

この身はただ一人の穢れた血の為に

大きな庭

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ステファン・レッドフィールドは、魔法族の父と非魔法族の母の間に生まれた。

彼は非魔法族生まれの魔女に恋し、グリフィンドールに組分けされた彼女と違ってスリザリンに組分けされた。

彼は同世代の“生き残った男の子”のような英雄の器では無かったし、その傍らを務められるような人間では無かった。彼は単なる脇役以上の、何者でも無かったのだ。

炎のゴブレット終了。

目次

追憶	1
物語以前の物語	
組分け	4
賢者の石	
グリフィン・ドールの女の子	9
スリザリンの男の子	23
ヘルメティカ	37
生き残った男の子	48
魔法薬学講義担当兼スリザリン寮監	68
今世紀で最も偉大な魔法使い	78
闇の魔術に対する防衛術教授	96
今世紀で最も偉大になるべきでなかった魔法使い	112
秘密の部屋	
ステイブ・レッドフィールド	131
英雄の未来の仲間達	139
純血主義	155
蛇の王	176
スリザリンの存在	193
偽典の伝道師	209
知恵の女神	237
分霊箱	248
アズカバンの囚人	
テオドロミン	277

鉤爪、少女、犬

恐怖の虚像

狼達の中の狼人間

ウインガーディアム・レヴィオオーサ

悪心と善導

読書亡羊

炎のゴブレット

パスカルの賭け

三大魔法学校対抗試合

朱き極光

スポーツマンシップ

グレンジャー・ロウズ

第一の課題とその顛末

貴族中の貴族

労働階級

貴族階級

服従の呪文

蠢動

他愛も取り留めもない話

実力と血統の壁

銀色の暴走特急

ズルい人

矮小で些細な反乱

そして小さな勝者

ライブラリアン

296

325

350

383

408

423

459

495

521

550

574

592

612

632

664

693

708

725

750

772

803

817

842

860

ハンプティ・ダンプティ

第二の課題とその顛末

フィクシヨン・ライティング

歴史上最も邪悪な魔法使い

死喰い人

交錯

王と召使い

闇と光

恋と愛

公平性の有無

蛇と穴熊

ハツフルパフの体現者

賽は投げられた

不死鳥の騎士団

始まりの鐘

デボンの憂愁

ポリジューズ菓

移動鍵と逆転時計

ハリー・ポッターという物語

大団円の脚本

在るべき英雄の姿

高貴なる義務

十四年前の疑問

アリアナ・ダンプルドア

訣別

適正手続	1437
悪性格立証	1462
自己実現欲求	1480
一つの偉大な魔法	1502
再出発	1519
レジスタンス	1548
フンボルト理念	1581
サボタージュ	1620
教育原理	1650
教育令第二十四号	1664
教育令第二十五号	1693
魔女に与える鉄槌	1713
在ったり無かつたり部屋	1734
変わらぬ対立	1752
悪の帝国	1766
狼人間行動綱領	1783
バック対ベル	1797
匣に残ったモノ	1816
彼等なりの逢瀬	1837
胸中の蛇	1853
ホーンド・サーペント	1882
盤石と破綻	1904
支配の座	1940
学生運動	1969
ウニベルシタス	2004

砂上の家	2014
覚悟	44
天秤の主張	206
一対一	102
魔法族至上主義	140
人間の問題	162
逆セーレム魔女裁判	197
ヘテロシス	226

追憶

母が死に、僕が“釈放”されたまさにその日、梟は窓からやってきた。

一般的に、それが魔法族にとって喜びの知らせである事は重々承知している。

けれども、僕はその“收容”通知に対し、特段の感慨を抱く事は出来なかつた。

せめてそれが一日、否、数時間でも早ければ、僕は真つ当に喜ぶ事が出来ただろう。去年の十二月二十六日に十一歳を迎え、当たり前のように九月一日時点においても十一歳であり、そして何より魔法的な素養を有する事を、グレートブリテン唯一の魔法学校により公証された者として。

しかし、それを心待ちにしていた唯一の肉親——ホームエデュケーションという“言い訳”の下に僕をプライマリースクールにやらなかつた母は、既にこの世に居なかつた。

だから当然の帰結として、僕は来るべき七年間に対して、一切の関心も、好意も、希望も何ら持ち得なかつたのだ。

——他ならぬ、彼女に出会うまでは。

「驚いたわ……！ 貴方も魔法族なの!？」

恐らく、僕は母を愛していたのかもしれない。

魔法の制御の難易度は、感情の強さに比例する。特に、子供であれば猶更だ。

たとえ未成年で有つても、非魔法族の前で魔法を行使する事は望ましい事では無い。僕は過去の一度の過ちによつてその事を重々承知しているながら、しかし、公然と魔法の制御を喪つた。それは、僕にとつて明らかに恥ずべき事であるのは間違ひなかつた。

けれども、幸運な事に、それを見咎めたのは単なる非魔法族では無かつた。そして、何よりも僕にとって幸運で有つたのは、それが“彼女”で有つた事だつた。

「私も魔法使いなの！ ……嗚呼、ええと、それは正確では無かつた

わ。私は非魔法族、つまり貴方達が言うマグル生まれの魔法使いなの。けれども、つい先日素晴らしい届けが家にもたらされたのよ。最初、パパとママは明らかに信じてなかったけれど、最後には信じてくれて、ホグワーツへ行く事を許してくれたわ……！」

彼女は余りに押しが強く、無駄にお喋りで、そしてうざったらしかった。

「見た感じ、貴方と私は同級生に思えるのだけど、違うかしら？ それとも、ホグワーツの先輩だったりする？ 出来る事ならば、ホグワーツについて色々聞きたいのよ。私も本で色々読んで勉強したし、夜更かしし過ぎてママに怒られちゃったくらいだけど、気になる事や解らない事が一杯出来たの。それを少しばかり早く解決出来るとしたら、こんなに嬉しい事は無いわ！」

正直言つて、第一印象は最悪以外の何物でも無い。

僕が魔法使いである事を——魔法族の父を持っている事を肯定する前ですら、彼女は一方的に言葉を捲し立てていた。同世代の子供とロクにコミュニケーションを取った事が無い僕でも、そのような行いが無礼で、無作法で、そして間違っているものだという事くらいは、理解する事が出来たものだ。しかし、この非魔法族生まれの魔女は、それを未だ学んでいない程度には「愚か」であるようだった。

……嗚呼、けれども。

確かに、第一印象は最悪で有ったけれども。

それでも、僕は紛れもなく、彼女によって救われたのだろう。

唯一の肉親を喪い、自覚しないまま深い傷を負った僕の心を、彼女は——どう思い返してみても刺激的で、半ば暴力的とすら有ったのだが——癒してくれたのだろう。

別にその後、彼女の印象が大きく変わった訳では無い。寧ろ、僕は彼女と会話すれば会話する程に、彼女は我が強くて、知識のひけらかしが好きで、言葉の選び方が非常に下手くそな魔女である事を、強く実感するに至っていた。

しかしそれと同時に、彼女は聡明で、気高く、優しく思い遣りが有つて、そして酷く魅力的な女の子である事もまた理解していたのだ。そ

して、短い交流の中である事を差し引いても、自分自身が彼女に対し、
一体どのような感情を抱いているのかも。

それは、黄金の日々だった。

共に学び、議論し——希望に満ちた未来を疑っていなかった一か
月。

その時は勿論、後の人生において振り返ったとしても、その一か月
以上に僕が純粹に幸福を感じる事が出来た時間は、ただの一度として
無かったのだ。

物語以前の物語 組分け

レッドフィールド・ステイブン。

厳格な女性教授によつてそう呼ばれ、僕は太田間の中央へと進み出した。

彼女の呼んだ名前は、言ってみれば「正しい」物では無かった。字面だけ見れば別にそう読めなくもない、というか、普通にそう発音する者も少なくはないだろう。

もつとも、今現在において僕がやるべき事は、その女性教授に対して文句を言う事でも、名前の是正要求をする事でも無かった。そもそもの話、女性が僕をそう呼んだのは、初対面において僕が正さなかつたからであり、また、魔法界の公的機関は間違いなくそれが本名だと認識しているからでもある。何より、僕は名前について、自身を識別する為の記号という以上の価値を見出していなかった。

故に、僕がすべき事は、これからの僕の七年間を少しでもマシな物にする為に、「骨董品」を説得する事で有った。

「——ふむ。君の意向は了解した」

そんな言葉が、僕の脳内に響き渡る。

その三角帽子は、僕が初めて目の当たりにする、まさに魔法らしい——動く写真を載せた本を除けばだが——道具であった。しかし、それ以上に僕にとつて意味を持っていたのは、これからの僕の七年間をコレが決するという点にこそ有った。

「つまり、君にとつて如何なる寮に属するかというのは、非常に些細な問題に過ぎないという訳だ。彼女と同じ寮に行く事が望みで有り、それ以外——つまり、そこから先、君が何を学び、何になるかなど全く持って興味が無い。成程成程、解りやすくして良い事だ」
そう。

僕にそれ以外の想いなど無い。

何せ、七年だ。自分が生まれてから、今まで過ごした年齢の半分以

上。正直言つて、想像も出来ない程に途方もない長さにししか思えない。それだけの期間、全く見ず知らずの相手のみと共に寮生活を過ごすなど、考えたくもないのだ。

だから、その通りにすれば良い。

——グリフィンドールと。

大広間に響く声で、そう叫べばいい。

「まあまあ、待ちたまえ。そんなに結論を急かす事は無いだろう。特に、こうして私自身が少しばかり長く、君達の頭に乗っておく必要を感じた時はね」

……僕はこれ以上の必要性を感じてなど居ない。

それとも、その動機が不純だから受け容れられないとでも言うのか。

「いやいや、そんな事は言う筈も無いとも。実の所、その手の希望を聞くのは少なくない。そして大概の場合、それが決め手になるのだよ。確たる理由をもって特定の寮を避ける、或いは希望するというのは非常に稀であるのだから」

その言い草では、まるで僕は確たる理由をもって獅子寮を希望していないようだ。

「聡明かつ論理的な思考だ。そして、私はまさしくその通りに思っている。つまるところ、それが本人の資質に正しく合致するか否かの問題なのだよ。希望も回答も、それを導く理由の価値に比べれば、余りに些細な事に過ぎないと言える」

……………

「千年だ。それだけの期間、私は組分けの役割を負い続けて来た。そして、当然の事ながら、その過程において悩む事は大いにあった。先程の生き残った男の子はその典型だ。嗚呼、時間としてそこまで費やした訳では無いが。それでも、あれは本当に難しい組分けであった」

ハットストール。

組分け帽子が、その選択を迷わざるを得ない者。

そう呼ばれる場合は、概ね五分を超えた場合であると聞く。だが、要した時間の長さや悩みの深さは、ある程度比例はするだろうが、し

かし等しいとも限らない。

「つまりだね、かの四人のうち二人以上——創始者の間において取り合いになるような者であっても、組分けされるべきはたった一つの寮なのだ。その調整として私は存在しているのであり、本人の希望を聞くのはその為の典型的な手段である。どんなに教える側が望もうと、教わる側が望まなければ大成はしないのだからね」

……何となく、解った。

あの生き残った男の子は、最後に望んだが故に、グリフィンドールに行ったのだろう。

「また、他の理由で少しばかり私が帽子を柔らかくする事もある。例えばの話だが、幾らその者達に相応しかろうと、スリザリンのみに百人入れてしまつては、他の三人から不平が出る事は大いに想像が付くだろう？」

成程、四寮対抗という仕組みを採る以上、そこにはある程度の均衡が必要であるに違いない。

言葉を聞く限りでは厳密に人数調整する気も更々無いようだが、組分けする側としては全く無視できるものでも無いのかもしれない。

そして、帽子は言葉にしなかったし、僕の勝手な想像かもしれないが、その“他の理由”には、その学年全体、ないしは寮全体の考慮まで入っているのかもしれない。

「話が逸れた。要するに、君の意向は了解したし、その想いも理解した。」

——だがね、全てを聞き入れる訳では無いのだ」

その瞬間、僕は帽子を頭の上から投げ捨てようとした。

しかし、僕の身体はびくともしなかった。滞りなくこの儀式を終わらせない事など許さないというように、帽子が僕の手を離してくれなかった。

「君が帽子を乗せる瞬間、否、私が彼女の寮を宣言するまさにその瞬間までは、君は四寮の内で最も強くレイブンクローを希望していた。違うかね？」

……違わない。

直接言った事は無いが、彼女はレイブンクローに入ると思っていた。

たとえば彼女がグリフィンドールに心惹かれている事を知っていたとしても、彼女は間違いなくそうなるだろうと確信していた。だからこそ、僕はこの大広間に来るまで、その寮に入れる事を祈っていたのだ。

「そういう事だ。私としては、君がレイブンクローに入れば上手くやっけて行けると判断している。しかし、君はそれを希望しない。絶対に。そしてその場合においては、私としては選択の優先度を一段階下げざるを得ないと考え。何故なら、君の学びの目的は——昔はどうあれ——今は既に唯一の為に変質してしまっているからだ」

解ったような口を利く。そんな反論は、僕には出来なかった。

その言葉は正しいのだと、僕は確信していたから。

「私が最後まで悩んだ結果として本人に選択を委ねる者が居る一方、言葉を交わす内にその者に相応しい寮が見えてくる者も居る。君はそちらの典型例だ。ヒトとは複雑なもので、極論すれば万人が四寮全ての資質を有すると言える。だが、それでも私はその中で、その者に最も相応しい寮を選ぶとし、またそうしてきた自負があるのだ」

恐らくこの帽子は、最初から殆ど結論を出していたのだろう。

最初に告げた通りに、僕の希望も回答もそれ自体はどうでも良かったのだ。不適當な寮の希望を述べた瞬間に、この帽子は最終にして決定的な判断を下した。他の寮の希望を聞いたり、或いは薦めたりしないのがその証左である。

「解っているとも。君は、自分がその寮に相応しくないと考えている。しかし、君は正しく向き合う事が出来るだろう。彼が純血主義であるとは知っていないながら、それを実現する為の部屋すらも用意しながら、それでも私がマグル生まれや半純血を組分けしてきた意味に」

そんな口上を帽子は一方的に言って、僕を含めた大広間に居る全ての人間に聞こえるような声で、僕が七年間幽閉される寮の名前を告げた。

「——スリザリナー！」

そうして僕は、ハーマイオニー・グレンジャーと別の寮となった。

賢者の石

グリフィンドールの女の子

図書館で本の山に埋もれている小さな女の子——ハーマイオニー・グレンジャーは、その表情からして、見るからに憔悴しているようだった。

僅か一カ月前、彼女の顔が輝いていた頃が、酷く遠く思える。

勿論、彼女が魔法界に対して飽いたとか、或いは失望したとかいうのではないだろう。寧ろ、スリザリンとグリフィンドールの合同授業の風景を見る限り、彼女はそちらの方面については充実しきっているようだった。

だからこそ、彼女が酷く参っているのはそれ以外——非魔法族社会においても逃げられない、人間関係についてであった。

ホグワーツの一学年など、所詮は百五十人程度。加えて、全寮制の下に共同生活を強いられるともなれば、たった一か月の期間の経過、そして四寮に分断されている事を差し引いても、同級生の顔や名前を覚えるにはそれなりに長い時間だと言えた。特に、その人間が目立つ場合であれば猶更である。

そう、彼女はホグワーツ一年生の中で最も——無論、全ホグワーツ生が顔と名前を一致させられるであろう一人の例外的な生徒を除けばだが——目立っていた。既に一年生の中で彼女の名前を知らない者は居ないであろう。僕はそう確信すらしていたし、それは間違いないく広く同意を得られるに違いなかった。

何であれ、彼女は歯止めを利かせるのを忘れてしまった。

玩具を与えられた幼児のようだったと、そのように言い換える事も出来るだろう。彼女は元々好奇心旺盛で知識欲に満ち溢れていたが、実際に魔法界に飛び込んで余計にそれが酷くなってしまったに違いない。

そして何より悪かったのは、彼女の能力が余りに卓越し過ぎていた事である。

入学前に教科書を丸々暗記してしまう狂気を実現してしまうのは言わずもがな。そして更に質が悪い事に、彼女は純粹な意味での頭でっかちでは無かった。つまり、彼女は実技も出来た。正直な所、僕は彼女が理論だけのタイプで有ると思っていたのだが、彼女の類まれなる記憶力と聡明さは、僕の陳腐な予想を蹴つ飛ばす程に凶抜けたものだったらしい。

結果として彼女は入学からたった一か月で、生徒どころか教師陣すらも疑わない学年一の秀才の地位を確立し——当然のように孤立した。

無論、彼女とてそれを座視していた訳では無いだろう。

どの時点で自身の立場の危うさに気付いたのかは別として、彼女も周りと上手くやろうと頑張りはしたに違いない。けれども、僕にすら聞こえてくる噂を聞く限り、成果は芳しくないようだった。

僕が見るに、彼女は余りにもレイブンクロー的だった。

知識や成績と言った面だけでは無く、その在り方がだ。つまりは、己の確たる世界観を内に持っていて、それを現実に展開するに際して他者の眼を余り気にしないという点だ。

グリフィンボールは目立ちたがり屋で自惚れ屋であるが、しかし同時に他者の眼を——すなわち、恰好付けたり、もしくは仲間の共感を求めたりと——気にする傾向を有するようであった。

しかし、ハーマイオニー・グレンジャーは違った。少なくとも彼女は、自身の知的好奇心と個人的達成感を充足する事が第一で、それは彼女自身が楽しいからやっているものであって、それが他者から承認されるか否かは二の次であった。そして、そうであれば、周りから浮いてしまうのも至極当然の話だった。

もつとも、僕はそれを彼女に指摘しなかったし、その気も無かった。他人の事だから好き勝手言えるだけであり、僕とてスリザリンで上手くやっている訳では無かったのだ。寧ろ僕は、自身が、彼女に対して最もそのような事を言う資格が無いホグワーツ一年生の一人であると自負していた。

何より彼女とて、そんな解りきった事を指摘されたくはないだろう

う。解りきつていて尚、どうしようも無いというのが人間関係であり、対人能力なのだ。理解で解決出来るのであれば、既に世界から苛めや夫婦喧嘩、そして戦争という言葉は淘汰されているに違いない。そもその話、僕には彼女に伝える機会など無かった。

何故なら僕は、ホグワーツに入ってから、彼女とただの一度も会話をしていないからだ。

スリザリンとグリフィンドール。

その両者の関係性は、僕の想像していた以上に——すなわち創始者の争いを引き摺っている以上に——悪い事を、スリザリンに入ってからたった一日で思い知った。

別に僕自身、純血主義自体に左程思う所は無い。無論、自分が「そう」では無いから良い気はしないが、サラザール・スリザリンの生きた当時にはそれが当然に必要なとされた時代だっただろうという事くらいは理解出来るからだ。魔法族と非魔法族は分断されておらず、今よりももっと緊張的で、憎悪と流血に満ちたものだった。潜在的な敵に対して武器を与える愚かさを主張する理念は、その必要性どころか、有用性もまた肯定しえるものですらある。

だが、現在の二寮——厳密にはスリザリン以外の三寮とであるが——の対立の根は違う。

魔法族と非魔法族云々では無い。究極的に言えば、純血と非純血ですらも問題とならない。つまるところ、それら自体が問題であるという訳では無く、スリザリンを構成する根幹の思想群が死喰い人を生み出す土壌となり、尚且つ現在も元死喰い人の子息が多く所属する寮という事こそが問題であった。

かつての戦争後、多くの元死喰い人は、アズカバン行きから逃れた。無論の事、親と子の罪は別である。だが、その死喰い人達に自分の親兄弟を殺された——それも死体がマトモな状態でない場合が多く、死体が無い事すら珍しくなかった——人間がそう理性的に割り切れるだろうか？　そして、そんな中で、死喰い人であったが故に戦争当時安穏と暮らし、更には戦後何の罰も受けずにのうのうと暮らしている者達に対して、彼等が好意的に対応出来る筈があるだろうか？

寧ろ、スリザリン以外の人間が、スリザリンに対して嫌悪と憎悪を剥き出しにするのは、人間として真つ当な感情の発露だとすら言えるだろう。魔法戦争において最も血を流したであろうグリフィンドールが殺意を抱いている事など、最早当然という他無い。

被害者遺族と、加害者家族。

極論してしまえば、スリザリンとそれ以外はその関係性に尽き、であるからして、御互いが仲良しこよしになれないのは当然である。それどころか、今のように“小競り合い”で済んでいるのは非常に平和で可愛らしい状況だとすら評価出来る。

そう考えれば、ホグワーツという学び舎は善良に機能しており、またホグワーツ教授陣は上手く学生達を管理しきっているのかもしれない。何せ、学生間の抗争において死亡者が出る——非魔法族においても、大学において学生決闘（及びそれに伴う負傷者と死亡者）は珍しくなかったと聞く。何処の世界でも人間は同じであるという証左であろう——ような事は、少なくとも最近は無いらしいようであるから。

だからこそ、僕は入学以来、ハーマイオニー・グレンジャーと会話しようとするような愚行は犯そうとしなかった。

蛇蝎のように嫌われているスリザリン生と仲が良いグリフィンドール生というレッテル貼りを許し、更に彼女を取り巻く状況を悪化させるような真似はしたくなかったからだ。

……嗚呼、言い訳めいている事は否定しない。

彼女が一人で寂しそうにしている姿を見る度に、また何とか周りに話掛けながらも適当にあしらわれる姿を見る度に、自分の惨めさを感じない訳では無かった。

模範的グリフィンドールであれば、彼女に声を掛けただろう。勇猛果敢な、騎士道精神溢れる獅子の寮。それを体現するかのよう、孤独な女の子を一人のままに放っておく真似などしはしなかっただろう。たとえそれが周りから白眼視される羽目になろうとも、自身の心の赴くままに、平気で声を掛けてみせたに違いない。

だが、僕は残念ながら、スリザリン生——いや、それも言い訳なの

だ。

単純に、僕に勇気が無いだけに過ぎない。スリザリン寮における僕の生活は、決して良いものとは言えなかったが、さりとて想像した程に悪いものでは無かった。寧ろ、ある一人の人間が、洋服店で多少会話したからなどという余りに奇妙な理由に基づく好意を示してくれた事によつて、非純血の割には良い位置に居るとも言えた。そして、僕はそれを手放したくは無かったのだ。ただの独善的な自己防衛で、自己保身に過ぎない。

だから、僕に出来る事は、彼女を遠巻きに見る事だけだった。

彼女を取り巻く状況が少しでも良くなりますようにと、そう祈る事ぐらいしか出来なかった。

合同授業の最中や、或いは今のように図書室の棚の隙間から、彼女に悟られないように覗き見るような真似が、どう考えても情けない事は理解している。けれども、彼女の姿を見る事は、色鮮やかであるとは言えない僕の学生生活の中で、ささやかな幸せを感じさせるものである事は、決して否定出来なかったのだ。無論、今この瞬間さえも。

ただ、そのような不埒な行いが何時までも続く筈も無く、そしてこの瞬間に終わる事は偶然であると共に必然では有ったと言えよう。

先程まで熱心に本へと目を落としていたハーマイオニー・グレンジャーは、何の気紛れか顔を上げた。そして、彼女から遙か離れた所に居た僕と、視線が合った。合つて、しまった。

「――あ」

彼女は僅かに口を開き、僕は思わず視線を逸らした。

その反応を考えるに、今まで彼女は、しばしば僕から覗き見られていた事に気付いていなかったのかも知れない。それは救いでも有つたが、しかし意味の無いものでもあった。何故なら、彼女は今それに気付いてしまったのだから。

暫くの間、僕は本棚の中から本を探す振りをし続けた。

それが余りにわざとらしいものであると理解していても、建前を繕う事を止められはしなかった。

数十秒か、もしくは数分か。それだけの時間が経って、中身を口々に確認出来てもいない適当な本を右手に取って僕が視線を戻した時――彼女の視線は僕に留まったままだった。

彼女の表情は、何とも表現しがたいものであった。

色々な感情が入り混じっていて、結果として無色になっているような表情。当然そこから彼女の考えを読み取る事など出来はしない。そのような表情は、僕が知るハーマイオニー・グレンジャーのいずれのものとも違い、しかし、彼女の素の表情であるようにも思えた。

そして、僕には彼女がどうして欲しいか、解った気がした。

それと共に、自分が今、一体何をすべきかという事も。

僕は周りを見渡した。都合の悪い事に、そう、余りに都合の悪い事に、付近の席は大半が埋まっており、彼女が座っている机には、本の山以外に誰も居なかった。もしかしたら、入学一か月で既に図書室に入り浸っている小さな『本の虫』には、上級生であっても近寄りがたいのかも知れない。

だから僕は、努めて平静を装って彼女に近づき、彼女の斜め前の席に座った。

彼女は既に視線を本へと戻していたが、それが拒絶を示すものではない事は何となく解った。

言葉を切り出したのは、彼女が先だった。

「……ええと、元気？」

「……ああ」

ちらりと彼女の方を見れば、彼女は本に視線を落としたままだった。

それが周りから会話している事が悟られない為である事は明らかであり、また彼女もグリフィンドールとスリザリンの確執を良く承知している事も歴然としていた。そして、彼女が僕に対して今まで声を掛けようとしなかったのが、僕と全く同じ理由であるという事さえも。

二寮の生徒が、一緒の席に座っている事自体目立つのでは無いか。そんな正論は、意識的に頭の隅へと追いやった。

「ねえ、ステファン」

「……何だ、ハーマイオニー」

「——私達、同じ寮だったら良かったのにな」

しみじみと、彼女は呟くように言った。

嬉しい言葉だった。だが、それ以上に言葉に含まれた悲しい響きが、僕の心を喜びに満たす事を止めた。

「あの一か月が遠い事のように思えるわ。グリフィンドール、スリザリン、レイブンクロー、ハッフルパフ。その四寮に組分けされる方法、寮の場所、部屋や談話室の装飾、そしてそこで送るホグワーツでの生活。あの時は、これから素晴らしい毎日が待っていると信じてた」

確かに、あの日々は疑う余地も無く輝いていた。

だが、現実は何を得てしてこんなものなのかもしれない。

手に入れていない物は美しく、しかし一度手に入れてしまったものは色褪せて見える。

「……君は、今ではもう、素晴らしい毎日が待っていると思えないのか？」

「……いいえ。魔法界での生活は、刺激的で、退屈しないもので有る事は間違いないもの。今だって、その気持ちに嘘は無いわ」

そんな気丈とも取れる言葉の内容自体に、確かに嘘は無いのだろう。

しかし、その弱々しきこそが、彼女の本音を物語っていた。

無論、それを指摘出来る程に僕は無神経な強さを持ってはおらず、だから聞かなかった振りをして、一つ前の彼女の言葉に答えた。

「……同じ寮か。それはどう足掻いても叶いそうには無かったな」

「あら、貴方はグリフィンドールへの組分けは勧められなかったの？

確かに、貴方がグリフィンドール的であるという気はしないけど、

その要素は持ち合わせて居ると思うけど」

「いいや。これっぽっちも勧められなかった」

事実上拒絶された、とまでは言わなかった。

そしてそれに気付かない彼女は、当然のように言った。

「それは多少意外だわ。でも、レイブンクローは勧められたんじゃないやな

い？」

「……まあ、そうだな」

「やっぱり。私は、てつきり貴方がレイブンクローに行くものだと
思っていたもの」

「その可能性も有ったのかも知れない。だが、組分け帽子にとつては
スリザリンが大本命だったみたいだ。あくまで僕が強く希望してい
るのならば、レイブンクローに組分けする事も吝かではない感じでも
有ったが」

「あら、希望しなかったの？ どうして？ 入学前、貴方はあんなにも
レイブンクローに行きたがってたのに」

「……気が変わったただけだ」

君が居ないからだ、とは言える筈も無い。

だから、軽く咳払いと共に誤魔化した。もつとも、彼女自身そこま
で強い疑問を抱いたのでも無く、多少気になったから聞いた程度に過
ぎなかつたのだろう。過去——組分け時を思い返すように、少しばか
りぼんやりした口調で言った。

「私は、グリフィンドールかレイブンクローだったわ」

「だろうね」

「失礼ね、と言いたい所だけど……まあ自分でも解ってるわ。私がレ
イブンクロー向きだって。多少憧れていたけど、私にグリフィンドー
ルの精神が有るなんて自信が無かつたもの」

「無意味な虚栄心に満ちていて、独善的で、自分勝手な精神を持つて
るって事か？」

「今度は怒るわよ」

口調は尖っていたが、その内には隠し切れない笑みがあった。

けれども、それは一瞬。彼女の元気は、萎むように消えてしまった。
「……でも、本当なのよ。私だって、皆と仲良くしたいわ。けど、私は
思わず無神経な事を言ってしまうし、少しばかり空気が読めないのも
事実なもの。ホグワーツに来る前もそうだった。ずっとそう言われ
てきた。だから、自分を変えたかつたんだけど——」

——失敗した。そういう事なのだろう。

同時に、組分け帽子が彼女をグリフィンドールに入れた理由も解つた気がした。

彼女は選択肢を与えられ、そして選択した。

彼女が今言葉にしなくても、それ以上の事——あの長過ぎる組分け帽子の悩みの中で紡がれた、彼女の万感の想いと言葉が存在したに違いなかった。ただ単に好きな女の子と一緒に居たいというだけで寮を選択しようとした何処の馬鹿野郎と違い、自身の未来と展望を見据え、確固たる意志と理念と希望を胸に抱いて、彼女は組分け帽子との対話を行ったのは間違いなかった。

無論、彼女に他の資質が存在しなければ組分けされる事もなかっただろうが、しかしそれでも最後の決定打は間違はなくそこに有った。そして、それこそが正しく、「グリフィンドール」——僕が決して持ち得ず、当然に組分け帽子が見透かしていたモノは明らかだった。

……そして彼女は今、それを、自身を疑おうとしている。

「やっぱり、私はレイブンクローに——」

「——君は、やっぱりグリフィンドールで上手くやっているとと思う」
落ち込む彼女を励ます気持ちは有った。

だが、揺ぎ無い本心と共に、確信を持って言った。

何時の間にか、御互いに本から視線を上げていた。彼女の瞳が僕を真つ直ぐと見て、僕の瞳もまた彼女を真つ直ぐと見ていた。既に、周りの事など頭から飛んでいた。ただ、この不器用な彼女に、想いを伝えなかった。

「君は確かに無神経な所が有る」

彼女は否定しなかった。

「君は思った事を感情のままに、口にしてしまう所が有る。自分の知識や考えを絶対視し、他人に押し付けてしまいがちな所が有る。一度思い込んでしまったら最後、視野狭窄に陥り、他人に言われても直す事が出来ない頑迷な所が有る」

彼女は否定しなかった。

「でも」

でも。

「君は何にでも一生懸命で、間違いを見過ごせない人である事を知っている。君は、誰かの救いになる事が出来る、強い人だという事を知っている。君は聡明で、気高く、優しく思い遣りが有って、素晴らしく魅力的な女性である事を——僕は間違いなく知っている」
僕にとつて、ハーマイオニー・グレンジャーは、そんな女の子だった。

第一印象は最悪だった。

だが、そうであっても、少なくとも僕は彼女に好意を抱いている。恋愛の意味を有してはいても、友情的な意味も併存しているのは確かだった。深く付き合うにつれ、僕はハーマイオニー・グレンジャーという女性の良さを当然に理解する事が出来た。

ならば、どうしてグリフィンドールの人間が——騎士道精神に溢れ、高潔たらんと欲する者達が、それを理解されないままに居る事が出来ようか。

「確かに今は上手く行っていないかもしれない。でも、今はたかが七年の百分の一程度が終わったに過ぎないだろう？ 君が素敵な人間である事には変わりはない。だから、グリフィンドールの人間だって、君の良さを理解してくれる日が——」

「……………良くもまあ、面と向かって言えるわね」

途中で途切れた僕の言葉から身を護るように、彼女は分厚い本を持ち上げて顔を隠した。

それは、僕にとつても助かった。言葉を費やしている内に、自分が一体何を口走っているかを自覚する程度には冷静になれたからだ。無論、鼓動は冷静とは言い難かったが。

けれども、恐らくそれは御互い様であり、それを保証するかのよう
に彼女は言った。

「でも、貴方もスリザリンで上手くやっていけると思うわ」

本の向こう側からポツリと零すように、しかし迷いなく言葉を紡ぐ。

「貴方は強い人だわ。そして、確固たる知識の下に、断固とした決意を出来る人。確かに私は貴方の生まれを知っているけれど、それでも貴

方がスリザリンの偉大さを持っている事は何ら否定出来ない。寧ろ、サラザール・スリザリンは貴方のような人を求めたので有つて欲しいと思つてゐる」

そして、と彼女は続けた。

「何より、私と違つて貴方の学生生活は確約されているとも言えないかしら。ほら、組分け帽子も言つてたでしょ。スリザリンでは君は真の友を——」

その言葉尻が段々と小さくすぼんでいったのは、彼女の的には模範的スリザリン生を決して友としたいくないと感じたからだだろう。

もつとも、僕も面と向かつて否定はしまい。グリフィンドールが悪し様に言う程スリザリンが邪悪だと思わなかつたが、さりとして心を開いて友となれるとも思えなかつた。

ただ、彼女の言わんとした事は十分に伝わつた。

「……まあ、貴方にもスリザリンに入つて良かつたと思える時が来るわ」

多少早口に何とかそう言つ切つて、彼女は言葉を結ぶ。

相変わらず本に隠されて、彼女の表情は見えない。けれども、それでも彼女の表情は、目に浮かぶようだった。あの一か月の間に散々見た、不器用な優しさに満ちた——僕が彼女に惹かれた表情の筈だった。

そして、それを思うと限界だった。

「有難う。少しだけど、話せて良かつた」

囁くようにそう言つて、僕は立ち上がった。

名残惜しくは有つた。だが、これ以上は留まる事など出来なかつた。

図書室全ての人間が、こちらを意識しているようにも思えた。もつとも、それは思い上がりなのかも知れない。けれども、それが真実だと思えるくらいには、僕の顔は熱かつた。

ただ、一番熱いように感じたのは、自身の背中だった。けれども、その発生源を振り返つて確認する事はしなかつた。

「……私もそうよ。また、話しましょう」

そう聞こえたのは、僕の幻聴では無かった筈だ。

何にせよ、僕は踵を返したまま彼女の下を立ち去った。

二寮の断絶。一か月の空白。

それが無かったかのように、僕達は再度言葉を交わす事が出来た。

それは負け犬同士の傷の舐め合いめいたもので有ったにしろ、僕は彼女との繋がりを確かめる事が出来た。彼女も僕に対して好意を――僕が抱くのと同種でない事を理解する程度の理性は有ったが――抱いている事を確認する事が出来たのだ。僕にとって、ホグワーツに入学して以来の最良の日だったと言えよう。

……もつとも、次の機会というのは、中々訪れなかった。

御互いに暗黙の了解というものは有った。

つまり、周りに気付かれてはならないという事だ。

依然として、御互いが御互いの立場を壊すつもりは無かった。正確に言えば、彼女の方はどうか知らない。けれども、少なくとも僕の方は、やはり彼女に対して「スリザリン生と仲が良い」などという汚名を着せるつもりは抱けなかった。それが僕にとって、酷くじれったく思える事柄で有ったとしても、だ。

しかし、先の時のように御誂え向きに図書室の他の机が埋まっている場合などそうそう無かったし、仮にその場合でも彼女の机に他の人間が座っている場合というのも少なくなかった。つまり、自然と二人で会話出来る機会は無かったのだ。

付け加えれば、それ以外の場所で彼女を捕まえるというのも現実的では無かった。

スリザリン生がグリフィンドール生を連れ出す？ 如何にそれが浮いている生徒で有っても、そんな「決闘」の誘いを騎士道精神に満ちた彼等が見逃す筈も無い。……まあ、後から考えれば、それは彼女を溶け込ませる為の良い手段かも知れなかったのだが。

そして何より。

彼女にとって大きな転機となる事件が起こる方が、圧倒的に早かった。

「トロールが……地下室に……！」

ハロウインの夜。

闇の魔術に対する防衛術教授が、そう言つて倒れた。

もつとも、その時点において、僕は他の生徒と同じ程度の恐慌にか陥らなかつた。

トロールという種族を見た事は無かつたし、M・O・M分類においてXXXXなどという細かい知識など記憶の片隅にすら無かつたが、対処を誤れば大人でも返り討ちに会う程度には強力であるという常識は有つた。だからこそ、当然の帰結としてそれに挑むような野心など抱きはしなかつたし、監督生の引率に従つてスリザリン寮へと戻るといふ有り触れた選択をした。

……嗚呼、迂遠な言い方はすまい。

僕はハーマイオニー・グレンジャーがハロウインのパーティーに居ない事に気付きはしても、既に授業から泣いて逃げ出していたなど考へもしなかつた。

まして彼女がトロールに関わる事になるとは夢にも思わなかつた。事の顛末を知つたのは、全てが終わつてからだつた。

その不用意さに眉を顰めた者が皆無であつた訳では無い。死人が出たとしても可笑しくは無かつた。寧ろ、それに遭遇した者達の年齢を考えれば、そうならなかつた事こそが奇跡とすら言える。スリザリン生の内では、半ば嘲笑すら——加点された事を知つていて尚——沸き上がったものだ。死にたがりな英雄願望のグリフィンドールらしいと。

しかし何にせよ、生き残つた男の子は、まさしく英雄らしい特別性を見せた。

無論、僕にとつてそれ自体はどうでも良い事だ。

僕にとつて一番の関心事であつたのは、その「冒険」を契機として、ハーマイオニー・グレンジャーは彼の最も親しい友人となつたという事だ。そして、頭でつかちだと信じ込まれていた彼女が、馬鹿げたグリフィンドールの側面を見せた事こそ、寮に受け容れられ始める理由となつたという事も。

彼女は、孤独では無くなつた。

僕は、彼女の唯一の理解者などでは無くなった。

事件の後、それまではあれ程機会が無かったにも拘わらず、ハーマイオニー・グレンジャーと会話する「偶然」は直ぐに訪れた。その時には、既に彼女は憔悴した女の子では無かった。輝く学生生活を謳歌する、一人の快活な女の子だった。

彼女は様々な話を話してくれた。英雄ハリー・ポッターの事、もう一人の友人ロナルド・ウィーズリーの事。その他の、多少仲良くなれた女生徒達の事。マダム・ピンスに見咎められないよう囁くような、しかし弾みを隠し切れない声で、彼女は自身の輝かしき日々の事について明かしてくれた。

それは喜ばしい事だった。その気持ちに嘘偽りは無い。

だが、それと同時に、僕はまざまざと実感したのだ。

嗚呼、そうだ。僕は、組分けの結果を真の意味で受け容れていなかったのかも知れない。けれども、二か月経って漸く受け容れた。受け容れざるを得なかった。

彼女はグリフィンドールで、僕はスリザリンドと。

スリザリンの男の子

僕の学生生活は、最初から失敗していた。

それがどんな存在であれ——つまり、それが望まないような血筋であるという場合でも——自分達の寮に振り分けられた事を歓迎しているのに、その人間が『この寮には来たくありませんでした』という絶望的な顔をしていれば、そりゃあ失敗方向に全力で突っ走るのも解りきった話だ。

だが、それは余禄に過ぎないと言える。

たとえその場合であっても、レイブンクローやハツフルパフならば、後から挽回する事について多少の希望は持ち得ただろう。だがよりによって僕が組分けされた寮はスリザリン、純血主義にして貴族主義の寮であったのだ。僕は最初から失敗を予見し——或る意味ではその通りになった。

聖なる二十八という偏見に塗れた区分はさておき、魔法社会というのは広くて狭い。

すなわち、魔法族は非魔法族のように小さく群れて住む必要が無い一方、姿現し・移動鍵^{ポトキ}という移動能力に加えて単純な数の問題故に——魔法族がロンドンを闊歩するのにダイアゴン横丁だけでほぼ足りる事を考えてみれば良い——殆どが少なからず顔見知りであるのが当然だった。

言い換えれば、古くから存在する「純血」であれば、対立関係の有無を問わず互いの存在を認知する事は不可避的であり、逆に言えば、そうでない者は「純血」だと言えない事など考えるまでも無い程に明らかだった。

つまるところ、彼等は単純に姓名を聞くだけで、その者が純血で無いか否か——身内として迎えるべきか否かを殆ど判断可能であり、更に御互いの先祖の歴史について少しばかり会話をすれば完璧に識別可能であるとすら言えるのだ。

それは彼等が本能的に備えた能力であり、その事は別に驚くに値しない。非魔法族の貴族とて、少なからずそう言った面があるのだ。で

あれば、古き因習を色濃く継承してきた魔法族が、どうして逃れる事が出来ようか。

要するにスリザリンの性質として挙げられる団結主義は、入学前からの家族ぐるみの交流に強く依存するものである事は否定し得ないのだ。そして言うまでも無く、それらは非魔法族ないし半純血が余り持ち得ないものである。つまるところ、スリザリンに組分けされたその種の者達は、事実上ハンデを背負っていると言っている。

もつとも、救いかどうかは知らないが、彼等にとつて親戚関係と看做す範囲は広い。ほんの数百年遡つて、彼等の由緒正しい家系図の中に相手の家名を見つけられれば――すなわち、何の問題もなく嫁いだ人間が居れば、彼等は当然に親戚扱いをする事だろう。

更に言えば、彼等とて不要な波風を立てない程度の頭は有る。

同姓同名を理由に遠い親戚関係を見出したり、或いは何かの間違いで抹消されたのだと理解したりという「柔軟」さは、彼等の得意とする所だ。特に七年間も寮で生活をする上、学内の繋がりが卒業後にどう影響するか解らない。何より、組分け帽子という由緒正しい魔法具がその者のスリザリン性を保証しているという面も、その欺瞞を生み出すには都合が良かったと言える。

ただ、そのような場合においても、いわば二流純血扱いされるといふのは否定しがたいようだった。無論の事、低い地位に有ると見なされる事が、それがそのまま不幸に直結するという訳では無いのだが。蛇寮に組分けされた者らしく、「純血派」の者達の間を狡猾に渡り歩いて楽しくやっている者も居るようであった。

勿論、スリザリン内においても、「非主流派」とも言うべき非魔法族生まれ・半純血のコミュニティが存在する。

ホグワーツ全生徒で約千人であるから、単純計算でスリザリン所属は二百五十人。見た感じそれより少ないようだが、いずれにせよ全ての者が聖なる二十八に連なるというのは現実味が無い。そして、二流扱いされる位ならば、そういう者で徒党を組もうと考える者達が現れるのは当然の話ではある。

けれども、彼等が「純血派」から完全に独立してやって行ける訳で

も無かった。

数で負けているとか、純血に媚びる方が楽な場合が多いとかいう以上に単純な話だ。

十一年間魔法界で家庭教育を受けて来た者と、十一年間魔法無しで生きてきていきなり魔法界に放り込まれた者。どちらが優秀である割合が高いだろうか。非魔法界において、良いパブリックスクールないいしいカレッジに入る者は、得てして金持ちの家庭が多いのと似たようなものだ。今年の一年生にはド派手な超例外が居るから忘れがちだが、魔法族が非魔法族より優秀——魔法の領域において、だが——であるというのは厳然たる事実である。

まあ、長々と述べたが、何にせよスリザリンに入るという事は、即座に自身の立場を鮮明化させる必要が有るといふ事であった。純血で無い場合は猶更に。

純血に媚びるか、それとも距離を置くか。

狭い世界内での共同生活であるが故に、どちらかを選んだ所でそのまま戦争関係に陥る訳では無い。特に、“生き残った男の子”により闇の帝王が滅ぼされ、純血の子息の多くがアズカバンに収容されている現在、スリザリン内部の勢力図は非常に繊細なものとなっている。だからこそ、純血派も慎重になっており、ある程度融和的な態度を示していた。

しかし、逆にそれ故に、非純血派は勿論の事ながら、純血派も“身内”以外への勢力拡大にそれなりに熱意を抱いていると言えるのだが。

もしかしたら、現在のスリザリンは歴史上、今までで一番スリザリン内の純血以外に優しくなっている時代なのかも知れなかった。五年生の監督生の立場が許されているのがその良い例だ。

ただ、純血主義という眠れるドラゴンは、未だに学生達の下で眠っている。それが、一か月程度のスリザリン生活における僕の実感である。

まあいずれにせよ、僕が所属するとなれば、非純血・半純血側の“非主流派”以外に選択の余地は無かった筈だった。生まれに加え、貴

族的な社交性が欠如しているのは自覚していたからだ。

ただ、仮にそのコミュニティに属せた所で、それはいずれ破綻していたかもしれない。先に述べた通り、スリザリンという世界に括られた以上、「純血派」と距離は置けても関わりは必須だった。しかし、そのパワーバランスを理解した上で器用に立ち振る舞っている将来の自分など、全くもって想像出来なかったのだから。

……けれども。

今の僕には、全てが仮定であり、余計な杞憂でしかなかった。

僕の学生生活は最初から失敗していた事は既に述べた。

だが、スリザリンにおいては、そのような事は酷く稀であると言わざるを得ないのだ。

入寮当初から、自身の立場の表明を求められる。純血という対立軸が存在し、それを基準とする、大きく分けて二つの枠組みを持つ集団が存在する。それらは一見悪い事にも思えるが、しかし、裏を返せばコミュニティがはつきりしており、何処かの女の子のように気が合う合わないという不明確な基準で排斥されるという事は有り得ないのだ。

勿論、集団の階層構造の中で下に置かれるというのは往々にして存在するが、それは有る程度時間が経過してからの話であり、集団を成立させる為の数合わせにも価値が有るのだから、最初から失敗するというのは有り得ない。友人以外を排斥するグリフィンドールとは違う。この寮内においては、打算と利益によっても結束と関係性を維持可能であるのだから。

故に、僕のスリザリン生活を失敗させた最大の要因。

それは、一人の少年のせいだった。

「やあ、ステイブン。呪文学の宿題は終わったかい？ まあ、君の事だから終わっていると思うのだが、可能であれば見せて欲しくてね」
談話室の隅へ押し込められて読書していた僕に対し、少なくとも外見上は親し気に声を掛けてくる金髪の少年。

ドラコ・マルフォイ。

ブラックが残らずアズカバンに行き、それらの子供もマトモに学内

に居ない現状においては、最も高貴で純血の主流に位置するとも言える、純血中の純血の次期当主。どういふ訳か彼に目を付けられたからこそ、僕には選択の余地が無かった。

無論、僕が「純血派」に属したという訳では無い。アヒルが白鳥の群れに混じる事が出来る筈は無いのだ。しかしまあ、彼が目を掛けている相手を、「非主流派」が横から搔つ攫う真似も出来はしない。結果として、僕はどちらにも属せない、非常に微妙な地位に置かれる事になった。

そして、当然ながら僕が真正面から文句を言える筈も無かった。彼は尊き血より導かれる善意からそう振る舞っているのである。現状において排除される事がない要因として、多少は彼の助力が有る事は事実であった。

もつとも一番の理由は、その中途半端な立場故に、スリザリンに居た一か月で「純血派」の面倒臭さも「非主流派」の苦労も見る機会が有ったからだろう。どちらでもないという事が気楽であるという気が無かったと言えるば嘘になる。

失敗はしても、それで楽しく暮らせない事はやはり無いのだから。

「……まあ、終わっているから構わないが」

僕は彼に何時ものように答え、しかし一瞬逡巡した。

今までは、僕が当然のように持つてきていた。それはスリザリン的な用心云々以前に、余程親しい者で無ければプライベートな空間に他人を入れる事はしないという至極常識的な論理の帰結だった。ドラコ・マルフォイとて、その育ちの良さ故に、僕がそうする事について一度として疑問を呈した事は無い。

だが、この瞬間、その下らない常識は逆に利用できる事のように思えたのだ。

「確か机の上に有った筈だ。勝手に探して持つて行ってくれ。何処かに埋もれているかもしれないが、羊皮紙の群れを適当に発掘すれば見つかる筈だ」

「……良いのか？」

少しばかり目を見開いて確認を取る彼に、僕は頷く。

ドラコ・マルフォイにも、自身が取りに行かされるといふ手間以上に、私的空間に侵入を許すという特権の価値と重さを理解しているのだろう。その瞳の奥底に僅かな侮蔑が見えるのは箱入り息子らしいが、さりとしてその悪用許可証を与えられる事を見逃す程に非スリザリシムトでは無かった。

そして僕は、それを把握して尚、前言を翻すつもりも無かった。「構わない。何より、一々君に断りを入れられる方が面倒だ。今度からも探して取ってくれて良い。無ければ終わってないか、僕が持っているかのどちらかだ」

「……流石にそんな恥知らずな真似は出来ん」

「恥知らず云々を言うならば、まずは自分一人で宿題を終わらせる事だ」

「……僕は忙しいんだよ、君と違って」

僕の皮肉に対し、ドラコ・マルフォイは不機嫌そうに顔を歪めて言葉返す。

その言葉は正確でも無いが、間違っている訳でも無い。彼は明らかに僕よりも遊んでいたが、それと同時に社交にも力を入れていた。無味乾燥な宿題に時間を費やすよりは、余程将来に直結する活動とは言えるだろう。

ただ、今の僕にとって重要だったのは、僕が露骨に彼を揶揄しても尚、彼が不機嫌な態度を見せるだけで済んだという点だった。

ドラコ・マルフォイという存在をどう扱うべきか、僕は非常に図りかねていた。

約二か月前。明らかに純血では無い僕に対し、彼は平気で話しかけてきた。それ故に最初、「純血派」は僕を純血と勘違い——もつとも、姓名を聞いて彼等の誤解は直ぐに解けたのだが——した。そして、僕の学生生活は最初から蹴つ躓いたのだが、その理由は定かでは無い。僕の思い返す限り、彼との交流はダイアゴン横丁の洋服店での会話のみであり、その会話を振り返ってみても何ら特別な点は無かった筈だった。

その理由を今まで僕は彼自身に問わなかった。

問う理由など無い。表面的であれ造り物であれ、彼が同学年のスリザリンで唯一友好的な態度を示してくれる存在であるのは変わりない。眠れるドラゴンを擽る趣味は無かった。

無かったのだが――

「なあ、マルフォイ。別に宿題を見せるのは構わない。その代わりに聞きたい事が有る」

「君が僕に聞く事が有るとは珍しいな。言ってみろ」

「何故、君は僕に構う？ 君の交友関係に、僕は必要無い筈だが」

――僕は踏み込む事に決めた。

それはこの二か月間の薄い交流の中で、彼がスリザリン的で有りながらも何処か甘っちょろい事を――恐らく両親からは酷く愛されているからだろう。良くも悪くも、彼は箱入りだった――理解したからである。

何より。

ハーマイオニー・グレンジャーの状況が変わった事が大きかったのは否定出来ない。

勿論、真なる友人を得る事など欠片も期待して無かったが。一番近いのは半ばヤケになったという事なのかもしれない。

「わざわざ指摘される事でも無いと思うが、僕の血筋が君のように尊くない事は理解しているだろう。それなのに、君が僕に良くする理由が解らない」

今まで何も問わなかった僕が、いきなり問うたのに面食らっていたマルフォイは、しかしその僕の言葉で顔を微妙に歪めた。

「君……誰が聞いているか解らない談話室で、その発言は不用意だぞ」
「危険な発言だとは認めるが、今更だ。誰もが気付いている事を隠しても意味が無い」

僕は軽く肩を竦める。

もつとも、気付かない振りを貫こうとする点は、彼もまた純血という事なのかもしれない。

彼等は見ない事が、それはすなわち存在しない事であると考えがちだった。家系図なんかが良い例だ。無論、僕はそれを真正面から否定

するつもりは無い。見ない方が精神衛生上都合の良い事も存在する。世界の貧困、窮乏、悲劇など、誰もが何かを見ない振りをして生きている。

そもそも、僕らの会話に注意を向けている人間は、見た感じでは存在しなかった。

入学最初は異様で相応しくない取り合わせに注目されていたが、二か月もすれば人は慣れる。

「しかし、あ……僕も聞かなかったのだが、スリザリンに組分けされたという事は、一応の血筋は保証されている筈だろう。君の優秀さはマグルでは無いだろうし、何処の家系に繋がっているとか聞いた事は無いのか？」

「一応聞いた事が有る。ロクでも無いものだったが」

「何と言っていた？」

僕が他の生徒と殆ど交流しない事も有って、家系を知る人間も居ないからだろう。彼は微妙に好奇心をそそられたように身を乗り出すが、期待には応えられそうに無かった。

「ペベッル、クッリ、ウチ、ブッリ、ック、そしてレスト、ラ、ンジ。その辺りと血縁関係が有るとは言っていた」

「……ペベレル、クラウチ、ブラック、レストレンジでは無いのか」

「さあ。僕が母から直接聞いた名前はそうだったからな」

「何と言うか、君の母上は——」

「——狂っていた。それは否定しない。そして既に死んだ人間だから、真実は解らない」

「……余計な事を聞いた」

憐みと共に、微妙にバツの悪そうな顔をする。

悪感情を抱いた相手ならともかく、同じ寮で二か月程過ごしてきた相手に対して冷ややかになれる程、冷酷で在れる訳でもないらしい。

彼は、奇妙なアンバランスさを同居させた人物だった。一言では表現しがたいが、スリザリン生としての側面と、そうでない側面を極端な形で有しているように見えた。家族が無い事が憐れだと思える事が——家族愛が善なる物であるのを信じ切っている事は、その典型例

だ。つまり、家族など居ない方が良いという場合が得てして存在する事を、彼は全くもって理解していない。

もつとも、そのアンバランスさが無ければ、僕に話掛けようと思いつらしなかつただろう。事実、模範的スリザリン生である彼の取り巻き二人はここに居ないのだから。

「まあ、気にしないでくれ。エリザベス一世の子の末裔であるという法螺話を平気で言う人でも有った。その言葉を一々マトモに受け止めていたらキリがない」

非魔法族の歴史においても、魔法族の歴史においても、エリザベス一世は未婚かつ子が居なかつた。それが動かしがたい史実である。

だから慰めるつもりで言ったのだが、何故かドラコ・マルフォイが盛大に顔を引き攣らせたのが印象的では有った。

「そ、それでだ。何故君と交流しようとするかだったな」

軽く咳払いをし、ドラコ・マルフォイは本題へと戻す。

「一言で言えば、君が優秀だからだ。確かに君は少なくとも姓名が純血のモノでは無いが、さりとてスリザリンに相応しいエリート^①の資質を有している事は、この二か月で君が寮にもたらした点こそが証明しているだろう」

「現一年のスリザリンで最優秀なのは、恐らくセオドール・ノットだが？」

「……いずれにせよ、君が優秀なのは変わりないだろう」

僕の揶揄に、マルフォイは顔を嫌そうに歪めながら答える。

「ノット」というように聖二十八族であり、尚且つ死喰い人の噂が有る家系でもあるからマルフォイと親しいのだと思つたが、そうではないらしい。まあ、嫌う事が出来るという事から考えるに、それなりの交流が有るのは間違いないのだろうか。

そして、自身が優秀であるというのは、まあ否定し得ない事では有る。

ほんの一个月間とはいえ、入学前に一体誰と共に学んでいたかを考えれば、それは当然の事だった。

けれども、彼の言葉に納得した訳では無い。

「だが、君が僕に声を掛けた理由は、マダム・マルキンの店で会話したからという理由だっただろう。それは僕が優秀であるとやらが判明する前だ。故にたまたまそれだけの偶然で、僕と交流を持つとうするのは筋が通らない」

確かに会話をした。ドラコ・マルフォイより前、たまたまマダム・マルキンの店を訪れていたからだ。しかし、その会話とて大したものでは無かった筈だ。明らかに純血のナリをしていたから適当におだてはしたが、おべっか使いを今更彼が必要とする筈も無い。

そしてまた、手頃な宿題代行マシンも彼は必要としないだろう。

その程度で「マルフォイ」と交流を持ちたい者は掃いて捨てる程居る。別に学業の助けを同学年から探さずとも、上級生の助けを求める方が直截的である。

だからこそ、僕にとつてドラコ・マルフォイは不気味であり、距離を測りかねている部分が有ったのだ。

「……まあ、偶然である事は認める」

果たして、ドラコ・マルフォイは頷いた。

「君は会話の内容を気にしているようだが、特別な会話で無かった事は保証しよう。君の言葉が、純血から見れば間違いなく落第レベルであつた事もね」

「ならば、何故」

「父上が仰っていたのだ。それが必要だと信ずるならば、多少は柔軟になるべきだと」

「父というと……ルシウス・マルフォイ氏か」

若くして大それた地位に居る俊英である以上に、こちらの方が有名だろう。

元死喰い人。そう呼ばれながら尚、今現在に至つても日の当たる場所を歩いている怪人。

「別に君を主題としてふくろう便を送った訳では無い。ただ、話題の中で君の話が出た。そして、それとなく諭されたのだ」

「貴方が出した話題とやらは、想像するに愉快では無かつた筈だが」

僕の揶揄を、マルフォイは否定しなかつた。

「けれども、父上はこう言ったのだ。間違いなく純血では無いような人間であろうとも、スリザリンらしい人間は居る。事実、自身の友人も偉大な寮に相応しい人間である事に変わりはないが、彼が背負う姓は聖二十八族では無いのだと」

「……それは、意外な発言だ」

その瞬間、僕は思わず周りを再度見わたしていた。

相変わらず、こちらに注目している学生は居ない。けれども、誰が聞いているか解らない場所において話すには、僕の踏み込んだ発言よりも遥かに危険な内容だった。僕は非純血の学生以上の何者でも無い一方、彼の父には立場が有るのだから。

「失礼ながら、ルシウス・マルフォイ氏らしくもない」

「ああ。僕もそう思った。けれども、色々とやり取りをする内に、考える事は色々とあった。だが、結果として僕の迷いは晴れたし、今までの二か月を見る限り、君はもつと正当に評価されるべきだと、僕はそう考えている」

真つ直ぐと僕の方を見つめて、ドラコ・マルフォイは言う。

……その言葉に嘘は無い。そう感じた。

ハリー・ポッターとの交流を見る限り、彼は手の込んだ搦め手よりも直接的な手段を選ぶ傾向に有る。ある意味で素直というか、ひねくられていない事こそが、彼が親の愛を一心に受けて来た事の証明であり、スリザリンとして微妙に異質な点であった。

もつとも、理由として未だに少し弱いような気がした。

そこまで考えて、ふと思ひ出す。

彼は最初から、マダム・マルキンの店で起きた事をえらく気に掛けていたという事に。

僕の後にはドラコ・マルフォイが店に入ってきて、その間の会話に特別なものは無かった。ならば、他に特別な事は何だろうかと考えれば、答えなど決まっている。当然のように僕が先に出て、その時僕は一人の少年とすれ違った。ならば、その後にはドラコ・マルフォイが、彼と会話していたとしても何ら可笑しくない。

成程、彼が意識しているのか知らないが、代用品というのは納得出

来る気がした。

そして、彼とルシウス・マルフォイ氏が交わした手紙の内容も想像が付いた。

ハリー・ポッターは英雄である以前に半純血であるが、さりとて「ポッター」は、聖なる二十八でないにしろ知られた血筋である事に違いなかった。不足は有るが、何処の馬の骨とも知れぬ姓の者より遙かにマシである。

そこまで考えが及ぶと、彼に言うべき事は決まっていた。

非魔法族は、自身の理解出来ない物に魔法を見た。そして、恐怖してきた。魔法を知る魔法族とて変わらない。自分の理解出来ない物に、魔法以上の魔法を見てきた。だが、裏を返せば、既知である物を必要以上に恐れる意味も無い。

「……気が変わった。今回は僕が持つて来よう」

突然立ち上がった僕に、彼は目を白黒させる。

「何？ どういう意味だ？」

「依頼者が宿題代行マシンよりも良い評価を取ってはならないと言う理屈は無いだろう。フィリウス・フリットウィック教授が好みそうな表現を偶々見つけたし、君が覚えていて正しく利用出来れば次の授業の実技では君に多少点数をくれるかもしれない」

「それは……まあ助かるが。良いのかい？」

「他ならぬ君が、より僕を擁護しようとしてくれる気である事には感謝を示すべきだろう」

ただ、と僕は続けた。

「君が僕の境遇を考えてくれるのは有り難いが、『間違いなく純血』ではない——つまり聖なる二十八ではないという重みを君はもう少しばかり意識すべきだ。君は僕に必要以上に肩入れすべきでは無い。それは、君の取り巻きの方が良く理解している」

「……二人には、僕から言っておく」

「君が強制しても意味は無い。彼等は僕に対して永遠に好意を抱かないだろう。何より、僕は今の立ち位置は嫌っていない」

「純血派」と「非主流派」。

そのいずれに所属するか——そしてその中のヒエラルキーとして何処に位置付けられるか——を、スリザリン寮に入った者は選択させられる。だが、それが出来ず、また真の意味で両者に所属出来なかつた者として過ぎてきた二か月間で、僕は気付いたのだ。それは子供のごっこ遊び以上を抜け出せないのだと。

確かに、学生という狭い世界の中で、そのコミュニティの所属・階級は死活問題にも思える。だが、冷静に考えれば、それらは決して絶対では無い。それを覆す為の手段は幾らでも存在する。特に魔法という力が存在するのであれば猶更だ。

何より、属さなかつたとして死ぬ訳では無いのだ。闇の帝王が巻き起こした魔法戦争は過去の物であり、どちらつかずの蝙蝠が当然に始末される世の中では無い。既に魔法使いが簡単に命を捨てなければならぬ時代などではないのだ。

勿論、監督生を初めとする学内での権威、そしてその延長である魔法省等の組織での出世を考えるならば、コミュニティ内での努力は必須であり、不可欠と言えた。しかし、僕の母は既に亡い。守るべき物が有りはしない。それは大概の場合にはロクでもない事だが、しかし時として大きな強みにもなる。

そして、ドラコ・マルフォイには——家と歴史を背負うべき者には、それが解らない。

別に揶揄でも何でも無く、そんな生き物を彼は今まで見た事が無いのだろう。

「君がそういうなら強制はしないが——しかし僕としても君への言い分がある。蛇は身内に対して表立った苛めをする訳では無い。しかし、それは苛める以上に効果的な術を知っているからだ。君の立場が不安定な事は自覚しておけ」

「……そうだな。忠告は有り難く受け止めておく」
自分の扱いが多少ばかり良いのは、それなりに加点を受けて寮に貢献しているからに過ぎない。

それは理解している。ヒエラルキーを手っ取り早く上げる方法の一つが勉強やスポーツに打ち込む事だというのは、至極当然の一般論

なのだ。

まして、ドラコ・マルフォイとこれからも“交流”を続けていくつもりならば、それが生命線である事は強く心に留めておかねばならない。

「気が変わったら何時でも言ってくれ。僕は、もう少しばかり君に好意的になる準備が有る」

「ああ、覚えておこう」

……御互いに確認した訳では無いが。

その瞬間から、僕とドラコ・マルフォイは、奇妙な——決して友人関係とは言えない繋がり始める事に同意したのでろう。彼は今まで以上に僕の助力を求め、そしてまた僕は彼に對して力を貸した。氣付いたかどうか知らないが、僕は彼に学業成績を譲り渡すような真似すらした。それは僕にとって苦痛では無く、当然の対価の支払いに過ぎなかった。

勿論、その後に僕の状況が変わったという訳では無い。

相変わらず同室の人間達は今まで通り僕に不干渉であり、僕を軽んじる態度を崩しはしなかった。純血主義は凝り固まっており、それが変化する氣配も無い。その点についてドラコ・マルフォイを責めるつもりは無かった。一部とはいえ、僕が彼の庇護を跳ね除けたのは事実であり、そもそも彼には改善出来るものでも無かったに違いない。何せそれは今の監督生達ですらどうしようもない事で——恐らくは千年の重みが有る事柄なのだから。

実際の所、僕はこの状況に概ね満足していた。

確かに僕の Hogwartz 生活は失敗し、今後絶対に好転する事は無いだろう。だが、灰色の中でも、何事も無ければ七年間やっていけるだけの目途は付いた。学生生活という狭い世界でそれが得られた事は、確かに喜ぶべき事だった。

ヘルメティカ

十一月は一瞬で過ぎ去り、十二月もまた同様に過ぎ去ろうとしている。

その間に相変わらずの特別性を見せた英雄ハリー・ポッターについて、最早言及する必要は無いだろう。

それは彼が全校生に対して初めて見せる「選ばれし資質」で有り、スリザリンである僕もその光景を当然目の当たりとする事になった。

正直な所、僕は肉体派というより頭脳派であり、更に言えばクイデイツチに対して興味の欠片も抱けなかった。

その筈遊びの戦略性、すなわち一見シーカーの働きによって決まる欠陥スポーツのように見えて、その実、全選手の有機的な動きが要求されるといふ点は認めるとしても、それが自分もやりたいとか見たいとかいふ欲求に直結するとは限らない。

また、その勝利が寮杯の行方に関わると言っても、僕にとって点数というのは「スリザリンにおける平穩ポイント」以上の何物でも無く、そもそもスリザリンに対して帰属意識は有していても忠誠まで抱いている訳では無かった。畢竟、何処が寮杯を取ろうが僕にとって些細な話であり、一部の上級生——端的に言えば、寮杯の行方は彼等の就職や出世に意義を有さない。勿論、スリザリンに限らず普通に学生生活を謳歌している者からは異端だ——と同様に冷ややかな目で見ざるを得なかったのだ。

ただ、クイデイツチにもそれに付随する寮杯の行方にも興味が無いからと言って、その事がそのままそれらと距離を置ける事に繋がる訳では無い。既に述べた通り、それは異端の立場である。「間違いなく純血」といふような揺ぎ無い立場が有るならば別だが、僕のようなふわふわした立場において、世論に逆った末路など目に見えている。

故に、興味が有る振りをしながら凍える中でのクイデイツチ観戦という刑罰に僕が服するのは至極当然であったし、デビュー直後の一年生に派手に負けた事による試合後の愚痴や怒号の爆発を我慢する事も、また善良なスリザリン生としての義務とも言えるものであった。

ただそれも冬季休暇前ともなればある程度落ち着き、主たる話題は休暇中に何をやるかという事に移っていた。

流石にスリザリン、僕の耳に聞こえてくるものでも休暇の予定は浮ついた煌びやかな物が多く、名家の連繋と権勢を実感するには十分だった。グリフィンドールを筆頭に他寮はスリザリンの純血政策を馬鹿にしがちだが、彼等は戦争では無く婚姻を進める事により世界を支配しかけた非魔法族の家系の事を知るべきである。強大な家同士の強固な結び付きというのは、互いの足の引っ張り合いを避けられる為に、単純な総和以上の力を発揮する。勿論、彼等のその末路が現在の純血主義の閉塞と重なる辺り皮肉とも言えるかも知れないが。

そんな祝祭日前の浮かれた生徒達を後目に相変わらず陰気な顔をしたスネイプ寮監は、十二月の半ば頃にはホグワーツに残る生徒は名前を記載するようにと酷く事務的に告げ、羊皮紙を残していった。当然の事ながら、殆どのスリザリン生には無用の物であると言えたが、僕はそれに用がある数少ないスリザリン生の一人であった。

別に帰る家が無いという訳では無い。

母が僕を「収容」していた些細な屋敷は、ただ一点を除き厳格にして公平なる副校長の「少しばかりの」手間によって、母の死を原因として滞りなく僕の物になっている。正確には、僕の後見人となっている非魔法族の管理下に置かれているが、事実上自由に扱えるという点においては何ら変わりがない。望めば冬季休暇中を過ごせるだけの十分過ぎる空間が存在している事には違いも無かった。

もつとも、母が居ない屋敷に帰る理由は無く、屋敷しもべ妖精を雇う程に巨大でも無い我が家において、未成年者一人での生活がどの程度文明的であるかなど論ずるに俟たない。であれば、ホグワーツに残るといふ選択肢の採用は自明であった。

その事に対してドラコ・マルフォイが揶揄してきたのもまた些細な事だ。

寧ろ、彼の奇妙な盟友としては、彼がそのような素直な感慨を抱く事が出来るのを喜ぶべきように思われる。前にも述べたが、彼は家族愛という物が素晴らしいモノで有る事を疑っては居なかった。それ

は皮肉でも無く、正しい子供の在り方と言えるのだから。

ただ、彼がそれと共に、僕に散々休暇中の予定を自慢してきた事を考えるに、彼は僕に頭を下げて仲間に入れてくれと言って欲しかったのかも知れない。無論、僕が頼んだ所で彼は理由を付けて当然に断つただろうが。要は、自分が優越感に浸る為の儀式をしたいただけだった。それを察せられる程度には、ドラコ・マルフォイとの交流を有していた。

そうして日々は刻々と過ぎていき、冬季休暇二日前となった今——僕は、ハーマイオニー・グレンジャーと通算六度目の、図書室での“偶然”に直面しようとしていた。

ハロウィン以来、彼女が独り図書室で学習するような事は、格段に減った。

物理的に貸出禁止のような場合——つまり、鎖に繋がれているという事だ——は兎も角、それが許容されている場合は寮の談話室へ持ち帰る事が多くなった。そうでない場合においても、彼女の二人の親友と共に居る場合が少なくなかった。もつとも彼女は僕との“偶然”を取りやめる気は無いらしかった事は、僕にとって確かな救いだっただ。

まあ、彼女の友人について語る際の聞き手が欲しいだけなのかも知れないが。

司書の巡回をやり過ごす為にポツリポツリと話す事を余儀なくされる——密会がマダム・ピンスにバレれば叩き出される事は明らかだからだ。彼女は図書室の支配に熱心であり、本を読む以外の行為に及ぶ生徒に対して常に殺意を抱いている——のを差し引いても、大抵は彼女の独演会であると評せざるを得なかった。孤立した状況を脱しても、彼女は何処までも“ハーマイオニー・グレンジャー”であった。

ただ一方で、僕がドラコ・マルフォイについて語った所で御互いに何ら楽しくなりようもない事は明白なのだ。それを考えれば、彼女の行いは“英断”であると言えよう。そもそもの話、彼女の囁くような声に耳を傾け続ける事は、僕は決して嫌いでは無かったのだから。

もつとも、今日は何時もの“偶然”と何処か違うようだった。

彼女が親友との付き合いで忙しくなった結果、御互いの片割れが占有する机以外が埋まっている程の好機を見計らうのは不可能になった。故に、両者が暗黙の内にある程度のリスクを見ない振りをするとするのは、ここ二回くらいの傾向だった。

しかし、今は冬季休暇二日前である。

大量に出された冬季休暇の宿題を先送りするのが学生として正しい姿であり、浮かれ気分で休暇を待つというのもまた学生として在るべき姿である。つまり、こんな時期に図書室にやってくる者など変わり者が殆どで、必然的に利用者も少ない。開店休業状態とまでは言わないが、常と比べれば酷くガランとしている。

だが、彼女はそれを気にした風も無く、真つ直ぐと僕の占有する机の方向に向かってきて、付近の棚から可能な限り分厚いのを無造作に何冊か選び取り、それを閲覧机へと置いて席に着いた。今日は、僕の左斜めに座る気分らしかった。

……まあ人数が少ないというのは見咎める人間も減ると考えたのかも知れないが、

「——ええと、ここ良いかしら？」

などと声を掛けたのは、明らかに何時もと異なる不自然な点で有ったと言えよう。

そんな彼女は、やけにソワソワしているようだった。

こう言っただけだが、彼女は感情を制御するのが苦手なタイプである。

落ち着きが無かったり、神経質で有ったりといった心境は、ダイレクトに彼女の言葉や行動に現れる。それを考えれば、彼女の気を特に逸らせるような理由が有るのは歴然としていたが、流星に図書室でそうなる理由というのにも推測が付きかねる。実際、図書室を訪れているのはただの時間潰しに過ぎず、彼女の態度は今後待ち受ける何かに原因を求められるのかも知れなかった。

しかし、このような不安定なハーマイオニー・グレンジャーなど、入学前の一か月の間ですら何度も見たものだった。だから、僕はそれ以

上気にする事無く読書へと戻ったし、彼女もまた落ち着きがないまま
で有りながらも、鈍器めいた本を開いて目を通し始めた。

その後暫くの間、僕と彼女の間に会話は無かった。

しかし、僕はそのような時間も決して嫌ってはいなかった。確かに
僕は彼女によって一方的に紡がれる声に耳を傾けるのが好きだった
が、御互いが捲るページの音だけが存在する空間を共有する事もまた
心地良く思っていた。恐らく、彼女もそうだろう。彼女は友人と楽し
く過ごす事について強い執着を抱いてはいても、本質的には「本の虫
」であるのだから。

そのように穏やかな時間は過ぎ、乾いた紙の立てる音が二人合わせ
て百を優に超えたであろう頃、彼女は何時もの囁き声で、何時もとは
違う話の切り出し方をした。

「ねえ、貴方に聞きたいんだけど——」

ハーマイオニー・グレンジャーが僕に質問をするのは、酷く稀有な
事態であった。

魔法界について知識を欠いていた入学前は逆に質問マシンであつ
たのだが、入学後には殆ど記憶に無かった。彼女は依然として学年一
の秀才である事を証明し続けており、優秀層とは言っても彼女より遙
かに劣る事が明らかで僕では、彼女に助力する事など早々無い。

ただ、皆無とまでは言えなかつたし、その頃には僕は既に、ハーマ
イオニー・グレンジャーが当初から何時もと違う様子を見せていたと
いう良く有る事を頭から飛ばしていた。だから僕は、次々と紡がれる
彼女の質問に淡々と答えていった。

その間、僕が本から視線を上げるような事はしなかつた。

それが何時ものスタイルであるという面は有つたが、一番の原因は
彼女の殆どが機械的に処理できるような物であつたからである。紡
がれる質問の大半が冬季休暇中に出された宿題に関する事であるの
は彼女らしくも有つたが、僕が簡単とすら思う問いをする事は彼女ら
しくないとも言えた。ただまあ、求められているのに敢えて答えない
理屈も無い。

そのように、何時もと比して珍しく僕の言葉数の方が多いと言う状

況がひとしきり続いた後、彼女は一つの質問を僕へと投げ掛けた。

「じゃあ、ニコラス・フラメルについては？」

「ニコラス・フラメル？ 君が授業の予習に余念がないのは知っているが、まさか五年分も先取りしようとしているとは知らなかった」

その質問も既知であり、やはり顔を上げないままに僕は言葉を紡いだ。

まあ、それが解答で無かったのは御愛嬌だろう。その名前は錬金術師の物であり、しかしホグワーツにおいて錬金術の授業は最終の二年、それも十分な希望者が居る場合にのみ開講される筈だった。つまり一年生時点において関心を持つには余りに早過ぎる知識で有ると言える。しかし、一拍置きさえすれば、彼女ならば有り得ると思ってしまうのが、彼女が「ハーマイオニー・グレンジャー」たる所以だった。

だからこそ、僕はその問いが為された事に左程疑問を持ちもしなかったのだが、彼女の反応は劇的だった。

「貴方知っ——!?!」

半ば椅子から立ち上がるうとしながら発させた彼女の言葉は、一瞬で途切れた。

賢明にも、自分が今何処に居るかを途中で思い出してくれたからだ。

もつとも、マダム・ピンスは当然というように見咎め、鋭利過ぎる視線を飛ばしてくる。ハーマイオニー・グレンジャーは何度か咳払いをするが、どう考えても誤魔化しきれいていないのは明らかだった。しかし、短気な司書にしては珍しく今回は見逃す事にしたらしい。偶々遠くに居たからなのか、或いは冬季休暇を彼女ですらも楽しみにしているのか。その理由は杳やうとして知れない。多分、解る日が来る事は無いだろう。

だが、ハーマイオニー・グレンジャーはへこたれないらしく、たっぷり三十分程度読書に時間を費やして嚴重な監視を逃れた後、その姿勢を崩さないままに囁き声で問うてきた。

「……ニコラス・フラメルについて、貴方は知ってるの？」

「ああ。非魔法族の書籍で見た事がある。確か、賢者の石の製作者だと」

その瞬間の彼女の表情の変化は見物だった。

無意識的にであれ、彼女は己の血筋故に、非魔法族について魔法族よりも詳しいという自負が有ったのだろう。だからこそ半純血とは言え僕のような魔法族の口から『非魔法族の書籍』で読んだ——それが馬鹿げた空想的な代物ファンタジックと区分される類で有っても——という発言を聞くとは思ってもよらなかったに違いない。

「……まさか、マグル側にヒントが有るなんて考えもしなかったわ。てつきり魔法界の人物かと思つて探していたもの」

「いや、君がそう言うのであれば、魔法界で遺した功績が非魔法族にも伝わっているというのが正確なのだろうな。何せ彼は数百年前の錬金術師だ」

「つまり、1692年の国際機密保持法成立前って事？」

「或いは、多少の魔法的隠蔽では隠しきれない程に彼が偉大で有ったかだ。両方の理由かも知れないが」

数百年前の人物とは言え、賢者の石が何たるかを思えば、彼の業績や彼に関する記述など有り余る程に残っている筈だ。特にホグワーツの蔵書数は膨大である。自分の屋敷に山積みされている類の書籍が禁書となつていて事実上閲覧出来なかつたり、或いは意図的に欠落させられてすらいるのは知識libraryの集積場としてどうかと思うが、賢者の石を製造した偉人については生徒が読める書籍の中に間違いなく存在するに違いない。

そう思つたのは彼女も同様だったのだろう。得た手掛かりの確証を得る為に、すぐさま本の再発掘に旅立ちなどしなかった。

その代わり、降参を示すかのように椅子に背を預け、感慨深げに溜息を吐く。

「冗談交じりで考えていた事が正しいとはね。私は家に帰った際、パパやママに聞いてみようとも思つたのよ。でもまさか、それが正解だったなんて」

「……たとえ聞いても答えが返ってきたとは思わないが。君の両親は

単なる歯医者だろう」

「あら、錬金術という『学問』が、マグル社会において一体何を発展させたのか御存知ないのかしら？　そして歯医者にも科学的な知識は必要なのよ」

そう彼女は言うが、非魔法族の書籍ではどう考えても胡散臭い形で記載してあったと記憶しているし、論理と合理性を重んじていた彼女の両親があんな不確かな事柄について信じるとは——彼らが、自分の娘が魔法族であるという最高に不確かな現実に直面した事を考えても——更々思えなかつたのだ。

まあ、それは別に良いのだが。

「しかし、何だってニコラス・フラメルに興味を抱いたんだ？　まさか本気で五年分の勉強を先取りしようとしていた訳では無いだろう？」

ハーマイオニー・グレンジャーは、聡明な女性である。

しかし、必ずしも賢明であるとは言えず、そして隠し事をするのもやはり下手だった。

「ええと、個人的な興味よ。たまたまニコラス・フラメルの名前を見かけて、彼が何をやったのかなーと気になっただけ。そう、それだけよ」
早口で紡がれる言い訳は胡散臭く、ここ最近の彼女の行動を考えれば完全に嘘だった。

ハーマイオニー・グレンジャーは二人の友人とつるむようになっていたが、しかし彼等は頭脳派よりも肉体派である。迫りくる期末試験によって強制されたのであれば兎も角、自発的に『本の虫』になりに来る事など有り得ない。だが、ここ暫く彼等は三人連れ立って図書室に入り浸り、何か熱心に調べ物をしていただけだ。

そして、その内容は今は明らかである。すなわち、ニコラス・フラメルについて彼等は調べていた。流石に、何故調べていたのかという事は解らないが。

ただ、誤魔化すように紡がれた次の彼女の言葉は、僕の核心を突いていた。

「そ、それより！　貴方もマグルの書籍って読むのね。いえ、入学前に貴方がマグルに関して色々と話をしようとしていたのは私も覚えて

いるけど、本当に短い間だったじゃない？　　とうか、一日だけ？
最初話した感じでは余りマグルにも興味も無さそうだったし」

「……」一応君は知っていると思うが、僕の母は非魔法族だった。自分のルーツに興味を抱くのがそんなに不自然だろうか？」

「べ、別に悪くないわよ。ただ、半純血でも魔法側にどっぷりという人の方が多みたいじゃない？　　寧ろ、マグルに興味を持つ事は素晴らしいと思うわ。ロンの話を聞いていて思うけど、魔法族がマグルに余りにも無知であると思う事は多々あるもの」

後半はぼやくように言うが、しかし聡明なる彼女の推測は完全に間違っても無かった。

非魔法族の母と未成年者が暮らすという都合上、その生活は必然的に非魔法族に近いものだった。けれども、母はそうでありながら、可能な限り僕を魔法以外に触れさせたくないと考えていたから、僕の知識は圧倒的に魔法にどっぷりだったのは事実である。

但し、僕は母への反抗から、寧ろ非魔法族の知識をどうにかして手に入れようと何時も企んでいたし、母の死後はその動機を喪った代わり、一人の女の子の関心を買う為の手段に成り代わった。故に、それなりの数の書籍には目を通したし、他の魔法族よりは圧倒的にマシである事は疑いない。ただ、時間が無かった上に突貫で仕上げた為に、細部が御座なりになっていいる部分も余りにも多い事は否定出来ない。

そしてまあ、その後のオチについては語るまでも無いだろう。

それなりに知識を得たと自負した僕は意気揚々と女の子に話題を振ったのだが、彼女は新たに知った魔法界の事にお熱だった。

結果としてそれが求められていない事を理解した僕はそれを封印し、彼女が好む魔法界の事について話題を広げる事にしたのだった。自身が彼女に抱く想いを恋であると自覚する前に、舞い上がった心のままに突っ走った愚か者の失敗談である。

……ただ、彼女がその事を覚えていたとは意外だった。

いや、彼女の並外れた記憶力からすれば、何ら可笑しくなど無いのかも知れないのだが。

「……しかし、スリザリン生にとっては望ましくない在り方だ。解つ

てると思うが——」

「——あら、私が誰かに言うと思うの？　まして、一般的なスリザリン生に？」

少しばかり怒ったような、しかし何処か悪戯っぽい口調と共に彼女は僕を流し見た。

「私が話すスリザリン生は貴方だけだし、話したいと思うスリザリン生も貴方だけだわ。そんな心配は全くもって無用よ」

……その言葉が僕にとってどれ程反則的で、破壊的であるのか。

言いたい事は言い終わったというように軽く伸びをしている彼女には、それが解らないだろう。

「嗚呼、この部分はハリーやロンにも言わないわよ。スリザリン生がマグルに理解が有るなんて、彼等は言っても信じないでしょうしね」
「……君が僕に関して余計な事を言い触らすなんて、それこそ心配していない」

「なら良かったわ」

彼女は満足気に微笑みを見せて、全体の分量に比して殆ど目を通していない本の山を片手に立ち上がる。

恐らく彼女はそれらを借りもせずに元の場所に返し、その代わりにニコラス・フラメルについて書かれた書籍を探しに行くのだろう。今日話掛けてきたのは、その名前について僕が何か知っていないかを聞く為であり、その目的を果たした以上、最早ここに留まる理由など無かった。

「本当に助かったわ。探すべき本が多過ぎて、取っ掛かりが見つからなかったから。これで先に進めそうなもの」

僕の顔に彼女の顔を近づけて囁きの感謝を述べた後、彼女は颯爽と立ち去った。

そうして予想通り手早く目的の物を発見したらしい彼女は、スキップしそうなくらい浮かれているのを司書に怒られた後、貸出を受けて図書室を出て行った。彼女が戻って来ない事を若干残念に思う気持ちも有ったが、彼女が何も言っていなかったという事はニコラス・フラメルについて僕が間違った事を告げた訳でも無いという事であり、

自身が助力出来たのは喜ばしい事だった。

……言うまでも無い事だが。

この時点で、そしてその後かなりの間、僕は彼女の質問の真意に気が付かなかった。

ニコラス・フラメル——その最も著名な業績である賢者の石。それについて何故彼女が関心を抱いたかを知る為には材料が不足していた。

すなわち、彼女の質問と禁じられた廊下を直接結び付けるのは論理が飛躍し過ぎていたし、第一、賢者の石について魔法族が興味を抱く事は決して不自然でも無いのだ。それは、誰にとっても解りやすく、酷く魅力的な奇跡で有り、万人が時代を超えて渴望して来た代物だったのだから。

故に、僕がその不愉快な真実に気付いたのは、ドラゴン騒ぎが起こつてからの事になる。

生き残った男の子

ハリー・ポッター。

彼の実像に関して、僕は殆ど興味が無かったと言って良い。

ハーマイオニー・グレンジャーから彼の話を聞くようになってからもそれは変わらなかつた。

というよりも、寧ろ彼女からの話はそれを助長した。彼女から聞くハリー・ポッターの話は、何ら特別性も無く有り触れたものであり、“同学年のグリフィンボールの男の子”の学生生活以外の何物でも無かつた。

必然、僕にとって彼は“ハリー・ポッター”という記号を喪失し、物語的空想を補強するツールのようなものにしか成りえなかつた。

その物語空想とは言うまでもない。僕がグリフィンボールに組分けされた場合に、どのような生活を送り、どのような行動をし、どのような感情を抱いただろうという、余りにも女々しく救いようがない空想だ。しかし、その意味で“同学年のグリフィンボールの男の子”は自己投影すべき物語的人物であり、そのような架空的存在である宿命として永遠に触れ合う事の無い筈の存在だつた。

無論、ハリー・ポッターという実体は、確かに同学年のホグワーツに存在していたし、主にドラコ・マルフォイによつてそれを見せられるべきはした。

しかし、彼等にとつて——つまりドラコ・マルフォイも含めて——僕という存在は背景以下の存在であつた。そして僕も割り込むつもりも無かつた。ボス猿同士の抗争の間に、どうして下層の猿が介入出来るようか。故に、それらは僕の眼前で確かに起こっていた事象であるとしても、僕にとつて遠い世界のままであるのは変わりが無かつた。一方で、“生き残った男の子”に何ら興味を抱かなかつた訳ではない。

それが通常の魔法族と些か異なる興味としか成りえなかつた事は疑いない。僕は物心付く前に魔法族の父を喪い、物心を付いてからは非魔法族の母に育てられたのだ。必然、“生き残った男の子”に対し

て崇拜や畏敬、感謝の念を抱く事は出来なかった。

しかし、彼等と同じように、“生き残った男の子”についての謎について、考えを巡らせる事は出来た。まあ、闇の帝王の死亡後から十一年間頭を悩ませ続けた彼等程熱心では無かったが、その謎に惹き付けられたのに変わりはなかった。

彼には多くの謎が付き纏っている。

例えば、何故、彼は隠されたのかという事について。

深く考えるまでも無く、それは可笑しな話である。

生き残った男の子は、ほんの齡一歳にしてアルバス・パーシバル・ウルフリック・ブライアン・ダンブルドアに比肩すべき偉業を打ち立てた。確かに両親を殺害されたという魔法戦争後には有り触れた不幸を有しているが、さりとてこれから幸福を享受する権利を有していない訳では無い。寧ろ彼が為し遂げた事を思えば、一般的な戦争孤児と異なり、目が眩まればかりの輝かしき将来はそれだけで十二分に約束されていたとすら言えた。

それにも関わらず、彼は魔法界に留め置かれなかった。

死喰い人の残党が未だ跋扈していた戦争直後は兎も角、一応の平穏を取り戻して以降は筋が通らず、その事に疑問を抱く人間が当然居た。

ロイヤル・タッチ——非魔法族の迷信——よろしく、“聖人”に触れる事が出来ない魔法族の嘆きと不満の声は当然に沸き上がっていたのはまあ別に良い。つまるところ、“生き残った男の子”が公開されないのは、明らかに魔法族にとって不当である筈だった。

そして、それを為したのは言うまでもなくアルバス・ダンブルドアその人である。

そもそも無茶苦茶な話だ。

アルバス・ダンブルドアは、魔法省役人でもハリー・ポッターの後見人でも何でもない。けれどもアルバス・ダンブルドアは、“生き残った男の子”はグレートブリテン魔法界の全魔法使いが総力を挙げて庇護すべき子供であるという声を残らず踏み潰して、“生き残った男の子”を独占した。独占し続けた。

その事は様々な疑念と疑惑、そして嘘か真か知れない数々の噂を呼び、果てにはアルバス・ダンブルドアが自らの秘密兵器として使うつもりなのだと言われたようである。

よくよく考えてみれば、アルバス・ダンブルドアという「疑いなく英雄」は、その頃には既に——正確にはそれ以前からずっと、であろうが——明確に嫌悪と敵意を少なからず向けられていたように思える。

まして、「生き残った男の子」が非魔法族社会に「収容」された事を、果たしてどれだけの者が知っていただろうか。

彼が「マグル」の中で生まれ育ったというのは既に現ホグワーツに居る学生にとつては常識であったが、ハリー・ポッターその人は——当然ハーマイオニー・グレンジャーもだ。寧ろ、彼女の語り口で気付いた——その重みを理解していないように思えた。

何故なら、「生き残った男の子」を非魔法族の世界に送り込む事は、純粹なる魔法族的価値観から見れば、余りにも残酷な価値観だからだ。

そう、残酷な、だ。

魔法省という純血の牙城が示すように、魔法族が非魔法族に対して向けている眼など明らかである。まして、スリザリンを「純血」主義だと笑う他三寮——ただハッフルパフだけは微妙に違うように思えるが——も、その実、僕にとっては「純血」主義の差別主義者である事に変わりなかった。何せ彼等は至極当然に次のように思っているのだ。

魔法無し你的生活？

彼は一歳で既に試練に直面したのに、何故更なる試練を与えるような真似をするのか？

繰り返すが、そこには善意しかない。そして、その善意をやはり手酷く無視したのも、そのような謎を生み出したのも、アルバス・ダンブルドアその人である筈だった。

何故隠されたのか。何故非魔法界に置かれたのか。

その意味で、僕は「生き残った男の子」について確かに興味を抱い

ていた。

もつとも、それは野次馬的な興味以上の物では無い。

既に述べたように、僕は「生き残った男の子」に対して、何ら崇拜等の感情を抱いてはいなかった。当然ながら、彼の扱いが不当であるとも、アルバス・ダンブルドアの策謀を暴いてやろうとも思いもしない。ホグワーツに来て以来の調査、先の謎の理由について書籍や雑誌、新聞や魔法省の公的声明の中に探す事はしたし、当然のように挫折したが、しかし、それで構わなかった。歴史は闇のままだという結論を放置する事が出来た。僕にとって「生き残った男の子」への思い入れは、その程度でしかなかった。

そんな訳で、僕にとって「ハリー・ポッター」の実像はどうでも良かったのだ。

彼の「同学年のグリフィンドールの男の子」としての側面にしろ、「生き残った男の子」としての側面にしろ、一定の関心や興味を寄せられるものである事に違いなかったが、しかし自分が接近して確かめるべき存在では無かった。

彼は余りにも遠かった。そして、その事について、僕は何ら不満を抱いていなかった。寧ろ、僕に容易く触れられるような物であるべきでは決して無かった。

そうなってしまうえば最後、先のような「グリフィンドールの男の子」を通した空想は粉々に破壊され、そしてまた「生き残った男の子」への適度な無関心を保つ事は出来ないという理解していたからだ。忌憚なく言えば、僕は彼に対して近付きたくなかったのだ。

無論、人の関係というのは、二人の行動によつて構築されるべきものである。

しかし、僕は彼が近付いてくる事は有り得ないと踏んでいた。

確かにハリー・ポッターとの間には、共通の友人という繋がりには有った。

けれども、友人の友人がそのまま友人で無ければならないという理屈は無い。まして、彼と僕との間には二寮の深い断絶が有り、付け加えれば対立関係に有る悪い知人の存在も居た。ただ一点、彼が要らぬ

騎士道精神を發揮した場合とは別だと考えていたが、しかしそれは不可避的な接近を意味するだけで、継続的な近接を意味する事には成り得ない筈だった。

けれども、それは裏切られた。

なんてことは無い。

ただ単にハリー・ポッターは「疑いなく英雄」だったという事だ。

休暇というものは良いモノだった。

特に、スリザリン生である事を取り繕う必要は無いのが大きい。

自分がスリザリン生である事を既に否定するつもりは無いが、スリザリンらしい——つまり、「純血」らしい振る舞いをする事は、「そう」ではない自分にとっては心労が溜まるものであるのも事実だった。しかし、スリザリン生は殆どが実家へと帰り、それは相変わらず然したる交流の無い同室の人間ですらも例外では無い。

何より一番良いのは、僕のクリスマスの「惨状」を見られずに済んだという事だ。

クリスマスにプレゼントを贈り合うような親しい友人というのは、スリザリン内には居ない。そして、天涯孤独の身であるから、ホグワーツ外から来るといふ事も無い。

ただ予想もしていなかった事に、一冊だけラッピングされた本が置かれてあった。贈り手の名前は添えられていなかったが、中身がマグルの本（表紙の偽装付き）ともなれば、それが誰なのかは明らかである。

そしてこちらにも散々悩み抜いた挙句に贈り物をする決断をしていた——子供っぽいかと思っただが、絵本を送った。吟遊詩人ビードルの作品の一つ『豊かな幸運の泉の物語』の本だ。彼女はまず間違いなく読もうとしない類の物語であり、あの話だけならば非魔法族にも理解しやすいと考えた。童話が残酷な場合が多いのもやはり同じらしい——のは、我ながら本当に英断であったと言える。

そんなクリスマスの幸福の一方、二日後の誕生日の方は御寒い状況

であったが、そちらの方はやむを得ないだろう。

クリスマスに引き続いてというのは余りに面倒なのは解りきった事であり、そもそも彼女は僕の誕生日を知らない。誕生日を教え合う機会など訪れなかったからだ。そして当然の事ながら、僕も彼女の誕生日を知らない。直接聞けば良いのだろうが、今まで幾度も挑みながらも失敗してきたのが現状だった。

まあそんな事はさておき、休暇というのは自由だった。

寮内での共同生活という大原則には何ら変わりはなかったから、食事を初めとする幾つかの規則は未だに残っている。しかし、就寝時間というような本当に厳格な一部を除けば、それらの規則も緩められてすらおり、学生がどう過ごすかは自由裁量に任されていた。

そしてスリザリン寮内で残った者に自分が仲の良いモノなど居ないのだから——まあ、休暇中で無くとも同じなのだが——僕は何をして時間を潰すかを考えねばならなかった。もつとも、それは休暇前に既に決めていた。すなわち、 Hogwartz 内の探検だった。

それは休暇でしか出来ない事であった。七階立ての魔法の城は、授業に追い立てられていく日々の間に探索するには余りにも広すぎる。特に、魔法的に迷わされる可能性が有るともなれば猶更だ。勿論、学期内の休日中にそれを行う事は決して無理ではなかったが、授業の事を考えれば、そのような挑戦をわざわざする気にもなれなかった。何より、人に溢れて居ては探検感が出ないだろう。

但し、探検と言っても些細なモノだ。

禁じられた森を筆頭に明らかに危険な物に近付く度胸は無かったし、全く馴染みの無いような場所に赴くつもりも無かった。噂に聞くグリフィンドールの赤毛の双子であれば、このような「散歩」など退屈過ぎると言って嘲笑う程度でしかない。しかし、母が死ぬまで殆ど屋敷に閉じ込められていた僕にとっては、やはり刺激的であった。

学生の殆ど居ない Hogwartz は、常とは全く違う表情を見せていた。

良く見知っている場所でも見知らぬ場所のように見え、また初めて訪れる場所は例外無く新鮮な驚きを提供してくれた。

一番気に入ったのは、螺旋階段を上った先、天文台の塔からの眺めだった。

十二月の半ばからホグワーツが冬の城と化していたのは明らかでは有ったが、しかしこうして高い場所から見るとそれが良く解ると共に、想像以上の美しさだった。

一面の銀世界。

凍り付いて中が見通せなくなった湖に、白く化粧された禁じられた森。校庭は当然に、薬草学で使用する温室群もまた雪に埋もれてしまっているのが見える。そして何処からともなく聞こえてくる正体不明の生物の遠吠えは、しかし恐怖どころか何処となく風情を感じさせるものだった。

勿論、天文学の授業の中で、同じ場所を同じ視点から見ることには有った。けれども、天文学である以上、行われるのは夜である。昼日中、それも普通であれば授業が行われている時間帯に見るのは格別なものがある。

授業以外には立ち入り禁止という話は重々承知はしていたが、であれば閉鎖していない方が悪いし、まあ休暇中の教授達も五月蠅く言わないだろうという確信は有った。減点はされるかも知れないが、規則を思い出させる為の形式的なもので終わるに違いない。一応優等生で通っているというのも都合が良かった。

何時ぞやのクイディッチの時とは違い、僕は寒さの中で飽きもせず眼下の世界を見つめていた。

ある瞬間、ふと、誰かが共に居たのなら余計に楽しいだろうな、と思いはした。もつとも、それは余りにも叶わぬ希望と言えたが。しかし、愉しむ気持ちは全く消えず、僕は一人笑った。

そう、一人の筈だったのだ。

「——ねえ、ちよつと良いかな」

瞬間、その声が聞こえた方を僕は振り向いた。

誰も居ない筈だった。少なくとも、視界の中で動く物は何も無かったし、一応教授が入って来ないかは多少気になっていたからそちらの方に視線を向ける事は有った。そして誰も居なかった筈なのだろう。

まるで中空から出て来たかのように、彼——ハリー・ポッターはそこに居た。

余程僕の反応が劇的で、過剰で、そして奇妙だったのだろう。彼の碧の瞳は、面白がっている様子を隠そうとはしていなかった。悪戯が成功した、そう言っているように見えた。

「……それは、僕に言っているのか」

他に誰も居ない事など解っているのに、僕はそんな間抜けな質問をしていた。

しかし、ハリー・ポッターは少し口元を笑みに歪めたままでありながらも、確かに頷いた。

「ああ。君に話があるんだ」

ハーマイオニー・グレンジャーの友人達。

現実として、彼等の属性が“グリフィンドール”的である事は明らかだった。

血を裏切った赤毛の友人は解りやすい。彼は生粋のスリザリン嫌いである事を全身で表現していたが、彼はそれが当然の正義だと考えるべき根拠が有った。

すなわち、彼の母親の兄弟達は、魔法戦争において死喰い人に殺され、当然の帰結として親の“洗脳”を受けている。嗚呼、別にその“洗脳”を揶揄するつもりは無い。全くの善意から為される親の“洗脳”を子供がそうそう跳ね付けられる筈も無い事を、僕は身をもって知っている。何にせよ、彼は戦争遺族であり、死喰い人を数多く輩出してきたスリザリンに対して友好的になれないだけの正当な理由が有った。

また、この眼前の英雄も、同様にスリザリンに好意的などなれる筈も無い。

ホグワーツ入学後のドラコ・マルフォイとの関係は当然の事ながら、彼の親は闇の帝王によって殺された。闇の帝王がマトモに学び舎に通ったとも思えないが——名前からして、ボーバトン出身なのかも

しれない——厳然たる事実として、闇の帝王の配下にはスリザリン生が多かった。直接的な親の仇であるとはまでは言えないが、さりとて恨みを持つのが不当では無い程度には関係を有していると言える。

だからこそ、彼等が能動的に接触してくる事など、ただの一つの理由、つまり友人である非魔法族生まれの女の子を「間違ったの」から引き離す事を除いて存在しないだろうと踏んでいたのだが、敵対的というには穏やかな先の言葉から考えるに、それは違うようだった。

「……話をしたい、ね。僕について、ハーマイオニー・グレンジャーに何か聞いたのか？」

思い当たる理由は、それ以外に無い。

けれども、その事自体が余りに腑に落ちないのも事実だった。

事実、彼は首を縦に振ろうとして、しかし途中で横に振る事に変えた。

「違——いや、違わないけど、違うんだ。確かにハーマイオニーから君がニコラス・フラメルについて教えてくれたって聞いた。そして、それは確かに今こうして君と話をする一つの切っ掛けでは有るけど、そうじゃない。僕が話をしたいと思ったのは、全く別の話についてだ」

ハリー・ポッターの言葉は、僕の違和感を肯定するものだった。

ニコラス・フラメルに関して、ハーマイオニー・グレンジャーから二人の友人に伝わるのは当然予測出来る事だった。但し、彼女がスリザリン生である僕の名前を出すとは思っても居なかったが。しかし、その場合においても、その助力についてわざわざ礼を言いに来たというのは突拍子が無い考えである。そのような丁寧な真似を、グリフィンドールがスリザリンに対して行う意味など何ら存在しない。

だからこそ、僕には彼がわざわざ話の機会を設けようとしたその理由が解らない。

そして僕の困惑が伝わったのだろう、彼は更に言葉を続けた。

「ねえ、ダイアゴン横丁の、マダム・マルキンの洋装店の入り口で僕とすれ違った事覚えてる？ まあ、君の方は気付いていなかったかも知れないけど」

「……いや、覚えては居る。気付いていた。いたが——」

僕が更に困惑を深め、言葉を途中が途切れさせてしまったのは、似たような事をスリザリンでも聞かれたからだ。

しかし、それを知りようもない彼は、確信が裏付けられたというように頷く。

「やっぱり、君は僕の傷跡を確かに見てたんだ」

「……まあ、店の入口だったからな」

「だろうと思った」

そう言うのは、店の中で隣に立っていたであろう誰かが、その時は彼の傷跡に気付かなかったからかもしれない。

「それで、僕が傷跡に気付いていたから何だと言うんだ？ 僕は君と入口ですれ違っただけで、僕は君と会話をせず、ドアから立ち去っただけだった筈だが」

「そうだよ。普通に考えて特別な事は何も無かった。けど、僕にとつて、それがどんなに特別な事であるか、解らない筈は無いだろう？」

ハリー・ポッターは感情が籠ったのか、顔を少しばかり近付けて言った。

「特に、あの日は僕が魔法界に来た一日目だった。ホグワーツで三カ月ばかり生活した後じゃないんだ。誰も彼もが、僕の額を見て、当然のように話掛けてきた。御辞儀をしてくる人間も居たし、握手を求めてくる人間も居た。そこまで行かなくとも、ひそひそ話をされるのはしよっちゅうだった」

「まあ、グレートブリテン魔法界の英雄ならばそうだろう」

僕の揶揄に明らかに嫌な顔をしたが、しかし彼は立ち去る気は無いやうだった。

「だけど、君は違っただろう？」

まあ、それはその通りだ。

僕にはそうする理由は何も無かった。

「ハーマイオニーから君の事を少し聞いた。勿論、彼女は余り良い顔をしなかつたけどね。ただ、君がマグル生まれなのかって聞いて、彼女は違うって答えてくれた。正直、それまで僕は君がマグル生まれだ

と違っていたんだ。そうだったら、僕への反応も解るから」
ハリー・ポッターは魔法界の英雄であるが、非魔法界の英雄ではない。

故に、その人間がスリザリンに組分けされたとしても、マグル生まれであると思っていた。しかし、知識の化身にして僕と奇妙な友人関係を続けている彼女は否定した。だからこそ、彼は僕に興味を抱いたのだろう。

もつとも、それはそれ程強い興味では無かったに違いない。

余りに些細な事であり、勘違いである可能性があり、スリザリン生に接触しに行く理由が無かった。だからこそ、約三か月の間は何も無かった。

けれども、彼はハーマイオニー・グレンジャーから、恐らく彼女が実家に戻る前に、ニコラス・フラメルについて僕が助力をした事を聞いた。そして、良い切っ掛けだと考えたのだろう。たまたま見かけたからなのか、或いは強い決心に基づくものかは知らないが、こうして僕を追いかけて来て話合いの機会を持つとうとした。都合の良い事に、スリザリン生は冬季休暇中には殆ど残っていないのだ、互いに見咎められる心配は無い。

しかし、この上無い皮肉だった。

一洋服店における、酷く有り触れた何ら特別である筈もない接触。しかしそれこそが、二人の重要人物——片や闇の帝王を打ち倒した英雄、片や純血中の純血の子息が僕に接触しようとする契機となっている。

その奇妙な相似について、ドラコ・マルフォイは当然、目の前に居るハリー・ポッターもまた知り得ない。けれども、両者は絶対的に相容れないながらも、何処か互いに共感を抱けるような共通の根幹を有しているのかも知れなかった。

「……つまり君は、僕が君を特別扱いしない理由を知りたい訳だ」

「別に特別扱いして欲しい訳じゃないけど、あー、そうかな」

彼は頷くが、さりとて困るのも事実だった。

別に語りたくないという訳では無い。しかし、僕がそうである理由

を語るには必然的に、僕の育ちについて語らねばならないという事であつて、このような立ち話の間に理解して貰えるものでも無かつたし、長々しくなる事は明らかであつた。そして、興味の無い人間の身の上話程につまらないものは無いという一般論くらいは理解している。

「……やっぱり無遠慮な事を聞いたかな？」

「いや——少しばかり考えを纏めていただけだ」

恐る恐る聞いてくるハリー・ポッターに、しかし僕は首を振つた。

拒絶しても良かった。そうであつたとしても、彼は怒りを見せないだろうという感覚も有つた。だが、スリザリン生を捕まえに行つてまで話を聞こうというその精神に対しては、一応の敬意を払うべきだつた。

「『生き残つた男の子』には、多くの謎が付き纏つている」

「え？」

面食らつて声を上げた彼に、しかし僕は気にせず言葉を続ける。

「君が英雄で有りながら非魔法族の中で生まれ育つた理由。死喰い人を使うのではなく、闇の帝王が直々にポッター一家を襲つた理由。事実かどうかは知らないが、君が受けたのは死の呪文であり、それでいて尚生き残つたという理由。他にも数え上げればきりが無いが、その中において、最も疑問であるのは——」

僕は、彼の額を見た。

余りに特徴的な稲妻の傷。『生き残つた男の子』の証。

「何故、闇の帝王は、君にその傷を残すのが精々で死んだのか」

それは余りにも一般論的で、けれども看過出来ない核心の疑問。

「十年前、君は当然に赤子だつた。一方で闇の帝王が闇の魔法使いとして途方も無く強大だつたというのは噂に聞いている。未だにその名前を口々に呼べない位に。」

——さて、両者が戦つたらどちらが勝つと思う？」

「……まあ、ヴォルデモートだろうね」

闇の帝王の名前を平気で口にした事に僕は眉を顰めたが、彼はその事自体気が付いていないようだつた。そして、辟易した表情で肩を竦

める。

「だけど、その常識的な考えをしてくれる人間は居ないんだよ。誰もが、僕を特別扱いする。闇の帝王を打ち破った『聖なる力』が有るんじゃないかってね」

しかし、僕は口を歪めた。

「『聖なる力』は有るんじゃないのか。嗚呼、君が思うような意味じゃない。つまり、赤子が闇の帝王と決闘して勝ったとは到底思えない。一応聞くが、君は魔法族的な子供として以外の力を発揮した事は有るか？」

「無いよ。気付いたら別の場所に居るとか、髪が一晩で伸びるとか、硝子が消えるとか、ただそれぐらい。人一人をぶっ飛ばす事すら出来はしない」

「なら、君は闇の帝王を上回った訳でも、より偉大であった訳でも無い。単純に、君は何らかの理由により幸運だったただけだ」

「それは……当然の事じゃないか」

「当然の事を確認する事こそ論理というものだ」

その点はハーマイオニー・グレンジャーも同意——いや、彼女はどうか怪しかった。

彼女は地べたを這いずり回って丹念に事実を積み上げていくというよりも、膨大な知識に裏打ちされた直観により押し潰していくという方が近いだろう。単なる勘よりも余程質が悪い。一見文学系でありながら、しかし気性はストロングスタイルなのだ、彼女は。

「そして、確かな理由が有るのであれば、仮説を立てる価値も有る。例えば、幸運にも死の呪文が君に効かない体質であるとか。人間、突然変異というのは現実に存在するからな」

「……珍獣を見る目はやめて欲しいんだけど。でも、やっぱりそれは違うと思う」

「であれば、何らかの魔法が掛けられたというのはどうだ。一番有り得て、一番君が特別などでは無い仮説だ」

「それは……有り得るのかも知れない」

「もつとも、死の呪文に対する反対呪文は存在しない。君が本当に死

の呪文を受け、それでも護られたというのであれば、全く知られていない魔法が、全く知らない形で使われたという事になる」

単純に思い付くのは犠牲や代償を捧げた守護の魔法だ。

そのような行いは、魔法の世界において珍しくも無い。そして聞くところに拠れば、彼の前には、お誂え向きに二人の犠牲者が居る。

ただ腑に落ちないのは、家族が命を投げ打つ程度で闇の帝王を打ち破れるのだったら、闇の帝王は優に百回は死んでいるだろうし、「生き残った男の子」もポコポコ生まれているだろうと思える事だ。寧ろ、その程度で子を護れるなら、親は当然に命を投げ出すだろう。逆に子供を護れなかった親は、子供の事を全く愛していなかったのかという話になる。

だからこそ、その仮説は僕にとって可能性が低いと言わさせるを得ない。

まあ他の条件——たとえばピンポイントで赤子を殺しに行ったあたりを付け加えるならば別だろうが、それは闇の帝王の行いとして似つかわしくない。親を殺したついでに子も殺そうとしたらうっかり死んだという方がまだ現実味が……いや、それはそれでどうだろう。

成程、そう考えると大多数の魔法族が、「生き残った男の子」には「聖なる力」を持っていて欲しい理由が解る気がした。

闇の帝王が偉大で無かったとすれば、その彼に殺された者達は救われない。逆に偉大であれば、それは仕方なかった事だと言い訳する事が出来る。

「……うーん、言われてみれば確かに考えてみた事も無かったな」

即興で組み上げた言葉にしては、彼にそれなりに影響が有ったらしい。

彼は腕組みをしたまま、自分の思考に没頭しているのがありありと解る。

もしかしたら、生き残った理由が謎だと言われて、そこで思考停止してしまっていたのかもしれない。しかし、それを責める事は誰にも出来ないだろう。自分が生き残った理由を考えると、必然的に親が死んだ時の事を考えるのを意味するのだから。

「まあ、そういう訳で、僕は君が特別では無く、何か確固たる理由を求められると考えている。だからこそ、君を理由も無く特別扱いする気になれない。もっとも、仮説が間違っていて、君が真に『聖なる力』を持つていけば崇め立てざるを得ないが」

「……その場合でも止めてよ。僕はそんな風にされて喜ぶ趣味は無い。それがスリザリン生ならば猶更だ」

嫌味を隠す事無く付け加えた僕の皮肉に、『生き残った男の子』の称号を持つ単なる男の子は顔を歪める。

ただ、それを見て思い出した事も有った。

「……『聖なる力』では無いが。君には疑いなく特別な点があったな」

「え？」

「つまり、クイディッチの腕前だ。僕は詳しい訳では無いが、それでも見ただけで別格だという事は解る。マルフォイよりも明らかに君は良い飛び手だ」

それは、マルフォイ自身も心の何処かで認めているだろう。

ドラコ・マルフォイが今年度の寮選抜クイディッチ選手になる事は、彼の家の力をもってすれば、難題ではあれ決して無理では無かった筈だ。無論、この学期が始まる前は流石に不可能だったろうが、今となつては約百年の慣習を打ち破った直近の『先例』——眼前の男の子が居る。しかし、そうはなっていない。そして、それが全てだった。

もっとも、彼が家から持ち込んだ箒を使って——規則破りだった筈だが、彼は当然のように意に介していなかった——来年の為に熱心に練習をしている事実を、僕は知っているが。僕の彼への助力が増えたのも、その延長線上に有ると言える。

「……スリザリン生に褒められるのは凄く変な気がするな」

落ち着かないように身動きするが、事実は事実だ。見ない振りをして仕方がない。

「まあ、僕としては君が次に手加減してくれる事を祈るばかりだ。君は当然知らないだろうが、先のグリフィンドール戦後のスリザリン寮

の有様は酷いものだった。僕としては、アレを避けられるのであれば、今すぐ君を崇めても良い」

「それは聞けないかな。寧ろやる気が出て来たよ。もう一度繰り返してやろうって」

自分では解らなかったが、余程苦々しい表情をしていたのだろう。彼は声を上げて笑った。

彼が聞くべき事は聞いたし、僕は話すべき事は話した。

そのように思ったのだが、彼は何故か立ち去りがたいものを感じてゐるらしい。僕が視線を天文台の光景に戻しても、彼はその場を動こうしなかった。

……嗚呼、薄々感じはしている。寧ろ、それは強まるばかりだった。

だが「生き残った男の子」は僕の内心を気にした風も無く——僕の心の底に浮かび上がった考えを保証するかのよう——彼は語り掛けて来た。

「ロンは……ロナルド・ウィーズリーは、君の事を良く言っていないかった」

それを僕に聞かせる事に意味が有るのかと思つたが、彼の方は、僕の沈黙が先を促しているものと取つたのだろう。彼は続けた。

「二度だけ、ハーマイオニーから君の話が出た事が有る。けど、その時にロンは滅茶苦茶に怒っちゃってさ。彼女が君の事を擁護するものだから余計に。まあ彼女の怒り具合も酷かったけど。その、話もしないで決めつけるのは、マグルを差別するスリザリンと同じだとか」

そのつもりは無かつたのだが、思わず微笑んでしまった。

成程、余りにもハーマイオニー・グレンジャーらしい言いつぶりだ。そういう辺りが彼女を入学直後に孤立させた原因であるのだが、彼女に友人が出来てもそれを治す気は無いらしい。もっとも、それが彼女の良い所でもあるが。

「結局、暗黙の内に君の事は御互い話題にしないってなつたみたいだけど。ただ、その時僕はロンの言葉を否定もしなかつたけど、そこま

で悪いようにも思えなかった。だってマダム・マルキンの店で擦れ違つた時に君は僕に会釈したし、ハーマイオニーはああ言うし、何よりマルフォイと僕が争っている時の君の視線は——」

「——ちなみに、ロナルド・ウィーズリーは僕の事を何と言っていた？」

言葉を途中で遮られた事に驚いたのか、彼は一瞬息を呑んだ。

彼が思う理由で、僕はそれを聞いた訳では無い。だが、僕が依然として彼の顔を見ずに、眼下の風景を見ていたのが良かったのだろう。彼は、何とか言葉を絞りだそうとした。

「……あー、それは」

「言葉を飾らなくて良い」

「ドラコ・マルフォイに媚び諂う権威主義者。純血主義にどっぷり浸かつた陰気な偏屈野郎」

僕は苦い思いと共に笑った。

今までとは違い、声を上げて。

「彼は良く見ているな。僕はそれを否定できない」

茶化す訳では無く、間違いなく本心からだつた。

ロナルド・ウィーズリーは「疑いなく普通」だつた。

ハリー・ポッター、そしてハーマイオニー・グレンジャー。二人の事はホグワーツ一年の口の端に上る事が多く、スリザリン寮でもそれは例外ではない。勿論スリザリンでは侮蔑と嘲笑が大半だつたが、何にせよ、スリザリンにとつても彼等の動向は無視出来ないものである事に疑問を差し挟む余地は無かつたのだ。

しかし、ロナルド・ウィーズリーは、血を裏切つた者の一人、或いはアーサー・ウィーズリーの息子以上の事を認識されていない。皮肉にもロナルド・ウィーズリーという存在を最も認識しているのがドラコ・マルフォイであり、それ以外の者は英雄達のお零れを貰う腰巾着だとしか考えていなかった。要するに、ロナルド・ウィーズリーはスリザリンの大多数にとつて「取るに足らない者」だつた。

ただし、そうであるが故に見える物もまた存在する筈である。

認識とは相対的な物であり、比較して初めて構築しうるものであ

る。人が二つの眼によって距離を測るように、一つの立場からでは見えない事もあるだろう。

ハーマイオニー・グレンジャーは変わらぬ友誼を示してくれては居る。しかし、僕が彼女を「穢れた血」と呼ぶ純血主義者に対して、媚びて立場を確保している事実は揺るぎないのだ。それは僕が直視したくない、けれども心に留めておかねばならない現実だった。

もつとも、僕の反応は、ハリー・ポッターにとって意外なものだったらしい。今私は不気味な物に向かい合っていますという感情を、全く隠していない声で言う。

「……ええと、怒らないんだね。これがマルフォイなら殴り掛かってくると思うけど」

「彼は「疑いなく純血」だからな。それ以外がスリザリンに居れば解る」

一応の立場を確保出来ていようと、悪評と陰口からは逃れられない。ただそれだけの話だ。

しかし、ハリー・ポッターにとっては余程深く腑に落ちる所が有つたらしい。視界の端に彼を捉えている僕にも見えるように大きく頷きながら口を開いた。

「正直言つて、ハーマイオニーが君を断固として庇う理由が今まで解らなかつたけど、こうして話してみても何となく解つたよ。君は他のスリザリン生とは違う気がする」

「君がそうは言つても、僕は間違いなくスリザリンだ。現に、君とドラコ・マルフォイの争いを一度として止めようとしていない」

「そりやそうだけど。でも、君の方にも立場が有るんだろ？」

「……君は正気か」

それを聞いた瞬間、思わず彼の方を向いてそう言つてしまった。

彼の表情から明らかに気分を害した事を解つても尚、撤回する気になれなかつた。

しかし、何故そう言わないでいられるだろう？

最初から違和感は有つた。ハーマイオニー・グレンジャーから彼の話を、「同学年のグリフィンドールの男の子」の話を聞く度に、それ

は確かに感じていた。だが、それはあくまで彼女の視点を通した物であり、当然に省略されている事が有ると考えていた。

けれども、こうして話をしてみて、そして言葉を交わすにしたがつて、その違和感はどうも強くなっていた。そして、先の言葉は決定的だった。

しかし、こうして話をしてみれば、その普通さは際立って見えてしまう。

彼は英雄である。

暗黒時代を終わらせた功労者である。

闇の帝王を討ち滅ぼした“生き残った男の子”である。

それにも関わらず、彼はその功績を過度に鼻に掛けたりせず、自惚れたりもせず、ちやほやされる事を嫌悪し、それどころかこうしてスリザリン生にすら善良さを——それがどんなに些細な欠片であったとしても——見せようとしている。

それは間違いなく“異常”だった。

「……っ。僕はただダーズリーみたいな奴等の中で暮らしていくのがどんなに大変な事か身をもって知ってるから——いや、もう良い。やっぱ君はスリザリン生だ。ハーマイオニーは君の事を良い人だと言っていたけど、僕はそう思えそうにない」

ここが石畳で無ければ、盛大な足音が鳴っていただろう。

怒声を叩きつけ、存分に痲癩を爆発させたまま、彼は展望台の出口へと突進していった。

しかし、何を思ったのか、ハリー・ポッターは目的地に到着したところでピタリと動きを止めた。そしてゆっくりと振り返った彼の顔からは、それまでの怒りが完全に拭い去られていた。

「でも、ハーマイオニーとはこれまで通り話をしてあげて欲しい。あれ以来、確かに僕達の前で君の事を話題にはしなくなったけど、僕が聞いたらちゃんと答えてくれたし、何より合同での授業中、彼女は時折君の方を見ている事が有るから。……まあ、君は気付いていなさそうではあったけどね」

勿論、それは気付いていた。

単に気が付いていない振りをしていただけだ。

……そうしていれば、彼女は僕の方を見続けてくれるから。

そして彼も僕の答えを求めては居なかつたのだろう。

今度こそ彼は立ち去っていった。

そうして、ある意味僕とドラコ・マルフォイとの関係以上に奇妙とも言える、英雄ハリー・ポッターとの初めての出会いは終わった。

正直言つて、何処かの女の子の時よりは余程好感の持てる最初の交流だったと言えよう。ドラコ・マルフォイと比べても同様である。確かに僕はそれまで彼に含む所は無かつたが、スリザリン生にわざわざ会話を持ちかけるような馬鹿正直さは、自分が決して持ち得ないからこそ眩しく思うものであり、敬意を払うべきものであつた。

もつとも、彼の場合は彼女と逆だつた。

たとえ一方的であるにしろ、僕には彼を嫌うだけの十分な理由が出来た。たとえ逆恨みに等しいものだど頭では理解していても、他ならぬ彼女自身がそれを選択したのだとしても、彼がそこに存在している事自体に対して、半ば憎悪を抱かざるを得なかつた。

結局の所、彼はグリフィンボールだつた。

わざわざ僕に話し掛けるなどという愚行をしたように。

余計な騎士道精神を有する、“生き残つた男の子”にして、“疑いなく英雄”だつた。

魔法薬学講義担当兼スリザリン寮監

ホグワーツでの教育体制は完全にイカレている。

それを最初の授業で実感させてくれる程度には、ホグワーツの魔法薬学講義担当である我らがセブルス・スネイプ寮監は「優秀」だった。

入学一か月前に知り合った小さな女の子は魔法界で為されるであろう授業の事で頭が一杯だったが、一方で僕は非魔法族の教育にも興味を抱いた。と言っても大層なものでは無く、あくまでどんな事をやっている程度の興味でしかなかったが、何せ時勢が良かった。

非魔法界において、四十数年前の教育法が大規模に改革されたのがほんの三年前の事。

その施行結果に対する論評も矢継ぎ早に出され続け、教員不足を初めとして教育の崩壊を叫ぶ声が下火になるどころか依然として大きくなされていたのだ。教育については高い関心が寄せられ続けているのであり、非魔法族に殆ど知識の無い少年ですら簡単に様々な情報に触れる事が出来た。

勿論、それはあくまで非魔法族の世界において「在るべき教育の姿」であり、それをそのまま魔法族の世界に持ち込む事が正しいとは決して言えない。しかし、非魔法族と魔法族の間に大きな違いが無いと信ずるのであれば、導入は出来なくても、その理念を生かす事も応用を利かせる事も当然に可能な筈であった。

そしてその観点から言えば——魔法薬学の授業というのは論外だった。

最初の大演説はまあ良い。流石に最初耳にした時は余りの脅迫の酷さに啞然とはしたが、魔法薬学の危険性を考えれば、幾ら注意しても注意し過ぎるという事は無い。

一年のスリザリン生とグリフィンドル生であれば、その事をネビル・ロングボトムの尊い犠牲によりまざまざと理解出来た筈だった。教える側としては、誇張無く死の危険と隣合わせに成り得る教科である以上、神経質にならざるを得ないというのは当然の話だ。

しかし、それ以外は完全にいただけなかった。

ハリー・ポッターに対する対応は、真つ当な教授で有ればまず有り得ない。

習っていない物を答えるなどというのは無茶苦茶な話だ。そもそも知らない事を学ぶ為に講義に出ているのだから。それどころか彼に対する態度も劣悪である。彼にそう問うていたスネイプ寮監の視線は嫌悪と憎悪に満ちており、何が有ったかにせよ、大の大人が十一歳の少年に向けるものでは無かった。

ハーマイオニー・グレンジャーに対する一貫した無視もそうだ。彼女が出しゃばりなのは解りきった事であり、当時の彼女には間違いないく学友を助けようとするつもりなど欠片も無かった筈であるが、出された問いに対して答えようとしたのは確かである。それを無視するのはやはり十一歳の少女に対する大の大人の態度とは言えない。

そんな訳——どちらの理由が大きいかは議論の余地が無いが——で、僕はスリザリン生としては珍しくスネイプ寮監に対して嫌悪を抱いていた。

もつとも、スネイプ寮監は生徒からの好意を獲得する事について全く関心が無いように見えたし、何より彼の方も僕に対して嫌悪を抱いているようだった。

思い返す限り、最初は一般のスリザリン生と変わらなかった筈である。

だが、二、三回の授業を経た後は、明らかに他のスリザリン生と違う冷淡な対応に変わったように思う。ドラコ・マルフォイから『君、スネイプ教授に対して何かしたのか?』と問われたぐらいだから、気のせいでは無いだろう。

ただまあ、僕が彼に対して抱いている感情を思えば、その変化は何ら不自然では無いだろう。嫌っている相手から好かれると思う方が可笑しい話だ。

無論、スネイプ寮監の授業態度——千年も続いている学び舎で行うには余りに時代錯誤な徒弟制的指導手腕を除けば、その叡智の深淵さは敬意に値するものであった事だ。

グリフィンドール生には馬鹿げた位に刺々しく、僕を除くスリザリオン生には出来の悪い水飴のように駄々甘にという違いがあったが、彼の指導は常に正しかった。

彼の言葉が比喩と装飾に満ちているのは、適切な魔法薬の作成法を伝達させる為にそれが必要であるからだだった。また、生徒に混乱を生じさせる原因の一つである、教科書とは異なる我流の作成法の教授は、しかしその効能だけを見れば、愚直に教科書をなぞっただけの代物よりも数段上である事に違いなかった。

つまり、セブルス・スネイプ寮監は教授としては論外で有ったが、魔法薬学^{Potion Master}の熟練者にして、その神秘の最奥を学ぶ為の師^{Master}としてはこれ以上の存在は無かった。彼は本質的に研究者かつ探究者であり、物分かりの悪い学生に対し下らない魔法薬を教える事に時間を割くのは才能の浪費としか言いようがないような、傑出した人物であると言えた。

しかし、それを授業を重ねるにつれて理解出来た所で、嫌いなものは嫌いだった。

幸運にというべきか。授業という場以外で、寮監が学生に対して直接関わる事は少ない。余程の事でない限り、寮内の自治は首席や監督生に対して一任されている。

ただそうは言っても、第一責任者が寮監である事に変わりはなく、監督生達に相談出来ないような事柄についてあればその相手を自寮の寮監とする事は許されていた。

故に、これから僕がそれを相談すべき先は、やはりスネイプ寮監しか有り得なかった。

グリフィンドールの点数が盛大に引かれ、ドラコ・マルフォイが罰則に行き、それらの話題が第一線から引いた頃。

何時も通りにハリー・ポッターがグリフィンドールの点数を減らした魔法薬学の授業後、僕はスネイプ寮監へと話し掛けた。

魔法薬学の教室は、相変わらず陰気である。

その教室の主が陰気だからという訳では無いだろう。魔法薬学は、ホグワーツにおいて、最も非魔法族の期待に添えるような科目であると言えた。杖を片手に怪しげな材料を加えた鍋をかき回すなどというのは、まさしく歴史上迫害を受けていた、ステレオタイプな魔法使いの姿だからだ。そして、実際に迫害されるだけの危険を有している。

ペリタセラム、アモルテンシア、フェリックス・フェリシス
真実薬、魅惑万能薬、幸運の液体、ポリジュース薬等々。

魔法薬学の秘奥は、それが自分の物であれ他者の物であれ、正しく人生を狂わせるだけの凶悪さを有している。戦時においては、かの禁じられた三つの呪文こそが有用であるが、しかし、平時においては魔法薬学の強力性・汎用性に敵う物では無かった。逆に言えば、戦時に有用で無いからこそ——魔法族同士の血の抗争には利用しにくいものであり、事実、歴史的にそうだったからこそ、それらは制限はされども禁忌にまでは至らないでいる。

しかし、敬遠されるべき代物である事に変わりない。それが魔法族で有ったとしても、だ。スネイプ寮監の鼻屑を一身に受けるスリザリンとて、その事は本能的に理解している。

だからこそスリザリン生は、その分野に卓越したセブルス・スネイプ寮監——他の三寮に比べて余りに若輩な、三十そこそこではない教授に対しても尊敬と畏敬の念を払うのだ。まあ、グリフィンドールを筆頭に、他の三寮がその辺りの機微を理解しているとは思えないが。

そんな寮監は、生徒が使用した後の機材や材料のチェックをしていた。

どうやら生徒の掃除や後片付けの程度、或いは扱いの丁寧さを信頼していないらしく、授業が終わると間違いなく自分の眼でそれが行われているかを確認しているのを良く見る。好意的に見れば、生徒の安全に気を配っていると言えるのかもしれない。残留していた余計な材料や成分による汚染が発生すれば、どんな魔法的惨事を引き起こすか知れたものでは無いからだ。無論、これもグリフィンドールからは賛同を得られないだろうが。

流石に慣れているのか一つあたり長くても数秒程度しか費やしていないが、そのような神経質な作業をする寮監と共に時間を過ごした生徒は、スリザリンにすらも存在しない。授業が終わってから、直ぐに僕を除く生徒は居なくなっていた。

そして、僕がわざわざ残っている事を、近付いてきている事を理解しているだろうに、セブルス・スネイプ寮監は、その作業から顔を上げようとしなかった。

僕が声を掛けて初めて、漸く顔を上げた。

「スネイプ寮監」

「……何だね」

その顔には、意外にも表情が浮かんでいなかった。

寮監は明らかに僕を嫌悪している筈であり、今もその奥底にはそれが横たわっているのが感じ取れたが、無表情を装う事によって、それを隠そうとしていた。

それは、ハリー・ポッターに対して感情を剥き出しにする寮監の様子からは考えられない、言うまでもなく教授的な理性に満ちた振る舞いだった。

「君が我輩に質問したい訳では無い事は見れば解る。何か用が有るのかね？」

「ええ」

「ならばさつきと言ひ給え。我輩は生徒に助力するに際し無用な装飾を好まない」

「であればそのように。」

——アルバス・ダンブルドア校長に御会いしたい」

僕の言葉に、寮監は露骨に愚か者を見る目をした。

そして、寮監はすぐには僕に解答を寄越そうとはしなかった。

「ステイブ・レッドフィールド。我輩は君がもう少し賢い生徒であると考えていた。しかし、どうやら今日から我輩の認識を正さねばならないらしい」

手元に視線を戻し、寮監は吐き捨てるように言う。

「分別の付かぬ雛共にも悩まされて忙しい教授以上に、校長閣下は忙し

いのだ。どういう理由で君が校長と話をしたいのか知らないが、一生徒が望んで話を出来るような物では無い」

「その理由が、忙しい校長閣下が直接聞くべき重要な事でも？」

「それは子供の判断すべき事で無く、大人が判断すべき事だ。そして君が理解していないようだが、我輩は大人であり、君の寮監でも有る」

「……つまり、貴方が話を聞いてくれると？」

「……何故、そう意外そうに言うのかね？ 我輩は君の寮監だと、そう言つた筈だが」

嫌そうな、それでいて不思議そうであるという複雑な表情を浮かべる寮監。

だが、そんな反応こそ心外だ。これまでの授業を見る限り、少なくともこの寮監は真つ当に教育をする気が無いように思えたし、まして僕を嫌っているともなれば猶更のように考えられた。だが、どういう訳か、少なくとも今この瞬間、彼は自身の職務を果たす気が——それも心の底から嘘偽り無く——有るようだった。

けれども、そんな僕の内心を知りもしない寮監は、僕の反応を素直に受け取つた。

不躰な生徒に纏わり付かれていては作業が進まないと思つたのだろう。寮監は、その黒く長いローブを翻しながら、高圧的に言つた。「……まあ良い。我輩が聞き手として不足で有るといふならば、それはそれで構わない。そして、我輩も当然のように判断する。即ち、校長閣下を煩わせるまでの事項では無いと。話は終わりならば引きたまえ。我輩には次の授業の準備が——」

正直言つて、最初から受け入れられるとは思つても居なかつた。

嫌味は兎も角として、寮監の言葉は正しい。

一生徒が直接校長と面会したいなど烏滸がましいにも程が有るし、寮監として自分の頭を超えて話をする事は腹立たしくて仕方ない事だろう。

だがそれを理解して尚、校長に直接話をしたいと願い出たのは、話の内容としてはそれが真つ当であり、筋であつたからだ。要するに手続的な自然性を保つに過ぎず、だからこそ、断られる前提で有つても

それを口にしなければならなかった。

流石に寮監が嫌っている僕の相談を受けようとしたのは予想外だったが、さりとて当初の予定からは何も外れていない。スリザリン寮においては、会話の中に猜疑と検分、そして虚実と探究を忍ばせるのが作法だった。

「四階の禁じられた廊下」

寮監は立ち止った。

ゆつくりと振り返ったその顔からは、先程以上に何も読み取る事が出来なかった。

「……君は宝探しでもしているのかね？　それが事実であるならば、君は無知蒙昧で向こう見ずなグリフィンドールに組分けされるべきだったように思えるが」

寮監の反応は、露骨であったとは言えない。寧ろ彼は表面上、真実は何も知らない、しかし生徒の安全には関心を抱いている者としての反応を取り繕っていた。けれども僕はそれ故に、この寮監はあそこに何が置かれているのか間違ひなく知っているのだと気付いた。

そして逆に寮監も、その中身について僕が見当を付けている事に気付いた筈だ。僕の眼を真っ直ぐ見つめようとし、心の内を読み取ろうとしたのが証拠だった。もともと、合わせるつもりもない。如何に自寮の寮監とて、そのような危険を冒しはしたくなかった。

「勘違いして欲しく無いですが、その宝について、僕は全く興味が有りません」

「……あの部屋に立ち入ったのか？」

「立ち入ろうとしたのは事実です。情報が何も無ければ、スリザリン生らしく狡知に振る舞うも何もないでしょう？　ただ入れはしなかったですよ。流石に単なるホグワーツの一年生が入れる程に、容易い護りでは無いみたいですから」

「まあ……そうであろうな。本来はその筈だ」

何処か期待が外れたような、微妙な顔をしながら寮監は頷く。

しかし、その言葉からしてみれば入り込んだ人間が居るようだが――いや、まさかそんな事は無いだろう。けれども、改めて確かめる事

が出来たのは明らかだった。

もつとも、それは寮監との今の会話で考えるべき事では無いのも同様に明らかだった。

「だけど、中身について語る事は出来る」

挑発するように、僕は告げた。

「……君が騒いでも何も起きはするまい」

「さて、それはどうでしょう。スリザリンにはドラコ・マルフォイが居る」

「……あれはお前の——半純血の意図通りに動きはしないだろう」

「でしようね。普通ならば」

惚けたように楽観的な見解を嘯く寮監に対して、僕は鼻で笑った。

彼と僕は友人関係では無く、何より彼はプライドが高い。彼は僕から利益を得ようとはすれど、僕に利益を与えられようとはしないだろう。能動と受動の違いでしかないが、彼の中では天と地の差が有る。そして、寮監らしくとすべきか——或いは他の理由が有るのか——この寮監はドラコ・マルフォイという個人を正しく理解しているようだった。

けれども、今はその『普通』の状況ではないのだ。

「お忘れですか。彼は、スリザリン生らしく振る舞う事を忘れた結果、二十点を失った。そして、その理由は広く伝わっていなくとも、夜に罰則を受けた事は皆知っている」

「……………」

「まあそれ以上に派手な減点劇が有ったから目立っては居ませんが、彼自身がそれを赦すかどうかは別です。彼は屈辱感を抱いており、名誉挽回の機会を探している。少しばかり情報が怪しかろうと、彼はその真偽を確かめようとはするでしょうし、仮にそれが真実であるとするれば、自分の行使し得る限りの力をもつてそれを利用しようとするでしょう」

僕はそう予測した。

そして同様の予測を寮監も立てている事は、その口を噤んだ様子から明らかだった。

勿論、ドラコ・マルフォイがそれを知ってどう動くかを更に予想は出来ない。

日刊予言者新聞あたりに持ち込むのか、或いは親の理事としての立場を使って何かをするのかもしれない。己が手に入れようとする事も有り得る。だが、彼がどのようなように動こうとも別に構わなかったし、それが成功するかどうかも当然どうでも良かった。

大事なのは、不愉快な物が学内に有るという事が——彼女が余計な物に関わる可能性が無くなるという事だった。

「君は——君は、教授を脅そうというのかね？」

「はい、寮監。いいえ、違います。僕はそれによって全体的利益の実現を図ろうとしているのであり、その事によって貴方が直接被害を受ける訳では無いでしょう？」

「馬鹿げた事を嘯くでない。君が乱そうとしているのは学内の秩序だ」

「では、その原因を作っているのは誰です？　僕はスネイプ寮監がその思考に同意してくれないとは思っていない。だからこそ、校長に会いたいと先に告げた上で、貴方にこうして相談させて頂いている」

相変わらず表情は動かない。しかし、その瞳が僅かに揺れた気がした。

嗚呼、そうだ。僕はスリザリン生であり、スネイプ寮監はスリザリンの寮監だった。しかも今この学校で起こっているのが余りにもグリフィン・ドールのだともなれば、同じ考えを抱くのは至極当然であり、逆に違う考えを抱いている方が異端だった。

「重ねて言いますが、僕はそれを手に入れようとしている訳ではありません」

素直に言えば、全く欲しくない訳では無かった。

手を伸ばせる機会が有ったのであれば、僕は当然にそれに手を伸ばす事だろう。

何せ不老不死の結晶だ。その効能もそうだが、賢者の石自体が膨大な魔法知識とその実践により紡ぎ上げられた集大成と言える。魔法族なら当然欲しがって然るべきである。

だが、僕にとって今優先すべき事は、やはりそれを手に入れる事では無かった。

「様々な反論は承知の上です。その安全対策についてはホグワーツ教授が万全を期しているでしょう。しかし、それは学校生活に全くもって必要無い物の筈だ。そして、人間というのは一般に、その可能性の存在だけで十分恐怖しうる。違いますか？」

彼女が傷付く事を、僕が恐れるように、とは言わなかった。

言うべき必要が無い事では有ったし、言うつもりも更々無かった。

そもそも、スネイプ寮監は、スリザリン生がグリフィンドールの非魔法族の為に動くなどとは夢にも思わない。寮監はまさしくスリザリンらしい存在であり、そんな唾棄すべき懦弱な考えなど、そもそも想定する事が出来ない筈だからだ。

スネイプ寮監は一分ばかり、沈黙し続けた。

そしてその後で漸く、彼は口を開いた。

「……先の言葉は撤回しよう。お前が相応しいのは確かにスリザリンのようだ」

苦々しい顔を露わにして、嫌味な声色で紡がれたのは、受諾の言葉だった。

「だが、今の話の流れでは、お前はそうするつもりは——つまり、ドラコにそれを告げるつもりは全く無いのだろうか？　ならば、何の必要が有って校長と話をする事を求める？　お前の目的は薄々理解したが、我輩にはそれが必須とは思えないのだが」

確認するような問いに、僕は当然の言葉を返す。

そして、寮監は、校長と直接会話を交わす事が出来るかまでは保証しないけれども、今の話は間違いなく伝えられるであろう事を確約した。

……この会話の中で意外に感じた事は、幾つも有った。

けれども一番意外だったのは、この寮監も笑みを見せる事が有ると言う事だった。

今世紀で最も偉大な魔法使い

細長い文字の招待状が、何処からか届いた。

それに署名は無い。書いてある内容としても、ある日時と、それに加えて単語一つだけ。だが、それで十分伝わるのだろうかこの送り手は言いたげだった。

実際そうだった。既にスネイプ寮監からは、「罰則」が有る事と、ある場所についての伝言を受けている。寮監はただ場所を告げただけで、そこに何の部屋が有るのかを告げなかったし、ましてやそれ以上の事を何も言わなかった。僕も問わなかったが、やはりそれで十分だった。

御互いにとって、否、寮監も含めて、他からその会話を知られる事は何も得しない。その点において誰もが意見を同じくしている筈だった。

そうして僕は、夜のホグワーツを一人歩いてその場所へ向かった。

ガーゴイルの石像をどかし、螺旋階段を上った先。多くの肖像画と、奇妙な道具に囲まれる部屋の中。その中央に鎮座する机の前に、その老人は僕を待ち構えるように掛けていた。

アルバス・パーシバル・ウルフリック・ブライアン・ダンブルドア。すなわち、今世紀で最も偉大な魔法使い。

「——おお。良く来た、ステファン。待つておったよ」

僕が入ってきた事を感じた老人は、瞑っていた瞳を開き、僕をそう呼んで部屋へと招き入れた。

入学時に、その姿は一度見た筈だった。

その際の印象は、案外大したものではないなという失望めいたものだった。

頭の悪い校歌を馬鹿げたりリズムで歌うのを許容する。禁じられた廊下についてわざわざ語るといふ放言をする。笑う気にもなれない

ような間の抜けた挨拶を抜かず。

その振る舞いは頑迷で偏屈な大魔法使いというよりも、加齢によって必然的に能力を喪った道化の老人という方が遥かに近かった。

そして、同時に納得したものだ。

書籍という物は余分を省略し過ぎてしまう。

それは時に物事を過度に美化し、時に過度に冒瀆し、結果として人に本質を見失わせる。だからこそ、書を読み解く際には心して掛からねばならない。それは、禁忌を記す魔法書の類を読む上で必然的に学ぶ事柄であった。そして、この時も、その原理原則はやはり正しかったとそう思ったのだ。嗚呼、紛れもなく正しかった。

その蒼い瞳が向けられた瞬間、僕の身体は凍ったように冷たくなった。

湛える色は穏やかだ。悪戯つぽく輝くそれは、校長室に呼び出された生徒を落ち着かせるように、緩やかに細められている。しかし、深い。余りにも深すぎた。百年以上の時が、六十年以上も英雄として君臨し続けてきた歴史が、そこに濃縮してしまっている。

この老人は紛れもなく書籍以上の怪物で。

僕は、この老人が余りにも怖ろしくて堪らなかった。

「君の事はセブルスから聞いた」

手を机の上で組んだまま、老人は言った。

静かで、柔和で、不自然なまでに力が覆い隠された彼の言葉が耳を打つ。

「つまるところ、君がこの老いぼれの愚行について、明確に『抗議』したいという事をね」

「……………」

そこまで端的な言い方はしなかった。

が、寮監は正しく僕の意図を伝えてくれているようだった。

そして、この老人はその抗議を受け止める用意が有るといふ事も、同時に伝えていた。

けれども、それを理解した所で、僕の口からはすぐさま言葉が出なかった。大きく息を吸い、そして吐いて漸く、予め用意していた言葉

を紡ぎだす事が出来た。

「……愚行と解っているなら話は早いですね。僕が言うべき事は、ただ一つです。あのロクでもない物をこの学校からさっさと撤去して欲しい。ただそれだけです」

僕の言葉程度で激昂する筈が無い。

それが解っていたし、実際に老人は穏やかな表情を崩さなかった。もつとも、現れたのは意外な反応だった。この老人は、僕の言葉を聞いて、明らかに喜ぶような煌めきを、その瞳に映したのだった。

「……嗚呼、君にとっては解らぬじやろうな」

僕の微細な困惑を至極当然のように見透かして、老人は軽く頷いた。

「しかし、そのような直截的な物言いを僕が生徒から——それもよりにもよって、スリザリンの生徒から聞くのが何年振りかを知れば、君はその事に同意してくれるかと思うておる。僕は長く生きておるが、もう四十七、八年はそのような事は無かったのじゃから」

僕が生きて来た四倍以上。

そのような年月を軽く口にする老人は、まさしく僕の想像以上の存在だった。

「昔はそうでは無かった。当時僕が校長では無かったというのを差し引いても。ある生徒が影響力を行使するその時までには、生徒との信頼は結べたのじゃ。純血主義という断絶が有っても、寮の違いが有っても、確かに共に同じ世界に立ち、同じ物を見て、衝突する事は出来た。

そう、ゴドリック・グリフィンドールと、サラザール・スリザリンが雌雄を決したように」

「……ホグワーツ創設期において、二人が数年間共存したように、ではなくですか？」

「それも有るじやろう。しかし、サラザール・スリザリンは学校を去つたのじゃ。ゴドリック・グリフィンドールは彼を殺さなかった。そして彼もまた、学校を去つたのみで、ホグワーツを滅ぼさなかった。そこには僕は、相容れぬ者への理解と敬意が有ると思う」

「グリフィンドールの方は同族殺しが出来ない純血かぶれの腰抜け

で、スリザリンの方は創設者三人に勝ち目が見えなくて失意のままに死んだ。僕はそれだけだと思えますけどね」

真に「マグル」を護りたいならば、グリフィンドールは彼を殺しておくべきだった。

僕はスリザリン的価値観から当然のように考える。実際に、その後サラザール・スリザリンが遺した「秘密の部屋」などという有りもしない呪いによって、純血と非魔法族の両方を縛り続けているのだから。

そして、彼は殺人を嫌う善良な人間だったという生温い反論も適切ではないだろう。

千年前だ。迫害の時代なのだ。決闘と戦争がそこら中に転がり、今とは比較にならない程に血に濡れた、魔法使いの命が今より遥かに価値の無い時代だった。その中を騎士道精神という馬鹿げた——そう、馬鹿げた、だ。騎士道精神が尊ばれたのは、それらを略奪と殺戮に生きる大多数が守護出来なかったからこそ尊ばれたのだ——下に生きた彼が、流血と死に全く無関係であったと考える方がどうかしていた。

「見解の相違じゃな。けれども、儂等はどうして議論が出来ておる。理解し得なくとも、御互いに前に進もうとしておる。そこにはやはり価値が有るとは思えぬかね？」

「……否定はしません。しかし、衝突の果ての別離であれば意味は無いでしょう。グリフィンドール生は、スリザリンが決闘で敗北した事を、正義の鉄槌の証だと誤信している」

「儂が見るに、その点ではスリザリン生も同種の誤信をしているように思う」

冷やかな言い方だった。けれども、逆にそれは僕に仄暗い喜びを齎すものだった。

老人はその温厚で、物柔らかな態度を未だに崩していない。だが、その物言いこそが、僕と——吹けば飛ぶような実力の差があり、また権力の差が有る存在とすらも、真正面から向かい合おうとしているという証明でもあった。

しかし、それを老人は瞬時に自覚し、恥じ入ったのかもしれない。御互い平行線であると解りきった議論を打ち切るように、彼は微笑んだ。

「ともあれ、儂には喜ばしいのじゃよ。君がスリザリン生で有りながら、このようにグリフィン・ドールの側面を見せてくれた事は——」

「——その物言いは、流石に不愉快なので止めてくれませんか」

僕が口を挟むと同時、周りの肖像画からも強弱の差はあれ種々のクレームが入った。

それらが存在している事には気付いていたが、彼等彼女等は全て寝ていると思っていた。事実、先程まで目を瞑っていたし、そちらの方に視線をやった今も、やはり目を瞑っている。だが、それが寝たふりであるのは最早聞くまでも無かった。

「おお、すまぬの。スリザリンの偉大な校長の方々からも、そして他ならぬ君からも注意を受けてしまった。ホグワーツ生は、誰もが自分の寮が一番だと思ってしまう。そして、儂もその因果から抜け出せぬ。たとえ十分に気をつけているつもりでもものう。

——しかし、逆に言えば、君もスリザリン生であるという自負がある訳じゃな」

「……………」

「結構結構。それは非常に良い事じゃ。要するにそれは、君が自身に在るべき場所としてスリザリンを定義しているという意味じゃからの」

老人は笑いながら髭を撫でた後、蒼い瞳を真っ直ぐ僕に合わせようとし——しかし、僕はそれを拒絶した。

そして、それによって漸く、老人は困ったような反応を見せた。

「……君は酷く賢明で、慎重な魔法使いらしい。じゃが、開心術は心を読める万能の術では無いし、何より儂は生徒に対して無闇矢鱈に開心術を掛けるような恥知らずな真似はせぬよ」

老人が今度はそう言うが、しかしそれは勘違いだった。

僕は最初に、既に老人と視線を合わせている。そもそも寮監が疑念を呈したように、真つ当なスリザリン生であれば、何の護りも無いま

まに、この大魔法使いと一対一で話し合う機会を作る筈も無かった。その意味では、僕がグリフィンドールの行いをしたのは事実であり、それ故に、心を読まれる事は既に最初から許容していたのだった。

だから僕が視線を合わせるのを避けたのは、反射的で、純粋な感情の顕れ——過度に踏み込まれるという恐怖から出た反応に過ぎなかった。

もつとも、そうであるからと言って、老人の失言を見逃すという事は有り得なかった。

「……無闇矢鱈にという事は、理由があれば掛ける事も有るという事ですか？」

「……そのようなつもりは無い」

否定の言葉と共に、じゃが、と老人は付け加えた。

「そうしたいという誘惑を跳ね除ける程に、儂は強い自覚も無い。もつとも、幸か不幸かその機会には巡り合っておらぬよ。実の所、その誘惑は幾度か有った。しかし、それらの相手は常に卓越した閉心術士であり、掛けようとすればバレたであろうし、当然に防がれたであろうからのう」

その言葉を聞いて、思わず僕は老人の瞳をまじまじと見た。

つい先程目を逸らした行いからは、余りに筋が通っていないともいえる。けれども、その言葉の重みが、響きが、人を惹き付けるだけの引力を持っていた。

眼前の老人は、たちまちの内に全く変貌していた。彼が積み重ねた時が、そのまま表れていた。

地べたに打ち捨てられ、朽ち果てた巨木。使い古され、汚れ、擦り切れた襪褌布。そのようなみすぼらしさと弱々しさしか持ち得ない今の老人は、今世紀最大の魔法使いどころか、グレートブリテン唯一の魔法学校の校長の地位すら相応しく見えなかった。

老人は、僕の先に、何処か遠い誰かを見ていた。

「そして君の対応が間違っていたと非難する事は出来ぬ。先程儂が君に開心術を掛けるつもりが無かったというのは保証しよう。けれども、誘惑に駆られたのは事実じゃ。正しくは、あれらの時も、開心術

を使うべきで有ったのでは無いかという事では有るが」

「……………」

「……嗚呼、あちこち話が飛ぶのも老人の癖じゃの。君にとつて知つた事ではないともなれば余計にじゃ。そして、長々と話過ぎた。久々に楽しんでいた。それは否定せぬ。このような立場になつた宿命とも言えるのじゃが。」

故に、君が最も関心が有る事について話を戻そう」

胸の内を吐き出したからか、少しばかり力を取り戻した老人は言う。

「予め言うが、疑っている訳では無い。しかし、君は賢明にも、セブルスの前ですらその『物品』の名前を言わなかつた。そして開心術無しに我等が理解を深める為には、一応であれ確認が必要じゃろう」
道理であり、続けられる問いも予測が付いた。

けれども、老人が言う通り、御互いの為に、問うて答えるという儀式は必要だつた。

「君は、あの廊下の奥に何が秘されていると考えておる？」

「——賢者の石」

「見事じゃ」

此処に至つて、最早勿体ぶるつもりは無いらしい。

老人の言葉は、僕の言葉の正しさを証明するものであつた。

けれども、僕が全く嬉しく無い事は言うまでもない。この老人によつて称賛されたくはないという以上に、そもそも自身が独力で気付いた訳でも無いからだ。

「……貴方なら理解しているのでは有りませんか。それが何処から漏れたのかを」

「その推論も正しいの。グリフィンドールの三人組じゃろう？　そして、それ故に君は、このように儼に直接抗議する気になつた訳じゃ」
そこまで解っているならば、本当に話が早かつた。

「一応、推理の過程もお聞かせ願えるかね？　勿論、君の気が許すのであれば、じゃが。正直な所、あの三人組とて君に対して馬鹿正直に賢者の石が隠されておると——或いはそれを容易に推察出来るような

発言をしたとは、決して思えぬのじゃ」

「……僕がスリザリンだからですか」

「いや。その場合で有れば、ここに居るのは全部で四人の生徒である筈じゃからのう」

挑発めいた言葉に、しかし老人は朗らかに笑いながら否定した。

そして、その言葉にも一理有る事を認めざるを得なかった。無理矢理に、或いは騙し討ち的にでも彼等を連れて来られるのであれば、僕はそうしただろう。けれども、その考えは些か以上に無謀だという事は否定しなかった。何より、僕はそれが如何なる手段を用いても不可能であろうと薄々予感していた。

勿論、その真偽を眼前の老人に問い質す程に愚かでは無かった。

「……先のドラゴン騒ぎですよ」

渋々という口調を取り繕い、僕は答えた。

もつとも、その解答は何故か老人にとつて酷く意外なもので有ったらしい。一瞬で有るが、虚を突かれたように目を見開き、口を僅かに開けた。

「ほう？ 儂もその事については少しばかり、しかし確かに耳にしておる。けれども、儂にはあの騒ぎが本気で賢者の石の事柄に結び付くとは思えぬ」

「僕も正気では無いと思いますよ。何より、アレは切っ掛けに過ぎなかつたんですから」

だが何にせよ、決定打である事には違いなかつた。

「賢者の石——ニコラス・フラメルについて、ハーマイオニー・グレンジャーが僕に聞きました。彼女は意外にもその名前を知りませんでしたから」

「ふむ。彼女の生まれを考えれば——嗚呼、勿論これは侮蔑では無いのじゃが——魔法的な事に知識を欠いていても奇妙では無い。けれども、一年生でありながら尚校長室にすら轟く彼女の優秀さに鑑みるに、他に助けを求めたのは意外である事は否定出来んの。しかし、結論としてその点に関して君は彼女より優秀だったのじゃな」

「その点のみ」ですよ。そして不思議な事でも無い。彼女は余りに

完璧主義であり、忙し過ぎる。彼女は百点のテストで百二十点を取ろうとする人間ですから」

言うまでも無く、テストで——O・W・LやN・E・W・Tであったとしても——最高評価「O」を取るのに百点中百点満点を取る必要は無いし、ましてや百点以上の点数を取る必要も無い。仮にそうであれば、最高評価など殆ど飾りの存在でしかないだろう。

そして、彼女のような過剰な努力をしない分——すなわち、それなりに優秀な生徒として留まる分、余計に時間が有るのは事実だった。

まあ、ニコラス・フラメルについて知ったのは、この学校に来る前では有るのだが。それでも彼女がやり過ぎだという事には変わりはない。

「しかし、ドラゴン騒ぎの方は？ 否、正確には、寮に大減点をもたらしたハリー達の夜遊び、ないしはドラコがハリー達に嵌められた騒ぎとも言ふべきか。何せ、アレがドラゴンに関する物じゃと知っている者は限られている。彼等も吹聴する筈も無いからのう」

それは間違いなく正しいだろう。

だから、彼等の口を割らせるような努力をする気は無かった。

「もつとも、幾つかの事を結び付ける事は出来ます。ドラコ・マルフォイは、愚行によって罰則を受ける羽目になるまでの数日間、酷く有頂天でした。そして、その前に彼は僕に対して聞きました。ドラゴンを飼う事が禁じられている事について、何を調べれば良いかと。僕は端的にワーロック法に関して答えました」

そしてドラコ・マルフォイは、異常なまでに熱心に調べていた。

「確かに、その推量は自然であるのう。じゃが、それはあの騒ぎがドラゴンに関するものであるという解答を導くに過ぎないじゃろう」

「ええ。しかし、ドラゴンについては、最も有名な生薬にして逸話が有るでしょう？ 実際に、魔法界の銀行が正しくその運用をしているのだから」

「——宝の護り手、か」

顎髭を撫でつつ、中空を見つめて考え込む老人に、僕は頷く。

「けれども、その時点では推論に過ぎません。ただ、後は推論を検証す

るだけです。見つかるのはグリーンゴッツ破りであったり、ニコラス・フラメルと校長閣下の関係であったり、反証どころか補強する材料ばかりでしたが。また、僕は端的に三人組——ハリー・ポッターに対して質問もしました。ただ、これはスネイプ寮監に対して話をした後で「すが」

「大胆不敵としか言えぬのう。しかし、この老人の勝手な推測であり、同時に間違いないとも確信しているのじやが、ハリーは間違いなく素直に答えなかつた筈じや。であれば、君はハリーに対して、一体何と質問したのかね？」

「貴重な宝を守るには、どうしたら良いか」

「彼はどう答えたのかね？」

「獰猛な獣にそれを守らせる事だと」

その失言に気付いたハリー・ポッターの表情と、彼にハーマイオニー・グレンジャーが肘打ちを食らわせた事も更なる推論材料では有つたが、そこは省いた。この老人とて、自身の不用意な言動に誰よりも恥じ入っているのがハリー・ポッターだという事は当然に気付いている筈だからだ。

ただ、ハリー・ポッターの名誉の為に言えば、それは厳密には失態とも言えない筈だった。彼は賢者の石について何ら言及していないし、何となくであるが、彼は——そしてハーマイオニー・グレンジャーすらも——獰猛な獣自体が何かを守っている事自体、すなわちその獣の存在自体は別に隠す事でもないように考えているようだった。

もしかしたら、あの部屋に立ち入る事自体は何ら難しくないと誤解しているのかもしれない。寮監によれば、あの部屋に生徒はそもそも立ち入れない「筈」なのだから。しかし、それが明らかに「筈」で留まつてしまつていた事が確認出来たという意味で、ハリー・ポッターに投げ掛けた質問には意味が有つた。

老人は目を閉じて暫く何かを考え込み、僕はそれを静かに待っていた。

長かつた。酷く、酷く。そしてこの老人は、僕に対して短期的な解答をした場合について考えている訳では間違いなくなかつた。彼は

彼だけが秘める知識と経験の下で、己がどうするのが最善であるかを吟味しているに違いなかった。

そして、彼は言った。

「残念ながら、君の解答は間違いだと言わざるを得ぬ」

――

本音を言えば、推論が外れていようが構わなかった。

彼女達が禁じられた廊下に『賢者の石』が隠されているのだと信じて探検ごっこをする事を止めたかったに過ぎない。要するに、その物品が危険であり、彼女が賢者の石が隠されていると信じて危険に飛び込むのを厭っただけで、実際にそれが隠されているようがどちらでも良かった。

だが、予測が外れて愕然としなかったと言えば嘘になる。

もつとも、老人は僕の表情を愉快がる訳でも無く、寧ろ真摯に言葉を紡いだ。

「間違っているとは言ったが、落第だと言ったつもりは無いがの。性悪の老人らしく君の推量の弱点や、或いは誤答を導いた原因をあげつらう事も出来るが、儂はその気は無い。そもそも最初から無かった。儂は確かに言ったじゃろう、『見事じゃ』と」

その言葉で確かに思い出す。

老人は、賢者の石が隠されている事自体は何ら否定しなかったのだと。

「君が得た材料からの推論としては自然であろう。君は、間違いなくあの三人組よりも手掛かりが少なかったのだから。……成程、賢者の石を守護するドラゴンか。確かに組み合わせとして収まりは悪くない。今度機会があればそうするとしようかの」

「……それが決して訪れない事を祈っていますよ」

それに、と僕は続けた。

「多少は安心しているのも事実です。正直な話、僕が探偵ごっこに興じたのは、子供達がウロチョロする学び舎に狂暴な生き物を持ち込む馬鹿げた大人など居ないと信じたかったというのも有りますから」

そこまで言っただと我に返る。

校長閣下は、僕の推論が間違いだと言った。さりとて、賢者の石の存在は認めた。つまり、どの点が過っていて、どの点が正しかったのか――

「僕は聞くべきを聞いた。そして君は答えてくれた。ならば、次は僕の番じやろう」

だが、老人は僕の思考を待つことは無かった。

そして断固たる決意の下に言った。

「僕は、それを止める気は無い」

「……………」

それは解釈の余地が無い程に明確な拒絶だった。

「君の懸念は理解出来る。そして、僕の常識としても、それが正しい事は重々承知している。しかし、それは出来ぬのだよ。それを為さねばならぬ理由がな」

「……明らかな形で生徒を危険に晒してでも？」

「制御出来る形で晒す必要が有るのじゃ」

「それこそ馬鹿げている。不老不死の一端を欲しがる人間など山のように居る筈だ。元死喰い人に、狼人間。それに、『例のあの人』の残党――」

「ヴォルデモート卿じゃよ、ステファン。物事には正しい呼び名が有る」

「御言葉ですが、貴方は彼が死んで十一年経って尚、魔法族がその名を呼ばない理由を重く受け止めるべきだ。そして、僕はそれを軽んずる気は無い。馬鹿げた迷信や御伽噺が時として一欠片の真実を含んでいる場合は、往々にして存在する」

何より、と僕は更に付け加えた。

「その『ヴォル何とか卿』の姓――或いは、名前でも良いですが――それは何と言うのです？ 如何に邪悪な魔法使いとて人間の母親から生まれた筈ですが、その『ヴォル何とか卿』の上か下に続く名前を、僕は一度も聞いた事が無いんですが。正しい呼び名が有ると仰るのならば、是非お聞かせ願いたいものですけどね？」

この皮肉は、どういう訳か老人に痛烈に利いたようだった。

もつとも、それが何故なのかを察する事は出来なかつた。僕は当然の事を言つたつもりだつた。少なくとも、非魔法族の社会を知る半純血として真つ当な疑問な筈だ。

ヴォルデモート・何某にしろ、何某・ヴォルデモートにしろ、その記述を見つげ出す事は、如何なる本であつても叶わなかつた。

死の飛翔などという仰々し過ぎる名前を付けた親を恨んでいるからなのか知らないが、過激な純血主義思想の持ち主としては、自身の誇らしき家名——つまり一点の疑いなくサラザール・スリザリンに繋がる家名——を名乗らないのは奇妙以外の何物でも無いからだ。

そして、反応から見ると、この老人はその理由を知っているようだった。だが、それと同時に、僕に対して語るべきではないと考えているのも明らかだつた。

「……この議論について、儂の方がより分の悪い事を認めざるを得ないようじゃの」

「貴方が認めざるを得ない事は、もう一点有ります。賢者の石という危険物を、十一歳の人間の前に晒すという事の愚かさだ」

「更にもう一点有るとも。すなわち、若人の——君の聡明さを見誤つていた事じゃ」

老人は、そう告げる瞬間だけは笑みを見せなかつた。

「おお、じゃが、それでも儂には君の願いを跳ね除ける事しか出来ぬ。別に君が若い、十一歳の少年であるからでは無い。何せ儂は君よりも遙かに長く生き、経験を積んだ魔法使い達の反対に対しても、残らず却下をしてきたのだから」

賢者の石の守護。

複数人により何重にもそれを張り巡らせるならば、当然に教授の協力が必要だつた。

「今回の事情を知る教授陣からは、例外なく猛烈な反対を受けた。この大事な年に、正気の沙汰では無いとな。まして真に物を知る教授は言ってくれた。百歩譲つてその危険な物品を学校に受け容れる事は許容しても、そのような愚行は決して許されるような事では無いと」

「……ホグワーツの教授陣に良心というものが有つた事は喜ばしく思

いますよ」

「儂も常々実感しておるよ」

「ただ、教授陣を統轄する校長にそれが無かった事は残念極まりない事ですが」

「それもまた儂が常々実感しておる事じゃ」

この手の皮肉は、老人には通用しないようだった。

そして、この老人は、それを少しばかり面白がっている。

同時に何処かで諦念を抱いている。百年以上生き、五十年近く「英雄」のままに君臨してきた者として、その性分を放棄する事が出来ない事に。

「けれども、渋々で有ったが、最後には彼等は受け容れてくれた。信頼を委ねてくれた。結果としてこの学校の護りは、意図せぬ悪しき者を入れる程に軟ではなくなった」

「つまり——」

そこまで口にして、先の言葉を紡ぐのは止めた。

……「意図せぬ」者か。成程、真に巫山戯けた事を言っている。

そして老人は、僕が何を言おうとしたかを見透かしている癖に、何も見なかった振りをして断言した。

「故に、確信しておるよ。それでも一般の生徒は間違いなく安全である」と

この老人が、何を意図しているかは解らない。

けれども、「安全」だというのは、確かな経験と知見に基づく確信に基づくモノなのだろう。そして、僕にはそれを覆す材料など無い。

この老人は今世紀で最も偉大な魔法使いであり、闇の帝王亡き今、この世で最も強力な魔法使いである筈なのだから。

だから引き下がるしかなかった。

しかし、引き下がるだけで納得出来ないのが、自察の性分だった。

「……杖に誓って貰う事は？」

「儂——アルバス・ダンブルドアは、今回の賢者の石に関する事で、君に一切の命の危険が無い事を、この杖に懸けて保証しよう」

「僕が真に求めて居る保証を、貴方は解っている筈ですが」

気負いなくさらりと言われた言葉に、端的に僕は回答する。

だが、アルバス・ダンブルドアは余計な反論を口にしなかった。それが通じない程にこの老人は愚鈍である筈が無く、僕が出会った中で——そして全世界の全歴史を見渡してすら有数の——最も叡智に満ち溢れた魔法使いだった。

「今回の賢者の石に関する事で、最も厚い護りを受けた唯一の者以外の生徒が、真なる邪悪に直接対峙する事が無いような措置を取っており、尚且つそれを全うする事につき最善を尽くす事を、僕はこの杖に懸けて誓おう」

今の言葉の中で留保付きで除かれた者については、僕としてはどうでも良かった。

そもそもの話、この老人はその点に関しては譲る筈も無かった。逆に言えば、この老人にとつてそれ以外の点については、譲る譲らないとか或いは杖に誓う誓わないとか以前に、ホグワーツ校長として当然死守すべき事柄なのだろう。

だからこそ、自惚れた生徒の傲慢極まりない下劣な願いに対して、こうして何ら躊躇いも無く受け入れてみせる事が出来るのだ。

けれども、偉大な魔法使いが最大限の誠意を示した事には変わりない。

「……ドラコ・マルフォイは勿論、あのグリフィンドールの三人組も含めた全ての者に対して、僕は賢者の石に関する事柄について——勿論、この校長室で為された会話も含めて——誰にも話さないと、この杖に懸けて誓いましょう」

もつとも、僕の杖は貴方よりも遥かに価値が無いですが。そう結んだ僕に、老人は悪戯っぽく微笑んで見せた。

「価値が無い筈は無いとも。寧ろ他ならぬ君がそう誓ってくれた事こそ、僕は嬉しく思う。比較するのは失礼な事かもしれないが、我がホグワーツの教授陣が僕に信頼を委ねてくれたのと同等以上に」

そうは言うが、僕には全くもって同意しかねた。

己が知るべきでは無い事を、知り過ぎたという実感が有った。そして、僕の前にこの老人と寮監が散々やりあっただろう事も。

恐らく寮監は、僕の話の内容を伝える事に同意はしても、僕が校長と直接面談する事までは賛同しなかっただろうからだ。すなわち、この老人に対する皮肉を述べるには、ただ僕の事を告げるだけで目的は達せられたのは明らかだからだ。

故に、立ち去る前に聞いておかなければならなかった。

「これは初めに聞くべきでしたが。」

——僕に忘却術を掛けようとは思わないんですか？」

それは紛れも無く、挑発のつもりで掛けた言葉だった。

だが、老人は揺らがなかった。その程度で、生徒の戯言如きで崩れる程度では、今世紀で最も偉大な魔法使いと呼ばれる訳も無かった。

「全くもってスリザリンらしい物言いじゃ。君達は必要と有れば、それを躊躇う事は無いじゃろうしの。……嗚呼、しかし儂は明言せねばならぬ。先程告げた通り、確かに儂は開心術を生徒に掛けたいという誘惑に駆られた事は有るが、さりとして生徒に忘却術を掛けたいという誘惑に駆られた事は断じてない。ただの一度も。一切の例外無く」

「……………」

「儂は儂の弱さと愚かさを理解している。否、少なくとも理解しようとしているつもりじゃ。けれども、そこまで弱いつもりもまた無いのじゃよ」

その瞳は揺ぎ無かった。先程までと違い、断固とした意思により貫かれていた。そしてその事がまざまざと実感させるのだ。アルバス・ダンブルドアという存在は、どんな状況に陥ろうとも、それを是とする事は無いのだろうという事を。

そしてだからこそ、僕は次の言葉を紡ぐ事を止められなかった。

「しかし、その者を守る為に忘却術が適切だという事も有る筈だ。知るべきではない事を知った者に対してそれを行使する事は、決して倫理的にも否定される事ではない」

「それは大人の身勝手な言い訳でしかないじゃろう」

老人は首をゆるゆると横に振った。

「儂は、儂以外の者がそれを行う事までは否定せぬ。この魔法界として、マグルに対してその理屈を振り翳しておるしの。そして、儂も場合に

よつては、それと同種の魔法を行使する事に躊躇う事は無い。けれども、それは本質的に儂の流儀では無いし、そもそも君が思う程に忘却術は万能では無い。隠す事が、逆に危険を招く事も有る」

その言葉には、この老人の経験則によつて裏打ちされた重みが有つた。

間違いなく、老人はそれを直視して来たのだろう。嚴重に秘されたが為に興味と関心を惹き、粗雑かつ乱雑に暴かれ、そして破壊的で不可逆的な惨劇を齎した結果というものを。

「じゃから、儂は君に忘却術を掛けるつもりは全く無い。儂はそうしない事が正しいのだと、心の底から信じておる」

そして善なる魔法使いとしての矜持を、この老人は持っている。

何より、直接会話して解つた事だが、余りにも頑迷かつ頑固だった。

……ただ、それはアルバス・ダンブルドア個人の主義に過ぎない。

セブルス・スネイプ寮監、或いはミネルバ・マクゴナガル教授にその措置を頼めば、その限りでは無いに違いない。前者は当然の合理性から、後者は逡巡をすれども確かな生徒愛から、その行いを肯定するだろう。だから、僕がこの老人に真に反抗したいというのであれば、この部屋から出た後、彼等の下に一直線に向かうべきだった。

もつとも、僕はそこまでする気が無かった。その一番の理由は明らかだった。

この老人は保証したのだ。常識的に見ればどう考えても杜撰で、危険な状況を放置しながらも、尚、既に十年前に偉業を為した「英雄」以外が、直接危険に晒される事は無いと。当然ながら、僕を含めてさえ、確かに保証してみた。

そんな「疑いなく英雄」の言葉は、やはり重いものであった。

「どうやら我々の此度の話し合いは終わりのようじゃの」

時計を見つつ、老人は静かに告げた。

「もつとも、儂が勝手に考えるところ、君とは少なくとも後一度は話す必要が有るように思う。けれども今日は既に、生徒が散歩時間としては少々不適切じゃ。儂もここまで君と会話が弾むというのは思つてもみなかつたからのう。」

だから帰りたまえ。後はセブルスが良くしてくれるじやろう」

その言葉に、僕は何も反論する事なく従う。

この密会の口実を授業の相談等では無く、敢えて罰則を受けている事にしたのは寮監の地味な嫌がらせだったが、それでも寮監が口の堅い類の人間であるとは理解していたし、真実を隠す為に相応の擁護をしてくれる事は間違いなかった。

しかし、僕は校長室から辞する前、それを口走る事を止められなかった。

「……貴方は狂っている」

眩きに近かろうとも、老人には届いた筈だ。

ちらりと振り返ってみた彼の表情は、酷く愉し気で——何処か物悲しかった。

闇の魔術に対する防衛術教授

クイリナス・クイレル講師。

闇の魔術に対する防衛術講義担当。

彼の授業の評判というのは、決して芳しいものでは無い。

噂によれば、彼は旅行だか研究だかの後遺症によりマトモさを喪つたらしい。

大蒜臭に塗れた教室の中で、視線は生徒どころか中空を行ったりきたりして、ずつとそわそわと歩き周りながらも生徒には全く近寄ろうとせず、朗読はどもり混じりな上、何かに怯えて頻繁に悲鳴を上げる為に聴きづらくて——それらを無視したとしても精々普通程度の内容の授業であつた。

彼の授業は魔法省の指針に忠実に則つた至極標準的な物であり、獨創性も活動体験も無く、生徒にとつて刺激的なものでなかつた。

それでも彼の授業がボイコットされないのは、その悲劇に対する多少の同情と、それらが問題とならないレポート課題の存在により辛うじて授業の秩序が保たれているからだろう。ただ、実技が増えるであろう上級生においては一体どうやって授業を成立させているのか気になる所である。あくまで単なる興味であり、調べようとする気にはならなかつたが。

もつとも、ホグワーツの教育について期待しない方が心の平安が保たれるというのは、とうの昔に身に染みていた。

この闇の魔術に対する防衛術は勿論、睡眠学習の時間と化している魔法史学に加え、魔法薬学もまあ、スリザリン以外にとってはさうだろう。

一年の必須科目の内半分近くがどうかしているというのは異常にも思えるのだが——それは僕が非魔法族の教育の方に幻想を抱き過ぎていられるのかも知れない。隣の芝は青く見えるというものだ。

そして少なくともこの闇の魔術に対する防衛術に関しては、僕は授業が散々だろうが台無しだろうが構わなかつた。

クイリナス・クイレル講師は十一、二歳の子供達に対して酷く過保

護なのか杖を一切振ろうとしなかったし、ただ理論の授業に終始していた。そして、それらの座学は、僕が得意とする方だった。つまるところ、僕が不得手とするのは記憶でどうこうならない実技であり、僕は寧ろそちらの対応を常に迫られた。まあ闇の魔術に対する防衛術については元々知識に溢れていたというのも、理由の一つでは有ったのだが。

ともあれ僕がハーマイオニー・グレンジャーで無い以上、変身術や呪文学といった授業については熱を入れる必要がある、何とか着いていく必要が有ったのだが、その点では、自身がスリザリン寮に所属したのは幸運だった。

純血と伝統は、それだけのノウハウを蓄積している。

言葉を飾らなければ、入学前の貯金によるスタートダッシュで自惚れたお坊っちやま達を、最低限落第生にしない為の鉄のシステムというべきか。流石に千年の間連綿と続いているとは言えなかったが、数十年分程度ならば自学自習の方法論や呪文を使用する要領、改善法など容易に集まった。

これは間違いなくレイブンクローに所属しては叶いようも無かった筈である。彼等は個人主義であり、それ以上に自分の興味の方向のみに特化し過ぎだった。彼等の叡智が高みに有る事は少なかつたが、万人に共有出来る性質でない場合もまた多かつた。

まして、大半のスリザリン監督生も、その分野においては半純血にすら協力的だった。

彼等にとって、寮杯を獲得出来るか否かというのは、最大のとまでは言えなくとも、関心として少なくないウエイトを占めていた。自身が何年度の監督生であるかに加えて、ささやかな栄光を社交の世界に添えられるのなら、それは当然に歓迎すべきだった。優等生に自分の時間を十分程度割いてやる位は、何ら面倒な事でも無い。まして、六年連続で寮杯獲得中となれば余計にだ。

そういう訳で、僕はスリザリンの叡智の集積を甘受する事に熱心だった。

そしてそれは外部的には真面目に見えるのは事実だった。たとえ

闇の魔術に対する授業を一切聞いていなかったとしても、クイリナス・クイレル講師が生徒に全く注意を払っていないように見えても、客観的に見れば、僕は他の生徒達と違って完璧な“生徒”だった。

——嗚呼、それなのに、どうしてその事が興味を惹くと予測出来ようか。

期末試験を数日後に控えた頃、授業後にクイリナス・クイレル講師は言った。

「す、少し残って、い、頂けますか。た、多少貴方と、お、お話がしたいのです」

彼の言葉を聞ける範囲に居たスリザリン生が驚愕の眼で僕を見るも、それに対して応える事は出来なかった。講師が自ら生徒に声を掛けるなどという珍事を引き起こす心当たりなど無かったからだ。

真面目な生徒だと取り繕っているつもりはあったし、仮に実体がない真面目な生徒で有る事がバレていたとしても、そのような生徒などドラコ・マルフォイを筆頭に掃いて捨てる程居た。しかし、彼は僕を指名した。

そして結論だけ言えば、僕は断れなかった。

それが“教授”に対する生徒の行動としては、明らかに不審だったからだ。

生徒の大半が出て行っても、立ち込める大蒜臭は出て行ってくれなかった。

そしてそれ以上に、この教室は魔法薬学とは別種の意味で陰気だった。息苦しいとでも言うのだろうか。魔法薬学においてその陰気さを増幅しているのは我等が寮監だったが、この教室はそれとは全く異なるように思っていた。大勢の意見は大蒜臭が原因だろうと言っていたが、僕は、この凍えるような生温さは、この世の物では無いように思われたのだ。

勿論、ドラコ・マルフォイは僕を馬鹿にしていた。

「ええと、何の御用でしょうか」

僕の問いに、クイリナス・クイレル講師はすぐに答えなかった。うろつきはしないまでも、そわそわと身体を揺らす。そして視線を僕と入口との間で数度往復し、間違いなく誰も入ってくる様子が無い事を確信したような後、漸く口を開いた。

「え、ええと。せ、先日レポート、見事でしたよ」

それは明らかに社交辞令的な話の切り出し方だった。

そして、生憎僕はそのレポートの内容を覚えていない。

試験が近いにも関わらず、終わった事について一々拘ってはいられたなかった。まして、一番興味が薄くどうにでもなりそうな科目であるなら猶更だ。

もつとも、確かな事が有った。

「それは嬉しい事ですが、しかし僕が特別優秀という訳では無いでしょう？ このクラスには、恐らく僕よりも出来ている人間が居た筈だ」

確か、その筈だった。

常には無いが、ドラコ・マルフォイの方の完成度を上げる事が殆どだった。

流石の彼も試験前には勉強をせざるを得ないらしく、間接的にしか試験に関係しないレポート作業をぶん投げた上で、出題されそうな部分はピックアップしろという無茶苦茶を言っていたが、まあその恨みをささやかに晴らしたのは確かこの科目では無かった筈だ。

そして、講師は嬉しそうに頷いた。

「え、ええ。ドラコ・マルフォイ君のも、よ、良く出来ていました。常に、出来ています。い、いつも、き、君のと同一人物が書いたような事を除けばですが」

「……………」

「が、合衆国——新大陸の方では、研究の公平性の意識が、昨今、た、高まっていますね。も、勿論、この国でもそうです。た、確かに教授というのは学生がそれらの行為をしがちだと理解していますし、た、大抵の場合、経験をもって、み、見極められます。し、しかしそ

これは、個人のノウハウ以上の物では有りません。多くの魔法族は、じ、自分の経験を絶対視し、そ、「外」から体系化された理論を学ばない」僕は何も答えなかったが、クイリナス・クイレル教授もまた答えを求めて居なかった。

闇の魔術に対する防衛術教授。

そう、^{Professor}教授だ。どんな意図があれば、彼は教える資質が有るのだと認められた。

ホグワーツにおいてはO・W・LとN・E・W・T、その二つの大試験が有る。如何に校長に選任権が有ると言っても、果たしてそれらの落第生を任命出来る程に軽い地位だろうか。

いや、その可能性は否定出来ない。あの校長ならば、どんな事でもやりかねない。非魔法界のように教授という地位に就くプロセスが確立していないのを悪用して、それらの落第生、或いはそもそもそれらを受講していない者すら教授にするかもしれない。

しかし今明らかなのは、彼は少なくとも、闇の魔術に対する防衛術教授である前はマグル学教授であったという事だった。

そして、彼は恐らく本題を問うた。

「――き、君の学生生活は、の、望ましいものなのかな？」

寮監のみが、授業外において学生を指導する権限を有する訳では無い。

彼が「教授」である以上、当然に加点と減点の権限を持ち、必然的に生徒を従わせる権威を有していた。だが、授業に直接関係ない分野についてまで、科目を担当する教授が関心を持つというのは、余程親しい関係で無い限り稀であるといえた。

故に、それは余りにも唐突で、領分を逸脱した質問だった。

けれども、啞然とする僕を後目に、彼は熱意を宿して捲し立てた。「あ、貴方は熱心だ。ち、知識に貪欲だ。そして、じ、十分な能力も有る。し、しかし、君は学友に認められていない。その価値を、不当に貶められている。そ、それは酷く寂しい物では無いのかと、そ、そう思ったのです」

クイリナス・クイレル教授は、立ったままだった。

彼は大人であり、僕よりも視線が高かった。だがそれでも、彼は僕を見上げているように思えた。

「わ、私には理解出来ない。あ、貴方は何故そこまで強く在れるのです？ あ、貴方は嘲笑されている。ち、中傷されている。ひ、冷ややかに見られている。なのに、それで良いと思っている。」

あ、貴方は、自身を他の人間に認めさせてやりたいと——そう思わないんですか？」

……どういう意図を持っているのか解らない。

ただそれでも明らかな事が有った。

彼にとつて、僕は異常だった。異質だった。異端だった。

スリザリンの中に異分子として在りながら、しかし決定的に排除される事は無く、ある種の安定的な地位を有している僕が。彼の経験からは全く理解出来なかつた。

だからこそ、彼は答えを求めた。

既にホグワーツに居られなくなった者から、今そこに居る者に対して。

間違いなく、救いを求めているのだ。

「貴方は——」

僕は逡巡した。

だが、言い切った。

「——他から認められたかったですか？」

教授は、その殻を捨て去ったクイリナス・クイレル個人は答えた。

「私は認められたかつた」

その言葉からは、どれもが消えていた。

彼の瞳は、今や濁っていないかつた。その瞳には傲岸と、自尊と、理性の光が有った。

「ヴォルデモート卿」

……その瞬間、僕に驚きが無かつたとは言えない。

その名前を呼べるのは、この学校でただ二人だけの筈だった。

恐らく、あのミネルバ・マクゴナガル教授、或いはフィリウス・フィットウィック教授すらも、それを平然と口にする事は出来ない筈

だった。だから、僕はこの瞬間まで、ただ二人の前以外でそれを聞く事は無いであろうと、半ば確信していたのだった。

しかし、それは間違いだった。

「彼を討ち滅ぼそうとした者は多くいた。家族愛、隣人愛、名誉や金銭欲。一般に純粋で美しいとされるものから、不純で穢らしい動機まで様々だ。だが、ヴォルデモート卿を討ち破った者は一人として居ない。あのアルバス・ダンブルドアですら、それは例外で無かった」

「……アルバス・ダンブルドアは、負けても居ないと思いますが」

「ならば、彼に聞いてみる事だ。第一次の魔法戦争で、貴方は勝ったのかと。頼りにならない魔法省に代わり、彼は不死鳥の騎士団——ヴォルデモート卿への抵抗組織を率いていたのだから」

「……………」

何となく、あの老人は敗北したのだと答える気がした。

「お前が意識してかどうか知らないが、ハリー・ポッターの名前を出さなかったな」

教授は酷薄な感心と共に僕を見ながら、口を不格好に歪ませて邪悪に笑う。

「その事は正しい。ヴォルデモート卿が消えたハロウインの夜。何が起こったのか誰も知らなかった。死喰い人ですら混乱していた。最初、〃生き残った男の子〃——つい一年ばかり前に生まれた赤子がヴォルデモート卿を退けたのだと聞いて、一体誰が信じたと思う？

それが大嘘では無い証拠は？ 紆余曲折有って、結果的に今はそれが常識になっているが」

「……ハリー・ポッターは、闇の帝王を退けていないと？」

「そうは言っていない。それは厳然たる事実だろう。闇の帝王は、どんなに挑発や侮蔑をされようとも、その後決して姿を現す事は無かったのだから。しかし、疑問に思うのが当然の筈だ。ヴォルデモート卿は本当に死んだのかと。ハリー・ポッターは本当に勝ったのかと。」

——闇は、本当に晴れたのかと」

部屋に立ち込める大蒜臭。

その中で微かに、しかし腐敗臭を感じ取れたような気がした。

「私はハリー・ポッターが勝ってはいないと判断した」

「……それが貴方にとつて、何か意味が？」

「無かったのだろうか。結局、闇に抵抗しようとした愚行の代償を支払ったのだから」

教授は頭の後ろに手をやり、ターバンに触れた。

「——私の授業の評判はどうかね？」

話が飛んだ。

そう感じたが、しかしその強い眼差しは、本筋から何ら外れていないのだと言っていた。

「……まあ、良くないですよ。教えようとするだけマシというレベルですかね」

「だろうな」

正直に答えた僕に、教授は微かに歯を剥き出しながら笑った。

「だが、闇の魔術に対する防衛術の教師として私程に相応しい者は居ないと、この教職に就いて以来、私は常々自負しているのだよ」

「何故」

「闇に抵抗しようとした末路を、この身が示しているから」

「——」

ルーマニアだったかアルバニアだったかの吸血鬼によって酷い目に遭わされた。

クイリナス・クイレル教授がそのような悲劇に遭った事は周知の事実だった。けれども生徒はそれを知りながら——彼をどもりの取るに足りない教師だと笑っている。

「言っただろう、ヴォルデモート卿を討ち破ろうとした者は多く、しかし誰も為し得なかったのだと。そして残ったのは死体の山だ。アルバス・ダンブルドアの配下であろうと多くが死んだ。つまるところ——」

「闇を受け容れるべきであったと？」

「自分が闇を討ち破れると、そう驕るべきでは無いという事だ。力を有していない者——資格無き愚か者は立ち向かうべきではない。それを理解する事こそが、闇の魔術に対する防衛術である」

……言わんとする事は解る。

アルバス・ダンブルドアの側に立とうと、ヴォルデモート卿の側に立とうと、死ぬ者は死に、壊れる者は壊れるという事なのだろう。それが闇に対抗するという事だ。

逆に言えば——対抗しなければ、死ぬ事も壊れる事も無い。

「……逃げろという事ですか？」

「私のようになりたくないのであれば」

「しかし、戦わねばならない時も有る筈だ」

「そうだな。望まずとも杖を取らなければならぬ時は有る」

教授は、僕の心にも無い優等生的な反論を、全く否定する気は無いようだった。

「特に、英雄気取りで自惚れ屋なグリフィン・ドールと異なり、狡猾卑劣で内向きなスリザリンはそれを強く意識するだろう。だが……どうにもならぬ事というのは有るのだ」

その瞳に映っているのは、暗い絶望か。

「マグルの自動車は知っているかね？ ……嗚呼、知っているなら話が早い。マグルの世界では、アレによって五千が死んだ。この島だけで、一年間のみでだぞ？ 正気の沙汰では無い。しかし、彼等はそれに対抗する為に身体を鍛えようとしな。何故なら無駄だからだ」

「……彼等は魔法を使えないから。そのような魔法族的な回答は的外れなんですよ」

「我等とて魔法無しでは同じ事だろう。鉄の塊が高速で突っ込んで来て、耐えられる者など居ない。そして魔法有りだとしても、不意を突かれれば同じ事だ」

この教授は、マグル学を教えていたという。

正直な所、僕は彼がマトモにマグル学を教えられていたとは思っていないかった。

何故なら、マトモに教えられていたのならば——つまり、グレートブリテン唯一の魔法学校の教育が功を奏していたのならば、この魔法界の非魔法族対策はもっと真つ当な物になっている筈だ。ウィーズリーに対して左程含む所は無いが、あの父親の程度の知識で——会っ

た事は無いがマグル保護法を見ればその知識の程度は解る。それは彼等の父親の人格や善良さとは全く無関係だ——非魔法族との関係規制をやっているというのは論外だ。

まあ一番論外なのは、その役職の重要性を一切理解していない魔法省自体だが。魔法戦争で非魔法族生まれが大殺戮されたと言っても、優秀な魔法使いが残ってない訳ではないだろう。しかし、それらの者を有効利用しようと考えもしないのは、省内においても余程純血主義が蔓延っているらしい。

ともあれ、元マグル学教授としては眼前の存在を何ら信用していなかったが——しかし、今の言葉を聞く限り、それは明白な勘違いであるようであった。

「つまりところ、彼等は諦めている。その自動車の有用性を重視し、故意や過失によって轢殺され、顔も解らなくなる程に肉体を粉々にされる事を受け容れている」

「……闇によって殺される人間も、また魔法の有用性によるコストである?」

「近しい物が有るとは思わないかね?」

「詭弁でしかないでしょう」

「かもしれないな。だが、私にとっては同じ事だ。どんなに備え、そして幾ら学び鍛えようと、唐突に全てを奪われ、何ら無価値に擦り潰されてしまうという点においては」

彼は闇への向き合い方について、こう言いたいのだろう。

逃げろ。そして諦めろ、と。

「……ホグワーツに戻ってきて、羨ましく思える事も有る」

元マグル学教授であり、現闇の魔術に対する防衛術教授。

異質にして異色の経歴を持つ人間は、言葉通りの色を瞳に映しながら言う。

「君達は、魔法を信じている。闇を打ち破る側にしろ、光を呑み込もうとする側にしろ、そこに希望を見出している。自分達が家族と、恋人と、親友と、或いは己一人で笑い続ける為の力だと何ら疑っていない。しかし——」

「——貴方は信じられない」

「もはや魔法は私を救ってはくれない。言うまでもなく、ホグワーツも」

悲劇に酔っている。そう切り捨てるのは容易いだろう。

彼は既に、明白に闇の側だ。ハリリー・ポッターに、或いはアルバス・ダンブルドアによって討ち滅ぼされるべき人間だ。それは疑う余地も無い。

あの校長閣下が獅子身中の虫を放置する理由などどうだって良いが、しかしそれは放置されているだけであって、欺かれていた訳では無いのだ。この教授の言葉を借りれば、彼は力無く資格無き愚か者であり——闇の帝王では無いが故に——当然に、善にして偉大な魔法使いに敗北する事だろう。

だが、彼は、そうされなければならない程の悪を為したのだろうか。したのかもしれない。僕は表面上の事を聞いたに過ぎない。巨悪に挑む過程、或いはその為の力を得る過程において、禁忌に触れた事が有るのかもしれない。

けれども、彼の本来の人格が貪欲で、小狡く、意地悪く、そして醜悪極まりないという程度に過ぎないのであれば、それは滅ぶまでの業であると言えない筈だった。ただ認められたいが為に闇の魔術に手を出しただけならば、それが悪の魔術で無い以上、彼は未だに戻れる位置に居る筈だった。

クイリナス・クイレルは、黙ったままで、それ以上何も言おうとしなかった。

けれども、彼は依然として答えを待っていた。あのどもりながら告げられた言葉は間違いなく本心で、教授としてではなく生徒として、僕の答えを辛抱強く待ち続けていた。

だが——彼に対して、僕は一体何と答えられようか。

僕がホグワーツに通っているのは、それ以外の目的が無いからに過ぎない。僕は、他の子供と違って、栄光と栄達の為にこの学校に来た訳では無い。入学前にそれを喪った以上、ハーマイオニー・グレンジャーと少しでも近い場所に居ようと望み、結局それが叶わずに、単

なる惰性として、今ここにいる。だから、彼と何ら共有できるものではない。

それでも、彼の心からの求めに答える為には、何かを言わなければならなかった。それは解っていた。

その適切な答えをどうにか探せないかと考える内に——ふと、視線を教授の机の上に向けた。

乱雑に積みあげられた防衛術の本の合間。

そこには、一本の杖が無造作に放り投げられていた。

魔法族にとって、杖とは己の分身であり、何にも代えがたい友である。杖を買って以来、余程の事が無い限り、その身から離す事は無い。僕とてそうだ。不死鳥の羽を芯とする杉の杖を、今も持っている。しかし、教授はそうでは無かった。

まさか、授業の間にわざわざ机に置く必要は無いし、その素振りを見た記憶も無かった。そもそも、僕はクイリナス・クイレル教授が杖を振る光景など、ただの一度も無かつ——

「

そうして、己の愚かさを直視させられた。

クイリナス・クイレル教授は確かに忠告した。

力無き者、資格を持たぬ者は、闇に立ち向かうべきではないと。

ならば、その闇とは何か。決まっている。アルバス・ダンブルドアは、意図せぬ者を城には招き入れないと言った。あの老人は、間違いなく僕に警告したのだ。そして、僕も理解していた筈だった。その筈で、真に理解してなどいなかった。

僕は逃げるべきだったのだ。何を捨ててでも。

教授に呼び止められた体面が有った？ それが生存を勝ち取る為に一体何の意味が有る？

力。資格。

それを有する者は、この城に二人しか居ない。アルバス・ダンブルドア。ハリー・ポッター。

そして——僕はそのいずれでも無い。

クイリナス・クイレル教授の瞳は今や濁りきっていた。その中に、赤い蛇の焰がのたうち回っていた。

今や立ちこめるのは大蒜臭では無く、腐り落ちた血と肉と死の臭いであつた。ここは既に教室では無く狩場で有り、かつて誰よりも闇を邪悪の極みへと昇華した、煮える大釜の中だつた。

知らない。見たこともない。

そもそも、彼は死んだという歴史的知識が有つた。

でも、そこに居るのが誰であるかを、今まさに死につつある僕は悟っていた。

そうして、クイリナス・クイレル教授では無い誰かが、その身体を無理矢理に回して、僕の方に蛇の視線を向けようと——

「——ここに居たのか、レッドフィールド」

声が、世界を打ち破つた。

スネイプ寮監だつた。

正直言つて、寮監がどのように入つて来たのか解らない。いや、彼は普通に入つてきた筈だ。中を外に晒すかのように、教室は開け放たれていた。先程まで酷く立ち込めていた大蒜臭が、外に流されるように薄れて行つた。

そして、どもりの教授は、スネイプ寮監に対して、歪んだ笑みを浮かべてみせていた。

「……あ、ああ、セブルス。良く来てくれました」

先程見た、蛇のような色は無い。怯えきつた、卑屈な瞳だけがあつた。

もつとも、スネイプ寮監は一切気にした素振りを見せなかつた。自分がこの部屋の主であるように完全に無視しきつて、僕に対して冷淡な視線を寄越した。

「我輩は、授業が終わつたらすぐ私の所に来るように、と伝えた筈だが？ 物分かりの悪い愚か者で有つても理解出来るように、正確にだ。

しかし、何時まで経つても君は我輩の下に来ない。我輩が時間を無駄にされる事を嫌っている事を君は知っている筈だが？」

「……すみませんでした」

僕は素直に頭を下げる。

その様子を暫しの間ねつとりと見つめた後、スネイプ寮監は、闇の魔術に対する防衛術教授へと向き直った。

「という訳で、レッドフィールドを連れて行きたいのだが、構わんかね？」

言葉の内容は許可を求めて居るようで、しかし既に決定事項を伝えるような口調だった。

もつとも、クイリナス・クイレル教授は逆らうつもりも無いらしい。

先の言葉を繰り返すように、彼は微笑みながら言った。

「え、ええ。私が彼にすべき話というのは、もう終わりました。ち、ちよつとした授業の話を、し、してましてね。か、彼と話す事は、す、既に、あ、有りません。その生徒を、今すぐに私の前から連れ出して下さい」

教室を出て、僕はスネイプ寮監の後を着いていく。

彼は黒のローブを靡かせながら早足で歩いていて、こちらの方をまるで見ようとしない。十一歳の歩幅では半ば走るようになってい事を、全く気にしようとすらない。

そして、クイリナス・クイレル教授の教室から数階分離れた後、予備動作も無く突然クルリと振り返った。その右手には、杖が握られていた。

言うまでもなく、僕に向けられていた。

「我輩が君に、何の用事で授業後に来いと言ったか覚えてるかね？」立ち止まって尚息を切らしている僕が答えるべきは解っていた。

「いいえ。貴方が今日の闇の魔術に対する防衛術の後に自身の下を訪れるように言った事など有りませんし、付け加えれば今まで一度もそのような事は有りませんでした」

「成程、つまり君には先日の罰則の成果が出ていなかったようだ」
「ええ、寮監。貴方からはまだ受けて居ませんから。無論、貴方がこれから初めての罰則を課したいというのであれば、僕は何ら逆らう事は出来ませんが」

スネイプ寮監の瞳が、僕の瞳をしつかりと覗き込む。

その真偽を探るように——何か悪い物に取り憑かれていないかを見極めるように。

二十秒程彼はそうしていたが、寮監なりに満足する結果が得られたのだろう。軽く鼻を鳴らした後、握っていた杖を僕から外し、ローブの中に仕舞った。

「我輩が、君に言う事は、何も無い」

言葉を明確に区切りながら、力強くスネイプ寮監は断言した。

「だが、スリザリン生である君は理解している。そう期待して良いかね？」

「はい。大人二人を弄した事で良い気になった馬鹿な学生が、身の程知らずにも余計な首を突っ込もうとした事は理解しています」

「結構」

彼はそう言い、ローブを翻した。

「では、我輩は行く」

スネイプ寮監が何をしに来たのか。

それは、彼の行動から余りにも明らかだった。

クイリナス・クイレル教授は監視対象で——それと同時に、ステファン・レッドフィールドという、余計な事を知り過ぎている十一歳の子供は、大人にとっての庇護対象だった。

しかし、僕是不興を買う事を承知で、寮監の背中に向かって言った。

「彼は紛れもなくホグワーツ教授でした」

遠ざかっていく背中は何も答えなかった。

その後、僕はクイリナス・クイレル教授から当然に距離を取った。

いや、距離を取ったというのは正確ではないのかも知れない。

彼は全てに怯えきっていて全く生徒に近付こうとしなかったし、生

徒が近付こうとすれば逆に逃げていく有様だった。あの時の会話が嘘であるかのように、周りからあらゆる物を遠ざけ続け、何に対しても親密さを示す事は無かった。

彼の授業は相変わらず酷いモノで、聞くに堪えなくて、真剣に聞いている学生など皆無で——最後の授業まで、そのどもりを笑われていた。

そして、賢者の石は護られた。

“生き残った男の子”が、それを成し遂げた。

今世紀で最も偉大になるべきでなかった魔法使い

全くもって巫山戯けた話だ。

“英雄”達を褒め称える老人の話聞きながら、そう思う。

ハリー・ポッターが賢者の石を護つたという“秘密”は既に流布されていた。

誰が流したかなど、考えるまでも無い。

ハーマイオニー・グレンジャーも、ロナルド・ウィーズリーも、最初に率先して自身の功績を声高に語る程愚かではない。賢者の石というのは、魔法界全体でも上から数えた方が早い程の^{アーティファクト}叡智の結晶であり、学校に秘されていたというのは現実味が無く、何よりそれを巡る“英雄的行為”は禁じられた廊下の先——外部から事実上閉ざされた空間で行われた事だ。一年生がそのような明らかな“法螺話”を吹聴したところで、誰も信じはしない。

本来であれば、それが真実であろうと誰も知り得ないし、決して真実の保証も為し得ない。

ただ一人、それを実現させる権力と説得力を有する、間違いなく“英雄”一人を除いて。

嗚呼、全くもって、全くもって筋の通らない話である。

あの老人は、スリザリン生——中でも首席と^{第七}最終学年の監督生の姿が見えないのだろうか。

彼等彼女等は、その地位を有している事から、基本的に聡明だった。

まあ監督生の方は、スリザリン寮内の秩序維持という都合上家柄等の方が重視されるのだが、一応優秀と言って良いのは違いないだろう。僕も多少の恩義があった。

だからこそ、老人の流れが一体何処に落ち着くのか、それを予見してしまっている。その蒼褪めた表情からは、倒れていないのが不思議な位だった。

六年だ。スリザリンは、これまでの六年間、寮杯を維持し続けて来た。

しかし、彼等は今年、それを喪ってしまう。その挫折が、屈辱が、傷

跡が、これからの彼等彼女等の社交界、経歴、そして出世にどれ程の暗い影響を齎す事だろうか。

無論、スリザリンは声高にその失点をあげつらいはしない。寮杯を獲得する事が出来なかった歳上の偉大な先輩というのは幾らでも居るのだから、そうしてしまえばそれこそ要らぬ蛇を出してしまう事になる。

けれども、連綿と続いてきた栄光を喪わせた者として、裏で嘲笑されるのは変わりない。

たとえそれが恣意的な校長閣下の介入によろうとも、賢者の石を護るといふ偉業によろうとも、熾烈な減点主義の世界においては結果こそが全てなのだから。挽回が出来る可能性が有っても、それは遙か先の話で、栄光の筈だった出だしの躓きを無くすものでは無いのだから。

アルバス・パーシバル・ウルフリック・ブライアン・ダンブルドアは、彼自身がグリフィンドールに選ばれた事を当然視し、また誇りに思っている。

しかし、この瞬間の行いを見る限り、彼は、よりにもよって組分け帽子が今年度謳った“手段を問わず目的を遂げる狡猾さ”を体現しているように思え、それ故に蛇寮にこそ組分けされるべきように思えた。

無論、その事は僕の校長閣下に対する“敬意”を喪わせるものではない。

逆に好感や親近感すら抱かせるものだ。権力というのは、必要な時に用いなければ意味が無い。それが君臨すべき者として、“英雄”として正しい姿だ。

そうして、校長閣下はネビル・ロングボトムにも十点点した。

それによつて、スリザリン寮の点数を上回った。そして、そこから中——勿論、スリザリン寮を除いて、歓喜が爆発した。レイブンクローやハッフルパフですらも同じような所を見るに、どうやら、我が寮は余程恨まれていたらしい。

ただ、それらを耳にしながら、僕の思考は全く別の所に飛んでいた。

すなわち、今回の加点劇の解釈について。

あのドラゴン騒ぎの真実は僕にとって未だに解らない事だらけである。

が、しかし、あれが賢者の石に纏わるものであるのであれば、校長閣下は全てを元に戻したただけだ。つまり、ドラコ・マルフォイと三人組の深夜の馬鹿騒ぎにまつわる、先の五十点かける三イコール百五十点減点を無かったただけにしたに過ぎないのだ。

となれば、純粹に校長閣下が加点したのは、ネビル・ロングボトムだけになるとも言える。

つまり、校長閣下は、彼に対しても何らかの意図が――

「おうおう、喜びが爆発しておるのう。しかし、諸君。少しばかり待ちたまえ」

老人は歡喜に沸く生徒が多少落ち着くの見計らって、片手を上げた。

「儂の話は終わったと、まだ儂は一切言うておらぬ事に気付いてほしい」

その時点では、これから先の展開を予想出来た者は居なかったに違いない。

「自らが渦中に飛び込む事だけが行動するということではない」

瞬間、広間が不自然とすら言える程に一斉に静まり返った。

グリフィンホール席は周りの友人達と肩を組み、また叩き合う恰好のまま凍ったように不自然に動きを止め、他の寮もまた同じだった。

それは先程のように歡喜が爆発する予兆では無く、これから不吉が到来する予感故に。

「彼等四人は、勇気を、グリフィンホールを象徴する要素を正しく体現した。それは紛れもなく加点するに相応しい事じゃ。しかし一方で、この今学期に狡知を、スリザリンを象徴する要素を正しく体現した者がやはり居る。

――ステファン・レッドフィールド君」

一瞬、何を言われたのか解らなかった。

そして、理解が及ぶ前に、全寮生の視線が僕の方を向いていた。

「彼は賢者の石を——嗚呼、彼はそれが賢者の石であると知らなかったのじゃが——自ら護ろうとはしなかった。彼は寮監であるスネイプ教授に、そして勿論他の教授陣に対しても、その大人としての知識と力に対して信頼を示した。しかし、それと共に、叡智に満ちた警告と助言を残したのじゃ。そして、それは確かに正しく、間違いなく今回の騒動を解決する一翼となった。

よって、スリザリンにも十点を与える」

〔前代未聞の同時優勝。〕

そうであるのに、グリフィンドールは勿論、他二寮も静まり返ったままだった。

榮譽を辛うじて確保したスリザリン寮の人間ですら、僕を見つめるだけで何も言わなかった。

先程までそこら中に転がっていた楽し気な顔と笑い声は無く、表情を喪った顔と重苦しい沈黙が大広間を支配していた。

ただ、寮監のみが僕を冷ややかに笑っていた。

全てを振り切って、その場所へ赴いた。

ガーゴイルも、螺旋階段も、獅子のノツカーの付いた扉も、何の支障にもならなかった。

そして、今回の事件のファイナーレを大勢にとって不本意な形で締め括った老人は、生徒達の困惑など無かったように、校長室の真ん中に存在していた。

「二体何のつもりですか、アルバス・ダンブルドア……！」

怒声が校長室全体に響きわたる。壁に掛かっていた肖像画達は、今は寝たふりをしておらず、僕の蛮行に対して眉を顰めていた。前の中には居なかつた筈の美しい鳥——止まり木に止まっている不死鳥も、まるで不機嫌さを示すかのように首をもたげていた。

もつとも、部屋の主は椅子に掛けたまま、穏やかに微笑みを見せていた。

その事が、余計に腹立たしかった。

「僕は貴方に点数を恵んで貰おうと思った事は一度として無い！ 貴方を信奉するグリフィンドールの生徒を使つて貴方が何を企もうと構わないが、それ以外の人間について、まるで貴方の小間使いのように賢しく利用しようとしないうで頂きたい……！」

「解つておる」

老人は、表情を変えないまま重々しく頷いた。

「君がスリザリンの中で何とかバランスを持つて、この一年間を過ごそうとしてきた事も。儂の行いはそれを破壊するであろう事も。その責は全て儂に有る」

「……であれば、何をしてくれるんです？ 何もしてくれないんでしょう、貴方は。最後の最後、事がどうしようもなくなるまで貴方は動かない人間だ」

無理矢理に怒りを鎮めつつそこまで言い切つて、溜息を吐く。

別に言葉の内容は完全な本心では無い。無論、獲得出来る物があれば、この老人から何等かを奪い取りたかったが、生憎それは直ぐに思いつかなかつた。

そして、結果からを見れば、あれは悪い事だけでは無かつた。

幾らスリザリンが忌み嫌う相手からの加点とは言え、寮杯を喪うという不名誉から逃れられたという事実は大きかつた。スリザリンの首席、監督生は、酷く迂遠で直截的とは程遠い物であつたが、それでも感謝を示したのは事実だつた。故に、他のスリザリン生が、真正面から僕の行いを非難したり、問い詰める事は出来なかつた。

何よりこの老人が、明らかな虚偽を混ぜ込んだというのが救いだつた。

質の悪い事にその虚偽に気付く者が三名程——当然、その事実を既に知る寮監は除く——居るのは悩み事だつたが、今考えるべきでは無かつた。

「……僕の後には、寮監も怒鳴り込んできますよ。寮監は僕以上に怒り心頭だ」

寮監は老人の策略に巻き込まれた僕を嘲笑するのに忙しく、老人の言葉に彼の功績も示唆されていた事に最初気付かなかつた。

しかし、生徒が寮監により口止めされていると強く主張すれば、矢面に立たされるのが誰かなど明らかだった。そして僕はそれをする事を躊躇わなかった。この老人はそれを見越して敢えてあのような言い回しをしたというのも、やはりまた明らかだったからだ。

僕が口を割らない事にドラコ・マルフォイは強い不愉快を示したが、直ぐに引き下がった。

別に僕から聞けなくとも、スネイプ寮監から聞けるだろうと信じ込んでいるのだろう。無論、あの寮監が馬鹿正直に真実を告げるとは思わない。精々彼をだまぐらかす上手い言い訳を、大人の知恵により捻りだしてくれる事を祈るばかりだった。

そして、老人もそんな寮監の現在に思いを馳せたのだろう、重苦しく頷いた。

「……そうじゃな。この一年間、セブルスには迷惑を掛け続けた。セブルスにもやはりその権利が有るし、後で誠意を尽くさねばならんじやろう」

迷惑を掛け続けた。

それはハリー・ポッターを護り続けた事を含むのだろう。

僕もクイディッチ観戦をしていた以上、ハリー・ポッターが箒の上で踊っていたのは見ていたし、またドラコ・マルフォイの様子から、罰則時には大冒険が有った事は察していた。僕が考える以上に、ハリー・ポッターという「英雄」はたった一年で幾度も死に直面し、また危うい所で逃れ続けてきたのだろう。

何より、後半は寮監にとって御荷物がまた一つ増えていたのだから、堪らなかつたに違いない。

「……その際には僕から感謝の言葉が有った事を告げておいて下さい。寮監が居なければ、僕は間違いなく死んでいた。それは疑う余地も無い事実です」

「そういうのは自分自身で言うべきものではないのかね？」

「寮監は、僕からのそれを受け取ろうとしないでしょう。寮監は、僕からの敬意を一切求めていない」

「……君達も、意外と複雑な関係に有るようじゃの」

老人がそう吐き出すが、こればかりは理解されないのは承知していた。

僕とて、説明し難い所が有るのだから猶更だ。ハーマイオニー・グレンジャーに対する態度、御互いが御互いに抱く嫌悪、それも理由の一つだろう。だが、今学年を通してどういう訳か、思ったのだ。僕は決して、スネイプ寮監と相容れるようになってはいけなのだと。

あの背中に投げ掛けた言葉も、その一環だった。だからこそ、僕は問わねばならなかった。

アルバス・ダンブルドア——今回の全てを知る者に対して。

「クイリナス・クイレル教授はどうなりました？」
「彼は死んだ」

冷淡な物言いだった。

そこに容赦は一切なかった。

「……君は彼を教授と呼ぶのじゃな。彼が邪悪で有る事を知った今でさえも」

嘆かわしいというように軽く首を振る老人に、僕もまた首を振り返してやる。

「知っている今だからこそですよ。そして、僕が会話したのは、非魔法族の知識や常識を十分理解していた元マグル学教授であり、闇に対抗し続ける事を最後まで忘れなかった闇の魔術に対する防衛術教授だった」

「過大評価に過ぎるの。彼は特別を求めていた。邪悪の深奥にある教えを受ける事を躊躇せず、杖を用いず飛翔するという特徴的な技能を獲得し、杖無しで自在に魔法を行使出来るようになった。十一歳から苦楽を共にした友であり、父であり、子である筈の杖を喪う事を些事と看做した。彼は力に溺れていた」

「溺れる事の何が悪いのです？ 溺れているという事は、まだ沈んでいないという事でしょう？ 彼は足掻いていた。その末路を覚悟しながら、尚耐えようとしていた。彼は自ら杖を、効率的に魔法を使う

為の外部装置を遠ざけた」

「いいや。最初から彼にはそこまでの強さは無かった。塵のような存在に堕ちた邪悪に敗北する程に弱かった。彼の貪欲さと浅はかさは、邪悪の再来を招いた。そこに同情すべき点はない」

「であれば、思い起こすべきだ。彼はトロールという危険物を制御しきり、尚且つグリーンゴッツの金庫を破るという大罪を犯した訳だ。特に小鬼はヒトの策謀を聞いてくれるものではない。勿論、塵ではどうにもならない」

僕は嘲笑と共に続けた。

「そんな邪悪と共に教授は一年も無駄に時間を過ごしていた。賢者の石を護るアトラクション如きに過剰な注意を払い、中々挑もうとしなかった。その間、服従の呪文や闇の物品を用いる事も無く、ハリ・ポッターも含め、ただの生徒一人も殺すどころか傷付けすらしなかった」

老人の表情は微塵も動かなかった。

彼は心を閉ざしていた。閉心術のような魔術の意味では無く、大人だけが持ち得る豊富な経験と自身が正しいのだという強固な信念さでもって、僕の言葉を排除していた。

「第一、教授は明らかに取り憑かれていましたが、それは何時からですか？ 旅行先で黒い森に入った時ですか？ それともグレートブリテンに戻ってきて、グリーンゴッツ破りに失敗した後ですか？」

「……それを特定する事に、果たして何の意味が有るのかね？ 彼が何時闇に取り憑かれようとも、闇に堕ちた事に変わるまい」

「大ありですよ。貴方は教授が弱弱い邪悪に唆される人間だったとする一方、その邪悪こそが教授を強くしたとする。そこには矛盾があるでしょう」

「矛盾は無いとも。彼の精神が傲慢な割に懦弱で有った事と、彼の魔法力が才能に満ち強大で有った事は問題無く両立しうる。そして、その点において残念極まりない人間じゃった。それらが釣り合っていない者の破滅は必然と言えるからの」

議論は平行線だった。

僕は老人の言い分を認める気は無かったし、老人もまた同様だった。

それでも確信した事が有った。教授があのような物に取り憑かれ、間近で見張られなければならなくなったのは、グリーンゴツツ破りの後なのだと。そうでなければ、この老人は何ら誤魔化す必要は無かつたのだから。

つまり、そこまではクイリナス・クイレル教授は後戻りする事が出来た。

そもその話、僕がグリーンゴツツと賢者の石をヒントとして結び付けたのは、ハーマイオニー・グレンジャーに対する「信頼」が主であり、些か飛躍的な物で有った事は否定しない。しかし、かつての時も、明らかに指摘したこの今も、アルバス・ダブルドアは何ら否定しなかつた。

となれば、グリーンゴツツに賢者の石が置かれていたのは三人組の推測通り、事実であつたのだろう。そして、グリーンゴツツ破りが失敗した原因が、その金庫が当日には空になつていたからだという事は、当時の日刊予言者新聞で大々的に報道されていた。

であれば、この老人の意図の下で、賢者の石は移された。

その邪悪が迫っている事を悟ったからこそ、その行いは為された。

そして、クイリナス・クイレル教授は、結果として闇の帝王に取り憑かれた。

「貴方は石をグリーンゴツツから移した時点で、クイリナス・クイレル教授を殺していた訳だ。邪悪が迫っている事を知りながら、その邪悪の根本を滅ぼそうとせず、寧ろ高貴な石ころを護る事に終始した。一人の教授のような些細な犠牲を気にせず、闇の復活を防ぐ為に」

「君は少々儂に期待し過ぎておるよ。儂は全ての悪事を食い止められる訳では無い。そも、君とて、一人を救う為に賢者の石を渡せば良かったとは思ってなからう」

「ええ。そんな馬鹿な事は思いませんよ。その代わり、貴方が今回の「悪巧み」を考えついたのが、最早教授を救えなくなつた事に気付いた後であつて欲しいとは思つてますが」

グリンゴッツからホグワーツに移した。それは確定されたと言っている事実である。

しかし、それが何処も経由せず直接為されたのだというのは、確定された事実では無い。

要するに、最初の最初から、アルバス・ダンブルドアがハリー・ポッターを危険にさらす確固たる意図の下に石を移したという事は、誰も語ってはいないし、確認されても居ない。

アルバス・ダンブルドアは一体どの時点で今回の事を計画したのか。

賢者の石を秘する場所は、本当に最初からホグワーツだったのか。それは依然不明である。

そしてやはり、この老人は慈悲と矜持を示す為に、真実を語るつもりは無いようだった。

「……あの場で、全てを語らなかったのは何故ですか」

だから、わざとらしくとも話を変える事にした。

この余りにも強過ぎる大魔法使いに、クイリナス・クイレル教授の心境は理解出来ないだろう。寮の違い云々では無く、生き物としての格が違ったのだから。

そして、僕はそれが出来た。同じ程度の格でしかなかったのだから。何より彼の本音をぶつけられた者として——それを答ええないままに終わってしまった者として、僕は彼を理解してやらなければならなかった。

そして、それらは今言っても全てが遅い事であった。

遣る瀬無さを振り切って、僕は続ける。

「賢者の石の護りが余りにも馬鹿々々しい事は置いておきましょう。ただ、上級生は当然に疑っている事は伝えておきます。何をしたのかいまいち不明なハリー・ポッターは別として、貴方の言によれば、ロナルド・ウィーズリーはチェス、ハーマイオニー・グレンジャーは論理。いずれも一年生に破れる程度ならば、大した事は無かったのではないかという事に」

彼等は得意満面だろうが、冷ややかに見ている者は多かった。僕と

てそうだ。

チエスが創造的であつた時代は、非魔法界では終わりの兆しが見えている。

『Deep Thought』と名付けられた “能無し” は、“42” という答えを出すに留まらず、既にチエスの最高位のタイトルを持つ人間を打ち破つた。世界王者には敗北したが、いずれ敗北する時代は訪れるだろう。魔法界のチエス駒がある種の我儘さ——ランダム性を有しているのは確かだが、解けないもので無いとは確信している。論理とてそう。寧ろ、単純な論理こそが、彼等 “能無し” の最も得意とする所である。

今回の賢者の石の護りは、魔法族が見下す “マグル” ですら容易に超えられる程度の試練でしかない。非魔法族であれば、かの邪悪よりも余程上手く賢者の石をホグワーツから盗み取る事が出来ただろう。だが、その簡単さを老人に指摘する事は、今の本題などでは無かつた。

「あの三人組とクイリナス・クイレル教授の間に起きた事は “秘密” でした。しかし、抜け落ちていいる事が有つたでしょう？ 貴方がハリー・ポッターを褒め称える際、何と言つたか、貴方は本当に自覚しているのですか？」

「……流石に、そこまで耄碌しては居らぬとも。彼については……『その完璧な精神力と、並外れた勇気を称え』た」

「何故、闇の帝王を退けたと言わなかつたんです？」

ヴォルデモート卿。

自身が対峙した邪悪がソレである事を、僕は確信していた。

本能在理解していた。闇の中の闇。理性と自制を残らず吹っ飛ばし、誰も行きついた事の無い領域にまで踏み込んだ、人知を超えかねない程の悪の魔術の体現者。出会ってしまった以上、それがどんなに有り得ない事のように見えても、心が肯定してしまっていた。

そして漸く老人は、僕の期待通りに、苦々しく悲嘆にくれた表情を浮かべてくれた。

「僕は彼が死んだと思つていた。ハリー・ポッターを危険に晒す真意

が、理解出来ないでいた。だが、闇の帝王が生きているのであれば、それは全く別の話だ」

勿論、アルバス・ダンブルドアが何故ハリー・ポッターを矢面に立たせようとするのかまでは解らないが、それでも、闇の帝王が彼を狙う事は明らかだった。

闇の帝王にとって、彼は自身の失墜を招いた怨敵なのだから。

であれば、これから歩むべき道筋も見えていた。

「貴方は魔法大臣になるべきだ」

僕は言った。

アルバス・ダンブルドアは小さく呻き声を上げた。

「コーネリウス・ファッジ現魔法大臣がどうという人間か僕は知りません。けれども、闇の脅威に立ち向かう存在として、貴方以上に相応しい人物は居ない筈だ。貴方は彼を今すぐ蹴落とし、グレートブリテンを纏め上げなければならぬ」

「……おお、ステファン。コーネリウスは、まだ二年程しか任期を務めておらぬ。それに、何より魔法大臣になる為には選挙が必要なんじゃない」

「任期？ 最大七年の選挙さえ守れば、魔法大臣のそれには確たる下限も上限も無かったと記憶していますが？ そしてたかが選挙が言い訳になると？ やれば良いでしょう。全ての人脈と権威、政治力を費やして、如何なる手段を用いても」

「そう簡単にする訳では無い。下が上を容易くひっくり返してしまえば、その地位は権威も権力も喪つてしまう。事は、魔法大臣、魔法界の頂点なのじゃ」

「既に綺麗事が言える平時では無い、その事は貴方が解っているでしょう？ そして頂点だからこそ、貴方は奪わねばならない。闇の帝王がそれを目指すからこそ、貴方は先にその地位を手中にし、占有し、脅威を排除し続けなければならない」

闇の帝王の復活。

それを真剣に受け止める者がどれだけ居るかは怪しいものである。グリーンゴッツ破りに闇の帝王が裏に居ると囁きながらも、その本人

が実行したとは誰も思っていない。グレートブリテンの魔法族は微妙で複雑な心情を抱いており、アルバス・ダンブルドアという英雄が語った所でその事実を信じられず——しかし今ならば、戯言をほざきだした老人の、最後の花道として頂点に押し上げる程度は是とするだろう。

何なら「生き残った男の子」^{poster boy}を選挙の顔にすれば良い。彼はその役割を喜んで果たそうとするに違いない。

そして、一度権力を持った後で有れば、後はどうにでもなる。

「クイリナス・クイレル教授は不死鳥の騎士団について言及しました。それが魔法省の組織で無い事は想像が付きます。名称がマージン騎士団に由来している事は明らかですから。故に、今度は同様の事を繰り返してはならない。グレートブリテン全体をもって、対抗すべきだ」

相手がゲリラ戦法を用いてくるからと言って、こちらもそうせざるを得ないという事は無い。

確かに苦労は伴うだろう。組織が巨大になればなる程に、身動きは鈍重な物となる。しかし、巨大であればある程に可能である事もまた有った。如何なるアルバス・ダンブルドアでも二か所に同時に存在する事が出来ないように、頭数というのは単純な力だった。

そして、纏め上げるのは復活してからでは遅い。

服従の呪文、磔の呪文。適切な人質、見せしめの処刑。恐怖、猜疑、そして利益。

それらをもって、闇の帝王は当然に人の結束を破壊しようとするだろう。だからこそ、その前に、結束と団結を強固にしておかなければならない。今だ残党達が表立って動けず、スパイを多く入り込ませるのが難しい間に、万全の準備を整えておかねばならない。

そう。

「——大いなる善の為に」

今度こそ、アルバス・ダンブルドアは片手で覆った。

死んだように身動きを止めたまま、そして暫くの間何も言わなかった。

そこに大魔法使いは居なかった。あの時と、クイリナス・クイレル教授の時と同じだった。知識と経験によつて形成された虚飾の皮が剥がれ落ち、肉体と精神を賦活していた血は抜け落ちて、彼を彼たらしめる本質が顕れていた。

そして、老人は言った。

「権力を持つ儂は信用出来ぬ。儂は、それを求めはせぬ」

「――」

僕は、何も言わなかった。

権力。

魔法魔術学校校長を、事実上グレートブリテンの全魔法使いに影響力を行使出来る地位を、彼は何と考えている？

その地位に四半世紀以上も君臨し続けている人間が、客観的に見て、権力にどんな態度を取っていると評せるだろうか？

だが。

だが、この老人には言つても伝わらないだろう。

そして今漸く、本質的に理解した。何故、他のスリザリンがこの大魔法使いを嫌うのかを。

彼はそれが自身のマグル鼻根に基づくものだと思っているのかもしれない。実際その側面は有るだろう。けれども、嫌悪を抱いていても、敬意と尊重の念を抱く事は出来る筈だ。しかし、他のスリザリンはそうしない。出来ない。その最も決定的で、致命的な理由が今眼前に横たわっていた。

そして僕は、やはりスリザリンのようだった。

「……何故、僕に何も言わないんです？」

諦観と共に、僕は静かに、極めて穏やかに聞こえるように言った。

「貴方は僕より遥かに生きている。遥かに長くの経験を有し、膨大な魔法力を持ち、そして広範な知識と深淵なる叡智をその身に宿している。そんな貴方であれば、僕の無知で浅はかな言葉など全て跳ね飛ばせた筈だ。前に来た時ですらその機会は有った。なのに、何故、貴方はそのような態度を僕に取るのです？」

それだけが、僕にとって理解出来なかった。

どういう訳か、この老人は僕と真正面から向き合おうとしている。言葉を聞こうとしている。そして、それはこの老人にとつて最も大事であろうハリー・ポッターよりも真摯な事は間違いなかった。

王様の耳はロバの耳。近しく、大事な人間に喋れない事が、しかしどうなっても良いモノに対して容易く喋れるという事は得てして存在する。

けれども、その「穴」として僕を選ぶ理由が、僕には解らなかつた。「……それはのう、ステファン。よりによつて君がその名前を持つからじゃ」

果たして、それに答える老人は。

残酷な位に、憐れさを覚える程に、完璧な老賢者の姿を取り戻していた。

「数奇過ぎると思う。じゃが、前回スリザリンである君がよりにもよつてその目的の為に此処に訪れた時、儂はそれを思い起こさざるを得なかつた。勿論、会話してみた君は、彼とは異なっていた。けれども、その根底に在る激しさを見れば、それは儂にはやはり酷く似ているように思う」

「……余りに抽象的で、意味が解りかねますが」

「そのようにしているからの。気付かなければ、奇妙な一致でしかないのじゃから」

僕の非難を、老人は当然のように受け止めた。

「しかし、半純血である儂にはその知識が有つた。そして、その宿命を、思い起こさざるを得なかつた。偶然の相似だと切り捨てられなかつた。それと共に繰り返し返しては欲しくないと、彼のように贖いに生きる事になつて欲しくはないと何処かで願っている」

「……願うだけですか、アルバス・ダンブルドアともあろうものが」

「それ以外出来ぬのじゃ。その力は最も強大で、同時にどうしようもないものであるからの」

要するに、実質的に何も語るつもりは無いのだろう。

この老人はこの老人なりに確かな根拠があるのは間違いない。けれども、手掛かりが余りにも無き過ぎて推論する事は不可能であり、

それ以上に読み解く必要性もまた見出せなかった。

僕は踵を返そうとし、けれどもその前に老人に告げた。

「もう僕は二度とこの場所に来るような面倒な真似はしたく有りません。今回の件で懲りました。自分の力を過信し、周りの力を感じて、要らぬ事に首を突っ込むべきでないと。寮監の助けが無ければ、僕は間違いなく死んでいた訳ですから」

力無き者、資格無き者は死ぬとクイリナス・クイレル教授は言った。そうだ。その言葉の通りに、彼は死んだ。アルバス・ダンブルドアが示唆するに、教授は闇の帝王の教えを正しく実現する力量を有しながら、しかし滅ぼされた。彼は己の末路をもって、正しく闇の魔術に対する防衛術の在り方を証明してみせた。

アルバス・ダンブルドアの周りは死に塗れている。

ジェームズ・ポッター。リリー・エバンズ。『英雄』の親である彼等ですら死んだ。

彼等がホグワーツの首席だった記録は、今尚校内に輝かしく残っている。今の僕より年長で、知識豊富で、圧倒的に優秀である事は歴然としていた。しかし、死んだ。

彼等は器が足りなかった。息子の成長を見届ける前に、闇の帝王の前に屍を晒した。世間はその見事な死に様を称賛するが、かと言ってそれと同様の末路を望まない。英雄的行為を無責任に称賛するのは、何時だってそれをしようとは思っていない凡人だけだ。

スリザリンは違う。自己防衛の下、当然に、躊躇いも無く逃げる。臆病と笑われても、汚名を代価に生存を買えるのであればそれで良い。ただ愛の為に、それを行う。生きて、妻と子と共に笑い、涙し、その上で天に定められし時間を全うしたいと思っっているから。

そして、僕達が逃げた所で、それでも世界は上手くやる筈だ。今まで間違いなくそうであったのだし、この世には『英雄』が居るのだから。無責任な者が得するように、世界は出来ている。

「しかし、ステファン。」

君がスリザリンであるように、彼女はグリフィンドールなのじゃ」
全てを見透かしたような大魔法使いの言葉に、僕は答える意義を感

じなかった。

僕は無視して入口へと、その櫛の扉へと歩いていった。無理矢理入って来たのだから、無理矢理出て行く権利もまた同様に存在する筈だった。

けれども、僕はもつと良く考えるべきだった。

僕は好き放題言った。心の赴くままに、感情の奔るままに。

しかし、そもそもそれを可能にしたのは——敢えて校長室へと招き入れるような真似をしたのは、間違いなくアルバス・ダンブルドア本人だった。

であれば、彼の方にもまた僕に告げるべき事があつたと考えるのが素直だった。

僕は最初から勘違いしていたのだ。そして間違えていたのだ。あの加点劇は、決してスリザリン的では無かった。彼がグリフィンドールである以上、他の可能性を検討すべきだった。

だからこそ、そうしなかつたこそ、聞くべきでない事を聞く羽目になる。

「——言い訳と受け取ってくれて良い。僕は浮かれ過ぎたのじゃ」

僕は足を止め、しかし振り返らなかつた。

もう二度と、そのような姿は見たくなかつた。先の一度で十分だった。「英雄」を、その力量を、叡智を、それに対する敬意を心の底から疑ってしまう事などはしたくなかつた。

「学生達の前に出た瞬間、彼を大きく褒め讃えたいという我欲に駆られた。最初に加点の事を口にした以上、もはや止められなかつた。我に返つた僕は、最後に君の事を思い出した。僕は多少の冷静さの表れとしてスリザリンにも加点し、前代未聞の同点優勝とした」

それは冷静さとは言わない。

その反論をするには、アルバス・ダンブルドアの言葉は弱々し過ぎた。

「君は僕の『些細な』計画が全て上手く行つたと考えておるのじやろう。嗚呼、上手く行つたとも。上手く行きすぎた。僕は選択と挑戦の権利を与え、そしてハリーは見事に受けて立ってみせた。ヴォルデ

モート卿に真つ向から立ち向かつてみせた。誇らしかった。立派な男だった。どうだと言わんばかりじゃった。じゃが……じゃが」

絞りだすような声は、酷く震えていた。

「たった十一の少年が正しくそう出来ると、果たして誰が想像出来るかね？ 彼はヴォルデモート卿といずれ対決するであろう。しかし、決して、断じて、今である必要は無い。その覚悟と勇気を持ち、自身の宿命を意識する事は、の。生まれながらにして英雄で有った者は存在せず、当然十一歳で違つたと言つて非難する者もまた居らぬのじゃ」

……嗚呼。

アルバス・ダンブルドアは、その言葉を告げる為に、僕を此処に呼んだのだ。

この老人の策謀の全容は知れない。そしてまた、僕に明かす事も永遠に無いだろう。

けれども、今学期に秘密の一端に、ある種ハリー・ポッターよりも深く触れた者に対して、その誤解を——全ての事象を掌握していたのだとされる事は我慢がならなかった。彼の策謀は、巨悪に直面させ、それが何たるかを実感させる所までで有り、恐らくはその恐慌を慰め、再起と発奮を促す事こそ本筋の計画だった。

そして同時に、その事実には思い至らざるを得なかった。

アルバス・ダンブルドアは、未婚であり、子供を——養子ですらも——持った事が無いのだと。すなわち、本当の意味で、彼はその愛を知っていない。

「——最後になつたが」

付け足された言葉は、先程までが夢であつたかのように平静を取り戻していた。

僕は漸く振り返つた。そこに居たのは、やはり間違ひなく「英雄」だった。

彼にとって真に大事な者達が、他ならぬ彼に対して望み続けているのである、老練で悠然とした老賢者の態度だった。素晴らしき、一点の曇りなき大魔法使いの姿だった。

「君に加点した事が思い付きで有った事は否定しない。けれども、嘘を述べたつもりは無い。君は正義の下に、それも同時にスリザリンらしく行動した。それは正しく評価されるべき事であり、儂は願わくは、君が今後もそれを持ち続けて欲しいと思っておる」

たどえ、儂等がゴドリツク・グリフィンドールとサラザール・スリザリンのようになろうとも。

「……失礼します」

何も残す事は無い。そう思っていたが。

この世の誰よりも愛に対して真摯であり、その力を信奉していながら——しかし誰よりも愛に愛されていない魔法使いに対して、僕は敬意の言葉を残した。

そうして、僕の一学年は終わりを告げた。

秘密の部屋

ステイブ・レッドフィールド

「ステファン。貴方はお父様を上回らなければならぬのですよ」

視線が合わず、夢見る表情のままに、母は何時もう言っていた。「貴方は賢くならなければならない。強くならなければならない。誰よりも学び、誰よりも深く在らなければならない。そうでなければ、貴方は生きていけないのです」

母は狂っていた。

それがどういう理由に基づくモノで有るか、僕は知らない。

魔法以外を殆ど知らなかった当時、僕はそれを魔法的な後遺症に基づくものと考えていたのだが、今思えば、非魔法族的な、科学的に説明出来る理由の可能性も否定出来なかった。もともと、僕にとっては前者の方で有って欲しいと信じていた。そちらの方が、当時においてはどう足掻いても母を助ける事が出来なかったという意味で、まだ救いようがあるからだ。

母は、日常生活は概ね普通のように——僕がもつと幼い時に限るが——送る事が出来た。

けれどもその当時ですら、それが表面上の事に過ぎないのは僕にも理解出来た。彼女の頭の中では常に霧が立ち込め、また影に覆われていた。

その割に行動に然したる支障が見られなかったのは、奇跡としか言いようがない。無論、悪い方の奇跡だ。当時は良かったと思っていたのだが、母が異常である事が殆どの人間に察知出来なかったという意味では、それは紛れも無い不幸に違いないのだから。

屋敷に積まれていた蔵書から見ても、父はどう考えても善良な魔法使いで無かった。

しかしその一方で、母と僕が暮らしていた一戸建ての家は、遺された愛に満ち溢れていた。

母は、魔法を扱えなかった。

だから、一般的な魔法使いのように、屋敷に魔法的な護りを施された所で維持出来ず、下手な機能を発揮してしまえば母が一步も外に出られる事無く餓死する——ガンブの元素変容の法則だ——事は明らかだった。故に、そのような物は、まるで最初からそんな物は無かつたかのように、母の周りから徹底的に排除されていた。

正直言つて蔵書を初めとする品々を最初に始末して欲しかったと思うが、それは今更言つても仕方がない事である。母は、その必要性を感じていたのは確かなのだから。

ともあれ、母の為に、色々な準備がされていた事は間違いない。

今では多少時代遅れになった、しかし当時では最新であったであろう電化製品群。定期的に来る在宅介護労働者。後見人として指定された弁護士。非魔法族の金銭——それも様々な国のもの——が詰め込まれた金庫。家のあちこちに貼られていたメモ。その他数多くの護りが、愛が、家には遺されていた。

けれども、母はそれらを上手く扱えなかった。

不運な事に、全く、では無く。

仮に母が全てを出来なかったのであれば、周りの者は異常に気付いた筈だ。

しかし、中途半端に出来たからこそ、非魔法族である彼等は、母にその庇護から外れたいと言われても、制止する術を持たなかったのだろう。寧ろ、母に対してそれが真に必要なで有るか、疑問を抱いてすら居たかもしれない。

そして何よりも不運であったのは、僕が魔法的才能を有していた事だ。

魔法を扱えない者が魔法族を育てる。それは不可能な話とは言えない。

両者の間に、然したる断絶は無い。魔法というツールを用いるか、科学というツールを用いるかの差でしかない。それは肌の色や民族という些細な違いよりも決定的であるという事は否定しないが、やはり相互理解が不可能という程でも無かった。

けれども、魔法の教育を受けた事も無い人間が、正しく魔法的な教

育を受けた魔法族の子供を育てようとするともなれば話が別であった。

母はそうしようとした。やはり、母はそうすべきであると考えていたのだから。

僕の成長を喜ぶと同時に、母は僕が学ぶ事を喜んだ。僕がそうすれば、母は弱々しい力で何時も抱き締めてくれていた。母は僕が大きくなる事を急かし、追い立て、望んでいた。

何より、母は僕がホグワーツに行く事を——僕の未来を誰よりも祈っていた。

「私はホグワーツがとてもユーモラスな場所だと聞いているわ。イルヴァーモニーと違い、非魔法族の常識はあの場所では通じないだろうって。だから、貴方は非魔法族的な事に触れない方が良いわ。全部、私がします」

その言葉を母が全う出来ていたとは言えない。

母は常に夢の中に微睡んでおり、僕が家から出ない事と魔法的学習を続ける事以外に、左程関心を持っていないとは言えなかった。時折正気に近いような理性を見せる場合を除いては、僕の「収容」はある程度自由の利くものだった。つまり、非魔法族の発明品を興味本位と試行錯誤によって弄る事くらいは、僕の物心が着いた頃から不可能では無かった。

そして、僕の成長に反比例するかのように母が衰弱してしまうようになってからは、悲しい事に、その自由は大きくなった。僕は二人が生きる為に、弱々しい母の反対に時に従いつつ、また時に反抗しながら、出来る限りの事をしなければならなかった。

非魔法族の常識を何とか見て学び取った。金銭という概念を覚え、食糧を買う物にも行った。母が使えなかった電化製品を発掘して動かした。また、殆どベッドから動けなくなった母の為に日常の諸々を行い、何とか生活を維持しようとした。

そして残念ながら出来てしまった。母に遺されていた愛は、それ程に篤かった。

今思えば、助けを求めるべきだった。

死に向かいつつあった母を抱えた子供は、当然に外の世界に救いを求めるべきだった。

聡明なるハーマイオニー・グレンジャーであれば、当然にそうしただろう。けれども、僕は愚かだった。母の言葉をその言葉通りに受け止め、非魔法族には——興味は有つても——触れる事はすべきでないと考えていた。

母は非魔法族に対して全く期待しておらず、ある意味でそれは正しかった。

けれども、母を生かし続けたいと思うのであれば、僕はやはり期待を躊躇うべきでは無かったのだ。優しい鎖に縛られる事を是とすべきでは無かったのだ。

僕が早く成長する必要が無くなったその日。

母は最期の言葉と共に、比類なき無償の愛を残した。

「ねえ、ステファン。覚えておいて。貴方のお母さんは、私達は、貴方を愛していたわ」

僕は過ちを犯しており、母は死を選択した。

僕が学んだ魔法に救いなどなかった。全ては終わってしまったのだった。

非魔法族の発明は良いものだ。

ロンドン郊外に建った、一人では余りに広過ぎる我が「城」の中。
セントラルヒーディング

暖房で適度に調整されたりビングで、電気トースターから飛び出て来たトースターを齧り、コーヒーマシンにより淹れられたブラックコーヒーを啜りつつ、チャンネルを適当に回して朝の番組を流し見しながら、何時ものように実感する。

僕にとって、それらはもう一人の育ての親であるとも言えた。

確かに校外で魔法が使えないという未成年の身分は面倒では有つたが、今の御時世、それは決して悲観すべき物でも無い。既に暗黒時代は遠い過去の物であり、敬愛する彼等に対して文句を付けられるも

のでも無かった。

ただ一番の難点は、それらによる文明の享受には金銭が掛かるという事だ。

杖の場合は魔法力と些細な腕の力を要するが、それ以上のコストは掛からない。一方で、非魔法族的な発明品は、動かせば動かす程に金が掛かる上に、尚且つ壊れて取り換えるのにもまた金が掛かる。幸運にも未だ全部を取り換えるような事態には陥っていないが、その時の事を考えれば扱いには丁寧さが要求されるし——特に、最初にそれらを僕が使った時の扱いは非情に「丁寧」だった——心情的にもそうしたくはなかった。

ホグワーツで最も気に入っている所は、その生活に一切の金銭が掛からないという事だ。

費やされる生活中の費用は、基本的に全て魔法省が負担してくれる。ホグワーツが義務教育などでは無く、家庭教育が許されている事を差し引いても、親にとってホグワーツに行かせないメリットというのは余り無かった。勿論、個人的支出をする場合は別であるし、杖や教科書には一応の金銭的負担が必要であるのだが、全体から見れば些細な事だ。

おまけに母の「後片付け」を行ったミネルバ・マクゴナガル教授は、厳格では有るが非常に生徒思いな魔女だった。

彼女の代わりに我等の寮監が来たのであれば、そこまでの手厚いサポートは望めなかっただろう。教授は孤児に対する数々の制度の説明のみならず、母が多くを辞める前に戻す事——非魔法界と繋がりを残したいという我儘さえも聞いてくれた。これは別に寮監の善性を疑っている訳では無く、何処まで生徒に入れ込めるかという適性の話である。

無論、彼女を遣わしたのが誰であるかなど明らかだ。

厳密に言えば、僕は非魔法族の世界に居ながらも既に魔法界を知る人間であり、必然的に「マグル」生まれの魔法使いと違ってホグワーツ魔法魔術学校についての入学説明など不要である。本来ならば、梟の案内だけで足りた筈だった。

もつとも、僕が魔力の制御を誤って引き起こした魔法事故によって魔法省の役人が一度来た事があり、その事実はホグワーツも——あの老人も重々承知していたという事だろう。もしかすれば、あの老人は、僕の知る以上の何かを知っていたのかも知れない。それに真実味が有ると考えられる程度には、彼は余りに化物染みた魔法使いだった。

そして、煙突飛行と姿現しを用いる事が出来る魔法使いによって、距離は敵では無い。

流石に大陸間移動になればアルバス・ダンブルドアだろうと闇の帝王だろうと限界が有るだろうが、グレートブリテンないしアイルランドの範囲ならある程度どうにでもなった。それらの地域の子供に手紙が送られ、尚且つホグワーツがこの島唯一の——非魔法族のように乱立するような真似をしない——学校であるのは、そういう理由もあるのだろう。

まあ、それを良い事に派遣されたミネルバ・マクゴナガル教授には同情の念を禁じ得ないが。それが明らかに想定していない面倒であれば余計にだ。

ともあれ、今日から二年目が始まる。

先の学年がどう終わったかという事を考えれば、多少憂鬱な事は否定出来ない。

ただ、一か月以上の空白期間が有ったのだ。それなりに落ち着いている事に期待したい。寮監も良い言い訳を考えてはいるだろう。

そして、一番の懸念事項であったハーマイオニー・グレンジャーの誕生日プレゼントは既に選び終わっている。彼女からそれを切り出してくれた事は有り難かった。もつとも、互いの誕生日情報を交換する以外を為すには、全ての準備を終えて帰りのホグワーツ特急に乗車するまでの時間、それも周りの目を盗んでの時間は余りに短かった。

夏休み中、彼女とは会っていない。

会おうと思えば、不可能では無かった。同じ非魔法族の世界に住み、多少距離が有るとは言っても非魔法族的距離感ですら近いと評せる程度でしかなかった。

けれども、やはり僕達の関係は、御互いの家を行き来するという程には親しくも無かった。

かつて一度だけ、彼女が僕の家に来たいと発言した事は有る。ただあの時は、母が死んだ後である事を差し引いても、出しやばりな少女を家に招き入れる気は無かった。今となつては馬鹿な事をしたものだと思ふし、あれ以来、彼女が同種の発言を一度もしていない。もつとも、少しだけホツとしているのも事実だ。客のもてなし方など僕は知らない。

柱時計に視線をやれば、針はそろそろ六時半を指そうとしていた。生憎この家は良い場所に立っており、「マグル」式交通手段を用いるとしても、どんなにゆつくり行こうがキングスクロスまで二時間も掛からない。出発時刻の午前十一時までにはまだまだ余裕とも言える。しかし、僕にとってはそろそろ余裕が無くなつてきたと言える時間なのだ。

去年はハーマイオニー・グレンジャーが共に居た。流石に共にキングスクロスまで行くという事はしなかったが、それでもホグワーツ特急では、コンパートメントの中では一緒だった。正確には、彼女が余計な御節介を發揮して、特急内を探し回るまではだが。

けれども、入学前と違つて既に寮が別れている以上、やはり去年と同じく共に居ない方が良いというのは間違いないだろう。何より、今年の彼女は、友人二人と共にコンパートメントでの時間を過ごす事を望むに違いない。彼女は既に、まだ見ぬホグワーツで本当に友達が出るか、内心不安がついていた女の子では無いのだから。

そして、その一方で僕の現状は言うまでも無い。同学年で一番関係性が近いのがドラコ・マルフォイであり、それから遥かに離れてセオドル・ノットと堅苦しい議論を交わす位で、ホグワーツに到着するまでの時間を楽しく過ごす相手など居なかった。

別に孤独である事は構わない。

ただ、良く解らない人間と共に時間を過ごすのは可能な限り避けたい所だった。

まして、一時間程度なら兎も角、ホグワーツまでは午前十一時から

日が暮れるまで掛かるのだ。流石に他が満席の場合に席を共にする事にまで文句は言わないが、和気藹々としている中に御邪魔させてくれと申し出るような事態は絶対に御免である。

となれば席を、誰よりも早く占有する以外にない。

学期末は幸運にも、快適な特急の旅を送る事が出来たが——幾ら多少の疑問を有していても、流石に僕が陰気なスリザリンである事を忘れさせる程ではなかったらしい——その幸運を何度も期待する訳にも行かない。

そういう訳で、僕は食べ終わった後の片付けを済ませ、家の戸締りを確認した上で、予定通り午前七時には準備を終えた。そうして、僕は去年と同じように、玄関先の机の上に置かれた写真立てに対し出発の挨拶を告げた上で家を出た。

その写真には、一人の人間が写っていた。

雲一つない青空を背景として風に金髪をたなびかせて、蒼みがかつた灰色の瞳を細め、カメラの前の誰かへ、穏やかに笑みを浮かべている女性。

確かに僕は、概ねの点で非魔法族の発明は良いものだと思っている。

しかし、敢えて不満点を述べるとすれば、それは彼等の写真が全く動いてくれない事だった。

英雄の未来の仲間達

あの時、僕の名前を学校中が知った筈だった。

実際の所、あの一年間の殆どの期間、大多数の人間は僕を認識しては居なかつただろう。

だが、あの加点劇は、その状況を完全に一変させた。もつとも、グリフィンドールの英雄達が寮を問わず話を求められたのに対し、僕の方はスリザリンのみ——それもスネイプ寮監により堅く口止めされているという恐ろしい事実を口にした後は、誰も近付いて来る事は無かつたのだが。

しかし、僕の事を知っているという点ではやはり変わらない。

寧ろ、逆に不気味な存在となつたのかも知れない。賢者の石を護つたという彼等の行いは解りやすかつたが、その裏で糸を引いていたスリザリンの方は、ハリー・ポッターが果たした役割以上に意味不明であつただろう。元々の蛇寮の悪評も加えれば余計にだ。

故に今日は家をあれ程早く出たのであり、その甲斐有つて、僕は可能な限り端の方のコンパートメントを一人で占有する事に成功していた。今だ席取りにあぶれた人間が何とか座れる場所を探しに来るといふ事は無く、幸運であればこのまま一人で居られるかもしれない。かつた。

けれども僕が思い出すべきは、スリザリンの悪評を真に実感しているのはホグワーツ経験者のみであり、尚且つ先の加点劇について知っているのもまた、前年度のホグワーツ在學生だけであるといふ事だつた。

プラットフォームから殆ど生徒が一掃された頃、その珍妙な闖入者は現れた。

「えーと、ここ開いてる、のかな？」

何処となく怖気付いている声に顔を上げる。そして、驚愕した。

その女の子は、明らかにぶっ飛んでいた。

グレートブリテンの魔法族が非魔法族基準で珍妙である事は慣れていたが、そうにしたってどうかしていた。彼女は、黄色い管と青い

羽と赤い蕪がくつついた言語を絶するような髪飾りを頭に寄せた上で、絵ですら見たことのない不思議な生き物がぶら下がったイヤリングを片耳だけにぶら下げていた。一言で言えば、紛う事無き狂人だった。

「……取り敢えず、その頭の髪飾りは取った方が良い」

何とか言葉を絞り出した僕に、彼女は首を傾げた。

「そう、かな？　とっても良いと思うんだけど。これは模型で、パパの試作品なんだ」

「……君の父親のセンスは否定しないが、それは恐らく校則違反だ」

実際そうかどうかは知らないが、幾らホグワーツの教授陣とてそれを是とする事は無いだろうと思う。そのくらいは、教授陣の良心を信じている。

そして、寡聞にもこれ程奇妙な同級生が居ると聞いた事は無いし、上級生であるようにも見えなかった。僕を見ても何も反応が無い所から見ても、新入生なのだろう。

その新入生は忠告を受け取る気は一応有るらしく、髪飾りを大事そうにゆつくりと外した後、荷物を引っ張ってきて僕の眼の前にポストと座っていた。

「……まあ、何も言うまい。」

正直言つて、ホグワーツ特急が目的地に到着するまでに、彼女が友人を見つけられるとも思えなかったし、そんな新入生に違う席を探せと言える程、僕は非情にもなれなかった。

「あたし、ルーナ・ラブグッド。今年から新入生なんだ」

「……ステファン・レッドフィールドだ。君と違って新入生ではない」
正しい名前を名乗ろうと思ったが、そうする気になれなかった。

そのような些細な違いなど、彼女が気に留める筈も無い事は予想出来たからだ。

現に彼女が関心を示したのは、僕が新入生でないという点であった。身長的にどう考えても同じ歳には見えなかったと思うが、一縷の望みをかけていたのかもしれない。微妙にガツカリした様子を見せて、けれどもやはり立ち去ろうとしなかった。

彼女はゴソゴソと荷物を漁った後、一冊の本を取り出して僕の前に突き出した。

「……何だ、これは」

その雑誌は、何と言うか表現に困る感じに前衛的過ぎて、そしてド派手だった。色合いがどうかとかなという話ではない。その雑誌を構成している全てがぶっ飛んでいた。

『ザ・クイブラー』。それが雑誌の名前らしい。

重要でない些細な事について論陣を張るとは、謙遜しているのか事実を述べているのか良く解らなかった。

「読んだ事が有る？　これ、あたしのパパが編集してるの。しわしわ角スノーカックの記事とか、とつても人気で話題なんだよ」

「……当然読んだ事が無いが。その、しわ何とかとやらも聞いた事が無い」

「しわしわ角のスノーカック。スウェーデンに棲んでるの」

彼女は自信満々に言うが、僕は顔を歪めざるを得なかった。

一応『幻の動物とその生息地』は去年の指定教科書であり、尚且つ闇の魔術に対する防衛術の中で使用されたのだから、最低限の知識は有している。

まあ、当該授業は飼育が目的では無く対処が目的なので、『闇の力―護身術入門』と共に狼人間などの一部しか参照しなかった――そして授業の中では後者の方が当然活躍した。但し最終的に狼男には噛まれるなどという教訓で終わっていた――ものの、目次に如何なる動物が上がつていたか程度は未だに記憶に残っている所だった。

しかし、そのような奇妙な生物は全く以って見た記憶が無かった。「……わざわざ“しわしわ角”と付けるからにはそれが特徴的なのだろうが、その事が種の生存や繁殖にどう資するのか解りかねる。そもそも “snorkack” という響きは僕には馬鹿々々しさしか感じないが、その名前は一体何に由来しているんだ？」

第一スウェーデンというのもぎっくりし過ぎだ。

山に棲むのか、湖に棲むのか、雪原に棲むのか、さっぱり伝わって来ない。

けれども、僕の当然の疑問を聞いた彼女は、微妙に夢から覚めたような瞳をして、僕の方を大きな瞳で見上げた。

「……どうかしたか？」

「ううん。だって、そんな事を聞いてくれた人は初めてなんだもの」別に興味を持ってそう聞いた訳では無かったが、彼女はそう取っただらしい。一度瞬きをした後、嬉々としてその謎生物について語り出した。

そして丁度その瞬間、コンパートメントの前を偶々一人の人間が通りかかった。

それはハーマイオニー・グレンジャーだった。

彼女はコンパートメント内に僕を見つけて微笑んだが、何かに気付いたような素振りを見せた後で、直ぐに身を翻して戻って行った。

……まあ、宣無き事である。彼女が最も優先し、また今捜している友人のハリー・ポッターとロナルド・ウィーズリーはここには居らず、目的が達せられなかった以上当然だった。多少気が沈むのは否定出来なかったが。

そして当然ながら、話に熱が入り始めたルーナ・ラブグッドは気付かなかった。

とはいえ、彼女のような通行人が通る事は——ひいては僕と奇妙な少女が同席している光景の目撃者は——少なかった。

僕が誰であるかに気付いた人間が例外なくギョツとした顔をするのは辟易したが、そのような人間は僕が思ったよりは少なかった。そもそも通行人自体が少ない事から見ると、殆どが既に空席を見つけたか、友達と合流を終えたのだろう。そして、僕の顔を見ても何ら気付かない者も少なからず居た。賢者の石の騒動はその程度でしかなく、自意識過剰だったのかもしれない。

何より幸運な事に、スリザリンは一人も通らなかつた。彼等は社交が御好きなので、その点は驚くには値しないのだが。

そして、明らかに席からあぶれたような人間——つまり、何とか空席を探そうとしている人間が通りかかる気配もまた無かつた。端の方は席が埋まっていると解りきっているからかもしれない。

まあそんな特急内での学生達の行動観察はさておき、ルーナ・ラブグッドの話は荒唐無稽で、空想に満ちていた。

一応話を先に振った以上、最初は真面目に聞いていた。が、聞けば聞く度に、彼女が話すその生き物は明らかに虚偽のように感じられたのだ。

専門家では無い以上、僕に実在を否定する材料も無い。彼女が探し続ければ、本当にその生き物が見つかるかもしれない。しかし、話の途中でも僕が迷わず本を取り出す事を選択する位には、彼女の話を通して受け止めるのは困難だった。

勿論、流石の彼女もそんな僕の態度に多少機嫌を害したが、「専門書」——つまり今年度の教科書として指定された小説の内の一冊だが——を見せて、現魔法生物と比較したいと言えば直ぐに納得した。適当に頭に浮かんできた、記憶する価値も無い疑問を投げかけてやれば余計に上機嫌になった。どうやら余程周りに聞いてくれる人が居なかつたらしい。

そして、小説としては出来が良い教科書モドキを多少読み進め、それでも彼女の独演会の熱が未だに治まる気配が見られず内心辟易し始めた頃、とうとう明らかに席にあぶれたらしい生徒が通りかかってしまった。

荷物が通路にぶつかる鈍い音。それによって、僕は視線を上げる。そこに居たのは、外がそれなりに寒いにも拘わらず汗を掻いた丸顔の少年だった。僕が誰かと——それもスリザリン以外の人間と居る事に驚いてしまったのは疑いなかった。

ただ、驚愕するのは別に構わないのだが、出来れば静かにそうして欲しかった。その音によって、今まで話に夢中だった彼女は彼に気付いた上、余計な親切心を発揮したからだ。

「席、空いてるよー」

多少なりとも僕と会話が成立していたのが嬉しかったのだろう。

最初の怖気付いた様子など忘れ去ったように弾んだ声は、逃げずに固まったままの人間へと声を掛けた。

けれども、声を掛けた人間が悪い。

その人間はグリフィンドール生、ネビル・ロングボトムだった。

「……………」

正直、何と言えば良いのか解らない。

スリザリンが嫌われている事くらいは彼女も知っているかも知れないが、彼がドラコ・マルフォイにしよつちゆう苛められており、尚且つ僕がその取り巻き——実態は微妙に違うが、外部から見ればそうだろう——である事を彼女は知らなかった。

そして、自分から申し出るのも何となく嫌だった。

だから彼が断わる事を望んでいたし、当然そうなると思っていたのだが、意外な事に彼は身を縮めながらコンパートメントの中へと立ち入ってきた。

明らかな新生が陰気なスリザリンと二人で居るのは良くないと、余計な騎士道精神を發揮したのかもしれない。決意を秘めるように息を吸った後、僕へと声を掛けてきた。緊張で声が震えていなければ完璧だった。

「…………ええと、レッドフィールド。座って良いかな」

「…………好きにすれば良い」

少し迷いはしたが軽く頷いて、顎でルーナ・ラブグッドの側の席を示す。

男女の関係から考えれば僕の側にネビル・ロングボトムが座るのが妥当だったが、彼からすれば僕の隣に座りたくないに違いない。その読みは正しかったらしく、ネビル・ロングボトムは荷物を棚の上に乗せた後、彼女の隣の席に座った。

正直余り歓迎しかねる事態だったが……まあこれも已むを得ないだろう。

グリフィンドールとスリザリンが共に居るのは絶対的に不適切だったが、別にこの結果としてネビル・ロングボトムが獅子寮で仲間外れにされようとうだって良かったし、スリザリンである僕とて一年目ではなく二年目だ。去年ならば断固として拒否しただろうが、あの期末の状況を見る限り、マルフォイは僕を切れまい。

何より、ロングボトムは疑いなく純血——聖二十八族だった。

闇の帝王。彼が未だ健在であると知った以上、情報を集めるのは当然の事だった。

『日刊予言者新聞』という愚かしい塵紙に金を払うのは癪だったが、一応の情報雑誌である事に変わりない。一番良いのは、過去の、つまり十一年前の闇の帝王失墜当時の記事だったが、それを求められるのは、ホグワーツの図書館しか僕には思い当たらなかつた。あそこは古い記事を全て取つてあると聞いた事が有るからだ。そして当然、家に居る間はどうしようもない。出来るのはこれからである。

ただ、結論としてやはり塵紙は塵紙であり、ダイアゴン横丁で購入した書籍の方が遥かに役に立ったものだ。露骨に闇の帝王について語る物は無いが、しかし“生き残った男の子”について語る物は腐る程山積みされている。

そして、それらに当たれば必然的に、素晴らしき血筋のロングボトム家について知る事になるのも当然だった。加えて、何故彼がスリザリンドで無いかも。

同時にネビル・ロングボトムという存在について興味が惹かれたのもまた事実であつた。

つまり、果たしてドラコ・マルフォイ達疑いなき純血は、ネビル・ロングボトムのような“出来損ない”について、一体どのように考えているのかを。

彼等は魔法族のみの血を引いている事を誇りにしている。

けれども、その一方で、彼等は——スリザリン全体は、ネビル・ロングボトムを明らかに詰まらない者として馬鹿にしている。

彼等が純血の内にも“外れ”が生まれる事を認めるのか、はたまた彼等の拠り所である『純血一族一覽』を否定するのか。まあ、大本命はネビル・ロングボトムがロングボトム家の子供でないと主張する辺りだろうが、いずれにせよ興味深い物のように思えた。

そしてその辺りを超けば、ドラコ・マルフォイを誤魔化す事などどうにでもなるだろうと思えた。彼は親に深く愛され、“純血”という殻に護られている。自分で自分自身の事を疑つた事が無い人間を煙に巻くのは、非常に容易い事だと言える。

もつとも、冷やかな観察の目で見ている僕と、ネビル・ロングボトムは違うようだった。

ルーナ・ラブグッドと自己紹介を交わし合い、彼が荷物を置いて座席に着いた後、僕はてっきり彼女と会話を続けるものだと思っていた。僕の認識では、彼は不運な新入生を護る為に、彼はこんな状況にわざわざ突っ込まなければならなかった筈だからだ。

そして、それは別に僕にとって何ら問題は無い。如何に真実を語っていたように僕には狂気クレイムとしか聞こえない相手の矛先が逸れるのなら、それは歓迎すべき事である。

しかし、彼はあろう事か、僕と話がしたいようだった。

「えっと、レッドフィールド。……去年は言い損ねちゃったけど」

先程までの新入生と同レベルの力強さしかない声に、僕は本から視線を上げる。

彼は明らかにビビッていたが、しかし視線を逸らさなかった。

「トレバーを探してくれてありがとう。言ってみれば君の御蔭で見つかったようなものだけど、僕は喜んでた内に、君はさっさと行っちゃおう。そのままズルズルと言う機会が無くて……今更だと思うかもしれないけど」

そう言われて、何の事か解らなかった。全くもって思い当たる事は何も無い。

だが、僕の困惑が伝わったのだろう、彼は慌ててヒキガエルを取り出し、そこで漸く去年に在った出来事を思い出した。一年という時間は、やはり遠いものであった。

「……ああ、あれか。ハーマイオニー・グレンジャーが勇ましく探したペットか」

もつとも、ネビル・ロングボトムの言葉は正確では無い。

「僕は君の言葉を少しばかり代弁して、そこら辺の善良そうな上級生を捕まえて助力を求めたに過ぎない。言ってみれば、他ならぬ君が自ら探して見つけただけだ」

そしてアレは、ペットが見つからない事に泣き出した男の子と、それを慰める女の子を連れていたというのが一番大きい。明らかな下

級生——そして話せば新入生だと解る——がそんな状況であるのにそれを無視出来る者は、スリザリンを除いて早々居ない。

発端はただ一人の上級生だったのだが、人伝に聞いた首席やら監督生やらがゾロゾロと名乗りを上げて大捜索が行われた結果、彼のペットである蛙は目出度く見つかったのだった。最後には拍手喝采だったのはある意味でノリが良く、そしてやはり馬鹿々々しかった。

但し、同じ配役でも二人では見つからなかったかもしれない。ハーマイオニー・グレンジャーは何でも自分でやりたがり、他人に物を頼む事を知らな過ぎた。そして何より、彼女は同級生に見える相手には声を掛けられても、明らかかな上級生——魔法を使えるような人間——に声を掛けるには、少々怖がりだった。

ネビル・ロングボトムの方は……まあ言うまでもない。

しかし、いずれにしても僕の助力は小さいに違いない。

だが、ネビル・ロングボトムは善良だった。緩やかに彼は首を振る。「それでも、君は確かにトレバーを探そうとしてくれただろう？　そして、それにはやっぱり感謝すべきだよ。……と言つても、ここまで遅れちゃった僕が言えたものじゃないけど」

「……まあ、それは別段構わないが。会話する機会が一切無かったのは重々承知だ。合同授業で話掛けるなども論外だから」

特に魔法薬学でそのような行為に及べば、現実で悪夢を見る事は間違いない。

「だが、スリザリン相手にグリフィンドルがそうする必要が有ると思えないが。何も覚えていない振りをすれば良いだろう。現に僕は覚えていなかった」

「けど、僕は覚えて居たし、心残りだったんだ。そして君はスリザリンだけど、マルフォイと違って僕を揶揄ったりしないし、僕に魔法を掛けたりもしないもの。だから、僕は君が言う程悪い奴じゃないと思つている」

その言葉は、酷く真摯で、心を籠めた物だった。

そして、先の学年で聞いた誰かの言葉と、余りにも似すぎていた。グリフィンドルとスリザリン。

戦争遺族と戦争加害者。その関係は、ここにも有る筈だった。

ネビル・ロングボトム。ハリー・ポッターと同日に生まれた少年は、やはり同日に闇の帝王の陣営から襲撃を受けて、やはり両親を事実上喪った。そんな余りにも数奇な運命を辿り過ぎている少年は、けれども、同様に僕へと一欠片の好意を示そうとする。ハリー・ポッターとは確かに違う理由でありながら、それでも全く同じように。

先程までの僕の興味は、言わばロングボトム家の子息に対する物でしかなかった。

けれども今僕に浮かび上がってきた興味は、間違いなくネビル・ロングボトム個人に対する物だった。

しかし、それは——その興味が導く質問は、決して為すべき事では無いと理性は判断していた。疑問を口に出すだけならば幼子にでも出来る。自制すべき、問うべきではない質問というのは世の中に存在する。何より、ここには部外者が、新入生の女の子が居る。彼女の事を思うならば、そして何よりネビル・ロングボトムの事を思うならば、こんな過激で、残酷な疑問を投げかけるべきでは無かった。

けれども、僕はその悪意の誘惑に耐え切れなかった。

開いていた本を閉じ、彼の方を真っ直ぐ見つめ、僕は問い掛けた。

「……ネビル・ロングボトム」

「? 何だい、改まったようにして?」

「両親は——僕の母は死んだ」

静かに告げられた言葉に一瞬呆けた後、その意味を理解した彼は酷く慄いた顔をした。

唐突な話題だ。突拍子もない展開だ。それは問わずとも己が解りきっている。

彼は何故僕がこんな話をするのか理解出来ていないに違いない。彼と僕は親しい訳では無く、親しい間柄で有っても、何の契機も無しに話をしようとしないだろう。本来ならば明らかに繊細さを要する、踏み込んだ質問だった。

しかし、僕にとってこれは確かな、そして逃す事の出来ない契機だった。

彼と話す機会など、恐らく二度と無い。そしてまた、御互いに破壊されるような関係など、決して形成されていないし、今後もそうされる事は有り得ない。永遠に訪れないであろう適切な機会を待つ意味など無いのだ。

だからこそ、今ここで聞こうが何も変わらなかった。たとえばそれが非常識で、非人間的であろうとも、それを問わねばならなかった。

「僕は未だに納得しきれていない。僕の価値観においては、あれは不合理だった。そこまでする必要は無い筈だった。なのに、母は死んだ。己でそれを選択した。それが……僕には理解出来ない」

己の生存。それは至上命題の筈である。

生きていなければ、泣く事も笑う事も出来はしない。その筈だ。

「君の事は知っている。悲劇だったと。闇による尊い犠牲だったと。しかし、それ以上でも無かった。彼等は数字でしかなかった。ハリー・ポッターと違い、それらは儀礼的に讃えられるだけで、英雄視されるべきものでは無かった。その行いの価値など、何ら変わらない筈なのに」

ハリー・ポッターの両親の犠牲は、直接的では無くとも、闇の帝王の死をもたらすという唯一無二のものだった。

一方で、ネビル・ロングボトム両親の犠牲は、子供を護って親が死ぬという戦争中では有り触れた一事件に過ぎなかった。寧ろ憐れまれる始末だ。もう少し襲撃が遅れたのであれば、〃生き残った男の子〃による闇の帝王の失墜の御蔭で無事で居られたかもしれない、と。

同じでありながら、そこには天と地程の差異が存在する。

けれども、当事者にとっては違う筈だった。

僕の母の死が、世界に何らの影響を齎さずとも、唯一無二であったのと同じように。

「だから、君に聞きたい。他ならぬ愛によって護られた君に。己の命を捨ててまで、己の輝かしき未来を投げ打ってまで、人は他人を護るべき価値が有るのかを。護られた人間は、その事を心の底から良かったのだと感ぜられるかを」

ネビル・ロングボトムは答えなかった。

彼は、その顔を嫌悪と不愉快さ、そして怒りに歪めた。視線を落ち着かなく動かし、最終的にコンパートメントの外へチラリと向けた。彼の右手は堅く強く握られ、彼の爆発の時間が近い事を、僕は見て取った。

けれども、僕は彼を止める権利を持たなかった。

当然の権利行使を、僕なんかが止められる筈もなかった。

僕は目を瞑った。当然の結果だった。そして、報いを受ける覚悟は出来ていた。罵倒されようが殴り掛かられようが構わない。それは我を忘れた愚か者が当然に受けるべき代償だった。

故に、その空気を破ったのは、一人の新入生だった。

グリフィンドールでも、スリザリンでも無い人間だった。

「あたしのママも死んだんだ。二年前に」

思わず呆気にとられて、彼女の方を見た。ネビル・ロングボトムも同じだった。

「すつごい魔女だったんだ。でも、実験の最中に死んじやった。呪文の失敗でね。ひどい事故だった」

遠くを見る彼女の表情は、酷く透明だった。

まだ受け容れ切れていない事が、ありありと解る表情だった。

新入生だった。年下の筈だった。けれども、彼女が大きく見えた。

「寂しいよ。悲しいよ。そう思わない筈が無いもん。まあ、あたしはあんたみたいに護られた訳じゃないけど、それでもママはあたしを愛してくれた。ちよつと厳しかったけどね。でも、ママは見えないところに隠れて、あたしを見守ってくれてるもん。だから、あたしは今もそれなりに幸せだよ。良いパパも居るしね」

何も言えなかった。

どういう理屈で彼女がそれを語ろうと思ったかは解らない。

そもそも、彼女の言葉は、僕の疑問に何ら答えるものでは無い。彼女は彼女なりの死の受け止め方で、彼女の心中だけを述べた独白だった。

だがそれでも、その言葉は一つの真理を表しているようで、やはり

言葉が何も出て来はしなかった。

だから、彼女の想いに応えたのはネビル・ロングボトムだった。

彼は、少し微笑みながら穏やかに言った。その瞳には眩しくなるぐらいに、強い光が宿っていた。

「僕も酷く悲しく、惨めになる事が有る。何故、僕はこうなんだろうって」

「……………」

「別に、ばあちゃんに思う所が有る訳じゃないけど、ホグワーツ特急で自分の子供を見送る親を見る度に、どうしてそうならなかったんだろうって考える事が有る。馬鹿な話だよ、僕の両親は、僕がそうする為に——ホグワーツに行く為にあなつたのに」

彼の両親の状態を、僕は紙面の上でしか知らない。

磔の呪文。肉体的な損傷が残らない禁呪。僕はそれを余りに不経済だと考えていた。

何故なら、人体の欠損というのは、それが自分の物であれ他人の物であれ、見る者に精神的衝撃を与えるのには効率的な手段と言えるからだ。にも拘わらず、それを発明した魔法族はその結果を無駄だとして切り捨てた。故に、禁呪というには、他の二つ——服従や殺人の魔法と並べるには余りに型落ちでは無いかと、そんな事すら考えていた。

けれども、やはりそれは許されざる呪文として並べられるだけの理由が有るのだろう。

彼は、まさしく地獄を見た筈なのだ。それが齎す、最悪の結果を。

「僕はルーナみたいに強くなれる気がしない。父さんと、母さんは、未だに僕を見てくれないもの。父さん達が僕をしつかり見てくれる日を何度も夢見て、心の何処かでそれが絶対に叶わない事だと信じちゃっている。でも、それでもやっぱり僕は、父さんや母さんの行いに心の底から感謝しているんだと思うし、本当に好きなんだと思う」

「……………」

「君はどうなんだい？」

「僕は——未だに答えが出ない。母を愛していたのは、間違いないが。

「誇れる気はしない」

卑怯な答えだった。

だが、ネビル・ロングボトムは軽く頷いた。

そして、ルーナ・ラブグッドは嬉しそうにっこりと微笑んだ。

僕が、彼が、そして彼女が、同類などでは無い事は明確だった。

いずれも肉親の死に対して異なる向き合い方をしており、その事について理解はすれども共感までは出来ない事は歴然としていた。だが、それでも、やはり御互いを尊重するべきであるという点においては、残念ながら一致してしまっていた。

別に伊達や酔狂で、彼等にこんな事を聞いた訳では無かった。

先の学年に起こった事。それは未だに忘れられない。

魔法戦争は終わってなどいない。あの教授が第一次と評したように、闇の帝王は未だ生存しており、復活を諦めていないのだ。百年後に復活するのならば、或いは僕が Hogwartz を卒業した後であれば、別に好きにしてくれと言いたいくらいだった。けれども覚悟は決めておくべきであり、そしてそれは早いに越した事は無い。その点において、僕はある老人とやはり気が合わなかった。

つまり、己の立ち位置を意識し、また自覚すべきだった。

僕はスリザリンであり、死喰い人の息子であるドラコ・マルフォイと一応近い関係に有る。

仮に魔法戦争が再開された場合、スリザリンは当然のように支配下に置かれ、僕は立場の選択を迫られる事だろう。いや、迫られる選択など無い筈だ。肉親のしがらみが無く、魔法界への執着すらなく、そしてスリザリンに組分けされた僕は、どうするのが一番賢いのかを知っている。理解している筈なのだ。

だが——未だ答えが出ていないように思えて仕方がない。

母は僕が Hogwartz に行く事を望み、その将来を祈り、僕を愛していたのだから。

しかし、二人はそれ以上余計な事を問わなかった。

ネビル・ロングボトムは、僕の愚かさを断罪しない強さを有していたし。

ルーナ・ラブグッドは、僕の迷いを追求しない賢明さを持っていた。その上で、彼女は言った。

「満足した？」

僕は頷きはしなかったが、彼女はそれで十分だったらしい。

「じゃあ、ステファンが長々と話したから、今度は私の番ね」

そう言った後、その手に持った本を——『ザ・クイブラー』をまるで聖典のように掲げた。

その余りにもけばけばしくて馬鹿々々しい表紙にネビル・ロングボトムが目を丸くする。そう言えば、彼は未だそれを見ていなかった。当然それに圧倒される経験もしていなかった。

何時の間にか、先程までの暗く重苦しい雰囲気は吹き飛んでいた。

そして、ルーナ・ラブグッドは今まで見て来た通りの狂気ルイニーに戻っていた。もつとも、少しばかり張り上げるような声を考えるに、今の彼女は彼女なりに何時も通りではないのかもしれないなかった。

「ネビルはさつき居なかったから最初から話してあげるね。ステファンも真剣に聞いてくれてたから、ネビルもきつと興味を持ってくれると思う。しわしわ角スノーカックはね、スウエーデンに棲んでるんだ」

「……えっと、何？」

「しわしわ角スノーカックだよ、ネビル」

困惑と共に助けを求める視線を無視して、僕は再度本を開いて視線を落とした。

流石にその不思議生物については聞き飽きたというのも有ったし、何より——考えを整理する時間が欲しかった。僕の余りに身勝手な問いに対して、それでも真摯に対峙してくれた彼女達について。

僕達を待っていたかのように汽笛が鳴った。出発の合図だった。

ホグワーツへの道中、彼女達の会話は多少ちくはぐでありながらも、何とか成立していた。ネビル・ロングボトムがその珍妙な生物群に興味が無いのは解りきっていたが、彼はそれを指摘するには推しが弱く、またルーナ・ラブグッドはそれに気付かない位に自分の世界に入り込んでいた。

そして僕は、本を読む振りをしたまま、思考に沈み、しかし確かに彼等の会話へと耳を傾けていた。

恐らく、これは今年だけだろう。

ルーナ・ラブグッドは、ホグワーツで友達を作る前の新入生で、知り合いも居なかったからこそ、一人で座っている——つまり、仲間内で楽しげに喋っているような声を掛けづらい者達ではない——人間に意を決して声を掛けようとしたのだろう。

ネビル・ロングボトムも同じ。似合わない騎士道精神を發揮しただけで、別に僕と友好的になろうとした訳では無い。今年のように陰気なスリザリンと座る羽目になった事で懲りて、来年は何とか他のコンパートメントを見つけようとするだろう。

だから、この賑やかさは今年限りのものになる。それは確信している。

ただ。

一人で居るのと同じ位には、この時間は不愉快では無かった。

純血主義

今年は何も起こらない。

最初は、そう思っていたものだ。

空飛ぶフォード・アングリアは少しばかり派手では有った。

違法行為にも軽重が有るが、国際機密保持法を破壊しかねない類は基本的に重罪である。アズカバン送りまで行かずとも、杖を折られる事態、つまり一発退学になつても可笑しくなかつた。だが、その「偉業」を成し遂げたのは「生き残つた男の子」である。仮にアルバス・ダンプルドアの介入が無かつたとしても、彼の処罰がどうなるかなど明白だ。

そして個人的な意見を述べるのならば、過去に飛べない時点でデロリアンよりも old-fashioned 旧式である。次の機会が有れば逆転時計と組み合わせて欲しいものだった。

一方で、新しい闇の魔術に対する防衛術教師もまた派手では有つた。

愚かしい程に、という一語を付け加えるべきだろうが、それは良い。ギリギリの所で踏み止まつていた去年と違い、今年は完全に講義の秩序が崩壊しているのは明らかだ。

しかし、彼はそれ以上の物でも無かつた。

我等がスネイプ寮監に尋ねるに『アレは小物だ。そしてクイレルの時とも違う』との有り難い保証が返ってきた。それと同時に、校長閣下が不愉快な策謀を張り巡らせているとも。

ただ寮監と違い、僕にとってそれは別にどうでも良い事だった。僕と寮監のスタンスは、確かに似ていても、決して一致するものではない。あの老人が学生の七分の一を台無しにするだけの意義が有ると判断したというのならば、それは必要な事では有るのだろう。

一応他の教授陣——三寮監にも確認したが、濁した言葉ですら伝わってくる程度には大した人物で無いという確信が抱けただけだ。スネイプ寮監と学生時代が被っているという興味深い事実も聞けたが、流石にわざわざ地雷を踏みに行く趣味も無い。いずれにせよ、闇

の帝王の手駒として彼がクイリナス・クイレル教授よりも不適格なのは歴然としているように見えた。

故に、僕にとつての一番の関心事は、ハーマイオニー・グレンジャーの対応が何故か冷たいように思えるという事で有ったし、またハロウィンパーティーに彼女が再度居ないという事で有った——去年の同日に起こった事を考えれば当然だった——のだが、まさかそれを完全に頭から吹っ飛ばす事態になるとは思わなかった。

秘密の部屋は開かれたり。

継承者の敵よ、気をつけよ。

そんな不愉快な文言が、壁に描かれている。

秘密の部屋。ホグワーツに秘された、サラザール・スリザリンの遺産。

“秘密”であるのに知られているという、余計な揚げ足取りは不要だった。

サラザール・スリザリンはホグワーツの創始者であり、実在の人物である。そして、子孫の存在も当然に確認されている。四寮の絆の崩壊後においても、グリフィンドール、レイブンクロー、そしてハッフルパフは、当然のようにスリザリンの子孫をホグワーツ——但し、スリザリン寮ではあるが——に受け容れ続けた。

であれば、そのような遺産が遺されていた所で全くもって不自然では無いし、それが語り継がれる事もまた何ら疑問を抱くものではない。

もつとも、伝説という物が全て真実を語る物では無いというのも僕は当然に理解していた。

つまり、時には全くの嘘である事も、或いは真実の一側面を語れども誇張されたに過ぎないという場合も多々存在する。特に秘密の部屋の性質を考えれば猶更疑うべきだった。

サラザール・スリザリンはゴドリック・グリフィンドールに敗北した。

決闘裁判。そのような風習がノルマン¹・コンクエスト⁶以前⁶のこの島国において通用したのか、そもそも魔法界において当時の時点^年でそ

れが存在したのかは不明である。当然ながら、彼等が雌雄を決するその意図をもつて決闘を行ったか——もしくは本当に決闘（或いは寮間での内戦）を行ったのか——というのも歴史の闇の中である。

しかし、重要なのは、後世の人間がどう考えるかという事だ。

決闘により正義を示すというのは、古代ゲルマンからの由緒正しい権利救済の手段だった。

理性と合理を備えた者によるその手段の明確な禁止は遙かに時代を下る必要があり、グレートブリテンでは近代に入つてすら何度も幾度も却下された歴史が、合衆国においてはほんの数年前に、決闘での裁判の申し出が裁判所に却下されるような事態も起きている。

それを馬鹿々々しいと取るのは自由だが、どんなに調査を尽くしても不明瞭な罪は神に委ねるしかないという一種の諦念と、全知全能が正しき者を見捨てる筈も無いという篤き信仰が根底に存在していた事を忘れてはならない。

付け加えるならば、少なくとも現在においては、魔法界でも決闘という制度が今尚存在している事に疑いはなく、当然に勝つた方が正義であるという思考もまた当然に有している。

故に、ゴドリック・グリフィンドールの勝利という歴史的事実は、スリザリンにとつては長らく屈辱的で有つた事に疑いはない。つまり、サラザール・スリザリンが他の三創始者の目を盗んで“マグル”殺人兵器を残せしめたという、そんな虚偽の神話を創作しても可笑しくないと考える位には。

そして僕は、その後者の考えの方が——つまり、秘密の部屋など存在しないという考えの方が、至極妥当のように思われたのだ。

アルバス・ダンブルドア。あれ程化物染みた存在ですら、彼は今世紀で最も偉大な魔法使いに留まり、至上最も偉大な魔法使いでは無い。

まあ四創設者という“殿堂入り”が存在する以上己むを得ない事であるともいえるが、しかし、アルバス・ダンブルドアと同程度に傑出した魔法使いが、この千年間全く現れなかつたと考える方が無理な話だ。スリザリンにも、マーリンという偉大な先達——彼の残した功

績からすれば、秘密の部屋を使うとは思えないのも確かだが——が居る。

いずれにせよ、並外れた力を持つ多くの大魔法使い達が伝説を追い求め、ホグワーツという限られた空間を隅から隅まで探索し続けた筈であり、しかしその結論は現在に示されている。

秘密の部屋は、誰にも見つけられていない。であれば、そのような物は虚構と考えるのが当然の論理の筈である。

そして——この文字を見て思う事もまた同じ。

秘密の部屋が開かれたと書かれた所で、それが真実である保証など全く無い。都合よく伝説を騙って、人を恐怖に陥らせようとしていると考える方が理に適っている。

死んだ猫が傍の松明に吊るされているのは脅しのつもりかも知れないが、猫はホグワーツには通わないのだ。秘密の部屋の伝説からは、余りにもそぐわない。吊るしておくならば、サラザール・スリザリンがホグワーツに不適切だと考えた、「マグル」の死体の方が余程相応しいと言えるだろう。

……まあ、そぐわないからこそ、逆に余計不気味でもあるのだが。

しかし、今僕の頭を占めているのは、たった一つだった。

「継承者の敵よ、気をつけよ！ 次はおまえたちの番だぞ、『穢れた血“め！”」

そんな愚かしい言葉を堂々と吐き捨てたドラコ・マルフォイを後ろから撃ってやりたいという欲求を、何とか押し留める事だった。

純血主義。

スリザリンの特性として表されるソレは、しかし、そうされてしまったが故に、歪んだ形で現在まで引き継がれてしまったように思う。

現に模範的グリフィン・ドールの人間は「純血主義」を唾棄すべき下らないモノとして結論付ける。別にそれは構わない。僕として純血主義に真正面から賛成する訳では無い。が、彼等がそこで思考停止し

てしまっている事だけは頂けない。

純血主義の伝統は、それなりに良い面も有る。

文化と知識、教育の継承。縁戚化による対立の回避。政治と社会の団結の密接な連携及び強化。今は汚泥のようになってきている事も否定しないが、それはあくまで今だからだ。

グリフィンドールは忘れているのだろうか。

彼等のゴースト、ニコラス・ド・ミムジー・ポーピントン卿は、“マグル”の王宮に仕え、公然と魔法力を貸したにも拘わらず、一度の些細な失敗によって魔女狩りの下に処刑されたのだと。杖を奪われ魔法が使えないようにされた挙句、斬れ味の鈍い斧で拷問され、死に至らしめられた——まあ、ゴーストになった以上死んでは居ないが——のだと。

国際機密維持法。

かの大分裂の時代まで、“マグル”と魔法族は同じ世界を生きていた。

裏を返せば、その瞬間まで、魔法使いは“マグル”の脅威に晒され続けていた。

そして民族浄化の手段は、一つは女を奴隷化する事であるが、もう一つは子供を殺戮する事である。都合の良い事に、未成年の——特に、十一歳未満の子供は、魔法を上手く制御出来ない。しかも酷く原始的な形で彼等はそれを発現させてしまう。つまり、“マグル”にも解りやすい形だ。その果てに起こる悲劇など、わざわざ説明する必要無いだろう。

多くのスリザリン——つまり純血同士の結束を深める事に終始し、内に内にと閉じ籠り続けた者達——以外の魔法使いは1692年まで期待を捨てなかった。名誉革命^{1688年}後、グレートブリテンとアイルランドの魔法界は、ウイリアム三世及びメアリー二世に対して、“マグル”法の下での魔法使いの保護を求めすらした。

そして、その“成果”が、先の国際機密維持法だった。

サラザール・スリザリンは聡明であり、賢明だった。

“マグル”は魔法族を護らない。だからこそ、純血を死守し、その

内で教育を課し、御互いの結束を図るべき——もつとも、かつてのマルフォイ家がそれまで「マグル」との付き合いが最も深い一族の内の一つだったというのは、歴史の数奇さを示すものと言えよう——だった。それを違えた結果、魔法族はそれまでより深く、「マグル」から隠れ棲まざるを得なくなつた。今の人間は忘れていているが、それは紛れもない魔法族の挫折であり、敗北なのだ。

何せ国際機密維持法の成立はすんなり行つた訳では無く、「マグル」に宣戦布告をしようとする者達は決して少数派では無かつたのであり、しかし最終的な結果は今見ての通りなのだから。

無論、先の学年におけるアルバス・ダンブルドアの冷ややかな指摘に対して、僕は忸怩たる思いを抱きながらも否定出来ない。

あの老人は暗に言つたのだ。仮にかつてのサラザール・スリザリンの考えが正しかつたからと言つて——ゴドリック・グリフィンドールによる勝利が間違つていたからと言つて——現在もまたそうであるとは限らないと。スリザリンは、創始者の無念を晴らす事に固執し過ぎて、「今」大事な事を見失つていのではないかと。

確かにそれは一応の真理を突いているのだろう。

しかし、スリザリンが間違つていた所で、グリフィンドールが正しいという訳でもまた無いのだ。そして、それは現在の状況により証明されてしまつていのように僕には思えてならない。

純血主義は歪んだ形で伝わり、必然として他も歪んだ。「マグル生まれ」を「穢れた血」と呼ぶ最大の怨敵スリザリンに対して結束してしまつたせいで、魔法族はそれ以外に目を配る事を忘れてしまつた。

すなわち、「マグル生まれ」は厳密には魔法族なのだ。何故なら、魔法を使えるのだから。

スリザリンは目を逸らしがちだが、その事実が変わらない。そして、それを理由にグリフィンドールの後継者達が彼等を同胞として——魔法を使える仲間だと強く擁護してしまつた事の帰結として、魔法を使えない者への差別を寧ろ浮き彫りとしてしまつた。

「スクイブ」。「マグル」。

殆どの魔法使いは、彼等を明らかに蔑視している。

僕に言わせれば、スリザリンが魔法族同士婚姻した家系である事を理由に“純血”主義を掲げているのであれば、それ以外は魔法力の有無を“純血”主義として掲げている。言葉の定義が多少違うだけで、本質的には同じ穴の貉である。

半ば已むを得ない事であるとは言え、“スクイブ”は魔法族の社会から公然と排除され、家族以外に助けが与えられる事は無く、非魔法族社会へと追いやられるか魔法界の片隅で惨めに生きる事を強いられている。

“マグル”に対しても、善良な見方をしている魔法族ですら、非魔法族を奇妙で物珍しい道具を作る珍獣扱い程度にしか思っておらず、その知識と叡智に対して何ら敬意も理解も示そうとしない。

それが差別では無いと——純血以外を徹底的に排斥するスリザリンと違うのだと、どうして言えようか。

本当の意味で非差別的に近かった創始者の理念の余波か、ハツフルパフだけは多少違う見方をしている気がしたが——それは余談だろう。何にせよ、殆どの魔法使いが自惚れた差別主義者である。それが僕の認識だった。

そして、僕もまたその千年以上続く宿痾から逃れられているつもりも無い。

何故なら、僕は結局それを是正する為に動くつもりは無いのだし、その考えを誰にも——目の前の正義の騎士にさえ伝える気もまた無いのだから。

ハーマイオニー・グレンジャーは僕を呼び出した。

学期当初から一貫して僕に余所余所しかった気がしたが、先日の危機はその態度を撤回するに十分だったらしい。というより、わざわざふくろう便を経由してまで手紙を出してきたのは初めてだった。その中には日時と、四階の元禁じられた廊下という言葉だけが記されていたが、その筆跡が誰の物であるかなど僕が見間違えようがない。

他の生徒の目を盗み、その指定した時刻より僅かに早く着いてみれば、その端に隠れるように、彼女は腕を組んだまま待っていた。

彼女は怒っているというか、やはり微妙に不機嫌なように見えた。秘密の部屋が開いたという事を考えればそれは別段不思議でも無いと思っただのだが、それも違うような気がした。何故なら学年当初から、彼女は僕を避けないまでも図書室内でそんな感じでは有り、また今回も同種の感情を継続しているように見えたからだ。

「待ってたわ、ステファン」

彼女はそう言つて、僕が入ってきた扉の方に杖を向けて呪文を唱える。

「……二年の力量では簡単に開けられると思うが」

「それでも、隠れる程度の時間は稼げるでしょう。去年は禁じられていたというイメージも有る訳だしね。それに今回は適当に場所を見繕っただけで、また適切な場所が無いかを探しておくわよ。或いは、一か所に固定しなければ良いかも知れないし」

当然の事のように、彼女は言つてのけた。

「……僕達は、余り接触しない方が良いと思つていたが？ 生徒が居ても可笑しくない図書館ですらリスクが有るのに、他の場所で開催していると知れたら——」

「——あら、私も今年が始まるまさにその瞬間までは同じく思つていたわよ。もつとも、去年スリザリンをギリギリで救い上げた人は、また違った考えを持っていたみたいだけど」

「……まあ、去年と僕の立場が多少変わっている事は認めるが」

皮肉めいた口調を隠そうとしない彼女に、僕は肯定の意を示す。

学年末の加点は、僕が考える以上に大きな物だったらしい。

当然ながらあの老人を嫌っているスリザリンは褒め称えたりもしないし、反対に老人の手駒だとして身内から排除する事は、スネイプ寮監の助力も有つてか無かつた。

しかし、他のスリザリンが気付かなかつた事に気付き、尚且つ自ら手を下さずに干渉してしまつたせいで、油断がならず触れてもならない人間という風には認識されてしまつたらしく、去年以上に微妙な立場に押しやられていた。

勿論、それは僕の立場が大幅に改善したという訳では無い。相変わらず軽蔑され、嘲笑されるのは普通で有ったし、ドラコ・マルフォイも僕を都合の良い小間使いとして扱う事は——僕とてそうされない方が寧ろ困るので有るが——止めなかつた。けれども、多少自由に動けるある種の貯金が出来たというのは、確かな事だつた。

「図書室では、御互い好きに話せない事は去年を通して十分理解しているでしょ。マダム・ピンズの目を盗んで会話するのも大変だし、話せる内容自体も限られてるし。それとも——」

彼女は息を大きく吸って、言い切つた。

「——『穢れた血』とは会っている事を見られたくないって事？」
「……………」

鋭い言葉に、僕は黙り込まざるを得ない。

その言葉を彼女から聞く事は、去年から予測はしていた。

グリフィンドールが、あの無駄に騎士道精神に満ち溢れた集団が、その刺激的な単語を彼女の耳に入れる事は可能な限り無いであろうとは思っていた。しかし、それでも彼女には二人の友人と共に対立している、悪いスリザリンの敵が居た。彼女がその差別用語を聞く機会がああいう場になつたのは予想の斜め上だつたが、しかしこれは必然であるとも言えた。

「その差別的な言葉については色々聞いたわ。表している意味も、それがスリザリン内でどう考えられているかも。貴方が、去年一貫して他の人間から私と話されているのを見られなくなかつた理由は、私が『穢れた血』だつたから？」

「……………まあ、その理由が無い訳では無い」

語気の荒い彼女の言葉に、僕は嘘を吐いても仕方ないと肯定する。

一番僕が念頭に置いていたのはグリフィンドールとスリザリンという敵対的な関係性——つまり、僕と友誼を続ける事で彼女の立場を損なうという点——だつたが、純血主義の内実を知る中で、彼女が『マグル』生まれの魔法使いである事も遠ざける理由へ当然に加わつたのは事実である。

良くも悪くも僕は半純血であり、それより劣等の地位——勿論、

スリザリン
純血的価値観によつてだが——の者の立場について真剣に考えて居なかつたという事だつた。

「当然ながら、貴方はマルフォイと交友が有る訳だから、こうなる事は予測していた訳でしょう？　まさか、あのマルフォイが自重するなんて思えないし」

「……それもまた肯定する」

「じゃあ、私にそれを伝えなかつたのは何故？　貴方ならば、去年の時点でスリザリンの彼等が私を何と呼んでいるか当然聞いていた訳でしょう？　なら、私に対して去年の内に、私の魔法界での立場を伝えるべきだと思わなかつたのかしら」

「………何故、と言われても」

その質問に対して、初めて困惑して言い淀む。

先程までは筋が通っている質問だつた。だが、今の質問、つまり僕が知っている事が何故彼女に伝える事に繋がるのかは良く解らなかつた。けれども、彼女はそれが重要であると言うように、腕組みしたまま僕の方を見上げ、答えを待っていた。

だから、これが正しいのかという確信が無いまま、僕は思った事のみを紡ぐ。結果的に間違っていたとしても、彼女に嘘を吐くよりはマシだつた。

「自分が差別されている、なんて聞いて愉快になる人間は居ないだろう。恐らく君は、去年のように遠ざけられる事は有つても、悪意を持った差別を受ける経験は今まで無かつた筈だ。別に知つた所でどうしようも無いし、わざわざ気分を害する必要も無いだろう」

何より、彼女との貴重な時間をそのような事に費やしたくなかつた。

「それは……確かにそうだけど。でも、マルフォイに最初に聞かされるのは嫌だつたわ」

「ああいう事件の場で、叫ばれるように、か？」

「いえ、違うわ。マルフォイが私をそう呼ぶのは二回目だもの」

「……二回目？」

その事実を、僕は知らない。そして思い当たるような機会も無い。

だが、ハーマイオニー・グレンジャーは何故か驚いたような顔をした後、その表情を笑みへと変えた。全くもって不可解な事に、何処か嬉しそうですら有った。

「わ、忘れて頂戴。兎も角、貴方が去年私に伝えなかったのは別に變な理由じやなかったというのは何となく伝わったし、貴方が私をそう呼びそうに無いというのも理解したわ。ネビルやレイブンクローの子とだけコンパートメントを一緒にした理由も」

慌てたように早口で言った彼女に、僕は更に困惑を深める。

「……ネビル・ロングボトムやルーナ・ラブグッドが何故そこで出て来る？　そもそも、君が通り掛かった時、ネビル・ロングボトムはコンパートメントに居なかつ——」

「兎、も、角！　今は、それは良いの！」

強引に話を打ち切ろうとする彼女に、僕はそれ以上追求する事を諦める。

通常は非常に理性的で有るが、時として感情的になり、その場合は全く手が付けられなくなる事を僕は良く理解していた。

「私が言いたいのは、たとえ不愉快になっても、貴方から穏当に伝えて欲しかったという事よ。そりゃあ、聞かされた瞬間は冷静でいられる自信は余り無いけれど、それでもマルフォイから初めて聞かされるよりも数千倍マシよ」

「……そう言う物なのか？　見ない振りをしてでも良い事が無いのは否定しないが、見ないまままで居られるならそれに越した事も無いだろう」

「首に手を添えて敢えて見せてくれる事が有り難い場合だって、世の中にはあるものよ」

確信をもって紡がれた言葉に、僕は小さく息を吐いた。

たまに話している論理が解らなくなる点を考えれば、アルバス・ダンプルドアとの会話の方が彼女との会話よりも気楽な面も有るのだと認めざるを得なかつた。

あの老人は、若者の言葉に容易に怒らない程度には老成しており、突飛な話題にも当然のように対応し、何よりその知識と叡智は深かつ

た。常に曖昧な事を言うのを好むという気に入らない点はあるものの、その裏に理由の存在が透けて見えるのは解りやすく、また理解を示しやすいとも言えた。

もつとも、それを彼女に真正面から伝えるべきではないという程度の常識は僕にも有る。

「まあ、本題は終わった事だし、余談の方に入りましょう」

彼女はそう言って、表情を真剣な物に戻した。

「秘密の部屋について、貴方が知っている事は有る？」

「……………」

その彼女の言葉に、今度は深く溜息を吐いた。

僕は君に去年のように危険に突っ込むような真似をして欲しくはないのだと言いたい気もしたが、しかし、僕は彼女の親ではない以上それを言う権利もまた無かった。何より、「穢れた血」が——危険の方が近寄ってくる可能性が高い彼女が、その事に関心を抱くのは理解出来る話だった。そして、知人にスリザリンが居ればこうなるのは必然である。

「『ホグワーツの歴史』は？」

「全部借りられてたわ。やっぱり、皆気になるみたい」

書籍の信奉者、ハーマイオニー・グレンジャーは肩を竦める。

「でも、ビンズ教授が話してくれたわ。スリザリンが、真の後継者が現れるまで開かない『秘密の部屋』を作ったって。そこには恐怖、何らかの怪物が残されていて、真の継承者のみがそれを操れるらしいわよ」

「……………待ってくれ。彼に話を聞いたのか？」

「ええ。だって、教授は魔法史学を教えていらっしやるし、ゴーストでしょう？」

「秘密の部屋」について聞くには適切だと思ったの

あつげらかんと言うが、言葉が出て来ない。

無茶苦茶というか、知識旺盛な彼女らしいというか。そして、答えが返ってきたのも驚きだ。彼は「教授」として十分過ぎる知識を有しているが、全くもって生徒に興味が無く、その講義に工夫も無かった。そして、ゴーストというのは、そのような存在である事が宿命で

ある筈なのだが——彼女は、少しばかりとはいえ、それを打ち砕いたらしい。

「それで、スリザリンの貴方に聞きたいの。『秘密の部屋』について、もっと知ってる事が無いかって。出来れば、その怪物の正体についても」

期待の眼差しで見上げてくる彼女に、僕は視線を微妙に逸らす。それに応えられないというのも有るが、それは余りにも目に毒だった。

「はつきり言って、秘密の部屋について僕が君に言える事は無い」「え?」

彼女の驚いたような声に、僕も少しばかり意を決し、今度は彼女に視線を合わせた。

「何故なら、僕は君が聞いた事以上の内容を知らないからだ。怪物だったという噂も聞いた事が有るが、それがゴーストでも関心を抱く程度に確度が高いものだとは思ってもみなかった。僕はそれを完全な虚偽だと考えていたからな」

「? どうしてそう思えるの? 私には真実な気がするけど」
「仮に実在するとして、アルバス・ダンブルドアが今までそれを探さなかったとでも? まさか、それを発見出来ないとでも?」

偉大なるグリフィン・ドールの先輩の名前を出してやれば、彼女は口を噤む。

あの老人とて、その類の職務怠慢をする事はしないだろう。それは間違いない。

「何より、秘密の部屋が開かれたという犯行声明が出されたからと言って、それが真実である保証は全く無い。その上未だ起きているのが猫一匹を殺しただけでもなれば——」

「——殺してないわ。石化させただけだとダンブルドア校長は仰っていたもの」

「……そうなのか。ならば余計に、奇妙な話だ。サラザール・スリザリンの遺産が、たかだか猫一匹すら殺せない訳だからな。しかも、非魔法族を初めとする『適切で無い者』をホグワーツから排除するのに、

何ら役に立っていない」

そう付け加えてやれば、彼女も少しばかり自信を失ったらしかった。

スリザリンの怪物。それを聞いて、思い当たる節が無い訳では無い。スリザリンが象徴とする生物が何であるかを考えれば当然に思い当たる事であり、『幻の動物とその生息地』においても、その名前は明確に記載されている。

しかし、あの視線が齎す結果は「死」だった筈だ。明らかにそぐわないように見え、可能性としてはやはり低い気がする。その仮説を語る必要が有るとも思えなかった。

「そういう訳で、僕は秘密の部屋が開かれたという事を真実として真剣に受け止めていない。神話は神話であり、それを利用した何者かがホグワーツを闊歩している。その可能性が高いのではないかというのが、個人的な見解だ」

「ビンズ教授と同じ結論ね……。教授の方は、それが誰かに利用されているとは当然言わなかったけど。でも、それならばそれで、危険である事は変わりがないでしょう?」

「……まあ、そうだな」

「そして、騙るにしても、秘密の部屋がマグル排除を目的としたサラザール・スリザリンの遺産である以上、今回の事件においても同種の目的を持っていると考えるのが自然だわ」

それも道理だった。そして、それこそが問題だった。

別に秘密の部屋に何が遺されているようが、仮にそれが怪物であろうが、究極的には些細な事と言える。秘密の部屋は、スリザリンの継承者によって開かれるものである。要は、スリザリンの継承者こそが真に脅威なのであり、それが誰であるかこそ最も注意を払うべき事項であると言えた。

「つまり」

僕は深く息を吐く。

「君はスリザリンにその継承者が居ないかも、僕に聞きたい訳だ」

ハーマイオニー・グレンジャーは強い視線でもって肯定する。

解ってはいたが、何となく気が進まないのは確かだった。しかし、彼女とて引き下がる気が無いのもまた同様に解りきっている。彼女にとつて、これは生命線であった。自らの身の危険という意味でも、恐らく今回の件に反対したであろう二人の友人を説得するという意味でも。

「僕も一応スリザリンである以上、露骨に身内を売る事は出来ない。それがたとえどんな人物で有ってもだ。だから、特定の人物については語らない」

彼女が——彼女達が誰を疑っているかは察する事が出来るが、予め念押ししておく。

そして、彼女は多少不満そうな表情を見せたが、確かに頷いた。

「現状のスリザリンの雰囲気は真つ二つに別れている。秘密の部屋の神話の再誕を喜ぶ者と、有り得ないとして表面上馬鹿にする者。前者が純血で、後者が半純血や非魔法族生まれだ」

「……え？ 待って、スリザリンにはマグル生まれも居るの？」

「知らなかったのか——というのは酷か。表向きはそうでは無いからな」

彼等が「相応しい」態度を取る限り、純血は一応見て見ない振りをしてくれる。それを知る半純血も、仮にその人物が自分と敵対的であったとしても、絶対にそれだけは口外しない。そして当然ながら自ら言い触らす事でも無い。となれば、外部が気付かないのは必然だった。

「今はそれは置いておこう。しかし、スリザリンの中に今回の功績を自慢する者は見る限り居ない。まあ、今起こっている事が猫を石化させた程度であるというのも有るが、談話室で交わされるのは殆ど秘密の部屋の謎自体についてだ。有ってもこれからどうなるかの予想程度ではない」

「……でも、幾らスリザリンであっても、皆が皆仲良しって訳では無いんでしょ？ 仮に秘密の部屋に居るのが怪物で、それを操れたとして、そんな武器を晒すような真似はしなないと思うのだけど」

「そうだな。それは余りに不用意過ぎる」

蛇は団結主義である一方、身内が自らと同様に毒を有している事も良く知っている。

「けれども、その犯行を仄めかす程度の人間は居て良い筈だ。或いは、これから起こる事を少しばかり『予言』しても良い。何せ、スリザリンの継承者だ。純血がその地位を欲しているのは明らかだし、一目置くであろう事も確かだ。自身がそうである事を明かした瞬間、王族になれる、とでも言うかな。その地位と価値というのは非常に高い」

「だけど、そのような人間は居ないって事ね。但し、当然ながら貴方が知り得る範囲の事に限られるでしょうけど」

「解ってくれて嬉しい。僕は純血のコミュニティの中に居る訳ではない。彼等が内輪で話しているという可能性は全く否定出来ない」

もつとも、その可能性は低いようにも思えた。

これは外部の人間に伝えるににくいのだが、何と云うか、スリザリン内でこの騒動を冷ややかに見ている者が皆無なのだ。仮に真犯人が居るのであれば、この騒ぎを内心愉快に思い、ほくそ笑んでいても可笑しくないに違いない。しかし、純血・非純血問わず、それが期待にしろ、好奇にしろ、恐怖にしろ、今回の件に対して少なからず心を動かしている。

勿論、これは僕の勝手な見方によるもので、上手く演技をしている可能性も有る、というかその場合に見抜ける自信が有る訳でも無い。けれども、スリザリン内に今回の犯人が居るとするのは、どうもしっくり来なかった。

「ともあれ、僕には未だにスリザリンの継承者として思い当たる人物が居ない。別に全ての者が全くの無実だと主張したい訳では無く、言ってみればスリザリン全員が怪しいままであり、他よりも抜きん出て疑念を抱けるような人物が居ないという事だが」

「うーん、難しいわね。貴方に聞けば簡単に解ると思っただけれど、甘かったようね」

「……すまないな。この程度しか言える事が無い」

「……いえ。知らないのであれば、それは仕方がない事だわ」

ハーマイオニー・グレンジャーは明らかにガツカリした様子を隠し

きれていなかったが、それでも確かに微笑んで見せた。

「……ただ、これまで以上に周りに注意はしておこう。たとえば確信が持たなくても、可能性がそれなりに有ると判断すれば、君に伝える」「あら、身内は売らないんじゃないの?」

「たまには例外が有っても良いだろう」

少しばかり顔を顰めつつ言えば、今度は彼女も面白そうに笑ってみせた。

「そうしてくれると助かるわ。貴方が言う通り、今は猫を石化させるだけに留まっている事だしね。少なくとも現時点では、余計な心配をするべきでは無いのかもしれないわ。この学校には、ダンブルドア校長やマクゴナガル教授もいらっしやるし」

自分を安心させるかのように、彼女はそう結論付けた。

しかし、そこで彼女は何かを思い出したような表情をした後、そう言えば、と口を開いた。

「聞く機会が無かったし、今の今まで忘れていたけれど。貴方、去年の賢者の石で結局何をしたの? 加点されたからには、間違いなく何かをしたのでしょうけど」

「……ああ、あれか」

恐らく、ダンブルドアという名前から連想したのでだろう。

けれどもこちらの方は、たとえば彼女に対しても明確に首を振らざるを得なかった。

「それはアルバス・ダンブルドアに対して、誰にも語らないという事を杖に対して誓っている。こればかりは、君に対しても口に出る事では無い」

細かい事を言えば、『賢者の石の件』での『この校長室での会話』が果たして何処まで適用されるかが問題だったが、やはり語るべきでは無いだろう。

あれは簡単に話せる内容でも無いし、御互いに踏み込み過ぎていた。

何より、あの老人にとっては、クイリナス・クイレル教授は、ハリー・ポッターがその良心を痛めてはならない悪役のままであるべきだと

考えているに違いなかった。僕にとつても、〃生き残った男の子〃が
使い物にならなくなるといふのは今の所歓迎しかねる事態だった。

もつとも、流石のハーマイオニー・グレンジャーもまさかそんな発
言が飛び出て来るとは思わなかったのだろう。目を丸くしながらも、
こくこくと頷く。

「そ、そう。それは話しちやマズいわね。余計な事を聞いちゃったわ」
「それこそ知らなければ、仕方無い事だろう。これは誰にも言ってい
ない事でも有るからな、気になるのが自然だ」

「そう言ってくれると有難いわ。そうね、確かにダンブルドア校長も、
学期末で私達には解るような嘘を言ってたものね。

——けど、少しばかり安心もしたわ」

彼女は、悪戯っぽく、そして何処か揶揄うように言った。

「グリフィンドールでは、貴方がスリザリンの誰よりも闇の魔術に詳
しくて、実はクイレルを操っていたとか、賢者の石での黒幕だった
という話も出ていたのよ。本当に馬鹿な話よね。そんな外部から
変な干渉が無かった事なんて、ハリーや私が知っているのに」
「……………」

ダンブルドア校長が知っているなら余計にそんな事は有り得ない
わねと続ける彼女に、僕は何も答えられなかった。

噂は常に真実を語る訳でなくとも、常に虚偽を語る訳では無い。

だが、彼女は当然ながら僕の内心に気付くような事は無かった。朗
らかな表情を崩さず、彼女は言う。

「また、ふくろう便で連絡するわ。…………えつと、確認して無かったけ
ど、図書館の外で私と会う気が全くないわけでは無いのよね？」

「…………ああ、既に一度こうして会っているんだ。今更の話だろう」
「そう。安心したわ。ただ今度は手紙にも細工すべきかもしれないわ
ね、マルフォイや他の人間が見る可能性も無い訳ではないし。暗号と
かが良いかしら？」

「…………それは君に任せる」

悪巧みを楽しむような表情を浮かべて考え込んでいる彼女に、僕は
諦めて答える。

彼女は失敗を極度に恐れるタイプであり、このようなりスクを負うのは本来の気質では無いと思っていたのだがどうやら違ったらしい。グリフィンドールに染まったのか、それとも元々グリフィンドールのだったのか。

ただ、彼女と自由に話せる回数が増えるのは、僕としても歓迎すべき事だった。僕の方とて、何か「密会」を隠す為の手段を考えておかなければならないだろう。

暫く彼女は思考に沈んでいたが、僕の存在を思い出したように顔を上げた。

「予想以上に話し込んだじゃった訳だし、今日はお開きにしましょう。ステファンもそれで良い？」

「……そうだな。ズルズルとここに居座った所で、余り得られる物はないだろう」

名残惜しいが、それは事実だった。

「じゃあ、今回は貴方の方が先に帰って頂戴。言うまでも無いと思うけど、気を付けてね。今は禁じられては居ないにしても、教授方は生徒がこの辺りをうろつく事を良しとはしないでしようし。御互い優等生だから、見つかったらでもなりはするけど」

「……扉を出た瞬間に鉢合わせるといふのはどうしようも無いがな。それは祈るしかないが。しかし、僕の方が先で良いのか？ 君は僕より先に来ていたんだろう？」

この場所は、当然と言えば当然だが、御世辞にも会話するのに適した環境では無い。

微妙に肌寒く彼女の身体も冷えているだろうと思っただが、それでも彼女は微笑んで見せた。

「ええ。貴方が先に出てくれた方が適切だと思うし、ここに長居するつもりも無いわよ。特に今回に限っては一切誰にも見られずに帰るつもりだから」

けれども、僕が甘かった。

結果的には彼女が抱いた危機感の方が正しかった。

ギルデロイ・ロックハートがハリー・ポッターを骨抜きにし、スネイク寮監の授業で花火を爆発させるような命知らずが現れ、決闘クラブの行いによりハリー・ポッターがスリザリンの継承者候補筆頭に成りあがったのは些細な事とすら言えた。

犠牲者は出た。

コリン・クリービー。ジャステイン・フィンチ・フレッチリー。

ニコラス・ド・ミムジー・ポーピントン卿も巻き込まれはしたが、いずれにせよ、サラザール・スリザリンの残した遺物は、純血以外——彼がホグワーツで学ぶべきでは無いと考えた者に対して牙を剥いた。

結果として生徒は教授、監督生、そして首席らによって監視され、図書館ですらまともに向かう事が出来なくなつたし、一人で出歩くなどもつての他であつた。必然、ハーマイオニー・グレンジャーと隠れて会う事など全く不可能な状況に陥つていた。

その間一度だけ、彼女からふくろう便が来た事が有る。

彼女の筆跡で、『前に言つていた、心当たりはあるか』と。それに対して、僕は『無い』と一言だけ返した。それは紛れもない事実だつた。

スリザリンの中で、そのような人間は居なかつた。談話室で声高には言わなくとも「純血派」はいよいよ上機嫌に——けれども微妙に不安さを隠すように——なり、「非純血派」は逆に恐怖を隠せずに居られなくなつていた。

そして、スリザリン内での会話にも決定的な変化は見られない。今回の事件について、スリザリンの継承者へ助力したいと言う人間は居ても、或いは誰が次の犠牲者になるかを賭け出す人間が現れても、その犯行を示唆したり、今後の「予言」をする者は全く居なかつた。僕の眼において、スリザリンは、犯行に関与していないという点では白のようには思えなかつた。

猜疑と陰鬱は、日が進むにつれてどんどん深くなつていく。

「マンドレイク回復薬」により石化は解く事が出来るのだという発表が有つて尚、生徒を安心させるには全く至らなかつた。

完全な石化というのが並外れた闇の魔術で無ければ実現し得ない

事を、特にスリザリンは良く知っている。そして、そのような存在は人を殺しうる力もまた当然有している筈であり、気紛れに今までの方針を変える事もまた十分に有り得るのだという事も。

そして、そこまで詳しくないスリザリン以外でも、非常に危険な存在がホグワーツを自由に闊歩しているという事は正確に認識していた。寧ろ詳しくないからこそ、更に恐慌に陥っていた。教授陣は何とか統制を保とうとしていたが、ミネルバ・マクゴナガル教授やスネイプ寮監の授業ですら怪しくなる程度に、生徒は今後に対して不安と恐怖を抱いていた。

勿論僕も気が気では無かったし、何処かの老人に対してきつさと解決してくれという思いを抱いていたが——ただ一つ、大きな疑問を抱かざるを得なかった。

“マンドレイク回復薬”によって石化が回復されるのは良い。しかし、ニコラス・ド・ミムジー・ポーピントン卿、つまりゴーストに対し、一体どのようにしてそれを服薬させるといふのだろうか——？

蛇の王

冬季休暇中、ドラコ・マルフォイは珍しくホグワーツに残っていた。秘密の部屋の犯人が解らない現状から当然のように帰宅を選択した他寮と違い、殆どの純血のスリザリンは、今回の騒ぎについて恐怖を抱いてはいない。

しかし、今年も彼等の内輪での社交会が有るのは浮かれた話題からしても明らかで、当然のようにスリザリンに残る生徒は圧倒的少数派であり、また去年あれ程僕やハリー・ポッターらを煽っていたのだから、ドラコ・マルフォイも家に帰る事を何ら疑って居なかった。

けれども、その予測は外れ、彼は寮へと残った。

その取り巻き二人すらも一緒に。

その理由に内心首を傾げざるを得なかったが、けれども問い質すような真似を僕はしなかった。

僕にとつて彼の行動は興味の範疇に無く、強いて言うならば、彼の干渉が鬱陶しいくらいだった。

彼はホグワーツでの休暇が余程退屈らしく、気紛れに僕へとちよっかいを掛け続けた。

クリスマスである今朝も、一冊だけ送られて来たプレゼント——今年は、変身術に関する書籍だった。正直言って、魔法界の物であるのは有り難い。去年は隠し通すのに苦労したし、現在は家に置いたままである——を隠した後、プレゼントは誰からも来なかったとドラコ・マルフォイに告げる事で彼の自尊心を満足させ、彼が受け取った素晴らしいプレゼントの数々について長々と拝聴する羽目になったものだ。

もつとも、もう既に一年半も彼と交流を続けているのだから、御互い慣れた物だった。

一応拝聴したとは言っても、僕は本を読みながらであったのだから、ドラコ・マルフォイの言葉を半ば聞き流していたに等しい。既に彼も、僕が読書を止めない事について何も言いはしない。それでも僕に話し掛けるのを止めようとしない辺り、彼らしいと言えば彼らしい

のだが。

そんな些細な特別の朝を迎え、何時も通り読書の為に昼食を抜き、去年に比べて煩わしいクリスマス・ディナーを過ごした後の事である。ふくろう便を受け取ったらしいドラコ・マルフォイが、不気味な位に満面の笑みを見せながら、僕に良い物を見せてやろうと宣い出した。

彼にとって良い物が僕にとって良い物で無いのは明らかだったが、ドラコ・マルフォイが言い出した以上、それは決定事項と言えた。もつとも、相変わらず僕に一番最初に見せるような気は更々無いらしい。彼は子分等が見当たる場所に居ない事に僅かばかりの苛立ちを見せてから、彼等を探しに行った。

何時もの事と言えば何時もの事だった。当然ながらその時点において、僕は何ら疑問を抱きはしなかった。何の変化も無い、スリザリンの談話室の光景だったと言って良い。

故に、問題はその後だった。

ドラコ・マルフォイは二人組を連れて談話室に入ってきてから、良い物を取つてくると自室に向かった。その際、彼は僕の傍の席へ座っておくように指示し、それもまた自然だった。

彼等が僕を嫌悪しているのは確固たる事実だが、さりとして最近は無駄に避けるよりも利用した方が良いのだと気付いたらしい。まあ、彼等の成績からすれば当然の事であり、皮肉を言えば今更かと評するべきなのかも知れなかった。

僕としては、彼等は去年良く進級出来たものだと感じた程度でしかなく、彼等が間接的にその恩恵を被る事について、別に細かく言うつもりも無かった。彼等が僕に貸しや恩義を感じてくれる程に惻巧だとは思っていないが、更にもっと必要は無く、ついで程度の手間で済むのであれば、そうしない理由もまた無かったのだ。

もつとも、彼等の態度がそれ以降で大きく変わったという訳では無い。彼等は軽蔑と侮蔑を表すのに何時も熱心だったし、余程の用事が無ければ、僕に話し掛けてこようなどしなかった。ドラコ・マルフォイから同席を指示された場合とて、親分に逆らう事は出来ないという

方針は堅持していたものの、殆どむつつりと黙り込むばかりだった。
つまり——

「……ええと、レッドフィールド」

「? どうした?」

「僕達は、その、彼と——純血だけで話したい事が有る。君が居ては困るんだ」

——そんな台詞は、絶対に吐く存在では無いという事だ。

勿論、今まで一度として無かったからと言って、永遠に無いという事は有り得ない。しかし、ドラコ・マルフォイの監視下に無い彼等の台詞として相応しいのは『邪魔だから他所に行け、半純血』である。それを考えれば、まるで本人では無いような台詞でしかなかった。

故に必然的に、ある可能性に思い当る。

何らかの魔法か、或いは魔法薬——例えば、ポリジューズ薬を用いて変身している可能性に。

ほんの二週間前の魔法薬学での大爆発。

あれは未だ印象に新しい。そして、当然ながら、その時の違和感についても。

ハリー・ポッターの表情——ではない。僕が目にしたのはハーマイオニー・グレンジャー及びロナルド・ウィーズリーだった。つまり、スネイプ寮監的に何時も通りの明らかに不当な嫌疑に憤るのではなく、まるでそれが至極妥当であるかのように俯き、寮監の怒りをやり過ぎそうとする表情。それは、本当に関わっていないのであれば、絶対に有り得ない反応と言えた。

加えて、寮監が今この瞬間の状況を放置せざるを得なかった理由——すなわち、寮監が彼等三人組を犯人として取っ捕まえたり、或いは彼等を監視して魔法薬を作成している証拠を掴もうとしたりしなかった原因にも見当が付いた。

寮監は魔法薬学の教授なのだ。

平均的な hogwarts の二年生どころか、最優秀の二年生がどの程度の魔法薬学を作成出来るかなど当然熟知しているだろう。そして、その経験からすれば、寮監は、盗まれた材料から作成出来るような魔法薬——ポリジューズ薬のような高度な魔法薬を、たかだか二年生が作

成する事は不可能であると判断した。

寮監の直観としてはそれが間違いであるように感じていても、その理性的で合理的な判断を覆す程の確信は得られなかったのだろう。自分を嘲ろうとする腹立たしい悪戯、或いはあの三人組以外の誰かが他の機会に盗みに入った。そう考えるのが、魔法薬学教授として真つ当な結論であると考えた。

恐らく、僕が寮監の立場で有ったとしても同じように考えるに違いない。ただ単に本を読んだだけで魔法薬を調合出来るならば、ホグワーツの全員が魔法薬学で「O」評価を取れるだろうし、そもそも魔法薬学教授など不要であるのだから。

つまり、この点において、無茶苦茶なのはハーマイオニー・グレンジャーだった。

座学だけでは無く実技すらも凶抜けた秀才というのは、全くもって反則極まりなかった。

そして、彼等がポリジューズ薬を用いてまでここに入ってきた理由も当然理解出来る。

僕は彼女に対して、自身は純血のコミュニティに居ないと告げた。なればこそ、純血である者で有れば、何か聞けるような事を考えたのだろう。勿論、彼女以外の二人は、僕の言葉が信じられないと思つたのかもしれない。別にそれはそれで良かった。他人の言葉の裏を取らないのは、愚か者の選択で有った。それが信用出来ない者であるなら猶更だ。

だが、そこまで考えを巡らせたのと、ドラコ・マルフォイが帰ってきたのとほぼ同時だった。僕が二人へと言葉を返す前に、彼は僕と彼等に割り込むように空いた席へと座り、自慢気に二人に新聞の切り抜きらしき代物を渡した。

「ほら、父上が僕に送ってくれたんだ。素晴らしく笑えるだろう？」
ドラコ・マルフォイはそう言うが、彼等の表情を客観的に見るに、どうも笑えるとは程遠いらしかった。

もつとも、と。

明らかに平静を喪つて、ここに来た目的が頭から吹っ飛んだ彼等の

様子を見ながら思う。

彼等はこうしている余裕が有るのだろうか。ポリジューズ薬の一回の効能は、魔法薬学の熟練者の手に扱れば十二時間程まで伸ばせると聞く。しかし、如何にハーマイオニー・グレンジャーとて、そこまでの偉業を成し遂げたとも思えない。十分程度で切れるような不出来な調査をした訳でも無いようだが、時間の制約はそれなりに厳しい筈だ。

そしてそこまで考えを進めた後、彼等と一緒に居て然るべきハーマイオニー・グレンジャーがこの場に居ない事に漸く思い至った。

ドラコ・マルフォイの取り巻き二人組が他と居るのは稀だから不自然さを感じていなかったが、変身しているのがグリフィンドール二人組ならば別の話だった。流石に彼女がスリザリンの継承者に襲われたのであれば彼等がここに居る事は無いだろうが、それは不安にならないで済む事を意味はしない。

だが、僕や二人組の様子に全く頓着しない人間がここに存在しており、彼は二人組から回収した新聞記事を僕の前に突き出して見せた。「ステイブーン。お前にも見せてやろう」

それを大人しく受け取って読んでみれば……成程、彼等が心穏やかに居られないのも納得だった。

その記事によれば、あのフォード・アングリアの一件で、ウィーズリー達の父親は罰金五十ガリオンを課されたらしい。そして、読んでみた後の感想は、「マグル保護法」の撤廃部分を除いて、ルシウス・マルフォイ氏に同意する、だ。

犯罪の内容が内容だ。加えて、実行犯であるハリー・ポッターらが事実上の無罪放免である以上、その分を未成年者の監督義務違反として負うのは不当とも言えまい。

五十ガリオンの罰金——新入生の杖約七本分だ。魔法族にとって安くは無いが、高くも無い——も軽過ぎる。解雇は兎も角、道義的な自主辞任は当然にも思えた。彼は単なる魔法省職員では無く、「マグル製品不正使用取締局」職員なのだ。どんな顔をして今後マグル製品の違反を取り締まるのだという話になる。

もつとも、純血の牙城が聖二十八族のウィーズリーを辞めさせる事など出来はしないだろうという予測は付いたし、この二人の中身が誰かという事を思えば、素直な感想を言うのは不適切である。別に彼等からどう思われようが構わないが、ハーマイオニー・グレンジャーの立場を悪くする事など当然避けるべきだった。

故に、これからの僕の行動もまた決まりきった事だった。

「マルフォイ、随分愉快な記事を見せてくれた事は有り難いが」

その瞬間に殴り掛かる様子を見せた人間と、止めに走った人間とで中身がどちらなのか解った気がしたものの、それは些細な事だった。

「良い機会だ。秘密の部屋について少しばかり聞きたい」

そんな僕の言葉に、ドラコ・マルフォイは興味深そうに目を細めた。

そして怪しい反応と動きを続けている二人組は、弾かれたように姿勢を伸ばした。

「ほう。君が僕に質問をするのは珍しい。ましてそれが秘密の部屋の事で有れば猶更だ。非純血の奴等と違って、君は殆ど我関せずと言った感じであつたからな。気付いていたか、余りに平然としているせいで君がスリザリンの継承者でないかと言う者も居たぞ？」

「……それは気付いて居なかつた上に、僕は普通に興味を持っていた筈だがな」

実際、ドラコ・マルフォイの言葉は初耳だった。

ただ確かに、そう見えたかも知れない。

ハーマイオニー・グレンジャーに伝えた通り、僕は秘密の部屋の伝説を真剣に受け止めておらず、関心が有つたのは誰がスリザリンの継承者であるかという一点でしかなく、それさえ突き止めてしまえばあの老人に放り投げて何とでもなるだろう——寮監はクイレルの件とは違うと言つたが、そもそも僕は老人の策略の可能性も未だ排斥していない——という達観も有つた。

そしてその温度の差異は、周りにしてみれば明らかだったのだろう。半純血がスリザリンの継承者であるという、全く有り得そうにない事を考える位に。

「まあ、今更そんな事を僕に聞いてくるぐらいだから、君がスリザリン

の継承者で無い事は明らかかなようだが。そもそもお前の血は僕のよ
うに優れている訳では無いからな」

「ああ、そうだ。だから教えて貰いたい。純血中の純血、マルフォイ家
の次期当主。……必要であれば頭を下げるし、〃相応しい敬意〃を示
しても良いが」

そうしても構わないと本心から言えば、ドラコ・マルフォイは満足
気に笑った。

「いや、そこまでして貰う必要は無いさ、ステイブン。君の血が僕よ
り大きく劣っているのと同様に、君が酷く物分かりが良いのもこの一
年半で十分承知している。君がそこまで必死に頼み込むともなれば、
僕が助力するのも吝かではない」

けれども、と彼は続けた。

微妙に勿体ぶるように、しかし何処か残念そうにドラコ・マルフォ
イは言う。

「残念ながら、僕とて余り君に語れる事は多くない。そのこのゴイルや
クラップには既に告げた事だが——」

彼に流し目を寄越された瞬間二人は背筋を伸ばしたが、そのよう
な、彼等らしくもない素振りをするのは止めて欲しい所だった。

「父上が僕に話してくれないからな。僕が余りに知り過ぎているのは
不自然だと言って、どんなに僕が聞いても口を開いて下さらない」

成程、だからこそ、僕の求めに対してもこれ程簡単に応じたに違
ない。

真に重要な事実を知っていたのであれば、ドラコ・マルフォイは
もつと勿体ぶつただろうし、やはりそれ相応の敬意と誠意を求めた筈
だった。

「確かに前回〃部屋〃が開かれたのは五十年前であり、父上より前の
時代だ。しかし、父上は全て御存知だ。あの時は全てが沈黙させられ
たと言うにも関わらず。その理由を知っているのが何故であるのか
ですら、教えて下さらない」

「……何故であるのかすら、ね」

その言葉に少しばかり引つ掛かりを覚えたが、彼は独白するように

続けた。

「もつとも、僕でも知っている事は有る。五十年前、『部屋』が開かれた時、一人の穢れた血が死んだ」

「……待て。死んだ？」

「おや、知らなかったのか、ステイーブン。そうだ、死んだとも」

ドラコ・マルフォイがニヤニヤと笑うが、それを気にせず考えに沈む。

死んだのであれば、それは僕の仮説、ハーマイオニー・グレンジャーに対して伝えなかつた予想しうる怪物、サラザール・スリザリンが遺した遺産の正体としては真つ当だった。逆に言えば、今回誰も死んでいないからこそ、現在の状況が奇妙にしか思えず、去年のように校長室に怒鳴り込みに行く気が——名探偵気取りの自惚れた行動をしに行く気がしないのだ。

けれども、少なくとも五十年前は違つたらしい。

『幻の生物とその生息地』に記載されている蛇の王。バジリスク。

どうやら「マグル」の言語と対応しないらしく、小さな蛇では無いようである。だが、その生き物は一睨みで即死に至らしめるという点は共通している。そして、魔法界ニユート・スキャマंडーの魔法生物の権威ダーによる見解では、パーセルタングのみがそれを操れる。成程、サラザール・スリザリンの後継者が操る秘密の部屋の怪物としては、余りに相応しい存在と言える。

であれば。

前回に秘密の部屋が開かれたというのは、事実の可能性が高く。

翻つて、一人の死人も出ていない今回は、秘密の部屋が開かれた可能性は酷く低い。

そう結論付けるのが妥当な筈である。嗚呼、それが論理的というものだ。

だが……しかしだ。

ハーマイオニー・グレンジャーは、秘密の部屋が開かれた事を半ば確信していた。それは単純な勘かも知れないが、彼女がそう感じているというだけで僕には検討する価値が有るのも確かである。それは

間違いなく僕には無い物の見方であるからだ。

何より、スネイプ寮監が取った行動の意図を考えれば、今回もまた秘密の部屋が開かれたというのが、酷く腑に落ちる結論を導けるように思えたからだ。

そもそも僕は秘密の部屋を神話だと考えていた。けれども、前回に開かれた事が有るのであれば、要するに秘密の部屋が架空では無く現実存在するのであれば、全く話は変わってくるのでは無いだろうか――？

「どうした、ステイブン。何か気付いたのか？」

流石のドラコ・マルフォイも黙り込んだ僕が気になったのか、僕へと声を掛けてくる。

その瞳には、己を利する機会を逃すまいという卑しい輝きが存在する。こういう勘の良い所は彼の才覚の顕れであり、そしてまた決して油断出来ない所であるとも言えた。

だから、僕は努めて嘘を吐かないように返答をする。

「いいや、事件の真相が解るような気がしたんだが——深く考えた結果、どうやら僕の勘違いだったらしい。スリザリンの継承者についても、解らない事だらけだ」

平然とそう言い切ってみせた僕の顔を彼は暫く見ていたが、その後、不機嫌そうに嘲笑した。

「まあ、そうだろう。お前にスリザリンの継承者が誰かなど解る筈が無いだろうな、この僕でさえ知らないのに。……あーあ、スリザリンの継承者が僕に正体を明かしてくれないものかな。一言でも耳元で囁いてくれれば、僕は存分に協力をしてやれるんだが」

そう言ったドラコ・マルフォイに、恐らくハリー・ポッターが喰い付く。今回陰で糸を引いている人物について聞くと、彼はあっさり心当たりが無いと返答する。

そして、彼等はそれを契機として、矢継ぎ早に質問を続けていく。前回の部屋を開けた者の末路、アズカバンについて、マルフォイ家の館の立ち入り調査と、マルフォイ家の「秘密の部屋」について。勿論、僕にとってそれらは残らずどうでも良い事だ。

もつとも、彼等の好奇心が尽きる前に、タイムリミットが訪れた。彼等がここに来て約三十分足らずと言った所か。それなりに迷ったのかも知れない。スリザリンの談話室が、迷路のような廊下を進み湖の下まで潜り込んだ先の地下室^{dungeon}である以上、グリフィンドールである彼等は已むを得ないのであろう。まあ、ここに居ないハーマイオニー・グレンジャーは当然事前調査をしていたのだから、居ない以上当然であるのかもしれない。

事情を知っていれば魔法薬の効能が切れつつあると解る兆候を示した彼等は、下手な言い訳を残した挙句、まさしく脱兎として駆けていく。

それを見送るドラコ・マルフォイの表情は、少しばかり間抜けさを感じさせるものだった。

「僕はずつとあいつらがウスノロだと思っていたが。あいつらもやろうと思えば、あんなに早く動けるものなんだな」

ズレた感想を抱く彼に、真実を告げる必要は無い。

ただ、代わりに忠告してやるべき事は有った。彼等の馬鹿げた正義感に基づく行いを密告する気は無くとも、必要以上にプライバシーを侵させる事まで許す気は無い。

「マルフォイ。君の館の『秘密の部屋』について、だが」

「?」 何だ、ステイブン。それがどうかしたか?」

「悪い事は言わない。君がその部屋について他の人間の居るような場所^所で語ってしまった事を、いますぐ君の父上に伝えるべきだ。それによつて君は叱責を受けるかもしれないが、後にその事が明らかになるよりは良い事に違いないだろう」

僕の言葉に、ドラコ・マルフォイは怪訝な顔をする。

「何故だ?」 ここはスリザリンの巢だぞ?」 まさか、身内に対してそんな馬鹿げた密告をするような恥知らずが、まさか居る筈も無いだろうに」

それに関しては全くもって正しいだろうが、今回は事情が違うのだ。

「身内に対しても絶対に秘すべき事は有る。信頼するという事は無闇

矢鱈に喋るといふ事では無い。秘密は明かされてしまえば秘密では無いんだ。何なら、僕がルシウス・マルフォイ氏に直接手紙を送つても良い。氏は僕に同意してくれるだろう」

ロナルド・ウィーズリーの親が、息子からの情報を真正直に信じるとは限らない。ポリジュークス薬を用いて聞き出したなど言えない以上、それは出所が不確かな情報だからだ。だから、見過ごされる可能性も決して低いものでは無かった。

しかし、一方でルシウス・マルフォイ氏が僕と同じように考える可能性は低くないように思えるのだ。実際に今回の件で魔法省に調べられる事が無くとも、ドラコ・マルフォイが一家の秘密を公然と暴露したのは事実なのだ。そのような不用意な真似を息子の行いは、間違はなく氏は好まないに違いない。

当然の事ながら、半純血の話は何処まで真剣に受け取るか、そもそも手紙を読まずに捨てられないかという懸念は有るが、それなりに勝ちの公算は有るように思える。

そんな思いと共に言つてやれば、彼もマズいかもしれないと心が動いたらしかった。

「……君が、僕を陥れようとしているんじゃないだろうな」

「だったら、君に対して何も言わずに魔法省の役人に投書している。感謝も何も不要だ。僕の事をルシウス・マルフォイ氏の手紙に書く必要すらない。少なくとも現状では、氏がどう反応するかまだ不明確だからな」

「……君に従う訳では無いが、君の言葉に理の有る事は事実だ」

彼は明らかに気の進まない表情を浮かべた後、踵を返して自室へと向かっていく。

文面を練る必要が有る都合上、実際にふくろう便を出しに行くのは先になるだろう。

それを見送った後、僕は立ち上がって図書室へと足を向ける。

一連の襲撃により、規則上は、談話室外に出る際に首席か監督生に伝える事になっているが、教授の監視が行き届かない冬季休暇中、自分が襲われるとも考えていない純血の監督生、しかも相手が半純血と

もなれば、どんな対応をされるかなど解りきついている。当然のように外出を許された。マダム・ピンスへの言い訳が面倒では有るが、長居しなければとやかく言われもしないだろう。

調べるべきは、五十年前の事だ。

図書室に保存された『日刊予言者新聞』の過去の記事。

回復可能な石化については報道規制も出来るだろう。だが、死人までを隠す事は——遺族に対する口止めへの協力等を求める事を考慮すれば——出来ないに違いない。

勿論、真正直に蛇の王によつて殺されたとは報道される事は無いのは解りきつている。また、マルフォイの言葉通り、秘密の部屋がきっかけ五十年前に開かれたとも限らない。年月が不明確な可能性もある。しかし、毎年毎年ホグワーツで死人が出る事など考えられないから、探すのに苦勞はしないだろう。

不吉な予感と共に僕は図書室へと赴き、その記事を見つけた。

前後の年代を探す事も予定していたが、まさしく五十年前だったのは幸運だった。

マートル・エリザベス・ワレン。

ホグワーツにおいて不慮の事故で死んだ少女。

その名前に心当たりが有る訳では無い。

しかし、あの三人組が最初の事件に居合わせた際の下手な言い訳に纏わる噂の中で、少しばかり耳にした事が気に掛かった。すなわち、ホグワーツで死に、外部で騒ぎを起こした拳句、魔法省によつて再度ホグワーツに送り返された“穢れた血”のゴーストが居るのだと。

後は、そこら辺をうろついている適当なゴーストを探し出して——もつとも、犠牲者の存在により多少苦勞したが——名前を告げ、居場所を聞くだけだった。

正直言つて、左程期待していなかったと言つて良い。そのような僕が偶々記憶していた不憚なゴーストが、偶々五十年前の犠牲者であるという事は普通有り得ない。

だが、果たして彼女は、嘆きのマートルはそこに居た。

どうやらグリフィンドール三人組は彼女のトイレの中でポリ

ジューズ薬の調査を行っていたらしい。片付け無いままになっているところを見ると、恐らくハーマイオニー・グレンジャーに何らかのトラブルが発生したのだろう。もつとも、遠からず戻ってくるだろう事は予測出来たし、滞在していて気分が良い物でも無かったから手早く要件を済ませる事に越した事は無い。その際、鍋から少しばかり薬品を採取したのは余談だろう。

そしてトイレの隅に居た彼女から、彼女が死んだ時の事を聞いてみれば、確認までは得られなかったものの必要な情報は得られた。

何故か彼女は僕に———というか、僕のローブに対してのようすら見えた———酷い恐怖を感じているようだったが、その御蔭で話がすんなり進んだのは歓迎すべきだった。僕が秘密の部屋を探したい訳では無く、ただ彼女を殺した存在を知りたいだけだったというのも、会話が円滑に済んだ一つの理由なのかもしれない。

変な外国語。巨大な黄色の目玉が二つ。

前者はパーセルタング。後者の方は、成程、教科書通りの特徴だ。

後は、答え合わせをするだけだった。

そして、その結果が去年以上に不愉快な真実となるであろう事を、僕は半ば悟っていた。

元々、確認するつもりでは有ったのだ。

今回秘密の部屋が開かれた訳では無いという結論で有っても———つまり、五十年前と違うので有っても———簡単に裏付けを取れる手段が有るならば、それを躊躇う気など無かった。

勿論、ハーマイオニー・グレンジャー経由が一番穏当では有り、当然に答えを得られるだろう。しかし、今回と五十年前がほぼ同一であるとする予測してしまった現状において、それを選ぶ事は出来なかった。

彼女は少々聡明に過ぎ、僕の反応から何かを読み取る可能性は十分考えられた。何より、彼女に対して直接言い逃れが必要となる状況は、可能な限り避けたかったのだ。

グリフィンドールの談話室から出た瞬間を見計らって、僕はハ

リー・ポッターに詰め寄った。

このように、秘密の部屋の怪物を恐れて大半の生徒が帰宅している状況は、殆ど誰にも接触を見られずに済むという点において、非常に都合が良いと言えた。もつとも、数時間待つ羽目になったのはうんざりしたが。

「ハーマイオニー・グレンジャーは？」

ハリー・ポッターは怯んだ顔をし、ロナルド・ウィーズリーは露骨に嫌悪を示した。

恐らく、去年の事が脳裏によぎったのだろう。賢者の石の守護について彼から答えを盗み取り、尚且つ加点劇を演出したのは記憶している筈だ。正確には彼から得た答えは全体において決定的な事象でも無く、予測を外してすら居るのだが、彼にとつての認識を変えるものでは無いのは間違いない。

もつとも、ハリー・ポッターが答ええないという事は殆ど予想していなかった。彼は『異常』であるが故に、奇妙なフェアネスさを見せる事は去年から解りきっていた。

その予測通り、彼はロナルド・ウィーズリーの制止に気付きながらも無視して、ハリー・ポッターは僕に顔を近付けながら、囁くように言った。

「別に襲われた訳じゃない。彼女は一応元気だよ」

僕は頷き、しかしもう一つの言葉を紡いだ。

それが気になっていたのは事実だが、本命は後の方だった。

「ギルデロイ・ロックハートの近くで、何か怪しい声を聞いた記憶はあるか？」

「え？ それは無——いや、三階の部屋辺りでの事はそうかもしれない。フィルチの猫が襲われた時、確かあいつの部屋の近くだったから。つて、え？ 何で君がそれを——」

決まりだ。間違いなかった。

ギルデロイ・ロックハートについても気になっていたのは事実だ。

しかし、最も重要なのは、ハリー・ポッターが——パーセルマウスが怪しい声を聞いたという点だった。

バジリスクは誰にも目撃されていない。となれば、その蛇の移動手段は、恐らく壁の中——パイプと言った所か。

勿論、それが解った所で何ら意味が無い。階段すら御行儀が良くないホグワーツにおいて、外から見えないパイプが大人しく一箇所留まっているとも思えない。加えて僕の記憶によれば、十八世紀頃にホグワーツでは配管工事が行われているにも関わらず、秘密の部屋は今でも秘密のままである。隠蔽工作に従事した者が居るか、或いは入口から侵入出来ない魔法的な守護が為されているのか。

何にせよ、単純な物理的手段で見つかるように無いのは、秘密の部屋の発見の為にホグワーツの解体・発破作業を進めた大魔法使いが居ない事から確かなように思える。

困惑したままの彼を後目に、僕は乱暴に彼を突き飛ばした後、僕は踵を返す。

今は他人の目が無いとも思えたが、一応、グリフィン^敵ドールの談話室前なのだ。用心する事に越した事は無かった。

もつとも、その瞬間に彼の手に紙を押し付ける事もまた忘れなかった。はつきり言って、それは重要では無いし、別に大した事を書いてある訳では無い。『スリザリンの継承者が用いている手段は依然として掴めない。但し、五十年前と今回は繋がっているように思える』。言ってみれば、それは先の質問を多少誤魔化す為の迷彩に過ぎなかった。

ハーマイオニー・グレンジャーが、それを読んで真意に気付いてしまふかは解らない。

何故なら、その程度の事は、こんな乱暴な手段を用いずとも伝えられる筈だからだ。そこに着目すれば、『用いている手段』と敢えて書いた理由や、『五十年前と今回は繋がっている』という意味に当然に気付いてしまう可能性は有った。けれども、それでもそう記載したのは、後の言い逃れの事を考えれば、やはり彼女に完全な嘘偽りを述べる事は出来なかったからだ。

ハーマイオニー・グレンジャーは、いずれ秘密の部屋の怪物に襲わ

れるだろう。

彼女は適切な位置に居る。襲われた所で不自然では無く、襲われた後の影響としても素晴らしく都合が良い位置に。であれば、それが起こるのは、殆ど間違いないと考えられた。

勿論、それを未然に防ぐ事も考えた。しかし、今回の最も恐るべき問題——つまりスリザリンの継承者が一体どうやっているかが全く解っていない以上、それは不可能なのだ。

今までは、僕にとって問題なのは一貫して誰がであり、どうやってでは無かった。しかし、今は違う。確かに誰がというのは依然として問題であるものの、一番の問題は既にどうやってであった。そして、その答えは恐らく出ない。どんな形であれ、この事件が解決するまで、僕に判明する事は無いだろう。

ハリー・ポッターに渡したメモは、間違いなく事実を記している。仮にスリザリンの継承者が用いている手段を——彼がどうやって今回の事件を引き起こしているのかを突き止められていたのであれば、僕はその情報を適切に行使する事など何ら躊躇う事は無かった。しかし、それもまた解らない。解らない以上、僕には事態を静観する以外に採り得る手段など無い。

ハーマイオニー・グレンジャーが死を迎えない事を、祈る以外に無い。

去年と同じだ。秘密の部屋ごとバジリスクを消滅させる事が可能な最強の駒は、今回もまた全く動く気が無く、僕が全ての盤面をひっくり返そうと動くのを是としない。

そして去年と違うのは、今回の黒幕もまた、やはり僕が盤面をひっくり返すのを是としないであろうという事だ。現在は奇妙な均衡を保ったままである。そのバランスを破壊し、彼が最後の演出として“穢れた血”を殺す気になって欲しくは当然無かった。

嗚呼、解っている。

アルバス・ダンブルドアですら、全ての悪事を防ぐなど出来ない事は。

けれども、それがどんなに筋違いだと解っていても——スリザリン

の怪物の正体を見透かしながら放置しているあの老人に対して、まさしく大いなる善の為に行動している正義に対して、僕は尚、怨嗟の思いを抱く事を止められはしなかったのだ。

スリザリンの存在

つまるところ、今回における一つの大きな鍵は寮監の行動だった。ギルデロイ・ロックハート主催の決闘クラブ。あの時、ドラコ・マルフォイが出した蛇へとハリー・ポッターが話し掛けてしまったが故に、彼はスリザリンの継承者の最有力候補に成り上がってしまった。あの瞬間に、彼は Hogworts 中から疑念と猜疑の眼を送られる事が決ってしまった。

一見、あれは偶発的な事象に思える。噂だけ聞けばそうだろう。人伝に聞いたのでは、先の事実しか——ハリー・ポッターが、蛇に話し掛けたという情報しか得られまい。

彼等の決闘の前、まさしく蛇を召喚する直前に、スネイプ寮監がドラコ・マルフォイに何やら語り掛けていた。その事実を外部が得る事は、決して出来る筈が有るまい。

サーペンソーター。

ドラコ・マルフォイは、何故その魔法を選択したのだろうか。

変身術は大雑把に言って、Transformation Vanishment Conjuratiion 変容、消失、出現、復元Untransfiguration に分類する事が出来る。そして、直感とも合致する

であろうが、既に存在する物の物理的性質を変える変容よりも、中空から物を取り出す出現の方が、当然ながら遥かに難易度が高い。

厳密には出現呪文でも全くの無から有を取り出している場合というのは稀であり、また蛇を出現させる魔法は、鳥エを出現イさせる魔法スと並んで簡単な部類だとも言われているのだが、それは二年生が扱うのが簡単だという事を意味はしないのだ。

それを成功させたドラコ・マルフォイの才能はさておき、そのような難易度が高く失敗する可能性のある魔法を公衆の面前で試す必要は、彼自身に有ったのだろうか。

そもそも、その難易度に比して決闘においての効果が見合っていない。

仮にハリー・ポッターが蛇を恐れるという事実を知っているならば効果的でもあるが、そのような情報を得る機会がドラコ・マルフォイ

に無かったのは明らかであり、実際ハリー・ポッターは蛇に対して恐怖を示さなかった。本気で決闘に勝利する、或いはハリー・ポッターを真に害する気が有ったのなら、衝撃呪文フリベンドを選択した方がまだマシだった。

要するに、あの決闘クラブの全体の流れを見れば、蛇が出現させられたのは誰かの確たる意図無しには余程有り得ないと言えた。そして、その意図を、或いは干渉を為し得たのは、あの場においてただ一人しか存在しない。セブルス・スネイプ寮監である。

しかし、あの時点で、僕は何時もの寮監の嫌がらせ程度にしか考えて居なかった。多少寮監らしくは無いと思ってはいても、それ以上考えを進めなかった。

けれども、それは浅はかだった。

考え直してみれば、その事は歴然としていた。

蛇を出すのがハリー・ポッターに対する嫌がらせに成り得るのは、彼の恐怖の対象が蛇である事を知っている場合か、ハリー・ポッターがパーセルタングでは無いかと予想している場合である。そして、前者についてはドラコ・マルフォイと同様の理由で否定出来る。

すなわち、寮監は何らかの理由でそれを予測していたのだろう。その上でドラコ・マルフォイを使って試し、立証された。恐らく、あれは意図された行動だった。

加えて、今現在において秘密の部屋騒動が起こっているという状況を考えれば、その怪物がバジリスクである事を示す狙いが含まれていたのは疑う余地も無い。愚かにも秘密の部屋を神話だと考えている人間で無ければ、当然に気付き得る可能性であった。

もつとも、ここで問題として浮かび上がって来るのは、そのような迂遠な真似をした寮監の意図である。

寮監は完全な私情で授業を進め、個人的な憎悪で加点減点を行う教授失格な人では有るが、さりとて彼はスリザリンである。たかがハリー・ポッターを学校全体から孤立させる為だけに、そのような行いをする筈は無い。嫌がらせをするにしても、もつと狡猾スマイトな手段は幾らでも存在するのだから。

端的に言えば、秘密の部屋の怪物がバジリスクである事、そしてハリー・ポッターがパーセルタングの可能性がある事。その二点をアルバス・ダンブルドアに伝えさえすれば、今年の事件は円満に解決した筈だった。

しかし——その行いを、寮監は選択しなかった。

勿論、スネイプ寮監がアルバス・ダンブルドアと敵対しているのであれば、伝えない事は不自然では無い。けれども、去年の遣り取りから、両者の間には互いに一応の——それでいて強固な——信頼関係がある事に疑いは無い。そもそも敵対して居るのであれば、ハリー・ポッターのパーセルタングを暴露する筈も無いのだ。それは、アルバス・ダンブルドアに対して、実質的に秘密の部屋の鍵を渡すという事なのだから。

だからこそ、寮監の真意を推測せねばならなかった。

スネイプ寮監がアルバス・ダンブルドアに直接的な接触を図ろうとしないような、筋の通った理由を。

そして、当然のように、一つの回答に辿り着いてしまった。

十一年前について調べれば、その事実には辿り着くのだ。イゴール・カルカロフを初めとする魔法戦争後の裁判。セブルス・スネイプ寮監が、死喰い人であると指摘され、しかしアルバス・ダンブルドアの保証によつて無罪放免となった事実。

その裏に、両者との間に何が有ったかは不明のままである。

しかし、確かな事実は、寮監がかつて死喰い人であったという事であり、確かな予感はその第二次魔法戦争を予見している老人ならば当然それを「元」にするつもりが無いだろうという事であり、そうであるが為——今回の事件には闇の帝王が裏で糸を引いているが為、寮監はアルバス・ダンブルドアへと不用意に接触出来ないのではないかという可能性は、当然想定しうるものであった。

まして、アルバス・ダンブルドアの不可解な沈黙は、僕の仮説を強く裏付けた。

そう、寮監の行動によりハリー・ポッターがパーセルタングだと知った事で、あの老人は鍵を手に入れたのだ。スリザリンの内に継承

され続けてきたからこそ秘密を秘密のままにし、けれども今まさにグリフィンドールに転がり込んできた鍵を。

本気で秘密の部屋を潰そうとするならば、介入する機会は何もない存在した。

今となつては比肩すべき者が無い魔法力を行使して、秘密の部屋ごとバジリスクを葬る事は、今世紀で最も偉大な魔法使いには決して不可能では無かった。

事情を説明すれば、ハリー・ポッターはあの老人に喜んで助力した事だろう。別に彼を部屋の中に入れ、また怪物と対面させるような真似をする必要は無い。ただ案内人として、部屋を探させるだけに徹させれば良い。千年の神話を暴くだけでもハリー・ポッターは十分な名誉を得られるし、何よりスリザリンの継承者（殺）という不名誉を返上して針の筵から脱却出来るのだ。如何に英雄志願の彼とて、多少の不満は表せど、我儘を言いはしないだろう。

だが、アルバス・ダンブルドアはそうしなかった。

あの老人がそのような怠慢をする理由は——やはり闇の帝王以外に考えられない。

彼は誰がというの確信している。何が一連の石化事件を引き起こしているのかも見透かしている。しかし、恐らくどうやってが解っていない。

去年彼は闇の帝王を塵と表現したが、その言葉から考えるに、普通では秘密の部屋を開ける状態では無いのだろう。けれども、厳然たる事実として、今秘密の部屋は開かれている。だからこそ何等かの手段を——あの老人の長い生ですら見た事が無く、限られた知識しか保有していない魔法の深淵を用いて、闇の帝王はホグワーツに干渉している。あの老人は、恐らくそう考えている。

本心を述べれば、僕はそこまで確信していない。

僕が今回の裏に闇の帝王が居ると考えているのは、アルバス・ダンブルドアがそう考えているであろうからに過ぎない。

けれども、それを前提とすれば、様々な事が腑に落ちるといってもまた確かだったのだ。

十月末に秘密の部屋が開かれていながら、二月の今までたった三度の襲撃しかない理由も。死を齎す筈のバジリスクがただの猫一匹さえも殺していない理由も。スリザリンの生徒が被害者から徹底して避けられている理由も。アルバス・ダンブルドアが生徒の危険に全く動かず、あまつさえその職務怠慢を口実に学校から追放されようとしている理由も。

千年の神話に比して余りに小規模過ぎる事件は、ただ偏に闇の帝王がハリー・ポッターを秘密の部屋に誘い込み、殺す目的に用いられているというのならば、全て納得出来てしまう。

そしてだからこそ、ハーマイオニー・グレンジャーは狙われる。

彼女の犠牲は、ハリー・ポッターにその騎士道精神グリフィンドルを發揮させるには十分だろう。寧ろ、彼女以外に、ハリー・ポッターを秘密の部屋へと招き入れる為の動機と成り得る適切な人材は無いに違いない。彼女が「穢れた血」であるというのも都合が良い。誰もその結果に疑問を抱かず、それ故に、彼女の襲撃は止められない。

未然に防ぐ事は出来ない。アルバス・ダンブルドアですら、今回における闇の帝王の手管を未だ突き止めてはいないのだ。完全に動向を把握し、寮監に監視させていた去年のクイリナス・クイレル教授と――敢えて賢者の石を餌にホグワーツに招き入れるような攻勢の手段を用いたのと違い、今回は完全に守勢の手段、それも後手の手番を選ぶ事を余儀なくされている。

だからこそ、その手段手段を突き止める為に、彼は形振り構わずバジリスクを滅ぼすような真似を自制し、闇の帝王が策略を巡らせるのを是としていく。

あの老人は、「次」を見据えている。

今回の手段を再度用いられた時、そして今回とは違って真にスリザリンの継承者らしく行動された時、出る犠牲者の数は今回とは比較にならない。被害者には酷だが、言ってみればただ今回は石化しただけだ。回復可能な傷害であり、死んだ訳では無い。

しかし、恐らく「次」はそうならない。老人にはその確信があるからこそ、今回の許容できる限度の襲撃を黙認し続け、座視したままに

居る。

そして、それに気付いた所で、僕に出来る事は無い。

そう、今回だけを防ぐならば何とでもなるのだ。あの老人程に力技を用いる事は出来ないが、闇の帝王に存在を感知されていないという点において、幾らでも付け入る隙はある。けれども、アルバス・ダンブルドアと全く同じ理由で、僕が動かない事が最善なのだ。

闇の帝王に“次”を残せば、“穢れた血”が大勢死ぬ。

……ハーマイオニー・グレンジャーも狙われ、死ぬかもしれない。

だから、僕が出来るのは、彼女が死を迎えない事を願うしかない。

これまでの犠牲者と同じように、闇の帝王が彼女の死を必須だと考えず、石化させるだけでハリー・ポッターを奮起させ、秘密の部屋へと誘い込むには足るのだと、そう考える事を祈るしかない。

ただ——彼女の生存を上げる為に、出来る事が有るならばすべきだった。

それが自己の無力を慰めるだけに過ぎないだろうと半ば理解していても、何も動かないままでは居られなかった。

ギルデロイ・ロックハート。

自称闇の魔術に対する防衛術教授。

正直な所、彼が“秘密の部屋”に参与していないという可能性は、何ら消し去れては居ない。バジリスクの操作に関していえば、そこに個人的な能力というのは必要とされない。ただ、パーセルマウス——サラザール・スリザリンの血筋で有れば良いだけだ。

そして、その能力は、脈々と受け継がれるとは限らない。それはハリー・ポッターがパーセルタングを発現せしめたという事実に現れているように思える。サラザール・スリザリンがどれだけ子孫を残したか知らないが、彼は千年前——つまり、人間で言えば最低でも約十世代前の人物だ。パーセルタングが血筋さえあれば必ず継承されるというものであれば、パーセルタングは魔法界に溢れ返り、秘密の部屋は毎年のように開かれ、過去の大魔法使いが当然に気付いていた筈だ

ろう。裏を返せば、それだけ稀な能力で有ったというのは確かなのだろうか。

だからこそ、嫌疑の晴れていないギルデロイ・ロツクハートと対峙するというのは、相応のリスクが有るのは言うまでも無い。

ただ、今回に限っては、その是非を殆ど確実に確かめられる方法が存在した。

当然の事ながら、それ以前にやるべき事はやった。

ドラコ・マルフォイという情報源はその最たる物だった。

もつとも、さして強い根拠というのは得られなかった。

彼が冬休みにホグワーツに残ったのは、アルバス・ダンブルドアを追放する為に両親が各所を飛び回っているからだという事と、その追放計画が動き出したのは学期前——つまり、秘密の部屋が開かれる以前の話であるらしい事、そしてギルデロイ・ロツクハートの教育方針には夫妻共に大きな侮蔑と嫌悪を示している事が得られたのみだ。

後者の二つの事実は、ルシウス・マルフォイ氏がこの事件に関与している可能性の増加と、ギルデロイ・ロツクハートの関与の可能性の低減を意味したが、やはり確定的とは言えない。

だからこそ、確認を取るべきはただ一人しか居なかった。

セブルス・スネイプ寮監は——“元”死喰い人は、恐らく闇の帝王との兼ね合い故にあの老人とは直接接触出来ない。

けれども、スリザリン寮生がスリザリン寮監に私的に相談するという行為は、決して可笑しい物でも無いのだから。

勿論、機嫌を逆撫でする事は当然に予測出来た。

石化騒動。決闘クラブ。ギルデロイ・ロツクハートに対して、敵意どころか殺意を抱いているのは——当人以外には——客観的に明らかだった。そして、それを不用意に突く真似は、可能であれば避けたかったし、実際今までそうして来た。

だが、ここに至ってはそんな事は言ってられない。最も優先すべき事を考えれば、寮監の不興を更に買う事など、これから五年間を考えなくても尚無視出来るリスクだった。

「——アレは小物だ。既に我輩はそう言った筈だが、レッドフィール

ド」

案の定、僕の質問に対し、寮監は盛大な嫌悪を表情に表した。ただそれでも寮監は、去年と同じように、話を聞く事自体を拒絶しようとしなかった。

魔法薬学の教室に備え付けられた研究室の中、座ったままの寮監は、立っている僕に真正面から向き合っていた。

「僕も覚えていますよ。しかし、状況が変わったんです」

「我輩には何も変わったように思えんがな。まあ、それは御互いの価値観の違いか」

相変わらず底の読めない瞳が、僕を射抜く。

それは何時覗き込んでも深かった。これ以上というのは、僕はアルバス・ダンブルドアしか知らない。いや、あの老人すらも超えているのでは無いかという感覚すら抱いてしまう程に、寮監の瞳は途方も無く昏かった。恐らく、それは寮監が歩んできた生——憂鬱と苦杯、そして宿怨によって磨かれてきた物に違いなかった。

「それで、貴様は何を目的とする？ あの愚物を追放する手段があるならば、寧ろ我輩の方から聞かせて欲しい物だが？」

「残念ながら違います。去年はレイブンクローでしたし、今年もレイブンクローです。だからこそ、僕は貴方から情報を得たいと考えている」

「それが我輩に何の利点も無いというのは目を瞑っておいてやろう。しかし、何の為に？」

「要するに、僕は保証が欲しいんです」

僕の言葉に、寮監は冷やかに笑った。

「そんな保証など無い。敵と直接対峙するに際して、己が全くの無事で居られるという事など幻想だ。それが許されるのはただの一握りだけで有り、我らはそうではない」

「ですが。最も危険な類のモノが何かというのは、僕も寮監も同意出来る筈ですが。そして今年も同様の事が起きてはいないかと疑っている」

一人はアルバス・ダンブルドア。

そしてもう一人は、やはり言うまでも無い。

当然ながら寮監に伝わらない筈も無く、不機嫌さを滲ませて、しかし確かに吐き捨てる。

「優れた打ち手はどんな駒で有っても上手く扱ってみせるものだ。だが、選べるのであれば、ロックハートのような不出来で、利用価値も無い駒を選ぶ筈もない。当然ながら、それを献上する事など以ての外だ。揺ぎ無い美学を有する者にとって、それは侮辱でしかないのだから」

……何だかんだ言つて寮監は話が早くて助かる。

その言葉はギルデロイ・ロックハートに対する嫌疑を絶対的に否定するもの。

あの老人の言によれば、去年の闇の帝王は塵に等しかつたという。そして、前回は選べなかつた一方、今回は選ばれたのだと寮監は示唆した。

賢者の石を手に入れられなかつた存在が、たった一年足らずで駒を選べるような状況に改善しているとも思えない。故に、駒を選んだのは闇の帝王に近い誰か——死喰い人なのだろう。可能性として一番高いのは、やはりルシウス・マルフォイ氏なのだろうか。

当然の事ながら、引つ掛かる点が無い訳では無い。

今回における外部の者の関与を示唆しながら、しかし同時に今回には闇の帝王の深い関与が有るのだと老人は——この寮監も当然に考えている。その理屈は杳として知れない。闇の帝王を知る者達が有する理解、或いは確信という物が存在するのかもしれない。

けれども僕にとつては、ギルデロイ・ロックハートが今回の共謀犯、ないしは実行犯として圧倒的に不適切であると知れただけで十分だった。

それが解つたのであれば、後聞くべきは一つだった。

もつとも、これはあくまで保険のような物に過ぎないのだが。既にあの男は、何の警戒対象にもならない筈なのだから。

「ギルデロイ・ロックハートの採用時の評価は？」

誰の評価とは名前を出しはしない。そして、それで互いにとっては

やはり十分である。

『どんなに悪い教師からでも、学べる事は沢山有る。何をすべきでないか、どうしてはいけないか』。……ふん、馬鹿々々しい物言いだ。物事全てから学びを得られるのは賢者のみだ。ホグワーツの学生はそれ程出来の良い頭を持っていない』

寮監の辛辣な評価は兎も角、解る事はある。

つまり、あの老人は、悪い教師だと解っていないながら招き入れた。

悪いというのは、単純な善悪では無いだろう。生徒を導く存在としての教師の適性という面では、この寮監ですら底辺クラスである事は間違いなかった。であれば、その悪いというのは単純に能力という面で劣るといふ事なのだろうし、実際その通りだった。いずれにせよ、クイリナス・クイレル教授と違う理由で雇用されたというのも明らかだ。

そして、恐らくはこれ以上得られる情報は無い。

僕はそう感じ、しかし僕が感謝を示そうとするのを制止するかのようには寮監は口を挟んだ、

「……レッドフィールド。生徒であれば何時でも助けて貰えると思っ
ていたら大間違いだ」

「解っています。前回は例外的だった事くらいは。そして、何時も何時も助けを期待すべきでない事くらいも」

偽りなく、僕は寮監に対して頷きを見せる。

寮監は、必要な犠牲を必要と割り切れる人間であった。そしてそれが僕であった場合、当然に寮監は見捨ててみせるだろう。

如何なる理由が存在するにしろ、寮監にとって唯一安否を気にするのはハリー・ポッターのみであり、それ以外は寮監の関心の外に在る。去年は片手間に防げる程度であったからそうしただけで、寮監があの老人と接触する事すらも控える今回においては、危険というのは比較にならず、絶対的に助けを期待出来ない事だろう。

けれども、僕の返答に対して、寮監はどういう訳か引き下がらなかった。

「……ならば、何故、君は——お前は動こうとする？」

その瞳の内には、見間違えようなない疑問の色が揺らめいている。「去年と同じだ。卓越した打ち手同士の試合に、余人が割り込む意味など無い。寧ろ、それは本来輝かしい物であるべき物を愚劣に貶め、余計な無駄と混乱を招く事となる。去年は見逃しはした。だが、今回は違う筈だ。たかが生徒が介入し、干渉する余地は無い。身を縮め、全てが終わるのを待つのが最善だ」

寮監は、やはり正しい。それは解っている。

しかし、それに対して、僕が言える事は一つだった。

「僕は去年も言った筈です。人は可能性のみで恐怖出来ると」

「……それがどうした。可能性は可能性に過ぎない。そして、恐怖を抑え込める事こそ、人間の理性の証明だ」

「そして、祈りだけでは限界が有る事を直視するのも理性の筈だ。今回のコリン・クリービーも、ジャステイン・フィンチーフレツチリーだって、その瞬間、祈り、願い、そして助けを求めていた筈だ。だが何も起こらなかった。彼等は見捨てられ、犠牲となった」

「違う。その二人はそれで済んだだろう。我輩が言っているのは――」

「――同じ事ですよ」

無礼と解っていて尚、僕は言葉を差し挟む。

「全ての悪事を防げる存在は居ない。人の手は二つしか無い。そして、あれは最後まで躊躇う事はしても、それでも最後の最後には断固たる決意の下に見捨てられる人間だ。であれば、己が為すべき事を為すしかない。たとえそれが無駄に等しいと理解していても、少しでも可能性を上げられるのであれば止められるものでは無いでしょう」

「――」
何故かは解らない。けれども、僕の言葉に寮監は酷くたじろいでしまった。

まさしく痛い所を突かれてしまったというような、見ようとしなかった物を見せられたような。そんな苦渋と後悔、そして嫌悪と怨嗟を混ぜ込んだような表情。

……思えば、この寮監とあの老人の関係も不思議な物だ。

殆ど全てのスリザリン生が、あの老人に対して相容れないと感じ、嫌悪を抱いている。そして、この寮監もまた他ならぬスリザリンなのだ。その内心など容易に伺える。だがそれでも、あの老人に譲歩し、助力し、その走狗になる事を是としている。果たして、その裏にはどれ程強固な覚悟と信念が存在しているというのだろうか。

それを見透かそうとする気持ちだが、僕に無かったとは言えない。

実際、寮監には伝わったのだろう。寮監は一度瞳を閉じ、そして開いた後は、何時も通りの感情を見透かせない仏頂面に戻っていた。

「……ギルデロイ・ロックハートが君の目的の為の手段として適切か否かは一端置いておく。ただ、レッドフィールド。その執心は過剰だ。それだけは告げておこう」

寮監はそこで一度言葉を切り、しかし言葉を止める事はしなかった。

「何せ、あれに必要な以上の疑念と猜疑を抱いているというのは論外だ。真に優れた魔法使いは物の本質を、根源を読み取る。敵の事を敵以上に理解し、愛慕し、その上で相對する。卓越した“開心術士”が決闘にも優れるのは当然の話だ。相手の根幹に通じていれば、策を読むのも、罠に嵌めるも、敵わないと知って自ら先に逃走する事さえも、全ては自由自在なのだから」

唐突とも思える寮監の長口上に対し、僕は何も口答えする事無く拝聴する。

意図は知れない。だが、言葉の内容からすれば、それが先達が後進に対して貴重な教えを授けようとするものである事は明らかだったからだ。

「スリザリンがどういう物か、心に留めているだろうな」

言葉は質問の形式だったが、それは答えを求める物では無かった。

実際、寮監は僕の表情を一頻りねめあげた後、軽く頷いて言葉を続ける。

「闇の魔術を使うというからと言って、それはスリザリンに近しき意味はしない。種々の魔法を悪用する場合も同じだ。確かにそれらは我等と親和性を有する。特に闇の魔法に惹かれるのは、我等にとつ

て半ば習性であるともいえる。けれども、当然の事ながら闇は悪では無い。我々にとつて、それらは目的を遂げる為の一道具に過ぎない」

「……」

「闇の魔術の行使においては創意と柔軟が要求される。スリザリン内での処世においても臨機と狡知が求められる。しかし、いずれもそれらは確固たる目的の下に行われなければならない。前者で有れば、憎悪、害意、殺意を。後者で有れば、野望、防衛、実利を」

つまり。

「……ギルデロイ・ロックハートは絶対にそうでは無いと？」

「それを確信出来ないのが、君が未だスリザリンとして不十分な証なのだろうな。開心術によって暴かれた個人的事柄、つまり組分けについては通常聞くべきでは無いが。君はレイブンクローに組分けされようとしたのでは無いか？」

「……」

「当たりか。嗚呼、最終的に君はスリザリンだったのだ。それをとやかく言うつもりは無い。されど、己に近しく思えるからと言って入れ込み過ぎるな、という事だ」

寮監は嘲笑を、しかし同時に憐憫を示しながら言う。

「レイブンクローは鷲を、天空の王を象徴する。その蒼の色も大気を象徴する。あれらは自身が叡智の寮であると信じているが、我輩に言わせれば敵意と拒絶の寮だ。その点において、貴様が親和性を見出す事は何ら驚くに値しない。彼等もまた、蛇と近い面を持っている。もつとも、それは我等と決定的に否なる物でも有るが」

「……前者は良いでしょう。しかし、レイブンクローの性質は受容でもあるのでは？」

「大空の下に居る人間が青色になれるか？ 同じ大気に包まれば、全ての者は同類か？ 受容は同化を意味しない。叡智も、独創も、突き詰めた果てに行き着くは隔絶なのだ。故に、あの寮は内輪で団結出来ない。ロウエナ・レイブンクローの髪飾りが彼女の死と共に消えたように、あの徹底的な個人主義は、今だけを追い求めて次を見据えていない。それが我らとの違いだ」

「……………」

語られたのは、あくまで寮監の私的な見解に過ぎない。僕の見方と一致しない点があるのも確かだった。

けれども、それが僕より遙かに長くホグワーツを見て来た者の貴重な私見であり、また腑に落ちる点があるのも事実だった。

成程、であれば、ギルデロイ・ロックハートは骨の髄までレイブンクロー的で、そしてスリザリンは決して彼を同胞として歓迎し得ないのだろう。

彼のホグワーツでの所業は、彼のこれまでの名声を明らかに毀損している。

ホグワーツでの生徒はたかが千程度。しかし、それらはグレートブリテン及びアイルランド全土から集められたのであり、多くの者には親が居る。必然、それだけ広範囲の影響力を有するのであり、まして、断片的であれ子供から伝え聞くギルデロイ・ロックハートの教育方針は、マトモな感覚を持っているのであれば当然に眉を顰めるものだ。あのマルフォイ夫妻ですら然りである。

勿論、単に毀損するから駄目だという安直な話では無い。確固たる目的意識の下に他ならぬ次を見据えて為されるのであれば——例えば、秘密の部屋を開く為に敢えて代償を支払う事を是としたのならば何の問題も無い。

特に、ここはホグワーツなのだ。ギルデロイ・ロックハートの過去の学び舎なのだ。当時も校長であったアルバス・ダンブルドア、彼を直接指導した三寮監、そして一時とはいえ学生時代を同じくするセブルス・スネイプ寮監。彼の過去の行いを忘れていない者達が未だ現役として存在するのだ。

それを理解して尚、汚名挽回を恐れず渦中に飛び込むというのであれば、口では侮蔑と軽蔑の言葉を吐きながらも、スリザリンは彼と手を握るのを何ら躊躇いはしないだろう。

けれども、単純に目先の利益に囚われ、自分の身の程を弁える事が無く、利益と危険を天秤で計る事もせず、ただその場凌ぎの快樂の為に行動するのであれば——それは間違いなくスリザリンから賛同を

得られまい。

そして、ギルデロイ・ロックハートがどちらの性質であると寮監が考えているか。

そんな事は、これまでを見て、今を見てもまた明らかだった。

「繰り返す。君は執心し過ぎている。去年の事が有ったか、君はレイブクローに入れ込み過ぎている。しかし、それはスリザリンの正道から外れている。半純血がそうなれない事は我輩も良く理解しているが、立ち位置を見喪う事はしてはならない」

お前は異質であると寮監は暗に言った。

「そして君は何処かでドラコ・マルフォイを最もスリザリン的な存在だと見ている節がある。それも誤解の一因なのだろうな。アレは確かな意思の下にそう在らんとしているだけで、未だスリザリンに心の底まで染まつている訳では無い。無論、長ずればいずれそうなるであろうが——少なくとも、今君と交流を続けているのは異端でしかない。その事は常に、深く意識しておくべきだ」

「……御教授、感謝致します」

ここまで言を尽くしてくれた理由が解らないが、本心の忠告だというの理解出来ている。

だから、僕は寮監に対して深く頭を下げた。もともと寮監は、その感謝を拒絶するように嘲笑を深めるだけだったが。

「理解したのであれば去れ」

先程の好意が幻であったかのように、寮監は端的に命令する。

「繰り返すが、我輩は生徒が自らの愚行によって報いを受ける事には感知しない。あの愚物と向き合った末に廃人になろうが、或いは殺されようが、我輩は一向に構わんし、気分を害する事もまた無いのだ」
「……？ 彼の性質が見たままの通りであれば、何ら警戒する必要も無いのでは？」

一瞬言葉通り立ち去ろうとしたものの、やはり質問せずには居られなかった。

僕が警戒していたのは、ギルデロイ・ロックハートが闇の帝王の影響下に有るかのみ。つまり、塵のような存在でありながら尚、己より

遙かに強大だった魔法使いと——アルバス・ダンブルドアすら上回りかねない怪物と対峙する羽目にならないかというただ一点だけだ。

そして違うのであれば、最早彼と直接対峙する事につき、何ら支障を感じるものでは無かった。彼は無能を装っているのではなく、ピクシー妖精すら制御出来ない真なる無能であり、決闘クラブを初めとするいずれの場面においても無様を晒す事しか出来ない道化の筈だった。

けれども、僕の言葉に対して、寮監は陰鬱な笑いと共に口を歪めた。「アルバス・ダンブルドアと同じだな。己が価値を見出す事が出来た物に対しては酷く熱心であるが、しかし逆に、見出せない物については君は——お前達は余りに冷ややかだ」

その最悪の侮蔑に対して、僕は何も返答出来ない。

何故なら、寮監が絶対の確信と共にその言葉を発している事が理解出来たから。

「無能であろうと常に牙を持たないとは限らない。スリザリンの猜疑と排外は、それを良く知るからだ。賢者が愚者に必ず勝つ訳では無い。弱者が強者を凌駕するという事もまた有り得る。我輩には、あの老人がそれを忘れているようにしか思えんがな」

偽典の伝道師

二月の初め、ハーマイオニー・グレンジャーは退院した。

未だに襲撃は、ジャステイン・フィンチーフレッチリーとニコラス・ド・ミムジー・ポーピントン卿以外、つまり十二月の中頃以降起こっていない。未だ気を抜いていない教授陣は兎も角、監督生達の監視は明らかにやる気を喪い始めており、周りのスリザリンも襲撃が続かない原因について喧々諤々の議論を交わしていた。

もつとも僕にとって、それは総決算前の一時的な平穏以外の何物でも無かった。

入院理由が何であろうが医務室は安全圏であった筈であり、しかし彼女はそこから出てしまった。一人になる機会があれば——そしてハリー・ポッターの秘密の部屋の謎への進捗次第では、彼女は襲われる。それは間違いないだろう。

ただ、闇の帝王が彼の動向を正確に把握しているのかは多少問題でもある。

一番良いのは、グリフィンドールの内側で観察する事だろうが、そのような手段など闇の魔術でも早々無い。ましてホグワーツは単なる古い城では無く、様々な魔法的護りによって生徒を肉体的・精神的に保護しているのだから猶更だ。

それが万能でない事は一連の秘密の部屋の被害を見れば明らかでは有るが、それは創始者の遺産であるからに過ぎない。闇の帝王の場合は別だろう。ただ監視をするに留まったとしても、決して容易では無い筈だ。

見切り発車的に事を起こすのか、或いは本当に状況を正確に把握する手段が存在するのか。僕の都合としては出来れば後者で在って欲しいのだが——僕にとって、ハーマイオニー・グレンジャーが早く気付き過ぎるのも困るが、全く気付かないままに事が起こるのもまた困るからだ——いずれにせよ、今回の事件の終結が近いのだろうかという事は予感していた。

僕が三人組の動向を知った手段は、言わずもがなハーマイオニー・

グレンジャーからのふくろう便である。

内容が内容である以上、詳細な内容は記載されていない。けれども、五十年前に秘密の部屋が開かれた事について何か新事実を掴んだような内容を記していた。

であれば、彼等はいずれマートル・エリザベス・ワレンに辿り着くだろう。そこまで行けば、秘密の部屋の扉はもう目前の筈だ。彼女の生前の行動を考えれば、あのトイレに入口があるかは別として、部屋に直接繋がるパイプが存在するに違いないのだから。

そして、そのふくろう便には、部屋について会って話したいという旨も添えられていた。

クリスマス休暇中にハリー・ポッターに渡していた紙片の事も有つて、僕が何かを掴んでいるのでは無いかと気になっているのだろう。

ただ、その求めに対しては、今は接触するには時期が悪いとして断った。闇の帝王が何らかの手段を用いてハリー・ポッターの周辺を見張っている可能性が排斥出来ない以上、一時的な接触は兎も角、余り長々と会話を交わすような真似はしたくなかった。

しかし絶対に接触する気が無い訳では無く、それは単に全く別のアプローチを目論んでいるからに過ぎない。

ギルデロイ・ロックハートに近付くのは簡単だった。

彼が教科書として扱う小説さえ熟読すれば良いのだから、これ程楽なものはない。その内容について多少踏み込んだ内容を話してやれば、嬉々として彼は乗ってきた。学期当初であれば女生徒でない僕へ真摯に対応する事は無かつただろうが、支持者の多くを喪った今であれば別だった。望みはしなくとも、彼は長々と彼の物語について「教授」してくれた。

無論、近付く手段が容易であるからと言って、それを選択した結果が精神的にどうであるかはまた別の話だ。他のスリザリンは明らかに自分の正気を疑っていたし、監督生が酷く親身な様子で医務室に行くよう勧めて来た事には流石に閉口した。一度誤魔化せば終わると思つたが、その後も何度も言われたので、余程正気を逸しているように思われたらしい。

もつとも、彼女と自然に——つまり闇の帝王の無駄な関心を惹かない形で接触する手段としては、僕にはこれ以上の物は考え付かなかつたのだ。

ただ、その手段ギルデロイ・ロックハートを選択した事について、僕の意地の悪さや、彼に対する関心の強さが多分に含まれていた事も否定しない。寮監は僕にレイブクロウへ執心しているのだと指摘したが、成程、それは間違っていないのかもしれない。地を這う蛇よりも、空を舞う鷹に憧れる。その趣味嗜好の自覚は確かに有つたのだから。

男と幾度か会話して見た結果、彼がスリザリン的では無いというのは明確に解つた。

寮監の眼は的確だった。彼の著作からも明らかだったが、彼は善の側に——悪を打倒する側に強く惹かれていた。生粋のスリザリンであれば、やはりそんな事は有り得ないだろう。

寮監も言及した通り、やはり闇は悪では無いのだ。

けれども、他の三寮はそれを理解しようとしなない。ギルデロイ・ロックハートもその例外では無かった。著作からは必ずしもそうでは無いと感ぜられるにも関わらず、彼の言葉からは、闇と悪を一緒くたにし、それらは遍く打ち倒されるべきという理念だと考えている事が単純に伝わって来た。

正直言つて、ギルデロイ・ロックハートとの会話は苦痛を通り越して拷問だった。

授業では解っていたが、それでも僕は彼の著作を読み込んだのだ。故に、僅かな期待を持っていたのだが、やはり男は授業で露呈し続けてきた通りの、憐れで無能な道化であった。そして、それを幾度と無く実感し、待ち望んでいたその機会が漸く訪れた。

「——おや、ステイブン君。また、僕に質問に来たのかい？ 熱心な事だね」

許可を得て中に入れば、何時も通り、気色の悪い部屋の中で、ギルデロイ・ロックハートは得意げに笑っていた。

闇の魔術に対する防衛術教授に割り当てられた、三階の個人研究室。その部屋は、無数の自分の写真によつて誇らし気に飾り立てられ

ている。

良くもまあここまで自分に酔える物だと思う。本人に対して殆ど敬意を抱く事は出来ないが、その中でも数少ない敬意を抱ける点はこれだった。

「全くもって、人気教授というのは辛いものだ。少しばかり軽い気持ちでホグワーツに来た事を多少後悔する位にね。『週刊魔女』の取材から逃げ回る方がどんなに楽か。嗚呼、心配御無用。君達に対して真摯に向き合わない事は有り得ない」

君達。

その言葉通り、彼の部屋には先客が居た。

それは言うまでも無く、ハーマイオニー・グレンジャーだった。

彼女は教授の前に置かれた椅子に、ちよこんと腰かけていた。彼女は一瞬僕に対して笑い掛けようとしたが、しかし取り繕うようにつんと視線を逸らした。

それは、彼女が今回の機会を単なる偶然だと主張したいが為の行動なのかもしれない。

ただ、どう考えても偶然で無い事は言うまでも無かった。僕の最近の動向を知れば、その小さな身体から零れ落ちんばかりに膨大な知的好奇心を持つ彼女が取るであろう行動など当然に予想出来る。誤算と言えば、グリフィンドールに噂が届くまで時間が掛かり、その分ロックハートによる拷問の回数が予想以上に嵩んだ点くらいだった。

勿論、彼女のそのような細かい仕草にギルデロイ・ロックハートが気付く筈も無い。椅子の上で気取った風に足を組みなおした後、己に酔いしれた甘ったるい声で僕に語り掛けてくる。

「しかし、残念なお知らせだステイブン君。私は今、ミス・ハーマイオニーからの質問を受けていてね。私の著作を読み込んでくれているファンに順位を付けるというのは申し訳ない事だが、彼女が先着である以上仕方ない事だが――」

「――いえ、先生！ 私は構いません」

椅子の上で気取った姿で肩を竦めるギルデロイ・ロックハートに、彼女は割り込む。

ただ、その顔は紅潮し、声もまた上ずっていた。

……男に対する彼女の想いが愛情と言った物に基づく物では無いのは傍から見ても明らかなのだから、取り立てて嫉妬する事は無い。けれども、話で聞いているのと実際に見るのでは、苛立ち具合が段違いだった。成程、スネイプ寮監を見て解っているつもりだったが、ギルデロイ・ロックハートは人を煽るといふ点においても天才だった。そのような僕の内心を他所に、二人の世界に入っている者達は話を進める。

「おや。良いのかい、ミス・ハーマイオニー。他者に譲るのは美德だが、しかし時として自らの力で勝ち取りに行かねばならない時があるのだよ。待っているだけでは何も手に入らない。私はホグワーツ時代にそれを十分学んだものだ」

「い、いえ。ロックハート教授が生徒を蔑ろにしない方だと私は解っていますから。それに、ステファ……ミスター・レッドフィールドの質問に対して、教授がどのような解答をされるかについても、私には関心が有ります。その、こう言った機会は中々無いですから」

「確かにその通りだ。他者の言動からも学ぶ事は大いに有る。勿論、私を観察する事以上の学びというのは世界に存在しないがね。——さて、ステイブーン」

怒涛のような会話を終えた後、酷く自然体にギルデロイ・ロックハートは僕に向き直る。

「ミス・ハーマイオニーは、私と君との歓談に同席する事をお望みらしい。勿論、君は気にしないだろうね？」

「……ええ。構いません」

「宜しい。ただ、この部屋には君の分の椅子が無い。君は立っていてくれたまえ」

魔法使いに有るまじき事を平然と宣う男に対して、最早何も思いはしない。

一々感情を動かしても仕方がないと、僕はとつとつに悟っていた。

セブルス・スネイプ寮監は何だかんだ言って付き合いが良過ぎるのだ。物事を真正面から受け止めすぎるといふか。寮監は僕をレイブ

ンクローに肩入れしていると嘲笑していたが、それを言えば寮監はグ
リフィンドール精神に惹かれ過ぎていて。自らの手で叩き潰さない
と気が済まない辺りは、まさしく彼等のそれである。

ともあれ、この状況が酷く都合が良い事に変わりは無い。もつと
も、ここまで上手く行くとも思っていないが。

ハーマイオニー・グレンジャーは彼の熱心な信徒の一人であるが、
唯一では無い。あのバレンタイン後ですら、そこそこの数の女生徒が
未だ彼に思いを寄せていた。ただ、それでもスリザリンの男子生徒と
居合わせた者は——たとえ憧れのギルデロイ・ロックハートが一緒
でも——たった一人しか居ないだろうと確信していたし、彼女は間違
いなく理由を付けて残りたがるだろうという事もまた予測が付いて
いた。

しかし、今は他の人間は居らず、ハーマイオニー・グレンジャーだ
けが居る。

どういう理由でこの状況が作られたのか知らないが、彼女と共にこ
の男と対峙する事は、保険の意味でも、個人的な感情の意味でも、注
文通りの状況であるのは間違いないかった。

「さて、今回は何の質問かな？ 『グールお化けとのクールな散策』に
ついて？ それとも『雪男とゆっくり一年』？ ……嗚呼、そう言え
ば確か、前回君は『狼男との大いなる山歩き』の、私が電話ボックス
に逃げ込んだ際の事に酷く関心を示していたね。そうだね、私と君の
間柄だし、今日は観客も居る。良いだろう。その事についてより詳し
く——」

「——本日、聞きたいのは、それについてでは有りません」

自惚れた男の妄言を、強制的に止める。

目的を殆ど達成した以上、著作以上の事を語らない壊れた蓄音機に
付き合うつもりが無かった。

そして、成程寮監の言う事も一理有るのかもしれないと感じて居
た。己がレイブンクローに肩入れして居なければ、このような事を聞
く筈は無いだろうからだ。

目的を完遂するのであれば、ここから直ぐに立ち去り、ハーマイオ

ニー・グレンジャーに対して見せるべき物を見せるだけで済む。そうしないのは個人的な執着に他ならない。

僕は、ギルデロイ・ロックハートに対して問うた。

「アルバス・ダンブルドアについて、貴方はどう思います？」

男は、明らかな困惑を露わにした。

部屋中の写真は、薄笑いであつたり、肩を竦めて首を振つたり、顎に手を当てて考えたり、呆れて宙を仰いだり、思い思いの行動を取っていた。しかし、そのいずれも、僕の質問の意図を凶りかねているのは確かなようだった。

「……言っている意味が解らないね、ステイブン」

「真つ当な質問だと思いますが、ロックハート……教授」

教授という言葉を発するのに未だに強い意思を必要とするのは困り物だった。

「貴方は輝かしい功績を有している。闇の力に対する防衛術連盟の名誉会員、週刊魔女のチャーミングスマイル賞五回連続受賞、そしてマリーリン勲章勲三等」

「あ、ああ……！　そうだとも。君がそれを忘れていないでくれて嬉しいよ。いや、私にとっては多少のスパイス的な、些細な物に過ぎないがね。私はその程度で収まるような器ではないと自負しているし、もつと凄い事をやつてのけるつもりだから」

ハーマイオニー・グレンジャーは困惑したままに、その視線を行ったり来たりしている。

彼女は聡明な魔女であるが、必ずしも賢明で無い場合が有り得る。この会話がどういう方向に向かっているのか、僕が何を真に問いたいか、僕が全く読めないのもあろう。そして、読めないからこそ、彼女は尊敬する『教授』の前での失敗を恐れて動けない。

ただ彼女は、分岐路の前で選択を迫られたからと言って、常に片方が正しい経路に繋がっている訳では無い事を知るべきであつた。いずれの道も断崖に繋がっている事は得てして存在する。

「しかし、対してアルバス・ダンブルドア。あの老人の称号もまた素晴らしいものだ。大魔法使い、魔法戦士隊長、最上級独立魔法使い、国

際魔法使い連盟会員。そして——マーリン勲章勲一等」

「……そ、それがどうしたかね？ 校長の業績など誰もが良く知っている筈だが」

「ええ。知らない人はいない筈です。そして何の意図も有りませんよ。ただ、ロックハート教授のこれからの、凄い抱負とやらについて聞きたいだけです」

視線を微妙に逸らした男に対し、僕は努めて冷静に語り掛け続ける。

「マーリン勲章の基準はある程度公にされています。勲三等は、魔法界の知識や娯楽への貢献。勲二等は、並外れた業績や尽力。そして勲一等は、魔法界における傑出した、勇敢さを示す行わないし他とは一線を画する行為に対する表彰」

勿論、基準は基準に過ぎない。

それを満たしていない、政治的理由で受賞した魔法使いも当然存在する。

けれども、大衆がその基準を満たしたと感じれば受賞出来る可能性が高いというのもまた事実なのだ。政治的とは、大多数に迎合的でもある事も意味するのだから。まして、魔法大臣が民主的な選挙によって選出されるともなれば余計にだ。

「ロックハート教授。魔法生物に関する研究では、我が校に先達が居ます。ニユート・スキヤマンダー氏という偉大な先達が。勿論、闇を打ち払う事こそを大望とする教授とはベクトルが違いますが……しかし、彼は勲二等止まりでした。だからこそ、貴方に聞きたいんです」
言うまでも無く、勲等の大小が人の価値を決める訳でも無い。

だが、この男が人からの価値を重視しているのは明らかだった。そしてそれ故に、僕は彼に対して質問を、挑発を投げ掛けざるを得なかったのだ。

どんなに言い繕おうとも、この男がホグワーツ内の殆どの人間から軽蔑され、馬鹿にされ、嘲笑され、それでも尚自らを喪わないで居られている事に疑いはない。それは一応の敬意に値する。だからこそ、それが断固とした信念と確信に由来する物なのか、それともあやふや

で容易に崩れるような現実逃避に由来する物なのかには関心が有った。

そして、どちらで在って欲しいと思っっているかは——先のスネイプ寮監の言葉を聞いた後でも、依然として何ら変化していなかった。

「貴方は、ホグワーツ教授のキャリアを終えた後。魔法界全体の為に、あの老人よりも更に偉大で特別な存在になる為に、一体何をすることもするのか。僕はそれを質問したいのです」

アルバス・ダンブルドアを踏み越えて行くだけの覚悟が有るのか、僕は聞きたかった。

関心と興味を抱き、聞きたいという強い欲望に駆られ、今まさに少なくない期待と共に答えを求め、そして——返って来た物はやはり期待外れなものだった。

彼の眼はしきりに泳ぎ、定まっていなかった。

部屋中のどの写真を見ても同じ。僕を真っ直ぐ見つめてくる物は一つとして無い。

彼は何も考えて居なかった。詳細で、具体的で、現実性のある指針^{ビジョン}を全く有していなかった。これまで通りを続けていれば全てが良い方向に向かつていくのだと、根拠の無い自信を持ち続けていた。当然の事ながらそれは、猜疑と疑念、そして野心に満ちたスリザリンに相応しい物でも無い。

……嗚呼、解りきっていた。

この男が他の同輩を——敬意を抱くべき教授達を軽んじる台詞は幾らでも聞いた。

ポモーナ・スプラウト教授の薬草学の知識を平気で貶め、セブルス・スネイプ教授よりも調薬や決闘が優れている事を誇りすらした。僕の知らない所で更にミネルバ・マクゴナガル教授やフィリウス・フリットウィック教授に対して軽率な発言をしていたとしても、何ら驚くにも値しない。

けれども、ギルデロイ・ロックハートがアルバス・ダンブルドアを軽んじるような発言は、ホグワーツにおいてただの一度も聞いた覚えが無かった。それは単純に敬意の顕れとも取れるし、普通ならばそう

取るべきなのだろうが、この男は普通では無かった。

つまり、結論としては至極単純だ。

ギルデロイ・ロックハートは、心の何処かでアルバス・ダンブルドアに敵わない事を認めてしまっている。

「……話を変えましょう。ハリー・ポッターについて、どう思います」
僕の言葉に、男は救いの糸が目の前に差し出されたかのように輝いた笑顔を見せた。

その顔に滝のような汗が流れていなければ、教科書に載せたい位に完璧な笑顔だった。いや、まあ、既に今年度の指定教科書には一応載っているが、それは良い。

「あ、ああ。ハリーの事ですか。全く困った生徒ですよ。私にも経験があります、彼は少しばかり目立ちたがり屋だ。『名前を呼んではいけないあの人』を倒したか何とかで多少有名だが、私に比べれば大した事は——」

「——しかし、先の基準に照らせば、彼はマーリン勲章一等に値すると思いませんか？ 彼は幼かったから受け取れなかった。けれども、"マグル"を大量に拷問し、殺戮をした悪の魔法使いを滅ぼしたのはそれに値する。さながらゲラート・グリンデルバルドに勝利し、勲一等を貰った校長閣下のように。そうは思いませんか」

ギルデロイ・ロックハートは、萎れるように口を閉ざした。

そして、ハーマイオニー・グレンジャーは僕の足をローブ越しに踏んだ。

その顔が微妙に男の視線を避けるような角度で、しかし確かな怒りに彩られている所を見ると、どうやら漸く、これまで僕が言わんとしていた真意に気付いたらしい。

もつとも、彼女の制止が無くとも続ける気は無かった。僕が闇の帝王の輝かしい業績について語った瞬間、男の瞳には確かな恐怖が横切った。去年の教授と異なり、この男が闇の帝王を滅ぼしに行くという事は、天地がひっくり返っても有り得ないだろう。

この世界から悪を追い払う事を大望として掲げて居ながら——けれども、彼はその為に何ら行動を起こす気は無い。ただ恰好が良いか

ら、そう豪語しているに過ぎない。

「……すみません、教授。不躰な事を言ってしまったようです」

僕は全くの本心から頭を下げる。

嗚呼、本心だった。聞くべきでない事を聞いた。ただその一点において。

そして、やはりギルデロイ・ロックハートはその機微について何ら理解を示そうとしない。彼の瞳には、自分の姿しか映っていない。

「い、いや構わないとも。君は確かに、前回までは私を酷く理解した質問をしてきてくれたのだ。今日は調子が悪いのかな？ 少しばかり馬鹿げた質問をした所で怒りを抱きはしな——」

「——最後に一つだけ。『狼男との大いなる山歩き』の記載について、僕は切実な疑問が有るのです。それを聞かせて頂いても宜しいでしょうか？」

「な、何だろうか？ 私の作品に関わる事ならば教授として答えよう。しかし良いかね、最後だ。もうそれ以上に質問は受け付けない」

慌てたように付け加えるが、彼は僕の質問自体を止めようとしなかった。

それは初めから解りきっていた事だった。彼は自身の著作を何よりも誇るからこそ、それに関わる問いから逃れられない。彼にとつて、その著作は絶対の自信の拠り所であり、正しく聖典だった。だからこそ、僕の問いを許してしまう。

そして、それは僕にとって酷く有り難い事でもあった。

如何にハーマイオニー・グレンジャーへ自然に近づく手段で有ったとは言え、彼の著作を読み込んだのは事実だった。何度も、幾度も、読み返したのだ。ギルデロイ・ロックハートが僕を自身の理解者と誤信し、好感と寛容を示すのも当然の話だった。僕は何の苦痛も無く、それらを行い、殆ど記憶するまでに至ったのだから。

はつきり言おう。僕は彼が紡ぐ物語に魅入られたのだ。

たとえ、本人がどうしようも無く見下げ果てた無能で有ったとしても、彼の作品が単なる虚構的創作に過ぎないとしても、書籍が語る英雄達の姿は生き生きとしていて、印象的で、精緻で、鮮烈だった。

彼が自身の名前を売る手段として写真集では無く小説という手段を用いたのは、そしてそれが曲がりなりにも成功を収めたのは、本自体の出来の良さと無関係である筈も無かった。そうでなければ、彼へ失望を示す者は最初から居なかつたのだ。そもそも期待していなければ、当然に失望する事も無いのだから。

加えて、僕を最も強く惹き付けたのは、その著作に記されていた単語だった。

究極的に言えば、それさえなければ、この男とここまで辛抱強く会話しようとせず、またその考えを読み取ろうともしなかつたかもしれない。殆ど期待外れに終わったと言っても、その事だけは偽りでは無かつた。

「貴方は非魔法族に対して、珍しく『マグル生まれ』に対して偏見を持っていない。ハーマイオニー・グレンジャーを、貴方は手放しで称賛してみせる」

「? ……それが、どうかしたかね? 私は別に当然の事をしているまでだが。ミス・ハーマイオニーが学年一の優秀な魔女であるという事は、厳然たる事実だろうか?」

男は心底不可解だというように、素直な感情を漏らした。

そしてハーマイオニー・グレンジャーは僕の足を強く踏んでいた事も忘れて頬を赤く染めたが、それは余談に過ぎない。

そう。彼について敬意を抱ける数少ない点が極まつた自己陶醉以外に在るとすれば、それは彼が一切の差別的思想を有さないという点であつた。

彼の半純血という生まれがそうさせているとは思わない。

半純血であろうと、魔法族の血を尊ぶが余り、『マグル』を見下す者は大勢居る。寧ろ、スリザリンを見るに、半純血である者こそ自分がスリザリン的であろうと——純血主義に対する忠実な信奉者であろうとする傾向が強かつた。

逆に、聖二十八族の方が僕に対する風当たりが弱いと感じる時は決して少なくなかつた。例外的なドラコ・マルフォイを除いても尚、純血である彼等には余裕が有り、自然体のままに嘲笑や軽蔑を示しはす

れど、加害や排斥を目論むような事は無かった。

それらを為そうとし、僕の半純血にしては恵まれた立ち位置を奪い取ろうと企んでいたのは、大抵の場合同じ半純血だった。

そして僕自身、客観的であろうと努めては居るが、やはり非魔法界の事よりも魔法界の事がまず先に脳裏に浮かぶのは否定しがたかった。それは、生まれて以降身に着けた価値観に基づく偏見であり、半ば本能であった。

けれども、ギルデロイ・ロックハートはそれから完全に脱却している。

それ故に、僕は祈りを——ギルデロイ・ロックハートという存在が、僕が入学前に思い描いていたようなレイブンクローであるという最後の一縷の望みと共に、言葉を紡いだ。

「貴方は『狼男との大いなる山歩き』の中において、こう記した。自身が最も望む誕生日の理想的な贈り物は、魔法界と非魔法界のハーモニーであると。間違いないですか？」

「まあ、確かに私はそう書いたが。……君、それがそこまで重要な事かね？」

「ええ。僕にとってその言葉は酷く重い物に感じました」

僕は息を吸った後、言い切った。

「つまり、貴方は1692年の国際機密保持法の破壊を目論んでいる。そういう事ですか？」

ギルデロイ・ロックハートは凍った。

ハーマイオニー・グレンジャーも凍った。

部屋中の写真も、一つの例外無く唾然とした表情のまま凍っていた。

「嗚呼、僕は何ら非難する気は有りません。寧ろ、僕は、教授がそれを真にする気が有るといっているのであれば賛同すら出来ます。両世界の壁をまるでベルリンのように破壊出来れば、それは正しく素晴らしいハーモニーが生まれる事でしょう」

それは、偽り無き本心だった。

母によって魔法的知識の習得を強制され、しかし僕の愚行によって

母が死に、マグル生まれの聡明なる魔女と出会い、秘された魔法魔術学校に通い、その最も純血思想の濃い場所から魔法界の縮図を見、特別になれないまま無様に死んだ教授と出会い、誰よりも強く魔法界で君臨する事を望んだ闇の帝王に直面し、また善なる大魔法使いの告解を聞いた。

だからこそ、思う。果たして、それは堅持すべき価値が有るのかと。魔法という物は、それ程特別視されなければならない物なのだろうか。

「今は時流も味方しています。世界は変わっている。貴方達が言う“マグル”の技術は発達している。既に彼等は星を宇宙に打ち上げ、それを用いて一瞬で、広範囲に、全く同一の映像を伝えられるようになった。貴方がグレートブリテンに居ながらにして、海を越えた大陸や、新大陸にすらも姿を見せる事が出来るような時代は、もう既に来てしまっている」

闇の帝王はいずれ復活する。魔法界に君臨しようと欲している。それを阻む一つの手段。それは、玉座自体を破壊してしまう事だった。

勿論、国際機密保持法を破壊した際には、グレートブリテン及びアイルランドという狭い世界に限られず、全世界規模で多大な混沌が訪れ、無数の犠牲が生ずる事だろう。しかし、その審判の時においては、闇の帝王への対処という事象を下らない些事へと貶め——そして、恐らく闇の帝王はそれを我慢出来ない。

彼は“マグル”にも“魔法族”にも等しく宣戦布告し、両者はその強大な敵に対して已むを得ず手を組む事になるだろう。

それによって三百年近く続いた断絶が埋まるとは思っても居ないが、一つの契機を作る事は出来る。薄っぺらくとも一度は為せたのだから、今度もそれが出来る筈という幻想を抱ける筈なのだ。

そして当然の事ながら、僕は“マグル”と“魔法族”の両方に喧嘩を売った場合、闇の帝王が勝利するなど思っていない。闇の帝王がどんなに強大な悪の魔法使いであろうとも、その手はやはり二本しかないのだから。分割統治が出来なければ、単純に数の論理が勝敗を決す

るのは解りきつた事だ。

多少の問題は有れど、国際機密保持法の破壊は間違いなく僕好みで、最終的に目指すべき脚本シナリオとしては悪くない。

「貴方には才能が有る。その顔も、声も、文筆の才能さえも。望みさえすれば、貴方は『マグル』界においても特別になれる筈だ。別に最初から魔法の存在を露わにする必要などない。ひっそりと『マグル』界の片隅で、地道に創作活動が続ければ良い。別にその事自体は、何ら国際機密保持法に反しない。文句は言われども、貴方を公的に止められはしない」

言ってみれば、彼の人気は『著作』によるものでしかなかった。

彼が教授として無能である事が露呈しても、彼の人気が完全に喪われなかつたのはその点にこそ有った。彼の冒険が真に疑わしくとも、彼の作品の価値は何ら損なわれるものではない。魔法界生まれは当然の事ながら、ハーマイオニー・グレンジャーを初めとする『マグル』生まれにすら、ギルデロイ・ロックハートの著作は通用している。

たとえそれらを手に取る発端が、彼の顔が良いというただ一点に有ったとしても、彼が世に公表した結晶は結果として、非魔法界と魔法界の壁を確かに越えてみせている。

「最初は嘲笑される事は間違いないでしょう。そもそも『マグル』におもねるような行為に、魔法族は興味を示しすらしないかもしれぬ。けれども、貴方は今までと同じ事を『マグル』の世界で続けければ良い。貴方の顔とその作品でもって名前を売り、地道に支持者を獲得し、貴方の名声と作品の価値を誰も否定出来なくなつた最後の最後に、事を起こせば良い。

——全英が見守るその中で、貴方は誰の目にも明らかかな形で魔法を使えば良い」

電波が一期一会だった時代は既に過去の物である。

その瞬間に立ち会えなくても、数百万、数千万の人間がそれを家庭において記録出来る。

回数を重ねる必要は無い。膨大な下準備を掛けた上での、ただの一度、ほんの数秒さえ確保出来れば良い。ただそれだけで、ギルデロイ・

ロックハートは、事実上不朽不滅の存在として記録されうる。

「ゲラート・グリンデルバルド。アルバス・ダンブルドア。そして、『名前を言つてはならないあの人』。彼等の名前など『マグル』は全く知らない。彼等は何ら特別ではない。けれどもその瞬間、大作家ギルデロイ・ロックハートが魔法使いである事を暴露した時、貴方の名前は両界において誰よりも偉大で、唯一無二の魔法使いとして讃えられる」

当然ながら、疑う者も出る筈だろう。

都合の良い事に手品は普遍的な存在だ。彼等は彼等なりの常識でもって、それを理屈付けようとするだろう。

けれども、エネルギー保存則の常識を粉々にする現象に対して、彼等が屁理屈を付けるのにも限度がある。

そもそも、真偽の大論争を引き起こす時点で十分なのだ。ギルデロイ・ロックハートの衝撃を狼煙として、次に続かんとする魔法使いが出て来る事は容易に想像出来る。国際機密保持法自体に疑問を抱いている者は言わずもがな。そして確たる信条を持たない『マグル生まれ』の親達が、或いは『スクイブ』達が、魔法界について口を開き始めるに違いない。

そうして、国際機密保持法は済し崩し的に破壊され、時代遅れの遺物は正しく過去の物となる。

「――『Magical Me』。貴方はその言葉通り、魔法の象徴となれる」

彼がレイブンクローであるのは皮肉が効いていた。

驚。それは古代ギリシヤないしは古代ローマより伝わる由緒正しい権力と神聖の象徴であり、神の使者の証でも有る。その象徴は、数々の国、或いは王家に継承され続けて来た。そして他ならぬ国教会においても、驚は世界に福音の光を広める象徴的存在であると言われている。

そしてこの場合、ギルデロイ・ロックハートが造り上げた偽典を元に、彼は今まで秘されていた魔法の光を世界に広めるのだ。

僕は待った。永遠にも思える数秒を待って、しかし外からの介入が

有る方が早かった。

「ロックハート教授、失礼しました……！ 私達、これで帰りますー！」
ハーマイオニー・グレンジャーは急いで頭を下げた後、僕の手をしつかりと握ったまま、ギルデロイ・ロックハートの部屋から強制的に退出させた。それについて僕は何も抵抗しなかったし、男の部屋に言葉を何も残しはしなかった。

残念ながら、彼は何も決断的な答えを返す事が出来なかった。
それが答えであり、それだけで十分だった。

——彼は「教授」に徹する気も「道化」に徹する気も無い。

僕はハーマイオニー・グレンジャーの手に引つ張られたままに、廊下を突き進む。

彼女が激怒している訳では無いのは見て分かった。彼女は、ギルデロイ・ロックハートに対する僕の発言を完全に受けとめ切れていない。彼女は聡明であるが故に、その是非、影響、問題、そして賛意を初め、非魔法界や魔法界全体の在り方、自分の立ち位置など様々な事に頭を巡らせており、恐らくは思考がパンクする寸前な筈だった。

「何……！ 貴方のさっきの言葉は、何の意図が有って……！ そもそも、どうしてあんな……！ いえ、本当に正気で……！」
ぐいぐいと僕を引つ張りながら紡がれるそれは、言葉になっていない。

その事は手を繋いだ箇所から伝わってくる熱と同様に、彼女の内心の大嵐つぷりを酷く示していたが、僕にとっては既に彼女が気にすべきでは無い事象へと成り下がっていた。

期待したのは事実だ。彼が啓蒙の驚足り得るのではないかと、そういう幻想を抱いたのは真実だ。しかし期待外れに終わった夢は、やはりさっさと捨てるべきなのだ。どう足掻いても実現しそうな物に固執していても、それは何らの生産性を齎さないのだから。

「ハーマイオニー。先程の僕の冗談をまさか本気にしたのか？」

僕の言葉に、彼女はピタリと止まる。

それと同時に、握っていた手が離れた。その熱が僕から遠ざかった。

「冗談?」

「ああ、冗談だ」

そう言ってみせた僕に対する彼女の表情は、何とも形容しがたい物だった。

激怒すべきなのか、軽蔑すべきなのか、落胆すべきなのか。己がどうするのか正解であるか判断がついておらず、一つだけ確かなのは、彼女は自身が酷く疲れ果ている事に気付いているという事だった。

その隙を逃さず、僕は彼女に対して畳み掛ける。

「先の言葉は、誇大妄想の気が大き過ぎる。曲がりなりにも、今まで国際機密保持法は堅持されて来た。それを破壊しようとする御調子者や愚か者は居ただろうに、魔法は秘密のままだった。それを簡単に破れる物だと思うか?」

「……まあ、それは確かに。そんなに簡単に破れるなら、こんな状況に無いものね」

「思考実験の類だよ。実際、ロックハート……教授は、僕に何も答えなかっただろう? 彼はその愚かさを理解している。彼は何ら本気にしていないかった」

未だあの男に対する信仰心を喪って居ないハーマイオニー・グレンジャーは、彼を持ち上げる言葉に対して、複雑な表情のまま不承不承頷いた。

もつとも、相応の勝算は有る事までは告げなかった。

先の言葉の肝は、ギルデロイ・ロックハートが魔法とは全く関係無い技能を用いて「マグル」に浸透しようとする点にこそある。

カルロツタ・ピンクストーンを筆頭に今まで魔法能力をもつて「マグル」界に殴り込みを掛けようとした魔法族は数多く居ただろうが、それとは全く関係無い点において知名度と信仰を獲得しようとした魔法族は殆ど居なかっただろうと考えているからだ。

そして、テレビジョン時代を中心とする娯楽主義潮流が味方している今において、それを行おうとする魔法使いが皆無で有る事は絶対的に確信し

ている。

「でも、やっぱりさっきの発言は悪趣味過ぎるわ。あんな突拍子も無い、飛んでもない事を言い出すなんて。ロックハート教授の言葉を曲解し過ぎよ。彼が言う魔法界と非魔法界のハーモニーは、そんな過激で破滅的な手段で齎させるべきものでは無い筈だわ」

憤懣やるかたない様子で彼女はぼやく。

相変わらず彼女は正しい対処を凶りかねているようだが、自分は先の僕の言葉に対して酷く不満であるという結論だけは出たらしかった。そして、僕は何らも否定しない。

過激である事も、破滅的である事も厳然たる事実だ。しかし、硬直化した魔法界は、その位しないと変わらないという確信が有ったから、僕はあるな事を述べたに過ぎない。

第一、彼女の理解や共感を求めようとした訳でも無い。僕は彼女に惹かれているが、全てを支配したいとも思わなかった。彼女は独立した個であり、違う考えを持つ人間だった。その事を、価値を否定するつもりは何らない。

けれども、それでも彼女の考えを理解したいと思う点は有った。

自分の激情を発散させるかのように再度歩き出した彼女を追い掛け、隣に並んだ後、僕は彼女に問い掛けた。

「なあ、ハーマイオニー」

「……何。陰険で性格が悪い魔法使いさん」

「君は何故、今になってもギルデロイ・ロックハートを信じ続けられる？」

不満と不機嫌さを露わにし始めてきた彼女に対して、僕は問い掛ける。

聡明なる魔女が、常に賢明で無い事は重々承知している。けれども、これはそのような簡単な論理で片付けられるような物では無い気がしたのだ。

つまり、ギルデロイ・ロックハートは無能を露呈しながら、彼女は憧れを殆ど捨てていない事については確かな理由が有るのでは無いかと。

「問いが広過ぎて答えかねるわ。質問の意図をもっと明確にしてくれると助かるのだけど」

「例えば、生徒の間に馬鹿げた噂が有るだろう。ギルデロイ・ロツクハート本人は何ら冒険を行っておらず、忘却術を用いて他人の功績を盗み取ったのだという噂だ」

「……嗚呼、あの信じるにも値しない最高の馬鹿話ね」

ハーマイオニー・グレンジャーは、余計に顔を顰めてみせる。

「どうやら、それは僕に対する怒りの矛先を逸らす程度には、彼女にとつても不愉快で荒唐無稽な物だったらしい。」

無論、僕と彼女では理由が違う。僕がそれを馬鹿々々しいと思うのは、単純にギルデロイ・ロツクハートがそんな器用な真似が出来そうに無い程、圧倒的に無能だからだ。忘却術というのは相応に高度な呪文の筈であり、容易に扱える物でも無い。であればそんな事は有り得ない。僕は当然そう考え、それが大勢の意見であった。

今では生徒の間でも、その珍説を大真面目に唱える者は居ない。ギルデロイ・ロツクハートの真実と題する賭けの中では、大穴狙いの極少数のみである。

ただ、この様子では、ハーマイオニー・グレンジャーは違う見解を持つようだった。

「全く、皆は忘却呪文が単に万能な呪文だと考え過ぎなのよ。この魔法界を維持している根幹ともいうべきものにも関わらず、余りにも興味が無過ぎるわ」

「君は、非魔法族生まれの人間として——いや、知識の探究者として、当然ながら調べた訳だ。忘却術オブリビエイトについて」

「正確に言えば、忘却呪文と記憶修正呪文の二種だけれど。両者は全く別の呪文なんだし——って、大変だわ！ 忘却術オブリビエイトは覚えているけど、そっちの呪文は忘れちゃったわ！」

「……それは、君が後から図書室へ行って存分に調べると良い」

忘却呪文も記憶修正呪文術も二学年で出て来ないのは明らかだったが、この教科書の信奉者にはお構い無しらしい。彼女は知らない事を知らないままに出来ない人間だった。

それでも彼女は何か思い出そうとするように腕組みして、むずむずと落ち着かない素振りが続けていたが、諦めが付いたらしい。短く嘆息した後、僕への説明を続けた。

「まあ、二つが別種の呪文と言ったけれども、混同するのは理解が出来るわ。忘却呪文もやっぱり呪文なのよ」

「……というところ？」

「呪文Charms——つ——ま——り、

address certain properties to an object or creature
ある特性・属性を特定の対象に追加する魔法なの。決して変身・変容では無いのよ」

「しかし、呪文Charmsに分類されようが、その分類が正しいとは限らないだろう」

「ええ、そうね。分類は一定でも絶対でも無い。リンネが分類学の父になる前も、なつて以降も、生物の枠組はあつちこつち変わってきた訳だし。でも、私には納得行くわ。人間の記憶の仕組みからすれば——
要するに、マグル的な知識からすればそれは自然とも言えるもの——
僕は沈黙を守り、先を促す。

己が半純血にしては多くの非魔法族的の知識を有しているとは言っても、全体の知識量を比較すれば、ハーマイオニー・グレンジャーの方に軍配が上がる事は解っていたからだ。

「要するに、忘却にも種別が有るという話よ。幼少期の記憶が良い例だわ。それらは忘却しているけども、消滅している訳では無い。何らかの刺激で蘇る事がある。つまり、初めから記憶の中に存在しないのではなく、ただ単純に思い出せないだけ」

「成程、忘却術もその類だど？」

「確信が無いけど、多分ね。全く別の物に性質を変化させてると言う訳じゃない。そうでなければ、忘却術を破るなんて事出来ないでしょう？ 既に存在しない——或いは外に抽出された——物は蘇らせられないし、作れないわ」

「反対の、物を消失させる事は出来るようだがな。もつとも、そちらは変身Transfiguration術の授業範囲だが。しかし、不合理であるのには変わりない」

「……まあ、液体の蒸発がそのまま液体が消滅するのを意味はしないって事でしょ。そもそも魔法について物理法則を直接適用する事が無茶だわ」

既に幾度となくその難題にぶち当たって来たらしい知識の象徴は、肩を竦める。

「それで、それが何故ギルデロイ・ロックハート……教授に関係する？」

敬称を付け加えたのは、勿論誰かの眼が猫のように鋭かったからだった。

そしてそれに一応の満足を覚えた彼女は、軽く鼻を鳴らして説明を続けた。

「つまり、彼の著作を良く読み込んでいる人であれば、彼の冒険が酷く長期間に及んでいる事が解る筈なの。つまりマグルが魔法界的に不適切な物を目撃した際にそれを消去するのと違う。連続の、連続的で、物語性のある、血肉に刻まれた記憶なのよ」

「……仮に忘却呪文を用いるとして、それらを全て消す事は？」

「不可能では無いでしょう。でも、絶対に隠したい事を強く忘れさせようとしたり、或いは長期間にわたっての記憶を忘れさせたりするならば、そこには後遺症が残る筈。まあ一時的にその場凌ぎで誤魔化すだけなら別だけど。ただ、多少なりとも話せばボロが出るわよ。本人も、違和感を抱いていずれ思い出すと思う」

「どの程度の確信を持ってそれは言える？」

「やはり絶対までは言わないけど、高い確度で。それは呪文^{Charms}で、許されざる呪文^{Curse}ではないもの。要するに忘却呪文は本質的に精神にも肉体にも害ではなくて、けれどもそれを無理矢理害に変質させてしまえば、そこには歪みが出て然るべき」

……成程、だからこそ、ギルデロイ・ロックハートの所業について、それを忘却術によるものだと考える人間は知識人に居ないのだろう。専門的な忘却呪文がどういうものかに熟知している専門家は、彼の功績が盗み取られた物だと考えもしない。彼の功績は確かな知見を有する者達によって間違いなく検証され、そしてその結果は白だっ

た。彼が詐欺的な行いをしたのでは無いと、実証されたと結論付けた。

ただ、彼女の説明を聞いて、僕は何となくそちらの方が——忘却術説の方が有り得るような気がしてきたのも事実だった。正直今まで歯牙にもかけていなかったのだが、有り得ないと聞く程に信じられるような気がしてくるのは不思議である。

それは偏に僕がThe Case of the Cottlely Fairiesの事例を知っているからだろう。

アレの顛末に忘却呪文が実際に用いられたかどうかはさておき、多くの知識を有する事が常に真実を手に入れる鍵となるとは限らない。

そして、単にミーハーなだけかと思っていたが、彼女には彼女なりの理由が有ったのだ。

「……成程、君が彼を疑わない理由は確かな物だ」
「解ってくれたかしら！」

「ああ、十分に理解したよ。合理的に考えれば、彼の精緻な描写に基づく冒険が、忘却呪文によるものである可能性は絶対的に低いのだと」
死の呪文を受けた赤子が生き残るような可能性と同等くらいには理解した。

「しかし、ハーマイオニー」
「？ 何かしら？」

「先の論理は否定しない。ただ、こういう見方もすべきでは無いのか。——要するに、鉛を黄金に変えるのに、魔法は必要としないのだと」

僕の言葉に、ハーマイオニー・グレンジャーは至極当然のように反論する。

「黄金は魔法で作れないわ。別にレプラコーンの事を言っている訳では無く、魔法界における貧富の差やグリーンゴッツのシステムを見ればそれは自明でしょう？」

それは正しく、けれども僕が言っているのはそのような表面上の事では無かった。

「君は魔法の世界を知ったが故に、多くの不思議には魔法という理屈が有ると思っている。しかし、現実にはそうでは無い筈だ。例えば、

古代社会において、科学知識の下に鍍金を造り上げた者は？ 或いは近世社会において、中に人が入ったチエス指し人形を見た者は？ 人を騙すのに魔法は必要無い。機巧には種が有るといふ事もまた有り得る」

僕の指摘に彼女は黙り込む。

勿論、彼女自身が痛い所を突かれたと感じたからだとは更々思っていない。

彼女は心の奥底で何処かその可能性を疑っており、単に見ようとしなかったに過ぎない。ただそれでも、こうして言葉にされれば、やはり直視せざるを得ないに違いなかった。やはり彼女は、同学年で最も聡明なる魔法使いなのだから。

ギルデロイ・ロックハートの著作は、全て架空の創作物である。

それが賭けにおいて最も大本命であり、僕とて先程までそれに賭けていたと言って良い。彼のホグワーツにおけるその無能さは、それ以外の結論を導かせない程に酷い物だった。

そして、彼を今も尚想う女生徒の中にも、そう思っている人間は少なからず居るだろう。それでも黄色い声を止めないのは、彼の能力や著作と無関係に、単純に彼の顔が良く、ミーハーなアイドル的崇拜を抱いているからに過ぎない筈だった。

ただ、結局の所、既に僕にとってギルデロイ・ロックハートの詐術の種が何だろうと構わないのだ。彼から期待した結果が得られなかった以上、やはり関心を抱けはしない。

だから後は最後の仕上げを——本題の行為に取り掛かるだけだった。

僕は通路の曲がり角に差し掛かる瞬間、鏡を取り出し、それを覗き込んだ。

通路の先に居る存在と鉢合わせを避けるように、直視してしまうのを避けるように。

そして、当然ながら、その行いは彼女——僕の言葉について考え込んでいる分、怪しい足取りのまま歩いてきたハーマイオニー・グレンジャーを現実に取り戻す程度には、十分な奇行であるように映ったよ

うだった。

「? 一体どうしたの?」

訳が解らないと説明を求める上目遣いに、僕は肩を竦める。

「僕達が一緒に居るのは見られない方が良いだろう? だから、その確認をしている」

無論、それは建前の理由付けに過ぎなかった。

「後は曲がり角でスリザリンの怪物と出会ったらどうしようも無いという理由もある。周りに人間が居る時までの必要性は感じないが、一人で出歩く時は何時もこうしている」

「それは、まあ、生徒にしる怪物にしる、鉢合わせたらどうしようも無いのは確か……ではあるけれど? でも、少なくとも後者はもう二か月も誰も襲われていない訳だし、そこまでするのは流石に用心が過ぎないかしら?」

「自分で可能な事はしておかないと気が済まない性分なんだ。君もどうだ?」

「……そんな怪しい真似を何時もする気にはなれないけど。貴方が……わざわざくれると言うなら……まあ一応貰っておくわ」

彼女は何か質問をしようとして、しかし口籠って素直に僕が差し出す鏡に手を伸ばした。

強引なものも不自然なものも無理があるのも承知の上だった。

けれども、怪物は絶対に直視してはならないのだと言葉にしてしまえば、彼女はその裏を読もうとし、必然的に正体に思い当たるだろうと言う確信が有った。そして、彼女は当然二人の友人に伝え、秘密の部屋を執念で探し当て、やはり当然のようにその部屋の中に共に突っ込むだろうというのもまた、去年の事を思えば確信に等しい物だった。

しかし、在るべき行為の模範を示すだけで有れば、彼女は僕を被害妄想に取り憑かれた臆病者だと失望するだけで、そのような個人的事情を他に漏らす事も無いだろう。その分だけ彼等は真相に気付くのが遅れる——彼女がまさしく襲われ、石化する時まで——事だろう。というか、そうであって欲しいと信じたのだ。

解っている。このような行いに殆ど意味は無いのだと。

“英雄”ハリー・ポッターは、気付くべき時に気付くだろう。闇の帝王はそれを欲し、アルバス・ダンブルドアも理由は違えどその時を待っている。必然、真相に辿り着く時は訪れる。

ハーマイオニー・グレンジャーが“英雄”に連れられて秘密の部屋の中へと同行するかというのは、僕がそれを——彼女が死ぬ危険を跳ね上げるのを極端に恐れているだけで有って、その事は闇の帝王にとっても、アルバス・ダンブルドアにとってさえ、究極的にはどうでも良いのだ。

彼女を部屋の外で襲おうが中で襲おうが、彼女が石化しようが死のうが、何だって。

僕が行っているのは非常に些細な干渉であり、彼女の生存可能性を少しばかり変動させるに過ぎない。そして、それが状況を悪化させる物で無いとも限らない。

けれども、僕は何もやらないままでは居られなかった。己の無力さを、誤魔化し、慰める為だけに。

ハーマイオニー・グレンジャーは僕から受け取った鏡をじつと見つめ、そしてやはり何かを言おうと口を開いた。

けれども、彼女はまたもやそれを言葉にしなかった。

その代わりだというように、彼女は別れの言葉を紡いだ。

「……じゃあ、ステファン。また今度ね」

「……ああ」

正直言つて、もう少し何か言われるのかと思った。

けれども、彼女は何も言おうとしなかった。今回において色々と考える事が沢山有り過ぎたのかも知れないし、何かを感じたのかも知れない。

しかし確かであるのは、彼女は彼女にしては珍しく、解らない事を解らないままにしたという事だった。

そして彼女に何も言い訳せずに立ち去れた事について、僕は間違いないく安堵していた。

彼女が石化してしまえば危険は無くなる。今までの犠牲者と同じ

目で済むならば、彼女は間違いなく安全になる。

無論、後遺症という可能性は排除しきれない。けれども、彼女が命を喪うという最悪の結果を考えれば、それは僕にとって許容出来る犠牲であると言えた。

……彼女が気付いた時、全てを知りながら尚放置した僕を、彼女は責めるのでは無いか。

それは、敢えて見ない事にした。

彼女から嫌われる事を考えるだけで、心が軋むのは事実だった。

彼女と過ごす時間は間違いなく僕にとってささやかな、しかし確かな幸せを感じさせる物であり、僕が今でもホグワーツに留まり続ける最も大きな理由だった。

けれども、僕はやはり心の奥深くで、けれども至極理性的に判断していたのだ。

彼女が死ぬ事に比べれば、それもまた許容出来る犠牲であるのだと。

より大いなる善を考えれば、それが最適解であるのだと。

そうして、また一年が終わり行く。

ハーマイオニー・グレンジャーは期待通り石化し、アルバス・ダンブルドアは予想通り追放され、けれどもハリー・ポッターは秘密の部屋を暴くばかりか、その剣でもってバジリスクを打倒せしめた。

またもや「生き残った男の子」は「英雄」となった。

一方僕は、単に女の子に鏡を渡すという、何ら大勢に影響のないちっぽけな行いをしたに過ぎなかった。

別にその事について落胆の気持ちは無い。

それが普通なのだ。直接的な干渉どころか間接的な干渉すら出来ず、ただの傍観者に甘んじる。それが「英雄」でも無く、彼等の駒として盤面上がる資格も無い存在としては、当然の帰結の筈である。

そうである筈だというのに——複雑な気持ちを抱く事は避けられなかった。

その感情を何と名付けるべきか。僕は学年が終わって尚、その答えを出す事が出来ないままだった。

知恵の女神

石化したハーマイオニー・グレンジャーの姿は、未だに目に強く焼き付いている。

三人組が調査した鍋から盗んだポリジューズ薬は、彼女が死んでいない事を——期待通りに石化しただけである事を確認する程度には役立った。

所詮生徒が調査し、尚且つ時間が経過して劣化した代物だ。その効能は十分にすら持たなかったが、マダム・ポンフリーを言い包め、彼女が陥った症状の見解を聞き、また彼女の姿を見る事ぐらいは可能だった。

彼女の枕元には、一枚の割れた鏡が、その破片と共に置かれていた。安っぽい手鏡だった。

「マグル」による大量生産。普通の女生徒が持つような、可愛らしく、立派ではない、単に機能性だけを追求しただけの代物。僕が手渡したのだからそれは当たり前の話で、割れているのは恐らく彼女が落としてしまったからだろう。ただ、確かな事は、それが求めた通りの仕事を果たしてくれた事だった。

しかし、今尚、僕にとってそれが最善であったのかは、やはり解らない。

これは嘘偽りなく、予定通りの結果である筈だった。

けれども、ハーマイオニー・グレンジャーの姿を見下ろせば見下ろす程に、僕のした事は間違いでは無かったのかという実感すら湧いてきた。そして、そのような感情は、言ってみれば、それは不合理極まりないものである筈だった。

彼女の姿は恐怖を浮かべた表情のままに硬直していた。

だが、恐怖が何だというのか。彼女は死ななかつた。闇の帝王の危機を正しく乗り越えた。その程度は許容出来る筈で——しかし、どうしてだか納得出来る気がしなかつた。

ハリー・ポッターらの働きによりグリフィンドールが二百点を獲得し、当然のように獅子寮が寮杯を獲得した。

去年のような番狂わせは無い、まさしく順当な結果と言えよう。それでもスリザリン生は不満を隠し切れて居なかったが、去年よりは納得出来るもので有った事に違いない。

秘密の部屋の被害は周知の事実であり、何よりアルバス・ダンブルドアはその神話が終わった事を、誰の眼にも明らかな形で示してみせた。

言うまでもなく、その「悲劇」はスリザリン中の生粋の純血主義にとつて大いに残念がる結果に終わったのだが——ドラコ・マルフォイもその一人だった——神話が神話で無い事を示したという点においては、多くの者を奮起させる事にもなった。

すなわち、最も知れ渡っているサラザール・スリザリンの遺産が秘密の部屋に過ぎないのであり、同種の物は幾らでも有るのだから。

ただ、それは何処の寮も同じであつた事だろう。

グリフィンドールの剣という伝説的遺物が発見されたのも相俟つて、ハッフルパフやレイブンクローでも宝探しやホグワーツ探検で一時期賑わつたようだった。他ならぬスリザリンを含めてその成果が何も聞こえて来ない所を見ると、残らず失敗したようでは有るが。

そのような、今年を覆つた陰鬱さの反動とも言える狂乱の日々が学年末まで続き、そして漸く訪れた学年の最終日、細い文字による招待状がやはり届いた。

全く来ないと思つていたと言え、嘘になる。

しかし、去年と違つて、僕をわざわざ呼びつけるような義理は無い以上、来ない可能性も十分有り得ると思つていた。実際、秘密の部屋が解決してから直ぐに呼び寄せるような真似をしなかったのだ。だから僕は半ば安堵していたのであり、しかし本日目出度く裏切られた訳だった。どうやら、今年もまた、老人の方には僕に用件が有るらしい。

正直言つて、無視してやろうという気持ちが無かつた訳では無い。ホグワーツ特急に乗つてしまえば、一応は逃げ切れる。そして、去年とは異なり、寮監がこのような事態に関与しないであろう事は大体想像が付いている。あの寮監が老人の使い走りになるのは唯一人の生徒の事のみで、まかり間違つても嫌悪を抱いている生徒の為に働く事は無いのは明らかだからだ。

しかし、あの老人には、寮監以外の手駒が居る。

何よりそれが最も僕が断わりにくい相手であれば、それを当てるのも当然だった。

「レットフィールド。少しばかり、貴方に用件があります」

言付けを受けた上級生に指示されて寮の外に出向けば、そこには敢えて中に立ち入らなかつたのであろうミネルバ・マクゴナガル教授が立っていた。

学年最終日に教授から呼び出しを受ける者は早々居ない。

まして、それが自寮の寮監では無く、犬猿の間柄とも言えるグリフィンドール寮の寮監からともなれば猶更だ。当然の事ながら、ミネルバ・マクゴナガル教授が待つている事を伝えに来た上級生は勿論、それを知つた他の寮生も興味津々な様子を見せはした。

ただ、心当たりを口に出来よう筈も無いし、何よりミネルバ・マクゴナガル教授は、我等がスリザリン寮監と違う意味で余計な詮索を許さないだけの威厳が有つた。

彼女が半純血である以上スリザリンが表立つて敬服を示す事は無いが、それでも何処かの校長よりはよっぽど尊重されているのはやはり明らかだった。

それは揺ぎ無い彼女の授業方針により獲得された成果では有るのだろう。その厳格さ故に、逆にグリフィンドールでは微妙に敬遠されている節もあるのが何とも言えないが。どんなに良い教授であったとしても、距離が近過ぎるとまた違うのかもしれない。

そんな教授の後ろを、僕は黙って付いていく。

最終日、それもホグワーツ特急で帰る時刻が迫りつつあるともあって、寮外を出歩いているような生徒は殆ど居ない。偶に見かけても、ミネルバ・マクゴナガル教授の姿を見かけると、そそくさと自寮の方へ戻っていくのが大半だった。

ただ、中には気安げに声を掛ける上級生——グリフィンボールに限られない——も居る所を見ると、成程、スリザリン寮監と比較すれば生徒に親しみを持たれてはいるらしい。まあ、教授が誰を連れていかを認識して顔を引き攣らせる所までが御決りでは有ったのだが。

そして、地下から上って来て、辿り着いたのは三階だった。そこに何が有るのか、というより目的地が何処であるのかは最初から解りきった事だ。

ただ、公的には僕は何も知らない事になっている。だから、案内人が必要なのは当然の話だったのだが、その態度こそ教授には奇異に映ってしまったようだった。

「……本当に何も聞かないのですね、貴方は」
少し立ち止まって呆れと共の言葉に、僕は相応しい対応について今更ながら思い当たる。

ただ、それは本当に今更の話だった。そして、その言葉からすれば、あの老人は多少説明をしたのかもしれない。無論、スリザリン寮監でも無いのに、スリザリン生を呼び出させられる意味までは理解してないだろう。知っていれば、下らない理由で使い走りのような真似をさせられている事について既に激怒している筈だ。

可能な限り老人と関わりたくないという点において、寮監と僕は一致している。

もつとも、多くを知らされずとも職務に忠実さを示す教授は、口火を切るには良い機会だったとも思ったのだろう。そのまま言葉を継いで来た。

「そう言えば、校長は貴方の事をステファン・レッドフィールドと呼びましたが、ステイブ・レッドフィールドでは無かったですか？」
まあ、いずれ聞かれるとは思っていた。

僕の関係性の中で、それを気にするのはドラコ・マルフォイくらい

——ハーマイオニー・グレンジャーは当然ながら、あの瞬間に疑問を抱いてはいないだろう。そして、組分け帽子の後は、彼女は個人的な事情で聞ける状況でも無かった——である。

そして、彼に対しては、あの老人が正しい読み方を忘れる程ボケたのだろうという説明のみで事足りた。相変わらず、スリザリンからの敬意は皆無らしい。

「……正しい読み方は、ステイブンの筈ですよ」

教授には筈と答えたが、そうであるというのは確信だった。

「ならば、ステファンというのは？」

「……母がずっとそう呼んでましたので。僕としてもそちらの方が気に入っています」

「——私があの家を訪れた時点で、貴方を親しく呼べる人間は、間違いなく貴方を育て上げた彼女しか居なかった。であるのに、貴方はそれが違う名前と呼ばれていたと認識している。その理由は、余り聞くべきではないのでしょうかね」

ミネルバ・マクゴナガル教授は、憐憫と共に深い溜息を吐く。

それに対して、僕はやはり答える意義を見出せなかった。

「ええ、ステイブン。私もこう踏み込んだ事を言うべきでは無いとは思っています。しかし、私がそう言わざるを得ないという事もまた、理解してくれば良いと思っています」

「……解っていますよ。僕は、教授に深く感謝しています。死亡の手続も、墓の手配も、埋葬さえも、その他雑多な全てすらも、貴方が僕に代わってやってくれたのですから」

「ええ。あの時私はそうする事が正しいと思っていました。ただ、今になって本当にそれが正しかったのか疑わしく思っています。その様子では、まだ、彼女の墓を訪れられていないのでしょうか？」

「急かしはしません。しかし、貴方がいずれ向き合う事が出来れば良いと思っています」

ミネルバ・マクゴナガル教授は、明らかに良い教師だった。

必要以上の事を口にしないままに、しかし的確に助言をする。

クイドイツチという唯一の点を除けば、スリザリンに対してすら彼女は公平性を示してみせる。別にフィリウス・フリットウィック教授やポモーナ・スプラウト教授が軽んじられているという訳では無い――前者は微妙かもしれない。彼は半ヒトだからだ――が、それでも、スリザリンの中ですら、彼女は強固な求心力と確かな指導力を保持している。

だからこそ、僕は教授の背中に向かって問うた。

「ミネルバ・マクゴナガル教授」

「何でしょう」

「不躰な質問をしても？」

「内容によります」

教授は明確に答えた。

「しかし、生徒の多少の無遠慮な問いに対して怒りを示す程愚かでは無いですし、私が先程貴方のデリケートな事柄について触れたのは事実です。故に、少しばかり寛容である準備が有るというのもまた述べておきましょう」

ならば、余計に都合が良いものだった。

「アルバス・ダンブルドアに代わり、ホグワーツの校長になる御積りは？」

ミネルバ・マクゴナガル教授は立ち止った。

そして、僕の質問が教授の寛容を超えたのは明らかだった。

もつとも、流石と言うべきか。先の言葉、生徒の無遠慮な質問に対して怒りを示す程では無いというのを護る気らしく、振り返った教授は鉄面皮のままだった。

「アルバス・ダンブルドア校長です、ステイブン。あの方は依然として校長であり、これからも校長のままです。こんな愚か極まりない事を言わせないで下さい」

微妙に震える声は、しかし僕の質問の意図と明らかな齟齬が有った。

けれども、この場合は教授の方が正しかった。

成程、タイミングが悪い。既に秘密の部屋の騒動が解決したとは

言つても、学期中に学校理事が解任動議を発し、あの老人を追放しようとした動きが有つたという事実は無くならない。教授達はそれを重く受け止めており、造反の教唆めいた言葉を掛けられる事に良い気はしないだろう。

だから、僕はそれを認める。

「申し訳有りません、教授。僕の言葉が足りませんでした。僕がアルバス・ダンブルドアを校長と呼びたくないのは全く別の理由です。ですから、質問を訂正します。アルバス・ダンブルドアによる打診を前提として、貴方が校長となる御積りは無いかと」

「……私にはその両者の差異が解りかねます。そもそも私としては、ホグワーツ生徒である貴方が、ホグワーツ校長に対して敬意を示さない事自体が不愉快です」

「僕は僕なりにアルバス・ダンブルドアには敬意を示していますよ。そもそも、校長は真つ当に敬意を示されない事こそを痛快だと思つている節があるみたいですけどね」

言葉にすれば余計に実感するが、全くもって難儀な老人だった。

「それに、その様子では教授は詳しい内容を聞いていないのでは？教授がスネイプ寮監の代わりに僕を呼びに行かされた事に大した理由は無いですが、しかし、何故ハリー・ポッターでは無く、僕のような一生徒を呼ぶのか疑問に思つていいるのでは？」

「校長には校長の考えが有ります。それで十分でしょう」

「けれども、貴方は副校長だ。秘密の部屋は解決した筈なのに、アルバス・ダンブルドアの秘密主義は未だ終わっていない。それが不可解で仕方がない筈です」

「貴方はまだ終わっていないと——」

不用意な問いだった。それこそがああ老人の隙だった。

単なる信仰や忠誠では塗り隠せない、策謀と秘密が齎す罅。

そして、その事に自分で気付けない程、ミネルバ・マクゴナガル教授は頭の巡りが悪い訳でも無かった。額を左手で抑えて息を吐いた後、渋々と言つたように口を開く。

「……成程、校長が貴方を呼んだ理由の一端が解りました。そして、ス

リザリンで貴方が浮きながら、しかし排除されない理由も。けれども、忠告しておきましょう。貴方のそのやり口は、他から好意を得られる物ではない」

「……その必要性と切迫性を感じていたとしても？」

「前者は兎も角、切迫性を感じる理由が解りません。貴方は未だホグワーツの一生徒に過ぎないのであり、そうするのは……まあ、確かに今学期は不愉快な事が有りましたが。何にせよ、そこまで生き急ぐ事は……無いのです」

先程までの怒りを完全に鎮め、思い遣りすら見せて教授は言う。

それはミネルバ・マクゴナガル教授の教師としての人格の素晴らしさを示すものでは有ったが、途中で言い淀んだ事を僕は見逃せはしなかった。

当然の事ながら、僕は秘密の部屋の内部で何が起こったのかは知らない。ハリー・ポッターがバジリスクを殺し、事件を解決した事。校内で語られているその程度しか知り得ない。

ただ、それでも闇の帝王が関与している事を殆ど確信していたし、そうであれば——それを知っている人間であれば、全てが終わり、もう安全になったのだとは言える筈も無かった。

そして、ミネルバ・マクゴナガル教授がどちらかは明らかであり。また教授は、僕がそれを見透かした事に勘付かない程、やはり愚かでも無かった。

「……貴方は、見ない振りは出来ないのですか？」

「ええ。解り切った事をそのままに出来ない性分なので。アルバス・ダンブルドアの方針、己一人が最も全てを上手く成し遂げられるという傲慢に、僕は賛同出来ない」

率直に言えば、これは嫉妬でもあるのだろう。

その全力をもってすれば大抵の物事をどうにでも解決してしまう事が出来る大魔法使いに、何も解決出来ない些細な力しか持ち得ない木端の魔法使いが抱いてしまう、理不尽な恨み言。

「教授は去年の賢者の石の際にどれだけの事をアルバス・ダンブルドアから伝えられていたのです？ 賢者の石に纏わる計画について、何

処まで知っていたんですか？」

「……全ては校長の御考えの通りに進みました」

「ええ。幸運にも。ハリー・ポッターは『英雄』でしたから」

そして『英雄』の功績が大きいにして、あの老人は最善以上の結果を導き出してみせたのも事実では有る。

「けれども、貴方は何の役割を担った……いえ、任されたのですか？」

貴方はグリフィン・ドラール寮監だ。賢者の石が盗まれようとしている事に気付いた際、流石の三人組も貴方を頼ろうとした筈だ。そして、貴方はどのような対応をしたのです？」

ミネルバ・マクゴナガル教授は僕を静かに見返した。そして、それだけで伝わった。

彼女は、三人組をすげなく追い返した。賢者の石が盗まれようとしていると、真剣に受け止めはしなかった。自分達教授の、そして校長の護りこそが、ほんの一年生の心配よりも遥かに強力なのであると。

その結果がどうであったかは、最早論ずるまでも無い。

「アルバス・ダンブルドアは、自らが他に対して不信を示し、不説明に徹するにも拘わらず、相手に身勝手に一方的な信頼と忠誠を求める類の存在だ。しかし、それが常に正しいとは限らない」

僕はその事に関して、未だに同意出来ない。

「たとえそれが善意に拠る物だとしても、真意を伝えない事は時により手酷い結果を——」

そこまで言い掛け、僕は口を噤んだ。噤まされた。

寮監やあの老人相手では、そのような事をする筈も無かった。

だが、僕はやはり僕なりにこの教授に好感と敬意を抱いており、そしてその相手にとって決定的で致命的となる地雷を踏んだ事に気付いて——たとえ、それが何故なのかは解らなくても——尚、それを踏み切ってみせる事は出来なかったのだ。

ミネルバ・マクゴナガル教授は、瞳の光を揺らしつつ、真一文字に口を結んでいた。

けれども、彼女が信仰する、理想の教授としての在り方を放棄する事だけはしなかった。そして、少しの逡巡の色を見せた後、何処か覚

悟すら決めた様子で再度口を開いた。

「……貴方が私に校長の座を奪えと唆す意図が解りました。ええ、本当に遺憾ながら。何より、私の認識が甘かった事も認めます。貴方がスリザリンから排除されないのではなく、スリザリンが貴方を排除出来ないという事さえも」

教授は一瞬眼を伏せた後、再度僕へと視線を戻した。

「けれども、私の想いは変わりません。校長——アルバス・ダンブルドア教授こそが、ホグワーツ校長として最も相応しいのだと。たとえば、そこに貴方の言う秘密主義が有ろうと、私が教授の企みから排除されようと、その程度で怒りや不平を抱く程若くも有りません」

揺ぎ無かった。

鉄芯により貫かれたように、その忠誠心と信仰心は堅く、筋が通っていた。

「……だからこそ、アルバス・ダンブルドアはどうしようもないように僕には思えた。」

あの老人は、この教授を通じてホグワーツに干渉し続ける事など可能だろうに、自ら一人で物事を進めたがる。

その能力からすれば分権など可能であるだろうに、己が嗜好に合わないという理由で独裁的に君臨したがる。時として、盲目のままの集団の暴走こそが、全てを見透かし最善を選択する指導者に率いられるよりも良い結果を齎す場合もある事を、決して認めようとしなない。

「……アルバス・ダンブルドアは最強の盾です。けれども、同時に最強の剣でもあるのです。大陸で暴れていたゲラート・グリンデルバルドの際、彼がどう用いられたか御存知でしょう」

「それでも、教授は教授でした。私から言える事は以上です」

ただ、とミネルバ・マクゴナガル教授は続けた。

「大人としては少々意地の悪い事を言いました。貴方はアルバス・ダンブルドア教授を非難しますが、しかし貴方の行いを振り返った時、再度それを堂々と非難出来ますか？」

「……………」

僕は答えられない。答えられる訳が無い。

今年の事を思えば、それが自分に返ってくる事は薄々理解していた。そして今、教授は明確な形で詳らかにしていた。

ハーマイオニー・グレンジャーは未だに何も聞いて来ていない。石化から回復して、この学期末まで幾らでも時間は有った。けれども、彼女はふくろう便を送ってすら聞いて来ようとせず、そしてまた僕は、全てが終わっても教えようとしなかった。

僕は明らかに、見るべき物を見ない振りをしていた。

もつとも、教授はそれを咎めもせず、逆に微笑んですら見せた。

「ただ、私は貴方の教授でも有ります。入学前に貴方と関わった事も、こうして今話している事も、何かの縁が有るといふ事かもしれないかもしれません。何より、私はグリフィン・ドール寮監として、貴方よりも少しばかり多くの個人的な物事を聞いています」

「――」

「貴方が何か真に選択に迷った時、私は一度だけ貴方の相談に乗る用意が有る事を伝えておきます。……正直に言えばまさか生徒に、しかもスリザリン生にその必要性を感じるとは思いませんでした。けれども、アルバス・ダンブルドア教授からそうして頂いた事を思えば、やはり私も同じ事をする覚悟は抱いておくべきなのでしょう」

「そこまで言い切った後、最後に教授は厳格な表情に戻って宣告した。

「既に告げましたが、貴方の遣り口はそれが如何に最短であったとしても、他からの好意を獲得出来る類の物では有りません。それを続ける限り、いずれ貴方は失敗します」

出来れば貴方がその事を深く胸に刻み、私に相談する日が来ないで済むのを祈ります。

そのように必要な警告だけを述べた後、ミネルバ・マクゴナガル教授は何も言葉を発する事は無かった。僕を校長室の中へと導き入れ、何の未練も見せる事も無く、当然のように僕と老人だけを残して立ち去っていった。

彼女は何処までも忠実で、確たる理念と矜持を有した教師だった。

分霊箱

この校長室に来たのは、もう都合三度目である。

流石にハリー・ポッターよりは来ていないだろうと確信しているが、それでも生徒個人が軽々しく来て良い場所では無い。実際、殆どの生徒は、この校長室を訪れないままにホグワーツを卒業する筈であり、そしてそれは間違いなく良い事の筈だった。

けれども、アルバス・ダンブルドアがそれを必要としているのであれば、僕はやはり最初から拒む術は無いのだろう。彼は校長であり、僕は生徒であるのだから。

不思議な銀の機械が煙を部屋に燻らせる中、相変わらず老人は超然とした気配を纏ったままに、微笑みを湛えて椅子に腰掛けていた。

去年と明らかに違う所を探すとすれば、ハリー・ポッターがバジリスクを殺害せしめたという、ゴドリック・グリフィンドール由来の美麗な銀剣が飾られている所だった。

「さて、ステファン。今年も良く来てくれた」

どう考えても社交辞令な歓迎を無視し、僕は視線で先を促した。それに対して老人は少しばかり困った表情を浮かべる。

「……君は少しせつかな嫌いが有るのう。物事を急速に進めたがる」

「全てにおいてそうしたいと思っっている訳では有りませんよ。ただ、必要で無い事に際して、あまり時間を大きく割く意味が無いと考えているだけです」

そして、アルバス・ダンブルドアもまた根本的には同種だと思っている。

僕よりも手段と方法が酷く婉曲的であるが、それでも最低限必要な事以外に従事したがない傾向という事は変わらないだろう。

この老人は、推理の種明かしをする程に親切でも、丁寧でも無い。徹底的に独善的で、功利的である事について、僕は当然に共感を示している。

そんな揶揄が通じたのか、それとも僕の頑なさに折れたのか。或い

は、それが自らにとつても好都合だとすら考えたのか。老人は小さく頷いた後、口を開いた。

「まずは君には礼を言わなくてはならんおう」

「……随分な皮肉ですね」

ただ、余りにあんまりな先制攻撃に、僕は顔を顰める。

けれども、今回は老人にその意図は無かったらしい。静かに首を振った。

「偽りなき本音じゃよ。今年、君は儂の計画を破壊しようとしなかった。君が動かなかつた御蔭で、儂は生徒を一人も殺さずに——五十年前の二の舞を演じずに済んだ。その事について、儂は君に対して深く感謝しておる。個人的にホグワーツ特別功労賞を与えたい位にの」

「去年と違つてそのような戯言を抜かさなかつた事は本気で有り難いですよ」

今年も加点されていたら、一体どうなっていたか解らない。監督生が何処か期待するような表情を向けていたのは知っていたが、当然に無視した。僕を何だと思っているんだ。

そして何より、僕の行いは讃えられる類の物では無い。

「……そもそもの話、去年僕は何もしなかつた。そして、今年もです。『生き残つた男の子』のみが——『英雄』のみが全てを成し遂げ、終わらせた。僕の力というのは一貫して些細な物であり、状況に波風を立てるものでも無かつた」

去年も無力を感じた。塵のような闇の帝王の前で尚、僕はその塵以下の存在だった。

しかし、今年はそれ以上だった。二月初めにハーマイオニー・グレンジャーが退院し、間違いなく彼女が穏当に石化した事を確認するまで、本当に気が気で無かつた。胸を張って出来たとと言える事など何も無い。己の無能さに対し、大きな怒りを感じたと言つて良い。

けれども、老人は重苦しい表情のままに首を再度振った。

「君が盤外から状況を破壊しようとした去年の事を忘れる程、儂は物忘れが激しくも無い。君は儂の斜め上の方向性を取れるような人間であると、良く心に刻んだものじゃ」

この老人も僕を何だと思っっているんだろうかと僕は睨んだが、老人はやはり気にも留めなかった。そして当たり前のように、言葉を紡ぐ。

「何もしなかったと言えばそれは儂の事じゃ。寧ろ、儂の立場を考えると単なる生徒以上に罪深いであろうと思うてはおる。そもそも、君は真に何もしなかったのかね？　ハーマイオニーに鏡を渡したのは君じゃろう？　アレは、保険としては良い一手じゃったと儂は思う」
果たして、本当にそうだろうか。

「……所詮は保険でした。そして、無かつたとしても彼女は何とかしたかもしれない。彼女は聡明だ。バジリスクの正体に気付けば、当然自衛の手段を探したでしょう」

「かもしれない、じゃよ。ステファン。その保証はやはり無い」

老人は言うが、女生徒が普段から身嗜みを整える鏡を持ち歩いてたとしても不自然では無いだろう。ハーマイオニー・グレンジャーはその辺りに余り頓着しない性格でも有るが、それでも彼女は歴とした女性なのだ。僕の干渉はやはり無意味だったかもしれない。

ただ、今の会話からもはっきりした事が有る。

「つまり、貴方は途中まではバジリスクによる犠牲者が出なくても、最後の最後はバジリスクによる死者が出るかも知れないと、そう考えていた訳ですね」

「……否定する意味は無いじゃろうな。最後の一件だけは止められんかも知れぬ。その可能性は頭に有った。そして、それを君が最も恐れていた事も、儂には解っておる」

この老人に対して今更何かを言う気は無い。

ただ嘆息して、問いを紡いだ。

「僕には全く解りませんが、闇の帝王が生徒を石化するに留めた一番の理由は何なのです？　少なくとも今回においては、闇の帝王が最後まで殺人に踏み切る事は無いだろうと、貴方は確信しているようだった。実際、彼は殺そうとしなかった」

「まあ、そうじゃな。それはヴォルデモート卿との知己と理解——彼の生徒時代を知る者にしか導けぬ結論の一つであろうて」

老人は頷き、僕を悩ませていた答えをあつさりと言った。

「それはのう。一人を殺せばホグワーツが閉鎖される可能性がある
と、あやつが知っていたからじゃ」

「……………は？」

茫然として更なる説明を求めるが、それで終わりのようだった。

実際、アルバス・ダンブルドアも少しばかりの苦笑を浮かべてみせた。

「馬鹿げているのは承知じゃよ。根拠としては薄弱に聞こえるのも。けれども、強く意識していた筈じゃ。五十年前、マートル・エリザベス・ワレンの死によって、ホグワーツは一度閉鎖の寸前まで行った事を。実際は直ぐにその段階まで進んだ訳では無いが、望まぬ場所に戻らされようとした事実は、あやつにはトラウマ的であつたに違いない」

トラウマ的。その表現を老人が選択したのは、酷く意味深で、揶揄的でもあつた。

「……………まあ、貴方がそう断言する以上、単なる勘に留まるのではないん
でしょうが。であれば、闇の帝王が生徒を殺すのを避けたのも当然の話ですね」

「閉校となれば必然、ハリーも家に戻る事になるからの。勿論、ホグワーツが永久に閉校になる事もまた有り得ぬから、次を待つ事は可能では有るが」

「余計な時間を与えないに越した事が無いのは確かでしょう。ハリー・ポッターという秘密の部屋の鍵を放置するのは、それだけ不確定要素が増える訳ですし」

アルバス・ダンブルドアが秘密の部屋の怪物について勘付いている事を、闇の帝王が気付いていたかは解らない。

けれども、ハリー・ポッターを秘密の部屋に誘い込む事に成功しても、それがアルバス・ダンブルドア同伴では不味いと考えていたのは殆ど間違いないだろう。その可能性を低減させる為の努力を惜しまないのは当然とも言える。

「最初の事件、ミセス・ノリス——アーガスの猫を石化させたのは、恐

らく偶然で有ったのでは無いかと思う。バジリスクの生態は謎が多く、ニユートが知っておったかは別として、『幻の生物とその生息地』にも石化現象は記載されて居なかつた筈じゃからの」

だが、何の因果か、死を齎す筈の視線は全く別の結果を生み出した。闇の帝王は当然の事ながら疑問を抱き、その理由について検討したのだろう。そしてやはり至極当然に気付いた。直視させなければ、意図的に石化させる事が出来ると。

「後は知つての通りじゃ。スリザリンの継承者の力を誇示しつつ、閉校させないままハリーへ謎を残す事が出来る。死者が出ておらずとも犠牲が出ているのは確かであるから、儂の責任を追及して追放するのにも十分じゃ。もつとも、その計画を真に固めたのはハリーがパーセルタングである事を知つてからの事じゃろうが」

「……そして、貴方がそれを見透かした上で、ハリー・ポッターを放置するのを決めたのもまた同じタイミングだったという訳ですね。彼が何時も襲撃現場に居合わせた事も併せ、彼は蛇の声を普段から聞いていたみたいですし。貴方はそれを告げられた筈では？」

「——計画を立てたのは然りじゃ。けれども、君には一点間違いがある。ハリーは既に蛇の言葉を聞いていた事を、儂に伝えようとはしなかつたからの」

その答えは意外だった。

僕はハリー・ポッターが、アルバス・ダンブルドアに対して当然それを告げているものだと思つていた。そして、その上で無視したのだとも。しかし、どうやら違つたらしい。

ただ——複雑な親子の関係性について、余計な首を突つ込むつもりも無い。そもそも突つ込めるだけの経験が無い。

だから、僕は話を大前提へと戻した。

「闇の帝王は、閉校を避ける為に殺さなかつた。裏を返せば、閉校になつても構わないという段階——ハリー・ポッターを秘密の部屋に誘き寄せられる公算が付いたのであれば、やはり『穢れた血』が幾ら死んでも構わなかつた。そういう事になりますね」

老人は何も答えない。僕もそれを気にしない。

当然の話だ。その確認は、一番最初に既に終わらせている。

だからこそ、僕はハーマイオニー・グレンジャーがその最後となる事を徹底的に恐怖した。バジリスクの被害を黙認し、秘密の部屋の真実について三人組も含めて伝える事が無く、しかしそれでも半ば無意味な干渉を止められなかったのは、その点にこそ在った。

幸運な事に、ハーマイオニー・グレンジャーは、ペネロピ・クリアウォーターと共に石化だけで済んだ。そして、僕の想定外だったのは、闇の帝王にとって彼女を最後の、決定的な一押しとする必要は無かったという事だった。ハリー・ポッターを秘密の部屋の謎に駆り立てるに足る人物が、まさか彼女以外に居るとは思わなかったのだから。

ジネブラ・ウィーズリー。

ハリー・ポッターの親友ロナルド・ウィーズリー、その妹。

成程、その身柄が手中に在るならば、ハーマイオニー・グレンジャーに拘る必要は無い。

僕が最悪として想定していた脚本は、ハーマイオニー・グレンジャーを贄として殺害し、その復讐としてハリー・ポッターを誘き寄せるといふ物だった。しかし、囚われの御姫様を救い出すという展開は、獅子寮には酷く効果的で、感心する程に合理的な手段とも言えた。

「ジネブラ・ウィーズリー。彼女の役割は？」

僕のその問いに答える義理は、老人には本来無い。

けれども、予め決めていたかのように、何の逡巡も無く答えた。

「彼女はヴォルデモート卿に操られておったのじゃ。一連の石化事件について、手引きをしたのは彼女じゃった。自由が無い身ながら、あやつは手持ちの駒を誠に上手く使ってみせたと言えよう。流石の儂も、ここまでとは思わぬかった。あの男程に疑惑と不和を撒く才能に長けた者は居るまいと、今回つくづく実感したものじゃ」

その言葉には確かな苦々しさが含まれていながらも、賞賛を隠そうとはしなかった。

「仮にハリーを殺す事に失敗したとしても、果たして一石何鳥で有つたらうかの。ウィーズリー家の失墜。グリフィンドール寮の分断。

ホグワーツという学び舎自体への信頼の破壊。血を裏切る者への見せしめによる、真に純血主義マグル蔑視を信奉する者の増大。全くもって危うい所じゃった」

その大半は僕にとって左程関心が無いが――

「……操られていた？ ホグワーツでは、肉体的、精神的護りが幾重にも掛けられている筈でしょう。単純な服従の呪文は、この校内では上手く機能しないのでは？」

――流石に、身の危険が有るといふ事は聞き流す事が出来なかった。

ここは単に変な城では無く、魔法魔術学校なのだ。

『姿現し』や『姿くらまし』が制限されているなどは、防衛措置として序の口に過ぎない。移動鍵を学校内に繋げるのも、或いは逆に学校内から外部に繋げるのにも、それ相応の魔法力と権限が必要な筈であり、それ以外にも種々の攻撃や干渉が不可能な要塞となっているに違いなかった。そもその成り立ちからして、この学校は「マグル」からの迫害を少なからず背景とするものなのだから。

言ってみれば、ホグワーツ生は全員、その入学に際して「ホグワーツ」と魔法契約を結んでいるのである。この校舎内で正しく学び、成長し、卒業する為に。それを妨げるような暴力的行いは、原則として「ホグワーツ」自体が許容しないに違いなかった。

「まあ、そうじゃの。外部の者が掛ければ、普通は君の言う通りじゃ。しかし、去年校長である儂が招き入れたように、或いは創始者自ら遺したように、一定のルールに従って入り込むという事は可能なのじやよ。今回ヴォルデモート卿が用いたのも、その類じゃった」

「……その手段について余り知りたいたとも思いませんが、僕が最も大きな関心を有するのは一つです。今回には「次」が有るんですか？」
「無いとは断言出来ぬ。同種の干渉は想定しうる。しかし、手段は突き止めたし、今回の一つは間違いなくハリーが葬った。一応安心しては良いじやろう」

完全なる断言では無かったが、けれども僕にとっては十分満足出来る回答だった。

この余りに多くを見通し過ぎる大魔法使いが、確実な物言いを出来ない事など承知の上だ。しかし、今回この老人が被害を黙認したのは、偏に闇の帝王が用いている手段が解らなかつたに過ぎない。逆に言えば、解っているのであれば、たとえ同種の干渉が用いられても何とでも対策のしようがあるだろう。その点で、次が今回と全く同じになる事は有り得ない。

小さく安堵の息を吐いた僕に、だがアルバス・ダンブルドアは苦笑を深めた。

「……覚悟しておいたつもりじゃが。君は今回も多くを見通していたようじゃの」

その言葉が、額面通りに受け取って良い物で無いのは何となく伝わってきた。

「儂が真に懸念していたのは、君が今回の状況を——去年と同様に不愉快だと感じて残らず是正しようとする事じゃった。全てを見透かした上で、尚放置するとは余り期待しておらぬかつた。ただ、君は此度の儂との会話に平然とついてきてみせた。それは間違いなく君が、殆ど正確に事情を把握していた証明とも言える」

……まあ、何も理解しないままであれば、この飛び飛びの会話は意味不明だろう。

御互いに一から十まで説明をしないし、求めても居ない。もつとも、僕としては当然の行いである。必要で無い事に言葉を費やすのは、その事自体が必要であるという場合が時に存在する事は認めるとしても、やはり個人的嗜好としては大きな意義が感じられない。

「それで？ それが何か貴方を満足させる事だったのですか？」

「満足とは違うの。驚きというべきか。儂は秘密の部屋が解決するまで——君の事をハリーに言及されるまでは半信半疑であったのだから」

思ってもみなかった名前に、僕は眉を顰める。

「……ハリー・ポッターが、僕の一体何を指摘するというんです？ 彼と僕は、殆ど接触が無かつた筈ですが」

「ハリーは、君が今回の全てに気付いていたのでは無いか、と儂に問

うた。そして率直に言つて、儂はそれを誤魔化すのに大変苦勞したと言わざるを得ぬ。それが正しいのかどうかすらも解らなかつたからの。結局、普通であれば犠牲を見逃す筈が無いであろうという言葉に、ハリーも一応の納得を見せてくれたが」

……そう老人は言うが、やはり意味が解らない。

ハリー・ポッターとの直接の接触は、あの十二月末のメモが最後である。意味深であるのは否定しないが、だからと言って僕が真相に氣付いているという確信には繋がらない。

ハーマイオニー・グレンジャー經由を考えるにしても、あのギルデロイ・ロックハートとの接触を除けば、全く接触していないと言つても過言ではない。わざわざ彼女が僕から鏡を渡された事を喋る理由は考えもつかないし、やはりその結論を出す理由は無い筈だつた。

ただ、見る限りでは、この老人もその答えを持たないらしい。問い掛けの視線を寄越しても尚、アルバス・ダンブルドアは、ただ静かに僕を見返してくるだけだつた。

「そう言えば、その際ハリーもしきりに不思議がつておつたが、君は随分とギルデロイに関心を寄せておつたようじゃの。ギルデロイが一体何であつたのかと、儂にも強く確認された。その点に関して、君は儂以上に何か情報を持つていたのかね？」

その蒼い瞳には、珍しく興味と関心の色が映っている。

言葉を選ばなければ内心を探る色と表現すべきか。

去年この老人は原則として開心術を生徒に用いるような真似をしないとは言つたが、その叡智と老練さを持つて若人の内心を見透かす事については何ら言及していなかったし、実際それらによつて開心術に近い真似は出来るのだろう。だからこそ、彼は殆どの場合において開心術を必要としない。

だが、別に今回に関しては、開心術有りだろうが無しだろうが構わなかつた。

「……ああ、貴方が疑念を持つ理由は何ら存在しませんよ。ギルデロイ・ロックハートの名前を彼に対する迷彩として使つたのは事実ですし、他ならぬ彼自身から話を聞きたかつたのもまた事実です。しか

し、もう終わった事です」

あの時点で最早彼はどうでも良い存在だったし、既に何を言っても仕方がない。

彼は、不幸な事故によって記憶を喪ってしまったのだから。

「その割には、ギルデロイが間違いなく闇の帝王とは無関係だと儂が保証した後も、ハリーは何か腑に落ちないようじゃったが……まあ、君がそう言うのであればそうなのじゃろう」

自分を納得させるように老人は頷き、けれども話題を続けたいいらしなかった。

「ただ、去年のクイリナスと違って、君は何も言う気が無いようじゃの？」

心底不思議そうに言うが、僕が何時も何時も文句を付けるとでも思っているのだろうか。

いやまあ、全く言いたい事が無い訳では無いのだが。

「僕の価値観では、去年は教授として尊敬出来るような人間であり、今年は教授としても道化としても尊敬を抱けるような人間で無かつただけですよ」

そう言い切り、しかし寮監の言葉が脳裏に蘇る。

『己が価値を見出す事が出来た物に対しては酷く熱心であるが、しかし逆に、見出せない物については君は——お前達は余りに冷ややかだ』

だが、それは何か可笑しい事なのだろうか。

興味や好意を抱く者には親身に、それ以外には冷淡であるのは誰だって同じである筈だ。にも拘わらず、あのような皮肉を、半ば憐憫するように言った理由を今一解りかねている。

まあ、一々気にしても仕方がない事でもあるのだろうか。

「文句が有るとすれば、何故あのような害にしなければならない無能を貴方が雇ったのかという事位でしょうか。学ぶ事が無いという事を学ぶというのもまた学びであると言うのであれば、ギルデロイ・ロツクハート以上の人材は居ませんでしたか」

「——それについては、悔いが残った部分でも有るの」

老人は、深い後悔を滲ませながら、大きく息を吐く。

「儂は、彼の為には、ホグワーツに招くのが一番であると信じておつた。ここでは生徒だけでは無く、教える側もまた多くを学ぶ。そして、儂は彼の学生時代を——ギルデロイが目を輝かせながら、愉快な校内新聞の出版許可を儂に求めてきた時の事を覚えておる」

「……ただ、貴方は今年余りにも忙しかったようですからね」

座視する事は、何もしないという事では無い。

ルシウス・マルフォイ氏の干渉を思えば当然だ。この老人もまた闇の帝王が動くのを待っていたとは言え、追放されるのが早過ぎては不確定な事象を引き起こす可能性が有った。如何に石化が意図的だったとは言え、闇の帝王がその手段を選択したのは、やはりアルバス・ダンブルドアという絶対の暴力を無視できなかつたからに違いない。「……それで、今回貴方がギルデロイ・ロックハートを招き入れた深慮遠慮は、一体どのような物であつたのです？ その事についても、やはり想像が付きませんでしたか」

気宇壮大な存在かとも思えば、結局は見たままの存在だつた。

故に、僕はアルバス・ダンブルドアがどういふ価値を彼に見出したのか気になつてもいたが、老人は当然のように言つた。

「ギルデロイは、忘却術を用いて人の功績を盗んでおつた」

「……それで？」

「その内の二人は、儂の知人であつた。故に、儂はギルデロイにハリリーの教師となる名誉をちらつかせ、ホグワーツへと招いた。彼の詐欺、そして彼がペテン師である事を明らかにし、その罪を明らかにする為に」

「——成程。その為に、貴方は学校に招き入れたという事ですか」

気付けば拳を強く握り締めていた。

個人的な事情の下に、公の組織を利用する。

七年の内の一年。二度と訪れない時間を、誰とも知らない中年の贖罪の為に使い潰す。

別にその行為自体を否定するつもりは無い。公を濫用出来る地位に在るならば、やはり私は当然の権利としてそれを行使すべきだつ

た。

しかし、それと同時に領分を弁える事は必要な筈だ。己が利益を図るのも結構。全体の為に奉仕すると嘯くのも問題を無い。けれども、それは善悪や是非を問わず、確かな自覚と決意の下に行われるべきであり、断じてあやふやなままに用いられてはならないに違いなかった。

ギルデロイ・ロックハート。

彼は、一人の男子生徒に対話と共感を求める程、この一年を通して誇りと自尊心を手酷く傷つけられ、理解に基づく敬意に飢えていた。確かに彼は犯罪者だった。老人は対処する時間が無かった。しかし、どんなに正当な理由が有ったとしても、その冷ややかな歓迎は、ホグワーツという学び舎が再度彼にとって居心地が良い物などでは無い程である事を克明にした。

僕はあの男に価値を見出せなかったが、それでも、それを無視しきる事は出来ない。

……いや、この老人はこの老人なりに美学を持っているつもりなのだろう。

言ってしまうえば、僕の価値観にそれが合わないというだけなのかもしれない。

僕は寮監を教授と呼びたくは無いが、生徒を倫理的に導く気概を更々見せる事無く、ただ己が研究に身命を費やし、またそれを継承し得る者の育成を欲するという価値観は、『教授』の一つの在り方だとしてやはり理解出来るのだから。

「……どうやら大穴が正解だったようですね」

握った手を軽く開きながら、僕は言葉を紡ぐ。

「忘却術説が有り得ないというのは、ハーマイオニー・グレンジャーが滔々と説明してくれました。まあ、彼が不幸な事故で記憶を喪ったと聞いた瞬間、そうだとは思いましたが」

「ハーマイオニーは真に聡明な魔女であるようじゃの。そして多くが同じように考えた。正しく巧妙な技であった。儂に確信は有ったとは言え、証拠は無かったし、暴く手段も無かった。回復も期待は出来

なかった。彼自身が、それを悔い改める以外にの」

同時にギルデロイ・ロックハートの並々ならぬ腕も解る物だ。

『狼男との大いなる山歩き』において、彼は村を救ったのだと記述していた。

そう、彼が他人の功績を盗んだのだとすれば、それだけの目撃者、或いは真の英雄に対して感謝した者が居た筈なのだ。けれども、そのような者は現れないか、或いは真実を言っても嘘吐き呼ばわりされる程の少数派に貶められた。魔法事故惨事部の総力を上げた場合でも、つてもここまで見事な真似は中々出来ないだろうと思わせる、完璧な腕前だった。

彼はやはりレイブクロードだったのだろう。馴れ合いを排した徹底的な個人主義は、時に突出した大魔法使いを産む。記憶の領域において、彼以上の魔法使いは居なかった。

そして――

「ギルデロイ・ロックハートは、貴方に勝利したという事ですか」

――その事実を少しばかり羨む気持ちだが、無い訳ではなかった。

「……やはり、君もそう感じるかの」

「報いを受けた以上、僕は余りそう思いませんが。しかし、貴方の目的を外したのは確かです。貴方は罪を贖わせる為にギルデロイ・ロックハートをホグワーツに呼び、けれども彼は逃げおさせた。彼は法の届かない場所に、最早誰にも裁けない場所に行ってしまった」

その事だけは、幾ら言葉を濁そうとも揺るぎがない。

秘密の部屋の中で何が起こったのかを僕は正確には知らないし、知る術も無い。けれども、それなりの期間を掛けて会話を交わした間柄なのだ。何故か記憶を喪ったという事も併せれば、あの男がどういう行動を取ろうとしたのかは容易に想像が付く。

「それを正しく予測していたのは寮監ですよ。『賢者が愚者に必ず勝つ訳では無い』と。明らかにあの男を雇った貴方を揶揄する台詞を吐いていた」

「……セブルスらしい物言いじゃの。彼は反対を示したものの、それ以上の事は言わなかった。ギルデロイの雇用に一番反対したのはミ

ネルバじやつた」

「ならば恐らく、それを寮監は深く後悔したでしょう。良い気味だとも思いますが」

ただ寮監は、ギルデロイ・ロックハートに牙が有る事を見透かしていた。

当時は拷問だと考えていたが、あの男と幾度と無く会話をし、一定の信頼関係を築いた事は良かったのかもしれない。自分を手酷く侮辱した——客観的にそう見えるのは事実だろう——生徒に対し、私怨の下に忘却術を行使して人格を破壊する可能性は皆無だったとは言えないのだから。

「一応聞きますが、彼の行いを公表する気は？」

「……しても信じられる物じゃなからうて。報いは受けた。彼はその一生を治療に費やす事となる」

勿論、僕はそうは思わない。

アルバス・ダンブルドアは相応の権力者だ。その言葉は十二分に正しい。

そもそも別にホグワーツに招き入れる必要など無かった。形振り構わず政治力を行使すれば、万人が万人、ギルデロイ・ロックハートが詐欺師である事を信じなくとも、再起不能な程度には毀損出来ただろう。

都合の良い事に、彼は二年生にも劣る程に呪文を使えず、公開の場で実践を促してやればそれで終わった。何より一番重要なのは、アルバス・ダンブルドアはマーリン勲章一等で、ギルデロイ・ロックハートはマーリン勲章三等なのだから。

加えて今の時点においては「生き残った男の子」が居る。

特に秘密の部屋を暴き、バジリスクを殺してみせたという事実は誰にも否定出来ず、やはりその言葉は重みを持つ。たとえ彼が十二歳であるとしても、彼がギルデロイ・ロックハートの名誉を傷付けて得られる利益など無いのは明らかであり、彼が真実を語っているのだというのを受け止められるだろう。

けれども、やはりこの老人はそれを選ばない。

闇の力に対する防衛術連盟の名誉会員、週刊魔女のチャームングスマイル賞五回連続受賞、そしてマーリン勲章勲三等。

常に自慢していたそれらの名声を、彼は喪いはしなかった。

今回も、そして恐らく永久に。それは、やはり勝ちなのかもしれない。

加えて、ギルデロイ・ロックハートがこの老人を上回った点がもう一つ有る。

「ハリー・ポッターらが、ホグワーツで最も無能——ではなく有害であつた存在を秘密の部屋に連れて行った事についてはどう考えているんです？ 彼が秘密の部屋に誘い込まれる事までは、貴方の計画の範疇だつた。しかし、ああなるとは考えて居なかつた筈だ」

「——そうじゃな。それは痛恨だつたと言つて良い」

ハーマイオニー・グレンジャーと違い、彼等もギルデロイ・ロックハートを間違ひなく馬鹿にしていた筈だが、けれども最後に頼つたのがあの男であるというのは奇妙さも有る。

ただ、改めて考えれば、それは当然の事なのかも知れない。

先のミネルバ・マクゴナガル教授との会話を考えるに、賢者の石を解決するに際し、ハリー・ポッター達にとつては、大人達は頼れるものには成り得なかつた。一方、当然の事ながらギルデロイ・ロックハートは去年居なかつた。そうであれば、この展開を予め予想する事もまた不可能では無かつたのかもしれない。

しかし、そのハンデを背負つて全てを終わらせたハリー・ポッターは、やはり常人とは一線を画する「異常」で有るのだろう。精神力もそうだが、天運の面にしても並外れている。それはまさしく「英雄」の在り方に他ならなかつた。

「……せめて、来年こそは闇の魔術に対する防衛術教授に期待したいものですけどね」

「耳が痛い。しかし、心して置こう」

端的な言葉に、老人は頷いた。

僕はクイリナス・クイレル教授を教授と呼ぶが、その授業がマトモで無かつたというのは認めざるを得ないのだから。その点はやはり

寮監に軍配が上がる、というか比較にならない。二年とも口クでも無かった以上、三年連続というのは勘弁して欲しい。

まあ、実際の所、この老人にさして期待していないのだが。

「……それで。そろそろ本題に入るつもりは有りますか？ 僕が貴方に要らない質問したのも悪かったですし、答えて頂いた事に感謝が無い事はないですが。」

けれども、貴方は、こんな話をする為に僕を呼び付けた訳では無い筈だ」

この老人は名探偵では無い。

推理の種明かしをする程に親切でも、丁寧でも無い。

今年は去年とは違うのだ。

去年の場合は、杖に秘密を誓ってみせた者に対して、いわば説明責任として僕に真相を伝える義理は有った。けれども、今年はそうでは無い。この老人の策謀について生徒が何も見ないままに居るといふのは当然の行いであり、わざわざ呼びつけてまで感謝を示す必要も、言葉を交わしてやる必要も無い筈だった。

そして、アルバス・ダンブルドアは当然のように頷く。

当たり前のように、生徒が自身の求めに、その謎に解答する事を疑わない。

「その前に、君に問うておきたい事が有るのじゃ」

「……下らない前座が必要ですか」

「前座では無い。儂にとつては紛れも無く本題の一環じゃよ」

老人は首を振り、重々しくその口を開く。

「君がスリザリン生である事を、儂は良く承知している。儂がスリザリンから蛇蝎のように、という表現では生温い程嫌われているのも理解しておる。そして何より、君と儂の気質が全くもって合わないというのも、御互いが同意を示せる点であるとも思う」

「……………」

「しかし、君は去年も、今年も、儂に対する最低限の尊重だけは捨て去ろうとしない。どんなに見下げ果てた老人であると感じようと、絶対に。その理由を、儂は聞かせて貰いたいのじゃ」

そう言われた瞬間、平静を保ったとは思う。

だが、この老人には伝わっている事は解っていた。

「……それが必要ですか？」

「酷な事を聞いておるとは理解しておる。しかし、儂は君にそれを言葉にして欲しいと思う。いや、迂遠な事を言っても仕方が無かろう。儂はその理由に見当が付いておるし、それは正しいのだと半ば確信しているのだから」

当然の事だった。

入学前、ホグワーツへの「脱獄」に希望を抱いていた時から、英雄の生涯は僕にとり興味を惹く事柄だった。寧ろ、魔法界において、アルバス・ダンブルドアについて関心を抱き、何らかを調べようとする者は居ないだろう。

彼は多くの書籍、或いは論文の中において語られ、それを追う事は何ら苦労が無かった。そして子供の理として当然のように憧れ——しかし、皮肉にも「収容」が終わった後、それが憧憬を抱くような英雄では無いという事を理解した。

そしてその事こそが——この老人の生に共感してしまった事こそが、逆に、僕にとってアルバス・ダンブルドアに対して冷笑の態度を貫けない理由となってしまうた。

「今では無く、当時。君を育て上げた者に対して、君はどのような想いを抱いていたかね？」

僕は大きく息を吸い、そして吐き捨てた。

「決まっているでしょう。」

——反吐が出る程嫌いでしたよ」

そう思わない筈が無かった。

僕の生は、母に支配されていた。優しく、それ故に残酷な鎖に繋がれていた。

物心付いた時から、母が全ての中心に居た。

今の僕ではなく未来を見ていた、その言葉が嫌いだった。僕の嫌悪と暴言を是認していた、その笑みが嫌いだった。死臭に似た匂いを漂わせていた、その抱擁が嫌いだった。

僕が成長するのと比例するように、僕が母の生命を吸い取っていくかのように、それらは日々耐えられないものとなり、特に最後の二年程は酷いものだった。

食事を一回一回口元まで運ぶ。力の抜けた身体をしばしば動かす。不可避的な汚物を処理し、身体を拭く。呻き声や喚き声を上げているのに付き合う。目の届く範囲外で危険な事をしないように、殆ど丸一日寄り添う。

それらの基本的な事柄は当然ながら、日常の全てについて僕は必要とされた。

無論、言葉に表してみればこれ程単純で、無味乾燥な物は無い。ただ、こればかりは、実際に見た者しか感じられない重みと、苦々しさが有った。

何より僕が最もロクでも無いと感じていたのは、母が時折正気を、理性を取り戻す点だった。単なる動物だと割り切れば、もつと手酷く扱えたのだ。しかし、出来なかった。非道にも、母は、神はそれを赦してはくれなかった。

ただ——そんな事を目の前の老人にわざわざ言っただけでやる必要は無かった。言葉よりも雄弁な物が、世の中に在る。まして、互いに同種の物を持っているのなら猶更だ。

そして、老人は大樹のような頑なさのままに、静かに頷いた。

「君は勘違いしているかも知れぬから、予め補足しておこう。確かに僕は、ホグワーツの卒業時にゴドリツクの谷に戻り、その後大きく変わった。しかし、それは母の死が原因では無い。寧ろ、当時はそれを心の何処かで恨んでいたかも知れぬ」

「……貴方に出来損ないの妹が居るといような話は、幾つか読みました。けれども、貴方を貶める為の嘘だと僕は思っていました」

「嘘では無い。また、スクイブでも無かった。僕の妹で、アリアナ・ダンプルドアといった。そして、君が母と呼ぶ者に、恐らく最も境遇が

近い存在じゃったと思う。また、彼女の死こそが、儂に自身の愚かさを、如何に愛を軽んじていたのかを思い知らせたのじゃ」

それを語る老人に、去年のような弱々しさは無かった。

枯れ落ちていた。その事について余りに悩み、考え過ぎ、その段階を通り越していた。けれどもそれは表面上だけで、その洞の中には大嵐がうねっている事を僕は既に知っていた。

「儂は——儂等は、喪わねば理解出来なかった。共に過ごす何年の時よりも、ただの一瞬こそが重く、痛烈な衝撃を、魂の終焉を与えた。この先どれ程の長く生きようとも味わわないであろう、苦杯と欠損、そして何よりも自分自身への激情を齎した」

「……………」

アルバス・ダンブルドアはそこまで言い切った。

僕は何も言わなかったし、老人もまたそれを求めなかった。

「君に聞くべきかどうかは迷っておった。去年、君の率直な言葉を聞いても尚。じゃが、やはり君は信用に足る。その確信は今確かなものとなった。だからこそ、真にこの戦争の中核となる事項について問おうと思う」

「……僕はそれを全くもって希望していないんですけどね。僕にとってハリー・ポッターが基本的にどうでも良い存在だというのは理解している筈だ」

「代わりに儂が君に力を与えるとしても？ 例えばそう、閉心術を」

今年は、僕が呻く番だった。

嗚呼、この老人は長く生きて来ただけあって、他人の急所を正しく知っている。

僕には力が必要だった。些細で有っても、確かな力が。今年のように、或いは去年のように、物事を傍観しないままに居られるだけの暴力が。

「……貴方は酷い人間だ。それは貴方が必要だから覚えさせようとしているだけだ」

「否定はせぬ。けれども、君が今年全てを見透かしたという事は、それでいて尚動かなかったという事は、間違いなく君に力の必要性を感じ

させた筈じゃ。そして、儂はそれを提供出来る。特に閉心術の類は、一人で鍛えられる物では無いからのう」

「多忙な校長自らが、それを行う必要が有りますか？ 例えば寮監なんかに対して丸投げしてしまえば良いのでは？」

「儂は自ら関わるだけの価値を感じておる。誰も君に注目していない今であれば、儂自らが動く事も出来る。別にセブルスが不適切であるという訳では無い。彼は卓越した閉心術士じゃ。指導する者としては十分過ぎる程であろうし、儂の予測通り来年セブルスが多少忙しくなるとしても、仕事を遣り遂げるだけの能力を有している」

じゃが、と老人は壮絶な微笑みを見せた。

「——君が真に実感しているかは知らぬが。」

儂は今世紀で最も偉大な魔法使いと呼ばれておるのじゃよ」

この老人の教師の在り方が、僕は気に入らない。

さりとして、それでも指導者として不適という訳では無いのは解っている。寧ろ、この老人程に、他人を先の領域に進ませるといふ一点において、眼前の存在以上の者は居ないのだろう。校長職として最前線から離れていた期間が長いとしても、百年近くホグワーツに巢食ってきたという事実は変わらない。

そして、閉心術の修練は必然的に他人に対し心の侵入を許すものであるが——この老人の前では全く気にする必要も無いのだろうとは承知していた。この怪物は、間違いなく僕以上に僕の事を知っている。不快だが、それは事実だ。

「……貴方は余りにも多くの事を企み過ぎる。聞きましたよ、秘密の部屋を元通りに閉じ直し、バジリスクの亡骸も再度そこに葬る気だと。あの毒は貴重な上に、産出者が死んだ程度で容易に劣化する物では無い。貴方はホグワーツに災厄を残そうとしている」

秘密の部屋の解決というハリー・ポッターの偉業を、そしてアルバス・ダンブルドアの帰還を納得させる為には、バジリスクの遺骸こそが最も手軽で適切だった。

だが四百年程の間、英国では御目に掛かれなかった怪物だ。たかだか自分に制御出来ない程度の些事では諦めない魔法生物狂い共を

もってして尚、それだけの間ヴェールを剥がせなかつた存在だ。研究したい者や、それを保存したい者がわらわらと現れて来たのは当然の成り行きとも言える。スリザリンの卒業生ですら秘密の部屋を含めて大いに興味を持った。

けれども、この老人は殆どそれらを拒絶したと聞く。

「あれはサラザール・スリザリンの遺産じゃ。であれば、本来の場所に還してやり、穏やかに眠らせてやるのが当然じゃろうて」

「……良く言う。ならば、ゴドリック・グリフィンドールの剣を小鬼達の下に戻してやるべきでしょう。それは彼が盗んだ物だ」

「それはゴドリックの遺産じゃよ、ステファン。盗んだ物などでは無い」

校長室の片隅に置かれた美麗な剣を見ながら老人は言うが、僕にはやはり同意しかねる。

購入金額と借入金額には必然的に大きな差異が有るのは当然の事だ。そして一方が購入するつもりで金額を提示し、一方が賃貸するつもりでその金額に同意したのであれば、そこに両当事者の意思の合致は無く、契約は当然に成立しない。

それを種族の差異による行き違いだと主張するのは、詐欺師の開き直りでしかない。

だが、老人はその眼を細め、釘を刺すように言う。

「君は聡明にも理解している筈じゃが、互いの真意の合致の下に既に成立した契約を、気に入らなくなったからとして事後に覆す場合であれば、それはやはり不当な行いであろう」

「……解っていますよ。そして、既にいずれが真実か不明だ。水掛け論にしかない」

溜息を吐く。そもそもどちらでも構わないのだ。

この話題は、単に自分が決意する為の猶予を求めただけに過ぎない。

「それで、実際僕に何を聞きたいんです？」

その問いに、漸く老人は本題に入ってくれらしい。

静かに頷いて、問いを発した。

「闇の魔術について多少の見解を聞きたいのじゃ」

予想通りの言葉に、最早肩を竦める気にもなれなかった。

「ヴォルデモート卿の失墜の後、この国では闇の魔術に関する知識も物品も多くが狩られた。彼等も隠す時間も隙も無かったからの。しかし、それ以外までは手が回らなかつたのも事実。というより、その必要性は無いと多くの者が考えていた。……君の父上は混乱に乗じ上手くこの国に入り込んだようじゃの。また卓越した魔法使いだった」

「僕は母がそれを為したと思いますかね。そして父は既に死んだ。永久に」

ステイブーン・レッドフィールドは、既に気に留めるべき存在では無い。

国を舞台とする魔法戦争とも違う。あれは家庭内の些細な事件で、全て終わっている。

「母の——僕の家には闇の魔術の品々が積まれていた事は、ミネルバ・マクゴナガル教授から報告を？ 教授は“後始末”をする過程で、当然にそれらを見ましたから」

「うむ。流石に事が事であるからの。君の家に在った物の諸々についても聞いた。二年とは言え彼女は魔法省執行部に居た。しかしその彼女ですら見た事の無い物が有ったとも」

「文句は言いませんよ。その際釘も刺されましたし」

教授は、ホグワーツ教師として、そして生徒を助ける者として来たと言った。

だからこそ、その行為の過程で知った違法な諸々を、善良な一魔法族として通報するような真似はしなかった。不愉快さを示し、忠告を残しながらも、その職分を踏み越えようとはしなかった。僕が教授の立場であれば、“当然の善意”を行使しただろうが、教授は厳格で、融通が利かず、何だかんだ言って生徒に甘かった。

ただ、危険分子についての上司への報告は、教師として当然の事だった。

そして、僕からそれらの闇の遺産が接收される事の一歩の歯止めと

なつたのは、やはりこの老人で有つたのかもしれない。

「……しかし、貴方が僕に聞くような事はやはり無いとは思いますが、けれどね。貴方が闇の魔術を嫌悪しているのは理解してはいますが、それにしたって全く知識が無い訳では無いでしょう。その上、貴方は推量する事を大得意としている筈だ」

第一、知識が有るからと言ってそれがそのまま力を有するという訳では無い。

如何に闇の魔術を使おうとも、僕の力量では、この老人の産毛一本すら削ぐ事は出来まい。それは、仮に十年、二十年後の自分をこの瞬間に持って来られた所で殆ど変わりはないだろう。百歳を超えた老人に、体力と魔力の全盛を迎えた人間が簡単に敗北する。それが才能の差異であり、英雄と凡夫との違いの筈だった。

「君に聞く必要が有るかは儂が判断する事じゃよ。そして、推量する際に材料が多いに越した事は無い。それ無しにやるのは、単なる当てずっぽうというものじゃ」

「ならば、闇祓いを初めとする適切な相談相手が居る筈では？ 彼等は闇に対抗する都合上、相応の知識を有している筈です」

「事は秘して進める必要が有るのじゃ。そして、彼等に答えられない事は確信している。無論、君に伝える事が大きな危険を孕む事も理解している。しかし、事が事であるが故に、逆に君の場合は知つておいた方が適切であり、まだ状況を制御出来るように思えるのじゃ」

「……つまり、何について？」

「ホークラックス。分霊箱に関して」

重苦しく発された闇の言葉に、僕は強制的に沈黙させられた。

分霊箱。

魂を引き裂き、それを外部に閉じ込めて延命を図る、闇の魔術の秘奥。

成程、この老人がそれを僕に問わざるを得ない筈だ。

アルバス・ダンブルドアは、余りにも多くを見通し過ぎている。だからこそ、口を開くべき時に開かず、逆に口を開くべきでない時に開

いでしよう。

しかしまあ、この場合は口を開くべきだったのだろう。それを知らなければ、僕は最大の危険を避けられなくなる。去年と同じような事など二度と御免だが、けれども仮にそのような万一が存在した場合、それを承知しているのは間違いなく有効な手札に成り得る。

そして、この老人は本気で僕に閉心術を叩き込もうとしている。

「……僕に聞く事が適切である事は確かなようです。ただ、それでもやはり聞く必要は無かったように思えますが？ 不死への方法論は幾つも存在し、分霊箱はその一つでしかない。一方、仮に分霊箱が用いられたと貴方が確信しているのであれば、貴方がすべきは方法論を問う事では無く、何が分霊箱に変えられたかを突き止める事だ」

分霊箱一個を特定し、捜し当て、破壊するだけだ。

別に「専門家」に聞く必要など無い。悩む事も難しい事も全くない。

けれども、アルバス・ダンブルドアは、僕の不理解を詰るかのよう
に首を振った。

「事はそう簡単に行かぬのじゃ。儂とて確信を持っている訳では無い
しの。そして一番の問題が控えているように儂には感じた。だから
こそ、君の見解を聞きたいのじゃ」

老人は真剣な表情を崩さないままに言った。

「——分霊箱を複数作るといふ事は有り得るかね？」

「——は？ 何でわざわざそんな大馬鹿な真似をしなければなら
ないのです？」

そして、僕は半ば啞然としながらその戯けた質問に答えた。

この老人が、時に突拍子も無い事を言い出す場合が有り得るのは承
知していた。けれども、ここまで理解不能な事を言われる事になると
は思わなかった。

老人は茫然としていた。何故、そんな返答が為されるのか本気で解
らないというように。

しかし、老人は気付いた。そして、一瞬遅れて僕も気付いた。

「……成程、成程。そうだとすれば、まったくもって並外れた魔法使い

じゃ」

その声には紛れも無い畏怖の色が混じっていた。

「分霊箱。それを用いる際、術者は必ず強力な守護の呪文を掛けねばならぬと警告される。魂の分割は一度ですら残された魂を大いに不安定にする。そして知られる限りにおいて、二回以上魂を分割した魔法使いというのは存在せず、その結果についても何も記されていない」

アルバス・ダンブルドアが語る言葉は、僕の知識と一致する。

「それを素直に解釈すれば、その余りの魔法の非道さ、高度さ、そして難解さ故に、誰もがそれ以上の領域へと達する事が出来なかったとなるじゃろう。しかし——」

実際それらは必ずしも間違っている訳では無い。

膨大な魔法力と強固な意思力、そして深い闇への理解無くして成立しない。

……ただ。

「まさか殺人を繰り返す程度が闇の魔法使いにとって障害になると？ 紀元前五百年頃の腐ったハーポより約二千五百年。その間、ただの一人も試さなかったとでも？」

「——魔法に暗示と隠喩は付き物じゃ。それを丁寧に解きほぐそうとする魔法使いは、分霊箱をただの一つのみ作る事こそが、正しい……闇の魔法をそう形容したくないのじゃが、ともあれ意図された結果を獲得する為の訓戒で有ると解釈する」

だからこそ、愚かな真似なのだ。分霊箱を複数作るという事は。

だが、間違つた道を突き進んだ先が、何処にも繋がっていないとは限らない。

「君はどう思うかね？ それを踏まえて尚、複数作る事は？」

「……何とも言えませんよ。ただ、複数作つたと主張する人間が居ないという事は、また分霊箱が不滅の手段として一般的なものだと考えられていないという事は、多くの魔法使いが不可能だと結論付けたか、実際に愚行の代償を払って死んだと考えるのが真つ当です」

殺人が手段と言っても、それは魂を引き裂くだけの物で無ければな

らない。

そうでなければ、分霊箱など世の中に溢れているだろう。猿がシエイクスピアを書き上げる可能性が皆無では無い通り、たとえ呪文を知らなかりうが意図して作りだす可能性はそれなりに存在する。

それでいて尚、分霊箱の存在が知られないままに居るとなれば、やはりそこには相当高い障壁が存在するのだと考えざるを得ない。

「……解っていますか。仮説が正しいとすれば、これは相当の難事ですよ」

御互いに、その分霊箱が誰に関する物かを口にしていない。

去年あれだけ正しい呼び名で呼ぶ事を求めた老人ですら、それを口にしない。それは用心の結果などでは無い。数々の護りに満ちたホグワーツ内、しかも今世紀で最も偉大な魔法使いの傍において、たかが名前を呼んだだけで外部に知られる事は有り得ない。

故に、誰の事が共通理解が出来ていて尚、その名前を出さないのは、これまでの誰よりも深い所まで辿り着いてしまったかもしれない者への恐れからに過ぎなかった。

「まず、不死の手段が分霊箱による物だと確定しなければならぬ。彼の失墜前の行動を追跡し、他に彼の嗜好に合うような方法論が無いが、併用しようと考えなかったかを検証しなければならぬ」

これは大前提である。一番難しいのはそれからだ。

「次に、彼のとった方法が分霊箱以外に無いと確信した場合には、その個数を確定させなければならぬ。しかもそれは殆ど一番最初に、ですよ」

「当然承知しておる。分霊箱の破壊を、或いはその探索を、悟られてはならぬ。分霊箱以外の方法が無いかの検証と、分霊箱の件を同時並行的に進めるのは困難じゃろう。そして、複数個存在すると確信した後もまた、一気呵成に物事を進めねばならぬ」

「その複数個について何が分霊箱になったかも当然ですが、その特定後にも気付かれてもならない。場所を変更する。数を増やす。そうされてしまえば、最早対処のしようがない」

そもそも特定が——その者にとって魂を容れるに足る執着物を探

すのが大変だという点が分霊箱の最大の強みであるというのに、それが複数など本当にやってられない。

「後者は不可能だと儂は見えておるが。あやつは既に限界まで魂を押し込めたのでは無いか」

「肉体の分割と魂の分割を一緒にすべきではないでしょう。恐らく後者は形而上的世界の論理によつて支配されている。仮に現実の論理が通用するとしても、例えば手足を切り落として計五分割されたとしても、理屈上は生存可能だ」

直感的にはアルバス・ダンブルドアの方が正しい気がするが、樂觀的になり過ぎるのは不適切だ。どう軽く見積もっても、相手は前例の無い化物なのだから。

「……来年から忙しくなりそうじやの」

「まあ関係無い身としては、御愁傷様というだけです」

嘆息する老人に他人事のように言う。実際他人事だった。

「生き残った男の子」殿ならば兎も角、この男が僕を盤上の駒として用いる必要性を感じるとは思えない。

今回偶々知識として役立ちました、それ以上の事は出来などしない。今年の些細な干渉が精々で、アルバス・ダンブルドアのように強大な魔法力を持っている訳でも無い。何より、舞台上に上がる気が更々無い。

今僕の頭に有るのも、四の五の言わずホグワーツから今すぐ逃げべきでは無いかという点だ。この老人が易々と負けるとは思わないが、真に己の身を考えるならそれを選択すべきだった。ただ……やはりそれは出来ないのだろう。

ハーマイオニー・グレンジャーは、全ての意義を喪ったあの日の僕が得た唯一執着出来るものであり、真に譲る事の出来ない価値を有する全てで有った。

闇の帝王の事を知らなければ、こんな身勝手な懸念などしなかった。交通事故に遭うのを過剰に不安に思つては生きてはいけないのだから。しかし、彼女が純血至上主義の大量虐殺者に狙われる可能性が高いとなれば、それはやはり別の話だった。

こうなるので有れば、たとえ自分の力量では間違いなく何も変化を齎せないと理解して尚、今年秘密の部屋に何とか干渉を試みるべきだったのかも知れない。魔法界の入口とも言えるホグワーツが廃校になれば、*「マグル生まれ」*は魔法界に留まる動機を決定的に喪う。後付けながらも、それは中々良い考えのように思えてしまう。

望んだ部分も有れど、まさかここまで面倒な状況に陥る事になるとは入学時には、否、去年ですら考えもしなかった。そう溜息を吐きながら時計を見る。

諸々の準備を終えた上でホグワーツ特急に乗る事を考えれば、もはや時間は殆ど無いと言えた。既に寮の人間は、殆どが退出しようとしている事だろう。

「……もつとも、今年は今すぐに帰るとは行かないのでしようね」

半ば諦念と共に言えば、老人は小さく頷いた。

「閉心術は一朝一夕で身に着けられる物では無い。君に本格的に教えるのも、来年が始まってからになるじやろう。しかし、最低限、心に入り込まれたか否かを知れる程度には、その感覚を身に着けて貰わねばならぬ」

「解っていますよ。分霊箱の秘密が露見した事を知られるリスクを、貴方は当然許容出来る。露見した場合で有っても、それで全てが終わる訳ではなく、対応策が取れない訳でも無いのだから」

「けれども、それすら知らぬままでは何の手の施しようも無いからの。寧ろ逆に罠に嵌められ、最悪の結果を招く事になりかねん」

だからこそ、学年最終日に呼び付けたのだ。全くもつて大した大魔法使いである。

僕の感心を他所にアルバス・ダンブルドアは滑るように椅子から立ち上がった。そして立ち上がった事で露わになる長身が、僕を上から見下ろした。

「そう言えば」

ふと思いついたというように、単なる付け足しの振りをして老人は問う。

「君は深い質問をしようと殆どしないのじやの。五十年前の真相。此

度の秘密の部屋内での顛末。ヴォルデモート卿のその正体。何よりもハリーに割り当てられた配役について。君にとっては多くの謎が残されているままじゃ。君はそれを知ろうと思わないのかね？」

それに対する答えなど決まっていた。

「知る必要が無い事を、聞く必要が有りますか？」

別に危険を招くから知りたくないのでは無い。最大級の危険となる情報は既に知ってしまったている。今更一つや二つ増えた所で同じだった。

故に、それは単純に僕が興味と関心、つまりその情報を知って利用する程の価値が見いだせないという事であり、それは正しく眼前の老人に対して伝わった。

だからお返しのように、僕も付け足しのような質問をする事にした。

「分霊箱の破壊手段にはどんな物が有るのです？ 悪霊の火を初めとする強力な闇の魔法、或いはバジリスクのような強靱な魔法生物の毒。その程度しか知りませんが」

果たして、アルバス・ダンブルドアは答えた。

「破壊とは違うが、引き裂いた魂を元に戻す方法は有る。すなわち、良心の呵責じゃ。そして、元に戻すという事は、外に閉じ込めていた魂が本来の場所へと帰ろうとする事を意味する。しかし、その際に身体が破壊されていれば——魂の片割れの在る場所が最早現世では無いのであれば、その者は当然のように死ぬじやろう」

「——成程」

そうして、僕の二年生は終わる。

アズカバンの囚人 テオブロミン

「ホグワーツの設立は革命的であったと思う」

まるで曇りガラスの向こう側にいるように輪郭がぼやけたスーツ姿の壮年の男——ステイブン・レッドフィールドは言った。

「知識というのは、常に歴史の中で秘されるものだった。その独占は、富、名声、権威その他君臨する為の手段として大いに貢献してきたものだ。そして当然の事ながら、それらは内輪で継承されるに至った。当然の事ながら、主に血族相手に」

非魔法族的に言えば、世襲に近いだろうか。

「しかし、ホグワーツの四創始者は、当時の社会背景に基づく結束の必要性からそれを放棄した。アイルランドへの望郷の念と魔法族が圧倒的に少数であるという新大陸の特殊性により成立した、イルヴァーモニーとは明らかに事情が異なるのは興味深い」

その意図が本当の意味で何処に在ったのかまでは、現代には詳細に伝わっていない。

けれども、彼等は一人でやろうとしなかった。プラトンのアカデメイアのように、或いはアリストテレスのリュケイオンのように、絶対なる一が中心となって教える事を是とせず、他の同輩の必要性を認め

た。

その上で、血族関係を殆ど無視して——サラザール・スリザリンですら純血主義であり、血族至上主義ではない——広く生徒を募り、最終的にグレートブリテンからアイルランド全域を保護地域とするまでに至った。

「考えてみれば、イルヴァーモニーは本当に特殊なのだ。最初は家族内での小さな授業から始まり、組織化にはホグワーツという理想が念頭に有り、また闇の魔法使いゴームレイス・ゴントの襲撃が忘れられなかった事が根幹にあるのだから」

話を戻すが、と男は言った。

「別にホグワーツが特別であると言いたい訳では無い。国際魔法使い連盟に登録されている伝統のある十一校——つまり、イルヴァーモニーも当然含む——が、いずれも知識の拡大に同意してきた事は変わらない。そして、何よりも忘れてはならないのは、それが魔法界にとって大いに異端であるという事だ」

異端。正統では無い事。

「魔法魔術学校は十一では無い。現在においてもそれ以上存在するのであり、歴史的にも数多の存在が生まれて来た。しかし、それは消えて来た。世界各国の魔法使いの多くは、依然として家庭教育を選択している。言ってみれば、殆どにとってそれらは必要とされなかった」

公的教育を必要としなかった。

知識を拡散し、結集し、そして総動員する試みには賛同しなかった。

「非魔法界No-majにおいて、中世における大学の起りは、権力からの干渉を防ぎ、自らの利益を確保する為の組合に原点が有った。しかし、魔法界においては？ 少なくとも、魔法界に王子は——王は居ない。神の恩寵を受けし統治者など存在しない。そもそも我等はそのような存在を必要としなかった。非魔法族と違い、魔法族は遥かに生存が容易かったのだから」

科学の焰によって、非魔法族の人口が爆発的に増える以前。

その時点では、魔法族は単純に、圧倒的に種族として強かった。それも各々が。

権力と階級の出現は、社会の進化、言ってみれば頭数の確保の必要性とその現実化にこそ有った。農業を少しでも効率良くする為に、水汲みの負担を分担する為に、衣服や住居の確保を分業する為に、非魔法族はそれらを作り上げた。

一方、魔法族はそれらを殆ど必要としなかった。

全くでは無いが、その要請が希薄だった。

当然ながら魔法は万能などでは無い。ガンプの元素変容の法則を初めとして、魔法使いにおいても種々の制限は存在する。だがしかし、過酷な大自然の中で生存し、血を繋ぐという種族の使命の達成には、それらは余りに些細な制限でしかない。

アケアメンテイ、インセンデイオ、エビスキー、スコージファイ、デイフォデイオ、ポイント、ミート、ルーモス、レパロ
水増加、炎生成、治癒、浄化、掘削、四方位、光出現、修復
等々。

魔法の存在は多くの事を実現し、仮に一人で出来ない事が有っても、家族間ないしは親族単位の相互補助さえあれば、大抵が事足りた。

自身の上に戴くべき存在を求めず、当然ながら己の研究に歯止めを掛ける者が存在しない以上、思想や信条、良心や言論、そして学問の自由の確保を主眼とする教育・研究機関など有り得なかった。

「そもそもの話、非魔法族がそのような組織を、つまり専門家集団の形成を欲したのは、知識を交換し、切磋琢磨し、そして社会に広く還元する為だった。しかし、魔法族にとってそれが必要かね？」

本質的に、魔法族にとって『社会』は必要では無い。

今現在ですら、魔法族は分断されたままに住んでいる。そして、その事に大きな不満を感じては居ない。国際機密保持法の施行以降、魔法族は非魔法族の共同体の中に更に小さな共同体を構築し、隠れ住み、ひっそりと生を送る事に慣れてしまっている。

だからこそ、より大きな社会の発展の基礎となる教育機関は必要では無く。

いや、寧ろ――

「そうだ。邪魔だ。そもそも、我等には魔法が有る。服従の呪文、磔の呪文、真実薬、万能魅惑薬、ポリジューズ薬、そして開心術等々。非魔法族と違って、わざわざ書籍に頼らずとも相手から快く教えて貰う事は決して不可能ではない。古きアレクサンドリア、或いはこの国の博物館よりも更にスマートに、世界の事物を収集出来る」

「マグル」の迫害の印象により、魔法族は忘れがちだが。

魔法族の最大の敵は、魔法族である。過去も、今も、そしてこれからも。

「無論、行き着いた魔法使いからそれらを奪う事は殆ど不可能だがね。ただまあ、細やかな情報の集積こそ価値有るものだ。天才の技術は再現性という面で難が有る場合も多いからね。……嗚呼、負け惜しみだよ。自分で至れるのならば、こんな真似はしないのだから」

しかし、それはこの男の趣味が多分に含まれるものなのだろう。

百科全書派と気が合いそうだった。深い一よりも、手軽な百こそが使い勝手が良い場合というのを、男は良く知っていた筈だった。

「そもそも今は何処の国も広く見張られている。ほんの三百年程前には悪党達の天国、豊穰に満ちた狩場の時代があったのだが——それはやはり過去のものだ。このような時代に存在する事は恨めしくある」

まあ今は今で良い所が有るのだが、と気障に肩を竦める。

「何だったかな。そう、ホグワーツの——魔法魔術学校の設立は革命的だったという話だ。つまり、大した事の無い技術を広める事によって、技術の奪い合い、殺し合いを減退させた。何処の学校もそういう意図で設立したかどうかは知らないがね。しかし、結果的にそうなったのは否定出来ないのではないかと私は思う。衣食住が足りれば争いも減る訳だ」

それでも、非魔法族と同様、過去の魔法族の血の気が多かったのは明らかだ。十三世紀後半に始まった三大魔法学校対抗試合が、1792年まで続いた事はその一つである。

但し魔法学校を中心として繰り広げられた家族、民族、国境を超えた数々の接触は、かつての血で血を洗う報復戦を終わらせ、穏健に殺し合う程度で済ませる事に貢献した。

「ただまあ」

ステイブ・レッドフィールドは笑う。

「やはり伝統的で古臭い魔法使いとしては、気に入らないのは変わらないがね」

深い嘲りと共に。

「魔法使いは個の内に籠るべきだ。種として先に行こうとするべきだ。闇にしろ、光にしろ。この国に神秘部とやらが在るのは唯一魔法省の活動の中で評価出来る。倫理も道徳も、世間も他人も関係無い。現状維持のみの組織への就職活動の為に魔法を用いるなど馬鹿げている」

真理を探究すべきなのだ。真実を追求すべきなのだ。

男は狂信と共に、断言する。

「ゲラート・グリンデルバルドには人を魅惑して止まない昏き華が

有った。『名前を言つてはならない例のあの人』には人を焦がす墮落的な熱が有った。彼等は紛れも無く偉大だった。闇の中の闇、そう讃えられるに相応しき程の行いを為した」

両者は全くもって方向性を異にする。

けれども、何かを変えようとしたという点において——魔法を“魔”として扱い、単なる目的達成の手段に貶めようとしたという点において軸を一にする。それは現状維持を愛し、社会という物に興味を持たない従来魔法使いとは絶対的に異質な在り方だ。

しかし、彼等は違つた。硬直した現状や伝統と訣別し、打破し、そしてこの現実世界を理想郷へと変革せんと立ち上がったのは確かであるのだ。魔法学校を創設し知識の火を広げた者達のように、その烽火を上げようとした彼等は間違いなく革命的な存在であつた。

そして、その点において、この男は彼等に対して敬意を抱いている。そのような存在に成れないのが解っているからこそ、その資質が自らに無い事を自覚するからこそ、その光に恋い焦がれている。

「——しかしまあ、何処の世界でも一番厄介なのは、チヨロチヨロ動き回る小悪党では無いかね？」

シリウス・ブラック未だ捕まらず。

塵紙の中の塵紙、『日刊予言者新聞』は最近、その報道に熱心だった。大量殺人犯である以上当然と言えば当然であるが、嬉々として報道している事が伝わる文面は如何な物か。そして、どうせならば昨年度のホグワーツ大量殺人未遂の際にその積極性を発揮して欲しかったが——今回は反権力である事を躊躇わないらしい。

実際問題、隠し切れるものでも無かつたのだろう。

アズカバン脱獄という前代未聞の大事件である事もそうだが、シリウス・ブラックの犯罪内容がマグル大量殺人——つまり、国際機密保持法に抵触しかねない事項であるというのが問題だった。

事は魔法界内部で収めきられる物では無く、非魔法界にも必然的に伝えなければならぬ類の物である。去年から伺える隠蔽具合から

見るに、どちらか一方だったら隠蔽に走ったかもしれないが、両方セツトだとバレた時に不味いと判断したのかもしれない。

ただ、今の僕にとつて最も問題であるのは、大量殺人犯が外を我が物顔で闊歩している事などではなく、勝手にリビングのソファアームに座っている老人だった。

その手には二階に置いていた筈の書籍——闇の一端を記した本をパラパラと捲っていた。隣には既に十冊が積み上げられているが、この老人はほんの十分程度でそれらに目を通し終えていた。どんな分野においても、この老人は規格外のようだった。

しかし、老人が何処の場所でも自分の家のように振る舞いたがるのは何とかならないものか。ボケも大概にして欲しい。

「ふむ。良い機会じゃと思つて確認してみたのじゃが、些か期待外れの面が有った事は否定出来んの」

手元の本から視線を外して、老人は僕に向かって言う。

僕はコーヒーを注いだカップをソファアーム前のテーブルに置き、老人と対面するように腰掛けた。勿論、そのカップは僕の側にだけしか置かなかつた。非難と抗議の視線は当然のように切つて捨てた。

「……ミネルバが魔法省でも見た事が無い代物と言つておつたから相当の呪物が闇の工芸品かと危惧しておつたが、実際の所、読んでみると余り大した事が無い物も多い」

「まあ、そうでしょうね。如何に混乱期とは言え、喋つたり動いたりするようなやんちゃな本を持ち込ませる程この国もザルでは無いでしょう」

真の意味で危ない本も魔道具も、この家に無い。

そもそも、この家には魔法的な防備が事実上零なのだ。特に母が死に、魔法族の未成年だけになった事が解り切つている以上、魔法的痕跡が漏れた時点で即警告である。イエローカードそれにも拘わらず、そのような状況で未だに無罪放免であるという現実が、その事実を明確に語っている。マルフォイ家と違って、「秘密の部屋」は無いのだから。

何より当時、僕は更に幼かつた。如何に母が愛のスパルタ教育をしていたとしても、子供を危険物に近付けるのにも限度が有る。母は

狂っていたが、生存本能を忘れる程には壊れてもいなかった。

第一、この書籍の収集者達は、己が呪文を使う事自体には余り興味が無かった。

魔法の「あらゆる領域にわたって参照」されうるような「啓蒙と手引き」の書の類の方が興味が有ったのは明らかである。

「……ただ、危険物も零でも無いようじゃがの」

それはそうだろう。母は魔法的教育を受けておらず、必然識別する事も出来なかった。

というか、動いたり、叫んだり、明らかに触れられなかったりする以外を殆ど丸ごとかっぱらって来たのだから、ごちゃごちゃなのも当然だった。

……嗚呼、そのような危ない本は、この家に一つだけ有った。

「三年生の教科書に、怪物的な怪物の本を指定した愚か者は誰なのです?」

「最近耳が遠くなってしまったのう」

「ベタな誤魔化しが過ぎますね」

まあ、今年の教師が誰なのかは、その反応以前に想像が付いていた。

交友関係からして彼女は間違いなくこの科目を選択するだろうと予測していたのだが、まさかその御本人が出て来るとは思っても居なかった。そして、そのような選択が大失敗であったという事も。下心で自分の道を選択してはならないという良い教訓である。

「貴方は魔法省を鬱陶しいと思っっているようですが、統一した指導要綱を打ち立てるといふのは、最低限度の教育水準を確保するといふ意味では価値がある。当たり外れが有るのはやむを得ないとしても、その差異が大きすぎるとは余りに不公平でしょう」

「その先生独自の知識や経験を教えるといふのもまた教育では無いかね?」

「それはプラスアルファの話ですよ。ギルデロイ・ロックハートは何も教えなかったし、クイレナス・クイレレル教授だって実技的な面では不足だった」

そしてこの老人は、目的の為には生徒の教育を蔑ろにしがちだっ

た。

「……というか、僕の個人的な遺産も新任教師についてもどうでも良いですが。さっさと用件を終えて帰ってくれないか？」

これ見よがしに溜息を吐いて見せるが、老人には全くもって堪えた様子は無い。

忙しい筈の校長閣下は、僕へと嫌がらせをする為に時間を割く価値は見出しているようだった。

「つれないのう。老人に対して歓迎の一杯も出さぬとは」

「呼んでもない上に、事前に連絡も無いのにも拘わらず、中に入れていく時点で十分歓迎しているものだど理解して欲しいものですけどね」
ただ、文句を言いながらも、老人は杖を振ろうとしなかった。

この家で魔法を使える人間は未成年の僕だけしか残っていないからでは無いだろう。

別に魔法省に魔法の行使が知られると言っても、それがそのまま違反行為として認定される訳では無い。予め話を通しておけば、少しばかりの話し合いをする程度の時間ならば見逃してくれる——そうで無ければ、入学に際して教授が魔法を見せる事が出来ない——に違いない。

まして、この老人はアルバス・ダンブルドアなのだ。

個人的な事情であれ、口利きをして貰おうと思えば簡単に為せた筈である。それを可能にする程度には、この老人は地位と名声を保持しており、権力を有していた。

けれども、それを今回は老人は自制したのだろう。

そしてまた、僕もその事については賛同出来る。無用なリスクを犯さないで済むのであれば、それに越した事は無いに違いないのだから。

「……しかし、君はこの家に魔法的な護りをする気はやはり無いのじゃの」

「それは終わった話の筈ですがね」

少し——つまり、それが外見に現れるという事はかなり、だ——不愉快そうな表情を浮かべながら、老人は皮肉を言う。けれども、それ

は既に話が終わった事だった。

何も無い方が解りやすく良いのだ。

泥棒を防ぐ為に鍵は閉めるが、それ以上をする気など更々無い。

そもそも話、闇の帝王が本気で僕を狙ってくれば、僕はどうしようも無い。僕がアルバス・ダンブルドアに永久に勝てないであろう事と同様、それと同等の存在相手にはやはり永遠に何も出来はしないのだ。多少魔法的防備をするだけで闇の帝王を防げるのであれば、前回の魔法戦争であれ程人は死んで居ない。

この老人から学んでいるのは、その危険を事前に避ける為の手札の一つに過ぎず、闇の帝王を殺す為の方法論では無い。そして、無駄な事を行う気もまた無い。狙われたらそれで終わりだ。その覚悟ぐらいはしている。

脚本を乱すような部外者は、速やかに排除されるべきなのだから。「というか、僕の防備に文句を付ける位であれば、最も気を使わなければならぬ人物が居るでしょう。そちらの家庭訪問に行ってはどうか？」

僕がそう言えば、老人は痛い所を突かれたというように黙り込む。「スリザリンの僕は今年何ら危険が無いと言って良い。いえ、四寮全部で、たった一人だけしか危険が無いと言っても過言では無い筈だ。よりもよつてシリウス・ブラック。裏切者にしてハリー・ポッターの両親の仇。そして、彼からしても、自ら闇の帝王の失墜を招いたという意味でやはり仇だ」

魔法省から圧力でも掛かっているのか新聞は明示的に報道していないが、どんな馬鹿でもシリウス・ブラックが誰を狙っているかは容易に想像が付くだろう。

ましてピーター・ペティグリューの英雄的な最後は、シリウス・ブラックが卓越した闇の魔法使いとしての資質を余計に輝かせている。「死の呪文の難点は、原則として一発で一人しか殺せないという点です。それを非魔法族十二人と魔法族一人？ 正直無茶が過ぎています。地下鉄の人混みの中なら兎も角、二人がさながら決闘のように向き合っていたとなれば猶更と言えるでしょうに」

爆発呪文コンフリクゴにしる破砕呪文ボンバーダにしる、通常ではそのような殺傷力を持つものではない。大人の魔法使いで有っても同様である。

非魔法族にはガス爆発という事で誤魔化したらしいが、僕としては本当にガス爆発が起つたと考える方が余程理屈に合っているとすら考えてしまう。

「教授に聞きたいのですが、二人の魔法族が同時に魔法を撃ち合い、それが相乗効果を発揮して威力が増大するという事は？」

「……相変わらず悪どい考え方しかせぬの、君は。その答えはイエスじゃよ。生徒が協力して呪文を掛けた結果、教師をノックアウトしかけた事件は幾度か有った」

「別にピーター・ペティグリユーが殺したとは言いませんよ。自分自身の生命の防衛の為に力を使用した結果、他人に被害を及ぼしたとしても、それは事故以外に言いようがない」

そもそも彼は死んで居る。

英雄的に死んだ者の過失を暴き立てた所で何も変わらない。

「それで、ハリー・ポッターの所に行く気は？」

「彼は魔法省によって、多くの闇祓いによって手厚く護られている。ホグワーツに来るまで、そしてホグワーツに来てからも、彼の護りは盤石じゃよ」

「僕が聞いているのは、アルバス・ダンブルドアが彼の所に行くかという話ですが」

惚けた振りをする老人の言葉を正しく修正する。

あの「英雄」が、真実を知った時に突っ込んで行かないとは限らない。

無論の事、闇の帝王を打ち破った人間が高々シリウス・ブラック程度に敗北するとは思わないが、避けられるべきリスクというのは可能な限り避けるべきだ。そして、アルバス・ダンブルドアの言葉であれば、彼の歯止めとなるには十分だろう。あの「英雄」にとって、この老人は未だに頼りになる大人のままであるようだから。

しかし——この老人はやはり行く気が無いようだった。

僕の母と違って言葉を持っているのに、その機会が十二分に与えら

れているのに、彼は愛を与えようとしなない。最期の最期に全てを与えれば良いという物でも無いのだ。その事に僕は大きな不満を抱いている訳では無いが、何も返せなかったという点で後悔は有った。

そして、このような場合に老人が話を逸らすのは何時もの事であり、それは僕も良くやる事であるから、要するに御互い様であると言えた。

ただ、老人の口から出て来た言葉は、些か驚くべき内容で有ったのは確かだった。

「今学年、吸魂鬼がホグワーツの警備を行う事になっておる」

「……それはまた。貴方が良く同意しましたね」

「せざるを得んじやろう。政治的にも、実利的にも」

この老人が、闇の生き物を嫌っているのは知っていた。

それらを嫌う位ならば、完全に森番の遊び場となっている禁じられた森に棲む、ロクでもない生物達を駆除してから言ってくれと個人的には思うが、何にせよこの老人は本気で嫌悪していた。しかし、それで居て尚、受け容れざるを得なかったのが真実らしい。

そして、解った事も有る。

「……あれ程夏休み末、僕の訓練を急いだのもそういう事ですか」

来学期から本格的に訓練を始めるとか言いながら、この老人、ほぼ突貫で教育を行うような真似を行ってくれたのだ。特に夏休み末は酷いものだった。まさか休暇であるのに家に帰れないような事があるとは思ってもみなかった。

シリウス・ブラックの件で忙しい筈にも拘わらず、僕に関わって良いのかと危惧していたが、そういう事情で有れば仕方がなかったのだろう。吸魂鬼から生徒を護る事を考えれば、可能な限り身体を空けて置く必要があると感じたに違いない。

「それは儂も申し訳無かったと思うておるよ。大概荒つぽい訓練になっちゃったのはの。ただ、君が良過ぎる生徒で有ったというのも悪いのじゃ」

「あれだけ心を粉々にされた甲斐が有ったようでは何よりですよ」

母達の事。父の事。ホグワーツでの事。

僕の記憶を分類するとすれば殆どがそれだけでしかないが、それでも意外と内容が豊富で有る事に気付かされたものだ。心を暴かれるのは不愉快な事しか無いと思っていたが、自分でも覚えていないような些細な事を掘り返してくれるのは便利な物だった。

特に、母の事については感謝すら抱ける程だ。母は僕の成長と反するように狂気と衰弱に堕ちて行ったのであり、逆に言えば、僕が殆ど覚えていない頃であれば、真面である時間もそれだけ多かったのだから。

「もつとも」

老人の蒼い瞳が、僕と視線を合わせる。

思わず身構えたが、老人は開心術を使わなかった。そして、身構えてしまった事こそが失敗だという事は、指摘されずとも解っていた。開心術が全てでは無いという事を知る程度には、この老人は長く人生を送っていた。

「君は未だ基礎を身に着けたに過ぎない。期間はそれなりに空くが、儂が今年の何回か——半年ぐらいの間は君を見続けよう。後は独学じゃな。努力を怠らなければ……これから四年もすれば、一端の閉心術士を名乗る事が出来るじゃろう」

「……先は長いですね」

解っていたが、そう簡単な道程では無いらしい。

しかし、力が抜ける僕に返って来たのは呆れの色を含んだ苦笑だった。

「儂の『一端』の基準を君は軽く考えておるようじゃな。そこまで行き着けば、服従や磔の呪文を併用してすらも、容易に心の奥底に秘めた内容を暴けはせぬよ。儂が知る限り、ホグワーツ卒業前にそこまで達した生徒は居らぬ。君の偉大なスリザリンの先輩でさえもじゃ」

それは寮監、では無いのだろう。

去年は聞きもしなかったが、それが誰なのかは解っている。この老人が度々話題に出し、一種の警戒を抱き続けていたそのスリザリン生は、在学中の闇の帝王以外に有り得なかった。

「丁度良いから今後の事を話すが、儂の都合により夏休み中に無理を

したせいで、そして君が優秀な生徒で有った御蔭で、少しばかり時間が空いたと言つて良い。君が希望するならば、他に多少の手解きをするのも吝かでは無いが？」

「……結構ですよ。吸魂鬼に時間を割く為に時間を空けた以上、その余裕はやはり本来の目的の為に用いるべきでしょう」

要らない親切心を発揮する老人に、当然僕は断りの言葉を述べる。「貴方に教わるべきでは無いのだとつくづく実感しましたよ。正確には貴方の指導、いえ力を独占すべきでは無いというべきですか。貴方は少しばかり魔法が上手過ぎる」

相性云々以前に、この老人は余りに何でも出来過ぎた。

今でも同意しかねるが、今回教わる内に、この老人が権力を望まなという気持ちが無くなるでもなかった。

強過ぎ、そして賢過ぎる彼は、己の望みを——少なくとも大局的観点では——殆ど全てを叶える事が出来てしまう。だからこそ、誰よりも深刻に己の力を縛る事の意味を、必要性を痛感してしまうのだろう。そして何よりも最悪なのは、彼が校長にまで昇ってしまった事から解る通り、彼がその態度を一貫出来る程には強くないという事であった。

どっちつかずの状況に置いておくには諸刃となる駒であり。

どっちつかずで無くなればこれ程までに頼もしい駒もまた無かつた。

そして、今学期は後者の状況であるのは間違いないかった。

己の生徒が吸魂鬼によって生きているとも死んでいるともつかない状況になる事を、この老人は絶対に許容しない。去年のバジリスクと違い、今年のそれは回復不可能な傷害なのだから。

「君は守護霊の呪文を農から教わろうとは思わないのかね？ 君が覚えて居れば、農も多少安心が出来るし、役立つような場面も想定出来るのじゃが」

「……そのような状況に陥らないようにするのが、貴方がたの仕事でしょうに」

苦々しい思いを抱えながら、僕は答える。

流石のハーマイオニー・グレンジャーも、数百体の吸魂鬼に立ち向かっていくような状況には陥らないだろう。というか、普通はその時点で死ぬ。それをひっくり返せるのは、闇の帝王を二度も打ち破った「英雄」殿くらいだろう。

そもその話、僕は守護霊の呪文について余り価値を見出していない。

「吸魂鬼やレシフオールドにしか通用しない汎用性の低い呪文は、僕にとって余り心惹かれる物では有りませんよ。今学期に必要なものかもしれないのを置いておけば、それを使う状況は酷く限られる。そのような非効率的な行為をする位で有れば、他の有用そうな呪文を覚えませよ」

気軽に覚えられるのであれば学びもしようとは思いますが、O・W・Lを遥かに超える難易度ともあればおいそれとは手を出す気にはならない。人の可処分時間は有限なのだ。

それでも自分にとって価値が有ると思えばそうするが、一年以内に守護霊の呪文を使えるようになるというのは希望的観測が過ぎる。あの呪文の最も難しい所は、魔法それ自体ではなく、吸魂鬼の前という平静で居られない状況において創り上げる事なのだから。自分が覚えきる頃には全てが終わっているであろう事を考えれば、やはり価値を見出せない。

「ほう。しかし、あれは単に吸魂鬼達を追い払う為だけに使えるものではない。特に言葉を伝えるには便利なものじゃよ」

「貴方の呪文の改造能力には驚嘆しますが。ただ、僕が誰に対して伝言を頼む用事が有るといふんです？」

冷やかな僕の言葉に、老人も黙り込んだ。

全くもって良い気味であるが、ただ、僕にも他の理由が無い訳では無かった。

吸魂鬼のキス

「そもそも必殺技は別として、吸魂鬼の恐怖は耐えられない物では無いのでは？　嘘か真か知りませんが、闇の魔法使いが守護霊の呪文を唱えれば代わりに蛆虫が沸くのだという話も聞きますし、何より心が綺麗で無い魔法使いは守護霊が使えないという話の割には、この世界

では闇の魔法使いが滅んでいる訳ではない」

殺戮兵器は殺戮兵器として扱えば良い。

要するに、守護霊を牧羊犬として吸魂鬼を追い立て、闇の魔法使い狩りに使えば良い。

吸魂鬼達にとつても狭いアズカバンではなく、外で存分に運動が出来るのは喜ばしい事だろう。そのまま速やかに死刑執行に移れるという効率性も申し分ない。

だというのに、魔法族はどうも要らない倫理観を發揮したがる——と非難したい所だが、結局それが実行に移されていないのは、闇の魔法使いにとつて吸魂鬼が余り有効では無い、彼等には耐性が有るといふ一点に尽きるのだろう。

「そして吸魂鬼の被害にチョコレートが利くというのは有名ですが、カカオが西洋に持ち込まれたのは何時だと思っっているんですか？」

牢獄前のアズカバンが建設されたときされるのは、十五世紀頃。

しかし、それもエクリジスという詳細不明の闇の大魔法使いが死に、その要塞の存在が魔法省に露見してからの事ではない。つまり、吸魂鬼は、それより前にこの国に居た。

「カカオ豆をクリストファー・コロンブスが持ち帰り、エルナン・コルテスがチョコレート飲料に遭遇し、それから何年も経って宮廷に持ち込まれて初めて一般化した。そもそも、最も初めの用法は薬であり、甘くなかった訳ですし。

——そして何より一番の問題は、カカオにとって、この国は余りにも生きにくい」

高温多雨を初めとして、生育条件は非常に限定されている。要するに、外から輸入しなければ、チョコレートなどは生産出来ないと考えるのは真つ当な論理といふべきだろう。

ただ老人は、僕の論調を多少面白がりながらも、出来の悪い生徒へ諭すかのように言った。

「ステファン。確かにそれは概ね正しいが、薬効が発見される事とそれが不可欠であるという事は等しくはない。また、魔法族はマグル社会と違い、新世界の発見よりも以前に向こう側の社会と繋がりが有つ

た。そして何より、儂等は魔法使いなのじゃよ」

「……そう言えば、そうでしたね」

カカオの生育に身命を賭す魔法使いなど余り想像できないが、居ても何ら変では無いのが魔法界であると言える。

そもそも、蛙チヨコレートの成分はカカオCocoaではなくクロアコアCroakoaという謎物質だった。この世界では非魔法界の常識を魔法界に適応できる部分とそう出来ない部分が有るが、これは後者の場合に他ならなかった。

「けれども、その様子では君は——」

「——アズカバンの運用に、賛同している。ええ、その通りですよ」
使える物は使う。それに越した事は無いだろう。

現状では、生きのいい餌をくれてやって大人しくして貰うというのは自身の安全の面からも最適であり、牢獄としての機能性から言っても文句は無い。

「しかし、あの生き物は、魔法省に対して忠実では無い。全くもって不愉快な生物じゃ」

「不愉快なのは否定しませんが、家畜に忠誠を求める程愚かな事は無いですよ。そして十八世紀前半のダモクレス・ロウル魔法大臣によってアズカバンが刑務所として生まれ変わった後、今まで脱獄は出来なかった。要はそれだけコストが安く済んできた」

「現状では、じゃよ。そしてガリオン金貨だけが物事のコストの尺度となる物ではない。あのような破壊的で冒瀆的な行いは、一刻も早く止めるべきじゃ」

「ならば、やはり貴方が魔法大臣となって止めれば良い。他人に動きを期待するよりも先に、まずは自分が主導的に動く方が建設的だ」
「儂はその地位に就くつもりは無い。既に君にそう告げた筈じゃがの」

平行線の議論に、僕は肩を竦める。

そして、老人は立ち上がった。もっとも、僕はそれに対して言葉を投げ掛けた。

「……シリウス・ブラックは無罪だと？」

「君もそう思うかね？」

「……いえ、余り」

とは言え、僕の家になんか来たのは、それを聞く為だったのは他ならないのだろう。

そんな事は誰にも言えまい。英雄的に死んだ若者の死を穢し、生き残った男の子の両親の仇であるような存在を庇うような台詞は。

僕は先程ピーター・ペティグリュウの死について一つの疑問を呈したが、この誰よりも賢きアルバス・ダンブルドアには当然念頭に有つただろう。この大魔法使いが僕と同じような事を考えない筈が無い。

そしてこの老人であれば一度で十三人を粉々にする事が出来ない筈も無いが、それは相当な難事だと判断している筈だ。そしてこの老人は僕以上の情報——例えば教え子の力量、当時の死喰い人や魔法省の動きなど——を当然有している。色々と思う事が有るのだろう。特に、シリウス・ブラックが解き放たれた今となっては。

「……去年の問題はどうやって、だった。そして今年はどうして今、ですか」

脱獄不可能の拷問刑務所、アズカバン。

その中で十二、三年耐え切った、それも逃げおおせる程の正気を保ち続けた存在だ。しかも闇の帝王の蠢動に同調するように、という主張は成り立たない。一昨年の裏に闇の帝王の存在が有った事は公にされていないのだから。

勿論、收容されている間ずっと脱獄を目論んで来て、そして今、偶々脱獄に成功したに過ぎない可能性もまた否定出来ない。

しかし、やはりアルバス・ダンブルドアは、彼のみが有する諸々の事情を総合した結果、その可能性は小さくないと感じている。その確度を検証する為に、僕のような第三者に打ち明けてみせる程度には。

だからこそ、僕は非難の言葉を当然述べる。

「……無罪の可能性が有ると思うならば、何故貴方は今まで何もしなかったんです？ 闇の帝王失墜時に貴方は『生き残った男の子』の保護を筆頭に色々忙しかったのは解りますが、後から話を聞く事も出来た筈では？」

「簡単な話じゃ。儂に対して当時政治的な横槍が有り、そしてそれが無くなった時には既に取返しも付かない状況に陥ったと感じたからじゃ」

僕は視線で先を求め、老人の蒼の瞳は返答するかのように燃え上がった。

「アズカバン。その最奥に一度でも閉じ込めた者が、まともに証言を出来ると思うかね？ 錯乱や狂気に堕ちずに正気を保っていられると思うかね？」

「……………」

成程、議論をここに持つてきたからこそ、老人は吸魂鬼の話を持ち出したのだ。

「君の言う通り、吸魂鬼に耐性を持つ者は存在する。闇との親和性が深まれば深まる程に、必然として魂は影響を受け難くなる。要は、落差じゃ。単に冷やすだけでは耐えられても、一度温めた後に冷やすのであれば、その物は酷く脆くなる」

「ならば、魔法族は善lightの生き物creatureを開発するべきですね。闇だけではバランスが悪いと思っていた。それが闇の帝王が蕩ける位であれば申し分無い」

その冗談にアルバス・ダンブルドアは愉快そうに微笑み、しかし再度表情を引き締めた。

「心が善であれば善である程に、その冤罪は取り返しが付かなくなる。儂にはそのような事は許されるべきではないと思うし、それを齎す吸魂鬼は好まぬ」

「幾ら性根が腐つていようが、冤罪の価値に変わりはない。そして、それは見逃せるコストだ。後からでも取返しが付く事は去年送られた誰かで証明されている。他ならぬ彼も、ヒトである事には変わらないでしょう？」

最後に付け加えた言葉に、老人は嫌そうに顔を歪めた。

半巨人だから頑丈だ、なんて台詞は口が裂けても言えないのが、この老人の弱みだった。

「…………シリウス・ブラックは、弁解も抗弁も許されず、まるで口封じさ

れるかのようにアズカバンへと送られた。それは君の価値観に合うのかね？」

「謎が残る以上、吐かせるだけ吐かせて牢獄送りにするのが筋でしょう。牢獄送りにするのは、服従の呪文に掛けられていたという妄言が出てからでも遅くない」

「であるならば、彼への処遇において賛同出来ない。それは儂等の共通理解かの」

「吸魂鬼もですよ。現状での有用性を認める事と、将来への禍根を憂う事は両立しうる。彼等を滅ぼす方法が有るのなら、僕は当然賛同しますよ」

「宜しい。——最初の授業は、学期が始まってから三週目の土曜日じゃ。校長室へと赴く為の方法は、また追って知らせる」

それだけを言い捨てて、老人はローブを翻して中空へと消え失せた。

何が起こったかは考えるまでも無い。ここまで一貫して杖を使わないでおいたのは、最後の最後でこれをやる為であったのだろう。

「……全く、嫌がらせの上手い老人だ」

当然の事ながら、『未成年魔法使いの妥当な制限による法令』に基づく警告など来ないだろう。そして、魔法省はこの魔法の行使自体を把握していないに違いない。

今世紀で最も偉大な魔法使いというのは伊達では無いのだから。

鉤爪、少女、犬

毎年毎年、ホグワーツの教育体制に疑問を抱くのは恒例行事だった。

二年連続外れで有り、しかも去年に至っては教育の体を為していなかった闇の魔術に対する防衛術の科目は、今年は間違いなく当たりと言って良いようだった。

グリフィンドール出身であり、尚且つスネイプ寮監が嫌悪感を示しているのが丸分かりであったから、スリザリン内でリーマス・ルーピン教授を褒め称える者は皆無である。

しかし、彼の授業が闇の魔術に対する防衛術の模範的授業で有った事を疑う者は、少なくとも彼の授業を受けられた者であれば存在しないと言って良い。それは、ボガートを使った授業において多少のトラブルが発生した今年年のスリザリンにおいても、である。

講義内容もそうだが、彼の生徒への教え方には工夫と配慮が有り、スリザリンが文句を付けられる所と言えば、彼のローブが何時見ても襤褸切れめいている点くらいだった。

翻って、今年の魔法生物飼育学は完全な大外れだった。

噂に聞く占い学も相当酷いらしいが、自分が受けていない科目が駄目であろうと知った事では無かった。そして個人的には、それすらも上回るだろう酷さである事を確信していた。

向こうは生徒を教えようとする事がどういう事かを理解しているが——とはいえ、ハーマイオニー・グレンジヤーの言葉を聞く限り、少しばかり怪しい感じもする——魔法生物飼育学の方は、自分と生徒が同じ生物であると勘違いしているようだった。

教科書に怪物的な怪物の本を指定してみせた事からもそれは明らかである。

アレの御し方は撫でれば良いという事らしいが、暴れ回る猛獣に等しいあの本を素手で撫で付けられる者など限られているのだ。半巨人並みの怪力を持つているならば別だが、フローリシユ・アンド・ブルッツ書店の店長ですら苦戦していた以上、そのような存在を生徒に

対して期待しては行けない事など解り切った話だった。もつとも、それをルビウス・ハグリッドという男は理解して居なかつたのであるが。

ただ、怒れるハーマイオニー・グレンジャーはそれを多少失念しているらしい。

グリフィンドールは友人に対しては酷く盲目的になる所が有るとはいえ、彼等は、スリザリンが友人を有していないだけだろうと反論するに違いないだろうが。

「まったく、マルフォイの奴つたら……！ みつともないつたらありやしないわ……！」

マダム・ピンスの縄張り
図 書 室である為に小声では有るものの、確かな苛立ちと共に彼女は言う。

まあ、僕も反論はするまい。

僕はドラコ・マルフォイという個人に対して寧ろ好意を抱いていると言って良いが、さりとして時折見せる愚かさというのには余り賛同出来なかつた。

つまるところ、何の毒性も無いヒツポグリフの鉤爪による傷が直ぐ治療出来ないなどというのは、自分は真つ当な「癒者」に掛かる事も出来ないと言っているような物である。人を陥れるにしても、もつと効率的で的確な手段を用いて欲しくあつた。

「スネイプもスネイプよ！ 何事も無いと解つてる癖に、あんなに過保護にしちやって！ 三歳児に対する親の方がまだ厳しいと思えるくらいだわ！」

そして、収まらない彼女の怒りは寮監に飛び火した。

しかもその愚痴が止まる様子も無い。ドラコ・マルフォイへの鼻屑に始まり、自身を完全に無視する態度など、口を開けばキリがないらしかつた。

こちらもまあ、彼女達には彼女達の言い分が妥当である面も否定出来なかつた。

寮監の態度に、多少の理由が有るのは解っている。

というより、元死喰い人でいながら、アルバス・ダンブルドアとの

一定の信頼関係を築いている時点で訳アリ以外に有り得ない。けれども一方で、客観的観点からして、寮監のそれが過剰であるのも事実なのだ。

悪の魔法薬学教授として振る舞うだけならば、あそこまで露骨な憎悪を示す必要は無かったし、スリザリンに対する過度な鼻屑も不要な筈であった。

要するに、寮監は何処からどう見ても個人の感情の下にその地位を濫用しているのであり——しかも、質の悪い事に、寮監をその立場に置いている事に一応の負い目を感じて居るらしいあの老人は、それを咎めはしなかった。だからこそ、僕は寮監を教授として敬意を払えないのであり、老人も同じ理由で好きになれないのだった。

ただ、寮監としても、彼等に、そして僕にも好かれようとは断じて思ってははいまい。

特に、ハリー・ポッターから好意を得る位で有ったら死を選ぶのでは無いかという位に、寮監は彼を嫌っていた。であれば、互いに憎悪を向け合い、罵倒し合う関係は、それはそれである意味健全な形であると言えるのだろう。いずれの人間にも、相手を嫌う権利は与えられている筈なのだから。

しかし、彼女が有る程度愚痴を吐き出した後、僕は彼女の言葉を全否定しないまでも、一言付け加える事は忘れなかった。

「君がそのようにスネイプ寮監を嫌うのも至極真つ当だが。さりとて、寮監は魔法薬学教授としての最低限の矜持は喪っていないだろう」

そしてそのような言葉がハーマイオニー・グレンジャーに受け入れられない事は解っていた。

本の向こう側から覗くのは、唇を軽く噛み、明らかに不満そうな表情。

「貴方が単に自分の寮の寮監を擁護したいのだと思っははいないけれど、その感想には断じて賛成出来ないわ」

少しばかり乱雑に本のページを捲りながら、彼女は続ける。

「スネイプが不愉快で無かった事はないわ。何せ私が提出する宿題や

課題に対して、スネイプは毎回毎回ネチネチネチとした評価しか返さないもの。ハリーやロンの評価もボロクソだけど、私に対する物は余りにも細か過ぎるのよ。何処の教科書を探しても載ってなくて、論文を漁る羽目になるのもしよっちゅうだし」

「……まあ、あの寮監のやりそうな事では有るが。しかし聞くが、君への寮監の指摘が一度でも間違っていた事は？」

「そう考えた事は何度も。あの人の指摘は我流のものが多過ぎるわ」「結論だけを端的に」

「……………無いわ」

「だろう？」

不承不承頷く学年一の秀才に、更に言葉を付け足す。

「もつと言えば、君はこの二年間、学年一の立場を喪っていない」

まあ去年は秘密の部屋騒ぎで学年末試験が開催されなかったのだが、それは彼女が王座から陥落した事を意味はしまい。寧ろ、学年を通して彼女はますます優秀性を見せつけていたと言えた。

「……………言いたい事は解るわよ。普段の評価や態度がどうあれ、少なくとも最終成績では、スネイプは理不尽な減点をしなかった。頭では理解しているつもりだわ」

普段は私怨の下に普通に減点しているようなものかどうかと思うが、恐らく記録上においては、ハーマイオニー・グレンジャーの魔法薬学の成績は一切の瑕疵が無いトップなのだろう。

たとえお気に入りのドラコ・マルフォイであっても——彼は僕よりも明らかに才能が有る——魔法薬学において彼女以上の成績を付ける事は、彼自身が許しはしない。態度として教師失格では有っても、彼は教師としての自負や誇りが無い訳では無かった。

もつとも、彼女から真に同意を得ようとは思って居なかったし、僕が寮監を敢えて擁護したのは別の意図が有ったからだ。

「君が寮監を教授失格だと非難するのは勝手だが、それを踏まえてルビウス・ハグリッドの初回授業を思い返してみると良い」

僕の言葉で苦々しい顔に変わったのは、彼女自身、あれが大失敗であつた事を明確に理解しているからか。

「……アレは、その、ちよつと舞い上がり過ぎただけよ。何より、あんな事になったのは、マルフォイが余計な事をしたからだわ」

確かに、ルビウス・ハグリッドは警告した。

それを破ったドラコ・マルフォイは自業自得な面が無いでもないが。

「『マグル』の常識で考えてみてくれ。動物園の調教師によつて『間違ひなく』良く躡けられたライオンを、鎖無しで year 9 の学生の前に連れて来る教師を、君はどう思う？」

「……………」

「答えられないならば、歯医者である君の両親に聞いてみたらどうだ？」

「……結構よ。それこそ頭で理解しているつもりだもの」

魔法界の常識的に言えば、マルフォイの怪我は大した事は無い。

だが、それはあくまで魔法界的に、だ。マグル界でどう考えられるかなんて言うまでもない。もっとも、『マグル生まれ』の才女ハーマイオニー・グレンジャーであつても、二年も経てば魔法界の常識に染まる事からは逃れられないらしかつた。

ただ、ここはやはり非魔法界では無く、魔法界であるのは事実だ。

その点において、彼女が完全に間違つている訳でも無い。

「……まあ、彼がクビにはなる事は有るまい。彼本人については、今回は警告が精々だ」

僕の言葉に強い確信が含まれている事が伝わったのだろう、彼女は本から視線を上げ、上目遣いで僕へと説明を求めてくる。その彼女に、僕は視線を本へと落としながら言った。

「簡単な事だ。魔法魔術学校でたかが腕一本を怪我した程度で職員をクビにしてしまつては、誰も職員が居なくなつてしまふだろう？ 呪文学や魔法薬学なんて危険と隣り合わせの授業であるし、十七歳から習得が始まる姿現しなんて危険の最たるものだ」

授業以外で生徒一人を骨抜きにした去年のギルデロイ・ロックハートは論外だが、魔法は高度になればなる程に、それが齎す結果も重大な物になる。

三年でヒツポグリフは多少過激だが、適切な注意を払えば不適當とも言えないだろう。

単なる year 9 の子供に対してライオンは不適當だが、ここは魔法魔術学校で有り、またここに居るのは普通の子供では無く魔法を扱う事を学ぶ生徒であるのだ。

つまり、敢えて言うならば、多くの生徒の前に一遍に十数頭も連れて来た事こそが大問題だった。ヒツポグリフを挑発する愚か者が出る位は当然想定して然るべきであり、万一の為に監督しきれないような状況を作った事こそ責められるべきであると言える。

「じゃあ、ハグリッドが辞めさせられはしないって事？」

「断言はしないが、恐らくな。流石に聖マンゴに長期入院する程ならば責任を取る必要も有るだろうが、腕一本でクビになるという先例の作成は、誰で有っても望みはしまい」

次は自分もそうなるかもしれない、という可能性の恐ろしさを理解出来ない程に大人達は愚かでは有るまい。それは、ルビウス・ハグリッドの指導方針や彼に対する好悪とは、全く別次元の問題であると言えた。

ただ、まあ――

「……貴方は残念そうね」

彼女の言葉は、多少の非難を含んでいた。

そして、僕は否定せず軽く肩を竦めた。彼女に対して全くもって思ってもみない事を述べるのは困難であったし、別に隠す事でも無かった。

「貴方の性格的にはマルフォイの肩を決して持ちそうにも無いと思ってたけど、彼の方針に賛同するって訳？ ヒツポグリフを連れて来たハグリッドが教師失格だと思ってるの？」

「言った筈だ。彼がその点でクビになる事は無いだろうと。僕はその点についてそれ以上非難する気は無いさ。つまり、ヒツポグリフ自体は問題では無い」

「？ じゃあ何？」

「君はその後の授業を見て、何も思わないと言うのか？」

「ハーマイオニー・グレンジャーの沈黙こそが、答えを雄弁に物語る。前回の授業。それは、レタス喰い虫の育成だった。その難易度など論ずるに値しない。」

わざわざ魔法魔術学校に来て、しかも選択授業の一つを潰してまで学ぶのがレタスの刻み方と食べさせ方ともなれば、文句を言いたくもなる。

「別に私的な事情で沈み込むのは構わないさ。ただ、ここはルビウス・ハグリッドの遊び場じゃない。生徒に対して魔法生物の事を教える場だ。感情に振り回される前に最低限の仕事は果たして欲しいと、真つ当な教育を受けたいと思うのは奇妙な事だろうか？」

ルビウス・ハグリッドが教師としては絶望的に向いてないだろうという感想を僕は持っているが、彼がその分野について一つの専門家である事は否定しない。

セストラルをあれ程大量に飼育し、また失敗は有ったとは言えヒツポグリフを制御してみせる——しかも、その興奮に当てられて他のヒツポグリフが暴れるような真似をさせなかった——人間だ。だからこそ、怪物的な怪物の本を指定されて尚、僕は彼に一縷の望みを抱き、そして初回ではそれなりに心躍り、しかし結局は裏切られている。「まあ、一回で愚痴愚痴言い続けはしないが。それでも次も同様の授業が続くのであれば、ルビウス・ハグリッドがクビになるような機会には諸手を上げて賛同したいと考えてしまう程度にはうんざりしている」

魔法界は余りに教育について無頓着過ぎではないか、と思う。大多数の生徒は楽な授業が続く事について文句を言いはしないだろうが、そうで在ってはならないと考えるべきが大人だろう。

特に、魔法界が現状維持を——非魔法界からの魔法の隠蔽を続けたいならば、魔法界の存在をバラしかねない魔法生物に対する知識は必要不可欠だろうに。スウェーデンとチベットによる常習的な国際機密保持法第73条違反は国際問題の筈であり、ヒツポグリフと言え

ば、毎日 Disillusionment Charm 隠蔽呪文を掛ければその下でも合法に飼育が許

される程度の魔法生物でしかないのだから。

そんな思いと共に言えば、ハーマイオニー・グレンジャーは盛大に顔を引き攣らせていた。

「……えっと、それは止めて頂戴。絶対に。本気で。何が有っても」
高く積まれた本の合間を縫って顔を近付けながら言う彼女に、僕は溜息を吐いた。

「……君は僕を本当に何だと思っているんだ」

別にそう思うだけで、実現する力など何も無い。

僕の賛同など吹けば飛ぶものであり、そもそもルシウス・マルフォイ氏も当然ながらルビウス・ハグリッドの辞職について動いている筈である。

あの老人への嫌がらせ以上に、息子が殺され掛けて——その状況を作り出したのがルビウス・ハグリッドであるという点を無視すれば、普通の魔法生物飼育学教授ではそこまで行っても不自然では無かった——黙って居られる親など居まい。

そして、そのような怒れる権力者にして息子を強く愛する父親で有っても、ルビウス・ハグリッドをクビにまでは追い込めまい。それはやはり確信であると言えた。

けれども、ハーマイオニー・グレンジャーは、僕が望めばそれを実現出来るのだと、心の底から信じてしまっているようだった。

「だって、貴方ならば出来そうな気がするもの。一昨年だって、貴方は自分で殆ど動かないままにダンブルドア校長からの加点を勝ち取ったわ。そして去年だって——」

そこまで言って、彼女は軽く首を横に振った。

追求して貰っても構わなかった。寧ろ、そうして欲しいとすら思っていた。だが、彼女は僕を楽にしてくれる気は無いようであり、そしてまた、僕には彼女に嫌われるだけの勇気が未だ無かった。

あからさまに話題を変えた言葉は、しかし親身な表情と共に紡がれた。

「貴方の悪評——というか、噂を聞いた事が有るかしら？」

「評判？」

ホグワーツにおける僕の社会は狭い。

授業に関する内容や学内での伝達以外では、殆ど私的な会話をしないと言って良い。

談話室で不可避免的に——というか、その為に嫌な顔をされつつも談話室に居座っているのだが——入ってくる噂話だけで、それも些細な物ばかりだ。それでも、自分の悪評や侮蔑は良く聞きはするが、彼女が言っているのはそういう事じゃないしかった。

「最近の貴方の噂は、去年、正確には一昨年だけど、あの賢者の石の後より凄い事になってるわ。その事も蒸し返されて、貴方が誰よりも闇の魔術に通じているというのは、最早事実みたいに語られてるし。一体全体、貴方は何をしたの？」

「……あー、まあ多少の心当たりが無い訳でもないが」

僕にとって当然の対応だったが、それが悪かったのだろう。

少なからずスリザリン生にも衝撃を与えた一件は、スリザリンが口を噤んだ為に噂だけが先行した結果、他寮には誇大された形で伝わって居るらしい。

「しかし、噂は噂だ。確かに闇の魔術は少しばかり人より多く知っているのは事実だが、別に使えはしないし、新しく闇の魔術を創る才能もまた無い。才能だけ言えば、僕はセオドル・ノットの足元にも及ばないだろう」

「ノットって……ああ、あの嫌な感じな人ね」

「君が嫌な感じを覚えないスリザリン生が居るのか？」

「そうね。そんな人は居なかったわ。私の目の前に居る誰かさんなんて特に最悪よ」

彼女の言葉はさておき、最も優秀で卓越したスリザリン生がセオドル・ノット以外に有り得ない事は、最早誰の眼にも明らかだった。

かの一匹狼は、或る意味でハーマイオニー・グレンジャーより頭が良い。

成績の面では彼女に圧倒的に及ばなくとも、創意工夫という点においては群を抜いていた。政治力や指導力で他を動かせる器がハーマイオニー・グレンジャーであるとすれば、セオドル・ノットは自身

の能力のみで他を動かせる器だろう。

そして、僕はセオドル・ノットに及ばない。当然ながら、ハーマイオニー・グレンジャーにも。絶対的に負けるといって程に謙遜はしないが、それでも学問の分野において、僕は己が彼女達より劣る事を明確に自覚していた。

そんな内心を知ってか知らずか、彼女は続ける。

「兎も角、貴方は少し注意した方が良いわ。貴方がその程度で動じないのは賢者の石の一件を乗り越えた時に解っていたけど、悪評ばかり有り過ぎてもロクな事にならないわよ」

「気を付けてどうこうなるものではないと思うが、善処しよう」

正直言つて、ドラコ・マルフォイに眼を付けられる以前に戻らないとどうにもなりはしないように思えるが、一応努力するだけならタダだった。

僕の言葉に満足そうに頷き、そしてハーマイオニー・グレンジャーは言った。

「解ったわ。確かに前回の授業は或る意味ヒツポグリフの時より大失敗だったし、ハグリッドがクビにならないにしても、初回……と二回目以外はちゃんと授業をやっている事は、処分を軽くする理由にはなるでしょう」

「……待て。君は、一体何を言っている」

「決まっているわ。ハグリッドの手助けをするのよ」

堂々と生徒が教授に干渉する宣言をした彼女に、思わず深く溜息を吐いてしまう。

別に僕はハーマイオニー・グレンジャーにそうする事を求めた訳では無かった。

自学自習が必要なら必要で、割り切るといふ気持ちは有った。一昨年と去年の闇の魔術に対する防衛術はそうだったのだ。失望はすれども、元々魔法界の大人に——あの老人が君臨する魔法魔術学校に対して余り希望を持ってはいない。期待する事もまた、辞められそうにないのだが。

けれども、彼女の意思は既に硬いようだった。

「まずはハグリッドに聞かなきゃね。ホグワーツにどんな魔法生物が居るか解らない訳だし。それによってカリキュラムも変わってくるわ」

俄然やる気を出し始めたハーマイオニー・グレンジャーを止められない事は解っていた。

彼女は酷く失敗を恐れる割には小さく纏まる事を嫌い、多くの物事に対して興味や関心を示す傾向が有り過ぎた。それは彼女の魅力でも有ったが、やはり欠点でも有るのだろう。

多くを抱え込み過ぎてパンクしなければ良いのだが、とつくづく思う。まして、これから本来彼女にしたかった忠告をするともなれば猶更だ。

「その意気込みに水を差したくは無いのだが、君が真に取り組むべきはその事ではない。僕はハグリッドがクビにはならないだろうと言ったが、他に処分を受けないとも言っていない。寧ろ、君にとってはそちらの方が問題だろう」

「……え？」

あふれ出る意欲を表すように拳を握り締めた格好のまま、彼女は硬直する。

「君は魔法族の魔法生物に対する認識が甘過ぎるという事だ。ヒト以外に対して、魔法族は歴史的に冷淡だ。それは長きに渡る血で血を洗う戦争の結果でも有る。まああの歴史学教授の無味乾燥な読経では感じ取りにくいだろうが」

その言葉で伝わっていない雰囲気を感じ、僕は更に言葉を付け加えた。

「つまり、人狼であれ、トロールであれ、魔法族を害するヒト以外については酷く敏感だという事だ。短絡的に即時の駆除が間違いなく正当だと考えてしまう程に」

「人狼には脱狼薬が発明されている現在では必ずしもヒトに危険と言えないし、トロールがヒト以外かも議論が——バックビークが処刑されちゃうって事？」

「それがあのヒツポグリフの名前ならば、そうだろうな」

声高な反論を途中で止め、それまでと違って囁くような声で為された言葉に、僕は頷きを返す事で答えとした。

「……っ。で、でも、バックビークは賢いわ。何の理由も無くヒトを傷付ける事はない程に。アレにはマルフォイにも責任が有ったでしよう？」

「ドラコ・マルフォイの行いが、スリザリンらしさを忘れたもので有ったのは確かだが。しかし、ヒトとヒト以外は対等では無い。理由はどうあれ、ヒツポグリフは高貴なヒトを傷付けた。付け加えるに、それを防ぐべき管理者は止められなかった」

まあ、腕一本を傷付けるだけで止め切ったのは流石であると言えた。

怒れるヒツポグリフをその程度で御しきつたのだと聞いて驚かない人間は、それなりに少数派である事だろう。寧ろ、拍手喝采する人間の方が多そうだ。それはルビウス・ハグリッドの確かな実力を示すものであり、自身への手酷い侮辱を我慢させる程に、ヒツポグリフと間に確固たる信頼を築いていた証であると言っても良い。

「それとも、ルビウス・ハグリッドが責任を取って辞任するか？ 非魔法族的で有るが、魔法族的にも理解は出来る。ルシウス・マルフォイ氏も一応の妥協点として矛を収める可能性は高い。彼は政治を理解している」

その事について、裏の事情が有る事を僕は告げなかった。

彼の生まれも背景に有るのだというのは、ハーマイオニー・グレンジャーに更に余計な心労を負担させるに他ならないと感じて居たからだ。

確信を得たのは閉心術の訓練中アルバス・ダンブルドアに婉曲的に確認したからだだったが、あの老人として僕が殆どそうであると考えていたからこそ認めたに過ぎない。

骨生え薬や魔法の失敗などの議論が罷り通っているが、人間をどう改良してもゴリラには成れないのだ。家畜の肉の暴食やプロテイン、或いはドーピングと筋力トレーニング無しで、彼等はその隆々たる肉体を維持している。それと同じだ。

彼は生物としての規格が違う。人間に留まるものではない。であれば、何との子供であるかの想像は至極単純な物であると言える。

そして、そのような彼の追放は、ルシウス・マルフォイ氏に大きな満足を齎すだろう。純血主義者は、ヒト以外についても侮蔑する傾向が強い。

「ハグリッドが辞める……？　でも、それは……」

彼女にとって、それもまた受け入れがたい提案なのだろう。

話を聞いている限り、ルビウス・ハグリッドは彼女に——彼女達にとって、教師というよりも友人という関係に近しかった。

ただ、そうであるからこそ、やはり残酷な現実には正確に把握しておかなければならない。

「アレも嫌、コレも嫌ではどうにもならない。教師の不注意により生徒が魔法生物に傷付けられたというのは事実であり、彼等が為そうとしている事は、法律を大きく曲げるような行いでも無い。それを阻もうとするのであれば、まず君は分が悪い事を認識する必要がある」

それでも納得が行かなそうなのは、ハーマイオニー・グレンジャーも、グリフィンドールだという事なのだろう。

彼女は己の思い描く正義が、社会の正義と一致する事を何ら疑っていない。

だからこそ、彼等は自惚れた行動に出る事が出来る。スリザリンも身内大事という点で変わりはないが、しかし自身が社会規範から逸脱している事位は理解出来るのだ。それ故に、狡知と機智をもって、規則や社会に対応しようとするのだから。

けれども、僕は彼女を過度に困らせるつもりもまた無かった。それがどんなに遺憾で有っても、自らに手間を掛ける事になっても、許容出来ない訳では無い。

「……僕は言った筈だ。君がすべき事は、授業を改善させる事では無い」と

「えっと……。バックビークの処刑を避ける為に、私に出来る事が有るって事？」

その通りだと、頷いて見せる。

「法的には、今回の事件の被告になるのはヒツポグリフ——つまり、裁判手続も、処刑手続も、そのヒツポグリフを名宛人として為される筈だ。言ってみれば、ルビウス・ハグリッドは部外者だ。だからこそ、彼がクビに成り得ないので有るが。つまり、責任を第一に負うべき他に当事者というのが居る訳だし、身代わりを許すのはナンセンスだ」

「……魔法界では随分奇妙な事をやるのね。ああ、そう言えば動物裁判animal trialというのを聞いた事が有るわ。中世時代の、古臭い馬鹿げた風習だったかしら」

「本当に馬鹿げているかは同意しかねるがな。それはまあ良いだろう」

非魔法族の中の法で、動物は「物」でしか無い。

つまり自身と対等の一個の人格として尊重せず、劣後する者として見下している。

動物には刑法も民法も適用されないし、仮にペットが人を殺したからと言って屠殺請求権など許されず、精々飼い主が補償金を払って終わりである。万一、その飼い主に過失も何も無ければ、遺族は満足に金すら受け取れず、単に泣き寝入りするしかない。

勿論、非魔法族の世界ではライオンや虎をペットに買うという事はしないから左程問題は生じないが、さりとて奥山における事故は普通に有り、街中ですら動物園という環境が有る。その中で都合の良い理屈を振り翳して、一方的に殺すという事は普通に行われている。

古来より、民の権利は貴族のような権力者によって一方的に蹂躪されてきた。

それを守護する存在として登場してきたのが適正手続であり、善良な心を持った者により運営される裁判手続である。ならば、人の傲慢により殺される事を防ぐ為に、同じ世界に生きる対等な「者」達へとそれらを適用しようとした行いを、どうして馬鹿げた話であると切つて捨てる事が出来ようか。

ただ、それを語った所でハーマイオニー・グレンジャーには理解して貰えまい。

そして恐らく、非魔法族の法感覚や倫理感としては、彼女の方が絶対的に正しい。

「ともあれ、君はその馬鹿げた風習に従わなければならない。現行法はそうだし、法を是正する力も時間も無い。そして、無罪——は、ヒトを傷害した事実が存在する以上難しいだろうが、追放か、或いはそれが許されるかどうかは解らないが、罰金刑の類で収めなければならない」

その場合どの道ルビウス・ハグリッドが払う事になるのだから、欺瞞と言えば欺瞞だが。

「そつちの感覚の方がマグル的に解りやすいわね……。というか、やっぱり迂遠な気がして仕方がないわ。そりやあ人を殺したとかなら心情的に収まりつかないから解るけど、所有者が解つてて怪我しただけの事例で、責任を理解出来ない動物に裁判をする意味有る？」

「それは魔法省に聞いてくれ。そして断言しても良いが、ルシウス・マルフォイ氏が求めて来るのは処刑だ。これは予言でも何でも無い」

「……水晶玉無しの私にも解るわよ。本っ当に野蛮で、馬鹿げた事ね」
彼女は語気を荒くして、怒りと共に吐き捨てる。

「しかし、その勝算が皆無とまでは言えないように思える」

非魔法族的解決法——つまり、ドラコ・マルフォイを傷害させた事に対する精神的慰謝料等を含む賠償が通るかは別として、不利であるにしても擁護する理屈が皆無では無い。

「バックビークとやらは敬意を示した君達に対しては何も危害を加えなかったし、復讐に動いている訳でも無い。怪我の軽重は問題であるにしろ、後遺症の主張までは出来まい。彼がクイデイツチから永遠に離れる気なら別だが。そして責任の話をすれば、君の言った通り、ヒツポグリフを尊重しなかったドラコ・マルフォイに有るといいうのもまた否定出来ない」

「……そうね、その通りだわ。彼等がヒトでは無いからと言って、ヒトがヒト以外の権利を容易く侵害して良い訳でも無い筈よ」

先程は馬鹿げた風習だと言いながら——そして、依然としてその価値観を認めていない筈でありながら——早速その考え方に適応して

みせている所は流石というか何というか。

ハーマイオニー・グレンジャーが単なる頭でっかちな人間では無い事をつくづく思い知らされる瞬間でも有る。或いは、友人の為ならば幾らでも「柔軟」になれるグリフィンドールらしきとも言えるべきだろうか。

「聞いた瞬間はどうなる事かと思っただけ、良く考えれば勝てるような気がしてきたわ。幾ら怪我させたとは言っても、即処刑っていうのは余りに野蛮な真似だものね」

顔を輝かせ始めた彼女に、しかし心から同意する事は出来なかった。

真つ当に考えれば、勝算はそれなりに有る。それは否定し得ない。

だが、ハーマイオニー・グレンジャーに最初に告げた通り、魔法族はヒト以外に冷淡だ。そして、動物裁判に限らず、裁判手続は民の権利を守る一方、時に権力者が自身の意を押し通す手段として用いられてきたのもまた事実である。

如何に正論を推し進めようとも、それが悪い形で露呈した結果がどうなるかというのは、出来れば余り想像したくも無かった。或いは、そこまで魔法界が「中世的」——非魔法族における伝統的分類では、中世とは凡そ西暦1500年までとされる。あの1692年の悪名高きセーレム魔女裁判は歴史から見れば中世では無い——であつて欲しくないと思つているのだというべきか。

果たして、それ程までに、この世界は善く回っている事を期待して良いのだろうか。

それは今の僕には何とも言えず——少し待てば、自ずと結果が出る事でも有った。

「……それで。御機嫌なのは良いとして、僕としては君が優先順位を付けた上で取捨選択すべきでは無いかと思つているが。要するに、何をやらないかという事だ」

「どういう事？」

「君がどう見ても暇では無いという意味だ。新しい事を抱える余裕など無いだろう」

「それは……」

ハーマイオニー・グレンジャーの側の机——本の山に埋もれ、辛うじて彼女の姿が見える程度になっている惨状を見ながら彼女を見れば、バツの悪そうに俯いた。

本日、僕が彼女と共に座れたのは、間違いなくそれが原因に他ならなかった。本の虫通り越して本そのものだ。近寄りたくないのも頷ける。

三年から選択授業が増えたとは言え、今日は特に酷い。まあ、最低二科目、彼女ならば限界まで取っていた所で何ら驚くに値しないが、さりとてそれと失敗を恐れる完璧主義と組み合わせた場合、それが齎す悲劇は容易に想像が付いた。

「大丈夫よ。何とか——」

言い掛けた彼女の眼前に軽く掌を掲げ、その言葉を止めた。

月並みな表現ではあるが、大丈夫だと主張する人間は大抵大丈夫では無いものであり、何とかするという発言は殆どの場合、今は適切な解決手段を有していませんという事を意味する。

「君が授業を本能的に蔑ろに出来ないのも解っている。また、ヒツポグリフが断頭台の露に消える事も好まないだろう」

それが出来るのであれば、僕が好意を抱いたハーマイオニー・グレンジャーなどでは有り得なかった。

「そして両者を比較した場合、後者の方は時間を費やしたただけ成果が出るものでは無い。要するに、利用出来る判例や法解釈も限られる。つまり、前者が第一、後者が第二だ。そして、その余は切り捨てるべき些事だ」

「で、でも、貴方はハグリッドの授業に不満なんでしょう？ 私はその嫌いだわ」

「我慢出来ない程では無い。真剣にどうかと思っただけだが、煩わされないだけロックハートよりマシだ。……とは言え、君はそれで納得出来ないんだな」

僕の言葉に、彼女は口を噤んだまま、しかし強い意思を籠めた視線と共に頷く。

ルビウス・ハグリッドが教授として悪く思われる事に何故そこまで拒否反応を示すのか理解しかねるが、それもまた彼女にとって絶対に譲れない事らしい。

となれば、僕が取るべき行動など一つしか無かった。

まあ、最初から決まりきっていた事だと言われれば、そこまでだが。

「……解った。それならば僕が手伝おう」

「え？」

「授業の方も、ヒップグリフの裁判の方もだ。君がやる気であるならば仕方がない」

驚いた表情の彼女に畳み掛けるように、僕は言葉を続ける。

「但し、前者は君がルビウス・ハグリッドを言い包めてくれ。授業を改善する必要がある事についても、手助けする用意が有る事も。彼がスリザリンの世話になって良い気になる筈も無いからな。聴き取りについても全て任せる」

「え、えっと。別にそれは構わないけど……ハグリッドならきちんと言明したら貴方の事も解つてくれると思うわよ」

「なら、僕が彼の小屋に赴く理由も口実も一つも存在しないとでも言っておこうか。兎も角、僕の関与を彼に伝える利点など何も無い。何より、彼が『良いスリザリン』に対して授業中に冷たく対応する演技が出来ると思うか？」

そう言えば、彼女は痛い所を突かれたというように黙り込んだ。

それ以前に、彼女はルビウス・ハグリッドの善性を信じているようだが、僕としては受け容れるか受け容れないかは五分五分のように思えた。

秘密の部屋の冤罪を着せて彼をアズカバンに叩き込んだのは他ならぬ偉大なスリザリンの先輩であり、それ以外への半巨人への差別的取り扱いや死喰い人との敵対等々、正当な恨みを抱く理由が多過ぎる。ドラコ・マルフォイとの繋がりを下手に疑われて、彼とハーマイオニー・グレンジャーとの関係が上手く行かなくなってしまうえば、授業改善も裁判への関与も完全に破綻すると言えた。

別に僕は彼に恩を着せたいが為にやろうとしている訳では無いの

だから、そのような余計なリスクは背負えない。

「理解してくれたなら後者に移るが、裁判の対処については人海戦術が必要だ。どの道、君の友人二人もヒツポグリフの危機については遠からず知るだろう。彼等が授業改善計画に興味を持つとは思われないが、そちらの方には協力が期待出来る」

非魔法界程に手軽に本を搜索出来る訳では無いし、非魔法界とてどの道最後には内容を見なければどうにもならない。そしてそう言った事についてはやはり頭数が物を言う。

「そうね……。ハリーやロンは、レタスを切り刻む作業が毎時間続いても、それを覚えようと思うよりは面倒が無くて良いと思うでしょうし。解ったわ。そちらについても、ハリー達に上手い事伝えておくわ」

そう言つて、しかし彼女は微妙に不満そうな表情を見せた。

「この事についても、貴方の協力はハリー達に伝えない方が良いと思う訳？」

「先と同じだ。余計な火種は増やさないと越した事は無いだろう。協力や手分けの方法も含めて、上手く言っていてくれれば僕としては文句が無い」

「……確かにロンには絶対に伝えない方が良いでしょうけど。でも、貴方はハリーとは仲が悪い訳では無いんでしょう？ 少なくとも、私はそう理解しているけど」

「それは彼が勝手にそう思っているだけだ。僕の方は彼が余り好きじゃない」

どちらかと言えば、ロナルド・ウィーズリーニユートラルに対しての方が余程好意的だと言える。全く関わらない以上、中立であるのだから。

ただ、ハリー・ポッターにそのような感情を抱くのは多少八つ当たりの面が有るのもまた自覚している。一昨年は間違いなく巻き込んだ側だが、去年は少なくともハリー・ポッター自身に大きな責任は無かった。

しかしそれでも、ハリー・ポッターは自分が闇の社会における超一級の賞金首であるという事実をもっと直視すべきだと思ってしまう

事は避けられなかった。己を危機に晒す事につき余りに無頓着といふのだろうか。言い換えれば、それは彼が危険を自覚しないで済む程に手厚く護られているという事でも有るのだろうか。

何にせよ、僕がハリー・ポッターに抱いているのは、好意とは程遠い物である事は確かな筈だった。

「……まあ、貴方とハリーとの関係は、今は置いておくわ。当人が居ないにも関わらず、貴方と議論しても仕方ないでしょうし」

そんな僕の言葉をどう受け取ったのか。

何処か呆れたような表情を隠さながらも、それでも本と羊皮紙の山を彼女は片付け始めた。本を返却する前に崩れやしないかと不安に思う量だが、僕の方をチラリと見た彼女は、それを見透かしたように愉しげに笑った。

「大丈夫よ。私も何回か往復するつもりだから。……それで、私は今からハグリッドの所に行くわ。外出時間もそうだけど、日数的に一番急ぎなのはそれでしようし。本格的に授業について考えるのは、今日じゃなくて明日で良いかしら？」

「……そうだな。そもそも僕達がどうこうする以前に、ルビウス・ハグリッドが何事も無く授業を改善出来るのなら、それが最も問題無いとも言える。彼の魔法生物についての能力はやはり確かなのだろう？」

第一、授業に干渉すると言っても、出来る事は限られている。

彼は操り人形でも何でも無いし、全ての台本を渡すのは馬鹿にし過ぎていられるだろう。言ってみれば、多少の常識的な方向性を示す程度しか出来はしない。何より、それで十分だろう。ハーマイオニー・グレンジャーが友情を示す程度なのだから、スリザリンよりも遙かに他人に対して親身になれるのだろうか、教育としての体裁を整える事も出来る筈だ。

「それは保証するわ。知識も、躰ける能力も。そして、その強みを生かせば当然良い授業になる筈よ。……危ない生き物が好きっていう点さえどうにかすれば問題無いわ。というか、私が軌道修正しなきゃいけないのはそこよね」

軽く溜息を吐き、けれどもその後、彼女は心からの微笑みを僕に浮かべてみせた。

「私はまだちよつと納得出来ないけど、貴方は他の人に伝えたくないみたいだから。御礼を言えない三人分、私が感謝を伝えておくわ。本当に有難う」

「別に構わない。……そもそも何も労力が実った訳では無いのに気が早いだろうに」

「そうね。でも貴方が面倒を引き受けてくれようとしてるのは確かでしょう？　ならば、やっぱり有難うという言葉が相応しい筈だわ」

もう一度、彼女は感謝の言葉を述べ、僕は小さく頷くに留めた。

彼女は面倒だと言う。確かに簡単な事だと断言出来るものではないし、今年それ相応の時間を割く必要が出来たのは確かだが、さりとてやはり面倒だとまでは思わない。

三年前、君が僕に与えてくれた物の大きさを思えば、この程度の事は何でも無い。

シリウス・ブラックが、hogwartsに侵入した。

言うまでもなく学校の責任では有るが、しかしそれを誰も大つぴらに責める事はしなかった。ドラコ・マルフォイを始めとする、スリザリンですらそうだ。

つまるところ、状況が去年とは違う。シリウス・ブラックの逃亡が、魔法省という純血一派の牙城の失態である面もあっただろう。だが、一度として逃亡を赦した事が無い監獄から逃げ出したという実績こそが——裏を返せば、hogwartsに忍び込んでも何ら可笑しくないという事が——多くの者の口を塞いだ一番の理由だった。

だからこそ、今年hogwartsを半アズカバンにした事について、今まで保護者から露骨な文句は出て来なかったのだし、大規模な帰還事業の予定は現在の所立てられては居ない。

もつとも、それも何時まで持つかは怪しいのだが。この厳戒態勢が

続けば、去年の事も有って、ホグワーツの安全性という点について疑問を抱く親が出て来ても可笑しくはなかった。

とはいえ、現状はそのような動きは殆ど見られなかったし。

それ故、僕がスリザリンの奇妙な雰囲気気付くのは必然とも言えた。

まさしく、去年とは違う筈だった。

去年の騒ぎは、建前上非純血が狙われるというものだった。そしてスリザリンにも“マグル生まれ”を初めとする非純血は存在していたからこそ、確かに寮内で恐怖は蔓延した。しかし一方で、自分達が絶対に襲撃される事は無いだろうと確信していた純血達は、去年の中でもある程度の余裕を持っていたのだ。

まあ、余計な事を言えば、それもジネブラ・ウィーズリーが拉致されるまでの話では有ったのだが。

幾ら彼等が血を裏切る者だとして、血が絶対の免罪符にならないという事実は、多少の疑念を呼び起こすには十分だったらしかった。

去年の理事達の裏切り、すなわちルシウス・マルフォイ氏の劇的な解任も一番の原因はそれだ。その一点において、闇の帝王は失敗したと言って良いのかもしれない。如何に操り人形をそのまま人質とする事が効率的で有っても、彼等に純血主義の価値を疑わせてはならなかった。

ただ闇の帝王には恐らく当時それ程自由が無く、またハリー・ポッターを殺せさえすれば後はどうにでもなる事を考えれば、明確な失態とも言えないだろうが。

それはさておき、対して今年だ。

シリウス・ブラックが誰の命を狙っているか。

新聞が報道せずとも男の前科からすれば万人にとって明白な筈でありながら、しかしスリザリンは真正直にそれを受け止めていないように思えた。

否、スリザリンではなく“元”死喰い人の子供達と言うべきか。

別に恐怖している訳では無いだろうが、その雰囲気は異様だった。寧ろ、“非純血派”——つまり、半純血やマグル生まれの人間の方が、

余程樂觀的だった。去年の秘密の部屋騒動とは真逆と言える構図こそが、その奇妙さに拍車を掛けていると言えるのかも知れない。

後者はシリウス・ブラックがハリー・ポッターを殺しに来た事を殆ど信じており、けれども前者はそれについて何処か懐疑的ですからあるようだった。

それに、スネイプ寮監の「搜索」が、何処か鬼気迫っているのも気になった。

授業を放棄する程では無いが、しかし、それ以外の時間は可能な限り全てそれに費やしているのでは無いか。そう思える程度には、狂気的な色を感じる物で有った。そしてそれは、ハリー・ポッターに対して示すものと同種の強い感情だった。

「——マルフォイ」

となれば、頼りに出来る人間は一人しか居なかった。

まあ、スリザリンで彼以外に僕がそう出来る人間は、他に居ないのであるが。

談話室内で何時もの三人組に声を掛ければ、残りの二人は気分を害したような表情をした後、離れた場所へと移動した。一方で、ドラコ・マルフォイは空いていた僕の前に座った。

寮内に二年強も居れば、指定席めいた物は出来る。

そして、何か有ればこの場所で話すのは、何時も通りの事だった。また、本題に余計な装飾を必要としない程度には、御互い性格を理解していた。

「シリウス・ブラックとは、どういう男なんだ」

「……それを直接僕に聞くのか。たまに、君が馬鹿なんじゃないかと思えてくるよ」

マルフォイは侮蔑と共に、何処か呆れたような表情を浮かべる。

「別に、詳しい話を聞こうとも思っていない。だが確か、君の母上はブラック家だったと思ひ出したのだ。こそこそと人の家について調べられても不愉快だろう」

「だからと言って、直接聞くのはやはり愚かだと思うが」

まあ良い、とマルフォイは言った。

ここはスリザリンの談話室で有り、聞き耳を立てている人間も居るのを理解している。去年の不用意な発言で、ルシウス・マルフォイ氏から絞られたのかも知れない。だがそれでも彼が敢えて口を開くのは——つまるところ、寮内における政治だった。

僕との付き合いで「純血派」以外に睨みを聞かせる価値を、彼なりに見出したのだろう。同等とは全くもって考えていないだろうし、真の意味で同輩だと認めはしないだろうが、利益を得るだけの意義は僕の存在と同じように感じて居るに違いなかった。

「僕を頼ったのも間違いではないからな。君がシリウス・ブラックについて何を調べるつもりだったか知らない。が、僕の母上に眼を付けたのは間違いない。シリウス・ブラックは、僕の母上の従弟だった」
「……まあ、単に家名が同じ程度では無いだろうとは思って居たが。随分と近しかったものだ」

「いいや、近しいか否かを言えば掛け離れている。つまり、彼は僕の母上とは公式には無関係だ。何せ、彼はブラック家の家系図から抹消されているからな」

首を軽く振りながら告げられた言葉は、事前に想定するのが無理だと思える程度にはぶっ飛んだ発言だった。

そんな僕に対して、ドラコ・マルフォイは侮蔑を含んだ呆れの感情を露わにした。

「その様子だと、君は知らなかったんだな。ならば、忠告しよう。正しい血筋に無知であるのは、魔法界において当然侮蔑されるべき事だ。ましてスリザリンならば猶更だ」

「……それは、そうだな。忠告感謝するよ、マルフォイ家の次期当主」
僕の言葉に皮肉が含まれていない事は伝わったのだろう、彼は満足気に頷く。

そしてその反応は、僕に質問を続けて良いという許可でも有った。「だが、抹消された？ 随分とまた穏やかでは無いな」

「実際、穏やかどころでは無い」

ドラコ・マルフォイは重々しく頷く。

「母上は話してくださらないが、しかし僕も純血の次期当主であるから、それなりの事は耳に入る。ブラック家でありながらグリフィンドール生に行ったという、出来損ないの話はね。そして結論から言えば、それがシリウス・ブラックだ」

「……君はそれを正気で言っているのか」

「正気も正気さ」

素晴らしき純血である筈の家系が、スリザリン以外？

しかも、よりにもよって犬猿の仲であるグリフィンドール？

「僕はそれがブラック家における唯一の例だと確信している。だからこそ名前が出なくても、その大恥がシリウス・ブラックの事だと特定出来た訳だが」

「……まあ、明らかな家名の恥とは言え、余りに派手過ぎるからな」

口にするには憚られるとは言え、全く口に上らせないのも不可能過ぎる。

「となると、シリウス・ブラックはグリフィンドール生でありながら、ハリー・ポッターの父親を裏切り——いや、闇の帝王に忠実な者として当然に謀殺し、純血に相応しい行いとして『マグル』を大量虐殺した訳だ」

予想以上にとんでもない男では有った。

成程、単に十三人吹っ飛ばした事こそが彼の脱獄の事実を公開するのに繋がったのだと思って居たが、その裏には純血絡みで色々事情が有ったらしい。

「……多少哀れに思えるな。彼は一貫して名誉を回復しなかったのかも知れんが、それでも闇の帝王を間接的に滅ぼしたのだから」

そう締め括った僕に、けれども、ドラコ・マルフォイは不思議な表情を浮かべた。

まるで、それが腑に落ちないというような。

もつとも、僕はその表情について問う代わりに礼を告げた。

本来であれば寮監についても聞きたかったのであるが、この話題に続ける事は適切でないだろうというのは、確信に近い直感だった。

「……下らない事を聞いたな、マルフォイ。理由はどうあれ未だ抹消

されたままの純血の話を、スリザリンの談話室ですべきでは無かった」

「いや、良い。純血ならば一度は耳にした事が有る類の話だし、調べて解らないような話でも無い。また去年の『秘密の部屋』の件も有つて、父上は僕が君に借り過ぎているとお考えだ。この程度の事を聞かれる程度であれば何でも無い」

「ならば、ルシウス・マルフォイ氏にも礼を告げておいてくれ。スリザリンで平和な生活を送るに当たって、貴方の息子には大変世話になっていると」

「その程度で父上が考えを翻すとも思えないが、確かに伝えておこう。僕としては都合の良い事に違いないからな」

それだけを言つて、マルフォイは離れて行つた。

その背を見送り、大きく息を吐く。

閉心術士というのは恐ろしい存在だ。或いは、開心術士か。

別に僕はドラコ・マルフォイへと術を掛けた訳では無いし、無言呪文を扱える程に熟達している訳では無い。

けれども、あの老人との訓練は——特に、開心術も閉心術に繋がるのだという理屈を押し通し、僕に使わせるようになった後では——人の心の動きというのに、酷く敏感にさせていた。彼がそれを隠そうとしなかつたというのも有るが、それでも去年の僕では、ここまで明確に彼の思考を掬い取る事など出来なかつただろう。

成程、寮内が不自然な雰囲気にもなる筈だ。

ドラコ・マルフォイを始め、死喰い人関係者の子供は、今回の事件で親に対して当然にシリウス・ブラックについて言及した筈だ。

別にその内容は何でも良い。シリウス・ブラックの詳細を知りたがるか、その行いを讃えるか、何だつて。ただ、彼等の親から返つてきた反応は、彼等にとつて恐らく予想外のものであるに違いなかった。

無論、子供に全てを語つた親が居ると思えない。けれども、語らないからこそ雄弁であるという事は多々有るのだ。元死喰い人の子供だからこそ、自身の親の無防備で素直な反応を見る事が出来る立場にあるからこそ、当然に気付いた筈なのだ。

死喰い人は——少なくとも、アズカバンの外に居るような人間は——シリウス・ブラックが闇の帝王に通じている事を知らなかった。そして、たとえ意図しなかったとしても、彼が闇の帝王の失墜をもたらした以上、彼を自分達の仲間であると信じては居ない。

だからこそ、死喰い人の関係者達は、彼の脱獄を無邪気に喜んでないし、彼が本当にハリー・ポッターを害してくれるか疑っている。

まあ、彼がグリフィンボールで有るのに加え、明確にブラック家から抹消されているという事実も大きくは有るのだろう。

そのような立場であればまずスパイとして疑われないだろう事は否定しがたいが、さりとてスパイになる為だけに家名から抹消されると言われて、はい解りましたと頷く純血もまた居るまい。たとえ一時で有っても同じ事だ。余りに不名誉が過ぎる。

要するに、シリウス・ブラックが、除名に相応しいだけの純血らしくない行いを少なくとも一度はしたというのは、純血にとって何ら疑いを抱く事が無いものである。

無論、シリウス・ブラックが正しく名誉回復した事を闇の帝王直々に伝えられれば別だろうが、しかしその前に闇の帝王は消え失せた。それがこの状況という事らしい。

否、アルバス・ダンブルドアの推量が正しければ、全ての前提は覆るのだが。

「……談話室の守り人を切り裂くのは正気の沙汰では無いが」

シリウス・ブラックがグリフィンボールで有った以上、自察への入り方に一定のルールが存在する事くらい理解していた筈だろう。それにも関わらず、無理矢理入ろうと押し入り、入れて貰えない結果として彼女を切り裂くのは正気の沙汰では無い。

もつと言つてしまえば、どう考えたつて無罪の人間の所業では無いと言える。

しかし、色々と中途半端であるという事もまた否定出来なかった。アズカバンに十二、三年閉じ込められたから狂っているという話では無い。

狂っているならば——すなわち、アルバス・ダンブルドアが主張するように、彼の善性故に心が粉々に破壊されているというならば、脱獄した後も殆ど誰からも見られないままに魔法省の追跡を躲し続け、尚且つ普段の手厚い防備に加えて吸魂鬼付きのホグワーツ内に入り込むような理性的行いなど出来ない筈だった。

そして、多少なりとも理性が残っているならば、談話室に押し入ろうとする事は奇妙である。

ハリー・ポッターを狙うだけならば、その必要は無い。彼はホグワーツの生徒であり、必然的に談話室外に出るのだ。去年バジリスクが生徒に対してそうしたように、単に襲うだけならば寧ろ談話室以外の方が好都合であると言える。

けれども、どういう訳かシリウス・ブラックはそうしなかった。

アズカバンを脱獄し、尚且つホグワーツにも侵入するという不可能を実現していながら、彼はグリフィンドール談話室には侵入出来ず、しかしそれを成し遂げる事にこそ拘った。その瞬間までシリウス・ブラックの侵入は察知されていなかったのだから、誰にも知られずに事を起こす機会を放棄して尚、彼にとってはそうする意味と価値があったとも取れる。

あの老人が何とか魔法省よりも先にシリウス・ブラックを確保しようとしているのは、最早確定事項であると言えた。

あの時、僕に彼の事について聞いた時点で、その意図は有ったのだろう。

老人が内輪からの手引きを考えていないのはスネイプ寮監の苛立ち具合からも明らか——やはり誰を疑っているのか余りに解りやすかった——であり、万一シリウス・ブラックがスリザリンに接触するような事になれば、僕を通じて干渉しようとしたのだろう。今回、寮監が老人の悪巧みにつき頼りにならないのは、誰が見ても認めざるを得ないからだ。

とはいえ、その目論見が外れたようであるのもまた言うまでも無い。

シリウス・ブラックは、確固たる目的意識を持って動いている。そ

して、それはグリフィン・ドールの談話室の内在る。もつとも、それが何なのかは解らないが。

あの老人も当然同じ事を考えている筈である。

シリウス・ブラックの襲撃の後、彼がグリフィン・ドール談話室に入らなかった事が半ば明らかであるにも関わらず、校長閣下は全寮の生徒を談話室や寮塔から叩き出して大広間に集めるような真似をした。それは、他の寮の人間がかくまっっていないかを含めて城全体を調べるのもそうだが、一番の理由は、グリフィン・ドールの談話室にシリウス・ブラックが狙うような何かを不自然さを見せないままに搜索し尽くす為で有つただろう。

その目的を発見出来たかどうかは不明だが、アルバス・ダンブルドアが御嫌いな吸魂鬼を未だ学校に張り付けて置いている点から見るに、まだ見つかつていないように思える。

ただ——いずれにせよ、一昨年、去年と違うというのは何も変わりはないに違いない。

シリウス・ブラックがグリフィン・ドール談話室を目的とした以上、他ならぬハーマイオニー・グレンジャーも一応危険が有る事は認めざるを得ない。しかしまあ、彼の属性から見て、その談話室に存在する何かもハリー・ポッター絡みで有る事は想像が付くし、そこに彼女が関わる余地が殆ど無いというのは、動かしようもない事実であった。

彼女が危険に突つ込む事も、巻き込まれる事も無い。

無意味で無価値な心配に気を已む事も、自分の無力を痛感する事も無い。

強いて言えばヒツポグリフの裁判こそが一番の問題だが、最善を尽くすつもりだというのは変わりないし、最悪の場合に陥ったとしても、彼女の親友達の存在さえあれば、いずれ立ち直りは出来るだろう。少なくとも、闇の帝王やバジリスクの襲撃に怯えるよりは余程健全な悩みだった。

今年は気楽であり、彼女は安全だ。

そして、それは間違いない良い事だった。

恐怖の虚像

ホグズミード。

ブリテンにおいて、唯一魔法族のみが住まう村。千年以上前に「マグル」からの迫害により建設されたというが、その存在の奇妙さについて色々と思いを馳せずには居られない。

それは何故他に魔法族が集まる事は無かったのかという点であったり、魔法界と非魔法界が分断されたという割に魔法族は半ば寄生するようにして非魔法界の共同体の中に隠れ住んだりしなかったのかという点であったり、或いは1714年以降にホグワーツ生の遊び場と化した理由——しかも三年生以上に限定する意味——は果たして何処にあつたのかという点であったり、まあ様々だ。

ただ、確かな興味を抱きはすれども、そのような場所で共に過ごす友人が居ない僕にとつては、やはりそれ以上の価値を有するものでは無かつた。いずれは訪れてみたいとは思うが、同学年の人間が浮かれていた一度目は行く気にならなかつた。そして二度目——この冬季クリスマス休暇前の最後の機会においても、やはり時期的に浮かれている中で、一人寂しく行くという事は考えられなかつた。流星にそこまで僕は悟つてもいない。

故に何時も通りにして二度目のドラコ・マルフォイの親愛に満ちた皮肉を甘受した後の土曜日の朝は、冬季やイースター休暇に次ぐ程度には完全に解放された時間であつた。

去年、一昨年と上級生が同様に外出する事は有つた——とは言え、秘密の部屋が開かれて以降は制限が掛かつたのだが——にも拘わらず、同学年の者達が寮内にも校内にも居ないという事実が、僕に対してホグワーツを閑散とした物のように思わせた事には多少驚いた。それは僕は僕なりに、「ホグワーツ」に対して親愛を抱いているという証なのかもしれない。

ただそうであっても、自分がやる事は、やはり大きくは変わらなかつた。

何時も通り談話室で読書をし、気になった事が有れば図書室で調べ

物をしながら時間を過ごすだけである。

知識というのは良い。得れば得る程に自らの血肉となり、力となる。

ハーマイオニー・グレンジャー程に僕は書籍そのものを信奉している訳では無いが、著者が読者に対して提示する物が非常に価値が有るという点においては同意出来る。それが真実にしろ偽りにしろ、確たる意図と思考、己が有する知識と経験に基づいて過去が紙面に刻み込まれた点こそ、またそれを読み解こうとする事こそ、僕の喜びであった。

とは言え、最近は新たな息抜きが別に加わっている。

ハーマイオニー・グレンジャーが固執した半分、つまりルビウス・ハグリッドの授業改善の方は酷く順調だった。

彼には常識は無いが、その本質はやはり善良で素直なのだろう。教師としては向いていないにしても、人に対して親身に接する事が出来るという点では、スネイプ寮監よりも圧倒的に優れている。そして何より魔法生物に対する知識と熱意は本物であった。

不注意から生じる小さな失敗はしょっちゅうで有ったし、更に色々としりざリンがちよっかいを掛けようとする事から生ずる騒動もしばしば起こりはしたが、ルビウス・ハグリッドの魔法生物を制御する能力、そして三人組を筆頭として彼を手伝おうとするグリフィンドール寮の団結力も有って、概ね問題無く進んでいたと言えた。

……ハーマイオニー・グレンジャーにも不意打ちで危険生物を持ち込んできたりする事が有るのは、まあ愛嬌の一種だろう。それでも自分の眼が届く一匹しか連れて来ないのは、彼も学んだという事だろうか。それで実験台となるのは何時もの三人組なので、僕にとってはその問題では無かった。彼女は時折、僕の方を恨めしげに見てはいたが。

一方で、もう半分、つまりヒツポグリフ裁判の方は芳しくない。

その一番の原因は、ルビウス・ハグリッドが未だ樂觀的な点に有る。学校の理事達から非難はされ、その時には二回目の授業を台無しにする程度には沈み込んだようでは有るものの、正式な処分の通知は未

だ届かず仕舞いである。そして、アルバス・ダンブルドアの保証や、最近はそれなりに授業が上手く行っている事も有つてか、彼の気分を十分に上向きにさせたようだった。

ヒツポグリフが『危険物処理委員会』に掛けられるであろうというハーマイオニー・グレンジャーの忠告——僕の言葉を半ばそのまま伝えていたのだが——に對しても、「ハーマイオニー、おまえさんは心配し過ぎだ」という事らしい。

彼女自身、ルビウス・ハグリッドや他二人の言葉を聞く内に、本当にそのような残酷な真似が行われるのか段々疑わしくなってきたようであり、説得も最初に比べて熱が入らなく、というか殆ど行っていないのは伝わって来た。

ただ、彼女達はスリザリンの陰湿さを軽く見過ぎであり、ドラコ・マルフォイが寮内で何と言っているのか知らないものであり、また権力の腐敗を理解して居なかった。

彼等が信じなくなればなる程に、僕がヒツポグリフは裁判に掛けられるどころか処刑まで行くだろうという確信を強めていくのは皮肉だった。そして、どういう弁護を打ち出そうとも、それは容易く握り潰され、歪められるであろうという事も。

処刑予告
その時が来た時の彼等の反応を想像する事は、僕に多少意地の悪い喜びを抱かせる物であるというのは否定出来なかったが、さりとてそれで一番苦勞するのがハーマイオニー・グレンジャーであろうともしれば、安穩としては居られなかった。

見通しが酷く暗くとも全く意味が無いとまだ完全に決まった訳でも無いし、出来る準備は可能な限りすべきであると言えた。

そんな状況の中、僕は何時を通り図書室で本を読みふけていたのだが——流石に來客が有ると思つてもみなかった。

幾らこの席が入口から奥まった場所に存在するとは言え、この閑散としている中で、既に先客が居る席に着く必要は無い。まして、僕は単なる陰險なスリザリン生では無く、ハーマイオニー・グレンジャーによればそれなりに酷い悪評が付き纏っているらしい部類のスリザリン生である。

それでも敢えて座るとすれば、やはりハーマイオニー・グレンジャー以外に存在しない筈で有るが、しかし彼女は二人の友人が居るのであり、当然ホグズミードで休暇前の最後の買い込みをしているだろうと思つて居た。

だが、違つた。彼女がホグズミードを訪れている部分は間違つていないだろうが、その友人の人数の予測が間違つていたらしい。何の因果か、彼はここに居た。

「……ハリー・ポッター」

「やあ」

軽い挨拶と共に、“生き残つた男の子”は、平然と僕の前へと座つた。

彼から好意的な、ないしは気軽な対応をされる理由というのは無い。

僕からすれば、ほぼ丸一年ぶりか。ハーマイオニー・グレンジャーが医務室送りになつた為にメモを渡すという体裁で、彼からバジリスクの確証をまんまと得た時以来の事で有る。無論、授業で顔を合わせたりはするが、会話する事も無いし、そもそも近付かない。ドラコ・マルフォイが僕を嫉めるような機会を与えたくも無いからだ。

強いて言うならば、アルバス・ダンブルドア繋がりのかもしれない。

一昨年はどうか知らないが、去年ハリー・ポッターは僕の事を気にしていたという。その際に、何かを吹き込んでいても可笑しくない。全くもつて、あの老人はロクな事をしない。

「君も前回からホグズミードに行つて居なかつたというのを聞いてさ。もしかしたら図書室に居るんじゃないかと思つたら、案の定だつたよ」

どうやらこの英雄殿は、わざわざ僕を探していたらしい。

そして、手元に本を持ってきて会話を隠蔽するというような殊勝な

真似をする気は無いようである。マダム・ピンスの縄張りで平然とそれを行うその姿は、いつそ堂々としていた。

「……君はこうしてスリザリンの人間と喋っていて良いのか？」

僕の揶揄に、ハリー・ポッターは皮肉めいた笑みを浮かべる。

「殆どの人間がクリスマス前のホグズミードを楽しんでいるんだから、僕等を見咎める人間なんてまず居ないだろう？ それに見咎めた所で、他ならぬ僕がスリザリんと『楽しく』会話しているとも思わないし、好き勝手に解釈してくれるさ」

その言葉は傲慢とも取れるが、しかし彼としては当然の事を語る口振りだった。そしてそれ以上に、注目され続けて来た者の重みが有った。

『生き残った男の子』という属性に加え、一昨年の賢者の石、去年のバジリスク。僕の比にならない位に好意的な評価と、それ以上の悪評を受けて来たのだろう。

ギルデロイ・ロックハートのように目立つ事を楽しむタイプならば違ったのだろうが、明らかに彼はそのような類の人間では無かった。その事に飽き飽きし、皮肉を飛ばさずには居られないのだろう。自分がどう在ろうとも、人は勝手に噂をするのだという事を。

「……それで。何故君がここに居る？ 当然の事ながら、僕は君がハーマイオニー・グレンジャーやロナルド・ウィーズリーと共にホグズミードに行っているものだと思っただが」

手元の本に再度視線を落としつつ、僕は問い掛ける。

『君も』という言葉から何と無く想像が付いたが、返ってきた答えは案の定だった。

「保護者からの許可が貰えなかったんだよ。それを貰う為に頑張りはしたんだけど、マグルを怒らせちゃって、というか、あ……僕が少しばかり癩癩を起しちゃってさ。それで、マクゴナガル教授も許してくれなかったから、僕はホグズミードに行けないって訳」

「……成程。ダーズリーとやらは随分『生き残った男の子』を手酷く扱っているらしい」

ハリー・ポッターが相応に我慢強いのは、僕と会話している事から

も明らかである。それを怒らせるとは、余程の事を言われたのだろう。というか、たかが保護者のサインを貰う為に頑張るといふ時点で色々察する物がある。

正直言つて、その虐待行為を魔法界全体に暴露するだけであの老人の権威を失墜させるには十分な気がするが、ただまあ、流石にハリー・ポッター自身が望みはしないだろう。そして、あの老人が「我が子」をそのような状況に置いているという事は、相応の理由が有るのだろう。

納得と共に言つた僕に、しかし彼は不思議そうな表情を見せた。

「えつと、僕がダーズリーと暮らしてゐるつて、ハーマイオニーから聞いたのかな」

「いや、君から聞いた筈だ。二年前だったか」

「……まあ、そうだよ。去年はそんな事話す暇は無かつたし。言つたような気はしないでもないけど、流石に覚えていないな」

彼にとつて自分が言つたかどうかは然して関心事でも無かつたのだろう。気を取り直したように、彼は僕に対して質問を飛ばしてきた。

「君もホグズミードに行つてないという事は、やっぱりサインを貰えなかつたの？」

「……ただ、その選択が絶望的に駄目だった。

「……考えてみてくれ。僕が、共にホグズミードに行くような友人が居ると思うか？」

「あー、ええと。その、ごめん」

軽く溜息を吐く。

もう二年強そのような状況が続いているのだから、状況は受け容れている。けれども、自らの口で言いたい事実では無かつた。

とは言ふものの——僕が誰かと一緒にホグズミードで楽しく過ごしている光景というのは、僕自身、全くもつて想像出来なかつた。たとえそれがハーマイオニー・グレンジャーで有つても、だ。

入学当時はもう少し想像出来ていたような気がするが、それが彼女と離れてから時間が経ち過ぎた故であるのかなのかは解らない。

そんな事を思いながら少し視線を上げれば、誰かを探している様子のグリフィンドール生の姿が目に入った。赤毛で双子、となれば思い当たる存在は一名、いや二名しか居ない。

そして彼等の片割れは、ハリー・ポッターを認識した後、僕の方を見てギョツとした顔を浮かべた。こちらを指さしながら、もう一人の片割れの肩を叩けば、やはり僕の方を見てギョツとした顔を浮かべた。

何やら深刻な顔で相談し始める始末であるが、已むを得ないと言えど已むを得ないか。グリフィンドールの人間の、友人好きの性質は常軌を逸している。

「……アレは、君に用事が有るんじゃないのか？」

「あつ、ジョージとフレッドだ。どうしたんだろう」

暗にここから立ち去ったかどうか、と言ったつもりだったが、ハリー・ポッターには通じなかったらしい。彼等が間違いなく自分を探していたらしい事を確認すると、少し待ってくれというジャスチャーを彼等に対して送っていた。

驚いた事に、この英雄はまだ僕と会話し足りないらしかった。

「……良いのか、待たせて」

赤毛の双子を視界の端に入れながら、僕は問い掛ける。

当人の制止を受けて尚、双子のどちらかはそれでも僕達に近付こうとしたのだが、もう一方が止めていた。そして、再度何事か言い合った後、一定の結論が出たらしく、彼等は僕等から離れた席に座った。会話が聞こえはしないまでも、僕等を——僕を監視し、何か有れば介入出来る程度の位置だった。

「良いよ、別に。どうせホグズミードに行けはしない分、暇は有るんだからさ。それに、ジョージとフレッドは同じ寮だから何時でも話せるよ」

ハリー・ポッターは、そう言い切る。

……別に、こちらを優先しなくても良い、というか逆に迷惑なのだが。

しかし僕の内心を敢えて無視しながら、彼は逆に僕を試すような視

線を寄越した。

「それより、君こそ良いの？ 僕と会話している所をグリフィンドル生に見られているけど？ それとも去年の時のように突き飛ばしてみる？」

微妙に嫌味が入っているのは、理由を理解していても苛立ちはしたという事なのだろう。

「……既に見られしまったのだから、今更の話だろう。それに——」
「それに？」

「——いや、何でも無い」

去年の際に僕が一番気にしていたのは、グリフィンドル生では無く闇の帝王だった。

だが結果的にそれは同じ事であり、また正しい行いでもあったのだろう。闇の帝王に操られていたのは、ジネブラ・ウィーズリーで有ったのだから。けれども、その辺りは伝わる筈も無いし、伝えてしまえば余計に面倒な事になるのは想像が付いた。

「ただ、口止めはして欲しいがな。口実は何でも良い。僕の事を適当に悪く言ってくれば、君が迷惑を被る事も無いだろう」

「……いいの？ 彼等の事だから、その場合には君に悪戯を仕掛けてくると思うけど」

「……撤回しよう。出来れば穏便に取りなしてくれると助かる」

苦々し気に僕が言えば、ハリー・ポッターは声を上げて笑った。

「解ったよ。ジョージもフレッドも渋るとは思うけど、何とかやってみる」

その言葉に安堵しなかったと言えば全くの嘘になる。クソ爆弾程度で済みそうにない襲撃を受けるのは御免だった。

そして、不毛な報復合戦を仕掛ける気も無い。入学してきてから殆ど悪戯に学生生活を捧げて来た人間に敵わないのは解り切った話なのだから。

「……それで。待ち人が居る以上、速やかに君の用件を済ますべきじゃないのか」

幾らホグズミード禁止で暇だとは言っても、単なる時間潰しの為に

わざわざ喋り掛けては来ないだろう。そう思って水を向けてみれば、彼は肯定を示すように軽く頷いた。

「そうだね。えーっと、まずはその、君はハグリッドの為に色々としてくれてるんだらう？　まずは、その礼を言っておかなきゃならないと思つて」

「……律儀な事だ。別に大した事をした訳では無いし、授業の評判が良くなったのはルビウス・ハグリッド自身の努力の賜物だろう。ギルデロイ・ロックハートの授業が一年間台無しのままだったように、変えようと思わなければ何も変わらない」

そもそも、君達の為に僕は動いている訳では無い。そのような想いと共に言えば、彼は解つているというように苦笑を深めた。

「君はそう言うと思つてた。でも、ハーマイオニーからは君が言い出したのが始まりだつて聞いてるし、ハグリッドが少しでも授業をマシにしようと思つてくれたのは良い事だよ。……まあ、思い出したように「おもしれえ」生き物を持つてくるのは辞めて欲しいけどね」

その表情を見る限り、たとえ友人関係でも彼の趣味に着いていけない部分は有るらしい。

「後、君はマルフォイを怪我させた事で、バックビークが処刑されちゃうつて考えたみたいだけど」

「……別段、信じられないならば構わないが。現時点では不確かである事には変わらない」

「いや、そうは言わないけどさ。ただ、ハグリッドはダンブルドア校長がやるだけの事をやつてくれたつて言つてるし、ハーマイオニーも最近その事を全く話題に出さなくなつたから逆に心配になつちやつて」

「……大概難儀だな、君も」

耳に痛い忠告は聞きたくなくても、無いなら無いで不安になるらしい。或る意味でハーマイオニー・グレンジャーの友人ならではの感覚だった。

「……まあ、そろそろ結果は出るだろう。あの一件からもう二か月だ。処分を決める時間としては十分だろうから、休暇前までか、或いは年明け最初には通知が来ても可笑しくない。君達がどうするかはそれ

からでも良いんじゃないか」

正確には、ドラコ・マルフォイからそろそろだという事を聞いたのだが、それは言う必要も無い。そして、数日程度の努力で何かが変わる訳でも無いだろう。

そんな僕の無意味な耳障りの良い言葉は、彼を一応納得させるには十分だったらしい。もつとも、僕が助かるとは一言も告げてない事には気付いているのだろう。少しばかり不安な様子を見せながらも、彼は頷いた。

「それが良いかもね。ハグリッドにもまた聞いてみるよ」

それで、と彼は続けた。

ルビウス・ハグリッドの話題はあくまで前座なのだろう。そして、それが終わった以上、本題に入るに違いなかった。

「ハーマイオニーが何をやっているか知ってる？」

「……何を、と言われても困るが」

僕の困惑の返答に、彼は考え考え説明を付け加えた。

「えっとね、ハーマイオニーは去年全部の選択科目を登録しててさ。それで、今年はどうするのかと思ってたんだけど、どうも同じ時間に行われている筈の授業を受けてるみたいなんだ。皆の話聞く限り、全ての授業に皆勤みたいだし」

「……待て。まず、彼女は全ての選択科目を登録したのか」

「？ あれ、もしかしてそれ自体知らない？」

「今初めて知った」

彼女と勉強の話をしていない訳では無い———というかそれが大半だが、さりとて何を選択したのかの確認はしていない。

その機会が有ればしたかも知れないが、去年は秘密の部屋騒ぎで忙しく、彼女は二度も医務室送りになり、全てが終わった頃には時期を逸していた。そして、三年が始まれば授業に出るのだから必然的に選択科目は解る。聞く機会がある筈も無い。

また確かに、僕が受けている魔法生物飼育学、数占い、古代ルーン文字の全てに彼女は出席している。しかし、彼女は取れる限界まで科目を取るだろうと思っていたし、彼女が好みそうな科目だとも思って

居たから、不思議とまでは思わなかった。

ただ、他の選択科目も取っているとなれば話は全く違ってくる。ハリ・ポッターの言う通り、少なくとも今年は全ての授業を受けるという事は不可能の筈だった。

「……そっか。ハーマイオニーは何をしているかについて僕達にも全く喋ってくれないし。てつきり僕は、君が何かを知っていると思っただけだ」

「君達友人に喋らない事を、僕に喋りはしないだろう」

「そうかい？ 僕には、ハーマイオニーが君に対して心を開いているように思える」

「それは僕の台詞だな。君達の方が、彼女と共に居る時間は長く、そしてまた距離も近い。僕が知る筈も無い」

事実、全ての選択科目を受けている事も言わなかっただろう。

そう告げてやれば、しかしハリ・ポッターは微妙に腑に落ちないような表情を浮かべた。……何故そのような反応をされるのかは、理解しがたい所があった。

「まあ、良いや。それで、ハーマイオニーが何をしているか思い浮かばないかな？」

「……全く思い浮かばない訳では無いが。正直言って、授業を受けるだけならば方法論が色々有り過ぎる。『憂いの篩』というのも有るが……嗚呼、他の人間が皆勤として認識しているのならば有り得ないか」

有り得ないと切って捨てた仮説に、しかし彼は僅かに興味を持ったようだった。

「その『憂いの篩』って？」

「ホグワーツがこの場所に建てられる要因となったらしい魔法具だ。ざっくり言ってしまうと、他人の過去の記憶を、まるでその場に居るように見る事が出来る。『ホグワーツの歴史』でも見れば最初の方に書いてある筈だ」

「あんなクソ鈍器をクソ真面目に読んだ人間がハーマイオニー以外に居るとは思わなかったけど。へえ、そんな不思議な道具が有るなん

て。一度見てみたい——」

ハリー・ポッターは、何かに思い当たったかのようにそこで言葉を切った。

「……それは良いとして。やっぱり、君でもハーマイオニーが何をやってるか思いつかない？」

「そのようだ。それなりに有力な仮説すら思い浮かばない」

「……いや、別に構わないよ。知らなかった以上、駄目で元々みたいなものだし」

ハリー・ポッターは少し落胆した様子を見せるが、それは諦めて貰うしか無かった。

正確には、同じ人間が同時に二か所に存在すると聞いてまず逆転時計を思い浮かべた。

けれども、逆転時計の実物を見た事が無いから何とも言えない部分があるが、典型的な時間旅行の鉄則は、基本的に「誰からも見られないはならない」である。

それでも個人として認識されない程度ならばギリギリ許容範囲だろうが、さりとてハーマイオニー・グレンジャーとして授業を受けるともなれば話は変わってくる。

ホグワーツの同学年、いやグリフィンドールの同学年ですら四十名前後の生徒が居るだろう。それらの証言を結集すれば、彼女が同じ時間に行われている別の授業に皆勤である事に、気付かない者が出ない筈が無い。

現実として、ハリー・ポッター達はそれに気付き、可笑しいと考えてしまっている。そして先の鉄則からすれば、その時点で禁忌を犯しているようにしか思えない。

本物の逆転時計には何か例外的な規則があるのか、或いは何等かの手段を併用しているのか。ただ、そのような話を持ち出してしまえば、最早何でも有りになってしまう。推測どころか勘とすら言えない。

……しかし、ここに来てはまだ、ハリー・ポッターは立ち去ろうとしなかった。

待たされているウィーズリーの双子が微妙に焦れているのが見えるが、彼にとつては問題ないのだろうか。

ただ、僕としては、彼等からの敵意が一応薄れてきているらしいのは良い事だった。ハリー・ポッターと僕が平和に会話を続けている所から、少なくとも彼を護る為に悪戯をする必要は無いと判断してくれたい。

「後、もう一つ聞きたい事が有るんだけど」

「……好きにしてくれ」

完全に投げやりに返答した僕に、彼は問うた。

「——君のまね妖怪は、ハーマイオニーの死体が変わったのかい？」

決るような言葉に、反射的に顔を上げてしまっていた。

ハリー・ポッターと視線が合う。彼の碧の瞳は、その深い色彩の裏に読みがたい感情を隠したままに、真っ直ぐこちらを見つめている。

彼に冗談を言っている気配は全く無かった。真剣に、素面のままに、僕のまね妖怪がそうなった可能性を考えているようだった。

そして、僕は勘違いしていた。

ルビウス・ハグリッドの事についても、ハーマイオニー・グレンジャーの事についてもそれらのいずれもがハリー・ポッターにとつて前座だった。彼にとつて他ならぬこれこそが本題なのだと、今更に気付かされたのだった。

先程までと違い、僕は完全に手元の本から視線を上げていた。

最早集中出来る気がしなかったし、彼の言葉と真剣に向き合う必要性を感じて居た。それを知ってか知らずか、ハリー・ポッターは僕の態度に大きな動揺を見せる事無く、僕の瞳を捉えたまま淡々と言葉を紡ぐ。

「まね妖怪の授業は広く話題になった。余り大つぴらに話される内容じゃないけど、それでも誰が何に変わったというのは、ある程度話になった。それは、他と余り交流しないスリザリンについてですらそう

だ」

「……………」

「でも、君のまね妖怪が何に変わったかはまるで聞こえて来ない。僕のように向き合わなかったというなら解るよ。でも、君の番は確かに有ったという話は聞こえてくるのに、何に変わったかという事だけが聞こえて来ない」

ハーマイオニー・グレンジャーに、僕の悪評について問われた。

そして、心当たりが無い筈もなかった。全てのスリザリンが僕のまね妖怪について口を開きたくないと感じ、さりとして完全に口を噤む事までは出来ないとなれば当然の話だった。まして変化した物を思えば、現在のスリザリンの中で最も邪悪だと噂されるのは不可避だと言えた。

「僕のまね妖怪は、吸魂鬼になる」

「……………何だ、藪から棒に」

「いや、だってフェアじゃないだろう？ 一方的に自分の恐怖の内容を知られているなんて。だから、僕の方も予め言っておこうかと思っただ。まあ授業の中で向かい合った訳でも無いから、恐らくの話では有るんだけど」

その立派過ぎる騎士道精神に、深く嘆息する。

彼は真っ直ぐだった。二年前と同じように。 “異常” なままでに。

無論、ひねくれた見方も出来る。隠す必要のない些事を、さも重要な事のように語って相手の言葉を引き出す話術。それが用いられる事は世間において珍しくも無い。

しかし、今のハリー・ポッターに、そのような意図が無い事は伝わって来た。皮肉な事に、あの老人による講義は、そのような副作用まで存在するようだった。

故に、僕が誤魔化すという選択肢は、初めから無かった。

……嗚呼、それに気付くようになったのは最近だった。

すなわち、この手の人間に対して、僕はどうして良いか解らなくなるという事に。

あの老人や、或いは寮監の方が僕にとっては余程付き合やすかつ

た。彼等には誤魔化しをしようが、騙し討ちをしようが何ら良心が痛まなくて済む。平気で心を偽り、言葉を紡ぐ事が出来てしまう。それは、恐らく僕が育つ上で学んだ話法に最も近いからだろう。

しかし、彼等のような人種相手は違った。

正直、つい最近までハーマイオニー・グレンジャーだけが特別だと思っていた。彼女以外の人間に対し、心を開いて会話を交わすというような事は殆ど存在しないのだから。

けれども、今こうしてそれを実感しているように、それは多少正確では無いのだろう。彼女が最も特別であるのは疑いようがないが、それでも彼女に対する同種の物を、僕はハリー・ポッターに対しても覚えていいる事を否定は出来なかった。

それが僕にとって良い事なのかは、やはり解らないが。

ただ――

「……君の誤解が何処から来たか知らないが、残念ながらそうでは無い。僕のまね妖怪は、そのような物に変わらなかった。君の予測は外れだ」

――今回においては、誤魔化す以前の問題だった。

そもそもそれは決定的に間違っているのだから。

「……えっと、違うの?」

僕の言葉が余程予想外だったのだろう。

ハリー・ポッターの反応は、驚愕というよりも失望しているようにすら見えた。

「ルーピン教授は、君の時は失敗だったと言っていたんだ。だからてつきり僕は、君の時にハーマイオニーの死体が出て来た物だと考えただけだ」

「……君とリーマス・ルーピン教授は随分と親しいんだな」

「ああつと、教授の事を責めないでね? 僕が吸魂鬼への対策について相談に行った時、恐怖の話になったんだ。具体的にはその――」

ハリー・ポッターは僅かに言い淀み、けれども振り切るように告げた。

「――吸魂鬼に近付くと、僕はヴォルデモートが襲撃した時の事を想

い出してしまおうんだ」

言葉を濁したものの、それが両親の死の状況について言っているのは明白だった。

「それで、ヴォルデモートからまね妖怪の事を連想して、教授に死体に変わる事が有るかと聞いたら有ると答えてくれた。僕がそれを言い出したから、教授はやはり三年生にはまね妖怪は刺激が大きかったのかもしれないと苦笑して、ポロっと君の名前を出したんだ」

「……成程、その流れでは誤解するのも無理は無いな」

ただ、ハリー・ポッターはそれ以前から、僕のボガートについてそうでは無いかと予測していたのかも知れない。僕はそのような素振りを見せた事は無い筈と思っっているが、彼なりの根拠を持ち合わせて居るのだろう。

そしてまた、大失敗例として僕の名前を漏らした教授を責める気にもならない。勿論、教授はまね妖怪を授業に用いるに際し、予めそれなりのリスクについて考えては居ただろうが、それでもスリザリン内でああいう形で現れてしまったのは、痛恨事では有ったに違いない。「しかし、誤解が真つ当でも、間違いは間違いだ。リーマス・ルーピン教授は、そのような意味で、失敗だと漏らした訳では無い」

それは嘘では無かった。

僕の恐怖と問われて、ハーマイオニー・グレンジャーの死体を一瞬思い浮かべたのは事実であった。けれども、僕のまね妖怪はそれに変わってくれなかった。

誤魔化されているとでも思っているのか、探るような視線の彼に僕は告げる。

「少し想像してみてください。スリザリン生のまね妖怪がマグル生まれの魔女の死体になる。その際、どんな事態になると考える?」

「……えっと、大騒動? オマケにスキヤンダルとして話題になる?」

「ならば聞くが、実際にそれが起きたか?」

「……いや。僕が君のまね妖怪が何に変化したのか知らないように、そうはならなかった。色々、それっぽい噂が無い事は無いけど。スリザリンは堅く口を噤んでる」

「そういう事だ。ハーマイオニー・グレンジャーの死体では無い。それは絶対だ」

少し迷っていたようだが、ハリー・ポッターは頷いた。

僕が嘘を吐いていないのは勿論だが、彼にとつても正当性を認められる理屈であつたらしい。

「じゃあ何だい？ まさかヴォルデモート卿という訳でも無いだろう？ 死喰い人の子供や、或いは僕と違って、君は実際に会つた事が無い筈だし」

「無論、違う。その人間が全く想像も付かない人物に変化出来る程、ボガードは融通が利くような生物ではないからな」

出会つた事が無い存在で無ければならないという制限は無い。仮にそれが需要であれば、ミイラやらバンシー、見た事も無い死体が出て来る事は無いだろう。

さりとて、想像出来ない程に現実味が無いのであれば、そもそも恐怖足り得ない。

「その前にだ。僕のまね妖怪が何に変わったかについて、君に対して答えたくない訳ではない。別に隠す事でも無いからな。しかし、君に対して、少しばかり質問をさせてくれ。……嗚呼、君のまね妖怪について掘り下げたい訳ではないし、大した話でも無い」

微妙に警戒する様子を見せたハリー・ポッターに、予め念押しをして続ける。

実際、大した話でも無い。別に聞かなくても良いのだが、僕のまね妖怪の内容について話せば彼はすぐさまここを立ち去るだろう。それは僕にとつて好都合でもあるが、さりとて、ここまで一方的に長々と喋らされて、情報だけ取られて帰られるというのは癪だった。

要するに、ハリー・ポッターへの嫌がらせに近かつた。

……もつとも、僕はその行いをすぐさま後悔する事になるのだが。

「君はリーマス・ルーピン教授から守護霊の呪文の個人講義を受けようとしているようだが、そこまで君は教授と仲が良いのか？」

かの教授についてそれなりの事を知り、そして幾何かの推測も付けている。

無論の事確証は無いが、それについて少しばかりの確信を抱くにはハリー・ポッターからの話は良い材料となるだろう。そんな思いと共に僕は問う。

けれども、彼は何の事か解らないというように、きよんとした反応を見せた。

しかも、僕にとって全く予想を超えた言葉と共に。

「えっと、その、守護霊？ 何だい、それ？ 初めて聞くんだけど」

「……本気で待ってくれ。君は、それを教わりに教授の下に行ったんじゃないのか」

「さあ？ 吸魂鬼が今度現れた時にどうすれば良いかを相談に行つて、学期が明けてから個人的に教えて貰う事を約束したのは確かだけど。内容までは聞いてない」

「他に吸魂鬼を退ける方法が有るのか……？」

吸魂鬼を退ける事が出来るのは、僕が知る限り真の守護霊のみの筈だった。

逆にそれ以外の方法、それもホグワーツ三年生が使えるような、より簡単な手段が有れば、アズカバンはとうの昔に破られているだろう。あの呪文が吸魂鬼に大きな影響を与え、そして何より派手に目立つという点も、アズカバンが脱獄不可能だった一因に違いないからだ。

無論、闇の魔術への親和性を高め、吸魂鬼に耐性を付けるというのであれば話は別だが、流石に“生き残った男の子”にその手段は用いないだろう。そもそもあの老人が許すまい。

「まあ、君がそれ以外に有り得ないって言うのなら、ルーピン教授も僕にそれを教えてくれるんじゃないのかな。

——それで、守護霊の呪文って何？」

「……今は僕が質問している場合だったと思うんだが」

「良いじゃないか。その口振りでは、知らない訳では無いんだらう？」

「……僕は何でも答えてくれるハーマイオニー・グレンジャーでは無いんだがな」

まね妖怪についての回答を後回しにされて多少気分を害していた

のは何処へやら。

彼は自分が教わるかも知れない魔法について興味津々のようだった。僕がこれ見よがしに嫌な顔をして、全く堪えた様子も無かった。

「……一応リーマス・ルーピン教授が教えるのを躊躇する気が解らないでもない。守護霊の呪文の難易度はO・W・Lレベルを超える。普通のホグワーツ三年生が手を出す呪文では無い」

「……そんなのを僕は覚えさせられるの？」

「別に君が差し迫って必要としないのであれば話は別だが。けれども、君は吸魂鬼に対抗する術、それも有効で適切な手段が緊急で必要な訳だろうか？」

そう問い掛ければ、ハリー・ポッターは覚悟を決めた顔で頷く。

彼の脳裏に過っているのは、吸魂鬼の影響で箒から落ちた瞬間の筈だった。

「守護霊の呪文と言うのは、最も幸福な記憶を現実投影、具現化する物だ。その名の通り、吸魂鬼が齎す絶望や憂鬱から君を守り、真の守護霊の呪文は呪文行使者を守るのみならず祓って見せるという。消滅まではさせられないようだが、対吸魂鬼という点においてはこれ以上に強力な護りは有り得ないと言っていい」

僕の断言に、彼は難易度以上に魅力を感じたようだった。

「それで、何かその呪文にコツは有るの？」

「使えもしない僕に聞くのは論外だと思うが、必要な物は知っている。幸福な記憶だ。寧ろ、それを必要とする事こそがこの呪文の核と言える。そして恐らく、それが一番難しい」

「……へえ？ 最も幸福な記憶、ね」

少しばかり、ハリー・ポッターは考え込む。

「想像でも構わない。君にとつて、最も幸福な記憶のイメージは何だ？」

「そうだな……。例えば、ダーズリー家に二度と帰らなくて済むとか？ 後は、クイディッチで優勝したまさにその瞬間とか？」

「後者は同時に僕の最悪の記憶にもなりそうだが――」

そう言った僕に、ハリー・ポッターはニヤリと笑った。

その事に関しては、彼は二年前を覚えているようだった。

「——真の守護霊の呪文は、僕としてはそう言った物で生み出されるような物では無いと思う。いや、幸福な記憶を必要とする事自体を否定はしない。しかし、その核というべきか。それを構築するべき物は、一概に言葉では言い表せない何かであると思う」

「……えーっと。意味が解らないんだけど」

「僕としても抽象的な事を言っているのは解っている」

言葉通りの感情を表情で示した彼に、僕は続けた。

「つまり、君が例として挙げた記憶。それは君にとって『最も』幸福な記憶であると言えるか。これより先、人生においてそれ以上の事が有り得ないと思うか？」

「……それは、将来的な仮定の話になるけど。流石に人生を通してみたら、それ以上に幸せな事は有るんじゃないかな」

「そういう事だ。であれば、『最も』では無い」

だからこそ、守護霊の呪文は難しいのだろう。

そもその成り立ちが、余りにも曖昧過ぎるのだから。

「吸魂鬼は人間の幸福を貪り、平和と希望を奪い、絶望と憂鬱を撒き散らす。しかし、ならば何故、最も幸福な記憶によって生み出される呪文によって追い払う事が出来る？ 幸福とは吸魂鬼にとって、極上の餌では無かったのか？」

幸福な記憶だけで吸魂鬼を追い払えるのならば、それを自分の頭の中で思い浮かべていけば、守護霊の呪文は必要無い筈である。

しかし、それで耐えられた魔法使いが居るとは聞いた事は無いし、アズカバンで餌場扱いされているのが現実だ。寧ろ逆に、一般的な幸福の概念とは掛け離れている筈の闇の魔法使いの方が、吸魂鬼に親和性を有する始末である。

「守護霊の呪文が有効なのは、それが絶望を感じ取れないからである」と一般に説明される。しかしそれは吸魂鬼が守護霊を傷付けられない理屈にはなれど、守護霊が吸魂鬼に有効な理屈にはならない」

繰り返すが、吸魂鬼は幸福を啜る生物だ。

故に、プラスのエネルギーがマイナスのエネルギーを打ち消すという単純な話には繋がり難い。

「そして、絶望を感じないで済むが故に有効ならば、最も幸福な記憶を核とする必然性は有るのだろうか？ 単に嬉しいとか楽しいという激しい感情では駄目なのだろうか？ 何より守護霊は使う者によつて別々の姿を形作るのだが、何故その者の本質を表しているとも取れる姿を、自然に形作る特性を有する？」

調べてみれば、守護霊の成り立ちは酷く古い。アズカバンの建設すら最近と言える程だ。

そのような護りには、魔法の最奥を必要するのではないだろうか。すなわち、理屈や理論を超えた、人が人として在るべき根幹を。

「……何となく君の言わんとした事は解つたけど。でもさ、君の理屈じゃ、最も幸福な記憶なんて存在しない事になる。そもそも、幸福つて、その量を比較出来る物なのかな」

「良い指摘だ。そして、僕はそこにこそ、守護霊の呪文の神髄が有ると思う」

実体の有る守護霊を生み出せる魔法使いは、魔法省やウイゼンガモットの高官として選ばれる事が出来るという「迷信」が蔓延っている。

しかし、その割には守護霊の呪文は、O・W・Lレベルを遥かに超える——つまり、N・E・W・Tレベルを遥かに超える、では無い——魔法としか扱われていない。それは、魔法族が時代の進展によりそれだけ進歩したという意味か、それとも何かを誤っているのか。

「君は非魔法界で育つたのだから、^{スターター}発火装置と言えば通じるか。最も幸福な記憶をそれに見立て、吸魂鬼が貪る事が出来ない幸福を超えた何かを燃え上がらせ、当人の本質として顕現させる。僕は守護霊とはそういう魔法では無いかと考えている」

腕組みして深く考え込み出したハリー・ポッターに、僕は言葉を付け加える。

「……あくまで僕の勝手な私見だ。言った通り、僕は守護霊を使えないし、リーマス・ルーピン教授が君に対してどうやって教えるか解ら

ない。話半分、いやそれ以下の戯言として受け止めてくれればそれで良い」

「うーん。まあ、解ったよ。ハーマイオニーやルーピン教授にも聞いてみる」

その言葉の内容の割には、僕の適当な推論には彼なりに何か感じる所が有ったらしい。返答も何処か上の空で、寧ろ同意しかねる気配すら有った。

それは良いのだが、本筋から大幅に逸れ過ぎている。

「……それで、話を元に戻して良いか？」

呆れと共に問えば、彼は少しばかり現実に戻ってきたようだった。「ええと、何だっけ。……嗚呼、ルーピン教授と僕の仲が良いか、だっけか。良く解らないけど、悪くは無いと思う。二回相談に乗って貰ったかな。一回目は、ルーピン教授が僕をまね妖怪に向き合わせなかった理由について」

「闇の帝王が出るかと思っただろうな。君の言葉によれば、それは間違いらしいが。そして、二回目は、守護霊——と決まった訳では無いが、吸魂鬼の対策についての個人授業の件か」

「当たり前。そう言えば、吸魂鬼が近付いた時の事について僕が語った時、何かルーピン教授には思う所が有るみたいだったな。僕の勘違いかも知れないけど」

そう言う割には何処か確信めいた響きと共に、彼は付け加えた。

その内容はやはり意図的にぼやかされているが、それでも想像は付く。ハリー・ポッターにしても、僕にはその程度で通じると思っただらこそ、その表現に留めたに違い無かった。

「一応確認するが、その個人授業はそれなりに長く続きそうか？」

「だと思っよ。病気のせいで教授が忙しいというのも有ったけど、簡単に解決するんなら、冬休み前にさっさと講義をやってくれてたんじゃないかな」

それに、守護霊の呪文が難しいと言ったのは君だろう、とハリー・ポッターは言った。

そこまです聞いて、僕は深く溜息を吐いた。

別に彼のその言葉に対して苛立ちを覚えた訳では無い。苛立ちを覚えるとすれば、この程度の事を彼から聞き出すまでに、圧倒的に回り道をさせられた事についてだ。

やっぱり、彼とは相性が悪いし、好きになれそうも無い。何事ももつと速やかに話を進めて欲しかった。

けれども、少なくとも今回はもう十分だった。

「僕からの質問は終わりだ。故に、約束をした以上、今度は君の質問に答えよう」

リーマス・ルーピン教授について、これ以上理解する必要も無い。正確を期すならアルバス・ダンブルドアに確認すべきだし、更に言えば個人授業についても伝えるのが万全だが、ハリー・ポッターにそこまでする義理は無い。そして別に心配せずとも、リーマス・ルーピン教授はその辺りの事は上手く調整するだろう。真に悪意を持っているのであれば、学期が明けるまで待たず迅速に済ませる方が良いのだから。

しかし僕の決断とは裏腹に、彼は不思議そうに首を傾げた。

「……質問に答えるって、他に何か有ったつけ？」

「……僕のまね妖怪の事だ。別に必要無いなら良いが」

「ま、待って。冗談だよ。知りたい、知りたいと思ってる。ハーマイオニーも『他人の恐怖が何だったかなんて無神経に聞く物じゃないでしょ』って訳知り顔で言っただけ、僕から見れば自分でも信じ切れない位に未練たらたらな位だ」

酷い誇張が含まれてそうな慌てて付け加えられた情報は不要だ。そんな小細工をする位ならば、まず完全に忘れる事を辞めて欲しい。何故なら僕が完全な馬鹿みたいだからだ。

ただ、彼にとってはハーマイオニー・グレンジャーが関わるかも知れないから気にしただけで、それ以上に重要事で無いのは事実だったのかもしれない。寧ろ、箒から彼を叩き落とした吸魂鬼に対抗する為の手段の方が余程の関心事であり、その事で他が丸ごと頭から吹っ飛ばされたとしても当然の成り行きだったと考えるべきだろうか。

何より、ハリー・ポッターが忘れてる事はもう一つ有った。

「彼等は随分と待ちくたびれたようだがな」

「えっ？ あ……！」

僕の視線を彼が追えば、言わんとする事に気付いたのだろう。

こちらを観察し続けていた赤毛の双子はニツコリと満面の笑みを浮かべながら、まるで鏡写しのようにハリー・ポッターに対して手を振っていた。

正直言つて、中々に迫力がある。幾ら親友の兄とは言え、同じ寮の上級生の存在を完全に忘れ去って話し込むのは豪胆だった。彼等の下に行けば、間違いなくシメられるだろう。そして僕の知った事では無い。彼だけがグリフィンドールで、僕はスリザリンなのだから。

「まあ、僕との会話内容を適当に知らせる事だ。僕のまね妖怪についても、別に隠す事じゃない。ただ、君が知らせるべきかどうかは判断に任せるが。あの双子ならば、逆に吹聴しない気もするが……正直どちらでも良いんだ。最早取返しの付かない程度に悪評が広まっているらしいからな」

微妙に顔が蒼白となっている彼に、僕は告げた。

「アルバス・ダンブルドア」

「……え？」

跳ねるように、ハリー・ポッターはこちらを見た。

一瞬で顔の色は元に戻っていた。しかし、その碧の瞳の内には、困惑と、混乱と、それ以上に得体の知れない物を見るような色が有った。その彼に対して、僕は再度答えを刻むように言った。

「アルバス・パーシバル・ウルフリック・ブライアン・ダンブルドア。激情を振り切った無表情のまま、蒼の瞳を殺意で冷ややかに燃やし、空間を捻じ曲げんばかりにその全身から魔法力を撒き散らす超越者。それが僕へと杖を向けている姿に、僕のまね妖怪^{ポガート}は変わった」

言葉で表せば、それだけでしかない。

そして、怒れるアルバス・ダンブルドアというのは、今学期、全校生徒が一応見る機会が存在した。すなわち、吸魂鬼が学校に入り込んだ——というより、ハリー・ポッターが箒から墜落した瞬間の事である。ただ、それを経ても、スリザリンは口を開けなかった。

あれは距離が近くはなかった。自分達にその感情を向けられては居なかった。

何より、自分の存在の全てを賭して尚、眼前の存在を滅ぼしてみせるのだという絶対の覚悟という物が存在しなかった。

けれども、あの場に顕現したまね妖怪にはそれらの全てが有った。

そして恐らく、あの場に居たスリザリンは、一瞬ではあっても確かに思ってしまったのだ。

アルバス・ダンブルドアこそが今世紀で最も偉大な魔法使いであり、絶対に敵に回してはならない存在なのだ。邪悪を極めた筈の闇の帝王は、しかし生い先短い老人の力を到底凌ぐ物では無く、故に自分達は彼の陣営へと速やかに寝返るべきでは無いのかと。

そのような裏切りの想いを、ボガートが創り出した偽物に対してすら抱いてしまった。

故に、誰もが口を閉ざした。

語る事を拒み、しかし全てを秘密にする事が出来なかった。それが、真相だった。

狼達の中の狼人間

冬季休暇が明け、一月になって授業が開始した。

休暇中、ハーマイオニー・グレンジヤーと友人二人に何か有ったらしい。彼女は図書室を良く訪れるようになった。その理由について、僕は何も問わなかった。

僕に語る必要が有るならば彼女から告げるだろうと考えていたし、また無遠慮に触れる事も無いだろうとも思っていたからだ。何より、他に人が傍に居るだけで心が癒される事が有るのだという事を、三年程前に僕は他ならぬ彼女から教えて貰っていた。

だから、僕のやる事と言えば、何時もより図書室に居る時間を増やした位だ。彼女の口数が非常に少なかりと、疲れ果て、苛立ち、時に僕へと当たる事が存在しようとも、それは当然の事だった。

案の定ヒツポグリフの死刑予告通知が来たというのは、或る意味で都合が良かった。ただ、僕が既に頑張り過ぎていたという事は、逆に都合が悪かった。彼女が没頭する対象を、一つ奪ってしまったと言えるからだ。

その代わりというように、ルビウス・ハグリッドの授業を余計熱心に“改善”しようとしている事は痛々しく有った。

一方で、懸念されたシリウス・ブラックの再度の襲撃は未だに無い。学校が依然吸魂鬼付きである事と、スネイプ教授が冬季休暇中校内を駆けずり回っていた事を考えれば、やはり彼は逃げおせているのだろう。彼が大量殺人犯であろうと冤罪囚であろうと、今年のアルバス・ダンブルドアにそれを泳がせておく理由は無い。一昨年や去年と違うのだ。あの老人からどうやって逃げ遂せているか、少しばかり知りたくも有った。

とはいえ、やはり僕にとってシリウス・ブラックは関心の対象では無く、さりとて今年は向こうから関係者が寄ってくる年のように思った。

新学期が始まって二度目の闇の魔術に対する防衛術の授業が終了した後、放課後に自身の研究室に来るようにリーマス・ルーピン教授

から告げられた。

その時の他のスリザリン生の反応は……まあ、何も言うまい。何故その雰囲気になったのか知らない教授は酷く不思議そうでは有ったが。

そして注文通りに教授の部屋を訪れてみれば、何と云うか、そこは普通だった。

何となくギルドロイ・ロックハートのあの派手さが懐かしくなってくるというのは、単に部屋を訪れた回数 of 差異なのだろうか。僕やギルドロイ・ロックハートの言葉に対して、一々部屋中の写真が反応を示すというのは、あれはあれで悪趣味だったが、見物でも有ったのだ。そして、最早永遠に見る事の出来ない光景でもある。

そんな僕の感傷を他所に、リーマス・ルーピン教授は部屋へと招き入れた後、僕を椅子へと座らせた。そして、予め淹れていたであろう紅茶のマグカップを差し出して来る。

「ステイブン、いやステファンだったか。ティー・バッグなのが申し訳無いが」

「いえ、構いません。有難うございます」

リーマス・ルーピン教授から、縁の欠けたそれを受け取る。

個人的な好みで言えば珈琲の方が好きなのだが、さりとして客として呼ばれているのに文句は付けられまい。

僕の反応に微かに笑った後、教授は僕と向かい合うように座った。

「……それで、何の用でしょう？ まさか、成績について問題でも？」

先んじてそう切り出した僕の言葉に、リーマス・ルーピン教授は不意を突かれたような顔をして、しかし微笑みを見せた。

「いいや、そのような堅い話では無いよ。君は全体から見ても、非常に良く出来ている。ただ、実技よりレポートの方が苦手なのかな？ 勿論、それはどちらかと言えばの話だが。そそっかしい勘違いや間違、或いは独自の見解が目立つ。最後は一概に悪い事では無いが」
「……参考までに、教授から見て、スリザリンの中でレポートが優秀な生徒は誰です？」

「そうだね。男子生徒の中では、やはりセオドルだろうね。彼は何

時も安定して良いレポートを仕上げてくる。後は……ドラコも良いね。もつとも、彼は君とは逆に実技の方をもう少し頑張るべきだが」「嗚呼、そうでしょうね」

僕は笑った。少しばかり、愉快的な気持ちだった。

もつとも、リーマス・ルーピン教授にその意味が通じる筈も無い。彼を知らなければ、僕とドラコ・マルフォイとの正反対きについて反応したと思うだろう。実際、教授は僕の返答について、何ら引掛かりを覚えなかったようだった。

「それで、違うというならば何なんですか？ 成績が問題でないのであれば、僕には教授に今更呼びつけられる理由が無いと思うんですが」「……今更か。嗚呼、そうだね」

レポートの話題の真意について理解出来なくても、そちらの皮肉は通じたらしい。

もつともリーマス・ルーピン教授はその身分に相応しく、僕に対して怒りを見せるどころか、単純に恥じ入ったような笑みを浮かべるだけだった。

「本来ならば、直ぐ君に言葉を掛けるべきだったのだろうね。しかし、あの状況ではあー、何と言うか、そういう雰囲気では無かったというか。そうしてしまう事は、寧ろ君の立場を非常に難しい物にしてしまうように思えたのだよ」

少しばかり言い辛そうにする教授に、今度は僕が苦笑する番だった。

「……まあ、解りますよ。殆どが自分の恐怖と向き合ったのに、僕だけ特別扱いする事など出来なかった事は。そして、都合の悪い事に、貴方はグリフィンドールだ」

要するに、あの老人と同じ寮だった。

そしてまた、僕はそれと犬猿の仲であるスリザリンだった。

「別に非難している訳でも有りません。僕にとって、あれは左程気にすべき事でも何でも無い事でしたから。実際、あの時も授業は何事も無く終わったでしょう？」

「そうだね、君は確かに退けてみせた。見事なものだったよ」

教授は穏やかに、称賛を隠す事無く認めてみせる。

その後の雰囲気は終始一貫して微妙にはなつたが、大問題に発展しなかつたのは間違いない。僕に促されて我に返つた教授は僕の番が無かつたかのように授業を進め、そして退治までやりおさせた。

また、僕自身にとって気にすべきでは無いというのも偽りでは無い。

所詮アレは偽物だった。良く出来ていたが、一瞬の泡沫でしかない。その間をやり過ぎてしまえば消え去ってしまう程度の存在を、どうして畏れられようか。

だから、気になつたのは――

「――ハリー・ポッターに話を聞いたからですか？」

僕の言葉に、リーマス・ルーピン教授は少しばかり怯んだような表情を浮かべた。そして何かを逡巡するように一呼吸置いた後、誤魔化すように微笑みを浮かべて答えた。

「そうだね。それが無かつたとは言わない。ただ、私がこのような機会を設けようとしたのは、ダンブルドア校長から御話を聞いたからだよ」

「……………」

成程、あの老人か。

確かに休暇中、シリウス・ブラックの影響により生徒の数が露骨に減つた事も有つて、あの老人の手は空いていた。どれくらいかと言えば、学期中も不定期的に続いていた閉心術……と閉心術の訓練について、再度僕に集中講義をする位には暇にしていた。

そして、それが終わった後、同時に一応の卒業も言い渡された。既に基礎が殆ど固まつた以上、自分が教え続けても大幅な実力向上に繋がらないだろうという事らしい。

実際には、アルバス・ダンブルドアの教えを受け続ければ、全く実力が伸びないという事では無い。閉心術の訓練は、やはり相手有つての物である。

ただ、今の僕にとってそれは習熟までの時間を短縮する程度の効果しか無い。裏を返せば、これぐらいの上達が有れば非効率的な自学自

習でも十分同じ所まで行き着けるだろうというあの老人の御墨付で有り、それに文句は無かった。

ただ、その辺りの事情は当然、リーマス・ルーピン教授は知らない筈だった。スネイプ寮監ですら知らないだろう。そして言うまでもなく、普通の生徒であれば、アルバス・ダンブルドアという大魔法使いは、雲の上に位置する筈の、遠い存在だった。

だからこそ、僕の沈黙を当然に教授は誤解し、少しばかり早口で付け加えた。

「嗚呼、君が不安になるのも解る。そして、余り人に話すべき内容では無いという事も。だが、校長は別に君の事を悪く仰っては居なかった。寧ろ、君の事を案じていらした」

案じていたというのは間違いなく体面だけ取り繕ったものだろうと確信していたが、そのような僕と老人の関係性についても、やはり教授は知り得なかった。

「別に、責めるつもりは有りませんよ。教授としては、自分の校長がまね妖怪として現れたなんて、十分報告案件でしょう。……それで、どんな反応を？」

「校長は、驚いていらした。けれども、その後直ぐに納得していらつしやった」

その内容からは不自然さすら感じる程落ち着き払ったままに、ルーピン教授は言い切った。

「まあ、良く解らないのが、その後に『自分が現れただけだったか』と聞かれた事だったけどね。しかし、私は何も答えられなかった。……嗚呼、別に私が君に答えを求めて居る訳じゃない。ただ、校長はそう仰っていた事は伝えておくべきだと思っただけ。私が校長に伝えた事が、手放して褒められたものじゃないのは確かだから」

――

流石に校長閣下は僕と同じ考えだったらしい。

敵意と殺意に満ちたアルバス・ダンブルドア。それが現れたのは別に良い。

だが正直言って、僕はハーマイオニー・グレンジャーの死体が現れ

るという事を期待していたのであり、あの老人が出て来た時でさえも、ハーマイオニー・グレンジャーを示すような属性を有する物が共に出て来ると思っていた。

彼女の杖なんかが良い典型だろう。折れたそれを握っていたとかであれば、僕はそれを素直に受け止められた。恋し愛する者の死体が出て来るといふのは、非常に真つ当で典型的なまね妖怪の変化形態と言えた。

だが、僕のボガードが再現したのは、アルバス・ダンブルドア以上の物では無かった。

それがボガードの再現能力の限界に有るのか、或いはそれ以外に何か理由が有るのか解らない。けれども、どんなに探しても他の要素は見付からなかった。

「しかし、その様子では校長の質問に対する答えを、君も持っていないさそうだね」

「……ええ、まあ」

教授の想像している理由とは全く違うが、誤解を解かずに僕は頷いた。

それを少しばかり観察するように教授は見た後、言葉が続けた。

「ただ、私としても考えが足りなかった事は認めざるを得ないだろう。闇の帝王、或いは死喰い人が現れるという可能性は、当然に思い描いていた。可能な限り、そのような生徒には向き合わせないようにしたい、ハリー——ハリー・ポッターはその典型だった。けれども、その逆の可能性というのは、完全に想定外だったよ」

まあ、この教授もあの瞬間完全に硬直していたのだから、余程の衝撃だったのだろう。

「……教授が気に病む必要は無いでしよう」

全くの本心と共に、僕は言葉を返す。

「実際、僕の方が異常なのでしょう。『本気』のアルバス・ダンブルドアに現実味を感じているのは、恐らくこの校内に僕しか居ない筈ですから」

僕は過少評価してしまっていたのかも知れない。

アルバス・ダンブルドアという存在の事を。

考えても居なかった奇縁によって、僕はあの老人と近くなり過ぎてしまった。

御互いに不可避の反感を抱けども、あの老人は僕を糾弾するには老成し過ぎており、そしてまた僕はあの老人と訣別するには矮小過ぎた。更に言えば、御互いが似たような傷を持つていた。そして何より、如何にその本質が頑迷で、傲慢で、冷淡で有ろうとも、僕は二年前の最後に見た姿を——愛に惑わされた姿というのを忘れ去って居なかった。

また、僕が接触する存在が何も変わらなかったという事も小さくないのかもしれない。

ハーマイオニー・グレンジャーはその事実を知らず、ドラコ・マルフォイは半純血の僕程度を恐れて避けるような屈辱を自らが許せなかった。必然として、僕の狭い社会では、その重みというのを実感する事は遅れに遅れた。

僕のまね妖怪の正体について告げた時の、ハリー・ポッターの表情を覚えている。

そして、恐らくそれが客観的な評価として正しいのだろう。彼は「英雄」で、そうであるが故に全ての解答でもある筈なのだから。

「君は、あのような校長の姿を見た事が有るのかい？」

「いいえ、有りませんが」

静かに投げ掛けられた問いに、軽く首を振る。

訓練中に何度か不可避的に過去を覗きはしたが、その影響は無かったのは明らかだ。

まね妖怪は良く知る姿——老人の姿だった。そして僕はそれを不思議に思うものではない。ゲラート・グリンデルバルドとの伝説的な決闘も含めて、全ての過去は現在の老人の中に在る。肉体と魔法力の活力の衰えは、時の積み重ねの前では些細な差異に過ぎない。

「まね妖怪の模写対象は、現実に見た物でなければならぬという制限は無いでしょう？ 見た物にしか変化出来ないというのであれば、あれ程までに正確に個人の恐怖を写し取る事は出来ない。その存在

自体が人で言う開心術そのものであるからこそ、人によってそれが恐怖を掻き立てるか否かの大きな差異を生み出してしまおう」

寧ろ、見た事の無い物を——目に見えない抽象的な部分を、再現性に難を抱えるにも拘わらず視覚的な制限の内に再現しようとしてしまうからこそ、時にちぐはぐで、時により致命的な結果を生み出してしまおうのだろう。

ハリー・ポッターの変化が良い例だ。

彼のまね妖怪は、親の死んだ状況を再現するのでは無く、それを再現する吸魂鬼こそを再現する。直接的に言えば、例えば今まさに死のうとしていた両親達の姿、或いは声を再現する方がシンプルで難が無いと言える。けれども、まね妖怪はそうしない。何故なら、まね妖怪は本能的に、その状況を再現される事自体がハリー・ポッターの恐怖では無いと理解しているからだ。

彼にとって両親の死は最悪の恐怖の象徴で有ってもそれ自体では無く、言ってみれば人の精神を蝕み破壊する恐怖そのものを恐怖している。もつと噛み砕いて表現すれば、恐怖が齎す影響こそを恐れているというべきか。

だからこそ、平和と幸福、希望を奪い取る吸魂鬼の姿に変わってしまおうのだろう。

「……確かに君の言う通り、まね妖怪の性質はそのような面があるが」
教授は、口元に僅かな微笑みを浮かべたままに、僕の眼を真っ直ぐ見て言う。

「あれ程精巧な変化な物だから、私は見た事が有るのだと思っ居た」
「……一生徒が、何時見る機会が有るといふんです？ アルバス・ダンブルドアの存在をもつてすれば、僕を殺す事など指一本すら必要無いでしょうに」

「一生徒という表現が正しいのか私には疑問が有るがね。とはいえ、確かに見た事が無いというのは、そうなのかもしれない。先学期のミスター・ポッターが墜落した時ですらも、そして私が知る中でも、あれ程の感情を御見せになった事は一度として無い」

「貴方が知る中、というのは不死鳥の騎士団の際の事ですか」

その単語を出した瞬間、リーマス・ルーピン教授の瞳が僅かに鋭くなる。

けれども、すぐさま普段の授業を思わせるような、先程までと同じような、穏やかな物に戻った。

「君は私が思うより多くの事を知っているようだ。とは言え、私はそれに対して答えてあげる訳には行かないな。ダンブルドア校長がそれを率いていたのは事実だが、彼を信頼する者全てがその組織に属した訳では無いし、逆に信頼しない者も属していたのだから」

ただここで誤魔化し過ぎるのも不自然だろうと、教授は続けた。

「私がダンブルドア校長と『例のあの人』の衝突の瞬間に立ち会った事はない。けれども、仮にその瞬間に立ち会ったとしてもああはならないと思うよ。敢えて言うならば、伝説的な決闘をしたゲラート・グリンデルバルドくらいじゃないかな。校長が本気にならないとは口が裂けても言わないが、恐らくそこまで入れ込んではいないまい」

「……アルバス・ダンブルドアにとって、闇の帝王はその程度でしかない?」

僕の詰問にも似た言葉に、教授は明らかかな苦笑を見せた。

「そうじゃないさ。強弱の問題では無い。純粹な力量だけ言えば、闇の帝王はグリンデルバルドよりも上回るかも知れないのだから。言ってみれば、自分の存在意義に対する闘争とでも言うのかな。世間的な善悪を超えて許せない物であるか否かという事だ」

「……大人的な比喻は解りにくいので、もう少し簡潔に言ってくれませんか」

「本当に君に伝わっていないのかな? まあ良いが、恋でも愛情でも、友愛でも家族愛でも何でも構わない。自分の価値観において認められず、そして自らが何としてもそれを挫かなければならない。そういう妄執めいた物が足りない気がするんだよ、私にはね」

「……どういう経緯に至って、教授がそのような事を思ったのかは解らない。」

けれども、その言葉の意味までが理解不能な訳では無い。

『彼はヴォルデモート卿といずれ対決するであろう』

二年前、アルバス・ダンブルドアはそう言った。

その口振りは、まるで彼こそがそうせねばならないというようであった。実際、アルバス・ダンブルドアはハリー・ポッターを闇の帝王と向き合わせる事にこそ拘った。管理された形で有っても、賢者の石を餌としてでも、彼の成長を促す必要性を確信していた。

この魔法戦争が、闇の帝王と今世紀で最も偉大な魔法使いを打ち手として、魔法界を盤と見立てて対立する物では無く。あくまでそうであるのは——主役であるのは、〃生き残った男の子〃だということに。

「まあ、君が私の考えに同意するかは別だがね。ともあれ、私にとって痛恨だと感じたのは、スリザリンの前にアルバス・ダンブルドアという存在が現れたのもそうだが、それ以上に、生徒にそのような類の激情に触れさせてしまった事こそある。あれは余りに刺激的過ぎた。少なくとも、 Hogwーツ三年生が向き合うような物じゃない」

何せ私も大いにビビってしまったものだ。
冗談のように口にするが、釣られて笑みを浮かべるには真剣味を消し切れていない。

……この教授は、僕の一件が大失敗だったとハリー・ポッターに漏らしてしまった。

それが気の緩みから、或いは親しみから感じる物である事は否定しきれないだろう。だが、彼が他の生徒の前ですらそう独白せざるを得なかったのは、彼が彼なりに真剣に矜持と覚悟を持ってあの授業を——まね妖怪を用いる事を決断していたからなのだろう。

他の授業で如何なる失態を犯そうとも、あれだけは絶対に失敗してはならない。それ程の意義を教授が見出していたからだった。

「……貴方は、何故まね妖怪を用いるという過激な授業を一番初めに行ったのです？」

「何故だと思う？」

リーマス・ルーピン教授は、静かに微笑んだ。

その微笑みは今までと別種の物で、真実に満ちていて、同時に挑発的だった。そして、問いの答えを求めて居なかった。

「闇の魔術に対する防衛術。その核心は、邪悪へ向き合う覚悟を持つておく事だよ」

資格無き愚か者は逃げるべきなのだ。

かつてその教訓を身をもって示した人間と同じ地位でもって同じ科目を教えながら、しかしリーマス・ルーピン教授は全く別の解答を口にした。

「邪悪は人間を襲う機会を常に伺っている。そしてそれは突然訪れる物で、襲うのを待ってもくれない。別にそれは『例のあの人』とやらに限った物じゃない。この世には、邪悪というのは有り触れている。だからこそ、僕はまね妖怪を使った。疑似的とは言え、その覚悟を抱かせ、そして打ち破る経験をさせる為に」

たとえ教授によつて守護された状況で有つても、リデイクラスという呪文一つで追い払える偽物で有つても、大勢の仲間達が傍で見守っている物で有つても——いや、そうであるからこそ、教授はその価値を見出し、他の人間から最も介入を受け辛い一番最初においてそれを行つたのだろう。

「平和になつたのは良い事だ。私の学生時代とは雲泥の差だね。しかし、全ての邪悪が打ち払われた訳では無い。そして、恐怖の下に硬直してしまえば、それはそのまま死を意味する事が多いというのを僕達は肌で理解している。同時に少しでも動けさえすれば、それだけで生きられる可能性が上がるといふ事もだ」

リーマス・ルーピン教授は、魔法戦争を知っている。そして、その教訓も。

それは僕が決して持ち得ない物だった。

一昨年、僕は動けなかった。杖を持っていながら、何も出来はしなかった。

スネイプ教授が居なければ、僕はあの時死んでいたか、或いは、真つ当な生活を送れない程度には破壊されていた。直接感謝を伝えていないとはいえ、それでもあの老人に伝言を頼んだのは本心で有つたし、その恩を未だ忘れては居なかった。

そして眼前の教授はその一端でも生徒に伝えようとした。

「……もつとも、上手く行つたとは言いがね」

自分の気持ちを慰めるかのように紅茶を啜つた後、カップを置きながら教授は苦笑する。

「教師というのは匙加減が難しい。ハリーのようには恐怖を知り過ぎて
いる人間には向き合わせられないし、逆にそうでない人間には余り重
みが伝わらない。そして、まね妖怪が恐怖を再現しきれない君のよう
な人間には、そもそも試練自体に成り得ない」

ただそれでもこの教授は、何かが残る事を期待して、あの授業を
行つたのだ。

感慨に沈む僕を前に、教授は少しばかり姿勢を正す。両手を軽く組
み、椅子から多少身を乗り出すようにして、リーマス・ルーピン教授
は、僕へと言葉を投げ掛けて来る。

「さて、校長は何も言わなかった。君に対して問い詰めたり、何かを聞
いたりする必要も無いとさえ仰つた。だから、その事自体に君が不安
を感じる必要性もまた無い」

口元には依然として微笑みが有つたが、瞳には真剣さが有つた。

「とはいえ、私は一応教授だ。あのアルバス・ダンブルドアに対して
馬鹿馬鹿しいと告げて見せた君が、僕に対して何かを話したい事が有
ると思うならば別だ。今更と思うのも当然だろうし、僕としても答え
を強制している訳では無いが、出来れば聞かせて欲しいと思つてい
る」

「……………」

「レッドフィールドという名前は、私には聞き覚えが無い。死喰い人
としても、それどころかホグワーツ卒業生としても。同姓を探せば居
るのかも知れないが、君のように印象的な魔法使いとなれば、まず居
ないだろう。父上と母上、どちらの姓なのかな？」

教授の問いに、軽く溜息を吐く。

「名前は父上の物ですよ。魔法使いで有つたのも。ただ何処かの外国
に居たらしいですし、教授が御存知無いのも無理は無いですよ。母
は非魔法族であり、魔法戦争後に僕を連れてこの国に入ってきたよう
です。何処に居たかも正直知りません」

何処の国に一番近しかったかは父や母の言葉からは想像が付いているが、さりとて父が卒業生であった事までは保証しないだろうし、一箇所に留まっていたかも知れない。

僕の答えに、教授は満足を示すかのように軽く頷く。そして、更に何かを口にしようとしたが——僕が口を開く方が更に早かった。

「その前に、リーマス・ルーピン教授。一つ質問をしても？」

「ん？ 何だい？」

教授は一瞬面食らったようだったが、しかし微笑みを浮かべ直した。穏やかで、理想的な大人として在ろうとしていて——それでいて、作り物だと解る表情を。

「教授はシリウス・ブラックが何故ホグワーツに侵入出来たと思いませんか？」

「……何故私にそれを聞くんだい？」

リーマス・ルーピン教授は動揺を現さなかった。

「貴方が狼男であり、彼と繋がりが有るから」

だから、僕はそれを告げた。

リーマス・ルーピン教授は硬直し、その瞳には大きな動揺が有った。それは狼人間である事を当てられたが故でもあり、またシリウス・ブラックとの繋がりを示唆されたが故でもある。

けれども、彼がそこまで大きな反応を見せた一番の理由は、自分が僕の事を探ろうとしていたにも拘わらず、逆に自分の事について手酷い逆襲を受けた事に違いなかった。

「非常に教授らしい態度で有ったと思いますが、グリフィンボールがスリザリンに親切過ぎるのは不自然です。最初からそうであつたならば別ですが、まね妖怪の授業が終わってから四か月も経ってそういう事を言われれば、怪しまない方が可笑しいでしょう」

細部が多少異なりはすれども、僕はクイリナス・クイレル教授を思い出していた。

寮監でも無いにも拘わらず、個人について余計な事を詮索しようとする態度は、やはり真つ当であるとは言えまい。一応今回は授業内容の事で灰色では有るが、それでもやはり期間が空き過ぎているのは致命的だった。

何より、アルバス・ダンブルドアが問題無いと言っているのにも拘わらず、この教授が関わって来ようとする態度にこそ僕は引つ掛かった。

「僕は最初に言った筈ですが。今更だと。そしてそれと共に、ハリー・ポッターに何か聞いたんですかと」

一昨年、去年はレイブンクロー。しかし、今年はグリフィンドール。そしてボガートの件を考えれば、僕に対してそれを抱くのは当然と言えた。入学前に接触が有り、僕の事情について多少なりとも——しかし、その核心部分を——知っていたミネルバ・マクゴナガル教授とは違う。そして闇の魔術に対する防衛術教授という地位は、半ば職業病として、それが頭に過ぎらずには居られなかった。

片方だけならば、見逃したかもしれない。否、恐らく、ボガートの件については、この教授は可能な限り速やかにあの老人に照会したのだろう。そして、一応の保証が得られたから、彼は僕に対して何も問わなかった。九月の学期初めにボガートの授業を終えて尚、教授は一月まで沈黙を守り続ける事が出来た。

けれども、彼はハリー・ポッターと会話して、僕と交流が有る事を知った。この時期なのは、やはり守護霊の呪文の訓練を始めたからに違いない。あの話の流れからして、ハリー・ポッターは僕の事を当然に話題としただろう。

その上、彼は単なる教授では無く、ハリー・ポッターに非常に深い想いを——恐らく、ジエームズ・ポッターとの繋がりのために個人的な強い感情を抱いている教授であった。

ハリー・ポッターへ確認した事柄に加え、客観的に見て、学年の適性水準を超え、本人が覚えられるかどうか不透明な魔法の習得の為に時間を割くというのは相当入れ込んでいなければ不可能である。あのミネルバ・マクゴナガル教授とて、そこまでするかどうかは怪しい。

そして、僕は幾何かの材料——ピーター・ペティグリュウやシリウス・ブラックに関する諸々の言及、監督生名簿と首席名簿、寮監のリーマス・ルーピン教授及びハリー・ポッターへの態度など——を有していた。

であれば、僕の存在に対して強い懸念を、或いは隔意を抱くというのは、それなりに真つ当ですら有る。

確証までは抱かずとも、導かれた回答を、ぶつけてみる価値は十分有ると僕が判断する程度には。

激昂するのか、惚けるのか、それとも開き直るのか。

如何に普段の授業において穏やかであるとは言え、その本質までは解らない。だから、僕は教授の前に座ったままに待った。

決壊しそうな激情と、酷い混乱。何故という疑問。自分はどうか答えるべきかという逡巡。それを読み取るのに、開心術など必要無い。僕の先の切込みは、正しく効果を発揮していた。

それらが落ち着くまで、優に二、三分の時間は要しただろう。

しかしその後で、リーマス・ルーピン教授は覚悟を決めたように大きく息を吐いた上で、降参するように小さく両手を上げた。

「……参ったよ。その通りだ。ハリーに対して怪しいスリザリンが、それもアルバス・ダンブルドアを恐怖とする人間が近付いていると聞いてしまったんだ。それ相応の警戒——というか、興味かな。まあ、それでもやはり前者に近いが。それを抱くのは真つ当だろう」

教授は認める。

僕に探りを入れようとしていた事を。

「いや、話している内に不味いかな、と思いはしたんだ。君の成績が優秀層に属するのは知っていたが、それでもそれで計り得ない要素と言うのを考えるべきだった。いや、まね妖怪をアルバス・ダンブルドアに変える人間が、普通である筈が無いか」

自分でそう言って、教授は苦笑してしまっていた。

その表情は、先程までと違い自然体だった。つまり、僕に対する警戒や敵意は無かった。スリザリン生から反撃を受けた筈だと言うのに、ハリー・ポッターに対して一定の強い想いを抱いているらしい存

在だというのに、彼は逆にそれらを丸つきり喪ってしまっていた。

……その理由が、全く察せない訳では無いが。

それは、恐らく酷く悲しい事であった。

「何故僕が狼人間である事に気付いた——と問うべきでは無いんだろうね。スネイプ教授の宿題、私の定期的な病欠、そしてまね妖怪。後は、スネイプ教授の反応かな」

「……更に言えばハーマイオニー・グレンジャーの言葉ですかね」
「彼女が？」

流石にもう一人真実を知っているとは思ってもみななかったのか、教授は驚いた顔をする。

もつとも、今回は彼女の隙故には無い。

彼女は狼人間が教授を続けて良いものか、それを黙っておいて良いのか判断が付かなかった——恐らく二人の友人に相談してすらのだろう。だからこそ、僕に対してもその事実を示唆した。

直接的に狼人間という単語は出さなかったが、それでも多少の誘導さえ有ればすぐに僕が気付くと踏んだのだろうし、気付かなければそれで構わないとも考えていたのかもしれない。そして僕は気づき、彼女に伝わる形で、言う必要は無いのではないかと示した。

「……いや、ハーマイオニーならば気付いていても可笑しくない、か。彼女と同年齢でより賢い魔女を、私は知らないからね。そして、ハーマイオニーと君に交流が有るといふ事は、確かにハリーも言っていた」

その嘆息には、納得の色だけが有った。

「とは言え、君がハーマイオニーから答えを聞いた訳では無さそうだ。そうであれば、ハリーは私が狼人間だと知っている筈だから」

「……ハリー・ポッターが知らないとは思いませんでしたか」

正直言つて、僕は知っているものだと思っていた。

あの友人達に告げないで、僕のみ告げる理由は無いのだから。

ただ、リーマス・ルーピン教授は微笑みながら首を横に振って否定した。

「いや、ハリーが知らないのは間違いないよ。知っていたら、彼は私が

言葉を濁した部分について、当然なんらかの反応を示しただろう。嗚呼、君に教えた——いや、ヒントだったか。それを与えたハーマイオニーを責める気も無い。つまり、彼女は君ならば遅かれ早かれ気付くと踏んだのだろう。私が定期的に休むのは、これからも続く訳だから」

教授はそう言うが、僕が彼女の言葉無しには気付かなかった可能性はそれなりに高い。

狼人間を教授にする、というのはそれくらいの爆弾だ。流石にスネイプ寮監の宿題に取り組んでいれば別だったが、僕はそもそもやらなかった。代理で来た人間が出した宿題をリーマス・ルーピン教授が唯唯諾諾と受け容れるとは思わなかったし、それが本来のカリキュラムから大きく外れているともなれば猶更の話だった。

ただ、少しばかりの示唆を受け、寮監の敵意を併せて一度考えを巡らせてみれば、正しい答えに至らない道理も無い。その点では、教授の言葉も強ち間違いでは無いのかもしれない。

「一方で、シリウス・ブラックの繋がりは、彼女から聞いた訳では無いんだろう？ ……嗚呼、何故君が気付いたのかは大体想像は付く」

教授は軽く手を振って、言葉を続けた。

「ジエームズはハリーの父親として有名だし、ピーターにしても友情と裏切りというのは新聞や本の恰好の題材となった。まあ、それで解るのは三人組が親友だった事止まりだが、さりとして他の情報を繋ぎ合わせて私もその一員だったと推量するのは不可能では無い」

何より、教授陣の誰かから聞く事は不可能でも無いだろう。シリウス・ブラックと違って、その事は隠すまでは無いのだから。

呆れ半分、諦め半分に言った後、教授はカップを改めて取った。

既に中身は冷え切っているが、それを気にした様子も無い。いや、寧ろ生温い方が教授にとつて都合が良いのかも知れなかった。

たとえ僕に期待を裏切られる事は無いと予感していても、煮え滾る現実を言葉で表すにはそれ相応の覚悟が居る。恐らく、教授は幾度もその苦々しさを味わってきただろうから。

経験則は、理性と本能の両方に教訓を深く刻み付けてくれる。

「……最後に聞かせてくれ。君は私がシリウス・ブラックと関係がある上に、そして何より狼人間であると理解していながら尚、今こうして悠長に話している。

——それは、酷く危険な行いだとは思わないのかね」

その言葉を示すように、半ば脅迫するように教授は軽く僕の方へと身を乗り出した。

彼の口は自身の歯を誇示する軽く開かれている。今は何の変哲も無いが、変身すれば最後、人間を害し、その血を汚染する不可逆の損傷を与える凶器に変わるのだというように。

だから、僕は極めて理性的な言葉と冷笑を返した。

「ハリー・ポッターが野放しなのに、何故貴方を警戒しろと？」

今回アルバス・ダンブルドアが何も言っていないというのも有るが——先学年の教授選任の苦言に対して心して置こうとか言った割にこれだからあの老人は救えない。僕が文句を言わなくとも、それ以上に他から非難轟々な事は解っているだろうに——最も大きな理由はやはりその点にこそ有った。

「狼人間が生物兵器として優れているのは、満月の夜に一噛みすればそれで全て終わるといふ事です。『生き残った男の子』が狼人間になったというのは、彼の権威を失墜させるには十分過ぎる傷だ。その程度には、魔法界では狼人間に対する差別的な見方が蔓延っている。しかし、そうなる気配は一向に無い」

だからこそ、今年は何も思いはしなかった。

正体が解りやすく危険であるが故に、近づくのに躊躇しないで済むというのは皮肉だ。

去年のギルデロイ・ロックハートの方が、余程近づく事に警戒が要求されたものだ。訳の分からない存在こそ、人の恐怖を掻き立てる物は無い。逆に言えば、正体が解っている存在を、必要以上に警戒する必要もまた無い。

「……満月の夜以外でも、狼人間なんてのは暴力的で、ロクでも無く、嫌な奴等ばかりだ。そういう反論は……まあ、君には響かないようだね」

成程、とリーマス・ルーピン教授は疲れ果てたような口振りであった。

しかし、その全身からは緊張が抜け、自然体にすら近い姿であるように見えるのは、それまでの反動なのだろう。一貫して作り物だった教授の態度は今や完全に剥がれ落ち、素の態度に酷く近い物となっているに違いなかった。

「君のまね妖怪が校長に変わる訳だ。もしかしたら、君こそが最もアルバス・ダンブルドアの強大さを信じているのかも知れないね。何せ、ホグワーツの教授陣にも、まね妖怪がヴォルデモート卿に変わる人間は少なくないだろうから」

先程とは違い、その名前を教授は冷静に呼んだ。

それは、僕が知る二人とは違って闇の帝王を恐怖しないからでは無く、もっと大きな恐怖を教授自身が知っているが故の行為だった。

「君の事はもう詮索しないよ。ハリーが君に感じて居るのは友情では無いようだが、それでも交流する価値を見出しているのは間違いないようだしね。ハーマイオニーも同様だろう。そして、校長が問題無いと断言するならば、教師が余計な首を突っ込む事では無かった」

「そうしてくれると助かりますよ。終わった過去を蒸し返されるのは、僕としても余り気分が良くないですから」

「シリウス・ブラックについて僕に聞いてきた君が良く言えたものだ」

その皮肉は、まあ甘受すべきだろう。

「……それで、君の質問は彼の脱獄の手段についてだったか。残念ながら、私は知らないね」

教授は酷く穏やかに、僕の眼を真っ直ぐ見つめながら言った。

「彼は由緒正しい高貴なブラック家の一員だ。ヴォルデモート卿から闇の魔術を教わったのでは無いのかね？ アズカバンでは殆どの者が狂うというが、死喰い人の中には依然として正気に踏み止まり、ヴォルデモート卿への忠誠を語る者が居るとも聞く」

視線が交錯する。教授は、僕の下世話な詮索を受けて立っている。

……そして、正直言つて僕は期待していた。

あの老人から一応の卒業を言い渡された事で、そしてドラコ・マル

フオイから確かに真実の一端を掬い上げられた事で、開心術を自在に操れるようになったのではないかと。

けれども、そんな都合の良い事は無かった。

やはり、あれは無防備な相手が対象だったのであり、半年程度の修練しかしていない人間が、杖無しで相手の心を読み取るなど出来る筈も無かった。

そして僕の眼には、教授は全くの真実を吐いているように見えた。

「……まあ、そう考えるのが真つ当なんでしょうね」

「おや、簡単に君は引き下がるのだね。根拠も確証も無かったのかい？」

「嫌味ですね。アルバス・ダンブルドアが突き止めて居ないんです。僕が推量を働かせるのは不可能な事は半ば解っていましたよ」

「だろうね。校長が突き止められないのであれば、僕が思い当たる程度の手段を用いている筈が無いだろう。誰にも思いつかないような、深い闇の秘術に違いない。何せ、あの方は、今世紀で最も偉大な魔法使いだからね」

あの老人が、シリウス・ブラックの侵入手段について全く検討が付いていない——その見当が付かないとは、何も思いつかないでは無く、無数に手段を考え付いてしまうという意味だが——事を、僕は確信している。

手段を知って居れば、今世紀で最も偉大な魔法使いに侵入が防げない筈も無い。

寧ろ、その程度の監視が出来なければ、そもそも食場からアズカバン離されて飢えている吸魂鬼から、好き勝手に動き回る生徒達全てを護り抜く事など出来る筈も無い。

そして一度接触してしまえば、あの老人にはシリウス・ブラックを止める魔法の言葉が有る。つまり、ピーター・ペティグリューは生きているのかという質問が。それが事実であれば当然止まるだろうし、事実でなくとも隙を作る事が出来るだろう。

招き入れる必要が有った一昨年、そして動きに制限の有った去年とは違う。今年アルバス・ダンブルドア自らが問題解決に直々に動い

ている。

そして、あの老人としても何度も何度もハリー・ポッターの機転や努力に頼るような真似をする隙をしないだろう。

賢者の石の時のように他ならぬハリー・ポッター自身が遂行せねばならないと確信している場合は別だが、今回はシリウス・ブラックのみならず、言葉が通じない吸魂鬼まで校内に存在する。守護霊の呪文を習得しようとしているとは言え、それが実を結ぶかどうかは不明確であり、実際に箒から叩き落された今となつては血眼になつて探している事だろう。

ただ、それでも未だにシリウス・ブラックは逃げおおせている。

であれば、一分野とは言えアルバス・ダンブルドアを超える手段を有しているのであり——当然、リーマス・ルーピン教授がその手段を推量出来ないのもまた道理である。

敢えて引つ掛かる事を述べるとすれば、リーマス・ルーピン教授が監督生となつたのが75年、つまり70年頃から始まつた魔法戦争中であり、流石のアルバス・ダンブルドアとて校内に居る狼人間の警戒が多少疎かになる程度には忙しかつたのでは無いかという点だが——それは何の推量にも繋がるもので無いし、流石の老人とて、その辺りの確認は取っているだろう。

シリウス・ブラックの脱獄手段のみでは無い。十二人の非魔法族を殺したと偽装して、ピーター・ペティグリューが衆人環視の中で逃げおおせる事が出来るような手段を知らないかという程度の確認は。

英雄として死んだ親友を侮辱する言葉であるが、激昂一つで真実を知れるなら安いものだ。

ただそれを僕が口にしないのは、つまりはまあ、あの老人への一種の信頼と言えた。

徹底的に嫌味な老人なのだから、人の傷を的確に抉る程度は平気で出来るだろう。ハリー・ポッターというより優先度の高い存在の危険が掛かっているのであれば猶更だ。何より、僕は必要以上に嫌悪を獲得する趣味も無い。

そして、僕にとつては先の言葉に気に掛かつた点が有つた。

「……貴方は、随分とアルバス・ダンブルドアに冷ややかなんですね」

今世紀で最も偉大な魔法使い。

そう言った教授の口振りは、皮肉の響きを隠し切れて居なかった。そのような僕の指摘に教授は少し眼を見張った後、自嘲するかのようにならうに笑った。

「今更君に対して隠しても意味が無いだろうね」

リーマス・ルーピン教授は認めた。

あの老人に対する感情が、親愛や心酔とは程遠い事を。

「恩義や感謝、敬慕を抱いているのは事実だ。忠誠を抱いているのも偽りが無い。また今こうしてこの職場に居る事も、十三年前にあの人の下に居た事も、別に不満は無いとも」

教授がアルバス・ダンブルドアの崇拜者である事。それは疑う余地が無い筈だった。

「ただ何というかな、収まりが良くないというのかな。嗚呼、相応しい表現としては——僕は多分、心の何処かで恨んでいるのだろう」

思えば、僕の正しさは他ならぬアルバス・ダンブルドアが保証したと教授は言った。

けれども、それでも僕がハリー・ポッターと相応の交流を持っていると聞いた時、この教授は我慢がならなかったのだろう。単に接触するのではなく、親身な態度を示すような芝居をした上で見せかけの好意を獲得し、内実を探ってやろうと考える程度には。

「あの時もそうだった。心の通じる友人達と引き離され、北で明らかにな汚れ仕事に従事させられた。……嗚呼、解っていたとも。私以上に適任者は居ないと。しかし、決定的に踏み外す事は何とか拒否したが、それでも多くの悪に手を染めさせられた」

そこまで言って、教授は首を横に振った。

「否、私は自らの意思でやったのだ。彼等の信頼を得る為にというのは、言い訳に過ぎない。友が見ていたら、それを知ったらどう思った

だろうね。狼男らしい、見下げ果てた奴だと考えたかもしれない。それも已むを得ない事だが」

その瞳の内には、戦争が映っていた。

泥臭く、陰鬱で、そして救いようがない現実の焰が。

「元々卒業時から、僕は何処にも受け入れられなかった。夢のような黄金モラトリアムの一時は終わったんだ。この病気の御蔭で定職というのは望む事が出来ず、僕はジエームズから金銭的な援助を受けてさえた」

苦渋や屈辱と言った感情は、その声には無かった。

それらを忘れさせるだけの信頼に基づく関係からか、ただ懐かしむような響きだけが有った。

「筋で言えば、未だ存命だった僕の両親に頼るべきだった。けどまあ、僕はこんな身だろう？ 既に僕の家のお金庫は空だった。それを見透かしていたジエームズは、半ば無理矢理にガリオンを押し付けてくれた。親からの遺産を浪費するには良い使い道だと嘯いてね。有り難かったよ。同時に情けなくも有ったがね」

彼の両親は、狼人間となつた息子を治療する為に四方八方手を尽くしたのである。しかし、治療法は見つからなかった。

脱狼薬の発明はほんのつい最近、それも症状を根本的に治療するのでは無く緩和するのみに過ぎない。

その上脱狼薬は、非常に希少な材料を要求する上に、調合するのにも高度な技量を要する。加えて、脱狼薬は満月前の一週間にわたって飲み続けなければならず、一度でも欠かせばその効力が無くなる。

仮に学生時代に存在していたとしても、教授にはどうにでもなるものでも無かつただろう。

「だからという訳では無いが、半ば当然に僕は戦争へと身を投じた。汚れ仕事であろうと、危険な任務であろうと構わなかった。……まあ、それ以外、僕に道が無かつた事も否定しない。けれども、僕は本心から友人達を守りたかつたという事だけは信じて欲しい。僕と違って、彼等には未来が有つたのだから」

未来。子供達。

ジエームズ・ポッターとリリー・エバンズとの関係は勿論、シリウ

ス・ブラックやピーター・ペティグリューについても、彼は同じ事を考えていたのだろう。

ただ、結果は悲劇に終わった。ジエームズ・ポッターとピーター・ペティグリューは英雄的に死に、シリウス・ブラックは裏切りによって監獄に送られた。

「そして戦争は終わった。けれども僕に待ち受けていたのは、前以上の苦境だった」

残った物は確かに存在する。ジエームズ・ポッター達の忘れ形見が。

ただ言うまでもなく、狼人間である彼は安全の為に近付く道など最初から無かったのであるし、自身が狼人間である事を知って尚それを受け容れてくれた理解者を喪ったという点においては、その事実は何ら慰めにならなかった。

「実の所、狼人間は死喰い人達にすら受け容れられなかったのが現実なのだが、善良な者達にとっては関係無かった。フェンリール・グレイバックの悪名は轟いていたからね。そして、戦争が終わって役目も無く世に放り出された中途半端の僕は、何処にも居場所が無かった」
声には憂いが滲んでいたが、それ以上に空虚さが立ち込めていた。

「——それで、どうして恨まないで居られようか。それはホグワーツ入学前と別種の、しかし比較にならない程に激しい想いだ。僕は既に温かさを知ってしまったのだから」

「……罵倒され、迫害される狼人間を見た事が？」

「当然有るとも。何人かはまさに眼前でね。そして同じようになりたくないと言った事すらある。馬鹿げた事だ、僕の本質も彼等と何ら変わらないというのに」

狼人間が真に畏怖されるのは、血の汚染にこそ有る。

治療法が無い不可逆変化に対して、純血は勿論、それ以外の魔法族も酷い恐怖を抱いている。誰だって、我が子から自分を産んで欲しくは無かったという言葉を聞きたくも無い。だからこそ、狼人間というのは、他のヒト以外や危険な魔法生物よりも苛烈に忌み嫌われる。

「……貴方は、アルバス・ダンブルドアがその力を使って自分の為に――

「狼人間の為に社会を変えてくれる事を期待した事は？」

「ステファン。自分が出来ないからと言つて、他人にその行いを期待してはならない。それは余りに身勝手に、子供っぽい行いだ」

「……けれども、リーマス・ルーピン教授にも子供だった頃は有る筈だ。」

いや、既に教授はアルバス・ダンブルドアに対する感情を吐露している。であれば、僕の問いに対しては言葉を返す必要は無いのだろう。回答は予め与えられているのだから。

「ダンブルドア校長が、最大限尽力して下さったのは理解している。それにも拘わらず、今年、ドローレス・アンブリッジの主導によつて反狼人法は成立した。英雄で有つても出来ない事は存在する。出来たのは、僕に対して仕事を与えてくれる事位だ。それもまた非常に偉大な行いである事は、敢えて言及するまでも無いだろうが」

「……」昨年には死に、去年は記憶を永遠に失つたような教職をですか」

その言葉に教授は一瞬驚き、しかしそれを打ち消すかのように笑い声を上げた。

「……何故、そんなに可笑しいのです。変な事を言いましたか？」

「いや、君でも知らない事は有るらしいと思つてね。確かにそれらは例外的であるが、僕の契約はどの道一年で終わりだ。僕の入学前から、そして在学中は当然、闇の魔術に対する防衛術教授は一年以上続いた試しが無い」

「――」
僕は定職とするものだと考えていた。

教授は疑いなく教える者としての才能が有る。

僕個人の意見でなく、ここ二年程の酷い教授に当たった人間は、誰もがそれを認め、彼の教育に対して感謝を示している。狼人間という属性など関係無く、リーマス・ルーピンというその人に対して、その資質を見出している。誰もが――他ならぬ僕としても、これから卒業時までずっと在籍して欲しいとすら思つて居た。

この学校で脱狼薬を調合しうる程の卓越した魔法薬学の才を持つ

た人間は、少なくとも一人居る。

そして、あの老人から強制されての嫌々ながらであれ、間違いなく脱狼薬をこの教授に対して提供しているだろう。そうであれば、理性を飛ばして変身し、他の者を襲う事など有り得ない。

リーマス・ルーピン教授がこれまでの四か月で善良さを示し続けたように、そして死の呪文を行使出来る魔法使いを友とする事が出来るのと同じように、彼はこの学校で何事も無く教育を——それまでと違う日の当たる所での静穏な生活を送る事が出来る筈だった。

であるからこそ僕は、教授の正体を知って尚、何も言わなかった。ハーマイオニー・グレンジャーに対して、口止めめいた事までした。

しかし、教授は最初から覚悟していたのだ。一年限りだ、と。

「その風変わりな慣習Jinxが何処から来るのか僕には解らない。しかし、校長は続けさせるべきでは無いと御考えのようだった。無理矢理続けた先に何が起こるか誰も知らないが、多分破滅的な事が起きるのだろうね。もしかしたら、僕の入学より遙か以前にそれが起こったのかも知れない」

「……それは良いでしょう。しかし、貴方はそれで納得しているのですか？ 確かに友人は既に居なくとも、貴方が落ち着いた生活を送る事が出来た場所は、変わらずここに在った筈だ」

クイリナス・クイレル教授。ギルデロイ・ロックハート。

理由は違えど、彼等はホグワーツに対して愛着を有していた。その為に戻ってきた。

そして、リーマス・ルーピン教授も同じだろう。彼等にとって、そして僕にとつてすら、ここは紛れも無く「家」で、それ以上の物であるに他ならないに違いなかった。

「確かにそれは否定しない。スネイプ——君の寮監にも非常に世話になってる。彼の好意により、僕は満月の夜も無害な子犬で居られる。自分の事を少しばかり好きで居られる。戦争後を考えれば、最も心落ち着く場所である事は否定しない」

だが。

だがそれでも、リーマス・ルーピン教授は認めようとしなない。

「諦めるのに納得が必要かい？ 僕はそれ以外の道など無いのだから」

「その諦念を与えるのが魔法界であり、社会であり、そして世界だった。」

如何に僕が言葉を尽くそうとも、その結論を覆す事は出来ない。アルバス・ダンブルドアや僕が抱く痛みが彼に理解出来ないように、彼が抱く痛みを僕達は理解出来ない。

狼人間を可哀想だと思うのも、差別をしてはならないと声高に叫ぶのは簡単だ。その事に意義が有る事も。しかし、幾らそれをしたって、彼等への理解には決して繋がらない。僕達が狼人間でない以上、その間には永遠に埋まらない断絶が存在する。ただ出来るのは、その断絶を受け容れ、彼等がそれを飛び越えようとした時に初めて、彼等が傷付かない為にそれを受け止める事だけの筈だった。

これ以上、この話題を続けても無駄なのだと悟っていた。

だから、矛先を変える事しか出来なかった。

「……一年後。いえ、もう六か月程ですか。それから貴方は何をするつもりなのです？」

僕の言葉に、リーマス・ルーピン教授は虚を突かれたような表情を見せた。

彼は僕よりも倍以上の年齢だった。だということに、その瞬間は、まるで同学年の少年のように見えた。

「ホグワーツ魔法魔術学校の教授というのは、それなりに地位が有る筈です。たとえ一年ごとに辞任し、『闇の魔術に対する防衛術教授』という肩書を持った人間が大量に居るとしても、それは変わらないでしょう。その職務を無事に真つ当出来たとすれば、相応の箔が付く筈です」

この国における唯一無二の公的教育機関の、Professor教授と呼ばれる地位なのだ。それぐらいの価値が有って貰わなければ困る。

「貴方が日陰で生きる事を余儀なくされていた事は見れば解ります。しかし、これからはそうでは無いでしょう？ ささやかで有っても確

かに幸せを得られる道が有る筈だ」

「……今後か。それは、考えてもみなかつたな。また北へ——半ば朽ち果てた懐かしい我が家へ戻る事しか頭に無かつた」

リーマス・ルーピン教授は半ば茫然と呟いた。

「……成程、君のまね妖怪が校長を写し取った理由が、そしてそれを退ける事が出来た理由が解った気がする。そして、君が抱く激情の根源も。君は僕と違った理由の下に、社会を、世界を——アルバス・ダンブルドアを恨んでいるのだろう」

そう言葉を紡いでいくにつれて、教授は段々と自身を取り戻して行つたようだった。

「……貴方は僕の事を詮索しないと、既に言つた筈ですが」

「詮索はしていないさ。勝手に理解してしまつただけなのだから」

教授は笑つた。快活に、愉快そうに。

そして単刀直入に、一切の回りくどさを排し、結論のみを告げた。

「——君が変えようとは思わないのかい？」

「僕が——？」

彼は真つ直ぐと僕を見ていた。

嫌になる位に、憎悪を抱きたくなくなる程に透き通つた瞳で。

グリフィンドールだけが持ち得る、その勇気を持った心でもって、僕を捉える。

「君は他人にそれを求めようとしているように思える。僕がかつてそう在り、今もそれを捨て切れていないように。しかし、君が真に世界に対してそう在って欲しいと願うならば、他ならぬ君が自ら先頭に立つて動くべきだ。君の理念を実現する為に。理想をこの世に齎す為に」

「……馬鹿げている。世界を変える事が出来るのは、アルバス・ダンブルドアのような、或いはハリー・ポッターのような人間だ。人の眼を気にし、小狡く立ち回り、決定的な勇気を踏み出せないスリザリナなどでは無い」

僕は、*“英雄”* などでは無い。

ハーマイオニー・グレンジャーとて、そうでは無い。

「そうかね。私はそう思わないが。私は君が入学した頃の事を知らないが、今の君は、本当に他のスリザリンの眼を気にして行動しているのかな？」

「……………」

「まね妖怪が校長に——アルバス・ダンブルドアという大魔法使いに変化した時、誰もが動けなかった。私自身ですら例外では無いさ。あの瞬間、生徒を守らなければならないという意識など掻き消えていた。けれども、君だけは違った。じっくりとそれを見つめた後、馬鹿馬鹿しいと切つて捨てた」

当たり前だった。

アルバス・ダンブルドアというのは、あの程度の存在では無かった。

何より、僕にとってはあの老人が恐怖の象徴では有っても、恐怖そのものでは無いのだろう。恐らく、僕が心の奥底で恐れているのはそれを超えた所に有るのだ。……残念ながら、それはハーマイオニー・グレンジャーとは関係無い所に存在するに違いない。

理性がそうであつて欲しいと願つていても、本能までがそうなれる訳では無いのだから。

けれども、そんな僕の内心など、外部の者にとっては何ら関係無いのだろう。

「解るかい？ あの瞬間、他のスリザリン生が真に得体が知れないと思つたのは君なんだ。嫌悪を抱き、不気味さを感じ、それでも己が同様に在れないという点において一種の畏敬を払わざるを得ないと思つたのは」

「……だから何だと言うんです？ それはリーダーの資質では無いでしょう。人を惹き付け、従わせ、そして自在に動かす事が出来るような類の力では無い」

「そうだね。しかし、君と同じ力は、ハリー・ポッターも、アルバス・ダンブルドアさえも持っていない。それは価値を見出すべきでは無いかな？」

同意出来ない。

個の力は必要だった。けれども、最終的に物事を決めるのは、やは

り数の力の筈だった。それを正しく運用出来る存在こそが、『英雄』の筈だった。良く話に聞いたゲラート・グリンデルバルド、そして闇の帝王でさえも、そのような資格を持ち得ていたに違いなかった。しかし、僕には無い。

それが有れば、僕はその時、母を――

「ステファン。ハリーは、ジェームズやリリーを救えなかった。ダンブルドアでさえも。彼等は魔法界を救ったが、それでも救えない者は確かに有った」

リーマス・ルーピン教授は、明確に釘を刺した。

「君は、自分がその器で無いという。ならば、逆に考えてみたまえ。彼等とは反対に、一を救う事で、魔法界を救うのだと。それは酷く愉快な事では無いかな？」

「……貴方は」

優しく気に微笑む彼の前で、言葉を無理矢理に絞り出す。

「夢想家に過ぎる。妄想家と言って良い。英雄的に在ろうとして、実際に英雄に成れる者など居ない。ただ彼等の輝きを添える灯として消費されるのが精々だ。出来て自らの命と引き換えに、一の命を救えるぐらいでしかない。そしてそれですら、世界に漣すら齎さない」
「しかし、その微細な変化が世界を動かすかも知れない。そう考えるのは野暮だろうか」

そう言って、教授は困ったように茶色の髪をかき上げた。

「参ったな。私もこのような事を言う人間では無かった筈なのだが。若者に期待し過ぎてしまうのは、教師になってしまった故の性なのかな」

苦笑を浮かべる彼の口元には、時を刻むように皺が寄っていた。

「友人達と出会う以前、自分の状況が堪らなく嫌だった。誰かが変えてくれと、そう願っていた。そして、友人達と出会ってからは、自分で変えたいと思った。色々と夢想したものだ。魔法省に輝かしく入って出世したり、或いは呪文の分野で大きな発見や功績を為したりとね。そして、狼人間の苦境を改善させるような、立派な指導者となる事を夢見はした」

若い時分であるならば誰でもやるものの筈だ、と。懐かしむように教授は言った。

「……………」

「しかしまあ、あの頃は戦争の時代だった。そして、僕にとっては見知らぬ狼人間を救うよりも、やはり友人達の方が大切だった。だから夢を捨てて戦争の為に己を捧げた。その点で言えば、僕は君の言うような『英雄』などでは無かったのだろう」

「……………今からでも変えようと思わないんですか？」

「もう若くないからね。そして、あの時守りたかった物は、全て喪ってしまった」

その言葉に僕は反発を覚えた。反射的に言葉が出ていた。

「貴方にはハリー・ポッターが居るでしょう。未だに貴方はジェームズ・ポッターに対して恩義を返し切れて居ない筈だ。幸運な事に、貴方は今、教授として此処に居る。ならば、貴方は彼を父親の代わりに導く事が出来るし、それ以上の事もまた出来る。何も終わっていない。死んでしまった彼等と違って」

「……………」

どういう意図でそれを口にしたのか、自分ですら説明しがたかった。

けれども、リーマス・ルーピン教授は僕を馬鹿にしなかった。驚きの表情を浮かべはしたが、それでも彼は嬉しそうに笑った。

「……………そうだな。確かに、私はその点で恵まれているのだろう。そして、誰よりも彼にとつて、良い教師で無ければならない」

教授は座ったままに、流れるような動作で杖を取り出した。

向けられる先は中空。そしてまるで円を描くように振り、共に言葉を紡がれる。エクスペクト・パトロナムと。

それによって顕現するは、青白い輝を宿した狼。リーマス・ルーピン教授の本質を表す守護霊の姿。狼は踊るように研究室の中を駆け巡った。

「君の守護霊の解釈は興味深かった。主流の解釈から外れていて、広く受け容れられる物かどうかは解らないがね。しかし確かに、私の最

も幸福な記憶とは、学生時代のどれか一瞬を切り取った物では無い。それを超えた所に、私の幸福は存在する」

狼。それは高度な社会性を有する動物だ。

家族集団を核として群れを作り、互いに密接な協力をもって狩りや子育てを行う。

今の狼人間の現状を思えば、そして教授が自身の変身する姿を何よりも忌み嫌っている事から考えれば、余りに皮肉な特性であると言える。

けれども、教授はそれと訣別する事は出来ないだろう。それは、間違いなく自分を構成する一要素であり——そして恐らく、彼等の友情を真に確信させたものの筈なのだから。

「私がこうして君と穏やかに会話している理由は既に解っているだろう？ 私は、狼人間だとバレた瞬間に掌を返したような扱いを受けるのを幾度も見て来た。実際に見て来たという事は、同じく見捨ててきたという事でも有る。しかし、君はそうしなかった。それが打算や計画的な物かは、結局私には見破れなかったが」

リーマス・ルーピン教授は、それでも構わないと言った。

「私の弱みを握った者として、君が望むのであれば何時でもこの研究室に来て構わない。守護霊の呪文を教えろというのであればそうしよう。……だが、君はそれを余り良しとしないのだろうか。君は、弱者である事を受け容れられる人間だ」

「……貴方は、グリフィンドールだ」

「しかし、君はスリザリンのでも無いのだろうか。だからと言って、君がグリフィンドールに合うとも思えないのが酷く残念であるがね。君は異常に聡すぎ、そして不気味過ぎる。その根源は恐らく、私が探りきれなかった所に在るのだろうか」

その短評に、侮蔑や軽蔑は無い。淡々と事実のみを告げる響きだけが有った。

「ただ、一つだけ言わせてくれ。私が、君にとっても良い教授である為に」

リーマス・ルーピン教授は守護霊を消して、僕に向き直って言った。

その瞳には、今回の中で最も強い輝きが有った。下手すれば、僕がハリー・ポッターへと近づくよからぬ存在だと考えていたその時以上に。真つ直ぐと、言葉に力を籠めて、その警鐘を鳴らす言葉を告げる。「君がハーマイオニー・グレンジャーに対して、どのような執着を抱いているのかは解らない。だがそれでも、君は彼女と訣別するような言葉を吐いてはいけない。何が有っても、どんな意図が有ろうと絶対に。それは間違いなく、良い結果を齎さない」

「……………」

その言葉には、僕には理解しがたい、しかし何処か確信めいた響きが有った。

教授はそれを経験則でもって述べているのだろう。彼にはそれを断言するだけの根拠が有り、そして僕にそうして欲しくないのだと、何故だか強く思っているようだった。

……けれども。

僕の心に決定的に残ったのはその言葉では無かった。

若い時分ならば誰でもやるものの筈だ。そう教授は言った。

しかし、僕は一度もそのような真似をした事が無かった。

不満は有る。怒りは有る。それ以上に、この世界に対して様々に思う事も、形容しがたい汚泥のような感情を抱いてすら居る。されど、そのような世界を変える自分の姿を思い描いた経験は無く——思い描く事も出来なかった。

そして、その時が来る事は無いのだと、それが自分の事であるが故に確信してしまっていた。

ウインガー・ダイヤモンド・レヴィオーサ

もう二月になった。

ハーマイオニー・グレンジャーと、ハリー・ポッター及びロナルド・ウィーズリーの間の確執は、未だに溶ける気配がない。

彼等の間の問題——すなわち、ファイアボルトに纏わる件は、彼女が一月以上も友人無しで過ごす内に、ポツリポツリと語ってくれた。

そして、それに対する僕の考えも、彼女の、或いはミネルバ・マクゴナガル教授の考えと概ね一致する物だったというのは驚くに値しない。

心当たりの無いような高価なプレゼントを、何の意図も無しに送るような人間は居ない。差出人の名前無しで送りそうな悪戯人間としてはあの老人が居るが、しかし教授が取り上げた所を見るに違うらしい。そうであれば、やはり思い当たる送り主としては、ハリー・ポッターの命を狙っているであろうシリウス・ブラックこそが第一容疑者であった。

但し、出所不明の箒に乗って飛ぶような阿呆が居るとは早々思えず、それを本気で暗殺の手段として意図するような人間が居るのかという疑問は当然のように生まれてきたが。

さりとて、疑念を晴らすには弱い疑問であるのは否定出来まい。調べる為に没収する事も、その過程で解体する事も、何ら不当な判断や措置とも言えないだろう。そして同時に、彼等が怒りを示すという事にも、一応の理解を示す事が出来るものでも有った。

ただ、それは時間が解決してくれる問題だった。

箒に対して何等かの工作が見付かるにしろ、全くの潔白であるにしろ、結果が出れば彼等は仲直りをし得る。前者の場合ならば当然に彼女に対して感謝するだろうし、後者の場合であれば微妙な雰囲気にはなるだろうが、ハリー・ポッター等の方も、その身を案じた優しい少女の行いの結果だという事を理解出来ない程に愚かでも無いだろう。

だから僕は心配していなかったし、専ら自分の事について時間を費

やす事が出来た。

——つまり、自分自身の力量を向上させ、確かな暴力を獲得する事について。

僕は一昨年と去年抱いた無力感を自覚したままに、それを放置出来るような強い人間では無かったのかもしれない。

今世紀で最も偉大な魔法使いによる教えを一部拒否はしたものの、それはあくまであの老人に余計な労力を割かせない事を理由とするものであり、別に力自体に惹かれない訳では無かった。

守護霊の呪文について何となく興味を持ちきれないのは相変わらずだったが、他の実戦的な呪文に関しても同様で有ったという訳ではない。寧ろ貪欲に、それらを求めすらした。

閉心術と開心術は、一つの力を実現する為の手段に過ぎない。

そして、他の有用な手段を追い求めるに際し、スリザリンという純血と伝統の寮は非常に好都合であった。偉大なる先輩達が残した物は宿題のみに関する物に限られるものでは無く、特に実戦的な闇の魔術についてより学ぶにはこれ以上無い環境だったと言つて良い。

更に言えばリーマス・ルーピン教授——魔法戦争経験者からの少しばかりの肩入れを得られたという事も、非常に幸運だったと言える。

この三年間で初めて教えを受ける真つ当な闇の魔術に対する防衛術教授は伊達では無く、彼の知識は僕よりも豊富で、やはり当然のようにそれらは自らの経験に強く裏付けられていた。

僕が授業でやるような内容、つまり魔法生物に関する諸々の対応に関心を左程示さず、明らかに対人戦を想定している事についていたからなのか教授も複雑そうな顔をしていたが、それでも彼は、そのような力が必要とされる場合も有り得る事を良く理解していた。

何せ彼が狼人間に堕ちたのは決して事故では無く、五歳の時、自分の父親に対する復讐の代わりとして、フェンリール・グレイバックに噛まれた事を起因としている。人の悪意が齎す悲劇的な結末に対して、彼は己の身をもって教訓を知っていた。そうであるからこそ、彼はまね妖怪の授業をわざわざ最初に持ってきたのだから。

故に、彼は僕にとっても良い教授で有ったというのは疑いが無い。

彼の個人的な病気の問題や最も優先すべきハリー・ポッターへ個人講義の為に、教授が手自ら僕へと呪文を教えるという事は殆ど無かったが、質問に対する回答や助言については、彼は惜しみなく与えてくれた。その点は間違いなく感謝すべきだった。

それ以外に、善良な一学生として為すべき事が無かった訳では無い。

たとえば、四か月後に迫った期末試験はその一つだろう。

去年は忌々しい蛇の唯一の功績としてそれが免除されたものの、今年はそのような奇跡は期待出来まい。別に僕だけならばある程度どうにでもなるのだが、スリザリンのクイディッチ優勝杯獲得を目指して日夜練習に励んでいるドラコ・マルフォイが最後に泣きついてくるのが目に見えているともなれば、恩を売る機会を逃す訳にも行かなかった。

しかしながら、彼がどの道切羽詰まらないと頼って来ないのも、一年時の経験から解り切っていた。つまるところ、本当に忙しくなると予測されるのは六月を目前とする頃であり、今の僕が行うべきは自身の復習を兼ねたある程度の準備だけで、現在の所は多少の余裕というのが存在していた。

また、ヒツポグリフ裁判の『原稿』作成についても、一応為すべき事の範疇に入るだろう。

もともと、そちらも既に大詰めを迎えつつあったと言える。裁判の日が近付いてきた今、早めに準備を始めていた御蔭も有って既に判例の捜索に見切りを付け——結局彼女の二人の友人は役立たずに終わった——今は裁判内で何を話すべきかという台本を書き上げる段階に有った。そして、それもまた殆ど終わりが見えていた。

正直素人がここまでする事では無かったが、それ以上にルビウス・ハグリッドという男が問題だったのだ。判例を調べ上げて一息付いたハーマイオニー・グレンジャーに対し、更に殆ど一から十まで台本を用意してやる必要が有るのではないかという僕の指摘には、彼女も何も反論出来はしなかった。魔法生物以外の小難しい事に関して、彼がフロツピーディスク以下の記憶容量と保持の耐久性しか持ち併せ

ていないのは明白だった。

何より判例というのは、羅列しただけでは意味を為さないのだ。同じ事件というものは世界に一例として無く、似ている事件というのはつまり、違う点が確かに存在するという意味でも有るのだから。要するに、違うが故にやはり違う結論を導くべきである——そんな諸刃の剣となるのが判例なのだ。

ただ如何にハーマイオニー・グレンジャーが優秀であったとは言え、やはりその作業はホグワーツ生が手に負える範囲を超えていた。そして僕もまた、真剣に挑んだという点において偽りは無くとも、最善を尽くしたと胸を張って言えるものでは無かった。彼女には言わないが、最後の最後、細部の仕上げくらいはあの老人に投げれば良いだろうという気持ちも有していたからだ。

そしてある種の諦念が無かった事もまた否定しない。

つまり素人の拙い文章構成だろうが、専門家の整然とした理論構築だろうが、アルバス・ダンブルドアという外部からの反則介入を用いても尚覆す事が出来ないのであれば、処刑の結末は何も変わらないだろうという諦念が。

だからこそ、僕の今学年の大きな関心は、そして時間の使い方は、やはり他ならぬ己の為に大きく費やされていた。そして同時に、僕は今までの三年間の中で最も充実しているだろうという確信すらも抱いていた。

賢者の石や秘密の部屋といった、僕の手に残る巨大過ぎる問題に関わるのでは無く、自分自身の小さな問題の解決の為に己の力を傾ける。それは確かな喜びだった。

要するに僕は学びという行為を本質的に嫌っていないという証でも有り、入学前の「収容」を——ある忌々しく邪悪な本との出会いを何だかんだ言って自分を構成する一要素として認識していると言う証左でも有るのだろう。

そして、その点においてハーマイオニー・グレンジャーと僕は違う面が有るのかもしれないと、僕は段々と思い始めるようになってきていた。

別に彼女が学びを嫌いだと言いたい訳では無い。寧ろ真逆だろう。しかし、彼女が知ったかぶりと時に揶揄されるように、彼女はその知識を外へと発散したがる傾向が有る。対して僕はそれらを溜め込む事だけで満足出来る質だった。

その面においては、やはり僕はレイブクローに近く、そして逆に彼女はそのような面から遥かに遠ざかっており、少なくとも今の彼女は、殆ど間違いなくグリフィンドールの為の知識を求めているように見えた。

入学してからこの二年半で、これ程彼女と共に長く時間を過ごしたのは初めてだったが、近付けば近付く程に違う事を発見するというのは奇妙で、そして少しばかり愉快だった。

……同時に、自分がどう足掻いても解決出来ない類の彼女の問題が、やはり現実として存在するという事も。

ハリー・ポッターから彼女が全ての選択科目を取っている事を聞き、実際にそれが齎す結果をこのように傍で見続け、そして慢性的な意気消沈と疲労困憊の状態に陥っている事を実感しながらも、僕には何も出来なかった。

彼女はグリフィンドールで、故にその治療にはグリフィンドールの特効薬が必要だった。

そしてスリザリンである僕はそれを持ち合わせていない。それを持ち合わせているのがグリフィンドールの二人である事もまた、論を俟たない。

ただ、だからといって別に僕は落胆もしなかったし、焦りもしなかった。

既に述べたように、全ては時間が解決する事だった。加えてミネルバ・マクゴナガル教授の唯一の欠点であるクイディッチへの熱意を思えば、何としても試合前には調査の結論を間に合わせるだろう事は明らかだった。そして、その時期は直ぐ傍まで迫っている。故にそろそろ終戦だろうという予想を立てるのは、僕としては当然の事だった。

だからこそ、その日、僕は酷い衝撃を受ける羽目になったのだ。

……そして、自分が如何に醜い存在であるかを、直視する羽目にも。

最近になって、ハーマイオニー・グレンジャーは図書室にあまり来ないようになった。そして、僕はそれを良い兆しだと考えていた。

明らかに彼女は友人二人と仲直りをする契機を探しており、会話が交わせない関係性を早く止めたいと考えていた。そして僕は多少名残惜しく感じつつも、そうなる事について異存は無く——当然の事ながら、彼等の関係性が致命的に破綻するような事態というのは全く考えだにしていなかった。

けれども、それは起こってしまった。

リーマス・ルーピン教授から得た許可書を用いて僕が禁書を読みふけていた時、図書室にはまず似つかわしくない早足の音が僕の耳を打った。その時点で僕は神経質なマダム・ピンスの激昂を予測していたが、それ以上に思う事は無かった。だからこそ、それが僕の方へと近付いて来て、その挙句僕の横で立ち止まるまでは、僕は顔を上げなかった。そして、それが誰の物かに思い当たってからも、半ば気軽な調子で顔を上げた。

そして僕は、顔を上げてしまった事を、一瞬だけであれ後悔した。ハーマイオニー・グレンジャーが泣いていた。

辛うじて涙を零しては居なかったものの、その栗色の瞳が濡れている事は明らかだった。それは僕の初めて見る表情で、しかしそれはただ単に僕が知らないだけで——恐らくホグワーツでは二度目の筈だった。

彼女は何も言わなかった。ほんの数秒だけ僕の方を見つめ、そしてくるりと踵を返した。

その瞬間に僕の机の上に羊皮紙の切れ端がひらりと舞い、同時に僕が握っていた禁書のページもまた一枚捲れた。そして、少しの距離の間我慢して歩いたものの、とうとう耐え切れなくなった彼女は、図書室の入口へ駆け出して行ってしまった。

「図書室では走らな——」

マダム・ピンスの怒声が途中で途切れたのは、彼女の表情を見たからだろう。

彼女が何処の机の元から走り去ったか、という点まで見られなかつ

たのは幸運だった。そして、図書室内に居た人間も殆どがそうだったらしい。彼女の凶行と、そして司書の異常に多少ざわめきはしたものの、それで八つ当たりをされてしまつては堪らないと元の静寂へと戻って行く。

けれども、僕の内心まではそうは行かなかつた。

机の上に軟着陸した羊皮紙の切れ端。彼女が立ち去る際に残したメッセージを、僕は拾い上げる。

感情のままに切り取つたのだろう。不格好な三角形をした紙片には、良く見知つた筆跡によつて、ただ一語だけが記載されていた。

「……禁じられた森」

永遠にも感じられる二、三分をじりじりと浪費した後、僕は足早に図書室を出た。

彼女が追い掛けて来て欲しいと僕に伝えた事は明白だった。場所の指定が曖昧で何処に行けば良いのか、或いはあのように傷付いた彼女に対して一体何を言えば良いのか解らずとも、求められたのであれば行かないという選択肢は無かつた。

禁じられた森。その中に僕が立ち入つた事は、一度として無い。

アルバス・ダンブルドアは必ず新生に警告し、上級生もまた同様にケンタウロスや狼人間、人食い蜘蛛などが巢食うのだという噂で怖がらせるのが半ば慣習となつている、生徒にとっての禁則地として指定された広大な領域。

魔法魔術学校（学舎）の敷地内にそれが存在するのが可笑しいという事は言うまい。

森とは古来より、人に対する脅威で有ると共に、人の生存を許す揺籃でも有つた。

傷を癒し健康を保つ為の種々の薬草、温かい毛皮や新鮮な肉を提供してくれる獣達、喉を潤す為の清純な湧き水、そして、人を風雨から守る隠れ家の提供地として。

イズルト・セイア、ないしはイルヴァーモーニーの起源も森に在つ

た。その事を思えば、ホグワーツ内に森が存在する事など何ら驚くに値しない。特に、非魔法族が山と森を切り開く前においては、そのような空間は——自身がホグワーツで学び、そして生かされた経験を実践する為の機会は、日常的に有り触れたもので有った事は容易に推察されるからだ。

しかしながら、その森が禁じられたという事から解るように、その場所はホグワーツ内では既に半ば役割を喪っていたと言っている。

今の世の中、食物や薬品を求めるのであれば、ダイアゴン横丁に向かえば殆ど全てが手に入る。ホグワーツの四創始者達が、或いはイゾルト・セイアがそうしたように、森の中へ自ら分け入って目的の物を探し出すような必要性は皆無である。無味乾燥な文明化の波は、非魔法界のみならず魔法界にすら訪れているという事らしい。

さりとて、役割を喪失したとしても、機能まで喪失した訳では無いだろう。

そして勿論、その脅威さえも。

寧ろ、森番や一部の教授を除いて殆ど立ち入らなくなつたからこそ、人に対して峻厳で苛烈だった原初に近付いている筈である。そしてまた、時折漏れ出る教授の言葉の端々からも、その森が好奇心の代償として容易く死を求めかねない場所である事をひしひしと感じていた。

多くの生徒は学年が上がるにつれて不思議空間ホグワーツに対する冒険心を育んで行くものだが、逆にそれを喪わせる数少ない場所がそこだと言えた。理由無くそこに居るのが見つければ寮への大減点を貰うという以上に、人間であれば抱く本能的な恐怖が、その場所に近付く事を躊躇させる。だからこそ、こんな機会が無ければ、僕はその中に入るどころか近付く事すら無かつただろう。

まして、今の情勢も宜しく無い。

シリウス・ブラックは未だに逃亡を続けており、吸魂鬼が命令に唯々諾々と従う存在ではないというのは、ハリー・ポッターの一件からでも明らかである。如何に誰からも見られたくはないと彼女が考えていても、待ち合わせ場所としては相応しくない。擦れ違う者達に

多少怪訝な顔や、引き攣った顔をされたとして、急がないという選択肢は無かった。

だが、校庭に出てしまえば、彼女の危険を過度に心配する必要は無いというのも直ぐに解った。

授業中以外にはまず近付く事が無い、森に近い校庭の隅にポツンと佇んでいる木で出来た小屋。その前に、眼を凝らさなくても誰か解る程に特徴的な、巨大な人影が有る。

禁じられた森はホグワーツの敷地内に在るが、さりとしてそこまで行くには校庭を突っ切っていかねばならず、森に入ろうとする人間が居ればすぐに解り、当然ながらそれを見咎める守護者が居た。というより、それが森番として最も重要な仕事と言えた。そして、その任を務めるのは、言わずもがな半巨人の巨大で強大な存在、ルビウス・ハグリッドその人である。

彼は禁じられた森の方角を厳しい眼で見つめていたが、ふとこちらの方角へ顔を向けた。

そして、少しばかり逡巡する様子を見せた後、顎をしゃくり上げて森の一方角を示した。その先に誰が居るのかは、彼の方へわざわざ近寄ってまで聞く必要は無かった。

初めて立ち入るその森は、まさしく禁じられたと言うに相応しい場所だった。

鬱蒼と空を覆い隠す木々も、複雑に植生が絡み合っている地面も、遠くから心を逆撫するような獣の鳴き声も、この森は人間を拒絶しているのだという本能的な確信さえも、僕にとって初めて経験する衝撃的な物だった。今まで僕が知っていた森は写真の中の存在でしか無かったというのを差し引いたとしても、禁じられた森というのは異界であり、魔界であった。

さりとしてこの森の中で最も衝撃的で刺激的である存在が、ふわふわとした栗毛の彼女であるという事も、やはり最初から解り切っている。

た。

端も端、入口も入口で有りながら尚、僕を圧倒した森の中で、彼女をどう探せば良いのか多少不安では有った。

しかし、探すまでも無かった。元より彼女は森自体に用事は無かったのだから、奥まで立ち入る筈も無いのは冷静に考えれば当たり前前の事だった。強いて言えば、ほんの数メートル立ち入っただけで、それが僕に飛び込んで来るとするのは、考えだにしなかつたと言つて良い。

ただ、その勢いが少しばかり強過ぎたせいで、半ば押し倒されるように木の根元を背にして座り込む羽目になったのは、少々恰好が付かなかつた。というか、強かに腰をぶつけてそれなりに痛かつた。

けれども、その温かい重みを前にして——酷く傷付いている者に対して、そのような泣き言を漏らせはしなかつた。

「……ごめんなさい、ステファン。ごめんなさい」

「……いや、良いさ」

果たしてそれ以外の何と言葉を返せようか。

涙をボロボロと零し、酷くしゃくり上げながら、枯れた声で謝罪を繰り返す彼女に対して。

何に向けられた謝罪なのかは定かでは無い。ここに僕を呼んだ事か、或いは泣くしか出来ない自分についての事なのか、もしくは僕の知り得ない理由に基づくものなのか。ただ今の僕に出来るのは、自分のローブで彼女を包み込むように抱きしめてやり、また宥めるようにその背中を撫でてやる事だけだった。

予想に反して不思議と僕の鼓動は落ち着いていた。

それは彼女が悲しみにくれ、打ちのめされ、誰かに縋りつかないとやってられない事が明らかだったからかもしれない。凶書室で見た時から解つていたとは言え、こうして彼女の小さな身体が僕の腕にすっぽりと収まっていると、その事を余計に実感させられるものだった。

彼女がある程度泣き止み、一応の落ち着きを見せるまで、結構な時間を経やした。

未だに春の兆しを見せない大気は冷え冷えとしており、しかしそれを打ち消すかのように彼女の身体は熱かった。そして、彼女は僕の胸元から顔を上げはすれど、離れる事はしなかった。抱き着いた体勢のままに、彼女は今日起こった事を——憐れな鼠の事件について語った。

「——ステファン。貴方はどう思う？」

「……………」

祈るように紡がれた彼女の問いに、僕はすぐさま答えられなかった。

話を聞いて抱いた感想など決まりきった話だった。

クルックシャンクス スキヤバース
彼女の猫が自分の鼠を狙っている。

そのような見当違いの考えの下にロナルド・ウィーズリーが猫を、ひいてはハーマイオニー・グレンジャーを目の敵にしているのだという愚痴は、既にそれまでの間に彼女から聞いていた。そして実際に現場を見て居なかりと、残された状況証拠を併せて考えれば、果たしてどちらの言い分の方が真実味が有るなどという事は、理性的に結論付けてしまっていた。

故に僕が敢えて口に出さずとも、ハーマイオニー・グレンジャーにはその思考が伝わったのだろう。

彼女は絶望的な表情をして、その瞳から更に大粒の涙を浮かべ——

「……………入学時に来た許可証の内容を、覚えているか？」

「……………え？」

——それが零れ落ちる前に何とか、そのような言葉を僕は紡ぐ事が出来た。

「二年前の事だ。君が覚えているかどうか解らないが、その時に指定教科書の一覧と一緒に書いて有った記述を、僕は未だに記憶している」

僕の方を見上げる濡れた視線は、困惑に揺れている。

聡明な彼女をして尚、僕がそのような事を言い出した理由が全くもって理解出来ないのだという反応が、彼女の表情にはありありと現れていた。

……まあ、僕とて正気ではこのような事を言い出したりもしない。正直言つて、何を言つて良いか解らないからこそ出て来た発言でも有った。

けれども、僕は彼女を慰める事が出来るような気の利いた言葉は依然として浮かばなかったし、その手段について学んだ事も無かった。だからこそ、一度口にしてしまった以上、僕はそれが正しいかどうかを検証する事も出来ず、最後まで紡ぐしかなかった。

「そこにはこう書かれて有った。『ふくろう、または猫、またはヒキガエルを持つてきてもよい。』と。つまり、許可証には鼠が羅列されておらず、その記載自体を素直に解釈する限り、ロナルド・ウィーズリーが鼠を持ち込む行為は校則違反だ」

彼女は何を言われたのか解らないように、一瞬ポカンと口を開けた。

しかし、時間と共にその内容を正確に理解するにつれ、彼女の表情は段々と崩れて行き——そして最後にはクスクスと笑い出した。

「ふふふ、真剣な顔をして貴方が一体何を言い出すのかと思つたら、まさかそんな事だなんて。……でもね、ステファン」

幼い子供に言い聞かせるような口調で、彼女は優しく僕に告げた。

「持つて来て良いとは書いてあるけど、その他を決して持つて来てはいけないと書いては無いでしょう？　つまりアレは、新入生が危険なペットを好き勝手に持ち込まない為の措置に過ぎないのよ。何より元はお兄さんのペットなんだから、校則を守る事はちゃんとしているわ」

……まあ、そんな予感はしていた。

スリザリン寮でも、それ以外の生き物を見なかった訳では無いのだから。

ただ、例示に過ぎないならば解るように書くべきだろう。あの表現では、やはり僕が考えたように、それ以外が禁止されているようにも読めてしまう。

「——ああ、おつかしい。貴方がまさかそんな間の抜けた事を言つてのけるなんて。今まで知らなかったけど、貴方には意外と冗談の才能

が有るのかも知れないわね」

ハーマイオニー・グレンジャーはクスクス笑いを止める素振りは無かった。愉し気に、その瞳から涙を溢しながら。

そして一頻り笑い終えた後、彼女は再度僕をぎゅっと抱きしめた。

「……本当に、そうだったら良かったのにね」

僕の胸に顔を押し付けながら、彼女は言った。

「いえ、それも八つ当たりだわ。私をもっと注意しておくべきだったのよ。クルックシャンクスが猫で、スキヤバースが鼠だというのは解ってたのに」

「……魔法界は規則自体も運用すらも曖昧過ぎる。ペットが共食いしないように注意しろ、という考えは全くもってないらしい」

「貴方らしい言い方ね。でも、世の中ってそういう物じゃないかしら？」

「物事には限度が有るだろう。今までの二年半を見るに、魔法界のそれは度を越し過ぎている」

鼠についてロナルド・ウィーズリーが許可を取ってよういまいが、入学許可書には間違いなく猫は連れて来て良いという保証が——鼠と違って——存在するのだ。

今回はたまたまハーマイオニー・グレンジャーだったが、さりとて彼女以外が猫を連れて来る可能性は存在するのであるし、実際にグリフィンドール寮内には彼女以外を飼い主とする猫が居るのも知れない。つまり、この二年半の間、潜在的危険は存在し続けていた。

食物連鎖内に先輩後輩という関係性は無く、ただ捕食者被捕食者という関係性のみが有る。

そうであれば、規則を敷く側である大人は生徒達が余計な問題を起こさないように相応の配慮を示すべきであるし、そして飼い主の方でも、自身のペットが被捕食者という地位に在る事を認識していたのであれば、やはり細心の注意を払うべきであった。

要するに、僕は彼女の方を一方的に断罪するというつもりは更々無かった。

だがそれでも——無過失だろうが何だろうが、それを殺してしまっ

たのであれば、どちらがより悪いのかというのも明白なのだ。

自然の摂理として、原則的に命は戻らない。

「……もう、駄目なのかしら」

ハーマイオニー・グレンジャーは、震える声でポツリと呟く。

「解ってるわよ。ロンやハリーの言い分の方が正しいだなんて事は。でも、認めちゃったら、二度と取返しが付かないじゃないの。私達の関係が終わっちゃうじゃないの」

悲嘆と後悔に濡れた独白は、誰よりも彼女自身を切り刻んでいる。

「夢見ちゃ駄目なの？ スキャバーズが食べられたというのは勘違いで、クルックシャンクスが何も悪い事はしてなくて。そして……そして、また一晩明けて明日になったら、私達が何事も無かったかのように笑い合ってるなんて可能性は」

「……現実逃避をしたとしても、君の問題は何も改善しない」

「……ええ。本当に解っているつもりなのよ、私は」

その語尾が弱々しくなっていく事こそが、彼女の精神状態を表していた。

彼女は酷く打ちのめされていた。荒れ狂う感情の奔流に呑み込まれていた。そして、何よりも疲れ果ててしまっていた。今の彼女にとって学年一の才女としての肩書は何ら役に立たず、彼女は泣き震えるちっぽけな女の子以上の存在では無かった。

そして、僕にとって依然として正答というのは解らない。

僕が知るのは愛すべき母であり、忌々しき父であった。しかも、それらへの対応が決して今ここで求められている訳では無いというのは明らかだった。しかし皮肉な事に、だからこそ僕がやるべきは最初から一つしか無かったのだろう。

「——ハーマイオニー」

「……何？」

「君にとって、ハリー・ポッターとはどういう存在だ？」

赤くなった瞳のまま、彼女は僕の方を見上げていた。

意図を図りかねている。その事は容易に伝わってきた。そして、何処かこちらを責めるような色すらも。彼女は僕がその言葉を発した

事に対して、彼女は明らかに気分を害していた。

それも無理はない。僕がそのような、彼等に関する突っ込んだ質問をした事は一度も無い。

ハーマイオニー・グレンジャーがハリー・ポッターの事を、或いはロナルド・ウィーズリーの事を楽し気に語る事を聞き続けてきた。しかし、僕は一度も聞き手で有るのを放棄した事は無かったし、彼女もまたそれを良しとして来た。

「……何で、今、そのような事を聞くの？」

「他ならぬ今こそ、君から聞く必要が有ると感じたからだ」

強いて言えば、理屈では無かった。

僕が確たる解答を持ち合わせていない以上、その答えを探すとしたら、彼女自身の中以外に有り得ない。そのような直感と経験則からの言葉に過ぎず、しかし今まで大半の場合が正しかった。僕にとつての解答の多くは、他ならぬ彼女から発見して来たものだった。

だからこそ、この行為もまた、今までと何ら変わってなど居ない。

「もう一度、君に聞く。ハーマイオニー・グレンジャー。君にとつての友人、ハリー・ポッターはどういう人間だ？」

「……それは」

彼女は暫し視線を迷わせ、そして告げた。

「ハリーは、勇気の有る人よ」

それは、僕からでは無く、彼女から見た「英雄」像。

「彼はまあ、ちよつと短気で癪癪持ちな所は有るわ。けれども、何だかんだ言つて私を気に掛けてくれる時も有るし、やっぱり勇気が有る人というのが第一に挙がると思う。ハリーは、色々と厄介事に巻き込まれる困った人で、それでも折れたりしない人だから」

彼女は静かに、悲しげなまま、けれども自慢の気持ちを隠し切れずに言う。

「最初に私が彼と会った時、単に「生き残った男の子」という称号を運良く得た物と考えていたわ。赤ん坊が邪悪な魔法使いを倒せる訳ないものね。……けれど、やっぱりハリーは違うのよ」

僕にとつても、その思考が有った事は事実である。

そして魔法界の大多数にとっても——ホグワーツの生徒の大部分ですら、その考えは未だに覆されていないだろう。彼を知らなければ、そう考えるのが真つ当だ。心の何処かで彼が“聖なる力”を有している事を希望していても、最後の最後には冷静な理性の働きを止める事は出来ない。彼が幸運を掴んだだけの凡人である事を信じたくなってしまう。

しかし、時に現実には想像を凌駕する。

「賢者の石もそう。秘密の部屋だってそう。そのいずれも最後に“例のあの人”と対面し、ハリーはそして打ち勝つて来た。彼は間違いない、選ばれた人間よ。でも、彼はそれで驕ったりなんてしなかったわ。寧ろ、私に助けを求めてくれたり、尊重してくれたりした。そして、勇気の振るい方を間違えたりもしなかった」

その言葉に多少の美化が掛かっている事は事実だったが、さりとは完全に否定出来る物でも無かった。

ハリー・ポッターには、間違いなく“英雄”の才能が有る。

「だから、私は彼の友人で有る事を……誇りに思うとは少し違うかもしれないけど。それでも彼が胸を張れるような友人で在りたいと思ってる」

アルバス・ダンブルドアが、何処まで見通していたのか解らない。それを意図してダーズリー家に預けたのか。それとも全く偶然に形成されたのか。

いずれにせよ、ハリー・ポッターのその在り方に、ハーマイオニー・グレンジャーは強い刺激を受けて来た。幼少時から傑出性を示し続けてきた彼女は、自分が絶対に敵わないと思えるような存在に初めて遭遇し、だからこそ彼に対して彼女は一種の敬意を払い、親愛の情を示そうとしてきたのだった。

……けれども、僕が真に聞きたいのは、彼の事では無かった。

物語の主役として運命付けられたような存在は——しかし、少なくとも今この瞬間は、次の話題に移る為の単なる前座に過ぎなかった。

「では、君のもう一人の友人、ロナルド・ウィーズリーはどうだ？」

「……………」

話の流れからしても、それを問われる事は解っていたのだろう。

だが、それでも彼女は言葉を直ぐに返す事は出来なかった。俯き、唇を噛み、答えたくないというように首を嫌々と横に振った。ふわふわとした茶色の髪が、宙に舞い、そして力無く重力へ引かれた。

けれども、僕は辛抱強く待った。彼女がこちらを睨んできても、静かにその眼を見返した。

それが暫く続いた後、僕がどうやっても引き下がる事が無いのは理解出来たのだろう。彼女は観念したように口を開いた。

「……ロンは、嫌な人だわ」

その強い言葉は、寒々とした森の中で、静かに染み渡った。

「出会った時からそうだったわ。ハロウインの時もそう。私の事を人前で中傷して、何ら悪びれなかった。あの時程、私が惨めさを感じた事は無かった」

「……………」

「彼は自分の能力に対して卑屈で、口では威勢の良い事を言うのにそれが現実化してくると臆病になって、ハリーや自分の兄弟に対する劣等感と嫉妬心に満ちていて、けれども自らそれを改善しようとしなくて、空気を読まない冗談をこれ見よがしに言う人で、そして、凄い皮肉屋なの。彼は、私が一番嫌に思っ居る部分を、本当に的確に突いてくる」

その言葉は罵詈雑言に満ちていて——されど、その表情は、内容からは程遠く。

「気が合わないって思った事なんて何度も有る。今回みたいな大喧嘩までは行かなくとも、呪文を掛けてやりたいと思っ事すら有るわ。そして、そして……………」

「——でも、君にとつて最も大切な友人なんだろう？」

ハーマイオニー・グレンジャーは答えず、僕の胸へ顔を埋めた。

けれども、触れあっている所から、答えが伝わってくる気がした。

「……君が選択科目を全て取っている事は、ハリー・ポッターから聞いて知った」

彼女がこうなっている一つの要因、そして時間が解決するのだとし

て僕が触れなかった彼女の秘密を、僕は口にする。

「……貴方にしては、随分と気付いてくれるのが遅かったみたいね」
「そうだな。それは否定しない」

彼女の口振りからすれば、僕に対して少しばかりのヒントを出していたようだった。

或いは、シグナルと表現すべきだろうか。何れの意図が有ったにせよ、彼女は共に居るが故に気付くであろう友人二人と違い、異常に気付かない事が至極当然と言える僕に対して自身の状況を伝える気持ちがあり——しかし、僕は見逃してしまった。

今、彼女との会話を思い返してみれば、それらしい言葉は確かに存在していた事に気付く。けれども、今掘り返した所で、何の意味をも持ちはしない。

それを見透かしたような少しばかりの落胆の声色と共に、彼女は僕に対して問うた。

彼女がその眼を泣き腫らしていても尚、その眼の下に浮かんだ限の印象は薄れるどころか、寧ろ逆に強く意識させていた。

「私がどんな手段を使っているか、貴方には解る？」

「……いや」

ハリー・ポッターとの会話以降も、幾度か考えてはした。調べもした。けれども、確たる答え、適切な答えというの——推量する材料が酷く乏しい事を差し引いたとしても——やはり浮かび上がって来なかった。

そして、そんな僕が余程面白かったのか、彼女は赤い眼のままに口元を綻ばせた。

「ふふ。貴方にもそのように解らないと言える事が有るのね。てつきり貴方の事だから、全て御見通しなのだと思ってたわ」

「……僕はアルバス・ダンブルドアでは無い」

「そこで校長先生を引き合いに出す事が貴方らしいわ。あの方よりも賢い人間なんて、この世界の中で探す方が難しいでしょうに」

それは否定出来ないが、さりとて賢い事が常に正しく在る事を意味しない。

そして、僕は今正しく在れるのであれば、己の賢さなど放棄して良い位だった。

「でも、少し残念だわ。私は誰にも言っただけはいけないと口止めされたけど、相手が知っていれば全く別の話だった筈だから。まあちよつとルール違反な気がしない訳では無いけど」

「……」
ハーマイオニー・グレンジャーは自嘲するように口を歪めた。

「ハリー達が、そして貴方が勘付いている通り、私は同時に授業へ出席する為の特別措置を受けさせて貰ってる。それも、物凄い魔法よ。今後一生で、そのような機会が無いと思う位に、貴重な物。それで私は、選択科目の全科目を受ける事が出来ている」

「……それは、君にとって必要な事なのか？」

「ええ。間違いなく、私にとって必要なの」

何の逡巡も無く、迷いすら見せずに、彼女は僕へと答えた。

「私は学ぶ事が好き。知る事が好き。そしてまあ……やっぱり知識をひけらかす事も好きだわ。ただ、私はそうしたいと思っっている以上に、多分それが必要だと強く考えている。賢く取捨選択出来る貴方には理解出来ないかもしれないけど——それが私なのよ」

「……」

彼女は図抜けた勉学の才能を有しており、しかしそれは完璧主義を助長する。

普通の人間であれば何処かで挫折し、妥協してしまう筈が、少なくとも学業の範囲において彼女はそれが出来てしまうが故に、止まらないうで居られる。自分で解っけていても、それが止められず、その正しさを信仰してしまっている。

「貴方は、私とロン、そしてハリーが一番最初に仲良くなった時の事を知っているでしょ？」

「……ああ」

彼女自身から幾度も聞いた。その瞬間の事を、輝かしい笑顔と共に。

ウインガーディアム・レヴィオーサ。一年で習得するような、簡単

な呪文。

それをもつて、ハリー・ポッター達は、否、ハリー・ポッターとロナルド・ウィーズリーは、ホグワーツに迷い込んだトロールを協力して撃退してみせた。

トロールと一口に言っても——つまり、M・O・M・分類でXXX Xという同じ枠組みの内でも、程度の差というのは存在する。特定の場所の警護を行う事が出来る程のまだ言葉の通じる相手も居れば、彼が撃退したように多少の機転を利かせるだけで圧倒しうるような愚劣な者も居る。

しかしそれでも、種族として平均三メートル六十センチを超え、体重は一トンにも達するとされる、その脳の小ささに反比例する程の暴力的で破壊的な魔法生物は、やはりホグワーツ一年生が容易く対応できるものでも無いのだ。

故にその偉業は彼等の並外れた勇氣と努力を示すものであり——

「始まりは、ウインガーディアム・レヴィオーサだったのよ」

——当時の時点で友人に余計な御節介を焼く事が出来た優等生の功績でも有った。

「アレが無かったら、私達は死んでいたわ。ハリーがトロールに飛びついても、あの生き物は止まらなかった。そして、私はただ恐ろしくて、床に座り込んでいる事しか出来なかった。ロンが私の言葉を覚えてくれていたから、私達は今も生きていられている」

そうとは限らない。

ロナルド・ウィーズリーとて魔法族だし、彼女達もまたそうだ。

彼等は当然に子供の頃に魔法を意図せぬ形で発動した事は有るだろう。杖を使う魔法は便利で有るが、時として咄嗟に発動した魔法が、その精緻で制御された——けれども余計な不純の混ざった——魔法を凌駕するという事も有る。

……しかし。

「あの魔法の事が無かったら、私達は仲良くなれなかったのよ」

その事は、絶対に否定し得ない事実でも有った。

彼女は知識のひけらかしが好きで、要らぬ御節介焼きで、その気質

が彼女達の最初の対立を招いたとしても、それでもウインガーディアム・レヴィオーサは、彼女にとって、三人組が仲良くなる為の魔法だった。

魔法界に来て学んだ如何なる魔法よりも、彼女にとってその呪文こそが、自身の世界を変えた大いなる「魔法」に他ならなかった。

「私は知らないわ、ただ学ぶ事しか。賢者の石の時だって、秘密の部屋の時だってそう。私は彼等の役に立てたから、一緒に居させて貰ってる。……解ってるわよ、何度も噂されもしたわよ。男二人の中で親しくやっているのが、女子として変じゃないかって」

それが揶揄い混じりで言われたのか、或いは本気で言われたのかは、グリフィンドール寮の内部を知らない僕には解らない。

けれども、彼等が百五十点を引かれた際に「生き残った男の子」にすらスニッチ捕獲係カキとしてしか話し掛けなかつた例のように、時にグリフィンドールは、群れを乗っ取つた獅子が前の頭の血を引く子獅子を残らず噛み殺すが如き酷薄さを見せる事が有る。

彼等にとつては同じ集団に帰属するか否かが重要であり、自分達の足並みを露骨に乱すようなはみ出し者は、スリザリン以上の苛烈な処遇を求める傾向が存在している。

それを考えれば、彼女は掛け替えのない親友達を得た二年前のハロウィーンの時からも、依然として異端のままに変わっていないのかもしれないなかった。

「だから私は誰よりも学ぶの。知らないのが怖い。間違ってるのが怖い。役に立てないのが怖いし、失望されるのが怖い。今でも私は全く足りなくて——」

「けれども、ロナルド・ウィーズリーは君にそうする事を求めているのか？」

「無理矢理に差し挟んだ言葉に、彼女は胸を刺されたかのような表情をして黙り込んだ。」

「ハリー・ポッターの事は、今は置いておこう。君の知識と叡智が彼にとって役立つているのは事実だが、しかし彼は「生き残った男の子」

という一言では言い表せない位に、色々と厄介で特殊な事情が有り過ぎる」

このような場合に例外を除外するというのは余り好きでは無いが、あのような「英雄」を標準値として語ってしまえば話が可笑しくなるのは明白だった。

「だから、ロナルド・ウィーズリーだ。君の純朴にして率直な友人は、君を便利な物知り事典扱いしているか？ 君が学年一の優等生である事を求めて居るか？ 寧ろ、君のそのような部分とは全く違う所に君の美点を見出し、二年もの間君と一緒に居るのでは無いのか？」

「……………」

「君は、先程盛大に彼を扱き下ろした。容赦なく、酷く貶めすらした。……………けれども君は、彼の良い所もハリ・ポッターと同じように、否、それ以上に知っている筈だ」

言葉こそが、全て真実を語るとは限らない。

「……………何でそう断言出来るの？ ロンは貴方と全く交流が無いし、私は貴方の前でロンの事を殆ど話したりしないというのに」

「確かに君は僕の事を気にして彼の事を余り語らないが」

彼女の言葉を、僕は軽く息を吐きながら認める。

「それでも君をこの二年半もの間ずっと見て来た。君の楽し気な言葉の裏側には、確かに彼の存在が見え隠れしていた事は理解出来ていたつもりだ」

語らなくても、伝わるという事は有るものだ。

彼女にとつてのロナルド・ウィーズリーが、そのような存在だった。

……………もう幾度、僕は仮定の物語を——彼等と共に居る光景を想像しようとしただろう。

けれども、既に最近はその妄想自体を辞めていた。彼等三人組は、一つとして完成されていた。僕が入り込む余地は無かった。どんな設定を造ろうとも、僕が彼等の輪の中に居るとするのは違和感でしか無く、それは正しく無かった。

彼女は、あの二人と一緒に居る事こそが「正しい」筈だった。

「君は聡明で、気高く、優しく思い遣りが有って、素晴らしく魅力的な

女性だ」

「……貴方は二年前も、そう言ってくれたわね」

「今もそう思っている。君が素直になれなくて、己の醜さに自己嫌悪し、僕のような人間に縋りつくような弱さを見せている今も、同様に。少しばかり寄り道して、少しばかり間違えても、君は最後には正しい道を選ぶのだと信じている」

僕に対して吐露した全ての言葉が、まるきり彼女の本心だとは思えない。

ただ単に心が弱り切っているから、少しばかり捻くれた物の見方しか出来なくなっているだけだ。彼女を取り巻く世界は、そんなに厳しくも無いだろう。そして、落ち着きさえすれば、彼女は僕と違って見誤らないで済む筈だ。

「……貴方が」

ハーマイオニー・グレンジャーは、小さくしゃくり上げながら呟く。

「やっぱり、貴方がグリフィンドールだったら良かったのに」

「……僕はスリザリンド。君の傍には居続けられない」

とはいえ、一年の時よりもその反論の声が小さくなった事は自覚していた。

未だに僕は、自身が居るべき場所をそこだと定義している。けれども、一年の学年末にアルバス・ダンブルドアに加点され、二年のスリザリンの継承者騒ぎを経て、三年のまね妖怪の顛末だ。リーマス・ルーピン教授が指摘したように、僕は果たして「スリザリン」で在れているのか、そもそもそもそもそうする事が正しいのか解らなくなってきたような気がしていた。

けれども、一年前と変わらず確かな事が有る。

それは、少なくとも僕の居るべきはグリフィンドールで無いという事だ。

……ただ。

「それでも、君が耐えられないと感じた時は、君の友人二人が受け止められないような事態が生じた時くらいは、少しばかり寄り添って、悩みを聞く事は出来る。そこに寮の垣根というのは、恐らくは存在しな

い筈だ」

「……私が言っているのは、そういう事じゃないのよ」

僕の言葉に、けれども、彼女は何か弱々しく言葉を返した。

彼女がその中に籠めた意図を、僕は感じ取る事が出来なかった。せめて顔を上げてくれれば何かを感じ取れたかもしれないが、彼女は僕の胸の中に再度しっかりと抱き着いたまま、何も答えてくれなかった。

「ねえ……ステファン」

暫くの静寂の後、薄く儂い声色で、彼女は問う。

泣き疲れたのか、その言葉には抗いがたい眠気が滲んでいる。そして、それに自らを委ねるように、彼女は本心からの問いを僕へと投げ掛けた。

「貴方は、私にハリーやロンの事について聞いたわね。なら、貴方のほうは？ 貴方にとって、私は、一体何なのかしら……？」

微妙に舌つたらずで、消えて行きそうな問いに、僕は答えた。

「ならば、君にとつての僕というのは、一体何なのだろうか」

卑怯な切り返しだった。

しかし、彼女もまた卑怯だった。

僕の問いに対し、彼女はもごもごと確かな答えを告げていた。恐らくは、夢の中でそれを答えている筈だった。勿論、夢の住人では無い僕には届かない。

けれども——彼女の中には既に答えが有り、そしていずれ口にされるであろうという事だけは解った。それを聞いて、僕がどう反応するだろうかというのは、勿論自分でも想像だに出来なかったが。

……僕にとつて、彼女がどういう存在であるか。それは疑う余地が無い程に明白である。

母の死を契機に意味を喪った僕にとつて、彼女こそが指針であり基準であった。ホグワーツに通う事を決めたのも、彼女の傍に居たいと感じたが故であり、それが絶対的に叶わないと知った後も尚、彼女の存在こそが慰めであり、支えであると言えた。

だが、一方で僕達の関係性について答えるのは、それは余りに難し

過ぎた。

僕が彼女に好意を抱いているのは間違いないが、しかし、あの熱に浮かされたような一か月から二年も時間が過ぎて落ち着いた中で、僕が彼女とどういう関係で有りたいと考えているのかは自分自身ですら解らなかつた。そして、彼女は、僕に対してどう在つて欲しいのかという事を、今まで一度も言つてくれた事は無かつた。

だからこそ、相応しい表現は、ただの一言しか見つからなかつた。
——解らない、と。

ただ、それでも。

彼女の髪をかき上げながら、聞こえないと解つていても、僕は彼女に告げた。

「君の事が大切だという事は間違いない」

それだけは、恐らく一生変わる事は無いだろうというのは断言出来る。

悪心と善導

鬱蒼と茂る森の中に居ても尚解っていたが、外は既に日が落ちようとしていた。

余り話し込んだつもりは無かったが、しかし彼女の暴れ狂う感情を受け止めるには、やはり相応の時間を要したらしい。彼女が疲れて眠ってしまうのも無理はないと言えた。今回精神的に強い打撃を受けたのもそうだが、やはり彼女には、三年生になって以降の積もり積もった肉体的な疲労が一挙に襲い来たようだった。

とは言え、このまま外に居る訳には行かなかった。

日中では未だに寒さが残る日が多く、まして夜が近付いてきているとなれば猶更だ。平静な状態に無かった彼女は先程まで全く感じて無かっただろうが、寧ろ逆にそうであるからこそ、余計に外で寝かせておくような事は出来なかった。そんな真似をすれば、更に酷い体調不良で寝込むのは眼に見えている。

勿論、僕がグリフィンドールに彼女を送り届けるというのは論外であり、スリザリンに連れ帰るといふ婉曲的な自殺をする事もまた有り得なかったが、都合の良い事に、禁じられた森という場所の近くには彼女を安静にさせておく宛てが有った。

共に居た場所が、禁じられた森の端の端であって良かった。

ハーマイオニー・グレンジャーを背負って歩いたほんの十メートル程の距離でそれを実感しながら禁じられた森の外に出れば、すぐさまランタンの光と共に大きな影が走ってきた。その正体が誰であるかは、やはり言うまでもない。

結構な距離が有った筈だというのに、僕達の元に辿り着くまではほんの数秒しか掛からなかったように感じたのは、その巨大な体躯が距離感を狂わせていたからか。或いは、彼がハーマイオニー・グレンジャーの身を案じていたからか。多分、両方では有るのだろう。

そんな彼は僕の前で泥と砂ぼこりを巻き上げながら急停止し、僕の背中に誰が乗っているかを認識した後、その大きな口で怒声を上げようとした。

「お前さん、ハーマイオニーに何を——！」

「眠っているだけです。貴方は彼女を起こすつもりですか」

「——うぐっ。むう」

端的な僕の叱責に対し変な呻き声を上げて、彼は勢い良く口を閉じる。

その言葉を証明するように僕の肩口からハーマイオニー・グレンジャーの顔を覗かせてやれば、彼は恐縮したように小さく身を窄めた。それでも彼の身体は、僕と彼女を丸ごと隠し通して尚、後二人くらは隠れるであろう程に巨大だったが。

そんな彼に対して、僕は彼女を少しばかり持ち上げて告げる。

「丁度良かった。僕の代わりに彼女を運んでくれますか？ 如何に彼女が僕より小さいとは言え、人一人を運ぶのは流石に重労働ですから」

「……お前さんは意外とデリカシーという物が無いな」

「父親の教育が悪かったので仕方無いでしょう。無理だと言うならば引き下がりますが、どうします？」

「……まあ、ええだろう。うん、まあ、俺としてもそれが都合がええ」
僕の背中から軽々と彼女を取り上げた際に告げられた言葉の真意は問わなかった。僕としても、そのような意図が無かった訳ではないからだ。

しかし相変わらず、その単純な一動作ですらも、ルビウス・ハグリッドという存在は力という物に満ち溢れていた。

彼が自身の血故に苦勞してきたであろう事は解っているが、それでもこういう場合は羨ましくなる。少なくとも、彼は単純な力不足で困難を感じた事は殆ど稀だろうから。

ただやはり、それは無い物ねだりだというに過ぎないのだが。

彼は僕のようにハーマイオニー・グレンジャーを背負うには余りに大きすぎる為、赤子に対してそうするように彼女を抱え込んだ。その後で、彼は僕に対して言葉を投げ掛けてくる。

「……それで、お前さんはどうするんだ」

「勿論、帰りますよ。貴方が居れば、彼女は安心でしょう」

「……てつきりお前さんは、ハーマイオニーの傍に居たがるものと思っていたが」

ルビウス・ハグリッドが、言い辛そうなのは、僕と彼の関係を考えれば当然の事だろう。けれども、それに対して僕は微笑みすら返す事が出来た。

「今のハーマイオニー・グレンジャーに最も必要なのは、僕では無い。貴方の友人二人の筈だ。違いますか？」

「……そりゃあ、そうだが。しかし——」

彼は口籠り、一応の礼儀として僕は待った。

そして彼は深く考えながら、それでも確かに言葉を紡いだ。

「——ハーマイオニーがいの一番に助けを求めたのはお前さんだった。俺じゃねえ。なら、彼女が目覚めるまで居てやるのが筋だろう」

「……貴方が、それを許さないのでは？」

「俺は友達の友達を手酷く扱う程に落ちぶれちゃいねえ」

ぶつきらぼうに、だがキラキラと輝く瞳を向けて、彼は言った。

「……そういう所は、彼がまたグリフィンドールである事の証だった。」

けれども、それが常に正しい保証は無い。

特に、友人の友人などという曖昧な存在を安易に信じる事など有ってはならないのだ。その者が自分にとつての友人としても認められるとは限らないし——ましてや、自分の価値観からは許容しかねるであろう悪事を目論んでいるような場合も大いに有り得る。

「取り敢えず、今のハーマイオニーが外に居るのは良くない。俺の小屋に向かうぞ」

その決定に対し、僕は異論を唱える事は無かった。寧ろ支持していたと言つて良い。

但し、僕はその事によつて、彼との会話を打ち切るつもりは更々無かった。彼が仮に僕との会話を続ける気が無くとも、僕は彼に対して聞かせなければならぬ言葉を未だ持ち合わせて居た。

身長に比例して彼の一步は大きかったが、ハーマイオニー・グレンジャーを揺らさないよう慎重に抱えて歩いている御蔭で、小走りにな

らずに済んでいるのが救いだった。彼に普通に歩かれたら、僕は走る事に精一杯で会話など出来なかっただろう。

「——それで、貴方は彼女から仲違いの理由を聞きましたか？」
「んにや、まだだ」

僕の問いに、彼は力無く首を振った。

「ファイアボルトがシリウス・ブラックの送ってきたもんだと言つて、クリスマス頃に口を聞かなくなったのは知つちよる。しかし、今回はその、泣いたまま俺の小屋に飛び込んできて、お前さんが後から来るからと言いつ捨てた後に森へと走つていつちまったからな」

「……そうですか」

彼女は、事が起こつてから殆ど一直線に僕の元に来たらしい。それが嬉しくも有り、さりとして悲しくも有るのは、当然ながら己の度し難い愚かさ故であつた。

もつとも、地面と前方とそしてハーマイオニー・グレンジャーを見るのに忙しい彼は、僕の反応を気にする素振りも無く言葉を続けた。「という事は、お前さんはハーマイオニーから泣いていた原因を聞いた訳だな」

「ええ。ロナルド・ウィーズリーのペットである鼠を、彼女のペットである猫が食べたのが今回の喧嘩の発端のようですよ」

「そりゃあ——」
僕の言葉にルビウス・ハグリッドはあんぐりと口を開けて立ち止まった。

こちらを見つめる瞳には否定して欲しいという願望が浮かんでい
るが、残念ながら僕はそれに応えられなかった。

「一応、まさに猫が鼠を食べた瞬間を彼や彼女が見た訳では無いよう
です。しかし、状況証拠から言えば、僕としてもそう考えるのが真つ
当だと思えますよ。僕は動物の生態に余り詳しくは無いですが、僅か
な血跡と猫の毛だけを残して、鼠が忽然と消え失せる事は？」

「……有り得ん事じゃねえ。内臓など選り好みして食べ残しをせん限
り、猫は鼠程度ならば綺麗に噛み砕いてペロリと喰つちまう。食べた
証拠も殆ど残らん」

「……解っていました、やはり可能性は低くないようですね」

専門家からの御墨付きともなれば、僕達の結論は正しい事のように思えた。全くもって嬉しくないの言うまでもないが。

「ただ話を聞く限りでは、大喧嘩の要因はそれだけでは無く、ハーマイオニー・グレンジャーが強情にもそれが認められないというのも大きいみたいですが」

「確かにハーマイオニーはちいとばかり頭が堅い所が有るし、ロンも意地を張る所が有るが。いかん、いかんぞ、それは……！」

動揺の大きさから見て、そのような事態は考えて無かったのだろう。彼は自ら言い出した事を——誰を抱いているかをも忘れ、茫然と立ち竦んでいる。

彼女達は二年と少しの間、けれどもその時間に比して濃厚に、確かな友情を育んで来た。

賢者の石の試練を三人で解決し、秘密の部屋による脅威も乗り越え、そして今回のシリウス・ブラックというハリー・ポッターの両親の仇に纏わる災難についても、彼等は当然に感情を共有し、決意を固めてきた筈なのだ。

その近しき時間の上に成り立つ結末は間違いなく硬く——しかし、それは過去形になろうとしている。

「……まあ、更に詳しい事は彼女から聞いて下さい。貴方にも話す事で、彼女はもう少し落ち着くでしょう。この学内で貴方はあの二人組に次ぐ彼女の友人なので、出来る事が有る筈です。いえ、出来る事が有らねばならない」

希望的観測が混じり込んでいるのは、それが僕の本心に反するからだろう。

彼女の前では耐え切った。綺麗事でもって、暗い本音を覆い隠す事が出来た。

けれども、こうして彼女と離れた今——彼女の熱が無くなった今、この状況は僕にとって都合の良くすら有るといふ考えに直面せざるを得なかった。

嗚呼、そうだ。

僕は心の何処かで歓迎している節が有る。

僕がハリー・ポッターを嫌悪するのは、偏に彼には闇の帝王の影が付き纏うからだ。

去年バジリスクを恐れたように、彼の傍というのは危険が存在する。そして、アルバス・ダンブルドアが懸念するが如く、何れ闇の帝王が復活するので有れば、彼と親友関係に有るといふのは最大級の災厄を招く事になる。ロナルド・ウィーズリーが「純血」であるのと同様に、ハーマイオニー・グレンジャーが「穢れた血」であるという事実は一切変わらないのだから。

故に、彼女の安全のみを考えるならば、僕は彼等の友情を徹底的に破壊しなければならぬ。

そしてこの降って湧いたような絶好の機会は、仮に鼠が本当に猫に食われて居なかったとしても、彼等の間に再起不能なまでの猜疑と不信、そして修復不可能な信頼の破壊を為す事は十分に可能だろうと、冷静に判断すらしてしまっていた。

ロナルド・ウィーズリーという同性の友人を、ハリー・ポッターは見捨てられない。

ハーマイオニー・グレンジャーと彼ならば、ハリー・ポッターは彼の方を選択するだろう。今回の件で言い分に分が存在するのは彼の方であるとすれば猶更だ。

あの三人組はある種の歪な所が有った。

彼女が自白した通り、男二人女一人という関係は、異常とは言わななくても稀である。

そして、彼等三人組は酷く気が合うような間柄では無く、逆ですら有り、外部から客観的に見る限りでは寧ろ良く成立していると思う程で、それはやはりトロール退治という共通体験から始まっているのだろう。そして、それ故に彼等は仲良くなつた理由を、又は彼等が今も常に共に居続けている根拠を、上手く言語化する事が出来ない。

友情とはそういう物なのかも知れない——まあ、それを知らない僕が語るのも可笑しいのだが——のだが、さりとして曖昧な関係で有るのは間違いない。そして、であるからこそ、僕はそれが付け込む隙が有

るのだと、破壊する隙が有るのだという思考を働かせてしまう。別に良いでは無いか。

無二の筈であった親友を喪う程度の事は。

そう思っただけで居た筈の相手に裏切られる場合が有るといふのは、ジエームズ・ポッターの例を見て解る通りだ。そして世間的にも、同種の事例など有り触れているだろう。友情は神聖で、尊く、されど永遠とは限らない。その破綻は確かに心に傷を残せども、時が経て尚絶対的に癒える事が無かろうとも、耐えたままに一生を送れぬ程の痛みでは無い。

ハーマイオニー・グレンジャーとて、一年次とは違う筈だ。

二年を超える寮生活は、僕にすら一定の関係を構築する程の物である。

彼女の方にも、親友とまでは言えなくとも、それなりに会話を交わす同性の友人は出来ているだろう。そしてまた、グリフィンドール寮の者達は、彼女がどんな人間かを理解する程度の時間を十分に有していた筈だ。強情で、融通が利かず、知ったかぶり、しかし努力家で善良な女の子の事を。

だからこそ、ハリー・ポッター達との友人関係が破綻しても、ハーマイオニー・グレンジャーがグリフィンドール寮内において完全に孤立する事は無いに違いない。

嗚呼、それ故に、そんな事を考えてしまいが為に――

「今回は、貴方しか居ないんです」

――僕は今回、彼女の傍に居続ける事が出来ない。

彼女に毒を流し込む事を渴望する己を、強く自覚するが故に。

「直ぐは無理でしょう。彼女も、ロナルド・ウィーズリーにも、考える時間が必要です。冷静にはなれなくても、彼等の友情を確認する為の時間が。けれども、時間だけでは無理でしょう。仲直りには切っ掛けが必要で、それは貴方が取り持たなくてはならない」

「俺が……？　しかし、そりゃあ――」

「貴方は二人の友人何れとも親しいでしょう。そして、貴方が魔法生物狂いなのも当然知っている。貴方の言葉ならば、届く筈だ。いえ、

貴方の言葉だけが届く可能性が有る。僕でも無く、アルバス・ダンブルドアでも無く、ただ貴方一人だけが」

彼は僕の方を困惑と共に見返し、けれども僕はそれを切り捨てるように断言した。

こういうのは理屈では無く、そもそも彼等こそが正論だった。だからこそ、正論を超えた感情論で無ければ、彼等の考えを変える事は出来ない。

ルビウス・ハグリッドという男が魔法生物ペット達に対して並々ならぬ愛着を持っているのは、ホグワーツに居る人間であれば、そして彼等の友人であるならば、重々承知しているだろう。同時に、そのような存在を喪った時、彼が激昂しないでいられないであろう事も。

しかし、グリフィンドールである彼は、スリザリンである僕と違い、もつと大切な事を知っている筈だった。だからこそ、その仲違いの間を取り持つ役割を果たす事は、悍ましき僕の希望を容赦無く叩き潰してくれるような真似は、彼以外に出来ない筈だった。

「あの三人組が永遠に物別れになつて良いと、貴方がそう思うのなら別の話です。けれども、そう思わないのであれば、貴方が動くしかない。……僕から言えるのはそれだけです。後は、貴方に任せます」僕は彼に言うべきは、ただその事に尽きた。

それでも、僕がそうして欲しいと言わなかったのは、やはり僕の醜悪さに基づく物に違いなかった。僕にとっては——心がどちらの結末を望んでいるかは別として——どちらになつても構わないという現実が変わらなかつたのだから。

言ってみれば、ルビウス・ハグリッドに最後の選択を任せたいのは願掛けでも有り、呪いに等しい物でも有った。

そして、僕の用事は済んだ。

だからこそ、当然のようにルビウス・ハグリッドの前から立ち去ろうとし、しかし憎らしい程に善良な彼はそれを許さなかった。

「待て。お前さんがそう言うならば、こっちにも条件が有る」

「……条件？」

その余りに間の抜けた表現に、僕は思わず立ち止まって振り返る。

そして、彼自身もその可笑しさに気付いたのだろう。微妙にバツの悪そうな顔をした後、しかしその高い視点から真つ直ぐ僕を見下ろして、ぽりぽりと頬を搔く。片手で有っても、彼女を抱く姿は揺るぎ無かった。

「あー、条件というのはちいと間違えた。つまりその、何だ。お前さんがどういう理由でそんな顔をしてるのか解らんし、何故そんな事を言うのかも解らんが、俺のすべき事は解る。兎も角お前さん、ハーマイオニーが目覚めるまで俺の小屋に居ろ」

体軀に比して余りに小さな瞳は、しかしやはり僕の物よりも大きいのだと言う事を感じさせた。

「……何故、そのような事を言い出したんです？」

「俺にも良く解らん。解らんが、少なくともハーマイオニーはお前さんが傍に居る事を望むだろうという位は知つとるつもりだ。だから、俺はそう言っちよる」

「……論理の欠片も無いですね。そして一貫して支離滅裂だ」

命令口調の言葉に、従う義理は無い。

けれども、その誘いが甘いものであるのは確かだった。

未だ僕自身、己が真にどうしたいのか——彼女にどうなって欲しいのかというのが解らずとも、自分を保てない位に弱り切っていた彼女が心配であるのは、決して偽りでは無かったのだから。

「……但し、目覚めるまでです。彼女と違って、僕は一人で城に戻らなければならぬ」

一緒に帰るといふのは論外だ。

そして、ハーマイオニー・グレンジャーで有れば、ルビウス・ハグリッドが城へと送り届けた所で何ら不自然さは無いだろう。単純に安全という面においても、僕よりは彼の傍に居る方が遥かに良い。

「まあそうだな。ハーマイオニーもすぐには城に帰れんだろうし、俺もちよつくら話したい事が有る。それが良いだろう」

そう言ってから、ルビウス・ハグリッドは、むつつりと黙り込んで再度小屋へと歩き始め、僕もまたその巨体に隠れるように、その後を追った。

それからハーマイオニー・グレンジャーが目覚めるまで、僕と彼の間に会話は何ら存在しなかった。冷たい外気を遮断した部屋の中で、暖炉の火が時折爆ぜる音と、彼女の静かな寝息だけを聞きながら、ルビウス・ハグリッドが淹れてくれた熱い紅茶を啜りつつ、彼女が目覚めるのを二人待ち続けた。

そして彼女が寝ぼけ眼のままに目覚め、猫のように僕の手に擦り付けるようにする頭を撫でた後、僕はルビウス・ハグリッドの小屋を辞した。

そうして僕は当然、職員室に居るミネルバ・マクゴナガル教授の下へと向かった。

教授は僕の顔を見た瞬間に引き攣った顔を浮かべたが、僕の事ではなく貴方（ハーマイオニー・グレンジャー）の生徒の事だと言うと何処か安心したような表情に変わった。

最初はその理由が解らなかったのだが、そう言えば先学年の最後に一度だけ相談に乗ると言われたのだった。その時が来たのかと思つて警戒したのだろう。まあ喜ばしい事に、未だ真に選択に迷うという機会は僕に訪れていなかった。

事情は詳しく話さなかった。

彼女自身が話すべきと考える事と、そうでない事の差異を、僕には判断出来ない。そしてまた、教授は生徒の悩み相談を受けるのに慣れているのか、余計な事を聞こうとしなかった。ただ単に、ロナルド・ウィーズリーやハリー・ポッターと決定的に仲違いをしたようだけ言えれば、ある程度察したようだった。その問題の根深ささえもだ。

「……解りました。あの子が入学直後に寮に馴染めなかった事は良く覚えていますが、今年は彼女が学業の事で酷く神経質になっていた事も知っています。私からもより彼女を見ておく事にしましょう」

時間が過ぎれば解決するような事では無いと、教授も直感しているのだろう。

その言葉は重々しく、表情も憂いに満ちていた。

けれども、教授の話はそこで終わらなかった。

「貴方はグレンジャーの特別措置の内容を知っているのですか？」

「……何故それを僕に聞くんです？」

一般の生徒を委縮させるには十分過ぎる鋭い視線は、しかし僕に何ら感慨を齎すものではない。

けれども、教授の方も僕を咎めようと思った訳では無かった。彼女は僕の反応から答えを見極めようとしたに過ぎない。そして、その結果は彼女を落胆させるものだったようである。何時もの厳然な仮面を捨て、教授は酷く疲れたような表情へと変えた。

「……確かに私は誰にも言ってはならないと言いましたが、あの子の拘子定規さをまだ理解していなかったようですね」

ただ、その身勝手とも思える言葉には、僕は顔を歪めざるを得なかった。

「教授が彼女の行動の奇妙さの機巧について知っているのは重々承知していますが、口止めたのであれば責任を持つべきだ。何より、仮に親しい間柄で有ったとしても言ってはならない事というのは、世の中には得てして有るでしょうに」

「……それは認めましょう。この事が他に知れたら大変な事になる筈です。その魅力に取り付かれた者は多く、それが手の届く場所に有ると知って手を伸ばすのを止められない者はまた少なくない。無遠慮な学生が不用意に弄べば、たとえそれが全くの善意に基づくもので有ったとしても、取り返しの付かない可能性になるでしょう」

「……随分と仰々しい言葉が出て来るものですね。どうやら彼女は、僕の予想以上の手段を用いているらしい」

沈痛な面持ちでの教授の返答に、深い溜息を漏らさざるを得なかった。

「ただ、私は彼女が自制する事が出来る人間だと信じていましたし、何より彼女は溢れんばかりの才を持っていました」

「……それは、単に彼女の頭が良いという話では無いんでしょうね」

「ええ。そうでは無く、余りに良過ぎるという話ですよ。如何に百点

を満点としないとは言え、それが目安である事には変わりはなく、しかし事実上全ての科目で、彼女は百点を付けるでは足りないのだと教師に思わせてしまうのですから」

ハーマイオニー・グレンジャーは百点満点のテストで百二十点を狙う人間であり、そしてまたそれを出来る人間だった。

「単なる優等生、一学生ではこのような特別措置は通りません。それは彼女がポッターと共に解決してきた二回の事件の功績でも有り、何より彼女に対して神秘部が興味を持たなければ、今回のような事は起きなかったでしょう」

「……そのようなヒントを出すような真似をして良いのですか？」

「貴方は多少知り過ぎていての方が良いようですからね。それに、貴方はグレンジャーの意思を尊重して最後まで何も言わずにいられる人間では無いですか？ もっとも、それが常に良い事で有るとは限りませんが」

今度は、教授の方が溜息をこれ見よがしに吐いた。

「グレンジャーは多忙過ぎます。限度を知らないというべきでしょう。関心の赴くままに、自分が手の届くと判断した部分については、他ならぬ己自身で遣り遂げようとします」

「……それが何か問題でも？ それは、彼女の欠点でも有り、良い所でも有ります」

「ええ、それは同意しますよ。だからこそ、彼女には少しばかり余所見をする為の時間的余裕を上げたかったのですよ、私は。ブラックの脱獄が予想外では有りましたが、それでも今年は下手な事は起きないだろうという先方の意見でしたので」

まあ、神秘部の意図を推し量る事程に無駄な行いは有りませんが、と教授は言う。

「……しかし、教授の目論見とは真逆になっているようですがね」

僕の皮肉を籠めた揶揄を、教授は何ら否定しなかった。

「解っています。グレンジャーがポッター達との付き合いでかなり、柔らかく、なっただと思っただけですが、本質は変わらないという事でしょう。あの子は事前に定められた規則を限界まで厳密に守り、そし

てまた注意された通りに自分の友人達にも告げなかった」

「生徒が教授の思い通りに動く訳では無いという典型でしょう。ですが、それは気軽に用いるには危な過ぎる代物を渡したが故でも有るのでは？ ハリー・ポッターもロナルド・ウィーズリーも、思慮深い存在と評するには程遠い」

「貴方のように思慮深すぎるよりも遥かに良いとは思いますがね。……しかし、彼女も今更打ち明ける気にもならないでしょう。喧嘩しているとなれば猶更です」

教授にしては珍しい皮肉は、彼女をして解決が難題であると認識しているのか。或いは、それなりに評価して貰っていると考えるべきなのか。

ただ、真つ直ぐこちらを見つめる瞳は、少なくとも強い輝きに満ちていた。

「兎に角、良く伝えてくれました。ポッター達が私に言うとも思えませんが、グレンジャーとしても告げ口するような真似は好まないでしょう。もつとも、教師が出来る事は彼女を見守り、望むのであれば相談に乗る位の事しか出来ませんが」

「それで十分ですよ。ルビウス・ハグリッドも事情は知っているので、彼とも相談して下さい。もつとも、これは僕に言われるまでの事では無いと思いますが」

「……貴方は交友関係が狭い割に、意外な伝手を持っているのですね」
「単なる成り行きです。別に親しい訳でも有りません」

そもそも、まともに話したのが今日だけだ。

教授が考えているような関係とは全く持って異なる。

「……まあ、そういう事にしておきます。そして、これ以降はグリフィンドール寮の問題となるでしょう。上手く物事が転ぶかは解りませんが、私としては最善を尽くす事を約束します」

教授は少しばかり微笑み、しかし再度厳格な表情を作った。

ミネルバ・マクゴナガル教授は、骨の髄まで教師である事を止められなかった。

昨年の学期末と同じように、スリザリン生に対してすらも。それは

僕が間違いなく敬意を払える点であり、さりとして他の多くの生徒と同じように多少苦手とする点でも有った。

それを面白がるような光を眼の奥に浮かべ、しかし教授は真摯に僕に対して告げる。

「ただ、貴方がこのように賢しく振る舞うという事は心配でも有りません。少なくとも、普通の生徒が教授に対してこの類の根回しをするというのは稀です。しかも、それがスリザリン生ともなれば、驚天動地の行いと言つて良いでしょう」

「……僕は間違いをしていると?」

「いえ、そういう訳では有りません。ただ、少しばかり偏執的な所があると評すべきでしょうか。上手く行っている時は良いですが、それが裏目に出た時が怖くも有ります。何せ、そういう方を私は良く知っているのです」

「……………」

僕は沈黙を守った。それがどちらの人間の事だか解らなかつたからだ。

そして、その解答は、教授にとっては大いに不満が残るものだったようである。教授は微妙に呆れと、そしてより強い嘆きの感情を滲ませながら、僕へと言葉を続けた。

「——ステイブーン。貴方は、グレンジャーを直接止めようとしないのでですね」

「……何故、止めなければならぬのです?」

少しばかりの惚けと、しかし揺ぎ無い確信と共に僕は答えた。

「彼女は前に進もうとし続けている。諦めるつもりは無いという意思を示している。であれば、手伝う事や助言する事は出来たとしても、相手を尊重するのであれば、その選択を止める事はすべきでないでしょう」

「それが全くの真意に基づく物で有るならば、私も賛意を示しましょう。けれども、貴方はそれがグレンジャーの望みで無い事に当然気付いている筈ですが」

「……一応説得はしました。しかしまあ、届かなかつたのが現実です」

おどけるように肩を竦め、けれども教授はピクリとも表情を動かさなかつた。

「ですが、貴方が辞めて欲しいという発言はしては居ないので無いですか？　美麗に装飾された迂遠な千の言葉よりも、陳腐で単純な一の言葉の方が届く場合は少なく有りません」

「……今度機会が有れば、心掛けるようにしますよ」

「私としては、今すぐそうする事を御勧めしますけどね。——けれども、ホグワーツ生の誰よりも賢明な貴方には、貴方なりの考えが有るのでしよう。これ以上は言いません」

僕がハーマイオニー・グレンジャーについて相談した時よりも遙かに深刻な表情と、大きな溜息を吐いた後、教授は渋々といったように告げた。

「もう出歩くには少々遅い時間です。ブラックの消息はあれから掴めていませんが、危険が去った訳でも有りません。自察に戻りなさい」
「……ええ、そうします」

僕の素直な返答に教授は満足を表すように軽く頷いた後、やはり教師らしい忠告を最後に付け加えた。

「私は貴方が色々と問題の有る生徒だと考えていますが、それでも同時に好意的にも受け止めています。だから、その優しさと思ひ遣りを常々忘れないよう。そして出来ればもう少し広い範囲に、貴方がそれらを与えられる事を願います」

まったくもって、ミネルバ・マクゴナガル教授の忠告は耳に痛かつた。

読書亡羊

あのハーマイオニー・グレンジャーとの逢瀬以降、特に変わった事は無かった。

彼女はあの時の事についてやはり触れず、そして僕から少しばかり距離を置いた。それが単純な気恥ずかしさから来る物で無い事は明白だった。

もつとも、友人達と仲直りをしたという報告だけは、彼女から直接受けた。

彼女は細部まで語ろうとしなかったが、ホグズミードを訪れた以降に、彼女はロナルド・ウィーズリーに謝る事が出来、彼の方もまた彼女を許したらしい。結局の所、彼等の関係は——そして、彼女とロナルド・ウィーズリーとの間の絆は、僕が想像した程に脆弱でも無かったという事かもしれない。それが多少意外に感じた事も、否定しない。

とは言え、その誤算に対して僕が抱いた想いは、やはり一言では表し難いものでは有った。

ただ、喜ぶべきでは有るのだろう。どんなに歪で在ろうとも、それが彼女にとって本当に心が許せる場所であり、所属すべき集団であるのだと認識出来るのであれば、それを肯定する事は「正しい」在り方の筈だった。

一方で、共に伝えられたヒツポグリフ裁判の敗訴については、案の定というべきでは有った。

ドラコ・マルフォイが騒いでいた為に結果は知っていたが、それでも彼女の口から聞くというのはまた違う感慨を齎す物だった。

僕の表情をどう解釈したのか、貴方は出来る限りの事をやってくれたわという慰めの言葉と、これからはロンも頑張ってくれるって話よとの励ましの言葉を彼女は残した。

控訴に関して僕が更に手伝う必要が有るかと問えば、取り敢えず私達の方でまた検討し直してみろという事で彼女は婉曲的に断った。それについても、まあ何も言うまい。彼等は今まで離れた分を取り戻

し、友情を再確認する時間が必要に違いなかった。

その後の月日は一瞬だった。

誰かに殴られるような立場に無いドラコ・マルフォイが何故か頬を腫らしているという謎の事象が有ったり、イースター休暇中の宿題でビンセント・クラップとグレゴリー・ゴイルが死にかけていたり、グリフィンドールがスリザリンを二百三十対二十で盛大に叩き潰して優勝した為に寮が崩壊しかけるといふ事態が有ったりしたが、概ね学生としての平和な日常が続いていたと評する事が出来よう。

そして、シリウス・ブラックという大量殺人犯の事ですら、試験という学生の直近の危機が迫ってくると、多くの生徒が忘れ去っていた。

再度図書室で良く見かけるようになり、また少しばかりの会話を再び交わせるようになったハーマイオニー・グレンジャーも、殆ど例外で無いように見えた。

寧ろ、敗訴によって使い物にならなくなったルビウス・ハグリッドの授業改善を殆ど放棄し、自分の事に専念しなければならぬ程に、彼女はその傾向が特に強かった。彼女は明らかに神経質になっており、自身を取り巻く殆どに対して苛立ちを見せていた。

その姿を見る度、ミネルバ・マクゴナガル教授の忠告を僕が思い出さなかったとなれば全くの嘘になる。けれども、今の彼女が聞き入れる事は無いだろうという確信も有った。言葉だけで簡単に変われるのなら何ら苦労しないのだから。

しかし、試験が終わった後であれば——彼女の心労が明確に減り、それでも何も変わらないのであれば、彼女と少し話が出来るかもしれないとも思っていた。

ただ、ミネルバ・マクゴナガル教授に相談した際の感触からは、教授もまた現状を放置したまま来年度へと進ませる事はしないだろうという確信もまた有った。

そして、僕に代わって教授こそがそれを解決してくれる事を期待しなかった訳では無い。僕に対してすら忠告を惜しまないあの公平にして厳格な教授であれば、生徒を導く事に関しては僕より遙かに「上

手く” やつてくれる筈だった。

だから、僕は学ぶ事に、力を求める事に溺れた。

……溺れてしまった。

なまじ暇が出来たと勘違いしてしまったが故に、リーマス・ルーピン教授の好意を不運にも獲得してしまったが故に、そのような愚行に陥ってしまった。

僕にとつての世界は、狭かった。

ハーマイオニー・グレンジャーのように友人が居る訳でも無く、ロナルド・ウィーズリーのようにチェスを初めとする娯楽に没頭するでも無く、ハリー・ポッターやドラコ・マルフォイのようにクイディッチ狂いであるという訳でも無い。

つまるところ、彼女と同様に、僕は学び以外の事を知らなかった。

寧ろ、僕を構成する要素は、ハーマイオニー・グレンジャーという唯一の例外を除けば、それ以外に全く存在しないと行って良く、もしかすれば一番興味を有しているかもしれない “マグル” 趣味に興じる事は、スリザリン寮内に居れば当然ながら不可能だった。

故に、ホグワーツという生温い揺籠へと慣れてしまった者は——寮内の派閥の力学からも半ば解放され、二年間の貯金と経験によりドラコ・マルフォイへの助力も片手間に出来るようになり、ハーマイオニー・グレンジャーに対しての心配を放棄した愚か者は、叡智の追求の延長として、魔道の探究に堕ちてしまう事こそ必然だった。

『それは必要なのか』

あの冬の森の中で、僕は彼女にそう問うた。

……嗚呼、そうだ。彼女に論じたつもりでありながら、しかしその言葉が僕自身に返ってくるという事を、全くもって意識していなかった。

寧ろ彼女以上に悪質だろう。

僕の原初はハーマイオニー・グレンジャー以前、あの本にこそ存在する。

それが齎す末路は眼前で確かに見届けた筈であり、また自分がどのような存在であるか認識していた筈だった。けれども、誤った。それ

は、僕が確かにあの父親の血を引いているという、全く嬉しくない証なのかもしれない。

結局の所、僕は善良な学生としてその生活を無為に、自動的に過ごすだけで、その延長線上に確固として存在する解答へと辿り着く事が出来るのだと勘違いしてしまった。……馬鹿な話だ。この二年間、本質的にそうで在った事など無かっただろうに。

僕はハーマイオニー・グレンジャーでは無く、ましてやハリー・ポッターで無い。学び以上の気付きを得られる天才的な存在でも、その身に有する機知と才気を万全以上に行使出来る英雄的な存在でも無いのだ。

単なる凡愚であり、だからこそ本当に大切な事を、過去と同じように間違える。

目的無しに獲得する暴力程に、無意味な物は無い。

僕はそれをハーマイオニー・グレンジャーの為だと——バジリスクの前で何も出来なかった事を繰り返さず、そしてまた三年前に母を喪った事を繰り返さない為だと、確かな目的に基づく物だと、そう勘違いしていた所があったのだろう。暴力こそが、弱者を守る為の最小限の力こそを有していれば運命を、世界を変えられるのだと心の何処かで思っていた。

けれども、僕は知っていた筈では無いか。

自身の学びが、得た力が何も救わなかった事を——救う事の出来る材料を確かに手元に持っていないながら尚、僕がそれを見過ごした為に、母の命という代償を支払う羽目になってしまった意味を。

学年当初から一貫して関心が無かったシリウス・ブラックについて、僕はその立場を変えなかった。変える意義を感じなかった。彼が如何なる存在であるかを知りながらも、僕に出来る事は無いだろうと、無視をし続けた。

アルバス・ダンブルドアという今世紀で最も偉大な魔法使いが、学期前にわざわざ僕の下を訪れてまで、彼について会話を交わすような手間を掛けたのに、だ。

何度学んでも、真に重要な事を学ぶ事は出来ない。だからこそ、人

は教訓を残す。

そしてその教訓を知る者ですら大半の場合に遵守する事が出来ないからこそ、それは後世にも残る教訓足り得る。それはこの瞬間も、やはり変わるものではなかった。

学期末試験最終日。

それに至つても、僕の生活は日常のままだった。

試験前と試験中は、ヒツポグリフの処刑に浮かれようとするドラコ・マルフォイを黙らせる事は簡単だったが、終わってしまえばそれを止める事は出来ない。

正確に言えば控訴が今日であり、一応の望みは存在するという事だが、しかし既に処刑人を連れて来ているという。ハーマイオニー・グレンジャーからの連絡が何も無くとも、狂暴なヒツポグリフの末路は既に目に見えていた。

ドラコ・マルフォイは、今夜になれば父上からあの獣畜生が処刑されたという知らせが来るに違いないと、明らかにわくわくした様子を隠し切れて居なかった。

結局の所、やはり何も変わらなかったのだ。

魔法界がそういう場所である事など、最初から解っていたのだ。

僕が見て来た事柄が、聞いてきた内容が、そして我が父の遺した言葉が、それを明示していた。ただ、僕が彼等と違うのは、それが決して正しいと思えないという事だけだ。

……そして付け加えるならば、僕が彼等に比べて圧倒的に能力も実力も才能すらも劣り、黙認するしか出来ないという事も。

しかし、リーマス・ルーピン教授は、敬意を払うべき大人は言った。君が変えようとは思わないのかと。

未だに、僕はその光景を思い描く事は出来ない。それは変わらな
い。だが、夢が見られないままでも、進む事は出来るのでは無いか。
僕は最近そう思うようになって来た。

それは、三年間で最も充実した僕の学生生活からも無縁では無いだろう。僕の実力は確かに向上していた。同時に限界もまた見えたような気がしても、何だかんだ言ってやはり、僕は自身の成長に対して喜びを感じられない程に、枯れ果てた人間でも無かった。

確かに、僕は今、ヒツポグリフ一匹すらも救う事は出来ないが。けれども、同じような事を繰り返さないで済むような日が来るのを願うというのはやはり許されるのでは無いのだろうか。この日の無力と、屈辱を忘れずにいられば、いつか良い方向へと向かうのでは無いだろうか。

そのような、自分らしくも無く、そして何処か腑に落ちきらない思考を巡らせながら何時の間にか眠りに着き——そして、叩き起こされた。

真夜中を遥かに過ぎ、既に眠っていた生徒を目覚めさせる蛮行を為したのは、それを為す事が出来たのは、セブルス・スネイプ寮監しか有り得なかった。

明日、正確に言えば、今日の事が今から憂鬱だった。

よりにもよって、昨日は試験終了日だったのだ。それに全寮制という要素が加われば、生じる結果など解り切っている。

つまり、嵌めを外して夜更かしする人間はそれなりの数が居た。普段であれば首席や監督生も止めただろうが、流星に一年を締め括る一つのささやかなイベントを制止する程の堅物である訳でも無い。そして教授陣の方も、眠りに就きたい人間を妨害すると言ったような度が過ぎた行為が発生しない限りは、それをとやかく咎め立てる程に狭量である訳でも無い。

言ってみれば、所謂打ち上げ会は一つの伝統だった。

そんな中に、用事が無い限り寮内へと立ち入らない筈のスネイプ寮監が入って来た瞬間の、彼等の反応を見る事が出来なかったのは少々

残念な気がしないでも無かった。

だが、最も重要な事はそれでは無く、要するに、激情に震えながら僕を叩き起こす寮監の姿を目撃した人間は相当数居たという事だ。

……まあ、叩き起こす際の一連の騒ぎで、少なくとも男子寮で眠っていた大半は起こされた気がしないでも無いので、結局は同じ結果になったのかもしれないが。

ただ、今の目下の問題は、他のスリザリン生では無く、やはり僕の方を睨みつける寮監の方だろう。外見上はある程度落ち着いたようだが、その内に煮え滾る感情は何ら鎮静化していないのは、僕からすれば明らかで在ったが。

「……それで、一体全体何の用事なのです?」

温かな談話室から寒々とした研究室まで連れ出され、椅子も無く立たされたままの僕は、多少のウンザリした想いと共に問い掛ける。

流星に眠気は飛んでいた。真昼だろうが真夜中だろうが、ここは不気味で、薄暗く、そして陰気なのだなどという感想を抱く余裕すら有った。

そんな僕に対して、寮監は押し殺した声で言った。

「事は急を要するのだ、レッドフィールド」

「……まあ、そうでしょうね。何ら急ぎではないにも拘わらず学生を叩き起こすような寮監が居れば、僕は驚きますよ」

その言葉は半ば挑発で在ったが、寮監は全く表情を動かさなかった。それは僕のそれが通じなかったという訳では無く、より大きな感情と目的意識に支配されていた。

「今の我輩は、お前の戯言を聞いている暇など無いのだ」

「……ならば、どういう有意義な会話を僕としようとしているのです?」

「——今宵、シリウス・ブラックが捕まった」

その言葉には、多少驚きを覚えはした。

しかし、アルバス・ダンブルドアの縄張り^ホで一年間逃げおおせたとしても、いずれ限界が来るのは解り切っていたし、それが今だったからと言って事は驚くに値しないのかも知れない。そんな思いが存在

していたからこそ、多少で済んだのだった。

だからこそ、真に驚きで在ったのは、次の言葉だった。

「それも、我輩の働きによってな」

「……………」

別に、寮監の実力を侮っていたという訳では無い。

けれども、アルバス・ダンブルドアが熱心に、全ての人間に先行して確保しようと考えていたであろう事を見透かしていたからこそ、言わば今世紀で最も偉大な魔法使いを出し抜いたともいえるその言葉が僕にとって予想外で有ったというのは間違いなかった。

「……それで、その偉業を為した寮監は、僕に何の用なのです？ マーリン勲章勲一等には流石に値しないと思いますが、勲二等であれば十分でしょう。シリウス・ブラックは魔法省の体面に泥を塗りまくった訳ですからね。まさか御祝の言葉を期待していると？」

「無論、そんな事など期待していないとも。何せ、我輩は既にそれらには値しないのだ。すなわち、シリウス・ブラックは今宵、同様に逃げ出してみせたのだから」

「……………」

冷やかな言葉に、僕は口元を引き締める。

……嗚呼、そういう事なのか。寮監が何故わざわざ僕を叩き起こしてまで話を聞こうと思ったのか。その理由が、多少は見えて来た。

そして、それに少しばかりの満足を覚えたらしい寮監は、しかし淡々と言葉を続けた。

「シリウス・ブラックは、魔法省の監視下に置かれていた。そして杖を持つていかなかった。しかし、吸魂鬼の接吻が執行される寸前に、どういう理由か忽然と消え失せた」

「……消え失せた？ それはまた意味が解りかねますね」

やはりぴくりとも表情を動かない寮監に、流石に困惑の言葉を返す。

「姿くらしがホグワーツ内では不可能な以上、尋常な手段では不可能では？ 噂に聞く希少な『透明マント』でも使いましたか？ どうか、警護の者は一体何をしていた訳です？ その人間の話は？」

「非常に遺憾な事ながら、部屋の中にはシリウス・ブラック以外誰も居なかった」

「……まあ、どういう経緯でそんな事になっていたかは、聞かない事にしましょう。どのような場合でも、不愉快な事にしかならないようですからね」

魔法省の人間が大犯罪者を恐れて職務放棄したにしろ、あの老人の意図が介在しているにしろ、或いは他の理由が存在するにしろ、どの道ロクでも無い事は明らかだった。

「……それで、寮監は一体何を僕に聞きたいのです？ 正直言って、シリウス・ブラックについて僕が知っている事は余り無いと言って――」

「――ポッターだ！」

そこで、寮監の堪忍袋の緒が切れた。

「このような珍妙極まりない事には、間違いなくポッターが絡んでいる！ そして、ダンブルドアもだ！ あのグリフィンドール共は、あらゆる事かシリウス・ブラックの妄言を信じ、逃亡に手を貸した！ 魔法界の法を犯し、社会の秩序を乱し、人々の安寧を害し、己の愚昧さを証明するような行いをした！」

その怒声は廊下にまで響き渡るのではないかと思う程に大きく、耳鳴りに顔を歪めざるを得なかった。この寮監は、城中の人間を起こしたいのだろうか。

「……そうで有ったとして、何故僕に聞くのです？ その話の中に、スリザリン寮内で眠りに就いていた僕が出て来る余地など無い筈ですが？」

「我輩は知っているのだ！ お前がダンブルドアとこそこそと接触していた事を」

……成程、それは盲点だった。

「お前は学年初めから、校長室へと何度も通っていたな？ 真つ当に廊下を使用していなければ誰も気付かぬとでも？ それは余りにも我輩を見くびり過ぎだ……！ そして、我輩が問い詰めてみれば、ダンブルドアは語るべき事では無いと言って回答を拒絶した」

思い返せば、去年に僕を呼びに来たのはミネルバ・マクゴナガル教授だった。

まああの老人が彼女相手でも閉心術の事を語るとは更々思えないが、しかし寮監がその内容を知る機会というのはまず無かったのだろう。

そしてまた、僕とあの老人との間で為された会話の内容は、この寮監にこそ語るべきでも無かった。元死喰い人——しかも、恐らくスパイなどという怪しまれる立場の人間——に対して、分霊箱の事を知られるというのは、余りにリスクが高すぎる。

ただ、やはり寮監の考えは勘違い甚だしかった。

「生憎ですが、その件はこの騒ぎの真相とも関係有りませんよ」

激昂する寮監を前に、僕は肩を竦める。

「校長閣下と接触が有ったのは事実ですが、冬季休暇中でそれは既に終わってしまった。あれ以降、僕は校長閣下に接触していませんし、何をやっているのかも知りません。そして、今年は今後も接触してやる事は無いでしょう」

今回何をやらかしたのか知らないが、あの老人は全てを語ってくれる程に素直では無い。

一昨年は説明責任。去年は真実追求。その何れにも、あの老人なりの意図が有り、僕との会話は老人にとって必要性を見出せる物だった。しかし、今年のシリウス・ブラック関連の事象において、僕が必要とされる事は有り得ない。

シリウス・ブラックはハリー・ポッターと深く関係を有する人物であり、また今年はかつての親友が——リーマス・ルーピン教授が都合良く校内に居る。今日は満月だから話を聞けないだろうが、夜が明ければ事情聴取は出来る筈だ。そう考えると、僕の存在が必要とされるような隙間などやはり存在しなかった。

だからこそ、それは確信で有ったと言って良い。

けれども、そのような正論は、怒りで歯を剥き出しにする寮監には通じないらしい。

……まあ、このような言葉で納得出来るならば、セブルス・スネイ

プ寮監では有り得ないと言えはそこまでだが。

そして、残念ながら僕は寮監を止める言葉を偶々持ち合わせて居た。

「要するに、アルバス・ダンブルドアが学年当初に予想していた通り、シリウス・ブラックは無罪だった。つまりは、ピーター・ペティグリューが生きていて、彼こそがポッター家の『秘密の守人』だった。今回の真相はそういう事ですか」

「……………」

半ば遣る瀬無く紡いだ僕の言葉に、寮監は眼を剥いた。

別に、その内容自体に衝撃を受けた訳では無いだろう。発言の端々を聞く限り、寮監はそれを否定する立場だ。だから、僕が言った事自体が——恐らく、アルバス・ダンブルドアやハリー・ポッターの言い分と殆ど一致したであろう事こそ、その表情だった。

だが、寮監は我に返り、今度は僕に対して嫌悪を剥き出しにした。けれども、僕はそれに馬鹿正直に付き合う気は無かったし、僕が言葉を吐く方が早かった。

「ハリー・ポッターはシリウス・ブラックの無罪を主張したんでしょう？　ならば、ピーター・ペティグリューの事を何と言っていましたか？　出来れば、十二年前に衆人環視の状況で大通りを吹き飛ばして死を偽装した手段まで判明すると有難いんですが？」

「言うまでもない……………！　あのポッターめ達は、ウイーズリーの鼠がどうか、ピーター・ペティグリューが『動物もどき』だとか、そのような明らかに錯乱した内容を——」

その言葉が、途中で切れる。そして、寮監の表情が醜く歪み、歯噛みした。

気付いたのだろう。思い当たったのだろう。

……………ただまあ、僕は遠慮してやるつもりは無かった。安眠している所を叩き起こされたのだ、寛容になど成り得ないのは当たり前前だった。

「しかし、錯乱しているとは酷い言い草ですね。論理の欠片も無い。寧ろ、僕としては貴方が逆に、シリウス・ブラックが有罪だと考える

よう、ピーター・ペティグリューから錯乱の呪文を掛けられている可能性こそ主張したい所ですが」

「……っ。ポッターは十三の若造だ！ その証言など信用に値せん！」

寮監はそう反論する。気付きながらも、しかしそれを認められないというように。

そして、全くもって都合が良かった。今の寮監には何時もとは違い、付け入る隙が有り過ぎた。解ってはいたが、余程シリウス・ブラックに対して強い憎悪を、復讐の念を抱いていたという事らしい。そして、その感情は、賢人の眼を曇らせるには十分だという事だ。

「馬鹿な話だ。非魔法界では六歳程度の人間にも証言の価値を認めますよ。十七歳に達して居ないからと言って、それが無価値な筈も無いでしょう」

僕は冷笑し、そして続ける。

「第一、既に貴方はお忘れのようですが、前回の魔法戦争において、自分は服従の呪文を掛けられて闇の帝王に従っていたという、信じるに値しない証言が裁判中にどれ程有りましたか？ 僕は今まで彼等が十三歳以下の少年少女だったとは知りませんでした」

「！ それは関係無いだろう……！」

「ええ、ですからやはり単なる皮肉ですよ」

寮監は激昂の表情を見せ、しかしそれは僕には張子のようにしか見えなかった。

「元死喰い人である寮監に聞きますが、シリウス・ブラックは死喰い人だったんですか？」

言葉を遮って発した僕の言葉に対し、寮監は怯んだ表情をした。

「まあ、スリザリン寮の死喰い人関係者も知らないようでしたので予想はしていましたが、その様子だと貴方もそのような事実に関心当たりが無いようですね」

僕としては、シリウス・ブラックが死喰い人である事実を寮監が知っていた可能性を一応排除しては居なかった。仮にその場合だと面倒な事になるとも考えていたのだが、しかし、そうでないのであれ

ば話は至極単純だった。

「嗚呼、別に反論は要りませんよ。円満な職場形成の為に闇の帝王がスパイの顔合わせをしてくれるとも思えませんしね。だからそれから解るのは、シリウス・ブラックが死喰い人で無かったという事実では無く、貴方は仮にピーター・ペティグリューが死喰い人であったとしても同様に知らない立場に在っただろうという事実です」

「……………」

論理というような仰々しい表現も要らない程の、単純な理屈だ。

「そもそも信用性の話ならば、僕はハリー・ポッターを支持しますよ」
そしてこれについても、やはり単純な、人の感情を踏まえた上での理屈である。

「ジェームズ・ポッターとリリー・エバンスの殺害の一件に、貴方は何ら利害関係の無い第三者だ。一方で、ハリー・ポッターにとって、シリウス・ブラックは愛する両親を裏切った憎い仇の筈だ。であれば、シリウス・ブラックを陥れる証言をする事は普通でも、それを庇う必然性は無い」

寮監は何故か絶望的に打ちのめされた表情をしたが、知った事では無い。

僕は、但しあるとすればと容赦なく続け、それを口にした。

「彼が本当に無罪で、仇が別に存在した場合ですがね」

そして、どれ程までに魔法界が曖昧のままに物事を進めているのか解るものだ。

吸魂鬼^{死刑}による接吻^{執行}がされる寸前だった？

非魔法界のこの国では、死刑制度はもう数十年前に事実上廃止されている。

それは国家による個人の権利の究極的剥奪という行為に際して、適正手続を保証しきれないと断じたが故である。僕としては別に死刑制度の是非などどうでも良いが、しかし最低限の手続保証が無いままに即執行は普通に問題だろう。

特にシリウス・ブラックの場合は、十二年前に裁判をやらないうまま監獄に叩き込んだのだ。

たとえフリで有っても、表向きの建前や大義は必要だ。でなければ、暴力という規則こそが至上命題となってしまう、行き着く果ては無秩序で有る。

その点で言えば、まだ闇の帝王の方が、まだ話が通じる存在と評すべきだろう。少なくとも、彼は純血至上主義という解りやすい法則の下に統治を試みようとしたのだから。

とは言え、その適当さの割にのうのうとシリウス・ブラックを十二年生かしておいた事が不可解——と一瞬考えたものの、そう言えば、アズカバンは更生施設でも贖罪施設でも無く単なる拷問施設であった。

楽に殺したくないから監獄に叩き込んでいるだけで、生かしたくて生かしている訳では無かった。正気を喪って勝手に衰弱死してくれるという効率的なオマケ付きですら有る。その割に闇の魔法使いに対しては効力が薄いというのは……成程、あの老人が忌み嫌うだけ有るかも知れない。

ただ、今は魔法界の司法制度について語るべき場などでは無かった。

「既に寮監も御気付きのようですが、『動物もどき』ならば死を偽装する事も簡単ですね。非魔法族は人が鼠になるとは思わないから、爆発後に跡形も無く消えれば粉々になったと考える。残っていた肉片は指の一本、ならば自分で切り落としてもしたんでしょうかね」

それに変化出来る事を知っていたであろうシリウス・ブラックが気付かなかった、或いは逃げ出した鼠への執拗な追跡に移らなかつた事は疑問だが——それ程までに実際の爆発現場というのは破壊的で、彼にとって予想以上の物だったのかもしれない。

本当にガス管を爆発させたか、或いは非魔法界の爆弾を用いたりしたのか。

無論、大穴として、彼が卓越した魔法使いで有った可能性も大いに存在する。ギルデロイ・ロックハートが一分野において天才的であったように、首席や監督生の陰に隠れたピーター・ペティグリューが、彼等と同様の傑物で無かつた可能性を否定する材料は全く無いのだから。

ら。

「となれば、他の二人、ジェームズ・ポッターとシリウス・ブラックも『動物もどき』だったと考えるのが素直でしょうか。嗚呼、確か『動物もどき』への変身には杖が不要だった筈ですから、シリウス・ブラックがアズカバンから脱獄した手段もこれで説明が付きそうですね。人の方は脱走対策をしているとしても、動物まで防ぐ構造とは思えませんし」

『動物もどき』は高度な魔法だが、その「魔法的」性質に比して、魔法族にとつては魅力的な魔法では無い。何故なら、犬や猫に変身した所で、何ら強靱になれる訳でも無く、利便性が増える訳でも無いからだ。

魔法族には羽の代わりに箒や姿現しが有り、牙の代わりに死の呪文や磔の呪文が存在する。

そして何より、一時的な姿の変容で有れば、単なる変身術を用いる事も可能だった。無論、『動物もどき』まで行き着く魔法使いは殆ど例外無く卓越した変身術の腕を持つ事は言うまでも無いが、しかしながら見た目が映える割に非主流マイナーな魔法の典型と言って良い。

それを敢えて習得した理由は——三人が習得したという予想が正しいという前提で有ればだが——これまた予想出来なくも無い。但し、仮定に仮定を重ねたものである以上、大した確度を有するものは無いのだが。

しかし、少なくとも同時に判明した事が有る。

それはリーマス・ルーピン教授も『動物もどき』の事を知っていたという事だ。

加えて彼等が未登録非合法で有る事もまず間違いない。

仮に登録されているのであれば、シリウス・ブラックが魔法省の眼を掻い潜って逃亡を続けられる筈も無いし、何よりアルバス・ダンブルドアがさつきと捕まえているだろう。

あの老人が犬猫一匹程度を一年間も捕捉出来ないとすれば、それこそ今世紀で最も偉大な魔法使いの力量を侮つていると言えるのだから。

そしてまた、教授から隠された事に対して僕は何ら落胆を覚えはしない。

誰にだって語りたくない事は有るし、それが親友達の違法行為であるというのであれば猶更だった。アルバス・ダンブルドアにも伝えていないのであれば、わざわざ僕に対して伝える理由など余計に存在しない。

嗚呼、明らかな事はもう一つ存在したか。

「つまるところ、貴方は失敗したようですね」

「――」

打ちひしがれていた寮監は流石にその言葉に顔を上げ、僕の方を憎悪でもって睨みつけ、唇を捲り上げるように歯を剥き出しにし、けれども何も言わなかった。

「貴方がシリウス・ブラックを捕まえ、しかしハリー・ポッターがピーター・ペティグリューは生きていたと主張して彼の逃亡に手を貸したというのならば、貴方もその場に居合わせたという事でしょう。つまり、貴方はハリー・ポッターや“旧友”を憎み過ぎるが故に、真犯人を逃したという事に他ならない」

「……ブラックは、十六の時に殺人鬼の本性を露わにした。あの男は我輩を満月の夜の人狼の下に誘い込み、そして殺そうとした」

その解答には、もはや笑う気にもなれず、溜息を吐くしかなかった。「シリウス・ブラックが忌むべき殺人鬼で有る事と、彼がポッター家の事件の犯人では無いという事は両立するでしょう。頭の良い寮監ならば当然に理解しているでしょうに」

僕は当然の事を述べた。述べた筈だった。

ハリー・ポッター、或いはリーマス・ルーピン教授に対して寮監が理性的になれないのは重々承知しているが、それでも本質的には傑出した頭腦の持ち主で、合理的に振る舞う事が出来る存在であるとは思っている。そして、当然ながらその身に有する才能も。

僕が同じ年数を生きた所で、やはりこの教授までは至る事が出来ないだろう。特に今年度の充実した一年は、それを予感させるには十分だった。やはり、力に惹かれ、それを求めようとも、出来ない人間は

出来ない。そんな諦念を感じないでも無かったのだから。

……嗚呼、だから、それがセブルス・スネイプという人間の逆鱗に触れる言葉であるのだという事に、僕は到底思い当たれはしなかったのだ。

「我輩が頭の良い人間だと……！」

寮監は、ずっと激怒していた。

僕を連れて来る時も、連れて来てからも、僕の正論に打ちひしがれていた時さえも。

だが、それはまだ抑えが効いていたのだと、僕は今この瞬間に知った。

強烈な自己否定と共に僕へと叩き付けられた感情は、ある意味でアルバス・ダンブルドアを凌駕するほどの脅威を感じさせるものだった。そして、それは人間で有れば誰もが当然に持ち得る、強力にして諸刃の武器である筈だった。

「真に頭が良いのならば！ 我輩はあんな言葉を吐いたりしなかった！ その意味を、自身を直視しようとしなくて、闇の魔術に傾倒する事など無かった！ 己の立ち位置が敵対と訣別を意味する事だと当然に理解した筈であり、ましてや余計な密告など当然しなかった！」

「……………」
荒々しく髪を掻きむしりながら発された、その言葉の意図は知れない。

だが、それを考える前に寮監は杖を抜いていた。

去年の決闘クラブの相手は無能であったが為に、寮監が授業以外でそれを行うのを見たのは事実上二年前が最後だった。けれども、今回はあの時以上に速く、滑らかで、そして鋭かった。僕が何度もアルバス・ダンブルドアそれ以上の技量を見た事を差し引いても尚、僕が憧れ、羨み、しかし至る事が出来ないであろう卓越性を証明するものだった。

杖先は、僕の心臓へと向けられている。

二年前と違うのは、寮監が僕に対して本気で魔法を撃つ気があるという点だった。

「ステイブ・レッドフィールド」

「何でしょう、セブルス・スネイプ寮監」

煮え滾る殺意と共に、彼は問うた。

「貴様は、ハーマイオニー・グレンジャーを穢れた血と呼べるか？」

Mudblood

一瞬であれ、その質問に虚を突かれたのは間違いないかった。

寮監が、そのような不可解な質問をぶつける意図が、それを推測する材料すらも、僕には全く思い当たらなかったからだ。

けれども、それを僕から得る事が真に重要だと思っっているらしい寮監は、解答するまで引き下がる気は無いという意思を全身でもって表示していた。

故に僕は、暫しの間考え、そして可能な限り真摯に答えた。

「……恐らく、それが正しいと考えたのであれば」

流石に断言は出来なかった。

しかし、そう確信したのであれば、僕はそれを躊躇わないだろうという予感も有る。

母は、僕に比類なき愛を残した。何も与えられずとも、何も出来ずとも、全世界で唯一譲れない物の為に、ただ想うが故にその命を投げ打ってみせた。

そうであれば、僕がハーマイオニー・グレンジャーを真に愛すると確信し、その時が来たと考えるのであれば僕は同じ事をするだろうし、ましてやそのような存在で無いという諦念が有ったとしても、真意でない言葉を吐いて見下げ果てられる程度の些細な物であれば、僕は好意と恩義の為にそれを行うだろう。

僕の解答に微動だにせず、寮監は問いを続けた。

「ならば、他のマグル生まれを穢れた血と呼べるか？」

「呼べますよ。必要であれば」

今度は先程よりも簡単だった。

僕にとって、ハーマイオニー・グレンジャー以外のマグル生まれに對し、思う所は何も無い。嫌われた所で何ら痛痒を感じないし、そもそも僕への悪評を考えれば、既に蛇蝎のように嫌われている筈だった。だからこそ、それは考えるまでも無い当然だった。

だが、寮監はその言葉にこそ大きな反応を示した。杖腕を震わし、激情を押し殺すように息を深く吐き、そして言葉を紡いだ。

「必要が無ければ？」

「呼びませんよ。そもそも僕は『Maggie』という用語自体が好かない」

NoIwizardkind or NoIwimaj
非魔法族というような表現も直接過ぎて好む所では無いが、自他の識別以上の意味が籠められているように聞こえる『Maggie』の響きに比べれば、遥かにマシなように思えた。ただ、これはどちらかと言えば僕個人の趣味嗜好に近い類の問題であるが。

しかし、僕が答えた瞬間、寮監は天井に向かって哄笑を上げた。

それは、人はこれ程までに激情を籠める事が出来るのだという、悍ましい笑いで有った。そして長い笑いが終わった時、僕の方を再度見据えた時、そこには冷たく滾る殺意が現れていた。

「……嗚呼、我輩は間違っていた。全くもって違っていた。我輩は貴様を嫌悪すべきだと思っていた。似ているとすら考えていた。しかし、違うのだな。嗚呼、そうとも。お前は我輩では無い。相容れてはならないでは無く、相容れようと思っても無理な話だった」

「何を——」

当たり前の事の筈で、しかし同時に細部が僕の認識と違っていた。

けれども、寮監は答えずに呪文を紡いだ。

レジリメンズ
「開心……！」

刹那、僕は自身の成果を發揮する事に全力を尽くしていた。

それは偏に反復訓練の賜物であり、また半年という短期間であつても最高の教師から個人授業を受けた事に基づく当然の帰結である。たとえ相手が杖有りで、本気で開心術を掛けられようとも、容易く余計な情報を掬い取らせる真似を許しはしなかった。

さりとて、やはり所詮は一年の付け焼刃で有り、そしてまた寮監は、アルバス・ダンブルドアに及ばずとも、僕と比較すれば隔絶した力量を誇る開心術士だった。

そして何より手法が違った。アルバス・ダンブルドアの物が掴みどころ無く流麗で芸術的な侵入であるとするれば、寮監の方は僕の心を破

壊する事を厭わない野蛮で暴力的な侵入だった。

寮監の望まない方向へ捻じ曲げようと試み、間違った方向へ誘導する為の罫を仕掛け、全く偽りの記憶を造り出し、最後には虚無の殻で守ろうとも、全ては蹴散らされ、打破せしめられ、意図された目的は達成させられた。

そして、セブルス・スネイプ教授は笑った。

何時も通りの調子を取り戻し、陰気に、ねっとり粘着的に。

ハリー・ポッターに対するのと全く同様の——否、それを上回る悪意と殺意を籠めて。しかし、声色だけは何処か愛撫するように愉し気に。

……僕が真に闇の魔法使いと向き合う経験は、事実上一度も無かった。

三年前は、直接顔を合わせるといふ点においては無いまま全てが終わった。

二年前のクイリナス・クイレル教授は一つの闇の魔法使いの極致では有ったが、それでも僕に対しては教授である事を貫き、スネイプ教授の来訪を歓迎し、僕を連れ出す事を肯定してみせた。

一年前はギルデロイ・ロックハートが僕に対してその内に秘めた本性を露わにする事は無く、真の黒幕には僕が接触する事すら無かった。

だからこそ。

真黒のローブを纏い、暗鬱なる魔法力を全身から滲ませこちらを睥睨するこの教授こそが、僕が初めて直接対面する本物の闇の魔法使いだった。

「成程、成程。校長閣下とコソコソやっていたのはそれが理由か」

意図した目的を達成した教授は、唇を捲り上げるようにして邪悪に笑った。

「悪くは無い。一年にしては上出来だと言えよう。少なくとも、我輩は何故君がそれを学んだのか、また何故校長閣下が直々に教える必要性を感じたかまでは——心を掬い取れなかったのだから。しかしまあ、未だ三流である事も事実だ。そこまで強固に防備を固めては、その先に何か有るのだと疑わせるような物だ」

右手に握った杖を軽く弄びながら、寮監は喜色すら滲ませる。依然として瞳の内に燃える悪意と殺意は揺らいでいないが、表面上は友好的とすら言える態度だった。

「閉心術の基本にして奥義が心を空にする事で有るのは事実だ。しかし、全てを無で満たすというのが適切で無い場合も往々にして存在する。特に、多くを知っておかねば安心出来ない相手に対して、全くの無心というのは危険極まりない」

その言葉は独白めいていたが、やはり僕へと教えを授ける物である。

「相手が見たい物は見せなければならぬ。それも露骨には無い。多過ぎず、しかし少な過ぎず、相手が苦心して掬い取った物と思わせねばならない。そして、その裏にこそ真に見せたくない物を隠し通して見せる。匙加減が重要だ……繊細で、大胆で、時に一握りの人間的愚かさすらも必要とされる作業だ」

「……それは、貴方の経験則に基づく物ですか」

「否、一般論に過ぎぬ。君は我輩が決してそれから逸脱しない事は解っている筈だが？」

「……ええ、そうですね。重々承知していますよ」

そしてそれが全くの間違いでは無い。その教えは確かにあの老人から受けたからだ。

しかし、それを実践出来はしなかったし、仮に試みようとも、失敗した事だろう。教授の前では、僕力など吹けば飛ぶような物だった。けれども、将来の事を考えるのであれば、それは出来るようになっていなければ話にならない筈だった。

「さて、本題に戻ろう。つまり、シリウス・ブラックめの事についてだ」
悠然とした態度で、ゆつたりと教授は言葉を紡ぐ。

「要するに君は、ダンブルドアとの間で、学期前が始まる前に、ブラックが無罪である可能性を共有した。その事について相違無いな？」

「……僕を仲間に入れるのは止めて欲しいですね」

間違った解答である事を予感しながらも、僕は渋々言葉を紡がざるを得なかった。

「それを真剣に検討していたのは、あの老人だけです。僕はシリウス・ブラックやピーター・ペティグリューがどんな人間か知りませんでした。偏向的に歪められた、書籍の情報しか持ち合わせて居なかった。冤罪だと判断するまでの材料は無かった」

「しかし、お前は我輩にその可能性が存在する事を伝えなかった」

「訊かれませんでしたからね。貴方がシリウス・ブラック、ひいてはリーマス・ルーピン教授を怪しんで居たのにも、相応の理由が有るのだらうと考えていた訳です。つまるところ僕はこの件について――」

「――中立的だった。そのように言いたいのだな？」

僕の内心を正確に見透かし、言葉を引き取る。

背筋を凍らせ、酷く心を掻き乱すだけの痛撃を、教授は的確に放つてみせる。

「我輩は去年言った筈だ。お前達は、興味が無い者に対しては酷く冷淡だと。そして、弱者が強者を上回る事も有り得るのだと。だからこそ、貴様等は容易に間違える」

「……今何が、そうであるか？」

「君は今回珍しく物分かりが悪いようだが、我輩はそうのように言っている」

顔を近付けながら、教授は粘つくような言葉で続けた。

「先程において、君は我輩が失敗したと言ったな。しかし、君は自分もまた失敗したのだと考えないのかね？ ブラックの事を我輩に告げず、闇の帝王に忠実なる配下をおめおめと逃がすような事態に陥らせてしまった。その罪科を、全く意識しないで居られるかね？」

「……普通に考えて」

僕は感情を押し殺し、言葉を紡ぐ。

「闇の帝王は十二年間復活出来ないままだった。如何に死喰い人に日和見主義者が多くとも、まさか彼の忠義者が全てアズカバンに行った訳では無いでしょう。それが一人増えたからと言ってどうなるというんです？」

闇の帝王は深く隠れ棲んでいる。

塵のような存在と評しながら尚、アルバス・ダンブルドアは諸悪の根源を見つけ切れず、そしてまた滅ぼし切れていない。滅ぼすのに手順が必要な事は判明しているが、しかし、さながらアズカバンのように手元に管理して置けば如何様にでも出来る筈だ。しかしそれを行わないのは、やはりその隠蔽においてあの老人を超えているという事を意味するのだろう。

加えてその程度は、自身の信奉者で有った死喰い人に対してすら適用される程の、徹底的な物のように思える。

何せ十二年もの間、死喰い人達は、闇の帝王が未だ健在だというような活動を殆ど行っていない。一部の狂信的な残党達ですら散発的で、統制が取れて居なくて、だからこそ英国魔法界の人間の多くは、闇の帝王の死体を確認せずとも、彼が死んだのだと考えているのだろう。

そして、教授は口元を歪めたままに鷹揚に頷いた。

「その通りだ。鼠のようにこそそこそとした小物が、闇の帝王の陣営に舞い戻った所で、大きく物事が変わる訳では無いと考えるのは至極真つ当では有る。だがな、偏執的なまでに疑心暗鬼な我々は、果たしてそれで満足出来るかね？」

「……………」

「お前は今世紀で最も偉大な魔法使いが万能で無い事を理解していたと思っていたがな」

それは失望を隠さない、皮肉の言葉だった。

「いや、我輩が君を過大評価していたのだろう。賢者の石の時の一件にこそ、君の本質というのは明らかにされていたのだから」

二年前。

僕は教授を踏み台として、あの老人と接触した。

それこそが正しいのだと、そのような自惚れた考えのままに。

「君が賢者の石について気付いた事が、図抜けて賢いと我輩は言わん。ダンブルドアがポッター共に気付かせようとしていたのは明らかだからな。あのグレンジャーと付き合いがあれば、思い当たる事は出来ただろう。そしてまた、止めようとした事自体もまた良い。気に入らない物を叩き潰してやりたいという頭が空っぽの行いは、まさしく子供っぽいと評せよう」

そうだ。校長室へ赴く前、僕はその不愉快な物を何としても是正するつもりだった。

子供がうろつく学び舎の中に、危険物を保管するなどというのはどんな理屈が有ろうとも正当化されない。まして、後に解った事では有るものの、同時に校内へと危険人物を招き入れてすら居た。教職者として、そんな真似は絶対に許されよう筈も無い。

「校長室に向かうあの瞬間までは、お前はドラコと一緒に居た。決闘と称してポッターを嵌めようとしたように、秘密の部屋の伝説に乗じてマグル生まれの者達を脅迫したように、或いはクイディッチの試合で吸魂鬼の仮装をしたように、あの時お前は感情の赴くままに「抗議」へと向かった。それはスリザリンらしく無いが、されどその年齢らしい行動だった」

……だが。

「貴様は妥協した」

あの校長室で、子供らしく行う事を辞めてしまった。

いや、僕が最初から子供らしかったという訳では無い。僕は僕のままだった。だから、僕の本質は元より「正しい」物では無かったという事なのだろう。

「賢しき子供のように振る舞わず、愚かな大人のように納得した。拳句、ダンブルドアの行動に賛同すら示し、その正しさを疑わせないままに進ませてしまった。」

——あの老人と接触させれば、君は癩癩を起こすだろうという我輩の予測にも拘らず」

教授はスリザリンだ。僕が教授を理解し得るように、教授もまた僕

を理解し得る。そして、本質だけを考えれば、僕はあの老人に融和する態度を示す事は無かつただろう。だからこそ、その予測が大いに外れていたという訳では無い。

けれども、教授は知らなかった。アルバス・ダンブルドアにとってのアリアナ・ダンブルドアが、僕にとつての母で有つた事を。そして何より、悪辣なる我が父の存在を、この教授は知り得なかった。

しかしその事は、誤ってしまった事に対して、何の言い訳にもならないのだ。

「さて、ステイブーン・レッドフィールド。時間旅行は魔法の中でも最大の秘奥であり禁忌でも有る。しかし、今の君が二年前に戻れると仮定して、果たして同じ行動を取るかね？ ダンブルドアに対して、君は妥協するかね？」

答えはしない。

生徒が教授の思い通りに動く訳では無い。

されど、大概の場合において、正しいのは生徒でなく教授の方だった。

「そして今年。君は間違いなく我輩よりも情報を得ていた筈だった。加えて、君の頭脳であれば、我輩より少しだけ賢い君であれば、今宵の事について上手く解決出来る可能性を有していた。我輩はその程度には君を評価している。だからこそ、君に問おう。

——果たして君は、今学年において本当に正しい選択肢を選んだのかと」

解っていた。己の心が答えを出していた。

今年が気楽だった？

馬鹿な話だ。僕が単に怠惰に身を任せただけだった。

シリウス・ブラックが冤罪か否かにかかわらず、十二年前の真実を握っている者が確たる目的を持って動くという意味を軽んじ過ぎた。如何なる理由が有れど、その行動の先は闇の帝王の存在に繋がっている事など解っていたというのに。

闇の帝王を——塵のような存在で居ながら尚、並外れていた悪の魔法使いの復活を真に防ぐ気が有れば、二年前直接対面しかけたあの脅

威を本当に懸念するのであれば、僕はその復権の可能性を低減させる為にとありとあらゆる最善を尽くすべきだった。それは巡り巡って、ハーマイオニー・グレンジャーを、"マグル生まれ"の魔女を守る事になった筈だ。

だと言うのに、僕は手を抜いてしまった。

「……嗚呼、我輩はお前を、君を責めているつもりは無いとも」

慰めの言葉を、全く本心では無いと解る声色で教授は紡ぐ。

「ホグワーツの三年生一人が行動したとて、一体何を変えられよう？

闇の魔術に対する防衛術教授も、魔法薬学教授も、魔法魔術学校校長も、変身術教授を初めとする他の大人たちも、今回残らず無様を晒し、残らず役立たずだった。だから、君が何も動かなかった所で、何も変わらないし、責任は無いのだ」

教授は残酷にそう保証する。

けれども、僕自身がそれを認められるかは別の話だった。

「我等にこそ責任が存在する。……しかし、嗚呼、愚か者の発言として聞いてくれたまえ。仮にこの先数年以内に闇の帝王が復活する事態に陥った場合、まさに今宵こそ致命的に誤ってしまったのだと。防げた筈の事柄を、見当違いの愚行により看過したのだと」

予言では無い。教授自身が、その発言内容を信じては居なかった。

今宵逃げ延びた闇の帝王の召使いを、そこまで高く評価しては居なかった。

しかし、万が一より遥かに高い確率で、それは確かに現実化しうるという事を、教授は——元死喰い人は断言しきつてみせた。

そうさせたのは、彼の元主人の存在の強大さを重々承知するが故。教授が過去に崇拜を捧げ、そして今をもって尚強い恐怖を抱き続ける悪の大魔法使いとは、そのような存在だった。

「ルーピンも同じだ」

僕に対する物と別種の憎悪を籠めて、教授は低く呟くように言う。

しかし、その言葉こそが僕にとっての痛撃となる事を、教授は真に理解し尽くしていた。

「満月の今宵、ルーピンは脱狼薬を飲み忘れた。懐かしき旧友達との

再会出来るかもしれないという慶事に気を取られ、恐らくは地図を覗き込む事に夢中となつてな」

「思わず呻き、歯を食い縛った。」

それは、駄目だ。それは、在つてはならない。

「我輩は、今年の初め、校長閣下に告げた。狼人間を招き入れるのは譲歩するとしても、我輩が一度殺され掛けた時と同様の事態が再び生徒に対して起きるのであれば、我輩は自身の正義に従つて行動すると。そして、校長閣下は当然了承した」

あの老人ならば、そうするだろう。

無駄に信頼する事を好む人間であり、何より実際、リーマス・ルーピン教授は白だった。

シリウス・ブラックと繋がっているかという一点について、アルバス・ダンブルドアは正しく解答を導いていた。そうであれば、シリウス・ブラックに対する守護として、またハリー・ポッターに対しての教師として、これ程相応しい役割は存在しなかつた。

しかし、それ以外の点において、彼を配置した事は正しかったのだろうか。

「嗚呼、『動物もどき』の事を黙っていたのも置いておこう。それは究極的には生徒を危険に晒す物では無かつたのだろうからな。そして、我輩は最善を尽くしたとも。七面倒な脱狼薬を手間暇掛けて調査し、飲み忘れたような場合は——今宵のような場合は手自ら持つていく事すらした。我輩が嫌がらせをしたと思われるなど断じて許せるものでないのだから」

言葉通り、教授は為すべき事を遣り遂げたに違いない。

単純に、教授が有する恨みを晴らすのであれば、薬に細工をすれば済む。この教授の腕前をもってすれば、完全な改造までは行かずとも、多少効能を弱める程度の事は出来た筈だ。けれども寮監は恐らく、魔法薬学教授としての矜持をもって、それを良しとしなかつた。

「だが、ポッター共の眼の前で、あの考え無しの畜生は変身した。君はどう考える？ 自分が何者か正しく意識しているならば、教師とし

て、大人として、適切に己の体調を管理すべきでは無いかね？ たかが薬を飲む程度、ほんの十秒も有れば足りる程度の行いの筈だが」
リーマス・ルーピン教授は、三十年程も狼人間をやって来た筈なのだ。

その危険を、恐ろしさを、子供が狼人間に堕ちた際に受けるであろう社会的な迫害を、知っていた筈なのだ。

しかも彼は hogwarts 在学時と違い、既に成人してしまった狼人間なのだ。特に満月の晩は厳格に自制しなければ、フェンリール・グレイバックと何ら変わらない、危険な闇の怪物に堕ちてしまうのだ。けれども、彼は間違えてしまった。

To err is human.
人は過つものだが、それでも取り返しの付く物と付かない物が存在する。一度の失敗でも決定的に信頼を破壊してしまう物と、そうでない物が存在する。

そして、今回の件がどちらであるのか言うまでも無い。

「杖を使え」

教授は、傲慢に宣告した。

「レッドフィールド。ダンブルドアから開心術も習ったのだろうか？

我輩がその練習台となってやろう。だから使え。使うのだ……！」

その怒声に弾かれるように、僕は杖を抜いた。

一瞬教授が瞠目したのは、それが教授の予想した以上の速度だったからかもしれない。今世紀で最も偉大な魔法使いが幾度もそうするのを見て来たのだから、当然では有った。けれども、僕にとって一切の喜びを齎すものでは無かった。

レジリメンス
「……開心」

その瞬間に、僕は教授の心をいとも容易く読み解く事が出来た。

一切の抵抗は無かった。無いように見えた。自分が卓越した開心術の腕を有するのだと、その方面に才能が有るのだと強く誤信させる程滑らかに、多くを得る事が出来た。

だが——それは確実に、意図的に招待されたのだろう。

僕はそれを積極的に得ようとしなかったし、それらの思念が教授の中に有る事もまた知らなかった。ただ単純に教授が、僕程度には作為

を悟らせない程に見事な閉心術士だというだけだった。

僕が見えたのは、四人の男達が一人の男を虐める風景。

それも一つでは無く、複数。御丁寧に、学年が上がっても——僕の年齢を超えても尚、それが続けられていた事まで見せてくれた。

その一人の側は、勿論セブルス・スネイプ教授である。そしてその四人の方もまた、その内三人とは直接会った事は無いにしても、全員の名前を識別する事が出来た。それらの誰もが、未来の姿へとその面影を残していた。

「見たか？ アレらがジェームズ・ポッター、シリウス・ブラック、リーマス・ルーピン、そしてピーター・ペティグリューという愚連隊の本質だ。傲慢で、不愉快で、独善的で秩序を気に掛けない、自分こそが社会正義の化身だと疑って居ないグリフィンドール共だ」

教授の腕前で有れば、嘘の記憶を作る事が出来ただろう。

そして僕程度の力量では、やはりそれを見破る事は出来ないだろう。

だがそれでも、見せたくない部分を隠そうとした面が有ったとしても、教授が全くの偽りを造り上げて開示した訳では無いというのは理解していた。教授の態度が、声が、感情が、そして何より僕の急所を正しく把握しているで有ろうスリザリンの存在が、そのような無駄な事をする筈も無かったのだ。

「そして、リーマス・ルーピンという低劣な男よ……！ あれは仲間達に好かれ、集団に所属し続けたいという我欲のみが先行し、本来のグリフィンドールの気質を——騎士道精神的な正直さも勇敢さも何ら持ち合わせていない馬鹿者だ！」

それ自体が非難に値する訳では無いだろう。そう思ってしまうのは真つ当的な感情だ。

また、彼が何も止めなかつたからと言って彼が悪であるという訳ではない。人は一概に割り切れる物では無いという事は、誰よりも多面的なアルバス・ダンブルドアが、眼前に居るセブルス・スネイプ教授が、我が母が、そして父が、そうである事を僕は見て来た。

けれども、そのような心の大半を確かに占めているその人間の本质

が、ふとした瞬間に顕れ出る事を——それが時には致命的な間違いを招く事もまた知っている。

「あの男は、二十年近く経った今でもその本質を変えていない。何もしない事が正しいと考えている、ポッターとブラックの腰巾着でしかない。……そしてレッドフィールド」

「……………」

「スリザリンである君には告げておこう。我輩は今朝、ルーピンの秘密についてうっかり口を滑らせるような心持ちである。さて、君は止めるかね？ 君はあの教授が辞めさせられない事こそが、社会の理屈として正しいと思うかね？」

「…………その行いに、僕の解答は必要ですか」

僕の絞り出した言葉に、教授は陰鬱な微笑みを返した。そして、それで十分だった。

「……寮監、うっかりであるから正しいも何も無いでしょうが、しかし仮定の話をさせてもらうならば、些細な過失でそれを行ったとしても、貴方は間違っていない。そしてアルバス・ダンブルドアは正しい行為を止められない。少なくとも僕は、そう感じて居ます」

教授の希望通り、その当然の立場を宣言する。

その裏に僕がどんな想いを抱こうとも、それは確かに僕の価値観であるのだから。

リーマス・ルーピン教授は、今まで教授足り得て来た。

つまり、これまで彼の秘密を——狼人間である事を、殆どの者から隠し通す事に成功してきた。彼は毎月不可避免的に起こる変身の為に一ヶ所に留まる事は出来ず、それ故に本来の能力を考えれば余りに役不足な仕事に従事し続けていようとも、真の意味で狼人間を取り巻く受難に対して彼自身が直面した事は無い。

しかし、それも終わる。

もはや平穏と幸福の日々は訪れない。彼は侮蔑され、迫害され、何処にも受け容れられる事も無く、死ぬまで異端で在り続ける。

その結末の決定的な引き金を引くのは眼前の教授であるが、されどそれを何もせず見逃すという点において僕は同罪だった。何もしな

い事も、行動する事も、目的を果たせなければ同罪であり害悪ですら有る。それが、此度の苦い教訓とも言えた。

だが——僕も一方的に終わらせる気も無かった。

……それが意地ですら無く、全く持つて無意義である事は理解していたけれども。

しかし何であれ、僕に開心術を使わせたのは、悪手とは言わないまでも緩手だった。

教授は僕から正しく事実を隠し通したが、しかしそれでも読み取れる事柄というのは存在する。開心術とは書物を読むが如く心を覗くような単純な術理では無く、深淵にして重層的な迷宮の中から真実を拾い上げる作業であり、そして何より僕もまたスリザリンである為に、それを見通す事が可能だった。

「僕がハーマイオニー・グレンジヤーに固執するように、貴方もまたリリー・エバンズに執心している。一年時から貴方が僕を嫌い続け、そして僕が貴方の事を好きになれなかった根源の理由は、そういう事ですか」

その言葉に教授は揺らぎ、だがすぐさま平静を取り戻した。

流石にそこまで意図して読み取らせようと思つた訳では無いだろう。教授が僕に対してそこまで親切な真似を行う義理はやはり存在しない。

けれども、知られた所で教授にとって痛恨という程では無かった。御互いが御互いの弱みを握っているのだから、寧ろ状況が解りやすくなっただけだった。

「……成程、僕は貴方と相容れてはならないと心の何処かで感じて居ましたが、しかしそれは勘違いだった訳ですね。僕は望んでも貴方になれない」

この教授が今此処に存在する事こそが、僕と教授が似て非なる絶対の証だった。

「だろうな。我輩もそう確信している。そして、それを知れただけで今宵は我輩にも一応の収穫が有った。つまらん物では有るが」

そう表情だけは冷淡に告げ、しかし瞳と言葉には灼熱が渦巻いていた。

「都合が良いからついでに忠告してやろう。我輩には珍しく、善意をもつて」

黒衣の闇の魔法使いは、僕を睥睨する。

「なあ、レッドフィールド。君はこの三年間、小賢しく、そして上手く立ち回って来たつもりなのかも知れぬ。そして、目的を幾何か果たしたのやも知れぬ。けれども、考えた事が有るかね？　闇の帝王が復活した際に、君がどう見られるかという事を」

言われずとも解っている。

僕は目立ち過ぎた。そして、それが実力に対し分不相応だった。

真なる闇の帝王の前では僕は塵以下の存在であり、行動も思考も容易く蹂躪される事だろう。逆らう事など出来はしないし、勝利する事などもつての他の筈だった。

であるからこそ、僕はやはり闇の帝王が復活する事に繋がる事態を予見すれば、採るべき行動は最初から一つしか無かった筈だった。そして既に、歯止めを利かせる事が可能で有ったその分岐点は通り過ぎ、その点において最早取返しが付きようもない。

「便利な従者^{手足}を獲得した闇の帝王が復活されるまで、果たしてどれだけ掛かるだろうな。四年か、三年か、或いは一年か。あの方の知識と叡智は、君が想像する以上に深いぞ？」

塵のような存在。一歳の赤子により凋落を齎された存在。

しかし、それでもアルバス・ダンブルドアは警戒し続け、そして心の何処かで復活を疑っていない。史上最悪の魔法使いというのは、そのような不世出の傑出した怪物だった。

「無論、君が逃げるといっているのであれば構わない。少しばかりの優秀性を見出しはしても、たかがホグワーツの学生一人に固執する方でも無いからな」

だが、と教授は続ける。

「君が在学中に闇の帝王が復活し、それでも特定の目的の為に君がここから逃げようとしないう場合。君は死喰い人候補生として当然に選

扱を迫られるだろう。そして、自身の命を保全するという最小限の目的に留まらず、闇の帝王の眼を盗んで己の目的を果たそうとするならば、その道程は酷く険峻な物になる」

残念ながら今年、ハーマイオニー・グレンジャーとハリー・ポッターの絆は破壊されなかった。寧ろ、それを強固にしてしまったのかも知れない。泡沫の感情を——彼女の一時の、いずれ終わる幸福を願ったが故に、取返しが付かない事を招いたのかもしれない。

しかし、僕はこれから何を為すべきなのだろうか。

クイリナス・クイレル教授は、闇の帝王に叛逆しようとした末路を示し、同時に、真なる邪悪の前では逃げるべきだという言葉を残して死んだ。

ギルデロイ・ロックハートは、身に余る大望を抱き、英雄に対して害意を向けた結果その代償を支払い、自身の存在を喪失した。

そしてリーマス・ルーピン教授は、敬意を抱くに値する大人であった筈の彼は、間違っではいけない部分で致命的に間違い、己の不始末によって自ら平穏な生を放棄した。

彼等からの教訓の下で、僕はどう動くのが正しいのだろうか。

その答えは出そうになく——しかし、いずれ出さなければならぬ時が必ず来る。

「闇の帝王は、無駄に慈悲を御掛けになる存在では無い。そしてまた、アルバス・ダンブルドアも冷徹な策謀の過程に容赦を放棄出来る存在だ。リリーは死んだ。我輩がどう動こうとも、どう無様に請い願おうとも、儂く命を散らされた。偉大なる英雄達の狭間で、凡庸なる我輩の意思や希望が受け容れられた事など、真に一度も無かったとも」

その瞳の内に、苦渋も悲嘆も読み取れない。

セブルス・スネイプという存在は、その物語は既に終わっていた。僕が一つの終わりを迎え、しかし新たな固執の対象を見出した一方で、彼は既に執心の対象を喪い、そして何も始められなかった。彼の心は現在に向けられておらず、過去に留まっている。

「ステイブーン……否、ステファン・レッドフィールド。君がハーマイオニー・グレンジャーを、己にとって真に大事な存在だと考えるので

あれば――」

セブルス・スネイプ教授は、既に失敗した者として、重々しく忠言を残した。

御互いの息の掛かる程に近い距離で、しっかりと視線を合わせ、殺意と憎悪、そして僅かばかりの羨望を籠めて。

「――良く考えて行動し、良く考えて選べ。本当に重要な事を間違えないように」

期末試験が終われば、学生の一年など既に終わったような物である。

狼人間が教授をやっていたという醜聞は大いに話題となったが、休み前で浮かれる生徒の前では所詮は一過性の物でしかない。

そして、さつさと消費されて忘れ去られる事になったのは、リーマス・ルーピン教授が大多数の生徒にとって良き教師で有ったというのも少なくないのかもしれない。つまるところ狼人間という疑いなく邪悪な存在が、善良な行いをする存在である事など有ってはならないからだ。

試験終了の翌々日、ハーマイオニー・グレンジャーから、ふくろう便が届いた。

正直言って、迷いはした。やはり断るべきだと感じはした。だが、彼女をずっと避け続ける事は出来ないし、理由を告げないままでは彼女は強情さを発揮するだろう事も予測が付いた。そして何より――彼女が僕の解答を持っているのだという事を、期待してはいた。

久々に会う彼女の表情は、酷く晴れやかだった。

友人二人と喧嘩していた頃とも、仲直りをした後も尚神経質で有った頃とも違う。試験中の苛々していた態度とも違う。何の心配も持たず、未来に対して希望を持ち、明るい将来を何ら疑っていない善なる表情だった。

彼女の問題は完全に解決していた。それもこの上無く良い方向に。

まるで何らかの冒険が、彼女を一回り大きくしたようだった。

「ねえ、ステファーン！ バックビークが逃げた事を聞いたかしら？」

「……ああ」

弾むような言葉に、僕は小さく頷く。

無論、ドラコ・マルフォイが癩癩を起こしていたから知っていた。

「その事だけど、あのね。私も色々と考えたけど、やっぱり裁判に一番協力してくれた貴方には言っておくべきだと思って。実は、バックビークは——」

「——度し難い事に、魔法省の役人が正規の手続をもつて下した判決に反し、魔法大臣の眼を掻い潜って逃亡した。それ以上でも以下でも無いだろう」

「……え？」

彼女は僕を見上げ、僕は彼女を見下ろした。

「話すべきでない事は有る筈だ。君が学年中一貫して、全ての選択科目を取るのに使っていた手段をハリー・ポッター達にも告げなかったように。秘密というのは、容易に明かされてはならない。世の中には、口を噤まなければならぬ事実というのが有る」

ハーマイオニー・グレンジャーは、酷いショックを受けているようだった。

……嗚呼、それは不可避な事だろうと、頭の何処かで理性が言う。

僕は今まで一度たりとも、彼女に対して感情的な振る舞いをした事は無かった。僕にとって、己の模倣対象であり、超え続けていなければならぬ存在は——父は、一度も子供に対してそのような態度を見せなかった。僕はその行いを学習する機会が存在しなかった。

けれども、今の僕はそう在る事が出来なかった。

「……すまない。君が少しばかりでも打ち明けようとしてくれた事は多少嬉しく思う。だが今は、頭の整理が付いていないんだ。これは僕の個人的な、君には全く関係無い事情だ」

「ステファア——」

彼女が後ろで何かを言っていた。けれども、振り向く事は出来なかった。

理屈では無かった。これが自分にとって正しい行いでは無く、彼女を傷付けるような間違った行いにしか過ぎず、何の結果にも繋がらないというのは解っていた。

だが、僕の奥底から湧き上がる衝動的な激情がそうさせた。

たとえそれがどのような結末を導く事になろうとも。今の僕の心は、その愚行を肯定していた。

その後、ハーマイオニー・グレンジャーが僕を呼びだそうとする事も無かった。

僕は図書室に以降一度も向かう事無く、残された日々は何事も無く過ぎて行った。平和であり、気楽であり、日常的で、単なる一学生の風景を超えるものでは無かった。

アルバス・ダンブルドアからの手紙はやはり来なかった。

リーマス・ルーピン教授からの手紙もまた。

そうして、僕の三年目が終わった。

炎のゴブレット パスカルの賭け

要するに、僕は何を模倣したのかという話だ。

子供は、周りの人間を見て——特に親を見て成長する。

己の取り巻く社会とは、世界とは、子供にとって不断の学び舎である。

けれども、僕の世界というのは狭かった。母に優しく「収容」され、プライマリースクール初等教育にも通わずただ学習し続ける事を強要された僕は当然に、自宅以外の場所や、母以外の人間という物について、殆ど無知のままだったと言つて良い。

まして、一番近い対象である母は狂っていた。

特に僕がそれなりに成長して以降は、衰弱し、より狂気に蝕まれ、正常に会話が成立する期間というのは段々と少なくなつていった。その事自体が僕の精神の成熟化に寄与したのは否定し得えずとも、母が己の「真つ当」な成長を促す為の手段として不適切であつたという点においては何ら疑いは無いのである。

要するに、僕は子供としての適切な環境を与えられなかった。

必然的な帰結として、本来であれば、僕は成長する筈が無かつた。

自発性を育み目的意識を獲得する事も、劣等感を抱き自身の能力を自覚する事も——或いは、自己同一性の危機に直面して価値観への忠誠を意識したり、社会集団との関係性を構築して愛情という神聖なる不毀の力に憧憬を抱いたりする事も、決して有り得ない筈だった。

けれども、僕は一応の成長を遂げる事は出来た。

何という事は無い。

つまるところ、僕が見て、学び、真似た対象は母では無かつただけだ。

全ての始まりは、五、六歳くらいに出会つた一冊の本だった。

最初にそれと遭遇した時、僕はそれに対して何ら特別性を見出さな

かった。寧ろ、その訳の解らなさによつて理解を放棄し、本の山の奥底に封印すらした。

それは子供として真つ当な反応だったという事は確信を持って言える。その年齢では全く理解出来ないような高度で難解な事をごちやごちやと言つてくる本に対し、一体どうして興味を持つ事が出来るのか。

ただ、僕の心の何処かにおいて、その存在が残り続けたというのは確かなのだろう。

僕の母は学べという指針を寄越しはしたが、何処まで学べという基準を設定はしなかった。

それは母が正気では無かったという理由も有るのだが、さりとてそれを設定しようと思つて出来る物でも無かつただろう。遊戯のように、数値で強弱を付けられるのであれば、この世界はもつと生きやすい筈なのだから。

そしてそうであるが故に、僕は自ら身勝手な目標を設定してしまつたのだ。

意識的では無かつた。けれども、日々の学習の延長線上、自分の成長と進歩の先に、その本をいざれ理解出来るようになるだろうという予感を抱いていたのであり、実際それは或る意味で正しかつた。だからこそ、代わり映えのしない閉鎖的な日常における進捗確認手段として、それを使うようになってしまつたのだ。……その意味を知らず、そうしてしまつた。

ただ、全ては不運だつたというだけなのだろう。

母がその本まで一緒くたに奪つてこなければ、という仮定は意味が無い。僕の父は確かに書物の人であり、自身を託す象徴としてはこれ以上の物は無かつた。

そして、母がその本を僕の手の届く所に置いた事も同様だ。如何に僕が成長する事こそが母にとっての至上命題だつたとはいえ、仮にそれがどんな代物であるかを知つていれば母は僕の為にそれを抜き取つただろうし、仮に途中で僕が母に報告していれば、やはり取り上げただろう。それらは、あの結末こそが保証している。

しかし現実はそのならず、宿業の結晶は僕の手元に留まり続けた。

最初は、詰まらな過ぎて盛大に放り投げた。

二度目、最初の時から半年は経っていたと思うが、それは変わらなかった。

しかし三度目、四度目と、僕がその本を開く事は続いた。そして、回数を重ねるにつれて段々とその間隔は短くなっていった。不定期で有りながらも継続的に、その本を開き、問い、読む事によって、自身を試し続けたのだった。

その本は、子供に対して一貫して不親切だった。不理解の極みだったと言つて良い。

分野、領域問わず、様々な事について語った。訳の分からない内容を教え、ややこしい独演や持論を長々と述べ続けた。僕が聞いていたのかを確認していたかすら定かではない。究極的には、僕に対して自身の話を聞いている事を期待しておらず、単にやる事が無かったが故の暇潰し程度にしか感じて居なかったのかも知れない。

けれども皮肉な事に、だからこそ、僕はその本に段々と魅力を感じて行ったのだろう。

閉じた世界において、その本もまた僕を構成する社会へと変わって行った。最初の予感は正しかった。僕が学び、成長と進歩を続けるにしたがって、その本が語る内容を断片的であるとしても、やはり理解出来るようになって行ったのだから。

最後の二年。母の衰弱が酷くなり、時間により母の存在が蝕まれていくにしたがい、僕は段々とその本こそが唯一の愉しみとなって行った。暇さえ有ればそれを開くようになり、対話し、自分の心を打ち明け、自身という物の大半を注ぎ込み、その本こそが自分自身の価値を唯一証明してくれる物だと考えるようになって行った。

そしてとうとう、最後には半透明をした壮年の男が現れた時、僕は己の、そして母の死を招く終末へと踏み出したのだ。

本から現れ出でた壮年の男は、僕を見て僅かに目を見張り、その後で言った。

「——人生は題名の無い本とも評される。

そして、奇遇にもこの本にも題名が無い。私は私自身を表す適切な表現というのを、最期まで見つけられなかったからね。だからこそ、ステイブ・レッドフィールド君。他ならぬ君にこそ聞きたい。君は、この本に対して、一体何という題名を付けるかね？」

書物というのは、僕にとって喜びで、力でも有ると同時に、殆ど全ての筈だった。

けれども、昨年度のホグワーツから帰って来てから、決定的に間違えたのだと自覚して以降、その慣習に明らかに没頭しきれていない事を自覚するようになっていた。

自分は何をすべきなのか。それが、解らなくなっている。

僕はこの三年間、ハーマイオニー・グレンジャーこそを大きな指針として存在して来た。

母を喪い、成長する意味も喪った中で、彼女こそが僕の存在する意味だった。そして、存在して来たつもりだった。

しかし、真にやるべき事を見失い己の事にかまけた結果、僕は間違った。

リーマス・ルーピン教授の事にしても、闇の帝王の召使いにしても、より上手くやる事は出来た筈なのだ。けれども、手の届く範囲に有った物を、取り零してしまった。そして、当然のようにああいふ結末を招いてしまった。それは僕自身にとって許しがたいものだった。どう考えてもあの失敗は、終末の到来を致命的なまでに進めてしまったのだから。

無論、子供がこのような小難しい事を考える必要など無いのかもしれない。

セブルス・スネイプ教授は、僕に責任が無いと言った。

自分達のような大人にこそ、あの失敗に責任が有るのだと言った。

……嗚呼、されど、その責任はどうやって取るのだろう。

そもそも、それは大人がどうこうやって取り切れるような代物なのだろうか。

金銭で保障出来る範囲ならば問題無い。しかし、事は闇の帝王、史上最悪の闇の魔法使いの事なのだ。彼が復活した時、多くの生が損なわれ、また多くの命が摘み取られる事になる。その中にハーマイオニー・グレンジャーが含まれない保障など無い。そして、それは僕にとって、神ならぬ人では到底償えない重さだとしか感じられないのだ。

だからこそ、僕は今まさに迷っており、そして出来る事が何も無い。力を求めても駄目だろう。

セブルス・スネイプ教授は、闇の帝王の復活を最早既定路線、それも遠くない未来に訪れる物として考えているようだった。

故に、猶予はたった数年であり、しかしその程度の期間で手っ取り早く強くなれるならば苦勞しない。そもそも闇の帝王がそんな簡単に打倒しうる存在であるのなら、かの教授が——僕より遥かに力量と才能において優れた闇の魔法使いが、リリー・エバンスの復讐の為に立ち上がっていたに違いなかった。

加えて、叡智の面においても、やはり求めた所で意味は無い。

あの老人が何も言っただけで来ない事から解っては居たが、父の蔵書の中に、塵のようになった闇の帝王が復活を試みる事が出来るような手段を記す書物——名前のみならず、明確に方法論を示す物——というのは存在しなかった。

実の所、それが存在する可能性は決して低くなかった筈なのだが、母は全ての蔵書を盗み取ってきた訳では無い。要は持つてこなかった本、つまり喋ったり動いたりする類の書物に記載されていた類なのかもしれない。

……結局の所、僕はその三年前から停滞し続けているのだろう。

何も成長も進歩もしていない。ただ知識と、魔法が少しばかり出来るようになっただけで、依然としてその本質は変わっていない。固執する対象がハーマイオニー・グレンジャーへとすり替わっただけで、目的も宛てもなく、無意味に学びだけ続けている。

惰性的に、日常を送り続けている。

だからと言って立ち止まっていたとしても何ら意味が無いのは薄々感じて居るが——理性においてそれを自覚していても、やる気が起きなかった。

本に眼を通していても、眼はその紙面の上を虚しくなぞるだけで頭に入ってきて、思考は何時の間にか諦念に囚われ空転し続けている。こんな事は「収容」の際ですら無かったのであり、比喩でなく人生で初めてだった。

「……全く、自分の事ながら度し難い」

普通の家庭ならば、子供として両親に相談でもするのだろう。

或いは、人生の先達たる教師に対して、答えを求めたりするかもしれない。

けれども、僕の母、そして両親は既に死んで居る以上、相談する事は当然出来ない。

また教師の方にしても、一般的な形では無いとは言え、寮監であるセブルス・スネイプ教授には事実上相談を既にしたような物であり、他に思い浮かぶのはミネルバ・マクゴナガル教授だろうが、選択に迷っているとは違うのであるから、やはり対象として不適切な気がする。

だからこそ、僕はどうかして個人的にこの問題を解決しなければならぬのであり。

そんな時、尋ねを求める音が——ドアノックの音がした。

こんな家にわざわざ来る人間というのは、そうそう居ない。

都会的な無関心により余計な詮索までされる事は無かったが、さりとて母というのは近所付き合いがまともにも出来る人間では無かったし、そもそも幼い子供が頻繁に買い物に出たりすれば、悪目立ちするのも当然だった。

そして母の死後は一人残った僕は夏以外ホグワーツで家を空けている訳だから、一体どんな生活をしているんだと思うのが当然だろう。最低限会釈や挨拶をするようにしては居るが、反応が悪いのは止むを得なかった。

さりとて、出ないという選択肢も無かった。

万が一の場合に困るといいうのも有るし、真つ当な訪問客——後見人だったり、非魔法族の役所の人間である可能性が無いとは限らない。逆にそれ以外でも、どうにかならない事も無い。

「……とは言え、土曜日の朝の十時から御苦労な事だ」

こういう場合に杖持ちというのは便利なものだ。

少なくとも、子供で有っても身を護る為の手段が得られる。無論、自分で撃退するのではなく、『未成年の』ないしは、国際機密保持法を盾にして魔法省の役人を無理矢理呼ぶのだが。警察と違って、逆恨み無しにしてくれる所が最も良い点だろう。

そんな事を思いながら僕がドアを開ければ返ってきたのは輝かんなばかりの笑顔。

「……何故君がここに居るんだ」

流石に衝撃的過ぎて、そう言うのが精一杯だった。

玄関先に居たのは、この三年間で見慣れた野暮ったいローブ姿ではなく、簡素なシャツに動きやすいジーンズ姿という、普段の身嗜みには余り頓着しない彼女らしい私服姿のハーマイオニー・グレンジャーだった。

一度だけ、彼女が僕の家に来たいと言った事が有った。

しかしその時は当然のように、僕は断った。必然的に彼女は僕の住所など知り得ない筈なのだが、けれども幻覚でも何でも無く、彼女は僕の目の前に居る。

「貴方が居てくれて良かったわ！ ええ、本当に……！ 休みだから出掛けているかも知れないと不安だったのよ。ただ、余り早過ぎるのも悪いかと思っただから、今の時間に訪れる事にしたの。居なければ何度か来るつもりでは有ったけど——」

「……別にそれは良いとして、君は僕の家を知らなかった筈だが」

一方的に捲し立てる彼女の言葉を遮って言えば、彼女は更に早口に

なつて言った。

「と、取り敢えず中に入れてくれるかしら？　玄関先で話し込むのも何だし」

「……まあ良いが」

明らかに誤魔化した彼女に、僕は一つ溜息を入れて屋内へと招き入れる。

僕の後ろで露骨に安堵したような声が漏れた事は、聞かなかった事にした。約束もしておらず押しかけて来た以上、断られる事も予測していたのだろう。ただ、ハーマイオニー・グレンジャーを追い返す事が出来る程に、僕は性格が悪い人間でも無かった。

「リビング、いやこの場合は応接間の方が良いか」

「？　ええと、私は別に何処でも構わないわよ。勝手に押し掛けちやつた訳だから」

「そうは行かないだろう。しかし生憎、客をもてなした事など無くてな。まともな来客というのは君が初めてで、作法というのが僕には解らない」

玄関先のホールを通り抜けながら、キョロキョロと見渡したい衝動をこらえているらしい彼女に言えば、軽く声を上げて嬉しそうに笑った。

「私だつて何時もママがしているんだから良く解らないわよ。そして残念ながら、ホグワーツに行くまでわざわざ家に呼ぶ程に親しい友人なんて殆ど居なかったしね。実際は一、二回くらいは有ったけど、ママが何をしてたかなんて覚えてないわ」

「しかし、ハリー・ポッターやロナルド・ウィーズリーが居るだろう」「ハリーは夏休みの大半をプリベット通り四番地で幽閉されてるし、ロンはお父さんと違って、マグル界の生活に対して興味は無いのよ。そして何より、彼等は女の子の家に積極的に来たがる性格でも無いから、今の所、どちらも来てくれそうにないわ」

ロナルド・ウィーズリーの方は兎も角として、ハリー・ポッターの方は地下鉄でもバスでも使用すれば彼女に会いに行けるだろうにも拘わらず、彼女の口振りから考えるに、そのような自由すらない状況

らしい。何ともまあ、英雄様は大変のようだ。

「だから私達が集まるとなれば、自然とロンの家になるのよ。今年の夏の終わりも……その、行く事になってるわ。魔法省で働いているロンのお父さんが、クイディッチ・ワールドカップのチケットを取れたからって、招待されたの」

「……嗚呼、そう言えば今年はそのイベントが有ったか」

一応購読し続けている塵紙こと『日刊予言者新聞』も、最近は半ばロクに読んでいないので忘れかけていた。しかしそれでも薄っすらとは記憶が有るといふ事は、紙面は殆どそれ一色だったのかも知れない。

彼女はクイディッチに余り興味が無かったと思っただが、さりとて去年の寮杯獲得を喜ばない程に野暮では無いし、親友二人とのイベント事を逃すつもりも無いのだろう。去年の友情の亀裂は、完全に修復されたらしい。いや、そもそもそんな物は無かったのかもしれないが。

「君は紅茶で良いか？ 淹れてくるから待つて貰う事になるが」

振り返って問えば、彼女は少し考えた後、首を横に振った。

「……えっと、キッチンまで付いて行って良いかしら？ ただ待つておくのは、その、何と言うか手持ち無沙汰だから。余り色々とするのも何だし」

「別に物珍しい物でも無いがな。……嗚呼、その類のメモは普通の家には存在しないか」

家中に張ってあるメモの一つに眼を留めた彼女に言う。

キッチンは左。

そう書いてあるだけの、この家にしては分量が少なく役に立たないメモである。

「母が解らなくならないように、との配慮だ。とは言え、母が読めていたかどうかは怪しい。家の中で迷う事も珍しくなかったからな。ただ、比較的に迷わない方が多かつた事を考えると、読めていた可能性も無くはないが」

この家が愛に満ちているのは否定しないが、それでもここを母に遺した人間は、内装を新しく改修する暇が有ったらずこの家をこそ処

分すべきだった。

一応子供連れの家族が住むような家という定義には外れていないが、さりとて親子二人で住むには広過ぎ、そして豪華過ぎた。一人になった今など言うまでも無い。

「……女性の字ね」

彼女は軽く腰を屈めて、幼子の手でも届く程の低い位置に張って有ったメモ——電気は消すように、と書いてある——に顔を近付けつつも、触れないように注意しながら言う。

「そうだな。それを遺した方は、酷くまめな人間だったのだろう。心配性過ぎると言っても良い。……微妙に空回りした感じが無くも無いがな」

彼女に応えながら、僕はやかんに火を掛け、棚に仕舞っていたティーポットを取り出す。ティーバッグ以外は久々だが、このような事も良いだろう。

少し沈黙が降りるが、それは彼女がキッチンを興味深そうに見回していたからだだった。

「随分きちんと整頓されているのね」

「それは単純に料理をしないからだ。ホグワーツの生活に慣れた弊害だな。自分で鍋を動かして料理する気がしない。と言っても、昔の母が出来ていただけで、僕は全く出来ないが」

「……ええと、そう言えば、貴方のお母様は？ 出掛けられているのかしら？」

その質問に一瞬動きを止め、そして思い当たる。

そう言えば、彼女は知らなかったのか。彼女と出会った時は印象が最悪であり、その後もホグワーツに居た以上、特に伝える機会というのが無かった。もしかしたら、あの一か月の間に、僕が彼女を家に招くのを拒絶した事も尾を引いているのかも知れない。

思い返せばあれ以降、僕の家庭内の事について彼女が聞いた事は無かった。

「母は既に死んで居る。付け加えるならば、父もだ」

「……御免なさい」

「いや、既に受け入れた事だ。寧ろ、君には早く言っておくべきだった」

一氣に沈み込んだ声に、火を見ながらも淡々と答える。

「玄関先のホールに、写真が有っただろう？ あれが母だ」

「……そう。綺麗な人だったわ」

「世辞でも嬉しい。色々問題は有ったが、それでも良い母だった。そして僕が知る中で最も強い人でも有った。少なくとも僕は、あそこまで強く在れる気はしない」

そう言つて彼女の方へ意識して笑いかけるが、それでも彼女はバツが悪そうだった。

まあ、仕方がないのかもしれない。彼女は「マグル」の、一般的に見て平和な家庭に育った女性だ。死という物が日常的に存在し、尚且つ十三年前まで戦争をしていた魔法界とは違う。ハーマイオニー・グレンジャーにとって、肉親の死とは遠い物で、忌避すべき物だった。そんな善良な少女は視線を彷徨させた後、机の上に堂々と鎮座していた珈琲メーカーに眼を向けた。

「貴方は珈琲の方が飲むの？」

「ああ、そうだな」

話の取っ掛かりを見つけたというような彼女の表情に、僕は笑みを苦笑に変えて答える。

「最初は意地のような物だった。反抗したかったというかな。要するに、大人になりたかった訳だ。母は全くと言って良い程、珈琲を飲めなかったから」

感想を直接聞いた事は無いが、泥水と同じだと思つていた節が有った。

「そして逆に父は、恐らく偏執的なまでの珈琲派だった。今思えば、嫌そうな顔をしていたのはそれも有ったのかも知れないな」

そこまで言葉を紡ぎ、ふと彼女の方を見た。

「——すまないな。このような話は詰まらないだろう」

そう言えば彼女は驚いたような顔をして、しかし顔を優しく綻ばせた。

「いいえ、興味深いわ。貴方が自分の事を語る事は稀だから」

「……そういう物か？」

「そういう物よ」

彼女はクスクス笑った。

「でも、地図はしっかり見た筈だけど、貴方がドアを開けてくれるまで本当に不安だったわ。貴方は殆ど語らなかったから、何となく、貴方はもっと複雑な家庭だと想像していたのだけれど。でも、来てみればこんなに立派な煉瓦造りのお家に住んでるし」

「君は自分の住所を再度良く確認した上で、自分の家のベッドルームの数を改めて数えてからそれを言った方が良い」

「それがどれ程恵まれてるか解ってるから言ってるのよ。……というか、もっと歩いていける程の近所だとも思ってたわ。あの一か月、殆ど毎日会っていた訳だから」

「もう帰らなきゃと一方的に言い捨てた上に、また明日教えて頂戴と颯爽と帰って行ったのは誰だったかを思い出してからそれを言うべきだな、君は」

その言葉に従う義理は全くもって無かったのだが、それに従った事こそ僕の人生の中でも最良の選択の内の一つだったかも知れない。

けれども、三年前を懐かしみながら言った僕に、彼女は頬を真紅に染めた。

「……そこまで、子供っぽい言い方はしなかった筈だわ」

それは僕の言葉の内容自体を否定しないものだが、まあ良いだろう。

……正直言って、意外だった。

あんな終わり方をしたというのに、彼女とこうして自然と話している事が。

けれども、それが喜ばしい事であるのは確かだった。

二人してティーカップを持ち、キッチン内の机に着いた。

僕としては応接間に行くものだと思っていたが、気付けばそうなっていた。何時の間にか会話が途切れていた僕達は、無言のままに、淹れたての紅茶で喉を潤した。

そして、言葉を切り出したのは彼女の方からだった。

「貴方の家の事は、マクゴナガル教授に聞いたの」

「……まあ、そうだろうな」

ホグワーツの教授で有り、尚且つ実際に訪れた事も有るのだ。そして教授はグリフィンボール寮監でも有る。僕の住所など当然知っているし、彼女に対して教える事もまた容易い事であると言えた。

「しかし、良く教えてくれたな。あの人は、そういう所は厳格だと思っただが」

クイディッチを除き、厳格にして公平な魔女。

それが僕の見方であり、また校内の殆どの見方の筈だった。

「その、私も、多少そんな事を思わなくも無かったわ。ふくろう便を送るのを決めるまでも、送った後も、聞いたら駄目な事を聞いちゃったんじゃないと怖かったし。ただ、教授は一緒に地図をお送り下さったわ。……気を悪くした？」

「いや、そんな事は無い」

恐々と僕を見上げる彼女に、僕は首を振る。

「教授が教えたという事は、それだけの意味が有るのだろう。そう思う位には僕はミネルバ・マクゴナガル教授に敬意を払っているし、恩義を感じている」

……僕にとっても有り難かった事は、一応否定しない。

新学期が始まってから、彼女に対してどういう言葉を掛ければ良いのか解らなかった。

だということに、彼女の方から、こうして話をしに来てくれた。そして、何時の間にか、元通り自然に話を出来ている。それで十分過ぎた。……ただ、彼女はそれだけの手間とリスクを支払ってここに来たのだ。

単に遊びに来たかったという訳では無いし、そのような内容であればミネルバ・マクゴナガル教授も当然僕の住所を教える事など無かつ

ただろう。

だから、ハーマイオニー・グレンジャーの用事など、初めから解り切っていた。

「それで、今日来たのは、貴方に話が有って来たの。その、学期末の事について」

「……ああ」

予想通りの言葉が出て来た事について僕は何と反応して良いのか解らず、けれども彼女はカップを両手で持ったまま、優しく微笑んだ。「別に、貴方がああいう事を言った理由は詳しく聞かないわ。ただちよつと、びつくりしただけよ。私が貴方やハリー、ロンに学年中の事を言わなかった事も事実だもの。そして、本来誰にも言うべきではないという事も」

ただ、と紅茶で唇を湿らせた後、彼女は続けた。

「やっぱり良く考えたけど、貴方には学期中の事も含めて、学期末の出来事について伝えるべきだと思ったのよ。ええ、特に学期中の事については、どうやって複数の授業を受けていたかについては、私は約束したわ。誰にも言わないって。けど、本当に必要だと思った時には、その規則を破るべきだというのもまた、私は去年に学んだの」

その点においては、グリフィンドールとスリザリンは近似性を有する。

だから、それ自体を否定はしない。故に、僕が譲れないのは別の点だった。

「……秘密は容易に明かされてはならない。僕はそう言った筈だ」

彼女は肯定するように頷き、けれども真つ直ぐと視線を逸らさない。

「でもそれは原理原則で、私は共有すべき場合は有るのだと思ってる。確かに、口を噤む必要が無いとは言わないし、これは本来隠し通す事実なのかも知れない。けれども、私は本当に、本当に考えた。マクゴナガル教授にも相談したわ。私は貴方に話すべきなのかって」

「……教授は、君の秘密について僕に明かす事を良しとは——」

そこまで言って、しかし思い当たる。

あの教授は、先学期、僕にその秘密についてヒントを出してきたという事に。

「そう。教授は再度釘を刺してきたわ。言っではならないって。でも、同時に仰っていたわ。相手に秘密を持ち続けるという事は恐ろしい事だとも。たとえそれが善意に拠る物だとしても、真意を伝えない事は時により手酷い結果を齎す場合も有るって」

「……………」

「…………… どうしたの、そんな苦い顔をして」

「いや、そこで痛烈な皮肉が返ってくるとは思ってなくてな」

まさか一年前が帰ってくるとは考えも寄らなかった。

あの教授はやはり、意外とユーモアが解る人なのかも知れない。

「皮肉というのは解らないし、善意で伝えないのと今回は違うのかも知れないけど…………… 私は貴方に話すべきだと結論付けた。ハリーの許可も貰ってきたわ」

「……………それは許可し得る類なのか？」

「解らない。でも、良いのよ。あれだけバックビークの為に力を貸してくれた人が余計な密告はしないと私は信じている」

「信じる事が裏目に出る場合もまた有る筈だ」

「なら、貴方はその信頼を裏切る人なの？」

彼女は一瞬の逡巡すら無く、そう言っただけ。

そして、そのような透き通った瞳の前では、僕は何も反論出来なかった。

「まあ、全員が全員諸手を上げて賛成してくれた訳では無いわ。事が事だもの。ただ——」

「ただ？」

僕の促しに、彼女は苦笑を深めながら言った。

「——あの夜、貴方がスナイプに夜中に叩き起こされて詰め寄られたっていうのは、色々噂に聞いているわよ。ロンと、当然反対派になる人も思う所があったみたい」

「……………僕も人の事は言えないが、あの教授も大概だな」

自業自得の面も有るにしろ、それ以外に巡り合わせが悪過ぎるのも

事実だろう。

本質的に邪悪な人では無いのは既に僕に伝わったのだが、さりとて一筋縄では行かない性格をしている事は疑いが無かった。生徒からの敬意を獲得するより、寧ろ敵意と害意を向けられる事こそを快適だと考える、陰気で自罰的な闇の魔法使いだった。

「後は、ハリーの説得と……驚いた事にルーピン教授もその反対派に何か仰ったようだわ。ハリーが教授の個人講義を受けていたのは知っていたけど、貴方も受けていたの？」

「……いや、細々とした助言を受けていただけだ。君が授業に関する質問をする代わりに、授業外の事について幾何かの質問をして答えて貰っていたに過ぎない」

「……そう。まあ確かに、ハリーも似たような事を言っていたわね」

そして結局は見当違いの努力だった。

得た力自体を否定する訳では無いが、やはり忸怩たる思いを抱くのは確かである。

けれども、それを知っているのか知っていないのか。ハーマイオニー・グレンジャーは、僕に言い聞かせるように言葉を紡いだ。

「要するに、貴方が信頼出来るというのは、私だけの勝手な考えじゃないのよ。貴方が今までやって来た行動が、それを支持してる。そして、私は貴方に聞いて欲しいと思ってる。だから、最後は貴方が聞きたいのか、そうで無いかだけ」

何時の間にか、彼女はティーカップから手を放し、机の上へと身を乗り出していた。

僕がカップを握る手にその手が触れようとしている事を、しかしながら触れ切れないでいる事を、そして軽く震えている事を、否応無しに意識せざるを得なかった。

やはり迷いは有った。それを僕に告げるという事が、しかも学期末と違い気軽な気持ちでは無く、それも物語の核心部分まで口を開く事が、彼女の立場を悪くするのでは無いかと。

けれども、彼女は既に逃げ道を塞いでいた。

彼女は考え、準備して、そして僕へと向かい合おうとしてくれてい

た。

「どうするの？ 貴方は聞くの、聞かないの？」

「……そうだな。聞こう」

ハーマイオニー・グレンジャーは、あの老人とは違う。

彼女が本気で僕へと話したいと思っている以上、僕はそれを聞き届ける事こそが利益が有る。それは考えなくとも、解り切った話だった。

話の構図としては、単純だった。

逆転時計。学生には大それた魔法具を用いて、彼女は複数の授業を受けていた事。

一匹の狼人間と三人の「動物もどき」。シリウス・ブラックの冤罪が明らかになり、しかしリーマス・ルーピン教授が変身した為に、ピーター・ペティグリューが逃げ出した事。

彼女達の時間旅行。過去へと戻り、バックビークを処刑から救い出し、同時にシリウス・ブラックを救い出し、彼の逃走を幫助した事。

何故、その日に叫びの屋敷とやりにリーマス・ルーピン教授に加えてスネイプ教授まで集まる事が出来たのかというような細かい点は、残念ながら教えられないと彼女が断わったが、取り立てて関心を惹く物では無く、そもそも全体像を把握する事に支障は無かった。

逆転時計という根幹を除けば、僕が想定していた物とそう外れるものではない。

シリウス・ブラックの無実も、「動物もどき」の事も、既に既知の情報で有った。

だからこそ、特に気になったのは二点。

逆転時計という時間旅行を制御しうる魔法具が、僕の想像よりも遥かに強力な代物である事、つまり、やりようによっては未来を破壊出来る物である点。

そしてシビル・トレローニーの予言。セブルス・スネイプ教授の予

測の正しさを保証する、昏き将来の到来が確定されたという点である。

しかしいずれの事柄についても彼女にわざわざ伝えるような内容などでは無く、故に僕が聞いたのは、優先度が低くとも、彼等だけが知り得るであろう物の見方だった。

「……アルバス・ダンブルドアは、何と言っていた？」

構図としては単純でも、話し切るには相応の時間を費やした。

再度沸かした二杯目の紅茶で口の中を潤した彼女は少し考えた後、口を開く。

「えっと、シリウスを救う際に？」

「君達がやるべき事を終えた後でだ。ハリー・ポッターに対してかも知れない。時間の因果に関して、あの老人であれば何かを言っていた筈だ」

「ちよつと待つて頂戴。確か、ペティグリューを逃がしてしまった事について、校長先生は平静を保っていたって。後は、『我々の行動の因果というものは、常に複雑で、多様なもの』だとか。後は、ペティグリューの命を救った事で繋がりが出来たという事かしら」

後者の方は直接僕に関わる物では無い為に優先度が低いが、しかしそれもひつくるめて、あの老人はその言葉を紡いだのだろう。

ただ、やはり正面から認めたくないというのが一番先に来るが。

言ってみれば、シリウス・ブラックが救済される事は因果によって初めから決定されていた。しかし、逆に、死が因果によって決定されている場合も存在しうるのだ。

今回は偶々そうならなかったが、けれども仮にその時が訪れた時、複雑で多様だから良いモノなのだと言って受け容れろというのは――僕には出来そうにもない。そもそも、僕はそのような決定論的立場には頷きがたい物が有る。

まあ、僕が我儘過ぎるのだと言えば、それまでなのだが。

「……貴方はまず校長先生を気にするのね」

その言葉に、思考を巡らせるのを止めて僕は顔を上げる。

彼女は、その瞳に不思議な色を湛えて、僕の方を見つめていた。

「いいえ、薄々気付いていたわ。貴方がダンブルドア先生の事を語る時は、まるで新しい間柄のように感じられていた。でも、普通はそんな事は有り得ないと思ってた。当然私は校長先生と一対一で話した事は無いし、あのハリーにすら、滅多に御会いにならないのだから」

アルバス・ダンブルドアがハリー・ポッターと顔を合わせたがらない一番の理由は全く違う次元の所に有るのだが、さりとして、僕がハリー・ポッターよりも——この学校の誰よりもあの老人と顔を突き合わせた回数が多いというのは事実だった。

そして、それが彼女の疑念を増幅し、不安を駆り立てた物であるのかもしれない。

「この三年間——いえ、去年は違ったみたいだから、二年間かしら。貴方は事件の背後に居るようだった。私達より遥かに多くの事を知って、動いているように見えた」

それは正確では無い。

単純な情報量で言えば、ハリー・ポッターの方が余程物を知っている。

けれども、彼女達の立場から見れば、そう思えるのだろう。僕の配役というのは何処にも無くて、しかしながら確かに事件の合間に姿を見せていたが故に。

「私は聞かなかったわ。貴方が何かを言いたげで、けれども聞かされたくも無さそうだったから、この三年間口を噤み続けた。見ない振りをし続けた。それが間違った選択だったとまでは思わない。けど、もう我慢できないの」

「……………」

「だから——聞かせて頂戴。二年前、バジリスクが私を襲った時の事について」

僅かの間、僕は眼を瞑った。

今まで彼女は聞く事を避け、しかし今こうして聞いている。

学期末の件を伝えられなかった事は、彼女にとっての一応の心残りでは有っただろう。実際僕は、あの時、彼女の言葉を聞く事を拒絶したのだから。

けれども同時に、その事を考えた際に、彼女は——僕たちは未だに秘密の部屋の事件を終わらせていない事に直面せざるを得なかったのだろう。別にそれは彼女だけの責任では無く、どちらと言えば、僕の方が責任が大きいと言えるだろう。

ただ、それでも僕達はやはり共犯で。

しかし、このように明示的に問われた以上、僕に口を噤むという選択肢は無かった。

「……君は当然答えが解っていると思う」

その回答は、別に誤魔化す事を意図したものではない。

彼女であれば、あれから丸一年経った今であれば、正しい答えに辿り着いていない筈が無い。そのような確信の下に紡いだ言葉であり、彼女はやはり頷いた。

「……ええ、大体は。わざわざ貴方が嫌ってるハリーに接触した事。貴方がハリーにした質問の内容。ハリーよりも先にマートルへ接触した事。そして何よりあんなに不自然に、私に対して手鏡を渡して起きた事。勘付く為の要素は幾らでも有った。……ただ、何で貴方がロックハート教授に興味を持ったのかは、今一解らなかつたけど」

「ああ、彼の事は考えなくて良い。物のついでで、大きく関わる物では無い」

「それにしてはやっぱり貴方は熱心に——」

途中まで言葉を紡ぎ、彼女は軽く首を振った。

「……いえ、良いわ。ただ、私は少しばかり文句を言いたい気分よ。貴方があんなに露骨に鏡を渡すから、最初は秘密の部屋の怪物がゴルゴンやコカトリスなんかじゃないかと思っちゃったわ。何せ生じた結果は石化だった訳だし」

「……成程、そのつもりは無かった」

苦笑する彼女に対して、僕もまた苦笑を返す。

意図せずして、彼女に対するミスリードになっていたらしい。

ただそれもほんの一瞬の事。彼女は表情を引き締め、微妙に震える声で続けた。

「ハリーは言ってたわ。二番目の事件、コリンが襲われた後、ダンブルドア校長先生が、問題は誰がではなく、どうやってだというのを聞いたって」

揺れる栗色の瞳が、僕を真っ直ぐと射抜く。

「つまり、貴方も、ダンブルドアも、早くから——少なくとも、貴方の方は私が襲われる前から、秘密の部屋の怪物の正体について見越していた。それで居ながら、貴方達は、被害を見過ごし続けた。そういう事でしょう?」

「正解だ、ハーマイオニー」

彼女は否定して欲しそうだったが、しかしそれが真実だった。

聞いては居ないが、セブルス・スネイプ教授も気付いていたように思う。

スリザリン寮生、元死喰い人、そしてあれ程の頭脳を持った人間だ。バジリスクの存在が頭に思い浮かばない方が可笑しい。もしかすれば、元御主人様から直々に何かを聞いていた可能性すら有る。明言はされずとも存在を仄めかされる程度なら有り得そうだし、その場合で有れば「秘密の部屋」の怪物の正体は解らずとも、少なくとも黒幕は判明する。

そしてそうであれば、あの騒ぎの間、教授はあの老人と接触を避けただろう。教授の立場は非常に不安定で、そして細心の注意を払う必要が有る。無知を装う方が都合が良い。

一方で、老人の方もまた教授を遠ざけたのかもしれない。実際のあの事件は分霊箱という最大級の闇の秘奥に関わる物であり、闇の帝王にとつての急所だった。あの事件の顛末についてすら、あの老人が教授に何も語って居なかつたとしても驚きはしない。

「……秘密の部屋の怪物は、バジリスクだったのよ」

彼女は全くの正論を、やはり震える声で紡ぐ。

「M. O. M分類でドラゴンと同じXXXXXX。その指標が単純な強弱、或いは同分類内での同等さを表す訳では無いにしろ、非常に危険

な生物で有るのには変わりない。皆が運良く直視しなければ、間違はなく死んで居たわ」

「二つ訂正するとすれば、石化したのは偶然では無いという点だ。最後にハリー・ポッターに敗北したとは言え、スリザリンの継承者というのは、そこまで愚かでは無い。彼も多分、その類の事を言っていたのではないかと思う」

物言いたげな彼女に、僕は言葉を続けた。

「ただ、君に鏡を渡したように、最後に死人が出るかもしれないという事は考えていた。当然、アルバス・ダンブルドアも。スリザリンの継承者は、目的を達成すれば殺人を自制するつもりは無く、真にそれらしく行動する事を躊躇わない筈だった」

「……実際、秘密の部屋に攫われたのは純血であるジニーで、白骨が永遠に横たわるだろうって書いたんだものね。そしてそれは単なる誘い文句では無く、ハリーもまた、ジニーは辛うじて生きていただけで、あのままだと衰弱して死んでいたかもって言ってたわ」

「つまり、そういう事だ」

落胆か、或いは憔悴か。

少しばかり潤んだ瞳を向ける彼女に、けれども追い討ちの言葉を掛ける。

「僕は、君が石化するかもしれないと知りながら、それを見捨てた。僕にとっては、バジリスクという些細な恐怖より、スリザリンの継承者の暗躍こそが恐怖だったからだ」

「でも——」

彼女は口を開きかけ、そして閉じた。

それは彼女自身、自分が何を言うべきかを自覚していなかったからかも知れない。

「二年前、賢者の石の件も同様だ」

経緯は違えども、根底に有る物は変わらない。

「試練が終わった後で、君達はアルバス・ダンブルドアに対し、何か思わなかったか？」

「……やっぱりハリーが言っていたわ。校長先生は全てを知ってい

て、自分達に必要な事だけを教えてくれていて、ハリーにそのつもりが有るのなら、ええとその、『例のあの人』と対決する権利が有るって考えていた筈だっ」

その表現に、僅かばかり瞠目する。

ハリー・ポッターはアルバス・ダンブルドアの思惑を正しく見抜き、しかもそれからは——決して恨みつらみの感情は伝わって来ない。寧ろ、清々しさや爽快さすら感じさせる、*「英雄」*としての在り方だった。正しく選ばれた者だった。

「そこまで解っているなら話は早い。杖の誓いを違えるつもりは無いが、君が勝手に推測するのは自由だ。つまり、僕が最後に加点された理由について。アルバス・ダンブルドアは君達の予測する行為を為し、僕もまた二年前も同様の事を行った。ただそれだけだ」

あの老人と、僕は似ている所が有る。

根底に有る物が違えども、真に守りたいと思っている者が違えども、方法論として同種の事を取りたがるのだという事を、僕は認めざるを得ない。

「……貴方達は どうして、 どうして、 そのような事が出来るの？」

「大事の前の小事を知るからだよ、ハーマイオニー。より大いなる善の為に、というやつだ。つまり、小さな至上命題の為に、多くを切り捨てる事が出来る類の人間だ」

僕達は致命的に失敗し、最も守りたかった物を喪った。

だからこそその反動として、今度はそれ以外で有れば許容出来る損失として受け取ってしまう傾向が有る。セブルス・スネイプ教授の言葉は正しい。僕達は冷淡で、しかし決定的に優先順位を付けなければ、今度は間違ってしまう事を確信しているからだ。

「ねえ。貴方にとってダンブルドア先生ってどんな人？」

彼女は何処か躊躇を見せながらも、覚悟を決めて問う。

意外な気がしないでも無かった。彼女がああ老人にそこまで強い関心を抱いているとは思わなかったからだ。

ただ、さして回答に困る物でも無かった。

「冷たい人間だ。己の価値観の下で肯定出来る物だけを庇護し、それ

以外は遍く切り捨てられる存在。惑い、間違え、しかし過ちを糺す必要性を感じていない、この世界の負け犬。しかし、それを認められない者にとつては最も忌むべき敵」

「……………」

「グリフィン・ドールの先輩を酷く言い過ぎだろうか？」

「……いえ、違うわ」

彼女は弱々しく微笑み、けれども僕は言葉を続けた。

「しかし、君はアルバス・ダンブルドアを正しく認識しなければならぬ。あの老人は多くを見通し、加えて誰にも解らない所で悪辣な手練手管を用いている。だから——」

「——信じるな、って事？」

「いいや。魔法界に居たいのなら、君は何が有ってもその指示と行為を信じ切らねばならない。たとえ、その者の人格が信頼に値しないと感じたとしても」

小さく紡がれた言葉を、僕は僅かばかり微笑みながら否定する。

「魔法戦争はいずれ再開される。両陣営の旗頭になるのは、前回と同じく闇の帝王とアルバス・ダンブルドア以外に有り得ない。そして、魔法界に居続ける事を望むのであれば、どちらかに賭けなければならぬ。要するに、勝ちそうなのは何れかという話だ」

その時が訪れた際、中立は許されないだろう。

アルバス・ダンブルドアの側は兎も角、闇の帝王がそれを許すまい。

そして、忠誠を誓わせる手段として、手を汚させるといふ事が古来より使われてきた事は言うまでも無い。生憎、*“マグル”*はグレートブリテンのみでも数千万居るのだから、血を流すには事欠かない。服従の呪文で、磔の呪文で、或いは人質に対する愛をもって、人々は手を汚す事を強いられるだろう。

だからこそ多くの魔法族は、一つの分岐点で、手遅れになる前の選択を迫られる。

「しかし、君の場合は、そしてハリー・ポッターは、どちらに賭けるかの選択肢は無い。君は*“マグル生まれ”*として浄化対象。一方、彼は*“生き残った男の子”*で、己を一度打倒した上に叛乱の旗頭として相

応しい存在を、闇の帝王が生かしておくとも思えない。故に、君達はアルバス・ダンブルドアが信頼出来なかつたと、全額を賭ける以外に無いのだ」

彼女達は、勝たなければ生き続ける事が出来ない。

無論、僕が想定しているように、逃げるのであれば問題は無い。けれども、ハリー・ポッターの方は執拗に追い続けるだろうし、彼女は親友を見捨てる程に薄情では無い。リーマス・ルーピン教授がそうしたように、彼女は戦争に身を投じる事を選択する事だろう。

故に、聡明なるハーマイオニー・グレンジャーは、僕を上目遣いで見た。

「——じゃあ、貴方は？」

「……………」

「貴方は、どちらに賭けるの？ 『例のあの人』と、ダンブルドア校長先生。将来の英国の魔法界の覇権を握っているのは、何れになるだろうと考えているの？」

そして、それが問題だった。

「……正直言って、僕は断言出来ない」

「……………何で？」

ハーマイオニー・グレンジャーは、多くの疑問と少しの不満を湛えた瞳を僕へと向ける。

「貴方は半純血なんですよ？ 純血主義を掲げる『例のあの人』の支配下では、良く扱われはしないんじゃないの？」

「……だろうな。だから、真つ当に考えれば、どちらに付くべきかは解っているのだろう」

しかし、文献の中から微かに伺える闇の帝王の行動を見る限り、彼にとつて純血主義というのは一定の重要性を持ち得ていても、至上命題では無いような気がするものであり。

「ただ、君も囚人のジレンマは知っている筈だ。二人が黙秘という最善の手段を選択出来ずに自白するように、手を取り合つて悪に立ち向かうというのは幻想だ。必ずや誰かが、或いは両者が裏切り、自分だけが助かろうとする。結果として、全員が等しく酷い目に遭う」

全体の利益を考えれば、黙秘する以外の道は無い。それが「合理的だ」。

けれども、虚構的な利益獲得を追求する人間の浅ましきは、その行動を取り得ない。

「そんな事は——」

「君は学期末、一種の実例を見た筈だ。ピーター・ペティグリューという実例を」

「……………」

僕は、彼を軽蔑し切れない。それは、非常に人間的な行動だからだ。裏切った方が悪い。そう切り捨てるのは簡単だが、人の感情と行動はそれまでの積み重ねによって成立する。

彼の親友達に、アルバス・ダンブルドアに、落ち度というのは全く無かったのだろうか。

つまるところ、彼の友人達は、彼のみに対して、自分の命と換えて良いと確信させる程の友情を培って来なかつたのであり、あの老人は、自分の陣営が勝利すると信頼させるだけの行いを為さなかつたと評する事は出来ないのだろうか。

勿論、眼前の彼女を含めたグリフィンドールは認めないだろうが。「アルバス・ダンブルドアは、偉大だ。そして強大でも有る。けれども、彼は近付けば近付く程に、その本質は聖人とは程遠く、同時に凡人とも距離が有り過ぎ、己にとっての何らの助けにならないのだと感じてしまう」

遠くからであれば見惚れざるを得ない優美な山々が、近付いてしまえば荒々しい死の大地が広がっているように。あの老人は、理解すれば理解する程に、決して信用や信頼という言葉から程遠い存在であると感じてしまう。

勝手な想像になるが、ジエームズ・ポッター、或いはリーマス・ルーピン教授がああ老人を決定的に信頼しきれなかつたのも、それと同種の理由に基づくように感じるのだ。

「……それは、身勝手よ。校長先生だって普通の人間だし、全てを守り切れる訳じゃない。そして、他は良くても自分だけは助けてくれっ

て、虫の良過ぎる話だわ」

「その非難は正しい。しかしながら、囚人は適切な行動を出来はしない」

「……貴方のまね妖怪が、校長先生になったのもそういう事？」

ハリー・ポッターから聞いたのか。

まあ、驚く事では無いだろう。あの双子に話をしたかどうかは別として、親友二人に対してハリー・ポッターが打ち明けない理屈も無かった。

「まね妖怪がああなったのは僕にとってそう簡単な話でも無いが、それが理由の一部である事はその通りだろう。僕にとってアルバス・ダンプルドアは、一つの世界だ。だからこそ、あれは僕に対して敵対する態度を取ったのであり、しかしながら退治出来ない物でも無かった。象徴であり、けれども現実では無い」

そこまで言って、一つ溜息を吐く。

「そして何より——」

「何より？」

「アルバス・ダンプルドアは既に齡百を超えている。そして、前回の魔法戦争は、少なくとも表向きでの殺し合いは十年間続いた。ならば、今世紀で最も偉大な魔法使いが寿命、或いは老衰により不覚を取って死んだ後、誰がその後を継いで戦うのだろうか」

僕の言葉に、彼女は怯んだ顔をした。

「……っ。それは、そうね。多分貴方は、実力云々の事を言いたい訳では無いんでしょ？」

「そういう事だ。一体どれだけの人間が、彼の死後に、その陣営が勝利すると希望を持てる？ アルバス・ダンプルドアが駄目だったとなった時点で、他の誰も勝ち得ないと多くが考えたとしても、何ら不自然では無いだろう」

そしてもう一つ、思う事が僕には有る。

正直言って、今世紀で最も偉大な魔法使いと史上最悪の闇の魔法使いを比較すれば、甲乙付け難くとも、最終的に前者を選ぶだろう。それは勝算や利益という解りやすい理屈で無く、単純にどちらに対して

より好意的に在れるかという曖昧模糊とした理屈で有った。

しかしながら、今の段階において最も僕にとつて問題だったのは、寿命云々という話では無く、他ならぬアルバス・ダンブルドアこそが、魔法戦争の銀の弾丸と成り得るのが自分などでは無いと考えている事だった。

逆転時計。それを用いてシリウス・ブラックの運命を変えたのは、アルバス・ダンブルドアでは無く、ハリー・ポッターだった。

賢者の石の時から薄々感じて居たが、あの老人は第二次魔法戦争へ臨むに際し、彼に対して“生き残った男の子”以上の意義を、見出しているように思える。それが、十三年前に闇の帝王から生き残らせた“聖なる力”に起因するのか、それ以外の理由が存在するのか、僕には解らないが。

ただ、アルバス・ダンブルドアはハリー・ポッターで無ければならないと考えている。

ミネルバ・マクゴナガル教授でも無く、セブルス・スネイプ教授でも無く、闇の帝王と雌雄を決するのは彼で無ければならないという確信をもって。

ハリー・ポッターに資格が有るのは事実である。

彼は“生き残った男の子”であり、紛れも無く“英雄”である。

しかしながら、その場合であれば、アルバス・ダンブルドアの代役を彼が務めるといふのであれば、僕は迷いながらも闇の帝王の側に就く方を選ぶだろう。

何せ積み上げた年数が足りない。闇の帝王は、約十三年の休戦期間を除いても、十年以上も戦争を続けて来たのだ。準備段階も合わせれば、それ以上の期間を殺戮と君臨の為だけに捧げて来たのである。そんな妄執の怪物を、ホグワーツ生が打倒しようと考える方が稀だろう。後十年、二十年後になれば別だが、今の彼に対して賭ける事は流石に躊躇する。

「君はホグワーツの学生であれば、これからも一つの集団で居られると思っっているのかも知れない。寮対抗杯やクイディッチ優勝杯を巡る対立、ないしは性格の不適合によつて互いに好意を抱けなくとも、

同じ場所に帰属し、忠誠を抱き続けられると思っっているかもしれない」

十三年もの間、平和が続いてしまった。

それは或る意味で良い事なのだろうが、しかし闇の蠢動が続いていたとなれば、やはり悪い事で無いとは言いきれないだろう。要するに、不可避の未来の脅威に対して、何ら覚悟や準備をして来なかったという事なのだから。

「しかし、魔法戦争が再開された時、少くない人間達が、御互いに殺し合う羽目になる。名誉の為に、忠誠の為に、正義の為に、そして護るべき者の為に」

「……別の方に賭けたら、そうなるって事？」

「ああ。賭けて勝った所で利益が出るかは疑わしいが。しかし、昨日まで手を取り合っていて、今日には手を振り払わざるを得ない。戦争というのは、そういうモノだろう」

セブルス・スネイプ教授の事を想う。

彼等の陣営は別だった。最終的にどちらに所属していたのかは僕には伝わってしまったが、さりとて同時に、少なくとも最初は違ったのだと知った。

その理由は、思考は、僕に計り知れるものではないが、あの教授は相応の覚悟の下に、闇の帝王の臣下となっていた事はまず間違いない。そして、そのような事は——グリフィンドールとスリザリンでは稀だっただろうが——恐らく、有り触れた事だったのである。

ハーマイオニー・グレンジャーは、僕の言葉を受けて、深く考えていた。深く、酷く深く。そして、それは僕にとって必要な事だった。シビル・トレローニーの教授として相応しくない行状は良く聞いている。毎年毎年一人の生徒に対して死の予言をするというのはどう考えたって不適切であるし、ハーマイオニー・グレンジャーが嘔吐き呼ばわりする気も解らないでも無い。

だが、あの伝説的なカツサンドラ・トレローニーの玄孫である事は事実であり、世界の未来を確定するような予言が世の中に存在する事も理解している。そして、アルバス・ダンブルドアも否定しなかった

という事は、その未来は間違いないと訪れるのだ。

……復活の時か、或いはそれより少しばかりの猶予が有るのか。いずれにせよ、僕は選択を迫られる時が来る。そして、それは多分、御互いにとつて良い結末になるとは思えない。万一そのような奇跡が起きるとしても——最悪の覚悟はすべきなのだ。

これから始まるのは戦争で、命の潰し合いなのだから。

そして途中少しばかり話が逸れたにしろ、語るべき事は語った。

後は彼女の審判を待つのみだった。彼女がどのような結論を導こうとも、僕は受け容れるつもりだった。拒絶されようが、何も変わらない。見下げ果てられた所で想う価値は減じ得ないのだと、僕は良く知っている。

寧ろ穏やかさすら感じつつ彼女を見つめながら、僕は彼女の言葉を待ち——そして何時も正しいハーマイオニー・グレンジャーは、僕に向かつておもむろに手を出した。

「ん」

「……何だ、その手は」

差し出された手を疑問の眼で見れば、彼女は優しく微笑んだ。

「貴方の話に私が頷きたい点は幾つもある。そして、貴方が秘密の部屋に際して、私を見捨てたというのも、まあ一応理解したわ」

ハーマイオニー・グレンジャーはそう言い、けれども臆しなかった。「でも、少なくとも今は、私の手を振り払わないで済むんでしょ？」

……嗚呼、全くもって、彼女は正しい。

三年前から、彼女は真に重要な事を間違えたりなどしない。

「……ああ、そうだな」

差し出された手を握れば、軽く上下に振られた。

「もつと、早くこうして話をしておくべきだったわ」

「……そうだろうか」

「そうよ。下手に怖がって、色々想像して、自分の中で余計に問題を大きくしてしまうよりも、ずっと良い事だったわ」

彼女は少し吹っ切れた様子で、口元を緩ませていた。

依然として、僕の手は彼女に握られており、そこから熱が伝わって

くる。

彼女の表情の中には、やはり絶望や陰鬱は見えない。彼女は多くを知っているのに、昏い未来が確実に訪れる事を知っているのに、それを持つとうとしない。それは単なる楽観的な思考に基づく物では無く、それは僕の知らない強さに由来しているのは明らかだった。

「……ハーマイオニー・グレンジャー」

だからこそ、僕は彼女に更なる答えを求めた。

「ん、何？」

「君は書籍でも、自身の経験でも答えを導けない問いが有った時、答えを何処に求める？」

「そりゃあ……もつと本を読むわ」

「君らしい答えだ。しかしそれでも見つかりそうに無い時は？」

「その時は教授に聞くわよ。どうしようもないくらいにクズな一部を除いて、ホグワーツの教授陣は優秀なもの。私が質問に行くと何時も真摯に答えて下さるし」

……嗚呼、そうだろうな。それが正しい筈だった。

確かに僕は失敗した。失敗したが、方法論の全てが間違ったという訳でも無い。

そして一度失敗したが故に、己のそれまでを全否定する意味も無いだろう。あの時は失敗したというだけで、今度もまたそうであるとは限らない。何より、自身が考える最善を尽くさないで良いという訳でも無いのだ。

立ち止まるのは、最後の結末が訪れてからで良い。

僕と母の物語は既に終わり、セブルス・スネイプ教授とリリー・エバンズの物語もまた終わり、しかしハーマイオニー・グレンジャーの物語は未だ結末が見えたという訳では無い。だからこそ、僕は最後まで進む事を辞めるべきでは無いのだ。

「……今聞いたのって、貴方にとって何か——学期末の事に関係有る？」

「ああ」

「それは、やっぱり私が聞いちや駄目な事なの？」

「残念ながら、やはり君には言えない。これは個人的で、スリザリンの問題でもある。君に話して楽になりたい気持ちも有るが、今は出来そうにない」

アルバス・ダンブルドア。セブルス・スネイプ教授。

その何れにしても、彼女に対して語れる物では無いだろう。その内容は余りにも個人的な領域に踏み込み過ぎており、そしてまた秘密のままに在るべきである。魔法戦争の再開が近付いているともなれば、猶更の事だ。

けれども彼女は、一年前とも学期末とも違い、その言葉を口にしてくれた。

「でも、ステファンなら、何時か私にそれを話してくれる？」

「——そうだな。今日みたいに、いざれ話せる時が来れば良いと思う」

そしてまた、僕も今度は頷く事が出来た。

そんな夢のような日が来る事は、今の僕には想像出来ないが。

ホグワーツを何事も無く卒業する事が出来たのであれば、この魔法界を覆う闇が晴れたのであれば、僕はそれを容易く笑い話に出来るのだろう。

そして、僕の保証に彼女は満足気に大きく頷いて、ふと顔を上の方へと向けた。そこにはキッチンに備え付けられた時計が有る。時刻は十一時半を指していた。

「……そろそろ私は帰らなくちゃ」

彼女はそう言い、しかし何かに思い当たったのか慌てて付け加えた。

「貴方が今日自宅に居るか解らなかったから、ママに昼は帰って来ないと言つてないのよ。突然貴方の家の電話や公衆電話red telephone boxを使つて連絡したら、逆に心配しちゃうだろうし」

「ああ、君がそう言うのであれば、それが良いだろう」

僕は頷き、しかし彼女は迷うように僅かに俯いた。

そしてその後、意を決したように顔を上げて、少しばかり勢い良く言った。

「ねえ、ステファン。今度は私の家に来ない？」

「……君の家には？」

聞き返した僕に、彼女は頷く。

「貴方が来たのは、三年前の一度だけでしょ。貴方が本を読み漁っていた事を、今でも良く覚えてるわ。というか、それしか印象が無いというのが正しいけれど」

「……嗚呼、そう言えばそうだったな」

まだハーマイオニー・グレンジャーが、僕にとっていけ好かない女の子で有った頃。

あの頃は、まだ非魔法族の知識の多くを知らないままに興味だけが先行し、しかし積極的に知識を習得する必要性も感じていなかった。故に、僕が彼女の父親の蔵書を読み漁っていたのは、要するに嫌がらせの類だった。

ただ、彼女は本の虫の気質を有しており、本を前に我慢するという事が苦痛であることを理解していたが為に、その行動に微妙に不満そうな顔をしながらも、最初は共に寄り添って本を読むだけだった。

……そう、最初は。

「最終的に君が我慢出来なくなつて、僕を再度外に叩き出したんだっただか」

「……貴方が悪いのよ。私は確かに家にはマグルの本が一杯有るつて言つて誘つたけれども、まさかそれ以外に何も興味を持つとうとしないとは思わなかつたわ」

「……そうだな。僕もまあ、大概無礼なガキだった」

発端が嫌がらせだとしても、何だかんだ言つて没頭してしまつたのは、僕もまた本の虫だったという事だ。知識を得る事については、本能的に貪欲だった。

しかしながら、今ならば解る。

ハーマイオニー・グレンジャーは、友人らしい事をしたかつたのだと。

ただ、御互いに早過ぎたのだ。彼女は幻想が先行し、僕はまだ過去を見ていた。どう考えたとしても、上手く行きようも無い。……少なくとも、あの時は。

「私はグリフィンンドールの三年間で、友人という物がどういふ事なのかは理解したわ。スリザリンの貴方はどう？」

「……まあ、三年前よりは上手くやれる自信はある」
牽制するような瞳に、僕は苦笑しながら答える。

そして、それは一応正解だったらしく、彼女は嬉しそうに微笑んだ。
「じゃあ決まりね」

それは別に構わないのだが。

「また明日、とでも言うつもりか？」

その言葉に揶揄の響きを含ませなかつた訳では無い。

そしてそれは確かに伝わったらしく、彼女は頬を少し赤く染めて俯いた。そして反論する声も、やはり先程よりも小さかった。

「……そんな事は言わないわ。昔とは違うわよ」

だから来週と、彼女は告げた。

「ママとパパも突然だとビックリする筈だから、日を改めた方が良いでしょう。そしてハリーやロンが女の子の家へと積極的に来たがる人間じゃないってのは、少し残念そうだったからね。歓迎してくれるわよ」

「……それは解ってるさ。三年前も、君の両親は、君と同じく親切だった」

とは言え、どの道同性の友人が来る訳でも無いというのは良いのだろうかと思わないでもないのだが。ただ、それもまたハーマイオニー・グレンジャーらしいのだろう。

「来週という事は、丁度七日後で良いんだな？」

「いえ、日曜日にしましょう。それで良い？」

僕は頷く。別に、用事など端から無いのだから。

「時間はお昼、一時半からにしましょう。朝からは用事が有るし、昼一杯を使える方が都合が良いわ。私の家は覚えてる？」

「……ああ、問題は無い」

彼女に連れられて行ったのは一度だけだ。

けれども、もう一度だけ、僕は彼女の家を訪れた事が有る。その時は彼女と共にでは無かつた以上、外から見ただけで有つたのだが。

ただ、その事を知り得ない彼女は少し不安そうにしており、そして僕は苦笑した。

「そんなに心配ならば、住所を置いて行けば良いだろう。生憎、地図くらいは読める」

「そう言われてみればそうね。……魔法界に染まり過ぎなのかしら」

「寧ろ、非魔法族が番地やストリート名、ポストコードと言った煩雑な記号に支配され過ぎていると言えるだろう」

煙突飛行だと言葉を紡ぐだけで、移動鍵ポトキの方は、触れさえすれば連れて行ってくれる。場所を知っておく必要が有るのは強いて言えば姿現しだが、それは的確に場所を理解しておく必要が有り、地図上の何処かを知っているのは少々違う。

それを考えれば、非魔法族が面倒な事は否めない。ただ単純に、非魔法族がそのような管理方法を取らなければならぬ程に増えすぎているのだと言えば、そこまでなのだが。

僕がメモとシャープペンシルPropelling pencilを渡せば、彼女はそれにさらさらと自分の家の住所を書いた。

「……二年間使って居れば羽根ペンにも慣れたけど、やっぱりこっちの方が楽よね」

「どちらの世界にも、良い所と悪い所が有るといっただけだろう。そしてそれは、単純な優劣を意味するものではない」

「そうね、その通りだわ」

僕にそれらを返しながら、彼女は笑う。

「じゃあ、来週日曜日。——待ってるわ、ステファン」

その後、僕と彼女は都合往復二度に渡り、それぞれの家を行き来した。

グレンジャー夫妻は、三年前の男の子を覚えていくれたらしく、僕を温かく迎え入れてくれた。彼女の両親らしく、彼等は親切で、善良で、幸福そうだった。そして、それは確かな一つの愛の在り方――

—そして母や僕の知らない物でも有るのだろう。

依然として、懸念は有った。

去年の事は、未だ完全に受け止め切れなかった訳では無い。

けれども、彼女と一緒に居れば、僕の悩みなど酷く些細な事のように思えて来た。彼女と会話するだけでは無い。ただ会話無く傍に居るだけで、僕はこれまで犯した失敗も、これから直面する選択の事も、忘れる事が出来た。あの期末試験以降、あれ程内容が頭に入らなかつた読書も、今まで通りに行う事が出来た。

—段々と決意も固まっていくように思えた。

そうして八月末が近付いた頃、今週末からロナルド・ウィーズリーの家に行くのだという事で、その行き来は終わった。彼女はまた学期が明けてからね、と微笑みながら手を振って、僕もまた頷いて、彼女の家を後にした。

……そしてそれから約一週間が経った頃、僕は『日刊予言者新聞』のその記事を読んだ。

クイディッチワールドカップの決勝戦後、死喰い人の集団が「マグル」虐めを行い、しかし「闇の印」が打ち上げられた事により散り散りとなった事。そして、それは闇の帝王が失墜して以降の十三年間、一度も上がらなかつた物である事を。

暗き時代の象徴が、再開の狼煙が上がった。

闇の帝王の召使いが逃げ出し、その復活の予言がなされてから、ほんの二カ月程しか経っていない中で、今までの膠着状態はいとも容易く破られてしまった。

——『選択の時が迫っている』。

三大魔法学校対抗試合

ホグワーツ特急内において、珍しくドラコ・マルフォイが僕に接触して来た。

一体何の用かと思えば、何という事は無い。自分が得た情報について自慢したかったらしい。僕に対して思わせぶりな態度を一貫して取り続けた物だから、適度に彼の自尊心をくすぐってやれば、今年年においてホグワーツで行われる大イベントについて語ってくれた。

三大魔法学校対抗試合。

国際魔法協力部と、魔法ゲーム・スポーツ部の協力により、今年それを復活させるらしい。

内容について左程詳しい訳では無いが、『ホグワーツの歴史』によれば、確か死人が続出した事によって二百年程前に中止となった催事だったという記憶が有る。

彼は目立ちたがり屋のポッターや貧乏人のウィーズリーはエントリーするかもしれない、とか愉しげに言っただけだが、その事を教えてやると微妙にビビっていた。その口振りからすれば、彼もまた内心ではエントリーしたいと思っていたのかも知れない。

しかし、逆に彼等が事故死を迎えてくれるのは都合が良いと思いついたらしく、上機嫌に戻ったのは流石だったが。

ただ、アルバス・ダンブルドアも無茶をするものだ。

闇の帝王の召使いが逃げ出した、或いは闇の印が打ち上げられたから行こうという訳でも無いだろうが、そのような事が念頭に有るのはまず間違いない。あの老人が、過去に死人を続出させ続けたような催し物を、何の打算も無く好んで復活させようとする筈も無いからだ。逆に国際協力や連携に少しでも興味があれば、長い校長人生の間にさつさと復活させている。

何にせよあの老人は、闇の時代が訪れる前に、国際的な親交を深める事が必須だと考えたのだろう。規模が規模である以上相応な準備が必要であろうから、賢者の石の騒動辺りからでも目論んでいたのだろうか。費やす心労と労力を考えれば、本当に良くやるものだ。

別にその事が無駄だとは言わない。

しかし、闇の帝王がゲラート・グリンデルバルドと違う事は意識しておくべきだろう。

グレートブリテンにおいて元今世紀で史上最悪の闇の魔法使いは、ニューヨーク、パリ、リオデジャネイロ等々、国境を気にする事無く活動し続けて来た。要するに、それだけ多方面に敵を作り、その脅威も広く知られ、共通の敵への国際的団結を招いてきた。

けれども、闇の帝王は、基本的にグレートブリテンこそを主戦場とし、その魔法界に君臨する事に拘つてきた。外に打つて出る前に失墜したかは兎も角、結果的に海外では大々的に活動せず、今世紀で最も偉大な魔法使いに対する挑戦こそを戦争の一つの主題として来た。

それは両者が夢見る革命の帰結の違いに基づく物であり、何れが優れているという訳でも無いが、自身の権力確立という点のみを見据えた場合、闇の帝王の方がより戦略的と言える。

姿現しや移動鍵が有るとはいえ、大陸と島国は距離が有る。思想的にも、親交的にも。それは、外部が「正義の侵略戦争」に踏み切る事を躊躇させる事だろう。

そして何より、魔法界には共同幻想イデオロギーが足りない。

非魔法界が数年前まで資本主義と共産主義で対立していたような、国や世界丸ごとを覆う共通認識に基づく熱量というのが、魔法界には無い。

強いて言うならば国際機密保持法——それを取り巻く魔法族と非魔法族の関係における現状維持だけである。それ以外は各国の、否、一つの国内ですら、魔法族達は全く別の方向を向いてしまっている。

故にそれは、明確に国際機密保持法を破壊しようとする革命を巻き起こしたゲラート・グリンデルバルドを敗北にこそ追いやったが、個人的な独裁制の確立の為に戦争を引き起こした闇の帝王に対しては殆ど無力に等しい。

闇の帝王は魔法族による非魔法族の支配を進めようとした点では同じでも、先人と違って確たる理念の下で国際機密保持法を破壊しようとしている訳では無い。寧ろ、その支配さえ是認されるのである。

ば、非魔法界での失踪や事故死の数を多少増やすだけに留まり、分断されたままの世界を肯定するようにすら思う。

だからこそ、闇の魔術の深淵に誰よりも深く入り込んだ史上最悪の魔法使いというのは、それに触れた事の無い者には脅威が全く伝わらないし、想像も出来ない。ましてや、道徳的な正義の下に、悪を打ち滅ぼすという御節介焼きは登場して来ない。

繰り返すが、闇の魔術は悪の魔術では無いのだ。

ダームストラングでは闇の魔術を平然と授業で教えるように、魔法族にとってそれは必ずしも忌み嫌われる物では無い。

アルバス・ダンブルドアはそれを徹底的に嫌い、校長の立場を恣意的に利用してhogwーツ内から関連書籍を取り除き、ウイゼンガモット主席魔法戦士と最上級独立魔法使いの地位をもって、英国内で闇の魔術や物品に関する法規制を推進すらしめた。

しかし、その御膝元であるグレートブリテン内ですら、闇は依然幅を利かせている。

ダイアゴン横丁にはノクターン横丁が隣接し、ボージン・アンド・バークスを初めとする店によって闇の品々が半ば公然と売られている。そして魔法戦争後期には、闇祓いに対して合法的に許されざる呪文を使用する権限が与えられ、それを推進したバーテミス・クラウチ・シニアは次期魔法大臣に後一步という所まで上り詰めた。

つまり魔法族は無意識に、闇の魔術や魔法具が“正しく”使われるのであれば何ら問題ないと考えてしまっている。その本能と伝統を、継承し続けている。

その“常識”が通用しないのは、銃規制さながらに闇を厳しく規制しきった極東の島国、マホウトコロくらいの物だろう。

だからこそ、どれだけあの老人が闇の帝王の脅威を叫ぼうとも、所詮は対岸の火事なのだ。

私利私欲の為に闇の魔術を用いる邪悪な魔法使いは必ず打倒されるべきであるという正義の題目は魔法界に存在せず、またダームストラングにしる、ポーバトンにしる、他所の国の戦争に巻き込まれたくも無いだろう。

そして闇の帝王の方も、余程の理由が無い限り、戦火をわざわざ広げはしないに違いない。彼はグレートブリテンに建つホグワーツこそ、自身の居城と考えていたようだから。

それ故に、このような国際的協力事の効果は限定的で——さりとて、今の僕は効果を全く否定しない。数年前に話し、笑い合った者が、しかし海の向こうで無残に殺されているという体験には、真つ当な人間ならば感じる所が有る筈だからだ。そしてだから意味が有る。

この一回で全てを変える事は出来ないし、変えられると思つても無いだろう。

これは始まりで、布石でしかない。しかし、直近の闇の帝王に纏わる一連の流れを上手く利用出来れば、交流の潮流は必ず生み出し得る。そして、かつての三大魔法学校対抗試合が如く約五百年間とまでは言わないが、この複雑な時代における今回の復活がそれなりの期間続けば、この分断化された魔法界も変わっていく事を期待出来るかもしれない。

ただまあ——そのような打算の思考は、やはり付随的な物だと言えた。

僕はドラコ・マルフォイ達と同じく、三大魔法対抗試合という大イベントに心惹かれていて自分が居る事を否定出来なかつた。

彼と違つて代表選手に名乗りを上げる気も無く、そもそも選ばれた所で勝ち得ると確信する程に自分自身を評価していないが、各三校の最も優れた選手の実力を知るといふ点においては良い機会に成り得る。自身が同じ実力にまで辿り着く事は期待しないにしろ、一応の基準が有ればやはり違つてくるだろう。

何より、単純に見世物として興味も有つた。

少なくとも、保身的な意味でグリフィンドールに勝つか否かという以外に興味を持ってないクイディッチを観戦するよりは、酷く生産的な行いの筈だった。

そして、ホグワーツ特急内で聞いた通り、ホグワーツにおいて組分けの儀式が終了した後、アルバス・ダンブルドアは、三大魔法学校対抗試合の復活を宣言した。

ただ、ドラコ・マルフォイが知らなかったのか、或いは僕に対して隠したのかは不明だが、今回の試合では十七歳未満は参加資格を有さないという特別措置が取られるらしい。そして僕が知る限りではそのような奇妙な措置が取られた事など一度も無い。

つまり、代表選手^{Champion}として学校内における最も優秀な生徒が選ばれるというのを真つ当に考えれば、最上級生^{七年生}が選ばれる筈である。

例えば四年生である僕は三年しかホグワーツで学んで居ない一方、彼等は丸六年、すなわち単純に倍の期間学んでいる。その積み重ねというのはやはり馬鹿にならない。

しかしながら、歴史的に言えば必ずしも年功序列で選ばれるような物では無かった。寧ろ、そうで無かった場合というのは決して少なくなかった。

原則五年に一度の定期的な開催。つまり、最も幸運な者は二年と七年の際に出場の機会が回ってくる一方、最も不運な者は三年の際のみに同様の機会が回ってくる。

けれども、そのような不均衡に対して、昔からの伝統という反論を覆す程に大きな不満というのは約五百年間出て来なかったのであり、そしてまた実際に、魔法族はそれが何ら言い訳にならない事を証明してきた。

無常に屍を晒す最上級生が居た一方、年齢という大きなハンデを背負いながらも、最も学校を代表するに相応わしいとして選ばれ、三校の頂点にすら立った者が居た。そして、その者が得る名誉というのが他に比して遥かに巨大となる事は言を俟たない。

純粹な実力至上主義こそが魔法族の本質的な価値観として正しい在り方で有り、ほんの二、三年の積み重ねが誤差だと思える程の苛烈な試練こそが、三大魔法学校対抗試合自体の名誉を保証して来たのだった。

けれども、アルバス・ダンブルドアはそうする気は無いらしい。

そしてまあ案の定というか、それが説明された瞬間そこから抗議の声が上がった。

それもやむを得ない気がしないでもない。十七歳以上か未満かと

いう区分は、僕から見ても若干不公平さを感じるのだ。

何せその分け方では、七年生は全ての人間が参加資格を有する一方、六年生は参加出来る者と参加出来ない者で別れてしまう。それも、ホグワーツの入学資格が九月一日時点で十一歳である事、及び代表選手が十月三十一日に選出される事からすれば、単純計算して現六年生の六分の一しか参加資格を有さない。これでは不満も出るだろう。

ただ、十七歳という区分は魔法界の成人年齢であり、それを境界とするのが解りやすく、そしてまたそれ以外の資格での選別——つまり六年生以上という学年の判定——は、アルバス・ダンブルドアをもつてしても難事だと言う事なのかも知れない。あの老人なら出来そうな気がしないでも無いが、余計な調整をして防衛措置が弱まるより良いだろう。

……正直言つて、残念な気持ちが無い訳では無い。

それは自身に参加資格が無いからという訳では無く、純粹にそれではハリー・ポッターが参加出来なくなってしまうという点だ。

僕が考える限り、ホグワーツを代表するに相応しい選手となれば、それはハリー・ポッター以外に存在しない。

彼は「生き残った男の子」として闇の帝王の失墜を招き、ホグワーツ在学中ですら二度もその姦計から逃れ、去年は有体守護霊により百体以上の吸魂鬼を追い払ってみせたという。何より、あのアルバス・ダンブルドアの期待に応え続けているという点において、どう考えても尋常な存在では無い。

たかが三年先に生まれた人間達に敗北する構図など、僕は到底想像出来る筈も無かった。

けれども——老人がそういう措置を取ったのは、生徒の安全もそうだが、何よりハリー・ポッターを参加させない為であろう。

彼は三年の間例外なく、問題事に見舞われ続けているし、第二次魔法戦争においても闇の帝王に対抗するに際し大きな鍵を握る重要人物であるらしい事を思うと、やはり万一という事を考えざるを得ない。死の危険が有る試練に直面させたたくも無いのは当然である。

「生き残った男の子」の成長を促すにしろ、このような大規模な催し物の中で、危険を管理出来ない中でそれを為す必要というのは全く無い。安全を殆ど確信していたらしい賢者の石の際と違って、バジリスクにしても吸魂鬼にしても、彼が死んだとしても何ら可笑しくない脅威で有ったのだから。全ては運が良く、彼が「英雄」であっただけに過ぎない。

故に、これは妥当なのだろうとも思った。

二百年ぶりに復活した三校で最も優れた選手を選抜する試合で、ハリー・ポッターがそもそも参加資格を与えられず、当然のように不戦敗となる事は。

……心の何処かで、何処か納得出来ない感覚を覚えながら。

その後のホグワーツは、三大魔法学校対抗試合一色だった。何処に行っても、その話題ばかりを聞く。

寧ろ、それ以外に息抜きめいた物が無かったというべきか。

スリザリンでのアラスター・ムーディ教授による刺激的な授業は、どう考えても穏やかな物にならないと思っていたが、案の定だった。否、それ以上だった。

まさか普通に闇の印の事に——無論、言及で無く暗示しただけだが——触れるとは思わなかった。誰が確認した訳でも無いにも拘わらずスリザリン内の禁忌となっているその話題を平然とぶち込めるのは、流石にアズカバンの半分を埋めたと称される伝説的な闇祓いであつた。

ドラコ・マルフォイは授業の度に戦々恐々としており、セオドール・ノットでさえ何時もの一匹狼の立場を半ば放棄して、授業内では元死喰い人関係者集団の中に紛れ込んでいた。そして、それを見て教授は嬉しそうだった。無論、負の意味でだが。的が絞りやすくなったと考えているのは明白だった。

スリザリンもグリフィン・ドールがどんな気持ちで魔法薬学を受けているか解った事だろう。

ただ一つの救いは、アラスター・ムーディ教授は授業自体を真つ当にやる気が有ったらしい事だろうか。闇の魔法使いの役割遂行ロールプレイをしているスネイプ教授と違い、闇祓いとしての立場を崩せないのだから当然かもしれない。

ただ、極大の負担が闇の魔術に対する防衛術で有った事は疑いが無くとも、それ以外が楽だったという訳では無い。四年生である僕達は来年がO・W・L. という事も有って、授業の高度化と宿題の増加に追われる事になった。

しかしながら今年はそれは四年生に限ったものでなく、魔法界とホグワーツに慣れるべき新入生を除けば、殆どの学年の授業がそうであるようだった。

どう考えても、例年よりも速度が速い。どうやら教授陣は、三大魔法学校対抗試合が始まった後では、生徒も勉強に身が入らないと考えているらしい。

まあ、妥当な思考であるし、公的私的問わず学校間の交流行事まで時間が取られる事を考えれば、授業を先取りするのも当然と言える。今回のイベントは、三校で最も優れた魔法使いを決めるだけではなく、目的としては国際交流も含まれるのだから。

故に、スリザリンを筆頭に大多数の生徒が軽くノイローゼになりつつ有り、必然的に大イベントである三大魔法学校対抗試合に否応無く注目が集まっていた。

個人的な事を言えば、ハーマイオニー・グレンジャーとS・P・E・W. に関して多少揉めるといふ事は有ったものの、僕としても来るその日に心浮かれる気持ちは何処か有ったのは否定しない。過去の三大魔法学校対抗試合がどんな物で有ったかを知れば知る程に、それに対する期待というのは否応無しに高まって行った。

そして十月三十日。ポーバトンとダムストラングはそれぞれ特徴的な登場をし、各校の代表団がホグワーツに受け容れられた。

ドラコ・マルフォイはその血筋と縁故と社交性を発揮し、スリザリ

ンにダムストラングを招く事に成功して満足気だった。スリザリ
ンの大多数も拍手喝采だった。

ただ、誰も彼もがビクトール・クラムと話をしたが、そちらを伺
おうとして気もそぞろだったのは、饗応側ホストとしてどうなのだろうか。
手隙になった人間が、孤立して食事を取っていた僕と話をしに来るぐ
らいだったから相当であった。

彼等からすれば、全くビクトール・クラムに興味を持たない男子生
徒というのは逆に余程目立つたらしい。まあ、僕としては、ダムス
トラングの生徒からも親からもイゴール・カルカロフの評判がやはり
宜しくないと知れたのは良い事だった。

また、あの老人が設けた年齢線という防衛機構についても話題と
なっていたが、意外にもスリザリンでは、年齢線に挑もうとする蛮勇
を犯そうとするような人間は、少なくとも表向きは存在しないよう
だった。それはやはりアラスター・ムーディ教授が睨みを利かせてい
たというのが少なからず存在するのだろう。

ただ、十七歳以上ルールを遵守する者の人間を咎める事は無かったのであり、逆に物事
が解りやすくなったというように、立候補表明した有資格者に対して
期待が集中していた。

同席したダムストラングの人間に対しても応援や声援を送る事
を忘れなかったのは、彼等が身内の社交だけにかまけていた訳では無
いという証明でも有り、何となく安心した点でも有る。

そしてその翌日、運命のハロウインの日。

三校の人間が待ちわびた、三大魔法学校対抗試合の代表選手を決す
る日が来た。

炎のゴブレットがそれを選出する瞬間は、中々見物で有ったと言っ
て良い。単純に人間が発表するよりは荘厳で、幻想的で有った。

意図してかどうかは知らないが、人ならぬモノが——さながら神が
選んだように演出するのは、代表選手が決まった後は確執を捨てて、
全校が一丸となって応援出来るようにとの措置なのかも知れない。

ダムストラング、ボーバトン、そしてホグワーツ。

それらの代表選手としてゴブレットが選択した名を、アルバス・ダ

ンブルドアが告げる。

ビクトール・クラム、フラー・デラクール、そしてセドリック・デイゴリー。

前者二人は良く知らない。

眼を見張るような美人と、世界的なクイディッチ選手。僕にはそれ以上でも以下でもない。

だからこそ、最も僕の感情を揺り動かしたのは、ホグワーツの代表選手としてセドリック・デイゴリーという名前こそだった。

襲い来たそれは激情だった。己でも何と評して良いか解らない、強い心の振動。

強いて言えば怒りに近く、しかし何処かそう割り切れる物では無くて。強いて言えば二年前、秘密の部屋の怪物の正体とアルバス・ダンブルドアの意図を見透かした瞬間に抱いた同種の物で。そして、その名前が呼ばれた事は間違っているのだという、絶対的な確信が有った。

——けれども、思い返すべきだった。

ジャック・オー・ランタンに象徴されるその日は、三年の間一度も例外なく、ハリー・ポッターに纏わる出来事が引き起こされてきたという事に。

既に三校の代表者が揃ったにも拘わらず、炎のゴブレットは燃え上がる。

蒼から紅に。三度称賛と栄誉を受けながら繰り返されたそれは、しかし今度は不吉と不気味さを撒き散らしながら色を変え、高く一枚の羊皮紙を空へ打ち上げた。

そうして、舞い落ちてきたそれを取ったアルバス・ダンブルドアは、彼の名を呼んだ。

「——ハリー・ポッター」

……そうでなくては、という心の声があった。

ハリー・ポッターは、三寮——それに加えて二校——を敵に回した。最初グリフィンドールは自寮から代表選手を輩出した事で何処か浮足立っていたが、流石に事の大ききさというものに漸く気付いたらしい。談話室^裏では兎も角として、それ以外では彼等^表も余りハリー・ポッターを支持するような素振りを見せはしなかった。

二年前、秘密の部屋の際には、まだ理性的な人間が居た。

ハリー・ポッターは「殺害」現場に毎回居合わせる蛇語使いだったが、さりとて状況証拠で一番怪しかっただけで、決定的な証拠が有った訳では無い。

真犯人であるならばそんなわざわざ疑念を抱かれる状況に自分を置く筈も無く、彼の親友として「穢れた血」であるハーマイオニー・グレンジャーが居た。何より彼はグリフィンドールだったが為に、スリザリンの継承者である事自体を疑う人間は居た。

しかし、今回は流石に理性を失った者が殆どで有り、それもまた理解出来る反応だ。

これが単にホグワーツ代表選手として選ばれたというのであればまだ良かったのかもしれない。十七歳以上のみが参加資格を有するという年齢の規則というのは、今回限りの特別安全措施に過ぎず、寧ろ慣例からすればその制限が有る事こそが異常なのだから。

しかし、三人の代表選手という大会の大前提の規則を破壊したのは流石のホグワーツ生をして、大部分が受け入れる事を拒否した。国際社会に対して、十三年前の英雄として特別扱いされる事を好む、目立ちたがりの馬鹿の存在を晒したような物なのだから当然だ。真つ当な倫理観と正義感を持つている人間で有れば当然激怒する。

そして、ハッフルパフとグリフィンドールの関係性は致命的に悪化した。

セドリック・デイゴリーの応援のみに留まらず、ハリー・ポッターの中傷活動にまで及ぶのだから、これは相当の事だと言って良い。

ハッフルパフがこれ程外部に敵意を剥き出しにするのは、僕が知る限り初めてだった。

彼等は例外的にクイドイツに關しては熱心だが、それでも試合内での相手に対する敬意と称賛を忘れはしなかった。だから、憎悪も取れるこれ程の苛烈な反応は、もしかしたらホグワーツ千年の歴史を見渡しても初めての事であるのかも知れない。

尻尾爆発スクリウトとかいう、不注意がそのまま死を招きそうな刺激的に過ぎる生物を持ち出した魔法生物飼育学中に遠目から見ただけだが、流石のハリー・ポッターもこの状況には憔悴しているようだった。

けれども、それは今までずっと見かけていたロナルド・ウィーズリーが傍に居ないからかも知れない。去年はハーマイオニー・グレンジャーが一人であり、今年はそのようだった。

とは言え、二人ともハリー・ポッターから同時に離れる事は無いのは、それはそれで強固な信頼に基づく物なのだと言評する事も可能なだろう。

ただ、未だそれらは僕にとって見逃し得る些細な事だった。

僕の頭を占めていたのは、三大魔法学校対抗試合自体に直接干渉出来ないにしろ——そもそも教授陣に任せて余計な真似をしない方が余程上手く行く筈だ——僕が僕だけの方法で干渉するにはどう在るべきかという点だった。

未だどうするべきかという展望までは有して居ない。しかし、無駄で有っても、無価値で有っても、何も行動しないとこの気は全く無かった。最善を尽くして届かないならば諦めも付くが、去年のように悔いが残る結果となるのは、想像するだけでも御免だった。

既に確認は取っている。

ハリー・ポッターの名前を告げた時の老人の反応から解っていたが、結果は考えていた通り。これは貴方の計画の内かと、そう問うた手紙に、戻ってきた細長い筆跡は“N.O.”と記すだけだった。それだけでも感情が見えるのだから不思議な物だ。

ふくろう便扱いされたミネルバ・マクゴナガル教授は微妙に不満そうだったが、内部に誰が潜んでいるか解らない以上、校長と生徒の繋がりには可能な限り隠すべきだと考えたのだろう。何も言われはしな

かった。……変身術の授業内での当たりは微妙に強くなったが。

故に、授業の予習をしている時でも、復習をしている時でも、或いはドラコ・マルフォイの代わりにレポートの原案を書いている時も、その事が頭の片隅に有り続けた。

ハリー・ポッターを守る方向に動くにしろ、見捨てる方向に動くにしろ、どう行動するのが自分の利益に直結するかというのを考える事だけは辞めなかった。

……まさか、一時とは言え、それを吹っ飛ばすような事が起こるとは思いも寄らなかった。

ドラコ・マルフォイが今回もまた何事かやっているのは把握していた。

彼はスリザリン内ではやはり目立つ存在で有り、何よりハリー・ポッターが再度学校の敵になった絶好の機会を逃す筈も無かった。

ただ、良くも悪くも、彼は何時も僕の予測を上回ってくれる。まさか、そういう形でやるとは想像しても居なかった。

既に周りが寄り付きすらなくなった談話室の端の指定席で、翌日に控えた魔法薬学の予習を息抜きに僕が行っていた最中、談話室内で愉しげな声と嘲笑が上がった。

それ自体は何時もの事だ。その程度の悪辣さを一々気にしては、スリザリン内で何時も通り生活しては行けない。通例よりも多少騒がしくとも、許容量を超えるものでは無かった。

また内容的にも聞き耳を立てる程では無さそうだった。

僕に聞こえる位置で何か重要な事を喋る阿呆は既にスリザリンに居なくなつたが、ただまあ、情報の重要性はこちらが判断する物だ。特に授業に関するあれこれは、友人の居ない僕には死活問題となる場合が多い。誰にも言わないが、聞き耳を立てていたが為に難を逃れたという事は幾度か有った。

そして、それからどれだけ経つたのか。

談話室内の会話が少し減ると共に、ふと影が差した。

座ったままに見上げてみれば、彼以外に僕に話しかけるような人間は居ない以上解つてはいたが、やはりドラコ・マルフォイだった。

「……どうした。何か用だろうか」

彼は、愉しくて愉しくて仕方ないという、輝くばかりの表情を浮かべていた。

そして大概の場合、それが僕にとっても愉快にならない事を経験則上知っていた。

「やあ、ステイブーン。良い物を作って貰ったんだ。君も気に入ると思う」

そう言つて得意気に手を広げて見せびらかしたのは、一つのバッジだった。

『セドリック・デイゴリーを応援しよう』

Support Cedric Diggory
The Real Hogwarts Champion
「セドリック・デイゴリーを応援しよう」

そのバッジには赤い文字で、そう書かれてあった。

……眼を疑つても、何度見返しても変わらない。確かに、疑問の余地なく、解釈の余地がなく、その文字が存在する。何とも度し難く、そして己にとって許しがたい事にだ。

「良く出来ているだろう？ こんなに早く量を用意するのは流石の僕でも骨が折れたよ。それでだね、これはバッジを押すと文字が変わるんだ。良いか、今やってみせ——」

気付けば、僕は彼の言葉を遮っていた。

「——セドリック・デイゴリーは純血か？」

途端、談話室が静まり返った。

ドラコ・マルフォイの手の中で、『汚いぞ、ポッター』の文字が輝いている。

けれども、彼の表情からは、先程までの得意気な様子が拭い去られていた。

そして、周りが一斉に僕を見ていた事から、自分自身が思つて居た以上に大きく、そして冷ややかな声を出してしまつていたというのに漸く気付いた。

「……嗚呼、すまないな。少しばかり愚かな事を言った。別に『デイゴリー』が純血で無いと決まつた訳では無い。スリザリンである僕はそれを良く知っている筈だった。そうだ、良く知っている。だから

ら、今の発言は撤回しよう」

聖なる二十八で無いからと言って、純血で無いとは限らない。

そんな事はスリザリンの大半が信じて居ないにも拘わらず、その虚飾と欺瞞だけは揺らがせてはならない。それはこの寮内で平穩に学生生活を送る上で必要とされる処世術であり、また寮の秩序を維持するうえでも必須だった。だから先程の発言は不適切である事は違いない。

しかし、そこに籠めた意図までは、やはり撤回するつもりは無い。

僕が周りを見渡せば、談話室内でこちらを観察していた人間達が眼を逸らしていく。

そして、残らず僕から注目が外れたらしい事を確認した後、僕はドラコ・マルフォイに再度向き直った。

「ハリー・ポッターを貶めるのは良いだろう」

静かに、ドラコ・マルフォイに告げる。

「彼は三大魔法学校対抗試合であるにも拘わらず、四人目の代表選手になった訳だからな。しかも本来出場出来ない筈の未成年だ。不当さと不公平さを感じるのは至極当然だ」

その感情は全くもって理解出来る物であるし、魔法生物飼育学の授業でも彼が馬鹿にされている事を当然放置した。

それは今までの三年間繰り返し返されてきた事でも有り、この四年目もまた何も変わらなかった。それが、ハリー・ポッター、ドラコ・マルフォイ、そして僕の関係性だった。

「ただ、僕は個人的な流儀として、セドリック・デイゴリーがホグワーツの真の代表選手として相応しいなどという妄言を吐く気は更々無い」

僕は、セドリック・デイゴリーが気に入らない。

彼がクイディッチで活躍する姿を見た。吸魂鬼の介入が有ったとは言え、ハリー・ポッターを確かに敗北させたというのを知っている。けれども、その時は左程何も思わず——しかしながら、彼が代表選手に選ばれたという事がやはり受け入れがたかった。

その理由について考え、そして確信している。

それは間違いなく、年齢線という今回限りの無粋な措置が存在したからだった。

「……っ。ステイブーン。ポッターは代表選手の座を盗み取ったんだぞ！ お前はスリザリンの輪を乱すのか！」

ドラコ・マルフォイは激昂するが、しかし失笑しか浮かばなかった。アルバス・ダンブルドア。そしてセブルス・スネイプ教授を見て来ているのだ。残酷な事だが、現実として彼には迫力が足りないし、何よりその理屈は完全に御門違いだ。

「輪云々を言うならばマルフォイ。誇り高いスリザリンが、まさか劣等集団のハッフルパフの人間を応援するというのか？ 本気で？」

椅子に座ったまま見上げてやれば、彼は漸くその顔を怯んだ物に変えた。

別にハッフルパフに思う所が有る訳でも無い。自己陶醉のグリフィンドールだろうが知識馬鹿のレイブンクローだろうが、僕は同様の発言をした事だろう。今回はそれが偶々、ハッフルパフのセドリック・デイゴリーだったというだけだ。

「誤解して欲しくないが、真つ当な審査の下にスリザリンから代表選手が出たのならば、僕もこんな事は言わない。当然に真のホグワーツ代表選手として応援するとも」

嗚呼、僕はそうするだろう。自身が帰属する場所として、スリザリンに対しては相応の愛着を持ち、忠誠を有している。

勿論、ホグワーツに対しても同種の物を持っていない訳では無いが、それはあくまでスリザリンを通してでしかない。ハッフルパフにも、レイブンクローにも、グリフィンドールに対してだって、直接的には思う所は無いのだ。

故に僕はスリザリンとして、眼前の頭の悪いバッジを受け容れるつもりは無い。

「君は、ハリー・ポッターが代表選手の地位を盗み取ったと言った」

あの驚愕の表情と、少ない交流から感じた彼の性格を思えば、彼が何かをした可能性は低いように思える。ただ、三大魔法学校対抗試合

に出場する為にアルバス・ダンブルドアを彼が後ろから刺したのであれば、それはそれで何ら構わなかった。

「しかし、セドリック・デイゴリーこそ、その地位を本来在るべき選手から盗み取ったと考えないのか？ 本来三人しか選ばれない代表選手を、四人も選ぶ狂った骨董品だぞ？ ハリー・ポッター以外の他の三人が正当に審査されて代表になったのだと、どうして言える？」

ドラコ・マルフォイは愕然とするが、別に奇抜な発想でも無いだろう。

アルバス・ダンブルドアは代表選手を炎のゴブレット——「公明正大なる審査員」が選ぶのだと言ったが、ハリー・ポッターの名を呼んだあの時点で、その信用性は地に堕ちている。

「君はセドリック・デイゴリーの事をどれだけ知っている？ 僕は全く知らない。……嗚呼、言うまでも無く、監督生やクイディッチのシーカーという、各寮四人以上の人間が存在する程度の特異性以外にという意味だが」

夥しい死者を勝ち抜くだけの資格を持っているかを、僕は知らない。

ハリー・ポッターにそれだけの資格が有る事は、確かに知っているけれども。

「で、ドラコ・マルフォイ。彼はこういった存在だ？ 君が知っているならば、全く無知な僕にも、彼がホグワーツを背負うに相応しい唯一無二だと教えて欲しいものだか」

ドラコ・マルフォイは何も答えられない。

恐らく彼は、他の三選手の正当性を全く疑う事すらしなかつただろうから。

「空の覇者たるビクトール・クラムが、地でも覇者足り得るのだと誰が保証する？ 顔が良い以外に何も解らないフラー・デラクールが、ピレネーの山奥で最優だと誰が保証する？ 最初からあの四人が出場する事が予定調和では無かったと、全てが最初から仕組まれていたのでは無いのだと、君は保証出来るのか？」

他の三人が正当に選ばれた可能性も一応否定し得ない。

けれども、僕の天秤がどちらに傾くかと言えば、選出過程に明らか
な不正が存在している以上、やはり三人全てが正しくないという方
だった。

「僕は『スリザリン』から外れた事を何ら言っているつもりは無い」

点滅するバッジを手に持ち、口を開けたまま見返す彼を後目に、僕
は立ち上がった。

「そして繰り返そう。僕はセドリック・デイゴリーを、真のホグワーツ
代表選手などと言って応援するような馬鹿げた行いをする気も全く
無い。これは絶対だ」

ハッフルパフ。

ホグワーツにおいて、最も控えめな寮。

かの寮は悪目立ちする他の三寮と違い、ハッフルパフの特徴を捉え
るのが困難である。

学年当初に組分け帽子は勤勉こそを資格ある者として選Most worthy of admissionび取る
と歌ったが、その実、ヘルガ・ハッフルパフという魔女は、他の三人
の創始者と違い、如何なる生徒も公平に教える事を尊んだとされてい
る。彼女こそが今で言う非差別主義者に最も近く、それ故に当時にお
いて最も異端だったと言えるかもしれない。

そしてだからこそ、僕は一般に言われるハッフルパフと徳目される
という項目、つまり勤勉やら忠誠やらを、寮全体の特色として素直に
受け止め切れない。それを真つ向から全て否定する程でも無いが、何
となく収まりの悪さを感じて仕方ないのだ。

かの寮に劣等生が集まるというのは、半ば共通認識であると言って
良い。

実際は必ずしもそうでは無いが、そういうレッテルが貼られている
のは否定し得ない。

来るもの拒まずの創始者の方針を強く受けた寮は、必然的に良く言
えば最も寛容で、悪く言えば最も闇鍋の寮となってしまうている。そ

してそれ故に、彼等はハツフルパフ的という特徴を備える事が困難になつている。

瀝青He that touches pitch shall be defiled.に 触れるものは汚れるというように、寮へ所属し続ける事は、その寮らしさを周りから求められ、またその思考や行動に近付いていくという事でも有る。

貴族のスリザリン、騎士のグリフィンドール、賢人のレイブンクロー。

連綿と続く千年の歴史の下では、個人という物を容易く作り変える。

同じ寮内で比べるならば千差万別であれど、ホグワーツという括りでは同種同類であると認識せざるを得ない、人の根幹の共通性が七年の共同生活によつて構築されるのだ。故に、同じ寮内の人間は少なからず御互いを理解し、また共感する事が出来る。

しかしながら、ハツフルパフはそうでは無いように思える。

一つで括るには困難である程に各人各様であり、そしてまた、外部から劣等生だと認識されているが故に、他寮で見られるような寮内の緊張関係を持ち得ない。それはスリザリンに対してすら相應の交流を保つ彼等の温和さを生み出すのだろうが、それは自己の研鑽や向上心、変化と言つた点につき負の方向性に働く。要は悪い意味での生温さと馴れ合いが生じてしまう。

故に、かの寮は所属により一つの方向性を持ち得る事が困難であり、彼等の特性を一口で言い表す事もまた困難を極めて仕方ないように思えるのだ。無理矢理探してしまえば、それは「ホグワーツ生」の特徴と混同してしまう事になるだろう。

ただ、それでも彼等の根源を求めらば、やはりヘルガ・ハツフルパフ——それも彼女が寮の象徴として穴熊を選択した点に辿り着く事になるのだろうか。

普段大人しくとも危険に置かれた際にはその攻撃性と凶暴性をふんだんに発揮する——故にしばしば穴熊を強制的に犬と戦わせる Badder baiting 見世物が行われた——身近で牧歌的な夜行性の英国的生物は、当然のように神話と伝説に彩られている。

穴熊という生き物につき注目される特徴的な点は、やはり彼等の不
断の掘削活動によつて構築される、多くの入口を備えた複雑で、数百
メートルにも及ぶ広大な彼等の巣穴であろう。

それ故に彼等は大地を司る生物と考えられ、しばしば星の深奥に
通じる魔術的な神秘性まで見出され得た。故に、ハツフルパフの色が
麦の黄色と地の黒色——併せて大地に由来する豊穰と恩恵に繋がる
事は何ら不自然な事では無い。

また、穴熊は時に幸運の象徴とされる事も有るが、どちらかと言え
ば、不運や死の方が圧倒的に関連性が強い生物である。

夜に跋扈する生物が死と結び付けられる事は世界的に何ら特異で
も無いが、穴熊がそうなのは、彼等の巣穴内における『落盤事故
』を掘り出した人間達が、そこに埋葬の風習を見出した事に由来す
る。故に、彼等の存在は特に死の色彩を帯び、彼等の叫声と横断は棺
桶を運ぶ物とされたのであり、伝承の下で長らく恐怖を喚起させてき
たのである。

要するに、他寮の創始者が選択した獅子や鷲、蛇と言つた解りやす
さは無いが、さりとて穴熊は彼等以上に油断出来ず、得体の知れず、脅
威足り得る存在であるとも言えるのだ。

なれば——最もハツフルパフらしいと称される人間は、果たして一
体どのように認識するのが正しいと言ふべきなのだろうか。

セドリツク・デイゴリー。

ハツフルパフの六年生にして監督生。

魔法省に勤める父親を持ち、背が高く、顔立ちも整っており、勉学
に優れて最上級生になれば首席間違いなしだと評され、加えてクイ
デイツチのシーカーにしてキャプテンともなれば、少々話を盛り過ぎ
では無いかと思う程だ。

彼が日刊予言者新聞に——というより、リータ・スキーターに——
無視されたからなのか、ハツフルパフは彼の広報に勤しむ事にしたら
しい。その一貫として、経歴や抱負等々を記載した彼の写真付きの宣
伝ビラが、学校中にバラ撒かれ、壁の至る所に張り付けられていた。

半ば選挙活動めいたこの行動を一体誰がどういう理由と経緯で思

い付いたのか全く想像も付かないが、このような活動は中々悪くない手だと言えよう。

如何に全寮制とはいえ千人程度の学生が居る中で、寮も学年も違えば顔も名前も知らない人間というのは多い。しかしこれだけやれば、セドリツク・デイゴリーという存在を知らない。少なくとも、僕のような人間は大助かりだ。これで無駄な詮索をしなくて済むのだから。

……まあ、どうかと思う情報が無い訳でも無いが。

デポンのオツテリー・セント・キャッチポールOttetry St. Catchpoleの近く——確かウィーズリー家もその辺りに有ると聞いた筈だ——に住んでいるとまで書いて良いのだろうか。詳細な情報が助かるのは確かだが、ここまで来ると彼の家族が引越す羽目になるんじゃないかという不安が先に来る。

他にビクトール・クラムやフラァ・デラクルールの同種のビラも撒かれているのは、お祭り好きの Hogwatts 生と言った所か。

ビクトール・クラムは、愛想なくむつつりとしているが、慣れているのもあるからまだ解る。意外なのは見るからに高慢そうなフラァ・デラクルールが受け容れたという点だが、それは予言者新聞で彼女の名前のスペルが間違っていたからなのかもしれない。

ちなみにハリー・ポッターの物は無い。彼はスリザリンの継承者の時以上の嫌悪を集めており、何より書店に行けば彼について書いた本など山程売っているのだから、そのようなビラが作られる筈も無かった。流石のグリフィンドールとて、今回は空気を読んだらしい。

しかし、だ。

壁に貼られたこちらに笑い掛けるセドリツク・デイゴリーの写真を横目に見つつ、何時も通り一人で廊下を歩きながら考える。

注目を向けて初めて気付いたが、僕は彼に既視感を抱いている。

そう、僕は彼のような人間を知っている気がするのだ。それもかなり印象的な形で。

しかし、それを何時何処で見たのかというのが全くもって思い出せない。彼が代表選手に選ばれてからずっと考えを巡らせているのだが、それでも思い当たらないのであり、落ち着かなくて仕方無い。

……確か余り愉快な類の人種では無かった筈なのだが。

ただ僕一人の些細な支持は兎も角、大々的な宣伝活動の成果か、或いはハリー・ポッターに対する反発か、セドリック・ディゴリーは殆ど全校から人気を獲得していた。

何処へ行つても、彼は人だかりに囲まれている。

それもハツフルパフだけでは無く、グリフィンドールを含む三寮全ての人間に。

レイブンクローは炎のゴブレットを騙した叡智を称賛するよりも、やはり規則破りの馬鹿を知性が無いと評すべきだと結論付けたらしく、グリフィンドールでも騎士道的にそれを正しくないと考え、自寮の目立ちたがりよりもマシだと公然と立場を表明する人間が出始めた。

流石にスリザリンは全体としては多少の距離を保っているが、女子生徒は女性特有の交友関係によって男子生徒に比べれば他寮に受け入れられている上、彼女達にとっては顔が良ければ基本的に関係無いのだろう。優れた遺伝子を獲得しようとする野心は評価すべきだった。

それを微妙に不愉快そうに見ている先輩方も居たが、嫉妬と取られかねない制止をするような軽拳な者までは居なかった。

そして——そのような光景はハリー・ポッターと大違いだ。

そもそも、彼は“生き残った男の子”で、クイディッチのシーカーである割に、校内における人気という物が余り無かった。

彼も大概設定を盛り過ぎている上に、三年連続の寮杯獲得に大きく貢献しているのにも拘わらず、今一支持されきらないというか。代表選手の件を差し引いても微妙である。

別に功績に比例するように問題行動を起こしているからでは無いだろう。

それが原因で嫌われるならば、ウィーズリーの双子は更に嫌われている筈だ。しかしながら、全生徒の支持という面では、あの双子の方が余程多い。血を裏切った者達として彼等の一族を馬鹿にするスリザリン内ですら、双子の悪戯のファンが居る位だ。

では、セドリック・デイゴリーとハリー・ポッターの違いは何処に有るのだろうか。

そんな馬鹿な考えに思考を巡らせていると、ふとその人だけが近付いている事に気付く。言うまでもなく、渦中の人物が近付いてきているからだ。

当然の事ながら、僕はさっさと道を開ける。

今の Hogwarts で彼が最上級の階級に位置するからという訳では無い。ただ、人の塊が全て道を開けるよりも、一人が避ける方が手間が無いからだ。

僕に気付いた取り巻きの女性の一部が嫌な視線で見ているのは、まあ、珍しくも無い。

今のハリー・ポッターは別格として、ドラコ・マルフォイよりも嫌われているのでは無いかと思う事は多々有った。少なくとも、彼はスリザリン内では相応の好意と敬意を獲得しているのだから。

ただ、あの賢者の石の学期末から丸二年だ、流石に慣れもする。

しかし、セドリック・デイゴリーは出来た上級生として軽く会釈し、何事も無く通り過ぎようとした。僕も会釈を返すだけを行い、何も言うつもりは無かった。

彼の視線が、僕のローブを撫でるように——何かを探すように動くのを見なければだ。

「——僕がバッジを付けていないのが気になりますか」

その瞬間の、彼の表情というのは見物だった。

別に大きな動揺を示した訳では無い。けれども、先程まで取り巻き達と楽しそうに話していた彼の表情は、幻だったかのように消え失せた。

そして、彼は無視すれば良かった。或いは適当にあしらえば良かった。

見知らぬ無礼な下級生に、突然声を掛けられたのだ。内容自体も決して穏当な物とは言えない。真つ当な対応をしなかった所で、彼の評判を全く下げるものでも無かっただろう。

けれども、彼は噂通りに、大衆の求める通り、理想的な生徒の対応

を行ってしまった。

「いや、良い事だよ」

セドリック・デイゴリーは、気分を害した様子もなく優しげに微笑む。

「僕もそのような事は辞めるべきだと言っているんだ。ハリーがどんな方法を使ったにしろ、既にゴブレットの魔法契約に縛られてしまったからね。逃げも隠れも出来ず、これから過酷な試練を受けなければならぬ以上、そのようなみつももない真似をすべきでは無いだろう」

「」
去年、リーマス・ルーピン教授には通じなかった。けれども、今回はそうでは無いらしい。

彼の言葉の真偽が解ってしまったのが、僕の開心術の力量が上がった事による物か、或いは彼の心が余りにも無防備過ぎたのかは不明であるが。

しかしながら、周りの女性徒を見渡せば、確かに彼女達はあの馬鹿げたバッジを付けていない。少なくとも、彼は口ではその通りの事を言い、彼女達は彼の関心を買う為に、その事をやっているらしかった。

バツが悪そうに身動きする彼女達から視線を外して、僕は再度セドリック・デイゴリーへと、好青年の仮面を被り続ける彼へと視線を戻す。

「——成程、確かにその通りですね。幾ら生き残った男の子とは言え、ハリー・ポッターはまだ未成年、それも四年のホグワーツ生だ。普通に考えれば彼は課題に失敗し、十七歳以上の魔法使いである貴方がたは当然楽々と成功してみせるでしょう」

「……………」

「何より貴方は去年、ハリー・ポッターに勝利した。クイディッチで無敗だった彼に、貴方こそが初めて土を着けた。たとえそれが幸運に基づく物であっても、勝利は勝利だ。であれば、今回もそうならないとは限らない。僕も応援していますよ」

その瞬間、一瞬であれ、彼の仮面が崩れた。

「……君は、僕を全く応援していないと思ったんだけどね」
セドリック・デイゴリーの瞳が昏くなる。

そして、僕はそれを見て軽く微笑んだ。
スリザリンの談話室内での会話が、外に漏れていたらしい。だから
と言って、別に思う所は無い。派閥から排斥されるという事はそうい
う事だし、彼は僕と違い人気者だ。

ただ、それを認めてやる程、僕は彼に対して好意的でも無かった。
「何処かで根も葉も無い噂でも聞いたんですか？ スリザリンの悪評
は今更ですし、誰かがそうした所で何ら疑問にも思いませんが」
「……そうかもね。良く考えなくても、君は悪い噂ばかりだから」
それだけを言っただけで、彼は更に何も告げずに立ち去る。

取り巻きの女性達が恐々と彼の後を着いていくのは、スリザリン生
の陰鬱さと忌まわしさを漸く思い出す事が出来たからか。それとも、
セドリック・デイゴリーが、瞳の奥底に燃える炎までは隠し切れてい
なかつたからか。

そして、その集団を静かに見送りつつ、漸く思い当たった。

——彼が一体、誰に似ているのかという事に。

成程、直ぐに思い当たらない筈だ。

物腰と周囲への対応の在り方から一見似ていないように見えるし、
何より僕はその人間に直接会った事が無いのだから、その存在に簡単
に行き着く筈は無い。

けれどもそれに思い及んでしまえば、心の奥底を覗き込んでしまえ
ば、これ程までに本質が似通っている存在というのは早々存在しな
かった。

顔が良く、基本的に誰に対しても友好的で、入学時より人気者。
周りが首席を確信する程の成績を残し、クイディッチのシーカーと
しても活躍し、出来ない事など殆ど無いと思える程に、ありとあらゆる
分野に秀でている。

まさしく完璧で、多くの者が手放しに持て囃すような、際立って人

目を引く存在でありながら——しかし、その裏側には己の能力に対する強固な自信と、己が他より優位であるという強烈な自尊心と、己を本来以上に大きく見せる事に惹かれて止まない強大な欲望を有している。

嗚呼、そうだ。

彼はジェームズ・ポッターに似ている。

朱き極光

此度において、犯人がハリー・ポッターの名前を入れた目的は何だろうか。

今年年の初めにおいて、闇の印が打ち上がった事と連動した事象である事は、まず前提として考えるべきだろう。

闇の時代の象徴と全く独立して、“生き残った男の子”が三大魔法学校対抗試合の四人目の選手として名乗りを上げさせられたと考えるのは、少々偶然に期待し過ぎに思える。

それが有り得ないとは言わないが、クイディッチでの死喰い人の馬鹿騒ぎ、彼等が闇の印を見て逃亡した事、そして去年闇の帝王の召使いが逃亡している事まで併せて考えれば、やはりそのような可能性は望み薄と結論付けざるを得まい。

僕は既に、闇の帝王の復活を妨害する気は殆ど無かった。

完全に放棄した訳では無く、眼前にその機会がぶら下げられれば当然手を伸ばす事はするだろうが——しかし、色々と考えを巡らせた結果として、闇の帝王が今後取るであろう復活方法について調べる事は半ば辞めていたし、先手を打って動く事も諦めていた。

学期前にハーマイオニー・グレンジャーと話さなければ、僕はそれに動いたかも知れない。

けれども、僕はシビル・トレローニーによる予言を知ってしまった。そして予言の存在を頭から完全に信じないにしろ、決して軽んじるべき物では無いという事も重々承知している。特に、それが真なる予見者により為された物の場合は。

ゲラート・グリンデルバルトの革命戦争期に議論と混乱を巻き起こしたタイコ・ドドナスの予見書のように、その真偽がどうあれ、強大な力を有する魔法使い達がそれに反応して行動するという意味で、予言というのは多大な影響力を持ち得るものだ。

けれども、逆に言えば、あの予言はその意味で特異だった。

それを聞いたのは、確実な者としてハリー・ポッターとその親友であるハーマイオニー・グレンジャーら二人、そして当然の事ながらア

ルバス・ダンブルドア。一応可能性としてはシリウス・ブラックら不死鳥の騎士団関係者も又聞きしたかも知れない。

しかし、それ以上の者に聞かれた訳では無く、何よりその予言には干渉の余地も無いし、解釈の余地も無い。

ピーター・ペティグリュウの逃亡。そして来る闇の帝王の復活。それ以外の理解は不可能であり、また更なる情報を汲み取る事も不可能である。

予言の作法^{パター}としては、それを遵守する方向に動こうとも、それを破壊する方向に動こうとも、最終結果として人の干渉出来る範囲を超えて結果的に予言は正しい物だったという結末で終わるものが大概だ。つまり、それを聞いた人間の行動すらも内包して予め為されるものこそ本物の予言である。予言が破られる形の話も皆無ではないが、少なくとも予言が真実である事を前提とした良く有る御伽噺というのはそう言う物だ。

だからこそ、かの予言は酷く不気味ですら有る。

一応付け加えるならば、その時点のハリー・ポッターに限定すれば解釈の余地は有った。

しかし、僕がハーマイオニー・グレンジャーから話を聞いた限りの判断であるが、恐らく彼はそれを聞きながらも何の反応や行動も起こして居ない。

つまり、かのシビル・トレローニーの予言が仮に無かろうとも、ハリー・ポッターは自身の親の仇として当然にシリウス・ブラックを疑い、結果としてピーター・ペティグリュウを逃がしたように思える。客観的観点から見れば、予言は彼の行動に対して影響を与えておらず、そしてまた未来に対しても漣すら起こしていないように見えてしまう。

ならば、その予言は、一体何の為に為されたのだろうか。

神の類が存在するとして、それが為されなければならない理由は何処に有ったのか。

……嗚呼、その予言の存在によって、明確に影響を与えられた一点を見出す事は可能である。それが誰に対して直接為されたのかを考

えれば、当然にそれに気付き得る。

しかし、それは未来を告げる代物として余りにも悪辣で、既に解釈の余地が与えられていた物を確認したに過ぎないという残酷性を有する物で、そしてその場合はアルバス・ダンブルドアが“生き残った男の子”を特別扱いする真の理由にも繋がり得るだろう。

無論、これは僕が想定する中で最も悪い方向性に位置する考え方で、外れていて欲しいとすら思いもする考え方でも有るが。

ただ、やはり最悪を考えて然るべきであり。

であれば、三大魔法学校対抗試合の課題以外の方に干渉する事を是とするべきだった。

幸い、手頃な短期的目標というのは存在する。つまり、為すべきはハリー・ポッターの名前を炎のゴブレットに入れた犯人捜しだ。

そして、皮肉にもセブルス・スネイプ教授が残してくれたヒントを考えれば、最悪の場合にはこちらから捜し当てる必要すらないかもしれないという事で有った。

無論の事、そうならない方が良いのは言うまでも無く、こちらから先手を打って相手を探し当ててみせる事こそ最善であるのだが。何故ならその場合は、アルバス・ダンブルドアに対して全てを丸投げするという選択肢も浮かび上がるからだ。

しかしながら未だ十一月中旬。

二校の到着から約二週間が経ち、第一の課題が始まるまで後一週間程。

ボーバトンとダムストラング、そしてホグワーツの交流がある程度私的に進み、代表選手も知らされないという課題について様々な思惑が語られ、公然と賭けが行われている頃。

今回の犯人が事を起こしうる絶好の機会まではまだ時間が有り、実際に代表選手となったハリー・ポッターに関して何か特異な事が起きる訳でも無く、ホグワーツは表面上平和だった。

アラスター・ムーディ教授。

彼による今年の闇の魔術に対する防衛術の授業は、全体として見るならば、最悪より少しマシという程度と評すべきだった。

別に、内容が悪いと言う訳では無かった。

ギルデロイ・ロックハートによる演劇の授業や、クイリナス・クイレル教授による机上の空論の羅列と比較すれば、その過激で実践的過ぎる授業は、賛否は激しく割れそうであるものの、どちらかと言えば、好意的に受け止める生徒の方が多かっただろう。

やり過ぎだ、と言う声も有った。許されざる三つの呪文を眼前で見せ、その上で服従の呪文を実際に生徒に対して行使するというのは、どう考えても頭がイカれているからだ。

済し崩しのな停戦からまだ十三年。魔法戦争の傷痕が残っているのは、別にネビル・ロングボトムだけでは無いのだ。噂によれば、彼の実演により失神した人間、また半狂乱に陥って一部の授業を自主欠席せざるを得なかった人間すら居るようであった。

ただ、アラスター・ムーディが「マッド」である事は英国魔法界では広く知られており、そしてまた時期というのも良かった。すなわち、今年は十三年ぶりの闇の印が上がったタイミングでもあるという事だ。

スリザリン以外は漠然としながらも確かに現在に不吉な予感を抱いており、闇の魔術について熟知する必要があると感じていた。故に、その過激な授業は概ね歓迎された。

魔法省は暗い噂や風聞を打ち消そうとするのに躍起であったが、生徒が何も感じない訳では無い。特にこの三年間にホグワーツで何が有ったかを知っている上級生——スリザリンの継承者の復活とシリウス・ブラックの逃亡を身近で体験している者であれば半ば当然とすら言える。

流石に十三年^{闇の時代}前が戻ってくるなどと言う「妄言」を吐く者は居なかったが、さりとして広く力が求められるのには十分な動機と環境であったと評さざるを得ない。嗚呼、ホグワーツの教育体制というのは、本当に「優秀」だった。

油断大敵という標語は生徒間で大流行したが、それは完全なる冗談として受け容れられた訳では無い。特に魔法戦争で親類を喪った者達は、色々と思う所が有るようだ。

非公式の決闘クラブが何処も活発になっている——二校との交流を名目とした代表選手に選ばれなかった者達のストレス発散でも有るだろうが——事からも、それが伺える。また、ホグワーツ全体が一体となって代表選手を応援しようという雰囲気になっているのも有るだろうが、スリザリンを除いて三寮間の接触というのは明らかに増えている。

あの老人の思惑通り、三大魔法学校対抗試合も確かに良い燃料になっているらしい。これまでと変わらない日常のみでは、ホグワーツにここまで劇的な変化が訪れる事は無かったに違いない。国際交流云々より内部的な面が大きいのは皮肉というべきなのかもしれないが。

一方でスリザリンはと言えば、彼等と全く軸を異にしていた。

発端であり起爆剤でもあった闇の魔術に対する防衛術の受け止め方が違ったから当然だ。

アズカバン送りが逃げ出した裏切者達の馬鹿騒ぎに対して闇の印が打ち上げられたというだけでも寮内の雰囲気是相当危険な物だったというのに、それに加えて闇の魔術に対する防衛術教授というのがよりもよってな人間である。

アラスター・ムーディ教授は伝説的な闇祓いだった。

それも、誰もが認める位に狂つていながらにして、アズカバンの半分を埋めたと言われる程の実績を有する人間である。つまり、死喰い人関係者の多くを牢獄に送った。そして、スリザリンにはその関係者、或いは「元」死喰い人の子供すら居るのだ。

この状況で良い授業になると考える方が無理な話であり、実際教授は彼等に対して憎悪と敵意を剥き出しにし、威嚇と脅迫を忘れなかった。彼が蛇蝎の如く闇を嫌っているのは、まさしく真実であるようだった。

既にケナガイタチとして手酷くやられたドラコ・マルフォイは勿

論、セオドール・ノットも何時もよりも神経質になっていたし、彼等を筆頭に聖二十八族が威張り腐らずに進む授業というのは今までで初めての物だと言って良い。

授業は皮肉と侮蔑、そして必要以上に至近距離から生徒を覗き込むアラスター・ムーディ教授によって恐怖と怯えに支配されていた。

そして、ドラコ・マルフォイ達がそれに対して穏やかで有れる筈も無く、授業後の暴言や周りに対する八つ当たりも酷いものだった。それは半純血や非魔法族生まれの“非主流派”も歓迎出来る事では無い。本音はどうあれ、建前としては聖二十八族の血を引く彼等こそがスリザリンの頭であり、支配者なのだから。

ただ最悪一步前で踏み止まったのは、教授の授業が真つ当——その扱う対象が許されざる呪文であるという点に眼を瞑る限りだが——であり、尚且つ、明らかな死喰い人関係者だと解り切っている生徒以外、特に半純血の生徒辺りには教授なりの友好性を示したからだった。

彼の友好が一般的な他人のそれと違うらしいのは流石に“マッド”と呼ばれるだけあったが、必要以上に威圧せず、平凡な苛烈さと普通の狂気に基づく対応は、意外にもそれなりの好意と敬意を獲得したようだった。僕もその類で有ったのだから、その事は断言出来る。

……そんな雰囲気を感じ取ったからこそ、半純血やマグル生まれに対してドラコ・マルフォイ達の当たりが強くなったというのも有るのだろうか。

しかしまあ、あの老人は本気でスリザリンに喧嘩を売っているのかと思わないでも無い。

幾ら寮全体で見れば全く味方に靡きそうに無いからと言って、ここまで“適当”な扱いをされれば、一部の者ですら敬意と好意を喪うだろう。スリザリンに居る全てが純血主義者では無く、半純血や“マグル”生まれは——あの老人の潜在的な味方は、確かに存在するのだから。

そして彼等は、この数年間を見る限り、あの老人の為には命を捨てられないと思う筈だ。

スリザリンは身内鼻頂であり、裏返せば、それを護つてくれる事が期待出来ない者に対して忠誠や献身を示す事はしない。敵対までせずとも、彼等はいざという時は逃げるだろう。

僕としては、不死鳥の騎士団とやらはグリフィンドールの凝り固まった正義人間ばかりで構成された集団に違いないと確信している。

だからこそ、かつてあの老人はゲラート・グリンデルバルトに勝ち、しかしながら闇の帝王に敗北したのだ。善側だろうが悪側だろうが、同じ物の見方しか出来ない追従者イエスマンに支配された組織の脆弱性など、考えるまでも無く解り切っている。

ともあれそんな訳で、今年の闇の魔術に対する防衛術は最悪より少しマシという程度に落ち付くのであり——そして僕としては、アラスタール・ムーディ教授という存在が、少なくとも今年は絶対に近付いてはならない類の人間だと言う確信が強まるばかりだった。

彼は狂っていたが、確かな実力と指導力を有し、指針としては善側を選択していた。

僕が単純に力を求めていたのであれば、彼に近付こうとしただろう。個人講義を期待出来るとは思わないが、少なくとも挑んでみる価値は有った筈だ。それは間違いないが最短距離で有り、今学年の初めにハーマイオニー・グレンジャーがその力を示してくれたように、挑む前に自身で結論付けて諦めるなど有り得ない話である。

スリザリン生が闇祓いに近付くというのは冗談としては質が悪過ぎるが、目的の為に手段は選んでも居られまい。これから訪れるのは、戦争の時代なのだから。

けれども、未だ選択を迫られていないが為に、僕にとって最も都合の良い両天秤の状況を維持するには、彼と接触するべきでないというのが既に出した結論だった。

アラスタール・ムーディは、教授の前に闇祓いである。だからこそ、彼に近いと思われる事は、それだけ選択肢を狭める事になる。闇の魔法使いは必ずしもスリザリンでは無いが、それに近いと思われるという利点を放棄する事は僕にとって考えられなかった。

……それでも、向こうから近付いてくるとなれば、やはり別の話

だった。

まあ、そのような類の行為を僕が歓迎出来る人間というのは、この世に事実上一人しか存在しないので、それを嫌だとか感じるような感性を育む事など出来る筈も無かったのだが。それにしたって、何も思わない訳でも無いのだ。

特にこの三年間、闇の魔術に対する防衛術教授がどんな人間達で有ったかを考えれば、面倒事を予感しない方がどうかしている。まして、今年は明確に眼を付けられないように動いたつもりだったとなれば——そして、それが裏目に出たようであるのなら猶更だ。

アラスター・ムーディ教授が嵌ったのか、或いは単なる嫌がらせの一環か。

宿題として出したレポートの成果を確認する為に、再度服従の呪文を生徒に掛け直すと言い出して——当然、誰も文句を言えはしなかった——案の定スリザリンの誰一人として全く抵抗出来ない事を確認した後、フラフラになった全員を侮蔑したように鼻を鳴らし、教授は僕へ放課後研究室に来いと言い捨てて教室を去っていった。

その瞬間にまたかという視線が殺到したし、今年は早いねと小さく皮肉る人間も居た。

しかしながら、僕も僕なりの反論が有るものだ。

別に好きで個人的に呼ばれている訳では無いし、そもそも彼等は、どう足掻いても生徒を個人的に呼び止めそうになかったクイリナス・クイレル教授の印象を引き摺り過ぎである。加えて、彼は僕を教室に残らせただけで、研究室に来いと言った訳では無い。

……まあ、毎年毎年向こうから関わりを求められているという自覚は有るし、今回は特にスリザリン生と縁遠い存在による物である為に強く反論できないのだが。

しかも残念ながら、今年は何故呼ばれたのかという見当が付いていないというのが既に憂鬱だった。発端は咄嗟に行った事だったから仕方が無い面も有るのだが、それでも僕は既に一つ失敗を犯してしまっただけらしいのは認めざるを得なかった。

闇の魔術に対する防衛術教授の個人研究室に來たのは都合三度目だ。

一昨年は写真。去年は闇の生物。そして今年は防犯グッズの山らしい。

隠れん防止器、秘密発見器、敵鏡等々。見た事が有る物から、見た事が無い物まで。

世間で売られている物は全て有り、売られていない物も多くがここに有るのではないかと思う位に多種多様だった。

ただ、全てが起動されている訳では無いようなのは、ここホグワーツでは上手く作動しないからかも知れない。この被害妄想の専門家が、望んで止めるとも思えないからだ。

そもそも如何に全方位にぐるぐる回る便利な眼を持つていたとて、同時に見えるのは二つまでであり、人が費やせる注意力も限界が有る以上、防犯設備が多かろうと意味が無いと思うのだが、そのような正論は教授には通用しないのだろう。

けれど、その偏執的な警戒心が、全くの自意識過剰とは言えない。アラスター・ムーディはアルバス・ダンブルドア程の絶対的な不可侵性を有して居らず、実際に実力の面だけ考えても明確に劣後する筈だ。特に今の状態で有れば猶更に。

衰えか、或いは飽きか。理由は知らないが、この教授はホグワーツに來る以前、半ば引退生活を送っていたと聞く。そうであるならば、流石に戦闘勘は鈍っている筈だった。

そして、それは別に奇妙でも何でも無い。手入れもせず仕舞い続けた刃が錆び付き、切れ味も鈍るといふのは自然の摂理である。

ただ単純に、アルバス・ダンブルドアが異常なだけなのだ。

軽拳に動けない高位の立場に在り、尚且つ百歳を超えているにも拘わらず、今世紀で最も偉大な魔法使いの座を未だ明け渡していないあの老人が。そして、彼の記憶を覗き見た限り、どう考えてもゲラート・

グリンデルバルドとの決闘時には今以上に強かったのだから、本当にどうかしている。

しかしながら、それはアラスター・ムーディというかつての超一流の闇祓いが単なる一流に落ちたに過ぎない程度であり、ホグワーツ生と比較すれば誤差程度の弱体化でしかない。

そして、数々の邪悪な魔法使いを追い詰めて来た闇祓いとしての経験と思考力まで喪った訳では無いだろう。

彼は「マッドアイ」だが、行動が可笑しかったのは現役時代からだったらしいのであり、つまり彼の能力は脅迫観念と病的狂気からは全く独立していた。それらが強まった影響が無い事もないだろうが、良い方向に働かないとも限らない。

何より、その類の能力は、アルバス・ダンブルドアに欠如している物だった。

だからこそあの老人は、引退していた人間をわざわざ引つ張りだしたのだろう。

そして、幸か不幸かそれは慧眼だった。実際に、三大魔法学校対抗試合にはハリー・ポッターという予想外の波乱が生じている。

年齢のみでなく三校という制限も破られた以上、それを為した者は内部に近い人間であり、この教授は身内に容赦するような存在で無い事は実績が示しているのだから、これ程までに適役と言える存在も居なかった。

そんなアラスター・ムーディ教授は、座っていた僕の前へ紅茶を置く。

「まあ飲み」

御茶会という言葉から程遠い存在に思え、そもそもティーカップを持っている姿自体が滑稽にすら思えたが、一方的に呼びつけた生徒をもてなす程度の気持ちは有るらしい。

また、去年のリーマス・ルーピン教授のティーカップは罅割れていたが、この教授のそれは綺麗で、意外と洒落ていた。ティーバッグで淹れられた物であるのが似つかわしくない位には上等だ。誰かから貰った物をそのまま引つ張りだしたのかもしれない。

教授は僕の前へと掛け、不気味な蒼い瞳でジッと僕を見つめてくる。

その前に、ティーカップは無い。生徒に対して茶を出しはすれども、自分が同伴する気持ちは無いらしい。しかしながら、僕は視線の強さに耐え切れず、自身の前にだけ置かれた紅茶を一口含んだ。そして、それを見届けて漸く、教授は眦を緩めた。

「敵かもしれない相手から出された茶を飲むとは、随分と無用心な事だ」

「……自分から出しておいて、無茶苦茶過ぎませんか？」

薄々嫌な予感はしていたが、確たる根拠も無しに教授へ無礼過ぎる真似は出来ないだろう。

そんな想いと共に見返せば、それが余程面白かったのか、アラスター・ムーディ教授は自分のスキットルからゴクリと一口飲みながら低く笑った。

「ロングボトムも同じ事をした」

「……貴方が、彼と茶を飲む程に社交的だとは思いませんでしたよ」

「少しばかり縁が有るからな。あれの両親——フランク・ロングボトムとアリス・ロングボトムは閨戚이었다。そして、それらを襲った悲劇とその末路も僕は良く知っておる」

一瞬だけ思い返すように、ふいと視線を中空に逸らす。

……彼等は、磔の呪文により正気を喪った。この閨戚いはかつての同僚の遺児にすら容赦無く呪文を実演し、ただそのフォローをする程度には血が通っていたらしい。

「しかしながら、レッドフィールド。あれがグリフィンドールであるのと違い、お前はスリザリンだろう。油断大敵だ。既に教えただろうが、ええ？」

ホグワーツでの流行語となった決め台詞を教授は口にする。

「自身が何処に居るか。また相手が何をしてくるか。それを常に意識して居なければ、無様に敵の手中に落ちる羽目になるのだ。特に、自身の敵陣とも言える場所ではな。」

——嗚呼、さながらこんな風に」

……ここに来る際に、用件は予想していた。

しかし、まさかそう来るとは思ってもみなかった。

杖を僕に向けた教授を見て浮かび上がった思考は、嗚呼、流石に「マッドアイ」と呼称されるだけは有るなという、称賛に近い驚嘆だった。

「――Imperio
インペリオ」

至上の多幸福感が心を侵食する。

不安も、心配も、疑念も、まともな思考さえも、何もかもが曖昧模糊とした安堵と歓喜の奔流に飲み込まれていく。柔らかい布が敷き詰められた揺り籠の中に溺れるように、己の存在が溶け、滴り落ち、深淵へと沈んでいく。

取り残された唯一は、この男の前で跪けと命じる声。

そうすれば、もつともつと己は幸福を感じる事が出来るのだと、そんな根拠が無い確信が到来している。本能と理性の両方がそれを求め、命令が頭の中で無数に反響する。

それは抗い難い誘惑と、排除を容易く許さない強制力を間違いない有していて。

けれども――僕はそうしなかった。

「……随分と穏やかでは無い歓迎ですね。少なくとも、教師の所業では無い」

別に声を出す必要も、大きな動作をする必要も無い。

僕は心が侵食されるという感覚を幾度となく経験しており、自我と自意識の確保という技術を熟知しており、異物を己の中から排斥する方法を実践するだけの能力を有していた。

「1717年以降、正当な理由無く服従の呪文を人に掛けた場合にはアズカバン送りになるのだと教えたのは貴方です。そして、授業の1環としてそれを行う事はぎりぎり許容されても、今はそうではない筈ですが」

僕の非難に対して、闇の魔術に対する防衛術教授は何処吹く風といった様子だった。

服従の呪文が僕に対して大きな効果をもたらさなかったにも拘わ

らず、教授は寧ろ上機嫌さを抱いていた。彼は傷だらけの顔を大きく歪め、生身の瞳にぎらつくような光を浮かべながら、脅すような声で当たり前のように言う。

「正当な理由なら存在する。教授を騙そうとした悪いスリザリンの炙り出しよ」

「……………」

「儂は授業で服従の呪文を全員に掛けた。二度に渡ってな。そして、抵抗する能力を見せる者は、四年のスリザリンのクラスには誰も居なかった」

陰鬱な邪悪さすら感じさせる笑みを浮かべつつ、教授は両方の眼を僕に向ける。

「だが、服従の呪文に抵抗する能力を持った者は居た。今まさに儂の眼の前に。それも、授業中は間違いなくそれに掛かったようなふりをした生徒がな」

……………そう、僕に服従の呪文は通じなかった。

授業の時も、先程の時も、それを破る事が出来ていた。

「隠す意味が何処に有る？ 服従の呪文への抵抗力を示す事は誇りにはなれど、恥になるような物ではない。しかし、お前は隠した。この行いが怪しくないと、酷く疚しい事が自分^に有ると言っているようなものだ、よりにもよってこの儂が考えないとでも？」

「……………面倒を避ける為ですよ。僕が目立って良い事は無いですからね」

実の所、今年は状況さえ選べるのならば目立つ気が無い訳ではない。

この三年間を通して、そしてセドリック・デイゴリーの関係において既に悪目立ちしてしまっている以上、今更目立たないようにというのも無理である。

ただ、その反応を全く予想出来ない形で、しかもこの死喰い人の敵対者闇祓いであるアラスター・ムーディに眼を付けられる形で、目立ちたくは無かったのだ。

けれども、今回はその思惑が逆に働いた。

最も気付かれてはならない者に対して気付かれた。

世の中上手くやろうとして上手く行くならば苦勞はしないが、しかしこの一年の殆ど最初から躓き続けている事に鑑みると、今後が心配になるというものだ。

「生徒として聞きたいのですが、何故気付いたのです？」

「少なくとも落胆と諦念と共に、僕は教授に問い掛ける。

「実の所、自分でも上手く行ったと思いましたが。貴方は先程僕が授業内で呪文を破っていたと言いましたが、最初は間違いなく掛かりましたからね」

一回目に服従の呪文を掛けられた時、行動の面においては眼前の教授に掌握され、僕に身体の内自由は無かったのであり、その面において僕は何も偽った訳では無い。

そして、百戦錬磨の教授は、称賛を隠す事無く低い言葉で続けた。

「嗚呼、それはお前が単純に不運だったと言える。何しろ僕は、服従の呪文の効果に関して専門家だ。嗚呼、十数年の時間を掛けて、それがどういう物かよくよく身に染みている。そして、お前にはその気配が無いように感じたのだ……」

後半は独白するように段々と言葉が小さくなり、けれども僕を強い瞳で見た。

「おお、僕も一度は騙されかけたとも。あの時点では些細な違和感だった。けれども、二度目は無かったな。此度で確信した。お前には通用しておらず、服従の呪文に掛かっている振りをしていると。全くもって良い——いや、悪い役者で有ったとも」

「……演技のコツというのは、二年前に十分指導されましたからね。よりにもよって、闇の魔術に対する防衛術の中ですが」

こんな形で役立つ事になるとは、あの頃は思っても居なかったが。

服従の呪文。その身に受けるのは初めてだったし、その誘惑に最初屈したのは真実である。

けれども、心を支配下に置くという一点において、この教授は僕を征服し切る事は出来なかった。そして、心が自由で有るのなら、肉体の主導権を取り戻すのは難しい事では無かった。外部の他人と内

部の己、いずれが強い支配と影響力を行使出来るかは自明である。

取り戻した後に掛かった振りをしたのは、教授の言う通りである。身体だけでなく、精神の方も取り繕った。

僕がそれを為し得た理由については考えるまでもない。

言うまでもなくアルバス・ダンブルドアの功績だった。或いは、元凶というべきか。

「お前が服従の呪文を破れたのは……嗚呼、やはり閉心術か。あれもまた、心への支配を撥ねつけるという点で共通する所が有る」

両眼で真っ直ぐと僕の眼を見て、途端に教授は口元を不器用に歪める。

別に心に侵入された感覚は無かった。しかし、若干であれ完全に眼を合わせた事に対して身構えたという点で気付いたのだろう。少なくとも、その心得が有るという事に。

「閉心術に才能を示すのはスリザリンの特性だろうな。お前の寮監であるスネイプ、あれも卓越した閉心術士だった。そして、言うまでも無く『例のあの人』も」

「……その二人と共に並べられると、場違い甚だしいと思うんですがね」

伝説的な闇祓いが闇の帝王の名前を呼ばなかった事に多少の意外さとする種の納得を感じながら、僕は軽く息を吐く。そして、教授は否定するでも無く、あっさりと頷いた。

「そうだな。少なくともお前はひよっこだ。彼等と違って、経験が足りない」

闇の帝王にしろ、スネイプ教授にしろ、実戦における実践数は僕の比にならない。

特に後者は、その量と質において——もしかすれば閉心術に係る技量すらも——闇の帝王を凌駕し得るだろう。スネイプ教授は、酷く不本意な事であったとしても、他ならぬ闇の帝王を相手にそれを磨き上げて来たのだろうから。

「しかし、ホグワーツの四年としては驚異的な優秀さと言える。お前の年齢で服従の呪文に抵抗出来る程の深度をもった者など、果たして

「ホグワーツの全歴史を見てどれ程居るか」

「……まあ、後半の全歴史云々は言い過ぎだと思えますが、流石にその点に関しては余り謙遜しませんよ。閉心術の面で他より圧倒的に秀でているのは事実ですし」

何しろ、アルバス・ダンブルドアの手をわざわざ煩わせたのだ。それぐらい出来なければ、僕は自身を容認出来はしない。

「ただ実際、貴方も本気で呪文を掛けはしなかったでしょう。本気でやれば、ホグワーツ生一人を無理矢理従わせる事など造作も無かった筈だ。そうでなければ、服従の呪文は許されざる呪文の一つとして数えられていない」

「ふむう。まあ、多少甘かったのは否定せぬ」

教授は、左手で顎を撫でながら、考え考え頷く。

「磔の呪文に本気の害意が、死の呪文に本気の殺意が必要なように、服従の呪文には相手の自由を剥奪しようとする本気の悪意が必要だ。その点を思えば、あれは授業で有った以上、当然のように手加減が入っていたのやも知れぬ」

そこまで言って、けれども、その蒼い瞳でギロリとこちらを見た。

「だが、それでも呪文を破ったのは、ポッターとお前くらいの物だな」

「……………」

正直言って、もっと居る物だと思って居た。

この教授が殆ど学年を問わず——流石に新入生を筆頭に下級生に掛ける程無茶苦茶では無かったが——服従の呪文を掛けまくっているのは話題となっていたのだ。上級生の中にもそれが出来る者が居ると判断するのも自然な筈だ。

けれどもこの教授が断言するからにはそうなのだろう。

……しかし、逆に言えば、ハリー・ポッターは閉心術の訓練無しで打ち破った訳だ。

第一次魔法戦争において服従の呪文が魔法省内ですら——つまり優秀な学業成績を残した成人の魔法使い達に対してすら猛威を振るったように、心への干渉への抵抗力というのは練習して簡単に上げ

られる訳では無い。それが出来るのであれば、やはり服従の呪文は許されざる呪文の中からとつと外されているだろう。

アルバス・ダンブルドアの言では、僕に資質が無いと判断したのであれば、流石に僕へ分霊箱について意見を求めなかつただろうし、閉心術を教えはしなかつたという。つまり、あの老人のような優秀な指導者をもつてしても、向き不向きによって出来ない事は有る。それが、心の領域に深く関わる魔法の特性であり、難解さでも有った。

それを考えると、ハリー・ポッターもまた閉心術の資質が有るのかもしれない。

英雄たる彼の事を思いつつアラスター・ムーディ教授を見返せば、暫くの間僕の心を覗き込もうとするようにじつと見つめていたものの、ふいと彼は視線を逸らした。

そして、軽く杖を振れば、手元に一枚の羊皮紙が飛んできた。

「ルーピン教授から、手紙は貰っておる」

掴み取った羊皮紙に蒼い方の視線を落としながら、教授は重々しく言う。

「去年の授業内容の事もそうだが、生徒に関しての言及もだ。グリフィンドールには、ポッターやグレンジャーという優秀な生徒が居る一方、スリザリンにはレッドフィールドやノットという優秀な生徒が居るとな」

無論、と教授は唸るように続けた。

「儂は他人の評価を容易に受け容れる存在では無い。この眼で直接見ると気が済まん質だ。しかし、ルーピン教授が言うのであれば、一応の重きを置くだけの価値は有る」

「リーマス・ルーピン教授と相応の知己が？」

「かつて同僚だった。——フン、お前はその意味が解るらしいな」

「……貴方は魔法省魔法省の人間人間では？」

「魔法省に属するからと言って、唯々諾々と上に従う者ばかりでは無いという事だ。バーテミウス・クラウチの台頭前も、台頭後で有つてもそれは変わらない」

教授はその瞳に強い憎悪を滲ませながら吐き捨てる。

「嗚呼、お前は儂が許されざる呪文を平気で使った事からそう思ったのか。魔法戦争後期から停戦後暫くまで、闇祓いに対してそれらが合法化されていたからな。成程、随分と聡くは有る。しかし、違う。儂は寧ろダブルドアの側に酷く近い立場に在った」

……確かに、理屈立てて考えれば気付いて然るべきだったのかも知れない。

あの老人は闇の魔術の類を基本的に嫌っており、何よりこの教授はアズカバンの半分を埋めたのだ。死体は牢獄に送れない。殺人の呪いを含む許されざる呪文を合法化されようが、この教授は可能な限り生かして捕える事を心掛けたのだろう。

であれば、魔法省という体制の中に居ながら、アルバス・ダンブルドアの独立組織——不死鳥の騎士団に所属していた所で何ら奇妙でも無いし、その繋がりでリーマス・ルーピン教授を良く知っていたとしても不自然でも無かった。

「ただ、儂が一番興味を持ったのはお前よ」

蒼い瞳を背後に向けつつ、教授は生身の眼にその通りの感情を浮かべる。

「ノットよりもお前は高評価だった。成績的にはアレの方が良いにも拘わらず、その点については実際にルーピン教授が譲らなかつたにも拘わらず、しかし手紙の中ではお前の方を特に褒め称えている。学業では計れぬ優秀さを持ち、闇祓いの資質が有ると」

「……………」

それは、スリザリンとして喜ぶべきなのだろうか。

「しかしまあ、授業を見た限り、儂の意見は違う。お前にはもつと向いている職というのが有るように思う。お前とて、自身は闇祓いには向いて居らぬと考えているのだろうか？」

「…………何の根拠が有って、そのような事を？」

「くくく。さて、儂の単なる勘よ」

教授は酷く愉し気だった。

……こう見ると、面構えが凶悪な事も有って死喰い人にすら見えてくる。

ルシウス・マルフォイ氏とアラスター・ムーディ教授。その両者の写真を出してどちらが死喰い人かとクイズをしたら、十人中九人は後者が死喰い人だと断言しそうだ。実際、本質的には近しい物が有るだろう。死喰い人の思考や行動を熟知していなければ、アズカバンの半分を埋める事など出来はしまい。

依然として杖を出したままの教授は、低く問い掛ける。

「レッドフィールドという名は、儂も聞いた事は無い。貴様の父親の名は何と言う」

そして、僕は深く嘆息せざるを得なかった。

「……去年も似たような事を聞かれた覚えがありますが、それが必要ですか？ 別に貴方がたが名前を知っているような存在では無いですよ。父はこの国の魔法界の人間では無いし、海外の大犯罪者という訳では有りませんし」

「そんなのは知った事では無い。儂が聞いているのは、お前の父親の名前だ」

「……ステイブ・レッドフィールドですよ。父とはミドルネームが違いますかね」

一歩も引く気は無いらしい教授に、渋々ながら答える。

僕のそれはスチュアートだ。

故に、名前の末尾に何世やら jr. というのは公式には付かない。そして渋りはしたし、余り口にしたくない事実では有ったものの、僕としてはその事に関して余り大きな想いを抱いている訳では無かった。僕は自己の認識手段として、名前自体にそれ程重きを置いている訳でも無い。

何より、特別な名前では無いと思っ居た。あの父親がゲラート・グリンデルバルトの闘争に深く関わっていたなら、アルバス・ダンブルドアが何らかの言及をしただろう。けれどもそれは無く、仮に関わっていたとしても下つ端から逸脱する者でも無かったに違いない。

あの父は歴史の傍観者たる事を好めども、主役である事を好まなかった。望んでもなれるものでも無かっただろうが、主義主張としてそうでは無かった。

……嗚呼、けれども。」

「……くく。数奇な事も有るものだ」

僕の想像以上に、教授の反応は劇的だった。

正しく狂相。傷だらけの皮膚を歪め、小さく震わしながら、罅割れた唸り声で独白する。

「嗚呼、完全に一致する訳では無いだろう。そこまでの運命性を期待するのは度が過ぎてている。しかし、成程。それは余りに十分過ぎる理由だ」

「ステイブン・レッドフィールドという名前に、聞き覚えが？」

そう聞いたのは、もはや反射的な物だった。

教授から感じる不吉さと邪悪さから耐えられなかったからと言って良い。アルバス・ダンブルドアやスネイプ教授と全く別種の脅威が、僕にその質問を紡がせていた。

「いや、知らんな。そもそも馬鹿げた問いだ。知っていたら、お前に反応を示しただろうに。お前と父親は、同じ名前を持っているのだから」

「……そうですね。それは、その通りだ」

既に教授から熱狂は去っており、元の偏屈さを取り戻していた。

「お前は純血という訳では無さそうだな」

確認を取るだけのような言葉に、僕は頷く。

「ええ。半純血ですよ」

「……聞いた身では有るが、素直に認めるのは意外でも有る。お前はスリザリンだろう」

「今更の話ですよ。我が寮内で隠し通せる物でも有りませんし」

既に四年前に通った道だ。

あの頃は相応に必死であり、しかし今の状況を思えば多少滑稽に思えなくも無い。

ただ、それは贅沢に過ぎるのだろうか。

スリザリンの四年目という事は、三回も下級生達が必死になっているのを見て来たという事だ。血の純度で劣る彼等彼女等は、上層へと時に媚び、時に距離を置き、時に同類で纏まり、何れにせよ聖なる二

十八以外は苦勞していた。

当然ながらドラコ・マルフォイに近付こうとする人間も相応の数を
見て来たのであり、それを考えれば、今の僕は半純血にしては余りに
恵まれ過ぎている。この立場なりの悩みや面倒というのは有るが、そ
れにしたって迫害される事は無いのだから平和な物だ。

何時だったかドラコ・マルフォイが言ったように、スリザリンは身
内鼻根であるが、その一方で、狡猾な形で責苦と苦悩を味わわせる方
法を良く知っている。

「ふむ。しかし、その割にお前は相応の立場に居るのでは無いか。儂
は確かに見たぞ。儂がお前に服従の呪文を掛けようとした時、お前な
らば破ってみせるのでは無いかと他の者達が期待しながら見つめて
いた事を」

「……単に、腫物や厄介者扱いされているだけです。敬意を払われて
いるとか、一目置かれているとか、そういう話じゃありません」

「フン、馬鹿げた謙遜だ。実際、お前は破っていた訳だからな」
教授は不機嫌そうに鼻を鳴らす。

「そして、スリザリンが不愉快な寮であるというのが変わって居なく
て何よりだ。単に純血であるというだけで偉ぶれると勘違いしてい
る愚か者の寮だ」

痛烈だった。

グリフィンドール

あの老人ですら、そこまでの口撃をしなかった。

けれども、この狂える闇祓いは、スリザリン生を前にして尚、それ
を止めなかった。

「スリザリンは純血を無瑕疵の物として扱う。しかしながら腐り切っ
た純血主義者が多過ぎると思わんか？ 聖二十八族が典型だ。儂が
殺したロジエールは性根が腐り切った奴だったが、それでも忠義と信
念に死んだ。しかし、他はどうだ。ええ？」

「……僕は、その言葉に対して返すような言葉を持っていませんよ。
僕は間違いなく、スリザリンの人間ですのぞ」

僕の誤魔化しを見透かし、教授はあくどい笑みを浮かべる。

「ならば、儂が代わりに言っやろう。お前の寮には血の純度さえ保

てば偉いと勘違いしている戯けばかりだ。嗚呼、儂等にとつても家の存続は至上命題では有る。しかしながら、何故儂等の先祖が血に、そして継承に拘ったのかを解らぬ愚か者が多過ぎる」

「ここまで、純血主義者を扱き下ろす他人には初めて出会った。

いや、この教授は厳密には血の純度が無意味だと言っている訳では無い。ただ、スリザリンの中でその趣旨を何も探究しない者が多い事こそを、表面的な体面を維持する者達が跋扈している事こそを、ひいては現在の魔法界の在り方を唾棄し切っている。

「……貴方は純血なのですか」

「儂の家は勿論、純血だ」

「ムーデイ」は元々闇祓いの家系として敵が多かった為に二十八から外されたが。

教授は至極つまらなそうに吐き捨て、そして僕を見る。

「だが、それは良い。——要するに、生まれよりもどう生きるかなのだ」

マッドアイが、その名の通りに狂的な黒色の眼差しを向ける。

「半純血だろうが純血だろうが、同じく人生の道は開かれている。アラスター・ムーデイという男が半身まで闇に浸かりながら、死喰い人として重宝されるであろう資格と能力を有しながら、それで居て尚、家系の在り方を良しとしてアズカバンの半分を埋めたように」
「……………」

「資格だけを持っていた所で、それを正しく使えなければ意味が無い。逆に言えば、それを持ち得なくとも、それを正しく扱える者というのは確かに存在する」

要は、免許のような物だと言いたいのだろう。

車にしろ、医者にしろ、許可を受けていなくとも、それを受けている人間よりも技量が優れている人間は居る。逆に、許可を受けていようが、腕が悪ければ当然に敬遠される。いや、寧ろ害悪として排除されるべきですら有るのだろうか。

ギルデロイ・ロックハートという最悪の教授がこの学校で許容されてしまったように。

……一人の老人の身勝手な偽善の下、彼の更生活動の為に学生の一年が浪費されたように。

ただ、僕は当然の反論を持ち合わせている。

「資格という社会的承認が必要なものは、危険を未然に防止し、秩序を維持する為です。誰もが何も考えずに姿現しをして『バラけ』てしまえばどうなります？ であれば、資格を持たない者は、身の程を知って大人しくしておくべきだ」

教授は頷き、しかし表情は明らか不同意を示していた。

「ならば、それを承認するのが大馬鹿者だったならばどうだ？ コーネリウス・ファツジヤルシウス・マルフォイのような存在が社会の上層に蔓延り、ふんぞり返り、与えるべき者でない者達に対して資格を与えている。その資格の正当性は保証されるのか？」

コツ、と。

義足の音を鳴らしながら、アラスター・ムーディ教授は身を乗り出す。

その凶悪な顔が、唯一残った生身の瞳が、至近距離から僕を見つめてくる。

「それはもう、全てを破壊したくなって暴れる馬鹿共が出て来るのも已むを得んと思わんか？ 澱みきった社会を正常化し、闇と光を正しく配置し、後に産まれる者達が己に疑問を感じずに済むようにすべきと考える愚か者達がな？」

「……貴方は賛同するのですか」

「賛同などせん。僕は闇祓いだぞ」

けれど、理解は出来る。暗に、その瞳は言っていた。

「純血主義は澱み、今の魔法省は腐り果てている」

アラスター・ムーディ教授は断言する。

「かつての魔法戦争であやつらがどれだけ役に立った？ 不死鳥の騎士団が何故多くの死体を捧げなければならなかった？ まして倫理観と遵法精神の欠けたバーテミス・クラウチを歓迎したと思えば、息子をアズカバンに送るといふ醜聞が発覚した途端に掌を返して罵倒した。全くもって勝手に、他人事だ。その体質は未だ何も変わって

いない」

「……………」

「何よりふざけているのは、たった十三年で戦争を忘れ去った事だ」
静かに燃え上がる瞳の中には、未だに戦争が残っている。

……この教授は引退した筈だというのに、それを忘れ去っていないでいる。

「……平和ボケするのは良い事でしょう。それは社会が安定している証だ」

「安定した？ 本当に『例のあの人』が死に、戦争が終わったと言うのか？ 有り得ん。誰よりも闇の魔術を熟知し、その実践に勤しんで来た男が、そう易々と死ぬ筈も無い」

僕は、意識して表情を変えなかった。

しかし、アラスター・ムーディ教授のアルバス・ダンブルドアとの関係性を考えれば、その情報は——闇の帝王が生存している事は、知っていて然るべきだった。

「……つまり、貴方は僕に対して何を言いたいんです？」

「何も。強いていうなら儂の愚痴だ。お前は、余程スリザリンに不満が有るようだからな。しかし、それが特別だと思っては困る。誰もが、何かに不満を抱いている」

「……………」

闇祓いとしての名声を極め、悠々自適の隠遁生活に入ったアラスター・ムーディでさえ、この魔法界について、確かな疑問と不審を抱いている。寧ろ、彼は光も闇も良く見える位置にその身を置き続けて来たからこそ、余計に多くを思うのだろう。

「ただ、不満は呑み込むべきだ。自分に世界を変える資質が無いと断じるならば、な」

僕の心中を正確に見通しているのでは無いか。

そう思えるような言葉を、教授は優しく、けれども残酷に告げる。「少なくとも儂はやらん。政治家でも革命家でも、そしてダンブルドアでも無い。儂は単なる一闇祓い、それも既に一度引退した男だ。だからこそ、儂は与えられた職務から逸脱しない」

その言葉に狂熱は無い。

当然の事実を述べているという響きだけが有った。

この教授は、自身を指導者足り得ないと考えている。一つの目的に統一された組織の中で、上によつて消費されるべき構成員として、人生を全うする物だと考えている。

けれども、それに甘んじる事と現状に不平を抱く事は、全く別次元の話だった。

「……アルバス・ダンブルドアは、社会を変えるつもりは無いようですが」

「変えているさ。変わりゆこうとする社会を、全く変えないように。だから、儂はダンブルドアの盟友と言われる身で有りながら、考えが合はん事も多い」

解っている。余りに過激な授業から、それは当然だと思っていた。本来六年にしか教えられない筈の許されざる呪文。それを四年からだ。

この教授はアルバス・ダンブルドアが僕達ならば耐えられるだろうと考えていた故に教えると言ったが、それでも洩つた事は想像に難くない。闇の印が上がったという情勢を考えても、出来るのならば子供は何も考えず安全な場所でぬくぬくと過ごすべきであるというのが、あの老人が抱く甘い考えだ。

けれども、闇祓いとして生きて来た中で培われた強固な信念が、恐らくそれを退けた。

自身が「教授」で在るならば、許されざる呪文を——これからの闇の時代で向き合わねばならない核心領域について教えない事など有り得ないと、あの老人を跳ね除けた。

故に当然のように思想を異にし、

「だが、史上最悪の魔法使いを打倒しうるのはアルバス・ダンブルドア以外に存在しない。ファッジやスクリムジョール、シャックルボルト、そして当然儂も無理だ。裏を返せば、それ以外に希望が無いからこそ、儂等の陣営は脆弱で、酷く不利な訳で有るが」

しかし闇を憎むという一点で立場を同じくしている。

アラスター・ムーディ教授は闍祓いだった。

……恐らく、本質的には他の誰よりも向いていないにも拘わらず。そしてだからこそ、彼は伝説となった。

「——愚痴はこの程度にしておこう。少々興が乗り過ぎた。と言っても、若者を前に口が軽くなるのは引退した人間の悪い癖のようなものだが」

自嘲するように言って、教授は再度杖を振った。

……話の最中も教授が杖を握っていたままだったのか、それとも一度ローブに仕舞った後に再度取り出したのか。それすらも、今の僕には解らなかった。

呪文によって呼び寄せられたのは、今度は一冊の古色蒼然とした本だった。

『最も邪悪なる魔術』と、その題名には記されている。そして、それを持った手を差し出す。……間違いなく、僕の方へと。

「スリザリンならば、闇の魔術に興味が有るのではないか？ お前に貸してやろう」

「……それは、どう見たって禁書に有った類の本では？」

何より、喋る類の本で有るのは容易に想像が付いた。

けれども、教授は僕の反応を意に介さなかった。

「禁書区域に有ったという事は、ダンブルドアが残したという事だ。そしてこれは初学者向けでは無いが、紛れもなく有益な内容を含む。ルーピン教授が言うようにお前が闍祓いに向いている場合でも、当然これらを知っている事は役に立つだろう」

そう言って、教授は僕の手へと押し付ける。

「……僕はスリザリンとして、闍祓いの手を借りる気は有りませんが」「スリザリンでも闍祓いになった者は居る。他の三寮より圧倒的に少ないが。何よりそう嘯くので有れば、お前はその本を直ぐに払いのけるべきだったな」

僕の手に収まった本を見ながら、教授は明確に皮肉だと解る笑い声を上げた。

「若造、一つ忠告しておこう。選り好みせずに貪欲に吸収するという

事は重要だ。特に敵の事で有れば猶更だ。儂が何故、闇祓いとして傑出した戦果を上げられたと思う？ 死喰い人について誰よりも学んだからだ。グリフィンドールが嫌悪する事に、真つ向から挑んだからだ」

……教授は、許されざる呪文を教えた最初の授業で言った。

『わしに言わせれば、戦うべき相手は早く知れば知るほどよい。見たこともないものから、どうやって身を護るのだ』と。

その言葉通り、この魔法使いは実際に見、学び、知ってきたのだろう。闇祓い側にしろ、死喰い人側にしろ。その魔法体系は勿論、思考回路や行動原理まで。

この闇祓いと死喰い人と一線を画すのはただ一点。悪意をもってそれらを実践するか否か。逆に言えば、それ以外は、全くもって死喰い人と等しい。

アズカバンの半分を埋めたのは、アルバス・ダンブルドアでは無い。あの老人が必ずしも最前線に立つ必要が有る地位に無いとしても、他ならぬアラスター・マッドアイ・ムーディこそが、それを成し遂げたのだ。

「スリザリンであるお前が闇祓い儂に関わられたくないならばそれで良い」

鷹揚に、けれども何処か挑発するように教授は言う。

「弛緩と油断こそが大敵である事を忘却するならば好きにしろ。けれどもそう在る事を望まないなら、ふくろう便でも送れ。適当な本を見繕い、適切な助言をくれてやろう」

好意的な言葉だった。好意的過ぎる言葉だった。

僕にとって都合が良過ぎる。今年中は表向きこの闇祓いと近付いている所を見られたくないが、さりとして裏では繋がりを持ち続ける事が出来るというのは魅力的だった。アルバス・ダンブルドアと同様に、否、それ以上に誘惑されている自身に気付かされた。

だからこそ、僕は教授に問わざるを得なかった。

「……アラスター・ムーディ教授。貴方のホグワーツでの寮は？」

「くく。何処だと思う」

「少なくともグリフィンドルでは無い。それ以上の事は言えそうに有りません」

かの獅子寮は、別に正義の寮でも何でも無い。

けれども、あの老人の醜悪さに迎合出来るのはグリフィンドル以外に居ない事を考えれば、その可能性が最も高くは有る。それが理性的な解答と言える。実際多くの人間がそう考えるだろうし、それが有る意味で「正しい」のだろう。

しかしながら、僕の直感——間違いという感覚を抱いて尚——それを否定していた。

「だからと言って、貴方が何処に配置されれば最も収まりが良いかと考えても、判断に困る。社会への無関心はレイブンクロー、自身への無執着はハツフルパフ、そしてその他者への狂的な無譲歩はスリザリンド。貴方はそのどれも有し、ですが一概には言えない」

「嗚呼、しかしながら、人間とはそういう物では無いか。たった四寮に全てが分けられるというなら、苦労はしない。聖二十八族、純血、半純血、そしてマグル生まれ。そんな四つの血の性質だけで人を判断するという程に愚かな話だ」

「それでも、己が何に惹かれるかというのは有るでしょう。けれども、貴方にはそれが無い。強いて言えばスリザリンのように思いますが、それですら希薄だ」

この闇祓いは、グリフィンドル的騎士道精神に焦がれていない。彼等の大多数が眉を顰める吸魂鬼の存在を嫌悪する事は無いだろうし、闇の魔術の実践に眉を顰めども、その知識までも徹底的に排除する事は完全に愚かだと断じるだろう。自惚れや自信過剰、無意味な虚栄心からは程遠く、模範的なグリフィンドルの思想に対して親和性を示すような凶など全くもって想像出来ない。

しかしながら、文字通り自身の身を切つてまで行うその善への献身は、やはりスリザリンの特性からも遠い物と見ざるを得ない。

そして、アラスター・ムーディ教授は僕に対して笑い掛ける。

小さくて昏い瞳に、狂気を滲ませて。

「良い見立てだ。そして、そういう余計な推量を働かせる愚か者が多

いからこそ、儂は自察が何処で有ったかを言わん。世の緩み切った者達は殊更に自察が何処かを主張するが、アレは開心術により暴かれた事項だぞ？ 儂に言わせれば、当然に隠して然るべきだ」

その言葉には理が有る。

油断大敵の下に全てを疑い続け、その実証として未だ命を喪っていない者の言葉には。

「……何故、僕に親切にしようと、個人的に教えようとするのです？」
そう僕が問えば、教授は笑った。

愉しげに、本当の上機嫌の下に顕れたのだと解るよう大きく。

「何、闇祓い時代に散々やってきたし、今は教授という地位に居るのだ。後進を育てるのも仕事の内だ。そして、それが優秀であるというならば申し分が無い」

スポーツマンシップ

アラスター・ムーディ教授の「宿題」は、随分と歯応えが有った。

第一の課題への期待の高まりを完全に無視して僕は何時も通りの図書室で本を開いている訳であるが、正直言つて完全に手に余る内容だと言つて良い。今まで続けていた優等生としての積み重ねなど何だったのかという次元である。辛うじて理解は出来るが、実践は程遠い。

教授が何を思つてこの本を選択したか知らないが、正直今すぐ突き返したくなる位には難しい。数年先、それも専門で研究する人間で無ければやらない内容であろう。

多少の個人的な興味が有るにしろ、伝説的な闇祓いに伝手を持つておけるという魅力が無ければ——アルバス・ダンブルドアに対する不信が無ければ——今こんなにも熱心に取り組もうとしていない。三大魔法学校対抗試合が本格的に開始して以降は、全体の授業の速度が緩やかになる事を願うばかりだ。去年のハーマイオニー・グレンジャーでは無いが、このままではパンクしかねない。

……まあ、来年の進路相談の事を考えれば、出来る事はやらざるを得ないという側面もあるのだが。

特にスリザリンの寮監はスネイプ教授だ。彼が真つ当に進路指導する所など想像が付かないからこそ、可能な限り付け入る隙というのは小さくしておかなければならない。

一方で、本題たる三大魔法学校対抗試合に関してだが、僕を取り巻く状況は正直微妙な物になってきた。……嗚呼、少しばかり、僕はやり過ぎたのだろう。

セドリック・ディゴリーを応援する気が無いと断言したのは全くの本心では有ったが、三大魔法学校対抗試合の代表選手の全てについて、あれ程明確に疑問を投げ掛けたのは不味かった。というのも、あの時点では外部——僕の悪評が既に広まっているホグワーツはどうでも良いとして、他の二校——に漏れているとは思わなかったのだ。

正確にはそれを想定していない自分の愚かさを嘆くべきだったと

いすべきか。

ダームストラングはスリザリンと同席したのであり、その縁も有つて親しく成り得る所に居るのは解っていた。

如何に談話室内でなされた会話であるとは言え、絶対的に隠す必要が有る類の内容でも無い。そして、それが三大魔法学校対抗試合の根幹に関わる物であるからこそ、口を嚙むのは困難だろう。少なくとも、ハツフルパフに告げ口するより気楽な筈だ。

更に反応を見た感じでは、ボーバトンまで僕の痛烈な揶揄は広まっているらしい。

歓迎会の雰囲気から見るとフラウ・デラクールは同性から好かれる性格では無いと踏んでいたが、さりとて自校の代表選手を扱き下ろされて歓迎出来る訳でも無いという事でも有るようである。スリザリンの大勢を見ても解っていたが、自校の代表だろうが気に入らなければ応援しない僕のような存在は異端らしい。

しかしながら、結論だけ見ればやはり致命的な物では無いだろう。今回の一つの問題は、ハリー・ポッターの名前を入れた犯人がどちら側かという事だ。つまり闇の帝王か、有象無象の死喰い人か。その何れかによって全く違ってくる。

後者の場合、セドリック・ディゴリーを否定した事は——というか、ドラコ・マルフォイを真正面から非難した事は、悪い状況へと繋がりがねない。闇の帝王がルシウス・マルフォイ氏を受け容れるかどうか不明だが、自身の支配の速やかな確立という事を考えれば、即座に処分する事は無く、相応の地位に就けると考えられるからだ。

ただ、その場合でも大きな支障は無い。僕の想定する最悪は前者、つまり今回の手引きに闇の帝王が直接関与している事であり、そうでないならば死喰い人から悪印象を持たれた所で何らの痛痒にもならない。寧ろ、それを歓迎すら出来るだろう。

嗚呼、それはそれで良いのだが——最近の図書室は、少々五月蠅かった。

第一の課題、それも代表選手にすら内容が知らされない試練。

そうである事も有ってか、ハリー・ポッターを含め、彼等四人の姿

を図書室で見る。そして問題で有るのは彼等自体では無く他に有り、本を読む事を目的としないどころか図書室に来たのが入学以来初めてでは無いかと思える人間がうろつき回っている事だった。

ホグワーツ生の適当さと無秩序さから半ば必然的に、図書室で無言で学習している人間というのはどちらかと言えば少数派だ。僕とてハーマイオニー・グレンジャーと言葉を交わす事は少なくとも、それ故にマダム・ピンスは図書室の偏執的な巡回を辞めないのだが、それにしたって今回のビクトール・クラムへの対応というのは度が過ぎていた。

黄色い声と忍び笑い、頻繁過ぎる本の出し入れと生徒達の往来、手を振ったりウインクしたりというようなアピール行為等々、図書室の守護神マダム・ピンスが制御を諦める程である。……まあ、大穴で彼女がビクトール・クラムのファンという可能性も無きにしも有らずだが。

救いは、ビクトール・クラムが勤勉な読書家らしい事だろうか。

注目になれているらしい世界的クイディッチ選手は全く反応せず黙々と本を読み続けているので、辛うじて決壊だけは免れている。

彼がギルデロイ・ロックハートでなくて良かったものだ。そうであつたならば、図書室はサイン会場になって機能停止した事だろう。勿論、マダム・ピンスが頭に血を上らせて卒倒する事によつてだが。

「——ステファンって一年の頃よりも無茶苦茶になつてゐるわよね」

気分転換には微妙過ぎる思考を無理矢理断ち切つたのは、断りなしに僕の前に座つた一人。

どさどさと遠慮無く本を置きながら、そう小声で言つたのは、当然ながらハーマイオニー・グレンジャーであつた。

「貴方つて昔はもう少し評判を気にする方だと思つていたけど、もう最近はやケクソになつて来たんじゃないかと思つてきたわ。事件の渦中に居た事なんて一度も無いのに、ここまで目立てるのつて最早一種の才能よ」

その言葉には、当然呆れが滲んでいる。

「……軽率になつているのは否定しない。だが、開き直らざるを得な

い状況に陥っているという一面が有るのは理解して欲しいものだ」

全ては、一年の学年末のアルバス・ダブルドアから始まった。

あれさえ無ければ、もう少し平穏な学生生活が送れていたように思える。あの時は悪くないと思ったが、ここまで事件続きだと解つていれば上手く立ち回っただろう。

「どうかしら。年々、スリザリン関係無しに悪くなる貴方の評判に苦勞させられる私の身にもなって欲しいわ。というか、ハツフルパフ生が言つてたセドリックに文句付けてるスリザリンって貴方でしょ」

「……僕とは限らないと思うが。純血主義者にしてスリザリン至上主義のスリザリン生というのは大勢居るだろうに」

「でも貴方でしょ」

確信と共に繰り返した彼女に、僕は白旗を上げた。

「……確かに、君の言う通りだ。その噂の元は僕以外に有り得ない」

やっぱりというように彼女が微笑に笑う。

「まあ、解つてたわ。ズルしたハリーが代表選手とか有り得ないって怒る人間は掃いて捨てる程居たわよ。ただ、炎のゴブレットは信用出来ない、代表選手は全員違つて残らず資格無いでしよって断言する過激派は貴方くらいのものよ」

「至極当然の思考回路だと思うがな。あの三人の正当性は何ら確保されていない」

「ええ、そうね。貴方の言に理が有ると認めた生徒は確かに居るわ。特にレイブンクローあたりはね。だから、ハツフルパフがビラ撒きに息巻いてるのよ。セドリックって誰とか抜かしたスリザリン生に思い知らせてやるんだって」

「……流石にそこまで言つたつもりは無いがな」

ただ、人の発言が面白おかしく捻じ曲げられるのは何時もの事か。「ハリーも凄い嬉しそうだったわ。セドリックが真のホグワーツの代表選手だと浮かれていた人間には良い皮肉だって。何より、貴方はあの馬鹿げたバッジを着けていないし」

彼女の言葉に溜息を吐く。

「別に僕はハリー・ポッターを応援している訳では無い」

「ええ、貴方の捻くれたハリーへの感情は解っているわ。実際、貴方の言葉はセドリックと同様にハリーの資格に対して当然疑問を投げかけている」

「けれども、敵の敵は味方か」

しかしながら、彼等の感情は妥当性が有るものだ。

自寮から代表選手が選ばれたという彼等の熱気に冷水をぶっつけたのだから、ハツフルパフは当然恨む事だろう。

その割に僕への直接的な干渉が無いのは、多少不気味であるが。

“生き残った男の子”にも容赦しないのだから孤立したスリザリンに対して我慢はしない筈だ。ただ、そのような事は不思議な事に無かった。そして思い当たる節も無い。

「そのハリー・ポッターはどうしたんだ？ 君達が第一の課題の為に入り浸っている事は、僕も当然ながら見てはいたが」

良くも悪くも注目を集める英雄が居る傍で、僕はハーマイオニー・グレンジャーに対して話し掛けもしないし、彼女もそうだった。

そもそもハリー・ポッターにとつても不意だったらしい試練は、周りの事を気にする余裕を失わせており、彼女と同じ位に本に噛り付いていたのだ。彼女もそれに付き合っていたから、部外者が邪魔出来る筈も無い。

それを思えば彼がここに居ないと考えるべきだが、彼女は案の定領いた。

「ああ、気分転換よ。談話室は今のハリーには居辛いけど、私と一緒に図書室ばかりだからウンザリしてるみたい。今年はハリーの息抜きになってたクイディッチも無いし、第一の課題も近いから気も立ってるのよ」

あつけらかんと言う彼女は、ハリー・ポッターの行動に理解を示すものだった。

ロナルド・ウィーズリーの件もそうだが、去年の逆転時計での件も有るのかもしれない。彼女達が四六時中一緒に居る事は同じだが、それでも学年末からは彼等の距離感が微妙に変わっているような気がする。それは不仲や不信が続いていたから離れたという訳では無く、

御互いを尊重する必要性を認識したが故の行為のように見えた。

しかし、「英雄」殿も大変だ。

彼が挑むのは歴史的に夥しい死者が出たという試練であり、唯一十四歳でも有る。それを理由に一人だけ難易度を下げてくれる訳が無い。部外者は正しく他人事で有っても、当人はそうは居られないという事だろう。

「……嗚呼、念の為確認しておくが、ハリー・ポッターは自ら名前を入れていないだろうな」

「ええ。それは間違いなく私が保証するわ」

本から顔を上げて問えば、彼女もまた視線を合わせてはつきりと頷いた。

「ならば良い」

既に確信していたのだから、何が変わった訳でも無い。

しかし、当たって欲しくない方ばかり当たるのは如何な物か。

「そう言えば、君は多少変わったな」

彼女と向き合ってみて、僕は気付いた。

「君の前歯が小さくなっている。魔法で調整したのか？」

「……ええ、そうよ。どうかしら？」

「さあ。僕は美的感覚を磨きながら十四年生きて来た訳でも無い。君の両親が残念がるだろうという感想と、君が魅力的で可愛い女性であるのは四年前から同じだと言える位だ」

どう答えるべきか困惑しつつ答えれば、彼女は本の向こう側に顔を隠した。

……正解だったのか、外れだったのか。本を読んでも答えが出ない物というのは世の中に多く有るが、千人居れば千通りの答えが有るのに正解を引くのは至難である。

彼女が再度話掛けてくるまでは、僕が彼女の存在を忘れる位には、たっぷりと時間を要した。

「……でも、本当に大丈夫なの？」

「——何がだ？」

微妙に押し殺した声に、『最も邪悪なる魔術』に再度没頭していた僕

は一步遅れて答える。

しかし、闇の魔術というのはどうして苦痛やら悲鳴、悪感情とやらが好きなのか。もっと恰好良く優雅な黒さを持ち得るといふのは期待してはならないのか。

「二応ハリーへの援護射撃にもなった訳だから今回はグリフィンドールも貴方の発言には好意的だけど、敵を作り過ぎじゃない？」

「大丈夫かどうかは知らないが、この雰囲気はそう長くも続くまい。炎のゴブレットが正しい代表選手を選んだかどうかは、第一の課題で明確に解る」

運命の一日目まで既に一週間を切り、そこで一応の区切りは付くだろう。

「夥しい死者を出すと言われた催し物が、一般の生徒が簡単にこなせる程に生易しいとは思えない。寧ろ難易度が高ければ高い程、課題を達成した人間には既成事実が出来る。つまり、炎のゴブレットは正しく、真の資格を持った代表選手の名を告げたという事実が」

生徒の中を探せば、他に同様に課題を達成出来る人間は居るかもしれない。

ゴブレットはそれを達成出来る能力を持つ選手では無く、あくまで一つの学校の枠内で最も優れた選手を選ぶに過ぎないからだ。

ただ、後出して自身も可能だったと主張した所で、所詮は負け惜しみにしかならない。

「行為こそが正義であり、偉業自体が正当性を保証する。一生徒に過ぎない僕の疑念など、真実の前には簡単に消え去る事だろう。だから、僕はさして気にしている訳では無い」

「それなら良いんだけど……。でも代表選手リリーって本当に課題内容を知らされてないわよ。大丈夫よね？ 抜き打ちだから、多少は優しくなるわよね？」

「さあ。逆に一番最初が過激という事も有り得る。何処からも文句が出ないままに、自分達の好き勝手に進められるからな。それは主催者次第だ」

ルドビッチ・バグマン。バーテミウス・クラウチ。

この三大魔法学校対抗試合を主導した組織の長である彼等の何れの名も、僕は裁判記録で——よりもよつて死喰い人関連の裁判で知っている。その性格というのも、ある程度は想像が付いている。しかしながら、流石にどのような課題を出すかというまでは予測出来ない。

……ただ、「ルード」バグマンが主導した場合は過激になる気がする。

彼は典型的な御調子者だ。そして、何処に境界線を引くべきかを認識したがない傾向が有るように見受けられる。『ばか』だったが故に死喰い人に情報を漏らしたように、うっかり代表選手を殺そうとする可能性は否定出来ない。

これはあくまで予測では無く、単なる予感に過ぎないが。

「いずれにせよ、全ては第一の課題の成否に懸かっている。代表選手達が成功すれば、僕は単なる愚かな妄言を吐いた馬鹿というだけで済む」

スリザリンが何時も通り、根も葉もない風聞と見当外れの推論を流した。

ただそれだけで終わる。

「しかし、裏返して言えば、代表選手は第一の課題だけは何としても成功させなければならぬ。僕が煽った形にはなったが、それが無くても同じだ。特に今回においては」

「……そこまで言う？ 歴史的には、第一の課題を失敗しても挽回して優勝した代表選手って居るでしょう？ 寧ろ、それを期待して逆に

応援したくなるんじゃないかしら」

アムダードック効果
判官鼻貞か。

それは有り得ない事でも無いが、世の中善良な人間ばかりでは無い。

そして、今回の三大魔法学校対抗試合というのは普通では無いのだ。

「想像して欲しい。本来資格が無い筈の十四歳の魔法使いが、困難な課題を何とか達成した。一方で、資格が有り、炎のゴブレットから正

しく選ばれた筈の成人である自分は、しかしながら惨めにも課題を失敗してしまった」

「……悪夢ね。想像しただけで吐き気がするわ」

「それだけならばまだ良い」

さらに今回は誰が見ても不正な状況が生じているが故に、事がややこしくなっている。

「ホグワーツの代表選手は二人居るんだ。そして決定的な上下が——ハリー・ポッターがセドリック・デイゴリーよりも優れている事が全校生徒に晒された場合、それは彼にとつて致命的な事になるだろう」それはもう酷い事になるに違いない。

本来選ばれるべきでは無かった人間が、たまたま十七歳の制限が有ったが為にお零れで選ばれた。或いは、ゴブレットの不調により、間違つて名前が出て来てしまった。

セドリック・デイゴリーを貶める論理など、幾らでも思い浮かぶ。そしてその論理は、代表選手の否定の論理と違い、多くが発想するのに苦勞しない類の代物だろう。

「ビクトール・クラムやフラー・デラクールにもプレッシャーは有るが、セドリック・デイゴリーの比では無いだろう。そして、ハッフルパフがハリー・ポッターに過剰反応しているのも、その末路を正しく予見しているが故だ」

友人も、恋人も、今まで積み上げてきた六年さえも、ほんの数十分で消え失せる。自信は打ち砕かれ、自尊心は引き裂かれ、心は憎悪に支配される。

「根が良い人間であれば、そんな悲劇を望む事は有り得ないだろう。嗚呼、全くもってハッフルパフは仲間想いであり、そして善良だ」

彼等はセドリック・デイゴリーの成功以上に、ハリー・ポッターこそが失敗する事を誰よりも願っている。ハリー・ポッターが失敗していれば、セドリック・デイゴリーが同様に失敗しても決定的に面目を失う事は無いからだ。

それ故に、ハッフルパフは全校を巻き込んで彼の中傷活動を行っている。ストレスを加え、精神に責め苦を与え、本番での失敗の可能性

を上げようとしている。皮肉な事に、善性に基づく好意と思慕こそが、人の精神を破壊する悪意を生み出している。

故に僕は本心からそう称賛するのだが、しかしハーマイオニー・グレンジャーは、僕の言葉に含まれた揶揄を感じ取ったようだった。

「……貴方はセドリックに失敗して欲しいの？」

ハツフルパフについて問わないそれは、彼女が僕を正確に理解しようとしている証だった。

「……どうだかな。実際、僕自身も明確では無い」

嫌いだというのは断言出来る。

彼が代表選手となつていているという間違いを脇に置いたとしても、彼の心を見透かしてしまった今、その確信は強くなつてしまつてゐる。

ただ——それが起こつた時、良い気味だと思えるかは微妙な所だ。

それは僕が彼を可哀想だと思ふような真つ当な存在であるという訳では無く、単純にアルバス・ダンブルドアやセブルス・スネイプ教授への物と同程度の思い入れを抱けないからだ。

セドリック・デイゴリーは僕にとつて特別では無い。

今までの中でも上から数えた方が早い位には強い感情を抱いてゐるのも事実だが、第一の課題を失敗した所で、やはりそうだったか、程度の感想で終わつてしまう可能性も否定出来ない。セドリック・デイゴリーが僕の動向を気にしないのと同様に、僕もまた彼の動向について左程興味がある訳では無いからだ。

しかし、それ故に彼女は興味を惹かれてゐるようだった。

「貴方つて好き嫌いは結構はつきりしてるけど、嫌いなりに付き合えるタイプじゃない？ 勿論、ハリーの事は除外しても尚、私にはそう見えるという意味だけだ」

「……そうだろうか？ 自分では解らないが」

「ええ。ロンは貴方に近付こうとしないけど、仮に近付くのであればそれなりに仲良くやれそうな気がするわ。寧ろ、ハリーよりも相性が良さそうね」

そしてだからこそ意外だわ、と彼女は続けた。

「——貴方がセドリックを嫌うのは何故？」

ハーマイオニー・グレンジャーの瞳には、強い関心が有った。

彼女が今まで直接見て来たという留保付きで有れば、僕が明確に嫌悪を示す人間というのを見るのは初めてだからだろう。

ギルデロイ・ロックハート、或いはドラコ・マルフォイやスネイプ教授にすら明確な形でそれを剥き出しにした事は無いからこそ、彼女は疑問を持っていた。

その中に微かな非難が混じっているのは意外だが、不自然という訳でも無い。

「貴方はハリーが嫌いだと一貫して言ってきたけど、セドリックはその比じゃないでしょう？　寧ろ、ハリーには明らかに好意的と言えるくらいだわ」

「……そうだな。ハリー・ポッターより嫌いなのは確かだ」

「でしょう？　だって貴方は彼をはつきりと挑発したものだ。珍しくセドリックが怒る位に」

思ってもみなかった言葉に、思わず彼女を見返した。

「彼が怒りを見せたのか？　他人が居る所で？」

「ええ、まあ。少し違うのかもしれないけど、貴方から離れた後、貴方の悪口を言い始めた女子に対して、その話題は口にしないで欲しいって強く言ったって聞いている」

「……成程、ハッフルパフが僕を持って余しているのはそれが理由か」

そして、意外にも僕の言葉は彼にとって相当堪えたらしい。

いけ好かないスリザリンが勝手な事を言っていた程度の受け止め方をするとも思っていたが、彼は自分の仮面の出来にそれなりの自信を持つていたのかもしれない。あの瞬間に彼が優等生を取り繕ったのは、急所を射抜かれた動揺故でもあったのだろう。

「そもそも貴方、セドリックを応援しているとか言っただけでしょ？」

でも同時に、貴方が挑発したとかセドリックが怒ったという噂が伝わってくる。その割に、応援以外の詳しい会話内容は良く解らない」

「僕は彼を真のホグワーツの代表選手でないと言った。その立場は明らかだ。なら、単純に応援していると直接告げた事を挑発だと受け止め彼が怒りを示したと解するのは自然ではないのか？」

「……ええ、そうね。だから私が解らないと言ったのは、セドリックが単なる安っぽい挑発に引つ掛かるとは思えないからよ」

ページを捲る音に溜息を被せた後、彼女は続けた。

「応援云々を超えた所で、貴方が何かの逆鱗に触れたのは明白よ。貴方、そういうの得意でしょ？　そして、貴方は目的や意図無しに相手に絡みに行く性格でも無い。だから聞いた話からの私の勝手な判断になるけど、貴方は間違いなくセドリックに対して悪意を抱いていた」

「……君は、随分はつきりと断言するんだな」

「丸三年以上貴方の事を見て来たのよ。解らない方が可笑しいわ」

当然のように、ハーマイオニー・グレンジャーという女性は断言する。

「噂話が何処か茫洋としているのも、その場に居た人間が——恐らくハッフル・パフが濁してる。そしてそれも恐らく理由が有る。多分、貴方がセドリックを揺らがせたから」

「……自身の王国が乱されるかもしれない可能性という初めての脅威に、彼もそれなりの危機感を抱いたという事だろうな。ただ、その後にハリー・ポッターと同じ対応していれば何事も無く済んだだろうに」

彼はそうすべきだった。

そうであれば、ハリー・ポッターと同じく、何の憂いも無しに、ハッフル・パフは僕の中傷を存分に続ける事が出来た。このような微妙な情勢を造らずに済んだ。

そもそも僕が言い触らす相手など居らず、その言に信用性は無いのだから、その危機感は過度の物だ。スリザリンの異物の発言を、ハッフル・パフの優等生が全否定するというのも難しく無い。故に、その失敗は、僕の感知する所では無い。

まあ、他ならぬ彼自身が誰よりも痛恨と感じて居る事では有ろう

が。

けれども、気持ちは解らないでもない。

あの場に居た人間であれば、会話の発端がバツジだった事を知っている。そして、内容を深く考えれば、ハツフルパフ以外でも僕の揶揄の裏に気付くかもしれない。ハツフルパフが明確に気付いているかどうかは不明であるが、少なくとも広くは知られていないだろうし、セドリック・デイゴリー自身は知られたくないと考えている筈だった。

ただハーマイオニー・グレンジャーはあの場に居らず、また部外者グリフインドルだ。

故に彼女は真意に気付く事が出来ないだろう。そして僕としても開心術で見透かした事柄が無関係で無い以上、全てを伝える気も無いのだが——彼女が納得しないのは明らかだった。

「僕がセドリック・デイゴリーを、何処からどう見ても非の打ち所がない監督生を明確に嫌っているという事が気に入らないか？」

視線を交わさないままの問い掛けに、けれども彼女は頷いたようだった。

「……そうね。貴方がそんな感情を持っている事がちよつと嫌」

「だろうな。君が好きそうなタイプだ」

苦笑しながら言うと、彼女は口を尖らせて烈火のごとく抗議してきた。

「……ハンサムだから好きになる訳じゃないわよ。それだけじゃ決してないわ」

まあ確かにギルデロイ・ロックハートは、顔だけでは無く小説家としても優れていたが。

そしてその点に関する敬意は未だに喪われていない。彼は記憶を喪い、しかしながら作品の価値を喪失せずには済んだのだから。その事については、僕はアルバス・ダンブルドアに感謝していると言っても良かった。

「君の男の趣味は兎も角として」

僕の前置きに更なる不服そうな感情が伝わって来たが、彼女は何も

言わなかった。

それは、一々反論しては話が進まないという事も有つただろうし、僕が話をするつもりが有るといふ事に彼女が気付いたからだつた。そして彼女の反応の意味を僕が正確に見通せたといふ事は、成程三年という期間は、確かに御互いを知るには長いようだった。

「僕がセドリック・デイゴリーを心底嫌悪するのは、彼が代表選手の地位を盗み取った云々の理由では無い。もつと性格的な物で下らない事だ。僕がハリー・ポッターやスネイプ教授よりも彼を嫌っている理由というのはそこに在る」

多分、アルバス・ダンブルドアの次かもしれない。

積極的に関与しないで済む人間だというのが救いだ。後二年で卒業してくれる者だといふのも都合が良い。仮に同級生だったら、愉快ならざる事になっていただろう。

「それを語るに際して、まず些細な事から上げておこう。アラスター・ムーディ教授によつて、マルフォイがケナガイタチに変えられた出来事についてだ」

「……それは未だ記憶に新しい事だけど、それがどうかした？」

「僕が記憶しているのは偶然、という訳でも無いのだが、僕はどちらかと言えば周りの反応を見ていた。そして、彼も、セドリック・デイゴリーもその中に居た」

ドラコ・マルフォイ
ケナガイタチを見ていても、面白いだけで得られる物は無い。

だから周りの方を観察していたのだが、それ故に僕は彼の事を覚えていた。その時点では、僕は彼の本質を知らなかった訳だが、流石にハッフルパフのシーカーで監督生ともなれば名前くらいは覚えていゝる。認識する事は可能だった。

「……？　だから何？」

「嗚呼、本当に些細な事だ」

その時は当然に見逃し、しかし今になっては意義を感じられるだけの代物。

「彼は笑っていた。教授によつて何度も跳ね上げられ、石畳へと叩き付けられるドラコ・マルフォイの無様さについて、仲間達と随分愉し

そうに語り合っていた」

それを口にした瞬間、彼女は衝撃に顔を歪め、しかし即座に僕へと反論した。

「っ。でも、ハリーだって笑ってたわ。ロンはもつと大笑いしていた。永久に自分の記憶に焼き付けて置きたいとまで言ってたわよ」

そして、彼女は言いにくそうに続けた。

「……私だって、あの光景を見た時は圧倒されてたけど、その後で笑っちゃったわ」

それを自ら告白出来る善良さは素晴らしいと思うが、そうでは無い。

「君は勘違いしているようだが、僕は笑う行為自体を非難したい訳では無い。仮にスリザリンの眼が無かろうと僕がそれを笑う事は無いが、心情に理解を示す事は出来る。ドラコ・マルフォイは恨みを買って過ぎている。何より呪文を背中へと撃った以上、自業自得の面はあるからな」

故に、僕がそれによつてハリー・ポッターやロナルド・ウィーズリーを嫌いはしない。逆に、ドラコ・マルフォイに対しても同様だ。

性格が良くない事が、直接的な好悪に繋がる事は無い。セドリック・デイゴリーに対する程に弱くもない感情となれば当然だ。

「要するに、どんなに上手く取り繕っていたとしても、細部やふとした瞬間に本質は顕れる。そして、その本質と表面の乖離が激しい程、その表面が見目好く小奇麗さを取り繕っている程に、僕はどうかやら嫌悪を抱くらしい」

セドリック・デイゴリー。

彼は、そのような人間だった。

「kindness honesty fairness親切、誠実、公平性。彼はハツフルパフが尊ぶそれらの徳目を持ち合わせて居ると見られ、実際彼はその通りの行為をやっている。僕よりも余程上等な人間だ」

それは、間違いなく敬意を払われるべきでは有るのだろう。

「——ただ、彼は心の底からそれらに染まっている訳では無い。形骸で、虚偽的だ」

だからこそ、僕はセドリック・デイゴリーに対して強烈な嫌悪を抱いた。

「今の状況が最も解りやすい。例えば三大魔法学校対抗試合の課題で、ハリー・ポッターがセドリック・デイゴリーを先に助けたとしてよ
う」

「仮定の話になってる事自体に突っ込みはしないけれど、まず例が不適切じゃないかしら。三校対抗試合は個人種目よ。ハリーがセドリックを助ける機会なんてそう有ると思えないわ」

「ならば別に他でも構わない。クイディッチだろうが、家庭の個人的事情だろうが何だって。例を持ち出すのは便宜上の物に過ぎないからな。君が納得出来る事項で良い」

ハリー・ポッターがセドリック・デイゴリーを先に助けるという要素が有れば何でも良いのだ。

「ともあれ、現在の状況下においてハリー・ポッターが、先にセドリック・デイゴリーを助けたという前提で話を進めよう。それも小さくない恩を感じる物だ。——さて、その瞬間においてそれはフェアだろうか。天秤はどのように傾いているだろうか」

「? 先にハリーが助けたならば、フェアも何も無いでしょう? 貸し一つで、ハリーの方に天秤が傾いてるって事になるわ」

「違う」

当然のように言った彼女に、僕は否定を返した。

「天秤は傾き過ぎている。何せ最初から釣り合っていないなかったからだ」

仮定の話で他人を批判する事が無意味な事は重々承知だが。

それでも、この場合には多少の不適切さは許されるだろう。彼女に告げたように、ハリー・ポッターとセドリック・デイゴリーの関係は最初から公平性を欠いているのだから。

「……どういう意味? 助けたのが最初ならば天秤が傾くのは必然でしょう? まさかセドリックが先に、最初にハリーを助ける事こそが正しいと貴方は言いたいのか?」

「結論としては似たような物だ。彼が親切で誠実で公平性を有する真

に道徳的な人間ならば、天秤を並行に保つ努力をすべきだったと言っているのだから」

彼女が僕に視線を向けているのを感じ、しかし僕は視線を上げなかった。

「つまり、あのバッジがスリザリンだけでなく、ハッフルパフにも蔓延している事を、それをセドリック・ディゴリーが止めていない事を僕は指摘している」

「――」

廊下での会話もそうだった。そして、それが彼の急所だった。

僕はそれを真正面から揶揄し、それ故に彼は平静で居る事が出来なかった。

「あれはセドリック・ディゴリーを応援するだけでなく、ハリー・ポッターを貶める物だ。嗚呼、彼が明確に不公正な真似をしでかしたというならば解るとも。けれども、規則を設定したのはアルバス・ダンブルドアで、普通に考えれば十四歳の人間が騙せる筈も無い。けれども、彼等は貶めている。証拠も無く、さながら魔女裁判的にな」

魔女裁判を為した人間達は、悪では無い。

彼等彼女等は、その行為が大義に適う正義だと信じ切っていた。

しかし、今の時代の理性的で道徳的な人間は、それらの行為を邪悪だと断ずるだろう。

拷問による悲鳴、本心に基づく哀願、苦痛による諦念の自白に注意と関心を払わなかったからこそ、その暴虐と殺戮の嵐は起きたのだと。

ならば、この場合においても同じ事が言える筈だった。

「あのバッジに対しては、確たる正義感を持つ者ならば嫌悪と忌避を示して然るべきでは無いか？ それを同じ寮の人間が身に着けるのを放置している事は、善良で道徳心に満ち溢れた、全校生徒が範とすべき好青年の在り方か？」

違う筈だ。決してそうでは無い筈だ。

セドリック・ディゴリーとハリー・ポッターの立場が真逆であり、真の代表選手がハリー・ポッターで有ったとして、ハーマイオニー・グ

レンジャーは『汚いぞ、デイゴリー』バッジを着ける事は無いだろう。それは、彼女が考える公正とは真つ向から対立し、主義主張に反するものだからだ。

僕はハーマイオニー・グレンジャーを見た。

その瞳は、動揺で揺れていた。

「嗚呼、口では間違いなく止めている筈だ。それは確認した。しかし、セドリック・デイゴリーが真に高潔足らんとするならば、このような馬鹿げた事を辞めるべきだと強く言うべきだった。無口や謙虚な性格である事など、何ら言い訳にはならない」

言葉は発するだけで強制力を持つ訳では無い。

そこには確かな意思の力と、揺ぎ無い確信が必要なのだ。

「彼は単なる一学生では無い。六年生で、しかも監督生だぞ？　彼は力を持っている。見苦しい行為を止めさせ、他者にも気高さと高潔さを促すだけの力を。それにも拘わらず、ハツフルパフは、彼の友人達はハリー・ポッターを平気で汚いと呼んで囃し立てる」

「……貴方は監督生を神聖視し過ぎだわ。全ての寮生を統制出来る訳では無いもの」

「なら、君は監督生に言われても何も従わないか？　上級生である六年生から窘められて反抗するか？　何より、監督生は自寮からも減点する権限を有していた筈だが？」

彼女は答えられない。

ハーマイオニー・グレンジャーならばどうするかなど解っているから。

僕は別にスリザリンを止めろと言っている訳では無いし、レイブンクローも同様である。流石に不可能を求めはしない。

けれども、自分と同じ^七年^生以下^{以外}の学年のハツフルパフに対しては、彼の統制が効く筈だった。寮内での敬意と親愛を獲得し、他人が自然と従わざるを得ない程の強い人間的魅^{leader}力^{ship}を有しているのであれば、彼はそれが出来る筈だった。

「先の仮定の続きだ。ハリー・ポッターがセドリック・デイゴリーを助け、更に今度は逆にセドリック・デイゴリーが助けたとしよう。しか

し、それは天秤を釣り合わせ、公平性を回復する物では決して無い」他人は手放しで称賛するだろうし、その善良性を完全に否定する訳でも無いが、それでも僕は同時に軽蔑の念を抱く事だろう。

「そして、だ。セドリック・デイゴリーがハリー・ポッターを助けるのみならず、加えてこのバッジの存在もハツフルパフから一掃したしよう。彼が為すべき最善を尽くしたとしよう。そこで漸く天秤が釣り合うが——やはり僕はそれを揶揄する事だろう」

結果が綺麗で有っても、その過程が歪んでいた事には変わりはない。「スポーツマンシップ。或いはフェアプレイ精神。それは、相手の立場を理解し、尊重し合い、それ故にどちらからともなく譲り合う行為の筈だ。最終的に実行の促進と実効性を担保するのは利益だろうが、それでも発端は間違いなく違う筈だ」

その性質上、最初はどちらかが一方的に損しなければならぬ。後に相手も同様の事をしてくれるだろうという期待が有っても、何らかの保証無しにその身を投げ出さねばならない。

だからこそ、その無私に近い信念から生まれ出る自然の発露は、この世界で強く尊い輝きを放ち、彼等が得るべき報酬の代償として大衆は賞賛すべき義務が有る。

それを進めて言えば、一方的に損している側が更に損するというのは正しく無く。

「相手から何かの利益を得たが故に、その御返しとしてなされただけの打算的な物はそう呼べはしない。導かれた最後の状況は同じでも、決して同種の物には成り得ない」

それは悍ましさと醜悪さすら喚び起こすものであって。

「そして、セドリック・デイゴリーがハリー・ポッターから利益を得なければ、彼が公正な状況を造り出す事は——『汚いぞ、ポッター』というバッジを排除する事は期待出来なかつた。そんな気は彼に更々無かつた。そう考えるのは邪推だろうか?」

自分が得しないから何もしない。

正義の為に何も行動しない。それは人間的である。

僕とて同じだ。

あのようなバッジを非難し、身に着ける事を拒否したとしても、それを辞めさせた訳では無い。何よりドラコ・マルフォイは気付かなかったが、僕はセドリック・デイゴリーに関して揶揄したのみで、単純に『汚いぞ、ポッター』というバッジだけだったら、僕が着用するに支障は無かった。

要するに僕に正義感というのは全くもって存在せず。

しかしながらセドリック・デイゴリーという人間も、同じ穴の貉だというだけの話。

「彼は口先だけの男だ」

寛容や優しき、正直や公平性からは程遠い。

「口では辞めろと言いつ、しかし他人が自身の為を想って中傷してくる事で己の自尊心を満足させ、昏い喜びを抱いている。それを周りも悟っているからこそ、止めろと言われた所で周りも従わない。彼は非道を黙認し、彼こそが悪を正義として承認している」

自信。自負。自尊。

誰もがそのような物を持っている。

けれども彼が持つそれは、ハツフルパフに似つかわしくない程に強い。グリフィンドールのように自惚れていて、レイブンクローのように排他的で、スリザリンのように陰惨だ。

「……けれど、去年のクイディッチでは、セドリックは高潔さを示したわ」

これまで何も言葉を差し挟まなかったのは、僕の論理に気押されていたからか。

それでもハーマイオニー・グレンジャーは隙を見逃す女性では無い。抗議の視線と共に、彼女は獅子寮の資質を十分に発揮する。

既に本を読む振りなど辞め、本を閉じてすら居たのは、その感情の強さ故か。

「貴方は直接見していないでしょうけど、ハリーが落ちた後で、セドリックはスニッチを取った。それにも拘わらず、セドリックは再試合を主張したのよ。ウッドですら形だけの抗議しかしなかった。貴方が非難するような人では無いわ」

「嗚呼、そうだな。彼は最大限上手くやっただろう」

あの瞬間、彼は「生き残った男の子」を利用して、その評判と好感度を上げた。

「しかしながら、再試合が行われる可能性がどれだけ有った？ あの時は、ドラコ・マルフォイが怪我を言い訳にして飛ぶのを回避する程の悪天候だった。つまり公明正大な審判にとってハリー・ポッターが、本当に吸魂鬼という乱入者により落ちたと判断出来たか？」

彼女は反論しない。

それは僕が因果の話でなく、証明の可否不可否を論じているからだ。

彼が吸魂鬼により落ちたのは事実だろう。しかし、客観的妥当性は別の話だ。

「サッカーボールに動物が触れた時のように、スニッチに吸魂鬼が触れた結果として勝敗が左右された訳ではない。そしてハリー・ポッターは落ち、けれどもセドリック・ディゴリーは落ちなかった。吸魂鬼の試合への干渉は無く、その公正性は害されなかったと考えるのは妥当では無いか？」

恐らく、マダム・フーチはそのように判断した。

彼女の心証では違ったとしても、客観に基づく競技の公平性を堅持した。

「彼は恐らく一瞬で理解してやった。見事な物だ。その事に関しては、称賛を禁じ得ない」

「……なら、どうすれば良かったの？」

彼女の声には、困惑が滲んでいた。

「貴方の正しさを認めるとすれば、セドリックは去年ハリーが落ちた際に、当然の勝利だという顔をすべきだったという事になる。それはやっぱり可笑しいわよ」

「……そうだな。その点に関しては君の方に理が有る。言い掛かりめいている事は、僕としても否定しない。君の言うような場合でも、僕は非難可能だ」

再試合を求めない事を、倫理と道徳の欠如の証として指摘する事が

可能だろう。

しかしながら、僕がセドリック・デイゴリーという存在に対して引つ掛かりを覚える点というのはそうでは無いのだ。

ハリー・ポッターに直接的な嫌悪を抱かないにも拘わらず、けれどもセドリック・デイゴリーに酷い嫌悪感を抱き、また忌避感を抱いている理由は、その点にこそ有った。

「ハーマイオニー。僕は単に、性格の悪い人間を嫌うという訳では無い」

セドリック・デイゴリーが単純にそうであれば、僕はここまで嫌わなかっただろう。

「知つての通り、僕はドラコ・マルフォイとの交流を続けている。そして、君達友人二人も良い性格をしているのは重々承知だ」

僕は、それらを当然に許容出来る。

「……そうよ。貴方だって、口ではセドリックの事を非難するけど、何もしないじゃない。マルフォイがグリフィンドールを虐めている時だって、私が何かを言われている時だって、貴方は何も是正しなかった」

「肯定しよう。僕は僕の立場を理由に、個人的身勝手^{unfairness}で悪を放置している。その不親切^{unkindness}、不誠実^{dishonesty}、そして不公^{unfairness}正は十分非難に値する」

最初に述べた通り、セドリック・デイゴリーは僕よりも遥かに上等な人間である。

しかし、人としての上等さが好悪を決する物では無い。寧ろ、下等であればある程に、筋違いの好悪を抱くものだった。

「つまるところ——僕は、彼の善人面を剥がしてやりたいのだろう」

そう口にした瞬間、ハーマイオニー・グレンジャーの顔には確かな嫌悪が浮かび上がった。

それはほんの一瞬、瞬きする程の時間も無かったと言って良い。だが、そのような感情を彼女が僕に向けるのは、これが初めてだった。

しかしそれでも、僕は言葉を止める気は無かった。

「彼が周りに見られているような存在で無い事を、僕だけが知る彼の

本質という物を公にし、その人気と敬意を破壊してやりたいという欲望。僕は確かにそれを抱いている。率先してそうする気は無いが――機会があれば僕はそれを是とする筈だ」

さながらスネイプ教授が、ジェームズ・ポッターに試みようとしたように。

教授もまた開心術の心得を有していた。それを聞いたかは別だが、人の心の特に暗い部分について、教授は当時の hogwarts 生の誰よりも熟知していた筈だ。

だからこそ、彼は恋敵という以上に、ジェームズ・ポッターに対して敵意と憎悪を剥き出しにした。隠し切れない彼等の傲慢を、己こそが正義だと疑わない醜悪さこそが受け容れられなかった。

思えば、スネイプ教授は真反対だ。

リリー・エバンズという唯一の例外を除き、教授は隠そうとしない。

本質的にスリザリン鼻根だし、骨の髄まで物分かりの悪い生徒が大嫌いだし、立场上敵対するのが必要であるという面が有るにしても、ハリー・ポッターに対して本気の憎悪を――愛する女と憎い男の息子という以上の感情を抱いているのは事実である。それにも拘わらず、教授が開心術に非常に長けている人間だというのが皮肉だ。

けれども残念ながら、僕はスネイプ教授では無い。

今の所、セドリック・ダイゴリーは恋敵などでは無かったし、また僕がハーマイオニー・グレンジャーに向ける好意というのは、彼の物とは違った方向性を有するものだ。だから、これ以上に喧嘩を売りに行く必要性や価値まで感じている訳では無かった。

彼の方から来るならば別だが、それはそれでやはり同じ事には成り得ない。

僕はやはりスネイプ教授とは違うから、呪文で対抗する事などしない。一応炎のゴブレットが選ぶくらいだから、実力は確かな可能性も高いのだ。真正面からやり合うつもりは無い。

ただ、弱者にしても何とでもやりようは有るものだ。最低限、セドリック・ダイゴリーの名声を破壊する事くらいは容易い。追い込まれた者特有の反撃でもって、スネイプ教授とはまた違った形でそれを

露わにさせるだろう。

「要するに、嫉妬だ」

一言で纏めればそれに尽きる。

「僕は正しきの為に彼を暴きたい訳では無い。彼がそうでないにも拘わらず、善やら正義と言った素晴らしい存在のように見られている事が気に入らない。そして僕は個人的な満足の下それを暴き立てたいと思っっている」

「……貴方のその感情は歪んでいるわ」

「だろうな」

彼女の静かで強い非難を排斥する事は出来ない。

ハーマイオニー・グレンジャーの中には、何時も答えが有る。そして正しきも。

「前も言ったかもしれないが、僕は別に君に対して僕の考えを強制したい訳では無い」

不承認をその表情だけでなく全身で示す彼女に、僕は微笑む。

「僕のドラコ・マルフォイやスネイプ教授、或いはアルバス・ダンブルドアに対する見方と君達の見方が違うように、やはり君には君のセドリック・デイゴリーの見方が有る。そして、僕の視点が偏見に塗れているという批判に対し、返せる言葉など有りはしない」

大衆から外れているという自覚は有る。

セドリック・デイゴリーは人気者で、人格者とみられている。物事の正否は多数決で決される訳では無いが、数というのが一つの指針になる事に違いはない。

「ただ、僕がセドリック・デイゴリーを嫌う理由というのはそういう事だ。それが全てでは無いが、少なくとも僕は彼が気に入らない。彼が代表選手である以上に、その薄っぺらい、虚飾と偽善に満ち溢れた在り方というものが」

ハリー・ポッターでは無く。

ロナルド・ウィーズリーでも無く。

ドラコ・マルフォイですら有り得ず。

セドリック・デイゴリーこそを、僕は許容出来ない。

グレンジャー・ロウズ

彼女は、複雑そうだった。

このような事を話すつもりも無かったし、聞くつもりも無かったの
だろう。

セドリック・デイゴリーについても、彼女はもつと理解、或いは納得出来る理由が返ってくると思っていた筈だ。

僕は彼女にそうするように努めてきたのであるし、秘密の部屋的一件としてアルバス・ダンブルドアや僕が何も考えずにあのような真似をした訳では無いと受け容れる程度の事は出来た。だから、まさか自分が悍ましく不快だと思える回答が返ってくるとは、決して思いもしなかったに違いない。

けれども、これも間違いなく僕の一面である。

ハーマイオニー・グレンジャーは、僕がアルバス・ダンブルドアや、スネイプ教授と会話している姿を知らない。そして知らなかっただけで、最初から存在していた。ただ単に、彼女が見る機会が無かったに過ぎない。

もつとも、このような事は、誰かと過ごす中では不可避の事項の筈だった。

単に今まで彼女と適度な距離を保っていたが故に、ハリー・ポッターやロナルド・ウィーズリーより近しくなかったが故に、この瞬間まで露呈しなかっただけに過ぎない。

彼等二人と同じように、彼女の気質から我慢出来ない一側面を、彼女が僕の中から初めて見出したというだけの話。

特別それを僕が偽ったつもりは——まあ、全く心当たりが無い訳ではないが、しかしながらセドリック・デイゴリーという自身が承服しかねる存在を呈示された以上、その反射的側面として、少なくとも彼に関わる事に関しては誤魔化す事が出来なかった。

——そしてまた、これも御互いにとって相容れない一つでも有るの
だろう。

「しもべ妖精福祉振興協会の話はどうなっただろうか？」

セドリック・デイゴリーの話について彼女は受け止め切れず、故に彼女から話を切り出す事は期待出来なかった。だから、僕から水を向けた。

「今まで敢えて問わなかったが、もうそろそろ良いだろう。君が話を持ち掛けてから一カ月は経っている訳だしな。」

——ルビウス・ハグリットは、その組織について何と言っていた？」僕は条件、という程でも無いが、彼女がそれへの協力を求めてきた際に聞いた。

ルビウス・ハグリットは君の活動に賛同しているのかと。

彼女が求めてきたのは、恐らく友人二人と比較すれば酷く些細な助力だった。

S. P. E. W. の目的が最終的に屋敷しもべ妖精を最も多く抱えている集団——つまりスリザリン——に受け容れさせる事であるとしても、僕の立場を破壊してまで求める程には、彼女は冷徹でも酷薄では無かった。だから彼女は僕が賛同してくれる事を殆ど疑っておらず、しかしそれでも僕は留保した。

彼女が公然と不快感を示したのは言うまでもない。

他人の意見を聞かなければ自分の意見を決められないのかと言いたげだったし、寧ろ僕がそのような類の人間で無いと解っていたからこそ、彼女はそのような反応を大いに示した。

けれども、その当時僕は屋敷しもべ妖精の事について詳しくなく、自分で判断を下す為の時間が欲しかったし、その為にルビウス・ハグリットの意見を聞きたかったのも事実だった。それ以来、彼女からは音沙汰が無かったが、その事実自体が答えを表していた。

「……まだ説得中よ」

納得出来ないという声で、ハーマイオニー・グレンジャーは呟くように言う。

「でも、私は諦めていないわ。だから、もう少し時間を頂戴。今度はまた違ったアプローチで議論してみるから。そうしたら多分——」

「いや、君の意見が彼に受け容れられる事は無いだろう。そして、僕もだ。既に僕の意味は固まった。S. P. E. W. の活動に対して、僕

は全く賛同出来ない」

「——え？」

茫然と、彼女はこちらを見上げる。

ここまで明確に拒絶されるとは思っても居なかった。そんな表情だった。

「君はやはり頑迷な所が有る。ルビウス・ハグリットは無知故に君の主義主張に反対している訳では無い。彼は魔法生物——自分と違う物を良くも悪くも同じように扱える人間だ。何せあのスクリユートにすら愛着を抱ける位だからな。相当筋金入りと言って良い」

不快極まりない生物だが、去年のレタス喰い虫程に毛嫌いしている訳では無い。

魔法生物というのは、必ず既知の物であるとは限らない。世の中ドラゴン程に著名な存在ばかりでは無く、二年前のバジリスクとて直接見なければ石化させるという、広く知られていない性質を有していた。

そして、彼は去年の事を忘れていないらしく、スクリユートに最も重点を置きながらも、やはり一般^{W.L.}向けの他の魔法生物について講義をする事も一応忘れていなかったから、教授としての裁量に対して不満をぶつけるという筋違いな口出しをする訳も無かった。

……そもそも、スリザリンですら、危険な生き物に慣れ出している。アラスター・ムーディ教授の仕打ちが念頭に有り、また授業中ずつとぶつぶつ文句を言い続けているにしろ、ドラコ・マルフォイは去年のハーマイオニー・グレンジャーの占い学のような真似をせずに授業に留まっているのだから。

何にせよ、そのような歪な公平性を示すルビウス・ハグリットですら、S. P. E. W. には反対の意思を表明する。その意見は、やはり軽んずる事は出来ない。

「彼は確固たる考えをもって君に反対しており、僕もまた同様だ。ルビウス・ハグリットは多少口下手で君に強く出られない所が有るかもしれないが、君の事を思うが故に僕は明確に言おう。一時の熱に囚われて、軽拳で間違った行動に身を捧げるべきでは無いと」

「なっ——！」

僕に言い出して来たのは新学期に入って多少経ってからだだが、休み中に彼女が何も言って来なかった以上、それを思い付いたのは新学期に入って以降だろう。つまり、思い立ってから最大でも二カ月半程度しか経過していない。

費やした時間が組織の成熟度と直結する訳では無いが、それでも為すべき目標が大きければ大きい程に、組織を構築するには相応の準備と検討が必要な筈だった。

「君の優しさまで否定する気は無いんだ。その発想の原点に在る気高さと、尊さも。君の中には何時も正しさが在り、しかしながら今回は珍しく間違った形で現れているように思える」

先学期の逆転時計の件のように、僕は可能な限りハーマイオニー・グレンジャーを尊重したいと思っているが、それでも絶対的に間違っていると思える事柄まで放置する事は出来ない。特に、自分自身の価値観と真っ向から対立するともなれば猶更に。

勿論、彼女は当然のように、声高に反論しようとした。

彼女は語るのだろう。如何に屋敷しもべ妖精が魔法族に虐げられているのかを。彼等の権利が護られるべきであるのかを。そして魔法族がどれだけ無知のままに、見て見ないふりをして、その問題を放置し続けているのかというのを。

そして、それ自体は間違っている訳では無い。

だからこそ、僕は彼女にそもそも反論させるつもりは無かった。

「歴史の話をしよう」

唐突な言葉に面食らった彼女を何時も通り気にせず、僕は話を続ける。

「嗚呼、それも魔法族の歴史では無い。別にそちらでも良いのだが、君は善良な両親の許に生まれ、真つ当な教育により健やかに人権意識を育む事が出来たが故に、所謂「マグル」の方の歴史について語る方がやはり適切だろう」

僕がホグワーツにおいて半純血を意識するのと同様、「穢れた血アイデンティティ」という侮蔑語を通して自身の起源を意識するが故に、彼女にとって

はより身近であり、耳を傾ける事が出来るだろう。

「知つての通り、魔法族と違って非魔法族は特に色で区別した」

「……黒人差別の事を言いたいの？」

「嗚呼、そうだ。魔法界は『スクイブ』の方が差別されるし、この国には高貴で由緒正しい家系が存在している以上、黒人という人種が奴隷制や迫害の歴史と直結する訳では無い。だから、僕は君達の歴史で手酷く扱われた黒の事を言っている」

一概に、黒が悪や暗闇と結び付けられた訳では無い。

黒は豊穡や高貴、力や厳粛さと結び付けられる事も有った。ナイルの黒土、天蓋たる宇宙、謙虚と節制を尊ぶ宗教者、そして人に文明の火を提供してきた木炭や石炭。実際に、中世を色濃く残す英国魔法界のブラック家は、純血主義の王族である。

ただ、人に限っては、その黒の良性は受け入れられなかった。

「君は、屋敷しもべ妖精について奴隷制度のようだと言及した事が有ったな」

「ええ、そうよ！ 本当にクラウチさんやデイゴリーさんの扱いの悪さと言ったら！ ああいう事は決して許されるべきでは無いわ！」

それは解りやすく良い。

「ならば、近代奴隷制の終焉を達成した一つの革命について語るとしよう」

余りにも早過ぎた、尊き幻想の話を。

「1804年の事だ。カリブ海に浮かぶ海賊島トルトゥーガの近くの大きな島、その西側で、世界史上一つの画期的な事件が起こった。海を越えた本国で発された人権宣言に触発された黒人black people 奴隷は、白人を島から消滅させる事で、奴隷解放と共に世界最初の近代黒人共和国を打ち立ててみせたのだ」

近隣諸国に比して一際異彩を放つ、唯一無二の異常な革命。

西半球での黒人の歴史と文化を語るに際して欠く事が出来ない、輝かしく幻想。

奴隷制度と黒人差別、そして西欧植民地支配からの解放など様々な因習の打破を達成したそれは——しかしながら、輝かしいモノのまま

で終わってはくれなかった。

「その革命は成功し、同時に失敗した。その末路を君は知っているか？ 知らないならば僕が言うが、革命は島を焦土とした。革命より数年で国が二つに割れ、三つにすら割れた。そして今では、ほんの数年前に最悪の独裁が終わったものの、首都ですら貧困と飢餓で溢れている」

「で、でもそれは西欧諸国の身勝手な招いた事でしょう？ 彼等の革命が直接間違っているという事にはならない筈よ。当然、それがかなり過激になった事も」

「嗚呼、そうだ。別に支配され続けていた方が幸せだったとは言わない。奴隷制の下で無知のまま幸福に暮らした者など居らず、彼等の復讐心は正当だった。またそれに先行する大陸の革命は、その数倍の数の人間を人道的に断頭台へ送ってきた訳だからな」

実際に、1804年の成果をその後妨げていたのは先進諸国だった。

奴隷制を堅持していた国にとってはどう考えても都合が悪く、彼等が国家として承認されるには長い時間と犠牲を費やす羽目となった。

何より北には周辺で最も早く独立を達成した巨人^{合衆国}が存在していた。当時から無視出来なかつたその存在は、時が経つにつれて更に強大になり、カリブ海諸国へ大きな影響と昏い歴史を与え続ける事となる。

「けれども、この革命からは一つの教訓を読み取る事が出来る。つまり、革命は慎重かつ計画的に行われるべきであり、一歩間違えば改善や革新どころか荒廃と悲劇しか生み出さない事を」

かの島で行われた報復の強姦と拷問と虐殺は、如何に正当であろうとも、奴隷制の維持を主張する者達によって解放しない事の正当性を主張する根拠として用いられた。

そしてまた皮肉な事に、強い合衆国を誕生させたのは、一連の革命戦争期に防衛の困難さを痛感した本国が、遠く離れたルイジアナを格安で売却したからだだった。

加えて同じ島に同居しながら革命の成果の共有と西洋化の放棄を拒否した東半分は、西に比べて長らく経済的に劣った地位であったも

の、今では完全に逆転してしまっている。

「——っ。けれど、大半の革命というのは済し崩し的に行われるものでしょう。そして、私は別にS・P・E・W.によって暴力的な革命を起こしたい訳じゃないわ」

「……そうか。成程、君にとつてはもつと穏健な物を想定しているんだったな」

「そうよ。だから——」

「同じだよ。君がもつと良く考えるべきだと言う結論は変わらない」

例として適切で無いと彼女が考えようと、実際にそうであったとしても。

意図した通りに革命や運動が進むのであれば、この世界はもつと単純な形をしている。

「グレנגジャー」

彼女の姓を、僕は呼ぶ。

「君のその名がそれに由来するかは知らない。ただ、1870年代に合衆国で一つの変革の波をもたらした組織について、僕はたまたま知識が有る」

勿論たまたまなどでは無いが、それは常の通り些細な事だ。

「全ての事象がその組織に帰属する訳では無い。しかし、最も著名で中心的な公然の秘密組織であるそれは、穀物を運搬する鉄道、ないしは穀物を貯蔵する蒸気駆動の穀物エレベーターを支配していた企業達に対しての反抗を露わにした事によって歴史に名を刻んだ」

「グレנגジャー・ムーブメント」

「Grange農場から始まった変革と進歩。後世の人間は、その一連の熱狂をそう名付けた。」

「特にその二つの独占と支配は、農産物の流通と販売を大きく制約していた。企業達が要求する過酷な使用料は、農家の大きな負担となり、彼等の生存は事実上彼等に握られていた」

その何れも回避出来る性質の物では無い、つまり農家を続ける上で必要経費と言える物である。しかし、高ければそれだけ物が売れなくなり、一方で作って売らなければ死ぬ。だというのは、企業は不公正

に——無論、彼等から見てだが——独占し、利益を享受していた。

「これは差別的発言では無いと理解して欲しいが、当時において農家というのは無知だった。教育の機会が無く、法的知識も欠けていた。だから、正義感を持った善良な一人の人間が騎士団Th. Orderを立ち上げたんだ。彼は大統領の命令によって派遣されたのであり、その活動を支持した最初期の七人が居たにしろ、全ては一人の人間から始まった」

土壤は有った。肥料も与えられた。

それを差し引いても、彼が一つの歴史を動かした。

彼女の表情をちらりと見れば、真剣に耳を傾けている。それから読み取れるのは、偉人についての称賛と尊敬と——そして自分を重ねているのだろう。その人間に、そして同じ名を持つ組織に、これからの屋敷しもべ妖精の姿と己の夢を見ているのだろう。

……ただ、彼女は僕がどんな話の文脈でこれを持ち出しているか考えるべきだった。

「始まったのは60年代だが、最盛期は70年代だった。彼等の運動は一応実った。グレンジャー達は鉄道運賃や穀物エレベーターの価格の引き下げを求め、傍観者だったかつてと違い政治に関与し、複数の州で法案を成立させた。彼等の主導による、運賃や輸送費の最高価格に干渉するなどの形で独占規制を行ったそれらを、一般にGranger Lawsグレンジャー法と呼ぶ」

価格の統制だけが法の成果では無かった。それは規制の一つではない。

ただ、余りに高すぎる輸送費の引き下げというのが彼等の大きな目的の一つであり、その達成が意識され、革命の成果として喧伝されたのは確かだ。

「しかしながら、一方で、企業達はそれを違憲だと主張して法律への不服従を通告し、法廷へと持ち込んだ。要は、州政府やそれに支配された組織が値段を勝手に決める事は、自分達の財産を適正手続無しに奪う物なのだ」と主張した」

「可笑しいわ……！ 物流ってのは単なる一企業が独占的に好き放題にして良い物じゃないでしょう？ 誰もがそれを営業出来る訳では

無いもの。鉄道が典型のように、社会に大きな影響を及ぼす企業活動はもつと制限的で、広く人の為になるべきよ」

「その通りだ。結論としては、その主張は司法の最高機関の名の下に一応退けられた。つまり、『Public interests』^{Public interests}によって私企業が制約される場合が有るといふ論理だ」

後の推移を見るにそう単純な話では無いが、ここではそう言うておくべきだろう。

グレンジャー・ムーブメントは公権力による介入の概念を打ち立てた。百数十年経つても通用するような、資本主義が忘れてはならない原理原則を。

「ただ、グレンジャー法はほんの数年で全てが緩められた。彼等の革命は後退した」

「……！ どうして？」

「各州で成立したグレンジャー法^{Laws}には強弱と濃淡が有ったが、その一つに通称ポッター法という物が存在する。……嗚呼、巡り合わせめいたものを感じるな。君の親友である彼の姓と一致するそれは、立法によって非常に包括的な規制を鉄道に施す代物だった。が、それが良いとは限らない」

過剰は過激だ。

そして余分でも有り、不必要でも有り。

「鉄道は企業によって運営されていた。価格への干渉——要するに値下げ——を初めとする種々の規制は、鉄道の儲けを当然に減らした。資本家達に配当は支払われず、それどころか新規の鉄道建設は停止した。投資しても儲けが出ず、寧ろ損すると判断したからだ」

彼等は己が利権の死守に眼が眩んでいた事は否定出来ないけれども。

それは、鉄道側が法を挫折させる為に打ち出した^{キャンペーン}反対活動の一環だったけれども。

それでも、その論理の正しさを真つ向から否定出来る者など誰も存在しなかったのだ。

「現代とは違う。蒸気機関車というリチャード・トレビシツクの革命

は奇しくも1804年。それからわずか七十年、合衆国が鉄道建設し始めて五十年程。所謂大陸横断鉄道の建設が始まったのは1863年だ。そのような中で新たな交通網が構築されない場合、一番困るのは果たして一体誰だっただろうか」

国を南北に割った戦^{Civil War}争が終わり、再建と再統合が求められていた時代だ。

それに冷や水を浴びせるような真似事が、幾ら何でも受け容れられるだろうか。如何に始まりの理念が正しかろうとも、世の中というのは結果こそが全てでは無いだろうか。

鉄道規制に限った物では無い。資本主義の下における進歩は、企業の拡大と半ば不可分である。故に、それに歯止めを掛けるグレンジャー法は後退させられた。自ら、後退した。

絶句する彼女を他所に、僕は続けた。

「彼等の崩壊の原因が、そのみに帰する訳では無い」

法の欠陥と後退だけが、その運動の衰退を招いた訳では無い。

「他の失敗もあった。彼等は、仲介商人や資本家達が農家の必要とする種々の商品を通じて自分達を“搾取”していると考えた。だから、彼等は安い商品の確保の為に仲間内で仲介し、共同購入し、或いは自分で事業を起こした」

結果、どうなったか。

「彼等は留まる所を知らなかった。婦人服、農業機械、穀物エレベーター、蒸気船航路、保険。合同し、合資し、合名し、ありとあらゆる事を身内の組織だけで完結させようとし——当然のように冷徹な市場競争の論理に敗北して、莫大な借金だけが残った」

薔薇色の未来を勝手に描いていた者達は、話が違うと憤ったかもしれない。

けれど、世界というのはそういうモノだった。正しさだけでは生きては行けない。そしてそうと解れば、人は離れ、物は奪い尽くされ、最後には何も無くなってしまう。

その組織自体は完全崩壊の前に原点に戻って再編を進めた為に消滅だけは免れたが、その過程で多くが失望し、離れて行き、当然のよ

うにかつての影響力を喪つてしまった。

「ハーマイオニー。『グレンジャー・ムーブメント』に終止符を打つたのは司法や行政の冷酷、或いは外部の悪意云々では無かった。彼等の崩壊を招いたのは内部の不信と不和であり、政治的な分裂であり、金銭的な損失だった」

社会情勢が悪かったというのもあるが、理想は幻想でしかなかったのだ。

その運動は確かに輝かしく歴史的な功績を後世に遺したけれども、当時だけを切り取ってみれば、個々の民衆の幸福という点に視点を向けてしまえば、無責任に褒め称えられるような輝かしい運動などでは決して無かった。

「そもそも組織が設立された発端の目的は政治では無かった。寧ろ、政治を語り、その下に統制する事は禁忌ですらあった。当時にしては珍しく女性の権利を軽んじなかったその友愛組織は、教育による啓蒙と家族や農家間での連帯を目的としていた」

政治結社で無かった事が一概に悪かった訳では無い。最初からそうであった場合であれば、かの焰はあそこまで派手に燃え上がりはしなかつただろう。

ただ、組織が一気に拡大し、不相応なまでに膨張し過ぎた時、統制が取れなくなつた。高尚な目的は忘れられ、議論と不満を吐き出し、団体行動をする為の仲間を探すのを提供するだけの場となつてしまった。

「半ば暴走だつたんだ。農家の権利の守護者^{Patron}という幻想に引き摺られ、己の存在意義を曖昧にしたまま無軌道に突き進み、本来在るべき領分という物を超えてしまつた組織は、興奮が醒めて己の価値に疑問を持った瞬間に、当然のように自壊してしまつた」

そして、農家達はより政治的に構築された組織に移るか、或いは自らそれらを立ち上げた。

グレンジャー達が始めた革命は期待していた程の未来を手繰り寄せる事が出来ず、無知と傲慢は悪評と分裂、そして破綻を引き起こし、『グレンジャー・ムーブメント』という夢は消え去つた。

「……つまり、貴方はそれらの歴史を通して、何を主張したいのよ」
ハーマイオニー・グレンジャーは怒りと憤りに震えていた。

「一方は百九十年前。もう一方は百二十年前。どちらも今より遙か昔の時代の話じゃないの。今は二十世紀、それも十年足らずで二十一世紀よ。それが何の教訓になるって言うの？」

「教訓になるとも」

歴史は常に学ぶ所が有る。

学んだ所で繰り返さないという保証は無いが、知らないよりずっと良い。

何より今回に関しては、決してそう外れた事を言っているつもりも無かった。

「君は無意識に魔法界を、屋敷しもべ妖精の虐待を放置している社会を後進的な物として見下している。前近代の遺物が残存していると看做している。それは正しく、ならば、先例として見習うべきは進んだ『マグル』の西欧社会では無いだろう」

そして、この話題は彼女が余り詳しくないであろう、しかし世界の一つの原点とも言える事象をそれぞれ取り上げただけで、他を取り上げて構わない。

そもそも歴史ですら語る必要など無い。

『マグル』の世界もまた、現在進行形で残酷だ。

「別に最近の事でも良いが？ 91年からバルカンで燃え上がり、今尚続く民族主義と宗教対立の紛争について語るか？ 或いは94年、つまり今年漸く死を迎えた、かつてこの国の連邦の一員であった世界の白人至上主義についてでも良い。そして、それらは始まりから殺し合いになった訳では無い」

「歴史の話は結構よ！ 違うの……！ 私はそんなつもりで言っている訳じゃ……！」

「同じだよ。古き因習と伝統、人の価値観。頼りにならない機会主義者と好き勝手に利益を貪る悪魔達。君が戦うのはそれらだ。そして、その果てに血を見ないという保証は無い」

別に、覚悟の上ならば構わない。

悉くを業火で焼き尽くし、数多くを贄として捧げ、それでも革命に生きるといふのであれば、それはそれで一つの在り方だ。それはどちらかと言えば僕の惹かれる所ですらある。今の魔法界の停滞を忌み嫌う己としては、その方が解りやすさを有しているとすら思える。

ただ——それはハーマイオニー・グレンジャーの望む所でも無いだろう。

しかし、それでも意識はしておくべきなのだ。真に、世界を変革したいと望むのであれば。

何より彼女は忘れている。

「いいか、この魔法界は啓蒙と合理の思想が行き渡った、穏当な世界などでは無い。死と磔と服従の呪文の飛び交う古臭い場所だ。君の運動をスリザリンが冗談と受け取ってくれるなら良いが、屋敷しもべ妖精に対して悪魔的思想を植え付けようとしていると認識されればどうなると思う?」

「それは……。でも、そうとは……」

「いいや。君はやはりスリザリンの外部への冷酷さを甘く見ている。僕が排斥されても迫害されないのは、偏にスリザリンだからだ。逆に、外部にはその縛りが無い。そして、学生社会を出てしまえば、ドラコ・マルフォイのような可愛らしい嫌がらせで留まってくれない」
それを考えれば、反吐S.P.E.W.というのは悪くない名前だ。どう考えても正気でマトモだとは思えず、しかし目的を狡猾に達成する為の適当な隠れ蓑に成り得るからだ。

しかし、皆そうだという保証は無い。本質を見る者は、何処にでも居る。

「平和的に運動をするつもりでも、相手もそうしてくれるとは限らない。この国がかつて帝国で有った時の歴史を見れば、革命や運動など掃いて捨てる程見つけられる。当然失敗例も。だからこそ、その血を色濃く引く君は、深く煮詰めて考えなければならぬ」

革命にしろ、運動にしろ。

後退と悲劇を齎さない為に、真剣に悩み抜かなければならない。半ば不可避だとしても、それを少しでも軽減する為に、最大限の努力を

しなければならぬ。

そして、一度決めたのであれば、行動をもつてその信念を確定しなければならぬ。

「嗚呼、予め言っておこう。繰り返しになるが、セドリック・デイゴリーについてと同じく、僕は君に考えを強制しない。君が僕の話聞いてどうするかは君の選択次第だ。拒絶すらしても構わない。それもまた、君と僕の立場の違いでしかない」

その理念は一貫している。

己が受け容れない事に悲しく思いはすれども、それ自体を受け容れないという事では無い。正しさの化身がやはり正しかった。単にそれだけの事なのだから。

「だから、君に求めるのは考える事だけ。僕は君の活動目的に全く共感出来ないという答えを聞いた上で、君自身の結論を出してくれる事だけだ」

狂う程に苦しみ、悩み、傷付け、その上で結論を出したとは思えない程に的外れだと感じるからこそ、表面的な協力すら許容出来ない。「給料と労働条件——後者は兎も角、前者は必要か？ 彼等は売買で獲得した物質的豊かさに然したる価値を見出さない。魔法省の代表権——ケンタウロス担当室が事実上左遷部署となっているように、彼等はヒト族の政治に興味を持たない。杖の保持——彼等は杖無しに、ホグワーツでも姿現しを使う事が出来る」

理念は別として、その活動目的については殆ど疑問を呈さざるを得ない。

「ホグワーツに屋敷しもべ妖精を受け容れたのは、ヘルガ・ハツフルパフだった。慈愛と善良さに溢れた彼女は、彼等に職場と安全、そして奉仕の満足を提供した。彼女は当時における最善を尽くし、故に彼等は感謝し、今も尚その子孫達は恩義を忘れずにこの場所に居る」

「……それは、当時で正しかっただけだわ。今も維持されるべきとは限らない」

「大いに正しい。だが、やはり現状を変えようとする君が間違っていないという保証は無い」

何かを変えろというのは甘美な響きだ。

しかし、アラスター・ムーディ教授が指摘したように、現状維持にも相応の努力が必要なのは事実だ。僕にとって受け容れがたくとも、それは認めなければならぬ。

「だが、彼女は最大限屋敷しもべ妖精の意思を尊重した。彼女は寄り添おうとした。君とは違う。君は彼等と話し合い、悩みと苦しみを分かち合い、その上で活動を始めた訳では無い。可哀想だという薄っぺらな激情に流された行動でしかなく、決して本気の行動では無い」

痛烈な批判に、罵倒に、ハーマイオニー・グレンジャーの顔が歪む。

その瞳に、涙が浮かんでいる。……嗚呼、それでも言わざるを得ないのだ。

「本気で世界を変えろつもりで有るのなら——そんなヒトの価値観に凝り固まった独善的な活動目的は出て来ない筈なんだ。君は真に革命の主体となるべき屋敷しもべ妖精を無視し、自分自身にだけ眼を向けている。少なくとも、僕にはそう思えて仕方がない」

「貴方は！」

ハーマイオニー・グレンジャーは怒声と共に立ち上がった。

椅子が盛大な音を立てて、図書室に居た者の全てが動きを停止し、視界内に居る者の全てがこちらを見た。それでも、彼女はそれを無視した。

「貴方はスリザリンよ！ 骨の髄まで！」

その瞬間ハーマイオニー・グレンジャーは、はっとしたような顔をした。

自分が何を発言したのかに気付いたようなそれは、衝動的で反射的な言葉だった筈だ。彼女が本当に言いたかった言葉では無かった筈だ。……嗚呼、それでも、彼女は自分が何を言っているのか理解して尚、彼女は震える声で続きの言葉を紡ぐのを止められなかった。

「貴方は自分大好きで保身しかできない残酷な傍観者よ……！ 確信が持てるまで動かない事が賢いと考えている日和見主義者。そして、社会を変えたがらず、大多数に迎合する事が完全に正しいと思ってる差別主義者だわ……！」

「僕はそれを否定出来ないが故に、人格非難では無く理性的な反論だと受け取ろう」

激情に、正しい論理に付き合う気は無かった。

だから僕は囁くような声で、けれども彼女にはつきり届くように問い掛けた。

「しかし、ハーマイオニー・グレンジャー。君はS. P. E. W.を通じて何がしたい？ 君が本当に許せないと思ったのは、その原初の想いは、果たして何処に有る？」

視線を合わせたまま、彼女に対してゆっくりと続ける。

「今後も議論がしたいというならば付き合おう。別に何時来てくれても良い。僕を論破し、やり籠めたいが為にでも構わない。そう、理想の下になんだってすれば良い。

——しかしながら、君がそのような活動目的を掲げ続ける限り、僕は君に協力する事が出来ないという考えは変わらないだろう」

ハーマイオニー・グレンジャーは僕の下を去った。

去年とは違う。眼は少し赤かったけれども、マダム・ピンスすら注意を忘れる程の熱量と激怒と共に、周りの視線を完全に無視しきったまま、胸すら張って堂々と歩いて行った。

そしてやはり去年とは違い、僕は彼女を追い掛けなかった。

己の事ながら意外さすら感じる物だった。彼女を傷付ける事を理解しても尚、それでも我慢出来ないような事柄が、自分の中には確かに存在していたという事に。

彼女が僕を——魔法界の貴族たる仲間達スリザリンを敵に回すような活動を表立って出来ない人間を——巻き込もうとした理由も解らないでもない。僕は本質的に革命、運動、ないし世界の変容に対して惹かれていた。だから、当然に賛同してくれると考えたのだろう。

けれども、僕はそれらに惹かれているからこそ、志向するからこそ、相応の価値と重みを求めてしまう。彼女の考えと、立ち位置を全く異

にしてしまう。

ゲラート・グリンデルバルド。闇の帝王。

彼等は何れも挫折を経験し、しかしそれでも一種の敬意を払うのは、彼等から何を犠牲としても革命を実現するという意思と覚悟を感じるからだ。自分にはどう足掻いてもそこに至れないと確信し、また全世界を探しても彼等の真似事をする事が出来る人間すら極少数しか居ないだろうというのを痛感しているからだ。

その二人だけ見れば彼等は五十年に一人の人間だが、たまたま時代の歪みがそれらを生み出しただけで、魔法史全体——勿論、全世界の——で見れば数百年に一人の人物である。

彼等のように世の中を好き放題に弄繰り回した魔法族というのは稀だった。そしてそれ以上に、恐らく彼等は支持者を集うにしろ、己の力量を向上させるにしろ、暴力革命の為の準備を怠りはしなかった。だからこそ、彼等は悪くとも偉大な事を成し遂げる事が出来た筈だ。

要するに、彼等は学生のクラブ活動気分の世界に挑んだ訳では無い。

彼女は屋敷しもべ妖精について図書室を片っ端からひっくり返したようであるし、それはそれで必要な事だ。

けれども、革命を成し遂げたいのであれば、特に杖での決闘無しに無血で達成する事を希望するならば、その成否を決するのは洒落た理念や小奇麗な正義でも無く、挨拶と握手、衝突と折衝、そして何よりも会った回数と言葉を交わした時間である事だろう。

しかしながら、ハーマイオニー・グレンジャーは屋敷しもべ妖精と——革命の主体となるべき者達と殆ど会話した事が無いという。

ドビーという変わり者、ウインキーという可哀想な者が居るのは聞いたが、彼等と本音を曝け出してぶつかり合った上で協会を立ち上げたという訳では無いのは明白だった。

つまり、彼女はどうか考えても汗を掻き足りていない。

それが透けて見えたからこそ、僕はあのように悪辣な形で彼女を否定した。

……嗚呼、彼女が単純に一時的な満足と、自身の善良さを社会を通して確認したいだけというのならば、僕は何も言わなかっただろう。有象無象の大衆による感情的な支持もまた、革命や運動には必要不可欠だ。

寧ろ、それらを率いる指導者以外の人間は、確たる信念や展望を持っていての方が珍しかった。賢明でも聡明でも無い、何となくという流れに身を任せた数の論理こそが、数ある革命や運動を成功させ、そして輝かしい歴史を打ち立ててきたのであり、深く考えたり悩んだりする事は本質的に必須であるとも言えなかった。

故に、僕はただ彼女にそう在って欲しく無いが故に、あのような事を告げたのだ。

「……とは言え、我儘だろうな」

彼女が訪れて来る前と同じように、本に視線を落としながら呟く。自分が出来ない事を他人に求めてはならない。

リーマス・ルーピン教授は正しいが、しかし、一人で出来ない事に時に分かち合い、時に身勝手に夢を押し付けてきたのが社会であり、人間の本質である筈だった。

ハーマイオニー・グレンジャーは「英雄」では無い。

彼女はハリー・ポッター程の器を有している訳では無い。その叡智と魅力は多くの人間を動かす事が出来、しかしながら世界を変える事は出来ないだろう。歴史に名を残す数々の魔法大臣と同じ程度の優秀性、卓越性でしか無く、広いと思っていた道は成長するにつれて狭くなり、外の世界に身を置けば当然に己の分と限界を知るだろう。

嗚呼、けれども。

たとえ、僕の結論では「英雄」で無かったとしても。

それでも尚、己が深く好意を抱いたモノが、確かに価値を見出だしたモノが、その通りに至上の輝きで有って欲しいと願うのは——やはり罪であると言うのだろうか。

第一の課題とその顛末

第一の課題は、ドラゴンである。

課題当日、コロッセオめいた舞台を前にルード・バグマンが高らかにそう宣言した時、僕は一つの空想を思い描いてしまった。

すなわち、死喰い人を始めとする闇の魔法使いが遍く敵視する『生き残った男の子』——但し一人は女性だが——とやらは実は世界に四人存在しており、僕は単純な無知故にそれを知らなかったのではな
いか。そんな馬鹿々々しい空想を。

ドラゴン。

非魔法界にも良く伝わる幻想の王。

魔法省分類においてXXXXX。訓練する事も飼い慣らす事も出
来ず、かつ魔法使い殺しとして知られる生物。

秘密の部屋の主であるバジリスクを放置した僕やアルバス・ダンブ
ルドアを、善良にして良識の有るハーマイオニー・グレンジャーが非
難したのと同様、専門家による学術的判断からしても魔法使いが対峙
する事が推奨されない、怪物中の怪物。

かつて夥しい死者を出した三大魔法学校対抗試合は、しかし今回こ
そは死亡選手が出ないよう特別の安全措施が取られたという建前の
下に開催された。ルード・バグマンやバーテムウス・クラウチ、その
他の魔法省から出向してきた多くの役人達、加えてアルバス・ダンブ
ルドアを含む三校校長が細心の注意を払っているとも当然聞いたの
だが——どうやらそれは嘘だったらしい。

寧ろ、彼等が協力して、ハリー・ポッターを含めた代表選手全員を
葬り去りたいと思っても尚信じられる。それくらいには法外で無茶
苦茶な現実が、今日の前には存在していた。

会場の異様な雰囲気を感じにする事も無く楽し気に司会を始めた
ルード・バグマンをぶん殴りに行きかけたグリフィンドール生は、恐
らく片手では足らなかつただろう。スリザリンの大部分を除けば、ハ
リー・ポッターを歓迎しなかつたハツフルパフですら同様の想いを抱
いているようであった。

衝撃的な課題内容の発表にどよめく観客。それを気にせず自分
の世界に入り込んだ司会。自身の存在を誇示するかのように遠くか
ら聞こえるドラゴンの咆哮。そして、緊張感を隠せないドラゴン使い
ら大人達。

それらは或る意味見物では有ったが、第一の課題に際する僕の関心
事はやはり別の所——課題というのがどのように「運営」されるか
という点に存在していた。

何者かがハリー・ポッターを代表選手とした以上、その犯人は三大
魔法学校対抗試合の中で確固たる目的を有している。そして、それ
に外部者である僕が付け込むとすれば、自身が犯人だったらどのよう
に干渉するかを想定するのは第一歩だった。

もつとも、その運営方法、試合規則、或いは生徒に対する注意喚起
というのは、当たり前では有るが目立ったような物を述べる物では無
かった。

代表選手には途中棄権の権利が有り、試合中ドラゴン使い達が彼等
の安全の為に眼を光らせ続けているから何ら心配は無い事。

観客に対しても同様であり、更には会場全体に対し種々の防御呪文
が掛けられており、観戦するに際しても大きな危険が無い事。

加えてその反射的效果として、署名した三校に現在所属する者全て
が試合規則を始め魔法法的な拘束の下に置かれており、外部から代表
選手への妨害は禁じられ、実際にそれを行う事は出来ず、違反者には
ホグワーツと魔法省の両者の下で軽くない罰則が下されるであろう
という事。

最初の二つは当然で有り、最後の一つも何ら驚くにも価しない。

ハリー・ポッターを強制参加させた炎のゴブレットが、まさか単
なる気の利いたくじ引きマシンに過ぎない訳では無いだろう。殺人
罪が人を拘束し、処罰する剣で有る一方、無辜の市民を守る盾の機能
も有している。わざわざ代表選手に名前を入れさせたあの魔法具は、
一般人には広く明かされない不思議な効果を他に宿していると考え
る方が寧ろ自然であろう。

また敢えて魔法省の名前を出すのも、干渉すれば悪戯で済まない事

を示すのを狙った事であり、そして理屈としても、三大魔法学校対抗試合に魔法省が深く関与している以上、その面子を汚す事を許しはしまい。特に、今年のクイディッチ・ワールドカップにおいて、魔法省は国際的な大恥を晒したのだ。生徒だからと言って軽い処置が下ると考えるのは甘過ぎである。

加えて、三大魔法学校対抗試合が有する性質自体が、そのような行為が易々と許されるとも思えない。三百年の歴史の中で外側から介入を試みた馬鹿が居ない筈も無いし、けれどもその逸話が伝わらず、三大魔法学校対抗試合の権威自体が損なわれていない——夥しい死者という点を除いてだが——という事は、多分そういう事なのだろう。

更に言えば、アルバス・ダンブルドア。

年齢線の一件ではハリー・ポッターを参加させてしまうという無様を晒したが、あの今世紀で最も偉大な魔法使いの守護が、課題に関する無粋な干渉を易々と許してくれるとも思えない。

思い返せばハリー・ポッターは、クイディッチの試合において三年連続で外部からの攻撃を受けている。

一年目は箒が制御不能となり、二年目はブラッジャーが彼の腕を粉碎——ついでにギルデロイ・ロックハートが彼を骨抜きに——し、三年目には吸魂鬼によって地上に叩き落された。

このような「尊き」前例が有るにも拘わらず、その手の干渉への強い対抗措置を取れないとすれば、馬鹿を通り越して無能である。そしてまあ、アルバス・ダンブルドアがそのような人間でないと考える位には、僕はあの老人の知性と実力に対して信頼を置いている。

更に更に、これはついで程度の理由でしかないが、流星のスリザリオンとして今回は殆どの生徒が空気という物を読んでいた。

仮に魔法省の警告が無かろうとも、ハリー・ポッターを事故死させる為に呪文を使うべきではない。ドラコ・マルフォイにすらそう考えさせる位には、第一の課題がドラゴン——魔法使いにとって一つの死の象徴であるという意味は大きいようだった。

死の呪文を使用する事自体については余り抵抗が無くとも、他人が

踊り喰いされるような結果を招く関与をしたい人間は居ないらしい。銃で人を殺す事が出来ても、剣で人を殺す事には抵抗があるようなものだろうか。まあ、人間として真つ当な感覚であるだろう。

勿論、それでも自身が関与しない事故死は有って欲しいと考える位には、スリザリンは「スリザリン的」であるようでは有ったのだが。故に、というべきか。

第一の課題は不気味な位の静寂と共に開始が宣言され、進行と共に観客の殆どを熱狂の渦に陥れ——そして最終的には平穩無事のままに、予定の全てを終了した。

三校全体と魔法省、そして多くの大人が協力して敷いた体制は、その完璧さを遺憾無く発揮し、ドラゴンという大危険物を用いて尚イベントをイベントのままに留め、興奮と熱狂の渦をもたらしたままに終結させて見せた。

いや、その結果を導いた最たる理由は、あの場に居た誰もが理解していた筈だった。

僕はマルフォイ、或いはハーマイオニーに対して——その後の展開や彼女の話から判断するに、結果的に殆ど全校生徒が知ったようだが——疑問を呈した。

ハリー・ポッターを四人目の代表選手とするような炎のゴブレットは公明正大な審査員などでは無く、残りの三人の正当性も保証されないのではないかと。セドリック・デイゴリー、ビクトール・クラム、そしてフラー・デラクール。彼等が三大魔法学校対抗試合の代表選手として相応しき資質と能力を持っているかは疑わしいのではないかと。その理屈は、あの時点ではそれなりに尊重されるだけの重みを有していた。

誰の眼にも明らかな不正の露呈は、その可能性を広く考えさせるには十分だった。

けれどもまあ、第一の課題が終わった今、それがどうであるかは言うまでも無い。

僕の「予言」は綺麗に外れた。

四人の代表選手は、自らが代表選手に足り得る事を証明した。

炎のゴブレットから名前が出たからという理由では無く、四者四様の方法でドラゴンを出し抜き、第一の課題を達成する事で、尊敬と権威を勝ち取ってみせた。

そして当然の事ながら、理由はどうあれ代表選手に疑問を呈した僕に対する風当たりというのは至極当たり前に強くなつたのだが、それはまあ些細な事だ。元より嫌われているスリザリン生であり、それどころかスリザリン生の中でも敬遠されてきたのだ。非難と忌避の理由が一つ増えた所で、何かが大きく変わる訳では無い。

何より、僕の関心というのは、やはり最初からそこに無い。

彼を三大魔法学校対抗試合に参加させた第三者は、第一の課題中に何も動かなかつた。

ドラゴンは不幸な事故を演出するにはさして苦労しない程の脅威だっただろうに、ハリー・ポッターが事故死しても不自然では無いと考える位には刺激的であつたのに、干渉のような干渉をしなかつたのだ。スリザリンの内部からですら、そのような動きは無かつた。

課題は全部で三つ。つまり、後二度機会が有ると言えばそれまでである。

しかし、後二度有るのだからという甘い考えで、絶好の機会である今回を逃したのではないかという価値判断を下す事も可能な筈だ。

そしてまた、警備体制という点で見れば、今後の二度で大きく変わる物でも無いだろう。ハリー・ポッターの護りがこれ以上に薄まるとは考えられず、逆にアルバス・ダンブルドアであれば、第一の課題の経験を生かす事によって、ハリー・ポッターに対する新たな守護すら掛けてみせるかも知れない。

だからこそ、彼を害する気配すら見えなかつたのは不気味だった。

僕は何かを勘違いしているのではないかと。あのアルバス・ダンブルドアですら、見当違いの所を見てしまつていのではないかと——
そう思えてならなかつた。

話が少し前後はするのだが。

第一の課題終了後、セドリック・デイゴリーはその地位を確たる物とした。

ドラゴンを華麗に出し抜いてみせた事により人気を一層高めたのもそうだが、それが全てでは無い。課題の達成が三大魔法学校対抗試合の代表選手の資質を証明したとすれば、その「問題」の解決に尽力した事は、ホグワーツの優等生としての評判を揺ぎ無いものとした。ハッフルパフは当然の事ながら、グリフィンドールからも敬意を勝ち取った。

その「問題」というのは、当然の事ながらあのふざけたバッジについてである。

いや、第一の課題開始前には、既にバッジの着用云々を既に離れていたのだから、それがもたらした影響とでも言うべきであろうか。

僕はその事に対して何も予言などしなかったが、僕にとって酷く不愉快な事象であった以上推移については注視していたし、そもそも何も予見していなかった訳では無い。あれが出現し、ハッフルパフの殆どがそれを肯定した時点において、僕は当たり前のように、未来におけるグリフィンドールとハッフルパフの戦争状態の到来を思い描いていた。

至極当然の事ながら、行為というのは、後に辞めたとしても消滅するものではない。過去に当該行為に及んだという事実は、決して消え失せたりなどしない。

前提として、ハッフルパフは自寮の代表選手を応援するだけならまだしも、あのバッジを公然とローブに帯び、ハリー・ポッターへの中傷活動に走った。呪いを掛けに走らないまでも、リータ・スキーターの記事を持ち出しての揶揄は当然、廊下で彼に侮辱の言葉を投げつけ、精神的に追い詰め、第一の課題を失敗させようとした。

しかし一方、グリフィンドール。

かの寮生はハリー・ポッターを公然と支持する事まではしなかったものの、彼等にとってハリー・ポッターは一貫して自寮の代表選手で有った筈だ。

何せ、あの御調子者共の思考は解りやすい。

有り得る筈が無い四人目の代表選手が誕生した瞬間、彼等はハリー・ポッターを当然に歓迎した事だろう。ウィーズリー家の双子ですら不可能で有った年齢線という障壁を超え、アルバス・ダンブルドアを出し抜いてみせた「英雄」への賞賛を隠しはしなかつた事だろう。

勿論、彼等はすぐさまそれを取り繕った。

ボーバトンやダームストラングの生徒達、加えて彼等の本国の反応や、予言者新聞に代表される媒体による不正の指摘の下では、空気を読む以外の選択は無い。

しかしそれでも、ハリー・ポッターを裏で応援している者が多く居た事に疑いは無い。

何年もの時間を経て育んできた寮内での結束というのは、世間の反応程度で容易に断ち切れる物では無い。そのような脆弱な物であれば、四寮間の確執や、自寮への固執などというのは既にホグワーツから消え失せている筈である。

ロナルド・ウィーズリーの反応がグリフィンドール内を複雑にした面が有つたらしいにしろ、全グリフィンドールがハリー・ポッターの敵に回つたとは考えられない。寧ろ、グリフィンドールの主流、根底に有つた感情は、自寮の代表選手ハリー・ポッターの応援だつたであろうと僕は断言する。

畢竟、ハツフルパフとグリフィンドールには、今回の騒動で明確な対立構造が生まれた。

ハツフルパフはグリフィンドールの一人のみ、ハリー・ポッターという個人に対してのみ喧嘩を売っているつもりだつたのかも知れない。というより、珍しく熱に浮かれた彼等、他人の中傷に慣れていない者達の思考は一貫してそうだろう。

だが、ハツフルパフはグリフィンドールの習性を見落としている。仲間への侮辱は自分への侮辱と等しいと考えるのが彼等である。それどころか自分以上に他人の為により激しく燃え上がってみせるので有つて、その自認と自尊を公然と踏み躪つたハツフルパフに対

し、あの独善的騎士道集団が黙っていられる筈も無いのだ。

故に、グリフィンドールは第一の課題に至るまで、能天気なハッフルパフに対して不満と敵意を貯め込んできた。両者を引き裂く罅、二寮の断絶を招く種が生まれ、短期間に急速に育まれ、不可避の熱戦へと発展するのには時間の問題だった。

もつとも、明確な対立構造を有しながらも尚冷戦のまままで有ったのは、グリフィンドールが珍しく自制したからだ。

本来の彼等であれば何時ものように即決速攻で殴り込みに行くのだが――スリザリンに対しては当然そうした。バッジが広く出現しからの二週間程、スリザリンとグリフィンドールには不幸な事故で医務室送りになる例が多発していた――今回の一件には小さくない負い目が有った。

ハッフルパフ出身の代表選手という、輝かしき話題の矮小化。有り得る筈の無い四人目の、年齢資格を欠いた代表選手。付け加えれば、ハリー・ポッターが数々の騒動を引き起こしてきたのはグリフィンドール自身が良く知っていたのも有っただろう。

言ってみれば、世間的にも、感情的にも、理論的にも分が悪かった。済し崩し的に二寮間の戦争を引き起こすのには、躊躇するだけの理由が有った。ハッフルパフをやんわりと宥める事は出来ても、強く制止し、決定的に対決へと踏み切りにくい土壌が有った。

……しかしまあ、それが出来ないのと、何も思わないのは別の話だ。スリザリンもハリー・ポッターを中傷はしていたが、或る意味それは何時もの事だ。

しかし、グリフィンドールが勝手な仲間意識を有していたハッフルパフが、今回の一件において彼等の予想を大きく超える行動に出た。

元来性根の腐っている者が悪事をしてしまあそうだろうなという感想を抱くだけだが、善人だと思っていた相手が悪事をすれば衝撃を受ける。人の感情とは真に我儘なもので、しかしグリフィンドールはそれを制御出来る程賢くは無い。しかもスリザリンに対する物と違つて軽々と表に出せはしない為に、敵意の炎は内に閉じ込められ、より強く燃え盛る事になった。

火種は厳然として存在し、必要なのは契機だった。

それが「何」になるのかまでを事前に想定する事は流石に出来なかったが、第一の課題でハリー・ポッターがドラゴンを見事に出し抜いた時、僕はそれを十分だと見た。グリフィンドールは一つの強力な口実を、ハツフルパフに反撃を開始する為の武器を手に入れたと感じたのだ。

クイディッチを含むスポーツの世界で顕著なように、絶対的な実力の提示は時に、外部からの無責任な批判や中傷を、問答無用で捻じ伏せうる。

ハリー・ポッターが代表選手の座を盗み取ったと非難されたのは、一千ガリオンという富と三百年振りの優勝選手という名誉への嫉妬の面も有った。自身が優勝選手として賞賛されている仮定の世界を、しかし所詮夢でしか無いと考えていた未来を、ハリー・ポッターは現実にし得る権利を得たのだ。しかも、本来資格無き者で有りながらも、なかば裏口的に。だから、彼へと一言で言い表しがたい感情を抱くのは当然であり、自然であった。

けれども、ハリー・ポッターは意図せずして、だが明確に疑問を突き付けた。

——代表選手になったとして、お前達は自分と同じ事が出来るのかと。

ハリー・ポッターは魔法界的に、闇の帝王失墜後の十三年間一貫して英雄だった。そして、ホグワーツに入って以降も、数々の英雄的行動を引き起こしてきた。

だが、彼のホグワーツでの行いに眉を顰めていたのは決して我らが寮監にして教授殿のみでは無く、レイブンクローやハツフルパフ、グリフィンドールの中にすら存在していた。彼を歓迎していなかった者達は、今回ハリー・ポッターが代表選手となったのと同じような特別扱いに対して嫉妬をしていた者は、決して少なく無かったのだ。

けれども、今回は決定的に違う点がある。

彼の偉業は今まで一貫して密室で行われてきた。

賢者の石、秘密の部屋、そして当然ながら闇の帝王の失墜。そのい

ずれの活躍も、他人の眼に触れる物では無く、疑念と疑問を挟む余地が有った。如何にクイディッチの世界で実力を示そうとも、魔法的な能力と資質とは無関係である以上、彼を侮り過小評価する風潮は一掃されず、その行為は何ら妨げられるものでは無かった。

しかし今回の三大魔法学校対抗試合第一の課題においては、誰にでも見える形で彼自身の資質と能力を見せつけた。

大会規則でも無く、炎のゴブレットでも無く、『他ならぬお前が、三校の代表選手達に並び立つ者としハリー・ポッターは相応しいと思うか』という形で自らが訴えかけてみせた。

そして、その問いに対する解答は、彼がそれまでに行ってきた英雄的行動の追認は、課題後に向けられた彼への歓声の大きさを示すだけで十分だろう。

ハツフルパフ——余り深く考えもせず、信念も無く成り行きのにハリー・ポッターを中傷していた者達もまた、あの試合内容を見せつけられた以上、ハリー・ポッターを否定し続ける事は出来なかった。スリザリンの一貫性を彼等は抱けなかった。

そもそも彼等は、本質的には他寮との融和を是とする者達である。今回が異常であり、異例である。故にハリー・ポッターが第一の課題を終えた時、彼等はそれまでの自分達の行いに疑問を抱き、それを顧みる余地が産まれた。あそこまでやるべきでは無かったと反省し、後悔しうる趨勢へと傾いた。

そしてそれは結果として、グリフィンドールが戦争に踏み切る隙を作った。

嗚呼、隙なのだ。優しきは時に甘さであり、弱さに繋がる。

自校の代表選手を中傷する事は間違いである。ハリー・ポッターは自校の代表選手に相応しい活躍を見せた。故に、ハリー・ポッターを中傷する事は間違いであり、それを為したハツフルパフもまた間違いである——そんな三段論法以下の言いがかりは、しかし火種を延焼させ、業火へと成長させるには十分である。

ハツフルパフは言うかも知れない。

自分達が間違っていた事を認め、辞めたのだから良いでは無いか

と。正しい在り方に「是正」したのだから良いのでは無いかと。

けれどもグリフィンドールは、自分達が正しい事さえ理解して貰えばそれで構わない、というような、清涼で爽やかな性格を持っている訳では無い。

あの者達はやはりスリザリンを超える陰湿さを根底に有しているし、時に露わにする事を厭わない。そうでなければ、一夜にして百五十点を喪わせたかつての十一歳ハリー・ポッターの少年を、寮全体で晒上げにする筈も無いのだ。

そして、今回のグリフィンドールは止まれない。止まる事が出来ない。

ハツフルパフ自体がハリー・ポッターへ公然と敵意を剥き出しにした瞬間、バジジ云々、代表選手云々から問題の核心部は離れていた。

ハツフルパフは、グリフィンドールの仲間を侮辱した。

根も葉も無い誹謗中傷、魔女裁判的な非道の処遇を受けた。

そのような無法を、他寮の横暴を、「グリフィンドール」が黙っていられるのか。

いや、それまで黙っている事を余儀無くされたが故に、既にハツフルパフの行為を殆ど黙認したが為に、たとえ言いがかり的な理屈を発端として持ち出しても、自分達が「グリフィンドールの事である」事の証明の為に立ち上がらねばならなかった。

それは面子の問題であり、感情的な理屈であり、それ故に解決が困難であって、融和の崩壊の帰結としての戦争へと発展する事が当然だった。

グリフィンドールとハツフルパフの戦争。その発端が三大魔法学校対抗試合に纏わる事象だったとしても、表面化した衝突は更なる対立と問題の表面化を生み、戦火と憎悪を拡大・再生産する。戦争において、最初の戦争理由が忘れ去られる事など珍しくない。全く関係無い不平や不満を飲み込み、最終的に、勝つ為に戦うという例は幾らでも有る。

そして、二寮の価値観の相違が常に問われてきたスリザリンとグリフィンドールとは異なり、ハツフルパフとグリフィンドールはそれが

問われる事が殆ど無かった。ガス抜きする場も、御互いの差異が焦点として先鋭化される機会自体が無かった。

そもそも、スリザリンとグリフィンホールでは親しき交流が無く、必然として、本来仲睦まじい友人で有った者達が、譲れない矜持が為に対立する事が——更なる対立と激戦を招くような関係性が無かった。

しかし、ハツフルパフとグリフィンホールにはそれが有る。

そして、その友人達は、第一の課題終了時まで互いにハリー・ポッターについての問題を棚上げしてきたに違いない以上、当然その不自然さに直面せざるを得ないのだ。そして直面した時、自分が「ハツフルパフ」或いは「グリフィンホール」である事を意識し、対立を止める事が出来ない筈なのだ。

勿論、そのような問題に口出しする資格というのは、ハリー・ポッターには有る。

誹謗中傷されたのは他ならぬ彼であり、今回の一件の当事者で有る以上、二寮の戦争が勃発するような愚行を止める為に大きく介入する権利は当然のように有している。

けれども、僕はそのような方面の能力について、寮への統率力という点において、僕は「英雄」たる彼をやはり評価していない。

彼の交友関係は二人の親友以外は薄く、そしてまた既に述べた通り、問題の核心は三大魔法学校対抗試合のみを離れ、「グリフィンホール」的ないしは「ハツフルパフ」的な物へと移っている。ハリー・ポッターの気質がスリザリン寄りであり、かつ癩癪持ちの傾向が有る事からすれば、そのような機微を把握した上で制御する事は出来はしないだろうと踏んでいた。

だからこそ、僕は二寮の融和の崩壊を、戦争を予見した。

それが寮の一部を焼くに留まるか、二寮全体を燃え上がらせるかは解らずとも、かつて友人で有った者達が対立し、疎遠となり、永遠の不干涉となる事例が数多く現れると思っていた。論争と衝突は各地で相応の規模となり、数か月か、数年か、ハツフルパフとグリフィンホールを隔てる大きな断絶を生む事だろうと考えていた。

だが——そうはならなかった。

他ならぬセドリック・デイゴリーの、強力な介入によって。

“セドリック・デイゴリー”の動きは素早く、そして見事だった。

第一の課題での熱狂が醒める前、ハツフルパフとグリフィンドールが我に返る前に、彼は大きく動いた。不正が看過されていた事を忘れていないと、そしてそれを誰よりも直視し憂慮していたのだという事を証明するかのように、精力的に活動した。

彼は課題終了の殆ど直後には既に自察が誤っていた事を宣言し、それを止められなかった自身の不徳を恥じて見せ、尚不満を隠さないグリフィンドール生とは自ら多くの言葉を費やし、時には頭を下げる事を躊躇わなかった。自察全体の問題である事を差し引いても尚やり過ぎだと思える位に、彼は二寮の友人関係の破綻の回避に動き、便乗的に噴出した不満や諸問題の解決にすら大きく関与し、己の誠意を広く示すのを厭わなかった。

特筆すべきは、彼が問題を正確に把握した上で動いていた——少なくとも、僕の眼にはそのように見えた——という事であろう。

今回の最大の焦点は究極的には、ハツフルパフが“ハツフルパフ”である事を忘れた事であり、グリフィンドールが“グリフィンドール”で在れなかった点に帰結される。

しかし、来年の首席候補にして三大魔法学校対抗試合代表選手、そして何よりも最もハツフルパフ的存在であるが、自察が“ハツフルパフ”でなかった事を認めた。その上で、“グリフィンドール”的な正しさを肯定し、尊重し、グリフィンドール生が今回の一件で決してそれを喪っていない事の保証すらしてみせたのだ。

そしてそれは当然の事ながら、グリフィンドール生に満足を与え、溜飲を下げさせる事に成功した。良くも悪くも、そのような事はハリー・ポッターでは出来ない真似だった。

何より意識すべきは、好き好んで自らの友人を喪いたい者というのは居ないという事だ。

断絶状態でも戦争状態でも何ら問題の生じないスリザリンとは違う。数年もの間同じ校舎で関係を育み続け、友人と呼んできた者を喪

うかもしれないという危険性を、彼は広く意識させた。一時の感情的理由で永遠に係性を喪う愚行は、「グリフィンドールの」であるのかと、決して言葉にせずとも、態度で示し続けた。そして、その在り方が、尊き行動が実を結ばない道理は無い。

その上で、今回の被害者にして最大の当事者たるハリー・ポッターもまたセドリック・ダイゴリーの方針に同意——殆ど黙示に、だが。その点からしても、やはり彼は他人を統率する気質では無い。政治家ないし派閥の利害調整者は、自分の影響力を増大させる機会を見逃さないものだ——した事によって、四人目の代表選手から始まったハッフルパフとグリフィンドールとの対立は、完全に終焉を迎えた。

寮全体での対立というのは稀でも、学生を千人集めて寮生活をやっていけば、生徒の大多数を巻き込む問題というのはしばしば発生し得る。

それを解決する事が求められるのは、監督生であり、時には首席であり、寮を代表する顔役だった。彼等の殆どはその地位自体では無く、学生間の問題解決能力を有するが為に敬意と権力を保証されている。僕は当然として、ハリー・ポッターが代表や指導者足り得ず、しかしマルフォイはスリザリンの代表足り得るのはその点にこそ有る。

ただ、彼等が介入して全てが綺麗に解決する事は珍しく、表で手打ちになったとしても個人間で問題が燻つたままだというのは普通である。彼等は人より優れていても超人では無く、やはり一学生の域を出はしないからだ。

そして今回の問題は、まだ開戦前でも開戦前夜では有り、しかも Hogwarts 創設以来初めてのグリフィンドール・ハッフルパフ間の大規模戦争に発展し得る事態でも有った。

三大魔法学校対抗試合という非日常、グリフィンドール代表とセドリック・ダイゴリーハッフルパフ代表を通じての代理戦争を肯定しかねない状況が続く下では、それを懸念し過ぎだと言えないだけの現実感があつた。

そのような大問題は一介の学生では当然、多くの生徒が協力してすら解決どころか緩和出来ないのが通常であつて——けれども、セドリック・ダイゴリーは一人でそれを為し遂げた。これまでホグワーツ

内で生じたどんな学生問題よりも見事に解決し、ハロウイン以来に有った火種を二寮間の笑い話にまで貶めてみせた。

彼の行動の成果は、多くをハロウイン以前の状態に戻し、更にはそれを進めてみせた。

二寮間の親密さは当然に、ボーバトンとダームストラング——ハリー・ポッターが四人目の代表選手となった事によつてグリフィンドールから距離を置いた者達をも呼び戻した。

グリフィンドールは四人目の代表選手の件で二校には近付きにくくなつていたし、かの二校としてもまた同様だった。その彼等の仲立ちとなつたのはハツフルパフであり、それがハツフルパフの負い目に基づく贖罪的な行動的だったとしても、誰もが満足出来る結果であり、雨降つて地固まるというように、当然ながら、ハリー・ポッターの選出以前の物よりも更に深い関わり合いとなつているのが見て取れた。

結果としてホグワーツは以前の平穩を取り戻し、それどころか三大魔法学校対抗試合という大行事の潮流の中で余計に賑やかさを増し——当然、その立役者たるセドリック・デイゴリーはその存在感を大いに強める事となつた。

代表選手としての実力と人気。二寮の対立を收拾して見せた人望と能力。ハリー・ポッターという色々な意味での例外であり規格外たる存在を除けば、彼に比肩する者は既に校内には居なくなつた。彼が善良で模範的な優等生である事を、そう認識すべきである事を、誰もが——スリザリンですら——疑いはしなくなつた。

後はまあ、見事だつたと言えば、僕への対応に触れない訳には行かない。

第一の課題以降、僕は再度、彼と廊下で擦れ違ふ事が有つた。

その際、僕としては皮肉を返されるのも已むを得ないと考えていたし、甘んじて受けるつもりでも有つた。悪名高いスリザリンに対し多少過激な言葉を使つても、彼のイメージが損なわれる事は無いだろう事は、僕自身が確信する所で有つた。

しかし、セドリック・デイゴリーはそうしなかつた。

“セドリック・デイゴリー”として、僕に追い討ちする事を良しとせず、何事も無かったように振る舞った。しかも、その振る舞い方も、一歩間違えれば嫌味と高慢さが露わになりかねない物だったのだが、それを全く感じさせない爽やかで、洗練されていた物だった。

彼がそうした理由が、僕からの反撃を恐れたからなのかは解らない。

しかし、あの瞬間に御互いの格付けは決定的に済み、彼の本性を暴露する機会が自身の手から既に永久に失われた事を、僕は当然のように理解した。

あの時中途半端に罅を入れたせいで、そしてそれを上手く利用出来なかったが為に、その仮面は第一の課題を経て余計に強固になった。雨降って地固まるというのは、この場合にも言えるだろう。ハツフルパフ生が今回の教訓を深く心に刻んだように、ハツフルパフ的存在はより強靱になった。

今後、彼が第二ないし第三の課題に大失敗するような事が有ったとしても、“セドリック・デイゴリー”の幻想が壊れる事は無く、その威信や名声を決定的に喪う事は無いだろう。仮に最終的にハリー・ポッターが優勝しようとも、二年年下の相手に出し抜かれようとも揺るがないだろう確たる物を彼は勝ち取った。スポーツマンシップの下に讃えるだけの余裕を、その能力と努力と行動で以って手に入れた。

そしてまた、僕にそれを破壊する隙を与える事は決してしまい。

再度の邂逅時、絶好の機会に不干渉を選択した以上、彼は僕に今後も近寄る事は無いだろうし、その口実も作りはしまい。加えて彼が第六学年で有り、卒業まで二年を切り、今年は三大魔法学校対抗試合が続く事を考えれば、そのような時間的余裕自体が無いだろう。

かのハツフルパフ生は最後まで“セドリック・デイゴリー”で在り続けられるに違いない。

他人に望まれる通りに、自身が強く望む通りに。

そしてそれは——ハーマイオニーの“誤解”を、僕が解く術が無いという事を意味する。

彼女にとって、セドリック・デイゴリーは「善い人」のままである事だろう。

実際、今回の一連の流れにも相応の脚本を描く事は出来るのだ。

セドリック・デイゴリーは、第一の課題前から、あのバッジを寮内の人間が着用するのを止めようとしていた。しかし、力及ばずにその流れを止められなかった。ただ、第一の課題によってハリー・ポッターが代表選手としての資質を証明した後、彼を強く擁護しうる風潮と余地が出来た。そして、グリフィンドールとの対立をかねてから憂えていたセドリック・デイゴリーは、改めてバッジを着用しないように寮生に告げ、その上で、今回の後始末に奔走する事を買って出た。

そんな話であれば、現在の情勢と何ら矛盾する事は無く、セドリック・デイゴリーが広く讃えられるべき善人で有るという「前提」にも反しない。そして、その脚本の方が耳障りが良く、一般的にも受け入れやすい事だろうし、人間的でも有る。

元より、僕はハツフルパフの誹謗中傷をセドリック・デイゴリーが指導したとは思って居ない。その可能性は、最初から排除している。何故ならそれは「セドリック・デイゴリー」から外れるからだ。その理想像を崩すような真似を、自分が手を汚すような愚行を、彼が決してする筈も無い。彼は状況を傍観したのみであり、放置しただけで有って、善意的に解釈するならば、群集心理に抵抗して仲間から爪弾きされる事を恐れるような、人間らしい弱さを持った人間だったと思いたい事も不可能では無いからだ。

そしてハーマイオニー・グレンジャーがどう動くかは大体想像も付く。

良くも悪くも彼女は素直であり、真つ直ぐで、そして善良さを肯定する陽の人間だ。僕が彼を嫌うのを、スネイプ教授がハリー・ポッターを嫌うのと同種の理不尽な物だと断じ、彼女は僕と距離を置こうとするだろう。

その事について、多少の寂寞を抱かないでも無いが——しかしそれは、僕にとって許容出来る範疇に留まるものでしかない。

無為に仲違いを恐れて己を曲げる事が出来るならばそのような事

をそもそも口にしないし、何より、それは優先順位としては高くも無い。僕が許容出来る範疇を、未だに何も超えていない。

セドリック・デイゴリーを応援するバッジをマルフォイが作った事。

彼やS・P・E・W．に対するハーマイオニー・グレンジャーとの意見の相違。

そして、バッジが齎したハツフルパフとグリフィンドールへの試練とその帰結。

もつと言えば、第一の課題において代表選手が課題を達成したか――ビクトール・クラムやフラー・デラクールが五体満足のままに達成した事も、不愉快なセドリック・デイゴリーが課題を達成した事も、ハリー・ポッターが不幸な事故に遭わなかった事も。

仮にハリー・ポッターが実際に死んでいてすら究極的にはどうでも良く、それら全ては僕にとって脇道でしかなく、本題は別の所に有る。

第一の課題が、三大魔法学校対抗試合自体が僕にとって直接重要な訳では無い。僕にとって重要なのはその後であり、来るべき本物の戦争だ。

闇の印がああいう形で上がった以上、今回一貫して意識し、また注視しているべきは、“スリザリンの存在”の動向である。彼等が如何なる目的の下に、どのように動き、何を引き起こそうとするかである。恐らくはアルバス・ダンブルドアの眼をもつてしても看破しきれないそれを明確化し、今後自身が取り得る方針を獲得する事である。

結論から言えば、それは失敗に終わった。

探偵の真似事をする以前に、事件が起こらなかった。

ハリー・ポッターに対する干渉は勿論の事、彼をミスディレクションとして目的を遂げんとする陰謀の気配で有ったり、それらの予兆を

感じる事は出来なかった。第一の課題は何事も無く終わるという不気味な結末を迎え、犯人どころかその目的を確定する手掛かりすら手に入れられはしなかった。

クイデイツチ・ワールドカップ以来の文脈から考えれば、決定的な事象が起こらなくともその前日譚ともいふべき何か有って然るべきで有ったと言うのに、スリザリンは外部内部問わず、全くもって動こうとしない。沈黙を守り続け、それどころか息を潜めている雰囲気すら有る。あのルシウス・マルフォイですら、たかがヒツポグリフ一匹にあれ程多くの干渉をした者ですら、表立った動きを決して見せようとしなない。

だからこそ、奇妙で奇怪で言い様が無い不安を搔き立てられたのであり——しかしながら、第一の課題を経て僕に、何らの収穫が無かった訳では無かった。

……いや、果たしてあれを収穫と言って良いのだろうか。

Hogワーツ校内、湖畔においての意図的で、しかし偶然めいた邂逅。彼は“スリザリン的存在”には思えず、付け加えれば専門家からすれば有り得ないという見解が示された。

そして何より、自分の中でしつくり来なかった。余りに疑わしく意味深な発言をしながら、しかし直観では無関係、今回の事件とは全く独立の物だという感覚が有った。今回の事件の犯人像、現在想定される容疑者の思想の、そのいずれにも彼は合致し得なかった。

故に、僕はさっさと忘れ去るべきであるというのに、或いは直観の反証として彼を疑い続けるに足る証拠を探すべきであるというに——あの内容自体こそが、第一の課題後より、僕の思考を支配し続けている。

『善き伝統は途切れ、古き歪みが悪しき形で露呈し、それでも決して全てが喪われた訳では無い。元より“Hogワーツ”は、偉大な人物達を数多く輩出して来たのだ。四寮を一つに纏め上げ、善く君臨し、貴族的な意思と理念と責任の下に正しき方向へと導く“王”。そのような者が現れるのを期待する事に、一体何の疑いが有ろうか』

その理念に、思想に惹かれた訳では無い。

己は彼と出自を異にし、現在の地位と権力では絶対的な差異を有し、そして彼がとうの昔に失敗してしまった者である以上、その言葉をそのまま受け容れる事は出来ない。

けれども、それでも尚看過出来ないと感じたのは――

『グリンデルバルドの革命に因果が有ったように、あの大战にも因果が有った。両者は接続されていた。魔法戦争は一人の闇の魔法使いの独創的な思想の下で発生した訳では無い。この国ではほんの三、四十年ばかり、革命が起こるのが先送りされていたに過ぎなかったのだ』

――彼の語る視点が、魔法世界大戦や第一次魔法戦争と言った視点に留まらず、それらを悉く飲み干して、超越的な視座の下にこの国の全てを語らんとする物で有ったからだろう。身勝手に、暴虐的で、人の上に君臨すべきと自負する者として、彼が言葉を紡いだからだろう。

バーテミウス・クラウチ。

聖二十八族たるクラウチ家の現当主。

純血中の純血の家に生まれながら、貴族たる能力と資質を保持しながら、労働階級の中に入り混じった異端者にして異常者。朽ちた老骨であり、歴史に取り残された遺物であり、この国の魔法界における変革の象徴に敗北を認めたる者。

彼は、再革命にして反革命を唱えた。

貴族中の貴族

ハリー・ポッターを強制参加させやすい位置に配置された人物は誰なのか。

それを考えた時、その筆頭に上がるのは当然ながら今回の運営側、魔法省の二人。バーテミウス・クラウチ氏とルドビッチ・バグマンである。

炎のゴブレットが三百年間何処に安置され続けていたかは知らないが、警備体制等を把握し得る彼等魔法省の人間であればゴブレット自体に仕掛けをする機会は幾らでも作れはしただろう。

また、大会規則を「解釈」するのは彼等であり、しかも三大魔法学校対抗試合が三百年間停止され続けて来た事を考えれば、四人目の代表選手が現れるような事態にどうするかを想定していないボーバトンやダームストラングが理論的な「異議」を提示出来るとも考えられない。裏を返せば、ハリー・ポッターを合規則的に参加させやすいと言える。

必然、彼等は今回の容疑者としては有力で、着目すべき存在である。勿論、服従の呪文を始めとした捜査攪乱手段が有る魔法界において彼等が「犯人」であるとは限らないし、別に「マグル的」手段でもって彼等を従わせる事が魔法族に出来ない訳では無い。しかしながら、その場合——彼等が幫助者の地位に留まる場合であっても、それは「犯人」と繋がっているという事であるから、着目すべき事に何ら変わりはない。

というより、「犯人」はまず第一に彼等を使う事を考えるのが当然であって、仮にそれが不可能な場合、或いはそれを偽装として有効に使えると判断した場合に、他の人間を使う事を考えるべきであろう。これは有効性の問題であり、難易度の問題でもある。幾ら巧緻な策を立てようとも、実現出来なければ意味が無い。

ただ、この程度は誰でも考える事だ。

アルバス・ダンブルドアは当然、猜疑心の強いアラスター・ムーディ教授も確実に、オリンペ・マクシーム校長やイゴール・カルカロフも

考えを巡らせていない筈は無い。

特に後者二人は異国の魔法省を信用する義理など何ら無いから、バーテミウス・クラウチ氏とルード・バグマン氏の動向にも眼を光らせ続けるだろう。現時点では四人目の代表選手が選出されたという不正が為されただけに過ぎないが、今後、彼等の大事な生徒であるフラー・デラクールやビクトール・クラムが、ハリー・ポッターに巻き込まれて事故死しない保証は無いのだから。

故に、僕が彼等に着目する事は決して大きな意味が有る訳では無かった。

三校相互の疑心に基づく監視体制は強固で有り、これからの不正をそう易々と見逃すとも思えない。まあ、それを踏まえて不正しようと考えているであろう存在が今回の「犯人」だと思うが、少なくとも生徒が一人増えた所で何かが変わる物でも無い。

……本来ならば、その筈だった。

そもその話、僕が出来るのは「注視」以上の何物でも無い筈だった。

彼等が「犯人」か否かの確認——即ち、馬脚を露させかねないような行動を取らせる状況を創るには、それなりに特別な交渉の場が必要である。

別に僕自身が名探偵になる事は必須では無く、固執もしないし、寧ろアルバス・ダンブルドアを始めとして大人達が「犯人」を見つけてくれる事こそを最も期待しているのだが、その第一の理由は、僕が事件の中核と成り得る者達に接触する身分や地位には無いという点こそに有るのだ。

二年前に意図して近付いたギルデロイ・ロックハート、或いは偶然より親しく交流する機会を得た、去年のリーマス・ルーピン教授及び今年のアラスター・ムーディ教授。

彼等に近付く事は、決して不可能では無かった。寧ろ最初から非常に容易く、何ら支障が無かったとすら言えるだろう。

彼等は教授の身分に有り、僕は生徒の身分に有った。つまり程度の差異は有れど、最初から交流が想定されている間柄に有ったのだ。

けれども、彼等二人は魔法省高官である。

そして対する僕は、ホグワーツ一生徒以上の何者でもない。

僕はハリー・ポッターでは有り得ず、ドラコ・マルフォイでも無かった。

彼等は、魔法省高官に会うだけの身分が有った。申し出を受けてくれるだけの地位が有った。寧ろ彼等は向こうから繋がりを欲する類の人間達である。言ってみれば特別で、状況に干渉し得る、確たる資格を持った者だった。

しかし、僕は違う。僕は彼等に接触する権利自体を有していない。

別に僕に限った事では無い。ホグワーツ始まって以来の才女とも思えるハーマイオニー・グレンジャー、或いはアーサー・ウィーズリーを父に持つロン・ウィーズリーとて変わらない。親や友人の繋がりで挨拶程度は出来ても、ハリー・ポッターやドラコ・マルフォイと違い、個人的な会話を交わすという事は決して出来はしない。

だからこそ、僕が自ら状況を引つ掻き回すなどという思い上がりは最初から想定していなかった。というより、秩序としてそう在るべきだった。特別でも無い一子供が、身分を有する大人と個人的に深い会話を交わすなど断じて有り得てはならなかった。

後から考えた時、彼との——バーテミス・クラウチ氏との会話はやはり存在するべきでは無かった。特に彼が単なる魔法省国際魔法協力部部长などでは決してあり得なかった事を考えれば、僕はそれを求めるべきでは無かった。

……けれども、やはりそれは後だから言える話だ。

首を突っ込める機会が有った。状況を掻き乱せる隙を見出した。

そして何より、彼が貴族階級に生まれながら異端の存在で有るのを選択した事からすれば——僕がバーテミス・クラウチ氏との接触を持たない道など、初めから有りはしなかったのだろう。

第一の課題後、僕がバーテミス・クラウチ氏に注目していたのは、

言ってみれば何となくだった。

ハリー・ポッターの点数発表が終わり、ルドビッチ・バグマンが第二の課題は三か月後に行われる事を告知し、ホグワーツ生達が課題の興奮冷めやらぬまま三々五々に寮へと戻って行く。

そして混雑を避ける為に暫しの間コロシアムに残る事を選択した僕の眼下では、会場に残った大人達は此度の成功を讃え合ったり、片付けの指示を大声でしたり、複数人が集まって何やら話込んだりしていた。

最後のそれは魔法や魔法具という盗聴手段が有る事からすれば不用心だという評価もし得るが、それらの殆どは子供に聞かれて致命的となる程大した話では無いのだろう。

そして全てが僕達の眼の届く範囲で行われている訳でも無い。運営テントの中に留まって未だに何やらしている魔法省の役人も存在しているようであったし、遠くから聞こえる咆哮はドラゴン使いが未だに働いている事の証左でも有る。また、アルバス・ダンブルドアやアラスター・ムーディ教授の姿は既に見当たらなかった。

しかし、僕の眼の当たる範囲においては、大人達が浮かべる感情は殆ど同じ物だ。

満足。安堵。達成感等々。明るい陽の感情ばかりが、彼等からは容易く読み取れる。

ルドビッチ・バグマンは今から飲みにも行きそうな位に上機嫌を爆発させており、他の魔法省職員も多かれ少なかれ、心地良い疲労と共に顔を輝かせていた。

その点はホグワーツ教授に眼を向けても変わらない。フィリウス・フリットウィック教授はそこかしこの人間を捕まえては代表選手達への賞賛の言葉をまくし立てており、ポモーナ・スプラウト教授はセドリック・デイゴリーの事を誇らしく思っているのを隠し切れて居なかつたし、ミネルバ・マクゴナガル教授でさえも明らかに表情を綻ばせていた。

また、四人目の代表選手の存在に文句を付けたであろう二校の校長でも例外では無い。

オリンペ・マクシム校長はフラー・デラクルの肩を抱いて——体格の違いから覆いかぶさっているのと大差なかったが——彼女の健闘を讃えると共に自校の馬車へと戻っていくのが見えたし、イゴール・カルカロフの方は、むつつりとしたままのビクトール・クラムを引き連れて各方面への外交に忙しいようであったが、彼等の対応の違いはどうあれ、今回の試合結果は校長達にとって大きな満足を齎す物だったのは確かだろう。

ただ一方で、それらの典型的な反応の中に決して混じろうとしない者も居る。

我らが寮監殿はその筆頭なのだが、正直言って彼は特別枠だった。ハリー・ポッターが課題を達成した瞬間の表情はやはり見物だったが、このような祝祭に浮かれる人物で無いというのはこの三年間で熟知している。故に今更関心を引く物では無かったし、寧ろそのような在り方は、僕に安堵に近い感情を齎す物ですら有った。

けれども、そのような類の人間はもう一人居た。

バーテミウス・クラウチ氏。

地位と経歴そして能力から観て、今回の三大魔法学校対抗試合を取り仕切っている者。

彼が審査員席に座っている時も思っ居たのだが、その顔色は尋常じゃなく酷い。

一瞬骸骨かと思紛う位には頬がこけ落ち、肌も青白く、仮にホグワーツ生であればマダム・ポンフリーが救護室に問答無用で叩き込むのだと確信出来る程で、真つ当な良心を持った人間ならば彼に聖マンガ魔法疾患障害病院の診療を受けるのを勧める位には、普通の人間として在るべき姿から掛け離れていたと言って良い。

もつとも、背筋は一切曲がっておらず、足取りが揺らいでいるという事も無く、遠目だから断言しかねるが、視線が定まっていないう事も無いようだった。言ってみれば、見た目が単に病人のようであるという以外には、何ら異常を生じているようには伺えない。

ただ、それ以上に僕は気になった点。

それは、第一の課題が終了した事に対する感慨が、バーテミウス・

クラウチ氏からは何ら伺い知れないように見えた点である。

確かに、言つてしまえば三分の一が終わつたに過ぎない。三大魔法学校対抗試合がかつて夥しい死人を産み、また今回が約三百年振りの開催である事を考えれば、第二の課題まで三か月空くとは言え何ら安心も油断も出来る物では無い。

けれども、それを差し引いたとしても異質と言うべきか。

何というか、彼からは熱意どころか事務的な責任感すら見出せない。酷い病相を露わにして尚職務に励んでいるのであればもつと何か——例えばその個人を突き動かす原動力的な物が感じられる方が真つ当だと思うのだが、そのような物は無く、彼から感じる印象は、空虚や虚無の類ですらあつた。

ただ、それをもつて異常と断言する事は無かつた。

周りの人間は彼がそのような有様で尚この場で居る事に殆ど疑問を持つていない——つまり、病氣程度に屈しない仕事人間だとは最低でも思われている——ようであり、ルドビッチ・バグマンが陽気に肩を組んできたのを苛立ち混じりに外した際には人間味を感じられたし、そもそも服従の呪文等の性質を考えれば、あからさまに怪しいという事が犯人性に直結する訳でも無い。

しかしながら、浮かれ切り緩み切つた空間の中で、周りの人間に声を掛けられているのを丁寧にあしらい、或いは礼儀正しく振り切つたりとしている姿以上に、彼の心の在り様が酷く目立っているように見えたのは確かだつた。

そして、彼が試合会場を立ち去り、その足の向ける先がどうも校門の方で無いらしいと察した時、僕に彼を追わない選択肢は存在しなかつた。

もつとも、彼の行動が客観的に不審や不自然と言うには程遠かつたというのには、やはり再度強調して置くべきだろう。

恐らく彼は自身が仕事を魔法省に数多く残している身である事を主張して、ホグワーツでの後始末をしている者達や、夜の打ち上げを既に考えている者達の下を辞した。そして『姿くらし』が出来ないホグワーツから歩いて出ようとしているのだと、彼等は当然に考えた

筈で、多分それはバーテミウス・クラウチという人格に鑑みれば何ら疑問を抱くような行動では無かったに違いない。

そして――

「人を覗き見するのは感心しない」

――当然のように、その老紳士は気付いた。

尾行途中、彼は何も奇妙な行動を取る事はしなかった。杖を振る事も、魔道具を使うような真似をしなかった。ただ歩き、進み、ホグワーツ内の湖畔へと辿り着いた。

地下に談話室を持つスリザリンには近い、巨大な湖。新入生が渡って来る始まりの場所であり、卒業生が渡って帰る終わりの場所。そこで老紳士は暫しの間佇み、後ろ手に腕を組んだままに湖面を見詰めた後、その姿のままに不屈者へと声を掛けたのだった。

己に何故気付いたのか。

その問いを僕に許す前に、バーテミウス・クラウチ氏は言葉を続けた。

「ホグワーツ生の殆どが礼儀を理解しないのは承知している。しかし、流石にここに至って逃げる程に恥知らずでは無いと期待したいものだ」

そして、僕の注意を引いたのはやはりその声色だった。

それを、何と形容したらよいだろうか。不機嫌では無い。強張ったとも違う。微妙に葛藤するかの如く声色は揺らいでいながら、しかし言葉の内容は簡潔、明快かつ率直で。ただ、口から洩れる何処か擦れ気味の息からは、彼が本調子では無いのは紛れも無く確かである。

嗚呼、そうだ。

一言で表すならば、それはさながら幽鬼の声のようであった。

「――失礼を御詫びする。そう言うには既に手遅れなんでしょうね」
「当然だ」

即座の返答に、容赦の色は無かった。

声色は怪しくとも、やはり言葉の芯はしっかりとしていた。

「魔法省の役人が何処に向かうかに興味を抱くのは理解出来ぬ訳でも無いが、同時に君もまた私が普通どう感じるかに想いを向けるべきだろう。自身を嗅ぎまわる不愉快なホグワーツ生に対し、最初から好意を抱ける訳も無い」

その割には、声に苛立ちというのは伺えない。

「故に、私とすれば本来取るべき立場は一つだ。ホグワーツ校長、或いは君の寮監に対して、今回君が取った行為について報告する。されば然るべき罰則が下されるだろう。まあ、大した罰にはならないだろうが、魔法省高官直々の苦情というのは、君の経歴に傷を付ける程度には十分だ」

ただ、と老紳士は言葉を切った。

そうして、木々の後ろから姿を現した僕へと視線を向けた。

彼は、それまでの姿勢、つまり湖を眺めるといいう在り様を崩しはしなかった。もつと言えば、正対する事を——僕を個人として認める事を明らかに拒否していた。彼の出自からすれば自然であり、今の僕の無礼からすれば当然の態度だった。

けれども、彼の視線は僕の全身を上から下まで観察し、

「よりにもよってスリザリン。となれば願掛けは外れたと判断する事が当然だろう。元より余り期待もしては居なかつたのだが。しかしながら、それが異端のスリザリンとなるとなれば、それはまた別の話なのだろう」

老紳士は口元を歪ませ、笑みの形にした。

「……今までの彼の行動に、露骨に不審は無かつた。

けれども、ここに至って謎かけめいた言葉を発した。それは明らかに普通とは言えない対応の仕方であり、それ以上に、彼が浮かべたその笑みこそが、バーテミス・クラウチという人間に相応しくない決定的な異常のように思えたのだ。

「こちらに来たまえ」

老紳士は視線だけで自身の隣を示す。

それは人を支配する事に慣れた者の所作であり、事実上の命令だった。

僕は大人しく従い、数分もの間、老紳士はそれ以上を求めなかった。何かを考え込むように黙り込んだ彼は、同じように湖を眺める事のみを求めた。

「——君に一つ試験をしたい。そう言えば、君は不快に思うかね？」

そして徐に投げ掛けられた問いに、

「当然ながら」

僕は老紳士と並んだまま、同じ方向を見たままに答えた。

「貴方は、いえ、貴方がたはそういう生き物では無いでしょう？ 貴方がたが住まう世界は元より一挙手一投足が試験され、吟味され続ける世界だ。わざわざ礼儀正しく今からお前を試すなどと言う筈も無い。

「クラウチ」がそれを理解出来ない程、軟弱で有る訳が無い」

「——ほう」

僕の解答に、微妙に声色が変わった。

「成程。如何に異端で有つても、純血の家に生まれていない事も明らかである相手には当然の親切のつもりだったが、曲がりなりにもスリザリンか。余計な御世話だったらしい」

「……………」

「だが、なればこそ試験をしよう。と言っても、簡単な物だ」

彼等に有りがちな人の話を聞かない態度でもって、老紳士は続ける。

「さて、第一の課題が終わってから殆ど直後、同僚達の愚かな会話を振り切つて私はここに来た。我が母校ホグワーツの湖、その畔にだ。そして君が知っているかは知らないが、私は魔法省国際魔法協力部部长として多忙な身であり、自身の仕事に相応の責任感を持っている。我が同輩たるルード・バグマンと違ってな」

「……………まさか、貴方がここに居る理由を推理しろと？」

「そのまさかだ」

……………老人が若者を試したがるのは何時もの事だ。

そして、その内容が悪辣で有り過ぎるのも。

「では僕は推理するまでも無い解答を紡ぎましょう。つまり、貴方はただで気晴らしでここに来た。何の理由も無く、ここを訪れた。それ以上でも以下でも無い」

彼等の——貴族の試験に真正面から付き合う事程に無意味な物は無い。

別に正解か不正解かは重要では無く、そもそも彼等の中において、回答者を正解と不正解の何れに振り分けるかどうかは初めから決まっているからだ。

「第二の課題が行われるまで後三か月です。期間が空くからこそ時間の余裕が有りますし、それに伴う環境の変化も見込まれる。今から下見を行うような真似をする方が馬鹿です。故に、普通の人間は、三大魔法学校対抗試合の審査員がわざわざ、いえ、たまたま湖に足を運んでそれを眺めているからと言って、それを試合内容に——具体的には第二の課題が行われる場所だと言う発想に結び付けるなどという馬鹿な事はしない」

「だからこそ、気晴らしかね?」

「ええ、全てに万全を期さないと済まない程に神経質な性格で、かつ二十四時間仕事だけを考える中毒的な人間で有ったとしても、そんな事は有り得ない」

……願掛け、という謎めいた言葉が少々不安では有ったが。

それを踏まえた解答は流石に求められてはいない筈だった。

「そもそも僕が三校の一生徒で有る事を考えれば、仮に間違いだったとしても、課題内容を示唆するような不正と取られかねない行動自体が論外だ。そうでしよう?」

「——そうだな。それは真つ当で正しい解答だ」

僕の揶揄を正確に受け取って、厳めしい表情のまま老紳士は頷く。

「そして、君は理解しているようだが、“我々”にとつて正しいかどうかは些事だと言える。世間一般の正解や不正解、或いは善や悪など無価値でしかない。大事なものは——」

「——貴方がだが、どう規定するか」

「そうだ。もっとも、現状では、既にそれを守護し切れてなどいないが

ね」

彼は再度湖の方を——郷愁などでは無く、冷徹な観察の視線で見やっただ後、改めて僕の方へと向き直った。

その老紳士が本調子で無いのは明らかだった。

向かい合ってみれば、いよいよ死期が訪れんとしている老人のように見えた。

しかし、決定的に気品を喪っていないなかったし、次の言葉が朗々かつ堂々たるものであったのは、彼がその手の挨拶——社交かつ威嚇——には何十年も慣れ親しんでいたが故だろう。

肉体に刷り込まれて本能まで至った行動は、体調や気分の上下程度で霞むものではない。

「私はバーテミウス・クラウチという。今は魔法省の国際魔法協力部部長、そして今回の三大魔法学校対抗試合では運営の統括及び協議の審判役を務めている」

……彼は落ちたとは言え権力者であり、必然的帰結として有名人であり、そもそも年上かつ目上の彼が先に名乗るとするのは、必要性どころか礼儀の面から見ても外れている。第一、先の口上は、「純血」の人間、貴族の人間として相応しい名乗り上げなどでは無い。

だが、敢えてそうしたのは、当然の事ながら、僕を試す為だった。一応の礼儀を知る名有りの生徒か、礼儀知らずのままの名無しの生徒であるのか、彼は僕に選ばせようとしている。少なくとも、単なる Hogwarts 生であると認識するつもりは無いと表明している。

これは、果たして幸運と言うべきなのだろうか。

尾行はすれどもこの老紳士がボ口を出す事を期待してはいなかったし、ましてやこうして、有象無象以上の個人として会話出来るとは思っただけで居なかった。

だが。

「ステイブ・レッドフィールド。貴方のように輝かしい功績も立派な肩書も持っていない、単なるスリザリン生ですよ」

僕は名乗った。

当然の事として、彼の前で己の存在を示す事を躊躇いはしなかつ

た。

「まずは、私に着目したのは非常に良い目をしていると評価したい」
静かに、だが揺ぎない意思と共に、バーテミウス・クラウチ氏は言った。

「何も、私は伊達や酔狂で先の試験をした訳では無い。少なくとも、君が単なるスリザリンで有れば、あのような質問をしなかった。つまり、私がこうして母校の湖を眺めているのは、第二の課題に関わるからなのでは無いかと」

「……口にするべきではない。それは既に御互いの共通理解だった筈ですが」

「何、私は規則を破るのを好まない。私は君の勝手な推論を口にしただけだ」

僕の皮肉に対し貴族としての傲岸さを遺憾無く発揮して、老紳士は平然と告げる。

「規則は、それが明快に制定されているのであれば、厳格に適用されるべきだ。ホグワーツの学生、いや、部外者全てに対し、三大魔法学校対抗試合の課題の内容に関わる情報を公開する事は一切が禁じられている。魔法省の役人は当然、三校の教授や校長全ての者が、同意の下に拘束されている。少なくとも、建前上は」

建前上。

……嗚呼、正しく貴族が好む表現だ。

何時如何なる時でも語られぬ闇が存在する事を、例外的場合が有り得るといふ事を、彼等特権階級は良く知っている。

「しかし、私は第一の課題においてその原則が破られたと推測している。勿論、証拠は無い。無いが、この私が何ら疑いを持ち得ないような無能だと考えて貰っては困るものだ」

「……証拠は無いのに断言しても良いのですか？ それも、部外者の前で」

「何、君が正しくスリザリンで有るならば当然に疑っているだろうし、その上で、仮に不正が有ったとしても些細な事だと考える事だろうか？ それと共に、不正は規制出来なかった方もまた愚かなのだと、そう結論付けるだろうか？」

「……………」

「実際、第一の課題に纏わる防諜体制は御粗末なものだった。まあ、それで良かったかも知れん。現実には理想に優先される。代表選手がドラゴンに喰われる事故が起こるよりは許容範囲だとして見逃す事は、何ら批難される訳でも有るまい」

……正気とは思えない程に過激だった、第一の課題。

しかし、代表選手全てが見事に課題を達成し、かつ大いに盛り上がり博したという結果から見れば、三百年振りの親交試合としては確かに大成功だと評せるだろう。

「だから、私が多少 hogwarts の生徒と言葉を交わした所で、誰に文句を言われる筋合いも無い。私は依然として課題の内容について何も語っていないし、私の言葉から君が推量出来る範囲も限られている」

「……まあ、それは確かにそうかも知れませんが」

確かに否定しきれない事実では有る。

「仮に第二の課題がここで、湖で行われるのが正しかろうとも、何が代表選手に要求されるかまでは実際僕には推測出来ない。安直に考えるならば湖の中で試験が行われるといった所ですが、そもそも第一の課題は外部からドラゴンを連れてきた訳ですからね。単純に舞台上しかないとも考え得る」

「そういう事だ。そして何が行われるか解ったとしても、代表選手が正しく対応出来る訳では無い。三校試合は教科書を持ち込んで満点を取れるようなテストでは無いのだ」

「だから、公平性は害され過ぎない。あくまで許容出来る範囲に留まり得る」

「——そして何より、私は君が誰かに情報を漏らすような人間では無いと確信している」

「……………」

僕の言葉を封じるように紡がれた力強い言葉。

その裏に存在していたのは、決して僕の人格への信頼では無い。自身が有する観察眼、数十年の時で構築してきた己への信仰だった。

「君が単なるスリザリンであれば、私はさつきとここから立ち去っていただろう。仮に君が『純血』で有ったとしても変わりはない。他人を尾行するような不愉快な生徒に時間を費やす意味を見出しはしなかった」

この老紳士が、最初から僕が純血で無いのを見抜いているのは何ら驚くに値しない。

本物の『純血』^{貴族}は、相手が自身の同類か否かを当然に嗅ぎ分ける。貴族というのはそういう人種であり、『クラウチ』である人間が不可能な筈も無い。特にスリザリンの人間で有れば、彼等が好意の下に見逃してくれているに過ぎない事を七年の寮生活の中で嫌と言う程に理解するものだ。

如何に仲間や同輩で有っても、純血でない人間は下等であり、二流。それはスリザリン寮において揺るがない階級社会の実情である。

ただ、
「しかしながら、君は違う。因果な事に、君は異端のスリザリンだった」

老紳士はそれだけには焦点を置かなかった。

それ以外にこそ、バーテミウス・クラウチ氏は意味を見出した。

「……そう言えば、貴方は最初から僕をそう表現していましたね」

異端。正統では無い者。

「はつきり言つて初対面ですよね？ まさか、僕の存在を知っていたという訳では無いでしょう？ 貴方が知る動機も無いし、僕の事を喋る人間にも思い当たらない」

「当然だ。たかが一生徒に関心を持つ程私は暇では無い。魔法省の役人としても、クラウチとしても。だから、私が君の存在を知ったのはつい先程の話だというのは、間違いなく確かだ」

「ならば、何故僕をそう呼ぶのです？ 別に変な事は——」

「バッジだ」

その老紳士、貴族中の貴族は端的に言った。

その一語は、胸の奥底に煮え滾る苛立ちを隠し切れていなかった。「私は審査員としてあの場所に座り、三校の生徒達がそれぞれ自校を応援しているのを見ていた。当然の事ながら、嫌に輝くバッジをホグワーツ生が着けているのも眼にしたし、それがどんな類の物かを気にする程度には、世俗や社会に注意を払っているつもりだ」

「……………」

「当然スリザリンも着けていた。嗚呼、言い訳は要らない。ハッフルパフとスリザリンが着けている物が同一であるかというのを判断出来る眼は持っている」

貴族においては観察力と注意力の有無が社会的な生死に繋がり得る。

そして、生まれ落ちた瞬間から政治の生存競争に身を置き続けてきた彼は、当たり前のようにそれを見出した。

「しかし、君は着けていない。第一の課題が終わった後、バーテミウス・クラウチを尾行しようと考えたスリザリンである君のローブには、何故だかそれが無い」

……当然ながら、僕が着けていない意味についても。

僕が考えている以上に、この老紳士は、それを重大な物と受け止めていた。

「三大魔法学校対抗試合において、スリザリンは本来利害関係を持っていない。特にこの十数年の流れの中では、自校だからと言って短絡的にホグワーツを応援するような殊勝さを持ち得ない。だが、スリザリンは全体主義的に、聖二十八族でも無い他ハッフルパフ寮を応援した。それが意味するのは一つ、スリザリン内の尊き誰かの意向に他ならない」

敢えて濁したようだが、それでもこの老紳士は、それが誰だか把握しているようだった。

「……随分、スリザリンと言う物を正確に把握しているのですね。貴方は——」

「——下らん問いだ。私は、自分が何処の寮に所属していたかを自ら

語る気は無い」

ホグワーツ出身者が当然にする筈の問い。

けれども老紳士は、僕の言葉が紡がれる事自体を拒絶した。彼の表情に浮かんだのは苛立ちのみでは無い。強烈な嫌悪であり、深い憎悪だった。

「私はアラスターとは違う。つまり、己の事について他人が余計に吹聴しそうになると呪いをかけ始めるような人間では無い。だから君が調べれば当然に私の寮を知る事は出来るだろうし、その行為までを止める気もまた無い」

「……………」

「だが、私はそれ自体に価値を見出さない。絶対に、断じて」

苛立ちを超え、憎悪すら滲ませて、バーテミウス・クラウチ氏は切つて捨てる。

「いいか、たかが七年過ぎただけの寮に拘泥するのは、ホグワーツという狭い世界に閉じこもったままの者が陥る悪癖だ」

「——」

「この国の者、ホグワーツを母校とする者は、口を開けば必ずそれを聞きたがる。しかし、私が貴族としてどれだけの時間を生き、また何年魔法省で過ごしたと思つて居る？ その私からすれば、全く愚劣の思考でしかない」

……奇遇であり、奇縁でもある。

まさにその名前の人物は自寮が何処かを語らず——しかし、この老紳士は、結論としては同じで有りながら、寮の詮索を拒絶する理由について明確に立場を異にしている。

「そして、私はそれ以上に古い『純血』の名家の当主なのだ。我々貴族が、その子供が取るような行動など熟知している。スリザリンが全体で動く時にはその背後には間違いなく誰かが居り、その決定は背信者を許す程には軽々しい物では無い」

「…………彼の統制が絶対かという点に異論の余地は有りそうですが。まあ、良いでしょう」

自寮が何処であるかと同様に、それを語らない立場を取るといふの

もまた重い。価値判断をそこには置かないというのも、それはそれで価値判断の一つなのだから。

「ただ、僕が今バッジを付けていないからと言って、事前に外した可能性は？ 確かに僕は第一の課題が終わって以降、貴方に着目し、尾行してきましたが、貴方の前に姿を現す際に外したという可能性は？」
「それを検討する事に意味が有るかね？」

試すように紡いだ疑問に対し、返って来たのは蒙昧に対する更なる苛立ちだった。

「仮にそうだったとしても、それが意味する事は、君があのかのバッジを大人に見られたくない程恥ずかしい物だと判断したという事だ。であれば、私にとつては何も変わらない。スリザリンの全体から外れ、逸脱する事に対し、何ら躊躇をしないという意味では」

確かに、それは否定しえなかった。

この老紳士が語るように、僕が提示した二つに大きな差異は無い。「そもそもバッジの着用の有無は、それは単なる気付きを超えない。偶々バッジを落とした、或いはハリー・ポッターの活躍を見て外したというのも有り得る」

「けれども、貴方は殆ど最初から僕を異端と呼んだ」

「見ていれば解る。そして幾らか言葉を交わせば十分に過ぎる」

老紳士は鼻を鳴らして嘲笑した。

「良いか、私はバーテミス・クラウチだぞ……！ 尾行を咎められたにも拘わらず大きな動揺を見せず、平気で会話を続けられる純血以外がどれだけ居ると思つて居る？ しかも、単なる無礼では無く、我々の流儀を理解しようとする心意気も——たとえそれが少々見当違いの部分があると——持とうとしている。その在り様が異端と言わずして何と云う？」

我々が決して大つぴらにすべき言葉では無いが、と。

人差し指を優雅に立てながら、老紳士は敢えて強調した形で前置きして次を紡いだ。

「君は純血では無い」

その断言には威迫が有り、重圧を伴っていた。

「家名、言葉、所作、思想等々。我々が生来継承し、かつ物心付くより前から本能に刻み付けてきたそれらを、純血の家以外に生まれ持った人間は持ち得ない。そしてまた、たかだか数年のスリザリン生活程度で模倣など出来はしない。たとえ公然と言葉に昇らせなくとも、寛容にも見逃していても、『純血』は内心でもって確かに真実を知っている」

眼前のクラウチ家当主は間違いなく純血であり、貴族中の貴族であるからこそ、それを偽る事は出来ない。僕が嘘を吐いた所で一笑に付されるだけだろうし、彼等には彼等なりの試験方法を有している。

「だが、我々にも判断し得ない事は有る。『純血』はその差異を重く受け止めないが、あの魔法戦争に一応の始末を付け、この十数年を見て来た者として無関心で居られない事が有る。つまりだ。君は半純血なのかね？ それともマグル生まれなのかね？」

「……半純血ですよ」

「寮の人間はそれを？」

「……………知っていますよ。僕が半純血で有る事を知らない人間は皆無です」

「よりにもよってか」

驚愕を通り越して畏怖と共に、バーテミウス・クラウチ氏は真剣に吐露した。

「私にとって君がマグル生まれに見えた事は別に良い。だが、私としてはそちらの方が自然とすら思える。マグル生まれが侮蔑され、排除され、異端視されるのは当然だ。だが、半純血である君が、魔法戦争後の今においてそうである事は有ってはならないのだ」

……………お前はマグル生まれであるよりも異常だと。

老紳士の言葉はどう聞いても、そう告げているように聞こえた。

「半純血は一般にスリザリンから受け容れられている。一流として扱われはしないが、それでも一員でないと真正面から否定される事は無い。その理由は、既に半純血の数が無視出来る物ではないという事もだが、今現在において最も大きい要因は、闇の帝王治世下においては半純血までが許されるという教条の下に動いていたからだ」

……純血主義。

その字面に反して、それは完全なる純血以外の根絶を意味しなかった。

聖二十八族を当然に、純血を自称する者達が死喰い人の中核を占めていたにも拘わらず。完全無欠の教条を掲げても何ら支障が無いと思えるというのに、闇の帝王は半純血の許容を選択した。何れそこに行き着くかもしれないとしても、魔法戦争時点では妥協した。

「だと言うのに、君は異端だ」

集団の中に在ってはならない。

「君はスリザリンから外れている。それを齎した理由には、何らかの発端が有ったのかも知れない。しかし、普通ならばそれはホグワーツでの寮生活を過ごす中で解消されるべき物だ。『純血』もその方針を受け容れるのに吝かでは無い。君はマグル生まれでは無く、確かな魔法使いの血を引く半純血で、スリザリンの一員足り得る者なのだから」

「……………」

「けれども、君の異端さは維持され続けているようだ。逸脱する事を躊躇せず、独自の在り様を喪わない。私からすれば、それは発端など関係無い。どういう経緯や理由を辿ろうとも、君の人格と資質は間違はなくその状況に君を追い込んだ筈だ」

そもそも僕が最初にこうなったのは、聖二十八族において現在筆頭的な地位に有るマルフォイが珍しく親身に言葉を交わす事を選択したからだ。今の時点においても、あれが——マダム・マルキン服飾店での偶然的な交錯が無ければ、という思いを抱いているのは事実だ。

けれども、バーテミウス・クラウチ氏は、貴族的な老獪さを有する紳士は、不愉快さを全く隠す事無く言う。

最初から異端であるが故に、遅かれ早かれそうだったと。

「……………それで、貴方は僕に何が言いたいのです？ 正統と異端の差異は相対的なものであり、そもそも僕が異端だったとして、その指摘に何か意味が有るのです？」

「意味など無い」

老紳士は、突き放した調子で断言する。

断言して、真正面から僕の眼を見詰める。心を飲み込まんとする。開心術や服従の呪文と言った、純度の低い支配では無い。連綿と続いてきた貴族と奴隷、その関係性でもって、彼は僕へと臨んでいる。「しかし、私が君と多少の雑談をする気になった所で、君自身に問題が生じるのかね？ 君は私を尾行して来たのだ。異端のスリザリンである君が、だ。故に、君の選択は二つだ。老人の戯言を黙って聞くか、或いはここから直ぐに立ち去るか」

詰め寄る彼の表情はやはり酷い有様だ。

一貫して血の気が通っていないかった表情は余計に蒼白で、死蟻同然の不気味で劣悪な状態を呈している。如何に仕事人間と言っても、これを他人に見せる事自体が貴族として怠慢であり、墮落であり、弱点の誇示だと判断されかねない程の、「クラウチ」としては本来絶対に見せてはならない姿の筈である。

だが、それでも尚、彼が「貴種」足る事を喪っているようには見えなかった。

どんなに本調子で無かろうと、精彩を欠いていようと、貴族以外の凡俗が一般的にどう思われようと、誇り高き矜持と意地の下に立ち、純血の貴族としてそうでない者の前に人が在るべき姿を見せつけ——しかしどういふ訳か、何処となく、僕にそれを理解する事を求めている節ですら有る。

その疑問を、解消し得るような解答は、今の僕には思いつかない。推量する材料すらも、僕には見つけられない。そして、眼前の老紳士、バーテミウス・クラウチという男も、それを与える気は無いらしかった。

多くを置き去りしたままに、爽快なまでの唐突さのままに、

「——君達がどんな存在で有るかを、我々」は良く知っている」

沈黙の下での傾聴を選択した僕の前で、そんな口上から、彼の教示は始まった。

労働階級

「クラウチ家は旧くから続く『純血』の名家だ」

聖二十八族。

しかし、その区分以前に『聖なる』分け方が無かった筈も無い。

『純血一覽』が世に現れる前で有っても、貴賤の線分は引かれてきた。そして、『純血一覽』を記したときされるカンタンケラス・ノットも、それまでの先例を何も参考にしなかつた訳でも無いだろう。『クラウチ』は聖二十八族だから尊いのでは無く、尊かつたから当然のように聖二十八族に組み込まれたに過ぎない。

「我が家は当然ながら少なくとも人間がスリザリンに組分けされ、また魔法界において数多の高い地位を占め、責務を果たしてきた。そして、当然ながら、世界を、社会を、それを構成する者全ての事を観続けてきた。いや、別に我が家に限つた事では無い。名家と呼ばれる『我々』は、長き歴史の堆積の中、『君達』の事を観察し続けてきたのだ」

我々。そして、君達。

バーテミウス・クラウチ氏は、明確に両者を別種の存在として区分していた。

今の魔法界の多くの者が『マグル』と魔法族、或いは『スクイブ』と魔法族と言うように、魔法の能力の有無によって境界線を引きたがる。

しかし、彼はそうしない。本物の『純血』は、そこには引かない。「我々が君達を侮蔑し、軽蔑する事に、まさか疑問を抱く訳では有るまい？ 何せ君達は世俗の雑事に忙殺され、近視眼的な生を紡ぐ行為に憑りつかれ、魔法界全体の大きいなる責務を果たそうとしない。簡潔に一言で表現するならば、君達は労働に勤しんでいる」

労働。

その言葉が全てを代表される訳では無いだろうが、その一言にある程度多くが集約されるのは間違いないだろう。

「勿論、我々の暮らしは君達の犠牲によって成り立っているのだが、他

人の犠牲に——踏み躪られる存在に甘んじねばならないというのは、やはり我々にとつては軽蔑を向けるべきものである。何より實際、殆どの者が上に立つに値しない者ばかりなのだ。時を積み重ねる中でその信念を強くし、揺ぎ無い物にした所で、一体何の不思議が有るだろうか」

「しかし、貴方は——」

僕は、眼前の存在を見る。

どんなに立派そうに見える肩書を持っていても、所詮は単なる役人でしかない者を。

「嗚呼、私は当然の事ながら非主流の部類に属するのだよ」

僕の視線に、老紳士はあっさりとは答えて見せる。

「そうだ。私もまた、貴族として異端であり、異常ですらある。土地と人から搾取して文明の営みを支える貴族らしくも無く、ホグワーツ理事や魔法省の外部顧問と言った名誉職を尊ぶ臣でも無く、社会の一部品として労働する卑しき存在なのだ」

何ら怯む事も臆する事も無くバーテミウス・クラウチ氏は断言した。

本来在ってはならないのだと。決して正しい姿では無いのだと。自身が生きて来た数十年の道筋が過ちを証明し続けてきたのだと、彼は恥じる事無く言つてのけた。

「今、魔法省に居る純血中の純血——万人が認める古い魔法使いの家系は、キングズリー……シャックルボルトくらいのものだ。魔法法執行部、闇祓いの所属だな。ただ、彼も本流では無い。何せ彼は、マグル社会に溶け込んで働く事を余儀なくさせられているのだから」

もつとも、彼自身は望んでその地位に居るようだが、と老紳士は続ける。

……その言葉は、彼もまた変わり者である事を主張する為であるのは間違いなかった。

「ともあれ、ルシウスを見れば解るだろう。魔法省の中で働かねばならない純血など二流と言つて良い。古くから血を護つてきた『純血』は資産家が多く、必然、芸術や文化を始め、魔法省全体の、有象無

象が短期的に無視しがちなあらゆる事柄に対して貢献してきた。地を這いずる下賤達と異なる視点でもって、我々は多くを見て来、また行動してきた」

我々。

そう豪語出来る人間は限られている。

確かにバーテミウス・クラウチ氏は非主流の、貴族としては例外的であるのかもしれない。

けれどもクラウチ家は、古くから続く純血の名家であり、当然のように聖二十八族に数えられ、眼前の老紳士は疑いようも無くその本家の現当主であり、産まれてより叩き込まれてきた貴族としての教育の下に、その超越的な視点を備えている。

「もつとも、君に関係無い貴族階級の事は、今はさて置いておこう。我々が君達に対して向ける感情、ないしその是非もだ。私がこうして最初に語ろうとしているのは異端でないスリザリンであり、魔法戦争後の十数年の君達を取り巻く環境であり、君が正しく認識すべき現状である」

異端でない、と。

老紳士は再度僕に思い出させるように言った。

「私から見れば、今のスリザリン程に単純で、詰まらない構造をしている時代は無い。特に、君のような純血未満の出自を有する、二流所のスリザリンにとっては」

つまり、一流の貴族階級に属さない者にとっては、か。

「高貴な責務を持ち得ない君達は、スリザリン寮内において何ら細かい事を考える必要は無い。家の政治も、力関係においても無為に頭を悩ませる必要は無い。ただ聖二十八族に頭を下げて媚び諂い、純血らしく振舞っていればそれだけで評価される。嗚呼、これ程までに半端者達が生きやすい時代というのは無かっただろう」

「……凄まじく偏見に満ちた断言ですね。まあ、貴方が聖二十八族とも呼ばれる程の名家である事を考えれば、至極自然な事なのかもしれませんが」

「けれども、大原則は外していない。違うかね？」

「それは……否定しませんが」

聖二十八族の機嫌を損ねてはならない。

彼等は自分達の上位であり、法律であり、絶対である。

それが、現在のスリザリンにおいて敷かれている階級制度の実情であり現状。

「別に、それ自体を大きく非難はしない。既に明確に立場を表明した筈だが、私は数十年も魔法省という組織に属してきた人間だ。ホグワーツの中で如何なる運営が行われていようと、その忌むべき悪習が外に持ち込まれない限りは無関心を保つ事は出来る」

外。

魔法省。ひいては、この国の魔法界。

「しかしながら、逆に私は魔法省の事について語るのを躊躇わない。その組織の中で長らく生きてきた者として、私はスリザリンの卒業生、特に魔法省に来るような者をまず高く評価していないという事について。それは先程言った、単純な寮内構造が招く帰結故だ」

老紳士は失望を隠さなかった。

若者の至らなさを嘆く老人らしくと切り捨てるには真摯に、現状を強く憂いていた。そう思わせるのは、彼が貴族——上に立つべき者としての出自と視点を有する為だろう。

「スリザリンの半端者は例外無く上におもねる事に慣れきっている。学生時代から偽物の階級社会で偽物の権力ごっこに親しんだ結果、その勘違いを引き継いだまま社会に出てくる。どんなに優秀な成績を修めていようと、思い上がったまま、惰弱なままに社会に出て来る」

「……随分と辛辣ですね」

「解った口を利けるのは大人の特権だ。そして、私も魔法省で一角の地位を占め続けて来たという自負が有る。貴族としての生き方を徹底出来ずに放逐された結果、家柄だけしか誇れる物が残らなかつた者達と違ってな」

「……貴方は魔法省国際魔法協力部部长、でしたね」

「今は、そして左遷された時もだ」

高貴な出自を持っているが故に、出世しやすい下地が有ったのは間

違いない。

けれども、第一次魔法戦争後、バーテミウス・クラウチ氏は、政治的には致命のスキャンダルが為に失脚へと追い込まれている。解りやすく言えば、大きな隙を作った。

かつて次期魔法大臣へ手の届く所まで昇った者を即座に解雇するのは、流石に当時としては出来なかつた筈である。そもそも厳密には息子の失態であり、本人の責任とまでは言えず、平の職員に落とすような敬意の欠ける真似は出来ようもない。

けれども、左遷後に失態があれば、無能で有れば、それを理由に後から辞任させられた筈だ。如何に魔法省が権威主義的な旧態依然の機構だとしても、たかが聖二十八族というだけで君臨し続ける事は出来ず、適当な口実で勇退させる機会は常に伺われてきたに違いなかった。

だが、彼は今も尚、その地位に居座っている。

そのような男が無能である筈も無く、無自覚的である事も有り得ず、己に対する自負も当然ながら強固だった。

「さて、ここまで言えば解るだろう。現在の単純な寮内構造。スリザリンの半端者、自分が正統のスリザリンであると勘違いした者が、社会に出て直面する大問題。例えば魔法省に入った『スリザリンの優等生』が遭遇する決定的な喪失に、君は気付くだろうか？」

……同意するかは全く別問題として。

バーテミウス・クラウチ氏が言いたい事に、失望している構造に、気付く事は出来た。

この老紳士は最初からヒントを散りばめていた。僕達、いや、異端である僕を除いた普通の、典型的なスリザリンを、貴族として違う物として扱い続けて来た。そして、そのような存在を、彼は何と言ったか。何と評したか。それを考えれば、答えを出すのは然して苦勞する事でも無い。

「……つまり、自分が頭を垂れていれば済む、尊き者の存在ですね」

聖二十八族に代表される純血。

上位であり、法律であり、絶対である、何も考えずに従って居れば

済む者達。

そして、僕の答えが正解であるのかどうかは、わざわざ老紳士に聞く必要が無かった。その表情が、言葉が、それを証明していた。

「再度繰り返そう。君達にとつての寮内政治、もつと言えは生き方というのは単純だ」

既に構築された共通理解を元に、彼は持論を続ける。

「君達は当然の被支配者として、魔法界に責任を持たない者として、単に『純血』に対して服従、隷属し続けていれば済む。そのような本能を、今のスリザリン寮内は特に育み続けている。更に幸か不幸か、『純血』の子供は基本的に優秀だ。何せ彼等には多額の財を費やして教育が為され、かつ君臨すべき者として恥ずかしくないだけの資質が要求されるからだ」

セオドル・ノットというスリザリンの最優秀生は勿論の事、ドラコ・マルフォイですら、僕の助力を抜きにしても優等生——但し、本人はサボりがちだが——の部類に属する。

そして、彼等はそこで留まる事は許されず、それ以上を求められてきた。

特に、マグル生まれのハーマイオニーに成績面で劣っている事が広く親達に露見してからは、ノット家にしろマルフォイ家にしろ、二人には一族全体から相当強く突き上げが有った事は同級生として知っている。最近では止んだようだが、それは単純に、ハーマイオニー・グレンジャーという少女がホグワーツ史でも類を見ない程の才女であると誰が見ても疑わないようになったという、酷く例外的な結果に過ぎない。

当然の事ながら、ハーマイオニーを知るホグワーツ生であれば、セオドル・ノットやドラコ・マルフォイが彼女に成績面で遅れを取つていようと、彼等に頭を下げる事を忌避する事は有り得ない。『穢れた血』に負ける劣等種などと考える事は決して無い。

彼等は ^{Sacred} 聖 二十八族の一員に値する優秀さを文句無く示し——

「しかし、彼等が魔法省内部に入ってくる事は無い。彼等は財政的、或いは人的資源を外部から提供する ^{パトロン} 支援者となる事は有つても、実務家

として自らが動く事は殆ど無い。彼等は上司には成り得ず、触れる事が出来ない格別の存在となる」

——社会に出てしまえば、彼等は元スリザリンの二流市民達の上から消え失せる。

「そして表面だけ上手くやっていた馬鹿げたスリザリン達は、それまで存在していた明確な指針を喪う。利用出来る庇護者の力を喪った事を失念し、自身の能力と価値を適切に証明する術を知らないまま、社会に適応する前にまず当然のように失敗する」

上位が消えるという事は、序列が上がるという良い側面ばかりでは無い。

その序列に相応しいだけの責任を持ち、権力を意識し、正しくそれを行任せねばならない。けれども、元スリザリンの二流は、そもそもそのような経験自体が無く、意識も持ち得ない。

「七年の寮生活。生徒の半生を支配し続けた環境が与える影響は大きい。それがその本人にとって相応しく無く、環境自体が歪んでいる状況であるならば猶更にだ。特に、魔法省に働きに来る程度でしかないスリザリン——それを貴種たる資質の結果だと勘違いし、省に入つてそれが偽りの煌めきで有った事に直面するような愚か者達にはな」
筋道は通っていた。当然の事ながら道理も。

そしてそれ故に、僕は反論の言葉を持ち得なかった。

「君の事だからこう言うかも知れない。それはスリザリンに限った事では無いだろうと」

黙り込んだままの僕にバーテミウス・クラウチ氏は一定の譲歩を示す。

しかし、彼は決して結論まで譲る気は無かった。

「確かにそうだ。卒業に喪失は付き物だ。グリフィンドールであれば、仲間内の鼻屑目に基づく無条件の肯定を。レイブンクローであれば、相対的でしかない成績基準や努力自体に対する賞賛を。ハッフル

パフであれば、生温い慣れ合いと慰め合いを喪う。結果主義、出世競争、新たな人間関係、複雑怪奇な社会構造等々。それらの前に、他の三寮の出身者も確かに例外無く、それまでの指針を喪いはするのだ」
ただ、と老紳士は続ける。

そして、主張したい事も予想が付いた。

「……スリザリンで有った学生が喪う物は、他よりも重い。恐らくは、学生が当然に考え、理解しているつもり以上に」

「私はやはり、今のを付け加えるべきだと考えるが」

補足しながらも、彼は訂正までする事は無かった。

「学生という身分は、違う人種を一所へと押し込め、同じ人種だと錯覚させる。魔法族の人数からの必然的帰結とは言え、この国で唯一の学び舎というのは残酷だ」

違うのだ。

この老紳士が最初から一貫しているように。

純血と純血以外。貴族階級と労働階級。選民と凡俗。

絶対的な区別が、彼等と僕達の間には横たわり続けている。

「スリザリンの大部分は貴族らしく過ごす事は出来ず、社会の中で泥と汗に汚れて働く必要が有る。スリザリンに選ばれた事で多くが自分を優等種だと錯覚しがちだが、その実、そのような事は決して無い。生を受けた瞬間に区別されており、混じり合う事も無く、そして大抵の場合、卒業後にその夢は醒める」

煌びやかな社交界。選ばれた者だけが参加出来る、豪勢で豪華な宴の数々。

権力者の多くと触れ合える時間は——しかし、それは学生時代だけの、聖二十八族を始めとする“特別な人間”の傍に居るからこそ許される。

決して、自分が特別だからでは無い。

「不公平なのは、卒業後の時点においては、貴族の血とそれ以外では能力の差異というのは左程存在しないという事だ。同じホグワーツで学び、同じ寮で毎日生活する以上、優等生と呼ばれる者の間では際立った差異など生じ得ない。……嗚呼、けれども」

卒業後に道は分かれたるのだ、と。

貴族の一人である筈の存在は、嘲り混じりの憐憫を隠さずに続けた。

「一方は各界の著名人や天才達との交流で大きな刺激を受けて切磋琢磨し、己の才能と能力を更に高める事になる。しかしもう一方は、無能な上司や物分かりの悪い同僚との交流を余儀なくされ、誰にでも出来るような雑事に忙殺される」

卒業時は差異が無くとも、卒業後に差異が生じる。

絶対的な環境の違いの下に、両者は決定的に区画される。

「この現実を前に、鬱屈せずに居られる者が——スリザリンの狭い社会が全てで有った者が、至上の輝きを間近で見続けて来た者が、どうしてその現実を容易に受け容れる事が出来ようか？」

「……………」

同じで無い物を同じように扱った事の結末。

それも、最も家柄的格差が生じやすいスリザリンで露呈しやすい悲劇。

「かつて同じ寮に属した同輩や上司が居れば、同じ志の下に同じ苦杯を舐める者が居れば、それを癒す事は可能だ。貧富や貴賤の絶対的不公平は、スリザリンのみならず他の三寮にも等しく存在する。しかしながら、元より少数精鋭の、しかも貴族としての道の歩む者が多く居るスリザリンにおいては、そのような仲間というものの自体が期待出来ない」

……四寮の人数は、決して等しくは無い。

最も多いのはハツフルパフであり、最も少ないのはスリザリンである。そして、最も貴族的な家系に連なる人間が多いのも当然ながらスリザリンである。

ホグワーツの学生はざっと千、そしてスリザリンが占める席は二百程度。それを七学年で割ると、一学年あたり約三十人弱。その中から更に、聖二十八族に代表される貴族的な家系は、庶民とは異なる高貴で高尚な任務に着く事になる。

僕達の学年で言えば、マルフォイ、ノットを筆頭に、クラブ、ゴ

イルと言った聖二十八族の男子は、労働に身を粉にするような事は確実に無い。女子は更に多く、グリーングラスやパーキンソン、ブルストロードは間違いなく社交界以外から殆ど姿を消す事だろうし、他の女性陣も、賃金労働より血を繋ぐ事こそ求められるだろう。

そして、その残った中でも進路は分かたれる。魔法省は当然ながら上位の成績が要求され、進める人間自体が更に絞られる。そう考えると、同期の人間など期待は出来ず、それどころか、一年上の先輩や、一年下の後輩が居なかったとしても不自然では無い。

同胞愛を掲げるスリザリンは——けれども、社会に出た瞬間、多くの同胞を喪う。

「そして、『純血』。元スリザリンで有った一流の者達との関係も問題だ。彼等と同じ寮や学年に所属していたが故に、魔法省に入った二流の元スリザリンは特別な人脈を持っている。果たしてこれは真と言えるかね?」

「……遺憾ながら偽でしょう。『純血』は、今で言えば聖二十八族は彼等だけでつるみたがる。階級社会を超えた友人関係など成立し得ず、卒業後に打算無しで手厚く助けてくれる関係には成りませんよ」
ドラコ・マルフォイと僕は友人関係に成り得ない。

特別なハリ・ポッターとは違う。身分が違い、そもその格差が存在する。如何に相応の交流を持っていようとも、ドラコ・マルフォイを通じて頼み事をするとか、助力を求めるといような『権利』を行使する立場には昇る事が出来ない。

「もつとも、義理で何回か助けてくれる程度の事はしてくれて欲しいけどね。その程度の慈善を願う事は、下層階級で這いずる貪欲な乞食にも許されるでしょう?」

肩を竦めながら紡いだ答えに対し、現実を知る老紳士は軽く頷いた。

「その通りだ。何度かは救う。繋がりは繋がりで、口実には成り得る。しかし、我々は君達を同じ生き物と見ていないし、そもそも我々は別に元スリザリンのみから果実を収穫する必要は無いのだ。そして、我々の資産や人脈を狙う元グリフィンドール、元レイブンクロー、元

ハツフルパフは数多い。我々にとって、君達は特別でも何でもない」
元スリザリンだから。

“純血”にとっては、それが助ける理由にはならない。

何故なら、偶々同じ場所で同じ時間を過ごしただけの、最初から別の生き物だから。白鳥と家鴨は何れ道が分かたれる物で、その方が何れにとっても幸せだ。

「今の魔法大臣がスリザリンに見えるかね？ けれども、彼にとって我々は利用価値が有り、我々にとっても同様だ。逆に言えば、それ以外の関係性に然したる価値は無い。我々は重みを感じない。たかが七年を頼みにするような愚か者など特に論外だ」

「……そのような者は、貴方がたには要らない、と？」

「サラザール・スリザリンが、魔法省内で出世する程度の、官僚的に良く出来た人材を求めたとしても？ 君達スリザリン寮は、そもそも“非純血”が行く事を想定されて居ない。最初から君達に生きる権利を、存在自体を認めていないのだ」

彼等は高貴なる者だ。凡愚とは異なり、生まれた時より多くを持っている。

ガンプの法則。魔法で出来ない世界規範を示す論理。アレは魔法の有限性を記述すると共に、古い魔法族の家系の在り様を戒める物なのかもしれない。

富や金銭は魔法使いにとって本質的に重要で無く、しかし“純血”は、魔法で何が出来て出来ないかを良く熟知していた。食物——それを産み出す源泉となる土地などが典型だ。魔法で創れない物は確かに有り、それ故に彼等は不可能な場所に有る物を渴望した。

この世界を如何に規定するかというのもまた同様。魔法省や国際魔法使い連盟などという後発の組織が出来る前から存在し続けている彼等は、この世界を如何に規定するかに責任を負う事を覚悟していた。それが杖一本ではどうにもならない事を知っていた。

だからこそ、彼等は当然に恵まれている。というより、恵まれなければなら無かったのだ。物質的にも、精神的にも。ただ魔法が使えるだけに過ぎない生き物共とは違って。

しかしながら、だ。

「……言いたい事は何となく解りましたよ」

大きく溜息を零しながら、敢えて呆れを表面化させて吐き捨てる。「貴方の言葉を纏めるところだ。今の『非純血』の元スリザリンは、生まれの不公平さに悲嘆しがちな上に、知人も同僚も少なく、学生時代の好悪を引きずったままに新たな交友も広がらない。だから仕事が出来ないし、出世も出来ない。たかが七年に固執する、下流階級の愚物ばかりしか残っていない」

魔法省に身を置いた事が無い、そもそも社会に出た事の無い僕には解らない。

それが正しいのか、間違っているのか。老人の諫言なのか、戯言なのか。高貴なる者の慧眼なのか、打倒されるべき者の偏見なのか。

ただ、老紳士の、貴族中の貴族が語る論理を理解出来ない訳でも無かった。出来ない訳でも無かったからこそ、下層階級に属する者として、こう評さねばならなかった。

「貴族らしい、市民に理解を示さない、陳腐で身勝手な理論だ。どんなに労働階級に入り混じっても、決してそのものには成れなかった、半端者の偏見だ」

論理矛盾を内在しているとは指摘しなかった。彼がどういう立場を最初に取ったかこそを考えれば、その帰結自体は何ら不自然でも無かった。しかし、敢えて僕がそう評したのは、その二流所の一員としての矜持故の言葉であり、眼前の貴種に対する挑発だった。

だが、バーテミウス・クラウチ氏は揺らがなかった。

「私はその傾向が強いと見るが、全てで無いのは事実だ。克服する者も居るし、上手く適応する者も居る。そもそもスリザリン内で上手くやれなかったが故に成功する者すら居る。一部を見て、全体を語るのが愚かしいのはこの場合にも妥当する。私とて、魔法界全てを知っている訳でも無く、知っているのは魔法省の範囲でしかない」

彼は当然認める。

例外の存在を、異例の有様を。

「しかしながら、同時に私は聞いてきたのだ。君とは違って普通のス

リザリン生として過ごし、魔法省に入る程度には優秀な者が、このように零すのを。直接に、或いは間接に。特に魔法戦争後の十数年は、飽きる程に」

堂の入った、大人の笑み。

時に押し潰された者だけが浮かべられる諦念と共に、彼は言葉を舌に乗せる。彼等の悲嘆に絶対的に共感出来ない出自の者で有るにも拘わらず、悲嘆と絶望を籠めて。

「――何故、己はスリザリンだったのかと」

サラザール・スリザリンは、後継に対して純血たる事を求めた。

そして現在ではというべきか、或いは当然の帰結というべきか。既に貴族と殆ど同意義に至ったその呪詛は、生まれた時点から貴族的である事を許された者の多くをスリザリンへと組分けし、そしてまた寮全体が貴族的存在の生育を前提に運営される事となった。

そして、その事に対しスリザリン生の殆どが卒業時まで疑問を持たない。分断されたホグワーツの四寮こそが、自寮が提供する世界こそが学生にとつては全てであり、それ以外を知らないからだ。

けれども、元スリザリンの労働階級が卒業後に新たな世界に出た時、偽りの貴族社会から出た際に、あの学び舎こそが異常だったと気付く羽目になる。

スリザリンに組分けされた半純血が最も苦難に直面するのはホグワーツに在籍する七年間などでは無く、ホグワーツを卒業して以降の数十年なのだ。その残酷さを噛み締める羽目になる者が余りにも多いのだと、貴族中の貴族は残酷に宣告した。

「私は今、スリザリンにおいてのみ言及した」

社会を、未来を憂える老紳士の諫言は、そこで当然終わりはない。

バーテミウス・クラウチ氏は、貴族の中の貴族でありながらも異端足り得る者は、本来知り得ない労働階級について我が物顔で語る。

「が、失望の対象が当該寮だけでは無いという事は言うまでも無かる

う。現状故にスリザリンを詳細に取り上げざるを得なかったに過ぎず、私の立場は最初から一貫している」

「ホグワーツの寮区分自体を、正しくはそれに固執する者を嫌悪している。」

「現在の四寮は何れも詰まらない構造に堕ちている。グリフィンドールであればグリフィンドールで、レイブンクローであればレイブンクローで、ハッフルパフであればハッフルパフで、その価値観の下に小さく纏まり、凝り固まっている。それから外れる者達でさえ、当該寮的では無いに過ぎない人間達が居るに過ぎない」

「ウエーザビー君もその一人だ、と彼は静かな怒りと共に零す。」

「……ウエーザビー？」

「この老紳士が話題に上げる以上、魔法省の人間であるのは間違いないだろう。」

そして、魔法省に入るような者——つまり、ホグワーツでの成績優秀者で有れば、在学時期が被る限り、当然他寮に伝わる位には有名な筈であり、僕もまた知っている筈だった。

けれども、ウエーザビーなどという人間は、僕の記憶には無い。

「嗚呼、そうか。これは私の失点だった。故に言い直そう。グリフィンドール出身で、監督生の地位を獲得し、首席にもなり、N. E. W. T. においてもトップの成績を修めただけの、今年魔法省に入省し国際魔法協力部に配属されたパーシー・ウエーザビー君と言えば流石に君も気付くかね？」

「いや確かに、そこまで言えば誰の事だかは薄々想像が付くのだが。」

「……失礼ながら、貴方は名前を」

「間違えていないか。」

「そう問う前に、老紳士は強い語調で断言した。」

「嗚呼、当然ながら間違えている……！」

「彼等貴族は、己の過誤を容易に認めなどしない。弱点を晒さない。それでもこの老紳士は、労働階級内に入り込んだ貴族は、平気でそれを為してみせる。」

「間違えているとも。そして間違えない道理など無い。私は彼自身の」

口から訂正の言葉を、そして正しい名前を聞いていないからだ！」

それは強烈な自負と、矜持と、信念とに裏付けられるが故に。

単なる貴族以上のモノで在るべきだという覚悟こそが、『純血』以上の者足らんとしてきた意識が、この老紳士に過誤の認識を許容する。

「本来であれば、彼の名前を間違える筈は無い。私は耄碌するにはまだ若く、どういう理由にしろ彼の家は聖二十八族に数えられており、尚且つ私はアーサー・ウィーズリーを同僚として知っている。かの赤毛の一族を知り、更にはクイディッチ・ワールドカップで彼等が並んでいるのをこの眼で見ている。第一、新たに部下となる者の名前を正確に記憶するのは上に立つべき者の当然の責務だ。事前に記憶していない筈も無い」

けれども、この老紳士はウェーザビーと呼ぶ。

貴族的な意地の悪さを隠そうとせず、誤解を誤解のままにしている。

「君が己の名前を間違つて呼ばれた時、スリザリニックにはどう対処するかね？」

「……何がスリザリニックかは断言しかねますが、別に訂正してもしなくてもどちらでも良いのでは？　そこは本人の好みの問題でしょう」

ドラコ・マルフォイと僕が異なるように、スリザリニックにも趣味嗜好が有る。

セドリック・ディゴリーの件は絶対的に否定されるべきだと考えるが、彼と僕の指針が違うからと言って常に否定する気も無いし、寧ろ異なつて然るべきだろう。

「ならば君の考えで構わない。特に訂正しない場合にはどう考える？」

「間違つた名前でも有ろうと上司に記憶して貰えるならば良いという考えが一つ。後はまあ……上司に誤つた名前を呼ばせる事で恥を掻かせ、周りから軽んじられるように仕向け、失脚に繋げるのも有りますか。どちらかと言えば、後者の方がスリザリニック好みでしょうけど」

二つを答えた僕には当然逃げが存在したのだが、老紳士は不問のま

まに頷いた。

「そうだな。貴族である者は、名前を間違つて呼ぶような相手に対しては強烈な隔意と敵意を抱く。貴族の序列、道理が通つた上で軽んじられるのは許容出来るが、名前を間違ふなどという存在の否定など、絶対に寛容では居られない。我々はその事を決して忘れない」

スリザリンは、本質的に陰湿で陰険である。

けれども、そのスリザリンが生温く思える程の修羅が、貴族界には広がっている。スリザリンはあくまで模型で、ごっこに過ぎず、本物は次元が違う。寮内での侮辱は虐め程度にしか繋がらないが、彼等の世界では血を見る事に直結する。

「我々は必ずや尊厳を穢された事に雪辱を晴らす事を誓う。何時の日か侮辱した相手を下に置く事を願う。今回であれば誤つた名前で呼び、その上で罪を贖わせようとする。それが、貴族としての本能である」

「しかし、彼はグリフィンドールでしょう?」

「であれば、正々堂々お前は間違つていると、そう指摘すべきでは無いかね?」

「……………」

……それは確かに否定し得なかった。

ハーマイオニー・グレンジジャーならば、決して躊躇しないだろう。あのハリー・ポッターもまた——この国に彼の名前を知らない者がほぼ居ないのはさて置いて——公然と不愉快を示し、真正面からは正を要求する事に違いない。

相手が遥かに上の権力者だろうが、彼等の騎士的喧嘩っ早さは、その程度で止まらない。寧ろ、権力を歯牙に掛けないのが彼等の本質的な気質だ。騎士は王が間違つていると感じた時、叛逆する事を躊躇わない。

「別にグリフィンドールの有る事を私は求めない。既に魔法省に所属する以上、それに寄り過ぎるのは寧ろ害悪だ。故にどういう形でも良い。レイブンクロウ的に知性溢れる皮肉や冗談を飛ばそうが、ハツフルパフ的に周囲の者を駆使して上司の顔を立てながら修正するの

でも良い」

グリフィンドールの事である事が必ずしも正解では無い。

真正面から上司の非を指摘する事は、時には上司の反感を買い、憎悪を抱かれる事にも成り得る。世界は正しさのみで回っている訳では無い。愚者が権力を握り、賢人が閑職に追いやられるという事は何ら珍しくも無い。

そして如何に正しかろうと、権力が無ければそれを実現する事は出来ない。スリザリンはそれを良く理解するからこそ、時に卑劣とも呼ばれる手段を躊躇わない。

「しかし、どれを取るにせよ、自分が生来体得してきた要素をもって、自分を構成する全てを費やして、己が名乗りを高らかに上げなければならぬのだ」

己が己であるならば。

たかが七年に規定される存在でないと自負するならば。

「だが、ウエーザビー君はそうしなかった。何も考えなかった。緊張から自己紹介を失敗したのは別に構わない。貴族すら過ち、失敗するのだから、庶民に過ぎない者がそうであった所で一体誰を咎めようか？」

故に、この貴族が最も気に食わないのはその後の話。

貴族は失敗を恐れる。しかし、それ以上に恐れるのは、その失敗をそのままにする事だ。名誉が毀損され続けた結果、家名が地に堕ち、歴史の闇に消えていくのを幾度となく、幾星霜の間見続けて来たからだ。

「しかし、彼は何の意図も目的も無く、成り行きのままを受け容れた。彼の知能と熱意は買っているが、あのような頭の軽さでは、権力を握る資格を有し得ない」

ウィーズリーは純血で、聖二十八族にも数えられている。

その一方で彼が本質的にウィーズリーを「純血」と考えていないのはこれまでの会話で明らかだが——パーシー・ウエーザビーはそれ以前の問題なのだろう。

「君達は被支配者だ。世界を憂えぬ愚者であり、毎日の糧を求める事

に追われる無知蒙昧な存在であり、卑屈で下賤な二等市民だ。しかし、それでも堅持すべき一線というのが有る筈では無いかね？ 己が何であるかという信念。誰に何を言われようが貫く意思。世界において、如何なる存在として立つかの覚悟。それを求める事は、私の我儘と言えるかね？」

バーテミウス・クラウチ氏は、貴族としての本流から外れている。けれども、貴族としての矜持を忘れたつもりは無く、貴族らしい振舞いをも忘れた訳では無いのだろう。彼は労働階級の中に在り、労働階級と共に仕事をしながら、しかしその原点とも言うべき思想はその身に宿している。

貴族でありながら労働者足る彼は、労働者でありながら貴族足る事を求めている。

グリフィン・ドール以上、レイブンクロー以上、ハッフルパフ以上、そして当然ながらスリザリン以上である事を望んでいる。

「しかしながら、貴方の論理は横暴ですよ」

貴族が身勝手なのは今更の話だ。

けれどもだからこそ、口を挟まざるを得ない。

「貴方は、最初に述べた筈だ。クラウチは、『純血』は、僕達の事を良く観て来た。つまりは、凡俗で三流の下等市民の事を良く知っている訳だ。ならば、貴族で無い者の軽薄浅慮を歴史的に熟知している筈であり、本来そのような理屈が出て来る筈も無いでしょう」

端的に言えばこうなる。

「期待し過ぎです」

愚昧な劣等種なのだから当然に貴族では無いので有って、そこから外れてしまつてはそもそも定義が成り立ち得ないのだ。

解らなかつた。

この老紳士が、貴族として異端であるのは理解した。

けれども、何故そのような思考を持ち得たのかが理解し得ない。

如何に下賤の中で労働するような反骨精神溢れる者で有っても、貴族はそのような思考を持たない筈なのだ。彼の生きた環境は、そのような革命思想を産まない筈なのだ。

「貴方は貴族中の貴族だ。それにも拘わらず、僕達の肩を持つとうとする。激励だろうが罵倒だろうが、僕達を認識している事自体が奇妙な話だ。それどころか、貴方はより上位で有る事を求める。それも労働者に対し、貴族のように振る舞う事を求める」

異端を通り越して異形である。

これをアルバス・ダンブルドアが言うならばまだしも、バーテミウス・クラウチの口から出て来たというのが有り得ない。本来の秩序として、有り得てはならない。

「貴種というのは、劣等種を視界に入れる事自体を認めない生き物だ。時を知る為に時計の裏側を一々覗く馬鹿は居ないし、齒車に時刻を示す事まで求めるのは狂気の沙汰だ。だというのに、貴方はそのような真似をする。一体何処で貴方はそんな思想を拾って——」

「——昔はそうでは無かったからだ」

「……………」

他人の話に割り込む無礼さを、その言葉からは感じなかった。

誤解の修正。正しい位置からの教導。老紳士の否定は、その強靱さを感じた。

「昔はそうでは無かった。全体とは言えずとも、一部分は。君は非常に賢明で、聡明で、世界という物を良く見ている。だからこそ、当然に疑問を抱いた筈だ。何故、組分け帽子は——サラザール・スリザリンの思考を四分の一として受け継いだ魔道具は、半純血やマグル生まれをスリザリンに組分けするのかを。そして、恐らくは一応の結論も持っている」

この老紳士は、スリザリンは純血以外の生存を想定していないと言った。

けれども、彼はこのように、組分け自体を決して否定しない。なれば、その半純血やマグル生まれの生存は、果たしてどうやって確保されるべきなのか。……誰が保証すべきで有ると、彼が考えているの

か。

「繰り返すが、私はスリザリンのみを見ている訳では無い。四寮制も然りだ。何故四寮制が創設以来断絶する事無く継続しているのかね？　『純血』が、或いはスリザリンに組分けされてきた多くの者が、その重さを、創設者達が残した願いと祈りについて一度も思考する事無く、呆けたままに血を繋いで来たとても？」

四寮制。現在も続く、当然の制度。けれども、それは可笑しな話でもある。

始まりが四寮なのは解る。では何故、現在は三寮となつて居ないのか。

そしてまた、秘密の部屋。サラザール・スリザリンの遺産。

ホグワーツで学ぶ事が相応しくない者を殺す武器を秘したと伝わるかの部屋は、資格の有無を判断する為の鍵の一つを蛇語とし、蛇語は彼の血筋に約千年もの間連綿と継承され続け、しかしながら何故、記録される限りにおいて、秘密の部屋はほんの五十年前程に初めて開かれたのか。

「君達が考えない生き物だと言うのは理解している。君達の『普通』を、我々は熟知している。けれどもマグルの世界と違い、我々にはスリザリンを内包する偉大なホグワーツが有った。半純血やマグル生まれも無分別のままに受け容れる、気高く尊き箱庭が有った。故に君達は学ぶ事は幾らでも出来たのだ。我々の思考を、流儀を、存在意義を」

魔法使いという点において、新たな血を引く者は仲間と言えたから。

サラザール・スリザリンを喪つたスリザリン寮が如何に拒絶しようとも、ヘルガ・ハツフルパフが当然に受け容れ、ホグワーツという場所で一か所に集う事を強制して来たからこそ、半純血やマグル生まれに対して、その学習の特権が広く与えられた。

「だが、愚かしくも——まあ、当然と言えるかも知れないが——君達はそれを忘却した。区分されていたに過ぎない四寮を、分断されている物だと勘違いした。そして今は、スリザリン的、或いはグリフィン

ドールの的と言った下らない価値観に固執し過ぎる始末だ」

彼は七年を重んじない。けれども、軽んじている訳でも無い。

寧ろホグワーツを偉大な学舎と考えるが故に――

「魔法戦争。忌まわしき分裂を、君達は引き摺り続けている。この十数年の分裂が、千年間も変わらず続いて来たなどという勘違いを犯している。歴史を知らない穢らわしき半純血やマグル生まれ共は、今が当然、サラザール・スリザリンが去って以降の在るべき姿だと思ひ込んでいる」

――今の在り様を、この老紳士は唾棄すべき物と考えている。

「かの戦乱は多くの魔法使いの命を奪い、純血と非純血間の憎悪を助長し、先祖代々の資産と人脈を受け継いできた純血達の多くをアズカバンに幽閉した。別にその史実自体を私は否定しない。彼等は為すべきではない事を、秩序と正義の下では許されるべきではない事を為した。そしてその多くを処理したのは、他ならぬ私だ」

かつて次期魔法大臣と呼ばれた男は、その最前線に立っていた。「しかしながら、過去までを否定するのは許されるべきでは無いと思わんかね？ 君達に信念も意思も覚悟も無く、何の干渉も無ければ墮落すると理解していたからこそ、『純血』は君達の上に義務として君臨し、正しい方向へ導いてきた。この千年の繁栄は、我々の尊き奉仕、スリザリンに組分けされた者を含む多くの『純血』達によつて創られてきた」

支配階級的な独善をもつて、彼は歴史に好意的な評価をする。

正直、異論の余地は大いに有り得るだろう。彼が軽蔑する下層民には下層民なりの意見が有り、物の見方が有り、語られぬ歴史が存在する。どんなに言い繕っても、どんなに労働階級の振りをしていても、彼は骨の髄まで貴族であり、その宿業から抜け出す事は出来ない。

けれども、普通の『純血』はそのような苦悩を抱かない。自身の正しさを確認するような真似はしないし、下々の細部にまで眼を向ける事すらしない。しかし、このバーテミス・クラウチ氏はそうでなかったからこそ、今この場所に立っている。

僕に対して、ホグワーツの生徒に対して、己の時間を費やす価値と

いうのを認めている。

「貴族的責務、伝統の継承者として我々『純血』が四寮の交流をどれ程重んじて来たと思う？ ホラスのスラグ・クラブ——彼はスラグホーン家だ——は一つの例だ。彼は偶々スリザリンだが、他三寮の『純血』も多かれ少なかれ同様の事をやった。魔法使い同士の人脈と血脈を繋ぎ合わせ、魔法界全体を広く見通し、世界を正しい方向へと導いてきた」

しかし、それは壊れた。

この異端の貴族にとって、第一次魔法戦争は、一般の人間が考える以上に致命だった。

違う寮の違う者達の交流は、集団に新しい風を呼び込む。思考、価値観、或いは血そのものと言いつても良い。多様性というのは種族の生存に必須の要素であり、故にホグワーツは四寮の存在を許容し、その上で全体が魔法族として纏まる事を求めている。

求めている——事実上、一寮が欠けた。欠けたままを、誰も是正しない。

「スリザリン的要素。そう括るのは本意で無いが、それでも半純血やマグル生まれ、或いはそのような者達に惹かれた俗人共はそれを喪った。馬鹿げた物だと蔑み、嫌悪し、不干渉とした。それらの要素を『純血』から奪ったのであれば私も文句は無かった。我々として支配階級が変わるといふ経験が幾度も有るのだ。『ブラック』も『マルフォイ』も、一貫して至上だった訳では無い。けれども、君達は塵芥として捨て去ったのだ」

狡猾。野心。同胞愛。臨機の才に自己防衛。

それらを他寮の要素によって代替する事は可能だ。例えば、同胞愛は寛容や優しき、騎士道精神によって、臨機の才は知性と機知によって、置き換える事が出来るように見える。

しかし、それは所詮代替だ。重なる点は有っても決して同一では無い。

そして、スリザリンが掲げる諸要素を、喪つても何ら問題無いと考える人間がどれ程居ようか？ 大多数の人間はそれらを必要だと考

えるだろうし、にも拘わらず、ホグワーツは、魔法界はスリザリンを不要であると自惚れている。

「関係の広さは、手札や選択肢の豊富さを意味する。そして、人格の深みをも。かつての四寮間の交流は、当然にそれを産み出していた。純血”ですら例外では無い。我々の多くはマグル嫌いだが、何より最も嫌う事は、何処からも招待されないまま慮外者扱いされる事なのだ。交流を余儀無くされた帰結として必然に、我々にも変化は齎されていたのだ」

……それは、彼が語った二流の元スリザリンにも救いとなつたのだろう。

四寮を超えた接触は、同類の間を探す事に繋がる。

貴族だらけのスリザリン内には仲間が居なくとも、魔法省に働きに行く程度に過ぎない同輩を他寮で見つける事は出来た。自身にのしかかる激務に対して愚痴を零し、物解りの悪い上司を扱き下ろし、自分達が出世した未来の姿を想像して共に笑い合う事が出来るような者を探しに行く事が許されていた。

けれども、そのような関係性は既に無い。

今のスリザリンは孤独であり、孤立している。

「君達は進歩した、新しきを獲得したと思いがっている。だが、千年以上を見て来た家の人間から言おう。君達は喪つたのだ。我等が受け継いできた伝統を、価値を、支配者の在り方を。衆愚に堕ちた馬鹿者達が、相応しくなき歪んだ社会を造り上げた」

それは「純血」の価値観で、世界観であり、「非純血」たる僕とは本来融和しえない。

嗚呼、けれども。それでもだ。

「だからこそ現在、純血”の専横を当然に招いている」

純血非純血をひつくるめた全ての世界。

今の在り方が正しくないという一点において、彼と僕は一致し得るのかも知れない。

「魔法界は墮落し、魔法省は腐敗し切っている。そして、それを作り出したのは我々でも、看過しているのは君達なのだ。現状を維持し、守

護しているのは君達なのだ。私が国際魔法協力部部長に追いやられて十数年も、決定的に追い落とせなかったのは君達の責任なのだ」

……何故だか解らない。

けれども、彼はそうされるべきだったと強固に考えている。

権力を握らなければ、握り続けなければ良かったと。

己が貴族という身分に生まれ落ちた事自体を、心の底から憎み切っている。

「私が自分の息子をアズカバンに送った事を、君は知っているかね？」

「……。ええ、まあ」

話題が飛んだ事で一瞬呆けたが、辛うじて頷いた。

寧ろ、頷かされたというべきか。それは貴族である彼からは出て来ない筈の話題であり、それを彼の前でした者は居ないだろうと確信していたからだだった。だからこそ、それを当人が敢えて口にしたという重さこそが、僕に間抜けのような反応をさせた。

「あれについて君はどう考える？」

「どうって——」

広過ぎる質問だ。

当然ながら、そのような質問を他人からされるのを想定した事など一度も無い。彼に限らず、第一次魔法戦争に関連する事について語るのは、現在の社会にとって広く禁忌である。

ただ、後世の人間としてあれを見た上で、何も思わなかった訳では無い。

「……ならば一つだけ。何故貴方の息子を、父親である貴方が主催する評議会で裁いたんです？」

僕の言葉に、バーテミウス・クラウチ氏は小さく顎を動かした。

表情は変わらずとも、強固な意思の力で変えようとしていなくとも、満足を示していた。

「そうだ。如何に判決が最終的に多数決で有ろうとも、褒賞や罰則の決定に身内に関わらせる物では無い。これは法原理では無く、社会の経験則からの帰結だ。親は子供に対して過度に甘くする。或いは、過度に厳しくする。故に外されるべきであり、そして手続的な不正は、

結果に歪みを産み得るものだ」

……彼が陪審の多数決を採っただけ、という考えは成り立ち得ない。

あの裁判記録は、この老紳士が、自分の息子はアズカバンでの終身刑が妥当だという意見を述べていた。それが評決に無影響だったとは、口が裂けても言えはしない。

「けれども、愚物共は看過した。嗚呼、当然私に不満を告げる、正しき資格と知性を持った者は居たとも。だが、大多数は何も言わなかった。純血だから、聖二十八族だから、立派なバーテミウス・クラウチだから、そのような無法を良しとした」

この老紳士は、自分の都合の良いように特権を使った。

「純血」であれば、貴族であれば、その行為自体に疑問も罪悪感も抱かない。専横を極め、有象無象を蹂躪した上で己が意思を通す事こそ彼等の本分である。

なればこそ、この異端の「純血」が、その行為を本心では何と評価しているのかは明らかである。

「して、それを踏まえた上でだ。あの裁判の内容は、正しく行われたと考えるかね？ 端的に言えば、息子は有罪だったかね？ それとも無罪だったかね？」

「……流石にそこまで。ヒツポグリフの下らない裁判内容には幾つも眼を通した経験がありますが、あの膨大な一連の裁判記録群にわざわざ眼を通す程暇じゃありません」

「ならば私から答えを言おう。アレは無罪だった」

「――」
思わず、老紳士の表情をまじまじと見る。

冗談を言っているのかと思った。けれども、彼は微動だにして居なかった。真偽を図ろうとする僕の眼を、真正面から受け止めていた。

「……貴方は誤審をしたと？」

「違う」

口に出した瞬間自分でも馬鹿げていると思った言葉は、案の定、首を振って否定された。

「確たる物証が無かった。複数の証言も曖昧で、疑問を差し挟む余地が多々有った。厳密に裁判審理を進めれば、無罪が明らかになる事件以外の何物でも無かった。あの反応を見るに当時私以外の者は殆どそう思わなかったようだが、審理が進んだ後でまで真実を見逃し続ける程、ウイゼンガモットは馬鹿の集まりでも無い」

「ならば、無罪とすべきだったでしょう」

「いや、息子は間違いなく死喰い人だった。だから、私はアズカバンに送った」

「――」
断言。

手続に不正が有っても、内容は正当だったと老紳士は言った。

「解るとも。息子の嘘に気付かないとでも？ 息子が革命の灯に惹かれ、闇の帝王に憧れ、その一団に間違いなく加入し、我が家を出ようとしていたのを知らないとでも？ それらは私が敢えて見逃した、息子から無能だと考えられるのすら良しとしたに過ぎないの？」

「……………」

「私は親だ。父親なのだ。気付かない筈も無い。どんな言葉を紡ごうが、どんな姿になろうが、私は息子の真実を見通せない程に愚物であるつもりもない。あの息子に対して馬鹿げた筋違いの同情を向けるような、半純血やマグル生まれ達と一緒にされるのは心外だ。侮辱であり屈辱だ。全くもって言語道断でしかない」

その判断が、正しいという保証はない。

老紳士は誤ったのかも知れない。彼の息子、同じくバーテミウス・クラウチという名を持つ者は最後の一线で踏み止まり、決して死喰い人などでは無かったという事も有り得る。老紳士が何と主張しようと、誤審をした可能性、すべきでない判断を下した可能性は有る。

けれども――何となく、僕は確信してしまったのだ。

バーテミウス・クラウチ氏は制度を大きく捻じ曲げ、また裁判内容に強力に干渉したのであったとしても、それでも彼は正義の下に適切な判断を下す事をしたのだろうと。あれは確かに有罪以外の何物でも無かったのだろうと。

「純血」としての横暴で我儘な判断が無ければ、一人の残忍な死喰い人が社会に放置されたままだった。だが、それは未然に防がれた。息子をアズカバンに送るのを躊躇わない気高き親が居た御蔭で、君達のような愚昧な者達の安寧が守られた」

秩序。それは如何にして保たれるべきなのか。

その一つの教訓が、バーテミウス・クラウチ・ジュニアの裁判の中には存在していた。

「幸い、犬のように喚くだけで審理が進まない死喰い人が居た御蔭で、自分はやっていないと父親に泣き落としするだけの死喰い人をアズカバンに送るのに支障は無かった。真実が誰の眼にも明らかに見える以上、審理を適当に進める事を、殆どの者が疑問に思わなかった」
嫌悪に吐き捨てた言葉に、ふと一つの閃きが有った。

「シリウス・ブラック。彼が逮捕された後、その警備状況はどうだったんです?」

「何故君がそれを聞くかは知らないが、当時魔法法執行部部長であった私はそれを答える事が出来る。現場に駆け付けた魔法法執行部隊が彼を逮捕し、闇祓いがそれに加わり、そして当然の事ながら吸魂鬼が就けられた。それ以上は流石に答えられないが、ポッター家の悲劇を生んだ犯罪者の警備は非常に嚴重だったとは述べておこう」

「……………」

シリウス・ブラックは、去年アズカバンから脱獄し、ホグワーツに侵入してみせ、グリフィンボール塔の『太った婦人』をナイフで切り裂く程度には正気を保っていた。

しかしながらそれは、十二年間正気で在り続けた事を決して担保しない。そして、ハリー・ポッターが非常に吸魂鬼に敏感で有った事を、僕は偶々知っている。

僕の表情から十分だと察したらしい老紳士は、改めて続ける。

「逆の事も言える。『ルード』・バグマン。あの男も死喰い人容疑が掛けられた事は知っているかね? 別に知らなくても良い。結論を言えば、彼は疑惑を掛けられながらも、評議会から無罪を下され、アズカバンに送られる事は無かった」

だが、と続ける。

「彼の犯した罪は情報の漏洩だった。それは事実であり、彼も認めた。けれども、果たしてそれは軽い物かね？ 無罪放免に値するかね？ 魔法戦争。戦争なのだ。あの男の軽はずみの行為でどれだけ捜査が混乱させられ、我々の抵抗が妨害され、どれ程の死人を産んだと思っているのか」

言葉の端々には苛立たしき、腹立たしきが強く滲んでいた。

「けれども、短慮で軽忽な三流共は無罪とした。有名なクイディッチ・プレイヤーで、自国イングランドの勝利に貢献したから。スポーツ一筋の男は頭が軽いのが普通で騙されても仕方が無く、アズカバンに送るのは可哀想だから。そんな下々の馬鹿げた理屈の下、あの有害物質を教訓無しに社会に放置する事を良しとした」

その主張が正当なのは、今度は判断し切れなかった。

けれども、真正面から不当だと否定する事も出来ないように思えた。バーテミウス・クラウチ側、正義の杖と天秤を握る側からの主張として、真つ当に論理が通っている。

「世には資格無き者が蔓延っている。法の最高機関のウイゼンガモットでさえ。その一つの原因は、間違いなくホグワーツにこそ有る。たかが七年。されどそれが全てのように扱い、尊い物のように誤認し、しかも下賤極まりない白痴共は平気で解釈を間違い続けている有様だ」

スリザリンの排斥。

この老紳士はそれを指摘したが、偶々それが今の情勢で目に余るだけで、その事だけを憂えている訳では無いのだろう。

魔法省と言う高級組織。『純血』^{一流}で無いながらも、今の魔法界を運営する人材を輩出する場所として現状期待せざるを得ない世界の中で、彼は多くの人間を見て来た。そして、失望させられ続けて来た。自身は『純血』で有るが故に、人が支配者として本来在るべき姿を知るが故に、バーテミウス・クラウチはこの有様を看過出来ない。

そして、彼が僕に——異端のスリザリンにこうして長々と語っている理由もそこに在る。

当然ながら、老紳士は僕だけを見ていない。ここに聞き手は僕しか居ない。それでも、彼が僕のみには語っていると思えばはしない。貴族中の貴族である人種が、一人の人間に期待する程に殊勝では無いのだ。貴族とは、複数の人間を天秤に掛け、競争させ、分別する事によって、自身の目的を達成せんと欲する唯我独尊の生物だ。この老紳士が貴族ならば、当然にそうであるべきなのだ。けれども、そうで有ったとしても、彼は僕に直接それを語る意義を見出している。貴族である者が、貴族でない者に対して、価値を感じている。

変わって欲しいと、誰よりも祈っている。

それが恐らく、彼が「純血」で有りながらも、「非純血」が蔓延る世界に身を置いた理由だから。この老紳士が青年だった時に、親や親族の反対や非難を振り切つてまで、労働階級の世界に身を投じた根源だろうから。

「……貴方は何を、いえ、何処から始めて欲しいのですか？」

「これまでの流れで、君に今こうして語っている事で、それは明白では無いかね？」

自然に、傲慢に、けれども気品有る口振りで彼は解答を口にする。

「ホグワーツは狭い箱庭だ。頑迷で矮小な遊び場だ。けれども「ホグワーツ」という在り方自体が、四創始者の尊き祈りを継承し続けている。社会の全てを反映していなくとも、確かに魔法界の縮図であつて、しかも社会では決して学べない多くの教訓を得られる貴重な場所なのだ」

彼は四寮の分断を嫌う。特筆を憎悪する。

最初から彼は、「ホグワーツ」の卒業生たる事を望んでいる。

「私は今の在り様が間違つていると思う。心の底から。けれども、変えようと思えば幾らでも変えられるだろう。嗚呼、そうとも。変えられる筈なのだ。大人達には資格と能力が無くとも、他ならぬ子供達はそれらを有している筈なのだ」

彼は「純血」と「非純血」を区分する。

それを当然する世界に長らく生きた者として、その因習から逃れる

事は出来ない。

けれども同時に知っている。その両者の、我々と君達の定義が違った時代が、自身の中にも確かに有ったという事を。ホグワーツという偉大な学舎こそが、それを許容していた事を。黄金の時代が存在していた事を、彼は重々承知している。

……そして誰よりも、それが既に喪われたのだと理解してしまっている。

「善き伝統は途切れ、古き歪みが悪しき形で露呈し、それでも決して全てが喪われた訳では無い。元より『ホグワーツ』は、偉大な人物達を数多く輩出して来たのだ。四寮を一つに纏め上げ、善く君臨し、貴族的な意思と理念と責任の下に正しき方向へと導く『王』。そのような者が現れるのを期待する事に、一体何の疑いが有ろうか」

疑いは無いと、彼はそう付け加えた。

……だが、その声の響きが、彼の言葉の内容を裏切っている。

この老紳士は、バーテミウス・クラウチ氏は、魔法省の最高権力者の地位に手の届く所まで昇り、そして今も尚、彼は決して低くない地位に君臨し続けている。そして魔法省というのは労働階級の成績優秀者の多くが行き着く組織であり、ホグワーツの上澄みを吸い上げて来た社会であり、しかし、その中で生き続けて来た者は、絶望しか抱いていない。

「——さて、レッドフィールド君」

異端の貴族は、異端のスリザリンに改めて向き直る。

視線を真っ直ぐと合わせ、堂々と、貴族的矜持の下に対峙する。

「私は長々と君達について、支配される者達の有様と現状について教示してきた。求められるべき人物像も提示した。故に、創始者が偉大なる種たれと望んだスリザリン寮に所属する少年、その中でも異端に身を置く人間。そして何より『非純血』の領分から外れ得ず、しかし『純血』の興味を強く惹き得る者にこそ問おう」

何故、この老紳士がここに着地点を持って来ようと思ったかはやはり解らない。

けれども、バーテミウス・クラウチという人間にとって、この一連

の教示は、教導は、決して軽い物では無い。

始まりが無礼なホグワーツ生への叱責で有ったとしても、今為されようとしている問いは、この異端の貴族からの挑戦であり――

「私の期待が見当違いでない事を示すホグワーツ生が確かに居る事を、君は提示出来るかね？」

――その問いは、彼の信念への、彼自身の人生の是非への審判を求めめるもので有った。

「……………」

しかし僕の中に、その答えは無い。

沈黙を守る以外の選択肢は決して有り得ない。

彼の絶望を癒し得る都合の良い存在など、決して知り得はしない。

それに最も近い資格を有するホグワーツ生は、ハリー・ポッター。

或いはドラコ・マルフォイである。その兩人以外には、そもそも資格自体が認められない。

けれども、彼等はこのバーテミウス・クラウチ氏を満足させるまでの資質を持ち得ない。彼等には四寮を統合するだけの器が無い云々以前に、彼等はそのような四寮が統合される光景などそもそも想像だにしていけないからだ。グリフィンドールの、或いはスリザリンのである事を過度に重んじる事を止めないからだ。

故に、この覚悟有る問いを前にして、彼等の名前を軽々しく口にする事など出来ない。

だが、老紳士は待った。

僕が何らかの回答を示す事を。異端のスリザリンに対して僅かな期待を。

そして、

「――少し観ていない内に、随分気安くなったようだな、ええ？」

何時かを繰り返すように。

外からの介入が、僕に回答しない事を許した。

「自分の仕事を放り出して一生徒と親し気に交流するなんて、本来の

貴様からは有り得なかつた筈だが。一体どうした？ 何時の間にか主義信条を変えたのか？ マッドと呼ばれる儂以上に頭が狂つたのか？ なあ、バーティ・クラウチ。我が元上司にして、闇の魔法使いを激しく憎む、立派な魔法使いよ」

老紳士へと真つ直ぐと杖を向け、蒼い瞳を四方八方へと間断無く回し、不器用に足を引き摺りながら、憎悪に歯を剥き出しにして近寄ってくる元闇祓い。

言わずもがな、アラスター・マッドアイ・ムーディ教授だった。

貴族階級

アラスター・ムーディ教授は見るからに激怒していた。

彼の荒々しい声が、血走った視線が、刺々しい態度が、強く握り締められて震える杖が、教授の感情をまざまざと示している。

元魔法法執行部部長と、元闇祓い。魔法省の組織構造からして直接的な指揮関係には無かったかもしれないが、身分として上司と部下の関係に有った事に疑いは無い。故に、両者の間には何らかの因縁が存在したかもしれない。しかしそれを考えても尚、アラスター・ムーディ教授のバーテミウス・クラウチ氏に対する感情は常軌を逸していた。

一言で表現するならば、彼は殺意を抱いていた。

「バーティ・クラウチ……！ 儂の眼の届く所では決して不審な動きは許さんと、儂は既に言った筈だ……！ しかし今、お前は何をやっている！ 生徒と呑気に御喋りか？ そんな事はお前には許されていない！ そんな普通で無い事は、お前には許されない！」

激情と共に詰め寄る教授の迫力は、それを向けられていない人間であつても、アルバス・ダンブルドアという至上を知る僕としても、怯まざるを得ない程の物で有った。

そして、普通ならば、これだけの怒りを向けられた本人が平静で居られる筈も無い。伝説的な闇祓いが相手だとか、或いは自分がかつての上司だったとか、そのような身分は関係無い。全身全霊を賭して相手に不同意を、自身の狂気を容赦なく叩き付ける教授の態度に真っ向から対峙するのは、普通の人間では決して不可能な筈だった。

「普通で無い？ 普通では無いだと……！」

けれども、それを受けて立つ側。

バーテミウス・クラウチ氏もまた、尋常では無かった。

「ムーディ……！ お前に何が解る！ 単なる純血、たかが魔法省の使用人でしかない下賤な者に！ 真の『純血』たるバーテミウス・クラウチの、高貴なる責務と覚悟を背負い続けて来た私の気持ちの一体何が解る！ 何の権限が有って、お前は今の私を普通で無いと規定する!？」

教授以上の狂気に、老紳士は堕ちていた。

怒れる伝説的闇祓いを圧倒する程の覇気を、彼は宿していた。

「良いか、人間とは単純に割り切れる物では無い！ 決して一貫性を抱ける物では無く、例外を常に造りたがる生き物だ！ そして、それさえも普通の一枠なのだ！ 一面だけを観て全ての結論が導き出せるような者では決してない！ お前は自分が賢いが故にそれを為せると考えているようだが、その態度こそが大馬鹿者の証なのだ……！」

「っ。言わせておけば。バーティ・クラウチ！ 儂には儂なりの——」

「黙れ！ 口を開くな！ お前と違い、彼には見所が有る！ そしてその彼がいじらしく殊勝な事に、私との会話を求めた！ 自身の知己を魔法省高官に広げる為に、私が継ぐ伝統と叡智を学び取る為に、彼はここに立っている……！ その彼の正当な権利を、資格有る者の義務を、一体お前は何の理由を持って妨害するのだ！」

暴虐的で、権威主義的で、殆ど理屈と言った理屈が無かった。

けれども、そこで初めて、教授は他人に対して怯むような様子を見せた。そしてそれは、伝説の闇祓いもまた人間なのだという感慨よりも、寧ろ形容しがたい不安すら掻き立てるものだった。

「私がおか変だとしても？ 私は何時も通り、普段通りのバーティミス・クラウチだ！ それを理解したのならば黙っていたまえ！ 道理を理解しない愚か者によって無駄に人生を浪費させられるのは、苦痛以外の何物でもない……！」

一口にそう言い切って、老紳士は再度僕へと向き直る。

流石に息は荒れていたが、その表情は先の態度が夢だったと思う位に凧いでいた。

「……さて。要らぬ邪魔が入ったが、続けるとしよう」

凄まじい切り替えようだった。

正直な所、逃げ腰気味になったのは否定出来なかった。

先の激論からの展開で平然と話を続けようとするのは、常識外れどころの騒ぎでは無い。けれども、彼はそんな事など知った事は無いらしい。怒りの感情によって多少血の気が戻っていても尚白い表情の

ままた、骸骨めいた老紳士は話を続行する気だった。

「先程、私は『君達』の——労働階級の悲哀について話をしていたな」
「……ええ、まあ。僕達の寮が詰んでいるという話でしたよね」

一瞬と言うには長い躊躇の後に言葉を紡げば、彼はさながら僕を賞賛するように頷いた。

……どうやら本気で何事も無かったように振る舞う气らしい。未だに殺意を向けている教授の方など一切視界にすら入れず、貴族中の貴族は傲岸なままに言葉を続けた。

「そして、それ以上に、今のホグワーツという在り方が終わっている。改めて断言しよう、半純血やマグル生まれにとって、今の学び舎は心地良い物に成り得ないし、輝かしき魔法界を創り得る人格を形成する物ともなり得ない」

だからこそ、この貴族中の貴族は、ホグワーツに君臨しえる『王』を求めた。

「けれども——労働階級を語る上で貴族階級の事を避けては通れない。つまり今回で言えば『純血』^{我々}の事を完全に無視する事は出来ない。我々は別れて暮らしている訳では無いし、我々は君達の事を指導する立場だ。我々に変化が有れば、当然君達にも変化を齎し得る」

少し落ち着いてきた声に、僕は首肯をもって同意を示す。

それは当然の事だろう。

両者は連関し、相互に影響を与えている。社会は全ての構成員によつて形成される物であり、下流市民や奴隷で有っても例外では無い。

けれども、僕はこの老紳士の発言を忘れていない。

「……貴方は既に、僕には関係無い話だと述べた上で、省略する事を選択した筈ですが」

「気が変わった。そして、君は物分かりが良く、聞く資格が有る。後進たる者を育てるのもまた高貴なる者の責務の一環である以上、私は更なる時間を費やす事を躊躇わない」

僕の疑問をあつさり切り捨てた老紳士は、殺意の中に困惑を混ぜ始めた教授の方向へ、やはり視線を向けようとはしなかった。

「では続けるが、君達を取り巻く環境は旧き良き時代から大きく変動した。尊き伝統は捨て去られ、君達は当然のように墮落した。しかし、君達より先に変わったのは——それらを先に喪ったのは、間違いなく我々の方だった」

彼は、先だってホグワーツからの変革を求めた。

スリザリンの分断を非難し、“王”の出現を渴望した。

けれども、バーテミウス・クラウチ氏の原点は、間違いなくそこには無いのだろう。

言ってみれば、彼は教師になる事を選択しなかった。

つまりは社会を変えるにはホグワーツでは不十分で、魔法省がそれを為し得る組織だと考えていた事を示す証であり、それを前提とするならば——彼は既に失敗している。寧ろ、子供に期待してしまっている事こそが、ホグワーツという自身の手の届かない場所からの変化を求めている事こそが、彼が大人として挫折した事を自白したような物で有った。

そして、その原因は、間違いなくホグワーツ外この国の魔法界内に在ったのだろう。

これからの時代においては“非純血”の群れに飛び込まざるを得ないのだと、かつて一人の“純血”がそう思い詰めた程の、社会の歪と世界の不条理が既に存在していた。

「起点は1945年だ。かの革命によつて、我々は墮ちた」

1920年代でも無く、1970年でも無く、1981年10月31日ですら無く。

彼はその年こそを、“純血”が大変動を迎えた決定的な刻として設定した。

「もつとも、その革命を語るには多少時代を遡つて語る必要が有る。というより、そうせざるを得ない。1945年が何の年かは、魔法族にとつてわざわざ語るまでも無いだろう？　つまりは、ゲラート・グリンデルバルドの革命。それ自体に触れる事は不可避なのだ」

教授がピクリと反応したのを横目に見つつ、僕は彼に当然の疑問をぶつけた。

「貴方は『純血』を語ろうとしているんですね？　それも、この国の『純血』について」

「その通りだが、何か問題が有るかね？」

「……その歴史的事実を今取り上げる必要が有りますか？　彼の軍隊は、この国において公的には活動しなかった。当然の事ながら、戦火もまた広がらなかったと記憶してはいますが」

彼は一人の男を恐れていたが為に、大陸から海を渡っては来なかったとされる。それが嘘か真かは知らないが、この国で大きな戦闘が見られなかったのは歴史的な事実で有る。

「そうだな。グリーンデルバルドの革命による目立った血は、国内において流れはしなかった」

その口振りは僕へと理解を示すもので、しかし同時に不同意を示すもの。

「だが、純血の名家の人脈や血縁関係が、まさか国内の魔法使いのみに留まるとでも？　魔法省において、国際魔法協力部という組織が何時から設置されたと思っている？　国際機密保持法の破壊という魔法族全体の大问题に、国内で死人が出ていないからと言って対岸の火事だと無関係を気取れる事は可能かね？」

……己の事ながら、馬鹿げた問いをした。

絶対に、そんな事は有り得ない。

「この国に革命の火は上がらなかった。だが、この国の者の心に灯が点かなかったという訳では無い。あまつさえ、戦火に自ら身を投じた者達、或いはその関係者が居た。敵味方を問わずだ。例えばグリーンデルバルドの側近には早期からロジエール家に連なる女性が居た事は確認されているし、反対にこの国の魔法省は早々に大陸からの要請を受けて、スキヤマンダー家の闇祓いを大陸へと派遣した」

「……………」

「必然、我等は注意深く観察していた。そして、無関係では無くとも他人事に近かったからこそ、革命について色々と思案し、議論する余裕

が有った。我々は「純血」として、貴族としてどう振る舞うべきかという難題に改めて直面させられる事となった」

彼は他人事だと言ったが、その言葉程に「純血」は呑気では無かったのだらう。

当然の事ながら、世界を一変させ得る思想は、一所に影響が留まれるものでは無い。

1095年に出された東方への援助督促にしろ、1517年に教会に打ち付けられた糾弾状にしろ、時代に適合した思想は、一個人の意図を超えて万人の反響と論争と熱狂を生んだ。

そして革命。初めから社会を変えざる事を意図する行為が世界に与える影響の大きさについて、わざわざ多言を費やす必要など無い。1789年のパリ、1848年のロンドン、1917年のペトログラード等々。それらは当たり前のように世界へと拡散され、浸透し、天高く伸びた篝火に導かれた羊達の、時代と世界に対する挑戦が始まった。

なれば、魔法界におけるゲラート・グリンデルバルドの聖戦。

如何に戦火に飲まれる事が無かろうと、殺し合いを始める者が居なからうと、彼の思想がこの国に——長らく魔法界を支配し続けて来た者達に、全く影響を与えない道理は無い。

「そもそも、かの革命以前から世界は変化の流れに有った。魔法界はマグル界から隔離されていようと、断絶されている訳でも無い。漏れ鍋が、聖マンゴが、そして当然ながら魔法省が、マグルの街中に埋もれている。勿論、最初に在ったのは我等の方だが。しかし、魔法族が見ようとすれば直ぐ見られるような場所に、マグルの世界は横たわっている」

姿現し呪文が存在する以上魔法族は街中を歩いてそれらの場所に向かう必要が無いが、興味本位でそれを行おうとする変わり者が居なかつた訳でも無いだらう。

「我等は最初、マグルの変化を左程真剣に受け止めていなかった。ガンプの法則が提示するように、食料は魔法ですら自由に生み出す事は出来ない。都市と呼ばれる場所にマグルが大勢集まり始めている事

を理解しても、何れは減少に転じると考えていた」

人は食えなければ殖える事は出来ない。

そして、その結果を——疫病と飢餓、荒廃と死滅の時代を、魔法使いは見つめて来た。種として言えば、魔法族は非魔法族より、魔法という力の分だけ強かったからだ。

……だが、〃マグル〃は殖えた。殖え過ぎた。

それは、ホグワーツが管轄するグレートブリテンとアイルランド全体をもつてさえ、千人程度の学生しか集められない魔法族には出来ない事だった。

「マグルの一度目の世界大戦では大勢が死んだ。裏を返せば、それだけ死ぬ余裕が有ったという事だ。魔法省の公的な中立表明、アーチャー・エバーモンド魔法大臣の立法に反してあの戦争に参加した我が国の魔法使いは、しかし英雄と呼ぶ事を厭われなかった」

公式記録には無いが、あの戦争には世界全体で数千の魔法使いが関わったと言う。

テセウス・スキヤマンダー。彼もまた、あの戦争において名を上げた。明確に違法だったにも拘わらず、彼はその後闇祓い局局长へと出世する事になる。

「違法行為が追認されたのは、彼等を英雄と呼ぶなければ恥と思える程、あの戦争が地獄だったが故だ。古き戦いを記録する純血の家系程に、時代が、世界が既に変わった事を理解した」

……貴族的、或いは騎士道的精神の下に魔法使いが、銃弾と砲弾が飛び交う最前線で戦っていた筈も無いが、それでも彼等は垣間見はしたのだろう。

〃劣^マつていた筈^グの者〃の実情を、暴力を、脅威を。

そして——

「——その流れの中で、ゲラート・グリンデルバルドの革命が勃発したのですね。魔法族の下に非魔法族を支配せんとする、魔法族にとっての聖戦が」

「そうだ」

バーテミウス・クラウチ氏は頷く。

「時代を読めぬ馬鹿者、特に半端に純血思想にかぶれた半純血に多い事だが、あの革命を一人の闇の魔法使いだけが始めた気狂いの戦争だと考えている。しかし、時代は流れなのだ。特に世界を変えるだけの変化には必ず因果が存在する」

下地は有った。

魔法族と非魔法族の力関係が揺らぎつつあった。

革命を指導したのはゲラート・グリンデルバルドだったが、それでも、革命を始めたのは、有名無名を問わない大多数の魔法使い達だった。

魔法界を担い、憂い、広く尽力し続けて来た「純血」達だった。

「だが」

否定を口にし、しかし「クラウチ」の現当主は直ぐに言葉を告げなかった。

「革命は敗北したのだ」

……それは、彼をもつて尚、口にするのが重い言葉だったが故。

「その理非については語らない。元々あの革命が過激的過ぎるという声は、当時の「純血」の中にも有ったからだ。だから語るのは結果。即ち、我々に残った物を語ろう。或いは喪った物と表現すべきだろうか」

「……………」

「革命の灯に惹かれてこの国を出た若き子供達が、陣営問わず大勢死んだ。名家が大陸に築いた人脈と資産の多くが焼け落ちた。先祖代々受け継いできた知識、秘宝の数々が闇に消えた。既に血脈や権勢が細っている旧い家系はゴーストを初めとして少なくなかったが、あれは我々にとって非常に深い傷痕を遺した。そして当然ながら大陸と同様に、純血への、そして魔法使い自体への幻想が壊れ切った」

言葉で表現するのは簡単だ。

しかし、その損失は気が遠くなる程膨大で、彼等にとって掛け替えない物だった。

……ただ、それだけではないのだ。

寧ろ、それだけで有れば話は単純だったかも知れない。

バーテミウス・クラウチ氏は、革命の起点を1945年と厳密に設定した。ゲラート・グリンデルバルドの革命とは表現しなかった。

世界革命の終わりにこそ、彼は国内の革命の発端を、伝統の根絶が始まった物として認識した。その年に起きた歴史的出来事は、やはりこの国の人間ならば殆どの者が知っている。

「決定的だったのは、あの革命の終焉によってこそ我が国に革命が起こり、史上類を見ない『王』が誕生してしまった事だ。それも既存体制の何処にも属さず、しかし我が意思のみを絶対として通そうとする、暴虐の王が。そしてそれこそが、我々『純血』を引き摺り下ろした悪だった」

ブラツク家は事実上の王族を自称するが、それでも魔法族に『王』は居ない。

魔法界においては生存維持の為に集住も都市化も不要であり、結果として強大な指導者というのがそもそも求められる余地が無かったという特質故に、『マグル』が想像する旧来の封建的で絶対王政的な君主は生まれる余地は存在し得なかった。

けれども、疑似的であれ、それが産み出される環境が出来た。

ゲラート・グリンデルバルドという闇の王。二、三十年もの長きに渡った昏い時代が続く中、彼を打ち破るだけの強力な光の王が求められ、その救世思想が浸透し——そして、伝説的な決闘という、言い訳のしようがない上下関係の規定の下に彼を打ち破る事によって、彼の地位は盤石で絶対的な物となった。

「アルバス・ダンブルドア。彼こそが、我が国の歪みだった」

……やはり、あの老人に全ては繋がるのだ。

「グリンデルバルドの革命に対抗した『純血』が居なかった訳では無い。当然ながら、血を捧げた無名の魔法使いが大勢居た。しかし、それは劇的な終幕の前に忘れさられた。実際に戦火に飲まれた大陸ではそんな事は無かったが、それを他人事だと考えていたこの国の下々共は違った」

圧倒的伝説の前に、陳腐で地道な努力は消し去られた。

物語を読んでいるが如く、映画を眺めているが如く、かの血みどろ

の戦争が遠い世界の神話のように受け取られてしまった。

「彼等は殆どダンブルドアだけを賞賛した。サラザール・スリザリンの追放と同じように、差別主義的な『純血』が当然に敗れ、平和と融和を希求する平等主義者が勝利したのだと考えた。美味しい所を搔つ攫つただけの彼が、光だと、手本だと、正しいのだと信奉した」
「……………」

「それでも彼が魔法大臣になるのであれば問題は無かった。或いは、彼が真実の意味で一教師に留まるのであれば」

アルバス・ダンブルドアは、そうでは無かった。

「単なるホグワーツ校長風情、或いは魔法大臣風情が、魔法界全体の大英雄の意向を無視出来るかね？ 彼が教育内容にどれ程干渉したと思う？ 国際的な地位を利用して、法案をどれ程多く通したと思う？ 嗚呼、彼の名誉の為にやはり断言しよう。彼は私利私欲では無く、人の安寧を守護するという信念と目的の下にそれらを行つた」

アルバス・ダンブルドアの行為は善なのだろう。

僕もそれを否定するつもりは無い。あの老人は強力で、強靱で、何より高潔で無いと自覚するが故に高潔足らんとしている。尋常の精神では有り得ず、正しく英雄として、今世紀で最も偉大な魔法使いである事を証明し続けている。

但し。

「理念は通っていた。しかし、道理と倫理を欠いていた」

結果だけ正しければそれで良い。その理屈を他人が黙認するのにも限度は有る。

あの我儘で身勝手な老人には、自粛や我慢が出来た筈も無かった。アルバス・ダンブルドアは間違いなく一線を超えた。

強力な行政機構が歴史的に必要とされなかった結果、良くも悪くも魔法界は曖昧だ。

教育内容決定権、及び法案提出権。それぞれホグワーツ校長、そして魔法大臣に帰属するという共通認識は存在していても、それ以外の者が全く所持して居ないのかは明確では無い。権威ある称号を帯び

る者、具体的には国際魔法使い連盟議長やウイゼンガモット最高裁主席魔法戦士に帰属するのかがどうかは殆ど不文のままでも有った。

それを良い事に、アルバス・ダンブルドアは数多の「改善」を行つた。闇の帝王の勢力の伸長を妨げんとする数々の法案も然り。自身の影響力を最大限活用し、他の人間を道具として、魔法界の政治に干渉してしまつた。

多分、その行いは明確に法に反する訳では無かつた。寧ろ、突き詰めて考えれば完全に、完膚なきまでに合法でも有った事だろう。特に古臭い中世、或いは魔法省成立以前の魔法使い評議会こそが統治の根幹組織だつた時代において、非常時に超越的な指導力が求められた先例は間違いなく有つた筈だつた。

ただ——それでも暗黙の了解として自重されて来たに違いなかつた。

そして、近現代、二十世紀も半ばを過ぎた時代においては、その必要性も無かつた筈だ。

1707年のウリツク・ガンプ以来、広く魔法界を指導すべき至上の地位は明確だつたからだ。相応しき者が相応しい地位に昇り、それに見合つた権力を行使するという正しき秩序は維持されてきたのは明白だつた。

一教師や一校長という地位のまま、平気で政治を行う異常者の登場までは。

そして、思い起こすべきはやはり歴史である。

独裁^{dictatorship}。

その言葉は古代ローマの独裁官^{dictator}、事実上無制限の権限を握り得た官職に由来する。

その地位に就いた者として最も有名な人物は、当然の事ながら皇帝^{カエサル}だろう。

異常な若年にして最高神祇官の権威を纏い、都合四度の独裁官に就任し、共和政を破壊する寸前まで行きながらも、最後には元老院^{ブルータス}によって暗殺された、大軍人にして大政治家。

……しかしながらだ。

彼の末路を思う時、独裁官の意義を考えた時、同時に想起せざるを得ない者が居る。

かの皇帝カエサルの後継者は、自身の政敵となり得る者を排除しきった後でさえ、独裁官には就かなかつた。圧倒的な戦績と人気を背景に、その地位の復活を要請された際には拒絶した。

代わりとして、制限された権限を持つに過ぎない官職を数多く兼任した。既存の権限を良い所取りし、一つの身に束ねた。その結果として、事実上出来ない事が無くなった。

アウグストゥス
尊厳者。

かの称号を帯びた者、当時において市民の第一人者及び共和政の擁護者として振る舞った者を、しかし後世の歴史家は一体何と記録しているだろうか。

そしてアルバス・ダンブルドア。

かの老人は、大魔法使い、魔法戦士隊長、最上級独立魔法使い、国際魔法使い連盟議長、ウイゼンガモット最高裁主席魔法戦士、ホグワーツ魔法魔術学校校長、不死鳥の騎士団団長、そして何よりもゲラート・グリンデルバルドを決闘により打ち倒した大英雄である。

統治する為に君臨する事は必須では無い。

この貴族にとって、かの男こそがこの国の王であり、皇帝であり、絶対者だった。

「グリンデルバルド時代以前において、『純血』の力は絶大だった」
自分の時代で無かろうとも、老紳士は己の記憶を回顧するように語る。

それは非魔法界生まれには決して許されない事であり、半純血ですらも多くの者が資格を持ち得ない。長らく支配階級の地位に居た家系、伝統と歴史を継承し記録し続けてきた者達のみが許される特権だった。

「我々は国内外の調整機関として機能していた。財産の、人材の、知識

の、そして魔法界の諸問題について。マグル生まれには更々期待出来ず、降つて湧いたような二流の家系では国外に持ち得る伝手など限られる。知つての通り世界は広く、我々こそがそれを提供出来た」

一般の「マグル」が飛行機で世界を飛び回れるようになったのは、ここ十年、二十年の話。

けれども、魔法族は姿現しによつて広範な移動範囲を誇つた。海を越え大陸に渡る事は困難を極めるが、複数回に分けるか移動鍵を用いれば条件付きであれ可能だった。必然、彼等の財産や人脈は、正しく世界規模で存在していた。一人の人間の寿命、たかが百年程度では紡ぎきれない繋がりや、彼等「純血」は千年以上を費やして作り上げてきた。

「しかし、グリンドバルドの革命が起こつた。あれによつて、我が国の純血の子供もそれなりの数が命を散らした。加えて大陸で大勢が死んだ事で、我々は要求と欲望を叶える為の伝手の多くを喪い、当然力を落とした。外部からは、マグル生まれや半純血にはそう見えなくとも、他ならぬ我々が自覚していた」

「……そして、その権力の空白に後釜として座つたのは、当然のように世界的に有名で、広く顔を利かせる事も出来るアルバス・ダンブルドアという訳ですね」

「その通りだ」

老紳士は首肯する。

「特に、革命で多くを喪つた大陸は、我々の有形無形の援助を必要としていた。それ自体は珍しい事では無い。魔法界に確たる行政や福祉が無いからこそ、我等は当然に古き善き相互扶助を重んじる。そして、それらを提供出来るのは純血だった」

一人の狂王が倒れたからと言って、戦乱が直ちに終結する訳では無い。

戦争において一番大変なのは後始末であり、その対応で人々の未来が天と地程に変わり得る。

「だが、その援助要請の少なくない数が、アルバス・ダンブルドア経由で持ち込まれた。単なる一教師、政治家でも無い者を通して。そし

て、彼は我々に命令し、我々はそれを拒絶する事は出来なかった」
結果は同じ。どうせ助けるのだし、感謝も受け取るのだから些細な
違いでしか無い。

庶民にはそう見えても、貴族には違った。気高く善き統治者足らんとする彼等の矜持を、自負を大きく傷付けた。その気遣い^交を出来る純血は、既に世界から多くが喪われていた。

「それは始まりでしか無かった。1945年に突如、我々から権力は離れた訳では無い。ただ、時が経つにつれ権力の中樞は確実に移動した。それまで純血を第一に頼っていた者達が、他を頼りにしだした」
発端は戦後処理でも、一度流れが出来てしまえば止められなかった。

「純血」と「非純血」。数が多いのはどちらであるかは明白だ。特に、革命によつて多くが死体となった後においては。

「純血」を介在しない、或いは下にしか置かない新たな秩序が構築され始めた。その頂点に立っていたのは、残り半世紀を残しながら尚、既に今世紀で最も偉大な魔法使いと呼ばれた男だった事は言うまでも無い」

そして最も悲劇なのは、彼が正しく今世紀^そで最も偉大^うだったという事だ。

アルバス・ダンブルドアは余りにも能力が有り過ぎた。何でも出来た。教師も、政治家も、それまで純血が果たしていた調整機関としての役割も、純血以上に出来たに違いなかった。

それによつて、それまで自分達が信奉していた「純血」は大した存在では決して無いと、恭しく扱うには当たらない者達だと、多くの者が思い上がった。

二流のスリザリンと同じ構図だ。自分達は特別でも無いのに、アルバス・ダンブルドアを同類と勘違いし、半純血や「マグル」生まれが尊いと自惚れた。

「もつとも、貴族でない僕は、労働階級——虐げられる者の側として言いましよう。あの老人が好き放題やっていたとしても、それはそれまでの聖二十八族、いえ「純血」も同じだったのでは？ 自分がやって

いた事をやり返される事が正しくないというのは身勝手だ」

「……君はそれを言えるのだな。『クラウチ』である私に、面と向かって」

「まあ、自分達が一方的に正しいという思考が余り気に入らないもので」

「その立場こそ最も独善と言うべき気がするがな」

老紳士は平静を装っていたが、その内心には明らかな苛立ちが見えた。

それでも、会話をここで打ち切るつもりは全くもって彼には無いようだった。

「ただ、君のその指摘自体は真つ当では有る。しかしだ。その時代の変遷を直接見て来た者としては思うのだ。彼が魔法大臣として、万人にとって明確な頂点として君臨したのであれば、『純血』は受け容れられたのでは無いかと。既に告げたように、我々は多くの場合それを握っていたが、常にそうで有った訳では無いのだから」

「……………」

「要するにだ。彼が既存秩序の内側に無い事は既に明白だったのだが、それが一時的な例外では無いと思えた。つまりは、彼こそが原理原則となる予感を抱いたのだよ」

単なる個人以上の意味を我々は彼に見たのだと、静かに言った。

声色には激情は無く、表情には諦念が有り、内容には憧憬と贅辞が含まれていた。

「古き伝統が軽んじられ、秩序が踏み躪られ、新しき時代を持ち込む大嵐を、我々はダンブルドアに見出した。嗚呼、そうだ。ゲラート・グリンドルバルドはこの国で革命家足り得なかったが、アルバス・ダンブルドアは間違いなく革命家足り得たのだ」

新時代の創生。

この国の非魔法族が1688年に行ったように、革命に際しては必ずしも血が流れる必要は無い。そして革命の定義を既存秩序の破壊と新秩序の構築とするならば、アルバス・ダンブルドアは間違いなくそれを行ったのだった。

そして、純血達はそれを早期から敏感に察知した。普通の魔法族と違い、或る意味で彼等以上にアルバス・ダンブルドアを評価していた。何せ旧くから続く魔法使い達は、1692年を当然として数多くの時代の変わり目を見て来たのだから。

「更に言えば、君にはその発想が余りないかもしれないが、純血にとつて我慢出来なかったのは、権力から遠ざかった事のみではない。半純血である彼が証明し、そして結果として齎した世の風潮こそが最も我慢できないという『純血』は少なくなかった」

老紳士はそこで言葉を止め、僕に検討の時間を許すかのように一拍置いた。

そして確かに、僕には解りはしなかった。老紳士の言葉を前提としてさえも、僕には純血が絶対に認められないような変化というのは浮かんで来なかった。

それを確認し、薄い嘲笑を浮かべながら、バーテミウス・クラウチ氏は再度口を開いた。

「私は魔法省の役人として、長く続く純血の家系として、現在のホグワーツ生には魔法使いとマグルの両親ないし祖父母を持つ子供が多い事を良く知っている。聖二十八族の中、それも家系図から抹消されていない者にすら、そのような者が存在しているのだ」

「……余りピンときませんね。半純血の存在が気に入らなかったのは、純血で有れば元々の事だったのでは？」

「そうか。ならば、こう言えばどうかね？ 今の半純血half-bloodと言う言葉は、直接の父や母がマグルである必要は無い。祖父母がマグルであるという範疇にすら留まらず、先祖に一人でもマグルが居れば駄目だ。自身の家系図を調べるにも限度が在り、尚且つ純血pure-bloodに対する混血mixed-bloodという表現でも無いにも拘わらず」

「……別に、その些細な表現的差異は奇妙だとまでは思いませんが」
半分halfから半分halfに変化した事が、そんなにも重要なのだろうか。

同じ言葉でも時代や社会で意味合いが変わる事は寧ろ自然だろう。「まだ解らないか。では、直接的表現をしよう。家族の繋がりはどうやって出来るのかね？」

「それは——」

答えを言おうとして、漸く気付いた。

「……婚姻、正確にはその風潮ですか」

老紳士は頷く。重々しく、苦々しさすら籠めて。

「かつては結婚相手がマグルだとしても、マグル生まれだとしても、それらを公言しないだけの良識は有った。何故なら、血の純度による優劣の証明は為されていないにしても、『立派な善き』魔法使いには血が必要だという暗黙の了解は存在しており、何より魔法界の事を知るマグルを悪戯に増やす事によって1692年の国際的な秩序を揺るがす真似は、決して許されるものではないからだ」

老紳士は言葉を切った後、

「だが、アルバス・ダンブルドアという強力な反証が、世界に生まれた」

解りきっていた回答を当然のように口にした。

「あの男は、半純血は許されると主張していた。マグルを直接の両親に持つてすら何ら恥ずべきでは無いと宣った。『立派な善き』魔法使いには、血など些細な事だと言った。その結果、何が起こったか」

……結婚の秩序の、爆発的な崩壊。

「若者が拡大解釈するのは世の常だ。だが、大人として——しかもあの男は未婚だ——自重すべきでは無かったかね？ 結果として半純血であれば、マグルの誰と結婚しようが何ら問題無いという淫らな風潮を作るような真似は、自身の発言力の大きさを考えれば、断じてするべきでは無かったと思わないかね？」

「——」

「ダンブルドアにその意図までは無かった事は認めよう。しかし忌むべき事に、彼は政治家では無かった。彼は自身の都合の良い時だけ意見を発信し、それ以外は自身が単なる教師でしかないという理屈で口を噤んだ。断片的な言葉が誤解され、間違った解釈が流布された」

全てが悪い方向に進んだ訳でも無いだろう。

間違いなく純血である眼前の老紳士は非難するが、アルバス・ダンブルドアによって救いを得た半純血も居た筈だ。純血至上社会の下で、彼等は、半純血達は、一貫して日陰者だった。そのような人間達

が、胸を張って歩けるようになった。

それは一つの偉大な功績であり——けれども、だ。

魔法界において半純血が日陰者で有るというならば、そもそもそのような存在を可能な限り産み出さない方向で、努力する道もまた有ったのでは無いのだろうか。

「……しかし、貴方がたは一度それを否定した筈だ」

僕はそれを主張する材料を有している。

魔法史こそが、更なる反論になる。

「魔法界と非魔法界に最も溝が有ったのは1692年、或いはその前後が頂点だったと記憶しています。しかしその三、四十年ばかり後、パーセウス・パーキンソン魔法大臣の下において“マグル”と魔法族の結婚禁止法案は否決された筈ですが」

「正しい歴史認識だ。それが気に食わない“純血”は少なくなかったが、それでも当時の情勢としては、それを通すべきでないと考えた者の方が多かった」

「ならば個人の自由でしょう。たとえば非魔法族と魔法族の間であったとしても、それが好意を抱く者であれば結婚する事は何ら妨げられるものではない——」

「——では聞くが。秩序の維持者を自認する“純血”が無節操に、煤に薄汚れた工場労働者や、泥にまみれた炭鉱労働者と結婚するのを許したと思うのかね？ そのような家系を持つ者を、易々と魔法使いの仲間として受け入れたとでも？」

沈黙。

情け容赦無い正論、大人としての断罪に、僕は返す言葉を見つけれなかった。

「我々魔法使いに階級が有るように、マグルにも階級が有る。知性と生活の差異が、我々魔法使いへの敬意や尊重という理解度の差異が明確に存在する」

……寧ろ、魔法使いよりも惨く、酷いだろう。

ホグワーツという偉大な牙城が存在する魔法界では、十一歳以上は学期中飢える心配など無いし、教育も無償で受けられる。それも“純

血”の人間ですら完全な家庭教育を放棄し、ホグワーツに通わせる事を選択する程の水準の物を、だ。

けれども、“マグル”の世界では違う。

階級の差異は、人間としての格差と等しい。

「魔法使いはマグルの世界に疎過ぎる。特にこの国の水準は酷いものだ。金銭的価値、社会構造、生活環境や文化的常識。我々は人種や宗教以上に異なるのに、それらを重く受け止めず、ただ顔が良いとか、親に反発したいとか、マグルとの融和という題目に憧れたとか、そんな短絡的な理由でマグルと結婚し始める愚者が世に蔓延した」

全てがそのような極端に走った訳でも無いと、老紳士は一応補足する。

けれども、思い起こすべきは魔法族の人口で有り、その社会の狭さだった。毎年数十万人が結婚して子供を産む社会なら兎も角、同学年が精々百五十人しか居ない社会でそのような人間が出れば——それは当然、無視出来ない大問題となるだろう。

「必然のように不幸へと堕ちた夫婦が、魔法使いとマグルの間で手軽に生産された。マグル生まれとの間では多少マシだが、それでも事情は左程変わらなかった。特に出身階級が低層であるならば猶更だ。家自体の考えの差異というのは大きく、断絶の問題は根深かった。恋愛関係は上手く行っても、結婚関係が破綻するのはザラだった」

魔法界に生きる者と、“マグル”界に生きる者。

両者の間には、余りにも格差が有り過ぎた。そして、特に“マグル”が関わって来た場合、魔法を使う能力が存在するという点についての嫉妬や憎悪、不理解からも自由で居られない。それを解決しないままに結婚すれば、殆どが失敗するのも必然だったのかも知れない。

「そして“純血”が真に魔法界を思うならば、それを公然と非難する訳には行かなかった。親の魔法使い達が愚かな結婚で不幸になるのは自業自得でも、子供には無関係だからだ。魔法使いの親達は半純血になりようが無く、その罪を生まれ持って背負うのは子供だからだ」

純血至上主義の“純血”は多かった。

しかし、そうでない“純血”も確かに存在したのであり、そのよう

な人間こそが、その社会問題に真に苦悩した。

「……そして、アルバス・ダンブルドアは何もしなかった。いえ、対処する義務がそもそも無かった。彼は一応一教師で、或いは学校の校長で、政治家では無かったから」

魔法界では十七歳で成人するとは言え、在学中に結婚するのは稀だろう。彼等の多くは卒業してから結婚し、故に当然ながら、そこから発生する問題は社会の問題へと移っている。

勿論、自己責任論で片付ける選択肢も有る。

他人が不幸になろうと家が衰退しようとして、知った事では無いと切り捨てる事も出来る。

しかし繰り返すが、魔法界は狭いのだ。自分の子供で無くとも、小さな頃から可愛がっていた子供など幾らでも居るだろう。先祖代々助け合ってきた者達も居るだろう。そのような家系が、むぎむぎと衰退していく事を決して良しとしない者は少なくない筈だった。

そして、魔法界の統治者としての責任感を持つ者程、そのような風潮に不快感を示し――

「――当然、何も出来なかったとも。グリンデルバルドの敗北で、純血への幻想は破壊されていた。上から頭ごなしに否定し、或いは制限されるというのを嫌う流れが有った。そもそもその話、結婚は究極的に家内の問題だ。『社会』^{純血}が介入するにも限界が有った」

……結果として、『純血』は余計に半純血、特に『マグル』と非魔法族の子への敵意を強めたのかも知れない。

社会の事を考えずに自分の欲望のみに従った者達が産み落とした、下賤な結晶^{half}として。嗚呼、良く言った者だ。その意味では、正しく僕達は半端者^{half}だった。

「結婚の秩序が破壊されたのは、魔法族とマグルとの間のみでは無かった。割れた窓が放置されていれば治安が悪化するように、魔法族においても無法が――家や親に道理を通さない結婚が頻繁に横行した。例えば、アーサー……ウィーズリーとプルエットは駆け落ちしたが、何故彼等は駆け落ちせざるを得なかったと思うかね？」

「……ウィーズリーが血を裏切る者と呼ばれ、聖二十八族に数えられ

ていてもマグルの先祖が居る事を自称している事からすれば、疑問の余地は少ないと思いますが」

「成程、スリザリンである君にとってはそうか。だが、プルエット家の兄弟が魔法戦争時にダンブルドアの下で戦った位には、あの家は血の純度や血を裏切る者である事を重視して居なかつた。故に、彼等の結婚が親から大反対されたのは別の理由だ」

流石にウィーズリー家の内部に立ち入る内容まで語る気が無いらしく、バーテミウス・クラウチ氏は話題を一般論へと戻す。

「親が子の結婚の全てを支配していた訳では無い。姿くらしを始め、子が親に本気で抵抗しようと思えば幾らでも手段は有る。一方で子としても、狭い魔法界で逃げ回るには限度が有る。故に、御互いが譲歩し、和解し合える点を探している部分は有った」

「……それはつまり、恋愛関係が制限されていたという事を意味するだけでしよう。好意を抱き合う者達が結婚を諦め、妥協していただけだ」

「私としては不幸になるよりマシだと考えるがね。そして、結婚というのは当人だけでなく家の問題の筈だ。だと言うのに、魔法使いがマグルと結婚する事さえも認められるならば、好き合っている魔法使い同士が結婚する程度の事は当然認められるべきだと彼等は主張した」

好き合っているだけの、と。

そう苛立ちと共に老紳士は吐き捨てた。

もつとも、自身が平静を欠いた事は直ぐに自覚したらしい。誤魔化すように大きな咳払いをした後、老紳士が改めて紡いだのは穏健な言葉——間違いなく、彼の本心からは程遠い言葉——だった。

「まあ、これに関しては君に理解や共感までを求めはしない。君は今の人間だ。価値観は時代と共に変わる。私とて、親が気に食わない事など幾らでも有った。古臭い人間であると切り捨てられる事を受け容れる用意は、既に老人と呼ばれる者として当然出来る」

言いたいのは、と彼は結論と主張の言葉を接ぐ。

「我々『純血』にとつて、ダンブルドアは独裁的な王で、同時に野蠻で粗野な革命戦士だった。彼は我々から権力を奪い、好き放題に魔法界

を墮落させた。我々はそれを止められず、それどころか彼に都合の良い走狗となる事を余儀なくされ、必然的に自己がどう在るべきかという事を問われる羽目になった。

——純血とは、貴族とは何か。

その命題について自問自答しなければならなかった」

魔法界における権力と権威の喪失。

そして、結婚に象徴される家族と血統の崩壊。

老紳士が語った二つは理由の全てでは無いだろうが、それでも純血達があの人を嫌うに相応しい象徴的な理由である事に揺るぎないのだろう。彼等が「純血」として千年、或いはそれ以上の長い間維持して来た価値を、あの男は粉々に破壊した。破壊するだけならはまだしも、噴出した問題の多くを他人へと丸投げした。

彼は或る時は英雄として、或る時は一教師として、都合良く身分を使い分ける事により権利だけを行使して義務を免れ、自分が思うがままに世界を規定する事を躊躇いはしなかった。「純血」達が長年背負ってきた、力を持たざるを得ない者の義務を果たさず、更にはそれを最も侮辱的な形で踏み躪り、決して顧みる事は無かった。

無論、アルバス・ダンブルドアにも反論の言葉は有るだろう。

しかし事實は別として、当時の「純血」にはそうにししか見えなかった。

故に必然、「純血」は己が価値を、存在意義を自問自答する必要に迫られた。

そして、その答えは恐らく出なかった。

出ていたのであれば、「その後」が起こりはしなかった筈だからだ。

「……理性的には、僕はこう反論すべきなんでしょうね」

精神的疲労を自覚しながら、僕は続ける。

「貴方がゲラート・グリンデルバルドの際に前提としたように、革命と

は多くから求められて発生する物だ。故に、貴方達貴族を襲った変化や自尊心の毀損の責任を、アルバス・ダンブルドアに押し付けられる訳では無いと」

非魔法界においても、二度の大戦前後で世界の枠組みというのは変わっている。

それは個人によって造られた物では無く、無名の大多数の惰性によって、半ば自然発生的に造られた物である。独裁国家の下でさえ、法と暴力と監視の下で制御出来る物と出来ない物が存在していた。それを考えれば、アルバス・ダンブルドアは単に悪目立ちしただけの、社会の一部品に過ぎないとも評価し得る筈である。

「けれども、やはり彼は存在として余りに巨大過ぎる。自分の領域外の事に平気で口を挟み、圧倒的権威と精緻な理論武装で他人を操作する事を厭わず、何よりこの国の殆どの魔法使いよりも賢明で有能だった。そんな男に社会変革の責任が無いという事こそ無責任でしょう」
アルバス・ダンブルドア。

今世紀で最も偉大な魔法使いにして——世界の敵。

「君がそう言うならば、私が代わりにこう言おう。能力主義や個人主義、恋愛主義。そして半純血やマグル生まれ、スクイブの権利向上。それらの多様性や流動性の出現は、ダンブルドアが居なくても生じたのでは無いかと。特にこの年になってから、強く思う」

最後に付け加えた言葉は、それはつまり、過去はそうでは無かったという事。

「マグル生まれの魔法大臣が60年代に初めて登場した時、我々は当然ダンブルドアの専制をそこに見た。それは一面の真実では有った。しかし全てでは無かった。当時も依然として“純血”が金銭も人脈も圧倒していたし、選挙に負ける事など事前に欠片も考えていなかった。しかし、結果として我々は負けたのだ」

^{Nobby Leach}
ノビー・リーチ魔法大臣の就任に純血達は反発し、抗議としてウイゼンガモットを始めとする様々な公的役職から身を引いた。

けれども、それによって何かが大きく変わった訳でも無かった。

「我々は時代遅れに成りつつあった。千年を超える時を経て徐々に積

み重なり、ズレ始めていた歯車が、統治機構の故障が、あの時代に露わになっただけなのだ。純血と同意義になった貴族、正しくはその時点における貴族という在り方自体が、時代にそぐわなくなっていた」

「そしてダンブルドアは単にその象徴に過ぎなかった」

「……それで、貴方は納得出来たんですか」

少し躊躇しながら紡いだ、踏み込んだ問いに、老紳士は笑った。

貴族らしくない笑み。市民の、下級層の人間のみが浮かばせる事を慣れた笑み。

……革命の敗北者の、その事実と現実を受け容れ切った者だけが浮かべられる種類の表情。

「当然、土台無理な話だ」

理解は出来たとしても納得は出来そうにないと、明確に告白した。

「どんなに正しくとも、感情で受け入れがたいという事は存在するのだ。例えば、ダンブルドアはグリンデルバルドを倒した英雄だ。だが、大陸の全ての人間が、彼に対して敬意や感謝を抱いている訳では無い。寧ろ、逆の場合も多い。その理由は解るだろうか？」

「……お前が早期からグリンデルバルドに対抗していれば、1945年よりも早く彼と決闘して居れば、無駄な血は流れる事無く、自分の大切な人間達は助かったのでは無いかと」

「正解だ」

「……それは八つ当たりだ。」

アルバス・ダンブルドアが結果としてたまたま英雄だったが故の、逆恨みでしかない。

だがそれでも、弱者が喪失の痛みに耐えるには、感情の矛先を向ける相手が必要なのだ。

「我々魔法省は、当然ながらその中核を成した純血は、早期から彼に協力を要請していた。1927年には、魔法省が公的に協力を要請していた記録が有る。当然、非公式にはそれより前から協力を求めていた筈だ」

「……単なる部外者の民間人に、ですか？」

「単なる？ 断じて有り得ない。ダンブルドアは若い頃から類稀な腕前の決闘者として名を馳せており、その時点で闇の魔術に対する防衛術教授の地位にあり、そしてまた一貫して闇への敵意や市民に対する暴力への嫌悪を隠していなかった。既に彼は国際的に名を知られ、国内外に多くの人脈を有していた」

後世から見れば、彼は1945年に英雄——普通で無い者になったようにも思える。けれども、そうでは無かったと老紳士は言い切った。

1927年となると……ダンブルドアは四十代後半あたりか。成程、若いという年齢では無く、さりとて魔法使い的には年を取り過ぎている訳でも無い。そして考えてみれば、あれだけの大魔法使いが、その年齢まで実力を知られていない筈も無かった。

「しかし、ダンブルドアは動かなかった。その時点での我々純血が、どれだけ国外から突き上げを食らっていたと思う？ 貴重な魔法使いを出し渋っていると考えられていたと思う？ 我々純血の中にも血を流した者が居た事は述べたが、あの男が参加しない代わりに、高貴なる義務として反革命に身を投じた純血の子息達というのも、国内には確かに居たのだ」

国際的に見てさえ、魔法界というのは国土に比して余りに狭い。

そのような社会においては、相互扶助の精神は当然に存在していた筈だ。古き純血は大陸の魔法使いとも少なくない血縁関係を有していた筈だ。国際魔法協力部の存在が象徴するように、非常時には当然に魔法界全体が一丸となつて協力する事が前提となっていた筈だ。

だが——あの老人は事実上1945年まで、それを棚上げにし続けた。裏で動いていたにしても、実際は戦っていたかも知れないにしても、無知な愚民達にはそう見えた。

「……アルバス・ダンブルドアが、魔法省に協力しなかった理由は？」
「不明だ」

老紳士は軽く首を振った。

「魔法省が気に入らなかつた可能性も有るが、私は協力出来ないだけの理由が有ると推測している。ただ、当時の魔法省が知らなかつたの

は確實だ。ダンブルドアは理由を語らず要請を拒否し続けた。我々に、或いは純血の誰か一人にでも事情を打ち明けさえすれば、国外の声を宥めるに役立ったであろうし、彼の問題解決に協力する事も出来た筈だった」

しかし、彼は黙して語らなかつた。貴族達の面子を潰し続けた。

誰にでも秘密にしておきたい事は有ると片付けるには余りに大問題過ぎる国際的な戦争の中で、アルバス・ダンブルドアは他人を信用する事は決して無かつた。

「そして更に不愉快な事には、出国している筈の無い人間が入国した記録が、その年に残っている。当時の魔法法執行部の上層部に居た一人——意図的に曖昧にしている事は述べて置こう——の口利きによつて不問とされたようだが、それでも記録の不自然と不整合性を消す事は出来ない」

……あの老人のやりそうな事だ。

どう考えても魔法省内の機密に属する情報が故に、老紳士はその出国していた人間の名を語らなかつたが、しかしその人間こそが、何らかの理由で動けないアルバス・ダンブルドアの手先となっていたのだろう。

しかも、出国している筈が無い人間だと断言した事から考えるに、偶々出国が記録されていなかったという訳では無さそうだ。恐らくその人間は出国が禁じられ、監視されていた。

そして、アルバス・ダンブルドアは自身の独善的な目的の下に、違法に出国させたのだろう。相も変わらず、法や規則を軽視する態度をもつて。

「だが、多くを喪った者にとっては、そのような事は一切関係無い。彼に理由が有つたとしても、秘密裏に動いていたとしても、ダンブルドアが戦争当初に助力を理由無く拒否していたという事実が全てだ。そして、それは世界中で公表されているに等しい。何せ、彼への要請と拒絶という事実は、他国の魔法省がわざわざ秘匿するような機密でも無いからだ」

アルバス・ダンブルドアは、自分の大切な者達を救ってくれなかつ

た。

そんな恨みを向けるには、十分過ぎる程の理由だった。

「我々純血の、ダンブルドアに対する感情も同様だ。殆どの場合、あの男が取った行動は結果として正しかった。概ねにおいて時代に適合していた。けれども、歴史の塵箱に捨てられんとしていた我々が、到底納得出来る筈も無かった」

「……………」

「純血の間に、不満は燻っていた。敵意は育まれて続けていた。どんなに遅くとも1945年から、アルバス・ダンブルドア変革の象徴に対して憎悪が燃え広がりに続けていた。そして十年、二十年、三十年と時を積み重ねた結果、当然のように限界を迎え、臨界に達し、盛大に爆発し、死の業火を撒き散らした」

ゲラート・グリンデルバルドの革命の“その後”の話。

“純血”達の尊厳が毀損され続けた結末が齎した大事件が歴史上の何を指すかは、この国に住む魔法使いならば誰でも知っている。

魔法戦争。

その頭に第一次と付く事が既に予定されている、暗黒の十年間。

「グリンデルバルドの革命に因果が有ったように、あの大战にも因果が有った。両者は接続されていた。魔法大戦は一人の闇の魔法使いの独創的な思想の下で発生した訳では無い。この国ではほんの三、四十年ばかり、革命が起こるのが先送りされていたに過ぎなかったのだ」

“純血”の当主として時代を見つめて来た老紳士は明言しなかった。

だがそれでも、言葉の裏には本心が透けて見えた。

この国においてもグリンデルバルドの革命が発生していたのであれば、闇の帝王の時代が訪れる事は無かったのでは、或いは被害が少なく済んだのでは無いかと。死者の数字としては差し引き零だったとしても、何かが変わっていたのでは無いかと。

何せ、彼は知っているのだ。やはり“純血”として歴史を観測し続けて来たのだ。

闇の帝王が引き起こした第一次魔法戦争の結果として、国内における“純血”達が喪った物を。人材を、財産を、知識を、連帯の消滅を。そして、純血の権威と伝統の失墜を。

世には因果が有る。事象は接続されている。

バーテミウス・クラウチ氏は最初に労働階級、特にスリザリンの悲哀とホグワーツの現在の歪について語り、更にその後には貴族階級の悲劇、ゲラート・グリンデルバルドの革命が齎した影響とそれによって誕生した王の革命について語った。

それらの話が完全に連続、対応している訳では無かった。現在と過去で時空が一致していなかったし、視点も社会と個人で別に置かれていた。それが意図的かどうかは知る由も無いが、しかし確かな事は、それらの間にもやはり因果と接続が存在するのだろう。

そして彼はそれを変えようと挑み、魔法省の中へと入り——敗北した。

彼は闇祓いに対し、闇の魔法使いに禁じられた呪文を行使する権限を解禁した。或いは、死喰い人の多くをアズカバンに送る一方、死喰い人でないという妄言を信じて純血の多くを無罪とした。そうやって出世の道を駆け上がった。

……しかし考えてみるまでも無く、それは明らかかな汚れ仕事だ。

誰だつてやりたくはない。明らかに嘘だと思いつながら元死喰い人の純血に無罪評決を下すのは勿論の事、特に第一次魔法大戦の一連の裁判を主催する事など、多くが拒否反応を示すだろう。

拷問と人殺しを厭わないテロリスト集団を裁くという事は、その憎悪と怨恨を一身に背負い、復讐を果たす為の象徴となる事だ。

戦争中は司法も行政も完全に麻痺していた事が明白であり、当時アズカバンから脱獄囚が出なかった——個人的な予想としては、出られ得る囚人が存在しなかったのだと思うが——のが奇跡だと言う事は、目端の利く者ならば理解していただろう。加えて、“マッドアイ”が如何に精力的に多くの死喰い人を牢獄に叩き込んでも、在野に元気な死喰い人が残っていない保証は無い。

つまりは彼には戦後において、そしてそれ以降の人生において命の

危険が付き纏う事を覚悟をした上で尚、至上魔であるべき筈大の地位臣を渴望し、けれども、その結果がああだった。

不死鳥の騎士団を率いたアルバス・ダンブルドア、手が御綺麗なままで居られたあの老人と違い、手を汚す事を厭わずに当然のように黒一色となったバーテミウス・クラウチは、息子を、妻を、全てを喪った。

誇り有る支配者足らんとして労働階級に入り混じった異端の貴族は、異端の身らしい末路として社会によって正しく処断された。

そして、年を重ねて死に近付きつつある今、もはや既に取り返しのつかないのだと、そう諦め切ってしまったている。魔法省では何も変わらないと、今後も全てが捻じ曲がったままに維持されるのだと受け容れている。

故にこうして若者に語った。

わざわざ少くない言葉を、己が時間を費やした。

身も蓋も無い形で纏めるとすれば、要はそんな話なのだ。

服従の呪文

「——もう良いのでは無いかね、クラウチ」

「……………」

制止の声が、重苦しい空気を切り裂く。

それを聞いて漸く、僕はここに居たのが二人で無い事を思い出した。

アラスター・ムーディ教授は既に一度、途中でバーテミス・クラウチ氏の独演会に介入していた。にも拘わらず、僕は今この時まで彼の存在を失念してしまっていた。

それは、老紳士の後半部の話に僕がのめり込み過ぎていたからか——それとも、自身の存在を誇示する事を忘却し、単なる傍聴人へと墮してしまいう程に、教授もまた聞き入っていたからか。

ただ、ここに至って、彼はその立場を維持する事を辞めるようだった。

「聖二十八族としての御高説は結構。儂にすら興味深い部分は有った。だが、魔法戦争の事については、お前が決して訳知り顔で語るべきでは無いと、そう儂は強く考えるが？」

最初の憤怒の振る舞いは何処へやら。

そう語るアラスター・ムーディ教授の表情は平静で、その声は柔らかな物だった。

……そして、それ故、異様に危うかった。

これと同種の物に、僕は幾度か触れた事が有る。我らが寮監スネイプ教授から、そして当然ながらアルバス・ダンブルドアから、これらと似たような物——限界を振り切れた激情が齎す凧を感じた事が有る。

一応、それが齎し得る末路、人の本性が露わにされた瞬間を、僕は未だに見ずに済んでいる。けれども、そうなった際には只では済まないというのは、本能で理解している。

しかし、バーテミス・クラウチ氏の方の反応もまた静かな物だった。

彼は、何ら気圧されたような素振りでは無かった。それどころか、教授の方を、一切無視し切っていた。芒洋とした素振りすら見せて、中空を見詰めていた。

「そうだな。魔法戦争の事は私が敢えて語る必要も有るまい。それを語るに相応しい者は他に居るだろう」

暫し静止した後、ポツリと老紳士は零した。

そうして漸く、今まで視界にも入れなかった教授の方を見やった。「アラスター、お前が来なければもつと早く話は済んだのだが。けれども、逆にこれで良かったのかも知れん。吐き出すべき事は吐き出した。その機会が、望外の時間が得られた。故にここで満足すべきなのだろう。後は、私が選択出来るものではない」

老紳士の言葉は明確に裏の意味を含ませていて、けれども教授は何ら応えようとはしなかった。澄み切った静謐のままに、伝説の闇祓いは黙殺する事を選択した。

そして、それが変わる事が無いのを理解したのだろう。

何故か口元を軽く歪めた老紳士は、改めて僕へと向き直った。

「——レッドフィールド君。知つての通り、私は今、非常に多忙な身だ」

魔法省国際魔法協力部であり三大魔法学校対抗試合の運営を司る者は、至極当たり前の事を口にして、けれども言葉を続けた。

「しかし、君との此度の会話は、こうして語る時間を与えられた事は、非常に価値が有る物で有ったと考えている。故に、君と再会出来る日が訪れる事を私は心の底から期待しているし、そしてその時は、私は真に“純血”として、君に対応する事を約束しよう」

それは事実上の招待の言葉。

「……ええと、この場合は謹んで御受けすると答えれば良いんですかね？」

孤立したスリザリンである僕にパーティーは無縁だった。

だからこそ、何と答えれば良いのか解らず、それを見たバーテミウス・クラウチ氏は、今度は明確に笑みの形へと変えた。

「君は異端であるが、そう言う所はやはり半端であるな。礼儀を知ら

ぬ者は、我々の世界から当然に軽んじられる。此度は君達の世界で有るから見逃したが、次はそうはでない事を期待している」

叱責にも叱咤にも取れる言葉をもって踵を返した後、

「――最後に一つ、助言をしよう」

しかし彼は即座に立ち去り切る事はしなかった。

「……え？」

バーテミウス・クラウチ氏は振り返らなかつた。

こちらに背を向けたまま、表情を見せないままに、彼は淡々と続ける。

「服従の呪文。それが何故、魔法省を最も手古摺らせたか。変身術には自分の姿を変える物も存在し、また魔法薬には他人に成り変わる物も有るにも拘わらず、かの呪文だけが何故禁じられた扱いをしているか、真に理解しているかね？」

「……………」

視界の端の、アラスター・ムーディ教授は動かなかつた。

一切の動きが無く、けれども完全に心を隠し切っているのがありありと感じ取れた。気を尖らせ、言葉の一言一句を吟味していた。

……そして、それ以上に僕の方が、気が気で無かつた。

如何に元闇祓いとは言え、『マッドアイ』の前で不用意に口にするには余りに危険過ぎる話題で有る。

けれども、老紳士は気にしなかつた。無視したままに、言葉が続けた。

「それはだ。服従の呪文の自由度が単純に高いからだ。特に極まつた術者の下では、一度杖を振れば長時間影響を行使し続ける事が可能で有り、尚且つ逐一命令する必要も無いからだ。命令を下しさえすれば、被支配者は自分なりに命令を解釈し、動いてみせるからだ」

そして何故だろうか。

この状況以上に、その説明の内容自体にこそ、異様な重圧を感じてしまうのは。

「ある場所に存在する物を取って来い。ある物品を特定の相手に渡せ。特定の行動を取る者を見かけたら密告しろ。そして当然の事な

がら、何事も無かったかのように学生生活を送り、或いは自身に与えられた職務を遂行しろ。そのような命令が、服従の呪文では許される」

「解るかね？ 仮に知っていたとしても、再度胸に刻むべきだ。これこそが服従の呪文が禁呪となった理由であり、我々魔法省が更に禁呪をもって対抗した理由なのだから」

……言いたい事は解る。そして、暗示している理由も。

ただ、決定的に解らない事が一つ。

「……それで、貴方は何故今更そんな事を言い出すのです？」

「何、君は目立つ割には余りにも不用心過ぎるからだ。これがかつての魔法戦争中であれば、私が君を害するような悪い人間だったのなれば、君は既に死んでいる」

「……危険は低めだと踏んで行動はしていましたよ」

今回は三校試合、国際関係と不可分の問題なのだ。

校内でホグワーツ生が一人でも死ぬか失踪すれば、如何に大会と関係無い所で有ってもボーバトンやダムストラングは自分達の生徒を護る為に全員を引き上げさせる事だろう。

炎のゴブレットの拘束力はハリー・ポッターの離脱を許さない程度には非常に強力なようだが、形振り構わなければどうにでも解決出来る。三校試合を中止する必要すら無く、寧ろ完遂させてやれば彼等が離脱する事に支障はないだろう。

だから、僕如きに「犯人」が手を出す危険は余りに高すぎる。

「そうか。それが正しいかは、私は敢えて語らんよ」

その裏に皮肉を隠しもしないのは、彼の種族としての習性だろう。

「しかし、気をつけたまえ。君は異端のスリザリンであるという以上に、他人の真意を図る為の詮索と挑発を迷わず、己が敵対者を作る事を厭わな過ぎる。そのような在り方で居て尚長生きした者を、私は今まで一人しか見た事が無い」

「……………」

「此度においても、寧ろ此度においてこそ胸に留めておくべきだ。

我々の敵は常に解りやすい所に居た。そして、小賢し過ぎる者というのは何時だつて邪魔だった。闇の陣営にとつても、光の陣営にとつてさえも」

それは尊い助言で教訓なのであろうが、気質としてどうにも受け入れがたい事は有る物だ。

そして、それはそもそも僕にとつて覚悟の上である。

「……最後に御聞きしますが、貴方はそもそも何故、僕に気付いたのです？ 貴方は杖や魔道具を使う素振りを見せなかったし、魔法の気配も纏つては居なかつた。気付く機会は無かつたように思います」
「その答えは単純だ。単に私は最初から周りに注意を払つていたに過ぎない。そして往々にして、単純な論理を前提とする方が、賢い者を騙すには酷く効果的なのだ」

そんな忠告を残し、老紳士は再度歩みを進め始めた。

僕と、教授の事を振り返らないままに、真つ直ぐと伸びた背中はずく消えていった。

バーテミウス・クラウチ氏は去つた。

僕とアラスター・ムーデー教授だけが当然に残つた。

そして教授は、何かを深く考え込んでいるようだった。教授の杖は未だに老紳士が去つた方向へと向けられたままだったが、その杖先はきちんと定まつては居らず、微かな風にさえ揺らされ、動いている。

何時の間にか、日が暮れようとしている事に僕は気付いた。

しかし、驚いたのは時間の経過自体では無かつた。

今日まさに第一の課題が行われた筈だったというのに、四者四様の見事な課題の達成を見せてくれたというのに、それらの印象は殆ど拭い去られていた事こそが、僕に驚きを齎した根源だった。

あの光景が遠い過去だと思える程に、ただ、貴族中の貴族が残した彼の歴史こそが、その血と家系が刻んできた重みこそが、僕の中に強く残つていた。

特に、アルバス・ダンブルドア。

以前、教授はあの老人を変えようとしないう者と揶揄した。

しかし、一方で老紳士は革命戦士と批判した。

全く正反対の観方で、その何れが正しいかは一概に言える物では無く、究極的にはその二つの観方は両立し得る物なのかも知れない。

けれども、今この場でそれらを整理するのが到底不可能なのは明白であり、

「教授」

「……何だ」

「バーテミウス・クラウチ氏が、服従の呪文に掛かっている事は有り得ますか？」

ここに都合の良く専門家が居る以上、これだけは第一に聞いておかねばならなかった。

ただ実際、非常に危険な問いで有った。

最初に老紳士へと見せた憤怒の情。或いは、最後に見せた凧の感情。その何れにしても尋常の物では無く、教授にとつてバーテミウス・クラウチという存在自体が地雷なのは明白であり、不用意に踏み込めばその破壊力が僕へと向けられる事は容易に想像出来た。

けれども、問いに対する教授の反応は、少なくとも表面上は穏やかだった。教授は低い唸り声を上げて直ぐに答えなかったが、しかしそれは迷いを示す物でも有る。

元闇祓いとして沈黙を保つべきか、教授として説明を選択するべきか。

「……ふむ。悪くない。嗚呼、寧ろ筋が良い発想だ」

そして、その切り出し方は、話す方向に天秤が傾いた事を示すものだった。

「怪しい行動を取った者が居れば、まず服従の呪文を疑え。それは闇祓い——先の戦争を忘れておらぬ者に限るが——らしい思考では有る」

教授は、感情を押し殺した声で静かに言う。

「だが、儂の個人的な判断としては、その可能性は非常に低いと考えざ

るを得んな」

それは僕の結論と違った。

僕は決め切れなかったが、教授は否定する方向の判断を下した。

「クク、その反応では随分と意外に思っているようだな？ まさか、僕が私情でもってクラウチをしょつ引くべきだと主張すると考えていたか？」

「……そうは言いませんが」

そこまで過激な事は、流石の僕も考えてはいない。

「ただ、貴方の最初の反応は、彼を闇の魔法使い同然に扱っているように聞こえましたし、普通で無いという表現に加え、バーテミウス・クラウチ氏の最後の助言を加味すれば、その可能性も有るように思えましたので」

「僕にそのつもりは一切無かったし、お前には無様な姿を見せたと思っている。失望するのもお前の勝手だ。だが、僕が平静で居るには、あの男と僕の間には因縁が有り過ぎるのだ」

その単眼に再度の殺意を一瞬だけ滲ませて、しかし教授は一度眼を閉じた。

そして開いた後には、鋭利な叡智の輝きだけが残っていた。

「僕の本心から言えば、あれが不審な動きをしたとして問答無用でダンプルドア、或いは闇祓いの下へ引つ張って行きたい所だ。しかし、僕は既に現役を退いており、しかも僕の頭脳は残念ながら、クラウチが服従の呪文に掛かっているという事は考えにくいと答えざるを得ん」

論理とは別に感情的には不愉快らしく、彼は食い縛った歯を剥き出しにしていた。

「その理由についても僕は説明出来る。特にお前には論理で説明する方が良いでしょう。……さて、お前の言う通り、仮にクラウチが服従の呪文に掛かっていたとしよう。しかし、それを前提とするならば、理屈に合わぬ事が有る」

先の展開も含めて考えながら紡いでいる内容らしく、教授の話しぶりは多少ゆつくりした物だったが、しかしその言葉の軸はしっかりと

していた。

「儂もクラウチの動きには着目していたが、あの男に常に付き従ったり、頻繁に接触したりしている者は見ていない。まあ、儂とクラウチの関係は周知であるし、儂が警戒せねばならん者は他にも多い。故に、儂の眼の届かぬ所で誰かと会った可能性は否定せんが」

さて、これを聞いて儂の授業を受けたお前はどう思うと続け、

「もつとも、クラウチの忠告を聞いた今では簡単過ぎたか？」

付け加えられた言葉の裏には多少面白がる響きがあった。

勿論、回答は確かに簡単であり、誘導が露骨過ぎで、悩む必要など無かった。

「貴方が授業で服従の呪文を僕達に使った時、貴方は当然ながら傍に居ましたね。しかし、今回バーテミウス・クラウチ氏の場合はどうなのか。要はそう言う事でしよう」

「正解だ」

満足気に、教授は頷く。そして今度紡ぐ言葉は流暢だった。

「服従の呪文の恐ろしい点は、あの男が示唆したように、相手を管理し続けるのに常に杖を向けている必要は無いという点であるし、逐一命を奪う必要が無いという点でも有る」

服従の呪文は、非魔法族のマリオネットのように、一々後に居る必要は無いのだ。

そうでなければ、バーテミウス・クラウチ氏が摘示した行為を対象者に取らせる事は決して不可能である。逆にそれが出来たからこそ、服従の呪文は禁呪に至った。

「しかし、何もかもが出来る訳では無い。マグル生まれは特に、そして時には純血の魔法使いですら、魔法が何でも出来る手段のように考えられている。しかし、出来ない事、出来そうにない事というのは当然存在する。服従の呪文ですら例外では無い。対象者の技量によって破り得るといふ以前に、不可能の枠組みが厳然として存在するのだ」

……服従の呪文が為し得る限界というのを、僕は当然知らない。

一人の術者が何人もの相手に対して同時に掛ける事が出来るのか。服従の呪文の効力は、一度で何時間、或いは何日まで続くのか。本人

が受け入れがたい事、即ち自殺などの行為に対しても服従させる事が出来るのか。

数十キロ先、数百キロ先の相手にも影響力を行使し続ける事が出来るのか。

その何れにも今の僕は回答出来ず、しかしそれらの問い全てが無制限という訳では無いだろう。それが可能ならば、魔法界は既に闇の帝王一人の手で陥落している筈だった。

「けれども、一つの例として距離の制限が有ると仮定しても、解決方法は幾らでも有る筈です。例えば、やはり貴方が暗に示したように、校内に潜む誰かが彼に服従の呪文を掛け続ける事によって克服する事は可能でしょうか？」

「そうだな。ただ、あの男は魔法省の人間だ。そして、儂の知るクラウチは、病氣程度で欠勤する位ならば死を選ぶ程の仕事人間だ。言いたい事が解るか？」

彼は幽鬼のような有様で有りながら、それでも今日此処に居た。

魔法省の高官として、三大魔法学校対抗試合における審査員としての自身の仕事を果たしていた。そして、それを誰も止めるような様子は無かった。彼が体調不良を押し通して尚、他の人間は、バーテミウス・クラウチ氏がホグワーツに居る事を否定しなかった。

「……彼は恐らく、魔法省に一日も欠かさず出勤し続けている。そして、校内に潜んでいる人間が居るとして、その者がホグワーツ内の行動に関して彼を制御する事が出来ても、魔法省で勤務する彼の行動まで制御する事が出来る訳では無い」

「その通りだ」

教授は、我が意を得たりというように大きく頷いた。

「勿論の事、魔法省内に別の協力者が居れば解決する理屈で有る。更に言えばクラウチが出勤する前に、毎日服従の呪文を掛けられている可能性も想定しうる。しかし、前者は兎も角、後者の方は、今の時代で儂以外が容易く口にしえない程度には、荒唐無稽な理屈では有るな」
今聞いた僕の印象でも、前者は有り得るだろう。

死喰い人の残党——但し、偽証してアズカバンを逃れた連中が大半

だから、彼等が闇の帝王と繋がっている事は考え辛いが——は、魔法省内に依然として存在する。彼等が動いているのであれば、バーテミウス・クラウチ氏の「操縦」に協力している事は想定しうる。

しかし、確かに後者は荒唐無稽と言う位には、突拍子が無い理屈では有る。要塞じみた「純血」の家の護りを誰にも知られないまま易々と突破し、しかも高度な技量と多大な魔法力を持つ大人の魔法使いを、まるで玩具のように扱っている闇の魔法使いが、在野に存在しているという事なのだから。

「更に言えば、ホグワーツはスコットランドで魔法省はロンドンだ。そしてクラウチは恐らく姿現しで移動している。まさか奴が箒で飛ぶ訳には行かない？ さて、その距離の断絶を経ても、服従の呪文の効力は維持し得るのか？ どうだ、優等生？ この程度なら教科書に載っていても可笑しくないが？」

ニヤニヤとした教授の問いに、僕は黙る事しか出来ない。

どんなにぎっくり計算しても両距離の間には直線距離で五百キロ超。ホグワーツの位置次第では七、八百キロの空間の差が横たわっている。それだけの障壁を隔てても、服従の呪文は効果を弱める事無く、正常に機能し続けるのだろうか。

その解決法も、服従の呪文を掛け直す為の中継地を作る——つまり、姿現しをする際には必ず術者の下に姿現しをするよう事前に命令する——事で解決しうるが、正直言って途中で呪文が解ける危険度を考えれば余り美しくないし、それを考えてしまっている時点で、服従の呪文には相応に厳格な制限が存在する事を僕が前提としてしまっているのは明らかだった。

「疑うのは結構。儂の信条からすれば、それを推奨するもので有る。しかし、有り得ない事は存在するのだ。儂も何も考え無しに、何時も何時でも誕生日プレゼントを爆破する訳では無い。儂には儂なりの疑う理屈が有り、その可能性を十分肯定し得たから爆破したのだ」
教授なりの冗談を口にし、けれども浮かんでいた笑みは直ぐに消えた。

代わりに現れて来たのは、真剣な表情。

蒼の魔法の眼は目まぐるしく周囲に向けられ、しかし残った単眼は真つ直ぐ僕を見据えて、アラスター・ムーディ教授は僕の想定して居なかった言葉を続けた。

「先程僕は、可能性が低いと言った。術者の場所や距離に対して疑問を呈した。けれども、常識的な思考からは全く考えられない程に強力な服従の呪文を扱える闇の魔法使いを、僕は一人だけ知っている」

「——え？」

「闇の帝王」

端的に紡がれた解答に混じるのは、明確な畏怖と恐怖。

「光の当たらぬ領域において、あの男の前に不可能はまず無い。アルバス・ダンブルドアですら出来ないかもしれない事、あやつはやる事が出来る」

僕が知らない血と死の時代を、この元闇祓いは知っている。

「先の魔法戦争時代。不可解と不可能が跋扈し、人は不安と動揺、疑心暗鬼に囚われた。お前には前も言った筈だが、グリンデルバルドと異なり闇の帝王の名が呼ばれぬのは、単にこの国が戦争に巻き込まれたか否かの差異では無い。あれは間違いなく、闇の領域というのを大きく広げた。その絶対的な『偉大』さにこそ、僕は恐怖を覚えて己まないのだから」

果たして何と言って良いのか、僕には解らなかつた。

普通は出来ない完全犯罪。しかし、闇の帝王ならば可能だと伝説の闇祓いは言う。

であれば、今回の事件には闇の帝王が当然関わっている——そう結論付けるべきだと答えるべきなのだろうか。

……いや、最初に立てた前提を忘れてはならない。

その思考と共に教授を見返せば、彼は傷を大きく歪ませながら笑つた。

「ククク。嗚呼、その通り。これはクラウチが服従の呪文に掛かっているという前提での思考実験だ。もつとも、確認してみるに越した事は無いがな。仮にあれがポッターの名前を入れたとすれば、これ程話が早く済むという事も無い」

「……確認するのは良いとして、一体どうやって確認するんです？
服従の呪文は先の戦争で魔法省を大いに手古摺らせた呪文の筈です
が」

「何、闇祓いには闇祓いなりの確認方法が有る。過去に服従の呪文に
掛けられていたかが問題の裁判と異なり、現在服従の呪文に掛かつて
いるかという場合はもつと単純なのだ」

「……その口ぶりからすれば、その手段について余り聞かない方が良
いようですね」

「儂も一応教授のつもりだ。生徒に教えるべき事と、そうでない事の
区別は付く」

彼が「マッドアイ」と呼ばれるからには、相応の理由が有る。

それを万人に思い起こさせるような事件の予感を、その気配は漂わ
せていた。

そして、それを纏ったまま、彼は徐に僕へと声を掛ける。

「——なあ、レッドフィールド」

「……何でしょう」

「此度のお前の行動は不審に過ぎる。偶然だろうが意図的だろうが、
客観的に見てお前の行動は怪しいの一言だ。バーティ・クラウチと接
触した事は勿論、それと会話した事もだ。儂が現役で有ったならば、
やはり魔法省へ問答無用で連れ帰っている」

「……………」

それはまあ、そうだろう。

「けれども、儂は何も聞かん。クラウチと何を話したのかも、何を考え
たのかも。まあ、儂が聞いた部分から多少の想像を巡らせる事は可能
であるし、故に大きな問題を生じさせる物でも無いと考えてはおる。
何かを企んだ上で整合性の有る話をするのは困難だ。特に、あのよう
な話に暗号や隠語を混ぜるのは不可能と言つて良い」

「……そう言ってしまったって良いんですか。しかも本人の前で」

「断言はせん。しかし、思い出せ、レッドフィールド。魔法使いに「説
得」は不要なのだ。そしてかつての戦争時、「説得」が通用しない者
は直ぐに姿を消した物だ。我々にとって真に警戒すべきで有ったの

は、姿の見えない他人では無く、姿が見える隣人だった」

隣人は裏切り得るが、そもそも居ない人間は裏切らない。

離れているが故に安心だという理屈が、魔法界においては成立し得る。

「油断大敵。儂は一切信用せん。何もかも。親友で有ろうと、かつての戦友で有ろうと、闇祓いとして教えた者で有ったとしても。今教えている者であったとしても例外は無い」

だからこそ、と教授は続ける。

「儂がお前を疑うように、お前もまた儂を疑え」

「――」

余りに正気で無い言葉。常軌を逸した理屈。

それをアラスター・マッドアイ・ムーディ教授は平然と口にする。

「ダンブルドアはやはり儂を疑っては居らんようだ。けれども、死喰い人の残党共が此度の件において何かを企んでいるので有れば、儂は絶好の位置に居る。そして、ダンブルドアが疑わん相手を疑うのが、儂のような人間の仕事だ」

「……しかし、貴方が貴方自身を疑うのには限界がある、というより不可能だ。そしてだからこそ、貴方は僕に貴方を疑えと？」

「そうだ」

「正直言つて、それは……無茶苦茶だ」

「おうとも。だからこそ、儂はマッドアイと呼ばれておるのよ」

己が狂っている事を彼は否定しない。

自認しながらも、更なる狂気に堕ちるのに惑う事はしない。

「嗚呼、それとだ。今回の件はダンブルドアに当然報告しておく。一生徒がバーティ・クラウチと接触したという件は、儂の胸の中のみ収めておくには流石に事が大き過ぎる。これでも儂は、この三校試合の警備役も兼ねて教授を引き受けたのだからな」

「……ええ、それは至極真つ当な話です。別に異存は有りませんよ」

僕の回答に軽く頷き、教授は顎をしゃくる。寮に戻れと言う事だろう。

僕を立ち去らせる理由について、想像出来ない訳では無い。魔法の気配が事後的に辿れるのかは僕の知識の及ぶ所では無いが、バーテミス・クラウチ氏の行動——教授にとつては明らかに不審な行動——について、何か手掛かりを得る手段がないとも限らない。

そして、彼の仕事に、生徒が関わる余地は無い。僕は速やかに立ち去るべきだった。

しかし二、三步足を進めた後で、ふと思いついた質問を徐に宙へと投げ掛ける。

「そう言えば、貴方が僕に個人的に教えている事を、あの老人は知っているのですか？」

「いや。ダンブルドアは知らん」

即座の返答に、僕は思わず振り向いた。

夕影の中に、蒼白く輝く単眼と狂貌の笑みが浮かんでいる。

「別に驚くには当たらんだろう。儂が何を教えるかは儂が決めるし、誰を教えるかも儂が決める。ダンブルドアはあれで口五月蠅い男だ。自分は口を割らん癖に、他人には口を割らせたがる。意趣返しをするには丁度良いだろう？」

「……………」

「けれども、ここに至っては耳に入れねばならんようだ。何、儂はお前を面白い生徒だと考えていたが、儂の予想以上で有ったようだからな。クラウチの興味を惹いた点も、お前が今アルバス・ダンブルドアを何と呼んだかも。儂の前で無ければいずれも大いに問題だ」

……油断大敵。

「敢えて今度は口にしよう。寮に戻れ。そして、ここに至って要らぬ好奇心を発揮して寄り道をする程、お前は愚かしい奴では有るまい？」

「…………ええ。そうさせて貰いますよ」

最後に痛烈な教訓を再確認させてくれた教授に一礼して、僕は彼の下を去った。

そして真実かどうかは解らないし、単純に被害妄想に過ぎないのかもしれない。だが、その蒼の瞳はずっと僕の背を追っているのではな

いか。そう思えてならなかった。

この数週間後、僕は『日刊予言者新聞』の記事を通して、十一月末以降、バーテミス・クラウチ氏が公の場所に姿を見せていないという厄介事の到来の気配を知る事になる。

蠢動

バーテミウス・クラウチ氏との邂逅は、やはり例外的で異常な物だったのだろう。

その後、取り立てて特別な事は何も起こる事は無く、僕の周りには日常が戻って来た。

一応僕はそれが帰ってくる期待を余りしていなかったが、こちらの予測は良い意味で外れてしまったらしい。代表選手全ての資格に僕は疑念を投げ掛け、しかし全員が第一の課題を達成したが為に完全に間違いだった事が露呈した以上、各方面から何らかの報復活動は有り得るかも知れないと考えていたのだが、そのような事は一切無かった。

セドリック・デイゴリーは既に述べた通り僕への不干渉を明確に表現し、ビクトール・クラムやフラール・デラクールはそもそも第一の課題以前と同様に、僕への関心自体を見せる素振りすら無かった。そして彼等の態度に倣うかのように、ハツフルパフ、ダームストラング、ポーバトンの何れも僕への関わり合いを避け続けている。

その理由が彼等の影響力によるものか、既に負け犬になった一生徒など彼等の眼中に無いのかは分からない。しかし如何なる理由であろうと、腫物扱い止まりの対応で留まってくれるのは僕にとって歓迎すべき事である。そもそもあの時点の僕は寮内の発言が漏れるとは思っても居なかつたし、彼等代表選手の権威を真正面から否定するつもりまでは無かつたのだから、このような扱いは大いに好都合で有つた。

しかしながら、変わらなかつた点として最も意外であり、敢えて特筆すべきであり、かつ重要であると言えるのは、やはりドラコ・マルフォイの態度だろう。

正直な所、あのバッジに対する皮肉と拒絶——更に言えば、ハリー・ポッターが課題を達成してしまった事——は彼との決別も不可避だと思つたのだが、彼はそうしなかつた。

彼は僕等の間には何事も無かつたように振る舞う事を選択した。

バッジの事は一切話題にしないものの、僕に何時も通り宿題や次回の課題を手伝わせ、気が向くと侮蔑や挑発をぶついたりするなど、僕は僕が四年間で良く見知ったドラコ・マルフォイらしい在り方を続けていた。

バーテミウス・クラウチ氏は僕を異端と呼ぶのを躊躇わなかったが、考えてみればドラコ・マルフォイも現在における異端の純血では有る。

僕は如何に彼に長らく利益を提供してきたとは言え、今回は半純血の二流市民と関係を切る絶好の機会だった。誰からも文句が出ない理由と状況であり、元々僕との交流を余り良く思っ居なかったクラブやゴイルを始めとする純血達からは歓迎されるであろうにも拘わらず、彼は何を思ったのか、それを選択しなかった。

その思惑が何処に在るのかは幾ら考えても解らず、開心術を使うにしても抽象的な思考や計画まで読み切るのは不可能である。そもその話、たまたま入学前に会話した程度を口実として一学年以来それなりの関係性を保ってきた事自体が異常だと言わなければならない。今更考えた所で答えが出るものでも無いのも当然ともいえた。

しかし、ドラコ・マルフォイが何を企んでいようと、スリザリンのトップとも言える彼が事実上不問とする態度を取った事に変わりはない。スリザリン全体もまた、僕に対する扱いをかつての放置と敬遠の物に戻す事を決したようだった。

更に言えば、アラスター・ムーディ教授との関係もそれまで通りだった。

あの後指導や添削の遣り取りを二度程行いはしたものの、僕は何も聞かなかつたし、教授もまた何も告げようとしなかつた。バーテミウス・クラウチ氏が服従の呪文に掛かっているようがまいが、それらは大人達が解決すべき事であって、生徒の出る幕では無いし、口を挟むべき事でも無いという事なのだろう。

それ故、帰ってきた今まで通りの日常は一瞬で過ぎ去っていき、学期末も段々と近付いてきた。例年通りの休暇前の浮わつた気配が、けれども今までとはまた異質の雰囲気、校内を、いや三校全体を支

配しつづであった。

それが今年のクリスマススの特別イベント、ユール・ボールの存在に有る事は明白だった。

教室内や廊下で予定を語り合う会話やダンスへの誘いが為され、自慢やからかいの声上がり、真偽の不確かな噂話がひっきりなしに飛び交う。それはやはり一つの平和の象徴であり——しかし僕にとっては関心の範囲外で、また無関係の事象である事を疑ってはいなかった。

十二月の、授業が行われる最終週の月曜日。

学期の開始以来もつともホグワーツ的で在り続けてきた魔法生物飼育学の授業は、戦々恐々としていた生徒側の予想に反し、酷く平和な形で終了した。

先週は何時ものルビウス・ハグリッドらしさを発揮した——即ち、スクリユートの冬眠実験を行った結果、グリフィンドール以外の殆どが彼の小屋に立て籠もるといふ大事件が発生——した為に、魔法生物飼育学の履修者の間では、今週はどんな無茶をさせられるのかという話題で持ち切りだった。

それはルビウス・ハグリッドに協力してスクリユートを取り押さえる方向に動いた者達ですら例外では無く、その少ない彼等ですら、二度と御免だと公言するのを躊躇わなかった。そんな本音を吐く事を自制したのはあの三人組位のものであるし、彼等とて内心どう思っているかなど傍目から見ても明らかであった。

しかしながら、学期最後の授業はそれまでの破天荒さが嘘で有ったかのように、スクリユートの餌を用意するという至極平穩無事な代物だった。

それは魔法生物飼育学を受けていた生徒全員に驚愕を齎し——マルフォイは勿論、ハリー・ポッターら三人組ですらも酷く間抜けな顔をしていた——けれども、それに文句を付けるような愚かな生徒は誰

も居なかった。

正直に喜びを表すといった藪蛇な真似をする者すら皆無であり、クラス全員が下手な会話など殆どせず、粛々と自身に割り当てられた作業を進めた物だ。それは常に阿鼻叫喚の声が渦巻いていた今学期の授業風景からは程遠い、或る意味で異例の授業であった。

ただ、それは妥当な判断では有ったのだろう。

スクリユートは既に、生徒がどうこう出来る領域を超え始めていた。

頑強な灰色の甲殻、機敏な動作を生み出す力強い脚、火と爆発を生み出す尻尾、そして背中中の棘や腹の吸盤。大きさは二メートルを超え、同族での殺し合いで残りが十匹になる程に凶暴な気質を有していた。学期当初はまだ可愛げが有ったと評せる程に彼等は明確な脅威へと成長し、如何に魔法を使えようとも、スクリユートの尻尾の一振りや体重を乗せた踏みつけで手足を砕かれ、爆発の一撃で顔が吹き飛ばす事も有り得たし、寧ろ先週の授業において大怪我をする者が皆無で済んだのが奇跡である。

そのような状況を放置するのであれば、流石の僕もルビウス・ハグリッドの追放に動くのも吝かでは無かったのだが、彼にも最後の良心の欠片くらいは有ったらしい。三人組の反応から見ても、彼が自発的にスクリユートの授業を止めたのは間違いないようであった。

そんな久々に誰も病棟室送りへとならない授業の後、意外な事に、僕はルビウス・ハグリッドから直々に呼び止められた。巨大な身体を縮めるようにして話し掛けて来た彼には、教授という地位の人間とは思えない程に自信と風格という物が欠けていた。

「あー、レッドフィールド。放課後、俺ん小屋に来い。お前さんにはちよつくら授業……スクリユートの世話でちよつと頼みたい事が有る」

「……………」

その言葉が発された瞬間、スリザリンドころかグリフィンドールの姿すらも周りから消えた。

ルビウス・ハグリッドが僕に近付いて何を話すのか興味を持ってい

たマルフォイもまた、嫌味を僕に残す事すら忘れて逃げ去って行った。何時も動きが遅いクラブとゴイルですら、入学して初めて見る位に俊敏な動きで姿を眩ました。危険な厄介事に巻き込まれては堪らないという切実さからの、彼等の本能的行動に違いなかった。

「……それで」

僕がゆつくりとルビウス・ハグリッドを見やれば、彼は何故だかピクリと震える。

「僕を気に入っている訳では無い貴方が、僕にわざわざ頼む理由は？」

何時ものように、ハリー・ポッター達に頼めば良いでしょう。彼等ならば貴方に親身に協力する筈ですが」

言葉と共に三人組を探す。

しかし、彼等は近場には見当たらず、既に校舎へと足早に向かつているのが見えた。

ただ——彼等の位置は、ルビウス・ハグリッドの言葉を聞いてから逃げたにしては距離が離れ過ぎており、何より彼と僕が会話するという異常事態を目にしながら頑なにこちらを振り返りすらしないという態度に強い違和感が有った。

そして、ルビウス・ハグリッドの顔に視線を戻せば、同じ物を見ている彼の表情には残念がる色は一切無い。困惑、というより親の背中を見送る子供のようだった。

「えー、教授が生徒に、ちいとばかり仕事を頼むのに理由が居るか？」

あー、それでだ。教授が好きに優秀な生徒を指名しても、別に問題は有りもせんだろう？」

「僕がそれを断りますと言ったら？」

「そりゃあ、困る……！　　というかお前さん、教授の頼みを断ると言うんかー！」

「許容される場合も普通に存在するでしょう。例えば僕に放課後スネイク教授の罰則が有った場合、遺憾ながら貴方の頼み事を断らざるを得ない訳ですが」

「ぐむう。う、うーん。そりゃあ確かに。いや、しかし……」

ほとほと参ったという様子で唸り始めた彼を前に、溜息を一つ吐

く。

……成程、事情は概ね理解した。

「——ただ、それが今日の放課後だというのであれば何ら問題有りませんよ。スネイプ教授の罰則が入っているという事も有りませんし。貴方の小屋に来れば良いのですか？」

呆れつつそう言えば、彼は一転して大きな顔に笑顔を浮かべた。

「そりゃあ、勿論だ！ ウン、良く言ってくれたぞ、ステイブーン！」

俺はお前さんが黙ってそう言ってくれるものと信じちよったぞ！」

「一応明確にしておきたいんですが、放課後直ぐで構わないんですよね？ もつとも、授業後に質問をするかも知れないので厳密に直後には向かえないと思いますが」

「ああ、それで構わんとも！ 寧ろその方が都合が良いな。急がん方が良い」

……相変わらず不用意極まりない言動しかしていないが、まあ、これはこれで彼の味なのだろう。良くも悪くも、彼は謀に向かな過ぎる。

ただ、一応牽制しておく必要は有った。

「あくまで今回だけです。流石にスクリユートの世話係で有るように見られたり、周りから押し付けられたりするというのは御免極まる」
「……そりゃあ、まあ。俺もお前さんとそう言う事態には余りなりたくないが」

無然とした表情で、しかし何処か不満気なのは、魔法生物愛が為せる故だろう。

スリザリンへの隔意よりも、自分のペットが悪く言われる事への反発が上なのは流石だ。

もつとも、これは形式的な物に過ぎない。スクリユートは単なる口実だというのは勘付いているし、生徒の危険を一応考えて自発的に授業の内容を変更した以上、彼は僕も同様にスクリユートを近付けるような真似はしないでだろう。

何より、彼がこうして僕に話し掛けてきたのは彼の都合故だろうが、僕としても、自然な形で聞きたい事を聞き出すには非常に都合が

良いと言えた。

「——リータ・スキーター」

「え？」

「貴方は彼女から、一体何を聞かれたんです？」

スクリユートの冬眠騒動の直後。

あの出鱈目記者が来たのは魔法生物飼育学履修者であれば誰でも知っているし、彼等の会話に聞き耳を立てていたのは三人組だけでは無い。授業後には既に彼等の会話の内容——先週の金曜日にはインタビューが行われる——というのは全員に広まっていたし、マルフォイなどは自ら情報売り込む用意が有る事を告げに行っていた。

そして、僕としてもそれなりの関心を抱かざるを得ない事象で有ったのは事実である。

「先週授業を訪れた彼女のインタビューを、貴方は受けたのでしょうか？　そこで、貴方は一体何を話した、いえ、どんな情報を引き出されたのです？」

ただ、彼にとつては唐突にも思えたのだろう。人の事情に立ち入った質問をした僕に対する叛意を抱かせるよりも、寧ろ彼を酷く困惑させたようだった。

「結果を知るには明後日のコラムを待つのが最も良いんでしょうが、僕には貴方に会う機会が有ると思えない以上、今敢えて聞いています。いえ、迂遠な言い回しは止めましょう。貴方はスクリユートの事だけを喋った訳では無いですよね？」

「それは……その」

ルビウス・ハグリッドは、明らかにたじろいだ。

勿論、僕は意図してこのような会話運びをしている。

この男は理詰めという言葉や自身の予想だにしていなかった突飛な話題を突き付けられるのに弱く、何より、曲がりなりにも自身の頼みを引き受けてくれた相手には強く出られない。

「あの様子からして、彼女は殆ど魔法生物には興味が無さそうだ。個人的な予想ですが、今までの彼女の記事の内容や傾向から考えれば、ハリー・ポッターについてはまず聞かれた事でしょう」

「というか、聞かれない筈も無い。」

「それで、アルバス・ダンブルドアや、アラスター・ムーディ教授、或いはバーテミス・クラウチ氏について聞かれましたか？ 後は今後の課題の事については？」

「え、ええとだな……。ウンにや、ダンブルドア達については……。聞かれなかったな。課題についても……。同じだ。というか、スクリユートがちよつとで、殆どはハリーについてだった」

「しどろもどろで有りながらも、聞きたい事にはきちんと答えてくれている。寧ろ、促した身で有りながら逆に心配になる位の口の軽さだった。」

「具体的にはどのような事を？」

「色々……。そう色々だ。しかし、俺は友人として、ハリーが秘密にした事を断じて喋つとらんぞ。だからあの女は、俺にハリーを悪く言わせようと余計に躍起になったし」

「成程、つまり下らないゴシップ記事のネタを貴方から得ようとしただけですか」

「俺はそう思つちよる。その筈だ……」

微妙に自信無さげなのは、賢者の石が校内に隠されている事を三人組に漏らした時のように、重要な情報を意図せず漏らした可能性を自分でも排除し切れないからだろう。

そして僕もその懸念は多少抱かないでもないが……。まあ、この分では有り得ないだろう。彼女がハリー・ポッターにのみ関心を抱いている事が知れた、いや改めて確認出来たというので十分である。貴重とまでは行かないが、情報源は多数有った方が良い。

だが、流石のルビウス・ハグリッドも、漸く表情を厳しい物へと変えた。

「……。けど、何故お前さんがそんな事を気にするんだ」

顔に比して小さな黒色の瞳からは、僕に対する警戒は勿論だが、そ

れ以上にリータ・スキーターに対する強い警戒心が見て取れる。あの三人組が思っている以上に、彼は——少なくとも友人の部分は——身構えてインタビューに臨んだのかもしれない。

「あれは大した女とも思えんぞ。嘘と誇張ばかりの、下らん記事を書くしか能がない奴だ。よりにもよってお前さんが着目する価値が有ると思えん」

「まあ、それは僕も概ね同意する所では有りますが」

彼女の記事は下世話過ぎるし、内容も非常に質が悪い。

全てを嘘八百で構成するような真似をせず、しれつと真実を混ぜ込むのを忘れないあたりは特に酷い。彼女は類稀な法螺吹と扇動者の才能を持ち合わせていると言って良く、論ずるまでも無く新聞記者としては最低最悪の人種だった。

ただ、僕は彼女のみに対して眼を向けている訳では無かった。

「貴方は、いえ、貴方達は物事を単純に考え過ぎる。しかし、世界は決して単純では無い。世の中は多くの人間の思惑と行動が絡み合っていて動いている。アルバス・ダンブルドアや闇の帝王ですら、その内の一つ——まあ巨大で代えの効かな過ぎる代物ですが——でしかない。無視は出来ずとも、全てが彼等によって動かされているとは限らない」

寧ろ、僕にとってはそれこそが恐怖である。

闇の帝王の復活が現実味を帯び、その後の展開に考えを巡らせざるを得ない僕にとっては。

ただそれは、今回とはまた別の話だ。

「そもそも貴方は疑問に思わないのですか？ 去年あれだけヒツポグリフ如きで騒いだにも拘わらず、今年のスリザリンはスクリュートに対して何ら騒がない事を」

「……………」

「スクリュートが明白に違法だとは言いません。そうであるならば、流石にルシウス・マルフォイ氏も動くでしょうし、リータ・スキーターも明後日^{水曜}まで待つこと無く、今日にでもさっさとスクリュートの記事を出しているでしょう。アルバス・ダンブルドアを叩ける材料なら何

でも良いですし、少しでも調べれば簡単に実験的飼育令に行き着く訳ですから」

ニュートン・スキヤマンダーの主導によって成立した1965年の法律によって、魔法生物の新種を創る事は大きく規制されている。腐ったハーポや東南アジアの魔法使い達がやったように、バジリスクやアクロマンチュラのような危険物を創る事は国内では許されない。そして創るのが禁止だからと言って輸入等ならば問題無いという事も無いだろう。

「逆に彼等が表立って動かない事は、スクリユートの取り扱いを十分合法と取る余地が存在する事を示していると言っている。合法とする理屈としては色々考え付きますが、まあどれでも構わないですし、興味も有りません」

とは言うものの、全くの合法であるだろうとは口には出さない。寧ろ真逆。本気で突こうとすれば、幾らでも違法の論理構成は出来るとも考えている。

だから、丁寧に各所に取材した上で、専門家の見解を踏まえる形で記事を構成するならば、それなりに重みの有る記事にはなるように思える。仮に特別な許可が下されていたとしても、その許可を下した理由や判断自体が妥当だったのかという形で如何様にも文句は付けられる。

ただ、リータ・スキーターがそのようなまどろっこしい真似を好む人間でないのは確実であり、一方、ルシウス・マルフォイ氏は——少なくともこの二年の振る舞いは——違う。

「御存知の通り、ルシウス・マルフォイ氏は一貫して、アルバス・ダンブルドアを校長の地位から追い落とす機会を伺い続けて来ましたが、そして彼は秘密の部屋の事件の解決を機に委員会を辞任させられましたが、未だ魔法省に大きな伝手を有しているのは去年の騒動が示す通りです」

そして、今年。

スクリユートが結果的に違法で無かろうが、アレを生徒に取り扱わせる危険は外部から文句が言われても仕方ない所だ。

薬草学でも人の首を絞めたり殴ったりする植物を取り扱う事は有るので多少の怪我に文句を言う親は早々居ない。だが、問題は今回スクリュートが誰も見た事があるような生物ではなく新種らしい点——つまり、誰も知らないような特殊な毒や魔法的損傷を与える手段を突然変異によつて獲得しているかもしれないという点なのだ。

火傷や切り傷、刺し傷と言った、直ぐ呪文で治療出来るような可愛げのある生き物であったというのは結果論に過ぎず、致命的な事故が起こる危険は有つたのだと主張する者に対して、杞憂や言いがかりだと断ずる事は出来ない。

仮にルビウス・ハグリッド以外の専門家が事前に確認していたとしても、偶々発現しなかった可能性は決して否定し得ないのだ。バジリスクの眼を直接見なければ石化に留まるというように、専門家でも知り得ない、或いは周知をしていない生態は存在しうる。魔法生物飼育学の世界にも、ゴルパロットの第三の法則と同様の定理は存在する筈だろう。

だというのに、校内のスクリュートは見逃され続けている。

「灰色を黒色にする真似を、ルシウス・マルフォイ氏は厭わない。しかしながら、今年、彼は何も動こうとしなかった。そして知つての通り、マルフォイを始め、スリザリンの生徒はスクリュートに対し不平不満は零せども、親に対して授業が不当だと訴えた素振りが無い。前回の立て籠もりを別とすれば、大人しく授業を受け続けてきた」

親や生徒として在るべき姿と言えばそれまでだ。

しかし、そうでないのが、従順とは程遠いのが本来のスリザリンな筈である。

「そして、表立って動いているのはリータ・スキーター、大衆が頭から記事を信じるとも思えないゴシップ記者だけです」

溜息を吐かざるを得ないのは、良くも悪くも彼女が外れだったからだ。ギルデロイ・ロックハートが有していたような牙すら、あの記者からは感じられなかった。

「二応、彼女が裏でスリザリンと繋がっている可能性も考えましたが、貴方の言葉からすればそうではないらしい。実際僕の見た所では、彼

女は闇の陣営と繋がる程大胆な人間でもない」

「……お前さんは随分と自信を持って言うな」

「実際に会って確かめましたので」

彼女が『取材』する際にマルフォイに無理を言っただけで立ち会ったが、その時に鎌をかけた彼女の反応は——闇の帝王に心底怯えていた——正直言っただけで失望を齎すものだった。あれがギルデロイ・ロックハート程の演技ならば大したものだが、恐らく違うだろう。

そもそも、ルビウス・ハグリッドからハリー・ポッターの悪評を聞くこととする事自体が可笑しな話だ。それを得たいならば、我らが寮監殿の下に行けば良い。匿名さえ守れば間違はなく嬉々として、これまでの三年間に有った事実を詳細に教えてくれる。

それをしないという事は、彼女は元死喰い人には望んで近付きたくないと考えているという事を意味している。

一応同様の『疑惑』が有るルシウス・マルフォイ氏との繋がりを有しているのは、彼が魔法省の権力者であるからか。もしかしたら、彼は彼女の弱みを何か握っているのかもしれない。ただ、この辺りは勝手な推測に留まりはするのだが。

「要するに、彼女は貴方達と同じ側に居ようとする事を辞めてはいない。職業倫理は別として、彼女の性根はスリザリン程には腐ってませんよ」

「……あの女が腐っていないだと？ それは可笑しな言い分じゃねえか？ ダンブルドアが校内に入る事を禁じた上に、『時代遅れの遺物』とか呼ぶ酷い記事を書いちよつたんだぞ？」

「その評価の是非はさておき、彼女は不法侵入やプライバシー違反が精々で、拷問や殺人に及べる器ではないという事です。そもそも前回の授業において、不法侵入だったか自体が疑わしい」

元より、アルバス・ダンブルドアの眼を掻い潜って立ち入ったとは更々思っていない。

去年、あの老人はシリウス・ブラックの侵入を許した。まさか同じ手段を使っているとも思えないが、それにしただけで警戒は強めている事だろう。

加えて彼と違い、リータ・スキーターは白昼堂々姿を現したのだ。彼女は誰かに報告されても構わないよう真つ当な道筋で入って来たと考えるのが普通であり、あの老人が彼女を監視下に置き続けたと考えるのが自然である。

ダンブルドアは、ホグワーツにおいてすら絶対的な権力者では無い事に甘んじているのは、ほんの二年前、あの老人が委員会により追放されかけた事からも証明されている。まして、この三大魔法学校対抗試合という魔法省が深く関わる催し事が校内で行われる現状では、外部の記者の立ち入りを認めるよう働き掛ける事自体は非常識とまでは言えない。

そして、低俗な記者一人を校内に立ち入らせる程度で有れば、あの老人が強固に拒絶する筈も無い。何せそれはアルバス・ダンブルドアという強大な魔法使いにとっては大事の前の小事に過ぎないからだ。「ともあれ、僕の印象、貴方の話、何よりアルバス・ダンブルドアが明らかに見逃している事から見ても、あの女は本件に無関係の公算が高いでしょう。闇の陣営は彼女に接触する意義を見出せないし、接触しなくても都合良く動いてくれている」

それでも尚、良い役者であるならば僕にはどうしようもないが——ただ、あの怪物じみた老人の視点は、間違いなくそれを超えた場所に存在する。

「つまり、スリザリンは何も表で動きを見せていないんですよ」

闇の陣営は、ワールドカップの騒ぎが嘘だったかのように、沈黙を守っている。

「例年と違い、クリスマスに帰る生徒というのも極少数だ。それは今年ユール・ボールが開催されるというのも有るのでしようが、それにしたって、飽きる程毎年社交会をやっている彼等が逆に興味を示さなくても不思議では無い。いえ、寧ろユール・ボール後に、更に自宅でのパーティーへの招待を企画して然るべきだ」

豊富な財力と人脈。

多くが朽ち落ちたとは言え、全てが無くなった訳でも無い。

スリザリンの親達は依然としてそれを提供出来るし、子供も利用す

るのを躊躇わない。家の力は自身の力であり、その資源を都合良く利用出来てこそその貴族である。

「しかし、彼等は余りに統率の取れた形で殆どが参加を表明し、それ以上の行動を見せない。まるで親元に帰るべきでないように。」

——であれば、一体彼等は何をやっているのでしょうか？」

ルシウス・マルフォイ氏を始め、死喰い人の残党とも呼ばれる闇の魔法使い達の動きは、全く表に出て来ない。であれば、彼等の人的資源は、果たして何処に向けられているのだろうか。

「闇の帝王が全てを仕組み、彼のみがハリー・ポッターを害する事を狙っているというのであれば物事は単純だ。しかし、現実はそのように無いでしょう。闇の帝王を失墜させた『生き残った男の子』は、各所から恨まれている。彼を痛い目に遭わせる事が出来れば、自分がどうなっても良いという輩も居るでしょう」

悪党よりも小悪党の方が余程厄介では無いかと父は言った。

それはこの三年間を見ても解るだろう。

アルバス・ダンブルドアはクイリナス・クイレル教授——グリッソツツ銀行に侵入した挙句逃げおおせる程の闇の魔法使い——を管理出来る形の危険と評したし、それを疑う材料は無い。加えて、教授には闇の帝王が憑り付いており、ハリー・ポッターが『生き残った男の子』となった先例からすれば、同様の事象が起こるのをアルバス・ダンブルドアが期待するのには相応の確信が有ったのだろうし、恐らくそうなのだろう。

しかし、ギルデロイ・ロックハート。そしてピーター・ペテイングリユー。

アルバス・ダンブルドアが一貫して小物扱いし続けたであろう二人に関しては、何処をどう検討しても、ハリー・ポッターへの危害を完全に防げると確信していたとは思えない。

前者は最も偉大な魔法使い以外が気付かない程の技量でハリー・ポッターの記憶を吹き飛ばす寸前まで行き、後者はロナルド・ウィーズリーの傍で彼を何時でも殺せる位置に居た。

両者の何れもハリー・ポッター自身に直接危害を加える可能性は高

くなかったとは言え、決して低くもなかっただろう。そして、彼等に不運が味方すれば、現在のそのような状況がそもそも存在し得なかったのは明らかだ。

ギルデロイ・ロックハートの場合、仮に命まで取られず全ての記憶を喪う事も無かったとしても、ハリー・ポッターは記憶修正後の脱力を乗り越えた上で、闇の帝王及びバジリスクと立ち向かわねばならなかった。

ピーター・ペティグリユーの場合、シリウス・ブラックが脱獄する事件が無く、彼の正体が判明する前に闇の帝王が復活する噂が聞こえてきたのであれば、彼は「生き残った男の子」を殺す事に躊躇いは無かっただろう。

つまり、ハリー・ポッターが現在も五体満足で有り続けているのは、ただ偏に彼に確かな実力と生存能力が有り、また幸運が味方にしたからである。

逆に言えば、彼は辛うじて生き残ってきたに過ぎない。

「そしてまた、世の中全てが劇的な物事によって動く訳では無いでしょう。溺死や落石、不意の流れ矢等々によつて、不運で平凡な死に様を迎えた英雄は数知れない。それを差し引いても、世の中は悲劇的な事故と陳腐な死に溢れている」

「生き残った男の子」ハリー・ポッターは偉大な闇の帝王の失墜を齎し、しかし間抜けにも足を滑らせて頭を打った挙句死にました、などという事も有り得るのだ。そんな展開を小説でやれば非難轟轟だが、しかし、それが有り得るのが現実である。

「……ホグワーツは生徒を強く護つちよる。そしてハリーに対しては、更にダンブルドアが手厚く様々な魔法を掛けとるんだ。この校内に居る限り、例のあの人だろうが、死喰い人共だろうが、ハリーには容易く手を出せん」

「けれども、それらと貴方の警戒は両立し得るでしょうか?」

「……………」

むつつりと黙り込むルビウス・ハグリッドに、僕は冷ややかに笑った。

「つまり、何が言いたいかといえば――」

この一言に尽きる。

「――油断大敵。そう思いませんか？」

つくづく至言であり、金言である。

「……お前さんは」

巖のように険しい表情で、ルビウス・ハグリッドは絞り出すように言う。

「何で俺にそんな事を言う？ 俺は特段お前に親切にしたつもりも無いし、それで俺を罠に掛ける事が出来るとも思えん。だというのに、お前さんは平気で助言めいた事をする。俺の頭が良くない事を差し引いても、全くもって意味が解らん」

「貴方は不思議そうに言いますが、僕にとつては理屈が通った話なんですけどね。これは打算と利益の上での行動ですよ」

アルバス・ダンブルドアも彼に警戒は促しているだろう。

しかし、あの老人に絶対の信頼を置いている彼が何処まで真剣に受け止めているかは疑わしく、だからこそ、彼にとつて奇妙なスリザリオン生が警告する価値が有る。何を言うかでは無く、誰が言うかが重要である場合は確かに存在するのだ。

「僕達は二人でポーカーをやっているんじゃないんです。手札は多いに越した事は無く、それが強い札ならば更に申し分無く、その上、それを持っているのが最悪自分で無くとも何ら問題とならないでしょう」

目的が最後に達成されるのなら、それを為すのが己か否かは些細な事である。

「アルバス・ダンブルドアを信頼するのは結構ですが、あの老人は今年ハリー・ポッターの参加をむざむざと許したんです。つまりはあの老人を上回った闇の魔法使いが、最低一人は校内か周辺に潜んでいる。その上、スリザリンは不気味な動きをしていると来ています。第一の課題は無事に終わりましたが決して安心出来る状況では無い。寧ろ逆に不穏ですよ」

「……だから、お前さんは俺に気を付けろと言うんか。それも、これま

で以上に」

「ええ。既に貴方は授業中、スクリユートにハリー・ポッターを殺させる気は無くなったようですね。ですから、これは本心からの言葉ですよ」

去年の僕が彼女達の友情を破壊する事に失敗し、また第一の課題で彼女達が友情を再確認した以上、ハリー・ポッターが安全である事とハーマイオニーが安全である事は現状殆ど意味が等しくなっている。

加えて彼女がグリフィンドールの復讐心に駆られない為にも、ハリー・ポッターの命が保全されている事は、僕にとって左程悪い物では無い。別に彼が死んでも構わないものの、死なないに越した事は無いのだ。

——そしてまあ。

彼の Hogwarts 流の過激で刺激的な授業は、意外と嫌いでは無いのだ。

ヒップグリフにしるスクリユートにしる、真つ当な魔法生物飼育学教師で有れば、そのような授業に——魔法界における命の軽さというのをまざまざと思い出させてくれる貴重な課題に取り組む事など、決して有り得はしなかっただろうから。

他愛も取り留めもない話

いよいよクリスマスも近付いたせいも有るのだろう。

段々と無視出来ない位に煩くなってきたドラコ・マルフォイを適当にやり過ごした放課後。

敢えて少し時間を潰した後で約束通りにルビウス・ハグリッドの小屋へと向かえば、既に彼は小屋の外に出ており、そして僕に仕草で小屋の方向を促して森の中へと去って行った。

説明も何も無くあっさりとしているのは、僕が当然に気付いている事を前提とする信頼か、或いはあのような示唆を為した僕への苦手意識か。僕としても既にルビウス・ハグリッドに用は無かったし、話が早く進むのは都合が良かった。

半巨人用に頑丈に作られている小屋の扉を軽くノックすれば、入ってくれとの声。

その言葉に従って中へと入れれば、まず暖かな空気が僕を歓迎してくれる。それは、煌々と輝く暖炉からのみでは無く、小屋の持ち主の手柄による物でも有るのだろう。野生の動物達が残していったであろう独特の臭気が鼻を擽るが、不快というまでも無いのは友人達の為に綺麗に清掃を欠かしていないからか。

そんな空間の中央で、ハリー・ポッターとロナルド・ウィーズリーが机の前に掛けて僕を待っていた。

彼等の前には、淹れたばかりであろう紅茶のカップが三個と、岩石のようなケーキらしき物体が乗った三皿が有る。……四個と四皿では無く。

「この様子ではスクリュートの世話への助力が要するという訳でも無さそうだ」

軽く部屋を見渡した後の僕の第一声に、ハリー・ポッターは破顔した。

「そう言う冗談は要らないよ。と言っても、君も解つて来てた筈だろう？ ハグリッドも何か君は気付いていたらしい事を言っていたし」

「ああ。で無ければ、最初からここに来ていない」

ルビウス・ハグリッドの芝居は下手だった。

最初から隠し事をしているのが明らかかな位に挙動不審であったし、彼がスクリユートの世話を本気で頼むつもりならば、やはり三人組を差し置いて僕に声を掛ける道理など全くなく、先の授業で解る通り、既に彼はスクリユートの前に生徒を出す気が無かった。

彼がスクリユートの世話にかこつけて是非とも僕を殺したいというのなら別の話だったが、そこまで恨みを買った心当たりもまた存在し無かった。

故にスクリユートの世話云々は単なる僕を誘き出す口実であり、それを必要とする人間は非常に限られる。授業後の諸々の状況も併せて考えれば、答えなど一つしかない。

ただ、ここには僕が予想していた一人が欠けていた。

「……ハーマイオニーは居ないのか」

紅茶も、菓子も三人分。

椅子は部屋の中に四脚有るものの、部屋の隅に追い遣られたその巨大で頑丈そうな一脚が誰の物かは解り切っている。そして、ハリー・ポッターとロナルド・ウィーズリーは隣合うように座り、机を挟んだ反対側には彼等に向かい合うように空白の椅子が――来客である僕へ割り当てられているのである。椅子がポツンと存在している。

あの魅力的な栗毛の少女の姿は、小屋の中に姿は見えなかった。

「あー、彼女には席を外して貰ってるんだ。ちょっと男同士で話をしたいと思ってるね」

非常に言い辛そうで、何か含んだような台詞をハリー・ポッターは宣う。

彼は視線を意識して逸らしているようであり、決して僕の眼を見ようとしなかった。

何か後ろ暗い事が有ると言っているような物で、ただ、言葉からは深刻さが全く伺われないというのが微妙に不思議だった。

「ええと、ほら、君とハーマイオニーは今微妙な関係みたいだし、彼女も君と顔を合わせ辛いようだったしさ。君としても、今は彼女が居ない方が都合が良いだろう？」

「……まあ、それは否定し得ないが」

確かに彼女が居なくて安堵する部分が無かった訳では無い。

座ってくれ、と手で示したハリー・ポッターに大人しく従い、椅子へと腰掛ける。

僕の左手の方に位置するロナルド・ウィーズリーは、同席しても話す気は無いとの意思表示だろう。僕に視線を一切向けなかったし、僕も彼から暖かい歓迎を期待していない。というより、ハリー・ポッターの対応が異質では有るのだろう。

今のスリザリンとグリフィンドールの間柄において、四年目の同級生に対する最低限の好意を示す事が出来る人間がどれ程貴重であるのかは言うまでもないのだから。

「……ところで、招かれた身で聞くのも何だが、これはケーキ、というか食べ物で良いのか？　こう言ってはあれだが、人間の食べ物に思えないが」

「えーと、それはハグリッド御手製のロツクケーキだよ。歯が砕けそうになる位に固いけど、紅茶と一緒になら何とか食べられるし、味の方は保証するよ」

「……そうか」

何故御茶の時間にそんな重労働をしなくてはならないのか甚だ疑問だが、一応家主であるルビウス・ハグリッドの好意では有るのだろう。ただ、最初に手を付けるのは酷く躊躇われる。

故に取り敢えず問題無さそうな紅茶に手を伸ばそうとして、思わず動きを止めた。

「？　どうかした？」

「……いや、君が気にする事では無い。一つの考えがふと頭に過ぎっただけだ」

怪訝、というより何故か焦燥に近い表情を浮かべた彼に、ひらひらと手を振る。

「言ってみれば、僕が君に茶に招かれている今のこの状況を見て、アラスター・ムーディ教授ならば一体どう反応するだろうかと思っただけだ」

「えーと、多分怒る、とか？」

「烈火の如くが抜けているがな。教授は他人から出される飲み物には真実薬や毒薬が含まれていても可笑しくないと考える人間だ。ただ、教授のそれは実体験に基づく物だろうが」

そして、実際に手痛い指導を直接受けたものだ。

そう思いつつも、僕は杖を取り出す事無くティーカップを手に取り、口へと近付ける。

彼が他人の飲み物に危険物を仕込むような人間では無いというのは、これまでのホグワーツ生活で良く理解している。礼儀作法からは外れるが、自身の立ち位置を示すには解りやすく、何より彼等は他人にそれを期待する程に行儀が良い人間ではない。

「それで。わざわざ図書館で僕を捕まえるのでは無く、ルビウス・ハグリッドを巻き込んでまでここに呼び寄せたんだ。他人には決して話は聞かれたくないというような、それ相応の理由が存在するんだろう？」

彼等としてはかなり回りくどい手段を使ったのだ。

だからこそ、大人しく呼び出されたのであるが、しかしながら、僕の言葉にハリー・ポッターは困ったように眉根を寄せた。

「それはまあ確かに、最近余り図書館で君を見かけないと言っても、あそこで待てばいずれ君が捕まるのは解り切っているけどさ。でも、今の状況で僕達が図書館の中で内緒話をするというのは余りにも無茶じゃないかな」

「今年の君には更に新しく肩書が加わった訳だからな。四人目の真の代表選手、そしてドラゴンを出し抜いてみせる程の魔法戦士か。何れも立派な物だ」

「君の方こそ。代表選手全員の資格を否定した挙句、マルフォイを平気で馬鹿にするし、その上あの温厚なセドリックと揉めるなんて普通の神経じゃ無理だよ」

「……つまり、静かに学生生活を送るには御互い有名人過ぎるという訳だ」

「それを君が認めてくれて嬉しいよ。その辛さを理解してくれると更

に申し分ないかな」

髪をくしやりと軽く握りながら笑う。『生き残った男の子』に溜息を一つ。

一応己が一年の学期末よりも悪目立ちしている事は自覚している。仕方ないとは言え、意図した訳では無い事で騒がれるのは面倒だった。

もつとも、この『生き残った男の子』は慣れっこなのだろう。闇の帝王の失墜からして、彼の意思の及ぶ所では無かったのだから。

「それに——まさか君がハーマイオニーと喧嘩をするとは思わなかったしね」

ハリー・ポッターはそう言いながら、気まずげにチラリと部屋の隅へと視線を向ける。

「……君達とて喧嘩はするだろう？ 去年も、そして今年だって」
具体的には言わなかったが、その張本人はギクリと身体を強張らせた。

彼が僕に視線を向けようとしなくとも、話を聞いていない訳では無いようだった。

「そりゃあ、ロンに限った事じゃなく、僕だってハーマイオニーと喧嘩したりするけど。でも、よりにもよって君がそういう事するって発想自体がなかったからさ」

「……そんなにも、僕は彼女と喧嘩しそうにないように見えるだろうか」

「うん。正直、セドリックと軽く揉めるような真似をした事すら意外だったし」

そう素直に真正面から認められても困るのだが。

「ほら、君って何時も飄々……じゃないな。超然？ としているからさ。他人とぶつかる程の熱意を見せる姿が僕には想像出来なかったし。そんなのは時間の無駄とか言いそう」

「一体君は僕をどんな冷血人間だと思っっているんだ。僕にも感情や好悪は有る」

ハリー・ポッターにどう思われようが左程問題は無いのだが、そこ

まで悪しざまに言われると流石に多少気になってしまふのは人の性か。

「それで、何で喧嘩したんだい？ ハーマイオニーは怒ってた、というか色々やりきれない感じで不機嫌だったし。彼女が刺々しいのは珍しくないけど、あそこまで怒りが長引くとなると、それこそ結構な理由でないと有り得ないと思うんだけど」

「僕達の会話の内容は彼女に聞かなかつたのか？ 寧ろ当然に知っていると思つたが」

「S. P. E. W. の事は聞いた。ハグリッドと同じで、君とハーマイオニーの意見が全く合わなかつたとか。そしてハグリッドと違つて、君は真正面から彼女を論破しようとした事も」

ハリー・ポッターはそれ以上言わなかつたが、その言葉には賞賛の響きが有つた。どうやら彼は、声高に革命を唱えた彼女に随分辟易していたらしい。

今も彼女はS. P. E. W. を続けているのか、或いは続けているのか。それを僕は敢えて問わなかつた。彼に聞くべき事では無かつたし、聞くのが少し怖い部分でも有つたからだ。

「しかし、S. P. E. W. の事は？」

「うん。もう一個、セドリックについて何か君が言つたというのは聞いてるけど、余り詳しくは話してくれなかつた。何か君の名誉に関わる部分だからって」

「……本当に律儀な事だ。今更僕に護るべき名誉が有る訳でもなく、まして親友に隠し事をするまでの物では無いだろうに」

それもまあ、ハーマイオニー・グレンジャーという女性の良い部分でも有るのだろう。

或いは、去年の延長として、彼等三人が一、二年の時にそうであつたのと違い、既に一心同体で居られなくなつた事を改めて示す物であるのかも知れないが。

「ただ、正直な所、僕にとってはS. P. E. W.の方が譲れない問題だがな。別に僕は彼女に改めるとまでは言わないが、あのまま進む彼女を僕は個人的に見たくはない」

僕を救った彼女ですら美しくないのだという可能性を、認識して
たくない。

「へえ……。でも、セドリックに関しても結構な事を言ったんだろう
？」

「それはまあ、その通りだが」

ハーマイオニーに依然として残る「誤解」の話か。

確かに相応の事を、しかも一方的な偏見の下に放言はしたのだが。
「ただ、正直大した事ではないぞ？ S. P. E. W. の方を君が
知っているのなら猶更だ。しかもハーマイオニーが気分を害した
ように、君が聞いて愉快になれる話でも無い」

「？ どういう事？」

僕は紅茶で軽く口を潤した後、彼の疑問にはつきりと回答を口にし
た。

「簡潔に述べるなら、僕はセドリック・デイゴリーの悪口を言った。た
だそれだけだ」

僕にとつては隠すべき事では無く、しかも何らかの意図を持って言
葉にした訳では無い。だが、ハリー・ポッターにも容易に受け容れら
れはしないだろうという予感是有った。

何故なら仮にセドリック・デイゴリーに隔意を抱いているのであれ
ば、半ば黙認という形で有っても、彼が先のグリフィンドール・ハッ
フルパフ間の戦争を止める方向での対応を取る事は低いだろうと考
えられたからだ。

仮に二寮の大分断は流石に嫌だという考えで有ったとしても、セド
リック・デイゴリーに対する意趣返しの方法は存在する。例えば、代
表選手になって三週間近く誹謗中傷され続けたのだから、それと同じ
だけ放って置いてくれと求める事は、嫌味な対応で有る事は否定出来
なくても、大きく非難されるものではないだろう。

しかしハリー・ポッターはその類の行為を選択する事は無く、それ
故に今回、ハーマイオニーと同じくセドリック・デイゴリーを擁護す
る言葉を聞く羽目になるだろうと思って居たのだが、彼の反応は僕の
予想の斜め上を言った。

「——ああ、君もそう思うんだね」

碧の瞳に満ちるのは、昏く濁った嫉妬と敵愾の情。

「あいつは決して皆が言っているような好青年じゃない。
セドリックは、役にも立たない、かわいいだけの、
頭は鳥の脳みそくらいしかないやつだ」

……嗚呼、成程。

全くもって素晴らしく酷い言い草であり、その粘つく陰鬱な感情を見て思った。

ハーマイオニーは正しい。僕がハリー・ポッターを嫌悪していると口では言いながらも、その何処かで彼を跳ね除けきれないのは、彼が有するこのスリザリンの気質にこそ存在する。

ただ——少々、度が過ぎてている。

言ってみれば、僕以上に感情的過ぎる。

「ロナルド・ウィーズリー。彼とセドリック・デイゴリーの間に何か有ったのか」

まさか自分の方に話題が飛んでくると思っては居なかったのだろう。

詰まらなそうにぼんやりと僕達の会話を眺めつつ紅茶を啜っていたロナルド・ウィーズリーは、思わぬ飛び火に驚愕で眼を見開いた後、咽ながら慌てて口を開いた。

「ゴホッゴホッ。い、いや、別段君の気にする事じゃ無いさ。そうそう、別にハリーがあいつに先約された件で勝手に恨んでるとか——」

「ロン」

「……ごめん、ハリー。僕もう何も言わない」

ハリー・ポッターの強い語気には、隠し切れない怒りが滲んでいた。もつとも、決定的な失言まで行かなかったのは流石に親友というベキか。

ただ何にせよ、彼にはセドリック・デイゴリーを恨むようになった理由が有るらしい。もう少し詮索すればその中身まで掴めそうな気がしないでも無いが——それをしてしまうと、彼を本気で怒らせるような予感も有った。

しかし、その危うさはハリー・ポッター自身が誰よりも自覚していたのだろう。

気を落ち着かせる為か、自身の紅茶をがぶりと一飲みした後で、彼は改めて言葉を続けた。

「まあ、セドリツクの事は御互いどうでも良いだろう？ 別に本題じゃないんだし、君だってわざわざ気分が悪くなるような話を続けたくもないだろうし」

「そうだな。第一の課題があのような形で終わった以上、そしてその後の顛末があのように収拾が付けられてしまった以上、僕にとってはもう済んだ事だ」

彼は既に僕がどうこう出来る地位の人間では無い。

「それでも君にとって何か意味が有ると思うならば改めてハーマイオニーに聞くと良い。僕から許可が出たというなら拒みもしない筈だ」
「暇が有ったらそうするよ。ただ、君がセドリツクと揉めた理由も何となく解った気がする以上、余りそうする必要を感じないけどね」

多少誤魔化すようにそう言った後、ふと彼は何かを思いついたような表情を浮かべた。

「第一の課題と言えばさ。君も当然見ていたんだらう？」

「……流石に今年アレを校内で見えていない人間の方が珍しいと思うが。それがどうしたか？」

その後のバーテミス・クラウチ氏の印象が強過ぎるが、忘れた訳では無い。

「いや、見てたんならさ、君の感想を聞きたいかなって。何せ君は代表選手を残らず資格が無いと事前に啖呵を切った訳だしさ。その上で直接君の反応を聞く勇気を持っている人間が他に居そうもないし、良い機会だから聞いてみようかと思って」

「……何が良い機会か解りかねるが、四人全員が三大魔法学校対抗試合の代表選手たる資質を有していた。第一の課題の結果がそれを証明した。僕にとってそれ以上でも以下でも無いが」

率直な感想を言ったのだが、ハリー・ポッターにとっては期待外れの物だったらしい。彼は明確に抗議の意思を示すように口を尖らせ

てみせた。

「そういう事じゃないんだよ。ほら、審査員が点数を付けてただろ？」

ああいうのだよ」

「……成程。つまり、順位を付けろと」

「君の事だから色々と“分析”はしているんだらう？　僕はそれを聞きたいんだ」

純粋な好奇心以外が見えない言葉に重い息を吐く。

確かにしていない訳では無いが、それでも誰かに聞かせようと思っていた訳でも無い。ハーマイオニーとの距離が空いた今であれば猶更の話だ。

「……別に聞いても愉快にはならないと思うが？　既に君は理解していると思うが、たとえ君の前で有ったとしても、僕は言葉を濁すような性格ではない」

「それは僕が一位に相応しくないとやっているような物だけだね」

チクリと、微妙に意地が悪い表情でハリー・ポッターは皮肉を飛ばす。

「でも、別にそれでも良いんだ。ロンやハーマイオニーは僕が一番だって言ってくれたし、カルカロフも僕に対しては四点しか付けなかっただろう？　だから、純粋な興味だよ」

「……イゴール・カルカロフと同列に語られるのは釈然としないがな。彼は、ビクトール・クラムへの贔負が過ぎる」

とはいえ一方で、アルバス・ダンブルドアは多少アレを学ぶべきだとも思うのだが。

「それに、そもそも皆して自分の好みを好き勝手言ってただろ？　杖を振りかぶったクラムの真面目な顔がカッコよかったとか、間一髪で鉤爪を避けてみせたセドリツクの素早い動きに見惚れたとか、スカートに火が着いた時のフラーの慌てぶりがちょっと可愛かったとか」

「……ミーハーな意見ばかり挙げたのは恣意的な物を感じるが、一時期誰が自分の一推しかを争うのが流行っていたのは知っている。随分牧歌的な戦争で結構な事では有ったが」

グリフィンドール・ハッフルパフ間の戦争前夜、或いはグリフィン

ドール・スリザリン間の恒常的な戦争状態とは比較にならない平和さだった。

結局の所、誰もが本気で一位を決めたいと思っていた訳では無く、代表選手を話の肴として盛り上がりたいただけだったのだろう。グリフィン・ドールがハツフルパフを、或いはホグワーツがダームストラングやボーバトンを純粋に褒め称える構図が平気で存在していた。

「そうそう。だから、そこに君の偏見が一つ加わっても大した事では無いだろ？ 別に真剣に批評しろって言っている訳じゃないんだからさ」

「ならば、回答を拒否したい所ではあるんだが……」

改めて溜息を吐いた後、座っていた姿勢を多少真面目な物に変える。

接した時間は長くないとは言え、付き合っただけ見ればハリー・ポッターとは四年目なのだ。断られただけで引き下がる気が有るのかどうか位は見当が付く。彼が強い関心を持っているのは明らかだったし——何が何でも拒絶する程の大した話でも無かった。

「まあ、自分が一位でなくとも構わないと君が言うならば答えるが、但し予め留意して欲しい。これはあくまで僕の個人的で、適当な見解だ。聞いた上で好きに否定してくれて良い。君が反感や別種の感想を抱くのも全くの自由だ」

僕の念押しに、ハリー・ポッターは頷く。

彼は相も変わらず僕を便利な知恵袋と考えているようだが、それでも興味を抱いているという分にはマシであり、何より僕としても彼と何でも無いような世間話をするよりは楽なのだ。

遠過ぎず、しかし近付き過ぎない。

その距離感として、現状は決して悪くない筈だった。

「そうだな……。まず、何から話すべきか」

ハリー・ポッターの指摘通り、僕が第一の課題をそれなりに真面目

に見ていたのは確かだ。

ただ、ドラコ・マルフォイは僕にそのような意見を聞くタイプでは無く、そしてまた第一の課題について熱心に語り合う友人などそもそも僕には居ない。当然ながら理路整然と他人に説明をする準備をしている訳でも無く、整理の為に多少の猶予が必要だった。

……しかしまあ、あの審査員達も点数を出すならコメントくらい付けても良いだろうに。

採点種目で必ずそれらが付される訳でも無いだろうが、エンターテインメントとして考えれば、間違いなく有った方が盛り上がるだろう。

特に国際交流を主眼とするならば話のネタは多い方が良いでしょうし、歴戦の魔法戦士や熟練の術者による言葉というのは、三校の生徒にとって貴重な教訓となるに違いなかった。ついでに言えば、イゴール・カルカロフのような不公平過ぎる採点も有る程度抑止を期待出来る。

逆にそれが存在しなかったからこそ生徒間で会話が盛り上がった面も有ったのだろうが、逆にそのような権威有る専門家の言葉が既に存在していたのであれば、ハリー・ポッターが僕に批評を求めるなどという奇妙な真似をしなかっただろうというのは確かだ。

もつとも、今更部外者が言っても詮無き事では有るのだが。

「まあ、解りやすい所から行くか。つまり君やビクトール・クラム。代表選手の中で、最も映えた試合をした人間達からだ」

一か月前の出来事である以上に別の理由で臆気になっている内容を何とか思い出しながら、ゆつくりと言葉を紡ぐ。

「君達の取った手段は全く別方向の物だったが、何れも見応えが有った。君は純粋な飛行技術で翻弄し、彼は真つ向からの戦闘技術で痛撃を与えた。二人とも自身の得意とする面を存分に発揮したと言えるし、その上他が容易に真似出来るものでもない」

手段としては両者とも単純な方だが、難易度がそれに比例する訳では無い。

「君の方法であれば、素人では箒ごと消し炭にされるのは解りきって

いる。ドラゴンから見ても如何に人間が的として小さく、機動力と小回りで優れているとは言え限度が有る。彼等には炎のブレスも有るからな。仮に君のファイアボルトを貸し出されたとしても、普通の人間は容易く狩られてしまふだろう」

僕であれば五秒も持たないだろう。

ドラゴンが飛んだ時点で、僕の死が確定する。

ただハリー・ポッターは微妙に不満気であり、しかしその理由は既に推察出来ていた。

「……嗚呼、解っている。ビクトール・クラムなら自分と同じ事が出来ると言いたいのだろうか？ けれども、僕としては逆も然りだと思うが？ 君も結膜炎の呪いを上手く使ってドラゴンを出し抜く事が出来る。倒す事は不可能でも、卵を盗むのは余裕だ。そう判断する位には、君が闇の魔術に対する防衛術の技量に優れ、かつ化物退治に慣れている事を知っている」

校内のみに限定しても、決闘クラブでの立ち回りや、リーマス・ルーピン教授からの評価において、ハリー・ポッターは平凡で無い事を証明し続けている。

そして彼が打倒したのは、トロール、バジリスク、吸魂鬼達に……嗚呼、闇の帝王もか。或る意味、自身の格上と戦う事に関しては代表選手の中で最も経験を有すると言っても良い。

「……前も思ったけど、君はグリフィン^僕ドルを褒める事を躊躇わないよね。マルフォイなら何とかして僕を扱き下ろすと思うけど」

「彼は何故か君が関わりと途端に愚かになるからな。そして、客観的に彼を観て来た身としては、彼の箒の腕前ではドラゴンを出し抜くのはやはり不可能だ」

如何に僕より上手かろうとも、ハリー・ポッターやビクトール・クラムの前では塵芥だ。

スニッチを同時、かつ等距離で発見した場合、ドラコ・マルフォイは彼等に絶対に勝ち得ない。そう確信する位には、彼等との間に残酷な才能の差が有る。

「クイディッチ選手は四寮に等しく居るだろう？ それでも、君と同

じ事が出来ると嘯いた人間が居たか？ 或いは、非公式の決闘クラブで腕を磨いた者もホグワーツ内に多く居るが、ビクトール・クラムと同じ事が自分にでも出来ると大見得を切った人間が居たか？ 居ないだろう。あれ程見事な試合結果が現実であり、全てであり、絶対だ」

内心そう思っていた人間が居たとしても、彼等の結果はその公言を許さなかった。

「君達は正しく、三大魔法学校対抗が夥しい死者を出しながら尚、三年もの間続いた理由というのを見せてくれた。成程、あのような見世物を定期的に見せてくれるのであれば、過去の魔法使い達が熱狂的になった気持ちも理解出来るものだ」

彼等は、三校の頂点を決める為の資格を与えられる者として相応しい。

炎のゴブレットから名前が出たとか形式的な物では無く、そう思わせるだけの実力と結果を全員の前で見せつけたからこそ、ハリー・ポッターはスリザリンを除く殆どの生徒——割を食ったボーバトンやダームストラングも含めて——から代表選手として受け入れられ、ビクトール・クラムも同様に己の地位を確固たる物とした。

「次に、セドリック・ディゴリー」

最もハツフルパフ的と言われる存在。

「彼のやり方は、呪文は使い方次第だという事に感心させられるものだった。寧ろ、どう使うかにこそ、術者の技量が最も表れる事を明らかにした試合というべきか」

「随分あっさりと褒めるんだね」

ハリー・ポッターは意外の表情を隠さなかった。

「君はさつき単に悪口を言ったとだけ述べたけど、ハーマイオニーが言葉を濁す位なんだから、多分僕の比にならない事を言ったと思うんだけど」

「だからそれは後で彼女に聞いてくれ。……まあ、個人的な好悪は別として、やはり評価は正當にせざるを得ないだろう。そもそも、彼は来年の首席候補だと聞いていた以上、数値上の能力や技量までは疑ってはいなかった」

そして噂以上の実力だったのは、あの結果を見れば明らかだろう。課題の三分の一が終わったに過ぎないとは言え、営巢中の雌ドラゴンを出し抜くという課題は、まぐれで成功出来るような物でも無い。「代表選手の中で最もドラゴンという種を理解していたのは恐らく彼だった。こう言つては何だが、君達二人は殆ど現場で対応を決めているように見えた。まあ、君達の何れの手段も臨機応変に対応する以外に無い代物だから仕方ない事でも有るが」

「……僕は試合を見てないから何とも言えないんだけどさ。犬を使つてドラゴンの気を逸らしたセドリックだって、臨機応変に対応する必要が有ったのは同じだと思ふけど」

「そうだな。ただ君は——いや君達は、ドラゴンの種類が変わつたとて全く同じ方法を取つただろう？ 要は、君達は自身の強みを押し付ける手法を選択した。君達にとってドラゴンはドラゴンでしかなかった。しかし、彼は相手の弱みを理解する手法だったと言うべきか」

「どちらが優れているという訳では無く、これは方法論の差異に過ぎない。」

「何で君がそんな事を断言出来るんだい？」

「簡単な話だ。ハリー・ポッター、君はセドリック・デイゴリーと同じ事を出来るか？」

微妙に不満そうな彼に、僕は淡々と疑問を突きつける。

「非生物を生物とする変身術は相応に高度だが、それは置いておこう。セドリック・デイゴリーはラブラドールを見事に操り、スウェーデン・シヨートー・スナウト種の気を逸らしてみせた。さて、君は自分がそれを為している姿を思い描く事が出来るか？」

「……………」

「出来ないだろうな。ビクトール・クラムに代わって結膜炎の呪いでドラゴンを怯ませる自分の姿を想像出来ても、そちらの方を想像する事は君には出来ない」

「……君も出来ないと思ふけど？」

「当然、強く肯定しよう」

それは絶対的な大前提では有る。

彼の技量は、僕より上に位置している。……遙かに、とは付けはしないが。

「しかし、彼の呪文の使い方が、スウエーデン・ショートー・スナウト種に有効で有ったとの事後的な評価は出来る。同時に、ハンガリー・ホーンテール種には通じなかつただろうという評価も。両者はドラゴンという大きな枠組みで括る事は出来るが、しかし両者は全く行動や習性を異にする別種であるというのを決して忘れてはならない」

ニユートン・スキヤマンダーが彼と同じハツフルパフで有るのは単なる偶然だろうが、しかしながら、セドリック・デイゴリーの頭に彼の存在が有った事は間違いない。魔法生物への向き合い方という面で、彼以上に学ぶべき人間というのは多くないからだ。

「彼は、ドラゴンでは無くスウエーデン・ショートー・スナウト種として、また単なるスウエーデン・ショートー・スナウト種では無く唯一無二の相手として、自身が向き合う存在を理解しようと努めた。種の本能、習性、個体の気質、好悪等々。可能な限り全てを」

それが出来ていなければ、セドリック・デイゴリーはラブラドール・レトリバー共々、早々に食われているか燃やされて消し炭になっている。

「スウエーデン・ショートー・スナウト種の鮮やかな蒼の炎にしろ、或いはその飛行能力にしろ、どう考えたって人間や犬の足よりも速い。そして人の骨を消し炭に出来る火力にしても、少なくとも魔法使いを屠つて来た牙や爪にしても、学生が杖一本で防げる程生温い物でも無い。そんな怪物に対し、犬如きを使って気を逸らし、隙を作ったんだぞ？　しかも、営巢中の、卵を護っている雌ドラゴンをだ。その言葉が、意味が軽いとでも思うか？」

ファイアボルトという逃走手段を持っていたハリー・ポッター、或いは結膜炎の呪いによる速攻で相手が本領を發揮する前に終わらせたビクトール・クラムと違うのだ。ドラゴンに隙を作らせる事が必要でも、挑発し過ぎるのは禁忌だった。

「故に、理解だ。ドラゴンに言う事を聞かせる事は、ドラゴン使いです

ら殆ど為し得ない。そして彼自体も言う事を聞かせるまでは行かなかったが、それでもある程度誘導してみせた。犬と、それ以上に己が身体を最大限に用いる事によって」

しかも事前の練習など出来る筈も無く、彼は殆どぶっつけ本番だったのだ。

「だから、君達と彼を僕は違う次元に置いた。幾つもの展開を綿密に想定し、対応を事前に用意して、尚且つ本番でそれを適宜に適切な形で選択しなければ彼と同じ事を出来はしない。そう判断するからこそ、呪文は使い方次第であり、僕は彼を見事だと評する訳だ」

四者四様の手段の内、最も成功確率が低く、危険が高かったのは彼の物だっただろう。

ただ、それでもあの男はやったのだ。やり遂げたのだ。同じ手段でドラゴンに挑めと言われてドラゴン使いですら難色を示すに違いないそれを、彼は成功させてみせたのだ。

その事実から眼を逸らして貶める事など、一体どうして出来ようか。

「二応難癖を付けるならば少しばかり地味だった事か。怪我を火傷程度に抑えた事は逆に賞賛されるべきと主張する者が居るだろうし、僕も同意見であるが、多少見栄えが劣るのは誰にも否定し得ないだろう。ただ、これは君達がひたすらに派手過ぎたとも言えるが」

殆ど同種の課題に挑む以上、比較対象は不可避である。

特にルード・バグマンは見栄え重視であり、その嗜好が点数に現れていた。彼はハリー・ポッターに満点を付けたし、卵を破壊したビクトール・クラムへの減点も最低限に済ませた。

そして、試合として点数で評価される以上、審査員に「受ける」方法で課題を達成する事が出来るかも実力の内だという事は可能だろう。

ハリー・ポッターは既に言葉を差し挟もうとせず、ただじつと僕を見詰めていた。

「——さて、ざっと三人を見たが、君達の間で点数に差を付けるのは難しい」

点数が十点しか無く、かつ項目で細分化されていないのも一因では有るが、どれも決して普通の生徒では為し得ないのが一番の理由である。

「君達三人の粗を探せばきりが無いが、同時にそれ以上に優れた点があるのは解り切った事だ。敢えて口にするが、僕には君達のやった事を再現出来そうにないというのも有るからな。故に、僕が点数を付けるとすれば、君達三人に同じ点数を付ける事だろう」

付ける点数が十点か九点かは些細な事だ。

順位や優劣を付ける事が出来ないという一点において、何ら変わりようがない。

「但し、だ」

誰もが知る通り、代表選手は四人居た。

そして、敢えて僕が彼女を省いてきたのは、単純な一つの理由に他ならない。

「誰が一番優れていたかを決めるに躊躇いは無い。仮に最終的に君達三人と同じ十点を彼女に付ける事になろうとも、その中ですら僕は序列を決める事が出来るだろう。僕はフラー・デラクールこそ、第一の課題で最も非凡である事を証明したと思う」

深く考えるまでも無く、あれこそが至上だった。

「審査員の点数を非難する訳では無い。彼等は彼等なりの基準で審査し、それは基本的に正当だ。僕よりも熟練の魔法使いによる判断である以上、それを疑う余地は無い。しかしながら——それでも、僕の採点基準趣味嗜好の下では、彼女が一番だった。彼女が用いた魅了呪文は美しく、あの一瞬故に、僕は彼女を第一の課題においての最優秀だと主張する」

僕の言葉を聞いて尚、お前はフラー・デラクールよりも劣ると聞かされて尚、ハリー・ポッターの表情に反感や嫉妬は浮かんでいなかった。

彼には納得と感心が有り、それ以上にフラー・デラクルの再評価、或いは純粋な賞賛が有るようだった。それは、ドラゴンという同種の困難な課題に立ち向かった代表選手同士が持ち得る、或る種の共感に

基づく尊重の念かもしれないなかった。

「それでえっと——ッ」

「……どうした？」

何かを言おうとして、しかし突然口を閉じたハリー・ポッターに問う。

けれども、彼は焦ったように首を大きく振った。あからさまに大袈裟な動作だった。

「べ、別に何でもないよ。君の意見はすっごく参考になった。うん、聞いて良かった」

「……理由を言っていないが良いのか」

「い、いや、僕が一番気になっていたのは順位だから。フラーが一位で、他が二位って事でしょ？ 同率三人なのは釈然としないけど、一応は問題無いかなって」

僕の間感では彼は大嘘を吐いているのだが、まあ、僕としては手間が省けるのは歓迎すべき事では有る。彼が十分だと主張するならば、わざわざそれを否定する義理は無い。

そして少なくとも、フラー自体に左程強い興味を抱いていないというのは事実のようでも有ったし、本題前の前座にしては少々入り込み過ぎた事を自覚したのかも知れない。

「——それで、話は完全に変わるんだけどさ」

微妙に真剣味の有る物に表情を引き締めて、しかし何処か意地の悪い光を浮かべつつ、ハリー・ポッターは言葉を紡いだ。

「君はこのクリスマス、どうするつもりなんだい？ 君が女の子と踊ってる姿なんて全く……いや、殆ど思いつかないんだけど、既にスリザリンで誰かを誘ったりした？」

それは確かにハーマイオニー・グレンジャーが居ては為し得ない類の話だった。

だが、ハリー・ポッターが僕に投げ掛ける話題としては、余りに不
適当な物でも有った。

「……君と僕とは、このような世間話をする間柄では無かった筈だが」
「別に良いじゃないか。グリフィンドールでの噂話では君の事なんて
全く伝わって来ないし。なら直接聞くしかないだろう?」

「聞かないという選択肢も絶対に有る筈だがな……」

愉快そうに笑みを浮かべる彼の表情は、何処からどう見てもスリザ
リンだった。

しかも質が悪いのが、これを聞く為に僕を呼びつけたのだと読み取
れてしまう事である。流石にこのような馬鹿げた浮かれ話が本題で
は無いだろうが、それでも彼が真実僕にぶつけたい話題として考えて
いた事がありありと伝わってきた。

「しかし、何処もかしこも浮かれ過ぎだろう。誰が誰と踊るとか、誰そ
れが未だに相手を決めかねているとか、どうでも良い話ばかりだ。そ
してまさかマルフォイと同じような事を君の口から聞く羽目になる
とは思ってもみなかった」

僕の言葉に、流石にハリー・ポッターは嫌悪に顔を歪める。

「ゲッ。あいつと同じ事を僕がしているの?」

「同じかは解らないが、似たような事はマルフォイからも言われた。
何時も通り、自身の交際歴や社交経験についての長々とした自慢と一
緒にな。もっとも彼は、僕が未だにパートナーを決めていないのであ
れば、自分が世話してやっても良いとも続けたのだが——」

「えっ!? じゃあ、マルフォイの紹介した女の子と行くって事!」

「そう言われて僕が行くと思うか?」

何故か思いの外強い驚愕を示したハリー・ポッターに、僕は溜息を
返す。

「殆ど話した事の無い相手とダンスに行つてどうする? 全く盛り上
りもしないのは目に見えているし、そもそも僕の相手をさせられる女
性が可哀想だろう。どう考えても罰ゲーム以外の何物でも無いから
な」

僕は針の筵で居る事に慣れているが、女性の方は違うだろう。そし

てそれを受け容れてくれるような奇跡が存在するとは最初から微塵も期待もしていない。

「しかしながら、今回のマルフォイは珍しく執拗だ。僕が簡単に考えを曲げない人間だというのは彼も解っているから一度拒絶すれば大概それで終わるのだが……何らかの企みが有るのだろう。彼は余程僕を笑い物にしたいと見える」

「あー」

「……何だ、その反応は」

「いや、だってマルフォイの苦勞に思いを馳せる日が来るとは思わなかったからさ」

先程までの嫌悪感は何処へやら、ハリー・ポッターは感慨深く言葉を漏らした。

彼がそのような感想を抱くのは異常な事だというのは解るのだが、先の話の何処にそれが有ったかいまいち理解しがたい。

「えーっと、じゃあユール・ボールはどうするの?」

「解り切っているだろう。家に戻るつもりだ」

僕の回答に、ハリー・ポッターは唾然とした表情を浮かべた。

……まさか彼は、僕が例年通り大人しく寮に残るとでも思ってたのだろうか。確かに三年以下だと寮に留まる人間は少なくないが、一応ユール・ボールに参加資格の有る人間なのに彼等と一緒に寮に残るのは余りに寂し過ぎるだろう。

「で、でもグリフィンドールの四年生以上は全員残るみたいだけど」

「別にユール・ボールは強制では無く、帰る事も禁じられてはいないだろう? 例年通り、スリザリンでも寮監がホグワーツに残る人間に名前を書くようリストを持ってきた訳だからな。まあ、三大魔法学校對抗試合の代表選手殿は違うみたいだが」

「うっ」

ハリー・ポッターが呻き声を上げる。

確証は無かったが、どうやら凶星だったらしい。彼が本来はユール・ボールを歓迎しない類の人種であるというのは、この四年で重々承知している。

「元々僕が休暇中に家に帰らないのは、ホグワーツだろうが家だろうがやる事は左程変わらないからに過ぎない。食事も出るからな。ただ——今年は多少思う所も有る。マルフォイを黙らせる為にも、心残りを済ませる良い切っ掛けと捉えるべきなのかも知れない」

「生き残った男の子」。

その事實は、この国の誰もが知っていた。

更に言えば、僕は部外者の中では最も彼を知っていた。ハーマイオニー・グレンジャー、そしてアルバス・ダンブルドア。その二者から、この三年間の偉業について良く聞き及んでいた。賢者の石を護り、秘密の部屋を暴き、百を超える吸魂鬼を祓った事を聞いた。

……嗚呼、それでも。

他人から聞くのでは無く、彼の雄姿を自身の眼で見たのは、初めてだったのだ。

だからこそ、思ってしまったのだ。

英雄と凡人を隔てる壁は一体何処に存在するのかと。

「ん？ 心残り？ わざわざ君には帰ってやる事が有るの？」

……思考を妨げるように挟まれた疑問の声が耳に届いた瞬間、自分の失態に気付いた。

どう考えて見ても、ハリー・ポッターの興味を惹くような言葉をわざわざ告げるような必要は無かった。ただ帰ると言えば済んだ話だった。そして、この英雄殿はその隙を敢えて見逃してくれるような、さっぱりとした性格や善良さを有していない事を知っている。

だが、ハリー・ポッターの反応は僕の警戒した代物とは少々異なつた。

「それって何？ 何としても済ませなきゃならない位に大事な事？」

「……答える理由が有るか？」

「ええと、余り言えないけど、僕には聞く理由が有るんだ。それじゃ駄目？」

彼はそう言つて、碧の瞳で真っ直ぐと見据えてくる。

彼の瞳の中からは、決して邪な感情は見えない。何らかを隠している企みの匂いは感じる物の、そこにスリザリ的な策謀の気配は全く

感じない。

……嗚呼。苦手だ、本当に。

先程までの調子であれば全く断るのに苦心しなかったというのに、ハリー・ポッターは、僕に対して時折このような光を向けてくる。そして、その場合は不思議な位に、僕が余計な推測を働かせる気力と、回答を拒否する意思を喪わせてしまう。

去年、スネイプ教授は、開心術の範囲では僕からリリー・ポッターの姿を隠し通したが、それでも教授はハリー・ポッターを見て同じ気分になる時があったのかも知れない。いや、それ以上に悪いか。教授はリリー・ポッターに対して特別な想いを持っているのだから。

逃げられない事を悟った僕は、可能な限り自然に聞こえるように回答を口にした。

「別に大した事では無い。単に母の墓参りにでも行こうかと思っただけだ」

瞬間、ハリー・ポッターは大きな衝撃に眼を見張った。

我関せずの態度を取り続けていたロナルド・ウィーズリーですら、聞いてしまった事にバツの悪そうな顔をした。

けれども、僕は苦笑を浮かべてみせた。

「喋ると決めたのは僕だ。気に病む必要は無い」

ハリー・ポッターならば良いかと、そう思ってしまった。

「そして、あくまで思い付きだ。マルフォイの体面を全く傷付けずに断る口実は何か無いかと探した結果、それも有り得るかと考えてしまったに過ぎない」

少なくとも理性ではそれが最善だと判断していた。

ただ、感情までが受け容れてくれた訳では無い。寧ろ真逆だ。

「正直な所、行かないに越した事が無い———というか、踏ん切りも付いて居ない。祝祭日であるクリスマスMASの時期に行くのもどうかという考えも持っている。どちらかと言えば家に帰っても怖気付いて行けず仕舞になる気もしないではない」

二年前、ミネルバ・マクゴナガル教授は、僕が墓参りに行ったかを聞いた。

個人的事情に立ち入る話題をわざわざ教授が持ち出したのは、それだけの理由が有る筈なのだ。僕が立ち向かいたくない真実を、墓に向き合えば否応無しに理解せざるを得ない事実を、彼女が知っているからだ。

「——実際、今でも疑っている。僕は本当にそこに行けるのかと」「解るよ」

漏らした弱音に被せるようなハリー・ポッターの言葉は、しかし真摯だった。

彼の碧の瞳は驚く程に澄んでいて、先程以上に強い輝きを放っている。それは先のスリザリンの色からは程遠く、紛う事無く善きグリフィンドールだった。

「僕もまだ、両親の死んだ場所に行けていないんだ。望めば直ぐに行ける筈なのに」

「……………」

……アルバス・ダンブルドアの意図の下、彼は夏中ダーズリー家に監禁されている。

けれども、クイディッチ・ワールドカップに行ったららしい事からすれば、彼は夏全て居なければならぬという事はないらしい。そして、休暇は夏のみならず、冬季は勿論、イースターだって有る。交通手段と保護者の問題は、ミネルバ・マクゴナガル教授が直々に融通を利かせるという確信が有る。そのような特別扱いを拒絶する程に、あの教授は冷淡では無い。

だが、彼はそれをしていない。親の死んだ場所を訪れたいという子供らしい希望を、彼は自らの意思の下に自制している。いや、拒絶している。

「というより、僕は両親がどんな風にヴォルデモートに殺されたかという事だけしか知らない。それ以上は調べる気にもならない。多分、君の方が色々と知っている筈だ」

「……君でさえ、そうなんだな」

ゴドリックの谷。

彼等の死地は、今は記念碑となっている。

それが遺族にとつて喜ばしい事なのかは解らないが、彼にとつてはやはり軽くない意味が有るのだろう。嗚呼、僕が墓石に——単に名前が刻まれただけの石に、解り切った事実を確認する事を恐れるように、彼は自身の存在が齎した悲劇の結果を直視し切れないのだろう。「……それを聞いて多少救われた気がしてしまうのは、許されるべき事では無いんだろうな。率直に言うとな、君からそのような言葉を聞いてしまった事を恨んでいる。君ですらそうなのだから、僕が立ち向かえなかつた所で何ら問題無いのではないかと」

僕の八つ当たりには、ハリー・ポッターはニヤツと笑つた。

しかし、嫌味な笑みではなく、逆に爽快さすら感じさせた。

「今からでも取り止めにしないかい？ 別に強制されている訳でも無いんだし」

「是非ともそうしたい気分だ。他人に宣言したら決意が固まるというのは大嘘だな。自分の弱さにこれ程嫌気が差すという事も無いだろう」

理性では解っているのだ。

ミネルバ・マクゴナガル教授は僕が墓の前に立たない事を不義理だと非難する事は無く、そしてまた僕が物心ついた時から彼女は狂っているに拘わらず、アルバス・ダンブルドアは入学前から僕の事情の殆どを知っていた。

故に、そこに何が有るか——いや、存在しないかなど自明であつた。

「ただまあ、僕の心残りというのはそれだ。そして今の予定としては、墓参りに赴くかも知れ、今後どうするかを家に戻ってゆっくり考えたいと思つている。かつての思い出に浸るには、良くも悪くもあの家は丁度良い」

このように考えるようになった一番の要因が、三大魔法学校対抗試合に、第一の課題の結果に起因する事に疑問の余地は無い。

セドリック・ディゴリーを含め、彼等は己の強さを示した。肉体的にも、精神的にも。

僕等は彼等程に特別では無く、そしてまた強く在れないが——それでも、決して焦がれてはならない道理は存在しない筈だつた。

実力と血統の壁

ハリー・ポッターは物思いに沈み、暫く何も言わなかった。

ロナルド・ウィーズリーは居心地が悪そうで、何も言えなかった。それは已むを得ないだろう。彼と僕達の間には絶対的な不理解がある。

これを理解出来るのは、運命によって実際に大切な者の命を奪われた者以外に居ない。

僕が知る交友範囲の中では、ネビル・ロングボトムとルーナ・ラブグッドだけが理解を示しうる事柄であり、理解を示さずに済めばそれに越した事では無いものでもあった。どう考えたって、運命の理不尽により大切な者を喪う苦痛など知らない方が幸せなのだから。

「けど、僕にとつては意外かな」

彼なりに整理をつけたのか、ポツリとハリー・ポッターは言った。

ロナルド・ウィーズリーが露骨にホツとした表情を浮かべたのが、酷く印象的だった。

ただ、彼等の様子を冷静に観察出来たのもそれまでだった。

次にハリー・ポッターから出た発言は僕の予測の遙か上を行き、そして同時に、心の奥底に沈めた感情を大きく揺り動かしてくれた。

「最初僕は君にスリザリンの誰かと踊るのかいつて嫌な聞き方をしたけど、正直に言うとき。僕は君が何とかして手段を見つけてハーマイオニーと踊ってみせると思っていたよ」

即座に言葉を返す事が、僕には出来なかった。

「……また、〃生き残った男の子〃は無茶苦茶を言う」

絞り出すような言葉を紡ぐのが精一杯。

平静など取り繕える筈も無く、自身の表情は酷い事になっているだろう。

入学以来、ハリー・ポッターは、僕にとって一貫して対処に困る存在だった。

今回もまた同じ。このグリフィンドールからは程遠い筈の存在は、〃生き残った男の子〃には見えない人間は、しかし時折僕にとって眩

く思えるグリフィンドールの振る舞いを行い、殆ど例外なく、僕に致命的な傷を負わせてくる。

僕の性根の腐敗と醜悪さ、そして脆弱さを、これ以上ない位に残酷な形で、まざまざと突き付けてくれる。

天井を仰ぎ、長く息を吐いた。

その数秒の猶予でもって、辛うじて何時も通りの自分を貼り付ける。

「そんなに驚く事かな？ 君とハーマイオニーは仲が良いし、君が他の女の子と仲良くしているのを見た事が無いもの。だから、普通に誘おうと考えてるのかなって」

その問いを背景としてガリガリという音が鳴る。

それはロナルド・ウィーズリーがケーキを齧り始めたが故であり、個人的に歯を傷めないのか心配になったのだが、ハリー・ポッターは親友を止めようとしなかった。というか明らかにいない者として扱っており、僕にもそれを求めているようだった。

「……そうは言うが、君は別に僕がハーマイオニーと踊って欲しいとか、そんな事を考えた上でその台詞を吐いた訳では無いだろう？」

「まあそうだね。僕は君を応援出来ない立場だし」

「だろうな」

微かに笑いながらの彼の言葉に、失望も落胆もしなかった。

グリフィンドール生のハーマイオニー・グレンジャーの親友として、彼はスリザリンの良からぬ虫が近付く事を是としないだろう。それは至極真つ当な考えだ。

ユール・ボールの事を聞いて彼女の存在が思い浮かばなかったと言えば嘘になる。

だが、その考えは直ぐに頭から消した、というか消え失せた。

「はつきりと言っておこう。僕にハーマイオニー・グレンジャーと踊る気は初めから無かったし、そもそも選択肢自体が存在しなかった。だから僕は、彼女が君かロナルド・ウィーズリーのどちらかと踊るものだと——」

「——!? 何で僕がハーマイオニーと踊らなきゃならないんだい!？」

僕の言葉を遮って、ロナルド・ウィーズリーが突然素っ頓狂な声を上げた。

或る意味先程のハリー・ポッターの妄言以上に驚いたが、他人の動揺を見れば落ち着くというのは真実だったらしい。素手で掴んでいたロックケーキを皿へと放り出し、高ぶった感情で紅潮した彼の劇的な反応が、僕に冷静さを取り戻させた。

「僕が！ ハーマイオニーと！ 踊る!? 君が変な事ばかり考えてるってのはハリーとハーマイオニーの話から薄々察していたけど、どうしてそんな発想になるんだい!？」

「……今回はそんなに突飛な事を言ったつもりは無いが。彼女の交友関係からすればそう考えるのが自然だろう。そもそも思っていたと言っただけで、別に君に強制はして居ないが」

冷え切った視線で見やれば、多少我を取り戻したのだろう。

ロナルド・ウィーズリーは気まずげに頭を掻きながら、誤魔化すような笑みを浮かべた。

「アハハ、そうだよ。自然……自然か。いやなに、ハーマイオニーは僕達と良い友達だからね。パートナーとして誘うという発想が無かったと言うか。でもまあ、あんなにツンツンしてるハーマイオニーを誘いたがる男なんて居ないだろうから、誰も相手が居ないなら別に僕が誘ってやっても良いかな——アイタツ」

あたふたと慌てて手を振った後、今度は足でもぶつけたのか、屈んだロナルド・ウィーズリーを胡乱な眼で見る。

慌ただしくて騒がしい事の上無いが、成程、ここまで来ると一周回って多少愉快に思えて来た。そして、彼等が三人組で無ければならない理由も何となく解る。

彼は潤滑油だ。

ハーマイオニー・グレンジャーはレイブンクロー、ハリー・ポッターはスリザリン。何れもグリフィンドールの正道からは外れ、何事も無ければ浮くような性質を有している。けれども、その間に入るのが最もグリフィンドールである彼なのだろう。

そんな親友の一連の奇行にハリー・ポッターは苦笑しながら僕へと

答える。

「ロンは兎も角、僕もハーマイオニーとは踊るつもりは無かったよ。僕は元々、ユール・ボールで他に踊りたい人が居たからね」

「……そうか」

一瞬言葉に詰まるが、そういう事も有るだろうと納得する。

一方通行の好意では関係性は発展し得ない。それは、僕がこの身で良く知っている。

「ならば、君はその女性と踊る訳だ」

「——いや、断られたよ」

当然の理屈の筈の言葉に、しかしハリー・ポッターは首を振った。

その瞳には、セドリック・デイゴリーを罵倒した時と同じ昏い輝きが有った。

「……君の誘いを断る人間が居るとは驚きだな」

吐露した言葉は、偽りなく本気だった。

「『生き残った男の子』、『代表選手』。おまけにグリフィンドールに多くの勝利を齎してきたシーカー。余程の純血主義者で無ければ、君と御近付きになっておきたい女生徒は多いだろうし、親も全力を挙げて協力しそうな物だが」

「まあ、立派な肩書だけではどうにもならない場合もあるって事かな」
肩を疎める彼が滲ませる感情は余裕では無く、寧ろ諦念に近いものだった。

「と言っても、正確には断られた訳じゃないけどね。既にパートナーが居るって話を聞いて諦めたというか。挑む前に望みは終わっちゃったんだ」

「その様子だと、自分で聞いた訳でも無さそうだな」

ハリー・ポッターは頷く。

「そうだね、ハーマイオニーに頼み込んだんだよ。僕に見込みが有るかまでは求めないけど、せめてパートナーが決まっているかどうか聞いてくれないかって。その代わりちよつと無茶な願い事をされちゃったけどね。ただ、自分で聞くよりはマシだったよ、間違いない」
「……まあ、相手も君も居たたまれない事になるのは疑いが無いな」

普通ならば断わられる人種で無いだけに、余計に憐れさが出る。

「それをやっちゃったのが僕だからね」

道化を気取るように大袈裟に、ロナルド・ウィーズリーが肩を竦めてみせる。

……今まで可能な限り関わらない立場で居た筈だが、彼は既に忘れたのか。それが当然というように、僕達がまるで親友であつたかのようにならに会話に入ってきた。

「陰気臭くて友達が居ないスリザリンの君でも聞いているだろう？」

フラーにふらふらと惹かれて無謀にも誘つちやつたのが僕さ。まして答えを聞く前に逃げてしまふ始末だ。笑えよ、笑ってくれよ。寧ろ君にすら笑つて貰えないと自分が情けないよ」

「……余計な御世話な上に、躁鬱が激し過ぎはしないか」

「放つておいて良いよ。最近は何時もおれだから」

容赦ない物言い、しかしその裏には友人としての親愛を感じ取れた。

彼等にとつてはこの程度の遣り取りなど何時もの事なのだろう。慰める事も無く、一見無視するような形で、ハリー・ポッターは改めて僕へと向き直つた。

「それで、話は最初に戻るんだけどさ。選択肢が無いってどういう事だい？ 別にスリザリンが他寮の女の子と踊つちやいけないという訳でも無いだろう？」

「……そうだな」

ロナルド・ウィーズリーの変な介入で些か脱線はしたが、彼の疑問は当然だろう。

そして別に僕が答える義理も無いのだが、ただ、この辺りの機微はグリフィンボール生には決して理解出来ない。そしてハリー・ポッター達がドラコ・マルフォイを始めとする普通のスリザリンと親密に語り合っている姿が想像出来ない以上、やはり僕が答えるべきなのだろう。

バーテミウス・クラウチ氏が、スリザリンを特に槍玉に挙げてホグワーツの現状を揶揄したのも大いに解るといふ物だ。

良くも悪くも彼等はスリザリンを——人の悪意の汚泥というものを理解していなさ過ぎる。彼等がスリザリンを皆殺して根絶する覚悟を持っているならば構わないのだが、甘っちょろいグリフィンドールのままで居たいのならば、逆に彼等は知って居なければならぬ。「僕がハーマイオニーと踊り得ない理由は、殆ど一言で表す事が出来る」

簡潔で、単純で、それでも絶対ではある。

「彼女が半純血ならば問題無い。しかし、それが『穢れた血』なら全くの別問題だ」

その瞬間、赤毛が激怒と共に椅子を蹴り飛ばして立ち上がる。

素晴らしい反応速度であり、彼女の親友が取るべき一つの正答では有るのだろう。その点だけ見れば、驚きの表情以上を見せなかったハリ・ポッターは失格と言える。

ただ、ハリ・ポッターがそれに留まったのは、彼が『マグル』界で育ったという文化の違い以上に、僕という人間の性格を多少なりとも理解していたからなのかも知れない。そして、今回に限ってはそれは正しい。

「嗚呼、ロナルド・ウィーズリー。グリフィンドールの行動に出ないでくれ」

過激な言葉だが、言葉狩りしたからと言って存在は無くなりはない。いい。

時には真っ向から直視しなければならぬ時もある。今回、どうか本件はその一つだ。

「別に僕は何の意図も無しにこの言葉を持ち出した訳では無い。彼女が『穢れた血』だから踊る選択肢が無いという結論に変わりないが、それには相応の理由が存在する。だから座りたまえ。杖に訴えかければ何でも解決すると考えるのは野蛮人の考えだ」

強い方が正義。

アルバス・ダンブルドアにも共通する思考だ。

もつとも、騎士らしい所業だと言えばそうなのだろう。

そもそも「マグル」界において騎士道物語の傑作として挙げられる『アーサー王の死』の物語自体、殺戮と淫奔、そして不貞と謀反を賛美する物語ではない。貴族的^{スリザリン}精神を時代遅れの悪と描く世俗の物語は多いが、あのような騎士道精神こそ根絶させられて然るべきであるし、彼等は人間としての理想像を再考すべきだろう。

まあ、ロナルド・ウィーズリーは決して理解を示す事は無いのだろうし、今はグリフィンボールを非難したい訳では無い。寧ろ槍玉に挙げるのはスリザリンの方である。

しかしながら、僕にも何らの覚悟を持たずに出来る会話でも無い。放置していたロックケーキを僕は手に取り、口へと運んだ。成程、確かに余りにも堅過ぎるが、味としては悪くない。半巨人と人間で顎の強さは違っても、味覚が余り変わらないというのは新たな発見だ。

そんな僕を、彼等二人は静かに待っていた。

もしかしたら、何も言えなかったというのが正解なのかもしれないが。

「穢れた血」

粗方食べ終わり、紅茶を飲み干した後、僕はその言葉を繰り返す。

「君達はそれを差別用語だという知識を持つてはいても、それが純血主義者によってどれ程の嫌悪の下で発されるのかを理解していない。そして、これからの時代において彼女の友人のままに居たいならば、ロナルド・ウィーズリー、君こそがその意味を十分に理解して居なければならぬ」

「……えっと、ステファン。僕は良いのかい？」

「君は「生き残った男の子」だからな。正直ついでのような物であり、知ってようがいまいが同じ事だ。やはりどう足掻いてもスリザリンの大先輩に狙われる事には変わりはない」

多少不愉快に顔を歪めていたハリー・ポッターに答えれば、その意味が伝わったのだろう。彼は、その表情を一転して神妙な物に変え

た。

「君は聖二十八族に数えられる純血であり、しかしながら血を裏切る者とするら呼ばれる位には純血の本流から外れている。だから、過激な——と言ってもそれが一般的のだが——純血主義者が、マグル生まれの人間に対して如何なる考えを有しているかを知らないだろうか?」
「……当然僕が知る筈も無いだろ、そんな頭のおかしい連中の考えなんか」

「好き嫌いは結構。ただ、アラスター・ムーディ教授は授業中、一体何と言っていただろうか。グリフィンドールでも恐らく同じような事を言っていた筈だが」

自らが立ち向かう物を知っていなければならぬ。

その事に思い当たったのか、ロナルド・ウィーズリーもむつつりと黙り込む。

そして、僕は問い掛けはしたが、答えを求めた訳では無い。幾ら待っても彼等から答えが返って来ない事は解り切っているからだ。善良過ぎる彼等には、その発想は出ない。

「僕から話題に出した以上、先の問いに自ら答えよう。純血主義者は『穢れた血』が自分達よりも劣った混じり物だと考えているが、実のところ、彼等は『穢れた血』が魔法を使う事自体を忌み嫌っている。正しい魔法使いや魔女から魔法を奪ったという考えに憑りつかれているし、特にその象徴である杖を持っている事が気に入らない」

「……え?」

二人の呆然とした表情は、言葉の意味を咀嚼するのに時間が掛かっているからか。

「もつと解りやすく言おう。純血主義達は彼女の杖——ドラゴンの心臓の琴線を芯とする葡萄の木の花杖だったか。それを奪い取り、あわよくば眼前で折ってやりたいと考えている」

反応は、やはり赤毛の方が早く、劇的だった。

「はあ!? ハーマイオニーだって僕等と同じくオリバンダーの店で杖を買ったんだ! 誰かから奪ったんじゃない! そもそも魔法を奪うって、一体どうやったらそんな事出来るんだ! それが出来るなら

スクイブなんて魔法界からは絶滅してる筈だろ！ スリザリンは頭が可笑しい奴ばつかだと思つてたけど、本気でイカレてるんじゃないのか!？」

怒りと共に再度立ち上がったロナルド・ウィーズリーの言葉を僕は無視した。彼の感情に一々付き合っていたら、話が進まないのは解り切っている。

「その評価は留保して置こう。既に述べた通り、重要なのは君や僕がどう考えるかという事では無く、彼等がどう考えるかという事だ」

自分がどうするかでは無く、死喰い人達がどうするかを考えなければならぬ。

「つまり、究極の純血主義者にとって『マグル』生まれというのは、小鬼や屋敷しもべ妖精、庭小人、いやそれ以下の存在でしかない。彼等と同様『マグル』生まれが杖を持つなど言語道断であり、家畜や奴隷、或いは娯楽として狩られるべき『物』でしかないのだ」

彼等は『穢れた血』を人間だと認識していない。

『マグル』界における近代黒人奴隷の歴史的処遇が最も近いだろうか。

ただ違うのは、彼等は二十一世紀にもなろうとしている今、魔法界にその昏く血塗られた時代遅れの因習を新造しようとしている点である。

「程度の差異は有れ、それは今のスリザリンの根幹に在る思想だ。故に、スリザリン生が『穢れた血』と踊る事がどう見られるかは想像出来るだろう？ 美女と野獣の扱いの比では無い」

せめて彼女がスリザリンだったら見逃してもくれただろうが、グリフィンドールだどう考えても無理だ。特に彼女は、ハリーポッター、闇の帝王の失墜を齎した者の親友でも有る。酌量してくれる可能性など一切有り得なかった。

「スリザリンにも我慢の限度は有る。この国で最上位の由緒正しく高貴な血筋を引く直系の男子であるシリウス・ブラックですら——彼は一応グリフィンドールだったが——生家から抹消されたように、許容値を超えれば当然手酷い仕打ちを受ける事になる。これもまた同じ

だ」

身内には甘めだが、一度身内から排除されればその歯止めは利かない。

有形無形問わず、集団での暴力でもって存在自体を消し去ろうと試みるだろう。

「でも、君はマルフォイがバッジを付けろって言ってきたのを拒否したんだろう？　そして、君は今まで平気で一人バッジを着けないままに居たじゃないか。だから、君が今回のパーティーで多少外れた行動をしたって問題は無いんじゃないの？」

「あれとは違う。確かにバッジの件は明確に一線を超えはした。しかし、それが一応不問にされたのは、あくまで『スリザリンの』行動から外れるものでは無かったからに過ぎない」

ハリー・ポッターの反論に軽く首を振る。

例外で、異端では有るが、根絶させられなければならない程でも無い。

「……嗚呼、言いたい事は解る。ならば何故、スリザリンの中でバッジを付けないのが僕一人だったのか。レイブンクロー達のように理解を示しても良いのではないか、だろう？」

こういう所は、やはりハリー・ポッターは余りにも解りやすい。

「しかしドラコ・マルフォイとしては、自らバッジを持ち出した以上、彼にそれを外すという選択肢が無かった。僕の意見を容れる事は彼にとって一種の負けだからな。そして、他のスリザリンもバッジを外す事は出来なかった。内心どう思っているかが、その行為は僕への賛同を、そしてドラコ・マルフォイへの反逆と批判を意味する」

「……随分と面倒くさいんだね、スリザリンって。本当、馬鹿みたいだ」

「残念ながら、それが階級社会と言うものだ」

無視して生きていけるならばそれが一番だろうが、現状のスリザリンでは不可能だ。

聖なる二十八は、至上で在らなければならぬ。それは寮の運営と存在意義の根幹であり、それを一応尊重する姿勢を見せているからこ

そ、純血派にも非主流派にも属さない僕でさえ、完全に排除されずに済んでいる。

「ただ、スリザリンが行き過ぎているのは否定しないが、こういう面倒な集団の空気や駆け引きというのは何処にでも存在している。僕に言わせれば、それを殆ど意識せずに済んでいる君こそが異端であり、異常だ」

それでもハリー・ポッターは不理解に基づく不満の表情を消さなかったが、ロナルド・ウィーズリーが一定の理解を示す表情を浮かべたのが酷く対照的ではあった。

「もつとも、絶対的に無視出来ない訳ではない。君の『生き残った男の子』という不思議な力もそうだし、先のシリウス・ブラックがやはり典型だろう。魔法力や杖の腕、信頼出来る友人や寮の力など、他を圧倒する実力が有れば黙らせるのも可能ではある」

「なら、頭がぶっ壊れてるスリザリン生も行けそうだけど」

「それこそ無茶を言うな。僕は力の面で他より抜きん出ている訳では無いし、周りもそう認識している。僕の自己認識もそう外れる物でも無い」

そして、僕は無為に蹴り殺される子犬には成りたくない。

「でもさ。マルフォイもそうだけど、寧ろスリザリンは君を過小評価し過ぎていると思うんだよ。だってさ、ダンブルドアが——」

「——僕の事は良い。一番の問題は、僕に留まらない事だからだ」

ハリー・ポッターの言葉を途中で遮る。

ホグワーツ生活は後三年半。

無理を押し通すには長過ぎるが、絶対的に不可能であると言えないかもしれない。

バーテミス・クラウチ氏は権力ごっこと評したように、大人にとっては所詮は余り真剣に考えるべきでない御遊び程度にしか過ぎず、しかも一流の純血と二流の半純血の道は卒業後に明確に分断されるのだ。現時点で訣別を示す選択肢というのも一応皆無ではないだろう。

しかしながら、今回における最も重い問題はそこでは無い。

「言つた筈だ、『穢れた血』は奴隷同然だと。そして、僕は半純血。闇の帝王の有り難い訓示の御蔭で、極端な純血主義者でも強くは排除の動きに踏み切れない身だ。そのような者達が番いになるような場合、どちらが悪いかというのは解るだろう」

答えは一つしかない。

「淫らに誘惑した『穢れた血』が、魔法使いに道を誤らせてしまった薄汚い雌餓鬼が悪い」

純血主義者は間違いなく、このように考える。

「つまり、敵意は僕よりもハーマイオニーに強く向かうんだ。彼等は間違つた思想に走つた者を排除するという回りくどい手段より、穢らわしい病原菌を直接根絶しようとする事を選ぶ」

「そんな事つて……」

「有り得るんだ。そして彼女は君の傍に居るが故に護られている部分も有る。『生き残つた男の子』は目立つ上に、君が意識していようとまいと強力に護られ、監視されている。ホグワーツの生徒の誰の命よりも、ハリー・ポッターの命は重いからな」

もつとも、ハリー・ポッターの親友であるという点こそが圧倒的に彼女の危険度を上げているのが実際なのだが、流石に僕の辞書にも容赦という文字は存在する。

「ただ、既に君はハーマイオニー・グレンジャーと四六時中居られまゐ。そして、彼女がこれから呪いに怯え続ける学生生活を送るべきと思うのか？ バジリスクの時と同様に、廊下を曲がる際に一々慎重にならなければならぬ毎日を通すべきだと考えるのか？」

それは、絶対的に正しくないだろう。

「でもさ、たかが君と踊つただけでハーマイオニーを傷付ける人間なんて本当に居るのかな？ あのマルフォイだって、彼女に歯呪いを掛ける位が精々だったし」

「確かに学生でそれ程の度胸を有する者は一握りだ」

率直な疑問を漏らした言葉に、僕は軽く頷いて肯定する。

「しかし、スリザリンには確かに居る。学生で居ながらも、許されざる呪文を扱うのに躊躇わない人種が。そして、その能力を持った人間さ

えも」

「……禁じられた呪文を使える人間が、って事？」

「勿論、死の呪文も含めて、だ」

当然の事ながら、容易に使用出来る物では無い。

アルバス・ダンブルドアが、そしてスネイプ教授も含めた四寮監もまた眼を光らせている。

廊下で魔法を使うなという校則が如何に形骸化しているかが、特に高度な魔法を使えるようになる上級生に強く自制が求められている事には変わりはない。

そして、強力な闇の魔術を一度でも使ってしまったら非常に重い罰則が科されるというのは、ホグワーツ生活をしていれば自然に思い知る所だ。他人を大きく傷付けてしまえば、退学処分は当然、アズカバン行きすらも十分視野に入り得る。

しかし裏を返せば、覚悟さえ決めれば殺人は可能だという事。

魔法界は、非魔法界で子供に銃を持たせるのと同種の危うい均衡の上に成り立っている。

「スリザリンが一貫して優秀だった所以、伝統として先輩方が継承してきた羊皮紙遺産の数々の山を引っ繰り返していれば、その扱い方のヒント辺りは転がっている事はしばしば有る。そして、スリザリン内では闇の魔術に関する噂にも事欠かない。全てが事実では無いだろうが、使えても可笑しくないであろう先輩方は確かに居た」

殺すだけならば失神呪文や石化呪文を使ってナイフで刺せば足りるが、それでも死の呪文は闇の魔術の一つの極致であり、象徴だ。

魔法が飛び交っている戦場において実践的な形で死の呪文を使う事は難しくても、集中出来る恵まれた状況下で呪文を唱える限りにおいては、ホグワーツの六、七年程度でも決して不可能では無い。特に今のスリザリンにおいてはそれが扱えるという魔法使いを尊ぶ傾向が強いし、それをもって下級生を脅迫するような人間も存在する。

ただ、今回はスリザリンの内部のみが全てでは無い。

「そもそも君は、己が何故三大魔法学校対抗試合に出る羽目になったかを忘れているらしい」

「僕の指摘に、ハリー・ポッターは顔を俯かせて黙り込んだ。」

「校内、或いは学校に容易く入れる立場の者達の中に、君に対して策謀を張り巡らしている者が潜んでいる。しかもその人間は、如何なる理由が有れども、アルバス・ダンブルドアを一度は出し抜いた。その上、強力な魔法契約を課しうる魔法具、炎のゴブレットを騙しうる程の魔法使いだという事が明らかになっている」

かの「犯人」が、策謀・技量の何れの面でも事に疑いは無い。

そして仕掛けた悪戯が偶々上手く行ってしまっただけの善良な魔法使いだというのも望み薄だ。三校に加え魔法省が関与しているこの行事において、しかも「生き残った男の子」を巻き込んでみせるというのは余りに難易度が高く、手が込み過ぎている。

「そんな魔法使いが、君を殺したついでに、或いは君を殺せなかった腹いせに、ハーマイオニーを狙わない保証は何処に有る？ 悪目立ちした「穢れた血」の始末と、君への嫌がらせ。一石二鳥であるし、実際、僕達はバジリスクの際にその危険を実感した筈だ」

あの時は石化で済んだが、今度もその程度で済むとは限らない。

元々魔法界は死の危険がそこら中に転がっているのだが、今の時代、本物の戦争前夜においてはその脅威はこの十三年間の比では無いのだ。

ハーマイオニー・グレンジャーが死ぬ。その未来は、決して現実離れした物では無い。

更に今年はもう一つ理由があるのだが、それはやはりあくまで余禄だ。そして、結論としては何ら変わり得ない。

「要するに、周りの状況が余りにも悪過ぎる。僕の不安定な寮内の立ち位置、半純血であるという恵まれた訳でもない生まれ、極端な純血主義思想の暗い面、油断できないスリザリンの上級生、そして何より君の近くに潜む闇の魔法使い。さながら地雷原に居るような物だ。たかがダンスだと短慮で軽薄な行動を取れば、容易く身の破滅に繋がり得る」

そして言及はしなかったものの、復活を遂げようとしている闇の帝

王。

校内での居場所を喪うに留まるならば良いが、今年の不用意な行いは生命の危機に一足飛びで近付く事へと成りかねないのだ。

「故に、僕にとって最初からハーマイオニー・グレンジャーと踊るなど有り得なかつた」

僕は英^{ハリイ・ポッター}雄では無いのだ。

どう足掻いても出来ないという行為は、現実として存在する。

僕の断言に、ハリイ・ポッターは再度黙り込んだ。

一瞬ちらりと部屋の隅に視線を逸らした彼の感情は——何故か奇妙に読み辛かつた。

複雑、或いは入り乱れていると言い変えた方が良いかもしれない。彼自身、その感情の動きを説明出来ないのだろう。余り多くの事を言つたつもりも無いし、論理的に突飛な事を告げたつもりでは無いのだが、彼にとつては違ったらしい。大きく心が揺り動かされていると共に、しかもどうという訳か、不条理への怒りすらも抱いているように感じ取れた。

その一方で、ロナルド・ウィーズリーの心の動きは解りやすかつた。納得、安堵、そして強い歓迎。僕がハーマイオニーと踊らない事は理屈が通っていると感じ、そしてまた、彼女が危機に晒されない事は良い事だと考えている。更に想像で補うとすれば、スリザリンには絶対彼女を近付けるべきでは無いという想いを新たにしている事だろう。

「つまりだ」

その感情のままに、辛気臭くなつた雰囲気振り払うように彼は陽気に切り出した。

「ごちやごちや難しい事は兎も角、グリフィンドールとスリザリンは一緒に踊れない、そんな事は天地が引つ繰り返つても有り得ないという事だろ？」

「そうだな。君の言う通りだ、ロナルド・ウィーズリー」

「嗚呼、そうさ。まあ、物事は収まる所に収まるし、世の中にはお似合いの相手同士が居るもんさ。別にユール・ボールと一緒に踊ったカッツプルが結婚するとは限らないしな。寧ろ学生時代の交際のあれこれを引き摺るのは少数派なんじゃないか？　だから、そう気にする事は無いぜ、レッドフィールド」

「君の慰め方が僕には今一理解出来ないが、慰めとして受け取ってはおう」

彼の口振りだと、僕がまるでハーマイオニー・グレンジャーと結婚したいが故にユール・ボールで踊りたかったように聞こえてしまう。

そして、ハリー・ポッターも御調子者の親友に引き摺られたのか、先程までの深刻な表情を消し去って苦笑を浮かべた。

「……まあ、君がそこまで言うなら僕も何も言わないよ」

疲れたように、或いは付き合いきれないというように彼は肩を竦める。

「でも、君が色々と考えているのを知れたのは良かったかな。と言っても、僕としては君が余りにも考え過ぎてるようにも思うけどね。僕がドラゴンを出し抜いたみたいに、えいやって挑んでみれば意外と何とかなりそうな気もするし」

「それは君が『生き残った男の子』であると同時に、『生き残った男の子』なのに考え無し過ぎるだけだろう」

特別と一緒にされては困る。

だが、ハリー・ポッターは首を軽く傾げた。

「そうかな？　何せ僕は君と話すと何時も、自分が途轍もなく馬鹿なんじゃないかと無性に思ってしまう。ハーマイオニーとは違う。彼女も酷く頭が良いけど、君は全く別物だ」

「それこそ思い違いだと思うがな。僕としては左程特別な事を言っているつもりでは無いし、教科書を殆ど丸暗記出来る女性や、一年からクイディッチの花形として活躍出来る男の子よりは普通のつもりだ。これは以前にも言ったかも知れないが」

自分が持つていない能力が良く見えるだけだろう。

僕としては、やはり彼女や彼の方が羨ましい。それらは明確に見える力であり、他人を黙らせる事の出来る優位性の証なのだから。

異端や異常、奇妙や不気味は、決して力などでは無い。

ただ、そんなハリー・ポッターは悪戯っぽい光を再度浮かべた。

「じゃあ君よりも多少特別な僕が聞くけどさ」

僕の卑下を揶揄しつつ、彼は真っ向から言葉で切り込んできた。

「——今回の『犯人』の正体、君はもう解ってる？」

「——」

彼の視線が僕の眼を鋭く射抜く。

逃がすつもりは無いと、何としてでも答えを聞くとの覚悟が瞳には宿っていた。

「……成程。既に忘れつつあったが、そもそもの発端としては、君がルビウス・ハグリッドを巻き込むという手段を使つてまで、わざわざ僕を呼びつけたんだっただな」

第一の課題の評価、そしてユール・ボールの相手。まさかそれらが彼にとって重要で有る筈も無く、しかし自身の命に関わる内容については当然重大な関心事だった。そして確かに、このような話は周りに人が居る中で出来る話でも無い。

思い返してみれば、二年の時に同種の事をやったのだ。ハーマイオニーを通じて、或いはポリジューズ薬を用いて、彼はスリザリンの継承者の正体を探ろうとした。

しかしながら、聞く相手が間違つて——いや、正しかろうと同じ事か。アルバス・ダンブルドアは、恐らく未だに正体に見当が付いていないのだから。

そして、僕もまた同じである。

「正体には未だ見当も付かない。僕は全てを見通している訳では無いからな」

その言葉にハリー・ポッターが疑わしそうな顔をするが、軽く両手を上げる。彼の脳裏には僕と同じく秘密の部屋の一件が浮かんでいるであろう事は、開心術士でなくとも明らかだった。

「確かに君の疑念は真つ当だ。僕は多分に当て推量で動いた事実が有

り、結果的に正解の場合も有るが、それでも今年は今までの三年間と違う」

「……どういう事？」

「一概には言いにくい。理由、というか原因は複合的だからだ」

更に疑問を深くしたハリー・ポッターに、僕は大きく息を吐いた後で答える。

「今回は外部から大勢の人間が入り込み、学校としての閉鎖性を事実上喪っている事。想定される犯人像が複数存在する事。それに連動して、犯人の目的も複数考え得る事。しかもスリザリンの動きが内部からすら良く解らないのも去年以上に不可解であり、クイディッチ・ワールドカップにおける闇の印を何処に位置付けるべきかが不透明なのが一番——」

「——あーあー。君がやつぱり色々と面倒臭い事を考えてた事は解つたよ。それと、犯人が確かに解っていないだろうというのもの」

……自分から聞いておいて遮るのはやはり反則では無いだろうか。長々と説明する手間が省けたと好意的に解釈するのにも限度という物が有る。

ただ、彼も何ら考え無しに僕の独白じみた言葉を止めた訳では無いらしかった。

「でもさ、犯人像や目的が複数考えられるってどういう事だい？」

「……？ ハリー・ポッター。僕には君の言っている意味こそ解らないが」

「いや、だってさ。目的つてのは解り切ってるだろ？ 今回の三校試合でヴォルデモートが僕を殺そうとしている以外に無いじゃないか」

この英雄は相変わらず困った事に平気で闇の帝王の名前を呼ぶし、ビクついている親友に配慮を示すべきだと思うのだが、内容としては聞き逃せない物で有った。

「何故、そのように断言出来る？ 君を殺したがっている人間は死喰い人の残党を筆頭に多く存在するし、闇の印が上がった文脈からはそちらの線というのも十分考えられる。だというのに、何故、闇の帝王だと君は自信を持って言える？」

自身の語調が多少荒くなっているのは自覚していた。

けれども、それとは殆ど関係無く、ハリー・ポッターは僕から視線を逸らした。彼から伝わってくるのは何故か解らないが、気恥ずかしさと気まずさだった。

「ええと、その、僕にはヴォルデモートがそう考えているのが解るんだ」

「解る？」

その表現に思わず眉を顰め、説明を促す。

けれども、ハリー・ポッターは、喋るつもりが無さそうだった。

喋れない理由が有るのか、それとも単に喋りたくないと思っっているのか。

こういう時、開心術は不便だ。読心術で無いが故に、イエスノーで判明する以外の事柄は基本的に判断が付きかねるし、全てが見える訳でも無い。無防備過ぎる彼の心から一瞬読み取れた映像も、暗い部屋に二人が居るといふ事くらいしか解らなかつた。解釈しようにも意味不明過ぎて、そもそも直接関係が有るか自体が解らない。

「……まあ、君が話したくないというのなら構わない」

同時に肩を竦める事で、追及する意思が無いと示す。

「ただ、そこは今回非常に重要な点だ。そもそも君は三校試合で、と限定したが、間違いなくこの試合に闇の帝王が間違いなく関わっていると断言出来るのか？ 闇の帝王は何時如何なる時でも、隙あらば君を殺したいと考えている筈だが」

「ええと……。それは確かに、ちよつと自信無い、かな。僕が憶えている限りでは、そこまでは言つてなかつた気がする」

何かを必死に思い出すような表情で、ハリー・ポッターはその答えを絞り出す。

非常に引つ掛かる言い回しの中には、しかし嘘の色は見いだせない。先の言葉と併せて考えるに、どうやら彼は、闇の帝王が最近自身への陰謀を張り巡らそうとしていると考えているが、それが三大魔法学校対抗試合に直接関わるかは確証がないと考えているらしい。

貴重に思える情報だが、しかし内容が曖昧な事も有って、全賭けす

るには微妙な所だ。

「成程。ただ仮に君がその予想に確証を持っていたとしても、物事が単純化する訳では無い。アルバス・ダンブルドアも短絡的に結論を出しはしないだろう。が、他ならぬ闇の帝王の専門家である君の見解だ。強く胸に留めておくべきでは有るだろうな」

「……そんな表現されると滅茶苦茶嫌だけどね」

言葉だけでは足りないというように、彼は大きく顔を歪めた。

「しかし、僕が頭を悩ませているのは、そういう事だ。君の首を狙っているのは、闇の帝王だけでは無い。特に今は、積極的に狙わざるを得ないような動機が有る。だからこそ、今回の件は難しく有る」

あの老人はもつと正確に物事を予見しているかもしれないが、僕としては依然真偽不明との結論を下さざるを得ない。炎のゴブレットから彼の名前を出してみせた技量や方法の謎もそうだが、余りにも不気味な点、不可解な事象が多過ぎる。

「繰り返すが、僕に未だ“犯人”は解っていないし、目星すら付いて居ない。如何に小難しい言葉を弄そうとも、殆ど君達と変わらない」

「——じゃあ」

僕の言葉を受けて、ハリー・ポッターは挑むように言う。

「解ったら教えてくれるかい？ バジリスクの時と違って」

「——」

その言葉に僅かに硬直したのは、見咎められただろうか。

……嗚呼、間違いなく見咎められただろう。僕は確かに動揺したし、彼の碧の瞳は確かに色を変えた。よりによってその言葉を彼が選択しなければ、二年前の苦渋の結末を持ち出さなければ隠し通せた筈だが、今回は——いや、今回かもしれないが——彼の方が上手だった。

だから、僕は正直に答えるしか無かった。

「約束は出来ない。何故なら、僕はスリザリンだからだ」

ロナルド・ウィーズリーが不愉快に顔を歪めるが、ハリー・ポッターはやはり冷静だった。手を肩に置く事で親友を押し留めた上で、改めて口を開く。

「でも、君は狡猾で、自己防衛に長けている。自分が一番利益を得られると考えたら、当然に僕に教えてくれるだろう？　何故なら、君はスリザリンだからだ」

「……君がそう考えるのは勝手だ」

「解つてるさ。今まで通り勝手にするよ」

……嗚呼、本当に勝手な男だ。

だからこそ、ハリー・ポッターは「生き残った男の子^{英雄}」なのかも知れないが。

「ただ、君達のグリフィンボールにも色々居るように、「スリザリン的」にも種類や濃淡が有る。徹底的に美学を重んじるスリザリンも居れば、目的遂行の為に美学を捨て去るのを厭わないスリザリンも居る。余り簡単に決めつけると痛い目に遭うぞ」

「じゃあ余計に大丈夫だね。君はどう考えたって美学を重視するタイプじゃないもの。特に、自身が重要だと考える物に関してはね」

「……本当に、要らぬ方向に口が回るものだ」

その言葉と共に僕は席を立った。

案の定、ハリー・ポッターは座ったまま静かに僕を見上げるだけで、止めようとはしなかった。その穏やかな態度は、僕に多少の腹立たしさを覚えさせるもので、けれども、決して不快ともいえないというのが、自分が負けてしまったのだという思いを強く抱かせた。

だから僕は、負け犬の矜持として、彼に最後の質問を投げ掛ける。

「——これだけ君が一方的に聞いたんだ。今更僕の質問に答ええない不義理はしないだろう？」

「そりゃあ……内容にもよるけど、何？」

ハリー・ポッターは僕の言葉に、警戒よりも意表を突かれたような顔をした。

僕が既に席を立った以上、御互いの話は既に終わったと考えていたのだろう。けれども、今回最も意味の有る問いという物を、僕は彼に未だ投げたつもりは無かった。

「君は本命の女性から断られたのだろうか？　ならば、ハーマイオニー・グレンジャーと踊る気は無いのか？　彼女は君の傍に立つに相応し

い女性だと思うが」

酷く面食らった、驚愕の顔。

まさかそんな事を聞かれるとは思って居なかったという、全くの素の反応。

「――。あー、それは今まで全く考えてもみなかったな」

彼が自身を取り戻すには優に十秒以上の時を要した。

彷徨うように視線を動かし、最後に何も無い場所へと止めた後、漸く彼は言った。

「けど、僕がハーマイオニーと踊るかどうかというのは、彼女が僕と踊りたいと思うか次第だろう？　僕とハーマイオニーは親しい友人ではあるけど、だからこそ逆に、そういう対象として見れないって断られるような気もするし」

「そうか。それは……残念だ」

全くの本心から、僕はその言葉を漏らした。

皮肉な事に、ハリー・ポッターはジェームズ・ポッターでは無い。

それが上手く行く場合も有り、逆に上手く行かない場合も有る。今回は後者だ。スネイプ教授が喝破したように、僕達はやはり同じくは有り得ないのだろう。どんなに相似で有ったとしても、人間が千差万別である以上、先例は参考になっても流用する事は出来はしない。

残念？　と首を傾げているハリー・ポッターを他所に、僕は小屋を出た。

身を切るような寒さを感じたのは、今まで温かな場所に居たからだけでは無い筈だった。

銀色の暴走特急

ハリー・ポッターに呼び出された翌日の事。

相変わずクリスマスに浮かれている——しかし、不満が一部で確かに燻っている——校内を後目に、僕は何時も通り図書館で本を開いていた。

クリスマス前の学期最終週とは言え、最後まできっちり講義を行う授業は幾つか存在する。例えば変身術が典型であるし、今年は闇の魔術に対する防衛術も含まれるだろうし、最終日にテストまで行う魔法薬学は極めつけでもある。

しかしながら、僕は完璧主義者ハイマイオニーでは無い。

彼女は必死で教科書を捲り直している事だろうが、概ねの科目において僕は予習を終えているし、魔法薬学にしても今更復習した所で点数が跳ね上がると思えない。あの教授は、付け焼刃の小細工を見逃してくれる程に甘くはないし、そもそも生徒の実力自体に期待していない。あの科目を苦手とする人間が多い事も相まって、無難にこなせば優秀層に食い込む程度の点数はくれる公算が付いていた。

そんな訳で、僕は相変わずアラスター・ムーディ教授から出された課題をこなしていた。

最近はスリザリン寮内に籠り続きであり、闇の魔術を学ぶ環境としてはあの寮以上の場所というのは中々無いのだが、先輩方が代々寄贈してきた寮の蔵書、或いは残してきた教科書や羊皮紙のメモのみで全てが事足りるという訳でも無い。

だからわざわざ図書室に出て来た上で、禁書の棚から出された黴臭い本に齧り付くようにして学習しているのだが、本を借りる際に毎回マダム・ピンズから胡散臭そうに見られるのは流石にどうにかならなだろうか。六、七年以外が禁書から借りる事は殆ど無いからこそなのだろうが、今年に入ってもう何度目か解らない位の事なのだから、そろそろ慣れて欲しい物だ。

しかし、久々の図書室は何時の間にか静けさを取り戻していた。

ユール・ボールが告知された前後というのは酷い物だったが、図書

室の守護者もあの状況が続く事は許さなかつたらしい。もしくは、全員が全員、ユール・ボールの相手を校庭や寮内で見付けようとするのに夢中なのかも知れない。今までしばしば見かけていたビクトール・クラムの姿が見えないのも一因として存在するだろう。

ひそひそ話の声すら聞こえない、ホグワーツ入学後以来最も雑音が無いと言つて良い程の、静寂の世界が有つた。

その時間がどれ程続いただろう。

時間の経過によつて擦れた文字を読み解いていた僕の上に、ふと影が差していた。

最初は単に通りがかつた人間だと思つていたのだが、その影は、さながら僕の本の中身を覗き込んでいるように一切動かなかつた。我慢比べというように僕は本のページを数回捲つたが、やはり立ち去る気配は無い。

そこで漸く僕はその影の持ち主が誰かを確かめる為に顔を上げ、すぐさま眉を顰めた。

「——随分とまた、意外な人間が来ましたね」

顔を上げる前、僕はそれがハリー・ポッターかハーマイオニーだと予想していた。

何故なら、僕に図書館内で声を掛けるような人間はその二人しか居らず、今までそれ以外の人間から誰にも邪魔をされた事は無いからだ。

ただ改めて考えてみれば、彼等二人は僕の読書を遮つて声を掛けて来る程度には気安い間柄だとも言えた。故に僕が気付くのを敢えて待つた訪ね人は、その何れでも無かつた。

それどころか、彼女と僕は事実上初対面の間柄ですらあつた。

「聞いていた通り、図書館に居まゝしたね。それも本当に黴臭くて陰気臭い本……！ 真つ当な魔法使いが読む代物としては、あんまり過ぎると思いまゝす」

妖精の如き圧倒的な銀の美貌。

ボーバトンの代表選手、フラー・デラクールがそこに立っていた。

フラー・デラクールによつて、僕は問答無用で図書室から連れ出された。

正直、僕は余り気が進まなかつたのだが、彼女が僕の前に座つた瞬間、図書室の秩序の番人、マダム・ピンスが疑うような眼つきと共に近寄つて来たとなれば仕方が無かつた。

どうやら、ハーマイオニー・グレンジャーが大声を出して僕の下を去つていった一件は、司書が僕を要警戒対象と認識するに十分な事態だつたようである。一人で静かに図書室に居る分には何も言わないが、会話するような可能性が有るとなると別らしかつた。

フラー・デラクールも近付いてくる司書の姿に気付いたらしい。彼女の姿を見て不機嫌そうに鼻を鳴らした後、話が有ると言つて入口へと向かつて行つた。僕が追つて来ない事など全く考えていない、堂々とした立ち振る舞いだつた。

「……全く、本当に勝手な物だ」

唯我独尊過ぎて、溜息すら出ない。

そして、彼女と共に居るのを見られたくないという思考は既に手遅れだつた。

フラー・デラクールは今を時めく代表選手であるという以上に、衆目を集めすぎる美貌をしている。彼女が今僕へと話しかけた所を目撃した生徒が全く居なかつたと期待するのは望み薄だろうし、先程の状況から見て彼女は暫く僕の傍に立つていた筈だ。如何に図書室の中とは言つても、さぞかし目立つた事だろう。

実際、僕が周りを見渡せば、慌てて視線を逸らしたような生徒が何人も居た。噂がどうなるか、今の時点で既に恐ろしい物だ。

視線が無くても尚、こちらの動向を伺つている気配を浴びながら僕は図書室を出る。

遠ざかりつつある背中では、僕を追わせる気は有るらしい。彼女は勝手知つたるとばかりに使われていない教室の入り口を開けた後、僕が着いて来ているのをちらりと確認し中へと入つて行つた。

自分の学校では無いにも拘わらず、余りにも堂々とした所作だった。「——それで、何の用です？　まさか、貴方が僕をユール・ボールに誘うような酔狂な真似をしに来たという訳でも無いでしょう？」

話を出来る場所ならば何処でも良かったらしい。
空き教室で待ち受けていた彼女に対し、僕は開口一番問うた。

当然の事ながら、皮肉だ。

事実、フラー・デラクールはあっさりと頷く。

「貴方にそのような下らない事を聞きに来た訳では有りませーん。聞くまでもなく、貴方に踊ってくれるパートナーは居なさそうですし、貴方は私に釣り合わないです」

「これまたはつきり言ってくれますね。まあ、貴方らしい気はしますが」

僕は呆れば良いのか、怒れば良いのか。

だが、彼女には反論を許さないだけの雰囲気がある。美人は得だという以上に、彼女が持ち得る自分自身への確信がそれを齎すのだから。

ただ——まさか僕の皮肉が更なる藪蛇になるとは思ってもみなかった。

「確かに、私はレイブクローの人達に、代表選手以外であれば誰をパートナーにすれば最も目立てるか聞きました。半分程が貴方の名前を上げました。でも、私には嫌がらせを判別する程度の頭は有りませーす。貴方、評判悪過ぎです」

「……それは流石に余計な御世話ですよ」

どうやら彼女は、本当に良い性格をしているらしい。

いや、僕のような計算の言葉と違い、これは完全な素かも知れないが。彼女もまた、良くも悪くも相手を気遣う為に取り繕うという事を知らないようである。

「しかし、そのような判断が出来るという事は、少なくとも貴方は自分が嫌がらせされるような女だとは自覚している訳ですね」

真正面からの揶揄を向けるも、彼女は少しばかり眉を寄せただけだった。

「私の美しさに嫉妬する人間というのは何処にでも居まーす。それを一々気にしてはキリがありません。言いたい人間には言わせておけば良いのでーす」

「……僕も開き直る方だと自認していますが、貴方には負けるでしよう」

「これまた、ハーマイオニーとは全く違うタイプのようだ。」

彼女は確固たる己を有しているが故に自身がどう見られるかというのは殆ど無頓着であるが、フラー・デラクールは逆に自分がどう見られているかこそが確固たる己の拠り所なのだろう。真つ当では無いし、共感出来る物でも無いが、解りやすくして良い事ではある。

そして、少しばかり興味が湧いた。

彼女には無く、勿論自分自身についての事だ。

「……丁度良いから一応聞いておきますが、僕の事を何と言っていたんです？ 別にレイブンクローに限った事で無くても良いですが」

「えーと、ちよつと待って下さい」

軽く宙を見上げて、彼女は指折り数えだす。

「二年ではダンブリ・ドールを騙してグリフィンドールの単独優勝を阻んで、二年では道化の教師の裏に隠れてスリザリンの継承者の下僕としてバジリスクを生徒達に喚びつけて、三年では誰もが震え上がる化物を教室に召喚してクラスを恐慌に陥れーた挙句、大量殺人鬼を招き入れる悪巧みを狼人間と交わしていたのを寮監に咎められーたと聞きました」

「……何処の悪いスリザリンなんでしょうかね、それは。客観的に聞いていて極悪過ぎる」

「でも、私が聞いた大体の人間が同じ事を言っただけか？」

「………噂はある程度収束する物ですし、完全に間違っている訳でも無いですからね」

事実では無いが、誇張で済む範囲で留まっているのが質が悪い。

というか、リーマス・ルーピン教授とそれなりに接触が有った事までバレているのか。……嗚呼、一応ギルデロイ・ロックハートとごっちゃになってそんな噂が生じた可能性は有るか。

だが、それらの全てにおいて少なからずアルバス・ダンブルドアが絡んでいるというのが最悪だ。本当にあの老人は、僕にとっての諸悪の根源でしかないようだ。

「……まあ、率直な感想を聞いて助かりはしましたよ。自分が純粹にどう見られているかというのは、中々聞ける機会も有りませぬしね」
ハリー・ポッターも言っていたが、四年のホグワーツ生活を経て僕もそれなりに注目され得る立場になったという事なのだろう。

良くも悪くも英雄的である彼に比べれば悪目立ちも甚だしいが、自業自得として受け容れるべき……いや、流石にここまで来ると何も思わないではいられないものだ。ホグワーツ入学以前、或いは入学時点でこうなると知っていれば、僕はもつと慎重に行動したに違いない。もつとも、バーテミス・クラウチ氏の所感によれば遠からずボロが出ただろうという事では有るが、それでも多少マシには修正出来た事だろう。

「——それで、その悪評塗れの人間に対して何か用ですか？」

短く息を吐いて追想を振り切った後、僕は問う。

「貴方と僕には接点がありませんし、関わる理由も無かった筈ですが、今こうして連れ出した以上、それ相応の理由が有るのでしょうか？ 僕も貴方のような人間に付き合う程暇では無いですから、さっさと要件を切り出して欲しい物ですが」

僕の言葉にフラッシュ・デラクルスは明らかに鼻白んだ。

自身の矜持が傷付けられた怒りが、一瞬だけ表情に現れる。この凶抜けた美女は、異性からそういう突き放した台詞を聞く事は殆ど無かったに違いない。

けれども、僕はその事自体に自分の利益を一切見出さないと、彼女も直ぐに自分が何故僕を連れて来たのか思い出したようである。

己を落ち着かせるように頷いて、彼女は理由を告げた。

「——つまり、^{わたし}私が一番優れていたと聞きました」

本気で何を言われたのか解らなかつた。

言葉が唐突であり、内容が断片的だったという以上に、その優れていたという言葉と、フラー・デラクル、そして僕の存在が結び付かなかつた。

彼女が次に続けた言葉で、漸くその真意を理解する事が出来た。

「あの第一の課題において、貴方は、わたし私こそが四人の代表選手の中で最も優れていると言つたと噂を聞きました。だから私はその理由を貴方に聞きに来たのでーす」

……嗚呼、成程。

彼女の用件とはその事だったのか。

確かにその通りではある。

ハリー・ポッターでも無く、セドリック・ダイゴリーでも無く、ビクトール・クラムでも無く、フラー・デラクル眼前の彼女こそを僕は一位に挙げた。それは事実であり、けれども事実だったからこそ多少の混乱を齎す物でも有つた。

ただ、黙り込んだ僕を見て自信を喪つたのか、彼女は不安そうに瞳を揺らがせた。

「ええーと、貴方は私を一番だと言つたのではなーいのですか？」

「……いや、確かに言いましたよ、それは間違い有りませんが」

しかし、彼女に伝わるような場所での発言では無い。

「……ただまあ、彼に口留めした訳では有りませんからね」

整理してみれば、これほど単純な論理も存在しなかつた。

殆ど密室だったとは言え、彼等の外部に出ない事まで期待出来はしない。あの場所には三人組全員が居た訳では無いのだ。故に、セドリック・ダイゴリースリザリンの談話室の時よりも受け入れやすくは有る。

「要するにハリー・ポッターから聞いたのでしょうか？ 彼は貴方と同じく代表選手だ。どんな話題から僕の事が口に入る羽目になったのか知りませんが、彼の言葉を聞いて僕の所にあの真意を問い質しに来た訳ですか」

質問の形だったとはいえ、半ば確信を持っていた。

けれども予想外な事に、彼女は首を大きく横に振ってくれた。

「噂を最初に聞いたのは人伝でです。代表選手をこつぴどく扱き下ろしたスリザリン生が、^{わたし}私を一位に挙げたとハリーが言っていたと聞きまーした。そして、^{わたし}私はハリーに理由を聞きに行きましたが、知らないと答えまーした。だから、貴方に聞きに来たのでーす」

「……それだと大分話が変わって来ますね。やはり最低限の口留めはしておくべきでしたよ」

撤回しよう。セドリック・デイゴリーの時より遥かに悪い。

彼は、自身が有名人であるのを考えないからいけない。

あの三人組にとっては私的な会話のつもりだったろうが、グリフィンドール談話室か、或いは廊下で他から聞き咎められ、そして巡り巡ってフラァー・デラクルの所まで伝わったという所か。何れにせよ、僕の「評価」は想像以上に周りから注目を浴びていたという事らしい。

「……しかし、ハリー・ポッターと言ひ、貴方と言ひ、僕の評価を聞く必要が有るんですか？ 三校の校長と、魔法省の人間二人により評価は出た筈でしょう」

溜息混じりの言葉に、フラァー・デラクルは微笑んだ。

見惚れる位に輝かしい美貌で、儂く、けれども何処か恐怖を感じさせる笑みで。

「しかし、知っての通り^{わたし}私は四位でした」

「……………」

気にして居なかったが、そう言えばそうだった。

ルドビッチ・バグマンと、イゴール・カルカロフ。

彼等の多少偏った採点基準により、その結果は必然だった。

「別に私は点数に文句を付けたい訳では有りません。一番のセドリックを見てはいませんが、それでも三番のビクトールや四番のハリーを見ました。そしてその限りでは——彼等に劣っているとは思いませんが——四位という判断が下された事には納得しています」

納得している。

その言葉を口にする際、瞳に焰がちらついていたが、それは良いだろう。

審査員の採点基準次第ではそれが理解出来ると言っても、感情の面は別だ。彼女の傲慢さと自尊心の強さは外見からして明らかである。そしてそれ位の負けん気が無ければ、代表選手に昇るまでの杖腕を獲得するには至っていないだろうというのも容易に想像しうる。

しかし、薄暗い感情を呑み込んで、彼女は続けた。

「けれども、貴方は私わたしが一番だと言いました」

確かに、僕は彼女こそが一番だとハリー・ポッターに対して告げた。彼は結局その理由を聞くのを何故か打ち切ったが、それはやはり確かだった。

「しかしながら、貴方の周りには、それを言ってくれる人間というのは大勢居た筈ですが」

フラー・デラクール。

男性を悉く魅了せしめる女性に、疑問の言葉を投げ掛ける。

「代表選手四人の間には所詮一点、二点の誤差程度の差異しかないでしょう？　そして貴方の順位は、オリンペ・マクシム校長が公平で有るように自重し、ルドビッチ・バグマンが試合としての見栄えを重視し、更にはイゴール・カルカロフが自校の鼻貞を躊躇わなかった事が合わさってそうなったに過ぎない」

ハリー・ポッターが挙げていた俗っぽ過ぎる評価は兎も角、生徒間で「一位」が割れる事は、左程不合理であるという訳では無い。

趣味嗜好の差異以外に決め手を欠く位には、四者四様の試合は何れも見事だった。

「貴方は美人だ。御近づきになりたい人間など山程居るでしょう。君が最も良かったという賛辞と共に、齒の浮く台詞を付け加える位の事をやる者は大量に湧き出て来た筈ですが」

挑発と揶揄を籠めた言葉に、けれども彼女の瞳は少しも揺れなかった。

「それらはもう既に聞き飽きました」

「……だから、僕に聞きたいと？」

「ええ」

真つ直ぐと僕を見つめ、フラー・デラクールは問い掛ける。

心を覗き込む必要など無い。彼女は、他ならぬ僕の評価を強く気にしている。何時もの高慢さを多少押し殺してでも、真摯に僕に答えを求めようとしている。

ただ――

「僕が貴方にそれを語る義理は、全くもって存在しない」

――彼女は、ハーマイオニーでも、ハリー・ポッターでも無い。

僕が一々彼女に対して言葉を弄す利益を見出せないし、価値を感じても居ない。僕の評価は第一の課題時点での物に過ぎず、彼女を一位に挙げた所でそれ以上の特別性を感じても居ない。こうしてわざわざ直接求められようとも、自分と全く関係無い世界に存在している彼女に対し、自分の考えをペラペラ喋る気にもなれない。

……今年、このような状況で無ければ、間違いなくそうなのだが。

けれども、彼女の思い通りに――自分のままならない事など無かつたであろう美貌の女性の思惑通りに、話を進めるとするのは酷く癪でもあった。

ピクリと不機嫌さを露にした彼女に、僕は続ける。

「もし仮に僕から耳障りの良い言葉を聞けると思っているのなら、それは全くの筋違いです。僕は貴方に媚びようと思つてあのような発言をした訳でも無いし、今も同じだ。少しばかり愛嬌を振りまけば答えてくれると期待するのは、余りに見当違いの考えでしかない」

本人の前で評価をする事など、僕だつて余り好んで口にしたいたいと思わない。

こちらを明らかに軽んじられた上で、気安く聞きに来られるというのは御免だった。

「別に貴方は僕で無くても構わないのでしょうか？ 公然と貴方を一位に推す有象無象の一人として、偶々気にかかったから僕を呼びつけた。どうせそんな所――」

「――誰でも良い!? そんな訳が有りまーすか!」

僕の言葉を遮つて、彼女は感情を爆発させた。

自分としては、当然の論理を口にした筈だった。

けれども、彼女から返つて来たのは、予想以上に激しい否定と反発

の感情。深い蒼色の瞳は誰でもなく、他ならぬ僕だけを真つ直ぐ見据えていた。

「決まっているでしょう！ かつての貴方の発言に本気で腹が立ったからこそ、私は今貴方に聞きに来ていまーす！ ええ、平気で居られる物でーすか！ 代表選手残らず資格が無い!? 入学以来！ そして三校試合が決まって以降！ 私がどれ程努力し、どんな想いを抱えていたのか、貴方には決して解りっこないでしょう……！」

気取った高慢さをかなぐり捨てて、彼女は僕の胸倉を掴んでいた。呆氣に取られる所の話では無い。僕は完全に圧倒されていて、これが彼女の打算に基づく口撃ならば見事な物だった。

「この三校試合は私の優秀さを証明する絶好の機会だと考えられまーした！ このような、誰が見ても私を特別だと認めざるを得ない機会を待ち望んでいまーした！ そして、ゴブレットから名前が出た時、私が内心どれだけ歓喜したか！ ああ、けれども貴方は、その喜びに大いに水を差したのでーす！」

しかし、何故だろう。

彼女の顔は常の美貌から程遠く、心に溜め込んでいた感情が一気に露呈したが故に歪んでいる。普通の男であれば一目見てしまえば一瞬で恋も醒めてしまいそんな醜悪さで有りながら、けれども僕は、彼女のそのような表情にこそ惹き付けられて已まなかった。

「貴方は私がハリーと同様、まるで手違いで選ばれたように貴方は言いまーした。これまでの努力を、想いをコケにしたように感じたのです。そして、あの第一の課題が始まるまでの二週間、私が陰でどれだけの事を言われたか！」

「……………」

あの僕の言葉の焦点は、セドリック・ディゴリーにこそ有った。

だが、寮内から漏れ出た内容だったが故に正確さを失い、けれどもフラウ・テラクルにも刺さる言葉なのも確かだった。彼女が選ばれた際のポーバトンの女生徒達の失望は甚だしく、故に僕の理屈は救いにもなったのだろう。

一方で、彼女にとっては毒となった。

大人の世界で自身の特殊性を示し続けているビクトール・クラムとはまた違う。他人より少しばかり美人でしかないフラー・デラクルにとって、寧ろ美人である事こそが敵視される理由である彼女にとって、魔女としての実力に疑いを向けるあの指摘は痛烈に響いた。

それを恨みに思うのも、無理も無い話だった。

「けれども、ドラゴンの眼前に立たされた時、私は貴方の言葉の真意を理解したのでーす」

突如、すっとんと感情を落とし、フラー・デラクルは呟いた。

「ゴブレットから紙切れが出て来た事に、一体何の価値が有りまーすか？ 能力的にボーバトンで一番であったとして、あの不条理な怪物の前でどれ程の意味が有りまーすか？ 遙か三百年前、ゴブレットに選ばれてきた人間が死体を積み重ねてきたイベントこそが、トライウィザード・トーナメント三大魔法学校対抗試合だというのに」

ホグワーツ、ボーバトン、そしてダームストラング。

その中のたった四人の生徒だけが、あの脅威と恐怖を真に知っている。

「でも、ああして私は課題を達成する事が出来まーした」

ハリー・ポッターと同様。

フラー・デラクルは、あの結果をもって自身の資質と実力を証明した。第一の課題の達成をもって、彼女もまた真のボーバトンの代表選手となる事が出来た。

「そして、貴方は私を一番と評価してくれたと聞きまーした。ゴブレットから名前が出た事では無く、あの試合内容自体を見て。それも、煩わしいように寄って来る男達と違って、私とは全く関係無い所で、何ら打算も無く、媚び諂う事もせーずに」

「……つまり貴方は最初から、僕が貴方の意を惹きたいと思って発言したなどとは更々思っても居なかつた訳ですね」

「当然でーす。単に無礼なだけの人間の下にまで、わざわざ聞きには来ないでーす」

寧ろ、それ故に、今ここに彼女は居るのか。

「貴方が嘘を吐く必要も有りません。そして、それを知りたいと思う

のは、聞かせて欲しいと思うのは不自然でーすか？ 私^{わたし}は他でも無く、貴方自身の評価こそを聞きたいのです。代表選手全ての資格を疑い、そしてその上で尚、私^{わたし}を一番に挙げてくれた貴方の言葉を問いに来たのでーす」

彼女は真つ直ぐで、透き通っていた。

何も包み隠す事なく、己の心を僕の方へと開いていた。

……高慢で、いけ好かない女性だという印象が先に在った。

けれども、こうして向き合ってしまった時、彼女の本質はそれから掛け離れている事に気付かされた。あの第一の課題を見て彼女の能力に疑いを持つていなかったが、それでも僕は、彼女の人格という物を侮っていたのだろう。

フラー・デラクールは外見と同じく心も美しく、僕よりも遥かに上等な人間だった。

炎のゴブレットから名前が出るに相応しい、真のボーバトンの代表選手に違いなかった。

「——正直、買い被り過ぎですよ。僕の意図はそこまで深い意味は無かった」

だからこそ、僕は白旗を上げるしかなかった。

この女性を前にして尚、口を閉ざし続けていられる程に非情にはなれなかった。

「けれども、貴方にそこまで言わせて尚、僕が何も語らないというのは余りにも不義理過ぎるでしょう。そもそも余り勿体ぶる類の話では有りませんでしたしね。

——これはそう、僕の趣味嗜好の話です」

四者四様の第一の課題。

その優劣を決する基準は何処に有ったか。

「前提として、ルドビッチ・バグマンは第一の課題について、ドラゴンを出し抜く事だと言いました。それは目標である金の卵を奪い取る

事も含みますが、何にせよ、採点基準の重点はその点に置かれた筈ですし、そう有つて然るべきです」

僕が喋る気になつたのは伝わつたのだろう。

大人しく聞く態勢になつた彼女に、僕は続けた。

「その点で言えば、今回の課題の点数に大きな差異が出なかつたのも当然でしょう。貴方がた四人は何れもドラゴンを出し抜いてみせた。已むを得ず卵を破壊してしまつたビクトール・クラムですら例外では無い。結果、審査員に『受ける』手段を取つた二人が同率一位になりましたが、概ね正当に評価されたと言えるでしょう」

ハリー・ポッターの大減点を除けば、イゴール・カルカロフですら真つ当に評価していた。

もつとも、多少の裁量で許される一、二点の減点こそが、フラー・デラクルを四位へと押し下げた一因ではあるのだが。

「ただ、別に僕は公明正大な審査員でも、三校試合の帰趨を決すべき採点官でも無い。彼等の基準に乗る必要は有りません。個人的ミーハーさから貴方達を讃える事も批評の内であると同様に、全く別の観点から評価する事は禁じられても無いでしょう」

だからこそ、これは趣味嗜好の話なのだ。

「僕が見ていたのは、三大魔法学校対抗試合の課題として生徒が向かい合わされるのでは無く、果たしてドラゴン使いならばどう対応し評価するのだろうかという観点です」

僕が観察していたのは、彼等代表選手だけでは無かつた。

本職である彼等にもまた注目していたのであり、彼等は自分達が注目されている事に気付かなかつたからこそ、素直に評価を顔へと出していた。そして、その評価は、僕の論理と概ね一致する物で——つまり、フラー・デラクルこそが一位だと告げていた。

「ハリー・ポッターは試合として見事でしたよ」

プロのクイディッチ選手なら同等の事が出来るだろうが、それでも一発勝負、かつ十四歳時点で出来るかとなると首を傾げる者が殆どだろう。それこそ、ビクトール・クラム級の才能を持った人間しか真似出来ないに違いない。

「けれども、彼はドラゴンに自由自在に、そして縦横無尽に飛び回らせた。しかし、それは今回ドラゴン使いや三校長の監視の下、かつ非魔法族への隠蔽を気にする必要が無い程に広大で、魔法的守護にも満ちたホグワーツだから許されたに過ぎません。そうでなければ彼の行為というのは、国際機密保持法から見て明らかに不適切でしょう」

非魔法族関連で言えば忘却呪文で一発だろうが、魔法事故巻き戻し局の手間を煩わせないに越した事は無いし、ドラゴン使い本職であれば可能な限り避けようとするだろう。

「ビクトール・クラム。彼は戦闘として最も優れていた」

彼がホグワーツに来ていれば、その性格的な合わなさに眼を瞑ってでも尚組分け帽子がグリフィンドールに入れただろうという位には、その身は騎士という物を体現していた。

「しかしながら、結膜炎の呪文はドラゴンを傷付ける物だ。不可逆の損傷を与える物で有りませんし、あの程度の傷で野生に淘汰される程ドラゴンは脆弱では無いですが、痛みはドラゴンを暴れさせる。実際卵を破壊しましたしね。邪悪なドラゴンを殺す場合は兎も角として、保護する場合にはドラゴン使いは好んで使おうとしないでしょう」

第一の課題で用いた事自体を直接的に非難するドラゴン使いは流石に居ないだろう。

成人したばかりの素人に、殆ど抜き打ちで、一対一でもって営巢中の雌ドラゴンに立ち向かわせるという課題自体がそもそも無茶苦茶だったのだから。

けれども、本職である彼等からすれば、やはり余り歓迎出来ない手段である筈だ。

「セドリック・デイゴリー。彼は呪文の披露という面で最も巧みだった」

岩をラブラドルに変え、それをドラゴンに追わせる際に卵を取った。ハツフルパフの大先輩と似たようで有りながらも、レイブンクロー的でしたらあった見事な腕前だった。

「けれども、確実性に欠けた。彼は自分の知識と知略でもって隙を作りましたが、それは偶々上手く行ったと評されても仕方がないでしょ

う。客観的に見て、ラブラドルもセドリック・デイゴリーも、ドラゴンにとつての脅威とは成り得ないんですから」

空を飛んだ上でドラゴンの鼻先で挑発したハリー・ポッター、或いは結膜炎の呪いで痛撃を与えたビクトール・クラムと違う。

彼等は敵意を己に向けたが、全力で飛ばれてもブレスを乱射されても困るセドリック・デイゴリーは己から逸らそうとした。しかし、その難易度は前二者とは比較にならない程に高い。

例えば、ドラゴンがセドリック・デイゴリーを完全に無視するように眼を瞑って蹲ってしまったとしたら彼はどうしたのだろうか。また、鬱陶しい生き物が二匹以上居れば両方を警戒するのは当然であり、営巢中のドラゴンが自分の腹の下へと完全に卵を隠し続けてしまう可能性も有った。

勿論、それらの場合は彼も戦法を当然変えただろう。故にそのまま失敗したとは言わないが、ドラゴンの反応次第で失敗する策だったのは確かだ。結論として偶々あのスウェーデン・シヨートー・スナウト種、偶々あの個体だったからこそ、彼は大成功を収めた。

「彼の策や行動は緻密で繊細な物でしたが、それらは良い事ばかりでは無い。裏を返せば予定外の行動で簡単に壊れ得るという事です。ドラゴンを人に都合の良いように操る事が酷く困難なのは、第一次世界大戦中、ニュートン・スキヤマンダーが関わった作戦の逸話からも証明されている。実際、セドリック・デイゴリーも最後には燃やされかけましたしね」

ドラゴンがニュートン・スキヤマンダー以外を食い殺そうとするのを防げなかった為、大戦中には一つの作戦が机上のままに葬り去られた。

軍事に属する情報が表に出ているのは、その作戦が真実失敗したからだろうし、それまでの魔法史で幾度と無く繰り返されてきたが為に恥にもならないからだろう。

「……もう十分では無いですか？ これらは全て事後的な、幾らでも言える難癖です。そして、ここまで言えば、僕が貴方を最優だと評価する理由にも想像が付くでしょう」

眼を閉じて、黙って僕の言葉を聞いていたフラー・デラクールに告げる。

けれども、代表選手としての資質を持っている彼女は僕の手間を省いてくれる気は無いようだった。片目だけを開いて、口元を僅かに綻ばせる。

「それでも、貴方の口から聞きたいです」

「……………」

それに意味が有るのか、と重い息を長く吐いた。

ただ、彼女は逃がしてくれず、そしてここまで喋った以上、最後まで続けるしかなかった。

「代表選手三人。彼等はドラゴンを出し抜いた」

第一の課題として求められた事項を、間違いなく達成してみせた。

「けれども、彼等三人が立ち向かったドラゴンは、課題の後も元気一杯だった。ビクトール・クラムが対峙した中国火の玉種チャイニーズ・ファイアボールでさえそうだ。結膜炎に掛かっただけで、致死に至るまでの傷を負った訳では無かった。彼等は単純に隙を突いてドラゴンから卵を奪ったに過ぎない」

しかし、フラー・デラクールだけは違った。

「貴方はドラゴンを恍惚とさせ、殆ど無力化した。他三人と違って制圧した」

その効力は一時的で限定的で有った。

いびきを掻いていたし、試合終了後にドラゴン使い達が大量駆け寄ってきた際には直ぐに眼を覚ます位の、微睡みに似た代物でしかなかった。

しかし、そうであったにしろ、彼女は確かに無力化してみせたのだ。

課題達成が告げられると同時に、急いでドラゴン使い達が制止する必要が有った彼等のドラゴンとは違った。

「多くの魔法使いがドラゴンを魅惑したという意味を深く考えていません。そういう事も有り得るんだろうとしか考えなかった。けれども、そんな事が一人で簡単に出来るならば、ドラゴン一匹に対し、わざわざドラゴン使いが七、八名も対応する必要は無い」

都合四度。課題が終わった後、それは繰り返された。

勿論、安全を考えての人員というのも有るだろう。けれども、一人で制圧が出来るというのなら、彼等は魔法使い殺しM.O. M分類XXXXXの中で最も有名な生物となつては居ない。

「ドラゴンの皮膚は、古代の魔法が浸透した事によつて殆どの呪文を通さない。ステュービファイ失神呪文であれば、半ダースのドラゴン使いが一斉に使わなければならない程に。そして、ドラゴン使いはしばしばその手段を用いるという」

魅了と失神。効果は違うものの、導く結果は殆ど同じだ。

そうであれば、手段として手軽な方を選択するのが当然の筈だ。

……嗚呼、それが本当に手軽で、人員も要らず、難易度も等しいのであれば、そうしない筈も無い。

それにも拘わらず、ドラゴン使いがフラー・テラクルのように魅了しないのは何故か。

「つまり、魅了にしろ失神にしろ、容易くあの巨体は沈まない筈なんですよ。ドラゴンだろうが巨人だろうが、大きいという事は単純にそれだけ強いという事でも有る。彼等の皮膚や血肉が旧く強い魔法を帯びているともなれば猶更の話です」

失神呪文では数名の魔法使いが必要となり、しかし魅了呪文では一人の魔法使いで十分だというのは不合理なのだ。ドラゴンが魔法に強い耐性を持っている以上、魅了呪文で有つても数名の魔法使いで無ければドラゴンを眠らせられないと考える事こそ論理的である。

「マグル」の科学的観点から見ても同じ。

手段が麻醉銃だろうが注射器だろうが、人間用の麻醉を体内に打ち込んだだけでは、ゾウやキリンは眠つてくれない。それでは単純に強度が足りない。

人間の脳を容易く破壊し、心臓を止める程の強力な薬を、皮膚の上からでは無く体内に直接打ち込む事によつて漸く、彼等の暴走を止める事が出来るのだ。

けれども。

「けれども、貴方はたった一人でそれを成し遂げた」

フラー・デラクールは、その不合理を為し得た。

それが如何なる術理による物かは僕には解らない。血筋か、或いは単純な才能か。何れにせよ、あれは尋常ではない技だった筈なのだ。他の三人には再現性がそれなりに有るように見えた。

ハリー・ポッターならプロのクイディッチ選手であれば、ビクトール・クラムなら腕の良い決闘士であれば、セドリック・ディゴリーなら経験豊富な魔法生物学者であれば、それぞれ同じ事は出来た筈なのだ。十七歳——十四歳が混じっているが——という年齢制限さえ無ければ、かつ試合での一発勝負という条件で無ければ、どれも相応に可能だと思えた。

しかし、フラー・デラクールと同じ事を、一体誰が出来るのか解らなかつた。

思いつくのは精々アルバス・ダンブルドア位の物で、けれどもあの老人も大概例外的な存在である。だからこそ、彼女がそれを為し得た原理が不明だった。

「確かに、審査員が評価しなかつた理由というのも解りません。そこまでに至る道程は、貴方の美貌からは考えられない位に不格好でした。貴方はあの魔法を幾度か掛けて手酷く失敗しましたし、特に最後の油断に関しては、結果としてスカートに火が付いただけで済んだと言っても、ドラゴンの前という点を考えれば良く無かつたでしょう」

そして、もう一点。

「加えて、やはりあれは試合としての派手さに欠けました。ビクトール・クラムやハリー・ポッターには当然、セドリック・ディゴリーにすら劣っている。それを審査員のコメント無しに的確に評価するというのは、どう考えても困難過ぎます」

試合なのだ。課題なのだ。評価の対象であり、点数を付けられるのだ。

審査員が安易に流されるとは思わないが、観客の雰囲気というのは大事である。ああいう形で大衆に披露される形で行われたともなれば、より一層無視出来ない要素だろう。

嗚呼、それでも尚。

「ただ、あの魔法だけは。ドラゴンを恍惚状態へと墮とし、魅惑しきつてみせたあの瞬間だけは、僕には誰よりも優れていて、酷く美しい物に見えた。そしてそれこそが、僕が第一の課題において貴方を最も優れていたと評した理由です」

「……あれは私のおばさまの魔法でした」

依然眼を瞑ったまま、フラー・デラクールはポツリと呟いた。

「成功率は、貴方が思っている程に高くなかったです。そしてまた、そもそもドラゴンに対して通じるという保証も有りませーんです。けれども、私はドラゴンに対してそれ以上の手段というのは持ち合わせて居ませんでーしたし、やるしか無かったですでーす」

「……………」

彼女の独白は、弱さを示す物。

フラー・デラクールという女性が、世間には見せるべきではない物。

……改めて思う。代表選手の中で最も危なげなく課題をこなしたのは、意外にもハリー・ポッターであったのかも知れないと。

考えてみれば、イゴール・カルカロフが真つ当に採点したのであれば、彼こそが順当な、それもぶつちぎりのトップだった。

それは審査員が十四歳に対して甘めに点数を付けたが故だ——やむを得ない事で、当然とも言える——と思つて居たが、僕より遙かに経験を積んだ魔法使い達には、僕の見えていない点が見えていたとも取れる。

「ええ、本当に私の選択を褒めたいです。貴方が単に代表選手を扱き下ろすだけの存在などでは無く、正しく真実を見てくれる魔法使いだと考えた事を。そして、自ら貴方の下を訪れてまで話を聞こうとした事を」

「……まあ、満足したのならば何よりです」

自分の胸に右手を当てながら感慨深そうに呟いた彼女に、僕はそれ

以外の言葉は持ち合わせていなかった。というより、一方的に僕を拉致同然に連れ出して、聞きたい事を聞くだけ聞いて勝手に満足している人間に対して他に何と答えれば良いのか。

「では、先輩も気が済まれたというのであれば、僕は戻らせて貰いますよ」

話は終わった。

フラー・デラクールも、これ以上僕を必要としないだろう。その確信と共に、僕はローブを翻して教室の出口へと足を向けた。

彼女に連れ出された姿が広く見られている以上手遅れだとはいえ、さっさと図書室に戻れば傷は最小限で済むだろう。

第一、僕は自分が一度取り掛かった作業を途中で邪魔されるのが余り好きでは無かった。アラスター・ムーディ教授の課題は今日中に済ませておきたいと当初から考えていたし、そのつもりだった。

そう思考しながら、しかし軽い抵抗が僕の歩みを妨げた。

それはローブが後ろから掴まれたからだというのは、感覚として解った。

「……まだ何か？」

それを為し得るのは、当然フラー・デラクールしか居ない。

疑念と共に振り向いて問えば、何故か彼女は慌てた表情を浮かべた。

「え、えーえと、そう。そうです！ 貴方はユール・ボールで踊っている相手が既に決まっているのですか？ 先程は聞くのを忘れていました」

「……それを今聞く意味が解りませんし、またクリスマス。また、ユール・ボールですか」

過剰な程に焦りながら紡がれた唐突な言葉に、痛んだ額に手を当てる。

マルフォイもハリー・ポッターも、そしてフラー・デラクールですら僕が誰と踊るかに関して余計な興味を持ち過ぎだった。

そしてたった三人とは言っても、僕の交友関係の狭さからすれば割合が多過ぎる。現在疎遠となっているハーマイオニーは除外される

以上、フラー・デラクルのせいで百パーセントを超えたような物だった。

「答える義理は無いですが、隠す意味も無いので答えましょう。僕にユール・ボールの相手は決まっていますし、今後もそのような相手が現れる事も無い筈です。貴方が言ったように、僕はホグワーツでは悪評塗れで嫌われている。楽しいクリスマスなど期待出来ませんよ」「そうなのでーすか。ま、まあ、貴方らしいのかも知れませーん」「ええ。そうでしょうとも」

僕の言葉に、フラー・デラクルは恥じらうように俯いた。

それで会話が途切れてしまいが、立ち去ろうとする僕をわざわざ引き留めたからには、何か聞きたい事を思いついたのだろう。であれば、さつさと本題に入って欲しい所である。

しかしながら、俯く前にチラリと見えた彼女の瞳の色に、僕は酷く心惹かれる物が有った。

ユール・ボール。

それは僕にとって一貫してどうでも良い事象だ。今回の「犯人」が間違いなく行動するとなれば流石に別だが、その気配も無い以上左程興味を持ってない。この瞬間とて変わっておらず、先の仕返しとしてフラー・デラクルが誰と踊るかを聞く気にすらならない程に関心が無い。

けれども、彼女の存在自体に初めから関心を持っていなかったと言えれば間違いであった。彼女は僕の良く知り得ない人間であり、代表選手であり、今回の容疑者の一人ではあつて——しかも、僕が更に関心を向け得る相手が傍に居る。

そして、先に見えた色は、間違いなく僕への好意だった。

——本音を言えば。

僕は最初から彼女に対して期待など抱いていなかった。

フラー・デラクルはホグワーツでは無くゴートン生であり、三校試合の代表選手であり、並外れた美貌を持つ高嶺の華である。

接点など持ち得る事など無いと諦めていたし、そして、僕の言葉に答えてくれる程の親切さを発揮してくれるような人間では無いと見

ていたし、個人的に話をする所か近付く事自体が不可能だと思っていた。

けれども、如何なる因果か、フラァ・デラクールはこうして僕の前に立っている。

無理矢理連れ出された上に、彼女に言った訳でも無い自分の発言を解説させられた事に辟易していたが故に今の今まで忘れていたが、現在の状況は非常に好都合なのは確かだった。

「丁度良いですから、フラァ・デラクール。僕にも聞きたい事が一つありました」

「は、はいっ……！」

フラァ・デラクールは跳ねるように背筋を伸ばした。

……何故そこまで畏まるのか解らないが、聞きたい事はそれ程大層な事では無い。些細な、というには軽い情報でも無いが、少なくとも彼女に関わる内容でも無かった。

緊張で感情を覆い隠した銀の美貌に、僕は問い掛けた。

「オリンペ・マクシム校長。彼女は一体どういう女性なんです？」

「……………」

忌避されている事は、決して悪い事ばかりでは無い。

例えば、マルフォイがやっているような社交、或いは「非主流派」がやっているようなご機嫌取りの真似をしなくて済むのは解りやすい利点だ。

他ならぬマルフォイ自身が寛容にも許しているという部分も有るが、結果的に楽を出来ているのは事実である。今年はその無いが、休暇中にパーティーの招待状を送り合ったり、学期中であっても寮内でのささやかな夜会に参加したりせず、家や寮のベッドに引き籠っていても何ら文句は言われないからだ。

ただ、一つだけ困る事が有るとすれば、今回のように何かを知りたいと考えた場合、その情報を得る為の手段が限られるという事であ

る。

特に、図書室に置かれている『日刊予言者新聞』の記録、或いはハーマイオニーやマルフォイから情報が得られないような場合、僕は基本的にそこで手詰まりになる。

如何に身内大事の察と言つても、僕と他のスリザリン生は気軽に情報を教えてくれる程気安い関係では無い。流石にマルフォイが直々に聞けば別だろうが、彼はそこまで僕の為に骨を折ってくれるまでは親切だとは言えない。

そして今回求める情報、つまりオリンペ・マクシム校長が“犯人”であるか否かというのは、やはりマルフォイから得られはしない。彼の家の由来からして、聞きさえすれば通り一遍の内容は得られるだろうが、彼がマルフォイ家当主でも死喰い人自体でも無い以上、核心部——ルビウス・ハグリッドと同種の彼女の人物像を探る為には不適當だった。

故に、フラー・デラクール。

彼女に近しい教え子の口から直接聞きたかった。

「オリンペ・マクシム校長は見ての通りに存在感が有り、非常に気になる女性です。だからこそ、貴方から聞きたい。彼女は一体どういう女性なのか、その印象を」

ルビウス・ハグリッドと同様、彼女の出自を僕は確信している。

そして、巨人は闇の生物であり、今まで迫害されてきた存在だった。彼女のような混血として死喰い人からすれば歓迎出来る存在では無いが、これまでの魔法使いの世の中として生きにくいのは同じなのだ。憎悪や復讐を原動力として、彼女は闇の帝王の下に走る動機が存在する。

加えて、この銀に輝く女性が闇の陣営には遠いのは直感として強く有った。

少しばかり自分の行為を賞賛されただけで、僕へと好意——友好の情を僕へと抱くような軽い人間は、スリザリンの気質では無く、想定し得る今回の“犯人”像からも遠い。

故に、彼女は此度において情報を得る相手としては相当であり、迂

闊ナルビウス・ハグリッドや異例のバーテミウス・クラウチ氏程までは期待しないものの、僕に対して多少口を軽くする事を期待しうると踏んだのだ。

「――貴方は」

フラー・デラクールは何時の間にか下を向いている。

重力に惹かれて前に垂れ下がった長い銀髪が、彼女の表情を覆い隠していた。

「貴方は本気で私わたしに……この私に、校長の事を質問しているつもりなのですか？」

「？ 当然ですが。知りたくも無い事を質問する筈が――」

無いでしょう。

その言葉尻を思わず飲み込んだ。

顔を上げた彼女の瞳の内には、怒りの灼熱が荒れ狂っていた。

「少しばかり貴方には見所が有ると思いまーしたが、まーさか私の前で、しかもこのタイミングで、他の女性の話をされるとは全く思っても居ませんでーした」

微かに震えている言葉尻が、彼女の激情を余計にはつきりと伝えてくる。

……理屈が解らないが、彼女の地雷を盛大に踏んでしまった事は明らかだった。

「しかも、貴方が望む情報を得る為にしても、全く機微の欠片も有りません！ 自身が知りたいにしても、そんなにも直接的な聞き方が有りまーすか！ その有様で、一体貴方はどうやってこれまでのホグワーツで過ごして来たのでーすか……！」

「……いやまあ、今までこれで通用して来た物で」

「なら貴方の周りの人間が可笑しかったのでーす！」

そう言われても、自分の気質というのは簡単に変わる物では無いだろう。

僕の交友範囲というのは狭く、尚且つマルフォイやハリー・ポッターとすら良くも悪くもホグワーツ生活を四年程共にしている。ハーマイオニーだけではなく彼等ですら、今更僕が聞きたい事だけを聞い

た所で不満や文句を言ってくる程、物分かりが悪い人間では無い。

「そもそも何故、マダム・マクシームの話題がここで出て来るのでーす!?! どうして、彼女をユール・ボールに誘えるかを私に聞くんではないか!? そもそもあの流れは、完全に貴方が私をユール・ボールに誘う雰囲気だったでしょう……!」

その言葉に一瞬呆けて、しかし一つの納得を得た。

「……嗚呼、成程。確かにユール・ボールの話題の後に続けた以上、そう聞こえなくも無い訳ですか。その発想というのは有りませんでしたよ」

「寧ろ! その発想しか! 無いでーしよう!」

フラー・デラクールは息を荒げて断言する。

僕にとつては既に終わった話だったから、頭から抜け落ちていた。考えてみれば確かにその通りだ。彼女の誤解は、話の文脈からして突飛では無い。突飛では無いが、それが論理として妥当かというのは別の話だろう。

「ただ、僕がオリンペ・マクシーム校長を誘うのは流石に無茶が有るでしょう。人格等は未だ僕が知らないので置いておきますが、そもそも彼女は僕と比べて余りにも大き過ぎる」

「ええ、そうでしょう! 貴方は私と同じ位です!」

別にそこまで勢い良く肯定されなくても、僕がルビウス・ハグリッド大の女性と踊るのはどう考えても不格好だと想像するのは容易い。「第一、何故そんな勘違いを僕がすると思っただんです?」

誤解も甚だしいし、やはり論理として明確な欠如が存在する。

「貴方は最初に、僕をユール・ボールに誘いに来たのではないと言ったでしょう? 同時に貴方と僕は釣り合わないとも。その評価は全くもって妥当ですし、僕も自惚れはしませんよ」

「それは——」

途端、フラー・デラクールは先程までの威勢を失い口籠った。

「そして当然ながら、貴方が未だ相手を決めていないとも考えても居ない。良い商品から売り切れるというのは市場の原則であり、寮監がユール・ボールを告知してから既に五日。しかも休日である土日を挟

んでいる。貴方のような美しい女性が相手を見付けるには十分過ぎる時間では有りませんか？」

彼女は僕のようにパートナーを探すのに苦勞する類の人間とは違
う。

「貴方には黙っていてもパートナー希望者が山程行列を為した事でしようし、仮に貴方が踊りたい相手が居たとすれば、自ら一度申し込めばそれで終わりではないですか？ 故に、未だに決まっていないという可能性を考える事自体が不自然でしように」

そこまで口にして、けれども少なくとも昨日まで相手が決まっていない、決まっていない事自体が可笑しな人間が居た事を思い出した。ただ——やはり彼、ハリー・ポッターとは違うだろう。

彼は交友関係が狭く、切羽詰まってもいないのに相手を誘う程に積極的である訳でもなく、傍にハーマイオニー・グレンジャーが居る。一般的に見て女性からは誘いにくい状況では有るだろうし、そもそも彼は一晩の相手を探し求める程に良い性格をしていない。

「……つまり、私がわたしパートナーを決まっていなければ変だど？」
「ええ。考えられませんかよ」

断言する。

「寧ろ異常事態ですよ。如何に貴方が明らかな高嶺の華で、表面上高慢で鼻持ちのならない女性のように見えても、流石に目ぼしい男性からは軒並み断られたとか、この五日間でロクでもない男だけしか寄つて来なかったとか、そういう事は無いでしよう？」

揶揄を含みはすれど、僕の言葉に疑問は無かった。

フラー・デラクールが本質的には素直な女性であるというのは既に解っている。

節操無く男を魅了しかねない圧倒的美貌は、彼女に鎧を身に着ける事を余儀無くさせられたのだろう。対人関係という面では、恐らく彼女は僕より酷い。僕は最初からそれを作れなかったが、彼女は作っては破壊するという事を繰り返さざるを得なかったであろうからだ。

故に彼女は刺々しく、しかしその鎧の下には驚く程純粋な心が秘されている。

それを見抜けない節穴ばかりでは無いだろうし、それが見抜けるからこそ良い男の筈だ。そしてホグワーツ、ボーバトン、ダームストラングには数百人も男が居るのだから、そのような人間を見付ける事も難しくは無いだらう。

「……ええ、そうですね」

肯定の言葉。

それと共に、彼女は眩い程に煌めく笑顔を浮かべていた。

けれども、それに対する感想は美しいとかでは無く、単純に恐ろしいという物だった。

「このフラー・デラクールとも有ろう者が、未だにユール・ボールのパートナーが決まっていない事など有り得ませーん。貴方の言う通りです。正解です」

……このような類の笑みを、ハーマイオニーも幾度か浮かべた事がある。

例えば、彼女の家を始めて訪れた時。ハーマイオニーを放り出して彼女の父親の蔵書に夢中となっていた僕を外へと叩き出した際に、これと全く同種の物を見た物だ。

つまるところ、これは本気で激怒している瞳だった。

「それで」

彼女は、その笑顔と美貌を僕へと近付ける。

何時の間にか絡め取られていた手が、僕が距離を取るのを許してくれない。

「私は相手を決めまーした。一方で、貴方のユール・ボールのパートナーは未だに決まっていなーい。それは、間違いないですか？」

「……確かにその通りですが、僕は何も困りませんよ。クリスマスは帰宅する予定——」

「——決まっていらないのですね？」

「……ええ」

僕は頷くしか無かった。

近付いて更に解る美貌以上に、彼女の迫力が有無を言わせなかった。

「ただ——だからと言って何なのですか？　今更悪評を気にする身でも無いですが、まさか一人で参加して恥晒しになれとでも？」

「……っ」

率直な疑問は、けれどもフラー・デラクールは良く効いたようだった。

「それとも、貴方が僕の相手を見付けてきてくれるという訳でも無いでしょう。面と向かって言うべき事では無いかも知れませんが、貴方はボーバトンの女生徒から敬遠されている。少なくとも、貴方から男を斡旋されるような真似は御免でしょう」

彼女が代表選手に選ばれた時のボーバトン生の反応は、未だに記憶に残っている。

マルフォイ以上に、彼女が僕に宛がうような女性を用意出来るとは思えないし、嫌がらせに賛同する女性が居るとも考えられない。そもそもマルフォイと違って、僕の悪評がホグワーツ内でどんなに広がるかとボーバトン生は気にしないだろう。

実際、彼女は凶星を突かれたように怯み、しかし、それもほんの少しの間の事。何か良い考えを思いついたというように、彼女は美貌を直ぐに輝かせた。

「良い事を思いつきまーした！」

実際、彼女は言葉にしてくれた。

先の笑顔とは違う、彼女の美貌を余計に映えさせる笑顔だった。

こんな状況で無ければ、純粹に美術品を見る気持ちで観察出来たのだが、その表情も言葉も不吉な予感しかしない。彼女にここへと連れて来られた事自体が僕にとって面倒事であるのは言うに及ばないが、それでも更なる災厄を運ぼうとしているのは歴然としていた。

「ええ、^{わたし}私が貴方にパートナーを紹介してあげまーす！　それも私に^{わたし}負けない位に素晴ーらしいレディでーす！　貴方が独りでパーティーに来て恥を搔く事も有り得ませーん。貴方もきつと大満足すーる事でしょうー！」

「……………」

そう強く保証されても、全く安心出来ないのは何故だろうか。

そして彼女の様子を見ていて、ふと思った。

「……何となく、自棄になってませんか？」

「一体誰のせいですか！」

フラー・デラクルは強引で、横暴だった。

彼女が不吉な宣告をしてくれた翌日の昼の事、わざわざ彼女は再度僕を呼び出した。それも、他のスリザリン男子によつて僕を外に連れ出させるという、滅茶苦茶目立つ方法だった。ハリー・ポッターとはまた別の方向性で彼女は周りの眼を気にしておらず、そして僕にとつて迷惑なのはどっちもどっち——いや、やはり彼女の方が実害が大きかった。

フラー・デラクルがボーバトンの女生徒から嫌われている第一の原因はその類稀な美貌だろうが、やはりその性格も一役買っているように思う。彼女は余りにも無神経だった。

その彼女は、一見して明らかな程の喜色を顔に浮かべていた。

「私が休暇に入るのを待ってでは無く、観光の為に彼女達が早めにこの国に来ていてくれて助かりまーした。本国にふくろう便を送つていては、帰つてくるまで時間が掛かりまーすからね。本人に聞いてみた所、彼女も是非貴方と踊りたいと言つてくれまーした」

そう言つて、フラー・デラクルは写真を取り出す。

既に悲劇が予想出来ていたが、僕には渋々それを見る選択肢以外は残されていなかった。

「彼女が貴方の相手でーす」

そして、最早天井を仰ぐ気にも、溜息を吐く気にもならない。

彼女から渡された写真、こちらに向かつて手を振り笑顔を振りまく女性が一体誰なのか、わざわざ彼女に対して問う必要は無かった。

確かに美人、いや美少女では有る。

何せフラー・デラクルのミニチュア版なのだから。

しかし一番の問題はその点では無い。

オリンペ・マクシム校長の場合とは完全に真逆だ。

どう考えても、その写真の少女は僕と比べて余りに小さ過ぎた。恐らく、ホグワーツ基準では入学まで後二、三年の時間を待つ必要が有るだろう。そんな相手をユール・ボールに僕が本気で連れて行くともなれば……まあ、どんな事になるかは解り切っている。

どうやら彼女は、僕の悪評を更に一つ増やそうとしているらしいかった。

そして。

「デラクール。幾ら妹をユール・ボールへ参加させたいと思っても無茶が過ぎます。四年生以下だから良いと言いますが、三校の学生で有るのは当然の前提です。そもそもユール・ボールは夜間、八時から十二時まで行われるのですよ？ 途中で退出すると言っても、八、九歳にしかならない女の子を連れまわすのは余りに不適當です」

クリスマスに残る申請を出せとフラー・デラクールに詰め寄られた後。

已むを得ず彼女と共にミネルバ・マクゴナガル教授の下を訪れ、事情を聞いて一瞬で怒り心頭になった教授から、僕達はくどくどと説教されていた。

「貴方も貴方です、レッドフィールド。貴方ならばデラクールを如何様にも止められたでしょう。貴方が時折常識を欠くのはこの四年で良く知っています。このような愚行を犯す人間だとは思っても居ませんでした。どうやら評価を改める必要が有るようですね」

彼女が見切り発車で動いたという抗弁を口にする暇すら許されなかつた。

フラー・デラクールの突飛な思い付きは、ホグワーツの風紀を担う女帝から真正面から普通に却下されたのであり、その理由としても至極妥当で当然の論理だった。

ズルい人

半ば巻き込まれ事故とは言え、関わってしまったのが運の尽き。

昨日、そして今日。

二連続、それも今日に限っては二回も僕は彼女に関わる羽目になり、昨日とはまた別の空き教室へと連れ込まれていた。

もつとも昨日や今日の昼までと異なり、今の彼女は美貌を完全にくすませている。

人間というのは内心の感情でここまで外見を左右されるのか。そんな感慨を抱くと共に、けれども流石に口にはしなかった。彼女——フラァー・デラクールが、自分の齎してしまった愚行の結果を受けて、本気で沈み込んでいるのは解るからだ。

ミネルバ・マクゴナガル教授の正論によって本日の昼には彼女の戯言が却下されたのだが、彼女を真に打ちのめす報せは放課後にやってきた。

教授が知らせたのか、彼女の妹から親が聞き出したのかは解らない。しかし、本日の授業終了後には必然のように、両親から大反対と御叱りの言葉が記されたふくろう便が届いたと聞く。というか、彼女が先程自ら教えてくれた。

僕に親の気持ちなど理解出来なくとも、世間一般的にそう判断するのが普通だと判断出来る位の頭は有る。ボーバトンではない他校の生徒、それも昨日今日初めて会ったような相手に魔法魔術学校入学前の子供を任せ、尚且つ夜から始まり真夜中まで続くようなパーティーへと参加させる。どう考えても非常識であり、要望が通る筈も無い。ただ、フラァー・デラクールにとっては酷く傷心する出来事だったらしい。

その一番の原因は、馬鹿げた計画が教授や両親に撥ね付けられた事では無く、昨日から散々自慢してきた妹にこそ有るのは明白だった。

「で、妹さんは一体何と仰っていました？」

「……お姉さまだけズルいと」

フラァー・デラクールは僅かに唇を噛みながら、呟くように答える。

つまり、両親からの手紙と共に、妹からの手紙も同封されていた訳だ。

フラー・デラクールにとって酷な気がするが、親達が自業自得だと切って捨てたのか、或いはガブリエル・デラクルールの強い主張に折れざるを得なかったのか。

何れにせよ、単にその言葉のみが書いてあった訳でも有るまい。親に楽しみを却下され、姉は頼りになりそうもなく、結果として不満と文句の言葉が散々書き連ねられていたのだろう。

「——全く、下手な希望を持たせるからいけないですよ。彼女には初めから参加資格の無い以上、そもそもダンスという発想が無かったでしょうに」

余り気が進まなかったが、それでも言うっておかなければならなかった。

必要も無いのに飽を見せびらかすからこうなる。

彼女にとつては元々食べる権利のない飽であり、それを楽しみにしていたのは全くの勘違いと思ひ込みでしかないのだが、それでも彼女は姉によつて飽を取り上げられてしまったと考えているだろう。人の心というのは数字上の帳尻のみで納得するようには出来ていない。

「聞いていませんでしたが、そもそも一体どういう考えで僕に妹と踊らせる気になったんです？ まさか妹への嫌がらせの為に僕を引つ張りだそうとした訳でも無いでしょう？ 第一、姉が妹の行動を一方的に決めてしまうというのも、やはり筋違いな話だと思ひますが」

「それは……」

確かに彼女を称賛はした。しかし、だから妹と踊れという論理が解らない。

世の中の全てが論理で片付く訳では無いのは頭では理解しているが、今回のフラー・デラクールには、相当な飛躍が存在しているように思える。

「……確かに、冷静さを欠いていたのは貴方の言う通りです」

何時もの高慢さを潜め、しよげきった彼女は呟く。

「ただ、貴方とガブリエルを踊らせるのは悪くないアイデアだと

思ったのでーす。私が言うのも何ですが、ガブリエールは非常にちやほーやされてきまーした。私も非常に大事にしていまーす。そして、彼女は今でも可愛らしいですし、美しくなっていくでしょう。けれども——それは決して良い事ばかりでは有りませんから」

彼女の瞳に浮かぶのは痛みであり、自身と同じ目に遭って欲しくないという愛だった。

「私達に寄ってくる男達には酷い人間が少なくないのでーす。丁寧や親切、そして善意。私達はそれを恋や愛だと錯覚しがちでーす。けれども、それらは打算と欲望、更には悪意の刃が潜んでいる事がとても多いのでーす」

「それで、僕は妹の教訓となる悪い男役ですか」

口の端を曲げながら皮肉を紡げば、しかし彼女は首を振って微笑んだ。

「いいえ。貴方を一つの見本として欲しいのでーす。私^{わたし}達の熱に浮かされていけない人間と言うのがどういう類の存在であるか、貴方を見れば本当に簡単に解りまーす。貴方は余りにも解りやすい人^{ひと}でーすから」

「それはまた——」

ほんの少ししか会話していないのに、随分と信頼された物だ。

「だから、貴方とガブリエールが踊るのは、彼女にとつて非常にプラスだと思いまーした。早過ぎるという考えも私^{わたし}には有りません。彼女^{わたし}は私に似て賢く、そして早いに越した事は無いのでーす。私^{わたし}達は、自分の力を常に制御出来る訳では有りませんから」

「? 制御……?」

単なる思い付き程度の物だと考えていたが、彼女の行動には一応思惑——論理的な、とは決して言わないが——が有った事は、話の流れから察する事が出来る。それも彼女、いや彼女達にとつてはかなり切実で、決して軽く扱えない問題だという事も。

そして、今まさにフラァー・デラクールは、その理由を探る手掛かりとなる言葉を口にした。

「制御しなければならぬ何か有るのですか? ……いえ、そう言

えば、貴方はドラゴンを魅了した魔法について自身の祖母の魔法と口にしながら、具体的に触れませんでしたね。まあ、貴方が意図的に隠したような女性では無いとは考えてはいますが」

話の流れとして詳しく語る必要が有る部分では無く、旧い家系には秘密の魔法というのが有っても不自然では無いと考えられたし、そもそも僕も興味を持って聞こうとしなかった。彼女の祖母が如何なる人間だろうが、あの時点においてはどうしても良かったからだ。

けれども、事ここに至っては聞かすには居られなかった。

「貴方の祖母は、一体どんな方だったのです？」

「多分貴方の推測通りです。私のおばさまはヴィーラでした」

その瞳に卑下の色は無く、自身の魅了呪文に胸を張った時と同じ誇りが有った。

けれども、彼女は信頼出来ない人間の前で濫りに口にしない程度には、その意味の重さと風当たりの強さを人生で知っており——そして、僕にとっては災厄を告げる言葉でも有った。

「……既に詮無き事ですが、もう少し早く教えて欲しかったと思いますよ」

危うい所だったと、思わず天井を仰ぐ。

彼女の妹と踊らされていた場合、ハーマイオニー・グレンジャーよりも言い訳が聞く—— hogwatts 四年生が異国の八、九歳程度の少女を誘うという構図は余りに馬鹿馬鹿し過ぎる——が、それでもロクでも無い騒動を彼女に招く事に成りかねなかった。

いや、この状況も良くない物ではある。

昨日の図書室から始まり、彼女と共に居る姿を見られ過ぎている。

「一応聞いておきますが、hogwatts 内でそれを知っている人間は？」

手遅れとは言え、被害を確認しておく必要が有った。

「ええと、ポーバトンの人間は当然知っています。後は、杖調べの時に居た人間も知っています。私の杖の芯は、祖母であるヴィーラの髪の毛ですから」

「……そうですか。それらは仕方ないとして、今後は一切口にしない事を勧めますよ」

「つ。ヴィーラの血を引いている事がそんなにも駄目なのでーすか？」

「気を害した事は謝ります。そして僕は誓って、貴方の血で差別する事は有りません」

ハーマイオニーに対する物と同じように、僕はそれらの差異に価値を見出さない。

「ただ、貴方を混ざり物だと嘲笑する人間は、この国ではそれなりに多いんです。十三年前の戦争で掲げられた純血主義の火は、未だにこの国に燻っている。見目麗しいが故に許すという単純な人間も居ますが、定義的には貴方は迫害の対象だ」

「……嗚呼、そう言えーば。この国は死の飛翔ヴォルデモという馬鹿げた名前の犯罪者に良いようにされていまーしたね」

かの闇の帝王を呼ぶ発音が彼女の母国流の物だったにせよ、紡いだ言葉の内容は、ハリー・ポッターの比では無い位に考え無し過ぎた。

「……少なくとも校内では、そのような台詞を口にしないでください。三大魔法学校対抗試合の危険の比で無い、対岸の大火事に巻き込まれたくないならば。絶対に、何が有っても」

意思を籠めて言えば、フラー・デラクールはピクリと震えた。

そして、恐々と僕の方を見た後で、数秒掛けて首を縦に振った。言葉で示してくれなかったのは些か不満だが、一応受け容れてくれたと納得するべきか。こうして忠告してまで尚、この状況で命知らずな真似を為すのであれば、流石に自業自得と言うべきだろう。

「……まあ、それは良いです」

僕の言葉に、フラー・デラクールは安堵したように息を大きく吐いた。

「ヴィーラの事にしても、僕としては余り宜しくない問題ですが、事前に知れただけ良いと考えるべきでしょう。そもそも、ミネルバ・マクゴナガル教授に却下された以上、彼女とダンスをする未来自体が有り得ない訳ですが」

僕にとってみれば、非常に幸運だったと言える。

色々な意味で救われたとも言おうか。ホグワーツに入って、いや

教授と出会ってから二番目に大きな感謝を捧げるべき出来事だったと言えるかもしれない。

けれども、彼女は僕を咎めるように言葉を差し込んだ。

「でも、ガブリエールは踊る事を楽しみにしていました」

「……別に僕とでは無いでしょう」

「もう同じ事でーす」

力無く、自嘲するようにフラー・デラクールは笑った。

「貴方も今年の最初にドレスローブの準備するように言われたでしょう？ 当然、ポーバトンの代表団も同じであり、私達は——母は、張り切って新調をしました。そして、妹はまだ小さいですから、一緒に買い物にも行ったのでーす」

「……嗚呼、そこで姉のドレス姿を見て羨ましくなった訳ですか」

そして彼女の脳裏にはその妹の憧れと不満の表情が強く焼き付いていたのであり、偶々都合良く扱えそうな人間が居たからこそ、これ幸いと利用する事を思いついたのだろう。

それでも、妹を一時とは言え知らぬ男に預けるのだから不用意以外の何物でも無いし、妹の行動を勝手に姉が決めてしまうのは姉妹の在るべき姿として如何な物かと思うのだが——それでも、無道な事をする人間では無いという程度には見込まれたと好意的に思うべきか。

既に整理を付けているとしても、クォーターヴィーラの立場が偏見と侮蔑に塗れているというのは、彼女が十七年で良く実感しているのかもしれない。彼女がポーバトンの女性達に好かれているように見えないのは、彼女の美貌や性格のみに由来する物でもないのだろう。

「でも、発端は既にどうでも良いでーす。問題はガブリエール、今のあの娘の事でーす。そんなつもりが無かったとは言え、私の不用意な行いで彼女を傷付けてしまいまーした。ホグワーツ、異国の学び舎がどんな所か、彼女は非常に楽しみにしていたのでーす……」

「……まあ確かに、ドラゴンへ挑む姉の姿を九歳程度の子供に見せる訳にも行きませんか。三大魔法学校対抗試合がどういう物か親は理解していますから観覧を自制しますし、課題の内容を明かせずとも魔法省が止めるでしょう」

もつとも、ホグワーツ^{十一}一年生に見せたのも大概では有るのだが。四年生であるハーマイオニー・グレンジヤーに関して言っても、彼女の両親が今回の一件について詳しく——つまり、親友がドラゴンに喰われそうになる光景を娘が見させられた事——聞けば、そのまま意識を喪いかねない。如何に魔法使いの常識と倫理観が緩いと言っても、親が子の精神を心配する気持ちはそう変わりはないだろう。

そして、今回に拘る理由も一応は理解出来る。

仮に三大魔法学校対抗試合が今後開催され続けるとしても、単純に周期で考えるならばホグワーツは十五年後。どう考えてもガブリエル・デラクールはボーバトン^{十二}を卒業しており、仕事で縁が有るといふ事が生じない限り、彼女が真つ当にホグワーツの学校生活に立ち入る事は無いと言ってもいい。

だから半ば暴走のような真似をしたとは言え、何らかの形でこの祭典に関わらせてあげたいというのは、姉としての全くの本心からの行動なのだろう。軽拳で無軌道で、その上余りにも身勝手な事ばかりで、完全に否定出来なくとも——如何に僕で有っても、その開かれた心から伝わってくる暖かい想いまでは否定出来なかった。

……嗚呼、それこそ彼女達と関わってしまったのが運の尽きだったのだろう。

僕に出来る事というのは殆ど無い。

悲しきかな、世界は力の強い者の都合の良いように出来ている。

だからこそ、凡俗である僕は彼女の力になってやる事は出来ない。フラァ・デラクール、或いはガブリエル・デラクールを慰められるような力を持つてなどいはいはしない。

けれども、幸か不幸か、フラァ・デラクールは先の課題で広く敬意と名声を勝ち取った強者だった。しかも都合の良い事に、今のホグワーツには似たような存在が四人も存在し、更には現在の校内には、未だ表には出ない、しかし確かな不満が燻っている。

「——ズルい、と。貴方の妹はそう言ったんですよね」

俯いているフラァ・デラクールに、僕は問うた。

「……？　それがどうかしましたか」

「いえ。その言葉自体は問題有りませんよ。ただ、そのような引つ掛かる言葉を残した事を、半ば恨みがましく思います。現状のホグワーツをそれ程的確に表した言葉は他に無いんですから」

ズルい。不公平。

深く考えるまでも無く、確かにその通りだ。

そのような制限を掛ける理屈としては至極真つ当である。大人として許容出来る範囲は何処までかを考えた上で、深い考慮に基づく判断では有るのだろう。

だが、子供の側からすればそのような詰まらない論理的な理屈など知った事では無いし——僕から見ても均衡を欠いてしまっている。

それ故に、僕は一つの冴えない策謀を思いついてしまった。

いや、策謀とすら呼べないかも知れない。計画性など無く、実現性が不確定で、成功率もまた決して高くない代物で、何より僕の領分を超えた事をやろうとするのだから。

「……貴方が妹の信頼を回復したい、失敗を挽回したいというのならば方法が無い訳ではないですよ。勿論、貴方が多少動く必要があり、結構な無茶を通そうとする事になりますし、最終的に校長達に企てを阻まれて失敗する可能性も相応に高いですが」

「！　それは事実でーすか!?　一体それはどういう方法でーすか!？」

「……取り敢えず離れて下さい。説明はしますから」

僕の手を強く握りつつ顔を近付けてきた彼女から距離を取る。

彼女の美貌をどうこう思いはしないが、見られて困るような真似をして欲しくは無かった。

「事前に確認しておきたいんですが、代表選手四人間で揉め事か不和が存在するという訳では有りませんよね？　別に存在していたからといって不可能に直結する訳ではないですが、これから無茶をする以上、把握しておきたい事実です」

確認の言葉に、フラー・デラクールは自信満々に頷いた。

先程までくすんでいた美貌は、今は一等星にも負けない程に輝きを取り戻している。

「そんな物は無いです。私達は同じくドラゴンに立ち向かった仲間ですから、御互いにリスペクトが有りませう。それは彼等も同じだと思いまう」

「ならば良かった……というには早いですが。まあ、勝負にはなりそうです」

代表選手四人の確保が出来るとなれば、勝算は多少上がり得る。

「であれば、貴方に頼みたい、というより、やって貰わなければならぬ事が有ります。何よりも先に、貴方はハツフルパフに向かわなければならぬ。つまり、今回の悪巧みに関してセドリツク・デイゴリーへ協力を要請——」

途中で言葉を切ったのは、彼女の表情が露骨に曇ったからだだった。

「……気が向きませせん」

「……………」

一体どの口で、彼女は不和など存在しないと言い切ったのか。

ただ、頬を膨らませ不満を示すだけの表情からは、一応深刻で無いのは確からしい。

「貴方の感情はさておき、彼の協力は是非とも欲しい所なんですよ。今のホグワーツ内において、彼程に顔の利く人間は居ませんからね。気が向かない程度であれば、残念ながら我慢して貰うしか有りません。正直言つて、後の二人はオマケみたいな物ですから」

居て欲しいが、必須では無い。

「？ ビクトールは必要では無いんですか？ 彼は代表選手であるのみならず、世界的なクイディッチ・プレイヤーで、セドリツクよりも当然顔が広いでうす」

「別にそこまで広い枠組みでどうしようとしている訳では有りませんし、僕の印象としては、彼は鋼のような人だ。良くも悪くも自ら大きく動くようにも見えませんし、最悪黙認さえして貰えれば十分です」

融通が利きそうには無いが、真つ直ぐな熱意が通らない人間でも無いだろう。

第一の課題終了後においても、彼は止むを得ずとはいえ、自分が傷

付けてしまったドラゴンを心配そうに見詰めていた。そこから判断する限り彼は悪い人間では無く、仮にそれが演技で有ったとしても、今回の件に乗ってくれる程度の頭の巡りは有るだろう。

「では、ハリーは？　この国では『生き残った男の子』なのでしよう？」

「彼は更にどうでも良くて、今回は単なる頭数ですよ」

Hogwーツ外の人間らしく、しかしHogwーツ内からは容れられない言葉に首を振る。

「彼は絶対に断らないと解り切っていますし、代表選手四人が足並み揃えて動くという意義は大きいですが、それは彼個人の力を必要としている訳では有りません。寧ろ、彼からウィーズリーの双子に伝えて貰うというのが本命とすら言えますよ」

統率力の面では、マルフォイと比べる事すら烏滸がましい。

ロナルド・ウィーズリーの方がまだマシと言える位だ。彼がその強力な肩書をもってHogwーツの全生徒の上に君臨してくれないかという期待を最初から捨てている程度には、人を率いるという事に関し、彼の気質は絶望的に向いていない。特に今回の場合、十人やこれらの数を動かそうとしている訳では無いのだから猶更だ。

「ですから、セドリック・デイゴリー次第、貴方が彼を口説き落とせるかに懸かっています。彼が動いてくれさえすれば、成功にしても失敗にしても結果は早く出ますし、逆に彼の協力が全く得られないのであれば、貴方が校内を駆けずり回る羽目になり、そして同時に大いに苦勞する事になるでしょう」

我慢比べをした所で負けはしないだろうが、痛み分けにしかならない。

今のHogwーツがユール・ボール一色だからこそ通り得るのであり、この燦る熱が続く事は余り期待出来ない以上、可能な限り早く終わらせたい所だ。

「まあ、やはり僕の印象では『セドリック・デイゴリー』が断るといふ事は無さそうですが——彼が今回の一つの要と成り得る以上、断言は出来ませんしね。結局、動いて確かめてみるしかないでしょうし、断

られた場合はその時考えとしましようか」

「……良く解りませーんが、貴方は一体何をするつもりなのでーすか？」

フラー・デラクールは、不気味な物を見るような眼を僕へと向けていた。

「僕は何もしませんよ。そのような力は有りませんから」

だからと言って、疑いの表情に変えられても困る。

僕はドラゴンを残らず出し抜いた代表選手達のような名声や敬意を勝ち得てもないし、赤子でいながら闇の帝王を打倒したハリー・ポッターのような特別な力を持っても居ない。

「ただ単に、僕は思い出させようとしていただけです。彼等の子供時代、大人が設定した制限に一々付き合う義理など一切無いというように、気に入らないという感情のままにチェス盤をひっくり返していたであろう頃の記憶を」

ズルいというのは強い言葉だ。

やりきれない感情を叩き付け得る暴力だ。

そして同種の言葉を吐きたいのは、ガブリエル・デラクールだけでは無い。

「貴方達が多少力を貸そうとも、最終的にはやはり彼等次第です。貴方がたは補助者には成り得ても、当事者には決して成り得ない。しかし、火は既に燻っており、燃え盛る気配も有る。後は貴方がたが煽つて何処まで大きくなるかですが、上手く……いいえ。下手に行けば――」

彼等が駄々を捏ねてくれるのならば。

正当な理由を、無道によって通す事に賛同してくれるのならば。

「――狭い^{ホゲワ}世界での些細な反乱が起こるでしょう」

そして、そのうねりが起こる事を、僕は期待している。

フラー・デラクールは当然のように僕の協力を期待し、共に着いて

くるように促したが、僕はやはり当たり前前の事としてその要望を却下した。

彼等代表選手の間の特段の確執が無くとも、僕とセドリック・デイゴリーの間には普通に確執が存在している。そして、スリザリンの置かれている立場と僕を取り巻く悪評からすれば、僕が関わらない方が良いのは明白だったし、そもそも僕は僕で別にやる事が存在していた。

探し人は直ぐに見つかった。

スリザリン寮内で大勢の人間を集めて何やら気分良さそうに会話している存在。輝かしい金髪と端正な笑顔を輝かせる男は、言わずもがなドラコ・マルフォイである。

最近の彼の周りには、“非主流派”——半純血や、公式にはマグル生まれなどでは無い男子が主に集まるようになっていた。それはユール・ボールが近付いている事と無関係では無い、というより殆どの理由なのだろう。

“純血”は今更パーティーの作法や規則について解説される必要が無い程には社交の場に慣れ切っているが、スリザリン内でも二流に属する者達は違う。そして、彼が“純血”にしては半純血を忌避しない方であるというのは、僕の存在が為に半ば常識のような物だった。

更に言えば、現在のスリザリンの双壁であるノットは、彼程に面倒見が良くも無いし、親切な訳でも無い。女子の方はまたコミュニティの成り立ち方が違うようだが、わざわざ聞きに行くには抵抗が有る者が多いだろうし、そもそもエスコートされる側の知識が必要となる男子というのが圧倒的極小数だろう。

故に、今のマルフォイは四年生以上からは大人気であり、彼も自尊心を満たしながらも、寮内の社交に励んでいた。……本当に普段の立ち回りは如才無いのだが、何故ハリー・ポッターが絡むとあそこまで不用意になれるのか本気で疑問で有る。

だが、それは今までの僕には一貫して都合が良く、そして今も彼の力を欲している。

「マルフォイ」

集団の中に居る彼に声を掛ければ、意外そうな表情を浮かべて僕を見上げた。

そうして、彼はにんまりと笑う。先程まで彼の周りに居た人間は蜘蛛の子を散らすように離れていき、けれども、彼等は遠巻きに僕達を見守っていた。それまで居心地が悪そうにしていたクラブやゴイルだけが、ただ彼の傍に残った。

「ああ、ステイブン。漸くユール・ボールの相手を自分で見付けるのが無理だと解ったのか。だから言ったろ？ 君が一度頭を下げさえすれば、僕が世話してやつても良いって——」

「——嗚呼、それはどうでも良い。今回は別の話だ」
相変わらずの妄言を切って捨てる。

諦めの悪さは彼の良さの一つでも有るが、流石にこれだけ断り続けているのだから認めてくれとは思う。僕にとってそこまでして参加したい程、ユール・ボールは魅力的では無い。

「君に一つ頼みたい事が有る」

「……頼み？ ユール・ボールの事では無くてか？」

「一応関係は有る。ただ、全く別問題と考えてくれていい」

疑問塗れの表情を浮かべるマルフォイに、僕は続けた。

「そして、君にも利益が有る話だ。この悪巧みに噛んでくれれば、代表選手達までは行かずとも、君は暫くの間、校内で大きな顔を出れるようになる」

「……ステイブン。君が絡み、しかも自ら動くんだ。それは間違いない、面倒事だろう」

喜色よりも警戒を示した彼に、僕は軽く笑った。

流石に同じ寮で四年も共に過ごしてきただけは有る。今回の事が今までのように彼から細々とした話を聞く物では無く、今までに無い大それた事をやろうとすると勘付いたのだろう。

「それは正しい。実の所、今から頼もうとしている事は相当な無茶だ。君達の負担が大きい以前に、まずこれから騒動が起こるか自体不明確であり、最大の障壁は当然ミネルバ・マクゴナガル教授やあの老人だ。蹴られる可能性としても決して低くは無い。そしてその場合、費やし

た労力や金銭は全くの無駄になり得る。要するに——これは賭けや投資の類の話だ」

「……わざわざそう前置きされて、僕があっさりに乗るとでも思うのか」

「思わない。しかし、僕は君だけに首を縦に振らせようとしている訳では無い。そして、君の家は“純血”だ。だからこそ、僕は多少の勝算が有ると踏んでいる」

彼の家は、^{貴族}一流のスリザリンなのだ。

決して凡俗と同じ視点で考えてはならない。危険も無しに利益を^{リスク}得られはしない事は承知であろうし、多少の損失が出ようが庶民と違つて揺るぎもしない。

だから、危険と利益の天秤が釣り合っていると彼等が判断し、尚且つ責任を取らせる相手として僕が十分であると認識して貰えれば——彼等はこの話に乗らうと考えている。

「勿論、必ず乗れと言つて居る訳では無い。無茶を求めるのは承知の上で有り、断つたとしても逆恨みなどしない。ただ、君が僕の話聞いて、或いは今後の展開と動向を見た上で納得出来たのなら、是非この話に噛んで欲しいと思つているし、その価値はあるように思う」
「……………」

「嗚呼、それも君のみではなく、君ごとだ」

今回ハリー・ポッターが必須では無いように、ドラコ・マルフォイもまた必須では無い。僕が期待しているのは、欲しているのは彼の後ろ、強大な財力と権力そして人脈だ。

「つまり、マルフォイ家——別にルシウス・マルフォイ氏でも構わないのだが、敢えて言うならナルシッサ・マルフォイ夫人。彼女にこそ、この話に乗れるかどうかを聞いて欲しい」

矮小で些細な反乱

クリスマスをはぼ一週間後に控え、校内はユール・ボールの話一色だった。

だった。そう、それは既に過去形になった。

依然としてユール・ボールに関する話が主流で有った点に揺ぎ無い。けれども、それに加えて、或る一つの主張と議論が一瞬でそれに並ぶ力を獲得した。正しくはユール・ボールの延長線上に存在する話でも有ったのだが、その方向性が別で有った事は間違いなかった。

何より、それらの語り手で有った主役達が違う。

であれば、やはりそれまでの話と一線を画していると考えるべきだろう。

僕達、私達にもクリスマスを楽しむ権利は有る。

そのような些細な——というには、生徒達を大きく動かした運動から始まった。

確かに、ホグワーツの多くがユール・ボールに浮かれていた。

蜂蜜酒が数百樽買い込まれたとか、本物の妖精がクリスマスの飾り付けに使われるつもりだとか、妖女シスターズとかいう世間で有名なしいグループをあの人々がわざわざ呼んだとか、誰が誰を誘ったようだとか、真偽問わず様々だ。そして、それを口にする殆どの者が、その真偽自体はどうでも良いと考えており、噂をする事自体に意味と価値を見出していた。

つまりはダンス当日のみならず、クリスマスまでの一日一日が多くの子供にとって祭典であり、娯楽であり、これからの人生において忘れる事のないであろう日々であったのだが——そのような幸福の中に居たのは、決してホグワーツの全生徒では有り得ない。

その一つの典型の人間が、ユール・ボールのパートナーを見つけられない者。

具体的にはクラブやゴイル、或いは僕と言った人種だ。如何にユール・ボールが楽しそうだと言っても、一緒に行った所でどう考えても楽しめないし、参加チケットとして利用する事すらも遠慮したい

という類の嫌われ者達。

ただ、僕達のような人間にも、未だに一応希望は無い訳では無い。残り一週間程の間に、相手を見つけられる可能性。ユール・ボールに一人で行った上で、余り物の仲間を見つけ踊る可能性。或いは、不運にもユール・ボールで別れた者の片割れを捕まえる可能性等々。後半二つは半ば反則的であるが、別に必ず二人で無ければ入場出来ないとはスネイプ教授から聞いていない。次回の事は知らないが、慣習や先例を無視出来る事実上の第一回目ならば、押し掛けさえしてしまえば摘まみ出されはしないだろう。

けれども、ユール・ボールを楽しみとも思つて居ない人間は、それだけでは無い。

今回のパーティーにおいて、初めから希望すらも与えられない者達が校内には存在する。

つまり、ユール・ボールに参加出来るのは四年以上の生徒、そしてそれらの上級生から誘われた三年以下の生徒だけなのだ。それ以外の人間にはそもそも資格自体が存在しない。当然ながら、彼等にはユール・ボールを楽しむ権利さえ初めから剥奪されている。

加えて言えば、普通は関係性の近い同級生で踊るのが大半だ。

如何に寮内は家族のような物な関係と言つても、先輩後輩間には一定の距離が有る。ましてクリスマスダンスに誘い、或いは誘われるというのは中々ハードルが高い。特に下級生から自分を連れて行つてくれと上級生に頼める者は殆ど居らず、ましてやホグワーツに入學して四カ月程度しか経っていない一年生など絶望的である。

そして当然ながら、一人と一人がペアとしてパートナーを構成するのであり、一人と二人などというふしだらな組み合わせはまず無いだろう。

つまり如何に四年生以上の方が三年生以下より全体数は多いと言つても、三年生以下が全員誘われる事はおろか、その殆どが誘われはしないままパーティー当日を迎える公算が高い。

要するに、しきりに校内でユール・ボールに関する会話が飛び交つていたとしても、単純計算で校内の七分の三近く、どんなに少なく見

積もつても七分の二強は、この話題自体に一切加われはしない。彼等は寮内での先輩達が楽しそうに会話をしているのを、何も振りをして耐え続ける事を余儀無くさせられている。

彼等は上級生達のような特別なクリスマスでは無く、普通の幸せしかないクリスマスに甘んじなければならず、後数年早く生まれていさえすればという苦い思いを抱きながら、社会の理不尽に歯噛みする事を強いられていたのだ。

——さて。

このようなズルい状況を大人らしく我慢出来る者が、果たしてどれだけ居るだろう。

その回答、或いは結果というのは直ぐに出た。

セドリック・デイゴリーとウィーズリーの双子が主導となつて三寮の下級生を集め、そしてフラー・デラクールが自らこの不平等を問題提起した。それが一般的に見て問題と成り得るような爆弾だと、彼等に改めて気づかせた。

そして口火を切つたのは上級生で有つたものの、一度動き出してしまえば、最早この暴動を指導する必要も煽る必要も無かつた。下級生達が自ら率先して校内に問題を周知させると共に、教授陣に対して公然と状況の是正を要求し始めた。

かつての農民達グレンジャーと同じ構図だ。分断された状態の中、一人で運動を出来る者というのは極少数である。

ただ、同種同類の人間達を一カ所に集め、現状についての会話と議論の場所さえ設けてしまえば、しかも自分達の不満が決して少数派に属する物では無いと——これが独り善がりの我儘な考えでは無いと誤認してしまえば、彼等は当然のように動き出すし、止まりはしない。

僕がフラー・デラクールに助言をした夜には話題となり、翌日の朝方には既に業火となつていた。スネイプ教授を除く三寮監の下には、休み時間中、下級生達が頻りに押し掛けている光景が廊下のあちこちで見られたし、職員室は詰め寄せる生徒でパンク状態だった。

また、どう動くべきかの先例が有つたというのも良く無かつたのか

も知れない。

即ちハツフルパフが『日刊予言者新聞』に完全に無視されたセドリック・デイゴリーの周知の為にやった物と、スリザリンがハリー・ポッターにやったアレである。

下級生達は、賢くも先輩達の遣り口を学んだ。バッジを作り、ビラを撒きまくった。マルフォイが作ったような魔法の掛かった手の込んだ代物では無かったが、魔法使いがハサミとペンを一切使つてはならないという規則は無い。

まして、彼等は下級生らしく無秩序に好き勝手やっていた。

たとえばハリー・ポッターの中傷を統率していたのは事実上マルフォイだったが、フラー・デラクール達は流石にそこまで関わらなかった。

それ故に、私達も着飾つて踊りたいとか僕も妖女シスターズを見たかというような一応正しい物から、クリスマスプレゼントが欲しいとか自分の身体より大きなケーキが食べたいとか誰が好きだとか、何処を向いているのか解らない希望や要望までが無秩序に乱れ飛んだ。

しかしながら、上級生達は止めなかつたし、概ね微笑ましい物として受け容れた。

セドリック・デイゴリーを始めとする代表選手が関わっていたというのも有つたし、学期末を締め括る騒ぎの一つとしては見物だったし、理屈としても納得出来たからだろう。

自分達は偶々四年以上で参加資格を有していたが、では仮に自分達が三年以下だったならばと想像する位は誰にでも出来る。

また、ボーバトンやダームストラングでも、下級生達の廊下での政治活動を応援する声を掛ける者は少なくなかつた。彼等はホグワーツの下級生を通して明らかに本国の自分達の下級生を見ていたし、更には彼等の我儘が通る事を望んでいた。

結局、持ったのは二日だった。

フラー・デラクールが行動開始をした放課後を併せても三日。

直ぐにクリスマス休暇に入ってしまうという時間制限が有つたに

しても、いや有ったが故に、その業火を大人達は止められなかった。
学期末の最終日。

その放課後になってすぐ、寮監達を代表する形でミネルバ・マクゴナガル教授は四寮の下級生達全員を大々的に集めた。

そして下級生の主張と不満は既に十分聞いたと述べた上で、これ以上は意味が無いから校内の馬鹿騒ぎを止めるようにとの御達しを下し、更に続けるつもりであれば、冬休み中であろうと問答無用で減点や罰則を課すつもりだと警告したらしい。

同種の指導が行われたのは監督生、首席も同じだったのだろう。

依然として不満たらたらの下級生を宥めつつ、彼等は粛々と事態の収束へ動き始めた。ウィーズリーの双子は教授陣の権力の濫用だと主張してそれでも騒ぎを続行しようとしたようだが、普通に減点と罰則を食らわされていた。

……そして何故か僕は、ミネルバ・マクゴナガル教授によって呼び出された。

「さて、貴方が反^{アンチ}ユール・ボール運動を企んだ目的を是非とも聞かせて貰いたい所です」

「……随分と御挨拶ですね」

職員室で、教授はずばりと言った。

僕の好みだとしても、単刀直入にも程が有った。

「しかし教授はそう仰りますが、この騒動において僕の名は一切出ていない筈です。加えて、騒いでいたのも代表選手や下級生、つまり僕とは遠く離れた所で有ったと思いますか？」

フラー・デラクールには、当然口止めをしている。

スリザリンの関与が現時点で露わになるのは宜しくないし、僕の名前が出ればセドリック・デイゴリーの協力が得られない可能性が上がる。そして、僕は別にマルフォイのように、校内で権力を築き上げた

いという野望を抱く程に野心家でも努力家でも無かった。

僕の疑問に、ミネルバ・マクゴナガル教授は彫刻のような表情のまま頷く。

「確かに、此度の騒動の先頭に立ったのはデラクルであり、ウィーズリー達でしょう。話ではデイゴリーも協力したようですが。更に言えば、既に騒動は彼等の手を離れつつ有ったようですね。そうでなければ、あそこまで統率も無く私達の下にゾロゾロと来なかつたでしょう」

ここでビクトール・クラムとハリー・ポッターの名前が教授から挙がらないあたりが、彼等の性格という物を良く示している。

後者は兎も角、前者は間違いなく騒ぎの拡大の為に動いていたのだろうし、その事実を教授達も把握してはいるだろうが、主導的な立場には決して数えられていなかった。

「ただ、この騒動にスリザリンの人間が絡んでいるというのは疑い有りません。何故私がそう断言するのか、その意味は言わずとも解るでしょう?」

「……………」

「そして、代表選手、或いはボーバトンやダームストラングにはスリザリンへの伝手が無いし、そもそも動機が有りません。前者達は個人的な好悪から、後者達はわざわざスリザリンを問題に巻き込む発想をするには、距離と関係性が少々遠いでしょう」

「ドラコ・マルフォイが居る筈ですが。名家の彼は当然両校とも繋がりは有りますし、此度もまた彼がスリザリンの中心ですよ」

「それは否定しませんが、企んだのは絶対に別の人間です」

一応の抗弁を、ばっさり教授は切って捨てる。

「彼がこの手の小賢しい策謀を巡らせる事はしません。これまでの前例を見る限り、彼はもつと直接的で、自らが動くような手段を好みます。そもそもボーバトンやダームストラングという観点では無く、デラクルを初めとする代表選手達との関係性という観点で見れば、彼は余り近しい訳でも有りません」

一方で、とミネルバ・マクゴナガル教授は言葉を続けた。

「如何なる手練手管を使ったのか見当も付きませんが、貴方が何故かデラクールと近しくなっていたのは先日私がこの眼で見えています。そして、貴方が時に厄介事を引き起こす事も、マルフォイに悪巧みを持ち掛けられる程度には交流が或る事も、この四年で承知しています」

呼ばれた時から解っていたが、言い逃れをする事は無理だった。

故に僕は軽く両手を上げる事で、降参と服従を示した。

「確かに明確な論理であり、僕が否定出来るような材料も有りません。企んだというか、フラー・デラクールに甘言を持ちかけたのは事実です。けれども——人を極悪非道の人間のように言われては困りますよ」

僕が動いた訳でも無いし、火を着けた訳でも無い。

「つまりは四年生以上だけ楽しそうな真似をしていたのが駄目だったんです。風紀上の問題から参加禁止の規則を打ち立てる理屈は解りますが、そんなズルい真似は理不尽で有り、均衡を欠いており、彼等は当然に憤りを感じて然るべきだった」

ユール・ボールにおける年齢制限。

誘われれば三年生以下も参加する事が出来る、と考えるのは間違いだ。

誘われなければ三年生以下は参加する事すら出来ない、と考えるのが正解だ。

炎のゴブレットの投票にも年齢線が引かれていたから、彼等の多くはユール・ボールにおいても同種の制限が為されても不自然では無いと誤認した。思い込まされた。

けれども、命の危険が有るが故に為されるべき制約と、大人が面倒を見切れないが故に為される制約は全く別種の物だ。その合理性も、許容されるべき強度も。ドラゴンに立ち向かうのに年齢は必要だが、ダンスを楽しむのに年齢は不要だ。

「……それでも貴方が火を着けなければ起こりませんでした」

「最初から火は燻っていましたよ。ただ単に、三年生以下が上の人間達を慮って、楽しみに水を差すような真似をしなかったに過ぎませ

ん」

苦々しく言った教授に首を振る。

表面上を取り繕う事は出来ても、やはり内心までは別なのだ。

彼等は本心からズルいと思っていた。ガブリエル・デラクールが姉の着飾った姿を見てそう思ったように、下級生達は、上級生の楽しそうな会話を見て同様の思いを抱いた。

「それでも貴方が不満の仲介を、いえ、仲介出来るような人間を差し向けたからこそでしょう。個人の問題で留まっているならば、各寮監も個々人で対応出来ました。しかし、彼等が似た不満を抱えている人間が他にも数多く、しかも寮を超えて存在する事に気付いた時——」

途中で切った言葉には、色濃い疲労が滲み出ている。

「……この騒ぎの前から、教授達には相談が有ったのですか？」

「当然です。特に、女生徒からは多く文句が出ていました。何故、四年生以上しか参加出来ないのか。自分達も何とか参加させて欲しいと」「そして、それぞれが巧みに言い包めていた訳ですね」

「子供達を騙するのが教師の仕事のように言われるのは心外です」
けれども、本質としては変わらないだろう。

四年待てば良いというのは、彼等は容易く言えなかった。

ダムストラング、ボーバトンの何れも、彼等の全校生徒がホグワーツに来た訳では無い。

ボーバトンの馬車にしても、ダムストラングの船にしても、千人の人間——あくまで現ホグワーツの人数と同数と考えた上での数だが——は乗らないのだ。あくまでハロウインの前日に来た彼等は『代表団』であり、一部がホグワーツに留まって授業を受けているに過ぎない。

ユール・ボールも同じだ。

ホグワーツ生は、大抵がホグワーツ生同士で踊る。

当日にボーバトンやダムストラングの人間がユール・ボールに来るのか——つまり、たった四時間の為に遙々海を渡って来るのか——知らないが、それでも学校を超えて知り合う機会、それもクリスマスに踊る程の関係を築くのは中々難しい。

故に、彼等から自分達も踊りたいと求められただけならまだしも、他国の人間と楽しい時間を自分達も過ごしたいと望まれたら、教授達は返事に窮さざるを得なかった筈だ。

「そして下級生達、それも三寮の女生徒にとっては、四年生以上という条件は相当受け入れがたい物だった訳ですね。フラー・デラクルの妹もそうでしたし。もつとも、その点には僕には余り理解出来ない感覚ですが」

女性達にとっては、やはり着飾って踊るといふのは特別なのだろう。

そう考えたのだが、何故だか教授は首を横に振った。

「今の貴方の言葉には二点の間違いが有ります。この騒動前、秘密裏に抗議してきたのは三寮では無く四寮です。そして、それ程の不満を抱えていたのは女生徒だけでは無く男子生徒もです。これについても、スリザリンを含みます」

「……スリザリン寮監は貴方がたのようになりませんでしたし、しかも男子もですか？」

「ええ。私にも一人、二人程。そして相談に来る程に思い詰めたスリザリンの男子生徒の殆どは、フリットウィック教授が対応したとの報告を受けています」

「……………」

別に、我らが寮監に人望が無い訳ではないのだ。

しかしながら、クリスマスに自分達も騒ぎたいですと相談するには絶望的に向いていない相手である事は、スリザリン寮の人間としても認めざるを得ない。

如何にスリザリンとは言え、そのような妄言を吐ける命知らずというのは早々居ない。しかも、ユール・ボールに参加資格の無い人間——三年生以下で有れば猶更だ。あの仏頂面に対して真正面からそれを要望出来るといふならば、そのような人間はグリフィンドールを通り越してアズカバンに叩き込まれている事だろう。

「ただ、スネイプ教授からは、警備の業務を引き受ける事は可能だといふ申し出を頂いています。彼が酷く不承不承で有った事は、貴方には

語るまでも無いでしょうが」

「……この手の話に寮監がその対応と言う事は、それなりに前向きだという事ですね。何だかんだ言って、あの寮監は面倒見が良いというか何と言うか」

「……彼に対しそう言つてのけるのは、幾らスリザリンといえども貴方くらいの物でしょう」

「そうですね？ まあ、無駄に取り繕う必要が無い間柄では有りますが」

あの教授との関係の近さで言えば、マルフォイの方が圧倒的に近いだろう。彼は単純に教授から気に入られている。一方で僕達の方は、単純に嫌いだと切つて捨てるには、御互いが御互いの事を理解し過ぎてしまつてゐるし、相手に対して思う事が有り過ぎる。

そして、別段間違つてゐる事を言つてゐるつもりも無い。

どう見ても、教授は要らぬ面倒事まで引き受けて苦労する質だ。あのアルバス・ダンブルドアの下に居るといふのがまさにその証左でもあるし——しかしながら、自分の立ち位置といふのを良く理解した上で利用するスリザリンらしい人物でも有る。その申し出は、自身が「元」死喰い人である立場を流石に熟知し切つてゐる。

加えて、今の話から明確に分かる事が一つ存在する。

「——まさか通るとは思つて居ませんでしたよ」

警備の話。

それは、存在しない計画には出て来ない類の話だった。

「正確には通つた訳では有りません」

意外を籠めた僕の言葉に、教授は首を振りながら否定した。

「表向きは、下級生達の要望は一応却下という事になります。ユール・ボール、三校試合だけでも手一杯だというのに、彼等に普通のクリスマス以上の待遇を私達が用意するのは、労力も時間も足りません。どう考えても不可能です」

疲労の色濃い溜息を教授は吐く。それも長い長い溜息だった。

「ただ、ダンブルドア校長は下級生達の不満に理解を示されましたし、折り良く外部から計画が持ち込まれていました。三校の交流を深め

る為に、生徒や家族も参加出来るような開かれたパーティーを日中、ホグズミードで実施する事を計画していると。そして、可能であればホグワーツの下級生を招待したいとも」

どう考えても貴方の差し金でしょう、と言わんばかりの刺々しい眼でこちらを見る。

実際正解だった。フラウ・デラクールもセドリックも、ビクトール・クラムやハリー・ポッターにも出来ない、ただ唯一彼等だけが可能な一手を、僕は指させようとした。

つまり――

「マルフォイ家。話を聞かれた感触から予想していましたが、彼等は動いてくれた訳ですね」

「ええ。まるで校内の状況を正確に把握していたかのように、余りにも都合の良いタイミングで、彼等は話を持ち込んでくれましたよ」

――あの生粋の純血こそが、そのパーティーの計画を持ち込んだ存在だった。

「ただ実際、彼等が代わりにイベントを企画してくれるというのであれば、我々が何もしない訳には行かないとしても、負担は多少軽減されます。何より、保護者達と一緒に、それも昼というのが好都合です。ユール・ボールのような心配をする必要は減りますからね」

実の所、教授やフラウ・デラクルールの両親が、ガブリエル・デラクルールの参加に難色を示した大きな理由の一つがそこだ。

裏を返せば、それさえ解決してしまえば彼等の拒絶反応は低下するのであって、僕がナルシッサ・マルフォイ夫人に唯一強調して要望した部分でもあった。

「そして、教授は――いえ、あの老人は受けた訳ですか」

「ええ。私も相談されましたが、受ける事自体は既に御決めになられていたと思います」

「……それはまた、あっさりした事で」

あの好悪の激しい老人こそがホグワーツ側の障壁になると考えていたが、どうやら僕は彼を見くびっていたらしい。

現実問題、下級生達の不満を我儘だとして叩き潰すのも選択肢とし

て無い訳ではない。出来ない事、或いは許されない事を毅然と却下するのも大人の仕事の筈だし、当然僕もその可能性は視野に入れていた。

だが、アルバス・ダンブルドアは、マルフォイ家との力関係や現在を取り巻く状況の危険性を踏まえて尚、呑んでも構わないと判断したようである。

「副校長としてマルフォイ夫人からの手紙を拝見しましたが、その文面は非常に丁重な物でしたよ。一々述べはしませんが、こちらに都合の良い事が色々と書いて有りました。例えば警備の人員や移動鍵ポット・キーについては向こうがファッジ大臣と調整するつもりだそうです。特に国外間の移動は、そう簡単に行く物では無いのですがね」

そして薄々感じていたが、どう考えても想定以上に話が大きくなっていた。

「……」応弁解しておきますが、流石にそこまでするよう仕向けた訳では有りませんし、見切り発車で動いて欲しいと告げても居ませんよ」

僕から持ち掛けたとは言え、聖二十八族が現在色々忙しいらしいが為に、動いてくれるかどうかは半々だと考えていたし、更に言えば、動いてくれるにしても何処まで本気で動いてくれるかというのも未知数だった。

マルフォイに告げた通りこれは賭けと投資の話で、失敗してしまえばそのまま損失が発生し得るのだ。故に、この件における外部の、そして最大の障壁はその点に有ったのだが——彼等は動いた。僕の期待と予想を上回る圧倒的熱量でもって。

「年齢的に夫人は貴方の教え子でしょう？ 学生の思い付きにそう易々と乗りはしない人間だというのは御理解頂けると思いますが」

「ええ。しかし、重要なのは、マルフォイ夫人はそれ程までに本気だったと言う事です」

彼等が本気となった原因。

このタイミングで国際的イベントを、自身達の立場を固めるような大々の催し事を必要とする理由。金も労力も、形振りさえも構わない

根源というのは当然推測出来る。

——あの闇の印は、やはり彼等にとって大きな衝撃だったのだろう。

今更ながらに、その重みを思い知る。

そんな僕に対して、教授は刺すような視線を向けた。

「そもそも貴方が自分の力だけでこのような企み事を実現出来る程の力を持っていたのなら、貴方は既にホグワーツには留まって居ないでしょう」

背筋の寒くなるような物言いであり、どういう意味かは聞かせないだけの力が有った。

「そして、既にこれは私達の問題にも移っています」

「という事はもう?」

「ええ。教授会でマルフォイ家の提案に乗らせて貰う、いえこちらから御願いするという決定を下しました。ホグワーツの理事会からも了承を受けています。各方面に無理を言いましたが、下級生の為の、いえ国際交流の為の外部パーティーを実施するのは決定事項です」

だからこそ、教授達は今日、下級生の反乱を潰した訳だ。

彼等は実現の為に動き始めていた。どんなに遅くとも今日の昼、下手すれば昨日の夜の内から。そして、監督生や首席達があっさりと教授の指導に従ったのは、表に情報が出ておらずとも、何らかの形で仄めかされたのかも知れない。

……? いや、そう考えると可笑しくないだろうか。

「決まったのなら、何故情報が出ていないのです? 下級生を黙らせる為には、反乱を潰す前にその情報を出すのが一番手っ取り早いでしょうに」

「……一体誰のせいだと思っっているのですか」

疑問に返ってきたのは、本気で呆れたような表情。

「実施が決定したとしても、細部を調整出来ない訳では有りません。そして、その調整には貴方から話を聞く事が必須でしょう。まさか貴方がデラクルの妹と踊りたいが為にこのような大騒動を引き起こした筈は無いですからね」

「公式発表を延期する程の必要性が有るのですか？」

「当然です。貴方の返答次第では大修整すら止むを得ないと考えています」

にべも無かった。

教授はそれだけの覚悟をもって、僕との会談に挑んでいるようだった。

「……しかし、再三言っている筈ですが、僕が首謀はしても騒いだのは彼等ですよ？ 確実にこの形に落ち着くとまでは決して考えて居ませんでしたし、強いて言うならば成り行きです。教授が疑念を抱く理由がいまいち僕には解りかねますが」

実現性を度外視した暴動を計画とは呼べはしない。出来る人間達、力を持った者達が適当に上手い具合に纏めるだろうと考えていただけで、解決は丸投げしたような物だ。

だからこそ、問われる意味が理解出来なかった。

「では私から聞きますが、ホグワーツ外を、そしてマルフォイ家を引き込んだのは？」

教授は開心術士には見えない。

だが、そうだからと言って嘘を吐かせる程優しくないと、教授の瞳が告げていた。

「貴方はこの問題を学校行事外のイベントに巻き込むという形で解決しようとしてました。しかし、学校行事、校内でのイベントで収める選択肢も有った筈です。というより、代表選手四人、そして下級生達は例外無くそのように考えていた筈です」

けれども、発端の貴方はそうでは無かったと教授は指摘した。

「……それ程までに不自然ですか？」

「理屈として一応解ります。しかし、必然で有ったかと言うと首を傾げます」

教授の声の響きからは、猜疑というよりも純粹な疑問を感じた。

「当然、私達教師間では議論が有りました。主な論点は当然ながら、マルフォイ家の提案を受け容れず、ホグワーツのみで何かを計画すべきでは無いかという点でした。けれども、それは貴方が問題をそのよう

に設定したからです。貴方が関わらなければ、下級生の為のイベントをやるか否かの二択の議論だったでしょう」

だが、第三の選択肢が彼等の前に差し出された。

それも非常に好都合で、魅力的な選択肢。自分達に掛けられる負担が減り、下級生達にも特別感を演出出来、この騒動を納得させられる次善の解決策。

「この四年程貴方を見て来た私だから言いますが、貴方は意図が無い行動はしません。いえ、何ら自身に利益や成果物が発生しない面倒の為に働くのを厭うと言いましょうか。だからこそ、私は貴方に問い質しに来たのです。」

——貴方の真意は何処に有るのかと」

これは評価されていると言っているのだろうか。

これだけの大騒ぎをして、尚且つ最後にはマルフォイ家が出て来たのだから、僕の中には大きな策謀が存在するだろうと、そうミネルバ・マクゴナガル教授は疑っている。

ただ、そのように真剣に期待されても困る物だ。

大山鳴動して鼠一匹という事は、世間に広く転がっているだろうに。

「ちなみに、あの老人——アルバス・ダンブルドアは何と？」

「君が直接聞いた方が納得出来るだろうと」

「……つまりは、完全に僕に説明を投げた訳ですか」
けれども、今回は批難するつもりは無かった。

此度の計画において、ホグワーツ内で一番忙しく成り得るのが誰であるかは明白だった。準備や実施の主導がマルフォイ家に存在すると言っても、それを完全に渡し切らない為にホグワーツ側も動く必要が有り、既にあの老人は各地を飛び回っている事だろう。

「ただまあ、仰りたい事は解りました。要は、マルフォイ家が問題という訳ですね。貴方がたが、ミネルバ・マクゴナガル教授が疑念を抱く

だけの理由が彼等には存在する。それは自業自得であり、当然の用心でも有りますが」

スリザリンにとって、ルシウス・マルフォイ氏は疑いなく死喰い人である。

それ以前に、秘密の部屋の騒動でアルバス・ダンブルドアを一時追放してみせた時の事を、この教授は——教授達は決して忘れてなどいないだろう。

「しかし、教授が一応理屈は理解出来ると述べられたように、発想の端緒としては平凡ですよ。別にクリスマスマスに行うのは僕にとって必須では有りませんが、下級生はそれを前提としている以上、今から計画したとして約一週間で誰が為し得るかというのが最初に在りました。当然ながらその資金力、人脈を持っている解りやすい存在は聖二十八族です」

そして言うまでもなく、その筆頭であるマルフォイ家。

「もつとも、初めから聖二十八族を巻き込みたいという思惑は有りましたが。仮にクリスマスまで一か月有ったとしても、僕はこの騒動に彼等を囁ませようとしたでしょう」

マルフォイ家が手頃で有ったのは間違いない。

僕が頭を下げた所でノットが、或いはクラッブやゴイルが簡単に頷いてくれると思えない。一方で、ドラコ・マルフォイという男は、如何なる打算や目論見が有ったとしても、半純血とすら一定の係性を築く事の出来る人間だった。

ただ、万一彼が使い物にならなつたとしても、僕は何とかして他の「純血」を巻き込もうとした事だろう。

「……クイディッチ・ワールドカップの件が有ったのに、ですか？」

「有ったからこそ、ですよ」

僅かに顔を顰めた教授に、僕は答えた。

教授は別にルシウス・マルフォイ氏があの場に居たと主張していないが、揶揄しているのを隠す気は無いようである。

ただ、その是非はどちらでも良い事だ。そして、僕の考えとしては、寧ろ彼等がああ騒ぎに参加したような死喰い人の方が都合は良い。

「去年のアズカバン脱獄とホグワーツでの騒動が有り、それから三か月も経たずに闇の印がああいう形で撃ち上がり、加えて今の三校試合の裏には一人以上の闇の魔法使いが暗躍している。校内校外問わず、今の状況下というのは言う程に安全では無い」

表情を険しくした教授と、僕が考えている事は同じ。

ハリー・ポッターが代表選手に名乗りを上げさせられた件である。「けれども、自分が大きく関わった、それも他国の人間を招いているイベントをぶち壊すような馬鹿など早々居ないでしょう？ 死喰い人が一枚岩で無いらしい以上、彼等に反感を抱く人間が何かをしでかす恐れはありますが、少なくとも一勢力の動きを封じる事は出来る」

マルフォイ家が絡めば、当然マルフォイ派は動けず、中立派も静観する可能性が高い。

イベントの間にホグワーツ内や生徒へ何かを仕掛けられないかという警戒は必要では有るだろうが、それさえクリア出来れば、イベント自体の安全性は一定程度保証される。

「加えてスリザリンを参加させられるようなイベントであれば、子供達は良い人質になります。死喰い人の中核の基盤が聖二十八族に有る以上、良からぬ魔法使いが事を起こすにしても、親族や知人、御偉方の子供を不用意な真似で傷付けるのは避けたいとは考えるでしょう」

そして仮に此度の「犯人」が反マルフォイ派——つまり、マルフォイのイベントをぶち壊したいと考えるような人間であった場合でも、そのような軽拳には二の足を踏む。

しかも、その騒ぎを引き起こした時点でマルフォイ家との抗争は不可避であり、その不満を問答無用で鎮圧出来る闇の^{上位}帝王は未だ不在である。加えてホグワーツの警備から見咎められる危険性も考えれば、^{ハリー・ポッター}本命の男の子を差し置いてまで手を出しはしまいと判断するのは、決して期待し過ぎであるとは言えないだろう。

そこまで言って、後もう一つ理由が更に思いついたので付け加える。

「嗚呼、後はマルフォイが関われば、一応スリザリンの上級生が参加禁

止を通達するという事も無くなりますね。グリフィン・ドール主導だとまず間違いなくそうなりますが、教授の話聞く限りではスリザリンにもパーティーを楽しみたい下級生が居るようですし」

「その最後の理由を聞いた途端、教授は露骨に嫌そうな表情を浮かべた。」

「……貴方は下劣な理由を無為につらつらと並べるのでは無く、その最後の理由こそを初めに私へと告げるべきでしたね」

教授には珍しく、吐き捨てるように言われる。

けれども大きな理由を最初に、些細な理由を最後には普通では無いだろうか。

ただ、それでもミネルバ・マクゴナガル教授は満足したように僕へと頷いてみせた。

「解りました。真に不本意ながら、これではダンブルドアもあっさりと認めた筈です。ええ、最初から受け容れるしか有りませんでした。が、納得はしました。しましたとも」

この副校長は間違いなくアルバス・ダンブルドアの配下であるが、それはそれで苦勞が有るのだろう。半ば自棄のような言葉からは、あの老人に対する教授の感情が良く見て取れる。

……僕も同種の厄介者扱いされているようなのが少しばかり嫌だが。

「しかし、貴方は未だに自身の動機を語って居ませんが」

「そちらの方はもっと期待されても困りますよ」

鋭い視線を更に寄越してくる教授に肩を竦めた。

「教授が仰ったように、僕はフラー・デラクルを止めるべきでした。知らなかったとはいえ、九歳程度の女の子と踊るというのは犯罪的ですからね。故に、これは罪滅ぼしの類であり、また彼女の妹への想いを感じる所が有ったからです。……彼女達の血については？」

「クォーターヴィーラの事ですか？」

「御存知ならば話が早い。血の問題を抱えるという点では半純血も同じです。ヴィーラの血が齎す面倒を本質的に理解出来なくとも、スリザリンの僕は一定程度共感を示す事が出来る」

そして、その面倒を避けさせてあげたいという気持ちにも。

たとえそれが多少人間の良くない部分を見せる事になるとしても、向き合わなければならぬ問題である。フラー・デラクールが吐露したように、時に無意識の内に男を誘ってしまいかねないヴィーラの血は、彼女達自身を傷付ける事にも成りうる。

その解決手段として僕と踊る事が妥当かどうかは誠に疑問だが――まあ、やはり僕はヴィーラではないのだ。フラー・デラクールの判断を尊重する以外に無い。

「彼女のは暴走でしたが、その原点までは否定出来る物では無いでしょう。そして、如何なる形で有つても、この三百年振りの楽しい祭典に参加させてやりたいという想いも」

「……だからこそ、貴方はデラクールに協力した訳ですか」

「ええ。それ故に、僕はホグワーツ内部で問題を留まらせる事無く、外部のマルフォイ家までも巻き込み、彼女達が参加出来る余地の有る盤面を作ろうとした。三年生以下を巻き込んだのは、まあ、ついしてみたいな物です」

当然の事ながら、何も無ければ僕は下級生達の為に動く事はなかった。

彼等が不満を抱えている事に気付きながらも、それを無視し続けた事だろう。

「ただ、彼等が抱く感情、ガブリエル・デラクールと同種の主張には一定の正当性が存在していた。そして成功率を上げる為には騒ぎが大きいに越した事は無い。ならば、巻き込まない理由は無く――子供一人の為に貴方達は動かなくとも、多くの生徒達の為には何とか解決策を用意してくれる。そう思う位には、僕はホグワーツの教師を信頼している」

話を通るのが良かったが、却下してくれても構わなかった。

完全に不均衡を是正するというのは困難である。けれども、問題を表面化してしまえさえすれば、彼等は何らかの形で報いると信じていた。今回の成否はその点に掛かっており、故に勝算というのも低くはないと考えていた。それが全てで――それ以上は無い。

「……校長の仰った通りでしたね」

教授は眩くように言った。

「私が懸念するような恐れは一つも無いし、今回のイベントについても、一般的な注意や警戒は必要だとしても、実施する事自体は何ら問題無いだろうと」

「……アルバス・ダンブルドアは、僕に説明を丸投げしたのでは？」

「私の言葉に何も感想を仰らなかつたとは、決して言った覚えが有りません」

……確かにその通りだった。

流石にミネルバ・マクゴナガル教授は僕よりも上手だった。

「——さて、貴方から聞き取りをした結果、大きく何かを変える必要は無いようです」

呆れる僕を無視して、教授は淡々と説明を口にする。

「既に決まった事を通達しますと、パーティーはホグズミードの一角を借り受けたささやかな昼食会になるようです。実際は午前中に集まる事になるでしょうし、終わるのはティータイム前後になるでしょう」

ささやか、か。

いや、何も言うまい。

「生徒達のドレスコードは制服としました。羽目を外し過ぎないようにという戒めの為ですし、御洒落を許せば收拾が付かなくなりまして、ユール・ボールとの差別化の為でも有ります。そして、国際交流という観点からすれば、誰が外国からの客か、何処に居るのか一目瞭然の方が良いでしょう。警備の面でも楽です。更に公平性の観点から、四年生以上は一律、ユール・ボールの相手が居る三年生以下も参加禁止。これは今回の発端から見ても当然です」

条件としてもまあ妥当な所か。

着飾れないあたりは特に不満が出そうだが、余り下級生を優遇し過ぎて今度は上級生から不満が出うる。この辺りは賛否両論であり、教授間でも議論が割れた筈だが、最終的にそう決まったのならは何も言う事は無い。そもそも、一生徒である僕が文句を付けられる道理や

正当性自体が更々無い。

そう気軽に聞いていたのだが、最後に教授は爆弾を落としてくれた。

「そして、日付はクリスマスです」

「——正気ですか」

先のナルシツサ・マルフォイ夫人が持ち掛けた内容からも嫌な感じはしていたが、別に不公平を是正すれば良いのであって、同日にやる必要は無い。しかも残り一週間しか残っておらず、間違ひなく大騒動する羽目になる。

だと言うのに、彼等は本気でクリスマスにもう一イベント捻じ込むつもりらしい。

「確かに僕はクリスマスを口実にしましたが、その部分は普通に蹴られると思って居ましたよ。マルフォイ家からも、そしてホグワーツからも」

「貴方は却下されると考えていながら提案したのですか……」

額に手を当て嘆息しながら言つて、だが教授は答える必要は無いと軽く首を振つた。

陳腐過ぎる手段であるが、妥協する振りというのは交渉術の基本だった。

「しかしながら、私達には日程の余裕が無いのです。年が明ければ第二の課題の準備が始まります。それが終わってからとなると三月になりますし、第三の課題の準備もまた控えています。元より手を抜くつもりは有りませんが、ポッターの件で余計に警戒という物が必要です。校長もその時期に外部の人間を大勢近付ける事は好まないでしょう」

それに、と続ける。

「貴方は自分がそうで無かったが為に子供という存在を理解して居ないようですが、彼等がクリスマスに関して騒いだ以上、クリスマスで解決しなければ火が燻ったままになります。どの道苦勞するのであれば、可能な限り不満を解決する形に収めるべきでしょう」

「納得はしないでしょうが、それでも黙らせる事は可能でしょうに

……」

革命や運動を崩壊させる手段の一つは、内部分裂の楔を打ち込む事だ。

今は四年生以上だけ楽しむのはズルいで一致団結しているだろうが、代替イベントが用意される事が発表されれば、ならば良いかという穏健派と、いやクリスマスじゃないと駄目だという過激派で割れて内輪揉めを始めるのが解り切っている。

「そもそもなんですが、それで集まるんですか。魔法使いが教会の説法を素直に信じるような質では無い——ミサに行くような敬虔さがあれば、もっと『マグル』を理解している筈です——のは明らかですが、このような大騒動の中に用意された突貫のイベントにわざわざ他国に出張してまで来る人間は、そう多くは居ないでしょう?」

魔女狩りの歴史も有り、魔法界におけるクリスマスの扱いは、聖人の降誕祭という意識よりは宗教以前の土着の祝祭日を引き継いでいるという感覚に近い。

ただ、特に半純血や非魔法族はホグワーツに信仰を持っていたりする人間も少なからずいるし、状況的には他国も似たような物だろう。そして、信仰を持っていない魔法使いですら、最低限家族や友人の間で祝い事をする日だという認識は有している。

その率直な疑問に、ミネルバ・マクゴナガル教授は断言した。

「マルフォイ夫人は出来ると言いましたし、国際交流の体面が成り立つ程度には人を集めてみせるとも言いました。既に行われようとしているパーティーを幾つか飲み込むつもりだとも。校長も方々に声を掛けると聞いています」

「……聞く限りでは何時も通りのスリザリンの集会、政府高官のみが集まる高尚なイベントにはなりそうにないですね」

「私としてはホグワーツ生の見聞という面から歓迎ですし、マルフォイ夫人の方からも事前の了承を得ています。校長の挑発めいた言葉に対する応酬では有りましたが」

「……そこまで覚悟させるといふ事は、マルフォイ家も本気だといふ事だ。」

貴族的な体面を重視するよりも、国際的に自身の立場を固めうるイベントを起こす機会を、しかもホグワーツを巻き込んでまで行う事が出来る隙を見逃そうとしなかった。自分達に襲い掛かる金銭的負担も、労力的負荷も、殆ど一週間前に招待するような非礼や不格好さえも無視出来ると判断した。そして恐らく、他の聖二十八族も協力を惜しまない気で居る。

——やはり闇の帝王の復活は、決して遠い未来の事では無いのだろう。

そう改めて確信を抱いた僕に対して、けれども教授は危険な瞳を向けていた。

そして同時に、凄まじく嫌な予感と悪寒が走った。獅子は蛇を食らいはしないだろうが、弄ぶ事はしそうな物だった。少なくとも今の教授は完全に物騒な気配を漂わせている。

「他にも細々とした事項は有りますが、どうせ貴方は直ぐに知るでしょうし、余計な推測を巡らせもするでしょう。ですから、私から貴方に宣告しなければならぬ事は残り一つです」

既に教授達が裏で動いているのは明白だ。

けれども、僕に語った今の情報は、一応未だに表には出ていない物である。それ以前に、僕がミネルバ・マクゴナガル教授に何を言おうと精々修正される程度で、イベントを実施する事自体は確定事項だった。そして、教授の「聞き取り」とやらに、今回のパーティーについて長々と語る事は必要は無い。

ならば、何故教授はそうしたのか。

「ここまで来て無関係を気取る程に貴方は往生際が悪くないでしょうし、そうであっても通りません。ですので、今回の騒動を策謀した責任として、これから一週間、貴方には本イベントの準備を手伝って貰います」

やはりそうだった。

関係無い位置に居た僕を巻き込む為に、彼女は直接詳しく語ったのだ。

「……僕は教え子であるから当然理解されていると思いますが、如何

に優等生の部類であつても教授達のような細々とした見事な呪文は、僕には使えませんよ」

真つ当である筈の主張に、しかし教授から返つて来たのは冷笑だつた。

「貴方には手と足と口が有り、そして浮遊呪文も使えるでしょう。加えて、非効率なのは多少承知の上です。呪文無しでトロフィーを磨かせたり、書類の整理をさせるような物です。これは悪戯に学校を騒がせた生徒への罰則なのですから」

「……貴方はグリフィンドール寮監だ」

「そして私は副校長であり、その上スリザリンの寮監からも既に了承は得ています」

「……まあ、そうなるでしょうね」

解つていた。

あの教授は僕への嫌がらせの機会を見逃してくれる程甘くは無く、正当な理由でもって課せるとなれば猶更だ。どちらが最初に罰則という口実を言い出したのか知らないが、その話が相手から出なければ必ず一方が言い出しただろうし、どの道こうなつていただろう。

故に、僕は諦めるしか無かつた。

「解りました。解りましたよ。ここまで来て逃げません。冬休みに事実上の罰則を受けるといふのも文句は言いません。ただ、僕のクリスマスに残る申請はどうなつていゝんです？ あれは結局有耶無耶になつた気がしますが」

「心配しなくとも、これからホグワーツに残る人間の数には『誤差』が発生する筈です。此度の決定事項を伝えれば、まず間違ひなくそうなるでしょう。今更貴方一人増えた所で変わりませんし、望めばクリスマス後に帰るといふ事も可能です」

「……そこまで調整する気ですか」

「ええ。強制的に罰則として残す以上、貴方に関してはどの道融通を利かせるつもりでは有りますが。けれども、他の生徒についても同様です。ホグワーツ特急も含め、ありとあらゆる交通手段を検討する必要が有るでしょう。勿論、来る方と出る方何れについても」

教授が溜息を吐いてばかりだが、それ程の状況だという事だろう。実質マルフォイ家主権のパーティだと言っても、やるべき事は多い。

ホグワーツ生が大勢押し掛ける以上完全に丸投げという訳には行かないし、警備の点を始めとしたホグワーツ側の要望を通す為にも、それなりの誠意と協力が必要な筈だ。

マルフォイ家側としても、労力的にも世間的にも、ホグワーツとの協力体制を望むだろう。単純な国際交流のパーティだけならばここまで積極的になつても居ない程度には、彼等が裏で忙しいのは確かなのだろうから。

「……本当に忙しくなりそうですね」

「貴方も直ぐにそのような軽口が叩けなくなりますよ」

厳かに告げられた予言に、僕は黙り込むしか無かった。

そして小さな勝者

既に段取りというのは決められていたのだろう。

教授が僕の所に来た時点において、実行自体は決まっていたのだ。更には僕の話聞いて、教授は大きく変える必要が無いと言った。あの話を受けて教授が何か思う所があったにしても、それは生徒の見える所で大きく変わる物でも無いに違いない。以降の展開は既定路線で、予定調和でしか無かった。

学期最後の夕食前、四寮の寮監は揃って下級生達に吉報を知らせた。

ホグワーツの行事では無いが、クリスマスの昼間にホグズミードでパーティーが企画されている事。そのパーティーでは豪華な食事と催し物が行われる予定である事。ボーバトンとダームストラングを始めとする国外の魔法使いが、家族連れで大勢訪れる予定である事。ユール・ボールに参加出来ない下級生のみが招待されている事。ユール・ボール程の自由度は無いものの、少しばかり羽目を外すのは許される事。クリスマスに帰宅する必要が有る者には、ホグワーツ特急を始めとする交通手段が臨時で用意されうる事——等々。

着飾る事が却下された点や事実上保護者達の監視下に置かれる点に失望の声が上がり、そして何よりも主催がマルフォイ家^{ホスト}という点に難色を示す人間は多かった——特にグリフィンドール——が、ならば貴方達には特別なクリスマスは無しですとミネルバ・マクゴナガル教授に断言された事によつて殆どが黙り込んだ。

噂によれば、この辺りはセドリック・デイゴリーの説得の方が狡猾だったらしい。

校長及び三寮の教授達も準備と運営に関わっている事を強調した上、スリザリン主催の豪華なクリスマスパーティーに“純血”以外の、しかも何ら肩書の無い魔法使い達が招かれるという事はまず無いのだから逆に楽しむべきではないのだろうか——そう言い聞かせた事によつて、参加に乗り気になつた者は少なくなかつたようだった。

そして、悪くは無いかと思う人間が一度増えれば、後はもう雪崩

のように流れていくだけだった。グリフィン^{無駄}の意的な意地を張って、一人寂しく寮に残ったり、友人との話題に付いて行けなくなったりするような事は、普通の友人を持っていてる者なら御免だったらしい。

加えて、ボーバトンとダームストラングからも歓迎の声が上がった。

家族や兄弟姉妹が居る者達は当然の事、それ以外の後輩達はどうかを教授達に問い詰める生徒の姿は多かつたし、ふくろう便ではどう考えても時間が足りない為に、既に日が沈んでいるというのに本国に「速達」で手紙を送ろうと画策する人間が続出した。

後はまあ、マルフォイが酷く楽しそうでは有った。

これまでどのようなパーティーを純血のコミュニティが行ってきたのかを自慢すると共に、今回のクリスマスパーティーの具体的な内容を、スリザリンの下級生の興味を上手く攪る形で仄めかしまくっていた。そして、どうも校内の情勢を見ていた限り、彼等下級生達を通して、他三寮の人間にも噂話として伝わっているようだった。

実際は、今回突貫で予定が組まれたパーティーで有るが故にマルフォイは中身を何も知らないし、文字通り各所を飛び回っている両親に連絡を取りようも無い筈だが、やはり誰にとっても真偽はどうでも良いのだろう。重要なのは、下級生達が上級生達と同じく騒げる正當な口実を手に入れたという点だった。

そのような楽し気な談笑の一方。

教授陣には——加えて僕も——死ぬような毎日が始まっていた。

ホグワーツ生の親達へと説明が必要なのは勿論の事、交通手段の手配やクリスマス当日の予定の修正、運営や警備の手順の再確認、場所を借りるホグズミードへの挨拶など、マルフォイ家に多くの面倒を放り投げて尚、ホグワーツ自身が為さなければならぬ事は多い。

更には如何に招かれたと言っても、ホグワーツが何も用意しない訳には行かないと、パーティーに参加を表明した下級生達には、休日を潰してクリスマスでの出し物の練習——零からは無理であるから二校を歓迎した時の流用——をさせてすら居た。

やはり同日決行は狂気だったと半ば部外者である僕でも見ていて思ったのだから、自分達で決めたホグワーツ教職員達も内心どう思っているかは想像が付く。

しかし一方で、僕は魔法族の恐ろしきと言う物を実感したものだ。たかが昼食会をやるだけとは言っても、他国から客を呼んで千人を遥かに超える規模の物をやる訳だ。それも準備期間は一週間。『マグル』の常識からすれば非常に困難である。物資の輸送、会場の設営、人員の配備、幾ら金を積んでも物理的な限界は存在する。

けれども、魔法使いには、その限界が著しく高い。

彼等は杖の一振りです数十の荷物を飛ばし、自在に地面を成形し、瞬間移動で物と情報の伝達を一瞬で、しかも朝夜の区別無く行ってしまう。

その上、屋敷しもべ妖精を初め、小鬼、トロール、マーピプル、ヴィーラ、レプラコーンなど多種多様な者達が、人には不可能な、魔法的な事象を平気で顕現させてみせる。

石や植物が足を生やして動き出し、金属は自ら踊るようにして形を作り、川や池は自分から土地を開ける。ここには空想通りの魔法の世界が広がっていた。

そして同時に、『純血』達が持つ力の恐ろしさを改めて実感したのは、僕だけではなくホグワーツ教授陣もそうだったのかもしれない。果たしてどれ程のガリオン金貨を使ったのか。

これ程の大規模で、多様な種族を集めた上で指揮し、それも尋常ではない位に急がせるとなると、湯水のようにという表現では足りないだろう。

更に、会場を設営されていく中で見られる統率や調整は、突貫でぶち上げられた物とは思えない程に計画的で、洗練された物。つまりは業者や専門家達が何十年もの積み重ねによって蓄積してきた経験と技術が有り、そのような者達との人脈を同様に何十年も持ち続け、一貫して重宝し続けてきたのが、彼等の後援者たる『純血』だった。

彼等としてこのような切羽詰まった情勢で無ければそれらをこれ程無節操に行使する事は無いだろうが、行使を躊躇うのと全く出来ない

のとは大いに異なる。多くの者が、彼等の貴族としての本領という物を、その富と権力の膨大さを強く意識した事だろう。

……もつとも、やはり最も化物染みていたのは、アルバス・ダンブルドアだったが。

流石に冬に野外パーティーとは行かず、そしてまた千人以上を同時に収容するのは困難である。故に、幾つかのテント——正確にはそれらしき物——を建てる形となったのだが、それでも今回のイベントの象徴となりうる場所は必要だろう。

そう気軽に言って、あの老人はパーティー会場に割り当てられたその中央、ホグワーツを含めた三校の城の小さなミニチュア、と言っても三、四メートル規模の精巧な代物を造り上げた。……ほんの数時間、たった一人で。

小鬼達が用意した特別な貴金属が、マーピープルやトロール達が各地から運んできた資材が、屋敷しもべ妖精の細々とした助力が存在したにせよ、どれ程の変容の技量が有ればアレを実現出来るのかは解らない。小人で無い以上中を覗き込めはしないが、恐らく内装まで拘って造り上げている事だろう。各所を駆けずり回らされていた僕をミネルバ・マクゴナガル教授が探し出し、わざわざ見せてくれた意味も解る物だ。

その嫌がらせの結晶を見た時、マルフォイ夫人は露骨に顔を引き攣らせたが、自分達の仕事の価値を毀損しかねない代物をぶち壊すよりも、それに負けないようパーティー会場を更に飾り立てる方が建設的だと考えたのだろう。屋敷しもべ妖精達にそれらの三城をクリスマスらしく飾り立てるように命じた後、何処かへと急いで消えて行った。その日は全員が鞭打たれたように働いたことは、最早言うまでも無い。

そして——魔法使いが迫害された理由も改めて理解出来た。

今の“マグル”ならば、似たような事の実現自体は不可能では無い。しかし、掛かる金と時間と必要人員は、今回“純血”が費やしたのと比較にならない位に膨大な物となるだろう。

何より、魔法族はこれと同種の事を、千年前からやれた。

四創始者が手掛けたホグワーツ城は極端な例だとしても、これより小規模で個人的な“奇跡”であれば、魔法族には何ら不可能では無かった。

だからこそ、非魔法族は千年前の時点で魔法族を狩り立てた。

魔法が制御出来ない赤子や子供の内に殺し、数の力でもって押し潰した。それが合理性の無い本能的恐怖の下の行動だったとしても、歴史の結果から見れば大正解だった。現在において非魔法族は魔法族に対して殆ど勝利を収めており——しかし、魔法族に形振り構わず本気で戦争の覚悟を決めさせられたのならば、魔法族は今からでも彼等に勝ち得るに違いない。

結局。

今回の最大の障害は、ヒトに纏わる有り触れた事情だったのだろう。

既にクリスマスに他の予定が入っていると、元々家族で過ごす予定で有るとか。そんな、一週間前に招待に応じる事が出来るかどうか、それらの調整を為し得るかどうかという平凡な問題こそが、今回のイベントを成功させる上での一番のボトルネックであった。

物質的な、或いは距離的な要因は本気になった魔法族にとっては些細な問題であり——そして当然ながら、イベント自体が失敗する可能性など初めから無かったのだ。

一週間が過ぎるのはあっという間だった。

僕はホグワーツ、ホグズミード、そしてロンドンにすら出向いて様々な事をやらされたが、やはりこれは罰則、効率と引き換えに教育を行う代物でしか無かったのだろう。

手伝えというのは建前。

結局僕は最後まで足枷にしかならなかったし、寧ろ教授陣は僕を扱き使うのを口実として、わざわざ魔法を伝授する暇すら作ってくれて

特にフィリウス・フリットウィック教授は、教え子が一人しか居ないからか、或いは罰則を課された僕を気の毒に思ったのか、普段の授業以上に親身に教えてくれたものだ。

率直に言えば、パーティーの準備をする為の一連の魔法など僕は興味が全くないのだが、まあ、このような機会が無ければ自ら学びはしないというのも確かだった。使う機会が今後巡ってくるとは思えないが、知っていて損が発生する訳でも無い。教授達なりの善意として受け取っておくべきだった。

そもそも最大の山場は、やはり最初にこそ有ったのだろう。

間に合わせる事が出来るかどうか不明だったからこそ全体が全力全速力で動く必要があり、しかし目途が立ってからは段々と忙しきは減っていく、作業に携わる大人達の表情も明るくなり、僕に至っては、前日は殆ど暇になったとすら言えた。

そして当日においても、やはりやる事は少なかった。

既に専門家以外は居る事自体が邪魔だという領域に移っており、少々魔法が使えるだけの子供は御役御免で、座って作業を見ていると言いつけられる始末だ。大人達に至っても、多くが軽く談笑しながら設営を進めており、殆ど既に終わったような緊張感の無さだった。

その中で依然として馬車馬のように働いていたのは屋敷しもべ妖精位の物だ。

彼等はパーティー開始後こそが本番であり、更に忙しくなる筈だが、会場を所狭しと移動するその表情は使命感と遣り甲斐に満ち溢れている。

ホグワーツの屋敷しもべ妖精達が、自分達にもパーティーを手伝わせると、あの老人に直訴していた——彼等にはユール・ボールの仕事も有るのだ。そして、屋敷しもべ妖精が上位者に何かを求めるというのは非常に珍しい——位だから、彼等の根性は筋金入りである。

ハーマイオニー・グレンジャーの活動は、やはり方向性を大きく間違えているとつくづく思う。魔法界の同胞の泉では仲間扱いされているが、正直アレは全く別の生き物だ。やはり仲間扱いされているケンタウロスと同じく、普通の人の尺度で彼等を測るべきでは無い。

「……四年生以上の参加を一律禁止にしたのは正解でした」

ある時、僕と共に作業をしていたミネルバ・マクゴナガル教授がそのようにボソツとぼやいたが、教授の気持ちは大いに理解出来た。

僕は準備の都合上、必然的に両者を見ている。

ホグワーツの教授達がユール・ボールにも手を抜いておらず、また鼻根目無しに純粋な魔法の見事さと精緻さの面で見ればユール・ボールの方が上なのはまず間違いないが、それでもガリオン金貨の物量で殴って用意したイベントとの比較は流石に酷である。

パーティーの会場は、数百人は優に入る巨大な三つのテントを中心として構成されていた。

テントと表現したが、それは真つ白な布——素材については自信が無い——がまるで何も無い宙に釣り下げられようにして作られるのを僕が見たからで、完成図と内装だけであれば普通に簡易の城や聖堂と評しても過言では無かった。

突貫の割に規模が大き過ぎて会場を半ば分割する形にせざるを得なかったのは苦渋の選択かも知れないが、それでも三つとしたのは当然ながら三カ国を意図しており、それぞれの内装も国に沿ったテーマで作られていた。

ホグワーツは碧を基調としており多少偏っては居たが、下品過ぎる物では無く、常しえの生命の色として言い訳が聞く程度では有ろう。一方で銀の方は自重したのか、クリスマスらしい赤や黄、そして雪影を示す蒼と同じような使われ方をしている。

内装自体は、三校の中では或る意味最も普通スタンダードで有った。

中央には色取り取りの宝玉を煌めかせる巨大なモミの木が置かれ、今は既に羽を輝かせた妖精達が遊んでいる。天井には黄金のヤドリギが釣り下げられる共に、ポインセチア赤や白《クリスマスローズ》を中心に黄、紫、水色など様々な美しいガーランドで飾られていた。四寮を象徴する黒曜の彫刻は部屋の四隅に配置され、会場の至る所にはやはりクリスマスカラーのオーナメントや人形達がまるで玩具箱を表現するように沢山配置されていた。

ポーバトンは蒼と銀を基調としており、さながら氷と水晶の宮殿の

ようだった。

こちらはクリスマスのだというよりも、冬をそのまま切り取ってきたようだという方が近いかもしれない。天井に吊るされた豪華な銀のシャンデリア、そしてその光を浴びて輝く水晶の細工群は美術品としても見物だった。それらの数多の魔法生物や人々の中に混じっているドラゴンの一頭が見覚えのあるウェールズ・グリーン普通種であるのは、一種のサービスなのだろう。

準備中にニンフ達がリハーサルをし始めて何事かと思っただが、ボートンのクリスマスではそれが普通らしい。ユール・ボールの噂だけを聞いて一方的に妖女シスターズに対抗心を抱いているらしいのも何気に判明したが、まあ彼女達が顔を合わせる事は無いだろう。絶対に口クでも無い事態になるのは目に見えている。

ダムストラングは赤や灰を中心としており色合いとしては最も素朴で有ったが、それこそが中央に置かれた炎、消えないのではないかと思える程の力強い灯りを印象付けていた。

如何なる魔法を掛けたのか、この天幕の内だけは日没が近付いているように少し薄暗くされており、しかしその大きな炎と中空に浮かべられたイルミネーションが煌々と照らす事によって決して暗くは無く、外界と隔絶された幻想的な雰囲気を作っていた。

ボートンが光の美しさを表現していたとすれば、こちらは闇の美しさを表現したようであり、上手い具合に対比となっていた。

そして当然ながらそれらの内装や小道具のみならず、机の上に並べられた料理もそれぞれの三国流——例えばホグワーツならばローストやクリスマスプディング、ミンスパイ等々。誰かの願いが叶ったのか、人の身体、それもルビウス・ハグリッド基準よりも大きいケーキも鎮座していた——で、「純血」達が相当に拘った事が見て取れる。ここまで来ると、彼等がどういいうつもりでこれを用意したのかは容易に理解出来るものだ。

つまり、この異国に来て尚、自国流のクリスマスも併せてやれるよう取り計らったらしい。

計画を立てるのは簡単だが、当然他国から独自の飾り付けの品々

や、この国では手に入りにくい食材を取り寄せる必要が有るし、国の「解釈」に失敗すれば他国の客の気分を大いに害する事になる。つまりるところ、莫大な金と豊富な知識のある人間にしか出来ない曲芸だった。

更には、会場から離れた場所に急遽建てられた簡易倉庫には、パーティー内で配布予定のプレゼントの山々がうず高く積みまれている。当然、資金は純血達の持ち出した。

中には「純血」^{スリザリン}の普段の趣味嗜好に合わないような代物——流石にマグル製品は存在しないが、上流階級が触れそうにない稚拙な玩具や宝飾品も普通に混ざっている——も多数存在していたが、それは海外の客や今回の年齢層を考えたが故の事だろうし、クリスマスらしい物で有れば何でも御構いなしに節操無く集めて来た事を示す証拠でも有るだろう。

何にせよ、彼等が国内外問わず相当の無茶苦茶をやったのは明らかであり、最早嫉妬する事すら馬鹿らしくなる位の富の圧倒的格差と不公平の構図がそこに在った。

しかしながら——マクゴナガル教授が呟いたように、このパーティーは四年生以上は一律参加禁止。一方でユール・ボールは三年生以下が殆ど参加禁止。要するに、両方に参加する者は、少なくとも生徒側には居ないのである。やはり隣の芝が見えなければそもそも嫉妬はしようが無い訳で、それは今回において特に好都合と言えるだろう。

そして、物質的な豊かさが、楽しさと等しい訳でも無い。

三年生以下が保護者による監視の下、一定程度規制を受けるのは紛れもない事実。加えて、放任故の楽しみがあるユール・ボールと違い、この昼食会自体の楽しさを提供出来るかは、開始後の主^{マルフォイ家}権に懸かっている。純血達の戦争は寧ろこれからなのだ。

とはいえ、僕の役割、或いは義務は完全に終わった。

ミネルバ・マクゴナガル教授は、僕の罰則はパーティーが開始されるまでであり、後片付けに加わる事は強制されないと事前に告げていた。その意図は少々不明確だったものの、イベントが完全に終わるま

で付き合わされると思つて居た僕からすれば朗報だった。

加えて、状況としても完璧であった。

繰り返すが、この昼食会には四年生以上に参加資格が無い。

つまり、フラー・デラクールは当然の事ながら追放である。

彼女は自分はボーバトンだから関係ないだとか、一応反乱を首謀した者の一人として参加する権利が有ると騒いでいたが、ミネルバ・マクゴナガル教授は他校の生徒だからと言って容赦する性格では無かった。今朝早くに自分の家族達と何とか合流しようとしたらしいが、警備の闇祓いから自校の馬車に連れ戻されたと聞いている。

そして一応、僕もホグワーツ四年生では有る。

此度の騒動はフラー・デラクールが僕を妹と踊らせようとするという戯言に端を発した訳で、しかし別イベントを立ち上げた時点でその辺りは完全に有耶無耶となっており、しかもパーティーの原理原則からすれば、相手を傷付けずに正当な形で断る事が出来るのだ。

その上、僕はユール・ボールのパートナーも当然見つけられていない。

文字通りあちこちを飛び回ったからこそその結果であり、けれども相手を探し歩かないで済む良い口実になったというのは、今回の重労働の中で唯一喜べる点だった。

そして、独り身が参加出来ない訳では無くとも、参加しない理由にはなる。だからこそ、僕はこの祝日クリスマスを丸一日、一週間の疲労を癒す為だけに使うつもりだった。

つまり落ち着く所に落ち着いた訳で、どう考えても完璧——そう、完璧な筈だった。

「如何なる形であれ貴方はデラクールの妹を誘い、そして彼女はそれを受けたのでしよう。何歳で有ろうと彼女はレディであり、男ならば最後まで自身の言動の責任を取るべきです」

……僕の誤算は、教授の融通が非常に利かない場合があるのを忘れていた事だった。

察に戻ろうとした僕を、ミネルバ・マクゴナガル教授は厳しい顔で制止した。その表情は今まで見た事無い位に恐ろしく、その気配は今

にも杖を抜きそうな程に危険だった。

「それに、この一週間で少くない大人達が貴方の顔を知っていますから、特別に参加が許されても誰も文句は言いません。それなりに道理が通じるホグワーツ生から色々話を聞きたいという者達も居るでしょう」

その理屈に対して、反論は幾らでも出来た。

「その上、これこそが最も重要な点ですが——貴方は頭の中で小難しい理屈を捏ねくり回し過ぎる傾向があります。今回の準備もそうですが、このパーティー自体も世間の広さ、自由さを自らの眼で見るとは良い機会の筈です。これもホグワーツによる一つの教育だと考え、大いに学ぶようにしなさい」

けれども、教授の真剣な瞳と真摯な言葉を前に、僕は何も反論を許されなかった。

一縷の望みとしてデラクル夫妻が断ってくれる事に懸けていたのだが、娘達から、また教授達からも何かを伝えられていたらしい。余りあちこち連れ歩いてはくれるなど釘を刺されたものの、笑いなगरらガブリエル・デラクルのエスコートを御願いされる始末だった。

加えて本当に最後の希望、つまりガブリエル・デラクル自身が、既に不要になったであろう僕に対してクビを宣告してくれるだろうという淡い期待も、姉とそっくりの輝くような笑顔によつて打ち砕かれた。

そして、ここまで逃げ道を的確に塞がれた上で尚逃げ出せるような冴えた手段というのは僕には思いつかず、最終的に僕は、ガブリエル・デラクルと共に昼食会に参加する覚悟を決めざるを得なかったのだった。

——実際問題、そのパーティーは悪い物では無かった。

一週間の重労働による疲労と小さな少女のエスコートの四苦八苦を別にすれば、そして僕が騒がしいのを好まない点を抜きにすれば、

特別と言うに相応しいクリスマスにはなつた。

世間は、世界は、僕が考えているよりも広かつた。

三つに分けざるを得なかつた、けれども見事に造られた会場で社交を楽しむ魔法使いというのは確かに多かつた。

各々が三つのテントを行き来し合い、時に自国自慢で上機嫌になり、また時に他国自慢に唸り、或いは見慣れない料理に舌鼓を打つ一方、他方は口に合わなくて顔を顰めたりと、真つ当な国際交流の楽しみ方をしている者は多かつた。

三校の下級生達もまた——少なくとも最初の方は——同じ。

大人達よりも拙く、純粹で、無邪気な物だったが、それぞれが存分に、そして気儘にパーティーを楽しみ始めていた。三校の制服の違いが有つても彼等の間に垣根というのは見て取れず、寧ろ同じ制服を着た人間が共に居る事自体が稀ですらあつた。また着飾れないという不満も何処へやら、彼等の御願ひを受けたニンフ達の演奏を背景として、さながらユール・ボールのように踊る事も行われていた。

もつとも、今回の問題、或いは参加者にとつての最大の余興はそれ以外にこそ有つた。

スリザリンの昼食会ならば、この形で良かったのだろう。

この会場を見れば、彼等が普段どのような社交会をやっているかは想像が付く。彼等が呼ぶような参加者も、主催の設定に従う事に慣れ切っている。

けれども、今回は、そのような人間ばかりではない。突貫で作られたパーティー故の多様性と無秩序は、決して良い方向のみには働かなかつた。

魔法使いという人種は、良くも悪くも古い存在だ。

高校や大学によつて人格を成形されて企業に入り、生活の金を稼ぐ必要がある“マグル”界と異なり、魔法界で生きるには究極的には社会性は不要である。魔法を使って自分達が暮らせるだけの作物を細々と作り、ひたすらに魔道を探究する事は決して不可能では無い。

そして古い純血にも大別して二種類居り、“純血”として魔法族の支配者足らんとした者達と、世の片隅で隠者として生きる事を是とし

た者達が居る。特に後者の方は伝統を受け継ぎ続けていると言えは聞こえが良いが、言ってみれば粗野で礼儀知らずな蛮族と殆ど変わらない。

つまり、三つの区分をまどろっこしいと考える者は少なからず居り、そのような人間は外で酒盛りや勝手なレクリエーションを開始したりと好き勝手に動き始めた。

更にはパーティーを盛り上げようと考えたのだろう、好き勝手に空中に水や火や稲妻を打ち上げ始める魔法使いが出て、その応酬か偽物の金貨や銀の雨が時折降り、機能も効果も良く解らない魔法具が光を放って派手に自爆し、無断で持ち込まれた魔法生物達が飼い主の下を逃げ出して騒動を引き起こした。

下級生達も一々それらに眼を輝かせて睨し立て、その無秩序さに触発されたのだろう。時にはその騒動の渦中へと考え無しに突っ込んでいき、一部はおもむろに雪合戦を始め、飽きたらそのままテントに戻って会場を泥々に汚していた。

正直、準備中の殺人的スケジュールよりも尚狂気であり、教授達や真つ当な良識を持つ大人達を残らず卒倒させようとしていたと言つて良い。

最初の建前を忘れて途中から生徒が大人から隔離され始める始末であり——けれども何処もかしこも特別なクリスマスマスを満喫していると解る笑顔だらけだった。

これもこれで、特別らしい、或いは魔法使いらしいと評する事は出来るかもしれない。余りに好意的過ぎる評価だが、特に“マグル”生まれの人間からはどれも圧倒的支持を受け、“悪い”大人達も無駄に気分を良くしていたのも事実だったからだ。

その中で笑顔で居られなかった極一部には勿論ミネルバ・マクゴナガル教授を含むが、一番損な役回りに従事されたのは、言わずもがな主^{マルフオイ家}催である。

ルシウス・マルフオイ氏は別に用事が存在したのか、参加を遠慮したのかは解らない。しかし、“純血”達の家族は概ね夫の方は姿が見えず、殆どが夫人ばかりだった。

そして彼女達を統括するナルシツサ・マルフォイ夫人は混沌の光景を前に笑顔を取り繕い切れていないまま、時に警備の闇祓い達を引き連れつつ、広い会場の方々を慌ただしく駆け回る事を余儀無くさせられていた。こんなつもりでは無かったとありありと考えている事は、別に聞かなくとも見れば一目瞭然であった。

しかしながら、彼女に挨拶する招待客の全てが例外無くパーティーの素晴らしさを絶賛していた事を考えれば、一応投資と苦勞の甲斐は有ったと言えるのかも知れない。どんな野蛮人でもマルフォイ家の名前は憶えただろうし、逆に良識派は彼女達の大変さを目の当たりにしたが故に、余計に強く記憶しただろう。

その鬱憤を晴らすかのように僕は嫌味を言われ、デラクール家の血についても迂遠な形で揶揄された——夫人はブラック家だが、マルフォイ家自体は海を渡ってきた家系で有り、依然情報を得る伝手が残っているようだ——のだが、それは必要経費と受け入れるべきだろう。

少なくとも表面上は、夫人はデラクール一家に対して非常に親切であり、当たり前のようにフランス語を操って彼女達に応対し、小さなガブリエル・デラクールに対してすら礼儀を欠かさなかった。確証は無いが、あれは多分僕を擁護してくれていたような気がする。

そしてガブリエル・デラクールだが、彼女が小さかったのは或る意味救いだった。

彼女は未だ学生では無い為に制服着用義務ドレスクコードに従う必要は全く無いのだが、過去の姉の物を調整したであろう蒼のボーバトンの制服を着ており、少しばかり早くそれを着る機会が訪れた事に御満悦だった。彼女の論理では、それも特別に着飾るの内に入ったようである。

更に、こういう事になるなら女性の扱いを事前にマルフォイに聞いておくべきだったと内心冷や冷やしていたし、ガブリエル・デラクールがもう少し世間に揉まれた女性であったならば僕の拙いエスコートに文句を言っただろうが、彼女は御姫様扱いされるだけで満足してくれたのは僥倖だった。イングラント、ホグワーツでの話、三校試合の姉の話と、一応僕が提供出来る話題は相応に有ったのも良かったの

だろう。

といつても、僕としてはガブリエル・デラクールが評判の悪いスリザリンから離れて同年代の友人を作るといふ建設的な行為を一貫して期待していたし、顔を緊張と紅潮に染めたホグワーツ一年生が彼女を誘いに来た事によつて一度は達成されかけたのだが——残念ながら、彼女は僕の下へと戻つて来てしまった。

その理由を問えば、

「姉さまが言ったとおりでーす」

とのような、答えにならない答えが返つて来た。

一年生にして上級生スリザリンの僕に立ち向かう騎士道精神グリフィン・ドリルの持ち主だからそう悪くないと思つたが、彼女にとつてはどうも不満だつたらしい。

更に理由を聞けば、顔は僕の方が好みと断言された上で、他の男に女の子を奪われるとは何事かと叱られた。……僕が促したとはいへ、半ば彼女から惹かれるようにフラフラと行つたというのに、女性というのは酷く理不尽だつた。

結局、その後彼女は僕から離れるような素振りも見せず、僕の傍に居る事を見咎めて——若しくは都合が良いと考えて——彼女を誘ガブリエルいにくる少年達の淡い恋心を丁寧かつ容赦無く砕いていき、パーティーの終了時刻、日が赤く染まる時間まで僕は解放される事は無かつた。

ニンフの合唱や演奏と共に簡単なダンスのエスコートをさせ、屋敷しもべ妖精を差し置いて食事の用意を手自らさせ、参加者達が勝手に始めた各所でのレクリエーションには殆ど例外無く巻き込まれ、そして方々から幾度と無く掛けられる大人達から冷やかしの声には気を良くしたりと、一応今回の発端ともいえる少女は最後までパーティーを満喫していた。

もつとも。

一番彼女を喜ばせたのは、やはりあの老人の最後のサプライズだったのかも知れない。

パーティーは、ホグズミードの片隅で行われた。

それは警備上も人数上も已むを得ない事だったが、マルフォイ夫人がパーティーの解散を告げた後、アルバス・ダンブルドアはボーバト

ンとダムストラングの少年少女達にこう告げたのだ。ここまで来たのだから、実際のホグワーツ城を見たくないかと。

会場にはアルバス・ダンブルドアが作ったミニチュアは存在したが、それはあくまで作り物であり、寧ろそれが有ったからこそ余計に期待を高めていたのかもしれない。当然彼等は熱狂し、しかもあの老人は彼等の保護者も連れて、少しばかり城を案内すると言いつ出した。

ミネルバ・マクゴナガル教授の呆れた表情が印象的であり、無茶をすと思うが、全くもって、あの老人は離れた所で見えられないならば好々爺なのだ。

ただ、政治の面から見て悪くは無いのは事実なのだ。

ホグワーツによる四人目の代表選手ハリー・ポッターの選出。

それは異国の小さな少年少女達にもやはりズルいと思わせただろうし、彼等の保護者達も当然悪印象を抱いただろう。その対価や代償という訳では無いが、自国の魔法の牙城に立ち入りを許すのは、彼等の好感度を稼ぐ手段として単純かつ効果的なのは確かだった。

勿論、子供や保護者達に服従の呪文が掛けられている可能性を思えば警備の面から見て悪手であり、しかも恐らくアルバス・ダンブルドアは四人目がハリー・ポッターで無ければそんな危ない橋を渡る事はしなかったのだろうが、あの老人は良くも悪くも己に多大な自信を持つに足る、今世紀で最も偉大な魔法使いだった。

……だから不満は、何故か僕も巻き込まれた事で、案内役をさせられた点だった。

生徒から直接聞いた方が解る事も多いじやろうとアルバス・ダンブルドアは嘯き、それなのに何故か他三寮の下級生達は自寮へと戻らせた上で、あの老人は僕に闇祓いによる警備付きの数百人を引率させたのだ。

流石にこの人数で城内をウロウロする事は無かったものの、既にユール・ボールの準備が整った大広間は部屋の外からであれ見せし、尚且つ逆に一々場所を案内する事が出来なかったからこそ、僕は多くの説明を余儀無くさせられた。

人前で語るなど全く慣れていないし、更には既にミニチュアの前で

同じような事を聞かせていた筈のガブリエル・デラクールが何故か機嫌を損ねた事も有つて、非常に厳しい苦難であつた。

ただ、それですらも序章。

特別なクリスマス的一天を締め括る、僕の本当の苦難はそれからやつてきた。

既にパーティーの片付けが始められている会場に戻つてきて、ガブリエル・デラクールを宥めた上で夫妻の下に帰した事によつて漸く解放されたと思つたのも束の間、夫妻への挨拶もそこそこに僕は大人達に拉致された。……嗚呼、それは拉致以外の何物でも無かつた。

もつとホグワーツの話聞かせて欲しいと大人達に押し掛けられ、パーティーの後片付けの助力に加わつていた人間達がせつかくだから自分達も聞きたいと騒ぎ出し、では既にホグズミードのpubで始めている二次会に行くかという話になつていた。

……僕は一切何も賛同していないのに、あの老人から特別の外出許可も取り付け——心の中で大いに罵つた事は言うまでもない——有無を言わず連れ去るといふ見事な技だつた。

そして、未成年だから無体はされないだろうという真つ当な期待は無意味だつた。

噂に聞くクイディッチ・ワールドカップ、そしてパーティー自体の惨状でも理解していたが、小さい子供達の監視から外れた魔法使いというのは、入学前のハーマイオニー・グレンジャーの比較にならない程に無礼で、不作法だつた。

三本の筈は大繁盛を通り越して客が溢れ、ホグズヘッドは半ば略奪を受けたように根こそぎ酒が買占められ、寒さなど御構い無しに野外で大々的に酒盛りが始まつており、更にはホグズミードの住民達もクリスマスだからと御祭り騒ぎに乱入していた。彼等の行状が「マグル」から程遠いのは理解していたが、その時程「マグル」のクリスマス^の過ごし方を見習つてくれと強く思つた事は無かつた。

そして、ホグワーツの話聞くとこの口実は何処へやら。大概の酔っ払い共には論理も何も無く勝手に自分の言いたい事を一方的に喋り、しかも僕の握つていたバタービールは何時の間にかファイア

ウイスキーにすり替えられていた。その結果として僕は途中から言葉が覚束なくなつて意識を殆ど飛ばす羽目になり、後日になつても自分が何をやったのかを思い出さず事は出来なかつた。

辛うじて僕に残っている記憶は、何故かずぶ濡れになつて頭から雫を垂らしていた、何時も以上に仏頂面でキレ気味のスネイプ教授。

その記憶から考えるに恐らく教授が連れ帰つてくれた、というか救出してくれたのだらうが、それすらも定かでは無い。単に、朦朧としかつた僕が見た幻覚という事も有り得る。いずれにしても、僕は気付けば制服のローブのままベッドに寝ており、眼を覚ました時には既に翌日の朝どころか日が傾きつつあつた。

そして、二日酔いに痛む頭と共に、僕は強く思った。

「――今回のような事は二度と御免だ」

僕に社交などという重労働を楽しむ才能は決して無く、そして如何なる理由が有ろうと他人の事情に深く関与すべきでは無いのだと。

深く、そう深く、心に刻み込んだのだつた。

ライブラリアン

ユール・ボール、或いはクリスマスパーティー。

その何れに参加したかを問わず、あの狂乱の宴では多くの者が散々騒ぎ、そしてまた想い出として強く心に残ったのだろう。クリスマスが終わった翌日ですら騒ぎと話題が尽きる事は無く、しかし流石に新年を迎えて新学期が始まってしまえば、ホグワーツは表面上完全に落ち着きを取り戻していた。

今ならば、教授達がクリスマスに全ての決着を付けようとした理由も解らないでもない。

仮に代替イベントが今後に繰延ばしになっていた場合、校内は未だに革命騒ぎ、御祭り気分を引き摺ったままだった筈だ。けれどもあして下級生達にも満足出来るイベントを用意し、全員に明確な区切りが付けられた事によって、彼等は自分達の日常を思い出す事が出来た。

そして考えてみれば、如何に今年三大魔法学校対抗試合が組み立ていようとも、五年にはO・W・L. が、七年にはN・E・W・T. が変わらず待ち受けているのだ。

ハロウィンから続くホグワーツの賑やかさで、彼等としても余計に実感が湧きにくかったのかもしれない。しかし、自身の将来を大きく決定する試験が今年有るとなれば、流石に現実と向き合わねばならなかった。

特に五年を中心として少くない人間が神経質となり、耐えきれなくなつて下級生を怒鳴りつける事もしばしばだったが、気分が良ければ鷹揚にもなれるという事だろう。クリスマス之余韻に未だに浸っている下級生達は怒鳴られた所で余り動揺する事は無かつたし、たとえ二月末には再度の楽しみが予定されているとしても、それを大つぴらに騒ぎ立てて、焦燥に追われる彼等の気分を逆撫するような事もしなかつた。例年通りのホグワーツが戻ってきていた。

そして僕の方とは言えば、やはり何も変わりは無かつた。

目覚めたその日の夜、つまりクリスマスの翌日にはミネルバ・マク

ゴナガル教授に告げて早々に帰宅させては貰ったものの、それから外出する気力は最早無く、殆ど何もする気が無いまま家で引き籠っている間に冬期休暇が終わっていた。

結局の所、あのクリスマスマスが劇的に僕を変えたという事も無いし、周りの扱いが変わったという事も——と言つても、変えられた所で大いに困る訳だが——無い。新学期が始まって以降も相変わらず嫌厭されたままであり、僕にとっては平穩そのものだった。

あの反乱パーティーの絵図を描いた一人が僕である事に全く誰も気付いていないとは思わないが、さりとてやはり、気付いている者は殆ど居ないだろう。

フラー・デラクールには口留めをし、更に僕が罰則を受けていたのは必然ホグズミードを中心としてであり、その姿をホグワーツ生が見る事は殆ど無かった。

パーティーに上級生が独りだけ混じるといふ事態にしても、あの日を楽しんだ下級生達にとっては大抵が大きく気に留める事でも無い問題だっただろう。更にはミネルバ・マクゴナガル教授や警備の闇祓いと普通に会話していた姿は見られていただろうから、僕の参加が黙認されている事に彼等なりの理屈を付けたに違いない。

そして逆に、僕がユール・ボールに参加していないといふ事に気付く者も居なかつた筈だ。

代表選手のような当然に目立つ立場の人間ならば別として、あの広い会場、それも暗くて混雑しているであろう場所で、一々誰が居て誰が居ないといふ事を完全に把握出来た者が居ると思えない。パーティー無しで一人で参加していれば悪目立ちもしただろうが、最初から居ないのならば気に留められようもない。

強いて言えば、スリザリン寮の人間くらいか。

下級生、上級生問わず、僕が確実に関わっていた事を知つて居そうなのは。

あの場に居た者は僕がマルフォイにした話を残らず全部聞いていたし、もしかしたら——というより十中八九、聞いていた下級生が僕の悪巧みに乗るよう彼に頼み込んだ事だろう。

そして寮内政治にしても下級生の女子生徒からの頼みにしても、彼の立場を思えば早々無碍に出来たとは思えないし、マルフォイ家の金銭と労力の負担さえ許容出来るのならば、やはり彼にとっても大いに利益が有る話だった。

しかし僕の関与をスリザリンが知っていても、今度は寮外に話が出る事も無い。

セドリック・デイゴリーの時とは違う。あの昼食会はマルフォイ家の、ドラコ・マルフォイの、その他聖二十八族の功績で無ければならなかったし、その功績を僕に奪い取らせるような作り話を吹聴する馬鹿は、決してスリザリンには居てはならないのだから。

クリスマス後と言えば、フラー・デラクールもあれ以降近付いては来なかった。

学期が始まって暫くの間、何故か自分は怒っていますというようなあからさまな態度を僕へと示していたが、正直言って僕の知った事では無い。

それどころか、余りにも目立ち過ぎる彼女が冷淡な対応を取つてくれる事は、学期末に彼女と近付いている所を見られている僕からすれば大いに歓迎すべき事で有った。

彼女の妹ガブリエルの方がふくろう便を定期的に送つてくるようになった事は少しばかり悩みの種だったが、あのパーティーの苦勞に比べれば、些細な時間を使うだけで済むのはマシなものだ。手紙の中身の半分が自分の事についてなのは良いとして、残り半分が大抵フラー・デラクールについての内容であるのも辟易する事の一つではあったが、まあ姉妹仲睦まじくて良い事ではあるのだろう。

ただ一つ。

懸念事項を上げるとすれば、それは未だにハーマイオニーと疎遠である点だった。

彼女からクリスマスプレゼントが一応送られて来ていたという事は、多少の救いだったと言えるだろう。けれどもそれは、毎年続けていた事を今年も続けただけという、いわば義理のような物で、彼女に特別の意図など無かったのかもしれない。

ハーマイオニーは新学期が始まって以降も一貫として僕に近寄ろうとしなかったし、明らかに僕を避ける意思を表明していた。図書室で彼女の姿を見かける事が有っても彼女は僕に視線を寄越そうとすらしなかったし、眼が合ったように見えても、全く興味が無さそうに、ついでと視線を逸らすだけで、彼女はそれ以上の反応を示さなかった。……嗚呼、一度だけ、彼女から接触が有ったか。

新学期が始まってから一日、二日経つての事。

ふくろうが彼女からの手紙を運んで来て、その中には、リータ・スキーターの取材にマルフォイと共に居合わせたかという質問が書かれていた。

僕は当然それに対して直ちにイエスと返答したのだが、彼女がその手紙を送ってきた意図らしき物に思い至ったのは、既にふくろうを飛ばした後だった。

リータ・スキーターの記事。

それはルビウス・ハグリッドが半巨人である事を暴露する内容だった。

彼の出自に気付いている事に関し、僕は一度もハーマイオニーに言及した事は無い筈だ。

しかし僕より彼に近いハーマイオニーが、彼の出自を全く予想していないとも考えられなかったし、僕がそれに気付いていると彼女が判断するのもまた有り得る話だった。

そして、彼が半巨人である情報が何処からリータ・スキーターに流れたのかを考えた場合、スリザリンである僕がその発信源だと考える事も不自然では無い。あの記事にはマルフォイが去年のヒツポグリフが自分を傷付けた事も書いて有ったから、僕がリータ・スキーターに彼の出自を漏らしたという発想は、非常に論理的であると評せるだろう。

都合の悪い事に僕にはそれを否定する材料も無く、あの記者が半巨人のスクープを得た他の手段を即座に思い付く事も出来なかったし、そもそもあの取材の場に居たというのは揺るぎない事実ではあった。結果として、僕は黙り込む以外の選択肢は存在しなかったのだ。

更に「良い」事に、僕の気を逸らしてくれるような事態も起こっていない。

ガブリエルのエスコートと無礼な魔法使い達の横暴によって僕は途中から心配するどころの話では無かったが、懸念されたクリスマストラブルの事件は全く無かった。

クリスマスパーティー・ユール・ボール共に、警備の教授や闇祓いの仕事は酔っ払いや常識知らずの大人達、或いは羽目を外し過ぎた生徒達を肅正するのみで、それ以外は平和そのものだったとミネルバ・マクゴナガル教授から直々に聞かされている。

クリスマス後の翌日から数日間、学校に残った生徒は寮に軟禁されて「大掃除」が行われたらしいが、それ以上の騒ぎが有ったとも聞かないから、何も出なかつたか、騒ぐ事の大きな何かが見つかつた訳でも無かつたのだろう。そして当然のように、あのクリスマス以降で校内に目立った変化というのも見られない。

結果として次の山場、「犯人」が動く事が有り得るとすれば第二の課題の時だろうという判断を下さざるを得ず——だからと言うには変だが、僕は去年と殆ど同じように、何時も通りの何もない学生生活を送っていた。

そして、気付けば既に二月半ば。

第二の課題を一週間後に控え、僕は新たな来訪者を迎える事になった。

今年は本当に色々と異例だった。

特にフラー・デラクルの来襲は僕に多大な面倒を齎したものであり、あれ以上の出来事は早々無く、寧ろ気軽に転がってきては大いに困る。それに比べれば、今回の来訪者は多少の意表を突かれたにせよ、決して予想外という程では無い。

「——僕は、君に連れられて外に行く気は無い」

僕は本に視線を落としたまま、気まずそうな表情を浮かべて近寄つ

てきた彼——ロナルド・ウィーズリーに向かって言った。

「去年のように世間話に付き合う義理も無いし、君が求めるような話を出来るとも思えない。しかし……それでも構わないというならば、そこに座りたまえ」

正直、座るかどうかは半信半疑だったと言って良い。

僕の方は用事が無い以上、彼が立ち去ろうとも何ら構わなかった。ただ、これまでの三年半僕に全く近付こうとしなかった彼は、今回その主義主張を返上するには十分な理由で僕の下を訪れたらしい。ロナルド・ウィーズリーはおずおずとした、もしくは恐々とした様子で僕の前に座り、机の上に積まれた本の山を御互いの顔が伺える程度に横へと除けた。

マダム・ピンスの方をちらりと見る。

けれども、彼女はこちらに一瞥を返してきただけで、再度蔵書の点検へと戻った。フラァー・テラクルの時のように近付いて来る気というの無いようだった。

……グリフィンドールとスリザリンが同席するのは面倒事以外の何物でも無いと思うが、これは一応警戒が溶けたのか、或いはロナルド・ウィーズリーが侮られているという事か。何れにしても、邪魔されたが故に答えずに済むという幸運は期待出来ないようである。

「余計な御託は要らない。本題だけを単刀直入に言ってくれば良い」

何から話せば良いかまごついている彼に告げてやれば、少し面食らった顔をした後、都合が良いと思う事にしたらしい。彼は僕の促し通り、自身の質問だけを口にした。

「あー、水の中で一時間生き延びる為の呪文を君は知っているかい？」
思わず僕は軽く顔を上げる。

彼から発された問いの内容は、それだけの価値が有った。

「——成程。随分とまた、興味深い宿題だ」

僕の視線か、或いは言葉か。余計に彼は居心地が悪そうに身を固くする。

だがやはり彼は立ち去る気配を全く見せず、そんな僕への嫌悪感を押し殺してまでこの時期に彼が聞きに来るといふ事など、たった一つしか考えられない。

ハリー・ポッター、否、代表選手達は、また無理難題を押し付けられたらしい。

「しかし何故、君が聞きに来る？」

ただ、それと別の疑問が湧いたのもまた事実だった。

「正直言つて、ここに来るとすればやはりハリー・ポッターが一番高く、仮にそうでなかったとしても、精々来るのはハーマイオニー・グレンジャーだと思つていた」

彼は第一の課題を自らの発想と実力で出し抜いたのだ。

それ程の人間が今更僕を頼りにするとも思えなかったが、仮にその可能性が有るとすれば、本人直々にか、或いは僕と一番近い彼女が来ると思つていた。僕とは交流が皆無であると言つて良いロナルド・ウィーズリーが訪れて来たのは、やはり意外の一言だった。

「えーつとまあ、僕も柄にも無い事をしていふと思うよ。ほらだつてさ、ホグワーツに入学して以来、僕は君を、その——」

「——毛嫌いしていたし、避けてもいたな。それについて僕は何も言う気が無いが。スリザリンとグリフィンドールの関係性からすれば、それが普通だ」

「まだるっこしい言い方をしなきゃ……まあそうだ」

ロナルド・ウィーズリーの声は更にバツの悪そうな物に変わった。「ただ、そのさ。僕がハリーと喧嘩していた時、君はハリーの味方をしてくれていただろう？ バッジの事もそうだし、ハリーだけが代表選手の地位を奪つたとは限らないつてさ。あれで僕は、その……つまり、僕が思つていた程、君は悪——」

そこまで聞いて、指で軽く机を叩く。

彼はピクリと跳ねるように反応し、言葉を止めた。

「ロナルド・ウィーズリー。グリフィンドールに有りがちな事で、ルビ

ウス・ハグリッドもそうだったが、表だけを見て全てを判断すべきではない」

グリフィンドールが時に直情馬鹿と揶揄されるのも妥当だろう。

彼等は事物の裏側に眼を向けたがらないし、自分が見なければそもそも存在しないようにすら考えてしまっている。

マルフォイのように、悪意や害意を直接向けて来る解りやすい敵というのは稀であり、親切や友好を装って近付いて来る人間こそが真の脅威なのだ。

そんなにも簡単に白黒はつきり付くのであれば、特に今年僕は——アルバス・ダンブルドアもまた同様に——余計な心労を抱えてはいない。

「たかが一時の、一つの出来事で僕を見なおすなどというのは、全く賢明な真似とは言えない。グリフィンドールがスリザリンと明確に一線を引くのは悪い事では無いのだ。特に三人組の中で最もグリフィンドールである君は、その視点を強く意識しておくべきだろう」

彼等は安易に人を信用し過ぎる。

ネビル・ロングボトムを始めとする他のグリフィンドール生がたとえマルフォイに虐められていようとも、僕は一貫してそれを当然の事として無関心のままで在り続けたのを容易く忘れ去っているらしい。

「それで。君でなくハリー・ポッターが来なかったのは何故だ」

「……ハリーは、冬休み中に君がお墓参りに行くと思っていたっぽいからさ」

彼は気分を害した様子だが、僕の問いに対してロナルド・ウィーズリーは大人しく答えた。その言葉の裏側には何処か諦念が滲み始めてもいたが、素直であるのは歓迎すべき事だった。

「君はああは言ったけど、ハリーには確信が有ったみたいだった。でも、君はクリスマスには残っていただろう？ 休みになっても君の姿は時たま見かけたし、グリフィンドールのチビ共なんて、クリスマスに君を見たなんて事すら言ってたもの」

「そうは言うものの、一応休暇中家へと帰りはしたんだがな。ただ……君達にスリザリンの状況など解る筈も無いのも事実か。そして、

確かに墓参りに行っていないのも正解ではある」

けれども、ハリー・ポッター個人としては不快を抱くのも当然の事か。

そう結論付けた僕に、けれども、ロナルド・ウィーズリーは慌てたように付け加えた。

「あーっと、別に怒っている訳じゃないと思うんだよ。ただ、何か腑に落ちきれていない感じっていうかさ。そういうのは、君達にとっては重大事なんだろう?」

「——そうだな」

「だから、ハリーも余計にもやもやしてるみたい。ほら、君も解ると思うけど、ハリーって結構頑固な所が有るだろ? それで今は余り君に近付きたくないんじゃないかな。君と話すと何時も、考えなければならぬ事で頭を一杯にされるとも言っていたし」

「……彼らしい言い草だ」

思わず軽く笑ってしまう。

確かに、彼が今考えるべきは第二の課題の事である。

僕などに関わっている暇など無いし、ロナルド・ウィーズリーが僕の下へと来た以上、その余裕も無いのだろう。それも、ハリー・ポッターの親友である彼が、嫌いなスリザリン生に対して近付かざるを得ない程に思い詰めている。

「彼の事は理解した。ハーマイオニーの方はどうした?」

「あー、あいつの事は良いんだよ」

もう一人の事に話題を振ると、彼は露骨に顔を顰めた。

「全く友人の居ない君も、ハーマイオニーの事は聞いているだろう?」

あいつはクラムと踊ってクリスマスは楽しく過ごしたんだよ。それなのに、クリスマスが終わってから何かいきなり不機嫌になるしさ。精神が不安定なのも良い加減にしてくれと思うよ」

友人に対する軽口というには、やはりその内容は相当辛辣なように思える。

けれどもクリスマス前、あのルビウス・ハグリッドの小屋における彼等二人の様子から見れば、これくらい容赦の無いのが通常にも思え

たし、そもそも彼は僕の事などどうでも良いようにグチグチと不満を零し続けていた。

「新学期が近付いて漸く機嫌を治してきたかと思ったら、学期始まって直ぐには何故か激怒するし。その割に、何時の間にか萎れたような態度に変わってるんだからさ。しかもその理由も、僕達には全く話してくれやしない。ユール・ボールでも思ったけど、女の子っていうのは神秘の塊だね。男には理解不能だよ」

「……別に僕はハーマイオニーの観察記録を話せと言ったつもりは無いんだがな」

「ぐっ」

ロナルド・ウィーズリーが呻き声を上げる。

軽く頬が紅潮しているのは、自分が喋り過ぎた事を自覚しているからか。大いに動揺した表情を浮かべたまま、取り繕うように言葉を続けた。

「で、でも、そういう訳で僕が君の所に来たんだよ。君は色々賢いのは二人から聞いているし。この答えも君ならば簡単に答えてくれるんじゃないかと思ってさ」

「そもそも代表選手は、誰の助けも無く一人で課題の答えを見付ける筈だが？」

「……そ、それは確かにそうだけど」

チクリと警告を飛ばせば、彼は怯んだように黙り込む。

けれども今回は、その正論で終わらせる気というのは僕の方にも無かった。

「……しかし、確かにスリザリンとしても、その程度の規則は時に無視されても構わないだろうとも考える。そもそも既に御目溢しがされているようだしな。彼、或いは君が他の者に多少助けを求めた所で、それが“上手く”行われる限りにおいては問題無いのだろう」

その行為が公然になってしまえば処罰されざるを得ないが。

それが限度を超えないのであれば、今回は見逃されるべきだと考える余地は有る。

「……っ？ どういう事だい、それ？」

「彼は一人だけ年齢が下であり、自分で名乗りを上げた訳でも無い。そして君達の寮監が、君達二人の協力に全く気付いていないなどと、まさか本気で思っている訳では無いだろうな？」

「……………ああ、そっか。マクゴナガルは、まあそうだよな」
ガツクリと項垂れるが、当然ハーマイオニーは気付いていたに違いない。

間接的にであっても教授陣に質問するような事をすれば流石に一線を超えるし、今後一切の助力が禁止されかねないが、少なくとも今まで通りの仲良し三人組で課題に取り組む事は黙認されている。ハーマイオニーがその事を利用出来るようになったのは、ガチガチに規則で縛られていた一年時から考えればまあ、一応進歩では有ると言えるか。

そして、他の代表選手も気付いては居るだろう。

セドリック・デイゴリーは当然、フラー・デラクールやビクトール・クラムも、四カ月近くホグワーツに居て全く勘付かない程に愚かでも無い筈だ。

ただ、二年の差異の存在はそれだけ大きいと彼等は考えているのだろうし、同じ課題ドラゴンに立ち向かった者同士として、ハリー・ポッターが過度な不正をする人間では無いとも信頼しているのかもしれない。

勿論、一番大きいのは自分達の実力に対する自信だろうが。

「でも、なら話が早いや」

気を取り直したように、ロナルド・ウィーズリーは僕へと顔を近づける。

周りに聞かれたくない話でも有るからだろう、彼の声は一段小さくなっていた。

「……………とにかく、そういう訳で答えを欲しいんだ。しかもほら、君も知っているだろうけど、僕は第一の課題では何ら活躍出来なかったからさ。ここでハリーにもハーマイオニーにも良い所を見せておきたいんだよ。そして君も僕を通じてハリーを秘密裏に助ける事が出来るんだ。良い話だと思わないか？」

……………四年今まで関わらなかつたから当然とも言えるが、このロナル

ド・ウィーズリーは全くもって僕という人間を理解していない。

別に僕はハリー・ポッターを率先して助けたいと思っても居ないし、彼が事故死したとしても悲しむような良心を持ち合わせてもいない。

この辺りはハリー・ポッターの方がまだ理解しているだろう。僕が彼を邪険にしないのは、決して好意や好感に基づく物では無いというのは解っていて——解っていないながら、ああいう対応をし続けるから質が悪いが——僕との交流を続けている。

ハリー・ポッターが僕の下に来ないのはロナルド・ウィーズリーが告げた理由だけでは無く、それを理解しているというのも小さくない筈だ。第一の課題前に彼が僕の下へ相談に来なかったように、恐らく彼は、僕達の今までの交流内容からして、僕が課題について助言してくれるかは怪しいと考えている事だろう。

そしてそれ以前に、最大の問題点が有る。

「君は随分と期待して僕の所に来たようだが——」

真つ直ぐとこちらに見詰めている彼に対して僕は嗤う。

「——それに関して僕は役に立てそうも無い。何せ、水の中で一時間生き延びる呪文だったか。その類の魔法に僕は心当たりも無いし、見当も付かないからだ」

何を言われたのか解らないと言うように、ロナルド・ウィーズリーは瞬きをした。

たっぷり二十秒程の時間を費やした後、彼は漸く言葉を絞り出した。

「……アー、マジ？」

「このような事で冗談は言わないな」

その必要性も感じられない。

「わざわざ僕に聞きに来たという事は、ハーマイオニーも知らないという事だろう。そしてここ最近、君達三人組の姿を図書室で頻繁に見

ている。しかし、それでも君達は見付けられなかった。だということに、僕が知っていると考える事自体が非論理的だろう」

「でも、君はスリザリンだろ？ 特別な魔法を知っているとか——」

「スリザリンに水中人^{マーベール}は居ない」

彼の妄言をばつさり切り捨てた。

そして彼は闇の魔術を一体何だと思っっているのか。

暫くこつちを見ていたが、僕が知らないのは事実だと理解したのである。彼は御手上げだというように天井を仰ぐ。余程落胆したのか、椅子から半ばずり落ちるような恰好になった。

「……けどさ、本当に見つかからないんだ。僕達さ、何百冊も探したんだぜ？ それなのに何処にも無し。何にも無し。手掛かり一つすら書いてやしない」

「まあそうだろうな。でなければ君は僕の前に居ないし、そもそも課題にはなっていないだろう。第一の課題においてドラゴンと抜き打ちで対峙させた人間達が、簡単に見つかる手段で解決させるとは思えない」

第一の課題が無茶苦茶で有った以上、第二の課題を多少手緩くする可能性が無いとも限らないが、さりとて大きく難易度が低下する事も無いだろう。少なくとも、単なる四年生が手頃に知れる情報で解決出来る程、容易くなるとも思えない。

故に、本来であれば彼にはさつきと御帰り願う所であるし、僕をこれまで通り放って欲しいものであるが——彼にとっては幸運、僕にとっては不運な事が一つ有る。

「但し。だからと言って、多少の“一般論”を述べられないという事でも無い」

「えっ？」

それは、その宿題が僕に興味を惹かせる物で有ったという点だ。

跳ねるように椅子へと座り直した彼に対し、僕は続ける。

「その内容を最初に口にしたのは正解だったな。それを聞かなければ、少しばかりの口出しをする気にすらならなかっただろう。何より、前회가ルドビッチ・バグマン好みだったというのも運が良かった」

「第一の課題？ 既に終わった事が、何か関係有るのかい？」

「それ自体は然して。ただ、今回の試合に関わっているのは彼のみ、彼の部署のみでは無く、もう一つの部署が存在しているという事だ」

ルドビッチ・バグマンは魔法ゲーム・スポーツ部。

しかし、此度の三校対抗試合においてはもう一つ、国際魔法協力部も関与している。

それらの部署が仲良しこよしという事も無いだろうし、しかもその部長であるバーテミウス・クラウチ氏は、あの湖の畔において第二の課題のヒントを僕へと残した。それも、余りにも露骨過ぎるとも言える類のヒントを。

だからこそ逆に何か仕掛けが有るように感じたし、強い関心を抱いた。

仮に第二の課題の主導がああの傲慢な貴族に存在していたならば、解りやすすぎる解決策を用意するとは思えない。彼等は酷く迂遠で、しかし美学の有る真似を好む。それを今ここで簡単に解き明かせるとは考えてもいないが、課題が行われる前に少しばかり多くの事を知っておくというのは、僕にとって非常に抗いがたい誘惑だった。

「さて、まず確認しておくが、ハーマイオニーはその解決手段について全く知らないし、君達は全く探し切れなかった。これは確かな事実であるんだろうな」

「……君には耳が付いていないのか？ 僕は間違いなくそう言ったぞ？」

「まあそう言うな。前提は大事だ。それを忘れると大いに間違える羽目になる」

苛々を見せたロナルド・ウィーズリーに少しウンザリしながら答える。

ハリー・ポッターも大概せつちかな方だが、彼は更に輪を掛けて短絡的な質らしい。

「そして、それは非常に重要な事だ。君も良く理解しているだろうが、ハーマイオニーは単なる学年一の優等生では無い。百点以上、完璧を求める神経質な人間であり、一年先の予習どころか二年先の範囲を摘

まんで学習していても可笑しくないような魔女だ」

「そういやハーマイオニーはO. W. L. の模擬テストを解いてみたとか、N. E. W. T. の範囲がどうか、何時ものように知識をひけらかしたり無意識に自慢したりしてたな。……まあ、彼女のそれが知ったかぶりや、無駄な見栄を張った訳でないのも良く知ってるけどさ」

「まさしく彼女らしい。そしてそれから推測出来る事も有る。つまり今回の課題はO. W. L. を修了し、N. E. W. T. に向けての勉強をしている者——つまりセドリック・デイゴリーでさえも、真つ当には知り得ない知識を用いなければ達成出来ない課題では無いかという事だ」

僕の言葉に、ロナルド・ウィーズリーは口をあんぐりと開けた。

「ウゲー。じゃあ、ハリーはセドリックですら知らない事をやらされようとしているって事かい？ 魔法省はハリーを殺したいと思って居るのか？ 余りにも無茶苦茶だろ」

「……それは彼等をドラゴンに立ち向わせた時点で言うべき台詞だったがな」

改めて思い返しても、普通のホグワーツ六、七年生が達成出来るとは思えない。

「ただ、真つ当な試験範囲や学習指導要領に存在しないからと言って、ホグワーツで教えられていないとは断言出来ない。フィリウス・フリットウィック教授は愉快的呪文を教えたがる傾向が有る。教授が少しばかり本来の範囲を外れて教えている可能性も無い訳ではない」「でも……それじゃあ、ハリーは不利じゃないか」

「一人だけ年齢制限以下だから当然だろう。そして、三校試合の本来の原理原則から言えば、彼の参加は決して違反でも何でも無い。今回の年齢線は特別措置に過ぎないからな」

かつての三大魔法学校対抗試合では十四歳の参加は禁じられておらず、しばしばゴブレットはそのような人間を選出してきた。三校で最も優秀な選手を決めるという趣旨からは、ハリー・ポッターが参加する事自体は決して外れる物では無い。

「まあ何が言いたいかというのだ。君達が散々探してこれまで見つからなかったというならば、少しばかり視点を變える必要が有るかもしれないという事だ」

「視点？」

「断言まではしない。君達が探し切れていない本の中に、欲しい情報が眠っている可能性も一応無い訳ではない。学ぼうとする者にとつて、ホグワーツの図書室は厳し過ぎるからな」

軽く溜息を吐く。

この辺りは「マグル」社会を知る者、当然ハーマイオニーも強く同意する事に違いない。一方でこのロナルド・ウィーズリー、つまり先進的なロンドンの図書館、そこで熱意をもつて働く親切な者達に会った事が無い人間には、決して理解出来ない類の感覚でも有る。

「しかし、今話を聞いていた限りでは、どうも君達は人海戦術で探しさえすれば全てが見つかると思つて居た節が有る。それで解決出来るならば問題無いし、ハーマイオニーもこれまで困りもしなかったのだろうが、道具は上手く使わなければ逆に害となりうるものだ」

印刷物の普及。

それは本を読む人間に対して工夫と試行錯誤、そして更なる技術の発展を要求した。

かつての時代、書物が多いという事は、疑う余地も無く善であった。だが、その「多い」というのは、所詮は数十から数百、どんなに頑張つても千程度の物差しに過ぎなかった。その程度で大図書館を名乗れた時代が過去の物となり、何千何万冊という本が平気で書架に収まり始めるようになる、多いという事は悪に変わり始めた。どう考へても、その全てに一人の人間が眼を通す事は現実的に不可能になったからだ。

本を探すという行為の意味が、かつてとは全く変わり始めた。

書架に無いから見つからないという時代では無く、書架に有つても見つからないという時代が到来したのだ。知識は氾濫し、人に牙を向き始めた。読書家ないし愛書家は、恐らく今後永遠に解決されないであろう難題に直面し、同時に一生付き合わざるを得なくなった。

そして今、彼等も全く同種の悩みを抱えている。

「図書館、或いは図書室。そこで最も本を探すのが上手い人物は誰だか解るか?」

「えっ?」

「と言つても、これは焦らす程の問いでも無いが」

意表を突かれたような声を上げた彼に、視線でもって答えを示した。

「司書?」
Librarian

「その通りだ」

僕達の視線の先には、カウンターで何やら書き物をしているマダム・ピンスが居た。

「図書を管理し、目録を作成し、そして書架に本を配置する人間こそが最も書物という物に熟知している。何処に何が有り、如何なる本に何が書かれているかを知っている。そうである事は何ら驚くに値しない——と言つても、魔法界では多少違うようだが」

僕が「マグル」の世界で良く知るそれと同じ名前であるが、仕事に對しての向き合い方を全く異にしている。この場合は悪い意味で、魔法界は旧かった。

彼女は本の守護という役割を果たしている、というかそれ以外の役割を果たしているかは怪しい。確かにそれは大事では有る。双子の呪文ジエミニオが存在するとは言つても、複製品は時間によつて劣化するし、そもそも羊皮紙で出来た、それも魔法的に保護された本というのは存在自体が稀少だ。その原典の保存という一点において、彼女は一応司書足り得ている。

ただ、図書室の書物を秩序と系統を意識された分類の下に並べるなどという親切な真似をしてくれず、明らかに独自の基準で配列されている。彼女には解りやすいのかも知れないが、利用者にとっては不親切極まりない。

加えて、探している本が何処に有るか質問しても、彼女はその生徒が本を盗むのでは無いかという疑念の眼つきで見えてきた挙句、大概の場合は満足な答えが返つてくる事は無い。

何よりレファレンス業務。

外の世界で司書が司書たる理由、王のみの為の蔵書から市民の為の蔵書となったが故に広く開放された技能。そして僕が“マグル”界に触れて以降一貫して有益であったサービスを、彼女は一切提供してくれないし、そもそも持ち合わせている事すら怪しい。

しかし——それは、やはり外が余りに進み過ぎているだけに過ぎないのだろう。

中世の因習を色濃く引くこの世界において客を尊重するサービスなど期待し得ないし、そもそもホグワーツ生は学費を支払っていない以上客ですらない。……ホグワーツ教授達も、この図書室の中から本を探すのは難しそうだ、というのが少々引つ掛かりはするが。

もつとも、それは非魔法界も魔法界も知っている人間で、しかも本を愛する人間だから言える事である。そうでないロナルド・ウィーズリーは案の定、嫌な顔をした。

「君さ、あのハゲタカみたいなマダム・ピンスが協力してくれると思ってるの？　だとしたら本当に頭がお目出度いぜ」

「そうだな。彼女は基本的に学生に対して不親切だ。聞いても答えを期待出来まい」

この学校に図書室嫌が多いのは、彼女の存在も多分に影響しているだろう。

あの管理アーガス・フィルチ人といい、アルバス・ダンブルドアの職員の選出基準はどう考えてもイカれている。まあ、平気でギルデロイ・ロックハートやルビウス・ハグリッドを雇用してしまう人間であるから、寧ろ自然なのかも知れないが。

「ただ、今回は更に彼女を頼るべきでは無い理由が有る。僕は三大魔法学校対抗試合の規則を詳しく知らないが、ここが僕達ホグワーツの自校である以上、不用意な真似は可能な限り慎むべきでは有るだろう。故に、最初から彼女に聞くのは論外だ」

もう少し親切なら努力して多少のヒントを聞き出す気にもなるが、そのような徒勞に従事するのは彼等とて御免だろう。

「だが司書の視点というのは参考になるし、そうでは無い僕達とて何

も見付けられない訳では無い。背表紙だけ見て関係が有りそうな本を片っ端から取り出す事が、本を探すという行為では無いんだ。ここでは最終的にはそうせざるを得ないが、まず頭を使え」

産業革命以降の印刷技術の発展で、一人の王が図書館に君臨する事は不可能になった。

既に大英図書館は一個人が把握出来る狭い世界では無く、機械によつて管理されて検索されざるを得ない世界へと変わっている。

しかし、それ以前の時代は確かに有り、現代において全く流用出来ない訳でもない。

「大事なものは、何処で、何を探すかだ。ハーマイオニー・グレンジャーは多くを知り、図書室を長く利用しているが、彼女でも調べきれない事が有る。例を出そう。」

——ティンダーブラストとスイフトステイック。それらについて調べたいならば何の本を探す？ 或いは、この二つの言葉から、君は一体何を連想する？」

答えが返ってくるという保証は無かった。

けれども、僕はハーマイオニー・グレンジャーから彼の友人の事を聞いている。余り触れられない彼に関してとは言え、それが返ってくるだろうと期待出来る程度の知識は有った。

「そりゃ勿論、クイディッチ関係の本を探すよ。連想するのはファイアボルトかな」

案の定、彼からは即座に回答が返って来た。

「ああ、そうだ。それらの二語は箒の製品名だった筈だな？」

「うん。どっちもエレビー&スパドモア社が発売した筈だよ。そして、その会社を作ったのはエイブル・スパドモアなんだけど、彼の息子であるランドルフ・スパドモアがファイアボルトを作ったんだ」

「……流石にそこまで記憶していないが、まあ君が言うならば正しいのだろう」

クイディッチ狂に知識で勝てると思っていない。

「何でそんな質問をしたのか解らないけど、余りにも簡単過ぎるよ。僕を馬鹿にしてるのかいって感じだね。こんな質問なんて今のクイ

ドイツファンには殆ど常識みたいなものだし、何よりハリーの箒に関する事なんだぜ？　こんなの眠っていたって答えられるさー！」

「そうか。自信満々なのは結構だが、僕は知識自慢をされたくて質問した訳では無い」

「……じゃあ、何が言いたいのさ」

「君は知っている。だが、ハーマイオニー・グレンジャーは知らないだろうという事だ」

僕の言葉に、ロナルド・ウィーズリーはピタリと止まった。

「そもそも彼女は其二語が箒の名前という事すら気付かないに違いない。速い^{Swiftstick}棒の方は兎も角、燃えやすい爆風^{Tinderblast}の方は謎掛けか何かだと思っだろう」

「……あー、確かにハーマイオニーならそうかもな。だってクラムがワールドカップでやった技をウォンスキーフエイントとか言うくらいだぜ？　一人じゃ絶対に探せっこないよ」

「絶対かどうかは別として、彼女は君のように正しい場所に真っ直ぐ行く事は出来ない。見当違いの場所を探し、時間を大いに使う羽目になる事だろう」

図書室内には確かに答えが存在しうる。

けれども、使う人間によつて容易く明暗が分かれる場合というのが有る。

「仮にそれらについて彼女が魔法具の一種だと見当を付けたとしても。広義で言えば間違っていないからな。しかし、彼女は探し出せるだろうか。このような本が有るかは知らないが、『今世紀の有名魔法具一覽』という本が有ったとして、その二つはその中に有るだろうか」

「えーと、多分見つかからないんじゃないかな」

「何故」

「だって、その二つの箒って正直不人気で余り売れなかった商品だぜ？　有名でも何でも無いもの。書いてあるとしたら多分、箒名鑑くらいの物だよ」

「だろうな。僕もそう考える」

彼の言葉に僕は頷く。

「百科事典という表現が通用するか解らないが、その手の万物の名前を記載する事を目指した書籍でも同じだろう。ティンダーブラストやスイフトステイックを探す為にTやSの項目を探したとしても載ってない。何故なら書き手や編集者は、それを一般的に必要と考えないからだ。君のいう専門書だけが、それを載せる意義を見出すだろう」

紙面は記載出来る内容に物理的な限界が存在し、全てを載せる訳には行かない。

大衆が知らなくても良いマイナーな筈の事など、わざわざ独立して取り上げもしない。

「けれどもだ。仮にそのような一般書の中を探したとしても、ティンダーブラストやスイフトステイックという単語を見つけられる可能性が皆無では無いと思わないか？ 勿論、1993年以前に書かれた本では記載されていないだろうが、今ならば期待出来る筈だ」

その問いには、ロナルド・ウィーズリーは初めピンと来なかったようだった。自分としても回りくどい問い方であると思っっているから、それでも己むを得ない事である。

けれども、僕は最初にヒントめいた発言をした上に、わざわざ1993年という年月も出した。だから、彼が最終的に答えられたのも不思議では無かった。

「あー、違うかも知れないけど、ファイアボルトの所には載ってるかもとか？ ティンダーブラストとかは有名じゃないけど、93年に出たファイアボルトはワールドカップに使われる程に革新的な筈だ。その二つについてさらっと触れられていても変じゃないだろう？」

「僕が期待した通りの答えをしてくれて嬉しい。そして素晴らしく合理的な発想だ」

ロナルド・ウィーズリーは褒められ慣れていないのか、顔を赤くした。

「勿論、それらの不人気商品について長々と書いてある事は期待出来ない。ただ、それを見つけてる事が出来れば、後は君の言うように名鑑に当たれば良い。それらの筈について一般人以上に詳しくなれるだ

ろう。けれども――」

「――ハーマイオニーにはそれが出来ない」

「そういう事だ。そして、それが明確に僕と違う点でも有る」

何故僕の事が出て来たのか解らなかつたロナルド・ウィーズリーが首を傾げた為、僕は説明を付け加える。

「つまり、僕はそれらの二語がファイアボルトに関する物だと知っていた。しかし一方、彼女は恐らく知らない。図書室を使う上ではそれが大きな差異になる」

言うなれば、本の大海の中での羅針盤。

それが有るか無いかによつて、時間も労力も全く違う。

「君はウォンスキーフェイントと発言したハーマイオニー・グレンジャーを揶揄したが、しかし彼女はクイディッチに関する技の何かという知識は有った。その点で言えば、図書室を使って探すのに苦労しない。物事を多少調べるのに専門家である必要は無い。ちらりとでも記憶に有ればそれで済む」

けれども、逆に聞いた事が無ければ一から探す必要が有る為に酷く苦労する事になると僕は続け、同時にふと三年前の事が思い浮かんだ。

「そう言えば、君達は一年の時にニコラス・フラメルについて調べていた筈だな？」

「えっ!? いや、確かにそうだけど」

彼は意表を突かれたような表情を浮かべるが、僕にとっては突飛な話題でも無かつた。

「しかし、君達は見つけられなかつた。ハーマイオニーがわざわざ僕に聞きに来たくらいだからな。彼は賢者の石の製造者として余りに有名であり、錬金術の書籍に当たりさえすれば、殆ど全ての教本にその名が載っているにも拘わらず」

彼等は、図書室を上手く使う事が出来なかつた。

「えっと、でもさ。それは現代の魔法使いを探していたからだぜ？」

「同じ事だ。その名前が何に関する物か、ちらりとですら思い浮かばなかつた。錬金術に関する人間の筈だという知識が有り、ここからほ

んの数十歩と数分程度の労力で答えを見付けられた僕と違ってな。そして散々見当違いな所を探す羽目になったのも今回と同じだ」

彼等が苦勞したという事はやはり、魔法界に一冊の本でもって全ての事物、或いは人物を総覧するような事典の作成という概念は無いようだ。いや、それを作成しうるだけの人的資源が、魔法界には存在しないと言うべきだろうか。

近代的な百科事典は、大勢の人間の手によって書かれるものであり、百科全書派の内部では論争が絶えず、離脱者も多数出た難事であった。魔法界全体の人数からして、そのような大勢の賛同者を同時に期待する事は困難な気もする。

ただ、今は魔法界の問題について懸念を示すべき時では無い。

「引つ掛かり、取っ掛かりというのは重要だ。それを多く持つていれば、物を理解するのに苦勞しない。ハーマイオニーのような優秀な記憶力を持っていなくとも、必要な時に必要な事を容易く取り出す事が可能になる」

「でも……多分それが無かったから今の僕達は困っているんだけど」

「そうだな。しかしそれでも現時点で何も出来ない訳では無い。まず自身が何を探し、何処を探すべきかを意識する事くらいは出来るのだ」

マグルの世界では、本を探すのにまずカード目録を探す必要すら無い時代が来つつある。

けれどもこの世界では未だ遙か遠く、だからこそ、ハーマイオニー・グレンジャーのように抜群の記憶力を持つていない人間が世界を把握するには、事前に頭を使う必要が有る。

「最初に君は、水の中で一時間ばかり生き延びる手段が知りたいと言った。しかし、その意味を真に考えたか？ その命題を掘り下げて検討したか？ 仮にそうで無いのならば、今ここで、改めて考え直さなければならぬ」

ハンプティ・ダンプティ

「水の中で一時間ばかり生き延びる。その表現自体が不明確極まりなくて僕には気に入らないのだが——まあそれは今は置いておこう」

今ここに居るのがハーマイオニーであれば当然触れた。

しかし、魔法界のみに生きる彼にこの理解出来るとは思えない。そんな徒労をわざわざする気にもなれなかった。

「今回特に意識すべきは、それは君達が求める最終目的では無いという事だ」

「……えっと、僕達はそれを探してたんだけど」

「別に全てを否定はしない。しかし、それは手段に過ぎず、真に求めているのは課題の達成では無いのか？ それも、大人達によつて一応安全措置が取られているという建前では有るが、命の危険が有る類の代物だ」

ピンと来ていないロナルド・ウィーズリーに、更に言葉を続ける。

「つまり、一時間生き延びるだけで終わりなのか。今回の宿題とやらは、誰が最も長く水底に沈んでいられるかを競う物に過ぎないのか、という事だ」

そこまで説明して漸く彼は気付いたらしい。

深刻そうな表情に変わった所を見ると、僕の質問の真意にも考えが及んだか。

「……ハリーは、一時間以内に大切な物を取り戻す必要が有るとか言ってた」

「つまり、どう考えても水の中で生き延びるだけでは不十分だな」

それを探す事が間違っている訳では無いが、仮に見付けられたとしても問題解決に繋がらない可能性が高い。

「移動する必要も有りそうだ。そして時間制限付きか。相応の速度も要求されるらしい。ハリー・ポッターがどれ程泳げるか知らないが、ホグワーツには水泳教育の時間など無いし、家では親族に軟禁されている彼が大得意とも思えない。加えて、ドラゴンのような脅威が水中に存在する可能性も有るから、戦う手段も必要そうではある」

当然、僕は何のヒントも無しにこういった事を言っている訳では無い。

僕の頭の中にはバーテミウス・クラウチ氏と会話した場所、スリザリンの談話室が面するホグワーツの巨大な湖、緑の部屋の中から窓を通して見える水魔や水中人、そして大イカが日向ぼっこをしている光景が浮かんでいた。

けれども、僕にはあの老紳士の信頼を裏切る気は更々無く、そもそもロナルド・ウィーズリーに話すような必要が無かった。

ただ、僕の言葉を聞いて彼は更に混乱したようだった。

単に水の中で過ごす手段さえ見付かれれば解決だと思っていた彼からすれば、余計に難題を突き付けられた気分なのだろう。

「……君の言葉を聞いてると、ハリーには絶対出来っこない気がしてくるんだけど」

「遺憾ながら、その感想には同意せざるを得ない」

正直な話、無理難題と言える。

「どう考えても、一つや二つの呪文で足りるとは思えないし、六年生や七年生が達成出来る難易度すら超えているように見える。ドラゴンもそうだろうと言えばそこまでだが——」

——バーテミウス・クラウチ氏の印象には合致しない。

第一の課題程に過激にしないだろうし、そこまでの技量を求めるとも思えない。

「だからこそ、僕は視点を變える必要が有ると言った。そして、僕達は魔法使いである以前に、知能を持った人間だ。杖一本で解決する義務も無いし、その必要が無い事は奇しくも君の親友が第一の課題で見せてくれた通りだ」

「呼び寄せ呪文……！　そうだ、君にも聞こうと思ってたんだ……！」

何故か顔を輝かせたロナルド・ウィーズリーは、彼の“良い”発想を僕に語り聞かせた。つまり、ダイビング器材一式を呼び寄せるといふ手法だ。

彼はそれが大層名案だと考えていたようだが、話を進めるにつれて最初の威勢は失われ、最後の方は殆ど消えるような声だった。わざわざ

ざ僕の評価を告げる必要も無いらしい。

失望を隠さず息を吐いて、僕はローブから杖を抜く。

ビビったように身を縮めた彼に構わず、僕はその杖を机の上に置いた。

「ハーマイオニーは機密保持法の観点から却下したようだし、道具が上手く機能しない可能性も有るが、僕は更に別の視点から却下しよう。魔法使いは魔法を万能で有ると考え過ぎている。けれども真にそうであるならば、魔法族は千年前の時点で既に『マグル』に勝っているし、1692年において、彼等から離れて静かに隠れ住む最終決定を下していない」

質量保存則を始めとして物理法則に従いはしないが、魔法に秩序が存在しない訳では無い。体系が存在し、制限が設定され、暴力の手段としても使い勝手は限定される。

ルーモス、と僕は呪文を唱える。

それに応えて、杖先には淡い白の灯りが輝いた。

「簡単な呪文で有れば、直接杖に触れずともこうして魔法を行使する事は可能だ。魔法使いは家の中で、或いは外の暗闇の中で、杖を探すのに苦労しない。これは厳密には杖無し魔法では無く、そしてこれは自分の杖だからこそ使える魔法でも有る」

アクシオ、と今度は唱えた。

二十センチばかりの些細な移動だが、机の上に置かれていた杖は確かに浮き上がり、僕の手の中にピタリと収まる。

「二年時に魔法を放つ為の四要素については学習しただろうが、呼び寄せ呪文では特に集中力、それも対象を心の中ではつきり想い描く事が重要だ。今こうして僕は杖を少し呼び寄せたが、それが出来たのは、魔法使いにとって杖は半身とも言えるからだ」

心象の中で正確に思い描くのに苦労もせず、難易度としても高い物でも無い。そう補足しながら、僕は杖を再度ローブの中へ仕舞った。「翻って第一の課題。彼は自身の箒を呼び寄せた。推測するに校舎か箒ロッカーから飛んできたのだろうから、誰にでも出来る事では無い。しかし、あの箒は彼が良く見知った道具。クイディッチ選手に

とつての半身のような物だと、やはり僕は理解しているが」

「……じゃあ、そういうのじゃないダイビング器材を呼び寄せるのは無理だつて事？」

「魔法使いとしての力量次第で可能では有るだろう。ただ、眼前に無い物は想像しにくく、難易度も高い。尚且つ、箒は自分で飛べる。一方、器材は飛べない。アレ一式だと重量も結構な物だった筈だから、正直望み薄だな」

法律違反云々、機械の作動どうこう以前。

魔法法則から見て、ロナルド・ウィーズリーの発想というのは論外だった。

「——話を元に戻すが、見方を変えるといふのは別だ。つまり、探す分野について」

魔法界で図書配架や分類についてもっと考えられていたのなら苦勞しなかったが、それでも多少の役に立ちはず。

「呪文の区分や分類に
おける境界といふのは柔軟であり、
それ個人によつて見解が異なりうるものだが、
やはり物を探す際の指針にはなる。そして、
今回は何も手掛かりが無い以上、
更に大きな枠組みで考えても構わないだろう」

何より、こちらの方が彼にとつて取っ付き易い筈だ。

「ホグワーツには一年から続く基本科目、呪文学、変身術、薬草学、そして魔法薬学が存在する。さて、今回は何処を探す？」

「そりゃ勿論……呪文学関係の本を探すべきじゃないのか？」
「何故」

「僕達に人を変身するような高度な術は使えない。なら、まず探すのは呪文学関係の本だろ？ まあ、ピンスはそんな風に御行儀よく並べてくれないけどさ」

僕は軽く頷く。

彼の回答には、一応及第点を与える事が出来る。

「でも、あのさ——」

「——君の言いたい事は解っている」

口を開いたロナルド・ウィーズリーを、僕は遮った。

「しかし、見つからなかったと言いたいのだろうか？　そして、それは既に確認した事であるから僕も重々承知している。だが僕としては、それは左程不思議ではないとも思っている。特に、君達が水の中で生き延びる為の呪文を探していた場合には」

「？　どうしてだよ？」

「仮に君がホグワーツの七年生で、それも人を変身させるような呪文を容易に使える程の優等生だったとする。その状況で、新たに水の中で過ごせる呪文を作り出そうと思うか？」

稲妻に打たれたように暫し静止した後、ロナルド・ウィーズリーは渋々答えた。

「……多分、思わない」

「そういう事だ」

多くの人間が、その結論を下すだろう。

「他の呪文で代用出来るのに、わざわざ新たな呪文を作る必要性というのは基本的に無い。発明した所で世間的に評価もされはしない。そういう例が全くない訳ではないが、期待し過ぎるべきではない。特に水中で長時間活動するというような、魔法族の普通の生活には必要とされない特殊技能に関する物であるならば猶更だ」

爆発呪文ボンバーダと破碎呪文コンフリンゴのような例も有るが、それらは汎用性故に扱われ、また需要が見出された物だ。

水の中で過ごすという限定的用法の魔法が幾つも発明されたとも思えないし、改良しようとした酔狂な人間も極少数に違いない。魔法族は根本的に陸の生物であり、仮に水中生物や植物の研究等をするとしても、まず変身術を覚えようと努力する。新たに呪文を作るよりも余程近道で、世に出回っている多くの教本を参考にも出来る正攻法だ。

「まして呪文と変身Charms Transfiguring Spellsは特に境界が曖昧だ。ホグワー

ツのカリキュラムを見る限り、酔をワインに変えたりするような類の魔法は変容Transfigurationを主題とする変身術では無く、呪文学の方で教えられている。だから、両者の区別は参考になりにくいし、一方の分

野で出来れば事足りるとする場合も多い。同じ目的を二つの呪文によって別々に達成しようとする事は少ないのだ」

もつとも、この辺については、教授陣は異なる見解を持っているかもしれない。

気になつてしまった以上後で質問してみようとは思うが、今回の口ナルド・ウィーズリーには不要でも有るだろう。そもそも興味を持ちはするまい。

「君達が適切な呪文を探そうとしていたのは理解するし、見つければこのような事を考える事など不要だった。しかし、見つからないならばこのように頭を使う事が必要であるし、別の分野から探す事も有るだろう。そして、呪文学と変身術を除けば、範囲はかなり絞られる」
「えつと、薬草学や魔法薬学から探せつて事か」

「そうだな。後は魔法史から探し出す事も不可能とは言えない」
疑問を浮かべた彼に、僕は理由を付け加える。

「水中人は魔法族と歴史的に関わりが有る。彼等が1692年に意見を聞きに呼ばれた事や、グローガン・スタンプ魔法大臣の“ヒトたる存在”^{Being}についての定義判断が挙げられる。必然、両者には当然交流や行き来が有った。また、小鬼のような派手な戦争まで行かないが、紛争というのも幾らでも存在した。その際に使用した道具か呪文まで載っているのは期待するのは望み薄だが、当たつて見て損は無い。要は調べる視点とは幾らでも有るのだ」

一面から見て物事を把握する事は出来ない。

Professional
専門 一つの事について多方面の視点から検討・理解出来るのが
専門家であり、それが出来なければ、図書室で本を数分捲つただけの素人と何ら変わりはない。今回はそこまで求められている訳では無いだろうが、参考にする事は可能だろう。

「勿論、それだけでは余りにも広過ぎるし、全ての書籍がきっちり魔法薬学や薬草学の本という形で別れている訳でも無い。しかし、探し方の視点については触れた筈だ。君達は単に水の中で一時間を過ごす為の手段を探している訳では無いからな」

「早く移動出来て、戦うのに苦労しない手段か。本当に極狭い範囲を

探せば見つかりそうだ」

ロナルド・ウィーズリーは皮肉を飛ばすが、僕は無視した。

「そして何より——君は奇しくも、既にこの問題の中核を突いた」

僕にとつて最も注意を引いた点。

或いは疑念を抱いた点は、この課題の大前提にこそある。

彼と会話するまで余り考えてみなかったが、こうして整理してしまえば違和感が際立っていた。この課題は、余りにも無茶苦茶で、不可思議に満ちている。そしてそれ故に僕のような人間は、悪辣な陥穽が何処かに存在するのでは無いかと、当然のように疑ってしまう。

「ダイビング器材の提言は馬鹿げていたが、そこまで理解していた上でああ言ったならば見事と言える。君は僕が触れようとしていた事を先取りした。どう考えても一つ二つの呪文では何も解決しそうにない、そう思ってしまった瞬間から僕が抱いていた、一つの疑念についてだ」

「……そりゃ光栄だね。で、君の言い回しは相変わらず面倒臭いけど、そりゃ何だい？」

軽く肩を竦めた彼からは、やはり論理も知性も感じない。

けれども直感で正解を引いたのであれば、一応評価されるべきだろう。

「仮に、薬草学の教科書から君達の求める答えが発見されたとしよう。早く移動出来て、戦うのに苦労しない手段だ。さてここで、今回の課題で一番問題となるのは何だか解るか？」

「当然、どうやって手に入れるかだろ？」

「違う。当然、それが許されるかだ」

万事が適当な魔法族は、万人に解る形で規則を公開してくれない。反則を一切露わにしない——どのチームも事例集は収集しているだろうし、審判経験者が漏洩する事などザラだろうにだ——クイデイチが良い例だ。公開が必ずしも公正を示す訳では無いが、万人に理解を求めると頃な手段では有るのは間違いない。しかし、そのような手段を魔法族は嫌う傾向が強く、今回もまた同じだ。

代表選手で無いならば必要無いと考えられているからか、三大魔法

学校対抗試合における詳細な規則を僕は当然知らない。まあ、それは今更文句を言っても仕方がないが、今回においては大いに問題になるように思える。

「第一の課題で、彼はファイアボルトをわざわざ呼び寄せた。持ち込みをしなかったという事は、禁止されていたからだろう。つまり、箒は許可されていなかった。武器以外の、明らかに攻撃力が無い道具ですら、あの時は駄目だった」

だからこそ彼は呼び寄せ呪文を必要とし、そして課題において効果的でもあった。

「では、第二の課題は？ 第一の課題で杖以外が禁止され、第二の課題が同じ三大魔法学校対抗試合の枠組みに有るのならば、同じく禁止されると考えるのが自然だ。わざわざ持ち込みが許可されると大々的に告知されない限り、規則が変わったと考える余地は無い」

「……えーと、でも代表選手は事前にヒントを貰ったし、三か月の準備期間が与えられたんだぞ？ そしてまさかローブで潜る訳には行かないんだから水着は必要だろ？」

「ならばその『準備』は何処まで許される？ そもそも君は水着を例に挙げたが、水着の持ち込みが許されるというのは、絶対に規則には書かれていない」

「どうしてだよ？ 寧ろ禁止する方が可笑しいだろ」

「ならば、聞くんが。今回の課題が水場で行われると、最初から代表選手は知っていたか？」

ロナルド・ウィーズリーは黙り込んだ。

僕が知っているのは、代表選手が金の卵を与えられたという点まで。

あの卵にどういう仕掛けが有るかは知る由も無いが、開ければ自動的に水の中で課題が行われると解るといふ事も無いだろう。必然、水着の持ち込みが許可されるというような規則を制定する事で、あからさまなヒントを出してしまう筈も無い。

「その辺りの規則がどうなっているかについて、ハリー・ポッターは何か言っていたか？」

問うように視線を向ければ、ロナルド・ウィーズリーは露骨に逸らした。

「……まあ、最初から期待していなかったが。」

「既に示した通り、呼び寄せ呪文には制限が有る。決して何でも呼べる訳では無い。生物の類を直接呼び寄せる事は基本的に制限され、加えて魔法を掛ける事で呼び寄せ自体を禁じる事も出来る。そもそも毎回毎回呼び寄せ呪文を使わせるというのも芸がない」

第一の課題におけるハリー・ポッターの解決手段は劇的だったが、それを二回も三回も繰り返されるといっても興醒めだ。数百メートル先の校舎から一々呼び寄せる実力が無ければスタートラインにすら立てないというのも余りにナンセンスである。

「……そう。発想としては悪くない筈なのだ。一つや二つの真つ当な呪文で解決しそうにないというのであれば、呪文を使う事自体を諦めて他所から丸ごと持ってくるというのは基本だ。魔法族とて全てを杖一本で解決する訳では無い。魔法薬や魔法具に代表されるように、事前に労力と時間を投資して解決するという事も有り得る」

市場で売っているような道具を買ってきて解決するような真似は流石に駄目だろう。

しかし、例えば自分で調合した魔法薬を使うならば、それもまた選手の実力の内だとも評せるのでは無いか。三校で最も優秀な選手を決めるといふ、三大魔法学校対抗試合の趣旨に反しないのでは無いだろうか。

「けれども、持ち込みが一切禁止の場合、今までの僕の推測や示唆は全く的外れになる。そうなってしまう。だがそれでは余りにも詰まらない」

「つまらないって……。そんな言い方ありかよ」

「そうか？ 水中で一時間ばかり過ごす手段として変身術を使う事などホグワーツ一年生にすら発想出来るだろうに、それが実際に出来る者こそが必ず最高点を得てしまうであろうという、そんな単純すぎる予測が立つのは不適切では無いのか？」

適切な形でのヒトの変身、それもヒトの姿から掛け離れた変身は、

七年生程度が早々扱える難易度でも無い。

しかし、それを実演出来た人間は大いに評価され——逆にその手段を選ぶ実力が無い人間、その挑戦から逃げた者は、当然のように点数を引かれる。そんな事が有っていいのだろうか。

「勿論……持ち込みが反則だという事が判明するのは悪い訳では無い。その場合は完全に割り切って呪文学と変身術の中で答えを探そうと努力出来る。指針が明快になる。最高は取れなくとも、その次を狙う位は出来るだろう。これはこれで歓迎すべき事ではある」

「……その割に、君は随分とその答えには不満そうだな」

「当然だ。呪文の知識クイズや変身術コンテストをやるだけならば、三大魔法学校対抗試合である意味が無い。用意された正答というのは有るんだろうが、数学では無い以上、最高の解法が一つしか許されないというのは余りに陳腐で、腑に落ちない」

あれだけ第一の課題は見応えが有ったのだ。

結果として全員が全く別の手段を使ったものの、そうならない場合でもやはり四者四様の試合となったのは間違いない。同じ結膜炎の呪文を選択した者が居ても、ドラゴンの種族と個体が異なり、別個の機会に戦わされるともなれば、展開は当然変わり得る。対応には個人差と能力差が生じ、評価の際に選手間の格差を付ける事も当然のよう出来る。

けれども恐らく今回は違う。

課題の舞台となるであろう場所から逆算して考えれば、代表選手間で——特に、水の中での活動の解決策として同じ方法を選択した者達の間で——大きく変わる展開が有ると思えない。創意工夫も何も無く、ただ水中を活動出来る魔法が上手いだけの人間が勝つというのは、正直言って面白味が無さ過ぎる。

そして僕はあのバーテミス・クラウチ氏を知るからこそ——彼の意地の悪さを理解しているからこそ、何か仕掛けが有るような気がして止まないのだった。

「でもさ」

ロナルド・ウィーズリーは、考え考え言葉を口にする。

「魔法省の役人なんてどいつもこいつも頭がガチガチなんじゃないの。君は自分の好みで何か屁理屈をでっち上げただけで、そこまで真剣に考えていないかも知れないし」

……その指摘は、確かに的を射ているのかもしれない。

まず趣味嗜好で検討してしまうというのは、恐らく僕の悪癖だ。特に第一の課題がああいう形だったから、余計それに引き摺られてしまっている事は否定出来ない。

「そもそも君はクラウチが今回の課題に関わっていると考えているらしいけど、仮にそうでもパーシーが信奉する人間だぜ？ バグマンみたいに面白味を求めすぎるのも困るけど、課題に面白味や盛り上がりが必要だとか、そんな真つ当な事を考えてるとは思わないよ」

「パーシー・ウエーザ……ウィーズリーか」

かつてのグリフィンドール生、そしてあの期における男子の首席。

貴族中の貴族たる老紳士が露骨に軽んじ、しかし最低限の評価は与えていた人間。

「折角話題に出たのだ。その君の兄はどういう人間なんだ」

「パーシーの事か？」

「ああ」

頷いて肯定を示せば、大きく顔を歪めた。

「そりゃあ……ハーマイオニーを二、三回り頭でつかちにしたような人間さ。とにかく融通が利かないガリ勉強郎だ。そして規則にも煩い。無駄に気取っていて、仕切り屋でも有る」

「――」

「魔法省に就職してからは特に酷くなった。夏休み中なんてずっとピリピリしてしたし、怒鳴ってばかりだったな。しかも、今回の三校対抗試合についても、僕達に教えてくれもしなかった。なのに、僕達の前で極秘事項がどうか、勿体ぶって口にしてたんだ。あいつは自分が他人より優れてる事を自慢したいだけの自惚れ屋だよ」

……水を向けた身では有るが、ここまでベラベラ喋ってくれるとは思わなかった。

「あいつが監督生でも首席でも無くなった事は、今年になって最も良かった事の内の一つだね。全く煩いのなんの。あの権力大好き男が魔法大臣でもなつちやったらこの世の終わりだよ。フレッドとジョージなんかはアズカバンに入れられた挙句、延々と鍋の厚さを測らせられるのは間違いないさ……!」

「……吸魂鬼と鍋が何故繋がるか解らないが、兎に角凄く嫌な奴だという事か?」

三年間遠目から見ている限りではそう思えなかったが、意外な事も有る物だ。

そんな想いと共に聞いてみれば、彼は非常に形容しがたい表情を浮かべた。そして何かを言いたそうに口を頻りにもごもごした後、漸く重い口を開いた。

「……アー、いや、その、決して嫌な奴では無いというか」

「今までの言葉は嘘だったという事か?」

「ええと……全て事実で、本当に嫌な奴なただけ……何だろう。非常に表現に困るといふか……どう言えば良いのか解らないけど、敢えて言うならば——」

「——君の兄だからか」

「そう! 僕の兄なんだよ! とにかくそういう事だ!」

理屈も論理も何も無い。

けれども——言葉に出来ず、また言葉が不要であるという事はやはり有るだろう。

「……そうか。君の兄、か」

背もたれに大きく体重を預けた。

兄弟の居ない僕に、その感覚は全く解らない。

ただ、どんなに口で悪く言っているても、嫌っているという感情までは伝わっては来なかった。どんなに性格や気質が合わないとしても、彼にとっては自分の兄で、家族で、それは何が有ろうと決して揺るぎはしない繋がりのだろう。

ロナルド・ウィーズリーはパーシー・ウィーズリーに好意を抱いて居なくとも、それでも家族の情は抱いている。そしてそれが両立し得る事を、僕はこの身で良く理解している。

「えっと、ここまで言っておいてなんだけど、君がわざわざ聞くって事は、パーシーが何かヤバい事をやったとか、そういう訳じゃないよな？」

「……いや、その懸念は大いに外れだ。今回君に聞いたのは偶々で、気紛れに過ぎない」

しまったという表情をあからさまに浮かべている彼に首を振る。

何時も何時も、確たる計画を持って僕が動いていると思われても困るものだ。

「パーシー・ウィーズリーに思う所が有って君に質問した訳では無い。僕はあくまでバーテミス・クラウチ氏の部下であるという点のみに関心が有った。君の兄が彼の部下で無かったのなら、僕は今回話題にすらしなかつただろう」

「……クラウチ？ 何でレッドフィールドがクラウチを気にするんだよ」

「彼とは少しばかり、そして直接会話を交わした事があるからだ。その中で君の兄の話が出たから、少々興味を持って君に聞いてみたに過ぎない」

まあ少しばかり、と表現するには踏み込んだ話では有ったのだが。

「脱線はこれくらいにしておこう。そして君の考え、つまり僕が考え過ぎだという指摘自体も一理有る。あくまで僕のは“一般論”に過ぎず、今回の宿題に対して直接向かい合っている君の方が正しいというのは有り得る話だ。どうするか自体は君達が決めると良い」

話題を修正し、纏めに掛かる。

最初は余り気が向かなかつたが、一度検討し出してみると興味深くは有った。

自分がこの課題に立ち向かうのは絶対に御免だと言えるものの、完全な安全圏で頭を使うには良い暇潰しになったといえる。その点に關しては、わざわざ僕へと話を持ち込んできたロナルド・ウィーズ

リーに感謝しても良い。

「二応これまでの話を整理すると、僕の本命は魔法薬学か薬草学。魔法史学も参考になる余地は有る。……嗚呼、仮に変身術や呪文学の分野を探すとしても、僕であれば水に関わる本は余り選ばない。今まで君達を読んで来なかった類の本を探さだろう」

「……えっと、何で水に関する本は選ばないんだい？」

「君達が散々探した挙句、ヒントすら見付けられていないからだ」

それで解決していたならばこのような事は言わない。

けれども見つかっていないのであれば、やはりこれも視点を変えるべきなのだ。

「君は水の中で生き延びる方法を聞いたが、既にそれのみに拘る事無く、水に関係有りそうな本は当然片っ端から探していた筈だ。中々見つからないのであれば、余計にその選択をした事だろう。けれども、それでも尚、三人掛かりで何も見つける事が出来なかった」

ならば、そこには無いと考えるのがやはり自然だろう。

「つまり、真つ当な方法で見付ける事は不可能では無いかと僕は疑っている。当初は水中で使用する事を想定されて発明された訳では無い呪文の、教科書的で無い用法では無いかと」

ファイアボルトの欄、或いはその開発者の欄でティンダーブラストやスウィフトステイクが触れられる可能性が有るように、解説中に湖底でも利用は可能であるとサラツと触れている事は有り得ない話ではない。

「……それって、水の魔法を探したら馬鹿を見るって事か？ 流石にそんな性格悪い奴なんて早々居ないし、正直反則だろ」

「まあ断言はしないがな。単に古くて忘れ去られた呪文か、或いは新しく発明された呪文だという可能性も無い訳ではない。その場合でも、今まで見つからなかった事に理屈は付けられる」

呪文が見つかると思えば、考えられるのはそのどちらかだろう。

「そして僕は当然気が向かないのだが……君達がそれでも水に関する本から呪文を探したいのであれば、水中の生存にも種類が有るという事は最低限意識しておくべきだ」

水の中で生き延びる。

その不明確さが気に入らない根源的な理由でも有る。

「つまり鯨と鮫の違い、多量の酸素を水上で確保し効率的に運用するか、水中から酸素を取り込むかの差異だ。そもそも呼吸が不要な生物も居る。結果は同じように見えても方法論は異なり得るのだ。呪文学の分野を探すなら、その辺りはヒントになるかもしれない」

「……えーっと、全く意味が解らないんだけど」

「だろうな。だから省いたし、後からハーマイオニーに相談したまえ。彼女ならば理解した上で探しているとは思って居るが、彼女は時に視野狭窄に陥る事が有る。一応確認しておくに越した事は無い」

やはり指針は大事なのだ。

特に今回のような、図書室が素直に答えを用意してくれない類の、少しばかり捻った内容を探している場合においては。

「何より——君は既に最善で最短の、そして最も賢明な手段を取っている」

「え？」

「図書室のみが答えを与えてくれるという訳では無い。君達次第、君達の周りの人間達次第であるが、今回はそちらの方がまだ目が有るのかもしれない」

彼は偉大な一步をもう踏み出している。

呆けた返答を寄越した彼に、僕は軽く笑った。

「つまり、詳しい人間に聞く事だ」

図書室の本を一々ひっくり返すなど愚の骨頂。

今回彼が僕に試みたように、それこそが最も単純かつ効果的な手段である。

「無論、僕は詳しい人間では無かった。君の求める情報を提供出来ず、端的に言えば役立たずだった。けれども、一度失敗したからと言って諦める道理は何処にも無い。今回は教授には聞けないが、それ以外の誰に聞けば良いかというのは今までの話で大体見当が付くだろう？」

合同授業で共にする魔法薬学は別として、グリフィンドール生の薬草学の成績は流石に知らない。まあ前者は当然、後者においてもその

最優秀生徒はハーマイオニー・グレンジャー以外に居ないだろうが、授業範囲外の広範な知識を持つているかは別問題だ。

更に四年生のみでは無く別学年も含めて考えるとかなれば、僕は知る由も無い。

「既に解つていると思うが、聞き出せるのが取っ掛かり程度でも構わない。流石に直接的な答えを持つている人間は居ないだろうし、取っ掛かりさえあれば、後は君達が図書室で調べれば良いだけなのだから。当然、今回においては『上手く』やる必要が有るのも言うまでもないな？」

三大魔法学校対抗試合においては、代表選手は自らの力のみで課題を達成する。それが建前に過ぎないとしても、それが秩序である以上、表向きは維持されなければならない。

……口が堅く、自身の活躍や貢献を濫りに吹聴しないグリフィンドールか。余り想像が付かないが、七学年全てを探せば居ない事はないだろう。そして彼等の交友関係で見つからないというのなら、所詮はそこまでの話でしかない。

「でもさ、それなら長々と君が小難しい話をする必要が有ったのかよ」

「……何が言いたいかは予想が付くが、一応続けたまえ」

「君は長々と話してくれたけど、要は魔法薬学や薬草学に詳しい奴に聞くのが一番手っ取り早そうだった事だろ？　じゃあ最初からそう言えば済んだんじゃないか」

恨みがましく言うロナルド・ウィーズリーに、僕は長く溜息を吐いた。

彼は全くもって、何も理解する気が無いらしい。手軽な答えが傍に居るのも善し悪しなのだろう。だが、今回のように困る場合も有るし、今回においてはそれは避けられるべきだという事を、彼は既に忘れてしまっている。

「その答えは一理有ると言つて良い。寧ろ僕としてはその方が楽だった」

「じゃあ、何でそうしなかったんだい？」

「君は最初に自分が何を言ったのか忘れたのか？　君はハリー・ポツ

ターの役に立ちたいと言った。最初から詳しい誰かに聞くだけでは、君が活躍したとは言えないだろうに。少なくとも、君がその意味を理解した上で指揮を執らねば、それは功績とは言えない」

その言葉を聞いて漸く、ロナルド・ウィーズリーはバツの悪そうな表情を浮かべた。

僕も殆ど全てを記憶出来るような人間では無いから煩くは言わないが、それでも流星にその日の自分の発言位は記憶していて欲しいものだ。

「何より、聞き出すにも技術が居る。人間というのは、誰かから唐突に質問されて、直ぐに思い出せるようには出来ていない。特に今回のような、水の中で生き延びる方法という抽象性の高い質問ならば猶更だ。順序立てて話を聞いたり、多少のヒントや自身の希望を口にしたリする事によって、相手から初めて出て来る情報というのも有り得る」

たまたまその情報を直近で知ったという状況で無い限り、普通は思ひ浮かばない。

「……君って友達居ない筈だけど、何でそういう事解るんだい？」

「彼の——マルフォイの口を割らせるには、時に技術が必要であるからだ」

そして実験台としても手頃で、便利で、都合も良い。

……まあ、僕が真に必要なとする情報は簡単に口を開き、逆に必要ではあるが是非とも欲しいとまでは言えない情報は洩る傾向が有るといのが少々腑に落ちないが。ただこれは余り重大な理由が有る訳でも無く、僕と彼とでは価値観が異なるというだけに過ぎないのかも知れない。

「僕のスリザリンでの生活は良いだろう」

余計な詮索をされるのは好きでは無い。

「後は君の問題、グリフィンドールの問題だ。僕の説明を一言一句繰り返す必要は無いし、君なりに話せば良い。従えとすら言わない。これは一般論に過ぎず、今回の事例で用いるには不適當かも知れないからな。そこまでは僕も責任を持ってない」

ハーマイオニーあたりは、僕の口出しを拒絶しそうである。

それもまた構わない。僕にとってハリー・ポッターの生死が左程重要でないように、彼が優勝するかどうかというのは更に関心が薄い。

そもその話、僕は彼が三校試合で勝つべきでは無いと考えている——と言つても、流石にそこまで助言する気は無いが。近くに「犯人」が潜んでいる可能性を理解しながら、明らかにハリー・ポッター寄りの干渉をするというのは適切では無いからだ。

「ええと、ともかく君の言いたい事は良く解つ……いや、あんまり解らなかつたな。クソツ、ハリーが言つてた事が解るぞ。一度話してしまふと、考え事で頭の中を一杯にされる。やっぱり君、イカレてるな。どう考えても普通じゃないよ」

「僕に言われても困る。それを求めたのは君なのだから」

「アー、でも何だ。その……えーつと。わざわざ君の所に来た意味は有つたというか。つまり、僕が君に対して何を言いたいかというところ——」

「——嗚呼、その先は不要だ」

ロナルド・ウィーズリーを遮る。

何を言おうとしたかは解るし、それは言わせるべきでは無いからだ。

「まさか何の打算や利益も無しに、僕がこう長々と話すと思つたのか？ 商品を受け取った後なら、その対価を求められないとでも考えていたのか？ だとすれば余りにも虫が良過ぎ、君はスリザリンという物を甘く見過ぎている」

愕然とした表情を浮かべたロナルド・ウィーズリーに、僕は更に笑つた。

最初に述べた通り、彼は僕の事をそう悪くないスリザリンだと考えていたのだろう。

けれどもそう思つてしまった時点で、彼は既に蛇の罠に立ち入つてしまつている。あからさまに隙を見せられて付け込まない程、僕は御人好しでも何でも無い。

「しかし、今回僕が君に答えを与えた訳では無いのは事実だ。僕に

とつても興味深い話題では有った。恩に着せすぎるといふのも不当ではある」

義理難く恩を返すのはグリフィンドールでは無い。

仲間の為、己が信義の為ならば、それを都合良く忘れてしまえる事こそ彼等の本領でも有る。

「だから一度で良い。僕が助力を求めた際に、少しばかり耳を傾けてくれれば良い。嗚呼、それも君が僕の頼みを拒絶したら終わり。僕の一度切りの求めに対し、君が一度応じるか、或いは一度断ってみせるか。それで全て清算という形で構わない」

現時点で必要になるとは限らない。今年必要になるかどうかすら怪しい。

だが、保険は何処にでも掛けておいて損は無い。特に彼はハリ・ポッターやハーマイオニーと違い、容易く操れる類の駒では無いからだ。今回は彼に対して縛りを課すには都合が良く、その点においても利益が有ったというべきか。

「つまり僕は、君が断らないだろうと考える程度の些細な頼み事しかない。見誤ってしまえば、僕は君に何も頼み事を出来ないままに終わる。その程度の対価で有り、貸しに過ぎない。御互いに、それくらい軽い方が都合が良いだろう」

「……それって僕に有利過ぎない？ だって、君が何を言っても僕が断れば良い訳だろ？」

「その行為が君の良心に反しないならば、別にそれで構わないが」
「……………」

グリフィンドールは恰好付けたがりであり、その上、これは人間として許容出来るかの問題だ。あの二人の親友であるというのなら、早々簡単に出来ない類の行為である。

勿論、スリザリンである僕は何ら躊躇無く断るだろうが。

「……えーと、その今回の貸しとやらについて少し解らないんだけどさ」

「構わない。事前にそれを解消しておくのは、僕としても望む所でもある」

「じゃあ聞くんだけど。それは例え、ハーマイオニーへの口利きをしろって事なんかじゃ無いよね？　そういう面倒な真似に関わるのは、僕は絶対に御免なんだけど」

彼から飛び出た問いに思わず眉根を寄せる。

事前の予想の何れとも大きく外れ、そして突飛で荒唐無稽だった。

「何故そこでハーマイオニーが出て来るのか解らないが……その回答としては否だ。君を通して彼女をどうこうするような、そんな非効率な真似をする気は無い」

是が非でも必要となれば自分で彼女の下に行くし、仮に仲介が必要だとしても、ハリー・ポッターに頼むだろう。

ロナルド・ウィーズリーは短気で短絡的過ぎるし、ハーマイオニーと口論せずには居られない発想や考え方をしがちだ。場を収める為の仲介者としては、全く不適當である。

「じゃあ……まあ、それで良いけど。——あつ、良いつて言うのは、その貸して良いつていう意味だぞ。君がどんな頼みをしてこようと、多分僕は断るからな……！」

「その台詞は、君に頼み事をした時に再度聞くとしよう」

そして絶対では無く多分という単語を選択した時点で、既に語るに落ちている。

荒々しく立ち上がった彼を他所に、僕は視線を手元の本へと落とす。

彼はこれ以上の助力を求めているだろうし、僕もそれを与える気は無い。どういう答えを彼等が導き出すか自体には興味があるが、それは一週間後に自然と解る事だ。そしてまた答えが無いというので僕も当然に納得出来る。ハーマイオニー・グレンジャーが求めるような場合でない限り、彼等の傍に付き纏う必要を感じない。

現時点で特に関心を持ち、課題によって確定したいと考えているのはただ一点だけ。

「——重要な事だから敢えて繰り返しておくが。第二の課題で杖以外の持ち込みが一切禁じられるのかどうかだけは明確化しておきたまえ」

彼を視界に入れないうままに、最後の忠告を投げ掛ける。

「僕の一般論をハリー・ポッターやハーマイオニーが重視しない事は何ら構わない。だがそれだけは確実にしておくべきだ。万一ハリー・ポッターが知らないのならば、ミネルバ・マクゴナガル教授の下にでも聞きに行かせれば済むだろう。然して手間が掛かるという話でも無い」

クイディッチと異なり直接的に命が懸っている以上、代表選手が規則を明確化したいという要望は決して無碍にされないとは推測している。魔法省との摺り合わせも有って直ぐに答えが返って来ない事も有り得るが、全く無反応という事も無いだろう。

「そしてだ。結果としてやはり持ち込みが原則禁止されるという回答が返って来たならば、単に僕の考え過ぎで、杞憂に終わる。その方が単純で、君達にとっては都合が良い。素直に呪文学や変身術の分野を探すだけで何らかの答えが見つかるに違いない」

ハリー・ポッターに扱う実力が存在するかはまた別問題だが。

それでも、この課題の目指す所というのは最低限把握する事が出来る。

「けれども仮に、自分の力とは明らかに呼べない物を除いて、何か道具を持ち込む事自体は禁じられないという回答。ないしは水着や保護スーツの持ち込みすら曖昧にした上で、その行為が規則違反かどうかまで考えるのも課題だというような事実上の無回答が返って来た場合は……十分に注意する事を勧める」

この課題が決して単純な物では無いと。

水の中で生き延びる為の解法のみを求めているのではないと、そう示唆して来た場合。

「——僕の勘でしか無いが。その場合、この課題の出題者は酷く性格が悪い」

第二の課題とその顛末

第二の課題。

ホグワーツ湖底で行われた人質救出もまた、何事も無く終わった。セドリック・デイゴリーが一番に帰還して一位。

ハリー・ポッターが道徳性を理由に加点され二位。

ビクトール・クラムは二番目に帰還したものの三位。

フラー・デラクルスは課題を途中で棄権した事で四位。

その代表選手の何れにも大きな怪我も無く、他に人的、物的被害が出たという訳でも無い。

加えて、この試合を目眩ましとして国内で他に大事件が起こされたという事も無い。既に世間はクイディッチワールドカップの際に闇の印が上がったのを忘れたかのように、下らないニュースやゴシップの話題で盛り上がっていた。

つまりは表面上平穩のままであり、残る課題は後一つ。

それさえ終わってしまえば、ホグワーツは事件の渦中から外れる。

ハリー・ポッターの周辺、ハーマイオニー・グレンジャーから危険は遠ざかる。

裏を返すと、此度の「犯人」には既に後が無くなった。

ハリー・ポッターを無理矢理代表選手にさせるという周到かつ大胆な真似をやっておきながら、未だに全く表立った行動を取る事は出来ず、結果として残る一度の機会で「事」を起こさなければ——本当に

「生き残った男の子」が本命ならば、だが——ならなくなった。

最後までもなれば、誰だって今まで以上に警戒する。

ホグワーツ教授陣にしてもアルバス・ダンブルドアにしても、第三の課題においては最大限注意を払う事だろうし、これまでと違って終わった後の事を考えなくて良い以上、自分達の時間も労力も学期末一週間前の一日六月二十四日の為に大きく費やす事だろう。

更には此度の三校対抗試合の運営に魔法省が大きく関わっているのだから、そのトップたる魔法大臣も課題を見に来る筈であり、他国からの客——クリスマスの時とは比較にならないような海外の高官

達もホグワーツを訪れるのが容易に予想出来る。

クイディッチワールドカップの時と同等、或いはそれ以上の警備が校内には敷かれる事は間違いない、その中で「事」を起こすというのは不可能に近い。……近い、筈だ。

ドラゴン。そして水中。

その何れの課題でも干渉の仕方は幾らでも有っただろうに、本気でハリー・ポッターの命を狙うならば幾らでもやりようが有っただろうに——「犯人」は何も行動を起こさなかった。

僕達は何か見逃しているのか。何かを間違えているのか。

ハリー・ポッター、そして三大魔法学校対抗試合。その何れも「犯人」とっては関心が無いのではないかと思ってしまう程に、六月末のたつた一日さえ注意を払えば全ては終わりだといつかのよう、代表選手が四人呼ばれたハロウインの夜以外は事が上手く進み過ぎている。

何も起こらない。本来それは良い事に違いなかった。

けれども去年の騒動が懐かしくなる程に、今年の平穩は不気味だった。

第二の課題は九時半に始められ、規定通りならば十時半前後に終わる。

もつとも課題が終わってから即授業という無体は流石に行われないう予定であったし、審査員の審議や採点の時間も考慮に入れる必要があり、更にはハリー・ポッターの帰還が大幅に遅れた以上、その判断は正しかったのだろう。

しかし第一の課題の時と同様に半日は、つまり午後からは普段通り授業をやる気のようなのである。

そして一応、午前中のみ授業と午後のみ授業では今回大きな差異が生じ得る。

つまりは前回と異なり課題後にそのまま宴会を開いて騒ぎ続ける

事が出来ないという問題が生じるといふ点であり、その事実には気が付いた生徒からは不満も出たらしいが、だからと言って一時間の為に一日を潰せという要望に教授陣が頷く筈も無い。既に午後からは平常通り授業が行われる事は予告されている。

とは言え、昼まではグリフィンドールやハッフルパフが多少騒ぐ猶豫が与えられ、それ以外の生徒にも暇が出来たのは確かであった。

故に僕は図書室に向かって少しばかり調べ物をした後、何時も通り静かに本を読んでいたのだが——しかし、つかつかと怒り心頭で歩いてきた彼女は、両手で僕の着いていた机を強く叩きながら大声で言った。

「何故でーすか！　ここは当然、落ち込む女の子を慰めに来てくれる所でーす！」

「……………」

そして僕達は案の定、図書室から叩き出された。

フラー・デラクールは僕を校庭へと連れ出した。

午前中は授業が行われていない以上、手頃な空き教室が存在しないという事も有ったし、暖かい校内には人の眼が有り過ぎるという事も有るだろう。つまりはまあ、彼女があのような形で第二の課題を終えてしまった事とも無関係ではない筈だった。

「——寒いですね」

「今朝、湖底に潜らせられた人間に言う台詞ではないでーす」

僕の呟きに、銀の彼女は耳聴く反応する。

こちらへ向ける視線にも、少しばかりの非難が混じっていた。

「…………まあ、確かにそれを言われては返す言葉も有りませんが」

白い息が僕の口元から漏れ出る。

外に連れ出す気だと聞いて荷物を置くついでに寮からコートを取って来たが、強く吹き荒ぶ風は、着込んだ上からでも体温を大いに奪ってくれる。第二の課題を見ていた時も思ったが、良くもまあ、こ

の四人は課題から逃げなかったものだ。

「今更聞く事では無いかもしれませんが、身体の方は？ ガブリエルもそうですが、貴方の方はアルバス・ダンブルドアの護りも無く一時間ばかり湖底に居た訳でしょう？」

「ええ。中々マダム・ポンフリーが解放してくれなくて困りまーした。ただどちらかと言えば、私よりガブリエルを大いに心配したからこそ帰してくれなかった訳でーすが」

「……まあ、そうでしょうね」

水中に沈んでいる内は何らかの魔法が掛かっていただろうが、それも水上に浮上してからは解けた筈だ。そして陸まで移動するほんの数分で有っても、九歳の女の子の身体にとって二月の水は非常に大きな負担だろう。

「でも、もうガブリエルの方も身体の芯まで温まったので問題有りませーん」

「……言葉を聞く限りでは、置いてきたようですが。それは良いんですか？」

「ええ。約束したから良いのでーす」

手頃なベンチを発見したフラァーは一度杖を振って多少綺麗にした後、更に胸元からハンカチを取り出して置き、その上に座った。一方僕は一々そのような事を気にする身では無い。そのまま彼女の横に距離を開けて座り、持ってきた小さな本を片手で開いて読み始めた。

「……解っていましたか、本ツ当、機微の無い人ひとでーす」

「だとすれば、一々僕を連れ出さないで欲しい物ですがね」

呆れ半分、諦め半分の声を軽く受け流す。

まさか先程の言葉通りに、本気で慰めて欲しかった訳でもあるまい。

如何にポーバトン内に彼女の敵が多かろうが一人くらいは友人が居るだろうし、そうで無くとも、課題の失敗に傷心の彼女を慰めようとする男は大勢居るのは確実だ。そのような言葉が僕から出てくるのを期待する方が大いに間違っている。

「それで、用件が有るから連れ出したのでしょうか？」

「……用件が無ければ話をしてはいけないのですか」

「少なくとも僕はそうですが。何も無ければ基本話し掛ける事は有りません」

僕が口を開くのは、授業や課題の際に必要な場合が殆ど。

後は気紛れに話し掛けて来たマルフォイの応対をする程度で、それ以外に言葉を交わす相手も居ない。例外はハーマイオニー・グレンジャーくらいの物だが、その例外はもう数か月ずっと疎遠になってしまっている。

けれどもフラー・デラクールは、何故か僕に聞かせるように大きく溜息を吐いた。

「……ああ、これは私も悪かったのでーすね」

ガツクリと脱力して項垂れた後、しかし次に上げられた声には怒りが有った。

「ですが！ やっぱり貴方にも非が有るでしょう……！ ユール・ボールに参加しない挙句、何時の間にか自宅に帰っているとはどういう事ですか！ その癖、新学期が始まってから一切謝りにも来ないとは思いませんでーした！」

「……僕に何を求めているんですか」

視界の端で騒がしい彼女を他所に、僕はページを捲る。

「ユール・ボールの事をまだ言っているんですか？ そもそも、三年生以下の昼食会に出してしまった以上、僕は四年生以上のイベントに参加すべきでは無いでしょう。結果的に規則を破る事にはなりましたが、それでも均衡は保たれるべきだ」

ガブリエル・デラクールも何故かその前提で動いていたような気がするが、それは決して許されるべきでない行為だった。

「そして貴方はレイブンクローのロジャー・デイビス、でしたか？

彼をパートナーとして楽しい夜を過ごしたとは聞きましたよ」

「……何故、それを知っているんです？ 貴方は噂に興味が無いと思っただけでーす」

「良く解りませんが、彼がわざわざ直接僕に伝えに来たので」

下級生のスリザリンの下に何しに来たんだか、あの男は。

「……一応、そう一応言っておきまーすが、私は余り楽しく有りませーんでした。彼は表面上のエスコートは完璧でーしたが、心が全く伴っていなかったでーす」

そして彼女は一体何を伝えたいのか。

意味の通らない事を言う似た物カップルだという事なのだろうか。

「では、ユール・ボールの事はもう良いでーす……！ 何も言わず勝手に帰ったのは何故でーすか！ 新学期になっても何も言いに来ないのはどうしてでーすか！」

「……いや何故も何も、伝える理由も近付く理由も無いでしょう」

僕はフラー・デラクールと友人でも何でも無い。

二日ばかり止むを得ず関わる羽目になっただけで、ただそれだけの関係だった。

「でも、貴方はガブリエールと手紙の遣り取りをしていると聞いてまーす！」

「それは彼女から送ってくるからですよ。あのクリスマスの日も半ば大人達に拉致されたとは言え、彼女に別れの言葉もそこそこに立ち去った負い目が有りますしね」

「……その辺りは意外と義理堅いのですね、貴方は」

「義理堅いというか……何時辞めたら良いと思います？ 辞め時が解らないんですが」

「私が知る筈無いでしょう！」

激怒を叩きつけて来る彼女に内心のみで溜息を吐く。

出来れば姉経由でガブリエルに辞めるよう伝えて欲しかったのだが、この様子では受け容れてくれそうにもないし、彼女が飽きるまでは付き合う以外に無いのだろう。

しかし問題は、既に手紙に何を書いて良いのか解らなくなってきたという点だ。

僕の学生生活など何ら変わり映えがしないから、話題が尽きてくるのも早かった。ほんの三か月、数度の遣り取りでこれなのだから、流石に二年、つまり Hogwart's 基準での入学まで続くという事は止めて欲しいのだが。

……まあ、良い。

手元の本を閉じる。

どの道、彼女は静かに読書をさせてくれる気は無さそうだ。

「では、今度は僕が質問しましょう。第二の課題はどういう物だったのです？」

「……」

真つ直ぐ視線を合わせて問い掛ければ、彼女は唇を軽く噛んだ。

「貴方は今回、非常に難しい立場に追い遣られました。貴方は代表選手の中で一人だけ失敗した。第一の課題とは全く正反対。貴方に好意的なボーバトンの生徒でも今の貴方には話し掛け辛いでしょうし、場合によっては陰口を再開させたりもするでしょう」

「……それが解つていて、貴方は私から話を聞こうとするのですか」

「話す気が無いというならば、それを尊重しますが」

無理に彼女の口を割る必要までは感じない。

「ただ、人伝てに僕の所まで課題の内容が伝わってくるのには時間が掛かりそうです。更には他の三者が一々僕の下を訪れてくれる事はないでしょうし、僕の疑問に答えてもくれないでしょう。一方で貴方は何の理由で僕を呼び出したのか解りませんが、非常に有り難い事に今僕の前に居る。となれば当然、僕は貴方に聞くのが手っ取り早い」

「……貴方の疑問に答えられるのは私だけ、でーすか？」

「一応間違つていませんが、それが何か？」

そう言えば、彼女は何故だか僅かに瞳を輝かせた。

けれども、直ぐに顔を俯かせた事によって見えなくなった。

「……良いでしょう。周りも今は直接私に聞いてくる事は有りませーんが、何時までも口を閉じておく事は出来ないとも思いまーす。貴方は過大に評価する事も、過小に評価する事もしない人でーすから。今回は他の誰よりも聞き手に相応しいのでしよう」

スコットランド特有の曇り空を見上げ、フラー・デラクールは言った。

「課題。その中身ですね。ええ、とにかく、酷い所でーした」

第二の課題は特異だった。

水中という性質上、地上からは代表選手が何をやっているのか全く見えない。

一応水中人からの報告が有ったのか、或いは何か魔法を使つて見ていたのか解らないが、ルドビッチ・バグマン アルバス・タンブルドア 司会進行や審査員はある程度情報を把握していたようである。それは代表選手に命の危険が生じた場合は急行しなければならぬ以上何ら不自然では無く、寧ろそう在つて然るべきだと言えるだろう。

実際、フラーが課題失敗になると速やかに——魔法省の役人がやつたのか、或いは親切過ぎる水中人がやつたのかまでは湖上からは全く見えなかったが——水上に引き上げられたのだ。第一と同様に無茶な課題だったが、夥しい死者を出した過去の轍を踏むつもりはないという宣言は丸切り嘘という訳では無かつたらしい。

そして彼等を通じて間接的に、観客もまた選手達の動向を一応把握する事は出来た。

ただ、その内容も今何処に居るか、何の脅威に立ち向かっているか程度の物で、詳細と言うには程遠かった。はつきり言えば、観客を含めた地上の人間には水中で何が起こつていたのかが全く解らなかつたに等しく、大逆転の要因となつたハリー・ポッターの“道徳的”行為とやらも例外では無かつた。

当然、フラー・デラクールが何故失敗したのかも、詳細は解らぬままである。

「私は悔つていまーした。もっと上手く出来ると思つていまーした。あそこまで湖底というのが酷い所だとは、考えても無かつたのでーす」

今は水中に居ないというのに、彼女は震えていた。

「何よりも最悪なのが、水の痛さでーす。冷たーいというよりも、肌を焼く炎のようでーした。それに視界も良くないでーす。悪い場所は、三メートル先も見えませーんでした。泳ぐ為に足を動かすと黒い泥

が巻き上がり、水が濁って暗くなりまーす」

「……嗚呼、代表選手への課題には水温と視界の克服も有った訳ですね。実体験に基づかない推測というのは全く役に立たない。そう強く実感しますよ」

第一の課題が常識外れだったから事前に余り意識していなかったが、スコットランドの二月末、それも九時半から湖に潜水させる課題というのも大概イカレていた。

あの時の気温はどんなに高く見積もっても五度より多少上と言った程度。水温というのはそれより遥かに高いだろうが、湖底を楽しくダイビングというには寒すぎるだろう。

確かに魔法族は「マグル」より病気に掛かりにくく丈夫でもあるし、魔法によつて多少の保護を掛ける事も出来る——実際、彼等三人は地上で何らかの魔法を使っていたようだ——が、冬の湖底を一時間ばかり散歩させるのは普通に死人が出てても可笑しくなかった。

加えて視界か。

言われてみれば、あの湖の透明度は決して高いとも言えない。

人間の眼は水中で正確に物体を見られるような構造をしていないし、さらに今回の課題の目的は大切な物、攫われた彼女達の人質を取り戻す事なのだ。その為には恐らく——

「——ルドビッチ・バグマンの話聞いていた限りでは、代表選手は湖の何処にガブリエル達が居るかというのは伝えられていなかったようですが？」

「その通りでーす。私は彼女をわたりしまず探す必要が有りまーした」

案の定、フラー・デラクールは銀の髪を大きく揺らして頷いた。「とはいえ、あの湖は相当広い。一応試合の王道でセオリー言えば、人質が繋がれているとすれば湖の中央だろうとあたりをつけるんですが……幾らなんでも、ノーヒントという訳でも無いでしょう？」

「ええ。鈍く光る石が点々と置かれていたーり、時折水中人の歌が聞こえてきたーりしまーした。多分、目的地が湖の中央だというのも正解でーす」

肯定するフラーの表情は暗い。

それは、彼女が課題に失敗したからだけでは無さそうだった。

「でも、水中では何度も止まって魔法を使わないと方向が解らなくなーり、水草の茂みや黒の森によって道を塞がれたーりしました。あの広さと深さですから散々迷いまーしたし、一時間で戻るどころか、辿り着けるかどうかすら解りませーんでした」

「……………」

確定だ。

第二の課題が代表選手に求めたのは、水の中で息をする事のみでは無い。

真冬の水温への耐性、大切な物を搜索する事が出来る手段、制限時間内に目的地に辿り着く為の移動速度、更に水中の脅威へと対処出来る戦闘能力。ざっと数えただけでもこれだけの問題が突き付けられていたのであり、必然的に導かれる結論は一つである。

呆れと共に空を仰ぐ。

「——真っ当に考えれば杖一本、成人したばかりの生徒の実力では無理でしょう」

本気で課題として突き付けられたのであれば、最初から殆ど不可能な課題だった。

高度な人間の変容を自在に扱える者以外、この課題を達成出来るというような見通しは事前に立てられない。そしてそれ程の変身術の腕を持つ者は、今回の正規の代表選手三人、炎のゴブレットによって三校の中で最も優秀と判断された者の中にすら皆無だった。

一見すれば第一の課題より穏当に見えるものの、その実同じ位に質が悪い。

前回の敵が怪物の脅威であるとするならば、今回の敵は自然の脅威そのものだ。『マグル』よりも優れていると称する魔法族ですら未だに水中に村落を築く事が出来ていない最大の理由について代表選手達は考えさせられ、そして挑まされた訳だ。

意地の悪さを改めて思い知る僕を前に、フラーはおずおずと口を開いた。

「……………それで、ええと、やはり貴方は今回ハリーが一番だと考えるの

でーすか？」

「——何で、そんな話になるんです？」

「え？」

何故か僕がそう断言すると確信していたらしい彼女は、驚きに眼を開いた。

けれども、僕からすればその反応の方が驚愕に値する。ハリー・ポッターを一位に挙げる理由など、僕には全く存在しない。

「今回は別にセドリック・ディゴリーが一位で何ら文句は無いでしょう。手段としても、結果としても課題を達成するのに殆ど不足無かつた。ハリー・ポッターは当然の事、ビクトール・クラムですら彼より劣る。一位だけ見れば順当も順当ですよ」

フラーは口を開けたまま静止した後、何故か激昂し始めた。

「それは可笑しいでーす！ 貴方ならば当然泡頭呪文が今回の課題に適切で無かつたとか、何も考えず安易な手段を選んだとか、散々に文句を付ける筈でーす……！」

「……どれだけ僕を性格が悪い人間だと考えているんですか、貴方は」
自分が良い方では無いというのも自覚しているが、それでも酷い言いがかりだった。

「だって、貴方は今回代表選手に与えられた課題は、水中で息をする事だけだと最初から考えていなかった筈でーす。水の中を移動する事や、戦える手段を確保する事も考えていまーした。そしてさっき、貴方は水温や視界も課題だと言っていました。私達の『泡頭呪文』は、その何れの課題も解決するものではありません」

「……まあ、それはその通りですし、貴方がたが使用した呪文が僕の趣味嗜好に全く合うような解決策では無いのは確かですが」

ロナルド・ウィーズリーに対して指摘した問題点二つにしても、今湧き出た問題点二つにしても、泡頭呪文は役立たずに等しい。変身術は失敗云々と別の意味で惜しかったが、やはり僕であれば選ばなかつ

ただろう。

「というか、そもそも僕の言いそうな事を良く言い当てられますね」

「それはその……勘です。私にはそれくらい解りまーす」

一気に怒りを萎ませたフラァー・デラクールが気まずげに答える。

……開心術士でなくとも気付ける嘘を平気で吐くのは止めてくれないだろうか。

「しかし、結果というのは無視出来ないでしょう。セドリック・ディゴリーは課題で求められた内容を殆ど達成し、満点に非常に近い点数を取ったのです。審査員、今回の課題と代表選手を正しく評価出来る権限を有した者達は、そのような判断を下した。にも拘わらず、僕がその部分を否定してしまつては難癖に等しいでしょうに」

呆れた息を吐くが、フラァーは納得しなかつたようだった。

「でも、ハリリーのギリウイードは——」

「——ええ。確かに彼の手段に限れば、非常に賢い物でしたよ」

第一の課題の時とは違う。

代表選手が選択した手段の間には、明確な優劣が存在している。

「先程僕はそれについて調べましたが、随分と世界には奇妙な薬草が存在する物だと思ひましたよ。今回の課題が無ければ僕は知りもしなかつたでしょう」

実の所、僕は魔法薬学と薬草学の比較であれば、前者の方に答えが有る可能性が高いだろうと思つて居た。魔法薬学ならば調査によつて代表選手個人の実力を測る事が出来るし、課題後に発生しそうな批判も避けやすいからだ。

けれども、その予感の外れた。

今回の課題の答えは、薬草学の分野内にこそ在つた。

「^{グレイ}鰓という名が付けられるだけ有つて第一の効能は解りやすいですが、あの薬草の効果はそれだけでは無いようです。手足への水掻きの出現、視覚の変容、水温への適応。解りやすく言えば人間を水中人に近付ける薬草です。今回の課題にうつつけと言つてよく、何よりそれが一つの簡単な手段によつて為されるというのが申し分ない」

解決策というのは、可能な限り単純な方が良い。

複数の手段を組み合わせて問題を解決しようとする場合、そのどれか一つにでも問題が発生してしまえば上手く行かなくなってしまう可能性が有るからだ。

無論、たった一つの手段で全てが解決するというのはまず現実的には不可能だが、今回は三大魔法学校対抗試合という用意された舞台でも有った為か、ギリールウィードは殆ど全ての問題を一挙に解決してしまっただ。

しかも授業で扱うような大抵の薬草と異なり、ギリールウィードは殆ど加工無しに、ただ飲み込むだけで効果を発揮してくれる。まさに魔法族が水中に行く為の手段とも思え、第二の課題が出した難題の解決にも適切だった。

「一方で泡頭呪文。これはもう名前の通りですね。水上の酸素を確保し、そのまま水中に持ち込む。鯨のようなというよりも、多分非魔法族の潜水の歴史と同じでしょう。人間である以上、考える事は殆ど一緒だという事かもしれません」

非魔法族生まれのハーマイオニーが思いつかなかつたのが多少不思議であると言えなくもないが、ギルデロイ・ロックハートの時に露骨だったように、やはり彼女は発想を魔法からスタートさせる傾向が有る。

魔法的magicalな事には魔法magicが関わっていて然るべきと考えがちであり、今回も魔法magicは当然に魔法的magicalな解法を与えてくれると考えたのだろう。つまりは魔法によって「マグル」がやっている事を代用出来ないかという考えはしなかつた。

「ただ、貴方が指摘した通り、これは水中で息をする事しか解決してくれない。空気の膜の外の視界は悪いままですし、水の冷たさを顔周りしか緩和してくれませんか、移動速度も人間の足のままで。それらを我慢するか、他の呪文を更に使って解決する必要が有る」

今回の課題の内容と目的が暗に示唆していた問題を、そのまま解決してくれる物では決して無い。

「ちなみに、泡頭呪文は通常水場で使われるような類の魔法として本には載って無かつたと思いますが、貴方は何処で見付けたんです？」

「……呪文によって綺麗に出来る魔法族の村と違い、昔のマグル社会のパリは道が非常に汚かったと聞きます。それは、悪臭によって歩く事自体が耐えられない程だったそうです。だから魔法族は、マグル社会を歩く時にはしばしば泡頭呪文を使っていたらしいです」

「まあ、そんな所だろうと思いましたがよ」

つまりは、あの呪文を水中で使うというのは教科書的な発想では無かった。

ただ新鮮な空気が存在しない場所でそれを確保するという点では同じであり、今回の課題において転用出来るという発想をしたのは悪くなかった。

「難点は、それが空気を頭の周りに纏わせるだけに過ぎないあたりですか。魔法的な泡とは言っても外からの衝撃に左程強い訳でも無いでしょう。壊れてしまえば直ぐに息が出来なくなりますから、魔法の維持と衝撃の回避という二点に同時に注意して移動する必要も出て来てしまう。水中という環境でそれをやるのは、正直言って僕は御免ですね」

常に緊張を強いられ続け、息が出来なくなる恐怖にハラハラし続けるのは勘弁して貰いたいし、僕はその選択が出来る程に勇敢では無い。

そう思いつつも、それを選択して見せた代表選手は眼前に存在している。

「本人に聞くのは多少気が引けますが、セドリック・デイゴリーは成功し、けれども貴方は失敗した。その分岐点は一体何処に有ったのです？ 一応貴方がどうしても答えたくないというので有れば、やはりそれを尊重する気は有りますが」

流石に自分の失敗した原因の事だ。

フラーは唇を噛み締めて暫し黙り込んだが、最終的には重い口を開いた。

「……水グリーンデロー魔です」

「つまり、彼等の襲撃によって泡頭呪文が壊された。ないしは、集中が完全に途切れてしまい、自らの魔法力でそれを壊してしまった。そん

な所——」

「——それは違いまーす！」

フラーは大声で遮り、しかし恥じ入ったように俯いた。

「いいえ。完全に違うという訳では有りませーん。最後にーは、そうなりまーした。けれど、私が水魔を、あの程度の生き物を全く撃退出来なかった訳では無いでーす。いえ、やっぱり撃退出来なかった訳ですけども、その……」

取り留めない告白を黙って辛抱強く聞いていれば、彼女は段々落ちて着いていった。

「泡頭呪文は問題無く使えてまーした。けど、水魔の大規模な襲撃の後、私は突然息が上手く出来なくなったのでーす。顔の空気の泡はまだ大きかったのにでーす」

「……………」

「それまで共に居たセドリツクとビクトールが、何処に行ったか解らなくなりまーした。私は暫く水中を進んでいましたが、何時の間にか異変が生じている事に気付きました。真つ暗で静かな世界でも聞こえる程大きく心臓がバクバク動いていて、手足が痺れはじめて満足に動かせなくなーり、水上に無性にながりたーくなって、そこで漸く自分が速く浅い息をしている事に気付き、そして、そして——」

「——再度の水魔の襲撃が有って、そこで泡頭呪文が解けて棄権という事ですか」

彼女はコクリと頷く。

そして、あれは何だったのかという視線を向けられるが、流石に肩を竦める。

「僕に問われても困りますよ。僕は身一つで湖底に行った事は有りませんし、呪文の専門家でも無い。貴方のその反応や症状を直接見たという訳でも有りませんしね」

知識内に存在せず、取っ掛かりすらもない事はどうしようも無い。

「ただ、泡頭呪文が水場で使われる呪文として載っていない魔法であるというのには相応の理由が存在するという事でしよう。その辺りは、フィリウス・フリットウィック教授に聞く事を勧めますよ。貴方

の弱音にも真摯に向き合ってくれる筈ですし、答えもくれるでしょう」

「……貴方が言うのなら、そうしまーす」

「まあ何だかんだ言っただけで、魔法族はやはり陸の生き物だという事なんでしょうね。自身の変容は、或る意味で人間でなくなるという事でも有りますから」

水場の専門家が泡頭呪文の存在を知らない事は無いだろうし、場合によっては使用をすることも出来ない。

セドリック・デイゴリーも、フラー・デラクールですらも途中までは、今回の課題において使用するに支障が無かったのだ。適切に利用される限りにおいては有用なのだろうが——しかし専門家にとっては、可能な限り使用を忌避するだけの理由が有るのだろう。

「でもそれならば、貴方にとってセドリックは適切な手段を取れなかったのではないでーすか？ その……失敗した私が言うべきでないのは解っつていまーすけど」

「……確かに、貴方の体験談を聞いて少しばかり観方が変わっては来ましたが」

同じ魔法でも使い手の差が出たと切り捨てるのは簡単だ。

けれども彼女の話を聞いた限りでは、そして僕の感覚的に言えば、決してそれだけでは無いようにも思える。恐らく泡頭呪文という回答には悪辣な罠が仕込まれていた。運次第では回避出来るかもしれない。致命的となりうる類の陥穽が。

「しかし、前提を忘れてはいけません。これはどれだけ適切な手段を見付けられたかの勝負では無く、あくまで本旨は課題の目的を達成出来るかという点に有る。そしてセドリック・デイゴリーが貴方と違い単に運が良かったというだけにしても、それも実力の内でしょう。彼は一番早く、そして殆ど完璧に課題を達成してみせた。それが全てです」

趣味嗜好の裁量は許されても、採点基準から逸脱するべきでは無い。

そして真つ当に考えれば達成不可能のように思えても、今回はあく

まで試合の課題であり、代表選手には達成する事が期待されていた。「水魔が脅威として水中に居る事は貴方から聞きました。では、それ以外は？ 例えば、あの湖には大イカが居た筈ですが。或いは、Loch Ness 近場の湖で非魔法族に目撃を許してしまった水獣。ケルビー 他には海蛇やヒツボキヤンパス 馬など。そう言った脅威は居ましたか？」

「……ええと、そのような生き物は一切見ませんでした」

一瞬解答が遅れたのは、話題が突然変わったように思えたからだろう。

そしてその分を差し引けば、彼女は殆ど即座に答えを出したに等しかった。彼女はわざわざ思い出す努力が無い程に、水魔以外の脅威となる生物を見ていないようだった。

「ハリー・ポッターらは？ 無論、これは知っていればで構いませんが」

「ピクトールやセドリックとは一緒に迷っていたので彼等も見えていないのは同じだと思います。ハリーの口からも、そのような生き物が居たとは聞いていません」

「そして、最大の脅威と成り得る水中人。彼等についても、貴方がたは戦う事は決して無かったし、課題を邪魔される事も一切無かった。そう考えて良いですね？」

僕の言葉に、フラー・デラクールはしつかりと頷いた。

今の質問で一番重要なのは水中人の部分だったが、最後の光景を見る限り余り心配しても居なかつたし、実際その通りだった。彼等は代表選手の前に立ち塞がらなかつたらしい。

「となれば、今回の課題で用意された代表選手への直接的な脅威はグリーンデロー 水魔程度だった。まあ彼等が有利な水中ですから、無害で飼いなす事が出来る M・O・M 分類XXというのは当てにはなりませんし、実際貴方は失敗させられた。ただ、それでも決定的要因ではないようですから、こう言って良いでしょう」

第二の課題は、僕が予想した以上に単純だった。

「今回の課題の最大の脅威は溺死に過ぎず——まあ、十分過ぎる程の脅威ですが——代表選手がそれを防げるように対策出来たのである

ば、十分な点数を取れるようには出来ていた。つまり、難易度はある程度考えられていた」

水中での生存、かつ一時間という制約が試練であり、それ以上は求められなかった。

「仮に今回の課題において水中人と決闘ごっこ、或いは追いかけっこ遊びでもさせられていたならば、ハリー・ポッター以外は残らず失格だったでしょうね。視界も機動力も相手が圧倒的上。戦う以前に逃げる事すら出来ない。しかし、そうはならなかった」

「……加減されていた、という事ですか」

「第一の課題より多少マシという程度、気休めに過ぎませんがね」

難題である事には変わりない。

ギリ・ウイードでは余裕だが、それ以外の手段を使うとなると難易度が跳ね上がる。

ただ人間の変容を扱う事が出来る程の技量が有るなどの、学校史でも稀な位の天才的能力までを求められた訳では無い。普通に優秀な知識と杖腕、そして度胸と判断力を駆使すれば達成は可能だった。

「それを考えれば、今回の課題は泡頭呪文で十分だった。十分だったとは言いますが、貴方が失敗させられたように、やはり簡単では無かったでしょう」

水魔の魔法省分類がXXとされているのは、水中人が彼等を操る事が出来るという点も大きい。恐らく、いや間違いなく、彼女は意図的に襲われた事だろう。

「それでも、セドリック・ディゴリーは——辛うじてなのだととしても——課題を達成出来た。難癖を付けるとすれば、時間オーバーは時間オーバーだという点くらいですか。課題の目的は、『一時間以内に自身の大切な物を取り戻す』ですからね。後半は達成しても、前半は達成出来ないのは他二者と変わりません。ただ一分に過ぎないのも確かですから、一位なのは順当でしょう」

47点、つまり最低でも二人が満点を付けたのは点数をやり過ぎない。気もするが、相対評価も加味してそう判断するのも解らなくはない。

「……では、ビクトールの方はどうなのでーすか？」

僕の判断理由に納得行ったのかどうかは解らないが、彼女は別の一人に矛先を向けた。

「ビクトールは高度な変身術に挑みまーした。その、少しばかり不十分でーしたけど」

「まあ、見た目は普通に悪かったですね」

「マーマン半魚人と呼ばれるに相応しい奇天烈さだった。

「けれども、セドリック・デイゴリーより少しばかり遅かった程度で、課題の目的の後半部分を達成した事には変わりないでしょう。40点は点数を引き過ぎないように思えますけどね、イゴール・カルカロフはビクトール・クラムに9点か10点を付けたでしょうし」

「でも、アレは失敗でした。手段としては——」

「——適切では無かった。僕には一概にそう言い切れない気がします」

見栄え重視のルドビッチ・バグマン、後は完璧主義者で融通が利かないらしいパーシー・ウィーズリーあたりが結構減点したような気がするが、少なくとも変身術の大家であるアルバス・ダンブルドアはビクトール・クラムに適切な評価を与えた事だろう。

「高度な人間の変容、それも種を超えた正しく変身と言える程の魔法は、非常に難易度が高い物です。最大の問題は他人の助力無しに戻れなくなる可能性ですが、もう一つ小さくない問題は、それは人間と全く違う身体構造になってしまおうという点にあります」

魔法は万能では無い。

それが引き起こす全ての問題を、解決してくれる訳では無い。

「……それは、鱭や尾鱭を上手く使えないという事でーすか？」

「それも有る気はしますが、その辺りは魔法が魔法的magicalに解決してくれるのかもしれませんが。ですから、僕が言いたいのは今回の課題に即しての話ですよ」

変身すれば自動的に泳げるようになるのかもしれない。

その辺りの判断は僕の知識の範囲内では出来ず、だからこれは全く別の話だ。

「第二の課題の主要目的は、自身の大切な物を取り戻す事です。それを考えた場合、鮫に変身し過ぎる事は、果たして適切なのでしょうか。例えば、眼について」

「……？ 鮫は水の中で餌を取りまゝです。当然良く見える筈でーす」
「しかし、それは果たして人間と全く同じ観え方をしているんでしょうか？」

あの変身を見ると共に浮かんだ疑問だった。

「彼等は水中で魚を捕れさえすれば生きていけるでしょう。そして外敵から逃げる必要も殆ど無い。人間という大例外を除いて、彼等は捕食者の頂点に位置している。感覚として、それ程高度な眼の機能は必要が無い気がするんですよ」

環境によつて身体の機能は変化しうる。

退化とまでは言わないが、鮫には人程の進化は不要では無かったのではないか。

「彼等が色を識別出来る程度は？ 視野は？ 視力は？ 鮫の生態に詳しくない以上、僕はそれらの答えを持ち合わせていませんが、大切な物を取り戻す。つまり、人間には全く慣れない眼を使って湖の中からハーマイオニー・グレンジャー一人を探し出すのには、正直鮫の眼は向いていないと思うんです」

そもそも、人間個体の識別が出来るのだろうか。

ハリー・ポッターが二人の人質を連れて来た事から解る通り、四人の人質は同じ場所に居た。そして、あくまで取り戻すのは自身の大切な物で無ければならない。連れ帰ってみたら別人だったとなれば、最悪他人の妨害として失格になりかねない。

「そして“取り戻す”という部分。その対象が何であるのか不明で有ったとしても、どう考えても鮫の鰭では都合が悪そうだ。人間の強みは、自由自在に動かせる手と五指ですからね」

当然、一度変身を解くという解決策が無い訳ではない。

しかしながら、地上で有ったとしても非常に難度が高い術なのに、水中で、酸素不足の中、人間に一度戻った後で再度鮫に変身するとう事実上二度の変身を行い、その間に人質の救出も行うというのはか

なり無茶な話である。

「僕は今眼と手のみについて触れましたが、逆に水中での聴覚や嗅覚あたりは鮫の方が圧倒的に優れているでしょう。ただ、やはり課題の目的を達成するには向きそうに無い」

「……だから、ビクトールは敢えて不完全な形で変身術を行ったのでーすか」

「意図的かどうか解りませんが、結果的に悪くは無かったとは思いますが」

実際、制限時間を超えたとはいえ、課題の主要な目的は一応達成出来たのだ。

「種を超えた変容の場合、その変身対象と同等まで知能が低下してしまうという話も有ります。しかし、彼は半分人間のままだった。変身は肺までを含む半身が変化しただけで、手は使えた。眼や知能がどうなっていたか知りませんが、ああも不十分だった訳ですから、見た目が完全に変化したとしても中身まで完全に変化していたとは限らない」

そうでなければ、ハリネズミを針山に変身させたにも拘わらず、人が針を持って近付くと丸まるという事も無いだろう。外見だけは完璧でも、中身が不十分という事は有り得る。

「個人的な見解ですが、種を超えた人間の変容で最も重要なのは、変身しながらも変身し過ぎない事なのかもしれません。鮫は杖を使えませんが、杖ごとの必要も無いですが、杖ごと鮫に変身した魔法使いは、決して杖の使い方を忘れてはならない。でなければ、元に戻れなくなってしまう。魔法的に人間の利点を残したままに変身する事こそ、変身術の奥義なのでしょう」

自分で変身対象を選ぶ事の出来ない動物擬きに一定の需要が存在する理由も、単に動物擬きには杖が不要であるというだけでなく、その問題点にこそ起因するのかもしれない。

その現象を表現する呼称の中に魔法^{m a g i c s}使いが含まれているように、彼等は変化した後ですらも完全な動物では無いのだ。手酷い失敗をして人の姿でなくなるといふ事は有り得ても、獣畜生と化して我を忘れ

てしまうという事は恐らくないのだろう。

「正直、見た目だけでそう悪く言われるべき物でないと思います。完全な種の変容が出来る人間が他に居たのならば、ゴブレットはその人間を代表として選んでいそうな物です。加えて、セドリック・ディゴリーも貴方もそのような事は出来なかつた。ならば、少なくともこの世代では、そんな離れ業が出来る者は三校に居ないと考えるのが自然でしょう」

名乗りを挙げていない事も有るが、十分な実力を持つていながら尚、謙虚な魔法族というのがまず考えられない。力を持っている者は基本的に自信過剰であり、この眼前の女性がその典型とも言える。完璧な変身術を使えるのであれば第一の課題を上手くこなす事も可能だったであろうから、その可能性は殆ど排除してしまっても良いだろう。

「では、ハリーはどうなんですか？」

「僕が何を言い出しそうかは、何となく勘付いていそうな物ですがね」
「……………」

確証が有った訳では無い。

あくまで彼女とは二カ月程度、それも今回で殆ど二度目の付き合いに過ぎない。

だが彼女は何処に情報源が有るかは兎も角、僕が泡頭呪文の問題点を指摘した事を知っていたし、実際フラーは表情を歪め、嫌な物を見る目付きをした。

「ハリー・ポッターは論外、とするのは明らかに言い過ぎですが。确实な事は、彼は二番目の地位、45点もの高得点を与えられるのは相応しくない。今回に限っては三位が妥当。それも僕の個人的な趣味嗜好すら排して、ビクトール・クラム以下の点数が下されるべきです」

「今回の課題の目的は、一時間以内に自身の大事な物を取り戻す事です」

そこが最初の出発点であり、その前提を決して忘れてはならない。「時間制限を大きく逸脱した事はとやかく言いません。厳しい事を言えば、セドリック・デイゴリーすら守れなかった訳ですから。そして彼は、自身の大事な物を取り戻す部分については達成した。それに關しては、大いに評価されるべきでしょう」

目的自体を達成出来なかったフラー・デラクールよりは明確に上ではある。

「ただ、道徳心の発揮云々は目的に書かれていない。採点基準として示されていないし、目的から解釈するにも離れ過ぎている。それにも拘わらず、審査員はそのような主観的過ぎる、最初に設定した基準から離れ過ぎる判断を下してしまった。それが秩序の破壊、混乱の招来と言わずして何と言うんです?」

「……でも、あれは三大魔法学校対抗試合の精神に合う物ですし、魔法使いとして正しい姿の筈です。貴方が非難するのは可笑しな話だと思いまーす」

「別に加点自体まで文句は言いませんよ。個人の裁量好みによって得点を下すのは、審査員の当然の権限です。しかし、一時間という時間制限を大幅に超えた——つまり、課題の目標の半分を明確に失敗した——にも拘わらず、満点を与えるのはやり過ぎだ」

この点に関しては、イゴール・カルカロフが五点しか与えなかった方がまだ妥当である。

八点程度、もっと露骨に言えばビクトール・クラムと同列の点数を付けるのであれば好きにすれば良いと思う。しかし、それを超えるような点数を付けるのは許されるべきではない。

「例えば、ビクトール・クラムは第一の課題でドラゴンを傷付け、偽物の卵も破壊しました。しかし、そのような行為は魔法生物に対して惨く許されるべきではない仕打ちだと怒りを覚え、ドラゴンと卵を護る為に課題に乱入したらどうなります? それもまた一種の道徳心の発露の筈で、ならば今回と同様に加点するつもりですか?」

「それは……他の代表選手の仕事を邪魔しているでしょう。今回とは違いまーす」

「極論なのは理解していますよ。けれども、そのような点数稼ぎの目立ちたがり^スを防ぐ^タために、採点基準や目標設定が有る筈です」

確かに例外は許される場合が有る。

しかし、それは原則として秩序に適合する物で無ければならない。「今後三大魔法学校対抗試合が開催されたとして、今回の悪しき先例を踏まえ似たような馬鹿が出たらどうするんです？ 出るだけならばまだしも、その出しゃばりの行為の結果死人が出たら？ 褒め称えられる事は構わない。しかし、一線は引かれるべきでしょう」

賢者の石の時も、似たような事を思った。

トロールの際、ミネルバ・マクゴナガル教授はあの二人に加点する傍ら、少なくともハーマイオニーに対しては明確に減点の判断を下し、しかし他方でクイリナス・クイレル教授の際、アルバス・ダンブルドアはそのような遠慮も無く単に加点のみをした。

どんなに道徳的に正しくとも規則や法律の下で裁かれるべき行為というのは有る筈だというのに、あの騎士道^{グリフィン}気取りは平然と無視してみせた。あの時僕に力があればその無法を何としても叩き潰しただろうが、それは看過された。

好き勝手に言える僕^{第三者}からの断罪。

それに対し、フラー・テラクルは不服そうな表情を浮かべていた。明らかに何か言いたげで、表情だけでなく全身から不承認を示している、けれども彼女は更に反論をするような真似をしなかった。それは僕の語った理屈に納得出来る部分が有ったというよりも、逆に理解出来ない身でありながら尚理解しようとするが故だった。

その不器用過ぎる心の在り方に、思わず軽く口元が緩む。

「ハリー・ポッターが貴方の妹の命を救った。そういう考え自体まで否定しませんよ」

彼女の主観までを支配しようと思ってもいない。

「貴方も馬鹿では無いでしょう。孤独な水中の世界では理性的に考えられなくとも、人で溢れた地上の世界では理性的に考えられる筈だ。あれは課題でした」

「……一時間を超えれば、最早望みは有り得ない。そういう約束だった筈でーす」

「二位で帰ってきた人間ですら一時間の制限を一分オーバーだった。採点発表の際にルドビッチ・バグマンがそう言うのを、貴方もまた聞いていた筈ですが」

「……知りませーん。聞いてもいませーん」

そつぽを向くが、仮にそれでも今聞いただろう。

彼女は当然に気付いており、けれども見ない振りをしている。

非論理的な行動で有るが、見たくない物が有るとするのは理解出来るし、彼女とて本気で言っている訳でも無いのも伝わってくる。彼女にとって事実かどうかは重要では無く、彼女と彼の主観に基づく行為自体の尊さにこそ価値が有った。

「——そしてまあ、課題に過ぎないというのは、所詮全てが問題無く終わった後だから言える事。幸運にも全員無事だったから良かったというだけで、それが真実で有ったのならば、ハリー・ポッターの行為こそが正解なのでしょうね」

諦念と共に大きく息を吐く。

水魔にしろ水中人にしろ、水底へ人間を攫っていったという伝説は数多存在する。

それを強く念頭に置くならば、彼の行為はやはり軽々しく馬鹿にされて良い物でも無い。

彼が二人の人質を水上に連れ帰った際、少なくとも人間が愚かな事をしていると考えた筈だ。だが、そのような愚かな行為を自然にしまえるからこそ、僕のような人間には決して出来ない事を出来るからこそ、彼は「特生き残った男の子別」なのだろう。

そして同時に、看過する事の出来ない疑問が有った。

「……やはり貴方が代表選手も、第二の課題前、そして湖底に潜る前においては、大切な物が何かを全く知らされていなかったんですね？」

フラー・デラクールが完全に我を喪ったのはリタイア後、水中人によって地上に戻され、周りから何かを聞いてからの事だ。それまでは

通常のパニック状態というに変だが、まだ話を通じる状態だったように見えた。

「?、そうですが、それがどうかしましたか?」

「いえ、だとすれば余りに腑に落ちないと思ひましてね。つまりはアルバス・ダンブルドア、或いは魔法省の人間達は、貴方がロジャー・デイビスを見捨てるような薄情な人間だと考えていた事になります。正直、それは貴方という存在を見縊り過ぎだと思ひますが」

フラー・デラクールは、そこまでねじくれた人間では無い。

今回の課題で妹の命を真剣に案じたように、彼女は純粋な心を持つ女性であり、相手が誰であろうが「命を救う」事を躊躇いはしなかっただろう。

そして人質が誰かを第二の課題前に代表選手に教えないのであれば、ガブリエルを湖に沈める必然性が有ったとは考えられない。

他二者はユール・ボールの相手が人質で、ユール・ボールでロジャー・デイビスとフラー・デラクルールの仲がそう悪い物でも無かつた事は本人の口から既に聞いた。パーパティ・パチルパートナーを相当手酷く扱つたと僕にすら伝わってきたハリー・ポッターの場合はロナルド・ウィーズリーを人質にせざるを得なかつただろうが、フラー・デラクールの場合はそのようではない。

九歳程度の少女を沈めるといふ狂気を行うよりは、多少インパクトが弱かるうとも、人質役をロジャー・デイビスとする方が穏当な筈だった。

「あつ、それは——」

「——何か重大な理由でも?」

思わず反応したというようなフラーに視線をやる。

だが、彼女は慌て急いで僕から再度視線を逸らしてしまった。

「い、いえ。それは今貴方が気にする事では有りませーん」

「……自身の妹を湖に沈められて、その感想は薄情だと思ひますが」

「それは既に私達にとって問題とならない、解決済みの事なので構わないのでーす」

「……………まあ、身内がそういうのならば僕がしつこく言う事でも無

いのでしようが」

言い訳をするように慌てる彼女を他所に溜息を吐く。

答える気が無さそうな彼女は置いておいて、やはり思い出されるのは一年時の事。

あの老人は、賢者の石を餌として、クイリナス・クイレル教授及びハリー・ポッターを泳がせた。ホグワーツ校内に自ら危険を招き、その上で放置するような真似をした。

構図としては今回も似たように思える。

ハリー・ポッターを代表選手とした闇の魔法使いが居るにも拘わらず、アルバス・ダンブルドアは九歳の女の子を事件の渦中へと巻き込んでしまった。自身が今世紀で最も偉大な魔法使いであるというだけでは、今回の行為は無茶過ぎる。

第二の課題で「事」が起きない保証が無いという保証など無いだろうに、あの老人は今回もまた彼女を手頃な餌、闇の魔法使いがつけ込みやすい隙として使ったつもりなのだろうか。

それとも、あの老人は今回の件に自分の最大の敵が、闇の帝王が一切関わっていないと確信する何かがあるのだろうか。だとすれば一応それは僕にとって歓迎すべき事でも有るが——それでも内心どう思つかは別である。

ただ、そのような憤懣を捻じ伏せて、息を吐くだけに留めた。

このような事はフラー・デラクルの前で言うべき事では無かった。結果的に何もガブリエルの身に起こらなかつた以上、悪戯に不安を掻き立てる真似は不要である。

加えて今回の三大魔法学校対抗試合が終われば彼女達は自国に帰る身なのだ。闇の帝王が近々再開させる血みどろの魔法戦争、彼女達にとつての対岸の火事に付き合う義理も無い。

「え、ええと……その、怒っていまーすか？」

「——いいえ。仕方ないと思っただけですよ」

僕が何を考えようとも、これはどうしようもない事なのだ。

「……まあ、結果的に彼等は愚行を犯したという事でしょう。貴方は最後まで辿り着く事は叶いませんでしたが、仮に辿り着いていれば当

然ハリー・ポッターと同様の事をやろうとした筈だ。人質の命が危ないと思っていた点では同じですからね」

「……………」

と言つても、彼女はやはり辿り着けなかったのだ。

辿り着けていれば道徳的な行動を取っていただろう、というのは空虚で無意味過ぎる擁護だ。その身に確かな実力が無ければ、そもそも他人の命を救う事は出来ないのだから。

ただそれでも、救わなかった事が確定している代表選手二人とは明確に異なるし——そもそも、もつとやりようはあつただろう。

フラー・デラクールに告げたように、これは所詮試合の課題、命の危険を無駄に増やすべきでは無いイベントだったのだ。彼女の表面だけ見て冷徹で高慢なだけの女性と判断した挙句、九歳の子に危険を冒させるような大馬鹿な真似をするのは救いようがない。

「——そ、それで」

手を組んだ僕に問い掛ける彼女の声は少し上ずっていた。

頬が少しばかり赤いのは、流石に寒さを覚え始めてきたからか。僕もさつきと帰りたくなってきたが、彼女の話はまだ終わらないようだった。

「あ、貴方が持ち込みの有無について非常に、ええ、本当に非常に拘っていたという事を聞きました。それは何か重要な意味が有ったのでーすか？」

フィクション・ライティング

拘っていたのは事実だ。

意味がないかを探っていたのもまた事実。

僕から見れば第二の課題は曖昧な——解釈を幾らでもしようがあるような部分が存在するように思われ、またぶっつけ本番で有った第一と違い、長期の猶予と事前の準備が許されるという形式だったからこそ、そこに罣が有るように思えた。

だが、この銀の女性が真に聞きたいのは何かまでは把握しかねたので、視線でもって先を促す。それを理解してか、彼女は軽く頷いて言葉が続けた。

「えーと、結果から見ると私達の手段は優雅な手段では無かったと思いまーす。ハリーのギリ－ウイードが単純かつ効果的であり、予め用意されていた正答とすら考えられる程でーす。そして、貴方はそれを予想していまーした」

「別に予想まではしていませんでしたかね。……そもそも、泡頭呪文の評価についてもそうですが、一体何処から聞いたんです？」

「それは今どうでも良い話でーす！」

「まあ、その通りでは有りますが」

話を逸らす事は許さないという強い言葉に、大人しく引き下がる。

ハリー・ポッターから聞いたのか。或いは、クリスマスの時のように人伝てに聞く機会が有ったのか。

どちらにしても、彼女は課題終了後までそれを知らなかったのだらうというのは伝わってきたし、確かに情報源が解った所で何かが変わる物ではないのも事実だった。

「しかし、僕は疑念を抱いただけです。僕が水中人や大イカと戦わされる事まで視野に入れていたというのも有りますが、呪文でどうこう出来るようにも思えませんでした。身も蓋も無い表現をすれば、単に何処か楽な抜け道が無いかを探していたに過ぎない」

そして第三者だったからこそ、メタ的な視点で今回の課題を捉える事が出来ていた。

「結果を見れば、ハリー・ポッターは失格処分になっていない。ギリ・ウィードの持参——まあ、彼が外から持ち込んだかどうか一応不明ですから、利用と言っておきますか。それは許されていた。最低でも、呪文以外の手段の利用は規則違反では無かった」

「そうでーす。結果と審査員の点数から見ればそれは明らかーな筈でーす。それにも！ 拘わらず！ 貴方は彼が何と言われているか知っていますか……!?!」

「自分以外の力で課題を達成した、ズルをしたとはスリザリンで耳にしましたね。杖を力の象徴とみなす魔法族からすれば、至極自然な発想では有りますが」

フラー・デラクールは我が意を得たりというように大きく頷いてみせた。

「しかし、代表選手の誰も文句を言わないのでーす。ビクトールもセドリックも勿論私も、ハリーアがしたような素晴らしい発想は浮かばなかったと認めまーしたし、全員がそのような恥知らずの外部の声を宥めーていまーす」

クリスマスの時も思ったが、ドラゴンとの対面第一の課題は余程の事だったのだろう。彼女達が元々善良たらんとしている人間である以上に、あの共通体験は四人に非常に強固な結束を齎したと見える。

ハリー・ポッターを非難するのも理屈として間違っているとは思わないが、彼等は全て擁護する方に回ったらしい。

「ハリーアが非難される謂れは全く有りませーん。彼は恥じる事も無い、胸を張るべき行いをしたと誰も認めていまーす。ましてセドリックなどは、自分は水中の広場の石像に縛られていた人質の縄をポケットに入っていたナイフで切ったのだから、ハリーが問題となるなら自分も同じだとすら——」

「——へえ。それはまた、随分と不用意な行為と発言をした物だ」

途中までは適当に聞き流していたが、流石にその部分は別だった。

地上からは水中で何が起こっているかは解らない。それを頭では理解していたつもりだが、僕にとってここまで露骨な形で問題と成り得るとは考えてもみなかった。

ナイフ。それも、縄を断てる位には切れ味の有る物。

偶々湖底に転がっていたのを都合良く拾ったという訳では無いだろう。

「その発言は、間違いなくセドリツク・デイゴリー本人が口にした物ですか？」

「え、ええ。……そう、です」

フラー・デラクールは、何故か僅かに身を引きながら答える。

「嗚呼、ちなみにハリー・ポッターは何と言っていましたか？ まさか、その発言に対して何も反応していない、あの男がさせていないという訳ではないでしょうか？」

「……ハリーも事実だと肯定してしまっした。でも、槍を持った水中人に囲まれたあの状況だと当然だとも言ってしまっしたし、縄を切るのは拾った石で十分だったとも言ってしまっした。自分が人質の下に残ったのも、自分が馬鹿だったとすら認めてしまっした」

「まあ、あの英^{ハリー・ポッター}雄ならばそう言うでしょうね」

セドリツク・デイゴリーが先んじて自白したのは、どうせ直ぐに露見する事だからか。

ハリー・ポッターの行いが道徳的で加点に値するかはさておいて、彼が誰よりも先に人質達の下に辿り着いていたらしい事は疑う余地が無く——その水中人の長の発言を疑ってしまえば、水中で起こった事を何も信じられなくなる——当然、彼は人質の居る場所での他の二人の行動を知っていて然るべき地位に居る。

そのセドリツク・デイゴリーの行為についても、あの彼は全く重要だと考えていないだろうが、ふとした拍子で洩れるのは有り得る事だ。そして意図しない発言だからこそ、余計に信憑性は高まり得るだろう。

更に今回の試合結果も、客観的には余り都合が宜しくない。

嫌な言い方をしてしまえば、セドリツク・デイゴリーとビクトール・クラムは、広場に一人残るハリー・ポッターを全く気に留める事も無く、九歳^{ガブリエル・デラクール}程度の小さな女の子を見捨てて自分達の人質のみを連れ帰った。第二の課題の点数や順位云々を考えずとも、そのような薄情な人

間として彼等を評価するのが可能なのも事実であり、その点を執拗にあげつらつてこそそのスリザリン僕のよう人間である。

「ええと……私はいけない事を言いまーしたか」

恐々と疑問を口にするフラーに少し考え、最終的に首を振る。

「……いえ。今更そこをつつく気は無いですし、仮に不正であれば、審査員が現場で咎めるか、或いは採点時に指摘すべきだった。全てが終わった後で引っ繰り返す事は不適切です」

魔法使い基準では、ナイフは武器に当たらない。

ナイフによって付けられる傷は、それが闇の魔道具で無い限り杖の一振りとは簡単な呪文で治す事が出来るし、必然的に凶器であるとは看做されない。

だからと言って、そのような持ち込みと使用が許されるかは議論の余地が有るが。

ハリー・ポッターにしろセドリック・ディゴリーにしろ、デイフィンド切断呪文を使っていないのだ。

縄が余程丈夫そうだったのか、水中で使うのに支障が有ったのか、或いは人質を傷付けかねないと判断したのか。確かに切断呪文は使い次第で人を殺せる呪文であるが……杖を使えない状況をナイフによって解決したとなれば、それは未成年の魔法使いが校外で已む無く使う場合と異なり、明らかに利便性を上げる道具として用いられた事になる。

「予め確認をしておきたいんですが、貴方がた代表選手は何と言われているんです？」

あの場に来たのはハリー・ポッターロナルド・ウィーズリーでは無かった。

だからこそ知る事は出来ず、しかし今眼の前に居るのは代表選手フラー・デラクルだった。

「具体的に指定するならば、第一の課題終了直後。その際、どういった説明か知りたいのです。恐らくは第二の課題について何らかの告知が有ったと思いますが」

「……えーえと、『手短に』説明が有りました。卵の中のヒントを解けば、課題が何か解るし、prepare for準備も出来るようになるだろうと」

静かに僕は次の言葉を待った。
ぱちくりとフラァーは見返した。

「……それだけですか？」

「全てを覚えている訳では無いですが、それ以上の内容は無かったと思いますーす」

ここまで長い溜息をせざるを得なかったのは、僕の短い人生でも上位に入る。

代表選手ですらこの程度しか知らされていないならば、試合に直接関係無い外部の人間が規則を知りようも無い。制定も告知もされていないに等しいからだ。

そもそもその内容では、ギリウイードの持参若しくは使用が許されるのか解らない。

「……ちなみに、その説明をしたのは一体誰です？」

「ムツシユー・バグマンですーす」

「……………」

重要な情報を死喰い人に漏らす程度に口が軽いなら、今回の代表選手に対しても更に情報を流して欲しい所だった。

そして如何に本人が悪い人間でなくとも、悪い事を出来ない訳では決して無い。今回の不用意さにも同様の事が言える。

未知の困難に立ち向かわせる事を主眼とする第一の課題ならば、説明は最小限でも良かっただろう。けれども、今回は課題へのヒントと検討、準備の猶予が事前に、それも長期間与えられているのであり、何処までが規則として許されるかはやはり明確にしておくべきだった。

……嗚呼、一応擁護するなら、認識の差からの擦れ違いによる物なのかもしれない。

ルドビッチ・バグマンは当然湖底で課題を行う事を知っていた以上、杖一本では無理ではないかと当然考えていた筈だ。クイディッチ一筋で有っただろう男が学生時代に人間の変容を扱えた筈が無いし、現在でも扱えるとは思えない。そしてハーマイオニーが知らないような魔法を、解答を知らされる前に知っていたとも当然考えられない。

だからこそ、彼にとつての「準備」とは非常に広い意味を念頭においての発言——明日の授業の準備をしたのに、教科書とノートを忘れる阿呆は居ない——だったのだろうし、けれども当時何も知らない代表選手は、ハリー・ポッターを除き言葉通りの意味だと解釈した。「もう少し聞きましたよ。第一の課題の前は、誰に、何と言われましたか？ あの際には、箒が許可されないと解釈出来るような言葉が有った筈ですが」

「確 か …… 代 表 選 手 達 は
杖 will face the first challenge armed only with their wands だけを武器に第一の課題に立ち向かうと言われたと思います。ああ、第一の課題の後、第二の課題の情報が与えられるとも聞きました。その時はムッシュ・クラウチが説明した筈です」

「……第一の課題でも箒は武器では無いと強弁すれば、呼び寄せ呪文を使わずとも行けそうな気がしてきたのがもう何とも言えない所ですよね」

だが、杖という有用な装備a r m e dを携える以外は禁じられると解釈する方が自然なのも確か。そして箒が武器でないとの主張はどちらかと言えば屁理屈である。

わざわざ箒を呼び寄せる事を選択したハリー・ポッターの判断は間違っていない。

「ただし今の話を聞く限りでは、今回のハリー・ポッターは反則にされても不思議では無いと判断しますよ。第一の課題で杖以外が禁じられた以上、先のような言葉のみで第二の課題でギリ・ウィードの使用が許されるというのは、正直言って恣意的過ぎる解釈のように思える。外部から非難されるのも仕方無いでしょう」

「べ、別に私達がそれ以上の事を言われなかった訳では有りませーん。課題一週間前、マクゴナガル教授によって代表選手が改めて集められまーした」

「……一週間前、ですか」

最早何も言うまい。

「……兎も角、貴方がた代表選手はその際に、今回の課題が当 日何処

二月二十四日

で実施されるかを当然理解している筈だとか、そうであれば課題を達成するのに必要な限りの持ち込みは許されるとか、そう言った類の内容の台詞を聞かされた訳ですわね」

「え、えっと、そうでーす」

僕が先んじて結論を言ったせいとか、フラー・デラクールは眼を白黒させる。

それは僕が内容を言い当てた事による物では無く、彼女はその日何を聞いたかを僕から事細かに問い質されると思っただからだろう。

ただ、僕にとつては彼女が聞いた言葉を一言一句知りたい訳でも無く、そこを掘り下げる事に価値を見出しても居ない。今回の課題において代表選手三人は水着や保護スーツ程度ならば当然許されるべきだと考える事が可能であり、一方でハリー・ポッターはギリ・ウィードまでが許されると考える事も可能だった——それが理解出来ただけで十分である。

「まあ正直な話、そのような事を聞かされたとしてもハリー・ポッターを失格にする事は可能な気がしますがね。何処まで必要で、何処まで準備と言えるかはやはり微妙です。そしてギリ・ウィードの使用は、三大魔法学校対抗試合の課題が要求するとされる徳目の三つの内の一つ、魔法能力magical abilityを測れません。不適切とする判断も十分有りだ」

「しかし、知性は測れまーす。ハリーは水中で課題を行うという事を卵が鳴らす不快な音から読み解き、課題の達成に適切な手段を見つけまーした」

「そうは言いますが、それらは貴方も同じでしょう。そして課題が始まって以降は、貴方がたの方が余程知性を使っている。ギリ・ウィードを食べれば殆ど課題が終わったような物である彼と違って、貴方がたは更に苦勞しなければならなかったのですから」

水魔程度の脅威しか配置されていない以上、半ば水中人化した人間にとつては一時間以内に人質を連れ帰る事など楽勝である。一方で、泡頭呪文や半端な変身術でもって水中に挑んだ他の三者はそうはいかない。

それを否定出来ないらしい彼女は何も反論する事なく口を噤んだ。
「……けれどもやはり結果と審判の判断が全て。如何に外部が文句を言おうが覆らないし、覆すべきではない。ハリー・ポッターは失格処分を受けなかった。それどころか逆に、ルドビッチ・バグマンがその使用について『とくに効果が大きい』と評したように、明確に加点され、規則の下で許される行為とされた。それは忘れるべきではないでしょう」

とは言え、観客に対しても代表選手に対しても、もつと解る形で言つて欲しかった物だ。

規則の明確化は選手の名誉を守る盾とも成り得るのだ。ルドビッチ・バグマンが正しくアナウンスしていればこのような問題は生じなかつたし、代表選手達もこれ程苦勞する事は無く、ハリー・ポッターと同様にギリウイードを思い付いたかも知れない。

「……しかし、貴方はどうして、その部分を気にしたのでーすか？」
一応僕が納得したからか、おずおずとフラー・デラクールは問い掛けて来る。

……そして嗚呼、僕が彼女の問いを誤魔化したとも考えたのかも知れない。そもその彼女の問いは、僕が何故規則を明確化しようとしたのかという物だった。

「ただ、気にしたという表現は余り適切では有りません。僕に不利益が掛からない以上、別に魔法族が明確性を欠く規則でどう試合をやるかと構いませんよ。実の所、規則の正しさはどうでも良かった」

更にどちらかと言えば、僕はハリー・ポッターの側に理解を示せる。スリザリンは勝つ為に手段を選ばない。注意も警告も無ければ許されて然るべきと考え、実際今回許された。他のスリザリンはグチグチ不満を零していたが、曖昧な規則の間隙を正確に突いた点は寧ろ讃えられるべきであろう。

「つまり何が言いたいかというと――」

「――貴方がギリウイードを知らなかったとしても、それが試合で使えるように規則が出来ている筈だ。本当にそういう事なのでーすか？」

「……良く解りますね」

言い当てられた事に対し、思わず目を見張る。

けれども、フラー・デラクールは軽く眉を吊り上げた。

「^アハリーがそう零してまーした。思わずと言った感じでーしたけど」

「……………ハリー・ポッターが、ですか」

まあ、間違いなくその発言の出元は彼ではないだろう。

そこまでの的確に僕を評せるのは、僕の知る限りただ一人しか居ない。

「今回代表選手は皆、散々頭を悩ませたと思いまーす。人間の変身術が使えるなら課題は容易く、けれども幾らなんでも到底二、三か月の努力で覚えられるとは思わなかつたからでーす。私も多少努力はしてみました。直ぐに諦めまーした。ビクトールを含めて他の手段を探し、しかし結果は見ての通りでーす」

ホグワーツの湖底でもって課題を行う。

一見ドラゴンより楽に見え、けれどもその実、難易度としては左程変わり無かつた。

セドリック・デイゴリーとフラー・デラクールは水中に転用出来る泡頭呪文を辛うじて発見し、ビクトール・クラムは半端な変身術で挑んだ。ハリー・ポッターが何時答えを見つけたのか知らないが、少なくとも一週間前まで彼は手掛かりすら見つけられなかつた。

「けれども貴方は違った。貴方は最初から代表選手全員とは違う観点から課題を見ていまーした。この課題が途轍もない難題だと理解した時には、規則自体に疑問を——」

「——いえ、その表現は正確性を欠くでしょう」

確信をもって口に行っているところ悪いが、多分それは正しくない。

「その疑問が具体的な形になったのは確かに課題の困難さを理解してからです。けれども、遅く違和感を抱いていたのは、多分、あのホグワーツの湖の中で第二の課題が行われるらしいと推測した時から。その時点から、僕は無意識に可笑しさを感じていた筈だ」

「……………え？」

フラー・デラクールは啞然とした表情を浮かべる。

その反応は理解出来る。僕自身、それに明確に気付いたのはほんの今、この瞬間の事だ。彼女との会話で思考を整理出来たからに過ぎない。

だがそれでも、考えが纏まっておらずとも、心の奥底で仕掛けの存在を疑っていた。どう考えても可笑しな課題だったからこそ、規則に拘った。抜け道が無いか、寧ろ当然に有って然るべきだと探してしまった。

「ホグワーツの湖に何が棲んでいる、いえ暮らしているか、貴方がたも調べはしたのでしょうか？　そして苦労はしなかった筈だ。ホグワーツ生ならば最低限の知識は有りますし、人に聞けずとも『ホグワーツの歴史』を紐解けば容易く載っている程度の情報です」

ただスリザリンはあの湖に面した談話室を有しており、他寮よりも身近だ。

「純血」達は余り眼を向けたがらないし、その存在に対して不満を零す事は普通にするが、それでも良く知っている事に変わりはない。「課題を知った時より違和感はある。不可能に思える内容を前に疑問は膨れ上がった。そしてハリー・ポッターが水面に上がって来た時の光景を見る限り、ギリ・ウィードは「正答」のように思えた。規則が曖昧で無ければならなかった真意が見通せたと一瞬思ってしまった」

余りにも出来過ぎていて――

「まあ、結果的にそれは勘違いだったようですが」

――しかし解釈の余地無く否定された。

「貴方には、規則を明確化せんとした僕の考えが鋭く、正確に先を見通した物に映ったかもしれません。ただこれは偶々ハリー・ポッターが大いに評価されたからに過ぎない。セドリック・ディゴリーの⁴⁷点数を見ただでしょうか？　つまり規則云々は左程重要では無く、呪文によつて解決した者も一位になる事は当然に許された」

ハリー・ポッターの^{キリー・ウィード}の使用手段。

それは、泡頭呪文や半端な変身術と同等程度の評価しか得られなかった。

事前に与えられたヒントは所詮課題を達成する為の手段に過ぎず、目的では無かった。

その手段を発見する事こそが第二の課題において真に要求されている事柄では無いかと、そう考えてしまった僕の予測は、あの採点結果によって明確に否定された。

「だから、貴方がこれ以上掘り下げても僕からは何も出ませんよ。炎のゴブレットによる選出時と同じ。僕の予想は大いに外れました」

綺麗に型に収まらない論理こそが、現実では大正解という事も有り得るのだ。

「仕掛けは何も無かった。持ち込み禁止に代表される規則が明確化されなかったのは単に代表選手に対する救済逃げの道が用意されていただけで、やはり呪文によって解決される事こそが正道だった。ロナルド・ウィーズリーが正しく、僕は余りにも考え過ぎ——」

僕は最後まで言葉を紡ぐ事を許されなかった。

フラー・デラクールが右側から手を伸ばし、僕の頬を掴まんでいたからだ。

「貴方は結論を出すのが早過ぎです」

「……………」

冷たい左の指先が、僕の頬を横に引つ張る。

「そして意味が解りませーん。自己完結して居ないで、きちんと、相手に解るように説明して下さい。なーぜー、湖で第二の課題が行われるとなーると疑問を抱くのでーすか？」

「……………」

本気で答えさせる気が有るなら、ぐにぐにと引つ張って遊ばないで欲しい。

右腕で彼女の手を軽く払いのければ、抵抗する気は最初から無かったのだろう。あっさりと僕の頬から指を離れた。

ただ、彼女の眼は依然として据わっている。解答を拒めば再度指が伸びて来るだろう。

……正直、余り口にした物では無い。

既に間違いである事が事実上宣言されたような物であり、何よりこ

の出題者の印象に全くもってそぐわないからだ。僕が見た光景からは一応道理としては通っているものの、ここまで物語として綺麗過ぎる脚本は、やはり僕の好みでは無い。

しかし、フラー・デラクールは逃してくれないだろう。

一度心を決めたら一直線に突き進む女性であるというのは、クリスマスの件で思い知っている。僕の回答の中身に既に強い関心を抱いてしまった以上、この女性は何としても僕から聞こうとするし、付き纏い続けるに違いない。

それが解り切っているからこそ、気が進まないままに重い口を開く。

「……貴方は、ハリー・ポッターが浮上してきた時の光景を覚えていますか？」

「ガブリエールと一緒に連れて来た事ですか？」

「……まあ解りきっていましたが、全く認識していなかったようですね」

そして妹の心配をしていた彼女のみならず、大多数がそんな感じだろう。

今回の異常を象徴するあの光景は、彼等にとって驚き以外の感情を抱く物では無かった。どちらかと言えば、ハリー・ポッターがやった馬鹿の方が目立つ物だったからだ。

「それと共に確認しておきたい事があるのですが、代表選手に与えられたヒントというのは金の卵、つまり水中人の歌が入っていた訳ですよね？」

「誤魔化すのであれば——」

「——誤魔化す気は有りませんよ。そして重要だから聞いています」
彼女は依然として怪訝そうだったが、軽く頷いた後で答えた。

「なら、その通りです。私達はその歌を聞いて、水中で課題がある事を知ったのでーす」

「その中身は？ 誰が歌っていましたか？」

「一時間以内に大切な物を取り戻す事、さもなければ永遠に喪われてしまう事。誰かは解りませんが、水中語でしたし、多分水中人の女性

だと思いまーす。……これが重要でーすか？ 当然、課題を見ていた貴方は理解していた筈でーすが」

「いえ。前半は兎も角、女性という部分については初耳ですね。もつとも、重要とまでは言いませんが、補強になるのは確かでしょう」

僕はロナルド・ウィーズリーからその点に関して聞いて聞こうとしなかつたし、聞いていたからと言って何かが変わった訳でも無いだろう。けれどもやはり——

「奇妙に思いませんか？」

——この課題は、初めから可笑しな所が多過ぎる。

「水中語マーミッシュユを話せる魔法族というのは居ますが、かの言語は地上でも水中でも人の声帯から出すには向いていない音をしており、非常に話者が限られます。今回の課題に参与出来るという限定を付ければ、僕が知るその話者というのは二人です」

一人は審査の際、水中人の長と会話をしていたアルバス・ダンブルドア。

そしてもう一人は、二百カ国語を自在に操る事が出来るバーテミウス・クラウチ氏。

「ただ、女性という事はその何れにも合致しない。そして、魔法族が一々吹き込んだというよりは、やはり水中人が吹き込んでくれたと考える方が妥当でしょう。貴方の話を聞く限り、水中人の歌は何処に人質が居るかの方向を教えてくださいましたようですしね」

「……ええと、それが何か？」

「可笑しいでしょう。何故、水中人異種族が課題にそんなにも協力的なんですか？」

ホグワーツの湖。

そこには水中人が非常に旧くから棲んでおり、集落も存在する事は良く知っている。

そしてしばしば接触と諍いが存在していた事は、ホグワーツの長年の歴史が語る所だ。彼等は近しくも遠い隣人で在り続けて来た。

「水中人は魔法族の定義では現状 “^{Beast} 獣” です。正確には、グローガン・スタンプ魔法大臣のヒトの定義、『魔法社会の法律を理解するに足る知性を持ち、立法に関わる責任の一端を担うことのできる生物』の一員となる事を撥ね付け、魔法族から “^{Be i n g} ヒトたる存在” と認めて貰う事など不要だと断言した。それでも彼等と交流の有る魔法族は彼等を対等以上の存在^{ヒト}として当然扱っていますが、今回重要なのは、水中人にとって許容出来ない事は当然に拒絶する点です」

我々は、言葉が通じようとも違う存在同士であり、慣れ合う関係には無い。

「サバイバルの為に森を使いたいと言って、ケンタウルスが領くと思えます？ 或いは宝探しの為にグリーンゴッツ銀行の地下を使いたいと言って、小鬼^{ゴブリン}が領くと思えます？ 時に水中人^{マーベール}は彼等よりも友好的と評されますが、それは互いの生活圈・生存圏が被らないのが大きい。しかし、今回の課題はその一線を明らかに超え得る物だ」

断片的な話からでも、代表選手が彼等の暮らす場所に立ち入ったと判断するには十分。

けれども、それは可笑しくないだろうか？ 異民族、異種族が無遠慮に自分達の村や街に立ち入って来る事に対しては、誰だって反発を覚える事こそが普通ではないだろうか？

嗚呼、それが戦争等の為に絶対必要ならば、止むを得ない事だとして受け容れうるだろう。だが今回は三大魔法学校対抗試合、魔法族の身勝手な都合に基づくイベントでしかない。

「それにも拘わらず、卵に歌を吹き込んでくれる事に始まり、水中人達は最初から全面的に手を貸してくれている。自分達の湖に、半端な目的と覚悟で立ち入る事を許してくれている。それを両者の友好に基づく物と言うのは、流石に魔法族に都合が良過ぎる解釈でしょう」

水中人と魔法族の間にどのような交流、契約が存在しているようにとも、わざわざ協力してやる義理など欠片も無い。湖に立ち入る事までは許しても、課題への協力を断るのは至極自然であり、断られたから

と言って憤慨するのは逆恨みも良い所だった。

「……だからこそ、貴方は最初から違和感を抱いていたのでーすか？」
「言葉に出来る程具体的では有りませんが、それだけね」

ただ、原点はそこに在った筈だ。

バーテミス・クラウチ氏、或いはアルバス・ダンブルドア。

その両者が交渉をしたとしても、今回の課題は簡単に実現するようには思えない。

「人質が湖に繋がれていると聞いた時にその違和感は更に強まりました。彼女達に魔法の眠りを掛けたのはアルバス・ダンブルドアでも、湖底で彼等の安全を直接的に確保していたのは水中人以外に考えられないからです」

「……私はそれを見ていませんが、人質が居た場所では、ずっと水中人達に囲まれていたとハリーが言ってます」

「監視兼警護だったんでしょね。当時の彼が気付かないのは無理も無いですが」

溺れる事はなくとも、外部の攻撃から無敵という事も無いだろう。

代表選手が直面したように、少なくとも水魔は湖底の脅威として居た。水中人が水魔を飼いならしているとしても、全てが統制下に在るとは限らないし、事故は起こり得る物だ。しかし、それらは水中人によつて防がれていた。

「極め付けは、ハリー・ポッターが浮上してきた時でした。今回の課題において、あの瞬間こそが最も異常を象徴していたと言っても良い」
「先程も言ってますか？ ガブリエールでは無いならば、あの赤毛の男の子の事でーすか？ 彼もヘルプしてくれませぬ」
「違いますよ。僕が指摘したいのは彼等三人の周りの事です」
「周り？」

銀髪を揺らしながらフラー・デラクールは首を傾げる。

ここまで言っても彼女には解らないらしい。同じ光景を見ていたとしても、同じ物を見ている訳では無いという証左か。或いは、それだけ妹の事しか念頭に無かったという事か。どちらにしても答えが出そうにないので、僕は答えを口にした。

「ハリー・ポッター達が水面に現れた時、緑の髪をした頭も同時に現れた」

水面から顔を出したのは、三人のみでは決して無かった。

「つまり水中人もまた殆ど同時に現れたんですよ。それも二、三人ばかりでは無い。ざっと二十人ばかりだったと記憶しています。彼等はハリー・ポッター達を取り囲むように同時に浮上し、そして興奮して何かを頻りに語り掛けていた」

「……ああ、そう言えばそうでした。ガブリエルが大層怖かったと言つてまーした」

陸までは距離が有った為、アルバス・ダンブルドア水中語の話者でも何を言っていたかまでは聞こえなかっただろう。加えて魔法族に彼等の表情など解る筈も無いから、彼等が如何なる感情を抱いていたのかは不明である。

だが、それらを想像する手掛かりはその後に存在している。

「あの後、水中人はハリー・ポッターを取り囲んだまま、それもエスコートするように陸地へと泳いで来ました。軋むような耳障りな音と共にでしたが、あれは水中人の歌なのでしょう。そして、そのような待遇を受けたのはただ一人、ハリー・ポッターだけだ」

偶々彼が最後の競技者だったからに過ぎない。

そう言つてしまうには、余りに手厚過ぎる待遇だった。

「更にそこで話は終わらず、水中人の長が課題終了後にわざわざ陸地に上がってきました。しかも語った内容と云えば、ハリー・ポッターの英雄的行為を報告するような物です。けれども、普通に考えて、そこまでする必要が有りますか？ 水中人の仕事としては、人質と代表選手の命を守つてやっただけで十分過ぎるでしょう」

公正の為に報告義務は課されるべきでも、それは異種族に求められる物でも無い。

繰り返すが、これは三大魔法学校対抗試合。魔法族の勝手なイベントに過ぎないのだから。

「課題の始まりから腑に落ちなかった。そして課題が始まってみれば、水中人達はハリー・ポッターに、いえ、ああいう手段と行為を選択した人間に肩入れしていた。あれを見た時、僕はハリー・ポッター

が正答を引いたと思った。手段は当然の事、全ての人質を連れ帰る所まで。この第二の課題に求められた真意を正しく解いてみせたと考えた」

物語として、余りに綺麗な形で嵌り過ぎていた。

「つまり、水中人が人間を攫い、人間がそれを取り戻す。余り詳しくは有りませんが、非魔法族にも似たような伝説は伝わっているようです。セイレーン、メロウ、セルキー、マーメイド。彼等は古来より、人間を水底に引き摺り込む存在として広く知られている」

非魔法族と魔法族の世界は繋がっている。

全く同じで無くとも、類似した部分は確かに存在する。

「ただ、非魔法族の伝説や伝承では攫われて話は終わりでしょう。彼等にとって水中は長らく異界で、手の届かない領域だった。けれども一方、魔法族はそこで終わらない」

「……私達は魔法を使って湖底や海底へ行けまーす。変身術を使っても、当然ながらハリーがしたように、ギリールウイードを食べる事によっても」

「水中人の起源はギリシャ、すなわち地中海だと言われ、そして奇しくもギリールウイードも地中海の植物です。水中人が存在を知っているのも不思議では無いでしょう。ギリールウイードを薬草学者が発見したのはここ二、三百年の話のようですが、アレが突然変異で生まれた植物で、それ以前は全く存在しなかったと考えるのも非合理です」

さながら、西洋人の発見前から新大陸が存在したように。

広く知られていなかっただけで、個人としては知っている者が居た可能性は高い。

「加えて杖は地上の道具だ。彼等にとって馴染みが薄く、歓迎出来る物では無い。しかし一方で、ギリールウイードは彼等の領域に在る薬草だ。魔法族を彼等に近付け、彼等に寄り添おうとする意思を示しうる物とも言える」

人間の技術を無遠慮に行使して立ち入るよりも、礼儀と配慮を見て取れる物だった。

「水中人と魔法族の交流。それは個と個の間ですらも友好的な物ばかり

りでは無かったでしょう。血が流れた時もあった筈だ。そして同時に、過去には確かに居たのかもしれない。自身が圧倒的不利な水の世界に立ち入り、単身でもって彼等に挑み、そして己の大切な物を奪い返さんとした、水中人異種族ですら認めざるを得ない戦champion士という物が」

ハリー・ポッターは、一時間の制限を大きく超えた。

だが、それならば何故、外部から止められる事がなかったのだろうか。規定の時間を超えたならば、何か不測の事態が起こったと考えるのも真つ当だ。即座に失格処分を下すとまではしなくても、何らかの動きを見せて良い筈であった。

いや、そもそもの話を言えば、一位のセドリック・デイゴリーですら制限を超える難易度、一時間という時間設定自体が無茶だったのだ。選手の安全を考えるなら課題の運営も余裕をもって行われるべきであり、今回においては二時間とは言わずとも、九十分とすべきだった。

けれども、今回の課題では呪文のみでは殆ど余裕が無いギリギリの時間設定が為され、一時間を超えても最後まで代表選手に課題を完遂させた。一時間という制限など最初からどうでも良かったと言うかのように、三校対抗試合の運営は——水中人達は、課題を続行させた。「要するに今回の課題の真意は、彼等に語り継がれる伝説の再演だった」

初めから全てが奇妙だった。

だからこそ僕は、そこに確たる意図と目的を探してしまう。

「ごっこ遊びのような物に過ぎないとしても、実際に水中人と剣や槍を交えずとも、魔法族は絆を忘れていないと、魔法族の想いは捨てたものでは無いと、それを確認する為の交流だった。それを正しく読み解く事こそが、今回の第二の課題において代表選手に求められていた。そういうのは出来た話だと思いませんか？」

「——だとすれば、私達三人は残らず最初から間違っていた訳ですね」

フラーは、感じ入ったように眼を閉じ、声を震わせていた。

解り切った銀色の美貌は、この曇天の中でも眩く感じてしまう位に

輝きを増している。彼女が真実クオーターヴィーラである事を改めて実感出来る程の魅了の強さであり、僕ですら一瞬心を揺らがされてしまう程の危うさだった。

「貴方が物を持ち込めて当然だと考えーたのも。ハリーがギリ－ウイードを探して、あのような行いをしたのも。いえ、ギリ－ウイードもこの周^{highland loch}辺の湖、もつと言えばホグワーツの湖の中に生えていたのかも知れません」

「……御言葉ですが、ギリ－ウイードは海の植物ですよ」

ハリ－ポッターの口からは、それを外から持参したとは出ていないかもしれない。

ただ、ギリ－ウイードの植生を知っている者ならば、彼が湖にたまたま生えているのを拾い食いしたとは考えない筈だ。

けれども、フラー・デラクールは確信をもって首を振った。

「いえ、水中人ならば養殖出来ているかもしれないませーんし、正答を用意するのならばそれ位が解りやすいです。貴方が気にしていた持ち込みも問題とはなりませんからね。ハリ－はそれを食べたに違いありません」

相変わらず思考が一気に暴走する女性だ。

だが、彼女は重要な点を既に忘れてしまっている。

「——貴方は僕の今の話が正しい前提で話を進めているようですが」
深く、大層深く溜息を吐く。

「この話は所詮虚言、或いは戯言の類でしか有りませんよ。その事は既に課題後、あの場に居た全員に示されている。何せ、審査員達はギリ－ウイードに関して特別に触れる事はなかったのですから」
だから最初から口にしたくなかった。

僕は意図や仕掛けが有ると考え、けれどもその予想は完全に裏切られた。やはり現実には、物語のように上手い話ばかりで構成されている訳では無い。

「仮に正答であるならば審査員が、課題を採点する者達が当然にそれを指摘した筈だ。しかし、そんな物は無かった。ハリ－ポッターが用いたギリ－ウイードの評価としては泡頭呪文や変身術と同等。だ

からこそ、これは大外れ。邪推以外の何もでもない」

そして、改めて言葉にするべきでは無かったと実感する。

初めから嘘だと知っている言葉を紡ぐのは、詐欺師と変わりがないだろう。

「単なる虚構フィクションです。そして虚構というのは上手く作って有るのが当然です。そこに真実は何も眠っていない。現実には、そんなにも美しい物では——」

「——それでも私は何ら構いません」

フラーに両手で顔を挟まれ、言葉を強制的に止められた。

何時の間にか、彼女は僕の太腿の上に馬乗りになっていた。吐息が掛かる程の近い距離。銀系のような滑らかな髪が僕の頬を擦る。

「ハリーが私の妹の命を間違ひなく救ったように、今回の課題は貴方の言葉が正しいです。それに、貴方はその推理が本当に違うと確認したのでーすか?」

「……既に証明されていますし、馬鹿馬鹿し過ぎて探す気にもなれませんよ」

先の話を裏付けるような伝説。

不思議な草を食べたという程に露骨でなくとも、大切な物を取り戻す為には水の中に挑んだ魔法使いの話が存在すれば、虚構は虚構でなくなるかもしれない。

けれども、何処からも出て来ないだろうと僕は確信している。

そう考える一番の理由は——

「夢のある話では無いでーすか」
romantic

——あの傲慢な老紳士パーテミス・クラウチ氏の印象には、全くそぐわない。

「ええ、それならば水中人の加点分で問答無用でハリーが一位で50点満点になりまーす。何より女の子はそういうのが大好きでーすし、ボーバトンも当然でーす。私が最下位なのも必然で、そうであったとしても大いに面目が立ちまーす」

「……理論が無茶苦茶ですし、貴方が女性でボーバトン生なのは当然の筈ですが」

「貴方は興味無い事には本当に馬鹿でーす」

「……………」

今の何処に罵倒されなければならぬ要素が有ったのか。

「そうとなれば、そのような話を探さなければなりません。普通の
本よりも絵本の方が良さそうですね。第三の課題の内容が発表され
るまで多少暇になると思っていました。忙しくなりそうですね」
「……無駄な努力は止めておくべきだと思いますよ。どんなに探した
としても、そんな都合の良い話というのは見つからないでし
よう」

「無ければ作れば良いだけです。魔法使いは別れて住んでいるの
です。自分の地元や家に伝わっていた話だと主張すれば誰も気
付きませーんし、何も問題有りませーん」

「……………いや、当然気付くし、どう考えても問題でしょうに」

やはり余計な事を吹き込むべきでは無かった。

フラー・デラクールから感じるのは、ガブリエル・デラクールの僕
と踊らせようとした時と同種の熱量。僕がどんなに止めたとしても、
この女性は虚構を本物にしようとするだろう。止めたければ最初か
ら、断固として僕の妄想を話すべきでは無かったのだ。

「……まあ、貴方の名前でもやる分には好きにして下さい。こんな話を
信じる馬鹿は早々居ないでしょうし、貴方が笑われて終わるだけだ」
「ええ、言われなくとも好きにしまーす」

今にも踊り出しそうな位に上機嫌な彼女に脱力するしかない。

本当に、一度思い込むと融通が利かない女性だ。そして人の上に馬
乗りになったままの状態からはさっさと脱して欲しいのだが、女性に
対して重いと言ってはならない位の常識は持っていたし、コートの上
から軽く太腿に触れて催促しても、彼女は降りようとしなかった。

そのまま彼女は額同士をくっつける。

御互い冷え切っている筈なのに、触れている部分は酷く熱く感じ
た。

「やっぱり貴方は素晴らしい人ですね」

「……眼が付いているのですか、貴方は」

近くに見える深い蒼の瞳からは、しかし全く嘘の色は読み取れな

い。

「ええ、貴方の性格が決して良くないというのは解っています。けれども、今回の話を出来る人間がどれ程居るのでーすか？ 三人の代表選手が残らず、無駄な意地を張らずに、予め貴方の話を聞いておくべきだったと思うに違い有りませーん」

「……それは単に貴方の感想に過ぎませんよ」

あんな馬鹿な話を残らず鵜呑みにする程、代表選手は頭が宜しくない訳でも無いだろう。

この眼前の女性とて、そちらの方が面白そうだと思つて居るから信じようとしているだけだ。そして、世界は面白いかどうかという理屈で回っている訳でも無い。

その割には彼女の声が自信と確信に満ち溢れていたのが嫌だったが、考えてみれば、不遜で高慢で自信過剰なのがフラー・デラクールという存在だった。

自分に一切の非は有りませんと全身で主張する美少女は、これまでも冷静で真つ当な理屈を力づくで叩き折つて来たのだろう。全くもつて質が悪過ぎる。

「クリスマスの後、母^{ママン}から忠告されました」

上から覗き込むような体勢のまま、彼女は言葉を紡ぐ。

「私達のヴィーラの血に浮かれない人間には二種類居ると。一つは、私達を真に大切に想ってくれる人間。そしてもう一つは、私達を心底どうでも良いと思つて居る人間。相手がどちらなのかは正しく見極めなさい」と

「……貴方の親にしては、随分と真つ当な事を言いますね」

僕にとってフラー・デラクールは関心の外だ。

どんなに魅力を振りまかれようが心が揺れないのは、閉心術の訓練を多少積んでいるというのも有るのだろうが、最大の理由はそこに在る。

「ええ、悲しいかな、私は貴方がどちらか解つてしまいまーす。ガブリエールもそうでーす。女の子は視線に敏感でーすし、相手が自分を見てくれているかどうかも同様でーす。けれども、同時に思うのでー

す。今そうでなくとも、それが出来るかどうかは別問題だと」

「……見れるかどうかの話ですか？」

「想えるかどうかの話です」

だとすれば、やはり僕は違うだろう。

彼女達を想おうとする気には全くなれないし、今後その日が来る事も絶対に無いだろう。

「——しかし、想えるかどうか、ですか」

僕はハーマイオニー・グレンジャーに恋している。想っている、筈だ。

けれども、それが独り善がりな物に過ぎないのでは無いかと疑って——いや、既にそうである事を確信してしまっ居るのだ。彼女は僕の事を全く想っておらず、選ぶ権利は一貫して彼女に在り、僕には無い。そしてそれで良いのでは無いかと受け入れている。

彼女はレイブンクローでは無くグリフィンドールを選択出来たが、僕はグリフィンドールどころかレイブンクローですら選択出来なかった。嗚呼、何時だって、僕が始まった時とてそうだった。あの父が間違ひなく死んだ時も、母の命がこの手から零れた時も、僕は一貫して無力で、部外者で、何も変える事の出来ない存在のまま——

「まーた余計な事を考えていまーすね、貴方は」

再度、頬を摘ままれる。

「貴方は見た目以上に心が大人に思えまーすが、それは上辺だけに過ぎないのが何となく解ってきまーした。だからこそ、一つ助言をしまーす。貴方の為に、そして私達の為にも」

真つ直ぐと覗き込まれているのは何も変わらないのに、何故か僕は視線を逸らしてしまった。

……いや、そうしてしまった理由は解り切っている。

フラー・デラクルの瞳に浮かんでいたのは、ハリー・ポッターと対峙した時にも幾度か見る羽目にもなる、僕が非常に苦手な類の光だった。

「貴方は時には自身の欲求のままに奪おうとするべきです。この世界は貴方にとっては狭い筈で、貴方が手に入れられる物も想像以上に

多く有る筈で―す」

「……………」

「けれども、意識していて欲しい事が有りま―す。今貴方が手に入れられるとしても——何時までも、貴方の掌の上に残る事は有り得ないので―す。どんなに我慢強い人間でも何時までも強いままでは居られませんし、誰もがずっと待つていられる訳では無いですから」

フラー・デラクルの言っている事は重要なのだろう。

それは解るし、伝わってくる。彼女は真心と情愛をもって僕に向き合っており、だが今の僕にはその意味を理解する事が出来ないし——多分、それは僕の根源にとって決して相容れないという感覚が有る。重要な物を間違えてはならないし、優先順位を見失っても行けない。己が求めた結果として選択を間違え、全てを喪わせるという事は有ってはならないのだ。

供に居るだけでは、御互いが暖め有っているだけでは何も解決しない。あの事故によって魔法省が僕達の家を訪れた時は最後の分岐点であり、僕は償うつもりで寄り添う事を選択し、そして結果として選択を誤った。人は何事も無くても死に行く物だという事を、安易に忘れ去っていたのだ。

「一応心に留めておきましょう。理解は——やはり出来そうにないですが」

「な―ら―ば、頑張つて理解するように努力してください」

「……解りました。解りましたから、僕に乗ったまま足を叩かないでください、足を」

暴力に訴えるのは止めて欲しい。

僕は肉グリフインドル体派では無いのだ。

「そして貴方がそこまで言うのなら、柄にもない事を一つしましよ―う」

彼女の左手首を掴みながら、言葉に意思を乗せる。

今まで散々馴れ馴れしく近付いてきたというのに、その瞬間フラァは大きく身を引こうとした。だが、少しばかり力を籠め、更に背中を左手で支える事で無理矢理引き留めた。自分がどんな体勢かを意識はすべきだし、危ないから動くのは止めて欲しいものだ。

「第三の課題の事です」

「……課題？」

フラァ・デラクールは一瞬ポカンとした後、大きく溜息を吐いた。

「……貴方はそう言う人だと解つていまーした。ええ、本当に解つていましーたとも」

「解っているならば結構です」

僕は膝裏から掬い上げるようにして彼女を上から横に退け、元通りベンチに座らせる。

先程まで抵抗を止めていたのに再度抵抗を始めたのが謎であり難点だったが、魔法無しでは力は僕の方が上である。人間は座る道具では無いという事も学習してほしい。

「告知によれば第三の課題の詳細は一か月前、つまり今から三か月程後の五月末です。けれども、既に今の時点で告げておきましょう。仮に第三の課題が外部から見えないような形で行われた場合。少しでも不穏な気配を感じたら、躊躇せず棄権して下さい」

僕の言葉の響きと内容に、流石に不穏さを感じたのだろう。

フラァ・デラクールも不満を引つ込め、僕の視線を真正面から受けて立った。

「……何故、そんなに怖い顔で言うんでーすか」

「文字通り、笑えない話だからですよ」

冗談を口にしたつもりは無いし、真剣に言っている。

「そして、これはここだけの話です。貴方が外国の人間だから言っていますし、真に大切な事は貴方が口を噤んで居られる人間だと信じるからこそ告げている。貴方が死にたくないならば、気付いていない振りをしつつ、慎重に動くのが最善だ」

フラァ・デラクルールの顔に、漸く恐怖の色が宿った。

その深い蒼の瞳の中には、彼女を真つ直ぐと見詰める僕の姿が映つ

ている。

「杞憂に過ぎないならば良いんです。しかし、そのような最悪の状況が意図的に造られた場合、今度こそ『事』が起こる可能性を排除しきれない」

普通の三大魔法学校対抗試合ならば、こんな事は言わない。

だが、今回は普通で無い。第二の課題が湖で行われる事から違和感が始まったように、この三校対抗試合は、ハロウインの夜からずっと異常を訴え続けている。

「あの課題においてハリー・ポッターの採点に物言いが入ったのは、あの水中人の長が出て来てからの事でした。つまりは、彼女に聞かなければ、三校の審査員ですら水中の状況を正確に把握出来ていなかったのではないかとという疑問が生まれる」

アルバス・ダンブルドアであれば、何かを把握していたのかもしれない。

遠見の魔法や魔道具が存在するのか僕は余り詳しく知らないが、少なくともあの老人の配下にはアラスター・ムーディ教授が居る。もつとも、あの不思議な義眼が水底まで見通せる程の性能を持っているかどうかは、やはり不明なのでは有るが。

「演技や採点が必ず公の場所で行わなければならないという理屈は有りません。しかし、内容の公開は透明性の確保の為の単純な手段でしょう。特に、三校試合には長年不正が付き物でした。それも校長、代表選手、学校の生徒、保護者や卒業生。考え得る限りの立場の間人が、栄冠を勝ち取る為に卑劣な手段を用いて来た」

フラー・デラクルは表情を険しい物へと変える。

「……ポーバトンやダームストラングがそれらをすると言いは言いませんか？」

「確かに二校も未だに容疑から外していません。ただ——残念ながら、第一容疑者はホグワーツと我が国の魔法省ですよ。ゴブレットの準備や課題の内容を決めたのは誰か、その上今の状況を考えれば、そのどちらかに『犯人』が居る可能性が高い」

彼女からオリンペ・マクシーム校長には確かに紹介して貰った。

流石に半巨人だ。半端な開心術が通じる物でも無いが、会った印象としては、彼女は善の側の人間だった。フラー・デラクールを単なる代表選手以上の存在——つまり、同じく血に問題を抱える者として大いに気遣っている事は明らかであった。

最初に紹介された際には表面上穏やかで有りながらも僕へと警戒を隠そうとしなかったが、その後フラー・デラクールが母国語で何やら話した後は途端に対応が柔らかくなり、逆に敬意と丁寧さすら感じた物だ。あの変化を意図的に行えるならば相当上手い役者であり、そしてまあ、フラー・デラクールがはつきりと彼女の人格を保証した上で恩師だと言ったのだ。彼女が“犯人”である可能性は、僕が当初考えていた程には高くないのだろう。

何より、異変の起こっている中心は依然としてこの国だ。

バーテミウス・クラウチ氏、あれだけの体調不良を押し通して第一の課題の審査員として立ち続けた老紳士は、しかし第二の課題で姿を現さなかった。それどころか、日刊予言者新聞においては、十一月末以来公式に姿を現していないと報道されている。つまりは第一の課題の後、僕が彼の姿を見たのが殆ど最後だった。

日刊予言者新聞は、彼が依然としてパーシー・ウィーズリーを通じて仕事をしているのだとも報道されているが、現在の情勢を正しく把握していれば、それを真正直に信じる馬鹿は居ない。

死喰い人であったピーター・ペティグリューが去年逃げ出し、今年のクイディッチ・ワールドカップでは十三年振りに闇の印が打ち上げられた。

更に魔法ゲーム・スポーツ部の魔法省職員バーサ・ジョーキンスが既に行方不明であり、彼女が姿を消したのはクイディッチ・ワールドカップ前だが、準備期間を考えれば三校対抗試合に関わっていたと判断するのが妥当だろう。

そしてバーテミウス・クラウチ氏も国際魔法協力部部长として、同じく三校対抗試合の運営に関わっており、しかし同様に姿を見せなくなった。

加えて、パーシー・ウィーズリーはホグワーツ卒業後半年の人間で

あり、その人間は兄弟からも多少疎まれる位には融通が利かず、しかもあの老紳士は、他人の前で彼をウエーザビーと呼ぶ位には軽んじていた。

そのような人間が何時の間にか魔法省の重鎮の個人秘書に昇進しているともなれば、疑うなという方が無理な話である。

更に付け加えれば、彼等が関わっていた三校対抗試合においては参加出来ない筈の年齢の人間が、居る筈の無い四人目として代表選手となっている。しかも、その人間は寄りにも寄って赤子にして闇の帝王を打ち破ったとされる“生き残った男の子”であるともなれば満点だ。

バーテミス・クラウチ氏は、恐らく無事では無い。

直接的な表現をすれば、彼は死んでいる可能性が高い。

そしてこのような一連の干渉を国外の人間が行うのは中々困難であり、必然として容疑を強く掛けるべきは我が校と魔法省である。“犯人”で居なくとも、協力者は国内に一人は居ると考えざるを得ない。

「寧ろ逆に、ボーバトンやダームストラングには不正——ホグワーツの不正、と敢えて言いましよう——を防ぐ方を期待したい所です。止められるならば、是非とも止めて欲しい。……が、残念ながら今回は余り期待出来そうにも有りません」

「……侮辱しまーすか？ 流石の私も、母国を悪く言われて愉快にはなれませーん」

「しかし、事実は正しく認識すべきです。こういう言い方は不快になるでしょうが、不正は許した方も悪い。勿論、この悪いは道徳的にという意味合いでは無いですが」

「なら、どういう意味でーすか。不正をした人間が悪いのは当然でしょう」

「それは前提ですが。では、初回ならば、今回だけならば許されるのですか？」

「それ、は……」

嫌味な言い方で、配慮も何も無い物言いでもある。

けれども、正義の下に他人を糾弾する事程、楽な仕事という物は無い。

「僕には伝わって来ませんが、貴方がたの本国では多分オリンピック・マクシーム校長や魔法省が相当非難ハッシングされたと思いますよ。このようなホグワーツの不正を許すのは何事か、お前達は一体何の仕事をしていたのか、とね。一番の大失態を犯したアルバス・ダンブルドアは他国の人間であり、けれども彼女達は自国の人間で、そしてこれは政治的な失点だ。彼女達の足を引っ張りたいと思って居る者は決して見逃さない」

僕のような悪辣な人間は、当然利用する事を考える。

彼女達に本当の意味で責任は無く、悪い訳でもないだろうと思っ
いても尚、だ。無知や無能で有った事は、過去の失敗を正当化しうる
言い訳にはならない。

「このように言う僕だって、後から、それも好き勝手言える部外者だからこそです。まさか、三校試合なのに四人の代表選手が出る事態が発生すると思っても居ませんでしたしね。ただ——理屈を考えればそれは不自然では無く、事前に想定して然るべきだった」

「……三校試合なのに、何故そう言えるんでーすか」

「長い歴史の中で、三校試合が二校になる危機や、四校以上に拡大するという議論は有ったという事です。そして、ゴブレットの製作者の思考としても、三校対抗試合が三校で無くなった途端に役立たずになるような道具を作るのは余り好まないでしょう？」

予め拡張性を持たせる事こそが自然だと言うべきだった。

勿論、これも今になってからこそ言える事ではあるのだが。

「三百年前は、当然その知識が有った筈です。そのような不正が為し得る事も理解し、その上で注意していたに違いないでしょう。それはマニキュアルマニキュアル注意事項に記すまでも無い無意識的な物で有ったかも知れませんが、開始以来一貫して防いで来たのは歴史が証明している」

「……三校試合において、一校が二人の代表選手を出した例は有りませーん」

「ええ。そのような前例が存在していたならば、ハリー・ポッターは今

回参加して居ない」

隅から隅まで規則を熟知し、過去の三校対抗試合の記録から不可能の境界線を理解している類の人間以外には、今回それが発想すら出来なかつた。そして如何に化^{アルバス・ダンブルドア}物と言つても、前例が無い事を全て予め見通した上で動ける筈も無い。

「三百年に渡る三校試合の中止。それは伝統の断絶を意味し、必然、大会運営の為の技術^{ノウハウ}も、不正を防ぐ為の相互監視の手法も、三校全てから喪われている。これは能力と言うよりも、人間の悪意に対しては後手に回らざるを得ないという問題です」

それが今回の強い懸念材料。

せめて直近に一度でも三校対抗試合が開催されていれば、あの老人やホグワーツ教授、そして二校の校長達もその反省点や懸念点に基づいて修正を出来たし、更に防備を手厚く出来た事だろう。

だが、今更嘆いたとて詮無き事だ。

今回ばかりは未知のまま手探りで挑むしかない。

「そして、観客の見えない所で行われる課題。第二の課題だけならば、一回だけと言うならばまあ良いでしょう。公開したままでは不都合な事、不自由な事というのは有り得る。観客の警備ばかりを考えて代選手の護りが疎かになつてもいけない。単純に興行のみを考えて、三校で最も優秀な生徒を決めるといふ理念が喪われるのも妥当では無い」

第一の課題では差が殆ど付かなかつたが、第二の課題では大いに明暗が分かれた。

四人別々に違う相手と戦わせる形で競技をさせるのではなく、半ば競争めいた形で課題をさせたが故に、今回は明確に順位を付ける事が可能だつた。結果論的の有つても、後者の方が良い課題だつたと評する事は可能である。

「但し、二度。三分の二が観客の、審査員の眼の届かない所で為されるというのは余程不適當に思える。特に第三は最後^{third last}だ。生徒達が見えない所で全ての課題を終了させて、三校で最も優秀な人間だと認められると思いませんか？ 第一の課題がああいう形だつたからこそ、三校の

生徒は貴方がた四人全てを代表選手と認めたとこののに」

「……だからこそ、貴方は気を付けるべきだと言っているのでーすか。特に、誰からも見えないように課題が行われる場合には」

「ええ。何事も無く終わるならば構わない。貴方がたが笑って優勝者を讃えて終われるのなら、それに越した事は無い。三校対抗試合が囷という可能性は依然として存在しますし、この『予言』が外れるというならば、僕は今度も甘んじて笑い物になりましたよ」

『生き残った男の子』を三大魔法学校対抗試合で殺す。

そんな劇的で、王道で、陳腐とすら言える脚本を、しかし敢えて外す。アルバス・ダンブルドアの眼が試合と彼に向いている事を最大限利用して、己が目的を達成する。

僕ならば間違いないと思うだろうし——けれども、『犯人』は僕では無い。

「可能な限り速やかに棄権しろとは言いませんし、このような忠告ですら、貴方の性格からすれば受け入れ難い物でしょう。だからこういう事を言うのは今回限りです」

フリー・デラクルは僕に近くなり過ぎた。

それを考えずとも、彼女は代表選手の一人である。

本気で今回の三大魔法学校対抗試合において『事』を為すつもりならば、服従の呪文を掛ける対象者として良い位置に居るし、彼女が引く血統としても本命への障害としても、事のついでに危害を加えられかねない人間だと言えるのだ。

だからこそ、最低限の忠告をすべきだと思った。ああまで真摯に向き合ってきたからこそ、僕も応えるべきだという気がしたのだ。

「貴方は蛇のように賢く逃げる事を考えるべきだ。この国は既に戦争前夜であり、何時誰が死んでも可笑しくない。そして貴方は他国の人間だ。部外者が下手に首を突っ込んで、命を無為に散らす必要は全く無いんです」

フリー・デラクルは依然として強張った表情を浮かべたままであり、しかし不思議と僕には、彼女が今にも泣き出しそうに見えた。

「今回の試合で敗者になったとしても、貴方の人生は変わらず続きう

る。

けれども死んでしまつては——人はそこで終わりなんですから」

言うべき事は言った。

彼女とて容易く引き下がれる立場に無いのは理解している。

最早フラー・デラクール一人の問題では無く、彼女には学校の、母国の名誉が懸つている。

歴代の三校対抗試合の戦績もホグワーツとボーバトンで全くの互角か、ホグワーツが一勝多かつた筈である。特に今回はホグワーツが四人目の代表選手を出した承服し難い不正を行った事もあつて、彼女には元より強く勝利が期待されていた事だろう。

大きく引き離されて最下位に沈んだ彼女にまだ優勝の機会が有るか解らないが、仮に有るのならば、フラー・デラクールという女性は自身の誇りと矜持に懸けて、死に物狂いで挑まなければ気が済まないに違いない。

だから後は彼女の選択次第、僕が関与出来る事では無い。

ただ、彼女にも一人で考える時間が必要だろう。

そんな配慮と共にベンチから立ち去ろうとすれば、素早く杖を抜いた彼女に何故か呪文で拘束された。……代表選手としての腕前を、こんな形で遺憾無く発揮しないで欲しかった。

無言の抗議を彼女は無視し、僕はそのまま校舎内を移動——途中遭遇したミネルバ・マクゴナガル教授が一つの溜息と多少の小言で見逃したのが解せない——する事を強制された。

そして、彼女が目指した目的地、医務室に辿り着いてその扉を開けた時、何故かブリエル・デラクールこそが湖底に沈められなければなかつたかを理解せざるを得なかつた。

第二の課題において彼女を人質にするという事は、当然の事ながら彼女をホグワーツ内に招き入れなければならぬ。あれだけホグワーツでのダンスパーティーに関心を示し、あの昼食会後にホグワ

ツを見られる事に喜びを露わにした彼女を、だ。

更に思い返せば、クリスマスパーティーでは他の者が大勢居り、尚且つユール・ボールが控えていたが為に、立ち入れる範囲は限られていた。一方、今回の場合は他三人の人質はホグワーツ内部の人間であり、入り込む部外者としては彼女一人である。

そして望まずして被害者となった彼女に対し、大人達が多少の便宜を図る事は、外部の眼には何ら不自然には映らない。

今回の策を考案したのはあの諸悪の根源アルバス・ダンブルドアだろう。

しかしそもそもの希望を出すと共に、老人に対して幼子らしくせがんだのが誰であるかは明白で有った。

妹に見えない位置で杖で脅されたままの僕に、選択肢など最初から存在しない。

輝かんばかりの笑顔で駆け寄って来たガブリエル・デラクルの“お願い”に首を縦に振らざるを得ず、僕は彼女に手を引かれ、監視である姉を引き連れて校内を巡る羽目になった。

結局、ガブリエルは夕食後まで居座ってホグワーツを満喫し、改めて彼女を迎えに来た両親に連れられて去って行った。……あの様子では自身の小さい方の娘が今朝湖に沈められた事を知っているかは怪しく、大きい方の娘も露骨に話を逸らしていた。

その点がバレルかどうかは彼女達の問題だが、僕にとつての問題は、今回クリスマスと違って殆ど全校生徒から彼女達と共に居る所を見られる羽目になったという点であり、当然ながら悪評と心労も明確に増えたという事だった。

デラクル姉妹と関わりとロクな事にならない。

あの騒動を経て理解していたつもりでも僕の認識は尚甘く、そして今更認識を修正出来たとしても、最早完全に手遅れだとしか言いようがなかった。

歴史上最も邪悪な魔法使い

三月になった。

先月末デラクール姉妹によって持ち込まれた大問題については——少なくともスリザリン内部においては、だが——何とか収拾を付ける事は出来たのだろう。

大騒動を巻き起こしてくれたガブリエルが帰った後、当然僕はぐさまマルフォイの所に行って頭を下げたのだが、彼から返ってきた反応は「君が混ざり者と一時の火遊びをしているのは知っている。ただ君は自分がスリザリン生である事を最後には思い出すべきだし、そもそも純血の僕に不愉快な物を見せるのは余り感心しないね」という淡泊な物だった。

当然ながら、その言葉を額面通りに受け取る事は決して出来ない。彼の発言は現状を一応許容するものであれ、自分の眼に見える所でやるなどという非難でも有るし、仮にそのような真似を感知すれば次は無いという警告でも有る。

加えて、彼は僕の庇護者として今回の件は叱責する正当性が存在していたにも拘わらず、敢えて黙認してみせる寛容と温情を示したのだ。つまりは単純に叱責されるよりも大きな債務を彼に対して負う羽目になったのであり、それを理解して尚、僕は再度頭を下げるしか無かったのだった。

そして必然の帰結として次に向かったのは、フラー・デラクルの下である。

ホグワーツ内で捕まえるよりもマシだろうと気が進まないながらもボーバトンの場所を再度訪れ、彼女に対しては次の旨を真正面から伝えた。スリザリンは純血主義の蔓延る寮であり、君が公の場で僕に近付いて来ると面倒な事になるから止めて欲しいと。

そして、そのような明確な拒絶の言葉を聞いて尚近付いてくるような酔狂な人間など早々居ない筈であるから、僕は今回の件もそれで清算が終わったつもりで居た。

しかし———という訳か、彼女はそれを他人に見られなければ構わ

ないと解釈したらしい。

前回のようになりザリン寮内から呼び出すとか図書室で近付いて来るような真似は止め、僕を空き教室に連れ込む手口に変えたようだった。

……最初は一体何事かと思つた物だ。

廊下を歩いていると突然扉が開いて引き摺り込まれるのは余りにも怖過ぎる。

勿論、僕としてはそれも止めて欲しかったのだが、僕をガブリエルと踊らせようとした時の危険な気配を滲まされては流石に引き下がらしかない。ボーバトンである彼女に取れる手段など然して無いだろうし、僕には思い付かないが、彼女が暴走したら何をしでかすか解らないのは身に染みている。

そして確かに、見られないのであれば余り問題が無いというのもまた真理では有つた。

問答無用で接触を強要するフラァーが——妹が名前呼びされている事に気付いた彼女は、自分もそう呼ぶように要求した。妹と同じく愛称呼びすら要求して来たが、その点に関しては妹共々流石に拒否した——してくる干渉は、意外と穏便な物だ。

興味も無い世間話を一方的に捲し立てるのも、ベタベタ触られるのも、多少気が散るだけで本を読むのには支障は無かつたし、どうせ後三か月程も我慢すれば彼女はホグワーツから立ち去ってくれるのだ。制御不可能な嵐は黙って過ぎ去るのを待つのが最善だった。

校内の方は依然として平和な物だ。

闇の魔法使いが陰謀を巡らせているとは思えない程に穏やかな物であり、あの水中人に関する法螺話も、あれだけフラァーがやる気を出し、ガブリエルの方も楽し気に聞いていた割には、少なくとも僕の周りでは聞かなかつた。やはり所詮は虚構と空想の産物であり、如何に適当な魔法使いでも真つ当に信じるような人間は居なかつたという事だろう。

廊下でも散々語られていた第一の課題と違い、第二の課題に関しての話題はピタリと止んでいたのが多少不思議だったが……まあ、ドラ

ゴンと違つて自分達が見てない水中の事だから自然な事ではあるのかもしれない。

そして意外にも、一人だけ失敗したフラーに対する中傷も、同様に表向きには見て取れなかった。依然として彼女はポーバトンの女性陣で浮いて居ながらも、代表選手の中で一人失敗したにしては受け容れられているようだった。

一つだけ異変が有ったとすれば、ハーマイオニーを取り巻く三角関係の記事が出た事か。

しかし、それも僕の関心を左程惹くような事象では無かった。

ミネルバ・マクゴナガル教授が表情にまでは出していないくとも内心非常に苛立っているらしい事を見てとり、しかし教授陣全体にそれ以上の動きが現れていないらしい事も把握すれば十分だ。つまりはシリウス・ブラックの時と明確に違う反応であり、あの老人の考えは容易に推察出来る。下世話な覗き屋は、やはり今回の大局に影響を及ぼす物では無いのだろう。

その記事に最も強い反応を示したのは、案の定というべきか、某魔法薬学教授だ。

授業内で御丁寧に全文を読み上げてくれるという暴挙を為した教授には流石に辟易したのだが、最大の関心事はその後にやってきた。即ち、イゴール・カルカロフの来訪であった。

元死喰い人が確定しているという彼等の関係性からすれば、周りの眼に触れる所で、しかも授業に立ち入って来るという形で接触を図るという事は余程穏やかでは無い。

つまりは彼等^{元死喰い人}にとつて無視出来ない何かが起こっていると考えるのが妥当であり——けれども、あの嫌味な教授は日々僕に事情を説明してくれる程に親切では無い。結局、彼等二人が接触した以上の事実を把握する事は出来ない^{と諦める}、というよりも当然の事であろうと納得していたのだが、その予測は良い意味で外れた。

翌週の魔法薬学の授業。

その間に、スネイプ教授は一度、かつ一瞬だけ視線を僕と合わせた。僕が存在していないかのように振る舞う普段の教授からすれば、そ

れだけでも酷く異例と言える。だが、僕を驚愕させたのは、教授がそれのみで終わらせなかった点だった。

開心術、閉心術において視線を合わせるといふのは元より重要な意味を持つ。

その魔法的な技術は単に相手の思考や感情の揺れを読み取る事のみを意味せず、言うなれば心同士の接触到に近い行為である。そして教授は高い技量を持つ開心術士であり、僕の方にも少しばかり開心術の心得は多少あった。

要するに御互い言葉を一切交わさずとも、最低限の情報を伝える程度は可能だという事だ。

その日の放課後、僕は教授の要求通り、彼の研究室を訪れた。

一応軽くノックした後、返答を待たずに扉を開ける。

相も変わらず来訪者の気を滅入らせる、スネイプ教授個人の研究室。

この場所はまずトーマス・エジソン以降の「マグル」界の明るさという物を見習うべきだが、魔法薬やその材料には光が悪影響となる代物も少なくないし、何よりこの部屋の主は現状で満足しているのだろう。

壁を埋め突くす程の背の高い棚、そこに規則正しく並べられた数多くの薬瓶、机に広げられている書きかけの羊皮紙、机の上で煮えているフラスコと大鍋。彼が教職である以上に真理の探究者である事が解る部屋であり、そして確かに、最も教^{Professor}授らしい部屋と言われて思ひ浮かべるのはこの部屋で有った。

その部屋の片隅で、教授は薬品の整理をしていたらしい。

彼は僕の無礼な来訪にも一切表情を動かす事は無かったし、そしてまた一瞥すらしなかった。軽く鼻を鳴らすだけの反応をした後、薬棚に向かって杖を振る。その教授の意図に従うように一本の薬瓶が宙に浮きあがり、教授の手に飛んで行った。

「——まさか貴方から誘いを受けるとは思いませんでしたよ」

薬瓶を危なげなく受け止めた教授に挑発の言葉を掛ければ、何時も通りの気取った、粘着いた声が返って来る。視線が無くても、その全身から僕への嫌悪が滲んでいた。

「我輩とて余り望ましくは無いのは言うまでも無い。しかし、今年の君は去年と違って随分と涙ぐましい努力を、それも傍目から見ていて哀れになる程の見当違いの努力をしている。であるからして、我輩も少しばかり手を貸してやろうと思ったまです」

「随分と笑わせる台詞を言った物ですね。スリザリン的である貴方が、そんな教師らしい善意を發揮する筈も無いでしょう。貴方にも意図が有る筈だ」

「当然有るとも。それが何か問題が有るかね？」

心外だと言うように、ねっとり疑問が紡がれる。

「それに、たとえ我輩に目的が有ったとしても君への助力である事に違いない。君が拘るスリザリン的な主義からしても、当然肯定される行いである。同胞愛は我等が愛すべき寮の奉ずる徳目であり、身内”には少々甘くなる物だ”

……僕を身内などと思っていないだろうに、本当に良く言う物だ。

「そしてこのような場合、我輩を何と呼ぶべきか解らないかね。なあ、スリザリン生レッドファイールド？」

「スネイプ寮監。僕が貴方を呼ぶにはそれで十分でしょう？」

「相変わらず敬意に欠けた生意気な小僧よ。それでこそ、君だと言うべきでは有るが」

教授はやはり僕を見なかった。

そして僕もそのような親密さを期待していなかった。

冷え冷えとした部屋の中で御互い一切視線を交わす事は無く——けれども、僕個人の感想を言えば、この教授の態度は非常に付き合いやすい物だ。感情や気分では無く、利益と理屈によって支配されている会話は心地良くすら有った。

解り切っていた事だが、教授は椅子を用意してくれるような親切さを發揮してはくれない。ただ、僕をわざわざ呼び付けた教授との話し

合いが、短時間で済むとは思っていなかった。だから、僕は適当に研究室の壁にもたれかかって腕組みをする。礼儀も何も有った物では無いが、教授はこちらに視線を寄越さないままに軽く眉を顰めただけだった。

ただ一つだけ、教授は今までの行動と違う動作を取った。

すなわち、教授は葉柵から杖先を逸らし、僕が入って来た扉、或いは部屋自体へと杖を向けて振った。その際、教授がマフリアートと呟いているのが耳に入る。

「嗚呼、これは防諜の呪文だ」

一応僕の視線を気にしたのか、教授はそう補足する。

「どう考えても、君との話は他人に聞かれて愉快になれる筈が無いのでな。特に今年の君は他人に盗み聞きされる才能を発揮しているようだ。用心をするに越した事は無い」

「……スリザリン談話室での事を言っているのですか?」

「いや、それとはまた別の一件だ。君自身は重要だと考えずとも、他が同じく考えられるとは限らない。特に君は今年に入って、より目立つようになった。周りにはもつと気を付ける事だ」

言葉の裏側には明確な嘲りが含まれていた。

忠告というよりも警告であり、しかしやはり教授にとって全く関心が無い事なのだろう。僕の皮肉の応酬を待つ事なく、言葉を続ける。

「クリスマスは、君にしては相当派手に動いたな」

教授は、手元の葉柵の中身を検分するように軽く杖で叩いていた。

「嗚呼、学生らしいと言えば学生らしい行いである。しかし、あれが君の目的に何か影響を齎したとか、状況を変えたとは全く思えないが?」

正直、最初我輩は耳を疑った物だ、君が無意味に思える行いに、あんなにも労力を費やすとは思ってもみなかつたのでね」

「……全面的に否定はしません。けれども、ああして動かなければ、フラーにもオリンペ・マクシーム校長に接触する事は出来なかつたでしょう」

「我輩はそれが無意味に思えると言った筈だが? 学生風情が探偵ごっこをした所で限度が知れているという当然の事を今更言うつも

りは無い。しかし、ボーバトンに近づくにしても、もつと賢い手段が有ったのではないかね？」

……相変わらず、的確に急所を抉ってくれる。

「君は最低限確認出来れば、それで満足出来た筈だ。服従の呪文を筆頭に、本気で潜伏した闇の魔法使いというのは一、二度の接触で簡単に炙り出せる物では無いからな。故にあのような手段を取ったのは、単にそれが自身の『美学』に合致する物で有ったからであろう？」

「……それが事実だったとして、何か貴方に問題でも？」

「全く無いとも。しかし、やはり君は我輩では無いという事を確認出来たという点で意味が有ったからな。少なくとも、あのような危険な真似は我輩には出来ない」

「スリザリンらしくなかったと？」

「いや、スリザリン過ぎたからこそ言っている」

教授は不機嫌そうに鼻を鳴らした。

気のせいではなく、その言葉を紡ぐ言葉には先程より力と熱が籠っていた。

「しかも、我輩達に通常許される類の遣り口では無い。為すべき行動方針だけを定め、しかし己に降りかかる面倒を能力有る他人に全て丸投げする。これがどんな人種の遣り口で有るかは、スリザリンである君に言う必要はあるまい？」

……嗚呼、言われてみれば。

あのような行為は、一流の純血貴族の遣り口だった。

「……領分を超えたと思いますか？」

「厚顔無恥に言う物だ。君の本質はそれを問題視しないだろうに」
「……………」

「だが、安心したまえ。貴族は互いに利用し合う存在だ。そして君の関与が全く無かったのであれば、たとえ同じ状況を聖二十八族だけが作ったとしてもダンブルドアは決して領かなかつただろう。君も理解している通り、あの校長閣下は好き嫌いが激しい」

領分を超えたとすれば、と教授は続けた。

「ナルシッサを指定した点は明確に線を踏んだな。あの意図は何処に

有った？」

「……ルシウス・マルフォイ氏は確実に死喰い人でしょう。しかし、夫人は不明確であり——ベラトリクス・レストレンジの事は一応念頭に在りましたが——彼女からの提案の方が老人としても受け容れやすいだろうと考えたままでです」

「間違いだったとまでは言わん。彼女は確かに死喰い人では無い」

スネイプ教授は仏頂面のまま認めた。

「しかし、君は去年ダンブルドアがルシウスを学校に入れた事を忘れてるし、何より、上位者の行動を下位者が制約するような真似はすべきではない。たとえそれが結果的に正しいと思えたとしても、だ」

「……………」

返答はしなかった。

けれども、僕は教授の言葉に理が有ると感じたし、そして教授にも伝わった筈だった。

恐らく、あのクリスマススの一件は、ホグワーツ生の、しかも純血ではない者の不法法だったからこそ見逃されたに過ぎないのだろう。

彼等とて一度で怒りを示す程に狭量では無いだろうが、それでも何度も許してくれる程鷹揚でも無い筈だ。直接警告が飛んで来なかったのは寛容を示す物か、或いはそれを察せない愚か者は直ぐに切られる事を示す物なのか。

何れにしても、今後気を付けるべき類の危険な行為だったのは違いなかった。……と言っても、あのような真似をする事は無いだろうが。

「ただ」

僕の意識を向けさせるように、教授は強調する。

「聖二十八族にとってあの昼食会が非常に好都合だったのは確かだった」

「……あの後に僕の方に文句が来なかったのもそれは心配していませんでしたが、彼女達も利益が得られたのは確かなのです」

あの日の夫人の苦勞を思えばその報酬は当然与えられて然るべきであり、実際、スネイプ教授は普段よりも大きく——普通の人間と比

較すれば極小さく——頷いた。

「何時もと違い魔法大臣を始めとして高官を呼べはしなかったが、逆に下から噂となつて広く伝わつたようだ。何故招待してくれなかつたという文句と共に、今夏は是非呼んで欲しいと各方面から声がかつたようだ。イースター休暇の予定も埋まっていると聞く」

「……それは結構な事です。しかしまあ、貴族達は自身が呼ばれない事を嫌うというのは本当のようですね」

あの惨状を見るに彼等は来なくて正解だった——逆に不平不満が出たに違いない——と思うが、それはまた別の話なのだろう。

そして、クリスマスの昼食会で思い出した事が有る。

「そう言えば、あの夜僕はホグズミードで酔い潰された訳ですが、それからスリザリン寮に僕を連れ帰ってくれたのは——」

「——それは」

スネイプ教授は、最後まで僕に言葉を紡がせなかった。

「我輩の一切関知する所では無い。我輩が君の事を気にするような親切な人間だと思つて居るのかね？ 要領が良過ぎる君に対して余計な心配をする程、愚かなつもりは無い」

「……まあ、そうでしょうね。何の利益も義理も無く、貴方が僕を救う事は有り得ない」

結局、アレは幻覚だったのだろう。

しかし、そうなる僕が心の奥底では、この教授を良い大人として信頼していたという事になってしまう。それはそれで嫌な話だが、一応、スネイプ教授が僕をわざわざ探しに来るなどという事実が有る方が不気味であり、恐怖を抱くに足る物だった。

「だが、気をつけたまえ。君は意外と不用意な所が有るようだ。特に、自身の関心が無い分野や領域に引き摺り込まれると弱い傾向が強い」
「……誰だつてそうでは？ 知らない事はどうしようも無いでしょう」

「極端過ぎると言っているのだ」

珍しく、その言葉には真摯な響きが含まれていた。

「君はそれらについては無知と無干渉のままが良いと思つている。世

の中は全てが冷淡で距離が有るように見えて、その実、御互いが複雑かつ密接に関心と関連を有している物だ。何の予兆も無く突然爆発するという事は無い。必ずや伏線と因果が有る。先週についても――

「……先週？」

教授は突然、口を噤んだ。

明らかに自身が不用意な事を口走ってしまったという反応だった。

「イゴール・カルカロフ、では無さそうですね。嗚呼、そちらで無いとすれば、貴方がハーマイオニー・グレンジャーについての記事を朗読してくれた事ですか」

「……………」

教授の苦々しげな反応からすれば正解らしい。

正直何故正解なのかまでは掴めなかったが、けれども突く隙としては十分だった。

「アレはまさか僕が知らないと思っていたから、わざわざ読み聞かせてくれていた訳ですか？ 確かに初耳では有りましたが、あの記事の内容は僕の心を揺らがす物では有りませんでしたし、貴方の行為を止めるような出過ぎた真似もありませんよ」

去年の末の出来事が無ければ、明確に非難したかもしれない。

けれども、僕は教授の心に開心術という直接的過ぎる手段をもって立ち入ってしまった。

彼が最も憎悪をぶつきたいジエームズ・ポッターも、自分の愚行を止めてくれるリリー・エバンズも、その何れも、この世界には既に居ない。それを理解してしまっただからこそ、如何に教授として相応しくない振る舞いをスネイプ教授がしようとも、そのような自傷行為を止める気が失せてしまっている。仮に僕が止めると考えていたのならば、勘違いも甚だしい。

だが、それを一々教授に伝えてあげる程に僕は親切では無いし、何より僕達の関係からすれば、もっと相応しい言葉が有る。

『週刊魔女』を手に、一文一文を抑揚と感情を込めて読み上げる貴方の姿は、随分とまあ楽しそうでした。それを見ていて、僕が何を思い

出していたかを御教えしましょうか？」

「……言わんで良い」

「ならば敢えて言いますが。ギルデロイ・ロックハートを思い出して
いましたよ」

瞬間、激烈なまでの拒絶反応と共に教授は顔を大きく歪めた。

教授の神経を逆撫でしまくったあの男の記憶は彼にとって未だに
鮮烈な物であるらしく、それ故に、僕は当然言葉を続けた。

「彼がチャールディング・スマイル賞を受賞した時の記事を読み聞かせて
くれる時は、まさにあのような感じでした。その上覚える位に何度も
聞かされた事から考えれば、しかも五連続受賞なので五通りの読み聞
かせが有った事を思えば、一度で済んだのは楽な物です」

アレももう二年前か。

正直、懐かしくすら思える。

あの時はバジリスクという明確な死の脅威であり、ハーマイオニー
への直接的な危険としては今年よりも高かった筈なのだが——今年
よりも雰囲気が出るかのような気がしてならないのは何故だろう。
あれでも道化として役立つていたという事なのだろうか。

「嗚呼、貴方が懸念しているかも知れないから言っておきますが、リー
タ・スキーターを止める気は有りませんよ。彼女はあのような下世話
な記事に打ちのめされる程弱くは無いですし、寧ろ逆に発奮する類の
女性です」

実際に覗き見た様子からみても間違いなく、彼女はリータ・スキー
ターへの復讐を画策しているし、その手段が無いかを探っている。特
に、あの記事は非常に個人的な内容のように思えた。如何なる手段を
使ったにせよ、それが真つ当な形で聞かれた物では無いだろう。

捻じり曲がった黒い薬草の入った薬瓶を手に静止し、しかし中身を
確認している風でもない不思議な反応を示している教授に対して、僕
は質問を投げ掛ける。

「二応貴方にも聞いておきますが、彼女は死喰い人では無いでしょう
？ 貴方には近付こうとしませんでしたし、悪の側に振れる程に彼女
に勇気が有るとは思えない」

「……確かに、アレも死喰い人では無い。勿論、我輩が知る限りでは有るが」

我に返ったらしい教授は、作業を再開する。杖を振り、薬瓶は棚へと戻った。

その回答が留保付きであるのは、ピーター・ペティグリュウの事が念頭にあるからだろうが、その点を僕は余り気にしていない。教授の過去の経験からの言葉は、僕の主観よりは明らかに信頼出来るからだ。

「その割に彼女はマルフォイ家と繋がりが有る訳ですが……まあ、一応貴方と違ってルシウス・マルフォイ氏の方は疑惑止まりですからね。とはいえ、僕から見れば自分を誤魔化しているだけに過ぎないように見えますけど」

スネイプ教授はダンブルドアに身元を保証されたが故にアズカバンに行く事は無かったが、それは教授が死喰い人では無かった事を理由とする物では無い。一方でルシウス・マルフォイ氏は裁判を経た結果として無罪である。

両者は法的に白であるのは同じでも、裁判上確定した事実として黒と白の違いが有る。

ただ、どちらが光の陣営として信頼出来るかもまた言うまでも無いが。

懸念事項が一つ完全に片付いた。

そう満足していた僕に対して、教授は不思議な視線を寄越した。その深い漆黒の瞳の中には、何時も通り感情は読み取れないが、少なくとも敵意は存在しないように思えた。

「——しかし、君は、お前はどのような人間だったな」

その言葉が帯びるのは納得では無く、呆れに近いようだった。

「成程、お前がデラクルを平気で近付けていられる訳だ。そのような人間であるからこそ、デラクルが近付いているのかもしれないが。だが、女という生き物は周りを良く見ている物だ。特に、こちらを全く見ていないように思える時というのが一番信頼出来ない」

「教授が性差別的な事を言うのですか？」

「我々に差異が有る事を否定は出来んだろう。そもそも、先の言葉に対してそのような揚げ足取りをしている時点で、君は無知と不理解である事を甘受している」

教授は失笑を隠さない。

「貴方とて、女性について語れる程、華が有る学生生活を送った訳では無いでしょうに」

「少なくとも我輩は、君よりも真つ当な形でリリーと関係を築いていたつもりだ。最後に我輩が間違い、それが壊れたとしてもだ」

「……………」

僕に反論を許さなかったのは、教授の口からその名前が出たからだではない。

こちらに視線どころか顔を向けておらずとも尚はつきりと見て取れる程に、物懐かしく過去を映している漆黒の瞳を覗く事が出来たからだ。

だが、それも泡沫であったように直ぐに消えて行った。

「——本題に入らないで良いのかね？ 御互い無限に時間が有るという訳では無い。そして我輩の助力を拒絶する程に君が気高く居られるというのであれば、それは一向に構わないが」

「……………」

その言葉で、漸く教授の誘いに乗った理由を思い出す。

今回の接触が僕に対する嫌がらせなのは殆ど確実だ。教授には利益が無く、僕に利益が有り過ぎる。恩を着せ過ぎており、それを僕が最も嫌う事を熟知している。

だが、それでも僕に乗らない選択肢は無いのだ。

「では単刀直入に聞きますが。今回の“犯人”は一体誰なのです？」

僕の問いに首を少し回して、教授は視線を返す。

「君に答えられるのはこれだけだ。我輩は知らん」

ほんの数秒、教授は視線を合わせ、再度逸らした。

それでも、言葉に一切嘘偽りが無いのを理解するには十分だった。

教授は自身がまたもや作業を止めていた事に気付いたのか。杖を二度振り、手元の薬瓶を入れ替えた。そして机上に置かれた小さな白色の灯りに翳し、手元を動かしながら品質を見分しつつ、けれども同時に会話を打ち切る気は無いらしかった。

「君は何処まで今回の事件を把握している？ いや、こう言おう。君にとって最も不可解で、我輩に問い質したいのは一体どの部分だ？」
「……クイディッチ・ワールドカップの闇の印です」

「だろうな。君はそこに引つ掛かるだろうと思っていた」

見抜かれた事に良い気はしないが、教授ならば当然だという感覚も同時に有った。

「ポッターが三大魔法学校対抗試合の代表選手となっただけならば、君にとって物事は簡単だったに違いない。君はその裏に闇の帝王が居る可能性が非常に高いと判断して行動した筈だ。何せ、君は去年ピーター・ペティグリューが逃げた事を知っている。その二つを結び付けるのは至極自然な発想と言える」

……教授がシリウス・ブラックと言わなかったのは、教授なりに去年の出来事を整理し、失敗を受け止めているからだろうか。それとも、僕の認識をそのまま述べただけなのだろうか。

相変わらず内心を覗かせないままに、彼は淡々と言葉を続ける。

「しかし、闇の印が上がった。いや、それだけならば、やはり君は当然にその事実を素直に受け取ったかもしれない。だが、アレは死喰い人の行進に対して打ち上げられた物であり、それを見た死喰い人は残らず逃走してしまった」

「……ええ、不可解でしたよ、本当に。あれで闇の印の意図が一気に解らなくなった。せめてどちらか得有れば、これほどまでも悩まずに済んだでしょう」

あの印を何処に位置付けるべきか解らないからこそ、今年是不気味なのだ。

「世間の認識では闇の帝王は死人のままです」

ハリー・ポッター達、或いは僕達にとっては違うが、表向きにはそ

うだ。

「そして死人が生き返らないというのは魔法界の常識です。『三人兄弟の物語』という御伽噺の影響も有りますが、歴史を見ても死人が復活した前例は一度も無い。賢者の石やユニコーンの血などで人を死にくくは出来ても、死人を完全に復活させる事は理論自体が存在しない」

人の魂はまだ魔法の手の届く領域に在るが、死後の世界は完全に範囲外である。

神秘部に存在すると噂されるヴェール。

この国の魔法省が出来た1707年時点には既に存在し、そもそも何時から在るのか、何処から来たのかも不明な神秘中の神秘。セストラルと同様に死を識る者だけが視認する事が出来る可能な、世界と世界の狭間。その先から“人”を取り戻す手段は、未だに手掛かりすら見つかっていないと言われている。

魔法で出来るのは自由意志の無い亡者を作り出す所まで。

それでさえ、蘇りの石くらの伝説的魔法具を使わねば難しいと出来ないと言われ続け、先の魔法戦争で闇の帝王が指揮して衆目に晒すまでは、そのような事は不可能に近いと考えられていた。しかしそれでも、学者の認識が一致するような理論の支柱は確かに有った。

一方で、死者蘇生は理論すら無い。

法螺話や伝説以上の、魔法的に実現出来るような理屈すらも見つかっていない。

だからこそ、魔法界の人間達は闇の帝王を未だに恐れながらも、彼が帰ってくる事は決して無いと考えている。闇の帝王が勝利目前で失墜し、その後は何事も無く十四年の平和が続いた以上、未だに名前を呼べない世間一般でさえも、殆どがそう信じ切っている。

「ただ、僕達はそれが間違いであるという事を知っている。死者蘇生は問題とならず、クイリナス・クイレル教授を通じて、闇の帝王は生存していたという事実を認識している。もっとも、あの老人は学期末に馬鹿な加点をする以外は表に出しませんでしたがね」

「我輩達には理解出来ない深謀遠慮が校長には有られるのだろう」

「そう思うのならもつと心を籠めて言つて欲しい物ですね」

教授の皮肉をわざわざ聞くまでも無く、スリザリンの認識は元から一致していた。

「何にせよ、闇の帝王が生存しており、且つ復活しつつあるという情報は表沙汰になっていない。せめて魔法大臣には伝えているとは思っています。最低でも世間は知らない。そうであれば——現時点で闇の印を打ち上げる利益というのが全く無い」

秘密裏に、自由のままに動ける状況に居るのだ。

それなのに、十三年振りの印を掲げて自分の存在をわざわざ誇示する理由が存在しない。

「大々的な事件を起こし、自身の復活を宣言するのならばまだ解りますよ。ただ、あの事件で死人は出ていない。まして、闇の印を打ち上げる側である筈の死喰い人が、その印を見て何故か残らず逃げ出すというオマケ付きです」

そこまで言つて、教授の方に視線を向ける。

「一応聞いておきたいのですが、あれは本物の死喰い人ですか？ 仮に偽物であつたのならば、闇の印を見て逃げ出すのは自然にはなりません」

「我輩はやはり答えを口には出来ん。しかし、これだけは言える。闇の帝王が残された恐怖は、たかが十三年如きで偽物を産み出す程に生温くは無い」

「成程」

それは偽物が利用するのも好都合であるという事を意味するのだが、これが教授の——元死喰い人であり、今も死喰い人達と繋がりを持つ人間の——発言である以上、その発言の内容は素直に受け取るべきだった。

「となれば、余計に解らなくなってしまう。逃げ出した死喰い人達が上げる筈も無い。如何に不忠者の彼等が気に入らずとも、闇の帝王も怒りを示す為だけに上げないでしょう。では、一体誰が闇の印を打ち上げたというのです？」

「そこで我輩を見られても困るが。我輩は知らん。嗚呼、もう少し解

りやすく言つてやろう。我輩の周りにも知っている者は居ない」

「それは先週来訪してきたイゴール・カルカロフを指す物では無さそうですね」

無言は肯定の証だった。

「では、闇の印が偽物だという線は？ 全く同じ魔法を使う事は出来なくとも、似たような魔法を作る事は出来そうな物です。言ってみれば、所詮は動く絵図ですから」

「……まあ、不可能では無いな。奇しくも君が先程話題に出した男が学生時代に、ホグワーツの校庭に自身の顔を打ち上げてくれた。あれが何を参考にしたかなど、誰が見ても解る」

「………本当に良く殺されませんでしたね。今の時代とは違うでしょう」

遺族からも、死喰い人達からも。

ギルデロイ・ロックハートが無神経だったのは学生時代からだっらしい。

「技量は知れていたから然して似てもいなかった上、あの男の馬鹿さは広く知られていたから、死喰い人も殺すような価値を見出さなかった。そして、今までの話を聞いたにも拘わらず、まさか君の口からあれを偽物だと疑うような台詞が出て来るとは思わなかったが？」

「……そうですね。貴方の発言から、その答えは自動的に導かれてしまう」

偽物であったのならば、死喰い人達は逃げていない。

「ならば、誰が打ち上げたかは解らないのですか？ 偽物を打ち上げられては困るのは戦争時も変わらなかつたでしょうし、何らかの暗号が仕込まれていても不思議では無いと思いますが。少なくとも、僕なら絶対にそうします」

「我輩としてもそれが妥当だと考えるし、有り得ないと否定する材料は無い。しかし、それは君が考える以上に困難だという事を認識すべきだ」

詰まらなそうに言った後、教授は僕を一瞥する。

そして自然な動作でもって、利き腕に持った杖を僕へと振った。

「ステューピファイ」

「プロテゴ。……一体何の真似です?」

僕が防いだ事に不満げに鼻を鳴らした教授は、しかし更に追い討ちを掛ける気は無いらしい。教授に杖を向けたままの僕を気にした風も無く、あつさりと再度葉棚へと向き直る。

「反応がまだ遅いな」

一瞬前に不意打ちで呪文を放った者らしい、傲慢過ぎる批評だった。

「我輩が本気で杖を抜いたのであれば、君は無様に失神していた筈だ。そして、せめてその程度の盾は無言で作ってみせたまえ」

「……無茶を仰る。無言呪文は六年の範囲ですよ」

二年先取りで使えるようにしておけというのは無茶が過ぎる。

「そして貴方は杖捌きを確かめる為にこのような真似をしたという訳では無いでしょう?」

「まあ、そうだ」

杖を仕舞えという視線に、僕も大人しく従う。

「何の呪文を使ったか、そもそも魔法が使われたか否かを判別するのは難しくは無い。但し、魔法を見ただけで、それが誰によって使用されたかを判別するのは非常に困難だ。君が今見たのは失神呪文だったが、これが武装解除呪文でも同様、呪文は精々光線だ。守護霊でもない限り、呪文に個性は現れ難い」

先程の呪文の意図は解ったが、それでも人に向けて放つ必要は無かっただろう。

そんな僕の抗議の視線を無視して、教授は説明を続ける。

「必然、術者を識別するのは困難を極める。さながら羊皮紙に一本の線を引いただけで、誰によって書かれたかを判別するような物だ。線がどの位真っ直ぐか、筆圧がどの程度かで人物を特定するのが無理なのは想像が付くだろう」

「……しかし、場合によっては誰が呪文を放ったか解ると聞いた事がありますか」

「それは杖の振り方や身体の動き等で判別しているのが殆どだ。特に

優れた決闘士はその技能を持っている。相手の癖や小さな動作、呪文の選択の仕方から先を読み、相手を打ち倒す必要が有るからな。その副作用として、誰かに変身していようとも本人を見抜く事は可能だ」
「嗚呼、成程。線自体から誰であるかは解らなくとも、その線の引き方によって人物を特定する事は出来るという事ですか」

利き手の動かし方、反対側の手の位置、羊皮紙から紙の距離など。線を一本引くにしても、人間によって千差万別だ。それと同様に、呪文自体に特徴は左程現れなくとも、呪文の使い方によって誰かは解り得るといふのは納得出来る理屈では有る。

「ただ、当然御理解頂いていると思いますが、闇の印は絵ですよ」
後回しにした追及をすれば、教授は解っていると頷いた。

「然り。だが、呪文を放つ際に要求される基本事項を、君は重々承知しているだろう？」

「……杖の動作、呪文の発音、集中力、そして意図」
「概ねその通りだ。そして、同じ呪文を扱う場合、通常それらは術者が違おうとも原則的に重なるし、それら無しには呪文は正確に発現しないと君達は散々教わった筈だ」

もつとも所詮原則に過ぎず、杖無し呪文のように、前二つは術者次第では不要である。

しかしその例外の場合でも省略出来ない後二つこそが、今回では問題なのだろう。

「無論、集中力や意図の部分に個性は出る。人の心が同じでない以上、それは出ざるを得ない。が、個性によって許容される誤差を離れ、同じ杖の振り方と同じ詠唱でもって、殆ど同じだが細部を異なる呪文を意図的に描かせるというのはやはり困難である」

不可能とは言わないがな、と続ける。

「そういう訳で、死喰い人同士では闇の印だけを見て判別する事は出来ないと考えたまえ。そもそも、誰が打ち上げたかを知る必要が有る場合というのがまず無いからな。あれは味方同士の連絡手段では無く、敵に対する犯行声明なのだから」

「……ならば、やはり誰が使ったかは誰にも解らないのですね」

「君は結論を急ぐ傾向に有るな。この四年間で解つては居た事だが」
スネイプ教授は、冷やかな眼を僕に向けた。

「死喰い人同士では不要であり、不可能である。しかし、本物を確実に見抜く必要が有る人物が一人だけ居る。尚且つその人物は、杖の動作と詠唱を殆ど同じにしながら自壊しない程の精緻な魔法式を構築し、呪文を教える際にはその細部を変えた呪文を教え、他人の意図や集中力に干渉出来そうですら有る」

そこまで言及されれば、流石に誰かは解るものだ。

その条件を満たす者など、今の世界に唯一人しか存在していない。

「——闇の帝王」

「そうだ」

僕の回答に、教授は重々しく頷いた。

「と言っても、我輩の推測が正しいとは限らん。闇の印の呪文は全て同じで、一切変わらないのかも知れぬ。単に帝王が死喰い人個々人の癖や個性を正確に把握しており、線の引き方だけで誰かを当てられる程魔法を熟知しているのだとしても、我輩は何ら驚かん」

「……確かに、同じ闇の印を想像するにしても複写機のように完全一致する訳でも無し。加えて絵の描き方にも個性が有る為に、必然の帰結として闇の印には細部の違いも出そうな物ですが——そこまで行けばもう何でも有りでしょう」

「そう思ってしまうのが、我等が主君なのだ」

断言する教授の表情には、やはり畏怖と恐怖が覗いている。

「グリフィンドールの馬鹿共は、聖二十八族が単に闇の帝王の思想に共感したから従属したのだと安易に考えている。確かにそれは否定しない。帝王は暗い魅力を御持ちだった。しかし、更に大きな理由は、闇の帝王がそれを可能な力を持っていたからだ。特にスリザリンは——」

「——勝つ為には手段を選ばない。そしてその手段には相手側に寝返る事も当然入る」

クイディッチのようなスポーツでは許されないが。

命の懸った戦争において、その行いは批難される物では無い。

「理解しているようで結構。60年代において、アルバス・ダンブルドアは依然として偉大だった。いずれ寿命が来るにしても、それはまだまだ先だった。特に強大な魔法使いはその魔法力でもって、何の魔法具や魔法薬の援けも無しに長生きする傾向が有る」

「……しかも、今の年になっても尚、最強の座は殆ど揺らいでなさそうですね」

全盛より衰えていようが、三十年前は更に強力だった事だろう。

「半世紀を残しながら今世紀で最も偉大な魔法使いと呼ばれた存在は、同時に今世紀中は最も強い魔法使いである事だろうと予想されていた。どんなに気に入らずとも、聖二十八族は頭を下げる事も出来る。実際、グリーンデルバルド期の基本方針はそうだった」

「しかし、それに戦争を仕掛け、打ち勝てる程の魔法使いが現れた訳です」

聖二十八族と言われる家系、それも国内に限れば断絶した家系は多い。

だが、それを考えても、前大戦期で家としてアルバス・ダンブルドアに明確に味方した聖二十八族は、僕が知る限りではプルウエット、ロングボトム程度。

一応別路線を取ったバーテミウス・クラウチ氏が居るが、それにしただって有名所の純血達は——聖二十八族という枠組みが恣意的だとしても、彼等が旧家である事は揺らがない——軒並みあの老人を支持しなかった。

自分の命が惜しかったし、そしてまた純血主義者である闇の帝王ならば自分達を殺す事は無いという考えも有ったのだろう。

けれども、あの老人が絶対に勝つと考えていたならば、身の程知らずの馬鹿が現れたという認識であったのならば、やはりアルバス・ダンブルドアを支持する位はして良い筈だった。実際、シリウス・ブルックは家の異端者^{グリフィン・ドール}であれど帝王の支配に反抗し——しかしそのような存在は彼一人でしかない。他は第一次魔法戦争において傍観を、消極的ながらも闇の帝王への支持を選択した。

結果として闇の帝王はアルバス・ダンブルドアの御膝元で十年以上

戦い抜き、魔法族非魔法族の区別無く、数多くの人間を殺し続けた。そして最終的に闇の帝王を止めたのは“生き残った男の子”という奇跡だった。

「君は闇の帝王を見た事は無いだろう。しかし、ダンブルドアは当然その眼で見ている。しかも君は、今ホグワーツに居る誰よりも正確にダンブルドアの実力を把握している筈だ」

「……………」

ホグワーツの誰よりもかは知らないが。

僕が百年どころか千年人生を積み上げようとも、あの領域に達する事は決して無いというのは十分に理解している。僕と違い、彼は間違いないく神に愛されている。

そして、闇の帝王も同様、いやそれ以上か。このセブルス・スネイク教授——僕が知る中でも闇の魔術に最も精通する魔法使いが従属を選択し、想い人を殺された時点ですら決闘を仕掛ける事を考えだにしなかった。

「それと同種の物を、我々は闇の帝王に感じた。遠く無い未来において、現在の“ダンブルドア政権”が砕かれると考えた。闇の帝王であれば、それが魔法の領域に属する限り、不可能は無いと思った。特にダンブルドアと違い、帝王は力の行使を隠そうとしなかった」

例えば、と教授は言った。

「闇の帝王は杖のみで空を飛べる」

「——は？」

冗談を言われたと思った。

しかし、スネイク教授は何時も通りの仏頂面だった。

それこそが、先の発言が紛れも無く真実なのだと雄弁に告げていた。

「……………待って下さい。それが一体何を意味するか解っているんですか？」

「おお、教授を馬鹿にするのかな？ 当然我輩は理解して言っている」「いや、だって。魔法族はホグワーツが出来る前から箒で空を飛んでいます、杖のみの飛行は別だ。1544年にジャレス・ホバート^{Jarles Hobart}が教会の屋根の上で制御不能のままに宙にぶら下がっていただけで魔法史に残っているんですよ？ 本当に杖のみで飛べるならばそれだけで魔法史に残る偉業だ……！」

「君は忘れているようだが、既に帝王は魔法史に残る偉人だ」「……そう言う事では無いでしょう」

浮遊呪文で最も有名なのはウインガーディアム・レビオーサであるが、浮上を実現する呪文というのは実の所数多い。派生まで含めるとらば上昇呪文^{アセンディオ}なども含まれるだろう。

それだけ似たような魔法が開発されたのは、水中と違って空は一貫して魔法族が強く焦がれ続け、また箒や絨毯のような代替手段が存在する以上、水中よりは簡単だとも思われた領域であったからで——けれども、誰もそのような魔法を作り出す事は出来なかった。

先のウインガーディアム・レビオーサですら今は一年でも教えられる魔法では有るが、四百年前は相応に高度な魔法であったのだ。

「飛べるというのは、浮けるとは違いますよね？」

「当然だ。箒と同様に、或いはそれ以上に自在に飛べる」

「……流石の非魔法族もそこまで至っていませんよ」

飛行機で空を移動出来ても、箒程に小型な飛行道具というのは非魔法界に存在しない。まして、殆ど生身で空を飛ぶとなれば、これから二、三十年経ったとしても不可能だろう。

「君が今実感した衝撃を我々は味わった。先は一例であり、闇の帝王が開発した魔法というのは数多い。そして帝王は惜しみなく——とは言えないが、幾何かを臣下に提供して下さっていた訳だ。当時ホグワーツで簡単な変身術しか教えていなかったダンブルドアと違ってな」

「……そりゃあ、付き従うのが当然ですね。正しく魔法の領域という物を広げていますし、本当に不可能など無いように思える」

活動年代から考えても、闇の帝王はアルバス・ダンブルドアよりは

若いだろう。

あの老人の時代を終わらせるのは、或いはそこまで行かずともあの老人が寿命で消えた次は、闇の帝王の時代が来るだろうと考えるには十分過ぎる理由である。

「ダンブルドアと帝王は対等と言われる。実際、我輩には戦えばどちらが勝つかは判断出来ん。両者共に、我等から実力が隔絶し過ぎている。ただ、呪文の作成、特に闇の魔術の分野では帝王が圧倒的に上だ。後者に関しては、ダンブルドアは我輩にすら劣る」

「……まあ、あの老人は闇の魔術を忌み嫌っていますからね」

アラスター・ムーディ教授の方がまだ、知識と理解を持っている事だろう。

費やした関心と時間、そして労力を、才能のみで埋めるには限界が有る。あの老人が最も強大な闇の魔法使いになれる可能性を秘めていても、それを選んで来なかった以上、専門として献身し続けた人間には敵わないのが普通であり、自然である。

「故に、我等は闇の帝王を恐れる。平和ボケした愚か者共よりも、不死鳥の騎士団を名乗った敵対者よりも。あの御方を良く知るからこそ、その力に恐怖を抱かざるを得ない。実際、闇の帝王は今や死の淵から蘇り、復活を遂げようとしている」

闇の時代が戻ってくる。
より強大となった死の主が、遠からず地獄を再現させようとしている。

「君にとって闇の印は非常に奇妙だった。しかし、何故死喰い人が十三年振りに、クイディッチ・ワールドカップで活動したのかも疑問に思ったのでは無いかね？」

「……それはその通りですが」

ピーター・ペティグリユーが逃げた事は、やはり公には知られていない。

仮にシリウス・ブラックを真の死喰い人だと信じていたとしても、彼が脱獄しただけで死喰い人が動くのは理由として弱い気がした。

クイディッチ・ワールドカップなのだ。世界中から十万を超える魔

法使いが集まり、この国のみならず各国の闇祓いが集まるようなイベントなのだ。たかが「マグル」虐めをするにしても、相当の準備を費やし、相応の危険を冒す必要が有る。気紛れに虐めたくなつたから実行に移すという訳には行かない。

「その理由は簡単だ。死喰い人は在野もアズカバン内も問わず、一人の例外無く闇の帝王の復活を悟つたからだ。そして、帝王の凋落後に何もしなかつた不忠者達は、立場を明確にする必要に迫られた。その一つが、あの行進だつた」

そう口にしながら、この方が早いというように教授はローブの袖を捲り上げた。

露わになつたのは酷く悪趣味な刺青。別に個人の趣味嗜好は自由だが、個人的に遠慮したい凶柄だという感想がまず最初に出る。但し、やはり一番の問題は、それがほんの数カ月前の新聞で見た物と同種の凶柄で有る事だつた。

「見て解るだろうが、闇の帝王によって直々に入れられた闇の印だ。単なる印では無い。これが黒く焼き付くと、呼び出しが有つた事を示す」

「……当然、十四年前の裁判では露わになっていませんでしたよね？」

そんな解りやすい証拠が有れば敵味方の判別に苦労しないし、無罪になつたとも思えない」

「そうだな。これ自体が非常に高度な魔法の産物であり、そして帝王が堕ちた後は殆ど消えた物だ。しかし、今はこの有様。呼び出しを受ければ更に解りやすく焼け付くのだが、それでも戻つて来たと確信するには十分だ」

色も、そして恐らくその存在も。

教授は袖を下ろし、その印を再度隠す。ほつと息を吐き、そうして自身が息を止めていた事に気付いた。当然ながら、それを齎せたのは刺青の醜悪さに圧倒された訳では無かつた。

「……教えてくれた事には心から感謝しますよ」

「おや、随分と素直なのだな」

「貴方の気紛れであつたとしても、僕にとって有り難い情報ですから

ね」

賢者の石の時のように、教授には教授なりの思惑が存在するのは解り切っている。

しかしそれ以上に、この情報は余りにも貴重過ぎる。闇の陣営に所属しないでこれを知っているのは、同じく教授から知らされたであろうアルバス・ダンブルドアぐらいだろう。

「ですが、改めて帝王への忠誠を示す始まりだった筈の行進は、それを咎めるように闇の印が打ち上げられた事で終わった訳ですか」

「そうなる。そして、その犯人が解っていない。印を見ただけで誰であるかを判別出来そうな、闇の帝王ただ一人以外は」

「……………」

やはり、あの闇の印が問題なのだ。

「君は今回の三大魔法学校対抗試合の『犯人』についてどう考えている？」

「……………考えられる犯人像は、大きく分けて三つ。今回行進を行った者達に代表される在野の死喰い人。闇の印を打ち上げた人間。そして、当然ながら闇の帝王」

一応、偶々ハリー・ポッターを殺したくなかった全くの第三者という可能性は有るが、流石に根拠も兆候も無い以上、今は排除しても良いだろう。

「そして、貴方の話を聞く限りでは在野の死喰い人の可能性は低いように思える。……………嗚呼、一応あの闇の印が上がったが為に、他を出し抜いて自分だけ『手土産』を持ち込もうとしそうな死喰い人というのは考えられますか」

在野の死喰い人は残らずアズカバンを逃れた不忠者であり、しかし帝王の劇的な失墜を招いたハリー・ポッターを殺したのであれば、許される余地も見えてくる筈だった。

「……………ただ、君は余りそう考えていないようだな」

「何となく、貴方もその可能性は低そうだと考えている気がしたので」
教授は不機嫌そうに鼻を鳴らす。

しかし、僕の言葉を否定まではしなかった。

「闇の印を打ち上げた人間ですが、前提として最低元死喰い人で無ければ闇の印を上げる事は出来ない。これは真実と考えて良いのでしょうか？」

「あの呪文について吹聴する事は禁じられている。そして、仮に闇の帝王が印を見ただけで誰の物かを判断出来る能力を有している、或いは絵図や魔法的暗号を仕込んでいると考える程度の頭を持っていれば、そのような真似を軽々しくする筈もない」

つまり、そちらもやはり本物だという事か。

アズカバンを逃れた元死喰い人が「マグル」虐めを行い、それに対して彼等を愉快と思わなかった現死喰い人が本物の闇の印を打ち上げた。今回の事件は見た通りのままであり、だからと言って奇妙でないという事はない。

「ルシウス達が動きを止めたのは何故だと思う？」

考え込む僕に対して教授は静かに問うが、最初から僕に答えさせるつもりは無かったらしい。問いに対して直ぐに答えを続けた。

「それを為すような死喰い人に心当たりが無かったからだ。ブラックに加えて他に一緒にアズカバンから脱獄したか、或いは一人だけ闇の帝王の寵愛を既に勝ち取っている裏切者が居るか。そのような場合で無ければ、あのタイミングで闇の印は上がり得ない」

「……貴方は後者の可能性は低いと考えているようですが、それでも互いに疑心暗鬼になるには十分だという訳ですね」

闇の印は、闇の帝王の臣下の証。

十三年前にアズカバンを逃れた者達が軽々しく掲げられる筈も無く、しかし今それを掲げられるのは、闇の帝王に対し一切恥じる事をしていない忠義者以外に有り得ない。

「だから死喰い人流の活動から手を引き、真つ当な活動に尽力している。それもまた、遠からず復活する我等が主君への貢献にはなり得るからな。それは名家である聖二十八族でしか為し得ず、君の企みに乗ったのもその一貫だ」

「……闇の帝王に許されるかどうかは、現状では解りませんしね」

教授は今度も何も言わなかった。

闇の帝王が復活した後の動向は、未だに読めない。

十四年前の失墜、その後の元死喰い人の対応への怒り次第では、ルシウス・マルフォイ氏を筆頭に、罪を免れた者達が皆殺しにされるのは有り得ない事ではない。

殺して組織の引き締めを図る方が良いか、殺さないで支配の拡大を優先する方が良いかは判断が難しい。組織が最終的に目指す方向性次第で、どちらの選択肢を取るのも正解と言えるだろう。そしてそれを選ぶ権利が有るのは、当然ながら闇の帝王ただ一人である。

「……まあ、その人物についてはこれ以上考えても何も出そうに有りませんね。推測する材料が余りにも少な過ぎる」

教授に視線をやるが、その横顔から何う限りでは異論はないらしい。

「そして大本命。闇の帝王ですが——」

ハリー・ポッターは確信を抱いていた。

けれども、やはり僕には確信を持ち切れない。

「——今回の件を実行しようとしていたならば、闇の印を打ち上げさせる理由はない。アルバス・ダンブルドアが闇の帝王の存在を知っているにしても、魔法省を始め、ワールドカップに來た他国の人間まで知らせる意味はない」

「二応闇の帝王陣営の動きとして理屈は付けられる。即ち、闇の印を打ち上げた人物は当時闇の帝王の指揮下に無く、しかも何らかの事情で印を上げる必要があった。しかし、今は闇の帝王の指揮下に組み込まれて“犯人”として動いているという理屈だ」

学期当初から散々考えていたのだろう。

推測を語る教授の言葉には一切の澱みが無かった。

「……嗚呼、成程。確かにそれなら整合性が認められます。しかし、余りにも偶発的過ぎる、もつと言えば運の要素が有り過ぎるのでは？」

理屈が有つていようが、正しい訳では無いだろう。

フラーに対して捏造してみせた水中人の伝説と同様に、言葉の上で有れば幾らでも尤もらしい論理は造り上げられる物だ。

事実、教授は頷いてみせる。

「それは否定しない。だが、そうであろうがなかろうが、我々にとつては何ら変わりはない。最も重要な部分、闇の帝王の動向が不可解だという点は、決して揺るぎはしないからだ」

教授の言葉は明らかに「犯人」、或いは闇の印の謎自体に焦点を当てて居なかつた。

そのような事はどうでも良いのだと、暗に言っていた。

「君は闇の印に強く疑問を抱いた。それは間違っていないし、死喰い人に影響を及ぼしたのもアレだった。しかし、君の立場からすれば、最も強く関心を抱くべきは闇の帝王ただ一人だろう。少なくとも現状は、だ」

教授の言葉は力強く、そして確信に満ちていた。

「君は知り得ないだろうから我輩から言おう。三百年振りに復活した三大魔法学校対抗試合の贄としてハリー・ポッターを殺すというのは、非常に闇の帝王の好みである」

断言したにも拘わらず、教授の表情は疑問を払拭し切れていない。

「しかしながら、一方で策としては雑に思える。確かに課題中はダンブルドアの庇護の魔法が外れ得る。そのような鼻肩や肩入れは、三校対抗試合の魔法契約の下に排除される。だが、それでもダンブルドアの眼が無くなる訳でも無いし、魔法省を初めとする守護の眼が加わる訳だ。煩わしく面倒である事には変わりはない」

「……まあ、そうですね。軽々しく抜ける防備という訳では無いでしょう」

当然の事ながら、本来の闇の帝王ならば、その程度を恐れはしないに違いない。事実、アルバス・ダンブルドアが率いる不死鳥の騎士団、そしてバーテミウス・クラウチ氏指揮下の魔法法執行部以外は敵とならず、しかも彼等でさえ帝王の暗躍を止められなかつた。

けれども――

「……それにも拘わらず貴方の主君は、未だに復活していない」

「然り」

死んでいないだろうが、死に近しい状態に在る。

「いや、復活しつつある。十三年もの停滞は終わった。故に、このよう

な状況と状態でわざわざポッターに干渉する理由というのが薄いのだ」

「……僕が想像していた以上に、厄介なようですね」

闇の帝王が関わっていない可能性がそれなりに有ると考える位には、セブルス・スネイプ教授は——そしてアルバス・ダンブルドアは、その材料を有しているらしい。

「僕には見当も付きませんでした。塵のような状態から復活出来る魔法薬というのは？」

「アルバス・ダンブルドアも同じ事を我輩に聞いたな。が、結論としては我輩にも解らん。但し、それを考える事は最早既に意味の無い物と成り果てているが」

魔法薬学教授は、既に匙を投げた事を隠さなかった。

「当時、そして三年前までは、塵ないし靈魂未満のゴーストだった。しかし今の闇の印の戻り方からして今は違うだろう。恐らく赤子程度の力しかない脆弱な物だろうが、それでも既に肉体を得ている。しかしながら、であるからこそその、今のこの複雑な状況なのであるが」

その言葉は僕に聞かせるようであり、それ以上に自問するようだった。

「つまり、闇の帝王は肉体を得る魔法薬を作り、既に使用した。考えても意味が無いというのはそういう意味だ。肉体としては脆弱極まらないままで在ろうと、魔法力を増大させうる状況に在り、死喰い人に刻まれた印が色濃くなりつつあるのもそれ故だろう」

「……………」

「予め言っておくが、そのような二段階の復活過程を闇の帝王が必然と考えたかは解らん。ただ、その行為自体は左程不自然という訳では無い。一見回り道に見えたとしても、一手間を加えた方が深みに至れる場合は往々にして有る。期間と労力を代償に、難易度を下げる訳だ」

助走と踏切が有った方が、高く、遠くに飛べるような物か。

魔法薬学教授からすれば、塵から人間に直接戻る方が完全に楽だという事でもないらしい。

「ゴーストから脆弱な肉体を取り戻す事。脆弱な肉体から人間へと戻る事。両者は全く性質を異にする。当然ながら、その材料も調合過程も。君の事だから多少調べはしただろうが、それでも君程度に理解出来る代物では無かったのではないかね？」

「……ええ、癩ですが全くもってその通りですよ」

偽っても露見するので素直に認める。

「見つからなかった訳では無いですが、僕はそれが真実であるかどうかを判断するだけの知識を有して居ない。調合法を読み解くなどもっての他ですよ」

書物が嘘を書いていない保証は無い。

それが表すのは、当時の書き手の認識でしかない。意図的であれ勘違いであれ、客観的事実を示す物では無いのだ。それらの手法が書かれているのは事実が淘汰されている教科書では無く、独善的価値観から記された胡散臭い魔法書の数々である。

だから、僕には探し切れなかったし、初めから期待もしていなかった。

「さもありません。この手の類は、多くの魔法使いが追い求めてきたものだ。まさしく玉石混交よ。素人が手を出せば、何の効果も出ない魔法薬を作れて御の字と言った所だろう」

そして最悪の場合、当然のように命を代償として支払う羽目になる。

けれども、この教授は石を排し玉を見つけ出せる才能を持った魔法薬学教授である。アルバス・ダンブルドアが如何なる意図で彼をその座に留めていようと、ギルデロイ・ロックハートやシビル・トレローニーのように偽物の力しか持っていないという訳では無い。

「ともあれ、先の二者は明確に違い、当然ながら前者の方が困難である。実体を有さない類の存在に対して影響を与える魔法薬の調合は、常に至難を極めると言って良い」

「……そう言えば、貴方はニコラス・ド・ミムジー・ポーピントン卿を石化擬きから回復させる程の見事な手腕をお持ちでしたね」

ギルデロイ・ロックハートが自信満々に色々言っていたが、それで

もホグワーツにおいて石化回復薬を調合する人間はこの眼前の存在しか居ない。

「フン、我輩にとってみれば造作も無い事だ。けれども、今度は『ヒトである』」

教授は少しばかり頬を緩め、直ぐに顔を引き締めた。

「君は我輩を高く見積もり過ぎていているようだが、正直言つて我輩の力量の及ぶ所では無い。恐らく、ゴーストから仮初の肉体を得た方は闇の帝王が直々に発明なされた独自の代物だ。稀少な魔法材料を要するのは疑いないが、最も必要なのは我輩すら及ばない類稀な魔法薬の力量と才覚と経験だ。常人の想像力と発想力では有り得ない」

「……そこまで貴方に言わしめるのですか」

「そうでなくては、闇の帝王は臣下さえ名を呼ぶのを恐れる存在足り得ないのだ」

ゲラート・グリンデルバルドの名は、この国に限らず広く呼ばれている。彼がその猛威を奮った大陸ですら、その名前を呼ぶ事自体を厭う者は居ない。

それは革命に対する彼等の立場の違いも有れど、闇の帝王は——ヴォルデモート卿は、世界の全てに君臨するに足る程の隔絶した絶対者なのだろう。

……もしかしたら、アルバス・ダンブルドア、そして油断大敵を信条とするアラスター・ムーディ教授以外に、善なる陣営で彼を正確に評価している人間は居ないのかもしれない、そしてそれ故に、決定的に危機感を共有出来る者が居ない為に、あの老人は自分で抵抗組織を立ち上げなければならなかったのかもしれない。

そこまで考えを及ぼし、当たり前前のように顔を歪めさせられる。

「……整理しましょう」

この教授が必要としないのは解っている。

けれども、自身の心を落ち着かせる為には、僕にはそれが必要だった。

「ゴーストから仮初の肉体を得る事は、少なくとも今の貴方には不可能な領域に属する事柄だ。そして、闇の帝王は独自の手法でもってそ

れを実現した。既に闇の帝王は、脆弱であれども肉体を得てしまっている」

つまり。

「一番難しそうな事は既に終わっているじゃないですか」

「そうだ。だからこそ、恐らくアルバス・ダンブルドアは戸惑っている」

重々しく、そして苦々しげに教授は言った。

要するに、こういう事だ。

「……本来ならば、闇の帝王は既に復活して無ければならない」

「然り」

何故だか闇の帝王の復活が遅れている。

それこそが、アルバス・ダンブルドアの誤算である。

「古い闇の魔術には幾つかの手段が有る。元の肉体へと回復したり、新しい身体を複製したり。方法論は様々だが、それは珍しくもない代物である。何故だか解るか？」

「……老いからの脱却ですね」

ひいては、不死への挑戦。

「その通りだ。スリザリンへの点数はやれんがな」

詰まらない冗談を前置きとしたのは、教授をして不愉快な事実だからか。

「確かに困難である事に違いはない。また、試す気にすらならない位の一見して出鱈目が書かれている書物も少なくない。珍しくない題材であるが故に、不良品もまた多い。だが、我輩にも時間を掛ければ——何十年かは必要だろうが——研究し尽くせる代物だ」

「貴方には出来る。そしてそれを闇の帝王とも有ろうものが、速やかに出来ない筈も無い」

「そういう事だ」

つまり、闇の帝王には復活を遅らせている意図が有る。

それが壮大な計画で有るか、或いは拘りめいた趣味であるかは不明だが。

「……思えば、アルバス・ダンブルドアは、闇の帝王が必ず復活すると

確信していたみたいでした。信頼していたと言つてすら過言ではないのでしょうか」

自身の教え子であるとか関係無く、誰よりも闇の帝王の理解者のようだった。

だからこそ思う。

「——もしかしたら、十三、四年も持った事の方が意外だったのかもしれないですね」

ピーター・ペティグリュウが逃げ出してほんの数カ月。

彼が余程特別で、復活に欠かせない要素だった場合は別だが、しながらそうでは無く、彼が闇の帝王の指示を聞くだけの手足に過ぎない場合。そのような人物が一人でも居れば闇の帝王は何時でも簡単に復活出来たという事になる。

闇の帝王が失墜した後も、少数派とは言え、ベラトリックス・レストレンジを筆頭に真に忠実な死喰い人達も存在したのだ。彼女達が闇の帝王の下に辿り着かなかったという保証は無く、そうなれば十数年ばかり復活が早まる事が自然であり、寧ろアルバス・ダンブルドアはそれを想定し続けていたのではないだろうか。

特に闇の帝王は四年前の時点において、都合良く憑り付ける肉体さえあれば、自身の復活をある程度自由に模索出来る事が明らかになっていた。

しかもゴースト程度の状態ですら、グリンゴッツに侵入出来る程の才覚を有した大人の魔法使いを下す程度の力を持っている事も同時に判明している。あの時は憑りついた肉体をホグワーツへの侵入と賢者の石の奪取に使ったが、その肉体を別の方向に使う可能性——つまり、己を復活させる魔法薬を作成する為に使用するというのは、当然ながらあの時点でアルバス・ダンブルドアには予期出来ただろう。

そうであれば、去年ピーター・ペティグリュウが逃げ出した事自体についても、あの老人は多少の痛痒を抱きはすれども、衝撃を受けない。

闇の帝王が復活する機会を許してしまったのではなく、良くもまあ十三年も持ち堪えた。あの老人にとっては何れ来るべき時が来ただ

けに過ぎず、それ以上の感想を持ち得ない。

その場合はその場合で、あの老人が全く準備していない点にこそ僕が嫌悪する理由になるが——いや、やはりあくまでそれは結果論に過ぎないかもしれない。

十三年も緊張関係が続けられる者など居ない。

復活しない闇の帝王の脅威を叫び続けたアルバス・ダンブルドアが、狼少年よろしく法螺吹き老人と認識されて、逆に厄介な事態になる可能性も無い訳ではない。

既に述べた通り、魔法界ですら、死んだ筈の人間が復活する事自体が有り得ない。死んでいないと主張し続ける事は可能だとしても、事実として十年間は闇の帝王が潜伏を選択した以上、世間は闇の帝王が死んだと扱いたがるだろうし、結果としては変わるまい。

つまりは意図してか知らないが、闇の帝王は失墜させられた時から常に主導権を持ち続けていた訳だ。

「ただ、あの老人の過去の考えなど最早どうでも良い事ですね。何にせよ、僕は間違えていた訳だ。『犯人』が誰かに気を取られ過ぎていた訳ですから」

「そういう事だ。考える事が無意味では無いが、最も関心を抱く相手を君は間違えていた」

真つ直ぐと僕を見詰め、教授は言葉を紡ぐ。

脅すように、それと同時に諭すように。

「三大魔法学校対抗試合に闇の帝王が関わっていようといまいと同じ事だ。復活を遅らせている帝王の意図と動向が不明確であつて——しかし、どういう計画を立てておられようとも、光の陣営に打撃を与える物なのは間違いない。そしてそれが解らないからこそ、ダンブルドアは動き切れていないのだ」

今回の考えられる『犯人』像。

闇の帝王の下へと帰る為に手土産を求めた元死喰い人。

ワールドカップで闇の印を上げる程の忠誠心を持った現死喰い人。

そして、復活を遂げようとしている闇の帝王自身。

その何れが『犯人』であろうとも——この中に正解が存在しな

かったとしても——最も重要なのは闇の帝王の動きなのだ。教授は言う。

そして、やはり教授の言葉の方が正しい。

最も強大で、かつ脅威であるのは闇の帝王。

そして手足とされる者が一人居れば最短数カ月、どんなに長く考えても十年程度で復活寸前までこぎつけられる事が明らかになった以上、最早復活自体を止めるのは不可能と考えるべきだ。一度復活を挫いたとしても、必ずや闇の帝王は復活してしまう。

更にスネイプ教授は知り得ないが、アルバス・ダンブルドアが二年前に示唆した複数の分霊箱という問題も有る。今年の三大魔法学校対抗試合で蠢く策謀のみにかかずらっているべきではなく、最も懸念すべきは今後の戦争はどうすべきかである。そしてそれが何時始まるかというのは、やはり闇の帝王の復活が何時行われるかにこそ関わっている。

テロリズムにおいては悪しき者が必ず先手を取る事が出来る。

頭の上では理解していても、こうして突き付けられると、それは非常に厄介だった。

死喰い人

「――結局、貴方は正しかった。一年持たなかった訳ですからね」
しみじみと紡いだ僕の言葉に教授は少し眉根を寄せたが、直ぐに理解したようだった。

去年末の「予言」。相似にして異質、同じく闇の陣営に属する事を選択した教授が、僕に対して残した忠告の話だ。

「嗚呼、そうだな。しかし、その点に関しては我輩の認識も甘かったのだ。君の卒業云々の話では無かった。どうやらあの鼠は、手足となれる才能はあつたらしい」

皮肉たつぷりに紡がれる言葉は、流石に笑える物では無い。

「……それを差し引いても、闇の帝王は常識外れ過ぎるでしょう」

個人の強度という観点から見れば、魔法史の何処を探したとしても、かの帝王と同じ領域にまで達した闇の魔法使いを見つけ出す事は出来ないだろう。

宿命の杖と共に暴虐を為したエメリックも、吸魂鬼を作りだしたエクリジスも、新大陸での悪の象徴たるゴームレイス・ゴントも、世界を混沌と戦火に陥れたゲラート・グリンデルバルトですらも、魔法使い”という点においてはヴォルデモート卿の前では恐らく一歩引かねばならない。それ程までに、かの存在は魔導の冥府へと堕ち切っている。

多くの書籍や新聞記事が語る第一次魔法戦争の顛末。

アルバス・ダンブルドアという大魔法使いを敵とし、けれども「生き残った男の子」が現れるまで止まらなかった事から解っていたが、敵は余りにも強大だった。正直言って、どう打倒すれば良いのか、戦争の終焉まで何十年掛かるのか、そもそも人の身で殺す事が出来るのかどうかすら解らない程である。

知っているからこそ余計に心労が掛かるというのは、このような事を言うのだろう。これからの遠大な道程に疲労を感じる僕に対し、仕切り直すようにスネイプ教授は咳払いをした。

「――それで、君の方はどうなのだ」

相変わらず薬棚の方を向いたまま、教授は問い掛けてきた。

既に棚の整理や在庫の品質の確認は終えたらしい。自分だけさつさと椅子に掛けるような真似でもするのかと思っていたが、教授は依然として立ったままだった。僕に上から見下ろされたくない程度の理由だろうが、机の上に置かれていた羊皮紙を手を取っている。ここまで来ても尚、殆ど僕に視線を向けないのは教授らしい態度でもある。

「君も我輩達とは違った形で動いていたのだ。それも、今まで以上に派手にだ。まさか何も成果が無かったという事はないだろうか？」

「……貴方は探偵ごっこと揶揄した筈ですが、それを気にするのですか」

「別に推理自体、その根拠までをも聞きたい訳では無い。答えだけを聞けば十分だ。そしてまさか、ここまで来て黙ったままという事もあるまい？」

「……確かにそうですが」

露骨な当て擦りに軽く溜息を吐くが、抵抗する気力は湧かない。

教授に対して口を噤む利益は無かったし、多くを与えられたのは事実だからだ。僕程度の推測を口にした所で返し切れる借りでも無いが、無視していい訳でも無い。

「まず、初めに明確にしておきたいのは、アルバス・ダンブルドアも“犯人”を解っていないだろうという事です。これは確信だと言っても良いでしょう」

これは大前提の話。

あの老人を信用し切れない僕達だからこそ、共有しておかなければならない点だった。

「実の所、我輩は未だに疑念を拭い切れない。が、君は違うのだな」

「ええ。どう考えても泳がす理由が無いですからね。クイリナス・クイレル教授やバジリスクとも違う。そして三大魔法学校対抗試合という舞台を用いずとも、既に三年間を通してハリー・ポッターの資質は証明され続けている」

僕の言葉に、案の定教授は気に入らないように鼻を鳴らす。

「……君は嫌にあの小僧を評価する。しかし、我輩にはそれだけの人間だとは思えんが」

「それは認識と見解の違いでしょう。そして、貴方が七年間ジエームズ・ポッターを見て来たように、僕は四年間ハリー・ポッターを見て来た。何故かは言うまでも無いでしょう？」

「……………」

好意を抱く者の傍に居たからこそ、当然に眼に入って来る物だ。

「そして、ハリー・ポッターの評価が無かったとしても、僕はアルバス・ダンブルドアについて貴方より確実に一点だけ多くを知っている。今回ばかりはハリー・ポッターを危険に晒す、いえ晒し続ける真似をする筈は無い。それは断言しておきますよ」

あの老人は、ハリー・ポッターを我が子のように愛している。

それ故に今回、“犯人”の確信が取れば形振り構わず制圧しに掛かる事だろう。

あの老人の本質は非常に我儘で傲慢な超越者であり、けれども依然として物分かりの良い賢者の体面を捨て去って居ない以上、未だに回答を掴んで居ないのは明らかだ。

「だから今回はあの老人の反応から“犯人”を逆算する真似は出来ない。自分で見付け出す、或いはあの老人が適切に推理する材料を与える必要が有りますが、手掛かりが殆ど無いのが現状で、ホグワーツないし魔法省に居るという可能性が高いと判断するのが精々です」

「……まあ、その程度は多少頭が使えるならば可能だ。つまり、何の役にも立たない」

「でしようね」

暗に無能と揶揄する言葉に、僕は軽く頷く。

この程度は推理とすら呼べないのは、指摘されずとも重々承知している。

「ただ、先の第二の課題。“犯人”がアルバス・ダンブルドアに敵対するならば、あの課題中は正に“事”を起こすには絶好の機会だと思っただんですが、しかし見逃されました。そこから考えれば——三大魔法学校対抗試合が囿では無く本命で有るという前提になります」

「ハリー・ポッターを狙っている気がします」

「未だに三大魔法学校対抗試合外で事件が起こる可能性は捨てていないが。」

「それでもあの課題を経て、『生き残った男の子』こそが目標である方に傾いたように思う。」

「——何故、そう思う」

「僕が戦争をやるならば、あの課題の中でガブリエルを殺しているからですよ」

「暫し黙り込んだ後、怪訝そうな声で問うた教授に対し端的に答えた。」

「年齢線で十七歳以上を排しながら、その課題で未成年を四人湖に沈め、そしてその内一人は九歳になるかならないかの少女。そのような状況で不幸な『事故』が起こったらどうなります？ 当然責任問題

かつ国際問題で、アルバス・ダンブルドアはホグワーツ追放ですよ。」

「彼が校長に留まるのは、大陸の魔法省が許さない」

「二年前と違い、今度こそ理事会は満場一致でクビを宣告するだろう。」

「後は楽な物です。別に『犯人』が最後まで全てを為す必要は無い。遠からず闇の帝王が復活するのが解っているのですから、後は任せてしまえば良い。最強の盾さえ排してしまえば、帝王は悠々とホグワーツを制圧し、子供を人質に取った後で降伏勧告して終わりです」

「僕の語る計画を聞いて、スネイプ教授は何も言わなかった。」

「ただ、物言いたげな視線だけをこちらに向けた。薄暗い部屋の中でも尚目立つ、その深い黒の瞳は、僕を追い詰めるかのように真っ直ぐと向けられた。そして内心が読めなくとも、ある程度は推測出来る物だ。」

「嗚呼、その反応も解りますよ。スリザリンである貴方にも同様の発想を出来る筈ですし、その是非を当然のように検討した筈です」

「……勝手に同類扱いしないで欲しい物だ。我輩は君とは違う」

「御謙遜を。そして御想像通り、実際はそう上手く行かないでしょう」

「あくまで机上の空論に過ぎない。」

大人スナイプの眼から見れば、粗スナイプが有る計画だろう。

「ビクトール・クラムの人質が誰であるかを考えれば、ガブリエルを湖に沈める事が早期に決まっていたとは思えません。故に、これを実行するとなれば『犯人』は本来の計画を放棄する必要が有ります。また、突貫で練った新たな計画は、相手の不意を突けたとしても、成功率という点で下がるでしょう」

加えて、と息を吐きながら言葉を続ける。

「あのアルバス・ダンブルドアは当然のように、最上級の護りガードを仕掛けていたでしょう。しかしそれを考えて尚、賭ける価値は有るように入りますよ。厳戒態勢が敷かれる事が解り切っている第三の課題まで待つよりは成功率が高いように思えますし、そもそも、これは別に成功しなくても良いんですから」

死にかけてくれれば十二分。

如何に魔法によって一瞬で治る傷であろうと、死ぬかもしれないなかったと思えば親は納得し難いものだ。世間——同様に子供を持つ者達も同じ。今世紀で最も偉大な魔法使いという立派な肩書に、一つ罅を入れる事が出来るだろう。

「……その君の計画が仮に成功したとしよう。だが、それはダンブルドアを校長の座から追いやるだけだ。彼の権威と名声が失墜しても、アズカバンに行くまでの罪では無い。依然として今世紀で最も偉大な魔法使い、及び不死鳥の騎士団長という脅威は残るが」

珍しく無表情を取り繕うようにして紡がれた言葉は、しかし教授らしい的確な物だった。

「その指摘は当然でしょう。ただ、僕はその価値も低くないと思いませんよ」

あの老人に自由を与える事になるが、それだけの利益が有るよう感じる。

「彼の校長としての期間は、闇の帝王の時代と殆ど一致しています。年齢的に若過ぎたという点も有ったでしょうが、それでもゲラート・グリンデルバルト期、或いは伝説的な決闘で名声を得た直後には望まず、しかし彼は闇の隆盛と対応するように地位を望んだ」

そして、今までずっと校長の座に留まっている。

「あの老人は己の理想とする姿とは程遠い、権力と名声が好きな普通の人間ですが、それでも基本的には、理由も無しに欲する事はないようです。しかし、魔法戦争期に不死鳥の騎士団という組織を立ち上げながら尚も校長の地位に留まり、今も固執し続けている以上——まあ、今は更に理由が加わっているようですが——それだけの意味があるのでしょうか」

「……ホグワーツ校長という座には、魔法的にも意味が有ると?」
「ここは四創始者が遺した生きた城ですよ。そして建てられたのは非魔法族との間で多量の血が流れていた時期です。学び舎として作られました、同じくらい戦火に耐えうる事を意図していたでしょう。何らかの仕掛けが有ると考える方が自然では?」

ホグワーツ創成当時は、子供が親元から離れて過ごすという観念自体が存在しなかった以上、まず第一に、親が安心して子供を預けられるような安全な場所を作る事が必須だった。

故に対魔法使いも当然想定されており、その一環として、この城は姿現しや姿眩まし——「マグル」は当然使えない——が出来ない。加えて、姿現しの練習の話を聞く限りでは、校長はその防衛機構に干渉出来るようだし、あの老人が校内で姿眩ましをしたり移動鍵を平気で作ったりしている所も見ている。

つまりは個人の力量とは関係無く地位自体に特権が与えられているようであり、そうでなければ子供を護る事は出来ず、しかしながらそれを十全に扱えるのは、あの今世紀で最も偉大な魔法使い以外に無いのだろう。

「ゲラート・グリンデルバルトはこの国に干渉しませんでしたが、当時教授だった彼の暗殺を全く考えなかった筈は無いでしょう。闇の帝王の場合はそれよりも露骨です。ホグワーツを狙えば当然あの老人が出て来る事が解っていた筈ですが、結論は歴史が示す通りです」

両者共にホグワーツ城を攻めた記録は、公式には一度として無い。不可能だったとは断言しないが、彼等をもつてしても相当な難事だと考えていた事は容易に想像がつく物だ。この魔法の牙城は正しく

要塞である。そして今世紀で最も偉大な魔法使いが守将に着くのであれば、何らの誇張も無く難攻不落となる事だろう。

教授は依然として羊皮紙を睨みつけていたが、紙面の文字を読んでいないのは明らかだった。ただ沈黙が答えであり、僕は軽く笑って話を修正する。

「話を今回の『犯人』に関する物に戻しますか」

先のはあくまで僕個人の考えに過ぎず、推し進めて考えても無益で有る。

「既に告げた通り、ハリー・ポッターを狙っているだろうというのが僕の予想です。そして勢力の方——元死喰い人、現死喰い人、闇の帝王と、そのどれが動いているかは解りません。加えて、特に怪しい人物というのも見当が付かない」

意図や目的、或いは首謀者が解らずとも、実行犯を捕まえられれば終わりだというのも一つの考え方だ。しかし、今回はそれも未だに手掛かりが見付からない。

「……嫌疑を掛け得る人間すら、君には見付からなかったと？」

「というより、平等に嫌疑を掛けない理由が存在すると言うべきでしょうか。つまり、決め手に欠いている。アラスター・ムーディ教授のように片っ端から呪文を掛けるというのであれば楽な物ですが——」

「——流石にそれは文明人の行いでは無い」

この教授とて、その点は難色を示すらしい。

反射的に左腕を掴んだのは何か理由が有るのかも知れないが、痛くない腹を探られるのは誰だつて嫌だという事だろう。

そして確かに未だ戦時では無いのだ。先の魔法戦争中ならば通りもしただろうが、現在において行うのは、何処かで明確な支障が生じ得るのかもしれない。

「有り得ない少数というのは確かに居ますよ。アルバス・ダンブルドア然り、ハリー・ポッター自身然り。個人的な印象で言ってしまうえば、フラーとオリンペ・マクシム校長は殆ど違つて懸けても良いですが」

「……それは単に君が親しいからでは無いのかね？」

「まさか。ハリー・ポッターに対する一連の反応の変化や、考えの變え方を意図して出来るならば大した物ですよ。彼女達は自然体であり、一つの目的の下に動いているような明確な意図を感じません。尚且つ、彼女達の間は眩しい位に善良に寄り過ぎている」

「……つまりは、君と相容れないという事か」

「ええ。考え方が根本から違いますし、僕と同じ方向に振れる気配すらない。あれが演技だとすれば御手上げですよ。潔く騙される事にします」

……後は、オリンペ・マクシム校長からの個人的な頼み事の件も有る。闇の陣営に属しているのならば、あれはまず有り得ない発想だった。

僕の言葉に内容以上の物を感じたのだろう。

そして印象というのも馬鹿にならないし、そもそも教授自身も可能性は低いと考えていたのかもしれない。教授はあっさりとは追及を止めた。

「……そうだな。君の無駄な努力の成果にも興味が無いし、我輩が気になる人間を聞いた方が早い。イゴール・カルカロフ辺りについての推理を長々と聞いた所で何も進まない」

「嗚呼、先週の感じから疑問を抱いていましたが、貴方は違うと判断しているのですね」

「あの男が『犯人』となれる度胸が有るなら、過去に仲間の名を売っては居ない」

ハリー・ポッターの殺害を功績とし、闇の帝王に許しを請うのは有り得ると思っていた。

ただ先週の気の小ささからすれば犯人像からは離れるように感じましたし、この教授の眼からすれば、余計に可能性が低く見えるらしい。

「デイゴリーはどうだ。君は随分と気にしていたようだが」

「……一番にその名前を出すのは当て擦りが過ぎますね」

僕の批難に対して、教授はただ笑みを深めるだけだった。

「……確かに、彼は最も闇に——僕達に近い人間です。そして彼の

立場、代表選手という地位も申し分無い。彼こそがハリー・ポッターを殺しやすい位置に在り、仮に彼を殺したとしても、あつかりと納得出来るような人格をしている」

同じくホグワーツで過ごした顔見知りや殺せる者は少ない。

スリザリン内でも少数で、それがたとえグリフィンドール相手でも同じだ。

同年代で考えるならば、マルフォイは論外。セオドル・ノットは半々、良くも悪くもビンセント・クラブとグレゴリー・ゴイルは殺せるか。

ただ、その少数の中にセドリック・ディゴリーは数えられる。

ハッフルパフの仲間達まで殺せるかは微妙だが、それでも思い入れの無い他寮の人間が相手ならば、グリフィンドールなど「セドリック・ディゴリー」である事を脱ぎ捨てた彼が手を汚す事は可能だろう。

「クク。真正面からそこまでハッフルパフの優等生をこき下ろすのは君くらいの物だろう」

「貴方もスリザリンでしょう。それも僕より大人だ。当然見透かしている筈ですが」

僕の揶揄に対して、やはり否定の言葉は返って来ない。

このスリザリン的な教授は、当然ながらセドリック・ディゴリーの負の面を理解している。そして教授は子供が嫌いであるが、いや嫌いで有りながら十数年教職に就き続けているのだ。彼程度の擬態に容易く惑わされる事は無いだろう。

「ただ彼はハッフルパフを装っていますし、それである程度満足しているようです。そもそも僕達にはあのような面倒な真似は出来ないのは解っているでしょう?」

「……まあ、そうだな。半純血であるという罪を負わされた事は我輩達にとつて非常に重い。しかし純血に生まれずに済んで良かったと、一度もそう思わなかったとは言わない」

「僕もそうですよ。寧ろ、貴方よりも強いかも知れない」

スリザリンに居れば、彼等を取り巻く柵の多さに当然気付かされる物だ。

マルフォイに近かろうとも近付き過ぎたくないのは、そういう理由も有る。親が死喰い人である点を考慮に入れずとも、彼等には自由が無き過ぎる。

「それと同種の面倒を彼はハツフルパフで背負っている訳です。そして、それはスリザリンと同種であろうと同一では無い。聖二十八族としての道を歩むという事は現状では死喰い人になると殆ど同義ですし、スリザリン内の状況が変わる物でも無いですが、彼は違う」

「……ハツフルパフのデイゴリーが死喰い人になれば、今まで必死で築き上げた物を全て捨てる事になる。要するに、あの男がそうする利益が無い、か」

「ええ。加えて、僕が闇の帝王を知らないように、セドリック・デイゴリーも知らないでしょう。一連のハリー・ポッターへの鼻屑を見て彼がアルバス・ダンブルドアを信じているとも思えませんが、一方で、知らない人間の實力を信じてあの老人に敵対する事もやはり考え辛い」
元よりハツフルパフには闇の魔法使いが非常に少ないのだ。

死喰い人として名前が挙がり尚且つその疑惑が強かった人間の中には、かつてハツフルパフに所属していた者は一人として居ない。

つまり闇に転ぼうとしても、接点が無い。

「正直、代表選手四人の中では彼が一番“犯人”の可能性が高いと思いますよ。想定される犯人像からも外れる物では無い。ただ、未だ闇の帝王が復活しておらず、光の陣営を去る理由や動機も無い現状では、彼は死喰い人の側に転ぶとは思えない」

都合の良い位置に居るから疑わしいだけで、それ以外に疑う理由が無いのだ。

余程の理由が無い限り彼は死喰い人と成り得ないし、今後もそうである事だろう。そして、教授が軽く頷いた所から見ると、彼の認識としても一致するようだった。

「成程、デイゴリーについては警戒を下げても良いようだ。ではムーデイの方はどうだ？」

「まあ、そちらの名前は当然出ますよね」

今度の名前は予想通りだった。

寧ろ、教授の口から出ない方が可笑しかった。

「先例からすれば、闇の魔術に対する防衛術教授を警戒するのは当然でしょう。ホグワーツ内に居て、かつ今年新しく入り込んだ人物。直接的な黒幕だったのは一年目だけですが、この三年間例外無く、彼等が危険な牙を持つていたのは事実だ」

「特に去年は本物の牙だったな」

「貴方の学生時代の憎悪に基づく感想は別に聞いていませんよ」

歯を剥き出しにしながら吐き捨てた言葉を一蹴する。

「……けれども、危険度の認識としては貴方の言葉を否定し切れる訳でも有りませんね」

闇の帝王を憑依させた闇の魔法使い。忘却術に関しては超一級の腕前を持っていた詐欺師。満月の晩に制御不能となった狼人間。

三人ともハリー・ポッターに隠し事をしており、尚且つ一人の例外無くハリー・ポッターを襲撃している。今年もそうでないという保証は決して無い。

「実際、僕の印象としては今年のアラスター・ムーディ教授も何かを隠している気がします。その隠し事が『犯人』であるかは解りませんが、これもまたあくまで僕の感想に過ぎませんが」

「……何故、そのような事を言える」

「前の学期、十一月の半ばあたりから教授には直々に教えて頂いているので。当然、貴方はアルバス・ダンブルドアから聞いていると思いますが」

案の定、教授は苦虫を噛み潰したような表情をする。

言うまでもなく、あの老人が教授に伝えているとは思っていなかった。

「とは言え、僕がそう感じたのはアラスター・ムーディ教授がバーテミス・クラウチ氏と接触した時ですけどね。彼は既に姿を見せなくなつて久しいですが、その前に会っていた場面を見ていた者としての感想です。御互いの因縁以上に、何か含む所が有るように感じました」

「……それも初耳だ」

「でしようね」

あの老人は、秘密主義に過ぎる。

「だが、君もまた不用意な事をしたのでは無いかね？ たとえ光の陣営に属していようと、どちらも危険人物で有る事に変わりない」

「ええ。しかし貴方にそのような表情をさせたのならば、危険の甲斐も有ったでしよう」

「……減らず口を」

「寮監の薫陶の賜物ですよ」

ますます教授は顔を歪め、だが同時に何かに気付いたようだった。

「お前のその発言で解った。二カ月程前、ムーデイがクラウチに対していきなり呪文を放とうとして問題となった事が有った。ウィーズリーやダンブルドアも手間を掛けられたと聞く」

「……あの教授ならばやるでしようね」

彼が油断大敵以上に最も狂気なのは、一度心を決めれば躊躇する事は無い点だった。

「そして僕は当然初耳ですし、そう在って然るべきでしょう。そのような話は魔法省の醜聞の類であり、外部には出すべきでは無いですからね。それで、結果はどうなったんです？」

「あの男はあくまで引退した闇祓いだ。正式な捜査権限など無い。あの男の実績とクラウチの言葉も有って拘束はされなかつたようだが、ウィーズリーやダンブルドアは相応に手間を掛けさせられたと聞く」「良い気味だ、と言いたい所ですが。……結果的には正解でしたか」「バーテミウス・クラウチ氏は姿を消した。」

ただ、それ以上に今の言葉を聞いて気に掛かった点があった。

「……しかし、アラスター・ムーデイ教授は何故隠遁生活を送る事にしたのです？」

改めて考えれば、その点が如何にも奇妙だった。

「教授は確かに片足を喪っています、その魔法力が損なわれた訳では無い。いえ、魔法力の面でも全盛期と比較すれば弱くなったのでしようが、あの教授——元闇祓いの腕ならば、今でも生半可な魔法使いでは太刀打ち出来ない筈です」

「フン。流石のあの狂人にも、穏やかに余生を過ごすなどという真つ当な思考が存在していたという事だろう」

「……普通ならそう考えるのが妥当では有るんでしょうが、ね」
「腑に落ちないか」

「ええ。あの元閹祓いは、闘い続けなければ生きていけない人のように思えたので」

「マッドアイ」が穏やかに老衰で死ぬという光景は、全く想像が付かない。

光の陣営への彼の献身は本物だ。また戦えなくなつたが故に最前線から身を引くにしても、後方で自身の教え子を量産し続ける位はしそうな物だし、その方が彼のイメージに合う。如何に狂つていようがアズカバンの半分を埋めた功績は絶大かつ不変であり、彼が部に残りたいと主張すれば簡単に追い出す事は出来ないだろう。

そもそも魔法省の他の役所的な部署と違い、閹祓い局の同僚は出世競争の相手というより、死の危険を共に潜り抜けた戦友に近い筈だ。
「・ムーデイが閹祓いで在り続ける事は可能であつたように思える。けれども、彼は隠遁生活の道を選んだ。」

今年アルバス・ダンブルドアに引き摺り出されない限り、ひっそりと暮らす事を選んでいった。それは並々ならぬ理由が無ければ有り得ないように思える。

「——そんなにも気になるなら聞いてみれば良い。君も一応教え子なのだろう?」

「……まあ、機会があればそうしますが」
教授の生き様に関わる問題だ。

余程の理由が無い限り、はぐらかされる予感もした。

「……だが、そうか。そんなにも早く、アラスター・ムーデイが君を教える価値を見出した、か。そうであれば、我輩が思つて居た程では無かつたかも知れん」

考えに沈んでいた僕を他所に、教授はポツリと呟く。

その瞳には不思議な光が浮かんでいる。横からでは判別しにくい

が、それは憎悪……いや、一番近いのは憧憬、だろうか。思わず漏れ出たような独白であったとしても、寧ろそうであるが故に、今までで初めて聞くような響きを帯びていたのは露骨だった。

「……どういう意味です？」

「ダンブルドアが言いそうな理屈を、君に対して伝える気は我輩には無い」

その言葉には、断固とした拒絶の響きが有った。

「ただ、これだけは指摘しておこう。今年君が派手に動く事を許容したのは、死喰い人側からの接触を期待しての事だった。我輩はそう見ているが？」

切り返すような鋭い指摘に、僕は顔を歪める。

……嗚呼、この教授は紛れも無くスリザリン寮監だった。

如何に嫌っている生徒で有ろうとも、その性格と思考を把握し切っている。

「やはりそうだったな。君は三年間目立つ事を拒否した、というよりも興味が無かったと言つて良い。けれども、今年は違った。今年の場合によつては目立っても構わないと考えていたし、悪目立ちも許容出来た」

「……あくまで最悪の場合、その可能性も有ると考えていただけですよ」

その返答が負け惜しみに過ぎない事は理解している。

教授の指摘を殆どそのまま認める内容であるのには変わりないからだ。

今年、僕はハーマイオニー・グレンジャーを近付けたくなかった。それは彼女が闇の魔法使いによつて害される危険を下げたいという意図も存在していたが、寧ろこちらから闇の魔法使いに近付けるという最後の選択肢を残しておきたいと考えていたのが大きかった。

「ただ、流石に今は期待していないと考えていいな？」

嘲笑う言葉に、渋々頷く。

「……ええ。デラクール姉妹によつて殆ど御破算になりましたしね。彼女達との繋がりを見られて尚そんな事を考える程、僕も楽観的では

無い」

「そこまで君が愚かで無くて何よりだ。けれども、発端からして多少愚かな部分が有ったと同時に我輩は考えている」

「僕がその発想を抱いたのは、貴方の発言が原因ですけどね」

半ば恨むように睨むも、教授は冷笑するだけだった。

「確かに我輩は去年、闇の帝王は君に関心を抱くだろうと言った。それを撤回する気は無い。この状況になってさえも変わらん。しかし、それは死喰い人が君に対して関心を抱く事を意味しない。仮にその死喰い人が、闇の帝王の指揮の元に動いていたとしても、だ」

「……………」

「真つ当な死喰い人であれば、君に近付くような真似は決して有り得ないのだ。死喰い人が如何なる存在であるかを理解していれば、そのような発想は出て来ない。君は死喰い人を不死鳥の騎士団の延長線として考えているだろうが、両者は根幹を異にしている。

——言うなれば、そう。設計思想が違うのだ」

「君は第一次魔法戦争で戦った両陣営について気付く事は無いかね？」

何時も通りの粘着いた言葉遣いだが、その裏に在るのは教授としての真摯さ。

「寧ろ、君が死喰い人に接触する事を考えたのならば、事前にそれに気付いて然るべきだった。不死鳥の騎士団と死喰い人。両者を並べるだけで明らかな、決定的な違いについて」

「…………意味が解りかねますが」

「ならば、もっと解りやすく質問しよう」

物解りの悪い生徒に優しく諭すような調子で——そのような様子を一度も授業で見せた事が無いからこそ、酷く不気味なのであるが——教授は質問を紡ぐ。

「アルバス・ダンブルドアは不死鳥の騎士団の一員かね？」

「……組織の内部構造は解りませんが、多分そうなのでは？」

疑問を捨てきれずに答えれば、教授は軽く頷いた。

「然り。では続けて問うが、闇の帝王は死喰い人の一員かね？」

「それは——」

多分、違うのでは。

そう口にしようとして、教授の真意に漸く気付いた。

「解ったようだな。君にしては、随分と物分かりが悪かったようだが」

僕の反応に対し、満足気に暗い笑みを教授は浮かべる。

「誤解してはいないだろうが、一応明確にはしておこう。死喰い人の主君は闇の帝王である。その点は揺ぎ無い。だが、対立するとされる両陣営には名前からして違う。設立理由から異なるのだから当然の話では有るのだが」

つまり、これは集団と個人の差異の話だった。

「死喰い人達。 Order of the Phoenix. 死喰い人の一員。

不死鳥の騎士団の構成員。比較して見れば明らかだ」

「……全体として動く事を意図しているのは、完全に不死鳥の騎士団の方ですね」

「そうだ。道理を理解せぬ者達は、死喰い人達には闇の帝王による独裁が敷かれていると宣う。しかし我輩に言わせれば、不死鳥の騎士団の方が余程独裁的よ」

組織とは、統一された目的の下に全体が動く事を余儀無くされる。

そして、その中において、アルバス・ダンブルドアは絶対的な君主なのだろう。彼のみが全てを知り、彼が全てを決定し、彼が全員に命令を下す。副団長と言える者は飾り程度にしか存在せず、そしてあの老人が消えた後に、その座を継ぎ得る者は恐らく居ない。

「死喰い人の目的は魔法界の支配と純血主義の徹底に在ると外部からは見られ、そしてそれは確かに我々にとつて重要な目的では有る。だが、その為に組織が作られた訳で無いし、その目的を互いに確認した上で我々は動いている訳でも無い」

「……その達成に動くのは決して死喰い人組織では無い。あくまで個々の死喰い人が、偶々一つの間人から発された指示と意図の下に動

いているに過ぎない」

「左様。我々は集団では無く個なのだ」

不死鳥の騎士団は軍に近い。

御互いは同じ目的に邁進する仲間であり、不可欠の戦友と言って良い。

けれども、死喰い人は軍からは程遠い。

御互いは決して仲間などでは有り得ず、それどころか敵対関係と
言って良いのだろう。

「無論、我々死喰い人にとっても帝王の命は絶対だ。しかし、啓示にも
似たその命に従う限りは、我々は大きく自由を許された。人も、人狼
も、巨人も、吸魂鬼も。好きに動き、好きに殺し、好きに犯す事を認
められた」

「こう言っては何ですが、死喰い人は雑多な寄せ集めな訳ですね」

「我輩は口が裂けてもそのような命知らずの台詞を言えんがな」

闇の帝王が不死鳥の騎士団以上に支持を集めた理由はそれか。

彼は多くを殺したが、その一方で多くの生命と自由を保証した。豪
奢な椅子の上に一人座って一方的に綺麗事を言うだけのあの老人よ
りも、その窮屈な世界の打破を掲げた帝王は、多くの日陰者にとって
余程魅力的に映ったのだろう。

「死喰い人という組織は自然発生的に産まれた。それ以前には目的な
ど殆ど統一されて居なかっただろう。勿論、魔法界の支配と純血主義
の徹底という考えは当初より帝王の中に在られたと思うが、それとは
関係無しに人が集まったと我輩は考えている。そうでなければ、あの
ような形の組織とはならないからな」

闇の帝王の力自体に惹かれた者。その力の下での庇護を求める者。
魔法界の高い地位に昇らんと野心を抱く者。暴虐と殺戮を好み、それ
を肯定する指導者を望む者。そして当然ながら、今の魔法界を破壊
し、純血達が君臨する世の中の到来を望む者。

様々な者が独自の意図を持って、一人の偉大な魔法使いの旗下に
集った。

「グリンデルバルドの軍隊と明確に違うのはそこだ。彼等は信奉者^{アコライト}と

呼ばれ、その名称から明らかなように、仰ぐべき神上位者の存在を前提としていた。革命に賛同する事こそが要件であり、誰もがその目的の下に集団として動く事を了解していた」

「……ですが、死喰い人という名称は、主人の存在や上下関係を含む物ではない。騎士団という、団長と団員の存在を当然に予定している物とも全く違う」

名前は所詮、対象を識別する為の記号に過ぎない。

しかし、名付け親が籠めた意図というのは確かに存在しうるだろう。

「……帝王が失墜すれば当然に瓦解する訳ですよ。帝王が消えた翌日あたりに即刻全国で御祭り騒ぎやるくらいですしね」

元より組織で無い以上、纏めていた者が消えれば殆どが立ち去るのも当然だった。

そしてその事を口にせずとも、誰もが理解していたのだろう。死喰い人は闇の帝王在りきの存在であり、闇の帝王無くしては存続し得ない。それが当時の共通認識であり、その後の展開を見る限り間違っても居なかった。かつては不死鳥の騎士団を圧倒する勢力であった組織にも拘わらず、闇の帝王が「生き残った男の子」の存在によって挫かれた後、彼の搜索や復活の為の行動を取る者は極少数でしか無かったのだから。

今更ながら納得した僕に、しかし教授は仏頂面のまま口を開いた。

「確かに組織で無かったからこそ、多くの死喰い人は闇の帝王に背を向け、裁判の場で服従の呪文に掛かっていたと嘯いた。けれども、そうしたのもう一点大きな理由が有る」

個で有ったからこそ裏切った者ばかりではない。

僕の言葉が不十分であると、そう付け加えるように教授は言葉を続けた。

「魔法界の支配と純血主義の徹底。それらは確かにあの時点の重大な関心事であったが、その二つをも超え得る一つの至上目的が存在する。それはやはり闇の帝王の名と我々の名称を並べれば、当然に君は気付く筈だが」

死の飛翔。

死喰い人。

「……死の克服ですか」

教授は頷く。

「全ての死喰い人が関心を持つていた訳では無い。しかし、多くを惹き付けたのはやはりその点だったし、闇の帝王が持つ中で最も偉大な力であると考えられていた。帝王は研究成果である数々の力を死喰い人達へと授けており、帝王の恩寵を獲得すればいずれ自身も——」
「——しかし、帝王は他の秘密を臣下へと気軽に授けはしても、不死の秘密を開示するのには余り積極的では無かった。違いますか？」

「……何故そう確信をもって言える？」

言葉を遮られた以上に、その質問内容にこそ教授は顔を歪めた。

「いえ、単なる推測ですよ。そうするのが発想としては自然だと考えただけです」

不死の要となる分霊箱が破られないようにする為ならば、その知識が記された書物を全て焼くのが手っ取り早い。息の根を止めるのに魔道具を破壊するという発想が無ければ、余程不幸な偶然が起こらない限り死を回避し続ける事が出来る。

闇の帝王は当然他の不死の手段を探しただろうし、不死の探究を続けていただろうが、自身が既に獲得した叡智を独占するという意図も有していたのだろう。

「けれども、それで良く解りました。死喰い人は研究集団としての色彩が強く、それすらも統率が取れて居なかった。そして不死だと思つて居た闇の帝王が、かのハロウインの日に消えた。偉大だと思つていた帝王ですらも只人でしか無かったと感じたからこそ、極一部を除いて悉くが帝王の下を去つてしまった訳ですか」

十四年前の失墜は必然だった。

崩壊すべくして崩壊し、闇の時代は速やかに終焉を迎えた。

……まあ、それは大いなる勘違いだったのだが。

中核にして全てであるヴォルデモート卿は、決して死んでいなかった。

そして奇しくも闇の帝王が一度失墜してしまった御蔭で、不死の一端は実際に証明された。

正確には決して死んだ訳では無いのだが、十数年の時を経て今後来る帰還は闇の帝王の神秘性を高め、彼の超越性を誰の眼にも明らかにし、そして以前よりも強大かつ広範にその影響力を行使する事を許すだろう。

「もつとも、寮監がそれを教えてくれた御蔭でもう一つの謎の方も腑に落ちましたよ」

「……謎？」

「ええ、やはり名前の話です」

死喰い人と不死鳥の騎士団の差異は気付かなかったが、もつと露骨な方は別だ。

「闇の帝王の真名からすれば、死喰い人は英語では無くDeath Eater 語で呼ばれるべきでしょう。最初その響きを聞いた時は何れかに統一しろよと思いましたが、そもそも同輩でも何でも無いならば、その差異は何ら不自然でも何でも無い」

「……」
理念と思想が違う以上、異なる命名規則に従うのも妥当だ。

もしかしたら、闇の帝王は死喰い人という呼称の命名者ですらないのかも知れない。

「……ちなみにだが。君は闇の帝王の名が仏語である事は気にしないのかね」

「その辺りは左程」

酷く渋い顔をしている教授に、多少の疑問を抱きながら答える。

「ローマ帝国の時代ですらグレートブリテンは辺境のままでしたし、数百年経ってホグワーツが建設される事になっても変わりませんよ。この島は西と南と東から様々な民族から侵入を受けて居ましたし、先進的なのは大陸の方だったでしょう」

大陸からそう離れていないとは言え、それでも一応海に囲まれているのだ。

人の往来は有ったにしても、文化が入って来るのが遅れるのは必然

である。この国が明確に世界の最先端に躍り出たのは、やはり産業革命以降だろう。

「そして、この国の旧家を見てもマルフォイ家は大陸から渡って来た家系ですし、レストレンジ家も本流がどちらか知りませんが、大陸にも血筋が存在していた筈でしょう。ブラック家の家訓も
Toujours Pure^{純血永遠なれ}で伝語です。ただ——」

「……ただ、何なのかね？」

「『マグル』の歴史でノルマン・フランス語がこの国で大々的に——
と言つても、支配階級のみですが——使われるようになったのは1066年以降。マルフォイ家^{アーモンド・マルフォイ氏}初代が渡ってきたのも同時期です。魔法使いに国境が無いにしても、どんなに遅く考えても993年には設立されていたホグワーツ、或いはサラザール・スリザリンによつて伝語が使われていたかは微妙な気がしますけどね」

そもそもイングランドに渡ってきたノルマン人というのは、多少大人しくなったヴァイキングの子孫なのだ。二百年程前の御先祖様^ロは元気に略奪業を営んでいた。

現代的観点で野蠻云々を語るのは馬鹿な話だが、普通に考えれば、海を渡って征服してきた人間達が『文化的』である筈も無い。それ以前にもアングロサクソン達の生活と歴史は確かに存在し、過去から連綿と受け継がれてきたのだから。

「四創始者の出身地にも議論が有ります。^{Wild moor}荒野から来たグリフィン^{giffin}、谷川^{glen}から来たレイブンクロー、^{valley brood}谷間から来たハツフルパフ、^{fenn}湿原から来たスリザリン」

「……今年の組分け帽子の歌か」

「ええ。まあグリフィンドールはゴドリックの谷が有りますから、イングランドと考えざるを得ないでしょう。他の創始者は特定し切れませんが、レイブンクローはスコットランド、ハツフルパフはウェールズと考えられる事が多いようです」

「では、スリザリンは？」

「今の四つの連合王国に対応させるのならば、出身はアイルランドになりますね」

そう考えるのなら、綺麗に対応してくれる。

ホグワーツの管轄がアイルランドにも及ぶ事も説明可能だ。

「そして当時のアイルランドはグレートブリテン以上にヴァイキングの時代です。更にその地域の言語は一般にケルトの系譜を引く物であり、ラテンの系譜を引く仏語とは全く異なるでしょう。アイルランドへのノルマン人の本格的な侵攻も1169年以降の話ですし」

「……ならば、サラザール・スリザリンは仏語を用いなかったと？」

「さあ？ それは解りません」

依然として不機嫌な顔のままの教授に肩を竦める。

「サラザール・スリザリンをアイルランド出身とするのは、国内で対応する場所を考えるならという思考です。イングランドの東部にも湿原は有りますし、レイブンクローだって一応アイルランドと考える事も可能だ。そもそも、創始者が四人居るから四つの連合王国に対応させるという発想は多分に“マグル”的で、魔法使いの物では有りません」

サラザール・スリザリンは当然の事、他の創始者——ゴドリック・グリフィンドールでさえも、出身は不明確のままだと言うのが正しいのだろう。

「……だが、ホグワーツ創設期は魔法族とマグルは基本的に敵対関係に有った筈だが？ 野蛮人^{マグル}が何を喋っていたかが気にしなかったという考えも出来るのでは無いかね？」

腕組みしながら為された教授の指摘は、非常に正確に的を射ている。

確かにこのような考え方には限界が有る。支配階級と非支配階級の言語が異なる以上に、異種族や異民族の言語が異なったとしても不思議では無い。

しかし、今回の場合はそうとも思えなかった。

「仏語も所詮口語ラテン語ですよ。グレートブリテンの^{魔法族}支配者に古い言語が保存されていたと考えるならば、^{43年から409年まで}一世紀の半ばから五世紀のローマ帝国下の上流階級に通用した、“真の”ラテン語で有るべきでは？ 現にホグワーツの校訓は——」

「……」

Draco Dormiens Nunquam Titillandus、
つまりラテン語か」

ラテン語はマグル間において早々に文語に墮した——特に西ローマの滅亡476年は大きかった——が、魔法族の間では普通に古臭く話されていたと考える方がまだ魔法界らしくでは有る。

「そして、アングロサクソン古英語も古い言語です。僕達が今どんな言語を話しているかを考えれば当然——と言っても、現在の英語は1066年以降の影響が大らしいですが」

だがそれでも、英語はラテン仏語とは違いでなく、ゲルマンの系譜に連なる言語とされている。

「ローマがブリタンニア属州を放棄して以降、五世紀半ばからはデンマーク南部やドイツ北岸から遙々渡ってきたアングル人やサクソン人がブリテン島に定着します。そして彼等の言語として使われた古英語は、ノルマン征服まで数百年間相応の影響力を持ちました」

仮に魔法族が旧くからグレートブリテン島に住んで居たならば、対岸の口語ロマンス語よりも、寧ろそちらの影響を受ける方が自然だと考える。

「更に面倒な事を言うならば、ブリトン人などのケルトの血を引く者達が消え失せた訳でも無く、現在のスコットランドやアイルランドにはそれに連なる言語が未だに残っています。加えて八世紀の終わりからブリテン島の東部はデーン人、つまりヴァイキングの来襲を受け、九世紀半ばから一時デーンロウとして支配を受けました」

ノルマン征服——この島における最後の異民族の軍事侵略までの歴史は、非常に混沌としており、民族も言語も多種多様だった。それを示すかのように、現在の英語は、単語や文法等においてそれらの影響を受けてやはり混沌としている。

「ホグワーツ前後の歴史は特に曖昧なので、“マグル”と何時訣別したのかは解りません。しかし三人の創始者はそれでも“マグル”生まれを受け容れましたし、その“マグル”はラテン語、アングロサクソン語、ゲール語やブリトン語、古ノルド語等、様々な言語を用いて

いました。それなのに、四創始者がどの言葉を使っていたかを特定するのは無茶な話でしょう」

更に1066年以降に入ってきたノルマン人貴族は、普通にノルマン仏語を使い続けた。

その状況が大きく変わるのはい、百年戦争期を待たなければならぬ。

「ただ——闇の帝王が自身を表す名として仏語を選んだという事は、サラザール・スリザリンの系譜について、マルフォイ家よりも古く大陸から渡って来たという確信が有ったのかも知れません。その場合では、仏語を使っていたとしても何ら不自然では無いでしょうね」

闇の帝王が真にスリザリンの血を引いていたのであれば、世間に広まっていない伝承、或いは家に代々伝わる逸話等に通じていた可能性も高いだろう。

別にノルマン征服以前に渡ってきたフランス人が皆無という訳では無いし、ブリトン人が五、六世紀に対岸に渡った結果としてのブルターニュがフランスに存在するように、「マグル」間ですら大陸とグレートブリテン間では相互通行が存在していたのだ。姿現しを使える類稀な腕前を持つフランスの魔法使いが一人渡ってきた所で何ら驚くに値しない。

しかし万一、サラザール・スリザリンが大陸と全く関係ない出身の人間であり、尚且つ死喰い人を仏語で無く英語で呼ぶ事を決めたのが聖二十八族だとしたら——その「Death Eater」と言う名は、支配者の言語を用いた主君への謙譲を示す物では決してなく、正しく貴族らしいと言える嫌がらせの仕方だと言えた。

「……本当に君は、随分と要らぬ知識を持っているようだ」

僕の妄言に今まで大人しく耳を傾けていた事が奇跡というべきか。スリザリンの教授は、何時も通りの陰鬱な笑みを浮かべながら皮肉を口にする。

微妙に顔色が悪く見えるのは、背を向けてすら居た先程とは違い、表情が少しばかり良く見えるようになったからに過ぎないだろう。少なくとも、その声は揺ぎ無いものだった。

「しかも、君の強引な理屈の付け方は、教科書そのままを口にするしか能がないグレンジャーよりも質が悪い。我輩は同じ寮のよしみとして忠告するが、我輩以外の前でそのような行いをしない事だ。君が自認する以上に、君の発想はマグルにかぶれ過ぎている」

「解っていますよ。ただ、魔法使いは『マグル』のセカンダリースクール of 教科書位は読むべきだと思いますがね。1692年以前は今より遥かに近い距離で我々は暮らしており、そして今ですら隣人である事に変わりないのですから」

知識に貴賤は無い。

有用無用の区別は存在するだろうが、それなら有用な物は存分に使うべきだ。非魔法族の知識をそのまま導入出来ないにしても、科学的手法くらいは導入可能だろう。

「——ええと。それで、何故こんな話をしているんですか」

話を再修正する為に問えば、これ見よがしに大きく溜息を吐かれた。

「……君が好き勝手に脱線したただけだ。そして大本は、死喰い人は、君が想像するような御堅い組織では無いという話だ」

「嗚呼、そして僕に近づく死喰い人は居ないだろうという事ですか」

死喰い人は個である。

闇の帝王と死喰い人の間ですら組織を構成しない。

「成程、確かにそうであれば、死喰い人が僕に接触する——協力者の確保や勢力拡大の為に人員増大という行動に移る事は有りませぬね。それが出来るのは、闇の帝王ただ一人だ」

「……まあ、そう言う事だ」

話が本題に戻ったからか、気を取り直すように教授は咳払いをする、

「不死鳥の騎士団は違う。設立目的が明確であり、単純である。闇の帝王の暴虐と支配を打ち砕く事。その為の集団、その為の組織だ。ア

ルバス・ダンブルドアでさえも騎士団の一員に過ぎず、目的達成の為の部品に過ぎないと言える」

「……組織の脆弱さは同程度だと思えますけどね」

まず間違いなく、あの老人が死ねば瓦解するだろう。

アラスター・ムーディ教授の見解としても似たような物だったし、実際スネイプ教授は更に咳払いをする事で誤魔化した。

「その目的の為であれば、騎士団は仲間や協力者を増やす事も躊躇わないだろう。そして可能な限り人数が多い方が望ましいから、勧誘も積極的に行いもする」

「寵愛を競い合う死喰い人達、少ない方が都合の良い集団とは性質を異にする訳ですね」

「そうだ。そして、死喰い人には騎士団と絶対的に異なる点がある。それは組織の中に更に組織、というよりは別種の構成を抱え込んでいると言える点だ」

その表現に多少考え込むが、答えは左程時間を置かずに出た。

「……純血組織、聖二十八族ですか」

スネイプ教授は小さく頷く。

「死喰い人の人員拡大は、その伝手を元に行われていた。要するに、既に死喰い人になった者が、旧くから家同士の付き合いがある、子供の頃から相手を知っているような者を引き込んだ場合が主だった。そしてその派生として——決して主流ではない——七年共に過ごして親しくなった者も組み込む事も行われた」

スリザリンの死喰い人。

聖二十八族の死喰い人。

殆どが両者の要素を兼ね備えるのも、当然の帰結だった訳だ。

「翻って、今はどうかね？ 帝王の凋落により、その影響力は断絶している。死喰い人の親を持つ者は居るが、死喰い人はその候補生ですらも校内から一掃されたと言って良い。そして君は半純血だ。血筋が劣っている以前に、死喰い人がその人格と資質を良く知る者ではない」

「……そんな異邦人アウトサイダーを身内に招かないのは当然として、協力者として

すら迎え入れる気には全くなりませんね」

「そう言う事だ」

教授は頷く。

「君は自身を餌として使えると思っていたようだが、今年は違う。未だ闇の帝王は復活しておらず、秘密裏に事を進める必要の有る今回の「犯人」も、君に接触する理由はない」

「……そのようです、ね。ええ、貴方が正しいでしょう」

スネイプ教授の理屈は筋が通っていて、納得出来る物だった。

実の所、僕は死喰い人が接触している可能性は言う程低くも無いと考えていた。

死喰い人が同一の目的と普通の結束を有する組織であり、かつ真つ当な忠義を持つ死喰い人が居たのならば、十四年前に存在していた旧来の死喰い人組織——もつと言えば、嘘を吐いてまでアズカバンを逃れた聖二十八族に大いに失望した筈だと考えていた。

如何に口では熱心に革命や変革を唱えていようが、旗色が悪くなれば途端に残らず裏切り、最後には自身の家系と保身を優先してしまう。

それは人間として正しい姿で有ろうが、同じ思想と目的の下に動いた同志を見捨てるというのは薄情でも有るし、残った者は憤りを感じるのが当然である。故に新たな血を——聖二十八族に属している人間では無く、それらに被れていない、闇の帝王や死喰い人のみの為に働けるような人間を求めても可笑しくない。

半純血という出自が余り宜しくないのは解っているが、かつての闇の帝王は排除の姿勢までを示しておらず、実際に死喰い人まで昇り詰めたスネイプ教授という証拠が存在している。

闇の帝王の復活後に帰還するであろう、しかし再度裏切る疑念を捨てきれない上流階級の者達よりも、裏切らない事を期待しうる下流階級の僕へと接触を図ろうとする事は有り得るのだと、そう思っていたのだが——けれどもそれは、物を知らぬ人間の浅慮な考えだった訳だ。

聖二十八族に憎悪を抱いている現死喰い人が居たとしても、死喰い

人が端から組織的に動く事が考えられない以上、組織の人員拡大という方向には動きようが無い。十四年前の死喰い人達の性格と性質からすれば、そんな事は決して有り得ないし、要らぬ期待や希望を持つべきでは無かったのだった。

「――僕の使い所が有るとしても、それは決して今年では無い。まだ先、闇の帝王が復活し、直々に勧誘が出来るようになってからの事ですか」

「……その言葉は、君は陣営を決めたという事かね？」

「いえ。単なる感想ですよ。ただ、スリザリンである僕をどう使うのが最も有効かと考えれば、やはりその結論に落ち着くでしょう」

これは決して、グリフィン・ドラゴールアルバス・ダンブルドアには出来ない事だ。

教授は相変わらずこちらを見ず、それどころか既に明確に背を向けてすら居た。

……話は終わり、立ち去るべき時間が来たという事だろう。僕を呼んだ教授の目的が達成されたのかは解らないが、もう僕の話を書くのは不要だと感じていたらしい。

「二応最後に聞いておきますが、貴方は僕から二人の人間についてしか聞かなかった。他に聞く必要は無かったのですか？」

「これからの第三の課題は君に関わりが無い。君に出来るのは祈る事だけだ」

セブルス・スネイプ教授の声は、やはり僕を徹底的に拒絶する物だった。

「そして、大人が不正について全く何も考えていないと思うかね？」

三大魔法学校対抗試合の関係者に裏切者、或いは今回の“犯人”に対する密告者が居たとして、それを防ぐ為の必要な措置を取って居ないか？ 夏の間には我々は残らず『署名した』のだ」

「……魔法契約、ですか。まあ、当然と言えば当然なのでしょうね」
羊皮紙に呪いを掛けたのか、或いは杖を使った契約を交わしたのか。

何にせよ、彼等は無策で三大魔法学校対抗試合を運営している訳では無かった。

試合の性質上、校長らの不正を完全に防ぐ訳では無い、それどころか意図して不正が出来るように作られては居るだろうが、それでも外部から干渉——特に、選手に対する生命侵害は厳禁だろう。どんなに優秀でも、生徒と大人ではどちらが勝つかは知れている——が出来ないようには作つてあるだろう。そして、〃犯人〃はその拘束を潜り抜けて暗躍している訳だ。

やはりアルバス・ダンブルドア、アラスター・ムーディ教授、若しくはスネイプ教授が此度の陰謀を防いでくれるのが最善。僕にどうこう出来る時期は既に終わっており、そもそも最初からその余地は無く、教授の言葉通り、後は祈つて結果を待つしかない。

賢者の石と秘密の部屋の時と同じように。

僕は何時だつて、こんな役回りから抜け出す事は出来ないらしい。

「此度の事については、一応礼と感謝を述べておきます」

「……不要だ。我輩には我輩の目的が有る」

「それでも、今回の貴方の授業も非常に有意義だったのは確かです」

教授が見てないと理解しながら尚、頭を深く下げる。

御互いに好意が成り立ち得ない関係なのは解っている。

けれど、最低限の態度に示しておくべきだった。余り認めたくないし、口には決して出さない事実であるが、それでもセブルス・スネイプ教授がスリザリンの寮監で在ったのは間違いなく幸運だったというべきなのだから。

「——対価という訳では無いが。今学期は多少ドラコの方を見ておきたまえ」

その言葉に頭を上げれば、教授はやはり僕の方を見て居なかった。しかし、これまでと異なり、教授の言葉からは確かな情を感じる事が出来た。

「君と彼の関係は友人からは程遠いだろう。しかし幸か不幸か、君はドラコと非常に近い場所に居る。可能性としては低いとしても、君の立場は非常に都合が良い」

「……ビンセント・クラップとグレゴリー・ゴイルが居るでしょう」

「ならば、彼等がドラコの友人に見えるかね？」

沈黙はガリオンだった。

「クリスマスの際、ナルシツサは君の叛乱に乗り、時間と労力とガリオンの金貨を山程費やした。そして社交界で夫婦が揃わないというのは余り体面が宜しくないにも拘わらず、ルシウスは出席を見送った。しかも、大抵の純血がそうした。その理由を君は当然考えた事だろう。もしかしたら、それを見透かしてまであの革命を起こしたのかもしれない」

「……………」

「人は唯一の意図だけで動く訳では無い。その規模が大掛かりで有れば猶更に。つまり、アレは両天秤だった。一つは闇の帝王が復活された時に、国外の干渉を排除するだけの影響力を持つ為。無論、もう一つは解るな？ 君は先程正確に指摘したのだから」

「…………アズカバンを逃れた死喰い人が、闇の帝王に許されるとは限らない。」

アルバス・ダンブルドアの庇護の確保。夫が殺された後の、妻や子供達の国外逃亡。

あのクリスマス・パーティーはその可能性を少しでも上げる為に実施されたイベントであり、かつて死喰い人の疑惑が掛かった者達が姿を見せず、その色彩を少しでも払拭しようとしたのも当然だった。そしてあのパーティーの中で、またはそれを隠れ蓑にして、或いはその後の晩餐会等において、何らかの密約が結ばれ、金貨が更に飛び交った事だろう。

「君は非常に特異だ」

スネイプ教授は静かに言う。

「殆どの場合、それは奇形なだけで有用でも有益でも無いが、何が上手く転ぶか解らんのが戦争ではある。我々が既に確認した通り、今年は特に注意を要する状況だ。ドラコがホグワーツを去る為に今年君が必要とされるかもしれないし、その必要は無くとも、卒業までに君が必要とされる日が来るかも知れない」

「…………貴方の前であり、且つスリザリンとしての誠意として、協力する事は吝かでは無いとは明言しておきましょう。しかし具体的に僕に

何をしろと言うのです?」

「今の所はそのままが良い。未だ帝王は復活していないのだから」

けれども、復活後は解らないと暗に告げていた。

「そして仮に必要なならなくとも、やはり君はそのままが良いのだろう。関心外の事に君が不器用なのは四年間で知っているし、何より君はドラゴが求める物を決して提供出来ない。ただそれでも他と違うという一点において、君は価値を見出されている」

謎めいた事を言つて、教授は最後に僕を真っ直ぐ見た。

何処かの老人の蒼の瞳と違って、その黒の瞳は、やはり意外と嫌いでは無かった。

「——理解していると思うが。もう時間が無いぞ、レッドフィールド」

交錯

今日、最も疲れる事は終わった。

それは事実だったが、更に一波乱あるとは思っても居なかった。

「——悪い人間と付き合うとロクな事が無い。それはスリザリンにも言える事だがな」

スネイプ教授の研究室から帰る途中、真正面からその声を掛けられた。

義足の音を鳴らしながら近づいてくる傷だらけの相貌の持ち主は、誰であろうアラスター・ムーディ教授。何時になくその表情は陰しく、僕を薄暗い廊下の向こうから睨みつけている。

「まさかスネイプの研究室から出て来るとはな。一体何を話していた？」

「……何をしていたも何も、彼は我がスリザリンの寮監ですが」

「その割には、随分と長話をしていたようだが？ お前が説教されるような真似をする程に迂闊とも思えんし、見た所そうした風でも無かったが」

「……………余り真正面から言う事では無いかもしれませんが、本当に嫌な眼ですね」

その蒼の義眼が三百六十度見渡せ、机の下に隠した雑誌まで見透かしてしまふ事から解っていたが、その前では壁の障害も無意味か。そして、僕とスネイプ教授の姿が見えていたならば、当然ながら説教をされていたなど決して思ふまい。

僕の皮肉に対し、アラスター・ムーディ教授はニヤリと笑う。

「それで、お前は僕の疑問に答えていないが？」

「……何をしていたも何も、単に個人的な雑談ですよ」

軽く肩を竦める。

「まさかその内容まで聞きたいとでもいうのですか？ 如何に教授で有っても、そのような権利は流石に無いと断言しますが」

「元死喰い人と教え子が親し気に話をしており、僕は元闇祓いだ。それでも尚、お前は僕に対して口を噤むというのか」

「親し気に、という点は否定します。一方で貴方に話をする気が無いのは肯定しましょう」

「ほう。前半は儂にとつてはどうでも良いが、何故そうする?」

「これは信頼や義理、そして忠義の話だからです」

中身からすれば、この教授に話す事も選択肢としては有りなのだろう。

ただ、一応僕と教授が「犯人」として疑惑を抱いている相手でも有るし、それ以上に、あそこでの会話が漏れ出る事はセブルス・スネイプ教授が望むまい。あれだけ多くを明かしてくれた教授の信を喪うような真似をする気は全く無かった。

「別に貴方だから、という気は有りませんよ。アルバス・ダンブルドアだろうと、ミネルバ・マクゴナガル教授だろうと話さないのは同じです」

「……そうか」

四方八方に義眼を回し、一方で肉眼は僕を真っ直ぐと見詰めたままの教授は、しかし明らかに気に入らなそうである。そんな様子を見て、僕は軽く溜息を吐く。

「……教授はセブルス・スネイプ寮監が未だに疑わしいと御考えで?」
「当然だ」

間髪入れずの返答が返つて来る。

「アレはアズカバンを逃れた死喰い人だぞ? 御主人様が失権した混乱期に上手くやったようだが、そのような輩など断じて信頼に値せん」

「教授の身分はアルバス・ダンブルドアによつて保証されているでしょう」

「ああ、そうだな。ダンブルドアはそうする。だが、儂は違う。儂が本当に憎悪しているのは、のうのうと過ごしている死喰い人共よ」

「……本当に貴方は生粋の闇祓いなんですね」

嫌悪と共に力強く吐き捨てる教授に思わず眩く。

何故闇祓いを引退するような真似をしたのか、真剣に解らないものだ。

ただそれはそれとして、先程の言葉は聞き流す事が出来なかった。「……まあ、確かに死喰い人疑惑の一連の裁判を見るだけで、罪から逃れる為の言い訳全集が作れそうな気がしますが——」
疑わしきは罰せずという論理が下された結果ならば納得だが、そうではなく単純に魔法界の裁判が後進的であるが故に見逃された気がするのが正直いただけくない。

シリウス・ブラックの誤審が存在する以上、あの場においてパーテムィウス・クラウチ氏の発言は話半分にししか聞けないが、確実を期す為に証拠不要で問答無用のままに牢獄に叩き込みたくなる気持ちは解る物だ。

実際、ルシウス・マルフォイ氏を十四年前にアズカバンに短期間でも収容出来ていれば、今の状況はまた大きく変わっていただろう。もつと言つてしまえば、それが出来ずに休戦処理を終えてしまった時点で、アルバス・ダンブルドア不死鳥の騎士団は政治的に敗北してしまっている。だから、あの老人は魔法大臣になっておくべきだったのだ。

「——ただ、スネイプ教授は、闇の帝王が権力を喪つた後に死喰い人疑惑が掛けられた他の人間達とは決定的に異なる点があるでしょう」

死喰い人に名を連ねながら彼等の名を売ったイゴール・カルカロフは例外だが。

一連の裁判を見て、セブルス・スネイプ教授程に異例の罪の逃れ方をした人間は無い。

「ダンブルドアの保証が信頼に値せん事は既に言った筈だが」

「いえ。問題はその理由の方です」

「理由？」

僕の言葉が気に掛かったのだろう。

依然として猜疑の光を消していないが、疑念を持った教授に首を小さく横に振った。

「ええ。アルバス・ダンブルドアは身元保証に際し、寮監が過去に死喰い人で在ったという事実は一切否定していません。スネイプ寮監がアズカバンを逃れているのは偏に闇の帝王が凋落する前に陣営を離れて、貴方がたの陣営に戻った事を理由とする物——」

そこまで口にして、思わず途中で言葉を切る。

僕にそうさせたのは、義眼で無い方の眼が怪しく光ったように感じたからだ。それも尋常で無い、覗き込む者の背筋を震わせるようなぎらつき方だった。

「……何か？」

「いや、何でも無い。そう、お前が気にする事ではない」

僕よりも自分を落ち着かせるようにゆっくりと、低い声で教授は言う。

……思い返しても、別に変な事を言つたつもりは無い。あの時代の人間ならば死喰い人の裁判の内容に着目していただろうし、当時闇祓いで有つたこの教授も知っている——もしかしたら、スネイプ教授が評議会に掛けられていた光景を見たかも知れない——情報だ。

であれば、先の発言から何か連想したのだろうか。

関係無い事を契機として発想を飛ばすという事は、僕も良くやる事である。会話の流れとは繋がっていない事も少なくないし、この教授が今まさにそうしたとも限らない。事実、アラスター・ムーディ教授は話題を大きく変えた。

「ところで、お前はポッター達と親しいのか？」

「……嗚呼、貴方ならば気付かない筈も無いですか」

思いがけない言葉に一瞬硬直するも、教授の顔、正確にはその蒼い瞳を見てすぐさま理由に思い当たった。この元闇祓いは元死喰い人のスネイプ教授を警戒していただろうが、それ以上に注意を払っていたのは、当然ながら「生き残った男の子」に対してだろう。

「けれども、僕に聞く前には当然裏を取っているのでしょうか？ 貴方であれば、別にハリー・ポッターの口から聞き出す事に支障はない筈だ。そして恐らく、彼からは別に親しい訳では無いという答えが返ってきた筈です。友人未満で、精々顔見知りと言える程度でしょう」

「そうだな。ポッターはそう言っておった。言葉通りでも無さそうだった」

「言葉通りですよ。彼と直接話した回数は、片手で足る程度の事しか有りません」

尚も猜疑の光が消えなかつたので、僕は言葉を付け加える。

「確かに彼はグリフィンドールであり、僕はスリザリンですが、率先して敵意を買うような真似をしていないだけです。貴方は気分を害しはしないでしょうから敢えて言いますが、今の御時世で、生き残った男の子」と敵対する程に愚かな事は無いと思いませんか？」

「クク、マルフォイを非難するか、お前は」

「闇の帝王は、ハリー・ポッターをどれだけ虐めたかで評価してくれないでしょうに」

口にした後で危ういかと思つたが、教授は寧ろ楽し気に顔の傷を歪ませた。

「その通りだ。内心如何に気に入らなろうがポッターに媚を売るのがスリザリンであり、狡猾なスリザリンは当然、両方に保険を掛ける。本当にスリザリンも甘つちよろくなつた物よ。……嗚呼、最も脅威であるのは解りやすい敵では無く、味方の中の敵なのだ」

最後の部分は呟くように言った。

それが示すのは、やはり今回の三大魔法学校対抗試合の事だろう。

「二応擁護しますが、スリザリンが刺々しくなつたのは戦争中や戦争後に迫害されたのが原因だと思えますよ。雑に計算しても二十年以上は白眼視され続けているんですから」

「それでも、所詮は学生共なのだ。親の交友関係を引き継ぐ訳でも無し、如何様にでもだまくらかす事は出来るだろう。実際、お前が現在の典型的なスリザリンではない対応をするだけで、ポッター共はお前に対して敵意を向けてはおらん。マルフォイと違ってな」

「……貴方は非難しているのですか」

「褒めておる。その在り方には甘えが無いからな」

甘え。

その単語に皮肉な響きを含ませた事を、教授は隠そうとしなかつた。

「再戦をする気ならば畏を仕込むべきだし、逆にその気が無いならば頭を下げるべきなのだ。けれども、あの小僧共は下らん学生生活が、虐め虐められの生温い時代が続くと思つている。死喰い人の親が居

る、聖二十八族の血を引いている。それだけで、自分の人生が当然に保証されると妄信している。その「偉くて尊い」親達は何をしたのかを愚かにも忘れ去ってだ」

「……………」

「彼等だけでは無い。我等の陣営も同じだ。魔法戦争は十四年前、済し崩しに停戦されたに過ぎない事を忘れている。戦争は終わっていないのだ。けれども魔法省も、ミネルバも、アルバスでさえも、本気で戦争が起こる筈が無いのだと心の何処かで考えてしまっている」

僕の追及の視線に気付いたのだろう。

「アラスター・マツドアイ」・ムーディ教授は、狂的な相貌を露わにして続けた。

「そうだ。アルバス・ダンブルドアにはまだ緩みが有る。口では、思考ではそうでは無い。しかし、態度と対応がそれを否定し切れていない。 Hogwartzの安全神話という物を、心の何処かで信じてしまっている」

「…………貴方と同じく、彼もまた闇の帝王が帰ってくると思つて居た人間の筈ですが」

「ダンブルドアも老いる。残念ながら。それだけ十四年の平和は長かったのだ。人の肉片や血痕、死んだも同然の狂った廃人達がそこら中に転がっていた時代など、光の陣営にとつて思い出したくも無い。頭では解つていても、心はそうではないのだ」

だが、と教授は両眼で僕を見つめた。

「何故だか、お前だけは本気で戦争を見詰めている」

「……………」

「未だ Hogwartzの生徒であるのに、あの戦争を知らない筈なのに、闇の帝王の脅威と報復を恐れる身では無いのに、それが起こればどうなるかを常に考えている。実際に戦争を経験した大人達が、命を狙われているポッターが何処か浮ついているにも拘わらず、お前だけが腰を据えて向き合おうとしている」

「…………戦争ですよ？ 真剣に考えるのが普通ではないのですか？」

「ならば、これから来る魔法戦争に関し、お前と似たような考えをした

者が居たか？」

僕は沈黙を守るしか無い。

アルバス・ダンブルドア——この教授に言わせれば、あの老人ですら甘いらしいが——を除けば、僕が会った中で同種の考え方をしていたのはただ一人。

クイリナス・クイレル教授。闇の帝王に憑りつかれ、彼の生存の事実とその力の脅威を、身をもって理解していた者だけである。

「儂が言うのも何だが、そのような常軌を逸した考え方を出来る者は真つ当な人生を送っていない。アルバスに問い質したが、流石に口を割らなかつた。個人的な事情だと言つてな」

「……それは当然ですよ。そして僕は、貴方にも口を割るつもりは無い」

「構わん。誰にだつて他人に暴かれたくない事は有る物だ」

教授は鷹揚に頷き、けれどもその瞳は爛々と輝いたまま僕を捉えている。

「クラウチについてもそうだ」

あの湖の畔で別れて以来、僕達の間で話題に上らなかつた者の名を口にする。

「十一月末を最後に、あの男の姿が公から消えた。お前はその事実を知っており、儂とあれの因縁を見てすら居るが、小賢しくも儂に対して全く問い質そうとしない。探偵気取りの子供であれば聞きたがるのが普通だ」

「気になつては居ますよ。しかし、貴方は教えてくれないでしょう」

関係性から期待せず、けれども教授は首を振つた。

「そうとは限らん。特に、お前が無関係で居られないかもしれない今の状況となればだ。『予言者新聞』を見たか？ クラウチの失踪に関して、ついに魔法大臣が動いた。もつとも、儂に言わせれば余りにも遅過ぎる動きであるのだが」

「……………」

無論の事、知っていた。

同時に面倒事が降りかかってくる可能性が高まつた事も。

僕の表情を見て、アラスター・ムーディ教授は軽く頬を緩めて笑う。「嗚呼、心配するな。クラウチの過去の魔法法執行部の肩書は、他の役人共と違って伊達では無く、非常に強力な魔法使いだった。魔法大臣は未成年の魔法使いに対して、余程の理由が無い限り注意を払おうとせんだろうし、生徒想いのダンブルドアも口を噤むだろう」

「……別に心配していませんよ。それは、僕にとって問題となりませんから」

「ほう？ 些事だど？」

「面倒事では有りますが、魔法省が必要と考えたのならば為されて然るべき事ですからね」

来るならば応じるだけだ。

協力するのは秩序を維持する為の義務と言えるのだから。

断言した僕に対して、教授は興味深そうな物を見る視線を向けて来た。余り心地良い視線では無く、それを振り払う為に僕は、誘われた通りの問いを口にする。

「……貴方が話題にしたので聞いておきますが、バーテミウス・クラウチ氏は服従の呪文に掛かっていたのですか？ あの後、貴方は確認に行った筈ですが」

「その問いに対して、儂は何も答える事は出来ん」

「ほら、やはり口を開いてくれないじゃないですか」

「違う。本当に解らんからだ」

やる気の無い僕の皮肉に、教授は逆に愉しげに笑った。

「儂は確認出来なかった。そしてそれだけでは無い。別に人間を従わせるのは服従の呪文が必須という訳では無いし、それ以上に、儂はそれを調べようとする過程で非常に面白い事を知った。これは公にされていない情報であり、当然ながらお前も知らんだろう」

勿体ぶった口調で有りながら、教授は隠す気は無さそうだった。

僕の反応を灰の肉眼と蒼の義眼で見詰めながら、何処かの薬学教授を思い出すような粘っこい口調でもって、その秘密を言葉に乗せた。

「闇の印が打ちあがった現場には、ポッター達が居た。それは良い。しかし、同時に居合わせた者が居る。ウインキーという屋敷しもべ妖

精だ。そして彼女はクラウチ家に仕えており、彼女の傍には杖が転がっていた」

「……それは」

大きな反応を示してしまったのは、教授の眼を見ていて解った。実際、教授は狂的な笑みを更に深め、しかしそれでも止まらなかった。

「尚且つ、彼女は魔法省の尋問無しに、クラウチが無罪同然に解放した。正確には衣服を与えられて解雇されるという罰を受けたがな。けれども、クラウチにとつては尋問されては困るような事情があつたのかも知れん。息子をアズカバンに送るような人間だ、どんな秘密が有っても可笑しくない」

「……その屋敷しもべ妖精は何処に？」

「実に驚くべき事に、何と Hogworts に居る。ドビーという屋敷しもべ妖精が共に連れてきたようだ。それを知った時は、儂も非常に驚いた物よ」

その言葉と表情は何処か道化染みていたが、だからこそ、その言葉は真実だと解った。この疑心暗鬼の闇祓いからすれば、それは余程有り得ない事だったのだろう。

「……アルバス・ダンブルドアが入れた訳ですか。当然、事情は詳細に聞いた上で招き入れているんですよね？ 魔法省も今ならば詳しく話を聞きたい筈ですが」

「残念ながら、それは非常に難しい。屋敷しもべ妖精は縛られている。強力な真実薬や高度な開心術を用いても、その秘密を暴くのは非常に骨が折れる。主人によって喋るなど明確に禁じられている事であれば、まず不可能だと言って良い」

その点こそ純血が彼等を重宝する最大の理由だが、と教授は付け加えた。

「……バーテミス・クラウチ氏が何かを隠していたのであれば、当然ながら口外を禁じていない筈も無いですよ。そして、そうでありながら、あの老人は Hogworts に入れている」

「儂も問い詰めた。ダンブルドアによれば、良からぬ行動を防ぐ為に

ドビーや他の屋敷しもべ妖精が見張っているようだ。そして、現在では飲んだくれていて、屋敷しもべ妖精としては役立たずになっているらしい。もつとも——」

「——この状況で、それが安心出来る訳も無い。ええ、僕達の認識は一致する筈です」

相も変わらず、不愉快極まりない老人だった。

最初から意図して招き入れた訳では無いだろう。

けれども、現状においても留め続けているとなると話が変わってくる。既に彼女は重要参考人だ。仮にホグワーツが彼女の身元を保証しているとしても、捜査機関の干渉を排除し続ける権限は校長には無いし、率先して協力して然るべきである。

「魔法大臣はバーテミウス・クラウチ氏の捜索に乗り出した。当然ながら、そのウインキーという屋敷しもべ妖精の事も把握しているでしょうし、闇の印に関して無罪放免としたならば、更に興味を持っている筈です。しかし、あの老人は引き渡す気は無いのでしょうか？」

「隠し続ける気までは無いようだが、そのようだ。御優しいアルバス・ダブルドアは、しもべに対して過酷な捜査が行われる事を非常に懸念している」

「……磔の呪文の使用がアズカバンでの終身刑となるのは、ヒトたる存在ではなく、a feeble human being 仲間である人間に対してですよね。いえ、屋敷しもべ妖精が魔法的に拘束されているならば、やはり口を開く事は不可能ですか」

結論付けた僕に、教授は耳障りな笑い声を上げた。

「すぐさまその発想に繋げるのは正しくスリザリンだな。そして、クラウチが消えた理由が犯罪であるかどうかは一応不明であるから、平和ボケした現在の魔法省にはそこまで出来ん。されど、多少『穏当』な真似を試みても可笑しくない。衰弱した者の抵抗力が弱まるのは、魔法族も屋敷しもべ妖精も生物である以上同じだ」

「それでも、やはり秘密自体は明かせないのでは？」

「しかし、全てを禁じるのは難しい。秘密に関する一切を口外する事を禁じて、禁じていない事は漏れ出るし、その中に推測の材料や、意

凶していない重要な情報が含まれている可能性は多い。おお、余り大っぴらに言える物では無いが、我々も散々利用したとも」

内容の割に声色は何処か愉快な響きを帯びていたが、眉を顰めるだけに留めた。

言葉は普通に通じてても、この教授が常人と違った世界に住んでいるのは何ら否定出来ないのだ。アラスター・ムーディ教授は現在も尚、戦場の中に生きている。

……そして教授が敢えて触れなかったか解らないが、一応、アルバス・ダンブルドアの判断を否定出来ないという考えも頭には有る。

その屋敷しもべ妖精は、消えたバーテミウス・クラウチ氏にかつて非常に近い立場に有り、今回の事件について何らかを知り得る位置にも居た。

つまり、“犯人” 或いはその協力者からすれば邪魔と成り得る存在であり、殺される危険が高い。それを考えればホグワーツで保護する必要性も認められ——加えて、状況によっては、“犯人” を誘い込む為の良い“餌” となるかもしれない。

考え込む僕に、教授はグルリと義眼を回した。

「これ以上は儂には言えん。実の所、喋り過ぎではある」

教授は義足の音を響かせながら歩みを進め、僕の方向へと近付く。そのまま殆ど僕の横を擦れ違うような恰好となり、しかし擦れ違いきる前に足を止めた。先程より遥かに近い距離で、互いの視線が交錯する。傷だらけな相貌から覗く蒼の義眼が、心の奥底を覗き込むかのように、僕を真っ直ぐと見詰めている。

「……ならば、何故僕に教えるような真似を？」

「限界を示す為だ」

その言葉は突き放すようでいて、何処か挑発的でもあった。

「お前は頭が回るが、しかし、お前も所詮は子供。雑な探偵ごっこで推理出来る事などたかが知れている。今回の件において、今の情報が重要である事は理解出来るだろう？」

「……………ええ。それくらいは流石に」

“犯人” に繋がるかは解らないが、無視出来ない情報であるのは確

かだ。

アラスター・ムーディ教授にも秘密が有るが、バーテミウス・クラウチ氏にもまた秘密が有る。そして恐らく、あの湖の畔での会話は少なからず関係しているのだろう。

別に僕でなければならぬ理由は無かっただろうが、何か意図が存在しなければ、奇妙なスリザリンを捕まえて滔々と話し込む必要もまた無かった筈だった。

「お前が興味と関心を抱く事は止められないだろう。だが、余り首を突っ込むな。儂を含めて大人は確かに動いている。そしてお前に今後面倒が掛かるような事が有っても、儂が最低限に留めるよう努力はしてやろう」

再度教授は歩み始め、今度こそ擦れ違った。

その足先が向いているのは、当然ながら僕が来た方向。故に僕はゆっくりと振り返り、遠ざかろうとする背中に向かって最後に問い掛けた。

「……今から教授は何処に向かわれるのです？」

「スネイプの所だ。少しばかり、話し合う事が出来た」

振り返らないままその答えだけを残して、教授は僕の下から去って行った。

王と召使い

可能性は高くはないとは思っていた。

それでも予測に入れていた事態が起こったのは、五月が終わろうとする頃だった。

フラァーから第三の課題が迷路の中で——外部から見えない形で——行われると聞いてから、そう日は経っていないかつただろう。それを僕に告げた時のフラァーの表情はそれはもう物凄い物だった。彼女がそれ以上何も言わなかったし、以降は課題について話題に上らせようとせず、何時も通りの下らない、しかし彼女にとっては重要らしい日常の話をするばかりだった。

僕の側も宣言通り既に触れる気は無く、一応過去の三校対抗試合において、第三の課題が迷路で実施された例が存在する事を確認はした。外部に内情が公開されないままに課題を行うのは珍しい事態では有るが、それだけで試合を中止すべき異常では無いのだろう。

ただ一点だけ、当時如何に運営が行われたかについて気になる部分があった。迷路においてどのような生物や障害が配置された程度の記載しかないし、そしてまあ、今回の優勝者の決定時には自動的に解る事でもあった。単に僕が気にし過ぎといふべきなのかもしれない。

ともあれ、後は第三の課題が起こるのを待つばかりである。

そう考えていたのだが、その『事態』が生じるかもしれない懸念を僕は忘れていた。

といつても、最初に思い描いていたのは二月頃、つまり三カ月も前であり、それだけ音沙汰がないのであれば、起こる事は無いだろうと考えていたから仕方のない事ではあるのだが。

だが、授業途中にミネルバ・マクゴナガル教授によって呼び出され、それと共に僕が今日会うべき来客が予告された事によって、かつての懸念が現実化した事を理解した。

ミネルバ・マクゴナガル教授が内容に口を噤もうとも、何が待ち受けているかを予測するのは難しくも無い。教授も僕が解っている事

を前提として動いている節も有ったが、流石に全てが御見通しという訳には行かない。問題は、何故今僕に会おうとする必要が有るのかという点なのだが、それは直ぐに知らされる事ではあるのだろう。

最早通いなれたと言っても過言ではない、ひっそりと壁に隠された校長室。

僕を先導したミネルバ・マクゴナガル教授が合言葉を告げ入口を開けた後、僕一人行くように促した。扉を潜り螺旋階段を上った先で待っていたのは、三人の大人。

一人は当然、この部屋の主であるアルバス・ダンブルドア。椅子に腰掛け、机の上に肘をおいて指を組み、僕には見慣れた険しい表情をしている最強の魔法使い。

もう一人はアラスター・ムーディ教授。壁を背にして、油断なく蒼の義眼を回している元闇祓い。ローブの中に手をつ込んでいるのは、杖を握っているからだろう。こちらは何故か楽し気で、口元に皮肉な笑みを浮かべている。

そして最後の一人、校長と教授に対して向かい合うように立っているのは、日刊予言者新聞の写真で見た事は有っても、直接会うのは初めてである人物。

縞模様のローブに黄緑色の山高帽という魔法界基準で普通の恰好をし、校長と元闇祓いと向かい合うように部屋の中央に立ち、気の良い笑みを僕に向けているその人間が誰であるかなど、この国の魔法界の人間で知らない者はまず居ない。

「やあやあ、授業を途中で抜けさせてしまつてすまないね。余りこういう事をしたくはないのだが、何分事が事だね。どうか気を悪くしないで欲しい」

この国の政治の頂点。

コーネリウス・ファッジ魔法大臣がそこに居た。

「良く来てくれたのう、ステファン」

「ステイブン、ですよ」

アルバス・ダブルドアの呼びかけに釘を刺す。

老人は少しだけ長く白い髭を動かしたが、それ以上の反応はしなかった。

この部屋の主である彼が魔法大臣を僕に紹介し、そして僕を魔法大臣に対して紹介する。そんな儀礼的でまどろっこしい初対面の挨拶を経た後、僅かな沈黙が訪れた。

解っていたが、楽しい話とは行きそうになかった。

黙っていたは何も進まないが、僕が促すまでも無かったようである。授業を抜けさせてまで呼び付けた以上、自ら話を切り出すのが大人としての責任だと感じていたのかもしれない。沈黙を破って口を開いたのは、コーネリウス・ファツジ魔法大臣だった。

……もつとも、その切り口は僕の予測の遥か斜め上を行つたのだが。

「ええと、何から話すべきかな。君は突然こうして魔法大臣の前に呼ばれた事に驚いただろうし、不安に思っているかもしれない。ああ、確かに、君は入学前に少々問題を起こして魔法治安維持部隊の人間に抵抗したとも聞いている。いや、安心してくれていい。子供が暴れた程度で前科を付ける程度に魔法省は狭量ではない」

瞬間、コーネリウス・ファツジ魔法大臣の姿が見えなくなった。

何か異変が起こったという訳では無い。僕が彼を認識出来なくなったのは、激情故に、視界が真っ赤に染まったからだ。

「確かに君の母君は国外で大きな事件を起こしているし、君の父君とて問題が有るような人物であるし、君の保護者として何時入国したか記録自体が無い。しかし、子供であった君に罪は無く、そもそも私個人としては、その後の事を考えれば省の対応には怠慢が有ったように――」

「コーネリウス」

今までで一、二を争う位には鋭い声だった。

アルバス・ダブルドアによる、強烈な制止の言葉。

……僕は初めて、彼に心底感謝したように思う。
たとえ相手が魔法大臣だったとしても関係無く、もう少しで杖を抜く所だった。

「……コーネリウス。彼の昔の事は今持ち出す必要が無いじやろう。魔法族の子供が感情に任せて魔法を暴発させた事についても、その後に彼の保護者が衰弱死した事についても、一切の事件性は無かった。そう記録されている筈じゃ」

「ダンブルドア、私もその事については問題として居ない。だが、予め説明と謝罪はしておくべきではないかね？ 彼は大切に想う人間を喪つたのだ。我々魔法省の対応に彼が疑念と嫌悪を抱いても何ら不思議は——」

Minister for Magic
「——魔法大臣」

非礼と解つていて尚、言葉を遮った。

息を大きく吸って、そして吐く。

改めて魔法大臣の顔を真っ直ぐと見据える。

こちらに向いた瞳の中に映っていたのは、慈愛と憐憫。突然この国の最高権力者に会う羽目になった生徒に対する、彼が理想と考える大人としての仮面。僕の過去を不用意に持ち出したが、それは単に少々無神経だっただけで、悪意が有った訳ではないらしい。

しかしながら、それを僕が好意的に受け取れるかは別の話だ。

「直々の御心遣いは有り難いですが、あの時来た役所の人間には概ね親切にして貰いましたよ。魔法省に一切の問題は有りませんでしたし、責任を問う気も有りません。まあこれは落ち着いて考えた後での結論であり、当時は違つたのは認めますが」

あの時は冷静でなかったし、今よりも子供だった。

まあ今も多少冷静では無いが、わざわざ彼が過去を掘り返したのも決して考え無しの行為ではないと判断出来る位には頭が冷えた。

仮に僕があ的事件で魔法省を嫌つていれば、今これからの魔法大臣の行動に大きな支障が出かねないのは明らかだ。僕に罪も責任が無いと前置きする事で、警戒心を解こうとする意図も有ったのだろう。だが、それは勘違い甚だしい。

多分、コーネリウス・ファツジ魔法大臣の性根は善良な人間では有るのだろう。

そして善良過ぎるが故に、元より他人を信用しない人間がどのように思考し、行動するかについて考えが及ばないのかもしれない。

「——ただ、遺憾ながら、僕の責任を勝手に奪うのだけは止めて頂きたい。彼女が死んだのは僕の自業自得であり、それを譲る気は一切無い」

そう言い切れば、この国で最も高位に有る魔法使いは、何故か大きくたじろいだ。

この魔法大臣は、僕に開心術士の心得が有るのは知らない筈である。けれども、僕と眼が合うのを避けるように、僅かに視線を逸らしている。

「用件を仰って下さい——と言っても、何の御用で僕が呼ばれたのかは予想が付いています。まさか、魔法大臣直々には思いませんでした」

「……何の事かね？」

「バーテミウス・クラウチ氏の事でしょう？」

魔法大臣は依然視線を合わせないまま大きく狼狽したが、まあ仕方のない事かもしれない。

アルバス・ダンブルドアやアラスター・ムーディ教授は僕を知っているが、彼は僕を知らない。彼にとっては突然の訪問と面会のつもりであり、僕がそれを三カ月以上も前に予期していた事など想像だにできなかったのだろう。

「と言っても、僕は何故今魔法大臣が来たのかまでは理解出来ません。バーテミウス・クラウチ氏が公から姿を消してから半年近く。貴方が捜査に乗り出してから三か月程です。彼が消える前に会ったスリザリン生の事を魔法省は把握していた筈ですが、捜査の眼は何ら向かなかった。だというのに、何故今なのです？」

問いと共に魔法大臣の眼を見ようとしたが、彼は視線を合わせないまま沈黙する。それを見て老人の方を見るが、小さく首を振られた。

故に答えは彼等二人では無く、今まで口を挟まなかったもう一人か

ら語られた。

「ほんの数日前、クラウドがホグワーツ内に現れたからだ」

「アラスター」

呆れたような呼びかけに、教授は軽く鼻で笑う。

「レッドフィールドは余りにも小賢し過ぎる。儂はこの小僧を教える上でそれを良く理解しているし、アルバス、それはお前も同意する所では無いか」

「だとしても、明かす必要のない秘密という物は有るじやろう」

「しかし我々はレッドフィールドに要らぬ負担を押し付けようとしているのだ。何ら説明も無いままに黙って受け容れるというのは、余りにも生徒に対し酷では無いかね？」

「……アラスター。まさか君の口からそのような言葉を聞くとは思わなんだ」

「入れ込んでいると言いたそうだな？　しかし、ファツジの提案に反対したのはアルバス、お前の方だろう。儂は一切反対などしなかったではないか」

両者の言い争いは教授に軍配が上がったらしい。

老人は身を引くように椅子の背にもたれかかり、再度机の上で指を組んだ。それ以上口を挟む気は無いという意思表示だろう。そして教授が改めて僕へと向き直ったのを待って、僕から口を開く。

「……バーテミウス・クラウド氏がホグワーツに現れた。その事自体に何の問題が有るといいます？　彼は三大魔法学校対抗試合の審査員であり、学校に現れるのは不自然ではない」

「わざわざ解り切った事を言うのは確認のつもりか？　余り賢いとは思えんが」

アラスター・ムーディ教授は邪悪に笑う。

「つまり現れ方が拙かったのだ。クラウドを発見したのはポッターとクラムだったが、奴等の証言によれば、クラウドはまるで長旅をしてきたようにボロボロで、見るからに正気を喪っていたらしい。三カ月も失踪していれば自然と言えば自然ではあるが」

「……らしいという表現は、要は彼はまだ保護されていない訳ですか」

「その通りだ。クラウチの下にクラムを残してポッターがダンブルドアを呼びに来た訳だが、ダンブルドアがその場を訪れた時には——そして儂が少し遅れて辿り着いた時には、気絶したクラムだけしか居なかった」

何処で発見されたかという場所を初め、情報が幾つか抜け落ちていく。

それは部外者に対して過度に情報を漏らさないという考えも有るのだろうが、どちらかと言えば教授が日々説明する真似は不要だと考えているのが大きいのだろう。実際、教授の言葉だけでそれがどれ程の異常事態であるかを悟るには充分だった。

「……バーテミウス・クラウチ氏が消えた。それは良いとして、その場にはハリー・ポッターが少し前まで傍に居て、ビクトール・クラムは気絶していたと？」

「ああ、その通りだ」

「それはまた——」

不可解だ、と言葉に出さずに口の中だけで唱える。

“生き残った男の子”の命を奪うならば絶好の機会だった筈だ。

「……話の流れとしてビクトール・クラムが自分に杖を向けたという訳では無いのでしょうか？　バーテミウス・クラウチ氏がその下手人だという可能性は？」

「ななな、何を馬鹿な——」

「儂の見立てになるが、無い。まあ聞く限りではクラム襲撃犯であるのは違いないらしいが、それを為したのは別の人間の意図によるものだろう。恐らく服従の呪文が使われたな」

不満の声を挙げかけた魔法大臣の言葉を切って捨てつつ教授は解答する。

そして問い掛けた身でなんだが、僕も同感である。

バーテミウス・クラウチ氏が“犯人”であるのなら、約三カ月もの間失踪し、突然ホグワーツに現れる必要は無い。彼は三大魔法学校対抗試合の審査員だったのだから、工作をするのにわざわざ怪しまれるような動きをする理由が無いのだ。

つまりそれ以外——既にホグワーツに潜んだ誰かが関与した可能性が高い。

一応、ハリー・ポッターが立ち去った後にバーテミウス・クラウチ氏を消した「犯人」が追いついたという可能性が考えられるが、しかしそうであればビクトール・クラムを気絶させた事に疑問が生じてしまう。

要はビクトール・クラムに対して先に服従の呪文を掛けた後、悠々とバーテミウス・クラウチ氏を始末して何事も無かったように装わせれば——たとえばバーテミウス・クラウチ氏が抵抗し、逃走したとビクトール・クラムに証言させれば良かっただろう。正気を喪った人間が不可解な行動をするのは不自然ではなく、寧ろ気絶したビクトール・クラムという物的証拠をわざわざ残す事で、彼等に危害を加えるバーテミウス・クラウチ氏以外の第三者が近くに居たのだと示唆するような手段を取るの是不合理である。

それにも拘わらず、バーテミウス・クラウチ氏を消した人間はハリー・ポッターを傷付ける事は無かったし、ビクトール・クラムにしても気絶させて放置した。恐らく「犯人」は、何よりも先にバーテミウス・クラウチ氏に呪文を掛ける事を優先した。

……何故？

教授に視線をやれば、低い笑い声を上げた。

「儂にも解らん。ポッターを殺すつもりならば、これ程の機会は無かっただろうに」

「殺す……！ 殺すだど!?!」

教授の言葉に、魔法大臣は気分を盛大に害したらしかった。

「そんな恐ろしい事が有る筈無いだろう……！ 今の魔法界で、このホグワーツであの子を殺そうとする人間が居る筈も無い!」

「ゴブレットにポッターの名を入れた闇の魔法使いが居るだろう」

「しかしムーディ！ 貴方はハリーの名前が出て来たのは、ハリーを殺そうとしているからだとして以前に推理しただろう！ けれども今までも、今回も、ハリーに危険は及ばなかった！ であれば、貴方の推理とやらは見当違いで、貴方の残った眼は節穴だったという訳だ!」

「その見解を儂は撤回したつもりは無い。勿論、一つ残った眼を取り替える気もない」

熱くなる魔法大臣に対し、教授は冷ややかに言った。

「寧ろファッジよ、お前にとっては何の説の方が都合の良い筈だが？ポッターを殺す為に犯人が名前を入れたのでなければ、二人の代表選手を出させてホグワーツを勝たせようとした犯人が魔法省に居る事になる訳だからな」

痛烈な皮肉に対して魔法大臣は更に顔を真っ赤に染め上げたが、更なる応酬がされる前に僕は質問を差し込んだ。

「その正気を喪っていたバーテミウス・クラウチ氏は最後に何と言っていました？」

良い大人の醜い争いに興味は持てない。

僕のそんな心境が視線にも表れたのか、魔法大臣は分別有る大人らしく素直に黙り込んだ。一方で教授は油断ならない目付きをして僕の方へと顔を向けた。

「ふむ。儂としては口を開く事は吝かでは無いが——」

無精髭を撫でながら、教授は老人の方を一瞥する。

案の定、アルバス・ダンブルドアは渋い顔をしながら首を振った。

「……成程、知り過ぎだという事ですな」

まあ、部外者の子供に与える情報としては十分過ぎる程では有るか。

失踪が続いていたバーテミウス・クラウチ氏が突如として現れ、そして消えた。証言者は代表選手二人であり、偽証の可能性も完全に排除して良いだろう。

魔法大臣がわざわざ出張するには十分過ぎる程の異常。しかも消えた場所がホグワーツともなれば、過去にバーテミウス・クラウチ氏に接触した人間から話を聞きたいと考えた所で何ら不自然は無い。僕が呼び出されるのも当然だ。

けれども、大体事情は把握した。

今僕がどう振る舞う事が、最も利益が有りそうだという事も。

「ステファン」

「ステイブんだ、と言った筈ですが」

流石にアルバス・ダンブルドアは勘が鋭い。

けれども、ホグワーツ校長風情は今御呼びではないのだ。

対面すべきはこの国で最も高い地位に位置する、否、位置しなければならぬ存在。コーネリウス・ファッジ魔法大臣にこそ語り掛けねばならない。

「バーテミウス・クラウチ氏はホグワーツ内で消えた。そして、ホグワーツ内では姿現しも姿眩ましも出来ない。三校試合の厳戒態勢を鑑みれば、校内の煙突飛行も制限され、監視されているでしょう。そのような状況の中で、彼は忽然と消えてしまった」

この事実を踏まえて、部外者が連想する事が一つ存在する。

「——つまり、去年のシリウス・ブラックと同じ事が起こったという事ですすね」

僕の言葉に対する反応は三者三様だった。

アルバス・ダンブルドアは余り表情を動かさずとも苦々しさを抱いているのは明らかで、アラスター・ムーディ教授は酷く興味深げに義眼を煌めかせながら回し——そして、この国の魔法界の頂点に位置する人間は、居心地が悪そうに沈黙するばかりだった。

けれども、三人とも予想外の事を指摘されたという反応では無かった。

それでいて、今更周回遅れの議論をするなどという返答が寄越されなかったのは、彼等が気付きながらも尚、それが絶対に対立を生むが故に指摘しきれなかった事実である証だった。

しかし、部外者である僕にとっては、そんな微妙な均衡など知った事では無かった。

「ええ、当然ながら聞き及んでいますよ。公には報道されていませんが、ここで起こった事ですからね。ホグワーツ内でシリウス・ブラックが忽然と消え失せた事によって、我がスネイプ寮監は大層御怒りで

した。その事を魔法大臣は御存知ですか？」

「……知っているとも。他ならぬ私が、このホグワーツに居た」

当然、それは僕も知っている。

ハーマイオニー・グレンジャーから直接聞いたのだから。

「そして今年、バーテミス・クラウチ氏がホグワーツ内で消えた。ハリ・ポッター達が嘘を吐く動機も利益も無い。となれば、成程、ホグワーツの警備には大きな穴が有り、死喰い人が暗躍する隙が依然として存在するようですね」

「今回ブラックが校内に入り込んだという事は有り得ぬ。去年を受けて儂は更に防備を追加した。何より、君はそれが間違いである事を十分理解している筈じゃ」

「理解？ 何を理解すると言うのです？」

眼鏡の奥から冷やややかな蒼の瞳が僕を貫く。

しかし既に見飽きたその敵意は、何の脅しにもならない。

「そもそも何れであろうと同じ事だ。違いますか？」

シリウス・ブラックであろうとピーター・ペティグリウであろうと。

世間にとっては、大量殺人を犯した凶悪な死喰い人が逃げ出した事には変わらないし、当然、どちらが闇の帝王を復活させようが同じだ。シリウス・ブラック達に個人的な感情を抱いていない人間にとっては、そのような真実など全く関心を持ち得ない。

そして世間と少々意味が違えど、僕達にとってもやはり同じだ。

闇の帝王。

復活が近い唯一絶対の脅威の前では、彼等は殆ど無視して構わない要素である。

「客観的で、確固たる事実だけを言いましょう。一昨年から去年に掛けて、ホグワーツ校長である貴方はシリウス・ブラックの侵入も、その逃亡も止められなかった」

「……………」

「また裁判によって確定された事実によれば、シリウス・ブラックは死喰い人です。そして去年の夏。クイディッチ・ワールドカップで死喰

い人が行進し、闇の印が上がりました。どちらに関与しているにしろ、彼が脱獄した翌年にそれらが起こったという点は見逃せない」

チラリと魔法大臣を一瞥すれば、彼は僕の視線を避けるように身動ぎした。

それを見て内心に湧き出て来た感想を敢えて捻り潰し、再度老人の方へと視線を戻す。

「シリウス・ブラックは国外に居ると報道されているのは僕も承知していますよ。しかし、彼がホグワーツ校内の、鍵の掛かった部屋から忽然と消え失せる能力を持っているのは去年判明しています。故に、今回も彼がバーテミウス・クラウチ氏を同様に消したと考えるのは自然でしょう」

「儂はそう思っておらぬ。そもそもブラックが何故、バーティを消すのかね？」

「ホグワーツに侵入して肖像画を切り裂き、生徒に馬乗りになってナイフを突き立てようとする狂人の考えを理解する必要が有りますか？　そして彼をアズカバンに送ったのは、他ならぬバーテミウス・クラウチ氏だったと記憶しています。恨みを持つには充分では？」

御互いが茶番と解り切っている応酬。

だがそれでも、この場でする事に僕は意味を感じており、そしてこの老人は僕にさせたくないと考えていた。だが横目で視界に入れてあるコーネリウス・ファッジ魔法大臣は、眼の前で行われている事態に着いて行けず、オロオロとした様子を見せるばかりだった。

「……では、アルバス・ダンブルドア。貴方は、シリウス・ブラックが現在ホグワーツ周辺に潜伏している事は決して有り得ないと御考えですか？」

「儂は根拠のない推測を口にする事は好まぬ」

「他ならぬ貴方の推測ならば、確実に無かるうとも大いに賭ける価値が有ると思えますがね。この国の魔法界で貴方より賢い人間など、数える程しか居ない筈ですから」

回答は返って来ず、そして僕はアルバス・ダンブルドアの性格を把握している。

この老人は居ないとは言わず、質問から逃げる事を選んだ。つまりは今現在、どうやらシリウス・ブラックは国内に居るようである。それも恐らく、ホグワーツから遠くない場所に。

去年の騒動の元凶であるのは確かなので、シリウス・ブラックとハリー・ポッターの関係性が余り宜しくない可能性も有ったが、そういう訳ではないらしい。

「——ちなみにですが、魔法大臣」

老人から視線を逸らして、魔法大臣へと視線を戻す。

たかが生徒の視線を前にして尚、彼はピクリと身体を震わせた。

「今の僕の見解は、去年と今年で同じ侵入手段が使われた事を前提としている。だが、仮に違うのであれば——例えば貴方が去年シリウス・ブラックが逃げ出した方法を御存知であれば話が変わってくる訳ですが、どうでしょうか？ スネイプ寮監は、去年に関してはハリー・ポッターらが関与したと御考えでしたが」

「アー、それは……その、子供に対して易々と話せる事では無い」

「……つまりは魔法省の機密だという事ですか？」

「あ、ああ。そう考えて貰って構わない」

歯切れ悪く回答を拒絶した大臣からは、何かを隠している気配は全く感じない。

彼の立場からすれば、ホグワーツ生に隠すべき重要事を持つていて然るべきだというのに、場当たり的に誤魔化している以外の反応には見えない。

「……では、善良な一市民として聞きますが、僕からすれば、シリウス・ブラックがバーテミス・クラウチ氏の失踪に関与した事を疑う証拠は揃っている。つまり去年と同様に、凶悪な殺人犯から僕達ホグワーツ生を護る為、再度校内に吸魂鬼を入れて頂けるのですよね？」

「ステファア……ステイブーン。儂はあの生き物がホグワーツに入る事を許可せぬ」

「貴方には聞いていませんよ、ホグワーツ校長。そしてホグワーツ内は無法地帯では無く、魔法省が施行した法律が当然及ぶ筈だ。故に僕は魔法大臣、この国の頂点に聞いています」

吸魂鬼嫌いのアルバス・ダンブルドアは僕の求めに不快さを隠そうとしなかったが、僕にとつては意外な事に、更に不快を隠さなかったのはアラスター・ムーディ教授だった。

だが、二人とも言葉を差し挟まず、魔法大臣の言葉を待った。

この場に居る三人の視線が一人へと向き、他から助けは得られず、問いからも逃げられないと悟った彼は渋々答えを口にした。

「残念ながら、それは出来ない」

……それは期待通りに、期待外れの答えだった。

「アー、君の言いたい事も理解出来る。しかし、去年吸魂鬼が生徒を襲おうとしたというのは我々にとつて無視出来るものではないし、更にはブラックは吸魂鬼に警備されたホグワーツに侵入し、その上逃げおせたのだ。要は遺憾ながら、彼等は役立たずだった訳だ」

「――」

「そして何より海外の高官には吸魂鬼を嫌う人間というのは少なくない。三校試合の結果を見る為に、第三の課題にはポーバトンやダームストラングからも客人が来る予定だ。だから、今のホグワーツは勿論、第三の課題の警備に吸魂鬼を充てるという事は決して出来ない」

「……要は今回、一番問題であるのは国際的な体面。それ故に第三の課題の警備に際しては吸魂鬼を使えないのであり、それ以上に大きな理由は無いという訳ですね」

「そ、それはどういう意味かね?」

「言葉通りの意味ですよ」

食い気味に問い掛けて来た大臣に微笑みかける。

解らないならばそれで良い。いや、良くはないが、納得はした。

「確かに世間的な評価を考えなかったのは僕の失態であり、吸魂鬼を入れれば良いというのは安直な発想でした。どうか御許し下さい」

「あ、ああ。納得してくれましたのであれば……私は別に構わん」

頭を軽く下げるが、その寸前に老人が顔を歪めているのが見えた。

当然、僕は吸魂鬼を校内に入れられるか否かに余り関心が無かった。

現在の状況を動かさしうる不確定要素が増えるのは歓迎だったが、駄

目で元々。そして、真に知りたかった事は今の遣り取りで十分知れた。

あろうことか。

この魔法大臣は、（ハーマイオニー）生徒に貸し出された逆転時計の事を知らないし、ヒツポグリフとシリウス・ブラックの逃亡経緯、ポッター家の惨劇の真実についても知らないのだ。

逆転時計によって時の流れを変える事は、必ずしも不可能ではない。

Time Turner 時間を引つ繰り返すモノという名称は、何ら誇張でも偽りでも無い。

Hour Reversal Charm 時の反転呪文を使うに際して、『過去』や未来の自分自身を殺してしまった例が存在するという警句が存在するように、或いはエロイーズ・ミンタンブルが時間逆行により大勢の人間を産まれなかつた事にしたように、逆転時計にはイゴール・ノヴィコフが唱えた首尾一貫の原則は必ずしも適用されない。

そもその話、時間が強力な復元力を持ち、時間旅行さえも歴史の一部であり、故に過去に戻つた人間が如何なる行動をしようとも本来の歴史を変える事が出来ないというならば、究極、法律による逆転時計の規制は不要とすら言える。

時間を変える事自体が不可能ではないからこそ、その危険が歴史的に証明されてきたからこそ、逆転時計の使用は魔法法によって厳格に制限され、使用の際にも過去の人間に干渉してはならない等の様々な規則が設けられ、賢明なる魔法使いは使用自体を自制する。

要するに、"シリウス・ブラックが生きている現在の歴史"が最初から正しい歴史だったという保証は無く、彼が死んでいるのが本来の歴史だったという可能性は一切排除できない。

今現在時間の流れに歪みが生じていなかろうとも、ハリー・ポッターとハーマイオニー・グレンジャーが禁忌を犯したとみなす事は、本来在るべき歴史を変えたが故に処罰されるべきだとの主張は決して不合理ではないのだ。寧ろ魔法大臣は、法の擁護者として正しく彼等を処罰しなければならない。

バーテミウス・クラウチ氏の言葉が脳裏に蘇る。

『アルバス・ダンブルドア。彼こそが、我が国の歪みだった』

咎める視線を老人へと向ければ、彼は真正面から受けて立った。

心の接触を通して伝わって来るのは、コーネリウス・ファッジ魔法大臣は決して認めないし、信じもしないし、知れば間違いなく保身に走るだろうという主張。

けれども、それに対する僕の主張もまた解り切っている。本人の資質がどうであろうと、この国の頂点に対して通すべき道理が存在する筈だった。

シリウス・ブラックの逃亡幫助は歴とした違法行為だ。

冤罪囚だから逃がしても罪に問われないという法は、何処の国にも存在しない。私人の独断をもって、警察機関、裁判所、そして世間の安寧を乱す事は許されないからだ。

だがそれでも尚、^{グリフィンドール}騎士たらんとして、自身の罪と罰を覚悟の上でシリウス・ブラックを逃がす事が正しいと主張するならば、それはそれで一つの在り方である。同胞愛の為にしばしば法を逸脱した手段を用いる^{スリザリン}貴族も、その行為に多少の不愉快さを覚えども尊重はするし、場合によっては彼等の擁護者となる事すら厭わないだろう。

しかし、危機が去ってからも何ら後始末をしないというのであれば別の話だ。

どうせ信じないからという子供じみた理由で真実を語る口を閉ざし、シリウス・ブラックの^{吸魂鬼の接吻}即時処刑の危険が無くなった後も真実を語る事も無く、自身の犯した罪と責任から逃れ続けるというのであれば、それは余りにも反道徳的である。

そうであれば、この老人が何れ魔法大臣——否、コーネリウス・ファッジという個人から大きなしつぺ返しを受けたとしても文句は言えない。アルバス・ダンブルドアが彼に対して信頼も忠誠も誠意も示さなかった以上、彼がそれらを返す義理も全く無いからだ。

そして今回の事件の厄介さも、この魔法大臣には伝わらない。

死喰い人の行進。闇の印。あれらが何故あの時生じたのかをシリウス・ブラックにしか関連付けられず、今回のバーテミウス・クラウ

チ氏の失踪についても、シリウス・ブラックを第一容疑者としは見れない。その裏にちらつく闇の帝王の影を見る事は出来ない。

「アルバス・ダンブルドア。これは僕の推測になりますが、魔法省高官にして三校試合の運営責任者の一人、そして審査員でもある彼が不可解な失踪を遂げた以上、貴方は今直ぐ三校対抗試合を中止すべきと主張したでしょうね」

「……そうじゃ」

重々しく発された返答に、何の驚きも感じなかった。感情自体が動かなかつた。

「そして魔法大臣……いえ、大臣。貴方はそれに応じられないと言いつ返したでしょうね」

わざわざ訂正した呼称に対して何らかの反応を示す事を多少期待したが、コーネリウス・ファッジ大臣は一切気にならないらしかった。僕の内心の変化を他所に、彼は小さく頷いた。

「……当然だ。確かにハリーの参加から始まり、良くない事が続き過ぎていく。しかし、ここまで来て自国の都合で一方的に試合を中止しては、私は支持を喪つてしまう」

コーネリウス・ファッジ大臣が競技続行に固執するのは当然だ。

三大魔法学校対抗試合は三校の協力によって成立する国際的行事であり、一校の校長が中止を主張しようとも、他の二校の校長は現状中止の必要性までは感じていないだろう。バーテミス・クラウチ氏にしても一応行方不明のまま、未だ死亡が確定した訳では無い。それにも拘わらず中止を強行すれば、各所から大きく非難を受けるのは眼に見えている。

何よりこの大臣にとっては、三百年振りに三大魔法学校対抗試合を復活させたという政治的功績は是が非でも欲しいのだろう。それをもつてすぐさま支持率が上がる訳では無いが、その唯一無二の功績をもつて歴史に美名を残す事は可能だからだ。

……無論、それはあくまで三校対抗試合が無事に終了すれば、だが。「ステイブン。君はどちらが正しいか解っている筈じゃ」

良心に訴え掛けるような老人の言葉を僕は無視した。

解っている。アルバス・ダンブルドアが絶対的に正しい。

去年の夏から不可解な事だらけであり、しかしその中核に三大魔法学校対抗試合が有る可能性は非常に高い。特にバーテミウス・クラウチ氏は、三校試合の準備と運営に深く関与している面からも、今回ホグワーツに現れた事からしても、大きな鍵を握っている筈である。万全を期すのならば、今からでも形振り構わず問答無用で中止するのが正しい”。

ただ、正しい事だけでは世の中で回らないし。

「既に手遅れだ。それは貴方が理解しているのでは？」

「……………」

アルバス・ダンブルドアは黙り込む。

唯一中止する機会が有ったとすれば、それは最初の時。四人目の代表選手の誕生という、大きな規則違反が露見した時だけだった。

炎のゴブレットの魔法契約を破った際に、どんな罰が降りかかるのかは解らない。

しかし、三校対抗試合の立候補ノミネートに要求される儀式は、自身の名前を入れる程度の軽い物であり、血肉も杖も使わない。仮に”犯人”がハリー・ポッターによる直筆の署名を何処からか手に入れたとしても、他代表選手と違い、三校対抗試合に参加する意思をもって署名や投票行為をした訳でも無いだろう。

つまりは当時の契約の強度は知れていた筈で、ハリー・ポッターが多少の悲劇と不幸に見舞われて聖マンゴ魔法疾患傷害病院にでも叩き込まれるのを許容するならば、魔法契約解釈の余地逃げ道は幾らでも有ったと思える。

けれども、ハリー・ポッターは既に第一、第二の課題に参加してしまっただ。

三校対抗試合は代表選手のみが参加出来る祭事であり、逆に言えば彼が三大魔法学校対抗試合の中で戦ってしまった以上、彼は代表選手以外の何者でも無い。当然ながら、炎のゴブレットの拘束力は強化され、途中離脱は非常に困難となっているだろう。

「ハリー・ポッターのみを外せるというならば別です。ここまで来て

彼を排除するのは生徒に不平不満は出るでしょうが、彼は本来居てはならない人間だ。道理は通っている。しかし魔法契約破棄の為に全てを中止しろというのは、最早道理が通らない」

中止出来たのは精々第一の課題十一月二十四日まで。

それ以降は、既に止める選択肢など与えられていない。

「それとも、貴方が今からでも責任を取りますか？」

挑発の意思を籠めて、アルバス・ダンブルドアを真正面から睨みつける。

「年齢線を間違つて未成年者を参加させ、バーテミウス・クラウチ氏は職務放棄し、今回彼の保護も失敗した。三校試合の課題や運営の秘密が漏れたのではないかという懸念も有りますし、国際的クイディッチ選手のビクトール・クラムが襲撃されたという醜聞も有る。校長の首一つが飛ぶ事に不自然さは全く有りませんし、それと引き換えであれば、問答無用での三校対抗試合の中止も能うでしょう」

炎のゴブレットの魔法契約さえどうにか出来るならば、僕の見た限り通ると思う。

オリンペ・マクシム校長は既にハリー・ポッターに好意的であり、腕の印に戦々恐々とするイゴール・カルカロフはこの国をさっさと出たいと思っている筈だ。両校長共に、何が何でも最後まで三校対抗試合を完遂しなければならぬとまでは考えておらず、本国への適当な口実——たとえばアルバス・ダンブルドアの失脚——さえ用意してやれば、普通に中止を飲むだろう。延期くらいならば余裕そうですらある。

彼等四人の決着を付けるにしても、必ず三校対抗試合の舞台でやらなければならないという道理は無い。彼等が代表選手Championとして相応しい事は、あの試合を見ていた三校の生徒であれば既に知っている。何れ別の機会で行われるならば文句は出まい。

「——君は、今すぐ儂が辞めるべきだと言うのかね？」

「僕は貴方を辞めさせる権限を持つ Hogwーツ 理事では有りません。彼等が何も言わないのであれば、貴方が校長である事に文句は無い。無論、心の中で思う事は別ですが」

コーネリウス・ファッジ大臣が魔法大臣という職に固執しているのは解り切った事だ。

今現在、世間での彼の支持率の低下は激しい。

去年はアズカバンから初の脱獄囚を出し、ホグワーツに吸魂鬼を入れないながらも尚取り逃し、二年近く逃亡を許し続けている。そして今年にはクイディッチ・ワールドカップという全世界の注目が集まる場において、死喰い人の行進と闇の印の打ち上げを許し、更にはハリー・ポッターを四人目の代表選手として参加させてしまった。

当然この国の魔法界の頂点に位置する彼は国内外問わず大きなバッシングを受けており、最早辞任も秒読みでは無いかと言われている。

全ての責任が彼に存在する訳でも無いし、客観的に見ても運が悪かったに過ぎないと思うのだが——民主主義の弊害として、彼の地位と指導力は民意によって担保される。それが無くなってしまえば彼は職を辞さねばならない。

わざわざバーテミウス・クラウチ氏の捜索に乗り出したのも人気取りの為に過ぎず、しかし今まで何の成果も上げられていない。そんな状況では彼が焦るのも当然であり、職にしがみつきたくもなるだろう。

しかしそれは、アルバス・ダンブルドアの方とて強くは言えないのではないだろうか。

三年前は闇の魔法使いの暗躍を意図して見逃して学期末にハリー・ポッターを医務室送りにし、二年前では四人の生徒と一人のゴーストを石化させた上でやはり学期末にハリー・ポッターを医務室送りにし、一年前はアズカバン脱獄犯の侵入と逃走を許したのみならず、教師として雇っていた狼人間を満月の晩に暴れさせた挙句に今度はロナルド・ウィーズリーを学期末に医務室送りにした。そして今年は先の通りである。

それにも拘わらず、アルバス・ダンブルドアは校長職を喪わず、一教授に降格すらしない。

二年前ルシウス・マルフォイ氏の脅迫に屈した負い目がある理事会

を都合良く利用し、殆ど何の責任も取る事無く、その地位に留まり続けていく。

この老人は、ホグワーツ校長という職に恋々としている。

闇の帝王への対抗の必要性という事情もあるだろう。だがそれ以上には、彼にそうさせているのは、少なくとも僕には、彼が愛すべき子供を卒業まで見守りたいという、酷く身勝手な我欲に基づくようにしか見えなかった。

闇と光

「——アルバス。随分とまあ感情的になつてゐるでは無いか」

冷や水を浴びせ掛けるように横から掛けられる声。

その声の主は、言うまでもなく、蒼の義眼を回す元闇祓い。口元は大きく歪められ、愉快な心中を隠そうともしていない。彼の輝かしい経歴を知らなければ、今にも人を殺そうとしている闇の魔法使いにしか見えなかった。

「しかし己むを得ん事では有るだろうな。物を知らぬ若僧によつて文句を付けられれば、如何に大人だろうと、いや大人であるからこそ我慢して居られる物では無い」

「……アラストー。君の方は非常に楽しんでおるようじゃな」

「当然だ。アルバス・ダンブルドアに対して真正面からここまで言える人間がどれだけ居るのやら。それが若き故の蛮勇だろうと、この国、いや世界を探しても類を見ないだろう。まあだからこそ僕は、スリザリン生である事に眼を瞑つて教えても構わないと感じた訳だが」

低い笑い声と共に教授が肯定した後、顔を向けるのは大臣の方向。「して、ファッジよ。レッドフィールドの疑問に付き合つてやる事が悪いとは言わんが、こやつを呼びつけた以上、頼み事が有つたのでは無いのかね？」

僕達の会話に口を挟まなかったコーネリウス・ファッジ大臣は、教授の呼び掛けで漸く我に返つたらしい。ただ、それが良かったかどうかは、顔面の傷を更に歪ませて笑みを大きくする教授を見ていれば判断が付かなかつた。

「もっとも、こやつがどれだけ我が強い子供であるかは今見た通りだ。授業中、儂が掛けた服従の呪文に抵抗してみせる位だからな。お前の提案に儂は賛同したが、是が非でもそうせねばならんとまでは考えておらん。今から撤回するとしても別に構わんぞ」

「そ、そうだな。確かに用件を済ませねば——いや、待て。服従の呪文を掛けただと？」

「ああ、それがどうかしたか」

領き掛けて愕然とした大臣と、平然とした態度で領いた狂人は酷く対照的である。

それが大臣にとっては挑発のように見えたのだろう。教授の言葉が漸く脳に染み込んだのもあってか、彼は再度顔を赤くして怒鳴り声を上げた。

「貴方は当然御存知だろうが、服従の呪文を人間に掛けるのは違法だ！ 確かに戦時中は例外的に闇祓いにその使用が認められたが、相手は死喰い人だけだ！ しかし今は戦時では無く、貴方は元闇祓いであり、そして彼はホグワーツの生徒なのだぞ！」

「おお、その程度の事は儂はよく知っておるとも。かつて儂も当事者だったからな」

「ならば——」

「だからそれがどうしたと言うのだ」

「なっ……!?!」

突き放した悪びれなさに、一瞬大臣が硬直する。

そしてその隙は、この場においては致命的でも有ったのだろう。ここは元より理性的な政策議論の場では無く、相手は「マッドアイ」ムーディなのだから。

「闇の魔術に対する防衛術の授業において、その闇の極致を教ええずして何を教える？ 許されざる三つの呪文。先の魔法戦争で最も人を壊し、殺してきた呪文がどれだけ凶悪で、破壊的で、油断出来ぬ代物かを実感せずして、一体何を防衛出来るといえるのだ？」

「せ、生徒に恐怖を与えるような呪文を教える事が論外だろう！ ましてや生徒に服従の呪文を実際に掛けてみるなど正気の沙汰では無い！」

「何故だ？ 鍋の熱さを知らねば不用意に触れる阿呆が出るように、禁呪が齎す恐怖を真に教えねば戒めにならん。そして服従の呪文を掛ける事が正気では無いだと？ 儂は正気だからこそ体験させたのだがな」

嘲笑と共に教授が大臣に近付けば、彼は圧倒されたように一歩下がる。それを認識した教授は、更に楽しげに笑い声を上げて一歩近付い

た。

「服従の呪文を破れさえすれば、魔法を掛けて安心した相手の隙を突き、命を拾える可能性が高まるというのが想像出来んのか？ 特に服従の呪文は許されざる三つの内、慣れによって抵抗する事が可能であり、尚且つ肉体と精神に大きな後遺症を残さない唯一の呪文だ。破るのは資質と努力が必要だが、試してみるに越した事は無いだろう」

口元は未だ笑みが張り付いていたが、その瞳は一切笑っていない。「嗚呼、実の所、抵抗出来る生徒はほぼ居なかった。しかし、儂に失望は無い。自分が服従の呪文に抵抗出来ないと知るのは得難い経験で、学習だ。闇の魔法使いに呪文に掛けられる事が事実上死を意味すると真に理解しているか否かで、危機への咄嗟の対応に差異が出るからな」

「っ！ 生徒がそのような事を知っている必要は無い！ 防衛術なのだから、生徒にはもつと役に立つ呪文や、逃げ方を教えれば——」

「百の呪文を知っていようが一の気概が無ければ役に立たん。そもそも逃げるだど？ 魔法法執行部隊に居た割に随分と甘つたるい言葉を宣う物だな、ファツジよ」

教授は最早、その表情から侮蔑を隠そうとしなかった。

抑揚を付けずに紡がれる言葉は、しかし逆におどろおどろしさしか感じない。

「逃げる事だけを考えるならば、本来杖一本有れば足りる。儂等魔法使いはそれだけで呪文により守られた場所や、相手が知らない場所へと移動出来る」

「ムーディ！ 姿現しをもつと早くから教えろというのか!？」

「違う。免許は馬鹿げた物だと思っておるが、姿眩ましは相応に危険で高度な呪文だ。基礎を固める事無しに早く教えた所で憶えられん。一年坊主に教えるなど時間の無駄だ」

……大臣の反駁を一蹴した教授が何を言おうとしているかは想像が付いた。

姿眩ましと姿現しに限った事では無い。魔法使いの長距離移動手段としては、他にも移動鍵や煙突飛行がある。電車や車、自転車など

の道具に加え、更に距離に比例する時間を追加費用^{コスト}として要求される
マグルとは違う。魔法使いは、いわば瞬間移動に等しい行いを可能で
あり、それにも拘わらず——
「儂が言いたいのはな、ポッターやロングボトムが何故犠牲になった
かという事だ」

——あの魔法戦争は大勢の死人を出した。

「彼等が姿眩ましを知らなかったとでも？ 護るべき赤子を忘れ、最
初から無謀にして堂々たる決闘を選んだとでも？ まあポッター達
の方は相手が悪過ぎた訳だが、基本的に闇の魔法使いはな、最初に相
手が逃げられぬようにして殺すものなのだ」

一つ残った瞳には爛々と、殺戮の光景が映っている。

「闇の魔法使いにとつて特に楽な仕事は、逃走しか頭に無い臆病者を
背中から撃ち殺す事だ。他方で厄介な仕事は、最後まで抜け目無く敵
の隙を伺い続ける相手を真正面から殺す事だ。たとえそれが学生だ
ろうと関係無い。武装解除、失神呪文、石化呪文。魔法使いであれば
一矢報いる牙は幾らでも持っている」

魔法使いの杖。

それは非魔法族の銃と変わらない脅威であり、逃走にすら用いる事
が出来るといふ点で更に優れている。戦闘員非戦闘員の区別無く、杖
を捨てない魔法使いは敵である。

「無論、儂等のような本職以外が闇の魔法使いに出遭ってしまった時、
それは殆ど死を意味する。ホグワーツ在学中の、或いは卒業したばか
りのひよつこの呪文など、儂等にとつては微風のようなものよ。抵抗
の上から殺すのにそう苦労はしない」

だがな、と教授は荒々しく続ける。

「だからと言って、妻や子供が危険に晒されても諦めよというのか？

闇祓いが駆け付けて来るまでの数分、或いは姿眩ましが禁じられて
いる場所から外に出る為の数メートル。それを勝ち取らせる為の武
器を、教師として生徒に与えたいと考えるのが不自然か？」

「……、この平和な時代で生徒が戦う必要など無い……！」

「平和？ 現状の何処が平和だというのだ？ 去年上がった闇の印に

対する親や親戚の恐慌を見て、生徒達が何も感じなかったとでも？

未だ十代の子供であるから社会の問題に全く思いを巡らせないのも当然だと、本気でそう思っているのか？」

「圧巻であり、圧倒的でもあった。」

その瞳の奥に地獄を燦らせ続ける元闇祓いは、現場を忘れた大臣が敵う物では無かった。教授は一步も動いていないというのに、大臣が震えながら後退っていた。

「子供が無知と無垢のまままで居てくれと願うのは、自惚れた大人の傲慢だ。特にマグル生まれなんぞは先の戦争で大勢が狙われ、拷問され、殺された。年齢など関係無く、産まれこそが罪としてな。あの悲劇を想えば、儂が生徒に教えを授ける事に手を抜ける筈もない」

魔法戦争は遠からず再開される。

ハーマイオニー・グレンジャーのようなマグル生まれにとって、この国に居る限りは死の危険が付き纏い続ける。戦争が始まった後、生活や友人、親戚や仕事、財産の多くを捨てて逃げないのならば、彼女達には戦場の地獄の方から近寄ってくる。

「嗚呼、儂は教えるとも。このホグワーツは他ならぬダンブルドアの存在によって安全が確保されており、だからこそ安心して最悪を教えられる。儂の教えが役に立たないに越した事は無い。だが、あの時学んでおけばよかったとの後悔を抱くのが死ぬ寸前では遅いのだ」

アラスター・ムーディ教授の考えは、戦場を生きる者の考えだ。

この国の“マグル”的思考からすれば非難轟轟であり、大臣のような反応を肯定する社会の方が正しいのだろうか——しかし、僕は教授の方に共感を覚えてしまう。

自力救済が跋扈する社会は野蛮である。

だがそれでも先の戦争中、死喰い人が勢力として圧倒し、長い間魔法省が機能不全に陥っていた事を考えれば、最後に頼れるのは己の力だと結論付けるのが真つ当では無いだろうか。

ただコーネリウス・ファッジにとっては受け容れられなかったらしい。

……嗚呼、間違いとは言わない。僕はそれもまた認める事が出来

る。

この大臣がシリウス・ブラックの逃亡の真実どころか、恐らく賢者の石や秘密の部屋騒動の裏に有った陰謀も知らされず、今年の闇の印や死喰い人の行進は脱獄シリウス・ブラックした一人のみが計画した程度にしか考えられないのであれば、そう考えるのは筋が通っている。

「ダンブルドア！ 貴方はホグワーツ内で私軍を作ろうとしているのか……!？」

彼は狂人の戯言に構ってられないと矛先をアルバス・ダンブルドアに向けたが、最早気疲れした様子を隠そうともしない老人は首を振った。

「……コーネリウス。この点に関しては儂も君に同意する。アラスタアの指導方針は、流石の儂も過激過ぎると思っておる」
「ならー！」

「しかし、儂がアラスタアを隠遁生活から引つ張り出すのと引換えに、その教育内容には口出しをせぬと約束した。そして保護者からの苦情も当初は沢山来たが、多くの生徒達は真剣に受け止めて授業に取り組んでいるようじゃ。スリザリンですらそうじゃろう？」

「……ええ。遺憾ながらそうですよ」

チラリと一瞥してきた老人の視線を受けて頷く。

縋るように僕を見て来る大臣には悪いが、それは動かしようがない現実だった。

「教授も年中服従の呪文を掛け続けている訳では有りません。他は過激ながらも現実的で真つ当な教えであり、教授を辞めさせようとすれば特にO・W・L・やN・E・W・Tを控えている五年や七年からは強硬な反対を食らうのは見えています。流石のマルフォイですら賛同はしませんよ」

教授の戦歴から必然と言うべきか、主に魔法生物の対処を扱った去年と違い今年の授業内容は対人特化で問題も多いのだが——それでも、この科目は闇の魔術魔法に対する防衛術なのだ。魔法生物に対する護身術ではない。

去年のリーマス・ルーピン教授の授業がそれらのテストに役立たな

いという訳ではないし、彼もまた有益な呪文を教えていたのだが、やはり理論と実践の徹底という点においては今年の教授の講義程では無いだろう。

「問題が有ったのは認めるが、生徒の多くが望んでいる以上、儂は現時点でアラスターを辞めさせるつもりは無い。どの道、アラスターの契約は今年限りのつもりじゃ。コーネリウス、今後こういう事が無いと約束するが、今回は引き下がってくれんかね？」

大臣は明らかに不満気であり、けれども言葉が出ないようだった。教授の選解任の権限はホグワーツ校長に存在しており、大臣に権限は無い。ホグワーツの自治の下で魔法界の頂点として抗議は出来ても、校長の決定を曲げる事は原則出来ない。今回の場合に理が存在するのはアルバス・ダンブルドアであった。

もつとも、僕の方にも不満が無い訳ではない。生徒の支持によって辞めさせるべきでないと考えたらば、生徒の支持が殆ど無かったかつてのギルデロイ・ロックハートをさっさと辞めさせるべきだっただろう。

「……今回の件は理事会に報告させて貰う」

負け惜しみのように、コーネリウス・ファッジは言った。

そして実際、報告した所で結論は決まり切っているように見える。一年限りの教授の暴走を理由に、この校長閣下を辞めさせる事は出来ない。

特に闇の魔術に対する防衛術教授は長らく——少なくとも、リーマス・ルーピン教授の学生時代からずっと——継続して一年以上教えられる例が存在していない。その問題を理事会が把握していないとは思えず、呪われた職に就いた人間が少々やり過ぎた所で騒ぐとは思えない。既に明らかにしたように、少々過激である点さえ除けば、アラスター・ムーディ教授の指導内容自体に左程の問題は無いのだから。けれども、この大臣は大変御苦労な事に抵抗するつもりらしい。

「面子から見れば当然と言えば当然だが、形式的な物に留まる気は無
いようだ。アルバス・ダンブルドアに良いように操られるのも解る。
要は真面目で、頭が固すぎるのだ。」

「……私は引き下がる訳ではないぞ、ダンブルドア。正式な抗議は文
書でもってさせて貰う。幾ら生徒が支持してしようと、彼等は未だ判
断力が未熟な子供なのだ。それを護るのが大人の仕事であり、私は今
回の虐待的な指導を見逃す事は出来ん」

「後半部に関して儂は少々意見を異にするのじゃが、お待ちしており
ましょうぞ」

アルバス・ダンブルドアは軽く頷いて答えるが、その態度が大臣に
とってどれ程腹立たしい物に映るか解っていてやっているのだろうか。
か。

にやにやと笑った教授が口を開こうとしたが、それは老人が視線で
止めた。ややこしくするなという事であり、そして脱線し過ぎだとい
う事でもあるのだろう。

「……ええと、ステイブソン君だったかね？」

威厳を取り戻そうとするように大臣は咳払いする。

強い方を相手にするよりも、弱い方に向かい合う方が楽だと思っ
たのかも知れない。まあ、漸く僕が今回呼ばれた用件を済ませる気
になつてくれたのは歓迎すべき事だった。

「アー、いみじくも君がどういう人間かは今までの会話で多少なりと
も解った気がするのだが、ええと、その何と言うべきか。良心を持
つた善良な若者にこういう要求をするのは私も非常に心苦しいのだが、
どうか気を悪くしないで欲しい」

何処からともなく取り出したハンカチで、大臣はせわしなく額を拭
う。

「これは私が独断で決めたという訳ではなく、捜査の中で魔法省が
色々な事情を考慮して多角的に検討を重ねた結果としての判断なの
だ。私は余り賛同できないのだが、私の立場としても仕方ない事
有って——」

「——つまり、何なのでしょう？」

「その、君にはだな。第三の課題の間、魔法省の監視下に居て貰いたいのだ」

一瞬言葉が詰まる。表情すら動いたかもしれない。

その反応を早とちりしたらしい大臣は、慌てて言葉を続けた。

「いやいや。君がバーティをどうこうしたとは全くもって考えていないとも。未成年の魔法使いにどうこう出来る物では無いし、ハリー達の言葉からは、姿を消したバーティは相当頭がどうかしていたようだしね。ただその、何だね。ほら、解るだろう？」

「……正気だった時のバーティウス・クラウチ氏と会った僕が何か必要な事を知ったかもしれず、『犯人』が危害を加えるかもしれない。そういう事を言いたいのですか？」

「そう、その通りだ……！」

我が意を得たりと頷く。

助け舟として出した言葉に、大臣は大袈裟な位に大きく頷いた。

僕はそれが口実に過ぎない事を彼の瞳から読み取れたのだが、しかし生徒の保護が目的であるというのは丸切り嘘という訳でも無いしなかった。

「アルバス・ダンブルドア。貴方が反対し、しかし教授が賛成した云々はこの事ですか」

「……そうじゃ」

「そうだ」

顔だけに向けて問えば、老人は渋々認め、教授は不敵に笑いながら認めた。

「ただレッドフィールドよ。お前は儂がこうする事に一切の疑問を持たないだろうか？」

「……ええ、そうですね。僕がバーティウス・クラウチ氏と接点を有し、ハリー・ポッターに危害を加えうるスリザリンである事は疑いが無い。貴方は当然そう主張すべきだ」

先のような阿呆な口実を信じるべきではなく、油断大敵を信条とする闇祓いは僕がバーティウス・クラウチ氏を消した可能性を疑うべきであり、たかだか教え子であるという程度で信頼しては『マッドアイ

“と呼ばれるに足りなかった。

バーテミウス・クラウチ氏が姿を消す前に接触し、かつ彼に会った人間としては浮いた存在である以上、治安を維持する彼等は寧ろ僕を怪しまなければならぬ。

「御話は分かりましたよ、大臣。僕がわざわざ呼ばれた理由も」

何故かハラハラとした様子を見せているコーネリウス・ファツジに僕は続ける。

「僕にとって予想外の申し出であったのは確かです。けれども、貴方の要請とも有れば、僕に何ら断る理由は有りませんよ。その要請を受け容れましょう」

承諾の言葉に、一瞬、大臣は何を言われたのか解らないという顔をした。そして少し時間を掛けて僕の答えを咀嚼した後、恐る恐るというように問い掛けて来る。

「……えっと、それは文句が無いという事かね？」

「ええ」

思う所は有れども、反抗まではしないと頷く。

「この国の頂点である貴方がわざわざ足を運び、その上でこうして丁重に頼んでいる。善良な一市民がそれを断る理由は無いでしょう？ もつとも、今すぐアズカバンに行けともなれば流石に抵抗もします

が——」

「そ、そんな事は断じてない！ 君は闇祓いの護衛付きで保護される事になるだろう」

「——ならば僕から言うべき事は何も有りません。三校試合の結末が見れないのは多少残念では有りますが……大臣、貴方の指示に従いましょう」

「そ、そうか。いやはや助かる……！ 魔法大臣として君の協力には心から礼を言おう」

安堵を浮かべるコーネリウス・ファツジは気楽な物だ。

僕がそういう気分になれないのは、軟禁されるのが予想の斜め上だったというのもあるが、僕を留めておく事に左程の価値を感じないからだ。

僕が何か重要な情報を意図せず握った可能性は否定出来ない。

出来ないが——今年の初めから奇妙な事が続く計画の為に、何が何でも排除しなければならぬという程の情報を得たという感覚はない。今回の事件に関して一番事情に通じていそうなウインキーという屋敷しもべ妖精の事もある。僕が殺されるとすれば、本命の計画が済んだ後で彼女共々ついでに始末される場合くらいのように思える。

だが、大臣は意気揚々と老人へと振り返った。

「どうだ、ダンブルドア！ 本人の同意は取り付けた。これで貴方も文句はないだろう？」

「……そうじゃな。その事に文句は言わん。だが、ステイブンもまた Hogwartz の生徒で有って、儂としては——」

「——大臣」

老人の無駄な言を遮り、僕はコーネリウス・ファッジへと呼びかける。

彼はチラリとアルバス・ダンブルドアを——生徒に発言を遮られて気分を害しても可笑しくない人間の方を見たが、その老人は不機嫌そうな表情を作りつつも視線を臥せていた。

「どうやら僕の意味というのは正しく伝わったらしい。」

「な、なんだろうか。何か気になった事が有るのかね？」

自分が答えざるを得ないと理解したらしい大臣は、漸く反応する。「申し訳ありませんが、僕は授業を抜け出してここに来ているのであり、出来れば時間内には戻りたいと思っています。ですので、僕は今後の事について聞いておきたいのですが」

「あーっと、今後の事というと？」

眼を白黒させた大臣に、僕はここに連れて来られた時からの疑問をぶつける。

「先の要請が僕にとって予想外だったのは否定しません。しかし、予想外だったのは内容が問題だった訳では有りません。つまり僕は今回呼ばれた理由は、バーテミウス・クラウチ氏と接触した際の事情聴取の為だろうと思っていたからです」

十一月末の第一の課題以降、バーテミウス・クラウチ氏が消えた。その時点において、僕は事情聴取の為に呼び出される事を予想していた。僕が本当に事件へ関与していると疑うかはさておき、彼が公から姿を消す前の様子を捜査機関が把握しようと考えてるのは、何ら不思議な行為ではないからだ。

まあ六月の今までそれが無かった所を見るに魔法省はそれを不要だろうと判断したのだろうが——その判断が不合理だという程自惚れていない——今回彼がホグワーツに現れ、そして消えたともなれば、流石に事情は変わって来ると思う。

バーテミウス・クラウチ氏が会った人間として存在が浮いており、今回彼が消えたホグワーツにも居たスリザリン生に話を聞いて然るべきではないだろうか。バーテミウス・クラウチ氏が何時消えたか知らないが、その頃僕にアリバイが有るかは自信が無い。

「そちらの方はどうされるんです？ 出来れば早く済ませたいと思いますし、望まれるのであれば開心術や真実薬の使用にも異論は有りませんが」

「——アー、それはだな」

だが、大臣は奇妙な位に大きく視線を逸らした。

……歯切れの悪い言葉が返ってきた時点で、次に紡がれる言葉も想像が付いた。

「バーティは強力な魔法使いだった。だから未成年の魔法使いが今回の厄介な事件に関与したと真剣に疑う程に、魔法省は馬鹿ではない。また君がバーティと会話をした事実が有っても、重大な事を知らされたとか、秘密裏に遣り取りをしたとも思っていないのだ」

「……………」

「君はそれまでバーティと接点がない。そして君には力を持った両親や親戚なども居ない。そんな君が、あのバーティに何が出来る？ 或いは、バーティが何故わざわざ意図して君と接触しようとする？ 仮に大事な事を任せたりするならば、マルフォイ君とか、そういう人間を使うのが自然だと思わないかね？」

理屈は通っている。通っているが、問題はそこではない。

「……要はバーテミウス・クラウチ氏と何を話したかについて、貴方どころか他の閣僚いに対しても語る必要は無い。そういう認識で良いのですか？」

「あ、ああ。その通りだ」

「……そう、ですか」

ならば何故僕を監視下に置く必要が有るのか。

それをわざわざ聞いてやる程、僕は気の良い人間では無かった。

——要するに、この大臣にとってはどうでも良いのだ。

今回わざわざ僕との面談を求めた事も。第三の課題中に僕を監視下に置く事も。

自分が有事に際して忙しく、魔法大臣らしい仕事をしているふりが出来るのであれば何だって良いのだ。秘密の部屋の際にルビウス・ハグリッドをアズカバンに送ったように、この大臣にとっては保身が第一で、真相を追い求めるのは二の次なのだ。

「……御用件は以上ですか、大臣」

「う、うむ」

大臣の領きを受けた後、僕は老人の方を見やる。

「という事らしいです。既に決まったのだから下手な擁護は要りませんし、その必要が無いのは解るでしょう？　貴方は余計な善人面に労力を割くより為すべき事が有る筈だ」

政治的な失点を非常に恐れているこの大臣が、僕に対して下手な拘束をする筈がない。

アルバス・ダンブルドアが先に示した懸念は見当外れでしかない、「そして僕の軟禁が確定事項となった以上、僕もまた他の事に関心を向けざるを得ない。つまりバーテミウス・クラウチ氏が姿を消す前に会った生徒が大臣から直々に聴取を受けたという噂が、期待通りに、何処からともなく流れるかどうかについてです」

この老人は曲がりなりにホグワーツ校長である。

校内の肖像画は勿論、教授や教職員、ゴースト、もしかしたら生徒にすら、自身が望む噂を流し、ホグワーツ内の情報を操る事が出来る

と信じている。

「……ステイーブン。僕はそうすべきではないと思うておる」

アルバス・ダンブルドアは首を小さく振る。

「それを広告する事は少なからず君の危険を上げる。それ以前に、今までの経緯とバーティが消えた状況を考えれば、君は得られる物が有ると端から期待しておらぬ筈じゃ」

「しかし可能性は零ではない。そして費やす労力は微小で、当たった時に得られる利益は極大です。ならばやらない選択肢など無い」

「生徒が自らを餌にするような行いには賛同出来ぬ」

「貴方の仕事は如何なる状況だろうと生徒を護る事でしょうか？ それとも貴方は、闇の魔法使いに狙われるのが解り切っている生徒を護れないと宣うのですか？」

「……良く言つてのける物じゃ。そんな事など本心で思っている訳では無かるうに」

老人は微妙に苦々し気に吐き捨てる。

彼にそうさせる理由は、彼の理性が僕の言葉に一定の利が有ると認めるからだろう。

ハリー・ポッターに比べれば、僕は喪つても左程支障のない駒である。ホグワーツ校長である以前に、彼が戦争に挑む冷徹な指導者であるのならば、些細な犠牲を是とする僕の提言を容れなければならぬ。

「ま、待ちたまえ。魔法大臣が生徒に疑いを掛けたともなれば私の体面が——」

「——大臣。これは無責任で勝手極まりないホグワーツ生の噂ですよ。馬鹿正直に信じる人間は誰も居ません。貴方はそんな事は有り得ないと毅然としていれば良い」

慌てて割り込もうとした大臣に対し、老人を睨んだままに答えれば、更なる反論は残念ながら返つて来なかった。

……これが、魔法界における行政の最高位か。

嗚呼、本当に。魔法界というのは全くもって——

浮かぼうとした邪念を、軽く首を振る事で掻き消す。

仮にも魔法省で出世し、ルシウス・マルフォイ氏の後押しが有ったとはいえ広く支持を集めていたのだ。平時であれば良い魔法大臣なのだろう。

ただ、ああして闇の印が上がり、スネイプ教授達が闇の帝王の復活を予感している以上、既に有事に突入している。そしてこの大臣は魔法執行部隊の経歴を有している割には、来る戦争の指導者として向いているようには見えない。かつてのハロルド・ミンチャム魔法大臣と同じく、この暗黒の時代に頂点に立つてしまった事こそが、彼の不幸だったと言うべきか。

「では、この場を辞させて頂きますが。最後に、アルバス・ダンブルドア」

「……何かね？」

コーネリウス・ファッジは俯き、アラスター・ムーデー教授は口元を歪め、この場において最も地位の高い老人は僕の視線を静かに受けて立った。

「貴方は去年度の末、自身の御膝元であるこのホグワーツ内において、生徒を傷付けた狂暴な獣ヒッポグリフ一匹の逃亡を許し、凶悪犯一人を捕まえ切れなかった」

何故、今それらを持ち出すのかとは彼は問わなかった。

この老人も確かに僕の理解者であるから、何処に話の着地点が有るのかを見透かしている筈だった。大臣が怪訝な顔をし、教授が油断ならない鋭い目付きをしていようと、アルバス・ダンブルドア一人は理解している筈だった。

理解していて尚、この老人は話の筋が解らないというように惚けていた。

「シリウス・ブラックが逃げ出した時、忌々しい吸魂鬼が出ていく事に気を良くし、まさか『愉快そうに見ていた』だけでは無いと僕は信じています」

「……………」

「ええ、そうである筈は無いでしょう。彼が逃げ出してしまった責任の一端は魔法省に在りますが、しかし貴方にも少なからずあった。故

に大臣が責任を追及された際には、貴方は大臣を強く擁護し、政治的な後ろ盾となるのが当然の行いだ」

アラスター・ムーディ教授が知っているかは解らないが、少なくともアルバス・ダンブルドアには、僕が籠めた言外の意味は伝わる筈だ。シリウス・ブラックの逃亡。

それは単に警備に不手際が有ったというのでは無く、この老人がハリ・ポッター達を使って助力したが故である。その結果が魔法大臣にとって政治的にどれ程致命傷であるかは当然理解出来ていただろうし、それでも尚彼等の無法を許したというのであれば、分別有る大人として後始末をしなければならぬ。

世の秩序を犯した責任は、最低限取らなければならぬ。

「そして今年のハロウィン以降、大臣が国外から非難されている原因の一端は、貴方が年齢線を間違えた事に在る。更には今回、ビクトール・クラムというクイディッチ界の至宝が傷付けられ、バーテミウス・クラウチ氏の保護にも失敗しています。これらによつて大臣は更に苦境に陥る事が眼に見えている訳ですが——」

良くもまあこれだけ政治的失点が積み重なったものだど溜息を吐きながら尋ねる。

「——それらを前提として、貴方は何か感じる所が無いのですか？」

貴方が為すべき仕事というのが有ると思いませんか？」

「……それは君が知らず、見ようとせず、理解しようともしていないだけじゃ」

アルバス・ダンブルドアは視線を逸らさない。

表情は頑なに引き締められ、しかし言葉は苦々しさを隠し切れていなかった。

「儂は為すべき事をしておるし、迷惑を掛けた各所にも頭を下げてもおる。そしてまた、君が暗に非難したような恥知らずな真似をしたつもりも無い。コーネリウスにしても、魔法大臣として良く職務に励んでおると思っておるよ」

「思っているだけでなく、僕のような馬鹿にも解るようにやって欲しいのですがね」

「しゃあしやあと云つてのける老人に吐き捨てる。

「例えば魔法省に頻繁に出入りをして協力する姿勢を見せると言つたように。特に今ならば、死喰い人が行進し、闇の印が上がり、ワールドカップがぶち壊され、魔法省職員二人が忽然と消えた現在ならば、かつての英雄である貴方が動くのは何ら不自然では無い。貴方の行動一つで、動揺している魔法界は多少なりとも落ち着ける」

「……そのような見世物は、ホグワーツ校長である儂の仕事では無い」
「僕はそれも貴方の仕事だと考えますが。マーリン勲章勲一等、大魔法使い、魔法戦士隊長、そしてウイゼンガモット会員及び最上級独立魔法使い。それらの称号が単なる煌びやかな飾りに過ぎないと聞いた覚えは有りませんから」

やり込めたつもりは決して無いが、アルバス・ダンブルドアは黙り込む。

そのような行いが、この老人の主義信条に合わないのは理解している。

百年近くの長きに渡って培われ、確固たる物となつた信念だ。今更若僧の言葉一つで揺らぐ筈も無いし、三年前の時点でそれは既に明らかになっている。

だがそれでも尚、僕は指摘せざるを得なかつた。

この老人は気付かないのだろうか。

コーネリウス・ファッジが今、どれ程期待に満ちた眼で自分を見詰めているのかを。

世間の評価から自由で居られない弱者にとって、己を揺ぎ無く貫き続ける事が出来る強者がどれ程眩く、そして同時に憎たらしく見えるのかを。

彼は制度上民意を反映している魔法大臣なのだ。無能であろうと無力ではない。

その好意を獲得する為に擦り寄り、惜しみなく利益を与え、己が願いを聞いて貰うよう最大限尽力する事を——あの気位の高いルシウス・マルフォイ氏ですら行っている事を——どうして躊躇う必要があるだろうか。

意に反する相手に媚びるのが嫌ならば、十四年間も魔法大臣の椅子を無造作に打ち棄てておくような真似をすべきではなかった。初めから自分がその地位に昇っておくべきだった。

「——君の言いたい事は解る。しかし、儂が出来る事にも限界はある」
「貴方の言う限界は、僕のような人間の限界と違う」

意思によつてしないのと、能力によつて出来ないのは違う。

「勇ましく杖と剣を振るう事だけが戦場で犠牲を減らす唯一の道だと思つている辺り、貴方は本当に悪い意味でグリフィンドルらしい。しかしスリザリンは戦場に出ずともそれが可能だという事を、逆もまた然りだという事を良く知つている。僕の言つている意味が解らない程、貴方は愚かではないでしょう？」

十四年前、この老人はルシウス・マルフォイ氏をアズカバンへと叩き込めなかった。

その落ち度によつてどれ程の死人が増えるのか、気付いてないとは言わせない。

見かけ上、政治の世界で死人は出ない。

けれども裏では、或いはその結果には確かに死人が出るのだ。

万がールシウス・マルフォイ氏が闇の帝王から許された場合、彼の影響力と政治力は、第二次魔法戦争において脅威となるのは解り切つている。この老人が自身の信条に固執し、十四年前に彼を潰し切れなかったが為に、ルシウス・マルフォイ氏によつて多くの非魔法族と魔法使い、そして不死鳥の騎士団員達が惨たらしく虐殺される事だろう。

御互いの視線がぶつかり合い、僕の方から視線を切る。

そして僕は狼狽し切つたままの大臣に一礼し、何が可笑しいのかニヤつている教授にも軽く目礼した後、そのまま踵を返して扉を出た。

最後に揶揄の言葉を口にしてやろうかとは思つた。

バーテミウス・クラウチ氏は、貴方をこの国の王と評していたと。

だが、そのような言葉を紡ぐのは辛うじて自重した。

先のアルバス・ダンブルドアへの助け舟と異なる言葉を吐く事に

よって、わざわざコーネリウス・ファッジ大臣の猜疑心を煽ってやるのは良い結果を産み出さないからだ。

——嗚呼、それでも。

僕の言葉は、間違いなく届かないのだろう。

螺旋階段を降りて校長室が隠された壁から出ると、一人の人間にばったりと出くわした。

微動だにしないガーゴイルの前で片足を抱えながら奇妙に飛び上がっている彼は、他ならぬハリー・ポッターである。爪先を何処かにぶつけでもしたのか、大きく顔を歪めていた。

「……一体、何をやっているんだ」

自分で聞いていて解る程に呆れが混じった言葉を掛けてみれば、ハリー・ポッターは僕の顔を見てピクリと震え、どういう訳か畏まったように背筋を伸ばした。

「え、ええっと、何故ステファンがここに？ 授業はどうしたんだい？」

「当然ながら君も授業が有る筈だがな。そして僕の方はきちんと許可を得た上でこの場に居る。ここに居る事は何ら咎められる事も無い」許可を得ている、という部分で再度ハリー・ポッターは震えた。

「どうやら彼の方は許可を得て校長室を訪れたという訳では無いらしい。つまりサボりか。」

「……ただ、他の生徒ならいざ知らず、ハリー・ポッターが——」生きた残った男の子が校長室を訪れるというのは、決して軽んじて良い状況では無い。

「急ぎか？」

「えっと、うん」

ハリー・ポッターはチラリと校長室の中を見ながら頷く。

反射的に左手が顔——向かおうとしたのは額、だろうか？ 断言は

出来ない——の方に動いたが、彼はそれを意思によって自制したようだった。

その理由までは解らない。ただ、その緑の瞳の中には切迫さまでは見えなくとも、真摯な色が見て取れた。元々性格上有り得ないと解っていたが、サボリにも相応の理由が有るらしい。

「ならば行くと良い」

入口が閉じられても困るので、一応部屋の外に出ないまま、横に身を引いて道を開ける。

「アルバス・ダンブルドアは部屋の中に居る。来客の対応中では有るが、他ならぬ君が訪れたともなれば邪険にされる事は無いだろう」

「……でも、勝手に入って良いのかな」

他人の眼が有るからか、躊躇った様子を見せた彼を軽く鼻で笑う。

「少なくとも校長室は、望まれない来訪者を排除する場合は有ると聞く。そうでなくとも事後的に承諾を得れば何の問題も無い。君がわざわざ授業を抜けてまでアルバス・ダンブルドアと話をする理由が有ると考えたのなら、追い返される事もまず有り得ない」

「……そう思う？」

「見た事は無いから断言出来ないが、そうだと聞いては居る」

彼は部屋の入口を護るガーゴイルが襲い掛かって来ないのを視線で確認した後、そろそろと部屋へと入ってくる。しかし、僕の進路上から退こうとはしなかった。

それどころか立ち塞がるようにして、意を決したように問いを紡いだ。

「ハーマイオニーとまだ仲直りするつもりは無いのかい？」

「……」
冗談を口にした訳では無いらしい。

偶然の遭遇であり、最初からその話題を僕にぶつける事を考えていた訳では無かったろうが、機会さえ有れば僕と話したいと思っていた話題では有ったのだろう。僕を真っ直ぐと貫く碧の瞳は、相変わらず僕の苦手な光を帯びている。

「……何故、君がそれを問う？ 君には関係無い話では無いのか」

「関係有るさ。ハーマイオニーは僕の親友だからね」

堂々と、余り聞きたくない言葉を彼は吐く。

「正直言つて、今の状況は僕も余り良い気はしないんだ。まあハーマイオニーは知つての通り強情だし、クリスマスやハグリッド、第二の課題の事、そしてスキーターの記事で君に声を掛け辛い状況になつてる。でも、彼女は君と仲直り出来る切っ掛けを探してるとは思う」

「……随分、確信を持っているんだな」

「言つただろう、僕と彼女は親友だ。それ位は解るよ」

こつとも自信満々に言つてのけられるのは羨ましくもある。

既に四年もホグワーツで生活して振り切つたと思つていたが、入学前に抱いていた理想をここまであからさまに突き付けられると、流石に何も感じない訳には行かないらしい。

それを別としても、その言葉自体が嬉しくない訳では無いのだが――

「仲直り云々は別としてだ。今の僕は、ハーマイオニーに近付く気は無い。また状況が変わつたのだ。仮に彼女から近付こうとして来たとしても、僕は彼女を避けるだろう」

「何でなんだい?」

露骨に疑問を表した彼に、僕は笑つた。

鏡が無くても、己の笑みが自嘲である事は確信していた。

「つい先日バーテミス・クラウチ氏がホグワーツに現れた時、君は傍に居たんだな?」

「っ。何故、君がそれを知っているんだ?」

「校長室に行けば直ぐに解る」

驚愕を露わにしたハリー・ポッターにそれだけを口にし、横を通り過ぎようとすれば、彼はそれを許さなかつた。ローブ越しに腕を強く掴まれ、無理矢理振り向かされる。

「君はフラー達を傍に近付けてる」

「……………」

「彼女らだつてスリザリンからすれば許せない人間だろう。だということに、君はそれを良しとしている。ハーマイオニーと一体何が違うん

だ」

「……それは重要か？」

「ああ」

軽く睨んで尚、ハリー・ポッターは視線を逸らさなかった。

思い返せば、彼はロナルド・ウィーズリーと立場を異にしていた。僕がハーマイオニーとユール・ボールで踊ると思っていたという戯言を口にしたし、そもそも一年時からの僕と彼女の友好関係に何も言っていない。ハリー・ポッターは彼のもう一人の親友のように、スリザリンはグリフィンドールに近付くなどという解りやすい考えの下に動いてはいない。

その真意が何処に有るかまでは掴み切れないが、少なくとも逃げるべき事では無いのは理解出来る。彼は彼女の親友として僕の態度へ真剣に憤りを感じており、そして僕が彼女を大切に想うのであれば、ハリー・ポッターの問いから逃げるのは、何となく不義である気がした。

「——彼女達の間には、本質的に違いは無いのかもしれない」

深く息を吸って、大きく吐いた。

「だから問題が有るとすれば、それは恐らく僕の方なのだろう」

「君の方？」

「ああ」

碧の瞳に真剣さを宿したままの彼に、僕は小さく頷く。

この点に関しては、アルバス・ダンブルドアを揶揄出来ない。対象とする人物が異なるだけで僕達はどこん同類であり、言葉を飾らずに言えば意気地がない。

「九割九分の確率で勝てるギャンブルが有ったとしよう」

ハリー・ポッターはうんざりした表情を浮かべたが、僕の言葉を遮りはしなかった。

「裏を返せば一分の確率でしか負けない。君はこのギャンブルで勝負する事も出来るし、勝負しない事も出来る。さて、この場合に君は賭けを行うか？」

「そりゃ……当然賭けるだろ？ 殆ど勝てるんだ。勝負しない手は無

いさ」

「その一分で取り返しのつかない唯一無二を——ハーマイオニー・グレンジャーやロナルド・ウィーズリーの命を喪うとしても、か？」

ハリー・ポッターは怯んだ。

彼にその反応をさせたのは、恐らく言葉の内容だけでは無い筈だった。

「これから起こる戦争というのはそういう賭けの連続である訳だが——今は置いておこう。ただ九割九分、まあそこまで行かずとも勝つ可能性が非常に高いと踏んだ場合は、賭けるべきであるという考えは正しい。喪失を恐れて賭けから逃げては勝利も無い。それが『合理的』な選択であり、通常為すべき判断では有るのだ」

理性では、そんな事は解っている。

「しかしながら、絶対に勝つ訳では無いという事は、それは即ち非常に低い可能性で負ける場合も有るといふ事だ。遊ギャンブルびで有れば、一度負けたとしても後から喪った金銭を取り返す事も出来るだろう。ただ、現実はそのはいかない。死人は帰って来ない」

「……でも、まだ戦争が起こっている訳じゃない」

「そうだな。それは非常に大きい要素だ」

ハリー・ポッターの指摘は的を射ている。

奇妙な事件が連続していても、未だ大々的な殺し合いは起きていない。行方不明者二人が出る程度の事件は、マグル基準では毎日どころか毎時間テレビで見る事が可能な日常であり、魔法使い基準でも異常と言いつけるまでの事ではない。

「ただ、アルバス・ダンブルドアもそうだが、僕達は常に最悪の場合を特に強く思い描いてしまうのだ。それを懸念する事が不合理で、天が落ちてくるのを憂うような愚行だとしても、その可能性を排除する事は決して僕達には出来ない」

既にハーマイオニー・グレンジャーには大きな危険が有る。

ハリー・ポッターの親友。それだけで死喰い人が彼女を殺すに足りるといふのは解っている。だから僕が彼女を遠ざけようとも、大きく危険度が変わる訳でも無い。

けれども嗚呼、それを理解していて尚、僕の行動如何で彼女の危険が僅かでも上がってしまうというならば——僕が自制するだけで彼女の安全を確保出来る可能性が存在するというならば、僕はその選択肢を取る事を辞められない。

そしてそれはあの老人も同様の筈だった。

「えーっと、君は解る気がするけど、ダンブルドアも？」

「君が疑問に思うのは当然だろうな。だが、これは断言して良い」

首を傾げると共に表情で不可解を示したが、僕ははつきりと頷いた。

ハリー・ポッターが気付かないのは止むを得ない。その感情を向けられるのは彼自身であり、尚且つアルバス・ダンブルドアが見て見ないふりをしている。スネイプ教授やミネルバ・マクゴナガル教授でも恐らく気付けず、曲がりなりにも彼から開心術を直接教わった僕だからこそ察せられる事柄だった。

「ガブリエルやフラーが傷付いても何ら問題無いと考えている訳では無い」

誤解は無いだろうが、一応は告げておく。

彼女が健やかに生きている事は、まあ、一応喜ばしい事ではあった。「だが、僕にとつて優先すべきはハーマイオニーだ。比較した場合に後者の方が危険な立場に居るといいうのも有るが、僕にとつての優先順位は決して揺るがない」

「順位って……人にそんなのは——」

「付けられる」

納得行かない風なハリー・ポッターを、真っ向から否定する。

「君とて、君の親友二人の命と、他のグリフィンドール生の命。その何れかを必ず選べと言われたら答えは決まっているだろう？ 強く意識していないだけで、人は序列を付けている。そして君が考えている以上に、今のこの魔法界において人の命は軽いのだ」

そこまで口にして、彼の反応を伺わないままに僕は軽く首を振った。

「いや、君はその考えで良いのかもしれない。僕と違い、君は特別だ。

その全てを掬い上げられなくとも、君はどちらも選び取り、限りなく多くを護る事が出来るのかも知れない。必ず一兎以上を得られるならば、二兎を追わないという選択肢は無いだろう」

「……僕が『生き残った男の子』である事なんて、君は昔からどうでも良かった筈だけど」

「同時にそれ以外に価値を見出している事は君も勘付いている筈だが」

殆ど初めての邂逅の時。

銀世界を前にして、僕は既にハリー・ポッターに違う価値を見出した。

「君は実績を残している。十一歳で闇の魔法使いに立ち向かい、十二歳でバジリスクを殺し、十三歳で吸魂鬼を退け、十四歳ではドラゴンを出し抜いた」

「それは……単に僕の運が良かっただけだ」

「普通の人間は運が良かろうとも出来ないのだ」

ハリー・ポッターの胸を拳で軽く叩く。

避けようと思えば出来た筈なのに、彼はそうしなかった。

「少なくとも僕には出来ない。断じて。君も直ぐに知るだろうが、第三の課題中に僕は軟禁される事になる。嗚呼、疑われている訳ではない。『生き残った男の子』である君と違い、彼等にとつて僕は子供で、言葉を聞き入れるに値しない者なのだ」

今年、僕はそれなりに派手に動いた。

しかしながら、それで何が変わっただろう。

解らない事が解つただけで、僕の力や権限では今回の真相に辿り着かない事が明白になった。アルバス・ダンブルドアも、アラスター・ムーディ教授も、当然ながらスネイプ教授も僕よりも多くの情報と知識を有し、また多くを為す能力を備えているというのに、しかしそんな彼等ですらも未だに今回の『犯人』には辿り着いていない。

僕はこれまでの三年間と同様に、事件の外にしか居られない。

「だから問題が解決するまでは、僕はハーマイオニー・グレンジャーに近付けない。僕のせいで彼女を危険に晒す事になってしまっても、そ

の責任を取れないからだ」

問題が解決するまで。

「……それが何時になるのかは、自分自身、既に薄々見当が付いている。

偶々今年、敵がホグワーツ内に潜んでいるという形で顕在化したただけで、闇の帝王が生きていると知った一年の学年末から“期限”を先延ばしにしてきたに過ぎないからだ。

「……責任、ね。ハーマイオニーはそんな事を君に言っただけで欲しくないと思うけど」

「ならば君は何と言うべきだと考える？」

「……………」

僕の問い掛けにハリー・ポッターは碧の澄んだ瞳で僕を真っ直ぐと見返すだけで、何も答えなかった。挑発に乗るつもりは無いという意思表示であり、お前が自分で考えるべきだという主張を全身で表現していた。

そして、まあ、正しいのはどちらであるのかというのは明白だった。

小さく息を吐き、話題を変える。

「一応聞いておくが、正気では無かったバーテミウス・クラウチ氏は何を言っていた？」

話の流れとしてハリー・ポッターが答えない可能性も有ったが、彼は素直に口を開いた。

「……えっと。木をパーシーと違って仕事の命令したり、奥さんと息子を連れてパーティーに行くとか言っただけで正気じゃなかった。ただ、少し正気に見えた時は、大変な事をしてしまって、ダンブルドアに警告しなきゃならない事が有るとは口にしてた」

「……まあ、重要な事を口走っただけならばアルバス・ダンブルドアも苦勞はしないか」

「だと思っ。あくまで正気だったのは少しだし、クラムが不気味がる位にはずつと変だったよ。バーサの事が自分のせいだとか何とかは一応言っただけ」

「多少気になるが、今回の事件に関与しているらしい人間の言葉だか

ら今更だな。彼女はルドビッチ・バグマンの部下だが、三校試合の準備で接触がなかった訳ではないだろう。磔の呪文などで壊されるに足る何かを目撃していても可笑しくもない立場に居るのは確かだ」

あの老人が教授の口を噤ませた事から少々期待していたが、流石にそう簡単に行く訳では無いらしい。僕としても、その発言内容に違和感はない。

意外なのは、バーテミウス・クラウチ氏の妻と子供の死をハリー・ポッターが知っているらしい事くらいか。そうでなければ正気を喪っているという感想は出て来ない。

「君は今回の犯人が――」

ハリー・ポッターが何を言おうとしたのか理解し、敢えて先んじて言った。

「クリスマス前と同じだ。その答えは、依然として解っていない。犯人像どころか犯人の数、動機や目的の見当すらついていない。先程僕が話した感覚としては、多分、アルバス・ダンブルドアと同じだ」

「……そっか。ハーマイオニーも解らないって言ってた」

「ああ、今年は異常だ。これまでの三年間の比では無い。『犯人』は君を代表選手とした事には明確な目的が有った筈なのだ。しかし、二度の課題では事件が起こる気配すらなく、君が代表選手となった事で利益が他の場所で生じた訳でもなく、目的は未だ不明なままだ」

十月三十一日を除けば、今年生じた異常はバーテミウス・クラウチ氏関連のみ。

殆ど一年間を通じて何らかの事件が起こってきた三年間とは違う。不気味である事以外に、ハリー・ポッターの周りは平穏だと言っても過言ではない。

「……やっぱり、君も第三の課題で何か警戒しなきゃならない事が起こると思ってる？」

「何も起こらなかつたとすれば、代わりに他の場所で異常事態が発生しているという事で、初めから君や僕がどうしようもない事だ。そして僕はそちらの方を望んではいる」

ハリー・ポッターが、他の本命の為の単なる目眩ましに過ぎない事

を祈っている。

「ただ、今年のホグワーツの始まりは、やはり君が代表選手になった事なのだ。だから第三の課題が最もききな臭いとも思っている。僕に言われるまでも無いと思うが、精々気をつけろ」

「……肝に銘じておくよ」

改めて表情を暗くしたハリー・ポッターを置いて、僕は彼の横を通り過ぎる。今度は彼は止めなかったし、後ろから言葉を掛けてくる事も無かった。

恋と愛

何だかんだ言つて、あの老人は求めた通りの仕事をやってくれたらしい。

歴代校長の肖像画が発信源か、或いはゴーストか。バーテミウス・クラウチ氏の失踪に関して魔法大臣が僕と面会し、第三の課題では護衛付きで観戦を控えて欲しいと求めたらしいという「秘密」は、翌日には既に全校に知れ渡っていた。

ドラコ・マルフォイは僕が求めるならば父親に文句を言つても良いと朝食前にわざわざ言いに来たし、フラーは一限目が終わった直後、何時も通り僕を空き教室に拉致して愚痴と共に断固抗議すべきだと主張していたが、その何れに対しても問題無いと退けた。

怪しい位置に居たのは自覚しているし、嫌な噂が立ったり周囲から白眼視されるのも今更だ。学校生活に大きな支障が出る訳でも無い。逆に、かつての魔法法執行部部長を害した危険人物とみられる事で安泰になりそうですらある。

久々にハーマイオニー・グレンジャーが僕の方を物言いたげに見詰めてきたが、ハリー・ポッター経由でも話は通っているのだろう。彼女が近付いてくるような事は無く、接触しにくる気配も見られなかった。そして、それで良いのだ。如何に可能性が低かろうとも、今回僕は「犯人」の前に餌として己を差し出したのには変わりないのだから。

そして大きな反応が直ぐに起こる事も期待していない。

……期待していなかったのだが、事が事なだけに何も無しとは行かないらしい。

ただ、彼からの接触が有った瞬間、これは一連の事件に纏わる話では無いなどは直感した。

不都合な情報を握っている人間を始末したいと考えている人間の行動としては、余りに堂々とし過ぎていたのだから。

周りに多くの生徒がいる中で、ビクトール・クラムは僕と話がしたいと持ち掛けて来た。

そして彼がそんな選択をした理由は、フラーが僕へと話掛けて来た時以上に想像が付かない——訳では無かった。彼と僕の間には直接的な接点は存在せず、しかし敢えて間接的な接点を見出すとすれば、それはただ一人の事についてしか考えられなかったからである。

僕が了承すれば、彼は放課後まで待たずに直ぐに用件を済ませる気らしかった。

会話する場所は何処でも良かったらしく、人通りの少ない階段の踊り場の隅まで連れて行かれた。予想される会話内容としては不用心な事だと思つたが、これくらい雑な方が逆に良いのかもしれない。彼は僕を先導する事に——即ち背を向ける事に躊躇しなかつたので、彼が振り返る前に杖を軽く振つた。聞き耳を立てられないに越した事は無い。

そうして、ビクトール・クラムは僕と向かい合う。

近くで見れば、思つていた以上に、彼は意外と威圧感があつた。

身長のせいではない。確かに僕より高いが、彼が〇脚気味である為に、実際の数値程に僕が見上げる必要は無い。圧倒的に違うのは体格だ。スポーツ選手、それもプロの世界で戦う人間である。箒を使うスポーツなのでラグビーやアイスホッケーの選手のように筋骨隆々という訳ではないが、それでも鍛え上げられた肉体をローブが隠し切れていない。

ただ同時に、微妙に迫力が足りないとも思つてしまうのは、彼が纏う雰囲気だろう。

その体格差故の自信というか、ざっくり言つてしまえば自惚れと傲慢さが無い。肉体の優れている人物に謙虚さが無いと言いたい訳では無く、寧ろ彼が謙虚過ぎるのだ。身体が小さい人物が更に身を縮めているのと同じ雰囲気があるというか……まあ、これは僕の勝手な偏見であり、箒に乗っている時はまた違ふのだろうが。

対面しながらも、どう話を切り出せば良いか迷っているらしい辺り

を見る限り、世間での「ビクトール・クラム」像とは合致しない。とはいえ、僕が遠目であれ見て来たホグワーツでの彼の印象からすれば、らしいと言えばらしいのであるが。

「——それで何の御用件でしょう。出来れば、さっさと口にして欲しい所ですが」

僕からそう切り出せば、何時も通りのむつつり面は変わらずとも、僅かに不快さを露わにした。こうして真っ向から対面してみれば、彼は意外と解りやすい質であるらしい。

「……聞いてはいたが、君は随分せっかちなんだな」

「僕の性格はどうでも良いですよ」

さっさと話せという視線をビクトール・クラムに向ければ、彼は僕へ少し睨むような視線を向けた後、口籠りつつも僕の下に来た理由を口にした。

「……ハーミイ・オウン・ニーの事だ」

「それだけを言われても解りかねますが」

発音は変だったが、誰を指しているかは流石に解る。

そして案の定の話題、想定通りの彼との接点と言える。

クリスマスと第二の課題を見れば、ビクトール・クラムがハーマイオニー・グレンジャーに強い好意を抱いているのは誰の眼から見ても明らかである。

ただ問題は、それを直接僕にぶつけてくる理由が解らない事だった。

「ハーミイ・オウン・ニーは、ポッター達の事を良く話題に出した。そして僕はザおくこの前、ポッターに君は彼女のボーイフレンドなのかと聞いた。彼は違うと答えた」

「……だから、何なのでしょう？」

「その時、ポッターから君の話が出た。君と彼女が、その、親しいと」

「——」
またハーリー・ポッターか、と溜息を吐く事はしない。

最初から出所は明らかだった。現状でハーマイオニーが自分から僕の話題を出す程に迂闊であるとは思えないし、長らく離れている以

上、ビクトール・クラムとの話に上らせる話題も無いからだ。だから問題は、やはり何故彼が僕に接触しに来たかなのである。

視線での更なる促しに彼は覚悟を決めるように息を吸った後、言葉の続きを紡ぐ。

「ポッターは、君こそがハーミイ・オウン―ニーの心に最も近い人間だと言っていた」

「……それは可笑しな話でしょう」

流石に買い被り過ぎだろうと、先の分を併せて溜息を吐いた。

「彼女の親友はハリー・ポッターとロナルド・ウィーズリー、グリフィンドールの彼等二人であり、彼女が最も長く時間を過ごしているのもあの二人だ。貴方との話の中で、僕が出て来る余地は無いでしょう」
「少なくともポッターはそう言った」

「であれば、ハリー・ポッターは見間違いをしている。僕が彼女に最後に会ったのはもう半年以上前の事です。近いどころの話では有りませんし、貴方がわざわざこうして問い詰める必要が有ると思えません」

強情を張るように言った彼の言葉を退ける。

あの日から僕達の距離は離れたままだ。

そして、もしかしたら、もう既に終わってしまったのかもしれない。ただ、ビクトール・クラムの用件は理解した。

僕に対してどのような答えを求めているのかも承知しているし、その答えを返すのにも問題は無い。公言すべき事でも無いが、事実は事実である。

「御不満ならば、僕もハリー・ポッターと同じ答えを貴方に返しましょう。僕はハーマイオニー・グレンジャーのボーイフレンドなどでは無い。それどころか、今となっては友人であるかどうかすら怪し――」

「――彼女は、君の事を友人だと言っていた」

「……………」

怒りが燃える彼の言葉に、思わず口を噤まされる。

「僕が君の名前を出した時、ハーミイ・オウン―ニーは大きく動揺した。ポッター達の事を話題にしても楽し気に笑っていた彼女が、君

の事だけは辛そうな顔をした。君についてだけ、彼女が特別な反応を示した」

「……それは単純に、彼女と今仲違いしているのが僕だけだからでしょうに」

「違う」

半ば呆れと共に言えば、即座の答えが返って来た。

言葉自体よりも、彼の真剣な表情と焦るような言葉の響きにこそ否定の強さが有った。

「重ねて今回の噂について聞いてみれば明らかだった。君がクラウチに何かしたという事を彼女は強く否定した。確かに嫌味で性格も悪く、正直クラウチをどうこうする程度は出来そうな人だけど、そんな事は絶対にしないと」

「……それは擁護されている、んでしょかね」

微妙な言い回しに苦笑し、しかし眼前の青年は余計に表情を険しくした。

「ハーミィーオーナーニニーは君の事を色々と悪く言っていたが、それでも君は信頼されている。どんなに会わない時間が経っても……その、と、友達だと」

「……それを伝えて、貴方は何を僕から聞きたいのです？」

「君がハーマイオニーをどう思っているかを聞きたいんだ」

「それは何故」

間髪入れず問えば、ビクトール・クラムは大きく息を吸った後で言った。

「僕がハーマイオニーを好きだからだ」

羨ましくなる程に堂々とした宣言。

己の存在に疑問を持たず、己の価値に信頼を置いている者だけが告げられる言葉。

この男は、ビクトール・クラムという人間を形作ってきた時間と選

扱に恥じる所が無いからこそ、そのような恋の感情の吐露を第三者に
対して出来るのだろう。

ハリー・ポッターとはまた違う形で、僕とは方向性を異にする存在
だった。

「――貴方は今の言葉を本気で言っているのですか？」

「ああ」

鋼のように頑なな表情のまま、彼は小さく頷いた。

瞳からも嘘偽りの気配は読めない。逆に真っ直ぐとハーマイオ
ニーを思っている事がありありと伝わってくる始末だった。

「……リータ・スキーターの記事が有ったとは言え、貴方の周りでアレ
を本気に行っている人間は殆どいないでしょう。彼女は『マグル』生
まれで、何の特別でもない単なる学生だ。世界的クイディッチ選手で
ある貴方の気の迷い、一年間の火遊び程度にしか思われていない」

「みたいだな。しかし、僕は本気だ」

「となれば、夏休み中に彼女をブルガリアに誘ったという部分も事実
ですか？」

「……………」

「断られた訳ですか」

返答が寄越されなかった事に笑えば、噛み付くように言った。

「断られた訳では無いし、君に笑われる筋合いはない」

「嗚呼、別に馬鹿にした訳では無いですよ。寧ろ意外にすら思ってい
たのです。僕は彼女が貴方の誘いに乗ったと考えていたので」

「……何故そう思う」

「ハリー・ポッターに聞けば良い。彼ならば答えてくれるでしょう」

教えてやる義理も有りませんと、そう呟く己の頬が歪んでいるのは
自覚していた。

嫌がらせでは無い。今の間答を経て、僕の事前の想像とビクトー
ル・クラムの実物との違いが改めて浮き彫りになった事が、堪らなく
愉快で有ったからだ。

僕の主観も世間的な評価としても、リータ・スキーターの記事の信
憑性は微妙だった。

特に彼女達の三角関係の記事自体が『日刊予言者新聞』ではなく『週刊魔女』というゴシップ雑誌に載せられたという事も有るし、そもそも『日刊予言者新聞』の記事からして、代表選手の名前の綴りを間違えるなど配慮の欠片も無い。ハリー・ポッターが両親の事を想って涙を零したという内容からも——他人の前でそのような振る舞いをする程に彼は解りやすい人間では無い——基本的に信用に値しない。

けれども、全てが嘘八百という事も無いらしいというのも読んでいれば伝わってくる物であり、そしてビクトール・クラムが彼女に熱を上げていくというのも、今回ばかりは事実であるという事らしい。ユール・ボールのダンスパートナーとしての指名からも解っていたつもりだが、ここまで本気だとは思ってもいなかった。

夏休み中の誘いが宙吊りのままになっているのは今の彼の悩みでは有るのだろう。僕の言葉通りハリー・ポッターに聞くべきか、或いは眼の前の僕を更に問い詰めるべきか懊悩しているらしいビクトール・クラムに言葉を続ける。

「断られた訳では無いという事は留保——いえ、貴方の表情からすればそう言う訳でも無いようですから、答えを貰う機会を逸したというあたりですか」

「……何故解る」

「貴方が明け透け過ぎるのです。余計な御世話かもしれませんが、もっと感情を隠すべきですよ。それで良く敵のシーカーに先んじてスニッチを取れる物だと思いますが」

ビクトール・クラムは、僕が会った中で最も感情を読みやすい人間の一人だった。

読みやすさで言えばドラコ・マルフォイの方が上だが、それは四年間の付き合いが有っての事である。先程まで彼は僕へ敵意や不愉快さを抱いていたが、今や不気味さを感じているのが手に取るように解る。

「そもそも貴方はもっと自分本位エゴイストな人間だと思っていたのですがね」

意外だという感情を隠さず、僕は更に言葉を積み重ねる。

「けれども、貴方はハーマイオニーに自分の誘いがどうなったかを聞

けず、そしてまた僕を問い詰めきれない。まあ、クリスマス前の革命の顛末で大体は察していましたが。あの時貴方は積極的に主導権を取りには行かなかつた訳ですし」

彼はフラー・デラクールやセドリック・デイゴリーに、革命の指導者たる事を譲った。

僕が最初に抱いていたビクトール・クラム像からは外れており、けれども今眼の前に居る背の高い上級生の印象とはやはり一致している。

「……何で僕が自分本位だと思っていたんだ。僕と君は会った事が無い筈だろう」

「だとしても、クイティッチ・ワールドカップの幕切れを見れば当然そう思うでしょう？」

あの顛末を見て、どうしてその感想を抱かないで居られようか。

クイティッチに左程詳しくない僕からしても、あれは並々ならぬ掟破りだったのだから。

「ワールドカップ決勝戦で貴方がスニッチを取って、しかし敗北した。その記事を新聞で見た時僕は、貴方は余程チームメイトを信頼していないのだろうなと感じたのですから」

「——」
ビクトール・クラムは大きく表情を歪めたが、反論の声は返ってこない。

別に僕の指摘を認めたくすは無い。寧ろ、指摘を受けて燃え上がった彼の瞳は、強烈な反発と否定を示している。けれども、反論を口にしなかったのは、彼がその非難をされてもやむを得ないと認めており、女々しい言い訳はしないという態度の表明だった。

「シーカーがスニッチを取った挙句敗けるという事は珍しいという程の物では有りません。僕が知る三年間のホグワーツでも、その事例は実際に見た事が有ります。そしてまず間違いなく、チームメイトも観衆もその行いを非難しない」

但し、そこには一つの前提が存在する。

「ホグワーツの、或いはプロシーズンのクイティッチマッチは原則、得

失点差が問題となるリーグ戦ですからね。百六十点差で負けるのと十点差で負けるのは、同じ敗北でも天地の差が有る。だからこそ、戦略的に敗北する事が許されません」

敗北に落胆はすれど、その選択を取ったシーカーを責める馬鹿は居ない。

けれども、今回のビクトール・クラムの事例は違う。

「貴方がやったのはクイディッチ・ワールドカップ決勝戦。一発勝負のトーナメントでは点数差は問題とならない。千点差で負けようが十点差で負けようが、負けは負けです。故にどんなに勝ち目が薄いと考えていても、勝っていないチームのシーカーがスニッチを取る事はまずないと言っている」

「……最終的なスコアは百七十対百六十で、僕達の負けだった」

ビクトール・クラムはポツリと補足の言葉を付け加える。

「そうですね。貴方がスニッチを取りさえしなければ、チェイサーが後二十点、いや十点取る可能性も有った。如何に薄かろうと、ブルガリアには勝ち目が残っていた。しかし、貴方はチームメイトが逆転の機会を作ってくれるとは考えず、己の手で自国の勝利を潰した」

付け加えれば、彼がスニッチを取る寸前、相手のシーカーは地面に衝突していた。

そしてスニッチを取れるのは規則上ピッチの七人中シーカーただ一人。相手チームのシーカーが一時飛行不能になった以上、敢えてスニッチを見逃し、逆転の機会を伺うべきだったという考え方も出来る、というより、そう書いていた新聞を見た。

一方で、ビクトール・クラムを擁護する声も無い訳ではなかった。彼はその前の試合展開で顔面を負傷しており、相手のシーカーがどうなったかを見る余裕などなく、スニッチを取らざるを得なかった。それもまた真つ当な指摘であつたのだが――

「――その様子では、貴方は自覚的にスニッチを取つたらしい」
今度の沈黙は、肯定を示すものだった。

僕はクイディッチに左程興味が無いのでその後の記事や論評などを追っていないが、恐らくは世界中で議論が沸騰した事だろう。

負けたら終わりのトーナメント戦で、自ら敗けを選択する事は是非か。個人戦では無いチーム戦において、一人に敗北を選択する権利は有るかどうか。

その議論の行く末にはやはり興味がないし、そもそも正解が存在する訳では無いだろう。

だが、そのような幕切れ故に僕は彼がホグワーツに来る前、「ビクトール・クラム」はチームメイトに信頼を寄せていない、自分の能力のみに絶対の自信を寄せる人間であるのだと思っていた。

「そんなに警戒せずとも、貴方がそうした理由は聞きませんよ」
身体が強張っているビクトール・クラムの姿を鼻で笑う。

「……君は興味がないのか」

「無い訳ではないですが、僕は記者では無く、そんな踏み込んだ取材インタビューをする間柄でも無いでしょう？ 今の話を聞いた貴方の反応だけで十分ですよ。別に今回の本題でも無いですしね」

あの幕切れについて彼が言い訳をせず、敗北の責任と非難を一身に背負ったのが解った事で十分。そして三大魔法学校対抗試合や今年度のホグワーツでの振る舞いも併せれば、もう最終判断を下してしまつて良いだろう。

ハーマイオニー・グレンジャーが惹かれているらしい所で多少不安に思っていたが、ビクトール・クラムは、あのギルデロイ・ロックハートからは程遠い人間性を御持ちらしい。

「——貴方の質問は、僕が彼女をどう思っているかでしたか」

クイディッチについてビクトール・クラムと議論したいとは考えていない。

彼の用件と本題について取り上げる。

「まあ、貴方が堂々とそう告げた所で僕が応ずる義理は有りませんが——誤魔化す意味も無いようなので答えましょう。異性の中で彼女のみが特別であり、一言で表現するならば、貴方と同じく、僕は彼女に恋をしているのでしょうか」

「敢えて言葉にするならば、そう評する以外にない。」

父親より多少はマシだ。けれども、状況までひっくり返るまで考えれば殆ど同じであり、やはり確かに血は引いているのだろう。そのような感情を抱く事が死に繋がる相手に対して、僕は恋心を抱いてしまっている。

しかし真正面から回答したにも拘わらず、彼は余計に表情を険しくした。

わざわざ直接聞きに来たのだから、予想通りの答えであった筈である。だが僕の眼には、彼が予想外の回答が返ってきたと感じているように見えた。

「……なら、何でスキーターの記事に何も動こうとしない？」

「動こうとしない、とは？」

「君はマルフォイと同じスリザリンなのだろう。そして君が酷く賢いのは良く知っている。なら、彼女を傷付ける記事を止めさせるなどやりようが有ったんじゃないのか？」

「僕の力を過大評価し過ぎですし、本気で傷付いたならば別の話ですが、彼女は僕の力を必要としていないようです。押し付けがましい恩など迷惑なだけでしょう」

そう返せば、彼は強い怒りを抱いたようだった。

何時ものむっつり面を更に顰めさせ、語気荒く詰め寄ってくる彼は、今まで猫背気味だった背中も伸びたせいか余計に大きくなったように思えた。

「そもそも僕が彼女を休暇中に誘った事が真実だと解った事について、君は眉一つ動かさなかった。彼女に恋をしているというなら思う所は無いのか？」

「何も、という程では有りませんが、左程重大とは思っていませんよ。行くかどうかはハーマイオニーが決める事ですし、それはそれで構わないとすら考えています」

「僕を馬鹿にしているのか」

「別段馬鹿にしているつもりは有りませんが」

更に怒りが増したようだったが、そのような反応は心外である。

「彼女が誰と付き合うかというのは彼女自身が決める事です。そして

向き合ってみて改めて思いましたが、貴方と親しい仲になる事は彼女にとって有益ですし——貴方が彼女をこの国から連れ出す事は良い事だろうとすら考えています」

故に、ビクトール・クラムに思う所は無い。

彼と彼女が交際を始めようと、僕を大きく揺るがす事は有り得ない。

「なっ!? ほ、本気で言っているのか……!」

「何故そう疑問に思うのです?」

無駄な確認をするビクトール・クラムが、僕には不思議で仕方が無い。

ハーマイオニー・グレンジャーの穏やかな未来を望むならばそれが最善。

他ならぬ本心だというのに、ビクトール・クラムは愕然とした表情を浮かべている。それどころか、彼の深い黒の瞳には、僕への拒否感がありありと現れていた。

「そしてこれでも僕は、貴方に真摯に向き合っているつもりですがね」
少なくともビクトール・クラムの前では、一切の嘘偽りを述べてはいない。

「特に今は純血至上主義を掲げた戦争の再開前で、彼女は『マグル』生まれ。加えて『生き残った男の子』の親友というのは、それだけで命を狙われるに値する。それを考えれば、彼女はこの国から出ていくのが最も賢明です」

彼女の立場への懸念は変わっておらず、特に今年になってより強くなっている。

ハーマイオニー・グレンジャーに限らず、マグル生まれの魔法使いは魔法界から去るべきであるし、可能ならば国外移住すべきである。ホグワーツ、或いはこの国の魔法界に拘る必要など無い。それらに今後も愛着を抱き続けたいならば——これから増える死人によって美しい想い出を穢されたくないならば、逆に自ら離れるべきですらある。

「彼女とハリー・ポッターの友情は問題だ。貴方が知っているか知り

ませんが、彼と友誼を結んでいた御蔭で、彼女は三年連続で生命の危機の一步手前くらいには立った。何処かの老人によれば一年目は違うようですが、客観的にはやはり三年連続でしょう」

クイリナス・クイレル教授。バジリスク。吸魂鬼と狼人間。

何処かでボタンの掛け違いがあれば、彼女は確かに死んでいた。親が知らない間に子供は何度も危険な遊びをしているというような、そんな世間的な一般論では括れない。犯罪者の悪意に由来する明確な死の危険に、この三年間で彼女は直面していた。

「しかし、愛情は大抵の場合、友情よりも優先される物でしょうか？ 闇の脅威に立ち向かう友人と共に戦う事よりも、貴方への愛と貴方との子への情を選択して海外に行ってくれるのならば、それは僕にとって歓迎出来る事象だ。まあ、流星にその事を心から祝福するとまでは行きませんが」

ただ、受け容れられる結果では有る。

人は死んだら終わりだ。今年初めの屋敷しもべ妖精へのハーマイオニーの関心を受けて多少僕の心境に変化が有るが、それでも生きている事が最善だというのには変わりはない。

「その点、ビクトール・クラム、貴方は非常に良い位置に居る。国外の魔法使いで、多大な名声と富を既に獲得しており、数々の雑誌や女生徒の反応を見る限りでは顔も良い部類に属するようだ。そんな貴方が彼女を手に入れようとするのを僕が妨げて一体どうするのです？」

「……君は彼女と一緒に居ようと思わないのか？」

「繰り返しますが、それを決めるのは彼女ですし、その必要も無いらしいのはこの四年間が示す通りです」

グリフィン・ドールに組分けされていれば、僕は彼女と居続けたと思うたのかもしれない。或いは二年前や今年の事が無ければ、僕は傍に居たいと考えたかもしれない。

しかし僕はスリザリンであり、二年前は近くに居た所で何も出来ず、そしてまた今年の離別は何の成果も得られなかった。

更に厄介なのは、逆に近付いても状況が好転するとは思えない事だ。

どう考えても、今のスリザリンから外れる事は、僕の特異な立場を喪うという事でもある。ハーマイオニーの事を想えばこそ、そのような愚行は利益が無く、不合理だ。

「貴方——貴方達と違い、僕には彼女を護れる力は有りません。貴方達には地位が有り、立場が有り、財力が有る。貴方の性根も善良みたいですしね。であれば、僕に何も言う事は有りません。元よりその権利が無いのも御承知でしょうけど」

「……君に伝わっていないようだから敢えて口にする。君は彼女に恋していると言った。ならば何故、僕から奪おうと考えない?」

「逆に何故、自ら彼女を不幸にしなければならぬのでしょうか?」

「……どういふ訳か畏怖すら浮かべはじめた彼に、僕は真正面から淡々と答える。」

「貴賤結婚の理想と現実が示すように、釣り合わない人間が添い遂げようとしても良くはならない。それを覆せるような力を持っていない限り、身分違いや立場違いの恋はすべきではないでしょう。そして僕はそのような『特別』では有りません」

マグルであった母と、魔法族であった父の結婚。

そこに物語のような大恋愛が存在していた事には疑いの余地は無く、けれども最終的な結果は破滅だった。彼女達は残らず不幸になり、命を散らす羽目になった。

僕にとって、ハーマイオニーと共に居る事はそれと同種のように思える。

これからの戦争で彼女の命を護り切る覚悟も自信も無い。そもそも彼女の両親のように、立派に子供を育て、幸せな家庭を築いている想像が付かない。一時の感情で道を踏み外してしまつては、悪い未来が訪れるようにしか思えない。

「……ハーミー——オウン——ニーに好かれようと、いや嫌われる事を君は恐れないのか?」

「好意は相手から嫌われて消える程度の物なのですか? 少なくとも僕にとつては、それが嫌悪や敵意によって相殺される事が有つても、決して無くなる物では有りませんよ」

その意味で、僕がフラーやガブリエルに抱くのは好意では無いのだ。

彼女達が僕から離れば、無くなる程度の物でしかない。故に僕は彼女達を想う事も出来ず、そして今、僕が消え失せる事の無い情だと確信出来るのは、ハーマイオニー・グレンジヤーに抱く物が唯一でしかない。

「君のは……異常だ。それは恋なんかじゃない」

「恋で無ければ何だというのです？ まさか愛だとも？」

何処か振り絞ったような彼の必死さに、何故か無性に可笑しくなつた。

「僕が抱く感情は一方的な物であり、僕と彼女は恋人でも親子でも何でも無い。赤の他人だ。そこに『愛』が成立する余地は無いでしょうに」

最早ビクトール・クラムの顔に浮かんでいたのは恐怖だった。

僕は奇抜な論理を持ち出した訳でも無い。けれども、彼にとっては共感も理解もしがたい物で有つたらしく、だが同種の感情を向けられる事には僕自身今更だ。このホグワーツでマトモな眼で見られてきた事の方が少なく、そして僕は異常者であるのだろう。

けれども、今更取り繕うつもりも無く、どうすれば取り繕えるのかも知り得なかった。

母が死んだ時、僕は既にステイブ・レッドフィールドだったのだから。

「……質問に対する答えはこの程度で良いですか？」

「いや」

僕の確認に、ビクトール・クラムは首を振る。

けれどもそれは反射的な物に過ぎなかったのだろう。彼が欲しい答えが得らなかつたのは確かだろうが、これ以上僕に何を聞いて良い

のか、どう問い詰めて良いのか解らないように見えた。自分で言うのも何だが、普通の感覚を持つ人間にとつては、僕のような異常者の相手は手に余るといふ事なのかもしれない。

そして、やはりビクトール・クラムは真つ直ぐ過ぎる。

あのフラーですら彼女の美貌が引き寄せる厄介事が為に大概面倒な性格をしているというのに、この世界的クイティツチ選手である彼は、しかし捻じくれた部分を殆ど持つていない。多くの富と名誉に狂わされた様子が欠片も見えない。世間知らずという訳では無いが、余程恵まれた人生を送つてきたのだろう。ドラコ・マルフォイと同様、感情や思考が読み取りやすいのも納得である。

もうビクトール・クラムが白だ（犯人でない）らうというのもほぼ確信した。

純血主義者であれば嘘でも言えないであろうハーマイオニーに対する感情、プロクイティツチ選手である彼に利益が存在しない事、何より今話をした上での感覚や掴んだ性格を考えれば、彼が死喰い人に靡く可能性は、イゴール・カルカロフとの接点を考えても非常に低い。仮にイゴール・カルカロフに誘われれば、彼は断固として訣別するだろう。ハリー・ポッターよりも余程解りやすい正義感を、この男は持っている。

……ならば多少の助言をしても罰は当たらない、か。

このまま待つていても質問が継がれないようだと理解し、僕は口を開く。

「貴方が何も無いというならば、僕からも一つだけ質問が有りますが」

「……な、何だろうか」

「——貴方は今回のクイティツチ・ワールドカップでチームメイトへ無能を宣告し、自国を敗北に追い遣つた訳ですが。その責任はどう果たす気ですか？」

あの試合の正しい認識については、既に互いに確認している。

だからその質問は露骨な挑発と嘲笑以外に在り得ず、故にビクトール・クラムが示す反応は劇的で、苛烈で、身震いする程に鮮明だった。

「……僕（ザオク）に出来る事は、ただ、勝つ事だけだ」

先程までの動揺や、或る意味で弱々しいと思える態度は一瞬で消え

ていた。

背筋を伸ばした訳でも無いのに、彼の身体は先程までより遙かに大きく見える。僕を威圧している訳でも激怒を向けている訳でも無いのに、己が圧倒される感覚、この眼の前の男より自身が遙かに矮小だという実感が湧く。クイディッチ・ピッチに居るビクトール・クラムは、今の彼なのだろう。

箒の上の頂点が、眼の前に立っていた。

「僕は敗北に言い訳をしない。上手い台詞を言える訳でも無い。だから、態度で示す。チームを負けさせた僕は、今度こそブルガリアに優勝杯を齎してみせる」

その宣言は小さく、静かで、けれども確固たる意思が籠められている。

「確かに貴方は既に最高峰にして、しかもこれから最盛期を迎える選手です。ただ、シーカーの腕前で勝てる競技でないのは決勝戦が示す通りでしょう？　そして逆も然りだ。今回貴方のチームのシーカー以外が無能だった訳では無い。チームとして貴方達は完敗だった」

決勝戦まで勝ちあがってきた以上、ブルガリアのチームがビクトール・クラム一人のチームだったという事は決して有り得ず、今回を逃せば向こう十年は優勝など出来ないと言われた程であり、しかしそれでもアイルランドの前に敗れ去った。

「スポーツ選手が大言壮語を吐くのは常の事です。そして、貴方に次の機会が訪れるとは限らない。どんなスポーツでも世界最高の大会ワールドカップや四大大会などで優勝出来ない名選手は掃いて捨てる程居る。貴方がそうならないと何故言えるのです？」

「絶対は無理。だから僕は繰り返すだけだ。今度こそスニッチを取って勝つと」

「となれば、四年後は期待して良いと？」

「そういう訳では無い。勿論、四年後にも優勝杯を当然獲りに行く。だが、それが叶わなければ、八年後、十二年後、十六年後、二十年後。どんなに衰えようと、僕が引退するまで言い続ける。僕が今のチームメイトに対して犯した罪は、そうする事でしか消えないと思ってい

る」

ビクトール・クラムが最も優勝に近付いた瞬間が今大会で有った。既にそう書いている新聞記事は、多分探せば有るだろう。

最高峰同士の戦いでは、負け方にも注目される。今回のブルガリアの敗北はクイデイツチ史に残る無様な敗北の仕方であり、負けても称賛される物とは言えなかった。チームの奮起を諦め、自らの手で試合を終わらせた彼には、今後厳しい眼も向けられる事だろう。

……だが、それでも彼は豪語してみせるのだ。

己への自負と覚悟、そしてチームメイトの夢を断った者の責任として。この世界に絶対が無かろうとも、己だけはそれを絶対と嘯き続けるのだと。

僕が挑発した期待通りに、眩い在り方を体現してみせる。

「——だからこそ、僕は貴方のように自信の有る人間が嫌いなんですけどね」

自分のような人間にとっては、眩し過ぎて嫉妬と劣等感で堪らない。

溜息交じりの罵倒に怯んだビクトール・クラムを後目に、僕は敬意を示す言葉を続ける。

「貴方がハーマイオニーを誘った件ですが」

そこで大きく肩で息を吐いたのは、許して欲しい所だった。

「返答を貰う機会を逸したに過ぎないのならば、もう一度誘う事をお勧めしますよ。断ってすらいけないというのは彼女らしくも無い。何だかんだ言って彼女は知識に飢え、好奇心も旺盛だ。ブルガリアの魔法界を見る機会に興味をそそられない訳がない。家族ぐるみで来ないかと誘えばまず乗ってくるでしょう」

彼は微妙そうな顔をしたが、その心境は理解しているし、そして高望みし過ぎである。

「どの道、彼女を一人国外に出す事はグレンジャー夫妻も良い気はしませんよ。その方がハーマイオニーも受けやすいでしょう。グレンジャー夫妻もウィーズリー家、つまり魔法界の家庭に招かれた事は無いみたいですから、寧ろ大喜びしそうな物です」

「……マグルに魔法界の事を知らせるのは法律に反する」

「グレンジャー夫妻は彼女の親として既に魔法界の事を知っていますし、貴方の国の魔法界で一家全員をぞろぞろと連れ歩けと言っている訳では有りませんよ」

第一。

「ビクトール・クラムが女性を連れ歩いているなんて知れたら大騒ぎになるんですから、貴方達二人で魔法界と一緒に出歩くななどという事は初めから無理でしょうに」

僕の指摘に不機嫌そうに眉を寄せたのは、まず間違いなく彼が普通のカップルのようなデートをする事を夢想していたからだろう。

ただ、それは考えが余りにも甘いと言うべきだ。ハリー・ポッターや僕にハーマイオニーとの関係を真正面から聞いてきた事からも思っていたが、どうも女遊びにかまけてきたようなタイプでは無いらしかった。

「貴方はもう口を噤まないと思います、ハーマイオニーが貴方の誘いに対して留保の言葉すら返さなかつたのは一体どういう訳なんですか？」

ビクトール・クラムはそっぽを向いた。

答える気が無いというより、面と向かつては答えたくはないという雰囲気だった。

「……第二の課題、制限時間に遅れていたポッターをハーミイ・オウソニー・ニニーは気にしていた。僕が隅へ引っ張っていった時も気もそぞろだった」

「まあ、そんな所でしようね」

僅かな沈黙の後の言葉は、予想通りと言えば予想通りか。

「しかし、貴方も誘ったタイミングが悪かった。彼女にとつてハリー・ポッターは単なる友人では無く、三年連続——いえ、もう四年連続でホグワーツで死に掛けた親友です。流石に一年近くもホグワーツに居れば彼の問題児ぶりは十分聞いていますでしょう？」

「……ああ。一歳の時にヴォルデモートを倒しただけじゃなく、これまでも相応の厄介事に巻き込まれ続けて来た」と

「現実は何以上にも酷い事を、彼の傍に居るハーマイオニーは知っています。だから、これからの貴方の誘いの成否についても同様の事が言えるでしょう」

その言葉に疑問符を浮かべているのがありありと解る彼に説明を続ける。

「夏季休暇中にブルガリアに行くという話を彼女が受けたとしましょう。ただ、今年ハリー・ポッターに何かがあった場合、それは御破算になる可能性が有るという事です。特に今年は今までと違い、単純にハリー・ポッターの命を狙っているようには思えない。今までの三度は一年区切りで殆ど問題が終わっていましたが、今回もそうだとはいえない」

「……僕がクラウチに襲われた時の事を言っているのか」

「ええ。ハリー・ポッターよりもバーテミウス・クラウチ氏を消す事を優先するというのは、今までの恒例行事の傾向から明らかに外れている」

これまでの三年間で、ハリー・ポッター以外に被害が出た例は存在する。

ただ、バジリスクがマグル生まれを排除するのは自然であり、シリウス・ブラックがロナルド・ウィーズリーを襲ったのも、ハリー・ポッターのベッドと間違ったのだと一応理屈付ける事は可能だった。そもそもあの時点で僕はハリー・ポッターが目的では無いだろうと考えていたから、彼以外に被害が出た所で左程驚きは無かった。

けれども、今年ハリー・ポッターを代表選手とした“犯人”が居ながらも、その後彼に対する害意が伺える現象は一切起こっておらず、理屈に合わない。謎めいた事件は今年の闇の印から始まっており、その裏には大きな計画と陰謀が存在する気がしてならない。

改めて少し考え込んでしまった僕に、ビクトール・クラムはふと何かに気付いたような顔をした。

「……僕を気絶させた主犯が君であるというような馬鹿馬鹿しい噂が真実だとは僕も思っていない。けど、第三の課題で君が見張られる羽目になったのもそういう事なのか？」

「どういう事です?」

「自分で言うのも何だが、僕は単なる生徒じゃない。カルカロフも僕が襲われた事を政府に抗議させると言っていた。だから、この国の政府は、手頃な容疑者として君を挙げたんじゃないか?」

「……嗚呼、その可能性は考えていませんでした。確かにそれは面白い発想だ」

言われてみれば、僕は都合の良いスケープゴートと成り得る位置に居る。

文句を言うような親や親戚、権力者も居ないから、多少雑に冤罪を掛けても大きな問題は起こり得ない。消え失せたバーテミス・クラウチ氏について何も掴めていませんと馬鹿正直に彼の本国に報告するよりは、捜査が進展している雰囲気を出さる事は出来るだろう。

ただ、それは可能性が低いように思える。

ビクトール・クラム襲撃犯の重要参考人に話を聞き、監視下に置いたとなれば、先方の政府がコーネリウス・ファッジに捜査状況を聞くとするのは解り切っている。如何にあの大臣とて、そのような面倒が待ち受けている問題の先送りをするだろうか。

「まあ、貴方の推測が正しかろうと大勢に影響は出ないでしょう。今年度も直に終わる。ハリー・ポッターに関して何かが起こりそうなのは第三の課題くらいのものでしょう。貴方が今年ハーマイオニーをブルガリアに誘いたいのであれば、これから、特に課題中は警戒する事です。放置されたとはいえ、貴方も襲われた身であるのは確かなのですから」

とはいえ、ビクトール・クラムの周りで何かが起こるとは余り思えない。

バーテミス・クラウチ氏を消した誰かは、同時に彼を害する事が出来た筈であり、しかし放置された。つまり、その誰か——ハリー・ポッターを代表選手に仕立て上げた「犯人」と断言出来ないのが難点だが——にとって彼はどうでも良い存在なのだろう。

問題は襲撃時に服従の呪文を掛けられていないかという位だが、アルバス・ダンブルドアやイゴール・カルカロフが注意を払っていない

筈もない。

そして彼が“犯人”ではないらしいとすれば、警戒してくれる人間が増えるに越した事は無い。アルバス・ダンブルドアやアラスター・ムーディ教授程に信頼出来る訳でも無いが、彼は代表選手である。課題の最中で何かが起こるとすれば、彼の警戒は無意味ではないだろう。

変わって考え込み出したビクトール・クラムの様子を少し何うが、どうやらこれ以上聞きたい事も語りたくない事も無さそうだった。

「これで話が終わりだというならば、僕は戻りますよ」

応援はしていないが、武運は祈っています。

それだけを言い残して身を翻そうとすれば、しかしビクトール・クラムは僕を呼び留めるようにして言葉を紡いだ。

「——思えば、今回の三校試合において、君だけが僕達代表選手の敵だった」

一体何を言い出すのか、と口には出来なかった。

彼を見やれば、僕がワールドカップの敗北を持ち出した時と同じ眼をしていた。

「ポッターもデイゴリーもデラクルも、本当の意味で敵では無かった。第一の課題が終わってからは猶更だ。僕達は競い合いながらも仲間だった」

けれども君は違う、と彼は言った。

「代表選手が決まった時も、第一の課題が終わってからも、第二の課題が終わってからでさえも、そしてクリスマスですらも、君は僕達の前に立ち塞がった。本来観客部外者に過ぎない筈なのに、君は思いも寄らぬ形で関わり続けた。それが出来たのは三校でただ一人、君だけだ」

「——」

「君の御蔭で、僕達代表選手が纏まれた部分も有ったというのものもある。だがそれ以上に、君のような人間が居ると知れた事は、僕がホグワーツに来て良かったと思える事の一つだ。それだけは……君に知っていて欲しい」

「……そうですか」

その言葉に、一体それ以外のどんな反応を返せば良いのか。
それを持ち出した意図が解らないし、僕がそれを聞いて何かが変わる訳でも無い。そして反論を返そうとも考えたが、言葉が浮かんで来なかった。だから僕はビクトール・クラムを残し、今度こそその場を立ち去った。

——そして、運命の六月二十四日第三の課題当日が訪れる。

公平性の有無

運命の日がやってきた。

三百年振りの三大魔法学校対抗試合の勝敗は今日決される。選手の名誉も、学校の榮譽も、六時からの課題如何によつて決まる。そのホグワーツはこれまで一度も体験した事の無い程の興奮状態、クリスマス前を遥かに上回る程の熱量に包まれていた。

三校の代表選手である四人には、代わる代わる生徒達が応援の言葉を掛けに行っていた。

そこに学校の垣根は無く、スリザリンを含めてすら寮の垣根も無い。

ダームストラングがフラー・デラクールを応援し、或いはボーバトンがビクトール・クラムを応援し、そしてハッフルパフとグリフィンドールが御互いにセドリック・デイゴリーとハリー・ポッターを応援し合う。少なくとも今この瞬間においては、誰にとつても勝敗自体は二の次であり、三大魔法学校対抗試合を計画した者達が掲げた尊き理念が、確かにこの場所で実現していた。

もつとも、僕には何時も通りに関係ない事である。

浮足立った彼等を横目に、僕は朝食を終え、さっさと寮へと向かった。

フラーは露骨に、そして何故かビクトール・クラムですら意味ありげに僕を見てきたが、僕は彼女達を見なかつた振りをした。

課題は夕食後からだというのに今から言葉を掛けに行く考えが余り理解出来ないし、他の大多数に応援される方が彼等としても嬉しいだろうし、そこは僕の居て良い場所でも無い。

何より代表選手達は試験を免除されているが、普通の生徒である僕は今日まで当然試験である。そちらの方が優先度が高いのは明らかであり——もつと言つてしまえば、三校試合に関わらない事をしていなければ気が可笑しくなりそうだったのだ。

何にせよ、今年度僕の頭を悩ませ続けた問題は今日で決着が付く。

そんな強い予感がしてならなかったし、そして軟禁される事が決まっている以上、僕はそれに関与する事が出来ない。このまま大多数の生徒と同様普通に試験を受け、予め決められていた通りに試合中軟禁され、課題の結果が出るのを待つしかない。

予期しうる不確定要素は最早存在せず、アルバス・ダンブルドアやハリー・ポッターで無い僕の周りでは、ビクトール・クラム以上に何の事件も起こる筈は無い。

賢者の石、秘密の部屋、アズカバンの囚人。それらにおいて僕は何の関わりも持たないままであり、全てが終わってから事の顛末を知らされるばかりで、そしてそれらの事件が僕自身を何ら変革する事は無い。

今回の炎のゴブレットでも同様。

僕は傍観者のままである事に変わりはない。

——そう、思っていたのだ。

魔法史学のテストを適当に終えた後、異変の一つは起こった。

既に終わったと思っていたし、最早関わる事は無いと考えていた。それは僕の独善的な結論では無く、御互いの共通理解だった筈なのだ。

スリザリンはスリザリンを理解する。

如何に彼がスリザリン寮に属していなかろうと、その資質は有している。故に僕がどんな人間であるかを、彼が理解出来ない筈もなかっただろう。

確かに僕は、決定的に対立すれば相手と共倒れになるまで止められないだろうが、さりとて相手を貶めるような面倒事にわざわざ骨を折る人間でも無い。更には彼と共倒れになっても僕の気が晴れる以外には利益は殆ど無いのであり、ああいう対立軸が生じたのも僕が意図した物ではないのだから、彼から仕掛けられない限りは僕が積極的に動く事はないのだ。

第一、客観的に見れば、彼は既に勝利を得ている。

僕の見当外れの中傷を寛大にも許した時点で、大多数の人間は彼が僕に情けを掛けたと見ただろうし、それは基本的に間違っていないかった。

僕自身も敗北を認めているし、それは彼本人にも伝わっているだろう。見えなくとも確かに存在する力関係を、人付き合いに長けた彼が察せない筈も無い。だからこそ彼が関与する理由など無く——それは彼が卒業するまで変わらないだろうと、そう結論付けていた。

魔法史学のテストの後、彼がハーマイオニーを呼び止めたのは一応目撃していたが、それは僕に関わりが無いだろうと考えていたし、そうであって然るべきだった。

だからこそ、朝と同じように速やかに昼食を済ませた後、僕の前に彼が立ちはだかった時は大いに混乱させられ、眉根を寄せざるを得なかったのだ。

「——レッドフィールド。少し時間を貰って良いかい？」
ハツフルパフの模範生。

セドリツク・デイゴリーは、何処か覚悟を決めた瞳でそう言った。

求めを拒絶する選択肢は無かった訳では無い。

けれども、ビクトール・クラムの時と同様セドリツク・デイゴリーが僕に話し掛けたのは人目に付き過ぎており、そしてビクトール・クラムの時と違ったのが、彼から感じる切実さと必死さだった。

理由が無ければ接触しないという事は、理由が有れば接触する価値を抱くという事でも有る。最早「犯人」が知れる事を期待していなかったが、それでも僅かでも可能性を見出せるというならば、話位は聞いても良いかとは感じたのだった。

セドリツク・デイゴリーに連れられた先は、中庭の隅だった。

第三の課題が今日で終わるといふ事は、ポーバトンやダームストラングとの別れの日もいよいよ迫ってきているという事も意味している。中庭のあちらこちらで違う制服を着た者達が入り混じって遊ん

でいる光景が見られたし、食堂から持ち出したのかサンドイッチなどを摘まんでいる生徒達の姿も見受けられた。

そしてまあ、少なくともハツフルパフ生達が遠巻きにこちらを見ているのは、彼等なりの監視のつもりかもしれない。

今の僕の立場を鑑みれば、それは理解出来る用心だった。

自ら望んでの事とはいえ、今の僕にはバーテミス・クラウチ氏を消した疑惑が掛かっている。ビクトール・クラムは真正面から僕を疑っていないと断言したが、その事實は警戒を解いて良いという事を意味しない。

セドリック・デイゴリーもそれを理解して僕を中庭へと連れ出したのだろうし、実際彼は優等生の微笑みを浮かべながら言った。相変わらず、気に食わない完璧な笑みだった。

「今の状況からして二人だけにはなれないが、御互いそれで十分だろう？」

「……そもそも、僕は貴方と話す事は無いのですがね」

軽く溜息。

ベンチは傍に有ったが、座る事はしなかった。

そんな友人らしい真似はしたくなかったし、個人的にはそこまで長話をしたとは思えない。二人立ったまま、互いに視線を合わせず会話を続ける。

「もう言ってしまうですが、御互い不干渉という事で終わったのでは？ 嫌味なスリザリン生は貴方の資質を読み間違えた。それで済んだ話です」

「確かに僕もそのつもりだった。けど、僕は今ここにハツフルパフの良い子ちゃんとして立っている訳じゃない。その覚悟を汲んでくれると助かる」

「——まさかそこまで率直に言ってくるとは思いませんでしたよ」

解りやすくもいい事ですが、と口にしながら僕はローブから杖を抜いた。

遠巻きに警戒していたハツフルパフ生、そして何だかんだ気になっていたらしい他のダームストラングやボーバトンの生徒もギョツと

した顔をしたが、セドリック・デイゴリーは眉一つ動かさなかった。僕はそのまま小さな声で呪文を唱えつつ、中空に向けて杖を振った。

「何にせよ、盗み聞きはされたくない話でしょう?」

「確かにそうだね。しかし、君は随分と便利な呪文を知っているんだな」

「……まあ、ホグワーツで良かった事の一つは、師に恵まれた事ですからね」

もう一度溜息を吐いて、今度はセドリック・デイゴリーと視線を合わせた。

彼に閉心術の心得はやはり無い。ただ、腹を括った人間の心は読み辛い。閉心術の初歩的な訓練が心を空にする事であるが、心の揺らぎを無くす事が出来るならば別に空でなくても良いのだ。解釈の余地が無い心は読み取りようが無い。今この時でさえ、僕はセドリック・デイゴリーが並々ならぬ覚悟で僕と対峙しているという事しか理解出来ない。

……問題は、彼が何故そこまで覚悟を決めているかであるのだが。「貴方が『セドリック・デイゴリー』を捨てて僕の前に立っているというならば、一応予め言っておきましょう。貴方は僕に話があるようですが、ではその自己満足に付き合ったとして、僕に一体何の利益があるのです?」

話の切り出し方からして、今回の事件の事では無いのは既に感じ取っていた。

それでも敢えて立ち去らないのは、彼が仮面の存在を自白した事への義理に過ぎなかった。

「これ以上ハッフルパフ生に敵視されなくて済む。それで十分じゃないのかい?」

「不十分だからこそ言っているのは解るでしょうし、それで釣り合わないと思っっているのではないのですか?」

僕の問い掛けに、セドリック・デイゴリーは頬を緩めた。

「そう直接的に言ってくる人間は居なかった。少なくとも僕の周りに

は」

「どういう訳か貴方はハッフルパフ生ですからね」

「いいや、スリザリンの同級生もだよ。純血主義を鼻に掛けた人間達でさえも、僕を露骨に敵に回す事はなかった。クイディッチのシーカー、成績最優秀者、そして自分で言うのも何だが顔も人当りも良いのだから、敵視した所で負け惜しみにしか聞こえない」

彼はにこやかな笑顔のまま、しかし淡々と事実のみを言った。

「負け惜しみに聞こえるのは、僕の方も何ら変わらないと思うんですが。貴方と僕では全く釣り合っていない。周りの生徒から見ればその筈です」

「そうかな？ 見た感じでは君がそうとは思えないし、三年前に何をしたのかを多くの生徒は忘れていないし、君の今年の行動と発言を見れば、決して侮る生徒など居ないだろう」

そう言いながら、セドリック・デイゴリーは僕達の方を見ているハッフルパフ生の方に視線を向けた。

彼等にも僕の友好的とは程遠い態度は見えているらしく、険しい表情を続けている。けれども、セドリック・デイゴリーは彼等の善意を歓迎しているどころか、寧ろ疎んでいるようですら有った。

「二年前、ハリーはスリザリンの継承者だと疑われた。それは彼が蛇語使いであり、例のあの人を滅ぼしたと伝えられる人間だったからだ。彼ならば可能だと、彼が闇の魔法使いの資質を持っていたから、生き残った男の子”になる事が出来たと考えられたからこそ、ハリーへの嫌疑は晴れなかった」

「……それが何か？」

「対してスリザリンの継承者のしもべとして疑われた人物が一人居る。奇妙な事に、高貴な血筋を有するマルフォイよりも、その人間の方が遥かに疑われている気が僕にはした。それも何故か、他の三寮よりもスリザリンの方が疑っているように見えた。ハリーと同じく、その人間は半純血だというのにね」

「……………」

その辺りの事は二年時のマルフォイからも、今年のフラワーからも聞

いた。

ただ、第一容疑者がハリー・ポッターであるのは揺るがないとしても、そこまで多くの人間から第二容疑者として疑われていたとは知らなかった。

「普通ならば、ホグワーツ生が大人の魔法使いを——それもクラウチ氏をどうこうしたとは考えない。彼我の実力差は歴然としており、けれども、ハツフルパフ生はああして君を警戒している。それが何を意味するかなんて、君には当然理解出来る筈だよ」

セドリック・デイゴリーは僕へと視線を戻し、その強い光を宿す瞳の前で、僕は何も言葉を発する事が出来なかった。

「確かに君と話したいというのは、僕の自己満足の為だ。しかし、こうして話す利益が有るかと言えば、君の方にも確かに利益は有るさ」

「……それは何です？」

「申し訳ないが、教えるのは焦らさせて貰う。直ぐに解る事だからだ」

「……まるで貴方が既に僕へと利益を与えているような言い草だ」

その指摘に彼は表情を強張らせたが、一応僕が立ち去る気が無い事は伝わったのだろう。

セドリック・デイゴリーは長く息を吐いた後、徐に言った。

「——ハリーは良い奴だ」

そう言う彼の瞳の中には、嫉妬と憎悪の大火が燻っていた。

何故、ハリー・ポッターの話になるのか。

当然の疑問で有ったが、僕に口を挟ませない程に、彼の言葉は力強かった。

「ハリーは四人目の代表選手、在ってはならない存在だ。けど、彼が単なる目立ちたがりの為に自分で名前を入れたのだと一体誰が信じる？ 彼はそんな事をする人間じゃない。ハリーは無理矢理三校試合に参加させられる羽目になった」

「……僕が見た所、彼は全く参加したくない訳ではなかったと思いませんが」

「かもしれない。寮と学校の名誉、そして何より好きな子に良い恰好を出来るんだ。誰だって可能なら参加したいに決まっている」

だが、と彼は続けた。

「そうしたいと思いつくのと、実際にそうするのは別だろう。ハリーは決して悪い奴じゃない。規則を自ら破って三校対抗試合を台無しにする事を考える程、悪い奴じゃないよ」

「……………」

第一の課題後には既にフレーもビクトール・クラムもそう思っていただろう。

それは彼女達の言葉から十分伺い知れる事であるし、ただ——
「貴方は心の底からそう思っている訳ですか？」

——セドリック・デイゴリーまでそうかというのは、僕は確証を得られていなかった。

けれども、彼は正確に僕の言わんとする事を見透かした上で、小さく口元を緩めた。自嘲と嫌悪に満ちた、僕が彼に対して多少好意的になれる笑みだった。

「君の推測通り、何事も無かったのなら第一の課題後、僕は他の二人と立場を異にしていただろう。けれども、僕は心底そう思っていると肯定出来るよ」

「……………何故」

「第一の課題はドラゴンだ。そう僕に教えてくれたのはハリーだからね」

「……………」

瞬間、思わず空を仰いでしまったのは流石に不可抗力だろう。

「……………驚かれるのは期待していたけど、ここまでとは思わなかったな」
「……………ええ、これは僕の勝手な事情ですよ。貴方が予期した物とは別の理由です」

ハーマイオニーに対して持ち出したのは、あくまで仮定の話だった。

しかしこうして天秤が傾き過ぎる、出来過ぎた話が実際に起こって
いたらしい。仮に彼女がそれを知っていたのなら、僕に近付きたが
らないのも当然の話か。さながら僕が未来を予知したようで、余りに
も不気味過ぎる。

ただ、今は棚に置いておくべき問題だった。

「……一応、貴方が課題の内容を知っていたのに左程驚きは有りませ
んよ。スウエーデンショートスナウト種でしたか。
Komodo dragon
コモドオオトカゲの生態や食性、毒性を他のトカゲと一緒に出来
ないように、一口にドラゴンと言っても種族によつて千差万別で、し
かしあれに対する貴方の対応は出来過ぎていましたからね」

魔法生物飼育学ではドラゴン——特に通常とは異なる産卵期のド
ラゴンについて扱わないし、ホグワーツ生が行き当たりばつたりで対
応出来るならばドラゴン使いなどという職業が存在する必要も無く、
ましてや専門家である彼等の中に死者が出る筈も無い。

もつとも、セドリック・デイゴリーが不正の告白をする為にこの話
を持ち出した訳ではないだろう。彼は二人と立場を異にし得ると
言った。

「要は、特別貴方だけに教えたという訳では無いんでしょう?」

「一応、ハリーは二人に教えなかったようだけどね」

善人ならば痛々しいと感じるであろう微笑みを彼は浮かべる。

「ただ、彼等二人は各々の校長から聞かされるだろうとハリーは確信
していた。だからハリーが教えてくれなければ、僕は何も知らずに挑
む事になつただろう」

ハリー・ポッターが何処から情報を知ったかは容易に想像が付く。

だが、セドリック・デイゴリーの方にも漏らしてくれる程にあの半
巨人は器用な性格をしていないし、ましてやアルバス・ダンブルドア
から教えられる事は有り得ない。あの老人とセドリック・デイゴリー
の親しさ云々以前に、僕がボーバトンやダムストラングであるなら
ば、あの老人が事前に課題を知る事は決して無いよう絶対に念押しす
るからだ。

自校で開催する以上、アルバス・ダンブルドアが他の校長二人より

高度な注意が要求されるのは至極当然であり、そしてあの老人は法や規則を左程歯牙にかけないが、理屈や根拠もなく気紛れで捻じ曲げる程に耄碌している訳でもない。

まして第一の課題内容が判明する前は、ハリー・ポッターを誰かが課題の中で事故に見せかけて殺しに来る事は考えても、安全に配慮しているという建前の三校対抗試合の主権者側が代表選手を殺しに来る事など考えもするまい。

あの稀代の大魔法使いが火を吐く大きな爬虫類如きに生徒を殺させる筈も無いが、さりとてセドリック・デイゴリーが課題を失敗する事自体は止められなかっただろう。

「——しかし、当時の状況でハリー・ポッターが貴方に課題の内容を教えた訳ですか」

「ああ、全く馬鹿な話だよね」

言葉の内容と裏腹に、その口調と表情は彼を讃えていた。

「ハリーへのハツフルパフの仕打ちも有るし、僕自身、あのハロウインの夜にハリーが名前を入れていないと言ったのを信じなかった。その状況で、僕に教えてくるのは当然だと考えるのは無理が有る。そして何より、彼の言葉は自身の不正の告白だ」

「……まあ、そうですね。ハリー・ポッターは馬鹿な事をした。その告白は、貴方に武器を——ハリー・ポッターの迫害を正当化する為の情報を与えた訳ですから」

わざわざ第一の課題で優劣を決するまでもない。

セドリック・デイゴリーはその時点で、二人居たホグワーツ代表選手を事実上一人にする事が可能だった。

「ハリー・ポッターが課題の内容を何故か事前に知っている。そう魔法省、或いは三校の生徒達に向かって告発するだけで良い。ゴブレットに名前を入れた疑惑に加え、課題の内容の漏洩疑惑まで掛かるといふのは、仮に事実でなくとも非常に宜しくない事態だ」

そして結果を見れば、その言葉通りに第一の課題はドラゴンだった。

セドリック・デイゴリーは僕の指摘に軽く頷いてみせる。

「ドラゴンと聞いた時、僕の脳裏に浮かんだのはハグリッドだった。彼のドラゴン好きというのは有名だからね。そして僕の家はウィーズリー家と付き合いが有るから、彼等の二番目の兄がドラゴン使いになったのも聞いている。実際、ホグワーツに来ていたようだよ」

「……状況証拠だけにしても有力なのが揃い過ぎていてしょうよ」

「正直、暴露すれば勝算は高かったらうね。終わった今ですらそう思うよ」

セドリック・デイゴリーは苦笑する。

そこまで材料が有れば、流石にハリー・ポッターが四人目の代表選手になった時とは違う。ハリー・ポッターが彼等から課題の漏洩を受けたと確実に証明するのはまだ困難だろうが、それでも世間が黒扱いするには十分過ぎる理由だと言つて良い。

「勿論、告発すれば僕の評判も無傷とは行かない。ハリーがわざわざ教えてくれたのに他の人間にバラしてしまう訳だから。ただ、幾らでも言い様は有る。不正には良心が耐えられなかったというのは不自然でもないし、そもそも僕自身はハリーを悪く言う必要が無い」

「……まあハリー・ポッターも不可抗力だった、ルビウス・ハグリッドの余計な親切で知ってしまったという筋書きは、決して真正面から否定出来る物では無いですからね」

それどころか、ハリー・ポッターがルビウス・ハグリッドから無理矢理課題の内容を聞き出したというよりは余程信じられる主張である。あの時点でのリータ・スキーターによれば、ハリー・ポッターは喪つた両親の事を想い夜な夜な枕を濡らす可哀想な子供なのだから。「好都合な事に、ハリーは僕達と違って未成年だ。元々責任が問われにくいし、今回の三校対抗試合は成人した魔法使いのみが参加する筈だった。そして何より課題が魔法使い殺しの怪物だろう？ 世間はそこまでハリーを悪く言わないし、寧ろ同情が多い筈だ」

「もつとも、その代わりに彼はホグワーツ内では再起不能になるでしょうね」

「それは……否定しないかな。これまでと比べ物にならない位肩身が狭くなりそうだ」

ボーバトンやダムストラングは当然の事。

ホグワーツにおいても、彼はグリフィンドールなのだ。

スリザリンと異なり、彼らが掲げる騎士道精神は概ねの場合卑怯な真似を許容しない。年齢線という、今回大人が勝手に定めた不当な措置を出し抜いてみせた時と違うのだ。グリフィンドールがハリー・ポッターの行為の是非を巡り二分される事は容易に想像出来、それからの彼の学生生活は暗い物となった事だろう。

「正直な所、僕が貴方の立場であればそうでしたでしょう。ドラゴンを出し抜くよりも圧倒的に勝算が高いし、そもそもドラゴンという課題自体が馬鹿げている。まあ、僕と違って喪う物が多過ぎる貴方には選べなかったのかも知れませんが」

自嘲を籠めた揶揄に、しかしセドリック・デイゴリーは首を軽く振った。

「確かに選びにくかったさ。ただ——全く考えなかったとなれば嘘になる」

彼は地面に一度視点を落とした後、今度は空を見上げた。先程まで僅かに見えていた陽光は、今は雲の中に隠れて消えていた。

「立候補した以上、勝敗と優劣が付くのは覚悟の上だった。それはクイディッチでも慣れっこだし、ハッフルパフチーム内に限定しても、下級生とのポジション争いで負けた先輩も見てきた。どんなに頑張っても、正々堂々戦っても、駄目な時が有るといっては理解出来る」
「だけど、今回はそもそも覚悟自体が出来なかったと彼は独白した。

「もう一人のホグワーツ代表選手が現れるなんて、一体誰が考える？
しかも、相手は単なる規則破りの恥知らずではなく、よりにもよってあのハリー・ポッターだった」

「……………」

「『生き残った男の子』。この国で最近出版された歴史の本ならまず確実に出て来るような英雄だ。しかも彼はそれまでの三年間、僕では無いもよらない事を達成してきた。僕はその全てを知っている訳では無いが、ダンブルドアの鼻屑を差し引いても、それが普通の人間には出来ないような大きな事だったというのは解り切ってる」

賢者の石。秘密の部屋。そして――

「――去年、表向きハリー・ポッターは何もしていない筈ですが」

湧いた疑問に、セドリック・ディゴリーは小馬鹿にしたような眼を向けてきた。

「シリウス・ブラックがポッター家を裏切ったのは有名だし、ウィーズリーは真夜中にナイフを突きつけられた訳だろう？　だというのに学期末、彼等はブラックが校内から逃げ出したと聞いても大きな反応を示さなかった。内容は解らずとも、彼等に何かがあったと想像するのは普通じゃないのか？」

……成程、良く見ている。

少しでも頭が回る人間ならば、去年にも裏があったのを見透かす事が出来た訳か。

「今年、ハツフルパフ生は気楽な物だった」

セドリック・ディゴリーは、何処か軽蔑した響きと共に言った。

遠目で伺っているハツフルパフ生に聞こえないのは、彼等にとって救いだろう。

「ペーパーテストにしろ実技にしろ先生の監視下で行う決闘クラブにしろ、普通ならば二年生も下の学生に負ける筈も無い。どう考えたって結果が解りきってる勝負だ。そしてまあ、校内でのハリーは、クイディッチ以外は余りパツとしないだろう？」

「普段絶対的に目立つのがハーマイオニー・グレンジャーですからね……」

「そうだ。彼が入学する前、僕も含めて皆がハリー・ポッターという英雄に期待を膨らませた物だった。しかし、蓋を開けてみればああだった。成績も行動も悪いとまでは行かないんだけど、平均よりも少し上という印象しかなかった」

……僕がスリザリンの一年次もそうだった。

闇の帝王を討ち滅ぼしたのは、ハリー・ポッターが帝王より更に闇の力を持つからだという噂がスリザリン寮内に存在していた。ドラコ・マルフォイも勿論それを知っていたし、彼が最初にハリー・ポッター、本来純血が蔑むべき半純血の人間に接触した理由は、多分その

点の確認だったに違いない。

けれども、ハリリー・ポッターは平凡な少年の域を出なかった。

「——ただ、通常ではない時、彼は非凡だった。違うかい？」

……セドリック・デイゴリーは、僕よりも多くの事を知っている訳ではない。

それでも僕に語り掛ける声色には確信が満ちていたし、実際ハリリー・ポッターが非凡であるという事は、僕が認めざるを得ない点だった。

「僕には自信がなかった。三大魔法学校対抗試合という礼儀正しい御勉強とは異なる世界で、僕が勝てるかは解らなかった。けれども、泣き言を漏らす訳にはなかった。僕はもう入学したばかりの一年生じゃないんだから」

「……………」

『「やあ、セド。君なら出来る」』『六年生の意地を見せろよ』『汚いポッターを負かしてやれ』。そんな応援の言葉が、僕には耐え難かった。相手は十四年前の伝説だ。そして万一ハリリーが成功し、僕が失敗すれば、僕は全てを喪う。優勝がかかるクイディッチの試合ですら、あんな重圧を感じた事はなかった」

ハッフルパフ生に悪意が有った訳ではないだろう。

「彼等は基本的に善良であり、しかし、やはり人を傷付けられない訳ではない。」

あの時点において、代表選手に不正に立候補したとみなされたハリリー・ポッターは偽物で、ゴブレットの審査を通過したセドリック・デイゴリーは真のホグワーツ代表だった。そして偽物が本物を下し、公正が不正に劣るといふ「不正義」が罷り通る事は、多くの人間にとって歓迎すべき事では無かった。

それは確かだろうが、勝手ににもその願望を一身に背負わされたセドリック・デイゴリーの心境は、果たして如何程のものだっただろうか。「……………」でも、結果として貴方は告発をしなかった」

「機を逃しただけさ。ハリリーから聞いて数日後に第一の課題だったからね」

わざとらしく笑い飛ばそうとしたが、明らかに空笑いである。

結果的に全員が成功したとしても、代表選手達四人は例外無く、事前告知も準備期間も無しでドラゴンに挑まされた事は内心未だに思う所が多いらしかった。

「そう。ハリーは、ハリー・ポッターは良い奴だ。それなのに、僕の父——エイモス・デイゴリーは、ハリーの事を酷く扱き下ろす」

セドリック・デイゴリーの眼の色が変わる。

まるで蛇がのたうっているかのように、彼の瞳の中では激情が渦巻いている。僕をもつてしても、その感情を正確に捉えきれない。敢えていうならば、軽蔑が一番近いだろうか。それが向かう先は、彼の父親だけでは無さそうだった。

「最初、僕は左程気に留めていなかった。けど、ホグワーツ代表が二人となった後は露骨だった。彼が魔法省に抗議に行つたのは当然にしても、僕は彼の行動に何処か拭い去れない違和感を抱くようになった。そして、今日もそうだ。彼はハリーに暴言を吐いた」

それを聞いて、漸く察する。

……恐らく、これが理由なのだ。

わざわざ今日、この日に僕へと接触を図つた原因。

今まで御互いに干渉されない事を望んでいたながらも、その平和を破つた理由。

——だが、それでも何故、僕に対し告白しているのかは未だ解らない。

「君は誤解していないと思うが、別に僕は彼の事を悪い人だと言いたい訳ではない」

僕の中に生まれ始めた困惑を他所に、セドリック・デイゴリーは語り続ける。

「立派な人だし、良い父だし、僕の自慢だ。当然、今もその想いは変わらない。だから僕が言いたいののは彼の事では無く、僕自身の事なんだ」

最早彼の瞳は僕を捉えておらず、自縄自縛の狂気に犯されていた。「ハリーは良い奴だ。しかし、セドリック・デイゴリーはどうなんだ？

僕は模範的なハツフルパフ生として振る舞ってきたし、残念ながら周りからもそう見られているつもりだが、果たしてそれは「正しい」のか？」

「……それを僕の目の前で漏らしても良いのですか？」

「今更だろう。君は僕の薄っぺらさを、皆が望む優等生を演じているに過ぎない事を見抜いている。本質は決して褒められた物ではない事をね」

遠巻きに見詰めているハツフルパフ生の表情は心配そうな物に変わっていたが、彼が気付いている様子はない。僕がそれを認識している事を気付いているかすら怪しい。

吐き捨てるセドリツク・デイゴリーは、己への嫌悪と憎悪を隠そうとしなかった。

「僕が抱き、そして大きくなっていった違和感。それは、本当に「良い子」ならば、エイモス・デイゴリーがハリーを悪く言う事を直ぐに辞めさせた筈ではないかという事だった」

「……………」

「今やハリーが不本意に参加させられた事は疑う余地は無く、特に今日はウィーズリー家を始めとする人間達も他に居た。ハリーを応援しにきた彼等の前で、エイモス・デイゴリーの振る舞いは褒められる物では無かった。僕はハリーに面と向かって侮辱した彼に対して、そのような言葉を吐くべきではないと公然と非難し、制止する行動を取るべきだった」

「……僕には解りませんが、父親には歯向かい辛い物ではないのですか」

いや、それ以上に疑問がある。

「今の話の不誠実の根源は貴方の父親の行動に由来している。貴方自身の悪に直結するものではない。故に僕にしてみれば、今貴方が言った不作為の失態は、貴方が貴方自身に怒りを抱く理由としては多少軽いように思えてならない」

「……嫌な事を言うね」

「それ程でも。」

——それで、貴方が自身に失望した一番の原因は一体何なのですか？」

僕の問い掛けに、今度はセドリック・デイゴリーも僕を認識する。彼は驚いたように僅かに眼を見開いた後、僕の眼としつかり視線を合わせ、薄気味悪い喜色の笑みを露わにした。相変わらず、彼の心の奥底は読み切れない。

「僕にとっては君が言う程に軽い理由ではないが、確かに切っ掛けにしか過ぎないのかもしれない。父の行動は、僕の悪辣さを明瞭に浮かび上がらせたただけだった」

声色は冷静だったが、表情は常の様子を欠いていた。

「セドリック・デイゴリー」という人間は既に、この場から完全に消えていた。

「ハリーは僕にドラゴンの事を、第一の課題の事を教えてくれた。そして僕にその借りを返す機会が直ぐに訪れた。君も良く知っているだろう、第二の課題の時だ」

「……黄金の卵の謎についての事を言っている訳ですか？」

「ああ。金切り声を上げるだけのアレには辟易したし、随分と頭を悩ませる羽目になった。解き明かす為に幾度と無く聞き続けたせいで、頭が可笑しくなりそうだった」

「確かに——卵を渡されて数日で解けるような謎という訳ではないですわね」

水に浸けるといふ発想は「マグル」的にみれば左程突飛とまでは言えないが、それでも即座に行き着く物ではないし、そして魔法使いらしい発想は、「不思議な謎や困難は、魔法によって解決する」である。適切な呪文の使用によって卵の封印が解かれるという発想が第一に来るのは、至極自然な事だと言える。

また他の人間から情報を得ようにも、マームリッシュ話者自体は極めて少ない上に、かの言語が地上で話されているのを聞く機会というのがそもそも無い。水中で会話する事を目的としており、かつ水中人が陸に上がって来る事が少ないからだ。

故に難しすぎるとまでは言わずとも、簡単だとまでは評し難い。

「実の所、僕は自力で卵を水に浸けるといふ発想に至った訳ではない。けれども、自力で得たヒントだけでハリーに借りを返したいというのは無駄な意地だったし、その点は恐らくハリーも同じ事だった。だから、僕はクリスマス前に彼へヒントを与えた」

つまり、第二の課題が終わって約一カ月と言った所か。

水に浸ける事さえ解れば、今度は水の中で行動する方法を調べるだけ——と言っても、ロナルド・ウィーズリーが僕の所に来たのが確か二月の中頃だから、三カ月近く彼等が頭を悩ませ続けた難題だった訳だが、代表選手決定から一カ月、ハリー・ポッター達が知って数日で実行された誰にとっても性急なドラゴンの課題よりも考える時間は充分与えていると言える。

「ならば、それで貴方はハリー・ポッターに借りを返せた訳ですか」

確認のつもりという言葉だった。

けれども、セドリック・デイゴリーは何故か頷かなかった。頷く代わりだというように、彼は淡々と——そう努力している事がありありと解る歪な表情のまま彼は続けた。

「僕はこう言った。『風呂に入れ』『卵を持って行け』『とにかくお湯の中でじっくり考えるんだ。そうすれば考える助けになる』。そんな事を彼に告げた」

「へえ。であれば——」

余り関心を払わないまま出した言葉を途中で打ち切る。

そうさせた理由は、僕が此度の邂逅の意味に気付いてしまったからだ。

セドリック・デイゴリーが何故、最初にハリー・ポッターを良い人間と評したのか。

彼は何故ハリー・ポッターへのエイモス・デイゴリーの無礼を非難し、それを止めようとしなかった自分に対して失望と激怒を抱いたのか。

……嗚呼、僕の言葉に何も答えられない筈だ。

セドリック・デイゴリーはハリー・ポッターに借りを返し切れしていない。半ば言いがかりめいた代表選手のバッチの件を抜きにしても、

天秤は均衡に戻されてなどいない。ハツフルパフが徳目として掲げる公平性を、彼は護り切れてはいない。

「ハリーは気付かなかつた。しかし、君は一瞬で気付く」

嫌悪の視線を向けられるのは慣れていない。

けれども、ある意味ではアルバス・ダンブルドアやスネイプ教授よりも、その視線は直視し辛かつた。セドリック・デイゴリーが僕へと向けるその大半は嫌悪であろうとも、しかし僅かに、そして確かに僕への羨望の色が在ったからだ。

何故自分は当時それを気付かなかつたのかと、この男が思っていたからだ。

「まあ、その場で気付かなかつたとしても、ハリー自身は後から気付いた事だろう。何せ後から彼も困つただろうから。もつとも、ハリーは今でも何も言つてこない。僕を責めようとしな。やつぱり僕とは違う。どんなに取り繕おうとも、姑息で卑怯にしかねない僕とだね」

セドリック・デイゴリーには嘘が在る。

そして彼は今日、己のそれを直視せざるを得なくなった。だからこそ、彼は僕の所に来た。

「……一応、貴方のヒントが役に立たなかつた訳ではないでしょう。ハリー・ポッターにとって、貴方の言葉が課題の助けになつたのまで疑うのは微妙に思える」

「だとしても、だ」

我ながら無意味な指摘に、セドリック・デイゴリーは微笑む。

他から見て許容出来るかどうかではなく、それが自分にとって許せるか否かこそが問題であつた。そして入学以来ハツフルパフの理想足らんとして在り続けてきた彼にとって致命だったからこそ、彼は今こうして僕の前に来てまで、己が本心を吐露している。

セドリック・デイゴリーは道化のように大袈裟に手を広げる。

間近で見れば異常にしか見えない完璧な優等生の笑顔を浮かべ、誰かを呼びかけるようにお道化た調子で利き手を挙げて、聞き手を安心させる柔らかな声色でもつて、彼は本来在るべきセドリック・デイ

ゴリー”を演じてみせる。

「『やあ、ハリー。第二の課題だけど、僕の予想では多分水中で行われる。卵に入っているのは、恐らく水中人の声だ。あの不快な卵の鳴き声は水の中だったら声が聞き取れるんだよ。もっとも、君の卵と僕の卵、同じ物だとは限らないから一応確認はして欲しいけどね』」

「言えただろう、これくらいの事は」

一瞬で元の冷淡な表情を取り戻して、セドリック・デイゴリーは吐き捨てた。

「ドラゴンが本当だった以上、僕の方が間違ったヒントを教える訳には行かなかった。当然、卵の謎については検証した。あの時点で、僕は卵を水に浸ける事が解答だと知っていた。知っていて、けれども僕の卑しい心はヒントを濁すという姑息さを選択した。どうせ直ぐに自身の所業がバレるだろうというのにな」

ハリー・ポッターの視点では、確かにセドリック・デイゴリーの言葉は不可解だ。

謎めいた言葉を残され、彼は煙に巻かれた気分になったかもしれない。最後には手掛かりとして機能する事が解ったとしても、では何故直接の答えを言わなかったかと疑問を抱いた事だろう。ハーマイオニーのような人間は他人から解答をそのまま与えられる事を嫌うが、少なくともハリー・ポッターはその事に抵抗を抱かない質である。

「借りを返すつもりだった。それでも僕は、監督生達だけが使える特別のバスルームの合言葉を教えた程度で、自分が彼に対して何かをしてやった気分になっていた。心の何処かで理解していて、眼を逸らしていた」

だからこそ、セドリック・デイゴリーは己自身を許せない。

「僕はハリーを助けきれず——未だに借りは背負ったままなんだ」

黄金の卵の謎は数日で解ける物では無いが、さりとて三か月有れば解けない物でもない。

あれは前振りに過ぎなかったし、求められる行為も単純に水に浸けるだけ。最初は魔法を使う事しか思いつかなくとも、考え得る方法を片っ端から試していけば偶然でも辿り着き得る解法である。恐らくバーティウス・クラウチ氏第二の課題の出題者としても、全ての代表選手が卵の謎を解き、水中人の歌を聞いて課題に挑む事を想定していただろう。

課題の本命は歌を聞いた後。

水中に沈められた大切な物を代表選手がどのようにして取り戻すか。

フラーの話でも解る通り、代表選手にとつては水中で生存するといふ課題は、高度な変身術や動物擬きという選択肢を除外すれば非常に難題であった。しかも実際の課題は水中で呼吸出来るようになっただけでは不十分。真冬の凍える広い湖で、視界も悪い中、時間内に救助対象を探し出した上で帰還出来て初めて合格を貰える代物だった。そしてハリー・ポッターが何時ギリウイードという解法に辿り着いたにせよ、少なくとも本番一週間前までは彼は御手上げ状態だった。

故にセドリック・デイゴリーが最初から端的に『卵を水に浸けろ』と助言しても大きな影響はなかっただろうし、それでハリー・ポッターも文句はなかっただろう。彼自身、第一の課題において、セドリック・デイゴリーにドラゴンの出し抜き方まで教えてやった訳ではないのだらうから。

「人間の本质は、行動にこそ現れる」

理想の生徒を演じたかった青年は、理想とは程遠い自身を皮肉って言った。

「人生の分岐点における行動で人間の本性が見えるとは良く言われるけど、こんな風に、どう転ぼうが最終的な結果が変わらない場合にどうするかという場合にも、やっぱり人の本質は現れると思うんだ。そこで手を抜くかどうかで本性が解る」

卵を持ち込んで、風呂の中でゆっくり考える。

そこまで限定されて、取れる行動というのは多くない。卵を水に浸けるといふ選択肢も難解ではない。セドリック・デイゴリーがヒントとして持ち出した時点で、ハリー・ポッターが謎を解けないまま終わるといふ事は無かつただろう。クリスマス前ならば考える時間の余裕も有り、一度で謎を解決する事は求められていない。最低限の好意と義理は示している。

だが、第一の課題時のハリー・ポッターの英雄^{馬鹿な}的行為と対比させた時、彼のヒントの出し方は果たして適切かつ十分だったと言えるだろうか。

少なくとも、セドリック・デイゴリーは否という結論を下した。

「ハリーが四人目の代表選手になった時、僕の友人にも非難する人間が居た。それでも、彼は僕に課題の事を教えた。嗚呼、言い訳は出来るさ……！あの時点ではハリーが事実を言っている保証なんてなかった、僕を嵌めようと嘘を言っているとすら一瞬思った。少なくとも、性格の悪い君はそれを疑うだろうか？」

「……ええ。それも強く疑う事でしょうね」

事前に全員へと課題内容を漏洩する事で逆に選手間と競技自体の公平性を図ろうとする発想は、僕にとっては馬鹿馬鹿しい物にしか聞こえない。

競争相手であるハリー・ポッターに聞かされるという部分も信用性が低くなる事情であるし、そもそも代表選手をドラゴンと予告無しで向かい合わせるといふのが、夥しい死者を出した歴史を繰り返さないよう万全の安全確保の下で三校試合を復活させたという建前と整合性が取れていない。

要は、セドリック・デイゴリーがハリー・ポッターから課題内容がドラゴンだと聞かされたとして、その時点で彼がその言葉を無条件に信じるというのは客観的に見ても無茶である。

「でも君と違って、僕はハリーの表情を見ている。無茶苦茶な試練に立ち向かう事への同情と、同じ困難に挑む者同士の共感が入り混じった、真摯な顔をしていた。僕はハリーが本当の事を言っていると、あ

の時点で殆ど確信していたんだ」

だからドラゴン対策に休日の殆どを費やす事にしたんだし、にも拘わらず、とセドリック・デイゴリーは続ける。

「嘘か本当か解らないヒントで僕も悩んだんだから、多少濁したヒントでも釣り合うのだと自分を無理矢理納得させた。言い訳になるが、ヒントを濁したのは衝動的な物だった。けど、僕は後から訂正しなかった。不実を放置した僕の醜悪さというのは、わざわざ言葉にするまでもないだろう?」

ハツフルパフが掲げる徳目は誠実、そして公平性である。

しかし、最もハツフルパフらしいと称される生徒は、それらに忠実で居られなかった。他寮であるハリー・ポッターの方が、余程それらに値する行為を示した。

「チョウ——レイブンクローのチョウ・チャンという子の事は知っているかい?」

「……確か、第二の課題における貴方の救出対象でしたか?」

「ああ。彼女は僕のガールフレンドだ」

他人の惚気をわざわざ聞かされた事に少しばかり面食らったが、これまでの話からは無関係ではないのだろう。そう思った僕へ、実際に彼は説明を続けた。

「でも、元はと言えば、彼女はハリーの事が好きだった」

「——」
「好きな子の前では、普通の男ならば恰好を付けたいと考える。君は違うらしいけれどね。けど、大多数にとってはその筈で、僕もそうだった。そして、ハリーがホグワーツの二人目の代表になった。当然、如何なる手段を用いても負けたくないと考える。特に第一の課題前、僕にとっては大きな恐怖だったよ」

「……ハリー・ポッターが成功し、セドリック・デイゴリーが失敗する。そうなれば、彼女が貴方を捨ててしまうのではないか。そう考えていた訳ですか」

「ああ。彼女がそんな女性ではないというのは解っている。けど、思う事は止められなかった。少しばかり優秀であるに過ぎない僕と違

い、英雄ハリー・ポッターは特別なんだ。そしてチョウはハリーが異性として好きで、けれども先にアプローチした僕に妥協した」

……妥協、か。

「貴方とて相当に優良物件である事は違いないでしょう？ ホグワーツ七学年全てを探しても、貴方よりも上の格を持つ人間はそう居そうにない」

「けど、人間の好き嫌いは顔や能力のみで決まる訳ではないだろう？

そしてハリーの傍には、もっと近しい女の子が居た」

「……ハーマイオニー・グレンジャー、ですか」

同級生であり、ハリー・ポッターの最も身近にいる異性。

けれども、と反論しようとして、しかしセドリック・デイゴリーは笑って止めた。

「彼等が御互いに異性として意識していないのは見てれば解る。ただ、諦める理由としては十分な理由だと思わないか？ 振り向いてくれるか解らない相手を想い続けるより、自分を好きだと先に言ってくれた、そこそこ優良な相手とくつつくには」

……それはまあ、一般的に否定出来ない理屈かもしれない。

事実、僕はハリー・ポッターに憧れる部分があるが、彼のようになれるとは思っていない。彼の傍に居続けるロナルド・ウィーズリーと同じ事すら出来るとも思っていない。それらの望みを捨てているし、諦めている。

チョウ・チャンにとって、ハリー・ポッター英雄への恋がそのような物だったのだろう。

「僕はフラーやビクトールに負ける事は許せた。けど、ハリーに負ける事だけは絶対に嫌だった。真のホグワーツの代表選手の立場、そして彼女の恋人の地位を奪われなくなかったし、喪いたくなかった」

「……だから、貴方はハリー・ポッターに対して誠実で居られなかったのですか」

「冷静になって見ればそう思えるという程度に過ぎないけどね。僕自身、あの時何を考えていたのかは、今はもう定かではない。だけど、醜い恋心や自惚れた見栄でそうしたのではないかと言われて、否定する

材料は何処にもない」

そして、セドリック・デイゴリー自身がそれが真実だと結論付けている。

ハリー・ポッターがチョウ・チャンに対して恋心を抱いているかを僕は知らないが、セドリック・デイゴリーの方はそれだけ危機感を抱いていた訳だ。

「――結局、僕はハツフルパフらしくなかった」

そう零す彼の言葉には、氣力が抜け落ちていた。

「入学時、僕は組分け帽子に他の寮へ入れるよう求めた。ハツフルパフは劣等生ばかりだという評判を、魔法界に住んでいれば当然知っている。しかし僕の希望は聞き入れられなかった。そうして僕は、ハツフルパフに入る羽目になった」

組分け帽子。

新入生を四寮に振り分ける機構であり、その後の人生を決する残酷な装置。

「実際ホグワーツに入学してみれば、そのような評価は四寮が互いに言い合う冗談や挨拶みたいな物だと解る。でも、僕は入学前それを真剣に信じていたし、ハツフルパフになんかに入りたくなかった。魔法使いとして強く、賢くて、そして偉大になりたかった」

男というのはそういう物だろうと同意を求めるように僕に聞いて、しかし彼は少しばかり黙った。多分、僕がそのような思想に共感を抱かない質だと思ったのだろう。けれども、彼の予想と違い、僕には理解出来ない訳でもなかった。

僕がそうであるのは、既に入学前に全てが終わっているからだっ

た。
彼女が生きていた時は、まだそのような素直な心を持ち得ていたように思う。何だかんだ言って僕は、父を上回る事を――闇の魔法使いに殺されない魔法使いとなる事を、彼女に求められていたのだから。「とにかく、自寮の象徴も余り好きではなかった。ライオン――文句なくカッコいい。オオワシ――スマートでイカしてる。蛇だつてクールだ。けど、アナグマ？ クマではなく？ この国の田舎で有り

触れた泥臭い生き物が象徴とされている事は、ハツフルパフのお前達は特別でもないし、凄くもないと言っているようだった」

過去形ではある。

けれども、過去の彼は本心からそう思っていたのだと、言葉に籠る熱が伝えていた。

「だから入学した後——暫く掛かったけれど——僕は決意したんだ。劣等生ばかりという印象を、僕が変えてみせる。グリフィンドールやスリザリン、レイブンクロウの鼻をあかしてやるとね。実際、競争心が欠けている事を除けば、ハツフルパフの仲間が良い奴ばかりだった。彼等の為にも頑張りたいという想いを抱く事は出来た」

それが、セドリック・デイゴリーが産まれた原点か。

僕から見れば、彼の本質はハツフルパフからは程遠いように思える。だからこそ、彼はよりハツフルパフ生らしく行動しようとした。そして、今年まで殆ど失敗無く成功し続けてきた。彼は比類無い評判を獲得し、スリザリンですら表立って悪く言えなかった。

「そして三大魔法学校対抗試合。絶好の機会が訪れたと考え、幸運な事に、僕は代表になるのにも成功した。三百年振りに再開した一回目の試合で僕がホグワーツを優勝させれば、ハツフルパフが劣等生ばかりだなんて言えやしない。今後対抗試合が繰り返される五年毎に、誰もがセドリック・デイゴリーの事を思い出す事になると、そう喜んだ」

「……似たような事はフレーも言っていましたよ」

「そりやそうだろう。誰だって、自分が主役だと思えるような晴れ舞台を嬉しく思わない筈がない。クイディッチで既に有名なビクトールですらそうだ。けど——」

——ハリー・ポッターという例外、この国の誰もが知る主役中の主役が舞台に上った。

「その事実を受け容れた時、目の前が真っ暗に変わった。ハリーが代表選手となった時点で、今回の試合は最早ハツフルパフ云々ではなく、生き残った男の子の為の物になった」

「……それでも貴方が勝てば、セドリック・デイゴリーの為の試合になつたのでは？」

「まさか」

セドリック・デイゴリーは鼻で笑って一蹴した。

「君も何時ぞやに揶揄しただろう？ 入学以来シーカー戦で無敗だった彼に、去年初めて土を付けたのは僕だった。それでも吸魂鬼が居なければという仮定が語られた。あの時僕が本当にハリリーに勝利したのだと、本気で認める者は誰も居ない」

僕ですらも、と彼は付け加える。

その部分には羨望や葛藤すらなかった。彼が入学以来熱心に打ち込んできたであろうクイティッチで素直に敗北を認める位には、去年までの三年間、ハリリー・ポッターからその才能を突き付けられ続け、そして受け容れざるを得なかった現実なのだろう。

「それと同じだ。ハリリーが年齢というハンデを背負っている以上、勝ったとしても何処かすつきりしない事になる。特に彼が英雄でなければならぬこの国ではね。そして僕の目的はハツフルパフの地位の向上、劣等生ばかりの寮でないと証明したいという物だった」

「……まあ、確かに彼に注目が集まる事で議論や論争の的がズレるかもしれませんが、それでも貴方の目的が全く達成出来ない訳ではないでしょう？」

「かもしれない。だが、そもそもビクトールやフラーに勝てるとは限らない。僕達二人とも負けてしまえば、同じ年ならば勝てたかもしれない。ハリリーだけが記憶され、僕の名は忘れ去られるのは確実だ。そして既に言った通り、僕はハリリーに勝てるかすら確信が無かった。実際、彼は同点とはいえ、現在トップに立っている」

「……やはり僕はその結果に納得行っていないですね。第二の課題の点数の付け方は、基準から見て論外であるようにしか思えない」

「その意見は僕の耳にも届いているよ」

今日初めて、彼は邪気のない本心からの笑みを浮かべた。

「けど、それが届いているからこそ、僕も含めて文句はないよ。ハリリーは第二の課題において、満点に値する結果を示した。彼が一位であるのは妥当だ」

僕の不満を嘲笑うような透き通った表情に、無性に腹が立った。

だがそれは僕の勝手に不当な言いがかりなのかもしれない、口を挟むより彼が言葉を続ける方が先だった。

「フラーの件がまさにその事実を示している。第二の課題で僕と同じ魔法を使いながらも失敗した彼女の事を、僕は心の何処かで侮っていた。だが、バグマンは『すばらしい泡頭呪文』と評していたし、事実、彼女が失敗した原因は魔法の腕が僕に劣っていたからではなかった」
「……ドラゴンを課題とする位に頭の軽い人間の評価は当てになりませんが、ならば一体何が理由だったのです？」

そう言えばフラーから聞きそびれている。
改めて抱いた問いを投げ掛ければ、彼は少し唇を歪めつつ解答した。

「マグルはね、スキューバダイビングの際には二人で潜るらしい」
「それが何か？」

「つまり友人の言葉では、心の問題だそうだ」

……呪文の——酸素の問題では無かったのか。

「人間は水中で活動するようには出来ていないから、ダイビングの際にパニックを起こすと正常な判断が出来なくなるらしい。口元の酸素のチューブを自分で外すと言った、陸上では有り得ない行動を取ったりもするそうだ。そしてどんな熟練者でも突然そのような事は起こりうることも聞いた。そんな事故の防止の為に二人一緒に潜る訳で、僕は運が良かっただけだ」

たまたま逃げた方向が順路で、直ぐに囚われた人質達とハリーに会えたから、パニックに陥らずに済んだだけだと彼は言った。

「……それが彼女を失敗に導いた最大の原因であり、泡頭呪文が水中で扱われる魔法として書籍で大っぴらに扱われない理由という訳ですか」

「多分ね。パニックで魔法を切らすか自分で壊すかしたら即座に窒息するような魔法は、やっぱり危険すぎるよ。水圧や減圧症の問題もあるしね。変身術が一番だ」

その記述がホグワーツであっさり見当たらないのも妥当と言えば妥当だろうか。

教授陣の搜索能力や水中人の好意にも限界がある。泡頭の呪文を使えば湖を楽に探検出来ると考える馬鹿が続出すれば、まず間違いないホグワーツで死人が出るだろう。もしかしたら、僕の知らない所でその旨の告知が出ているのかもしれない。

「しかし、パニック症状ですか。確かにフラーは失格前の事を語るにあたり、他二人とはぐれて一人になったとは言ってましたね」

「それを知っているのなら話が早い。あの課題で、人質のもとに最初に着いてたハリーに対し、僕はこう言った。水中だったから伝わったか解らないが、『フラーもクラムもいま来る』ってね。それを聞いて君は当然疑問に思うだろう?」

「……あの湖は広く、深く、そして彼女の証言によれば左程視界も良くない。御丁寧に順路の矢印が置かれていた訳でも無いでしょう。そんな中で、どうして貴方が他二人の動向を知る事が出来たのです?」
「その問いに答える必要は多分無いよね。君の想像通りだ」

フラーと一緒に居たと言っている以上、セドリック・デイゴリーが嘘を吐いた訳ではない。

つまり、恐らく彼等には協力体制、と言っても暗黙の了解に近い関係が結ばれていた。呪文を使って助け合うとまでは行かずとも、たとえば互いの杖灯ルーモスりを見る事が出来るような、そんな位置に全員が居た。

ドラゴンの時と違い協力が不可能な課題形式ではなく、規則によって禁じられている訳でも無かった。彼等三人が真摯かつ真剣に課題に挑んでいた事は揺らがない。

しかしハリー・ポッターの点数に対して彼等が異を唱えなかったのは——勿論、彼等に友情めいた物があるのも小さくないだろうが——ギリウイードの特性を最大限に生かしたハリー・ポッターが殆ど独力で課題を達成しており、一位の点数を与えられるに相応しいと、同じく水中で課題に挑んでいた彼等自身が誰より理解していたからか。「運も実力の内とか、そんな慰めを聞きたい訳じゃない」

セドリック・デイゴリーは、あくまで自分自身の醜悪さを厭っていた。

「ビクトールは気難しく、フラァーは高慢で、ハリーだつて陰気だ。けど、彼等の性根は歪んでいない。スポーツマンシップを体現出来る。頭で理解しているつもりで、しかし護りきれない僕と違ってね」

セドリック・デイゴリーは、仲間達の――セドリック・デイゴリーを仲間だと思つているハッフルパフ生へと一瞥した後、改めて僕へと向き直る。

「午前中、父と喧嘩したんだ」

「……………」

「ハリーにぶつけた失礼な言葉を、謝るように僕は言った。だが、父の口から出たのは疑問だつた。息子の晴れ舞台を不正で穢されて怒らない親など何処に居る、と。そして続けたんだ。お前は良い子過ぎて、物解りが良過ぎる。だから代わりに言つているのだとね」

……嗚呼、それは彼にとつて禁句だ。

生徒の模範として在れと規定された「セドリック・デイゴリー」だからこそ、彼は決してハリー・ポッターの悪口を表に出す事は出来ない。

けれども、彼の本質は違うのだ。見栄っ張りで、自己中心的で、当然ながら誰よりもハリー・ポッターが選出された事に対して怒りを溜め込んでいた。

「気付かされたよ。彼は僕を見ていない。僕が演じる理想の息子しか目に映つていない。そして、あんなに気の良い奴で、そして大きな試練と苦難を与えられているハリーを、しかし心の底から讃える事が出来ない小さな人間の血を僕は引いている」

「…………だからこそ、貴方はそんなにも絶望しているのですね」

「ああ。なんせそれは全く間違つていないんだ。僕の心は彼が、父が怒つてくれる事にこそ暗い喜びを抱いてもいたんだから」

漸く、セドリック・デイゴリーの心を読み切れない理由が解つた。

既に空洞なのだ。六年間強固に築き上られた「セドリック・デイゴリー」という偶像是破壊されている。ハリー・ポッターという本物の英雄、そしてフラァー・デラクールやビクトール・クラムという真つ直ぐな競争相手を前にして、自身がどれ程人格的に劣つていて、偽物で

あるかを突き付けられた。

「かつて君は容易く僕の本性を見破った」

何時か、擦れ違い様に言葉を交わした時の事をセドリック・デイゴリーは持ち出す。

僕がセドリック・デイゴリーを支持していない事を——自分の敵に回る側の人間なのだ、そう確認してしまった時の事を。

「その君には、今の僕はどう見える？」

「……仮面を被っていない、本物の貴方に見えますよ」

そして彼の纏う気配は、スリザリンで良く知る物に近かった。

光の当たる者への羨望と憎悪。持たぬ者としての劣等感と執着心。己の栄光を阻む存在への強烈な敵意。十四年前を区切りに爪弾きにされ続けた者達が抱く激怒と復讐の念と似たような感情を、ハツフルパフ寮に所属する筈の人間が有して居た。

「それは良かった。僕はそれを確認しに来たんだ」

今度浮かんだ笑みは、やはり完璧な物だった。

——どんなに僕が渴望したとしても獲得出来ない、模範的な善人の表情。

「時間を取らせて悪かったね」

「……………」

「君が察したように、報酬は既に渡している。それが何かは直ぐに解るだろうが——まあ、君が足りないと考えたら言ってくれ。余程で無ければ僕は君の要求を受け容れよう」

それだけを言つて、セドリック・デイゴリーは穏やかな笑みを残し、踵を返した。

彼の用事は済んだのだろう。一方的で、自己中心的で、しかしセドリック・デイゴリーの人生の分岐となるであろう価値を、彼は僕との会話の中に見出した。

嗚呼、それは誠に結構な事では有るが——

「仮に、の話ですが」

——利用されるだけ利用されるのを許す程に、僕は優しい人間であるつもりは無い。

「自分をハツフルパフでないと思っている貴方が今後スリザリンめいた行動を取ろうとしているとすれば、それは全くの見当違い。狡猾で機知に富んだ蛇の懐に居た事が無い人間の思い上がりですよ。その行いは決して『スリザリン的』ではない」

蛇と穴熊

セドリツク・デイゴリーは、いつぞやの時のように立ち止まった。

それが僕の思惑通りであるかは別として、自身の背中に投げつけられた挑発と侮辱に対し、彼は真つ向から受けて立たざるを得ないのだろう。これは彼が生来持っている資質と、努力によって獲得した仮面の両方が彼に課する、いわば宿業とも言える代物に違いなかった。

「『スリザリン』的、か」

ボソリと零された言葉には、侮蔑と嘲笑が含まれている。

「今のホグワーツの中で、それ程に空虚な言葉は無い。そうは思わないか？」

「何せそれは殆ど『死喰い人的』である事を意味している。しかもハッフルパフを劣等生と呼ぶような類の、半ば揶揄混じりの言葉じゃない。頭の悪い選民思想だけが歪に肥大した、拷問と殺戮だけが好きな狂人候補生。そんな三寮の憎悪と殺意に基づく物だ」

セドリツク・デイゴリーは振り返った。

先程より距離が空いて、彼は再度僕と対峙する。その表情には、陰鬱な影が落ちている事はない。やはり完璧な、優等生の仮面を被れている。けれども先程までと違い、その下に滲む皮肉と冷笑を隠し切れていなかった。

「マルフォイの面の皮の厚さは称賛に値するよ。魔法界は狭く、今のホグワーツにも死喰い人に親族を殺された者なんて珍しくもない。だというのに、ああして自分達には一切罪も責任もありませんというように平然と歩いているんだから」

「……………」

「服従の呪文に掛かっていた。しかし、果たしてそれは免罪符になるのだろうか。仮にそうであったとしても、マルフォイの金と策、そして杖によって戦争では大勢が死んだというのに。彼等の楡の杖には、指紋だけでなく多量の血がべつとりこびり付いている」

反論しようと思えば幾らでも出来たが、僕はそうしない事を選ん

だ。

セドリック・デイゴリーは明らかに論理の話をしている訳では無かった。理屈を超えた話、頭では解っていても受け入れられない遺族達の感情の話をしている。

「もつとも、君は多少違うのかもしれない。君の性格の悪さは他のスリザリンに引けを取らないと思うが、君の親が死喰い人だったというのは聞かない」

その言葉にも、僕はやはり反論しなかった。

今度はセドリック・デイゴリーが次に何を言おうとしているか想像が付いたからだ。

「——だから、今のスリザリンの中で純粹に『スリザリン的』と言えるのは、サラザール・スリザリンの意思を正しく受け継ぐのは、多分君以外に居ないんだろうね」

「——嗚呼、そんな事を言ってしまうが故に、貴方はハツフルパフなんですよ」

そして案の定、或いは期待通りに、彼はその禁句を口にしてしまった。

どんなにスリザリンとの親和性が高かろうが、彼はスリザリンにはなれない。

最初からそうで在ったならば別の道も有ったかもしれないが、セドリック・デイゴリーはスリザリンではなくハツフルパフで六年を過ごしたからこそ、そんな馬鹿げた勘違いをする。

視界の隅で、僕達を遠目から伺っていた人間達に再度緊張が走ったのを認識する。

……嗚呼、多分今の僕は、善良な彼等が思わず警戒心を抱いてしまふ位には、余程酷い表情をしているのだろう。しかし、彼等が近付いてくる気配はなかった、それどころか彼等は明らかに腰が引けており、そして余計な人間達に邪魔されたいのは歓迎だった。

「別に『スリザリン的』が死喰い人的であるという事を否定はしません。それを知って僕がマルフォイ達と交流を維持している以上、厳しい視線を向けられるにも文句はない。そして親をどうこう言うなら

ば、僕の母方は兎も角、父親の方は良い魔法使いとは言えませんよ。彼は最低でも二人は殺していますから」

僕の言葉にセドリック・デイゴリーは怯んだが、別に同情を惹きたい訳では無かった。

「確かに一度組分けされた以上、僕はスリザリンの指針から可能な限り外れまいとしては居ます。しかし僕にはスリザリンの資格である資格がそもそもないんですよ。貴方も知っているでしょうが、僕は半純血だ」

「どうしてそれが問題になるんだい？」

僕にとっては酷く間抜けな事に、彼は理解が出来ないと眉根を寄せ

る。「確かに純血、或いは聖二十八族より劣つたと看做される事は知っているさ。しかし、スリザリンは半純血を受け容れている。君の寮監、スネイプ教授だって半純血だろう？ ならば——」

「——お忘れですか、セドリック・デイゴリー。スリザリンの創始者サラザール・スリザリンは、誰もが認める生粋の純血主義者ですよ。その彼が、一体どうして半純血を受け容れたがるというのです？」

「——」

簡潔にして絶対の指摘。
過去の時代には揺ぎ無く、しかし今の時代の人間が忘れていく単純な論理に、セドリック・デイゴリーは漸く言葉を喪ってくれた。

「確かに現在スリザリンには半純血が居て、そして先の時代で闇の帝王が推し進めた“純血主義”も記憶に新しい。それ故に貴方がたは簡単に勘違いしている。しかし、思想の大本は“マグル”的な汚染が有るかどうかですよ。それは現在の純血の代表である聖二十八族達が、自分達にはマグルの血が一滴も含まれていないという建前を掲げており、ウィーズリー家が血の裏切り者と呼ばれる事から明らかでしょう？」

マグル生まれだろうが半純血だろうが、穢れた血が混じっていると
いう点ではどちらも変わらない。純血主義者にとって等しく侮蔑と
差別対象であり、そして当然の事ながら半純血である事を誇示する馬
半分マグル

鹿はスリザリンに居ない。自分の血筋を殆ど公言している僕ですら、そんな事はしていない。

「インクを混ぜた珈琲は、見た目も変わらず決して飲めなくはなくても、出来れば飲むのを遠慮したいと思いませんか？ 彼等純血にとって、僕達はそのような存在なんですよ」

スリザリンの中に居れば当然に痛感する。

半純血である自分達は、二流市民以上の存在には決して成れない事に。

「貴方達にとって一番身近な『純血主義』は先の戦争の物でしょうが、しかし闇の帝王のそれは非常に穏健だ。言ってしまうえば帝王は寧ろ半純血達の権利拡大に舵を切っていた側で、その意味でアルバス・ダンブルドアと同じ立場です。寧ろ口だけ達者なあの老人よりも実際に行動した帝王の方が、差別に晒されていた者には余程有り難かつたでしょう」

「……随分過激な発言だね。そんな事は初めて聞いたよ」

「本物の純血、スリザリン内部の人間にとってはわざわざ言うまでの事では有りませんからね。そして余所者にわざわざ説明してやる程、純血達は無粋でも野暮でもない」

僕からすれば闇の帝王はかなり異端である。

間違っているとはまでは言わない。帝国主義下に有ったこの国が支配の手段として分割統治を用いたように、最初から全てを敵に回すというのは愚かな行いである。その考えに基づいて初めは半純血を受け容れるという政策を取るのは理解出来、しかし、主義思想は純化を進めていく中で必然のように過激化するものなのだ。

ホロコーストを行った第三帝国とて、最初期は両親もしくは祖父母に一人でもユダヤ教徒が居ればユダヤ人として追放を試みている。

後に政治によって多少の修正を加えられようとも、祖父母に何人ユダヤ人が居るか等によりユダヤ人か否かが判定され、一応ドイツ人だと認められたとしても第一混血・第二混血と階級付けがなされた。そしてそのような運用が為されようとも、まず確信しているが、実際の運用の場面では法律と異なり普通に差別された筈である。

にも拘わらず、闇の帝王は、五十パーセントも穢れた血マグルのが混じる半純血ですらも仲間として歓迎する、純血主義にしては非常に穏健な——抵抗者は純血・半純血・マグル生まれ問わず平等に殺しまくっていた事を除けば、だが——立場を取っていた。

その割に、当時既に成立していた聖二十八族——建前上魔法使い以外を親族に一切持たず、当然の帰結として家系にマグルの血も含まれない者達は、闇の帝王の穏健主義に対して余り表立って反対した気配が見られないのも内心意外である。

後に厳格化するという約束をしていたからこそ従っていたという見方も出来なくもないが、この国の1642年からの革命にしても、対岸での1789年の大革命にしても、純化した思想は最終的に根本からの解決、つまり派閥間での殺し合いを余儀なくされた。

それを考えれば、既に滅んでいたゴーントは兎も角、レストレンジあたりは闇の帝王の取った政策に反対を表明しても良さそうな物だが——流石に戦争中に内部分裂する程愚かでは無かったのか、それとも闇の帝王の支配力が桁外れだったのか。

「……だが、サラザール・スリザリン本人が純血主義をどう捉えていたかについて、当時のホグワーツの記録は余り残っていない。そして当然、サラザール・スリザリンが半純血を排除したかどうか不明な筈だ」

「逆に言えば庇護した記録も有りません」

「……でも組分け帽子が君をスリザリンに入れた」

「組分け帽子はサラザール・スリザリンの思想を吹き込まれてはいても、そのものではない。他の三人の創始者と混ざっているし、変わるには十分な千年以上の時が経っている。そもそもサラザール・スリザリンについて、組分け帽子は何と歌っていますか？」

あの不愉快な骨董品からは、pure blood純血至上主義の内容しか聞いた事は無い。

「サラザール・スリザリンが何処まで“純血”として認めたかは兎も角、最低でも“マグル”を直接の両親に持つ半純血は拒絶した可能性が高いでしょう」

その点に関しては、僕は殆ど間違いないだろうと考えている。

「ホグワーツ創設期、魔法使いは『マグル』よりも種として圧倒的に強かった。だからこそ赤子や子供が狙われ、その守護として建設された城塞の一つがホグワーツです。そんな時代において、サラザール・スリザリンが魔法使いとマグルの合いの子を受け容れたなどと本気で思いますか？」

「……………」

「付け加えておくと、戦争で良くあるような、強姦されて生まれた不幸な混血は基本的に居ません。杖を持つ魔法使いの方が強いんですからね。まあ杖を奪われれば力関係は逆転するので皆無では無かったですでしょうが、しかし大多数は愛と合意の下に生まれた子か、劣った『マグル』に惹かれる情弱な精神を持った魔法使いの子だ」

そんな彼等に教える事を、貴族中の貴族足らんとした彼が果たして望んだらどうか。

僕としては大いに疑問符を付けざるを得ない。というより、殆ど有り得ないだろうと考えている。今でこそ半純血の存在が決して珍しくなく、またマグル生まれという存在が象徴的であるからこそ無視されているが、しかし当時は半純血として差別対象であっても可笑しくないし、寧ろそう考えて然るべきではないだろうか。

「……………けれども、マルフォイは君を傍に置いているだろう。それこそが君が純血から、聖二十八族から受け容れられている証じゃないのか」

それが反論になると思っっているのなら御笑い種だ。

そんな思いが露骨に表情に出ってしまったのか、セドリック・ディゴリーは顔を歪めた。

「階級社会は下級市民、つまり被支配者の生存を当然に肯定する。純血が屋敷しもべ妖精に仕事を与えるように、支配されるべき者にも然るべき役割は存在する。下賤だからと言って即座に拷問するとか、殺すとかいう発想には直接飛躍しただけです」

弱者を庇護するのも高貴なる責務の内では有るのだ。

しかし下僕や使用人として許容はしても、友人や仲間だと思ふ筈も

無い。ドラコ・マルフォイもそれを理解出来ない程に愚かではない筈だろう。たとえ丸四年を同じ寮で過ごしたとしても、彼が純血で僕が半純血である以上、それは決して超えられぬ境界線である。

「結局、ハッフルパフに過ぎない貴方は、スリザリンの歪みや矛盾に直面して来なかった」

彼の交友の広さでは、当然にスリザリン生も知己として含んでいた事だろう。

けれども、彼は決してスリザリンの核心に触れた事は無い。他の有象無象と同じように、彼はスリザリンを単なる殺人鬼候補生としか観ず、その思想を理解しようとしなからだ。

「スリザリンに来た半純血ないし『マグル』生まれ——そして一部の生粋の純血ですらも、一つの疑問に直面します。ええ、当然ながら、何故自分が組分け帽子によってスリザリンに所属させられたかでは有りません」

あのような閉鎖的で階級化された世界に居れば、半純血^{半端者}達は必ずその命題に直面する。

「——何故、この hogwarts に今、スリザリンが存在しているのか。」

元より hogwarts にこんな寮が存在しなかったのならば、自分は今のような酷い状況に陥らなかつたというのに」

セドリック・ディゴリーは、何も言わなかつた。

流石に一度も疑問に思わなかつたという訳ではないだろう。

ただ、それが生粋の純血以外にとってどれ程重い意味を持ち、切実な願望であるのかについて考えが及ばなかつただけだ。そしてその思考停止こそが、スリザリン内部に居る者とそれ以外を決定的に判別する分水嶺である。

「スリザリンでは平然と差別主義的思想が罷り通り、闇の魔法使いを数多く輩出している事は周知の通りで、特に先の魔法戦争では非常に割合も高かつた。ならば悪しきスリザリン寮を潰し、今後の hogwarts は三寮にしてしまおう。その主張は、ハッフルパフを始めとする貴方達に受け容れられますか？」

「……まあ、流石に反対意見が出るだろうね」

セドリック・デイゴリーは不服に顔を歪めながらも肯定した。

「千年以上続く伝統を破壊するというのは抵抗がある。特にそれを為した者として自分が悪評が残るのは、グリフィンドール出身の人間ですらも流石に御免被るだろう」

「でしようね。貴方がたですら一枚岩になれないし、当然スリザリンの卒業生は反対するでしょうから、まず実現する筈もない改革と言えるでしょう」

しかし。

「ホグワーツ史において、それが容易に可能な機会が一度有りました」
「……………」

「言わずもがな、ホグワーツで思想が対立し、内戦が勃発して、最終的にサラザール・スリザリンがホグワーツを去った時の事です」

創世期のホグワーツに何が起こったかは、今でも解らない事が多い。

それは魔法魔術学校の創設自体が世界規模で見ても革命的思想であり、千年経つても残る程に成長するとまでは考えて来なかった事もあるだろうが、一番の理由は、ホグワーツが断絶しかねない分裂を経験した魔法使い達の多くが、当時の事について口を噤んだからなのだろう。

しかし、全てが伝わらなかった訳ではない。

サラザール・スリザリンが純血主義を有していた事。そして彼が他の三人と袂を分かち、ホグワーツを去った事。それらはまず歴史的事実と言って良い。

であれば、スリザリンを潰す事は決して不可能では無かった。

「創始者三人は純血主義を退け、スリザリンは強力な指導者を喪った。その際にスリザリン寮を取り潰す事は可能だった筈だ。ゴドリック・グリフィンドール、ヘルガ・ハッフルパフ、ロウエナ・レイブンクロー。元々桁外れの魔法使いだった彼等に抵抗出来る者はまず居らず、そし

て筋としてもスリザリンを潰す事は否定されるべきではない」

どんなに言い繕おうとも、サラザール・スリザリンはホグワーツを去った。

故に彼の影響を一掃する為に、彼の教えが残る寮自体を取り潰すというのは合理的であり、残った勝者の選択として許容される。

「……確かに、僕も疑問に思わなかった訳ではないね」

セドリック・デイゴリーは認める。

「組分け帽子は、グリフィンドールの持ち物だ。けど、その中にはスリザリンの思考が残っている。サラザール・スリザリンを追放したならば、それも排斥すべきではないのか？ そうしていれば、純血主義という馬鹿な思想は、少なくとも今よりは残らなかった」

「純血主義が馬鹿だという価値観は兎も角、僕もそう思いますよ」

寧ろゴドリック・グリフィンドールはそうして然るべきだった。

徹底せずに甘さを残したが故に、今現在にまで余計な禍根を残してしまっている。

「汚濁は見える所で管理しておく方が良いと考えたのかも知れませんが、しかしホグワーツは教育機関で、子供に力を与える場所です。自ら危険分子を育てるような物だというのに、スリザリン寮は何故か見逃され、生かされた。つまりはサラザール・スリザリンの離脱以降、この寮の存在自体が一つの矛盾を抱えてしまっている」

人間の歴史を見れば、旧く善い物——この場合では純血主義の原点とそれに対する崇敬——が必ず保存される事は有り得ない。敗者の記録は残らず消し去られ、拭い去られるのが普通だ。相手が高貴なる血を引いていようが関係無い。善かろうが悪かろうが、敗ければ滅ぶ。

対して勝者は、自分の正当化の為に、敵の影響を残らず根絶しなければならぬ。

「そしてまた、サラザール・スリザリンの思考が吹き込まれた筈の組分け帽子は、何故か半純血をスリザリンに入れるという暴挙に出ている。これもまた矛盾だ」

スリザリンについて考えれば考える程に、その歪さが露わになる。

壊れかけている現状が、至極当然であるように思えて来る。

「僕には不思議で仕方が無い。我が寮以上に、スリザリンに対して生温い対応を続ける貴方がた三寮が。穏やかな排除と迫害を続けながらも、しかし四寮制の現状維持を図ろうとしている、それが出来ると勘違いしている貴方がたの行動が、僕には理解出来ない」

「……君は、スリザリンが滅ぼされるべきだと考えているのかい？」

「そんな事は僕には口が裂けても言えませんよ」

僕はスリザリンである。

だが、レイブンクローに所属していた場合。或いはハツフルパフやグリフィンドールに所属していたのならば、どのような立場を取るかは明白だ。

「もつとも、これだけは断言しておきましょう。貴方達が現状維持を——スリザリンの緩やかな滅びを望むならば、スリザリンは何れ自己の存続の為に先制して他の三寮を滅ぼそうとする。過激化した純血主義は、その結末に行き着く事を回避出来ない」

スリザリン寮の在り方は最早立ち行かなくなっている。

ゲラート・グリンデルバルトと闇の帝王。かの二人が主導した大戦争によって、多くの純粋な血と伝統が永遠に断絶した。ペストによる人口の激減で相対的に農民の地位が上がったように、彼等の革命で上流階級が死滅した事により、それ以外の地位が相対的に向上した。

そしてまた、魔法界の外に存在する「マグル」社会も、二度の大戦で大きく変わってしまった。社会は変化を求めており、けれどもスリザリンは明らかに着いて行けていない。

自分達が滅ぶという「純血」の焦燥感は、第一次魔法大戦期よりも強くなっている。

子供や親族の数は明らかに減り、多くの家系が先細っている事は隠し切れる物ではなく、半純血やマグル生まれの勢力拡大も最早止められず、魔法界の歪みと澱みは最早見て見ぬふりが出来る限度を超え、問題の最終的な解決——審判の日が求められている。

それを為そうとしている直近のスリザリンが今まさに復活しようとしている闇の帝王であり、初めから理念と思想が歪んでいるからこ

そ、必然的に多くの流血を伴わざるを得ない。

「セドリック・デイゴリー」

何の因果か、こうして会話する羽目になっている彼へと呼びかける。

「貴方は、自分がハツフルパフに相応しくない存在だと考えているんでしょう?」

「……まあ、そうだね」

彼は渋々肯定した。

そして先程の話からすれば、彼は入学時よりそう思っていた。

彼には騎士への崇敬が有った。知識への渴望が有った。野望への共鳴が有った。

セドリック・デイゴリーにとって誠実であるとか公平であるとか——つまりは単なる“良い子ちゃん”として評価される事は優先順位が低く、それよりも遥かに、魔法史に残るような偉大な魔法使いになりたいという夢の方が強かった。

——さながら、“生き残った男の子”がずっと前にそう成ったように。

「貴方がハツフルパフの理想を何と定義しているかは知りませんが、まあ予想は出来ます。そしてこうして僕と会話している以上、貴方は自分が思うハツフルパフの理想とはなれなかった事に、深い絶望を抱いているのでしょうか」

「……………」

「しかし貴方はスリザリンでは無く、スリザリンが内包する思想と葛藤に一度も向き合って来なかった。だから貴方は望もうがスリザリンになる事は出来ないし、他の寮生にもなれない。貴方はハツフルパフ以外の何者でも無いんですよ」

「——そうか。僕はハツフルパフなのか」

その言葉には、何処か落胆とも取り得る深い慨嘆が含まれていた。

……本当に奇妙な事では有る。

僕が見る限り、この男はグリフィンドールでも、レイブンクローでも、そして当然ながらスリザリンでも上手くやれたと思う。彼は狡猾や野心を、勇気や度胸を、知恵や機知を、各寮に所属する一般的な人間よりも遥かに多く持ち得ていた。そうでなければこれ程までに圧倒的な成績を文武の両面で修めた上で、スリザリンですら一目置く程の人望を広く獲得する事は無かつただろう。

今となつてはスリザリン以外では生きていけなかつたであろう事を自認する僕と異なり、セドリック・デイゴリーにはそれだけの資質が有り、そしてまた能力が有つた。だというのに、彼はどういう訳かハツフルパフに所属している。

僕の疑問を他所に、彼は何故か顔を僅かに綻ばせながら語り掛けてきた。

「フラーやグレンジャーが君の事を怖い人間だと評していた理由が今なら解るよ」

「……………」

「君が多くを見通してしまふからじゃない。妥協を許せず潔癖に生きようとする君の本質こそが、僕達にとつては理解出来ないからだ」

「……別に必ずしもそうである訳ではなく、論理が許せば構いませんよ」

「それが君の恐ろしい所だと思ふけどね。理屈が合えば君は肯定してしまう。君がマルフォイと上手くやれている事なんて良い例だ」

まるでそれが奇妙な事だというように、セドリック・デイゴリーは楽し気な声で言う。

先程まで壊れそうだったにも拘わらず、何時の間にか、彼は完璧な“セドリック・デイゴリー”を取り戻しつつあるように思えた。

「ただ、君の本心は違うだろう？ こうして話してみても痛感したよ。君は決して現実を認められない訳ではないのに、理想主義な所が有り過ぎる。徹底的で、破滅的だ」

「……………」

「君も何処かで解っている筈だ。先程君は、僕が為そうとしている行

動を「スリザリン的」ではないと言って止めた。しかし、「セドリック・デイゴリー」はそれを選ばない。決して選べない。君の冷静な思考は、そう判断していたんじゃないか？」

「――」
僅かに動揺を露わにしてしまったのは、内心でその指摘が正しいと認めてしまったからだ。

あの廊下で、そして今までの会話の中で、僕はセドリック・デイゴリーを見た。けれどもそれは、彼が僕を――ステイブ・レッドフィールドを見る事と同義だった。僕が彼を見透かす事が出来たのなら、彼に出来ない道理もなかった。

「君は想像し、そして何処かで期待したんだろう？　自分の矮小さに絶望した僕が、優等生の仮面をかなぐり捨てて本当の僕を露わにする事を。僕の両親に、先生に、友人達に、周りが見て来た「セドリック・デイゴリー」は造り物で紛い物に過ぎないと突き付け、全てを台無しにしてやる事を」

……その通りかもしれない。

しかし、僕は初めから解っていた筈ではないだろうか。

スネイプ教授はセドリック・デイゴリーを今回の事件の容疑者に上げた。けれども僕は、一体何と言ってその可能性が低いと判断したのだろうか。

「想像するのと実際に出来るのは違うというのは、ここでも言える。こいつを殺したいと考えて実際に行動に移す人間は少数であるように、今の「セドリック・デイゴリー」を捨てる事は僕には出来ない。そうする事は、全くの利益が無いからだ」

「……そう、でしょうね」

「残り一年でホグワーツを卒業するし、自惚れでも何でも無く、まず間違いない僕は来年首席になるだろう。学生生活で問題は生じておらず、寮の外にも友人は多く、後輩からは慕われ、可愛い彼女も居る。現状を捨て去るなんて以ての外だ」

セドリック・デイゴリーは正しい。

その言葉も、恐らく僕の評価も。

普通の人間ならばそう考えるのであって、しかし僕は見誤った。それは多分セドリック・デイゴリーがどうするかではなく、僕ならばどうするかを考えていたから。

ただ、そこまで口にして、彼は一呼吸を置いた。

決して小さくも短くもない、覚悟を決めるような間。一瞬本来のセドリック・デイゴリーが見えた気がしたが、一方で錯覚に過ぎない気もした。それでも並ならぬ覚悟を決めた上で彼が言葉を紡ごうとしているのは歴然としていた。

「裏を返せば」

ほんの少しだけ声を荒げながら、彼は続ける。

「それだけの利益を見いだせれば、僕はそうしたかもしれない」

「……………」

あくまで仮定の話。そして意味の無い話でも有る。

彼がハツフルパフに組分けされて六年を過ごし、今年三校抗試合の二つの課題を滞りなく達成し、そして揺ぎ無い地位と名声を既に獲得している今、それを認めた所で壊れる物は何も無い。時が巻き戻らない以上、彼は「セドリック・デイゴリー」のままである。

けれども、それでも彼は認めた。認めてしまった。

……それは間違いなく、僕が持ち得ない善良と公平性の発露だった。

「ハリーはこの四年間、幾度か誹謗中傷や大きな逆風に晒されてきた。一年時はスリザリンの七年連続優勝に加担しそうになった戦犯だったし、二年時は生徒を石化しまくる狂人扱いだった。三年時だって、ブラックが何を犯したかを知って居れば、御近づきになりたい人間じゃない。そして今年の事については、最早わざわざ言うまでもないだろう」

「……まあ、良くもまあして騒動を引き起こし続けられる物ですよ。彼は生き残った男の子ではなく呪われた子だった。そう言われても僕は信じますよ」

半分本気の僕の冗談にセドリック・デイゴリーは笑わなかった。

「けれども、僕はそこまで強く在れるだろうか？ 仮に第一の課題で

失敗していたら？　その後の第二、第三の課題で他を見返す事が出来なかつたら？」

「……貴方はそうしたかもしれないと？」

「仮にハリーがそうなった場合でも、彼ならばそうしなかつた。僕はそれを断言出来るけど、自分については自信が無いよ。この六年間、自分がハツフルパフの理想を——寛容や献身、公平性や優しさを持っているか疑問に思い続けて来たんだから」

苦笑する彼も、自分の中にそれらが全くないとは流石に考えている。い。

けれど、それ以外を多く持っていると自認するが故に、彼は疑問だったのだろう。

「そしてだからこそ君に聞きたい」

「答える義理は有りませんが」

「ここまで僕が弱みを見せたんだ。ここで黙る程、君は恥知らずじゃないだろ？」

——今更僕に恥を感じる真つ当な感覚など無いが。

そうだとしても、セドリック・デイゴリーの挑戦から逃げるのが嫌なのは確かだった。

「……一体何を聞きたいのです？」

「ハツフルパフの理想像について。君にとって、それは一体どんな物なんだい？」

理想。目指す人物像か。

「……残念ながら、その答えは僕の中には有りませんよ」

色々と業腹であるが、そう答えざるを得なかつた。

「貴族のスリザリン。騎士のグリフィンドール。賢人のレイブンクロー。各寮を端的に表現しうる単語は見つかっても、ハツフルパフだけは見つかриそうもない。貴方と話しても……と言つても、貴方は純正のハツフルパフに見えませんが、やはり解りません」

「へえ。なら、善人のハツフルパフというのはどうだい？」

「……やはり貴方はそう考えていたんですね」

「まあね」

彼はそう考えていた。

だからこそ、ハリー・ポッターと比べて自分がそうではなく、寧ろ彼がハツフルパフの徳目を備えていると感じてしまった時、彼は他ならぬ己自身に絶望してしまった。

「もつとも、今までの会話からすると、君なら絶対に違うと言いたいそうだけれど」

「ええ。貴族も騎士も賢人も、善人である事は兼ねられるでしょう。別に重複してはならないという道理はないですが、正直言って重複し過ぎる。別個の寮を立てた以上、もつと違う道を求めている然るべきだという気がしています」

「……そうか。確かに言われてみればその通りだ」

「そもそもハツフルパフは善や正義を徳目に掲げていませんよ。勿論、ハツフルパフに限らず、四創始者全員が敢えて外したのでしようが」

騎士道馬鹿のグリフィンドールですら掲げていない。

善や正義というのは相対的であり、突き詰めてしまえば対決と分裂しか生まない代物だ。かつてホグワーツを支えていた四つの柱が崩壊した時、彼等はそれらを思い知った筈だった。

「じゃあさ、見方を変えて、君が最もハツフルパフ的と思う人物は誰なんだい？ ハツフルパフの理想は解らずとも、それに近いと思える人物は挙げられるだろう」

「……また面倒な問いを」

きちんと伝わるように表情を歪めたつもりだが、彼は露骨に無視した。

そもそも他寮の人間に聞く事では無いだろうと思っただが、敢えて上げるならば――

「――テセウス・スキヤマンダーでしょうね」

瞬間、セドリック・デイゴリーは何故か非常に驚いた顔をした。

今日一番の驚きであると言って良いのかもしれない。それ位に大きな反応だった。

「……何でそんな顔をするんです？」

「いや、だつてさ。まさか他寮の人間からその名前が出てくるとは思わないし」

「……その名は当然知っていて然るべきでしょう。彼の業績を知っていれば、たとえハツフルパフ以外でもニュートン・スキヤマンダーの親戚程度の扱いなど決して出来ませんよ」

セドリック・デイゴリーが明確に反応した以上、当然彼はテセウス・スキヤマンダーがどんな人物で有るか、彼の業績がどんな物であるかを知っていた筈だ。しかし、それでも一瞬眼を逸らしたのは……ハツフルパフでもそう思う人間が少なくないからか。

「けど、彼は歴代の閹祓い局長の中で最も憧れを受ける、子供が是非彼のようにになりたいというような人物ではないだろうか？」

「……一応それは認めますが」

「一方でニュートンはそうじゃない。彼は世界中を旅して様々な魔法生物に出会い、そしてああして素晴らしい本を書いた。別にハツフルパフに限った事ではなく、僕達魔法界の子供がまず憧れるような人物だと言つて良い」

「遺憾ながらそれも認めましょう」

子供受けするのは圧倒的にニュートン・スキヤマンダーの方だろう。

「ただ、彼は生粋のハツフルパフという感じはしませんよ。……嗚呼、別にハツフルパフに入るべきでは無かつたと言つて居る訳では有りませんし、あくまで僕の雑感ですが」

口を挟もうとしたセドリック・デイゴリーを制止して、僕は続ける。「僕が著作や法律から受ける彼の印象は、ルビウス・ハグリッドを少しばかり穏健にした魔法生物第一主義者です。人間が嫌いかは断言出来ませんが、人間と魔法生物が対立したならば、魔法生物との絆を優先する類の人間でしょう。さて逆に聞きますが、そんな人間が主として人の和を重んじる貴方がたハツフルパフに馴染むと思えますか？」

その仮定と結果を想像してしまったのか、彼は微妙な顔をした。

「まあニュートン・スキヤマンダーが半巨人でない以上、あそこまで周りにとつて危険ではないと思えますが、しかし彼の著作は基本的に彼

の魔法生物との「交流」を前提に作成されている。捕獲でも飼育でも調教でもない。言うまでもなく大概の魔法生物は人間にとって脅威ですが、それを忘れていているかのように行動出来ている時点で相当の変人ですよ」

僕が言うのも何だが、学生時代浮いていた気がしてならない。

一方でルビウス・ハグリッドの方は、魔法生物関連の騒動で上級生を多大にイラつかせながらも、それでも一員として認められていた——たとえば彼が半巨人だと気付かれていようと——のが容易に想像出来る。

良くも悪くも、グリフィンドルというのはそんな寮だ。

ともあれ、ニュートン・スキヤマンダーは魔法生物に対する献身や慈愛は非常に強く見て取れるが、それが人間に向けられている印象は余りない。

「そしてこれが僕にとって一番の理由になりますが、彼はホグワーツ退学者であり、それにも拘わらず魔法省に勤務を認められながら、しかし早々に辞めたようです。そこから考えるに、多分組織への忠誠というのは余りないタイプでしょう」

「……ええとつまり、君はニュート・スキヤマンダーをグリフィンドルっぽいと考えているのかい？」

「組分け帽子が入れた以上、間違いなくハッフルパフでは有るんでしょうけどね。個人的にはグリフィンドルとの二択だった気がしますよ」

会ってみればまた印象も違うかもしれないが、しかし彼がホグワーツを卒業してもう半世紀以上は余裕で経っている。もう今更ハッフルパフ云々という年齢でも無いだろう。

「……同意出来るかどうかは別として、君がそう思う理由は解ったよ」
そう認める事自体に微妙に苦澁を滲んでいる時点でハッフルパフらしさが露骨な気もするが、セドリック・ディゴリーは肯定の頷きを示した。

「そしてだからこそ、君はテセウス・スキヤマンダーを最もハッフルパフ的な存在だろうと挙げる訳だ」

「まあそうなりますね」

魔法族と“マグル”を区別しない寛容と慈愛を持ち、闇祓いとして組織への忠誠を捧げ、しかし第一次大戦に参加したように上に対して無批判でもなく、公平に自分が居るべき場所を見定める事が出来る。あくまで第三者の言及からの判断であり実物は僕の予想と違う可能性は有るが、大きくは外してはいないと思う。

そう判断出来るのは、彼が時代として新しめの人物であり、第一次大戦と魔法大戦の両方に参加しているというのが大きい。

何れの大戦も魔法界の在り方を揺るがし、世界中の魔法使いが関心を持って着目していたのだ。記録は豊富であり、正確さも期待出来る。単なる闇祓い局長ではこうはいかない———というか、人間性を把握出来るような文献は一切残りはしなかったのは間違いない。

ただ。

僕が知る限りにおいてもハッフルパフ的であろう人物がテセウス・スキヤマンダーだったとして、そもそもの質問の発端、ハッフルパフの理想像とは如何なる存在であるかというのは、やはり湧いてきそうにもなかった。

けれども、ハッフルパフの模範生は笑った。

「そうか。良く解ったよ」

「……ハッフルパフの理想が解ったと？」

「いや、そうじゃない。君が解らないのなら僕に解る筈もないだろう」

「だけど、一つだけ確かな事が有るとセドリック・デイゴリーは微笑んだ。

「君がどう考えていようとも、たとえ純血主義の面から資格が無かろうとも、君の並外れた野心と同胞愛が為に、サラザール・スリザリンは例外として君を受け容れた事だろう」

ハツフルパフの体現者

セドリツク・デイゴリーの表情は穏やかだった。

今や彼は「セドリツク・デイゴリー」を完全に取り戻していた。

全身が自信と矜持に満ち、本来彼が有していたであろう活力が迸っている。

僕がハリー・ポッターを見た時に時折感じる、しかしそれとはまた別個の眩しき。セドリツク・デイゴリーはグリフィンドールでは無かったというのに、恐らく組分け帽子から半ば拒絶されたに等しかつただろうに、彼から僕はその資質を感じていた。

「残った三人の創設者がスリザリンを潰さないのも当然だ。ハツフルパフには、レイブンクローには、そしてグリフィンドールには君のような人間が産まれる筈もないからだ。ただサラザール・スリザリンだけが、君のような人間を受け容れられる。他の創始者達も、君の存在がスリザリンに受け容れられる事を歓迎出来る」

「……サラザール・スリザリンが僕を受け容れるなどという戯言は、貴方がハツフルパフであるから聞き流しましょう。しかし、他の三人がそれを是としたとする理由が僕には解らない」

「簡単な理屈だよ。スリザリンが去った事が大きな痛手だと誰よりも感じ、誰よりもスリザリン寮の維持に尽力したのは、他ならぬ彼等だっただろうから」

「……………故にスリザリンは存続しているത്?」

「ああ。サラザール・スリザリンが去った時点で潰れるべき敗者の寮を維持出来た人間が居たとすれば、それはたった三人しか存在しないと思わないかい?」

……確かに論理的な解答ではある。

仮にホグワーツが二分される程の大規模な対立が生じ、一人の創始者の追放を行ったのなら、同じ事を二度と繰り返さないように蛇寮を潰せという声は当時少なからず存在しただろう。その圧力に抵抗出来たとすれば、それはやはりゴドリツク・グリフィンドール、ロウエナ・レイブンクロー、ヘルガ・ハツフルパフ以外にありえない。

仮に当時スリザリンにマーリンが在籍していようとも、後に偉大となるに過ぎない魔法使い風情では、当時既に偉大であった魔法使いの意向を差し置いてスリザリンを維持するには力不足であろう。つまり、三人の創始者達の庇護と賛同が無ければ、スリザリンの崩壊に歯止めを掛ける事など誰にも出来はしない。

「多分、純血主義は創設者四人の一つの論点に過ぎなかったんだろう」
彼が口にする推測は、しかし強い自信と確信に満ちている。

「勿論最大の論点ではあったんだろうが、全てでは無かった。三対一ではなく、一対一が四つだった。だからこそ、スリザリン寮を潰す事なんて出来なかった。そうしてしまえば、次は他の寮の番となり、最後にはホグワーツ自体が無くなってしまう」

「……一度肅清を始めてしまえば、最後まで完遂せねばならない。確かに歴史の教訓は、それを示しています」

疑心暗鬼に陥った集団同士は、敵対派閥を根絶するまで止まれない。自分が止まったとしても、相手が予防的措置としてこちらを滅ぼそうとし続けるのが眼に見えているからである。

それがホグワーツでも起こり掛け、しかしスリザリンの追放後に歯止めが掛けられた。

「けれどもそれを証明する記録は有りませんよ」

「否定する理由も無いだろう？ サラザール・スリザリンが半端な魔法使いを——半純血を嫌っていたのか不明であるのと同様にね」

先に僕が用いた論理を都合良く引用しながら彼は笑う。

「実際、理屈は通っていると思うんだよ。確かにグリフィンドルとスリザリンの対立が目立つけど、ハッフルパフとレイブンクローに対立が全く存在せず、ずっと仲が良かったと歴史が語っている訳では無い。組分け帽子自身もそれを示唆しているように僕は思える」

僕はその手の歌詞をこの四年間で聞いた事が無い為に何とも言えないが、セドリック・デイゴリーには思い当たる部分があるようであった。

「そもそも、サラザール・スリザリンの『純血主義』って、今の典型的なグリフィンドル生が思う程に過激な物なのかな？ だって、彼が

去ってからすぐの時代に、君達の寮にはマーリンが現れているだろう？」

「……」
時にスリザリンは、自慢の為に彼の存在を引き合いに出す事がある。

けれども、僕としては余り容易く持ち出して欲しくない人間でもあった。それ故に、セドリック・デイゴリーが意図的に持ち出してきたのが見え見えだった。

「中世で最も偉大な魔法使いマーリン。彼の偉業は色々あるけれども、その一つがマーリン騎士団の創設だ。そしてかの騎士団の目的を、君は当然知っている筈だろう？」

「……それは伝聞経由の伝説に過ぎませんよ」

「けれども、それ以外に伝わっていない。違うかい？」

見透かしたような彼の顔を前に、僕は頷かなかった。

けれども彼は僕が知っているという事で十分だと判断したのだろうし、僕がマーリンを「スリザリン的」と捉えているかなどという、無駄としか思えない問いも紡ごうとしなかった。ただ、彼は騎士団創設の理由を自ら解答した。

「マーリン騎士団はマグルの保護を目的としていた。現在にはそう伝わっている」

「……………」

純血主義が蔓延る寮で最も有名な大魔法使いは、しかし今のスリザリンの主流派の思想とは全く相容れない活動を行っていた。真実は最早解らずとも、またホグワーツに掲げられた彼の肖像画は多くを語らずとも、そういう伝説が消えずに根強く残っている。

第一次魔法戦争でアルバス・ダンブルドアが反体制組織を騎士団としたのも、気取った格式溢れる名称を欲した訳では決していない。間違はなくかの高名な騎士団に肖って創設されたからこそ、そのような名前と組織体制となっていた。

当然ながら、殆どのスリザリンはその伝説を歴史的事実として認めていない。

しかし、このハツフルパフはそれが事実だと主張する。決してスリザリンを侮辱する意図などなく、あくまで彼が“スリザリン的”だったが故にそうなのだ。

「考えてみてくれ。サラザール・スリザリンが去った時の論点は、ホグワーツにマグル生まれを受け容れるかどうかだった。要は彼等を同族である魔法族として認めるかどうかで、マグルと仲良くするかとか、マグルにどう対応するかじゃなかったんだ」

「……確かにホグワーツに“マグル生まれ”を入学させる傍ら、“マグル”を排除し迫害し虐殺する魔法使いが居たとして、その行動は何ら矛盾を生じるもので有りませんが」

三人の創設者達がそうしたとまでは言わない。

ただ、ホグワーツ創設期は、魔法使いに対する凄惨な迫害の時代だった。身内や自身の子供を殺された魔法使いが“マグル”に対する報復を唱え、実際に行動していた場合は珍しくなかったであろうと考える方が自然だった。

それは解り切った話であるが、と溜息を吐く。

「しかし、それが何だというんです?」

「解らないかな? そんな時代において、魔法使いがマグルの保護を唱えたらどうなる?」

「――」

白眼視され、疎まれる。魔法使いの共同体から排斥させる。

セドリック・デイゴリーは、そのような事を言いたい訳ではないだろう。

この話はマーリンの、彼の騎士団の目的の延長線上にある。つまり。

「……あの異人種同士の殺戮の時代に、“マグル”相手に魔法を使う事は規制すべきと唱えた話が本当であるならば、それはもう途方もない野望ですね。コネチカットから来た未来のヤンキーYankeeの方が、当時基準としてもまだ正気だったような気がしますよ」

その理念は、余りに時代を先取りし過ぎている。

それが実現するのは彼の時代より何百年も後。魔法評議会、魔法

省、そして国際魔法使い連盟によって造り上げられた様々な盟約と法規制によつて漸く形になるのだから。

「要は、マグル保護の理念を指導出来るのはスリザリンしか居ないと思わないかい？」

「……………」

「グリフィンドールは悪いマグルと戦つて、魔法族の子供や女性を護る事を好むだろう。レイブンクローは己の興味優先で、社会を変える事に左程関心を抱こうとしない筈だ。そしてハッフルパフは、自分の寮の事だから言うが、先頭に立つてどうこうするタイプじゃない」

……当然、各寮の所属者が自寮の徳目以外の行動を出来ない理屈はない。

しかしながら、各寮の徳目に照らし、弱者を保護する指導者として率先して動きそうな寮は何処かと考えれば、奇妙な事にそれはスリザリンに違いなかった。

そしてセドリック・デイゴリーが示唆する通り、サラザール・スリザリンの主張は、マグル生まれ達——非魔法族の親を持ちながら魔法力を持つ人間——をホグワーツから排斥する事である。彼のマグル——そもそも魔法力自体を持たない人間——に対する立場、例えばマグルを絶滅させるべきであると主張していたかは現状不明確である。

また、僕が既にセドリック・デイゴリーに告げたように、純血主義の根幹である血を尊ぶ事と“マグル”保護はやはり必ず矛盾するものではない。屋敷しもべ妖精の庇護者はヘルガ・ハッフルパフだけではなく、歴史的にスリザリンもまたそうだった。

「——僕はね、ハッフルパフが最も優れている寮だと思つていた」
セドリック・デイゴリーはしみじみと本音を吐露する。

ホグワーツに所属した者が殆ど例外なく抱いてしまう悪癖を、けれども何処か清々しさを籠めて。彼の言葉には自尊や独善は一切含まれておらず、そして敢えて過去形を用いた表現は、彼が今どう思っているかをありありと示す物でもあった。

「ハッフルパフこそが一番だと僕が考えていた理由。それは他の寮以上に色々な人間が集まつて来て、しかも共存している事だった」

「……………」

「僕はアナグマが好きではなかったと言っただろ？」

「……ええ、まあ」

セドリツク・デイゴリーの問いに渋々頷く。

「僕がその考えを漏らした事は無かったけど、同じような意見を持った新入生が居た。そしてそれに対する先輩の発言が印象的だった。果たして何と言ったと思う？」

「……僕の知った事じゃありませんが」

「まあそう言わないでくれよ。ハツフルパフの根幹に関わる話なんだからさ」

今にも腹を抱えて笑い出しそうなセドリツク・デイゴリーは、関係無い昔話をするなどという僕の冷たい視線を無視して続けた。

「先輩はこう言った。『寮の象徴としてのアナグマは好きだし、寮旗のデザインも気に入ってる。けど家に戻って彼等の姿を見かければ、チョコチョコするネズミと同様に片っ端からぶち殺したくなる時もある』とね」

一瞬虚を突かれ、けれども直ぐに納得がいった。

「……そう言えば、どんなに美化しようと彼等は害獣でしたね」

身近であるという事は、人間と生息圏が近しく数も多いという事。

そして彼等はそこが畑だろうと構わず穴を掘る上、作物を食い荒す雑食性で、更には牛を殺す病気の保菌者と来ている。農家や畜産業者が敵意を向けない筈もなく、そのような家に生まれた子供は、当然親の現実主義なアナグマ観を受け継いでいる筈だった。

「……ただまあ、その発言を受けたハツフルパフの反応は容易に出来る気がしますが」

「想像の通りだよ。その発言にショックを受け、酷く反発した人間は少なくなかった。あんなに可愛い生き物を殺すとか信じられないってね」

「ですが、そのように反発した人間は、ロンドンのような都市部出身の人間が大半だったのでは？ 嗚呼、アナグマを全く問題としない貴方がた魔法使いも一応反発しますか」

「その通りだ。仮にハツフルパフ生で無くとも、ホグワーツの寮の象徴を進んで気軽に虐殺する気になれないし、そもそも僕等にとつては庭小人とかの方が余程厄介だしね」

彼は軽く肩を竦めてみせる。

「ただ、先輩に同意する人間も居たし、その両者が共存してこそそのハツフルパフだった。シヨックを受けた人間も、その子の家に行つて被害の実情を見た上で、彼等が何百ガリオンもの損害を出していると言われれば考え方も多少変わる。対して農家や酪農家の子だって、自分の寮が尊ぶアナグマは、出来る事なら殺したくないと思うのが人情だろう？」

そんな家庭の出身のハツフルパフ生がまず覚えるのはアナグマ除けの魔法だというジョークも有る位だと、セドリック・デイゴリーは朗らかに笑みを浮かべた。

「要するに、僕達は違う人間を許容する。というより、僕達はハツフルパフとしてそれを否定し得ないんだ。何故なら他ならぬハツフルパフの創設者がそれを求めたんだから」

一応重視する徳目は有つても、ヘルガ・ハツフルパフ、魔法使いである限り差別せずに教えるという立場を取った。

そのような彼女の寛容さは今まで広く伝えられているし、そして誇張でも何でもないのだろう。ホグワーツの組分けに際して四寮の何れにも割り振られる事なく、入学自体を拒否されたという事例は——その人間が魔法力を持たなかった唯一を除いて——存在していない。「だからこそ僕達の寮は一番数が多いし、様々な境遇の人間が集まつて来ている。純血も半純血もマグル生まれも。金持ちも貧者も。田舎生まれも都会育ちも例外なく」

「……そして貴方のような変わり者でさえも、ですか」

「そうだね。グリフィンドルよりも騎士らしく、レイブンクローよりも賢く、スリザリンよりも野心溢れる者であろうとする僕を、ハツフルパフは受け容れてくれた」

自嘲めいた口振りなのは、彼がその原点を忘れていたからか。

「この逸話を通して僕が何を説きたいか君には解るだろうが、敢えて

質問しようか。君達は自分の寮らしくない生徒を許容するかい？」

その問いに、答える必要は無いだろう。

「純血主義に染まらないスリザリン生。仲間の為に戦えない臆病なグリフィンロール生。知識ではなく空想の中に生きるレイブンクロー生。どの寮にもはみ出し者は居る筈だ。けれども君達は彼等を仲間として受け容れないし、逆に率先して排除する」

「……ハツフルパフには誠実さや寛容さの欠片もない生徒は居ると？」

「残念ながらと言うのが正しいか解らないが、確かに居るよ。僕も含めてね」

ここまで来て、彼は自寮の神聖視をしなかった。

「けど、僕達は少なくとも排除は拒否するし、それで良いんだろう。アナグマを絶滅させたいと思っていた人間すら受け容れるんだ、その程度は問題無いとは思わないかい？」

確かに伝え聞くヘルガ・ハツフルパフ像からすれば、そのような意見をぶつけられた所で——その行為自体を是としないだろうが——怒りはしないように思えた。

「先輩の言葉を聞いて、或いはその対立する者達の議論を耳にして、僕はアナグマが少し好きになった。当然ながら、自分の寮自体も。確かにアナグマは特別でなく恰好良くもないかもしれない。けれども僕達の寮は色んな人間と触れ、認め合って、大切な事を知れる」

「……まあ御指摘通り、スリザリンではそれを期待出来ませんが」

スリザリンにおいては、純血の意見こそが絶対。

純血——特に聖二十八族の意見や主張を覆す事が出来るのは、同じ聖二十八族だけ。それ以外に発言権は基本的に皆無。先輩後輩、首席や監督生の序列に殆ど意味は無く、身近な所で言えば、ドラコ・マルフォイは一年時からスリザリンの王で在り続けた。

そして他の寮も左程変わるまい。

レイブンクローでは成績や知識の優劣、グリフィンロールでは人気や仲間からの支持。入学時に寮の色に溶け込めなかった者は主流と成り得ず、七年を通して軽んじられたままの扱いを受けかねない。同

学年で言えば、ネビル・ロングボトムが最も解りやすい例だろうし、一年時のハーマイオニー・グレンジヤーとてその一例に違いない。

だが、恐らく彼等ハツフルパフは違うのだろう。

良くも悪くも寮の色の主張が強くはなく、だからこそ「ハツフルパフらしくない」とか「組分けを間違えられた」として排除されづらい。他の寮で生じる苛めの為の大義が一つ減っているであろう事は、まあ疑う余地もない。

「……それで。多様性の有る素晴らしい寮の自慢を聞かされて、僕はどんな顔をしろと?」

「侮蔑してくれば良いさ」

にこやかな顔で、似つかわしくない言葉を彼は言った。

「仲間の為に働くのが凄いと勘違いしているグリフィンロールも、テストの成績が良ければ賢いと勘違いしているレイブンクローも、血が純粹である事が偉いと勘違いしているスリザリンも不要だ。僕は心の何処かで、そう考えていたんだから」

……その言葉は、僕ですら一度も考えた事が無い程に過激な内容だった。

そんな感情が視線にも出たのか、彼は楽しげに白い歯を見せながら笑った。

「流石に口にした事は無いよ。僕は他の寮にも友人が居るからね。けど、ホグワーツにどれだけ「その寮らしい」人物が居るんだい? 皆無とは言わない。でも、虐めを無視するグリフィンロールも、試験程度ですら僕に勝てないレイブンクローも、他人に対する優しさを見せないハツフルパフも大勢居る」

彼は敢えてスリザリンに言及しなかった。

それは彼にスリザリンの友人が居ないという訳ではなく、僕がスリザリンの悪い部分を熟知していると察しているが故だった。

「——でもまあ、それは僕の自惚れで、傲慢に他ならなかった」

自嘲の笑みと共に、セドリック・ディゴリーは己の誤りを認める。

「君のような人間は、ハツフルパフには居ない。それはハツフルパフである僕が断言するよ。そして、それこそ四寮制が千年以上存在する

意味だ。ヘルガ・ハツフルパフが、ゴドリック・グリフィンドールが、ロウエナ・レイブンクローが僕達に遺した意思なんだ」

……バーテミウス・クラウチ氏も似たような事を言っていた。

スリザリンが存続しているのは、創設者達の祈りによる物なのだと。

「逆も言えるんじゃないか？ ダンブルドアでなくハリーが秘密の部屋を見付けた事からして、蛇パーセルタング語が大きな鍵だったのは馬鹿でも解る。じゃあ、何故千年も開かれなかった？ スリザリンに蛇語使いパーセルマウスが一人も居なかったのか？ 当時蛇語使いがいなくとも、扉の場所を子孫に伝えれば良い話じゃないか。彼等は純血、旧くから連綿と血を繋ぐ家系なんだから」

「……記録に無いからと言って、一度も開かれていない事の保証にはなりませんよ」

「しかし、開いた事を公にしない理由もないだろう？ 秘密裏にマグル生まれを一人一人殺す必要なんて無い。怖がらせさえすれば勝手に出て行ってくれるんだからさ」

「……………」

ホグワーツは幾度か大改修を行っているが、あの入口が女子トイレになったのは、記録から判断する限り十八世紀頃。その際に、サラザール・スリザリンの子孫の誰かが秘密の部屋の痕跡を見付ける事は決して不可能では無かっただろう。

であれば、秘密の部屋の存在を知った彼等は何故、スリザリンの継承者——伝説に従えばホグワーツからマグル生まれを一掃する者として行動しなかったのだろうか。

……嗚呼、一つの仮定を立てさえすれば、その疑問に説明が付かない訳では無いのだ。

サラザール・スリザリンが秘密の部屋を残した事自体は神話では無く、しかし、秘密の部屋とその怪物が残された理由と目的こそが神話で有ったというのであれば。

勿論、それを示す証拠は無い。

傍証ですらも存在せず、妄想の域を決して出ない。

マグル生まれの入学を拒否した純血主義者。サラザール・スリザリン そんな彼であれば、マグルに対しても迫害と排除を為したと考えるのは自然であり普通なのだ。寧ろ逆の立場に在ったのではないかと考えるのは正気を逸していると思えない。

「マグルの親戚や先祖を一切持たない家系が君達にとって『純血』である一方、僕達にとって祖父母が全て魔法使いならもう『純血』だ。その事が示すように、環境や立場が変われば考え方も、言葉が持つ意味も変わる。違いが存在するのが人間であり、それを学べる場所がホグワーツなんだ。つまりホグワーツは四寮でなければならぬ」

「……それが正しいとしましょう。そうであれば貴方は何が言いたいのです?」

「何、ハッフルパフの理想は解らなくとも、その一部の理念は伝わっている。だから僕もハッフルパフらしく在ろうと改めて思う。ホグワーツに忠誠を誓い、違う人間に寛容で、断絶を防ごうとする事に勤勉で、どんなに不可能に見えても苦勞を恐れない人間に」

セドリツク・デイゴリーは愉快そうに言った。

……何故だろう。

彼は何ら可笑しな事を言っている訳でも、恐ろしい内容を告げている訳でもない。

だが、それを聞いてしまったてはならないという強い予感だけがして、背筋に恐怖すら走り、だがそれが何を根拠としているか解らなかつたが故に、彼の言葉を止められなかつた。

「——なあ、一つ賭けをしないか」

賭け。勝負。

それらは互いの合意が無ければ成立しない。

僕は馬鹿正直に受ける性格をしていないというのに、そんな事などセドリツク・デイゴリーは初めから了解しているだろうに、傲慢にも、自惚れと共に僕へと持ち掛けてしまう。

……嗚呼、最悪なのは。

内容を聞かされる前から僕は乗らざるを得ないという感覚がしていたのだ。

何故なら、相手は「セドリック・デイゴリー」である。

第一の課題前は隙が存在していた。彼自身が告白したように、ハリー・ポッターに対する割り切れぬ隔意と憤激こそが彼の仮面に罅を入れていた。想定した理想形が完璧であれば完璧である程に穿ちやすく握り潰しやすい心は存在しないのであって、けれども今、完璧を殴り捨てた彼は、以前よりも仮面の強度と完成度を高めている。

ハツフルパフの模範生。

忠実で、誠実で、公平な眼を有し、忍耐と寛容の心に溢れた存在。

そう在れかしと造り上げられた存在に、不実で、不親切で、偏見に溢れていて、頑迷で偏狭なスリザリン生が敵う道理が一体何処に存在するだろうか。

「君との賭けの商品について語るには、まずグレンジャー。君と親しい彼女について語らなければならぬだろう」

案の定、セドリック・デイゴリーは僕の急所を突いて来た。

驚きを感じない事が驚きだった。適確に僕を傷付けようとすれば、彼女を話題に上らせない事は有り得ず、彼ならばそれが出来ない筈もないという納得が有った。

「……その口振りでは、まるで彼女自身を賭けに使おうとしている悪人のように思える。もっとも、貴方は意図してそんな表現を使ったのでしょうか」

セドリック・デイゴリーは整った顔立ちの上に微笑を乗せて肯定する。

「しかし何故、ハーマイオニー・グレンジャーがそこで出て来るんです？ いえ、貴方は僕が彼女と親しいのだと言った。何故そんな事を平気で言つてのけられるのですか？」

その事を外部に漏らした事は、一度として無い。

僕は当然であるし、ハーマイオニーもまたそうだろう。ハリー・ポッターとて口外すべき事でないというのは理解している。そして

また、今年は確かに彼女と居る所を注目されはしたが、それはこの男と屋敷しもべ妖精に関して口論した場面であり、外部から見ても仲が良いとは到底判断出来る物では無かった筈だった。

「一応言っておくが、今更誤魔化しても無駄だよ。僕はグレンジャー本人と話してきた。この会話の為の報奨の先払いの為にね。ただ、僕が気を回したのは今の所無意味だった気がしないが。彼女にとって僕が云々という話では既に無かったようだから」

「……報奨の話は今置いておきましょう。貴方は未だに僕の疑問、何故彼女を話題に出したのか——僕達の間係を知っていた理由について答えていませんが」

そう問えば、彼は困った奴を見るような視線を僕に向ける。

「君は非常に良く頭が回るんだろうが、それでも自分の事については無頓着な所が有るよね。グリフィンドールとスリザリンが一度ならば兎も角、何度も図書館で同席していれば目立つよ。そして、その片割れが君であるのなら猶更だ」

「……片割れがハーマイオニー・グレンジャーだから、ではないのですか?」

「まさか」

僕の言葉をセドリック・ディゴリーは一笑に付した。

愚昧さへの嘲笑までではないが、腑抜けた解答への揶揄は混じっていた。

「あれがスリザリンの要注意人物だとわざわざ後輩に教える事は有っても、彼女が君達の学年での最優秀生だと教える人間は居ないさ。マグル生まれとて魔法界に居ればマルフォイの名前は直ぐに覚えるが、流石にレッドフィールドは無名だからね」

「……他のスリザリンと違い、僕は苛めに勤しんでいるつもりは有りませんが」

「だからこそ、八つ当たりで外見上大人しそうな君に眼を付けたら困るだろう? 君は何をするか解らない所が有る。君が一年の時からそうだったし、バジリスクの時の噂もそれが理由だったし、そして実際、今年もそれを証明してみせた」

……そこまで前から不気味に思われる筋合いは無いと思うのだが。
「もつとも、僕が君達の関係を見抜いた訳ではないけどね」

セドリック・デイゴリーは僅かに眼を逸らし、微妙に悔しがるような響きで言う。

「僕は君達が図書館で一緒に居る所を一、二度は見た事が有る。けれどもそれは単に君が、グリフィンとスリザリンの対立を含めて外部に対して無関心なだけだと思っていた。けど、こういう話題は女の子の方が圧倒的に敏感だという事なんだろう」

「……その口振りでは、僕達の交流を複数の人間が知っているように聞こえますけど」

「そう言っているよ」

「……僕には入ってきていませんが。スリザリン生の耳に入れば当然ながら、僕に誰かが何も言っただけで来ないという事は有り得ないでしょうし」

穢れた血との交流は、純血主義を奉ずる寮にとって忌むべき物である。

だからこそスリザリンが知れば、すぐさま嫌味か警告が当然飛んでくるのは目に見えている。それが無かったからこそ、僕は外部に露見していないと思っていた。

ただデイゴリーの言葉によれば、それは間違いであるらしい。

「ホグワーツ生にも口外して良い内容かどうかを判断する頭は有るし、スリザリンの枠組みが全てですらない。スリザリン生自身にとってもね。君達は並外れて賢いせいかな、他を過小評価する傾向が有る。大概は事実なんだろうが、何時もそうだとはいえない」

……この男に伝えてある時点で判断する頭を持っていないだろう。そう反論しそうになって、すんでの所で止める。僕が知られて嫌な人物である事に違いはないが、しかしこの様子では、セドリック・デイゴリーもまた口外しなかったのだろう。彼への侮辱の復讐としては的確な攻撃と成り得ただろうに、それを選択しなかった。その意味では、彼に伝えた女生徒の眼は確かだったのかもしれない。

「……御言葉ですが、貴方の事だけで仲違いした訳では有りませんよ」

「そうらしいね。実際に聞いたよ」

嫌なくらい爽やかに、彼は僕の言葉を肯定した。

「そして僕は君の考えがある程度は理解出来る。ただその事は今はどうでも良い話だ。現状だけ見れば、君は今年の初めからグレンジャーに接触していないし、遠ざけ続けている。君にとってその必要が無くならない限り、君は彼女に近付こうとしない筈だ」

「……それが何か？」

「その君の崇高な計画が終わった後、君は彼女と元通りの関係に戻せるのかい？」

「――」

僕の沈黙を前に、デイゴリーはにんまりと笑った。

「これもまた、答える必要のない事実だ。自分とて薄々は勘付いていたのだ。」

「多分、出来ないだろうね」

嗚呼、そうかもしれない。

いや、かもしれないではない。間違いなく無理だろうと、自分でも感じている。

選択として大きく間違った気はしないし、後悔も無い。

けれども、僕はやはり彼女から距離を置き過ぎた。

ハリー・ポッターやロナルド・ウィーズリーのような親友であるならば、空いた時間は直ぐに無かった事に出来るのだろうが、恐らく僕にはそう出来ない。曲がりなりにも友人と呼べるであろう存在はホグワーツ入学時以来ハーマイオニー・グレンジャー唯一人で、しかもその友人としての交流は、いわば惰性のような物に過ぎなかった。どう仲直りすれば良いかも想像が付かない。

そもそも、ここで関係を断ち切ったとしても、彼女にとって損失は何ら存在しない。

入学前の彼女は魔法界の事を聞き出す情報源として僕に価値を見出していたが、今となっては最早価値は無い。彼女が僕に時間を費やす意義は見いだせない。

そしてグリフィンドールとスリザリンの関係を思えば、彼女は僕に

近づくべきではない。

ハーマイオニー・グレンジャーがハリー・ポッターとの友好関係を断ち切るべきだという次くらいには、彼女はステイブン・レッドフィールドとの友好関係を解消すべきである。ビクトール・クラムに告げた通り、僕は自ら率先してその為に動くのが「論理的」である。「僕と違って君はそんなに器用なタイプじゃない。そして僕の見た所——特に今年の無神経さを見れば——君は物事を拗らせる天才だと言える。仮に今から君が謝りに頭を下げに行っても、君は彼女の心情を理解出来ず、それどころか逆撫でしてしまうに違いない」

「……貴方の言葉全体を否定はしませんが、無神経さ？」

「その表現に引つ掛りを覚える事が出来るならば辛うじて落第は免れるのかな。だけど、やっぱり女の子達からは扱き下ろされそうな気がするね」

「意味有り気な物言いは止めませんか」

「君の得意技では無いのか？　そして他人に強制する物じゃないね」

反論の気力も湧かなかつた。

そんな僕が余程愉快で堪らないのか、顔の輝きを隠す事なく彼は続ける。

「だからこそ、賭けの話だよ」

ハーマイオニー・グレンジャー。

彼女と賭けを一体どう繋げようというのか。

「僕が何処に住んでいるか君は知っているだろうか？」

「……確かハツフルパフが散々撒いていたビラによれば、オツタリー・セント・キャッチポールでしたか」

「そうだ。あの辺りは魔法使いが旧くから住んでいる場所だね。具体例を挙げれば、ラブグッド家やウィーズリー家が近くに住んでいる」

「……ラブグッド？」

紡がれた意外な家名に思わず反応した僕に、彼は眉を跳ねさせた。「君と話していると意外な発見が結構あるよね。彼女を知っているのかい？」

「……偶々一度だけ話した事が有るだけです。知人というには程遠

い」

二年時のホグワーツ特急での邂逅以来、彼女が接触してくる事は無かった。

自寮で浮いている彼女も、流石に僕へと話し掛けて来る事は無い。ホグワーツに入学してから僕の悪評は当然知ったのだろうし、更に余計に排除されかねない行動を取らない程度には、彼女は賢^{レイブンクロー}明のようだった。

「随分興味深い事を聞いたし、それは逆に都合が良い気がしていたよ。君も知ってるだろうが、何しろ彼女は、僕達にとって足りないレイブンクローだからね」

「……………」

「ホームパーティーを開くんだ。近所の魔法使いの家族を招くのは自然だし、そして彼等が友人を連れて来る事も問題は無い。その結果として、たまたまグリフィンとスリザリンが同席する羽目になったとしても、やむを得ない事じゃないか？」

セドリック・デイゴリーは一貫して笑みを隠そうとしない。

主導権は完全に握られており、僕がそれを奪い返す気の利いた言葉は浮かばなかった。ハーマイオニー・グレンジャーとの仲直りの機会を持ち出された時点で、セドリック・デイゴリーはパーティーのホストとして当然のように客同士の仲を取り持つだろうとして察してしまった時点で、僕は既に敗北を喫していた。

「……………僕がそれを受け容れる理由は無い」

「だからこそ、賭けなんだ」

僕の完全な負け惜しみの言葉にも、セドリック・デイゴリーは手を緩めない。

「僕が三校試合に優勝したら、夏休暇中、君は『渋々』僕のパーティーに招かれる。それが僕が提示する賭けだ。それとも、君は賭けに負けると思っているのかい？ 君が僕の優勝が揺らがないと見てくれるならば、僕も悪い気はしないけど？」

「……………貴方はスリザリン的ではないと言いましたが、一部撤回しましょう。貴方は現時点でもスリザリンを上回る狡猾さを十分御持ち

のようだ」

「そりゃあ、僕は元々負けず嫌いだからね。負けたくなければ狡猾にもなる」

僕が彼の賭けに乗る事は絶対に無い。しかし既に僕は敗北していた。

僕の弱みを正確に把握した上で僕に価値ある報酬を提示した時点で、完全無欠なまでに彼の勝利だった。

「……何故、貴方がこんな馬鹿げた賭けをわざわざ僕達に対して提示しようとするのです？ 貴方が大層骨を折って僕達の仲を取り持った所で、左程利益が有るようには思えない」

「理解しているだろうに聞くのは、性格が悪いと思わないかい？」

そんな質問を返す方が、性格が悪いだろう。

「利益は有るさ。君に恩を売れる。君が一年の時、組分け帽子がスリザリンについて何と歌ったかを思い出さない訳ではないけれど、僕は君との関係をそんな綺麗な物に出来る気はしないからね。結局、僕は打算で、けれど君にとってもその方が気は楽だろう？」

そう笑うデイゴリーの笑みは、何時も通りに完璧で。

しかし、そこには仮面めいた嘘臭さというのは欠片すらなく。

「それに、確かに僕の本性は余り穴熊らしくは無いが、君の話聞く限り、それでもそれらしく振舞う事くらいは出来そうだ。寮の垣根を超えた交流の機会を作るといえるのは、如何にも「ハツフルパフ」で、「セドリック・デイゴリー」らしい。今まで中途半端だった分、これから僕はそれを追い求めるべきだとは思わないか？」

「……………」

「都合の良い事に、僕には後一年間ホグワーツでの生活が残ってる。今更N・E・W・T.に苦勞するような学生生活を送ってきたつもりは無い。だから残りの期間をホグワーツへの恩返しとして使うのは、僕はそう悪くはない気がしている」

天を仰ぐ。何時の間にか、空は一片の曇りすらない蒼一色に染まっている。

ホグワーツ入学以来、気に食わない事は幾らでも有った。その大部分はあの老人が造り出してきたのだが、それらを考えても、今この瞬間程に腹立たしいと思つた事は無かつた。

ヘルガ・ハツフルパフが掲げた理想。僕はそれに辿り着いた気がした。

「——貴方の寮のゴーストは太Fatつた修道士Friarでしたよね？」

突然の問いの意図を、セドリック・デイゴリーは理解出来なかつたのだろう。

一瞬呆氣に取られたように口を小さく開き、僅かに「セドリック・デイゴリー」が崩れ、けれども彼は何とか頷きつつ答えた。

「その通りだけど、それがどうかしたかい？」

「……いえ、単なる確認ですよ」

けれども、重要な確認だつた。

加えて僕の記憶が正しければ、彼の生きた時代はヘルガ・ハツフルパフの時代からそう離れていなかった。もしかすれば彼女の直接の教え子だつたかもしれず、そんな彼が托鉢修道士——つまり、基本クリスマスすら祝わない魔法使いとしては珍しく、宗教と信仰に傾倒した。

その意義はかつて僕が考えていたよりも重いのであつて、畢竟、かの魔法使いは、ヘルガ・ハツフルパフが掲げた理想の答えを宗教の中に見出し、故に奇蹟とは相容れぬ魔法の杖を持ちながらも尚、一人の信徒として生きる事を選択したのではないだろうか。

「でも、可笑しいよね」

開心術士でもなく、僕の思考を推測出来もしないデイゴリーは気楽に笑う。

「彼自身も使うジョークだけど、彼は修道士なのに太つてるんだからさ。余りマグルの教えは解らない僕ですら本当に良いのかと思うよ。それもあつてか結局最後には処刑されちゃつて、枢機卿になれなかつた事を今でも恨んでいるみたいだし」

「……清貧と貧乏は同義ではないですし、魔法使いらしくも感じますよ。理念と教義に敬意を抱いても、その容れ物に対して頭を垂れる事

は出来ないという事でしょう」

「ふーん。そう言う物かい？ まあ、気に入らない相手に従えないのは解るけど」

「であるからこそ、魔法族は組織や集団を形成するには向いていないのでしょね。このホグワーツを始めとする魔法魔術学校の存在が一つの奇蹟と言われる所以でも有りますが」

ただ彼等四人にとっては奇蹟では無く、至極当然の帰結で有ったのかも知れない。

確かに魔法使いにとって集住は必須でも必要でも無かった。だが彼等が共に抱いた一つの夢の実現の為には、四人である事が——ただ一人でない事が必要だった。

結局それはサラザール・スリザリンの離脱によって挫折を味わう事になったが、それでも親が子に夢を託すように、今は不可能でも遙か未来に自分達の理想を実現してくれる人間が現れるように、残った三人はホグワーツという箱庭を遺そうとしたのかもしれない。

実際、ホグワーツを去ったサラザール・スリザリンですらも、スリザリンの生徒を引き抜いて自分の嗜好純血至上主義に合う新たな学校を創設したとは伝わっていない。オックスフォードの理想の一時瓦解によってケンブリッジに集ったような歴史は、魔法界では紡がれる事はなかった。

そしてだからこそ思う。

「——ヘルガ・ハッフルパフは、つくづく強欲でしたね」

一体何処が温和で穏当な寮なのだ。

かの創始者程に果敢で、賢明で、野心に満ちた人間はそう居ないだろう。

「……何故、そう考えるんだい？」

「自分の思想や理念を後世に正しく残す手段として、一つは当然、資質がある人間を集める方法が有ります。これは閉鎖的な徒弟制度の下で一般的に想定される形でしようし、特にスリザリンが露骨ではあります。ホグワーツの寮は原則その指針の下に動いている」

だが、と皮肉を噛み締めながら僕は続ける。

「これと真逆とまでは言いませんが、もう一つ、これとは融和しにくい手段が存在している。そしてヘルガ・ハツフルパフは、その指針を創設時より明確にしている」

そして、レイブンクローよりも賢明なセドリック・デイゴリーであれば、その程度のヒントでも自察の中から答えを見出す事は容易かつた。

「……資質とは関係無しに大勢を集める、か」

「ええ。教師の数を筆頭とする設備的な問題さえ解決すれば、それが最も効果的な手段です」

「それは確かに、くくく。強欲と言われても仕方ないかな」

当初は資質を持っていないように見えても後に華開くという例が有り得るし、逆もまた然り。魔法使いの大成に際して単純な確率論を適用する訳には行かないにしろ、数が居た方がそれだけ望む人物が生まれる可能性が高くなるのは間違いない。

勿論他の創始者達も、自身が直接教えられる範囲の少数のみしか受け容れないと考えていた訳ではないだろう。自身の教え子が多いに越した事は無く、けれどもそれは当該生徒が自察の資質を強く有する限りという留保付きであって、他が要らないならば全部寄越せというヘルガ・ハツフルパフ程に剛毅ではなかった。

「成程、君の言葉を聞いて少し楽になったよ」

セドリック・デイゴリーの笑みは、良い意味で力が抜けていた。

「僕はハツフルパフらしくなかったから、誰よりもそう在らねばと思っていた。けど、最初から数打てば当たる枠だったのなら、僕がハツフルパフらしくないのも当然だった」

そこには諦念もまた含まれており、しかし僕の意見は多少違った。「……いいえ。だからこそ、貴方はハツフルパフなんでしょう。畢竟、自察で上手くやれる資質さえ有れば誰でも良かったとすら言える他三寮と違い、ハツフルパフにとっては他ではない貴方でなければならなかったから必然の組分けだった」

「——え？」

僕は未だにセドリック・デイゴリーに好意的になれない。

故に余り受け容れたくない結論では有り、けれども理屈としては通っており、理解と共感が出来る結論であるのも確かだった。

恐らくヘルガ・ハツフルパフは、自身の後継として明確に自身以上を求めたのだ。

最も尊きを、最も賢きを、最も強きを自負していた他の三創始者達と違い、彼女は自身が決して理想の存在足り得ないと誰よりも自覚していた。だからこそ、彼女は自分を超える存在が生まれ出ずる事を後世に期待し、ホグワーツという学び舎に祈りを託した。節操無く採った大勢の生徒により研磨されて出づる、奇蹟の宝玉を求めた。

しかし一方で、同時に彼女は誤解される事を恐れたのだろう。だから意図してアナグマを、神聖視され過ぎない、世に有り触れた生物を寮の象徴として据えた。

普通の人間は強くはない。創始者や教授達がどんな気高き理想を掲げ、生徒に求めたとしても、そこに辿り着ける人間は一握りである。

だが、理想に成れないからと言って理想を追い求める事自体が無意味ではない。ヘルガ・ハツフルパフは誰もが奇蹟を起こすような非現実を求めず、屋敷しもべ妖精への対応に象徴されるように、寧ろ奇蹟のない地道な救いこそを重要視していた。彼女は己の無力を自覚し、受け容れ、しかし尚世に蔓延る苦難に抵抗を止めないとする者こそが、圧倒的多数を占める凡人の道標に成り得るのだと確信していたのだろう。

そんな人間が創設した寮だからこそ、テセウス・スキヤマンダーのような存在を生み、今またセドリック・デイゴリーはハツフルパフに所属せざるを得なかった。

貴族のスリザリン、賢人のレイブンクロー、騎士のグリフィンドール。

そしてハツフルパフが理想としたのは恐らく――。

「……嗚呼、本当に強欲だ」

ヘルガ・ハツフルパフは偉大な魔女だった。

恐らくグリフィンドールが勇気を認めざるを得ない程に、レイブンクローが賢明を認めざるを得ない程に、スリザリンが野心を認めざる

を得ない程に。

「——三年時のクイディッチの試合」

何か質問したような顔をしていたセドリック・デイゴリーは、今度の問いにはたじろいだ。

「あの時ハリー・ポッターは吸魂鬼の影響で箒から落ちましたが、実際問題、貴方は気付いていたのですか？ それとも気付いていなかったのですか？」

「き、気付いていなかったよ。信じて貰えるかは解らないけど」

「……まあ。現実はそのままでしようね」

罰の悪そうに答えた彼の前で、精神的な疲れを隠さず大きく溜息を吐いた。

どんな悪人だろうと常に悪意の下で行動している訳ではない。

それと同じように、セドリック・デイゴリーが常に打算や損得勘定をもって行動していた訳ではなく、かつてのクイディッチの場合もまたそうだったのだろう。

そもそも発端からして馬鹿げた思考では有る。

二百キロを超えうる高速の世界において、クルミ大ほんの数センチの金のスニッチを追いながらも並行して吸魂鬼の動きを認識し、更には落ちていくハリー・ポッターの存在も踏まえた上で、自分は絶対に勝利を主張出来ると確信した上でスニッチを掴む——そんな曲芸をセドリック・デイゴリーが為したのだという思考は。

僕が正気であったのなら、余りに穿ち過ぎだと直ぐに却下していた筈である。

つまるところ。

現実という物は、僕が思っている程に悪意に満ちた物でもないのだろう。

僕は納得し、だがセドリック・デイゴリーは何故だか早口で言葉を紡ぎ出した。

「い、いや本当だ。やり直しを主張したのも咄嗟の物だ。『セドリック・デイゴリー』ならそうしなければならぬという反射的な行動で……いや、審判のフーチに抗議した時には直ぐにやり直しにならない

可能性が高いと判断したけれど——」

「別に貴方の言葉が信頼出来ないとは言っていないですよ」

「いいや、その言い方はどうしたって信じていないだろう」

「……何故そうなるんですか。第一、僕が否定した所で何の意味が——」

結局、セドリック・デイゴリーは僕が信じた事を中々信じようとしなかった。

僕が嘘を言っている訳では無いと理解した後も、何故か彼は即座に立ち去ろうとしなかったし、それどころか矢継ぎ早に話題を繰り出して、何処か僕を引き留めるようですら有った。

そして、会話の内容自体も概ねどうでも良い——少なくとも僕が彼の為に時間を費やす意義を見出せない類ばかりだった。第三の課題について触れるならばまだ興味を持てたのだが、大半は取り立てて取り上げるもない、彼と、ハツフルパフト、そして彼が愛してやまないらしい hogwarts の未来についての話であった。

僕としては、そんな嫌がらせに付き合う義理は無かった筈である。

セドリック・デイゴリーを黙って引き下がらせたのであれば、僕はただ一言、本来為すべき事を為せと告げるだけで良かった。

それはハリー・ポッターに第二の課題の真実と謝意を伝える事であり、彼の本質を巡って喧嘩したらしい父親と仲直りをする事である。

「セドリック・デイゴリー」であれば、彼らしさを喪ったそれらをもまず優先して解決しなければならぬ。彼が解決に取り掛かった所で現状では上手く解決出来るかどうかもまた未知数のままなのだから、僕のテスト前の復習の妨害に勤しんでいる場合ではない筈であった。

だが、昼食時間が終わるまでその言葉が出なかったのは、それまで僕達を遠巻きに監視していた人間達が呆気に取られる程にセドリック・デイゴリーは酷く愉快げで、楽しさを隠し立てもせず、真つ当な性格の人間ならば見惚れる程の、晴れやかで完璧な笑みを浮かべていたからかもしれない。

要は、僕は真面目に付き合うのも馬鹿馬鹿しいと脱力させられてい

た。

セドリック・デイゴリーの話に僕が耳を傾け続けた事に、それ以外の理由は無い筈だ。

……嗚呼。

本当に世の中というのは儘ならないけれど。

しかしまあ、最もハツフルパフらしくないように見えた生徒こそが、逆に最もヘルガ・ハツフルパフの理想に近しくなれるかもしれない。

世の中というのは、そんな儘ならぬ形こそが、普通であるべきなのかもしれない。

——セドリック・デイゴリーは死んだ。

賽は投げられた

一応覚悟は決めていた。

だが思ったよりも、その拘束は緩やかな物だった。

夕食が終わった後に一人連行されていく僕をスネイプ教授が口元をピクピク震わせながら見送る一方、ミネルバ・マクゴナガル教授の方は闇祓いに対して神経質にクドクド言っていたから、一体どんな事になるかと興味半分恐怖半分であったのだが、何と言う事は無い。生徒の殆どがクイディッチピッチに出払った事で静かになったホグワーツ城内の一室で、監視役の若い闇祓いと一緒に閉じ込められるだけだった。

しかも、閉じ込めるといいうのも名ばかりで、彼女は鍵を閉める素振りは無かったし、杖を取り上げようとすらしなかった。

そのような対応の裏には、そもそも僕が闇祓いをどうこう出来るとは考えられておらず、仮に後から間違いが判明したとしても、拘禁ではなく安全確保の為の保護に過ぎなかったと主張しやすいという思惑が透けて見える。

まあ僕としても文句は無いし、後に問題が生じたならば声を挙げる位はしても良い。コーネリウス・ファッジ大臣に恩を売るのは無意味ではないだろう。クイディッチピッチで今晚何が起こるかという心労を除けば、僕の方は気楽だった。

だから課題終了までの時間——制限時間が一時間と明確だった第二の課題と異なり、どれだけ掛かるか解らないが、三時間も見れば十分だろう——ゆっくりと本でも読みつつ軟禁生活を謳歌しようと思いい、許可を受けた上で本の山を教室に持ち込んでいた。

……が、ただ一つ、そこには誤算があった。

その誤算とは、監視役の闇祓いが非常に煩かった事だった。

それも間違いなく、僕が今までの人生で出会った中で一番煩かった。

流石に監視兼護衛という意識が有るらしく、杖を仕舞わないまま壁を背にし、ドアを視界内に入れつつ僕から視線を一度も逸らそうとは

しなかったが、とにかく喋る喋る。一体何時息継ぎをしているのかと疑問に思つてまじまじと観察してしまふ位に口を開きっぱなしだった。

しかも僕に下手な動きをさせない為に会話しているでもなく、単に元々の性格が喋り好きらしい。自分の親はスリザリンだった事、自分はハツフルパフであつた事、新米の闇祓いである事、アラスター・ムーディ教授が引退する前の教え子である事等々、聞いてもない内容をペラペラ喋ってくれたし、課題終了まで一人で喋り続ける程の勢いだった。

軟禁されて数分で僕は読書を諦め、大人しく彼女の会話に付き合う羽目になった。

いや、一方的に喋っているのを果たして会話と言つて良いのか解らない。セドリック・デイゴリーも大概ハツフルパフらしく無かつたが、この女はそれ以上だった。あの男と違い、他の三寮の適性が無かつたからこそハツフルパフに入れられた人間ではないのか。そう思う位には、他人への共感や配慮の精神が欠けていた。

フラァが貞淑な女性に思えるそんな地獄の時間は、しかし開始十分程度で中断を迎えた。それは来訪者が教室のドアを無遠慮に開き、強制的に話を打ち切らせたからによるものだった。

機関銃のような会話を受け流す中で彼女が本当に闇祓いであるのか段々疑いつつあつたのが、流石にミネルバ・マクゴナガル教授達全員が僕を騙そうとしていた訳ではないらしい。予期されていなかったであろう彼がドアを開ける数秒前には、闇祓いは既に壁から背中を離し、油断なく杖をローブから出していた。

ただ、突然の来訪者である彼にとっては、決して満足の行く対応では無かつたようである。

「仮にも護衛ならば、儂にも杖を向けるべきでは有つたと思うがな」
厳しい評価の言葉に、闇祓いは悪びれずにアハハと笑う。

その気の抜けた反応は、叱られたとは一切思っていないのが見え見えだった。まあ、彼——アラスター・ムーディ教授の思想は、本職にとつても苛烈に過ぎ、彼女は真似する気が更々無いのだろう。僕と同

様に教授もそれを見透かしたのか、追及する事なく唸るように言った。

「少しレッドフィールドと話したい事が有る。お前は暫く部屋の外に出ている」

単刀直入に用件しか告げない言葉は、かつての教え子に対する対応としてはぶっきらぼうに過ぎると思うのだが、闇祓いにとつては慣れっこらしい。何の疑いも見せず信頼を示し、気の抜けるような返答を残してヒラヒラと手を振りながら外に出て行き、そうして僕と教授の二人だけが教室に残された。

彼女を見送った後、教授は極滑らかな動作で扉の方へ杖を向け、二度振った。

眼の前の光景から抱いた違和感が論理を導くよりも、教授が僕の方へと向き直るのが早かった。教授が握る杖は、真つ直ぐと僕の心臓に向けられている。今まで何度か教授の眼を覗いてきたが、その闇のような黒色は、この一年間で初めて見る感情を浮かべていた。はつきり言ってしまうえば、教授は敵を見る眼をしていた。

「まずはレッドフィールド。杖を出せ」

「……そういう事、ですか」

その言葉に思わず天井を仰ぎ、そしてアラスター・ムーディ教授へと再度視線を戻す。

教授は依然として杖を真つ直ぐと僕へと向けたまま、鋭い視線で観察している。口を真一文字に引き絞り、それ以上の説明をする気が無いと告げていた。

僕はローブの中に手を差し込み、良く動きが見えるようにゆっくりと取り出す。

そしてそのまま手を開いて地に落とし、教授の方へと蹴り転がした。己の杖に対して余り好ましい扱いでは無かったが、この場合は止むを得ないというべきだろう。

そして背凭れに体重を深く預け、両手を堅く組み、抵抗の意思がない事を示した。

「——フン。思わず腹が立つ程に、お前は賢いな」

「転がって来た杖を義眼で一瞥し、身動きせずこちらを伺い続ける教授は低く笑う。

「俺は単に杖を出せとだけ言ったつもりだったがな。そのような対応は、まるで俺がお前に害を為そうとしているようでは無いか？」

「では違うのですか？　口だけでも否定して頂けると安心出来るのですか」

誘いの言葉に、教授は——闇の魔法使いは笑うだけだった。

それだけで、此度の一連の不審な事件、ハリー・ポッターが四人目の代表選手となり、バーテミウス・クラウチ氏がホグワーツで消えた謎への解答としては充分だった。

「——アルバス・ダンブルドアは負けたのですね」

「そうだ」

その返答を聞いて、僕は内心驚いた。

あの老人の敗北という答えを聞いたからではない。

その事実に対して失望と落胆を抱いてしまった自分に——何処かで僕はそんな事は有り得ないという希望を持っていた事にこそ、僕は驚きを覚えたのだった。

「今世紀で最も偉大な魔法使いとやらも耄碌した物だ」

アラスター・ムーディは侮蔑の言葉を口にする。

同時にその裏にある自賛の響きを隠し切れてはいない。

「確かに幾度か危うい場面は有った。が、それでもあの男は俺を一切疑おうとしなかった。一年間も時間が有ったのだ。そして今、俺は目的を全て果たそうとしている。この任務の達成をもって、俺は誰よりも高い地位を約束されるだろう」

随分と傲慢な発言内容だが、しかし彼に言う資格は有るだろう。

ハリー・ポッターの名前を炎のゴブレットに入れる所から始まり、一年間正体と目的を知られる事なく潜伏し続け、バーテミウス・クラ

ウチ氏が校長閣下に警告する前に彼を消し、そして滞りなくハリー・ポッターを第三の課題へと送り出した。

このアラスター・ムーディが堕ちた本物だろうが、成り代わられた偽物だろうが、何れにしても簡単な仕事で無かったのは間違いない。

「……ハリー・ポッターは死にましたか？」

「二応未だに生きていたとは言っておこう。しかし、もうじき迷宮へと入る。賢いお前ならば、それ以上説明する必要はないだろうか？」

「……まあそうでしょうね。貴方が僕の所に来てこうして呑気に話している以上、既に詰んでいる。そう考えるのが論理的で、合理的だ」

ハリー・ポッターと僕の、どちらの優先順位が高いかなど考えるまでも無い。本命の仕事が終わっていない限り、僕の前に現れる意味は無い。第三の課題にはハリー・ポッターを確実に殺す仕掛けが存在している。今生きていようと、直ぐに死ぬ。

そして既に先手を取られてしまっている。

恐らく部屋には僕が騒いでも支障がないようにする呪文、ないしは閉じ込める呪文が掛けられているだろう。抵抗の機会があったとすればそれは教授が扉に向かって杖を振った瞬間、油断大敵の教えに従い教授に武装解除を打ち込めなければまだ目は有った。だが僕は油断し、杖を喪い、そして死喰い人に命を握られてしまった。

そもそも話を言えば、最初から騒ぐ価値が有るかすら疑問だ。

もはやアラスター・ムーディが「犯人」であるのは疑う余地がないが、彼が単独犯であるとは限らない。先程外に出て行った闇祓いとして、彼の協力者、或いは彼によって服従の呪文の支配下に置かれている可能性は十分に考えられる。

奇蹟的にそれらを退けたとしても、ここは校舎の中である。第三の課題が行われているクイディッチピッチまで直線距離でも数百メートルの距離が有る。そこまで生き延び、このアラスター・ムーディの裏切りを伝えられる見込みは殆ど零に等しい。

この状況に至った以上、僕が出来る事は何も無い。

本職以外が闇の魔法使いに出会う事は死を意味する。それは今回においても不変だった。

「それで、わざわざ僕の所に来てまで話している訳は何なのです？」

椅子に座ったまま、油断なく僕を見つめる。『犯人』に問い掛ける。

義眼の方は一時も止まらずグルグルと回り続けている。離れて行った闇祓いのみならず、三校試合の結末に興味を示さず学校に残った一部の変わり者や、クイディッチピッチで第三の課題の行方を見守っている人間達の方まで警戒を怠っていないようであった。

「随分と余裕だな、レッドフィールド」

「まさか。虚勢ですよ」

思わず肩を竦めそうになり、しかし何とか止めた。

杖先を向けられている状況で、変な動きをするべきでは無かった。

「曲がりなりにも貴方はダンブルドアを出し抜いた訳ですからね。敵わない相手に戦いを挑む程、僕はグリフィンドールではない」

「フン。お前が抵抗はしないと踏んでは居たが、それでも多少洩ると思っていた」

「落ち着いて考えれば、僕の命は保証されるみたいですので」

仮に僕が知ってはならない情報を知ったというのであれば、彼は僕をさっさと始末すれば良い。自分が今回の件の犯人で有る事を明かす必要すらない。

服従の呪文。或いは死の呪文。

前者の方は一度破ったが、それでも再度破れるとは限らない。後者の方は、僕はハリー・ポッターでない以上、防げる訳がない。

「だから興味が有ります。ハリー・ポッターの死が既に確定しているとしても、貴方がこうして一生徒に接触し、正体を明かす事が非常に危険を上げる事は言うまでもない。だというのに、十四年前に主君を裏切った人間が、一体何の——」

「——裏切っただど？ あろう事が、俺が闇あの帝王御方を裏切ったというのか……!？」

部屋全体が震えたように思えたのは当然錯覚だ。

だが、直ぐにアラスター・ムーディは平静を取り戻した。覚悟していた僕が一切動揺していなかったというのも有るだろうし、自分が嵌められた事に気付いたからだだった。

「……俺を試したな」

「ええ、まあ」

先程より強い殺意を向けられながらも軽く頷く。

「しかし僕の立場も理解して欲しい物です。安易に主君を裏切る人間程に信じられない物は無い。そのような人間は、下を騙して嵌める事にも当然罪悪感を抱きはしませんからね。僕に断る選択肢はなくとも、最低限の用心はしたい」

これは自身の対応を考える上で必要な確認だった。

“犯人”が元死喰い人と現死喰い人のどちらであるかというのは、あの闇の印が上がって以降の疑問であり、僕が為すべき正解の振る舞いも変わり得る。聞く事自体が地雷なのは承知で、しかし知らずに地雷を踏んでしまうよりは余程マシである。

「……このような状況でも自分を正当化するか」

「こういう性格ですよ、僕は。一年間で貴方はそれを知っている筈ですが」

未だ不愉快そうでは有ったが、渋々アラスター・ムーデイは頷いた。

「……確かに当然の用心では有る。闇の帝王あの御方を裏切った負け犬、脳みその無い敗北主義者共に着きたくないと考えるのは自然だ。しかし、仮にそのような奴等で有れば、不愉快な妄言を吐いたお前を殺すとは考えなかったのか？」

「それは無いと踏んでいましたよ。僕が知っているのは、アラスター・ムーデイ教授”でしたが、貴方の裏切者への憎悪は本物に見えた。貴方が僕を知っているように、僕もまた、貴方という人間を良く知っている」

何故彼がこうして“犯人”として立っているのかは解らない。

だがそれでも、僕に投げ掛けた言葉の全てが嘘では無かったというのは解る。嘘を吐いていたのならば、あれ程まで僕の心は揺らされなかった。

僕の想いが伝わったか、彼は口を歪な弧に曲げ、そして用件を口にした。

「——良いだろう。」

ステイブーン・レッドフィールド。お前を死喰い人仲問に勧誘しに来た」

その言葉の意味が脳に染み込むのに、数秒の時間を要した。

用心の為か敢えて直接的な表現を避けた言葉は、しかしこの状況を踏まえれば何を指しているかなど明白である。それは闇の陣営の勧誘以外に在り得なかつた。

「……真純血主義者つ当な死喰い人は僕に近付かない。そう思っていたのですがね」

僕の揶揄に頬を動かしたが、教授が反論するより早く僕は言葉を続けた。

「しかし、それが貴方の口から発されるならば腑に落ちる部分も有ります。貴方が殆ど真実を語っていたとしたら、血を誇るしか能がない裏切者を引き込む事はしないでしょう。貴方はアスカバンから逃れた人間達を徹底的に嫌っていたのですから」

スネイプ教授の認識は、あくまで十四年前の死喰い人だった。時間は人間に変化を与える。

この現死喰い人にとつて、半純血を誘う事は不自然では無かつた。闇の帝王が消えてからも忠義を貫き続けた彼にとつて、裏切者の純血の方が余程信用に値しなかつた。それは僕が考えていた当初の予想が当たった形になるが、予想の上を行った部分も有る。

「何より貴方が死喰い人そつであるならば、最大の問題、知らぬ者を身内として組織に招く筈が無いという部分も解決している。この一年の指導を通して貴方は僕がどのような人間かを理解しており、加えて貴方が純血ならば、半純血を推薦する資格も有しているでしょう」

「そうだな。ただ、闇の帝王あの御方は確かに血を重んじるが、それ以上に才を愛する。しかもお前は「スリザリン」だ。必ずやお前を歓迎して下さるだろう」

スネイプ教授がそうですからね、とは言わなかつた。

この場で冗談でも言つてはならない事の区別は流石に出来ている。「ただ意外に思うのも確かです」

こうなる事を確かに希望はしていた。

けれども死喰い人がアラスター・ムーデイだったならば、また別の問題が持ち上がる。

「率直に言つて、僕は貴方側に不利となるような動きをしていた場合も有ったと思います。そしてドラコ・マルフォイと違い、僕の天秤はどちらに偏り過ぎているという事も無い。僕が貴方がたと反する陣営に着く事も、貴方は当然考えた筈です」

「おうとも。確かに考えた」

探りの言葉に対して、教授は些かも動じる様子を見せずに頷いた。

「お前の扱いには頭を悩ませたのは確かだ。特にブラックを持ち出して吸魂鬼共を招こうした部分はヒヤリとした。あれが実現していれば、俺は間違いなく窮地に立たされたと言つて良い。あの時は俺も珍しくダンブルドアの慈悲に感謝したものだ」

……彼とは逆に、僕は現在進行形で内心あの老人を罵っている。

「お前は自身の発想や思考、着眼点を特別な物だと思つておらん。だが、周りにとっては違う。寧ろ俺はお前が俺の正体を暴露する事自体よりも、お前の意見を参考に俺の正体に気付く誰かが現れる事こそを恐れていたと言つて良い」

「……しかし、結局それは貴方にとって僕が邪魔だという事では？」

「邪魔では有った。お前を引き込む見込みが全くないのであればの話だが」

その返答が返ってくるのは、薄々解つていた。

だがそれでも、やはり失望が有つたのだ。冷静に考えればやむを得ない事とはいえ、この死喰い人ですら、僕はそのように見えてしまつたのかと。

内心での感情のうねりを他所に、死喰い人は言葉を続ける。

「この一年間で、お前はファッジやダンブルドアに失望している事が俺には良く見て取れた。クラウチとの会話などは最も解りやすかつ

た。お前は現状に不満を抱いているし、今の社会に君臨している者達を嫌悪している」

彼の一つ残った瞳に映るのは、やはり共感の情。

「お前は賢過ぎ、そしてまた自身の主義という物を持ち得ている。故に、あれらと肩を並べる事は決して出来はしない。無論、それが勝利する側であれば渋々なながらも付き従うだろう。お前が何時か言ったように、それこそがスリザリンの性であり——しかし今はどうだ？」
杖を僕へと向けたまま、もう片方の手を大きく広げる。

「俺はダンブルドアを出し抜いた。『生き残った男の子』という幻想も今日で終わる。この期に及んで、間違った側を選べるのか？」

「——」

「いいや、お前には絶対には出来はしないと」

「……この教授は、僕の思想を良く知っており、尚且つ指摘は正しい。白状しよう。お前を誘うべきか、誘うとすれば何時引き入れるかは、俺をもつてしても簡単に結論を出せなかった。しかし、お前の今年度の動向、特にダンブルドアとの会話を見て思ったのだ。全てを済ませた後であれば、『他』に先を越されてお前を取られてしまうだろうと」

「……随分とまあ僕を評価して下さい着呢。たかが学生一人でしょう？」

「これも既に言った筈だ。あれに真正面から文句をぶつけ、己が主張を通そうとする人間が一体どれだけ居ると思う？　ホグワーツ中どころか、この国の魔法界全部を探しても極少数だ」

皮肉を紡ぐ教授の肉眼は血走り、傷だらけの顔には狂相が浮かんでいる。

「お前が思う以上に、俺はお前に注目してきた。お前を観察し、価値を測り、本質を捉えようとしてきた。だから確信した。ダンブルドアを含め、誰もがお前を見誤っていると」

「……………」

「お前は子供だ。気に入らない社会を、この不都合な世界を怒りと共に破壊したくて堪らない糞餓鬼だ。お前にとってはスリザリンです

らも枷であり、敵なのだ。四年の学生生活でお前は自らを下らん鎖に繋ぎ続け、大人しい振りをしているが、けれどもお前にとって今の魔法界は、否、魔法自体が憎悪の対象なのだろう?」

僕は沈黙を堅持し、けれどもアラスター・ムーディは愉悦に満ちた笑みを浮かべた。

「俺達とお前、その理念の全てが一致する訳では無い事は言っておこう。だがな、一つの絶対法を除いて死喰い人は自由だ。己が望む事の多くを好きなように出来る。願いを叶える為の力を得る事が出来る。全てお前の望み通りとは行かずとも、その形に近づく事は出来るのだ」

死喰い人は組織では無く個である。

……故に規律という物は存在しないに等しく、如何に全体として純血主義を掲げていようとも、多少の我儘を通す事は可能なのだろう。

絶対の法——ヴォルデモート卿への忠誠と服従さえあれば。

「魔法省、或いは不死鳥の騎士団。そしてアルバス・ダンブルドア。自分達だけ良い生活をしながら、民衆に不自由を強いる既得権益者共の下に就いて一体何になる? あのようなふざけた善人面を許したままで居られるのか? お前の本心に秘めた野望は叶うのか?」

「……だからこそ今の内に貴方がたの側に着いておけ、と?」

「ああ。これ程の好条件は今を置いて他に無い。それはお前も解っている筈だ」

解っているとも。

死喰い人として一年もの間ホグワーツに潜入し、アルバス・ダンブルドアを騙し続け、ハリー・ポッターを嵌める為の工作に従事し続けたのだ。この教授は闇の帝王の復活後、死喰い人達の中で最も高い地位を得る事だろう。

そしてその人間に直接引き立てられ、忠誠を誓ったのであれば、僕も相応の地位を得られる。そのような未来を思い描くのは至極簡単だった。

「——どうやら、僕に選択肢はないようです」

未練や心残りが無いと言えば全くの嘘になる。

けれども、臆気ながらもこの結末を学期当初から思い描いていたのは確かであり、アラスター・ムーディは——アルバス・ダンブルドアの敵は今ここに居る。ハリー・ポッターもまた遠からず死ぬ。

あの今世紀で最も偉大な魔法使いが敗北を喫した以上、最早光の陣営の側に立ち続ける義理も無く、覚悟と決断を決める時だった。

「それで、僕は何をすべきでしょう？」

僕の言葉に、教授は傷だらけの顔に微笑みを浮かべた。

誓いや契約の言葉を紡ぐ必要は無い。互いにそのような面倒は不要だと考えていたし、それを捧げるべき相手は一人しか居ない事を、僕も彼も理解していた。

「貴方がこうして僕を引き摺り込んだのだから、僕にやらせる仕事があるのでしょうか？」

「ああ。手段は問わん。お前は課題後に騒ぎを起こせ」

それ以上アラスター・ムーディは説明しなかったが、何の為にかは解る。その混乱に乗じて、彼は逃げるという事だろう。

「無論、今すぐとは言わん。課題中はお前が拘束されていたという方が都合が良いし、俺もまだやるべき事が残っている。お前が解放されてからで構わない」

「要は第三の課題の異変が露見した後で、アルバス・ダンブルドアを貴方の傍から引き離し、意識を逸らさせる。そういう事で構わないんですよね？」

「その程度はお前にとって難しくも何ともない仕事だろうか？」

「ええ。騒ぎが落ち着いた後に疑われはするでしょうが、それでも貴方が逃げる間気付かれない程度なら保証は出来るでしょう」

元々僕はアルバス・ダンブルドアに眼を付けられている。

それを利用すれば、あの老人を僕の下へと呼び寄せる事は簡単だと言って良い。

「本来は連絡し合うべきなのだろうが、御互いの状況を考えれば怪しまれる真似は慎むべきだろう。何時始めるかは任せる。が、しかし出来るだけ早く始めろ」

そうせざるを得ないだろうと僕は頷く。

別に緻密な折衝を必要とする計画ではないし、この死喰い人にとって駄目で元々だ。

一年間の知己で有ろうとも、僕が死喰い人の仲間として信頼出来るかはまた別の話である。僕が役に立てば悠々と逃げる事が出来るし、仮に僕が裏切っても当初の予定通り自力で逃げるだけ。故に僕は行動でもって信頼を獲得せねばならない。

「その点は了承しましたが、一つ確認しておきたい事が。貴方のその立場についてなのですが、第三の課題終了後には不要と考えて良いんですよね？」

そう問えば、アラスター・ムーディは頷いた。

「実の所、潜伏を続けられるのであれば続けるという命は下っている。この地位と立場は色々と便利だからな。ただ俺としては——」

「ええ。目的を果たしたのであれば、即座に離脱すべきだと思いますよ」

言葉の先を察した上で肯定する。

「その場合、貴方の主君から多少の不興を買うかもしれません。貴方の反応から見てもそうなのでしょう？ アラスター・ムーディ、伝説の闇祓いの立場はそう軽々しく手放すには惜しい。留まる事が出来れば、今後の戦争を圧倒的有利に進められる」

それは互いに重々承知だが、それ以上に実感している事も有る。

「ただハリー・ポッターの死亡、或いは行方不明が発覚した後は、最早あの老人の油断を期待する事は出来ない。今世紀で最も偉大な魔法使いの名を冠する者に相応しく、己が全精力を費やして裏切者を見つけ出すとするとする筈です」

「……俺に媚びるような発言を求めている訳ではないが？」

「僕がそんな人間でないというのは、既に理解して頂けていると思っ
ていますよ。そもそも貴方自身も、あの老人にとつてハリー・ポッターが「生き残った男の子」以上の存在だと薄々勘付いているからこそ、潜伏の続行を放棄しようと考えたのでは？」

ジロリと向けられる義眼は脅しにもならない。

この死喰い人が老人の傍に居たのであれば、それを察する事の出来

る機会は幾度か存在した筈だ。あの老人にとってハリー・ポッターの死は、「生き残った男の子」という象徴の喪失よりも遥かに大きな衝撃を与える事になる。そして、自暴自棄になった人間程に恐ろしい存在は無い。元々桁外れの怪物であるなら猶更だ。

「ハリー・ポッターの死以上に欲張るべきではない。僕はそう考えますよ。僕とは違い、貴方にとってここは敵地のご真ん中で、命を捨てて価値が生まれるような状況でも無い」

「……自分が安全圏に居るような話振りは気に食わんな」

「実際、安全圏に居ますからね」

眼の前の杖を除けば、直近での僕の危険というのは存在しない。

「アルバス・ダンブルドアは人間の善性を信じたがる。もともと、彼の理性は全く信じていないにも拘わらずそうしたがるのだから、悪癖以外の何物でもないですが。僕の関与が露見しようとも、あの老人は僕をアズカバンに送るどころか退学にすら出来はしない」

罪人を逃亡させる程度の事は去年のハリー・ポッターもやっていくる。

それと同様に、あの老人は僕の関与にも理由が有ったと考えたがらうだろう。

上手く僕が騙されて、もしくは脅されて手を貸した。

それが有り得ないと頭で理解していても、感情の下にそう信じたがり、そしてまた、手を汚していないのだからまだ後戻りさせる事は出来ると考えてしまう。

馬鹿な話だ。

人は戦場のみで死ぬものではないし、戦場以外でも人は人を殺せるというのに。

眼の前の人間を——殺人者を逃がすのに手を貸すとはそういう事だ。僕は自身の行いによって未来の死人の数を増やす羽目になる。その事には自覚的であるべきだろう。

「……フン。お前がそこまで断言するならば、そういう事にしておいてやろう」

アラスター・ムーディの肉眼が僕から一瞬逸れる。

誘いだっただのか、或いは義眼で何かを認識した為の咄嗟の警戒だったのか。

僕の視点では何れなのか解らなかったし、どちらでも良かった。その程度で動くならば、僕は初めから抵抗している。

「騒ぎを起こして以降のお前の仕事はホグワーツに潜伏し続ける事だ。今後の行動の指示については追って知らせよう。それで問題無いだろう？」
僕はまだ用心していた身であり、今回のお前の働きぶり次第では、勧誘も含めて考え直すのも視野に入れねばならん」

「異存は有りませんよ。当然の考えでしょう」

命令伝達手段は幾らでも有る。

ふくろう便でも、ドラコ・マルフォイ経由でも。

また、死喰い人達が独自の連絡手段を持っていた所で何ら驚きはない。

そもそもの話、アルバス・ダンブルドアに検閲されて困るような仕事をすぐさま僕に任せる事は流石に無いだろう。暫くは地味な仕事が続く———というか、学業に専念するよう伝えられて放置されても可笑しくない。

アラスター・ムーディは一度鼻を鳴らした後、身を屈め、落ちていた僕の杖を拾った。

その際、義眼の方は周囲の警戒を止めて僕だけを捉えていたが、僕は依然として座ったまま、どうぞ御好きにと手で促した。まさか現在の状況で返して貰えるとは思っていないし、僕から杖を奪っていた事が判明した所で、彼の立場としてはそれ程不自然でもない。

「———ただ、叶うならば。僕から貴方に御願いが有るのですが」
「……………」

杖を拾った死喰い人は、ピクリと眉を動かした。

彼は何も返答をしなかった。僕の言葉次第だと態度が伝えていたし、そもそも聞く義理も無いという思いを抱いているのは明らかだった。

だから僕はその「御願い」をし、そして死喰い人は案の定露骨に顔を顰めた。

「お前は今、何を俺に求めたのか解っているのか？」

「ええ。軽々しくねだる物ではないと理解していますよ」

スネイプ教授から聞いている以上、それは解っている。

「短い時間で可能かは怪しいでしょうし、そもそも今回は使いたくないと考えています。貴方が今の時点で僕に自分の正体を明かしたのは、貴方がここから立ち去った後でも手足と成り得る存在を残す為でしょうか？　僕が使ってしまったえば支障が出る」

「……………」

「ただ、僕が使える利点を考えれば、試さないで諦めるには惜しい。貴方の側で予期せぬ問題が発生した場合、或いは今後間違ひなく切札となりえます。そもそも僕がそれを悪用出来ると考える程に愚かではないというのは、貴方には十分御理解頂いていると思えますが？」

求めた側とは言え、この死喰い人が叶えてくれる公算は余り高くなかった。

だがこの死喰い人を裏切った場合には無駄になる類の願いである事は伝わっているだろうし、駄目で元々だった。果たして——死喰い人はぶつきらぼうな口調のままに言った。

「……今与えるのではなく、後からでも問題無いと思うがな」
「……………」

言葉は否定であり、けれども態度は違った。

僕から杖を逸らす事は無かった。しかし少しの間顎を撫でて考えた後、結果として死喰い人は僕の杖を差し出し——だが僕はそれをまだ取らなかつた。

手の届く距離では無かつたというのものもあるし、彼の視線が停止を命じていたというのものもある。そして未だ、彼は僕の願いを叶えるとは言っても居なかつた。

「それを叶えるかどうかは、テストをしてから考えるでしょう。……嗚呼、非常に簡単なテストだ。お前が一つの質問にどう答えるかを俺は聞きたい。お前の方も既に一度は俺を試したのだから、文句はあるまいな？」

試すように舐めまわす視線に、僕は軽く頷く。

自分から要求を突き付けた以上、断る選択肢など存在しなかった。

「——お前はスネイプの事をどう思う？」

そう聞いて、しかし死喰い人は軽く首を振った後で言葉を紡ぎ直した。

「いや、これではお前には不可解だろう。俺の見た所、あの男はお前に対して随分と眼を掛けている。何時ぞやの時にスネイプと積もる話をしたのだが、その時は闇祓い風情がスリザリンに手を出すなど強く牽制されたものだ。あれにしては非常に珍しいと言って良い」

「……眼を付けられているの間違いですけどね。好かれている訳でも有りませんし」

「そうか？ 俺にはそう見えなかったし、そしてお前があれに恩義や義理を感じているのは嘘ではないのだろうか？」

「それは勿論。色々世話になったのは事実ですよ」

一年生の時からして、教授に危うい所を救われている。

教授が来なくても無事だった——たとえ生きていたとしても自我を保つ事が出来ていたと考える程、僕は楽観的な人間では無かった。今を含めてすら、あの時こそ僕が最も死に近付いたと言える瞬間だった。

「ならば問題だ。お前は受けた恩義や義理を裏切りはしないと何時ぞやの時に言った。そして先程、安易に主君を裏切る人間程に信じられない物は無いとお前は言った。では、スネイプの事は、罪は、その行為の是非はどう考える？」

「——」
非常に危険な問いで、そして僕の生命を左右しうる問いである事は直ぐ解った。

この死喰い人が僕を仲間勧誘した事は既に何の保証にならないのだと、その凶悪な視線が示している。自分で紡いだ問いでありながら、僕の立場を図るには良い質問だと彼自身も感じているのが表情から伝わってくる。これに対して不用意な解答しか出来ないような愚者ならば、死喰い人として迎える価値は無いと判断して処分するのが適切だと僕ですらも思う。

……嗚呼、こんなにも簡単な問いに答えられない筈も無い。

「まず前提として、スネイプ寮監は主君が姿を隠す前に不死鳥の騎士団側に着いた。これは当時を知る者にとっては周知の事実です」

「そうだな。お前が言った通りで、スネイプ自身の審問やカルカロフの裁判記録に、はつきりとその旨が残されていた」

当時の一連の裁判は、非公開で済ませられる類の物では無かった。

あれだけ大勢が死んで行った戦争の後始末を誰もが知りたがった。日刊予言者新聞を初めとして大勢の記者や伝記家がウイゼンガモツトの大法廷に殺到し、そしてまた記録も公式、非公式問わず残されたのは当然の成り行きだった。調べるのに苦労する事も無く、僕のような hogwarts 学生は勿論、在野の魔法使いだって簡単に知れる情報は多い。

スネイプ教授が闇の陣営を裏切ったらしいという話は隠し通せる物でも無い。それが周知であるからこそ、彼は死喰い人と非難されず、hogwarts 薬学教授を続けられている。

それをこの死喰い人が知らなかったらしい理由が少し気になるが、答えてくれる保証は無いし、今は脇に置いておくべきだった。

「しかし、それが主君に対する裏切りとは限らない。つまり不死鳥の騎士団の側に寝返った振りをする事が主君の命令に基づく場合。アルバス・ダンブルドアの懐に入り込み続け、その信頼を獲得し、スパイとして利益を齎し続ける事が任務であるならば——寮監には何らの罪も無い」

つまり闇の帝王の凋落前に裏切ったのは偽装だった。

スネイプ教授の忠誠は、光の陣営に属した後も闇の帝王に向けられていた。

「……だが、あの男は主君が消えた後も探す事無く、安全な立場で十四年間、のうのうと過ごし続けた。その点をどう考える？」

「寧ろ何故探す必要が有るのでしよう？」

その事実は彼にとって未だに甚だ不愉快らしいが、しかし僕は迎合しなかった。

「潜伏する事こそが命令である以上、主君に忠誠を誓っていると受け

取られるような不審な行動を取るのには命令違反です。そして死の飛翔を——不死を真に信じているのなら、一時的に姿を消した程度で探す方こそが侮辱であり、主の力を疑う臣下の傲慢だ」

「……レストレンジ——嗚呼、ブラック姉妹の姉の方だが——が激昂しそうな主張だな」

「僕は会った事が有りませんから何とも言えませんよ」

明らかに皮肉っている物言いに、軽く肩を竦める。

「しかし、当然の行為では？ 駒は指し手の意思を無視して勝手に動いてはならない。事前に定められた適切な手順を踏んで命令が更新されない限り、教授は不死鳥の騎士団に潜伏し続けなければならぬ。それが組織の一員として在るべき姿であり、正しき忠誠の形でしょう」

闇の帝王が憑依しているらしき魔法使いが賢者の石を奪う事を妨げる結果としても、その行為は当然に正当化されるべきである。

余計に気を回し賢者の石の盗難を手助けするのが忠義では無い。新たな命令が無い以上、アルバス・ダンブルドアの疑いを招いて潜伏を危うくするような行動をする事こそ不忠なのだ。

「つまり、お前はスネイプは何ら悪くないと擁護する訳か」

「いいえ。勿論違いますよ」

納得した——した振りをしている死喰い人に首を振った。

彼が杖を握る力を強めていたのを見逃したつもりもないし、最初からここで話を終わらせる気自体が無い。間違った解答を、そのままにする訳がない。

「僕は最初に言い訳と言った筈です。この回答には一つ大きな弱点がある」

そして、この死喰い人が出した問いの真意でもある。

「たとえば潜伏自体が闇の帝王の命令でも、彼が消えたのを知って本当に裏切った可能性は否定出来ない。それは排斥出来ない主張であり——貴方が反論したい点でしょうか？」

闇の帝王の承認を受けて不死鳥の騎士団に入団した事と、闇の帝王の行方不明を受けて死喰い人陣営を裏切った事は両立し得る。裏切

りを罰しうる人間が消え、騎士団の勝利が確定したように見えたらば、スネイプ教授が離反するのは自然とも言える。

十四年前に裏切ったと言われて激昂した、帝王の第一の臣下を自認するであろうこの死喰い人はその疑念を捨てきれない。

「解っているなら話が早い。ならば、その点を如何に説明する?」

「これ以上は何も。あくまで先のように考えられるというような理屈の提示はしますが、その正当性を強調する事すらしません」

「ほう。お前は恥知らずにも恩師を見捨てると言うのか?」

愉快そうに問う死喰い人に、僕もまた冷笑を返した。

本当に意地が悪い。もつとも、テストというのはそう在るべきだろうが。

「世の中には超えてはならない領分があります。これもその類でしょう。命令通りかどうかは勿論、本当に裏切っているかどうかすら問題とならない」

この死喰い人に、権限を持たぬ者に弁解しようとする事自体が間違いだらう。

「事物の是非の判断は下の人間が行う事ではない。絶対の上位者が許すと言えは是であり、許されないと云えば非だ。特に僕のような下賤が異を差し挟もうとする事こそが烏滸がましい。スネイプ寮監の善悪も当然だ。僕はそのように考えますが?」

上下の秩序は侵されるべきではない。

駒は駒の立場を遵守すべきだというのは、この場合にも妥当する。

「……やはりお前は物分かりが良過ぎるな」

皮肉を口にする教授の顔は、しかし喜色に歪んでいた。

「だが、正解では有る。それこそ俺が求めた答えだ。マルフォイを始めとする恥知らずは、血筋や家族、自身の利益を優先し、平気で主君の意向を無視する。けれどもお前は道理が解っている。そうだ。下々にとつて、闇の帝王こそが絶対で然るべきなのだ」

その言葉に含まれた思い上がりに少し引つ掛かりを覚えたが、僕は意識して口を噤んだままで居た。上機嫌な死喰い人を敢えて不機嫌

にしても、良い事は無いからだ。

「闇あの帝王御方には、これから多くの忠実な配下が必要となる。これからの苦勞を考えれば今日で教授の立場を捨てなければならぬのは非常に惜しいが、お前を得られた事で我慢すべきだろう。見込みの有る人間をお前が引き込む事も期待出来るしな」

「……では」

「良いだろう。左程難しい仕事でもない。お前の願い、叶えてやろう」

アラスター・ムーデイは手短に僕の願いを叶えた後、僕の下を立ち去った。

僕の杖を持ち去らなかつたのは、命を賭けた問答によつてそれなりに信用を得られたと考へて良いのだろう。少なくとも最初は、彼が僕の杖を保持しているという不自然を承知の上で持ち去るつもりだつたのは間違いないのだから。

その代わりに彼は教室内に防護魔法を嫌と言う程掛けていったが、それは僕を部屋の外に出さないのを目的とするよりも、アリバイ作りの一環が強いように見えた。それなりの時間話し込んでいた事を隠す方法としては有効であり、他人を信用しないアラスター・ムーデイの行動としては自然でもある。

死喰い人と入れ替わりに戻つて来た闇祓いは、半ば要塞化された教室に辟易していた——入るのにも苦勞したらしく、頭が爆発していた——が、何事も無かつたとするのが精神衛生上都合が良いと判断したのかも知れない。中断前と同様に無駄話を再開し、一人で喧嘩を作れる彼女を前に更に適当になつた僕の生返事を気にも留めずに一方的に喋り続けた。

今の Hogwartz で最も御氣楽だつたのは、多分この闇祓いだつたらう。

第三の課題の結果が気になるからコツソリ見に行かない？ と持

ち掛けるのは正直頭がどうかしている。……流石にわざと誘いを持ち掛けて僕が隙を晒すのを期待したに過ぎず、決して本気の発言では無かったと信じたい。

相変わらず同居人は煩かったが、考える事は幾らでも有った。

今回の一連の事件と顛末。アラスター・ムーデイが闇に墮ちた理由、もしくは偽物だとすればその正体。僕が拘束から解放された後、騒ぎを起こす場合に己が取るべき行動。そして、確かに死ぬ筈であり、しかし未だ死んでいないらしいハリー・ポッターの事。

自身の陣営を決定的に表明する行動を取る覚悟が無かった訳ではない。

勝つ側に味方するのはスリザリンとして当然の行動であり、その結果として無数の血で己が手を穢す事になるのも承知の上で——けれども僕は自身の利益の為に一つだけ、ある“保険”を確保した。あの死喰い人に求めた願いこそが、それを前提とする物だった。

彼は噂しか聞いていないだろうが、僕はハリー・ポッターの三年間を良く知っている。

如何に可能性が低かろうと、冷静に考えれば有り得なかろうと、それでも尚、“生き残った男の子”が成し遂げて来た一連の奇蹟の事を。

——結論から言えば。

僕が騒ぎを起こす必要は無かった。

軟禁から解放された時点で、事件は全て終わっていた。

セドリツク・デイゴリーの死体と共にハリー・ポッターは帰還し、そして死喰い人は既に拘束された後。最早僕が騒ぎを起こしてどうこう出来るような状況では無く、あの死喰い人は当然、闇の帝王にとつても想定外の事象が起こったらしい事は明白だった。

セドリツク・デイゴリーは負けた。

アルバス・ダンブルドアも負けた。

闇の帝王もまた負けたと言つて良い。

“生き残った男の子”。

赤子でありながら闇の帝王を打ち破った者だけが唯一、十四年前と同様に勝ったのだ。

不死鳥の騎士団 始まりの鐘

夏休みに入り、僕はマルフォイ家に世話になっていた。

それは Hogwart's 入学以後の四年間の生活で、最も大きな変化であつただろう。

これまでの夏休暇中におけるマルフォイの誘い——というより一方的な自慢を垂れ流す妄言は、程度が如何なる物であろうと聞き流し続けてきた。

純血達が毎夏集まって如何なる遊びをしていようが全く興味が無いし、他人に煩わされる事自体が余り好きではないし、マルフォイの側も僕に来て欲しいとは考えていないだろうと思つていたから、当然の結果として僕がマルフォイ家を訪れる事はこの四年間で一度もなかった。

しかし、闇の帝王の復活により情勢は変わった。

自分の立場という物を、改めて表明しておく事が必要だった。

毎年恒例とも言えるマルフォイの今年の素晴らしい夏休み予定表の朗読を何時もより真剣に聞き流した後、僕は彼に対して「可能であれば、この夏、君の家に一度行ってみたいのだが」と申し出た。それに対してマルフォイは何故か盛大な驚愕の表情を浮かべた——その瞬間、僕は断られるのではないかと危惧した——が、彼の側も必要性は理解したようである。考えさせてくれという発言は有ったものの、最終的に僕はマルフォイ邸へと招かれた。

もつとも、多少の擦れ違いは有った。

僕としてはルシウス・マルフォイ氏に挨拶を、そしてナルシッサ・マルフォイ夫人にクリスマスの際の礼を改めて言おうとする程度の意味しかなかったが、ドラコ・マルフォイは僕が夏休暇中に滞在し続けたいと申し出たと解釈したらしい。僕に対して閉ざす扉は無いとルシウス・マルフォイ氏から直々に迎えられた上で、夏休暇中の間

邸 manor house の一室に滞在する事は何ら構わないと伝えられ、時間があ

るならばドラコの相手をして欲しいとも告げられた。

滞在部分についてはマルフォイが勝手に先走っただけなので最初は辞退したが、意図的で無くとも言質を奪ってしまった以上、徹底的に拒否する訳にも行かない。結果として幾度か宿泊する羽目になり、そもそも宿泊を断ろうが余り変わらなかった。というのも、マルフォイが大した用事もないのに、殆ど毎日僕を呼び付けたからである。

ビンセント・クラブやグレゴリー・ゴイルの姿は見かけなかったのでどうしたとも聞いたのだが、彼等は殆ど産まれてからの付き合いであり、どうせ社交の場で顔を合わせるから問題無いらしい。そして僕の家まで屋敷しもべ妖精が呼びに来たとすれば、用事が無いのに断る訳にも行かない。

無理矢理用事を作って家を出ておくのも考えたが、その場合、マルフォイが僕を屋敷しもべ妖精に追跡させるだろうという事は容易に想像が付いた。一応頼みを聞いて貰った身では有るのだし、結局従うのが一番面倒が無いだろうと、僕は夏休みに入ってから暫くさながら使用人のようにマルフォイ家へと頻繁に出入りする羽目になった。

一応、悪い事ばかりでは無かったとは言える。

特にマルフォイ家の書庫に立ち入りを許されたのは非常に幸運だった。

当然の事ながら僕はマルフォイ家の外部の人間であり、尚且つ今現在アーサー・ウィーズリー氏らが執拗に嗅ぎまわっている事からして、間違いなくマルフォイ家からすれば大した事のない書庫ではあつたろう。ただ、古い純血が千年近く掛けて収集してきた一部というのは、それ以外から見れば普通に貴重な書籍ばかりであり、普通の闇の魔術の書物を読んだり、純血の歴史や家系図を調べるには事欠かかなかった。

ただそれはそれとして、面倒事からもまた逃れられなかった。

たかが書庫に五時間程度引き籠っていた程度で干渉しにくるドラコ・マルフォイよりも非常に厄介だったのは、僕が一生無関係だと考えていたスリザリンの恒例行事、いわゆる社交界に出るのを強制された事である。

純血以外を排除せず、かつ未成年の男女が参加するような気楽で格の低いパーティだとしても、自分達が紹介した人間が無様な真似をするのはマルフォイ家、というよりナルシッサ・マルフォイ夫人にとつて我慢出来るものでもないらしい。

しかも発言を聞く限り、彼女は僕がクリスマス時にガブリエルに行っていた数々の「不作法」を見ており、そして許し難かったようである。徹底的に教育する旨を宣言され、彼女が呼んだ家庭教師による指導を受ける羽目になった。僕がマルフォイ家に入り浸る羽目になったのは、その熱血教育に長く時間を割かれたという部分も大きい。

勿論、彼等が生まれながらに身に着けて来た数々——社交場における礼儀作法と立ち振る舞い、言葉遣いや発音など——は、スリザリンで七年の Hogworts 生活を送った程度では身に着けられないし、促成教育でどうこうなる物でもない。無礼にならないギリギリまで妥協するとしても、夏休暇は習得期間として短過ぎる。

ただ、僕に「純血」の前でも恥ずかしくない振る舞いをして欲しいというのは一応彼女の好意に分類される行いであり、どういう形であれ将来的に役に立つ可能性があるというものは、バーテミウス・クラウチ氏が死んだ今でも尚否定出来ない。

何より女主人の不興を買うのは当主の気分を害するよりも或る意味恐ろしいから、好き嫌いに拘わらず手を抜く訳には行かなかった。

この部分に関しては、ドラコ・マルフォイは何の遠慮もせず、僕が晒す無様へ馬鹿笑いを向けていた。家庭教師が多少困っていたものの、ドラコ・マルフォイは雇い主の息子であり、尚且つ彼が示す例は流石に完璧でもあったから文句も言えないようだった。まあ、彼の態度は僕にとっては何時も通りの事であるし、寧ろ来る本番、何の為に礼儀作法を覚えさせられているかを想えば憂鬱にしかならなかった。

事実、ナルシッサ・マルフォイ夫人から辛うじて許せる——決して合格ではない——との判決を受けた後で出る羽目になった社交界は、僕にとっては苦痛でしかなかった。

祝宴にしろ舞踏会にしろ、余り興味が持てず苦労だけが大きい空間

は、自分が場違いだという感覚を際立たせた。無知で教養も無いのでただ見ているだけで足る演劇や音楽会、博覧会あたりはまだ気楽だったと言って良いが、何れにしろ改めて思い知らされたのは、自分は貴族という「職業」には向いていないという事だ。

一挙手一投足に手順と自制、政治的意図を求められる純血の生きる世界は、クリスマスや第二の課題後にガブリエルに連れまわされた方がマシだったと思えた位である。

……しかし一番最悪だったのは、ルシウス・マルフォイ氏に「君はセブルスと違い、この手の舞踏会や晩餐会にも進んで参加するのだな」と言われた瞬間だったのだが。

貴族的な皮肉でなく半純血の友人を持つ人間としての称賛の響きを有していたのは解ったから、憎悪を向ける先は当然あの教授だった。道理で一度途中で僕を「応援」しに来た訳だ。あの時は自分の後輩への哀れみだと思っていたが、振り回される僕の道化ぶりを観察しにきたに過ぎなかったらしい。

もつとも総合的に見れば、今までの一カ月は充実した夏休みと言って良く、残りの一カ月も恐らく同じようになる……いや、やはり残りの一カ月は今以上に酷くなるか。

未だに社交界の為の拷問訓練は続いているとはいえ、ナルシッサ・マルフォイ夫人の御許しが出たのだ。無礼な人間を招待・紹介する訳には行かないという事で今までパーティーの類には殆ど出ずに済んでいたのだが、これからはそうもいかないだろう。ドラコ・マルフォイのように、連れ回される機会が増えるのかもしれない。

そんな未来の事を想うと憂鬱で仕方が無かったが——とはいえその日は特別だった。勿論、良い意味では無く、更に憂鬱になれる日であるという方向であったのだが。

夏休暇も既に約一カ月が終わり、滞在している訳でも無いのに何故かマルフォイ家での生活にも慣れた頃。それまで引き延ばしていた「予定」の日が僕に訪れた。

その予定は、夏休暇中に入って齎された一通の手紙を発端としていた。

余り馴染みのない差出人からの手紙は、しかし余り僕に驚きを生じさせるものでは無かったし、内容を読めば理解を示せる物であった。結局、幾度かのふくろう便の遣り取りを経た上で、寮監の同席の下かつ最低でも一カ月の冷却期間を設けた上ならばという留保を僕が付け、それを先方が受け容れる形で「予定」は決まった。

勿論、予め決まっていた事なので、予定の日の前にマルフォイ邸を辞し、自宅へと戻っておく事は一応可能だった。それどころか、掛かる時間が読めないが為に朝から予定を入れていたのだから、自宅から向かう方が寧ろ自然であったと言えよう。

しかしそれでも僕が前日のマルフォイ家での宿泊と翌日暇を貰いたいという旨をルシウス・マルフォイ氏に対して願い出たのは、予定の内容が内容であり、現在の情勢が情勢であるからだった。用心するに越した事は無く、立場の表明も露骨過ぎる位の方が良い。

まあ許可を出した氏の顔が複雑そうだったのは、数多くの人間を直接間接的に始末してきた彼をもってしても、子を持つ親として思う所が有ったのだろうか。

故に僕は休暇中事実上の私室として割り当てられた一室で一泊し、屋敷しもべ妖精の世話を受けながら外出の準備を済ませたのだが、例外的な事は何時でも重なるらしい。もともと、事前に決まっていた予定と違って、それを予想しろというのは流石に無理だろう。その未来を予見出来たならば、今からでも「予見者」に転職出来るに違いないからだ。

僕が朝の準備を終えた頃、ドラコ・マルフォイは来襲し、開口一番こう言った。

「ステイブン、朗報だ！ ポッターの奴がとうとう退学になるぞ……！」

マルフォイ家に入り浸っていれば、ルシウス・マルフォイ氏が今現在非常に忙しくしているというのは当然に気付く事である。

僕がマルフォイ邸を訪れた当日こそ彼は僕を歓迎したし、その後も邸宅の中で彼の姿を一切見かけないという訳では無かったが、それでも彼が僕を相手する事は殆ど無かった。大概の場合に対応してくれたのはナルシツサ・マルフォイ夫人であり、その彼女でさえ、ドラコ・マルフォイ経由で不在を伝えられるという事も稀では無かった。

ルシウス・マルフォイ氏から非礼を詫びられはしたものの、世話になっっている身としては文句を言えようもない。そして闇の帝王の復活が暗黙の了解となっている現在においては、彼等が忙しいのも当然である。働き甲斐の有る主人であるのかは僕の眼からは定かでは無いが、闇の帝王当人に殺されないか戦々恐々として動いていた去年よりは、多少安心して働いている事だろう。

ともあれ、マルフォイ家当主が忙しいのは珍しくも何ともないが、しかし僕の「予定」の前日、つまり昨日は、確かに少々雰囲気違ったようではあった。

とつくに日も落ちたというのにルシウス・マルフォイ氏が急いで魔法省に向かったというのをドラコ・マルフォイから聞いた時、僕は「そうか。それで？」としか問わなかった。

寧ろそれ以外の何を言えという話ではあるものの、内心では色々と考えを巡らせていた。

ルシウス・マルフォイ氏が何処かに行くのは珍しくもないにも拘わらず、息子である彼が異常だと感じたという事は、彼なりに理由——氏にとって何か不測の事態が生じたようだと考えた根拠が存在していた筈なのである。だからこそその促しであったのだが、彼は馬鹿にされたと思つたらしく、大層癩癩を起こして立ち去っていった。

まあ、その反応は彼が疑念に思えど何も知らないという事を示すものであったというのもあり、僕はマルフォイを引き留めなかった。緊急事態ならば直ぐに新たな情報が寄越されるだろうと考えていたし、僕が就寝するまで何も無かったのだから、結局彼が騒いだけだけで大した事では無かったのだろうと結論付けた。

結論付けていたのだが——どうやら違つたらしい。

わざわざ聞くまでも無く、昨日のルシウス・マルフォイ氏の魔法省

への夜間出張はそれに関わるのだろうかと察する事は出来た。確かにそれが真実ならば、彼が魔法省に急行して事態を把握しようとするのも納得である。ドラコ・マルフォイに異常を感じさせもするだろう。彼が部屋のノックを忘れ去るのは何時もの事だが、今回は意図的な物では無いのだろう。入学以来の宿敵の退学予測に、彼は喜びを爆発させていた。

「ポッターは退学だ！ 寧ろ今まで退学にならなかった事の方が可笑しかった！ あいつは散々法律も校則も破っているんだからな！ これで漸く正しいホグワーツに一步近付いたというべきだろうし、後のはあの老いぼれさえ居なくなれば良い。そしてその日も遠くは無い筈だ……！」

彼が何時知ったにしろ、その慶事を余程僕に漏らしたかったのだろう。

歓喜の余りに僕を叩き起こすような真似をせず、常識的な範囲の朝の時間まで待つて部屋を訪れた事は一応感謝しても良い。上機嫌過ぎる彼の相手をしながら、憂鬱な予定の為の準備を進めるような真似はしたくもない。

僕は約束の時間までの暇潰しとして読んでいた本から視線を上げ、椅子に掛けたまま、未だ興奮状態を鎮めようともしない彼へと向き直った。

「ハリー！ポッターが退学なのは良いが、その理由を僕はまだ君から聞いていないが」

「ポッターは学校外で魔法を使った！ それもマグルの住宅街で、マグルの眼の前でだ！」

呆れを隠さず紡いだ僕の問いに、マルフォイは空に昇らんばかりの声色で答えた。

……嘆息をせずに済んだ事に対して、我ながら己の自制心は流石だと思つた。あの英雄殿は、現在の状況で一体何をやっているのだから。……それが事実ならば、確かに退学に成り得るな。現在の法律を厳密に適用する限りにおいては、彼は退学処分を受ける事が妥当だと考える余地は有る」

「だろう？ 散々鼻屑されてきたが、あいつは今度こそ言い逃れ出来ない！」

喜びを爆発させるマルフォイに僕の言葉の微妙な含みニュアンスは伝わらなかったらしいが、さりとて彼が完全に間違った事を言っている訳でもない。

未成年が学校外で魔法を使う事と、マグルの眼前で魔法を使う事。それらの行為は何れも違法であるものの、厳密には別個の違反である。そして、魔法に習熟していないから保護の為に規制するという意味合いを有する前者よりも、魔法使い連盟国際機密保持法を直接的に危険に晒しうる後者に抵触する場合の方が当然罪が重い。

夜間に自室で宿題を済ませる為に照明ルーモスの呪文を使う位ならば見逃される事も有ろう——光る棒は、映画が爆発的にヒットした御蔭で非魔法界で大人気であり、そう珍しい物でもない——が、誰に見られているか解ったものではない屋外で、尚且つ強力な魔法を使った場合は警告では済まない。

ドラコ・マルフォイ曰く、ハリー・ポッターは一昨年にも叔母を風船にしたらしいのだが、仮に真実ならば非常にギリギリの行為だった。その行為が屋外でなされていたならば、如何に生き残った男子、そしてシリウス・ブラックによって狙われていると思われていた子供と言っても、流石に無罪放免とは行かなかつただろう。

「ちなみにハリー・ポッターが何の魔法を使ったか解るか？」

僕の問いが重要な部分と知ってか知らずか、彼はあっさり口を開いた。

「父上は僕に教える事を勿体ぶっておられたが、聞いた所によると守護霊の呪文だそうだ」

「……そうか」

得意満面に言い切ったマルフォイに、多少気が沈むのは避けられない。

当然マルフォイは父親であるルシウス・マルフォイ氏から、そして氏は魔法省の役人——仕事の内容から考えれば魔法省魔法不正取締局の誰かから聞いたのだろうが、非常に厄介で微妙な判断が迫られる

事態になったものだ。多分、事情を把握したルシウス・マルフォイ氏も似たような心境だった筈である。

そして僕とマルフォイは同じ寮で四年を過ごし、特に今年の夏休暇中は長い間共に居る。

彼が僕の表情を読める位にはなるのであり、僕が物言いたげであった事を見て取ったのだろう。先程までの満面の笑顔を一瞬で消して、不機嫌さと抗議の意思を表情であからさまに主張ししつつ、マルフォイは唇を尖らせた。

「……何だ、ステイブン。喜んでる僕がまるで馬鹿だと言いたげだな」

「そこまでは言わないが。しかし彼の退学が確実だと信じる気にならないのは事実だ」

ハリー・ポッターの肩を持ったといえる発言だから、流石に視線は厳しい。

とはいえ、何時ものように文句をぶつけてこなかったのは、彼なりに父親の態度に感じる物が有ったからか。彼は視線で先を促し、僕は大人しく説明を加える。

「使った魔法が失神呪文のような呪文ならば事は単純だ。少なくとも現在の法律の建前上、“マグル”に対して呪文で危害を加えるのは許されない。だが、使った魔法が“マグル”に対して無害な、限定的な魔法であれば多少考える余地が生まれるように僕は思える」

そして守護霊パトローナスの呪文というのは、無害で限定的な呪文の筆頭である。

それを考えた時、此度のハリー・ポッターの行為は果たして退学処分を課されるまで行くのだろうか。当該違反が為された場合の裁判手続、有罪無罪の判断基準について僕は熟知している訳ではないが、それでも僕は中々厳しいように感じてならない。

「……同じ事じゃないのか。ズル賢いポッターの奴が直接的な手段を避けて、マグルを驚かせる嫌がらせに魔法を使っただけの事だろう」「確かにそれは否定出来ない」

僕はハリー・ポッターがそうだとは思わないが、そういう人間は居

るだろう。

「ただ考えるべきは一般的にどうかという部分だ。そして素直に考えて、ホグワーツ五年生にもなりながら、単に“マグル”を驚かせる為に呪文を行使する馬鹿は早々居ない」

「……………」

これもまた常識、或いは合理の話だ。

ドラコ・マルフォイが言うような人間は、普通は圧倒的少数派である。

「憎悪や敵意を抱いて傷付けるといふ話ならば解る。法律を知って尚、それを犯す人間が居るのは一般に想像が出来るからな。だが学年末に必ず、つまりは僕達はこれまで計四度、学外では決して魔法を使わない、使えば退学処分に加えて杖を折るといふ旨の警告の書面を学校から受け取って来た。それにも拘わらず、面白がって悪戯の為に魔法を使うような人間は稀だ」

「……単にポッターが考える脳みそを持ってなかった。それで解決する話だろう」

「それもまあ、否定しない。けれども、裁判官は君と違い、ハリー・ポッターが校則と法律破りの常習犯である事を知らない。普通の人間であればどう行動するだろうかと考え、故に今回ハリー・ポッターが魔法を使った理由に多少の疑問を抱いてしまう」

それに、と続ける。

「そもそも学外で魔法を使うなという規則が非常に緩いのは君も知っている筈だ」

法律上は重罪だが、運用上もそうだとはい限らない。

「この家で君や僕が平然と魔法を使っている事から解る通り、マグルの住宅街で魔法が使われた事は感知出来ても、魔法使いの家で誰が魔法を使ったかを魔法省は知る事は出来ない。つまり、魔法族とそれ以外との間で元々不平等な法律では有る」

一応、それは已むを得ない制限ではある。

魔法使いに魔法の使用制限を課す一番の目的は、やはり魔法の存在を非魔法族から隠す事である。場所と危険度が異なれば規制と罰則

が異なるのは当然であり、非魔法界の社会に居る者は国際機密保持法違反と成りかねない行為を慎んで然るべきである。嫌ならば魔法界に移住すれば良い話であり、都合良く権利だけ主張するのは道理が通らない。

ただそれでも、罪刑を考える上で平等を考慮されない訳でもないだろう。

「規則では退学、そして杖を折る事になっている。だが、それを徹底して運用されてきたかは疑問が有るな。未成年者に学外で絶対に魔法を使わせたくないなら、イルヴァーモニーのように、休暇中は杖を学校で保管させるようにすれば良い。しかし、ホグワーツはそうならない。要は、魔法族の子供が自宅で秘密裏に魔法を使える余地を残す為だ」

純血である家系にとって、その方が都合が良い。

自宅で魔法を使えるか否かで日常の便利さが雲泥の差であり、休暇中に呪文の復習や予習を出来れば、学期が始まってからの校内での成績、O・W・L. やN・E・W・T. の試験結果も当然良くなり得る。だからこそ、そのような微妙な取り扱いが罷り通っている。

……まあ、そのような練習はハーマイオニーには出来ないにも拘わらず、四年連続で彼女が不動のトップというのは異常であるのだが。非魔法界において学校教科書を読む事は何ら禁じられていないとは言え、つくづく彼女はどうかしていると思う。

「……………。つまり、ステイブン。今回の法律破りでは、お前はポッターが退学にならないと考えてる。そう言う事で良いんだな？」

「そうは言っていない」

少し考えて理解したらしい。苦々しく顔を歪めているマルフォイに首を振る。

彼の表情からは、ドアを破らなければかりに入って来た時の喜色は一切拭い去られていた。

「たとえ初犯だとしても、やはり法律上はハリー・ポッターは退学だ。そして吸魂鬼から命を護る為に呪文を使用したという妄言を主張するならば、彼は吸魂鬼が居た証拠を提示する必要がある。建前上、魔

法省は全ての吸魂鬼を管理しており、彼等はアズカバンの外に居る筈も無く、吸魂鬼から命を護る必要も当然無いからな」

吸魂鬼の存在はハリー・ポッターの無罪の結論を導くものである以上、その存在によつて有利な影響を受け得る彼こそがまず示唆をすべきであり、そしてそれを為したとしても、相手は国家である。今の展開を踏まえる限り、決して上手く行く気がしない。

「だから結論は裁判当日ハリー・ポッターがどう主張立証するかにかかっているし、そもそも僕は彼が退学になろうが無罪だろうがどうでも良い。どちらにせよ利害関係を持たないし、君と違つてそこまで彼の行く末に興味を持ってない」

これは本心では有る。

ハリー・ポッターが退学になつた所で、あの老人がヘコむ以外に左程大きく何かが変わる訳でも無いだろう。少しばかりハーマイオニーの危険が下がる程度で、それはあくまで少しばかりだ。たかが残りの三年間引き裂かれる事になろうと、これまで築いてきた彼女達の絆が壊れてくれる訳でもないだろう。

「それとも——」

本を閉じ、マルフォイに真つ直ぐ視線を合わせる。

別に特別な何かをしたという訳でもないのに、彼は露骨にたじろいだ。

「——君は羨ましいのか？ 同じホグワーツの同級生でありながら、しかし君の父親、そして闇の帝王がその動向に強い関心を向け、特別扱いをし続けている。生き残つた男の子」が

「……っ!? そ、そんな筈は無いだろ！ 何であんな奴を羨ましく思う必要が——！」

「そうか？ 僕は多少羨ましく思うがな」

「……………え？」

呆然とするマルフォイに、あくまで多少だかと付け加える。

そういう思いは確かに有るが、彼が四年連続で死ぬような目に遭い、尚且つ昨年度は殆ど死に等しい状況に追い込まれたともなれば、やはり彼に成りたいとは思わない。

もつとも、マルフォイがどう答えるかというのは気になる部分では有った。

ハリー・ポッターに纏わる事に関して彼に冷静さを期待出来ないのは四年間で見えてきた通りだったが、それは恐らく、或る意味で僕達が同類であるからなのだろうという予想は付いていた。

故に、彼が本心の一部でも吐露する事を期待していたのだが――

「――時間が来る方が早かったな」

バチンという音。

「御坊ちやま、御話中大変申し訳ないのです……！　そしてレッドフィールド様、約束通りスプラウト教授様が貴方様に御見えになられていらつしやります！　奥様が今、対応ならされていらつしやるのです！　私めは貴方様を呼びに参るよう仰せつかりました……！」

「そうか、有り難う」

「とんでも御座いませぬ。良いしもべとして当然の事です」

キーキー声で屋敷しもべ妖精は頭を下げる。

「という事だ。伝えていた通り、今朝はこれで失礼する。今の話を続けたいのであれば、今日の夜にでも聞かせて貰う事にしよう」

「……あ、ああ」

立ち上がった僕に、マルフォイは慌てて頷いた。

「だ、だけど」

「？」

先導しようとした屋敷しもべ妖精に着いていこうとすれば、マルフォイは僕に向かって声を掛けた。振り向けば、彼は明らかに僕を引き留めようとしていた。

「ステイブン、君がわざわざ行く必要が本当の有るのか？　だってあいつは事故で死んだんだし、君は単にあいつが死ぬ前に少し話しただけじゃないか」

「だから？　既に決まっていた事だし、今更それを指摘する意味が解らないが」

約束をし、予定通りに教授が訪れた。

ここでやつぱり辞めたというのは筋が通らない。

「っ。デイゴリーの親がこうして君を呼び付けてるんだぞ。つまり、君は疑われて——」

「ほう」

「な、何故笑う!？」

「笑いもするさ。その指摘は見当外れも良い所だからだ。仮にその可能性が少しでもあったのならば、僕はそもそも先方の申し出を受けていない」

ドラコ・マルフォイが懸念している事は有り得ない。

セドリック・デイゴリー夫妻が何故僕から話を聞きたいと言っているのかはポモーナ・スプラウト教授経由で伝えられているし、そして曲がりなりにも『セドリック・デイゴリー』の大部分を形作った両親なのだ。あの場では彼も悪く言っていたものの、さぞかし善良な人間なのだろうというのは確信している。

「それに、大した話をしに行く訳でもない。さっさと終わらせるだけだ。ついでに外で用事を済ませて家の事を終わらせた後、夜には戻ってくる。あの時セドリック・デイゴリーと何を話したかは、まあ一言句違わずとは行かないが、君に対して概ねの内容は伝えたであろう?」

「……別にデイゴリーの親が気にするような内容は無かったと思うけどな」

「僕もそう思う。だが、その後に彼と彼の両親が交わした言葉、親子の最後の会話を理解する為の前提として、多分あれが必要であり、重要なのだろう」

——そしてまあ。

自分の息子が死ぬ前に何を言っていたかが気になるのは、一般的に理解出来る。

そう結んだ僕に対してマルフォイは何も言わなかった。

もつとも、黙り込んだ彼の表情がルシウス・マルフォイ氏に何処か似ていて、今更ながらに彼等は親子なのだと思ひ、何だか無性に可笑しくなった。

デボンの憂愁

セドリツク・デイゴリーの名誉は穢されていた。

魔法省がその手の事をやるのだというのは理解していた。

秘密の部屋。それが開かれた事による犠牲者が一体どのような扱いを受けたか。マートル・エリザベス・ウオーレンは決して「気の悪い」ゴーストでは無かったし、間違いなく生前においても性格は変わらなかつただろうが、しかしそれは彼女の死を誰も悼まなかつた事を意味はせず、死後に辱められ続けても構わないという事でもない。

だが彼女の死の真実は、約五十年もの間、そもそも追及される事自体が殆ど無かつた。

ルビウス・ハグリッドがのうのうと森番を続けられていた事からすれば、恐らく彼の無罪は早くから判明していたのだろう。あの頭の出来でスリザリンの遺産に辿り着けるのなら、秘密の部屋は毎年開いたり閉じたりしていた事だろう。

けれども、彼が犯人であるというのは、彼をアズババンへと送った魔法省にとって——まあ一人の生徒に対して特別功労賞を授与してしまつたホグワーツにとつてもだろうが——都合が良かった。真犯人不明の迷宮入りと正しく訂正するよりも、最有力容疑者逮捕によつて事件収束の方が体裁を取り繕う事が出来た。

故に、そのような不義は、大勢によつて看過され、承認し続けられてきた。

それを考えれば、セドリツク・デイゴリーが事故によつて死んだと発表された事は、何ら驚くに値しない結果ではあるのだろうか。

一応、日刊予言者新聞は、彼の事を悲劇的な犠牲者のように書いてはいた。

リータ・スキーターの記事を平気で載せ続けていた流石の彼等でも、不注意で死んだ間抜けな青年とは書けなかつたらしい。そう書いてしまえば、魔法省の責任——夥しい死者を出した歴史を繰り返さないという誓いの下に、三大魔法学校対抗試合は魔法省の監督の下で行われた——を問わざるを得ないのであるから、語気が弱くなるのも仕

方が無いとは言えるのだが。

けれども、敬意をもつて彼の死を取り扱っているとはいない。

かのハツフルパフの模範生は、曲がりなりにも代表選手の一人として選出されたのだ。

スリザリンでも無く、グリフィンボールでも無く、レイブンクローでも無く、そして言うまでもなくハツフルパフの他の誰でも無く。五百年程の間代表選手を選び続けて来たあのゴブレットは、セドリック・デイゴリーこそがホグワーツを背負うに足りると相応しいとして、その名前が記された紙を炎の舌に乗せた。

そして実際、セドリック・デイゴリーは第一の課題と第二の課題でその実力を見せつけたのであり、あの試合を見ていた人間であれば彼が四人の中で一人実力が劣る訳ではないというのは疑う余地は無いのであって——けれども今、彼は他の三人と異なり実力不足だったからこそ死んだように書かれてしまっていた。

……いや、それだけならばマシだったのだろう。

大人達の失態により生徒の一人が死んだ。

それが、当然のように重要事として取り扱われるならば。

セドリック・デイゴリーの死は、大した問題ではないかのようにあつさりと言われた。

三大魔法学校対抗試合でハリー・ポッターが優勝したという記事と同じ位しか紙面は割かれず、魔法界は彼の死を容易く忘れようとしているのが明らかだった。

代わって紙面の多くを埋めたのは、アルバス・ダンブルドアとハリー・ポッターの誹謗中傷記事。内容はどうでも良い。つまるところ醜い政治の主導権争いに過ぎないのであって、結局の所、一人の人間の死など魔法省にとっても——当然ながら無知蒙昧な読者にとつてさえも——数字が一つ減っただけの、取るに足らない些事ではないのだ。

二人の英雄、ハリー・ポッターとアルバス・ダンブルドアこそが世の関心であり、中心だった。

言葉を選ばなければ、セドリック・デイゴリーは『余計者』だった。

このような結末に対し、あのハツフルパフには収まり切れない大望を有していた青年は、名誉と栄光を求めて三大魔法学校対抗試合に身を投じたあの男は、一体何を思うのだろうか。

——もつとも、幾ら問い掛けた所で、墓石は何も答えてくれないが。僕の目の前、故人となつたセドリック・デイゴリーを悼む為の墓は、その名前が見えない位、瑞々しく色鮮やかな弔花によつて埋め尽くされていた。

彼が死んでから既に一カ月程経つというのに、未だに来訪者は尽きないようである。ハツフルパフも、レイブンクローも、グリフィンドールも、そして恐らくスリザリンですらも、彼を偲ぶ為にこの場所を訪れているのだろう。まったく、大した人徳だった。仮に僕が死んだとしてもこうはなるまい。それどころか一人も花を手向けてくれないかもしれない。まあ、そうであつたとしても、僕は何も気にしないが。

所詮墓所は生者の為に存在する物体に過ぎず、当人にとって死は終わりでしかない。

墓の前に立つてみればもつと何か思う所が有るかとも思つていたが、どうやら僕の心はそれ程綺麗で繊細な物では無いらしかつた。

「——行きましようか」

再度墓石を一瞥した後。

この場所へ連れて来てきてくれた人間、ポモーナ・スプラウト教授に振り返る。

セドリック・デイゴリーがこの地に埋葬されて以来、彼女は幾度もこの場所を訪れているのだろう。花を供えた後は、僕を邪魔しないようにか、離れた場所に佇んでいた。

「……もう良いのですか」

「ええ」

暗い表情を隠し切れていないポモーナ・スプラウト教授に頷く。

「……本当に、花を手向けなくて良かったのですか?」

「僕にそれを求める程、セドリック・デイゴリーは愚かでは有りませんよ。彼と僕は友人でも何でも有りませんでしたしね」

そしてまあ、あの男が苦笑いをする姿は容易に脳裏に思い浮かべる事が出来た。仮に文句が有るならば、直接伝えに来ればいい。

「噂には伝え聞いてはいましたが、貴方は予想以上に変わった主義を持つているのですね。……とはいえ、セドリツクと御両親のわだかまりを、一切関わりもしないままに解決してみせた貴方であれば、何の不思議も無い気もしますが」

「解決を為したのはあの男であり、彼等が育んできた家族としての絆でしように」

「それでも、貴方の御蔭で悲しい別れをせずに済んだというのは変わりませんよ」

その言葉には呆れと言うよりも、疲れが滲んでいた。

もつとも、それ以上に悲しみが——流石に僕に対してではない——彼女を覆っていたのは、場所が場所であるからかもしれない。墓石の前に立ってしまったえば、どうしたって故人を思い出さねばならなくなる。僕ですらそうなのだから、あの男を丸六年の間見守って来た寮監ともなれば、余計に強く過去が蘇る事だろう。

「……まあ、僕としては取り立てて訂正する意義も無い話ですが」

教授がそう信ずるのであれば、勝手にすれば良い。

「セドリツク・デイゴリーの本性——という表現は辞めましょうか。ともあれ、彼が過去にハツフルパフとしてどう在るべきか悩んでいたらしい事は御存知ですか？」

知らない可能性も有るかもしれない。

そういう心配がない訳ではなかったが、有り難い事に、問いに対して教授は頷いた。

「私が知っているのは入学して直ぐの時です。そしてそのような事は——自身の組分けに疑問を抱き、悩むのは、どの寮でも有る事です。それは我々も理解していますし、一年生の間は特に注意深く見守る事になっています。セドリツクも、私に相談してきた一人でした」

教授はそこで一度言葉を切った。

それは相談内容にまで触れるつもりは無いという事であろうし、僕も軽く頷いて先を促した。個人的に行われた告白の中身まで知ろう

とまでは思わない。

「もつとも、その手の悩みを引き摺る事は稀です。時間が経てば、寮に馴染めば、友人が出来れば相談しには来なくなります。特に我がハツフルパフではそうでしょう。広く寮生を受け容れている事もあって、私達の寮はどのように在れという圧力は小さいですから」

「……まあ貴族つぼく、騎士つぼく、賢人つぼく振る舞っていけば足る三寮と違い、ハツフルパフが掲げる徳目を普段から表現するのは難しいというのは解りますよ」

公平も誠実も加減を間違えれば他人にとって逆に迷惑な、独善的行動に変わり得るのだと、その程度を理解出来る頭が有るなら猶更に。「やはり彼もそうでした。相談しに来たのは一度だけ。その後、彼がハツフルパフ。いえ、ホグワーツの模範生となったのは貴方も知る通りです。ただ……それは外からそう見えただけで、何ら解決してはいなかったのでしょうか」

「寧ろ決して解決する問題では無いのでは？ 少なくともスリザリン——純血主義を尊ぶ筈の寮では、その手の悩みが解決する事は有り得ませんよ」

「かもしれませんね」

自虐と揶揄を籠めたつもりだったが、教授は何も追及せずあっさりと頷いた。

「しかし、セドリックが代表選手となった翌日、ハツフルパフの価値を証明してみせると彼が笑いながら私に言いに来た時。あの時私は、彼が一年生であった時の事を、彼が相談した時の暗い表情の事を思い出さなかった訳では有りません」

「……………」

冗談交じりであっても、確かに本気は含まれていたのかもしれない。

確かにあの男は虚栄心に満ち、名誉欲に取り憑かれた男では有ったが、それでもハツフルパフを代表して戦うという気概が零だった訳ではないだろう。

「ですが安心しましたよ」

恐らく無意識にだろう、教授の視線は僕から逸れていた。

その視線の先、物言わぬ墓石へと僕も顔を向けながら続けた。

「同席する貴方がセドリック・デイゴリーの理解者である以上、今日僕が何を話そうと問題なさそうだ。想像されていると思いますが、彼と交わした会話は決して穏やかな物では有りませんし、何より僕は人の神経を逆撫でしないような会話というのが苦手ですからね」

「確かに貴方は色々不器用なようですし、貴方の方は心配して然るべきでしょう」

自虐よりも本気を含ませていえば、教授は小さく笑う。

もつとも教授が更に続けた内容は、僕の予想を超えた物だった。

「ただ、私の方はそれ程心配していませんよ」

「……どういう意味です？」

「貴方が今、ここに立っているからです」

チラリと盗み見た教授の表情からは、その瞬間だけは、悲しみが見えなかった。

決して消えた訳でも無く、僕が直視しがたい類の感情がそれを塗り潰していたからだ。

「セドリックの墓を訪れ、悼み、そして彼の両親の願い——セドリックが貴方と交わした言葉を知りたいという求めに答えようとしている。あの日彼等が口論し、けれども仲違いしたまま別れずには済んだというのとは彼等の事情で、貴方には一切関係無いにも拘わらず」

「……………」

「賢い貴方は理解しているでしょうが、彼等の願いを断る権利は貴方に有り、そうしたとしても我々は決して責めはしませんでした」

「……まあ、受けた所で余り手間では有りません」

断るといふ選択肢は、僕の中で有力では無かった。

後で何か文句を言われた方が嫌だし、下手な逆恨みを向けられても面倒である。

それに——

「——それに、セドリック・デイゴリーとの賭けが有りましたから、ね」
音を抑える事なく、大きく息を吐いた。

彼が三大魔法学校対抗試合で優勝すれば、僕はその招きに応じる。

一応僕は受けた訳では無いし、彼は単独優勝していないし、そもそも彼が招くという部分が叶えられていないが、それくらいは譲歩すべきだろう。代表選手四人の資質を疑った時から始まり、三大魔法学校対抗試合の全体を通して僕の眼は節穴だった。

「……セドリックがパーティを休暇中に開きたいと言っていたとは、彼の両親からも聞きました。それが貴方と関わるとは余り思えませんでしたね——本当なのですね」

「やはり信じられませんか」

「頭で解つていても難しい事は有る物です。貴方がたは友好的とは程遠かったようですし」

僕の方に再度顔を向けられて紡がれた言葉は、至極もつともではあつた。

彼の言葉を直接耳にした僕ですら、今でも中々荒唐無稽な内容だつたと思つている。あの男はやる気だつたが、果たして何処まで実現出来たやら。少なくとも在学中では、彼の野望が実現する事は無かつただろう。

「もつとも、一方で納得する気持ちも有りますが。少し落ち着いた後、最後にセドリックと会話をしたスリザリン生から話が聞きたいと彼の御両親から伺つた最初の時、貴方以外に有り得ないだろうと思ひましたから」

「それを聞いて、恐らく僕は嘆くべきなのでしょうね」

不可解な事象に関与しているのは僕だという、信頼の無さについて。

現実問題、彼と最期に話したのはハリー・ポッターだろうが——まあ、スリザリン生という条件であれば僕だろう。あの時僕達を見ていた生徒は多く、特定するのに苦労はしなかつたに違いない。

「率直に言つて、このような事は異例です。個人的に遺族が生徒から話を聞くのは止められはしないでしょうが、学校としてその仲介を行うのは、たとえハツフルパフ生相手であつても許される事では無い筈ですし、本来であれば拒絶して然るべきでした」

だからこそ、と教授は想いを籠めて強く言った。

「貴方が彼等の申し出を受けてくれた事に、私は深く感謝しています」
「……頭を下げて頂く必要は有りませんよ。言った通り、賭けが有り
ましたから」

「それでも、です」

更に深々と礼を示す教授に、僕は視線を逸らした。

教授的には当然の行いかもしれないが、見ている気分の良い物ではない。

「別にそう気に病む必要は有りませんよ」

慰めでは無く、本心から言う。

僕は——恐らく、僕達は、既に彼の死を悼んでなどいない。

あの日の会話の話をするだけならば、彼の両親からの申し出が有った時点で応じる事は可能だった。一月も経っている以上彼の葬儀も行われたのだし、その流れで彼との記憶を語るというのも自然ではあった。元より彼の葬儀へ出席してやる程に律儀ではないというのもあったが、一月月の猶予を求めたのは違う理由が存在していた。

セドリック・デイゴリーについて話す程度で気が滅入るような神経を僕はしていない。ただ、その後には多大な心労を齎す本命が待ち受けているかもしれないとなれば別だった。

「僕の自惚れであつて欲しいと願っていますし、違つたら笑い飛ばしてくれて構いません。しかし聞かせて頂きたい。本日の事ですが、セドリック・デイゴリーの両親と話した後、僕は自宅にそのまま帰って構わないのですか？」

果たして、ポモーナ・スプラウト教授は答えた。

「……どうやって切り出した物かと悩んでいましたが、貴方の前では無意味な心配だったようです。貴方の考えている通りだと考えて差し支え有りません」

「……でしようね。解っていましたよ」

視線を逸らしつつ紡がれた教授の言葉に、内心で嘆息する。

期待していなかった訳ではないが、そう上手くは行かないらしい。

昨年度、アラスター・ムーディ教授に化けた死喰い人に最も近し

かったのは僕だった。その上で放っておいてくれる程、あの老人は他人を信頼していない。そして僕もあの老人から話を聞く必要性を感じており、後は何時会うべきか、どのように連絡を取るかという問題だった。

死喰い人達も一学生を監視する程に暇ではないだろうが、直接ふくろう便を送り合うような危険を冒す気がないのは御互い様である。そして伝言役と輸送役を僕の下へと派遣して最も不自然でない機会と口実が、御互いにとって今日になったに過ぎない。

「未だ囚われている貴方がたと違い、僕達にとってセドリック・デイゴリーは既に終わった事です。この会合とて、上手く利用されているに過ぎません」

「……また、戦争が始まるのですね」

「既に戦争が始まっているのです」

教授の言葉を少し、しかし決定的に訂正する。

理由は解らないが、あれから死人は出ていない。

表向きだけの話では無く、多分裏でも変わらないだろう。どういう訳か、闇の帝王は暫くの間大人しくしているようである。或いは、彼にとって何か優先すべき事があるのか。

ただ、一人のハツフルパフ生の死は烽火であり、号砲だった。

今死人が出て居なくとも、死人を出す為の動きは水面下で始まっている。冷たい休戦期間はとうに終わり、僕達は既に熱い戦争の中に居る。

「もつとも、今しがた先方で起こっている『問題』の為に僕の予定を動かすつもりは一切有りません。それは現時点で教授にも理解して頂きたい」

「……問題？ 何か貴方がたは問題を抱えているのですか？」

「嗚呼、御存知ないならば構いません。連絡がないなら何も変える必要は無いという事でも有ります。多少の遅刻程度を問題にしないというのは御互い理解していますから」

鸚鵡返しに疑問を口にした教授に軽く首を振った。

ハリー・ポッターが起こした事件についてルシウス・マルフォイ氏

の所に情報が来たのは昨日でそれが殆ど最速、そしてあの老人の所に
報せが到達したのも同時期だろう。ただ事件が起こったのは何分夜
の事、殆どの人間が仕事を終えて家に帰った時間なのだ。彼等が昨夜
遊んでいたとは言わないし、出来る事からやっていただろうが、それ
でも本格的に動けるのはやはり今日からである。

そして「未成年魔法使いの妥当な制限に関する法令」違反の裁判が
何時行われるかの相場を僕は知らないが、彼が新学期を一カ月後に控
えるホグワーツ生である以上、そう遠くない内に行われるだろうし、
どちらにとつても左程猶予は有るまい。

だが、教授は僕に見せつけるように大袈裟に溜息を吐いた。

「……セブルスやミネルバが貴方に手を焼く理由が解る気がします
よ」

「僕は普通に行っているつもりなので、そう言われるのは心外ですけど
ね」

そもそも今の会話の何処に、そう思われる部分が有ったというの
か。

「しかしまあ、何時までもこの場所に居ても仕方ありません。そろ
そろ更なる約束の時間も迫っています。どう頑張ったとしても湿っ
ぽいだけの話にしかありませんが——」

教授は一瞬顔を臥せ、しかし再度上げた時には覚悟が有った。

「——為すべき事を為しましょうか」

頷いた後で杖を取り出した教授の腕を僕は取り、そしてセドリッ
ク・デイゴリーの墓に来た時のように、僕達は付き添い姿現しで目的
地へと飛んだ。

一人の愛する家族が欠け、未だ大きな悲しみに覆われ続けている家
へと。

セドリック・デイゴリーの両親との会話は、予想していたよりは穏

やかに終わった。

夫妻は多少の質問や疑問以外には口を挟む事無く、僕の話を始めから終わりまで——つまり三大魔法学校対抗試合の資格を僕が疑った所から、廊下での遣り取りの中身と意図、第三の課題での最後の会話まで、時折涙を堪えながらも、ただ静かに聞いていた。

聞いた上で思う所は有つただろうが、僕が事前に危惧していた、感情的に僕へと暴言をぶつけるような真似はしなかった。それはやはり夫妻が生徒を無意味に責めない位には善良であり、同席していたポモーナ・スプラウト教授が適切な補足や、セドリック・デイゴリーについての想い出話を交えてくれた事も大きかつただろう。

マルフォイに話した時と違って可能な限り一言一句漏らさず語つたとはいえ、セドリック・デイゴリーと僕の交流はたかが知れており、語る内容がそう有る訳でもない。

一通り話終えて質問も尽きた後、僕はポモーナ・スプラウト教授を残して席を立った。彼等がセドリック・デイゴリーを偲べるようになるには一カ月という期間は余りにも短過ぎるようだったが、それでも僕が居ない方が話は進むだろう。

一応昼食でもと引き留められはしたものの、あの男は僕に弱みを握られる事を望まないだろうと伝えれば、彼等はそれ以上何も言わなかった。しかし立ち去る際、僕のような人間に対して頭を下げられたのは、やはり非常にやり切れない気分になった。

そして僕はデイゴリー家の一室に用意されていた空き缶の前に立った。

僕は教授の付き添い姿現しによつて彼等の家を訪れた訳だが、帰り——というより行き的手段は別に用意されていた。見た目はただのゴミだが、しかし本質は一昨年に散々慣れ親しんだ移動鍵ポット・キーである。

夫妻はわざわざそれが用意された事自体に疑問を抱いたであろうし、それが何処に繋がっているか興味が無かつた訳でもないだろうが、余計な質問はやはりしなかった。

まあ、それをしなかつたのは多分、聞かずとも答えが解つていたからかもしれない。移動鍵を造れる術者というのは相応に限られる。

まして現在の情勢でポモーナ・スプラウト教授が持つてきたとなれば、その作成者が誰であるかは彼等にも容易く想像が付くだろう。

そして僕は空き缶に触れ、一人ホグワーツの校長室に飛んだ。

案の定、アルバス・ダンブルドアは不在だった。問題児が起こしてくれた事件についての今後の対応についての協議や、法律上の問題点の洗い直し、各所との折衝など、今やるべき事は多い。それに、僕とデイゴリー家の会談がどれだけ時間が掛かるか予想が出来なかったというのはやはり大きい。一応呼び付けた側だから待っているというのは時間を無駄にするだけであり、この程度の行き違いは已むを得ぬ事では有った。そして今更氣にする間柄でもない。

勿論、このような機会を奇貨として利用しない僕ではない。

勝手な都合により待たされる代償として、歴代校長の肖像画經由で一つの要求——アルバス・ダンブルドアが持っているであろう或る書物を僕に読ませる事——を行った。

その無礼な要求を伝えるに際し、歴代校長の半数程は多種多様な批難をしたが、しかし裏を返せば、それは半数程は口を噤む事を選択したという事でもある。何より肖像画は所詮肖像画、生きている人間ではない。判断権と決定権を持つのは生者であるアルバス・ダンブルドアであり、最終的に老人は僕の要求を承認した。

それ故に僕は望み通りにじっくりと本を読む事が出来、長らく待たされた所で何ら退屈はしなかった。まあ結果として数時間程待たされたのは、老人なりの嫌がらせであり、同時に配慮の一環なのかもしれない。

本を通読し、気になった部分の大半を手頃な羊皮紙に書き殴り終わった頃、視界の端で暖炉が明るく燃え上がった。一々視線を向けなくとも何が起こったかは解る。部屋の主、アルバス・ダンブルドアの帰還だった。

「今更君が無礼千万であるのは儂も解り切った事ではあつたのじやが。しかし、儂の都合で待たせるなら帰ると校長を脅迫して自分の欲しい物を手に入れる人間は、今のホグワーツでは恐らく君くらいのものじやろうな」

「そうですね？ 探せば居ると思いますよ。現在の誹謗中傷を考えなくとも、貴方を嫌っている人間というのは多いでしょうから」

横からの声と共に、僕の手許から本が浮き上がる。抵抗はしない。それを為したのは他ならぬアルバス・ダンブルドアであり、時間——もしくは我慢の限界——が来たという対応に他ならなかったからだ。羊皮紙まで奪わなかったのは、一応彼にも勝手な都合で待たせた身としての良心が働いたらしい。

ただ、肖像画経由でも伝えるよう求めたとはいえ、自分で言わねば済まない事が有った。

「やはり分霊箱の書籍は貴方が持っていた訳ですね」

老人は返答しないままに部屋を横断し、定位置である机の前に立ち、しかし座らなかつた。既に座っていた僕と、立っている老人。僕は機越しに対峙する。

「既に御存知でしょうが僕はマルフォイの所に世話になっていましたし、そもそもスリザリンです。故に、『幸運の泉の物語』をホグワーツ図書から除くようにルシウス・マルフォイ氏が求めた時、貴方が何と云って拒絶したのかを知っています」

「……………」

「貴方はこう云った。それを『知識の宝庫から取り除くことは非法かつ不道徳である』。故に自分が取り除く事はないと」

そして未だに、かの書籍はホグワーツの図書として置かれている。『幸運の泉の物語』は、『マグル』の騎士と魔法族の恋愛をもって大団円とする話です。しかしルシウス・マルフォイ氏にとってそれはハッピーエンドなどではなく、紛う事無き有害図書であり、個人的に僕も同意しますよ」

差別は許されるべきではない。

その想いは尊く、しかし現実には綺麗事だけで回らない。

「魔法族は議論の余地が有りますが、少なくとも、魔法族とそれ以外の^{ただの}マグル^{生まれ}は、現在の御互いの無知と無理解を鑑みれば絶対に奨励されるべきではない。文化と常識を絶対的に異にするその結婚は、どう足掻い

ても幸せにならないからだ」

「……儂の知る限り、幸せな家庭を築いた者は数多く居る」

「そうですか？ 少なくとも僕達の直近にそうでなかったであろう実例が存在しますがね」

誰達の事であるかは、わざわざ言及しなかった。

「まあ貴方と僕の立場が異なるのは別として、検閲が許されるべきでないという立場には同意します。ええ、だから僕は信じて居ますよ。多くの闇の魔術の書物を——歴代の校長達が最悪でも禁書指定に留めて長らく尊重してきた知識の山を、まさか取り除くなんて真似を貴方がしなかっただろうとね」

アルバス・ダンブルドアはチラリと肖像画の方向を見た。

歴代の校長達の三分の一程は寝たふりをしていたが、その中にレイブンクロー出身の校長の割合が一番多いのは偶然でも無いだろう。僕がアルバス・ダンブルドアに対して分霊箱の書籍を要求した時、沈黙という形で賛同したのは彼等だった。

「しかし、マグル界の銃のように、大きな害を産む物は規制すべきではないかね」

当然のように、善人はこう振る舞うべきだろうと頭で考えた上で、アルバス・ダンブルドアは嘯く。けれども、僕には失笑しか浮かばなかった。

その主張自体を否定する気は更々無い。実際、新大陸と違いこの国では警官ですら銃を持ってない程に規制されているし、その是非はマグルが決める物である。だが今回の正当化する例示として、それは絶対に持ち出すべきでは無かった。

「——ならば杖を取り上げるべきでは？」

アルバス・ダンブルドアは表情を動かさなかったが、それは表面上だけだった。

「ええ、魔法使い一般からでは当然有りませんよ。包丁や自動車が人を殺し得る道具だからと言って、その一切の所持を規制しようとする過激派はマグルにもそう居ないでしょう。それと同様に、僕は魔法族の全てから杖を取り上げると主張してはいない」

「……………」

「故に取り上げるべきは一部、すなわち未成年の魔法使いからです」

そしてその主張は昨日に発生した事件。

今現在問題となっている、ハリー・ポッターの退学騒動に繋がっている。

「イルヴァーモーニーでは休暇中、学生が学校に杖を置いて帰宅する事を義務化されている。子供が未熟で不用意な魔法を使う事で『マグル』に魔法界の存在が露見する危険を考えての措置であり、特に魔法界ではなくマグルの街中に住んでいるなら当然の対応だ」

未成年に杖を持たせる事によって生まれる利益と害悪。

前者は本来であれば殆ど無視して良い程零に等しく、後者はどれだけガリオン金貨を積み上げても取り返せない混乱が生じる危険性が存在する。

「ハリー・ポッターが魔法省から警告を受けたのは二度目です。彼本人がやったのか、法律上許されるかはこの際問題ではない。重要なのは、その二度の何れも、彼が杖を持っていなければ何ら問題にならなかったという事です」

一度目はハリー・ポッターにそもそも嫌疑が掛かり得ず、二度目はハリー・ポッターは魔法を使えなかった。すなわち、警告のふくろうが飛んでくる事も有り得ない。

「今回の件によって、国際機密保持法が害される危険性が改めて浮かび上がった。故に未成年には休暇中の杖の所持自体を禁じる事にした——それは法を制定する良い建前だと思いませんか？ 今まで純血達は反対していたでしょうが、今なら法案は通ると思いますよ」

ドラコ・マルフォイに説明したように、未成年の杖の所持は魔法界に住む人間にとって都合が良かった。故に純血達は新大陸に倣って規制しようと考える事は無く、しかし今年であれば賛成に回る理由などわざわざ言うまでもない。

「彼が魔法を暴発させて叔母を膨らませたように、マグル相手では杖が無くとも困る事は左程有りません。マグル最強の兵器の一つである銃も、この国では稀ですしね。それにも拘わらず、貴方は死喰い人

や吸魂鬼などの万が一の危険から身を護る為に未成年でも杖を所持し、それどころか携帯する権利すら有するべきと主張するのですか？」

——それは、銃規制反対派の人間の理屈ですが。

そう皮肉で結べば、老人の白い髭がピクリと動いた。

「貴方が『良い案だ』と賛同すれば、僕からルシウス・マルフォイ氏に提案しても構いませんよ。彼はこの国に根付いた魔法使いである以上、このような形での社会の改善は思い付かない。しかし、提案すれば賛同してくれるでしょう。彼からすれば三年後、いえ、もう二年後ですか。その際にまた理屈を付けて廃止すれば良い訳ですから」

未成年者は校外で魔法を使う事が許されないのだから、杖を持つ必要もまた無い。

些細な犠牲の下で大いなる善を確保出来る法律は社会的に承認されるべきであり——しかしそれを肯定してしまえば、ハリー・ポッターは十七歳の誕生日を迎えるまでの夏休暇中は当然、法律の規定次第では、十七歳を迎えた後も新学期を迎えてホグワーツへ登校するまでは、杖を保持する事が出来ない。

これから戦争に挑むアルバス・ダンブルドアは、それを良しと出来るのか。

「……一年以上空いたが。君は依然として絶好調のようじゃ。いや、寧ろ前よりも切れ味は上がっていると行って良いかもしれんの」

厳めしい表情を崩す事なく、アルバス・ダンブルドアは絞り出すように言った。

「……それで。仮に儂が分霊箱の本をホグワーツの書架から取り除いていたとしよう。その行いを君は悪だと批難するのかな」

「まさか。それは単純に悪と割り切れる物では無い」

僕は笑う。

「ただ、貴方はもつと自覚的であるべきです。学校の図書を一方的かつ恣意的に取り除く事は権力の行使であり、同時に校長はそれを行う正当な権限を有する権力者である事を。そして、権力を既に持っている貴方の行動は無条件には信頼出来ない」

瞳に不愉快気な色を浮かべたが、多分僕の方が酷いだろう。

アルバス・ダンブルドアが気に入らない根源というのは、そこに在る。

「貴方は確かに善人として在ろうと努力していますし、貴方が善人で在る事自体を否定しませんが、かと言ってその程度は貴方が思っている程では無い。自分に都合の良い規定や法律の抜け穴は見逃し、社会善より個人欲を優先する、一般に有り触れた極々平凡な善良さだ」
つくづく歪で、世間的には憐れまれて然るべきだろう。

この男程に英雄に向いていない人間は早々居らず、しかし彼は今世紀で最も偉大な魔法使いとなってしまう。魔法界にとって不幸であり、この老人にとっても不幸だった。

「だからこそ僕は——いえ、少なくとも人間が、貴方が善の代表や秩序の守護者として扱われている事を気に入らず、貴方の行為に対して否と声を挙げざるを得ないので」

「……どちらかと言えば、君は悪の側に立つのを厭わぬ人間じゃろう」
「善が秩序を破壊する場合は有るのと同様、悪が秩序を作れないという理屈も有りませんよ。まあ闇の帝王の秩序がどうかという部分については、一応貴方に譲歩しますが」

善は相対的な概念に過ぎない。

善意が善行を産むとは限らない。

僕達はそれを理解し、自戒しているが故に、アルバス・ダンブルドア一人の意思に基づく決定と横暴を——それが結果的に正解を導くとも——嫌うのだ。

「……老人虐めはこれくらいにしましょうか」

意識的にアルバス・ダンブルドアから視線を逸らし、再度戻した。その過程で円形の部屋の部屋の中が視界に入ったが、先程まで寝たふりをしていた肖像画達は眼を覚ましていた。それどころか、最早寝ている肖像画は視界の範囲に一人も居ない。大した話になるかは解らないというのに、わざわざ御苦労な事である。

見詰めるのは深海を思わせる蒼。丸一世紀を見続けて来た賢者の瞳。

四年前、一年の時に彼と対峙した際には、途方もない深淵のように思っていた筈だ。しかし今は、その奥底を見通せる程度でしかないよ
うな、そんな気がした。

「一昨年と違い今年には僕を呼んだという事は、それ相応の用件が有る
という訳ですよね？」

「君も応じた以上、君の方もまた僕に用件が有る筈じゃ」

「ええ。であれば、速やかに済ませましょうか。貴方と会話しても僕
は楽しい気分になれませんし、それは貴方の方も同じでしょうから」

ポリジューズ菓

「まずはステファン。よう来てくれたと言っておこう」

アルバス・ダンブルドアは、椅子に掛けず立ったまま言った。

未だ不機嫌さは滲んでいたし、歓迎する気配など欠片も無かったが、それでも御互いの立場と状況、そして開口一番の僕の皮肉を考えれば、和やかと表現出来る程度の反応だった。

「そして御互い忙しい身、と言っても現在の君の方の忙しさは、非常に真つ当な学生らしい物であり、儂としては多少複雑ながらも喜ばしく思っておるのじゃが——」

「……貴方に僕の私生活をとやかく言われる筋合いは有りませんよ」

「——とかく、手早く済ませたいのはやまやまじゃが、どう考えても儂等二人が会って話が短くなる筈もないの。特に此度は話すべき事は数多い。去年度を含めた今までについても、そしてこれからについても」

互いの表情が逆転した事に多少気を良くして、飄々と老人は続ける。

「暇潰しというには重すぎる本を渡した以上、君を待たせる事になつてすまないとは謝る必要は無いじやろう。ただ、敢えて言い訳を述べさせて貰うならば、こうして長く時間を取る為には仕方なかったのじゃよ。君が二言、三言話して済む相手であれば、今儂を悩ませている問題への対処の合間に、ぶらりとここに来る事は不可能ではなかったからのう」

その問題、ハリー・ポッターの件について彼は言わなかったし、僕も追及しなかった。

御互いに承知の事であつたし、今更取り立てて話題に出すような物でも無かった。直ぐに答えが解る事だし、そもそも今回僕達が会う必要性を見出した諸事情と異なり、二人の間で認識の摺り合わせを行う意味自体が感じられない。

「……ならばまず済ませるべき事を済ませたらどうです？　今更御互い遠慮する間柄ではありませんし、そちらの方が御互い話を進めやす

くはあるでしょう」

「そうじゃな。まずは済ませねばならぬ事をしよう」

僕は腕を軽く広げ、老人は答えたが、予想に反して彼はローブから杖を取り出さなかった。

それどころか、アルバス・ダンブルドアは深々と頭を下げた。

「……一体何のつもりです？　どんな反応をして良いのか困りますし、僕に対する冗談の趣向を変えたとすれば、非常に質が悪い気がするんですが」

「別に冗談のつもりは有らぬ。僕は最初に君に感謝を伝えねばならぬ」

「……貴方にそれを強いるような事をした記憶は、僕には一切有りませんが」

惚けるつもりは無く、本気で思い当たらない。

呆れと共に問えば、老人は感情を押し殺した声で答えを紡いだ。

「セドリックの両親の求めに君が応えてくれた事じゃ」

「——嗚呼、その事ですか」

老人の重苦しい響きと反対に、僕の言葉は自分で驚く位に軽かった。

「別に貴方がわざわざ頭を下げるような事では有りませんよ。単にセドリック・デイゴリーへの義理を果たしただけであり、彼の両親からも寮監からも礼は貰っています。そして流石にあの男が最初の模範とした両親だ、予想したよりは楽な仕事でしたしね」

僕にしては珍しい本心からの言葉に、老人は首を振る。

「それでも、僕はホグワーツ校長として、そして失敗した大人として、義務無き君の気高き行いには当然に感謝を捧げねばならぬ。セドリック・デイゴリーの最期の会話の背景を知りたいという彼等の求めに応じ、一応子供である君に対応を強いる事が僕等とて正しいと言えるかは、流石の僕も判断が付かなかったからの」

「……その手の話も既にポモーナ・スプラウト教授からも聞いた話ですし、そもそもこれは御互いの立場と現状を確認するよりも先にする事ですか？」

「僕はそう思うておるよ。戦士以前に、人間として忘れてはならぬ事はあろう」

僕は全くそう思わないから、大いに意見の対立があるようである。セドリック・デイゴリーに対して僕が過度に思い入れの有るような対応は止めて欲しい物だ。この校長室が安全であり、外部からの盗撮や盗聴が不可能であると解つていても、僕の立場を危うくしかねない行為をされて良い気にはなれない。

何より、そのような礼を受けとる資格が僕には無い。

「——正直な所、僕も彼の死に責任を感じていない訳では有りませんよ」

思わず嘆息混じりになったのは、これがこの老人にしか明かせない言葉だからだろう。

セドリック・デイゴリーの両親は当然として、ポモーナ・スプラウト教授に対しても口には出さなかった。あのハツフルパフの模範生と直接的に関わる話題では無かったのも有るが、意図して口を噤んだ一番の理由は、やはり自分の保身だ。全てを明かす事によって得られる自己満足と天秤に掛ければ、己の危険を避ける事を選択するのは当然だった。

「僕にはセドリック・デイゴリーの命を救う機会が有ったのではないですか？」

「——」

「校内のあの死喰い人が僕と接触したのが、厳密に第三の課題が始まる直前なのか、始まった直後なのかは僕の視点からは解りません。しかし、それから直ぐ僕がクイディッチ場に向かったのであれば、間に合う事が出来た気がしてならないんですが」

つまりは完全に手遅れになってしまったのは、ハリー・ポッターが迷路に入った瞬間だったのか。それとも迷路に入った後だったのか。「……それは君の責任ではあらぬ」

アルバス・ダンブルドアは、問いに答える為に渋々顔を上げながら言った。

「二年間ホグワーツに居たアラスター・ムーディが敵であった以上、君

の視点では誰が敵で、周りが何処まで信頼出来るか解らないのも当然じゃ。彼一人が潜入している保証も、服従の呪文の不在の立証もないからの。君の警備に就いた闇祓いに加え、部屋の監視が外に居る事も考えて動こうとしないのは、何ら可笑しな事ではない」

「僕はそのような事を聞いた訳では有りませんけどね」

老人が露骨に、深々と溜息を吐く。

「……その質問には僕は答えられんよ。確かかどうかは解らぬからじゃ」

「ならば単刀直入に聞きましょう。ハリー・ポッターが闇の帝王の下へ送り込まれた時間は？」

「……………。ハリーとセドリツクは、優勝杯に触れた事によってヴォルデモートの下に送り込まされた。つまり、君を含めた儂等がどうにもできなくなったのは、ハリーが迷路に入った直後では無い」

「そうでしょうね。ええ、僕が居なかった時の顛末を聞いた時から解っていましたとも」

予期してはいたが、案の定であった。

要は、あの死喰い人に僕は嘘を吐かれた訳だ。

合理的である事は決して正解である事を意味しない。

僕はその基本的な論理を、あの時もっと吟味しておくべきだった。自分の立場を決する重要な分岐点であり、かつ間違えてはならない場面で有ると理解しているならば、隙や見落としが無いかについて更に検討を深めておくべきだった。ハリー・ポッターが迷路に入った後、優勝杯を掴むまでは、あの闇祓いが本当に敵であるかも含めて、考察を深め、試す時間は残されていたのだから。

「……繰り返すが、それは君の責任ではない」

「ならば、貴方がたが同じ立場に置かれれば大人しくしていましたか？ アルバス・ダンブルドア。ハリー・ポッター。ハーマイオニー・グレンジャー。ロナルド・ウィーズリー。グリフィンドールが、たかだか死喰い人に脅された程度で行動するのを止めましたか？」

回答を待たず、僕は独白した。

「あの帽子は苛立たしい程に正しい組分けをする。僕をグリフィン

ドールに入れようとしなかったのも当然でしょう。僕には最初から獅子寮の資質が無かった」

こうまで鮮やかな形で突き付けられると清々しさすら有る。

僕がレイブンクロウに組分けされる可能性は零では無かろうと、やはりグリフィンドールに組分けされる可能性は零だった。眼前の老人も大概グリフィンドールらしくないが、それでもやはり基本的な志向はグリフィンドールであり、組分け自体が正当性を欠く訳ではない。資質自体が無く、当然に拒否された僕とは決定的に本質を異にしている。

「貴方がまんまと出し抜かれた人間なら、僕はセドリック・デイゴリーを見殺しにした人間ですよ。そして彼等はそれを知らずに僕へと感謝を向けた。僕が口を噤んだから当然の帰結ですが、要は貴方を責めたり、或いは貴方から礼を言われるべき程に身綺麗では無い」

ハリー・ポッターが迷路に入った時点では、何ら彼の死は確定していなかった。

あの時点で僕がアラスター・ムーデイの偽物に敵対する事を決めていれば、闇の帝王の復活とハリー・ポッターの殺害を目的とする計画は失敗する可能性があった。セドリック・デイゴリーを救う可能性が残っていて、しかし僕はむぎむぎと見過ごした。

故に僕には責任が有り、それを忘れずにいる必要がある。

「……これまでの付き合いで重々承知じやが、君も大概面倒な性格をしておるの」

「でなければ貴方とこうして付き合ってられないでしょう。僕が貴方よりマシだと思いう位には、貴方の性格には毒が有り過ぎる」

「流石にそこには見解の相違があるようじゃの」

老人は困ったように少し眉を寄せ、僕は鼻で笑う。

「まあ貴方の礼を受けとるまで話が進まないというのであれば、一応受け取っては置きますよ。何時までも貴方を立たせたままというのも気分が悪いですからね」

椅子に掛けたまま、長身の老人を見上げる。

「だからまず最初に為すべき事を——さつさと記憶を見ればどうです

か？　これは貴方が僕をここに呼んだ理由の一つでしょうし、貴方が直接見た方が、今日の今後の話も進めやすくなるのは明らかだ」

「……ファツジの前でも君は平然と言つてのけたが、開心術を受ける際は、普通はもつと臆するものじゃよ」

「折角人の心を覗き見る魔法が有るのだから、使わなければ損でしょう？　そして僕の感覚としては、憂いの篩を使うより我慢出来ますよ。記憶を取り出しても自分の中から喪われる事は無いとは解つていますが、自分の物が他に流出して残存するというのはやはりゾツとする」

「儂にとつては開心術も変わらぬと思うがの。そもそもそれだけの思考力を頭に入れておいて頭が爆発しないのが不思議なくらいじゃ」

「前者は見解の相違。後者は余計な御世話ですよ」

そしてこれが――彼が僕の心を暴く事が、互いにとつて必要である事に変わりない。

あの時何が行われたかを知らねばアルバス・ダンブルドアは僕を信用し切れないし、僕もまた話を進める為に、この老人の信頼をある程度獲得する必要がある。利害は一致している以上、やらない選択肢など初めから存在していない。

アルバス・ダンブルドアはゆっくりとローブを取り出し、僕の心臓に杖を向ける。

二年前、閉心術を教わっていた時から思っていたが、非常に特徴的な杖だった。この老人には似つかわしくない、見ていて良い気がしない不吉な杖である。そう感じてしまうのは、この杖がさながら人間の骨を模したような外見をしているからだろう。

「ただ、この前に予め一つくらい明らかにしても良いのではないですか？」

「……アラスター・ムーデイの正体じゃな」

「先入観無しの方が心を読みやすいと言うならば、読んでからでも良いですが」

アルバス・ダンブルドアは答えず、僕の言葉を待った。

「学期末にアラスター・ムーデイが姿を現していた事から見て彼が裏

切っていた訳では無いんでしようが、服従の呪文が使われたのか、或いは偽物だったのかは僕の視点からでは解らない。もつとも、後者の方が可能性が高いとは思っては居ますけれど」

「……君は成り代わりの方を疑っているのじゃな」

「ええ、まあ」

「——その推測は正しい。アレはクラウチじゃった」

「……………は？」

「バーテミウス・クラウチ・ジュニア。彼がアラスターに化けていた」
事前予想に一切無い解答に一瞬思考が止まり、けれども直ぐに目まぐるしく回る。

だが、それは同時に心の防備を疎かにする行為である。アルバス・ダンブルドアが意図して造り出した、僕が考え込まざるを得ない爆弾を投げ込んだ事により生じた隙。それを突くようにして行われた次の行動は、自分に対して行われるのでなければ、手放しに称賛したい位に美しい遣り方だった。

「予め宣言するが、儂が覗き見るのは君とクラウチの記憶だけじゃ。

——開^{レジリメン}心」

詠唱と共に呪文が構築され、心への侵入が始まった。

人の心を読むという事は、自然に反する行為である。

書物のように一読出来るように出来ていない心を、嘘発見器程度の判定のみならず、本人が抱いた感情や五感によって描いた風景まで読み取ろうとすれば、さながら臓器移植による拒絶反応が生じるように、入り込んでくる異物^{他人}を、心は自然と拒もうとしてしまう。

それを如何にして穿ち、懐柔し、暴き立て、解きほぐすかこそが開心術士の腕の見せ所で、その点この老人は言うまでもなく一級の術士である。本能的な反射による防御は意味をなさず、そしてだからこそ、僕は当然の礼儀として最大限の妨害の努力をした。

不意を突かれた事によって後手に回ったものの、この程度の不意打

ちは二年前の閉心術の訓練で散々やった物だ。そしてスネイプ教授により一手とはいえ貴重な指導を受けた事で、本命の相手に対してどうやれば良いのかも想像が出来ている。

不自然ではない程度の反射的な拒絶を見せると共に、侵入者が要求する情報を自ら心に浮かび上がらせ、更には疑問を敢えて抱かせて侵入者自ら探る努力をさせる事で誘導を掛ける。真正面からの抵抗や反発以外、考えられる偽装や隠蔽は全てやった。

それでいて尚、僕の抵抗は限られ、アルバス・ダンブルドアは欲した物の殆どを抜き取ってみせた。心の一切を隠し通すという観点で見れば、僕は完敗したと言って良い。

ただ、真の勝敗という面で見れば、表情から見れば明らかである。顔を不愉快そうに歪めたアルバス・ダンブルドアは杖先を僕から外し、ローブの中にしまった。その後、疲れと呆れが半々混じったような溜息を吐きながら椅子に掛ける。

「……儂が教えなくなつて一年半経つが、その間君は毎日修練を欠かさなかったようじゃな。随分と閉心術の腕前が向上しておる。君が半ば儂の行いを受け容れていて尚、心を探るのにこれ程苦勞させられるとは思わなかった」

「それでも、貴方の前では隠し切れなかったようですが」

飄々とした返答に、彼は余計に苦々しげな表情を浮かべる。

「良く言つてのけるものじゃ。儂は確かにバーテミウス・クラウチ・ジュニアの記憶を求めたが、シニアの記憶まで見せよと求めたつもりはない」

「貴方はクラウチと言つたでしょう？ ならば両方見るのが筋でしょう。そもそも、教授に化けたバーテミウス・クラウチ・ジュニアも、あの時後から来た訳ですし」

「……その部分に関して報告は受けておる」
「だとしても、当人の記憶で検証しなくて良いという話にはならないでしょう」

当然本心は嫌がらせの為であり、奏功して何よりである。

バーテミウス・クラウチ氏があの湖畔で語つた内容の信用性は低い

のだとしても、最早彼が何も語れなくなってしまうたであろう以上、アルバス・ダンブルドアは知っておくべきだった。

「……ですが、バーテミウス・クラウチ・ジュニアが正体ですか。その可能性など一切検討していませんでしたよ。僕の記憶違いでなければ、彼は既に死人だった筈ですから」

心の防衛を行った事による疲労か、或いは真実の重みが齎す心労か。

体重を大きく椅子に預けながら言えば、僕の記憶が間違っていない事を保証するように、老人は軽く頷いた。

「彼はクラウチ・シニア——バーティによって秘密裏にアズカバンから連れ出されておった。彼は十数年もの間服従の呪文を掛けられて幽閉されており、しかし今年の初めに自由になる機会を得た。それがあの闇の印であり、ヴォルデモートを呼び寄せる合図にもなったのじゃ」

「……それはまた、事件の裏で随分と予想外の事態が起こっていたものですね」

どんな千里眼を持とうと見透かすのは無理な話で、ただ、腑に落ちる部分は在った。

「道理で彼はスネイプ教授が無罪放免になった理由を知らないし、僕が吸魂鬼に触れた事を危うい所だったと表現する筈ですよ。そしてバーテミウス・クラウチ氏の行動に警戒心を抱き続け、失踪後に Hogwartz に現れた彼に対しても強い危機感を抱くのも頷ける」

「君にとって、彼の正体は納得出来る物じゃったのかね？」

「貴方もそうだと思いますが、バーテミウス・クラウチ・ジュニアの人物像まで掘めていた訳では有りませんけどね。当時の時点で彼は死喰い人となつて間もなかった筈でしたし、あれから十四年程の時が経っている。しかしまあ、僕の前での彼の言動は、まさしく生粋の純血”らしい物でしたよ」

半純血である僕を仲間に取り込もうとした事も妥当である。

マルフォイと同じく非の打ち所がない純血中の”純血”、己の地位に一切の疑いを抱かない魔法使いであるのならば、

親戚の中に一人でもマゲルが居る遠い祖先にマゲルがいて血も混ざっている間違いなく半純血の者と単に純血を名乗っている者を余り区別せず、結果として半純血に寛容にもなれるだろう。

彼の正体により今まで抱いていた疑問全てに説明が付き、他の死喰い人としての不自然さの部分についても解消された。死喰い人の組織に対して理想を抱いているのも当然だ。彼がアズカバンに叩き込まれたのは hogwarts を卒業してそれ程経っていない時期であり、つまりは死喰い人の内情と現実を他の人間程に熟知していた訳ではないだろう。

「……けれども、現実には本当に厄介ですよね」

諦めすら抱いて吐息を宙に投げる。

「実は死人が犯人だったという展開は推理小説で結構有るようですが、しかし読者に対する公平と挑戦を意識せざるを得ない小説と異なり、現実では推理側に死人が生きている事を気付かせるヒントが常に与えられる訳では無い。貴方が気付く機会もなかったでしょう」

「……そうじゃな。世間が言う程にバーティが冷酷でも無慈悲では無いというのは、この儂も知っておった。しかし、如何に息子と言っても、彼が脱獄させる程とは思わぬかった。奥方の末期の頼みだというのを考えても、やはり意外であるのを否定出来ぬ」

「魔法に忠実な堅物という雰囲気でしたからね。経歴から見ても、容貌や言動から見ても。まあ言動は、僕が見た部分は服従の呪文下であろう事から当てにならないでしょうが」

去年の初めの時点、もしくはバーティミウス・クラウチ氏が hogwarts に逃亡してきた時点で、彼の息子が生きているなどと看破するのは神の所業である。如何にアルバス・ダンブルドアが神算鬼謀の大賢者であるとしても、そこまで察する眼と頭脳を持ち得はしまい。

唯一真実に辿り着く事が可能な道筋があったとすれば――

「クラウチ家自分の家の屋敷しほべ妖精が hogwarts に居るのを見て、あの死喰い人は死ぬ程驚いたでしょうね。彼女だけが唯一、今回の物語の真相に迫る鍵を語れた訳ですから」

「……………」

——ウインキーとやらの口をこじ開ける事だった。

「やはりバーテミウス・クラウチ氏がホグワーツ内で失踪した時点で、彼女を拷問すべきだったんじゃないですか？ その時点で少しでも手掛かりを、バーテミウス・クラウチ・ジユニアの生存を知ればまた違った筈だ。今回死人が出るのを防げた可能性も存在したでしょうに」

「……屋敷しもべ妖精だからといって迫害して良いという理屈にはならぬ。そして拷問したとて容易く口を割る種族で無い事を、スリザリンである君は理解している筈じゃ」

「ならば貴方の信奉する愛とやらで口を開かせれば良かったのでは？

絶対法たる主人の為であれば、屋敷しもべ妖精は人間を傷付け、また秘密を破る事も可能でしょう。失踪したバーテミウス・クラウチ氏を餌にそれが出来なかつた時点で、やはり貴方は大いなる善の為に拷問を選択すべきでしたよ」

そう批判を口にしながらも、我ながら切れ味が悪いのは自覚していたし、単なる八つ当たりであるというのも解っていた。可能性は零では無いが、非常に低いのは確かだからだ。

「それで、バーテミウス・クラウチ・ジユニアは何処に？」

個人的な関心は既に左程無いが、しかし流れとして聞くのが自然な問いでは有った。

「今のコーネリウス・ファッジの非常に愉快な妄想と正論を丸ごと否定する証言を、彼は為し得る筈だ。まあロングボトム家に対する罪が濡れ衣だったとしても、アズカバンからの脱獄の罪状と今回の事件の嫌疑で、彼が再収監されるのは妥当ではありませんが——」

「……彼は、吸魂鬼の接吻を受けてしまった。最早何も語れはせぬ」

何故証言させないのかと紡ぐ前に、斜め上の回答に口を噤ませられる。

容易に証言出来ない状態になっている事は覚悟していた。だがそれでも、曲がりなりにも正義を奉ずる魔法省が、この老人が、そんな真似を軽々しく許していたとは思わなかった。

そうか。彼は死よりも惨い末路を迎えてしまったのか。

思う所が無いと言えば嘘になる。

そして如何なる経緯でそうなったかは——聞かない方が良いでしょう。

闇の帝王の意思の下、口封じの為に始末された。

万一その答えが返って来た時は、何と反応して良いか解らなかつた。それを聞きたくないと思う位には、あの死喰い人の思想と理念に僕は入れ込んでいたらしかった。

ただ、その一方でそうなるのも当然かと納得する部分も有る。

彼は闇の帝王を特別視する一方で、彼は自身もまた特別であるような言葉を紡いでいた。彼は裏切り者である在野の死喰い人達を憎悪し、彼等が闇の帝王に罰される事を何処か確信していたようであり——しかし結果は今が示す通りだ。闇の帝王にとって、バーテミス・クラウチ・ジュニアもまた、決して掛け替えない無二の人間などでは無かった。

多分闇の帝王は死喰い人達に期待していないし、便利な手足以上の事を望んでいない。

「……彼の成り代わりの手段は何でしたか？」

アルバス・ダンブルドアの顔を見ないままに、質問を続ける。

「誰かがホグワーツ、或いは魔法省内の何処かに入り込んでいるのは既に四人目の代表選手が現れた時点戦で既に解っていたというのに、まさか暴露呪文で解るような、ちやちな変装を貴方が見逃したという訳では無いでしょう？」

「ポリジューズ薬が使われていたのじゃ」

答えを聞いた瞬間、老人から更に大きく視線を外して天井へ息を吐く。

あれから様々な可能性を想定してはいた。その中にポリジューズ薬を使った成り代わりという想定が在ったのは事実だが、そのようなある種の覚悟を決めていて尚、よりもよってそれか、という感想を抱かざるを得なかつた。

「……また随分と無茶苦茶な手段が用いられたものですね。今回の事件から考えて、彼等の狙いは第三の課題だった。つまり九ヶ月の潜伏

を視野に入れていたにも拘わらず、その為にポリジュース薬を使うという発想は正気の沙汰とは思えませんか？」

「そうじゃな。このような飛び道具的手段が用いた例は、世界の魔法史を探しても稀じゃろう。成り代わり自体はままある事じゃし、先の戦争でも使われなかった訳でも無かった。しかし、今回のように妄執すら感じる程の例は、流石の儂も聞いた事は無い」

「……でしようね。手段妥当性としても実現可能性としても、下から考えた方が早い筈だ」

単純かつ明快、そして効果的。

だがそれ故に露見するのが通常で、けれども此度、闇の帝王達は——というより、バーテミス・クラウチ・ジュニアは通してみせた。「化けつぷり自体も見事な物じゃったよ」

その点を最初に明らかにする必要があると感じたのだろう、老人は自分から口火を切る。

「君の記憶のアラスター・ムーデイは、殆ど本人そのものと言って良いじゃろう。儂の前でボロを出さなかったのだから、当然と言えば当然なのじゃが。勿論、殆どと評したように、君の記憶の中にもアラスター・ムーデイらしからぬ場面は有った」

儂が明らかに奇妙さを感じた部分は、と彼は続けた。

「流石のアラスターとて、生徒が少々隠し事をした程度で服従の呪文を掛けようと試みはせぬ。君に事実を突き付け、呪文を掛けると脅せば十分じゃろう。答えも待たず問答無用で使うのは、本人であれば絶対に有り得ぬ。呪文を破った君を警戒したが故の行動じゃろうな」

「……やはり、そこで気付くべきでしたか」

「儂なら気付いたじゃろう。本物のアラスターであれば絶対に行わぬと確信するには充分じゃ。しかし、その場に儂が居なかったからこそクラウチは行ったのであり、そしてアラスター本人に会った事が無い君に気付けというのは流石に酷な事ではある」

アルバス・ダンブルドアは頷きながらも否定の言葉を口にする。

まあ客観的にも難しいか。あの時確かに違和感は抱いたのだが、それでもドラコ・マルフォイをケナガイタチに変えた記憶が鮮烈過ぎた

のが悪かった。

「君が考えている事は解る。しかし、あの体罰自体が論外なのは大前提として、無防備な相手の背中へ呪文を撃つ行為に対してアラスターは甘くはなれぬ。彼は闇祓いの職務の中で、卑怯な真似によつて殺されてきた仲間達を散々見て来ておるからかう」

「……油断大敵を忘れた自業自得と切り捨てる事は感情的には難しく、トラウマを刺激されれば過敏で過激にもなりますか」

「少なくとも儂は、あの騒動を左程不自然には思わなかつた」

つまりあれはアラスター・ムーデイがやりそうな行動では有つた訳だ。

しかしふと、アルバス・ダンブルドアが問題視しなかつたもう一つの部分に気付く。

「そう言えば、アラスター・ムーデイであれば服従の呪文を授業で使つても不思議ではないという事と、アラスター・ムーデイ本人が服従の呪文を授業で実際に使うという事は天地の差がある訳ですが、それは一体どちらだつたのです？」

さしたる意図も無い素朴な疑問。

ドラコ・マルフォイへの仕打ち以上に、違法行為も厭わないあの苛烈な授業こそが、アラスター・マッドアイ・ムーデイがどんな人間であるかを校内に知らしめた。良識をもつた保護者達は反発しただろうが、それでも闇の印が撃ちあげられた後なのだ、概ねの Hogwartz 生にとつて闇の真髄を知る事は歓迎されるべき事柄で、望んでの事は不明だが、かの「アラスター・ムーデイ教授」はあの時に熱狂的な支持を獲得したのだつた。

それに対し、アルバス・ダンブルドアは頬を僅かにヒクつかせたが、けれども彼は大きく息を吸つた後で答えた。

「……儂はそのどちらとも答える事が出来ぬ。儂はアラスターでないからの」

ただ一般論を言う事は出来る、と続けた。

「アラスターが囚われの身になつたのは、アーサーやハリーの証言からして Hogwartz の学期が始まるその前日じや。そして、クラウチは

「アラスター・ムーディ」に化けようとしていた。ならば、クラウチが服従の呪文を使ってアラスターから授業内容を聞き出そうとするのは当然であり、仮に本人が授業内容を決めていればそれを踏襲すると思わんかね？」

……成程、この老人をして言葉を濁さざるを得なかった理由が解つた。

「つまり、アラスター・ムーディが、ミネルバ・マクゴナガル教授派であるか、それともギルデロイ・ロックハート派であるかという話ですか」

「……良く言ったものじゃの」

僕の形容に感心したのか、その評価は微妙に呆れの響きを帯びている。

ミネルバ・マクゴナガル教授であれば、新任教授として赴任する前日まで授業内容を一切決めないという事は有り得ないし、休暇中に丸一年の計画を練っていても驚きはない。一方でギルデロイ・ロックハートであれば、自分なら行き当たりばつたりでも素晴らしい授業が行えるだろうという無駄に高い自己評価の下、赴任前日まで何も決めていないだろう。

これを今回のアラスター・ムーディに当て嵌めれば、服従の呪文を生徒に掛ける事を予め計画していた狂人であるか、それまで従事していた闇祓いの指導員の延長として生徒を教えようとしていた狂人であるかのどちらかになる。

どの道教授としては問題が有ると言える行動であり、そして明らかにしないままの方が御互いに心の平穏は保たれるだろう。

「ただ、見事な化けっぷりだったのは良いでしょう。しかしそれでもスネイプ寮監にしても、僕にしても、アラスター・ムーディが今回の事件で「犯人」となるべき地位に居たのは解っていた。名前が思い当たる中では第一容疑者だったと言って良い」

バーテミウス・クラウチ氏との繋がりが不明であるという部分を除けば、彼は今年の事件に関して余りに都合の良い位置に居過ぎていた。

「けれども見逃した一因は、あのアラスター・ムーディを貴方が信頼していたからです」

「……そうであろうな。君やセブルスは疑いを持って然るべきであり、けれども儂に否定されるのが解っている事を伝えようとはせんかったのじやろう」

「ええ。僕達は疑惑の立場を取り、けれども貴方ならば信頼の立場を選択する事は解っていた。それは御互い了解済みであった訳ですが、まあ言葉にはすべきでしたね」

「同じ事じゃよ。儂は君達の疑惑程度で疑いはせぬ。結果は変わりはしなかった」

「ですが、貴方ともあろう者が、単にアラスター・ムーディを信じたかっただけという訳でもないでしょう？　貴方が見逃した理由は一切何処に有ったんです？」

この老人が「アラスター・ムーディ教授」を完全に信用し切っていたから見過ぎした馬鹿だとは、僕は更々思っていない。

確かにこの老人の感情は他人を信用したがるが、その理性は他人を全く信用していない。そして同時に、他人を信頼する為に逆に疑うのだという事を忘れる程に、彼は耄碌していない。仮にアラスター・ムーディが変だと少しでも察知すれば、惚けた振りして本人しか知り得ない情報を問い、平然と鎌を掛けて確かめる位はやってのける筈なのだ。

故に彼の成り代わりが完璧であったのと共にアルバス・ダンブルドアの方にも何らかの原因があつた筈であり、問いに対して老人は疲れのように肩を落とし、一度眼鏡を外して眉間を軽く揉んだ後、再度眼鏡を掛けながら言った。

「ポリジューズ薬などによる他人に成り代わる変装というのは基本的に、不意打ちとしてしか使えぬ代物じゃ。それまで良く見知つた間柄であれば必ず露見する。さながら二年時のクリスマスに、君がハリー達の変装を容易く見破つたようにのう」

「ええ。ビンセント・クラップやグレゴリー・ゴイルと同じ寮で二年暮らした以上に、それまでの二年間、僕がどれだけあの三人を見て来た

「思っているのです？」

羨望と共に見て来た彼等の仕草、思考、そして行動原理。

「確実な根拠や証拠がなかりとも、結論に飛び付けるのは必然だった。」

「もつとも、ドラコ少年は気付かなかったようじゃが——」

「——流石に一年もの間騙し続けるのは無理な話です。そして彼も数十分で違和感は抱いていました。ただ、本物が帰って来た時、マルフォイが掛けた言葉が悪かった。さつきは随分と様子が変だった。何か変な物でも食べたのかと彼は言ってしまった訳ですから」

「……ふむ。それがどう繋がるのか儂には解らんじゃが」

「ハリー・ポッター達は、ポリジューズ薬の材料確保及び一時間ばかり本人を遠ざけておく為に、睡眠薬を菓子に仕込んだらしいですよ。しかもその菓子は廊下に置いたそうです。そして結果は彼等がスリザリン寮に侵入した事から解るでしょう」

「……成程、そのような恥ずかしい話は確かに喋れる訳がなからうの」

それを聞いた時は大いに脱力させられた物だった。

罨を仕掛ける方も仕掛ける方だし、罨に掛かる方も掛かる方である。

スリザリン寮への侵入についてはハリー・ポッターはアルバス・ダンブルドアに告白したようだが、その裏側で用いた手段までは白状しなかったのだろう。そして流石の老賢者として想像の斜め上を行かれただけでなく、酷く微妙な顔をしていた。

「しかし、儂もドラコ少年が気付く事を否定はせぬ。一年も共に居て気付かなかった耄碌ジジイと、君に批難されても仕方が無いとは思っておる」

「……バーテミウス・クラウチ・ジュニアが良い役者であったのは既に御互いが認める所です。彼が口にした闇祓いとしての在り方は、まず間違いなく本物に迫っていた。そして成り代わり自体が、そもそも今回の事件では想定しにくいでしょう」

アルバス・ダンブルドアが不意打ちだと言ったように、長期間他人

に成り代わって情報を得たり、工作したりという事はまず無い。

暴露呪文リペリオやグリーンゴツツ銀行に備え付けられた滝が代表的だが、どんな魔法的手段で成り代わろうとも、その化けの皮を剥がす方法は多々存在し、他にも秘密の守り人によって守護された場所に入れないかかったり、入る事を露骨に避け続けなければ直ぐにバレるだろう。つまり呪文や魔法薬で他人に成り代わるのは便利なようである、戦争中のように敵から警戒されている間は成功しにくく、最も有効に使えるのは精々短期の破壊工作や暗殺の場合なのである。

故に長期間一カ所に留まって共に過ごす事自体が一種の身分保障に成り得るのであるのであって、ホグワーツという半閉鎖空間、かつ一応まだ平時であった今回、アラスター・ムーデイの成り代わりの可能性を想定しろというのは中々難しい。

しかも今回用いられたのはポリジューズ薬、簡単に呪文を掛けた程度では剥がせない類の、光学的でなく物理的な変化を齎す手段である。継続的な服用の必要性、肉体自体が変化する事による面倒——眼や足などの身体的欠損、そして義足や義眼調達の問題——など、単純ではあるがそう易々と取れる手段でも無いのだ。

特にアラスター「マッドアイ」ムーデイの特徴である義眼は殆ど唯一無二だろう。

壁を見通す義眼を何処から取り寄せるか、或いはどうやって作成するかという問題が付き纏う以上、彼が長期旅行に出ているのを奇貨として成り代わると言った真似は不可能であり、伝説の闇祓いを打ち倒さなければそもそも成り代わる事すら出来はしない。

「しかしそうだとしてもアルバス・ダンブルドア、他ならぬ貴方がポリジューズ薬による成り代わりを考慮にすら入れないというのは、やはり奇妙に思いますが」

「……そうじゃな。君なら語るに支障はないし、隠し立てする必要もない話でもある」

アルバス・ダンブルドアは椅子に背を預け、過去を思い返すように宙を見た。

「君の事じゃから、アラスター・ムーデイがどんな人間であるかという

のは、ある程度情報を浚ったじやろう。故に聞きたいのじやが、彼はどんな人間であると考えたかね？ あの偽物は儂から見ても出来がよかったから、君があやつを見て感じた印象も含めて良い」

「……かの伝説の闇祓いの印象ですか」

学期初めの頃に抱いた印象。

魔法省の一役人について語る、断片的な記録から構築した人物像。

「まあ端的に言えば、闇の根絶に人生を捧げ、死ぬ寸前まで闇と戦い続けるような、そんな人間だと——って、そう言う事ですか」

思い当たらなかった事が不思議な位の単純な論理に、途中で脱力して言葉を切った。

「気付いたようじやな」

僕が察したのを知り、老人は頷く。

「アラスターは闇祓いとしての職務に全てを捧げておった。鼻を、眼を、足を、そして人生を。そして年を取り、また義足となった事で満足に動けなくなったとしても、彼の闇への敵意は些かも弱まらなかつた。君もアラスターの教え子に会ったと思うが、第一線を退いたとしても、ほんの数年前まで彼は彼なりに闘い続けておったのじや」

「……なら、何故そんな彼が引退したのです？」

スネイプ教授にもぶつけた問いに、しかし老人は同じく首を横に振った。

「それは聞いて居らぬ。老人になるとのう、君達若人のように面と向かって聞くような真似は出来なくなり、御互い言葉無しで理解しあつた振りをしたがる物なのじや」

引退直前に会ったかどうか自体、アルバス・ダンブルドアは敢えて口にしなかつた。

友人としては会っていても可笑しくはなく、しかし一方で戦友としては敢えて直接会う事を避けても可笑しくもない、そんな気がした。「アラスターがまさか引退するとは思わぬかつた。そりやあ足も眼も喪つた彼は、全盛期と比べれば衰えたとは言える。しかし、彼は平和に耐え切れず、直ぐに田舎から出て来る筈だと笑われる位には、悠々自適な隠遁生活という言葉が似つかわしくない男じやつた」

「……何時だったかその手の発言を耳にした時は、確かに正気かとは思いましたよ」

それは「アラスター・ムーディ」らしくなかった。

数年前ならば、そんな妄言を宣った時点で偽物認定すらされたかもしれない。

——ただ。

「アラスター・ムーディという男に変化を齎すには充分だった訳ですね」

「それが起こったのが引退前か、引退中は解らぬがの」

親しい人間なら他人が成り代われれば直ぐに気付くのが当然だという主張は、人間は普通そう簡単に変わる筈がない事を暗黙の前提としている。だが、闇祓い一筋として生きて来た男が仕事から身を引いたのであれば、何も変わらない事の方が寧ろ異常だろう。

「三校試合が行われる事は早い内から解っておった。当時ハリーが参加する羽目になるとは儂は夢にも思わなかったのじゃが、さりとて警備に万全を期さぬ理由も無かった。故にアラスターが引退していたというのは、あの時点の儂にとっては非常に都合が良かったのじゃ」

「……まあ、現役の闇祓いも魔法省での仕事があるでしょうし、三校試合当日である計三日間以外の警戒まで期待するのは難しいでしょう。そして彼等以外から人材を探すとすれば、アラスター・ムーディ以上に適任の存在もそう居ないでしょうね」

アルバス・ダンブルドアの盟友。

あの偽物の完璧な演技を見る限り、この老人とは多くの面で主義主張は相容れず、しかしそれでも先の戦争において不死鳥の騎士団員として共に戦い、不正義との対抗という面においては、この老人が大きな信頼を寄せられる人間。

「君がアラスターの若き教え子に会ったように、アラスターの引退はそう昔の事では無い。そして儂がアラスターに教授職を打診しに行った時——勿論、その時は本物じゃが——実際、外見上では、彼の杖腕や魔法力が格段に衰えていたようにも見えなかった」

じゃが儂はこう考えてしまったのじゃ、と老人は悲しげに言葉を

放った。

「アラスター・ムーデイという男は、果たしてこんなにも小さかっただろうか、とな」

「――」

アルバス・ダンブルドアは、彼の名誉の為に明言しなかった。

けれども、実際こう言ったも同然だった。

アラスター・ムーデイは圧倒的に弱くなっていた、と。

それは毎日の鍛錬の中止とか、体力や精神力、魔法力の劣化だとか、片足が無い事による身体能力の弱化とかいう、そんな解りやすい引き算が原因では無いのだろう。

未だ戦場の最前線に立っている魔法戦士だけが感じられる、非常に感覚的で言語化不可能な差異で、けれども恐らく生死を賭ける場面においては致命的な変化。それをアルバス・ダンブルドアは嗅ぎ取ってしまい、そして恐らく、彼は失望と悲嘆を同時に覚えた。これまで自分を残して最前線を去ってしまった若い魔法使い達と同様に、アラスター・ムーデイもまた只人であり、衰えから逃れられないのだと知ってしまった。

「ペティグリュウとクラウチ・ジュニア。死喰い人二人がかりとは言え、そのどちらも魔法戦には大きなブランクがあると言って良い。全盛期のアラスターであれば、廁の中で彼が襲われたとて易々と返り討ちにした事じゃろう」

「そして貴方はその印象を引き摺り続けていた訳ですか」

「その通りじゃ。彼の一方的敗北は考えられず、まして入れ替わりなど想像の埒外であった」

口調から強い後悔と自己嫌悪を隠そうとせず、アルバス・ダンブルドアは続ける。

「始業式の際、儂は確かに彼へ違和感を抱いた。或いは、些細な仕草や動作が、身に秘める魔法力が、記憶の中のアラスターと違うように思えた。しかし、儂が長らく共に居たのは十四年前じゃった。そして教授職の打診に行った時も、余り長く観察した訳ではなかったからの」
弱ったアラスター・ムーデイを見たくなかっただけではないか。

僕はそんな感想を抱き、そして多分それは正しい筈だった。他ならぬアルバス・ダンブルドアが僕を見て、小さく頷いて見せたからである。

「けれども、ホグワーツで過ごす内に、彼は更に変化した。一言で言えば、彼は若返ったように見えた。じゃが、儂にとつてはそれは違和感を抱くというより、いわば歓迎出来る、好ましい変化だった。彼は生徒を教える内に活力と魔法力を取り戻しつつあるのだと考えたし、儂が最初に違和感を抱いたような反応や仕草も、月日が経つ内に無くなつていった」

「前者は別人かつ十数年の服従の呪文逃れだから当たり前の話であり、後者も不思議では無いでしょうね。時間が経てば経つ程に演技の精度も上がる訳ですから」

「そうして馬鹿な老人は誤解したのじゃ。アラスター・ムーディは昔を取り戻しつつあったのだと。勿論、君は馬鹿な老人が他人を信頼したがった故の不始末だと非難するじやろうが」

「……去り行く老兵を見送る老人の気持ちは流石に解りませんから、非難など無理な話ですよ。戦場に留まる貴方が見送ってきたのは、アラスター・ムーディだけではないでしょうし」

親しい者ならば普通は見抜ける筈の成り代わりを、状況が普通ではないから見抜けないという落とし穴が存在していた。故に、この今世紀で最も偉大な魔法使いは失態を犯し、敵を懐に入れ続けたのである、今回の見逃しをアルバス・ダンブルドアの油断と切つて捨てるのは中々難しいのだろう。

「二つだけ今の君の言葉に訂正がある」

が、僕の言葉に対して老人は少しだけ悲哀を滲ませて言った。

「アラスターはまだ戦う気じゃよ」

「……本気ですか。此度の事を考えれば、それが意味する所が解らない筈ないでしょう?」

「当然じゃ。だが今回の失態が彼の誇りを大いに傷付けたのは推測出来るじやろう。伝説の闇祓いが、十四、五の子供に比べれば殺す価値も無いと脇に捨て置かれたのじゃ。アラスター・ムーディはこのよう

な仕打ちを受けて尚、易々と田舎に再度引き籠れるような男ではない」

そして彼は全てを覚悟の上で此度の戦争に挑むつもりじゃ。

そう老人は断言し、僕に言葉を差し挟む余地を与えなかった。

アズカバンの半分を埋めた伝説の闇祓い。

そんな彼は、しかし、油断大敵の下に要塞めいている筈の自^{ホームグラウンド}宅に居ながらも、たかが死喰い人二人に負ける程度に堕ちた事が明らかとなった。

そしてどんな輝かしい功績を過去に残しているようが、戦場では弱い者から死んで行く。

彼が今回生き残ったのは利用価値が有ったからに過ぎず、そして既に利用価値がなくなった彼が、現在もアズカバンに居る囚人達の多くから恨まれている彼の末路が今後どうなるか。僕も老人も互いに既に予想出来ていて、けれどもその災いの実現を避ける為には、敢えて口にすべきではない内容に違いなかった。

移動鍵と逆転時計

この老人をもつてしても、盟友の弱体は掘り下げたくない話題だったのだろう。

アルバス・ダンブルドアは話に区切りをつけるように一呼吸置いた後、自ら次を紡いだ。

「そして君はよくよく理解しておるじやろうが、儂の最大の失態は、アラスターの成り代わりを看破出来ず、敵を懐に入れ続けた事などでは断じて無い」

自身の正当化では無く、寧ろ自身の断罪の為に老人は明言した。

「はつきり言つて、アラスターに化けている者が校内に潜んでいようと、それは無視しても問題無い部分じゃった。あの死喰い人は自分の仕事を果たすまではハリーを殺す気は無かつたし、第三の課題の最後の最後まで、彼は事実上無害であつたと言つて良いからの」

僕は答えず、老人が代わりに説明を続ける。

「故に突き止めるべきは今回の目的であり、手段であつた。警備の何処に隙が有るか、動くとすれば何時動くか、仮にヴォルデモートが三校試合に干渉するならどうするかこそ、儂の頭脳を最大限に働かせるべき部分じゃった。要は儂が Hogwartz 外より校内の事、課題がどのように実施されるかについてもっと関心を抱いていれば、儂は此度の悲劇を止められておつた」

それはまあ……そうかもしれない。

「優勝杯に触れたハリーとセドリックは、ヴォルデモートの下に連れ去られた。それはハリーがセドリックの遺体と共に迷路の入り口、スタンドに居た観客達の前に現れた事によって明らかになつた。この事から、儂が注意を払うべき物が何だつたかは歴然としておる」

「……移動鍵ポットキーの二重掛け、或いは本来の移動経路の途中で二人が振り落とされるよう魔法的に仕組まれていた。最早推測するしかないですが、そういう事を言いたいのでしょうか？」

そのような事が出来るかは知らない。

ただ、第三の課題の顛末を人伝てに聞いた時からずっと考えていた

事であり、即座に否定が返って来なかったあたり、完全に間違っている訳でもない筈だ。

「魔法に対し素直にエネルギー保存則は適用出来ませんが、大きい現象を起こす方がより困難になるのは変わりない。つまり片道より往復の移動鍵を用意する方が手間であり、何よりハリー・ポッターを死地に送り込んだ死喰い人が、わざわざ帰りの便を用意してくれる筈も無い」

機能を発揮して消え失せた優勝杯は、バーテミス・クラウチ・ジュニアが代わりに偽物を置けば十分。そもそも優勝杯が行方不明のままでも——それが移動鍵として用いられたと後に判明した所で、左程支障も無さそうだ。

ハリー・ポッターが消えた事を知り何が起こったかを老人が推測する程度は、闇の帝王の側とて織り込み済みだろうし、侵入・脱出経路が一つ塞がれるのと引き換えに闇の帝王の復活と生き残った男の子の死亡が叶うというならば、十二分に過ぎるだろう。

「何より疑問に思っていたんですよ。外部から見えない迷路で第三の課題をやるといふならば、では一体どのように優勝者を判定するのか。壁の存在を物ともしないアラスター・ムーディの魔眼が有るとしても、彼が不正に Hogwartz の優勝を宣言すれば困ってしまう訳ですから」

「……儂も同種の疑問をルードにぶつけた。それに対して彼は、優勝者は誰が見てもはつきりと解るような、アツと驚く仕掛けが有ると言っておったよ」

「まあ違う意味で驚いたでしょうね」

僕があの場合に居合わせなかった以上、セドリック・デイゴリーの死体が現れた時の阿鼻叫喚は想像するしかないが、相当な物だった事だろう。

「元より優勝杯に移動鍵の機能が組み込まれていたのならば、優勝者を判定するのに不都合はない。試合の行方を見守る観客達の前に、代表選手が優勝杯を携えて最初に一人だけ姿を現したのならば、誰が優勝者であるかは明白だ」

優勝杯は迷路の中央に置かれており、初めから往復機能を備えた移動鍵として作られたのならば、元の迷路の中央に戻るのが普通だろう。

しかしハリー・ポッターは迷路の入口に現れた。それは、優勝杯に最初に触れた者を移動する仕掛けが初めから備わっていたのだと、そう考えるのが妥当ではないだろうか。

「そもそも、ただの移動鍵で Hogwarts の護りを抜ける訳では無いのでしょうか？」

「それが可能なら Hogwarts は難攻不落と呼ばれては居らぬし、前回の戦争でもヴォルデモートが移動鍵を作れる人間を潜入させようとした筈じゃ。けれども幸運な事に、侵入者によって生徒が人質として取られたような事件は起こらぬかった」

「流石に炎のゴブレット。五百年もの間代表選手達に不破の魔法契約を続け、二百年倉庫に眠っていても一切機能を損なっていない、超一級の魔道具は伊達では無いという事ですか。まあ余計なドツキリ要素を仕組んでくれたのには、今の僕達は文句を言いたい位ですが」

かの骨董品は、並外れた技量を持つ魔法使い達が相応の歳月を費やし、尚且つ Hogwarts を含む三校の校長達の関与と承認の上で作成された筈である。それが Hogwarts の護りを無視して移動を可能にしたとしても、何ら不思議では無い。

「そして説明書に記されていない、或いは忘れ去られた機能をバーティは知り得る立場に居たじやろう。当然、ヴォルデモートは彼から情報を得るのに支障はない」

「……そうですね。彼であれば、隠されていようが知らないままという事は無いでしょう。或いは、純血達が残してきた記録や日記帳にそのまま書かれていないとも限らない」

二百年振りの復活の一回目。

三大魔法学校対抗試合の下手際が、最悪の形で現れた。

「本当に、ここまで上手く行くと呪われているとすら思えてきますよ」

今年は何から何まで今年は異例過ぎた。

「今年都合良く自由になった、死んでいた筈の死喰い人。主君の復活

を前に行動した死喰い人達を咎めるように撃ちあげられた、想定される犯人が居ない闇の印。引退して世間と接触を断った闇祓い。二百年振りに倉庫から引つ張り出された炎のゴブレット。どれかの要素が欠ければ、貴方が気付く余地は有ったでしょうに」

そして、セドリック・デイゴリーも死ななかつた。

「……君は意外に責めはしないのじゃな。儂はもつと批判される物だと思っておったが」

「ここに居たのがハリー・ポッターやハーマイオニーならばそうしたかもしれないが、僕はスリザリンの中で裏の事情を知り、そしてまた貴方の性格を良く知っている。今回は多くを知っている者程間違える類の問題でしょう」

ハリー・ポッター視点では、今回の主要人物で“犯人”と考えられる存在は闇の帝王のみであり、そのしもべとしてゴブレットに名前を入れ、状況を都合良く支配出来る立場に居るのはアラスター・ムーディしか居なかつた。物事を単純に考え、消去法で考えれば正答を導けた。

しかし、ルシウス・マルフォイ氏やイゴール・カルカロフを含めた元死喰い人達の動向や思惑まで考慮に入れると、途端に問題は複雑化する。

結果から見れば自分で物事を難しくしただけの空回りの馬鹿だった訳だが、バーテミス・クラウチ氏がホグワーツで消えた時点で、僕もこの老人も、今回の事件中に人死にが出た事は疑っていなかつた。それ以上の被害を防ぐ——代表選手三人やその他の生徒、ルドビッチ・バグマンを始めとする審査員まで視野に入れて護るといふ観点で見ると、やはりアラスター・ムーディだけを警戒しておけば済むというのは難しい。

もつとも、如何に言い訳しようと思えば負けであるが——

「……どんなに予想していても、実際に会わなければ解らないという事も有るのう」

「……………」

眼の前の老人が一体何を言い出したのか、一瞬僕は理解出来なかつ

た。

そして、理解出来なかったが故に、人の心を読み切る怪物の攻撃を許してしまった。

「まさか君とも有ろう者がこれ程赤の他人セドリックに対し、情を移しているとは思わなんだ」

アルバス・ダンブルドアから不愉快な言葉を投げつけられた事は幾度も有る。

しかし、それらの記憶を軒並み浚った所で、此度程に気分を害する言葉を投げつけられた事はそう無かった。これまでの中でも最上位に位置するであろう、心を削られるような皮肉。この老人の本性の一端を確かに覗かせる、血の通っているとは思えない人間の言葉。

「——貴方より情を移しているのは確かなのかもしれないですね」
自分でも驚く位に、今まで聞いた事がないような声色が出た。

「アラスター・ムーディの成り代わり、更に優勝杯の絡繰りを見逃した事は良い。しかし、貴方の立場と権力からすれば、その時点でも決して取返しが付かなくなった訳では無いでしょう？ 貴方にはまだ出来た事が有った筈だ」

しかしアルバス・ダンブルドアは状況を座視した。

「逆転時計は時を五時間遡れる。ならば何故、それを使わなかったんです？」

僕の指摘に、老人は軽い鼻息で髭をそよがせるだけで、表情は動かさなない。

「かの魔法具は歴史を変えられる。セドリック・デイゴリーが死んだと解った時点で魔法省へと飛び、時計をひっくり返せば良かった。時計を用いて貴方が介入すれば、闇の帝王の復活自体は止められなかったとしても、彼を生かす事くらいは出来たでしょう」

「……ステファン。それは決して許されぬ行いじゃ。特にヴォルデモート程の魔法使いの意思を曲げて人一人の死を覆すともなれば、ど

れだけ広範囲に時間の歪みを引き起こすか、儂をもつてしても想像が付かぬ」

「は？ そんな些細な事でしょう……!? あの男の死が、将来の魔法界にとってどれ程の損失だったと思っているんです？ あれが生き続けるのであれば、たかが二十五人程度が消え失せ、火曜と木曜が多少長くなったり短くなったりした所で何ら——」

「——セドリック一人が生きていた所で、この戦争の趨勢に影響があるかね？」

差し込まれた酷薄な言葉に凍り付く。

そこで漸く、己が前のめりになりつつあった事を気付き、改めて椅子に身体を預けた。自分の体重が酷く重く感じたのは、椅子が軋むような音を立てただけでは無い筈だった。

先の言葉は、アルバス・ダンブルドア当人の言葉では無い。

この大魔法使いは、そこまで突き放した評価を軽々しく他人へと吐く事は無い。それが自分の嫌っている相手でないとなれば猶更だ。であるからこそ、先の言葉は本来僕自身が吐くべき言葉で、去年までの僕の立場を正確に反映した物に他ならなかった。

……アルバス・ダンブルドアは此度も正しいらしい。

セドリック・デイゴリーに対し、僕は在るべき以上に入れ込んでしまっている。

「……一昨年、何故ホグワーツに逆転時計が持ち込まれたんです？」

気付けば恨み言が口を突いて出ていた。

これまで逆転時計が一度もホグワーツに存在した事が無いのであれば、こんな愚かな事を考えはしなかった。その想いは眼の前の老人にも伝わった筈だった。

「選択科目を全て取り、かつ優等生だったから逆転時計を貰ったというハーマイオニーの言葉は、正直僕には信じられないですよ。何故ならO・W・L.を十二科目合格して首席にもなった事例は、ウイリアム・ウィーズリーとパーシー・ウィーズリーが存在している訳ですから」

つまりその程度の条件は、貴重では有っても稀少では無い。

ハーマイオニー・グレンジャーは、学校の評価枠組みで判断する限りにおいては、ホグワーツ史で見てしばしば生まれ出る優秀さと、多少便宜を図るべき程度の価値しか有してない。学校の枠では閉じ込めきれなかった大天才、在学中に数々の論文を発表し、卒業時点で多くの賞と名譽を受け取っていたアルバス・ダンブルドアとは、決して同じ軸で語る事は出来ない。

「先程の建前を信じる場合、直近の十数年で計九年もの間、グリフィンドールに逆転時計が存在する事になってしまふ。彼女は途中放棄しましたが、それでも七年です。その間、グリフィンドール生は一人として余計な詮索をしない程に自制心が強く——或いは同級生が時間旅行している事を全く察しもしない程に馬鹿なのですか？」

「そこまでグリフィンドールを過小評価する程に、僕は単純になれない。」

そして同じ事はスリザリンにも言える。

「先のグリフィンドール三人のように、十二科目取れる程の優秀な生徒が連続して現れたのが例外的だったとしましょう。しかし逆転時計を生徒に貸し出すという特例が昔から存在していれば、スリザリンの一人くらいは時間遡行に気付いて良いでしょうか？　そして一人気付けば子孫、或いは後輩に伝えるのは可能な筈です。つまり、この国に旧くから根付いた家系出身の人間が知っていないのは変だと言って良い」

すなわち、問題は在るべき事が無かった不自然である。

「ドラコ・マルフォイは当然逆転時計を借りて然るべきだった。彼は成績面のみは優良に属する側であり、ハーマイオニーよりは法律や校則を破っておらず、五時間余計に悪さをする為の道具を見逃す程に謙虚でもない。しかし、彼が去年から時間遡行をした様子は一切無かったと断言出来る。その理由は一体何処に在るのです？」

加えてスネイプ教授の一昨年の動向、すなわちシリウス・ブラックが密室から逃げ出した際に怒り狂っていた事を思えば、逆転時計という反則の道具がハリー・ポッター達の手許に有った事を教授が知っていた可能性は、非常に低いように思えてならないのだ。

そして真つ当な思考を働かせれば、時間遡行を可能とする強力な“玩具”を生徒に貸し出すという特例を作るより、授業を受講せずともO・W・L。試験に挑む事が可能であるという特例を作る方が妥当である。個人授業や個別の宿題を出さざるを得ない教授達に負担は増えるだろうが、未成年の魔法使いが不用意に“時”を破壊してしまう危険には代えられないからだ。

要するに、ハーマイオニー・グレンジャーこそがホグワーツ内で逆転時計を与えられた唯一の事例のように思えてならず——しかしながらアルバス・ダンブルドアは頑なに口を閉ざしたまま、静かに僕を見返すだけだった。

「……だんまりですか」

まあ、解答が返って来ない事は解っていた。

アルバス・ダンブルドアは僕に多くの秘密を明かしているように見えるが、しかしそれはあくまで必要な限りにおいてであり、不必要だと考える事は明かさない。賢者の石の時も、秘密の部屋の時も、僕が得る情報は明確に選別されていた。僕が当時求めなかったというのも有るが、仮に当時実際に問うてみた所で、この老人は答えてくれなかっただろう。

「しかし、やはりハーマイオニーに逆転時計を貸すべきでは無かったのでは？」

ただそれでも、問い続ける事は止め切れなかった。

心の奥から沸き上がる熱い何か、僕を止めさせなかった。

「シリウス・ブラックは吸魂鬼の接吻から救われ、けれどもセドリック・デイゴリーは死の呪文から救われる事は無かった。彼等の間に横たわる不平等、命の救済の基準は何処に——」

「——両者の違いは、あくまで逆転時計が絶対に不可欠とされるかという点に有り、それ以上に、時間に干渉する事が目的となっていないが故だと僕は推測しておるよ」

僕の言葉を遮って、アルバス・ダンブルドアは自分に言い聞かせるように呟く。

「元からシリウスを救う道は幾つか存在し、儂等が過ごす時間で最も

スマートに解決する手段が逆転時計で有ったというだけなのじゃろう。そして逆転時計がハーマイオニーの手許に存在する事を要求されたのは、恐らくシリウスを救う為ではない。であるからこそ、時間が壊れる事は無かったと考えておる。勿論、他にも理由が有り得る事を否定せぬが」

「……けれども最早彼女の手許に逆転時計は存在しない訳ですが。つまり、これから彼女が再度逆転時計を手に入れ、そして使う羽目になると?」

「ハーマイオニーが将来逆転時計を必要とし、使用する事になるかは解らぬ。だが少なくとも、彼女が逆転時計の事を良く知っておる点にこそ意味が在る。君は同意せぬかもしれぬが、儂はそう考えてならぬのじゃ」

それは彼女達にシリウス・ブラックの命を救わせた事の正当化に過ぎない。

そんな反論が口から出なかったのは、アルバス・ダンブルドアの言葉が嫌に予言めいていて、しかも的中してしまう予感がしたのが一番の理由だろう。

「……貴方にどう聞こえるかは別として、僕は情故に彼を惜しんでいる訳では有りませんよ」

老人の推測と主張を受け容れ、僕は深い嘆息と共に内心を吐露した。

「闇の帝王は復活した。彼は十四年前の裏切者を許した。これより戦争は再開され、故に三寮と蛇寮の分断が更に進む事もまた確定しました。そして貴方がたが僕達の迫害を進める以上、スリザリンは何時も通りの両天秤でなく、闇の帝王の勝利に全賭けせざるを得ないでしょう」

「君は敢えて見ない振りをしていようじゃが、儂等はスリザリンにもまた門戸を開いておるよ。『ヴォルデモートや つに逆らうというのなら』、我等は同じ陣営に立つ者じゃ」

「ならば、現在我が寮監以外に不死鳥の騎士団として戦っている主要なスリザリンの名を挙げて欲しいですね。貴方が信頼出来る」と

本心から断言出来るならば、無名の協力者として貴方がたと共に戦っているスリザリンでも構いませんが」

「……………」

「嗚呼、貴方が現時点で寮監の事を真に信用出来るというならば、妥協して良いですが」

答えは当然返って来ない。

ホグワーツは結束しなければならぬ。

この老人は学期末にその手の言葉を述べたが、果たしてどれだけの生徒があoの言葉を真剣に受け止めているだろうか。特にグリフィンドール生の中で、結束しなければならぬ仲間としてスリザリンを頭数に入れた者がどれだけ居るだろうか。最大限好意的に見て、スリザリンが頭を先に下げてくるならば仲間に入れてやって良い程度ではないだろうか。

「グリフィンドール被れのシリウス・ブラックは、スリザリンを、我が寮が保存してきた旧き善き理念を護ってくれないでしょう。寧ろ破壊する側に率先して回るのは間違いない」

「君は偏見に満ち過ぎている。流石のシリウスとてスリザリンが滅べと考えるはいまい」

「この状況に至った以上、傍観もまたスリザリンの滅びの道ですよ」

シリウス・ブラックが悪い人間であるかは、会った事がないが為に断言出来ない。

されども善が悪を、良心が破壊を為し得るのは、今学期でも強く思い知った教訓である。

「マグル生まれとマグルを大量虐殺した、闇の帝王と死喰い人を輩出した寮。一度目は許せても、二度目は無い。迫害されるマグル生まれは、そして彼等により今後も増え続けるであろう遺族達は、決してスリザリンを許せない。特に次が完璧なる勝利であれば、前回のようないゝ生き残った男の子」による済し崩し的な終戦でないならば、勝者の権利行使を止められない」

歴史上、魔法使いを狩ったのは悪魔ではない。

神に忠実な高潔な聖職者や、平和を愛する善良な市民こそが魔を

狩ってきた。

「戦後のスリザリンは名だけの別物に変わるでしょう。レイブンクローが、ハツフルパフが、グリフィンドールが、スリザリンを『改善』する。それによって良くなる部分は有るのは否定しませんが、それでも僕等が過ぎ、愛したスリザリンは既に無く、千年前から続く伝統は事実上終焉を迎える事になる」

「……君は悲観的に過ぎる。確かに僕はスリザリンに好意的になれませんが、それでもホグワーツの四寮制を崩すような真似は、ホグワーツ校長として看過出来ぬ。君が恐れている未来が訪れる事は、僕は生きている内は有り得ぬと保証しよう」

「貴方が止めようとしないとはい言つてませんよ」

アルバス・ダンブルドアは善良足らんとする人間であり、叡智に満ちた大賢者である。

だからこそ、ホグワーツ創始者達の願いを無下にする事は有り得ないだろうし、まず間違いなくスリザリンの崩壊を止めようとする側に回ってはくれるだろう。その程度の善良さは知っているし、けれども僕はそのような一人の行動のみに焦点を当てている訳ではない。

「ただ、1960年代にノービー・リーチ魔法大臣が生まれ、同時期にスクイブ達が大行進をやったように、大衆の意思による社会変化、来るべき未来の到来は止められないのです。それは一人の英雄が頑張った所で、どうこう出来る物ではない」

アルバス・ダンブルドアを止められる個人は、これまでこの国に誰も居なかった。

けれども、集団が止められないかどうかは証明されてないし、まず可能だと思っている。

「あれは確実に非魔法界の潮流と連動している。マグル生まれもスクイブも、非魔法界の社会の変化を魔法族より知っている訳ですからね。結局、それらが大問題化する前に闇の帝王による魔法戦争が始まり、その尽くが棚上げになりましたが、戦争が終わってこの国の魔法界が今後もやっていく気ならば、当然彼等に優しくしなければならぬ」

新大陸で第二次世界大戦後に赤狩りをやったように。

純血主義という忌むべき伝統を尽く焼却しなければならぬ。

その象徴としてスリザリンの浄化は、彼等への良い御機嫌取りになる事だろう。

「……セドリックは、その流れを止められたというのかね」

「少なくとも、それを期待は出来ましたよ。ホグワーツ首席。三百年振りの代表選手。ハリー・ポッターの盟友。そしてヘルガ・ハツフルパフの申し子。何より、今年度のホグワーツを一つに纏め上げられる人間は、未だホグワーツの生徒である彼しかいなかった」

一年で出来る事などたかが知れている。

たかが知れているが、それでもその少しがスリザリンには助けになつた。

校長や教授という強権的な立場の人間ではなく、曲がりなりにも七年間同じ立場で過ごして来た者が仲間としてスリザリンを受け容れ、声を上げる事こそが、純血主義に染まらぬ今の極少数のスリザリン生に対する庇護となり、光の陣営の側へと歩み寄る救いの道となつた。

しかし、三寮と一寮を繋ぐ懸け橋となれた人間は既に居ない。

正確に言えばそれを可能な地位を有する者は一人居るが、スリザリンの資質を持ちながらグリフィンドールに組分けされたあの英雄殿は性格が向いていないし、何よりスリザリンに隔意を持っているのは事実で、これまでの経緯から已むを得ない。それにも拘わらずスリザリンに手を差し伸べてくれという虫の良い話は出来ない。

「今年以降、ホグワーツ内では今まで以上にスリザリンが、丸ごと犯罪者予備軍扱いされる。まあ最初から立場を決めている僕達は良いですが、決めかねている者達は、やはり貴方がたに協力する気にならないうでしょう。仮に貴方がたの側に立ったとして、結局戦中も戦後も、裏切者や二流市民扱いされるのには変わりないのですから。そして四寮がバラバラになる事は止められない」

「……敢えて冷淡な言い方をしよう。それは被害者意識が過ぎるとは言えんかね？ 四寮を破壊しようとしているのは儂等では無く、間違つた道を進む君達じゃ。危険を冒して共に闇に立ち向かわんとす

る戦士達を侮辱し、差別する程、儂等は下等であるつもりは無い」
「調子が出て来たようですね。その善性に満ちた言葉に、確かに僕は反論する事は出来ない」

老人の淡々とした、しかし痛烈な揶揄の言葉に笑う。

皮肉ではなく、純粋な称賛と賛美である。アルバス・ダンブルドアはそうではなくてはならない。彼の善性の大半が理性によって形作られた上っ面だけの仮面だとしても、彼の本質は悪に染まりきれない。怠惰に陥れる事は可能でも、墮落し切るには、この老人は余りに強過ぎる。

そして個人として強過ぎるが故に、コーネリウス・ファツジを善性の下に突き放した事が象徴するように、やはりこの老人は弱者を理解し切る事が出来ない。

「ですが、下等で、馬鹿で、懦弱なのが人間ですよ。貴方が他に対してどれだけ期待しようとも、その人間達が応えられるとは限らない」

「たかが十数年、狭い社会の中でしか生きていない若僧が良く言う」

「たかが百年生きてただけで世界全てを知った気の老人に言われたくないですよ」

平行線で、そしてどちらが正しいかはこれから解る。

その相互理解と共に、どちらともなく視線を打ち切った。

「——ただ、あのハッフル・パフ生セドリック・デイゴリーが生きていれば。その点は互いに同意出来ると思いますけどね」

「……そうじゃな。儂の校長生活でも最上位の、痛恨の極みじゃったと思っておる」

意図せぬとも溜息が重なった。

セドリック・デイゴリー。

ハッフルパフの理想に最も近づく事が出来たかもしれない存在。

「……彼も死ぬ事によって、自察の理想を体现する必要は無かつたでしょうに」

貴族のスリザリン、騎士のグリフィンドル、賢人のレイブンクロー。

そして——聖者のハッフルパフ。

だが、聖者は基本的に生在りし日の功績によって認められるべきだろう。

死ぬ事自体にこそ意義が有ったというのは、決して望ましい事ではない。彼が生きてさえいれば更に多くの偉大な事を為し遂げられたであろうこそ、セドリック・デイゴリーは僕よりも遥かに価値の有る人間であったからこそ、余計にそう思う。

「彼はホグワーツの『王』となる資格が有りましたよ。スリザリン、レイブンクロー、グリフィンドールを備えたハッフルパフ。そして今回三校試合の代表選手として絶大な権威を獲得した彼のみが、此度の苦難を前に千年前の理想像を取り戻す事が出来た」

「儂はバーティが誰に対して語り掛けたかを忘却すべきではないと思っておるよ。少なくとも彼は、王となるべき資格は貴族スリザリンのみが有すると考えていた筈じゃ」

「……それこそ馬鹿な話ですよ。純血の資格云々以前の話。偉大なるマーリンが王座に昇らなかつたように、人には向き不向きという物が有る。僕には向いていない」

「望まずして権威の衣を着る者こそ、儂は良い指導者になれると思っておる」

「ならば余計に僕は不資格でしょうに。僕は権威が欲しくない訳ではない」

そしてセドリック・デイゴリーは向いていた。

あの男は近い将来、魔法界で重要な地位を占める事が出来た筈だった。魔法大臣として君臨しようと、在野の魔法使いとして生きようと、彼はスリザリンのみならず、全ての寮にとって不可欠な存在になつていた筈だった。

「……セドリック・デイゴリーは戦士として死にましたか？」

「……いや。君の前だから言うが、さながら虫ケラのように殺された」
「そうでしょうね」

予感はしていたし、学期末の言葉が暗示していた。

セドリック・デイゴリーは偶然、覇者の前を横切ってしまったただだ。

単純に運が悪かったが故に、彼は命を落としてしまった。ハリー・ポッターとの差異は僅かで、けれども生死の境界線としては決定的だった。

「結局、闇の帝王に頭を垂れ、自ら杖を差し出す者のみが生き延びられる。彼にしてみれば、本人の価値などどうでも良いのでしよう。パーテムウス・クラウチ・ジュニアもあのハッフルパフ生には心の闇と利用価値を見出していたでしょうに、主君には伝わりはしなかったらしい」

仮定の話。

ハリー・ポッターとセドリック・ディゴリーは同時に優勝杯を掴んだ。しかし彼等の性格を踏まえた場合、最初から同時優勝を狙っていた訳では無い筈だ。

彼等の間には現場での妥協と合意が存在していた筈で、裏を返せば何か状況が一つでも変わればセドリック・ディゴリーが単独で優勝杯を掴む事も有り得たのであり、パーテムウス・クラウチ・ジュニアの一年間の潜伏と計画は全て無駄になる危険が大いに存在していた。

つまり万全を期すならば、ハリー・ポッターに多少の不自然さを抱かせる事になっても尚、セドリック・ディゴリーを排除すべきだった。周りに他の教授の監視が有って、正体が露見するかもしれないとも、ハリー・ポッターに優勝杯を掴ませさえすれば勝ちなのだ。闇の帝王の忠実なる臣下として、どのように行動をすべきであるかなど明白である。

それでも、あの死喰い人は彼等の良心、御互いが出し抜くような真似をする筈はないという側に賭けた。それは何処かにハリー・ポッターのみならず、セドリック・ディゴリーも共に送り出せるのならば最上だという思考が無ければ有り得ないと思う。

しかし、彼は失敗した。主君への連絡を怠り、あの男を殺させた。

僕の事を引き込むような工作をする暇が有るならば、あの男の事を何とかして伝えておくべきだった。闇の帝王がセドリック・ディゴリーを墮落させる事が出来たならば、彼を死喰い人に引き込む事が出来たのならば、闇の陣営にとって掛け替えのない武器となっただろう

に。

そもそも、あの死喰い人は馬鹿な真似をしていた。僕の性格を読み切っていたとはいえ、あの男は一年掛けた重要な計画を他所に、全てが台無しになる危険を無視して尚、単なる一生徒を死喰い人に勧誘するが為に――

「――それだけの危険を冒す意味が、彼には有ったのじゃ」

眼を合わせていないというのに、彼は僕の思考を正確に見通した上で言った。

「第二の課題やクリスマスマスの際に見せた君の頭脳と発想力。ドラコ少年を説得し、デラクル嬢を誑かして、学校全体を巻き込んでみせた政治力と影響力。儂やファッジと対等に言葉を交わしてみせる度胸と信念。そして何より数奇な事に、状況は特殊だったとは言え、君はバーティ――他ならぬクラウチ・ジュニアの父君に、ただの一度の会話で認められてしまった」

「それだけの人間を自分の下に置きたいという欲を、彼は我慢出来なかったのじゃ」

評価し過ぎだ。そう思わずには居られない。

人一人救う勇氣も覚悟もない人間が、一体どれ程の価値が有るだろう。

「……僕はスリザリンだ。であれば、全てが終わってからでも良かったでしょう?」

溜息交じりの結論に、アルバス・ダンブルドアは首を小さく振る。

「ハリーが消えた事による混乱が起こった後では間に合わぬと考えたのじゃろう。君の傍にはマルフォイが居り、セブルスも居た。あの時点で彼等がヴォルデモートに生かされるかは不明じゃったが、生かされれば君は直ぐにどちらかに接触したじゃろう」

「この一年間程、アラスター・ムーディに化けた彼は僕に恩を売り続けていた。ならば、それを持ち出せば良かったじゃないですか」

「それでは君の忠誠の全て――更なる主君となるべきヴォルデモートを除いてじゃが――を得る事は出来ぬ。彼が一番に、それも危険を冒

して君を味方に引き入れるからこそ価値が有る。儂はそのクラウチ・ジュニアの気持ちが見るのじゃ」

儂もまた君をこうして呼び寄せておるのじゃからのう、と老人は呟いた。

けれども、彼なりの最大限の好意を示されて尚、乾いた笑いしか出なかった。

「貴方が本気で戦争に勝つつもりならば、ここに居るべきは僕では無く、セドリック・デイゴリーであった。やはり僕は本心からそう思いますけどね」

「……………」

「元より貴方が万能では無い事は理解していたつもりでした。けれども、それでも尚、貴方の支配と監視下においては生徒に死人など出ない。僕はそう信じていましたよ」

「…………それは儂も同様であり、しかし儂の思い上がりに過ぎなかった」それでも最早意味は無い。

如何に悔やみ、悼もうとも、喪われた命は還って来ない。

セドリック・デイゴリーは死んだのだ。

ハリー・ポッターという物語

「——終わった話はこれくらいにして、今後の話をしましょうか」
改めて僕はアルバス・ダンブルドアへとそう呼びかける。

確かに必要な確認では有ったが、これ以上過去に浸っていても何の建設性も無い。僕達は未来に繋がる話をする為に互いに会う意味を見出したのであり、僕の方は既に終えてしまったとはいえ、アルバス・ダンブルドアの目的はまだ終わっていないだろう。

「もつとも、既に立場は明らかにしているつもりですけどね」

牽制の意味を含めて、この老人にも解っている事を確認する。

「僕は今マルフォイ家に世話になっている。仮に貴方の目的や用件が僕を自分の陣営に引き込む事だとすれば、既に貴方の目的が叶う事は無いでしょう」

「君がマルフォイに付いたのであれば、僕にとって何ら問題を生じるものではないのう」

アルバス・ダンブルドアは冷ややかに言う。

「あの家がヴォルデモートに付き従い続けられるとは思えぬ。風向きが悪くなれば直ぐに裏切るじやろうし、既にあやつも信頼を置いておらぬじやろう。そしてヴォルデモートが今知っているか解らんが、ルシウスの迂闊な行いにより自身の秘宝を喪った事を知れば、その信頼が欠片も無くなる事は目に見えておる」

「……秘密の部屋の一件。分霊箱の話ですか」

「左様。それに、君はここに来たじやろう？ 一切揺らぐつもりが無いのであれば、僕の誘いを断わるべきじやった」

「……………。だからと言って、貴方の走狗になるつもりは有りませんよ」

「それでも君に対しては、交渉は通じるであろう」

半分呆れた僕を前にして、アルバス・ダンブルドアは断言した。

「クラウチ・ジュニアは君を引き込もうとした。しかし、引き込み切れなかったのは確かじやろう？ 彼は第三の課題後、殆ど直ぐに正体が露見してしまった。ヴォルデモートは君に対して本来抱くべき関心

を、未だ抱いておらぬ筈じゃ」

「……………」

「逃亡したバーティへの対処を見るに、彼等の間に連絡手段が有ったのは確かであろう。しかし、ジュニアも敵地への潜伏中、或いは第三の課題の最中に、見込みが有るスリザリン生が居ると一々報告する程迂闊では無かったと儂は考えておる」

「…………まあ、本来抱くべきという部分はさておき、闇の帝王が僕に必要な以上の注意を払っていないのは確かでしょうね。ルシウス・マルフォイ氏の言動を観察する限りでも、僕をドラコ・マルフォイの知己以上には扱っていないように思える」

闇の帝王が公的には死んだままであるというのも有るだろうが、主君の為に使命に殉じた死喰い人が残した教え子という認識を持つていたならば、もつと何か有つて良いという筈だという考えは抱かなくもない。

そして不用意なドラコ・マルフォイはさておき、少なくともルシウス・マルフォイ氏やナルシツサ・マルフォイ夫人の方は、僕の前で闇の帝王が復活した事を肯定する発言をしてもいない。僕の価値は、一ホグワーツ生の域を出ていないのは確実視していいだろう。

「しかし、儂はヴォルデモート以上に、君に関心を寄せておる」

それはそうだろう。

考えても気が滅入る事に、僕達には四年間の積み重ねがある。

「儂が目的をもって君を呼び寄せたように、君もまた目的をもってこの場所に来た。最初から見込みがないならば儂も諦めるが、多少の間で可能性を手繰り寄せられるというならば、儂にやらない理由はない」

「…………まあ、目的が無かった訳では有りませんが」

この老人と向き合うと何時も気疲れすると、そう溜息を吐く。

「ただ僕がどういう立場を取ろうとも、原則として貴方がハーマイオニーを護る事は解り切っている以上、それが単純に交渉材料になりえない事は貴方も承知の筈です」

「おお、それは解っているとも。しかし——」

「——何らかの情報を与える代わりに僕を貴方側に付かせる気ならもう無理ですよ。僕が一番聞きたかった事。つまり、あの死喰い人の正体が誰だったのかというのは知れたので」

アルバス・ダンブルドアの言葉を途中で切って結論だけを示す。

僕の用事はそれであり、それしかなかった。『アラスター・ムーディ教授』の正体をハリー・ポッターから聞く事は出来る事なら避けたかったし、そもそも彼がその事実を知っているかどうか自体が不明確だった。だから問題はどうかやって知るか、そしてこの老人に口にするかだったのだが、重要でないと勘違いしたせいか、あつさり吐いてくれた。

その情報に価値があると読み取れていれば、絶対に口を割らなかつただろうに。

老人の顔が僅かに歪む。彼は己の失態を漸く自覚したようだった。

「……開心術の方はさておき、儂は君に開心術を教えた事は未だに正しいと思っておる。しかし、それが正しい判断であった事を今程に恨んだ事はない」

「貴方が教え始めてから丸二年以上。毎日修練を積んできた甲斐は有ったようですね。貴方が油断していたのも有るでしょうが、それでも貴方に通じたというのは確かなのですから」

「記憶を隠したのじやな。それも、儂に知られば不都合な記憶を」

「杖に誓って言いますが、ほんの一部だけですよ」

努力はしたものの、それが限界だった。

それ以上を欲張れば、この老人に不自然さを勘付かれただろう。

「他はバーテミウス・クラウチ氏のも含め本物の記憶で、一部を捻じ曲げるといふ事すら出来なかった。やはり単に不都合な記憶を隠すといふ事と、違ふ記憶を作るのは全く異なりますね。心を読まれるのを逆手に取って相手を嵌めるといふのは中々出来そうにない」

「それは老練な魔法使いにとっても無理じやよ。君より遥かに長く生きたスリザリンの先輩——ヴォルデモートやセブルスの事ではないが——ですらも非常に困難な御業じや」

「それを聞けて良かった。馬鹿な事をして失敗するのは避けたいです

からね」

とはいえ、自分の閉心術は一応この老人にすら通じる。

それを知れた事は、今回の大きな収穫で有ったと言えよう。

「しかし、ここに明確に警告しておこう。自分以外の誰も信用しないヴォルデモートは、まず間違ひなく儂を上回る開心術の腕前を持つておるじやろう。先程まんまと儂を欺く事が出来たとしても、同じく通じると油断すべきではない」

「解っていますよ。貴方から教わった時の、当初の目標の期間すら未だ過ぎていない。まだ時間は有る——というより、御互いに有って欲しい訳ですが」

「ならば儂も少しは安心出来る。君が今言った通り、君の心の防備が厚いという事は儂にも利点があるのは確かじや。この会合も、君が易々と心を読まれぬ事を前提としておるしの」

机の上で指を組み、その顔に僅かに疲労を滲ませながらも、老人は言った。

「——して、儂の側の目的についての話じやつたか」

瞳を一度閉じたのは、覚悟を決める為か。

「儂も君をどうするかについて、今まで頭を悩ませておった。クラウチと一緒の気分じやよ。君は喪えない駒では決して無いが、かと言って放置すれば問題が生じる程度には無視出来ない駒でも有る。彼がファツジを使って君を課題から遠ざけたのは非常に良い手じやつた」

「あの死喰い人の前でも思いましたが、僕を幽閉する必要が有ったとは思いませんが」

「いいや。自由に発想を飛ばせる君であれば、第三の課題中に移動鍵の絡繰りに気付きえたじやろう。そこで君が公然と試合を中止させようと動いたかまでは儂にも断言出来んが、最悪でも自分の感想を周りに漏らす程度の事はした筈じや」

「……まあ、仮にマルフォイに聞かれでもしたら、口を滑らす位はしたかも知れませんね」

それ自体は、一スリザリン生として不自然ではない。

無知な生徒が偶々闇の帝王に不都合な行動をしてしまった程度で

あり、当然逆恨みを食らう事は避けられないが、やってみる価値は見出した事だろう。その内容がアルバス・ダンブルドアの耳にまで入るかは問題だが、優勝者がどうやって判定されるかの賭けでも大々的に開催すれば、この老人まで届き得たかもしれない。

「そして一番望ましい結果は、今ここで君の陣営を明確に変えさせる事であったが、どうもそう簡単には行かぬらしい。まあ解っていた事じゃがの。君が一度決めた事柄を易々と翻さぬ事は、儂以上に他人の言葉を聞き入れぬという事は、儂も十分よく知っている」

「……………」

「だからこそ、儂は考え方を変える事にした。未だ君の立ち振る舞い方を変える事は諦めておらぬが、多少譲歩しても良いと思っている。最悪、儂が君を使えずとも構わないでしょう」

「どういう——」

「——まずはハリーの今まで。彼が何を成し遂げてきたかを聞いて貰いたい」

その宣言を聞いて、どうして絶句しないで居られようか。

アルバス・ダンブルドアは直ぐに説明を続けず、僕の動揺が収まるのを辛抱強く待っていた。そして、それには時間が掛かった。少なくとも僕の認識では、長い時間を必要とした。これまでの四年間で一度も感じた事ないとすら思える驚愕を、アルバス・ダンブルドアの提案は齎したのだった。

「……………貴方は何を僕にさせようとしているのです?」

「儂がさせるのではない。君がするのじゃ」

長い顎鬚を撫でながら、嫌に蒼い瞳を煌めかせて老人は言う。

「ヴォルデモートは復活した。あやつは今は大人しくしておるが、今後ホグワーツへ干渉を試みないとは考えられぬ。まあ今年の闇の魔術に対する防衛術の新任教授は君の所の紐付きでは有りながらも、服従の呪文を掛けてどうこうする気までは無さそうじゃがのう」

「……………それがハリー・ポッターの今までを語る事にどう繋がるのですか」

「君は儂と同じタイプの人間じゃ。人の心の動きを深く読み切り、人

の行動を操り、そしてひいては未来すらも正確に推量してしまう。しかし、正確な過去と情報を知っておかねば、君はハリーの動向を予想し切れず、それどころか見誤ってしまう事じゃろう」

「だから貴方は僕へ彼について情報を教え、そしてその上で僕が勝手に動くのであれば、貴方の利益に反する事はないと考えているという訳ですか」

「そういう事じゃな」

アルバス・ダンブルドアの領きに、苦々しい想いを抱く。

そして確かに一学年時、賢者の石の時は、僕はこの老人に真意の一端を教えられたが故に動かなかった。逆に何も教えられていなかったならば——今考えれば、教えられなかった方が余程良い方向に進んだ筈であるが——ルシウス・マルフォイ氏に賢者の石の存在を伝えるのを躊躇わず、結果としてアルバス・ダンブルドアの偉大な計画に支障が出たのは間違いない。

だが、アルバス・ダンブルドアは秘密の暴露により僕を完璧に制御しきつたのであつて、要はこの老人にとつて、合理的に行動する相手に操りやすい人間は居ないという事だろう。

「……しかし、僕じゃなくても良いでしょう。貴方がこれからの事を示唆しておくならば、僕よりも彼の傍に居るハーマイオニーやロナルド・ウィーズリーが適切なのでは？」

「ハリーの友人というだけでも注意を引くのに、儂が彼等に一生徒以上の関心や期待を抱いておると知られるのは宜しくない。その方が君にとつても都合が良いじゃろう。そして彼等はハリーの立場に寄り過ぎていて。君のように全体を見て行動する事を期待は出来ぬ」

「……僕はハリー・ポッターの味方という訳では無いのですがね」「だとしてもハリーについて知っておく事は、君がハーマイオニーの安全を図る事にも繋がるのでは無いかね？」

……殺意を抱く程に、その指摘は正しい。

ただ一人の行動を確実に予測し切る事は、それが良く知るハーマイオニー・グレンジャーであったとしても中々困難だ。しかし、物事の規模が大きければ大きい程、そして動く人数が多ければ多い程に予測

しやすくなる場合も時として存在する。

特にハリー・ポッターは、これからの戦争において中核となるべき人物である。

あの三人組の中で、生死を賭した闘争に直接挑んだ経験が有るのも彼一人。彼の意向は三人組全体の行動指針に大きく影響を与えるだろうし、彼の動向を正確に把握しておく事が、そのまま彼女の動きを見極める事にも繋がりが得る。

「……はあ。自分の預かり知らぬ場所で己の情報が暴露されていた事を知れば、ハリー・ポッターは強い不快感を抱くでしょうね」

「真つ当な思い遣りの心など持ちあわせていないのは御互い今更の事じゃろう」

「まあ、戦争を遂行出来る人間が普通の良心を持つている方が異常ですか。そして僕も自分が善良とは言えない事は自覚しているつもりですよ」

僕の返答に、同意と言質は取れたと判断したのだろう。

そうして、アルバス・ダンブルドアはハリー・ポッターについて語り出した。それは、長い長い、英雄譚であった。

ハリー・ポッターの今まで。

そうは言えども、丸十五年を語る訳ではない。

ポッター家に居た頃の記憶のない赤子について長々と語った所で何の役に立たないし、ダーズリー家からの虐待がハリー・ポッターの人格を考える上で忘れてはならないにしても、彼の今を形作る決定的要素という訳では無い。そもそも、多くはアルバス・ダンブルドアが実際に見ていない光景であり、この老人には最初から語り得ないという事情も有る。

だから老人が主に語ったのは、ハリー・ポッターの四年間。

その上、アルバス・ダンブルドアは僕に必要な情報を提示するとい

う名目でそれを語っている以上、情景を詳細に口述するという事は無く、半ば叙事史的な語り口であり、どちらかと言えば淡々とした、無味乾燥な響きから逃れられていなかった。

もつとも、半ばと言ったのは、完全に事実や事象のみを語った訳では無かったからだ。

例えばアルバス・ダンブルドアは、自身がハリー・ポッターと交わした会話や、クイリナス・クイレル教授に憑りついた闇の帝王の言葉、或いは日記帳より現れたトム・マールヴォロ・リドルの言葉については、時間を掛けて詳細に語った。

多分それらは彼がハリー・ポッターから聞いた言葉を相当正確に再現した物であり、この老人は、それらの会話の内容や話振りを非常に重要だと考え、そしてまた僕が是が否にでも知っておかねばならないと判断したのでだろう。

一方で賢者の石へ繋がる途中への試練の詳細などは、アルバス・ダンブルドアにとって左程意義を持たない。スネイプ教授が石を狙っていると勘違いしたハリー・ポッターは、禁じられた廊下を抜けて石の間に辿り着き、鏡の前に立ったとだけ述べて終わりだ。

けれども、アルバス・ダンブルドアがそうしたのも、決して不親切によるものではない。重要部以外を可能な限り省いたのは、僕はハリー・ポッターと同じ年にホグワーツに通っている生徒であり、尚且つハーマイオニーという別の情報源、情感的な語り部が居たからである。

彼女は多くを語った。

賢者の石に関していえば、四つの試練。チェスでのロナルド・ウィーズリーの脱落。その際の不安や焦り。ハリー・ポッターの機転や対応等々。起きた事件だけを語るには不要な細部は、しかし当時の状況を脳裏で再現するには必要不可欠であり、ハリー・ポッターがどんな人物であるかを正確に把握する為の助けとなる部分だった。

勿論、ハーマイオニーが語れない部分も有る。鏡の仕掛けについての細部についてなどは、ハーマイオニーが直接見えない事も有って多くを聞けた訳では無かったが、けれどもそれについては今回アルバ

ス・ダンブルドアが語っている。

要は二人の語り手によって紡がれた話と、僕自身が彼等のホグワーツ生活の多くを見て来たが故に、僕はハリー・ポッターの四年間を再構成するのは容易かった。

さながら本のように、或いは映画のように、僕の脳裏にはハリー・ポッターが抱いた喜怒哀楽、実際に見たであろう光景は克明に再現されていた。あの英雄が直面したこれまでの脅威、今までの四年間に送ってきた冒険の数々は、当時抱いた感情は、その打倒の仕方は、容易に情景を想像する事が出来たのだ。

そしてそれはアルバス・ダンブルドアの目論見通りであった事だろう。

僕がそれを可能だと見透かした上で、彼はハリー・ポッターについて語っている。これまでの四年間を踏まえ、これからの数年間を動く事を期待している。つくづく嫌な老人であり、けれどもこれからの行動の為に僕に情報を与え、操り糸無しに僕を操作するという観点では、非常に見事な手腕だった。

ただ——アルバス・ダンブルドアは過小評価し過ぎていた。

僕にとってハリー・ポッターが如何なる存在であり、その話を聞く前から、僕が彼についてどんな認識を抱き、価値を見出していたのかを。

アルバス・ダンブルドアは、彼が最初に示唆した目的以上の意図を有していなかった。

彼の目的は、動く気がない己の代わりに、僕からハリー・ポッターに適宜必要な情報を与え、そしてまた、ハリー・ポッターの行動を監視し、制御させる事である。その事だけを考えれば、アルバス・ダンブルドアにとってハリー・ポッターの四年間を語る事は、最小の手間で最大の効率を上げる為の手段であるのは間違いなかった。

しかし、彼は思い出すべきだった。

三年時、シリウス・ブラックへの対応を僕は放棄した。

今では間違いであった事が疑いようもないその選択は、しかしあの時点の僕は正解だと判断していた。それは情報の不足によって僕が

ポッター家の襲撃自体はさして重要では無いと考えていたが故の帰結でもあったが、一番の理由は、僕とアルバス・ダンブルドアの最も優先すべき対象が異なり、目的も異なっていたからである。

確かに僕はアルバス・ダンブルドアと似た部分が有るかもしれない。

しかし僕はアルバス・ダンブルドアでは決して無い。

そしてアルバス・ダンブルドアは自分がハリー・ポッターとした会話の全ては知っているが、ステファン・レッドフィールドがハリー・ポッターとした会話の詳細については、殆ど知らない。概要程度は伝え聞いているだろうが、僕が一番の尊さを見出した部分は、語り手のハリー・ポッター自身は重要だと思わなかった筈である。故にハリー・ポッターを通してアルバス・ダンブルドアに伝わっているという事はまず有り得ず、結果として彼の思惑を潰す最悪の手を打った。一応、この老人が語る事実自体にも重要な部分が無かった訳ではない。

新たに判明した最重要の事実は、透明マントと忍びの地図の存在か。

その二つの魔道具については、所有者であるハリー・ポッターが僕にその存在を明かすのに同意しなかっただろうし、流石にハーマイオニー自身も僕に語るべきでないと判断した事だろう。僕は今まで知らなかったし、知らないままであれば、彼等が何処までの事をやれるかという点において、今後何かを間違えた可能性が高いと言える。

けれども、やはり此度で最も貴重で最大の武器となるのは、アルバス・ダンブルドアが簡略化した事実以上の事を語った部分であり、そしてハリー・ポッターという物語だった。

彼の物語を聞いて僕が抱いた感想を、一言で表すのは難しい。

それでも敢えて表現するとすれば——やはり感動、ないしは感銘とするべきなのだろう。

——そして長い話が終わる。

アルバス・ダンブルドアが話している内に時計を見る余裕など無かったが、相当の時間が経ったようである。夏が終わり初め、昼が短くなりつつある八月である事を考えても、既に日は傾き始めている。夜には戻ると言った身だが、この分ではその予定を遵守出来るかどうか怪しい。セドリック・ダイゴリーの家を辞して以降の、適当な攪乱工作の時間すら取れるかすら微妙だ。精々ドラコ・マルフォイが怪しんでくれない事に期待するしかない。

微妙な内心における不安と、しかし危険を冒す意味は有ったという複雑な心情を他所に、アルバス・ダンブルドアは続けた。

「君は二年前、誰が過去に秘密の部屋を開いたかを聞かなかった。ヴォルデモートと知る事で十分とした。けれどもこうなってしまった今、君は知っておかねばならぬ。トム・マールヴォロ・リドル。五十年程前に君の先輩であったあやつこそが、魔法戦争を引き起こし、今年セドリック・ダイゴリーを殺して復活を遂げたヴォルデモートなのじゃ」

この老人と違い、今をもって尚僕が知っておく必要が有るかは疑問に思っているのだが、確かにここ以外で闇の帝王の正体を知る事は出来なかっただろう。

ハリー・ポッターに聞くのは流石に論外で、その事実をハーマイオニーが知っている事も確定させたくはない。スネイプ教授は主君の素性を知っているか解らず、そもそも知っていたところで絶対に教えてくれないしなかった。ただアルバス・ダンブルドアだけが、僕に対して、闇の帝王も過去は単なる一生徒に過ぎなかったのだと主張し得た。

「そしてここからはハリーとは話し合っていない部分であるが、これまでの情報で、君はヴォルデモートがどんな人間であるかある程度察せたかと思う」

「……これもまた貴方の思惑と計画の一部ですか」

「寧ろこちらの方が本命と言えるかも知れんの。ヴォルデモートがど

ういう人間であるかを知れば、君が助かる可能性は総合的に見て上げるのじゃから」

強張った声色の僕の言葉に、飄々とした調子で老人は嘯いてみせる。

「しかも君は儂と違ってスリザリンの人間じゃ。であれば、トム・マルヴォロ・リドルという名について並々ならぬ関心を抱いた事であろうと思う。特に儂はあやつの出生を最初から知っておるが、君は知らぬからの」

「……まあ、会った事が無い以上、まずは客観的情報から推論するしかないですからね」

名は体を表すという格言に個人的に賛同は出来ないが、それでも名には人の祈りが籠められている。そこから読み取れる情報が無い訳では無い。

そしてトム・マルヴォロ・リドルが後世ヴォルデモート卿に成った事を想えば、闇に葬られたかつての名が持つ意味合いというのは非常に大きい。

「確かに奇妙な名前です。その姓は明らかに純血とは思えないし、何処の家系図でも見た覚えはない。そして更に興味深く有るのは、マルヴォロという名を有している人間を、僕はサラザール・スリザリンの末裔を名乗っていた名家の名前で見た記憶が有る」

「……流石にスリザリンじゃな」

素直な称賛と解る言葉に軽く苦笑する。

アルバス・ダンブルドアにしては、今回は過大評価が多いようだった。

「普通は気付きませんよ。社交界で会った事の無い人間、それも滅んだ家系の人間の個人名まで一々覚えている人間など、今のスリザリン全てを探してもまず居ないでしょう」

次期当主のマルフォイは当然、現当主のルシウス・マルフォイ氏として記憶してはいない筈だ。

それは彼等にとって既に歴史に消えて覚える必要のなくなった名であり、臣下の誰かが、或いは屋敷しもべ妖精が知っていれば不名誉

にならない程度の価値しか持たない。

「しかし、色々注目を集めるゴーント家であれば別です。イゾルト・セイアとその子孫達は大っぴらに過去を語りませんが、四百年近くの時間は歴史家が彼女の過去に辿り着くのは十分です。当然僕も知っており、他の家の家系図よりは真剣に見ましたよ」

リーニャ・スチュワードの願いとされる伝説も虚しく、ゴーント家の血はこの国に保存されており、しかし、その血は五十年程前、アズカバンの中で絶えた。サラザール・スリザリンの最も濃い血を引いていた者達は歴史の中に消え去った。

いや、この老人の反応から察するに、全てが消え去った訳では無かったのだろう。

「そして僕自身、トム・マールヴオロ・リドルという名前に見覚えがあったのも大きい。実を言えば、僕は今この時まで何故ゴーント家の家系図を見た時に引掛かりを覚えたのか気付いていませんでしたが、成程、見た事が有る名であれば納得だ」

「リドルの名を？ 君は一体何処で見たのかね」

鋭い追及の言葉。

当然の警戒だと思うが、問題に思う必要は無いと肩を竦める。

「優秀で如才ないスリザリン生は、後輩の学習に役立つように自身のノートや研究メモを残します。その際、自分の署名だったり、少し捻って綽名やイニシャルを残す事が有るんですよ。まあスリザリン流の社交であり、一種の御遊びですね。そのような先輩達の遺産こそが、スリザリンを長らく優等生たらしめてきた理由の一つでも有る訳です」

しかし、トム・マールヴオロ・リドルは五十年前の人物である。

それが少なからず役立つという事は、彼が並外れて優秀だった証か、それとも魔法界の進歩が緩やか過ぎるのか。多分、両方が正解なのだろうが。

けれども、眼前の老人は不思議そうに首を捻った。

「……それは何処の寮も少なからずやっておると思うが」

「では聞きますが。ハーマイオニーは僕の学年で最優秀の生徒です。」

その彼女が自身の使ったノートをホグワーツに残していったとして、果たしてそれを読む気になりますか？」

「……そうか。君の言わんとする事は儂にも理解出来たようじゃ」

ハーマイオニーが通常どんなノートを作っているか、この老人は知らないだろう。

けれども、完璧主義の彼女から大体想像は付いたらしく、そしてその通りである。教授の発言を一言一句残らず書き取り、更に自身の調査結果の多くの書き込みを加えた百点以上を目指すノートはそれ自体が山脈と化しており、彼女以外が気軽に読み解けるものではない。

「要はスリザリンは自分の為ではなく、最初から他人に見せる為に作る訳です。半純血が純血の為に作るテスト対策集が典型ですね。優等生向けには、役に立つか不明な個人的な研究結果や発想のメモや走り書きあたりです。確かに何処の寮も似た事はやっていますが、スリザリンは己が名前と恩義を売る為、己が未来の為に作る。籠める情熱と費やす努力が違います」

自分の研究成果をホグワーツに残していけば、後輩達が読む可能性が有る。純血であろうと半純血であろうと、成績の向上という欲求には抗えない。そして、彼等が遺したノート等が有用で有れば、共に残された署名を覚え、その先輩への感謝と好感を抱く事だろう。

また、逆に残してくれたノートやメモに御世話になったのだと後輩側が直接先輩に伝えられたのなら、その先輩が自分に対し、単なるホグワーツの後輩以上の親近感を自分に抱いてくれる事を、後輩側は十分期待し得る。

「もつとも、やはり御遊び程度ですよ。何もやらないよりマシ程度で、金の掛かった寄贈本を残していく純血達の方が実用的なコネを遥かに持っていますからね」

学生時代の些細な助力を一生の恩義と受け取る者は居ない。

話の切っ掛けになる以上の事は、期待すべきでないのが普通だった。

「……しかし、それを聞いて頷ける話もある」

老人は得心行ったという表情を浮かべながら、しみじみと呟いた。

「日記帳の発言からして、あやつは学生だったあの時点でヴォルデモートという名を作っており、けれども、あの名義は自身が嫌っておった筈のトム・マールヴォロ・リドルであった。流石にヴォルデモートと記す訳には行かぬにしろ、何故その名を分霊箱に、つまり殆ど永久に残す真似をしたか疑問で有ったのじゃが、賢きスリザリンならそれが誰かを知れたのじゃな」

——つまり自分の名を知る、新たなスリザリンの継承者を捜す事が出来た。

アルバス・ダンブルドアの呟いた独り言は僕に聞こえなかったが、一先ず追及は終わったらしい。更に言葉を継ぐ気が無いのを確認して、僕から口を開く。

「ただ既に非常に嫌な予感がしているのですが、彼の姓がリドルであるという事は、それはつまり彼は半純血であるのみならず——」

「——君の推測は正しい。彼はゴーンの女系に連なる者じゃ。男系ではない」

その回答に、よりもよってか、と椅子に背を預ける。

女系が必ずしも悪い訳では無い。

マグルの基準をそのまま当て嵌めるのは相当適切さを欠きはするが、この国における現在の君主が女王であり、尚且つ女王の男子が次期国王として戴冠するのが殆ど規定路線である事が示すように、例外は往々にして存在し、その例外を規定するのは強者であり頂点である。

ただ、書籍『生粋の貴族——魔法界家系図』が男児の滅んだ氏を記録しているように、貴族の世界ではやはり男系継承が基本——この国の非魔法界の王にしても、1995年時点現在の王位継承法では、既に長女が居ようとも、後から男児が産まれればその男児が王座を継ぐ。女系はこの国の歴史的経緯により否定する事が出来ず、王制維持の為に已むを得なかったから渋々認めてきたに過ぎない——であって、女系継承が認められる事は余りない。

しかもトム・マールヴォロ・リドルは女系のみならず半純血でもあった。

女系であるが純血であるならば、ゴーント家の相続……と言つても、当時の時点で殆ど衰退しており、継げるのは家名だけだっただろうが、ゴーント家内のみで正当な継承手続が行えなくなつた事に代えて、他の家が相続を承認する事に何ら支障は生じなかつた。だが、半純血である以上、彼を正当な相続人と認める家は存在しない。

そして聖二十八族基準を抜きにしても、狂信的な純血至上主義者として知られていたゴーント家が突然半純血に相続を認めるとは考えづらく、そもそもゴーント家最後の男子がアズカバンに行った罪状はマグル三人の殺害である。故に半純血の男子に対して家内で正当な相続手続が行われたと考える余地は無い。

つまり、トム・マールヴォロ・リドルは二重に資格が無かつた。

確かにサラザール・スリザリンの末裔であり、ゴーント家の血を引いてはいるが、あくまでトム・マールヴォロ・リドルに過ぎず、トム・マールヴォロ・ゴーントとなる余地は一切存在しなかつた。そしてその厄介な身上を理解して、納得出来る部分も有る。

「闇の帝王が純血主義として中途半端では無いかとは常々思つていましたが、それも当然なのでしょうね。彼にとって純血は寧ろ憎悪の対象で、純血主義は政治的に有益だから利用しているに過ぎない。尊ぶべきはサラザール・スリザリンの血の継承、そしてその象徴たる蛇語のみでしょうか」

彼にとって他の聖二十八族の殆どは等しく価値が無い。

プルウェット兄弟を初めとして、純血一族を殺戮するのに何ら躊躇いが無いのも当然だ。逆に半純血に寛容であるのも、自分が半純血であるからという理由のみならず、サラザール・スリザリンの系譜という点で許容される場合が有るとの観点からだろう。

「それも単に自分に都合の良い基準と理屈を振りかざしているに過ぎぬがの」

純血主義を侮蔑している人間に相応しく、老人は冷ややかに切つて捨てる。

「しかし、君もそうじゃと思うが、ヴォルデモートが半純血だからと言つて、そのあやつが純血主義を進める事を君は安易に軽蔑せぬの

じやろう?」

「ええ。貴族Peersというものは所詮、王Kingから血や土地を与えられて力を得た存在ですよ?」

現在名門と呼ばれても、千年程度遡れば有象無象だった貴族など幾らでも居る。この国の王族も、男系で見ればそう大した物ではない。「事実、闇の帝王が何と名乗っているかを聞けば露骨にそれを示しているではないですか。単にヴォル何とかが彼の正式名称などではない。まあ、これは彼がマグルの宗教に触れた事が有るのを前提とした話ですが」

「そこは問題とならぬ。彼はマグルの孤児院で育ったからの」
「……また要らない情報を」

肝心な事は口が重い割に、自分にとって重要でないものの他人にとつては危険物以外の何物でもない発言をポンポン投げ込んでくるのはどうにかならないのか。

しかし、その情報が確かならば確かに誤解を生ずる物ではない。
T O M M A R L V O L O R I D D L E .

I A M “L O R D” V O L D E M O R T .

“L o r d”は貴族院House of Lordsだったり、公爵を除く貴族への敬称だったり、高貴なる者の呼びかけとして使われるが、用法としてはそれらのみではない。祈りに代表される特定の場合で使われた時、その言葉はただ一つの存在を表す固有名詞化する。

例You know whoのあの人や、名前He who must not be namedを言つてはいけないあの人の呼び名も同様の観点から分析出来る。遙か昔、e l o h i m、d e u s や a l l a h の呼称が唯一無二で無かったように、彼の登場以前、それらの語句は特定の誰かを指すものでは無かった。一つの名前に限らず数多くの呼称や尊名を持つているのも、その手の存在には良くある事だ。

「……で、その爆弾を僕に知らせたのは貴方の伊達や酔狂では無いのでしょうか?」

闇の帝王の出生の秘密は、分霊箱の秘密より少しマシという程度の危険度である。

死喰い人の中にはそれを知っている者が居るかもしれないが、他人

に口を滑らして自ら死体になりたがる者は居ない。僕が知っている事が露見すれば、何故知ったのかと心を隅々まで探られるで済めば御の字、まずもって拷問死である。

そんな情報を知らせたのだから確たる意図を有する筈であり、実際彼は頷いた。

「そうじゃ。彼は死を恐れると共に、自らが特別な存在足らんとしておった。サラザール・スリザリンの血や蛇語の価値を知る前から、彼は己が他とは違っていると確信しておった。だからこそ、貴族趣味で^{フランス被れ}他国趣味の大仰な名前を付けた」

「スネイプ寮監にも似たような事を言いましたが、僕は余り貴族趣味とは思いませんけどね」

大陸の本国が法文書や行政文書からラテン語を排する姿勢を明確に見せたのは^{せいぜい十六世紀}の勅令以降で、カトリックがミサでのラテン語の要求を放棄したのは^{ほんの三十年前}の公会議以降である。

まあこの国では現在も議会で使用される La Re^王yne le ve^そult^{を欲す}の成句が象徴するように、議会や裁判などの主要な場面では長年ノルマンフレンチが使われてきた訳だが、それでも元のラテン語が決して軽んじられてきた訳ではない。中世におけるグラマースクールの勃興が象徴するようにラテン語は知識人の必須科目であり続けたし、国教会にしても、アングリカン・チャーチの三十九箇条には当然のようにラテン語版が存在している。

「そして貴方の名前の方が余程貴族趣味でしょう、ねえ、^{アルバス}白」
彼の名は旧いラテン語由来である。

「……君とて似たような物じゃろう、^{ステファノス}冠。君は正確にはラテンでは無いが。そもそも伝統有る名前を付けたならば、貴族であるか否か関係無く、その類の由来に行き着くものじゃ」

「まあそれはその通りですが」

ラテンが多数だろうが、他もラテンと並び古典語の双璧たるギリシャ語、そして紀元前から存在する^{ヘブライやアラム語等}旧約聖書関連の言葉あたりからの由来が殆ど。前者はシリウスやナルシッサ、後者はバーテミウス。祖

先が紡いだ前例、旧き名の因習を踏襲する限り、変わり種の名前は意外と無いものだ。

「そして例外も有る。例えば——」

「——四人のホグワーツ創設者でしょうか？」

言葉を引き取った解答に、老人は口を噤む。

「その場合でもやはり貴族趣味にならないと思えますがね。ゴドリック神授の王、ヘルガ祝福、ロウエナ名声と歓喜は何れも違いますが、これはどうでも良い。問題はサラザール古い家も違うようだという事です。スリザリンなんか普通に英語由来でしょうし」

「……つまり君はサラザール・スリザリンは少なくとも、フランス貴族出身の魔法使いなどでは無いと考えているのじゃな」

「あくまでマグル基準の価値観ですがね。反証が有るならば容易に翻しますよ」

断固とした根拠が有って言っている訳ではない。

「ただサラザールSarazarの名にしても、それが今も地名として残る場所はカステイリヤやナバラです。歴史上フランスと無関係だったとは言えませんが、それでもフランス文化どっぷりという場所では無い。ホグワーツ創世期当時なら猶更に」

「……随分と良く知って居るの」

「何処かの図書館に行つて司書に聞けば一発ですよ。飛行機の普及も有つて、ほんの十年か二十年前あたりから、スコットランドやアイルランドで先祖Genealogyの系譜を辿る旅行とやらが人気らしいですから」

親切な司書から借りた人名辞典でグレンジャーを調べるのも、当然苦労はしなかった。

「ちなみに今思いましたでしたが、四創始者の中で一人だけフランス語風の名前を御持ちの方が居ましたよね。フラーによれば “dor” というのは彼女達の国で金を意味するようです。そして奇遇な事に、彼が立てた寮は赤と金を象徴とするようですが」

「……………。確かにそうじゃが、たまたまと似通っていたという場合も有るのではないのかね？ スペルは変わっておるが、儂の姓の由来もその筈じゃ」

この時は知り得なかったが、Dumbledore ダンブルドアはマルハナバチを意味し、その語句はぶんぶん煩い虫を意味する “d o r” から来た物らしい。それを見て、名は体を表す場合もあるのだなとしみじみ思ったものだった。

「そもそも今の発言は、スリザリン生として不適切な失言のように思えるがの」

「流石に他所でこんな不謹慎な言葉は口にしませんよ。僕も発言相手を選ぶ位の脳は有る」

ヴォルデモートVoldemortの名はスリザリンよりも寧ろグリフィンGriffinドールに近いなどという感想を不用意に流せば、普通に怒りを買って殺されるだろう。

「——話が逸れつつあるが、ヴォルデモートがどんな人間で有るかは君も理解したようじゃ」

アルバス・ダンブルドアは僕から眼を逸らし、軌道修正する。

「儂は今、君にヴォルデモートについて多くを伝えた。あやつは自身が純血主義の下では恥ずべき半純血で有った事、マグルの父の血と平凡な名を嫌っていた事、大仰で非人間的な名を自称する程特別に固執していた事を君は知った」

半ば独白めいたように中空を見詰めながら、滔々と老人は語る。

「それらを踏まえた時、今回の事件で一つ奇妙な事が有ると言えぬかね？ 仮に儂がその復活の魔法薬に必要とされる材料を知っていたとすれば、ヴォルデモートが今回の事件で先のような復活手段を用いるだろうと考える余地がどれだけあるだろうか？」

「——っ。まさか貴方はハリー・ポッターが材料として使われる可能性、殺害ではなく誘拐が目的である可能性を想定しながら、今回の事件を止められなかったと——」

激昂した言葉は途中で力無く途切れた。

アルバス・ダンブルドアの真意を理解してしまったからだ。

かつてトム・マールヴォロ・リドルであったヴォルデモート卿。日記の発言等から伺える彼の人物像を想う時、此度は奇妙どころか異常でしかなかった。血、肉、骨。それらを不可欠の材料とした魔法薬に

ついで、明確に可笑しな部分がある。

僕の反応を見てとったアルバス・ダンブルドアは、余計に厳しくなった表情で解答を紡ぐ。

「何故そのヴォルデモートが自分の父の骨を使うのかね？」

……嗚呼、〃Lord Voldemort〃の人物像を考えた時、それは可笑しいのだ。

「僕の肉。敵の血。それらの解釈が広い事は明らかじやろう。ならば、父の骨に関しても素直に遺伝上の代物を使う道理が何処に有ろう？ 真に特別を追及する気ならば、あやつが尊ぶサラザール・スリザリンの骨を使うべきではなからうか？」

一理有るところの話ではない。そう思ってしまう。

観方によっては、今回は〃穢れた〃肉体を捨てる絶好の機会であった筈なのだ。

他人の骨や血肉を使うのは半ば儀式的な物に過ぎないとしても、復活した肉体が減んだ肉体と同一である事を証明する事は誰にも出来ない。言葉遊びに過ぎないとしても、今回の特別な復活の儀式によって闇の帝王が古い肉体を捨てたのだと主張すれば、臣下である死喰い人は内心はどうあれ、それを受け容れざるを得ない。

けれども今回、彼は父親の骨を、彼が忌み嫌うマグルの骨を用いた。誰がどう見ても、半純血の穢れた肉体を取り戻したとしか——寧ろ更に魔法使いとしての血の純度を低下させたとしか考えられない手段を選んだ。

「僕の肉に関しても同様の事が言えるじやろう。ペティグリユールの肉を用いたじゃと？ あのこそそそとした臆病で卑劣な魔法使いは、ヴォルデモートが最も忌み嫌う類の人間では無からうか？ そのような肉を自分に取り込むのを善しとする程、あの男は墮ちたというのか？」

「……しかし三分の一、ハリー・ポッターの血は一級の材料でしょう？」

反論というより素直な感想だったのだが、何故か彼は更に苛立った様子で吐き捨てた。

「それこそ成績が良いだけの馬鹿が犯した大いなる過ちじゃ……！」
彼がマグル生まれのリリーの血を引いている事は、あやつに流れる穢れた血を更に濃くした事は、この際無視してやっても良い。しかし、よりにもよってあやつがハリーの血を使うのは、百味ビーンズの耳糞味、いやゴキブリゴソゴソ豆板を進んで身に入れるような所業——」

流石にその言葉は視線でもって咎める。

それを理解してか、アルバス・ダンブルドアはそっぽを向きつつ答えた。

「……今のは元より君が知っておくべき内容じゃった。儂は失言をしておらぬよ」

「……そうですか」

その言葉を聞いて余計に気が沈んでしまったのは否めない。

闇の帝王がハリー・ポッターの血を取り込んだ事を、アルバス・ダンブルドアは致命的な間違いだと評している。それが軽い意味を持つとは到底思えない。今意味が解らずとも、非常に重要な事実で、そして何れそれが証明される事が予言されたに等しいからだ。

「ただ闇の帝王が三つ全てが三流の材料である魔法薬で復活したというならば、かつてよりも質の悪い肉体であるという事は無いのですか？」

アルバス・ダンブルドアの理屈を前提とすればそういう結論になる。

そう思うからこそ期待して問うたのだが、答える瞬間だけは一気に老けたように見えた。

「……美学として問題なだけで、材料として不適合という訳ではない。魔法薬は完璧に効果を発揮した。分霊箱によって彼の魂は損なわれただまじやが、しかし、頭脳と魔法力は無傷じゃろうと儂は考えておるし、実際にあやつに会ったセブルスも同様の見立てをしておる」

「分霊箱消滅の影響は？ 彼は既に魂の欠片を一つ喪ったでしょう？」

「それも影響は無さそうじゃ。ヴォルデモート卿は完全復活したと

言って良い」

「……それも可笑しな気がしますけどね」

魂、肉体、精神、そして魔法力の間にかく相関関係がないなら、その理屈は成り立ちうる。

しかし、分霊箱を複数作った彼は、容貌が変化したという。

つまり、魂と肉体には少なからず相関関係が存在する。であれば、分霊箱に収めた魂が一部この世から喪われたのならば、肉体や魔法力にも何らかの影響が出るのが寧ろ自然に思えるし、具体的には弱体化して良さそうだが——闇の帝王には、そのような事は無いらしい。

或いは、破壊されたからと言って現世から喪われたと考える事自体が間違いなのか。

「……それで、闇の帝王がかつての主義主張に反した、いわば墮落した手段を使った事が何の意味が在るのです？ まさか自分の失態を正当化しようとした訳では無いでしょう？」

と言っても、内心では彼が見誤ったのもやむを得ないと感じてはいない。

ハリー・ポッターに何ら思い入れの無い僕はアルバス・ダンブルドア程に樂觀視しないだろうが、それでもそのような復活の可能性は低いと判断するだろう。

老人は、最強の魔法戦士にして今世紀最大の賢者は大きく頷く。

「要するにの、ヴォルデモートは一貫性を欠いたのじゃ」

眼鏡の奥の青色に浮かぶのは軽蔑。更には落胆。

十年戦い続けた相手に対して、今世紀最強の魔法戦士は語気荒く吐き捨てる。

「簡潔に表現するならば、あやつは妥協した。本来の在り方を忘れ、自分の道を曲げた。その事について、君は柔軟性が有ったと評するやもしれぬ。しかし、儂等の妥協と一般人の妥協は違うのじゃ。望めば数多くの事を出来、また遺憾ながら片手間でも大概の事は叶えられてしまふからこそ、断じて妥協してはならぬと、そう自制しておかねばならぬ」

「……つまり、貴方がたの妥協は油断や失念に繋がると？」

「然り」

アルバス・ダンブルドアは肯定する。

「妥協は気楽で容易じゃ。そして多くの場合、儂等にとってそれが問題となりはしない。儂等は多少の支障が生じようとも、大概は力押しだけで解決出来るからう。けれども、それが問題となる極少数の場合には有り得る。そして儂等が力でどうにも出来ぬ物事というのは、それ即ち、儂等に致命的な結末を招来する脅威以外の何物でもないのじゃ」

「……………」

「特に己が何者であるべきかというのは絶対にブレてはならぬ。その揺らぎが生むのは隙であり、弱さである。今回ヴォルデモートは自分が特別で在らんとした原点を忘れ、マグルの骨と臆病者の肉と半純血の血を取り入れた事により、自らの滅びへと歩みを進めた」

十四年前も同じじゃった、と老人は冷酷に評する。

「ヴォルデモートは細心の注意を払い、分霊箱や他の数々の護りによつて己から死を遠ざけようとした。儂がどう思うかは別として、あやつは自身を無敵に等しいと考えておつた筈じゃ。しかし、同時にその事に誰よりも自信を持っていなかつたのもまたあやつなのじゃ。結果、短慮で拙速な行動を犯した挙句、身をもって代償を支払う羽目になつた」

十四年前。

史上最悪の魔法使いは、わずか一歳の赤子の前に敗北した。

この老人は、それを当然の宿命だと評する。特別で、超越的で、唯一絶対だと自負していた筈の存在が、矮小で狭量な一般人と同じ行動を選択したが故の末路だと断言する。

「君にも肝に銘じていて欲しいが、あやつの際と弱点はそこに在る。実際、あやつの不死の護りは今や分霊箱のみになつた。そして、あやつは過去に身に着けていた不死の魔法的護りについて、最早興味は抱くまい。十四年前の身をもつての実験で役に立たなかつたのじやから。故に分霊箱さえ破壊すれば、あれを殺しうる」

「…………まあ、不死を求める人間が分霊箱種類の保険のみで満足する筈が無

いのは解り切った事です。貴方の見立てでは、他の不死の呪いの可能性は検討しなくて良いと?」

「あれが受けたのは単なる死の呪文ではない。史上最悪の魔法使いが放った死の呪文じゃ。あの時あやつ肉体に刻まれていた種々の護りは、まず間違いない全てが破壊された。その影響を受けなかったのは、事前に分かれたれていたが為に呪文の効果を受けない分霊箱だけじゃ」

思えば、リリー・エバンズはハリー・ポッターに命を犠牲にした護りをかけたにも拘わらず、呪文を完全に防ぎ切れていない。彼には特徴的な額の傷が残っているからだ。

つまり闇の帝王の呪文は愛の守護を貫く寸前までは行った訳で、同じ死の結果を齎す手段でも心臓を一突きと全身を滅多刺しとは異なるように、ヴォルデモート卿の死の呪文は他と同じように考えるべきではないのだろう。

そんな推測を聞いて、そう言えばと思い出した。

「……バーテミウス・クラウチ・ジュニアは、死の呪文を受けて唯一生き残った人間はハリー・ポッターだと言っていました」

「ハリーに掛けられたリリーの愛の護りは死の呪文を反射した。故に正常な形で呪文の効果を受けた訳では無い。だから、死の呪文を受けて唯一生き残ったのは、やはりヴォルデモート一人だというべきじゃろうな」

勿論、その「称賛」は、分霊箱を作った上で死の呪文を受けた事のある人間が存在しない事を前提とするのだが。しかしながら、恐らくそんな人間は居ないだろう。

「ヴォルデモートが何れ分霊箱以上の不死を追い求める事自体は儂も否定せぬ。しかし此度の戦争中は——流石に何十年も続けば別じやが、あれを滅ぼす障害は分霊箱のみとして良いと思う。手頃な不死の企みは、第一次魔法戦争前に試しておる筈じゃからの」

「……まあ、そう簡単に不死の秘密が見付かるならば苦勞はしませんよね。戦争の片手間に搜索、研究するのは、どう考えても困難でしょう」

少なくともこの国の大半を支配した後でなければ、闇の帝王が自由に動く事は叶うまい。

特に闇の帝王の復活が否定されている現状、自国であろうと他国であろうと、フラフラ動いた挙句に姿を目撃されるか、魔法で変装を剥がされたら只の阿呆である。彼の復活が公的に秘されている事は、アルバス・ダンブルドアの陣営にとつても悪い事ばかりではないのだから。

「ユニコーンの血や賢者の石も最早必要とせぬ。ここで明言しておくが、あやつは一人で物事を為したがる性格をしておる。血も石も、継続的な摂取という呪いからは逃れられぬ。その手の不死には、自分の肉体を取り戻す為の手段として以上に関心を寄せはしまい」

「……別にその事に異議を唱えませんが、分霊箱を考えれば大丈夫だという考え自体にも反対は余りする気はないんですが、僕が聞いておく必要が有る気がするのは別の事です」

彼が求める手頃な不死は近場にそう無い。

けれども、ただ一つ。

ハリー・ポッターについて聞いた今の僕には、それが思い当たってしまう。

「——『吟遊詩人ビードルの物語』、その三人兄弟と死の物語は？」

その瞬間、老人は非常に大きな反応を示した。

表情や仕草に現れた訳では無い。寧ろ、それらの部分については完璧に制御し切っていた。しかしそれでもその瞳が、それまで透き通っていた蒼色が、今や溝や肥溜めが如く濁り切り、僕をして直視をしたくないと思ってしまう程の嫌悪感と拒否感を掻き立てていた。

「……第二の課題であのような仮説を提示する事によって生半可な校内の反論を尽く封殺し、その一方で同時に多種多様な活性化を引き起こした君であれば、それを指摘しても何ら不思議では無いと言うべきじゃろうな」

「……………その事は今は良いでしょう」

頬が引き攣るが、何とか捻じ伏せて言葉が続ける。

そして後半部は僕の周りでは知らないが、少なくともこの老人の口

から聞きたくはなかった。

「透明マント自体は非常に稀少であれ、貴方がわざわざ借り受ける程の品だとは思えない。そもそも普通の品ならば、子が相続出来る程に効果は続かない。そして伝説の決闘について、貴方がゲラート・グリンデルバルトから杖を勝ち取ったという表現を——その筆者は単に有りふれた慣用的比喻表現を用いただけでしょうが——見た事が有る」

仮説が正しいという前提になるが、最低でも二つは近場に在りそうだ。

そして三人兄弟の同定に尽力してきた歴史家達が、物語のモチーフになった可能性が高い家系としてペベレル家、ゴドリックの谷に住んでいた魔法使いを挙げている事を考えれば、そして少なくともゴドリックの谷に住んでいたポッター家の持つ透明マントが本物である可能性が高いなら、残りがこの国の何処かに眠っていたとしても何ら不思議では無い。

「それを踏まえた上で聞きますが、死の秘宝は今回の戦争に関わる道具ですか？」

「……それは考えなくても良い」

今も襲う内心の動揺を、この老人は強靱な精神力で捻じ伏せている。

ただそれでも、その言葉が多大な苦勞をもって紡がれたのが伝わってきた。

「ヴォルデモートは君とは違う。あやつはマグルの孤児院で育った以上、魔法使いの子供が聞かされるようなビードルの物語を知っている筈が無い。仮に知ったとしても、歴史がその存在を語らない魔法具に興味を示す筈が無い」

「それはどの程度確信できますか？ ハリー・ポッターの手許に伝説の証拠らしき一部が存在する以上、後から興味を持たれるような真似は御免なのですが」

「君自身が御伽噺に命を預けられるか。それを問うだけで十分ではないかね？」

「……良く考えればそうですね。死の秘宝の伝説が嘘ならば死ぬ訳ですし」

そもそも三つ集めたら不死となるという話は物語中には出て来ないし、そして三人の兄弟の物語は、末弟まで含めて全員が『死』の手に掛かり、この世を去った事を伝えている。死を制する者という表現は、何らかの寓意を含んでいると考えるのが妥当であろう。

……嗚呼、妥当の筈なのだが、何か引っ掛かる。

先の反応からして、この老人が死の秘宝に何らかの強い関心を抱いているのは明白だった。ジェームズ・ポッターからわざわざ透明マントを借り受けたというのも気に掛かる。そして、この老人は僕にそれらの事実を隠蔽出来るとは考えていなくとも、せめて核心部まで看破させる事は避けたいと誤魔化そうとしている。

故に老人の言葉を額面通りに受け取るべきではないという感じが出てはなかったが、かと言って今すぐこの隠し事の多い老人をつつけるような理屈が浮かばない。何とか捻り出せないかと少しの間考えたが、今僕が想像している「ヴォルデモート卿」の人物像を考える限りは、死の秘法の三つの何れも欲する事が無いように思えるのは確かなのだ。その点に関して、アルバス・ダンブルドアは嘘を言っている素振りも見られなかった。

だから仕方ないと一息吐き、当初の話題へと舞い戻る。

「……ともあれ、これから貴方が紡ぐであろう偉大な計画の大枠は解りましたよ」

そして、此度の会談の主題と価値も判明した。

今回は負けた。犠牲は大きかった。

けれども、闇の帝王の弱点も同時に明確となり、指針も明瞭になった。

「ならば後は分霊箱の目星ですが。あれから二年です。三大魔法学校対抗試合という邪魔が有ったとはいえ、この間何もしていなかったという訳ではないですよね？」

僕の問いに、瞳を煌めかせながら老人は頷いた。

今度は大魔法使いに相応しい、冬の夜空のような瞳だった。

「そうでもあり、一部は違う。儂は前回の戦争以前からヴォルデモートの過去、卒業後の動向について関心を持っておった。あやつ就職先は何らかの目的を感じさせる物で、最後に平和的に会話した時点でも、あの男が良からぬ事を企んで居るのは明白だったからの」

「……正直言つて、何を分霊箱にしたかを知る事は非常に困難だったと思つていたのですが。特に複数作つたと貴方が推測しているならば猶更の話です」

「確かに二年前から動いたならば掴むのは困難じゃつたらう。それを語り得た証言者の中には既に死人がおる。しかし、幸運な事に儂は彼等の記憶を得ている。自画自賛となるが、儂以外には易々と出来ぬ仕事じゃつたらう。あやつの不死の探究の痕跡を辿れば、膨大な人間に会う羽目になつたからの」

実際、砂漠から砂粒を探し出すような苦労だった事だろう。

けれども、アルバス・ダンブルドアは得たのだ。闇の帝王にとっての分霊箱——自身の魂が執着し、固着しうるような資格の有る、文物についての情報を。

「……貴方は本当に恐ろしい人間だと思えますよ」

純粋な称賛の言葉が漏れ出る事を、流石の僕にも止められなかった。

何の枷も課せられず、かつ正気で在る限りにおいては、この今世紀で最も偉大な魔法使いは正真正銘の怪物である。その一点を思う限り、ハリー・ポッターが死んでいた方が余程世界にとって良い方向に向かつたのではないかという感慨すら抱く程だった。

「当たりは付けていたでしょうが、確信は持つていた訳でもないのでしょうか？」

「そうじゃな。どれか一つが分霊箱にされたという可能性は常に頭の中に在った。その一つに分霊箱として相応しい格を持つた品も有つたしの。しかし、一点賭けは余りしたくないのも確かじゃつた。あやつが薄汚い鳥よろしく戦利品トロフィーを集める事は昔から知つておつたからの」

「……個数は？ 言えないならば構いませんが」

「確實なのは日記も含めて三じや。つまり魂は最低四つに分割されておる」

速やかに紡がれたアルバス・ダンブルドアの回答には、流石に直ぐに返答出来なかった。

「……無茶苦茶な話だ。そこまで魔道に堕ちる事が出来た人間は、絶対に彼一人でしょう」

「それは儂をもつてしても否定出来ぬの。分霊箱を複数作った者は居ない。その記述を読めば読む程に、あやつが色々な意味で規格外である事を思い知らされる」

そして確實なのは、という前置きを付けたのを考える限り、不確定なのが幾つか存在する、つまりこの老人は三つ以上分霊箱を作ったと推測しているという事だ。

「ただ、それ程の力量を持つ魔法使いです。僕は二年前にも、魂はいわば形而上学的な代物では無いかと指摘しましたが、三個作れるならば五個や十個も作れると考える方が論理的でしょう。端的に表現すれば、僕は魂の無限性や不可分性を信じている」

「……魂を分割するのに際し、分数の理屈は適用されぬと考えておるのじやな」

「たとえば日記を作る際に二等分したならば、本体と日記の区別は何処に存在します？ 肉体を持つている魂の半分が、自己を本体かつ特別な唯一無二だと定義する理屈は？ 箒が自ら飛ぶ世界で、魂入りの日記帳が動かない理由は？ 人が死ねば肉体はこの世界に置いていかれ、ギリシヤ人プラトンは肉体を魂の牢獄と評したというのに、何故たかが肉の塊を特別視し、他の物質を蔑視するのです？」

そして今回闇の帝王が復活して証明してみせたように、肉体はこの世から跡形も無く消滅したとしても、魔法的に再生出来る程度の代物ではない。

「そもそも二等分という考えが、魂を無意識の内に均一な球体として想定しているようで余り気に入らない。自分の肉体を秤や定規を使って二分したとしても、分割した二個は明確に非対称でしょう？

魂がそうでないという証明は存在しない筈だ」

分霊箱はいわばこの世に魂を縛り付ける為の錨、或いは楔みたいな物であつて、しかも内包される魂は分割されながらも一個であるというのが僕の想定に一番近い。

「興味深い。興味深いが……僕は君の説、さながら一体説とでも呼ぶべき考えには、寧ろ反対する立場を取つておると言えるじやろう。しかし、ここは魂についての議論を戦わせる場では無い。それは互いに同意出来ると思うし、儂がそう思うのには他にも理由が有る」

軽く顎を引く事です承と譲歩を示せば、アルバス・ダンブルドアは話を進めた。

「あれだけ死を恐れた男の事じゃ。分霊箱が無数に、自分の力の及ぶ限り作れると考えていたのならばさっさと数を揃えていたに違い無い。けれどもあの男の足跡を儂が辿つた限りにおいては、そのような素振りは一切見られぬ」

「……確かに理屈の上では、数が増えれば増える程に保険もまた増える訳ですが。しかし、闇の帝王はそうした訳では無かつたと？」

「左様。あやつは分霊箱の作成を非常に勿体ぶつておつた。分霊箱となる物の選定と同様、自身の魂を切り分ける死は特別で無ければならぬと信奉していた筈じゃ」

「貴方が語つた闇の帝王の人物像からすればそうしただろうというのには僕も同意出来る所ですが、だからと言って分霊箱の作成の自重には繋がらないとは思いますが」

最初の一個、恐らく唯一正式な手続によつて作成された真なる分霊箱トム・マールヴォロ・リドルの日記は問題無く機能するだろうと言っても、過剰な程に死を恐れる心配症ならば、犠牲の羊の質が多少悪かろうと分霊箱の作成を優先するような気がして仕方が無い。

けれども、アルバス・ダンブルドアは嘆息しつつ答えた。

「君の指摘通り、確たる証拠はない。しかし儂の推量によれば、ヴォルデモートは最初に分霊箱を作成してから、あやつが魔法戦争中における最後の分霊箱を作ろうとするまで、三十年以上の時間を空けたように思う。無数に造れると考えていればまず有り得ぬ行動じゃ」

「三十年以上もの間、無数の分霊箱を作り続けたの間違いでは？」

「君ならそう主張するだろうとは解っておった。だがそれでも儂の推測を君に伝えておくべきだとは思っておる。儂の推量が誤りだと判断すれば君はそのように動けば良いし、そもそも君とて切り分けられる側の魂の無限を信じはすれど、切り分ける側の人為の全能は信じまい」

「……貴方の言葉通り、分霊箱を作るのに限界が有るといふ方が都合が良いのは確かです。そしてやはり、分霊箱は一人一個という第一原則を忘れるべきではないのでしょうか」

あくまで闇の帝王は例外中の例外。

彼もまた人であった以上、何処かで頭打ちが来るのは確かなのだろう。

だから問題は幾つ存在するか、或いは存在させようとしたかという点だが――

「――手掛かりは有る。元々分霊箱の存在を知っていた筈のあやつが、不審な言動をしたと見える一度が存在する。今の所の最有力はそれじゃ。……無論、それが当てにならないと解れば、他を探すか、最悪の場合は片っ端から破壊して我慢比べをする羽目になるが」

「……そうですか。まあ、今見付かっていないのだから今後も無理だろうとは言いませんよ。貴方がそれを出来る人間だというのは知っていますし」

毅然として答える老人に、軽く肩を竦める。

恐らく僕の関わりの無い事であると思われる。

闇の帝王の分霊箱が何個あるうが、スリザリンに在籍して死喰い人達の眼が届きやすい僕が露骨に近付くのは宜しくない。探す隙も無いだろうし、手掛かりを握っているのはこの老人である。故にアルバス・ダンブルドアが、或いはハリー・ポッターが見付けるべき解答だった。

そして、僕が知る彼等ならば、間違いなく突き止めてみせるのだろう。

「これ程の答えを明かしたのは、君一人じゃ」

漸く話は纏めに入ろうとしているのだろう。

アルバス・ダンブルドアは静かに、感情を敢えて押し殺した声色で言った。

「不死鳥の騎士団とて誰も知らぬ。アラスターも、ミネルバも、シリウスも、アーサーも、勿論セブルスも。分霊箱の脅威を体験し、儂すら欺く閉心術の腕前を有し、その身に愛を知り、これまで散々儂とやり合ってきた君に対してだけ、儂はこれらの事を打ち明けておる」

「……随分とまあ信頼された物ですね。今までの貴方の僕への対応からすれば、寧ろ逆の事を想っているように思いましたが」

「クラウチジュニアは一年じゃ。しかし儂は四年、君の事を見てきた。儂にとっても君は余り都合の良い存在では無かったが、君が簡単に闇の陣営に付く人間でない事は理解しておる。でなければ二年前に分霊箱を話題に出すような真似はしておらぬよ」

「ハーマイオニーが居るからという理由は挙げないのですね」

「どの道彼女が死んだとすれば、君は余計にヴォルデモートへと意趣返しをせずにはいられまい。儂はそう思っておるから、その指摘は全くの的外れじゃ」

僕の皮肉をするりと受け流して老人は続けた。

「無論、計画は所詮計画ではある。今後実行に移すにあたって問題は生じるじやろうし、実行する事自体、そして求める結果を実現する事自体が最も困難であるのは揺るがぬ事実じゃ。けれども、君が考える程にヴォルデモートは無敵の存在ではない。儂は今度こそあやつを滅ぼせると思うておる」

「……そうなのでしょね。今の御話を聞く限り、その可能性は存在しているように思える」

アルバス・ダンブルドアは僕に全てを明かしておらずとも、現時点で闇の帝王を滅ぼす為の道筋は大方が示された。そしてこの老人が僕に敢えて隠したという事は、要は分霊箱の秘密を僕に明かすよりも重要な事実が眠っているという事である。どう考えても、アルバス・

ダンブルドアが既に闇の帝王に対して致命傷を与えうる武器を握っているのは明白だった。

そしてそれ以上に、改めて向かいあってみて、この老人が過去の遺物などではない事は思い知れた。最初にそう呼ばれた時から五十年近く経って尚、この大魔法使いは今世紀で最も偉大な魔法使いのままであり、何の策も無く敵に回すべき類の人間ではない。

「君には君なりの思惑が有ろう」

アルバス・ダンブルドアは静かに是認する。

「しかし、マルフォイと共に歩み、ヴォルデモートの臣下になった所で、君に待っているのは深い奈落じゃ。そこには君の明るい未来が待ってなどいない」

「……………」

「闇の魔術に熟達した人間がカッコいいなど思われる事も有らぬ。このまま君がハーマイオニーと共に居たいと少しでも思うのならば——」

「——スネイプ教授の後追いをする必要は無い、ですか？」

僕の言葉に、彼は素早く口を閉ざした。

別に刺々しい口調で問うた訳では無かった。けれど、まるで叱られた子供のような反応を老人は見せ、一瞬だけであれども大賢者の威厳は忽然と消えていた。

この老人は、僕とセブルス・スネイプ教授との関係性——シリウス・ブラックがホグワーツから逃げ去った後、御互いに弱点を握り合った事を知らない。そして知らないが故に、軽々しく僕達について踏み込んでしまった。

同じくマグル生まれに惹かれた御互いが抱く感情、嫌悪と共感、軽蔑と敬意などを丸ごと言語化出来る気はしないのだが、それでもどんなに言葉を尽くしても、この老人には決して理解出来ないだろう。多少違えども、殆ど同じ立場に居る者だけが通じ合える理だった。

「分霊箱については理解しました」

動揺を収め切れていない老人を無視して、先の話題を続ける。

「僕風情が評価するのは多少傲慢な気もしますが、貴方の計画にそう

簡単に隙は見えないように思える。仮に闇の帝王の分霊箱が百個存在しているようが、貴方であればその全てを破壊してみせる所までは行き付くのでしょうか」

今世紀で最も偉大な魔法使いは、多分それを出来る。

「しかし、闇の帝王本体を打倒する手段について、僕はまだ御聞きしていない。と言つても、今興味が有るのは一つです。ハリー・ポッターが十四年前にやったように、闇の帝王に適当な子供へ死の呪文を撃たせ、呪文を反射させる事でもって滅ぼすのは可能ですか？」

問われたアルバス・ダンブルドアは今日初めて迷いの色を見せた。

答えて良いのか、それとも口を噤むべきなのか。

言葉に反して僕が左程興味を持つている様子を見せていないにも拘わらず、何故僕はそんな事を問うたのか。そもそも闇の帝王をどう倒すかなど真つ当な不死鳥の騎士団であればわざわざ問わない類の質問だろうに、今世紀で最も偉大な魔法使いの力量を良く知る僕が敢えて口にした理由は何処に有るのか。老人は悩み、そして決断を下した。

「……君らしい非道な発想であるが、それは出来ぬじやろう」

歯切れが悪いながらも、アルバス・ダンブルドアは答える事を選んだ。

「愛の護りを掛ける為には、死ぬ必要が無いのに命を捧げなければならぬ。すなわち、犠牲となる者に生きる選択肢が与えられ、しかし深い愛情から意識的に死を選択し、命を散らす事が必要となる。君が適当な親と子を用意したとしてもヴォルデモートの呪文を防ぐ事は出来ぬし、それはあやつが数多くの家族を殺した事からも証明される」

……そうか。

犠牲の保護については何時だったか推量を巡らせていたが、つまりリリー・エバンスの選択こそが十四年前の奇蹟の鍵だった訳か。

「しかし選択肢が必要、ですか。可能性だけを言えば、ジェームズ・ポッターにも生きる選択肢は有ったでしょう？ かつてピーター・ペティグリューがそうしたように、闇の帝王の脅威を前に彼が妻子を見

捨て、自分の命を選択する事は有り得た」

アルバス・ダンブルドアは今更僕の真意に気付いたようだが、既に遅かった。

僕の興味は愛の守護呪文が有効か否かという部分に関心は無く、それが何故機能しえたのかという事から必然的に導かれる先にこそ存在していた。

「ジェームズ・ポッターが妻子を見捨てる可能性は零だったという反論は不適當だ。何故ならリリー・エバンズも我が子を見捨てる可能性は零だった筈でしょうから。ならば、彼等の違い、両親の愛でも父親の愛でもなく、母親の愛こそが犠牲の守護呪文を構築した理由は何処にあるのでしょうか？」

「――」
今度は老人は答えず、けれども僕は最早答えを欲していなかった。

「たとえば、こんな仮説はどうでしょう？ 闇の帝王がリリー・エバンズの命を保証——まあ間違いない、杖を向けて立ち塞がらない限りという条件付きでしょうが——する事を誰かと契約、或いは宣言していたのならば。それはジェームズ・ポッターとリリー・エバンズの決定的な差異、彼等の生死について選択肢の有無を説明しうるでしょう」
その場合、これまで闇の帝王が、或いは死喰い人達が家族皆殺しにしてきたにも拘わらず、他に愛の犠牲によって生存した子供が一人も居ない事に説明が付く。

そしてこの手の魔法が時の流れによって忘れ去られたのにも納得である。

子供の為ならば我が身など惜しくはない親は歴史上数多く居ただろうし、簡単に自分が身代わりになる類の魔法ならば需要も大いに有っただろう。しかし、現実はこのものだ。思う程に便利な魔法ではなく、求められる条件が厳し過ぎ、使い所も限られ過ぎている。

そして、その仮説が正しいとした場合、更に導かれる結論が有る。「リリー・エバンズの生死に利害関係を有し、かつ闇の帝王の意思に干渉出来る余地が有る者。僕が知る限りでは、そんな人物は一人しか居ないと思いますけどね」

「……しかし結局リリーは殺された。ヴォルデモートが約束を守るよ
うな人物でないという事は、最早君に説明など不要じやろう。ハーマ
イオニーの命を救う為にヴォルデモートに付くという選択肢は、やは
り理性的で合理的な君が選ぶに相応しい道では無い」

「果たしてそうでしょうか。たとえ気に入らなかつたら、道化の札を
引くと解つていても、選ぶ余地がないならその札を取るしかないで
しょう。そして元より、狡猾なるスリザリンは、勝ちそうにもない側
には付きたくないと考えるものなのです」

蒼の瞳と、僕の瞳が交錯する。

「……君は僕が負けると考えておるのかね？」

「負けるとは違うかもしれませんが、貴方が勝ち得ない可能性は高い
と思つていますよ」

彼が平凡な人間であるような確認に、僕は微笑む。

「確証を得るには十分な事を聞きました。だからこそ、自信をもつて
言いましょう」

今日、ハリー・ポッターの物語を、アルバス・ダンブルドアの見解
を聞いた。他の誰も知り得ない位に、多くの情報と示唆、気付きを得
た。であるからこそ、意図的に隠された部分が致命的だと見透かして
しまうからこそ、僕は残念ながら次の結論を下さざるを得なかった。
「貴方がアルバス・ダンブルドアである限り、貴方は闇の帝王に勝利す
る事が出来ない。絶対に、何処かで致命的な失敗を犯してしまう。そ
の光景が僕にはありありと思ひ浮かべられるからこそ、貴方の側には
賭けられない」

大団円の脚本

「——本当は、何も言わず帰るつもりだったんですけどね」

老人の不勝利を断言した僕は続ける。

アルバス・ダンブルドアが最初に言った通りだった。

僕と彼が会って短い話で終わる筈もなく、互いが平行線である事の再確認をしない限り、僕等は決して道を違える事が出来ないようであつた。

「しかし貴方が一方的に僕に多くを与えているのに、僕は何も言わず、はいさようならというのは公平では無いのでしょうか。貴方に届く筈が無いと薄々解つていようと、最初から言葉を尽くさず諦めるような不道徳は、僕自身としても気が進みませんしね」

今更言葉を交わす意義は見いだせない。

けれども、言葉をぶつける価値は零では無いのかもしれない。

ここまで来て尚、そう思つてしまうのは、僕が四年を通じて尚学ばないからか。それとも、この偉大なる老魔法使いに、未だに期待してしまうからなのか。

「もつとも、貴方が僕の話を書く気すら無いというのであれば、僕は黙つてここから立ち去りますが。子供の戯言だと一蹴されても仕方が無いというのは解つていますし」

「……何故、君は儂の敗北の可能性を断言出来るのじゃ?」

「……貴方は本当に複雑な人ですよね」

独裁的に振る舞い続ければ良い、嫌ならば最初から聞かなければ良いというのに、物分かりの良い賢人面をして、人の話を聞く姿勢を取ってしまう。

それは何の話も事情も聞かずに高圧的に振る舞い続ける人間は、彼が想定する善良さ、在るべき校長や老賢者としての姿から外れるからだろう。その理想像を貫き続ける事を彼の冷淡な理性が許さないとしても、余程の冷静さを喪わない限り、この老人は体面を取り繕う事を辞められない。

アルバス・ダンブルドアという人間は、そのように出来ている。

今までこの老人が僕の言葉を容れた事は無いにしても、言葉を耳にする事自体を拒絶はしない。その一点だけは、純粹に敬意を抱ける点でも有った。

「儂はここまで胸の裡を明かした。ならば、冷徹で合理的である君は当然に、儂の勝利を確信——は言い過ぎじやが、こちら側の立場に近付く可能性が高いと踏んでおった。儂は相応の勝算と覚悟をもって、この場に挑んでおるつもりじゃ」

「それは認めましょう。幾ら僕が多少閉心術に長けていると言っても、貴方は多くを暴露した。いえ、し過ぎた。その意味を理解出来ない程に愚かであるつもりはない」

僕の事前の予想に反し、とうの昔に引き込む云々の話は終わっていた。

アルバス・ダンブルドアは最初から僕を自分の味方として換算していた。僕が何処の陣営に身を置くか自体がこの老人にとっては些事であり、彼は今回の会談、その最低限の目的は既に果たしてしまっていた。ここまで来て尚、その必然の結論に向き合わないつもりはない。

しかし、その通りに僕が動くかどうかというのは、やはり別である。

「貴方は勝ちきれない。僕も貴方に付けない。そう断言するのは何ら根拠も無い物では有りませんよ。そして正気を喪っているつもりもない」

「……そう考えているのであれば、儂は君の言葉を今こうして聞こうとしておらぬよ。他ならぬ君だからこそ、耳に痛い反論を受け容れようとしておる」

「涙が出そうになる程に有り難い話ですね」

もつとも、やむを得ない事でもあるか。

真正面からの批判を子供に求める程、この老人は周りに“味方”が居ないのだから。

「貴方は僕が冷徹で合理的だと評しました。しかし、僕はそう在ろうと心掛けていますが、僕の認識ではそうでは有りません。そして他ならぬ貴方もまたそうなりきれない。だからこそ、僕はこのように

述べている訳ですし、貴方が勝ちきれない事を断言出来る」

理性が本能を克服するのにも限界が有る。

僕がこの四年間で自らの身をもって思い知らされた現実が、その結論を導かざるを得ない。

「率直に言つて、今回の事件でハリー・ポッターが死んでいたのなら、貴方に全賭けするのも厭いませんでしたよ。ここまで道筋が見えていたのであれば、貴方の勝利を疑う理由は余り無い。貴方は今己が持つ全てを犠牲にしても、勝利へと辿り着いてみせた事でしょう」

あくまで示されたのは大枠であり、細部を詰める必要からは逃げられず、事態が進むにつれて不測の事態や新たな問題が生じるのは当然だろう。しかしそれでも、この今世紀で最も偉大な魔法使いであれば、絶対に勝利を掴み取ってみせるだろうと断言出来る。

愛する子を喪つて復讐鬼と化した人間程に、恐ろしいものは無い。その人間が、世界の歴史を悉く浚つても見つけられない位の怪物ならば余計にである。

「……僕は君の変化を期待したが、それでも立場を変える事までは余り期待しておらんかった。君は既に闇の側に忠誠を誓ったのでは無いのかね？」

「蛇は神の意図と命令に叛逆し、原初の女性を唆してみせた生物ですよ。バーテミス・クラウチ・ジュニアが勝つ側に立たないのであれば、^{スリザリン}僕が付く理由も無い。そして僕は未だ闇の帝王自身に忠誠を誓った訳では無い」

「……………良く口が回るものじゃ。いや、ここで一番問題なのは、君がそんな言葉を吐きながらも、一切それを信じていない事なのじゃろくな」

「どちらでも良いでしょう。ハリー・ポッターは生き延びた。故に貴方には勝ち得ない可能性が高く残り、だからこそ、僕は今の貴方に付くのは遠慮したい」

今の、と限定を付したが、この老人は間違いなくハリー・ポッターが死ぬまで変わるまい。

そうでなければ、アルバス・ダンブルドアはアルバス・ダンブルド

ア足り得ない。

「貴方はハリー・ポッターが生きている事こそ勝率を上げ得ると主張するかもしれませんがね。しかし、護る者が居る事が必ず強さを齎すとは限らない。そして足手纏いが居ればいる程に、貴方という強力な個は弱くなる」

「……それは真正面からはつきりと述べさせて貰う。儂は多くの友や仲間が居るからこそ、このような強さを持ち得ていると考えておる」
「そうでしょうか。しかし、僕にしてみれば、不死鳥の騎士団は貴方にとって足枷にしか見えないのですけどね。ゲラート・グリンデルバルトの戦争時は兎も角、闇の帝王の戦争について考える限りは、そのような大仰な組織を作る事は不要に思えますが」

「儂は決してそうは思わぬよ。マグルやマグル生まれ、そして善良な魔法使いや多くの子供達を護る為に——」

「貴方がセドリック・デイゴリーについて僕に投げ掛けた言葉を返しましょう。それらの目先の命を救ったとして、この戦争の終結にどれだけ役に立つのです？」

「……………」

その指摘で漸く、アルバス・ダンブルドアの口を塞ぐ事に成功する。

「そして不死鳥の騎士団という枠組みが有る事は、僕には悪い結果を齎す気しませんがね。バーテミス・クラウチ氏が死に、魔法省がこの体たらくな以上、貴方は光の陣営の核心でしょう。しかもよりにもよって貴方は独裁的な騎士団長だ。貴方一人が間違えれば、その組織全て、陣営全体が間違える。間違えた結果、全てが死ぬ」

流石のアルバス・ダンブルドアとて、自身が過たないと強弁する恥知らずでは無かった。

セドリック・デイゴリーの犠牲が、ハリー・ポッターの両親達を含めて彼が喪つてきた者達が、そのような解答を許しはしない。けれども受け容れた訳では無く、僕が隙を見せれば即座に噛み千切るという獅子の姿勢は崩していなかった。

もつとも、一度食らいついた蛇の方も、その牙を離すつもりはない。「たとえば、貴方は貴方達にとって一貫性が重要だと言いました。し

かし、それって何処まで信用出来るでしょう？　バーテミウス・クラウチ氏はこう言っていましたよ」

あの老紳士は言った。

「一貫性の有る人間など居ないと」

「――」

『良いか、人間とは単純に割り切れる物では無い！　決して一貫性を抱ける物では無く、例外を常に造りたがる生き物だ！　そして、それさえも普通の一枠なのだ！　一面だけを観て全ての結論が導き出せるような者では決してない！』

服従の呪文の支配下に在ったという事情はある。

しかしその一点だけを無視し、話された状況そして話した相手を考えれば、あれは疑う余地もなく、己が命を燃やしながら紡がれた言葉のように感じられた。

「……それが誰に適応されるかは予め限定した。バーティは、儂等とは違う」

「一部は同意しますが、全部は肯定しかねますよ。貴方が人を辞められないように、闇の帝王が人を超えられないように、バーテミウス・クラウチ氏もまた人でしょう」

一貫的で、一面的である人間など有り得ない。

「僕に対して語られた一切の言葉を無視し、客観的行動から判断しても、彼は一貫性を欠いていた。正義の下に自分の息子を自らの手で裁き、しかしその息子を脱獄させるという不正義に手を染め、脱獄させた後は単なる先送りに過ぎない、どっちつかずな幽閉を選択した」

正義を貫くならば、脱獄させた息子を始末しておくべきだった。

不正義を貫くならば、脱獄させた息子を自由にしてやるべきだった。

「彼は一体どうするつもりだったのでしょうかね」

高貴なる由緒正しきクラウチ家。

彼が生きた理由全てが終わった今だからこそ、余計にそんな感慨を抱く。

「バーテミウス・クラウチ・ジュニアが服従の呪文を破る日が来ないと

いう前提に立ったとしても、彼は自分が死ぬまで息子を飼育し続けるつもりだったのでしょうか。危険を解っていたのに、息子にクイデイツチ・ワールドカップの観戦を許したのは何故だったのでしょうか。息子が闇の印を撃ち上げた以降も、何も変わらないと思っていたのでしょうか。前年にポッター家の悲劇の元凶とされたシリウス・ブルックが脱獄し、それまで大人しくしていた死喰い人達が何故かワールドカップで突然行動を再開したというのに？」

彼の行動は合理的では無かった。少しでも頭が回れば未来が無い事は解った筈だ。

だがそれでも解決し切れずに引き摺り続け、そして当然のように破綻した。名家中の名家の当主は、己が選択によって家を潰した。今年、息子の手によって殺されたのはあくまで余禄に過ぎない。クラウチ家の最後の末裔を自らアズカバンに送り、しかしその結末を受け容れ切れなかった時、その滅びは確定していた。

「貴方は、バーテミウス・クラウチ氏がどうするのが正解だったと思いますか？ 愛すべき妻の最期の願いを無慈悲に却下すべきだっと思えますか？ それとも、息子が闇の印を撃ち上げた時点で、悔い改めとしてアルバス・ダンブルドア、貴方に真実を告白すべきでしたか？」

「……」

「貴方が如何なる大賢者であろうと、その解答を導く事は出来ないでしょう。正解などない。合理的な決断と行動などという、不合理的な論理を持ち出す事は許されない」

正気を失ったバーテミウス・クラウチ氏は、ハリー・ポッター達が見た恰好からして、恐らく姿現しすら口クに使えない身であり、しかしそうなりながら尚ホグワーツに辿り着いた。

要は彼は最初から解っていた。

自身が頼るべき最強の切札にして最善の解答が、今世紀で最も偉大な魔法使いである事を。光の陣営の将来を考え、またクラウチ家の名誉の失墜を最小限に留めるには、この老人に対し、自身の過ちの告解をする以外の選択肢は有り得なかった。

しかし、それでも尚、正気を喪わなければ選択出来なかった。

彼に残っていた理性こそが、合理的な選択というのを邪魔し続けていた。

「貴方は人の行動の殆どを正確に読み切れるでしょう。闇の帝王もそこに例外は無いのでしよう。けれども実際、貴方は闇の帝王の思考を一度読み間違った」

「……確かに儂の失敗は認めよう。じゃが、次は無い」

「そうなのかもしれませんね。けれども、人は理屈で説明し切れず、そしてまた一人で動くこともない。貴方が勘定に入れていなかった人間が、闇の帝王を変え得る可能性は有る。スネイプ教授が闇の帝王の行動に干渉したが故に、[〃]生き残った男の子[〃]を生んだように」「ヴォルデモートにとってマグル生まれ一人などどうでも良いから、それが為せたのじゃ」

「どうでも良かった事が、どうでも良くなかった事には変わりませんよ」

あの教授も、つくづく奇妙な立場に置かれている。

僕は部外者から抜け出せないが、彼の方は部外者として抜け出せないのだろう。

その事実を知った時ハリー・ポッターがどうするかは、僕をして読み切れない。同時に、教授の選択自体もまた読み切れない。全く予想が付かない訳ではないが、確実にそうするだろうと考える程に、僕は傲慢になれない。

人間という代物は、それ程までに単純ではない。

「そして闇の帝王と比較すれば些細ですが、貴方は僕の行動すら読み切れていない。貴方は僕が貴方を嫌っているという事は解つていても、貴方に付く事は疑っていないのでしよう。であるからこそ、貴方はこういう馬鹿な行動を目論んだ」

バーテミス・クラウチ・ジュニアが課題前にそう考えたように。アルバス・ダンブルドアもまた、僕が自分の味方の側に着くと思っ

ている。「けれども、明言しておきますが。そもそも僕にとって現時点の最善最高の結果はアルバス・ダンブルドア、貴方が勝利する事などでは無

い」

眼鏡の奥の蒼い水面が、僅かに動揺で揺らいだ。

「……ヴォルデモートの勝利は、君が大切に想う少女の未来には繋がらぬ。たとえ君が彼女の命を救えたとしても、以降に待っているのは、尊厳無き家畜としての生活じゃ」

「それは確かでしょう。そもそも彼女の気性を考える限り、ハリー・ポッターかロナルド・ウィーズリーが死んだ時点で、彼女は復讐に身を投じる可能性が高い。故に闇と光、どちらが勝って欲しいかを敢えて言えば、それは光の側が勝つ方が望ましい」

闇の帝王の生存を知った一年生の時から、既にはつきりと解っていた事だった。

これまでの四年間を過ごす内に、確信が強まり続けてきた事だった。

「まあ、この魔法戦争から彼女が一切の手を引くというならば決してその限りでは有りません。そして僕が今年多少の期待を寄せていた人間はビクトール・クラムであり、伴侶として彼女を連れ出してくれないかと思っていたのですが、どうもそういう訳には行かないらしい」

学期末、別れの日、あの気難しい男は僕に会いに来た上で言った。

『ハーミイーオーナーニニーは僕の誘いを断った。今年はポッターの、傷付いた親友の傍に居たいそうだ。仮に僕が来年以降誘ったとしても、それを嬉しくは思えず、応えられるかというのは解らないと言っていた』

それをわざわざ僕に伝えるにきた意味と必要性が今一理解出来ないが、まあ一応助言をした者に対する義理を果たしに来たと見るべきだろうか。

「故に、アルバス・ダンブルドアが闇の帝王に勝利する未来は我慢、いえそれどころか歓迎出来ると言って良い。それは確かです」

「……ならば何故、君は僕が勝つ事を良しとせぬのかね」

「彼女にとってそれが最善の大団円では無いからですよ」

上を望めばキリが無いと言っても、手が届く可能性が有るならばや

はり望むべきだろう。

「彼女が今年からS・P・E・W. という活動に手を染めた事は御存知ですか？」

アルバス・ダンブルドアは困惑の表情を浮かべた。

それは意図して形作られた物であり、話題に上らせる必要が真にあるかと同時に問う物でも有った。しかし僕は軽く頷くだけの対応に留めた。何の意図もなく話題に出した訳ではないし、僕の取るべき立場について大いに関係が有る部分だった。

「……一応、耳にしておるが。そして君であればまず間違ひなく空回りと表現し、真正面から否定するであろう事も推測出来ておる」

「ならば話が早い」

何処から耳にしたにせよ、速やかに済むのは良い事だ。

「確かに僕には色々疑問符が付く部分が多かったです、それでも彼女が屋敷しもべ妖精のみならず、魔法界の古い因習と偏見自体に強い憤りを感じているのは変わりません。彼女自身、入学以来マグル生まれとして差別と偏見に晒されて来た訳ですからね。魔法界での自分の扱いを意識するマルフォイも近くに居ましたし」

そして彼女は一度決心すれば頑固であり、一途であった。

「彼女は現在社会を変えたいという願いを抱いており——しかし、ハーマイオニー・グレンジャーはそれを叶え切れない。彼女はそんな何ら“特別”ではないから。例えば彼女が社会を変える為に魔法大臣の地位を欲したとしても、彼女はそれを手にする事が出来ない」

「……儂は決してそうは思わぬ」

有り難い事に、その否定は力強かった。

「流石に今すぐ魔法大臣になって仕事が出来るとは言わんが、彼女には類稀な資質が有る。それも良い魔法大臣になれるじやろう」

「貴方の見立てを全否定しませんよ。寧ろ同意すら出来るでしょう」
能力以上に、彼女には強い意欲と意思が有る。

世界を自ら変えられる人間は、ハリー・ポッターのような人間では無く、何時だってああいう類の人間であるのだろう。

「しかし、コーネリウス・ファッジを見れば解ると思いませんか？ 魔

法大臣はテストの点数順で就ける物では無い。選挙に勝たなければ魔法大臣になれない。選挙に勝てないのならば、大臣としてどんなに上手くやれる能力が有ろうが無価値に等しい」

コーネリウス・ファツジは選挙に勝利したのは偏に運が良かったからだ。

アルバス・ダンブルドアが変わらず魔法大臣の地位に興味を示す事はなく、それまで本命であったバーテミス・クラウチ氏は失脚し、死喰い人疑惑によって政治的打撃を受けたルシウス・マルフォイ氏は手頃な傀儡を探していた。

そのどれか一つでも欠ければ、彼が魔法大臣になる事は絶対に無かった。

平時の魔法大臣として務め上げるだけの能力が彼に有ったとしても、単にそれだけでしかなかった人間に、魔法大臣の椅子は転がり込んでこなかった。

「アルバス・ダンブルドア、そしてハリー・ポッター。貴方がたは『特別』だ。貴方がたが魔法大臣に立候補すればまず確実に勝てますし、その地位が無くとも好き放題振る舞える事は、他ならぬ貴方が証明している。一応闇の帝王が復活した現在はまだ別の話になりますが――ただ一つだけ確かなのは、同じ事はハーマイオニーには絶対に不可能だという事です」

『特別』では無いから。

どんなにホグワーツで優秀な成績を修め、そしてこの先ホグワーツ首席として卒業しようとも、世間的には、単に学校という狭い社会で御勉強が良く出来ただけの、有象無象の小娘の一人でしかない。

「……まで言葉を費やせば僕が何を言いたいのか解るでしょう?」

「……………」

「ハーマイオニー・グレンジャーが真に社会を変えたいと望むならば、その最短最速の道は、ホグワーツで良い成績を残す事でも、魔法省で素晴らしい政策を立案する事でもない。国際魔法使い連盟で感動的な演説をする事でもないし、言うまでもなく屋敷しもべ妖精の為に S. P. E. W. の活動を継続する事ですらない」

現在の情勢の下では、それらは全て遠回りである。

「これからの魔法戦争においてハリー・ポッターを勝たせる事。英雄の友人であるのを良い事に彼の知名度を都合良く利用する売女では無く、魔法戦争での英雄の勝利に不可欠であった戦士の一人となる事です」

アルバス・ダンブルドアが勝利を収めた場合、それは叶わない。

この良識を備えた老人は、彼女達を直ぐに戦場に出す気は無いし、仮に卒業後にハーマイオニーが不死鳥の騎士団の一員として戦ったとしても、彼女の活躍は埋没する可能性は高い。その場合においては戦争の勝利に貢献した数十人、もしくは数百人の一人でしかない。

しかし、ハリー・ポッターが勝利を収めたならば。

不死鳥の騎士団の一員としてではなく、尚且つ誰が見ても彼女の戦争への貢献を疑う余地が無い程の大活躍を成し遂げたというならば。

彼女は「生き残った男の子」には及ばずとも、彼に次ぐ「特別」と成り得る。

「まあ彼女が貴方がたの代わりに闇の帝王を滅ぼす事で「英雄」となっても良いのですが、僕はそこまで彼女が才能に溢れた魔法使いだとは考えていない。勿論、今世紀で最も偉大な魔法使いの御墨付きが有るならば当然そちらが優先されますが」

「……ハーマイオニーには絶対に不可能じゃ。それは儂の杖腕どころか命を賭けて良い」

「でしようね。優秀なだけの魔法使いに多少の奇蹟が起こった程度で勝利出来るならば、そもそも闇の帝王は史上最悪とは呼ばれていない筈だ」

闇の帝王は抵抗する者尽くを殺し続けてきた。

この国の魔法使いとして生きる限り、ただ一人アルバス・ダンブルドアを除いて、全員の首元に死の鎌が突き付けられ続けて来た。その最悪の状況を誰も——眼前の魔法使いを含めて——変える事は出来なかった。それが出来たのは、僅か一歳の赤子だけだった。

「去年まで彼女は魔法界どうこうという事は余り考えていなかった。けれども、彼女は興味を持った。持ってしまった。それが何処まで行

くかは解りませんし、まず間違ひなく僕が望む方向には絶対に行かないでしょうが——それでも彼女がこの魔法界をどう変えようとするのかというのには一応興味がある」

彼女には意思があり、能力があり、権利があった。

何より、彼女はアルバス・ダンブルドアに嫌われている訳では無い。彼が支配する現状維持の魔法界に挑戦する資格を得ている。

「故に僕は貴方と立場を異にしている。ハーマイオニーがハリー・ポッターを使って勝利する事を期待している点において、貴方とは相容れない」

「……じゃが、この四年間、君は一貫してハーマイオニーの安全を図る方向に動いてきた。しかしその道は、彼女の危険を是とする道でも有る」

「そうですね。人は死んだら終わりだ。それは確かです」

彼女に死んで欲しくないという考えは変わらない。

「けれども、矛盾しているようですが、彼女に偉大になって欲しいという考えもまた存在するんですよ。もしくは自身の理想で有って欲しいと願っているというべきでしょうか。彼女はそんなつもりは無かったでしょうが、あの日、一人一人を救ったのですから」

彼女が居なければ、何も続く事は無かった。

「たかが一人。それでも救われた側にとつては忘れられぬ記憶で、何にも代えがたい恩義を抱くには十分で、そしてそれが今後世界で一つでも多く増えるとすれば、社会にとつて大いなる善と言えるでしょう？　であれば、その為の最短経路が存在するならば、僕は独善の欲望の下に阻むべきではない。そう思えたりもしませんか？」

「……ハーマイオニーは君の考えるような、そんな邪な動機でもってハリーの傍に居る訳では無い。彼女は純粋な友愛の為に共に居るのじゃ」

「それはその通りでしょう。彼女はそんな器用な女性ではない」

言われずとも、これまでの四年間でよくよく知っている。

「ただ、仮に僕が彼女の立場であったのなら、間違ひなく止まれません。そして自分が自制出来ないにも拘わらず、他人に自制を求めるの

は道理が通らないと思えてならないのです」

“生き残った男の子”の権威と地位は魅力的だ。

僕がハリー・ポッターの友人であったのなら、ハーマイオニーとはまた別の理由と目的の下で、しかし同様に危険を承知で傍に留まる事を選んだに違いない。自身の目的を果たす為の最短最速の経路は、やはりハリー・ポッターを利用する事だからだ。

「そして勿論、これは彼女が求めるならばの話です。彼女はそれを選ばないかもしれない。彼女は僕程に現在の魔法界を疎んでいる訳では有りませんからね。そして、彼女が全て放り出して逃げるとしても、僕は肯定しますよ」

僕のユメを、彼女に押し付けるつもりは無い。

「本音を言えば、僕自身、僕が彼女にどうして欲しいのか解らない。英雄の隣で悪と戦い続けた戦士となって欲しいのか、戦火から逃げた無名の母になって欲しいのか。後世にも名を残す魔法大臣となって欲しいのか、これからの歴史を語る伝記作家となって欲しいのか」

「君が選ばせようとは思わないのかね？」

「他人が選び取らせる事は不可能では？ また、貴方と違って自分の良いように操る気も有りません。多少口は挟んでも、最後は彼女が一人で決めるべき事です」

特に彼女の革命については、僕は関わるべきでないのだ。

最初から、入学前に初めて出会った時から歴然としているのである。彼女は善良で、潔癖で、穏健過ぎると。つまり僕の遣り口には合わない。

「……じゃが、それならばそれで儂は構わぬ」

アルバス・ダンブルドアは、微妙に声を震えさせながら言った。

「君がハリーを勝たせるつもりだとしても、光の側に立つのであれば手を取り合える。ハリーを勝たせる為に、君は儂の側に付くとは考えられぬのかね？」

「それも既に言った筈です。貴方は独裁的な騎士団長であり、貴方が間違えれば全員が間違えると。ハリー・ポッターも例外では無い。貴方の話から判断しても、僕の眼から見ても、彼は貴方を信頼している。

故に貴方が居る限り、貴方の下に留まる事を選択する。貴方の負けが彼の負けに等しい事に変わりはない」

ハリー・ポッターは自ら先頭に立って戦争を率いる類の人間ではなく、また現状立つ気も無い。であれば、僕がハリー・ポッターに味方する事など当然に不可能である。

「そして、何時までも猶予が有る訳では無い」

戦争は、何れにも勝ち目が存在し続ける公平な遊戯などではない。「ゲラート・グリンデルバルトによる世界魔法大戦における貴方の不審な行動。つまり、世界中で死人を生み出したあの革命に関して、貴方が参戦を求められながらも当初は拒んだのだと、僕はバーテミウス・クラウチ氏から聞きましたが」

突然質問が飛んだからか。もしくは質問の内容が彼にとって急所だったのか。

直ぐには答えが返って来ず、老人が答えられたのは、たつぷり十秒以上を費やした後だった。そして彼の認識にとっては、直ぐに答えたつもりもなかった。それが外部から見取れるくらいには、彼の瞳は何処でもない彼方を見ている時間が長かった。

「……あれには確かな理由が有ったのじゃ」

「理屈が存在すれば非道を看過するのが騎士道精神グリフィンボールでしたでしょうか」

「……………」

「それはまあ今は置いておきましょう。では、一方で闇の帝王が殺戮を振りまいた先の革命。第一次魔法戦争に際して、貴方に戦えない枷や理由が存在しましたか？」

今度は返答が超越されない。

明らかに、老人は答える必要性を見出していない。

「その事から考える限り、貴方が本気を出せば軽々逆転とは行かないのでしょうか。実際の戦場も、大概是同じだと思えますよ。比例の直線のように淡々と進み続けて勝利決定というのは殆ど無いでしょう。何処かで均衡が崩れて一気に趨勢が傾き、一挙に勝敗が決してしまう」

「……君に言わせれば、儂に逆転の目が無くなつた時点でハリーが死んだなら、最早この戦争はどうにも出来ぬという事じゃな」

「ええ。彼はさつきと死ぬか、最後まで生き残るかのどちらかにして欲しいものです」

中途半端が一番悪い。

そうなたった場合、光の陣営は必然のように敗北する気がしてならない。

「貴方は完璧では無い。間違える。それは当然だ。けれども、貴方の傍に歯止めを掛ける人間は居ない。誰かが可笑しいと思つても、貴方の実績と権威と地位が、忠告と諫言を、途中での間違いの修正を許さない」

だから貴方の意向には従う気にはなれませんよ、と改めて繰り返す。

何処を目的地としているか解らない暴走特急になど乗れない。最初から破滅行きと書いてある特急に乗つた方が、まだ自分がどう振る舞うかを決めやすいものだ。

「実際、今年度の状況が顕著に過ちを、現在の非道に対する貴方への傍観の態度を示しているではありませんか。誰も貴方の我儘を止められず、正されるべき間違いを放置し続けている。今世紀で最も偉大な魔法使いには確たる計画や理屈があるのだらうと、無瑕疵の信頼と忠誠を向け続けている」

そしてこの老人を信仰する一部以外は白けた眼で現状を見続けている。

少なくともセドリック・デイゴリーであれば、ホグワーツには四寮が必要だと理想論を宣つたあの男ならば、これを是としなかつた。自己の信条に違おうとも、自らの破滅を導くかもしれないとしても、更なる破滅を防ぐが為に、己の裡に毒を入れるのを選択した事だらう。それを拒絶し続けている、潔癖症のアルバス・ダンブルドアとは違う。

「——貴方は現在の魔法界の状況をどう思います?」

核心の質問、この老人の側に付けない理由の問いを僕は紡ぐ。

「……君がそれを聞く真意が解らん以上、答えられぬ」

「そうですか。では答えから言いますが、僕は不当だと思いましたがよ」
「……………」

「ええ、そうです。僕ですらそう思ってしまった。アルバス・ダンブルドア。二度の戦争で大きな貢献を果たした英雄。今世紀で最も偉大な魔法使い。一貫して悪に立ち向かってきた正義の魔法戦士。そんな彼の言葉に聞く耳を持たず、闇の帝王の復活を嘘だと切り捨て、耳障りだけが良いコーネリウス・ファッジの妄言を信じようとする、現在の魔法界は愚かだと」

そう思い、しかし直ぐに我に返った。

果たして本当にそうだろうか。

「落ち着いて考えてみた場合、貴方の証言の信用性はハリー・ポッター達が考える程に高い物なんでしょうか？ 頭が可笑しいのは彼等で、正気を保ち続けているのは魔法界である。そんな結論を導く事は、決して不可能だと言えるのでしょうか？」

これまでの十四年——特にハリー・ポッターがホグワーツに入学してから現時点までの、この老人の一切の所業を踏まえた上で考えた場合、闇の帝王が復活したのだというアルバス・ダンブルドアの言葉は、本当に信じるに足ると言えるのだろうか。

在るべき英雄の姿

アルバス・ダンブルドアの言葉は素晴らしい。

その身に秘める魔法力も、鍛え上げられた杖腕も、築き上げてきた経歴も申し分無い。

果たしてどれだけの人間が、この老人よりも自身が上等な存在であると主張出来るだろう。それどころか全世界の魔法史を探したとしても、アルバス・ダンブルドアを超えると断言しうる魔法使いを多く見付ける事は出来まい。これから後世に残る客観的事実から判断すれば、この英雄に瑕疵という瑕疵は存在せず、将来に生きる人間によって伝説化されていくだろうというのは既に眼に見えている。

されど。

現在生きる当事者にとって、この我儘な老魔法使い程に気に入らない人間は居らず。

歴史の検証によって僕達が大馬鹿者だと批判される事になろうとも、独自の考えを持つ一個人として、決して受け入れられない行動、我慢の限界を超える箇所が存在する。

「現在までの貴方の行動。それは世界魔法大戦の比では無い位に不審でしょう。あれはまだ、ホグワーツを出て外界に関わるような真似をしたくないという言い訳が効いた。そして貴方がさっさとゲラート・グリンデルバルトと決闘して戦争を終わらせれば良かったというのも、やはり言いがかりめいて聞こえるのは確かなのですから」

あれは「世界」魔法大戦だった。

ゲラート・グリンデルバルトが焚べた業火は、彼一人を単純に止めれば終わるという代物では無かった。国際機密保持法の意義に挑戦したあの戦争は、非魔法族と魔法族の関係を問うた聖戦は、まず間違はなく、どちらかの陣営が継戦能力を喪うまで終わりなどしなかった。

単に指導者一人が堕ちただけでは、そう軽々しく時代の潮流は止まらない。寧ろ悲劇的な犠牲を理由に神格化され、更に激しく燃え広がる。それが歴史の語る革命の本質である。

喪失を嘆く遺族達の感情は別として、アルバス・ダンブルドアには必要以上に責められるべき公的な瑕疵はなく——けれども、この国内における魔法戦争、彼の事実上の戦争指導者としての振る舞いは、全く理を異にしている。

「特に貴方がハリー・ポッターをホグワーツに迎え入れてからの行動は流石に眼に余り過ぎる。そう考える者は少なくないのではないのでしょうか。そして如何に貴方が英雄で、偉大な魔法使いだとしても、それは批判されなくて良いという事ではない」

闇の帝王のように、批判すら許さぬ絶対的君主として立つなら口を際むべきだが。

この老人が大衆の善意を背負い、自由と正義の守護者として立つならば、やはりそれらは民意の下に批判されて然るべきである。

「二年目」

賢者の石。

「客観的に見て、あのような危険物を学校に置くというのは褒められた物では無い。そして貴方はその存在を知らながら、闇の魔法使いの暗躍を許した。クイリナス・クイレル教授は貴方が被雇用者として学校に置いた人間であり、しかも貴方は本当の正体すら知っていた。どう考えたって貴方の行動は、生徒の安全に責任を負うべき校長の行動ではない」

即刻辞任するまでは行かずとも、内外に向けて説明をする必要が有る程度には問題だ。

「更に何処からともなくホグワーツ内に広まった学期末の『秘密』の内容——チェスや論理パズルの試練について検討してみれば、何故一年生が賢者の石を護る羽目になったのか、一年生にも解ける程度の防備しか備えてなかったのはどうしてなのかを疑問に思うでしょう。そもそも始業式で生徒達の好奇心を煽る事を言ったのもいだけではない。宝物の存在自体を周知しなければ盗まれる筈もなく、知られない事こそが最大の防備でしょう」

管理責任を問われても仕方が無い処遇のオンパレードである。

何も知らない外から判断する限り、一から十とは言わなくとも、九

くらいは可笑しな話だ。

そして、これらの問題は氷山の一角に過ぎない。責任有る、一般常識を備えた大人であれば今挙げた物までばかりではなく、より多くの問題点を指摘する事が出来るだろう。教授、或いは校長の立場からアルバス・ダンブルドアの行為を評価する場合、一年時の行動は、そもそも不適切過ぎて論ずるに値しない。

「——ただ、この魔法戦争を視野に入れた時、僕はそう悪い物では無かったと思いますよ」

その言葉を発した瞬間、アルバス・ダンブルドアは一瞬だけ眉根を寄せた。

「かの物語の裏に居たのは闇の帝王。史上最悪と評価され、反射された死の呪文を受けて尚生き延び続けた魔法使い。脆弱な塵、或いはゴーストでありながら、けれども肉体を持たない帰結として真つ当に滅ぼす手段が思い付かない怪物。未だ名を恐れられる闇の深奥が、貴方がたの相手でした」

ヴォルデモート卿。

彼が歴史上有数の闇の魔法使い程度で留まるなら良かった。

ホークラックス

分霊箱の魔法を作成した呪いのハーポが現在まで生きて——もし

くは存在して——いない事が示す通り、その護りもまた無敵では無い。賢者の石や生命の水が継続的使用を強いられるように、非魔法族からは万能にも思える姿現しにも一定の制限が存在するように、一切の制限が無い魔法的効果などこの世には有り得ず、分霊箱もまた地上の有限の理に服さざるを得ない。

だが、彼は歴史上殆ど類を見ない次元に堕ちた闇の魔法使いだった。

塵以下に貶められようとも成人クイリナス・クイレル教授した魔法使いを墮落させ、手足になる下僕一人に指示するだけで肉体を復活する魔法薬を作成してみせる大魔法使い。

分霊箱を作れはしても、果たして同様の行為を出来る魔法使いがどれだけ居るだろうか。魔道という領域において彼以上に極めた存在は、歴史を見てもそう居まい。

「現れるかどうか不確定な将来の魔法使いに期待せず、最強の魔法使いである貴方が存命の間に闇の帝王を滅ぼす。それを考えた時、一年目の貴方の行動はそう悪い物では無かったのでしょうか。当時僕がそこまで考えていたかは微妙だった気がしていますが、少なくとも今は、そう考えて良いと思っています」

もつともハーマイオニーを巻き込んだ事だけは、やはり文句を言いたいですが。

そう軽く息を吐きながら言葉を一区切りする。

ただ、その感想は感情的で、独善的な物に過ぎない。

今ここに至って、アルバス・ダンブルドアの計画の方が良かったのだらうとは解っているつもりだ。最悪でも保険、最良の場合には武器になる。そして現時点で判断する限りでは、どうやら後者の側に寄りつつある。本当に、謀を巡らせるといふ点において、この老人は超一流だった。

「賢者の石に繋がる貴方が用意した試練、そして彼の両親を殺した闇の帝王の前に、Mirror of Erised “生き残った男の子” がどう行動するかを見定める。

みぞの鏡へとハリ・ポッターを対面させ、彼の本質が高潔で無欲であり、賢者の石の誘惑にも屈さないかどうかを確認する。加えて彼の親友と共に試練を乗り越えさせる事で、成功体験を積ませる。それら全てを目論み、滞りなく完遂してみせたのは、他ならぬ貴方だった」

教授や校長としてみれば眼前の老人は失格も良い所だが、現時点の情報踏まえて戦争指導者として見た場合、アルバス・ダンブルドア以上に上手くやってのけた者などそうは居まい。

もつとも、やはり彼もまた、全てを予見していた訳では無い。

『君は儂の “些細な” 計画が全て上手く行ったと考えておるのじやろう。嗚呼、上手く行ったとも。上手く行きすぎた』

学期末の言葉を、弱々しい老人が漏らした本音を思い出す。

今改めて考えれば、一年目の顛末は余りにも出来過ぎていた。あの時は話半分だったが、特に去年度の一連の事象を踏まえた場合、あの英雄殿はやはり非凡だったのだろう。

「貴方は学期末最後、グリフィンドールへの大幅な加点で醜態を晒しましたが、しかしあれは些細な事だ。闇の帝王を滅ぼすという大義の為ならば、たかだか一年くらいの寮杯をくれてやる事に支障はない。大いなる善の為に、そしてスリザリンの殆どが潜在的な敵であるのに、要らぬ御機嫌取りをしてやる必要など無い」

どんなに良い大人であろうとも、戦争に勝てねば意味が無い。そもそも闇の帝王が君臨してしまえば、良い人間が暮らせる明るい未来が訪れない。

であれば、アルバス・ダンブルドアが悪い大人だろうが大きな支障は存在せず、後から評価を取り戻せる程度の行動でしかなかった。

「もつとも、これは僕の色眼鏡を通した見解であり、そしてそもそも現在情報を多く得ているからこそ、このようにも解釈出来るに過ぎません。何も知らなければ、賢者の石という危険物を学校に置いた挙句、自身の部下である教授の非道を看過した校長、たまたま死人も出さずに済んだだけの幸運な老人にしか見えないでしょう」

「……………」

「要は世間にとってみれば、貴方は無能だった」

そしてアルバス・ダンブルドアへの信頼を喪うには十分だった。

そこまで口にして、僕は多少間を空ける。

同意や不同意、補足や反論。何でも良いが、この老人が口を挟む時間を作ったつもりだった。けれども、指組みの向こう側から彼は僕に視線を向け続け、沈黙を守った。それは最後まで聞く姿勢の表明に他ならなかった。

だから、僕は次へと移った。

「二年目」

秘密の部屋。

「秘密の部屋が開かれ、生徒達を石化させた事の評価は人によるでしょう。秘密の部屋は千年もの間、歴代校長や数多くの生徒が捜し求めながらも見つからなかった伝説の部屋であり、また貴方以外が校長なら防げたという保証は無い。そもそも約五十年前の前回、アーランド・テイベット教授前任の校長の際にも一人死んでいるのですから」

責任問題であり辞職の追及に直結し得る問題だとしても、絶対に辞めねばならないと思う程の問題では無かった。あの時点では治療可能な石化、つまり以前の例よりはマシであり、今後の犠牲者を防ぐ為に校長として職責を続けるべきという主張は、相応の合理性を持っていた。

「もつとも、貴方の行動として大勢が気になったのは、秘密の部屋自体ではないでしょうね」

そこで注意してアルバス・ダンブルドアを見るが、やはり表情を動かさない。

まったく、忌々しくも面の皮の厚い人間であった。

「マンドレイク。アレは本当に学内で育て続ける必要が有ったのでしょうか？」

先入観無しに素朴に考えた際、奇妙さを感じる点はそこだった。

「貴方の友人の伝手で、聖マンゴの在庫で、或いは国外から輸入する事は出来なかったのか。魔法界には移動鍵や姿現しの高速移動手段が存在し、まして非魔法族の社会では飛行機が金持ちの独占物でも無くなった。猫は別に良いとして、コリン・クリービーを七カ月、ジャスティン・フィンチャーフレッチリーを六カ月程石化させておく必要は有ったのか。全てをホグワーツ内部で解決する意味は有ったのかと、そう思った人間は多数居たでしょう」

流星に純血、主にマグル生まれには死んで欲しいスリザリンには、マンドレイク回復薬、或いは同種の魔法薬を抛出する人間は居なかっただろう。しかし、この世に純血主義の魔法使いしか居ない訳ではあるまい。犠牲者多数ならば他所から在庫を融通して貰うのも難しからうが、総数で四人、それも十代の子供だ。外部から協力を期待する事は出来たに違いない。

まあホグワーツの自治と大人としての体面が多少問題となるだろうが、それでも石化してしまった子供に対する親の不安と、子供達の数カ月の学習期間。それらを天秤に掛ければ、どちらを優先すべきかは明確だ。

「ただし。貴方にとっても秘密の部屋、或いはバジリスクなど些細な

問題でした」

自身に批判が集まろうが、理事会を宥める為に頭を下げる必要性が有ろうが、アルバス・ダンブルドアにとって単に不愉快なだけでしかなかった。まして大きな爬虫類如き、発見に成功さえすれば、殺すどころか容易に無力化してしまえただろう。

だが、この老人は更に優先すべき事情を理由に動かなかった。

「闇の帝王。かつて秘密の部屋を開けたのが彼であり、今回も彼なし彼の下僕が動いていると貴方は予測していた。けれどもスリザリンに怪しい人間は居らず、ホグワーツにどのよう干渉しているかという手段も見つからなかった。それを突き止められるかこそが一番の焦点であって、今後死人が出るのを防ぐ為に取り組まなければならぬ最大の問題だった」

分霊箱という、人一人を乗っ取れる邪悪な魔道具。

ジネブラ・ウィーズリーの魂を喰い尽くしたトム・マールヴォロ・リドルが暗躍し、ホグワーツ生を片っ端から殺したらどうなっただろうか。

彼女は——彼女の身体は——当然のようにアズカバンに行き、しかしそれを為した黒幕が捕まる事は無い。彼はクイリナス・クイレル教授に対してしたように、既に用済みとなったジネブラ・ウィーズリーを殺した上で、別の生徒に乗り移って凶行を続けただろう。そして黒幕は公的に不明のままである。手段が分霊箱である事のみならず、更に分霊箱が日記帳である事を突き止めなければ、死人が出続けたのは間違いなかった。

「それを突き止める鍵はやはりハリー・ポッター。闇の帝王の肉体を滅ぼし、つい前年にも彼が賢者の石を奪うのを邪魔した存在。あの事件の裏側に居るのが闇の帝王であるならば、彼にちよっかいを掛けない筈は無かった」

“生き残った男の子”は一種の餌だった。

可能な限り防衛策を講じては居ても、あの年においてこの老人は、ハリー・ポッターを道具として、武器として使う事を躊躇わなかった。「マンドレイク回復薬の作成に学期末まで掛かるとした事は、貴方に

とっては時間の設定、それまでは石化が解ける事は無く、バジリスクの正体もバレないと犯人に知らせる意味合いが有ったのでしよう。しかも貴方は、犯人が闇の帝王である限りにおいては、彼が死人を出す事を可能な限り望まないという確信が有ったようだ」

闇の帝王。

彼を良く知り、解きほぐす事が出来るのは、この老人以上に居なかった。

そもそも伝説通りのスリザリンの継承者で有れば、あの事件が石化止まりである事自体が奇妙だった。マートル・エリザベス・ワレンが死んだ五十年前と同様、ホグワーツで学ぶに相応しくない者をさっさと殺すべきだった。そうして初めて、秘密の部屋が開かれたと大衆が信じるだけの説得力があった。

しかし二年時は違う。

『継承者の敵よ、気を付けよ』と警告はしたが、平然とホグワーツの学期が続けられた事から不十分なのは明白で、犠牲者は丸一年度掛けて生徒四人とゴースト一人と猫一匹。サラザール・スリザリンの伝説を念頭に置けば落胆すら覚えるせせこましい事件であり、秘密の部屋の怪物を騙って小悪党が何か悪事を働いているに過ぎないという可能性は、外部の眼から見れば決して排除し切れなかった筈だ。

けれども、アルバス・ダンブルドアはそれを不思議に思わず、黒幕を早々に突き止めた——寧ろ、闇の帝王ならばそう行動すると予め想像していただろうというのは想像が付く。

実際、トム・マールヴォロ・リドルは、スリザリンの継承者というよりも闇の帝王として振る舞う事を望み、自分の未来を挫いた男の子を誘き寄せる私利私欲の為に用い、マグル生まれを殺す事は『どうでも良い』とすら宣ってみせた。

そしてちらりと、この老人がマグルの孤児院出身だと言及した事が脳裏に過ぎる。

ホグワーツが閉鎖されるかもしれないという噂、それも嘘か真かアルバス・ダンブルドア自身がそれを考えているという噂すらあの頃には聞こえて来たが、多分それを流したのも彼の策の一環で有ったに

違いない。

あの一年もまた、殆どの事象が老人の手中にあった。

「最後の最後、ハリー・ポッターがキルデロイ・ロックハート一番無能な教師を輩に選んだ挙句、全てを一人で終わらせたのは貴方として予想だにできなかったでしょうが、それでも貴方は可能な限りホグワーツの安全、そして今後の戦争を有利に進めるように尽力していた」

今石化している生徒数人と、将来出るであろう死者数千、或いは数万人。

大いなる善の天秤に掛ければ、どちらを選択すべきかなどは明白である。

「しかしながら——それを察し得ない世間にとっては、貴方は無能だった」

表に出ている事情だけ見れば、アルバス・ダンブルドアへの信頼を喪うには十分だった。

「三年目」

アスカバンの囚人。

「バジリスクを片付けたのがハリー・ポッターであるのに続き、貴方がたが主張する難攻不落のホグワーツに今度こそ疑問符が付いたのは、あの年かも知れませんか。あの年にはシリウス・ブラックの侵入、及び学期末の再逃走を許した訳ですから」

前年に一度解職したアルバス・ダンブルドアをホグワーツ理事会が再度呼び戻したのは、ジネブラ・ウィーズリー——今最も広く知られている考聖二十八族基準え方では純血一族の娘——が誘拐され、したがってマグル生まれの排除を目的とする筈のスリザリンの継承者らしからぬ敵に對し、この老人の力が必要だと考えられたからだ。

しかし結果として二年目はハリー・ポッターさえいれば校長など不要とも思える終わり方をしていたのであり、そしてバジリスクの石化騒動に続いて脱獄囚の凶行が起こってしまった。他の人間であれば止められたかはやはり不透明だが、シリウス・ブラックの件につき今度こそは責任を取るべきだという声上がるのは不自然ではない。

「ただ、シリウス・ブラックは未登録の動物アニメーガス擬きであり、そして彼がア

ズカバンから脱獄したというのも多少問題をややこしくしたでしょう」

「アルバス・ダンブルドアが最初から知っていれば、とは最早言うまい。」

他の三寮とはまた違う理由で、グリフィムス・ポッター^{ジエームス・ポッター達}共が彼を信用出来ぬ理由というのは有ったのだらう。特にこの老人は、近しくなればなる程に聖人君子とは程遠い事を思い知らされる存在で、戦争を続けている間に傍に居たのならば、余計にこの老人の本質に触れる機会はある筈である。

「動物擬きは吸魂鬼の影響を受けにくい。そんな研究結果が一般的に存在し、広く知られているとは思えませんね。そもそも彼はピーター・ペティグリューの生存を認識しない限り脱獄する気にならなかった、つまりは十二年間は彼を収監するのに成功したのであって、アズカバンの防備が完全に無効化された訳でも無かった」

シリウス・ブラックにとってアズカバンに留まる事は半ば自罰的な行為であつたろうが、それでも酷過ぎる場所だから出てやろうという気力を沸かせる事は出来なかつた。彼にとって自由の為の脱獄自体が目的ではなく、脱獄は裏切者を追い詰める為の手段に過ぎなかつた。

それを考えると、僕は今まで以上に吸魂鬼へと好意を抱けそうだ。「そして状況を見る限り、彼は可能な限りホグワーツ内に留まろうとしなかつた筈です」

その理由がかつての友人であるリーマス・ルーピン教授の存在であり、更には友人達と共に作成した、先程の話にも出た忍びの地図の存在であろう。

「あの年の新しい闇の魔術に対する防衛術の新任教授が自分の学生時代の親友、リーマス・ルーピン教授である。シリウス・ブラックがその事実を何時知ったかは不明です。けれども友人であるならば、彼が動物擬きである事も、更には忍びの地図の使い方も当然知っている。地図で監視される危険を考えればホグワーツに長々と留まる事など出来はしなかつた」

この老人が全力でホグワーツを搜索しようとも捕捉出来る機会は非常に限られていた筈で、更にはもう一点、擦れ違いを産む要因があった。

「シリウス・ブラックがリーマス・ルーピン教授の存在を知った時、少しばかりの希望を抱いたかもしれない。かつての友が自分を捜してくれているならば、ポッター家襲撃の真相についてこっそり話をする機会が有ると考えなかった筈もないですから」

旧き友誼に期待するのは自然であり、説得は不可能とも言えなかった。

彼がピーター・ペティグリューの生存を知ったのは『日刊予言者新聞』の写真が原因であり、その存在さえ知らせる事が出来れば、リーマス・ルーピン教授は懐疑的ながらも最低限調べる事はしただろうし、直ぐに真相に辿り着いた事だろう。無実の人間が十二年もの間鼠に姿をやつして暮らしているというのは、どう考えたって変だからだ。

「しかし、多分リーマス・ルーピン教授は探さなかった。スネイプ寮監を筆頭に、彼は自分が疑われている事を知っていたから。故にシリウス・ブラックはピーター・ペティグリューの身柄無しでは、話を聞いてくれないと考えたのでしよう」

そもそもシリウス・ブラックは長いアズカバン生活を送っており、尚且つ校内には多くの吸魂鬼がうろついていたのだ、あの男は余計に正気だったとは言えないだろう。実際、彼は感情に任せてグリフィンホール入り口の肖像画を切り裂く程度には狂っていた。そこで諦めず、何とかしてリーマス・ルーピン教授に写真について知らせる手段を考えるべきだったと言うのは、当事者でない気楽な人間の勝手な言い分であり、流石に酷であろう。

「結果としてシリウス・ブラックは学期末まで逃げおおせ、そして同時に、彼が無実で有ると判明するのが遅れに遅れた。……しかしまあ、少なくともポッター家の悲劇の関与と十三人の殺人罪に関しては無罪である事には変わりない。正義の魔法使いたらんとする貴方が見ない振りは出来なかつたでしょう」

人は神でない以上、冤罪によって罪を着せ、罰を課してしまう事は有り得る。

だが冤罪を知りながら尚それを執行する事は——回復不能の処刑を看過する事は、善良な人間として絶対に行つてはならない。

「加えて、ハリー・ポッターは自身の後見人が無罪である事を知つてしまった。故に、シリウス・ブラックは貴方にとつて是が非でも救わねばならない存在となった。それが非常に困難である事を、貴方の明晰な頭脳は結論付けていたとしても」

状況が手遅れとなつていたのは、やはり否定出来ぬ現実だった。

「正攻法の裁判手続では、彼を無罪にする事は非常に困難でした。そもそも『日刊予言者新聞』によれば、あの時点で、十三人の殺人罪、アズカバン脱獄、及びホグワーツ侵入の罪を理由に『魔法省が、吸魂鬼吸魂鬼の接吻に対して、ブラックを見つけたらそれを執行することを許可』していた。その状況で彼を逃がさずに命を救うのは、まあ難しいと言わざるを得ない」

ハーマイオニー達がシリウス・ブラックを逃がす事が出来たのは、単純に学生の居るホグワーツ内で一人一人を処刑するのは不適切だという考えによるものであろう。少なくともこの老人はそう主張するだろうし、内容としても至極妥当である。コーネリウス・ファッジも、後に世間から批難を受けかねない政治的失点は避けたかったと想像出来る。

ただそれは裏を返すと、護送の闇祓い達の準備が整つてシリウス・ブラックがホグワーツから連れ出されれば即処刑という事を意味する。のんびり再審請求をすれば良いという反論は、あの状況では成り立ち得ないのだ。ピーター・ペティグリューの身柄があれば流石に別だろうが、彼が逃亡した以上、既に為された死刑執行の署名に待ったを掛ける事は出来ない。

「故に貴方は逆転時計を持っているハーマイオニーに指示し、コーネリウス・ファッジに政治的な打撃を与え、自分も誹りを受ける事を覚悟の上で、シリウス・ブラックを逃亡させた。より最善の手段が無かったのかというのは僕には何とも言えませんが、貴方は可能な限り

最善を図ろうとしたように僕には見え、そして貴方の目的は滞りなく達せられた」

何より、ハリー・ポッターも同時に使えるというのが非常に都合が良かった。

アルバス・ダンブルドアが意図して造り上げてきた二年間とは違っていたが、三年目をああいう形で解決してしまう事は、この老人の指針に適うものであった筈だ。

特に学期末、シビル・トレローニーが闇の帝王の復活を予言し、いよいよ悠長にして居られる暇がないと解つてからは、ハリー・ポッターがシリウス・ブラックを——一人の命を救った事は、後々大きな意味を持つて来るに違いなかった。

今回もまた、老人は殆ど動かないままに多くを得た。

「しかしながら、コーネリウス・ファッジがこの国の秩序と安全に責任を負う魔法大臣であるのと同様、アルバス・ダンブルドアは Hogwarts 内の秩序と安全に責任を負う Hogwarts 校長だ。シリウス・ブラックの件について自分は無関係であると言い逃れする事は許されない」
ましてや二年連続。

盤石である筈の Hogwarts の防備は抜かれてしまった。

「裏の事情を把握し得ない世間にとって、貴方は無能だった」

そしてアルバス・ダンブルドアへの信頼を喪うには十分だった。

「四年目」

炎のゴブレット。

「これは言うまでも無いでしょう」

ほんの直近の事なのだ。

わざわざ長々と説明する必要が感じられない。

「貴方が直々に年齢線を引いたのにも拘わらず、ハリー・ポッターの参加を許した。そしてセドリック・ディゴリーが死んだ。Hogwarts の安全神話は誰の眼にも明らかかな形で、完全に崩壊した。故に——貴方を無能だと思い、強い不信感を抱くのは十分だと言って良い」

それだけを言つて、僕は口を一端閉じた。

それまでの三年間と違い、擁護の言葉を続けはしなかった。

それは単純に、僕がセドリック・デイゴリーの死について已むを得なかつたという言い方をしたくないだけで、多分この老人の方も僕から聞きたくなかつただろう。更に追及をしないままに、アルバス・ダンブルドアは口を開いた。

「……それで、ずらずらと四年間の儂の失態を並べて君はどうしたいのかね？」

その声と表情は嫌に穏やかで、優しげですらあった。

それ故に、好好爺の外面の一枚下には、煮え滾る本心が透けて見えた。

「儂を疑う者が大勢居るのは承知しておる。客観的に見て、世間にとって儂が信用に足らんのも重々承知じゃ」

けれども、と。

「今君が口にした事柄の大半は、君にとってどうでも良い、気に入らざとも無視出来る事の筈じゃろう。そして君は儂を擁護するような補足すらして見せた。つまり君が儂を扱き下ろす理由にはなっておらぬし、儂が勝てないと判断する根拠にもならぬ」

アルバス・ダンブルドアは当然のように核心を突き、実際その通りだった。

僕が口にした部分は、僕にとって些細な問題だった。

この老人が如何に不愉快な所業をしていようが、学期中に大きな失策をした訳では無い。後出で揚げ足取りをする事など幾らでも出来るが、それを除けば然して大問題と言うまでの事はない。彼が冷ややかに指摘したように、セドリック・デイゴリーの死すら許容範囲の失態だと言って良い。彼が生きていれば今後の戦争の展開に影響を持ち得る存在となりえたかもしれないが、死んだからと言って、アルバス・ダンブルドアや不死鳥の騎士団にとって取り返しのつかないものではない。

しかし――

「――何故、貴方は四年で終わったと思つたんです？」

アルバス・ダンブルドアが長い髭をピクリと動かした。

それまで平静を取り繕ってきたからこそ、外見から解るその反応

は、彼の内心における大きな動揺をありありと示していた。

この老人は、ハリー・ポッターの話についても四年で終わらせた。しかし、それは不適切なのだ。本気で僕にハリー・ポッターの行動予測をさせる気ならば、セドリック・ディゴリーを眼前で殺された彼の現状を語らなければならぬし、そして同様に、現在の状況を語るならこの夏休暇中の事についても言及しなければならぬ。

そもそも、何故僕が四年間の事柄についてズラズラ並べたと思っ
ているのか。

あれらは世間の反応を指摘する為ではなく、ただ一人が有する価値の為に捧げられている。

「二カ月の留保。それを定めておいて良かったと思いますよ」

当初はさして明確な意図が有った訳では無かった。

神経質になってきているだろうセドリック・ディゴリーの両親とは会いたくないという気が優先しており、第二次魔法大戦の開戦による情勢を見極めたいというのは劣後していた。

まあ猶予が別に無くても結論は変わらなかつただろうが、それでもこの老人の五年目の失態が無かつたのならば、ここまで己の立場について確信を持つ事は出来なかつただろう。

「これまでの四年は、貴方の行動に納得する部分が有りました。気に入らなくとも、それは僕の認識で間違っていると思えるだけで、貴方自身はまた違った見解を御持ちなのかもしれない。貴方が僕と違う人間である事は当然に受け入れられていて、そう我慢する事は可能であつて、けれども今年はずう」

ハリー・ポッターの物語として、それは在ってはならない。

「いえ、これは必然なのでしょうね。この四年間、僕は貴方の Hogwarts 内での対処自体には左程文句は有りませんが、それからその後始末と Hogwarts 外での行動には多くの不満が有った。この四年間を通じて夏休暇中に為すべき事をしなかつたという点で貴方は一貫しており、今年のそれが特段酷いという見方も可能だ」

「生き残った男の子」が僕の予想通りの存在であるというのなら

この一カ月で、この老人が行った所業は批難されて然るべきで有るし、そして彼の言葉が信頼されなかった理由がそこに存在する。

「セドリック・デイゴリーは本当に見事だったと思いますよ」

アルバス・ダンブルドアが語ったハリー・ポッターの証言、去年度の最後に現れた双子の芯の奇蹟、こだまとして残した言葉は素晴らしかった。

「貴方は当然理解しているでしょう？ 今回の初戦で最大の戦果を上げたのは当然ハリー・ポッターですが、それに次ぐのは文句無しにセドリック・デイゴリーだと」

「……………」

セドリック・デイゴリーは敗北した。

それでもあの男は、死んでも猥^{ハツフルバフ}身を忘れなかった。

「現在コーネリウス・ファッジが率いる魔法省は、闇の帝王の復活を躍起になって否定しています。けれども貴方は十四年前の時点で既に、闇の帝王は死んでいない、姿を消したに過ぎないのだと主張していた筈です」

「……当然じゃ。あの時点で、儂はあやつが死んでおらぬと確信しておった」

アルバス・ダンブルドアが当時、闇の帝王の生存を主張して損する事は殆どない。

そもそも赤子が史上最悪の魔法使いを殺したという説自体が、客観的に見て酷く馬鹿らしい事を忘れてはならない。十四年前の時点においては「生き残った男の子」の風説を信じない方が寧ろ自然であり、合理的である。

「ですが、貴方は闇の帝王が生存している根拠を説明し、提示出来なかった。或いは貴方自身、闇の帝王に対する或る種の信頼以外には、その根拠が無いと自覚していた。……嗚呼、推測の理由一つ口にしなかつたとしても批難はしませんよ。戦争が終わっていない以上、不利になりかねない推測を広めるのは不適切だ」

ルシウス・マルフォイ氏を始めとした死喰い人は檻の外に居ただ。アルバス・ダンブルドア自身の推測という貴重で強力な武器を、

彼等に与えてやるべきではなかった。

「もつとも、貴方の言葉を世間が信じたかどうかは今の状況が示す通りです」

闇の帝王は既に死んだ、最大限譲歩して二度と力を取り戻せない位に弱体化したという扱いを受けており、今年のセドリツク・デイゴリーの「事故死」を経て尚、魔法省はその前提を堅持し続けている。「ハリー・ポッターやハーマイオニーあたりは、突然貴方が嘔吐き扱いされたと考えているでしょう。しかし、それは決して正しくない。貴方は十四年前からずっと、闇の帝王が死んでいないという戯言を叫び、けれども当時から一貫して狼老人扱いされ続けてきた」

「……流石にあの頃は、今のようには言われる事は無かったかの」

「だが、十四年の平和によって闇の帝王の死が確実視された。要は本来であれば、コーネリウス・ファッジはこれまで通り、貴方をボケ老人とするだけで良かった。対決する必要は無く、ただ分別有る大人として優しく諭す態度を取れば良かった」

一般論として、認知症に陥った人間が整合性を欠く事を言い出すのは珍しくない。

可哀想な老人は自分の生徒の消失を認められず、故に伝説的な闇の帝王の復活を持ち出したのだと主張する事は、決して理がない訳では無い。

「優勝杯に予め備えられていた移動鍵の動作不良により、セドリツク・デイゴリーは過去のクイディッチの審判のさながら、サハラかどこかに間違つて飛ばされたのだろう。だから魔法省が搜索を開始すれば直ぐに彼は見つかるに違いない。本来そう主張する事が出来た筈だった」

そして、かつて偉大だった英雄は現在を認知する能力を喪い、第一次魔法戦争時代の過去の記憶に舞い戻ってしまったのだから、そつとしておくのが一番だ——そう主張する事こそが、闇の帝王の復活を否定したいコーネリウス・ファッジにとって、最も楽な道だった。いずれ破綻するとしても、最初から対決する事は有り得なかった筈だった。

「しかし、セドリック・デイゴリーの死体が晒された」

彼は光の陣営に一本の剣を残した。

己が身をもつて、コーネリウス・ファツジの逃げを許さなかった。

「ハリー・ポッターはまず間違いなく、セドリック・デイゴリーの死体の価値を理解していなかったでしょう。本当に素晴らしい言葉だと思いますよ。僕の身体を両親の許に連れて帰ってくれ、でしたか。そんな彼の最期の願いを、あの英雄殿が聞き届けない筈もない」

その託された使命は、ハリー・ポッターにとって自身の命と同じ位に重要だっただろう。

初めから彼が移動鍵ポット・キーを使って帰る事のみを考えていれば、優勝杯が何処に置かれたままになっているかを必死に探していたのであれば、卓越した開心術士である闇の帝王に思考を読まれるか、行動から逃亡の目論見を看破されたかもしれないとすら思う。

けれどもセドリック・デイゴリーの死体を是が非でも奪還しようとするハリー・ポッターの行動は、多分、闇の帝王には全く理解出来なかった。

理解出来なかったが故に、彼はまんまと逃げおおせる事が出来た。

「セドリック・デイゴリーの死は確定した。ホグワーツを含めた三校の生徒。三大魔法学校対抗試合の結末を見に来た、ボーバトンやダムストラングの本国の人間、そしてその他多くの国の高官達。彼等の眼にも触れてしまった。生存の可能性を語る事は許されず、どんなに言い繕っても魔法省の失態による事故死以上に、状況が良くなりはないのが確定してしまった」

十四年の平和は破られた。

「セドリック・デイゴリーの死体に一切の外傷がなく、少なくとも外見上、死の呪文を用いられた死体と同様だった事は、あの場に居た大勢が目撃したでしょう。その時点で、貴方の言葉には一応の理があるかもしれない。そう考える人間が出て来る事を止められなくなった」

闇の帝王の復活が、現実味を帯びてしまった。

「また代表選手が事故死した事によって、三校試合の運営に関与した魔法省の管理責任が問われ、コーネリウス・ファツジにも批難が集ま

るのは避けられない。その矛先を逸らそうとすれば、彼が魔法大臣の職にしがみ付こうとするならば、貴方をボケ老人扱いするだけでは足りない。貴方こそが全ての元凶であるとして責任を押し付ける必要があり、公然と対決しなければならなくなった」

そして非常に都合の良い事に、今年アルバス・ダンブルドアはハリー・ポッターの参加を阻むのに失敗している。セドリック・ディゴリーに関して、耄碌した老人が失敗したから死んだのだと主張するのはそう悪い選択とは言えない。

勿論、この最強の魔法使いを敵に回す事を考えなければ、だが。

「けれども、あの魔法大臣の椅子に座っているだけの男の言葉が、果たしてどれ程真に迫って聞こえるでしょう？」

アルバス・ダンブルドアの事を考えないのであれば。

コーネリウス・ファッジもまた、魔法大臣としての能力につき左程評価されているという訳ではなく、広く尊敬や信頼を勝ち得ているとは決して言えないのである。

そして非魔法界が女王や首相に対して平気で批判し、またその言葉を真正面から嘘だと非難する事が有り得るように、魔法界における魔法大臣の言葉もまた、その一切が無条件で信じられているという訳ではない。

「シリウス・ブラックが脱獄し、ワールドカップで死喰い人が暴れ、十三年振りに闇の印が打ち上がった後なのです。そして、^{ハリー・ポッター}生き残った男の子^{セドリック・ディゴリー}が三校対抗試合に巻き込まれ、一人の代表選手が死んだ。魔法省が如何に躍起になって闇の帝王の復活は嘘だと主張しようとして、何かが変わだと感じない馬鹿の方が余程少数の筈だ」

更に闇の帝王の復活を語るのは、他ならぬアルバス・ダンブルドア。その言動と性格によって各方面から蛇蝎の如く忌み嫌われている老人であろうと、彼がゲラート・グリンデルバルトを打倒し、闇の勢力に対抗し続けて来た大魔法使いである事に変わりない。アラスター・ムーディが狂人でありながらも伝説の闇祓いで在り続けたように、史上最高峰の能力を持つと誰もが認める魔法戦士の言葉は、戯言と一蹴出来る程に軽くはない。

「——だというのに、何故魔法界は信じないんでしょうね？」
アルバス・ダンブルドアは口を堅く結び続けたままだ。

この国で最も賢い老人は、愚か者の真似事を止め切れない。
「まあ信じないというより半信半疑というのが近いでしょうか。貴方を信じ切れず、心地良いコーネリウス・ファッジの言葉に耳を傾け、まだ戦争の再開まで猶予が有ると勘違いして、優柔不断のままに立場を決められない。セドリック・デイゴリーの尊き献身にも拘わらず、そうなってしまう原因というのは一体何処に有るのでしょうか？」

魔法界はそこまで理性と論理的思考を持たない人間ばかりなのだろうか。

そうである筈は無い。今年のアルバス・ダンブルドアにこそ、大人としての義務と責任を果たさなかつた老人にこそ、現在の状況への責任が存在する。

「闇の帝王が復活し、そしてハリー・ポッターが辛くも闇の帝王の下から逃げ帰って来た事を受けて、僕は改めて“ハリー・ポッター”について調べました」

「……それは君にとつて今年必要だったのかね」

「大いに必要でしたよ。これからの戦争では避けて通れませんが、既に四年前ざつとは調べていましたが、今ならばまた変わった観方が出るだろうと感じましたから」

魔法戦争の十年。そして束の間の平和の十四年。

その総決算として辿り着くのは、やはり彼に違いなかった。

「幸か不幸か、今までの四年で僕はハリー・ポッター本人を知り過ぎて
いる。ホグワーツで遠目から、ハーマイオニー経由の伝聞から、そして直接の会話から。だからこそ僕は今一度、客観的な視点——世間は“生き残った男の子”をどう捉えているかを知りたかった」

たった十四年とは言え、闇の帝王の野望を挫いた彼について語る書籍や記事は数多い。

ハリー・ポッターがホグワーツに、この国の魔法界に帰ってからは更に増えた。以前に調べた経験も有つて、予め抱いていた想像の裏付けを得るには十分過ぎた。

「十四年前のハロウインの後、ハリー・ポッターはマグル界に隠された。後見人でも何でもない貴方が独断でその決定を為した事に散々文句は出たようですが、ロングボトム両親が破壊されて以降、その声は小さくなつたみたいですね。魔法界の混乱や危険、そして政治的な懸念を考えれば、彼の処遇はそう都合が悪い物でも無かつたのでしよう」

それによりハリー・ポッターはダーズリー家で不幸な幼少期を送る運命が確定したのだが、その程度の犠牲は受け入れられる代物であつた。闇の帝王が消えて即刻、混乱が収束した訳では無い。赤子に過ぎなかつた彼の身に危険が有り、非魔法界に隔離される必要性が有つた事は、あのハリー・ポッターとて洩々認めざるを得ない現実だろう。「もつとも、魔法界はハリー・ポッターの事を忘れた訳では無かつた。何かあるごとに彼への祝福と感謝の言葉が捧げられていた。特にホグワーツ入学の節目の年、彼の十一歳の誕生日は——まあ、その頃はダーズリー家によつて岩上の檻樓小屋に連れ出されていた訳ですが——大々的に祝われたようですね」

「……………」

「ホグワーツへの入学は義務では無く、家庭教育や海外留学も認められている。そんな一抹の不安は有りましたが、しかしハリー・ポッターはこの国の魔法界に戻つて来た。そして彼の帰還、及び闇の帝王が堕ちてから十周年を祝し、ハロウインは国中が御祭り騒ぎ——その頃ハリー・ポッターは懲りもせずトロールと戦う羽目になっていました——に包まれていた」

流石に新聞に長々と記事が載っている訳では無かつたが、それでも二、三行の文章で彼等の派手さが想像出来る位には、相当な騒動になつたのは充分に伝わってきた。

「この国の人間にとつて十四年もの間、ハリー・ポッターは非常に象徴的で、そして大切な子供として在り続けた。『ときどき夜になると、僕はいまでも両親を思って泣きます』。この内容に聞き覚え、というより見覚えは？」

「……………三校試合中のリータの記事じゃの」

「ええ、あれはハリー・ポッターを知る者から見れば非常に馬鹿げていました、それでも彼女は世間の需要を正確に把握していましたよ」
ゴシップ記者としては最上と言って良いだろう。

この老人によって幾重にも守られたハリー・ポッターに接触し、直接のインタビュにまで漕ぎ着け、多分に捏造や脚色が含まれてはいても、読者の求める通りの記事を書き上げてみせたのだから。

『日刊予言者新聞』の記事にしても『週刊魔女』の三角関係の記事にしても、あれらの記事を真剣に信じていた者は極少数だったでしょう。けれども、あれらの記事が真実の一端を報道していたのもまた確かであり、そしてホグワーツ生の子供を持たない人間にとっては、あれが殆ど初めて触れるハリー・ポッター像だった」

ハリー・ポッターが毎年教科書をダイアゴン横丁に買いに訪れるのを知ったとしても、良心の有る大人ならば、無遠慮に押し寄せて迷惑を掛ける事は無かつただろう。

だがそれでも彼等が「生き残った男の子」の事を気にしていないか、
かつた訳ではない。彼等は常に、そして確かに、心の片隅でハリー・ポッターを気に掛けて続けた。

「先の魔法戦争で自身の家族を、己が子供を喪った者は少なくない。それらの人間にとつてハリー・ポッターは光で、希望だった。要するに彼を我が子のように大切に思っているのは、赤毛が特徴の一族や、何処のグリフィン・ドールだけの特権では無いんですよ」

蒼い瞳が僕を責めるように、鋭く細められる。

聞きたくないならば止めれば良い。この老人が止めれば、僕は直ぐに言葉を打ち切る。

だというのに、この老人は止められない。この世にそんな「善良」な人間など居ないというのに、自分にとつて不愉快な理屈を感情的に打ち切らせるのは不思議でも何ともないというのに、アルバス・ダンブルドアは、彼の理性が正当性を認める論理を阻めない。

「そしてそれ故に、彼等は当然のようになんか思つたのです」

「ハリー・ポッター」が如何なる存在であるのか。

それは此度において重要な点であり、その面を見ない振りをしてい

るのは他ならぬこの老人、アルバス・ダンブルドアだった。誰よりも賢い筈の魔法使いが惚けている、今年為したその善意の所業こそが、彼が世界の信用を喪った最大の理由に繋がっている。

「——この五年目。『生き残った男の子』による直接の証言。セドリック・デイゴリーが殺され、闇の帝王の復活を目撃し、在野の死喰い人達が再集結した旨を語るハリー・ポッター自身の言葉。それが魔法界に存在しないのは、一体全体どういう理屈なんです?」

その指摘に漸く、アルバス・ダンブルドアは表情を歪めてくれた。

高貴なる義務

この夏休暇中に在るべきモノ。

一カ月の時間が有れば、存在して然るべき証言。

それが、今をもつてして尚、何処にも存在していなかった。

「二応、去年の学期末に貴方が多くを語らなかつた事を責めはしませんよ」

あの時アルバス・ダンブルドアが全校生徒に語つたのは、大雑把に言つて二点。

闇の帝王が復活した事と、闇の帝王によってセドリック・ディゴリーが殺された事。先の話からすれば後者を為したのはピーター・ペティグリューが正確なのだろうが、まあ闇の帝王の杖が使われ、闇の帝王の指示も有つた訳だから、まるつきり嘘だとは言えまい。

しかしながら、その二点以上の内容は語られなかつた。

「ええ、大した内容が語られなかつた事に不満を抱いた人間は居た——僕もその一人ですが——でしょうが、表立つて貴方に物申す人間は居なかつた。理由は簡単です。それらの疑問に悩まされるのは一時的な物であつて、誰もが直に解消されると信じて居たからだ」

実の所、僕は魔法省の立場からして検閲されるだろうと考えており、大衆が知る事が出来ないだろうと考えていたのだが、それはまた別の話だ。

「つまりはハリー・ポッターの証言が公になれば、あの日に何が起つたのかという真実を知れるのだと、ホグワーツ生の多くが考えていた。生徒の親もそうですし、あの第三の課題に招かれていた来賓、セドリック・ディゴリーが死んだ事を知つた大衆もそうです」

「……儂はハリーから聞いた事をファッジに、そして闇祓い達にも伝えておる」

「僕は先程からハリー・ポッターの、と強調して言っている筈ですがね」

「ここまで来て惚ける老人へ流石に大きな苛立ちを覚える。

……だが、考えてみれば惚けざるを得ないのかもしれない。

この老人の類稀な頭脳をもつてしても、真つ当な反論は思い浮かばないのだろう。

「証言が真実であるかどうかを判断する方法で、もつとも重要な一つは本人から聞く事だ。人から聞いた話には誤解や過誤が入り得る。また本人が証言するのならば、幾何かの質問をする事で真実かどうかを吟味する事が出来る。しかし又聞きだとそれが出来ない。にも拘わらず、伝聞について嘘だの真実だの安易に判断を下すのは、正直言つて馬鹿の所業ですよ」

故に、喫緊の問題が無いならば、判断を留保するのが一番賢い。

ハリー・ポッターが闇の帝王の復活を見たと言つていたのを聞いたという、アルバス・ダンブルドアの証言に左程の重みは無い。証言出来る者が尽く死んでおり、伝聞証言しかないという訳でもないのだ。闇の帝王が復活したのを直接見たというハリー・ポッターの証言が在つてこそ、初めてその中身の真実性を考える余地が生まれうる。

……嗚呼、こうも言い換えられるだろうか。

自分の子供がこう言つていましたという親の発言を、世間一般は果たして何処まで真剣に受け止めるのだろうか。

「勿論、ハリー・ポッターが広くインタビューを受けるとは言いません。大衆に対しては貴方経由でも構わない。ただ魔法省及び国際魔法使い連盟に対しては、尋問でも公聴会でも非公式の会談でも何でも良い。ハリー・ポッター本人が直接証言して然るべきだ」

闇の帝王の復活。

それは国内からのみならず、国際社会からも関心を向けられる事柄である。

死人の復活は何なる魔法でも不可能というのが現在の常識だ。

公的ではないとはいえ、闇の帝王は事実上死人扱いされていた。彼が如何にして復活を遂げたかの経緯について、国際魔法使い連盟が説明を求めようとするのは何ら不思議ではない。

そしてまた、如何に一国内戦とは言えども、大勢を殺戮し続けた闇の魔法使いの動向に連盟が注意を払うのは自然である。特にポーバトンの魔法使いは、ドーバー海峡が四十キロにも満たない事を考え

れば、対岸の火事とは言っても完全に無関心では居られまい。

加えて言えば今年の事件が起きた——代表選手も死んだ——のは三大魔法学校対抗試合、ボーバトンとダームストラングも関わる国際行事の中である。当事者である二校に対しては当然、更にその本国に対しても説明責任は果たされるべきだろう。

そしてそれらの説明は目撃者であるハリー・ポッター本人によって自ら直接に為されるべきであつて、魔法大戦の英雄であるアルバス・ダンブルドアだろうが——付け加えるならばこの国の魔法大臣であるコーネリウス・ファッジだろうが——代理で為す権利など一切無い。

ハリー・ポッター本人が最低一度、公の場において証言を残すのは、最早世界に対する義務であるとすら言つて良い。

「だというのに、ルシウス・マルフォイ氏はそんな物は存在しないと僕に言った」

それは、僕達にとつて決して受け入れられない「裏切り」だった。「まあ、彼が僕に全て真実を語る事は有り得ませんが、今回はそれは考えなくて良いでしょう。貴方がたの証言は基本的に一致する筈なのですから。ハリー・ポッターの証言だけ隠す意味は無いし、仮に自身を聞かせたくない場合でも「信じるに値しない戯言を述べていた」程度の返答で十分でしょう。そう言われれば僕は引き下がるしかない」

けれども違った。

ルシウス・マルフォイ氏は真摯に僕へと回答した。

故にハリー・ポッターの証言が無いのは真実だと、そう納得する以外に無かった。

「既に強調した通り、この国の魔法界にとつてハリー・ポッターは非常に大切な子供だった。流星にギルデロイ・ロックハートのように、彼に講演会やサイン会を開けと考えていた人間は少ないでしょう。しかし、それでも今回こそはハリー・ポッターが公の場に姿を現してくれると考えた。自分達へ直接言葉を投げ掛けてくれる事を、当然のよう

に期待した」

彼の語る真実が自分達を安心させるには程遠いとしても、あの地獄の戦争の再開という凶事を前にして、〃生き残った男の子〃が言葉を尽くしてくれるのだと考えた。十四年前に残された希望の子が、不安に苛まれる自分達に寄り添ってくれる事を当然のように期待した。

「けれども、その期待は裏切られた」

僕が去年度末ハリー・ポッターの姿を見たのは、ホグワーツ特急を降りた後、本物のアラスター・ムーディらによって護送されていくのを見たのが最後だ。その後の動向は推測するしかないが、多分彼はプリベット通り四番地に幽閉され続けたままなのだろう。

故に魔法省に出頭する事も、国外の国際魔法使い連盟において証言するような事も、このハリー・ポッターの夏休暇中には一切存在しなかった。彼のその行いを止めたのは、止める事が出来たのは、アルバス・ダンブルドアただ一人しか居ない。

「ねえ、そこに正当な理由が有るんですか?」

去年度の学期末以降、彼を魔法界から丸四週間隔離し続けた事に大義が在るのか。

「貴方がハリー・ポッターの証言を独占する正当性は存在するのですか? 有るのなら言って下さいよ。言わば犯罪者の目撃者であり、被害者でもある彼の証言を、肉親でも何でもない単なる老人が妨げるだけの正義が」

「……シリウスもハリーが証言する事は望んで居らぬ」

「ならばダーズリー家は? あの家の話を聞く限りでは、一時的にしろハリー・ポッターを厄介払いする機会を見逃すとは思いませんが?」

どんなに虐待しようが、彼等がマグル界での法定の保護者である事に揺るがない。

ハリー・ポッターに関わる重要事項について彼等には相談が為されるべきであり、また賛否を示す為の一票が与えられて然るべきである。

「ちなみに闇の帝王の復活は、マグル社会で言うテロリストが行動を再開した事に等しい訳です。故に勿論、今回の一連の事情に関しては

ダーズリー家に説明をしているのでしょうか？ あそこは第三者が想像する以上に強固な護りが施されているにしても、だからと言って自分達の安全に関わる事について、何も知らされないままで良い筈は無いと思いますが」

返ってくるのは沈黙。

それすら、していないのか。

本当に、結果だけは正しくとも、この老人が選択する過程には間違いしかなかった。

「……ハリーの心は大きく傷付いておる」

一切の流れを無視して、アルバス・ダンブルドアは言い訳の言葉を紡ぐ。

「同じホグワーツで学び続けてきた仲間を、自分が数秒前まで話していた人間を突然に殺されたのじゃ。ハリーは話す事を望まぬ」

「ええ、そうでしょうね。他人から証言を求められた所で、ハリー・ポッターは証言を強く拒絶するでしょう。それは僕の見立てでも確かですよ」

「そういう事じゃ。儂はそのような非道を若者に強制は出来ぬ」
「……………」

僕の一応の肯定に安堵を隠し切れなかった彼を見て、本当に救えないと思った。

たとえ尊厳を踏み躪られた性犯罪被害者だろうが両親を眼の前で惨殺された幼子だろうが、公的機関によって証言を強制されざるを得ない場合というのは有るだろう。

その証言者に対する配慮を求めるのは構わない。捜査や裁判によって忌まわしき記憶を掘り起こされ、更に傷付けられるであろう彼等に保護が与えられるべきなのは当然だ。しかし証言自体を拒絶するのは、それが止むを得ない例外的な場合を除いて、社会の在るべき秩序として許されるべきではない。

もつとも、この時代遅れの権利意識に囚われた老人は、ただハリー・ポッターの心が安らかで在って欲しいとだけ願う男は、断固として認めない。

「ヴォルデモートが復活したと述べる儂の言葉を信じぬのならば、たとえハリーが証言した所で信じる道理は無かろうに。だというのに彼が数時間も長々とした話を強制され、方々から散々に質問攻めにされ、心身共に憔悴させる必要が一体何処に有るだろうか？」

「……確かに彼が述べた所で心変わりするのはほんの一握り、数パーセントの人間でしょう。しかしその一握りの賢明な支持を獲得する事こそ、非常に大きいと考えますけどね」

ハリー・ポッターの証言が無い事は異常だ。

感情的ではなく、理性的にそう考える頭を持った人間は、たとえ少数でも価値が有るだろう。

「——そもその話。ジェームズ・ポッターは現状を是とするんでしょうか？」

「……………君は、何を」

アルバス・ダンブルドアにしては珍しく勘が悪かった。

いや、彼にとってジェームズ・ポッターは既に考慮に入れる必要のない人間だ。彼が実親であろうとも、親としての職務を果たせない人間だ。だからこそ彼ならばどうするかなど、死人に眼を向ける程に弱くないこの老人には、決して考えが及ばない。

「ジェームズ・ポッターは間違いなく僕が大嫌いな類の傲慢な頭空っぽ野郎だったでしょうが、それでも彼は善なる騎士道精神を持つ者たらんとするでしょう。彼は当然のように現在罷り通っている不正義を見逃せず、そしてまた、息子に対しても自分と同じように在る事を望む筈だ」

そして、この老人がグリフィンドールの部分でもある。

「シリウス・ブラックの冤罪。十四年前の魔法省の大失態であるそれを、この機会を利用してハリー・ポッターがぶちまけるのは、そう悪くない考えだと思いませんか？」

グリフィンドール。

騎士道を尊ぶ、勇猛果敢な獅子の寮。

そこに所属した事を誇りに思う人間が、無実のシリウス・ブラック

が未だに殺人鬼扱いされている現状を憂い、それを是正するのに絶好の機会を見逃せるだろうか。

「リーマス・ルーピン教授もシリウス・ブラックも貴方には恩義があり、弱みが有る。故に、それを主張する事が出来ない。しかしジェームズ・ポッターが生きていれば——その場合、ハリー・ポッターは、生き残った男の子”ではない訳ですが、今は無視しましょう——この現状でハリー・ポッターを表に出さずに居られるかは疑問だ」

「……子供が傷つく事を望む親など居らぬ。それはジェームズ達とて同じの筈じゃ」

「ハリー・ポッターは、自分が何かして傷付く事以上に、何もしないで傷付く事を恐れる。僕は彼をそんな人間だと思っっていますし、ジェームズ・ポッター達が真にハリー・ポッターの親ならば、彼のその想いを汲んでくれると思いますけどね」

一昨年度のシリウス・ブラックの一件について口を噤むのはまだ納得出来る。

ただそれでも去年度は、今年は、状況がまるで変わってしまったている。

「既にハリー・ポッターは大嘘吐き扱いされているんだ。そして闇の帝王の復活という”嘘”は、後に覆される事は解り切っている。ならば今更”嘘”が一個増えた所で一体何の問題が有るでしょう？ 占い師が一部を言い当てて言葉の全部を真実だと思わせるように、シリウス・ブラックについてもそれを行えば良い」

「……シリウスは現状大量殺人鬼扱いのままじゃ。彼を擁護する真似をしてしまえば、ハリーは更に窮地に追い遣られる事になる。ハリーが良からぬ事を考えた結果が今回の顛末だと、心無き魔法使い達は責め立てるに違いない」

「では、何時シリウス・ブラックは冤罪の嫌疑から逃れられるんです？ 貴方が裏で魔法省に圧力を掛けますか？ それでは日刊予言者新聞でただ一行、”シリウス・ブラックは冤罪囚でした”と御詫び記事が載るだけで、彼がダイアゴン横丁を歩く度に通報される事態は変わらない。法的に無罪となろうと、彼は世間的に有罪のままですよ」

シリウス・ブラックの真実について大々的に報道される事は有り得ない。

失敗を言いふらしたがる人間など居ないし、今年の魔法省や『日刊予言者新聞』の対応を見るに、彼の名誉は間違いなく回復されないままである。

しかし先のような詐術を使えば、シリウス・ブラックの名誉は多少マシになるだろう。

ハリー・ポッターが殺人犯シリウス・ブラックを擁護したというのは、『日刊予言者新聞』が自ら大々的に報道してくれるのだ。この老人の主張通り一時的に悪くなる事は否定しないが、闇の帝王の方も、表立って動けない不自由な冷戦状態を何時までも是とする筈もない。今は大人しくしていても、彼が公然と動く時は必ず来る。

そしてそれは魔法省が、もしくは世間が闇の帝王の復活を認めざるを得ない時である。

その瞬間に魔法戦争の再開が誰の眼にも明らかとなり、ハリー・ポッターとアルバス・ダンブルドアの評価は一変し、同時にシリウス・ブラックに纏わる風評もまた丸ごと反転する。

「加えて彼の名誉回復を現時点で行っておく事は、今後の戦争遂行の上で全く無価値では無い。去年のクイディッチワールドカップにおける闇の印。あれは貴方の側も、一体誰が撃ち上げたか解らなかつたのでしょうか？」

「……ヴォルデモートの指示ではないとは確信しておった。十四年前に軽率な行動により肉体を喪った教訓を持つあやつが、あれを配下に撃ち上げさせる事は絶対に有り得ぬ」

「成程、僕よりは強く確信していた訳ですか」

ハリー・ポッターと違い、この老人は闇の帝王が関わっていないと考える理由が有った訳だ。

「ただ、コーネリウス・ファッジの前でも言った筈です。一般の人間は違う、シリウス・ブラックが撃ち上げたと考えたと。そしてそれは今後についても同様の事が言えます。これから魔法省が隠し切れないような大事件が起こった時、その全てを魔法省はシリウス・ブラック

に結び付けようとするのはまず確実だ」

十二年間アズカバンに繋がれていた人間が、今どれ程戦力になるか僕は知らない。

けれども戦争で使えるような駒を遊ばせておいて良い理屈は決して無く、使えるようにする為の手段があるならば、可能な限り努力すべきである。

「ハリー・ポッターは『日刊予言者新聞』を読む人間では有りませんし、ハーマイオニーの方も、わざわざ彼に現状のシリウス・ブラックの扱いを伝えはしないでしよう。しかし彼がそれを知れば、そして正す力が自分に有ると理解すれば、彼は絶対に動こうとする」

どちらかと言えば、ハリー・ポッターは理屈より感情を重んじる人間である。

そして彼が後見人の事を大事に思えば思う程に、彼の行動は止まらない。

「二度公の場に出てしまえば、手酷い批判や心無い罵倒に晒される羽目になる。或いは、シリウス・ブラックの逃亡幫助に關しても正式に罪を着せられるかもしれない。そう事前に説明され、逃げる道を同時に示されたとしても、間違いなく彼は証言台に立つ事を望むでしょう」

それが彼の騎グリフィンドール士たる資質である。

「今までの Hogwーツ生活で、彼は幾度となく大勢から批判される立場に置かれてきた。それ故に多少の耐性があるとはいえ、今回ばかりはそれらが御遊びと思える程の壮絶な悪意がぶつけられるのは間違いない。けれども、それでも彼は——」

屈する事は決してない。

それ程、ハリー・ポッターという人間は弱くない。

そう続けようとした僕を、しかしアルバス・ダンブルドアが遮った。

「——解るじやろう、君には」

アルバス・ダンブルドアは声を荒げた訳ではなかった。

けれども平静は崩れ、醜悪な激怒を隠し切れていない。

僕は今まで何度かこの老人が被る仮面の一部を破壊し、その本性を

覗き見てきた事があるが、今回は一等酷い。しかし彼が露わにする感情の核心に巢食うのは僕に対する憎悪であるべきで、ハリー・ポッターと最も親しき誰かへの嫉妬であるとは決して考えたくなかった。「ハリーが公の場で証言するような事態になつてしまえば、彼に対してどのような侮辱的で、その心を大いに傷付ける質問が為されるのかを」

「……つまり、こう言いたいのでしよう？」

去年度末の事件について、世間で流れている噂が一つ存在する。

「セドリック・デイゴリーを殺したのはハリー・ポッターだったのではないか。彼が真正面からそう批難される事が、貴方にとっては非常に嫌な訳だ」

求めたのは自分だというのに、彼は解答の重さに怯んだように見えた。

けれども心を立て直すかのように姿勢を正して、アルバス・ダンブルドアは頷いた。

「然り。ハリーは未だ自分がそう批判されうる立場に居る事を気付いてはおらぬ。『日刊予言者新聞』も流石にそこまでは書かぬ。しかし、そういう見解が有るのは、ルシウスらがこそそと嘘を流しておるのは動かぬ事実じゃ」

「遺憾ながら、僕としては一理有ると言わざるを得ませんがね」

その主張は決して合理性を欠いてはいない。

「いわば密室だった空間から、死体一つと生きた人間一人が一緒に発見された。そしてその死体を検証した所、死の呪文によつて殺害された遺体である事が判明した。この状況で殺人の第一容疑者として疑うべきは誰か。それに対する解答は明らかでしょう」

セドリック・デイゴリーが殺された場面を見た者は居ない。

であれば、彼の腕を握つて現れたハリー・ポッターを疑うべきは当然である。

殺された手段が死の呪文である事は多少の問題になるが、そもそもハリー・ポッターは赤子にして闇の帝王を打ち破った人間だ。十四年にそのような異常事態が発生したのは、ハリー・ポッターが更に凶悪

な闇の魔法使いだったからだ。そんな噂は当時から存在していた。

その事を思えば、未だ十四歳のハリー・ポッターがセドリック・ディゴリーを殺せる筈が無いという反論は、そう強い物ではないのである。

「加えて、彼が直面するのは悪意だけでは在らぬ」

僕の感想を無視し、老人は正当化を続ける。

「善意と好意こそが人を責め、追い詰める事は大いに有り得るのじゃ。その点で儂は先達と言つて良い。グリンデルバルドを倒す前も、倒してからも、儂は英雄として無責任な大衆から期待され続け、働く事を余儀無くさせられたからのう……！」

如何にこの老人が気に入らなかりと、決して否定し得ない事実が有る。

それは今世紀で最も偉大な魔法使いと呼ぶのが相応しい程に、化物染みた技量と魔法力を有しているという事だ。大抵の行動は不適合であろうと、最後の最後には英雄として立ち、その義務を果たすのを辞めなかつたという事だ。

「ヴォルデモートの復活を信じた者が居たとしよう。或いは今後、ヴォルデモートの復活が公になったとしよう。その際、公の場に姿を現したハリーに——赤子の身でありながら史上最悪の魔法使いを退け、そして完全に復活したあの者と死喰い人達の包囲から逃げ延びた人間に、一体どんな言葉が向けられると思つておる？」

「まあ、ハリー・ポッターが英雄として先頭に立ち、戦う事を望むでしょうね」

「然りじゃ。彼に、十五歳になったばかりのあの子に大勢の者が継り付く。ホグワーツに遊びに行つて時間を浪費するような真似をせず、今すぐ戦えという声上がるじやろう。自分を守つてくれと彼の元に押し掛ける者すら現れると儂は確信しておる」

勝手な妄想とは言い切れない。

他ならぬ彼にはそれを懸念する資格が有る。

アルバス・ダンブルドア以上に英雄と呼べる存在は、この国には一

人を除いて他に居ない。その上彼は五十年近く英雄という職業をやっている。英雄という地位の面倒さと大衆の醜悪さを、彼が良く知っているのは確かだろう。

「ハリーが一度表に出してしまえば二度三度と求められる。あの子を気軽に呼び立てて良い者だと思い、歯止めが利かなくなる。また、ハリーは政治にも巻き込まれるじやろう。シリウスは後見人の資格を剥奪されており、法的に保護者と言える者は居ない。儂が真つ当な形で保護者となれないのは最初から眼に見えておったからの」

「当然でしょう。英雄ハリー・ポッターの保護者、彼の身柄を握った人間が政治的に強力になるのは明らかだ。これ以上貴方が強くなる事は、誰も望まない——と言つても、現状で貴方は事実上それを握り、また濫用している訳ですが」

アルバス・ダンブルドアに何の権限もないという事は有り得ないだろう。

戦争に自ら身を投じた者達が遺言を残さない筈もなく、ポッター夫妻も然りである。

そして第一に後を託された相手は恐らくジェームズ・ポッターの親友三人だろうが、第二に託された相手はアルバス・ダンブルドアに違いない。

後見人シリウス・ブラックを筆頭とする三人がポッター家の遺言を実現し得なくなるといふ事は、それは即ち、彼等三人の戦死を意味しているに等しい。そのような末期的状况にあたって最強の魔法使いの慈悲に縋らない理由が無い。彼等は当然のように遺言にその旨を記し、遺言の調査義務を有する魔法省にも同様の記録が残っている筈である。

勿論、アズカバンに行ったシリウス・ブラック、或いは死亡扱いのピーター・ペティグリューと異なり、リーマス・ルーピン教授は戦後も健在だった。

しかし、彼は狼男だ。単なる戦争遺族の面倒を見る程度なら問題は無かっただろうが、流石に「生き残った男の子」となれば別である。世間の注目を集める事は間違いなく、余計な詮索により狼男であると

いう秘密が露見した場合は最悪で、彼が已む無く辞退した結果、アルバス・ダンブルドアはポッター家の諸事務を管理する権限を握ったのだろう。

ただし。

ハリー・ポッターの身柄まで文章で明瞭に委ねていたかは疑問がある。

アルバス・ダンブルドアは一応善良な大魔法使いだ。故にグリーンゴッツ銀行の金庫を筆頭とする財産管理を委ねる事に何ら不足はない。魔法省、或いは良からぬ親戚がポッター家の財産を侵害するのを防いでくれる筈だと考える程度には、この老人は信用出来る存在である。

けれども——我が子を預けられるかという観点で見れば、多分信用出来ない。

そもその話、アルバス・ダンブルドアは不死鳥の騎士団団長である。自分達が戦死した時の事を想定しているのに、自らの子供を戦争指導者に預けようとする人間はそう居ないだろう。アルバス・ダンブルドア側としても迷惑である。奇跡的にジェームズ・ポッター達の死と停戦が重なっただけで、この老人は本来なら魔法戦争で忙しくしている筈だったのだから。

故に間違いなく、そこには欺瞞や詭弁が有る。

ハリー・ポッターを自由にする権限は、アルバス・ダンブルドアには無い。

「確かに貴方は十四年前に彼を最初に保護した人間であり、今貴方が彼に掛けている守護も嚴重であり、完璧に近いのでしょう。闇の帝王すら認める位の保護なのですし、過去も今でも魔法省がそれを用意出来たとは思えない」

この大魔法使いが取る行動が齎す結果は、概ねの場合正しい。

「だが、だからと言って、貴方がハリー・ポッターを自分勝手に支配する事を正当化していい訳がない。今この状況を見れば猶更そう思えて来る。貴方のハリー・ポッターに対する仕打ちに、魔法界は絶対に納得出来ない」

アルバス・ダンブルドアは偉大なる先達としての善意の下に動いているのだろう。

しかし僕にして見れば、アルバス・ダンブルドアという男は善意で悪事を為す天才と言って良い。これまでも、今も、これから。この老人は秩序を乱し、魔法界に害を齎し、他ならぬハリー・ポッターを苦しめ続ける元凶であるようにしか思えない。

「貴方が正しいと思う事と客観的に正しいという事は、決して等号で結ばれない。貴方は今の自身の行為が正しいと誰か一人からでも保証を受けたのですか？ 誰かに相談し、説明し、議論し、時に妥協して、今の行動を選択しているのですか？」

「当然、僕は信頼と信用を受けておるとも。僕の言っておる事、やっている事は正しいと言われているとも。そうでなければ、一体どうして僕が不死鳥の騎士団を率いられようか？」

「僕が言っているのはそういう事では無い。貴方に白紙委任されて構わない偉大な戦争計画では無く、周りや本人から承認を受けるべきもつと小さい指針の事を、ハリー・ポッターに与えられて然るべき選択の権利の事を言っている」

「同じじゃよ。君の理屈の根源は餓鬼の理屈でしかなく、君と同様、ハリーは英雄である前にまず子供なのじゃ。そして君が持つ現代マグル的な観念からも、子供を政治や戦争に引つ張り出すべきでないという理屈は理解出来るであろうに」

「……………」

この男は、気付かないのだろうか。

今の論理は、コーネリウス・ファッジが使った論理と殆ど同じだという事に。

そしてあのアラスター・ムーディ教授は偽物だったが、あの演技が完璧だった以上、多分本物も同意しないだろう。戦争の現実を多少でも知っていれば、そのような御花畑の理想論を馬鹿正直に語れる筈もない。

けれども、アルバス・ダンブルドアだけが語れる。

殆ど一生涯最強の座に君臨し続けて来た魔法使いのみが、その手を

血に汚さず御綺麗なままで居られた男だけが、子供は戦場に出るべきではないと―― “生き残った男の子” が何者であるかを知つていて尚、ハリー・ポッターを子供扱い出来るのだ。

「君が考える程に魔法界は成熟して居らぬ。一昔前のように、社会はハリーに戦いと犠牲を強いる。何より儂や君と違い、ハリーは性根が善良過ぎるのじゃ。彼は容易く言質を取られ、現在幾重も張り巡らされている保護を剥がされ、その身一つで戦争の最前線へと送り込まれる事になる。これは予想でなく予言じゃ。そしてそうなつては流石の儂とて彼を護り切れぬ」

我儘な老人は語気荒く、己の正当性を強弁する。

「君は重々理解しておるだろうが、儂は多方面から嫌われておる。近しい者であつても、いや、近しければ近い程、儂が油断ならぬ事を知つておる。まして君が指摘した通り、ハリーは強力な駒じゃ。何時も口煩い人間達は、十四年前に “ハリー・ポッター” という武器を得られなかつた者達は、今度こそ死に物狂いで獲りに来るじやろう」

アルバス・ダンブルドアの言葉に同意出来る部分は確かにある。

この老人も大概だが、それ以上に魔法省が信用出来ない組織である事は認めざるを得ない。子供が戦争や政治に引つ張り出される社会が不健全だというのも同意しよう。加えて、この老人が敢えて言及していない、僕の頭では思ひもつかないような数多くの熟考と覚悟と決断の下に、今現在の状況が作られているのも受け容れて良い。

けれども、ただ一点。

絶対に同意出来ない、否定しなければならぬ部分が存在する。

「……どうやら、僕は貴方を、ハリー・ポッターへの評価を勘違いしていたようです」

肺が空になる程に、大きな溜息を吐いた。

言葉を交わせば交わす程に、この老人の歪みを僕は見付けてしまふ。

僕はアルバス・ダンブルドアと接触するべきでは無かつた。最早遠い昔の事のように思える四年前、僕はグリフィンドールの正義感を振るつて、彼の下を訪ねるべきでは無かつた。そうでなければ、御互

いにこんな思いをする必要も、わざわざこうして対立する必要すらも無かった。

今まで僕は、アルバス・ダンブルドアと幾つもの見解の相違が有った。

けれども今回程に絶望した時は無い。

来る戦争に向けて、誰よりも多くを見通せる指導者が、これ程までに甘つちよろい言葉を述べている事に。この体たらくで、この老人は真剣に戦争で勝つつもりだという事に。不死鳥の騎士団は勝ち得ないだろうという予感、ここに至つて余計に強まってしまっている事に、僕は深い失望と落胆を抱かざるを得なかった。

「これまで僕は、貴方がハリー・ポッターを非常に高く評価していると思つていました。しかし、逆なんです。闇の帝王や死喰い人達まで数に入れたとしても、貴方よりもハリー・ポッターを過小に評価している人間は、この国の魔法界に存在しない」

賢者の石と秘密の部屋。

済し崩し的にハリー・ポッターが巻き込まれた去年と一昨年と違い、あの二年間の事件は大筋においてアルバス・ダンブルドアの意思の下に支配されていた。

賢者の石においては、この老人はクイリナス・クイレル教授を校内で泳がせ、ハリー・ポッターに散々ヒントをくれてやり、石に辿り着く為の迷宮を一年生でも解ける難易度に設定し、闇の帝王と対峙する機会と権利を与えた。

また秘密の部屋においては、秘密の部屋の怪物がバジリスクだと推測する程度の頭脳を有していたにも拘わらず、五十年前の真実と此度の校内への手段を突き止める為に気付かない振りをし、大蛇の毒を癒す不死鳥とグリフィンドールの剣を内蔵した帽子を残して学校を離れ、ハリー・ポッターが真犯人を突き止める事を期待した。

その何れにおいても、この老人は「生き残った男の子」を大きな危険に晒している。

しかしそれはハリー・ポッターは能力が——自分が救援に駆け付けるまで生き残れる程度の能力がある。そのように信頼しているから

だと、今まで僕は思っていた。

しかし、ここに至って違う事が判明した。

いや、かつてそうだったとしても、違うようになってしまったのだろう。

この四年間を経て更に増したハリー・ポッターに対する愛情が、今世紀で最も偉大だった魔法使いを墮落させ、理性と道徳を喪った盲目で白痴の老人に変えてしまった。

アルバス・ダンブルドアは、闇の帝王が一貫性を欠いたと非難した。しかしそうであるならば、彼もまた、既に一貫性を欠いてしまっている。

「——予言、有るんでしょう？」

ハリー・ポッターに関わる予言、それも彼が闇の帝王を滅ぼす類の予言が」

十四年前の疑問

“アルバス・ダンブルドア”は段々崩れつつあった。

動揺は何とか治め切れている。しかし、苦渋が、敵意が、そして僕への憎悪が存在していた。日が大きく傾き、夜の帳が染みつつある校長室の中、蒼の瞳が焰のように燃えている。僕は漸く、この老人の仮面を剥がしつつあり、しかしまだそれは始まりである。彼が他人の前に置いた分厚い壁は、まだ破壊し切れていない。

「まさか今指摘されるとは思っていなかった。そのような反応ですね」

「……………」

答えなかったが、答えたも同然だった。

「別に自分が賢いからこの指摘が出来たというつもりは有りませんよ。この十四年間でハリー・ポッターが何故闇の帝王を滅ぼす事が出来たのか。その謎に多くの人間が挑み、あれこれと頭を悩ませ続けてきました。この回答はそれらの予想の中に当然有りましたし、何より先程貴方自身が気付かせようとしていたんです。指摘出来ない筈もない」

賢者の石にそうした時と同じように、と内心のみで呟く。

それを口にしなかったのは、この予言の存在についてアルバス・ダンブルドアが自分から気付いて欲しい——真に気付かせたい相手を自覚して居ないからだ。そしてわざわざ代わりに伝えてやる程に、僕はこの老人に都合の良い存在になる気は無かった。

「もつとも鎌掛けの面が有ったのは否定しません。ですから嘘を吐いても良いよう正確に視線を合わせた訳ですが、どうやら貴方を過大評価していたみたいです」

「……生半可な嘘は君に通じない。それを既に僕は理解しておるからの。無意味な事はせんよ」

絞り出すような声色でアルバス・ダンブルドアは言った。

「しかし、僕もまた君の事を過大評価しておったのかもしれない。君は論理と合理を第一に重んずる人間だとこの四年間で思っておった。

その君が、まさか真の予言の實在を本気で確信し、ここで持ち出すとは夢にも思わなんだ」

「無駄に惚けてみせるのは貴方の悪癖だ。そう思いますけどね」

自分の都合の悪い部分を見たがらないのは誰にでも有るだろうが、それでもこの老人は一際酷い。賢過ぎるアルバス・ダンブルドアは、他人の知性こそを過小評価している。

「四年前、クイリナス・クイレル教授はこう言っていましたよ。『最初、〃生き残った男の子〃——つい一年ばかり前に生まれた赤子がヴオルデモート卿を退けたのだと聞いて、一体誰が信じたと思う？ それが大嘘では無い証拠は？』と」

僕が今以上に何も知らなかったあの時。

既に闇に囚われていた教授は、そう厳かに問うてみせた。

「……クイレルの名を持ち出さずとも、君はその疑問を当然に抱いた筈じゃ」

「そうですね。ただ、当時を知らない生徒に対して謎の根幹を的確に提示してみせる程には、あの教授は非常に賢い人でしたよ」

予言の存在の確信。

彼の言葉がその一助となったのは確かだった。

そう長い会話では無かったが、それでもあれは途中で終わってしまつたが故に、この四年間その一切が心残りのままで、印象に残り続けて来た。

本当に、かの教授のマグル学の講義を受けたかったものだ。

スリザリンから排斥される羽目になるとしても、その危険を冒す価値は有つただろう。

「まあ教授の言葉を抜きにしても、闇の帝王が復活した今、十四年前の謎を洗い直す必要を感じるのは当然の事ではないですか？ ハーマイオニーとて——」

「——彼女には君のような推論を立てる事は出来ぬ。君程に、彼女は賢くはない」

その無慈悲に切つて捨てる物言いに少々不愉快さを抱いたが、彼女が気付き得るか否かは今の本題では無く、僕は言葉を続けた。

「……ともあれ、物事の渦中に居た貴方がたにとっては、『生き残った男の子』の存在は何ら不思議ではないのでしよう。けれども第三者から見れば——特に、この四年間のハリー・ポッターの物語を聞いた僕にとってみれば、ソレは不思議で仕方が無い。そう思いますよ」

確かに穴は有るし、推量が多分に混ざる部分も有る。

だがそれでも合理の下に予言の存在を疑うには、十分過ぎる材料が存在していた。

「闇の帝王が消え去った当時の噂という物を、僕は良く知りません。しかし、当時の記録を見る限り、早い内からハリー・ポッターは『生き残った男の子』だったようですね。いえ、こう言いますようか。ハリー・ポッター以外の英雄の存在が噂される事は不思議となかった」と

アルバス・ダンブルドアは敢えてだんまりを決め込んでいる。

僕が何故、予言の存在に行き着いたかの説明を、無言のままに促し続ける。

「あのハロウインの夜、ゴドリツクの谷のポッター家でジェームズ・ポッターとリリー・エバンスの二人が死に、ハリー・ポッターが一人残った。そして、闇の帝王が姿を消した。もつとも、これだけの『客観的事実』が伝わるのにも相応の時間が掛かったでしょうし、その事実の情報が流れた当初では、それが真実かどうかはまだ解らなかつたでしょうが」

当時は未だ戦中であり、誤報が無い方が珍しかっただろう。

「そしてポッター家の悲劇の目撃者は現在に至るまで現れて居ませんし、実際目撃者は居なかつたのでしよう。つまり、当時何が起こったかは、闇の帝王が死亡しただろうというのも含めて『想像』です。ええ、想像するしかないんですよ」

想像を働かせ、どのような展開が合理的かを推測せざるを得ない。

「ポッター夫妻の死と、赤子の生存。闇の帝王の消息不明。それ以上の情報が解らず、しかしそれらの情報を踏まえた時、普通はどのよう

に推測すると思えます?」

「……答える必要が有るかね」

「まあ、そうですね。貴方からは期待出来る答えが返って来そうにない」

そうしてくれる程素直ではないし、アルバス・ダンブルドアは最初から誰よりも多くを知り得る立場に居た。今回聞く相手としては不適切だった。

故に、僕は自ら答えを紡いだ。

「普通はこう考えますよ。闇の帝王がポッター家を襲撃した後、何か不測の事態が生じ、それによって闇の帝王が姿を消した、とね」

つまりは如何に頭を悩ませようとも、赤子が闇の魔法使いを滅ぼしたという「間違^正った^い」結論を導く事にはならないだろう。

「二応ハリー・ポッターに対して死の呪文が行使されたというのも事実のようであり、これを知れば彼が帝王を滅ぼしたと想定する事は可能です。しかし、捜査機関の検証には時間が掛かる筈ですし——そもそも魔法界の捜査機関にそれを知る能力が有るか自体を知りませんが——その場合で有っても尚、他の第三者を仮定する方が余程合理的に思えます」

勿論、第三者の存在を仮定するのも結構な無理が有る。

闇の帝王によってポッター家が襲撃された際に偶々他の魔法使いが訪れており、その魔法使いは闇の帝王に対抗出来る程に凄腕で、そして両者は相打ちによって同じく肉体を喪ったというのは、まあ中々考え難いストーリーだ。

もつとも、その魔法使いがアルバス・ダンブルドアであれば辛うじて信じられそうな話であり、第一、赤子が最悪の闇の魔法使いを打ち破ったというストーリー自体が荒唐無稽過ぎるのだ。どちらの方が信じられるかと聞けば、前者だと答える人間の方が多いだろう。

だがそれにも拘わらず、ハリー・ポッターは早い内から「生き残った男の子」だった。

「そして究極を言えば、第三者の認識なんて問題無いのかもしれない。死喰い人達。そして不死鳥の騎——いえ、アルバス・ダンブルドア。対立する両陣営は何故、目撃者も無しに、闇の帝王を打ち破った

のがハリー・ポッターだと信じたのでしよう？」

特に死喰い人達は——転向したルシウス・マルフォイ氏達や、忠誠を崩さずにアズカバンへ行ったベラトリックス・レストレンジ達はいずれも——何故、他の人間が闇の帝王を殺したのだと、赤子によって滅ぼされたなど酷い大法螺だと大きく主張しなかったのだろうか。或いは、何故その主張が受け容れられなかったのだろうか。

赤子に滅ぼされた魔法使いなどという風評は主君の名誉を大きく失墜させ、ひいてはそのような人間に忠誠を誓った自分も軽んじられる可能性が有るにも拘わらず、だ。

「もつと言えば、姿を消した事が死を意味するとは限らない。単に何らかの目的が有って姿を隠したのかもしれない。しかし両陣営は闇の帝王が死んだ、そうでなくとも死に等しい状況に陥ったと考えた。死の飛翔の名や死喰い人の名称からすれば彼等が不死を求めていたのは明らかなのに、それが確実に破られたと考えた理由は果たして何故なのか」

「……その答えが、予言かね」

「ええ。それが存在していれば、これ程理屈が通る事は無い」

先の謎について綺麗に、単純かつ簡明に説明が付いてしまう。

「ハリー・ポッター、その時点で一歳に過ぎない赤子。そんな彼が闇の帝王を打ち破るなどという予言を馬鹿正直に信じる人間は居ない。闇の帝王が冗談交じりに死喰い人に告げ、その予言の真偽を試してみようと宣言するのは有り得る話です。その予言を残した人間が見るからに才能が無さそうであったのなら、余計にその可能性は高くなるでしょう」

闇の帝王視点ではどう考えたって外れる予言なのだ。

そして、そのように判断する人間の方が圧倒的多数だろう。

どんなに大穴狙いの人間であったとしても、赤子が闇の魔法使いを打ち破る方に賭けはしない。それはこのアルバス・ダンブルドアとて例外では無い。

「しかし結果として闇の帝王は姿を消し、ハリー・ポッターの両親は死亡したものの、一歳の赤子が生きていると伝えられた。史上最悪に狙

われて絶対に生きている筈もない人間が生きており、当たる筈の無い予言が当たったように見えた。予言通りに打ち滅ぼされたように思われた。故に、死喰い人達は挙って転向した」

最初に裏切った一人が誰だったのかは不明だ。

けれども、闇の帝王が裏切者をどう処分するかを良く知るような高位の死喰い人が——たとえばルシウス・マルフォイ氏が——公然と裏切ったならば、多くの人間が闇の帝王は死んだのだらうと考えるには十分だった事だろう。

「貴方の側もそうです。現代最強の魔法使いがアルバス・ダンブルドア十一年全力を費やして滅ぼせなかった相手が、しかし一夜にして忽然と姿を消してしまっただ。誰が為したのか疑問に思うのが当然であり、寧ろ闇の帝王の策を疑って然るべきですらある。けれども、そうはしなかった。何らかの理由によつて貴方は予言を事前に知っていたから」

だからハリー・ポッターの保護に速やかに動いた。

魔法省がポッター家の悲劇を完全に察知するよりも、ゴドリツクの谷の他の魔法使いが事件を掌握するよりも、誰よりも早く動く事が出来た。

「ハリー・ポッターこそが闇の帝王を打ち破った。その考えで二つの陣営の考えが一致している以上、実は他の人間が闇の帝王を滅ぼしたのだという噂が生まれようもない。ルシウス・マルフォイ氏のような転向者も、不要な嘘は付けないでしょう。予言の存在まで述べたかは知りませんが、闇の帝王の目的がポッター家の皆殺しであった程度の事は言える筈で、予言の記録を有する魔法省が全てを隠蔽したのも有り得る話です。そうして『生き残った男の子』の伝説は生まれた」

多くの人間は、闇の帝王がジェームズ・ポッターもしくはハリー・エバンズの殺害を目的としてポッター家を襲撃し、ついでに殺そうとしたハリー・ポッターを殺しきれなかったのだと考えている。当然の話だ、わざわざ闇の帝王が赤子を殺しに行く必要が有ったなど考えはしない。

故にハリー・ポッターは『The Boy Who Lived生き残った男の子』と呼ばれている。

闇の帝王を打ち破った男の子ではなく、闇の帝王を滅ぼす運命に選

ばれた男の子でもなく、あくまで奇蹟的な偶然によつて生き延びたに過ぎない人間として。

しかし、実際は違うのだろう。

彼は元より、闇の帝王と対決する事を宿命付けられていた。

「勿論、これは仮説に過ぎません。予言が存在したから以上に当時の両陣営の動向を説明し得る物語。それを貴方が作れるのならば、僕は一応聞く気が有りますが」

「……そうする必要は無かろう。言ったように、儂は君を易々と騙せるとは思つておらぬ」

じゃが、とアルバス・ダンプルドアは口をひん曲げる。

「君の語つた部分には明確な間違いが有る。それは予言の中身は、ハリーがヴォルデモートを滅ぼすという内容では無かつたという事じゃ」

「そうですか。まあ絶対に当たる予言は存在しえないという話も有りますし、勝利が予言されているならば、貴方がハリー・ポッターを戦場に引つ張り出さない道理も無いですか」

そもそも闇の帝王は生きていた。

予言は外れたか、未だ成就されていない。

「……しかし、君らしくも無い言い草じゃ」

そう言い捨てる老人に、鏡を見せたい気分になる。

物分かりの悪い愚者を前にしているような苛立ちを浮かべている彼は、更にそれ以上に顔を歪めている僕に向かって吐き捨てた。

「真の予言は確かに存在する。けれども、神秘部の予言の間におかれた予言とて、かすりもせず外れた物は少なくない。高名な予言者の予言とて、全てが的中した訳でもない。ケンタウロスですらも星を詠み間違ふように、百発百中の未来視は絶対に存在しない」

例え話をしようと、老人は重々しく言った。

「かつて真の予言者と呼ばれた者の血を引く者が、ホグワーツの職を求めて儂に会いに来た。しかし、その者は、占い学を履修した事のない儂の眼から見ても、全く才能が無いように思えた。そんな彼女が突如トランス状態に陥つたような素振りをして、絶対に実現しようにな

い酔っ払いの法螺話とも思える予言を宣告した場合。君はその内容を信じるかね？」

「寧ろ信頼する理由が有るんですか？ 職を得る為に、或いは自分を偉大な予言者に見せる為に演技をするというのは、世間的に見て珍しくもない行動原理でしょうに」

真正面から彼女の予言を信じるのは馬鹿の所業である。

予言を知って対策措置を一応講じたアルバス・ダンプルドアも、予言を受けて実際に行動に及んだ闇の帝王すらも信じていなかっただろう。

「もう言ってしまうでしょう。シビル・トレローニーの第一の予言は信頼に値しない。貴方がポッター家の悲劇を防げなかったのは一応失態ですが、さりとて大々的に責められる物でも無い。神に対して子供が石に取り換えられるのを予測しろというよりは無茶な話ですよ」

当人達が何を宣おうが、どんな反論をしようが、アルバス・ダンプルドアが秘密の守り人を引き受けるべきであり、その上でハリー・ポッターは手厚く守られるべきだった——そう主張するのは後出しであり、結果論である。あの恰好だけ立派な占い師による予言が為された時点において、その予言の内容を真剣に受け止めるというのは土台無理な話だ。

最低限の用心はするだろうが、わざわざ最大戦力が手を割ける程、魔法戦争は暇でもなかった筈である。シリウス・ブラック達の悪戯めいた入れ替わりが騎士団長に報告されなかった事や、透明マントが一時貸し出された事も、当人達の危機感の欠如を示している。

「ただ、最初から僕は第一の予言には左程興味がありませんでした。全く興味がない訳ではないですが、貴方の様子から判断する限り知って得はしないようですし、そもそも僕は占いが当たるか外れるか自体に興味がない。その点で、貴方の僕への見立ては正しい」

「……………」

「だから僕が関心を寄せるのは、予言の内容ではなく、それが存在する事による力であり、人に及ぼす影響ですよ」

百発百中の予言が存在し得ないのではないかという論拠と同じ。

真の予言を聞いた人間は通常、予言を受けて何らかの反応や行動を示すもので――

「特に僕が去年から強い興味を抱いていたのは、シビル・トレローニーが為した第二の予言の方でした。あの予言は、ハリー・ポッターの行動に一切影響を与えなかった。であれば、あの予言は一体何故存在したのかと」

――しかし、あれはそうでは無かった。

ハーマイオニー・グレンジャーに聞いた時から疑問だった。

幾度検討しても、あの第二の予言の存在価値は無かった。

「……本人すら意図し得ない予言の存在理由を考えようとする事自体が無意味である。君はそう思わんのかね？」

「その主張を受け容れるとしても、予言は存在する事によって人の行動を変えうるという点において意味が有り、その価値は否定し得ないでしょう。さながら第一の予言が、闇の帝王にとってそうであったように」

そこまで紡ぎ、僕は首を振った。

僕達の間柄において、それ程迂遠な言い方はする必要は無い。

「闇の帝王の僕の帰還。その予言を真剣に受け止めなかったハリー・ポッターは何も動かなかった。その結果ピーター・ペティグリューは逃げ去り、シリウス・ブラックは殺人犯の汚名を着せられたままで、そして今年闇の帝王が復活した。ハリー・ポッターの心境は推測するしか有りませんが、その不作為に深い後悔と自責の念を覚えている事でしょう」

あの時こうしていたら。

誰もが人生で一度は考えるであろう仮定の話は、しかしシビル・トレローニーの第二の予言の場合には異なる。あの時ハリー・ポッターが予言の内容を真剣に受け止めていたら、万一の可能性を想い、アルバス・ダンブルドアに即刻相談していたのならば、自分の後見人であるシリウス・ブラックを救える可能性は残っていた。

「であれば、今度はそれを繰り返さないと、次は予言を信じて行動しようと考えると思いませんか？ 要はあの予言はハリー・ポッターに第

一の予言を信じさせる為に存在した。その点に意義が有り、価値があった。僕にはそう思えてならないんですよ」

第二の予言という本物が存在した。

であれば、第一の予言もまた本物ではないか。

そう考えてしまうのが、普通の人情では無いだろうか。

「……君が知らぬ以上仕方ない事では有るが、シビルの第一の予言は信じて行動すれば未来を変えられるといった類の予言では無い」

「成程、ならばどういう類の予言なのです？ いえ、今は最も重要な部分だけを聞きましょうか。その第一の予言の内容をハリー・ポッターは知っているのですか？」

この老人が語った四年の中に第一の予言の話は一切出てこなかった。シビル・トレローニーの予言を二つ目と評した際にも彼は語らず、そして今の沈黙でもって確定した。

……嗚呼、そうなのだ。

闇の帝王の復活という戯言を触れ回っている今のアルバス・ダンブルドアを見て、彼程にハリー・ポッターを信頼している者は居ないのだと、そう多くの人間は考えるだろう。

しかし、実態は真逆だ。アルバス・ダンブルドア程に彼を、闇の帝王を一度打ち破った“生き残った男の子”の能力と資質を疑っている人間は居ない。

これまでの四年間、特に一年時の賢者の石の一件はハリー・ポッターが本当に予言通りに戦争に使えるかを試す為の試練で、それ以降の三年間も同様の観点に基づく物で、そして他ならぬあの英雄は真正面から受けて立った上で証明し続けて来たにも拘わらず、この老人は未だ信じ切れていない。

アルバス・ダンブルドアのハリー・ポッターに対する認識は、ダーズリー家に置いて行った一歳の小さな男の子から殆ど変化していない。自分一人が護らなければ何も為し得ない、弱々しい存在だと考えている。だからこそ、彼に関わる真実を平気な顔で隠してしまう。「貴方はハリー・ポッターに纏わる、為すべき仕事を為していない。魔

法戦争が再開され、勝利の為に最大限尽力するべきであるにも拘わらず、しかしハリー・ポッターを蔑ろにし続けている。それは彼の価値と意義と功績を想う限り異常で、許されて良い行いでは決してない。ハリー・ポッターの物語を聞いた今だからこそ、僕は余計にそう思えて仕方がない」

「——たしか一年の時には聞いていなかったと思いますが、今こそ聞きましょう」

クイリナス・クイレル教授はもう一つ、印象深い言葉を残していた。「第一次魔法戦争の勝敗について。もつと言ってしまえば、そもそもハリー・ポッターが闇の帝王を打ち破ったハロウインの夜が無かった場合。闇の帝王とアルバス・ダンブルドア。貴方がたのどちらが勝つただろうと、貴方は予測しているのですか？」

仮定の話だ。

けれども、今だからこそ意味が有る。

闇の帝王を滅ぼす為の道筋、分霊箱という不死の手段の破壊について語りながらも、その闇の帝王当人を殺し切れるかどうかについて、アルバス・ダンブルドアは一切語っていない。そんな現実には僕が気付いてしまった、この今だからこそ。

「僕は当時の事を直接知らない。しかし、後世から見た正直な感想として、あの戦争では闇の帝王や死喰い人の勢力が圧倒していたように思えてならない。魔法省は散々醜態を晒し、貴方がたの騎士団員にしても多くが死んで行った。ハリー・ポッターさえ居なければ、普通に闇の陣営が勝利を収めた可能性が高かったように思いますか？」

不死鳥の騎士団を率いたアルバス・ダンブルドアが居て尚——今世紀で最も偉大な魔法使いの力をもってして尚、行き着く結果は厳しかったように見える。

「……確かに、ヴォルデモートの最盛期は、死喰い人の勢力の方が圧倒的に強かった」

不死鳥の騎士団の指導者は、当時を最も良く知る者として僕の疑問を認めた。

「組織の人数比で言えば、最も悪い時で二十対一にも上ったじゃろう。しかし、それは数だけの話であり、不死鳥の騎士団に属して居る者だけが闇に抵抗したという訳では無い。バーテイが先頭に指揮した闇祓い達もいわば同胞達であり、それ以外にも表に出ない協力者は大勢居った。君も承知しておると思うが、数の論理で行くならば、純血を名乗れる人間の数よりも、名乗れぬ人間の数の方が圧倒的に多い」

「まあ、確かに聖二十八族以外の純血を数に入れて尚、マグル生まれ」と半純血を併せた数には及びませんが。だから貴方がたが当然勝つただろうと？」

「戦争である以上、断言は出来ぬよ。しかし、儂等は十一年戦ったのじゃ。決して一方的にやられていた訳では無いし、君のようにヴォルデモートが勝つたと断言するのは間違いであろうと——」

「ならばその十一年で、分霊箱を幾つ破壊したのですか？」

「——」

つまり、零か。

「……あの男の不死の仕組みが幾つあるか解らぬというのに、不用意な行動に出るべきでない。特に分霊箱——当時儂はそれを一個だと思っておったが——その存在を隠されてしまえば絶対に捕捉出来ぬ代物じゃ。君は儂の行動に理解を示す側だと思うかの」

「それでも尚、貴方が闇の帝王に届かなかった事には変わりませんよ。その不死の仕組みを解き明かし、命を刈り取りに行く所までは辿り着けなかった」

何が分霊箱に変えられたかについて、それを語る証人には死人が居る。

アルバス・ダンブルドアはそう言った以上、その記憶は——少なくとも分霊箱の存在を推測する一部は、魔法戦争中に得ていた筈である。それでも尚、戦争は終わらなかった。

今世紀で最も偉大な魔法使いという偉大をして、彼の首根を掴むには至らなかった。

「死の飛翔にとって、死喰い人と名乗る人間達は仲間でも何でも無い。かの闇の帝王さえ生きていれば組織は不滅であり、逆に彼が居なくなつたからこそ、十四年前はあつさり決着が付いた。要はこの戦争を終わらせるには、闇の帝王を絶対に打倒しなければならぬ」

王を仕留めなければ遊戯チェスが終わらないように。

この魔法戦争の勝利条件は、少なくとも光の陣営側では、初めから明確である。

「アラスター・マッドアイ・ムーデイがどれだけアズカバンを埋めようと大勢に影響は無く、ルシウス・マルフォイ氏を始めとした死喰い人がどんなに仕事熱心だろうとやはり影響はなかつた。だからこそ、アラスター・ムーデイは貴方の御零れで伝説の闇祓いになり、ルシウス・マルフォイ氏はアズカバン送りを辛うじて避けられた」

闇の帝王にとって、彼等が有象無象であつたのと同様に。

アルバス・ダンブルドアにとつても、彼等は遍く無視していい雑魚だつた。

だから、この老人は最強でありながら、最もアズカバンを埋めた人間にはならなかつた。

「ゲラート・グリンデルバルトが灯した革命の灯とは違う。この戦争を根本的に終わらせる為には、貴方はただ一人、闇の帝王のみを殺す事に尽力すれば良い。その事実を当時から貴方は解つていた筈で——けれどもその結果は、第一次魔法戦争の顛末が示す通りです」

アルバス・ダンブルドアは、闇の帝王を殺せなかつた。

今世紀で最も偉大な魔法使いはゲラート・グリンデルバルトの革命と異なり、己が有する殆ど全ての勢力を費やす事が出来ていて、しかし届かなかつた。

「闇の帝王は、唯一貴方を恐れていたと言われています。実際、直接決闘を出来たのであれば、貴方が勝つ可能性というのは低くはなかつたのではありませんか？」

沈黙。しかし、肯定。

まあ、納得出来る結論では有るのだ。闇の帝王と死喰い人達が仲良く決闘クラブに勤しんでいる姿など想像出来ないし、逆にアルバス・

ダンブルドアのそれは容易に想像出来る。

今まで聞いた内容から構築した闇の帝王像は、魔法戦士というより研究者に近い。

多分、知っている呪文や魔法理論の数を比べれば、アルバス・ダンブルドアは闇の帝王の足元にも及ぶまい。けれども、それらを使う事に関しては多分、この今世紀で最も偉大な魔法使いの方が遥かに優れている。

「二応加齢による衰えや志向した分野の差異もあるでしょうから、貴方がたに敬意を表して実力は互角としておきましょう。しかし、闇の帝王は、戦ってくれなかつたのでしょうか？　いえ、彼は貴方と戦う必要性を見出さなかつたのでしょうか？」

やはり老人は口を噤んだままである。

薄々感じていたというのも有るのだろうか。

闇の帝王は、今世紀で最も偉大な魔法使いを軽んじていたのだと。「貴方がたの勝利条件は殆ど一つだけだと言って良かった。けれども、闇の帝王の側は違う。不死鳥の騎士団やその協力者を、魔法省の闇祓い達を——つまりは貴方の手足となり得る者を徹底して狙えば良かった。そして貴方の方はキングだけが残っていても勝利ではない。勝利条件は非対称で、不平等だった」

魔法大戦は、ゲラート・グリーンデルバルトとアルバス・ダンブルドア、二人の指導者による決闘をもって事実上終結した。けれども大將同士の決闘で決着が付いた、もしくは決着を付けようとした戦争が果たしてどれだけあるだろうか。

王や元帥の仕事は、後方で頭を使い、戦争全体の指揮や戦略策定を為す事である。

必ずしもそうとは限らないが、現代戦であれば殆ど確実にそうであつて、特に勢力が圧倒的に上回っている側が、王を戦場に出す必要性は余り無い。

この魔法戦争も同じだ。たとえ闇の帝王が陣営の最大戦力であろうと、率先して彼が戦場に出る意味は無く、寧ろ出てはならないとすら言える。

グリフィン・ドールのような会戦主義の脳筋戦争は、策略と陰謀を好む蛇には合わない。闇の帝王はスリザリンであり、そしてスリザリン流の美しい戦争とは、自分が可能な限り手を煩わされなくて済む、美学に満ちた貴族の戦争である筈だった。

「闇の帝王が貴方を恐れている。その風評は彼にとって甚だ不愉快だったでしょうが——冷静に見て、わざわざ最強決定戦を行う必要性は欠片も見出せない。何れ勢力が圧倒するのは解り切っているんです。貴方の言でも長らく死喰い人側が優勢だったようですし、そもそも貴方がたは、特に貴方は死喰い人達を捕えてしまう。少なくとも裁判無しでの処刑を避ける。そして捕えられているに過ぎないならば、何れ逃がす事が可能だという事です」

闇の陣営は、たとえ戦場で敗北しようが戦力は殆ど減らない。

光の陣営は、戦場での敗北はそのまま戦力の減少を意味する。

その不均衡の是正を馬鹿真面目に、かつ堂々と主張したのはただ一人。

どうせ脱獄出来るならば混乱に乗じて悪事を働こうという馬鹿共を威嚇し、更に死喰い人の数自体を減らす事を考えたのは、禁じられた呪文——死の呪文は除外されていない——の使用を闇祓いに許可したバーテミウス・クラウチ氏のみである。

「アルバス・ダンブルドア。貴方が幾ら強かろうが全てを護る事は出来ない。貴方に味方した人間を、或いはその恋人や子供達を弱い順に片っ端から殺していけば、貴方に味方する人間は何れ居なくなる。そして貴方が一人になった後は悠々と、二十四時間休みなく、数百人の物量で貴方を殺しにいけば良い」

それがこの戦争に勝つ為の一つの、そして解りやすい手段。

「或いは、貴方の老衰による死を待つてすら構わない。闇の帝王は不死を追及し、その一部を既に実現している。更には今回肉体を復活させてみせたのだから、老衰した身体を取り替える位は出来そうな物です。時間は彼の味方であり、生きているだけで勝ちを掴める」

これもまた、戦争に勝つ手段である。

正々堂々戦えと、そうグリフィン・ドールは言うだろう。

しかし、別にスリザリンはその負け惜しみに律儀に付き合つてやる義理は無い。その正々堂々の戦場を設定出来ない、戦略的に勝利し得ない脳筋が悪いだけだ。

「当然、このような手段は貴方以外の大駒が居ては取れません。貴方の影響力を超える大政治家がこの国の魔法使いを束ねるならば、もしくは貴方に比肩する大魔法使いや戦士が戦力として立つならば、闇の帝王も手抜きする事は出来ず、戦場に出ざるを得ないでしょう。

——だが、現実には、そんな人間は居なかった」

大規模な戦争が起こるとテセウス・スキヤマンダーのように、才有人間は当然に頭角を現し、広く評判を残すものだ。しかし、あの第一次魔法戦争で名を上げた人間が、果たしてどれだけ居るだろう。殆どが戦争中に死に、生前の勇敢さを墓石で讃えられるばかりだ。

かの戦争で大きく名声を集めて生き残った、かつ成人の魔法使い。此度の戦争の再開で指導者として立つ事を周囲から認められる——この人間の指揮下ならば魔法戦争に勝つ可能性は零では無いと、そう思わせる事が可能であった者達は。アルバス・ダンブルドアを除けばたった二人。バーテミウス・クラウチ氏とアラスター・ムーディだけ。

その二人でさえ、今年、既に闇の陣営の前に敗北を喫している。

「結局、第一次魔法戦争において貴方だけが邪魔で、闇の帝王の野望を打ち砕く力を持っていた唯一の人間だった。しかし単にそれだけで、避けて通れば済む程度の障害に過ぎなかった。言ってみれば、貴方は闇の帝王の敵では無かった」

「……そんな事を言うのは、世界で君一人じやろう」

「そうでしょうか？ ならば問いますが、これからの戦争で貴方が闇の帝王と決闘している場面を、貴方は御自分で想像出来ますか？」

「……………先の戦争で、儂はヴォルデモートと幾度か杖を交えた事も有る」

「しかし、僕が言っている『決闘』は、己の全てを賭した、どちらが斃れるまで止めない最終的な決着手段の事です。さながら貴方がゲラート・グリンデルバルトと為したと伝わる、世紀の大決闘のように」

苦しい弁解は、今度は返って来なかった。

「僕が譲歩して貴方の主張を一部受け容れるとしても、貴方が闇の帝王の敵で在れたのは、1981年10月31日までです」

「——」

その日に何が起こったのか。

今この国に生きている魔法使いで、答えられぬ者は居ない。

「ゲラート・グリンデルバルトが何故貴方と決闘するという選択を——国際機密保持法の打破という理想の敗北を確定させる道を取ったのか。それを僕は知りません」

既に組織が崩壊していた為に最後の逆転の手段として決戦に挑む羽目になったのか、或いは彼等が直接戦わなければならない理由が有ったのか。部外者である僕には解らないが、それでも彼等は決闘に同意し、革命の終焉の鐘を鳴らし、全ての幕引きをした。

「しかし、闇の帝王は同じ轍を踏む気は無いでしょう。彼は貴方とは絶対に決闘をしてくれない。仮に遭遇戦をやる羽目になったとしても、適当に戦った後で引く。彼が分霊箱を多数作る程に死を恐れているならば猶更だ。自分と貴方が互角の力量で、決闘をやれば五割で勝ると予測していても、自らの死に繋がりにかねない危険は冒せない」

そして闇の帝王が噂通り亡者^{Inferi}の軍勢を操れるならば、彼の戦争に生者は不要であるとすら言える。どれだけ死喰い人達が死に、また裏切ろうとも、闇の帝王が死を迎えない限り、この国に訪れた暗黒の時代は決して終わらない。

アルバス・ダンブルドアは負けずに済んでも、同時に彼に勝利する事は出来ない。

「——但し、闇の帝王が絶対に雌雄を決しなければならぬ人間が一人居る」

アルバス・ダンブルドアが今回敗北した原因。

その一つは、自分の価値を高く見積もり過ぎた事。

そしてもう一つは——

「『生き残った男の子』。彼だけは、闇の帝王が戦わなければならない

「い」

——愛に眼が眩み、願望によって彼の価値を低く見積もり過ぎた事。

「彼は貴方に敗北した訳では無い。けれども、ハリー・ポッター。彼には、しかも赤子の彼には敗北を喫した。どんな詭弁を弄そうとも、あの十四年前を消す事は出来ない。……まあ、赤子に負けた間抜けとして闇の帝王を侮った人間は、即刻己の愚かさを後悔する羽目になるでしょうが——」

単に逃げ回るだけの臆病者が、眼の前の怪物と十年以上戦える筈も無い。

「——しかし、ハリー・ポッターの存在が、今後の統治や臣下集めに小さくない影響を及していく事は間違いない。彼の復活を信じている闇の陣営でも暫く様子見しようとする人間は増えたでしょうし、再結集した死喰い人達の心の奥底には未だ疑念が宿っている。何より闇の帝王自身が、己の名声と偉大さを毀損した人間を絶対に許せない」
去年度末の事件がそれをはっきりと示している。

自身の復活にハリー・ポッターの血を用い、他の死喰い人によってハリー・ポッターが殺される事を是とせず、己がハリー・ポッターより強いと証明する為に決闘した。そうまでしておいて尚、今回ハリー・ポッターは辛くも逃げ切ってしまった。彼はこの十四年間、徹頭徹尾、闇の帝王が何ら絶対^{Lord}ではない事を証明し、その面子を潰し続けて来た。

「故にハリー・ポッター。彼だけがヴォルデモート卿の敵だ」

アルバス・ダンブルドアでもなく。

今世界に存在する、或いは今後生まれるであろう世紀の大魔法使いでもなく。

格別強力とはいえない、幸運によって生き延びた少年のみが、唯一彼と戦う資格が有る。

「貴方が他の分霊箱を全て破壊出来たとしましょう。その場合、闇の帝王は貴方の前に現れない。新たな分霊箱を作るか、他の不死の秘法を求めるか、どちらにしても貴方と戦わない。そして貴方が善人の仮面と倫理の枷を嵌め続けている限り、闇の帝王の下には辿り着けな

い」

逃げるが勝ち。

不格好であるが、これは戦争である。

勝利に美学を求め過ぎるべきでは無く、そして闇の帝王は前回の戦争中、アルバス・ダンブルドアの眼を盗んで非魔法族と魔法族を虐殺する程度の事は楽々やっていた。この最強の魔法使いとは絶対に真正面から戦わないという誓いを立てた上で、それでいて尚魔法戦争を続行する事は、何ら難しい仕事では無いだろう。

「けれども、ハリー・ポッターだけは違う。彼だけは、闇の帝王本人が打倒せねばならない。半世紀以上も最強で在り続けた貴方と違い、母の愛に生かされただけの凡庸な小僧から逃げる事は許されない。分霊箱を破壊した果て、最後の魂の欠片は、絶対に彼の前に現れる。史上最悪の魔法使いを永遠に滅ぼしうる絶好の機会が、確実に一度は訪れる」

この戦争において、彼は必須の武器である。

十四年前の時点でハーマイオニー・グレンジャーやロナルド・ウィーズリーを武器として考慮していなかったとしても、彼だけは勘定に入れていなければならなかった。そしてアルバス・ダンブルドアだけがそれを出来ていたのであって、故に賢者の石から始まる四年間、これまでの偉大な校長のホグワーツ計画の殆どを正当化する事が可能だった。

「だというのに、今や貴方はハリー・ポッターを生かし続け、また彼が平々凡々な学生生活を送る事こそを至上命題としている。予言を知らせず、彼に“生き残った男の子”の意義に気付かせず、自分だけで勝てると思っている。何も知らされない不死鳥の騎士団はそうするしかないんでしょうが、僕は知ったが故に、貴方に反対の意思を表明せざるを得ない」

そしてこの老人が守勢に回り続けている限り、闇の帝王はアルバス・ダンブルドア側の人的資源を削り続ける事を第一目標として戦争を遂行し続け——そして何れ限界が来る。死喰い人達に数と戦力で圧倒された光の陣営は、一騎当千のアルバス・ダンブルドアが健在で

あろうとも、当然のように敗北する。

その未来を見通してしまったからこそ、僕は今ここで言葉を尽くしており、

「……だから何だというのかね」

けれども、この老人は決して容れない。

我が子の事となると、どんな賢人であろうと愚者に墮する。それはこの稀代の魔法使いにおいても例外では無いらしかった。

「ヴォルデモートがハリーを絶対に殺したいと思っっているのは確かじやろう。けれども、それが儂の勝利に何の価値が有るのかね？　まさか君は、ハリーがヴォルデモートに勝てると本気で考えておるのかね？」

彼は淡々と言葉を紡いでいるつもりであろう。

けれども、その声は、表情は、憎悪をありありと宿していた。僕が突き付けた論理を、全身全霊で否定しようとしていた。ただ、彼の否定は論理よりも感情が先行してしまっていた。

「アルバス・ダンブルドア」である事を、彼は既に忘れつつあった。「確かにハリーは君よりも遥かに闇の魔術に対する防衛術の才能を持っておる。しかし、それだけじゃ。ヴォルデモートは学生時代より桁外れの才覚を示しておった。ハリーは元から足元にも及ばんし、数十年の修練を積んだ今では隔絶しておる」

「ええ、そうでしょうね。今回は運が良かっただけです。真正面の決闘でハリー・ポッターが闇の帝王に勝てる可能性は零で、去年度まんまと逃げおおせた以上、次は逃がしてくれないでしょう。今度彼が一人で出遭ってしまえば、最早どちらかが死ぬまで戦うしかない」

「その通りじゃ。ヴォルデモートは愚か者じゃが、その力量が並外れている事に疑いはない」

老人は語気荒く吐き捨てる。

「家族皆殺しにされたエドガー。遺体の欠片しか見つからなかったベンジー。狂うまで拷問されたフランクとアリス。そしてジェームズとリリー！　彼等のように年齢と経験を重ねた魔法使いが、未だ Hogwarts 生でしかない子供にも劣る無能共だったと思うかね……!?!」

「思いませんよ。才能に溢れた数多くの魔法使いが、闇の帝王の前に敗れてきた。ロングボトムやポッターですら逃げるのが精々で、基本的に戦いにすらならなかった」

かの魔法使いは史上最悪と言われる闇の魔法使いであり、単純計算で六十年以上年齢と経験を積み重ねた老練な魔法使いでもある。そんな化物を数年の訓練しか積んでいないホグワーツ生が打ち破れるのならば、今世紀で最も偉大な魔法使いはこれ程までに苦労していない。

「貴方が正しい。ハリー・ポッターが闇の帝王の実力を超えられるとすれば、闇の帝王が老衰で死ぬ直前くらいのも物だ。何せ、彼がアルバス・ダンブルドア——今世紀で最も偉大な魔法使いである貴方と比肩する力を得た姿など、僕には全く想像が付きませんから」

ハリー・ポッターの才は、その程度でしかない。その程度と言っても、アラスター・ムーディを超える域くらいには達しうるのかもしれないが——しかし、闇の帝王はそんな人間達を屠り続けてきたし、アルバス・ダンブルドアの方もまた同等の人間達を一蹴し続けてきた。

彼等は歴史に名を残す傑物中の傑物達で、単純に比較相手が悪いだけだ。

「客観的に判断して、ハリー・ポッターは闇の帝王に勝てはしない。何処をどう検討しても勝率は零だ。彼が闇の帝王を打ち倒す手法など僕には一切思い浮かばない」

「ならば何故君はそこまで不合理な主張を出来るのじゃ……！ ハリーがヴォルデモートより強いとは思わぬ、勝てるとも考えぬ！ それでいて尚、君はハリーを必要とするのは何故じゃ!？」

「それでも尚、それしか道が見えないからですよ。貴方がハリー・ポッターに一切の権利を認めない現状が、どう考えても間違っていると感じるからですよ」

アルバス・ダンブルドアは傲慢過ぎる。

自分一人だけが、物事全てを上手く解決出来ると思っている。

己が保有する能力に対して、誰よりもこの老人自身が過大評価して

しまっている。

「貴方がどんなに偉大で賢明であろうと万能では無く、貴方は所詮限界の有る一個の人間でしかない。貴方は自分だけが闇の帝王を打ち倒せると妄信しているようですが、そうとは限らない。この国の未来を取り戻したのが一歳の赤子であったように、貴方が信用しきれない他人こそがそれを為し得る場合は有り得る」

ゲラート・グリンデルバルトはアルバス・ダンブルドアのみが打倒する事が出来た。

それは今の歴史を見る限り正しかったのだろうし、けれども、その論理が今回も妥当するとは思えない。どんな遊戯においても Acces of Spades のカードが必ず強いとは限らない。

「僕は別に不合理な事を言っているつもりは有りません。光の陣営が完勝する為には、最早ハリー・ポッターに賭ける以外の道は見えない。しかし、貴方が彼に真実を明かさず、また表舞台に上げようとしてもしい以上、貴方はどうも彼に賭ける気がないようだ。であればやはり、僕もハリー・ポッターに賭けられはしないでしょう」

アリアナ・ダンブルドア

「——そもそも、負けの種を育んできたのは闇の帝王だけなのではないか？」

アルバス・ダンブルドアには多くが見えている。

故にこの老人は、僕に対し、闇の帝王が抱える弱み、歪み、脆弱さを明かす事が出来た。

そして、僕に明かしたそれらですら全体の極々一部に過ぎない筈だ。かつてトム・マールヴォロ・リドルを教えた『アルバス・ダンブルドア教授』は、彼へと付け入る隙を数多く見つけているのだろうし、同時に彼の嵌め方を想定出来ている事だろう。だからこそ、この老人は自陣営の勝利を疑わず、けれども老人の方にもまた巨大な弱みと隙が存在している。

「貴方は賢過ぎ、偉大過ぎ、影響力が強過ぎて、今世紀で最も偉大な魔法使いである事を隠し立てもしない。であるからこそ、弱い人間は貴方に近付きたくないのです。頼れないのです。輝かしき王は矮小な僕達の悩みなど理解してくれず、その手を煩わせるような余計な真似をしたくない。そう考えてしまう」

「……まるで儂が強いだけの人間であるように言うのじゃな。この世界に生きている他の誰よりも、君は儂がそうでない事を知っておろうに」

「強さと弱さは両立するでしょう、闇の帝王のそれが表裏一体であるように」

アルバス・ダンブルドアは闇の帝王を弱者だと定義しているだろうが、しかし闇の帝王はそれ故に、ここまで魔道の深淵まで堕ちる事が出来た。己の魂を幾度となく切り刻み、数えきれない程の死体を産み、本来魔法族に従わぬ筈の巨人や吸魂鬼すらも配下とし、一国の魔法界を根本から破壊する所まで手を伸ばし得る怪物に成長しえた。

「貴方が固執している『アルバス・ダンブルドア』——正義の為に奉仕する善良な大魔法使いという理想こそが、今の魔法界を存続させ続けている一方、崩壊を招きかねない歪みもまた産み出している根源で

「はいですか？」

「……儂がそうでないと言うのかね」

「その答えを得るには、御自身の胸に聞くのが一番手っ取り早いと思いますが」

セドリック・デイゴリーの方が余程仮面を被るのが上手かった。

彼は少なくとも今年ハリー・ポッターと対峙する羽目になるまでは、ハツフルパフの模範生を貫き通す事が出来た。そうでなければ如何にスリザリンといえど、真のホグワーツ代表選手”という肩書を許さなかつただろう。僕がそうしたように、セドリック・デイゴリーもまた偽物だと、今回のゴブレットの選出は無効だと素直に主張していた筈だった。

「亡霊風情に憑りつかれたクイリナス・クイレル教授は、未だ健全な肉体を御持ちの貴方を頼れなかつた。友情と命を天秤に掛けられたピーター・ペティグリューは、闇の帝王と戦い続けてきた貴方に庇護を求められなかつた。それまで正義に生きてきたバーテミウス・クラウチ氏は、善良な魔法使いである貴方に対して正気を喪うまで真実を告白出来なかつた」

この老人の善人面を信用出来ない人間達が、この戦争において彼と距離を置いた。

しかし、それらの一連の裏切りや不信は、果たして避けられぬ物だつたのだろうか？

アルバス・ダンブルドアという魔法使いは、ホグワーツの絶対的守護者で、ゲラート・グリンデルバルトを決闘で下した魔法戦士で、マグルやマグル生まれの権利保護を唱え続ける慈悲深き賢者で、半生涯を通して闇に対決姿勢を示し続けた正義の人で、史上最悪の魔法使いであるヴォルデモート卿が唯一恐れた人間では無かつたのだろうか？

「彼等は貴方の何を信じられなかつたのでしょうか？」

「そして彼等の選択は人として間違っているのでしょうか？ 貴方は彼等の弱さを批難出来るのですか？ 僕には出来ない。絶対に。け

れども貴方は言える、いいえ、言わざるを得ないんでしょ。彼等は悪に屈した、弱く、愚かで、負け犬なのだ」と

結局、アルバス・ダンブルドアは真に理解してくれない。

彼がどんなに感激出来る演説をして、どんなに素晴らしい論説を寄稿しようとも、他ならぬ彼の行動こそが、弱者である彼等に不信を抱かせ、紡ぐべき言葉を喪わせた。アルバス・ダンブルドアの本質は決して世間で称賛される程に素晴らしい物では無いと思わせた。

「元より貴方の在り方に気に入らない部分は有りました」

例えば、と椅子の背凭れを軋ませる。

その音は誰かが悲鳴を上げているようにも聞こえた。

「コーネリウス・ファッジは今現在、アルバス・ダンブルドアが魔法大臣の地位を狙っているのだという正論を主張しています。闇の帝王の復活を叫んでいるのは貴方が自分に成り代わろうとする意図を示すものであり、ひいては魔法省の秩序への挑戦だ」と

コーネリウス・ファッジは他にも色々妄言を吐いていたが、彼にとって最も重要な点はそこに尽きる。彼はアルバス・ダンブルドアによって権力を奪われる事を恐れている。

「……無礼千万じゃ。儂は魔法大臣に幾度となく請われても断つてきた。その地位に就く事を儂が望んだ事は——無い」

「そうですか。しかし果たして客観的にそう見えるのしょうか」

一度もないと言わなかった点が少々不愉快では有ったが、そんな揚げ足を取る必要は無い。言葉よりも行動が雄弁な場合は往々にして存在する。

「そもそも魔法大臣は通常公の投票に基づく民主的な選挙によって選ばれる。ならば何故、貴方は魔法大臣になるよう請われたのでしょうか？ それを立候補しろという意味で有ると解釈したとしても、貴方が一度断れば見込みが無いと判断して諦めて良さそうなものだ。だということに、どうして貴方は自慢げに請われた回数数を数える事が出来るのでしょうか？」

「……儂が断つた回数を誇りに思った事は、断じて一度も有らぬ」

「それは貴方が魔法大臣に就きたがっているように見えたから。或い

は貴方が魔法大臣に就かないと不都合が生じたからだと考えるのは邪推し過ぎでしょうか」

アルバス・ダンブルドアの反駁を無視して僕は続けた。

「そもそも魔法大臣の地位を拒絶したから何なのです？ 貴方はそれを権力への拒否、支配への嫌悪を示す態度だと本気で思っているんですか？ 魔法大臣の地位を拒絶する事と、貪欲な権力志向を宿している事は、決して矛盾する訳では無い」

何故なら。

「ルシウス・マルフオイ氏もまた、魔法大臣を望んだ事は一度も無い」

「――」

アルバス・ダンブルドアと彼は、その点において一切の差異が無い。「正確には彼は死喰い人であったが故に就けなくなつた訳ですが、マルフオイ家が代々魔法大臣への野心を見せなかつたのは確かです。そもそも名前がその地位の本質を体現しているではないですか。ラテン語の教養が少し有れば、『Minister』の名を過度に有り難がる訳がない」

魔法の為の召使い。

謙遜から始まったのかもしれないが、良くもまあそんな名を付けたものだ。

歴史を見れば、国際機密保持法の制定による対応する為にウイゼンガモットから独立して設立されたのが魔法省である。つまり本来の論理で言えば魔法省は評議会の出先機関に過ぎず、魔法大臣の椅子は形式上最上位に置かれただけに過ぎない。

「マルフオイ家は魔法大臣に就かなかつた。しかし彼等は代々権力への野心を持ち続け、またこの魔法界の政治を大きく左右する一族で在り続けた。そして今も服従の呪文無しでコーネリウス・ファッジを都合良く扱い続けている。元より彼等には魔法大臣の地位など不要で、このように権力を掌握した一族や個人など歴史上珍しくも何ともないんですよ」

責任と義務から逃れる為、敢えて王座を退けた者は大勢居た。

「minenceのgris下。王座の背後の権力。Kingmaker王を作る者。このよ

うな用語や表現は世界中に幾らでも有る。君臨すれども統治せずという言葉は、裏を返せば統治に君臨は必要が無いという事。魔法大臣という軽い椅子は、マルフォイ家にとって魔法界の支配に必要なかつた」

そしてそれもまた差異を生ずるものではないだろう。

「貴方もそうだったのでは？」

魔法大臣に就かずとも、この男は自分の意思を叶える事に不自由しなかった。

「コーネリウス・ファッジの就任直後、彼が貴方にしよつちゅう相談に訪れている事を報道する下世話な記事が有りました。本来の理屈で言えば、魔法大臣と Hogworts 校長のどちらが偉いかは明白だ。しかし、コーネリウス・ファッジの媚び諂う姿を貴方は愉快だと思いませんか？ 魔法大臣が貴方の傀儡だという批判に、何も感じる所は無かったのですか？」

「……最早今更じゃが、君は捻くれた偏見と先入観で儂を見続けておる。儂は親切心から忠告と助言を為しただけで、ルシウスらのように私心で魔法界を操ろうとした事は無い」

「貴方はそのつもりで、客観的にそれが事実でも、周りの主観にはそう見えたのでしょうか。貴方に魔法大臣に就けという要請は、裏で人形を操る真似をせず、自ら先頭に立って動くべきだという忠告だった。そう聞こえてしまうのは僕の気のせいなのですかね」

アルバス・ダンブルドアの視線は、僕をしつかりと捉えたまま揺るがない。

しかし、最早張りぼてだ。己の善性と正義を疑わない、真つ直ぐとした強さは既に無い。これがアリアナ・ダンブルドアに繋がる瑕が齎す歪みである。たった百年生きた程度では、いや百年も生きているからこそ、それを隠蔽出来る筈もなかった。

「もう一つ、権威の話をしましょうか」

自分から視線を逸らし、話題を変える事を示す。

「この国は立憲君主制とはいえ女王を戴き続ける国であり、また貴族制度を色濃く残している国でも有る。貴方がこの国のマグルの新聞

にどれ程眼を通していか解りませんし、これはタブロイド紙が好む類の話題ですが、時にこのような記事が載る事があります」

「……………」

「何処ぞの誰々が騎士^{Sir}の称号、或いは帝国勲章を拒否した。そんな記事が」

今度はアルバス・ダンブルドアの反応を伺わなかった。

この後に及んで、偉大さを喪った老人の反応を一々確認してやる必要など無かった。

「貴族号や勲章を受け取らないのが偉いと言いたい訳では有りません。しかしその行為によって表明される彼等の意思——帝国主義の残滓の否定、彼等の無欲さ、自由でありたいという希望、権力への不服従の態度には、敬意を表す人間が大半でしょう。そもそも彼等が貴族号等を肩書きにつけなかった所で、彼等自身の残して来た偉業や功績が消える訳では無い」

翻ってアルバス・ダンブルドアはどうだろう。

彼の肩書は立派で、煌びやかで、眼が痛くなる程だ。

「仮に一人の自由な老人で居たかったならば、何故数々の勲章を受けるとる真似をしたんです？ 権威を備えた人間の言葉は大衆を動かさう。貴方は眼を逸らしているようですが、権威獲得も権力獲得への道筋なんですよ」

古代ローマ共和政の終焉を齎した一人の英雄。

彼が若くして最高神祇官に就いた事は、決して小さい事件では無い。

多分に脚色や伝説化されている部分もあるだろうが、それでもあの職を獲得するのに失敗していれば、皇帝^{カエサル}の名は至上の階に昇る事は無かつただろう。

「……他人から名譽を授けられる事と、自ら権力を握る事には超えられない差がある。そして君が今自認したように、勲章が有ろうと無かつたろうとも儂の英雄としての立場、最も強き魔法使いという地位は変わらぬ筈じゃろう」

「であっても、行動で権力と相容れぬ姿勢を示す事は出来る筈ですが」

この老人からは権威と名声を好む一般的な俗物である事が透けてみえ、自分は魔法大臣を拒否する高潔で無欲な人間だという主張は、僕の心に全く響かない。コーネリウス・ファッジの主張は多少強引であつても、正論の範疇に留まっているようにしか思えない。

「貴方からマーリン勲章勲一等を剥奪するという話も出て居ましたが、そんな話が今出ているという事は、裏を返せば未だに剥奪されていないという事でしよう？　ならば何処ぞのロックンローラーのように、自らマーリン勲章を叩き返したら如何です？　魔法省及びウイゼンガモットへの批判としてこれ以上に象徴的な行為は存在しないでしょうに」

「……仮に儂がそうした所で、何処まで行つてもパフォーマンスとしか見られんよ。儂がそれを貰つたのは過去の魔法省とウイゼンガモットからじゃ。今では無い。そして勲功は……為した事への対価として受け取つたに過ぎぬ」

「それでも行動する事には意味が在る筈ですし……対価、ね。貴方が本当にそれを——先延ばしにしたゲラート・グリンデルバルトの打倒を真に讃えられるべきだと考えているならば、それはそれで問題だと思ひますが」

彼は国際魔法使い連盟から除名されたのだ。

国内のみならず国外からどう考えられているかなど想像するのは容易い。

この老人はどうせ国外からも数々の名誉勲章は受け取っているだろうが、それらを与えた当の本人達は、アルバス・ダンブルドアが真剣に英雄だとは考えていなかったに違いない。

「ただ、僕には真剣に理解出来ないんですよ。ホグワーツ校長、ウイゼンガモット最上級独立魔法使い、国際魔法使い連盟会員等々の強力な地位を受け容れながら、魔法大臣という些細な称号Titileを拒絶するのは偉大だ。そう言いたげな貴方の態度が」

だから嫌いだった。

恐らく、彼の本質に触れた一年生の時から。

「どちらかならば僕は受け容れられた。多くの勲章を胸に煌めかせな

がら魔法大臣になつても、無粋な名誉と称賛の一切を拒絶して単なる一教授に留まつても。どちらの在り方も僕にとつては純粹に敬意を抱ける存在であり、けれども貴方はどちらでもない」

アルバス・ダンブルドアは中途半端だった。

そして彼の周りには、この程度の批判をしてくれる親友は居なかった。

この最強の魔法使いの怒りを買うのを承知で挑む、僕のような愚か者もまた居なかった。

「他ならぬ貴方が一貫性が重要であると抜かすならば、元より貴方に一貫性など無い。少なくとも貴方が言う一貫性が何か解らない。貴方がそんな歪であるのには理由が有る筈で、故に僕は貴方の人格に信頼が置けず、その行動も読み切れない」

二年時に彼が僕への共感を示した事から考えるに、彼には百年物の瑕が、それもアリアナ・ダンブルドアに纏わる致命的な後悔が存在するのは確かだ。ただ僕の今には知り得ず、そして知らないでも問題は無いという範疇を超えてしまっている。

「寧ろ、逆に貴方流の一貫性が維持される方が悪いのかもしれない。この戦争の勝敗を左右する場面において、万一、アルバス・ダンブルドアをアルバス・ダンブルドアたらしめる思想信条が問題になった場合。貴方は絶対に“正しい”行動を取れないからだ」

アリアナ・ダンブルドアの事情とハリー・ポッターの状況が、何らかの要因で奇蹟的に一致した場合。この老人は、不死鳥の騎士団長である事も今世紀で最も偉大な魔法使いである事も忘れ、それがたとえ己の死と魔法戦争の敗北の結果を齎すとしても、愚かに突き進んでしまふ事だろう。

「実際今も間違い続けているではないですか」

この老人は、真に魔法界の未来を憂う人間ならば決して許せぬ不義を看過している。

この今世紀で最も敬意を払われるべき魔法使いは、今この瞬間にも続く魔法界への背信行為によって、来世紀で最も軽蔑を向けられるべき魔法使いの一人となろうとしている。

「今コーネリウス・ファッジがのうのうと魔法界の頂点に居座り、言論に圧力を加え、新法の乱立と現行法の恣意的な解釈を濫用し、そして魔法省とウイゼンガモットの腐敗を公然と露わにしている事が、貴方の後の魔法使い達に如何なる影響を及ぼすのか。貴方が動かない結末を、混乱と破滅を、大賢者アルバス・ダンブルドアが理解出来ないはずもない」

「……………」

「まあ、それに関しては、ハーマイオニー・グレンジャーの事さえ考えなければ、僕にとつて良い気味だとすら思える事柄ですけども——」
大きく息を吸って、そして吐いた。

平静のままに紡げないのは、自分でも意外に思う位には平穩が嫌いでは無いらしい。

革命を起こさずに済ませられるならば誰だつてそれが一番である。そんな一般論が当て嵌まる程に、僕はマトモでは無いと思っていたのだが。

「——あの一年の学期末、僕が貴方に何を求めたか。繰り返す必要がありませんか？」

アルバス・ダンブルドアが応えてくれれば、全てをひっくり返して良かった。

去年から今年にかけ、僕は散々自らの節穴と無能振りを露呈してきたのだ。

今更護るべき矜持など僕には無いし、一貫性とやらもアルバス・ダンブルドアと闇の帝王だけに当て嵌まるらしい以上、僕が投げ捨てる事に何の問題無い。残りの二年で僕がスリザリン寮から、或いはドラコ・マルフォイから直々に始末される羽目になるとしても、今回の魔法戦争でどちらに付くのかを公然と鮮明にしてすら構わない。

アルバス・ダンブルドアが、今世紀で最も偉大な魔法使いが、僕が知る限りにおいて最強で最優の戦士が魔法界の頂点に立つ事には、それだけの価値が存在する。

眼を合わせ、一切の心を隠し立てせず、決死の覚悟で問い——けれども今世紀で最も偉大な魔法使いから答えは返つてこず、やはりそれ

が解答であり結論であるのだった。

アルバス・ダンブルドアの瞳に光る物は無い。

だがそれでも彼は、既に泣いているように見えた。

殆どの人間の眼から隠し続け、また護り続けて来た、この老人の脆弱さ。

百年もの間増築され続けて来た要塞は今や完全に崩れ落ちており、他の人間と同じく持っていた老人の本心を、僕は漸く覗き見る事に成功した。

ホグワーツの四年を費やし、ハリー・ポッターという鍵を用いる事によって、とうとう今世紀で最も偉大な魔法使いの核心部へと辿り着いてしまった。

「儂には決して出来ぬ……」

「何故」

「それが儂の大きいなる過ちに繋がるからじゃ」

枯れ果てた男は、身と声を大きく震わせながら言った。

「グリーンデルバルド、いや、ゲラートは儂が友と呼べる以上の存在じゃった」

「……………」

彼は祈るように手を組み、額に当て、顔の殆どを覆い隠した。

どんな表情をしているかは見えなくなったものの、見透かすのは容易かった。

「大いなる善の為に。それは元は儂が唱えた言葉じゃった。自分の才に自惚れ、初めて対等な相手を得た事で浮かれ切った若き魔法使いが、自分達の支配を正当化する為の題目として生み出した物じゃった。あの世界魔法大戦は、機密保持法を打破してマグルと魔法族を支配する為の聖戦は、彼の夢ではなく儂等の夢だったのじゃ」

それが、この老人の瑕か。

「…………アリアナ・ダンブルドアはどう関わるのですか？」

「そもその発端は、マグルによってアリアナが攻撃された事であった」

嗚咽を隠さずに、老人は答えた。

「魔法使いの幼い子供が魔法力を制御出ぬ事はしばしば有る事じゃ。しかし不幸だったのは、彼女が魔法を使う光景をマグルの子に見られた事じゃった。そして更に不幸だったのは、どんなにマグルに強制されようとも、彼女が再度魔法を扱えなかった事じゃった」

「……『マグル』は不思議を起こすように求め、しかしそれが叶わず過激化して彼女を壊した。となれば、貴方の父親がアズカバンに行つたのも——」

「——君の想像通り、その報復じゃよ」

その行為を批難する気は起きない。

御互いに幼き故の悲劇であろうと、決して許せない行為は有ろう。

「アリアナは狂った。彼女を放置していれば、機密保持法の名の下に、聖マンゴに閉じ込められるのは確実じゃった。だからそれを防ぐ為、儂の母はアリアナの癩癩を止める為に人生を捨てた。そして最後の最後、当然のように失敗した。儂等家族は三人になった。それが儂のホグワーツ卒業直前の出来事であつた」

「……………」

「誰がアリアナの面倒を見るか。答えは歴然としておつた。我が弟は未だホグワーツの生徒じゃった。儂は学校を卒業し、そしてまた家長じゃった。そうして儂は妹の癩癩を抑える為だけに、己の才能を費やす事を余儀無くさせられた。ゲラートがゴドリツクの谷に来たのは、その頃の話じゃ」

そしてゲラート・グリンデルバルトに惹かれた訳か。

老人の独白はとめどなく続く。

「儂等は強固な絆を育んだ。革命を、理想の未来を語つた。が、しかし最終的には破綻した。儂はの、革命の旅に妹を連れ歩けると真剣に思つておつた。機密保持法が無くなれば妹を隠す必要も無くなるのだからと、その行為を正当化しておつた。けれども言うまでも無からう、現実的には無理な話じゃ。その当然の指摘をしたのは弟で、儂等

は口論になった」

「……………」

「そこにゲラートが加わった。儂が見ない振りをしていたのじゃが、彼には非道な部分が有った。それが最も恐ろしい形で現れた。彼は聞き分けの無い、彼がそのように感じた儂の弟を痛め付けた。そして儂等は三つ巴の決闘となり、恐らくアリアナは儂等の諍いを止めようとして、それで、それで——」

「——もう結構ですよ」

告解の言葉を止める。

それ以上は不要で、過剰だった。

魔法大臣の椅子を拒否するようになった理由まで直接話が繋がっている訳では無いが、若きアルバス・ダンブルドアは当然に、革命によつてその座を獲る事を計画していたのだろう。

しかしその結果彼はアリアナを喪い、自分の家族愛と善良性を信頼出来なくなり、それ故に彼は魔法大臣に就きたがらなくなった。誰に求められようとも、百年の後悔を理由に至上の地位を遠ざけ続けた。

嗚呼、理解はした。

そして同時に、この老人を更に痛め付ける言葉など幾らでも思い付いた。

魔法大臣に就任する事がそのまま力によるマグル支配と等しい訳ではないとか、アルバス・ダンブルドアの父親がやったように魔法大臣でなくともマグルを虐げる事は可能だとか、既に散々言ってきたように魔法大臣でなかうと権力を振るう事は可能だとか——眼の前に座っている弱々しい老人が紡いだ、論理の破綻を指摘する事は可能だった。

けれども、それ以上に致命的な瑕疵を僕は見付けてしまった。

どうやらステイブ・レッドフィールドは、そのように出来ているようだった。

「——機密保持法と心無きマグルによつて、可哀想なアリアナは死んだ」

アルバス・ダンブルドアへ投げかける言葉には、己でも驚く程に力

は無かった。

息を呑む音。単なる前置きの言葉で、老人が打ちのめされた事を示す反応。それを聞いて尚、僕は止める事無く、椅子から崩れ落ちるようにして、中空を見詰めたままに疑問を紡ぐ。

「ならば、貴方は二人目のアリアナが産まれないように、或いは救う為に行動しようとは考えなかったのですか？ 人の悪意によつて悲劇に囚われた弱者。心無きマグルの攻撃による犠牲者。過去の貴方達のように、救いの声を挙げられない人間達。そんな彼等に手を差し伸べる事に、貴方は以降の自分の人生を捧げようとは思わなかったのですか？」

「アリアナが死んでしまったが故に貴方がホグワーツに引き籠つたのであれば、では、彼女が生きた意味というのは、果たして何処に有つたのでしょうか——？」

終わりだ、と瞳を閉じる。

御互いが相容れない事は明確になった。

この瞬間、僕達は道を共にしえない事を、決定的に実感してしまった。

「……儂が断言しよう。そう言う君も、儂と同じ道を辿る」

「……かもしれないですね。けれどもそれは、まだ今ではない」

気配だけで、アルバス・ダンブルドアは深く項垂れている事は解つた。

彼がどんな表情をしているのかも、わざわざ見て確認する必要は無かった。しわくちやの手によつて完全に覆い隠されていようとも、他ならぬ僕はそれを察する事が出来た。

国際魔法使い連盟機密保持法。

その秩序が神聖不可侵である事を前提としても、何も為し得ない訳ではない。

ゲラート・グリーンデルバルトによる革命の打倒に関わらなくとも良い。コーネリウス・ファッジらが生きるような政治の世界に打つて出る必要すらない。

マグルによって消えぬ傷を負った子供達。スクイブやオブスキュリアルと言った、この魔法界の歪みが生み出した弱者。そんな彼等と向き合い、一人一人を地道に救う聖者の道は存在した筈であり、そしてそれが可能で有ったのは、彼等の痛みを自らの身に知り、共感を抱ける過去を有し、誰よりも強大な魔法使いであるこの男では無かつただろうか。

しかし、それでもアルバス・ダンブルドアは、ホグワーツという安全で恵まれた箱庭において、その稀代の才能を浪費する事を選択した。大部分は彼でなくても誰かがやれたであろう仕事を、自分しか出来ない偉大な仕事のように振る舞い続けた。

彼は間違いを知っても尚間違い続けたのであり——そしてまあ、それは彼が予言したように、これからの未来の僕にも該当し得るかもしれない。僕達が自分本位で利己的で、そして身勝手な人間であるのは、今更語るまでも無い事だった。

老人が完全に落ち着くまで、永遠と思える時間が必要だった。

しかしその静寂の嵐が過ぎた後。上げられたホグワーツ校長の顔には微笑が讃えられていて、理想的な老賢者そのものの柔和さと威厳を備えていて、開心の術をもってしても偽りが無くて、けれどもだからこそ、僕は既に取り返しのない事をしたのだと理解した。

「君も気付いておる筈じゃ。好意を持ってぬ人々に対して、儂が酷く冷やかである事を。個人的な欲を優先し、為された非道を見せしめてしまう事を」

「……………」

「例えばハリーに入学許可を渡す時点、その際にハグリッドを遣わした事じゃ。君は明確に不愉快に思った部分が有ったじゃろう？」

「……正直、見事だという感想は抱きましたけどね」

求められた言葉では無いと知っていて、しかし本心からの言葉を紡ぐ。

「虐待を受け続け、己の未来に希望を持てなかつた少年。その少年が十一歳の誕生日を迎えた時、山程のふくろうの群れが非日常の到来を告げ、非魔法界では見られないような大きな人間が眼の前に現れる。

そして大きな彼は、少年が実は魔法使いだったと知らせると共に、意地悪な従兄弟の家族をもやり込めてしまおう。嗚呼、素晴らしく劇的で、物語的では有りませんか」

これ以上の演出など中々出来ない。

あの半巨人には演劇の才能が有るのかもしれない。

「その瞬間、さながら鳥が刷り込みによって親を覚えるように、ハリー・ポッターはルビウス・ハグリッドに対して強い好感を抱いた事でしょう」

ミネルバ・マクゴナガル教授を遣わした方が確かに穏当ではあった。

自分の両親の事すら知らされる事なく魔法界から隔離され続け、けれども「生き残った男の子」という非常に繊細な対応を求められる子供に対しては、あの女教授程に賢く、臨機応変に行動出来る人間を充てるのが適当だと、普通の人間ならば考えるだろう。

しかし間違いなく、彼女は適当ではあれど、最上ではなかった。

出会った最初の魔法使いがミネルバ・マクゴナガル教授であったのなら、聖ブルータス更生不能非行少年院の教師よりも少しマシに見える程度の印象しか、ハリー・ポッターに与えられなかっただろう。勿論、あの情の深い教授はダーズリー家に何らかの意趣返しをした事だろうし、グリフィンドールに組分けされた後でハリー・ポッターがそれを知った可能性は高いが、それでもルビウス・ハグリッド程に親しみを覚える事は無かった筈だ。

そもそも当時、彼がグリフィンドールに組分けされるかは不透明だった。

両親が同じ寮に属していたとしても、子供が別の寮に組分けされる事例は、少なくともあっても稀とまでは行かない。しかしその場合でも、ハリー・ポッターとルビウス・ハグリッドの友誼——己を魔法界に連れ出してくれた者への好意が続いた事は間違いなく、アルバス・ダンブルドアは半巨人を通して状況を支配する事が可能だった。

ただの十一歳の少年の心を操る事など、この老人にとっては朝飯前だった。

彼が入学する以前から、ハリー・ポッターへの干渉は既に始まっていたのだった。

しかしアルバス・ダンブルドアの視線は静かなままで、僕は渋々降参の言葉を続ける。

「……ええ、気に入らない点は有りましたよ」

椅子に座ったまま、軽く両手を挙げつつ答えた。

ハリー・ポッターを迎えに行く際にルビウス・ハグリッドが少々マグル虐めをしたのは些細な事だ。彼が退学後に折れた杖を持っていた事も無視出来なくはない。

ただ、ハリー・ポッターが十年間虐待を受けていた事は、ルビウス・ハグリッドが魔法界の秩序を無視して良いという事にそのまま繋がる訳では無い。

「魔法族は隠されなければならない。だということにマグルの民家に大量のふくろう便を送り込んだのは看過出来ず、何よりマグルに魔法を掛けたのはまだ見逃せたとしても、それを治療しないまま『ロンドンの私立病院で尻尾を取る』事を許したというのは論外だ」

要は国際機密保持法の明確な違反である。

「今からでもダーズリー家が魔法省に告発すれば、ルビウス・ハグリッドが折れた杖を持っているのと併せ、あの半巨人をアズカバンに叩き込むには十分でしょうね。無知で有る事は罪では無いが、無知であれば自分が損をする事を示す恰好の例だ」

「しかし、君はそれを助言しないのじゃろう？」

「ええ。ハーマイオニーの少々の、そしてハリー・ポッターの多大な不興を買ってまでするつもりは無い。秩序の維持よりもそれだけの損失を回避する事を優先してしまう」

この老人も同様だろう。

また、「処理」が行われたのは聞かずとも想像が付いている。

産まれたばかりの赤子でもない、十一歳にもなる子供に生えていた、豚のような尻尾を切除した。そんな医療事例は何処の病院にも存在せず、あまつさえ外科手術によって取り除いた尻尾が保存され、研究されているという事は無いだろう。

「医者 of 記憶を消したのか、或いはこの老人自身が魔法で尻尾を消したのか。」

「どちらの処遇を取ったにしても、彼は一応魔法界の秩序を守る為には行動し——しかしそれは裏返せば、この老人がルビウス・ハグリッドのマグル虐めを事後承認したという事だ。ルビウス・ハグリッドは法律違反を理由に叱責などされていけない筈で、この老人は寧ろ良くやってくれたという感想を抱いていたに違いなかった。」

「そういう事じゃ。儂はしばしば、マグルの権利保護の為に尽力する立派な魔法使いと呼ばれる事になる」

「……実際、貴方がマグル保護に全く貢献していないとは言いませんよ」

「慰めでも嬉しいものじゃの」

アルバス・ダンブルドアは小さく、軽やかに声を上げて笑った。

「ただ、儂はマグルを心から愛せぬのじゃ。アリアナを壊したマグルを、ハリーを虐げるマグルを、そしてその他の敬意を抱くに値せぬマグル達を。無論、そのような者ばかりではないのは頭では理解している。しかし儂の心の奥底にはマグルへの不信が有り、力を与えられた者として、魔法でもって彼等を罰する事を厭わぬ冷酷さが横たわっているのじゃ」

「しかし貴方が冷酷なのは、相手が“マグル”だからではない。貴方は魔法族に対しても全く同じでしょう？」

「そうじゃな。その点において、儂は皮肉にも平等であると言えるのかもしれない。軽蔑すべき魔法族に対しても、儂は決して力を貸したくないと感じてしまうのじゃから」

誰だつてそういう部分は有るだろう。

好意を抱ける者に対しては助力を惜しまず、しかし嫌悪しか抱いていない者に対しては、僅かの利益すらも与えたくない。そう考えてしまふのは人間の性で有って——けれどもこの老人は影響力を持ち過ぎており、自分が奉ずる正義を貫きたがる位には我儘で、尚且つ自身の好き嫌いが極端過ぎた。

「……貴方がハリー・ポッターを使おうとしない、真の理由は？」

「君は下らん拘りだと切り捨てるじやろう。しかし、儂はハリーに近付けぬのじゃ」

最早誤魔化す事をせず、アルバス・ダンブルドアは素直に白状した。「何時だったかアバーフォース——儂の弟が批難をぶつけてきた事が有る。いや、独り言に近い不平であったか、もしくは儂以外の者に告げたかもしれない。ともあれ、彼はこう言った。『兄がとても気にかけて相手の多くは、結局、むしろ放っておかれたほうが良かったと思われる状態になった』とな」

「……………」

「儂は可能な限りハリーに、無垢なる少年に近付かない方が良い人間なのじゃ。おお、今は上手い関係を抱いておるとも。けれど近しくなれば、儂と彼が親しくなれば状況は変わるじやろう。少しくらい遠いと思える関係の方が、寧ろ友好を築ける場合もある」

……僕は今日彼を散々に批難したが、それでも此度は同種の言葉を紡げなかった。

アルバス・ダンブルドアの主張もまた一理有るのかもしれないと、そう思ってしまった。

「儂は最初からハリーに接触すべきであったかね？ ハリーの誕生日、儂は直々に魔法界とホグワーツの説明をするべきであったじやろうか？ 返せず借りに続けたままだった透明マントを携えて、彼に真正面から向き合うべきじゃっただろうか？」

僕の答えを待たずに、アルバス・ダンブルドアは首を小さく振った。「儂には出来なかった。儂がハリーと向き合えば、当然ジェームズとリリーの事に触れざるを得ないじやろう。そして透明マントを直接返してしまえば、儂が私利私欲でマントを借り受けたせいでジェームズ達が死んでしまったのだと、ハリーがそう考えてしまうのは想像が付いた。それは儂の計画に大きく反しており、それ以上に儂はハリーに嫌われるのが怖かった」

「……………たかが透明マント如きが有った所で、ポッター家の結末が変わるとは思いませんが」

流石にその発言には口を挟んだ。

「確かに伝説によれば一切の魔法を受けつけず、死からも逃れられる秘宝でしょう。けれども伝説通りに完璧でないのはアラスター・ムーデイの義眼が隠蔽を見破った事からも明らかです。そもそもマントの存在は、ピーター・ペティグリュウが主君に伝えている筈だ」

「そうじゃな。ヴォルデモートなら見破る。みぞの鏡の前に透明のまま立ったハリーを、或いは秘密の部屋について聞く為にハグリッドを訪れたハリーとロンを、儂が易々と見破ったようにの。第一、透明マントは身体を無くす訳でもない。ウインキー達のように、四方に撃つた呪文に不幸にも当たる事はありうる」

「そう言いながらも、彼は自身の言葉を殆ど信じて居ないようだった。」

死の秘宝が真の所有者に対して齎す奇蹟を願う位には、この老人は自己の振る舞いを恥じ切っていた。

「しかし、それは君だから言える事じゃ。君であれば一年の時から同じ反論を出来たじゃろうが、普通のホグワーツ一年生には期待出来ぬ。お前のせいで親が死んだ。その感情的で、さりとて子供らしい真つ直ぐな批判を退ける事は、儂には決して出来ぬ。ジェームズ達が不死鳥の騎士団に所属していた事を考えれば、決して見当違いという訳でもないしろう」

「……………」

「更にもっと致命的な問題が有る。それは儂がハリーをダーズリー家に預けた元凶、彼の不幸の諸悪の根源であった事じゃ」

「……そうか。」

「確かに、その問題が有ったか。」

最早意味の無い仮定であるが、僕がグリフィンドールに組分けされていたのであれば絶対に利用したであろう、ハリー・ポッターに取り入る為の決定的な隙が。

「儂がダーズリー家に向かえば、彼等夫妻からその話が出るじゃろう。話もせずに一歳の赤子を置き去りにした儂に文句も言いたくなくなるじやろう。そしてハグリッドと違い、儂は多くを知っておる。誤魔化すにも限度があり、子供だから大人の嘘に気付かないというのは期待

すべきではない。故に儂はそれが露見するのを恐れた。更に彼が儂を憎悪し、「悪しき側」に進むのに恐怖した」

「……悪しき側？ ハリー・ポッターがですか？」

自覚はしていなかったが、僕の反応が余程可笑しかったのかもしれない。

アルバス・ダンブルドアは瞳に強烈な光を激しく瞬かせ、愉快そうに頬を綻ばせていた。君程の人間が、そんな愚かしい事を言うのか。彼は無言の内に告げていた。

「そうとも。はつきり言えば、儂はハリーに疑いの眼を向けておつたのじゃ」

今世紀で最も偉大になるべきでなかった魔法使いは、今こそ十四年を懺悔する。

「鏡の中にハリーが自身の家族を見て、賢者の石の試練を突破し、儂の期待以上の偉業を成し遂げる前まで。いや、それ以降ですらも。儂は心の何処かで常にハリーを疑っておつた。何故ならもう、シビルの予言は、闇の帝王と対比される存在を、決して光の魔法戦士とは述べなかつた」

魔法界に均衡を齎す者とも予言しなかつたのう。

校長は何処か茶化すように笑つたが、僕は一切笑えなかつた。

当たる筈の無い予言が当たつた。

それは闇の帝王のみならず、アルバス・ダンブルドアにも影響を与えた。

予言を素直に信じる筈もない合理的な人間に、しかし真なる予言の存在を疑う程に不合理でない人間に、予言内容を検証させ、善良であろうとしている老人には本来想像出来なかつた筈の最悪の未来予測を構築させる羽目になった。

「ヴォルデモートと等価値である存在。予言を素直に解釈するならば、それが新たな巨悪でない保証は無かつた。善良な者に育てられた者が必ずしも善とならないのは、トムが、そして他ならぬ儂自身が証明しておる。また両親からの愛に欠けるといふ点だけ見れば、ハ

リーは寧ろトムの側に近かった。その上、ヴォルデモートがハリーを傷つけた際に起こった事を考えれば、それが杞憂に留まらない可能性は高い。儂の優秀な頭脳は、そう結論付けるしかなかった」

そこまで言つて、彼は大きくかぶりを振った。

「いや、君には一切を秘さずに言おう。予言の内容を聞いて、儂が何を思い浮かべたと思う？ 儂は当然、ゲラートに対するアルバスを想い浮かべた。名が体を現さぬ、腹の中が真っ黒な、ゲラートと同じくマグルと魔法族の支配を望んだ、致命的な失敗を犯すまで自身の優越性に自惚れ続けていた魔法使いを思い浮かべたのじゃ……！」

「……だから、貴方は一貫して彼と距離を保ち続け、そして今もまた距離を置いている」

「然り。おお、結果として儂は間違え続けておつたのかもしれないけれども、それは今だから言える事じゃ。ハリーの善性を一切疑う余地が無い、今だからこそ」

ハリー・ポッターを非魔法界に隔離する事は、この老人には更に二点の利点があつた。

彼がさながら王子様のように、自分の力と地位に驕つた人間として育てられるのを防ぐ事。そして彼が魔法の存在を自覚し、学んで更に力を高めるのを遅らせる事。

……つまり、アルバス・ダンブルドアと同じ道を辿るのを阻むという事。

魔法を嫌う非魔法族のダーズリー家にハリー・ポッターを預けた事は、彼がオブスキュリアル化する危険を筆頭に、様々な危険と問題を抱えていた。ただそれでも、ハリー・ポッターが新たな闇の帝王として君臨し、更に多くの命が喪われる未来を憂うのであれば、この老人にとってダーズリー家やハリー・ポッター自身の犠牲など非常に些細な事であつた。

この大魔法使いが捨てきれない理念、大いなる善の下に肯定出来た。

「……成程、ハリー・ポッターの性質を善と信ずるなら、貴方の不親切と秘密主義はどう考えても狂っている。しかし彼の性質を悪と疑う

なら——貴方の立場も理解出来てしまう」

これ程までに腑に落ちる種明かしというのも早々ない。

もしかすれば、この老人程にハリー・ポッターが「悪」であるのを期待した人間は、この世界に居ないのかもしれない。

ハリー・ポッターがダーズリー家へ魔法力を用いて過度の報復を試みるならば、それを口実にして合法的に討ち滅ぼす。ハリー・ポッターが強大な闇の魔法使いだったが故にヴォルデモート卿を打ち滅ぼしたという噂を真実と成し、またシビル・トレローニーの予言——アルバス・ダンブルドアが闇の帝王を滅ぼす為の障害をも破壊する。

この老人が何処まで本気であったか、善良な正義の魔法使いで在ろうとする彼が子供殺し、ないしそれに準ずる監獄送りを是と出来たかは、一応疑問を差し挟む余地が有る。

けれども少なくとも僕のスリザリンの思考は、それが有りだと結論を下している。

ハリー・ポッターという余計で計算不能な駒を速やかに排除し、アルバス・ダンブルドアと闇の帝王の戦いという形で解りやすく盤面を整理するのは、一つの策として許容出来た。

しかし、この老人に当時どんな思惑が在ろうと、ハリー・ポッターは善だった。

ハリー・ポッターはアルバス・ダンブルドアとは違うと証明されてしまったが故に、彼はハリー・ポッターに敬意を払い、惹かれ、愛してしまった。そして愛してしまっただからこそ、今このような面倒な事になっている。

アルバス・ダンブルドアは、「アルバス・ダンブルドア」である事を忘れてしまった。

いや、元より解り切っていた事なのだろう。自分でない仮面を被るにも限界が有る。セドリック・ディゴリーがそうであったように、アルバス・ダンブルドアもまたそうだった。

「——結局、貴方は最後までハリー・ポッターを信頼出来ないんですよね」

「……いずれは、とっておる。しかし……君の見立てでは、儂は無理

なのじやな」

「ええ。多分、いえ絶対に貴方は躊躇する。全ての真実を告白する度胸は、貴方には無い」

「そうか……。そうじやろうな」

予言の事のみでは無い。

仮にこの老人が第一の予言について語る日が来たとしても、全てを告げる事は出来ない。

先の見えない謎めいた道筋だけを示して、彼には何も解らないまま、アルバス・ダンブルドアという大賢者の道具として扱われる事を期待するのだろうか。

「ですが、貴方がそう決めたならば、僕はもう何も言いませんよ」

属する陣営が違う以上、最初から必然では有った。

けれども、今こそ意見の相違と対立を、心の底から受け容れた。

「僕が予測する未来においても、最後に難題が存在しているのは事実です。貴方であれば、もしかしたらハリー・ポッター無しで何とかやる方法を見つけ出すのかもしれない。己の愛と善を他の誰よりも信じきれず、それ故に他人のそれらを誰よりも尊ぶ貴方ならば」

ハリー・ポッターが闇の帝王をどのように打倒するか。

アルバス・ダンブルドアが闇の帝王をどうやって引き摺り出すか。

その何れの答えが簡単で楽なのかは、僕には断言出来ない。

ハリー・ポッター有りを選ぶのも無しを選ぶのも、それぞれ一長一短。

そして僕は直感的にであるが、ハリー・ポッターを喪ったアルバス・ダンブルドアであれば、闇の帝王を滅ぼし得るとも考えていた。ならば、ハリー・ポッターを戦場に出さないが為に本気となった魔法使いは、やはりそれを為し得るのかもしれない。

「けれども、本当の最後に一つだけ。僕が貴方でなくハリー・ポッターと戦争をするならば、まず何よりも最初に、僕は彼等の友情に亀裂を入れようとするでしょう」

ハリー・ポッターは闇の帝王と違うが故に、僕はそれに意義を見出す。

「殺すのはハーマイオニーの父親が良い。殺し方も可能な限り残忍に、彼女のホグワーツの友誼が原因だと解るようにすべきでしょう。そうすれば彼女は残された母親の望み、良からぬ友人と縁を切つて平和に暮らして欲しいという願いを無視出来ない。そして友情の円環は壊れ、ハリー・ポッターの性格を考えれば、恐らくロナルド・ウィーズリーの方も一気に上手く行かなくなる」

「儂はトムがそうすると思わぬよ」

僕の言葉の深刻さに比して、アルバス・ダンブルドアの口調は軽かった。

「人質を使う、もしくは他人の犠牲を餌にするというのは、あやつらが先の戦争中で散々やった手法じゃった。しかし現状、その手段をハリーに対して用いる筈もない。日記帳のトムがハリーをどう評していたかを考慮すれば、成長したとはいえ、あやつ頭では考え付かぬ。そう、付かないのじゃが——」

アルバス・ダンブルドアは微笑んだ。

穏やかで、優しげで、けれども見る者を凍らせる程度の凄みが有った。

「——それは既に叶わぬ。絶対とは言わぬ。時間が経てば破れる可能性は確かに上がる。また、夫妻が偶然に死喰い人達の被害に遭う可能性は一応高くなっておる。ただ、魔法の力を絶対視するあやつらが指揮する限り、今回儂が施した偽装を見破れはせぬじゃろう」

「……そう、ですか」

助言のつもりで発した言葉は、結局余計な御世話だった訳だ。

正気で居る限り、この魔法使いを超えられる者はそう居ない。

今の時代に対抗出来るのは闇の帝王一人で、しかし彼も人である以上、得手不得手な分野は存在する。アルバス・ダンブルドアが魔道の知識の面で闇の帝王に一步劣るとしても、この手の操作では彼の追隨を許しはしないのだろう。

「——やはり、この国に貴方しか居なかった事こそが悲劇なんですよね」

この老人は、ただただ孤独だった。

ゲラート・グリンデルバルトと会うまで。そして、会ってから。

「貴方以外の誰かが居れば。今こそ本当の意味でそう思いますよ。貴方と歩を同じく出来るだけの能力を持った誰かが居れば、まず間違いなく、この魔法戦争は余裕勝ち出来ていた」

「……その意味では、バーティもアラスターも完全に力不足じゃったの。そして時間が足りぬかった。今この時に間に合ったとすれば、それは皮肉にもヴォルデモートじゃったろう」

「少なくとも彼は、貴方が強烈に意識し、敵視するだけの能力が有った訳だ」

「でなければ、儂等は十年以上殺し合いをして居らぬよ」

アルバス・ダンブルドアは少しだけ寂し気に笑った。

「今思えば、儂はトムと出会った瞬間からそれを知っていたように思う。兎を吊るし、仲間を傷付け、魔法力でもって平然と大人へ命令する事を躊躇わない、君と同じくらい無礼な十一歳の少年に会ったその時から。このように戦争をする羽目になるとは考えておらずとも、ゲラートとはまた違った意味で、トムは儂の特別であったのじゃろう」
もつとも君に言わせれば、トムにとって儂は何ら特別ではなかったようじゃが。

この国に君臨させられてしまった哀しき王は、そのように言葉を結んだ。

訣別

語るべきは語り尽くした。

御互いに済ませるべき全ては済ませた。

だから、後は余禄だった。

終わった物語を、多少見栄えがつくように整える為の作業に過ぎなかった。

「三年前、いや四年前に渡しておくべきであった物を君に渡すとしよう」

そう言つて、アルバス・ダンブルドアは執務机の引き出しから何かを取り出す。

差し出すように机の上に置かれたのは一つの無地の封筒と、一通の手紙。

その二つは、共に差し出されるのが多少奇妙に思う位には対照的だった。封筒の方は大きく、そこそこ厚みが有り、そして新しい。一方で手紙の方は小さく、少し古ぼけている。

「儂が君をステファンと呼んだ時点から、儂が君の多くを知っていたのは気付いていたじやろうと思う。しかし君は慈悲深くも、この老人めを問い質そうとはしなかった」

「……違いますよ。ただ単に僕の方にも準備が出来ていなかっただけです」

軽く不同意を示す為に首を振りながら、僕はそれらを受け取る為に手を伸ばした。

「事情を説明する手紙が貴方の下に届いたのは僕が入学する前ですか」

アルバス・ダンブルドアが事件を見過ごしたとは思つておらず、事件の顛末を知ったのは何もかもが終わった後で有った筈で、故にミネルバ・マクゴナガル教授を遣わした彼は頷いた。

「差し止めていたのは君の母君——保護者と呼ぶべき母君の方じやろう。恐らく彼女が死ぬと共に儂の所に送られる仕掛けになつておつたに違いない。もつとも手紙の内容から察するに、君を産んだ母君の

方は、それより早く儂に届く事を期待してたようじゃが」

「結局、貴方を信頼しきれなかったんですよ」

あの狂える母が頼れなかったのは必然だった。

「貴方に一度でも会えば、たとえ入学にはまだ時間の有る年齢の子供が対象だとしても、この手の救難要請を貴方が断る事は有り得ないと知れた。しかし他国の人間にはそれが知れない。これ程の面倒事を好き好んで貴方が背負うとは思わなかったでしょう」

「……そうかもしれぬな」

「しかし手紙の方は解りましたが、封筒の方は？」

「君の母君の事件に関する捜査記録、そして彼女達が葬られた場所についての記述などが入っておる。君は顛末を推察しておるじゃろうが、何分国外での事じゃ。君が調べるのは非常に困難であろうし、君もルシウスに頼りにくいじゃろう。余計な御節介かもしれんがの」

「感謝しますよ。整理は付けていたとはいえ、気になっていない訳では無かったですから」

口が綴じられていない封筒を無造作に開け、分厚い書類を取り出す。封筒の中にはもう一葉、写真が入れられているようだったが、それは今は見なかった。

何時だったか僕はネビル・ロングボトムに対し、あの愛は不合理だったと告げた。

しかし、あの時点で、僕はハリー・ポッターの両親が子供の為に命を捧げ、或いはネビル・ロングボトムに対し同種の事を行われたのを知っていた。それでいて尚、僕はあれを不合理だと言った。その理由の一端が、この記録には存在していた。

いや、そんな事など最初から解っていたのだ。

僕が無意識に、或いは意識的に、彼女達を混同し、同じく呼称していたのだから。

書類に記されていたのは、殆ど想像していた通り、それはある夫妻の無理心中事件——として非魔法界で扱われた、しかし実際は、一人の女性が闇の魔法使いを撃ち殺した事件を隠蔽した旨を記すものだった。直接の死因は至近距離による頭部への銃撃であるが、殆ど即

座に家の大半を燃やしているあたり、知ってか知らずか徹底している。決定的な隙さえ突けば非魔法族でも魔法族を殺し得るといい例だ。

そこだけに注目すれば一方的にも読めるが、記録は同時に、闇の魔法の過激な痕跡を物語っている。自分が愛する相手でない——そう思い込んでいた相手ならば、あの父が容赦する必要も無い。魔法使い達が無理心中という形で事件を終わらせたのも、現場を直接見た彼等にとっては当然の事だったのでろう。

「……君の保護者の直接の死因は衰弱死であり、事件性は無かった。そして彼女は魔法を扱えなかった。君も入学前の子供に過ぎなかった。つまり分霊箱を用いて君の前に現れた闇の魔法使いを滅ぼせた人物はあの場には居らず、しかし彼は滅んだ。それは君の二年前の発言から考える限り——」

「——ええ。自滅です。彼は間違いに気付き、それでも認められず彼女を痛め付け、しかし結局現実を受け容れざるを得なくなりました。魔法省の役人が来たのは僕の些細な抵抗とその余波の結果でした。まあ、あの末路を良心の呵責によるものと言っているかは微妙ですが」

僕が滅ぼした訳では無い。

「生き残った男の子」のような奇蹟は起きなかった。

初めから最後まで二人が始末を付け、僕が何かをする余地の無いままに全てが終わった。僕が知識を得る事も、呪文に習熟する事も、強くなる事すらも不要だった。僕達がこの国に来た時点において、事実上終わりは決まっていたようなものだった。

もつとも、最初から計画されていた訳では無いのだろう。

どちらが最後に僕と共に居たか、そしてあの男が勘違いした理由は、当初の計画がどうであったかを推察させ、彼女達の間にも意思と計画の擦れ違いが有った事を示唆している。元より一方は最初から気が触れていたのだから、その手の齟齬が出るのはある意味仕方が無く、結果が上手く行ったのは単なる偶然の産物で、しかし——。

思い込みに沈もうとする己を軽く自嘲の笑みを浮かべる事で止める。

「魔法省の役人達は終始親切でしたよ。僕自身の意思によって闇の魔術が行使されたと疑いを向ける事も無く、見逃してはならない大事件が発生したらしい事も推察した。けれども彼等は彼女の最後の願いを無碍には出来ず、そしてその後、当然のように彼女は死んだ。あの様子では、すぐさま聖マンゴに運ばれていれば救える可能性は零では無かったのでしょうかね」

コーネリウス・ファツジが疑問を差し挟んだのもそこに有る。

彼女が死んでしまったのは魔法省の怠慢、不適切な対応が原因だったのではないかと。

「止められるのは僕だけでした。彼女を助けてくれと言えるのは僕以外に居なかった。人は死ねば終わりの筈で、けれども良い終わり方を選択しようとする彼女を止めきれなかった」

「……止められなかった責任を、君が負う必要は無いじやろう。他ならぬ彼女が、聖マンゴで過ごす時間より君と共に居る時間を望んだのじやから」

「それでも、治療の甲斐無く死ぬ確率が高いとしても、やはり足掻くべきでした。分霊箱に僕が魂を喰われた結果として、彼女の生きる時間を短くしてしまった訳ですから。——まあ、どちらにせよ、やはり終わった物語なんです」

一人を殺せるのが一人だけとは限らない。

父と同じように、僕もまた作為によって彼女を殺した。

「……ホグワーツでは助けを求める者には必ず助けが与えられる。儂はそれを一つの救いだと考えておったし、君もまた、そうである事を儂は望んでおった。この四年間君は油断ならぬ生徒で在り続けたが、それでも儂は君に救いが有る事を期待していたのじや」

「学生中のリーマス・ルーピン教授のように救われる人間も居る。しかし僕達はそうではなかった。ただそれだけの話に過ぎません」

決してアルバス・ダンブルドアが悪かった訳では無い。

「子供三人残された貴方がたが誰にも頼ろうとしなかったように。或いは衰弱した彼女を抱えた僕が誰にも頼ろうとせず、最後の魔法省の助けも拒絶したように——外部の余計な干渉を不要とする人間は、助

けてという言葉を送せない人間というのは、確かにこの世に存在する」

その言葉を口に出来れば、何かが変わったのかもしれない。

アリアナ・ダンブルドアは死なず、僕の母も死ななかつたのかもしれない。

けれども、あの時点の僕達にはそんな選択肢は存在せず、可能性が零である以上、最初から仮定の話を考える事こそ無意味だった。

「……しかし、出来れば貴方にそんな人間を救える救世主で在って欲しかった。そう思ってしまうのは、無責任に超人を求める凡人の我儘なのでしょね」

高貴なる義務。

公共の福祉に奉仕する王者。

アルバス・ダンブルドアはその能力と資格を有し、けれどもそのような人間となるには、彼は余りにも性格が俗過ぎた。この老人にアリアナ・ダンブルドアの事が無かつたとしても、彼は魔法界の指導者として立つ事は断じて不可能だった事だろう。己の身を粉にして大衆を統べる事に何れ我慢出来なくなり、何処かで根本的に破綻したに違いない。

「……未来有る君ならそうなれる。教師ならば本来、そう言葉を掛けるべきなのじゃろうな」

「自分がそうなれない事など解っていますよ。貴方以上に、僕は他人の為に熱心になれない」

「御互いに難儀な事じゃな。儂も君も、社会の中に生きる人間としては弱過ぎるのじゃろう」

アルバス・ダンブルドアは立ち上がり、僕もまた立ち上がる。

僕よりも老人が先に行く方が早く、彼は自ら扉を開けた。部屋の主人として、別れを惜しむ個人として、互いに敬意を払う同類として、彼がそうするのを望んだのが感じ取れた。

僕は円形の校長室を横切る。

その際、歴代校長の肖像画達は何も言わなかつた。

誰一人として口を挟む事はなく、同時に僕達がその権利を認めても

いなかつた彼等は、けれども寝たふりをする事も無く、僕達の行動を静かに見つめたままだった。

僕は自分の為に開けられた扉を通り過ぎ、そして踵を返した。

部屋と外界の境界線を挟んで、ステイブ・スチュアート・レッドフィールドとアルバス・パーシバル・ウルフリック・ブライアン・ダンブルドアは向かい合う。単なる Hogwarts 校長と、Hogwarts 生として。同種の瑕を抱えながらも立場を異にする個として。長らく言葉を交わしながらも、最後まで相容れなかった人間同士として。

しかし、不思議な事だ。

この場所に来る時は何時だって憂鬱だったというのに、今は名残惜しくて仕方が無い。

「貴方には心から礼を言います。どんな意図が有ろうとも、これまで貴方が教えてくれた多くの事は、これからの戦争の振る舞い方、僕の目的の達成の為に大きく資するでしょう」

「儂の方こそ礼を言わねばならぬ。決して全てが成功だったとは言えぬが、久々に生徒を手自ら教えた事で原初の想いに立ち戻れた。疑いなく、儂の方にも学ぶ物は多かった」

「まあ、この戦争の最後にどちらが立ったまままで居られるかは一種の勝負ですが——」

「——二人とも立ったままという事は無かろうの。それも御互い覚悟の上じゃが」

示し合わせた事ではなかったが、同時に軽く笑い合う。

四年前は遙か高みから見下ろされていたのだが、何時の間にか左程見上げずに済む位の身長差になったのだと気付き、その事に強い慨嘆を抱いた。

「——さらばじゃ、ステイブ・レッドフィールド君」

「——ええ、さらばです。アルバス・ダンブルドア校長」

御互いに最後の挨拶を交わし、分厚い校長室の扉は閉ざされた。

そうして、僕は一墓の墓の前に立った。

一輪の花も添えられていない、今まで来訪者の一人も居なかったであろう寂しい墓。

死は終わりだ。何を代償に差し出したとしても、何を目的として戦ったとしても、天国や来世が存在する保証など無く、故人が得られる物も無い。だからこそ、人は今既に保証されている現世の可能な限りの存続を望み、不老不死を希求する。

今世紀で最も偉大な魔法使いな魔法使いは、闇の帝王を愚かと断言した。

だが、愚かでない人間が果たしてどれだけ居ようか。愚かと呼ぶ自身が愚かではないと否定出来る人間が、この世に存在するのだろうか。不老不死を求めた程度で、たかが顔が崩れ人から離れる程度の些細な代償で永遠を確保出来るなら、闇の帝王はそれを当然に是とする。死からの飛翔を願った少年は、決してその正義を疑いはしない。そしてまた、あの父親もそうだった。

自我と知識と意識の継続が為に、自分が愛する者以外を犠牲に捧げようとした。

彼にとつてはそれが当然だった。魔道に堕ちた彼は何の疑いもせず、己という個体は世界に保存されて然るべきだと確信していた。闇の帝王と違つたのは、己以外に唯一無二を見出し、また高らかに悪を唱える事にも興味を持たなかったあたりか。嗚呼、方法論の違いも有るだろう。もつとも、それらの違い全てが、彼の破滅を呼び寄せる事になってしまったのだが。

「……しかし、こういう手は反則ではないですか？ まあ、貴方が意地の悪い人間である事など、今更取り立ててあげつらう事では無いですが」

羊皮紙を片手に独り紡ぐが、自分でも苦笑交じりなのは解った。

あの封筒の中には捜査記録等と写真が入っていたが、その時点で僕は、それらとは関係無い一枚の羊皮紙が入っている事に気付かなかつた。わざわざ記録等と纏めて綴られていたのだから、眼の前で読まれないという考えの下に意図的に仕組まれていたのは明白だった。

その時点で破り捨てても良かったのだが、一応最後である。かの魔法使いが最後に何を残したかくらいは受け止めるべきだろうと思って読んでみれば、結局は時間の無駄だった。

特徴的な細長い筆跡によって書き連ねられていたのは、推測に推測を重ねた妄言。

イルヴァーモニーの創始者、イゾルト・セイアとジェームズ・スチュワードには養子達の他、魔法使いの子供が一人居た。

彼女——リーニャ・スチュワードは結婚をせず、子供も作ろうとせず、その結果魔法族としてのスチュワード家は彼女の死をもつて事実上断絶を迎えたのだが、彼女がそれを是とした理由には一つの伝説が存在する。それは彼女が引いている、忌むべき血統を残す事を良しとしなかったが故に子供を残さなかったという伝説である。

その忌むべき血統とは「セイア」では無い。

リーニャ・スチュワードの祖母、つまりイゾルト・セイアの母はアイルランドの名家出身であり、その名前をリーニャ・「ゴント」という。付け加えるならば、あの闇の大魔女ゴームレイス・ゴントと姉妹関係にあった。

もつとも、イゾルト・セイアの実子はもう一人居た。

彼女の子として産まれたマーニャ・スチュワードは、マグルであった父親の方に似たせいか、魔力の一切を持っていなかった。つまり、今でいうスクイブだった。

彼女は両親に愛されてはいたものの魔法界で暮らし続ける事を良しとせず、ネイティブアメリカンと結婚し、名もなきマグルとして暮らす事を選択した。そしてネイティブアメリカン達は部族間闘争や移民との戦争、天然痘の流行という苦難に襲われ続けた事もあり、魔法界はマーニャ・スチュワード達の子孫の行方——そもそも、そんな人間が本当に存在しているのかも含めて——を追い切れていない。

すなわち——

「……本当に馬鹿げた推測だ」

途中で買って来たライターで、その羊皮紙に火を着ける。

「どんなにもつともらしく聞こえようと、根拠が無いのならば空想で

しかない。こんなのは仮説とすら言えない。第一、サラザール・スリザリンは千年前の人物だ。彼の子孫や、たまたま蛇語を喋れる人間などそこら中に転がっていても不思議ではないでしょう。

——そして何より、僕は血縁の価値を過小評価せずとも、過大評価するつもりもない」

かの校長によってあらかじめ宿命付けられていたのだろう。羊皮紙は軽く炙っただけで、表に出すべきでない事件記録ごと大きく燃え拳がり、灰すら殆ど残さず消え失せた。

手許に残ったのは手紙と写真。それで十分だった。

そして眼の前の墓、そこに刻まれた名へと視線を移す。

マルタ・スチュアート^{Stewart}。

これ以上無い明瞭な解答に軽く笑い、手許に残ったもう一方、写真に手を落とす。

魔法界流の動く写真。どういう経緯で撮られたかは解らずとも、これが在る事自体は左程不思議には思わなかった。

彼女はイルヴァーモニーを知っていたのだ。何処から知ったかは最早知りえないだろうが、それでも全く想像出来ない訳ではない。大陸の魔法界の歴史、ラポポート法の存在を考えれば、彼女もまた国際機密保持法の犠牲者の一人であるのは間違いない。僕は最初からそれを確信していたし、あの校長も同様の推測を立てていた。そうでなければ、秘密の部屋の事件後、あの校長がアリアナ・ダンブルドアと同一視する事は無かった筈だ。

写真の中に居たのは、二人の金髪の女性。

外見から判断するに彼女達は姉妹、それも双子であるのは明らかだった。

彼女達は僕の記憶にあるよりも若く、今の僕よりも年上。それでも二十にはなっていない。一方は強く見覚えのある虚ろな笑顔を浮かべており、他方をがっちりと抱き寄せている。もう一方はそれが気に入らないのか、顰めつ面のまま身をよじっていて、逃げようとする意思を隠そうともしていないくて、けれども力づくで突っぱねようとまではしていないかった。

彼女達は僕に気付かず暫くじやれ合っていたが、殆ど同時に僕の存在に気付くと、二人揃って手を振り始めた。彼女達の笑顔は、今度は本当にそっくりな、幸福に満ちた物だった。

所詮は写真で、過去の記録で、人の造り物である。この写真が撮られた当時彼女達は僕の存在など知り得ず、故に所詮はそれらしい反応をするように仕組まれた魔法具に過ぎないというのは重々承知だ。しかしそれでも、僕はこのように考える事を好んだ。

既に喪われはした。誰もが失敗を犯した。

けれども家族同士、愛により繋がった者の絆は、確かに今も有るのだと。

適正手続

僕は夏休暇が始まって以降マルフォイ家に滞在していたのだが、その間ルシウス・マルフォイ氏と直接話をする機会は余り無かった。その上で一対一という限定をするならば、一度としてその機会は無かったと言って良い。

それは闇の帝王の復活やハリー・ポッターの裁判等で彼が非常に忙しくしているというのも一つの理由だったが、やはり最大の理由は、彼がわざわざ話を聞く必要性を感じる程の物を僕が持っている訳でも無く、また当主が直々に済ませるような要件も無かったからだろう。

僕の思い上がりでないのであれば夏中、ホグワーツ五年生である僕に対して一度は何らかの話があるとは考えていたが、その予想にしても休暇の終わり際に多少言葉を掛けられる程度で、腰を据えて何か面談をするという事までは期待して居なかった。

ただ、この手の僕の予想はやはり当たらないのだ。

ハリー・ポッターの無罪が下された翌日だっただろうか。

その日珍しく在宅中だったルシウス・マルフォイ氏によってドラコ・マルフォイが呼び出しを受けた事は、何ら特別でもない、家族として自然な行動である。だが彼が呼ばれてから十分も経たなかっただろう、その程度の僅かな時間で僕もまた呼び出されたのは、やはり僕に多少の驚きを齎すに足る異常事態に違いなかった。

屋敷しもべ妖精に引き連れられて僕が案内されたのは、客間の一室だった。

貴族という人種は事あるごとに相手を委縮させたがるというのは今更の話だが、この場所はその目的の為に作られている。宝石で飾られた豪華のシャンデリア、古めかしく堂々とした暖炉、曇り一つない窓から望める広大な庭、審美眼の無い僕には汚らしくしか見えない壺

や絵画の数々。外から日の光が差ししている事も有つて部屋の中は明るかつたものの、僕をして多少陰鬱な気持ちにならざるを得ない。

ただ、氏は僕の内心を理解してか、穏やかに微笑みつつ、気楽な様子でソファア―に掛けていた。客に対して普段は見せないであろう、姿勢を崩して足を組んでいる所作は僕を侮つているというよりも、余計に畏まる必要はないという露骨な意思表示のようであつた。

「気楽にしてくれて構わない」

実際、机越しに対面するようにソファア―に腰掛けた僕に対して、ルシウス・マルフォイ氏は明瞭にそう宣言した。

「突然呼び立ててすまないとは思っている。だが、私の手が空いている時間はそうないし、特に今年は何時それが出来るかも予測が立てにくいのでね。何れは君とゆっくり話をしたいとは考えていたものの、ここまで遅くなるとは考えてもいなかった」

「……いえ、別にそんな事は」

小さく首を振って問題無い事を示した後、僕は軽く頭を下げる。

「それどころかナルシツサ・マルフォイ夫人や、ドラコ・マルフォイ――貴方の息子さんにも非常に良くして頂いています。寧ろ僕のような者に対して過分とすら思える程で、逆に申し訳なくなつてくる程です」

「くく。その割に君はマルフォイ家に随分と馴染んでいるようだが？」

君が一度書庫に入ると中々出て来なくて困ると二人からは聞いている

「それは――」

「いいや、別に責めている訳では無いとも」

ルシウス・マルフォイ氏は鷹揚に微笑んでみせる。

「マルフォイ家の蔵書に興味を持つ人間は後を絶たないし、その手の客人を迎え入れた事もある。まあそれがホグワーツ生だというのは我が家の歴史でも殆ど例が無いと思うが、書物の知識に長幼も貴賤もない。本の方も埃を被つたままで居るより本望だろう」

取り敢えず御茶を楽しみながら話そうと、氏は僕達の前の珈琲を示す。

僕が珈琲党である事は屋敷しもべ妖精も既に知っているが、氏にも伝わっているのだろうか。そして氏が先に口を付けたのを確認した後、僕も珈琲を手にとって一口含む。

が、その隙を衝くかの如く、彼は話を切り出した。

「しかし——嗚呼、飲みながらで構わないとも。私の立場からすれば、君が我々に対して申し訳なく感じるべき理由を一つ挙げられなくも無い」

「……何でしょう」

「君がドラコの招きに応じるまで四年も掛かった事だよ」

真つ当に考えれば冗談、至極好意的に解釈しても社交辞令の言葉だと思っていた。

けれどもその割には、氏の表情からは微笑みが消えていた。

「君の事は結構前からドラコの口から聞いていた。一年生の頃は聞かなかったと記憶しているが、二年生からかな。君の話が出るようになったのは。だから早ければ二年から三年に掛けての夏、君に会う機会が出来ると考えていた。もつとも私の予感の外れた——というより、君は私が考える以上に強情だったようだが」

「……流石に誘いに応じるのは厚顔無恥が過ぎるでしょう。どう考えたって貴方に——いえ、ドラコ・マルフォイに御迷惑を掛けるというのは、解りきっていましたから」

全てが本心だという訳ではない。

ドラコ・マルフォイの招きに応じなかったのは、純スリザリン的な生活はどう考えても面倒に感じるもので、自分の性格には決して合わないというのが一番である。

しかし、純血と半純血という僕達の間横たわる絶対的な階級の違いを考えれば、ドラコ・マルフォイの誘いを社交辞令以上に受け取るべきではない。その建前の理由が決して軽いものでは無かったというのも、確かに事実であったのだ。

「貴方は、僕の経歴についても当然御調べになった訳でしょう？」

「……まあ、誤魔化す意味も無いな。確かに私の方で調べさせて貰った」

「ならば御分かりでしょうが、僕は一切の疑問の余地無く半純血、しかも半分も『穢れた血』が混じる人間です。その上貴方がたと違い、生まれてからまともな礼儀の教育を受けて来た訳でもない。そのような人間がマルフォイ家の門を軽々しく潜る気にはなれませんですよ」

「非常に殊勝な考えだが、君の育った環境を理解して尚咎め立てをする程我々も狭量ではないよ。そもそも君は学生だ。多少の無礼は許されやすい立場に有る」

まあ我が子がやっていれば間違いなく激怒するだろうがね、と氏は冗談っぽく笑んだ。

「それに、君はドラコからセブルスの事を聞いているだろう？ ドラコの方も、恐らくは入学以来、君が私にとってのセブルスと同じ存在である事を期待していた筈だが」

「だとしても、スネイプ寮監はプリンス家の血を引いているでしょう？」

舌で唇を湿らせるのをカップで隠しながら、僕は彼との明確な違いを指摘する。

スリザリンに四年間、しかもドラコ・マルフォイと近い場所に居た訳だし、何よりあの教授の事なのだ。流石に教授の家系については知っていた。

「二時の気の迷いで『マグル』と結婚した馬鹿な親のせいで、我等が寮監は大きな迷惑と損害を被った。己の努力ではどうしようも無い理由でスリザリンの本流から弾き出され、二等市民としての人生を余儀なくさせられた訳ですからね。しかしそれでも、旧く由緒有る血を引いている事は確かでしょう」

聖二十八族では無いにしろ、アイリーン・プリンスが相当良血であるのは間違いない。

僕が独自に家系図を調べた結果もそうだし、彼女がマグルと結婚したという醜聞を日刊予言者新聞が載せた事からも何となく伺える。

「翻って僕はどうでしょう？ 僕の父親は魔法使いだった訳ですが、貴方の調査で高貴な血を引いていましたでしょうか？」

「……いや。残念ながらレッドフィールドは無名であり、何処かの名家と関わりが有ったという記録を見付ける事は出来なかった」

「そもそもかつて新大陸に渡った魔法族は、国を追われた犯罪者か、本国で芽が出なくて都落ちした人間のどちらかですしね。現在は違うにしても、それらの子孫の割合が圧倒的多数なのは間違いない。また当然、母の方を調べないという手抜きをされた訳でもないでしょう？」

マグル側の家系を通じてというのは多少体面が悪いが、それでも高名な魔法使いと血縁関係が有るのと無いのとでは雲泥の差が有る。ハーマイオニーにしても「グレンジャー」という家名の魔法使いは居るし、彼女達は全く意識していなかったとしても、丹念に家系を遡れば何処かで同じ先祖に行き当たる事が可能だろう。

だから母親の家系を調べるに越した事は無く――

「――もつとも、僕は何も出なかったと確信していますが」

ルシウス・マルフォイ氏は問いに対して静かに頷いた。

あの校長ですら確信無く妄想を書き連ねるのが精々だったのだ。長らくマグルと距離を置き続けたマルフォイ家では辿る事は不可能だろう。

確かに何処かに居た可能性は零ではない。だがそれは、ハリー・ポッターとサラザール・スリザリンの血縁関係を真剣に主張するようなもので、そこらの庶民が現王族ウエセツクス家の末裔との血縁関係を主張する位には荒唐無稽である。

「しかしドラゴは、君が間違いなく高名な魔法使いの血を引いていると信じていたがね」

「残念ながらそうではなかったという事でしょう」

肩を竦めかけ、相手を思い出して踏み止まった。

「懦弱にも「マグル」と結婚した魔法使いはその通りに三流だった。それが冷酷な現実であるという事でしょうね。僕自身、先祖代々伝わる強力な魔法具や家名を示す遺産、或いは七変化といった特別な先天性の能力も持つては居ませんしね。証立てるモノは何も無い」

そして証明出来ないのならば無いのと同じである。

もつとも、先祖の立派さが証明出来なかつと、あの二人の母が僕の為に命を捧げた価値が毀損される訳でもない。流石に血を誇るマルフォイ家の前では口に出せないが、あの校長が綴った戯言のように、千年程遡つた先祖が誰かという問題を突き詰める事に、僕は一切の意義を見出せない。

そう断言してみせた僕に、ルシウス・マルフォイ氏は困つたように苦笑を漏らした。

「成程、ドラコが手を焼く訳だ」

「……………」

「しかし一番難儀な所は、私自身がドラコの苦勞を理解できない訳でもないというあたりだろうね。確かにセブルスもまた、私にとって素直で出来た友人という訳では無かつた。学生時代、彼の素行不良には悩まされたものだよ」

「……貴方と寮監の関係は——」

「友人と言って良い。少なくとも私はそう思っているし、彼もそう考えてくれていると信じている。面と向かつて聞いた事は一度も無いがね」

氏と教授の年齢は、確か五年か六年程は離れていた筈である。

それなのに何故彼等が友誼を結ぶに至つたのか。そして教授の学生自体はどんなものだったのか。興味が無い訳では無かつたが、深入りすると後でネチネチと嫌味を言われるのは眼に見えている。沈黙は金だと、珈琲を口に流し込む事で誤魔化した。

氏としても、この場に居ない人間の話題で盛り上がるべきではないと思つたのかもしれない。有り難い事に、さつさと話題を元に戻すつもりのもようだった。

「けれども、もっと早くに君を我が家に招きたかつたというのは本心だよ。それが出来ていれば、今のような見方をされる事も無かつただろう」

「今のような見方とは？」

「去年度の事が有つたからこそ、その称賛と対価として君を招いたという見方だよ。ドラコはもっと早くから君を評価していたというの

にね。息子に人を見る眼が有ったというのは喜ばしい一方、自分の親としての至らなさを思い知るばかりだ」

「……嗚呼、それですか」

去年度の革命絡みの話か。

「別に大層な事を提案した訳でも有りません。殆どが貴方がた頼りでしたし」

道筋を作ったとすら言えない。

何の謙讓も無く、全ての功績が純血家に帰せられるべきである。

「そもそもの話、三大魔法学校対抗試合に際して個人的なパーティを開く事は先例として有ったのでしよう？ 約五百年。その間に四年生以上だけしか騒げない事に反感を抱いた人間が、全く現れなかったとは考えられない」

特に純血の子息・令嬢は素直に不満を示しただろう。

そして去年のクリスマスで実際に見せてくれたように、この手の催し事は純血の得意とする分野である。またあのように半学校行事として開催する事は出来ずとも、私的に交流を深める事は三校試合の気高き理念の下に何ら咎められる事ではなく、学校で招待状をバラ撒く事もまた何ら校則違反に該当しない。

実際、ルシウス・マルフォイ氏は領いた。

「しかし、あの瞬間にそれを思い付いたというのが重要なのだ」

多くの人間が三百年を経て忘れていたからね、と氏は付け加える。「そしてダンブルドアは何かと我々がホグワーツに関わる事から遠ざけて来た。私がホグワーツの理事であった時も、そうで無くなつてからも。ダンブルドアはスリザリンを——」

「——毛嫌いしていますからね。彼は表面上、取り繕えていると思っ
ていますが」

「そうだ。ただ、あの時のダンブルドアは我々の協力を欲したし、我々も惜しみなく応えた。それは君の発想無しには有り得なかったし、あれによって融和の姿勢を見せられた事は大きかった。彼は多くから好かれていないが、それは影響力が無いという事を意味しない」

「とはいえ融和は去年度限りであり、現状また敵視された訳ですが」

多少なりとも考える頭を持っている人間ならば、この国が今二つに割れている事に気付く。そしてコーネリウス・ファッジが対立軸の片方の旗頭でない事すらも。

けれども、氏は皮肉めいた口振りと共に笑ってみせた。

「状況は常に変わるものだし、己むを得ず対立せねばならないという場合は有るものだ。そして今の所、大義がどちらにあるかは明白だろう?」

「まあ、そうですね。建前上この国の魔法界の全てを管轄するのは魔法大臣であり、ホグワーツ校長でもウイゼンガモット主席魔法戦士でも無い。まあ後者は既に辞任させられました」

「そういう事だ。彼には宣戦布告を受け取る権利も、国家の緊急事態や戦争状態を宣言する権利もない。彼は政治家では無く、単に少しばかり偉大な老人であるだけだ」

今年のルシウス・マルフォイ氏の立場は明白だ。

去年の場合、十四年前に裏切った手前、光の側にも保険を掛けておく必要が有った。

しかし、許された以上、その保険は必要無い——というより、闇の帝王は両賭けを続ける事を許すまい。一度裏切ったと見られているからこそ、身綺麗にしておくべきである。

そしてコーネリウス・ファッジは一応、形式上は魔法界の頂点に立っている。彼の語る言葉——闇の帝王の復活など嘘だという主張は、*「正しい」*もので然るべきだった。

「そう言えば、ドラコから聞いた推論もまた、実に興味深いものだった」

まだ本題に入る気がないのか、或いは本題でないという素振りなのか。

スネイプ教授彼の友人に話し掛けるような気安い調子で、ルシウス・マルフォイ

氏は先の騒動について切り出した。

「勿論、守護霊ポッター殿の裁判についての事だ。君も聞いただろうが、彼は実際に無罪になった。——ドラコから事件の記録も見せて貰っただろうね？」

「……ええ、まあ。確かに見せて頂きましたよ」

パーシー・ウィーズリーの名が法廷書記として輝かしく記されている事件記録は、当然外部に出ている筈も無い文書である。しかし、平然とドラコ・マルフォイから渡された所で今更驚きは無かった。高貴なる彼等に法の秩序の縛りは左程利きはしないのだ。

ただその御蔭と言うべきか、裁判の顛末は正確に把握している。

「結構。あの記録を見て解る通り彼は完全無欠の無罪判決を下されたが、その結論を君は既に十日程前、少し話を聞いただけで導いていた」
「……結論を断言した訳では無く、あくまで可能性が高いと言っただけだった筈ですよ。そもそも単なる生徒間での雑談でしかない、非常に荒い推論です。貴方が気に留めるまでもなかったと思いますが」
「そうかね？ 正直言つて、君が未だホグワーツ生だという事に驚きを抱かざるを得ない。全てに賛同出来はしないが、私ですら納得する部分も有った」

「……………」

謙遜して良いかどうか解らず、誤魔化すように軽く頭を下げた。

その辺りは学生らしいなと笑われた事をみると、完全な不正解は避けられたようだ。

「元々セブルスも君を高く評価していた。君の物の見方は年に見合わない以前に正道から外れており、故にスリザリン向きの人材らしいと。まあ渋々認めると言っただけでは有ったがね」

「……寮監ならばそう言うでしょうね」

全く評価されていないと考えていた、と言うのは自惚れすぎだろう。

教授は教授なりに僕を評価しているからこそその今までの四年間であるし、余り言語化したくはないが、彼の僕への「親切」の根源に在るのは或る種の期待であり願望では無いかとすら疑っているのだ。

その疑いが正しいかは現状不鮮明だが、少なくとも、僕を最も良く見ている一人であるのは否定し得ない。

「その表情を見るに、彼と君とは余り良い関係性では無さそうだ。嗚呼、彼本人からも聞いています。単純に、君とは反りが合わない」と

「——まあそうですね。御互いそう表現するしかないでしょう」

「私としてはセブルスにそう言わせしめる事こそが興味深くもある。しかしこういう事は部外者が口を挟むべき物ではないし、同じスリザリンであっても気が合う相手ばかりではないのは事実だ。付け加えておくと、私の眼には君達が上手くやれているように見える」

「……………」

「おっと、セブルスに関してはこれくらいにして置こうか。本題では無いし、あまり彼も良い顔をしないからね」

自分から打ち切る事で反論の言葉を上手く封じ、氏は続けた。

「ともあれ、彼は上手く罪から逃げおさせた。さて、それを踏まえた上で君はあの裁判の中身について何を思ったか。それを君に聞いてみたい」

「……何故、そのような事を問うのです？」

「ステイブーン君。君が君であるからだ」

追及を煙に巻くように彼は微笑む。

「ナルシツサにはこんな事を聞かないし、まして普通の Hogwーツ生に質問などしない。妻の専門分野では無いし、後者に至っては聞く価値の有る回答が寄越されるとは思えないからだ。だが、私は君には聞いておく必要が有ると私は感じた」

「……過大評価だと思いますけどね」

「そうだろうか？」

「ええ。確かに貴方がたにとって物事が都合良く進まなかった、寧ろ非常に余計な事をしてくれたという感想すら抱く物でしょうが——」

「——それだよ」

「……………何か変な事を言いましたか？」

突然の制止。

疑問を返せば、回答は不吉な薄笑いだった。

「君は今回の事件と裁判の顛末を余計だと考えている。それどころか、君は今回の失敗を非常に冷ややかに見ている節がある。その感想が出て来る時点で普通のホグワーツ生では無いのであり、君に話を聞いてみたいと考えるのは十分では無いかね？」

それは我々の意見と一致する物ではあるのだが、と氏は付け加えた。

その際一瞬だけでは有ったが、彼の表情は息子の知人に向ける類のものでは無かった。獲物を前に舌なめずりする蛇、数多の人間を服従させるのに慣れた貴族の表情だった。

「ポッターが退学にならなかつた事に関して、ドラコは明らかに不満そうだった。予め君の見解を聞いていたからか、それ程大きな物では無かったがね。まあ裁判の結果が不愉快であつたのは私にとつても変わりない。しかし、私は同時に息子に対しても不満を抱いた」

その言葉に改めて氏の表情を伺うが、流石に役者だ。
今の発言は外部の人間に聞かせるべきではない放言の類の筈だが、それを平然と吐ける位には、彼は名家の当主という役柄に慣れていた。

「嗚呼、ドラコは良くやっている。だが、親の欲目かな。良くやっているからこそ、更に多くを期待してしまう。つまり、私はドラコにその先を期待したのだ」

「先？」

「策や陰謀が失敗した場合。その後には検証が必要だろうか？」

ルシウス・マルフォイ氏はそう言つて立ち上がった。

一体何事かと思えば、彼は大きな窓に近寄つた。何処か映画の俳優染みた大袈裟な所作であり、そして間違いなく意図的な行動であろう。今更ながらに庭の白孔雀が気になつた訳でもあるまい。羽を広げた姿は確かに見事だが、この家の主である彼は見飽きている筈である。

彼が庭を見詰める形になつた事によつて、その表情が見えなくなつた。

それが氏の行動に齎させた唯一の、そして互いにとって決定的に重

要な結果だった。

「我々にとって失敗自体は問題無い。金銭も、権力も、一度の失敗で大きく打撃を受ける物では無い。例えば、去年度の君が目論んだパーティの裏側。その間に我々が動いていた件に関しては、失敗だったという見方も出来る。我々は短期間の内に莫大な金銭を喪い、各所に大きな借りを作った訳だからね。客観的にそう評価しうるとするのは認めざるを得ない」

何について動いていたかを、氏は何ら明言しなかった。

僕が理解している前提で語り掛けており、実際理解している。

闇の帝王の復活に際して、彼等は亡命を画策していた。十四年前の裏切りの代償を支払わされる恐れの有った彼等は、万一の際、せめて妻子だけでも安全な場所へと逃せるように奔走していた。当然、莫大なガリオン金貨での前金付きだ。

しかし結果として、闇の帝王は裏切者を許した。

粛清により組織の引き締めを図るよりも、信用出来ない人間を懐に入れる事を選んだ。マルフォイ家を筆頭とする名家を敵に回すべきではないという打算が働いた結果だろうし、そもそも闇の帝王自身、死喰い人達の忠誠を最初から信じていなかった事の証左でもあるかもしれない。

故に彼等は亡命する必要がなくなった訳だが——だからと言って、去年の「約束」を一切無かった事にしてくれとは行かない。

改めて考えるまでもなく、裏切り者の家族を受け入れたり、逃がすのに助力するという事は、その家は当然闇の帝王に目を付けられるという事である。

どの程度の家がその「要請」に応えたか知らないが、仮に応えた家が有るのであれば、その勇氣と覚悟自体に相応の価値が有り、対価は支払われるべきである。寧ろ旧来の友誼の為に危険を承知で助力してくれようとした家を冷遇してしまえば、マルフォイ家の沽券に関わる。

だからこそ、事実上契約は破棄されながらも相応の支払いは滞りなく行われただろうし、故に家の力は大きく減じた訳で、その面で言え

ば去年の件は大きな失敗とも評価し得る。

「勿論、私はあれを失敗だと考えていない。検証した結果、あれ以外の優れた手法などそうは無かったからだ。実の所今ならば、より適切だったと考えられる二、三の振るまい方を見付けてはいる。が、どんなに素晴らしくとも、その場で思い付けなかった考えに意味は無い」
「……………」

「ただ、検証する事が無価値ではない。寧ろ真逆だ。成功よりも失敗に、反省こそ学ぶ点がある。次があれば、反省を生かす事が出来るからだ。そしてこれは厳然たる事実だが、我々は大抵の庶民より次の機会が巡ってきやすい立場に在る。マルフォイ家の力は、それを可能にする」

何が言いたいか解ったかね、と氏は肩越しにチラリと僕を見た。

「今回におけるポツター絡みの陰謀は失敗した。ならば、何処が悪かったのか。いや、そもそも今回の騒動は何だったのか。それを考える事は当然ではないかね？」

「…………それは貴方がたが考える事で、上の命で動く僕達には関係無いですが」

「君にしては珍しく思える間違いだ。若しくは惚けているのかな。我々の仕事の本分は考える事ではなく、君達の考えが正しいのを見極めた上で決定する事だ。まあ最善は自分でも考えられる上位者である事だがね。私が今回ドラコにそれを求めたのは、酷だったかもしれない」

けれども困難を求めなければ向上は見込めまい。

そう謳ってみせた氏は、再度窓を通して庭を見詰め始める。

上手く窓に反射して彼の表情が見えるようにならないかというのは期待し過ぎだった。光はあの校長よりも平等だが、それ故に融通が利きはしない。

「…………正直な所、貴方は現状を正確に把握しているように思えます。物事を考えられる当主である貴方に、僕の言葉は必要無さそうに思えますが」

「私の口ではなく、君の口から語られるからこそ意味が有る」

声だけは軽やかに氏はそう言った。

「もつとも、雑談の延長だよ。私は君に正解を求めている訳でもないし、既に済んでしまった事なのだ。見当違いの回答をした所で何ら責めはしないし、実現可能性すら問いはしない。あくまで思考実験のよきな物とを考えてくれて構わない」

「……貴方がたの『雑談』が仕事の一種である事を考えれば、それ程信頼に値しない保証もそう多くはないと思うのですけどね」

露骨に揶揄してみたのが、やはり面の皮は厚い。

そもそも向き合っていないのだから、それを打ち破る事は無理だろう。

そしてこの場で僕が回答する事は、ルシウス・マルフォイ氏の中では既に決定事項なのだ。それを下位者が覆すには相応の材料が必要であり、尚且つ相対する上位者が庇護者の父親であるパトロヌスともなれば、初めから選択肢など無いのだろう。

軽く嘆息した後、僕は端的に結論を述べた。

「——コーネリウス・ファツジ大臣は上手く嵌められた物だ。僕はそう思いましたよ」

ルシウス・マルフォイ氏は外を見詰めたままである。

しかし確かに話を聞いている証として、彼は物分かりの悪い生徒を装う台詞を吐く。

「……何故、君はそのように思う？」

「今回の裁判を素直に見ればそんな感想を抱く筈でしょう？ だって、少なくとも今回の大仰な裁判は、明らかに余計なのですから」

あの大臣の行動では合理性を欠き、経済性すらも欠いている。

そこには明らかな歪みが存在し、故にそれは何らかの干渉、それも彼の目論見を挫こうとする敵対勢力の口出しを見出さざるを得ないのだ。

「大臣の目的は、自惚れ切った『生き残った男の子』の権威の失墜で

した」

闇の帝王が復活したという大嘘を吐き、魔法省が維持してきた十四年間の平和を破壊しようとする不屈き者を撃つしようとする事。それが大前提であり、今回の裁判もその延長線上に位置している。

「しかし、その目的を果たす為にどうしてウイゼンガモットを招集する事が必要なんです？ 彼を裁くのに刑事大法廷を用いる必要など無い。悪い裁判官一人を送り込んだ上で、形だけの裁判で速やかに有罪宣告すれば済んだ話でしょうに」

今回の騒動は本来ただそれだけで終わっていた。

そして一度有罪判決さえ勝ち取ってしまえば、後はこれまでと同様に『日刊予言者新聞』で印象操作——ハリー・ポッターは魔法界の秩序を軽んじる人間だと読者に知らしめるだけである。当然ハリー・ポッターは控訴する事だろうが、馬鹿な大衆に「正義」がどちらにあるかを信じさせるには十分だ。

少なくとも「マグルの住宅街で、かつマグルの面前で魔法を使った」という点は事実なのだ。全くの捏造ではない分、非常に楽な仕事だった事だろう。

「ウイゼンガモットの過半数を買収する事と、裁判官一人を買収する事。どちらが楽な仕事であるかは明白でしょう？ まあ結果として彼は無罪になったのですから大臣は買収し切れておらず、元より勝算なんてのはロクになかった訳ですしね」

スリザリンならば取らない手段でしょう、と評価を下す。

狡猾なる蛇は、可能な限り勝てる勝負のみに挑む主義だ。

勝ち目が解らない勝負は回避出来るならば回避するし、他の機会を待つ事を選択する。彼等の豊富な財産と権力は長期的視野の下での行動を可能とするのであり、そもそもそのような思慮と慎重さ無しには、蛇察が掲げる自己防衛など成しえない。

その観点から判断するに、コーネリウス・ファッジにスリザリン的資質は皆無だろう。今回のような喜劇を引き起こした挙句、しかも失敗するような事は有ってはならないのだ。

「……ふむ。しかし、君は知らない——嗚呼、その筈だな。まだ君に紹

介した事は無かったと記憶している。ともあれ今の魔法法執行部のポーンズ女史は余り愉快とは言えない人間だ。彼女が我々の圧力を撥ねのける人間だとは考えなかったのかね？」

「僕は確かに彼女を知りません。しかし、左程好ましい人物だとも思えませんね」

「何故だね？」

「たかが未成年の魔法使用違反事件に際し、大法廷を用いる事を止められなかった。その時点で、既に後世から無能として評されるであろう一人だからですよ」

氏の反論は真つ当で、理解出来る。

が、大抵の人間はそう割り切ってくれない筈だ。

彼女にも政治や事情が存在したのかもしれない。ハリー・ポッターが有罪になるという最悪の結果を避ける為に、今回のような舞台を設定したのかもしれない。だが、やはりそれは大義の為に法を踏み躪る態度であり、法の擁護者として褒められた物ではないだろう。

被告人が「生き残った男の子」な事もあり、今回の事件は後世において間違いなく取り沙汰されるだろうし、ウイゼンガモットの腐敗を示す一事例として長らく語り継がれるであろう。そしてその当事者の一人である彼女もまた、決して良い評価をされる筈も無い。

「未成年魔法使いの妥当な制限に関する法令及び国際機密保持法違反。生徒に出回っている情報からすれば重罪ですが、実際は間違いなく大した罪状では無い。まあ実際学校が下す退学処分自体は重いですが、一方で省が科す刑事罰自体は非常に軽い筈だ。大法廷を用いる必要が無いのは当然として、魔法法執行部部長が気に留める程の事件ですらない」

「……君は断言してみせるのだな」

「元々疑ってはいましたが、今は確信していますよ。今回のハリー・ポッターの裁判は一日、それも短時間で終わっています。要は、本来であれば裁判官一人居れば足り、悪質な再犯者でも無ければ流れ作業的に処理される程度の事件なんですよ？」

刑事大法廷で裁かれるような典型的な事件——例えば死喰い人疑惑

を受けた人間の裁判一件を処理するのに、一体どれだけの日数が費やされたと思っているのか。

「第一、落ち着いて考えればハリー・ポッターが退学になる事は有り得なかつた」

現行の魔法法の相場を踏まえれば、そのような重罪が課されるとは思えなかつた。

「三年前。自分自身が作った法の抜け穴を利用して空飛ぶ自動車を所持し、己の子供に持ち出しを許す程の杜撰な管理をしていたマグル製品不正使用取締局局长。彼がどんな罰を受けたか、貴方は当然記憶されているでしょう?」

「……まあ、そうだな」

ルシウス・マルフォイ氏が覚えていない筈もない。

“マグル”社会において、車は映画の中以外では飛ばない。

確かに彼自身が公然と車を飛ばした訳では無いが、そもそも空を飛ぶ車の存在を許し続ける事自体、“マグル”に魔法族の存在を疑わせ、国際機密保持法を危うくする行為である。まして嚴重な管理下に置かないなど魔法省役人としての危機感が足りないと言って良い。

しかしその罪に対して科されたのは、杖七本分相当でしかない五十ガリオンの罰金。懲戒免職も無し。ただそれだけでしかなかった。

やはり刑が軽過ぎるといふが個人的な意見だが、それはあくまで“マグル”の価値観に被れ過ぎた僕の考えだからだろう。ルシウス・マルフォイ氏ですら、内心あの程度の処分が妥当であるという判断を下していたのかもしれない。

何が起ころうと、杖を一振りして忘れさせてしまえばそれで済む。

そんな意識が頭に有る魔法使いにとっては、国際機密保持法違反は重罪に成り得ないのだろう。ルビウス・ハグリッドの行動などその典型だ。彼等は“マグル”を要注意存在として認識していないし、もつと言えれば舐め腐っている。

一応科学知識を持っていて多少数が勝るだけの種族を過大評価するべきではないとは僕も思うが、さりとて現状の大多数の魔法使いの認識は、やはり過小評価し過ぎとの結論を下さざるを得ない。“マグル

ル」の技術は著しい勢いで進歩しているにも拘わらず、しかし現在の多くの魔法族は百年以上前の魔法族より鈍感と来ている。国際機密保持法を真剣に考えていたという点においては、ゲラート・グリーンデルバルトの革命期の方がまだマシですらあろう。

「『マグル』の前で夜間に魔法を使った？ その程度なら頭の足りない彼等は心霊現象と勝手に解釈してくれるでしょうし、魔法の秘密を大きく危うくする程度でも無い。つまりは微罪も微罪。魔法族の一般感覚に照らせば大騒ぎする事の話では無かった。なれば、オフィスの片隅で一人が淡々と処理しない時点で、既に今回の裁判は歪められていた」

裁判官の心理として慎重に裁きたくなるとかいう理屈は知った事ではない。

相手が有名人であろうが同じ魔法族である。特別扱いも平等を欠く行いに違いはない。

「——畢竟、あの大臣が欲張り過ぎたのがいけなかつたんですよ」
罪と罰の天秤を大きく歪ませる行いは、やはりすべきではない。

その場では上手く行っているように見えても、必ず何処かで理屈が合わなくなるからだ。

「ハリー・ポッターの行為を大罪のように扱い、大法廷で見世物ショウをやるうとするからいけなかつた。大臣はそこまでの違法行為に手を染める必要は無かつた。一人の裁判官に圧力を加えるだけの、些細な汚職をすれば良かつた」

「……つまり、君はそれがコーネリウスの失態という訳だ」

「ええ。それが一番です」

「その口振りだと、他にも有るようだな」

「……有ると言えば有りますけどね」

意図して溜息を吐いたのは、氏の催促する気配を察したからではない。

当日のウイゼンガモットの面々も唾然としただろうと思う程、今回の裁判運営が余りに杜撰で、根回しも何も無いように見えてしまうからだ。

「……記録上から余り定かではないんですが、結局、当該時刻、吸魂鬼は全員魔法省の管理下に居たとする記録」のようなものは、裁判上提出されたんですか？ 仮にそれが提出されていたとしても、ウイゼンガモットの方々に印象付けられているとは思えなかつたんですが？」

羊皮紙——書面のようなモノは出たのかも知れないが、少なくとも証人は登場人物として出て来ずに終わってしまったている。

「まずこの国の魔法族の社会常識として、吸魂鬼は基本的にアズカバンにしか居ませんし、それらは原則魔法省に管理されています。また野良或いは逃亡した吸魂鬼が万一居たとしても、アレらは本能先行の畜生と左程変わりません。そこらに居るマグルを襲うような騒ぎを一切起こさないうまに魔法族一人を襲撃するのは考え辛い」

「ハリー・ポッター」

「そもそもその魔法族が始業日にキングズクロス駅に向かう途中で有ったなら兎も角、何の目的もなく気紛れに散歩に出たに過ぎないとなれば、狙って襲撃する事自体が困難ではないですか？ どうやって外出を知ったんです？」

要は、ハリー・ポッターが吸魂鬼に襲われるなどという事態は、そもそも発生する可能性自体が非常に低いものであり、反論そのものの評価として余り強力な物ではない。

「それらを踏まえた時、今回の事件においてハリー・ポッターに有罪判決を下すのは、絶対に不可能だったのでしょうか？」

抽象的には、その場に吸魂鬼が居た可能性は有り得る。

自分が殺す前に偶々他の誰かが殺していたり、覚醒剤を知らない内に飲まされて居たりするように、真犯人や首謀者の存在が零であると断言するのは神ならぬ裁判官には不可能である。だからこそ、ある程度の蓋然性——他の人間の関与が非常に低く、被告人が罪を犯した可能性が非常に高いと判断出来たならば、裁判官は有罪判決を下すのが通常だろう。

「何処かの弁護……いえ、彼は証人でしたか。彼が反論として挙げたストーリーは、魔法省の誰かが吸魂鬼に命令を下し、二人の吸魂鬼が魔法省の統制下を離れてプリベット通りを訪れ、そして被告人を襲つ

たという物でした。この反論は、裁判に顕出された証拠から見てそれ程有り得る——可能性が高いと言えるものでしょうかね？」

魔法省の支配下にある吸魂鬼は、全て居場所が把握されていた。当然ながら、プリベット通りに行ったという吸魂鬼も見当たらない。ならばプリベット通りにおける吸魂鬼の不存在は立証され、魔法省が命令したという事実も不存在である。

そう判断して有罪判決を下すのは、それなりに真つ当と言えないだろうか。

「そもそも、ハリー・ポッターの防御方法は予想出来た内容でしょうか？」

魔法を使った事自体を否定するか、魔法を使ったがそれは正当な理由に基づく物であるか。彼が無罪を主張する場合はそのどちらかのストーリーに乗る筈で、今回もそれから逸脱するものではない」

守護霊の呪文を使ったという証拠からすれば、吸魂鬼が居たという主張は非常に素直である。

「ならば大臣側はもつと準備出来た筈では？ 魔法省内の吸魂鬼の運営は適切に為されていたとか、特定の個人のみを襲える程に吸魂鬼は自制心が強くないとか。僕の想像力ではその程度が限界ですが、それを証言する魔法省の役人を連れて来るのは無駄ではないでしょう」

何故なら、普通であれば国家が証拠を偽造する可能性自体が低いからだ。

国家による記録も役人も、基本的に罪を逃れようとする被告人達よりも信頼がおける。そんな社会通念が存在し、国家が提出する物全てを疑ってしまっただけは、そもそも国家として成り立たない。それを疑う気ならば最低限でも疑わせるだけの切っ掛けが示されるべきだろう。

闇の帝王云々にしても、本件において提出なされるべきはそれが復活したという証拠——つまりハリー・ポッターという証言者——ではなく、闇の帝王が吸魂鬼に命令したと疑わせるに足る証拠が出されるべきで、何の根拠も無しでは妄想や狂言より多少マシ程度の評価しか出来ない。

「ハリー・ポッターがどう立証するか。その事に事前に僕が興味を

持っていたのは、大臣側がそれらの「偽造」^{準備}を行った場合、どう突き崩せば良いのか想像が付かなかったからです。彼の証人は、正直言つて左程大したものでは無かった」

スクイブの老婆の証言は、吸魂鬼に関する描写として、でかくてマントを着ていた以外の言及が出来ず、それどころか走るとか抜かしてみせるような代物だ。

第一、マグルには吸魂鬼が見えない以上、スクイブにもやはり見えないと考えるのが素直では無いだろうか。仮にスクイブが「微少な魔法力を持つものの、それが魔法を行使する程の程度に至らない人間」を含み、その手の人間には吸魂鬼が見えるとしても、今回の証人が実際に視る能力を持っているかは試して然るべきである。

後は……絶対に居ないとは言わないが、午後九時過ぎにキャットフードを買いに外に出る老婆がどれ程居るかは疑問である。しかもそんな人間が、吸魂鬼が魔法族——しかもその周辺では殆ど唯一の——を襲っている場面に偶々出くわす。純粹に確率のみで考えれば奇跡だろう。裏の事情を知っていなければ、最初から信憑性が疑わしくて仕方が無い。

「しかしながら……良い意味で杞憂だったようですが」

今回のウイゼンガモットが無罪判決を下すのも道理である。

疑わしきは被告人の利益にという原則を理解する頭を持った文明人であれば、証拠上無罪判決を下す以外に有り得なかった。

「……つまり、君は大臣の準備不足も悪かったと見る訳だな」

ルシウス・マルフォイは感心した素振りを一切見せないまま、淡々と言った。

「けれども、君は最初に『嵌められた』と言った。その理由を説明していない。君の口振りは確信に満ちている。何処かの老人が大臣の慢心を招いていてみせた——その程度の事を言っているようには思えない」

「まあ当然そういう切り返しが来ますよね。仰る通り、大臣の準備不足なんて大した問題とは考えていませんよ。望ましくはなくとも、それらは別に取返しのおつく筈だったのですから」

「取返しがつくとは？ 裁判が始まった後でも準備出来たという事かね？」

「……それを口にしてしている事自体、貴方は理解しているような物ですけどね」

だがどうあれ、ルシウス・マルフォイ氏は僕の口から答えさせたいらしい。

「今回の裁判は何から何まで歪んでいました。訴追側の主張にしても、被告人側の主張にしても。そして不自然に歪んでいる場合には、やはり策謀の下の行動と判断すべきでしょう。流石に大臣の知性を巨人並と看做したくもないですからね」

明け透けな暴言に、氏は何も反論をしなかった。

僕の方も本気で言っている訳では無い。ただ相手が悪かっただけだ。

「着目すべきは被告人側証人の発言です。その主張において、非常に首を傾げるものが存在しました。『魔法省は、必ずや徹底した調査をなさることでしょう。二人の吸魂鬼がなぜアズカバンからあれほど遠くにいたのか』『路地に吸魂鬼が存在したということは、本件において非常に関連性が高い』。彼はそのような発言をしています」

「無論、それを問題としていたのではないのだろうか？」

「ええ。非常に奇妙なのは次です。そう主張したのにも拘わらず、彼はこう言つ——いえ、発言自体は重要ではないですね。兎に角、彼は評決を早急に下すよう要求したんですよ。関連性の有る吸魂鬼の調査が終わるまで審理を延期しろとは言わなかった」

証人の主張は論理一貫性を欠いている。

彼の名譽の為に言えば、意図的に欠けさせている。

「正直、ウイゼンガモットの方々は困ったでしょう。吸魂鬼の在不在が事件に関連性が高く、かつ重要であるならば、その調査結果を見定めてから有罪無罪の判断を下したいと思う筈です。一人一人の運命を決めるんだ、その程度の慎重さを責められる筋合いは無く——しかしながら、被告人側はそう主張し、対する大臣も何も言わなかった。魔法省の調査と『準備』が整うのを待てとは誰も言い出さなかった」

それはやはり失態であり、彼が嵌められた事を確信した根拠でも有る。

そして大臣を嵌めたのが誰かは……まあ、明らかである。それが出来る人間など、初めから配役の内に一人しか居ない。彼はとことん人の操り方を心得ている。

「コーネリウス・ファツジ大臣が『真つ当に』裁判をやれば、ハリー・ポッターは有罪しか有り得なかった。また今回被告人側証人が魔法省の記録や役人の信用性に疑念を呈した以上、その調査が一日二日で終わる訳も無く、次の開廷はまず間違いなくホグワーツの始業式以降に連れ込んだでしょう。だからこそ、彼はそうさせなかったんでしょうね」

ハリー・ポッターの心の平穏を願う老人は全力でそれを阻止した。不当判決だとしても有罪を下される事を、或いは新学期が始まったも裁判の心配をしなければならぬ事を回避しようとした。

元々魔法省の調査結果が公正に行われるなど欠片も信じていなかったのも有るだろう。このウィゼンガモットで公演される喜劇の舞台を準備する為に、彼はコーネリウス・ファツジを含めた各方面の人間を得意の口八丁で騙し、自身の影響力を存分に行使したに違いない。

結局、スクイブの証言の信憑性や吸魂鬼が実際に居たかの調査結果どうこうなど、最初から何ら問題では無かったのだろう。コーネリウス・ファツジに大法廷を招集させてみせた時点で、アルバス・ダンブルドア校長は既に勝利していた。

「魔法法執行部や魔法不正取締局が内々に処理出来る程度の微罪事件。そんな些事に魔法大臣が出て来る余地は無くとも、大法廷で行われる程の重大事件については魔法大臣の参加資格は当然有る。また、あの大臣が勝訴は間違いないと錯覚させられたのであれば、準備不足も領ける。そして大臣 ^{Minister} 風情がウィゼンガモットの御偉方を気軽に何度も呼び付ける訳にも行かないですから、審理を別日に延期するという判断も下せなかった」

だから、やはり大臣が欲張り過ぎたのが問題だった。

こんな些細な事件を大法廷で裁くという大事にした時点で、彼は殆ど詰んでいた。

「更に証人は評決を促す前、適正手続違反——魔法界にそんな概念が有るかは知りませんが——未成年の魔法不正使用を大法廷で裁くという異常を指摘している。誰が見ても露骨な権力闘争で、裏の事情を邪推するには十分です。そして被告人を有罪と疑うだけの証拠も不十分。であれば、評決を求められたウイゼンガモットの結論は見えていた」

ウイゼンガモットの構成員は現状、光の陣営に近い者が多数を占める。

そうでなければ既に魔法界は闇の帝王の手に陥ちている筈であり、彼等には一定程度の良識を期待し得る。だからこそ、コーネリウス・ファツジがウイゼンガモットの支持を得たいのであれば、彼等の善なる心に最低限の「配慮」をしてやるべきだった。

余計な責任を自分が負う事は可能な限り避けたい。

そう考えるのが多くの人間の思考であり、特に正義を欠く疑惑があるならば猶更だ。

ゲラート・グリンデルバルトが国際機密保持法の破壊を掲げ、また闇の帝王が純血の復権を掲げたように、大きな悪を実現するのに最も楽で手っ取り早い方法は、それを善であるかのように上手く糊塗してみせる事である。その時点では善だと思えたのだという後世への言い訳を用意してやってこそ、平凡な人間は心安らかに非道を為せる。

だがコーネリウス・ファツジには悪人の才能が無かったのだろう。

だからこそ、ハリー・ポッターやアルバス・ダンブルドアを他ならぬ自分の手で貶めたいと考える余り、表向き粛々と法に従う素振りをしつつも裏工作で滅ぼすのではなく、一見正々堂々に見える公開裁判で「悪」を叩きのめす事に固執した結果——誰が見ても権力の恣意的濫用と取れるような手段に手を染め、挙句の果てに失敗してしまっただ。

まあアルバス・ダンブルドアやルシウス・マルフオイ氏も己こそが法律であるというような振る舞いを相当しているのだが、しかしそれ

は傑出した大魔法使いや莫大な財産を持つ名家当主だからこそ出来る事で、そしてコーネリウス・ファツジはそのどちらでもない。

「敵でないのならば手放しで称賛出来る。そう思ってしまう程に見事な手腕ですよ」

悪性格立証

「——ダンブルドアを評価するスリザリンは至極珍しい。いや、普通居ないと言おうか」

ルシウス・マルフォイ氏の身体は窓の方を向いたまま、視線だけが咎めるように寄越される。その声には叱責と批難の色が滲んでいて、けれども何処か薄っぺらさを感じる事からすれば——その原因までは把握出来なくとも——造り物に過ぎないのは明白だった。

「二応雑談の延長だと言ったが、それでも他人を試し、自分の立場を危うくするような言動は慎むべきだ。ドラコも言っていたぞ、君は寮内でも無頓着な発言が多過ぎると」

「僕は僕なりに気を付けていますし、今回もまたそうですよ。闇の帝王の力を信じるからこそ、僕はあの校長を軽んじる事は出来ない。闇の帝王が十一年を費やして尚殺せなかった人間を評価しないのは、寧ろ闇の帝王に対する侮辱では？」

「……そういう発言こそ、ドラコが懸念を示した最たる物だと私は思うのだがね」

何時かと同じ論理を紡げば、視線を再度逸らされながら大きく歎息される。

……やはり変な事を言っただけは無いのだが、この純血の当主はそう受け止めなかつたらしい。まあ、何時もの事と言えば何時もの事では有るが。

「しかし、君はコーネリウスが失敗したと言ったな」

「……それがどうしました？」

ルシウス・マルフォイ氏の表情はまた見えなくなる。

先程までと違い、氏の顔色を読めないのは今度は嫌な感じがした。「そのような生意気な事を言うのだから、コーネリウスが採るべきだった正しい手段についても君は当然考えているのだろうか？ 単に批判するだけの愚かさを、君は良く知っている筈だ」

「……貴方が止められなかった以上、正しい手段など提示出来ませんよ」

スリザリンは法を犯す事を左程躊躇わないが、それでも基本的には保守主義である。

特に伝統と慣例——自らの先祖や親戚が代々積み上げて来た成果——を露骨に破るといふ真似は忌避する傾向が強く、ウイゼンガモットの権威を軽んじるに等しい今回の「策謀」は、ルシウス・マルフォイ氏好みではないだろう。

「というか僕は半ば前提としていた訳ですが、貴方は今回の件には関わっていないと考えて良いんですね？　もし仮に貴方が二年前の畜生の時より手を抜いたと言うのであれば、僕は色々と考え直さなければなりませんけど」

少なくとも、あの動物裁判ヒッポグリップの場合は最初から結論が決まっていた。出た所勝負でウイゼンガモットに結論を委ねた今回と毛色が違ふという感覚がしている。

「その質問に意味がない事は理解しているだろう？　どちらにしても、私は否と答える」

「……まあ認めた所で自分の価値を下げるだけですからね。仮に貴方が関わっていたとしても、明らかな失敗で終わった以上、否定するのが無難だ」

「しかしそうだな。今回の件を初めて御聞きになられた時、あの御方は余り良い受け止められ方をされなかった。その程度は答えておこう」

「——」
初めて。初耳だった。

アズカバンが未だ敗れていない現状、現死喰い人は殆ど裏切り者で構成されているのであり、彼の了承を受けずに独断専行を為せる者はいないだろう。つまり、今回の計画は闇の帝王の意向では無く、死喰い人以外の人間によつて為されたという事を意味している。

改めて考えるまでもなく、今回の騒動で闇の陣営が得られた物は無い。

戦争再開により自分の身が危うくなった事を理解したハリー・ポッターは、今後不用意に外出する事を慎むだろう。元々ダーズリー家で

は軟禁に等しい扱いだったようであるから、登校日以外では外に出る事自体が無くなるかもしれない。

要は勝手に吸魂鬼をハリー・ポッターに遣わした誰かさんのせいで、死喰い人が彼を襲撃する機会が奪われた事になったとも評価し得る。その誰かさんは「良い事」をしたつもりかもしれないが、闇の帝王が不愉快になるのもまあ己むを得ない。

「さて、ともあれ我が友人コーネリウスが、今回ダンブルドアに勝利する為に取り得た手段だ。私が取り得た予防策でも構わない。それらについて実現可能性すら問わない。或る種の思考実験のような物だと考えてくれて良い。君はそれを思いついているのでは無いかね？」
「……既に述べた、内々に適当に裁けば良いという以外で、ですよね？」

「そうだな。そちらの方が考える価値は有るだろう。今回の刑事大法廷、ウイゼンガモットの招集は避けられないでしょう。その上で、君ならばどうした？」

答えるのが正解なのか、それとも答えないのが正解なのか。

見飽きている筈の中庭を彼が熱心に見詰めているせいで、僕にはその思考が読み切れない。全くもって上手い手だ。大人と子供、マルフォイ家の当主と平民、そして僕の庇護者の父親。そのような関係性の下での単なる雑談だという体であるからこそ、このような無礼が許され、しかし開心術士に対してここまで有効な手段もそうない。

少しだけ考えた結果、僕は結論を下すしかなかった。

「……政治的に採り得る手段では有りませんよ」

「全く問題無い。検証こそが大事だと言っただろう？ 沈黙より劣る発想は存在せず、その材料を提供しただけで十分評価に値すると私は考える。私は自由な発想を何ら咎め立てしない。私がどうすべきだったかでも構わないとも」

「……………」

そうは言うものの、流石に氏の失策を指摘する気にはなれない。

コーネリウス・ファッジの取り得た手段を指摘する方が余程マシであつた。

「……ウイゼンガモット大法廷。考え方によっては余り悪くない場所とも言えるのかもしれないね。大臣が目論んだ見世物を行う場としては、被告人と証人の本質を問い得る一人の“人間”を呼ぶ場としては、これほどまでに適切な場は無いですよ」

つくづく魔法界は歪んでいる、と内心のみで吐露する。

理屈は解るのだ。信用性に難が有ると判断するのは魔法族にとって何ら不思議でも無い。不思議でも無いのだが、最初から完全に排してしまふのはやはり違うだろう。

そしてあの校長。

彼を聖人の如く扱う気にはなれないのは、この辺りの卑劣さにも起因する。

結局の所、彼はマグルの血が半分流れているだけの魔法族であつて、魔法族の血が半分流れているマグルでは無い。

畢竟、彼は本質的に“マグル”の味方などではない。

「僕は訴追側である大臣が証人を呼ぶ権利を持つのか知りませんが、まあ名目は参考人でも何でも構いません。そもそも現行の魔法法の下において、彼は証人としての資格を持っていない。しかしながら、既に刑事大法廷を招集するという無法を犯しているんです。今更法律違反など問題とならず、故に何としてでも、僕は彼を召喚する手筈を整えようとするでしょう」

今回の喜劇に登場しなかった、けれども本来登場して然るべき人物。

「――ダドリー・ダーズリー。被告人が守護霊を使った際に出くわした“人間”を」

氏が小さく背中を震わせたが、それが肯定的か否定的かはやはり読み取れない。

ただ、僕がその名を出した意味は正確に理解したのだろうかというの

は明白だ。そうでなければ、彼の名前について反応を示す事は無い筈である。

「……成程。それは我々にとって政治的に取り得ない手段だ」

「でしよう？　伝統を重んじるスリザリンに、そんな恥知らずな真似は出来ない」

と言つても、コーネリウス・ファツジならするかもしれない。

この程度の事件にウイゼンガモットを招集するような真似をした事から見取れるように、彼は心の何処かで伝統を軽んじている人間である。今回のような完敗を避けられると知ればこの手の奇策に縋り着く事も有り得るかもしれないし、寧ろその方が僕には好感が持てる。

「——ふむ、しかし説明を求めても良いかね？」

「……？　説明？　何をです？」

答えるべき事は答え、伝えるべき事は伝わった。

だからこの問答は終わりだと思つたが、氏は不可解にも話を引き延ばそうとしてきた。

「何故、そのマグルを呼ぶ事がコーネリウスの勝ちに繋がらうるか。

それを君は説明していない」

「……反応的に貴方は理解しているのでは？　そして、別に確実に勝つとは言いませんよ。違法行為をやっている以上、大臣が不利なのは変わりない」

「そのような謙遜は不要だ。君は確かに勝利の手段を提示したのだから。そして繰り返し返すが、君の口から説明を聞きたい。それこそが私にとって大事なのだ」

「……………まあ、別に構いませんが」

何らかの意図が氏には有りそうだというのは解る。ただ顔を合わせていないせいも有り、それを読み切る事は出来ない。つくづくルシウス・マルフォイ氏は上手い事やったと思う。

もつとも、今回は氏の察しが良かった訳だが、仮に唯一の聞き手である彼が理解出来なかつたのであれば、どの道説明する必要は有つたのだ。説明を求められたからと言って、予期していた労力が増える訳

でもない。大人しく従うのは吝かでは無かった。

「……ハリー・ポッターが守護霊の呪文を使ったのは果たして吸魂鬼の襲撃から身を護る為であったのか。その状況を語り得る人間は、ハリー・ポッター本人と居合わせた「スクイブ」だけでは有りません。そこにはもう一人の人間が居た。勿論、ダドリー・ダーズリーの事で「す」

魔法族は彼を数に入れないが、「マグル」の方は彼を勘定に入れない事は有り得ない。今回の吸魂鬼襲撃事件に登場する関係者は、当然に三人であるべき筈だった。

「彼は「マグル」だ。故に、吸魂鬼は見えません。しかし、証人が目撃した事のみしか語れないという制限は一切ない。つまり心を蝕まれた時の体験を語る事は可能であり、更に大臣も裁判中に指摘はしたようです。守護霊の呪文は「マグル」も視認する事が出来る。彼は事件の全てを語れずとも、その中核部分を語りうる証人と言えます」

吸魂鬼が居たか。

ハリー・ポッターが吸魂鬼に対して呪文を使ったか。

「マグル」の証言からでも、それらの真実を推し量る事は可能だろう。

特に吸魂鬼の存在を「スクイブ」は知っていても、「マグル」の方は知らない。すなわち、「スクイブ」のように本で読んだ知識に基づいて、その姿や行動を語るという事は殆ど不可能だ。或る意味「スクイブ」よりも信用出来る証言が得られると言っても良い。

更に高位の守護霊は動物の姿を象るのであり、ハリー・ポッターが牡鹿の守護霊を作り出せる事は知っている。「マグル」には銀色の霧としか認識出来ない可能性は有るが、その辺りは裁判所内で実際に試せば良い話であり、仮にダドリー・ダーズリーがハリー・ポッターの守護霊の姿を語れるのなら、証言の信憑性というのは高くなる。「しかし、僕は真実を追求する為に彼を呼びたい訳では有りません。一応確認なのですが、ハリー・ポッターとダーズリー家の関係性は御存知ですよね？」

「確実に友好的とは言えないというのは知っている。噂程度でしかな

いが、虐待を受けているという風聞も耳にはいるな」

「でしようね。彼は有名人ですから。まあ、あの英雄殿は全く自覚していませんけどね」

特に入学直後は、彼の一挙手一投足が学校中に「報道」されていた。

“生き残った男の子”。史上最悪の闇の魔法使いを打ち砕き、これから殺される筈であった多くの命を救った希望の星。そんなハリー・ポッターが十年間、つまり魔法界から隔離されていた間はどんな生活をしていたかは当然誰もが興味を示す部分である。グリフィンドールは当然、スリザリンですら寮全体が強い関心を抱いていた。

そして彼が大っぴらに詳細は語らずとも——自分が虐待を受けているというのは、まあ普通に口を噤みたくなる事実ではある——四年間も共に Hogworts に過ごせば、彼等の関係が良くないのだと多くが察している。

去年度とて、キングズクロス駅に迎えに現れたダーズリー家に対して、ウィーズリー家やアラスター・ムーディ達が「友好的な」遣り取りをしているのを少なくない人間が見ているだろう。あの駅には私服の魔法省の闇祓いや魔法法執行部隊が万一の事態の為に詰めているのであり、それらの人間から氏が情報を得るのは不可能でも無い。「さて、彼等の関係性は宜しくないようです。それを踏まえた上で、召喚されたダドリー・ダーズリーは果たして「真実」を証言するのでしょうか？ 吸魂鬼の存在を感じたと証言し、ハリー・ポッターを助けるような行為を出来るのでしょうか？」

ダドリー・ダーズリーが嘘を吐く必要は別に無い。

ただ、その時の事を何も覚えていないと言えれば足る。それはマグルの住宅街に吸魂鬼が居たというよりも、寧ろ居なかった事を示唆する証拠となるのだから。

「そもそも彼は出廷したがるんでしょうかね。今回の事件の真実を知る為に、もう一人の被害者の証言を聞く事は重要だ。そう判断したウィゼンガモットが、従兄弟として親しい関係にある筈のハリー・ポッターに、自身の無罪立証に有利な証人を連れて来て欲しいと要請

した場合、果たしてそれは上手く行くんでしょか」

ハリー・ポッターが本当に守護霊の呪文を使ったのならば、それがダドリー・ダーズリーの魂を護る為でも有ったのならば、普通ならすんなり連れて来れる筈である。血縁関係を有し、十四年間同じ家で暮らし、そして命の恩人である相手を助ける為なのだ。証言する事自体がかなりの面倒だとしても、証人として立つ事自体を拒否するというのは常識的に考えづらい。

「ダドリー・ダーズリーをハリー・ポッターが連れて来られない。それは少なからず余計な疑念を呼ぶでしょう。通常、自分に有利な証言をする証人を隠そうとする人間など居ない。その証人の語る内容が重要であればある程に、当事者は己が勝利の為に証人を呼びたがる。その経験則に反した末路というのは、この現状が良く示していると思います」

「……ダンブルドアはハリー・ポッター本人に証言させない事によって、自分にとって都合の悪い事を隠そうとしている。それを言いたいのだね？」

「ええ、まさしくその通りです」

セドリック・ディゴリーの「事故死」を許したアルバス・ダンブルドアにとって、闇の帝王の復活を語るハリー・ポッターは当然自分に有利な証人である。しかし彼を証言させないのは、国際魔法使い連盟が求めても拒否するのは、どう考えても筋が通らない。

そして同種の経験則は、今回の場合にも当て嵌まり得る。

「マグルの住宅街に吸魂鬼が居た事はなく、ダドリー・ダーズリーは吸魂鬼の存在を一切認識しなかった。全ては大嘘で、だからこそ被告人ハリー・ポッター、或いは証人アルバス・ダンブルドアは、彼を証言台に連れて来られない。そんな疑念が生まれる筈で——まあ、それで終わらせる気は有りませんよ。ダドリー・ダーズリーの存在は見世物に必須なんですから」

彼は役者として在廷していなければならぬ。

魔法族と共に育った「マグル」が出廷して初めて、二人の本質と価値を問い得る。

「裁判所による証人召喚命令。それと同種のモノは恐らく魔法法にもあるでしょう。まあ無くても何でも理屈を付けられる。それを為す理屈と正義は明らかにこちら側に在る」

彼等は善人として立とうとするが故に、次の論理を否定出来ない。「『生き残った男の子』の裁判に誤審が有つてはならない。たとえマグルをウイゼンガモットに入れた先例が無くとも、特例としてダドリー・ダーズリーの話を聞く価値は認められる。そして、たかがマグルであるというだけで証言を封じるなどという馬鹿な真似は、マグルの権利の擁護者で在り続けたアルバス・ダンブルドア校長がする事は無いだろうと」

彼が法律・慣例違反を持ち出してダドリー・ダーズリーの召喚を拒否するのは結構だが、これまで散々それらを馬鹿にしてきた人間がどの口でという反応が寄越されるのは目に見えているし、そもそも譲歩しているのはウイゼンガモット側である。

ハリー・ポッターに有利となる証人を、魔法族至上主義の道理を曲げてまで召喚するのだ。そのような行為に『正義』の校長が反対するのは不自然にしか映らない。

「ダドリー・ダーズリーを証言台に立たせる事はまず可能でしょう。その後は——まあ、出来る事は有りませんね。大きく干渉出来るのはそこまでで、最後はダドリー・ダーズリーの『良心』に掛かっている。彼が吸魂鬼の存在を確かに感じたと言言してしまえば、こちらは潔く敗北を認め、無罪判決を下すしかない」

「……君から潔くという言葉が出て来るとは驚きだな」

「今回の裁判は元より不利ですし、現れた結果は認めざるを得ないでしょう」

ダドリー・ダーズリーの高潔な行いに対し、心から敬意を示すしかない。

「ただ、彼が法廷にさえ現れてしまえば、その緊張を解す名目で『雑談』が出来るかもしれません。ハリー・ポッターはどんな人間か、ダーズリー家でどんな振舞いをしているか。ハリー・ポッターから虐待されていないか、それ位露骨な質問をしても良いかもしれない」

「……ダンブルドアはそれを止めようとするだろうな」

「ええ。そして御分りの通り、その制止の主張は正しい。事件に無関係な質問は咎められて然るべきであり、ハリー・ポッターの生活様式は言うまでもなく本件被疑事件に無関係で、しかし止められた所で問題は無い。その遣り取りをダドリー・ダーズリーはどう思うでしょうか。そのような『正論』で口を塞がれて、彼は素直に道理を飲み込めるのでしょうか」

まあ本人に会った事が無い以上、その辺りを断言する事は出来ない。

僕の知るダドリー・ダーズリー像はあくまでハリー・ポッターの主観を通じたものであるし、そもそも左程興味があった訳でも無いから詳しい人格について聞いた訳でも無い。ハーマイオニーも良く知らないようであった。故に僕の彼の行動は多分に想像が混じるモノに過ぎず、実際のダドリー・ダーズリーは意外と理性的で、状況を正確に把握出来る人間かもしれない。

しかし、そうでなかったとすれば。

その上で、彼等の関係性が僕の想定通りだったとすれば。

ダドリー・ダーズリーを法廷に引き摺りだした時点で勝ったようなものだ。

「口を塞がれた腹いせに『真実』を語ってくれても良いですが、うっかり『失言』をしてくれるのが最上ですね。ハリー・ポッターから虐待を受けていた。そのようにダドリー・ダーズリーが漏らしてくれば、今回の微罪事件が吹っ飛ぶ醜聞へと発展する。それに対して、いや自分こそが虐待を受けていたのだとハリー・ポッター側が反論してくれたのならば、これはもう申し分無い結果と言って良いでしょう」
それらは事件の証拠には一切ならない。

ハリー・ポッターの性格が悪いからと言って、今回吸魂鬼が居たという主張は嘘となるものではない。本件事件において無罪判決を下すべきという結論は何ら揺らぎもしない。

しかし証言として何ら認められず、記録化すらされなかったとしても、一度顕出されたモノを無かった事には出来ない。公平かつ善良な

裁判官により運営される裁判ならば通常問題とならないが、今回の裁判はそうではないし、そもそもそのような失言が真に活用されるのは、裁判内ではなく裁判外においてである。

「両親を喪った悲劇の遺児を任された者が、ハリー・ポッターへの虐待を見逃した。或いは、マグルの権利と庇護を唱えて来た者が、ハリー・ポッターによるマグルへの虐待を黙認した。どちらに転ぶにしても、あの校長の権威は致命的に損なわれる。彼の悪しき性格は一人の少年によって立証され、彼を光の陣営の旗頭、純血主義への対抗者と観る者は格段に減る」

加えて裁判内においてハリー・ポッターとダドリー・ダーズリーの関係が破綻してくれば、ハリー・ポッターは以降ダーズリー家にも居られなくなる。

勿論、忘却術により全てを有耶無耶にする事は可能であろうが、それは「正義」の魔法使いの所業ではない。そして魔法省——闇の帝王の意を受けたルシウス・マルフオイ氏は、コーネリウス・ファッジを通じて闇祓いを派遣させ、そのような非道を阻み得る。

そしてあの校長が掛けた魔法の守護は無意味となり、闇の帝王を阻む障害は消え失せる。

「……成程。君にとってみれば、守護霊ポッター殿の有罪無罪など眼中に無い訳だ」

相も変わらず、氏は僕に背中を向けたまま言った。

「それどころか君は、彼に対して無罪判決程度くれてやっても構わなかったとすら思っている。裁判など所詮は手段に過ぎず、目的を達成出来るならば何でも良い。そういう思考が無ければ、そのような手段を思いつきはしない」

「……まあ、そうですね。勝訴判決を得たとしても中身は実質敗訴とというのは理屈上有り得るでしょう？ 大臣の本来の目的はハリー・ポッターに有罪判決を下す事ではない。無関係では有りませんが、そもそもその根源は、彼の名誉と信用を失墜させる事でした」

それを為し得る鍵を握っていたのは、僕の眼には一人の「マグル」だったように映る。

「マグル殺しの純血主義と、マグル擁護の平等主義。魔法戦争はそのような対立軸に基づく闘争だと一般的に“誤解”されています。しかし大法廷において、本来の対立軸が純血至上主義と魔法族至上主義の戦いであると引き直されたのであれば、今後の展開は果たしてどうなるでしょうね？」

「……その割に、君はいつでも良さそうだな」

氏の声色には微妙に棘が有った。

「……所詮は思考実験でしょう？ 余り過度に熱を持ってませんよ」

もつとも言葉が多少弱くなったのは、それが凶星だったからだ。

裁判の結果自体に興味は左程無い。

結局、僕の関心はダドリー・ダーズリーが何を語るかどうかにこそ有る。

それが叶ったのであれば、現在までの魔法族とマグルの関係性は正しかったのか、正しくなければどう在るべきなのか、国際機密保持法という聖典は維持されるべきかどうかを改めて問い直す素晴らしい裁判になったのは間違いない、本気で見たいと夢想すらしてしまう程で、しかし――

「――しかしながら、僕達には出来ません。神聖なるウイゼンガモツトに、下等生物^{マグル}が足を踏み入れる事は許すべきではない。それは我らが祖先、そして現在の魔法族全体に対する侮辱でしょう」

「……そうだな。幸運な事に、その通りだ」

ルシウス・マルフォイ氏は認める。

洩々と言った感情を読み取れたのは、恐らくは気のせいだろう。純血”であれば、僕が提示したような行動を取るべきでは無いのは揺らがないからだ。

そして今回の事件で明らかかな事がある。

“マグル”的客観視の下では、ダドリー・ダーズリーは事件に関して重要な証人である。

しかし彼は裁判所に呼ばれなかったし、裁判官も被告人側も問題化する事は無かった。

つまり、魔法使いは“マグル”に対して裁判における証人適格、話

に耳を傾けるに足る一個の人格を基本的に認めていない。忘却術や記憶修正術、服従の呪文等によって証言が歪められる可能性は魔法使いも同様——寧ろルシウス・マルフォイ氏達が死喰い人疑惑を上手く逃れたのを見て解る通り、基本的に人間の証言なんぞ信用しがたいものであるというのに、「マグル」には物事を正確に認識する頭が無いという偏見の下、その価値を否定している。

ウイゼンガモットの主席魔法戦士であったあの校長が「マグル」に証人適格を認める為の政治活動をしてきたかどうかは不明確ではあるが——それでも今回に限って言えば、彼は法の欠陥を都合良く利用したのは明白である。

未成年魔法使いが二度も騒動を起こして尚運転免許制限や猟銃規制が如く杖所持を禁じようとはしないのと同様に、今回の裁判で彼が召喚される事こそが致命だと看破した校長は、同じ人間の「マグル」に対する差別的取扱いに対して見ない振りをした。他の魔法族と同様に、彼もまた、自分の利益になる不条理は簡単に見逃せる人間ではない。

この国の魔法界は差別と偏見に満ち溢れている。それを正す事の出来る能力と意思を持った者は、ただの一人も居ない。

今世紀で最も偉大な魔法使いを含めてすら、その改革を期待する事など出来やしない。

「……私の認識が甘かったようだ」

ルシウス・マルフォイ氏は額に手を当てながら、疲れたように紡いだ。

半ば見せつけるような演技臭さは有ったが、全て作り物という訳では無いらしい。

「ドラコやナルシツサから君の危険さは良く聞いていたし、去年一騒動起こしてみせた手腕を考えるに、君を過少評価など出来はしなかつ

た。しかしそれでも尚不足だった。君が蛇に組分けされたのも当然というべきだろうな」

氏は窓際から離れ、僕の対面へと座り直す。

面と向かつては話辛いような、御互い微妙な取扱いを求められる話は終わりという事だろう。指を組んで、少しだけ僕の方に身を乗り出した。

「話を求めた身で言うのも何だが、やはり君は発言に注意すべきだ。我々にとってマグルの権利を拡大するそのような主張は、そもそも聞く姿勢を見せる意義すら感じない話だ。ダンブルドアを称賛するのとは比較にならない位に危険だと言える」

「重々承知ですよ」

開き直りにしか見えないのを理解した上で僕は頷いた。

「ただマルフォイ家の当主である貴方ならこの程度は問題無いだろうと考えたのであり——そして、これは『雑談』でしょう？ なればこそ、『穢れた血』の権利の真なる擁護者がどう行動したがるかという事は、貴方の耳に入れておくべきだと感じましたので」

「……マグル被れなのは我々にとって不適切だ。そうは思わないかね？」

「マルフォイ家は、特に国際機密保持法施行前では上手くやってきたと聞きますが？　そして下等な屋敷しもべだろうと不潔な獣畜生だろうと、その生態を知っていれば絞り取れる利益を見出せる。僕としては、そのような狡猾な蛇である方が好ましく思えますけれどね」

勿論、貴方は別の御考えを持っているでしょうが、と付け加える。

しかしながら、ルシウス・マルフォイ氏は意識しておくべきだとは思う。

確かに十四年前に闇の帝王を裏切り、それでも尚許された以上、マルフォイ家は闇の側に全賭けせざるを得ない。ただ、氏が分霊箱を喪うという、取返しが付かない大失態を犯しているのも事実なのだ。日記帳の秘密へと注意を向けられるのを避ける為、闇の帝王の反応は表向き激怒程度で済む筈だが——内心で抱いた殺意を忘れてはくれないだろう。

故に再度の裏切りをする気ならば「穢れた血」達の思考や倫理観は知っておくに越した事は無く、同時に自分達が利用出来るかどうかも検討に入れていて然るべきである。

「——成程、その諫言は一応心に留めておこう」

暫く真剣に考える様子を見せた後で、ルシウス・マルフォイ氏はそれだけを言った。

「しかし、君は思ったよりセブルスに似ていないな。彼は私を——他の人間を、というべきか。自分の言葉で左右しようとは考えない。だが、君は違う」

「……褒め言葉として受け取っておきます」

「ははは。その謙遜の仕方と表情の作り方は似ているかもしれない」

単純に似ていると言われるより嫌であり、そう思ってしまった事は伝わったのだろう。ルシウス・マルフォイ氏は更に愉快そうに笑った。

「もつとも、君のその——マニユビュレーター操作的人間とでも言おうか。そういう在り方は、余り他から好意を向けられる物ではない。寧ろ、不愉快に思う人間の方が圧倒的に多いだろう。私やドラコの前では構わないが、気を付けた方が良い」

「……ええ。可能な限り努力しましょう」

最早治らない悪癖の類だと思いが、それでも彼の真摯な忠告だという事は伝わってきた。頭を軽く下げて心からの感謝の意を示す。

そして雰囲気として、彼の話は済んだようだった。

左程大した話をした気はしないし、既に終わってしまった事を蒸し返して何がしたかったかは今一不明だが、まあルシウス・マルフォイ氏は本当に雑談——息子の知人がどういう人間であるかを図る為に、一対一で会話を交わしたただけなのかもしれない。

もう既に冷えてしまった珈琲を啜りつつ、しかしふと思いついた。

「……丁度話が出ましたが、僕の前に貴方が呼んでいた彼は何処に？」

「ああ、ドラコか」

そう言えば、彼の姿が見当たらない。ここに招かれる途中も見えない。

そんな疑問を口に出せば、氏は部屋の壁を見透かすような遠い目をした後、楽しげに笑った。

その笑みは嫌に引つ掛かる物だった。感じたのは、自分は何か見落としをしてしまったのではないかという不安。しかし、不吉というまでは行かない。その原因は、ルシウス・マルフォイ氏が浮かべた表情が、悪戯を企んでいる時の彼の息子の物に似ていたからだろう。

「ドラコには一つ、仕事を命じたのだ。今はそれに取り組んでいる最中だ」

「——貴方がたの“仕事”ですか？」

闇の帝王の、という意味を含めて問うたが、氏は軽く首を振った。

「私の、いやドラコの仕事だ。マルフォイ家次期当主としての訓練とも言えるかな。私の方も君の話を聞いた上で感じた所も有る。この後またドラコを呼んで話をせねばならないし、この分だと思ったよりも長くなりそうだ」

「そうですか。貴方も大変そうですね」

「そうでもない。この種の苦労は親である私の喜びでもあるし、君の御蔭で間違いなく楽になった部分も有る。君を我が家に招けた事は本当に良かった。それは間違いなく私の本心だよ」

「……良く解りませんが、御役に立ったならば何よりです」
向けられた含み笑いの真意は測りかねたが、悪い事では無いだろう。

誤魔化すように、カップに残った最後の一口を啜る。ルシウス・マルフォイ氏は黙ってそれを見届けた後、最後の問いを僕に投げ掛けた。

「——嗚呼、そうだ。君はドラコの事をどう思っている？」

今までと違う、明らかに意図を測りかねる問いに困惑する。

「どうとは？ 彼に対する僕の評価を聞いているのですか？」

「いいや、違う。君とドラコとの関係を聞いている」

「……それなりに上手い関係を築けていると僕個人は思っている、という事を聞きたいのでしょうか？ それとも、彼が僕の庇護者パトロナスである事は十分に理解している、と御答えすれば良いのでしょうか？」

まさか、ホグワーツ同級生であるという当然の回答を期待した訳ではないだろう。

この場で適切と思われる回答を僕は持ち得ず、しかしルシウス・マルフォイ氏は何故か苦笑した。僕が浮かべ得ない類の、成熟した大人の笑みだった。

「成程、良く解った。君のその言葉を聞いた親としては、君に言える事は一つだ。残り三年間か。これまで通り、ホグワーツでは私の息子を助けてやって欲しい」

「……それはまあ、被庇護者クリエンスであるのだから当然そうするつもりですが」

「くくく。そういう回答を私達が期待した訳では無いのだがね」

ルシウス・マルフォイ氏は更に苦笑を深めた。

己は全く馴染みが無い筈なのに、ステイブン・レッドフィールドは僕にそのような表情を見せた記憶が無いというのに、彼の表情を見て父親らしい表情だという感想が浮かんで来たのは何故だろう。

それはもしかしたら、ルシウス・マルフォイ氏の表情から、冷たい蛇には余り似つかわしくない温かみを見出してしまったからかもしれない。

「しかしながら、君の性格は何となく掴めてきたよ。そしてドラコが間違いなく私の息子だというのも強く実感する。恐らく私の父も多分こんな気持ちにさせられたのだろう。……まあ私の方には同じ経験が有る以上、良くも悪くも父程辛辣にはなれそうにないがね」

感慨混じりの言葉を漏らした後、彼は退出して構わないと告げる。

その瞬間、まるで僕達の動向を覗いていたかのように完璧なタイミングで屋敷しもべ妖精が現れた。流石にマルフォイ家のしもべ妖精は良く教育されている——何処かの妖精は余程狂っていたのだろう——という感想を抱きつつ部屋を退出しようとした僕に対して、ルシウス・マルフォイ氏は至極柔らかい口調で今後の予定を宣告した。

「それとだ。君の考え——禁じられた呪文を身に着けておきたいという希望は、ドラコから聞いている。そして現在の情勢を考えるに、私もその考えには一理有ると判断した。明日よりドラコと一緒に教え

るつもりだから、そのつもりで準備をしておきたまえ」

自己実現欲求

純血の作法に加え三つの呪文を教わるようになった事で僕の毎日
は更に忙しい物となったが、それらも多少は格好がつくようになり、
ホグワーツ入学後の四年間で最も「空虚」で有った夏休暇も漸く終
わろうとしている。

現状、世間で不吉な事が起こっているという事も無い。

既に戦争が始まっているとは思えない程に穏やかで、そして毎年恒
例行事で有る教科書購入の為に訪れたダイアゴン横丁では、相変わら
ず平和ボケした魔法族で溢れていた。スリザリン僕の制服を見かけた彼等が
何か噂している姿はちよくちよく見かけるもの——去年のクリス
マスの件のせいか、一方的に僕を見知っていて話し掛けてすらくる御
気楽魔法使いもそれなりに居たのが解せないが——不安や疑念とい
うよりは野次馬根性に満ちていて、あの校長達の主張を真面目に受け
止めてはいなかった。

何故このような奇妙な冷戦状態を保ち続けているのか。

その理由を、僕はやはり知らない。

あの校長から何とか聞きだしておけば良かったと多少思うものの、
ただ彼が僕にその内容を告げなかったという事は、どう足掻いても彼
が口を割る事は無かつただろう。

ハリー・ポッターに関して多くの情報を僕に与えた事から考える
に、あの校長にも今年僕を都合良く動かしたい意図が有ったのだろう
が——しかし明確な形で開示しなかった事から考えるに喫緊の対応
が要求されるでも無さそうだし、僕が今持っている手札から考えて
も、闇の陣営が大人しくしている理由に思い当たりはしない。

ルシウス・マルフォイ氏にも探りを入れたのだが、流石に回答は寄
越されなかった。

彼は良識の有る大人としての態度を保ち、子供には全く関わりの無
い事だという立場を崩そうとしない——つまり、僕達は平和にホグ
ワーツ生活を送っていれば良いのだと公言して憚らなかつた。ドラ
コ・マルフォイは相当不満そうだったが、僕の方は逆に歓迎すべき事

ではある。この四年間、ホグワーツこそが表舞台であり、主戦場であつたような物である。それが避けられるとするならば、初めて平和な一年を期待出来るかもしれない。

もつとも、開戦の時期もそう遠く無いだろう。

今でこそコーネリウス・ファッジが頂点をやっているが、ハリー・ポッターの裁判で晒したあの政治手腕を見る限り、政権に居られる期間もそう長く無さそうだ。元々シリウス・ブラックの脱獄事件を境に彼の支持率は低空飛行であるし、最長でも七年ごとの選挙を要求する平時のルールに従うならば彼が魔法大臣で居られるのは残り二年程。後任も帝王の復活を否定してくれるとは限らないのだから、闇の陣営はそれを一つの目途に戦争準備を整えろと考えるのが自然だろう。

ともあれ、今年に限れば、例年よりも穏やかになるような予感はある。有った。

シリウス・ブラックが脱獄していた一昨年や、三大魔法学校対抗試合という解りやすい面倒が予定されていた去年とは違う。今年を意識していなければ気を抜いてしまいかねない程で、翌日の始業日に向け自宅に戻って準備をしている最中、たつた魔法を使えないだけの事に苛立ちを抱きすらした位だ。これまでの四年間何らそんな事を考えなどしなかつたというのに、この夏休暇は何かと杖を振る事に慣れ過ぎていた。

こんな事なら『君の不在中、君の家を管理する屋敷しもべ妖精を手配しようか』というルシウス・マルフォイ氏の申し出を受けておくべきだったかと思つたが、余り『マルフォイ』の現当主に借りを作るのも望ましい事ではない。彼もあつさり引き下がった事から断られるのを予期してはいたのだろう。そもそも氏が想像しているであろう以上に、我が自宅には『純血』に見られるべきでない物が多過ぎる。

そんな中、予期せぬ客が来ないかという期待は多少有った。

去年の夏は——三年の学期末に生じた僕達の蟠りは、思つてもみなかつた彼女の来訪によつて解消された。結果的にその仲直りは二か月程で破綻した訳だが、来たるホグワーツ始業日が憂鬱にならないで済んだのは確かだ、今のような悩みを抱え続ける必要は無かつたの

だ。

もつとも、都合の良過ぎる期待というのも承知している。

自分が動こうとしないのに彼女の慈悲を望むのは余りに甘ったれた考えであり、そして僕がマルフォイ家にどっぷり関わるようになった現状では、非魔法界とはいえども、あの「マグル生まれ」の少女との接触は可能な限り避けるべきだった。

それでも朝と呼べる時間が終わろうとする頃、ドアが叩かれた硬質な音を聞いた瞬間、僅かに胸が跳ねなかつた訳では無い。たとえ裏切られると頭で考えていたとしても、去年度に何も無かつたような関係に戻れる事を僕は夢想し——しかし、それは間違つた形で裏切られた。

嗚呼、去年度の蟠りの事を考えては居た。

……確かにそれはそうなのだが、それは彼女の方ではない。

「——フラァー。何故、貴方がここに？」

「ふふふ。来てしまいました」

「……来てしまいましたではないんですよ、まったく」

思わず額に手を当てる。

僕の表情は決して好意的な代物では無かつた筈である。

学期末、ボーバトンとダムストラングがホグワーツを立ち去る日。僕が彼女に何を告げ、そしてどのような別れをしたかを思えば、彼女の来訪を心から喜べる筈も無い。

それでも尚、もう会う事は無いと思つていたフラァー・デラクール——外見上だけは上品な令嬢が如く、つばの広い帽子を被り、白いワンピースを着た美貌のクォーターヴィーラは、悪戯っ子のように輝く笑みを浮かべていた。

——清算、した筈だったのだ。

あの日、僕はフラァーとガブリエルに対して率直に思いを伝えた。

純血主義の覇権を懸けて戦争が始まつた以上、僕達はもう仲良くす

べきではない。御互いの関係は、きっぱり断ち切っておくべきなのだと。別れを惜しみ、再会を約束しようとした彼女達に対して、永遠の別れの宣言をした。

その時の言葉だけで理解が得られた訳では無い。

彼女達の反応は芳しいものではなく、質の悪い何かの冗談の類だとすら思ったようで、後にデラクール姉妹達が送って来た文面がそれを明瞭に語っており——しかし僕は彼女達への返信の代わり、彼女達の両親宛てに事情を説明する手紙をふくろうに託した。その後はマルフォイ邸に滞在していた事も有つてか、僕に手紙が届く事は無かつた。だから理解してくれたのだと思つていた。

ただ、それでもフラーはここにいた。

ここに居て、僕達の間で何も無かつたかのように笑つていた。

フラーに僕の住所を教え得る人間。

それは最初から一人しか思い当たらない。

実際、彼女は封蝋された手紙を携えて来たのだが、敢えて開きはしなかつた。

ミネルバ・マクゴナガル教授の名が裏書きされたソレの中には、どうせ御叱りの言葉が記されているのは解り切っている。少し御節介過ぎないかと思わないでも無いが、僕の良識と教授の良識、どちらが信頼出来るかも良く良く承知している。彼女の方が正しいに違いない。

そして僕に追い返す気が無くなった事を目敏く見て取つたのだろう。

それまでの不安を消し去つたフラーは招きの言葉を待とうとせず、僕を押し退けて家へと上がり込んだ。しかも無遠慮に家のあちこちを見回つた上で、当然のようにアレコレと品評しだすオマケ付きである。

予想より掃除されているけど細かい所は意外と行き届いていないとか、エントランスに飾つてある絵は趣味じゃないとか、ソファアームもつと柔らかい方が好きだとか、ベッドの方は割と好きになれるだとか、客間には花の一つでも生けておくべきだろうとか、何処の女主人かという位に言いたい放題だった。

そして最終的に「まるで葬式中みたいな家ですね。私は全体的に好きでは有りませーん」と言い放った上で、僕を外へと連れ出した。

丸二ヶ月会わなかつた程度で懐かしく思える傍若無人な態度であつたが、それでも僕が彼女の行動を止め切れなかつたのは、その一切切が去年良く見知つた「フラー・デラクール」らしい物であり、そして何より、左程外れた批評でもないなと苦笑してしまつたからだろう。

強引に連れ出されたのは意外な事に非魔法界ロンドンだった。

いや、彼女がローブ姿で無かつたのを見て予想して然るべきではあつたか。

「魔法使いなのに『マグル』の世界を歩く事に躊躇いはないのでですか？」という質問に対し、フラーは「感性を磨くには見慣れない物を見るのが一番です。特に最近のマグルのファッションと香水の発展は特筆に値しまーす」と事もなげに答えた。実際、全く非魔法界の常識を知らない訳ではないようで、足取りに迷いは有つたものの危なげは無い。

ヴィーラの血故か、外を出歩く事自体に余り慣れていなさそうでも有つたが、フラーが懸念であつた不審な行動魔法族的に及ぶような事は全く無かつた。二階建てバスや地下鉄ダブルデッカー チューブの支払いにまごつく素振りは見せず、街中でもぼつぽつ見掛けるようになった携帯電話電波発信源から露骨に距離を取ろうとする真似もしない。寧ろそれらの魔法界に存在しない品々について、己の妹にそうするようにあれこれと僕に教えようとする始末だった。

……まあそれはそれで不審では有ったのだが、彼女の好きなようにさせた。

去年度あれだけ一緒に居たのだから、流石に彼女も僕の「マグル趣味」は多少知っている。

だが、流石にホグワーツ内——少なからずスリザリンの眼が有る場所に居たのだ。その趣味の深度がどの程度の物なのかフラーは理解していなかったのだろう。ただ、彼女に好きにさせた一番の理由は、それが四年以上前の自分を何となく思い出させる行動で、自分でも懐かしく思えてしまったからに他ならない。

フラーは僕を外に連れ出したものの、別に用事や目的地が有る訳ではないらしい。

彼女は興味と好奇心の赴くままに、あちこちへと僕を引っ張り回した。ストリートに点在する服飾店や化粧品店群をひやかし、店先に山程食料品を積み上げた屋台が密集したマーケットで買い食いをし、かと思えば美術館に赴き真剣な顔で印象画を鑑賞し、そして運河に沿って散歩していれば傍に立ち並ぶ邸宅の善し悪しをあれこれと批評してみせるなど、本当に自由だった。

その間彼女は一貫して楽しげで——そしてまあ、一時の事だとしても、僕の頭から戦争の事が消えていたのは、流石に認めざるを得ない。

映画館を出て、フラーは今見た内容と女優の演技について一通り酷評と自論を述べてみせた——つまりは割と満足の行くものだったようである——後、彼女は僕を遅めのアフタヌーンティーへと誘った。ストリート沿いに洒落た何軒かの店を何も見なかったように平然と通り過ぎ、最終的に迷いなく入ったのは、非常に意外な事に、華やかさとは程遠い古びた喫茶店だった。

何故そこに決めたのか解らないが、どうも彼女には確たる基準が有ったらしい。解る事といえば、ストリートを望めるテラスの方に僕を引っ張っていった点からして、少なくとも外で紅茶を飲めるかどうか

かは必須だったのだという事くらいである。後は客で混雑していないのも有るだろうか。十程有るテラス席は二つしか埋まっていない。もつとも相変わらずフラーはフラーであり、テラス席に座るなりこの国の紅茶の味は余り好きでないと平然と言つてのけたのは流石だった。が、完全に言葉通りでも無さそうなのは表情が物語つてもいい。注文した紅茶を待つている間も、ティースタンドの中からケーキを物色している間も、やはり彼女は楽し気な様子そのままであった。しかし、流石にもうそろそろ良いだろう。

「——ところで、何故貴方はこの国に居るのです?」

付き合いで半分だけケーキを食べた僕に対し、僕から奪った半分に加えてケーキ三つをフラーが平らげた後。僕と彼女の美味しいの基準は相容れない——良くも悪くも彼女は舌が肥えすぎている——のを再確認した上で棚上げにしていた問いをぶつけてやれば、彼女は今日初めて笑顔を崩した。

紅が引かれた唇を、フラーは不満で尖らせている。

「私わたしのような美人とデートしてるのに、野暮な事を言うものではないませーん」

「野暮でも無粋でも構いませんが、何時までも聞かない訳でも行かないでしように」

ミネルバ・マクゴナガル教授への義理として、そして半ば罪滅ぼしとして、これまではフラーの望む通りにさせた。しかし、何時までもこうしても居られない。僕は彼女が今ここに居る理由を聞きだし、可能な限り早く、彼女が居るべき場所に帰らせるべきだった。

「そもそも学期末の事を忘れた訳では無いでしよう?」

「当然覚えていまーす。母ママ達への手紙も読みまーしたね」

「ならば、僕の考えも十分伝わった筈です。そもそもそのような行動を取った身で何ですが、完全に貴方がたから愛想を尽かされたものだと思いますし」

「ですから、こうして再度仲良くしようとしているのではないですか。今なら指を絡める事も特別に許してあげまーす」

「……ですから、の前後が全く繋がっていませんよ」

全く悪びれた素振りも無く、テーブルの上で指を絡めて来た彼女に溜息を吐く。

その一拍後、自転車^が倒れる派手な音や、人と人と衝突する音、男を詰る女性の怒声など多種多様な環境音が周りから生じた。それらの諸悪の根源が何事も無かったかのように平然としているのは、最早呆れるどころか感心してしまう。

フラームもつくづく面倒な体質をしている物だ。

この有様ならば、まともな恋愛一つ出来ないというのも確かに頷けてしまう。彼女の魅力は非魔法族・魔法族問わず男を狂わせる。ヴィーラは人と交わりその皮を獲得した事によって、逆に事態を悪化させてしまったのかもしれない。

「……貴方も相変わらず動じませーんね」

もつとも、僕が嘆息一つで済ませた事は御気に召さなかつたらしい。

学期中何度も繰り返された事象ではある。流石にフラームも呆れ交じりではあったものの、それはまた全く別の事であるらしく、その眉は確かに吊り上げられていた。

「決まった恋人の居る人間に魅力チャームが通じないという事は稀に有りますが、そうでもない人がここまで完璧に抵抗してみせるのは本当に初めてです。貴方は絶対何処か可笑しいと思いまーす」

「発情期の猿じゃあるまいし、そう簡単に魅了される方が可笑しい話でしょう」

まあ去年を振り返る限り、己にも全く通用しない訳でも無さそうではある。

だが、その事実を漏らせば面倒な反応が返ってくるのは目に見えており、この手の誘惑が通じにくいのは事実である。四方八方より遠目から盗み見て来る同種の視線を、僕は今のフラームに向ける事は出来なかった。そして彼女はやはり不満そうだった。

「寧ろ、貴方がそれを解決する努力をしない方が問題なのでは？ デラクール夫人はあれだけの美人であり、尚且つ貴方よりヴィーラの血が濃い訳でしょう。しかしそれでも貴方程に余計な虫が寄つて来な

いのは、やはり彼女には決まった夫が——無言で抓るのは止めませんか？」

「女性の前で他の女性を褒めるものではありません」

「……貴方の母親の事ですし、別に口説こうとしている訳ではないのは文脈から解る筈ですが」

ほっそりとした女性の指でも、抓られれば流石に痛い。

軽く指を払ってやれば、私は虫ではありませんと抗議しつつ僕の手の甲を撫で、しかしそれで多少満足したのかあつさりと手を引いた。

「そもそも去年度、僕は明確に言った筈ですよ。貴方が僕にどんな関係性を望もうと、僕は恐らく応えられないと。貴方は僕に『M a B e l l e F l e u r 』とでも呼んで欲しいのかもしれませんが、そのような優しい人間が欲しいというならば、貴方はさっさと他を当てるべきです」

「もう。私はそんな独創性のない陳腐な愛称で呼ばれたい訳ではありません。……でも、でも、貴方がどうしてもというのなら受け容れても良いです」

「……でも、の前後がやはり繋がっていませんよ」

「…………貴方はピレネーの凍土より堅物です」

更に頬を膨らませたが、しかし今度の彼女は楽しげである。

そして、明らかに軽い調子を演じている素振りをして、フラァーは言った。

「少し、調子を取り戻したようです—すね？」

「…………」

僕が今まで出会った人間の中で、最も恐ろしい眼をするのは当然あの校長だ。

しかしながら、彼女達は時に彼すら及ばないと思える程の、覗き込むだけで絶対的な敗北感を抱かせる類の色を瞳に浮かべる事がある。そして、フラァーやガブリエル、またハーマイオニーが何れも女性であるのは、果たして偶然なのだろうか。

フラァーは徐に、肩から掛けていたミニバッグへと手を伸ばす。が、

彼女の肩に手を掛ける事によって僕はそれを止めた。

盗み聞きされたくも無いと考えて杖を取り出そうとしたのだろうが、魔法を使った隠蔽が必ずしも良い事とは限らない。もう一度周りを見るが、他の客達との距離は多少空いているし、ストリートにもそれなりに雑踏と喧騒が有る。魔法族の注意と「マグル」の注意、どちらをより引くべきでないかは明らかである。

僕の意味が堅い事を見て取ったか、彼女は渋々手を引っ込め、改めて話始めた。

「本当は、あの日、私が今ここに居る理由を貴方に告げるつもりでした」

「……………」

理由を知らないのは貴方に責任が有る。

彼女の瞳はそう雄弁に言っており、けれども僕にも言い分が存在していた。

「……………事前に聞いてなかつたら何かが変わる訳でも有りませんよ」

現状、僕はフラァーを歓迎する気にはなれない。

「この魔法界は現在戦争状態。十数年前に多くの死者を産んだ反政府組織が暗躍し、今後更に大勢殺す企みをしている真つ最中な訳です。そんな場所に他国からわざわざ訪れているのですから、貴方にはさぞかし大層な理由が御有りなのでしょうね？」

渋い顔で甘つたるい紅茶を啜りつつ問えば、フラァーは案の定僕の方を見ていなかった。

横顔から伺えるフラァーの瞳は明らかに泳いでおり、先程とは違い、明確に僕と視線を合わせようとしていなかった。

「……………えーと、その。何と言いまーすか」

「どうせ大した理由ではないのでしょうか？」

「な、夏が明けてからは……………グ、グリーンゴッツ銀行で働くつもりです」

「……………はあ。で、何故？」

「え、英語が上手くなりたいと思つたからです」

もう更なる溜息すら出ない。

確かに公式窓口である魔法省が闇の帝王の復活を否定してはいるのだ。そんな惚けた理由で今この国を訪れる魔法族も、探せば何処かに居るかもしれない。

しかし、彼女はあの場所に——あの時のホグワーツに居たのだ。本当の理由は別に存在するだろう、寧ろ存在してくれと視線を向けるものの、フラーが頑なに僕の方を見ようとしない以上、真実を得る事は不可能のようだった。

「……去年あれだけ一緒に居たのです。僕が何を言いたいかは解るでしょう?」

「聞く耳は持ちませーん」

「英語が上手くなりたいたいという程度の理由でこれから戦火に包まれる国に来るとか正気ですか? しかもよりにもよってグリーンゴッツ、闇の帝王が何れ潰すであろう場所に? 貴方の本国が英語を見下しがちであるとはいえ、それでも学ぶ場は有るでしょうに」

「……聞く耳持たないと言った筈でーす。そして貴方に指図される筋合いも無いでーす」

「確かにその通りでは有りますが。けれどもデラクール夫妻は何と云って居ました?」

「私は既に成人しているのでーすよ……!」

「物には限度という物が有るでしょう」

そしてこれは、家族を持つ者が個人で決め得る範疇を超えている。「デラクール夫妻もセドリック・デイゴリーが帰って来た場に居ました。最後の課題の日に彼等が貴方の応援に来た事は当然僕も知ってますし、ガブリエルもあの別れの日まで留まっていた訳ですからね。まず間違いなく、夫妻からは大反対を受けた筈ですが」

夫妻が何処まで闇の帝王の脅威を理解しているかは解らない。

だがその言葉の響きからして、帝王の治世下でヴィーラのハーフやクオーターが余り歓迎されない事位は承知しているだろう。

その上、彼等にとってこの国の魔法界は、セドリック・デイゴリーを護り切れなかった校長を、そのままの地位に据え続けている世界である。闇の帝王の復活を宣言した彼の言葉を真つ向から信じていな

いとしても、万一本当に戦争が始まったのだとしたらという危惧は抱いて然るべきであり、真つ当な親ならば娘をこの魔法界に送りたいがる訳もない。

「それに、最後には納得して貰いまーしたね」

「賛成は？」

「こうして私がここに居る以上、貰ったも同然でーす」

「きちんと言葉の定義を踏まえて発言すべきだと何時だったか言った筈ですが。……いや、それでこそ貴方らしくは有りますけどね。貴方が妄言を吐き始めた際の夫妻の苦勞が目に見えますよ」

恋人でも何でもない人間に自分の娘の愚痴を漏らしていた位である。

しかしデラクール姉妹が我儘放題なのは溺愛されている事の裏返しでもあり、この銀色の暴走特急が本気で反発すれば、夫妻にも止められはしなかったのだろう。それはフラーなりの愛嬌故とも言ええられるのかもしれない。

そして僕がこれ以上責める気がないと悟って漸く顔を戻し、口を開いてみせるあたり、彼女は非常に目敏く、そしてあざとい女性だった。「でも、何の目的も無く来た訳では有りませーん。ちゃんと文句も言いに来ました」

口を軽く尖らせながらフラーは主張する。

そして彼女は、わざわざ僕の下を訪れた理由を告げた。

「ガブリエールは、貴方との別れを悲しんでいました」

「……………」

意外な事に、僕にはまだ動揺するだけの心が残っているようだった。

「ガブリエールは最初、内容を余り良く理解出来なかったようでした。理解した後は散々泣き喚いて、駄々を捏ねていまーしたね。貴方から返ってきた手紙も、ガブリエールの望むものでは有りませんでしたから。そして……納得出来なかったのは私もでーす」

あの日、離別を告げた瞬間、幼い少女の瞳は困惑に満ちていた。

僕は己の手でそれを作り出し、そして彼女の無理解に甘えた。ガブ

リエルが以降どのような反応を示すかを予想出来ていて尚、僕はそれを選択した。

フラーの方は妹よりも事情を多少理解してはいたようだが、それでも真面目に受け取る事を拒否していた。あの場で露骨に拒絶の素振りを見せなかったのは、追い続けるようなみつももない真似をしたくないという想いが彼女には有り、また僕の気が直ぐに変わるだろうという自信を持っていたからのように見えた。そして、やはり僕はそれを利用した。

「ガブリエールが……私達があの日多くの言葉を呑み込んだのは、貴方の言葉が唐突で、一方的な物だったからではありません」僕から視線を逸らし、どうにか日常を取り戻したストリートを見ながら彼女は言う。

もともと、きちんと眼の前の光景を見ているのかどうかは怪しい。その瞳はぼんやりとされていて、あの学期末の事を思い浮かべていた。「ええ、他でも無く貴方の表情がそれを許さなかったのです。第三の課題の後から貴方は変わりましたが、特にあの日あの時の貴方は……その、言葉を選びませんが、非常に恐ろしく見えましたから」

「……確かに内容は穏やかでは無かったです、それでも可能な限り丁寧に説明したと思いますけどね」

「そういう事では有りませーん。言葉よりも雄弁な物は常に存在しまーす」

「……………」

フラーは基本的に、感想を真っ直ぐ表現する女性だ。

その彼女が謎めいた言い方をする場合、その裏には大概強烈な批難が隠されている。それは、彼女と半年間を過ごす内に学んだ事の一つである。

「……去年度、僕が優柔不断であった事は認めましょう。済し崩し的に関係が続けた結果、貴方がたを傷付ける羽目になったのも申し訳ないとは思っています。それでもこうなった以上、僕達の関係は清算すべきでしょう」

あの四年目は、あの年だけで完全に終わらせておくべきだった。

しかし、僕は既に学年末に一度別れを告げ、そしてフラァーは納得出来なかったから今ここに来ている。そんな言葉で納得してくれるならば、それはフラァー・デラクールでは無かった。その時抱いた感情も一緒に持ち越して来ているらしく、彼女は大きな怒りを露わにして言った。

「スリザリンが、たかが学生の寮分けが何だというのです？」

たかが。

解り切った、しかし最早認める気が無い事柄を、彼女は言い切った。

「たとえば今までどれだけ多くの闇の魔法使いを生み、またこれからどれだけ多くの闇の魔法使いを生もうとも、貴方の価値が損なわれる事など有りませーん。私達が輝きを見出した、あの時のままでーす」

「……………」

「そもそも、何故貴方はスリザリンに忠誠を誓うのでーすか？ あの寮が、貴方にどれだけ多くの事をしてくれたのでーすか？ 血の純度を誇り、貴方^{半純血}を侮辱し、しかしながら私に言い寄ってくるスリザリン生が一人も居なかったと思っっているのでーすか？」

流石のヴィーラの魔力、いやフラァー・デラクール自身の魅力とすべきか。

そして解っている。最早スリザリンにも真に“純血主義”を信奉している者など居ないと。

今の魔法界には半純血の人間が多過ぎ、聖二十八族であるオリバンダーやブルストロードですら純血を喪いつつある。闇の帝王の妥協は現実を見据えた対処と評価し得なくもないのだ。

そしてマグル生まれとの混血が忌避され、ヴィーラとの混血が受け容れられるという理屈。それを可能とする純血主義の修正案——正しくは定義の明確化——は、僕の中に有る。

有るのだが、やはり机上の理屈でしかないのは事実だ。

考えにふける僕を前に、フラァーは瞳を僅かに潤ませ、何処か悲しげに言った。

「ねえ、ステファン。貴方がホグワーツを去る訳には行きませんか？」

「……………」

思ってもみなかった提案。

いや、眼を背け続けていた一つの解決策を、彼女は提示した。

「貴方が魔法教育を受け続ける事を望むならば、それはボーバトンでも可能な筈です。貴方であればきつと上手く……は、やっていけそうにないですが、それでも貴方の求める知識や技能が手に入る事は間違いないです」

言語や文化の壁があるなどという反論を彼女は許さなかった。

実際、既に戦争が勃発している今現在、その程度の障壁など些細な事ではある。

「自分ではそう考えていないようですが、貴方は何だかんだ言って優しい人でーす。マダム・マクシームも貴方に感謝していました。その、自分と彼の仲直りの手伝いをしてくれたと。確か名前はル、ルビ——」

「……ルビウス・ハグリッドですか？」

「そう、その人でーす」

「………はあ。まあ、覚えは有りますよ」

忘れる筈もない。去年度僕がオリンペ・マクシーム校長を容疑者から早々に外したのも、僕に持ち込まれた無茶な御願いが原因だった。真に闇の帝王の側に転ぶ氣を有している人間が、骨の髄までアルバス・ダンブルドア信者な彼と寄り戻そうとする筈もなかった。

「……ただ、それは然して大した仕事でも有りませんでした。どちらも仲直りをしたがっていた。僕がやったのは、ただ彼等を詭弁で殴りつけ、もう一度会おうと言質を取っただけです」

特にルビウス・ハグリッドは論理に弱いと知っている。

彼を言い包める事など僕にとっては容易い仕事であり、彼の本心としてもオリンペ・マクシーム校長と仲直りしたいと考えていたのであって、そして二人が実際に会ってしまえばする事は殆ど無かった。「でも、何故マダムは貴方に頼む気になったのでーすか？ 貴方はこんなにも朴念仁で、恋の仲立ちなんて最も不向きな人間だと思えますけど」

「……それはフラァー、貴方に全ての原因が有るのですけどね」

「？」

「解らないならいいですよ。それは貴方の良さでも有りますから」

僕が邪険にし続けて尚フラァーがべったりであった事は、彼女をして、いやボーバトンでフラァーを良く見て来た人間だからこそ驚愕するものであったらしい。そのせいで、オリンペ・マクシム校長は、僕が恋愛面で百戦錬磨な人間だと誤解してしまっていた。

一応説明はしたものの、それはそれで無意識に女性を引き寄せる誘蛾灯扱いされたようで、今をもって誤解が解けているかどうか怪しくはある。

まあそんな理屈をフラァーに説明するのは彼女も憚られたのだろう。僕が仲立ちに努力した事を教えても、核心については口を噤んだようである。

暫くの間、フラァーは僕を見詰めていたが、僕も回答を寄越す気が無いと察すると、気を取り直したように彼女は続けた。

「とにかく、マダムは保証してくれまーした。学校を移るという事は余り前例が無い事態ですが、それでもボーバトンで学びたいと思う魔法使いを拒む事はないと」

「……………」

「私はその後、ダンブリドールの所にも行きまーしたね。そして、彼は私の提案を非常に独創的で素晴らしい物だと褒めてくれましたし、貴方を領かせられるのであれば、ホグワーツからの転校手続を取ると約束してくれまーした」

「……………また無茶苦茶を通すものだ。家族でも何でもない人間が、それも本人の同意無しに転校云々の話を進めている。それは道理どころか常識を欠いているでしょうに」

しかし、あの校長は面白がつて受け容れた事だろう。

少なくとも表面上は、そして——内心でもそう在って欲しいものだ。

「ボーバトンはホグワーツより遥かに偉大で、素晴らしい学校でーす！ 険しくも雄大なピレネーの中に佇む美しいシャトー。絶景の庭園と壮大な噴水。数多の国から訪れる多種多様な学生と、それにより

集積された膨大な魔法の知識の数々。ホグワーツと異なり、貴方が興味を示すであろう錬金術にも力を入れていまーす。貴方も好きになる事間違いないでーす……！」

僕は反論せずフラーの言葉を聞き続ける。

言葉を連ねる度、彼女の意気は段々消沈していつて。

「……ただダンブリードールは、貴方が決して受け入れないだろうとも話していました」

そして最後に小さく紡がれた不満混じりの言葉が、あの校長の本心を暗に示していた。

『一貫性を喪ったのじゃ』

今世紀で最も偉大な魔法使いはそう言った。

あの場において、その指し示す範囲は非常に限定されてはいた。

だが、彼は本当はもつと拡大したかったのではないだろうか。善を信奉しながらも善なる信徒になれなかった弱き大魔法使いは、今この瞬間も彼を批判している世間に——しかし何れ都合良く「英雄」を求めるであろう風見鶏達に、最低限の一貫性を抱いて欲しかったのではなからうか。

そのような邪推が当たっているかは今では解らない事だが、あの校長の言葉が無くとも、彼が現在どのように考えていようとも、僕の心は決まっていた。

「……やはり、貴方は受け容れてくれないのですね」

返答する前に、フラーは微笑みながら言った。

そしてやはりこの手の笑みこそ、彼女を真に美しく見せる笑みだと僕は思った。

「結局、貴方は何を求めているのです？」

その質問は解らないからというだけでなく、解ろうとする為になされたものか。

「貴方が誰かに恋をしているというならば、私はまだ納得出来まーした。勿論、私の美貌と魅力に敵う女性などこの世に存在しません。一時の気の迷いを解いてしまえば私の勝利は絶対でーす。ですから、そのような人間がホグワーツに居ないかどうか、私は注意深く観察して

きたつもりです。けれども——」

そう言つてフラーは、彼女にしては珍しい、皮肉めいた笑みを浮かべる。

「——私の直感から判断する限り、貴方が恋をしているような女性は何処にも居ませんでした。その人間の事だけで頭が一杯になつて、胸が苦しくなると共に何処か弾む気持ちになれて、一緒に居るだけで幸せを感じられる事を確信している人間。そんな相手は、貴方の視線の先に一切見当たらなかつたです」

「……………」

僕とハーマイオニーの関係を知っている者が居る。

生きていた時のセドリック・デイゴリーはそう言つていた。

しかし、彼の言によればそれは女生徒——兎に角男子生徒は外れるらしい——である筈で、そしてフラー・デラクールは同性に好かれる類の性格をしていない。殆ど一年間ホグワーツに居ようとも、フラーが僕の傍に纏わりついていいる事を多くの人間が知つていようとも、彼女に教えるような善意に満ちた人間など存在しない。

だからフラーが知らないのも当然と言えば当然なのだが、しかしそれでも彼女の言葉の調子は、僕にそのような安易な結論付けを許さない程度には、深刻な表情で紡がれていた。彼女は彼女なりの調査と確信をもつてそう判断したのだと感じさせる、心配に満ちた色を瞳に浮かべていた。

「第一の課題。私を褒めてくれた時の事を、周りが言う程に貴方が悪い存在では無いと知った時の事を、私は良く覚えています。そして勿論、ガブリエールの為にクリスマスに尽力してくれた時の事も。けれど貴方の事を知れば知る程、逆に貴方は遠い人のように思えてしまふ」

「…………変とか異常とかは良く言われますが、遠いという評価は少々新鮮ですよ」

悪く言われるのは慣れている。

しかしフラーの形で率直に僕を評価する人間は、周りには居なかつた。

「……ただまあ、そう感じられるのは貴方が真つ当である何よりの証明なんでしようね」

フラー・デラクールは無意識に人を怒らせる悪癖が有つて、高慢な自信家で、それに見合う桁外れの美貌を持つ女性ではあるが、それでも他のホグワーツ生やボーバトン生と違うと感じた事は無い。

あの校長に対するように、人間として狂つていると感じた事は一度も無い。

出来れば内心を口にしたいくも無かつた。

けれどもフラーを納得させる為には必要だと覚悟すべきだつた。

ただ一つ、彼女の心に更に傷を——それも普通の人間には耐え難い程の忘れらぬ傷を負わせる真似が正しいかどうかは判断が付かない。そして今後もしも付きそうにない。

「僕は将来誰かをこの手に掛けるでしょう」

僕の懺悔にフラーは一瞬驚愕を示し、しかし彼女は口を一文字に結ぶ事で受け止めた。

「部下が手を穢さないままで居るのを許してくれる程、我等が帝王は優しくもない。現在のスリザリンには犯罪者ばかり。同級生の親も、我が寮監も、善人と呼ぶべき人間達を少なからず手に掛けています。地獄という物が本当に有るとすれば、彼等は残らず地獄行きに違いない」

ルシウス・マルフォイ氏にしろスネイプ教授にしろ、彼等は故意に人を殺している。

それも戦場での倣いという高貴な言い訳の利く場面でも無い。非戦闘員に属する人間達を、彼等は間違はなく虐殺している。その非道を犯さない限りは同胞として認めてくれない血に飢えた組織が、過去の、そして現在復活した闇の陣営であり、彼等の裁かれるべき罪も明白であつた。

「このまま行けば、当然僕もその後を追う事になる。己が欲望と利益の為に、何の躊躇いも無く手を穢す。そしてその未来を僕は受け容れられている。しかし、自分で言うのも何ですが、それはやはり真つ当な精神性を持つ人間の在り方では無い」

「……まだ、貴方はそうしていません」

「けれども、それも悪くないと思ってしまうのも事実なのです。死んだ方が善である人間は、この世界に確かに存在している。そして己の死後にどうなるかまで考えられる程、僕は余裕が有る訳ではないですから」

アルバス・ダンブルドア校長、ハリー・ポッターとは違う。

彼等とて万能では無いが、彼等以上に、僕の手の届く範囲は限られている。

“英雄”である彼等は片手間に世界を変える事が出来るが、そうでない僕が何かを変えようとするのであれば、僕が有する多くを、或いは全てを賭けねばならないだろう。何せ、“その時”に彼等が敵に回る事は解り切っている。彼等は安穩とした現状維持を望む主流派に他ならず、不満を持ち変革を求める非主流派などでは決してないからだ。

セドリック・ディゴリー
死んだあの男はスリザリンこそが革新の指導者足る資格を持つように言っていたが、本当にそうで在るならどんなに良い事か。

「貴方は——」

「——許せない。一言で表現するならば、それに尽きる」
「……………」

「母は……育ての母は、僕がホグワーツに行く事を楽しみにしていました。産みの親も恐らくそうだった筈だ。そして彼女達の死後に会った、好奇と期待に眼を輝かせた“マグル生まれ”の子も余り変わらない。会う人間は誰もがホグワーツを、魔法界自体をこの上無く素晴らしい場所のように語り、しかし実際に視た今のソレらは——」

溜息を一つ。

去年、バーテミウス・クラウチ・ジュニアは僕の核心を見通した。

ならばまた逆も然りだ。今の僕には、彼が死喰い人に身を投じた心情を理解出来る。方向性が全く違っていたとしても、僕達は同種の感情を抱いており、故に共感も理解も簡単だった。

「——魔法は非常に興味深い。それは確かです。通ってみればホグワーツはそう悪い場所でも無く、そして奇しくも貴方が画策した聖夜

の革命こそが、その可能性の一端を見せてくれた。あのような楽しいな事にも使えるならば、成程、その存在の価値は有る」

パーティー自体以上に、あの準備の場面こそが正しく魔法で、奇跡が有った。

あれを見たのが僕だけだったというのは非常に勿体無く思えている。魔法によってあれだけ素敵な事が出来るのだと知ったのであれば、ホグワーツ生はもつと熱心に魔法を学び始めるに違いないからだ。

「けれどもこんな事を思う位ならば、そもそも僕は『スクイブ』として生まれた方がマシだったのかもしれないね。まあその場合、僕は生まれてから直ぐに殺されていたでしょうが、それでもホグワーツで良からぬ考えを巡らせる人間は一人減らせました」

「そんな酷い事が……！」

「出来る父親でした」

アルバス・ダンブルドア校長と違い、父は明確に悪の側に立っていた。

「父は父なりに母を愛しては居ましたが、子に対してはそうでは無かったですからね。ただ、そうであるが故に母は助かった事でしょう。勿論、それは以降の家畜同然の生活を意味する物で、普通の人間が考える幸せな結婚生活とは程遠かったですでしょうが」

愛する者を自らの手で殺したのを知ったからこそ、彼は自ら滅んで逝った。

御伽噺で語り継ぎたい位の因果応報であり、彼が自負していた小悪党らしい末路だった。リリー・エバンスの命を懸けた抵抗を受けて尚、未だ生き長らえ、ハリー・ポッターの命に手を掛け続けている闇の帝王とは違う。僕の父は歴史の表舞台に立てる程に強くなどなかった。

「そして、僕は間違いなくあの父親の子だと実感していますよ」

果たして彼の思想が僕に引き継がれたせいなのか、それとも血は水よりも濃いという事だろうか。

母達の気高さは頭では理解している。彼女達のような生き方が正

しいのだとも。

「幸せな家庭という物を見る機会が複数回ありました。デラクール家もその一つです。ええ、頭ではあのような光景が理想だというのは解っている。それはこの世で最も素晴らしく、人間らしいと呼べる物の一つなのでしよう」

グレンジャー家もまたそうだった。

「ですが、僕は自分がそうなっている姿を想像出来ない」

「――」

「伴侶に愛を囁き、子を慈しみ、己の家族を護ろうとする自分を思い浮かべようとしても、僕にはそれが出来ない。寧ろ脳裏に浮かぶのは全く別の像なのです」

今まで僕を異常だと評する人間は相応に居た。しかし、同時にそのような外部の論評は不十分だという思いは消えてなくならなかった。

僕は根本的な所で普通から欠けている。これを真に理解出来る者が居るとすれば、それは恐らく、あの偉大なるアルバス・ダンブルドア校長だけだった。

「意にならない伴侶を籠の鳥が如く捕らえ、手酷く扱っている自分。血の繋がっている筈の子を虐待し、死に追いやってしまったている自分。我が母君達の愛をこの身に知っていて尚、僕は心の何処かで彼女達の行為を冷笑してしまい、同じ事は出来ないと諦めている。」

――貴方にはそう見えなかったようですが、そんな人間が僕なのです」

言葉を喪っているフラァ・デラクールを真つすぐと見据える。

矜持と誇り高さ故か、フラァは唇を強く噛み締め、僕から視線を背ける事だけは何とか避けようとしていた。それでも彼女の眼からは何時もの澄んだ輝きが消え、瞳孔は動揺で大きく震えており、その中から掬い取れた感情は、まるで怪物を目の当たりにしたかのような恐怖だった。

一つの偉大な魔法

トム・マールヴォロ・リドルとはどんな人間だったのだろうかとかと改めて思う。

そしてアルバス・ダンブルドア。彼が教授の地位にあった時、将来敵として殺し合いをする羽目になる生徒に対し、果たしてどう向き合ったのだろうか。

正直な所、あの校長——教授は非常に冷淡な対応をしたように感じる。

彼は僕に対しても温かく接して来た訳では無いが、しかし僕以上に、アルバス・ダンブルドア教授はトム・マールヴォロ・リドルに対して強烈な嫌悪感を抱いた筈だ。彼の好き嫌いを選び好みの激しさ、そして過去の瑕から来る支配への拒否反応は、少ないながらも大きな彼の欠点の一つと言える。それを踏まえて予想するならば、彼は将来史上最悪となる芽を持った少年に対し、教職失格とも評し得る行動を取ってしまったのかもしれない。

けれども、アルバス・ダンブルドア教授は何処まで責任を負うべきだろうか？

将来闇の魔法使いとなるトム・マールヴォロ・リドルを“更生”出来る可能性があるとすれば、今世紀で最も偉大な魔法使いとして対等以上足り得た彼だけだったであろう。

しかし教授が御優しい対応をしなかったが為にグレてしまったかの如く考えるのは、たかが一人の人間の影響力を過剰に見積もるもので、やはりトム・マールヴォロ・リドル個人への侮辱であり、彼が知れば激怒するのではなからうか。

過去のトム・マールヴォロ・リドルにしても、世間一般で言う悪の道を進むに際して相応の決意と覚悟が有った筈だ。アルバス・ダンブルドア教授が居ようと居まいと、みぞの鏡の中に喪った家族の姿を見出せなかったであろう少年の道筋は、大きく変わりなどしなかった。

そして彼程振り切れる気はしないにしても、僕の側にも同じ事が言える。

人一人の人生を丸ごと変えてみせた恩師。

そのような偉大な価値を有する人間が世界に存在するとして、それを持った事の有る人間は果たしてどれだけの数が居る事だろう。少なくとも、僕はそれを持っていないと言える。

僕はスネイプ教授やミネルバ・マクゴナガル教授に多分に感謝はしている。しかしながら、彼等が僕の根幹を変えてしまったのだと思つた事は今まで無いし、これからも多分無い。

そしてそれはアルバス・ダンブルドア校長も変わらないのだ。彼の存在感は僕の Hogwarts 生活中で非常に大きい物であり、今後の己の方針を決する上で不可欠の存在とも言えたが、仮にそれが無かつたとしてもそう変わらない道を、人殺しの道を歩んだだろう。

現在のステイブ・スチュアート・レッドフィールドを構成する最も大きな要素は、やはり我が憎むべき父君、ステイブ・レッドフィールドであるのだから。

故に――

「そんな考えは禁止です……！」

気付けば、彼女の顔が視界に広がっている。

彼女は椅子から半ば立ち上がり、机の上に身を乗り出して、両手で僕の頬を引っ張っていた。

「貴方は常に思考を悪い方向に働かせる癖が有ります！ それは不健康で、非生産的です！ 少なくとも、私の前ではそんな顔もして欲しくは有りませーん！」

「……どう主張されたとしても、僕の本質は変わりませんよ」

優しく手を払いのけつつ言えば、フラァはいやいやと首を大きく振った。

「それでもーす！ 絶対に！ 断じて！ 許さないでーす！ 貴方は色々訳の解らない事を宣い、散々面倒臭がりながらも、最後には私達の願いを叶えてくれる男性で無ければなりません！ 意味も無く人を傷付ける貴方は解釈違いでーす！ そんな未来は訪れては駄

目に決まってまーす！」

「……また貴方は無茶苦茶を言う」

泣き喚くまではしなかったが、それでも涙が浮かんでいるのに変わりはなかった。

どちらが年上だか解つたものではないと苦笑し、彼女の眦を親指で拭う。折角綺麗に化粧をしているのに、こんな事で崩してしまうのは勿体無かった。

「貴方の願いだとしても聞けるものと聞けないものが有る。そして、これはどう在つても聞けない類ですよ。ホグワーツはそれを僕に与えなかった。最初から願つてもいませんでしたけどね」

「——っ。なら代わりに答えて下さい」

「……何をです？」

呆れながら問えば、彼女の問いは直ぐに寄越されない。

もじもじと指を擦り合わせ、キヨロキヨロと視線をあちこちに彷徨させた後、助けが無い事に途方に暮れたような表情を浮かべてから、彼女は漸く口を開いた。

「……わ、私は今、個人的に英語を教わっています。それも、貴方より親切で、人当たりが良くて、周りからの評判も素晴らしい、貴方と全く反対のような男の人からです。それを聞いた貴方は嫉妬してくれまーすか？」

「——まさかとは思いますが」

顔を赤らめながら紡がれた真つ直ぐな言葉に、遅ればせながら気付いた。

「……貴方は本気だったんですか？」

「本気で！ 無いなら！ どんな！ 気だと！ 思つて！ 居たのですか！」

「痛……痛たつ。てつきり、故郷を離れて適当に遊べる男を探していて、それかたまたまヴィーラの力を制御する実験台にも都合が良かったからなのかと——痛い。ええ、僕が悪かったですよ。悪かったから叩くのを止めて下さい」

「私は！ そんなに！ 軽薄では！ 無いでーす！」

降参の台詞を述べても、御立腹のフラーは中々腕を叩くのを止めてくれなかった。

先程までの涙は何処へやら。今彼女の顔が真っ赤なのは、それが燃え上がる程の怒りに由来しているというのは明らかだ。叩きつけられる力も今までで一番強い。

……まあこの点に関しては、彼女の方が遥かに正当性を有している。ガブリエルの方は割と本気——と言っても、あくまで九歳の子供が背伸びした物——であろうとは受け止めていたのだが、そうであったのは寧ろ姉の方だったらしい。

「……それで、どうなんでーすか？」

「——嫉妬は出来ませんよ」

期待の上目遣いを向けて来る彼女に、しかし望まれた言葉を紡ぎはしない。

考える時間は不要だ。やはり答えは初めから決まり切っている。

「幸せを考えるならば、貴方はその男性とくつつくべきだ。僕は絶対に、何処かで貴方の事が頭から抜け落ちる。最後の最後には己が何に成るべきかではなく、何に成りたいかで道を決してしまう。誰かに予言されるまでもなく、貴方を傷付ける事でしょう」

アルバス・ダンブルドアは確かに多くの業績を残してきたかもしれない。

ゲラート・グリンデルバルトの野望を挫いた者として。闇の帝王に對抗した者として。今世紀で最も偉大な魔法使いとして。そして他ならぬホグワーツ校長として。総合的に見れば、彼よりも魔法界の為に生きた人間などそう多くないだろう。

けれども、彼はたった一人の願い、幼き少女が抱いていたであろう祈りに応えていないだろう。結局彼の頭の中には、自分の母親と同じ行為——愛する者の為に己の人生を捨て、殉じようとする考えなど欠片も無かった。

『間違いなく君もそうなる』

教授らしからぬ呪いめいた言葉は、しかし先達としての真摯な忠告でも有る。

だが、やはり僕に響く事は無い。結局の所、僕は利己的で自分本位であるからだ。

仮に母達が生きていれば、僕の選択を厭うかもしれない。その想像が出来たとしても、彼等が死人であり文句も言えない身である以上、最後に止まれる気もしない。

「……現在進行形で、貴方は私を傷付けています」

「先延ばしにすれば更に手酷いモノになりますし、この痛みとて何れ忘れる事が出来るでしょう。馬鹿な男に引つかかろうとしたという笑い話にする日も来ます。……最早質問する必要すら感じませんが、今後の一生を閉じ込められて過ごす羽目になる事を歓迎などしないでしょう？」

「——」
フラァは何とも言えない顔で僕を見返した。

「そういう事です。元々、僕の根底には闇の帝王に勝って欲しいという思いが有る」

一人の少女の価値さえ無視出来るならば、躊躇いなくそう賭けていた。

「『純血』主義が生む狂気、或いはサラザール・スリザリンが遺した理念に興味は持てなくとも、僕は理性的に闇の勝利を願う事が出来る。それは善良な貴方とは決定的に違う。そこら中で拷問と虐殺が繰り返され、悲鳴と啜り泣きしか聞こえない世界を、ある一点が為に肯定し得ると考えてしまう」

「……それは貴方の求める世界、目指す場所とは違う筈です」

「確かに違いますが、肯定可能では有りますよ」

「っ。数千の、罪無き人々が死ぬのですよ。貴方はそれを——」

「——見過ごせる。僕はその意味を見出してしまった」
必死に弁護しようとするフラァには悪いが、どう在っても揺らが無い。

「帝王が敷く統治は考えるまでもなく独裁でしょうが、その反射的効果、或いは不可避的な帰結として、彼による体制確立には揺るがぬ歴史的価値が付随する。つまり、どういう形態であれ、魔法族は初めて

統一的な中央政府と呼べる代物を目の当たりにし、そしてその力を知る事になる」

「……………え？」

「貴方の困惑も解りますよ。18世紀末の独立戦争や革命戦争。それらを直接経験していない魔法族は、果たしてどういった政体を志向する事になるのか。それに思いを巡らせた事の無い人間に、このような見方は出来無い」

つくづく魔法界は歪である。

魔法族にとって“マグル”は最も近しく、善き隣人で在り続けた。

であれば、国際機密保持法やラポート法の強制力が存在していた所で両者の交流を完全に断ち切る事など元より不可能だった。はみ出し者や変わり者、故意に規則を破ろうとする者を根絶する事など出来はしない。更には両方の血を引く半純血、どっちつかずの魔法族も増え始めた。故に自覚的無自覚的を問わず、“マグル”の常識、思想、そして概念は魔法界へと確かに——そして半端に——持ち込まれてしまっている。

純血主義の再流行にも同様の事が言える。

彼等が血を誇っていたのは今に始まった事では無い。“純血”達が輝かしい家系図を作る事は早くから行われて来たし、家系に関する研究をした書籍も相応に存在していた。だというのに何故、カンタンケラス・ノットが著した『純血一族一覽』は、純血以外にも存在を知られる程の爆発的な反響を齎したのか。その点に考えを巡らせないからこそ、差別は良くない程度の薄っぺらい否定しかグリフィンドールには出来ない。

だからこそ僕は闇の帝王の勝利、旧態依然とした魔法界の破壊をある点で望んでおり——ただ、あの校長すらも本質的に理解を示そうとしなかったのだから、僕の方が考え過ぎで、致命的な見落としをしており、道を間違っている可能性は有り得る。

しかし、その審判が下るのは、やはり今では無いだろう。

それはあくまでその国の魔法界、将来の魔法族達によって為されるべき事項である。

「まあ僕の私的な予想は脇に置いておきましょうか。ただ、仮にそれが正しくなくとも、帝王の支配が未来に与える影響は期待出来る。一国丸ごとを地獄の釜に落としたのならば、全世界の魔法族の眼も醒めてくれるでしょう」

「……………」

「あの校長は確かに問題も多かった。ですが、それでも彼は一貫して善の側に立とうとし、故に、この魔法界の致命的な破綻だけは避けられた。けれども彼と真逆の路線を行く大魔法使いが代わりに君臨すればどうなるか。その回答たる獣ビヒモスを見れば、どの魔法界も我が身を顧み、改革を急ぐべきだという危機感を抱く」

現状の魔法族は、自分達の力——魔法の全能性を信じてしまっている。

啓蒙主義と科学万能、ヒトの進化と進歩を妄信していた二十世紀初頭の「マグル」と殆ど同じ道を進んでいるのは、やはり同じ人間だという事なのだろうか。そしてその前例を踏まえて考える限り、このまま行けば終着点は行き詰まりであり、一つの絶望である。

「マグル」は既にその難題に直面し、遅々とした歩みながらも止揚と解決を図ろうとしているが、そもそも魔法族は問題に向き合う地点にすら立っていない。

「二国数千の魔法族の命を供物とした盛大な社会実験によって、全世界数十万の魔法族の命が救われる。部分で見れば暗黒の時代が到来したとしても、総和で見れば種族の明るい未来の可能性が開かれて、大いなる善の理想は達成される。何故そうなるか……というより、何故それを僕が期待するか。貴方は全く理解してくれないでしょう？」

「——っ。確かに、解りませんが。でも……………」

「ならば、やはり共に居ない方が良い。何も考えずアルバス・ダンブルドア校長側に立つ方が、貴方は真つ当な幸せを掴む事が出来る」

「……………では、貴方は」

「既に陣営は決めました。僕は明確に彼と対立する側ですよ」

あの校長の側に着く事は出来ない。

やはり彼の勝利には懐疑的なままだ。戦中ではなく、寧ろ戦後にお

いて。

君臨しつつも魔法大臣を拒絶する歪さが、来世紀の魔法界に破滅を招くと考える。

「……貴方はダンブリードールに勝てるのでーすか？」

「それは土台無理な話です。彼は百年以上も勝ち続けて来たし、そしてこれからも勝ち続ける事でしょう。あの魔法使いに戦場で真つ向から勝ち得る存在が居るとすれば、この時代では唯一人、闇の帝王だけだ」

「……ならば何故戦おうとするのでーすか？」

「彼にも間違っている点があると確信し、そして同時に彼の瑕が齎す歪みを——彼が自ら負けに行ってくれている事を知るからです。確かに“その時”が来る可能性は高くも無い。しかし、それが訪れてくれた場合、僕は確実に行動に移すでしょう」

結局、彼が国際機密保持法を聖典化した時点で互いの陣営など決まっていた。殆ど八つ当たりめいているとしても、その歴史的事実が無ければ我が母上達も死ななかつた。僕のような存在を残す事も有り得なかつた。それは紛れもない事実なのだ。

溜息を一つ吐き、更にもう一つ重ねて吐く。

「——良き想い出は良きままにしておくべきです。それが御互いの為だ」

フリー・デラクールがわざわざ僕の下へと赴き、如何に言葉を尽くそうとも、結論が変わる事は有り得ない。互いの道が交差したのは奇跡で、しかし奇跡で有れば何度も起こすべきでは無い。

「……少々意外でーす。まさか貴方が、私達との想い出を良い物と考えているとは思っていませんでした」

「言葉の綾に過ぎませんが、貴方が満足するなら認めても構いませんよ。邪険にし続けた身で言うのも何ですが、貴方と居なければ去年のような経験をする事も無かつた。所謂優越感というのも抱いていたのかも知れません」

「……ならば去年の内にもっと嬉しそうにして欲しかったでーす。そして今更そんな事を言うなんて、貴方は本当に酷い男の人でーす」

「今更気付いたのですか？　僕は貴方と会った時から既に酷い人間でしたよ」

僕は軽く微笑んでみせたが、フラーは笑いを返そうとしなかった。何処か憐れむような色を浮かべて、澄んだ蒼色の瞳で僕を捉え続けていた。

「合理性だけを考えるならば、貴方の好意を受け容れるべきなのは明らかだ」

「——っ」

「遠くない未来、貴方が正気を取り戻した時。僕達の関係は当然に破綻する筈です。だとしても、貴方を都合良く利用すれば多くの事が可能であり、なればやはり可能な限り破綻まで長く引き延ばす努力をすべきでしょう。ガブリエルの事も視野に入れてしまえば、貴方がたの好意を利用し続けるべきだと言えるのです」

少なくとも闇の帝王については、その純血思想に融通が利くと解っている。

リリー・エバンズですら生を保証された。真の“純血”主義者では絶対に許せない女——純血の魔法族と結婚し、半純血を産む事によって魔法界に血の汚染を生じさせた害悪——を殺す事に拘りなどしなかった。仮に口約束で一時的な猶予としか考えておらずとも、闇の帝王が本来踏み越えるべきではない一線を越えたのは確かであり、その意義は本人が考える以上に大きい。闇の帝王が抱く一貫性は、純血主義の部分については要求されていない。

なればヴィーラの血を引き、そして僕が会った中で最も美しい女性であるフラー・テラクルであれば、如何様にも言い訳をする事は可能だろう。純血主義の趣旨からも、彼女と子を作る事は肯定し得る理屈を導き得る。

勿論、闇の帝王の好意を僕が獲得するという前提が不可欠であるが、これはあの校長に勝利するよりも遥かに期待が持てる。良くも悪くも、僕は“半純血”^{彼と同じ}でもあるからだ。

しかしながら。

その道を選ぶという事は、フラーを危険な道に招き入れるのと同義

である。

自分の事ですら満足に出来ていないというのに、彼女を他の誰からも——闇の帝王も含めて——奪われないように護り、共に居続ける事は、どう考えても出来る気がしないのだ。

「貴方からの好意を僕が嬉しく思っている。それは確実なのでしよう。何せ貴方をこうして遠ざける事について、僕は一切の迷いも躊躇いも覚えない。悪い男に引っかけかけた母のような例を生み出さずに済む。その道を選択出来る事を——僕は本心から歓迎出来る」

彼女がどうして僕に惹かれたか。

その本質的な理由を聞き糺したいという気持ちは有ったが、それは学術的興味に近いモノで、是が非でも聞いておきたいと思う部分では無い。そして、拒絶した相手にそれを聞く事が酷であるという常識位は僕にも有る。

だから、俯いてしまったフラァーから逃げるように視線を逸らし、ストリートへと視線を戻した。会話までは聞こえずとも男女の諍いは注意を引いていたのか、バツの悪そうに足早に去っていく二、三人の通行人を見送りつつ、彼女の反応を辛抱強く待った。

重要なのは御互いの関係が正しくないという事であり、フラァーに受け容れて貰う事である。そして、時間は現状多く残されており、時間を費やしてでも解決すべきだった。

そしてとうとう、彼女は呟くように言った。

「……解り、ました」

「そうですね」

多少ズレこみはしたが、四年目の清算は確かに終えられたようだ。そう安堵の息を吐く。

僅かばかり期待していたような寂しさを感じる事も無い。あの父上は要らぬ遺産を残してくれたものだとも思うが、しかしそれが無ければ、僕はフラァー達と関わりもしなかった。

やはり因果は度し難い。

あちらを立てればこちらが立たない。最善の選択肢を採り続けた世界——僕がスリザリン以外に組分けされ、ハーマイオニーやフラールと知り合い、そしてあの校長と共に戦う世界など架空の存在でしかないのだろう。スリザリンに組分けされねば今の状況は無く、得た物の殆どを喪っている。世界は何処かで幸不幸が釣り合うように出来ている。

「ならば、貴方が今やるべき事は明らかでしょう」

「……………」

「早々に荷物を纏め、この国から出ていく事です。グリーンゴッツのゴブリン共に待ち惚けを食らわせるなど非常に些細なものだ。自分達は、決して滅ぼされまいだろうと高を括っている。魔法史を多少なりとも学び、先の戦争での闇の帝王の行動を見れば、そんな温い事は言っていられ——」

「——解ったと言いましたが。納得したとは言った記憶が無いです」

……暫く会わなかったから忘れていた。しかし忘れるべきではなかった。

物分かりの良いフラール・デラクールという存在など、そもそも架空であるのだと。

「そもそも貴方自身、私に指図する権利が無い事を認めた筈です。たとえ貴方が私達と共に居続ける事を拒否しよう！ 私の告白を貴方が断——」

フラールはそこまで言葉にし、しかし口を半開きにしたまま制止した。

「——告白？ こく、はく？ ……私は貴方に告白したんですか？」

「……いや、僕が答えるのが当然といった顔で聞いて来ないで下さいよ」

それこそ僕の知った事では無い。

「そもそもこの手の色事には慣れてるんじゃないですか？」

「私は何かをした事は有りませーん。黙っていたら勝手に寄ってくる

のが普通の男でーしたもの。ウンザリする程入れ食いでーす」

「……………貴方の女性からの評判が最悪から動かないのは、やっぱり妥当だと思いますよ」

彼女の妹は割合周りと上手くやれるようだというのに、この姉の不器用さは何なのだろうか。ここまで来ると確信的とすら思えて来る。

「とにかくー、でーす」

仕切りなおすように言った後、彼女はテーブルに乗り上げるように上体を近付けてくる。

正しくはそうしようとした。しかし、抱き着くには未だ机上に鎮座するティーセットが邪魔だと感じたらしい。苛立たしそうな顔をした後、彼女は椅子を僕の隣に動かし、抱き合うように身を寄せてきた。僕ので承も無く、流石に注目してしまった周囲の視線も何のその。唯我独尊という言葉が良く似合う女性だった。

するりと腕と指を絡ませながら、先程よりずっと近い距離で、フラーは囁くように言う。

「たとえば貴方が私に振り向いてくれる事が無いとしても、変わらない物が有りまーす。それは貴方が私達に多くを与えてくれたという事で、そして私達は少しでも多くを返したいと思っているという事でーす。それはこの瞬間も変わりませーん」

「……………御言葉ですが、僕はそれ程大した事をした覚えは——」

「——それこそ御言葉ですが、貴方にヴィーラの血を引く女の子の苦労は解りませんわ」

「……………」

それだけは流麗な発音で、痛烈かつ強制的に彼女は言葉を封じる。

「貴方は世の中の男よりも多少賢いようですが、それでも私達を取り巻く世界への理解は足りませーん。当然御存知でしょうけど、純粋なヴィーラは怪物的な見た目をしていまーすね？ そんな私達に全くの本心から偏見が無い男の人は、果たしてどれ程貴重な事であーるか」

「……………僕は偏見が割と酷い方だと自認していますけどね」

「ええ、そうですね。貴方は人間自体が満遍なく好きでないよう

ですから」

「……………」

女性というのはどうしてこんなにも恐ろしいのだろうか。

特にフラー・デラクールは論理的な人間とは程遠いというのに、その割に本質を見逃してくれはしない。男女同権主義者には怒られるかもしれないが、やはりX染色体を一個しか持たない者では理解出来ない世界が現実に存在すると思う。

「ただ、そんな貴方と言えども、今更私と貴方が『善き友人』である事まで否定はしませんよね？ 勿論、貴方が冷血であるのも私は良く知ってますけれど」

澄んだ蒼の瞳が怪しく、危険な色を帯びる。

そしてこういう時、僕は彼女を酷く魅力的な女性だと感じてしまう。周りが何と言おうと、どう見られようと、己が己である事に胸を張り続けられる彼女に尊さを見出してしまふ。

炎のゴブレットに選ばれた人間はどいつもこいつも眩しくて、嫌いだった。

「……………今までの話を聞いていなかったんですか。今後は如何なる関係だろうと——」

「——未来の事は関係有りません。今この瞬間の事を聞いていま——す！」

「……………はあ」

降参だ。

「現状、貴方が僕に最も近い友の一人であるのは間違いありません。これで良いですか？」

「……………一人という部分が気に食わないです」

「この流れでガブリエルを外す訳には行かないでしょうに……………」

それでも暫く不満げな表情のままだったのは、まさか妹と張り合っているのだろうか。ならば彼女は自分の妹が何歳であるかを思い出すべきである。

「……………まあ、少々容赦してあげますが、貴方がどう言おうとも私の行動は変わりませーん。そもそも貴方に責任の全てを取ってもらおう

と考えているのでは無いのですよ」

寧ろそれは私への侮辱でーすと、フラーは華やかに微笑んでみせた。

「私が英語を上手くなりたいと考えたのは、言ってみれば貴方のせいだ。言葉というのは大事です。伝えなければ伝わりませーんし、伝わらなければ伝える意味が小さいでーす。去年、そして今も、私はそう痛感していまーす。もっと私の英語が上手かったのなら、もっともつと伝えたい事を伝えられたのではなーいかと」

「……確かに貴方の英語は多少変では有りますが、十分喋れている範疇だと思えますけどね」

「ええ、そうでしょうとも。だから、私は正しくは、今自分の英語が間違ひなく下手だったという事を——言い訳が出来たのだという事を確認したのでしよーうね」

「……………」

上達が目的ではなく、上達の余地が有ったのを知る事が目的。

そんな変わった論理を彼女は持ち出したが、さりとて理解出来ない理屈では無かった。それは僕も似たような事をしてきたからで、ホグワーツに在学し続けている最大の理由でも有る。

「私がこうして戦争中の国に居るのも、貴方との友誼を続ける事だけは何としても叶えようとしているのも、それは全て私の選択で、私の人生です。どんなに私が求めても他人以上になる気が無い貴方がどうしようとするのは、酷く傲慢という物でーす」

「……だとしても、ここに貴方の求める幸福は有りませんよ。アルバス・ダンブルドア校長が勝とうが負けようが、この魔法界に明るい未来は訪れそうにない」

「自ら不幸なろうとしている人には言われたくありませんね。そしてそんな未来が見えているのに、貴方はこの地を捨てようとしなないではないでーすか」

「僕の方は……単に意地みたいな物です」

ハーマイオニー・グレンジャーという少女が始まりで、続ける全ての筈だった。

しかし、何時の間にかそうでなくなってしまった。根本が変わらざとも、ホグワーツが僕を何も変えなかった訳では無い。その事を想えば、クイリナス・クイレル教授と言葉を交わした事こそが間違いだっただのかもしれない。言わずと知れたあの大魔法使いではなく、他ならぬ彼こそが、ホグワーツの僕に呪いを残して行つた人間だった。

「しかし、フラー・デラクール。貴方には拘るモノも無い筈です」

「いいえ、有りませよ」

「拘つた結果、貴方が何も手に入れられないとしてもですか」

「人の関係は単純なゼロサムで成り立っている物では無いでーすよ？

勿論、貴方が私を望み、求めてくれるならば全く問題有りませんけど」

フラーは僕へと寄りかかり、僕の右肩に頭を乗せる。

細く光沢の美しい銀髪が僕の顔を撫でる。香水と、彼女自身が纏う匂いが鼻を擽る。

しかし、それもほんの僅かの間。彼女は僕の右腕を優しく撫で、少しの逡巡の後に抓つた後、漸く身体を離れた。相変わらず普通の友人の距離から程遠かったが、それでも彼女が然したる理由無く距離を空けたのは、僕の記憶する限りでは殆ど初めての事だった。

「ですが、これ以上は貴方を困らせてしまふみたいでーすね」

瞳に読み取れる感情とは真逆の、輝かんばかりの笑顔をフラーは浮かべる。

「確かに私が惹かれたのは、我が道を行く、全くもって私の意にならない男の子でーした。そんな貴方が変わってしまったえば、私は途端に恋心を喪つてしまうかもしれない。そして私は良いレディーのつもりでーすね。他人の願いを邪魔などはしたくありませんし、重荷にもなりたくないでーす」

「……………」

「但し一つだけ。ガブリエルとの手紙は続けて下さい。望めるならば

……………」

……私とも」
声色だけは弾むように、銀色の姉君は言った。

「もう少し、ほんの少しで良いのです。まだ見える形で戦争が始まっ

た訳では有りませーん。少し時間は掛かるでしょうが、ガブリエールにもこれを受け容れざるを得ない日が来まーす。それまでは私が窓口として、責任をもつて届けます」

拒否するのは非常に簡単であり、最善の道の筈だった。

その覚悟は去年度末から、いや彼女と関わった時から決めていたつもりだった。

けれども、これがフラァーなりの最大限の譲歩だということも伝わって来た。それと同時に、これを拒否した場合、僕に対する彼女の信頼を決定的に喪失するであろう事も。

「……貴方がたは——貴方は、それで良いんですね？」

「ええ。私の母も、父も、この件に関しては強く理解と賛成を示してくれていまーす。そして私も確信しているのです。やはりガブリエールにとって貴方との時間は何よりも大事だと。たとえば、最後には貴方が何れ去る事になってもでーす」

フラァーは胸を大きく張って、自信満々に頷く。

「——それに。私は貴方と違って、これからの事を余り心配していませんよ」

だって、と彼女は告げた。

くるりと回りながら立ち上がり、僕の手を引き寄せながら。

「万が一の場合。散々文句と不平を漏らしつつも、貴方は私達を護つてくれるのでしょうか？」

「——」

「ならば、私達に心配など有りませーん。私達が見出したのは、それだけの大きな能力と、相手に深い情愛を向けられる人でーす。であれば、〃例のあの人〃や死喰い人など恐れるに足りませーんね。なんせ私達にとって貴方に悪い男性は、この世に居ないのですから」

本当に。

フラァー・デラクールという人間は強かった。

この世界に本物の魔法使いが居るとすれば、彼女は間違いなくその一人だろう。

「ところで私はまだ答えを——これからも貴方が手紙を出し続けてく

れるかどうか、善き友人で居てくれるかどうかを聞いていませんが？」

「……ええ、僕の負けですよ。貴方がたの望み通りにしましょう」

「どうせ勝つなら違う形で勝ちたかったのでーすけれど。まあ言わないでおきまーす」

「完全に言ってしまったているじゃないですか……」

「御返しでーす。存分に後悔と罪悪感を抱くが良いでーす」

結局、僕は文字通り日が変わるまでフラーに連れ回された。

彼女のせいで “マグル” 流のデートを一生分知る羽目になったと言っても良い。

もっとも、知った所でこの経験を今後に生かしようがない。精々ビクトール・クラムに教えてやる位——というのはまあ下らない冗談である。そんな馬鹿な夢想をする位には、この日の事を誰かに語る機会が訪れるとは思えなかった。多分、墓まで持っていく類の話だろう。

日の変わりの鐘を待つまでも無く、彼女には、勿論僕にも魔法は掛かっていない。彼女は硝子の靴を履いてもいないし、その御伽話をそもそも知っている訳が無い。

それでも彼女が完全に一日を終えるのに拘ったのは、可能な限り多くの想い出を作ろうとしたからであり、また解りやすい形で区切りを付ける事を望んだからでもあるだろうか。

午前零時を過ぎ、それまで触れ合っていた身体を離れた後。

「——さようなら、ステファン」

フラー・デラクルはそれまでで一番の笑顔と共に別れを口にして、何の未練も名残惜しさも見せる事なく、見事に僕の下を去って行った。

再出発

キングズクロス駅のプラットホーム。

もう五年目の九と四分の三番線は、しかし今年は大きく雰囲気が一変していた。

“マグル”側は相変わらずの日常のようだったが、魔法族がたむろする側は違う。

この魔法界が既に戦時下に在るといふ現実を受け止めている人間はやはり少数派らしかったが、それでも最低限現在が異常事態であるという認識をしている魔法族は、ダイアゴン横丁よりは多いようである。

それは別に不思議でもなんでもなく、安全措置が施されていた筈の試合で一人の生徒が死に、更にセドリック・ディゴリーホグワーツ校長がアルバス・ダンブルドア国際魔法使い連盟、魔法大臣、そして日刊予言者新聞によつて強烈に批判されているともなれば、子を持つ親が心配を抱くのは至極自然な成り行きだろう。

僕がホグワーツ特急に乗り込もうとしている際も、乗り込んだ後に窓から観察していた間も、プラットホームのそこら中で多少大袈裟とも思える家族の別れと、また喧嘩未満の口論が繰り広げられているようだった。

更に今年特徴的だったのは、散見される各集団の人数だったかもしれない。

プラットホームで友人達を待っていた集団も、各コンパートメントに座った団体も、各々の構成人数がやけに少ない。一言で表現するならば、今年は細分化されている。そしてそれは現在の魔法界が分断されている事の反映だった。

闇の帝王の復活を信じる者達と信じない者達。

それまで友人関係で有った者同士でも、親の仕事や自身の有している思想の差異により、去年まで存在していなかった対立と不和が生じている。故に、例年通りに友達として待ち合わせる事が出来ないし、ホグワーツまでの列車旅を共にする事が出来ないのだろう。コーネ

リウス・ファツジ大臣の誹謗中傷の成果がそれなりに現れているという証明でも有る。

他方、一集団の構成人数が変わっていない、寧ろ増えているようなのはスリザリンか。

元々集まる傾向が有り、去年の件で一部からは拒絶反応まで示され始めたらしいスリザリンは、始業一日目から早くも寮内での結束を高めようとしているようだ。

しかもチラリと横目で見た限り、彼等の集団は例年の派閥——死喰い人の親を持つ人間が殆どである。聖二十八族“純血”は流石に別格みただが——すら崩していた。改めて仲良くしようという事でも、余計な事を考えていそうな人間を炙り出そうという腹でも有るのだろうか。呑気な他寮と違って誰もが生き残りの為に必死のようであり、また陰気で排他的な我が寮らしくて何よりだ。

もっとも今の僕は、そんな彼等に合流する気になれなかった。

適切ではないと解つていても、その手の政治ごっこに興じる気持ちの余裕が無かったのだ。

未だ新学期は始まってすらいないにも拘わらず、既に憂鬱で、気怠かった。

確かに今年の夏休暇中は忙しく、疲れる毎日ではあった。変わらぬ礼儀作法の講習に始まり、こんなに頻繁に開催していて良く飽きないなどと思えるパーティー、魔法省見学やマルフォイ家の得意先巡りと散々ドラコ・マルフォイに色々と連れ回され、目まぐるしい日々だった。その分本を読むのに費やす時間が減った為、今までの夏休暇より有意義で有ったかと言えるかは微妙だが、少なくとも濃厚ではあったと言えよう。

だがその渦中に在った時でさえ、こんな気分にはならなかった。

既にこんな状態なのは、新学期が生徒へ運んでくる病気に由来するものか。それとも、約十一時間程前までフラーに連れ回されていたが為の後遺症か。

スリザリン生達の横を無言で通り過ぎた際に止められすらしなかったのは、今日の精神状態からすれば有難かった。彼らが声を掛け

て来なかったのが如何なる理由に基づくモノで有ったとしても、自分だけの時間を確保する事が出来たからだ。

——といっても、所詮は一時的な物であるが。

一人コンパートメントに座り、ぼんやりと通路を眺めながら自嘲する。

こんな事をしていられるのも、ドラコ・マルフォイが仕事だというのが大きい。

彼は順当に監督生となったらしく、登校駅到着後速やかに特別車両とやらに集合する事になっている——そう伝えてきたのは昨日の手紙だった。そしてそれが齎す幸運は、待ち合わせて一緒に特急へと乗り込むという友人みたいな真似をせずに済む事と、朝一で挨拶に行っても会えない可能性が高いから時間潰しをしていたという言い訳——四年の付き合いであり、単なる口実に過ぎないと彼に伝わるのは承知している——が使える事だ。

が、それは新学期の挨拶を先延ばしに出来るという事で、回避出来る事を意味しない。

新監督生の集まりにしても互いの顔合わせ等が主であろうし、ドラコ・マルフォイが最初の車両巡回担当にならない限りは、直ぐに彼はスリザリンの群れへと戻る事だろう。その際に僕が居ないというのは、被庇護者である手前、やはり具合が悪いように思える。

まあ流石にホグワーツ生活が再開した以上今夏のように殆どの時間共に過ごさねばならないという事も無く、ビンセント・クラップとグレゴリー・ゴイルが元の鞆に収まるのだろうか——今年は今までの四年間と色々状況が異なっているのは確かだ。ドラコ・マルフォイの御機嫌伺いと、学期が始まって以降彼がどうしたいかの把握は必須だった。

……嗚呼、そう頭で理解していて尚、「日常」に戻れる気がしない。

この二ヶ月それが普通となり、今後も続く事に疑問すら抱かなかつたというのに、今はこうして非常に億劫だ。特急に乗っても本を開く気になれないのは初めての経験で、何もせず通路を眺める以外にやる気が湧かない。

既に特急の出発時刻が近いからか。それとも魔法界の分断によりコンバートメントを一緒にしたくない人間が増えたからか、或いは忌避され始めたスリザリンが複数の車両を丸ごと占拠しているからか。御苦労な事に最後尾車両まで席を探しに来た生徒をちらほら見掛けるようになった。

彼等はコンバートメントをドアの窓ガラス越しに覗き込み、僕の顔を見て驚きや恐怖の表情を浮かべ、僕が一人で座っているからと相席など申し込む事もなく足早に去っていく。そんな生徒に僕も声を掛ける事もなく、ただ見送る。幾度となく見送る。見送——

「……………あ」

見送った生徒の数は二桁までは行かなかっただろう。

ただ、それは今途切れてしまった。僕と視線が合ってしまったその人間は、眼を見開いて小さく声を上げ、通路の真ん中で立ち止まってしまった。

淡い銀色の瞳と、暗いブロンドの髪の少女。

生来の顔立ちの良さを台無しにする、身嗜みを整える事への無頓着さ。バタービールのコルクを繋げたネックレスを始めとする奇想天外な恰好。そして特徴的な、まるで歩きながら夢を見ているような茫洋とした眼差し。

それだけで彼女が誰であるかを特定するには十分である。接触したと言えるのは三年前に一度だけだが、それでもその名を忘れる訳が無い。

あれからレイブンクローに組分けされた女生徒、ルーナ・ラブグツドだった。

彼女との出逢い方は割と印象的だったが、それでも接点はその一度だけだ。

あの年は確か助けを求めて話し掛けて来るのでは無いか——そして僕がそれに応えられないのは明らかであり、非常に困らされる事が

予想された——と警戒していたが、レイブンクローに組分けされた彼女は、スリザリンの腫物的存在との接触を避ける程度には賢明だったらしい。あの年は一年の大半をバジリスクがうろついており、校内における生徒の移動の自由が制限されていた年であったという理由も小さくないかもしれない。

もつとも僕に近付かない賢明さは彼女の孤立を防ぐのに何の役にも立たなかったようではあったが、何であれ、彼女は僕に話掛けて来ようとしなかった。ホグワーツ特急での出逢いは僕の、或いは彼女のホグワーツ生活に何か変化を及ぼす事は無かった。

そして彼女が死喰い人向きの人間なら今年声を掛けようという発想に至ったかもしれないが、正直全くそう見えない。というか、その検討がそもそも頭に浮かばない位には、三年前に認識した彼女の性質は自分達から程遠かった。

故に今まで存在を忘却していた位なのだが——果たして何の思惑か、ルーナ・ラブグッドは通路で立ち尽くし、それまでの夢見るような気配を消し去って、その大きな瞳を一切の瞬きもさせないままに僕を見つめていた。

十数秒の停止を経て、彼女は動き出す。

視線が合ってしまったとはいえ、挨拶や会話などの友好的交流をしなければならぬルールなど無い。特に今年のスリザリンの立場の微妙さなど、日刊予言者新聞や魔法ラジオのメディアに触れられる生粋の魔法族ならば重々承知だろう。だからてつきりそのまま立ち去ると思っていたのだが、僕の行動予測に反し、彼女はコンパートメントの戸を大きく、勢い良く開いた。

そして出し抜けに言った。

「あんだ、ホグワーツ特急に乗ってなかった」

「……………」

僕も唐突な言葉を吐く自覚は有るが、彼女はその上を行くなど思

う。それも僕と違って意図や思惑の上で発するでは無く、非常に感情的な発言のようだ。淡い銀色をした大きな瞳からは、不安、不満、そし

て……憤り？ 彼女自身、感情を整理し切れていないというか、持て余しているような気配を感じる。

「……発言内容から過去の事だというのは解るが、何時の事を言ってるのか解らん」

窓枠に肘をついたまま、しかし質問を受けた身として一応誠実に答える。

「僕は短期休暇中には家に帰らないから、その事を言っているのであれば——」

「——初めて会った年度の終業日」

「……………まあ、そうだな。確かに乗っていなかった」

それは間違いないと。

夏中とは程遠い座り心地の椅子に背中を預けつつ、食い気味の言葉に頷く。

彼女の一年次。僕の二年次か。

確かあの学期末は、校長によって閉心術の訓練をさせられる羽目になっていた。要は居残りで、必然、普通の生徒が乗るホグワーツ特急に僕は乗っていない。

悪目立ちする可能性を踏まえて尚あの校長が閉心術の訓練を強いたのは、彼にとつてそれ程優先させるべき事象だと考えて居たのか。それとも、他にも——たとえば、ドラコ・マルフォイを通じてルシウス・マルフォイ氏と接触するような真似を防ぐと言ったような、差し迫った理由が有ったのか。まあ、割と単純で、僕が閉心術を習得出来るか不透明であり、その場合は更なる対策を考える必要を感じていたが為に急いだという可能性も有る。

何れにしても、ルーナ・ラブグッドの指摘は正しかった。

「しかし、それがどうかしたか？」

「ホグワーツ生はホグワーツ特急で登下校する事になってる」

「それもその通りだな。今から約百六十年前か。当時の魔法大臣——オッターリン・ギャンボル大臣が法をもって定めて以降、それが原則だ。だから何だという話でも有るが」

「……………」

僕の回答に彼女は少し俯き、黙り込んだ。

不満の高まりも感じたが、理由は不明である。真剣に探れば理由が解ったかもしれないが、今の僕には開心術他人の心を解釈するを使う元気が無く、その必要性も感じられず、そしてルーナ・ラブグッドの行動がそれをさせなかった。

彼女は僕と視線を合わせるのを避けたままに荷物をコンパートメント内に引き込んだ後、戸を閉める事もせずに、僕の対面へポスンと座った。その動作には澀みや迷いといったものが全く見受けられなかった。

「
」
恐ろしいものだ。

こんな風に至極当然のように振る舞われると、追り返す気にもなれない。

しかも理屈で考えれば、確かに僕に彼女の同席を断る権利はない。コンパートメントに予約席など存在せず、また先に座っていた側に占有権が発生するという事も無い。建前上は公共交通機関として仲良く使うのが原則であり、わざわざ口論などして首席達に揉め事を知られる羽目になった場合、非難されるのは一人で場所を使っていた僕の方だ。相手が下級生の女の子というのも非常に分が悪い。座ってしまった時点でもう勝ち目が無くなったとすら言えるだろう。スリザリンも形無しの狡猾さである。

……ただまあ、数十分後には僕はこの場を立ち去るつもり的身ではある。

むきになって彼女を追り返すのは無為な努力であり、空いたコンパートメントを残すよりは、彼女に使って貰った方が良いという考えも出来る。ここでは沈黙を、レイブクロー流の賢明さを発揮するのが僕にとつての正解であるのかもしれない。

——とはいえ、以前はこれ程の少女だっただろうか。

ルーナ・ラブグッドはやはり視線を合わせる事も無く、荷物の中からサイケデリックな表紙をした雑誌を取り出し、いそいそと読み進め出した。そんな彼女を黙って見つっと思う。

確かあの時は同席の許可を求められた記憶が有るし、もつと相手と会話しようとする意気を有していたような気がする。当時彼女はまだ一年生だった事だし、それから変化が有ったとしても可笑しくないのだが——嗚呼、そうか。三年間のホグワーツ生活は、新しい世界で友人を作ろうと必死になっていた少女を消し去るには十分だったという訳か。

レイブンクロー。

多様性を認めるといふ事は、それ即ち、融け合わないままを許すといふ事。

その寮を敵意と拒絶の寮と評し、大空はその下に居るのを許容するだけだと述べたのは確かスネイプ教授だったが、少なくとも彼女に限つて言えばそう作用した訳だ。その悲劇を思えば、僕がスリザリンに組分けされたのは正解……いや、そうでもないか。

たとえ温和なハッフルパフであろうと寮内で外れ者が生まれる事は不可避であり、結局僕とルーナ・ラブグッドの差異を分けたのは、その時当該寮に誰が居たかという縁でしかない。僕はドラコ・マルフォイのせいで非主流派——半純血達の集団に溶け込む機会を喪つたが、逆に彼の御蔭で完全に外れ者にならずに済んだとも言える。そして自分の四年間を振り返るに、ドラコ・マルフォイに関わらなかつた場合でも、スリザリン内で友人を作る事が出来たかは酷く微妙だった。そんな考えを何となく巡らせていけば、ルーナ・ラブグッドは唐突に、勢い良く顔を雑誌から上げた。そして初めて僕と視線を合わせ、持っていた雑誌を突き出してきた。

「ン」

「……何だ？」

胡乱な視線と意図を凶りかねた質問に対し、返されるのは強い意思の籠った視線。

「だって、ずっとあたしを見ていたでしょ？ だから読みたいのかなと思つて」

「……別にそんなつもりで見ていた訳では無いがな」

「なら、どんなつもり？」

「どういふつもりでも無い。少し考え事をしていただけだ」

「じゃあ、暇なんですよ？ 貸してあげる」

「……………」

自然界の有毒生物を連想させる表紙をした雑誌に僕は手を出さなかったが、彼女は強情だった。半ば無理やりに『ザ・クイブラー』を押し付けられた。

フラーやガブリエルの行動に直面させられた時と同種の間接感を抱きつつルーナ・ラブグッドを見るが、彼女は逃がしてくれそうにないようだ。

「……確か、君の父君が出版している雑誌だったか」

「……覚えてるの？」

「それ位はな。たかが三年で忘れる程、君は印象の薄い女性でも無かった」

「……………」

しかし、それ以外——後はしわしわ何とかなどという不思議生物——は余り覚えていない。

前回はこの雑誌を読んだのだったか。それとも読んでいないのだったか。仮に読んでいたのだとしたら、恐らく記憶から抹消しているのだろうか。

一つ溜息を吐いて、意図的に表紙を視界に入れないうまま雑誌を開く。

三年前しきりにしていた不思議生物の話や、或る意味で魔法族らしい彼女の立ち振る舞いからは、『ザ・クイブラー』がマトモな書物であると期待するのは望み薄だ。

内容に目を通してみれば、それは案の定、予想通りの劇物——

「——ほう」

期待はしていなかった。

していなかったのだが、こうも見事に斜め上を行かれると感嘆してしまう。

最初に目に入ってきたその記事は取り敢えず置いておき、それ以外の記事を見てみようとの後のページをパラパラと捲ってみれば、そちら

の方は予想通りの記事だった。

月旅行をしたと主張する魔法使いや、歌う恋人シリウス・ブラック、使用用途不明の呪文がルーン文字に隠されているという珍説等々。一周回って古風とも思える魔法使いのイカレ方をした記事は、正気のまま読み進められる気がしない。

けれども、偶然最初に開いたページに戻る。

やはり間違いではない。その記事だけは、僕の興味を強く惹いた。「小鬼殺しファッジの記事に興味があるの？　これ、今月号の特集なんだよ」

「の、ようだな」

ページを前方から逆さまに覗き込んだ彼女に生返事を返す。

表紙を再度見てみれば、確かに下手な絵で山高帽姿の人間が描かれている。少なくとも編集した人間は、この記事を重要だと考えたらしい。

内容は——内容自体は、案の定だ。小鬼を毒殺したやらパイにしたやら、アンガビュラー・スラツシキルターがどうか、読めば読む程に目が滑る記事だ。

けれども、ただ一点。

現在の情勢下においてこの記事が存在しているという事実は無視出来ない。

魔法大臣は、魔法界に関する全ての事項を管轄する。

コーネリウス・ファッジはその職掌を文字通りに解釈し、言論統制へと乗り出した。

その結果、今の魔法界では大衆に対し、まともな情報が一切発信されてはいない。

『日刊予言者新聞』は額に傷の有る男の子や、地位にしがみつく老人の誹謗中傷をやっている。魔法ラジオの方にしても、やはり闇の帝王が復活したというような内容は流れていない。「純血」達の協力も有ったとはいえ、この魔法界でここまで完璧に報道規制を敷いてみせた魔法大臣は恐らく彼が初めて——同時に最後——だろう。

そして言論統制に味を占めた権力者がやる事は何処も変わらない。

自分の美化。業績の誇示。己の支持率を上昇させる為のありとあらゆる宣伝。露骨にやらないだけの頭は有るようだが、ハリリー・ポッター達への中傷と同様、新聞やラジオの各所にはコーネリウス・ファッジを讃える言説が紛れ込まされていた。

現状、彼に『不都合』な報道は表向き一掃され——だが『ザ・クイブラー』は違う。

内容としては失笑物な上に名誉棄損になる線を余裕で踏み越えている記事を載せているが、それが出来ているというのは要するに、この雑誌は魔法大臣の検閲を受けていない。

まあ、何ら驚くに値しない事ではある。

こんな見るからに真つ当でない本がフローリッシュ・アンド・プロットに平積みされている筈が無く、殆ど個人出版に等しい代物の筈だ。グレートブリテンとアイルランド全土を併せて購読者は数十人と聞かされたとしても、そんなモノかと容易に受け居られるだろう。

けれども現在の状況で、情報を娘から——闇の帝王によりセドリック・デイゴリーが殺されたのだと知れる人間が、己の雑誌に反体制記事を載せる。その行動は決して軽く見ていいものではないだろう。それをやってのけるゼノフィリウス・ラブグッドとやらは、相応の覚悟が有る勇者か、それとも何も考えて居ない愚者か。

そして我慢して眼を通してみれば、一部に真実が紛れ込んでいるようにも読めるのだ。

「……彼の一番の野心は小鬼の金の統制、か」

どんなに取り繕った所で隠せない、魔法史が克明に語る欲望。

小鬼が杖の秘密を欲するのと同様、魔法族もまた小鬼金の秘密を欲している。

コーネリウス・ファッジがそうだとはい限らないが、しかしどちらの可能性が高いかと言えば、統制を計画している方だろう。そして魔法族の繁栄及び魔法省の権力確立を願うならば、その野心と展望を抱く事はやはり正しい。異種族間の友好は、貨幣鑄造権と銀行経営権を売り渡してまで維持する物でも無い。

真剣さを増した僕の反応に満足したのか、ルーナ・ラブグッドは大

きく頷いた。

「ファッジはね、とつても野心に溢れた人間なんだよ。ダンブルドア先生に対抗する為にファッジはとうとうヘリオパスの軍団を設立したんだ。詳しい一部の人間なんか、何れホグワーツに侵攻しようとするだろうって噂してる」

「……まあ魔法省のホグワーツ支配の野望は今更だし、魔法大臣が私軍を組織したとしても、あの校長が非合法で私兵組織不死鳥の騎士団を所有しているより遥かに自然だが——」

——ホグワーツに侵攻した瞬間、魔法省は自壊するぞ。

そう付け加えようとした僕の言葉を止めたのは、通路で立てられた派手な衝突音だった。

本当に無価値であるか解らなくなってきた雑誌から顔を上げ、何となく既視感を覚えつつその方向を見ると、そこには案の定の人物がトランクを引いている。

気の弱そうな丸顔は、余り獅子寮らしくない生徒、ネビル・ロングボトム。

「……や、やあ」

僕を見て、ルーナ・ラブグッドを見て、もう一度僕を見た後、彼は僕に声を掛けてきた。

そこに葛藤が見えたのは、どうも僕がスリザリンだからと言う訳でも無いようだ。そのような反感を抱いているならば、僕へと言葉を掛けてなど来ない筈だからだ。

「奇しくも三年前を思い出す状況だが——」

少し微妙な距離感が見える少女と少年を見やる。

いや、ネビル・ロングボトムが一方的に対応に困っているのか。

「——君達はグリフィンドルとレイブンクローだろう。嫌われ者のスリザリンと違い会話するのに障害は無い筈だが、あれからホグワーツで話をしたりしなかったのか？」

「ウ、ウーン。挨拶くらいは何度かしたかな」

ネビル・ロングボトムが少し気まずそうに答える。

まあ三年前は延々と不思議生物について説法を受けていたのを見

ているから気持ちは多少解るのだが、一方でルーナ・ラブグッドはあつげらかんと言った。

「話す機会は無かったよ。だってホグワーツであたしと……ルーニと話していると、ネビルは虐められるかもしれないモン。迷惑かけたくないし、あたしは良いんだ」

「そうか」

「……………」

この程度で痛む良心を僕は持ち合わせては居ないのだが、ネビル・ロングボトムは違うらしい。丸々とした大きな身体を締め、きまりが悪そうな顔をしている。ルーナ・ラブグッドが皮肉ではなく、全くの本心から言っているらしいのも良く効いた原因のようだ。

後悔と罪悪感で居たたまれなくなつたのか、ネビル・ロングボトムは通路で立ち尽くしたまま、もじもじとしている。他方ルーナ・ラブグッドも、彼をコンパートメントに招き入れるでもなく、夢見心地の表情のまま眺めている。

三年前と同じ集まりは、しかし三年前と違うギクシヤクとした雰囲気——いや、三年前も割と変な雰囲気だったような気もする。あの偶然の出逢いを契機として真つ当に友人関係を構築するには、僕達は察が違う以上に、立場と性格と思想が違い過ぎた。

そして三年前と違うのだと明確に示すように、救いの主は他から現れた。

「ネビル。そこに立ったままだとちよつと邪魔だよ」

「ご、ごめん」

警告というより気安さを感じる指摘に慌てて通路を開けようとするネビル・ロングボトムだが、彼がこの状態の時に良い事が起こる試しは無い。再度派手な音を立ててトランクを盛大に椅子へとぶつける。スリザリン生である僕すら良く見る光景で、彼——声の主にとっては日常茶飯事なのだろう。少しだけ苦笑して、そしてコンパートメント内の僕の姿を見て少し驚きを見せた後、今度は僕の方へと声を掛けてきた。

「アー、君達三人がどうい関係か解らないけどさ。その、席を一緒に

しても良いかい？ 少しばかり君と話をしたい事が有るんだ」

「……一体自分が何を言っているか解っているんだろうな、グリフィン・ドール」

「十分解ってるつもりだよ、スリザリン」

彼の行動も大抵突拍子が無いが、今回は一際だと溜息を吐く。

声の主は、額の稲妻が特徴的な人間。言わずもがな、ハリー・ポッター。

何時も一緒に居るハーマイオニー達二人の姿は傍に見えない。その代わりだろうか、一人の下級生らしき少女が彼の後ろに着き従っている。その特徴的な赤毛と何処となく見覚えのある顔立ちから判断するに、恐らくはジネブラ・ウィーズリーだろう。

二人の表情は対照的だ。ハリー・ポッターは何処か気後れしたように、一方でジネブラ・ウィーズリーの方は警戒するように。そして今の状況では後者の方が正しい。

「ならば予め一つ教えておくが、僕は今夏——嗚呼、今夏殆ど丸ごとだ。マルフォイ家に滞在していた。つまりは現在の御互いの立場というのは明らかな筈であり、それを知った上でも尚、君は僕と話をしたいと宣う訳か？」

その言葉にネビル・ロングボトムが大きくビクつく。

今度は荷物を振り回さなかったが、顔に過ぎった驚愕と恐怖は先程以上で、そして当然の反応でもある。事実上の敵対宣言であり、死喰い人によって両親を壊された人間が心穏やかで居られる筈も無い。

そしてジネブラ・ウィーズリーは元々僕に好意的では無かったのだが、更に敵愾心を強めたらしい。逆に心地良さすら覚える鋭い視線を僕へと向けて来る。

けれども、ハリー・ポッターは流石に少し警戒する素振りは見せたものの、軽く首を振った後、苦笑いする事で誤魔化した。

「……別に良いよ。君にしてもマルフォイにしても、そして他のグリフィン・ドール生にしても、ヴォルデモートに比べればどうって事ないからね。何の脅しにもならないさ」

「僕の前でその名を余り口にして欲しくないが——」

悪名にギクリと反応した二人を他所に一瞬だけ考えを巡らせ、そして答えは出た。

「——君が理解して尚そう求めるといふならば構わない」

それだけを言つて『ザ・クイブラー』に視線を落とす。

ハリー・ポッターが何故声を掛けて来たのかは想像も付かない。しかし、彼がそれだけの価値を見出している用件を携えて来たのなら、やはり断る選択肢など無かつた。

ハリー・ポッターに許しはしたが、他まで許したつもりは無い。

だがジネブラ・ウィーズリーは当然のように、ネビル・ロングボトムは安堵したようにコンパートメントへ入つてきた後、それまで開いたままだった戸を閉じた。まあルーナ・ラブグッドの時と同様文句を付けられない為に放置はしたが、左程良い気分にはならなかつた。

ともあれ、コンパートメントは五人になつた。

彼等が入つて来て早々ルーナ・ラブグッドはそれまで自分の傍らに置いていた荷物を棚に上げ、それが自然であるかのように僕の対面から左隣へと席を移つた。

一方でグリフィンボール生達は多少狭そうだったものの、三人並んで僕の対面へと座つた。僕から見て左——通路側の席からネビル・ロングボトム、ジネブラ・ウィーズリー、ハリー・ポッター。ハリー・ポッターが真ん中でないのは、窓側に座る僕と向かい合い、話がしやすいようにという配慮によるものか。

「……………」

そして、コンパートメント内に沈黙の帳が下りる。

立てられる音は、僕が『ザ・クイブラー』のページを捲る音だけ。この特急内でも恐らく唯一であろう、何の会話も発生しない閉鎖空間が出来上がった。

「——ええと、何の本を読んでいるんだい？」

「質問するならもつと興味が有るように問うべきだな」

「うっ」

ハーマイオニーと違い、彼は他人の読んでいる本に興味を示す類の人間ではない。

そんな考えと共に指摘してやれば、やはりその通りだったのだろう。軽く呻いた後に再度黙り込んだ。わざわざコンパートメントを共にしようとする位だから相応に重大な用件が有った筈だが、どうやら話を切り出し辛いと感じているらしい。

……一体どうして僕が余計な気を回さねばならないのやら。

「ところで監督生の仕事はどうした？」

本から視線を上げないままに、ハリー・ポッターに話を切り出してやる。

「ドラコ・マルフォイの手紙によれば、新監督生は特別車両に集合だった筈だがな。就任一日目からサボリとは流石に剛毅過ぎるように思えるが」

その瞬間、微妙な雰囲気 が漂ったのを感じ取る。

「アー、そうする必要は無いんだ。僕は監督生じゃない」

「……監督生ではない？」

何処か感情を排した印象を受けた声色での回答に、思わず顔を上げた。

平静を装おうとしているらしいハリー・ポッターの表情からは、嘘の色は見えない。言葉通り、彼が監督生に任命されていないのは本当のようだ。

しかし、その答えは僕にとって少くない驚きを齎すものだった。

新監督生の名が一般学生に周知されるのは始業日——但し任命を受けた人間から事前に直接伝え聞いた場合を除く——であるが、全寮制の学校で丸四年も同学年をやっているならば、各寮の「仕切り屋」、監督生の仕事を有り難がる優等生には大体目星が付いて来るものだ。

例えばハツフルパフならアーニー・マクミランとハンナ・アボット、レイブンクローならアンソニー・ゴールドスタインとパドマ・パチルと言ったように。予想でしかないが、彼等はまず今代の新監督生だろう。そしてグリフィンドールの女性は当然ハーマイオニー。一方で

男子は、ハリー・ポッターであると僕は疑っていなかった。

まあ彼は他の人間と違って唯一「仕切り屋」では無いのだが、さりとしてその難点を考慮に入れて尚、彼を監督生にしない選択肢など無い。ミネルバ・マクゴナガル教授——ハリー・ポッターの問題児振りを一番良く知って居るグリフィンドール寮監ですら、その処分を認めざるを得ないだろう。僕はそう考えていた。

ただ、彼の瞳——そこに映る去年までは見えなかった色を見て思い出した。

あの校長が、ハリー・ポッターに対してどんな立場を取ろうとしていたかを。

「——成程。アルバス・ダンブルドア校長の考えそうな事だ」

一度解答に思い当たってしまったえば、そちらの方が寧ろ校長らしい遣り口だと思えてくる。

ハリー・ポッターの平穏なホグワーツ生活を願うのであれば、確かに彼を監督生にする選択肢など無い。大方余計な心労や責任を負わせたくななどと考えたのだろう。

が、その感想にハリー・ポッターは大きく表情を変化させた。

「……？ どうした、そんな驚いた顔をして。僕は何か変な事を言っただか？」

「君は今ダンブルドアを——ア……まあ、自分で気付いていないならば良いや」

「……君が納得したなら何でも良いが。しかし、ならばグリフィンドールの男子新監督生は誰だ？ 僕が考える限り、他に適切そうな人間は思い当たらないのだがな」

そう問えば、ハリー・ポッターは微妙に口籠る。

だが彼のその反応で、監督生に選ばれたらしい人物にすぐさま想像が付いた。

「……まさかとは思うが、ロナルド・ウィーズリーが監督生ではないだろうか」

「そうだよ。ロンとハーマイオニーが今年のグリフィンドールの新監督生だ」

「……………そうか」

表情だけは平然と言つてのけた彼に、視線を落としつつ嘆息する。あの校長も他人の気持ちが全く理解出来ない訳では無かろうに、どうしてこうも的確に他人の感情を逆撫でする行動を取るのだろうか。まあ、悪癖なのだろう。

ハリー・ポッターを監督生にしない事は理解出来た。けれども、彼の内心の安寧を思うので有れば、ロナルド・ウィーズリーだけは監督生にすべきではなかった。

他のグリフィンドール生が新監督生となつたのであればハリー・ポッターは心から祝福出来たとしても、唯一彼の男友達に対してはそれが不可能である。その行動予測が正しい事は、まさに目の前のハリー・ポッターの反応が如実に証明してくれていた。

監視兼猫の鈴役などハーマイオニーだけで十分だったろうに、あの校長も過保護過ぎるというか。彼もまた、やはり僕と違った方向性で普通の感性からズレている。

そして同時に、非常に興味深いとも感じていた。

一瞬だけだが彼の瞳から読みとれた色。あれは、あの校長への反感だった。

ハリー・ポッターとアルバス・ダンブルドア校長は、それなりに良い関係を築いていた筈だと記憶している。去年校長室前で彼と会つた時も、そのような色は見えなかった。寧ろ逆で、彼は全幅と言って良い程の信頼を向けていた筈だ。しかし、今は違う。彼は校長に対して負の、ともすれば敵意ともとれるような強い感情を向けていた。

果たして夏休暇中、一体何が有つたのやら。

僕にハリー・ポッターの知識を与えた校長の意図は、それによって僕が彼の行動を正確に予測出来るようにし、かつ制御を出来るようにする点に在った筈である。しかしそれにも拘わらず、あの校長は余計な不確定要素を増やしてくれやがったのか。

まあ既に陣営を違えているので何の文句も言えないのだが、それでも多少の呆れを抱かざるを得ない。

そんな思考を打ち切らせたのは、刺々しい声での、そして予想外の

横槍だった。

「何か文句が有るの？」

再度視線を上げれば、視界に入るのは怒りに眦を吊り上げる赤毛の少女。

その激烈な反応からみるに、どうやらジネブラ・ウィーズリーは、僕の反応が気に食わなかったらしい。

「スリザリンの貴方はロンが監督生に指名された事が気に食わないようですけどね。私の兄が監督生になって一体何が悪いって——」

「——別に悪いとは言わないが」

気怠さと共に彼女の言葉を遮って真正面から見詰めてやれば、先までの威勢は一体何処に行ってしまったのか。彼女は大きく怯んだ表情を浮かべ、途端に口を閉ざしてしまった。

この程度で躊躇するならば、人の感想に介入すべきでは無い。

「逆に質問するのだが、ジネブラ・ウィーズリー。まさか君は本気で自分の兄こそが監督生に相応しいと思っているのか？ 嗚呼、まさかこの場所に居るハリー・ポッター、彼を退けてまで上に立つべき人間だと思っているのか？」

「そ、それは……」

だからグリフィンドール、特に純正のソレは嫌いなのだ。

自分の信奉する道こそが絶対だと信じ、他人の内にも理屈が有る事を認めない。

「一年前から大きく変わっていない限りという限定付きだが、魔法薬学を除き、この二人の成績には左程違いがなかった筈だ。そもそも二人より成績が良いであろうグリフィンドール男子というのも思い浮かべられる。そして四年間の素行に関しては何人も同レベルの不良、問題行動だらけ。成し遂げてきた功績で相殺するにしても、常に事件の中心に居たハリー・ポッターの方が明らかに上。となれば彼が監督生になった理由がますます理解しかねるが？」

僕への反発心のみで口を挟んだらしい少女は、消沈して視線を逸らす。

一方ハリー・ポッターは親友の話題であり、かつ親友の妹の手前、表

情だけは葬式に出席しているような顔をしていた。それでも多少後ろめたさを抱えながらも機嫌が良くなったらしいのは、わざわざ眼を合わせなくとも解る。非常に解りやすい人間で結構な事だ。

結局、解りやすい優劣が見当たらないのが問題なのである。

真つ当な学生であるなら監督生や首席の地位を欲するだろうし、任命されて悪い気もしない筈だ。そしてハーマイオニー程に圧倒的ならば自分が何故監督生になれなかったのかと憤る人間など現れまいが、ロナルド・ウィーズリー程度の優秀性ならば、彼が監督生になれて自分が監督生になれなかったのは何故かと疑問を抱く人間が出るのは極自然である。

それは性格の悪さに由来する物では無く、地位と名誉を有り難がる普通の人間らしい反応だ。寧ろ単に親友であるというだけで一切のわだかまりを抱かずに祝福出来る方が、人間として破綻してしまっている。

「——もつとも、君の考えも一理くらいは有る。ハリー・ポッターよりもロナルド・ウィーズリーが監督生に向いている。そう見える面は確かに有る」

「……………」

ジネブラ・ウィーズリーは呆け、ハリー・ポッターは裏切られたという表情をした。

非常に間の抜けた二人の反応に、僅かな愉快さと共に笑う。

「嗚呼、ハリー・ポッター。君が監督生を上手くやれないだろうという話では無い。これはあくまで能力の過不足ではなく、性格の向き不向きの話だ。但し、人によつては性格も能力の内に含まれると言うのかもしれないが」

だがどう分類するにせよ、人の上に立てる資格と人を指揮しうる資質は異なる筈だ。

「ホグワーツ生活も五年目になる。四年間事件には事欠かなかつた君とは言えど、己が監督生に向いているか否かの自己評価をする時間くらいは流石に有つただらう？」

「……………えつと」

「監督生はその権力と特権の代価として、他人の為に時間を使う事を余儀なくされる。新入生の案内をしたり、下級生の生活や勉強の相談に乗ったり、教授や首席の指示で校内の雑事に駆り出されたりな。ハーマイオニーはそれを余り苦としない性格だ。しかし、君はどうだ？ 君はそのような仕事に励む事に価値を感じ、寮を取り仕切る事に喜びを覚えるのか？」

「……………」

顎に手を当てて考え込む振りをしているが、表情は多弁だった。

「勿論、君が輝かしい『生き残った男の子』の称号で満足しないというならば、ホグワーツに着いてから校長へ抗議しに行くが良い。人を指揮する能力について君が不足しているとしても、人の上に立つ資格の面では不足など一切無い。そして確かに君はホグワーツ史上最も人気の有る監督生になれる」

それは間違いないと、絶対の確信をもって言える。

「『監督生、一歳の赤ん坊だった貴方が闇の帝王をどうやって倒したのですか？』。『去年闇の帝王からどうやって逃げ出したのですか？』。『奇跡の傷跡を見せてくれませんか？』。嗚呼、プリンセス・オブ・ウェールズ現在渦中にある妃殿下も真っ青の人気者だろうな」

「…………君は嫌味を言うのが最高に上手いよね」

「褒め言葉をどうも。君から貰った所で嬉しくは無いがね」

盛大に顔を歪めつつ言った彼からは、既に監督生への未練は感じなかった。

今更ながら、ハリー・ポッターは自身の立場を理解したのだろう。

監督生はその職務上、必然的に下級生達と接触する機会が増える。また他寮の監督生や首席と頻繁に顔を合わせる必要がある。魔法界の大半から大嘘吐き扱いされている現状、ハリー・ポッターの監督生業務にはそれなりの困難が付き纏うのは目に見えている。彼が耐えられないとまでは思わないが、耐えられたとしても何の自慢にもならないし、得られる利益も無い。

「まあ、監督生から外されたのが不愉快なら見返せば良いだけの話だ」
慰めではなく、ただの素朴な感想として言う。

「どの道、黙っていても二年後にはその機会が巡って来る。監督生よりもそちらの方が余程君向きとも言えるだろうしな」

「……え？」

「解らないという顔をするな。首席の話だ」

答えを紡いでみせても、ハリー・ポッターの表情はぼんやりとしたままだった。

僕達の会話を隣で眺めているルーナ・ラブグッド、不思議生物を夢見る少女と良い勝負だ。自分と首席という地位が、彼の頭では全く結びつかないらしい。ネビル・ロングボトムやジネブラ・ウィーズリーの方がまだ察しが良い。彼等は割と納得といった表情を浮かべている。

「……僕って首席になれるの？」

「……可能か不可能かで言えば可能だ。高い訳でもないが、さりとて低くもない」

のろのろと紡がれた間抜け過ぎる質問。

それに答えるのもまた間抜けかもしれない。そう思いつつ、渋々答える。

「そもそもの話、僕は入学以来、君が少なからずそれを目標にしてやってきたと思っていたがな。何せ君の両親二人は揃って首席だったのだから」

「……ああ、確かにトロフィールームで名前も見えたな。確か秘密の部屋の時だったっけ。そういう入学前にハグリッドも言っていた気もする」

呑気に言っただけのけるが、流石に「本物」は違うものだ。ハリー・ポッターにとって、自分が首席の座を獲得出来るか否かは関心の外だったらしい。

いや、内心では監督生になりたい希望も持っていたあたり、全く名誉や栄光に関心が無い訳ではないのか。去年の三大魔法学校対抗試合にしても、己の名が呼ばれた事に困惑は示せども、如何なる手段を使用しても断固として参加拒否しようとはまでは考えていなかった——まあ言うまでも無く、第一の課題内容を知るまでだろうが——よう

だった。

“生き残った男の子”という重い称号と、四年連続で彼に課された
試練と苦難。

それが、眼前で起こっている以外の事象について考える余裕を彼から奪ったと見るべきか。

「……そう言えばさ、首席ってどうやって選ばれるんだい？」

本当に解りやすい人間だ。

術をもって解釈する必要もなく、彼の碧の瞳からは期待と夢が読み取れる。

「答えは簡単だ。君の親友に聞け」

端的に答えれば、彼は表情を仏頂面に変える。

「ハーマイオニーに聞いても校則丸写しの答えしか返ってこないじゃないか」

「……まあ、確かに一言一句違わず暗唱する姿がありありと思ひ浮かびはするが」

「だよね？　なら君に聞くのが一番手っ取り早いだろう？」

相変わらずの凶々しい発言に溜息を吐く。

彼が僕とコンパートメントを共にしようと考えた本題とは間違いなく関係無い筈だが、彼は僕が答えるまで引く気が無さそうだ。

しかし、これは――

「――結論から先に言うが」

「……今絶対色々考えた上で、多くの説明を面倒臭いって省略したよね？」

「……まあ、兎も角、君が首席として相応しいというより、君を押し退けてまで首席になるような男子生徒は居ないのだ。その点で君は首席が一番近い人間だと言いうる」

誰を首席とするのが適切かではなく、彼を首席として本当に良いのだろうかかと頭を悩ませる人間は、長いホグワーツの歴史でもそう多くは無いだろう。しかしそれでも尚、ハリー・ポッターが首席として最有力候補である事は揺らがない。

「首席の選出基準は――僕が記憶する限りでは、学業成績、生徒として

の卓越した評判、誠実で善良で勤勉な性格の持ち主である事だったか。細部の記憶違いは有るだろうが、違った所で非常に些細であり、君が理解するのにも事欠くまい」

「……つまり単純な成績順じゃないという事？」

「そうなる。監督生も同じだから左程不思議という訳でも無いだろう？ 監督生にしても単なる良い子ちゃんに与えられる代物では無い。学業優秀や品行方正は目に見える形での優越性を明らかにするに過ぎず、真に必要なとされるのは、同級生や下級生に対しどれ程言う事を聞かせられる能力を持つかというモノなのだが——」

そこでジネブラ・ウィーズリーを見やる。

言いたい事は伝わったのだろう。彼女は首ごと視線を逸らした。

「——首席はまた違う。学年の顔、世代の象徴。ミスターないしミスホグワーツ。そのような表現をすれば、どんな人間が首席に選ばれやすいかというのは概ね想像出来る筈だ。そして同時にハリー・ポッター、君は候補者として挙げられる位には資格を持っているという事も」

“生き残った男の子”という面を差し引いても、彼程に目立った生徒は校内に居ない。

「君がホグワーツで残した成果は輝かしいものだ。一年は個人的に、三年は公開でない為に評価しないが、そうだとしても、四年次は三大魔法学校対抗試合優勝者の一人。二年次は秘密の部屋の発見及び事件解決に基づくホグワーツ功労賞獲得。そしてシーズン三年間に渡って校内最強のシーカーであり、恐らく君はクイディッチキャプテンになるだろう」

こんな人間を超える為には、一体何を成し遂げれば良いのだ？

そうハリー・ポッターに問えば、彼はきまりが悪そうに頬を掻いた。「……アー、でもさ。自分でこんな事言うのも何だけどさ、僕は余り成績が良く無いんだ。そりゃ平均よりは上だけど、君のような成績優秀者という程じゃない」

「確かにそれは弱みでは有る。しかも君は割と素行も悪い方だしな」

不満そうに唇を曲げたものの、自覚は有るのだろう。ハリー・ポツ

ターも反論しなかった。

「だが裏を返すと、成績さえ足れば問題無さそうだという事だ」
「……………」

「普通の首席の選出は、恐らく成績を第一の基礎とし、それ以外の多少の加点で決めるのだろう。善良云々の漠然かつ主観的基準と違い、成績は明快かつ絶対的な数値で出る上、クイディッチなどと異なり全生徒が参加するからな。まあ成績を重視するのはホグワーツが学校であり、勉強こそが本分であるという思想にも合致する」

成績なら比較して序列を付けやすいし、生徒の眼から見ても解りやすい。

「そもそも普通の生徒の場合、成績以外で明確な優劣が付く事はまず無い。あの校長のように在学中から校外の賞を獲得して名声を得ている生徒など稀で、他で差異が付くのは精々クイディッチ程度。当然考慮はされるだろうが、一方で余り重視し過ぎるとクイディッチが出来る人間は偉いのか——ハーマイオニーが首席になるのも不可能だ——という事にもなる。」

「しかし、その加点要素が並外れているなら話は変わる。君の成果の輝かしさは、歴代首席と比べても何も見劣りしない。勿論、それでも馬鹿な劣等生には与えんだろう。成績を基本として選出して来た以上、例外的事態は可能な限り少なくすべきだからな。ただ上から数えた方が早いと言える優等生の部類ならば、校長が君に首席を与えたとしても依怙鼻屑の声は上がらんよ」

本来はやはり学年一位や二位が必要なのだろうが、この男はやはり色々例外過ぎる。

そしてあの校長とて、本心ではこの男に首席を与えたいと考えて居る筈だ。

「素行の面にしてもだ。君は大体の場合、事件の方から近付いてくる身だった。二年次の登校方法を除けば、多少情状酌量の余地は有る。少なくとも、あの校長ならそう考える」

一年次は校長の策略、二年次は亡霊の暗躍、三年次は脱獄犯による騒動、そして四年次は闇の帝王の復活を目指した陰謀。これで素行良

く過ごせというのが無理な話だろう。

「……スネイプはそう言わないと思うけど」

「あの寮監が君を支持する事など絶対には有り得ない」

期待するだけ無駄である。

「そもそも寮監の支持など本質的に不要だ。決定権を持つのは我等が校長閣下。そして確かに監督生の場合は、寮監の推薦や意見を無下に出来んし、大体の場合それが通るのだろうか——」

「——待って。監督生を決めるのも校長先生じゃないの？」

言葉を遮ったハリー・ポッターに溜息を一つ。

「最終決定権を握るのは同じく校長ではある。が、性格の向き不向き、交友関係の広狭、寮内における支配力を知って居るのは各寮の寮監だ。そして単に成績が良いだけの頭でっかちな、陰気で社交性皆無の人間を監督生とした場合、一番苦勞するのは果たして誰だと思う？」

「……そっか。マクゴナガル先生——寮監が苦勞するののか」

「そういう事だ。校長が強権をもって押し通す事は可能だろうし、ホグワーツの歴史上それは幾度か有っただろうが、やはり寮監と相談の上で決めるのが円滑に進む」

だからスリザリンの監督生は、純血である事も暗黙の要件となっている。

多くの人間は下賤な血筋の人間の言う事を聞かず、また監督生は実家の権力を盾に我儘放題をしようとする下級生を制御しなければならぬ。その為には多少の成績に目を瞑っても、*“マルフォイ”*や*“パーキンソン”*などの人間を監督生にするのが——まあ、ドラコ・マルフォイは普通に成績が良い部類に属しているが——最も問題が生じにくい。

この原則が破られるとすれば、それは当該生徒がマーリンに準ずる例外だと蛇寮内で認められた場合のみである。勿論、トム・マールヴォロ・リドルはそれだけの器だったのだろう。

そしてハリー・ポッターは何処かホツとした表情を浮かべる。

その意味は——嗚呼、監督生の決定権が校長以外にも有る事に救いを感じたのか。

残念ながら、それは間違いである。ミネルバ・マクゴナガル教授は監督生の地位がハリー・ポッターを護るだろうと考える側の筈だ。そもそも僕が最初に何と言ったか忘れてるようだが、敢えて訂正して面倒を招く気は無かった。

「一方で首席は四寮から一人だ。無論男女別なので二寮から一人ずつ出る可能性も有るが、要するに各寮監は、自寮の人間が首席になって欲しいと通常考える事だろう。我等が寮監は語るまでもないが、ミネルバ・マクゴナガル教授とて例外では無い筈だが？」

「……それはまあ、そうだね。マクゴナガル先生だってパー……アー、とにかく、自寮から首席が出たら喜ぶよ。あれで結構解りやすい人だし」

ハリー・ポッターが突如として言葉を濁し、視線を険しくしたジネブラ・ウィーズリーをチラリと見た。流れからしてパーシー・ウィーズリーの前例を挙げようとしたのは明らかだが、彼等はそれを意図して避けたようだ。

それは僕にとって無視出来ない反応であり、夏休暇中パーシー・ウィーズリーと会話した時の感触も併せて非常に重要な情報でもあるのだが、まあ今は脇に置いておくべきだった。

「ともあれ四寮には対立関係が生じ、それぞれの意見や推薦を素直に聞いていては纏まらん。であれば、決定権を握るべきは校長だ。そして首席の場合、その人間が首席として相応しいだけの成果さえ残していれば、個々の生徒への支配力など問題とならない。各寮に居る二十数名の監督生に仕事を丸投げすれば良い訳だからな」

監督生が首席になった場合でも監督生は新たに任命されない——つまり首席と監督生が一切重複しない場合と比較し、首席と監督生を合わせた総数が最大二名少なくなりうる——のが一つの証拠とも言える。

要は首席を絶対不可欠とする場面など公式行事の挨拶など儀礼的な事くらいで、普段居なかったからと言って困る事態は殆ど無いに等しいのだ。その権限と権威は監督生を凌駕すれども、首席の不在の為に校内秩序が機能停止に陥るといふ事は無い。

「じゃあ、ダンブルドア先生の支持さえ有れば首席にはなれるんだね？」

「制度上はな」

明らかに目の輝きが増した彼に、投げやりに答える。

「しかし、寮監に全く異論を差し挟ませないという事も無いだろう。反対する寮監の方が多いとなれば校長の方も考える筈だ。相応しくない者を首席にするのは『ホグワーツ』の伝統を損なう事態であり、寮監も無関心では居られない。故に君が首席になりたいと本気で願うならば、最大の障害は我が寮監では無く、寧ろ君の所の寮監だ。史上最も不適格な首席を輩出した寮と呼ばれる事を、あの教授は絶対に望まない」

「……確かに反対している姿は簡単に思い浮かぶよ。それもスネイプと同じ位にね」

とは言うものの、彼の表情と声色は明るくなっていった。

二年後に首席になった未来の姿でも想像しているのだろうか。

本当に平和な事だ。この呑気さは彼が英雄たる故か、それとも元々の資質か。

或いはこれこそまさにアルバス・ダンブルドア校長が守ろうとしたモノ、本格的な開戦を控えた今、少しでも心穏やかに学生生活を過ごして欲しいと願う結果と考えるべきなのか。

しかし——残念ながら、僕はあの校長の思惑に乗ってやれない。

ハリー・ポッターの扱いについて、僕は立場を異にしている。

あの時の議論では敗北を認め、故に今年に進んで関わるつもりは無かったのだが、ハリー・ポッターの側から僕に近付いて来たというなら話は変わる。

「——ただまあ。首席を獲得する為に勉学に励む事が必ずしも良い訳では無いだろう。君が監督生にならなかつた事も、考えようによつては都合が良い。去年度末の一件が有る以上、君にはそれよりも優先すべき仕事があるのは明らかなのだから」

人間には相応しい役割があり、代われない義務というのもまた存在する。

一年のヒヨコ共の面倒を見たり、下級生達の喧嘩の仲裁をすると
言ったようなつまらない雑事など、ハーマイオニーやロナルド・
ウィーズリーに任せておけばいい。ハリー・ポッター、〃生き残った
男の子〃は、彼しか為せない事を為すべきである。

あの校長にその意図など無かっただろうが、僕としては本心からそ
う思う。

レジスタンス

狂気を振り分ける分水嶺は、とどのつまり多数派に支持されるか否かである。

無名の多数が烏は白であると判断したなら、実は烏は黒であると一人宣言人間は社会的に狂人である。また御偉い医師様の精神判定だろうと、所詮は科学の名の下に多数説となった理屈テキストに基づいて狂気を判断し、独自性の無い病名を慣例的に付しているに過ぎない。たった一人が狂気を定義し、判定するのは、真の意味での客観というモノが存在しない以上原理的に不可能なのである。

……嗚呼、それは理解しているものの、それでもこう思うのは止められない。

この『ザ・クイブラー』と呼ばれる雑誌はやはり狂気だと。

ハリー・ポッターがまた黙り込んでしまった為、その間魔法族の月旅行の記事を読んでいたのだが、その内容からは明らかに怪しさしか感じ取れない。

現在最高と呼ばれる箒ファイアボルトは、記憶に有るカタログの記載によれば10秒で約240km/hまで加速するのだったか。十分に時間を掛けた上での最高速ともなれば更に速度は出る——もつともスニッチを見付けてからのシーカーの動きで顕著なように、クイデッチ用箒で求められるのは最高速度より瞬間速度であり、売りになるのもそちらの方だ——だろう。

しかしそれでも第二宇宙速度——11.2km/s、つまり約40000km/hの壁は遠過ぎる。しかもファイアボルトではなく型落ちのクリーンスイープを使ったのであれば、余計に速度が足りない。必然、月まで行く事など不可能のように思われる。

……いや、待て。本当に不可能だと即断してしまつて良いのだろうか。

空飛ぶ箒自体が“マグル”の物理法則から逸脱する存在であり、何よりロケットと違い、魔法使いの箒には推進剤が不要だ。

箒が地球の重力から完全に自由であり、無限に速度を維持し続け、

また高度を上げ続ける事も可能であるならば、第二宇宙速度まで到らずとも地球脱出は可能ではないのか。

それ以外にも記事内に科学的な粗探しは出来る。

例えば、月までの距離と所要時間、それに要する水と食料の負担。人間が真空状態に置かれた場合の科学反応。降り注ぐ宇宙放射線の雨の問題。最高100度を超える酷暑と最低100度を遥かに下回る極寒にまで至る月環境で、月蛙とやらは生存可能なのか等々。

しかし、果たしてその全てを「魔法的」に解決する事は絶対に不可能だと、軽々しく断言してしまつて良いのだろうか。

魔法族と「マグル」。魔法と科学。

その両方の専門家から意見を聞けばまた違う答えが出るのだろうか。

そう悩む僕へ、痺れを切らしたように言葉が掛けられる。

「……思わせぶりの事を言つて止めるのは卑怯だと思わない?」

「思わせぶりの事を言つたように聞こえるのは、君の見通しが甘いという事でも有る。今年何も考えずにホグワーツに向かおうとしているという意味なのだからな」

だんまりの時間は終わりらしい。

真剣に考えを進めると難解に思えてくる記事から再度視線を上げ、皮肉を紡ぐ。

「現状君が如何なる立場に置かれているかを考えれば、これまでと同じ学生生活を送ろうという気分になれん筈だ。君は今ままで十分思ひ知つてきただろうが、グリフィンドールに所属している事は、それが必ずしも君や校長の味方をするという意味では無い」

その指摘が一体何の事かは即座に解つたようだ。

魔法省が闇の帝王の復活を否定し、これまで通りの日常を続けようとしているのは周知の事実だ。そして校長と彼を大嘘吐き扱いし、誹謗中傷している事も。

そして夏の大半をプリベット四番地に幽閉されていたであろうハリー・ポッターでさえ、流石にその現実を彼の友人から聞かされているのだらう。彼の表情は途端に険しい物へと変わり、今までの何処

か緩んだ空気は一瞬で消え去った。

「……っ。それってホグワーツでも僕達が嘔吐きだという奴が——」

「——君と同様、僕もまだ校内の様子を見ていない。だからその結論を出すのは尚早かもしれない。しかしだ、生徒が校長から聞かされたのはな、闇の帝王が復活したという事のみだ。それ以外は何も知らされなかったし、夏中の大臣や『日刊予言者新聞』はあの始末だ」

「……………ダンブルドアの言葉よりもそいつらの言う事を信じるって
いふのか？」

「熱くなるな、ハリー・ポッター」

顔が赤くなり、声にも熱が籠って来た事を咎める。

「その手のグリフィンドールのその性質は僕が嫌う所だと、君にそう
伝えた事が多分有る筈だが？　そして魔法大臣の発言が特段信じら
れているとは言っていない。魔法族は“マグル”よりも魔法大臣を
基本的に支持しているが、だからと言って“マグル”程に尊重したり
や敬意を払っている訳ではない。特に君を無罪としてしまった今夏
の大臣の失敗は、口さがない魔法使いの家で散々馬鹿にされていただ
ろう」

ハリー・ポッターは思ってもない事を言われたという表情をする。

しかし、あれだけの大騒動を巻き起こしながら失敗したのに、そう
ならない方が可笑しい。

政治力はホグワーツの寮別対抗杯のように目に見えるポイント制
では無い。

が、それでも失敗をすれば静かに、そして確かに減るもので、減り
続ければ当然に指導力を喪い、最後には誰も指示に従わなくなるもの
だ。あれだけ大騒ぎしての完敗はコーネリウス・ファッジの面子を丸
潰れにするものであったし、真つ当な頭を持っている人間ならば、彼
が魔法大臣のまままで本当に大丈夫かと思うのが自然な発想である。

「しかし一方で、だから校長の発言を信じるといふ事には決してなら
ない。ホグワーツに着いた後、恐らく君は思っていた以上に多くの人
間が現状を真剣に受け止めていない事に気付くだろう。これは予想
では有るものの、賭けても良い。絶対そうなっている」

「……そんな馬鹿は少ない筈だ。ヴォルデモートが復活したなんて、冗談にしては質が悪すぎる。そんな嘘吐く奴が居る筈無いだろう」
「逆もまた言えるだろうに。史上最悪の魔法使いが復活したにも拘わらず、何の対策も打たずに傍観しているばかりか、逆に要らぬ政争に励んでいる統治機関など存在する筈がないと」
「……………」

当事者であるからか、ハリー・ポッターは楽観的過ぎる。

公平に判断する限り、魔法大臣と Hogwarts 校長、その何れかの発言を真実だと確信出来るような決定的証拠など何処にも存在しない。「考える頭を持つのが自分だけ、他の人間が遍く愚か者しか存在しないのだと思わない方が良い。現在スリザリン以外で君の敵に回っている人間はな、多少現実逃避的な側面は存在しても、真つ当に頭を巡らせた結果そうしているのだ」

『ザ・クイブラー』、愚か者しか読まないと認識されているであろう雑誌を片手で閉じる。

「そして今世紀で最も偉大な魔法使いの発言を何も考えず信じるのも思考停止だ」

判断要素として軽んじるべきではないのは確かだ。

やはり誰が物事を言っているかは重要であり、しかしそれは良い方向にも悪い方向にも働く。丁度今、あの大魔法使いの言葉が世間から疑問視されているように。

「そもそもアルバス・ダンブルドアという人間は何処まで信用に足るのだろうか？ 魔法界で生きる者にとってどう認識されて来たのだろうか？ “マグル” 界で生まれ育った半純血である君は知らないし、僕も左程詳しいという訳ではないが、それでも生粋の魔法族の誰か——ロナルド・ウィーズリーあたりから聞いた事が無いか？」

特に賢者の石の事件以前、余計な先入観を省ける頃の噂や評判が良いが。

そう付け加えたが、ハリー・ポッターは口を堅く噤んだままだ。そして好都合だと彼から視線を外し、それまで傍観者に徹していた他の三人を見渡す。

「君達は生まれた時から魔法界に居るだろう？ ならばあの校長がホグワーツ外でどう噂されているか聞いた事は無いか？ このハリー・ポッターに現実を教えてやる良い機会だ」

ジネブラ・ウィーズリーとネビル・ロングボトムは突然矛先を向けられた事に大きな戸惑いを覚えたらしい。二人して顔を見合わせた。そして答えるべきか、本当に答えても良いかという逡巡が両者の間で交換される。

故にそんな悠長な事をしている彼等から答えが出るより、或いはハリー・ポッターが苛立ちを見せ始めるより、もう一人が詠うように回答を紡ぐ方が早かった。

「私は知ってるモン。『ダンブルドアは狂ってる』って、ずっとそう言われて来たんだよ」

ハリー・ポッターにとって現在まで正体不明の——恰好から見て変人である事は察していただろうが——下級生が平然と言つてのけたのには、彼も面食らったらしい。段々溜め込まれ始めていた怒りも一瞬で霧消していた。

彼がそんな反応になつてしまった一因は、彼女の答えを聞いて他の純血魔法族二人が少々居心地の悪そうな顔をした事にもあるかもしれない。

……ただ、そこで終わらないのがルーナ・ラブグッドという女性なのかもしれない。

「でも、ダンブルドア先生は良い人だよ？」

にこやかな表情で、彼女は平然と言つてのける。

「二年生の頃なんて私とブリバリング・ハムディングーを追いかけるのに協力してくれたし、一緒にホグワーツで探しもしたんだ。去年は忙しくなされていたみたいだけど、それでも応援してくれたし。だから間違いなく良い人だモン」

「……」

それがどんな生き物なのかこの場で理解している人間はルーナ・ラブグッド以外居なかった筈だ。だが、それでも全員の——やはり彼女を除く——意見が一致していただろう。

それは非常にアルバス・ダンブルドア校長がやっていそうな行動のように思えると。

「……まあ兎も角だ。この魔法界の殆どの魔法族がホグワーツ生活を経験しているにも拘わらず、あの校長にはそのような評価が罷り通っている訳だ。それも親愛から出る発言では無く、恐怖と不気味さの感情を籠めて、彼は多くから狂っていると呼ばれている」

先程の言葉は聞かなかった事にして先を続ける。

そんな冷淡な対応にルーナ・ラブグッドは頬を少し膨らませたが、この場に彼女に味方する者は居らず、誰も触れようとしなかった。

「要するに、彼は普通の生徒にとって良く知らない相手なのだ」

あの校長は何処まで己を客観視出来ているのだろうか。

「生徒の視点で見る校長の姿。それは始業日や終業日に戯言を抜かしたり、離れた職員席で食事をしている姿が殆どだ。クリスマスなどで生徒側の席へ来る事が有っても、休暇中校内に残らない生徒にとって知る由もない。更に魔法大戦や第一次魔法戦争中、彼は大層忙しくしていただろう。つまるところ生徒が彼の性格や気性を知る機会は非常に限られており、そうである以上、彼が本当に馬鹿げた大嘘を吐かない人物かどうかを判断出来ない」

生徒にとつて、彼は信頼に値する人間ではない。

ホグワーツに居る全教授中でも下から数えた方が早い位には。

「……君はつい先程、偉大な魔法使いだから信じるのは馬鹿だというような言い方をした。人となりを知ってた所で、言っている内容まで真実だとは限らない筈だ」

「そうだな。しかし天秤を大きく傾ける程の判断要素が無いなら、結局最後は何かを——好悪や知己等を理由に決めなければならぬ。合理的では無いが、人の感情から見れば論理的だ。その結果、魔法大臣より、校長より、善良なだけの友人の発言が信頼される場合は零でない」

それは誰にでも有るし、どんな大魔法使いでも逃れられない人間の宿業だ。

「彼は元々狂った魔法使いと呼ばれていた。そしてホグワーツに入っ

てみれば、やはり事ある事に意味不明な発言をしたり、奇行の目立つ校長だ。更にこの四年、賢者の石のような危険物を校内へ勝手に入れ、バジリスクを止められず、シリウス・ブラックの侵入と逃亡を許し、安全な筈の試合で一人の生徒を事故死させた。この体たらくで、あの校長が力を喪い、毫碌し、狂気に堕ち、闇の帝王の復活という妄想に取り憑かれたのではないと一体どうして言える？」

「それは全て理由が——」

「——有ったとも。だが世間は知らない。君がどれだけを知らされたか。そして魔法界がどれ程多くを知らされているか、改めて情報を整理してみると良い。その過程で当然のように、君はあの校長の秘密主義ぶりに驚く事だろう」

勿論、秘密主義が必ずしも悪い訳では無い。

たとえば「マグル」界の大統領や首相が国家機密——核スイツチが何処に有るとか、テロリストの動向がどうか、逐一国民に教える事は酷く愚かしい事だ。或いは実態はどうあれ組織として行政の管轄下に置かれた国防機関M16やCIA、KGB等の長官で有っても、現在従事中の作戦行動について国民に周知などしないだろう。

説明責任を振りかざす民主主義体制でさえ、国家正義という怪物は民衆の無知を容易く正当化してしまう。ならばこの前時代的で、個人的能力に依存する社会構造を保ったままの魔法界においては、頂点の人間の秘密主義など猶更簡単に肯定し、正当化する事が可能である。「だが」ここで重要なのは、その秘密主義を踏まえて尚、その人間が信用出来るかだ。 Hogワーツ内に限定するのならば、アルバス・ダンブルドア校長が何か隠し事をしていても、それでも生徒にとって信頼と忠誠を向け、敬意と好意を捧ぐに足る相手であるかだ」

「……………」

「結論から言えばそうではない。あの校長は、生徒にとって近い存在ではない。今世紀で最も偉大な魔法使い、その肩書だけで人を遠ざけるには十分だというのに、校長headmaster——つまり Hogワーツ内で最も権力を有する人間だ。そんな相手に対して気軽に校長室へと足を運び、冗談や軽口を叩き、悩みや困った事について相談する事が出来

ようか？ あの校長はそうして欲しいのだろうか、普通の生徒視点ではまず無理なのだ」

やはり個人的な見解では有る。

それでも思ってしまうのだ。

アルバス・ダンブルドアだけは絶対に校長になるべきでは無かったと。

「変身術教授でも、闇の魔術に対する防衛術教授でも何でも良い。七年間と言わずとも、一年間ですら構わない。その授業を受け、その人柄に触れる機会があったのであれば、彼はここまで遠く無かった。彼が無意味に嘘を吐いたり、単に愉快的気分になれるという理由で突飛な行動に出る事は有っても、この手の冗談だけは決して言わないと生徒は知れたかもしれない。

——が、そうではない。残念な事に。嘆かわしい事に」

今の彼は校長で、しかもこの四分の半世紀以上、彼は校長のまままで在り続けている。

魔法族の総数で言えばアルバス・ダンブルドア教授を知る者の方が多いただろうが、アルバス・ダンブルドア校長しか知らない者は無視出来ない程に存在する。そして教授時代を知る魔法族にとっても、それは何十年前の事——相応に昔の事だ。あの「好きだった先生」は変わってしまったのではないかという懸念は避けられない。

そして自分の子供からも校長への好意的な反応が返ってこないのであれば——この四年間、既に校長が戦争の為に動き続けていたのだと知らない者にとつては、彼の動向は狂って見える——アルバス・ダンブルドア校長の言葉を容易く信用する事など出来ない。まして終わった筈の暗黒時代の再来、闇の帝王の復活を信じられなどしない。

そも、このハリー・ポッターですら、一対一で校長と話した事がどれだけ有っただろう。

彼の様子と校長が口にした物語から判断するに、片手で少し余る位か。それである校長の人となり、全幅の信頼を向けるに足る存在であるかを判断出来る筈もない。実際、今のハリー・ポッターの信頼は不安定なものとなってしまうている。彼の瞳が揺らいでいるのが証

扱だ。

そこまで考えを巡らせ溜息を吐く。

そうさせたのは、ルーナ・ラブグッドがしきりにローブの肘部分を引つ張ってきたからだ。自分の発言を無視するなど言いたいのだろうが、結論は変わらない。

「確かにあの校長が各生徒にちよこちよこ干渉する事は有るだろう。特に下級生はその対応に触れ、彼を意外と愉快で、話が解る人物だと思いかもしれない」

そしてそれもあの校長の一側面、素顔の一端では有る。

「しかしだ。彼の本性の大部分がそうでない、それとは程遠い事に、いずれ気付く事になる。高学年になって、或いは卒業後社会に出て——特に魔法省に入つて。そして学生時代彼を英雄視していた人間程、あの校長に対して幻滅を覚える事だろう。彼は最も魔法族らしい魔法族の一人であり、故に勢いよく流入しつつある『マグル』の観点からは時代遅れにしか映らない」

ルーナ・ラブグッドを見やりつつ言えば、彼女は余り良く解らないという表情を浮かべていた。横目で見るネビル・ロングボトムは大きく困惑しており、ジネブラ・ウィーズリーは反感と無理解の感情を露わにしていた。

けれどやはりというか。

ハリー・ポッターだけが深刻な顔で受け止めていた。

「別の切り口から言おうか。仮に闇の帝王は復活したと言ったのがミネルバ・マクゴナガル教授だったとしたら、それは嘘だと宣う生徒が居るか？ 当然、居る筈が無い。グリフィンドールなら殆ど全てが真剣に受け止めるだろうし、スリザリンですらその主張は無理筋だと解る」

彼女は公正を重んじ、スリザリンを含めて寮を一切区別しない——但しクイディッチだけは除く——という事を、ホグワーツの生徒ならば誰でも知って居る。

これまでの変身術教授としての行動、そしてグリフィンドール寮監としての振舞いを良く知って居るからこそ、彼女の発言を頭から疑う

事などしない。

「だがあの校長はやはりそうではない。生徒にとって彼の一番の印象は、校内に居る良く知らない偉い人なのだ。これで信頼しろという方が無茶な話であり、そして同じく良く知らない偉い人コナーリウス・ファッジ魔法大臣が真逆の意見を言っているならば、あの校長に疑惑と見分の目を向けるのが当然だ」

「ホグワーツ生が忠誠と好意、信頼を向ける先は『ホグワーツ』である。

決してアルバス・ダンブルドア個人ではなく、彼と同一でもない。彼を校内から叩き出したとしても『ホグワーツ』は何ら変わりなどしない。

少なくとも、闇の帝王が校内に立ち入ってくるまでは。

「……嗚呼、ならば教授に帝王の復活を主張して貰えば解決だとか言うなよ?」

視界外からの物言いだけな視線を受け、そちらに顔を向けつつ言葉を紡ぐ。

口にする気だったかは別として、考えてはいたのだろう。ジネブラ・ウィーズリーは誤魔化すように咳払いをし、ネビル・ロングボトムはバツの悪そうな表情を浮かべた。

「その場合、教授がハリー・ポッターに騙されている説が有力化するだけだ。彼女を信用出来る事が即ち、闇の帝王復活説を肯定する事にはならない。まあ支持者の増減は当然有る訳だが、君達が求める結果には全く繋がらない」

とは言うものの、内心では決定的な違いが生まれたとは考えている。

「そして君達がミネルバ・マクゴナガル教授達に期待しているとすれば無駄だ。彼女等は沈黙を貫くに違いない。魔法省を支持する発言は当然だが、校長を支持する発言もまた絶対にしてない。新学期、寮監方に『正しい』見解を聞きに行く馬鹿な生徒が現れるのは目に見えているが、まず零回答で追い返される事だろう」

「……まだ起こってない事なのに、君は断定的に言うよね」

「断定出来る事ならな。そしてこれは断定出来る部類に属する」

予想と呼べる代物ですらない。

「教授方が自己の見解を無節操に表明したらどうなると思う？ 闇の帝王の復活肯定派と否定派に分かれての大論争だ。嗚呼、その程度で留まるなら良いかもな。最悪の場合、自寮の寮監と違う意見を持つ生徒の粛清にまで発展するかもしれない。何れにせよ、最終的に行き着く先はホグワーツを二つに割る事態、千年前の内戦の再来となる」

まあ解っていて踊るスリザリンは良いのだが、解っていないで踊られる他寮の生徒達は将来、非常に危うい立場に置かれる事になる。

現状、魔法省と不死鳥の騎士団は同じ陣営に居ない。要は魔法省に味方した者の引つ込みが付かなくなり、それまでの数年で培ってきた筈の友誼や共感が壊れてしまう事こそが、「ホグワーツ」にとって最大の不利となるだろう。

そして結局の所、「純血」より純血以外の方が多いのだ。

校内に不和が齎されて得る利益は、光の陣営より闇の陣営の方が遥かに大きい。

だが、ハリー・ポッターは不満気な反応を寄越す。

「……ならホグワーツを割ったら良いじゃないか」

本気で言っているというより、不満や苛立ち、そして反骨精神からか。

暗い表情で、低い声で、さながら挑発するかのように彼は言った。

「どの道ヴォルデモートが勝てばホグワーツの内戦も何も無いだろう。スリザリンと、あいつに味方した一部以外は全員殺されるんだ。四寮でなく一寮、全てスリザリンになるかもしれない。ならそうさせない為に正しい事は、ヴォルデモートが復活した事は皆で発信し、未来に備えるべきじゃないのか？ そもそもスリザリンと仲良くするの何て最初から——」

「——無理である。その言葉に可能だと答える程、僕は恥知らずでない」

自分の目の前に居るのが誰であるかを思い出したのだろう。彼は途中で言葉を途切れさせたのだが、僕はそれを引き取って言葉を続け

た。

「そして僕はそちらに転んでも悪くないと思っっている側では有るのだ」

「……………は？」

「自分から言い出したのにそんな顔をするな。ケンブリッジの誕生までは期待出来そうにないし、寧ろノーサンプトンやスタンフォードの例を踏襲する事になるだろうとは思っているが、一度割ってしまった方が変わり得ると考えている。『ホグワーツ』が有する権威を史上最も有効に活用し、同時に悪用もしているのがあの校長だからな」

西洋『マグル』世界を大きく割った大事件の一つ宗教改革にしても、その後に起こった惨禍の巨大さを思えば起こって良かったと手放しで言えはしないものの、大分断によって多くの良きモノが新しく生み出されたのは確かだろう。

「だが己の希望通りに他人が動いてくれると期待し過ぎるべきではない。教授方も、そして校長もか。……嗚呼、そうだとも。去年度末、あの校長は闇の帝王の復活を宣言した。しかし、今年も再強調してくれると君が考えているならば、それもまた勘違いだろう」

千年の伝統を引き継いだホグワーツ校長として。

スネイプ教授の追放が不可避となる状況を恐れる不死鳥の騎士団長として。

彼はその行動を取れないと予想している。

「つまり始業式において、あの校長の口から闇の帝王の復活に対して結束を強めるべきだと再度訴え掛けられる事はない。夏休月中に何事も起こっていないように、或いは去年度末のセドリック・ディゴリーの死など存在しなかったように、平然と学期を始める事だろう」

地獄の魔法戦争は再開された。

だというのに、彼は日常が変わらず続いているように振る舞う事だろう。

「——っ。ヴォルデモートが復活したのに本気か!? あれだけ夏中大嘘吐き扱いされて、魔法省はゴミ以下の対応しかしてないのに!? 生徒に警戒を呼び掛けたりもしないって!? そんな馬鹿な事が……」

！」

「こちらは断言出来ない。ただ、あの校長もグリフィンドールだ。要は危険な賭けであればある程、その命運を他人の行動や選択に委ねるのを嫌う」

自分が戦場に居ないと気が済まないタイプとも言い変えられるか。己の知らない所で大きな事が起こるのを、彼等は決して我慢する事が出来ない。

「あの校長が闇の帝王の復活を再強調してしまえば、スリザリンとしても対応に迫られ、そして選択肢が生まれる。つまりこんな校長の下に居られるかとホグワーツを出ていくという選択肢だ。或いは、あの校長及びそれに味方する全生徒をホグワーツから叩き出し、『正統』ホグワーツを奪還しようとする選択肢だ」

挑発されて黙ってられないのは、スリザリンもグリフィンドールと左程変わらない。

意思が統一されていなかった去年度末は、校長の一方的な言い分を見逃した。しかし今は違う。闇の帝王の復活が殆どに共有された以上、最早二度目を許す事は無いだろう。

「何れにせよスリザリンがそれらの行動に移れば、その時点で分裂が確定し、校長に打てる対策は皆無だ。校長に学生を退学させる権利は有るが、自由教育である以上、逆に引き留める権利はないからな。まあ一応可能性は低いのだが、千年の伝統を終わらせた愚かな校長と呼ばれる事を懸念するのであれば、彼はそんな隙を晒さない筈だ」

そして校長が騒ぎ立てないならば、闇の陣営も同様に静かにしている事だろう。

特に今年は親達もホグワーツ内部の様子を知りたがっている筈で、子供達からの手紙で何も変わった事が無いと報告されていれば、大丈夫だと勘違いする阿呆もそれなりに出ると予測される。何れ彼等も現実に気付く時が来るにしても、タイムリミットが伸びるに越した事はなく、闇の帝王にとって都合が良い。

一方で光の陣営——あの校長にとっても悪い話ではない。

元死んでいる男スネイプ教授が校内で主君の復活を否定して回り、魔法省と魔法大

臣への忠誠という正論を訴える事態に発展する——騎士団内の二重スパイよりも、今年ホグワーツで混乱を生じさせる方が有意義だと帝王が判断する可能性は零では無い——可能性も無くなるだろう。つまりはその延長として、後に闇の帝王の復活が明らかになった時、利敵行為を行ったスネイプ教授をホグワーツから追放すべきだという声上がる未来も潰せる。

あの校長は使える手駒をホグワーツに置いたままで居られる。

どちらの陣営にとっても、現状維持なら最悪は避けられる。

そしてわざわざ賭けに出るような状況でも無い。奇妙な戦争は歓迎出来る。フエニーウオー

「まあ、君が信じられないというならば構わない。数時間経てばどちらが正しいかどうかは解る。そして君が正しい場合は、僕を存分に嘲笑すると良い」

そちらでも一向に問題無かった。

去年と違い、予想を外したとしても死人は出そうにないからだ。

「しかし仮に何時も通りに始まった場合、それが校内に生むのは闇の帝王の復活など嘘だったのだろうという空気だろうな。当然ではある。親兄弟が明日突然殺されても可笑しくない時代になったというのに、子供は何も知らされないまま、考える機会も与えられなくとも十分だ。そう言っているに等しい対応は、非常に身勝手に尊重の欠片も無い——」

「——じゃあ、どうでも良いって言うのか？」

「……………」

息荒く言葉を遮ってくれたハリー・ポッターを見やる。

感情を抑えようとしている努力は見えだが、滲み出る怒りを隠し切れていなかった。

「僕はずつと大嘘吐き扱いされたままで居ろって？ ホグワーツの為、大人達の高貴な目的の為に？ 所構わず傷の痛む可笑しな狂人と呼ばれて、更にヴォルデモートと決闘したという大法螺を吹いているアホと陰口を叩かれ続けても、それでもダンブルドアもマクゴナガルも黙ってるのか……!? 僕の気持ちなんかどうでも良いって言うの

か!？」

自ら言葉を紡ぐ内に現状を再認識し、一気に頭に血が昇ったようだ。

ハリー・ポッターは勢い良く立ち上がり、大声で怒鳴り始めた。

「ああ、そうだったな……！　大人達が僕を本当に助けてくれた事なんて一度も無かった！　賢者の石を護った時も！　バジリスクを殺した時も！　吸魂鬼を追い払った時も！　僕が目立ちたいが為に年齢線を超えたのだと学校全体が責めた時だって！　大勢の死喰い人に囲まれてヴォルデモートと決闘する時ですら、僕一人だけが我慢して、僕の手で終わらせなければならなかった……!!」

彼は元々癩癪持ちだったが、今年は躁鬱傾向が強過ぎないかと思う。

ルーナ・ラブグッドを除いた二人は稲妻に撃たれたように硬直しているし、各コンパートメントはある程度の防音がされているとはいえ、大声を完全に遮断してくれる程ではない。この車両が静寂に包まれたのは、多分気のせいでは無いだろう。

「大人達は何時も何時も、些細な助力を大袈裟であるかのように言う……！　見えない所で手助けをした！　可能な限り情報を与えた！

ああ、非常に大層な助けだったとも！　子供より遥かに賢いつもり
の大人達が、最低限の何かをやった気にはなれたんだからな！　それを僕がどう思うかなんて一つも考慮に入れちゃいない！」

「……………」

「君だってそうだろう、冷血スリザリン！　君が僕より賢いのは認めるさ！　けど、君が賢いからなんだって言うんだ！　君の予想通りになったとして、何が変わるって言うんだ！　君だって今年もコウモリみたいにフラフラするだけで、何も動く気がないんだろう！」

怒っているが、それでも痛い所を突いてくる男だ。

この場合も、やはりハリー・ポッターは正しい人間である。

「今まで何も変えられていないのも、今年……今年も、か。動く気がないのも肯定しよう。それは確かに真実であり、耳の痛い所だ。が、僕に八つ当たりした所で何も変わらんぞ」

「知った事か！ 所詮は他人事だから好き勝手言え——」

「——他人事だとも。だから、君が動けばいいだろう」

「……………え？」

思っても居なかつた言葉を掛けられた衝撃に瞬きを忘れたのか。

見開いたまま止まつた彼の瞳を、不安定に揺らめく碧色を、座つたまま下から覗き込む。

「君が忘却の彼方に置いてしまうのは仕方ないが、この話の出発点は、首席を目指して学生生活に現を抜かしている暇が君に有るのかというものだった。途中の話は、特にあの校長についての部分はここに帰着する。君が、君こそがやれば良い」

あの校長が求めていないのは承知の上だ。

しかしだからこそ逆に、僕はこの男に対してそう求める。

「校長や教授が自陣営の支持者を集める真似は危うい。それは確かに事実だろう。千年前の内戦もサラザール・スリザリンとゴドリック・グリフィンドールの対立、つまり最終的には大人同士の抗争だったからな。しかしながら、一生徒で子供に過ぎない君が、ホグワーツにおいて“御友達”を増やす事は何の問題も発生しない。それはホグワーツ生の通常の行為であり、校長や教授——スネイプ寮監や今年の新教授をもつてしても尚禁じられない権利だ」

ハリー・ポッターは力が抜けたようにふらつき、倒れ込むように椅子へと座り込んだ。

余りの勢いに隣のジネブラ・ウィーズリーが顔を歪めはしたが、彼の表情を見てだろう。敢えて文句を言う気は無さそうだった。

「勿論、君が生徒に手当たり次第大論争を吹っ掛け、論破して帝王の復活を認めさせようとするなら別だ。その場合は騒動が不可避であり、ミネルバ・マクゴナガル教授ですら罰則と監視をもって止めようとするだろう。しかし、君が表向き波風立てずに動くつもりなら、彼等は止められない。そこまで生徒を支配する権限を教授は持つてなどいない」

「……………説得して、ヴォルデモートの復活を信じさせろって事か？」

「それも一つの手段ではあるが、別にそれが全てではない」

感情に振り回されている人間に、理屈を振りかざすのは寧ろ逆効果だろう。

「そもそも君が馬鹿な嘘を吐くような人間でない。そう知って貰う為に努力する事もまた有効な手段だ。言っただろう、誰が発言をしているかこそが正しさを決める場合は有り得ると。あの校長が信じられずとも、君を信じられる事は有る」

「まあ僕が言えた義理では無いのだが、君の校内での評判は左程芳しくない。故に校長でなく、君こそを信じられないと言う者も居るだろう。しかしそれでも、君は校長のような遠い存在ではない。ホグワーツ生にとって同じ空間で学ぶ同輩であり、グリフィンドールなら同じ寮である事も加わる。これからそれを変える為の機会と、変える為の時間は有ると思うがな」

その為に今年の時間を費やす事こそ、真に有意義と言えるものではないか？

愕然とした表情を浮かべたままのハリー・ポッターに、そう小刻みに笑ってみせる。

「……でも、僕達はまだ未成年で、子供だ。ウィーズリーおじさん達も、ルーピンやシ——兎も角、大人達は僕達には何も出来る事が無いと言いたげだった」

「下らんな。本物のアラスター・ムーディが聞けば笑い転げするような言葉だ」

赤毛の少女の肘打ちで発言が訂正されるのを眺めつつ一蹴する。

しかし不安定な発言だ。先程あれだけ大人を非難しておいて、今度は自分が子供だからか。けれどもこんな不安定さが、真つ当な子供の在り方なのだろうか。それを僕が真似出来そうにないのは、果たして良い事なのか悪い事なのか。

「戦争に大人も子供も無いだろう。年齢の長幼も、覚悟の有無も、種族の差異すら関係無く、この魔法界に留まる限り巻き込まれる。そして第一次魔法戦争は十一年続き、御互い散々犠牲を払って尚一時休戦止まりだった。ならば今度は何年戦争をやるだろうか？ 僕達の卒業

まで今年含めて後三年有るが、それまでに終わってくれるとは到底思えんが？」

「……だから卒業後に向けて、今から戦える仲間を集めておけつて言うのかい？」

「別に校内で魔法戦士を探せとは言っていない。寧ろ戦士以外の人材こそが校長に欠けており、だからこそコーネリウス・ファツジ如きに押されている」

今世紀で最も偉大な魔法使い。

その肩書に比して校長の求心力が異常に低い事を——彼と近い世代の人間の殆どが死んだか引退している事を差し引いても尚低い事を——彼等はずっと強く意識すべきである。

「今現在魔法界では二つの勢力が『票集め』しているが、現実の選挙と同様、全体の過半数を取る必要など全くない。死喰い人と不死鳥の騎士団。かつての戦争時にはどちらの人数が多かったのか、騎士団員の誰かから聞いていないのか？ 無投票の日和見主義者を最大限増加させ、その上で重要な局地で勝利する事さえ出来るならば、支持者の総数で劣る側が最終勝者となったとしても何ら可笑しな事ではない」

「……………」

「『マグル』と異なり、賢明なる魔法族は国民軍を生み出さなかつた。君はその意味をもっと深く考えたと良い。テロリスト風情に統治機関が負ける筈無いという甘い考えを抱いているならば、君は魔法族に、そして魔法界に対して幻想を持ち過ぎている」

ハリー・ポッターは表情を余計に険しくして黙り込んだ。

ネビル・ロングボトムやジネブラ・ウィーズリーの表情も硬いが、彼等はハリー・ポッターの感情の波に着いていけないというのが大きいらしく、余り大した思考を巡らせている感じがしない。更に僕の言葉への反応にしても困惑以上が含まれていないのは、彼等が生粋の

魔法族だからだろう。ハリー・ポッターと違い、彼等は「マグル」の社会制度に通じていない。

この場で御気楽そうなのはただ一人、ルーナ・ラブグッド位の物だ。もつとも、彼女が見た目通りかは解らない。必ずしも何も考えて居ない訳でも無く、レイブンクローらしい叡智の刃を携えている事は、三年前に十二分に思い知らされている。

硝子戸越しにコンパートメントの外をチラリと見る。

既に列車は出発して久しいのだが、また一人、生徒が通路を通り過ぎて行くのが視界に入った。今のはハッフルパフであったようだが、その寮に限った事でも無い。グリフィンボールも、レイブンクローも、そして一人二人だがスリザリンも、通り過ぎて行くのを見かけた。外見年齢から判断する限り、彼等は見回りに来た首席や監督生では無さそうだ。

つまり偶然を装って観察しに来る程にはハリー・ポッターは現在注目を集めているのであり、しかも先程更に注目を集める程の大声を上げてくれたのであつて——そして自惚れでないのであれば、僕が一緒に居る事も有るのだろう。

現在の情勢でスリザリンとグリフィンボールが席を同じくしているのは、どう考えても異常であり、不穏だ。これによりハリー・ポッターは更に嘘吐き呼ばわりされる事になるだろうが、まあ自分から僕の下へ来たのだ。頑張つて言い訳して貰うしかない。

一方、僕の方も後でドラコ・マルフォイによる尋問が待ち受けている訳だが、正直言つて、そちらの方は余り心配などしていなかった。今夏中マルフォイ家に滞在した事で得た一つは、ドラコ・マルフォイのハリー・ポッターに対する執着は、僕が想像していたよりも大きいという事である。他のスリザリンと異なり、ドラコ・マルフォイが意識しているのは「生き残った男の子」では無い。勿論、それが彼にとって良い事なのかは中々判断しにくい事であるのだが。

幾度目かの沈黙に手元の『ザ・クイブラー』を軽く弄んだ後、ルーナ・ラブグッドへと差し出す。興味が尽きた訳では無いが、そろそろ時間切れだろう。本来の持ち主に返そうとし——しかし、それは叶わ

なかった。途中で止められた。

その理由は、僕が動きを止めてしまったから。

そして根本の原因は、酷く抑揚の無い声でハリー・ポッターが問いを紡いだから。

否、鮮血を思わせる輝きを放った彼の瞳こそが、僕の動作を、呼吸を止めさせていた。

「……君はさ、どうして仲間を集めろって僕に言うんだ？」

「――」

失敗した。

本能以そう解らされた。

油断した結果の過ちと後悔を、今回も僕は思い知っていた。

吸魂鬼が眼前に現れた時のような涼しさとは異なる、自分が居る場所が一瞬で水底に変わってしまったかのような息苦しさ。心を制御すれば耐えられるという代物では無く、生物として圧倒的に下であると格付けが付いているが故の重圧。

この場でこれを感じているのは僕だけだ。

他の三人は何も感じていない。唯一その眼を真正面から見てもった僕だけが、死の恐怖と、己の不用意さが招いた代償を味わう羽目になっていた。

ホグワーツに入学して以降、己が死んだと思った瞬間は二度存在する。

その一度は当然、去年度末の事。アラスター・ムーディに化けた死神喰い人、バーテミス・クラウチ・ジュニアに杖を向けられた時。彼が僕に利用価値を見出していた事によって命を拾いはしたが、殺されても可笑しくは無かったし、生きた心地がしなかった。

しかしながら。

最も命の危険を感じたのは、その時では無い。

もうじき四年経とうとして尚、未だに鮮烈に記憶している、一人の教授と直接会話を交わしたあの日。クイリナス・クイレル教授の瞳の中に、赤色の光を見た時である。

……嗚呼、アルバス・ダンブルドア校長の言葉は本当に示唆に富ん

でいる。

ハリー・ポッターは何れ闇に墮ちるだろう。

あの大魔法使いにそう考えさせてしまった理由は何か。

そもそも子供が将来闇の魔法使いになるに違いないという発想は、本来の彼の流儀では無い。

ゲラート・グリンデルバルトとアルバス・ダンブルドア——過去友人関係に在った自分達二人との類似をハリー・ポッターと闇の帝王との間に視たとしても、当時のハリー・ポッターは一歳である。善悪の区別を知る以前の存在であり、第一、彼の両親であるジェームス・ポッターとリリー・エバンズは光の側で戦った人間だった。

であればあの校長は、彼の信奉する愛と教育によってハリー・ポッターが善の道に進むのを期待するのが当然であり、自然な行いであつたと言えよう。そして逆に明らかにそれらが与えられないであろうダーズリー家に置くのは、非常に校長らしくない行いだ。

彼の身の安全を天秤に掛けたとしてもそれは変わらない。一時的な避難場所としてダーズリー家に預ける必要が有つたにせよ、危険が低くなつたと判断したら即ハリー・ポッターを回収すれば良かったし、逆に危険だと判断すれば預け直せば良かった。

そもそも霊魂未満のゴーストに貶められた状態の亡霊を過度に恐れる程、今世紀で最も偉大な魔法使いは弱くない。彼が唯一警戒するに値する相手、闇の帝王が動いたのは精々四年前からで、第一次魔法戦争直後の一年程を除けば、ハリー・ポッターに身の危険など一切無かった。

けれども何故だか彼は十四年前そんな非道を是とし、また十年もの間それを是とし続けた。やはりその行いは、余りに「アルバス・ダンブルドア」らしくなかった。

そして今夏、闇の帝王を滅ぼす方法を聞いた時、僕は非常に不思議だったのだ。

如何に闇の帝王、彼が敵と看做す相手の弱点に繋がるとはいえ、分霊箱——邪法の極地の一つについて、闇を遠ざけて来たあの校長が多くの知識を持っているとは思えなかった。

そもそも帝王本人に詮索を知られてはならない以上、その知識の獲得は秘密裡に行う必要があり、必然得られる情報にも制限が付く。まして前代未聞の複数の分霊箱となると完全に魂の領域であり、魔法族にとつてすら殆どが未知のままの世界である。どんなに頭が良からうが推測を立てるにも限度が有ろう。

しかしそれにも拘わらず、あの校長は分霊箱を作れる数には限界が有ると断じ、更に闇の帝王はその限界が近付いていると推測した。何故あの校長がそんな推測を出来たのか、一体何を根拠としていたのか皆目見当も付かなかったが、今その答えが掴めてしまった。

ハリー・ポッター。

彼こそが、意図しない形で作成された分霊箱か。

改めて考えれば、あのハロウインの日に更なるヒントが有った。

校長は当然疑問を抱いたのだろう。

ハリー・ポッターが死ななかつた事では無い。闇の帝王が消え失せた事でも無い。

外傷を一切与えない事の特徴とする筈の死の呪文が、ハリー・ポッターに対しては唯一傷を与えてしまったという、一切の前例が無く、魔法的に不自然かつ不可解な事象について。そして推量したのだ。その傷は単なる傷跡では無く、彼を闇に結び付けた事を示す烙印では無いのかと。

それは一部間違いであり、しかし概ね正解でも有ったようだ。

去年までは、ハリー・ポッターに些細な変化しか——時折の痛みや、蛇語能力も付け加えられるだろうか。彼の血筋を見る限り、蛇語話者は居ない——与えていなかったと思われる。

けれども闇の帝王は復活した。
肉体を得たのみならず、その際にはハリー・ポッターの血も取り込んだ。傷と魂、そして血。彼等の間の繋がりには魔法史上類を見ない程に強固となった。

そして十四年前に予測されていた最悪の展開の一つは間違いなどでは無かった。そう思わせるだけの証拠が、今まさに目の前に存在している。

闇の帝王がハリー・ポッターに取り憑き、肉体を奪い、成り代わる。見る限り、その未来は十分起こり得る。

帝王が既に肉体を得ていようが関係無い。分霊箱の秘密を学び、魂を二度以上分割してみせるという奇跡を成し遂げ、塵のような存在に貶められて尚も生にしがみ付いてみせた存在ならば——今のこの世で最も魂について知識と思索を深めたと言つて良い最高峰の魔法使いならば、恐らく可能だ。クイリナス・クイレル教授やジネブラ・ウィーズリーに対しては不可能でも、ハリー・ポッター、己と最も近い器である彼に対してだけは、多分それが出来る。

「君は可能な限りスリザリンらしく振舞おうとして来た筈だ。けど、これは違うだろ？ グリフィンボールに仲間を集めろつて言うのは、明らかにスリザリンの遣り口じゃない」

「……………」

細心の注意を払い、言葉を選ばねばならない。

「君の言葉は殆ど、特に僕に何かを伝えようとする時は意味を持っていた。じゃあ、これは何の為なんだ？ マルフォイの奴に世話になって、ヴォルデモートの側に着こうとしている君の事だ。一体何を企んでる？ たとえば教えて僕に仲間を集めさせ、そして残らず一網打尽にするくらいの事は考えてるんじゃないか？」

答えを過つ事が有れば許さない。

母親の名残は消え失せ、血色に支配された瞳が告げている。

生理的反應で喘ぎそうになるのを意思の力で押し殺し、反対に息を肺から押し出ししながら、

「——闇の帝王の目的と僕の目的は必ずしも一致しない。まず初めにそう反論しておこうか」

可能な限り平静を装い、ゆつくりとそう回答を告げた。

「……………」

流石にその答え方は予想外だったのか、彼は黙り込んだ。

「嗚呼、闇の帝王の目的がスリザリン的では無いと言ったのではない」

僅かに重圧が薄れた隙、何か余計な事を言われるより先に、僕は言葉継ぎ足す。

「彼がやろうとしている事は、今のスリザリンの思想の一つの終着点だろう。それは何ら否定しない。しかしだ、闇の帝王に付き従う者全員が、彼の目指す世界を理想として等しく共有出来ている訳では無い。帝王の存在しない世界を目指す不死鳥の騎士団とは——嗚呼、違うな。これまで通りの魔法界の姿を等しく共有出来ている組織とは違う」

「……君は死喰い人がバラバラだって言うのかい？」

「でなければ、やはり十四年前に大勢が裏切り、組織自体が崩壊する事など無かっただろうに」

「……………」

「権力の渴望。社会への復讐。巫人や『穢れた血』の抹殺。禁忌とされる呪文や魔法薬の研究。自身の一族や家系の繁栄。そして、不死の獲得。現体制が邪魔だという点で一致し、互いに協力し合える領域が存在していたとしても、各々向いている方向は違う筈だ」

筈と表現はしたが、それは去年度聞いた内容の殆どそのままだった。

「僕も同じだ。闇の帝王の破壊的路線に概ね賛同出来るとしても、細かく見れば違う意見や思惑を持っている。君とこうしているのにも理由が有り、目的が有る」

「……目的？ その目的っていうのは何だい？」

「馬鹿正直に言えというのか？ スリザリンがグリフィンドールに？」

鼻で笑ってやれば、彼は瞳の赤を明滅させて苛立ちを露わにし、けれども何も言えなかった。彼から感じる圧力も弱まりつつある。

「しかし、強調はしておこう。先程『御友達』集めを勧めた理由が闇の帝王の打倒の為だと考えているなら、それは間違いだ。そんな事の為に僕は言葉を費やした訳では無いし、そちらは僕に唆されずともやるだろう？ 君はグリフィンドールだ。スリザリンに警戒されようが、僕から注意を払われていようが関係無い。絶対に、君は我慢出来

ない」

彼が思っているより遙かに、僕は「ハリー・ポッター」を見て来たつもりだ。

そして校長から聞かされた物語とも照らし合わせる限り、彼が何も行動しないという事は百パーセント有り得ない。あの校長はハリー・ポッターを戦争から遠ざけようとしているが、彼の性格からして土台無理な話だろうと僕は思っている。

「……ヴォルデモートを倒す為じゃないなら、じゃあ何の為に集めさせるんだ」

「多少はぐらかしはしたが、それでも割と誠意をもって回答したつもりではある。けれども君の口振りからするに、どうやら全く信用して貰えていないようだな」

「信じられる訳が無いだろう。君は余り嘘を吐かないが、必要が有れば吐く筈だ」

「その通りだ。しかし今回は違うし、君もそう確信出来るであろう反論は述べられる」

「へえ？ 聞かせて貰おうじゃないか」

赤い光を明滅させ、挑むように言う彼に笑う。

全ては偶然であり、数奇だった。しかし運命かもしれない。

今この場でこの話が出た事は非常に良かった。違う場所での話が出たならば逃げる事は出来なかったかもしれないが、彼等は今回も僕の救い手になってくれるらしい。

「ルーナ・ラブグッドとネビル・ロングボトム。君が今年「御友達」を集めるつもりならば、まず第一歩としてこの二人を誘う事から始めたらどうだと、僕は君にそう勧めるからだ」

「——え？」

彼が内容を理解した瞬間、血のような赤が消えた。

それも拍子抜けする程、綺麗さっぱりと。先程までの重圧や恐怖も嘘のように無くなった。

そして動揺するのは良いが、少しは隠したらどうだと内心で苦笑する。

ハリー・ポッターは口を半開きにしたまま、僕が挙げた二人を交互に、何度も見る。彼が有り得ないと思っているらしい事は、開心術士でなくとも丸わかりだ。彼が想定する仲間のイメージには、この二人が加わっている姿など全く存在していないようだった。

そんな彼を放っておき、僕は眼尻を吊り上げている赤毛の少女へと声を掛ける。

「嗚呼、ジネブラ・ウィーズリー。君を除外したのは単純に君の事を良く知らないからだ。これが初対面であり、人伝てに君の噂を聞く事すら殆ど無かつたからな。……と言っても、僕は君をこの二人と同じ扱いをする気は全く起きないが」

「……どうしてよ」

「くくく、グリフィンボールがスリザリンに評価して欲しいのか？」

「……………」

「理由は二つ有る。一つは単なるグリフィンボールなどハリー・ポッターの周りに溢れている事。ウィーズリー家だけで腹一杯だ。そしてもう一つ、こちらの方が僕にとって遥かに重要なのだが、君は大きな喪失を知らないまま幸せに生きて来れてしまったという事だ。無論、それは素晴らしいと言える。少なくとも僕からすれば、羨ましくて堪らないからな」

僕の言葉をジネブラ・ウィーズリーは皮肉と受け取ったようである。

しかしハリー・ポッターに意図が伝わったのは表情の変化より明白だった。他二人も同じだ。故に、この場に居る人間の中で彼女だけが一人理解出来ていなかった。

そして仮にこの場にロナルド・ウィーズリーやハーマイオニーが居た所で、ジネブラ・ウィーズリーの仲間入りをしたただけだ。クォーターヴィーラの女性が華麗に言つてのけたように、理解しようと努力しても尚理解出来ない事はやはり有る。

顔を近付け、もう一度ハリー・ポッターの眼を覗き込む。

彼は少ししたじろいだが、その瞳の中に赤の光は見えない。消えてしまった……訳では無いだろう。しかし奥に引っ込んだというより、繋

がりが薄れてしまったという感じがする。闇の帝王と「遠く」なった場合には、彼は彼のままで居られるという事だろうか。

「さて、「生き残った男の子」。ここに居る彼等が、死喰い人と戦う勇ましい魔法戦士に見えるか？ 或いはその資質が有ると感じるか？

ルーナ・ラブグツドの成績は僕も知らないが、ネビル・ロングボトムの成績は、僕より君の方が遥かに良く知っている筈だろう」

「……………」

「言葉は要らんようだ」

自分が彼等に失礼な反応をしてしまった事は流石に自覚したのでろう。ハリー・ポッターは酷くバツが悪そうだが——そして槍玉に上げられたネビル・ロングボトムも恥じるように身を縮こまらせていたが——彼等の凶太さの欠片も無い反応に失笑する。

この辺りは彼もルーナ・ラブグツドを見習うべきだ。彼女の方は一切動じていない。

「二応魔法戦争は一、二年で終わりそうになく、まして学校の成績と決闘の成績は違う。あの校長ならば、数年有れば子供は幾らでも変われるとも宣うだろう。……まあ、僕に言わせれば老人達が自分で変わろうとしないだけであり、そして僕の関心はそこに無い。君がこれからも魔法界で生きたいと望むなら、あの校長と違い、彼等のような人間を集めるべきだろう」

——と言っても、余計な御世話かもしれんがな。

そのように最後に言葉を結んだ後、椅子から立ち上がる。

そうしてローブの内から杖を取り出し、そのまま呪文を紡ぎつつ一振りする。四年を経て慣れ親しんだ浮遊呪文は正確に効力を発揮し、己のトランクが上の棚から床に落ちた。その際に重い音を立てたのは呪文の失敗ではなく、家から大量に本を持って来たが為の重量が原因だった。

「——っ。君は一体何をしているんだ」

「ここから去ろうとしている。寧ろここに留まる理由が何処に有る？」

焦ったように言う彼に、馬鹿げた質問をするのだなと微笑んでみせ

る。

「君の親友二人も仕事が終われば合流する気なのだろう？ 一つのコンパートメントに七人は手狭——まあ、六人でも余り変わらんか。しかしながら、そのような窮屈な思いをするのは御免だ。今年はスリザリン側の方が空いてそうだからな。彼等の何処かに入れて貰うさ」
そう僕が言ってみせた途端、ルーナ・ラブグッドもまた立ち上がった。

予兆無く唐突で、ハリー・ポッター達三人が飛び跳ねんばかりの勢いだった。彼女は僕と違って杖を取り出さなかったが、それでも柵に向かつて手を伸ばそうとした所を見ると、有している意図は明らかである。

が、彼女の頭の上に掌を乗せる事で、その行動を停止させた。

「君に着いて来てくれと頼んだつもりはない」
「ン。でも——」

「今ここではつきり述べておくが、僕は君と友人になった覚えも無い」
一切の飾らない言葉には、流石にルーナ・ラブグッドも傷付いた表情を浮かべた。

レイブンクローでの浮いた生活で更に浮世離れし、三年間で諦めてしまった部分は有るようだが、それでも彼女が奥底に抱く望みは変わって居ないようだ。意を決して先輩のコンパートメントへ殴り込みを掛けたあの時のまま、彼女は友人と呼べる存在を欲している。

そして僕の立ち位置は、あの時よりも更に明確な物となっている。
「だが確かにこの場に居るのはグリフィンボールだけで、後から来る二人も変わらない。だから居場所が無いと君が感じ、そしてスリザリンで気の合う人間を探したいと望むのならば連れて行っても良いのだが——」

「——ルーナは私の友達よ。お情けでスリザリンの仲間に入れて貰う必要なんて無いわ」

少女の鋭い声が、僕の言葉を最後まで紡がせない。

グリフィンボールの美点の一つは、非常に操作しやすい点だろう。そして渋々認めざるを得ない事でもあるが、この手の救い方はスリ

ザリンには出来ない。

「だ、そうだ」

確か学年が同じなので、彼女達の面識は有る筈だ。

が、それでも真つすぐなジネブラ・ウィーズリーの言葉は、ルーナ・ラブグッドに大きな戸惑いを齎したらしい。彼女は赤毛の少女にゆっくり視線を向けた後、更にのろのろと僕へと視線を戻す。友達であると言われたのは初めての経験だったらしく、彼女の処理能力を超えたようだ。

中途半端に立ち上がったままの少女の頭を掌で軽く押してやれば、彼女は抵抗する素振りを見せず、ポスツと椅子へと座り直した。

夢見心地というより呆然とした様子で僕を見上げる彼女に、重ねて問いをぶつける。

「嗚呼、一つ聞いておきたいが、『ザ・クイブラー』は寄稿を受け付けているか？ もつと言えば、たとえ生徒から送られてきた記事だとしても、君の父親は雑誌に載せようと考えてるか？」

「……えっと。多分、パパなら大丈夫だと思う。あんたは何か記事を載せて欲しいの？」

「現状そのつもりは無い。バナナg o b a n a n a sを見る事でも有れば吝かでは無いがな」

つまり、そんな機会は永遠に訪れないだろうという事だ。

「ただ、その雑誌には多少興味が湧いた。そうだな……取り敢えず一年は購読させて貰い、以降はまた来年考えようか。購読料は今の内に支払っていた方が良いだろうか？」

「ウウン。新聞と同じように、配達ふくろうにお金を払ってくれれば良いよ」

「そうか。ならば今月から頼みたいが、注文方法は——」

「——大丈夫。私からパパへの手紙と一緒に書いとく」

「では君に頼むとしよう」

まだ混乱状態から抜け出し切れてはないものの、親の新聞が売れた事は取り敢えず理解出来たようで、ルーナ・ラブグッドは幼く見える笑みを浮かべる。

そして僕達の会話を聞いた外野の反応は、真つ二つに割れていた。こいつ正気かと見上げてくる二人と、良く解つて居ない一人。要は雑誌の中身を知つて居る純血と、知らない半純血。非常に対照的で、そして知らない一人が後からどんな反応をするかは多少見たい気もするが——そこまでは欲張り過ぎだろう。

腰を屈め、トランクの取っ手に手を掛ける。半ば私的空間と言えるコンパートメント内は兎も角、通路で魔法を使つてしまえば監督生達に見咎められる可能性が有る。酷く面倒で億劫だが仕方が無かつた。「ちよ、ちよつと待つてくれ。まだ話は終わつてない」

コンパートメントの戸を開けさつさと立ち去ろうとした僕に、慌ててハリー・ポッターが慌てて声を掛けて来た。少し迷つたが、渋々振り返る。

「……何だ？ まだ君は僕に用事が有るのか？」

「当然だ。だつて君と話したい事が有るつて言つただろう。まだそれをしてない」

「……そう言えばそんな話だつたか」

言われてみれば、確かに本題と思える話を彼から聞いていない。

途中が余りに衝撃的過ぎたせいで、すっかり頭の中から抜け落ちていた。余り無い失態……という程に稀では無いが、確かに悪いのは僕ではある。

「ならば早く済ませる事だ。監督生会議が何時まで続くか解らんが、ドラコ・マルフォイがこの場に現れた場合、やはり宜しくない事態になる。何を躊躇つていたのか知らんが、悠長にしている時間はもう無いぞ」

立つたまま戸を軽く叩きつつ催促すれば、漸く踏ん切りがついたのか。

彼は覚悟を決めたように表情を引き締め、公開の場で僕に接触する危険を冒してまで望んだらしい本題を切り出した。

「セドリックと……その、最後に話をしたんだ」

「――」

息を呑んだのは二人か、或いは僕を含めた三人か。

わざわざ僕と直接話をしようと思うだけの動機なだけには有り、そしてここまで話したからなかった理由も解った。確かに、気軽に口にするのが不可能な話題だった。

「その時少しかけ口にしてたんだ。同時優勝なら君に文句も言わせないうて。理由を聞いたなら、君と賭けをしたって事だけ答えてくれた。けど、それ以上は答えてくれなかった。これがどういう事かは直ぐに僕にも解るって楽しそうに笑ってたけど——」

「——その中身を僕に聞きたいのか」

「……悪いかい？」

「いや」

彼の瞳の奥に、やはり赤い光は見えない。

それでも一切の欠片もだ。真つすぐな心が曝け出されており、しかしそれでも読み切れない。不思議な事ではない。「マグル」の考える読心術と異なる開心術において、この手の障害は不可避である。対象相手がこのような状態だと、心を穿って解釈する事など出来はしない。

セドリック・デイゴリー。

当然の話だが、あの男はハリー・ポッターにも剣を残して逝ったのか。

「君が期待する程、それに対する回答は大した物では無い」

時間を要しない問いだったと、コンパートメントの戸に再度手を掛ける。

「正確には僕が賭けを受けた訳でも無く、あの男が半ば強制的に賭けを強いた。彼は自分が優勝する方に賭け、対する僕は当然ながらその逆だ。賭けの対象は……今夏、彼の開くホームパーティーへの招待を受けるかどうかだった。君も解るといふ旨の発言は、そのパーティーにハリー・ポッター、君も誘おうと彼が考えていたからだ」

「……えっと、それってホント？」

「こんな事で嘘を吐いて何になる？ まあ、自分で口にしても馬鹿げていると思うがな」

今でも何かの夢では無かったかという気がする。

「……その賭けつて——」

「周知の結果が示す通り、彼の勝ちだ。もつともセドリック・デイゴリーは死んだ。招待も何も無く、だから僕も半分だけ叶えた。今夏の休暇中、あの男の家を訪問する所まではやった」

ルーナ・ラブグッドが元々大きい眼を更に見開いた。彼女を最後に驚かせられた事は多少痛快では有った。他二人の反応は、まあ言及するまでもないだろう。

しかし、ハリー・ポッターは不思議と驚いた素振りを見せなかった。やはり彼のこういう所は気に入らない。彼がどんなに濃いスリザリンの資質を有していても根本的にはグリフィンボールである事を、それもサラザール・スリザリンがゴドリック・グリフィンボールに見出したであろう価値を備えている事を、まざまざと直視させられるからだ。

そしてだからこそ——

「——なあ、ハリー・ポッター」

「……なんだい？」

あの校長より物語の顛末は聞き及んでいる。

彼が何と答えるかなど最初から目に見えている。

それでも尚、ハリー・ポッターの口から語られる内容に価値が無い訳では無いし、寧ろそうしなければ一切の価値が無いとも言える。

ハリー・ポッターを見下ろしたまま、僕は問いを紡ぐ。

「セドリック・デイゴリー。あの男は最期まで高潔だったか？」

「——ああ。あいつは、彼は、最期まで本当に良い奴だった」

問いの唐突さに戸惑いはしたものの、答えを紡ぐ彼の瞳と言葉に一切の曇りは無い。

そしてそれは解答であり、証明だ。

セドリック・デイゴリーが他人に悪く言われるような存在ではなく、非の打ち所がない、完璧で、生徒の模範とされるべき理想だという結論。歴史による美化を待つかも無く、彼はそのような存在である事を絶対的に確定させるに足る言葉。

死は終わりである。そしてあの男とて死にたいなど思っていない

かった筈だ。

しかしそれでもこの男に——歴史に名を残す資格の有る人間にこんな風に記憶されている事は、少しばかり羨ましいと思わないでも無かった。そして光の陣営が勝ったのであれば、彼の名はホグワーツにおいて永遠に記憶される事だろう。

「……ふん。やはり僕の見立ては間違いだった訳だ」

戸を開けつつ紡いだ、然したる思惑も持たないままの独白の言葉。「いや、違う」

しかし、それを聞き咎めて返されたのは明確な否定。

流石に驚きと共に振り返り、思わずハリー・ポッターの顔をまじまじと見る。

けれども、今度の彼は微かに笑っていた。先程とは違って心が読めるのは、端から僕に伝えようとしているから。自嘲、後悔、寂寞。そんな感情が向けられる先は僕では無く、他ならぬ彼自身だった。

「僕達の、間違いだった」

『セドリックは、役にも立たない、かわいいだけの、頭は鳥の脳みそぐらいしかないやつだ』

「……そうか。嗚呼、そうか」

何と返答して良いか解らないまま、誤魔化すように僕はコンパートメントを出た。

感じていた憂鬱と気怠さは何時の間にか消えている。今はそう悪い気分では無かった。

フンボルト理念

アルバス・ダンブルドア校長は何事も無く学期を始めるだろう。そう僕はハリー・ポッターに予言したが、実際その通りに事は進んだ。

彼は何も口にしなかった。

学校生活に関わる毎年恒例の言葉以外、何も。

闇の帝王の復活についても、セドリック・ディゴリーの現状の取り扱いについても、魔法省がハリー・ポッターと自分達を嘔吐き扱っている件についても、言及するどころか仄めかす事すらしなかった。これまでの四年間の新年度と同様、酷く穏やかな形で——そして厚顔無恥極まりない態度でもって、この大事な一年を始めてくれた。

もつとも、彼は流石に一筋縄では行かなかった。

組分け帽子が警告を発する。その発想は、やはり自分には無かったのだから。

しかも、その内容がまた絶妙である。

あの組分け帽子は千年以上前に起きた亀裂と不和を語り、今忍び寄りつつあるホグワーツの分断を警告し、これからの校内での団結の必要を訴えてはいた。だがしかし、闇の帝王云々については何ら直接的な言及をしなかった。

つまり、校長達を信じる者にとっては、組分け帽子の歌は闇の帝王や死喰い人への対抗の為に警告を発したように聞こえてしまう。一方で信じない者にとっては逆だ。校長やハリー・ポッターなどの校内の和を乱す者への対抗、魔法省への忠誠を訴えているように聞こえる。

まあ良く聞けば external, deadly foes なる 敵とは言っており、校長達に向け

た発言とは素直に解釈しがたいのであるが、そのような細部まで聞いていた人間が何処まで居たやら。途中までは帽子がどちらの立場で物を言っているか判断しがたい事もあり、ドロレス・アンブリッジやスネイプ教授が“子供を惑わす偏向的な発言である”と主張して歌を止めるのも難しかっただろう。

そもそも如何に創設者達が遺した帽子とはいえ、所詮は道具。ホグワーツの肖像画と同様に、あくまで考える頭をもっているように見せかけているだけの代物に過ぎない。その言葉を真に受け過ぎる事自体が愚かだという主張にも一理あり、最初から追及など不可能だったのかも知れない。

本当に狡猾で、見事な物だ。

千年も伝統を存続させてきた仕組みは、そう簡単に壊れてくれないらしい。

公然と行われたこの主導権争いに勘付いている者は少なからず居り、四人の寮監がそうであった事には何らの疑問も抱かなかったのだが——恐らく第一次魔法戦争時、彼等は同種の歌を聞いた経験があるのだろう——ただ一つだけ、ドローレス・アンブリッジも気付いているようであったのは意外だった。

彼女は一連の皮肉を理解出来る程度には理性的であるようで、校長の与太話を途中で遮ってみせたのも、帽子の歌に対する意趣返しのもりだったようだ。しかしながら、始業日における最初の攻防としては、あの校長が勝利を収めたと言つていいだろう。

けれども、それ以外。

大多数の人間は、色々と御話にならなかった。

彼等は目の前で起こった事態に対して、見たまま以上の意味を見出していないかった。

組分け帽子が変わった歌を紡いだ、ドローレス・アンブリッジが眠たくなるような話をしたという程度の認識で、既にホグワーツと魔法省の間で一戦が交えられたのだという事に気付いてすらいない。闇の帝王の復活を知っているドラコ・マルフォイですら気楽なものだ。

……嗚呼、そして何よりもハッフルパフ。

はつきり言つて、彼等は期待外れでしかなかったと言つて良い。

あれだけ静かに、しかし派手に遣り合っていたのだ。

なればこそセドリック・ディゴリーを継ぐ者として、彼等も参加するべきだった。

あの校長が何事も無かったかのように始業式を終えようとした瞬

間、ドローレス・アンブリッジと同種の行動に及ぶ——つまり、組分け帽子の不明確な歌の意図を改めて全校生徒の前で取り上げ、校長に對して公然と不服を申し立てるべきだった。賢い老人の沈黙を、愚かな若人の質問でもって打ち破るべきだったのだ。

アルバス・ダンブルドア校長、貴方はセドリック・デイゴリーの死を忘れたのか。彼の名譽が不当に貶められ、そして闇の帝王の復活から目を背けている魔法界の現状をどう思っているのか。改めて校内の結束を確認しないのか。何より自分達は、セドリック・デイゴリーがどんなに雄々しく闇の帝王と戦ったかを今まで聞かされていないのだ、と。

始業式をぶち壊すそんな暴挙にハツフルパフが及んだのであれば、あの校長としても何らかの対応——黙殺や鎮圧もまた一種の意思表示である——を余儀なくさせられ、今学期が平穩無事に始まる事など有り得なかった。

グリフィンドールであれば、間違いなくそうしただろう。

スリザリンにしても、状況さえ違えば似たような事をやった筈だ。自寮の仲間が——それも寮の歴史を見ても類稀な能力を持つていた人間が、酷く間拔けな事に事故で死んだ。そのような不名譽が平然と広められ続ける事など、この二寮は決して許せはしない。如何なる代償を支払ったとしても糾弾し、是正しようとしたに違いない。

だがハツフルパフはそうはせず。

ただただ、校長の沈黙を許してしまった。

良い子ちゃんばかりの穴熊達なら有り得るかもしれない。

始まる前からそう予想はしていたものの、実際にその結果を見せられた事に対しては、自分が思っていたよりも失望は深かった。彼等にとって亡きセドリック・デイゴリーへの思慕の念は、校長や教授の權威の前に屈する程度の代物でしかなく、まして己の退学覚悟で彼の名譽を回復しようなどとは思いつきもしなかったのだろう。

まあ、それを言えば他寮も同じか。

セドリック・デイゴリーのガールフレンドらしかったチョウ・チャン。或いは、こうなるだろうと僕が予言した相手であるハリー・ポツ

ター。そしてその他のレイブンクローヤグリフィンボール。彼等は例外無く、校長を含めた教授達が取り繕った、偽りの日常を破壊しようとしなかった。大人達の「賢い」行動に対して服従を選択し、今年何か劇的な事件が起こるまで待つ事を良しとしてしまった。

ホグワーツがああ男を喪った以上の事件など、早々起こりなどないというのに。

魔法戦争は再開された。

一人の学友が無残に殺された。

それにも拘わらず、未だにホグワーツは呆れる位に平和で——平和ボケしたままだった。

闇の魔術に対する防衛術。

毎年教授が変わるその授業は、酷く当たり外れが大きい。

そして今年その科目を受け持つ事になる彼女と初めて会ったのは、夏休暇中の職場見学で案内された、魔法省内の上級次官室だった。ピンク色に装飾されたド派手な部屋の主の第一印象は、嫌に破壊力のある女性。

赤子に向けるような声色と、酷くもつて回った言葉遣い、そして少女めいた幼さを感じさせる立ち振る舞いに、その部分だけは中年の女性らしさを感じさせる厭らしい笑み。ドローレス・アンブリッジと紹介された女性の一挙手一投足は、こちらの感情を一々逆撫でするものであり、ギルデロイ・ロックハートと同列くらいには強烈な初対面だった。

彼女へ微笑みを向けながら握手してみせたルシウス・マルフォイ氏や、終始一貫して気の良い案内役兼紹介者として振舞い続けていたコーネリウス・ファッジに対し、心からの敬意を抱いてしまう程だった。

ちなみにドラコ・マルフォイは露骨に顔を歪めてしまい、後で父親から叱責されていたのだが——まあこの表面上だけ平和な紹介劇に

意義を見出せるとすれば、それはルシウス・マルフォイ氏のドローレス・アンブリッジに対する評価を知れた事だろう。

ルシウス・マルフォイ氏は、明らかに彼女に対して非好意的だった。表情や態度に一切表さずとも、ドラコ・マルフォイと殆ど同じ程度には嫌っている。侮蔑していたと言つても過言ではない。その理由が何かまでは掴めず、後程説明されるような事すら無かったが、邂逅を経て心に刻んだのは、ホグワーツ学期中に彼女へと接近するのは得策ではないという点である。その決意の正しさは、あれだけ強烈なキャラクターであつたのに、以降彼女の話題が一切出なかつた事からも裏付けられたようなものだ。

利用価値を踏まえても尚、近付きたくない類の人種。

それが“マルフォイ”による品評であり、そして自身が彼等の庇護下に在る以上、やはりその方針には従うべきだった。

そんな訳で最初から彼女の印象は良くなかつたのだが、今年度の授業は直近二年間と違って大外れらしいと感じさせた最大の理由は、“マルフォイ”の敵意とは別に有る。それは彼女が指定教科書として挙げた本の中身だった。

教授の質や講義内容は指定教科書を読めば解る。

そう即断するのは必ずしも正しくないだろうが、ギルデロイ・ロックハート時代に如何なる本が指定教科書とされたかを考えれば、最低限推測する事は可能だろう。そして今年の本、ウィルバート・スリンクハードの『防衛術の理論』は、端的に言つて最悪だった。

僕としても、まさかこの世にギルデロイ・ロックハート以下が存在するとは思つてもみなかつた。少なくとも、あの小説は読んでいて退屈する事は無かつたからだ。

一方で『防衛術の理論』という自己啓発書は、机上の論理を延々と垂れ流すだけで、呪文の行使については殆ど触れておらず、率直に言つて無味乾燥でつまらない。激情により生じた不幸な事故によつて二冊目を買う羽目になつたのは不覚だったとも言える。

要は授業以前から期待出来る材料など欠片も無かつた訳だが——実際に蓋を開けてみれば、意外や意外、大いに拍子抜けさせられる羽

目になった。

予想よりも上等だった。そう言つてすら良かった。

何せ彼女が僕達に求めたのは、ただ教科書を読む事だけ。

僕が知る中での最悪の授業、僕にトロールや狼人間の演技を強要して来た過去のそれと比べれば遥かに楽なものだ。彼女は生徒の思索を邪魔するような干渉もせず、授業ごとに内容を把握しているかの確認^{テスト}すら行おうとしない。教科書を開くだけ開いて二時間他に思考を飛ばしていれば終わるのだから、僕は普通に歓迎出来たし、満足出来ていた。

まあドラコ・マルフォイ達が不満そうな反応を示したのも一応認識はしていた。

しかしながら彼等もドロレス・アンブリッジの指示には従つていたし、その手の反応は今までのハリー・ポッターの活躍で良く眼にするものでは有ったから、特段気に留めるような物とも思えなかった。グリフィンドールを含めた他寮にしても、多少の問答以上の拒否反応を示したとは聞いていない。

高等尋問官、学期開始から一週間経つて彼女が就任した新役職にしても、蓋を開けてみればなんて事はない。最初に真剣に考えていたのが馬鹿らしくなる程の、酷くしようもない役職でしかなかった。夏休暇中の初対面の時に非常に勿体ぶられ、あれだけ始業式で大言壮語を吐いた結果がコレかと思つたが、まあ役人の計画は往々にして展望^{ビジョン}だけは立派なのだと言えばそれまでの話かもしれない。

結局、彼女は今の魔法省と同じ、毒にも薬にもならない存在に過ぎないようだ。

これが彼女の擬態というならば見事な物だと言う他無いが、そもそもあの校長が今年ドロレス・アンブリッジを校内に入れたのだ。彼も去年の失敗を繰り返さないよう戒めてはいる筈で、その事を踏まえるに、彼女の危険度は無視して良い次元なのだろう。久々に闇の魔法使いが居ないホグワーツ生活が叶い、今年こそ穏やかな一年が実現しそうでもあつて——しかしながら、そんな樂觀的な見方をしていたのは僕だけだったらしい。

「——ステイブン。あのガマ蛙を何とかしろ」

ホグワーツが始まってから二週間。

闇の魔術に対する防衛術の授業が二度行われた日の放課後。

苛立ちを隠しもしない命令が我が庇護者パトローヌスから発せられた事によって漸く、僕の見立てが今回も見当違いであった事を知らされたのだった。

「……屋敷しもべ妖精相手でも、もう少し丁寧に命令すると思うがな」
指定席である談話室の一角。

薬草学の教科書を傍らに置いて進めていた宿題から、僕は視線を上げた。

そして最初に認識するのは、案の定、ドラコ・マルフォイ。更に彼の後ろには、これまでの四年間と変わらず御伴をやっているピンセント・クラブとグレゴリー・ゴイル。代わり映えのしない三人が、椅子に座ったままの僕を見下ろしている。

学期当初に懸念だった事項——ドラコ・マルフォイがどうしたのかという問題は、当然のように例年通りの形へと落ち着いていた。つまり彼は休暇中のように僕を連れ回すような真似に及ぶ事無く、彼の身分に相応しい“純血”のみを取り巻きとしている。

まあ今まで四年間その形で在ったし、今更意外に思う事は無かったが、その形に落ち着く之際して何の悶着も無かった事——特急でのハリー・ポッターとの接触について彼が一切何も聞いて来なかった事は、多少気になりはしている。が、わざわざ自分から話題に挙げる事でも無いし、聞いて来ないのには彼なりの意図が有るのかもしれない。そして彼が必要性感じたのなら後からでも聞いて来るだろう。

ともあれ彼の今の関心は珍しくハリー・ポッターにないようで、今年入ってきた闖入者に御執心らしい。しかも今回彼が持ち込んだ問題は、ハリー・ポッターに関する言い訳を考えるよりも厄介そうだと

というのは一目見て解る。

「随分と穏やかでは無い面子であり——」

僕の下を訪れる三人は代わり映えしなくとも、今回は違う部分がある。

ドラコ・マルフォイ達が怒り心頭の表情である事もそうだが、それに加え、彼等は三人組では無かった。

パンジー・パーキンソン、ミリセント・ブルストロード、そして妹を背に置いたダフネ・グリーングラス。同じ学年の「純血」の中核たる人間達を、彼等三人は後ろに連れている。ドラコ・マルフォイ達から一定の距離を置いているものの、それでも行動を共にしていると判断して良いだろう。僕に用事が有るのは、彼女達も含めた全員のようなのだ。

更に、異常はそれだけではない。

「——しかもこの話題に関心が有るのは、どうやらスリザリン全てらしい」

見渡す談話室からは、ドラコ・マルフォイの先程の命令以降、一切の会話が消えている。

この場に居る全ての人間の注目は僕達に集まっており、そしてドラコ・マルフォイ達は彼等を邪魔だと言って追い散らそうとしない。五学年の他の純血達も、また遠く離れた所に座っているセオドール・ノットですらも、他の上級生や監督生達も例外無く、僕を取り巻く一団へと注意を寄越している。

本当に穏やかではないと、ドラコ・マルフォイに視線を戻す。

「——で、そのガマ蛙とやらはドローレス・アンブリッジの事で良いのか?」

「ああ、そうだ」

「上手い紳名だが、まあ兎に角聞こうか。まず君は何が気に入らない?」

「気に入らない事だらけだろう」

彼は憤懣やるかたないという口調で吐き捨てた。

「あいつの態度。仕草。言葉遣い。授業内容、その全てだ。そもそも

君も同じクラスに居るんだ。あいつを僕達がどのように考えて居るかを、君が全く知らないとは言わせないぞ」

「そうだな。彼女が『教授』と呼ぶに相応しくない授業をしている事、そして君達が彼女を不愉快だと感じている事は僕も認識している」

「なら——」

「——しかし、それだけだろうか？ それ以上の害は無い」

きつぱりとした僕の断言に、何とも言えない空気が談話室に流れる。

狂人や異常者を見るような視線も集まるが、慣れたものであるし、怯む道理もない。可笑しな事を発言したつもりは全く無いからだ。

「……えーと、だな。君はアンブリッジを何とも思っていないのか？」

スリザリンの代表者のつもりか、或いは個人的な庇護者としての責任か、ドラコ・マルフォイが、おずおずと僕に問い掛けてくる。

それを半ば無視するように、僕は傍らに置いた本のページを左手で捲った。ながら聞きをする事に文句を言つて来る程付き合いは短くもなく、実際彼は何も触れなかった。

「何とも思っていないというのは違うな。あの高等尋問官殿は僕にとつても余り愉快な人物ではない。さりとて、別に我慢出来ない程では無い」

好意を抱けないだけで、それ以上の嫌悪や憎悪を抱けてもいない。

「そして、僕はてつきり既に受け入れられたのだと思っていたのだ。彼女は不愉快では有るものの、それでも君達が無礼を我慢しなければならぬような相手だとな。何せ初回も、そして今日もか。君達は彼女主宰の『読書会』に対し、何も言わなかった。スリザリンの他の学年で騒ぎが起きたとも聞いていない」

「……なら今すぐ認識を改める事だな。僕達はあるな授業を認めた覚えは無い」

「そのようだな。今更気付かされたが」

ドラコ・マルフォイは隣から椅子を奪つてきて、荒々しく僕の前へと座る。

一方、パンジー・パーキンソン達は立つたまま動こうとしない。今夏休暇中も含め、社交辞令や必要に迫られての事以外に会話しない間柄だというのもあるが、今この場においては、ドラコ・マルフォイ庇護者に全てを任せるといふ意思表示のつもりかもしれない。

「しかし、それはわざわざ僕に言う事か？」

「……………」

「あの有難い防衛術の御授業が気に入らず、尚且つ君達が文句を言える程度の相手ならば、僕に命令や威圧をするよりも先にすべき事が有るだろう。下らん授業を今すぐ辞めろ。そのようにドローレス・アンブリッジに苦情を入れれば終わり。何も難しい話でもない」

一体何をしているのかと思いつつ、変わらず本へと視線を落とす。

だが上から返って来たのは、ドラコ・マルフォイの険しい言葉だった。

「そんな戯言を抜かすのは君らしくもない。少し腑抜けているんじゃないか？」

「……………というと？」

「何故、僕達純血がこうして集まっていると思う？ どうしてこの場に居るスリザリン全員が、僕達の話に注目していると思ってる？」

何故、僕が君にこんな命令をさせられる羽目になったと思ってる？

その理由を君は一切考えなかったのか？」

その言葉に制止し、視線を再度上げる。

「——まさか、君達が求めた上で断られたのか」

「そうだ」

「……………成程、僕が間違っていたようだ」

ドラコ・マルフォイの酷評を受けるのも仕方無いかと、背凭れに寄り掛かっていた上体を起こす。開いていた本を閉じ、机上に積み上げられた本の上に乗せた。

そして彼の後ろ、パンジー・パーキンソン達へと改めて視線を向ける。

「つまり、君達の一団は、酷く御丁寧な事に、ドローレス・アンブリッジの部屋を訪れた。その上で彼女に対し、あの下らない授業の是正を

勧告した。しかしながらその結果は、彼女による拒絶だった。そういう風に認識して良いんだな」

「……ああ、そうだ。漸く解ったか」

「思考を何でも読める訳では無いのだから、口で言ってくれないと解らん」

「……………」

「——とは言え、そうか。高等尋問官殿も、随分とまた怖い物知らずの真似をやるものだ」

「純血」の個人を敵に回す。これは言ってみれば、学生の良くある喧嘩に過ぎない。

ホグワーツが全寮制を取る以上、どんなに気を付けたとしても生徒間での揉め事は起こるものだ。そして揉め事を起こした学生の一方だけが「純血」であるとしても、その生徒が必ずしも有利になるとは限らない。聖なる二十八とて一枚岩では無く、「純血」の側に大義が無いならば当然ながら他家の批判に晒されるし、場合によっては敵に回られてしまう。

直近で言えば去年、セドリック・デイゴリーのバッジの件。

仮にドラコ・マルフォイが穏便に収めず、問題視していたとしても、敵に回すのは彼個人と取り巻き二人のみだった。僕の主張はスリザリンの流儀に反するものではなく、他の寮生に中立以上の立場、つまりドラコ・マルフォイを公然と支持する事を選ばせなかった。

勿論、彼等が僕の味方になる訳でもないから以降の針の筈は避けられず、フラーやガブリエルへの対応に関しては別問題なので酷い事になつていた可能性が高いが、ともあれ、半純血やマグル生まれであったとしても、「純血」相手に喧嘩する事は不可能ではない。

しかし、純血の集団——それも何時もの取り巻きのレベルではなく、性別や派閥、実家の利害関係を超えて集結している一団を敵に回す。これは事実上戦争の開始を意味する。

内部対立を抱える筈の彼等が纏まれるという事は、要するに、彼等に一致団結を強いるだけの正義が存在しているという事だ。そしてそれだけの正義が存在しているという事は、彼等の寛恕や譲歩は期待

出来ず、監督生や寮監などの善意の第三者による仲介もほぼ不可能で、早々に屈服しない限りは行き着く所まで行ってしまうという事である。具体的には退学や魔法界追放、最悪それ以上の事態に発展しかねない。

「彼等は確かに学生だ。」

けれども、同時に彼等は未来の——否、現在でも権力者である。

貴族の反感を買った人間の末路など、一々歴史書に当たらずとも容易に想像が付く。

非魔法界でも不幸な「事故」は珍しくないというのに、この古臭い魔法界で一個人の命や人権が保証されるなどどうして考えられようか。学生時代どころか卒業以降の数十年間ずっと身の危険を心配せねばならない事態など、少なくとも僕は御免である。最強の守護者^{アルバス・ダンブルドア校長}は、ホグワーツの外には居ないのだから。

その程度の常識はスリザリンで過ごせば自然に学ぶ筈であるが、今回のドロレス・アンブリッジは躊躇なく危険へと飛び込んでみせたらしい。

「君達——というか、僕達にとつてか。大問題が発生したというのは理解した。君達の意味表明はどんなに過少に見積もっても第五学年の総意であり、その程度の事は訪れた人間の名前を聞けば新任の教授でも解るだろう。しかしそれを撥ね退けた。成程、とんでもない事態であり、君達が「対処」を考えるのも当然だ」

しかも、と続ける。

「君達は何らの理屈無しに要請をした訳では無い。君達の掲げる大義、突き付けた要求は、簡単に言えば教授としての務めを果たせという所か。そして実際、彼女の指導内容は悲惨の一言に尽きる。客観的にも真つ当で、道理に従った要求だと評価出来るだろう」

「それが解っているなら——」

「結論を急ぐな。一方のみに大義が有るとは限らない。だから聞きたいのだが、何故君達の命令に応じられないか、その理由を彼女から聞かされていないのか？」

ドラコ・マルフォイに問う。兎に角、情報が必要だった。

「……あいつは時期を見計らう必要が有ると言っていた」

「具体的な彼女の言葉を知りたい。可能な限り正確にだ」

「……………スリザリンの純血の子息令嬢が今更スリンクハードを学習する必要は無いと解って居るし、今後学習進度に対応した指導をするつもりは有る。しかし、それでも実際に授業を行うに際しては、他の寮——特にグリフィンドール共の動向を見計らってから判断する必要がある。そんな事を言っていた」

殆ど聞いたままの再現だろう。

息継ぎ無しの長台詞、何処となく彼女を真似した言葉の響きに、思わず嘖き出した。ドラコ・マルフォイは気分を害すと解っていたが、それでも耐え切れはしなかったのだ。

「何だ。随分と真つ当な理由じゃないか」

「っ。お前はアンブリッジの味方をするのか!？」

「そういう訳では無い」

激昂したドラコ・マルフォイを鼻で笑う。

「ただ、一体どんな理由が飛び出すかと身構えた割には、酷く拍子抜けだった。そう思ってしまったのは否定し切れん。君達が激怒するのも解るがな、彼女にもまた大義がある。僕は立場上彼女の味方にはなれないが、心情的には彼女寄りだと言わざるを得ない」

「マルフォイ」の庇護を受けている以上、ドラコ・マルフォイに反する選択肢は僕に無い。しかしながら、自分の意見と思考を示しておくのは許される筈だった。

「僕がグリフィンドールであるならば、彼女がスリザリンではどう教えているかをまず探ろうと考える。高等尋問官殿がスリザリン出身である事、そしてスリザリンに対して我が寮監殿よりも甘い態度を取っているのは知れ渡っているからな。やって損はしない」

「……………ウィーズリー共が、無理矢理スリザリンの授業に乱入してくるとかか?」

「良い案だ。授業妨害を理由に一、二週間の罰則を食らう事は、あの双子にとって何の痛痒も齎さない。実家から吠えメールが送られて来たとして気にも留めないだろう。そしてスリザリンだけ特別に授業が

行われていると暴露されれば、確実に政治問題に発展する」

ホグワーツの制度上、如何なる授業を行うかは教授の裁量である。他の三寮が落第生ばかりだから授業進捗が芳しくなく、故にウィルバート・スリンクハートの基礎の基礎から始めなければならない。一方でスリザリン生は優秀であるから、教科書から離れ、少しだけ実践的な授業を行う事が出来る。そのような主張は、理屈だけを見れば一応筋が通つていけると言える。

ただ普通に考えれば、やはり何らかの恣意や不公正を見出さざるを得ないだろう。他の三寮の生徒と保護者の反発は必至である。

「そして高等尋問官殿も全くの考え無しでは無いらしい」

彼女の言葉がそれを示している、と僕は続けた。

「君の言葉が殆ど聞いたままである場合、断つたと評価出来るかも微妙な線だな。時期を見計らう必要があるという発言は、あのような馬鹿げた授業を辞めるつもりはあるという意味で、君達の要請も遠からず履行はされる訳だ。即座に辞められない理由も妥当で、納得出来る。子供の我儘と言われても仕方がないようにも思えるな」

「我儘!? 君は僕達の行動を我儘と言うのか!？」

「大人曰く、子供は判断能力が未熟との事だ。大人と子供の意見が真つ向から対立した場合、残念ながら大人の方が優先される。大人の側にも理が有るならば猶更だ」

可能な限り冷静かつ簡潔に正論を紡いだつもりだが、ドラコ・マルフォイは心の底から気に入らないらしく、更に顔を真っ赤にした。

「君はあの場に居なかつたから、あの女の口振りを聞いていないからそんな呑気な事が言えるんだ! あいつは確かに言葉通り、いずれO.W.L. に役立つ授業をやりはするだろう! だが、あいつは絶対ギリギリまで引き延ばすつもりだ! 二カ月か、三カ月か、下手すればそれ以上! それまでずっと僕達を焦らして楽しむつもりなんだよ、あのガマ蛙は……!」

「ギリギリまで引き延ばすも何も、君は既に限界のようだが」

「茶化すな! 君も他人事では無いんだぞ!」

「そうは言うがな——」

ドラコ・マルフォイと高等尋問官殿の相性が悪いのは、初対面の時から感じていた。

しかし嫌悪で物事を見失うような真似はすべきではなく、僕の眼には彼が個人的な感情で我を喪っているように見える。

「——しかし現状、高等尋問官殿は授業をしているだろうか？」

「……………」

「確かに指導内容は馬鹿げている。僕もあんな内容を覚えるつもりは更々無いし、あの本は今すぐ燃やした方が魔法界の為になるとも思っている。けれども御遊戯の時間だったギルデロイ・ロックハート。或いはレタス喰い虫を生徒に配った後、自分は処刑されるヒツポグリフの心配をしていたルビウス・ハグリッドとは違うのだ」

彼女を教授と呼ぶ気にはならないが、そもそも授業の体を為していなかったアレらとは大いに異なる。劣悪であろうと、ドロレス・アンブリッジは教える姿勢は取っている。

「魔法省の新指導要領……いや、クイリナス・クイレル教授以外が無視した、正しい解釈での指導要綱だったか？　彼女がどういう表現をしていたか既に忘れたが、何れにせよドロレス・アンブリッジはその要領の下での授業をやっている訳だ。となれば今年のO. W. L. に全く役に立たない訳でも——」

「——多分出ないぞ」

「は？」

予想だにできなかった強い否定の言葉に、ドラコ・マルフォイの顔を改めて見やる。

先程怒鳴り声をあげたせいか、彼は盛大に息を切らしていたものの、それでも僕を馬鹿にする表情を作るのに支障は無いらしかった。

「ファッジの影響力は、未だ魔法省試験局には及んでいない。マーチバンクスやトフティとか、その辺りの古臭く、頭の固い老害共がのさばったままだ」

「……………つまり？」

「少なくとも今年のO. W. L. では、あんな内容の知識は一切問われない。現時点で断言までは出来ないが、まず間違いないと言って良

い」

「……………はあ。大臣にしろ高等尋問官にしろ、本当に教育改革する
気が有るのかね」

斜め上の指摘に、呆れを隠さず呟く。

あのような思想を本気で生徒の頭に染み込ませたいならば、当然な
がらO・W・Lに出すべきだろう。仮に試験範囲だろうと僕は最初
から捨てる気だったのだが、テストにすら出ないとなれば、他の生徒
も右から左だ。思想教育の体すら成していない。

そして今更ながらに、ドラコ・マルフォイ達が激怒している理由も
解った。

グリフィンドールの半巨人も大概奇天烈な授業をやってきたが、彼
等にとつてグリフィンドールは基本的に馬鹿の集まりであるから、不
満は抱けども憎悪までは行かない。相手が剽窃小説家、頭でつかちの
レイブンクローにしても同様だ。

しかし、狡猾なるスリザリン出身の人間が、後輩に無意味な苦行を
丸々二時間、それもO・W・Lの年に課しているともなれば——確
かに殺意まで行くだろう。

「……………成程、君達の主張は解った。だが、僕に言ってどうする？ 君達
が要請しても断られた。そして君達の御両親ルシウス・マルフォイ氏らに頼っていないあたり
から察するに、彼等も政治や血縁やらの柵で動けないという事だろう
？ であれば、僕が出来る事などやはり無いぞ。君達が希望する『対
処』など叶わない」

厄介事だというのは理解した。想像よりも面倒事であるのも納得
した。

しかしそうであるが故に、僕の手には余ると思う。

「聖なる二十八にとつては些細かもしれないが、それでも彼女は『ア
ンブリッジ』だ」

今更言うまでもなからうが、強調する為に敢えてゆっくりと言葉を
紡ぐ。

「過去にウイゼンガモットへ人を送り込めるだけの家格を有してお
り、今の彼女もウイゼンガモットの末席を占めている。要するに彼女

は力を持つ純血の側だ。君達が対処出来ない難題を、僕のような半純血がどうこう出来るとは到底――」

途中で口を噤む。

僕に言葉を続ける気力を喪失させたのは、寮内の反応。教師の前で見当違い回答を吐いた阿呆な生徒を見るような、そんな白けた雰囲気。

ドラコ・マルフォイは呆れた表情を隠さず、パンジー・パーキンソンとミリセント・ブルストロードは侮蔑を浮かべ、ダフネ・グリーングラスは視線を背け、ビンセント・クラッブとグレゴリー・ゴイルは馬鹿にするように鼻を鳴らし、セオドール・ノットはせせら笑っていた。

他の割と好意的な反応を探してさえ、困ったような笑みとか、渋く顔を歪めているといった類である。そのような表情を浮かべなかった生徒も一部居るが、彼等は例外無くスリザリンの主流派以外――非純血の生徒で、かつ魔法界の有力者を親族に持たない生徒だった。

「――ステイブーン。君にしては珍しく大間違いが続くな」

ドラコ・マルフォイは苦虫を噛み潰したような表情で、渋々という風に言葉を掛けて来る。

「……………そうらしい。僕の想定がそもそも間違っていたようだ」

これだけ露骨な反応が寄越されれば答えも解るモノだ。

先程まではドロレス・アンブリッジの背後にそれ程強力な有力者が居るのか、或いは闇の帝王の寵愛を既に受けているのか等々を聞くつもりだった。しかし、このような解答が寄越されてしまった以上、その必要もなくなった。

そして致命的に間違えたからこそ、敢えてこの場で言葉にしなければならなかった。

「周知の通り、血の問題について他人に――特に君達 “純血” に問う事は、非常に礼儀知らずで不適切な行いだ。しかしそれを重々承知した上で、物を知らぬ愚かな半純血は、この場において質問させて貰う。ドロレス・アンブリッジは純血か？」

“アンブリッジ” が聖二十八族で無い事は明らかである。

僕の質問はそれ以外の純血家の可能性を問うもので、けれども彼は首を振った。

「違うな。あの女は純血では無く、家系も大した物ではない。君が言っている過去のウイゼンガモット会員とやらが誰の事かは解らないが、アンブリッジとは一切の関係無い。あの女は、魔法省の床を掃除していた役人の娘だ」

「血の純度は？」

今度のドラコ・マルフォイは一瞬口籠った後、問いへの回答を口にした。

「……母親がマグルだ」

「そうか。——つまり僕と同じか」

実に良く解った。

これが今回の問題の根源か。

僕は間違った認識を抱いていた。

空気の読めない純血の御貴族様の傍流が、闇の魔術に対する防衛術教授と高等尋問官という二つの地位を利用して、魔法省の馬鹿げた方針を字句通りに強いている——僕は今回の騒動をそう捉え、故に傍観を決め込んでいたのだが、実態は違ったのだ。

思い上がった半純血が分を弁えず、我儘で無礼で、見るに堪えない振舞いをしている。

この寮内の多数はそう正しく物事を認識していたからこそ、ドローレス・アンブリッジに対して初めから非好意的であり、敵愾心を隠しもしなかった。その上で大義名分を有する「純血」の命令を彼女が断ってみせたのだから、そりゃあ大事にもなるだろう。

平民が貴族の面子を潰す。

言うまでもなく、これは戦争をするに十分な理由だった。

「……………」

ドローレス・アンブリッジは半純血である。

その前提を正しく把握すれば、成程、今回の問題は単純明快のようだ。

彼女の行動原理。ドラコ・マルフォイ達の命令を無碍にした理由にも既に見当が付いた。

実際に話してみなければ確定し切れないが、それでもスリザリンに丸四年居たのだ。彼女と同種であろう鬱屈を抱える人間はそれなりに見てきている。まあその鬱屈をここまで露骨に示してみせた人間は初めて見るが、それでも理解出来る範疇には留まっていた。

彼女がこんな「勇者」と成り得たのは、魔法省——「マグル」に縁を持つ者が例外無く幻想を抱く組織に入ってしまったからか。それとも、数十年前の彼女のホグワーツ生活は、それ程までに陰惨で、青春と呼ぶには程遠い物だったのか。

「……何故、そんなに君は楽しそうなんだ」

如何なる理由か、ドラコ・マルフォイは委縮したように身を縮めていた。

談話室内の雰囲気もまた一変していた。パンジー・パーキンソンは先程まで僕を馬鹿にする様子を隠そうとしていなかったが、どういう訳か神妙な顔をして俯いている。彼女の周りに居る「純血」達も大体が同じような反応。離れた場所のセオドル・ノットにおいても、その顔には薄笑いの名残すらも見付けられない。総じて、気味が悪くなる反応をしている。

しかし、僕の母親が「マグル」である事など寮内では周知の事実であり、今更平等思想に目覚めた訳でもあるまいに……と考え、有り得る可能性に思い当たる。

嗚呼、そうか。闇の帝王の血筋を知らされている可能性もあるのか。

もしくは帝王の血筋が明かされておらずとも、今年以降は特に「純血主義」の建前を堅持するよう、親達から口煩く言われているのか。

聖なる二十八
「純血」の血筋は尊ばれなければならない。

しかし、それが行き過ぎて半純血半分マグルを軽んじる事になってはならない。

闇の帝王が復活してしまった今、度が過ぎた軽蔑は、帝王の気分を半純血は偏見無く受け容れなければならぬのだ。その歪な最高理念が今年スリザリンに徹底されていると考えるのであれば、成程僕を見縊る訳にもいかないし、このような反応も道理だった。

「別に楽しんでいたらつもりは無いがな」

納得と共に答えつつ、右手で軽く顔を撫でる。頬は歪んでなど居ない。

「けれども、否定し切れないかもしれない。彼女の血筋を踏まえて考えてみれば、ドロレス・アンブリッジ高等尋問官は実に優秀じゃないか。今更ながらにそう思ったのだから」

背景を知ってしまうと、彼女から受ける印象が大きく変わって来る。

「十四年前、『純血』の——いや、スリザリンの勢力は大きく後退した。僕達の多くにとつて裏切り者である『クラウチ』、闇の帝王に対抗する道を選んだ男は、特にその流れを推し進めた。それにも拘わらず、あの高等尋問官殿は省内で職と地位を護り抜き、更には情勢を正しく把握して出世の機会を掴んだ上、今ではウイゼンガモットの末席を占めるまでになっている。並の野心と狡猾さで実現出来るものは無い」

何処の世界でも勝った側がやる事は変わらない。

大粛清、赤狩り。社会から不適切な思想をもった人間を放逐する。

あのバーテミウス・クラウチ氏が敵対者に寛大で有る筈も無く、まして己の勢力拡大の機会を見逃す訳が無いのであって、第一次魔法戦争後、闇に近かった者の多くが魔法省の職を追われる羽目になった。ルドビッチ・バグマンのように無罪判決を受けた幸運な人間は極少数で、有罪判決を受けるところか闇の帝王や死喰い人に通じた疑いを持たれただけ、或いはスリザリン寄りの姿勢を持っていただけで追放される例は枚挙に暇が無かった。

その一連の粛清劇は、バーテミウス・クラウチ氏の息子への有罪判決と自分自身の左遷によって終焉を迎える事となった。その結果、幾

らかは後に名誉回復され、また「クラウチ」をもってしても排除出来なかつた本物の「純血」達は残っていたものの、何の後ろ盾や実力を持たないスリザリン出身の人間は殆ど一掃されてしまったと言つて良い。

しかしながら、ドロレス・アンブリッジは現在、魔法大臣付上級次官だ。

つまり、その強制解雇と自主退職の嵐を生き延びてみせたという事だ。

「恐らく現状の魔法省での彼女の立ち位置は良識派のスリザリン、つまり先の戦争で闇の帝王に与しなかつた純血と言つた所だろうな。そして彼女が今や利用価値を備えた以上、本物のスリザリンも彼女の詐称を知らぬ振りをするか。血や家系など「純血」同士は聞かずとも解る物であり、礼儀としてそれらに触れるべきでないのは事実だからな」

推測に過ぎないが、ドロレス・アンブリッジが失脚や左遷を逃れたのは、彼女が闇の帝王に味方しなかつたというのが紛れも無い事実だったからだろう。

勿論その実態は、「純血」達が彼女を味方に付ける価値を見出さなかつただけなのだろうが。この辺りはスネイプ教授、ルシウス・マルフォイ氏の庇護を得て死喰い人にまで上り詰めた彼とは明確に違う。けれども、それは運が良いとも評価し得るか。

彼女は「純血」から遥かに遠い位置にいたからこそ、あの暗い時代を生き残る事が出来、今こうして魔法大臣付上級次官にまで辿り着く事が出来ているのだから。

その上、ドロレス・アンブリッジには未だに風が吹いているとも言える。

恐らく第一次魔法戦争時、闇の帝王は彼女の存在を知らなかつただろう。

「純血」にとって、彼女は帝王に紹介する程の価値ある人材ではなかつた。スリザリン出身である事を加味して尚、単なる有象無象の半純血の一人に過ぎず、故に仲間として迎える以前、そもそも存在を認

知すらされていなかったに違いない。

しかし、今は違う。十四年前に「純血」達から裏切られた帝王は、自分の家の利益しか考えない血筋自慢の人間ではなく、唯一己のみに忠誠を捧げる強力な臣下を求めている筈だ。そしてドローレス・アンブリッジは今や省内の実力者であり、十分な利用価値を有している。何より彼女は半純血だ。帝王と同族今後の立ち回り次第では更に上、死喰い人として迎えられる事すら可能かもしれない。

「——嗚呼、勘違いしてくれるな。勿論、それは魔法省内における優秀さであって、スリザリンの思想に合致する資質を認めているのではない」

物言いたげに口をもごもごさせているドラコ・マルフォイに笑い、付け加える。

「君達はドローレス・アンブリッジに対して怒りを抱いた。軽んじられたという感想すらも抱いた。しかし、それと共に不思議に思ったのではないか？」

「——」

「どうして彼女はこんな馬鹿げた、無意味な真似をするのだろうか？」

損得計算が出来れば当然「純血」に従う筈なのに、半純血の役人風情が逆らって何か利益が有るのか？魔法省での職が惜しくはないのか？魔法界から追放されるとも思わないのだろうか？」

「……僕はまだ、アンブリッジが僕達に授業をしない事への言い訳を話したただけだ。なのに、どうして僕達の心情をそこまで正確に言い当てられる？」

「君達が怒り心頭だからだよ」

推理という美称を付けるまでもない、簡単な推認である。

「君達とて半純血が平身低頭して事情を説明したのであれば、ここまですりもしないだろう？しかし、そうでは無さそうだ。つまりは、わざわざ「純血」が足を運んでやったにも拘わらず、酷く無礼な形で追い返されたという事だ」

「……軽んじられた僕達を君は笑う気か」

「そのつもりは無いし、君達の交渉能力を疑った訳でも無い」

僕に敵意を向けるのも御門違いである。

「この問題はな、恐らく『言語』が通じてないからこそ生じている。君達は『純血』で、僕達は半純血だ。そして僕は幸運な事にドラコ・マルフォイ——君が居たのだが、ドロールス・アンブリッジには学生時代にその手の存在は居なかつた。だからこそ、こんな事になつてゐる」

彼女は真つ当な授業をギリギリまで行わない筈だ。

そんなドラコ・マルフォイの言葉を最初は被害妄想甚だしいだろうと思つたが、こうなると正確な見立てのようだ。確かにそう考える方が理屈に合っている。

「ドロールス・アンブリッジは未だ何も理解していない。寧ろ、理解していないのは君達だと考えて居る事だろう。今の状況を正しく判断出来ていない生徒の我儘を、分別の有る大人が優しく諭してあげた。彼女の考えはこんな所だろうな。現在の難しい状況を踏まえた上で尚、グチグチ言わず黙つて『純血』の命令に従えと言われたとは思つていない」

ドラコ・マルフォイ達が一度引き下がったのは、彼女を破滅させる算段を付ける為である。そんな事も考えだにしていけない。

「……君はそう言うが、僕はちゃんとあの女に伝えたつもりだぞ」

「ならば聞くが。君達は単刀直入に、余計な装飾無く、役立たずの授業を今すぐ辞めろと言つたか？ 歯向かうならばルシウス・マルフォイ氏経由で即クビにするぞと言つたか？」

「……いや」

「だろうな」

バツの悪そうに顔を背けたドラコ・マルフォイに笑いを漏らす。

「教授かつ高等尋問官が相手である手前、どうせ御上品な言葉しか紡いでいないのだろうか？ 社交辞令の言葉も、彼女は額面通り受け取つている筈だ。スリザリンが相手ならばそれで構わないが……と、高等尋問官殿は一応スリザリンか。まあ話す相手が部外者で有つたり、道理を弁えぬ愚か者であつたりする場合、君達は言葉と人間を選ぶ必要が有る」

彼等は余り直接的な表現を好まない。

相手に言質を取られるのを避けるという警戒も有るし、数百年の交流が続いていけば、御互いに曖昧にしていた方が都合の良い点も出てくるものだ。たとえば平民にとつては問題の先送りとなる場合であつても、彼等貴族にとつては、百年も経てば——自分の子や孫の世代には状況が変わつていいる場合が有り得るのだ。彼等の婉曲表現は、長く家系を存続させる為の処世術という以上に、習性や生き様そのものと言つて良い。

ただ、他所者には当然ながら伝わらない。

言葉が通じていたとしても、会話にならないという場合が有り得る。

「……なら、僕達が今度こそ明確に、誤解の余地無く伝えれば済むという訳か？」

「そうではない。教授職に就いている彼女を君達は形式的であれ尊重し、怒りをぶつけるような無様な真似をしなかつた——少なくとも僕は君達がそうであつたと信じている——のだろうか？　ならば、君達は“純血”として最善を尽くしたという事だ」

「……………言っている意味が解らんぞ」

「つまり、君達が下に降りて来る必要は無いのだ」

確かに貴族達の作法は面倒では有る。

しかし、その敷居が高い事は必ずしも無意味ではない。

「致し方無い事情が有つたとはいえ、君達の“言語”を解さない下の人間におもねつた結果が去年のクリスマスだ。アレを繰り返してはならない。君は見ていないだろうが、酷いものであり、悲惨だった。スリザリンの人間にとつては損ばかりのパーティーだった」

今思い返しても溜息しか出ない。

「まあ君は四学年以上のパーティーに参加したのだから、当然知りはしないだろう。しかし君の母君から聞いたかもしれないし、仮に聞いていないならば——」

軽く辺りを見渡せば、一人の人間が最初に目に留まる。

姉の背に隠れ、恥じらうようにこちらを伺っている少女。確か今夏

の休暇中には会う機会が無かった筈だが、彼女は当時その場で見た記憶が有った。

「——アストリア・グリーングラス。その彼女から聞くと良い。彼女はあのクリスマスマスの場に居合わせており……」

「……！ ステイブーン！ 下級生に危険な目を向けるな！」

ドラコ・マルフォイの制止は、思わず途中で言葉を切ってしまう程に鋭かった。

「……危険な目とは何だ。当時のクリスマス語れる存在として都合が——」

「——良いから！ 視線を！ 向けるな！ 監督生としての命令だ！」

「………良く解らんが、君がそこまで強く言うなら従おう」

いまいち釈然としないが、軽く手を挙げて降参を示す。

声以上に彼の眼が激昂を露わにしており、従わないと酷い目に遭いそうだと。

しかし、何だ？ 僕は後輩の女生徒へ視線を向けるだけで駄目なのだろうか。フラールとガブリエルの遺産か？ 所構わず異性を誘惑するヴィーラと同種の存在と看做される程、僕は危険人物扱いされているというのだろうか？

「……は、話を続ける」

多くのスリザリン生の前で取り乱した事に今更気付いたのか、赤くなったドラコ・マルフォイに胡乱な視線を暫く向けた後、諦めて話を続けた。

「ともあれ、君達に責任は無い」

ドラコ・マルフォイに限らず、談話室内の全てに対して宣言する。

「半純血下賤に君達の機微は理解出来ん。逆も然り。だから人間を選ぶ必要が有ると言っただし、半純血と話すのは同じ半純血であるべきだ。たとえば貴族が靴を作れずとも馬鹿にはされないうらう？ 靴を作るのは靴屋に任せるのが適切だ」

Right People, Right Place
適材適所。

人には相応の配置と職務がある。

「——もつとも、彼女を純血扱いしていた何処かの馬鹿のせいで、君達には随分と面倒と不愉快を味わわせてしまったようだがな」

「……そ、それは別に良いんだが。けど、まさか君が、あの女を純血だと考えていたとは意外だった。てつきり、君ならば紹介された時に勘付いたと思っていたからな」

「期待されていた所悪いが、全く気付いていなかった」

取り繕うようにして紡がれた疑問に軽く首を振る。

「しかし君は気付いた訳だ。しかも恐らく、君の父上から彼女の血について聞かされる前に」

「そりやまあ……その通りだ。あの女が『純血』でない事など、一度会えば気付くさ」

「だろうな」

まさしく『純血』らしい言い分に溜息を吐く。

「しかし無様な弁解である事を承知で言うが、確実に純血とそれ以外を見分けられるのは本物の純血だけだ。僕のような人間には、その人間が純血の振りをしている半純血なのか、それとも俗に塗れた純血なのかは判別出来ない」

その作法が純血にとって許容される限界を攻めた物なのか、それとも完全に駄目なのか。

貴族の行動理念を表面的にしか理解していない者には、その境界線を見極められない。

「……なら僕も純血の一員として君に伝えておくが、あの女の振舞いは論外だぞ？ 入学時の君の方がまだ我慢出来た位だ。言葉もそうだが、特にあの、両手の指をチョンチョンと合わせる仕草は何だ？ 不愉快極まりないし、僕の周りでは一度も見事無いぞ」

「言うまでも無く僕は男で、正しいとされる女性の作法を学んでいないのだが——」

けれども、答えを知る手段は有る。周りの女性陣を眺めてやれば良い。

そして答えは直ぐに明らかとなった。吐く真似をする者、首を振る者、肩を竦める者、表情を暗くする者。それらの動作が示す意味など

考えるまでもない。

「——だとしてもだ。学んだ事から見て少し変だと感じて、自分の方が勘違いしているかもしれない、間違っているのかもしれないと思うのが人情だ。君が知る通り、僕のそれは生半可だからな。まあ偽物を判別するのに役立つ分、君達にとっては都合が良いのかもしれないが」

スラッ 靴屋は本質的に上流階級に昇れない。

後天的教育では得られない、煌びやかな世界で生まれた者だけが得る物は確かに存在する。

「だが、そもそも僕は君が父上から事情を聞いていると思っていたんだぞ？」

意外というより不思議な物を見る目をしてドラコ・マルフォイは言う。

「アンブリッジの血についてなど当然知っていると考えていたし、父上からも、アンブリッジの対処には君を使えと手紙が来たんだ。だから君が何もしないのが不思議で仕方なかったし、ましてこんな事の確認から始めなければならぬとは……考えてもみなかった」

「まあ、この程度の事に気付かないのは、氏としても誤算だったのかもな」

何故か一瞬言い淀んだドラコ・マルフォイを見つつ、素直な感想を口にする。

初体面の紹介後何らの説明がなかったのも、*“純血”*である彼にとってには自明の事で、一々言及して共通認識を構築するまでの事ではなかったのだろう。

「しかし、彼は今更伝える必要も無いとも考えたのだろう。わざわざ僕相手に筆を執る程の大事でも無いし、ホグワーツには君が居る。実際、知るのが盛大に遅れたとは言え、今こうして君から教えられた訳だしな」

「……何も、知らされていないのか？」

「君がどういう意味で言っているかは理解しかねるが、少なくともドロレス・アンブリッジに纏わる事に関しては、一切何も言われてい

ないし、聞いてもいない。ルシウス・マルフォイ氏の意向——彼女の授業を辞めさせたいと思っっているのは大人も同じらしいという事も、今の君の言葉を聞くまで知らなかった」

わざわざ僕の所まで降りてくる類の問題だという事も、思ってもみなかった。

「……君は父上から手紙を、指示を受け取っていないのか？」

「受け取っていない」

訝しがるというより、探るような視線と質問に否定を返す。

その返答だけでは彼の疑惑は消えなかったので、渋々更なる説明を続けた。

「君にとつては父親だろうが、彼は半純血風情が気安く交流出来る相手ではないのだ。ホグワーツが再開されて以来、僕には氏と連絡を取る理由が一切無かつたし、彼とて同様だろう。仮に手紙が来るとすれば、余程の切迫した事情が有るか、君に連絡を取れない場合だけだ。そして今回はその何れでもない」

ドローレス・アンブリッジの愚行は問題ではあるが、大事ではない。「そもそも君は大いに勘違いしているようだが、僕はルシウス・マルフォイ氏の命令を受ける事は無い。聞く義理が無し、そのつもりも全くないからな。だから君がどのようなように考えていようと、僕が彼から命令書を受け取るという事態は絶対に有り得ない」

「——それは、どういう事だ」

「僕の庇護者は君の父君ではない。ドラコ・マルフォイ、他ならぬ君なのだよ」

早合点したのが丸解りな彼の表情を見て、溜息を吐きながら答える。

「僕が恩義を受けたのは君の父君ではない。これまでの四年間共に同じ寮で過ごし、学年を積み上げ、殆ど一貫して後盾となり続けた君にこそ、僕は恩義がある。今年の夏休暇にしても、現当主のルシウス・マルフォイ氏の招きでは無く、次期当主の君の招きによって初めてマルフォイ家の門を潜れたのだ。僕はその点を履き違えるつもりは一切無い」

「その事はルシウス・マルフォイ氏も当然承知だ。だからこそ君に手紙が来たのだ。たかが親である事を理由に、君の頭越しに連絡を取ったり、命令書を送ってくるのは道理に反する。僕に命令を下すのは、あくまで君からでなくてはならない」

故にドローレス・アンブリッジの血についても伝えられていないし、今まで僕が動かなかつたとしても、何の文句が飛んで来る事もなかった。ルシウス・マルフォイ氏は息子の飼い犬に対して節度を保ち——だがそれは、行動が肯定されている事を意味はしない。

「とはいえ、ルシウス・マルフォイ氏は僕に御怒りでは有るだろう」
中空を見上げて状況を整理しつつ、再度溜息を吐く。

「主君に言われて動く屋敷しもべ妖精なんぞ首を刎ねられても仕方が無い。だから君が受け取った手紙の中に万一怒りが滲んでいたとしても、それは僕に対するものだ。君が気に病む必要など一切ない」
「……そ、その事は心配しなくて良い。父上は君に怒ってなど居ない。それは間違いない」

ドラコ・マルフォイは早口で僕の言葉を否定する。

……それを聞きながら、そう言えばと、少し奇妙な事に気付いた。

ドラコ・マルフォイの言葉を信ずるならば、氏の指示は僕を使えというものだったらしい。

つまり氏の指示はドローレス・アンブリッジが話の通じない相手である事を前提としており、しかしながら彼等は揃って高等尋問官の下を訪れている訳で、そこには確かな齟齬が生じているのだが——まあ良いか。僕の手を借りずに自分達だけで解決したい、半純血に出来る事が“純血”に出来ない筈がないという思考もまた、真つ当と言えば真つ当だ。

「……兎も角だ、ステイブン。君はあのガマ蛙をどうにか出来るのか？」

「形振り構わずという注文ならな」

ドローレス・アンブリッジが純血だからこそ手を出せないと考えていたのであつて、彼女が単なる半純血——僕と同じ身分の人間に過ぎ

ないのであれば、今回の問題を解決するにあたって障害はない。

「要は服従の呪文か、或いは他の闇の魔術で彼女を再起不能にしてやれば良いが——」

「……そこまでは誰も求めていない」

「——まあ僕としても好んで取りたい手段でも無い。彼女が聖マンゴに行く一方、僕はアズカバンに行く羽目になる訳だからな。どうせ直ぐに出られる事になるだろうし、吸魂鬼の生態に多少興味も有るが、それでもホグワーツ生活を投げ捨てる程の価値とは思えない」

やれと言われればやらざるを得なかったが、ドラコ・マルフォイの方もそこまで覚悟を決めていた訳では無いらしい。

「ただドロレス・アンブリッジを屈服させる事自体は良いとして、そもそも大人達は何と言っている？ 彼女の非常識な振舞いを許しがたいと感じている事は伝わってきたが、さりとて彼等に他の思惑が無いとも限らない。その辺りについてはドラコ・マルフォイ、君が詳しい内容を聞いていないのか？」

「……僕達のやる事は基本的に支持するとは聞いている」

「基本的に、と言うのがまた微妙な表現だな」

「決まっている。君が今言ったような、服従の呪文とか過激な手段は無しという意味だ。流石の父上であっても、そこまでの無茶苦茶は庇えない」

「それは理解している。それでも僕は平和主義者のつもりだ」

「……君は冗談が下手な事を自覚しろ」

冗談で言ったつもりは無いが、ドラコ・マルフォイの視線は冷やかだった。

「しかしながら、今回ばかりは言葉遊びをしたい訳では無い。何処まで承認されるかは非常に重要な点だ。僕達が可能な限り穏便に済ませようとしたとしても、意図しないところで高等尋問官の御仕事を邪魔しないとも限らない」

「……何が言いたい？」

「要するに、君から、或いは『純血』達から確認して欲しいのだ。あの高等尋問官の地位は、果たして何らかの『計画』に関わる物なのか

と」

本来、ドローレス・アンブリッジは「純血」が容易く潰せる相手である。

去年までならルシウス・マルフォイ氏達は躊躇いなくそうした筈で、しかし今年の特異事情——魔法省が闇の陣営にとつて都合の良い行動を取っており、そこから高等尋問官として彼女が派遣されているという事情が、その安易な道を選ぶ事を許さなかったのだろう。もしかしたら半純血、それも直接の「マグル」を親に持つ事も逆に利として働いたのかもしれない。

そういう訳で僕に順番が回って来たのだが、けれども都合良く使われる身としては、最低限の保身はしておきたい所だ。

「遺憾ながら、僕にはあの下らん役職の使い道を全く見出せん。だが、大人達——」上は意見を異にしている可能性がある。だから予め言質を取っておきたい。もしくは、彼女の御仕事が重要であると知らされたのならば、相応の覚悟と用心をした上で事に及びたいのだ」

「——」

暫く、沈黙が場を支配した。

直ぐに承諾が返ってくる類の問いだと思っていたが、ドラコ・マルフォイは呆気に取られた様子のまま静止するばかりだった。そして他の生徒が、代わりに自分がやるという答えを返してくる訳でもない。

視線で促して漸くドラコ・マルフォイは口を開いたものの、そこから出て来た言葉は、僕が期待していたものとは程遠かった。

「……アー、君は高等尋問官を大した職だと考えていないのか？」

「寧ろ、アレを革命的な職だと解する余地が有るか？ 居ても居なくても左程変わらない程度の職、人間に過ぎない。そんな僕の認識を変える部分は、今の君の話にも無かったのだが？」

聞き返すが、彼からは困惑の反応しか寄越されない。

周囲に目を向けても、僕の言葉に一定の理屈を認める——賛同では無くとも、最低限の理解を示す者達は、寮内において圧倒的少数らしい。

「……まあ魔法省がホグワーツに干渉する第一歩という意義は一応見出せる。ただ、それはコーネリウス・ファッジにとって意義があるというだけで、僕達の陣営にとって意義があるという訳では無いだろう」

「……君は高等尋問官の仕事内容を理解しているのか？」

「重々承知しているからこそ、こんな事を言っている」

高等尋問官職の設立は、教育令第二十三号により為されたものだったか。

確か『日刊予言者新聞』にそう書かれていた筈だ。

「……高等尋問官は、父上が支持している職だぞ。あの女自身は気に入らないが、それでもホグワーツの改革に繋がるならば、僕達は一定程度協力と譲歩をせざるを得ない」

「それは疑問だというのが僕の考えだがな」

手持ちの情報の下では、ドローレス・アンブリッジに対する一切の譲歩が不要に思える。

「反対しない事と賛同する事は違い、そして僕の眼には前者に見える。ルシウス・マルフォイ氏の高等尋問官殿に対する立場は、^{スタンス}勝手に踊ってくれる分には構わないが、大きく肩入れもしないというようにしか思えないのだ」

理屈立てて説明したつもりではある。

けれどもドラコ・マルフォイには、僕の論評は意味不明の物に感じられたらしい。濁り始めた灰色の瞳からは混乱が見て取れ、已む無く説明を続ける。

「なあ、ドラコ・マルフォイ。今年は去年までと状況が違うのだ」

闇の帝王は復活し、既に魔法戦争は始まった。

以降に起こるのは長閑な政争では無く、血みどろの殺し合いだ。

「個人的利益のみを追求した迂遠な策謀に興じる事はな、今年以降は決して出来ない。そんな真似は絶対に“上”が許してくれない。改めて考えてみると良い。僕達の陣営にとって今回の高等尋問官職の導入、ないしそれに関わる一連の教育改革。これらは必須と言えるか？」

「……必須に決まっているだろう？ あのマグル鼻頂の校長の横暴を許し続けるのか？」

「重ねて聞くが、今やる必要が有るか？ 嗚呼、単刀直入に言おうか。最終的に勝利さえしてしまえば、ホグワーツの『改善』など如何様にも出来ると思わないか？」

闇の帝王が魔法戦争で勝てば、全て解決する問題である。

言葉の裏に籠めた意味はドラコ・マルフォイに伝わったようであり、彼は表情を暗くし、口を堅く噤んでしまった。まあ彼の御付き二人は理解していないようだが、大部分には伝わったと見て良いだろう。漸く談話室内の殆どが理解を示してくれたようだった。

「ホグワーツ内での政争や教育内容への介入。それは僕達の陣営にとって優先すべき事項では無いのだ。後回しにしても特段の問題は生じず、あの校長が居なくなつてからの方が、迅速且つ大々的に改革を行える。今この瞬間にやらなければならない事ではない」

「……だから君は評価していない。父上や、あの御方の案でも無いと君は考えているのか？」

「そうだ。しかしながら僕の推測が正しい保証は無く、後から利用価値を見出したという事も有り得る。だからこそ、確認が必要なのだ。アレに何処まで配慮する必要が有るのかと」

氏の意向に反する以上に、闇の帝王の機嫌を害するのが最も拙い。前者は早々死にはしないが、後者は即座に死へ直結する。用心し過ぎるという事は無い。

「高等尋問官の職権にしても、現状大した力を持っている訳では無い。今後権限を拡大していく可能性は有るが、今の所は魔法戦争これからに影響を与える職では無い。何せあの職に与えられた権限は、同輩たる教授の査察及び停解職に過ぎんからだ」

一見大きな権力を与えられたように見えて——まあこれが平時であれば大した権力と言って良いのだが——現在の情勢を踏まえた上でとなると、全く違う見方をせざるを得ない。

「つまり僕達の陣営にとって最も邪魔である、あの校長の査察でも解職でも無い。二年程前に明らかになった通り、校長の解職権限を握る

のはホグワーツ理事会だ。そして今の理事会が誰に味方しているかというの、今校長職に誰が座っているかを見れば明らかだろう？」
彼は未だにアルバス・ダンブルドア校長だ。

理事達個人が闇の帝王の復活を信じてようがまいが、現状彼を辞めさせるべきでは無いという一点において、ホグワーツ理事会という組織は揺らいでいない。

「校長を排除出来ないなら、ホグワーツから教授を何人追放しようが誤差の範疇だ。そして任命責任を問うた所でやはり影響は知れている。ギルデロイ・ロックハートの任命も、ルビウス・ハグリッドの任命も、アラスター・ムーディの任命も、あの校長の辞職には足りなかった。更には今までの四年間に起こった不愉快な事態を知って尚、理事会は現校長を支持している。ならば高等尋問官がホグワーツに入つた所で、一体どうして状況が変わると期待出来るようか？」

この魔法戦争の勝敗は単純で、先に王殺しに成功した方が勝利である。

光の陣営は、闇の帝王を。

闇の陣営は、あの校長とハリー・ポッターを。

故に両陣営の戦略や策謀は全て王殺しを成功させる為、或いは王を護る為に費やされるべきであり、それに資する事の無い行動は全て無為と言って良い。高等尋問官の職権は、その無為な行動の良い例だ。彼女が如何なるホグワーツ改革を進めようと大勢には影響はしない。「そもそも魔法省の教育改革の成果に期待すべきではない。高等尋問官職の創設前に出された教育令——第二十二号だったか。正直な所、あれを見て僕は大きな失望を覚えた。何故そこまで遠慮するのかとすら感じたものだ」

「……遠、慮？」

「嗚呼、そうだと。非常に腰抜けの省令だ」

教育令第二十二号は、現校長が空職の教授職に候補者を配する事が出来なかった場合に、魔法省に対して教授の選任権を与えるもの。

そのような教育令が出された背景に在るのは当然ながら闇の魔術に対する防衛術、ドローレス・アンブリッジが現れるまで教授選びに

難航した呪われた科目だろう。

しかし、この魔法省の手緩さには、アルバス・ダンブルドア校長とて拍子抜けした事だろう。何ならほくそ笑みすらしたかもしれない。「あの校長が今まで不適切な人間を教授としてきたのは明らかだ。先の三人は典型で、シビル・トレローニーもそうだろう。そもそも防衛術教授が毎年変わる事自体、校長は適切な人間を選べていないと言える。だが、そうであるならば何故、魔法省は、校長でなく魔法省こそがホグワーツ教授を任命するという教育令を制定しなかったのだろうか？ その方が余程素直であるのに、あのような中途半端な教育令を出すに留めるのは怠慢では無いか？」

あの教育令に従う限り、高等尋問官が教職員を任命出来るのは、あくまで空職の科目が出て、尚且つ校長が候補者を見付けられなかった場合のみ。つまり校長が第一で、魔法省が第二だ。教授の直接の任命権は未だホグワーツ校長が握ったままで、仮に高等尋問官の御仕事により空職が出たとしても、校長は依然として教授を任命出来る。

ホグワーツ教授は魔法省が選ぶという直截的な省令を出していれば、そんな事は有り得なかった。仮に魔法省が選ばないとする場合でも、教授の任命に際しては魔法省への承認を要する。或いは届出を要するという規定を設ければ、縛りを掛ける事は出来たのだ。

しかし、コーネリウス・ファッジはそうしなかった。

「……嗚呼、日和る気持ちは解らんでも無いとも。確かにそのような省令、校長の権益を明確に侵害する類の改革は、間違いなく大反発を喰らう。この程度の些細な改革ですらウイゼンガモットを辞めた人間が出た訳だが、それをやれば今回の比では有るまい」

ホグワーツ校長という地位は、魔法界において「聖域」である。

魔法省如きがその権限を侵害する真似を、世の魔法族が許す筈も無い。

「とはいえ教育改革を本気でやる気ならば、やはり聖域に踏み込むべきだったのだ。今ならば「マグル」に近い者は支持した筈で、今回程に魔法省とホグワーツの上下関係を確認する絶好の機会は無かった。ホグワーツを潰す程の覚悟でコーネリウス・ファッジが改革を進

めるといふ姿勢を見せたなら、ルシウス・マルフォイ氏達とて反対は出来なかつただろうに」

魔法界における魔法大臣と Hogwartz 校長の力関係は、非魔法界における政府の首相と オックスブリッジの総長とは全く次元を異にする。

魔法大臣の地位を “マルフォイ” は求めず、事実上の王を称した一族の一つである “ブラック” もまた同様だった。彼等の姓は歴代魔法大臣のリストの中に見付けられない。しかしながら、歴代校長の中に “ブラック” —— フィニアス・ナイジェラス・ブラック教授は居る。その事実が答えの一端を示している。

「……君の常識では、魔法省が教授を任命しても良いのか？」

「個人的に賛同出来るかは一応留保しよう。しかし、主張が論外だとまでは思わない」

顔に恐怖が過ぎっているドラコ・マルフォイに、半ば投げ遣りに答える。

「魔法省こそが教授の任命権を握るべきだという主張。その正当化は決して不可能では無い。自治とは無法と意味を異にする。そもそも自治するだけの能力の無い者には自治の権利を与えられるべきではない。そして組織としての緊張関係を齎す為には、外部の介入を許す事こそが適切だ——その理屈には、確かに一定の正義が存在する」

ドローレス・アンブリッジは確かに教師と呼ぶに至らない人間では有るし、高等尋問官の職責を果たせるとも思えないが、彼女の資質の有無と魔法省の介入の妥当性は別個の物だ。

ギルデロイ・ロックハート、一昨年のルビウス・ハグリッド、そしてシビル・トレローニー。彼等が生徒の学習期間を台無しにした責任を負うべきは、決してアルバス・ダンブルドア校長だけではない。彼は確かに諸悪の根源だが、それらの非道を見ない振りし、放置し続けたのは、ミネルバ・マクゴナガル教授達を含めた全ての Hogwartz 教授である。

自浄作用の無い組織ホグワーツこそが僕達子供の教育機会を不当に奪っており、そして特急内でのハリー・ポッターの癩癩は、心情としては同意

出来るのだ。

大人達は、子供の気持ちなど何も考えてなどいない。

「だが、そうはなっていない。彼等はそうしなかった。なれば、〃巨悪〃を討ち滅ぼすには至らない。だからこそ、あの校長も高等尋問官を放置出来る。この期に及んで生温い手しか打って来ない相手など、最初から歯牙にかけていない。……嗚呼、全くもって下らん」

彼等は徐々に権限と権力を拡大するつもりではあるのだろう。

しかしホグワーツと魔法省の主導権争いが、過去に一度も存在しなかったと思っているのか。まして、今の校長はアルバス・ダンブルドアだ。ホグワーツを撃肘する二度目の機会が、都合良く魔法省に回ってくる訳がない。

「……解った。君の主張は解ったから落ち着け、ステイーブン。僕と違って、普通のスリザリンは君の唐突な怒りに慣れていない。周りを威圧するような真似も止めろ」

「そんな事はしていないし、僕は至極冷静であるつもりだ」

「僕達からはそう見えないから言っているんだ」

「………そうか」

まあ、言われてみれば多少感情的になって居るかもしれない。僕達の様子を伺っていた人垣も、心無しか最初より距離が空いているような気がする。

左手で顔を軽く拭った後、天井に向かって大きく息を吐く。

「……僕が父上に手紙を送れば良いんだな？」

僕が落ち着くまで待つと話が再脱線してしまうとも思ったのか。

先に口を開いたのはドラコ・マルフォイの方だった。

「確かにアンブリッジの仕事を邪魔するなどは父上から言われているが、積極的に協力しろとまでは言われていない。学期前の父上との会話でも、今まで受け取った手紙の内容にしても、アンブリッジを重要人物と位置付けているようなものは含まれていなかった」

「………そうか。だが、やはり結論を下すのは早計だろう。表向きがどうあれ、違法な話^{後ろ暗い}が君に降りてきていない可能性は十分ある」

「解っている」

ドラコ・マルフオイは重々しく頷いて見せる。

「父上達がアンブリッジについてどう思っているかは再度確認させて貰う。君が非常に関心を寄せていたという言葉も添えてな。それで良いのだろうか？」

「問題ない——と言いたいが」

「……まだ何か有るのか？」

「半ば規定路線のようになってきているが、結局の所、僕がドローレス・アンブリッジに“対処”するという事で良いのか？ 氏の指示がそうであると聞いているし、最も穏便に済みそうな手段は僕も一応思いついている。しかし、最低でも全スリザリンの了解がなければ話にならない。賛成や協力まで求めはしないが、僕のやる事を黙認して貰う必要は有る」

この場に第五学年の中核となる“純血”は居るし、他にも各学年の有力人物の姿がちらほら見えるが、全てでは無く、当然ながらスリザリンの全員が居る訳でも無い。

そもそも、この場に居る人間の意見すら未だに定かではない。ドローレス・アンブリッジとの交渉がすんなり進めば杞憂で済むのだが、失敗すればやはり大惨事に成り得る。見切り発車で突っ込むのは可能な限り避けたいし、まして別の考えをもった複数人が同時に彼女と交渉するなど論外である。

「つまりスリザリンの了解が有れば、あのガマ蛙を黙らせられる。ここに居ない人間にも、僕達が話を通せば問題無い。君の言葉をそう受け取って良いんだな？」

「……まあ、そうだな。確実とは言えないが、十中八九何とかなるだろう」

「なら十分だ」

ドラコ・マルフオイは試すかのように、碧色に染まる談話室を見渡す。

支配者の視線に怯えるかのように、多くの人間が目を逸らした。目を逸らさないのは彼と同格である者達だけで、彼等もまた何も言おうとはしなかった。僕達の話聞いていた者達全てが異論を挟まな

い事を確認した後で、彼は最後に僕へと視線を戻す。その表情からは、今スリザリン生を黙らせた優越感など欠片も見出せなかった。

「――君^オの希望^ダに反対する人間など、既にスリザリンには居ない」

サボタージュ

「……本当に協力は不要なんだな」

ドラコ・マルフォイが、うろろろと神経質に寮室内を歩き回る。

彼の後ろには珍しく、何時もの御伴の二人は居ない。ピンセント・クラップとグレゴリー・ゴイルは、彼の命令によって部屋を追い出された。僕と同室である同級生達も同じだ。『マルフォイ』の威光は、この場においても滞りなく効力を発揮した。

とはいえ、今はドローレス・アンブリッジとの接触前なのだ。内緒話をしていると受け取られるような真似は慎むべきだと僕は進言したのだが、彼は断固として受け容れなかった。僕が思っていたよりも、彼は心配症な男だった。

「不要だ、と言っただろう」

ドラコ・マルフォイに、幾度目か解らない言葉を繰り返す。

己の声が酷くぞんざいだったのは已むを得まい。

「高等尋問官職は直接『計画』に関わるものではない。ルシウス・マルフォイ氏からそう返答が寄越された以上、結論は殆ど決まっているような物だ」

ドローレス・アンブリッジは闇の帝王にとって必須の駒では無い。今回万一彼女を破滅させる羽目になったとしても、大人達は責める気は無い。

そう判断が下された時点で、既に彼女に勝ち目など存在しない。

「後は、どういう形で収束させるかという違いでしかない。必須でないにしろ、可能な限り失脚させないのが望ましいという『意見』も付いて来ていたしな。この四年間ハリー・ポッターが引き起こしてくれた騒動を考えれば、ホグワーツに一人くらい便利な駒を置いておきたいという考えも理解出来る」

差し当たってはハロウィンが山場である。

ハリー・ポッターに纏わる大事件が四年連続で発生してきた呪われた日だ。その日に何も起きないのであれば、平穏無事なホグワーツに一步前進出来ると言っても過言ではない。

逆に言えば、闇の陣営にとっては或る意味狙い目な日と言えるかもしれない。

「……別にそんな事はどうだって良いが。僕にも計画の中身を話す気も無いのか？」

「それもまた説明した。根本的には彼女と話し合いをするだけだ。何を話すつもりかは君も知らない方が良い。全てを打ち明けられるのも終わってからだ」

「……………」

こんな事を一々主君から言い出される場合、普通ならば僕が信頼されてない証であると考えるべきなのかもしれない。

だが、残念ながら僕は開心術士だ。僕に対する不信の色は、ドラコ・マルフォイの眼に見て取れない。夏休暇中に思い知るようになったが、彼も大概面倒な性格をしているようだった。

「セオドール・ノットやパンジー・パーキンソン達も納得していただろう？ 僕への積極的な協力をしない代わりに、僕が為す事を黙認はするとな。まあ予め中身を話しておかない事には多少難色を示したが、それでも多少計画を仄めかせば、僕の方に理が有ると最後には受け容れてくれた。思ったよりも円滑に物事が進んだのも助かったな。あれは良い誤算だった」

内容を秘したままというのは絶対に採めると思っていたのだが、そうはならなかった。

ドラコ・マルフォイが信用されている事もあるのだろうが、内容を知る事で自分が余計な責任を負うのを避けたという面もあるのかもしれない。そして彼等「純血」が責任を追及するのは、別に僕が無様に失敗してからでも遅くないのだ。

「もつとも、既に僕が何をするか薄々察している人間はそれなりに居たがな。彼等も立場上、実家の暗部を見る機会が今までにあつたのかもしれない。君達貴族の習性からすれば当然で——とは言え、ここまで洩る位だ。君には殆ど見当が付いていないようだが」

「……………悪いか」

「そうだな。僕が口出し出来る事では無いが、ルシウス・マルフォイ氏

は過保護に過ぎるとは思っている。この手の汚れ仕事について知らない振りするのもまた上位者の仕事だ」

学生時代にルシウス・マルフォイ氏がスネイプ教授を欲し、また夏休暇中、僕に対して氏が好意的な態度を示し続けたのも納得だった。

ビンセント・クラッブやグレゴリー・ゴイル。

あの取り巻き二人は、ドラコ・マルフォイにとって扱いにく過ぎる。彼等の頭が宜しくないという話ではない。大駒過ぎて取り回しが悪いという話である。

如何に今最も権勢を持つ家が「マルフォイ」であるとはいえ、階級としては対等である以上、彼等に日々雑務や面倒事を押し付けるのは角が立つ。特に捨て駒として理不尽に責任を押し付けるような真似は、決して許されない。そうしてしまえば最後、彼等の実家を丸ごと敵にしてみようからだ。必然、この手の失敗するかもしれない仕事を任せる事も出来ない。

翻って、使う駒が半純血の場合、そんな面倒事を考えなくても良い。貸しを作って支配するのに苦労もせず、切り捨てる際に心が痛む事も無く、一度反抗的な態度を示せば簡単に潰す事が出来る。徹頭徹尾便利屋として使い倒せば良く、話の通じない相手の下——失敗が想定される交渉にも、何の憂いなく送り込む事が可能だった。

「……靴を作る仕事は、靴屋に任せるのが一番良いというやつか」
「そういう事だな」

昨日の僕の台詞の引用。

彼がその含意を真に理解しているかは、今の所不明だ。

「……だが、君は自分で理解しているのか？」

「——何をだ？」

笑みを噛み殺しつつ問い掛ければ、ドラコ・マルフォイは僕から視線を逸らす。

うろろうろ部屋を歩き回るのも完全に止めている。言葉を紡ぐ彼は僕に対して背を向けており、それは何時ぞやの彼の父君を思い出させるような態度だった。

「君は昨日言ったな。ドローレス・アンブリッジはファッジと違って

半純血であり、そして持たざる者だと。だから、本来ならば僕達でどうにでもなる相手だと」

「確かに言いはした。実際、その筈だった。普通の相手であれば、君達が話を付けに行った時点で終わっていた事だろう」

今回の事例は、あくまで例外的なもの。

例外的だからこそ、こうして揉めているのだと言えるのかもしれないが。

「『マルフォイ』だろうと、『パーキンソン』だろうと、或いは『クラップ』や『ゴイル』だろうと、君達は支配力を——権力と権威を持つ側だ。どんなに少なく見積もってもホグワーツと同程度の古さを持つ歴史。君達の先祖が代々築き上げてきた人脈と財貨。君達は生まれた瞬間からそれらを持ち、故に君達は強者で、上位者だ」

そしてアンブリッジは持たぬ側である。

非純血は純血に勝てない。その基本原則は覆らない。

僕が成功しようと失敗しようと、彼女の末路はそう変動しない。仮に僕が介入しなかったとしても、闇の帝王による聖断が下された以上、ドラコ・マルフォイ達の最終的な勝利は決まり切っていた。

「なら——」

「……………ならっ？」

「半純血なのに好き勝手やっている人間は何なんだ？ 聖二十八族と比べて力を持たない筈なのに、僕達が——僕がどうにも出来ない奴が居る」

「あの校長やハリー・ポッターの事を言っているのか？」

或いは、我等が未来の主君である闇の帝王の事か。

問いに対して、ドラコ・マルフォイは何も答えなかった。背を向けているから、彼の心どころか、表情を読むのすら不可能だった。

「……………まあ一言で言えば、彼等がそれだけ強いからだろう」
「……………」

「杖腕、魔法力、呪文や魔法薬等に関する創造性と発明力。魔法使いとして求められる要素の殆どにおいて、彼等は秀でていて。如何なる肩書を持っているか、如何なる血統であるかなど関係無い。仮に彼等が

俗世から離れ、隠遁生活を送っていたとしても何も変わらない。彼等は単純に個として強過ぎるのだ」

非魔法界の言葉で言えば、unmo. universal 万能人か。

「突き詰めて言えば、彼等一人の好意を得る事が利益となり、逆に敵対する事が不利益に成り得てしまう。君も良く知る通り、スリザリンに所属する聖二十八族とて一枚岩では無い。彼等のような超人に何処かの一家が気に入られ、反対に他の一家が嫌われた場合、即座に力の不均衡や序列の変化が生じ得る。そして、それはスリザリン以外でも同じだ。彼等は如何なる勢力も無碍に出来ない存在であり、だからこそ好き勝手に振る舞える」

ただ一人で勢力図を書き換えられ得る怪物達。彼等はそうであるが故に、古い血を引く家であっても、その他の誰にとつても無視出来ない力を持っている。

「……なら、ポッターはどうなんだ」

「まあ、彼の事は非常に難しいな。アレを強いというのは憚られる」

先の二人とは明確に違う。

「客観的に見れば、彼は弱者だ。既にポッター家の血は汚染され、両親の死を機に家の人脈は吹き飛び、ハリー・ポッター個人もあくまで普通の才能ある魔法使い止まり。財貨に関しては祖父の代の成功で相応に有るようだが、それでも君達には遥かに及ばない。本来の理屈で言えば、純血が気に留める相手でも無い」

僕達の世代の最重要人物。四寮の全てから動向を注目され、校内の王たる資格を認められる唯一の存在は、本来ならドラコ・マルフォイの筈だった。

「生き残った男の子」という大例外が生まれさえしなければ、間違いなくそうなっていた。

「しかしそれでも彼を特別たらしめる理由を挙げるとすれば——それは幻想だろう」

少しだけ迷い、適切な言葉を探した果てに、そう口にする。

「得体の知れなさを、その裏返しとしての期待の大きさと言い変えても良いかもしれない。強弱や上下、常識や論理を無視し、この人間なら

ば不可能を為し得ると思わせるだけの無形の力。これを權威や権力、実力等の何処に位置付けるかは悩ましいが、兎も角、ハリー・ポッターにはそれだけの力が有る。正しくは、持っているのだと大勢から看做されている」

「順当に階位を昇った人間が英雄と呼ばれる事は無い。」

「どんなに偉くなろうと所詮は王や貴族、大將軍や大政治家止まり。」

「ただ唯一、人を超えて奇跡を成し遂げた者のみが英雄と呼ばれ、歴史に名を刻み得る。」

「あの二人と違い、彼が持つ幻想は自分の物ではない。それは闇の帝王に由来するものだ。故に、本来の実力より不相応に巨大な幻想を背負っているという評価も可能である。というより、それが正確な見立てだろう。だから何処かの大魔法使いの行動も一定程度理解出来るし、当然ながらドラコ・マルフォイ、君が不愉快に思う気持ちにも理解を示せる」

「『生き残った男の子』。」

「その称号が過剰に評価されている事を、僕は良く知っている。」

「一歳のハリー・ポッターが生き残ったのは、リリー・エバンスの愛の魔法の御蔭。」

「そしてそれ以降に彼が命を繋いできたのは、運に恵まれたという以上に、彼が闇の帝王の力を受け継いだ分霊箱——双子の芯の奇跡も、彼等が近い存在となって居なければ有り得なかった可能性が高い——であるという要素が大きい。」

「だから君がハリー・ポッターに勝ちたいと思うのなら、話は単純。その『幻想』を打ち崩してやる事だ。どうすれば良いかも明快と言って良い」

「……そんな手段が有るのか」
「有るとも。」

「——ドラコ・マルフォイ。君が彼を殺せば良い」

「その提案に、『純血』の子息は震えた。」

「政治ごっこは終わりたい。耐え切れなくなったように勢いよく振り返り、同時に僕が予想していたよりも激烈な拒絶反応を示した。」

「!? ししし、正気で言っているのか!?」

「僕はまったくの正気だ」

真正面から、瞳孔が大きく開いた灰色の眼を見据える。

こんな事を冗談で口にはしない。

「御互い未だに死の呪文を使えぬ身では有るが、それでも上手く呪文を利用すれば、人一人を始末する事は簡単だ。僕達が行使するのは夢に満ちた、幻想的で清らかな力などではない。奇跡miracleでなく魔法magic。他人を容易に不幸へと落とす事を可能とする、忌み嫌われるに相応しい呪われた力だよ」

ハリー・ポッターは闇の帝王に勝てるかもしれない。

そんな疑惑や期待こそが彼に“幻想”を与えている訳で、彼が同級生に殺される程度の存在に過ぎなかったと証明されたのならば、ハリー・ポッターは単に運が良かっただけの少年に成り下がる。

そしてまた、彼に代わりドラコ・マルフォイこそが、新たな“幻想”を背負う人間となる。

「……て、帝王はポッターを殺したがっているんじゃないのか?」

「だろうな。だが、僕としては無視可能な類の指示だと思っっている」

どんなに不合理な内容だろうと、独裁者の命令に背く事は基本的に死を意味する。

しかしながらこの件に関しては、まず間違いなく許しを得られるだろうという確信も有る。

「そもそも冷静に考えて、偉大なる帝王がハリー・ポッターに拘るべき理由が有るのか? 彼は校長とは違う。並外れた幸運を持っているだけで、平均よりは優秀なだけの人間だ。なれば代わりに殺す事を申し出て、主君の手間を省く事こそが真の臣下ではないのか?」

帝王本人が殺したいというのは所詮臣下への建前に過ぎない。

まあ自分が殺せぬ者を殺した魔法使いの誕生——己より“特別な人間の出現を忌避するという考えも帝王には当然有るだろう。だが、正直言って杞憂だ。

半純血でありながら、“純血”達に頭を垂れさせた魔法使い。ゲラート・グリンデルバルトを真正面から打ち破った人間に、敗北の可

能性を想像させる程の魔法使い。そして前代未聞の魂の複数分割を成し遂げ、肉体の消滅を経ても蘇ってみせた、史上最悪と呼ばれる魔法使い。

一体どれだけの人間が、彼と同じ事を出来るというのか。

あの校長を殺しただけで今世紀で最も偉大な魔法使いに成り代われないのと同様、ハリー・ポッターを殺しただけで闇の帝王を超える事など出来ない。

「しかも君は『マルフォイ』だ。他の有象無象ならいざ知らず、君を簡単に殺す事は帝王とて出来ない。ハリー・ポッターを殺す事にして、評価されることはあれ、死を賜る筋合いはない。彼を殺した事による褒章を拒否し、真なる忠誠を抱く者として当然の行為をしたまてだと主張したのならば、帝王は寛大さをもって君を迎えてくれるに違いない」

「だ、ダンブルドアが——」

「——あの老人は生徒を殺せんよ。彼はホグワーツ校長の名誉を捨てられない」

多少の期待は抱かなくもない。

我が子とも思えるハリー・ポッターを殺した相手に、激昂と共に復讐する事を。アリアナ・ダンブルドアを喪つて以来の、普通の人間らしい熱量を取り戻す事を。

だが、彼には無理だろう。

「そして殺されないならば、後から幾らでも帳尻を合わせる事は可能だ。アズカバンは遠からず破られる。吸魂鬼の管理が杜撰である事は、ハリー・ポッターの一件によつて暴露された。現状以上の警備の強化もコーネリウス・ファッジが許すまい。何より帝王に忠実な死喰い人が未だあそこに居る以上、彼は本気でアズカバンを攻略しようとするだろう。既に帝王の支配下であっても驚かんし、来たる騒ぎに紛れて逃げる事も不可能ではない」

——そこまでしてハリー・ポッターを超えたいなら、協力するのも吝かではないが？

「……き。き、君はポッターを殺す事を何とも思わないのか？」

「何も思わない訳では無いが、君がやると決めれば協力はするとも。君は僕の主であり、君が力を付ける事は、僕にとつても利益だ。反対する理由はない」

ハリー・ポッターとドラコ・マルフォイ。

魔法界を進歩させる人間が何れで有るかに、左程の拘りは無い。そして方法論としては、合法より非合法の方が遥かに都合が良い。人体実験をしてこそ得られる成果も多いだろう。

「但し、僕が助力出来るとしても御膳立てをする所まで。最後に手を穢す部分だけは、他ならぬ君の手でやって貰う必要が有る。僕が彼を殺してしまえば意味が無くな——」

「——解った。もう十分だ」

その声に嫌悪を隠さず、ドラコ・マルフォイは僕の言葉を遮った。俯いてしまった彼は、僕に瞳を覗かせなかつた。

「得体の知れなさ、か。確かにその通りだ」

「……………」

「色々言つてやりたいと思つていたが、今更お前に言うのは止めだ。もう四年も同じ寮に居るんだ。僕がポッターを殺すと言つたなら、お前が真剣に計画を練るんだろうという事は解つてる。だが、それは必要無い。僕には僕の考えが有る」

「そうか。君がそう言うならば従うまでだ」

一応頷きはしたものの、更に何かを聞かれる物だと思つていた。

けれども彼は全てを棚上げて、僕の口を封じる事を選択したようだった。事実、それは正しい。ハリー・ポッターを殺す気が無いなら、架空の計画を掘り下げる意味も無い。

「だから、僕は今の事だけ言っておく」

「今？」

「アンブリッジの事だ」

嗚呼、そうかと僕は頷く。

再度顔を上げた彼の瞳からは動揺が消え失せており、ただ親身な色だけがあつた。

「あれだけの人間の前で大口を叩いてみせたんだ。失敗は絶対に許さ

れない。君が万一アンブリッジへの対処を失敗した場合、「純血」は君を罰さなければ——矜持を懸けて叩き潰さなければならぬし、僕もまた、これまでのように庇う事は出来なくなる」

「……………」

「良いか、君が少しでも真つ当であるつもりなら、僕の忠告を改めて心に刻め」

闇の魔術に対する防衛術教授の部屋は、この四年間常に個性的だった。

けれども、あれらの部屋に対して個性的という言葉を使ったのが間違いだと思える程、このピンク一色の部屋は個性的——いや、そうでも無いか。やはりギルドロイ・ロックハートの部屋は、これと良い勝負をしていたと言って良い。とはいえ、ドローレス・アンブリッジの方も一方的に負けていないと言えるのは確実だ。

そんな部屋の主と僕は机を間に置く形で向かい合わせに座っていたのだが、会話を始めて五分も経てば、真つ当な話合いをする氣力を喪うには十分だった。

「私も本意では有りませんわ。しかし、ダメです。ダメなのです」

彼女はニタニタと頬を緩め、甘ったるい口調で言っている。

相談に来たという僕を彼女は快く——少なくとも表面上は——部屋に受け容れたのだが、僕の用件など最初から予想していたのだろう。彼女の僕への説諭は、嫌に粘つくく、比喩に満ちていて、内容が無い部分も多かったが、それでも生徒の要望に対する拒絶という指針には一切の揺らぎが無かった。

「マルフォイ家の御坊ちやま達が来た時にも伝えた筈ですが、今年の指導内容は魔法省の決定です。残念ながら、私の一存で大きく変えられる事ではないのです」

チツチツと、ずんぐりとした人差し指を小さく振る。

「確かにスリザリンの学習は全体的に進んでいるようですが、だか

らと言つて基礎を蔑ろにして良いという事にはならないでしょう？
確かに最初は無味乾燥に思えるかもしれませんが。しかし勉強とは
往々にしてそのような面が有り、既に学んだと思える内容だとして
も、更に学び直せば驚くような発見が有る物なのです」

「……つまり、僕達は未熟であるが故に、貴方がた大人の真意に気付く
はしないと？」

「素晴らしい答えです」

スリザリンに点数は上げられませんが、と。

自分では慈愛に満ちていると思つていらしい笑みを浮かべつつ、
彼女は頷いた。

「勿論、私は貴方がたの力になりたいと思つています。けれどもそれは
はまだ先の話です。スリザリンだけ鼻直し過ぎるのも良く有りませ
んし、ポッターやウィーズリー達のように、私への反抗心を隠さない
人間も居ます。この状況でスリザリンだけに私が特別授業したとな
れば——御互いに良くない事になる。その程度の事は想像が出来ま
せんか？」

「……………」

成程、ドラコ・マルフォイがあそこまで強く不可能だと言い張つた
理由が解つた。

「確かにコレは無理だ。」

最初から生徒の話など聞く気が無い。生徒を見下し切っており、対
等な存在とは認めていない。自分の持つ権力を存分に振るう事に愉
悦を覚え、己の地位を確認する事に大きな満足感を抱いている。事前
に想定していた通りの、酷い有様だった。

僕の想定していた範疇を、彼女は超えてくれなかった。

「——そうですか。良く解りました」

もう十分だ。

そんな思いを籠めて、説得を打ち切る。

相手が「純血」でなく半純血ならば変わるかもしれないという望
みを抱いていたのが間違いだつた。最初からスリザリン流の対応を
すべきだつたのだ。

「まあ、解つてくれましたか……！ それは良かった！」

彼女は僕の言葉を降参と服従の言葉と受け取つたらしい。甘つたるい声と共に大袈裟に手を叩き合わせ、自身の頬へと当てて。一々少女めいた仕草をするのは幼少期にトラウマでも有るのだろうか。流石にそこまでは誰も知らなかったし、そして知りたいとも思わない。「——ところで、僕が貴方と最初に御会いしたのは、夏休暇中の事でしたね」

交渉を始めようと、質問を投げかける。

それに対し、ドローレス・アンブリッジは短く太い首を傾げてみせた。

「……？ それは確かにその通りです。私はコーネリウスから貴方を紹介された時の事を良く覚えていますよ。非常に見込みの有る生徒で、今年私の助けにもなつてくれるだろうと」

「ええ、僕も記憶しています。そこまで大臣に評価されているとは思つてもみなかった——とは言いませんよ。大臣はあの場に居合わせていましたからね。大臣が居たからこそ、僕はあんな話をしたのだから当然ですが」

「……あの場？」

「大臣から何か聞いていないのですか？」

「……………何をです？」

「たった一度しか会っていない生徒を、魔法大臣ともあろう方が記憶している理由ですよ」

淡々と告げた言葉に、ドローレス・アンブリッジはギクリと表情を変えた。

「『マルフォイ』などの名家出身ならいざ知らず、半純血風情が大臣に拝謁する機会など早々無い。まして名前を記憶して頂く場合なんて非常に限られる。その事に貴方は疑問を抱き、大臣に探りを入れようとは思わなかったのですか？」

「き、聞いては居ませんね。コーネリウスは私に何も言いませんでした。コーネリウスが運良く貴方の事を覚えていただけで、私に伝える程では無いと考えたのでしょうか」

「まあ、そうかもしれないね」

否定をせずに、僕は頷く。

「大臣と御会いたあの場には校長も居ましたが、既に今年の夏、彼が痴呆老人である事は明らかになりました。当時僕が何を言ったかは最早重要で無く、そもそも既に済んだ事ですしね。バーテミウス・クラウチ氏は死に、三校試合は終わったのですから」

「――」

ドロレス・アンブリッジが居心地悪そうに身じろぎする。

今更ながらに自分が油断し切っていたかもしれない事に気付いたようである。視線を忙しく彷徨わせ、落ち着きなく自分の手を揉みしだいた後、僕のカップに視線を向けた。

「と、ところで、ミスター・レッツ……ステイブン。紅茶の御代わりは如何――あら？　ま、まったく飲んではいないでは有りませんか」

「ええ。去年の防衛術教授は一つの教えを残してくれました。貴方のような相手から差し出された飲み物に対し、僕は一体どのような対処を為すべきなのかと」

徐にローブから杖を抜く。

生徒が突然そんな行動に及ぶとは思わなかったらしい。ドロレス・アンブリッジは口をあんぐりと開けたまま、僕を制止しようとしなかった。

エバネスコ。

紡いだ呪文によって、一滴も口に入れなかった紅茶が消え失せる。メッセージは明確だった。

「さて、交渉に移りましょうか」

杖を仕舞いながら、啞然としている高等尋問官へ椅子上で姿勢を正す。

「貴方は今回ドラコ・マルフォイの命令に従わなかった。つまり、現在貴方はスリザリンを敵に回そうとしている訳ですが――」

「――どうしてそんな事になるのです？」

直ぐに笑顔を取り繕ってみせたのは、流石に魔法省で生き抜いてきただけ有る。

もつとも額にはピクピクと青筋が浮いており、顔に比べて不自然に小さい瞳には敵意と警戒心が浮かんでいる。僕の先制攻撃は、彼女の仮面に罅を入れる事くらいは出来たらしい。

「まさか寮への加点程度で好意を獲得出来ていたとでも？ 確かにスネイプ教授はその手の真似をやっていますが、それだけで同じ敬意を獲得出来ると思われては教授も心外でしょう。現状、『純血』の貴方への敬意は零だ。いえ、マイナスでしょうか」

「……私は子供の間違いに寛容な教授であるつもりです。同じ寮のよしみも有ります。今すぐ謝るならば見なかつた事にしてあげますよ」
「果たして見逃して貰う必要が有るのはどちらでしょうね？」

ドローレス・アンブリッジの眼に怯えが無いのは評価出来る点だった。

しかしながら、自分の地位に対する自惚れが現状を生んだ事を考えれば、彼女に対して少しばかり哀れみを抱かないでもなかつた。

「『純血』は貴方に対して失望している。しかも貴方はドラコ・マルフォイ達の言葉、彼等の警告を真剣に受け止めなかつた。それもあろうことか非常に無礼な形で追いつ返してしまった。これは致命的な失策と言つて良い。最早貴方に味方するスリザリン生は校内に居らず、貴方の自己満足に丸二時間付き合いたいとも思いはしないでしょう」
——要するに。

「明日以降、貴方の授業を全スリザリンが欠席する。そんな事態が起こりかねませんが？」

ドローレス・アンブリッジの表情が凍った。

グリフィン・ドールの反抗ぐらいは彼女も予想はしていた筈だ。

スリザリンとの関係は千年以上前から悪いが、今のグリフィン・ドールには大嘘吐きハリ・ポッターが居る。これで仲良くやれると思うのがどうかしているだろう。

しかし、彼女の足元——と信じ切っているだけだが——のスリザリ

ンから、公然とした反抗が生じるとは思っても居なかつたらしい。何とか動揺を鎮めようとしているが、彼女の顔からは笑顔が消え、瞳は動揺に震え、声は混乱を隠し切れていない。

「そ……それは、告発と受け取って良いのね？」

「告発？ そんな話が有る訳無いでしょう」

頭が悪い問いをせせら笑う。

「貴方もスリザリン出身なら御理解頂けるでしょうが、僕達は同胞を容易く売らない。まあ絶対に、では無いのですが、少なくとも今回は違いますよ。そして僕は懸念を示しただけで、別に確たる未来を予言した訳でも無い」

そもそも吐いた言葉自体が大嘘だった。

彼女の授業の欠席を考えている人間はそれなりに居る筈だが、それがスリザリンの意思として統一されているという事はない。ドラコ・マルフォイも含め純血の誰も、寮を挙げてのサボタージュ計画など立てていない。考え付いている者が皆無とも思わないが、そのような発想が出来る人間は、昨日僕が仄めかした時点で沈黙を選んだ筈だった。

明日以降もドローレス・アンブリッジの授業は通常通り行われ、そしてスリザリンも嫌々ながら参加する。寮内の意思は現状、そちらの方向で統一されている。

しかし、ドローレス・アンブリッジは知り得ない。

また、こうして疑念を持たされた以上、信じる事は出来ない。

「——っ。でも貴方は今、私の前で生徒達の叛乱を口にしました！

計画が無いのにそのような言葉を吐く筈が有りませんし、懸念に過ぎないというのは詭弁でしょう！」

「確かに詭弁では有りますね」

こんな理屈を通す世界は何処にも無いだろうと微笑む。

ドローレス・アンブリッジは漸く、僕を敵だと認識してくれたらしい。

屈辱に顔色をピンクに染める彼女の姿は、酷く無様で、滑稽で、そして幼く見える。

僕が彼女を舐め切っているという事も理解したのだろう。取り出された短い杖は、こちらに先を向けないものの、両手で堅く握りしめられている。またプルプルと震えながら敵意と激怒を露わにして険しい視線を向けてくるのだが——まあ、蛙に睨まれて怯む蛇は居ない。

「しかし逆に質問をしたいのですが、まさか高等尋問官殿は、全スリザリンから授業放棄される事が有り得ると御考えなのですか？」

「——」

「公平に評価すれば、我等がスネイプ寮監も大概酷い教え方をしています。だが、それでも意図的に彼の授業を欠席する生徒は居ない。毎回酷くやられているハリー・ポッターですら、欠席を考えなどしないでしょう。彼も今年O. W. L. 試験を受ける身ですからね。スネイプ教授による板書の一文字一文字、そして減点混じりの指摘の一言一言が貴重な教えである。その事を理解する程度の頭は、流石の彼も持っている」

そして、と乗り出すように机の上に両肘を置き、指を組む。

高等尋問官はたじろいで、椅子と共に身体を大きく引いた。

「今御話を伺った限りでは、貴方は魔法省の指針に忠実に従った、非常に素晴らしい授業を御やりになつている筈だ。ならば、その授業を欠席しようとする人間自体が有り得ないのでは？ 御自身で言われたように、学習の何たるかを理解出来ない数人が欠席する事は有り得るでしょう。しかし全スリザリンの欠席となると、常識的には考え難いと思えますが」

「す、スリザリンならば有り得るでしょう……！ 私達の寮は一度純血が命令すれば——」

「——ここに居る僕は、半純血ですけどね」

ドロレス・アンブリッジが愕然とする。

今更、この場に居るのがドラコ・マルフォイでなく僕である理由を察したのか。

「全スリザリンの授業放棄が計画されている。『それは嘘です』。他ならぬスリザリン生の僕が、それも半純血風情が言うのだから間違いない。

りません。僕は何も聞いていないし、命じられてもいない。仮に貴方が疑問を抱いているなら、今すぐ確認しても構いませんよ。しかし貴方がスリザリンの誰に問い詰めたとしても、叛乱の証拠など何も出ないでしょう」

実際そんな計画など無いのだから、当然の話である。

どんなにしつこく嗅ぎ回ろうとも、初めから無い物は見付ける事が出来ない。

「ただ、貴方が一々スリザリン生に問い詰めて回ったのならば、その行動もまた悪くないと考える人間が出るかもしれませんね。『純血』の誰かが命令してでは無く、貴方の被害妄想を受けて一人一人が考えた結果、己の意思でもって貴方の授業を放棄する。その結果として全スリザリンが欠席する事も有り得るかもしれない」

「……っ。そ、そんな不道德な真似は絶対に許しません……!」

不道德か。

高等尋問官殿のそれと、僕のそれは意味が違うらしい。

二重顎をプルプルと震わせて唸り声を上げる彼女を見ながら思う。

「私は魔法大臣付上級次官であり、高等尋問官であり、教授なのです！

今までのホグワーツ教授は貴方がたに甘かったようですが、私は厳正に対応します！」

「へえ。それで何をするのです?」

「決まっています! 当然そのような不屈き者には罰則を——」

「——で、どうやって罰則を課すんです?」

顎を手の上に置きつつ、薄笑いと共に真摯に疑問を紡げば、彼女は再度停止した。

それも今度は先程より長かった。そして長いというのは歓迎出来る。それだけ思考を回せるという事は、これからの話が通じる可能性も期待し得るからだ。

「今の一連の無礼に対し、僕に罰則を科したいならばどうぞ御自由に。教授である貴方にはその権利が有る。けれども『純血』達と、それに自然と倣った全スリザリン。その全てが授業放棄を決め込んだ場合、貴方は彼等を止め得る手段を保有していない」

「ええ、勿論理屈上は可能です。今年の最後まで……残り八か月程ですか。それまで毎週毎週数百人の生徒に罰則を科すのは大変でしょうが、まあやろうと思えばやれない事も無い」

覚悟を決めてしまえば、物理的に不可能とまでは言えない。

「しかし思い出して頂きたいのですが、貴方の後援者の一人、ルシウス・マルフォイ氏の息子はO・W・L・試験受験者です。七年生の場合はN・E・W・T・試験を控えている。貴方が彼等に罰則を課した場合、その分だけ彼等の勉強時間が減る訳です。つまり貴方の行為で。貴方の責任で。他ならぬ貴方が元凶として、彼等から貴重な時間を奪う」

「お、可笑しな話でしょう……！あ、貴方は私の責任のように語りますが、それは授業をサボった者に対する当然の罰です！ 私が責められる筋合いなど有りません！」

「普通ならばそうでしょう。しかし今回は普通ではない。重要なのは貴方の認識でも魔法省の判断でも社会からの評価でもない。唯一“純血”の審判こそが絶対であり、彼等が貴方のせいだと判定を下したのであれば、それは全て貴方のせいなのです」

「そんな馬鹿な話を通る訳が——！」

「貴方は学生時代、スリザリンが如何なる寮かを学ばなかったのですか？」

ドローレス・アンブリッジはとうとう、いや、やっとか。言葉を喪つてくれた。

“純血”は絶対だ。

ホグワーツ、特にスリザリン寮内において。

彼等の意向に反する行いは許されない。それが寮の根底に存在する基本原則だ。

「ドラコ・マルフォイ達を追い返したのは不味かった」

ただ御気持ちは解りますよと、顔面蒼白で震え始めた彼女に笑い掛ける。

「貴方の学生時代でも“純血”は絶対で、半純血風情が彼等の命令を

拒否する事など有り得なかつたでしょう。しかし、今や貴方は権力を——現在の魔法界で一応そう看做されている地位を得た。実際に多くの人間から傳かれ、遜られる身となった」

魔法大臣付上級次官。ウイゼンガモット評議員。

全体から見れば、十分上位層エリートに属すると言つて良い。

「そして貴方はホグワーツへと戻つて来た。しかもホグワーツ教授として。何者でもない女学生であつた、かつてとは違う。今の自分は、純血”より上だと自惚れるのも無理は無い。そして今回ドラコ・マルフォイ達の命令を拒絶した事で、上下関係が逆転したように貴方は感じたでしょう。数十年の悲願が叶つたといえる瞬間は、貴方にとって自分の正しさへの確信と、途方もない快感を齎すものであつたに違いない」

それこそが、彼女がドラコ・マルフォイ達の望みを無碍にした理由の根幹。

怨恨と復讐。自分を軽んじ続けた純血達を”正義”の下に踏み躪る事は、彼女がホグワーツ在学時から見続けてきた夢であつた。だからこそ彼女は、それがどんな惨劇を引き起こすかを理解していながらも我慢出来なかつたし、途中で引き下がれもしなかつた。

まあその手の憤慨や憎悪を抱いているのは、彼女に限つた事では無い。

たかが魔法族の血を多く引いているだけで、家が長い歴史を持っているだけで、一体何が偉いというのか。寮内で彼等が王族のように振る舞うのは許せない——態度にまで表さずとも、内心でそう思っている半純血や”マグル生まれ”は、スリザリン内にそれなりの数が居る。学年が上がるにつれて……というより、僕の開心術士の力量が上がるにつれて、そう言つた人間を良く見るようになった。だからドロレス・アンブリッジが半純血だと知つた瞬間、僕には今回の事情と彼女の動機を把握する事が出来たのだつた。

ドロレス・アンブリッジはわなわなと震え、瞳孔は大きく開いている。彼女の瞳の中には、狭く暗い部屋の中で一人泣いている少女が見える。

不当に奪われたのだ、と。

緑のローブを着た少女はそう喚いていた。

至極予想通りの光景で、僕自身、思う所が全く無い訳では無い。僕もまた半純血、その中でも最下級に位置する血の純度の人間であり、ドラコ・マルフォイの庇護を受けられなければそうなっていたかもしれない。

だが、それとこれとは話が別だ。

「本来の貴方ならば、こんな間の抜けた事をしなかつた筈だ。第一次魔法戦争後の魔法省で生き残るには、並々ならぬ狡知と姦計が必要だった筈ですからね。しかしホグワーツに戻って来て、それを忘れてしまいましたか？ 或いは、昔を否定したいと思いましたが？ でも間違いだ。貴方はホグワーツにおいて持たざる者だ」

潜在的な敵対者を服従させる権威も。

顕在化した敵対者を屈服させる権力も。

その何れも、ドロレス・アンブリッジは持っていない。

「魔法大臣付上級次官。半純血や『マグル生まれ』ならその地位を有り難がるでしょうが、生粋の魔法族は違う。彼等は本質的に魔法省を軽んじている。一族の傍流や庶子が入省する時代にもなったので、過度に貶めもしないようですけどね。しかし本心では猿山の格付け程度にしか考えていないし、汗水垂らして日銭を稼ぐ貴方達を見下し切っている」

砂の家の肩書に『純血』は従わない。

それが自分の利益になるか、余程道理に適った指示でない限りは。

「出来たばかりで伝統も無い高等尋問官職も同様。ルシウス・マルフォイ氏達『純血』の支持が有って辛うじて成立しているような職に、スリザリン生は軽々しく頭を垂れない。そもそも偉そうに聞こえるだけで、生徒に対しては何の権限も持たない職だ。強制力を備えていない以上、従う義理はやはり無い」

教育改革としても半端な以上、自分達が支える意味も全く見出していない。

「そして唯一敬意を抱き得るホグワーツ教授にしても、その人間が無

能で素質が無いとなれば、やはり軽んじる事を躊躇いはしない。寧ろ
そう在るべきなのですよ。四人の創始者に由来する教Professor授の座は神
聖であるべきだ。彼等より劣る事は止むを得なくとも、彼等と同じ肩
書で呼ぶ事が冒瀆だと思える存在を許すのは、本来のホグワーツ生と
して正しくない」

「……あ、貴方は生徒が教授に逆らう事を当然だと主張するのですか
？」

僕の耳には生徒如きがというニュアンスに聞こえたが、言葉に出さ
なかつただけ上等だろう。けれども内心どう思っているかは明らか
で、しかし彼女は半純血にも拘わらず、「マグル」世界の大学——ボ
ローニヤ等で如何なるせめぎ合いをやってきたのか知らないらしい。
「御忘れのようですが、ホグワーツ入学は義務で有りません」

その教育を是とするかは親の、そして生徒個人の意思に委ねられて
いる。

「ここで行われているのは自由教育であり、相手に資格がないと考え
るのであれば、黙って大人しく授業を受けてやる義理もない。寧ろそ
の人間に教授としての資格が無いと判断すれば、その授業を拒否し、
場合によっては学校から追放する方が余程理に適っている。と言っ
ても、今のホグワーツ生はスリザリンも含め、牙を喪ってしまったよ
うですが」

占い学では十数年間無能な教授が教え続け、ここ数年は闇の魔術に
対する防衛術においてもほぼ同様だった。それ故にホグワーツ生は、
無能な教授が校内に居続ける事に関して、或る意味で不自然さを抱か
なくなってしまった。

更には現在の「マグル」界の常識の下では、教授や先生に反抗する
のは望ましくない事で、大抵の場合は生徒の側に非があると看做され
る。

その結果、権威に容易く屈する生徒ばかりが生産されてしまった。
昔のホグワーツであれば、シビル・トレローニーにしても、ルビウ
ス・ハグリッドにしても、早々に学校から追放されるか、教える事が
出来なくなっていたに違いない。魔法族というのは元来、気に入らな

い処遇へ我慢出来る程に寛容な種では無いのだ。

「改めて断言しましょう。貴方は学生時代とは異なり、自分は権力と地位を得ているのだと御思いなのかもしれません。ですが、それは勘違いという物です。スリザリンは——『純血』は依然として貴方よりも格上で、力の序列は何も変わっていない」

不当に奪われた。

彼女は半純血であるが故に校内で権力を得られなかった、不遇な学生時代を過ごす羽目になったと考えており、一面においてその考えは正しい。

半純血はスリザリンの監督生になる事が出来ない。

成績や素行が寮内一位、それどころか学年一位であったとしても、純血を差し置いて監督生になる事は出来ない。その程度の卓越性では、スリザリンは慣例を破る事を認めない。だから、血統故に自分は監督生になれなかったのだと彼女が考え、純血達に恨みを持つのは、一応は筋が通っている。

しかしながら、半純血でも首席にはなれる。

今のアルバス・ダンブルドア校長は当然純血主義者では無いし、前任のアーマンド・デイペット校長にしても、トム・マールヴォロ・リドルを当然のように首席にしている。そして監督生でなくとも首席になった生徒は、ジェームス・ポッターを始め数多く居る。世代の象徴として認められる程の人間ならば、校長によって必然のように首席に任命されるのだ。

仮にハーマイオニー・グレンジャーがスリザリンで、寮内の要件を理由に監督生に任命されない事が有ったとしても、六年間一貫して学年一位の成績——それも凶抜けた成績——を取り続けたのならば、やはり当たり前のように首席に任命される事だろう。

けれども、ドロレス・アンブリッジは首席になっていない。

要はホグワーツにおける彼女の価値などその程度。

自己を過剰に評価し、悲劇の姫君ヒロインぶつっているに過ぎない。

「――では。あくまで仮定の話という前提で進めますが」

茶番だ。

そう伝わっている事を理解して尚、敢えての言葉を紡ぐ。

「全スリザリンが貴方の授業を欠席するなどの“愚行”に及んだ場合。別に貴方が対抗手段を持たない訳ではありません。生徒に叛逆する権利があるならば、貴方もまた叛逆を叩き潰す権利を有している。御互いを個として認めるならば、それが筋であり、平等だ」

まず一つは、既に述べた通り、罰則を下し続ける事ですと告げる。

彼女の闇の魔術に対する防衛術教授の地位は、ホグワーツ校長により承認された正当な物だ。保護者の抗議を聞き入れずに罰則を課す事は、別に非難される行いでは無い。

そして教授の解任権限は校長、理事会、今年の高尋問官に在り、その全てがドロレス・アンブリッジの在職を支持するのであれば、外部に何と言われようと教授のままに居られる。

もつともドロレス・アンブリッジは知り得ないが、実の所、スリザリン生に対して満足に罰則を課す事は不可能である。

仮にそのような事態――僕の交渉が失敗した場合、先んじて全スリザリン生に対して罰則のスケジュールを入れて貰うよう、既にスネイプ教授へと頼んでいる。まあ丸々一年間の放課後全てを教授の罰則で埋める訳でも行かないので、彼女が罰則を課す時間も多少は残るだろうが、今考えている程に上手く事が運びはしないのは間違いない。

「他の一つはアルバス・ダンブルドア校長に頼る事。彼は校長職に基づき、生徒を退学する権限を有している。ホグワーツ教授を不当に困らせ、学内秩序を破壊する生徒は退学処分させざるを得ない。そう脅されたのであれば、流石のスリザリン生も屈さざるを得ない。……もつともその道は、貴方があの校長に頭を下げる事を意味しますが」

その光景を想像したのか、高等尋問官は屈辱に歯を食い縛る。

「更なる一つはコーネリウス・ファッジ大臣に頼る事。建前に過ぎないとはいえ、彼は魔法界の頂点だ。その彼の御願いともなれば、やは

リスリザリンは従う必要が有る。……ただ、未成年の子供すら満足に支配出来ない部下を大臣はどう思うでしょう？　そして他の魔法省職員は、貴方の失態と能力不足を見逃してくれるでしょうかね？」

更に歯をきつく食い縛ったのは、彼女にとってそちらの方が嫌だからか。

魔法省は一枚岩などでは無いし、コーネリウス・ファツジとドロレス・アンブリッジも運命共同体などでは無い。まして出世競争相手である魔法省の同僚は、彼女にとって敵である。失態が大つぴらになつてしまう事は、彼女の政治生命が危機に瀕する事を意味する。

「しかし、この三つの道の何れを選んだとしても、積年の恨みを晴らせるのは確実だ。強制的にリスリザリン生を学習椅子へと座らせる事は出来る。全てが彼等の思い通りに行く事は無いのだと思ひ知らせる事も出来る」

「貴方の戦う道は残っている。だから、そう暗い顔をする必要は無いんですよ。今までに得た全てを代償にしても尚、学生時代の報復の続行を望むのであれば、貴方は為すべき対処を粛々と為せば良い。僕に對してもこう言えば済む。『たかが生徒風情が、私に逆らうな』と」

僕は彼女の行いを否定しない。
彼女がそこまでの革命の闘士足らんとするならば、僕はそれを肯定する。

闇の帝王が堕ちて以降の時代の変化、『マグル』の平等思想に付いていけない『純血』共の傲慢を叩き潰す事は、リスリザリンの大部分から敵意を抱かれても、一部からは支持を受けられるだろう。魔法省こそが上位者なのだと道理を強いる事が出来たならば、今のリスリザリンに、少なからず変化を齎す風と成り得るかもしれない。

また、そこまでの覚悟を決めてホグワーツでの権力確立を志向出来るならば、今は無用の長物でしかない高等尋問官職も金へと変わり、あの校長を永久に追い落とす事も期待出来る。彼が最も不得意とする相手は、そのような理外利外の情を持つ人間だからだ。

……まあ彼女が意地を張った場合、それは僕の破滅も意味する。

元々失敗した場合にタダで済むとは思っていなかったものの、あれ程強くドラコ・マルフォイが警告してきたのだ。スリザリンから爪弾きにされるどころか、責任を取って退学する程度は覚悟すべきだろう。真つ当に魔法界で生きる道すらも閉ざされる可能性すら有り得る。

だが今この瞬間、それも一興だと思えている。

ドロールレス・アンブリッジ
同族の女が上に行く為の贄となれるなら、決して悪い取引でもない。

「――」
暫く沈黙の時間が続いたので僕は視線を外し、壁に掛かっていた蒼い眼の猫のタペストリーを観察する事を始めた。多少時間を与える程度で覚悟を決めてくれるというのであれば、待つ事は何ら苦では無かった。

五分程度は待たただろうか。

部屋の中を観察するのに飽き始めた頃、漸くドロールレス・アンブリッジは口を開いた。

「……貴方は、いえ、貴方達は良いのですか？」

「何か不都合でも？」

どんな反論が出て来るのかと見やれば、彼女は何故か自信を取り戻したようだった。

両生類らしい厭らしさを感じる、ニタニタとした笑い。落ち着きなくピョコピョコと上下に動く小さな身体。落ち着きなく揉みしだされる、ふつくらとした手の動き。そして彼女の瞳は一瞬で失望を覚えてしまう程の、勘違いしきった色を浮かべていた。

「――っ。げ、現状の話です」

「現状とは？」

「ま、魔法省はポッターとダンブルドアの言葉を否定しています。彼等を嘔吐き扱いし、帝王の復活を否定しています。だから私達は貴方がたにとって味方――」

息を吐いた。

そこまでの意図は無かったが、ドロールレス・アンブリッジは大きく

身を震わせ、耳障りな主張を続ける事を止めてしまった。その表情は一瞬で蒼白に戻り、自信喪失し切っていて、しかし、非常に助かる反応で有ったのも事実だった。期待外れでしかない、馬鹿な主張で耳を汚したくもなかったからだ。

「闇の帝王の復活を否定しているのは魔法省、いえコーネリウス・ファッジ大臣の都合でしょうか？ 別にスリザリンが指示している訳では無いし、まして魔法大臣でも無い上級次官風情が決める事でも無い。勿論、貴方がコーネリウス・ファッジ大臣を説得出来るならば別ですが」

そして夏休暇中の彼の様子から判断する限り、不可能だとは解り切っている。

彼は権力欲に憑り付かれ、味方の引き留めに躍起であり、彼の意図に反する人間を許しはしまい。ドロールレス・アンブリッジを切り捨てる事も、当然躊躇わないだろう。

「……っ。わ、私は貴方がたの利益となる行動を——」

「——そもそも貴方は魔法省、ひいては御自身の価値を過大評価しているのでは？」

僕は言える立場に無いと解っていても、それでも言わずには居られなかった。

「万が一、闇の帝王が復活しているという妄言が事実だとしましょう。で、貴方は何をしようとしているのです？ 帝王が戦争に勝利する為に、一体何が出来るのです？ 自分では頑張っているつもりという主張は、決して無能無策の免罪符にならない。結果こそが評価の全てであり、帝王が貴方を褒めてくれるとは限りませんが？」

ドロールレス・アンブリッジが「純血」に媚びているつもりでも、ドラコ・マルフォイ達や、ルシウス・マルフォイ氏が彼女を大いに嫌っているように。

自分にとって都合の良い反応を他人が示してくれるとは限らない。

「そ、それは……！ 私は今こうしてホグワーツに潜入しています……！ ホグワーツ教授、そして高等尋問官の地位を有しています！ その力をもってすれば——」

彼女の妄言を他所に、もう一度、僕はローブから杖を抜いた。

高等尋問官が大きくビクついたが、今度杖を向ける先はドアだ。マ
フリーアート。既に習熟した呪文を唱え、魔法は正しく効力を発揮し
た。

「嗚呼、失礼。今掛けたのは盗聴防止の呪文です。ここまでする必要
は無いかもしれませんが、それでも内容が内容だ。用心し過ぎる事も
無いでしょう」

「……そ、それは構いませんが」

「その上で、ここだけの話として質問させて貰いますが」

クルクルと両手間で杖を投げ渡し、回しながら弄ぶ。

僕のその不作法を、彼女は最早止めようとはしなかった。

「――要するに、貴方がアルバス・ダンブルドアを殺してくれるという
事ですか?」

「……………は?」

あんぐりと口を開けて驚愕を示してくれるが、非常に心外な反応
だ。

何故この程度の話が出ただけで、一切考えもしなかったというよう
な顔をするのか。

「嗚呼、これも仮定の話、闇の帝王が復活していたらという思考実験で
す。その場合、この魔法界は必然的に戦争状態に突入している事にな
る。つまり殺し殺されの世界であって、闇の陣営の目的も、当然あの
校長をぶち殺してやる事の筈だ。彼を校長の座から引き摺り降ろす
とか、彼の名譽を低下させるとか、そういう呑気な真似を計画してい
るのでは無い」

「――」

「それとも何ですか? 仮に闇の帝王が復活していたとしても、貴方
はあの校長をホグワーツから追い出すだけで、後処理は全て帝王に御
任せするというのですか? 折角こうして校内に入り込んでいると
いうのに、そんな酷い手抜きをするつもりなのですか?」

俯き震える小さな女性を前に、大きな溜息を繰り返す。

内心で闇の陣営に付きたいと考えている人間すら、こんなにも平和

ボケしているのか。

少なくとも「純血」には——闇の帝王に着いたルシウス・マルフォイ氏にしても、その反対位置に立ったバーテミウス・クラウチ氏にしても、己の身を血で穢す覚悟が有ったのだが。

「……嗚呼、殺すのはハリー・ポッターの方でも構いませんよ」

「——っ」

息を飲む音と、引き攣ったままの表情に気付かない振りをして僕は続ける。

「この二週間程、貴方はハリー・ポッターに毎日罰則を科していたようですね？ しかも、この部屋で、彼一人で。つまり誰にも知られる事無く、彼を己の好きに出来るだけの状況を獲得していた訳だ。また多少彼を挑発してやれば、今後も同様に獲得する事が出来るでしょう」

「……………」

「貴方がた教師は破れぬ誓いまでとは言わずとも、生徒を傷付けない旨の誓約を何らかの形で結んでいるでしょう。更にあの校長は間違はなく、ハリー・ポッターに特別な仕掛けを施している。彼を殺す事は、見掛け程、言う程に簡単な仕事ではない」

ハリー・ポッターは、彼が思う以上に手厚く護られ、監視されている。

「しかし、一切の不法侵入を許さない家が存在しないように、この世に絶対の契約や護りなど存在しない。あの校長が如何なる護りを施しているようとも、彼を致命的に傷付ける為の抜け道は何処かに存在する筈で——今年度全てを費やし、それを探す努力をする気は御有りでしょうか？」

復活の材料として必要とされた去年と違い、ハリー・ポッターは殺せない相手ではない。

そうやって闇の帝王の勝利に貢献する気はあるのか。

己がアズカバンへ叩き込まれて尚、献身するだけの覚悟を有しているのか。

真正面から真剣な問いを投げ掛け、高等尋問官殿の表情を確認し、弄んでいた杖を再度ドアに向けて振った。マフリーアートの護りは最

早必要無かった。

ドローレス・アンブリッジ。

彼女に校長やハリー・ポッターを殺す度胸は無く、意気地も無かった。

両天秤を掛けるのはスリザリンとして悪いとも思わないが、それが出来るのは代替不能な者、二つの陣営に己を売り込めるだけの価値を持つ人間^{純血}だけだ。そしてドローレス・アンブリッジは、僕と同様にそうではない。

高等尋問官にしても闇の魔術に対する防衛術教授にしても、彼女が居なくなれば別の人間が来て、後を引き継ぐだけ。魔法大臣付上級次官やウイゼンガモット評議員でも同様だ。彼女は幾らでも代わりの利く程度の価値しか持っていない。

今回の交渉に託^{かこつけ}けて、僕は高等尋問官の職務内容、その今後の展望についても聞こうとも考えていたのだが——このザマでは徒労だろう。

教育令第二十三号は、教授の解職権限を高等尋問官に与えた。

それが意味するのは、アルバス・ダンブルドア校長を辞めさせる事が出来ずとも、ミネルバ・マクゴナガル教授を辞めさせるだけの権限は与えられているという事である。勿論、公正にやれば、ミネルバ・マクゴナガル教授の解職が妥当という判断になる訳が無いが、けれども、一体何処に公正にやってやる必要が有るといえるのか。

ハリー・ポッターの裁判と同じだ。

権力を握る側が本気になれば不可能など殆ど無く、合法的に敵を破滅させる真似など幾らでも可能である。それが体制であり、権力の座なのだ。

やり過ぎれば当然チャールズ一世やマクシミリアン・ロベスピエールと同種の末路を辿る訳だが、既に魔法省はホグワーツ——そして今世紀で最も偉大な魔法使いに対して戦争を仕掛けた後なのだ。今更自重や譲歩したところで無意味であり、本気で魔法省の権力を確立したいならば、千年の伝統ごと断つ覚悟の下に本気で戦わなければならぬ。

しかしながら、ドロールレス・アンブリッジは馬鹿正直に査察をやるだろう。

ミネルバ・マクゴナガル教授もポモーナ・スプラウト教授も、彼女の御嫌いであろう非人間の血が混じっているフィリウス・フリットウィック教授ですら、彼女は決してクビには出来ない。解雇出来るとすればルビウス・ハグリッドとシビル・トレローニーあたりの、大きな反発の起きず、当たり障りのない、自分よりも弱いと彼女が確信出来る人間だけだろう。

嗚呼、本当に。

アルバス・ダンブルドア校長は斯くも運に愛され、そして偉大である。

他の人間——死喰い人予備軍と呼べる人間を hogwarts に入れ、闇の魔術に対する防衛術教授及び高等尋問官に就けた場合、もつと酷い事態に発展した事だろう。

スリザリン生を意のままに動かし、生徒を経由して他寮の人間に片っ端から服従の呪文を掛け、hogwarts 内で煽動と破壊活動に勤しみ、闇の帝王や死喰い人の校内への侵入を容易にする程度の事なら出来たかもしれない。

けれども、この女にそれ程大それた真似は出来ない。

彼女は「正義」——他人から正当性を認められる行為しか為し得ない。

出来る悪事は精々、一週間の内ほんの数時間の学習機会を生徒から奪い、またハリー・ポッターを言葉や罰則で罵る程度の、酷く小さなものだけ。そして今後闇の帝王らも上位者による具体的な指示と自分の身の保証がない限り、光の陣営に敵対する行動に踏み切りはしない。己の危険を覚悟の上で、信念をもって「悪」に踏み切れなどはしないのだ。

今年 hogwarts に已む無く入れる敵性勢力。

その人員としてドロールレス・アンブリッジは一番望み得る種類の人間で、アルバス・ダンブルドアあの化物魔法使いが迎え入れた事にも納得しかなかった。

教育原理

闇の魔術に対する防衛術教授。

その地位に就く者が「犯人」であったのは、これまでの四年間の中で二人。確率で言えば二分の一である。しかし、ドローレス・アンブリッジはその確率を下げられるらしい。

今年本気で警戒する必要があるのは今の所、闇の帝王と繋がっているハリー・ポッター本人だけ。彼女についてはやはり無視していいようだ。

あの校長閣下も失望すらしているかもしれない。

魔法省で高位を占める人間が、これ程までに己の敵に成り得ないとは。

「勿論、今のはあくまで仮定の話ですよ」

俯いたままの彼女に視線を向けず、ピンク色の天井を見上げ、静かに言葉を紡ぐ。

「闇の帝王の復活は、一人の少年の大嘘である。それが魔法省の公式見解であり、スリザリンもそれを否定しない。故に当然ながら、あの校長や一人の少年を殺すという話にもならない。それらは平時の——平和な筈の時代の——法の下では重罪であり、文句無しのアズカバン行きですからね。『正義』の側の人間が為すべき行いではない」

「……………」

「それに、僕も現状、貴方に悪事を唆せる身分でも何でも無い。あの校長やハリー・ポッターを殺せる気はしませんし、試す気にもなりませんね。ええ、今の脱線は忘れて下さい。あくまで『雑談』です。そのような深刻な顔をされる程、大した意味など有りません」

僕がハリー・ポッターを殺せたらどれだけ状況が解りやすくなることかと思うが——まあそれが不可能であると見透かしているが為に、アルバス・ダンブルドア校長は僕に多くを知らせているのだ。そうでなければ、僕もまたハリー・ポッターを排除する価値を過少評価しているだろうし、何をおいても排除すべき存在だと看做してはいないに違いない。

「それで、今回の本題の方——闇の魔術に対する防衛術の授業については如何なされますか？　『純血』に対して意地を張り、スリザリンと全面戦争しますか？　それとも、ここで救いの手を取り、穏便な形で解決を望みますか？　結局の所、全ては貴方の選択次第ですけれど」

未だに答えて貰っていないので、明確に回答を促す。

それでも即座に返って来る事はなかったが、しかし今度の沈黙はほんの数秒程。まるで考えてもみなかったという驚愕の反応を、高等尋問官殿は丸顔に浮かべた。

「……穏便な形で解決？」

「ええ。そもそも僕がここに居るのはその為ですよ」

あくまでここには話し合いに来た。

ドラコ・マルフォイに伝えた通りで、宣戦布告を伝える使者となった気は無かった。

「貴方の考えは見当違いも良い所でしたが、スリザリン側も大事にしたいというのには確かな本音です。ドラコ・マルフォイ達にしても、ルシウス・マルフォイ氏達大人の意向としてもね。彼等が貴方を破滅させる事は簡単ですが、出来れば避けたいと誰もが思っている」

「上」から降りて来た回答——彼女は闇の陣営に利益を齎すかもしれないという言葉聞いてしまった以上、下請けの僕は尊重せざるを得ない。

「スリザリンが貴方へのサボタージュを決め込めば、まず間違いなく他の寮も追随する。単細胞のグリフィンボールも、成績大事なレイブンクローも、そして風見鶏のハッフルパフも。ホグワーツの全てが、貴方の授業を拒否する。僕達スリザリンがそれで大きく困るという事は有りませんが、可能であれば、そのような混乱が生じない方が望ましい」

高等尋問官の権威が残る場合と、残らない場合。

そのどちらが闇の陣営に利するか——あの校長か、ハリー・ポッターを始末する為に役立ち得るかを考えた場合は、やはり権威が残っていた方が都合が良い。

死喰い人でホグワーツに入り込んでいる人材としてはスネイプ教授が居るのだが、そもそも彼がどちらの陣営に心を決めてるかという以前、二重スパイという身分こそが教授の動き方に大きな制限を掛けている。彼は基本的に「最後の一撃」の為の駒であって、普段から使えるような駒では無い。彼を大々的に動かす際には常に騎士団追放と天秤に掛けねばならないから、やはり取り回しが悪いのだ。闇の陣営は安く、しかし価値有る駒を必要としている。

ドロレス・アンブリッジの瞳が大きく揺れ、視線があちこちを忙しなく動いた。

「——そもそも僕は、何故貴方が『教育』を拒むのか解らない」

復讐心も揺らいでいるらしい彼女を前に、予め用意していた駄目押し疑問を紡ぐ。

「今の三人の寮監、つまりミネルバ・マクゴナガル教授、ポモーナ・スプラウト教授、フィリウス・フリットウィック教授。彼等はホグワーツに対するのと同程度、アルバス・ダンブルドア校長に敬意を払い、忠誠を誓っています。しかし一方で、スネイプ教授はそうではない」

まあ忠誠を誓っていないくとも服従する場合は有るのだが、と内心で付け加える。

それは無視してはならない重要な差異ではあるが、この場では蛇足だった。

「さて、高等尋問官。この差異は何処に在ると思いますか？」

「……。それは……セブルスがスリザリンであるからでは無いのですか？」

「その答えを真正面から否定する事は流石に出来ませんが……まあ残念ながら、今回僕が期待した答えでは有りませんね」

つまり、と指を立てながら続ける。

「アルバス・ダンブルドア校長は彼等を教えたからですよ」

それが全てではないが、明確な差異はその点にこそ起因する。

「かつてアルバス・ダンブルドア校長は変身術、または闇の魔術に対する防衛術の教授だった。実際に当人達に聞いた訳では無いですが、先の三寮監が学生であった時期を考えれば、彼等がああ校長の教え子で

ある事は間違いないでしょう」

特にミネルバ・マクゴナガル教授に対しては、校長——かつての教授は、単なる一教授と生徒の間柄を超えて魔法の指導を行っていた。その交流こそが、同じグリフィンドール生であったという以上に、二人を強い信頼で結び付けている。

「しかし、スネイプ寮監は違います。彼が生徒で在った時、既にアルバス・ダンブルドアは校長だった。校長と教授との兼職が絶対にならないとは言いませんが、話を聞いていた限りは違うようです。特にあの頃は不死鳥の騎士団私兵組織を率いるのに忙しく、恐らく校長席を空けていた時間の方が多かつた筈です」

魔法戦争中に生徒達の指導を行える暇が存在するとは思えないし、それ以前にスネイプ教授はスリザリン寮生であり、しかも後に死喰い人となった側の人間である。あの校長は当時の教授の事を嫌っていたに違いなく、個人的に教える事も絶対に有り得ない。

「教えるという事は、生徒に影響力を残すという事だ。やりようによつては、そして相手によつては、その力は支配にすら届き得る程になるでしょう。たとえば、かつてのホラス・スラグホーン教授は——嗚呼、貴方も彼を御存知のようだ。ならば話は早い」

苦々しい表情を一瞬見せた理由は、まあ聞くまでもなからう。

この女がスラグ・クラブとやらの招き入れられるなど、絶対に有り得なかつた。

「残念ながら僕は御会いした事自体が無いですが、かの教授は優秀な生徒を見出し、育て、そして適切な地位に就けるのを得意としていたそうですね？　そしてまた生徒側も、教授に対して恩義と感謝を忘れなかつたと、僕はルシウス・マルフォイ氏本人から聞いています。そしてホラス・スラグホーン教授にそれを許したのは、彼がスラグホーン聖なる二十八” だったからではなく、彼がホグワーツ教授だったからです」

そして。

「貴方も今、ホグワーツ教授だ」

「」

立場だけ見れば、同じ地位に在る。

同じような影響力を生徒に及ぼし得る資格を持っている。

「更に、将来の事を御考えになつたらどうです？」

「……将来、ですか？」

「ええ」

小さな眼を最大限見開き、光明を見出したように顔を輝かせ始めた彼女に頷く。

「魔法大臣付上級次官。それより明確に上位に在るのは魔法大臣——選挙によつて就くべき地位だけで、つまり省内の仕事振りによつて更に出世するという事は望めない。省内で定期的な配置代えが有るかを僕は知りませんが、次の魔法大臣が上級次官の交代を望む事は有り得る」

「……貴方はコーネリウスを辞めさせようとしているのですか？」

「流石にそれは早とちりですよ」

僕に辞めさせる権限は無いし、それ以前に、その価値自体を見出していない。

「五年後、十年後も魔法大臣が同じであるとは限らない。そんな一般論を言っているだけで、そしてその時もまだ、貴方は魔法省に居るのでは？　魔法省役人は魔法大臣個人でなく、あくまで省にこそ忠誠を誓うという建前ですしね。まあ、貴方が現魔法大臣以外の下では働きたくないという強固な信念を御持ちならば、僕の指摘は的外れになりますが——」

沈みゆく泥船と運命を共にする程、殊勝な人間には思えない。

「——その際に適切な地位ポストは有るでしょうか？　次期大臣の就任によつて貴方が適当な部に左遷されるとして、その際貴方が『純血』達に嫌われているらしいという噂が流れれば、省内の人間達は貴方をどう扱うでしょうか？　一部門の部長という花道すら用意してくれず、貴方は役職も無い一役人に貶められるかもしれませんね」

そして、彼女が省内部の人間から好かれているとは全く思えない。

彼女を蹴落とす事が出来れば、代わりに高官の地位が一つ空く。躊躇う事は無いだろう。

「けれども逆に、貴方の助けになってくれる『純血』が居ればどうでしょう？」

「……………」

「ドラコ・マルフォイ達は確かに学生だ。しかし、それ以前に『純血』で、名家の未来の当主や夫人達でもある。彼等は既に力を持つ側の人間で、二年後にホグワーツを卒業してからは更に力を増す事になる。以降数十年、親から広範な人脈を引き継ぎ、魔法省に多大な寄付をし、政策に強い影響力を行使し続ける存在となるでしょう」

「『純血』は魔法省を軽蔑しきっているが、全く利用価値を見出していない訳では無く、彼等は自分の利益になる限りにおいて存続を許している。」

「その彼等は今現在、貴方へ腹を立てている。しかも貴方は『純血』を侮るような態度を取ったと受け止められている。このまま行けば卒業後、彼等は『マルフォイ』や『パーキンソン』として、在学中の無礼の代価を貴方に支払わせるべく、片手間に貴方の失脚計画を取り計らうよう指示するでしょうが——」

そして間違いなく、そうなる一歩寸前まで今回行ったのだが。

「——今ならば誤解で済みます」

「……、誤解？」

「ええ。誤解です。貴方は時期を見計らう必要が有るとだけ言った。少なくとも言葉の上では、貴方は彼等の要求を完全に却下した訳では無く、要らぬ言質は与えてなどいない」

ドローレス・アンブリッジは不用意な真似をしたが。

それでも最低限の保身をするだけの頭を持っていたのは、御互いにとって救いだっただけだ。

「そしてドラコ・マルフォイ達の不満は、二時間も無意味な授業を受けさせられる事に、それも何時まで続けさせられるか解らない事に起因するものです。つまり、その部分さえ解消されれば、彼等は引き下がる余地がある」

血が絡んだが為に多少ややこしい事態にはなったが、根幹はやはり単純なのである。

「確かにO. W. L 試験の成績は『純血』の進路を左程左右しません
が、それは彼等にとつて無価値だという事を意味しない。家の名譽、
個人的な尊敬や忠誠、結婚相手の体面。彼等が良い成績を収める事は
周囲から求められており、貴方がその一助となる事が出来たのならば
――」

「――聖二十八族が私に力を貸してくれると？」

「それは僕の一存ではどうにも出来ず、彼等が決める事です。これか
らの貴方の教え方次第、それこそ良い成績を取るのに役立つかどうか
で決まる事でしょう。しかし何れにしても、このまま対立を続けるよ
りも遥かに希望が持てる。そう思いませんか？」

「……………」

ドローレス・アンブリッジは考え込んでいる。

しかし、考えている時点で既に結論が出ているような物だ。

復讐の為に子供の要望を一蹴し続けるつもりであった彼女が、今や
一生徒の話に耳を傾け、この取引に応じる事が己の利益に繋がるかを
検討している。絶対的上位者足らんとする事を忘れ、半純血である僕
の下まで降りて来て、僕の背後に居る『純血』を仰ぎ見始めている。
初めから、この結論は決まっていた。

彼女が半純血である以上、やはりスリザリンの血の宿痾からは逃れ
られない。

「わ、私が教えると言えば――」

「――ん？」

絞り出すように紡がれた言葉に首を傾げる。

「マルフォイ家の御坊ちやま達が引き下がる事を……御互いの間に何
も無かったとする事を、貴方が保証してくれますか？」

「……嗚呼、僕が交渉役として信用ならないと言う事ですか？」

「い、いえ……。そんな事は……」

「まあ、もつともな話だと思えますよ」

何故か彼女は一瞬で身を小さく縮めたが、そう理由無く怯える必要
性など一切ない。非常に妥当かつ筋の通った指摘で、僕にとつての急
所を突いている。

「彼等『純血』が直々に交渉に来る事なく、僕を寄越してみせた理由の一つ。それは、半純血である僕であれば後腐れ無く切り捨てられるからです。その理屈を推し進めれば確かに、終わった後に全てを反故にするという事も有り得る」

本当に、この部分を問題視されたら弱いのだ。

この交渉は一応スリザリンの同意を得ている。が、ドローレス・アンブリッジはそれを知り得ない。確認や保証の為に今すぐドラコ・マルフォイを呼べという話が出るかもしれないし、その場合、彼をどうやって宥めるかは中々の悩み所だ。

二度も半純血の下に足を運ばされるのを許容するかは彼等の矜持純血的に微妙な線で、かと言ってその逆、ドローレス・アンブリッジが今スリザリン寮に来るのは目立ち過ぎる。

彼女が僕の言葉だけでは足りないかと主張するのであれば、やはりドラコ・マルフォイを説得しなければならず、そして寮内の反発も抑え込む必要が有った。或る意味で、ここからが僕の手腕を問われる山場と言えるかもしれない。

「ただ、そこは信じて貰うしかありませんね。言葉にしか出来ませんが、貴方が教授として相応しい限りは、僕も最大限貴方の為に力を貸す。その旨を杖に誓いましょう」

言葉を淡々と紡ぎながらも、内心では、さてこれからどうするかと悩みつつ——しかしながら、今度の彼女は僕を待たせなかった。

「……今回御互いに不幸な行き違いが生じました」

「——！」

「しかし、全ては誤解ですわ。スリザリン生を教えないなどという事は有りません。予定通り、明日からは貴方がたを教えるつもりです」

「——それは何よりだ」

予想外のあっさりとした敗北宣言に、一瞬虚を突かれてしまった。だが楽に済むに越した事は無く、暫くの間視線を合わせても嘘であるとは読み取れない。

そしてパンジー・パーキンソン達は兎も角、少なくともドラコ・マルフォイは、この結末を引つ繰り返したり、更にゴネて譲歩を勝ち取

ろうとするような人間ではない。求められた仕事は完遂出来たと
言っただいだろう。

まあ何故ここまで素直になったかは気になりはしたものの、丁寧な
説得により道理を解ってくれたのだろう。蒸し返す必要も無いだろ
うと、さつさと話を具体的な内容へと進める。

「ではこれ以降、貴方が教授らしく振舞う事に期待しますが、どのよう
な形で貴方が教えるかというのは――後程改めて僕から伝えに来ま
しょうか」

「……………」

「ここで僕達が全てを決めてしまうより、彼等に決めさせた方が円滑
に進みそうだ。他寮への対応も考える必要が有りますし、失敗の責任
も分担出来ませぬ。何より僕も具体的な中身は何も聞いていない。
勿論、貴方から異論が有るならば伺いますけれど」

「……………有りませぬ」

「結構」

軽く頷いた後、椅子から立ち上がる。

漸く慣れて来たピンク色の部屋を半分程横切り、言い忘れていた
と振り返る。何時の間にか項垂れているドローレス・アンブリッジに
対し、一言声を掛けた。

「……………嗚呼、そうだ。貴方が彼等に対して過剰に謝罪したり、媚び諂う
必要はありません」

勝敗は決し、純血と非純血スリザリンの秩序は取り戻された。

それでも魔法族全てホグワーツの秩序を考えるならば、この点は強調しておか
ねばならない。

「言葉不足だった部分、貴方の側に全ての否が存在していた点につい
ては明確にしておくべきです。しかし、それ以上に己を彼等の下に置
く必要は無い。貴方はやはり教授という地位に在り、僕達は生徒だ。
その上下を崩し過ぎる事はホグワーツにとって望ましくない」

「……………!? そ、それは……………」

ドローレス・アンブリッジが勢いよく立ち上がる。

椅子が倒れた音と衝撃はカーペットが吸収したものの、彼女が足を

机にぶついたららしい音は盛大に鳴った。しかしながら、彼女の表情の中に痛みは読み取れなかった。

「……何か問題が？」

「えっと……あの。それで……。いえ……」

「口籠らずに、はつきり言って頂きたいのですが」

「……マルフォイ家の御坊ちやま達は、その事に気分を害するのではないですか？」

「まあ、間違いなくそうなるでしょうね。彼等は明確に貴方を下へと置こうと画策するでしょうし、それが叶わなければ色々と言ってくるでしょう」

今回の問題は、*“純血”*達が闇の帝王の御機嫌伺いをしなければならなかった、また曲がりなりにもホグワーツに入り込む事に成功した彼女に対処しあぐねたからこそ起こったものだ。しかし、自分達が格下に舐められて黙っていられる訳が無いという点に変わりはない。

今までのドロレス・アンブリッジの行動に対しては、ドラコ・マルフォイ達も相当な苛立ちを溜め込んでいた。帝王の手前、報復行動までは出来なくても、今回改めて序列が確認された以上、何らかの形で不満を解消しようとする可能性はある。

「しかし、その程度は僕の方で何とかしますよ」

頭を下げて宥める苦労を思うと面倒だが、関わってしまった以上仕方が無い。

そして殆ど全権を任されてしまったのだから、それを悪用する事に躊躇いも無い。

「理が有るのも貴方の方だ。ルシウス・マルフォイ氏達の要望は、出来る限り何も無かったようにする事です。それにも拘わらず、ドラコ・マルフォイ達が突然貴方を軽んじ、また貴方が唐突に彼等へと卑屈な態度を取り始める。そんな真似をすれば、グリフィンドール達からは何かあった事が見え見えでしょう？」

「故に、貴方はこれまで通りで構わない。勿論、これは貴方が*“教授”*として相応しい仕事をする限りですけれどね。ドラコ・マルフォイ達

がやはり貴方は役に立たないと判断し、排斥せざるを得ないと心を決めてしまったのならば、流石に僕もどうにも出来ない」

結局は、この女性の仕事振り次第。

僕が出来るのは、あくまで切っ掛けを作る所までである。

「仮に防衛術を教えられる自信が無いならば、全て自習の時間にする事を御勧めしますよ。その場合彼等の敬意を勝ち取れはしませんが、少なくとも悪い結果にはならないでしょう。その程度の事なら彼等も文句を言いはしません。生徒が自力で何とかするのが珍しくない位には、このホグワーツに無能な教授は多かつたのですから」

ドロレス・アンブリッジは呆けた表情をしたままだ。

何か言いたい事が有るのかと少し待った後に紡がれたのは、誤解も甚だしい問いだった。

「……何故、そこまで私に良くしてくれるのです?」

「何も良くしているつもりは有りませんがね」

思わず失笑する。

彼女に利益を与えたと思われるのも心外だ。

僕がやったのも、単純にドロレス・アンブリッジの野望を挫き、ドラコ・マルフォイ達の希望を叶えただけである。結果を見れば、純血の完勝に等しく、精々スタートラインに戻しただけの話で、今回の一連の騒動で彼女が得られたモノは何も無い。

「ただ、敢えて言うならば——」

僕の立場は去年から、もしかしたら一年次から何も変わっていない。

「——スリザリンは同胞愛を重んじる。そして貴方もまたスリザリンでしよう?」

また彼女は会話中一度も認めはしなかったが、それでも半純^{同族}血だ。

この程度の肩入れは、決して理に合わない事では無かった。

後日談。

ドローレス・アンブリッジによる闇の魔術に対する防衛術の授業は、少人数体制での個別授業という形で再出発を迎える事となった。

具体的には四、五人がドローレス・アンブリッジの居る別室に呼ばれ、その人間達は呪文を実際に使った練習を行い、彼女による直接指導を受ける。そして一定時間後に別の集団と交代し、クラス全員の指導が終わるまでそれを繰り返す。その間、直接指導を受けない他の人間は、教室で本を読んでの自習らしい。他の授業のように全生徒が同時に呪文を唱えて練習を行うのは、万一の場合を考えれば、やはり難しいという判断だろう。

まあ、どういう議論を経てそうなったかは知らない。

授業形態を決めたのは「純血」達だ。重要事は上で決めるべきであり、下はただ単に指示に従うだけ——決定権は彼等にあるのに、どうして一々僕の意見を聞こうとするのか——である。まして始まる前に全てを決めて置かなければならない道理もないし、現実的には不可能であろう。実際に授業を行ってみれば、不都合や想定外の問題、詰めが甘かった箇所、思い通りに行かなかった部分が明らかになるのが目に見えている。

そもそも既に計画には欠陥があるのだ。

現状程度の取り決めだと、純血達は半純血の指導時間を削り、代わりに自らの指導時間を伸ばす事が可能である。もしかすれば意図したもののなかもれない。彼等に平等思想など期待し得ず、弱者を踏み躪る事など生まれた時から慣れ切っている。

ただ、その程度のちやちな悪巧みを止める気にもなれなかったし、その辺りは各クラス内で解決すべき事、場合によっては監督生達が介入して調整すべき内容だ。僕が最初から懸念し、指摘するまでの問題でも無かった。

後、特筆すべき事があるとするれば、今回の一件——ドローレス・アンブリッジがスリザリンへ授業を行う事に関し、他寮への口外を禁止する旨の誓約書が作成された事か。

これが非純血側から自発的に出た発想であったのは意外だったが、理屈を聞いてみれば納得が行った。彼等にしてみれば、不注意で秘密

を漏らして呪いに掛かるより、寮の秘密を破つたのだと「純血」達から疑惑を持たれる方が恐ろしいらしい。「純血」達が賛同する筈も無いという指摘も——実際、ドラコ・マルフォイ達は誓約書への署名を拒否した。彼等の常識として、得体の知れない羊皮紙に署名するなど論外である——今回は問題とならなかつたようだ。誓約書の呪いが自分達に降りかかつていないのならば、少なくとも、秘密を漏洩した容疑者から外れる事が出来るからである。

思わず感心してしまう程の賢い防衛戦略であり、強制でないにも拘わらず最終的に非純血の殆ど全て、加えて純血どころか「純血」の聖なる二十八一部からも署名する人間が出たのだから、尤もらしい理屈として広く受け止められたようだ。

一つ腑に落ちないとすれば、何故か僕が直々に羊皮紙に呪いを掛け、その紙の管理まで任せられる羽目になった点だが……まあ、「純血」側の人間を嘔ませておきたいという打算と、そんな重要証拠を管理したくないという心情は一応解る。出来れば僕の胃痛も慮って欲しかったが、上級生達から頼まれれば僕に断る選択肢などなく、渋々受け容れざるを得なかつた。

もつとも、ここまでやったにも拘わらず肩透かしである可能性、つまりドロレス・アンブリッジが「教授」として不適格だという可能性は残っていた。

今でこそ魔法省はhogwarts成績優秀者を受け容れているが、彼女の時代もまたそうであつたか知らないし、やはりテストの点数と教える能力は必ずしも比例しない。ドロレス・アンブリッジが学生時代優等生の部類だつたとは聞いたものの、それを言えば、ギルデロイ・ロックハートとて学生時代は優秀な生徒だつた。だから一抹の不安は残っていたのだが、どうやら杞憂だつたらしい。彼女は思ったよりも教えるのが上手かつた。

他の学年の授業内容までは見れない以上何とも言えないが、少なくとも第五学年においては、彼女は自分の授業計画カリキュラムを受け容れさせる事に成功した。近年のO. W. L. の傾向、そして魔法試験局の今年の出題担当者の専門性を踏まえた上での授業という売り文句は——多

少誇張などはあるにせよ——ドラコ・マルフォイ達「純血」、そしてその他の多くの生徒の心を捉えるには十分だったようだ。

再出発一時間目、彼女が守護霊の呪文を使ってみせたのも良い方向に働いたのだろう。

吸魂鬼を追い払う見目の良い呪文に惹かれる理由が僕には解らないが、魔法族にとつては一つの憧れらしい。ドローレス・アンブリッジは表面上平静を装ってはいたものの、生徒達が自分を見る眼が変わった事には気付いたようで、鼻高々な様子を隠し切れていなかった。

その代償として守護霊の呪文を学びたいと宣い出した人間が現れたのは——それも二、三人ではない——誤算だったが、当該呪文はO・W・L・の範囲では無い。単に加点要素に過ぎない、それも練習した所で使えるようになるか解らない高度な呪文である。その修練に時間を費やす暇が有るのかと彼等に問うてやれば、渋々ながらも、授業中に教えを請う事は諦めたようだ。

しかしながら、放課後ドラコ・マルフォイが何らかの呪文、それも銀色の靄が出る類の魔法を練習しているらしいという事は、僕の耳にも入ってきている。

ともあれ、スリザリンは落ち着きを取り戻し、他の波乱も無く九月は過ぎていった。

僕に生じた幾つかの問題——今回の件でスネイプ教授から一週間の罰則を喰らった事、何故か僕に対して相談事を持ち込む生徒が現れ始めた事、更には僕が何度もドローレス・アンブリッジの部屋を頻繁に訪れていたせいで、彼女が僕に恋愛感情を抱いているという噂が何処からか流れた事を除けば、酷く平和な一か月だった。

教育令第二十四号

「ステイブン。こっちへ来い」

朝からドラコ・マルフォイに声を掛けられるというのは酷く珍しい。

僕に何か用事がある場合、彼は基本的に放課後や夕食後の時間に押し掛けて来る。

甘やかされた嫡男の例に洩れず、彼は他人を待たせる事と我慢させる事は好きだが、その逆は嫌いである。だから問題——とは言うものの、大概は酷く些細な物が多いのだが——はすぐさま僕の所へ持ち込まれる事が多く、そして朝から問題が起こるといふのは余り無い。だから大抵起床後はゆっくり出来るのだが、今日はその例外のようである。

ドラコ・マルフォイは大きな声を出した訳ではないが、その声は御喋りの絶えない談話室でも良く通った。呼んでいる場所は掲示板前。そこには既に人だかりが出来ていたが、彼が大声で呼んでくれたせいだろう。掲示物を眺めて喋っていた彼等は途端に黙り込み、迷惑にも僕の進路を開けてくれたので、已む無く近付いた。

「新しい教育令だそうだ」

「そうか。意外と熱心な事だ」

漏れ出た皮肉と共に、彼が顎でしゃくる先へと視線を向ける。

そこには確かに、大袈裟な位に巨大な公式文書が張り付けられている。整然と貼り付けられた十数枚の掲示物達を一枚でもって覆い隠したソレには、ドロレス・アンブリッジの特徴的な署名と仰々しい押印がなされている。これまで二十数号出ていた筈だが、校内に周知される形で公布されるのは初めてである。そしてその教育令の内容は——

「——また露骨な真似をする」

教育令第二十四号。

内容として見れば、生徒の学生組織を禁止し、再結成にはドロレス・アンブリッジの許可を要するという以上の意味を持たない省令

だ。相変わらず闇の陣営には左程意味を持たないが、彼等魔法省の人間にとっては非常に重要なのだろう。

もつとも、これを出した側に立つ人間の思惑は多少異なるように思える。

コーネリウス・ファツジは学生達によつて反魔法省組織を形成される事への恐怖、そしてドローレス・アンブリッジは自らの支配欲の充足あたりか。

「――で？」

ドラコ・マルフォイを見る。

「この省令を僕に見せたかったのは解ったが、何か不満や問題があるのか？」

「い、いや、問題が有るといふ程じゃないが……」

仮に撤回させたいならば、その旨をドローレス・アンブリッジに伝えに行かねばならない。更にはルシウス・マルフォイ氏経由で干渉して貰う事も必要だろう。そう思いながら聞いたのだが、彼はしどろもどろになりながら、弁明するように口を開いた。

「その……こないだも君は教育令に文句を言っていただろう？ だから、コレを見て何か気付いた事とか、思った事が有るかもしれないと思つてな」

「あれは文句の範疇に入らんし、別に好きにしろとしか思わんよ」

わざわざ僕に聞く意図が解らんと嘆息する。

「これをもってスリザリンに嫌がらせをしてくるなら別だが、彼女も流石に同じ事を繰り返しはしまい。逆にそうして来たら尊敬しても良い位だ。内容としても……多少面倒な手続が増えるだけ。許可を貰いに行くのが面倒ではあるが――」

しかし、ドラコ・マルフォイともあろう者が、わざわざ聞いてみせるのだ。他に見落としてる部分があるかもしれないと掲示板に視線を戻し、改めて文面を二回程読み返す。

「……まあ、確かに穴に見える部分は存在するな」

「……穴？」

「何事も定義は大事だという事だ」

この教育令に一見して隙は見える。それは事実だ。

「……それは問題なのか？」

「いいや。スリザリンには関わりがなく、立法の権限を持つ者は *legem cuius condere* を解釈する権限をも持つ。だから僕が気付いたのも非常に下らん揚げ足取りで、これで何か問題が起こるといふ事でもないな」

「他に多少言える事が有るとすれば……この教育令の構造か。単に届出としているならば良かったのだが、これではミネルバ・マクゴナガル教授あたりは不快感を示すだろう」

『再結成の許可』。『高等尋問官への届出と承認』。本当に露骨だ。

罰則が『退校処分』というのもいただけでないが、何より最悪なのが、この教育令を見ても再結成の許可・承認要件が解らない——何をすれば再結成を許してくれるのか解らないという点だ。これは他の規則や細則を見れば解るのだろうか、それとも、そもそもそれらを法定すらしない程、魔法界は適当なのだろうか。

「嗚呼、それと、この教育令は多分に“マグル”的な省令に見える。杜撰さや悪辣さが見え隠れするがな。もつともあくまで僕の眼にはそう映るといっただけで、他の人間はまた別の視方をするのかもしれない。君がこれを問題視しないならば、放っておいて構わないだろう」

制定された法の趣旨と目的は一応読み取れる。

それ故に、僕はこの省令に対して左程嫌悪感を抱けない。

「もう良いだろうか？ 他にこの教育令を見たい者も居るだろう。何より、ここに留まって呑気に質疑応答を繰り返していても仕方無い」

「……良くは無い」

彼は辛辣に却下したが、それでも僕の言葉に一定の理は認めたらしい。

邪魔にならないように掲示板から離れ、けれどもそのままソファの方に向かう。着いて来いという意味は明らかで、彼が座るのを見届けた後、僕も対面のソファに座った。流石に“純血”仕様の品だ、座り心地は非常に良かった。

僕は杖を取り出したものの、ドラコ・マルフォイは顔を顰めつつ手

を軽く振る。

だから、僕は一度だけ杖を振るった。意図通り、コーヒーマーサーとティーカップが一つ、テーブルの上へと現れた。

「……何故君はマグルのだと思ったんだ」

「非常に親切極まりない省令だからだよ」

ソーサーからカップを持ちあげ、サーバーから珈琲を注ぎつつ、ドラコ・マルフォイの問いに軽く答える。彼が顔を歪めているのは僕の気楽な反応が不愉快だったのか、それとも立ち上る珈琲の匂いを嫌がっているのかは解らなかった。

「言葉の通り。自由と寛容を愛する魔法族らしくもない法令だ」

万事が万事杜撰である事の婉曲表現を用いつつ説明を続ける。

「具体例を挙げて説明するのが解りやすいだろう。これは君への確認に近いのだが——放課後、禁じられた森に踏み込んだ結果、生徒が死んだと君が聞かされたでしょう。これに対し、君はどう考える？」

「……どうって。それは、馬鹿が一人淘汰されただけの事だろう。禁じられているんだ。曲がりなりにも魔法族ならば、あの場所が危険だと理解する位は出来る」

「そうだろうな。君達はそう反応する」

困惑の表情を浮かべつつ答えたドラコ・マルフォイに頷く。

一年の時、彼はあの森で罰則を受けている。それから帰って来た際の反応を未だに鮮明に記憶しているが、魔法族の態度としては非常に真つ当だった。

「魔法的な道具、場所、生物、そして人。魔法族に死を齎しかねない脅威は、魔法界のそこら中に転がっている。それらを甘く見た阿呆が阿呆な事をやって死ぬのは自己責任。禁じられた森に踏み込んだ人間などは典型だ。言葉の解らない幼児でもあるまいし、先人の警句を真摯に受け止める事のない馬鹿など自然淘汰されても仕方ない」

と言っても、珈琲を啜りつつ彼を見る。

「何時ぞやの件は、君も愚かな事をした訳だが」

明言しなかったが、彼はそれがヒップポグリフの時の事を言っているとは気付いたのだろう。一瞬で顔を紅潮させ、けれども彼が口を開く

前に、言葉を継ぐ。

「ただ、アレは授業内の事件だった。教師が明確に責任を負うべき時間、しかし今回挙げた例はまた別問題。ホグワーツは言わずもがな全寮制で、生徒達は授業が終わった後の課外時間にも校内に留まる。教授が監視するのにも限界があり、そして生徒が愚かにも自ら危険に突っ込んだ場合、果たして教師は何処まで責任を負うべきか——そんな問題だ」

「……………」

「魔法界で阿呆な真似に及ぶとなると、命が幾ら有っても足りない。特に、生徒が教師の眼を盗み、自らの意思で魔法的成果に関与した場合には」

ハリー・ポッター達が非常に刺激^{スリリング}な四年間を送って来たのは周知の如くだが、このホグワーツで危険な目——勿論、三年程前に校内を這いずり回っていたバジリスクを勘定に入れない——に遭った生徒というのは、別に彼等に限った事でも無い。

「非合法の魔法薬研究会で作った薬を試した結果中毒死したら？ 或いは秘密裡にホグワーツ探検隊を組織して色々と嗅ぎ回った挙句、うっかり魔法の罫に掛かって爆死したら？ このような事態に対する魔法界の反応は解りやすい。親の躰と教育が悪く、馬鹿一人が死んだと計上して終わりだ」

そのような事故が有ったとの噂を聞いたりするが、実際にそれが真実かは知らない。もっともらしく聞こえる嘘が生徒間に出回るのは良くある話で、けれども教授達も公然にそれを否定しようとしなない。生徒が正しい恐怖心を持つのは、彼等にとって歓迎出来る事だからだ。

「だが、非魔法界は違う。教師には安全配慮義務——可能な限り子供が傷付かないような御優しい“箱庭”を創る義務が有ると断じる。これが正しいかは君の判断に任せるが、少なくとも非魔法界ではこのような態度を“先進的”とする。正しくは、現在そういう潮流が生じている」

良くも悪くも、非魔法界は生徒の自由を制限し始めている。

自由には責任が伴う。しかし、未熟な子供達では責任を取れない。故に、完全な自由もまた認める事が出来ないという論法だ。

「……それが、あの教育令にどう繋がるんだ？」

「教育令第二十四号に即して言うならば、闇の魔術に対する防衛術の自習を生徒が勝手に始めようとした場合を想定してみると良い」

その瞬間、新たに何人かがギョツとした視線を向けてきたのを感じたが、ドラコ・マルフォイが表情を変えなかったあたり、彼は気付かなかったようだった。

まあ、何れは気付くだろう。

「この場合、魔法族としては勉強熱心で結構だという反応になる。生徒が失神と蘇生あたりを行き来するような事に対し、何の疑問も持とうとしない。グリフィンドールあたりの親であれば、失神術を受けた際のカッコいい倒れ方を伝授してやる位の事は言う筈だ」

良くも悪くも呑気で牧歌的である。

「二方で『マグル』——半純血や『マグル生まれ』の親としての彼等は違う。大人の監視下から離れた場所で子供が何をやっているのか。そんな危険な活動は言語道断だという話になり、当然教師は止めさせるべきだという主張が出てくる。生徒同士が決闘さながらに失神呪文や石化呪文を撃ち合うなどまあ論外だ」

「……別にステューピファイを使うなら問題無いだろう？」

「僕の考えもそちらに近い。が、相手を失神させるのは法律上傷害罪だ。しかも科学的に良く解らん機序メカニズムで効果が発揮されるとなれば、魔法を理解する頭脳を持たない『マグル』が恐怖を抱くのは無理もない。非魔法界の本土は五十年程戦争を知らないから、教師の監視下でもそのような訓練をすべきでないと考える親すら居るだろうな。つまり、防衛術DADAの授業自体の廃止だ」

十数年前には直接国土防衛戦争——と言っても、『国土』はあくまでこの国の視点だが——をやったが、あれは一万数千キロ離れた島での事だ。五年前にしても二度目の大戦と異なり自国が直接空襲の危険に晒されていた訳でもない。我が身の危険として戦争を真剣に考えているこの国の非魔法族など殆どいまい。

「……………マグルは狂ってるんじゃないのか？」

「否定は出来ない」

侮蔑でなく本気で解らないという表情を浮かべた彼に、僕も少し微笑んでしまう。

魔法族にとって杖腕を磨く事は、この国の人間が毎日紅茶を飲むような日常生活の延長線のようなものだ。合衆国の人間が大学終わりに射撃訓練場に向かうのに近いと言った方が良いか。

ただ、昔よりも杖腕を磨く事に拘る者は減っているだろう。

魔法戦争の大いなる教訓の一つ。それは、多少決闘術に心得が有る程度では、本物の闇の魔法使いによって簡単に殺されてしまうというものなのだから。

「もつとも、完全に筋違いの懸念という訳でもないのだ」

“マグル”の言い分にも理は有る。

「魔法の厄介な所はな、発動しない方が余程マシな場合が有るという点にある。例えば酢をワインに変える呪文——これは来年学ぶであろう内容だが——を失敗した場合、代わりに爆発や凍結が発生するという事態が生じ得る。これと同種の反応が失神呪文で生じたらどうなる？ 人体中で爆発や氷塊が発生すれば、どんな惨劇となるか想像出来ないか？」

「……………しかし、そんな失敗なんて早々無い筈だろ？ 少なくとも今までの授業では、そんな大惨事が起こるのなんて見た事はない。ステューピファイに限った事でなく、全ての呪文でだ」

「確かにその通りだ。幸運な事に、僕もまた御眼に掛かった事がない。けれども今まで大事故が起こっていない最大の理由はな、魔法力の不足だよ」

非魔法族と違い、魔法族は成長に従って“安全”になるとは限らない。

「今までは、魔法の失敗は効果の不発生と殆ど同義だった。針山がハリネズミに変わらなとか、姿現しを試しても何処にも移動しないとか、或いは死Avada Kedavraの呪文を唱えたとしても何も起こらなとか。だが魔法力が足りており、しかし呪文の制御に失敗した場合、予期せぬ

形での惨劇を齎し得る」

杖が不能^{ボンコッ}だったが為に永遠の記憶喪失を宿命付けられた男が居たが、ならば杖が正常でも使用者が無能^{ボンコッ}だった場合、どうして同じ事が起こらないと言えようか。

「無論、実際には稀だ。学年が上がれば普通は杖の使用にも習熟する。つまり、制御能力も上がる。同じ失敗を引き起こすにしても、大失敗を小失敗に抑える事は出来るようになる。医務室に行けば、最悪でも聖マンガに行けば、治療出来る程度の事故にしかならない事が大半だ。しかしながら——常にそんな幸運に留まるとは限らないのも確かだ」

怪我の対処は早い方が良いのは魔法界でも同じ。

非魔法族と魔法族が生殖的隔離の関係にない——つまり、子供を作れる事が示すように、両者の身体の構造は基本的に変わらない。たとえば呪文的損傷により失血を招いた場合、魔法族であっても出血死やショック死する可能性が有る。当然ながら、近くにちゃんとした治療呪文を使える教授が居るか否かによって、怪我人の生存率は雲泥の差となる。

「故に生徒のみで魔法を練習しようとする真似は、非魔法族の常識の下には許されない。そしてそのような組織を生徒が勝手に創ろうとした場合、教師としてはそれを止めるべきであり、仮に止めなければ、事故を起こした阿呆ではなく教師こそが責任を問われる。万一死亡事故が起きた場合、特に十七歳にも満たない生徒では死の責任も取れないしな」

この教育令はそのような信念と確信の上に成立している。

眉を顰めた魔法族も多いだろうが、こう質問すれば黙り込んでくれるだろう。

自分の子供がセドリック・デイゴリーと同じように事故死したとしても、お前は何の不満も抱かずに居られるのかと。大人が子供達を護る為に一定の規制を敷くのは己むを得ないのだと。

その鋭き主張を前にして、更に不満を吐き続けられる者はそう居ない。

「……だから、クラブの再結成には許可を求めろというのか」

「ああ。学生団体の全解散を命令し、かつ再結成に許可を要求する事で、校内の団体数と構成員、活動状況を学校側が改めて把握する。更には活動内容に即した危機管理等の対応について確認し、不十分だと考えれば許可を下さない。それによつて学生組織の運営適正化を図る。

——まあ建前は、だが」

「建前上？」

「悪用法は君にも想像出来るだろうに？」

ホグワーツ一年生にも解るような事を一々言及する必要はあるまい。

あの高等尋問官殿が一番恨んでいるのは当然我等がスリザリンだろうが、だからといって他の寮に好意的だという訳でもなさそうだ。まあ、学生時代に他寮の友人を作る事が出来ていたのであれば、あれだけの憎悪を抱えて戻ってくる筈もないか。

「他に質問は？」

珈琲を飲み干した後、ソーサーの上にカップを置く。

ドラコ・マルフォイは少しの間迷っていたものの、頭の整理は付いたららしい。何処か覚悟を決めたような表情をして口を開いた。

「……スリザリン生がマグルに詳しいのは、君は問題としないのか？」

「教育令に対する質問では無いし、今更だという気もするが——」

そう答えつつ、ローブから抜いた杖を軽く振った。

部屋の片隅に飛ばしておきさえすれば、勝手に屋敷しもべ妖精が片付ける。その程度の事は、この四年間で良く知っていた。

「——しかしこれは逆質問になってしまふのだが、たとえば君は、他寮同士のクイディッチ試合^{マッチ}を見る事に疑問を抱くのか？」

「——」

「もつと具体的に言えば、他の三寮の内、スリザリンがクイディッチ杯で戦う最後の相手はハッフルパフだ。つまりハッフルパフはスリザリンと戦う前に対グリフィンボール、対レイブンクローと二戦する訳だが、君はその何れの試合も見に行くのではないか？ それも単純に

娯樂の為ではない。来る自分達との試合で戦いを有利に運ぶ為に。或いは、十中八九勝利出来ると踏んでいても、その勝利を更に確実な物にする為に」

「どういう形で彼等が試合相手を研究するのかまでは知らないし、興味も持ち得ないが、スリザリンの代表選手である彼等は間違いなく、偵察活動を主眼として競技場に向かう筈である。」

「これも同じだよ。相手を知らずに戦いに挑むのは愚者のやる事だ。たとえ勝てるかと解っていたとしても、完璧な勝利を期すなら当然相手を深く学ぶべきなのだ。そして単に勝つのみではなく、美しく勝つ。これはスリザリンの美学に反しないと思うが？」

「そう言つてのけた僕に、しかしドラコ・マルフォイが返してきたのは困惑の表情。」

「……完璧な勝利を期すと言つたな」

「？それがどうかしたか？」

「念押しするように繰り返された言葉は、僕をして意図が図りかねるもの。」

「マグルと戦争をやれば魔法族が勝つ。君はそう考えているのだな」

「……………寧ろ、君は『マグル』に負けるつもりなのか？」

「意表を突かれた問いに驚きを覚えつつ聞く。」

「そしてドラコ・マルフォイは、僕に更なる驚きを齎す程、大きな狼狽を見せた。」

「……本当に、何故聞いた側がそんなにも狼狽して見せるのだろうか。」

「まるで僕が『マグル』に勝てると言つたのが余りにも意外だったようではないか。確かに確実とは言えないものの、これでも一応魔法族という自負はあるのだが。」

「そ、そんなつもりは勿論無い」

「なら良いだろう」

「……………」

「そして今の所、僕は君達『純血』に学べとは求めない」

「現在の『純血主義』が如何なるモノかは重々承知している。」

「だが、君達に使われる側の僕が無知である事は許されないと、次の戦

争の前には君にも最低限学んで貰う。都合の良い夢に浸っていた結果“上”を満足させられない場合、そこには死有るのみだからな。生きる為に、君は自らの意思で学ぶことになる」

闇の帝王が勝利した場合、次の敵は当然ながら
Her Majesty's Government
女王陛下の政府である。

他の死喰い人達が無知のまま突っ込んで死ぬのは勝手だが、彼等の失敗に巻き込まれるのは御免だ。国際機密保持法との兼ね合いもある。ゲラート・グリンデルバルトの二の舞を避ける為には、彼等もまた“マグル”について学ばねばならないだろう。それが出来ないならば、後方の留置所で拷問に勤しんで貰った方が余程助かる。

ドラコ・マルフォイは暫くの間もごもご口を動かしていたが、それでもそれが言葉を発する為に使われる事は無かった。少しの間待ちはしたが、やはり同じだった。

そして何時までも待つていても時間が勿体ないから、僕は立ち上がった。ドラコ・マルフォイは少しだけ身体を震わせたものの、それ以上の反応はどうか抑え込んだようだ。

「……何処に行くんだ？ 朝食には早いと思うんだが？」

「これくらいは解ってくれ。高等尋問官の所だ」

つまり、仕事だ。

「あの教育令が求めていただろう？ 学生組織の許可申請に行つて来る」

「申請？ 君は何かクラブに所属していたか？」

「そのような暇や友人関係を僕が持つていると思うか？」

首を傾げながら紡がれた見当外れの言葉に溜息を吐く。

それらを持つていたのであれば、より明るい学生生活を送つてい

る。
「あの教育令は、既存の学生団体の解散を宣言している。そして文面上、クイディッチチームを除外するとは書いていないし、そもそもクイディッチは本教育令が規制しようとする筆頭だ。箒から落ちれば普通死ぬからな。……嗚呼、心配するな。許可はすんなりと通る筈で、通らなかつたらやはり君達が潰せばいい。二度目ともあれば“上

「も文句は言わんדרろうよ」

「マグル」基準を徹底するのならば、殆ど生身のまま二百キロ以上の速度で飛び回るような競技なんぞ問答無用で全禁止となる。大人が自己責任でやるなら兎も角、子供には、そのような自由の処分は許されない。

しかしながら、ここは魔法界で、僕達は魔法族である。彼等が掲げる論理に唯々諾々と従ってやる義理は無い。そしてドロレス・アンブリッジとて、クイディッチ狂を敵に回す恐ろしさくらいは七年間で学んでいるだろう。

「だが、曲がりなりにも教育令——法令の規定だ。許可を貰うにしても口頭で済むとは思えず、一定の手続が定められている筈だ。彼女は御役人様だから、再結成許可申請書か何かだとは思うが。そして申請書の必要事項を不足無く埋めるには、彼女から色々聞かねばならない」

「？ 僕が言えば許可が出るんじゃないか？」

「それは確かだ。しかし、不必要に特権を振りかざすのは賢い行為ではない」

その表情からして善意で言っているんだろうが、余計な御節介である。

「君達も多少意識してくれると有難いのだが、奴隷の側にも費やせる資源と労力が有る。故に君達は止むを得ない場合のみ、かつ最小限で最大効率となるように権力を振るうべきだ。どうせ働くのは君ではないのだ。——もつとも、君が作りたいなら一向に構わないが？」

ドラコ・マルフォイが首を横に振る。

そう言えば、自分が作らされる羽目になる事を疑っていなかったものの、クイディッチチームには当然ながらキャプテンが居る。グラハム・モンターギユを探して辺りを見回すと、彼と視線が合った。愛想笑いを向けてくる事から見ると、反論も無さそうだ。

「そして今後の事を考えると、今回の教育令の手続を潜脱する事は適切でもない。要らぬ腹を探られたくないのであれば、スリザリンも従順な姿勢を見せておいた方が得策だ」

「……それは一体全体どういう意味なんだ？」

「既にヒントは出した。これも直ぐに解るだろう」

クイディッチチームの再結成許可申請は速やかに済んだ。

僕が色々と質問し、また申請書を作成している最中、ドロールレス・アンブリッジは何か言いたげではあった。しかし、わざわざ彼女の思惑に乗ってやる気もなく、一貫して気付かない振りをし続けた。彼女が言いたい事はある程度想像が付いていたし、曲がりなりにも言葉を費やす苦勞をするならば、それは適切な相手にこそすべきだったからだ。

その相手、ドラコ・マルフォイが押し掛けて来たのは放課後の事だった。

「今朝、君は防衛術の自習を例として挙げたな」

僕の机の上に手を付き、身を乗り出しながら彼は勢いよく言う。

魔法薬学の授業前、グリフィンボールに許可書を見せびらかしている間は上機嫌だった。しかし、それは半日程で消え失せてしまったらしい。

手元の羊皮紙に目を通しつつ、ドラコ・マルフォイに返答する。

「嗚呼、言ったな。今朝の事を忘れる筈も無い」

「……スリザリンも規則に従う必要が有るとも言ったな」

「そうだ。他の寮の眼が有る以上、わざわざ教育令から逸脱するのは適切でないと思ったからな。既に許可申請を出したと言えれば他は文句は言えず、そして今日、君達は他の三寮を後目に悠々とクイディッチ競技場を独占出来る」

「……………それは礼を言うが」

一瞬だけたじろぐ気配がし、しかし直ぐに語気の荒い言葉が降って来た。

「つまり、君はグレンジャーやポッターの行動を知っていたんだな？」
「それは外れだ。僕は全く知らない」

真実である。

ハリー・ポッターの動向を把握する手段を、今の僕は持っていない。
「彼等が動いている確証など抱いていないし、あの教育令第二十四号が彼等の行動に対するカウンターであるかすらも知らない。しかしそうであろうとなかろうと、結果としては同じ事だ。だからこそ、あんな形で言及をしたのだ」

「同じ事、とは？ 相変わらず、君の言い回しは解りにくい」

「難しい事を言っているつもりは無い。教育令が出た後に勉強会が結成されようが、勉強会が結成された後に教育令が出ようが、一切何も変わりはない。それだけの話だ」

ドローレス・アンブリッジに聞けばどちらであるか解ったかもしれないが、その差異を確定する事に殆ど興味は無く、そもそも彼女の野望なんぞ知った事では無かった。

「闇の帝王が復活したと信じているグリフィンドールが、今年のドローレス・アンブリッジの授業に黙っていられると思うか？ 一回受ければ学べる内容は皆無だと知れる悲惨さであり、何れは自主的な勉強会という発想に辿り着く。更に君自身に置き換えてみると良い。仮に現在勉強会を計画して居なかつても、あのような「マグル」的な口煩さを持つ教育令を見れば逆にやってやろうという気になるだろうか？」

非魔法界では「マグル」の服を着る。そんな簡単な規則すら魔法族は守れないのだ。

魔法族は「マグル」への差別感情云々以前に、上からの統制、己の自由の剥奪を嫌う。このような強権的な省令を前にして、対抗心を燃やさない訳が無い。

更にこういう形になるとは思ってもみなかったものの、ハリー・ポッターに御友達を集めるように唆した身ではある。そして、あの特急でも彼は校長に——自分に何もさせない大人達に不満たらたらだったが、学期が始まって以降は更に溜め込んでいるに違いない。

彼が違法な集会を企画し、行動に移す。これはもう確定事項だ。

「しかし、君が聞いて来るのはもう少し早いと思つたがな」

意外だったと、足を組み変えながら感想を吐露する。

「遠回しな表現をした訳では無いし、ハリー・ポッターについての事だ。早ければ朝、僕が高等尋問官の所から帰つて来た後にこの話をせねばならないと考えていた」

「……流石に魔法薬学の前には気付いていた」

ドラコ・マルフォイはそっぽを向く。

「ただ、こんな事を外で話す訳にも行かないだろう。しかも君は休み時間になつたら姿を消していたし、昼食の際も姿を見かけなかった。君が最近忙しそうにしているのは知つて——」

彼が言葉を切つたのは、僕の机の上を見たから。相変わらず本の山と羊皮紙の束に埋もれた机の上だが、今は本の一冊も開いていない。案外目敏い男だった。

「——ところで君は一体何を見ているんだ？」

「学生団体の再結成許可申請書だ」

疑問と共に身を乗り出してきた彼にそれを見せる。

「スリザリン・クイディッツチームは早々に提出した訳だが、そこまで動きの早い人間は居なかつたようだ。そして、スリザリン内の多くの人間がこう思つたらしい。こんな下らん法令に悩まされるよりは、僕を申請窓口として丸投げするのが手っ取り早いだとな」

面倒な書類の書き方について学ぶ必要は無く、何より提出の際に高等尋問官職と会わずに済む。彼等委任者の利点としてはそれで十分だった。

「……そこまで君がやる義理が有るのか？」

「可能な限り君達と彼女を会わせるべきでは無い。その程度の事は僕も学習する」

揉め事が起こってから働くよりも、起こる前から働いた方が楽である。

「まあアレでも魔法大臣付上級次官だから、個人的に取り入ろうとする人間を止める気まではない。が、どうも我が寮には居ないらしい

な。授業内容についての質問以上をしているのは見た事がない。寧ろ良くもあれだけ嫌われるものだと感心すらする」

彼女の授業の評判は上々である。少なくともその点につき、批判は殆ど聞かない。精々実質的に授業を受けられる時間が短いという位だろう。

けれども、それ以外の部分は別だ。罵詈雑言しか聞いた事がない。

「……そうか」

そしてドラコ・マルフォイは納得を示すだけで、それ以上の追求をしなかった。

今回の再結成許可権限を利用しての専横を企画する程、彼は性格が悪くもないらしい。

勿論、この程度の許可で貸し借り云々を語るのは余りに狭量な真似ではある。僕も提案する気にすらなれなかったが、しかし他がどう考えるかはまた別のようだ。この書類の山を見るに、何か言われる前に許可を通しておこうという魂胆が見え見えだった。ついでに僕を通しておけば、しかしお前の部下は通しただろうと反論出来るようになる。

「……君が寮に貢献している事は解った。だが、ステイーブン。僕は――」

「――ハリー・ポッターの違法な学生団体を摘発し、あの男を退学させてやりたい、だろうか？」

「嘆息混じりに解答を紡ぐ。」

ドラコ・マルフォイの思考など解り切っている。

これまでの彼の四年間を眺めていればその結論を導けない方が可笑しいし、そもそも僕は先程ハリー・ポッターが集会を開く事は確実だと示唆した。彼がそう主張するのは必然だった。

「だが現状では望み薄だ。そしてはつきり言うと、僕は気が進まない」

その却下の返答に対する反発は、当然ながら予期していた。

彼の意思に真っ向から反対するものであり、叛逆と看做されても仕方が無い放言である。

勿論覚悟の上での発言でも有ったが、しかしドラコ・マルフォイは怒鳴り出しもなかった。意外さと共に彼の顔を見上げてみれば、その淡い灰色の瞳は怒りに燃えてはいるものの、意思の力をもって感情を押し殺そうとしていた。

「……君がそう言うって事は、確かな根拠が有るんだな」

「そうだな。何の理屈も無しにこんな事を言いはしない」

何だかんだ言って彼の庇護は僕の生命線で在り続けて来たし、これからもそれは変わりはない。必要性が存在していないのであれば、わざわざ衝突する気もない。

「君がどうしても望むならば従いはする。が、そもそも君は、あの教育令を過剰評価している節がある。君が期待を膨らませている程に、あれは強力では無いのだ」

教育令第二十四号。

ホグワーツで何も頭に詰め込めなかった生徒はアレをそのままの意味で読むのだろうか、曲がりなりにも真面目に勉強してきた人間であれば、当然に実現可能性を疑うだろう。

ドラコ・マルフォイは乱暴に椅子へと掛け、聞く姿勢を取った。

「……これもまた、君は大した省令だと思っていないのか」

「校長に対し文句を付ける口実程度にはなるかもしれない。その程度だな」

教育令第二十二号よりは多少マシという評価である。

「ハリー・ポッターを退学にする事は、彼の証言——闇の帝王が復活したという主張の信憑性を低減させるものではない。夏休暇中の一件とは違う。犯罪者の証言以上に、単なる中途退学者の証言の信憑性が疑いを持たれるかというのは怪しい」

「……教育令第二十四号違反も違法行為だろう」

「法令違反行為だ。そして違反する法令にしても、今年出たばかりの、それも校長と魔法大臣の間で紛争が起きた後に出た条文に過ぎない。誰がどう見ても権力闘争の産物で、それに違反した所で世間が『反社会的存在』と看做すかは微妙だ。加えて、中途退学処分など逆に箔が付くと考える人間も、魔法族の気質からすれば割と居る」

何より、と欠伸を噛み殺しつつ続ける。

「朝言っただろう。魔法族の常識には合致しないと。教授達の監視の眼をいかくぐって子供が秘密結社を結成する行為を周りはどう受け止めるか。グリフィン・ドールなら武勇伝にしかならず、他の寮も似たり寄りたりだ。我が寮とて変わらん。そして、たかがその程度の事で生徒が退学になったと知れ渡れば、世間の反応なんぞ初めから知れている」

魔法省は散々馬鹿にされ、生徒には各所から同情が寄せられるだけである。

コーネリウス・ファツジの思想は「純血」寄りと言って良いから、彼から出た発想ではないだろう。魔法省の御役人様には存外「マグル」被れが多いようだ。

そしてこの「純血」の子息には興味が無いだろうし、闇の陣営にとってもどうでも良い事だが、この教育令は、魔法省がホグワーツを支配する為の手段としては下の下だ。

生徒を何人退学処分にしたとしても、また退校の威嚇でもって何百人もの生徒を支配下に置いたとしても、ホグワーツ支配には何ら繋がらない。ホグワーツ校長、そして理事会。それらの権力機関が健在である限り学校の体制が揺らぐ事は早々有り得ず、故にそこに切り込めない省令など御遊びでしかない。

まあ大勢の生徒を一つの意思の下に束ね、学校体制に対して学生闘争クーデターを起こす気なら生徒の掌握にも意味が有るのだが——スリザリン生にすら嫌われている今の高等尋問官を見る限り、そんな曲芸には期待出来まい。

ドラコ・マルフォイは悔しげに顔を歪め、けれども食い下がる気は有るらしい。

「……校長に対して文句を付けるというのは?」
「教育令第二十四号の『退校処分にする』の解釈、手続。その部分に既に疑義が有るからだ」

そこに火種を見いだせない人間の眼は節穴だろう。
「退校処分の手続を具体的にどうするかという部分は、この教育令だ

け読んでいては解らない。そしてホグワーツ生を退学にするに際してはこれまで一定の手続が踏まれて来た筈で、それを行って来たのは当然ホグワーツ校長だろう。そもそも校長が退学処分権を持つという主張は、夏にハリー・ポッターの退学を阻止した理由の一つだしな」

ホグワーツの入学許可者名簿は、伝説的な魔法具——ドラゴン皮の本と銀色のインク壺、そして古ぼけた羽ペンのセット——によって自動的に作成されるという。ならばその延長線上にある学生登録、そして真反対に位置する学籍剥奪も、それと似たような魔法具によって魔法的に為されると考えるのが至極自然である。

そもそもホグワーツの成立経緯を考えれば、魔法省がホグワーツ生の管理手続に関与する根拠ないし余地自体が一切ない。それらの魔法具は間違いなくホグワーツ内部に存在する。

「あの校長は査察に基づく教授の解任云々については何も反論しない気がしている。面倒だしな。しかし、流石に生徒を退学させるともなればそうは行かない。生徒の放校を大人しく看過してしまう教授など、それこそ」^{Headmaster}校長としての資格がない」

学生達を守護する。

その一点に関しては、彼は絶対に引かない。

「……だが法律違反の人間——犯罪者が退学にならないのは可笑しくないか？」

「まあ、そのように難癖を付けるのが本省令の魂胆では有るのだろう」

その点において、教授の解職を可能とした第二十三号よりは利用価値が有る。

「この省令は、魔法省にも退学処分権が存する事を確認したものだ。或いは、仮に素行不良による退学処分権は校長に存するとしても、法令違反による退学処分権は魔法省に存する。もしくは、校長に退学処分権があるとしても、上級機関たる魔法省の判断に校長は拘束されるべきであり、省の処分命令には従うべきである。魔法省側の主張としてパツと思いつくのは、その程度か」

どれも今適当にでっち上げた理屈であり、世間的に承認されるかは疑問が有るものの、もつともらしい理屈など幾らでも付けられる。

「そして如何なる理屈を発端としていようと、僕はこの手の議論に――話し合いの結果でなく、校長と魔法省が話し合いをしたという事自体に価値を見出す側ではあるのだが……しかし、ドラコ・マルフォイ。君は今自分の言った事の意味を理解しているのか？」

「意味？」

「君が今言ったのは魔法省、或いは魔法大臣が生徒の退学に決定権を持つのを認めるという意味だ。たとえ法律違反云々という条件が付いていようとそれは変わらない。しかもその法律違反自体が非常に軽微な罪である訳だが、果たして本当にそれで良いのか？」

――管理人風情が支配者面するような真似を、君は許せるのか？」

「……………」

僕の言葉に、彼は唇を噛み締めて黙り込んだ。

そして解り切った反応でもあった。教授の任免権のように僕はその手の介入に肯定的な一方、支配者層「純血」は違う。付け加えると、魔法界ではやはり彼等こそが正常である。

けれども感情は別か。彼の眼は依然僕への反発、自身の希望の障害と成り得る僕への敵意を露わにしており、だから僕は宥めるように言葉が続ける。

「まあ、これは君の悲願のようなモノだ。拘るのも解る。解るが、他にも問題が有る」

「……………問題が有るとは僕には思えない」

「そして僕は君と判断を異にする。退学部分の実効性は脇に置いておくでしょうか。結局、この辺りは個人的な見解に過ぎない。曲がりなりに魔法大臣であるコーネリウス・ファッジ、或いは魔法法の専門家であれば上手く処理してのけるかもしれないしな」

専門性の要求される論点であって、僕も断言する所までは行かない。

「もつと解りやすい観点から行こう。教育令第二十四号自体に問題は無いとする。つまりこれまで僕が言った事は無視して良い。またハリ・ポッター達が防衛術クラブを結成したのも事実だでしょう。さ

て、君は一体どうやって彼等を退学にする？」

「そりゃあ決まっている。あいつらが集団で呪文を撃ち合っている所を押さえて——」

「——何処で捕まえる？」

机上に頬杖を突き、彼を見上げながら問う。

彼は即座に反論しようとし、暫く口を開け閉めした後、最終的には閉じた。

一応質問を投げた側として、許可申請書の不備や誤字を杖で訂正しつつ待つてはいた。しかし一向に答えが返ってこないなので、僕の方から予測を口にする。

「校庭で呪文を撃ち合えば人目に付く。必然、高等尋問官に通報する人間が現れるのは避けられない。城内の場合、^{ビープズ}騒霊に見つかつた時点で即破滅だ。アレは彼女を好いていないようだが、それよりも生徒に嫌がらせをする方を選ぶだろう。禁じられた森あたりは人が寄り付かないが、そんな場所に何度も向かえば目立つ」

要するに、と羊皮紙を捲りながら続けた。

「二回で終わる集まりならまだしも、継続的なクラブ活動なんぞ不可能だ。なれば当然、教育令第二十四号の適用の話は出て来ないし、ハリー・ポッターの退学も叶わない」

「し、しかし他の誰にもバレないような場所が何処かにあるかもしれないだろう？　そこでポッター達が自習をやっているのを突き止めれば、違反になるんじゃないか？」

「それは否定できない。場所の心当たりも幾つか有る」

「……本当か？」

「ああ」

「言え」

「例えば、秘密の部屋」

サラザール・スリザリンの隠し部屋。

「あの校長が蛇の亡骸と共に封印したと聞いてはいるが、それが真実かどうかを知る者は居ない。第一、彼は部屋の入口が何処かも秘密のままにしたからな」

ハリー・ポッターが賢者の石を防衛した事は「秘密」にした癖に、つくづく気に入らない。今の僕は入口を知っているとしても、その思いは変わらない。

「しかしハリー・ポッター達は当然知っている筈で、恐らく部屋の鍵となつていであろう蛇語も使える。一方で、今のスリザリンで他に蛇語を話せる者が居るとは聞いた事はない。つまりスリザリンは入れない」

「——っ。あいつらは神聖な部屋を呪文の訓練場として使うのか!？」

「既に守護者^{バジリスク}を殺し、荒らしたのだから今更だ。そして、あくまで可能性に過ぎない。確実に彼等が使うとも言っていないし、だが問題は、この種の可能性であれば他にも挙げられるという事だ」

彼等の行動を捕捉する為の面倒さを想像すると、憂鬱にしかならない。忍びの地図などという反則的な魔法具は、僕達の手元には存在しないのだ。

「更に付け加えて言えば、こんな奇抜な真似をする必要などない。もつと簡明かつ効果的な場所というのも存在している。スリザリン生の立ち入りの許されない場所というのが、この城内には誰にも明らかなる形で在るだろう?」

ドラコ・マルフォイは顎に手を当てて少しの間難しい顔をしていたが、愕然とした表情を浮かべた所を見ると、どうやら解答に辿り着いたらしい。

「……まさか」

「気付いたか。そう、グリフィンドールの塔内だよ」

あの場所もまた、一種の聖域である。

「談話室や寮室の中に在る机や椅子、ベット等の一切を片付けてしまえば、多少狭くはあるものの、少人数が交代交代で呪文を撃ち合う程度の事は可能だ。君達が無理矢理立入って検査出来なくもないが、自分達の縄張りなのだ。幾らでも偽装や言い訳は利かせられる」

「……寮内で呪文を撃ち合うなんてのは、マクゴナガルなら許さないんじゃないか?」

「去年までは間違いないが、今年は微妙だ。ドローレス・アンブリッジ

の授業に憂慮はしているだろうし、生徒の成績向上に協力するのは教授の務めでもある。最近ウィーズリーの双子達が巻き起こしている怪現象よりは、失神呪文が飛び交う方が平和だと判断するかもしれない」

ミネルバ・マクゴナガル教授の気性からしても、ドローレス・アンブリッジは御嫌いだらう。

また忘れてはならないが、あの教授もまたグリフィンボールだ。

原則的に風紀と秩序の維持を図りはするものの、心の奥底に獅子の精神を有している事は、一年生のハリー・ポッターをクイディッチ代表にした事に良く表れている。必要と有れば紳士協定——しかし入学許可証に『一年生は個人用の箒の持参は許されていない』と記載されているように、事実上の規則には近かった——を破る事を躊躇わない彼女であれば、この程度の規則違反を見ない振りする事は考えられる。

「そして彼女が問題視するにしても、それは呪文を撃ち合う部分だけ。談話室であの三人が集まって筆記テストの勉強をしているに留まる場合、彼女は何も言わない。個人的な宿題会や勉強会を咎める規則は無いからな。必然、君や高等尋問官殿が摘発するのも夢のまた夢だ」

「でも、教育令第二十四号が言うには——」

「——君の指摘したい事は解るが、それは叶わない」

先回りして、ドラコ・マルフォイの口を塞ぐ。

「正しくは可能だが、現状の高等尋問官殿の権力では足りない」

法が本質的にどんなモノであるかを理解していれば、そんな解釈は出来ない。

「君は想像力を働かせなければならぬ。あの教育令第二十四号は、どのような場合に適用されなそうに見えるか。頭が真つ当な振りをして執行するなら如何なる制約が付きそうか。それを考えれば、アレを文言通りに解釈しようとは考えないのでないか？」

そこまで説明して漸く、ドラコ・マルフォイは反論を諦めたようだった。

「そこで黙り込めるのなら、君は君が思う以上に賢い」

「……嫌味か」

「本心だとも」

マルフォイ家の教育が出来過ぎていたのだろう。

理屈立てて説明さえすれば、良くも悪くも彼は吞んでくれる。そしてこの場合の良くも悪くもという部分は、やはり悪い面の方が大きいのだろう。正当派の貴族足らんとするならば、そんな事は知った事は無いと見苦しく執着すべき場面かもしれない。

「グリフィンボールに限らず、他の寮でも変わらない。寮の中で組織活動を行っている限り、現実的には取り締まれない。言ってみれば、あの教育令第二十四号が効力を持つのは、公共空間である寮外だけでしかないのだ」

全方位から嫌われている高等尋問官殿では、期待される法執行を為し得ない。

「敢えて先程は言及しなかったが、拘らないなら校長の力を借りる手もある。彼の変身術の腕前をもってすれば、城内に、或いは校外のホグズミードに特別な部屋を増設する程度はやれる。ホグズミードへの抜け道がホグワーツ内に存在する事は、一昨年ハリー・ポッターが証明してくれたようなものだしな。そこまでやられたらもう捕まえる術は無い」

彼がそこまでやる可能性は低いとは思う。彼は今のハリー・ポッターに関わりたがらないだろうという以上に、アルバス・ダンブルドア“善き校長”は一部の生徒へ過度に肩入れすべきではないからだ。

しかしながら、ドロレス・アンブリッジが校内で好き勝手するのを看過するのもまた、アルバス・ダンブルドア“善き校長”の行いではない。だから有り得ない事態だともでは言い切れない。

「繰り返すが、現状は気が進まない」

“生き残った男の子”の秘密結社を見逃す事は、僕の利に成り得る。

その秘めたる打算を無視したとしても、見えてる面倒事に首を突っ込みたいとは思えない。

「ハリー・ポッターが『集会』を開く事はまず間違いないと言って良

い。しかし、その集会がどんな形態となるか、つまり『学生による組織』等として省令違反となるかは解らない。仮に違反となるモノが出来たとしても、摘発出来るかどうかというのは全く不透明。それにも拘わらず、彼等を退学させようとして校内を駆け回り回るなんて御免だ」

「……僕が君に命令したら、どうだ？」

「従いはする」

徹底抗戦する気力までは湧いて来ない。

「しかし今年の優先順位は明らかで、宿題等の『本業』の片手間に探すだけだ。成果も期待するなどは予告しておく。そして仮に君が自ら動いて違法な秘密結社を捜索しようとした場合、僕としても最終手段を取らせて貰う。つまり、君の父君や母君に御伺いを立てる」

「それは……ズルいだろう」

「已むを得んさ。上が諫言を容れないのなら、更に上に訴えるしかない」

余り望ましくはないが、共倒れになる事こそ最悪の不忠だろう。

「勿論、僕はあくまで御伺いを立てるだけだ。そして別に君の側から御伺いを立てても構わない。君の両親がハリー・ポッターの退学計画に賛同したなら——『上』の命令が下るならば、それは何よりも優先される。君の望みも叶い得る。……が、やはり期待し過ぎるな」

試して損はしないのも確かである。

けれども、それでも展開が予測出来る身として釘は刺しておく。

「今年からは常に、自身の行動は魔法戦争に役立つかを念頭に置かねばならない。そして単にハリー・ポッターを退学にした所で、彼の身柄が騎士団校長直轄の隠れ家に移されるだけだ」

この戦争に直接影響を及ぼす類の行動ではない。

「ハリー・ポッターの退学が以降の布石となるなら画策する気にもなるが、残念ながら、その手の嵌める計画は何も思い付かんしな」

「……本気で思い付かないのか？」

「ああ」

多少投げ遣りに答えはしたが、それでもその答えだけは、彼の目を

見て言った。

「今の所ハリー・ポッターの居場所は常に把握出来ているし、彼は大人が二十四時間警備している部屋に軟禁されてもいない。しかし彼を退学にしてしまえばそれらが反転する。彼をホグワーツ城の護りから出す事は出来るので、単に状況が悪くなるだけとも言わないが」

退学になれば城から出ていかなければならない以上、外部への移送中に襲撃する機会を得られるのだ——と言いたい所だが、その場合に警護に就くのはどうせあの大魔法使いである。何なら非合法のポトキーで一度何処かに移動し、更に姿眩まし等で別場所に護送する位はやれるだろう。それを捕捉するのは、闇の帝王の力をもってしても難題そうだ。

そうして結局、ルシウス・マルフォイ氏の「意向」に帰って来る。

「今年の君の最優先は学生生活を滞りなく送る事、特にO・W・L試験を大過なく終える事だ」

「——」

「君の人生はハリー・ポッターがホグワーツに居たままでも台無しにならないが、君が試験に大失敗でもすればその限りでは無い。問題無く科目をパスした人間達から君は一生馬鹿にされる羽目になるし、君の将来の伴侶も馬鹿と結婚したと言われ続ける。それで良いのか？」
専門課程試験であるN・E・W・T.と違い、O・W・L.は落とす為の試験では無い。

真つ当にホグワーツで勉強していれば可^Aは取れる程度、それすら出来ない人間は常識すら身に着けられない馬鹿だと看做されても仕方が無い試験である。

無論、「純血」の全てが勉強を得意とする訳でも無く、「純血」達の家業の才能とテストの点数は比例しない。だからO・W・L.の合格^{パス}を意味する優^O・期待^E以上・可^Aの差異は然したる問題とならない——勿論、良いに越した事は無い——のだが、しかし不可^Pや最低^D、論外^Tだけは取ってはならない。特に殆ど全校生徒が受ける事によって成績での序列が付いてしまう必修^{COR.}科目、その中でも魔法族らしい五科目を落とす事だけは許されないのだ。

防衛術・薬草学・呪文学・変身術・魔法薬学

魔法族らしい五科目を落とす事だけは許されないのだ。

一応O・W・L.の試験というのは個人成績が広く公開されるものではない。しかし、それでも試験をパス出来ない程の落第者となると、自然と周りに解つてしまふのだから。

「……そ、それは良くないが。しかし、僕の成績的には問題無いだろう？」

「現状の成績はこのまま勉強を続けたらという指標でしかない。君が遊んでいる間に他の生徒は勉強するのだぞ。それとも君は今直ぐO・W・L.を受けてもパスする自信が有るのか？」

当然ながら、生徒にO・W・L.を落として欲しいと思つているホグワーツ教授もまた居ない。

今年の授業は殆どが試験対策を念頭に行われるもので、第一学年から第四学年の授業のどれかを一年間だけ真面目に受けないのとは価値が異なる。

「ただでさえ君にはクイディッチが有る。今年もそれを続ける事を、ナルシッサ・マルフォイ夫人から何と言われたか忘れたか？ 僕は当然君を擁護したし、ルシウス・マルフォイ氏も君の選択を支持されていた。けれども、この陰謀は違う。仮に成功したとしても、単に君が一時の満足を得て終わる物でしかない」

何の未来にも繋がらない行為に、時間を費やす意味は無い。

「これが去年か来年であつたのなら、渋々であれ、君の命令を受け容れた事だろう」

去年は代表選手以外なら割と暇だったし、来年も時間割上は、今年より余裕が出来る。

最終的に徒労に終わろうとも、彼の意向を最大限叶えるよう動く事に異存は無かつた。ドロレス・アンブリッジの目論見通りに踊つてやつてよかつた。

「しかし今年は駄目だ。少なくとも、今の状況では容認出来ない。ドロレス・アンブリッジの読書会にハリー・ポッター達が付き合われ、かつ寮外の行動についても一定の制約を受け続ける。君はその程度の成果でもって満足するしかないのだ」

断固とした意思を籠めて言い切り、そこで会話が途切れる。

ドラコ・マルフォイは暫く口を閉ざしたままで、僕も同様であった。その内、僕は許可申請書の山を一通り崩し終わった。

後はスリザリン生に幾つかの質問をして申請書内の不備を補充し、今日の内に高等尋問官殿のチェックを受けた上で、彼女に指摘された部分についても更なる修正を施すだけである。思っていたよりも楽な仕事だったと、机の上で羊皮紙を揃える。

その頃になつて漸く、彼は口を開いた。

「状況が変われば良いんだろ？」

「――」

視線を上げる。

彼は何時の間にか立ち上がり、最初の時より更に身を乗り出して、僕を見下ろしていた。

「君は細かく限定をしていた。現状では、とか。今の状況、とか」

「まあそうだ。何らかの事情変更が有ればその限りでは無い。既に挙げた闇の帝王の許可はその最たる例だ。君が相応の理由を持ってきたのなら反対する道理も無い」

ハリー・ポッターをホグワーツに留める事は、今の僕にとって利益と成り得る。

しかし逆に彼を追放する事に大きな利益が生じるならば、もしくはその追放行為自体に正当性が認められるのであれば、取り立ててドラコ・マルフォイの希望に抵抗する気も無い。『生き残った男の子』が本気で戦争に取り組む状況を用意出来るなら、それはそれで歓迎出来る。

「ならばグレンジャーやポッターが秘密結社を結成している事が確実に、尚且つグリフィンドール寮以外で活動を行っているのも間違い無い。その証拠を僕が掴んだなら、君はポッター達を捕まえるのに精一杯努力するし、反対するであろうダンブルドア共々、このホグワーツから追放するよう最善を尽くす。今の君の話を踏まえれば、そう信じて良いんだな？」

淡い灰色の瞳をじっと見つめる。

しかし彼は視線を逸らさない。その様子を暫く眺めた後、僕は答え

た。

「——その場合は勿論、君の希望通りにしよう」

教育令第二十五号

十一月に入るといふ事は、ホグワーツが騒乱の時期を迎える事を意味する。

何故かと言えば、勿論クイディッチシーズンの開始が原因だ。

去年は三校試合によって全面的中止となったが、今年はそんな事も無く、例年通りに行われると発表されている。そして一年間が空いたせいか、はたまた生徒が大きく二分されている陰鬱さを反映しているのか、寮間でのいざこざは今まで経験した三度の何れよりも激しいようだ。特に開幕戦がグリフィン対スリザリンという事も有つて、怪奇現象の観測には事欠かない。

廊下で突然足がくっついて転ぶ人間。階段で何の前触れも無く卒倒する人間。図書室で髪や眉や歯や舌が突然伸び出す人間。食堂で全身が赤くなったり羽根だらけにする人間。

やはり魔法族は前時代的な凶暴さを引き摺り過ぎで、ホグワーツは杖を振る事を学ぶよりもまず先に、理性と倫理、そして文明人とは何かを学ぶべきである。

しかも今から既に憂鬱なのだが、これからも暫くは騒乱が続く事は確定している。開幕戦が終わるといふ事は、スリザリンかグリフィン・ドールに黒星が付いて新たな火種が生まれるのと殆ど同義なのだから。ドラコ・マルフォイとハリー・ポッターはどちらも引き分けて満足してくれないものだろうか。

とはいえ、そのような騒乱——それと片っ端から失神呪文を掛けてやりたくなる衝動——を除けば、僕にとってクイディッチシーズンは近づく事は、殊更特別な注意を払うものではない。そして今年は気にしている暇がない程度には忙しかった。

「……随分と下級生に慕われるようになったな」

「……………君にはそう見えるか」

鷲掴みにした杖をぞんざいに振り、防諜呪文^{マフリアート}を解いていた所に掛けられる声。

相も変わらず不機嫌そうなドラコ・マルフォイは、僕ではなく、去

り行く二年生の背中を見ていた。彼女は、つい先程まで僕の指定席で相談をしていた生徒だった。

「正確に言葉は使うべきだな。慕われているのではない。面倒事を押し付けられているのであり、体よく利用されているのだ」

精神的な疲労を強く感じつつ、肩を回しながら息を吐く。

その金色の髪が濡れている所から伺うに、クイディッチの練習帰りか。敗北が許されない一戦が近い事もあって、彼はやたらと神経を尖らせているようだ。

もつとも、そうなっている一番の原因は、こないだ階段から落ちかける「事故」が発生したからかもしれない。勿論、スネイプ教授がその後、グリフィンドール生を減点する光景とセットである。誰もかれも四年も繰り返し返して良く飽きないものだ。

「高等尋問官殿の一件以降、僕の所に相談を持ち掛けて来る変わり者が現れた訳だが、ここ最近は更に酷くなっている。聞く所によると何処かの監督生様の御指示のようだ。一々自分に問題を持ち込んで来る前に、まず僕へと相談を持って行けとな」

「……効率的では有るだろう。わざわざ僕が関わる必要のない事も多い」

「嗚呼、それは認める」

些事については取次役の段階で却下し、重要事だけ上役に話を持っていくのが効率が良い。

ドラコ・マルフォイの行いは賢明で、支配者として正しい振舞いだった。

「そして不平を言つては居るが、別に止めろと言っている訳では無い。ナルシッサ・マルフォイ夫人からも、今年は君の事を良く助けて欲しいと頼まれている。君が余計な御遊びにかまけていないのであれば、監督生業務の下請けに甘んじるなど何て事は無い」

「……君は父上の命令を聞く気が無いのに、母上の命令は聞くのか」

「命令では無く御願いだからな。歯向かう道理が無い」

「詭弁だろう」

「なら、君が夫人に直接言うか？ 君の頭を超えて僕に命令を下すな

と」

「……………」

ドラコ・マルフォイが黙り込む。

家庭で真に権力を持っている者が誰かというのは、彼も理解している。

「まあ、夫人の言葉全てに従う気は勿論無いとも。しかし、断る事が道理に反する頼みというのは有るし、コレはその類だ。君の将来を思つての言葉だから無碍にも出来ん。この間も言つたと思うが、君のO. W. L. のサポートこそが今年の僕の最優先事項だ」

「……………そう言う割には、随分と色々な事に首を突っ込んでいるようだが」

「とぅいづとっ…」

「……………さっきの話の続きだ。下級生の頼みを聞いてやっている」

嗚呼、そういう意味かと頷く。

色々と表現するから何かと思えば、雑事を色々しているという意味か。

去年と違って今の所は何も企み事をしていないのだし、疑いを持たれる真似自体もしていなかったと思つたので、少しばかり驚いてしまった。

「確かに色々では有るな。宿題や授業、選択科目に関する質問。喧嘩の仲裁、恋愛相談。遺失物の搜索に寮内備品の修理や蔵書の処分。家系図の整理に親子間の確執の解決。迷子探しにペットの躰、雑誌のクイズへの解答、そして後輩達のハロウインの飾付けの手伝い。良くもこれだけ出て来るものだ」

「……………そこまでとは思っていなかったし、割と変なのが紛れ込んでいないか？」

「持ち込んでくる方に言え」

「……………絶対に君が受けるのが悪いと思うぞ」

阿呆を見る目を向けつつそう言えるのは、ドラコ・マルフォイが強い立場の人間だからだ。

しかし僕は違う。たとえば下級生だろうが純血が持ち込んで来れば

何も言えないし、家系的に怪しかりうが有力者が親族に居る相手には何も言えない。更に本人が大した事無かりうと、友達としてその辺りの人間を引き連れてくればやはり何も言えない。

「まあ、余りにも下らん内容は却下している」

あくまで僕は本来の監督生、ドラコ・マルフォイの代わりでしかない。

「何より僕の所に来る問題の中に、真に深刻な物はないのだ。あからさまに『純血』向き、或いは高貴な相談者は、君の所に直接行く。手に負えない領域の問題が来る事も有るが——最近で言えば、怪しげな家系図云々はそれだったが、怪しいが故に『純血』に直接持ち込めない問題では有ったし、最後には君に任せましたしな」

僕に回ってくるのは殆どが雑用に近い、『純血』に相応しくない部類の仕事。他からは眼の届きにくい、裏方や寮内の範疇の仕事と言い換えても良いだろう。

ドラコ・マルフォイ達とて監督生の肩書を負わされた身である以上、教授の眼が有るような表向きの仕事は彼等がやるし、家名をもつてせねば解決出来ない大事が発生した場合には当然ながら彼等の出番である。

それすら面倒がる人間はそもそも監督生に任命されないし、逆にそのような問題解決能力が無い人間は、内々で監督生の地位を剥奪され得るのがスリザリンという寮であった。

「……しかし、それにしたって君の関わり方は度が過ぎているように思うけどな」

「そうは言うものの、誰かがやらない限り問題が残されるだけだろう？」

ドラコ・マルフォイは割合面倒見が良い方だが、あくまで『純血』の中でという部類であり、細々とした雑務を処理するのが得意な質では無い。

また、ドロレス・アンブリッジの時のように、『純血』が出て来た方がややこしくなる問題というものも有る。実際、この立場になって見て解った。高貴な方々の御手を煩わせたくないと思える問題とい

うのは、余りにも多く転がっている。

「それにこの四年間、スリザリンに、そして諸先輩方には割合良くして貰ったとは思っている。ならば、その分を多少は後輩達に返しても罰は当たらない？」

「……僕の眼には、君が好意的に扱われていたとは思えなかったんだが」

「君が温室育ち過ぎるのだ」

居心地が良いと手放しに言える環境でも無かったが、それでも寮生活で致命的に困った事が一度も無い。それは確かな事実だった。

「……そう言えば」

「何だ？」

「今週末クイディッチの試合が有るが、君は応援に来るのか？」

話題を変える枕詞と共に一拍開けて紡がれたのは、随分と唐突かつ奇妙な問い。

「……行くつもりでは有るが、それがどうかしたのか」

ドラコ・マルフォイの眼を見ても、質問した内容以上の企みの気配は発見出来ない。

「そもそも一昨年までは基本的に毎試合行っていた筈だろう？ 他寮の試合を見に行くまで熱心になれずとも、流石にそこまで僕も無法では無かったと思うが」

「……い、いや。しかし君は露骨にクイディッチに興味が無いだろう？」

「まあ入学時よりは興味を持っているが、それでも一般的な魔法族程には及ばんな」

あのスポーツに対する熱狂度は、どんなに努力しても一切共感出来ない部分である。

「そして一々見に行かずに済むというのであればどれ程楽かとは思いますが——まあ、一応スリザリンに所属させて貰っている以上、そうはいかんだらう。今回グリフィンドール戦で君達がやろうとしている事も知ってはいるものの、僕を巻き込む気は無さそうだからな」

無意味に一致団結を要求して来ない分、やはり気楽なものだ。

「だが、君が言い出した所をみると何か問題が有るのか？」

「……そうではないんだが、その、君が忙しそうだと思つて」

「だから応援に来なくて良いというのか？ 君の好意は有り難く思うが、数十分時間を潰されなくなった所で何かが変わる訳でもない。それが数時間でも同じだ」

クイディッチ狂いは生徒に限つた事ではない。教師もまた同類の集まりである。

だから試合日が近付くと宿題の量を筆頭に、生徒の負担が明らかに軽くなる。終わった後は遅れを取り戻す為に増えはするものの、全体的に見れば楽になっていく位だった。

そう言ったものの、ドラコ・マルフォイの表情は晴れなかった。

「しかし、君はスニッチを取れば終わるスポーツの何処が面白いんだと考えている口だろうか？」

その言葉に溜息を漏らす。

……一体誰から吹き込まれたのやら。

“マグル”について学べと言つた記憶はあるが、そういう意味ではない。

「そんな人間にはこう言い返したまえ。ボールを持っていない オフ・ザ・ボール時の十人がダラダラ走っているのを眺めていて、一体何が楽しいのか、と。得点に余り関わらないデイフェンダーのポジションは全て撤廃した方が良いんじゃないか、でも構わないぞ」

熱狂的なファンならば、恐らく顔を真っ赤にして反論してくれるだろう。

「……僕がそんな事を言う機会は未来永劫無い」

「ならそもそも馬鹿げた質問をしない事だ。僕が必要以上の熱意を持ってないのはスポーツ全般であつて、クイディッチに限るものではない。それに——」

「それに？」

「——考え過ぎだろうとは思うのだが、已むを得まい」

これまで、クイディッチでは“何事”かが起こつて来た。

一年目ではクイリナス・クイレル教授が箒を操作した。二年目では

屋敷しもべ妖精ドビーがブラッジャーを操作した。三年目では吸魂鬼がハリー・ポッターを叩き落した。

この恒例行事を踏まえるに、やはり観戦を面倒臭がっている場合では無いのだろうと思う。しかも今年のハロウインは何も起こらなかった。本当に、事件が起こっていた方がマシというのは、ハリー・ポッターの悪い部分だった。

「まあ僕の心配をするような暇が有るならば、君はさっさと机に向かいたまえ」

物言いたげなドラコ・マルフォイに対し、言葉を続ける。

「君が帰って来たという事は、クイディッチの練習が終わったという事だろう？ O. W. L. までもう七ヶ月しか残っていないのだ。君は勉強する事こそが本分であり、君が僕を困らせたり、僕の仕事を増やしたくないと少しでも思うならば、それが一番助かる」

「……」

「明後日の呪文学の宿題は君の机の上。この間返却された『毒薬の各種解毒剤』についての完答も、作成して既に置いている。——嗚呼、暫くしてテストもするぞ。質問に行った時のスネイプ教授の口振りで今年出題されるかもしれないと言う事だし、良問は何度解いても解き過ぎるという事は無い」

「……君はもつと他人に無関心かと思っていたが、案外口煩いよな」

「そのようだ。しかし恐らく性分だろう」

三年間と一年間、口煩い女性達が傍に居続けた事に責任転嫁するつもりはない。

全く影響を受けていないかと言うと、流石に嘘になるだろうが。

そして土曜日のクイディッチの試合。

そこでは案の定、盛大に問題が起こってくれた。

もつとも、そこで起きた「事件」は予想した方向性と全く違い、ホグワーツが未だ平和である証だったのかもしれないが、それにしたつ

て憂慮すべき事態であるのは変わりない。場合によってはマルフォイ家に対する直接の報告と、彼等からの叱責は覚悟すべきであろう。しかも、事件後に医務室送りになってからのドラコ・マルフォイが捕まらない。

あの程度の怪我なら医務室に行けば数分も掛からず治せた筈で、何なら競技場で杖の一振りでも治せた事だろう。

しかし、彼は医務室から出て来ず、用事を済ませて戻ってくれば去った後で、漸く彼を捕まえる事が出来たのはもう日付が変わろうとしている深夜。眠り着いた生徒を邪魔しないよう灯りの大半が落とされ、僕以外には一、二名程しか人間が残っていない談話室での事であった。

「――兎に角、座りたまえ」

人目を避けるように腰を屈めつつ入口を潜ってきたドラコ・マルフォイはビクリと震えたが、僕が待っていた事は察したのだろう。そして逃げる選択肢も無いと感じたらしい。僕の指定席に大人しく近寄って来て、既に用意していた椅子におずおずと座る。

談話室から殆ど人が消える今まで姿を見せなかったのも、今の彼がバツの悪そうな顔をしているのも、まあ、今日起こった事からすれば已むを得ないだろう。

これでハリー・ポッターとのクイディッツ開幕戦は三戦三敗、その上で衆人環視の中あんな目に遭えば、人の目を避けたくもなる。間違はなく自業自得だった事だろうとは思うものの、それでも全く同情を抱かない訳では無い。

「……前から思っていたが、ここで話をして盗み聞きされないのであるか？」
口を開いたのは彼が先で、予想通り、今日の事件への言及を先送りしようとする言葉。

周りが気になるのか、落ち着きなくキョロキョロしている。机の上に置かれた魔法具は、彼の青白い顔を余計に青白く染めていた。

「盗み聞きが可能か否かと聞かれれば可能だな」

「呪いに対しての逆呪いが存在するように、この防諜も魔法具や他の

呪文によって効力を打ち消せはする。寧ろ、それが不可能と考える方が可笑しい」

絶句しているドラコ・マルフォイを他所に、当然だろうと思いつつ説明を続ける。

魔法は多くの事が出来るが、決して全能では無い。

「だが僕は誰に対しても話す事を強制している訳でも無く、聞くとなれば最大限の配慮はしている。まして杖や魔法具での盗み聞きに気付かない程、鈍感であるつもりはない。そもそも場所を変えると、今から重要な話をすると言っているようなものだろうに」

結局、何処で話そうとも誰かに聞かれる危険は変わらない。

であれば、それが談話室であろうとも一向に構わないだろう。そもそもこの程度の危険で口煩く言ってくるような気位の高い人間は、わざわざ僕の所に問題を持ち込んで来ない。

「何より、今何時だと思っている？ 君は懸念し過ぎだ」

先程までは七年生が残っていたのだが、既に談話室に姿も見えない。明らかにドラコ・マルフォイが帰って来たのを見て去ったあたり、関わりたくないとは感じたらしい。

後はもう一つ。

「……………」

ドラコ・マルフォイが帰って来た後すぐ、僕には寮の入口が再度開いたように思えた。

しかし、入って来たような人間は何処にも見当たらない。

そして姿が見えない以上、勘違いと看做するのが普通ではある。

ホグワーツの教師は傷心し切ったドラコ・マルフォイを見逃す事はあれど、それ以外の生徒を見逃しはしない。だから寮外を出歩く事が不可能な時間に外から誰かが入って来る事は有り得ず——けれども、彼は割合面倒見が良いのだ。

「……………今日の事について、君は何か言わないのか」

口を開く際、ドラコ・マルフォイは防諜呪文マフリアートを掛けているのかと聞かなかった。

「言いたい事は有る。が、君は求めていないように見えたからな。し

かし——ずっとこうして居ても仕方が無いのも確かか。怖い人間が見回りに来ても問題だしな」

羊皮紙の上で羽ペンを滑らしながら答える。

僕がドラコ・マルフォイと視線を合わせないのは、面倒臭さによるものではなく、今回は意図的なものである。視線を合わせない方が話しやすくあろう。

「君は当然知っているだろうが、今回の事件の全体像を把握した後、僕は君を探していた。勿論、今後の方針を君から聞く為にだ。アレを大事にするならば、どうしたって君の協力が要るし、それも早い内に行動に移る方が良かったからだ」

「……………」

「けれども、君は捕まらず——そして君が僕を避けているらしい事に気付いた時、僕はこうして待つ事を選択した訳だ。実際、その選択は正しかったように思える。今の君は、絶好の機会がやってきてくれたと喜んでいる風には見えないからな」

「……お前が一体何を言っているか解らない」

「そうか？」

ドラコ・マルフォイの方を横目で見る。

その眼も表情も、俯いているせいで何えはしない。

「ならば、丁寧の一つずつ話を進めるとしようか」

視線は羊皮紙に落としたまま、改めての整理も兼ねて今日の出来事を回想する。

「僕は君達の遣り取りに最初から注目していた訳では無いし、遠目ではか事件を見られなかった。しかし競技場には居たのだから、事件の全貌を把握する事は出来た」

わざわざ応援に行った甲斐は有ったのだろうか。

勿論、決して嬉しい気分になれはしなかったが。こないだ思った事も撤回だ。何も起こらない平和なホグワーツの方が余程マシだった。「ハリー・ポッターがウィーズリーの片割れと二人がかりで君を殴った事。それもマダム・フーチから止められるまで殴るのを止めなかった事。そして事件後に別室へと連れて行かれたグリフィンドール三

人に下された処分の事。それらは既に全校生徒が知つただろうが、僕もまた例外では無い。特に最後については、ドローレス・アンブリッジが伝えに来てくれたからな」

「……………」

「そして、彼女の言葉を受けた僕の感想から述べるべきだろう」

ドラコ・マルフォイが解らないというなら、そこから始めなければなるまい。

「彼女からそれを聞かされた時、僕は当然こう思った」

僕を訪れたガマ蛙の顔は歓喜に満ちていたが、僕には溜息しか洩れなかった。

「——何故ドローレス・アンブリッジは、ハリー・ポッターを退学にしなかったのか、と」

喉を鳴らしたドラコ・マルフォイの反応を、僕は慈悲の下に気付かなかった振りをした。

まったく、つまらない保身に走るのは魔法省役人の習性なのだろうか。

あんな下らん学生組織に対して退学処分の威嚇をしたのに、しかし暴力事件には学内で終わる程度の生温い処分を下してしまう。腰抜けで、日和っている。今回もまた、彼女は「巨悪」と戦おうとしなかった。

「如何なる挑発をされようと暴力行為に及ぶのは文明人の振舞いでは無く、ましてや二人がかりなど言語道断である。このような悪辣な人間をホグワーツに置き続ける事は他の学生にも悪影響を及ぼすのであつて、故にハリー・ポッターは退学にされるべきである。これは非常に苦しい理屈では有るが、それでも一定の名分を認め得る主張だ」

「……僕はそんな事を聞きたい訳じゃない」

「そうか？　今までの方針からすれば、君は僕にそれを求めていたのだと思っていたが」

ドラコ・マルフォイが教育令第二十四号の問題を取り上げたのは記憶に新しい。

そして、ハリー・ポッターを退学させられるならば、手段を問わな

いとも思っていた。

「奇しくも教育令第二十五号が既に出ていた。『ホグワーツの生徒に関するすべての処罰、制裁、特権の剥奪に最高supreme authorityの権限』を持つ。その文面を素直に解釈し、高等尋問官が自身の権限に基づいて、生徒への罰則として退学処分を選択した。仮に文句があるならば、どうぞワイゼンガモット裁判所へ。高等尋問官の権限の有無を含め、処分不当であるか否かは公開法廷で判断して貰おうではないか——そんな理屈は、別に通らん話では無い」

呪文によつて一瞬で治療が出来るという事は、決して暴行の罪が軽くなる事を意味しない。

何せ肉体的暴行が齎した心理的傷跡を治す事は、魔法をもつてしても尚、限界がある。歴史的に見て、魔法族を最も多く壊してきた道具とは決して杖では無かった。『マグル』の用いる拳やナイフこそが魔法族、特に幼い子供達を傷付け、事実上の死を齎してきた。

「夏休暇中の吸魂鬼襲撃裁判、あの際アルバス・ダンブルドア校長は言った。ホグワーツにおけるハリー・ポッターの態度は『本件とは無関係』だと。これは彼の不品行を取り上げて有罪判決を得る事を目論んだ魔法大臣を咎めた言葉で、それはやはり、彼が正しい」

校外での杖の不正使用云々に、校内の事情を取り上げる必要は無い。

「しかしハリー・ポッターの退学処分事件についての裁判をやるのであれば、彼の素行不良が無関係という理屈は通らない。高等尋問官殿が退学処分を下した正当性は、君に対する暴行事件のみならず、ハリー・ポッターの行動の一切合切を踏まえた上で判断される事になるだろう」

品行方正な生徒の初犯と、素行不良の生徒の再犯。

両者の処分に軽重の差異が生じるのは至極当然の話である。

「そして彼の素行を知らない裁判官に退学の是非の判断をさせようとすれば、当然ながら素行に関する証拠を提出しなければならぬ。つまり、ハリー・ポッターの退学を正当化しようとすれば、裁判所において四年間の彼の素行を総浚いする事は必須だ」

彼の素行不良を証明する証拠——証人となるのは、勿論スネイプ教授。

立場上教授はその要請を断れないし、そして教授は校長と同じくハリー・ポッターの生存には関心があるようだが、しかし校長と違って彼をホグワーツに留める事には関心が無いだろう。

「僕の個人的な意見はさておき、『生き残った男の子』に厳正な処分がされてきたかは確かに議論の余地がある。また裁判をやれば、あの校長にとって都合の悪い事が多く露わになるのは確実だ。だから、今回法廷に紛争に持ち込んでやるのは一つの手だったのだが——」

そして結果がどうあれ現在の魔法界において恰好のゴシップになるのは間違いなく、ハリー・ポッターが纏う『^{イメージ}幻想』を失墜させるにも十分であつたのだが。

「——ただ、それでも高等尋問官殿は彼等を退学にしなかつた」

何度思い返しても、本当に溜息しか洩れ出て来ない。

子供のやった事ならば許されるという甘つたれた論理を、彼女は踏み躪ろうとしなかつた。

「教育令第二十五号では、高等尋問官に対して生徒への退学処分権を授与したと解釈するのは苦しいと判断したのか。それとも今回の事案では退学まで持つて行けないという、珍しく正気の判断を下したのか。どちらにしても、御行儀が良過ぎだ。権力の使い方をしらない。わざわざハリー・ポッターから隙を見せてくれた以上、やはり踏み込むべきだったろうに」

もつとも、彼女が大それた事が出来ない人間であるのは十分承知していたが。

本のページを左手で捲りながら、自嘲と揶揄が半々の感想を紡ぐ。

「……君にとってアンブリッジは小物か」

「ああ。彼女が高等尋問官に就任してからもう一か月と三週間経つんだぞ？ 趣味にかまけて本分を疎かにしている人間を、大した人物と呼ぶ事は決して出来んよ」

「一か月と三週間？ 趣味にかまけて……？」

「何故そこで不思議そうな反応を返すのか解らん。こんなのは自明

だろう」

劣化によって掠れた文字を丹念に読み取りながら、溜息を吐く。

「僕が高等尋問官ならな、既にカスバート・ビンズとシビル・トレローニーをクビにしている」

当然のように、与えられた合法的権限に基づき、期待された職務を適正に遂行している。

「闇の陣営は現時点での教育改革に興味が無いが、魔法省にとってはそうではない。高等尋問官就任のニュースを見た保護者や卒業生も同様だろう。そして亡霊歴史学者とインチキ占い師を排除する事に良心の呵責など感じない。どちらも教える能力が無く、生徒が唯一学べるのは、大人は割と適当に仕事をやっているのだなという点だけだ」

「……………」

「もう一人の問題教師、ルビウス・ハグリッドについては今の所不在ではある。しかし彼女の思想的にあの半巨人をクビにするのは規定路線だし、別に彼が居なかつたらと解職に向けた証拠集めは可能だ。これまでの二年間どんな授業をしていたかを生徒から聞き取るとかな。その上で彼の復帰を待ち、半巨人基準の授業をやりやがった瞬間に即クビにする」

一応ルビウス・ハグリッドは去年の後半から、正しくはウィルヘルミーナ・グラブリー・ブランクの授業が終わって以降は割と適切な授業をしていた訳だが、まあ全体的に見れば教授失格の烙印を押すには十分だろう。去年の反省が今年に生かされて無ければ酌量の余地も無い。

「しかし、彼女はカスバート・ビンズの査察に赴かず——全ての寮、学年で目撃されていないと聞いている——シビル・トレローニーの方にしても、停職候補に留めるなどという生温い真似をしている。ルビウス・ハグリッドについても嗅ぎ回っている気配はない」

その三名は何れも悪名高い授業担当者であり、解雇した所で大きな問題は生じない。

一部の生徒は反発するだろうが、スリザリンに限らず、グリフィン

ドールですら彼等の授業に不満を持っている生徒は多い。如何にドローレス・アンブリッジが嫌われていようと、彼等の解職決定に関して絶対的多数の支持を得られはするだろう。特にカスバート・ビンズとシビル・トレローニーの酷さを身をもって知って居る人間は、卒業生にも居るのだから。

けれども彼女は非常に呑気である。

学生時代から抱き続けた醜い支配欲。自分を蔑ろに扱って来た「ホグワーツ」に対する復讐心。それを満たす気が本当に有るのかと疑いたくなる程に。

「……君がせっかちなだけだろう。まだ、二ヶ月だ」

「かもな。だが有能さを測る尺度の一つは、仕事を終える速さの筈だろう?」

解職は非常に重い処分だ。それを下すには慎重に手続を踏み、改善勧告をしても尚改善しない場合にのみ解職させるべきである。そんな考えは一応——否、それこそ正義なのだろう。

しかしながら、彼女はそのような保身の下に仕事を遅らせている訳ではない。

ドローレス・アンブリッジは授業と呼べるものをギリギリまでしな
いだろう。

そう言ったのはドラコ・マルフォイだったが、その彼の言葉を借りるならば、彼女はシビル・トレローニーとルビウス・ハグリッドをギリギリまで辞めさせようとしないだろう。

せめて魔法省に忠実に動いていればまだ敬意を抱けるのだが、この有様では無理な話だ。

「……なら君はアンブリッジに言わないのか? その……さっさと仕事をしろって」

「言つてどうなる? 権力を楽しんでいる人間が聞くとは思えん」

僕の言葉を唯々諾々と容れる程、彼女は従順でもないだろう。

「そして君が疑念を差し挟んだように、僕の判断が絶対的に正しい保証は無い。そもそも生徒風情が口出しする事でも無い。そのような出過ぎた真似は明確に秩序に反する。『上』の希望が有るならば彼

女を黙らせられるが——音沙汰も無いのだろうか？　なら、現状は好きにさせているという事だ。彼女を叩きのめす正当性というのは僕には見付けられない」

「……………」

まあ教育改革が闇の陣営にとつて現状どうでも良いと言ったのは僕ではあるが、それにしても、もう少し興味を持っていてくれればと思わないでもない。しかしそれは感情的なモノで、呑める程度の不愉快さに過ぎない。

「高等尋問官殿の事は良い。彼女は何れホグワーツから消える。それが校長の意思によるか、それとも闇の帝王の意思によるかはまだ解らないが」

ともあれ、本題だ。

「——必要が有るから聞くのだが、君はする気か？」

「…………何をだ」

「勿論、ドローレス・アンブリッジに処分の訂正をさせる事だ」

決まり切っているだろうと、僕は続ける。

「今回の暴力事件を起こしたハリー・ポッターは当然退学に処されるべきである。そう主張して、アルバス・ダンブルドア校長との対決を彼女に促すつもりが有るのかと聞いている」

退学まで持つて行ける可能性は殆ど無い。

しかし、試みるのが徒労だという程に無価値な行いでも無い。

「つい先日、僕は曲がりなりにも君と約束したからな。彼等を『追放するよう最善を尽くす』と。あれは教育令第二十四号に関する話では有ったものの、根拠法令が違うからと言って約束していないというよな事は言わない。君が覚悟を決めるなら反対はしない」

「……………」

「二応その行為に及んだ場合の展望を話しておく、あの校長の反対が見えている以上、彼の退学はすんなりとは行かない。十中八九、ハリー・ポッターの退学の是非は裁判に掛ける事になる。寧ろ、その道を選ぶことこそが勝機とも言える。再度馬鹿げた裁判をわざわざ行う利点はな、審理過程で彼等を叩ける点にこそあるからだ」

吸魂鬼襲撃事件において、ダドリー・ダーズリーを証人喚問するという仮定と同じだ。

最初から負ける気でやるつもりはないが、勝たなくとも問題は生じない。

「つまりこの四年間のあらゆる事象をもつて、彼等の名誉と名声を失墜させる事に全力を尽くす訳だ。たとえば一年次末の『飾りつけをちよいと変えねばならん』とかいう戯言にしても、あの校長がハリ・ポッターとグリフィンドールを鼻屑して来た証拠の一つとして十分使える。主張の持つて行き方によっては、校長を自ら辞任に追い込む事すらも可能——」

説明を続けつつも全く反応が返って来なかったので、横目でドラコ・マルフォイを見る。

そして大きく息を吐いた。呆れの溜息だった。

「——君な、この期に及んで恥ずかしいとか言うのか」

「！ 君は他人事だから良いがな——！」

「時間が時間だ。音量を落とせ」

「……裁判になるなら、今回の事件が公式記録に残るんじゃないのか？」

大きく深呼吸をした後で、顔を屈辱に染めたままの彼は言った。そして僕は頷く。

「今日の暴行に対する処分として退学が適切かを判断するのだから、当然裁判所で詳細に聞かれる事になるな。暴行に至るまでの経緯、暴行の態様、それによって齎された怪我の程度等々。被害者である君は証人として呼ばれる公算が高い」

魔法界では召喚しないという事も有り得そうだが、出頭を望めば断られはしまい。

「そして記録どころか記憶にも良く残るだろう。この裁判は今世紀で最も阿呆な裁判エピソードⅡであり、しかも判決理由の中身次第では、今後生徒の退学が問題になるような事態が生じた度に、一々先例として持ち出される事になるかもしれない」

「……どう考えても大恥じゃないか」

「何十年後かに勇者として評価される可能性も僅かに有る。そもそもヒップグリフの時も君は弱い振りをしたのだし、彼等を貶められるなら安いもの——」

「——僕は——」

談話室にドラコ・マルフォイの大声が響く。

誰かが飛び起きて来るかもしれない。そんな懸念は、彼の頭から抜け落ちていく。

「お前の！ 趣味に！ 従う気は！ 無い！」

半ば自棄になっっているようでも有ったが、彼の意味は堅いようだ。絶対に従ってやるものかという決意を感じる。そして、彼は大いに勘違いをしている。

「そうか。君が不要だというならそうしよう」

「……………」

「……………」

「……いい、良いのか？」

「悪い事が何処に有る？」

素直に引つ込めた事が余程意外だったのか。

途端に気を使う素振りを見せ出した彼に軽く笑う。

「君は既に教育令第二十四号についての遣り取りを忘れたようだが、僕はそもそもこの手の策謀に反対する側だぞ？ O・W・L.のあの今年は無意味に時間を浪費する暇など無い。この立場は基本的に変わっておらず、前回の約束が無ければ先のような事を言っていないのだ」

万一ドラコ・マルフォイが許可を出した場合に生じるであろう厄介事は、検討するだけで頭痛を齎すには十分だった。

「裁判沙汰にするにしても、実行に当たって問題は多い。既にドロレス・アンブリッジが一応の処分を下しており、これを変更するといふのは——クイディッチ禁止が事実上執行されていないとはいえ——揉めるだろう。また、コーネリウス・ファッジが何処まで協力してくれるかにも左右され、審理を投げたウイゼンガモットがどう反応するかも読み切れない」

そして言わずもがな、と続ける。

「最大の問題は、暴行事件程度では絶対に退学にならんという事だ」

これが良い事なのか悪い事なのか。

この点に関しては、僕も判断を付けきれない。

「これは非魔法界だろうが魔法界だろうが変わらない。現時点ではな。だからハリー・ポッターへの退学処分が妥当だという判決を下させようとする場合、汚職裁判官は必須だ。そこまでの状況を用意するのは、ルシウス・マルフオイ氏の力を最大限使えた場合でも厳しいだろう」

あの吸魂鬼襲撃事件。有罪判決も裁量の一つとして有り得た裁判とは違う。

たかが子供の喧嘩を口実として退校処分を下すのは、誰の目から見ても言い訳の利かない不正裁判であり、それを躊躇わない人間がどれだけ居るのか怪しい。

やってみなければ解らない部分が有るとは言っても、先行きが余りにも不透明過ぎるのだ。ドラコ・マルフオイの名誉を賭金とするには、やはり二の足を踏む。

「寧ろ君が引つ込めた事にホツとしている。……嗚呼、ならばやるとか言ってくれるなよ。今更撤回するのは無しだ。その場合はやはり止める」

本人の意欲がこの程度では、何処かで失敗する事が目に見えている。変に彼が意地を張り、見切り発車を求められる方が迷惑だった。

「……そんな事はしない」

「なら僕はこれ以上言う事は無い。この話は終わりだ」

ベッドに戻っても構わない。

その意味も籠めて言ったのだが、ドラコ・マルフオイは椅子から微動だにしなかった。

「……………いや。僕には言う事が有るぞ」

ほう、と視線を上げる。

彼の灰の瞳に浮かんでいる挑戦的な光は、割と嫌いでは無かった。

「君は裁判云々について趣味という部分を否定しなかったな」

「……そうだな。心当たりは有る」

「その一方で、君はポッターが違法なクラブをやっているかには興味が無さそうだった」

「それも当たっているな」

余り意識しては居なかつたが、確かにスタンスは違う。

教育令第二十四号は退屈極まりない省令だったが、しかし今回の教育令第二十五号、というより、些細な暴行事件を大炎上させてやる事には強く惹かれた。

ドラコ・マルフォイの指摘は適切な物で、否定し得ない事実である。

「君は僕のしもべの筈だろう……！」

「……………」

「なのに僕に恥を晒させる事には積極的で、しかし僕が功績を上げる事には消極的だった。長々と屁理屈を述べたてて、僕に従わなかつた！ どっちも同じようにポッターを退学出来るにも拘わらずだ！

その違いは一体何処に有る？ やましい事が無いなら答えてみろ！」

魔女に与える鉄槌

ドラコ・マルフォイは当然ながら、僕が開心術士である事を知っている。

だが、彼は余り僕から視線を外すような真似をしない。確かに警戒しても仕方ない事であるし、正確な知識を持っていれば警戒し過ぎる程の事では無いというのもある。開心術は基本的に嘘発見器、兼感情読取装置を超えるものではなく、それ以上の事——相手の思考や思い描く映像を読み取れる場合もあるが、常にでは無い。そしてそもそも百パーセントの精度を期待出来るものでは無く、信用し過ぎるのも微妙だというのは、スネイプ教授の立場を見れば明らかである。

しかし、彼が視線を外そうとしない理由がそんな賢明さに基づくものではない点、現実から目を背ける蛮勇に基づいているらしいのは面白い所だ。彼は僕に舐められまいとして視線を逸らす事を拒否し、その気性の荒さは時折好ましく思える場合が有る。

「別にやましい事は無いな。趣味も否定しまい。やる気や積極性に差異があるのも確かだ」

それらについて、ドラコ・マルフォイの指摘に間違いはない。

「けれども、その両者を同じと思っているならば不正解だ。別にハリー・ポッター達が殴った相手が君で無かろうと、僕は同じ事を提案していた。今回よりは強く止めただろうが」

自分の身に起こった事で無ければ、ドラコ・マルフォイは喜々として大事にしようとしていただろう。制止する労力も比べ物にならない筈だ。その方が都合が良かったと感じなくてもないが——まあ、やはり止めたと思われる。断言出来ないのが辛い所だが。

「……なら何故何も説明しない」

「比較対象が無い以上、君に説明する必要が無かったのというのが一つ。最大の理由は、敢えて白状するなら一々説明するのが面倒だったからだだろうな」

「ふざけるな……！」

「ああ、君がそう反応するのも尤もだ。だが僕が過去に語らなかつたのがその程度の理由だという事は、今だんまりを決め込む理屈も無いという事だ。まあ、余り信用されない身であるのも自覚している。ここで君が知っておいた方が僕にも利益となるかもしれない」

視線を合わせないままで居る理由も既に無くなった。

羽ペンを置き、本を閉じる。時間ももう遅い。『勉強』を終えるには良い頃合いだろう。

椅子を軽く動かし、ドラコ・マルフォイへと改めて向き直る。彼は僕を睨みつけたまま視線を外そうとしない。心を読まれて困る物など一切無いと全身から主張していたし、そこまで開き直ると読みにくいものだ。そしてそもそも、読む気自体が無い。

「両者の違いを簡単に言えばな、未来に繋がるかどうかだった」

「……未来？」

「そうだ」

軽く頷き、右手で杖を振る。

机上の本も羊皮紙も、綺麗に整頓されて片付けられた。

「仮定の話。教育令第二十四号を用い、ハリー・ポッターを退学に出来たでしょうか」

彼は未だ御執心らしいので、その点に最初に触れる。

「だがな、それでは何も変わらないのだ」

そう、何も変わらない。

将来に期待を懸け得る変革など起こりやしない。

「ハリー・ポッターに一時の屈辱を与える事は可能だが、それだけで終わる。ドロレス・アンブリッジが居なくなれば当然ハリー・ポッターは戻ってくる。そしてその際、グリフィンドールは拍手喝采で彼を迎える事だろう」

「……アンブリッジがホグワーツに留まりさえすれば、ポッターは帰って来ない」

「その場合でもハリー・ポッターは『グリフィンドール』だよ。退学にされたまま卒業を迎え、彼一人が卒業式に出られなかったとしても、彼等は変わらず寮の一員として扱う。君も既に納得してしまつて

いるように、あの教育令は難癖だ。秘密結社の結成程度で放校処分を受けたなんて、魔法界では自慢にしかならん」

非魔法界の流儀では肯定出来る可能性が有る。

だが、魔法界は違う。この世界はそれ程先進的ではない。「ならば暴行事件も左程変わりはないだろうと、そう君は言うかもしれない」

反抗心を露わにする視線を受け止めながら、僕は肯定する。

「事実、今回裁判をやったとしてもハリー・ポッターを退学に出来る可能性は低い。けれども、如何にグリフィンドールとはいえ、人を殴る事が悪いと理解する程度の脳味噌はある。まあ気に入らない奴を叩きのめした事を武勇伝として吹聴する風潮もまた有るが——」

「——なら、やっぱり意味無いじゃないか」

「二度目はな。しかし、裁判で吊るし上げた後の二度目は違う。今度同じ事をすれば退学だと、そのように公開の法廷——ホグワーツ外で明確に宣言された後の不始末。ホグワーツ生活は後二年半程残っている訳だが、その中で万一彼が君を傷付けるような真似をすれば、ハリー・ポッターへの扱いは全く変わってくる。今回と同様、たかが殴った程度の行為でもな」

初犯よりも再犯の方が罪は重い。

魔法界と非魔法界で常識が一致する、数少ない部分である。

「言葉が通じないので無いのだ。そして既に高学年生として後輩達の模範となるべき身でもあり、遠からず成人として社会に受け入れられる身でもある。それに拘らず、反省の色が無く暴力行為を繰り返す舐め切った馬鹿には、重罰が下されたとしても仕方ない」

「……その場合でも、やっぱり殴った程度なら甘い処分が下るんじゃないか？」

「校長達はそうしたがらるだろう。二回目とて退学にならん。繰り返しておくが、〃マグル〃ですらもそうだ。この程度に退学は過剰過ぎると判断するのが〃大人〃だ」

それが今の常識だ。

教師という生き物は、その程度の悪さをする生徒を更生不可能と看

做しはしない。

「だが裁判上で警告が為され、且つルシウス・マルフォイ氏が持つ権力を最大限借りられるという前提なら、僕はハリー・ポッターを退学に追い込む自信が有るぞ？」

「万一追い込む事に失敗したとしても、彼を『グリフィンドール』でなくする事は出来ると思っている。仮に警告を為した裁判が不正裁判と認定されようが同じだ。ハリー・ポッターの暴行の事実と、それを繰り返した事実は何も無くならないからな」

非魔法界で有ったとしても、暴行程度では退学にならない。

だが、魔法界が非魔法界より『先進的』であってはならないという理屈も無い。

「加えて、裁判という形で大々的に『宣伝』する事には他にも意味が有る。今回の事件、その收拾の付け方には明らかに懸念が残ったからな」

言葉を喪つたままのドラコ・マルフォイを他所に溜息を吐く。

段々気分が沈んで来たのは自覚していた。しかし彼本人が気付いているか否かを問わず、彼の傍に居る人間として、警告はしておかねばならなかった。

「その部分だけは、僕がその場で介入出来たらと少し思いはしたが——やはり変わらんか。君の利益になると確信出来る事柄でも無く、他が肯定するかはやはり微妙な線だ。現在の状況はスリザリンチームに有利だからな。沈黙を決め込んだ可能性が高い」

僕がクイディッチピッチに乱入する事は、幾度考えても想像出来なかった。

「その懸念というのは解るだろうか？ 嗚呼、率直に言おうか」

ドラコ・マルフォイを殴ったのは二人だった。

しかしながら、クイディッチ禁止処分を受けたのは三人だった。

そこには明らかな不均衡と不正義が存在している。

「仮に僕が殴って居ない方のウィーズリーであれば、明日に——もう今日か——する行動は一つだ。クイディッチピッチで殴り損ねた君

を、今度こそ殴りに行く」

既にクイディッチが禁止されている以上怖い物も無く、それによつて今回の罪と罰の天秤は釣り合い、そして何よりも気分がすつきりする。

「計画と実行。未遂と既遂。法律上は、前者が後者と同程度の罪、或いはそれよりも重い罪を課される場合は存在するだろう。しかし、教育の場でそれは正しいのか？ あの場合に居ただれだけの人間が、あのよくな処分が下つた事に納得を示しただろうか？」

「――」

「ドローレス・アンブリッジにしてもミネルバ・マクゴナガル教授にしても、ウィーズリーの片割れが今度君を殴つた場合にどんな罰を下すのだろうか。先行して罰を受けているから無罪か？ 或いは逆に、一つの計画を分割しただけの人間が他より重罰を受けるのも仕方ないとするのか？ ならばやはり一度の機会に最後まで殴り切る方が得で、今回ウィーズリーの半分を止めたグリフィンドールにしても、今度からは誰も制止しようとするまい」

僕には全く理解出来ない。

今回限りで有つたとしても、それが許されてしまったという事が。

「せめてミネルバ・マクゴナガル教授には戦つていて欲しい所だ。ドローレス・アンブリッジがどんなに話の通じない相手だろうと、本体のクイディッチ禁止処分から見れば些細な是正であろうと、その最後の一線からは引いてはならない。教育者足らんとするならその筈なのだ」

「……マクゴナガルは――」

「――聞くつもりは無い。そして君が知らなかつた、この手の正論をドローレス・アンブリッジが退けている可能性は有る。……嗚呼、聞く気は無いとも」

ドラコ・マルフォイの言葉を許さない為に、大きく息を吐いた。

「ともあれ、暴行を裁判沙汰にしてしまえば、今回だけの問題、 Hogwarts 内部の問題で終わりなどしないのだ。君の問題提起が拓く未来は、君が今想像しているよりも遙かに価値が有る」

「……………」

「寮監や校長という身内では無く、外部の人間に判断を仰ぐ先例が出来る。『ホグワーツ』が頼りにならないと考えた場合に、社会に救いを求める為の道筋が出来る。まだ子供だからと舐め腐っていれば何れ報いを受けるのだと、それを思い知らせる最終手段が出来る」

そもそも、校長や寮監の処分が甘ったる過ぎるのではないかと思う時がある。

特にクイディッチシーズンが近づく度に校内が荒れるのはどうかならないだろうか。悪意をもって呪文を掛けた者に罰則は下されはするが、しかし、実質的に機能していない。一、二週間の罰則を受けてやるから呪文を掛けるのも肯定されるだろうと考える野蛮人ばかりである。

その風潮を助長しているのは我等が寮監、スリザリンが呪文を掛ける行為に対して徹底的に見ない振りをしている教授の存在である事は置いておく。彼は助長しているだけで、居なかりと校内の状況は左程変わりはないだろう。

残念ながら魔法族はそんな種族で、だから魔法省はあんな砂の家にしかなくなっていないのだ。

「……君は、ウイゼンガモットに対しても好意的ではないと思っただが」

「勿論そうだ。だが、僕を見ていれば良く解るだろう？ 人間は自分の事を棚に上げて他人の悪を糾弾する事が出来る。内部が腐敗してしようと外部への牽制は可能だ」

寧ろ権力分立という発明は、最初から組織の腐敗を前提としているだろう。

常に独立での自浄作用を期待出来るのであれば、他からの監視も介入も必要無いのだから。

「もつとも——既に無意味な仮定、空想の話に成り下がっている。君は僕の『趣味』に付き合う気は無いと言ったからな。また、君に述べた通り、実現可能性も低い。余計に疑われても面倒だから宣言しておくが、僕は今回の件に関し、君の意思から離れて動く気は無い。君が

断固として拒否を示した以上、やはりこの話は終わりなのだ」

今この時以降に蒸し返すつもりもない、と重ねて告げた。

手酷い侮辱をしたドラコ・マルフォイは罰として公衆の面前で辱めを受け、しかし自分から手を出した身として、ハリー・ポッター達もクイディッチ禁止という報いを受けた。全体として見ればスリザリンが得し過ぎではあるものの、ドローレス・アンブリッジの手前、これで手打ちとするしかないだろう。

「けれども、僕にこんな話をさせたのだ。少しは君にも悩んで欲しい」「……何をだ？」

白の魔道具灯に照らされる、青白い顔をした彼を真正面から見据える。

やはり彼の勘は良いのだろう。ここまでで話が終わるなら、最初から僕は口を開かない。

「未来の話だ」

話の前提は、ここで思い出して貰う。

「君の方は、息子や娘をこの学校に入れる気なんだろう？ まあ、君がダームストラングに入れるというのなら、ここで終わる話ではある」

ドラコ・マルフォイの話を聞いていた限り、その可能性は割と有った。

「しかしホグワーツに入れる場合、君はホグワーツを何処まで信じられる？ 今回のような事が君の息子や娘に起こった時、軽度の罰則しか下さない教師に対し何も思わずに居られるか？ 保護者から何も見えないこの箱庭に、君は憤りと憎悪を感じないと断言出来るか？」
今回ミネルバ・マクゴナガル教授が下そうとした本来の罰則は『一週間』だった。

どうせドラコ・マルフォイの方から下手な挑発をしたのだと思うし、彼等の何時も通りのじやれ合いと、今まで校内で執行されてきた罰則の相場から考えるに、それ程妥当性を欠いた罰則とも感じない。しかし一方で、それを軽過ぎるとしたドローレス・アンブリッジの判断も、常識外れだと言えるのだろうか。

観客にカンフーキックをかましたサッカー選手は、半年を優に超える試合出場禁止処分を負わされた。子供と大人で単純比較出来ないし、生涯禁止は論外にしても、一定期間のクイディッチ禁止処分を加重するのは不当だろうか。

今は、今回に限っては、一週間の処分を下す程度で構わないかもしれない。

けれども時代は変わる。しかし、あの校長が高等尋問官を当然のように退けた後、教育改革を進めようとする怖い者知らずは消えるだろう。そしてホグワーツは時代に取り残される。その結果、次にホグワーツの閉鎖性が問題になる時は、それは間違いなく手遅れになった後だ。

「……僕の子がそんな不当な真似に遭うなど有り得ない」

「果たしてそうだろうか。君が『マルフォイ』である事は、今回ハリー・ポッターが君を殴るのを止める理由には全くならなかったようだが？」

そう笑ってやれば、ドラコ・マルフォイは顔を赤に染めた。

法律など暴力が終わった後にしか役に立たない。

それは死喰い人の子ならば当然知っていて然るべきだろうに。

「そして君のハリー・ポッターに対する挑発、報復を受けても已むを得ない愚行を抜きにしてもだ。何の非も罪も無く、ただ善良に暮らそうとしているだけの君の息子や娘。その彼等が周りから虐められ、尊厳を踏み躪られる場合は、現実的に想定し得る」

「だから有り得ないって言って——」

勢い良く立ち上がった彼を、見上げながら言葉を紡ぐ。

「——光の陣営が勝てば、その可能性は有る」

「君が闇の帝王と心中するつもりなら、やはりこれも関係無い話だが」
ドラコ・マルフォイは口を開いたまま呆然とし、

「——今、何時だと思っている？」

直立したままの彼が何かを答えを捻り出す前に、放たれた叱責がそれを止めた。

ドラコ・マルフォイが面白い位に肩を跳ねさせた事から見ると、彼にとつては完全に不意打ちとなつたようだ。一方で僕も少し驚きはしたが、彼程では無い。夜更かしている生徒を叱りつけに来るのは寮監の仕事の一環でも有り、何となくだが、話を聞いて居るのではないかと最初は最初から感じていた。

「これはこれはスネイプ教授。今は十二時半と言つた所です」

「時間を聞いた訳では無いし、惚けるとは良い度胸だ」

スネイプ教授はにこりとも笑わなかつた。

「しかし、咎められる筋合いは無いと思いますが？ 今年もO・W・Lだ。将来の不安に駆られ、談話室で勉強に勤しむ生徒が居ても仕方ないでしょうに」

「君はそんな小心者ではないし、時間には限度が有る。しかも——」
意図的に強調するように言葉を切つて、ジロリと僕の傍らに積まれた本を見やる。

「——君のそこに積んである本は、全くO・W・Lに關係しないように見える」

「……解るんです？」

「君は『教授』を舐め切っている」

改めて上下を確定するように、彼は見下した視線を寄越す。

「仕事柄、世間的に有名な本など目を通して居るのだ。題名と著者を見れば中身を思い出す程度の事は出来る。闇の魔術に関わる書籍はそれらの記載が無い非合法の物も多いから、装丁から判断する場合も多いがな。けれどもそこに在る本の大半は、我輩にも心当たりがない」

「……へえ。今後は覚えておきますよ」

しかし、これが闇の魔術に対する防衛術教授の言葉だったら素直に受け止められただろうが、この寮監は薬学教授である。自分の本職と関わりない分野について詳細な知識を——それも闇の深淵に造詣があるのだというのは、基本的には自慢にならない。

……嗚呼。十数年連続で、闇の魔術に対する防衛術教授になれなかつた人間でもあるか。

言葉にせずとも皮肉は伝わったのかもしれない。彼の視線は厳しくなった。が、僕に付き合っついても無駄だと思ひ直したらしい。教授はドラコ・マルフォイの方へ視線を移す。

「ドラコ。君が最善を尽くした事を我輩は知っている。敗北はしたものの、君は良く戦った。だから恥じる事など一切ないし、まして暴力に訴える不届き者共の事を気にする必要は無い」

「スニッチを取られたのに、ですか？」

「試すような真似をするな、レッドフィールド」

薄笑いしつつ質問をした僕に、教授は視線すら寄越さなかつた。

「シーカーがスニッチを取れるか否かは勝敗に直結する分、どうしたって責められやすい。しかし、シーカーが仕事を遂行しやすいか、もしくは逆に相手のシーカーが仕事をしにくいかは他の選手の働きに依存する。シーカーの敗北はチームの敗北だ」

「意外とクイディッチが御好きなんですね」

「常識の範疇だ。異論は？」

「有りませんよ」

「マグル」流に言えば、サッカーでの失点は全てキーパー、或いはディフェンダー——特に最後に守備に対応した人間が守れなかつた事に責任が有るのかと言つた所か。

特にクイディッチにおいては、シーカーに対して直接妨害球を撃ち込めるビーターというポジションが存在する。クイディッチもチームスポーツである以上、シーカー一人では基本的に勝てず、だからこそビクトール・クラムという傑出した才能が際立つのだ。

……とは言ふものの、僕が見た限り、今回はシーカー個人の責任だったように思うが。

しかし不愛想な察監らしかぬ慰めは、ドラコ・マルフォイの心に届いたらしい。談話室に帰つて来てからも青白いままだった彼の顔は、少しだけ血の気を取り戻したようだった。

「君が語つた将来の夢を、我輩は未だに良く覚えてる。だからあの敗北に君が大きな衝撃を受けた事は理解出来るし、今日——昨日も見逃した。けれども次は無い。以降、外出禁止時間にうろついていた場

合は容赦無く罰則を下す。理解したか」

「……はい」

「なら今すぐベッドに向かいたまえ。——そしてレッドフィールド、君は残れ」

「解つていますよ」

名指しで止められた僕にドラコ・マルフォイが振り返ったが、肩を竦める。

スネイプ教授が秘密裡に談話室に入つて来たのではないか。そう疑つた時点で、既にこのような展開は読めていた。これから御説教を喰らうのは規定路線であつた。

しかし、教授は身勝手に話を進めているが、僕はまだ話を終えていない。

「ドラコ・マルフォイ。伝え損ねていたのだが——」

「我輩を無視しようとするとは良い度胸——」

「——アストリア・グリーングラスには、何か言葉を掛けておきたまえ」

無視したまま続けてやれば、スネイプ教授は口を噤んで少しだけ身を引いた。

無駄話でさえなければ、話をする事は許容してくれるらしい。

「手酷くやられた君の事を随分と心配していた。僕の所に直接不満をぶつけに来る位にはな。何と声を掛けるかは任せるし、別に挨拶のみでも良い。しかし、知らない振りだけはするな」

「……アストリアは君を」

「ギルデロイ・ロックハートも女生徒に人気は有つただらう？」

彼の言葉を遮るようにして、ただ諧謔のみを紡ぐ。

酷く意外であつたのだが、去年のパーティー騒動を刺激的——楽しい、ではないのが肝である——と感じたスリザリン生は存在していたらしかった。

「こちらの方は気恥ずかしいとか言つてられんぞ。彼女の心配に無関心を返すのは不義理であり、何よりこの四年間、君が恰好良さから程遠い真似に及んできたのは今更の話——」

「——ドラコ。行け」

スネイプ教授が僕の前に踊り出て、言葉のみならず視線ごと遮る。そして教授が何時も以上に不機嫌となった事は、ドラコ・マルフォイにも伝わったらしい。何も口答えする事無く、無言のまま去っていったようだ。ようだというのは、教授の背に隠れて見えないからである。この教授もまた、僕の視線すらも害悪だと看做しているらしいかった。

「——ドラコを誑かすのは止めろ」

「誑かしているつもりは有りませんがね」

相応の怒りと共に発された警告に、苦笑しか返せない。

深夜の談話室に立つ教授は、灯りが殆ど落とされている事もあつてか、余計蝙蝠に似ている。

彼はゆらりとローブから杖を抜き、そのまま振った。今年度が始まってからは割と使い慣れた防諜の魔法であるものの、やはり自分より格上の魔法使いが使った場合は明らかに精緻さが違う。これを真正面から破るのは中々難しそうだと思いつつ、再び僕は肩を竦めた。「そして僕は意見や感想を述べるだけ。決定権は今回も彼に委ねた。貴方達大人と異なり、選択肢自体を与えないような真似をする気は無い」

「……良く言うものだ」

スネイプ寮監は鼻を鳴らす。

「ドラコが賢明だったから良かったが、君は今回非常に不用意な真似をしようとした。マルフォイ家が学校内の喧嘩を政治問題化し、一人の生徒をウイゼンガモットに退学にしろと訴える。それが魔法界にどれ程大きな影響を齎すのか。君には想像出来る筈だが？」

その言葉は、僕とドラコ・マルフォイの会話内容を踏まえたもの。

それに対して何時から聞いていたのかとか、人の話に聞き耳を立てるなどという反論はしない。本気で誰にも聞かれたくないと思ってい

たならば、最初から魔法を使っていた。単に聞き耳を立てていたのが偶々スネイプ教授だったというだけで、何か対応を変える気などない。

「喧嘩。矮小化し過ぎでは？我等が校長閣下は言った。ものには適切な名前を使えと。嗚呼、それには同意出来る。今回の件も、法的にはれつきとした傷害事件でしよう？」

「……まして、君はこの時期に揉め事を起こそうとしたのだ。帝王は今秘密裡に計画を進めておられているが、同時にあらゆる物事に注意を払っている。彼の機嫌を損ねてしまう事が一体どれ程危険——」

「——で？ 実際、ハリー・ポッターの退学は『上』の意向に反するんですか？」

スネイプ教授は最初の疑問を無視したが、流石に二度目の内容は無視し切れなかったらしい。

途端に黙りこくりに、返答を寄越さなかった。

「でしようね。教育令第二十四号は曲がりなりにも省令だ。ルシウス・マルフォイ氏達も存在を容易に知れるもので、けれども僕はドラコ・マルフォイから、ハリー・ポッターを退学に追い込めとも、逆に退学にさせるなども聞いていない」

ドラコ・マルフォイがハリー・ポッターを退学にするという野心を抱えている以上、『上』から何らかの指示が有れば、当然彼は僕の下へと飛んで来た筈だ。彼の希望は一旦却下したものの、それでも事情が変われば協力すると約束はしたのだから。

しかし、そのような事は無かった。

「貴方は帝王の意思を持ち出しましたが、結局、彼にとっては何れでも良いんでしょう？ 彼の関心はホグワーツ内部に無い。現状は、という条件が付くとは思いますが」

「……何も言われてないから背信にならないというのは曲解だ。そして人を殴っただけで魔法省やウイゼンガモットを巻き込む大事に発展させる存在を、普通の人間は想定しない」

「何処にそんなのが居るんです？ 僕には見当も付きませんがね」

「……………」

今回にしても、コーネリウス・ファッヅカルシウス・マルフォイ氏が止めれば終わりだ。それ以上進める事は出来ない。僕は勿論の事、仮にドラコ・マルフォイが意地を張ったとしても叶いはしない事になる。所詮はその程度の悪巧みでしかない。

「そもそも貴方達大人が何も情報を下ろして来ないのに、余計な事をするなど言われても困りますよ。余計な事が何かという判断材料すらも僕には与えられていないんですから」

「去年とは違う。君に情報を与えるつもりは無い」

「解っていますよ。今年の貴方は『上』の方々の指示を受けている側です。まあ、ピーター・ペティグリューの前例、そして今貴方が置かれている立場を踏まえるに、やはり全てを教えられてると思いませんけど」

スネイプ教授に未だ役割は与えられていない。

校長も、闇の帝王も、彼を必要とする時が来ていない。

「ただ——今回の一件を裁判沙汰、ホグワーツ内部に留めず公開での問題提起を行う。それに関しては、貴方も賛同する側だと思っただすが」

「……………」

淡々と疑問を紡ぎつつ、机に頬杖を突き、ゆっくりと足を組んだ。

「子供時代に七年を過ごすこのホグワーツに対しては、愛着と望郷を抱いている人間が大多数なのでしょう。けれどもその逆、『ホグワーツ』に怨恨と憎悪を宿すしかなかった人間も確かに居る。今年帰つて来た女性も典型で、彼女と同じく、貴方もまた追放してやりたい相手というのは居たのでは？」

覚悟していて尚、背筋が凍える。

御互い暗黙の内に禁忌とした内容。その話題に無遠慮に踏み込んだ僕に教授から向けられるのは、暖炉の熱の残る空間では心地良く感じられる程の殺意だった。

「我輩は一方的にやられた覚えは無い。あやつらには常にやり返して来た」

「ええ、そうでしょうとも。四対一程度で怯むような貴方では無い」

単純な虐めと処理出来る間柄でも無いだろう。

恐らくハリー・ポッターとドラコ・マルフォイの関係性と変わらなかった。

「しかし、罰則が下されるだけでは到底足りない、クイディッチ禁止ですらまだ不足。退学こそが処分として妥当だという事件に、貴方は一度も立ち会った事が無いんですか？」

「――絶対に退学が揺らがらない。そう確信した事件は、我輩にも身の覚えがない」

その答えが発されるまでは僅かに間が有ったが、僕にはどちらでも良かった。

「ですが、誰もが貴方のように強い魔法力を持っている訳ではないでしょうに。やられたとてやり返す事が出来ない人間もまた存在する」

「――」

「ホグワーツは自由教育ですが、*“マグル生まれ”*が家庭教育を選択する事は事実上不可能だ。教育を受けず魔法力を制御出来ない魔法族など、国際機密保持法の観点から許容される訳が無い。七年間虐められっぱなしだろうが、彼等がホグワーツから脱獄する事など許されない」

ハーマイオニーは幸運にもハリー・ポッター達という救いを得られた訳だが、仮に得られなかつとも、彼女がホグワーツに留まり続ける事は必須だった。

「別に*“マグル生まれ”*に限った事では無い。ホグワーツに嫌気がさしたからと言って、ボーバトンやダムストラングなどの別の学校に通ったり、家庭で専属教師の授業を受ける事を選択したり出来る者など多くは無い。親の職場の問題や金銭的な制約が立ち塞がりますし、仮に親や親族を頼れない人間ならば――特に親である魔法族が一人で、しかも勘当同然であつたりすれば、逃げ道というのは余計に狭くなる」

ドローレス・アンブリッジ。ギルデロイ・ロックハート。そしてスネイプ教授。

これらの何処に、あの校長が尊ぶような素晴らしい愛の庇護が存在

していたというのか。バーテミウス・クラウチ氏が自由恋愛を忌み嫌っていたのも解るものだ。

「要は、このホグワーツで少くない者が泣き寝入りを余儀なくされて来たのであって——しかし、そのような弱者に対し、鈍感な人間を破滅させる為の鉄槌を残してあげるのは、十分正義と衡平の觀念に合致すると思いませんか？」

無論、現状では認められていない。

学校内かつ学生間の問題を学外の機関に持ち込むような先例は皆無であり、常識的としても露骨に眉を顰められる暴挙で、ましてこの魔法界は何の後盾も無い者——それも未成年の魔法族が、気安くウィゼンガモットに提訴出来るような社会構造をしていない。

けれども「純血」たるドラコ・マルフォイが第一人者となり、誰の眼にも明らかな形で先例を確立してしまったのならば、近い将来、復讐心に駆られた誰かが悪意をもって後に続くだろう。そしてその人間が肯定されるか否かは、時代の審判に委ねられる。

ホグワーツでは、助けを求める者には必ずそれが与えられる。

笑わせる。本当の弱者は、そもそも他人に助けを求める声自体を持たないものだ。

「言いたい事はそれで全てかね？」

硬質な言葉には、期待した程の感情の揺らぎは無かった。

ドローレス・アンブリッジと違い、彼の憎悪は過去に置き去りにされているようだ。彼は現在を護る事に関心は有っても、変えようとは思っていないらしい。

この部分は決定的に、僕とは違う。

「ええ。少なくとも、この点に関しては」

「ならば君にはドラコと同種の言葉を返そう。君の趣味に他人を巻き込むな。やるならば自分自身の身体と立場を使ってやれ」

「……まあ、それが筋では有るんですけどね」

現状では惜しく、難しくもある。

しかしハリー・ポッターとの関係性を清算する際には一考するとしてしよう。

何時も通りの仏頂面の教授に頷き賛同を示した後、此度の決着を問う言葉を投げる。

「——嗚呼、それと。三人に対するクイディッチ禁止は通ったんです？」

勿論、この場合の通したとは、あの校長が認めたかという意味だ。ドラコ・マルフォイは知らない可能性が高いと考えていたから、今ここに教授が現れたのは非常に都合がよかった。スリザリン寮監である彼は間違いなく、その答えを知っている。

薬学教授の死んだような瞳からは、一切の感情が読み取れはしない。

しかし開心術が通じなからうが、曲がりなりにも我が寮監で、四年間の付き合いで、しかも根幹が割合似た者なのだ。答えを読み取る事は出来る。

遺憾ながら、三人ともクイディッチ禁止とする処分は通ってしまっただけらしい。

あの校長は、ドロレス・アンブリッジと対立するのを避けたのだ。無論、勝てないのだと考えた訳では無く、単に手間や面倒は御免だという理由で。

「結局の所。今年ハリー・ポッターが箒遊びを続けられるかどうかかなんぞ、校長閣下にとっては至極どうでも良い事なんでしょうね」
足を投げ出すような恰好のまま吐き捨てる。

何も知らないからと言って何も思っていない訳では無いだろう。

狭量な老人の腸は煮え繰り返っているに違いなく、けれども大抵の人間にとっては、やはり外から見える行動が全てなのだ。何も言わずに心中を察してくれる相手なんぞ世界にそう転がっている訳では無い。少なくとも、ハリー・ポッターはそこまで察しが宜しくない。

「言うまでもなく、彼がプレー出来るか否かなど魔法戦争の展開に関わらない。それなのに高等尋問官ひいては魔法省と揉め、最悪の場合には処分の是非を争う法廷紛争までやる？　嗚呼、来る戦争を前に現在クソ程御忙しいであろう指揮官殿、今世紀で最も偉大な魔法使いは絶対にしらない。そんな愚行に及ぶという発想自体を持っていない」

大いなる善の下、小さな悪を看過する。

アルバス・ダンブルドア校長は、そのように出来ている。

ドローレス・アンブリッジは彼の敵に成り得ない。にも拘らず下手に彼女を叩き、高等尋問官職が他の人間に代わるか、或いは更に魔法省から人員が増派されるのは困るのだ。また僕が提案したように、クイディッチ禁止程度以上の大事にされても厄介極まりない。

だから彼は形式的な抗議だけを行って、彼女の虚栄心を大いに満たしてやった事だろう。

「けれども、ハリー・ポッターはどう思うでしょう？　彼は正義の筈の校長によって『不当判決』が覆される事を期待したに違いなく——しかしその当てが外れたのであれば、果たして彼はどう動くでしょうね？　あの校長は以後の魔法戦争に何ら影響は無いと踏んだようですが、今回の一件は本当に負の影響を齎さないのでしょうか？」
ついでに言えばミネルバ・マクゴナガル教授も遠ざけられるだろう。

そして単純なハリー・ポッターの思考回路は結論を下す。やはり大人は頼りにならないと。

「……罰則だ。二日間の書き取り」

スネイプ教授は返答の代わり、それだけを言った。

「罪状は？」

「君は教授を軽んじている。それで十分では無いかね？」

「ならば甘んじて受けましょう。一応、僕の言い分を最後まで聞いては貰いましたからね」

スネイプ教授の耳に入れて貰った事で意味は生じている。

先の言葉は闇の陣営に利するようにも、光の陣営に利するようにも使える。

彼が今回どちらとして振る舞いたいかこそが問題であり、別に聞かなかった事にしたとしても構わない。どの道、コレを使える立場に僕は居ないのだから。

指を組んで軽く背伸びをした後、僕は椅子から立ち上がる。

「——では、そろそろ寮室に戻らせて貰っても良いでしょうか？」

眠りに就きたいですし、とも付け加えた。

わざわざ声を掛けて来た以上用事が有るのだと思っていたのだが、この雰囲気からすると勘違いだったようだ。今年の夏休みを通じて、スネイプ教授が友人の息子に割と甘い事は学んでいた。今回はドラコ・マルフォイの様子を見るついででしかなかったらしい。

「暫くドラコの傍に付いておけ。今のグリフィンドール共は暴発しかねん」

「まあ構いませんが、その場合——」

「——余計な事を考えるな。君はドラコを護りさえしていれば良い」

「……ええ。仮にも貴方は寮監だ。貴方の指導ならば従いますよ」

抑圧を強いる言葉に溜息を漏らす。

今日グリフィンドールの様子を伺ってから対応を決めようと思っていたが、スネイプ教授がこう言う以上、彼等の抱える不平不満は危険領域に突っ込んでいるのだろう。一番悪いのはハリー・ポッター達だが、挑発したドラコ・マルフォイに責任が無い訳でも無い。

そして僕が共に居る程度でグリフィンドールが我慢するとは思えないし、警戒するにも限度が有る。巻き込まれて医務室送りになる事くらいは覚悟しておくべきか。

「更に伝えておくが、最近の君の振舞いは目に余るからどうにかしろという訴えが複数上がっている。彼等は直接的にはそう言わなかったがね。しかし、どんな言葉を使おうが意味は変わらん。君は他のスリザリン生から強く危険視されている」

「これまた可笑しな事を仰る」

「どうしてそう思う？」

「監督生以外が仕事を肩代わりするなんて、我が寮には良くある事だ。そして雑用を解決した程度で恩義を語る殊勝な蛇なんて、スリザリンには全く居ないでしょう？ 何より、基本的に嫌われ者であるのは自覚していますよ」

呆れつつそう言えば、スネイプ教授は嘲りと共に低く笑った。

「そちらでは無い。そして我輩も同感だと思う。そのような訴えが我輩の所まで上がって来たのは今年になってから。君が派手に動いた

と自覚している去年ではない」

「その意味を良く考えたまえ。もつとも君という生き物は、それを気付けるように出来ていないようだがな。それが出来るのならば、君はもう少し真つ当に生きられている」

……相変わらず、この教授も一筋縄では行かない。

「以降、定期的に我輩の下へ来い。万一君が行動を起こす際も、事前に報告を寄越せ。君が監督生の仕事の一部を受け持っている以上、文句は言わせん」

「解っていると思いますが」

「ああ、君は平然と情報を隠す事だろう。必要と有れば。ドラコの利益の為に。主君に隠れて動くのは御互い様。このような御託を並べる事は、我輩も重々承知している」

流石はスリザリン寮監、良く御理解されている。

引つ掛かる部分は有ったが、その一線さえ確保出来るならば僕に文句は無い。

コーネリウス・ファツジとドロレス・アンブリッジ。闇の帝王とルシウス・マルフォイ氏。更にはアルバス・ダンブルドア校長とミネルバ・マクゴナガル教授。誰もが自分の利益を最大化するように動いており、決して歩調を同じくしていない。そして僕も同じだ。

寮室へと歩みを進め始めた僕の背中に、強い意思を籠められた言葉が掛けられる。

「レッドフィールド。繰り返すが、何もするな」

「貴方が何と言おうと、今年はまだ何もしていませんよ」

首だけ振り返る。

教授の姿は、闇の中に溶けていっている。

「そして貴方が警戒すべき相手というのも違うのでは？」

「口答えするな。君はアンブリッジとドラコを見ていれば良い」

「一応そのつもりですが。しかし僕が今言ったのはハリー・ポッターの事ですよっ。」

この場所に来て以来、スネイプ教授は基本的に仏頂面だった。

表情を変えらるゝとしても軽蔑や嫌悪を浮かべる程度で、その何れも一貫して彼の内心を隠す仮面として機能し続けていた。

しかしハリー・ポッターの名を出した瞬間だけは、教授は明らかに動揺した。

そしてたった一瞬だけでも十分。教授が危険視する対象として、ハリー・ポッターは考慮されていない。彼こそが今年最も警戒すべき相手であるのだという懸念を、教授は未だ騎士団長から伝えられていないのだという事は知れた。

「……………。それは、我輩の仕事だ」

「そうですか」

絞り出すように言った教授へ一礼する。

そして僕が寮室に入り、扉を閉める頃になつて漸く、談話室の灯りは消えた。

在ったり無かつたり部屋

ルビウス・ハグリッドは相変わらずだった。

一昨年はヒツポグリフ。去年はスクリユート。

そして今年は一切何を出してくるかと思えばセストラル。

少しでも常識を持つている者ならば普通に推測出来る事であろうが、死を見た経験がある人間しか視認出来ない生き物について、O・W・L・試験で問われる可能性はまず低い。N・E・W・T・で問われるかすら怪しい。

それらのテストは、無駄知識自慢を集めて行う雑学クイズでは無いのだ。受験者の学習到達度を図る事を目的とする領域において、セストラルにつき生徒に問う意義は余りに薄過ぎる。まして『こいつらを飼い慣らすのに成功したのは、イギリスではたぶん俺だけ』という程に稀少かつ特異な生き物であるならば、テストの作成者も出題を躊躇うのが普通の筈である。

勿論逆に、授業を全てテストの為に費やすというのもまた問題ではあろう。

ミネルバ・マクゴナガル教授はO・W・L・用課題の中にも、知っていたられば将来に役に立つと彼女が信奉しているらしい類の呪文を巧妙に紛れ込ませているし、ポモーナ・スプラウト教授だって、魔法界基準で家庭用菜園向きの——つまり非魔法界では割とアブない——植物を一度持ち込んで来ていた。逆にフィリウス・フリットウィック教授は気分転換の為に、明らかに無関係な呪文を教えるという手段を採った。

しかしこの半巨人の頭には、そのような教育者らしい殊勝な思考は無い。

己の研究成果を生徒に見せようとしただけの自己満足的な振舞いで、熟考と葛藤の下に練り上げられた教育目的など欠片も有さず——けれども彼は正しく魔法族的であり、ここまで来ると素直に賞賛すらしてしまうものだ。

授業でセストラルが見えたのは……見えると手を挙げたのは、僕達

の学年では三人。

セオドール・ノット、ネビル・ロングボトム、そしてハリー・ポッター。割と納得の面々であり、勿論僕も見える訳だが、わざわざ自身の存在を主張し、晒し者になる真似はしなかった。その際ドラコ・マルフォイが無言で視線を向けて来たものの、その行為は少々不用意だったと言えるだろう。彼が僕の事情を知らない方が不自然とはいえ、この手の微妙な問題について、自分が知っているかと相手に伝えるような真似はすべきではない。

ともあれ、大きな身体に不釣り合いに小さな彼の脳味噌からは、去年後半の反省というものは消えてしまったらしい。新学期一発目から相変わらずカツ飛ばしていて、しかもまあそれは解り切っていた事ではある。だから問題だったのは、それと同時に行われたドロレス・アンブリッジの「査察」の方だった。

案の定というか。

やはり推測通りの、直視すら憚られる酷い有様だった。結局、彼女は僕の想像の範疇を超えてはくれなかった。

彼女は真つ当な査察を行わなかった。

そもそも初めからそのつもりがなかった。

ルビウス・ハグリッドのクビは、やはり査察前から彼女の中で決まっているようだ。だから彼女が魔法生物飼育学を訪れたのは、省の仕事ではなく、あくまで自身の趣味目的。単にルビウス・ハグリッドが、自分にとって楽しめる相手であるかを見極める為に過ぎなかった。

彼女が高等尋問官の職能にこの上なく忠実であろうとするならば、ルビウス・ハグリッドが教授として不適格であると判断した場合、彼女は肃々とクビにすれば良い。

単にそれだけの話で、その結論はホグワーツ生の大部分から支持されるし、自身の有能さをホグワーツ内外へ喧伝する成果となり、何より、あの半巨人を重用しているアルバス・ダンブルドアへの牽制と挑発も兼ねられる。躊躇する必要など欠片も無く——しかし彼女は解雇権の行使を勿体ぶっている。シビル・トレローニーに対しても同様

だ。

ミネルバ・マクゴナガル教授やフィリウス・フリットウィック教授らあたりの査察は既に終わっているというのに、彼等二人には同じ事をしない。無意味に停職と解雇をちらつかせ、客観的には異常としか思えない程の粘着性を示している。

その理由、つまり彼女が二人をクビにしようとしらない理由は勿論簡単だ。

折角自身が権力を振るえる地位を得て、尚且つ欲望の捌け口として都合の良い相手も見付けたというのに、それを易々と手放すなどんでもない。政治的圧力により彼等の辞任が不可避となるか、或いは自分が飽きるまで、存分に黓って楽しみたい。

ドロレス・アンブリッジの考えはそんな所だろう。

その思考からすれば、亡霊教師の下へ査察に行かなかつたのも必然となる。生きていない相手を黓った所で何ら楽しくないからだ。

まったく、僕に勝るとも劣らない良い趣味をしておられるのであって、この調子では、シビル・トレローニーとルビウス・ハグリッド、あの二人を辞めさせるには時間が掛かりそうだ。最悪学期末まで待たねばならないかもしれない。そして学期末まで待つという事は、闇の魔術の防衛術教授職の慣例上、殆ど無意味に終わるといいう事でもある。

……しかし確かにキリが良いと言えば良いものの、そこまで呑気に構えていてコーネリウス・ファッジは文句を言わないのだろうか。丸二年も十三人殺しを野放しにしている彼女の上司の窮地を救おうと思わないのだろうか。本当に、やはり魔法族は何もかもにおいて杜撰——鷹揚過ぎる。

そんな訳で、僕は既に今年恒例の変化を待つのに飽き飽きし始めていたのだが、しかし、そのような余裕を吹き飛ばす「事件」が起こったのは、その夕刻の事だった。

今年になり、僕の下にふくろう便が飛んで来る事は珍しくなくなつた。

手紙の差出人は相談事を持ち掛けてくる生徒であったり、夏中に知

り合った外部の学者や生徒の親達との手紙の遣り取りだったり、ドーバーの向こうの小さな少女やグリーンゴッツ勤めの女性だったり色々である。僕が取扱う物事の内容上、差出人の名前が日々書かれていない事も頻繁に存在し、だからその名無しの手紙を最初に受け取った時も、然して強い関心を惹かれるものではなかった。封蝋を解かないまま、傍らの魔法薬学の教科書の上に一時間程放置していたくらいだ。

けれどもその手紙には、他の全てを忘れるだけの衝撃が綴られていた。

書いてあるのは『今日、八階七時半。バカのバーナバスの壁掛けの前の部屋で』とだけ。用件も何も無く、素っ気ないを通り越して怪しさすら覚える文章である。

けれども僕にとってはそれで十分だった。誰が送って来たかも明白だ。

殆ど丸一年振りに見るとはいえ、彼女の——“マグル生まれ”の少女の手による筆跡を、今更見まがう筈も無かった。

seventh floor

八階 というのは、生徒が頻繁に立ち寄る場所では無い。

授業の行われる教室が余り無いという事もあるが、単純に上の階層に位置し、動く階段を上手く用いても尚一々昇るのが大変だというのが一つ。そして言わずもがな、余り知らない場所に迷い込むと、このホグワーツでは命を喪いかねないというのが一つ。

ホグワーツは“城”である以上、外敵——内部の構造を知らない人間を排する為には複雑、かつ危険である方が良い。非魔法界では人件費や工期の面で大きく制限が付くが、その制約は魔法界において圧倒的に緩い。何よりクイディッチに象徴される魔法族の調子外れぶりからすれば、彼等の辞書に“安全”という言葉がどう説明されているかを推測するのは容易だろう。

辛うじて存在する一部の魔法族の良心と、歴代校長の努力により改

善はされているようだが、当然それは城内に死に至る程の部屋が残っていないという事を意味しない。そして付近で授業が行われず、寮の入口からも離れ、一般生徒の動線上にない場所というのは——つまり大人が意図的にそうしているという事だ——経験的に相応の用心を要する部類に属する。

更に問題は、八階の『部屋』と手紙に記載されていた事だ。

ウィーズリーの双子達は勿論、ハリー・ポッターとロナルド・ウィーズリーにも劣るだろうが、それでも僕は校内を知っている方である。しかし僕の知る限り、その辺りに部屋は存在しなかった。確かに何か有っても可笑しくないような場所では有るものの、陳腐なスパイ小説のような、建物の余白から隠し部屋を見付けるといふ真似は無意味だ。魔法的に隠蔽されていたり、或いはエレベーターのように動く部屋というのもホグワーツ城には存在するのだから。

とは言え、実際に行ってみれば解る事でもある。

ましてハーマイオニーによる誘いなら指示に従う事が危険である筈もない。指定された時刻、指定された場所に行ってみれば——

「……やはりこのホグワーツには、まだまだ秘密の部屋が有るよ
うだな」
——感嘆混じりに溜息を吐く。

そこには何時の間にか、真鍮製の取っ手のある、磨き上げられた大きな扉が存在していた。一切記憶に無い、それも見慣れない造形だ。

ホグワーツで四年過ごしても尚見慣れないというのは相当危険であると同義だが、最早ここまで来て止める選択肢など存在しない。ローブの中の杖を再度確認した後、意を決して入ってみると、そこには更に驚愕を齎してくれる光景が広がっていた。

その部屋は、城内で初めて見る類の部屋だった。

見慣れないというのではない。単に、ホグワーツ城内に在る事が異常。

つまりは、魔法界の暗くて黴臭くゴチャついた部屋ではなく、そこには非魔法界の明るくて清潔で整頓された部屋が存在していた。しかも最も解りやすく言うなら、街の外れで「マグル」が趣味でやって

いる小さなカフェか、或いはレストランに迷い込んだようだとも表現しようか。それも、若者向けの雑誌のページに載っていたとしても不思議ではない程の、非常にミーハーな空間だった。

電化製品の類は流石に無いものの、白を基調とした内装はやはりホグワーツと全く統一性もなく、明らかに非魔法界流。魔法城内に存在していても可笑しくない品々——蠟燭の燭台、薪を燃やす暖炉、或いは切石と煉瓦で構築された壁や、木目の入った床——にしても、年季の入ったホグワーツのそれらとは違い、新品を意図的に古臭く見せているらしさを感じる。更には部屋の天井を支えているであろう四隅の柱は、冬の近さなど関係無いかのように、赤黄白青と色とりどりの花によって装飾されていた。

何より見事なのは、天井の半分以上を占める天窓だ。

ここは城塔の頂上では無い筈だが、部屋の入口からは漆黒を背景に輝く北極星やカシオペア座やりゅう座、更には空のあちこちで存在を主張する美しい銀河団を見渡せた。しかも天文学の授業の時よりもはつきりと見える。本来よりも遥かに近い場所で輝いているように見えているから、これは流石に魔法の産物であろう。

そしてそれらの光景に魅入られる僕を止めたのは、からかうような笑い声。

「貴方でもそれ程驚く事が有るのね」

「……僕を一体何だと思っっているんだ」

笑い声と揶揄の持ち主は、案の定ハーマイオニー・グレンジャー。栗毛の「マグル生まれ」の少女は、部屋の中央に置かれたテーブルの前に立っていた。

その木製テーブルには、一体どうやったのか、見るだけでも胃もたれしかねない程のデザートが所狭しと並べられている。僕が部屋に入って来るまで、彼女は椅子に掛けて待っていたのだろう。そしてそれを挟んで向かい合うように、空いた椅子が一つ。

「……君一人か？」

「ええ、勿論よ」

彼女はサラリと答える。

勿論、その言葉を素直に信じられない。『魔法』を僕は知っているのだが、まあ疑い過ぎても仕方が無いだろう。

それに、今回の彼女の言葉は、何となく素直に信じていい気がした。勿論、それは彼女を信頼しているからではなく、この空間にあの二人が居る所が全く想像出来ないという理由で。

「……だが、コレを見て驚くなど言う方が無理だ。そうは思わないか？」

呆れと共に紡げば、彼女も苦笑混じりに頷いた。

「そうね。私も最初は——部屋に入った瞬間は、こんなつもりではなかったと動揺したし、気後れもしてしまったから気持ちは少し解るわ。ただまあ、貴方のそんな顔が見れたのだから、こんな部屋に変わったのも悪くないと思えてきたわ」

「……変わった？ 確かにこの場所には、こんな部屋など無かった筈だが」

そう問えば、ハーマイオニーは得意気な調子で軽く胸を張った。

約一年振りに目の当たりにする、彼女が他人に説明を始める時に見せる仕草の一つだった。

「この特別な部屋は、在Commeたり無andかったり部屋とか、必要の部屋と呼ばれているわ。何時も存在する訳ではないし、入るには一定の手続が要求されるの。要件は二つ。この場所の前を三度往復する事。そしてその際、自分が本当に必要とする部屋を願う事よ」

と言っても、と彼女は大きく腕を広げつつ苦笑する。

「私が自ら見付けた訳ではないの。貴方の事だから、当然勘付いているでしょうけど」

「……そうだな。確かにこの辺りは君が来るような場所では無い」

ましてこのような場所を捜して校内を彷徨うのは、彼女の流儀ではない。

「しかし、在ったり無かったりという表現は解る。ここには本来部屋が存在しないからな。けれども、同じくこの部屋を必要の部屋とも呼ぶ辺りからするに——」

「——そう！ この部屋が現れる時には、部屋を求めた人間の願いを

叶える形に変わるの」

「……無茶苦茶だな。稀代の、それも洒落を解する魔法族の仕事だ」
予想出来ていたとはいえ、その返答を聞いて嘆息する。

眼前の光景だけでも十分だったが、彼女の端的な説明を踏まえれば、この部屋が魔法の極地に至っていると解る。

入室者の心を読み解いた上で、かつその者が願う部屋を用意する。果たしてどれだけの技量が有ればここまで到れるというのか。校内で学習する一般的な魔法のように、杖を軽く振って詠唱を一言二言すれば済むというものではないだろう。

校長閣下でも不可能かもしれない——そう思わせる程の仕事に直面するのは余り無いのだが、しかしこの必要の部屋とやらは、間違いなくその一つだった。

「それで、誰が見付けたかは解るとしても、一体どうやって見つけたんだ？ ……嗚呼、これは単純に興味本位の質問であり、別に口を噤んだ所でも構わないが」

聞けなくても致命的に困るものではないが、聞けた方が助かる問いでもある。

アルバス・ダンブルドア校長の話からは、ハリー・ポッターが必要の部屋に関わったと聞いた事は一度も無い。つまり僕にとって問題なのは手段よりも時期であり、万一この質問が拒絶された場合に放つ気である本命の問いこそ答えを求めていたのだが、しかしハーマイオニーはころころと笑いながら素直に答えた。

「そんな遠慮は不要だわ。ハリーが今年ドビーから教えて貰ったのよ」

「……成程、賢い搜索法だ。屋敷しもべ妖精の寿命は——まあ知らんが、間違いなく七年よりは長いだろうからな。彼等が知っているのも当然か」

それどころか、周知とすら言える程に有名かも知れない。

そして「 Hogワーツ」に忠誠を捧げる妖精達が生徒にペラペラ秘密を喋ると思えないが——そもそも存在を消す事が良い妖精の証でも有るから、彼等が生徒に接触する機会自体も少ないのだが——変わ

り者の妖精なら別だろう。

その妖精が真に忠誠を捧げる先は間違いなくハリー・ポッターである。彼がハリー・ポッターの許に出向き、秘密を語るのは、種族の規範に何ら抵触するものでも無い。

更に非常に助かる事に、彼女は今年とも付け加えてくれた。

要は、去年までのハリー・ポッターの行動について、この部屋の存在を考えずとも済むという事だ。

「……しかし、本当に必要だと願う、か」

「? それがかどうかしたの?」

「在ったり無かったり。その名の通り、随分とまた魔法的で厳しい条件だと思っただけ」

そう言えば、ハーマイオニーは呆れ返った表情を浮かべた。

これもまた、約一年振りに視る懐かしい反応だった。

「相変わらず、貴方の発想には飛躍が有るわ。変な部分に固執するかどうか、そういう所が非常に貴方らしいとは思っただけ」

「そうか? 僕は真つ当に思考を進めているつもりなのだが」

「そう考えているのは貴方だけで、貴方を知る者が誰も同意しない評価よ。だから一体どうしてそう考えたのか聞かせて貰って良いかしら?」

勿論、貴方が口にしたくないというなら仕方ないけれど。

弾んだ声と共に笑いながら、そう結んだ彼女に苦笑する。成程、彼女が既に一つ回答を寄越してくれた以上、その切り返しの前で口を噤む訳には行かない。

「なあ、ハーマイオニー。ホグワーツで一度も見事のない部屋に遭遇し、しかし再度その場所に行ったが何も無かった。このような場合、君はどうする?」

「……それは、探す、かしら? その場所を再度見付けようと魔法を使った、或いは何とか壁の中に入れていかと色々試行錯誤したり

——あ」

彼女は人差し指を顎に当てつつ、思い付くままに言葉を紡いでいたが、途中で言葉を切った。考えを巡らせていた通りの彼女は、既に

自分が答えを言っている事に気付いたようだった。

「そうだ。探すとも」

僕ならばそうする、ではない。

僕でもそうした、が正しいのだが。

「不思議な部屋の伝説は、このホグワーツに相当な数存在する。呪われた部屋もそうだが、最も著名な隠し部屋は勿論、サラザール・スリザリンが遺した秘密の部屋だった。歴代校長が見付けられなかった負の遺産を見付けられれば、ホグワーツ特別功労賞獲得と寮杯への大幅な加点は間違いない。わざわざバジリスクを殺すまでもなくな。つまり、ホグワーツ生にとって探す動機が割とあるのだ」

そもそも好奇心旺盛で怖いもの知らずの魔法族が、不思議な部屋に出くわして黙って居られる訳が無い。一度偶然に入ってしまったら、必ずや再度入ろうとするだろう。

「そして僕達には非常に都合な試金石が有る。今現在、ホグワーツ内部に最も熟知している生徒はウィーズリーの双子だろう。そして、彼等はこの部屋を知っていたか？」

「……いいえ。知らないみたいだったわ」

「勿論、彼等がこのような不思議な部屋に一度も出会った事が無いというなら別だが——」

「——それも違うわ。フレッドが、ここは『単なる箒置き場だった』って言ってたもの」

ならば非常に話が早い。

「それで？ 一度遭遇した不思議な部屋を、彼等が放置して居られると思うか？ 数日或いは数週間、何十もの試行錯誤を重ねる過程で、こここの廊下を偶然三度ばかり往復してみる事が無いと思うか？」

「……………絶対には有り得ないわね。私が獲得した四年分の寮点全てを賭けても良い位よ」

ハーマイオニーは、嫌そうに顔を顰めながらも断言する。

「僕もそう思う。彼等も遭遇した時点で不思議だとは気付いていなかったかもしれない。しかし、順路以外をフラフラ歩き回らない模範生ならまだしも、あの双子は年中ホグワーツ内を探検しているような

不良生徒だ。彼等が気紛れに『箒置き場』を再度訪れてみようと思わないかは非常に疑問だな」

そして口に出さないが、彼等は忍びの地図の元所有者だったと聞いている。

この部屋が地図に写れば存在に当然気付いている筈であり、逆に写らずとも、彼等の行動力を思えば、あんな部屋は本当に城内に存在したのかと疑問に思う瞬間が必ず訪れる。『箒置き場』の発見がハリー・ポッターに地図を譲渡した後であった場合でも、彼等は同じグリフィンドール生なのだ。ちよつと地図を見せてくれと言えば部屋の存在を確認するくらい出来るだろう。その彼等が見付けていないというのは、非常に不可解な話だ。

次のような仮定を想定しなければだが。

「多分、この部屋はそれを真に必要なとする場合でない^と現れないのだろう。つまり興味本位や悪戯目的、恋人の逢瀬に使いたい程度では利用出来ない。必要でなければ——切羽詰まってなければ、恐らくこの部屋は扉を用意しない」

そうであれば、この部屋が広く知られていない理由にも説明が付く。

一度存在を知ったとしても容易く再訪する事は不可能であり、一人の人間が自身の後輩や友人達にこの部屋の存在を教えた所で、殆どの場合に役に立たないからだ。必然、噂も多くに広まりはしない。けれども、他人に伝える事が無意味であるという事でもない。

その人間が真に助けを必要とする場合には——その部屋の存在を知っているのは大いに役立つだろう。

ハーマイオニーも納得したように頷いた。

「そう、ね。確かに私も真に——」

彼女は一旦納得した様子を見せるも、途中で何かに気付いたように頬を朱に染めた。

「……突然どうした？」

「……何でもないわ」

「……………どう見てもそう思えないが」

「私が問題無いって言ったら無いの！」

激しい剣幕に、額に手を当て、顔を逸らしつつ嘆息する。

ハーマイオニーとフラアの二人に振り回されて来た経験上、このような時に口応えしても無駄だと悟っている。落ち着くまで何も言わないのが正解で、一分程経過してから漸く、彼女から口を開いた。

「……まあ、貴方の言わんとする事は解ったわ」

結局赤くなつた意味はなんだつたのかと再度問い直す程、僕は愚かでは無かつた。

「そういう入場条件で有れば、この部屋をジョージやフレッドが見付けれなかつたのも納得が行く。あの二人がフィルチから逃げ回る時は必要になるでしょうけど、それ以外は部屋は必要にならない。だから現れない」

「まあ、そういう事になるな。現状では仮説に過ぎないが」

故に当然、間違っていたとしても気にしない。

間違いだと解ってくれば、それはそれで進展性のある発見である。

「けれども、やはり単に三度往復する程度で部屋に入れるとは到底思えないのだ。何せ——」

「——ええ。貴方に“必要”のハードルが高いと考えさせているのは、一度部屋を見付けた人間が自由に入れるとなると、部屋の設計者は困るのではないかという疑問でしょ？」

ハーマイオニーの顔は未だ赤かつたが、一時の感情で頭脳まで鈍らせた訳では無いらしい。

彼女に向かって僕は小さく頷いてみせる。

「その通りだ。これだけの部屋で、しかも必要とする形に変わると言う。たかが三度往復する程度の条件で自由に入室出来るならば、僕ならば当然独占する。他のホグワーツ生に使わせるなど言語道断だ。同じスリザリンにも秘密にし、七年間の放課後全てで常に入り浸る」
「単なる籌置き場程度の空間だとしても、誰も知らない“秘密基地”には価値が有る。」

まして必要の部屋の機能は便利過ぎる。そして世の中無欲な人間

ばかりでは無い。共有地コモンズの悲劇の逸話が示すように、自分の所有物でない物は使い潰される運命にある。

「しかし、そうなっては本当に部屋を必要とする人間が使えなくなってしまう。偶々部屋を発見した運の良い、だが強欲な人間に得させるのも、僕が部屋の設計者ならば気に入らんと考えるしな。防衛機構は絶対に用意する。……嗚呼、これはあくまで必要の部屋が二人以上同時に利用出来ない事を前提としているが。しかし、その部分は正しいだろう」

入室者の望みを読み取って、それを用意するだけで無茶苦茶だ。

それを複数用意してみせるのは、流石に労力が桁外れな物となる。この必要の部屋が複数する事による利点や意義も余り考えられない。

「そもそも僕は、真に必要とすれば、部屋前を三往復する事も、この廊下の前まで来ることすらも必要ないのではないかと疑っている。必要の部屋の事を指していると思われる噂は幾つか知っているが、その彼等が例外無く八階という高層を訪れ、かつ部屋前を偶々三度往復するという条件を満たしていたとは思えないからだ」

たとえば何処かの徘徊老人がトイレを探す際、わざわざ八階まで来てウロウロするとは思えない。

ウィーズリーの双子についても同様だ。

彼等がフィルチから逃げる際にこの廊下まで来た、更に隠れる為の部屋を願っていたという部分は良いとして、しかしその際に偶然部屋前を三往復するという事が有り得るだろうか？ やはり有り得ないだろう。逃亡者は、可能な限り一箇所に留まりたがらないものだ。

「城の何処にでも在ったり無かったりする部屋、か。それが有り得ない……とは言い切れないわね。そもそも、この城は意思を持っていると伝えられているもの。校長室の伝説とか良い例よね。だから、必要の部屋が同じであったとしても可笑しくない」

「ああ。まあその場合でも、部屋の本体がここに位置する事は間違いないだろうが」

魔法的にも、零から創造するより、既に在る物を移動させる方が楽だ。

この部屋の前まで来て三往復する方が、入室条件が多少緩くなる事も有り得るかもしれない。

「そしてこうも思ってしまうのだ。望みを叶える不思議な部屋が城の何処かに在ると噂され、しかも生徒達はその存在を確信している。そしてその部屋はまた、当然のように城の何処にでも繋がっている。それでこそ、部屋は託された本来の機能を果たし得るのではないかと――」

「……本来の機能？」

小首を傾げたハーマイオニーに溜息を吐く。

妄想が過ぎたのは自覚していた。先を促す彼女へ軽く首を振る。

「……この証拠はない。忘れてくれ」

「私達には今更でしょう？ 貴方が独創的な推測をするのは何時もの事よ」

ぶつけられる強い意思に、もう一度溜息。

これも一年前までは良く有った事だ。僕が余計に口を滑らせてしまう事は。そして、僕が已む無く答えざるを得なくなるまでが御決まりでもあった。それを考えれば、確かに自重する事に意味なんてないのかもしれない。

「……何が存在したとしても不思議ではない、入室者の願いを叶えてくれる不可思議な部屋。それがホグワーツ内で『真に必要』とされる場合はどんな場合だと思おう？」

「……………貴方が答えを言っつて。多分、ロクでもない答えだもの」

「ホグワーツが侵攻を受け、この城が陥落しそうな場合だ」

「――」

やっぱり、という表情を浮かべられたが今更だ。

ここは魔法族の子供を『マグル』から、或いは闇の魔法使いから護る為の城である。

戦時、それも万一の場合というのを想定して居ないとは決して思えない。

「非魔法界においても、城には秘密の通路や脱出口が付きものだろう？ だから校舎の何処かに繋がっている、或いは校舎の外への出口を

持つ部屋。それがホグワーツに存在しないとは思えず、そしてこの必要の部屋はその役割を果たすのに相応しいように思える」

ホグワーツから外部に繋がっている通路は幾つか存在するが、本気で探せば見付かる程度の通路、それも物理的に接続された通路ばかりだ。校長やアーガス・フィルチが存在を知らずながら放置している物で、侵攻者が塞ごうと考えれば塞げる程度でしかない。ましてその侵攻者がホグワーツ卒業生ならば、或いは他の卒業生や生徒を拷問でもして情報を得れば、その程度は可能だろう。

しかし、既に存在している通路とは別に、魔法的に新たに脱出経路を用意されれば、それを外から塞ごうとしても中々難しい。

「……色々言いたい事が有るけど、そんなのは『部屋』と呼べるの?」「君の意図する所は解る。つまり、必要の部屋が『通路』を作れるかという問題だろう?」

部屋とは基本的に、天井と床を有する、四方を壁によって囲まれた空間を言う。

壁以外が存在するとしても精々窓や扉などであつて、仮にそれらが開け放たれていたとしても、その部屋は、部屋が接続している廊下・通路・中庭等の外界とは別空間として認識・定義される。

故に、必要の「部屋」が脱出経路を作れるかどうか解らないという彼女の指摘は、非常にもつともなものだった。

「だが、通路が別途用意されており、そこに繋がる扉を持つ部屋なら用意出来るのではないかと思うのだ。そうすれば部屋自体が通路を作る必要も無く、「部屋」の定義も揺らがない。そしてそれらを繋ぐ部屋としての機能こそが、この部屋の本命で無いかと思う」

「……………」

「しかも隠し方が非常に洒落ている。部屋の存在を知る者が現れたとしても、平時においては単なる便利な部屋でしかない」

城が陥落するその瞬間までは、ここが脱出口だと誰にも思われな
い。

「存在を生徒に広く報せながらも、しかしその真の用途を隠し切ると
いう矛盾の両立。全く冴えている。この仮説が真実だとすれば、作っ

たのは聡明な賢者、或いは心優しき聖者のどちらかだろう。たとえこの部屋を作る力量が有ろうとも、顕示欲が強い貴族や好戦的な騎士はそんな真似をしない」

悲痛な助けを叫ぶ者が城を彷徨った時、初めて救済の扉が用意される。しかもその部屋は、ホグワーツ生であれば誰もが平等に開く資格を持つている。成程、余りにも良く考えられている部屋ではないか。

個人的にはレイブンクローの人間が作った可能性が高いと思える。それもここまでの部屋となると、ロウエナ・レイブンクロー謹製の部屋ですら有り得るかもしれない。

「五年目にこんな隠し種に遭遇するとは思わなかった。全くもって興味が尽きない。もっと早く見付けられていれば——いや、それでも同じ事か。たとえ一年の時に見付けていたとしても、この叡智に触れるだけの魔法の実力が僕には無かったのだから」

椅子から立ち上がったままのハーマイオニーを他所に、部屋の隅へと近付いていく。

彼女が如何なる部屋を「必要」としたか知らないが、このような部屋に変わった事自体は左程疑問に思わない。

ギルデロイ・ロックハートへ熱を上げていたように、ハーマイオニーが割とミーハーであるのも知っている。非常に面白いのが、フラーの方は意外と俗っぽさを嫌う場合も多く、両者の外観を入れ替えた方が「らしい」とすら思ってしまう事であるのだが——まあ、それは良い。

僕が今興味を有しているのは洒落た内装や、御丁寧に用意されているミルクポットやストレイテナー、或いはコーヒーサイフォンではない。今の情勢を踏まえ、この部屋が何処まで役に立つかどうかである。

「……………えっと、貴方は一体何をしようとしているの?」

「勿論、検証だよ」

困惑を隠さない声に、振り向かないまま返答する。

「検証?」

「ああ。先のもまた、あくまで仮説だ。だから、試してみなければなら

ない。と言つても、真に必要とするという要件が正しいのであれば、この部屋を出てしまうと二度と入れなくなる可能性が有る」

「……………」

「だからまず最初に部屋内を隈なく調べてみようかと思つている。取り敢えずは、入室者の居る状態から何処まで部屋が変われるかだが――」

そこまでを口にして、一体何故だろうか。

僕はその瞬間、無性に振り向かなければならないと感じた。

そして振り向いた後、そうしなければ良かったと後悔した。僕を振り向かせた理由は解つたが、それでも気付かない振りをした方がマシだという事もあるものだ。

ハーマイオニーは満面の笑みを浮かべていた。

初めて家に招かれた時、彼女を放置してグレンジャー家の蔵書を読み漁っていた後に見たのと同種の笑み。今更本人に確認するまでもない。僕の行動は、ハーマイオニーの地雷を盛大に踏んでしまったらしかつた。

「――座って」

「……………」

「座りなさい」

彼女は椅子を指さし、もう一度、淡々と繰り返した。当然、反抗する選択などない。

僕が大人しく座った後も、暫くハーマイオニーは冷たい笑顔のままだった。しかし改めて向かい合つてみると、その本心がどうであるのかは何となく伝わってきた。

十秒と続かず、彼女は耐え切れなくなったように声を上げて笑い出す。

それに対して、僕は笑つて良いか解らなかつた。意図せずとは言え、やらかしてしまつた後だったからだ。

けれども、その僕の顔が余程可笑しかったらしい。彼女は更に楽しそうな様子でひとしきり笑つた後、漸く許しの言葉を口にしてくれた。

「ともかく、久々に会えて嬉しいわ、ステファン」

「……ああ、僕もだ、ハーマイオニー」

長かった一年を経て、僕達は漸く再度の接点を得たのだった。

変わらぬ対立

「……しかし」

彼女の機嫌が上方修正されたのを改めて確認した上で、眼前のテーブルへと視線を移す。

正確にはそこに置かれた、デザートのお山々を。

「夕食後の間食としては、随分と豪華過ぎやしないか？」

レモンパイ。プディング。トフィー。スコーン。キャラットケーキ。ミンスパイ。アップル克蘭ブル。チョコレートファッジ。イートンメス。他にも、名前を言い当てられないデザートが、大小色とりどりの皿の上に沢山。

屋敷しもべ妖精がハロウインの日付を二週間程勘違いしたのかと聞いても信じられる程で、何なら妖精達が僕を糖尿病で殺す気だと言われても信じられる位に酷い。

食事を残すのは余り好きではないが、しかしその視覚的暴力は、既に完食を諦めさせるには十分である。食べ残しは……流石にスリザリン寮には持ち帰る事は出来まい。一応手配したのはハーマイオニーであり、細かい事を気にしないグリフィンドールならば余計な詮索もされないだろうから、彼女に任せざるを得ないだろうか。

テーブルに用意されていた皿とフォークを取りつつ、一体全体どうしたのかとハーマイオニーに聞けば、彼女は僅かに頬を膨らませた。

「……妖精達が私達の為に用意してくれたのよ」

「そうか」

言い訳がましくボソリと呟かれた言葉に、小さく笑う。

それは屋敷しもべ妖精に規定外労働をさせたという事であり、彼女の去年の思想からは全くそぐわない行動だ。勿論僕は彼等をこき使う事に疑問を抱かないが、けれどもハーマイオニーがそれを許したのは意外である。

ただ、その思いは伝わったのだろう。

ハーマイオニーはキャラットケーキをフォークで突きながら口を開いた。彼女の眉は顰められたままだった。

「そりやあ三日前に御願いした時、最初は余り良い顔されなかったわよ」

「そうだろうな。特に君の解放運動は妖精達から嫌厭されていそうだ」

「……嫌味つたらしいわね」

「個人的推測に過ぎないとも。事実の可能性が高いとも思っているが」

屋敷しもべ妖精は、基本的に人間の要望を断る種族ではない。

しかしながら、絶対に断らない訳ではないし、また怠慢や不服従をしないという事では必ずしもない。

そもそも生徒が妖精達を勝手に使い、不健康な間食を用意させる事は、特にグリフィンドール寮監殿善良な教職者であれば戒める筈である。だからこそ、妖精達が彼女の命令を断る事は必ずしも不可能では無かった筈だと推測していた。

そして、自分の行動を客観視する程度は出来たようだ。バツの悪そうな顔をしつつ、けれども何処か自棄になったような口調で続けた。

「でも何故軽食を用意して欲しいのか聞かれて、私が理由を言ったら——ちよつと口にしづらかったけど——途端に彼等は態度を一変させて、逆に是非手伝わせてくれたってペコペコ頭を下げ始めたの。こっちが呆気にとられる程の熱量で、気付いたら何時の間にか厨房から追いやられてたわ」

「くくく。そして妖精に押し切られたまま、こんな事になっている訳か」

「………馬鹿な女だと思っているのでしようね」

「いいや、そうは言わないとも」

唇を尖らせたハーマイオニーに、笑いながら軽く首を振る。

夜会の軽食を用意する事に何故妖精達がそこまで関心を示したかは良く解らないが——この品々を見るに、彼等が相当張り切って用意した事も伝わってくる——まあ、所詮彼等の考える事だ。余り大した理由でもなく、久しぶりに日常業務以外の仕事を与えられて歓喜したとかそこらだろう。

そして妖精達の自発的意思ならば、僕が余計に非難する理由はない。

「寧ろ、素晴らしい事だ。君は彼等に働き甲斐の有る仕事を与えた。そして妖精は喜び勇んで取り組み、更に当然、君は彼等に礼の言葉も掛けたのだろうか？」

「……それは、勿論そうしたわよ。今日コレを見せられて、どうやって八階まで運ぼうかと途方に暮れたら、当然自分達が部屋前まで給仕するものだって断固主張されたし。本当に至れり尽くせりで、ここまでされて礼を言わない人間なんて居るかしら？」

「ならば、彼等にとっては望外の贈り物となっただろう」

一つの皿からレモンパイを取り、切り分け、口へと含む。

菓子の味は家によっても特徴が有る。材料費に糸目を付けないマルフォイ家の物は口煩く、生徒の為に大量生産する事に慣れたホグワーツの物は素朴だ。勿論、どちらが口に合うかは甲乙つけがたい。

ただ、周りに気を使わないで済む食事というのは久々だった。

作法からの逸脱を見咎めるドラコ・マルフォイ、或いは他のスリザリン生はここには居ない。

「良い屋敷しもべ妖精である証は、可能な限り人前に姿を現さない事だ。しかし、それは奉仕に対して礼を言われる機会が無いという事を意味し、そして彼等は人間的な温かみのある言葉に何も思わないような種族でも無い。更に言えばこのホグワーツでは構造上、屋敷しもべ妖精は御褒めの言葉に飢えやすい環境に在るように思える」

あの校長閣下にしても、毎日屋敷しもべ妖精を労う程に暇では無いだろう。

対して、マルフォイ家にはそれが可能な環境が存在する。……まあ、その環境は在れど、マルフォイ一家が妖精達を一々労う程に親切でないのは言うまでもないが。

「けれども、君は今日それを与えた。間違いなく彼等に対する『善行』で、妖精達は逆に君へと感謝を向けすらしただろうと思うがね」

「……相変わらずで何よりだわ。貴方は何時も、皮肉めいた言い方しかない」

「——そうだな。この種の話題に対しては、気を付けていてもこうなってしまう」

道に迷う老人や子供、或いは視覚・聴覚障害者に対し、自分が全くの善意で親切にしたにも拘わらず、報酬としてポンド札の束を渡されればどう感じるか。

そのような皮肉すらも思い浮かんだが、何とか意思の力で押し留めた。折角再会出来たというのに、わざわざ問題を延焼させる意味など無かった。

「このように飢える屋敷しもべ妖精を少しでも不憫だと思うならば、その代わりに君が声を掛けてやる事だ。今日札を言ったとしても、改めて明日にでもまた、な。そう大層な言葉は不要だし、君が再度彼等と話をする口実にも——」

「——じゃあ、贈り物をするとかは？ たとえば、服を贈るとか」

「……………」

もつとも。

僕と彼女の意思は全く食い違っていたようだった。

彼女は未だに去年の対立を引き摺っていた。或いは、忘れる事を許さなかった。

「……………君は、何を言っているか解っているのか？」

「ええ。これは挑発よ。当然、貴方への、ね」

「……………はあ。そうか」

先程僕は更なる皮肉を紡ぐのを止めた。

が、それでも彼女は、僕が何かを言い掛けたと察していたのかもしれない。そして彼女はやはりグリフィンドルだった。挑発や侮辱に対して、そう易々と引き下がってくれやしない。

どうやら彼女は、今年も「愚かな」S. P. E. W. の活動を止める気は無いのだろう。その上、彼女が従事しようとしている活動は、僕が素直に感心出来る類でも無さそうだ。しかしだからこそ逆に、彼女は或る種の去年の続き、もしくは遣り直しとして、この話題を持ち出したのか。

ただ——彼女も何も考えずに話題を持ち出した訳でも無さそうだ。

フオークを握っているハーマイオニーの右手は、小さく小刻みに震えていた。

そして最も最悪なのが、この話が緊張を解く為の前置きの話ではない事だった。

「……まず、君が屋敷しもべ妖精の『解放』について理解しているかだが——」

「——見くびらないで頂戴」

僅かばかりの、けれども確かな怒りを籠めて彼女は僕を睨む。

「私はハリーがドビーを『解放』した時の話を聞いているのよ。まずハリーが自分の靴下を日記ごとマルフォイの父親に渡して、それをマルフォイの父親に投げ捨てさせた事で、ドビーに受け取らせたってね。決して、ハリーがドビーに服を渡した訳ではないわ」

「成程、そこはやはり問題では無かったようだ」

解放手続を誤解する程、つまり自分が屋敷しもべ妖精に服を贈れば直ちに彼等が主人から自由になると考える程、ハーマイオニーは愚かでは無い。その事は救いだった。

「であるならば、君が目論む解放の内容にも既に予想が付いたが、それに対して僕は幾つか疑問を提示しておくだけにしよう」

「……疑問を提示？」

「去年とてそうだったと思うが、僕は屋敷しもべ妖精の生態を熟知している訳では無い。今夏もそのような暇は余り無かったしな。だから、僕から答えを出す事は出来ない」

マルフォイ家の新たな屋敷しもべ妖精に対して多少の聞き込みはしたが、それでも彼の主人の手前突っ込んだ話は避けたし、種として深い理解まで到ったとも思わない。

だから今年もまた、真の意味でハーマイオニーの力にはなれない。

「しかし、個人的な疑問点、それも君が意識しておいた方が良いでしょう点は三つ程挙げられる」

「……三つも？」

「ああ。そして、君は聞くだけにして欲しい」

「——貴方が言いつばなし？ それって反則じゃない？」

「やはりこれは、御互いにとって本題ではあるまい？」

去年も割と言いつばなしだったとも記憶しているが、今年もつと状況が違うだろうと言う意図を滲ませつつ、僕は答える。

「であれば、手早く済ませた方が良い。別に君が僕と異なる意見を抱く事を止めないし、勿論、僕の疑問が見当外れである可能性は低くない。後日反論をぶつけて来ても構わない。その答えに向き合うべきは、S・P・E・W・に取り組む君なのだから」

ハーマイオニーは不満気な素振りを隠そうとしなかった。

が、ここで口論するのは無駄だと彼女も考えたのだろう。最後には渋々頷いた。ごじつ、と小さく呟く声が聞こえたが、その真意は解らない。まあ小声だったので僕に聞かせるつもりの内容でも無いだろうと、構わず先を進める事にした。

「第一は、ホグワーツの屋敷しもべ妖精の主人は誰なのか。君はそれをホグワーツ校長、或いは『ホグワーツ』という体制自体と考えているようだが、果たしてそれは正しいのだろうか」

「!? 貴方は違うって——」

彼女は即座に口を挟もうとして、しかし直ぐに閉じた。それを見て苦笑する。

一切何も言わなくてくれとまでは、流石の僕も言っていない。けれどもそれは彼女の覚悟を明確に示すもので、非常に有難く、両者にとっての救いとなる筈だった。

「君が嫌な気分になるのを承知で言うが、屋敷しもべ妖精は魔法法上『物』だ。主が死んで相続が発生すると、基本的に妖精は相続人へと承継される」

「……ええ。残念ながらそうみたいね」

「しかし、ヘルガ・ハツフルパフがそれを是としただろうか？ 妖精達をホグワーツに縛り続ける事を善と考えただろうか？ たとえば、ホグワーツを護る為に死ぬまで戦えと命令される可能性を、彼女は一度も考えなかっただろうか？」

当時は未だ迫害と戦火が燻っていた時代だ。

屋敷しもべ妖精が戦力として計上される事は、彼等にとっては害に

しかならない。

もつと具体的に言えば、「マグル」から良家の子供を護る為には、屋敷しもべ妖精を四六時中張り付けておくのが手っ取り早いのだ。

屋敷しもべ妖精は特異な体系を有する魔法を持つており、子供の守護者として十分役割を果たしうる。そして勿論、彼等は「マグル」に負ける程に弱くもないが、さりとて足手纏いの子供一人——下手すれば複数人——を抱えていれば、常に無傷という訳にもいかないだろう。

屋敷しもべ妖精の最高法規は、己の主人の命令である。その意味は、非常に重い。

「しかも、当時の『 hogwarts 』の相続者は誰だ？ 彼等創設者四人が生存していた時代、 hogwarts 校長という役職が存在していたと聞いた事が有るか？」

「……いいえ。最初期の hogwarts は四頭政、スリザリンが去ってからは三頭政だったと思うわ。創設者の誰かが校長になったという記録は何処にも存在しない筈よ」

「僕もそう記憶している。加えて、僕達は hogwarts が千年続いた事を後知恵で知って居るが、歴史の当事者たる彼女達は違う。自分達四人が死ねば自然解散する可能性も考慮するのが自然だ。何せ魔法魔術学校という概念自体、当時には存在しないからな」

「学校」——特にマグル界の大学の創設時期を定義しにくいのも、偏にその問題に起因する。

hogwarts もまた同じ。千年以上存続している事は確定しているが、正確な創設年は定義されていない。992年以前に創設されたという以上に、詳細な事は言えない。

「そして屋敷しもべ妖精数百人、いや数十人程度でも、立派な戦力ないし貴重な財産だ。 hogwarts 解散を仮定した場合、その際に彼等を巡って魔法族間で闘争が生じる事も考えられる」

ヘルガ・ハツフルパフが慈愛に満ちた人物であればある程に、屋敷しもべ妖精の未来を真剣に思う程に、彼等を hogwarts に縛り付けるような安易な行動を取る訳には行かない。

「契約は当事者を護る物として働く。しかしその一方、逆に縛る物としても働く。非魔法界でも雇用者が契約を盾に横暴を振るい、その結果訴訟沙汰になる事など良くあるだろう？ 魔法界でも同じだ。相手が屋敷しもべ妖精だったとしても。如何に千年前の人間とて、ヘルガ・ハツフルパフが契約の拘束力による危険を知らなかったとは思わないな」

そして、一つ思う事が有る。

サラザール・スリザリンがスリザリンの指針であるように、ヘルガ・ハツフルパフは当然ながらハツフルパフの模範である。

そして最もハツフルパフらしい人間であったあの男であれば、屋敷しもべ妖精と雇用契約を交わすなどと言った酷く勿体無い真似はしないだろうと。

しかしながら、その思考は僕の勝手な夢想に過ぎず、相手がハーマイオニーであれ他人に口走るなど以ての外だったから、軽く首を振った後で先を続ける。

「第一はこの程度だ。次に、第二の問題に移ろう」

疑問を棚上げにするという宣言を、今度のハーマイオニーは止めなかった。

「そもそも屋敷しもべ妖精に服を与える事が、何故彼等の解雇を意味するのだろうか？」

その原点は、果たして何処に有るのだろうか。

「服とは元来高価な代物だ。非魔法界における服の多くは、貴族の着古した衣服を奪い合い、それを裁断して作られるものだった。それも、他人の手の經由は一度や二度ではない。貴族が着古し、それを有産階級が着古し、更にそれを市民が着古した結果の布を、下層民が着る事すら有り得た。歴史を見れば、市場に既成の新品の服が存在しない時代・世界の方が長かった」

「……それ位は知ってるわ。それを変えたのは産業革命だという事も」

「そうだな。そして服の価値は魔法族にとっても左程変わらない。流石に非魔法界よりは安価だったが、それでもその作成には魔法族一人

と杖一本が最低でも拘束される。原材料まで考えればもつと多くが必要だ。決して、安い費用ではない。要するに、服とは本来おいそれと与えられるものではないのだよ」

服余りの現代とは違うのだ。

そして当たり前だが、ロンドンの小さな雑貨店に入つて紙幣一枚で毛糸玉が買えるという事もない。

「それにも拘わらず、魔法族は彼等の解雇に際して服を与える。永遠の訣別に際して、高額な代価を払おうとする。逆に屋敷しもべ妖精は、そのような事態を可能な限り拒絶しようとする。もしくは、彼等は一目見て解る通りに、可能な限り襪褌布以外を身に着けようとする。その理由を、君は真剣に考えた事があるだろうか？」

「――」
当たり前となつている慣習には、普通は原因や誕生秘話が存在する。

それを考えずに古いだけで正しい、或いは間違つているとするのは愚かな行為だ。

非魔法界の世界観を一変させた啓蒙思想の原点もそこに在る。啓蒙思想とは古い因習を捨てる事を正当化する思想ではなく、肯定したいが為に疑つた事例は少なくなかつた。

「君の『解放』指針、彼等に無理矢理にでも選択肢を与えようとする事は正しいかもしれない。意思に反して中古の服を着用せざるを得ないというのは、少なくとも先進国の大部分では過去となった。そして服飾の価値観は人種のみならず、時代によつても変わる。しかし、君が魔法界で解放運動を続けるならば、やはり原点について知っておくべきではないだろうか？」

ハーマイオニーは何か反論したげな表情だったが、意識して欲求を捻じ伏せたのが明らかだった。そして、正しい。僕達の間で口論する事にやはり意味は無い。

「第三で、最後だ。これは左程大した物でも無い」

一応付け加えておくか程度の意図しかないが、彼女にとっては意味があるかもしれない。

「確認なのだが、ウィーズリー家には屋敷しもべ妖精が居ないと考えて良いな？」

僕の言葉に、ハーマイオニーは頷いた。

「……そうね。私は姿を見た事が無いし、過去に居たとも聞いてないわ」

「ならば、何故居ないのだろうか？」

「マグル生まれ」である彼女は、当然考えた事が有るかもしれない。

そう思いながら彼女を見たが、返って来たのは困惑だった。であれば、仕方が無い。その疑問に至った根拠についての説明を続ける。

「ウィーズリー家は非常に古く、母方のプルウエット家にしても古い家系だ。そして既に述べたように、妖精は相続の対象になる。更には妖精達は給料を求めないから、貧しく在る事は彼等が居ない直接の理由にならない。加えて非魔法界の人間の視点から見れば、あれだけ子沢山の家には、妖精達の『仕事』が有り余っているように思える」

だが、居ない。

代々受け継いでいる妖精は、彼等の家に居ない。

僕は強調する為にそう繰り返した。

「もつとも、彼等が親達から相続出来なかった可能性は、僕の認識の上では左程低くない。また、単に彼等の親達が生きており、その人間達が屋敷しもべ妖精を使い続けているから居ないのだという考え方も出来る。或いは、彼等が受け継ぐ際に屋敷しもべ妖精が運悪く寿命を迎えたか。しかし——」

「——何となく見えて来たわ。貴方はそれを必然と見ているのね？」

「そうだな。現在市場取引されている妖精が高価である事を差し引いても、僕には必然に思える。件の自由な妖精ドビーにしても、ハリー・ポッターの伝手でウィーズリー家に世話になるという発想は無かつたのだろうか？ もつとも彼の場合、給料と休暇を求めていた。特に金銭面において、ウィーズリー家とは雇用条件が折り合わなかつた可能性も有る」

ただ、と溜息を吐く。

「屋敷しもべ妖精の生来の気質を考える限り、ハリー・ポッターが望みさえすれば、ドビーとやらは如何なる条件でも労働を受け容れたように思うのだ。『ウィーズリー』にしても、ガリオン金貨を与えられずとも、それに代わる価値有るモノを与える事は可能だった筈だ」

「ハーマイオニーからの伝聞に基づく判断なので断言はできないが、それでも彼にとつての給料や休暇は、己の自由を表現する一つの手段に過ぎないとしか聞こえなかったのだ。」

要するに、彼の満足出来る『報酬』が得られるならば、給料も不要であつたように思える。

「……まあ、ドビー云々は脱線だな」

その異端の妖精がハーマイオニーにとつて身近であるから持ち出しただけで、確証が有る訳でも無い。推測を色々巡らせるには情報量が足りない。

「兎に角、アーサー・ウィーズリーは屋敷しもべ妖精を所有していない。その意味を軽んじてはならないと思う。迂遠な言い方を辞めるなら、万一屋敷しもべ妖精に労働の自由が認められた場合、彼等はどんな職場で働きたいと考えるのだろうか？ 『マグル』の世界の伝説においても、不思議な小人が姿を現す家というのは一定の条件が有るものだろうか？」

彼等も心有る生き物なのだ。独自の趣味嗜好と行動指針を持つているのが当然と言える。そして魔法族と同様に——人間基準を用いて物を考えるのが馬鹿げている。

そこまで言い切つた後、僕は徐に立ち上がった。

その瞬間どういう訳か大いに焦つた様子を見せたハーマイオニーを他所に、向かうのは壁近く、カウンター机に置かれたコーヒーサイフォンの下だ。一杯分はハーマイオニーが用意してくれていたが、流石に御代わりは自分で入れ直す必要が有る。

勿論杖を使えば座つたままでも済んだのだが、そうしなかったのは、袂を別つた相手の前で杖を振るうのが適切でないと考えた以上に、話が終わった事を意図的に示す為でもある。

しかしサイフォンも割と現代的な道具の筈だが、趣味人が居るのは

魔法界も非魔法界も同じという事だろうか。そんな事を考えながらもコーヒーを淹れている最中、ハーマイオニーは何も言わなかった。

御互い直接向き合っていない状態だから、或いはサイフォンの立てる音の中では会話し辛いから黙っていたという訳では無いだろう。改めて生まれた疑問を整理するには、彼女をもつてしてもそれなりの時間が必要だったのだと思われる。

ハーマイオニーが口を開いたのは、僕がコーヒーカップを手に椅子に座り直した後だった。

「……貴方は、今の三つの疑問に答えを出しているのよね？」

「あくまで僕なりのだが、そうだ」

彼女の手から離れていたフォークをチラリと見た後、僕は肯定する。

今疑問をぶつけられた彼女とは違う。僕は既に僕の中での思索を終えている。

ヘルガ・ハツフルパフは、屋敷しもべ妖精と契約するような真似はしなかった。

魔法族は屋敷しもべ妖精を思うが故に服を与え、逆に妖精は主人を思うが故に服を拒絶した。

屋敷しもべ妖精は、一人で手が回らないような屋敷を差配する事こそ名誉だと看做している。

「しかしそれが正しいとは限らないし、そして繰り返すが、正しい答えを突き止めるのは君の仕事だ。どれも知ろうとすれば、やはり妖精達の中に答えを求める必要が有るのだから」

魔法族にとって、屋敷しもべ妖精達は余り研究対象になつてこなかった。

彼等は大きな御屋敷の外には余り出て来ないし、部外者が接する場面も限られている。ホグワーツにしても、生徒との交流は殆どない。各家々で独自に調べられている内容は有れども、万人が手に取れる書物という形では殆ど纏められていない。

故にハーマイオニー・グレンジャーが答えを求めようとするならば、彼等に聞く以外の方法は残されていない。

「……あれから丸一年経ったわ。それでも相変わらず、貴方は傍観者のように振る舞うのね」

「今も変わらず、屋敷しもべ妖精の未来に興味は無いからな」
紛れもない本音である。

「そして屋敷しもべ妖精は基本的に『家の中』の事だろう？ 他所の家庭の子供の教育に口出すべきでないように、他所の家庭の従者の教育に口を出すべきでは無い」

「……………」

「更に君は考えるべきだ。妖精達の適切な扱い方などというような倫理教育は一体誰に責任が有るのかと。一つは親。一つは一応魔法省。これに加えて後もう一つだけ、子供の教育に関して介入し得る組織が有る。後者二つは魔法界の前例や慣習からは良く思われないうし、非魔法界も同様に抵抗が強いが、それでも『マグル』は現在進行形で拡大を認める方向に動いている。だが——魔法界は、この通りだ」

彼は決して動かない。

動かないが為に、偉大のままに在り続けている。

「……念の為の確認だけど。確かに貴方は疑問を提示したけど、今回は去年とは遣り方が違ったわ。だから少なくとも、貴方は今年の行動に反対はしないのね」

「元より去年も、君の基本路線にまで反対したつもりはない」

彼女の認識通り、彼等は確かに現代的価値観の下では奴隷だろう。

「自己満足の革命など有害にしかならないと指摘しただけに過ぎず、そして、コレは君が決める事だ。誰に反対されようが貫くのも君達グリフィンドールだろう？」

「……………そうね。その通りよ」

ハーマイオニーは頷いたが、表情がすぐれないのは明らかだった。僕が提示した疑問への回答まで既に用意した訳では無いだろうが、それでも何処か可笑しいという考えをもっており、しかしそれを紡がないのは、互いの対立を避ける為だった。

そして改めて浮き彫りになってしまう。

やはり僕達は立場が——思想の何もかもが違い過ぎると。

彼女は自らの手で平和的に変えたいと思っっている訳だが、一方僕は、変わるのならば自分の手で無くとも良いと考え、破壊的でも問題無いと結論付けている。最初から気が合う筈も無く、そして魔法戦争が始まってしまった今、もう最後まで妥協は成立しないだろう。

その内心を知ってか知らずか、彼女はポツリと言葉を漏らした。

「……どうして、私達はこんなにも上手く行かないのかしらね」

悪の帝国

「貴方はそれだけ多くに考えを巡らせられる人よ」

「……………」

「今貴方が指摘した事とて、一体どれだけのホグワーツ生が考えているか解らないわ。ハリーやロンなんて、この四年間では一瞬たりとも考えた事なんてないと断言して良い」

言葉での肯定をせず、微苦笑だけに留める。

その辛辣さは、流石に彼等が親友だからというのものもあるのだろう。

しかし、嘘を含んでも居ない筈だ。僕としてもそう思う。彼等がハーマイオニーの運動について何かを考えているとすれば、彼女の思い付きに一々付き合わされるのが面倒臭いという程度でしかないだろう。

「だから、貴方は純血主義についてもそうだと私は思ってる。貴方はマルフォイみたいなのにヴォルデモートの行動を無批判に受け入れる人間じゃない。貴方はその考えを馬鹿らしく思っている筈だし、そして賢い貴方なら当然こうも推測している筈よ。ヴォルデモートが、良い為政者となる事は有り得ないって」

聞き逃せない表現が紛れ込んだが、それよりも先に来た驚きは別だ。

ヴォルデモート。

彼女は去年まで、その名前を口にした事が無い筈だった。

いや、一度か二度は口にし、僕も聞いた記憶は有るか。彼女は「マグル生まれ」で、その名を恐れる魔法族ではない。ただ、魔法界の常識を理解して以降は直接的な表現を避けて来た筈で——けれども、彼女は今、明らかに意識してその名前を呼んでいる。

「……君にその名前を口にはして欲しくないのだが」

「」

「まあ、君とて酔狂で呼んでいる訳でもないようだ。だから妥協はするし、二度と言わない事にしよう。但し、君がその名前を言うとするればホグワーツ内、あの校長の庇護下に限っての事にすべきだ。それ以

外では、そんな愚行は無しにして欲しい」

呼び方を変える気はないと示す鋭い視線に、多少態度を和らげる。今日に限ったとて、彼女は僕に対して多くの譲歩をしている。僕もそうするべきだろう。

「ともあれ君は悪の帝国となると見ているが、僕の方は、彼の政体が魔法族全体にとって悪となるかまでは定かではないと考えている。僕はまだその治世どころか、本人を見ていないからな。案外ネロ帝やジョン王と同じく、彼は善君で、民衆を思い、賢明なる治世をするかもしれない」

「……茶化さないで。絶対に悪の帝国となるに決まってる」

「さて、それはどうだろうか」

あの校長にしてもハリー・ポッターにしても、そして勿論ハーマイオニーにしても、闇の帝王を少々侮り過ぎて思うように思う。敵が自身の想定より間抜けに行動してくれるならば勿論歓迎すべきだが、自分の想定の上を行かれて困るのは当然彼等である。

「『マグル』や『マグル生まれ』にとつてどうかを取り敢えず脇に置けば、少なくとも魔法族に対しては、手当たり次第に虐殺する事はないだろうとは思っている。と言つても、これは帝王を校長閣下と対比する限りにおいての予測であり、君が何らかの理屈をもって否定する気なら聞く耳を持っているが」

けれども、可能性は低くないとも思っている。

「……………どうしてそこでダンブルドア先生を持ち出すのよ」

「両者とも己の能力に圧倒的な自信を持ち、そしてまた実際にそれだけ隔絶しているからだ。故に彼等は等しく、常人には非常識な、しかし彼等にとっては論理的な行動を取る可能性が高い」

校長も口にしてはいたが、彼等にとっては問題となる事件・事象の方が少ない。

それ故に、普通の人間ならば危機感を持つ類の問題を、彼等は何も思わず放置出来る。通常人ならば手遅れとも言える事態になったとしても、彼等の力をもってすれば大抵の場合、何事も無かったかのようには解決出来るからだ。

そして皮肉な事に、彼等にも手に余る問題のみが、彼等にとってそのまま致命となる。

「例えばの話。僕が悪意をもって魔法省を陥落せしめたでしょう」

あの組織を魔法族は軽んじているが、それでも用途次第であるというのは「純血」も認める所だ。何より闇の帝王が非魔法界育ちだと言うのであれば、やはり利用しないなど有り得ない。

「僕のような凡人の場合、省を陥落させてまず最初にやる事は決まっている。当然、肅清だ。実際に叛逆するかは関係無く、省内の疑わしき者は殺す。アーサー・ウィーズリーを例に挙げるのが解りやすいだろう。やる事も明快だ。彼の身柄を即刻確保し、それを人質として家族を誘き寄せ、「ウィーズリー」を族滅させる」

今夏、アーサー・ウィーズリーは僕と会うのを避けた。

まあ僕の存在を気にしている筈が無いので、僕が共に居たルシウス・マルフォイ氏と会うのを避けたというのが正しいだろうが、兎も角、魔法省見学で顔を合わせる事はなかった。だから、彼と会話する機会は与えられなかった。恐らく今後もないだろう。

しかしながら、あれがスリザリンの敵に回る事なんぞ既に解り切っている。

そして普通のスリザリンの立場からすれば、彼のような叛乱予備軍筆頭を生かしておく事など決して出来ない。聖なる二十八の一枝である事など関係ない。絶対に殺す。如何なる手段を用いたとしても殺し尽くす。

「……っ。その有り得ない仮定の話がどうかしたの？」

「闇の帝王は違うのではないかと思う。アルバス・ダンブルドア校長が他人に遣り直しの機会を与えるのと同じように、帝王は他人に恭順の機会を与えるのではないかと考えている」

つまり、と。

捧げるようにカップを持ち上げながら、説明の言葉を継ぐ。

「闇の帝王は、実際に叛逆するまでは殺す意義を見出さないのでないかという気がしてならないのだ。何故なら彼は、有象無象の魔法族の叛乱など如何様にでも鎮圧出来るからだ。アーサー・ウィーズリー

のような小物——これは勿論彼視点だ。僕には脅威となるだろう——を放置する事など、悪の大魔法使いにとっては何て事無い」
まあ気分次第で殺す事も十分有りえるがね、と小さく笑う。

喉に流し込んだ珈琲は、何故か先程より苦い気がした。その原因は決して、僕が淹れなおしたからという訳ではないだろう。

「……でも。マルフォイのパパなら絶対に殺す事を主張——」

「——僕にとっては本気で疑問なのだが。裏切りとはそう軽い物なのかね？」

「……………」

「ルシウス・マルフォイ氏は許された。そして一度裏切った『純血』を許すのであれば、一度も裏切っていない『純血』を許したとしても何ら可笑しくないだろう？ 少なくとも理屈は通っている。寧ろ叛乱分子と成り得る人間を省内に残しておくのを、闇の帝王は愉快がるかもしれないな。何とか彼を殺そうと画策するルシウス・マルフォイ氏共々、面白い見世物となってくれる可能性は有る」

内心で反骨精神を抱き、将来の叛乱を目論んでいようが関係無い。自身の敵足り得えない魔法使いの存在を、あの化物二人は意に介さない。臣下が勝手に動くのは好きにさせるだろうが、自分で動く程の意味は間違いなく見出すまい。

彼等は偉大過ぎ、強大過ぎるが故に、自由と傲慢を貫徹し得る。

「勿論、これは僕の、非常に個人的な予測に過ぎない。君が否定するのにも自由で、そしてもう一つの君の考え、闇の帝王の政治が僕にとって不愉快な筈だというのは正しい。こちらは確信だ。君の事もあるしな。僕の価値観でも認めざるを得ない残虐非道が、この魔法界で行われる筈だ」

ハーマイオニーの方を見やれば、彼女は大袈裟なくらいに顔を伏せていた。

直ぐに嘸み付いてくると思っていたから、その反応は意外だった。

「……なら、どうしてヴォルデモートの味方をしようとするのよ」

俯いたまま絞り出すように言った彼女に、僕は低く笑う。

「気に入らない現状を変える為だ」

「それは、私達の側でも出来るでしょう?」

「希望が持てない」

愚にも付かない反論を即座に切つて捨てる。

簡単に出した結論では無い。今までの四年間を踏まえた上での最終結論である。

思想は違えど尊重し合えたであろう、クイリナス・クイレル教授とバーテミウス・クラウチ氏。そして立場は相容れぬとも理解は出来た、ギルデロイ・ロックハートとバーテミウス・クラウチ・ジュニア。更には魔法界で弱き立場に置かれたままのリーマス・ルーピン教授、アーガス・フィルチ。そして忘れてはならない頂点である、アルバス・ダンブルドア校長。

彼等を見て来た結果、世間が光と呼ぶ側に僕は付けないと判断してしまった。

「……じゃあ、何でハリーに肩入れするのよ?」

俯くのを辞め、真つすぐと僕を見つめて来るハーマイオニー。

その瞳は本来ハリー・ポッターと似ているべき筈で、しかし今は違う。今の彼女の瞳からは、魅入られるだけの力強さや美しさを感じなかった。

「貴方はハリーに仲間を集めろと言ったわ。それは明らかに、貴方がハリーに対して何らかの期待をしているという事でしょう? そうでなければ説明が付かないもの」

「……………」

「貴方がハリーと話し込んでいた事はグリフィンドールで噂になったし、そしてレイブンクローやハッフルパフでも同じだったようだわ。そもそも貴方は或る意味ハリー以上に目立つもの。一回目の会合でも話が出た位で、絶対にスリザリンにも広く知られている筈」

……一応、寮内で僕がそれを知った事は無い。

が、彼女の方が正しい筈だ。誰も何も知らないと言う事は、やはり有り得ないのだろう。

「けれども、貴方は不用意な行動に踏み切った。貴方はそれだけの危険を冒す価値を見出していた」

「……そうだな。君の言葉は一部正しくないが、概ね正解だ」
後にドラコ・マルフォイに何を言われる事になろうとも、ハリー・ポッターに干渉する意義を見出していたのは事実である。

今世紀で最も偉大な魔法使いには最早期待出来ない。勿論、魔法大臣にも。

だから消去法として資格を持つのは “生き残った男の子” ただ一人。魔法戦争で光の陣営が勝利した場合、彼のみが唯一、これから起きる魔法界の崩壊に歯止めを掛け得る。そう、考えている。

「もつとも、貴方の期待の懸け方は非常に捻くれていたとは言わせて貰うけど。だって貴方の言葉は具体性を欠いていたもの。何を目的として、どうやって仲間を集めるかについては丸投げだったし。だから貴方との話の後、ハリーは一体どうすれば良いのか途方に暮れていたわ」

「それは己むを得んだらう。僕が友人の作り方を心得ていると思うか？」

「……まあ、確かにそうかもしれないけど」

その一瞬だけ、彼女は小さく微笑んだ。

「でも、貴方が示した指針を実現し得る方法は見付けられた。ハリーは——私達は、闇の魔術に対する防衛術の自習グループを作ったの。それも恐らく貴方が意図した通りに、グリフィンボールだけではない大きな集まりよ」

「……………そうか」

ドラコ・マルフォイに示したように、呪文の自習を行うなら寮内で足りる。

レイブンクローヤハッフルパフはそうしているという噂も聞き及んでいる。恐らくそれは真実だろう。何せスリザリンも既に同じ事をやっているからだ。

ドローレス・アンブリッジの授業に対して基本的に文句は出ていないが、唯一出ているとすれば、交代で少人数指導を受ける事に基づく時間の短さだ。それを解決する手段として、スリザリン生の一部——特に “純血” の我儘の割を食った非主流派は、寮外に知られない形で

呪文を練習する場所を求めた。そして寮監であるスネイプ教授は、寮室の一つを指定し、かつ今年は例外だという注意喚起をした上で、その許可を出している。

だが、彼女達はその道を選ばなかった。

「……しかし何故、僕が他の寮も巻き込む事を希望していたと考えた？」

「だって、貴方は明らかにルーナを巻き込もうとしていたじゃないの？」
「………言われて見れば、そうか」

ハリー・ポッターの気質からすれば、自分が教えようとするのは親友二人、ハーマイオニーとロナルド・ウィーズリーだけ。

そこから済し崩しのグリフィンドール全体に広がる事になる——三人だけの学習会で終わる可能性は全く考えて居なかった——としても、それ以上を望むのは難しいかもしれないという判断の方が大きかった。

だが、僕の願いとしては、やはり他寮を巻き込んで欲しかった。グリフィンドールの方に閉じ籠るのでは校長閣下と何も変わりはないし、これからの魔法界に挑む中核には成り得ないからだ。

だからこそ、ああした干渉をした訳だが、話を聞く限り、それは成功を見たらしい。

「勿論ハリーも、この集会を最初に提案した私も、始めるまでは多少不安だった。けど、第一回目の会合から成功の内に終わったし、二回目と三回目も同様だった。やっぱりハリーは教師として適任だったし、この自習に参加した人間は皆大いに満足していたわ」

「そうか。練習に相応しい場所も見付けたようだし、な」
「……ええ、そうね」

この場所に僕を呼び出した時点で、看破される事は最初から解っていたのだろう。ハーマイオニーは大きな動揺を見せないまま小さく頷いた。

そして、今更僕に口止めするような様子も見せなかった。何の理由も無くそのような不義理をしないと信ずる位には、ホグワーツ入学以来築いてきた関係性が御互いには有った。

「これは貴方が助言しなければ有り得なかつた筈よ」

「それはないな。彼も、君も、我慢出来ない質たちだ。僕が口を挟まずとも、君達は絶対に同じ事をやった」

「……じゃあ、それでも良いけど。でも、ハリーの頭には、間違いなく貴方の言葉が有ったわ。私が提案した時、ハリーは最初明らかに気が進まない素振りを見せたもの」

「それを否定するのは——流石に嫌味が過ぎるだろうな」

彼の思考に爪痕を残す事は、僕の意図した物だ。それは揺らがない。

「だから——」

彼女はそこで、初めて口籠った。

その表情には躊躇と、そして恐怖が現れていた。

「——私は、貴方を誘う気だったわ。ハリーが結成した自習グループ、魔法省やアンブリッジに対抗する為の組織、『ダンブルドア軍団』に」

一瞬思考が停止したが、それもほんの一瞬だけ。

「……………ダンブルドア軍団ね」

「やっぱり貴方には気に入らない名前なんでしょう？」

「そうだな…………。その質問に対する答えは控えさせて貰おうか」

本心からの笑みを浮かべながら答える。

勿論そう思いはしたものの、しかし最終的に出た結論は真逆だ。

名前は所詮名前である。何であれ、ハリー・ポッターが主体となつて己の組織を結成したのであれば、僕が目論んだ事は一応達成されている。

そしてダンブルドア軍団とやらの名称が表に出るといふ事は早々無さそうだったが、万一それが知れ渡る事になった場合、ハリー・ポッター関連の名稲妻の傷跡同盟よりも非常に愉快な事態になりそうである。

ここまで来ると、ドロレス・アンブリッジは世界に愛されている存在なのではないかとすらも思う。まあ不幸一色だったらしい学生時代の反動としてみれば、一応釣り合いは取れているか。

何よりあの老人に対し、これ程激烈に刺さる刃は無い。

「しかし、誘う気だったね」

言葉尻を、しかし確かに彼女が紡いだ言葉を咎めてみれば、案の定、ハーマイオニーは大きな動揺を示した。意図的では無かったようだが、決定的な差異だ。

その表現は過去形。そして彼等の集会は既に三度程繰り返されているようだ。途中参加者を認めない訳では無かろうが、それらの事実が表す結論は明白だろう。

「勘違いしないで。私に誘う気が全く無かったと言っている訳ではないの」

「……………」

「寧ろ、ハリーなんかは参加して欲しそうだったわ。勿論、貴方が強情な事も良く知っている。貴方がはつきりヴォルデモートの側に着くと言った以上、魔法省に対抗するような組織に加わる事はしないだろうとも言ってたわ」

「その推論の立て方は普通に間違いだな。まあ結論としては正しいが」

ドローレス・アンブリッジ及び魔法省、そして闇の帝王では、明確に立場も思想も違う。

前者達に媚びを得る必要を、僕は既に欠片程も認めていない。後者から勘気を被る可能性を排除出来る理屈が存在するのであれば、参加する事は必ずしも不可能では無かった。

……嗚呼、これも過去形だ。

「だから、私が誘う事は反対しないってハリーは言ってた。……ロンの方は断固反対だと言ってたけど」

「それも驚くに値しない。純グリフィンドールならまあ当然の反応だ」

「でも、どの道私が誘った所で、貴方は参加するつもりは無いんでしょう？ ……いいえ。貴方はハリーに近づく事が出来ないから、当然私達の集まりに参加する事も出来ないのでしょうか？」

「——ほう」

思わず口元を緩めてしまう。

それは一々断る手間が省けた事が理由でなく、そもそもその指摘が

彼女の口から飛び出して来るとは全く思っていなかったからだ。

一方、僕の賞賛混じりの感嘆に対して、ハーマイオニーは嬉しそうな様子を一切見せなかった。寧ろ希望が打ち砕かれたかのように、悲しげに眉を下げた。

「……余り信じたくなかったわ。けど、やっぱりそうなのね」

その表現は、何処か他人事めいた響きを帯びている。

実際、他人事では有るのだろう。恐らくその結論を導いたのは彼女では無い。そしてこの種の行動、未来視めいた駒の打ち手というのは、僕が知る限り一人しかない。

「アルバス・ダンブルドア校長が何か言っていた訳か？」

確信をもつての問いに、彼女はコクリと頷いた。

「先生は言ってたわ。新学期が始まって以降、貴方はハリーから距離を取りたがる筈だって。そして万一ハリーの方から貴方へ接触しようとしたら、出来る限り自然な形で引き離すように協力して欲しいとも頼まれたわ。それが、貴方達二人の安全にも繋がるよ」

「非常にらしい言葉だ」

やはりあの怪物はそうでなくてはならない。

彼はハリー・ポッターが分霊箱である事に気付いている。そして同時に彼自身に——更に闇の帝王にも——その事実を知らせてはならないと判断している。であれば、同じくその結論に至る僕がハリー・ポッターの接近を厭うのは、あの魔法使いにとって必然だった。

「それがどうしてなのか、ダンブルドアは理由を教えてくださいな。けれども、ダンブルドアは極々当然のものとして仰っていた。そしてこれを聞いた貴方も、やはり当然の事だと受け容れてしまう。この内容について、貴方達には一切の話し合いが無い筈なのに」

「確かに打ち合わせをした訳でもないが、少し訂正する部分もある。君の言葉も、ハリー・ポッターが接触しようとするれば、というものだしな。つまりあの校長は、僕が新学期前に気付く事を前提としており、実際に向かい合うまで気付かないとは更々思っていなかっただろう」

何も考えずに接触して死に掛けた身としては、つくづく恥じ入るし

かない。

「でも、今は何も疑問に思っていないでしょう？ 私はそれが何故なのか全く解らないのに」

「それは已むを得ない事だ。この理由が解らないのも、君が愚かという訳では無く、単に君に情報が足りない——」

「——どうしてよ!?! どうして、貴方は多くを知らされているのよ!?!」
「……………」

今日、彼女は可能な限り冷静で在ろうとしていたようだ。

意図せず対立した一年前と違い、明確に意識して、そして遥かに注意深く。

それでもとうとう我慢し切れなくなったらしく、彼女は感情を爆発させた。

ホグワーツ特急内で見たと通り、今年のハリー・ポッターは大いに怒りを溜め込んでいた。それを僕は必然だと見ていたが、けれどもそれはハーマイオニー・グレンジャーも同様だったらしい。

「この部屋なら貴方と話す事が出来る。そう考えたのはハリーも一緒だわ！ 今回だって、付いて来ようという素振りには有った！ 一年間私は貴方と話さなかったんだもの！ 間に入る人間が居た方が良くかもしれないって親切をハリーが發揮してくれそうになって、けれどもダンブルドアの言葉が頭に有ったから、私は丁重に断りを入れたわよ！」

「…………それは——君に礼を言うべきなのかね」

ハリー・ポッターがこの部屋に居る可能性は、手紙が届いた時から頭の中に在った。その場合に僕がどう対応しただろうかというのは、少々予測を立てるのが難しい。

ただ間違いないのは、万が一ハリー・ポッターがこの場に同席していたのなら、僕がこうして呑気に珈琲を飲み、菓子を摘まんでいるなど有り得ないという事だ。

確かに彼の中に闇の帝王を見たのは特急内、つまりホグワーツ城外だった。

だから今ならば——生徒の肉体と精神を魔法的に守護しているこ

の場所においては、あの時と違って安全だと考えるのも一つの判断である。元より数百キロを隔てた人間達が精神的に繋がっているという事自体が、非常に魔法的に不自然なのだ。そこまで警戒しなくて良いだろうという主張は、一定の理を認め得るものではある。

しかしながら、それでも本能的には受け入れがたかった。

仮に闇の帝王アルバス・ダンブルドア校長と同格の魔法使いを敵とした時の事を考えた場合、僕はそんな楽観的な推測を基にした行動を取らないだろうからだ。

「礼なんて要らないわよ！ 何で、何で貴方なの……？ 貴方は違う陣営に着いたんでしよう？ ダンブルドアにとって敵なんでしょう！？ だというのに、どうしてダンブルドアは貴方に、ハリーよりも、私よりも多くを知らせているのよ？」

「……………」

「そしてどうして放置出来るの？ 貴方が多くを知って居るのであれば、騎士団にとっても危険な筈でしょう？ けど、ダンブルドアは何もなくて良いと仰ったわ。貴方ならば問題ないとも付け加えられた。私がどうしてと聞いても、もつと情報が欲しいと訴えても、先生は何も答えてくれなどしなかった。その理由が、私には全く解らない……………」

非常に興味深い事だ。

ハリー・ポッターの中に視たのと同種の光。これまでの四年で、彼女からは一度も見なかった輝き。今世紀で最も偉大な魔法使いへの不信が、ハーマイオニー・グレンジャーの眼にも浮かんでいる。

あの校長と僕の特異な関係性のみが、それを産んだ訳では有るまい。

全ては四年間の積み重ね。これまで押し込めて来た疑問——ハリー・ポッターが何故ダーズリー家に軟禁されねばならないか、何故あの校長はハリー・ポッターに試練を与えてきたか、闇の帝王が復活して以降も何故彼に何も教えないのかなどの不満が、今になって爆発したに過ぎないのだろう。

……そして、あの校長閣下はコレを意に介さないのだ。

子供の癩癩や傷心など、彼にとっては無視出来る些事だからだ。大

人が子供を護るといふ絶対的大義の下では、幼く未熟な弱者達の感傷に一々付き合つてなど居られないからだ。

生きてさえいれば何とでもなると、彼は考えている。自分の命よりも遙かに重要な誇りが存在する事を、彼は頭では解つていても本質的に理解していない。それはあの校長閣下が純粹に「グリフィンドールの」でない事を示す、最たる在り方と言つても良いだろう。

しかも非常に困つた事に、僕にも彼女の傷心を解消出来る気がしない。

「——まあ、君がそう喚きたがる気持ちは理解出来るが」

何と答えたものかと、溜息を吐きつつ考える。

確かに僕は情報を、それも彼女が思う以上に致命的な情報を握つて
いる。

複数の分霊箱の存在について、あの校長が既に察している事。そしてハリー・ポッターが、意図せずに作られた分霊箱である事。その二つの情報を闇の帝王に齎せば、それだけで光の陣営を敗北させるまでには至らずとも、窮地に追い遣るには十分だ。

だから真つ当な人間であれば僕を放置するという選択は有り得ず、けれどもあの狂つた大魔法使いならそれが出来るという事は、彼を深く知つている者しか解らない。

「けれども現状、彼にとつては僕を放置していても問題無いのだ」

彼は正しく事態を把握した上で、そう結論付けている。

「校長閣下は僕を一定程度は賢いと認めている。つまり僕が何も考えず帝王の下に赴き、僕の知る情報を伝えるような自殺志願者ではないと理解している。そして情報が帝王にまで伝わる事がないのであるば、僕が何の秘密を知り、またどの陣営に所属しているかなど関係無い」

他に秘密の中身を知る人間が居たとしても、その者が決して公にしないのであれば、秘密は何も変わらず秘密のままだ。

「……自殺？　貴方がヴォルデモートに殺されるつて事？　確かに貴方は半純血だけど、それでもスリザリン生でしょう？」

「相手が自分の味方であろうが、それ以前にどれだけ己へと利益を齎

していようが、自分にとって不要かつ有害と看做せば排除する。それが世の独裁者というモノだろう?」

元より話が通じる相手ではないのだ。

気分を害せば殺される。法は非常に単純明快である。

「僕が知っている情報は、それを持ち込めば功績になる類の情報では無い。帝王の前で口にすれば最後、一体何処まで知っているのかと拷問され、最終的に口封じとして殺される類の内容だ。仮に他に周りに聞いていた者が居れば、それがベラトリクス・レストレンジだったとしても同じ末路を辿る事になる。気軽に口に出せはしないさ」

「……じゃあ、何で貴方がそれを知っているの?」

「僕が知らされたと思っっているならばそれは大きな勘違いをしている。確かに教えられたモノも有るが、殆どは己で推量し、そして校長から奪い取ったモノだ」

皮肉な事に、この四年間で僕が目論んで唯一成功した企てでもある。

「要するに、校長が僕を止めたいなら忘却術を使うしかなかった。が、彼にとっては余り好ましいと思える手段では無かったし、一度忘れさせても、僕が再度同じ結論に辿り着く可能性も低くなかった。更に忘却術自体も破る事は不可能ではない。忘却術を掛けた痕跡が、他人の興味を惹いてしまう事も有る。相手が帝王なら特にだろう」

だからこそ秘密の部屋の後、彼は僕の口を封じなかった。

「何より彼にとっては、自分が貴重品を持っていると知らずにフラフラ彷徨っている人間よりも、知った上で危険から遠ざかろうとする人間の存在を認める方がマシだった」

と言っても、僕が何れ帝王に近付く可能性は考えていただろう。

そうでなければ、彼が自ら閉心術を僕に教える必要もないからだ。帝王と対峙しても尚も秘密を護れるようにする為に、あの校長は僕へと力を与えたのだった。

「そして僕が幾つかの事実を知らされているからと言って、別に優越感を覚えはしないし、特権的地位に在るとも思わない。君が多くを知りたいと願うならば——相手から一方的に教えて欲しいと望むので

はなく、君も同様に、あの校長から無理矢理奪えば良い」

「……奪うっ？」

「ああ」

考えてもみなかったという表情で呟く彼女に、小さく頷く。

「先の論理。僕が秘密を知り続けている論理が、君に通用されないという道理は無い。秘しておく利益より打ち明ける利益が大きいと判断すれば、もしくは秘している事自体が無意味だと結論付ければ、あの校長は当然のように君へと情報を開示する。それが論理的な思考であり、合理的な行動というものだ」

しかも、と溜息を吐いた。

「あの老人は特に今年、自身の胸中を他人に察して欲しいと考えている節が有る。そして君はハリー・ポッターの親友だ。君は僕よりも遥かに容易く情報を手に入れられる立場に居る。ある程度の結論をもつて校長室に押し掛ければ、君は直ぐにでも求めるモノが得られるだろう」

明確に答えを提示しなくとも、疑念の核心さえ突いてやれば白状しそうな位だ。

僕を無碍にする態度は取れたとしても、ハーマイオニーを無碍にする事は彼には出来ないだろう。アルバス・ダンブルドアという人間は、そこまで強くはない。

「……でも、貴方が教えてくれれば——」

「——その気は無い。それでも陣営を異にした身で、あの校長への義理も有る」

「……」

御互い一々誓約などしていないが、闇の帝王は勿論、ドラコ・マルフォイやスネイプ教授にも一切明かさないう事を前提として僕は秘密を教えられている。その相手が光の陣営に属する者、ハリー・ポッターやハーマイオニーだったとしても例外には当たらない。

「何より君達に教える云々の話はな、既に校長閣下と議論が終わっている」

「……嘘でしょうっ？」

「確認すれば解る嘘を吐く意味が有るか？　そして敗北を喫したのは僕であり、秘密主義の彼が勝利した。御優し過ぎる大人の彼は、子供である君達に何も教えるつもりはないと切つて捨てた。そうせずとも勝てる。君達の指導者の意思は明確で、であれば、彼が望まない限りは僕も明かすつもりは無い」

ハリー・ポッターに全てを伝えて戦いの舞台に上げろという僕の要求は、彼によつて撥ね退けられた。

だからハーマイオニーの願いで有つたとしても、やはり譲歩は出来ない。彼女に打ち明けるといふ事は、ハリー・ポッターに打ち明けると同義だからだ。

「……………本ツ当、意味が解らないわ」

「……………」
吐き捨てる彼女の眼は、今にも泣き出しそうなくらいに濡れていた。

「ダンブルドアは、貴方が敵対するのは已むを得ないと仰つた。自分の責任だとまで仰つたわ。けれども、その言葉には明らかに貴方への理解が有つた。貴方もまた同様。貴方は騎士団の誰よりも先生を理解しているように見えて、それでも尚、貴方達が同じ道を歩めないのは何故なの？　何故貴方はヴォルデモートに味方出来るの？　そして……………」

彼女は大きく息を吸つた後、覚悟の光を瞳に宿して言った。

「……………貴方は何時か『穢れた血』を、私を殺すつもりなの？」

……………本当に、上手く行かないものだ。

今セドリック・デイゴリーが生きていれば、というのは無しだろう。既に魔法戦争は再開された。去年度末、僕は付く陣営を決めた。この場で先延ばしにした所で何れは表面化する問題で、何処かで解決しなければならぬ事柄だった。

それがこの瞬間であつたとしても、何の文句も持ち得ない。

「……………御免なさい。忘れて頂戴」

頭を大きく下げながら、ハーマイオニーが言う。

俯き、豊かな栗毛に隠されているせいで、その表情は見えない。

しかし、推察は出来るし、彼女の言葉の意味も解る。先の問いに答える事は、互いの決定的な訣別を意味する。これまで丸一年間疎遠だったが、それが永遠になるに違いない。

それでも、ここまで話をしてしまったのだ。

今更逃げる事は許されないだろう。

「……そうだな。君が言うなら今のは忘れよう。

が——しかし、君は本心を明かした。ならば、僕も少しだけ告解をしようか」

木の床を鳴らしながら少しだけ椅子を引き、宙を見上げる。

天蓋に備えられた窓からは、非常に腹立たしい事に、雲一つない星空が見えた。

「去年、僕達の間には二つの対立点、議論するだけの意見の相違が生じた。セドリツク・デイゴリーの善性についてと、S・P・E・Wの活動の是非について」

「……………」

「今回も繰り返すが、その内、前者はどちらでも良かった。あの男が気に入らないという個人的な事情。そしてあれを真のホグワーツ生と祀り上げる校内の風潮さえ無ければ、一切関わりすらしなかっただろう。……嗚呼、最終的には僕の間違いという事で結論が出たのは強調しておかねばならないが。あの男は最期まで仕事をしていったからな」

そう。

セドリツク・デイゴリーは死んでも仕事をしていった。

「——だから僕の立場を決したのはな、必然的にS・P・E・Wの側に属する問題だ」

狼人間行動綱領

セドリツク・デイゴリーの善性の側の問題ではない。

要するに、個人的な善悪——アルバス・ダンブルドア校長への軽蔑、不愉快さ、そして敵意というのは、本質的な問題ではないのだ。彼が「悪党」だろうと、それだけで道を違える理由にはならない。無論、全くの無関係でもないが、それでも彼がグリフィンボールで僕がスリザリンである事は、僕達が訣別せざるを得なかった根源ではない。「君が今、反発を抱いたのは解っている」

反論も返事も無かったが、確信と共に紡いだ。

「S. P. E. W. の側の問題と言うならば、闇の帝王の側に付くのは可笑しな話だと考えただろう。実際僕は、帝王の君臨が最善だとは更々思っていない。彼が頂点に立った場合、この魔法界が僕の望むように真に「マシ」となるのは、恐らく五十年や百年先だ。暫くの間口くでも無い世界となる事は、一切の否定もしない」

必然、ハリー・ポッターに向ける期待と、ドラコ・マルフォイに向ける期待は違う。

前者に求める変革は直近であるが、後者に求めるのは遠い未来の話。何ならドラコ・マルフォイの場合、別に彼ではなく、彼の子供や孫でも良いのだ。僕は余り気が長い方ではないと自覚しているが、それでもそれが不可避であると言うのなら已むを得ない。

「だが、このまま時代が下って行っただとしても、やはり僕は魔法界の自浄作用、普通の魔法族の人々が問題を解決してのける事には期待出来ないのだ。今の惨状を生み出した最大の理由が魔法戦争——つまり元凶が闇の帝王である事は確実であるが、しかしそうであったとしても、この平和な十四年間、何もしてこなかったのは、善良な筈の魔法族なのだから」

そこに闇の帝王の責任は無い。

クイリナス・クイレル教授にしても、バーテミス・クラウチ氏にしても、その身に秘めていた真意を理解されないまま死んだ。彼等を葬ったのはあの校長であり、また他の大多数の無関心な魔法族であっ

て——なればもう、善に期待する事など出来やしない。

「君に解りやすいよう、まずこの魔法界の差別の問題に焦点を当てようか」

S. P. E. W.。

彼女が目論む革命の、真の敵は一体何だろうか。

「君は去年屋敷しもべ妖精達の苦境を知り、そして許せないと思った。ならば、狼人間の苦境に対しても同種の考えを抱いただろう。知己となったリーマス・ルーピン教授の事も有る。君にとっては、狼人間の状況もまた見過ごせる問題では無いと感じたと思う」

「……………」

「そして僕がドローレス・アンブリッジと関わりを持っている事につき、君は不愉快を覚えたかもしれない。彼女は反人狼法を起草した人間だ。そして差別主義者であり、性格も宜しくはない。あんな人間とどうして平気で接触して居られるのか。そう思ったかもしれない」

勿論、僕の勝手な自惚れで無ければだが、と軽く笑う。

ハーマイオニーからは、やはり返答が寄越されなかった。しかし、こちらの話に対して聞き耳を立てている気配は、間違いなく感じ取れた。

「けれどもハーマイオニー、彼女は起草draftedしただけだ。そして世間に通ずる法であるとは、予め規定された適正な手続を経て、公的機関によって承認されたという事なのだ」

ハーマイオニー・グレンジャーは今更驚いた反応を寄越しはしない。

ドローレス・アンブリッジへの嫌悪は、彼女の頭脳を鈍らせる程でも無いようだ。

「……マグル保護法も、同じく適正に成立した法律の筈よ」

「そうだな」

彼女の反論に僕は頷き、受容を示す。

それらの法は善悪の両面であり、これをもって魔法界の判定を決しがたい。

「しかし大元の話。リーマス・ルーピン教授を苦しめているのは、果た

して反人狼法か？ ドローレス・アンブリッジの悪意と、魔法界における大勢の偏見がこの状況を作ったのか？ 果たしてそれだけが原因と言つて良いのか？」

「……………」

彼女が顔を上げた気配がしたが、それを意図的に無視し、違う筈だろうと続ける。

「反人狼法が出来たのは二年前。教授の困窮を見かねた校長が、防衛術教授の職を斡旋したのも二年前。しかし、法規制により就職が不可能になったとて、即座に貧困に転落する訳ではないだろう？ まあ教授はグリーンゴッツに口座を開設出来る身分だとは思えないが、だとしても、あの教授は明日の為の貯蓄を考えない程に刹那的な性格ではない」

「……………」

「けれども、リーマス・ルーピン教授は長らく貧困に喘いでいた。この二年間のみならず、その以前も。それは何故だ？」

今度は、ハーマイオニーの反応が大いに遅れた。

彼女はドローレス・アンブリッジについて考えを巡らせようとも、その先にまで思いを馳せようという発想は無かったようだ。

……近視眼的なのは、勇猛過ぎるグリフィンドールの悪癖か。

そしてこの類の熟考は、時に臆病と揶揄されるスリザリンの真骨頂でもある。

「……………あ、貴方は……………」

「何か気付いたか？」

奇妙に震える、弱弱い彼女の声に首を傾げる。

やはり視線は向けなかった。御節介な星空を見つめ続ける事を選択した。

「貴方は、第一次魔法戦争後の十二年間、ダンブルドアがルーピンを見捨てて来たと言いたいの？ 彼は前回も騎士団として戦ったと聞いたわ。だから報酬のお金をあげるとか、或いは戦争が終わって職を斡旋しなかったとか。そんな事を主張したいというの？」

「……………嗚呼、君はそちらの発想に向かってしまったのか」

彼女が即座に返答しなかった理由が解った。

そして僕の表現が悪かったのかもしれない、と笑う。

ハーマイオニーが聡明な少女であるのも善し悪しで、僕は明確に首を横に振る。

「あの校長の事が如何に嫌いでも、そんな事は言わんさ。あの御優しい校長閣下が、その程度を申し出ない筈も無い。あれでも今世紀で最も偉大な魔法使いだ。金銭にしても人脈にしても、有り余る程持っている。校長が教授に与える事は不可能では無かっただろう」

己が取り繕える限りは、あの老人は善人として振る舞おうとする。

戦争が終わったらハイサヨウナラという真似は、善人たらしんとする者の流儀では無い。軍人年金よろしくガリオン金貨で満たされた袋を渡す事くらいは容易く、また彼ならば、狼人間に理解を持つ人間を紹介し、職を斡旋する事も可能だっただろう。

「——だがハーマイオニー。今の指摘は非常に残酷では無いだろうか？」

「……え？」

彼女の呆けた声。表情まで想像出来る。

丸一年会話しなかったが、それでも同じ城で過ごし続けてはいたのだ。

だからこそ——許せはしない。

「あの魔法戦争に身を投じた者はな、決して金や職を目的としていなかった。グリフィンードルの騎士道精神は、何らかの対価を求めて血と命を捧げた訳では無かったのだ」

何を得た訳でも無い。総じて見れば、喪った物の方が大きかった事だろう。

それでも彼等は、己の選択に後悔せず、戦後に胸を張って日常へと帰って行った筈なのだ。

「それなのに君はたった一人だけ、それも五体満足で戦争を終えられた人間に、戦争の報酬を超越せと言えと求めるのか？ 自分は狼人間であるから、今は貯金が無くて、今後到底職を得られそうにないから、どうか金と職を御恵み下さいと？」

「……っ!?」

アンダードッグ
負け犬にも矜持が有る。

他人から見れば些細で、愚かに見えても、しかし譲れない一線が。「しかも申し出る相手は自分にホグワーツ入学を許可してくれた校長、既に返し切れない恩を受け取った大恩人だぞ? 魔法戦争で多少なりとも恩義を返したとはいえ、魔法界の狼人間の立場を考えれば、やはり天秤の傾きはそのままだろう」

狼人間による傷は不可逆かつ治療不能。

そして彼等が危険なのは、決して満月の夜に限った事では無い。

確かに満月の夜以外に『感染』は発生しないが、それ以外の時間に噛まれた場合でも、彼等が残した呪いの傷からは一定の汚染——狼人間としての性質が残る事は報告されている。生徒として迎え入れた狼人間が、子供の喧嘩中うっかり他人を噛んでしまう可能性を考えれば、かの寛容で傲慢な大魔法使い以外は、そのような愚を冒せない。ミネルバ・マクゴナガル教授ですら、狼人間の入学を認めたかどうか怪しい。

「……る、ルーピンはそれだけの事をしたわ。報酬を受け取っても恥じる必要は無い筈よ」

「僕もそう思う。仮にその手の申し出をしていた事を知ったとして、僕の教授への敬意は何も変わらない。受け取る資格は十二分に有るだろう」

忠誠心を有する狼人間など、如何に望んでもそう手に入るものではない。

あの校長閣下による指揮の下、リーマス・ルーピン教授は魔法戦争中に唯一無二の仕事をしただろう。彼の仕事によって少なくとも人間の命が救われ、また狼人間彼の同類になるという不幸を避けられた事だろう。その功績は讃えられるべきだった。

「しかし不死鳥の騎士団員。そして直接所属して居ないにしても、騎士団の協力者達。あの戦争で彼等がどれだけ死んだと思う? その死者達には兄弟姉妹、祖父母や両親、そして幼い子供達が居た。つまりあの偉大な偉大な魔法使い様にはな、救うべき弱者が他にも多く居

「ただ」

「彼は現在世界で最も強力な魔法使いの一人だ。しかし彼は所詮個で、手は二つしかなく、それを伸ばせる範囲など限られている。ならば一人で生きられる成人男性が自ら身を引く事は、己に手を貸す位なら他の人間に与えてやってくれと主張する行いは不自然か？ その高潔さはグリフィンドールが掲げる精神に十分合致し得ると考えられないか？」

勿論、これは僕の勝手な推測であり、事実であつたかは教授本人に聞くしかないが。

そう言い訳を口にした後、区切りを示す為に、少しだけ間を置いた。

ハーマイオニーは何も言わなかった。

「話を戻すが、狼人間を窮地にやっているのは魔法界であり、大勢の魔法族だ。それを放置し、見て見ぬ振りをしているのも。そして脱狼薬が発明された程度で狼人間は差別される必要が無くなった、或いは救われたと考えている甘い考えをしている魔法族もまた同類だ」

内心を支配し始めた黒い衝動を排除するように、大きく息を吐く。

「脱狼薬は、狼人間の変身時に理性を喪わなくするだけの薬でしかない。狼人間の変身自体を、要は他人に脅威となる鋭い爪や強靱な肉体を得る事を止めはしない。そして、狼人間の感染能力を喪わせるとも聞いた記憶が無いな。まあそれを試すには人体実験するしかないのだが、さりとて薬効が未知のままである現状、狼人間を警戒するなどという方が無理な話だ」

その薬は症状緩和薬に過ぎず、治療薬では無い。

「勿論、凶器と成り得る武装、杖を持っているのは魔法族も同じだ。狼人間と同様に、僕達魔法族は他人を簡単に殺す事も出来る。だから、その人次第という考えも有る。脱狼薬を服用した狼人間と、杖を持っている魔法族。その両者は一体何処が違うのか、差別するのは不条理ではないか。それは主張として有り得る」

その際、僕は意図して脱狼薬の疑問には口を噤んだ。

変身した狼人間は人間的な善悪を喪失し、完全な変身後は相手が妻

や娘であろうが構わず襲う。そして捕食相手を選び好みしないという事は、必然のように、誰かを狙って襲う事など出来ないという事だ。彼等が特定個人を襲おうとしても、人目を避けた場所で変身して遙々遠征というのは不可能で、満月の夜にその獲物の傍に身を置き続けるか、或いは満月になる前に予め獲物を拘束しておくか位しか取れる手段がない。しかも理性を喪失するから、勢い余って獲物を噛み殺すというのも良く有る話だ。つまり、効率的に同族を増やすという事が困難なのである。

その上、狼人間は基本的に杖を持った魔法族に敵わない。

銃を持った「マグル」が獣に勝てるのと同じだ。勿論、獣側が勝つ場合もしばしば存在するように、狼人間側の勝ち目がない訳ではない。だが、基本的な上下関係は揺らがない。目的意識の下に苦痛や恐怖に耐え、言語を駆使して相互協力体制を整え、巧妙な作戦を構築して敵を討ち滅ぼそうとする怪物達に、本能に支配された獣畜生共では対抗し切れない。

しかしそれらの問題は、脱狼薬によつて一挙に解決してしまうかもしれない。

理性的に襲い、理性的に感染させ、理性的に殺す。それが可能であるならば、魔法族と狼人間の力関係は逆転し得る。変身時に杖まで使えるなら完全にひっくり返るだろう。ダモクレス・ベルビーが悪魔の薬の発明者として後世に伝えられる可能性は、十分に有り得る。

有り得るのだが——情報の足りない現状では、所詮悲観的な想像、妄想の類でしかない。

そして僕が指摘したい問題の焦点は、決してそこには無かった。

「けれども、僕は脱狼薬を服用したという条件を意識して付けた。つまり君達は絶対に、脱狼薬を服用していない狼人間が満月の夜にウロウロしている事を認めない。彼等の「自由」を、君達善良な魔法族は許しなどしない。そしてそれは真つ当に聞こえてしまう」

ハーマイオニーは物の解っていない少女のように一々反論しなかった。

疑問が湧いたら直ぐに質問を紡いでいたのは、もう四年以上前の事

だ。そして、僕がそう簡単に突き崩せる論理を持ち出さないのを、これまでの付き合いにより彼女は良く知っていた。

一言一言が彼女に出血を強いている事を理解し、それでも僕は止めない。

「嗚呼、それは正しいのだ。最も素朴で原始的な自由主義論理——他者に対して危害を与えない限り、人間の自由は保証されるという原則。反転させれば、他者に危害を加える場合には自由が制限されても已むを得ないとする原則。その根幹まで糾弾しようとは流石に思っていない」

「マグル」の世界だって変わりない。刃物や銃器を携帯する事は許されないし、酒を飲んで自動車を運転する事も禁じられている。健全な社会は、そのような注意と配慮で成り立っている。

それは絶対的に正しく、けれども再度溜息を吐く。

「だが、その費用はどうするべきだろうか？」

「脱狼薬は非常に高価な薬だ。材料自体がまず稀少。それを調査しうる能力を持った人間も稀少、即ち技術料も当然高く付く。しかも毎月服用が必須であり、将来も必ず飲み続ける必要が有るから、人生において薬に過ぎ込む総費用は膨大になる」

味が酷く、砂糖を入れると台無しになるなんて些細である。

薬価の問題を解決しなければ、脱狼薬は狼人間の救済の可能性と成り得ない。

「で、だ。狼人間が魔法界で生きようとすれば、その入場料コストを払わねばならないのか？ それ位の金など自分達の世界に歓迎して貰えるなら安いものだろうと、そう魔法族は傲慢に言うのか？」

「それはマグルの世界なら——」

そこで、ハーマイオニーの反論が途切れる。

「——下等種族マグルなら？」

星を見上げたまま促すが、答えは返って来ない。

だが、それで良かった。彼女が僕の真意を理解したという事だ。

ここは夢のような魔法界だ。退屈に満ちた非魔法界では無い。

「公平の為に付け加えておくと、それを為し得るかもしれない機関は魔法界に一応在る。いや、在ったと表現すべきか。魔法生物規制管理部存在課内の、Werewolf Support Services 狼人間支援サービス。その組織は最早活動しているのかいないのか解らない状態で、狼人間への支援など忘れ去られているのが現状だ」

まして、脱狼薬の為の補助金を出すなんて夢のまた夢である。

「魔法史においても最優秀の成績を収める君は当然知っているだろうが、この魔法界でWerewolf Code of Conduct 狼人間行動綱領が制定されたのは1637年だ。つまり、それを守れば魔法界に受け入れてやるという原則が遙か昔に示されていた訳だが、しかし、守る狼人間は居なかった。狼人間に魔法族への不信が有り、魔法省に自身の存在を登録する者が居なかったのも理由だが、恐らく根本的な理由はそこには無い」

たとえ魔法大臣との間で破れぬ誓いを交す事が出来、命の無事が完全に保証されたとしても、あの狼人間規範を守る者は居なかっただろう。

「狼人間行動綱領は、彼等が毎月自身を閉じ込める事によって、他人を攻撃するような事態を防ぐよう規定する。これは明らかに、満月に変身する狼人間の習性を前提とした安全基準を策定する事を目的としている。そして嗚呼、これも素晴らしく真つ当に聞こえるな」

一見して真つ当だからこそ厄介だ。

「狼人間側の理屈——満月の夜に人間から隔離された狼人間は、飢えに苦しみ、狂い、最終的に自傷行為へと及ぶのだという事を考えさえしなければ、だが」

立場を逆転させてみれば、これ程冷淡で残忍な対応など無い。

魔法族が狼人間に突き付けた条件は、刃物を持つとか酒を控えろというものでは無い。重度の薬物中毒者が薬物を禁ずるような、病に侵された末期患者が激痛や呼吸困難を我慢するような、本能に深く干渉してくる部類の代物だ。

まあリーマス・ルーピン教授の例を鑑みるに、精神状態次第で捕食衝動を多少は緩和出来そうではある。しかしながら、それでも彼が狼人間である事に由来する苦痛は、学生時代に根本的に解決した訳では

無かつただろう。

「狼人間がそれだけの入場料を払わない限り、自分達の社会に受け容れてやらない。そう魔法族は示したのが狼人間行動綱領だ。そして現在。脱狼薬を服用しろという『命令』は、過去のソレと何も変わらない。三百五十年前から魔法族は何も進歩していない。弱者に対して一方的に負担を押し付けるのみで、なれば被差別側は——最も悪名高く、象徴的な悪の人狼たるフェンリール・グレイバックはこう言うだろう」

そんな世界はクソくらえだ、と。

憎悪と殺意をもって、吐き捨ててくれるだろう。

「……あ、貴方は狼人間の革命を肯定するの？」

「理解出来る、というだけだ」

ハーマイオニーの言葉を僅かに、しかし決定的に修正した。

「はつきり言つて、僕はリーマス・ルーピン教授の同類になどなりたくないからな」

何ら恥じ入る事もなく、堂々と僕は宣言する。

狼人間。その言葉を避けたのは、意図的なものだった。

「毎月の変身の苦痛、或いは脱狼薬の費用負担。どう考えたって御免だ。君とてそうだろうか？ 狼人間達が『自分達の境遇を理解するには良い方法が有る。それは今すぐ俺に噛まれる事だ』と、君に対して言つたでしょう。その際、君は必ずや強く拒絶する。どんな詭弁を弄してでも、彼等の『仲間』になろうとはしない」

「……………」

「悪い事では無いとも。非魔法界とて変わらんさ」

神の国など現世には無い。

理想だけを見上げて言う綺麗事は、現実の重みによって轢き潰される。

「如何なる人間も障碍者になりたくない。その後ろめたさを隠す為に、『マグル』は社会的弱者に対して優しくして来た。税金を広く徴収し、得た金を国家福祉の費用として充ててきた。揺籠から墓場までの信念は前首相が打ち砕いてくれたが、それでも全ての福祉政策を撤

廃した訳では無い。それらの慈悲の多くはこれから変わらず続いて行くだろう」

けれども、魔法界はどうだろうかと続ける。

「何故、教授の苦境は十二年、十四年——いや、三十余年間、変わらなかったのだろうな」

「……………」

「君は去年行動しない僕を非難し、それを甘んじて受けるつもりなのは変わりがない。だがな、リーマス・ルーピン教授の苦境について熟知しており、しかも更に強力な形で支援活動を為しえる人間が過去に一人だけ居た。あの玉座が不自然な形で用意された不恰好なハリボテに過ぎないにしても、我儘を押し通せるだけの三百年分の権威を獲得した事は、今現在コーネリウス・ファッジが証明してくれている。

——が、知つての通り、彼はそうしていない」

だからリーマス・ルーピン教授は、彼を真に信用出来なかった。

自分が救われる契機を作っただけの恩人よりも、実際に自分を救ってくれた友人達の秘密を守る事に高値を付け、動物擬きの秘密に口をアニメーガス隠み続けた。

シリウス・ブラックが脱獄手段として動物擬きを用いた訳では無いと考えたとしても——学生時代から使えたのに十二年間は大人しく収監されていたのだから、不合理な思考ではない——それでもアズカバン脱獄以降に闇祓いの追跡から逃れられている理由は、彼が犬に変身しているからなのだと察していただろうに。

……嗚呼、それを打ち明けられなかった教授の弱さを、僕は何ら否定しない。

かつての Hogwーツにおいて、リーマス・ルーピン教授の正体を知った途端、ジエームス・ポッター達が以降の交流を断ち切る可能性というのは有ったのだ。

特に「ポッター」や「ブラック」の子供は、幼少期から狼人間の恐怖など刻み込まれていただろう。しかし、あるうことか、ジエームス・ポッター達は受け容れた。そこに大魔法使いの策略や深謀遠慮は無く、三人の純然たる善意と友誼こそが過去の教授を真に救ったので

あつて、故に恩人よりも親友達への義理に殉じようとするのも当然である。

結局の所、彼が信用を勝ち取れなかっただけの話に過ぎない。

彼は世間に訴えるだけで、自ら動いて変えようとする事は無かったからだ。現に苦しみを味わっている者にとっては、手を抜いているようにしか見えなかったからだ。

「勿論、彼にも言い分は有る。何故望んでも居ないのに、自分が魔法界の王様の身分に押し上げられねばならないのか。自分の助力が無ければ正常化されない世界など、有り得てはならないと思わないのか。上からの強引な独裁によってではなく、魔法族が下より民主的かつ自主的に解決していくのが筋では無いかと」

もつともらしく聞こえるが、けれども期待し過ぎだ。

他ならぬ彼が揶揄した通り、魔法族はそれ程までに進歩した種族ではない。

「しかし、現在苦しんでいる者にとっては知った事では無い。自分を助けてくれなかった事が全て。八つ当たりだとしても、やはり憎悪を向けるには十分なのだ」

人間が何時も合理的に行動出来るというのなら何ら苦勞はしない。

「彼は何も変えなかった。あれだけ偉大で有りながら、力を持つ者としての責任、高貴なる義務を果たしてこなかった。彼がその身に宿す強大な力を振るうにしても、その対象は狭い社会内の小さな子供達であつて、同時に彼は自分の領分で無いと判断した者達、魔法界に住まう多数の大人を見捨ててきたのだ」

魔法界に求められたのは、脆弱な基盤しか持たない立法議会や法執行機関の長ではない。

開明的な啓蒙専制君主、或いは開発独裁を進める首相や大統領こそが必要だった。

「で、でも……い、貴方は、貴方という人は——」

そこまで口にして、ハーマイオニーは途方に暮れたような顔をした。

彼女は当然の反論を思い付きはしたものの、僕を傷付けずに表現す

る言葉が見付からなかったのだろう。けれども言いたい事は十分に伝わって来たので、彼女の代わりに口にしてやる。

「そうだな。僕は彼に救われなかった側の人間では無い」

アルバス・ダンブルドア校長は子供に甘い。甘過ぎる。

「寧ろ彼は存分に多くを与えてくれたとも。スリザリンの性質が濃い人間なんぞ御好きでなかっただろうし、僕の本性に触れた後は嫌悪すらしていただろうが、それでもあの大魔法使いにとって僕は庇護対象であり、慈悲と慈愛を注ぐべき相手だった。……まあ、僕はまだ何もしていないからな。在学中に四人は殺していたらしい、既に堕ちていた大先輩とは違う」

スリザリンに入る前、入学以前であれば余計にそうだろう。

もし産みの母の手紙が早く届いていれば、想定される保護対象が一歳未満—— hogwarts 入学まで数年を要する子供であったとしても、あの校長は当然のように最善を尽くしたに違いない。

母達の結末に校長が間に合わなかったのは偏に彼以外の部分、つまり育ての母が止めた事や全ての元凶たる我が父に原因と責任があつて、だからその部分に関し、今世紀で最も偉大な魔法使いへの恨みは一切無い。

勿論、これはコーネリウス・ファッジの前でも明言した通り、魔法省に対しても同じ事が言える。彼等が自分達を救わなかったのが悪いとは、毛頭主張するつもりがない。

「だからあの校長や魔法界を憎む理由は、無いと言えば確かにない」
「ならー」

「けれども、この魔法界に味方する理由も全く無いな」

そもそも光の陣営と敵対する理由しか存在しない。

「アルバス・ダンブルドアも闇の帝王も、ここ数十年間で魔法界に歪みを生み出した諸悪の根源だ。しかし結局の所、彼等も魔法族の一人ではない」

彼等は体制の象徴であるが、決して体制そのものではない。

「確かに彼等は一人で世界を変える力を持っていた。しかし、近代以降の革命の多くは下から生じるものだろうか？ 万人が革命権を握る

事は世に示されており、けれども今まで魔法族は誰も動かなかった。ならば現体制、現魔法族を滅ぼすべき悪と看做す事に、一体何の躊躇をしよう?。」

バック対ベル

「なあ、ハーマイオニー・ジーン・グレンジャー」

僕は夜から視線を逸らし、彼女を真つすぐ見据え、しつかりと呼び掛ける。

入学前、僕に対して魔法界の素晴らしさを押し付けてきた女性に。この四年間、正しい正義感を胸に宿し続けてきた女性に。母達の死以来、ずっと僕の希望で在り続けてきた彼女に。

この魔法界の現在を糾弾し、否定し、憎悪する言葉を投げ掛ける。「パーシー・ウィーズリーは、良き父と母を持ったな？」

「——え？」

彼女は呆然とこちらを見返した。

何故。

そう思っているのは、ここに居るのが誰だろうと容易に悟れた筈だ。

彼女にとつて、この流れでパーシー・ウィーズリーの話題が出たのは思考の埒外だった。今日僕は幾つかの問題を提起をしたが、今回の切り口は彼女の視点からは何れとも繋がっていない話のように見えってしまう筈で——けれども、違う。

これこそが魔法界の過去、現在、未来全てに繋がる話である。

こう言つては悪いが。

狼人間や屋敷しもべ妖精如きの問題に口を挟む暇が有るのならば、彼女はこの問題にこそ真剣に取り組むべきだった。魔法界が極々近い将来に直面し、そしてまた盛大に議論が紛糾するであろう問題は、これ以上に存在しないのだから。

「嗚呼、ハーマイオニー。この手のスリザリンの言葉はな、決して額面通りに受け取ってはならない。同種の皮肉が通じないのはドロレス・アンブリッジも同じだったが、君はもう少し賢く在るべきだ。そして言わずもがな、僕はこの話を世間話として出した訳ではない」

或る意味、去年は無理矢理に先延ばしとしたようなものだ。

しかしながら、既に純血主義を掲げる闇の帝王は復活した。そして

曖昧で居続ける事をハーマイオニー・グレンジャーが拒否した以上、僕は触れない訳には行かない。

「夏休暇中、彼は大臣の腰巾着としてパーティーに来ていた。会った場所は……散々ナルシツサ・マルフォイ夫人により連れ回された為にあやふやだが、兎に角何処かで彼と会ったし、多少なりとも私的な会話をする機会に恵まれた。嗚呼、大した話はしていない。投げ掛けたのは社交辞令と、後は今年彼が省内で聞き慣れたであろう言葉を幾つか。ただそれだけだ」

そして十分過ぎた。

「……それが何なのよ。どうして、そんな話題を持ち出すのよ」

彼女の声は疑問に満ち溢れており、しかし同じ位に恐怖を漏らしていた。

声色や表情を変えたつもりはないが、先の読めなさから不吉さを感じ取ったのかもしれない。それは正しいが、感じ取れていた所で意味は無い。

「パーシー・ウィーズリーはウィーズリー家から離反した。それはまづ間違いないと確信はしている。特急内でジネブラ・ウィーズリーが示した反応の事もあるし、何よりパーシー・ウィーズリー本人と会話した訳だからな。そこに疑いを持つては無い」

そして彼が融通の利かない——間諜向きではない——性格であるのは聞き及んでいるし、実際にグリフィン・ドラール生から煙たがられているのも幾度か見た。また今年の接触は彼が勉強しか出来ない阿呆かどうかの確認も兼ねており、ウエーザビー君呼ばわりを思えば、単純に彼を「賢明な」人間であると看做しにくい評価も存在していた。しかし、彼の資質と能力故か。或いはたった一年限りとはいえ、かつて魔法法執行部の頂点に上り詰めたバーテミス・クラウチ氏の薫陶の賜物か。夏季休暇中のハリー・ポッターへの魔女裁判に付き、彼はこう評してくれた。

『僕の見るところ、単に手続きのことで放免になった』、と。

「知つての通り、僕は今年の特急内でハリー・ポッターと話をした。その内容について、君が彼から内容を聞いたかは知らない。だが、これ

はアレと同一軸に在る話だ。話の信用度と、話者が誰か。話題は当然、闇の帝王が復活したという噂の信憑性について」

「……パーシーがダンブルドアやハリーを信じられないって事？」
「違うとも」

断固とした否定に、ハーマイオニーは頭を叩かれたように俯いた。「僕はこう言った。魔法大臣より、校長より、善良なだけの人間が信じられる場合は有ると。たとえ確たる証拠が無かったとしても、闇の帝王の復活を主張している人間を信じられるのなら、それを真実と信じる事が出来るのだ。裏を返せば、闇の帝王の復活を信じない場合は、それを主張している人間の悉くが信用ならないという事なのだ。

——つまり、自分の両親も含めて例外無く」

「……両親？」

「ああ、その通りだ」

意図せず漏れたであろう、か細く弱弱しい声に、僕は肯定を返す。「十数年共に暮らした愛する両親と、殆ど接触も無かった魔法大臣。或いは両親と、やはり深い接触の無かったホグワーツ校長。そのどちらの言葉に重きを置いて信じようとするか、それも物的証拠が無い上での信用性を考えるならば——普通は結論など明らかだろうか？」

当然、両親を信じる筈である。

それまでの関係が良好であればある程に決まり切っている。

仮に両親の言葉が間違っていると考えたとしても、対立や衝突を避ける為に敢えて両親の側に留まるという事は有ろう。真実でないこと知っていても尚信じるという事は、やはり人間の行動原理として決して不合理と言えるものではないからだ。

「だがパーシー・ウィーズリーは違う行動を取った。明確に敵対し、訣別した。それは、彼の両親に対する信頼が崩壊した証以外の何物でもない」

まさか学年首席の秀才が、魔法省への忠誠という綺麗事や、極々個人的な出世欲でもって家族からの離反の道を選んだと思っているのか。確かに彼の中にはその想いが見て取れたが、叛逆の根幹は違う。絶縁の覚悟を決めるには、それらの理由は弱過ぎる。彼の認識上、護

りたいものを護る為には権力が必要だったからああなった。

ジネブラ・ウィーズリーも同種の勘違いをしていたらう。パーシー・ウィーズリーの懊悩と葛藤を少しでも慮っていたのなら、あんなに己の正義を疑わない眼など出来ない。

自分達の存在こそ悪だとは、彼女達は考えだにしない。

「……どういふ事よ」

ハーマイオニーは、最早その態度から怯えを隠さなかった。

「何でパーシーが、ウィーズリーおばさん達を信じられなくなるのよ……。何故そんな事を、部外者である貴方に断言出来るのよ……？」

何故グリフィンドールでもない貴方が、ウィーズリー家の内情を、パーシーの気持ちを当然のように見透かしてみせるのよ!？」

「それは僕が偏にスリザリンだからだよ」

足元が疎かになってしまふのはグリフィンドールの悪癖か。

「スリザリンに居る限り、どう足掻いたってこの手の問題に向き合わねばならないからな。しかし、第一次魔法戦争後に甘やかされたグリフィンドール、ジェームス・ポッターとリリー・エバンスの献身故に持ちあげられた獅子の寮にはそれが無い」

自分達の勝利に浮かれ切った間抜け共は、魔法戦争の勃発で済し崩し的に棚上げとなった問題の全てを忘れた。そして今もその忘却を是とし続けている。

「特に最近の『ウィーズリー』は成績優秀者や人気者が続き、この手の嫉妬と憎悪の言葉をぶつけられるような怖い物知らずは、君達の寮に居なかつたのだらう。結果、パーシー・ウィーズリーは何も考えず学生生活を過ごし、魔法省に入って漸く、自分達の矛盾に向き合う羽目になった。その結果、彼が抱いていた理想の両親像が崩壊し、信頼を喪った訳だ」

ジネブラ・ウィーズリーの眼を思い返す。

裏切り。裏切り者か。

嗚呼、裏切ったのは——裏切っていないのはどちらの方が。

「『穢れた血』^{Muddy blood}。そう呼ばれる君は、魔法界に蔓延る血の問題についてもっと考えるべきだったのだ。或いは『ウィーズリー』などの善

良を気取る魔法族達は、この問題について率先して取り組むべきだった。このホグワーツ、安寧の学び舎では聞かずに済んでも、我等が偉大な校長の庇護の及ぶ外、醜悪で腐敗した大人達の社会においてはそれも行かないのだから」

外界から隔離された優しい世界。

しかし、優しさだけの世界は何処か歪んでいないだろうか。

繊細な問題だからと言って、今年度闇の帝王について一切触れないのもどうなのだろう。

現在の七年生達は、当然ながら半年と少し経てばホグワーツを卒業する。つまりあの最強の魔法使いの庇護下から出て、独り魔法界の中で生きていかねばならないのだ。

それにも拘わらず、何も知らされないまま最後の一年を過ごせというのは許されるのだろうか。彼等に準備する時間と覚悟を決める為の機会を与えないまま外の世界に送り出すのは、教え子達の良き将来を望む教職者として残酷な仕打ちだと思わないのだろうか。

これも同じ。

一切話題に出さずとも、それが消滅する事になる訳ではない。

不自然に眼を逸らし続けてしまえば、人生の何処かで必ずや代償を支払う羽目になる。

「アーサー・ウィーズリーについて、僕が抱いていた疑問点を挙げようか」

彼は典型的な魔法族の振舞いをした。

そして人生における彼の決定に部外者が文句を言う筋合いもなく——しかしながら、それで外部が何も批判しないと考えていたのであれば、やはり考えが甘過ぎるとしか言えない。

アーサー・ウィーズリーが妄信している程、この世に善人は多くない。

「二つ目。彼が省内で『マグル』の有識者として振る舞えた、その根源の理由は何か。マグル製品不正使用取締局は非常に小さい部署だ。二人しか人員が居なかった。だというのに、彼が『マグル保護法』制定の主導権を握る事になった——握らせて貰えたのは、一体どうして

なか」

彼が魔法界及び魔法省で尊重されているのは、一体何処に理由があるのか。

もつと言えば、マグル保護法の制定につき、「マグル」の片親や両親を持つ人間、マグル社会に通じている人間が主導権を握るべきという話は何故出なかったのか。万一そのような協力者が居たとして、その名前を魔法界で聞く事が無いのはどうしてか。

「二つ目。彼はグリフィンドールだ。スリザリンと違い、半純血やマグル生まれを公言する事が困難な寮では無い。つまり周りに「マグル」文化に精通している者は容易に見付けられ、卒業後でも連絡を取ろうと思えば出来た筈だ。純粋な魔法族でも、閨戚いあたりは割と「マグル」文化に通じているようだしな。しかし——それにも拘わらず、何故彼は「マグル」について無知のままでもしか居られなかったのか」

奇しくも去年、僕はロナルド・ウィーズリーに対し、知識を得る為の最短の道を示した。

それを困難にさせたのは勿論魔法戦争の勃発で有るが、更に不可能にまで至らしめたのは、やはりアーサー・ウィーズリー自身の行動に問題が有ったのではないか。

「加えて三つ目。ウィーズリー家、そしてアーサー・ウィーズリーは「血を裏切る者」と呼ばれている。この場合の「血を裏切る者」は、*Mugglelover* は、マグル愛好家と同じ意味を表す。しかし、その単語を字義通りに解釈した場合。彼等は——アーサー・ウィーズリーとモリー・プルウエットは本当に、己に流れる血を裏切ったのだろうか？」

バーテミス・クラウチ氏もチラリと触れていた。

彼等が駆け落ちせざるを得なくなった理由は何なのかと。

それら突き詰めていった時、全てを明快に説明してしまう、一つの解が存在する。

「——待って、頂戴」

そしてハーマイオニー・グレンジャーは頭の良い女性だ。

逐一全てを語る必要など無い。問題を用意し、指針を提示してやれ

ば、解答に自ずと辿り着く。辿り着いてしまう。声は先程よりも大きく震え、顔からは完全に血が引いていた。

「それが正しかったら、貴方の言葉を前提としてしまったら、パーシーは決してウィーズリー家に戻って来ないじゃない……！　ヴォルデモートの復活が明らかになつて、魔法省の嘘がバレた後でも、彼等が仲直りする事なんて出来ないじゃないの……！」

「そこまでは断言出来んな。パーシー・ウィーズリー次第だろう」
在学中に深い交流は無い。今回も立ったまま短時間会話しただけだ。

僕としても、そこまで彼を理解したという気はしない。

「闇の帝王の帰還が確定すれば、騎士団と魔法省は嫌でも同じ陣営に立つ事になる。要は望む望まずに拘らず、彼等は肩を並べて戦わなければならぬ。その結果、両親が生み出した矛盾と裏切りを飲み込み、パーシー・ウィーズリーが譲歩を示す事は十分有り得るだろう」

嗚呼、譲歩だ。

決定権は、親の負債を背負わされた彼の側に在る。

「そしてアーサー・ウィーズリー達が悪いと言っている訳ではない。君の眼から見て、彼等は誠実で、善良で、親の模範とも言える人間達なのだろうか？　ならば、僕もその前提を崩す事はしない。彼等は善き父であり、母であつた事だろう。子供としては当然誇りに思うべき、素晴らしい人間達。その一切を否定しないさ」

母達は兎も角、言わずもがな、僕の父親は一切の疑問の余地なく悪人だった。

そんな父親——ステイブン・レッドフィールドとは違い、七人の魔法族の子供を立派に育て上げた彼等二人は、世間的にも賞賛されるべきである。

「そしてこの指摘は、アーサー・ウィーズリー個人を責め立てているという事を意味しない。僕はアーサー・ウィーズリーに一切の非が無いと断言しても良い。僕が見る限り、殆どの魔法族——ハッフルパフも、レイブンクローも、グリフィンボールも一律に同じだからだ。何よりスリザリンはな、その恐怖を全肯定するからだ」

自分達の幸福な家族生活を追求するなら当然の選択と言える。

現状維持で構わないという点において、四寮の圧倒的多数が一致している。

「だが半分の魔法族の血しか持たない一人としては……選択権の無い者としては、こうも思わざるを得ないな。口だけの卑怯者、と」

ガブリエルを見習って、臆面無くズルいと言つてのけるべきだろうか。

「そして魔法省、あの半端な純血達が集う牙城においては、他人の悪口を聞くのに事欠かない。彼を庇護していたバーテミウス・クラウチ氏も去年消えた。この手の誹謗中傷に潔癖主義者が暴発するのウエーザビー君も必然で、しかも自業自得だ」

ハーマイオニーは、完全にテーブルに突っ伏してしまった。

波打つ彼女の髪が宙に舞い、大きく広がり、ティーカップの中や一部のケーキ皿に入ってしまう。それを杖を振る事で払いのけ、多少なりとも髪を整えてやった後、改めての反応を待たずに僕は帰結を述べる。

「事象には因果が有る。この始まりは1900年だ。或いは、1859年だったかもしれないが」

もしかしたらこの命題が突き付ける試練は、類人猿ホモ・サピエンスの内の一種族が地上に生まれ落ちた瞬間から始まっていたのかもしれない。

「何れにせよ、その時代に『マグル』は大きな発見を為し、革命的進歩を遂げた。それは非魔法界において或る思想を強化し——そう、決して新たに生んだ訳ではない——1930年代に一つの最盛期を迎えた。そして同時期を生きた『純血一族一覽』の著作者はな、単にそれを魔法界に輸入しただけに過ぎない。嗚呼、だからこそ広くウケたのだ。その思想に強く抵抗せざるを得なかったのは、純血主義者ではなくマグル愛好家だったからだ」

One Drop
一 滴の混じりも無い血。

純血主義者は当然それらを持つに等しいのだから、今更取り立てて強調する必要は無かった。長い歴史を持つている多くの魔法族の家系にとっても殆ど同様だった。

しかしそれ以外の新参者達にとっては他人事では無く、存在価値を揺るがされた。それ故に『純血一族一覽』という悪書は、それまで純血達が作成していた同種の書物や個人的家系図と違い、純血主義に対して反対する者にすら広く存在を知られている。

『純血一族一覽』の著作者が提示した『純血主義』。それは魔法界に持ち込まれた『マグル』の知見とサラザール・スリザリンの遺産が混じり合って生まれた、以前とは性質を全く異にする科学的な思想だ。君が心の奥底で望んでいる通りに、魔法族は『マグル』から大いに学んだのだ。その最大の成果物こそコレなのだ」

「……マグルに影響されたとは限らないじゃない」

「仮に当時影響されて居なかつたら同じ事だ。今現在、この『法則』は『マグル』の世界で簡単に見付けられるのだから」

今からでも新しい『純血主義』を始める事に支障は無い。

「無論、魔法族は『法則』の例外であるか、或いは全く別の『法則』に従うと証明出来るなら問題無いのだが——無理だろうか？」

「……………」

「であれば、推測するしかない。正しい『らしい』のは果たしてどちらか。『純血主義』か、その否定か。嗚呼、僕は当然、『純血主義』の側に賭けるとも。君達のように非魔法族と魔法族の同一性を認めれば、当然『法則』を受け容れざるを得ない」

魔法は科学によって説明し得ないという理屈も、この『法則』の間違いを証明する事は出来ない。

あくまで、魔法に関わる事項は科学法則と別の振舞いをするかもしれない止まり。偶々魔法と科学が一致するかもしれないという主張を、決して排斥してはくれない。

そもそもこの問題は、最新科学ですら未だ手の届かぬ領域である。だから答えを持っているのは、この世界を創った書き手以外に存在しない。

「敢えて強調しておくが、これを間違いかもしいれないとか、想像より『法則』が複雑かもしれないという指摘では足りんぞ？ 同種の問題に関わる非魔法界の狂乱は、決して科学的に正しかったのだから訪れ

た訳ではない。正しいかもしれないから起きたのだから」

当時でも批判者は居たのだ。しかし、勝利し切れなかった。

強固な理論的支柱をもって否定し、政治家や民衆を教化する所まで行けなかったからだ。その頃の人間が愚かだったからという訳ではなく、科学技術も社会構造も、そこまで進歩して居なかったからだ。

そして1930年代から40年代の一つの地獄がやり過ぎだと退けられた後でも、やり過ぎなければ良いのだとして、別種の地獄が世界各地で続いていた。しかも現代において思想の火が完全に消えた訳ではなく、未だに問題は燻り続けている。

「その上、ここは魔法界だ。魔法族^{Wizardkind}」の定義からすれば、この問題

は非魔法界を取り巻く問題よりも遥かに根が深く、質が悪い。だから早期の対応が要求されて然るべきであったのだが——けれども、誰も動かなかった。誰も。わざわざ変化する必要性を欠片も見出さないスリザリンは当然として、マグルとの友好を声高に叫んで来たようなグリフィンドールですら」

罪深い傍観を、魔法族の殆どが民意として選択して来た。

「偉大なるあの老人もまた、声を上げる事はしなかった。薄っぺらな博愛主義を掲げるばかりで、『純血主義』の原点が一体何処に在るのかという事について真剣に向き合わなかった。ならば、この悪しき思想が無くなりなどしないとも。単に見ない振りをしていただけで、問題自体は何も解決していないのだから」

本来改革の旗頭となるべきは『マルフォイ』であり、『ウィーズリー』だった。

しかし前者は闇の帝王による歪んだ純血主義を受容し、後者はゲラート・グリンデルバルト以前の前時代的な純血主義を継承した。

どちらも時代が見えていない古い頭のままで、遠くない未来に起こる社会問題を見据えてなどいない。僕にとって、その点において彼等は同類だった。

何れも、進歩によって葬り去られるべき敵だった。

「誰だって、魔法を使えるならば使いたいと思うのだ。

——僕を産んだ母だって、恐らくはそうだった」

理論上は、あの母が使えない方が可笑しかった。

そしてそれ故に父は興味を抱いたのだろうし、また母も接近を受け容れたのだろう。

だが皮肉な事に、父は使えない側に惹かれてしまった。

そうなつてしまったのは、使える側の頭がイカレていたのとは無関係であろう。あの父の信条からすれば、どんなに“マグル”に研究的な興味を抱こうとも、決して好意や性愛の対象となるべき存在ではなかった。その筈だった。

だが、運命はそう転ばなかった。

本当に、余りにも数奇で、残酷だった。

「……これからでも、変えられるわ」

顔を上げないままに紡がれる抵抗の、希望の言葉。

しかし、今初めて問題を意識した彼女の反論には、冷笑を返すしかない。

彼女のS・P・E・W以上に、僕は真剣にこの問題へと向き合つて来たからだ。穢れた血という言葉を一切聞かなかったであろうグリフィンドールと違い、婉曲的であれ半純血への揶揄を平気で聞き得るスリザリンでは、否応無しに向き合わざるを得なかったからだ。

「期待しろというのか？ 百六十年前より後退している魔法族に？」

「……百六十年前」

自信がないのだろう。ハーマイオニーは黙り込んだ。

結局の所、彼女は所詮“マグル生まれ”なのだ。

魔法界で文化や資産を築いて来た者の血を引いておらず、さながら運良く宝籤に当たった成り上がりでしかない。必然、モノの観方は決して半純血や“純血”と同一では無く、魔法族が歴史的に抱えて来た懊悩や葛藤を一切知らない。しかも彼女が後進的と信ずる魔法族から学び取ろうともして来なかったのだから——当たり前のように相容れない。

「1830年。その年を契機にホグワーツ——厳密にはホグズミードだが——では一つの巨大な変化が起こった。それが何かというのは、今年のO・W・L・受験者に聞けば答えがすんなり返ってくるだろう。そうでない下級生で有ったとしても、気の利いた者からならば答えが返って来る」

勿論彼女の頭にも答えは浮かんでいる筈だったが、僕は彼女の言葉を待たなかった。

「言わずもがな、ホグワーツ特急が導入された年だ」

ホグワーツ特急。

この魔法界において、最も非魔法的である人工物。

「しかし、魔法族の思考はそこで終わる。精々オツタリン・ギャンボル魔法大臣がそれを行ったと付け加える程度だろう。だが、その上で非魔法族の歴史を学んだ魔法族は、特に君達『マグル生まれ』は、当然こういう思考に至るべきだろう。余りに早過ぎる、と」

そして現在の魔法界の構造に対し、強烈な違和感を抱く羽目になる。

もしくは、失望や幻滅かもしれない。

「リチャード・トレビシックの蒸気機関車の発明が1804年。ジョージ・ステイブソンが蒸気機関車を改良し、ストックトン・ダーリントン間で走らせ始めたのが1825年。そして現代的な鉄道方式による都市間運送がリバプール・マンチェスター間で始まったのが1830年。他ならぬ『マグル』とて、1830年当時にとれだけの人間が蒸気機関車の存在を知っていたのやら」

新聞を読める学を持つ人間など、当時は圧倒的少数派。写真も発明に至っていない。

そのような時代において、『奇妙な馬』の存在を信じる者が、果たしてどれだけ居たか。その噂すら届かないデポンの農村では当然として、ロンドンでもスラム街イーストエンドならば殆ど知られていなかった事だろう。

「しかし、魔法族は知っていた。蒸気機関車が公の前に姿を現してからたった五年で、魔法界はその発明品を——勿論、アレが機械百パー

セントで動いているとは断じて思わないし、冶金技術が未熟な当時であれば猶更だが——受容した。それがキングズクロス駅が出来る約二十年前の事だ」

純血にしても、ホグワーツ特急の導入に際して大きな反対運動を行った。

1825年まで、「マグル」が軌道レールを走らせていたのは馬車だった。

それまでは蒸気機関車という概念自体が存在せず、とすれば、魔法族はホグワーツ特急を魔法の産物だと——つまり空飛ぶ絨毯の親戚として、鉄の塊を魔法族が動かしているのだと認識しても良い筈だろう。寧ろそれが自然な流れの筈で、けれどもそうはならなかった。

その上、今のドラコ・マルフォイ達生粋の「純血」の魔法族とて、始業日にホグワーツ特急を利用する事を避けてはいない。その発明品の導入の発端が「マグル」だとしても、彼等は自分達の生活を向上させる善き道具の受容を躊躇わなかった。

「過去の魔法族は、それだけ「マグル」に関心を払っていた。彼等の技術や思想が魔法界に資すると一度考えれば、どんな反対運動に直面しても、導入する事を躊躇いなどしなかった」

オッターリン・ギャンボル魔法大臣を先頭に、魔法族は改革を為した。より良き魔法界の為に。魔法族の進歩の為に。決して労力を惜しまなかった。

「君が思っているよりも、魔法族は非魔法族を観察していたのだ。政治に興味を持たないような家系と違い、少なくとも良き支配者足らんとしていた層は。或いは非魔法族を興味深い見世物としてではなく、共に高め合うべき同族として認めて来た層は」

見ていた。過去形だ。

「しかし今はどうだ？ 現在進行形で生まれつつある、新しい科学技術を持ち出すまでもない。非魔法界において電話が発明されて約二百年、赤い公衆電話の誕生から数えても約七十年が経つ。或いはテレビ放送がなされるようになってからは約六十年だ。それらに対し、今の魔法使いがどれだけの知識を有し、またそれを利用しようとして

いる？」

「純粋な魔法族達は、誰もが嘆かわしい程の理解度しか持っていない。」

無論、ホグワーツ城の魔力が機械の正常な稼働を許さないように、魔法界において用途が限定されたり、そもそも実用に堪えないと思われるであろう代物は確かに多く存在する。

けれども、全ては使い次第だ。使い勝手が悪いからといって遠ざけるのでは、火の点った木の枝を恐れる猿と変わりはない。

「『マグル生まれ』、或いは『マグル』の親を直接に持つ半純血は、このような無知の結末を少なからず予見していただろう」

魔法族は何時か滅びかねないと、そう認識した事だろう。

「……嗚呼、しかし。第一次魔法戦争が勃発した途端、その彼等の悉くが尻尾を巻いて『マグル』社会の闇に逃げ去った。非魔法族の大戦時、魔法族は『マグル』を助けたというのにな。全くもって恩知らず極まらない」

魔法界に基盤を持たない非純血達は、言わば外国人のようなモノだと評した純血達が居た。その発言は明らかに物を知る魔法族によるものであり、非常に言い得て妙だと思う。

『魔法界』から多くを与えられたにも拘らず、忠誠や感謝を返す事もなく、何も還元すらしないのであれば、排斥と侮蔑を受けるのも必然だろう。先祖代々の貢献がどれだけあったかを基準にするのは馬鹿々々しいが、それでも彼等が現在進行形で魔法界に貢献もせず、一方的に搾取する気しかないならば、その者達を受け容れる道理はやはり無い。

自らの権利を主張するなら、相応の義務を果たして貰わなければ御話にならない。

「そして、彼等は一体何を考えていたのだろうか？ 一般的な魔法族と違って二つの世界を知る自分達を、選ばれし人間だとしても考えていたのだろうか？ 馬鹿な事だ。国際機密保持法オメルダという血オメルダの掟、何より人間が生来より等しく有する排他的意識こそが、彼等の罪に鉄槌を下す。彼等の子供達が、その思い上がりのツケを払わされる」

後進的な魔法族を嘲笑っていた彼等は、必然が如く報いを受ける。「変える機会は、対応すべき時間は幾つか在った。新たなる『純血主義』が誕生した1930年初頭。ゲラート・グリンデルバルトが敗れた1945年。スクイブ達が非魔法界に倣って団体運動をした1960年代末。そして、歪んだ純血主義を唱えていた闇の帝王が墮ちた1981年」

魔法族には時間が有った。

将来の悲劇を少なく出来るかもしれない。その為に足掻き得る時間が。

「にも拘わらず、これまで魔法界に大きな変化は生まれなかった。正義面をした大勢は『純血主義』を狂った差別主義の産物と単純化し、見ない振りを続けた。君の同族——『マグル生まれ』達は、この国の『マグル』が1967年に成立させた法を見て、一切何も思わなかったのか？ その潮流が魔法界に波及すればどうなるかを一度も考えなかったのか？」

「……成立年までは知らなかったわ。け、けど、貴方が何の法を言っているかは想像が付いたわよ。そして、貴方はその法律の考えに対して反対しているのね？」

「いいや。反対ではない」

断固として否定する。そう即断されるのは流石に心外だった。

「僕は敬虔な宗教家や熱心な政治家ではなく、結論としてはどちらでも良いとも。僕一人が結論を出す問題ではなく、魔法族全体で方針を決めるべき問題で——」

——そして校長閣下と同様、恐らく僕がその倫理問題に直面する事はない。

「しかし賛否はどちらでも良くても、曖昧な立場に身を置く者として、問題自体が存在しないように振る舞う真似は許せないのだ。君が^{半純血やマグル生まれ}仲間と呼ぶ者ですら例外無くな。過去の彼等はそもそも気付かない程に阿呆ばかりだったのか、それとも意図的に見ない振りをしていたのか。どちらにしても、そのような怠惰は明確な不正義で、断罪されるべき悪に違いない」

光と嘯く者達が、この問題を看過し続けるなど在ってはならないのだ。

「……嗚呼、あの老人がどんなに偉大であろうとも、この問題の解決者には成り得んぞ？」

嘲笑と共に、断言する。

「コレが戦後公然と問題化された時、彼は間違いなく議論の中心から排除される。あの男の発言力は邪魔だ。反対者にとって、そして支持者にとってすらも。アレが強制的に問題を解決するというのも不可能だ」

「く、口出しする権利まで無いという事は有り得ないでしょう？」

「無いさ。恐怖を知らない外野は黙っているとされるのがオチだ」

彼は半純血としての痛みは知れど、純血としての痛みは知らない。

だから、仮に彼の発言が「先進的」であろうと、決して受け容れられる事は無いのだ。

「そしてこの領域の探求に関してはな、普通の魔法族よりも、闇の帝王の方が遥かに期待出来る。彼は半純血僕の同族で、恐らく、いや間違いなく彼は「純血」を嫌っている。だから彼は十中八九受け容れてくれるだろう。彼が君臨した後、正しい「純血主義」の知識を得る為に、科学的な人体実験を始める事を。その結果、魔法界は少しだけ、だが確かに前へと進める」

何が正しいかは現状未知である。

だからこそ、それを既知とする為に研究を進めなければならない。

その進歩的態度を取る者こそが現代的文明人であって、知ってしまったえば悲劇が訪れる可能性が高いからと目を背け続けるのは——多くの一般的魔法族、そしてこれまでの全ての半純血やマグル生まれの態度は、時代遅れの野蛮人という他ない。

そしてスリザリンも、この科学的追求に否を唱えない。

下等種族マグル由来の技術を用いようとも見ない振りをしてくれる。

ホグワーツ特急が最終的に受け容れられたように、結局どんな思想も実利には勝てやしない。

「……貴方は、その道がどれだけ重大な人権侵害を生む事になるのか

理解して言っているの？ どれだけ膨大な数の不幸を生むと承知した上で物を言っているの？ そんな大勢の犠牲の上に立つ前進が、本当に進歩だと信じている——」

「——ならば、この魔法界は今まで弱者に犠牲と不幸を強いて来なかつたとでも？ 都合良く最大多数の最大幸福を用いて来た者達が、その論理が自分に適用される段になって言い逃れするのか？」

「——」

「何より、この流れは止められんよ」

非魔法界において、科学的な発想と技術は既に存在する。

後はこの魔法界において、魔法的にどう応用し、適用するかというだけ。

「『マグル』の知識と思想、そして技術を輸入し、必ずや誰かが始める。スリザリンの、他の三寮の、或いは世界の誰かが既に始めているかもしれない。この世の誰も未来の魔法族に興味を持っていないという事は決して有り得ないのだ」

少なくとも見積もっても千数百年、魔法族はこの問題に悩み続けて来た。

その問題を抜本的に解決する可能性があるなら、闇の帝王が代わりに汚名を背負ってくれるというならば、その血塗られた研究を止めようとしなさい。口では非難しながらも世界は成果を心待ちにし、輝かしき未来の為に身を捧げる覚悟の有る魔法族は、その多くが帝王の下へと馳せ参じるだろう。

「既に分岐路は過ぎていく。シビル・トレローニーのような『第三の目』を持たずとも、この未来は容易く予測出来ていた。だがそれでも尚、多くの魔法族は真剣に向き合って来なかった。ならばこれからも何も変わらないだろう。今後取返しが付かなくなるまで魔法族は動かず、であれば帝王が全てを焼き払ってくれた方が、遥かに早く話は済む」

万一この魔法界が変わらずとも、世界の何処かは変わってくれただろう。

小さな世界一つを供物として、魔法族という種は進歩を遂げられ

る。

「……私達が——私が変わる。努力する。それでは駄目なの？」

「君が魔法界を変えられる地位を得るまで何年掛かる？」

突っ伏したまま震え続ける少女に微笑む。

彼女は Hogworts 始まって以来の才女で、けれども現時点では有象無象の小姑娘に過ぎない。

「嗚呼、そもそも君が魔法界を変えられる立場を得るという考えが自惚れなのだ。君が万一魔法大臣にまで辿り着いたとして、それは魔法界を大きく変え得る椅子では無い。魔法省が如何なる組織かを理解していれば、そんな言葉は決して出ない」

「マグル」初の魔法大臣ノビー・リーチは、陰謀の下に死んだ。

必然だった。魔法省を非魔法界の政府と同一視して行動したのであれば、当然ぶち殺されるに決まっている。その状況を変えられとすれば異端の「純血」バーテミウス・クラウチ氏だけだったが、彼は途中で挫折した。その結果、彼は本来の頂点から王が現れる事に——古き因習の復活に期待せざるを得なくなった。

「その上、コーネリウス・ファッジは積み立てられた三百年の信頼を切り崩しており、更にはあの校長閣下が状況を余計に悪くする。嗚呼、この魔法界に決定的な引導を渡すのは他ならぬ彼なのだ。二年以内に、彼は行動を起こす——否、起こさない。その帰結として来世紀、彼は前世紀で最も愚昧な大魔法使いと呼ばれる羽目になる」

良い気味だとも思う。

名誉欲と功名心を捨てきれない老人が、後世で過酷な時代の審判に晒される事は。

そして同時に将来の魔法族は気付くのだ。

あの老人を社会正義の下に断罪しなければならぬとすれば、ならば自分の親や親族達は、果たしてその当時に一体何をしてきたのかと。

今生きている魔法族の全員が、等しく罪人ではないのかと。

「君達は闇の帝王を敵と呼ぶ。彼こそが滅ぼされるべき悪と言う。

——しかしそう言う君達は本当に、存在が肯定されるべき善なのか

?

匣に残ったモノ

告解は終わった。

己の立ち位置の表明も。

闇の側に身を置くのだという宣誓も。

彼女の疑問全てが解消された訳でも無かろうが、それでも大枠を理
解するには十分だった筈だ。これは誰にも——アルバス・ダンブルド
アにすらも突き付けた事のない僕の行動指針で、或る意味で、この魔
法界への僕なりの宣戦布告と言っても良かった。

……と大袈裟に言っても、この世界が影響を受ける事は何も無かろ
うが。

「——立ち去って良いとは言っていないわ」

「そうだとしても。もう、この期に及んで話す事はないだろう?」

未だ顔を上げられない彼女に、立ち上がりつつ答える。

ここまで好き放題言つて尚、彼女と共に歩めるとは思っていない。

他人が自分に都合良く動いてくれる事を、期待すべきではない。

「初めから衡平フェアで無かった事は解っている」

嗚呼、そんな事は解っていたとも。

「この手の問題は『マグル』の世界でも道半ばで、解決なんて夢のま
た夢だ。この理屈を否定し得る答えを持つとすれば、それは全知全能
たる神だろう。必然、君を言い負かせる——いや、君が答えを持たな
い事は解っていた」

最初から議論になど成り得る筈が無かった。

彼女達が『善』足らんとする限り、この瞬間は負けねばならなかつ
た。

彼女が僕を糾弾出来るのは精々方法論に過ぎず、しかもそれは政治
によつて解決される領分。つまりは光の陣営と闇の陣営の何れに理
論的正当性が存在するかではなく、単純に何れがより強大な暴力装置
を用いて結論を定めるかという話でしかない。

「それが解つていて、けれども、残念ながら僕達はこうなつてしまつ
た。ならば君が知る以外に方法は無かった。しかし……まあ、これで

良かったのかもしれないな」

笑みを忘れて自嘲する。

「今後当然のように僕が負ければ、手法の違いはあれど、君は僕を継いで戦わなければならぬのだから。君達が闇の帝王を滅ぼし勝利した後、更に第三次魔法戦争、或いは第二次世界魔法大戦を止めようとするならば、君は必ずやそうせねばならないのだから。であれば、知るのが早いに越した事はない」

アルバス・ダンブルドア。

デウス・エクス・マキナ

あの御都合主義もその時ばかりは頼りにならず、彼女達が大量の出血と共に道を見付けなければならぬ。しかも、立ち向かった所で即座に解決する問題でもない。それから何十年もの苦闘を強いられ、そして彼女が生きている間には届かないかもしれないなかった。

もつとも、既に闇に付いた僕には関係ない話であるのだが。

僕はローブを翻して立ち去ろうとし——しかしハイマイオニーを見せていた反応が僕にそれを許さなかった。立ったまま髪を掻き上げ、暫く逡巡した後、溜息を吐き、改めて椅子に座り直す。乱暴に座った椅子と木の床が擦れて立てた音が、悲鳴のようで不愉快だった。

そして問うた。

思わず苦笑しつつ。

「——何故、泣く？」

何時の間にか顔を上げた彼女の瞳からは、大粒の涙が零れ落ちていた。

「君が心を痛める必要は無い。現在の『マグル生まれ』である君に責任は無いし、そんなにもコレを真剣に受け止める必要などないのだ。闇の陣営に既に付いた悪人の戯言だと切って捨てれば良い。ハリー・ポッター達とて、こんな事に一々思い悩んで生きていないだろう。幸せになりたいなら何も考えないで生きるというのも一つの選択だ」

それが『正解』なのだろう。

大多数の真つ当な人間は、自分の手の届く範囲の事しか考えない。

考え過ぎてしまえば最期、その果てに行き着くのは錯乱と破綻の道以外にないからだ。

けれども、彼女は首を大きく振った。燭台と星々の明かりの中で、涙が舞った。

「悔しくて悔しくて溜まらないのよ……！ 貴方の取る方法は、その結論は絶対に間違ってる。けれども、止める手段が思い浮かばない。だって貴方は正しさもまた含んでいるんだもの。貴方にそう言わしめるのも仕方が無いって思ってしまうんだもの……！」

「正しい事など無いさ。君こそが正しい」

僕を認める言葉を、敗北を受け容れる弱音を、しかし敢えて否定する。

「最初から犠牲を見据えた正義など在于てはならない。誰もが笑顔と なって終われる大団円こそが『正義』だ。賢しげに暴言と非難を吐くだけ吐いて、身勝手にも世間に失望を抱き、世界の善性に見切りを付けた人間は、この世で最も否定されるべき『悪』なのだ」

「でも、貴方はまだ諦めてないじゃない！ ハリーに期待を懸けているじゃない！」

泣きながらも、今度の彼女の言葉は震えていなかった。

「貴方が今のお話をするのは、この場で、私だけの前じゃなくても良かった筈よ。ダンブルドアが何も触れなかった始業式を台無しにして、全校生徒に広く訴える形でも出来た。貴方がそれに及んだならば、貴方の力をもってすれば、四寮の Hogworts を八つに割れたわ」

「……………。流石の僕も、そこまで自分を評価——」

「——いいえ。貴方ならやれたわ」

僕の否定を強く遮って、泣きながら彼女は断言する。

「去年一貫して問題を指摘し続けた貴方の話を、四寮の誰もが無視出来ない。『あの人』に付く人間は増えないかもしれないけど、ダンブルドア——いえ、ハリーと共に居る人間を減らせはしたのよ。貴方が大っぴらに今の問題を突き付けてしまえば最後、ロン達を取り巻く状況は一変し、その親友であるハリーへの眼も厳しい物になった筈だわ」

「…………何も変わらんよ。彼等の歪みに気付き、不愉快に思っている者は少なからず居る」

近しい位置に居るからだろう。

ハーマイオニーは僕を過剰に評価している。

「ハリー・ポッターがスリザリンの継承者扱いされた時、彼に対してアーニー・マクミランが何を言っていたか覚えてるか？ あの時に内心で反発を抱いていた者は少なくない。コーネリウス・ファッジを抜きにしても、君達の陣営もまた一枚岩ではないのだ」
勿論、アレが純粋な魔法族の信条であつて、しかし新半純血やマグル生まれたなる魔法族にとつては非常に受け入れがたい思考である。

魔法族間の亀裂は既に、確かに存在している。

「既にこの問題に気付いているが故に、不死鳥の騎士団に味方したがない者も居るだろう。これを考慮せず『マグル』との友好を唱えるなんぞ論外だからだ。だから僕が訴えずとも、誰かが代わりにやる。この現代において、代わりに利かない人材など存在しない」
「ええ、確かにそうかもしれないわ」

ハーマイオニーは静かに涙を零しながら続ける。

「ホグワーツの外には、貴方と同じ問題意識を持っている人間が少なからずいるんでしょうね。——でも、今このホグワーツにおいては、これ程の理屈を持って戦えるのは、貴方が唯一でしょう？」

……それは、まあそうか。

ドラコ・マルフォイですらもやろうとしない。

「『ウィーズリー』を貶める為には、知性の感じられない歌を作る必要は無い。こんなにも簡単な道が存在しているというのに、彼の純血としての常識が、闇の帝王が提唱した主義の歪さが、この視点を欠落させている。」

「貴方だけが冷徹に、劇的に、確たる理論をもってマグル愛好家を悪へと反転させられる。そうしないのは、貴方がハリーなら——ただ一人、『生き残った男の子』ならば、この状況を変え得る可能性が有ると看做しているから」

「……………」

「貴方はハリーの好意を喪う事が損だと考えているし、またハリーの敵を増やすのも良い方向に働かないと考えている。だから今年、こん

な絶対に解決しようもない難題をぶちまけて、ホグワーツに大混乱を起こそうとしない。違う?」

「――遺憾ながら、我が寮監殿から何もするなど釘を刺されているからな」

僕が辛うじて紡いだのは、疑問への答えでは無かった。

それでも、ハーマイオニーには十分伝わってしまったようだった。

「ええ、貴方が何故私でなく、ハリーに期待するのも良く解ったわ。そして何故、魔法戦士では無く、ネビルやルーナのような人間を集めろと言ったのかも。光の陣営が勝った後の事を考えた場合、確かにハリーだけが資格を持つ。そして彼の周りに必要なのは、グリフィン・ドールのでない人間だわ」

「……しかし、あの男は性格上、人の上に立つ器には見えん。政治に向いてるとも思えない」

「それでも、貴方は自分の見立てが覆される事を期待しているのでしょう?」

「そこまで期待出来ているならば、一貫してハリー・ポッターの側に賭けている」

期待出来ないからこそ、その逆に付いた。

僕が選ぶ先に大団円は無く、己の破滅の末路しか有り得ないというのは理解している。

それでも、どうしたって光を嘯く陣営には付けないのだ。それがフリーヤガブリエル、ハーマイオニーと共に歩む道と承知していて尚、僕の思考はその反対を進んでしまう。

けれども、彼女は泣きながら笑みを形作った。

今日初めて、綺麗だと思った。

「――ねえ、自分で気付いている? 貴方の言葉は全て、今虐げられている側から発されている事に」

「――」

「去年や、先程の屋敷しもべ妖精も。狼人間も。そして、貴方が最も譲る事の出来ない問題も。貴方は全て、世間が光を当てたがらない側に立った。貴方はヴォルデモートとは違うわ。貴方は優し過ぎるから、

この魔法界を滅ぼそうとしている」

「……馬鹿げている。優しいならば、そもそも滅びの道を歩みはしない」

この先の時代で誰が真つ先に死ぬかを考えれば、僕の本質は優しさとは程遠い。

母達が備えていた普通の穏健な思考では無く、父の過激な思想を継いでしまう僕は、やはり人でなしと呼ばれるべき存在であろう。

「そもそも君がそんな事を宣えるのは、君が多くを知らないからだ。ハリー・ポッターにしても、今年度彼を殺してみないかと複数人に持ち掛けすらした。……断られたが。そのような人間が優しい？ 有り得ないだろう。君が言うような善人など、今この場には存在しない」

その自白に彼女は一瞬だけ視線を伏せたが、それでも僕へ向ける眼を変えなかった。

「……ええ、貴方はそんな人よ」

「なら——」

「——貴方が本気でハリーを殺したいと思ったなら、他でもなく自らの手で挑んだ筈でしょう？ 貴方は他人に借りを作るのが嫌いだし、大事な事は全て自分で決めてしまいわ。それなのに他人を巻き込もうとしたのは、誰かの後押しが無いと踏み切れなかった証じゃないの？」

そうではない。

その否定の言葉は、僕の口から発されなかった。

「そして単に酷薄なだけの人が、どうしてルーナに対して助け船を与えるのよ？ 何の得なんてないのに、貴方は何故セドリツクの家に行つたのよ？ 貴方が貴方の思う通りに、言う通りに悪い人間だと言うならば、決してそんな真似はしないわ」

「……どちらも何も変わらなかったと思うがな」

やはり君は僕を美化し過ぎている、と言葉を零す。

場違いだと解っているのに、何故だか苦笑が深まってしまつた。

「ジネブラ・ウィーズリーは、三年間で築いた彼女なりの交友関係があるだろう。別の寮の人間に何時までも構っていられるとは思えんし、そもそも誰かと交友を持った程度で状況が改善するなら、虐めなんぞ世界から早々に一掃されている」

簡単に解決出来る問題ならば、ファイリウス・フリットウィック教授が既にやっている。

出来ないからこそ、他人の介入が必ずしも良い事態に転ぶとは限らないからこそ、ルーナ・ラブグッドは今まで虐められ続けて来た。そして三年前の邂逅が何の変化も齎さなかったように、今年の本グワーツ特急内での出来事が、彼女を取り巻く世界を激変させる筈も無い。「でも貴方はジニーに救いの言葉を、自分の友達だという発言を紡がせた。それはルーナにとって一つの救いで、何より、貴方はハリーにルーナを意識させた。ジニーはルーナの庇護者に成り得ずとも、ハリーはルーナの庇護者に成り得ると理解しているから。魔法戦争が始まった以上、『生き残った男の子』の友人を虐めるような人間など居ないと確信しているから」

「それでも結局あの英雄殿次第だ。丸投げしただけで、何かを与えた訳でも無かった」

そしてハリー・ポッターは未だにルーナ・ラブグッドを友人と認めていないだろうし、また、彼は己の友人関係を殊更周囲に誇示するよきな人間でも無い。今年度も変わらず、ルーナ・ラブグッドは虐めを受け続けるだろうと確信している。

「セドリック・ダイゴリーの方にしても——ダイゴリー夫妻が賢明だったただけだ」

流石にあの男、ミスター・ハッフルパフを育てた人間達だった。

「アルバス・ダンブルドア校長を今年最も強く糾弾出来たのは、断じて魔法大臣では無かった。愛する息子を『事故』によって喪う羽目になった彼等だった」

セドリック・ダイゴリーの遺体と共にハリー・ポッターが帰還した時点。

その時不死鳥の騎士団長が直面していた最大の問題は、己に対して

最も致命的な刃となるデイゴリー夫妻を、果たしてどうやって黙らせるかという点だった。

「年齢線を失敗しなければ、或いはハリー・ポッターの参加を何とか阻止出来ていれば、セドリック・デイゴリーが死ぬ筈も無かった。彼は所詮「生き残った男の子」のついでに殺された訳だからな。その余計な殺しを発生させたのは明らかな失態で、責任を取って校長を辞任しろと彼等に主張されてしまえば、アルバス・ダンブルドアの立場は現状より苦しいものとなっていた」

ホグワーツ理事会は、内部の保護者の訴えが有った程度で校長を辞めさせるような組織では無い。また、外部の魔法大臣の訴えが有ったとしても同様である。

しかしながら、その両方が揃ったのならば——デイゴリー夫妻が他の保護者達も巻き込み、直近四年間にホグワーツで起こった不愉快な事件を数え上げ、その上で魔法省からも校長の辞任要求が為されたならば、それが叶った可能性は有った。

ホグワーツ理事会員とて血の通った人間だ。

校長がセドリック・デイゴリーの死の責任を負うべきなのは疑う余地がないというのに、何故自分達が彼の盾となり、また尻拭いをせねばならないのかという思いを抱くのは普通である。各所からの吠えメール、家族にすら向くだろう四方八方からの批判を撥ね退けるには、それなりの正当性、恥じる事無き大義が存在しない限りは戦えない。

そもそも、彼等は三年前にルシウス・マルフォイ氏の脅迫に屈した者達が大半である。内外からの非難に耐えられたとは思えず——しかし今も尚、彼等はアルバス・ダンブルドアを校長に据えたまま耐え忍んでいる。

「だがデイゴリー夫妻は、あの校長を責めなかった。彼を政治的に弱体化させる事は、この魔法戦争に負の影響を及ぼすと理解していたからだ。校長に対して色々と思う所は有れど、彼等はそれを呑み込んだのだ」

そして少しでも考える頭を持っている者ならば、本来在って然るべ

キディゴリー夫妻の非難が無い理由を考える。

夫妻のそれが無いならば、理事会としてもそれを大義名分として戦える。セドリック・デイゴリーの死について遺族が納得している以上——黙示であれ校長の続投を支持している以上、魔法大臣のような部外者が余計に出しやばって来るなど。

「あの男の最後の仕事にしてもそうだ。ハリー・ポッターが帰還しても、仮にセドリック・デイゴリーの遺体が無かった場合。その後はどうなったか」

彼女の答えを待たず、僕は続ける。

「決まっている。デイゴリー夫妻は校長に対し、消えた息子を搜索し、自分達の下に身体を返すように騒いだ事だろう。その嘆願を既に無意味だとして校長が断るにしろ、或いは無意味と知りながら移動鍵事ポット・キー故の前例を基にサハラ砂漠を搜索するにしろ、闇の陣営にとつては非常に有り難い事になっていた」

ハリー・ポッターの善性を僕は否定しないが、それでも彼は、物事の細部まで気を利かせられるような男ではない。ましてその時の彼は、闇の帝王と死喰い人達に囲まれ、絶対絶命の状況下に置かれていた。既に死んだセドリック・デイゴリーの事が意識の外となっても可笑しくはない。

その状況で遺体を残してハリー・ポッターが逃げて来たとしても、それは決して非難されるものではなく——けれども、それでは彼の帰還後、校長が政治的に困るのだ。

「しかし、結果は今見ての通り。彼の遺体は帰ってきた。あの聡明かつ賢明な男が、それを見透かした上での願いを残したからだ」

死人が思考し得るかの問題を別とすれば、アレはそれが出来る人間だった。

「セドリック・デイゴリーは理解していた。自分の遺体が亡者として弄ばれ、魔法戦争再開の伝言役として魔法省に送りつけられる事態にでもなれば、校長閣下に非難が集中し、光の陣営からの大々の離反を招きかねないとな。だから自身の遺体を“生き残った男の子”に奪還させ、その功績をもって、彼こそが希望だと世に広く示したのだ」

勿論、自分自身セドリック・ディゴリーの遺体を取り戻す中で、ハリー・ポッターが死んだり、改めて囚われる危険というのは有った。

けれども、己の遺体の価値を正確に把握していた彼は、〃生き残った男の子〃の資質、三大魔法学校対抗試合で認め合った仲間の強さに賭けた。そして確かな勝利をもぎ取って見せた。

まあ、あの男の事だ。自分の両親達が後世、コーネリウス・ファッジと同列の愚か者扱いされるのを避ける為という考えも有った筈である。けれども彼が阻止した事態、その際に光の陣営が置かれたであろう苦境を思えば、それ位の役得は許されて然るべきだろう。

「ディゴリー家は戦う事を選択した。彼等三人は決して杖を振るっていないが、それでも光の陣営の為に今戦っているのだ」

現在のグリフィンドールの誰よりも勇敢で、高潔な道を選び取っている。

「でも、そこに貴方の干渉もあるでしょう？ 貴方はディゴリー家に行った。そして貴方が伝えた言葉の中には、セドリックの両親がホグワーツへ敵対する事を防ぐ内容が含まれていたんじゃないの？ 彼は間違いなく、ホグワーツを愛していたから」

「……何故そう言つてのけられる？」

「彼は私と貴方が——たとえたつた二人だけであれ、グリフィンドールとスリザリンが仲良くするのが望ましいと言つていたもの。それは彼がホグワーツ全体の事を考えていた以外に有り得ない」

「……………だとしても。彼等の意思決定に何ら影響を与えた訳ではない。僕が彼等の家を訪れるという話は学期中に存在していたが、実際に訪れたのは一ヶ月以上後だからな」

光の陣営に、僕は欠片も貢献した覚えはない。

全てが終わった後に行つた、僕の後始末に意味は無い。現在の状況を、光と闇の拮抗を形作っている理由は、全て僕以外の場所に在る。

「この四年間、僕の行動は一貫して何かを変えた訳では無かつた」

ハリー・ポッターの物語。

この戦争の中心である彼へ、如何なる影響も及ぼせなかつた。

命の危険に身を置き続ける彼の傍から、ハーマイオニー・グレン

ジャーを奪い取る事もまた出来なかった。

「君は僕を何か凄い人間のように評するが、そんな事は無い。少しばかり多くを知り、少しばかり他人より物が見えるだけ」

そしてその力は、己に無力感を与えて来るモノでしかなかった。

「行動と結果が伴わないならば、その思索や推察に意味も価値も無いのだ。この戦争で価値が有ったのは、アルバス・ダンブルドアであり、ジェームス・ポッターとリリー・エバンズであり、セドリック・デイゴリーであり、ハリー・ポッターだった。だから君は全くの見当違いをしており、こうして君が僕を弁護しようとする意味も——」

「——何かを変えなければ！」

「——」

「ええ、変えなければ意味が無いと貴方が言うのなら……！ 私だって、この四年間一切何もしていないわよ！」

悲鳴のように高い声で紡がれた反論が、僕の否定を止める。

僕が啞然として見つめるのも気にした風もなく、彼女は大きく息を吸った後で更に怒鳴り声を上げた。

「私がこれまで何をしてきたっていうのよ！ 賢者の石の時は、ダンブルドアが意図した通りに、スネイプ製の論理パズルを解いただけ。秘密の部屋の時は、石化したに飽き足らず、ハリーを死地に送ったわ。シリウスの時の逆転時計だって、偶々私が借りていただけ。去年なんて言わずもがなよ！ ハリーの意思こそが、ハリーの資質こそがハリーの命を救ってきたの。私は何もしていない……！」

「……そうは言うが、君が彼の傍に居続ける事こそが——」

「なら貴方も一緒よ！」

ハーマイオニーは、今回ばかりは怯まなかった。

「見える形で行動に影響を及ぼさずとも、貴方の言葉は周りの心に響いている。そう私は確信しているわ。ルーナも、セドリックの両親も、勿論、他ならぬセドリックにも。あの日、最後の日の昼、セドリックが私に何を残してくれたか解る？」

「……そう言うからには、下らないホームパーティーの誘いでは無いのだろうか？」

「それも有ったけど、今言っているのは違うわ」

「……………であれば、思い当たる節はないな」

暫し考える時間を与えられ、けれども最終的には首を振る。

その返答を受けた彼女は、赤い眼のまま笑って答えを紡いだ。

「貴方と仲直りする為のアドバイスよ」

「……………それはまた、馬鹿な事を」

「何が馬鹿なものですか。解る？ 貴方が理由無く他人を軽蔑するだけの嫌な人間なら、セドリックがあんな事を言う筈が無いのよ。彼の言葉が…………その時点ではこうなると思っただけでなくとも、彼が私に遺してくれた言葉が、貴方の本質を雄弁に語ってる」

死んでも御節介な男——いや、その時点では生きていたか。

何であれ、非常に気に食わない、嫌味な男だった。

「ちなみに何と言っていたんだ？」

そう聞いてみれば、彼女は何故か雰囲気を一変させ、ぷりぷりと怒り出した。

「それが聞いて！ いいい、今思い返してもとんでもないアドバイスだったわよ…………！ セドリックってば、一体私を何だと考えていたのかしら！ 彼が言うには、貴方と仲直りするのに一番良い方法は、問答無用でガバツと——」

「ガバツと？」

仲直りの手段には程遠いような擬音表現に問い返すと、泣くのを忘れてぶんすかと怒りを表現していたハーマイオニーは、ハツとした顔をして口を噤んでしまった。

答えを待つてみても、先が紡がれる気配は無い。その代わり、彼女はみるみるうちに顔を紅潮させていった。今日の最初よりも遥かに美しい赤色をしていた。

「……………兎も角、良いわ。今のは忘れて」

「聞いてくれと求めたのは君だろう。途中で止められると気になるのだが」

「良・い・の！ 私がセドリックのアドバイスを実践する事なんて絶対ない——いい、いえ、ないとは言い切れないのかもしれないけど、今は

決してしないんだから！」

行儀悪く、ダンダンと掌で机を叩く。食べ残しのデザートに乗せたままの食器が揺れる程、その勢いは強かった。相変わらず彼女の顔は、その眼と同じく真っ赤のままだ。

「でも、アドバイスは兎も角、セドリックが言いたかった事は解つたわ」

「……………」

「彼が言いたかったのは、貴方と仲直りしたいならマトモに話し合いなんかすべきでないという事よ。ええ、そうよ。元々私と貴方の出逢いからしてそうだったわ。だから貴方と理性的な遣り取りをしようとしたのがそもそも間違いだった。初めから、そんな事は諦めるべきだった」

……余りにもあんまりな評価だ。

それでも理性と論理の徒たらんとしているのだが。

僕が向ける呆れを一切気にも留めず、彼女は言葉を続ける。

「だから私から聞く事は非常にシンプルよ。」

——貴方にとって私の存在は今年必要なの？ もう必要無いの？」

「…………それは——」

何時の間にか、立場は逆転していた。

一方的に、僕が息を吞まされる立場になっている。

「余計な前置きなんて要らないわ。答えを導く為の理由すらも私は聞いてない。単純な二択よ、二択。イエスかノー。そのどちらかで回答して」

「……………」

ハーマイオニーの眼には、僕の返答への恐れが浮かんでいた。

それでもそれを遙かに凌いでいるのは、圧倒的な自信。僕が共に居続けるのを望む事を、彼女は欠片も疑っていない。僕達が去年までの三年間そんな疑問を抱かなかったように、彼女はこの瞬間もまた、僕達の関係が続く事を疑ってはいなかった。そう在る事を願っていた。

……本当に、開心術士であつても良い事はないものだ。

「…………君もそれで良いのか？ 僕は遠くない将来、確実に人を殺すぞ」

その時に己の杖を向けている先が一体誰なのか。
そこまでは予測出来ないし、それが出来たら苦勞はしない。

しかし己が手を穢そうとしている瞬間は、今も簡単に、鮮明に想像出来る。その未来は、間違ひなくやって来る。

「ええ。貴方はそれが出来る人だわ。貴方は既に付く陣營を決めた。必要が有ると判断すれば、それが利益だと判断すれば、躊躇う事は無いんでしよう」

「……………」

「けれども、であれば、貴方は必要が無い限りそうはしない。貴方は最後まで合理的に道を選べる人だから。可能な限り、そう在ろうとして居るから。だから私の取る方針としては簡単よ。私達がそのような状況を貴方に与えさせなければ、貴方は私達と共に居続けられる」
「それこそ買い被り過ぎだと思いがな。ふとした気紛れに行動する事は有り得る」

椅子に座ったまま、杖を鋭く抜いてみせる。

その先が向かうのは勿論、ハーマイオニー・グレンジャー。

御互い椅子に座って向き合っているのだ。手を伸ばし、杖を向けてしまえば、彼女の喉元まで数センチの距離しか残らない。危害を加えるのは簡単で、たった一言の呪文を紡げば良い。致命的な傷を負わせる気ならないならば、呪文を唱える必要すらも無い。

嗚呼、けれども。

今度の彼女の瞳には、恐怖の欠片も見出せなかった。

「私に絶交を言い渡されなくなったら、変な真似は止めて頂戴」

「……………嫌過ぎる脅迫だ。一体何処でそんな遣り口を覚えたのか」

「あら、貴方は私が良い子だと思っていたのかしら？」

「……………嗚呼、そうだな、不良生徒」

「……………」

深々と息を吐いてローブに杖を仕舞った後、僕は両手を軽く挙げる。

しかしながら、その上で尚、僕は悪足掻きの言葉を紡ぐ。

「……………何故、君達は僕に構う？」

敗北は認めよう。

それでも、不思議で仕方なかった。

「自分で言うのも何だが、君達は僕を見捨てた方が圧倒的に気楽な筈だ。こうして僕が態度を表明した以上、変わらず仲良くする理由など無い。それでも尚、君達は僕に関わろうとする。だからハーマイオニー、君にそれをさせる理由、面倒と苦難を厭わせない覚悟は一体何処から来る?」

敵意を表明し、闇の陣営に付くとも明言している。

けれども、フラァー・デラクールもそうだったが、ハーマイオニー・グレンジャーもまた、僕との関係性を断ち切ろうとしない。これまで通りの、いやそれ以上の友誼を結び続けようとする。

その理由は、ハーマイオニー・グレンジャーにとって何なのか。

そんな素朴な疑問に、彼女は笑った。

彼女からは今日初めて見る、グリフィンドールらしい笑みだった。「眼を離せば直ぐにでも死んでしまいそうな人からは眼を離したくないし、今にも崖から落ちそうな人間に対しては当たり前のように手を差し伸べる。それが善きサマリヤ人、可能な限り人間が目指すべき理想像というものではないかしら?」

「――」
完敗だった。

それを「マグル生まれ」から紡がれてしまったのは、黙る以外に道は無い。

「そしてダンブルドア先生も、まだ貴方を味方として数えているわよ」

「……相変わらず、生徒には御甘い事だ」

「甘いというのはどうかしら。今学期始まって貴方が即座にハリーを殺しに行かないならば、貴方はまだ手遅れではないと仰っていたわよ。……まあ、私は貴方がそんな真似を出来る筈がないって、初めから信じていたけれど」

「……………本当に気に入らん老人だな」

ハリー・ポッターが分霊箱である事は、決して僕を止める理由にならないかった。

分霊箱の原則は、高度な闇の魔法を用いなければ破壊出来ないという点である。

しかしこの四年間を観察して来た限り、ギルデロイ・ロックハートの骨抜き事件や、ピーター・ペティグリューがナイフを用いて彼の血を採取出来た事など、ハリー・ポッターを傷付けるのは可能だと示す例には事欠かない。

強いて言えば、ハリー・ポッターを殺しても分霊箱による繋がりによって滅ばない可能性が気に掛かるが——仮に滅んでいなかろうと復活出来ないならば、両者の差異は殆ど無い。ハリー・ポッターの帰るべき肉体を消してしまえば何の問題も生じない。

闇の帝王が復活出来たのもあくまで帝王自身の技量によるものであり、スネイプ教授の力を借りたとしても、校長が同種の真似が出来はしないだろう。そもそも帝王が使った肉体復活の方法をハリー・ポッターは使えない。何せ、彼が『敵の血』と『しもべの肉』を手に入れる事は殆ど不可能なのだから。

だからこそ、ハリー・ポッターをゴースト以下に貶める事は割合悪くないと思っているのだが、結局それを止めさせたのは、僕の立場——彼を殺して以降の、己の立場の難しさだった。

闇の帝王と校長閣下の認識はどうあれ、彼等以外から見れば、ハリー・ポッターは単に幸運により生き延びて来た少年に過ぎない。ハリー・ポッターを殺す事が非常に重要であるというのは、物事の裏を知っているから言える事だ。故に彼を殺したからと言って高位に取り立てて貰えるかどうかは怪しく、他の死喰い人も新人——帝王の寵愛を巡る競争相手——が増える事に反発するだろう。

何より帝王のハリー・ポッターへの執着も読み切れない部分がある。彼の立場上マルフォイ家の子息は容易く殺せないが、無名の半純血は違う。それでも七、八割方勝てると踏んでいるが、一世一代の勝負に出るのには未だ躊躇われた。

つくづく、闇の帝王に会った事が無いというのが悔やまれる。

せめて日記に籠められた欠片と会話出来ていれば、今よりも選択肢が広がっていただろうに。

一方で、校長の方は言わずもがな良く知っている。

だから校長と帝王。行動を読みやすく、信頼出来るのはやはり前者なのだ。この四年間散々遣り合つて来たからこそ、あの校長は最後の瞬間まで僕を阻まないと解つてしまう。

もつとも、それでも枷を掛けるのを忘れないのは、やはり悪辣なる校長閣下か。

ハーマイオニー・グレンジャー。もしかしたらフラー・デラクールですらも。そして勿論僕も、彼の掌の内からは逃れられていない。このような結果に終わるのも、恐らくは全て彼の予測の範疇なのだろう。

「下らない考え事は終わった？　そして貴方が溜め込んで来た事も今日大半は吐き出せたでしょ？　じゃあ、これで完全に伸直りね」

安心したように笑つた彼女は、テーブルを超えて手を伸ばしてくる。何時の間にか、彼女の眼から涙も消えていた。

が、僕は顔を顰める。

「……御互いの敵対関係は変わつていないだろう。僕達は——」

「聞く耳持たないわ。やる前からグチグチ言うのは貴方の悪い癖よ」

彼女は軽く立ち上がつて僕の腕を掴んだ後、無理矢理に握手し、ぶんぶん大きく上下に振つた。入学前に時が巻き戻つたと思う位に、彼女の表情は何処か幼く見えた。

「だから、黙つて見ていて頂戴」

「……………」

笑顔のまま、しかし先程と質の変わった笑みで、彼女は堂々と宣誓する。

「貴方が危惧するような未来を何とか……出来るかは断言出来ないけど、それでも私は戦つてみせるわ。ダンブルドア軍団はその一歩よ。この戦争で勝つのは、ダンブルドアではなくハリーでなければならぬ。その貴方の信念からは、私達の行動を支持出来るでしょうか？」

「……一年か、長くても二年。その頃には、既に取返しが付かなくなつている筈だ」

「十分よ。案ずるより産むが易しと言うわ。貴方は既に諦めた人だけ

ど、私は諦めない。どんなに困難な道程のように見えても、探し続ければ貴方も笑える結末が必ず見付かる。私はそう出来ると信じている」

不可能だ。

彼女の言葉を聞きながらも、己の心の声は冷酷にそう言っていた。簡単に未来を変えられると考えているならば、闇の帝王に全てを焼き払って貰おうと考えなどしない。闇の帝王に付く事が己の破滅の道筋と覚悟して尚進むのは、他に道が無いと判断しているからだ。彼女がどんなに足掻こうとも、魔法界は、魔法族は、自分達が地獄を見る事になる瞬間まで決して動こうとしない。

劇薬無しに社会構造が変わらないというのは、やはり歴史——人口を半減させた黒死病、欧州全土を席捲した市民革命、そして最も広範かつ膨大に殺した世界大戦——が証明してくれている。僕が彼女に突き付けた宿題の最終的解決には、死人の山を作る以外の道は無いだろう。

それでも尚口を挟む気になれなかったのは、彼女の笑顔を壊すのが躊躇われたというよりも、叶うのであればやはりそれこそが最も素晴らしい事で、何より惚れた者の弱みという物に違いなかった。

「ところで」

「……何だ？ 雰囲気を変えて、藪から棒に」

相も変わらず、笑顔で怒りを表現するのは非常に器用な事だと思う。

フォークを鷲掴みにしたハーマイオニー・グレンジャーは、剣呑さを纏って僕へと質問を投げかけて来た。

「あのフランス女とはまだ連絡を取っているの？」

き・み・た・ち。

どういう訳か、彼女は唇だけでそう語った。

「……フランス女と言うと、フラーの事か？」

「そう、ソレよ。ソレ以外に無いわよ」

「……………ソレとはまあ、随分と酷い表現だ」

フラーが女性にどう思われようと他人事では有る。

とは言え、ここまで来ると何とかならないものかとも思う。

今年度に入っても改めて実感したが、彼女の評判はスリザリン内においても頗る悪い。同じくクォーター・ヴィーラである妹と真逆なのは、本当に彼女の才能だと言うべきだろう。去年表立って言って来る人間は居なかったのに、今年になって良く聞くのは、単純に僕の交友範囲が広がった——広がらざるを得なかっただけだろうが。

そして、同種の悪感情を抱いているのはハーマイオニーも例外ではないようだ。

「で、どうなの?」

「連絡は取っているとも。妹ガブリエルの方ともな」

齎されるのは相変わらず、どうしても良い情報ばかりだがと嘆息する。

戦争が何かを理解していない妹の方は兎も角、姉の方も同様なのは果たしてどうなのか。上司のゴブリンが意外と紳士的だったとか、僕がそれを知ってどう返信すれば良いのか。かと言って、現在の情勢で重要な情報を齎して来られれば、その方が大問題になるのだが。

「……………そう」

ハーマイオニー・グレンジャーは俯いた。

緩いウェーブのかかった髪によって、表情がやはり見えなくなる。

「……………ちなみに。あくまでちなみに、参考までに、念の為に貴方に伝えしておくけど。私も未だにクラ——ビクトールと連絡を取ってるわよ」
「だろうな」

「だっ、だろうな!? 言うに事欠いて、だろうなって何よ!？」

僕は何の気なく頷いたのだが、彼女にとっては衝撃的だったらしい。

勢い良く立ち上がりながら喚くハーマイオニーに、椅子に体重を預けつつ答える。

「そうは言われても、な…………。去年あの男がホグワーツを去る前、義理

堅くも僕に伝えに来たのだ。君が今年度の夏、ハリー・ポッターの傍にいろのを選択した——つまり、彼のブルガリア本国への誘いを断つた事を伝えられるのと一緒にな。その際、彼は君にペンフレンドになつてくれるよう頼むつもりだとも宣っていた」

まったく、一体何の為にそんな事を言いに来たのだけか。

彼にそうさせたのは、既に大人プロの世界を知っているからというだけではあるまい。ダームストラング内部について余り知っている訳でもないが、やはりアレも異端の部類の生徒だろう。

「言葉の内容から察するに、その提案を君にしたのは僕に伝えに来た後のようなだが、しかし君が断らないであろう事は想像が付いていた。その申し出を断る理由なんぞ君には何ら存在しないからな。だから今更驚くような事でもない」

あの男と繋がりを持ち続ける事は、ハーマイオニーにとって武器となる。

去年、バーテミウス・クラウチ・ジュニアはビクトール・クラムを二度見逃した。

それは本筋の計画——ハリー・ポッターを贄としての帝王の復活——に支障が出るのを嫌った為であるが、しかし仮にその目的が無かつたとしても、バーテミウス・クラウチ・ジュニアは彼を殺しはしなかつただろう。ビクトール・クラムが一生クイディッチの出来ない身にもなれば、世界中のクイディッチファンが暴動を起こしてくれるのが目に見えているからだ。

その点は、帝王ハリー・ポッターを送り届けの復活が確定して以降は殺しても構わなかつた、フリーとは明確に違う。

故にハーマイオニーがビクトール・クラムと接点を持ち続ける事は、闇の陣営が彼女に利用価値を見出し、何処かで命を繋ぐ助けとなるかもしれない。既に明らかな通り、闇の帝王は決して純血主義の忠実な信徒という訳では無いのだから。

そんな風に僕は去年度結論付けていたし、一切の疑問も抱き得なかつたのだが、俯いた彼女は何故か、全身で反発と不同意を訴えていた。

「……………ええ。貴方はそんな人だと知っていたわよ」

本当に何故だろうか。

その声は今日一番か細いものだったのに、最も空恐ろしく聞こえたのだった。

彼等なりの逢瀬

必要の部屋は、真に「必要」とする時しか開かない。

その仮定が正しいのならば、あの仲直り以降、僕達が入れなくなる可能性も有った。

けれども僕の仮定が外れたのか。もしくは、ハーマイオニーが何らか裏道を見付けたのか。「必要」の部屋はあの日の後も変わらず、僕達の為に扉を用意し続けてくれていた。

恐らく僕にとって一番「正しい」行動とは、その原因を確かめる事だっただろう。

そもそも「必要」の部屋が宿す魔法の深淵に触れてみたい、全てとは言わずとも一部を己が物としたいという欲求は非常に抗いがたいものが有った。曲がりなりにも魔法族ならば例外無く同種の欲求を抱いた筈である。しかも卒業後には——二年後には触れる機会自体喪われるのだから、可能な限り早く取り掛かるべき事で、しかしながら、そんな気になれなかった。

理由は幾つか有る。

例えば、僕が真に部屋を「必要」とする事柄は既に存在しないだとか、部屋前の廊下で僕がウロウロしていれば余計な疑念を招くとか。他にももつともらしい理由は幾つか挙げられるのであって、しかしそれらは全て単なる口実に過ぎないだろう。

結局の所、僕は部屋に拒絶される事を恐れた。

余計な真似をしてこの「ホグワーツ」の怒りを買ひ、今後ハーマイオニーと会えなくなるような事は望まなかった。

今でこそ部屋を使えてはいるものの、部屋の作成者が定めた入室規則を完全に解き明かした訳でもないのだ。突然使えなくなったとしても何ら可笑しくはない。「魔法」というのは基本的に人知を超える物であり、下手に手を出す事で永久に使用不能となる可能性は排除しがたく、そしてその未来を僕は避けたかった。それは魔法戦争とは全く関係無い単純な私利私欲に基づく行動で、これではあの校長の事を余りとやかく言えまい。

原理も時限も不明である事を除けば、必要の部屋は本当に便利だった。

ハーマイオニーと会う頻度、時間は、三年次までよりも遙かに増えたと言つて良い。三日に一度は必ず会つたし、毎回一時間以上は共に居ただろう。しかも図書室と違い、他の人間の眼を気にしなくて良くなったというのが申し分無い。

各々が持つてきた本を自由に読み、時に互いの本を交換し、そして気が向いた時に顔を合わせて会話をする。

魔導の深淵が費やされた部屋を使つて行うには贅沢過ぎる程の、何も特別な事などない秘密の会合。何れ壊れる事が解り切つている逢瀬を、僕達は存分に満喫し続けた。

後はまあ、しもべ妖精達の「規定外労働」の貢献にも言及せねばなるまい。

最初のように食べきれない程のデザートが用意されている事は流石に無いものの、毎回毎回、必ず二、三品は軽食が用意されていた。その事をハーマイオニーは歓迎しているようではなかったが——彼女が気にしていたのは、妖精の問題というより個人的な問題である。女性には体重を気にする生き物だと僕はフラァーとの経験で学び取つていた——それでも文句を言う事は無かつたし、出された分に関しては必ず完食していた。

ただ、何故そこまでするのか。

疑問に思い、一度妖精の一人に聞いてみた事が有る。

そして彼は恭しく頭を下げながら答えた。

「御嬢様が我々に願われた『目的』を果たされたようであるのは、僅かばかり助力させて頂いた身として非常に喜ばしくあられます。けれども、その望ましい時間が可能な限り続くように願うのもまた、良い屋敷しもべ妖精というもので御座います」

妖精にしては珍しい謎掛けのような回答で、ハーマイオニーが慌てて口を塞ごうとしていたのが印象的であり——色々考えを巡らせた結果、真意の追求は棚上げにしている。

深い興味が有つて聞いた訳でも無かつたし、少なくとも僕が知るべ

きではないとハーマイオニーが、そして何より妖精がそう考えているのは十分伝わって来たからだ。ならば僕に何を隠しているにしろ悪い企みではないのだろう。妖精達とハーマイオニーの関係も陰悪という風でも無さそうだから、僕が余計な口を挟むべき事柄でもない。しかしながら、変わらない事がもう一つ。

給仕に現れる妖精達の服は相変わらず、至極みすばらしいままだった。

あの校長がハーマイオニーの目論む“革命”——妖精達の“自由”を認めない筈も無いから、妖精達は依然として強固に抵抗しているようだ。それが良い事なのか悪い事なのか未だに僕は判断が付きかねるが、妖精が色とりどりの服を選んで着る日はまだまだ遠いらしい。

ともあれ、殆ど一年振りに訪れた、静かで穏やかな日常だった。

これが最後になるかもしれない。

毎回毎回、彼女と会う度に抱くそんな思いさえなければ、完璧と言っても良かった。

それにしても今年が良い年だ。

クイディッチを禁止されているハリー・ポッターは意見を異にするかもしれないが、少なくとも僕にとってはそう思える。

現在出ている教育令と、それが齎した変化はどれも可愛らしいものだ。

ホグワーツ教授に対する監査は、二人への無意味な嗜虐行為を除けば全て終了してしまったと言って良く、他にクビになりそうな者は居ない。防衛術の授業は今も無意味な時間を続けているものの、それも各寮が勝手に行い始めた自習で補完され、時折医務室送りになる人間が出る以外に支障は出ていない。学内にしてもドロレス・アンブルリッジに処分の口実を与えない為か、ホグワーツ生は誰もが——ウィーズリーの二人とその取り巻きは数少ない例外だが——品行方

正を心掛けており、校内の秩序は例年以上に維持されている。

殆どの人間が現状を窮屈だと考えているのは明らかだが、しかしそれだけだ。高等尋問官殿はそれ以上の影響を与えられていない。

流石に彼女の方も現状の拙さは自覚し、何とか状況を打破したいと考えている様子が明らかに見て取れたものの、有効な手段を考え付かないらしい。

まあ結局の所、ドロレス・アンブリッジは御行儀が良過ぎるのだ。法令を施行する役人としての責任感結構だが、その役人らしい振舞いは魔法族の本質から程遠い。現状を変えたいのなら彼女はアルバス・ダンブルドア校長こそを見習うべきであり、それが嫌だということならばスリザリンとしての原点に立ち戻るべきである。スリザリンはグリフィンドールよりも法令を守る方では有るが、しかし何時も守るような種族でも無い。その事を彼女は忘れている。

そんな小役人の悪戦苦闘を観察しているだけで一年が過ぎてくれるならば、僕は今年がホグワーツで最も良い年だと断言出来た事だろう。

しかし、既に戦争が再開された以上、やはりそう上手く行かないのは承知していた。

そして四年続いたハロウインの呪いは解けたようだとは言え、やはり騒動の始点となるのは何時もあの男であるらしい。

とうとう「異変」が起こったのは、冬期休暇に入る直前の事。

未だ学期が最後まで終わっていないにも拘わらず、ハリー・ポッターがウィーズリーの兄妹達と共に突如として姿を消した。

今年の場合でそれを見過ごす者が居るとすれば、ビンセント・クラブとグレゴリー・ゴイル以下の脳味噌の持ち主であろう。……いや、彼等もドラコ・マルフォイに教えられて気付いた可能性が有るから微妙な線かもしれない。

ともあれその「異変」は校内に大騒ぎを引き起こす性質の物では無かったが、それでもホグワーツ内で広く関心を集め、一体何が起こったのかと広く噂されるには十分だった。グリフィンドールは秘密を守ろうとするというより事態を把握しきれていないようで、スリ

ザリン内でもしきりに情報交換が為され、レイブクロー生やハツフルパフ生が直接ミネルバ・マクゴナガル教授に訊ねに行っている姿も見かけた。

そして最終的に布告された公的見解によると、ウィーズリー兄妹に一足早い休暇が認められたのは、彼等の父親が入院したからという事らしい。

まあ、それ自体は嘘では無かった。

アーサー・ウィーズリーの入院自体は事実のようで、その裏付けはスリザリン生——聖マング魔法疾患傷害病院に関係者を有する人間からも取れた。

だがしかし、その事実だけを馬鹿正直に受け止めた人間がどれだけ居たのやら。

何故ならアーサー・ウィーズリーの入院はウィーズリー兄妹が消えた理由を説明してくれるが、ハリー・ポッターが同時に消えた理由を全く説明してくれないからである。

一応ハリー・ポッターに関しては、ミネルバ・マクゴナガル教授が別の言い訳をしてはいた。

けれどもそれが全く信じられていないというのは、公式発表後も色々と憶測が流れるのが止まらなかつた辺りからも明らかだ。勿論あの教授は相手にしなかつたが、それでもハリー・ポッターの消失についての言い訳が杜撰である。その事は彼女も自覚する所だつたであらう。

しかもアーサー・ウィーズリーが一時は危篤状態に陥つた程の重症だという続報が流れ始めると、ハリー・ポッターは「恒例行事」として消えたのだという見方を確固たる物とした。

噂の一部を例に出すなら、シリウス・ブラックと戦っているアーサー・ウィーズリーの救援にハリー・ポッターは向かつたのだとか、そういう調子である。正解かどうかは関係ない。結局の所、何だかんだ言つて闇の帝王の復活を——ハリー・ポッターの言葉を絶対に信じない生徒など居なかつたという事だろう。

まあ言い訳の杜撰さは個人的に非常に不愉快な物で有つたものの、

それでも魔法戦争に限って言えば、確かに問題無いと言えば無い。

アーサー・ウィーズリーの入院、更にはハリー・ポッターが消えた理由が魔法戦争絡みだというならば、それらの事情は闇の帝王に当然伝わっている筈である。御互い承知済みである以上そもそも言い訳する必要自体が無く、雑でも十分なのは理解出来る。

しかし、果たして全く問題無いとまで言って良いのだろうか？

去年までならこの程度の頭の悪い言い訳で十分だ。

生徒が何と噂していても、校長と教授が主張する事は校内において「正しい」。それらの地位は「ホグワーツ」において絶対であるべきで、彼等が生徒達に媚び諂う必要性など欠片も無く、そうであるが故に初めて校内の秩序が維持される。

けれども今年のホグワーツには、彼等の権威と権力に対して挑戦しようとしている者、彼等に対して「間違い」だと声を上げる資格を持つ人間が一人居る。

その人間——言うまでもなくドロレス・アンブリッジ高等尋問官は激怒していた。

ハリー・ポッター達への対応につき全く相談されず、あまつさえ深夜にミネルバ・マクゴナガル教授やアルバス・ダンブルドア校長が雑な嘘を吐いて煙に巻いてくれた事を、彼女は決して許せない違法行為であると確信していた。

今回彼女が意識した法令は教育令第二十六号。

当該法令は高等尋問官職に対して『特権の剥奪に最高の権限』及び『他の教職員が命じた処罰、制裁、特権の剥奪を変更する権限』を付与している。故に彼女の見解によれば、ハリー・ポッター達が早期休暇を許されるという「特権」なんぞ認められず、したがって当然それを『剥奪』出来るという論理が成り立つらしい。

……正直言つて、半分は無理筋な主張では有る。

少なくともウィーズリー兄妹に関しては、家族の入院を理由にホグワーツを出る事を特^{privilege}権だと認識する人間はまず居まい。特に一時危篤に陥った程ともなれば、学業を理由に生徒を引き止めようとする教師は正直どうかしている。

しかしながら、もう半分。

ハリー・ポッターに関する部分については一理有ると肯定せざるを得なかった。

……まあ、ドローレス・アンブリッジの主張に不用意に同調を示してしまった為に、やけに気を良くした彼女の愚痴に三時間ばかり付き合わされる羽目になったのは流石に閉口したが、しかし、彼女の心情——『特権』の剥奪を校長が却下した事に不満を抱くのは解るといいうのは変わりがない。秩序を重んじる体制側としては、ハリー・ポッターへの対応を問題視するのも当然である。あの校長閣下は耄碌でもしたのだろうか。

もつとも、その事とは別に、彼女の優秀さを再認識させられた点の一つある。

それは一体如何なる手段を用いてか、ハリー・ポッター達の不審な行動をドローレス・アンブリッジが察知してみせた点である。

寮を抜け出した生徒を教授が察知出来るかというのは、一応可能と言えれば可能だ。

労力を無視するならば呪文すら要らない。毎晩自らグリフィンホール寮に赴き、寮の入口を見張っていれば良いのだから。

ただ体力面を考えれば現実的では無く、そもそもハリー・ポッター達が夜間に寮を抜け出す可能性は一体どれ程有っただろう。彼等とて馬鹿ではないのだから、平時にそんな事をしようと思わなかった筈である。今回は非常に例外的な事態であり、それなのにドローレス・アンブリッジは彼等の行動に気付いた。

闇の帝王による連絡が有ったのだ——そう考えれば彼女の行動を容易く説明し得るが、しかしその可能性は明らかに低い。

ドローレス・アンブリッジは死喰い人ではなく、帝王は彼女に連絡する手段、それも真夜中に寝ている彼女を叩き起こす程の手段を持ち合わせているとは思えない。それは僕に闇の帝王の不関与を確信させる一つの理由であったが、しかし決定的な理由は、ドローレス・アンブリッジがハリー・ポッターを取り逃したからである。

今回の「異変」が帝王の故意的な行動であったのなら、彼女は予

めグリフィンドール寮の入口で待ち構えていて然るべきである。必然、取り逃す訳が無い。

つまり今回の一件は光と闇の何れにとつても偶発的なものであると踏むべきであつて、とすれば、ドロレス・アンブリッジは今回の異変を殆ど独力で察知してみせたという事だ。

要は何らかの魔法的手段を使って九月から十二月末までずっと監視していた可能性が高く——屋敷しもべ妖精という反則は考慮する必要が無いだろう。高等尋問官より校長閣下の命令の方が当然優先されるからだ——そして、彼女が如何なる手段を用いたにせよ、並大抵の発想と執念で為せる事では無い。

結局失敗し、ハリー・ポッターを取り逃してしまったとは言え、その事は彼女の評価を下げる理由にはならない。やはり曲がりなりにも我が蛇寮出身の人間という事だろうか。

何はともあれ、状況は一つ動いた。

未だ些細であるように思えるが、それでも潮目が変わったのは確かだ。

次の問題は、ハーマイオニー・グレンジャーが僕に疑問をぶつけてくるのか。ぶつけてくるとして、ハリー・ポッターの現状を知る前か知る後か。

そして僕としては、何れでも従う気だった。

その選択権は、この関係が続けさせてくれた彼女にこそ委ねられるべきである。

冬期休暇前、彼女は何も聞いて来なかった。

彼女が何としてでも僕と会話しようと試みていたならば、一応それは可能だった。

何時も通りの放課後でなくとも、昼休みの時間中、最悪の場合は授業をサポートして無理矢理に時間を作る事は出来た。在ったり無かったり部屋という反則は、彼女にその「必要」を許しただろう。

しかし、彼女はそれを選ばなかった。

理由は色々有る筈だ。ドロレス・アンブリッジの警戒の眼、三人組の内残された一人に対する生徒の好奇の視線、僕と会話すれば不可避的に背負う事になる心労、何より自分を置いて消えたハリー・ポッター達への心配と憤り。どれか一つだけという事も無い筈で——そして、その大半は、あくまで冬期休暇前の事情に過ぎない。

新年になれば状況が変わるだろうというのは早々に予想出来ていたし、そして新学期が始まって二日目に起きた事件がその予想を肯定した。

十人の死喰い人がアズカバンから脱獄した。

そのニュースが『日刊予言者新聞』に載った翌日、一シツクル銀貨——真つ当な社会では通貨に似た外見を持つ物体を作る事自体、通貨偽造の罪に該当する危険がある。その指摘を僕は未だに口に出せていない——が熱を持った。

ハーマイオニーからの呼び出しだった。

必要の部屋に来るのは、何時もハーマイオニーが先である。

どちらが決めた訳でも無い。

御互い何も言わない内にそのように決まっております、また変えようともしなかった。

その理由は多分、ハーマイオニーも僕も同じ筈である。

個人的願望と主観的必要性は全く別物であり、だからこそ僕達は疑いを捨てきれなかった。

——果たして『必要』の部屋は、僕に対して扉を用意してくれるのだろうか。

幸運な事に、その疑惑を試す機会はまだにやってくる暇がない。

今回もまた同じ。約束の時間ぴったりに訪れる僕を、ハーマイオニーは何時も通り部屋内で待ち受けていた。

「——今日は随分と趣向が変わったな」

「……………ええ、そうね」

部屋に入りつつそう言った僕に、ハーマイオニーは力なく笑いを返した。

僕が訪れる時、在ったり無かったり部屋は毎回内装を様変わりさせる。

正しくは、ハーマイオニーがそれを「必要」としているのだろう。

一度目はマグルのカフェカレストランめいた内装だったが、その次は巨大な図書館。或る時は王城もかくやと思われるような豪華な空間で、また或る時は魚や鯨が僕達の周りを泳ぐように作られた、半円球状の巨大なアクアリウム。

似たような場所に変わる時もあったが、連続する事は殆ど無く、そして大半は一度切りの空間であった。良くもまあ色々な場所を思い付くものだと感心しまう程で、その日どんな風に変わっているのかは内心割と楽しみにしていたのだが、今日の部屋は違う。

殺風景な灰一色の空間に、椅子が二つだけ。机すらない。

部屋も非常に狭く、手を横に広げたままでは二人が並ぶ事すら出来ない程の狭さだ。取調べを受ける容疑者というのは、こんな感じなのかもしれない。

「どうも御互い良い休暇とはならなかったようだな？ 確か家族でスキーに行くと君は言っていた筈だが、その様子では叶わなかったんだろう？」

丸木を不格好に組み合わせただけの、ガタつく椅子に座りながら尋ねる。

僕から口を開いたのは、どう話を切り出したものかという逡巡が彼女の表情から見て取れたからだ。そして僕の質問が、休暇中の彼女の居場所を確信した上で為しているのは伝わった事だろう。今度の彼女の笑みには少しばかり安堵が混じっていた。

「……………ええ。パパとママは残念がってたけど、認めてくれたわ」「そうか」

グレンジャー夫妻が彼女を溺愛しているのは良く知っている。

彼女が見え見えの嘘を吐いたとしても、受け容れない事は有り得な

かった。

「しかし、あの校長も薄情な事だ」

相変わらず、あの校長は人の心を解さない部分がある。

「わざわざハリー・ポッターまで外に出したのだ。後もう一人ばかり一緒に連れていくか、或いは後発便として朝から彼等の下に送り出すべきだった。そうしていれば、君が今冬家族旅行を諦める羽目にはならなかったかもしれないというのにな」

「……ハリーは——」

「——ドローレス・アンブリッジの不興を買ってまで、外に出す意味が有ったのか？」

「……………」

ハーマイオニーは開いた口を直ぐに閉じ、悔し気に唇を噛んだ。

反論の火が即座に消えたのは、彼女とて考えなかった訳ではないからだろう。

「異変」が起こったのは夜間であり、当時ハーマイオニーが居たのは当然女子寮であろうから、彼女が気付く事は不可能だったかもしれない。しかし、あの校長が三人の友情を重んじるのであれば、今回の事件で彼女一人を仲間外れとすべきではなかった。

「ウィーズリー兄妹が学業を放り出して聖マンゴに向かった事は何の批難もしないが、ハリー・ポッターの場合には道理が通らない。彼はウィーズリー家に良く世話になっているというだけ、実の子供のように扱って貰っているというだけで、養子でも何でもない。赤の他人だ。彼の早期休暇をドローレス・アンブリッジが不快に思うのは必然だ」

ミネルバ・マクゴナガル教授は反対しなかったのだろうか。

てつきり僕は、彼女がこの手の特別扱いを最も嫌う人間だと思っていたのだが。

「彼に如何なる『異変』が起こったにせよ、経過観察はホグワーツでも出来ただろう？ あの校長の傍以上に安全な場などこの魔法界には存在しない。ドローレス・アンブリッジ如きに構ってられない程の緊急性があつたならば別だが、彼に纏わる情報や噂を聞き、その上で

僕が事情を推測している限りでは、それ程の緊急性があつたとは到底思えないのだがな？」

アルバス・ダンブルドア校長。

半端に相手を尊重する彼の態度は、他人の気を大いに逆撫でしてくれる。

校長の主観ではドロレス・アンブリッジに割と譲歩しているつもりなのだろうが、彼女の視点で見れば、校長は何も譲ってなどいない。彼女を歯牙にも掛けず、尊重すべき個人とすら看做す事もなく、しかし彼女が本当に実現したい希望だけは的確に潰して回っている。これでは最初から何も譲歩しない方がまだマシだろう。校長の殺害の提案は既に一度断られているものの、再度提案すれば領いてくれるのではないか。そう思えるくらいに今の彼女は憎悪を溜め込んでいた。

しかし、ハーマイオニーは僕の疑問に答えなかった。

何も聞こえなかったかのように大きく息を吸い、そして吐いた。

「……御互いに、と言ったわね。貴方にとつての休暇も良くなかったの？」

「最悪を更に更新してくれたな」

彼女の無理矢理な軌道修正に、僕は逆らわず従った。

「帝王による制裁を恐れてパーティーどころでは無かつた去年とは違う。表向きは何も起こっていないようにしなければならぬから、純血”達は毎年恒例のそれを聞く訳だ。そしてスリザリン生である僕は、全てでは無いがその一部に出席しなければならなかつた」

「……貴方が楽しんでいる光景って元々想像出来ないけど、それ程酷かつたの？」

「ああ。表面だけ取り繕っていた分、余計に酷いものだった」

その時の事を思い返し、思わず溜息が漏れ出る。

「あの場で真面目に楽しんでいた”純血”は零だった。……まあ彼等にとつてはパーティーも戦いの場では有るから、本当の意味で楽しむという事は無いのだろう。しかし、今回は質が違う。頭を使った会話をしているのは何も知らない外部からの人間だけ。”純血”の大

人達は悉くが上の空で、誰もが早く「仕事」に戻りたいと思っていた。けれども、彼等の体面上、或いは建前上、それが出来ない。全くもって喜劇だよ」

そんな異様な雰囲気に含まれていれば僕達も呑気に楽しむどころではない。

料理やデザートは何時も通り上等だったが、それ以外は全く良い所が無かった。

しかも例年通りの「純血」達は休暇中に何度もパーティーを開くものだ。

つまり、その地獄は一度では終わらなかったのだ。

「そ、それは……大変だったわね」

ハーマイオニーは真面目な顔をしていたが、口元が震えている。

笑い事ではないと解つていながらも、どうやら想像図の滑稽さに堪えきれなかったらしい。彼女の笑いの波が治まるのを少し待った後、改めて僕は話を切り出す。

「あの時点では、彼等が戻りたいと思っている「仕事」というのが解らなかった。彼等はバーテミウス・クラウチ氏のような仕事中毒人間には見えなかったからな」

流石の彼女も、一瞬で表情を引き締めた。

「またルシウス・マルフォイ氏にしても、ドラコ・マルフォイに対して秘密を漏らすような真似をしなかった。まあ、休暇明けに「何か」が起こるとは教えていたと聞いたから大概甘いと思うが。ただ僕達の視点ではその「仕事」や「何か」が不可解なままで、しかし今では既に明らかになっている。勿論、君も解る筈だ」

「……アズカバンから死喰い人を脱獄させた事よね」

「その通りだ。立場上、僕は成功した事を喜ぶべきなのかね」

仮に失敗していれば、スリザリン寮内の雰囲気は酷い物になっていただろう。

かと言って、成功した今も良い物とは言い難いが。スリザリン生の大半が死喰い人関係者ではあるが、しかしながら全てではなく、帝王への協力の濃淡にも家や個人によって差異がある。ドラコ・マルフォ

イ達三人組のように無邪気に歓迎している者ばかりではない。

「二応、昨日の『日刊予言者新聞』は持って来た。君も既に読んではいらるだろうが、それでも今この場で必要とするかもしれない。そう考えたからであるが——」

「——必要無いわ」

「そうか。不要なら何よりだ」

「……貴方にとって良い事なの？」

「言葉の綾だよ」

一瞬眼を見開き、返答を間違ったかと途端に考え始めたハーマイオニーに笑う。

「寧ろその程度の事を聞いてくれる方が有難かった。全く知らないという回答で済んだからな。恐らく、スリザリン生で今回の件を知っていた人間は皆無だろう」

万一にでも情報が漏れれば比喩では無く殺される。

誰だって命は惜しいものだ。

「非常に意外な事に、闇の帝王も校長と同様、ホグワーツ生の助力を必要とする人間ではないらしい。これは僕と意見が異なるな。あの魔法使いは生徒に手を出したがるのだから、存分に利用してやる方が良さそうなものだが」

手慰みにクルリと手元の新聞を回す。

まあ個人的に、闇の帝王が何故今アズカバンを破ったかは気になる所では有る。

帝王の復活宣言を今まで世間が信じなかったのは、表向きは事件など何も起こっておらず、平和そのもののように見えたからだ。脱獄したシリウス・ブラックにしても、彼が誰かを殺したというニュースは——冤罪だったから当然だが——流れていない。極まった愚か者などは、シリウス・ブラックの脱獄すらも魔法省かアルバス・ダンブルドア校長のでっち上げだと考えていた。

しかし、アズカバンが再度破られた事で、間違いなく状況は変わった。

闇の帝王の復活はやはり本当ではないのか。

或いは、現在は「例のあの人」が確かに死んでいたとしても、今後シリウス・ブラック達が甦らせてしまう事態になるのではないかと。そのように噂をする人間は、ホグワーツに限っても増えつつある。四つ折りにされたまま宙を舞った新聞の写真の中では、本物と違って囚われたままの死喰い人達が抗議の声を上げている。魔法族が写真に音声機能を付けなかったのは、今は助かる事ではあるものの、少し残念だと思っている部分だ。

ロングボトム家を破壊したベラトリックス・レストレンジ。プルウエットの男系を断ったアントニン・ドロホフ。そしてかつて神秘部に勤務し、ルドビッチ・バグマンらを利用して魔法省の情報を散々漏洩させたオーガスタス・ルックウッド等々。

写真の中で暴れるこれらの人間をアズカバンから出したのは、素直に考えれば戦争の準備が出来たからという事になる。しかし少し邪推すれば、これらの人間が戦争の準備に必要だったから闇の帝王はアズカバンを破らざるを得なかったという見方も出来る。

どちらが正しいのかは——まあ、ここで考えても出ないだろうし、今年は教えてくれる人間も居ない。既にアズカバンが破られた以上その理由について考える意味も薄く、ハーマイオニーが不要というならば突き詰めなくても良いだろう。

そう内心で結論付け、杖を振って新聞を焼失させる。

「まあ、今は僕の意見など重要ではない。ハーマイオニー、君がこうして呼んだ以上、聞きたい事が有るのだろうか？　ならば遠慮せず聞くと良い」

その促しに彼女は安堵半分、不安半分に瞳を揺らした。

「……貴方はもう少し洩るものだと思っただわ」

「状況は多少変わった。一部については洩る意味すら無くなった」

「……………ダンブルドアの意に反する事は話さないんじゃないやなかったの？」

「僕から明かす気は無い。それは変わらない」

義理が有る以上、あの老人の意思は可能な限り尊重する。

「が、そもそも僕は校長の味方ではない。道理が通りさえすれば、その

義理を踏み躪る気は有る。君が既に当たりを付けている内容について言及する位はするとも。要は、知っている事を全て吐けというような無制約オープンの質問でなければ大抵は答えられる。勿論、変わらず答えられない質問も有るが」

何の手掛かりも無しに僕が持っている情報に辿り着く事が出来たならば、それは最早アルバス・ダンブルドア校長が隠し切れなくなつたという事である。隠す意味も無い、というより僕は明かすべきだという立場を取る。

「何より君の在り方は正しい。必要だと考えたのならば、使える物は使うべきなのだ。優先順位というものを間違えてはならない。今は既に戦時なのだからな」

僕との友情と、ハリー・ポッターの安全。

彼女にとつてどちらが重いかなんぞ明らかだ。当然過ぎて残念に思いすらしない。

「改めて僕の立場を鮮明にしておこう。僕が答えられない類の質問は三種。ドラコ・マルフォイの利益に反する事。アルバス・ダンブルドア校長の意思に反し、かつその意思を無視する道理も存在しない事。そして闇の帝王の目的を明らかに妨げると思われる事。君達の陣営に立てない以上、これらは譲れない」

「……………」

「意図的に嘘を吐くつもりはないが、必ずしも約束出来ないし、そもそも誤解等により間違つた事を言うかもしれない。答えられない事は答えられないと言うし、解らない事は解らないとも言おう。それでも君が構わないというならば——質問を受け付けよう」

胸中の蛇

「ハリーは夢を見たわ」

ハーマイオニーは、アズカバン脱獄について触れるつもりは無いと言った。

だから彼女が何を聞きたいかというのは想像が付いていたが、しかしそれでも十分な不意打ちになった。ああした前置きをして尚、ハーマイオニーがそのような内容を直接口にするとは思ってもいなかったからだ。

対面の椅子に座る彼女は、膝に置いた手を堅く握り締めている。

「ハリーが見た夢は、ウィーズリーおじさんが大きな蛇に噛まれる光景だった。そして想像は付くでしょうけど、その事件は実際同時刻に起きていた。このホグワーツから数百キロ離れた場所だね。それが冬期休暇前に起こった事で、だからあの時ハリー達は姿を消したの」その言葉に、直ぐに返答はしない。

推測はしていた事とは言え、これは非常に重要な事だ。検討と熟考は必須であり、ハーマイオニーも急かそうとはしない。暫くして考えを纏めた後で顔を上げれば、無言の間も彼女はずっと僕の方を見つめていたのか、視線を真正面から受けて立った。

「……一応最初に聞くが、その情報を僕に明かして良いと、君は本気で考えたのか？」

「余り自信は無かったけど、正しかったのは既に解ったわ」

確認の問いに寄越されたのは、非常に素っ気ない返答。

「今のが突拍子も無い内容だという事くらい私にも客観視出来るつもりよ。普通なら奇妙に思ったり不気味に感じたりする筈で、少なくとも騎士団員はそうだった」

「……………」

「けれども貴方は全く驚かなかった。その事件が起こるのは何ら不思議が無いと思っっているようにね。……ああ、表情が変わってないとかじゃないわ。とにかく、私には解ったのよ」

「…………まあ、そうだな」

確かに不思議になど思っていないし、結果的には有るが、僕に隠す意味はなかった。

「君の言う通りだ。先学期末に何が起こったかというのは、僕の方でも既にある程度見当を付けていた。僕にはそれを推測出来るだけの材料が校長から与えられており、仮にそれが無かったとしても、可能性の一つとして想像する位の情報は落ちていた」

「……そんな情報が有ったかしら」

「あつたとも」

背凭れに深く寄りかかりつつ、足を組みなおす。

「時系列を整理出来ない人間だと思われるのは心外だな。ハリー・ポッター達が校内から消えたときドローレス・アンブリッジが推測した時刻。アーサー・ウィーズリーが緊急治療室に運び込まれた時刻。両者を比較してみれば、殆ど同時か、下手すれば前者が早い」

「……………」

「アーサー・ウィーズリーの危篤状態にしても、明け方には既に脱していたという話だ。つまり普通であれば生徒達が寝ている内、何も知らないままに事態は全て終わっている。それなのに何故、君は朝食時に一人で大広間に座っていた——彼等の姿が朝食時から見えなかったのだろうか？ 父親の見舞いに行くにしても急ぐ必要は無く、実際ウィーズリー兄妹は昼以降に聖マンゴを訪れたというではないか？

その間、彼等は何処で何をしていた？」

当然、アーサー・ウィーズリーの危篤や入院の報せを受けてウィーズリー兄妹が消えたという筋書きは、これらの事実と整合しない。

「……貴方は、それを誰かに伝えたの？」

「ここまで具体的に伝えていないが、ドラコ・マルフォイに時間軸の質問を投げた結果、最終的には先程の回答が超越された。必然、闇の陣営にも当然伝わっているだろう」

先の一連の時間情報は決して公開情報ではないが、患者のプライバシーに深く関わるものでもないから、聖マンゴに関係者が居れば容易く集められる程度の情報である。僕が直接訪れて聞き回ったとて得られたかもしれない。今回の一件を誤魔化したかっつたと言うなら

もつと上手くやって欲しいものだ。

「……………マルフォイに言わないで欲しかった。そう思うのは身勝手よね」

「僕の照会なんぞ価値が無い。ハリー・ポッター達が姿を消したという連絡は、ドラコ・マルフォイからルシウス・マルフォイ氏に必ず行くのだ。必ずや何処かで誰かが気付く。敵が己より愚かだと期待すべきでもない」

一応ドローレス・アンブリッジは未だ気付いていないようだが、しかしそれを責めるのも酷ではある。『純血』達と違い、彼女は聖マンガに伝手を持つてはいないからだ。

「……………ともかく、何故なのかは知らないけど、貴方はコレを予測していたんでしょ？」

「君の言葉は正確ではなく、予想し切れなかった部分も存在する」

険しい表情を前に、軽く首を振ってみせる。

「まずハリー・ポッターが何らかの光景を視るといふ事は、まあ今更予測を立てる必要が無い事だ。それは僕達にとつて最早確定していた事柄だからな。あの校長の話では特に去年以降、夢を通じて闇の帝王と繋がる事が有ったらしい。君達自身、ハリー・ポッターの口からその事を聞いているだろうとは思う」

去年の…………ユール・ボール前だったか。間接的にだが、僕も同種の物を見ている。

あの時のハリー・ポッターのイメージは、まず間違いなく闇の帝王のものだ。そしてリータ・スキーターの記事——第三の課題前の彼の頭痛もそれによるものだろう。帝王の心を覗き見るのは、どうやら楽しい行為という訳でもないらしい。

「しかし中身に関しては想像の埒外で、初耳だ。今話を聞いて気になつた事も有る」

「…………聞かせてくれるの？」

「事実でなく推測である以上隠す事でもない。個人的に気になつたのはハリー・ポッターはその光景を何処から見たのかという部分だ。例えば傍らに居る人間の視点で見たのか、第三者視点で見たのか、或い

は僕が想定出来ないような場所からなのか。その手の情報が今の君の話からは抜け落ちていた」

「ハーマイオニーは全てを語っていない。」

だから意図的に削ぎ落された情報で有る可能性も存在していたのだが、彼女の反応を伺う限り、そうではないらしい。

彼女はその事実を知らない。ハリー・ポッターから聞かされていない。

「……貴方が問うからには、非常に重要なよね？」

「さて、重要であるかどうかを決めるのは君だ」

「……………」

「嗚呼、意地悪では無い。横や後ろから蛇を見ていた——そんな答えが彼から返って来たなら忘れて良い程度の問いだ。しかし今のを聞く限り、それ以外の答えが返って来そうだというのが問題だ。そもそも性質上、早合点して省略して良い類の問いでもない」

ハリー・ポッターが繋がっている先は闇の帝王である。

だから素直に考えれば、帝王の視点から、アーサー・ウィーズリーを襲う蛇の姿を確認していなければならぬ。

しかし既に今聞いた情報からして明らかに可笑しいのだ。

その蛇の姿を闇の帝王が見ていたならば——つまりその場に彼が居たならば、冬期休暇中にウィーズリー家は聖マンガに見舞いに行く代わり、アーサー・ウィーズリーの葬式を挙げる羽目になっていた事だろう。

けれどもそうっていない。

という事は、僕に情報が足りないか、僕が何かを見逃しているという事だ。

「……疑問に思ってしまった以上、後からでもハリーに聞いてみようと思うわ。けど、その答えは貴方には教えない。それで構わないかしら？」

「明かす必要が有ると君が考えたのなら、聞きはするがね」

僕の立場は一貫している。

彼女が余計な詮索を僕にしない以上、僕も彼女に対して余計な詮索

をしない。聞いた情報を踏まえて推測を立てる位はするが、少なくとも直接問い質す気は無かった。

「……とにかく、貴方は全く驚いていない。貴方にとっては既知同然の事が起こったに過ぎない。そして——それはダンブルドアも同じ。そう解釈して良いのよね?」

「まさしくその通りだ」

意図して震えないよう努力している。それが伝わってくる声に頷く。

「更に言えば、こうなる危険を甘く見積もっていたのは君達の騎士団長閣下だ。本気で危惧していたなら彼は既に対応を取っており、そもそもハリー・ポッターが夢を見る事は無かった」

「……対応っていうのは、閉心術の事?」

「それが一つの対処法ではある。もともと、夢を見る事は止められるとして、本命の対処に何処まで役立つかは未知数だが」

僕の回答に彼女は少しの間黙り込んだが、必死に脳を回転させる事は伝わって来た。

けれども答えを導き出せる程の情報を彼女は持っていないので、僕の方から話を続ける。

「あの校長は、ハリー・ポッターが一風変わった夢を見る事を恐れてなご居ない。僕が知る限りは去年二度以上、ハリー・ポッターは闇の帝王の心を覗き見ており、そしてアルバス・ダンブルドア校長も同じく知っていた。しかし、止めようとしなかっただろうか?」

「……ええ、そうね。ダンブルドアは、去年からハリーに閉心術を教えるようとはしなかった。今年——それもウィーズリーおじさんが襲われるまで、その必要を感じていなかったように見える」

「実際、夢を見る事自体の危険というのは考え辛い。彼が猟奇映像を見て魘されようが、遠く離れた光景を見させられようが、それが現実の魔法戦争で脅威になる事はほぼ無いからな。帝王の感情が伝わってくるのも同様だ。校長はハリー・ポッターを善と見ており、余程の事が無い限り、闇に染められる事もないと看做している」

寧ろ便利に働く場合の方が多いだろう。

だから彼等の繋がりには維持すべきではないか。その考えは、あの校長閣下には間違いないと有ったに違いない。

「故に彼が真に恐れたのは、闇の帝王によりハリー・ポッターが乗っ取られる可能性だ」

「——ええと、少しだけ考えを纏めさせて頂戴」

「構わない。好きにすると良い」

ハーマイオニーが左手で額を押さえ、眼を瞑った。

僕が与えた情報は彼女にとって余程呑み込みがたいものであったようだ。彼女はこちらにも聞こえる程の深呼吸をした後、挑戦者のような眼をして僕に向き直った。

「……ジニーは——ヴォルデモートに一度乗っ取られた経験を持つ彼女は、ハリーが乗っ取られていないと断言したわ。ハリーは一瞬たりとも記憶を喪っていないもの」

「だろうな。彼が過去に乗っ取られたのだと、そう主張したい訳ではない」

既に予期していた反論である。

だから、彼女の言葉に対して留保を付けるのは容易かった。

「そして一ヶ月後や二ヶ月後とか、そんな近い未来にハリー・ポッターが乗っ取られるという話をしてもない。彼等の物理的距離が離れており、かつホグワーツの護りが存在する限りは、そんな危険を恐れずとも良いだろう」

彼は彼のままだ。

ホグワーツ特急内とて、姿を瞳の中に見ただけである。成り代わられた訳でも無かった。

「しかし、将来的にその時が来るのではないかという推測を僕は——僕達は立てた。一番可能性が高いのはハリー・ポッターが闇の帝王と遭遇した時だ。心身が弱っている際も良くないかもしれない。僕にとって確信するまでの根拠は無かったが、可能性は高いと見ている」

「どうしてそんな事を言えるの？ ……いえ、これは答えてくれる筈がないわよね」

「その通りだが、答えられないというのがより正確だな。何せ校長の方は、今回の事件を受けて闇の帝王がハリー・ポッターを乗っ取るか、操作する事は出来ると確信してしまったように感じられるからだ」

アルバス・ダンブルドアは去年と違って動いた。

とすれば、彼は今回の事件に何かを見たのだろうか。

「理由は解らん。アーサー・ウィーズリー絡みの問題なのか、襲撃事件が起こった理由の問題なのか、それとも蛇が問題なのか、或いはそれ以外か」

特に、分霊箱に関わる問題なのか。

僕の視点からは全く解らない。まず間違いなく、ハーマイオニーの視点からも。

唯一解るのは、答えを持っているのはアルバス・ダンブルドア校長だけだという事だ。

改めて考え込む僕を他所にハーマイオニーは溜息を吐いた後、言葉を続けた。

「……質問を変えるわ。兎も角、ダンブルドア先生は今回のような事が起こるのを知っていたのよね？ それも夏休みの前から。だからハリーを遠ざけてた」

五十点もやれそうにないな、と顔を上げつつ軽く笑う。

「ハリー・ポッターを遠ざけていた理由は正解だ」

あの校長の事だ。必要以上に遠ざけたのだろう。

僕の方がマシだと自負出来る次元で、彼は人と人の距離を正確に測り切れない。

「しかし、予期していたのが夏休み前からというのは外れだ」

「――」

「あの校長は既に十四年前の時点で推量してしまっていた。勿論、ハリー・ポッターが何らかの光景を見るだろうと、そう具体的に予測していた訳では無いがね。しかし“生き残った男の子”が闇の帝王の影響を受ける可能性は誰よりも先に頭に思い描いていた。あれだけの賢さを持つ人間にはそれが出来てしまう」

ハーマイオニーは一瞬だけ脅えを見せたものの、それを振り払うよ

うに首を振った。

「……ダンブルドア先生が放置していた訳では無いのよね？」

「ああ。彼が十四年間注意深く見張っていたのは間違いない。そしてハリー・ポッターの人格の維持は、今や彼にとって最優先事項になっている。君が懸念するような事は無い」

「……………そう」

「付け加えると、十四年前の時点では複数の可能性が考えられた。当時どう動くのが正解だというのも解らなかったし、多くが見え過ぎてしまうからこそ動けないという事も有る。あの時こうすれば良かったというのは既に結果論に成り下がっている。彼は最善を尽くさなかったかもしれないが、それでも最悪を避ける為に立ち回ってはいただのだ」

彼は十四年前、ハリー・ポッターの傷跡から幾つかの推論を立てた。

悪しき魂の欠片に乗っ取られ、赤子が闇トム・マールヴォロ・リドルの帝王トム・マールヴォロ・リドルに変質してしま

う可能性。

悪しき魂の欠片に引き摺られ、第二の闇ハリー・ポッターの大魔法使いとして成長してしまいう可能性。

悪しき魂の欠片を物ともせず、善良と正義を尊ぶ真単なる手駒のつ当な人間として育つ可能性。

その一つ目、もしくは二つ目が現実化する危険を思えば、アルバス・ダンブルドア校長が“生き残った男の子”を手元に置くという判断は有り得ない。

校長の本性を把握し、その手口を熟知した人間は、第二次魔法戦争では光の陣営にとつて絶対到手強い敵となる。しかも校長の周りに居る者達が残らず“生き残った男の子”に絆され、懐柔されてしまえば、ハリー・ポッターを危険視出来るのは校長だけだ。その場合は勝ち目など無くなるとすら言つて良いだろう。

——儂は、ハリーに近付かない方が良い人間なのじゃ。

ハリー・ポッターに対してはアルバス・ダンブルドアこそが最も悪影響を及ぼしかねない。己こそが脅威であると看做していた発言は、間違いなく彼の本心に違いない。

そして理屈はどうあれ、魔法戦争が三つ巴——闇の帝王対闇の帝王対ホグワーツ校長、或いは例のあの人对生き残った男の子対今世紀で最も偉大な魔法使いになる事は避けられている。結果的にはあるが、あの校長がハリー・ポッターを手元に置かなかつたのは正しかった。

「無論の事、君が今直ぐ校長の所に怒鳴り込みたいというならば止めない。寧ろ応援しても良い。彼が他人から糾弾されたがっているのを差し引いても良い気味だとは思うからな」

「……そんな事はしないわ」

俯く彼女の瞳からチラリと見えたのは、それも良いかもという光だった。

冗談半分ではあるものの、それは半分は違うという事だ。

「でも、貴方の口振りでは閉心術が役に立たないという風に聞こえたけれど」

「未知数だ、と言ったのだ。何分前例が無い筈だからな。何とも言えん」

跳ね返った死の呪文により意図せずして分霊箱化され、十四年間で魂の接触が続き、更に復活の儀を経る中で血液と愛の加護の共有が為されている。

こんな事例なんぞ世界の何処にも無いと断言出来る。

「確かに閉心術は、『外部からの魔法による侵入や影響に対して心を封じる』手段だ。だが基本的には相手の開心術——感情や記憶を抜き取る技術に対抗する術であつて、魂を塗り潰して支配しようとしてくる相手への対抗を主眼とするものではない。この手の自己制御術が全く役に立たないという事も無いだろうが、防衛手段として役立つかは不透明だ」

「……………」

「ただ、あの校長が必要だと考えたのであれば、それは正しい可能性が高い。彼は僕よりハリー・ポッターに近い位置に居り、何より彼は僕より頭が良い——」

「——閉心術を教える人間がスネイプであつても？」

思わず天を仰ぐ。

灰褐色の天井は、何時ぞやの御節介な星空より苛立たしかった。

「……嗚呼、そうか。考えてみれば、今の校内には我が寮監しか居ないのか」

頭痛を抱えるのは今度は僕の番らしい。

確かに考えてみれば、盤面の駒中、閉心術を教えられるのは彼以外にない。

しかしそれでも常軌を逸しているだろう。感情を制御する事を肝要とする技術の習得に、感情を乱さざるを得ない——片方でなく御互いに——人間を敢えて用いようとするのは。

「……スネイプが教えるのってそんなにマズい？」

それまでと違い、僕の反応が大きかったからだだろう。今のハーマイオニーは、その表情に隠し切れない程の不安を浮かべていた。

しかし、非常に残念ながら、僕は首を振らざるを得ない。

「悪いと言えるかは判断しかねるな。少なくとも校長の判断を否定する根拠は無い。仮に閉心術を教えないとして、なら他に適切な対策があるのかという話になる」

代案も出せない以上、反対する気にはなれない。

「そもそも、スネイプ以外に閉心術を教えられる人間は居ないの？」

「そんな人間が居れば、あの校長はスネイプ寮監以外に仕事を押し付けている。如何にあの校長とて寮監に閉心術を教えさせる事を最善と思っている筈も無かろうよ」

どんなに頭が御花畑の人間でも、あの二人を一緒にの教室に閉じ込めておきたいとは考えないだろう。彼等の間に横たわる憎悪の深さは、ホグワーツに居る者であれば誰もが知っている。

「今年ドローレス・アンブリッジが抑止力となっていないければ、あの校長はどうかして校外から人間を招いていた。どの程度の頻度で寮監が教える気かは知らないが、一週間に一日くらいホグワーツに外部から客を招くなんて、そう難しい仕事でも無いだろう？」

「……そうね。ダンブルドアだもの、それが出来ない理由はないわ」

「余り期待して居なかったが、彼女は闇の陣営にとって中々役に立つ

ているようだ。少なくとも、あの校長を鬱陶しがらせる事は出来ている」

個人的にはあんなのは無視して実行に踏み切れれば良い——今回で言えば、ドロレス・アンブリッジが何と言って来ようと人間を外から呼べば良いと思うのだが、そんなつまらない自制をしてしまうからこそそのアルバス・ダンブルドア校長か。

「話に出た以上、開心術と閉心術について触れていた方が良いのは明らかだが……まあ、ざっくりとした内容で十分か。君の知りたい事でもあるまい」

「……………」

「まず開心術。君が今思っている程に、これは便利な技術では無い」

世に知られていないのは必然でもある。

「開心術は、自分と同等以上の閉心術士には通用しない。自分の心に他人が入り込むという状態がそもそも不自然だからな。細菌に対する免疫機構宜しく、防げるのが普通なのだ。第一、確実に“真実”を判定するには開心術以外の情報が必須であり、一方で“真実”を知るのに開心術は必須ではない。配偶者の浮気を見抜くのに、わざわざ開心術士としての修練を積む必要なんぞないだろう?」

そんな技術が無かろうとも、客観状況からの判断や物的証拠の収集等により、相手が“嘘を吐いている”と見抜く事は出来る。代替手段が有るのに遠回りするのは無駄の極みだ。

「決闘——否、殺し合いへの利用に際しても、開心術を役立てられるのは化物共だけだ。開心術の基本は眼を合わせる事であるが、しかし銃を向けられれば自然と銃口に視線が行くように、大抵の魔法族が意識するのは杖先だ。必然、視線は合いにくい。また、訓練された軍人が脊髄反射で銃を撃てるように、やはり熟練の杖使いも呪文行使に思考は殆ど不要だ。忙しい戦闘中に素人開心術士が呑気に読めるものでもないな」

だから開心術は対人戦闘の万能薬にも成り得ない。

開心に際して一々杖を振る必要がない熟練の魔法使い、かつ一瞬で心の深層まで読み切れる程の術士同士が殺し合う場合にのみ、心の読

み合いと呼べる戦いは発生する。

今の魔法界でそれが出来るのは勿論、たった二人だけだろう。

「無論、開心術の有用性を否定する気はない。使い所を選べば便利な術だ。大抵の術と同様、開心術も杖を使った方が基本的に強力にもなる。つまり一方的に杖を使える状況、つまり容疑者の取調べをする際に有れば特に有効に扱えるだろう。また独裁者が臣下の忠誠を確認する場合に使う気なら、一定程度は役に立つ」

そして、と続ける。

「開心術まで修めている闇祓いは少数であつても——取調官を専門家に任せたり、もしくは補助を頼めば良いだけだから——開心術の訓練を積んでいない闇祓いは居ないだろう。開心術士は少ないとはいえ、魔法戦士の心が無防備なのはやはり拙い。それでも力量に個人差は有るだろうし、闇の帝王の前で心を閉じられる者は稀だろうが」

「……貴方が言わんとする事は良く解つたわ。要するに開心術、いえ閉心術にしても、どちらも『普通』の人間が学んでいる技術では無いのね」

「その通りだ」

一定の理解を示してくれたらしいハーマイオニーへ頷く。

「重要な事だから繰り返すが、開心術は必ずしも『真実』を見抜いてはくれない。技術というのは、所詮人間が用いるものだから。開心術によって得られた結果は『果たして本当に信じていいのか』。そんな問題からは決して逃れられない」

完全な嘘発見器という物が偶発的に世界に誕生したとして、それを人類が適切に扱えるかは別の話だ。人が人である限り、その完全性を信用出来ない。

「あの校長の在り様を見ても解るだろう。アレは優秀な開心術士だが——彼にしては珍しく稀代の、ではないが——開心術を判断材料の一つ以上に重んじていない。光の陣営を裏切っていないかとか一々質問し、心を覗く真似なんぞもしない。それが無礼な行為で、逆に不信や反発を招きかねないというのも有るが、一番の理由は無意味だからだ」

開心術により得られた内容のみでは「真実」かどうか解らない。

二学年末、僕を「信用出来る」と言つてのけたのも、決して彼が開心術士だったからではない。偏に僕達が共通の瑕を持ち、かつ同様に囚われ続けているからに過ぎない。

「『真実』は開心術によつて隠せる。またその人間が心から騙されていれば、客観的事実と異なつていても『真実』になる。更に心を読んだ瞬間は『真実』で有つたとしても、一秒後に『嘘』に変化する事は有り得る。余程の愚者でない限り、無批判に開心術の結果を信頼する事はない。そして、あの校長は言うまでもなく愚者ではない」

「……確かにダンブルドアは、ペティグリューの裏切りも、シリウスやルーピンの真実も見抜けなかったものね」

「そして今も騎士団員を心から信用出来ないから戦争の趨勢を左右する事実も打ち明けられない。それはハリー・ポッターが相手であつても例外でない。彼は『生き残つた男の子』を信用し切れておらず、だから今も距離を置いている。開心術士が他人の本心を完全に知れるというならこんな事にはなつていない」

「……………」

「嗚呼、君はこれを意識しておく必要が有る」

僕の補足にギョツとした顔をしたハーマイオニーに笑う。

先の皮肉は彼女らしくも無かつたが、彼女が本気であの校長を理解しようとするならば、その段階で止まつてはならない。

「ピーター・ペティグリューの裏切りなんぞ問題ではない。自分に忠誠を向ける相手すらも信用しない。それこそがアルバス・ダンブルドアという人間を理解する始まりだ。闇の帝王が臣下の誰も信用出来ないように、今世紀で最も偉大な魔法使いもまた誰も信用出来ない。……まあ、両者の違いは、最後に相手に歪んだ願いを懸けるかどうかだろうが」

自分と違つて相手が善い人間であつて欲しい。

改悛の機会を広く認める光の魔法使いは、他人にそんな願いを懸けている。

そう口元を歪める。

「では、話の本筋に移ろう。閉心術を学ぶのに一番手っ取り早いのは、当然ながら開心術を防ぐ事だ。それもハリー・ポッターが心を閉じようとする相手が相手だから、半端な開心術士相手に練習する訳には行かない。呪文を覚えただけの生徒を相手にする位なら何もしない方が余程マシだ。下手な開心術では心を破壊する危険すら有る」

この練習に際しハーマイオニー達は使えない。

「……で、スネイプは熟練した開心術士という事になるのよね」

「そうだ。まあ、あの寮監が真に熟練しているのは閉心術の方だがね」
開心術の分野において教授を上回る技量を持つ人間は、この魔法界に限定しても割と居る事だろう。彼は決してそれを専門として磨いて来た訳では無いからだ。

しかし閉心術の分野においては違う。その技量は下手すればアルバス・ダンブルドア校長すら凌ぐかもしれない。

「ただ、心の防ぎ方を知っているなら攻め方も当然知っている。元警備会社の人間ならば上手く泥棒もやれるのと同じだ。ましてあの教授程に閉心術を極めている人間は居ない。その理由は——まあ一々君に語る筈もないだろう？」

「……………」

あの教授が心を閉じている相手が誰かを思えば、そう結論付けざるを得ない。

「そのようだ。しかし、ならばこうも言っておこう」

ハリー・ポッターへの個人授業の事を知ってしまった以上、彼女の友人を自負するならば、多少余計な御節介を焼いておくべきだろう。

「——良いか、君はセブルス・スネイプ教授を信じるな」

「……貴方は、信じろという側だと思っただわ」

「僕がそう素直な人間だと、君は本気で考えていたのか？」

「……………そうね」

笑うべきか怒るべきか解らない。

そんな表情のハーマイオニーに、僕も苦笑を返した。

「ただ厳密には、僕の見解はあくまで最後の一つ前までは信じてはならない、だ。最後は信じて良いのではないかと思う。ただその部分、つまり最後に信じられるか否かは君やハリー・ポッターが決める事でもある。僕と異なる判断を下すのを止める気はない」

闇の陣営に付いた以上、光の陣営の判断に介入する余地はない。

そもそもハーマイオニーがスネイプ教授の善悪を判断する際、僕がその場に居合わせる事は間違いなく有り得まい。

「けれども客観的な立場で、かつ現状の寮監に対して判断を下すというならば、あの寮監は信じられないし、君は彼を疑わなければならぬ。僕はそう考える」

「……ダンブルドアが信じているから大丈夫。そういう事ではないのよね」

「ああ。あの校長も間違う時は有る。とはいえ、大抵の場合に校長の見立てが正しい事も見逃してはならない。だから重要なのはバランスだ。相手を基本的に信用しつつも、万一の場合に疑う事が出来るか。当然、これは君の親友二人には期待出来ない」

嫌な奴だからスネイプ教授は信じられない。

校長が信じているからスネイプ教授は信じられる。

「極端から極端の結論を反復横跳びする事しか、彼等には出来はしない。」

「君の事だ。我等が寮監が何故これまでの十四年間、大手を振ってホグワーツを歩けたか。その理由について『日刊予言者新聞』か何かで読んだ事だろう?」

「……ええ。クラウチ……さんが主宰した、魔法法評議会の裁判記録は見たわ」

「ならば、スネイプ寮監が今現在従事している不死鳥の騎士団の任務。その内容についても、君は当然のように予想出来ているのではないか?」

「」
彼女は口を堅く噤んだが、何とも解りやすい。

ハーマイオニーは賢い女性だ。だから気付かない方が良い事にも気付いてしまう。ハリー・ポッターやロナルド・ウィーズリーは何も気付いていない。彼等は間違はなく、スネイプ教授が普通に騎士団の任務を行っているという認識しか持っていないだろう。

「イゴール・カルカロフと違い、我が寮監は死喰い人の名を売ってはいない。けれども、あの評議会の結論は、あの寮監は闇の帝王の失脚以前に光の陣営に戻り、そして大きな危険を冒して騎士団の密偵となっていたというものだ。これは隠されている事実ではなく、調べれば誰もが手に入れられる。そうでなければ、彼がホグワーツ教授を続ける事なぞ許されない」

戦後も本物のアラスター・ムーディを筆頭にスネイプ教授を疑う者は多く、しかしその全てを退け続けて来たのはアルバス・ダンブルドア校長だった。

「そしてこれを完全な真実と見るならば、闇の帝王から見れば裏切者であり、当然粛清対象だ。見逃すなんぞ断じて有り得ない。だから寮監に少しでも危機感が有れば、闇の帝王が復活した今、安全なホグワーツ城に閉じ籠り続ける事を選択する」

「……でも、スネイプは騎士団を出入りしていた——つまり、外に出ていたわ」

「そう。そしてそれを許す論理は一つだけだ。スネイプ教授が騎士団の仕事をしている傍ら、死喰い人の仕事をしている。要するに彼の騎士団の任務は、死喰い人への潜入だ。まあ同時に、死喰い人としての任務も、騎士団への潜入で有るのだが」

これはバーテミス・クラウチ・ジュニアに提示した回答の延長に在る。

スネイプ教授は、第一次魔法戦争中に帝王から受けた仕事——騎士団への潜伏任務を遂行中である。アルバス・ダンブルドア校長に取り入る為に、闇の帝王が消えた後も変わらない忠誠の下に、十四年間仕事をし続けていた。万一それが違ったとしても、十四年間で得た情報を提供し、帝王への忠誠は今も変わっていない事を証明した。

だから、彼は闇の陣営から受け容れられた。

「……流石に、貴方がスネイプに聞いた訳ではないのよね」

「そもそも聞いて答えてくれる人ではないがね」

あの教授がそれ程素直なら、ハリー・ポッターと今よりも良好な関係を築けている。

「ただ、騎士団の大半が同じ考えに至っている筈だ。そして二人とも、つまり校長も帝王も隠しはしないだろう。……いや、校長の方は表向き取り繕いはするか。どう考えたって騎士団内に不和を撒き散らすからな。裏切者が入り込んでいる可能性は受け容れざるを得なくても、その名札を付けた人間を平然と受け容れられる者はそう居ない」
しかし周りからどんなに言われても、あの校長が絶対に譲らないのは間違いない。

「寮監の立場を敢えて評するなら二重スパイだが、一般的なそれと違うのは、両陣営の指導者が解っていてやっていている事だ。校長と闇の帝王、そのどちらも自分の味方として振る舞う事を条件に、スネイプ寮監が二重の身分を持つ事を許している」

全くもってどうかしている、と思いつつ言葉を続ける。

「これを教授に許すのはな、御互いの指導者にとって利点や目的がある。例えば、騎士団員の一人が怪しい真似を——闇の帝王に利するよくな不穏な行動を取ったとする。それが発覚した場合、君達の騎士団長閣下は怒り狂い、裏切りの代償を支払わせ、騎士団から放逐する事だろう」

「……そりゃあ、当然の事じゃないの」

「しかし、その行動をしたのがスネイプ寮監である場合は同じ事にならない」

「どうしてよ？ 裏切者だと解ったんだから許す筈が——」

「二重スパイが一方のみの利益の為に行動する。そんな事など有り得ないのにな？」

「——」

本当に、あの怪物達の思考は常人と程遠い。

「勿論、限度は有る。幾ら闇の帝王の利益になるからと言っても、たとえば騎士団員の誰かを直接殺害するとかは論外だ。そこまですれば

校長閣下も黙ってはいまい。しかし、多少の悪さをする事くらいは見逃す。騎士団内の情報を流すのが典型だろう」

「……でも、情報を流すって言うっても、コレは戦争でしょう?」

「ああ。流す情報次第では騎士団員に死人が出かねないな」

ルドビッチ・バグマン以上の脳味噌が有れば、当然に躊躇う筈である。

「しかし、寮監が何もかも情報を流す訳には行かない。ここは魔法の世界だ。不利な情報を口外しない類の魔法契約を締結する事は現実として可能である」

闇の大魔法使いなら契約を無理に破って吐かせる事は当然可能だろうが、それではスパイとして無意味になる。余程の必要が無ければ取りたい手段でもなからう。

「また、あの校長は寮監に対して情報を秘匿したり、嘘の情報を流す事もするだろう。これは信用しているいないの問題ではなく、一度の失敗が大勢の死に繋がる戦争指導者として当然の用心だ。まして帝王に繋がっている事が解つていともなれば、そうしない理由を探す方が難しい」

「……要は、ヴォルデモートの視点ではスネイプから得られる情報は限定的であり、かつ必ずしも信用出来るか解らないって事?」

「そうだ。彼が死喰い人の為に万全の仕事をする事は、立場上絶対に出来ない」

しかし、と続ける。

「帝王が騎士団に紛れ込ませた普通のスパイより、スネイプ寮監が遥かに多くを知り得るのもまた事実だ。何せ、校長にとって、スネイプ寮監は不死鳥の騎士団の味方である。筈なのだからな。必然、校長は露骨に寮監を疑う事も出来ず、彼にある程度重要な仕事を任せたり、騎士団の核心部に近づく事を許さざるを得ない。そして寮監から得られる情報は闇の帝王にとって大きく役立つ事だろう」

ハーマイオニーが反論の為に口を開こうとするものの、片手を挙げる事で止めた。

彼女が言いたいのは、それでも用心の為にはスネイプ教授を遠ざけ

るべきではないかというものであろう。元死喰い人が警戒されるのは已むを得ない筈だという主張で、実際それは一理有るところか正論そのものなのだが、あの校長——というより、彼等の視点はそんな近視眼的な場所に無い。

「取り敢えず先を進める。帝王の方も同じだ。校長よりも不寛容だろうが、帝王としても一定程度、スネイプ寮監が騎士団の為に働く事は認めざるを得ない。帝王の立場としても、スネイプ寮監は不死鳥の騎士団の味方である。事を校長が疑う事は有ってはならない。そうなってしまうえば、当然騎士団から追放されるからな」

どちらの指導者も、スネイプ教授が実は自分の味方である二重スパイという枠組みを壊す気がない。そんな奇妙な状況が、彼の不思議な立ち位置を形成している。

「この結果、スネイプ寮監は両陣営で一定程度の地位を占める事になる。闇の陣営では死喰い人、光の陣営では高位の騎士団員。校長と帝王の両方が解っていてそれを肯定し——そして、それは或る場面で役に立つ可能性がある。誤魔化す意味が無いから言うが、寮監が最後の最後に味方する陣営に対し、戦争の趨勢を決める程の利益を齎し得るかもしれない」

あの二人は究極、寮監をそれだけの駒と見ている。

彼から得られる細々とした情報などは、あくまで余禄としか見えない。

そう、付け加える。

「つまり、あの二人が見据えているのは決定的な裏切りなのだ」

最後の一撃。

二重スパイの立場の放棄と引換えに行われる決定的貢献を、彼等は期待している。

「騎士団が裏切られては困る場面で、寮監が騎士団を裏切る。或いは逆に、帝王が裏切られては困る場面で、寮監が帝王を裏切る。セブルス・スネイプという人間が本当は自分の味方である筈と信ずるからこそ、どちらの指導者もその行為を当然期待する」

だからこそ、十四年前にアルバス・ダンブルドア校長はスネイプ教

授の保証人となり、去年度末に闇の帝王はスネイプ教授の再度の忠誠の誓いを受け容れた。

そうして、教授は生存を許されている。

「……でも、御互いスネイプが二重スパイと解っているんでしよう？
なら、そんな裏切りの場面が都合良くやってくるかしら？ 本当の意味で信頼して居れば、重要な仕事を任せる事も有るだろうし、その機会が与えられるというのも解るわよ？ けれどもヴォルデモートは——」

「——寮監を欠片も信じていないだろう。アルバス・ダンブルドア校長も同じだ。ハリー・ポッターすら信じられない人間が、一体どうして元死喰い人の男を信じられようか？」

「……………」

「故にこれは、彼等が張り巡らせた数ある策謀の一つに過ぎないだろう」

本命の内の一つかどうかまでは解らない。

けれども最低限、失敗して即座に困る策謀とはすまい。

策謀の一つに己の命運全てを賭けるのは愚かな事で、そもそもセブルス・スネイプという人間は闇の帝王や校長にとって信用に値しない人間だ。ハリー・ポッターやハーマイオニー以上に、教授を信じる理由が欠片も無い。

「敢えて言うなら、彼等にとつての一種の御遊びと表現した方が解り易いかもしれないな。寮監を媒介として行われる、二人の怪物達の策略合戦。失敗して元々で、しかし相手の思惑を上回って成功させた場合の利益は想像するに余り有る」

「……一応、それは貴方の勝手な想像なんでしょう？」

「ああ。僕の想像を覆す反論や証拠を君が持っていない限りはな」

「……………」

「そうは言うが。この推測が正しい場合、最初にボールを投げたのはあの校長だぞ？」

二重スパイとして働いてくれ。

まず校長が教授にそう持ち掛けなければ現在の状況にはならない。

そしてその時点で闇の帝王には拒絶する選択肢——つまり、校長の思惑や教授の言い訳を聞き入れず、寮監を裏切者として殺す事は出来たのだ。

どんな命乞いをしようと、闇の帝王が身体を喪った時に教授が彼の下に馳せ参じなかつたのは事実。賢者の石を求めるクイリナス・クイレル教授の妨害をしたのも事実。闇の帝王が身体を取り戻した去年度末に、他より遅れておめおめと姿を現したのもまた事実。更には、裏切ったかどうか解らない人間は物事を解りやすくする為に殺してしまえという発想にも一理有る。特にアズカバン脱獄を遂げた死喰い人達はそれを主張する事だろうし、帝王を一度裏切っているルシウス・マルフォイ氏ではスネイプ教授を庇えない。

だからスネイプ教授を二重スパイとして用いる計画は、そもそも最初から失敗が、それも非常に高い確率で見込まれるものなのだ。しかしそんな計画を平気で企て、尚且つその実行を強いるのが一切信用出来ない他人であるとなれば、正直言って常人の出来るモノではない。

本当にあの魔法使いは、脳髓の芯までイカレている。

「……どうかしている。私がそう感想を漏らしたのは、戦争の事を本気で考えている人間達の発想は、やっぱり違うと思っただからよ。正直な話、未だに理解しがたいわ」

「——その修正は、僕の言葉と左程変わらないように思えるが」

「全く違うわ」

「……そうか。まあ、先の話も君が信じる必要は無い。兎も角、だ」

推測に過ぎないし、仮に今現在正しかろうとも、彼等は最後に全てを覆せる力を持った人間だ。余り先の事を決めてかかって行動するのは宜しくもない。

「現在における確実な話をしよう。スネイプ寮監が閉心術の個人授業を受け持つ事になった。これは闇の帝王がハリー・ポッターに干渉し得る機会が生じたという事でもある。スネイプ寮監が死喰い人の身分も持つ以上、そう解釈せざるを得ない」

「……………」

「そしてだからこそ、僕は君に言うのだ。スネイプ寮監を信じるなど」

ハーマイオニー・グレンジャーは、スネイプ教授を疑わなければならない義務が有る。

「……ただ、貴方はそう言うけれど、スネイプがハリーを殺す警戒はしなくても良いんでしょう？　生き残った男の子の殺害は、スネイプの騎士団としての立場より価値が有るのは確実よ。だから本来は警戒しなければならぬのだけど、貴方はそこまでは必要無いと考えている」

「そうだな。あの校長は他の騎士団員とは異なり、唯一教授に対してだけは、縛り〃を掛けたとしても不思議ではない」

「その縛りって——」

「——君が想像する通りだろう。彼等二人を護る為には、それが一番手っ取り早い」

破れぬ誓い。

ハリー・ポッターを殺せば、スネイプ教授も死ぬ。

その威嚇が有れば、闇の帝王は短絡的かつ最高効率の命令を下せない。

勿論、帝王は臣下の命を使い捨てる事など全くもってどうでも良いと考えている筈だが、そのような命令をすれば裏切られる可能性が有るといふ事も理解している筈である。誰も他人を信じられない人間は、滅私の忠誠も信じられない。

「まあ実際に掛けているかどうかは別だが、最低でも帝王の前にはそういう事になっているだろう。仮に僕が寮監の立場に置かれ、かつ騎士団として本気で働くつもりならば、自分から申し出る事すらする。寮監が騎士団を離反して帝王の臣下として舞い戻る口実の一つにもなるしな。信じられないから破れぬ誓いを結べというのは、やはり世間的には盛大な侮辱ではある」

「……………」

「しかしその場合でも、ハリー・ポッターを傷付けないという縛りまで一々掛けはしない筈だ。そこまで行くと流石に、アルバス・ダンブルドア〃らしくもない。何より校長の目的を果たすには闇の帝王が寮監を駒として使ってくれなければ始まらない。直接的に害する事は

不可能でも、間接的に害する事は可能な仕掛けにしたに違いない」
そもそも心への侵入自体、見方を変えれば他人への攻撃である。
ハリー・ポッターに一切危害を加えられないなら、教授は開心術を
掛ける事すら出来ない。

「さて、開心術を教えようとする場合、既に述べた通り、ハリー・ポッ
ターに対して開心術を掛け、彼に防がせようとするのが最も手っ取り
早い」

それ以外の道は、何十年も地道に練習するのみである。

そしてハリー・ポッターにそんな悠長な事をしている暇はない。

「けれども、この開心術を掛けるスネイプ寮監は、二重スパイとして振
る舞わねばならない騎士団員兼死喰い人である。この場合、寮監は如
何なる振舞いをすると思う？ 或いは、二人の指導者は、それぞれ寮
監に如何なる要求をすると思う？」

「ええと、ダンブルドアはハリーに開心術を学んで欲しいんだから、ス
ネイプに開心術を教えるよう求めた訳でしょ？ そこは動かない筈
で、一方でヴォルデモートは……」

頬に人差し指を当てながら考えていたハーマイオニーは、まさかと
いう表情を浮かべる。

「……可能な限りハリーの心を開くよう、スネイプに命令する？」

「そうだ。その危険性は排除できない」

「――」
彼女は黙り込んだ。

非常識な判断だ。改めて彼女がそう考えているのがありありと伝
わって来るが、あの校長のような怪物を常識の枠組みで図る事が間
違っている。

「しかし、それが正しいかどうか解らないというのは告げておく。ハ
リー・ポッターの心を開く事が果たして闇の帝王の利益に繋がるの
か。この疑問は当然有り得るからな。個人的見解としては可能性は
低いと思っている。しかしそれを行う事によって万一利益が有るな
らば、臣下である寮監に対し帝王が要求しない理由がない」

二人が精神的に接続されている利点——特に闇の帝王側の利点と

いうのは余り思い付かないが、闇の大魔法使いならば何らかの利用方法を
見出すかもしれない。

「仮に利益が有る場合でも、帝王が寮監にどの程度の強度で命令するかという
問題が更に有る。是が非でも心を開く必要が有るなら、ハリー・ポッターに
閉心術など教えないのが一番だ。ただ、それは有り得ないだろう。閉心術を
教えられる人間は決して寮監だけではない。あの校長閣下が下らん拘りを
放棄してくれば、彼が直接教える事は可能なのだから」

「……………」

「故に現実的なのは、寮監が開心術を行使する際、ハリー・ポッターの心を
必要以上に開く。その一方で寮監は一切の手を抜かず、懇切丁寧に閉心術を
教える。これならば寮監は二人の要求を同時に叶えられるし、どちらも文句は
言わんだろう」

その程度の修正ならばと、互いに寮監の動きを黙認するに違いない。

「…………それって、大丈夫なの?」

「解らん」

端的かつ明快な返答。

ハーマイオニーが愕然とした表情を浮かべるが、僕としてはそう答える
しかない。

「解らん事だらけなのだ。精神的接続を齎す傷なんぞ前例が無いからな」

分霊箱という邪悪の極地、そして人間の魂の問題まで絡んだこの問題は、
今世紀で最も偉大な魔法使いをもってして尚、読み切れぬ領域の筈だ。

これに正しい答えを出そうと思えば、魔法族には更に数百年の時間が必要
だろう。

「しかし現時点で間違いなく言える事は——君の為にアルバス・ダンブルドア校
長の視点で言うが、彼はハリー・ポッターが閉心術を習得する事を望んで
おり、それが叶う方に可能性に賭けた。今回の「試練」も、ハリー・ポッ
ターなら問題無く乗り越えられると信じた訳だ」

バーテミウス・クラウチ・ジュニアによる服従の呪文、そして闇の帝王が直々に掛けた服従の呪文すらも、ハリー・ポッターは撥ね退けてみせたという話もある。

だから寮監の「嫌がらせ」を物ともせず、ハリー・ポッターが完璧に閉心術を習得出来る可能性は、僕の眼から見ても左程低くないように思われる。

「更にこちらは僕の想像になるが、校長も自信を持って行動している訳では無いと思う。最初から確信していたならばやはり対処療法的に行動する理由がない。既に言った通り去年から、そうでなくとも今年度の九月からハリー・ポッターに閉心術を教える事は可能だったからな。そうして「夢」を防いでいたなら、冬期休暇前の「異変」は起こらなかつた」

「……ハリーが夢を見なければウィーズリーおじさんは死んでいたわ」

「些事だ。あの校長は目先の一人を救う為に戦争をやっている訳では無い。一人が救われる代わりに将来大勢が死ぬ羽目になるなら、アルバス・ダンブルドアという人間はその一人を見捨てる。勿論最後まで救う道は無いかと足掻きはするが、彼は最後の最後にはそれが出来る」

非魔法界の首相だろうが王様だろうが変わらない。必要ならば冷徹な判断を下すのも、大勢の命を預かる指導者の仕事だ。

その一人の命がハリー・ポッターでない限り、あの校長閣下にはそれが出来る。

「故に、今回も結局はハリー・ポッター次第だと言える」

今回もまた、あの英雄殿が鍵を握っている。

「彼が滞りなく閉心術を修めたならば、校長の思惑通りで、めでたしめでたしで話は終わる。帝王の乗っ取りに対する防衛として役立つかは不明だが、閉心術を習得している事は少なくとも害にはならない。一方で帝王の思惑は挫かれる事になるが、元より寮監を通じて干渉出来る可能性が生じた事自体幸運だった。仕方無いと諦めるだろう」

「……じゃあ、ハリーが閉心術を習得出来なかつたら？」

「校長の計画は根本から軌道修正を余儀なくされる。あの大魔法使いの事だから何か次善の策を思い付くとは思うが。とはいえ、次善の域を超えないだろう。寮監にハリー・ポッターを教えさせる以外の良い代替手段が有るなら、やはり彼はそれを選択している」

溜息を一つ吐く。

つくづく他人事で良かったと思う。

現場の一兵卒以上になりたがらない人間が居るというのも良く解る。こんな細々とした事を一々考えた上で、思い通りに動いてくれない者達を操って戦うなど面倒で仕方が無い。

「そして、今回の開心術の訓練がハリー・ポッターに悪影響を及ぼす可能性も勿論存在する。スネイプ寮監が帝王の命令を受け、校長の眼を盗んで何かを仕掛けようとする可能性もまた零ではない。仮にそのような事態が起こった場合、また実際に起こらずともその気配を感じた場合——君は今回の個人授業を止めるべきだ。その権利もある」

ハーマイオニーは少しだけ身を固くしたが、それでも僕の視線から逃げなかった。

「まあロナルド・ウィーズリーにも同様の権利は有るが、彼はこの手の決断を出来ない人間だろう。但し、ロナルド・ウィーズリーの言葉を基に君が判断を下すのは悪くない。君と同等、一部の面では君以上に、ハリー・ポッターの『異変』には気付けるだろうからな」

「……開心術を教えるのはダンブルドアの計画でしょう？ その中止を先生が認めるの？」

「認めるとも」

強張った言葉に対し、気楽に答えを返す。

「己の判断に絶対の自信を持っている場合、彼は他人に何と言われようと譲りはしない。ハリー・ポッターや君、そして不死鳥の騎士団員に対し、秘密を抱え続けるのは典型だろう」

世の老人の例にもれず、百年を生きた彼は非常に強情だ。

まして自分より劣っていると看做す人間の言葉を、彼は易々と受け容れない。

「けれども一方でそこまで確信を持っていない場合、善人足らんとす

る彼は当然のように他人の判断を尊重する。それが世間的に承認されるべき行為とされるなら猶更に。ジエームス・ポッターの独断による秘密の守り人の決定、シリウス・ブラックの脱獄に対してリーマス・ルーピン教授の不関与を信じた事等々、彼は多くを譲る事が出来る」言葉の後半でハーマイオニーが微妙な顔をしたのは、その例が何れもアルバス・ダンブルドア校長が「間違い」を犯してしまった例だからだろう。

しかし、少なくとも今回に限っては、彼女達の結論を尊重するのに間違いは有り得ない。

「今世紀で最も偉大な魔法使いの知識や頭脳が導く答えより、ハリー・ポッターの親友が直観的に導き出す答えが正しい可能性はやはり存在するのだ。ミネルバ・マクゴナガル教授、或いは校長本人から何か言われなかったか？ 彼の様子を最も近い場所から観察出来、尚且つ成り代わりでも発生した時、最初に気付けるのは君達なのだから」

バーテミウス・クラウチ・ジュニアの前例から学ぶ必要が有る。

僕は笑いながら言ったが、ハーマイオニーは口元をピクリとも動かさなかった。

「……今の貴方の話を総合すると」

ハーマイオニーは悩み悩み、慎重に言葉を選びながら言う。

「貴方はスネイプを信じるなど言った。その際、貴方は最後の最後以外——つまりスネイプがヴォルデモートを裏切って良い時が来るまでという条件を付けたけど、今回のハリーへの個人授業に限るという条件は付けなかった。つまり、私が基本的にスネイプを疑うべきという考えは、貴方の中で変わらないのよね？」

「それはその通りだ」

やはり君が従う必要は無いが、と頷いてみせる。

「スネイプ寮監の行動が校長の承認に基づいて行われる限り、無駄に警戒する必要はない。あの校長の判断は概ね正しく、けれども如何なる仮説を立てたとしても絶対に正当化出来ない——そう君が判断を下した時、校長に逆らう事を躊躇うべきではない」

まあ校長が聞き入れるかどうかは別問題である。

しかし聞き入れずとも、彼女達が独自に行動する事は出来る。御優し過ぎる魔法使いは、ハリー・ポッター達に可能な限り自由を与えるからだ。彼は己が善人でないと自覚するからこそ、計画上絶対に必要だと判断しない限りは、典型的な悪の独裁者がやる行動彼等の行動をガチガチに縛る事はしない。

「そもそもスネイプ寮監には君達の味方をする自由が無い。彼は不死鳥の騎士団員兼死喰い人である——この前提が動かないならば、彼は絶好の裏切りの機会が訪れるその瞬間まで、決してどちらか一方のみに肩入れしてはならないからだ」

スネイプ教授は、あくまで曖昧だから両陣営への所属を許されている。

しかしその前提が崩れば、当然のように排除される。

「如何に校長や帝王が『御遊び』に興じていると言つても、流石に敵だと確定した者を放置したままには出来ない。そのような真似は彼等の周り——他の騎士団員や、死喰い人達も許しはしない。校長は寮監を騎士団から追放せざるを得なくなるし、帝王であれば当然の事ながら寮監を殺す」

「……だから貴方は、私がスネイプを信用すべきではないと考えているし、けれども死喰い人に残る事を考えなくて良い最後だけは、スネイプを一定程度信じられるとも考えているのね」

「あくまでスネイプ寮監が君達の味方である前提だがな」

その点は未だ不確定である。

僕の立場をもつてしても断定し切れない。彼は僕とは違うのだ。ハリー・ポッターを——ジェームス・ポッターの息子を殺す理由は、スネイプ教授には有る。

「彼が骨の髄まで死喰い人であり、最後の最後で不死鳥の騎士団を裏切る可能性は現実として残っている。君がハリー・ポッターの親友であると自負するならば、希望的観測で行動する事無く、正確に状況を見極めて動かねばならない。それが出来るのはやはり君だけだ」

「……………そうね」

ハーマイオニー・グレンジャーは難しい顔をしたままだ。

まあ、已むを得ない。僕が彼女の立場に居れば似たような反応を示

すだろう。

アルバス・ダンブルドア校長はスネイプ教授を信じてなどいない。死喰い人として大勢を傷付け、殺して来た男が、リリー・エバンス たった一人の死により真人間に改心した。そう純粹無垢に信じられる人間の方が余程狂っている。

しかし一方、校長は一定の確度で教授を自分の「駒」として使えると考えている。

つまり彼等には何らかの——契約と表現するか。兎も角、契約がある訳だが、それが何かは外部の人間には解らない。知るのは彼等二人だけで、他の人間は知らないまま、スネイプ教授を信頼すべき仲間 騎士団員として受け容れる事を強いられている。

……他の騎士団員は良く我慢しているものだ。僕なら早々にキレている。

ホーンド・サーペント

「他に何か有るか？」

ハーマイオニーが自分の思考に沈み、数分待っても帰って来ない事を確認した後、僕はそのように声を掛けて彼女を引き戻した。

しかし、直ぐには言葉が返ってこない。

散々逡巡する様子を見せた後、彼女は覚悟を決めた様子で問うた。

「——ヴオルデモートが求めている『武器』に心当たりは有る？」

「……………」

今年、僕は殆ど何も知らない立場に居る。

だから予期しない質問が飛び出て来るのは或る意味で予想通りでも有り、けれども一度も考えを巡らせた事すらない質問に対しては、一瞬であれ流石に考え込まざるを得なかった。

考え込んでしまった時点で、既にハーマイオニーの術中に嵌っていた。

「…………闇の帝王の目的を明らかに妨げるような質問には答えられない。僕は予めそう言っていた筈だがな」

「確かに私も聞いたけど、私が従うとは答えていないわ」

「……………そうだな。その通りだ」

屁理屈である事は歴然としている。

しかし、僕達が仲間と言える間柄でない以上、ハーマイオニーがこのような手段を使った事に文句を言える立場では無い。しかも見事なものだ。確認するまでもなく、彼女は必要最低限の情報を得たのだ。

即ち、その『武器』とやらは僕に明かされる類の情報では無かったと。

「まあ、無駄な抵抗を示すべきではないのだろう。僕の方に心当たりはない」

「…………答えられない、ではないのね」

「ああ」

余り本気で疑っている訳でも無いのだろう。

一応聞いてみたというような念押しに対し、しっかりと頷いてみせる。

『武器』——復活した闇の帝王が求めるだけの価値が有る物、と言い替えるか。そのような話は校長との会話で一切出て来なかったし、僕の持っている情報の中でピンと来るような物はない。まあ単純に隠されたのだろうか。その理由までは判断しかねるが」

「……貴方に教えなくなかった。それ以外に何か有るの?」

「どういう理由で教えなかったのかという問題が有る。知る必要が無かったのか、僕に明かす事が不利益となるのか、或いはあの校長の個人的な理由に基づいて秘密としたのか。他にも色々と考えられるし、それらの差異は僕にとって非常に重要だ」

まあハーマイオニーにとっては重要ではなく、事実、理解出来なかつたらしい彼女は曖昧な笑みを浮かべているが、僕の立場では違

う。

あの校長が個人的理由で秘密にしたという場合が特に最悪だ。

ハリー・ポッターに関わる事項につき、あの老人の判断は殆ど信用出来ないのではないか——特に今年度に入って以降、その想いがますます強くなっているからだ。

「……でも、その武器が何か、想像も付かない訳でもないわよね?」

「期待しているらしい所悪いが、想像すら付かんよ。『武器』に該当し得る物は多過ぎる。単なる比喩に過ぎない可能性も有るしな」

「その割には貴方も考え込んだでしょう? という事は、貴方の中で何かしら琴線に触れる部分が有ったんじゃないの?」

「まあ、それはその通りだが」

全く何も思い浮かばなかったとまでは言わない。

「だが、直ぐに却下した答えでもある。特にこれは与太話の可能性が非常に高い。この四年間で正しく適当な話は君と散々していた記憶が有るが、それを踏まえて尚、今回は敢えての前置きが必要な位の与太話だ」

「それでも良いわ」

僕の難色に、しかしハーマイオニーは強く食い下がった。

「私達は完全に行き詰っているのよ。誰も彼も思わせぶりな事を言うばかりで、全く中身を教えてくれやしない。だから何でも良いから聞かせて欲しいの。たとえばそれが貴方の中で有り得ないと判断された結論だとしても、何かしら役に立つかもしれない」

「……そうか」

まあ、元より断固として拒絶する気が有った訳でもない。

ハーマイオニーがそこまで言うというのであれば構わないだろう。

「――魔法使いの武器。そう聞いてまず連想するのは当然ながら杖だ」

肘掛の上で頬杖を突きながら言葉を続ける。

しかし、本当に作りの悪い椅子だった。こんなのに一時間も座っていれば身体を痛めるし、ハーマイオニーの前でなければ即座に立ち去っている。そう思える位には座り心地が悪い。

「とは言うものの、君もこの程度の事は考えただろう。非常に平凡かつ陳腐な発想だからな。想像出来ない人間の方が珍しい。そして非常に御誂え向きな事に、魔法界の歴史は一つの伝説的な杖の存在を記録している」

「ニワトコの杖、死の杖、宿命の杖。或いは、永久に不幸をもたらす杖。そう呼ばれる杖の事を貴方は言ってるのよね？」

「そうだ。まあ、僕はその存在自体に懐疑的な立場を取るがな」

「？ どういう事よ？」

僕の言葉に、ハーマイオニーは小さな驚きと共に首を傾げる。

「てつきり私は、貴方がこういう類の話を信じるタイプだと思っただけだ」

「対して君は余り信じないタイプだな」

「……ええ、残念ながらその通りね」

「とはいえ、その伝説の原型となる杖が存在していた事は否定しない。ここでは信じていると言うべきか。しかし伝説の語る通り、誰が使っても最強である杖が存在するというのは余り信じられない」

あの校長に一応疑問をぶつけはしたが、三人兄弟の物語通りの杖――『決闘すれば必ず持ち主が勝つ』という、『死』を克服した魔法使いに

ふさわしい杖』なんぞが存在するとは真剣に考えていなかった。魔法とは不思議なものだという事を考えても尚、その杖が存在する事は常識外れに思えてしまうからだ。

「魔法の杖と魔法族には相性が有る。これは『オリバンダー』にしろ『グレゴロビッチ』にしろ、現在著名な杖作りが掲げる定説だ。そして魔法史が物語る伝説的な杖は、その基本原則に反しているように思えてならない。君もそう考えたから信じていないのだろうか？」

「……その通りよ。杖の専門家でもないから確信まで持てなかったけど」

「無論、相性の煩さには杖によっても個体差が有る。所有者以外では全く実力を発揮し得ない杖——アカシアを使った杖あたりが特にそうなりやすいと言われているな——が存在する以上、その逆、人との相性を全く問わない杖というのも理屈としては有り得る。そしてそのような杖がたまたま最強と思える程に強力となったという可能性も、まあ零ではない」

否定し得る根拠が無いのは事実である。

宿命の杖を信じる者を、つまらない迷信に囚われていると非難する事は出来ない。

「しかし僕が最も承服しがたいのは、数百年前に作られた杖を超える者が現れなかった事を認める点だよ」

現代が過去に劣る事を認める。

これは余り愉快な想像ではない、と感想も吐露する。

「……ニワトコの杖が何時作られたかは知られてない筈よね？」

「その筈だ。作成者らしき人間は何人か挙げられているが、歴史学上で一致を見る定説は無いだろう。ただ相当古い事、そして『オリバンダー』や『グレゴロビッチ』絡みでないのは間違いない。だからこそ、それらの家に世紀の天才が——最強の杖を上回る杖を作った人間が一人も現れなかったというのは、ニワトコの杖が存在する可能性よりも疑問に思える」

既に絶滅した魔法生物も存在し、その材料を使っていれば現代で再現不可能という理屈も有り得るが、かと言って全く代替素材も発見出

来なかったというのも頷きがたい。

単純な社会進化論を僕は信奉していないが、それでも人間というのは後に歩くより前に歩く方が楽な生き物なのだ。杖の分野でも現代までに進歩が無かったとは思えない。

「……でも、ヴォルデモートが最強の杖を求めている可能性は有るでしょう?」

「それは否定し得ないが——」

「貴方は否定的なのね」

どういう訳か、彼女はクスクスと笑い声を上げた。

「それも、私の眼には随分と強い否定に思えるわ。ヴォルデモートがそれを求めているより、ニワトコの杖の存在を信じる方がまだマシ。そう考えてすらいそうなもの」

「——そうだな。ニワトコの杖の存在を存在する以前の話。彼がサラザール・スリザリンの後継者を自負するならば、出自の知れない自称最強の杖を捜し求めて使うよりも、まず彼に倣うべきではないか。個人的にはそう考えている」

「倣うって、要はスリザリンと同じ杖を使うって事?」

「ああ」

僕の頷きにハーマイオニーは明らかに戸惑いを見せたものの、それでも僕に向けられる栗毛の少女の瞳の輝きを見れば、話題へ大きな興味を示した事は明らかだった。

「でも、サラザール・スリザリンがどんな杖を使ったのかは知られていないか?」

「確実な事は知られていないだろうと思う」

思い出すように斜め上を見ながら紡がれた言葉に、気のない答えを返す。

「サラザール・スリザリンの杖が後世に伝わっていたという噂、ないし伝説は一応幾つか存在する。例えば、ゴームレイス・ゴントが使っていたのかな。しかし、それを裏付ける証拠も無い。杖材や芯材に関する情報も大きく錯綜している。『オリバンダー』が知っていれば話は早いんだがな、そんな事もなさそうだ」

「……確かにオリバンダーの一族は紀元前から存在しているわ。けど、スリザリンその人や、或いはグリフィンドール達三人の杖を作ったとは限らないでしょう?」

「それはそうだ」

“オリバンダー”は最も有名な杖作りだが、この魔法界唯一の杖作りという訳では無い。

千年前も同様であり、海外まで視野を広げれば杖作りの候補は更に増える。サラザール・スリザリンが杖を求めた際、当代のオリバンダーに頼ったとは限らない。

「しかし曲がりなりにも杖作りならば、最高峰の魔法使い達が如何なる杖を使ったかは気になる所だろう。自分が作ったなら当然後世に伝えようとするし、そうでないなら“オリバンダー”の誰かが調べようとしたに違いない。そう思わないか?」

「……………まあ、一理あるわね」

「無論、彼等が知った上で沈黙している可能性も否定し得ない。創始者と同じ杖を購入したいという人間が現れるのは、杖作りとしての信念——杖は本人に合った物が使われるべきという信念と相容れない。けれども、恐らくは事実を知らないのではないかと思う」

サラザール・スリザリンが自身で杖を創ったという伝説もあるからな、と続ける。

余り意識して発した言葉ではなかったが、ハーマイオニーはどういう訳か、虚を突かれたように口を開けていた。

「…………スリザリンが自ら杖を作った説は、貴方的にアリなの?」

「? 何故、それを疑問に思う?」

疑問を言葉にした直後、直ぐに理由に気付いた。

……………嗚呼、そうか。

彼女は“マグル生まれ”であるから、“魔法”を最初に手に取る場所は必然的にオリバンダーの店だった。だから、杖を売る店を魔法族にとって必須の存在として考えてしまうのか。

「魔法使いは、己に合う杖を使うのが最も実力を発揮出来る。この事は昔から広く言われており、識者によつては、杖は生き物であり使い

手と共に成長するのだとすら主張する。つまりは魔法使いの杖とは単なる道具ではなく己の一部かつ魔法そのものであつて——ならば、己の手で一から作り上げた杖こそが当人にとって最強の杖となる。そんな思想が生まれえない方が不自然ではないか？」

正しさが証明されているかに関係なく、多くの魔法族は古くからの信仰を重んじる。

サラザール・スリザリンがそうしたとしても不思議ではなかった。「知名度が高い所と言えば、イルヴァーモーニーの創始者、イゾルト・セイアは自ら杖を作っていた。もつとも杖魔法は西欧で発展した技術であり、新大陸には当然杖作りなど居なかったから、必要性に迫られての事でも有るのだが。……あそこには特別な木も植えられているしな。やはり伝説というのは案外馬鹿にならないかもしれない」「……特別な木？ イルヴァーモーニーの庭に植えられているという、葉に強力な薬効を持つ木の事？」

「そうだ。切り倒そうとしても切り倒せなかった——そんな奇妙な逸話を持つ木だ」

はてな、とハーマイオニーは顎に人差し指を当てつつ、波打つ髪を疑問に揺らす。

彼女が引つ掛かった部分は明らかだ。僕が敢えて奇妙と表現した理由が、彼女は解らないでいる。考え込むような素振りを見せたが、別に大層な発想では無い。彼女が思考に埋没する前に、僕の方から説明を始める。

「奇妙なのだよ。その樹木は現在殆どイルヴァーモーニーの象徴に近しくなっており、それを度外視しても、君が言つた通り薬として非常に有用な木でもある。しかし普通に考えて、そんな木を誰が切り倒そうとするんだ？ 例えばホグワーツには暴れ柳という無用の木があるが、それを切り倒そうという発想はウィーズリーの双子ですらしないだろうか？」

そう口にしつつ、あの校長はさっさと撤去すれば良いだろうとも思う。

リーマス・ルーピン教授がホグワーツを去つた今、既にあの木は役

目を終えている。今の狼人間の生徒には脱狼薬を与える事が可能なのだから、一々校外に追いやる必要もない。次の事故がニンバス2000を叩き折る程度の軽微な事故で終わるとは限らないのだろうか。「では、誰が切り倒そうとするか——その資格を持つのは誰か。かの木が何時から植えられているかは不明確だが、既にイルヴァーモーニーの最初期には存在していたという。であれば、有資格者は非常に限られる。イゾルト・セイアか、養子を含めた彼女の子供達。更にウイリアムと呼ばれる魔法生物パグワジ。そして当然に疑問に思う。イルヴァーモーニーの創始者、或いはそれに近い彼等は、一体何故その木を切り倒そうとしたのか？」

「……でも、葉の効能を知る前だったら切り倒そうとする事も有るんじゃないの？ もしくは、杖の材料として使うつもりだったけど木自身が嫌がったとか。後者はマグルの常識では有り得ないけど、魔法界では違うもの」

「そうだな。適切な反論だ。それらを突き崩すような証拠を、僕は状況証拠すら持っていない」

「ここではハーマイオニーが正しい。」

「ただ、その木について解っている事がもう一つ有る」

人差し指を掲げ、そして続ける。

「その木が何時からそこに在るのか、何故切られそうになったかなどは歴史の闇に消える部類の事実だ。誰かが記録しない限り後世に残る筈がない。しかし木自体が現存しているのであれば、少なくとも木の種別は解る。実物を観察して、調べれば済むのだからな」

壁で囲う位の極端な事をやらない限りは公に知られる事になる。そしてそのような真似——明らかに何か隠していますという行動は、イゾルト・セイア達も取っていない。だからイルヴァーモーニーに関する書籍を漁りさえすれば、その樹木が何であるかは当然載っている。

「正確性を期すためか、その樹木の名称は学術名で記述される事が大半だ。けれども世間的に知られているのはラテンの気取った名よりも俗称であり、かつ今回はそちらの名で呼ぶ方が適切だろう。かの樹

木は美しい木目、鱗のような特徴的紋様から、こう呼ばれている。

スネークウッド
——蛇の木と」

スネーク
蛇。

言わずもがな、サラザール・スリザリンの象徴。

「……偶々でしよう?」

「その通り。偶然の一致という可能性は有る」

呆然とした様子で呟かれた彼女の言葉に頷く。

「しかし、物語としては良く出来ているだろう? イゾルト・セイアは杖の材料として用いる為、自身の先祖と縁の深い木をイルヴァアーモニーに植えた。けれども後にイゾルト・セイアには、やはり何らかの理由によつて木を切り倒す必要性が生まれ、けれども失敗した。これは上手く伝説を説明出来る」

「……セイアがスリザリンの子孫である。その事に懐疑的な歴史家も居た筈よ」

「そうだな。だが、イルヴァアーモニーが明らかにホグワーツを模しており、かつピルグリム・ファーズという歴史的事実から、彼女がこの魔法界に起源を持つ事を否定する人間はまず居ない。そしてイゾルト・セイアには蛇に纏わる逸話や伝説が多い。例えば、イルヴァアーモニーで彼女が創設した寮は——」

ホーランド・サーベント
「——角 水 蛇寮」

降参するかのように、ハーマイオニーが小さく答えを呟いた。

ここでもまた蛇である。

一つなら兎も角、ここまで来るとイゾルト・セイアがサラザール・スリザリンの子孫であるという説にも信憑性が出て来るものだし、僕は信じる側でもある。

「まあその寮がレイブンクローに似ているとされるのは少々興味深くは有る」

実際に見た事が無いので断言出来ないが、そういう噂だ。

「少なくともスリザリンらしさから程遠いのは間違いなく、これはイゾルト・セイアがスリザリンの血縁である事を否定する理由としても良く挙げられる。と言つても、シリウス・ブラックのように逸れ者は

何処にでも居るものだ。根っからの鷲というより鷲に憧れた蛇という方が、個人的には説得力があるように思える」

「……レイブクロームみたいなスリザリン。そう、まるで貴方みたいね」

「——今の感想は必要か？」

「……………いえ。何となく、ふとそう思っただけよ」

聞き流して頂戴、と彼女は思考を振り払うように首を振った。

「ただ、あくまで仮説だ。サラザール・スリザリンの杖材と同種の木がイルヴァーモーニーに埋まっている。これは推測どころか妄想の域を出ない。問題も有るしな」

「問題？」

「忘れてはならないのは、かの樹木の原産地は南米大陸と言われている事だ」

ああ、とハーマイオニーは納得の表情を浮かべた。

「つまりこの島からは非常に遠く、かつ時代的にも早すぎる。仮にサラザール・スリザリンがスネークウッドを杖材に使ったとすれば、魔法族は『マグル』のヴィンランド伝説より遥かに早く、新大陸——それも南米まで繋がる交易路を持っていた事になってしまう」

割と非現実的に片足を突っ込んでいる。

とは言うものの、何時だったか蛙チョコレートの材料について校長閣下と雑談したように、魔法をもつてすれば絶対に不可能という訳でもないが。少なくともサラザール・スリザリンの時代には、既に魔法使い達は箒を使って飛んでいる。

「しかし、それが本当かどうかは格別、非常に夢のある話ではある。彼が異国からスネークウッドを手に入れた、或いは自らスネークウッドを探し当てた。更にその貴重な木材を誰か杖作りに委ねた、もしくは自ら杖を作った。歴史学によって証明される事は無いと思うが、怪しい書籍の紙面を埋める程度の話にはなるだろう」

ルーナ・ラブグッドには寄稿する気など一切ないと言ったが、残りの在学期間中に暇が出来たのなら一度やってみるのも一興かもしれない。あの正気を喪った本ならば、歴史的事実とは程遠い妄想を載せ

た所で何も責められはしまい。

「……嗚呼、そうだ。後は戯言の類だが、君には話しておこうか」

僕達の間柄では元より真面目な話の方が稀だった。

去年の別離を決めた話も、今年度の一発目も、そして今こうしている事も、何れも例外的な部類に属する。だから、一つくらい馬鹿な話を混ぜておくのも良いだろう。

「何の流れで出たか記憶していないが、この話題に関わるかもしれない校長の戯言が一つ有る。これは今までの話と違い、サラザール・スリザリンがそもそもスネークウツドの杖を使っていないという方向に傾かせる話だ」

消極方向であれ、発言者を考えると無視出来ない。

「今世紀で最も偉大な魔法使いは言った。スネークウツドの杖は、善良で、誠実で、友誼に厚く、何より冗談と笑顔が似合う人間の手にあるのが最も相応しいと」

ハーマイオニーは目を白黒させ、何かを言おうとして口を開くまではしたものの、最終的には閉じてしまった。どうやら、からかわれたと結論付けたようだ。僕と同じ気分を味わえたようで何よりである。

「……ちなみに、スリザリンの杖材がスネークウツドであると仮定とした場合、芯材の方には心当たりが有るの？」

「こちらも伝説の例に漏れず色々挙げられているし、杖材と違って有力な話も無いな」

戯言を聞かなかった事にしたらしい彼女の疑問に回答する。

「だがそれらの伝説の内、君も興味を持つだろう内容は存在する。サラザール・スリザリンの杖の芯材はバジリスクの角だった——そんな伝説が」

「……………えっと」

「知つての通り、バジリスクは秘密の部屋に居たな」

勿論、バジリスクの角の入手可能性が存在していた事は、サラザール・スリザリンが杖材として使用した事には直接繋がらない。しかし、入手可能性自体に疑問符がつくスネークウツドに比べれば、杖の芯材として使われた可能性は遥かに高いと言い得るだろう。

「……じゃあ、ヴォルデモートは——」

「——いや、現状その可能性は低い。言っただろう、却下したと」

ハーマイオニーは希望に眼を輝かせたが、僕としては冷たく切り捨てるしかない。

「まず、これらは全て仮説だというのが一つ。サラザール・スリザリンの杖の材料を確実に語る証拠は無い。彼の直系の子孫、或いは杖作りの一族は、それを秘密にしたか、知らなかった。何らかの証拠——例えば杖の現物が出て来るなどの事態が起きない限り、最早確実な事は言えないだろう。それなのに杖の作成に及ぶのは余りに見切り発車が過ぎる」

別に歴史的に証明されていなければ做ってはならない道理もないのだが、闇の帝王はそれ程夢見ロマンチストがちな人間には思えない。

「後は僕にとってこちらの理由が大きいが、仮に闇の帝王が本気で最強の杖の作成を考えているというなら、既にギャリック・オリバンダーを拉致しているだろうという事だ」

「——」

「自分で作る場合は専門家から学ぶのが一番だし、作らせる場合でも彼に頼らない理由は余り無い。しかし、彼は未だダイアゴン横丁に健在だ。これは理屈に合わない」

「……その代わりに他国の杖作りが消えた、なんてニユースも無いわよね」

「僕が記憶する限りではないな」

であれば、違ふのだろう。

「結論を言うが、闇の帝王が『武器』として杖を求めているとは思えない」

現時点ではその発想に惹かれず、乗る気にもなれない。

「ニワトコの杖の存在が公に証明された事は一度も無い。また、サラザール・スリザリンがニワトコの杖を用いたという伝説も僕は聞いた事が無い」

第一、仮にニワトコの杖の伝説が真実ならば、あの校長が既に持っている。

彼が生きている限り闇の帝王が杖を手に入れる手段は無い。初めから無意味な懸念だ。

「そしてサラザール・スリザリンの持っていた杖を再現するにしても、その材料を確定するような証拠は存在せず、闇の帝王が材料集めに動いている気配も無く、彼が杖作りを誘拐したという事もまた無い。だから、考えた上で僕は却下した。有り得ないとな」

ここまで考えて判断した訳では無いが、思考を整理した今でも結論は変わらない。

闇の帝王が求めている『武器』は杖ではない。

「——参考にならなかつただろう？」

「……ええ、そうね」

ハーマイオニーは頷きはしたものの、その言葉は歯切れが悪かつた。

言葉と裏腹な意見を持っている——つまり、闇の帝王が杖を求めている事を個人的に支持しているという訳では無さそうだ。しかし、彼女は何となく引つ掛かる部分が有るらしい。

そうさせるのは彼女のみが持つ情報か、それとも単なる直感か。何れにしても僕なりの結論は既に示したし、そして彼女が僕の結論に従う必要もやはりない。後は光の陣営に立つハーマイオニーが結論を下すべき事だった。

「……戦争御堅いの話はこれで終わりよ」

「そうか。それは何よりだ」

あれ以降もハーマイオニーは暫く思考に没頭していたが、何時までもそのままでは埒が明かないと考えたかもしれない。区切りを明確すべく、彼女はそう宣言した。

そして内心で安堵の溜息を吐く。

この程度で友好関係が崩れる訳が無い。僕はそう考えていたものの、やはり危惧は有ったのだ。そして杞憂で済んで何よりだった。

「……ああ、でも忘れてたわ」

「まだ何か有るのか？」

もう止めてくれといった表情を僕は浮かべていたのかもしれない。彼女は少しだけ眦を緩めた後、しかし表情を引き締めて口を開いた。

「去年度末何が起こったかについて私はハリーの話を広く公開するつもりよ。と言つても、この計画をまだハリーにすら話してないけど」「そうか。しかし堅い話ではないのは確かだな」

やはり彼女の話は事実上終わっていたらしい。

「君の好きにすると良い。ハリー・ポッターの親友である君には、当然その権利が有る」

自分でも気の抜けていると思える程に適当な返答だった。

しかし背を押すつもりで言った言葉でも有ったのだが、非常に意外な事に、彼女は頬を膨らませて露骨な不満を表現した。

「……相つ変わらず、貴方は興味を喪つた——貴方の中で終わった事には淡白よね」

「これ以外の何を言えと言うのだ？ その話を公開するには、ハリー・ポッターの口を開かせる必要が有る。当然、僕が関与出来ない話だ」
「……それはまあ、そうだけど」

納得の言葉を吐きながらも、ハーマイオニーは依然不満の態度を崩そうとしない。

「嗚呼、別段君がルーナ・ラブグッドを使う義務もないぞ」

あの時点で今年度ハーマイオニーに会う事になるとは思つても居なかつたが、こうして機会が出来た以上、直接伝えてはおくべきだろう。『ザ・クイブラー』は使えるとは思つたものの、必ずしもそれであればならないと考えた訳でもない。

「あの場に彼女が居合わせたのは偶々だ。ハリー・ポッターに“真実”を語らせるとして、僕が最初に想定していた手段は違うからな。君が僕とは別の遣り方をしたとして不快に思う事は一切無いし、その場合は如何なる手段を採るのか逆に興味がある」

「……怖いもの聞きたさで聞くんだけ、貴方の想定していた手段つ

ていうのは?。」

「国際魔法使い連盟の議場にハリー・ポッターを立たせ、闇の帝王の復活を訴えさせる。その上で魔法族と非魔法族を虐殺する巨悪への対決姿勢を表明し、改めて国際的な結末の必要性和重要性を強調する。本気で世界を動かす気ならば、そこまでやらねば意味が無い」

と言っても、連盟は未成年魔法使いの涙の訴えに感激してくれる組織でも無いのだが。

そのように付け加えた僕に、

「……………そう」

ハーマイオニーはそれだけを答えた。

その一言に色々な想いが詰め込まれているのは伝わって来たものの、僕は敢えて見なかった振りをした。その手の感慨は、既に夏休暇中に置いて来ている。

「そして、そもそも論として公開するかどうか強制していない。君達の騎士団長はハリー・ポッター自ら真実を語る機会を与えなかった。この魔法界で最も賢い人間は、断固として反対の立場を取った。……………まあ、あくまで今年度の八月まではとは付け加えておくが」

とはいえ、彼の立場は変わっていないとは思っている。

あの校長がハリー・ポッターを表舞台に上げたくなかったのは、戦略でなくあくまで私情である。状況が多少変わった所で考えが変わる事は有り得ない。

「でも、ダンブルドアが反対してるとしても私はやるわ」

改めて決心を固めるかのように、彼女は力強く宣言する。

「ダンブルドア軍団結成時から内心引っ掛っはいたのよ。ザカリアスは言ったわ。『僕達には知る権利がある』って」

「……………ザカリアス?。」

聞き慣れない名前が出て来た事に一瞬だけ戸惑う。

が、直ぐに誰の事だか思い当たった。

「……………嗚呼、〃マグル〃に良くある姓をしたハッフルパフの事か?。」

「……………多分、本人が聞いたら怒るわよ」

「怒るならその程度の人間だと言う事だ。ポッターとて非魔法界では

珍しい姓ではなく、「ポッター」の内の幾らかは「マグル」とも結婚しているようだが、ハリー・ポッターの父親は「純血」の可能性が非常に高い。まあハリー・ポッターにとってはどうでも良いだろうが」かの旧い家を「純血」に数えないなら、聖なる二十八は半分以下に削減すべきだろう。

「話の腰を折って済まないな。それで？ ザカリアス・スミスが具体的に何と言ったか知らないが、ハリー・ポッターは激怒したんじゃないか？ 嗚呼、ロナルド・ウィーズリーもか？ それに他のウィーズリー三人も居た筈だから、彼等も良い気にはならなかっただろうな」
「その場に居なかったのに良くもまあ的確な事を言えるわね……」

感心ではなく呆れの眼を向けられる。

「ええ、そうよ。彼等は貴方の言うような反応をしたわ。でも、私は倣う気にはなれなかった。ザカリアスの口を塞ごうとはしたけど、それはダンブルドア軍団の活動に直接関係無い話だったからで、言葉の内容自体には理が有る事も認めていた。ハッフルパフは——セドリツクの寮の人間は、気にせずにはいられないってね」

「……………」

「ハリーが世間に話してくれるよう、何としても、何度でも説得する。私にそう決めさせたのは勿論今回のアズカバンの事件よ。けれども最初にこの構想を産んだのは、この部屋で貴方が発した言葉なの。その言葉が、やはりザカリアスは正しかったんじゃないかと思わせた」
「……………何故、そこで僕が出て来る？」

興味深く聞いていた所に不意を突かれ、思わず眉を寄せる。

しかも、この部屋での言葉という限定が付いている。つまりハーマイオニーは僕と違い、『ザ・クイブラー』を見てその考えを思い付いたという訳ではないらしい。

「貴方には大した意図は無かったのかもしれない。けれども確かに言ったわ。悪い結果を防いでみせたのはセドリツクの最後の仕事だった、って」

「……………」

「貴方が言うからには嘘ではないんでしょう。それがハリーの頑張り

を無視するものではないのも解ってる。遺体を持ち帰ってみせたのはやっぱりハリーだもの。けど、私には解らないのよ。それなのに何故、貴方がそういう表現を用いたのかが」

「———そうか。君は、君達は聞いていないのか」

「二応、シリウスから断片的な話は聞いているわ。彼はハリーが語る場に居たもの。けど、私達はその場に居なかったし、その後ハリーから直接聞き出す事もしていない」

改めて考えてみればそれが自然か。

四つの試練を超え賢者の石を護った話。秘密の部屋を発見してバジリスクを殺した話。時を超えてアズカバンの囚人を救い出した話。その何れも武勇伝の類で、現場に居なかった友人と話を共有するのに支障はない。三人の中で話題に上がったのも一度や二度ではないだろう。

しかし、今回は違う。

一人一人が死んだ話は、たとえ親友の間柄だとしても軽々しく語れる話でもない。

「なのに、貴方が知っている理由は最早聞かないけど———」

ジロリと険しい視線を向けてくる。

実際、聞く意味も必要も無いだろう。彼女の中で既に答えは出ているからだ。

「———私もハリーから話を聞きたい。そう思ってしまった時点で、ザカリアスを責められはしないわ。そして、この魔法界全てが同じ事を思ってる。野次馬根性の人間も居るでしょうし、私ですらその気持ちがあるかないとは言えないけど、でも、それが全てでは無いと信じてる。だからこそ、去年の真実は秘されるべきではないと思っただの」

「……だが、結局はあの男が語るかどうかだ。それが無ければ何も始まらない」

「そうね。間違いなく渋ると思う。ただ、最後にはハリーも語ってくれる筈だわ」

……彼女の推測は、多分正しい。

アズカバンの脱獄は或る意味で追風だ。

少なくとも校内では風向きが——ハリー・ポッターを大法螺吹き扱
いする風潮が変わりつつある。彼が「真実」を語る気になっている
事は有り得る。何よりハーマイオニーの理詰め^{レゾナンス}の追求と感情的な懇
願を撥ね退けられる程、ハリー・ポッターは非情な人間ではない。

否定をしなかった僕に、ハーマイオニーはクスクス笑った。

「けれども、貴方がグリフィン^{グリフィン}だっただら。去年もそんな仮定を
考えたけど、戦争が始まった今年程それを切実に願ってしまふ事はな
いわ」

一度浮かんだ笑いは止まらないらしく、しかし彼女は構わず言葉を
続ける。

「貴方が本気でハリーを説得しにかかったら、十分も有れば彼を言い
包められた筈よ。いいえ、既に去年の話は公のものとなっていたで
しょうね」

「……前半は兎も角、後半はそうだな」

渋々であれ、認めざるを得ない。

「ハリー・ポッターが「真実」を語りたがらないのは解るとしても、そ
れを語るよう校長が説得するどころか、その選択肢^{オプション}が有る事すら示さ
ないのはやはり気に入らん。ハリー・ポッターにもまた、戦いの権利
が与えられるべきだろう」

王が決めた以上文句を言わず戦え。それだけで済む時代は遙か昔
だ。

戦争が死体の山が築かれれば始めれば済し崩し的に光の陣営に味方してくれるだろうと
いう冷淡な態度には、強い反発と嫌悪感しか抱けない。殆ど無意味で
あると想定していても、その世界に住まう者の意思を統一する努力は
最大限すべきである。

己以外の力に更々期待していないという点において、あの校長と帝
王はやはり似ている。

「そう言うと思ってたわ。貴方に比べれば、ハリーが溜め込んでいる
怒りなんてそよ風に思える位だし。それにもう一つ有るのよ。今年
同じ寮だったら良かったと思う理由」

ハーマイオニーは責めるような視線を向けて来る。

けれども、その口元に笑いがこびり付いているのが救いだった。

「閉心術。貴方なら、ハリーに教えられるんでしょう？」

「……………」

「貴方は閉心術、そして開心術の性質に詳し過ぎたわ。世に知られていない筈の技術なのにね。その理由は、貴方が実際に扱えるからなんでしょう？　それも、非常に高度なレベルで」

「——そうだな、認める。最初から誤魔化す気も無かったが」

余り明かしたくない話ではあったが、あそこまで踏み込んだ話をした以上、ハーマイオニーならば何れ思い当たるとは考えていた。それが今になったとしても驚きはしない。

「しかし万一僕がグリフィンボールだったとしても、やはりあの校長は僕に教えさせないだろう。相手の開心術を防いだ際、その術が逆流し、結果として心に入り込む場合がある。つまり僕が抱える『秘密』がハリー・ポッターに漏れる可能性は有り、僕が教えるのは余りに危険が大き過ぎる」

「でも、閉心術を教えるスネイプを見張ったり、横から助言したりは出来るでしょう？」

「…………それはまあ、可能だな」

心の内部の問題である以上、傍から介入出来る事は限られる。

それでも尚、居ない方がマシと非難されない程度には役に立てるだろう。

「スネイプは教えるに際してハリーと二人つきりならという条件を付けたらしいわよ。私やロンの同席は、とうめ——ええと、ジョージ達を作った道具を使う事も含めて明確に禁止されたわ。閉心術の心得が無い人間が居ても気が散るし、邪魔なだけだったね」

口を滑らせ掛けた割に、ハーマイオニーも上手い言い訳をしたものだ。

「けれども、貴方に対してはその言い訳は使えないわ。貴方の見解によればダンブルドアもスネイプを警戒しているんでしょう？　なら非常に上手い案だと考える筈よ」

「その場合であつてもスネイプ寮監は色々難癖を付けて僕を排除した

がると思うが——しかし、彼も自分が二重スパイであると知られて
いるのを良い事に好き放題言ってるな。まさか疑われない努力すら放
棄するとは。それでこそ、あの寮監らしいと言えるが」

元死喰い人である人間が一人で「生き残った男の子」を教える。
普通なら撥ね退けられるのが自然だ。

「……だから、今日の貴方の話を聞いて余計に憂鬱なのよ。質問して
おいて良かったのは間違いないけど、悩みが解消されるどころか更に
増えたわ」

今日は突つ伏す机が無いので、ハーマイオニーは座ったままガツク
リと項垂れる。

「貴方もダンブルドア先生も私に色んな事を、特にハリーのストツ
パーとなる事を「期待」してるのは解るわ。けど、学校の御勉強が出
来るのと、冷静だとか機転が利くとか判断力に優れるとかいうのは違
うのよ。今年になっては特に強く思うわ。私は自分が考えていたよ
り、その手の能力に優れている方じゃないって」

「でも、だからと言って放棄する君ではないだろう」

「……そうだけど。確かにそうだけど、それでも愚痴りたくなるわ」

座面に両手を当て、うーと言いながら足をバタバタさせる。

もつとも言葉や態度の割に、表情は余り暗くもない。彼女の言葉通
り単に胸中を吐き出したくなっただけで、現状を拒絶している訳では
ないらしい。

しかし、あの二人も本当に得難い親友を手に入れたものだ。

ハーマイオニーが居なかったのならば、彼等は二人で全てを為さね
ばならなかった。

一年目から彼女無しには得られない知識が多く、二年目はバジリス
クの答えに辿り着けたとも思えず、去年などは仲違いの間に入る者が
居なかった。今年で言えば、ダンブルドア軍団の運営——構成員の都
合の良い日時の設定等——に加えて、普段の宿題の消化にO.W.
L.の準備もか。不可能だとは言わないが、彼等の苦労や負担は現状
とは比較にならないものだった筈だ。

まあ彼等がその価値を真に自覚しているのかは怪しいのだが……

ハーマイオニーが疎んでいる訳でもなさそうだから良いのだろう。その感情が向けられる先が僕で在って欲しかったという考えは、やはり四年前に捨て去っている。

ただ、彼女は話が終わったという雰囲気醸し出していたが、僕の方はまだだった。

たとえ気が進まずとも、このまま聞かれないままにした方が良かったとしても、これからも友人で居るならば確認しておかなければならないと思つた。

「僕は開心術を使える——その事について君は言う事がないのか？」
「？」

本気で首を傾げられる。

彼女の恰好も、足をパタパタさせるのを止めただけだ。真剣さの欠片もない。

……当然の問いにそこまで雑な反応を示されると、自分が間抜けに思えてくるから止めて欲しいのだが。

「開心術や閉心術が表に余り知られない一番の理由。それは実際に使えると公言する者が居ないからだ。この技術を非魔法界の読心術のように考えるのは多くの魔法族も変わらない。稀にそれが出来る人間も居るらしいから完全に誤解ではないのだが……まあ、何と理屈を捏ねようと、開心術士が他人の心を無断で侵せる人間なのは事実だ」
「だから？」

「つまり、これを隠していた事に関して君は不愉快を覚えたであろうと思つてな」

「……ああ、そういう意味ね」

彼女の返答には、少しだけ軽蔑が混ざっていた。

「確かに心を覗かれるのは余り良い気はしないわ」

でも、と彼女は続ける。

「去年私も似たような事をやっていたのを考えれば、貴方を一方的に責めるのは違ふと思つてしまうもの。そして貴方は他人のプライバシーを無意味に侵害する人ではないと知つてるし——何より、貴方の言葉を信じるなら、開心術は便利な技術じゃないんでしょう？」

疑問の言葉は断定の響きを帯びている。

そして、僕の返答も待たず両手を軽く握られ、彼女は椅子ごとズイツと僕に近付いた。三年生で抱き着かれた時の次位には、彼女と僕の顔の距離が近付いていた。

……大事な話の為に距離を潰してくるのは、世の女性の習性なのだろうか。

「今、私が何を考えているか解る？ 流石に杖や呪文を使うのはナシだけど、視線を合わせて読める範囲では心を読んでも良いわよ。何を読まれても後から文句も言わないわ」

「……そうは言われてもだな」

臆気ながらも伝わってくるイメージは有る。

僕達が出会った最初の時の事。入学前に幾度となく公園で夕暮れまで過ごした事。去年を除く四年間、隠れるように図書室で会い続けた事。去年の夏、彼女が僕の家を訪れた時の事。

それらと共に、彼女から向けられる友愛や信頼の感情も掴み取れるが——ハーマイオニーが読んでみると暗に言っているのは、多分そういう事ではないのだろう。

困惑する僕に彼女は悪戯っぽい笑みを浮かべる。

「ええ、良く解ったわ」

握っていた片手を離れた彼女は、そのまま人差し指で鼻頭を軽く弾いた。

「貴方は私の心を読めない。貴方の様子を見る限り、全く読めないのではないんでしょうけど、少なくとも肝心な部分は読めていない。それこそ読心術のように読めていたら、もつと色々とは話は早かったでしょうにね。安堵半分、残念半分と言った所かしら」

「……残念？ そんなに心を読まれるとマズい事を考えていたのか？」

「そんな事を口に出しちゃうのが、貴方が女心を理解出来ない何よりの証拠なのよ」

そう言っつて。

ハーマイオニーは、べつと赤い舌を出して見せた。

盤石と破綻

彼女が示唆した『ザ・クイブラー』の記事が出たのは、二月も末になる頃だった。

案外早かった。そういうべきなのかもしれない。

アズカバン脱獄で決心したという言葉から察するに、ハーマイオニーが計画を始動させたのは新年以降だった筈である。そして如何に零細の雑誌とは言え、出版行為はそう迅速に出来るものでも無からう。

しかし、たった一ヶ月強でハリー・ポッターのインタビューは世に公開された。この速さを見るに、案外ゼノフィリウス・ラブグッドも魔法界の未来を憂う一人であるのかもしれない。

……まあ、その予想は大穴であり、単に予定通りに紙面が埋まらず仕方なくハリー・ポッターの記事で埋めた可能性の方が本命なのだが、『ザ・クイブラー』への寄稿者が締切を守りそうにない人種かどうかは、半年程購読していれば察せられるものなのだから。そもそも締切という規定が在るかどうかがすらすら怪しい。

ハリー・ポッターの記事は……内容的には然程目新しい物はなかった。

重要部分は校長から聞いているし、初耳の内容の中で特段引っ掛かった箇所も無い。敢えて言うのなら、その記事の執筆者としてリータ・スキーターの署名が有った事くらいか。去年の『週刊魔女』で酷い目に遭ったのはハーマイオニーも同様だろうに、良くもまたそんな人選をしたものだ。

もつとも、悪い手だとは思わない。

彼女は或る意味ハリー・ポッターよりも有名で、記事についての注目度を上げ、かつ内容に一定の信憑性を持たせるには恰好の人間と言える。何より素晴らしいのは、この記事に激怒した死喰い人に殺されても全く良心が痛まないという点だ。

まあ、ハーマイオニーに後半の意図が存在していたかは兎も角、流石のリータ・スキーターであっても、今回の記事を書く危険には気付

いていただろう。

彼女が非合法の動物擬きアニメーガスである事は、去年を見る限りルシウス・マルフォイ氏——ひいては闇の帝王も知っている。命が狙われた場合に逃げ切れる保証はなく、しかしながら、彼女は今回の執筆依頼を受けた。そう考えると、あのゴシップ記者もまた、僕が思っていたよりも気骨がある人間だったという事なのかもしれない。

記事も悪いものではない……どころか良く出来過ぎていて、はつきり言えば、素人の寄稿記事ばかりが載る『ザ・クイブラー』の中では浮いていた。ハーマイオニー自身が執筆しても何も変わらないだろうと思っていたが、こうして記事を見せられるとやはり本職は違うものだと感心させられるものだ。

ただ、僕にとつてはその程度の感想で有っても、他の人間には違うらしい。

特に親が死喰い人であると名指しされた者に対しては大いに動揺を齎したようだ。

『ザ・クイブラー』が発刊された翌日——ドローレス・アンブリッジがハリー・ポッターから雑誌を没収したらしい日の午前中は、ドラコ・マルフォイは騒ぎの理由について知らなかったようで、自分を見た人間達がひそひそ話をする光景を不思議がっていた。

しかし何処かの時点で、そして恐らくドローレス・アンブリッジ経由で情報を得たらしい。放課後まで待つ事もまた出来なかったようである。彼は休み時間に僕を空き教室へと引っ張り込み、乱暴に椅子へと押し付けた後、怒りで声を張り上げた。

「ステイブーン！ 君は一体何を考えている！」

椅子に座り直す僕を他所に、彼は勇ましく気炎を上げていた。

「君はあの事を既に知っていたんだろう……！ そもそもあの雑誌を君が購読していたというのは僕も知っているんだぞ！ 当然君はポッターのインタビュー記事も目にはしている筈で、何故僕に言わなかった！」

激しい怒りと猜疑心を隠さない彼の反応は聊かも僕に衝撃を与えなかったが、唯一、『ザ・クイブラー』を購読しているという指摘には

少し驚いた。

「僕がそこまで君の行動に注意を払っているとは思わなかった。そう思ってる顔だな？」

「……まあ、そうだな」

「君は変な所で大馬鹿野郎だ！ 君のような人間があんな雑誌を読んで居るのを無視しろというのが無理な話だろう！ もっとも、君が奇行に走るのはロックハートの時からだから、今まで余り気にもしていなかったがな……！」

その割には各方面から頭を心配されたギルデロイ・ロックハートの時と違い、今年も誰からも指摘されなかったように思えるが。

……まさか、あのイカレた雑誌を読んでも何ら不思議ではない人間だと広く認識されているのだろうか。万一『ザ・クイブラー』の標準的読者と同一視されているとすれば、割とショックな話ではある。

しかし、ドラコ・マルフォイには僕の内心の衝撃はどうでも良いらしい。

まあ僕が彼の立場でも同じ事を思った筈で——けれども、仮に僕がドラコ・マルフォイであったとすれば、このような無様を晒すまい。

「とにかく、ポッターがインタビューを受けたんだ。僕達としても対応を——」

「——それは良いが、一体何をすると言うんだ？」

膝の上で指組みをしながら紡いだ僕の疑問に、ドラコ・マルフォイは言葉を喪ったようだった。嫌味でも何でもなく、僕が想像しえない行動を思い付いているのなら是非聞かせて貰いたかったのだが、どうやらそういう訳では無いらしい。

『ザ・クイブラー』が出版された事は、昨日の時点でルシウス・マルフォイ氏に警告を送っている。事が事だからスネイプ寮監の所にも報告は行った。何も自慢にならんが、アレを闇の陣営に伝えた人間としては誰よりも早かっただろう。そしてルシウス・マルフォイ氏に伝われば、更に「上」にも伝わっている」

「……父上は、何と？」

「君はふくろう便を送らなかつたのか？」

素朴な疑問に、ドラコ・マルフォイは顔を背けた。

「……今の状況で送れる訳がないだろう」

「個人的にはそこまで警戒する意味も無いと思うが、まあ間違いとは言えんか。僕も一応、あの家の屋敷しもべ以外に読み取れないよう暗号化したしな。仮に何も知らない人間が見ても、単なる進路相談にか読めなかつただろう」

警戒心を持つておくのは良い事だ。

あの校長は好んで検閲をしたがらない人間ではあるが、しかし必要とあればやれる人間でもある。彼の懸念は理解出来るし、正しい。

「君の質問に答えるならば、全く何も無かつた」

ルシウス・マルフォイ氏は反応を示さなかつた。

「まあ表向きの質問……進路相談に対する回答は有つたが、それだけだ。嗚呼、君共々O・W・L。試験での良い報告を聞ける事を楽しみにしているとは添えられていたか。しかし『ザ・クイブラー』に関する言及は返つて来なかつた」

「……っ。そんな馬鹿な事が有る筈がない！ 何かの間違いで——」

「——その意図は明らかだ。要するに、放置していて構わないという事だよ」

僕は返答がない程度で無視されたとか、自身を軽んじられたと思う人間でない。そんな事はルシウス・マルフォイ氏も察しているだろう。仮に彼がそうでなかりうと、ナルシッサ・マルフォイ夫人が把握している筈である。

その上で返答をしないという事は、それ自体が答えである。

「……君の警告を見落としたという可能性は無いのか」

「その言葉は、ルシウス・マルフォイ氏への侮辱に片足を突っ込んでいると思うがな」

余程平常心を喪っているのか、非常に見当外れの言葉に思わず笑つてしまう。

「半純血風情が無礼な真似をする——君の父親は、そんな風に考える人間では無い。君を經由せず手紙を送るといふ事自体にメッセージ

性を見出し、内容に眼を通す程度はしてくれ。その位には道理を理解される方だ。万一の場合でもスネイプ寮監が居る。伝わらないなど有り得ない」

スネイプ教授も非常に不愉快そうな表情を浮かべていたが、それだけだ。

全く問題にならないというのは言い過ぎだが、大人達にとっては『ザ・クイブラー』の記事が出た事は大した問題でも無い。

「そもそもハリー・ポッターが『嘘』を言い触らすのは今更だ。彼は闇の帝王の復活を去年度末から主張している。その嘘を補強する作り話が今更語られた所で一体何の問題が有る？ 『ザ・クイブラー』の読者として言うが、あの雑誌は元々正気ではない。正気を喪った者が書く雑誌に、正気を喪った者のインタビュが載る——果たして、どれだけの者が信じるやら」

「……でも、今のホグワーツの雰囲気は」

「気にする必要は無い。何となく魔法省を信じていた者達が、何となくハリー・ポッターを信じるようになっただけだ。自分の頭で考えず周りに流されるああいう人間達はな、ハリー・ポッターの形勢が悪くなれば再度掌を返す。選挙をやっているのではないのだから、校内支持率に価値などない」

ハリー・ポッター個人へ忠誠を誓える者など、彼の親友二人を除けば一人も居ない。

少なくとも、今の所は。

「そもそも、インタビュにより状況が変わった訳ではない。アズカバンの大量脱獄事件を受け、闇の帝王の復活が真剣味をもって受け取られ始める事は解っていた。闇の帝王はその反応を全く気にも留めていないだろうという事もな」

「……………」

「世間が『真実』を信じなかったのは、単純に平和が続いていたからだ。シリウス・ブラックの脱獄もハリー・ポッターが復活を宣言する前の事だしな。それ以降に不審死が目に見えて増える事はなかった——第一次魔法戦争と同じ事は起こらなかったから、だから多くの人

間は信じなかった。しかし更にアズカバンが破られれば、それも逃げた囚人が間違いない死喰い人と呼べる人間ばかりならば、見方が変わるのは必然だ」

ハリー・ポッターの証言は後押し程度にしかない。

闇の帝王の復活が信じられ始めるのも、過去に元死喰い人の疑惑を掛けられた人間の子供への視線が冷たくなるのも時間の問題だった。

「……じゃあ何で、あの方が気に留めていないと思う？」

「今回のアズカバン脱獄。闇の帝王は隠蔽出来なかったと思うか？」

事件が報道された。

その意味を、ドラコ・マルフォイは考えるべきである。

「コーネリウス・ファッジは現状闇の帝王に利する行動を取っており、彼にとつては二年後に再選されるかどうかこそが最大の関心事だ。闇祓いや魔法法執行部隊にしても、シリウス・ブラックを野放しにしたままの無能さを丸三年叩かれ続けているから、市民からの信頼を更に低下させる事態は歓迎しない。ルシウス・マルフォイ氏達にとつては言わずもがなだ」

「……………」

「既に魔法省は腐敗し切っている——アルバス・ダンブルドアが少なからずそう仕向けたのだが。だから誰にとつても『事件』なんぞ無い方が良かったのだ」

『穏便』な脱獄方法は、バーテミス・クラウチ氏が息子を用いて実践してくれた。

コーネリウス・ファッジの権力を用いて何とか闇の手勢を一人アズカバンの監視に捻じ込めれば、後は簡単にそして秘密裡に、死喰い人は脱獄を遂げられただろう。

何れ発覚するにしても、今回のように即座に発覚する事は無かった。

「……なら、何でファッジは隠蔽しなかったんだ」

「報道規制が為されているから推測になるが、まあ少なくとも人間が死んだんだろう」

「……………」

吸魂鬼に警備を全て任せている訳はないだろうし、そもそも囚人には食事が必要だ。アズカバンに常駐していたかは別として、あの拷問施設の運営に生きた人間の手は欠かせない。

「死人を隠すにも限度が有る。死体が綺麗でない可能性もあるしな。遺族は死の理由を知りたがる筈であり、犠牲者の同僚達が何処まで緘口令に従うかどうかも解らない。アズカバン絡みの死人である以上、犠牲者は闇祓い、魔法法執行部隊、ないしはその関係者ばかりの筈だからな。公表を巡っては魔法法執行部で意見が割れたに違いなく、最終的には、後に何処からか告発されるよりはマシだと公表に踏み切ったんだろう」

「……でも、その話だとファツジは公表に抵抗するんじゃないか」

「彼が命令権を持つていようと実際に働くのは現場の人間だ。闇祓いや魔法法執行部隊、暴力装置である彼等に反抗されては堪らない。それだけ今のコーネリウス・ファツジの指導力が低下しているとも言える」

まあ、脱獄以前の時点でコーネリウス・ファツジに再選の目は既に無かったのだろう。

シリウス・ブラックを早期に見付けるよう、コーネリウス・ファツジが闇祓い達をせっついていた光景は容易に想像出来る。彼等が酷く不満を溜め込んだのは間違いなく、「叛逆」が起こるのもまた時間の問題だった。

「そして、何故多くの死人が出たか。言い替えると、何故闇の帝王が『穏便』な脱獄を選択しなかったか。難しい事では無い。単純に、かつての配下がより早く戻ってくる事に重きを置いた。少なくとも闇の帝王にとって、自身の復活の信憑性が多少強まろうと何も問題無いという事だろうさ」

個人的には悪手だと思うが、帝王には帝王なりの考えが有るのだろう。

そもそも僕に異論を差し挟む権利は無い。彼が決めた以上、それが正しい。

「ともあれ『上』は問題視などしていない。であれば、僕達が気にす

る事ではない」

そして、動く必要も無い。

「心配ならスネイプ寮監の下に相談に行くといい」

段々と落ち着いて来た様子のドラコ・マルフォイに、今後の目的意識を与えてやる。

「どうせ君のその様子では行っていないんだろう？ まあ、言われる内容も目に見えているが。気にせずO. W. L. の勉強をしろとか、そんな所だ。ただ、僕から同じ内容を言われるよりも安心は出来るだろう」

「……っ!? で、でもスネイプ先生は——」

「彼は記事内で名前を挙げられていない」

半ば自棄のように紡がれかけた反論を、最後まで言わせず切り伏せる。

「ハリー・ポッターにそんなつもりは無かっただろう。しかし馬鹿な読者は、アレに名が挙がっていない人間なら信じられると読んでしまうのだ。闇の帝王の復活に際して馳せ参じなかつた以上、セブルス・スネイプ寮監は間違いなく死喰い人ではない——そんな風にな」

騎士団員の一部も同様に考える事は有り得よう。

ましてホグワーツ教授達。特に騎士団の事情を推察出来る立場にない人間達は、今回の一件でスネイプ教授を完全に信用したかもしれない。

「寮監も今頃……そして放課後も苦勞するかもしれない。あの記事を見て、光の陣営に付きたいと思うスリザリン生が彼に近付こうとする事は大いに有り得る。けれども君も知る通り、あの寮監にはそれを受け容れる自由なんぞ存在しない」

スネイプ教授は死喰い人だ。

公然とスリザリンを裏切る生徒を見付けてしまえば、最悪の場合、闇の帝王に報告せねばなくなる。であれば最初から見付けけない方が良い。ドラコ・マルフォイの「相談」は渡りに船となるだろうし、彼の立場を改めて明らかにする事にも繋がるだろう。

そして俯いてしまったドラコ・マルフォイに、一つ独白を落とす。

「——まあな、現状について、多少の責任を感じる所は有るのだ」
瞬間、彼は跳ねるように顔を上げた。

彼の表情からは、どういう訳か強い疲労を感じているように読み取れた。

「……君に責任感が有るとは意外だな」

「心外だな。少しは有るとも」

ハーマイオニーの行動だから——本来スリザリン生では得られない筈の情報に基づくような対処はすべきではないから、今回ばかりは何もしなかった。

しかし、こうなる事を知っていた身として、また『ザ・クイブラー』の内容を広めるのに加担してしまった身として、全く何も思わない訳ではない。

教育令が雑誌の所持を禁じた時点において、生徒の手許に在った『ザ・クイブラー』は恐らく二冊。ルーナ・ラブグッドが持っていた物と、校内唯一の購読者である僕が持っていた物。そして僕の持っていた物は、昼休み中ルーナ・ラブグッドが半ば無理やり回収して行った。傍に死喰い人関係者が居る相手に恐喝を敢行するとはまったくもって良い度胸である。そして、その二冊が何処に行ったかは、校内の噂話を聞くに明らかである。

しかも「禁制品の対象は『ザ・クイブラー』である以上、ハリ・ポッターのインタビューのみ切り抜けば良いのではないか？」と言ってしまったのがいけなかった。

その僕の指摘は、雑誌を切り刻む事を好まなかった彼女に二つの発想を与えた。

裁断を防ぐ為には隠蔽呪文を使えば良いというのが一つ。そして『ザ・クイブラー』の注文書を配り歩くのは教育令に反しないというのが一つ。

フローリシユ・アンド・ブロッツ書店に置かれていても思えないアレの存在は、今日で Hogwartz の保護者の大半に知れ渡った事だろう。遅かれ早かれ知れ渡ってしまう事だった、そして読んでも内容を信じるかどうかは別だとはいえ、周知されるまでの時間を早めた責任

は感じている。

「ハリー・ポッターの主張を信じる者——闇の帝王の復活を信用する者が増えるのは織り込み済みだった。とはいえ、今回ばかりは燃え上がりだな。だからスリザリンが過度に不利な立場に置かれるならば、アルバス・ダンブルドア校長を巻き込んで何かやろうとは考えていた」

「……何故、そこでダンブルドアを持ち出す？」

「持ち出さない理由が逆に有るか？」

校内で今最も注目を浴びている者。

それはハリー・ポッターでは決してない。

今世紀で最も偉大な魔法使い——ゲラート・グリンデルバルトを討ち破り、前戦争でも不死鳥の騎士団を率いて闇の帝王と戦った人間である。

「ハリー・ポッターの路線と校長の路線、それらが一致しているのは去年度末から明らか。そしてアルバス・ダンブルドアはハリー・ポッターの上役、不死鳥の騎士団長だ。監督責任を問うのは必然で、だから彼の感想を聞いてやるのも不自然でもない。生徒の大半が気になっている事を代わりに質問してやる事になるが、まあそれ位は良いだろう」

「……………『ザ・クイブラー』は禁止されている」

「禁止されたのはあくまで所持だ。読む事は禁止されていない」

記事の知識を有している事は、本人が過去に『ザ・クイブラー』を所持していた事を間接的に推認はさせるものの、その事実を確実に証明する証拠では決してない。

例えば、他人が持っていた物を見せて貰っただけ、或いは噂で聞いただけという言い訳が普通に想定し得るからだ。この場合は当然ながら教育令第二十七号に反しない。

「何より、その高等尋問官令の発効は今日の昼前だ。『ザ・クイブラー』の購読者である僕が、それまでにハリー・ポッターの記事を読んでいようと何ら不思議でもないだろう？」

法を遡及適用する程、あの高等尋問官殿も野蛮ではないだろう。

そもそも彼女に余計な口を挟ませるつもりもない。

「故に、僕は今日、君が思うよりも遙かに注意深く校内を観察していたとも。グリフィンドールが果たして何処までやる気があるのかと。彼等が聖戦の為の軍を立ち上げ、血を見る事を覚悟してホグワーツの『膿』を出そうとするつもりなら、スネイプ寮監が何と言つていようと正当防衛としてやるつもりだったか——」

指を組んだ両手を膝に当て、抱え込む。

「——グリフィンドールは、呑気なハリー・ポッターは、自身の大嘘吐きという評価が払拭され、己の支持者が増えた事で満足を覚えている」

ハリー・ポッターの『攻撃』は既に終わっており、スリザリン生の迫害行動に移る気は更々持っていなかった。精々ドラコ・マルフォイ達の動揺を良い気味だと思ふ位で、色々と考えていたこちらが拍子抜けする程の平和主義者振りだった。

「つまるところ、ハリー・ポッターの眼にはスリザリン生など映っていないのだろうか」

「……………」

「まあ正しい認識では有る。彼と異なり、僕達が戦争に与える影響など皆無だ。あの『ザ・クイブラー』に対して行動する自由は闇の帝王から与えられておらず、ホグワーツに騒動を起こしたとしても、闇の帝王の助力無しには軽々と鎮圧されるだけ。彼が敵と看做すのは唯一闇の帝王であり、一応死喰い人が考慮に入る程度で、しかし校内のスリザリン生は違う」

何よりハリー・ポッターは、非の打ち所がなく『善』の側なのだろう。

彼の信条の下では、何も——というには、スリザリン生は多くの悪事をやっているが——兎に角、大きな罪を犯していない人間を裁くのは許されないのだ。ダーズリー家で虐待されていた割に真つ当な倫理感を持っているのは、やはりアレもまた異常とも呼べる。あの校長が大切に想う筈だ。

「他の生徒はどうかというと、ハリー・ポッターにやる気が無い以上、

彼の意向を無視して行動する気も無いようだ。一ヶ月半もすればイースター休暇。その後は五年生であればO・W・L、七年生であればN・E・W・T。他の人間でも期末試験。今回の記事など直ぐに頭の片隅に追いやってくれらるゝとも」

闇の帝王が君臨したのは既に十四年前の事になる。

当時の恐怖を直接知る者は最早生徒の中に残っていない。またシリウス・ブラック侵入時の恐怖にしても、彼がやった事と言えばただか肖像画を切り裂くだけだった。要するに、今のホグワーツにおいて、死の危機を切迫したモノとして捉えている生徒は皆無だという事らしい。

ルビウス・ハグリッドも大いなる学びを残してくれたものだ。

セストラルを見られない者達は、自分の死もまた思い描く事は出来ない。

「そして教授陣とアルバス・ダンプルドア校長。これらは言わずもなだ。今年度が始まって以来の方針を動かす気は無いらしい。彼等も善であり——まあ、親の罪は子の罪であると、そのような考え方はしない。君達が大人しくしている限りは、内心はどうあれ教授陣は君達の味方をしてくれる。これは賭けても良い」

教育令第二十七号を馬鹿げていると一蹴したものの、アレが出て唯一良い事があるとすれば、それはハリー・ポッターの「真実」を理由にスリザリンを迫害出来ないという事だ。

他三寮は僕達に対して理由も謂れもなき虐めしか出来ず、それはスネイプ教授のみならず、他の教授が眼を光らせ、場合によっては介入してくれるだろう。これは良く有る嫌がらせで済むものではなく、一度過激化してしまえば血を見る恐れがあるからだ。

何より教授達は第一次魔法戦争の経験者である。

だからこそ強く思っている事だろう。かつてのようには不愉快なモノをホグワーツ内で見る羽目になるのは、絶対に御免だ。

「兎に角、君が——君達が、か。今考えている程に酷い事にはならんよ」

木に吊るされたスリザリン生の死体を発見するような事は起こる

まい。

そう紡いで言葉を締め括る。

安心させるつもりでそう言ったのだが、ドラコ・マルフォイの青白い顔は一段と蒼白になったように見える。そしてその後二十秒ばかりの時間を掛けて発されたのは、思わず失笑せざるを得ない問いだった。

「……あの記事について君はどう思った？」

「随分と抽象的な問いだな」

相変わらず、質問に際してドラコ・マルフォイは視線を合わせない。

「回答をしたいのはやまやまだが、君が一体何を聞きたいのか解らない」

「……アレが本当に起こった事だと思うかという意味だ」

「成程、内容の真実性の話か」

もったもな話でもあると頷く。

恐らくドラコ・マルフォイ達にとっても、あの記事は初耳の事ばかりだっただろう。

如何に息子が相手とは言っても、アレは闇の帝王、そして自分達の失態についての話なのだ。ルシウス・マルフォイ氏らの口は重かったに違いない。故に内容を真実か測りかねているという点においては、彼等も他の Hogwartz 生と何ら変わらない。

「と言っても、君の心は決まっているように見える。そもそも話の核心部、つまり闇の帝王の復活については事実であり、周辺事実が正確かどうかを問う意味など余りない。だから僕の感想を聞く必要性も欠片も無いように思えるのだが——」

「御託は良いから答えろ。……嘘も吐くなよ。僕は君の主人だ」

「——そうか」

漸く合わせてくれた瞳には覚悟の色が有った。

それならば構わない。僕もまた、同種の覚悟を持って答えよう。

「君も知ってるの通り、ハリー・ポッターに眼に見えて解りやすい特別性など無い。魔法力や杖腕は優秀止まり。知性や発想力も凡庸。戦闘経験も豊富とは言えない。殺し合いの実力という点において、彼は闇

の帝王どころか、死喰い人の誰にも遠く及んでいない」

真正面から戦えば必ず勝てる。

合理的に考えれば、まず間違いなくその筈で。

「それでも、去年度末。復活した闇の帝王と、数多くの死喰い人達による包囲。どう考えても絶対絶命の筈の状況下において、しかし彼は生きた人間の力を借りる事もなく、殆ど独力で逃げおおせて見せた。それは間違いなく真実なのだろう」

「――」

「同じ事は出来んよ。君にも、勿論僕にも」

ドローレス・アンブリッジ。

闇の帝王と偶々向いている方向が同じなだけの、単なる魔法省の一人役人。

両陣営の指導者から「駒」としての価値を認められていない彼女は、或る意味、今のホグワーツ内で最も自由な人間と言って良かった。……もつとも彼女自身は嬉しく思っていない。そんな事に気付いていない以前に、誰よりも己の不甲斐なさや無力さ、世のままならなさを強く実感していたのは、間違いなく彼女自身だったであろうから。無能な古い学教授の一件など特に強く実感した事だろう。

シビル・トレローニーにクビを宣告した際、ドローレス・アンブリッジは勝利を確信していたものの、しかし校長が有する施設管理権によって追放を阻まれた。また教育令が侵せなかった教授任命権の下、彼女が嫌う半獣であるケンタウロスが古い学教授となってしまった。少しでも頭を回す事が出来たなら、あの展開は見えていた。

教育令がホグワーツ校長の聖域を侵せなかった事は学期当初の時点で既に指摘していたし――何より彼女が追放しようとしたのはシビル・トレローニー、ドローレス・アンブリッジと異なり戦争の「駒」の資格を持つ者だ。ああした判断を校長が下すのは当然だった。

古い学を選択したホグワーツ生の十六年分の学習機会。

魔法戦争を左右するかもしれない『予見者』を自身の手元に置く価値。

両者の重みを天秤に掛けた場合、真つ当な校長ならば当然前者を選び取るだろう。

何せ普段の彼女はどう見ても無能であり、ルビウス・ハグリッドの方がマシと言える程に知識の伝道者として不適格だ。ホグワーツ校長が担って来た伝統的責任を踏まえて尚、シビル・トレローニーをホグワーツに置く事は適切でなく、その身柄の確保及び安全の保証は魔法省や闇祓いに任せざるを得ないと判断するのが普通だろう。

しかし、アルバス・ダンブルドア校長は違う。

魔法界の守護者を自負する彼は後者を選ぶし、実際に選んだ。

嗚呼、確かに彼こそがシビル・トレローニーを最も上手く使えるだろう。

帝王が消えた後にハリー・ポッターを護り切ったのは間違いなく彼の功績で、また仮に彼女が今後『第三の予言』をするような事態になれば、それを知らないままでは不死鳥の騎士団は戦えない。そもそも魔法省なんぞ信ずるに値しないというのは、今でも一般的な魔法族が持つ信念である。彼こそが絶対的に「正しい」のであり——けれども子供の成長を第一に考えるべき教育者としては、特に今魔法界を侵食しつつある「マグル」の価値観の下では、やはり論外と言うべきではないだろうか。

そして闇の帝王であれば当然このアルバス・ダンブルドア校長の悪癖を知っていた筈で、彼の取る行動を推測していたに違いなく、そしてドロレス・アンブリッジはそうではない。今年度が始まって以降道化で在り続けた彼女は、最初から追い出せる筈が無いシビル・トレローニーに手を出し、またもや無様を晒す羽目になった。

……もつとも。

僕はやはりそれを嗤う気にはなれなかった。

グリフィンドールは勝ち誇っていた。あの校長とてそうだろう。

スリザリンですら彼女の失態を冷ややかに見詰めていて、しかし僕

は同じような樂觀を抱く気にはなれなかった。

ドローレス・アンブリッジは常に意外な所で有能さを発揮してきた。

魔法省内で出世競争に勝ち残り、純血達に血の詐称を黙認させ、冬期休暇前にはハリー・ポッター達を捕まえる寸前まで行つた。校内での失敗しか見ない人間であれば彼女を評価せず、単なる無能として片付けるのだろうが——果たしてそう簡単に結論を出してしまつて良いものか。

その疑問への回答は、四月の半ば、イースター休暇も数日後に迫つた頃に出てくれた。

「御呼びですか、高等尋問官殿」

「ええ。良く来てくれました、ステイブン」

ドローレス・アンブリッジに呼ばれる事は然して珍しくない。

しかし何時もと違い、他のスリザリン生を経由して呼ばれる事は割と珍しい。授業後に僕を呼び留めない場合、彼女は大概僕の下へと足を運びにくる。

もつとも必ずしもそうだと断言出来る事では無かつたし、気紛れに呼びつきたい気分になる時もある。だから何の覚悟も無く何時も通りにピンク色の部屋に赴いたのだが、その部屋の中に入った瞬間、既に非常事態なのだと思ひ知らされた。

一番に眼に入ったのは、顔を隠して椅子に座っている少女。

この部屋でスリザリン以外のローブを見たのは、僕が知る限り一度か二度と言つた程度。そして、そのレイブンクロー生が啜り泣いているとなると、どう考えても普通では無い。

「アレは?」

「ミス・マリエッタ・エッジコム——」

「——名前を聞いた訳ではないですが」

ビクリと震えた高等尋問官殿は、しかし一瞬後にはニタニタした笑みを取り戻していた。どうやら余程上機嫌らしい。

「密告者、ですよ」

「……そうですか」

勿体ぶつて小声で紡がれた言葉の意味する所は明らかだ。

ハリー・ポッターにしろハーマイオニーにしろ、構成員の統制が甘かったらしい。

とは言うものの、裏切者は不死鳥の騎士団長すら出している。十月末から数えて四ヶ月程は秘密を護り通したのだから、単なる学生の自習会にしては良く持った方か。

「聞き出せた内容は？ 嗚呼、僕に言えないのならば別に構いませんが」

そう言いつつも、彼女が口を噤まない事は解り切っていた。

話をする気が無いというならば、そもそも最初から呼び立てる事はすまい。

「……彼女によると、ポッター達が今夜違法な集会を開くようです」

「――」

「場所は、八階——そこは『必要の部屋』だと呼ばれているとも言っていました。もっともホグワーツ卒業生の一人として言わせて貰いますが、その場所には部屋など全く存在しなかった筈ですけれど」

「……………まあ、在るというからには在るんでしょう」

實際在るのを知っているのだがと思いつつ、杖を抜いて軽く振る。

意図した通りマリエッタ・エッジコムの腕が払われ、彼女の顔が露わになる。余り強い力を使った訳ではないから、彼女の抵抗によって直ぐに顔は隠され直した。泣き声も更に大きくなってくれたが、しかし知りたい事は知れた。

成程、ドローレス・アンブリッジが彼女を密告者と評した理由が解った。

そして思う。誰かの顔を一々確認しない限り、守りたい秘密が守れているかどうか解らない。そんな仕組みは、魔法契約として下の下である。

「では、現在のハリー・ポッター達の動向は？ 貴方に秘密が漏れたと知れば、彼等が既に何らかの反応を示しても可笑しくないように思いますが？」

その問いに、ドローレス・アンブリッジは呆れ顔を浮かべた。
彼女にしては非常に珍しく、憐憫すら混じっていた。

「……驚いた事に、この呪いを掛けた主は報復を優先したようです」
「はあ。この有様では、秘密を暴くのに今まで掛かった僕達の無能さを嘆くべきですかね」

深く溜息を吐く。

余り言いたくないが、ハーマイオニーの頭脳は今回ばかりは鈍ら
だったらしい。本気で秘密を護りたかったなら秘密を洩らした後で
罰を下しても意味は無い。

実際僕がスリザリン生との間で締結した契約も、罰を下すなどとい
う酷く余計な機能は付いていない。そんな機能を付けて魔法を複雑
化させる必要はなく、秘密が秘密でなくなった瞬間に誰が漏らしたか
が解れば目的達成には十分だからだ。

彼女は行動前にまず、ウィーズリーの双子に相談すべきだった。
悪巧みにおいて遥かに先達である彼等の力を借りていたのなら、こ
んな馬鹿な真似をしなかっただろうに。ハリー・ポッターの悪い部分
を学んでいるのは彼女もらしい。

とはいえ、折角ドローレス・アンブリッジが僕を呼んでくれたのだ。
求められてる通り、後処理をせねばならない。

「であれば、話は簡単でしょう」

ドローレス・アンブリッジに改めて向き直る。

何故か脅えの表情を見せた彼女に構わず、今後の事について問う。
「高等尋問官。貴方が今からやるべき事。それは当然解っていますよ
ね？」

「……や、やるべき事？」

「ええ。コーネリウス・ファッジ大臣をホグワーツに呼ぶ事です」

その瞬間に彼女が浮かべた反応は、想定外を言われたというもので

は無かった。

しかし、僕がそれを口にするとは思ってもみなかった。そう感じているのは明らかだった。

彼女が僕を呼んでまで持ち掛けようとした相談事にも、その構想は間違いなく入っていない。だからこそ大きく狼狽を示し、眼に見えて呼吸を乱れさせている。

「……な、何故貴方がそういうのか、理由を聞かせてくれませんか？」
「教育令第二十四号には穴が有るからですよ」

数ヶ月前には気付いていたが、口を挟む権限は僕に無かったし、そもそもその穴が問題になる場面というのは非常に限定されていた。だから放置していたのであって、けれどもこの状況に至り、尚且つドロレス・アンブリッジが発言を許してくれるというならば、僕が口を噤んだままにいる理由も無かった。

「あの教育令は、組織や団体等について『定例的に三人以上の生徒が集まるもの』と定義した。しかしながら、『学生Studentによる』という部分については全く定義していない。つまり、所謂 Student Organization 学生会の解釈は教育令から導く事は出来ず、であれば、その解釈は日常概念によって為されるしかない」

「嗚呼、迂遠な言い方を辞めましょうか。アルバス・ダンブルドア校長が首謀者として頂点に君臨し、彼こそが自ら直接に構成員を選定し、彼のみが集会日時と集会内容の全てを決める。貴方の常識に基づけば、これを学生による組織と呼べますか？ 教育令第二十四号違反を理由として生徒を退学処分に出れると胸を張って言えますか？」

ドロレス・アンブリッジから答えは返ってない。
「まあ、穴というのも酷でしょうかね」

法の善し悪しを判断する能力は僕には無いが、あのような規定にした気持ちは解る。

「教育令第二十四号を押し通す建前は、馬鹿なホグワーツ生を統制する為だった。勝手に魔法薬を作ろうとして爆死する馬鹿、死の危険を撒き散らす隠し部屋を開けようとする馬鹿、無謀にも一人で闇の魔法

使いを追った挙句死ぬような馬鹿。直近で言えばバジリスクの討伐に挑んだ馬鹿——の傍には、一応、教授を名乗る人間は居ましたか」溜息を吐く。

ギルデロイ・ロックハートが監視役として不適格である事とは別の話だ。ハリー・ポッターが愚行に及ぶに際し、大人の眼は有った。

「ともあれ、そのような馬鹿な生徒の死の責任を、子供の教育に失敗した馬鹿親共が hogwarts 教授に擦り付けるのは許されない。そんな趣旨の下で構築された本教員令は、当然ながら、教授の監督下に在る生徒の活動を規制していない。この穴を悪用する人間は今まで居なかつたようですが——しかし、あの狡猾な校長はそうとは限らない」ハリー・ポッターの軍団は、アルバス・ダンブルドアの下に行われた。

だから教育令第二十四号に反しないという言い訳をしてくる事は十二分に有り得る。

「……私は、その法を執行する私は、そんな解釈を許しません」

「ならば、ウイゼンガモット評議員を納得させる理屈が御有りで？」

「……………」

「貴方と校長、対立は何処まで行っても並行線だ。故に貴方が正攻法でアルバス・ダンブルドア校長を追い詰める気ならば、主戦場は当然 ウイゼンガモット 裁判所になりますよ？」

そして正直言つて無理筋に思える。

教授による監視の下、生徒の課外活動が適正に行われている。何処が違法なのか。

そもそも通常の魔法族の価値観では、生徒達が秘密裡に決闘クラブを開いていようが余り問題視しない。

勿論 hogwarts 教授は教職者としての建前として止めるが、教授の眼を盗んで悪さをやった事のない元生徒の方が珍しいだろう。ウイゼンガモットの頭の固い老人が何処まで「マグル的 現代的」な倫理観を持っているか疑問である。何故そんな事を問題視するのもかも理解出来ない者すら居そうだ。

「しかしながら、この言い訳には当然難点が有る。校長がそういう形

で人間を集める事は、確かに教育令には反しないかもしれない。だが他の魔法省や省令には反する可能性が有る。端的に言ってしまうえば叛逆罪ですね」

「……………」

「けれども実際にこのような言い逃れをされてしまった場合、貴方は引かざるを得ない。叛逆罪の成立判断や罪人の逮捕は、高等尋問官やホグワーツ教授、そして魔法大臣付上級次官の手には余る。……嗚呼、勿論、貴方は即座に魔法大臣に連絡する事でしょう。しかし魔法大臣を呼んだとして、あの校長が彼の前でも同じ言い訳を吐いてくれるかは解らない。アレは狡猾で、明晰だ。時間を与えてしまえば、また別の言い訳を考えつくかもしれない」

その場合、言った言わないの水掛け論になる。

そして、それで魔法省が負けるとは言わないが、勝てるとも言わない。どちらに転ぶかどうか解らない勝負は、余りしたくないものだ。

この程度の疑念など、誰かが思い付いている筈である。

僕はそう考えていたが、ドローレス・アンブリッジの様子を見る限り、少なくとも面と向かってぶつけられるのは初めてらしい。まあ、それだけ彼女達が嫌われているのか。動揺を示すように暫く両目を右往左往させていたが、突然自信を取り戻して僕へと焦点を合わせた。

「そ、そうです！ そのような主張は教育令でも許されたいではないですか！」

「——何故ですか？」

「教育令第二十六号が有るでは無いですか！」

「……………嗚呼」

思い出すのには少しだけ時間が掛かった。

『自分が給与の支払いを受けて教えている科目に厳密に関係すること以外』を生徒に教える事を禁止するアレか。

そう言えば、そんなものが有った。余りにも意義が薄いから忘れていた。

「だからダンブルドアは——」

「で、当該教育令を破った際の罰則規定は？」

「……………」

聞いてやれば、彼女は一瞬で意気消沈したようだった。

「あの教育令は、違反した教授をクビに出来るとは書いていない。つまり、あの規定を理由に、我が校長閣下を辞任させられるかどうかは解らない。出来るかもしれませんが、出来なくても不思議ではない」

「……………」

「貴方には高等尋問官の権限、ホグワーツ教授を辞任させる権限があるから然程問題にはならなかったんでしようけどね。或いは、そちら側の規定に、教育令第二十六号違反の罰則の根拠規定が置かれているんですか？ それなら罪刑法定に違反しないかもしれませんが——しかし、実の所、アレはホグワーツ校長に対して使えるのですかね？」

アルバス・ダンブルドアに突き付けるには、心細い矛のように思える。

「ホグワーツ校長の地位を僕も詳細に把握している訳では有りませんが、彼は雇われている……給与を支払われていると言えるんですか？ 確かに校長は理事会が選びますが、別に校長は理事会と雇用関係に立つ訳では無い。ホグワーツの構造的にも、彼は給与を払う側で有って、被雇用者を拘束する当該規定で縛るのは難しい気がします」

そして、例えばスネイプ教授なら魔法薬学という科目を教える対価として金銭を受け取っているが、ホグワーツ校長は特定の科目を教授する対価として金銭を受け取っている訳では無い。法適用の前提となる、『自分が給与の支払いを受けて教えている科目』自体が存在しない。

「まあ、〃ホグワーツ〃から金銭を受けていると認識するとか、科目subjectの定義を広く……教師として生徒に影響を及ぼす一切と取るとかして乗り越えたとしても、決定的な問題が残る。要は結局、ホグワーツ理事会の判断と魔法省の判断が抵触した時、果たしてどちらが優先するんです？」

「……………」

それだけは、絶対に何処の法令を探しても書かれていない。

ホグワーツと魔法省の力関係は、互いが望んで曖昧のままにしてきたに違いないからだ。

「知つての通り、理事会は現校長閣下を支持している。闇の帝王の復活という嘘を吹聴し出しても、辞任させるべきでないという判断は変わらなかった。それを魔法省がクビにしろと言つた所で——しかもこの程度の法令違反で——通るんですか？ 何処の組織だろうと、自分の権限が他所に奪われる事を善しとする事は有り得ないでしょうに」

ホグワーツ理事会はアルバス・ダンブルドアを嫌っている。

しかし、校長の選解任という権限を奪われる事態になれば、彼等は完全に魔法省の敵に回つてしまう。そして彼等は死に物狂いで抵抗してくるだろう。屈服させるのが不可能だとも言わないが、ホグワーツ外の親や卒業生も巻き込み大揉めするのは間違いない。

「つまるところ、教育令を弄り回す程度では足りないんですよ」

正攻法では、ホグワーツ校長が纏う権威を打ち破れない。

「……まあ、叛逆罪も魔法界では割と怪しいのですが、しかし非魔法界の流儀では介入理由として十分過ぎる程に重い。そして何より、個人の叛逆では無い。大人が教師の立場を利用し、生徒を集めて行う叛逆だ。そして判断能力が未熟な子供達を軍隊化しているのは、流石の魔法界の大人達でも眉を顰める事態と言える」

魔法省側が正義という体面は取り繕える。

疑う人間はどうしたつて出るだろうが、声高な批判を封じる位は出来る。彼等の批判は「ダンブルドアがそんな事をする筈が無い」という点に集中し、「そもそも魔法省が介入する事自体が可笑しい」という方向には行きにくい。

校長が生徒に課外活動をさせていたからクビにします——魔法省がその程度の主張をするより余程良い。

「今回の一件は、対応を誤れば容易に引つ繰り返されますよ」

ドロレス・アンブリッジが思っている程、簡単に済みはしない。「相手はアルバス・ダンブルドア。四半世紀以上に渡つて校長として

君臨する、今世紀で最も偉大な魔法使いだ」

「……………」

「だからこそ、こちらも油断せず、初撃で、最大火力で仕留めに行かねばならない。ハリー・ポッターが組織活動をしている場面を押さえるのみでは足りない。その上で、こちらの最強の札である魔法大臣が現場に居て初めて、主導権を握る事が出来る。ハリー・ポッターの退学、或いは校長の追放。それらの結果を手繰り寄せられる」

ガマガエルの小さな瞳は不安で揺れている。

「……コーネリウスを呼ぶ。それが私にもリスクがある事は解つていきますよね」

か細い声が部屋の中で良く通つたのは、啜り泣きが小さくなったからか。

そう言えばマリエッタ・エッジコムの存在を忘れていた。

しかしながら、話を聞かれていた所で別に大して影響は存在しないだろう。

彼女は既にハリー・ポッター達を裏切っており、そして事が終わるまでドローレス・アンブリッジは彼女をここから逃がそうとはしない。

そんな裏切者を置いておき、僕は領いてみせた。

「ええ、勿論」

魔法大臣を呼ぶというのは、言う程簡単に取りれる手段でも無い。

ハーマイオニーは二人を同一視している節があるし、大抵の場合はそれで構わないのだが、両者はやはり別個の人格なのだ。彼等の思惑や利益は重ならない部分が有る。

「貴方達は単なる上司と部下の関係に過ぎず、一蓮托生の間柄という訳でも無い。わざわざ呼び付けたのに何の成果も無かったとなれば、当然貴方は責任を問われる事になる。流石に即座にクビになる事は無いでしょうが、コーネリウス・ファッジが今までと違った眼で貴方を見る事は避けられない。ホグワーツにおける貴方の今までの行動も精査されるかもしれない」

特に今のコーネリウス・ファッジは自分の地位の危うさに焦っている

る。

まさにホグワーツでシリウス・ブラックを取り逃がした事も記憶に新しい。余計なぬか喜びをさせ、更に失態を上乗せしてくれた相手に対し、人当たりが良くなるとは思えない。

「けれども、別に魔法大臣に対して全てを明かす必要も無いでしょう？」

「ハリー・ポッターを退学にさせられそうだ。その程度の情報で彼は来てくれるでしょう。アズカバンの大量脱獄により彼の再選の道は絶たれた。そんな彼は現実逃避の為の刺激的な事件を求めている筈で、深く考えを巡らす事もない」

ドローレス・アンブリッジの顔は恐怖で彩られていた。

「……一体何が、貴方にファッジをそこまで断言せしめるのです？」

「彼がもつと賢かったなら、去年の時点で闇の帝王の復活を信じていた。そう思いませんか？」

何事も無ければ、コーネリウス・ファッジは良き魔法大臣として記憶された事だろう。

「純血」 鼻肩は魔法戦争により隅に追いやられた者達を庇護する善良さ、優柔不断は慎重や周囲の意見を良く聞くと言い換える事が出来た。そもそも彼が現在独裁を行えている事とて、ルシウス・マルフォイ氏達が協力している以上に、シリウス・ブラック脱獄までは目立った失敗を犯さなかった証であろう。

けれども、彼は誤ってはならない道を誤ってしまった。

何の確信も無しに、アルバス・ダンブルドア校長を裏切るべきではなかった。

「ドローレス・アンブリッジ高等尋問官、貴方の不安も理解出来る。あの校長がこんな言い訳をするとは限らないというのは僕としても認めざるを得ない。今まで通りに学内だけで問題を完結させたのであれば、今回の件で万一失敗した場合でも外に知られないまま事件を隠蔽し得る。要らぬ危険を負いたくないというのは尤もだ」

「ただまあ。貴方が校長の座を奪い取りたいというのであれば、この隙を見逃すなんぞ有り得ない。何、単なる僕の勘ですが、魔法大臣を呼んだ所で悪い事にはなりませんよ」

ドローレス・アンブリッジは知らない。けれども僕は知っている。ハリー・ポッター達が結成したのはダンブルドア軍団だ。

その無垢の忠誠に対しては、あの最強の魔法使いも敗北を認めざるを得ないのだ。

そうしてアルバス・ダンブルドアは盤上から消えた。

その結末へと落ち着いた経緯は知らない。

事の顛末を特等席で見届けたい気持ちも多少有ったのだが、ドローレス・アンブリッジはドラコ・マルフォイに対してハリー・ポッター以外のダンブルドア軍団の人間を捕まえるよう指示し、更に僕に対しては彼の補助をするように伝えて来た。

それが僕達を遠ざける口実だったのは明らかであり、自身の功績をコーネリウス・ファッジに誇示したかったらしいドラコ・マルフォイはぶちぶち文句を言っていたが、左程拘りのない僕は素直に従った。これはこれで面倒に巻き込まれないで済むと考える事は可能だったからだ。

そして予想通り、あの校長は暴力をもって我を通してくれた。

しかも御丁寧な事に、密室だった校長室で一体何が有ったかを広く喧伝してくれる始末。

医務室送りとなったマリエッタ・エッジコムは語る能力がなく、ミネルバ・マクゴナガル教授は教職者として堅く口を噤んだ筈で、ハリー・ポッターが噂を広めるにしても早過ぎたから、事件の情報源は校長室内の肖像画あたりか。

しかし、少しばかり思ってしまう。

あの校長は「マグル」と仲良くする気が本気で有るのだろうか、

と。

オックスブリッジの総長が首相や警察を暴力で叩きのめして逃げ去った。

そう聞いた「マグル」がどう思うか、それを彼の頭脳で理解出来ない訳でもあるまいに。

それでも尚、彼は今後も厚顔無恥に「マグル」との友好を唱え続けるのだろう。

価値観の違い過ぎる者の交流なんて御互いに不幸しか産まない。そんな現実からは、都合良く眼を逸らしたままに。

……まあ、良い。

彼はやはり「正しい」。

今回の行動もまた魔法界の常識では肯定出来るもので、らしくもなく自制していた老魔法使いは漸く魔法族としての本旨を思い出してくれた。

あの大魔法使いが為すべき仕事はドロレス・アンブリッジの可愛らしい我儘から生徒を守るとか、ハリー・ポッターの学生生活を心穏やかに見守る事ではない。闇の帝王を確実に葬る為の分霊箱探しである。今回は非常に「自然」な形で消えられたのだから、闇の陣営の監視を撤くのも容易く、彼は暫くの間大胆に動ける事だろう。

後は、もう一方の指し手が何を考えているかが解れば良いのだが――

「――ドラコ・マルフォイ。そのバッジは一体何だ？」

睡眠時間前の談話室。

恐らくは他の三寮と同じように校長の逃亡劇についての話題一色だった空間は、僕の言葉でピタリと静まり返った。

「……こ、これはだな」

「咎めている訳では無い。単に何かと聞いているだけだ」

胸元に輝く銀色を慌てて手で隠そうとした彼に、鼻を鳴らす。

そして、僕達の会話が聞こえていると周りは普段通りの会話が出来ないらしい。

そう思い知らされた僕は何時も通りに杖を抜き、指揮棒のように軽

く振った。この一年で使い慣れた魔法は滞りなく効力を発揮し、周囲に会話が漏れる事も無くなった。

こつそり後退りしつつ何かをローブから取り出そうとした人間が一人だけ居たが、彼の眼前に小さな衝撃を飛ばして止めてやった。愚かな事だ。スリザリンの授業を盗聴しようする試みが既に複数回防がれており、その行為内容が広く共有されている事を、その下級生は知らなかったらしい。

蒼褪めただけで文句も言つて来ない彼の姿を暫く観察した後、ドラコ・マルフォイへと視線を戻す。そうして漸く、彼は多くの視線の中——聞こえていないのに御苦労な事だ——重そうな口を開いた。

「……………尋問官親衛隊のバッジだ」

「そうか」

答えに軽く頷き、ドラコ・マルフォイにそれ以上は聞かなかつた。名前だけで何をやりたいのかが想像が付いたし、今直ぐ問題を指摘してやるのも余りに芸がないとも思ったからだ。

どうやらドラコ・マルフォイは、今年度の始め、一体如何なる理屈で高等尋問官殿に膝を屈させたのかという事を忘れたらしい。僕が高等尋問官職に突き付けた論理は尋問官親衛隊とやらにも当然該当するだろうに。彼は彼が思っているよりも「特別」ではない。

「ならば、僕が現時点で言うべき事は一つだ。二ヶ月後にはO.W.L.試験。魔法族として最低限の能力を有するかを図る、君にとって非常に重要な試験が迫っている」

「——」
「そしてそんなバッジはどうでも良い。確認しておかねばならない事がもう一つ」

「またもや同じような事を言う羽目になるとは思っても居なかつた。そう思いつつ溜息を吐いた後、ドラコ・マルフォイに向かって問い掛ける。」

「無論、ハリー・ポッターの退学の件だ」

過去のそれと同様、問わない自由は今回も僕にない。

「ドローレス・アンブリッジは規定上ホグワーツにおける最高権力者

となった。そしてハリー・ポッターが教育令を破ったのは明らかだ。教育令第二十四号、教育令第二十六号。そのどちらでも良い。それらの教育令に基づく限りハリー・ポッターは退学であり、君が彼を追放したいというのなら——試験が近付いている中で面倒を掛けてくれるとは思うもの——既に約束してしまった以上、僕は君を止める論理を持たない」

アルバス・ダンブルドア校長が責任を取った、などという理屈は無意味だ。

「独裁者に真つ当な理屈が通じると思っているのならその人間の頭はどうかしている。法を護らなければならぬのは、僕のように法を無視する力を持たない弱者だけだ。」

「……あー、そ、その事だが、ステイブン」

恐々と、言葉をつつかえさせながらドラコ・マルフォイが言葉を紡ぐ。

「ど、ドローレス・アンブリッジは校長室から締め出された」

「ふうん」

「……………」

「……………」

「だ、だから——」

「——ハリー・ポッターを排するのに、何か支障が有るか？」

何故それがここで意味を持つのか、僕にとっては不思議で仕方ない。

そのドローレス・アンブリッジの無様は、明日になれば広く知られるだろう。

そしてグリフィンボールの馬鹿共はざまあみろとほくそ笑むだろうが、多少なりとも道理が解っている人間であれば、その程度の些事を問題視などしない。

「なあ、ドラコ・マルフォイ。城や校長室が、無機物如きが人間様ホグワーツ校長を選ぶのか？」

「……………」

「違うだろう。現行法の下では、校長の選解任権限はホグワーツ理事

会に在る。そして、現在の状況でホグワーツ理事会がミネルバ・マクゴナガル教授を任命する事は有り得ない。それ程の気概が理事会に有るならば、賢者の石はそもそも校内に持ち込まれず、バジリスクの散歩を受けてホグワーツは早々に閉鎖されており、シリウス・ブラッックは吸魂鬼の接吻により抜け殻となった後で、三大魔法学校対抗試合にしても途中で中止されていた」

ドローレス・アンブリッジが校長になるのは既定路線だ。

ホグワーツ理事会、そしてミネルバ・マクゴナガル教授では役者が足りない。魔法省と戦争しても単体で勝ち得る前任者とは違うのだから、彼女達は法と秩序に従わねばならない。

ミネルバ・マクゴナガル教授を含めた寮監達は、内心はどうあれ、理事会の承認したドローレス・アンブリッジ新校長を受け入れざるを得ない。

「嗚呼、ホグワーツに残る伝説では、相応しくない者を校長室から排除するというモノが有る。しかしその伝説が真実である可能性と、アルバス・ダンブルドア校長が部屋の鍵を閉めて出て行った可能性。普通はどちらが現実的だと思うだろう？ あの校長が現在正当な校長に嫌がらせをしているのだという主張は、決して詭弁や屁理屈でもない」

校長室から締め出された程度の瑕疵は彼女の権限を損ないはしない。

ドローレス・アンブリッジがホグワーツ理事会に承認されたのであれば、そこに手続上の瑕疵はなく、彼女は当然「校長」として扱われるべきである。

「ハリー・ポッターを正式な手続で退学処分にするのが不可能そうだという問題にしても、だ。法の理想と世の実態、規定と運用は別物だ。ホグワーツの生徒を拘束する魔法契約が何と言っていようが、事実上彼をホグワーツ生で無くしてしまう事は可能だ。例えば、シビル・トレローニーと逆の事をやるとかな」

「……………」

「ホグワーツ校長の名の下に、ハリー・ポッターについて校内施設の利用権限の一切を停止する。そうしてしまえば、彼がホグワーツで授業

を受ける事は不可能となるだろう」

「ホグワーツ」の本質とは城ではない。

四人の創設者達が一つの目的の下に集い、そして彼等彼女等を慕う生徒が居る場所こそが「ホグワーツ」だった。この城が跡形無く吹っ飛ばうと、彼等の意思を継ぐ教授が残り、また教えを請う生徒が存在するならば、「ホグワーツ」は無くなりほしくない。

裏を返せば、ハリー・ポッターを城から追い出せる余地は十分ある。学生は当然にホグワーツ城内に滞在出来、また城内施設を利用し得る。そんな内容は、まず間違いなく原初の学生契約には書かれていない。

ミネルバ・マクゴナガル教授達が校外でハリー・ポッターを教えるのは御勝手に。

生徒の身分を正式に剥奪出来ない以上それは己むを得ない事で、しかしハーマイオニーやロナルド・ウィーズリーと共に授業を受ける時間は奪わせて貰う。

ダンブルドア軍団を結成した責、高等尋問官の視点で秩序を乱した責任は問わせて貰う。

「ホグワーツの魔法契約が炎のゴブレット未満の緩さで、かつ校長の誰かが防衛措置を施していないのなら、恐らくこの程度で抜けられる。万一これが通らずとも、ハリー・ポッターに嫌がらせをする為の理屈なんぞ幾らでも用意出来る」

嘘、詭弁、屁理屈、身勝手な仮定。

それらを駆使すれば、人の論理で正当化出来ない主張など存在しない。

「法はな、執行力……力が無ければ、学生の努力目標以下の価値しかない。あの校長が消えた以上、このホグワーツ城内で法的裏付けを持つそれを有するのはドロレス・アンブリッジただ一人だ。だから彼女が本気になってくれるならば、如何に「ホグワーツ」が護ろうと城内からハリー・ポッターを追い出せると確信しているのだが——」

改めて、眼前で沈黙したままの人間を見やる。

「——君はまたもや、ハリー・ポッターの退学に乗り気ではないよう

だ」

ドラコ・マルフォイは更にたじろぎ、余りに動揺したのか、手から何かを落とした。慌てて拾ったものの、僕がそれが何かを認識する時間としては十分だった。

一通の手紙。

どうやらドラコ・マルフォイは、尋問官親衛隊のバッジ以上にそれを隠したかったらしい。

「……………成程、成程」

手紙に書かれた名、或いは封蝋は見て取れなかった。

しかし、相手を察する事は可能だった。このタイミング——あの校長がホグワーツを去った直ぐ後、ふくろう便が生徒に届く事も稀な夜間の時間帯に受け取った手紙ともなれば、その差出人は殆ど一人しか有り得ないと言つて良いだろう。

「君も人が悪い。最初から言つてくれれば良かったのだ」

そうしてくれれば、無駄話をせずに済んだ。

「僕はハリー・ポッターを退学にする事に興味は無い。これは既に二度程言つた筈であり、やはり僕の立場は今も変わりはない。そして君が反対の意思を明確に表明するのならば、僕はそれに従う。これもやはり何度も言つた筈だろう？」

「——」

「正直言つて、君が手紙を僕に隠そうとした理由までは解らんのだが……まあ君がこれ以上僕に何かを伝えるつもりがないのならば、この話はこれで終わりだ」

再度杖を振つて呪文の効果搔き消した。

僕はそのまま、取り組んでいた課題へと戻る。

大多数のO・W・L科目に心配は無いが、やはり問題は天文学と薬草学だった。前者は星がどう動くこうと地上に大きな影響が出ないから興味を持ってないし、後者は単純に言葉の通じぬ反抗的な雑草が苦手だ。僕がO（僕）を逃すとすれば——そしてまず間違いなくそうなる予測しているが——その二科目であり、その分手を抜く事は出来なかった。

しかし、ドラコ・マルフォイは立ち去らなかつた。

「手紙の件か？」

問えば、首を横に振る気配。

「……いい、いや。あ、アンブリッジから君に伝言だ」

「内容は想像が付くが、聞かせて貰おうか」

奇妙に震えている声に溜息を吐いた後、再度杖を振り直す。

今度のそれは内容の秘匿というよりは、彼の名誉を守る為だった。

そして唾を飲む音の後に紡がれたのは、案の定の勧誘の言葉。

「……………君にも尋問官親衛隊として、新校長の手助けをして欲しいとの事だ」

「そうか。君は予想出来ているらしいが、まあ断る」

改めてドラコ・マルフォイを見上げる。

衝撃を受けた様子は無かつた。彼は覚悟しており、だが、受け容れられていなかった。

「正しくは、仕事を手伝えという君の命令は受ける。だが、その地位は要らん」

「……………親衛隊の一員になれ。僕がそう命令しても従わないのか」

「ならば、君は他の親衛隊員を納得させられるのか？」

ドラコ・マルフォイが大きく怯んだ様子を見せるのは、最早今更過ぎると思う。

「僕が尋問官親衛隊に就くという事は、単に立場上に過ぎないとはいえ、僕が『純血』と同格になるという事を意味する。ただの半純血の生徒が、自分達と同じ地位に就き、同等の権力を獲得する——そんな真似を、君は彼等に認めさせられるのか？」

闇の帝王が何と言おうとも、『純血』達は何も変わらない。

彼等は決して獣の血が混じる者を同格とは認めない。その現実を闇の帝王は——並外れた開心術士である彼は、一体どう感じていたのだろうか。

「まあ、一応可能か不可能かで言えば可能だろう」

現在の『マルフォイ』の権勢は、有無を言わさず意思を通せる力を持っている。

「しかし僕を親衛隊とする事で多数決の票数が増える訳でもあるまいし、この程度の事で彼等の反感を買うなんぞ無駄だ。それでも君が無理を通したいというのであれば従いはするが、僕としては強力な反対の態度を示させて貰う」

明日になれば「純血」達の意見が変わっている可能性は有り得るが、少なくとも今日の時点では、僕が親衛隊となる事につき同意を得られまい。

そして彼等が反対してくれるのは寧ろ助かる。沈むと解り切っている船に二人共乗ってやる義理はなく、今後の展開を考えれば、僕は尋問官親衛隊でない方が良い。

「繰り返すが、尋問官親衛隊に対して助力はする。肩書が無いからと言つて手を抜く事もしない。もつとも助力という立場で動く以上、それには君が仕事をする限りという留保が付くが。つまり、君が尋問官親衛隊としてどの程度熱心に働くかに掛かっている。そして個人的な意見を付け加えるなら、僕は君が熱心に働く事こそを期待している」

揺れる灰眼を見つめながら言いつつ、しかし思うのだ。

既に結果は見えていると。

今までの五年間を見て来た限り、ドラコ・マルフォイという人間は残念ながら辛抱強くない。そして今回アルバス・ダンブルドアが魔法族の模範を示してくれた以上、グリフィンドールを筆頭として尋問官親衛隊は手痛い反撃を受ける事にもなるう。ドラコ・マルフォイが尋問官親衛隊である事など忘れ、O. W. L. 試験の勉強に励むようになるまで一週間か、それとも二週間か。一ヶ月もてば快挙と言えるかもしれない。

「……嗚呼、そうだ。この返答は、ドロレス・アンブリッジには僕から伝えておく。だから彼女への言い訳を君が考える必要は無い。それは僕の仕事だ」

「他には?」

「……無い」

それで話は終わりだった。

ドラコ・マルフォイは暫く立ち竦んでいたものの、僕の論理を打ち砕く事が出来ないと悟ったのだろう。彼は何時の間にか立ち去っていた。その瞬間に気付かなかったのは、それだけ己が深く思考に没頭していた証だろう。そう思いつつ、杖を振って呪文を解除し直した。

ドラコ・マルフォイが隠そうとしていた手紙。

あの送り主は当然彼の実家、ルシウス・マルフォイ氏からの物に違いない。

アルバス・ダンブルドア校長がホグワーツを出ていった。

その情報が魔法大臣経由でルシウス・マルフォイ氏に伝わる可能性は有るが、しかし事件の重要性を思えばドラコ・マルフォイの方から伝える理由が無い。彼は他の三寮の生徒と同じく夜闇の中ふくろう便を飛ばし、そしてあの手紙は彼の報告に対する返答なのだろう。夜間に生徒の下へと届く手紙が、普通の送り主による普通の内容である筈がないのだから。

そして手紙の内容の方にしても、全てを言い当てる事は出来ないが、たった一つだけ——その手紙が運んで来た「命令」の内の一つならば、神ならぬ僕でも的中させられる。

闇の帝王は今学期当初、ホグワーツに興味が無かった。それはまず間違いない。

会話や報告をしている際のスネイプ教授の反応。冬期休暇前にハリー・ポッターがドロレス・アンブリッジから逃れられた事実。そして何より、ドラコ・マルフォイが今日の夕刻、『ダンブルドア軍団』の大捕物をやっていた頃までは抱えていた、ハリー・ポッターを退学に追い込むという野望。

それらの証拠全てが、闇の帝王による干渉の不存在、これまでのホグワーツへの関心の薄さを示している。

しかし——

「——今は、違うのか」

ドラコ・マルフォイの態度の変節は、ほぼ確実に「上」から止めら

れた事によるもの。

ホグワーツを護る最強の盾は消え失せた。そして闇の帝王は、この状況下でハリー・ポッターが退学になって貰っては困るらしい。

支配の座

「モンタギューが消えた」

深夜のスリザリン談話室。

ドラコ・マルフォイは僕の机の前の椅子に座り、そわそわとした様子を見せていた。

しかし、彼は何時もと違って中々僕に話を切り出そうとはせず、三十分程待つて談話室から他の人間が消えるのを見届けてから漸く、至極小さな声でそう言った。

それは唐突に紡がれた言葉でもあったが、今更僕に驚きを与えるものでは無かった。

一瞬だけドラコ・マルフォイを——魔法の守護下でも安心出来ないのか、片手で口元を隠している彼を見た後、再度分厚い呪文学の本へと視線を戻し、経年劣化で端がボロボロになっているページを捲った。彼の発言に一々驚いてやる程、僕はドラコ・マルフォイに対する奉仕の精神を持っていないのだ。

「そうか。それで？」

「……それで、って」

「それがどうしたと言い変えても良い」

自然と湧き出てきた欠伸を噛み殺しつつ言葉を継ぐ。

「今日君達が尋問官親衛隊として何をしていたかは聞き及んでいるし、その一員であるグラハム・モンタギューに『変なこと』が起こったのは今良く解った。が、その事実だけを伝えられても、君が僕にどうして欲しいかは解らない。個人的に興味を惹かれる事態でもないしな」

気の抜けた返答に寄越されたのは怒声。

先程まで不安そうだった彼は、僕の真つ当な返答が大層不愉快になっただけらしい。

しかし毎度毎度だが、この魔法は本当に素晴らしい魔法だ。これを学んでなければ、ドラコ・マルフォイが今年何度スリザリン生に迷惑を掛けていたか解らない。

「……っ!? その程度!? 解っているのか……! 朝に寮生が一人消され、今もまだ見つかっていないんだぞ!? それをどうでも良い事のように君は——」

「——なあ、君はグリフィンドールから反撃を受けないと思っていたのか?」

「——」

彼は今年、僕に反論をしない——非常に良くない傾向が有る。

だから視線を合わせないまま、可能な限り優しく問うたつもりだが、その配慮は今回も無意味だったようだ。暫く待っても答えが返って来ないので、渋々ながら再度視線を上げる。ドラコ・マルフォイの淡い灰色の瞳は、脅えと恐怖によって揺れていた。

実に意外な事だ。

僕はもう少し長く持つと考えていたのだが、ドラコ・マルフォイは既に「仕事」に音を上げようとしているようだ。スリザリン生一人——親衛隊の仲間が消えた事は、彼にとっては余程衝撃を与える事態だったらしい。相も変わらず彼は楽観的というか、育ちが良過ぎるが故に最悪の事態を予想出来ない所が有る。臆病な蛇スリザリンにしては割と珍しい。

「ちなみに聞いておきたいのだが」

未だ動揺を治め切れていない彼に嘆息し、僕から話を続ける。

「今の反応から見ると、君はグラハム・モンタギューがグリフィンドールのせいで消えたと看做しているようだ。けれども、そう考えた理由は一体何処に在る? 現在彼の姿が見えなくなっているとしても、自分の意思で何処かに身を潜めたという事も有り得るだろう?」

「……スネイプ先生が教えて下さった」

「どういう形で?」

「……ウィーズリー二人がモンタギューをキャビネットに突っ込んで、それ以降はあいつの姿が見えないと。匿名の生徒による告発だそうだ」

「ほっ?」

その言葉には素直に感心した。

感心の先は勿論、我が主や寮監殿に対してでは無かった。

「わざわざ匿名の告発と表現するとなれば、その証言者はグリフィン・ドールで、ミネルバ・マクゴナガル教授経由で寮監へと伝えられたという事か？ まあ仮に違ったとしても、双子の行動を見ていた者達の中で、一人の人間が忽然と消え失せた事をヤバいと思える感性の持ち主は居たという訳か。まったく、ホグワーツの未来は明るいな」

「呑気な事を言っている場合か……！」
「そういう場合だろうに」

ドラコ・マルフォイは一体どうして「マグル」的な事を言っているのか。

「グラハム・モンタギューは消え失せた。何処に飛ばされたかも、生きているかどうか不明。つまり単純に見れば、今回の事件はセドリック・デイゴリー及びハリー・ポッターの消失と何も変わらない。その上で、彼の両親が新校長や寮監によってホグワーツに呼ばれた形跡は？」

「……僕が知る限りは無い」

「ならば、そこまで大騒ぎする事でも無いんだろうさ」

愕然とした表情を見せる彼を他所に、もう一度一人嘆息する。

誰も彼も魔法族に幻想を抱き過ぎている。そしてその幻想による不利益が自分の身に降りかかって初めて、自分達の後進性を実感するらしい。

「君はもう少し、魔法界という物を理解していると思ったがな。三年前にホグワーツの休校が検討されるまで、一体何人の生徒の犠牲が必要だったと思っている？ その事を念頭に置けば、たかが一人行方不明となっただけで「ホグワーツ」が動揺する筈も無いと解るだろうに」

ホグワーツは依然平常運転。

校長……前校長がアレだったのだから、この世界が変わる筈も無い。

「まあ、去年のハリー・ポッター達は例外中の例外。如何に内側からとはいえ、何重にも魔法が掛かったこの城から抜け出すのは簡単ではな

い。彼の転移先は校内である可能性が高く、そうでなくとも近場だろう。数日もすれば痕跡程度は見つかるさ」

心配なら精々彼の魂の安息を祈ってやる事だと、雑に告げる。

そして僕はグラハム・モンタギューにそうしてやる程、気の良い人間ではない。

「……君はまるでモンタギューが、し、死んでいても可笑しくないように言うんだな」

「実際そう言っている」

「——」
惚けているのか、本気で気付いていないのか。

本に視線を落としたまま、絞り出すような言葉を肯定する。

「ホグワーツ教授陣、屋敷しもべ妖精、ゴースト、肖像画、そして城外のケンタウルスや水中人等々。『ホグワーツ』には多くの眼が有る訳だが、グラハム・モンタギューが未だに見つかっていない時点で十分異常だ。億が一ホグワーツの敷地外に飛ばされたとしても、公然と魔法を使いでもすれば魔法省の方から見付けてくれるしな。しかし、そうなっていない。これで良い想像をしろという方が無理だろう」

転移先が城内であっても、命の危険を齎す部屋は少なからず存在する。

仮に危険な部屋に飛ばされた訳では無くとも、転移の過程で身体がバラけて大怪我しているという可能性も考えられる。運よくバラけるのを避けられたとしても、人目に付かない部屋に閉じ込められればその末路は餓死か衰弱死だ。

更には城外に飛ばされる可能性も必ずしも零という訳ではなく、敷地内で有ったとしても飛んだ先が禁じられた森であれば最早手遅れである。

我が寮監なんかは御悔やみの言葉でも考えている頃かもしれない。

「そう驚く事かね？ 生徒の死体が挙がるなんぞこの古臭い世界では良く在った事だろうに。二年連続は割と快挙かもしれんが、さりとて前例が皆無だとも思わない」

そして視線を向けずとも、彼がどんな反応をしているかは手に取る

ように解る。

去年までは余り思わなかったのだが、今年に入ってから以降、彼は本当に死喰い人としてやっていけるのだろうかと思ってしまう事が多い。今回もまたそうだ。

この点に限ってみれば、ドラコ・マルフォイはビンセント・クラッブやグレゴリー・ゴイルを見習うべきである。彼等にとっては一人の死など夕食のメニューより価値が低く、自分達を柵に上げてグラハム・モンタギューの愚かさを笑ってしまえる事だろう。

「しかし、てつきり僕は『変なこと』が起きた人間が続出すると思つていたのだがな」

その水の向け方が嫌味に満ちているのは自覚していた。

ただ、現状を招いてくれた事に何も感じるなというのは無理な話だった。

「例えば君は、ハリー・ポッターによって医務室送りにされるものだと考えていた。グラハム・モンタギューの代わりに第一の犠牲者になっていたとしても不思議に思わず、この手の話も医務室の中であるものだすら想定していた」

「……しゅ、主人を主人と思わぬ事を言ってくれるんだな」

「ならば主人らしい振舞いを心掛ける事だ」

単なる反抗心から向けられる敵意など何も怖くない。

ドラコ・マルフォイが僕の皮肉を聞きたくなかったのなら、まずドロレス・アンブリッジ如きに踊らされるべきではなかった。

「君にとつての今年の最優先事項が何か、僕は口を酸っぱくして言っていた筈だ。それにも拘わらず、君は僕の知らない所で下らん御遊びに手を染めた。闇の帝王から受けた仕事の一環として行っているなら何の文句も無いのだが、やはりそれでも無いんだろう？」

「……じゃあ、君は僕を止めるべきだったんじゃないか？」

「君が尋問官親衛隊に就く前であれば、当然止めたとも」

恨みがましいというより、絶るような言葉を鼻で笑う。

「しかし、君達は杖より言葉で戦う者なのだ。吐いた言葉が安く見られて良い事はない。建前として上位に在るドロレス・アンブリッ

ジ、そして何より他の「純血」の前で尋問官親衛隊に就くのを受諾した以上、それを君が撤回するなど有り得ない」

何かの決定の際に一々僕に問い合わせる義務は存在しないが、それでも相談無しに己のみで決めるならば、その決定の責任を負う覚悟位はしておくべきである。

「勿論、面子や体面なんぞ言つてられない程の大事なら僕も介入はしただろう。が、少なくとも今回の件で君が死ぬ事はなさそうだったしな。君がまず最初に向かう場所はハリー・ポッターの所だと解り切っているが、ハリー・ポッターには君を殺せん」

「……でも、モンタギューは消えた」

「それは確かに僕の失敗だ。ハリー・ポッターがたった一度、ダンブルドア軍団の露見程度で怖じ気づくとは思わなかった。彼が君を優しく医務室送りにしなかった場合については、予め危険を想定して動いておくべきだった」

まあ、痛い目に遭う方が君も学べるだろう。

その考えが僕の眼を曇らせた事も否定しえない。

やはり隠す必要も無いので、己の本心も最後に付け加えた。

「……君は、こうなると解っていたのか?」

ポツリと呟かれた疑問へ、冷然と答えを返す。

「それはそうだろう。初めからすんなり行かないと考えていた」

失敗するとまでは言わないが。

大反発は必至であり、騒動も不可避だとは推測していた。

「新学期始め、スリザリンはドローレス・アンブリッジに不服従を示した。権威も権力も持たない地位、或いは人間に対し、その言う事を聞いてやる義理は無いとな」

彼女はスリザリンが戴くべき王では無く、故に自分達が納得出来ない授業を強要されると知れば、当たり前のように反抗の意思を示した。

「その理屈は此度においても妥当する。尋問官親衛隊の命令なんぞに従ってやる義理などない。グリフィンドールを筆頭に、ホグワーツ生

の大部分がそう考えた。そしてその結論が今回グラハム・モンタギューに降りかかった。ただそれだけの話に過ぎない」

「……っ。で、でも、ホグワーツ校長が決めたんだぞ!? 君はドロレス・アンブリッジを正式な校長だと言った。だったら彼女の、ひいては僕達の言う事を聞くのが筋だろう……!」

「理屈の上ではそうだな」

ドラコ・マルフォイの言い分は何ら間違っていない。

尋問官親衛隊が校内で如何に非道を為していても、そこに法的瑕疵自体は無い。

ホグワーツ校長の決定は、この校内において絶対だ。法律と校則はそう規定している。

「だがな、君達『純血』は魔法大臣の言う事をどれだけ聞くのだ?」

All matters relating to the magical community in Britain are managed solely by the Minister for Magic. 魔法大臣はこの魔法界に關する全ての事項を管轄する。訳だが、彼ないし彼女に命令されたとして、はいそうですかと君達は黙って受け容れるのかね?」

「違うだろうに。君達は魔法大臣にそれ程の力を認めない、大臣が命令出来る事項には当然制約が付き纏うと考えており、魔法界の頂点などとは更々認識していない」

法律が何と決めているかなんぞ関係無い。

「純血」達はそれとは別の論理の下に、従うべきか否かを考えている。

「……でも、全く命令を聞かない訳じゃない」

「そうだな。例えばオッターリン・ギャンボル魔法大臣は君達に言う事を聞かせたものな」

ホグワーツ特急の利用を拒絶する『純血』達に、かの魔法大臣は either rode the train or did not attend school. 従うかホグワーツを去るか脅して受け容れさせた。

まあ、やはり魔法省がホグワーツ生の停学・退学権限を持っているどうかという点は微妙なので、その脅迫はホグワーツ校長との協力が

前提であつた事だろう。ただ魔法大臣が「純血」に要求を通したという点においては変わらず、その点で彼女は地位の上下を誇示するのに成功したと言えるのだが——けれども今回も同じように考えて貰つては困る。

「君は権力機構の……支配の本質を勘違いしている。人間は立派な肩書が付いてる者に従うべきだ、そんな勘違いをな。魔法大臣などという不自然な玉座を念頭に置くからそうなるのであり、ドローレス・アンブリッジは見ての通りで、君ですらも完全に逃れられていない」
つくづくあの玉座は歪で仕方ない。

そして一番の問題は、それを意識している人間が稀だと言う事だ。この部分に関してはコーネリウス・ファッジ、そして歴代魔法大臣に深く同情を覚える。特にアルバス・ダンブルドアが事実上頂点に座っていたこの数十年間は、さぞかし肩身が狭かつた事だろう。

「だが、他の常識的な大人の行動を見れば解らないか？ アルバス・ダンブルドアは魔法大臣を平然と叩きのめして出て行つたし、ルシウス・マルフォイ氏とて内心どう考えているかは明らかだ。彼等は魔法大臣なんぞ軽んじており、軽蔑すらしている。真の魔法族にとつてこれらの振舞いこそが良心であり、模範であり、理想像だ」

「……魔法大臣に従う義理は無いと、君は言うのか」
「力のない人間に、だな」

苦々しさを噛み締めた言葉に、少し違ふと付け加える。

「魔法大臣云々ですらない。いいか、支配の根源となる権威と権力は、宝石で飾られた椅子から自然に湧いて出て来るモノでは無い。ましてや彼等は偉いですと法律や約束により決められて偉くなる場合なんぞ、本質的には有り得ないのだよ」

何処の歴史を見てもそんなモノは存在しない。

そう見える場合は、更に偉い人間から——皇帝や教皇、もしくは偉大な親などに代表される他の権力装置から借りているだけだ。そして借り物に過ぎない以上、侮られれば当然のように容易く転覆し、座っている椅子ごと滅ぼされてきた。

「君達「純血」の家系。或いはホグワーツ校長。それらが魔法界で大

きな顔を出来るのは、法律に決められているからか？ 違うだろう。まあホグワーツ校長の方は、現在においては一定程度法的裏付けがあるが、やはり昔はそうでは無かった。『純血』の方は今でも法規定は無い。『聖なる二十八』にしても公的な物ではなく、その枠組みは現在政財界で権勢を振るっている家々とは必ずしも一致しないからな」

「であるのに、それらが何故地位を保っているか。別に難しい事ではない。君達は時に杖で、時に金で、そして時に交渉で、何より結果と実績をもつて力を誇示し、その立場を確立し、現在進行形でそれを維持する為に努力しているからだ。今でこそ単にその肩書だけで——たとえば、君が『マルフォイ』だというだけで偉そうな顔を出来るが、誤解を招く事を承知で言えば、それは本来の支配の構造として不自然なのだ」

『純血』達の血みどろの抗争は言わずもがな。

彼等の多くは姻戚関係にあり共闘体制を敷く事も多いが、決して一枚岩ではないし、歴史的には普通に殺し合つて来た関係でもある。

またホグワーツ校長とて、権力闘争と無関係ではいられなかった。

中世以来の旧き魔法の牙城。城内に貯め込まれた数々の強力な魔法具。ケンタウルスや水中人、屋敷しもべ妖精に代表されるヒト族。深き森林に棲まうユニコーンなどの稀少な魔法生物。そして何より、私兵ないし人質として利用しうる幼き魔法族達。悪意を持つ者にとつて、それらが魅力的に映らない事は有り得ない。

『ホグワーツの歴史』は余り語りたがらないが、魔法史を丹念に見て行けば『ホグワーツ』が抱えてきた暗部は容易に読み取れる。『純血』達ならば、それらの直接的な記録や証拠を持つてすらいいるかもしれない。

「支配の成立には、何処かの分野で相手を凌駕する力を所持し——この力は崇敬や愛情に代表される個人的魅力、富や知識など他人に提供可能な資力、腕力や軍隊といった単純な暴力、そして行政や裁判権による制裁力等々、何でも良い——且つ、それをもつて上位者としての関係を構築する事が必要となる。強制と合意、矛盾めいた二要素が併

さつて初めて成立すると言つても過言では無く、どちらかが著しく均衡を喪えば支配は崩壊する。個人であれ、社会であれ、な」

「……………」

「或る社会の頂点に据えようとする椅子、支配の座と呼ぶべき地位では、特にこれが顕著に現れるし、問題となる」

「ここではホグワーツ校長だな、と言葉を繋ぐ。」

「確かに校長の椅子は、この魔法界で最高位の格式を有する。だが、それに座つただけで誰もが従つてくれる——下位の立場に降りる事を認めてくれるとは限らない。ホグワーツ教授やホグワーツ生がそれを認めない事は現実的に可能であり、事実、今そうなっている。ドローレス・アンブリッジは関係性を構築するどころか、そもそも力すら持つていないからな」

「手続的に正当な校長だろうと、実態として校長でないという事は有り得る。」

「だからホグワーツが統制を喪い、無秩序状態に陥るのは初めから眼に見えていた。」

「尋問官親衛隊も一緒だ。それはホグワーツ監督生制度への挑戦であり、一部分においてはホグワーツ教授の権威に対しても挑戦している。そしてホグワーツ生は君達の力を受け容れる事を承服していないし、上下関係についても合意していない。その事を示すように、ウィーズリーの双子はアルバス・ダンブルドアに倣いグラハム・モンタギューを叩きのめした」

「彼等は正に人間の、そして魔法族の鑑だな、と粗略に褒め称える。グリフィンドールを賞賛するのは鳥肌が立ってくるものの、腑抜けばかりのホグワーツの現状を見るに、率先して動いた彼等は認めざるを得ないだろう。」

「こんな事例は何時の時代、何処の歴史でもよく有る事だ。非常に雑で簡略的な表現をしてしまうならば、勝利なくして支配なぞ成立しない。そう、勝利だ。ここ魔法界において——」

「…………マグルの世界ではどうなんだ？」

「——ん？」

「何処の歴史でも、と君は言っただろう。マグルも変わらないのか？」
「……………嗚呼、そうだな」

突如差し込まれた疑問には思わず目を瞠り、返答が遅れた。
非魔法界においてどうか。

その事は僕が意図して触れようとしなかった内容であり、触れなくても説明出来ると踏んでいた内容でもある。

そしてはつきり言って、彼から質問してくるのは予想外だった。まさかドラコ・マルフォイがそこまで彼女の影響を受けているとは思ってもみなかったのだ。

「マグル」に対して偏見を持たない聖二十八族というのは非常に珍しい。

魔法族は基本的に自分が魔法族である事を——己に流れる魔法の血を誇りに考えており、だから魔法族の極点である聖なる二十八は、^{マグル}獣の血が混ざる半純血を侮蔑するし、人知れず魔法族らしくない人間を葬って来た。
バーテミス・クラウチ氏のような

しかし彼女は、他の聖二十八族のように真つ当に育つ事が出来なかった。

何故なら彼女が死の宿命を背負わされたのはまさに魔法族の血が原因で、彼女にとって血とは呪いであり、幻想を抱く事など不可能であつたからだ。

「君の質問に答えるが、非魔法界でも変わらない」
彼女について触れればドラコ・マルフォイの逆鱗にも触れる。

その事は今年度を過ごす内に薄々察していたから、何事も無いように回答を続けた。

「最も顕著なのが *Royal family* 王 家」だ。魔法界では大勝ちする「純血」は出なかつたが、非魔法界では違つた。そしてそれらの家ですら基本的に有力な封建領主の一つ、力有る一族の一つ以上のものではなく、臣下により下剋上を受けたり、滅ぼされたりした。絶対王政期には強大な権力を握つたが、歴史的に見れば非常に短期間の事だ。その後には平民に引き摺り降ろされた家は数知れない。伝統や良血、称号は、負けた彼等を救つてくれなかつたな」

古代で言えばユリウス・クラウディウス朝。

カエサルともオクタウィアヌスとも全く関係を持たない者が、果たして“Caesar”や“Augustus”の称号を掲げる事が許されるのか。そんな疑問は“ローマ皇帝”という概念が存在しない当時には間違いなく在った筈である。

支配者としての正統性をネロ以上に持つ者は有り得ず、しかしかの暴君は考え無しに元老院と近衛隊を敵に回した事で叛乱の正当性をくれてやり、彼とその血族のみが受け継ぐべきであった称号をむざむざと他家に奪われてしまった。

中世で言えばメロヴィング家やウエセツクス家。

メロヴィングが堕ちたのは彼等が弱かったからだというより、単純にカロリングが強過ぎた。ピピン二世、カール・マルテル、ピピン三世、そしてカール大帝。連続して英傑を輩出した一家は、極めつけに教皇の権威を借りる事によって主君を平和的に幽閉し、自分達の王位を確立する所まで辿り着いた。

ウエセツクスは今も血を残すものの、アングロサクソン系の実質的な最後の王エドワード懺悔王は、ノルマンという征服者の前に膝を屈し、家としては滅亡を迎えた。元々ウエセツクス家は、後に北海帝国を建設する事になるデーンによって既に一度王座を奪われていた。エグバートやアルフレッド大王の下で繁栄を謳歌した王国は最早斜陽であり、最後に滅ぼしたのが単にノルマンだったに過ぎない。

敢えて逆の例、近代の特異点を挙げるならばベルナドッテ家か。

スウェーデン王家に招かれたフランスの平民軍人は、1789年に始まる革命戦争の勝者として、そして法律と国民の擁護者として王位に昇った。誰もが直ぐに潰えると考えていた家は、しかし苦難に喘ぐ国を建て直した立役者となり、血筋を残す事に成功した。そして欧州の多くの国で古い血を持つ家系が追放・廃絶された中、現在においても玉座を守り続けている。

勝者で居続ける事なくしては君臨出来ないし、逆に勝利し続ければ新たに君臨出来る。

王ですら例外無いと歴史は語る。

「そして現在の非魔法界における実質的な頂点、”Prime Minister”。その役職は、法律によつて生み出された椅子では無い。首相という椅子は自然に——というには人為的過ぎるが、政争の勝者が既成事実として造り上げた椅子だ。支配、もしくはは権力が如何なるものかを学ぶ教材としては、魔法大臣よりも遥かに適切な教材だと言えるかもしれない」

先を続けるか、と視線でドラコ・マルフォイに問う。

彼は顔を大きく背けたが、話の内容が内容であるだけに、その反応は先を促したも同然だった。ローブの中の杖を軽く弄り、魔法の守護が変わらず維持されている事を確認した上で、僕は話を続けた。

「君の反応を見る限り、どうやら首相の方を掘り下げた方が良さそうだ。……まあ、そうだな。数百年前の非魔法界の歴史を語つても、カスバート・ビンズの話以上に眠くなる事請け合いだ。何より今に繋がるそちらの方が君の将来にも役立ち得るかもしれない」

歴史の成り行き次第では、ドラコ・マルフォイが首相に会う未来も有り得る。

折角彼から持ち掛けてくれた以上、話はしておくべきなのだろう。

「では、Prime Minister首相。これは魔法界における魔法大臣と対比される事が多いが、実際は似ている部分の方が少ない。成り経緯も違うしな。同一視出来るのは額面の説明だけで、実際は権威も権力も比べ物にならない。非魔法界の首相は正しく統治機構の頂点であり、最も強力な政治的権力を有し、非魔法界の未来を決める地位に在る」

首相と魔法大臣を並べるのは、騎士とサムライが同一であると語るような暴論だ。

文化も社会も違う職位を同じように語る事は決して出来ず、そして同じブリテンに在ろうが魔法界と非魔法界は”異国”なのだ。特に「ハーマイオニーのような”マグル生まれ”はその事を失念し、軽視し過ぎていように思える。」

「しかしながら、現在の政府において首相が占める存在感に反し、その椅子が法的に用意されたのは極々最近だ。Constitution国家の根源法によつて首相の地位が承認されたのはほんの九十年前。議会法では更に後。言

うまでもなくアルバス・ダンブルドアよりも若い」

「……待て。おかしくないか。僕も良く知っている訳じゃないが、首相と呼ばれる奴はそれ以前にも居た筈だぞ。だって、マルフォイ家の歴史に抛れば——」

そこまで口にして、失言に気付いたドラコ・マルフォイは黙り込んだ。

彼をそうせしめた理由は……まあ、単にそれが在ってはならない歴史だからだ。国際機密保持法以降は特に、そして保持法以前ですらも、マルフォイ家は下等生物マグルから距離を置いてきた。それが彼等の現在における公的見解である。

「初代首相として挙げられる人物は、大抵の場合、サー・ロバート・ウォルポールだ」

故に僕は礼儀或いは忠誠として、その失言を聞かなかった事にした。

「彼は十八世紀前半に活躍した人物であり、君にも伝わる表現をすれば、Witchcraft Act 1735 秘密保持法の成果たる 魔法が非魔法界の議会で通った時に権力を握っていた人物だ。しかし多少注意深い人間は、彼を事実上の首相だったと表現する」

「……事実上？」

「ああ。何故なら、サー・ロバート・ウォルポールは Prime Minister 首相なる地位に就いた事なんぞ一度も無かったし、他人からそう呼ばれる事に対して明確に嫌悪と反対の意を示したからな。だから彼を首相と呼ぶべきでないという意見には一理有るのだ」

互いの視線が交錯する。

彼の瞳の奥底には、疑問と混乱が透けて見えた。

「……何で、そいつは首相にならなかつたんだ？」

「簡単に言えば、当時は『首相』の椅子など存在しなかつたし、当然ながら支配を正当化する座でも無かつたからだ」

他人との上下を規定する立場ではなく、権力が付随する称号でも無かつた。

「……………そいつには他の地位や肩書は無かつたのか」

「いや。彼は財務第一卿という地位を持っていた。まあ財務大臣も一応そうか。それこそが当時の彼の立場を保証し、大きな権力を振るう事を許した政府の公的役職ではある。そして彼の地位——王の金庫番が弱い役職だったという事は、口が裂けても言えないな」

カネが無ければ統治は出来ない。

何時の時代、何処の国家でも通用する理屈である。

「しかし重要なのは、財務第一卿が『首相』の別名では無いという事だ。現在の非魔法界の法もその事を裏付けている。現行法は首相が必ず財務第一卿を兼職すると規定しているが、同じ職の別名に過ぎないのならばこのような規定が生まれる筈もないからな」

それらが同一であるなら、首相という憲政外の地位を事後追認する必要は無い。

財務第一卿の仕事としては区分しきれない仕事——閣議の主宰、王への優先的謁見や助言、広範な行政権の行使等の特権的地位を認めざるを得なかつたからこそ、『首相』の地位は公式化され、創設された。裏を返せば、それまで『首相』の政治的行為に根拠などなかつた。「この島における『首相』は約百五十年以上、概念上の存在に過ぎなかつた。対岸で人民の皇帝や共和制が生まれても、合衆国が大統領を生んでも、この国は例に倣わなかつた。しかしその一方、第一の臣下という曖昧な存在は暗黙の内に存在し続け、今や我が物顔で政府を牛耳っている。頂点が女王陛下であるのは今も不変だが、最早形式的なものに過ぎない」

政府行為の合法性を担保するのは、現在においても大半が女王大権のままだ。

だがどんなに熱心な王室崇拝者であろうと、現在の女王陛下が政治の実権を握っていると認める者は居ないだろう。

理論上無限である大権は、既に臣下が政治を壟断する道具に墮している。

「……どうして、どうしてそんな事になっているんだ？ 前から僕は不思議だったんだ。王様とは一番偉い存在なんじゃないのか？ 何

で首相とやらが権力を振るっているんだ？ 他のやつらは、それを止めようとはしなかったのか？」

「止めようとしたとも」

寧ろ、抵抗しない理が何処に在ろう。

「財務第一卿が優越するという法慣習ルが存在しなかった以上、他の国務大臣は規定上では同格だった。だから彼等は財務第一卿の“独裁”を止めようとしたし、また、他の国務大臣として“首相”になろうとした。その結果、過去には首相と第一財務卿の職が別人によつて兼ねられていたり、首相と呼べるような人間が同時期に二人存在したりする。後は国務大臣あたりも一応抵抗したかもな。時代の変化により権限が奪われつつあったとはいえ、大法官や枢密院議長あたりは一時代を築いた程の伝統有る地位では有った」

地位は権威と権力を直接担保しない。

ロバート・ウォルポールは特異点であり、当時の権力者が偶々財務第一卿という地位を握つて国政を恣にしていたに過ぎない。

そう解釈する者が圧倒的多数だったからこそ、権力への挑戦を受けた。

「何より忘れてはならないのは王権だ。君臨すれども統治せず。その題目は財務卿を含む臣下が都合良く創出したもので、臣下の“独裁”を真に受け容れる王なんぞ居なかった。現代ですら、本質的に未だ認めていないと言つて良いかもしれない」

立憲君主制の歴史は、王とそれ以外の闘争の歴史だ。

ジョージ一世は英語を喋れなかったと言われるが、当時の貴族は知識階級の頂点である。多言語話者である事など左程珍しくもなく、王と臣下で意思疎通に問題が生ずる事は有り得ない。必然、臣下に政治の全てを任せる事も無い。

そしてジョージ一世以降の王は当然ながら英語話者である。

君臨するだけの御飾で居るのが伝統であるなんて、軽々しく成立する訳が無い。

「しかし戦つて来たのは——自身の権益拡大の為に進み続けて来たのは財務第一卿の方も同じ。そして歴史の勝者となったのは財務第一

卿だ。その椅子は他の國務大臣や國務大官に対する優越性を確立した。流石に王の権威までは上回る事は出来なかつたが、権力の面については凌駕した。誰もが財務第一卿の「独裁」を認めざるを得なくなつた。その結果が「首相」の誕生だ」

臣下は二百年をかけて漸く、「Prime」の称号を王から奪い取つた。

臣下一人が国王大権を濫用する為には、曖昧な地位の方が都合が良かった。

そもそも臣下が近代社会で権力を振るうには、王の権力など本質的に不要だつた。

何れと解釈するかは個々の立場によりそうが、何にせよ、「首相」の地位は創設される事となつた。ロバート・ウォルポールを初代に擬制し、そして現代まで続いている。

「まあ、今のはざっくりとした大枠の説明だ。多少省いた部分も有るし、更に詳しく説明しようと思えば長くなる。だから最後に現状の事実だけを述べよう」

「……………」

「今では首相を頂点とする國務大臣の序列が確定し、國務大官の多くは廃絶され、枢密院は殆ど儀礼的存在と化し、そして女王陛下ですら権力に枷を嵌められた。非魔法界の国家の舵取りをする人間は、誰がどう見ても「首相」だ。その椅子こそが歴史の勝者であり、支配の座であり、しかし今後もそうであるかどうかは解らない」

支配の座は、決して永遠では無い。

創設された首相の椅子は、ロバート・ウォルポールから数えてもたつた二百五十年だ。更に二百五十年後には存在しなくなつていたとしても何ら不思議な事ではない。

「話を魔法界に戻そうか」

ここは立憲君主制について語る場では無い。

ドラコ・マルフォイは混乱した顔をしたままだったが、文句はないようだった。

「魔法界で支配の本質を顕著に体现している例は、言わずもがな闇の

帝王だ。アルバス・ダンブルドアですらホグワーツ校長という玉座に座ったが、彼は公的な地位や身分を一切持たなかった。が、君達「純血」達は逆らおうとしていないだろうか？ 彼が彼である。唯一その理由のみで、闇の帝王は君達の上に君臨している」

叛逆を禁ずる法など無い。

けれども、そうする者は殆ど居ない。

闇の側に立たんとする者は当然のように頭を垂れ、光の側に親和性を持つ者ですら彼に敵意を示す事は稀だった。特に魔法戦争後期において闇の帝王に表立って抵抗したのは、魔法省の一部と不死鳥の騎士団——ほんの一握りの変わり者達だけだった。

「……嗚呼、確かに彼はサラザール・スリザリンの子孫だと言われては居る」

ドラコ・マルフォイの眼から反論を読み取り、そう付け加える。

「しかし、その子孫を称する人間は闇の帝王が唯一無二だったか？

そしてスリザリンの子孫全てが例外無く魔法界の王として相応しいと、そう「純血」から広く認められて来たか？」

「——」
「違うだろうか？」

事実、「ゴーント」は滅んだ。

血筋だけ見ればアレ以上に純粋な家系は無かったというのに、他の家が手を差し伸べようとする事もなく、男系の血が牢獄の中で絶たれる事は看過された。

「闇の帝王が正当な支配者の血を引く事は、彼の権力と権威を語る上で欠かせないのも事実である。しかし、闇の帝王が君達の上に立っている決定的な理由は別だ。……まあ、「戦争」が有ったのだろう。実際に血が流れたか否かに拘らず、僕達の知らない所で、互いの上下関係を決しようとする衝突が幾度と無く起きた筈だ」

闇の帝王に従いたがらない「純血」は間違いなく居た筈である。

彼の主張に賛同出来る部分が存在しようとも、彼が半純血——劣^{マグル}った者の血が流れる人間だとすれば、拒否反応の存在は絶対だ。

「しかし闇の帝王は、その殆どに勝ち続けて来た。だからこそ彼は歴

史上初めて名誉称号以外を持たないまま「純血」を一つに纏め上げられたのであり、その身でもって支配や権力とは何かを体現した。だがそんな不世出の傑物ですら、一度負ければそっぽを向かれてしまった。この辺りは地位や肩書を全く持たなかつた事が悪い方向に働いたな」

勿論、敗北は世間の勘違いだったのだが。

父親にも関する事だからか。居心地悪そうに身を縮めた青年に笑う。

「けれども、彼の考えは明らかだ。過去も、現在も」

魔法界から弾き出された半純血は、ただ一点を見つめている。

「己が勝てば変わる。他が何を言ってもこようが、勝者こそが正義である。その思想の下に彼は魔法戦争を引き起こし、そして今も尚、戦い続けている。もしくは、歴史上類を見ない程強力な闇の魔法使いですら、闘争を余儀なくさせられていると言うべきか」

「――」

「それなのに、だ。なあ、ドラコ・マルフォイ。君は尋問官親衛隊という肩書だけで、それもドロレス・アンブリッジ如きから任命された地位を見せびらかすだけで、或いは「マルフォイ」というだけで他の人間達が従ってくれるとでも思っていたのか？ まさか君は、自分が闇の帝王よりも遥かに上等な存在であると考えていたのか？」

だとすれば、酷い自惚れも有ったものだ。

「すんなり行く筈が無いのだ、支配の座が如何なるモノか理解しているのならば」

この世に絶対など無い。

全ては相対であり、疑問を抱かれれば抵抗と挑戦を受ける。

「新校長も。高等尋問官や尋問官親衛隊も。呑気に座つたまま地位を承認されるなど決して有り得ない。自身の権力と権威を万人に認めさせたいならば戦わねばならないのだ。特にそれが既存権力と相容れないならば、大量の血を流す事すらも覚悟した上でな」

ただ――覚悟不足。

今のスリザリンはそれに尽きる。

今回のドラコ・マルフォイも、ドローレス・アンブリッジも例外でなく。

もつとも、 Hogwartz では政治・社会学等の教養を詳細に教えない以上、こうなっているのは必然なのだろうが。

しかし、呆れない訳では無い。確かにそれらの科目は Hogwartz の設立理念の射程外だが、歴史の何処かで教え始めるべきだったろうに。アルバス・ダンブルドアも含め、歴代の Hogwartz 校長は余程教育改革という物に興味が無かつたらしい。

「何にせよ、 Hogwartz 生の抵抗は自然であり、当然の権利だ」

立場上支持出来ないにしても、僕の心情は明確に彼等へ賛同する側に立つ。

「僕のように一々理屈を持ち出さずとも、 Hogwartz 生の大部分は既に直感的に気付いている。新校長や尋問官親衛隊の権威や権力は絶対でなく、自分達が挑戦するのは可能であり、そして戦ってしまえば当然のように勝ち得るだろうと自惚れている。

——何せ君達は、闇の帝王でもアルバス・ダンブルドアでもないからだ」

ふと気になって時計を見れば、既に十二時を回っている。

単純に話が長くなったのか。それともドラコ・マルフォイが僕と会話している場面を他人に見られたくないと思っていたのか。どちらも正しいのだろう。

「更に苦言を呈したい部分は在る。が、きりが無いから止めだ。既に時間も遅いしな。だから今ここで聞いておかねばならない事だけ聞いておく」

——つまり、君は今後どうしたいのだ？

その問いに、直ぐには返答が戻って来なかった。

自分に質問を投げ掛けられたと彼が気付くには数秒を要し、気付いてからは驚愕の表情を浮かべていた。このまま話を聞いているだけ

で終わると思っていたのか明らかで、非常に残念な反応でもある。折を見てルシウス・マルフォイ氏にも相談すべきかもしれない。

「……ぼ、僕の意見を聞いているのか」

「意見ではない。意思であり、決定だ」

それらは見逃せない程に大きく異なる。

「君は僕の主だからな。決めるのは君で、そしてそれを為す為の最低限……とすら言えないが、まあ今回の判断を下せる程度の知識は与えたつもりだ。今の長話にしても、何の意図も無しに行う程に暇ではない」

可能な範囲では最大限ドラコ・マルフォイを尊重する。

その基本方針は変わらない。

「先の話の意図は、まず君に学んで欲しかったからだ。法律や肩書等は絶対では無い——という事に加え、臣下が王の権限を奪い、侵し、超える事は可能だという事をな。今この場で王が指す対象とは当然闇の帝王だ。そして勿論そうしろと言っている訳では無い。そのような疑念を抱かれれば殺されるから気を付けろ。そういう警告だ」
そのつもりがなかうと、上に危険視されてしまえば末路は決まる。

ロバート・ウォルポールや小ピットのように、注意深く振る舞わねばならない。

「更にもう一つの意図は、現時点で尋問官親衛隊が大した事はなくとも、将来的に強力な組織へと変貌させる事は可能だと示唆する事だ。君は当然知り得ないが、小さな党内親衛隊も突撃隊や警察、軍隊を喰い散らかして巨大化した。尋問官親衛隊が同様の事を為し得ない理屈も無いし、魔法界に限ってすら死喰い人という前例が在る。ただこれまで話で解っただろうが、何の努力や苦労も無しには行かない」

闘争と勝利無しの権力確立など有り得ない。

「繰り返すが、尋問官親衛隊は監督生やホグワーツ教授といった既存権力への挑戦だ。まして君達はその力を用いて本日……昨日何をやっていたかを思えば大反発は必至。敵はホグワーツ教授の殆どと、

スリザリン以外の三寮の生徒全て。そして、校外も少なからずか」

古い「ホグワーツ」に郷愁を抱く者は必ずや抵抗する。

卒業生達が校内に行き出せる影響力は限定的とは言っても、無視出来るものではない。

「確かにアルバス・ダンブルドアは去ったし、校長の椅子もこちらに在る。条件さえ揃えば魔法大臣ですらも利用できるだろう。しかし抵抗勢力全てを叩きのめし、こちらの言う事を聞かせる存在へと貶めるのは骨だ。帝王在学時代の死喰い人予備軍ですらスリザリン以外への影響力は限定的だったようだしな。それでも尚、尋問官親衛隊として校内に君臨したいと君が言うのなら、当然二ヶ月後のO・W・L・試験も無いものだと思つて欲しい訳だが——」

何時の間にか殆ど俯いてしまったドラコ・マルフォイの灰眼を覗き込む。

「——まあ、そこまでの覚悟は無さそうか。……気の迷いめいた反発も無しだ」

彼は口を開こうとしたが、人差し指で机を叩けば即座に口を閉じた。

そして他人に止められて辞める程度の覚悟しかないなら、最初から試みるべきではない。

「ならば、今後の君の方針は決まりだ。尋問官親衛隊には可能な限り関わるな」

O・W・L・試験が最優先。

その当初の路線を維持するなら、やはりドラコ・マルフォイは遊んでいる暇は無い。

「今の所犠牲者はグラハム・モンタギューだけのようだが、グリフィン・ドールの甘さも長くは続くまい。同じ目に遭いたくないならば余計な刺激をするな。後から贖いをさせる事は可能だとしても、君が行方不明になる事で喪つた時間は戻って来ないのだから」

「……一度吐いた言葉は撤回すべきじゃない。そう言ったのは君じゃないのか」

「だから、生贄として僕が居るんだろう？」

」
相変わらず。

ドラコ・マルフォイは「純血」らしくない事を言う。

何でも自分でやる「生き残った男の子」は悪い手本だとそろそろ学んで欲しい所だ。

「非常に好都合な事に、僕は尋問官親衛隊ではない。ドローレス・アンブリッジは僕に直接の命令権を持たず、君が僕へと仕事を下請けさせても何の問題もない。まあ部外者を関わらせるなど言うのは可能だが、そんな煩い事を言う気は彼女に無いようだしな」

今日のドローレス・アンブリッジの様子を見る限りは有り得まい。

「結果、君は尋問親衛隊に纏わる面倒の一切を僕に任せ、公然と義務から逃れる事が出来る。沈むと解っている泥船に乗るのはやはり一人だけで良い」

「……ま、まさか」

「何だ？」

「そ、その為に君は親衛隊にならなかつたのか？」

「……嗚呼、僕が気分で断つたとしても？」

バツの悪そうに視線を逸らすドラコ・マルフォイに、笑みが漏れる。

「くくく、半分はそうだ。けれども「純血」である君と違い、僕は何の権力も持たない、か弱いか弱い半純血なのだ。他人に命令権を委ねる危険なんぞ可能な限り負いたくもない。まして相手がドローレス・アンブリッジ、品が良いとは決して呼べない人間ならば猶更だ」

「……………」

「勿論、今の事態になっているのは君の御蔭でもある。君が僕を強制的に親衛隊に入れていれば、こんな見え見えの言い訳すら為し得なかつたからな」

ドラコ・マルフォイは非常に良い主人だ。

ドローレス・アンブリッジで無くとも、ビンセント・クラブブやグレゴリー・ゴイルが主だった場合でもこうは行かなかつただろう。

「既にドローレス・アンブリッジから聞いたかもしれないが、彼女は今日僕に対して「御願い」しに来た。ウィーズリー達がバラ撒いた花

火の処理、更には今後予期される叛乱の鎮圧を手伝って欲しいとな。勿論その場では断つたが、受ける事になるだろうとも伝えて居る。断つたのは君の命令が存在しないからに過ぎず、しかしそれが下るのは解り切っているからだ」

「……君が断つた際、アンブリッジは何か言わなかったのか」

「言つて来たとも。自分は防衛術教授だとか、それも今では新校長だとか、他にもゴニョニョと呟いていた。だが彼女の眼には、スリザリオンがアルバス・ダンブルドア校長に従っているように見えたのかね？
だとすれば節穴も良い所だな」

確かにホグワーツ校長は権威と権力を認めるべき存在であり、一定の敬意も払いはするが、無条件の支配や服従を認める対象では断じてない。何より僕が敬意を払うか否かを決めるのは相手が如何なる人間であるかであつて、相手がどんな椅子に座っているかでは無い。

「兎も角、君の指揮下で僕が関わるのは決定事項だ。元々親衛隊の仕事に協力するとは言つていたしな。但し今日と違うのは、全て僕に任せていると言つて逃げろという事だ。そして臣下の成果は主人の成果である。君は何の批難を受ける事ではないし、恥じる必要も無い」

適材適所。

ウィーズリー達と遊んでやるのは、ドラコ・マルフォイの仕事ではない。

「他の親衛隊員が何かしら言つて来るかもしれないが、それも暫くの辛抱だろう。グラハム・モンタギューのような不幸が自分の身にも降りかかれば、彼等は直ぐに尋問官親衛隊への幻想を喪う。ドロレス・アンブリッジの側としても、君達がO・W・L.をパス出来なかつたとなれば逆に困る。アレは直ぐに名前のみ組織に墮するとも」

「……じゃあ、君が親衛隊になつていたとしても同じだったんじゃないのか」

「君が一抜けする意味——他の親衛隊員よりほんの数時間程、下手すれば数日以上余分に勉強出来る事に価値はないというならば、確かに全く同じだな」

「……………」

五年や七年の生徒は、この時期一分一秒が惜しい人間の方が多いだろう。

パンジー・パーキンソンやミリセント・ブルストロードとて、女性は男より成績が軽視される傾向が有るものの、決してO・W・L.を蔑ろにして良い身分ではない。

それよりもビンセント・クラブとグレゴリー・ゴイルは良いのだろうか。彼等の成績の向上はドローレス・アンブリッジが匙を投げ、それを他のスリザリンが納得と共に受け容れる程だ。魔法族として最低限の成績——五ふくろうすらも取れない気がしてならないのだが。

まあ彼等が実家の反対を無視してまで仕事に身を捧げ、親衛隊の地位をホグワーツで盤石な物と変えられるならば、それはそれで意味を見出し得るだろう。万一それを叶えられたのならば、O・W・L.試験で全科目優を取るより遥かに評価されると言っても良い。

もつとも、ドラコ・マルフォイと同様、彼等がそのような努力を早々に放棄するのは明らかのように思える。彼等もまた、五年間同じ寮で過ごして来た同期であるからだ。

「き、君は大丈夫なのか」

「何が？」

不意のドラコ・マルフォイの言葉に、思索から引き戻される。

「……………O・W・L. 試験なのは君も一緒だろう」

「——嗚呼。何かと思えば、その事か」

らしくもない心配の言葉に何か見落としが有ったかと思えば、何とこの事は無い。非常に平凡で、既に思考を巡らせた後の問題についての言及だった。

「まあ、君と違って五年間真面目に勉強はしてきたからな。点数が下がる事は避けられんだろうが、たかが一ヶ月半を台無しにされた所で酷い事にはならんよ」

成績が悪くても済む口実を用意してくれて寧ろ助かると思える位だ……とはいうものの、僕が休み時間以外にまで校内を駆けずり回る羽目にもならないだろう。

臣下が王を凌駕する。

有力な後ろ盾を持たないまま出世競争に勝ち残った人間は、その危険を経験的に理解している筈だ。彼女は僕、というよりもドラコ・マルフォイを頼り過ぎてはならない。或る事項において協力出来るのだとしても、両者は本質的に、利害が一致しない他人なのだから。「君が心配する事などなにも無い。マルフォイ夫妻の希望は^{オーダー}今も変わらず、君が滞りなくO. W. L. 試験を終わらせる事だ。万が一僕が酷い成績をとったとしてもそれは僕が責を負うべき事であり、君は自分の事だけを心配しておけば良い」

闇の帝王が何かを企んでいるとしても、僕への依頼は何も変更されていない。

「生き残った男の子」とは違い、ドラコ・マルフォイは普通のホグワーツ生である事を広く望まれている。

「他に質問は有るか？ 無いならベッドに向かっても構わないぞ」

話は済んだと、手を頭の上に組み、大きく伸びをしながら伝える。「今日は珍しく寮監がやって来っていないが、何時見回りに来るかは解らない。君に対しては甘いとは言え、余り小言を言われても面白くないだろう？」

再度湧いて来た欠伸をもう一度噛み殺す。

夜はまだ長いというのに、既に眠気に抗えなくなってきた。屋敷しもべ妖精に新たな珈琲でも頼むべきかもしれない。試した事は無いが、適当に呼べば多分来るだろう。

「……その口振りだと、君の方はまだ寝ないのか？」

「ん？ 嗚呼、そうだな。今日は限界まで粘るつもりだ」

何の気無しに答えたが、ドラコ・マルフォイには引つ掛かる所が有ったらしい。

彼の視線の先には僕の手許の呪文学の本。もしくは、ミネルバ・マクゴナガル教授の許可を得て禁書棚から分捕って来た本の山か。

「……………O. W. L. の勉強をしているようには見えないが」

「ははは。何時ぞやの寮監の真似か？」

「何時も何時も茶化すんじゃない……………」 僕じゃなかったら杖を抜い

「ているぞ！」

「解つているとも。君の寛大さには何時も感謝している。勿論皮肉抜きでな」

予想外に愉快的気分させられたのは紛れも無い事実だったが、あくまで冗談ではあると、大きな苛立ちを見せた彼に弁解する。

「今僕がやっているのはな、ウィーズリー共がバラ撒いた花火の対処法探しだ」

瞬間、どういう訳かドラコ・マルフォイは意表を突かれたような顔をした。

その反応を多少意外に思ったものの、心を読むまでの内容では無いし、そもそも読めるか微妙な性質の内容でもある。だから構わず説明を続けた。

「ドローレス・アンブリッジは今日アレに対処出来ず、わざわざ彼女の方から“御願ひ”をしに来てくれたのだ。それを僕が対処出来たらば恩を着せられるだろう？ そのような真似が実際に可能かどうかは不明であり、もしかしたら既に彼女が対処法を見付けている可能性は有るが、それでも放課後一日と丸一晚を捧げる程度の価値は有る」

「……方法は見つかったのか？」

「君に隠しても無意味だから言うが、全く無いな」

ボソリと紡がれた質問へ素直に回答する。

「燃焼作用の原理上、燃料が酸素か温度を奪えば火は消える。どれか一つのみを全て奪わなければならないという道理は勿論無く、その三つを全て減らすのが当然望ましい。しかしそれらに干渉される可能性はウィーズリー達も想定済みの筈であり、そもそもその程度で解決出来るなら、アレらは簡単な消失呪文で消してしまえただろう」

純粋な杖の腕前では、ドローレス・アンブリッジは僕より遥かに格上である。その彼女が消せなかったのだからそう簡単な事ではない。教授陣に聞くという手段も今回ばかりは取る事が出来ない。

生徒の頼みだとしても、ミネルバ・マクゴナガル教授はドローレス・アンブリッジに助力するような真似を望むまい。他の教授も似たり

寄ったりだ。そして唯一味方に成り得るかもしれないスリザリン寮監は、僕が苦勞している姿を眺める方が御好きだろう。

そして未だに手がかりすら見付かっていない。

現在一番見込みが有りそうなのが、何とかして非魔法界の消火剤を取り寄せ、花火の真ん中に叩き込んでやる事だと言うのが救えない。魔法使いである僕も大した事は無いものだ。

「また当然ながら、花火を止めるだけでは不十分だ。ウィーズリー共が校内に放ったのは単なる花火では無く、花火のドラゴンやロケット花火、ネズミ花火等だからな。火を消すだけでなく、どうにかして運動量ごと殺す必要が有り、そしてそれで終わりではない。ウィーズリー達は色々玩具を発明していると聞いているし、こちらが対処したのなら新手を出してくるだろう」

「……………」

今回の騒動は所詮始まりでしかない。

しかし、ミネルバ・マクゴナガル教授達は着地点をどう考えているのだろうか。

慣例からすれば確かにドローレス・アンブリッジは今年で消えるが、それがアルバス・ダンブルドアの帰還と一致するとは限らない。

コーネリウス・ファッジの任期は未だ後二年弱残っている。あの大臣の支持率は急激に低下しているが、強制解任する所まで行けるかは微妙だ。つまりドローレス・アンブリッジが居なくなったとしても、来年度は代わりの高等尋問官がホグワーツに送られてくるだけの事に過ぎない。それともまさか、以降ずっと無秩序状態を続ける気なのだろうか？

「まあ、気楽にやるやい」

相変わらず、僕が未来予測をすると悲觀的にしかならない。

そんな想いを押し殺すように溜息を吐き、再度無言となったドラコ・マルフォイに続ける。

「僕がその方法を見付けられず、彼女が既に消し方を見付けているとしても、それはそれで悪くない。対処の為の人員、つまり僕や他の親衛隊の手を必要とするであろう事は変わらないからな。恩を着せら

れないのは少々惜しいが——」

と、話の途中でドラコ・マルフォイは突然立ち上がった。態とらしく椅子の音を立てようとしたような、大袈裟な動作だった。

「——寝る」

「そうか。おやすみ」

したかった話は既に終わっている。

彼を止める気も必要も無いので、僕はそれだけを答える。

けれども彼は反応を返す事もなく、静かに寮室へと引込んで行った。

何処と無く肩が落ち、気が沈んでいるようにも見えたが、不可解な理由で彼が機嫌を害するのはやはり何時もの事でもある。翌日——十二時を回っているからもう今日か——の朝まで引き摺っていない限りは、別段気に留める事でも無いだろう。

その後、結局懸念に反し、我等が寮監殿が談話室に見回りに来る事は無かった。

態度と言葉とは裏腹に面倒見が良いスネイプ教授の事だから、もしかしたら消えたグラハム・モンタギューを夜通し捜索でもしていたのかもしれない。

何れにせよ、ドローレス・アンブリッジから主導権を握るという理由の為だけにあの便利な部屋を試す“必要”は生じなかった。一晩中談話室を抜け出す事も無く、黴臭い本の山の前に座っているだけで眠れぬ僕の夜は更けて行った。

学生運動

懸念だった花火退治は、拍子抜けするくらい楽に済む事になった。その理由は、我等のスネイプ教授が助けの手を差し伸べてくれたからだ。

当然ながら、彼は非常に渋々と言った様子で有った。

呪文を教えてくれた際もあからさまに不機嫌で、何故我輩がこんな事と思っているのがあるかと見て取れた。そして教授は僕に助力してくれる程に良い人では無いので、その慈悲が誰の差し金によるのかも明白だったが——しかし一方、僕が看破出来る事を理解して尚、ドラコ・マルフォイが嘘を吐いた理由はやはり不明だった——ともあれ、我が主人の手助けが有難いものであったのは間違いない。

結果として、『バンバン暴れ花火』やら『デラックス大爆発』の退治の為に校内を駆け回る仕事は、費やされる時間さえ考慮しないなら、監督生業務の補助より少し面倒という程度に収まってくれた。所詮は玩具という事か。単なる優等生でしかなかった魔法省役人にはどうにも出来なくとも、優れた魔法使いであるホグワーツ教授にとつては障害にすらならないらしい。

グラハム・モンタギューにしても、失踪翌日には生きてままだ見付かった。

僕としては意外かつ落胆してしまう結末であり、情の深いドラコ・マルフォイは露骨に安堵していたが、これで一番命拾いしたのは“ウィーズリー”であろう。

教授達の双子への処遇もそうだが、この状況で死人が出てしまえば、コーネリウス・ファッジが暴走し、ホグワーツの休校を訴える事も有り得た。まあその場合はルシウス・マルフォイ氏が圧力を掛け、何とか学期を続けさせようとしただろうが、問題は、“ウィーズリー”が闇の帝王の怒りを買いかねないという事である。余計な邪魔をされれば今度こそアーサー・ウィーズリーを殺しに行く筈で、彼等は殺される理由が増えなかつた幸運に感謝すべきだろう。

そして勿論、僕の最大の関心事であり懸念事項は、アルバス・ダン

ブルドアが消えた翌日に熱くなったシツクル銀貨への対応であった――のだが、残念ながらそちらの方は、直ぐに解決の為に動く訳には行かず、先送りとなった。

ダンブルドア軍団が捕まってくれたのは『必要の部屋』だ。である以上、高等尋問官殿や尋問官親衛隊達がそこを見張るのも自然な話である。

まあ本気でハリー・ポッターが再度訪れるとは彼女達も思っていないさそうだったものの、警戒を解く理由は無い。また、かの部屋の神秘自体がドロレス・アンブリッジ達の関心を強く惹いたのだろう。あの日以降、休み時間や放課後に彼女達が八階の廊下前をうろつく姿も良く見掛けるようになり、当然のように僕達が逢瀬を重ねる事も封じられていた。

その上、僕には監督生業務の代行・尋問官親衛隊に関する雑務に加え、試験が間近に迫って来た事によって増大し始めた膨大な宿題にドラコ・マルフォイの試験対策の世話と、為すべき事は山積みであり、纏まった時間を取る事は中々難しかった。

結果、僕自身ハーマイオニーと話す必要性は感じていたものの、あつという間に数日が過ぎ去ってしまい……そして、彼女が痺れを切らす方が早かつたらしい。

明日からイースター休暇が始まる金曜日。

その日、僕はポモナ・スプラウト教授に呼び出された。

呼び出しの用件も濁され、向かうよう指示されたのが第四温室だというのが少々不可解だったが、余計な押し問答で時間を浪費する程暇ではない。夕食後指定された時刻に大人しく向かって見れば、そこで僕を待ち受けていたのは、予想だにもしなかったハーマイオニーの姿。それまでつまらなそうに入口付近の壁に寄りかかっていた彼女は、僕を見て一瞬だけ安堵の表情を見せた後、直ぐに腕組みしてそっぽを向き、温室の奥へと入って行った。

その光景を見た僕は一つ嘆息した後、辺りに誰も居ないのを目視と呪文によって確証を得た上で、温室の入口を潜った。

ホグワーツ教授は、僕が思っている以上に御節介焼きらしい。

「しかし、ポモーナ・スプラウト教授が良く了承したものだ」

まず最初に、僕はそう切り出した。

場所は温室の殆ど真ん中。背の高い植物に覆い隠されるように用意されていた簡素な丸椅子スツールに腰掛けながら、言葉が続ける。

僕達の距離は、一メートル強と言った程度。もつと距離を取られると思っていたが、余り話しにくくならない程度を選んだのだろうか。そして、僕達の間程の距離、二等辺三角形を描くような位置に置かれた石の上に、一個の小さな置時計が用意されていた。椅子に座っていれば何れの側からでも見えるようにされているのは、時間を意識しろという言葉無き警句だろうか。

正直言つて、この部屋の居心地は余り良く無かった。

土と草の匂いが強烈で、御世辞にも空気が澄んでいるとも言えず、湿度も高く、隙を見せると牙付きゼラニウムなど不愉快な魔法植物が襲い掛かって来るといふのもいただけない。

しかし、今のような状況で、誰にも怪しまれず、かつ落ち着いて話せる場所というのはそう多くない。これで文句を言えば罰が下るだろう。

「君の代わりに僕を呼び出し、尚且つ温室を密会の為に使わせる。確かに彼女は良い教師であるが、それでもここまで生徒に許すとは思わなかった。一体、どんな言い包め方をしたのだ？」

「……私の差し金じゃないわよ」

「……………ポモーナ・スプラウト教授が自発的に、この状況を設定したのか？」

少しの驚きと共に聞き返せば、彼女は波打つ長い髪を舞わせながら首を横に振った。部屋に帰る頃には、髪が温室の匂いを吸ってしまいそうだなと思う。

「いいえ。提案はマクゴナガル先生。そして頼まれたのよ、貴方を止めろつてね」

「——君は僕の良心回路扱いされているのか」

「この機に貴方が内蔵してくれるのが一番良いんだけど」

「生憎ホグワーツ入学前に捨てていて、今はスペースが無い」

「そもそもそんなモノが在ったら、僕は彼女と会い続けてはいまい。」

「下らない事を言わないで。兎も角、貴方に枷を掛けておいた方が良いというのは、スプラウト先生の方も同意されたわ。今のホグワーツ内で最も警戒すべき人間は貴方だと看做されていて、だから今、こんな事になっているの」

「それはまた御苦労な事だ」

「……こういう告げ口は余り好きじゃないんだけど、一応伝えておくわ。貴方はスリザリンで一番会話は出来ても、一番話が通じない人間だって評されていたわよ」

「心外な評価だな。ただまあ、受け止めはしよう。受け止めるだけだが」

聞く気は無いし、正す必要性も感じていない。

しかし、ウィーズリーの一件程度でここまで介入してくると思わなかった。

確かに二、三日前に教授二人の下へ向かったし、僕の懸念と警告に彼女達は揃って顔を顰めていたが、思っていた以上に深刻に受け止めてくれたらしい。

もつとも、彼女達が真剣であろうと、張本人達が真剣でないなら無意味なのだが。

「……でも、はつきり言って、荷が重すぎるわ」

大きく息を吐き出して尚、彼女の顔は晴れなかった。

「まあ、それ程大きな期待をされてはいないでしょうけど。それでも、貴方を止めるなんて無理でしょう？ 私がここで何を言おうとも、一度決めたら貴方はやる人だもの」

「別に僕から何かをしようとは思わんよ」

返答が適当だったのは否めない。

しかし、線を踏み越えたのは彼等であって、僕達では無い。

「何かするのはグラハム・モンターギューや——或いは、これからのス

リザリンの彼等だ。そして、寮の団結を持ち出されれば僕は抵抗出来ない。障害も既に無い。良い大人が御手本を見せてくれた以上、監督生も、首席も、教授も、彼に倣う生徒を止める道理は無い。ホグワーツが秩序を喪うのは規定路線で、そこから生ずる災禍もまた不可避だ」

「……アンブリッジや尋問官親衛隊が好き勝手やっているから。貴方はそう言わないのね」

「彼等の行為は、少なくともホグワーツの校則や魔法省の定める法律には反しないからな。そして、無秩序状態を公然と肯定したのも彼の方が先だ」

無法に対して無法で反撃するのは無法者だけだ。

まあグリフィンドールの嘯く騎士道は、そういうモノだと承知しては居るのだが。

「そして、別にグリフィンドールに止めろとも言わないとも」

何かをする気が有るのではなく、何もしない気が有るといのがやはり正しい。

「こういう世界は、君達の望む通りだろうか？ やられたら、やり返す。非常に純粹だ。但し、『目には目を』という理屈が成立するのは、そこに公平な裁定者が機能している時だけだ。法治の無い世界にそんな良心は期待すべきでない」

「……聞いてた通り、やっぱりダンブルドアに怒っているのね」

「思い違いだ。別に前校長閣下の行為自体を否定しないし、理解を示す事すら出来る。——が、せめて外部にバレないようにやる程度の慎みは持つて欲しい。そう考えるのは罪なのかね」

彼は強過ぎるから、他人の視線や反応に無頓着で構わないだろう。しかし、他の人間は違う。あの夜に校長室で何が起こったかについて、肖像画、ゴースト、そしてハリー・ポッターの口を塞ぐ程度の事はすべきだった。

「……私は最大限止めるよう努力するし、先生方も眼を配ってくれると仰ったわ」

「それで無くなるなら、ルーナ・ラブグッドは未だに虐められ続けているな」

「……………」

「見張るには時間的・物理的制約が有る。そして悪餓鬼共にとっては、教授達も含め、君のような『良い子ちゃん』はウケが悪い。統制出来るとは到底思えんよ」

皮肉が余程心に突き刺さったのか、ハーマイオニーは唇を噛んで黙り込んでしまう。

アルバス・ダンプルドアがトム・マールヴォロ・リドルを更生させられなかったように。

悪戯気分で他人を壊せるように生まれついた者達を、教師という生き物達は統制出来ない。

そして何処だろうと、ウインチェスターだろうとイトンだろうと同じだ。どんなに素晴らしい教師であったとしても、彼等の手の届く範囲は学校という箱庭の、更に限られた領域であつて、心の内側や学校の外側まで干渉し得ない。

「——解つたわ。じゃあ、約束して」

……それでも簡単にへこたれないのは、やはり彼女の美点か。

「何を？」

「酷くなりそうな事態を貴方が知った時は、貴方の力の及ぶ限り止めるって」

「……………同じような内容は、教授達にも言われたな」

スリザリンとして行動に打って出る前に、まず相談しろとも伝えられた。

「でも、先生達は貴方を制止しようとしただけで、約束はさせなかったんでしよう？」

「それはその通りだ。そうさせる事など何もないからな」

「なら、この場でして」

「…………その事に何の意味が有る？」

聞き返せば、彼女は頬を膨らませた。

「良いから！ 貴方が約束するのが最も大事なの！」

「——そうさせた所で何が変わるとは思わんが、まあ君が言うならそうしよう」

それでもハーマイオニーは手を自分の腰に当てながら睨んで来たので、一つ溜息を吐き、教授や君が不愉快に思う事態が起らないように努力はすると付け加えた。

そうしてやれば、一応彼女は矛を収める事にしたようだ。未だに微笑みを向けてくれる事は無かったが、こちらへ向けられる視線の強度は弱まった。

いや——弱まり過ぎていた。

「……それで。頼まれ事が終わったというなら、もう僕は御役御免か？」

そう問うてみれば、ハーマイオニーは軽く俯きつつ首を緩く横に振った。

「……友人としての会話も多少なら構わない。先生方はそう仰つたわ」

「そうか」

「スプラウト先生は多少渋られたけど、最終的には納得されていたわ。勿論これは非常に例外的な対応で、あの女が現在我が物顔でホグワーツをうろついでいて、尚且つマクゴナガル先生の口添えも有つての事だけだ」

ほら、解るでしようと、ハーマイオニーが上目遣いをして来たのに頷く。

「まあな。魔法省が現在最も関心を抱いているのは、アルバス・ダンブルドアの居場所だ。そして、あのグリフィンドール寮監と前校長の關係の深さは周知でもある。ドローレス・アンブリッジが如何なる監視手段を用いているにしても、彼女の周りもまた見張られている可能性が高い。教授がそう簡単に監視を許すとも思えんから懸念し過ぎかもしれないが、悪い警戒では無い」

相手を侮つた挙句に、最悪の結果を招くよりもマシ——
「……………」

ハーマイオニー・グレンジャーに、開心術の才は無い。

けれども、どういう訳か、視線すら合わせる事無く、彼女は僕の思考を読み取つたようだった。彼女は力無く項垂れ、肩は落とされてい

た。

「……貴方は——」

「ん？」

「——部屋を開けようとしなかったの？」

「……………それは如何なる意味で言っている？」

そして、何故問うて来るかも解らない。

しかしながら、その質問には何となく不穏な気配を感じ取った。

「私達が会う為の最短の手段は、勿論あの部屋を開ける事だった筈よ。ええ、あの夜以来、アンブリッジや尋問官親衛隊が八階の廊下をウロウロしてたり、罨を張っているかもしれない事は理解している。それでも、『必要の部屋』と呼ばれる部屋なら、貴方が先に部屋内に入ってしまったならば、どうにかならんじやないの？」

「それはまあ、そうかもしれないが」

ハーマイオニーの瞳は、大きく逸らされたままだ。

しかし、質問の口調は詰問めいていて、答え方を間違えば酷い事が予想出来ていて——それを感じられた所で、理由が解らなければ対処しようもない。

「だが、僕はそれが出来ないという気がしている」

だから僕の選択肢は何時も通り、可能な限りは誠実で有る事だけ。

「確かに部屋は扉を用意してくれたかもしれない。けれども、必要の部屋が、入室者の願いをどのように読み取っているかどうかは解らん。だから、思い描いている表面的な願いでは無く、心の深層の願いに応じた部屋を——僕にとって真に『必要』とする部屋を用意してしまう可能性が有る。その際は、恐らく御互いにとって、非常に困った事になる」

万一そうなってしまえば、自制出来る気は余り無いからだ。

最近自覚してきた事であるが、僕は思った以上に我慢強い人間ではない。

「願い？ 貴方の深層の？ 一体どんな願いな？ ダンブルドアが

逃げてしまった後で、私に会うよりも『必要』な用事が——」

「——まあ、その話は後回しにしよう」

「……………」

「一切話をしないと云っている訳じゃない」

言葉を途中で遮られた事より、回答を拒まれた事の方に御怒りらしい。

相手が誰であるかを忘れ、怒りと共に視線を合わせてきたハーマイオニーに苦笑する。

「こんな状況になってしまった以上、僕としても君に問い質したい質問が出来た。これは必要の部屋が如何なる部屋を用意するかに関わる事で、しかし、この僕の話自体は五分と足らずに終わる。だから最悪の場合、適当な空き部屋を見繕って君に話す事も有り得た」

「……………質問？ 私に？ 他ならぬ貴方が、部屋を『必要』とする事に関わる程の？」

一瞬で激怒の色が消え、不安以外が見付けられなくなるのは何故なのか。

「…………しかし、ハーマイオニー。この場を用意したのが教授達でも、どうにか出来ないかとミネルバ・マクゴナガル教授に相談したのは君が先だろう？ つまり、君は僕に色々と聞きたい事が有る筈だ。そして納得出来ない事も。ならばまず間違いない、そこから始めない事には僕の話どころでは無くて——必然、やはり適当な場所で気軽に、という訳には行かない」

彼女の聞きたがり癖は、学年が上がるにつけて収まった。

けれども彼女の知識欲は、逆により大きくなっている事は重々承知している。

「正直な所、君が今からする話題について答えるのは余り気が進まない。今更終わった事を蒸し返しても建設的では無いからな」

最早、ホグワーツ内の現状は諦めている。

「けれども、君が聞くというなら僕は答える。相変わらず僕の視点と偏見に基づく感想や思考に過ぎず、君がそれを間違っているとか、許しがたいと考えるのも自由だ。そして、信じられないと一切を否定する事すら好きにすると良い」

「……………」

「だから、君から先で構わない。ポモーナ・スプラウト教授達がどの程度私的な会話を許してくれるかどうか解らんし、彼女が見回りに来ても文句は言えん。寧ろ、高等尋問官殿の事を考えると、逆にその方が安全だとすら言えるしな」

途中で時間切れというのも嫌だろう？

そう更に笑いつつ、譲るように掌をハーマイオニーの方に指し向ける。

けれども、彼女は中々話を始めようとしなかった。

彼女は明らかに僕の理屈を認めていて、けれども、半ば僕の言いなりになる事こそが癪であるようだった。

この手の反抗心は、「普通」の人間には通常なのだろうか。そう思ってしまうのは、ドラコ・マルフォイにも良く見られる反応だからだ。母数が二つしか無かろうと、その何れも同じであるとすると、やはり偶然より必然の共通を疑ってしまう。

「……ハリーやロンは、何故ドビーが警告をしに来たのかに疑問を抱かなかった」

それでも、最終的にハーマイオニーはそう切り出した。

そして意外だった。時間が無いかもしれない以上、もつと核心から問うてくるものだと考えていたが、そんな周辺部から聞いてくるとは

——否、あの夜の時系列順だから正しいのか。

そんな思考を他所に、彼女は話を続けた。

感情を押し殺し切れていない、何処か希望に縋り付こうとするような声で。

「けれども、私は違う。御馬鹿なマリエッタが『夕食後まもなく』アンブリッジに秘密を明かした時、ドビーはそこに居なかった筈よ。仮に居合わせたなら直ぐに……つまり、集会が始まる前に、ハリーの下へと忠告しに来たに違いないもの」

「でも、そうじゃなかった。また、アンブリッジがマリエッタから話を聞いた後、ドビーが部屋を偶然訪れる可能性も低い筈でしょう？ そ

して秘密の話をした後に、あの女は屋敷しもべ妖精を部屋に近付けようとはしないんじゃないかしら？」

「……だろうな」

去年のアラスター・ムーデー——に化けていたバーテミウス・クラウチ・ジュニアとは状況が違う。彼は聞かせる為に、意図的に妖精を近付けた。

一方で、ドローレス・アンブリッジにはその理由が無い。

「彼女は妖精達をこき使う事に躊躇は無さそうだが、しかし一般的な『純血』と違い、彼等を背景や空気と扱う事は出来なさそうではあつた。また、ドビーの側が気を利かせていた——彼が自発的に、前校長が居なくなつて以降の彼女を注意深く見張つていたとも思わんね。どう見てもアレは、そこまで賢い存在では無いだろう」

マリエッタ・エッジコムの告発の瞬間、もしくはその後、ドビーが運良く居合わせたと考えるのは——そしてマリエッタ・エッジコムがダンブルドア軍団の一員である事を知つており、ハリー・ポッターにも報告せねばならないという思考が出来たというのは、余りに奇跡が噛み合い過ぎているだろう。

「だから私は考えたのよ。貴方がドビーを警告に寄越してくれたんじゃないかつて」

その言葉は好意的な響きを帯びていたが、しかし僕は首を横に振つた。

「それは間違いだ。僕は彼に対し、君達に警告するように命令を下してはいない」

「……どういふ事よ。他の妖精達も、他ならぬドビーも、貴方が助けてくれたと言つたわ」

「余りに節穴過ぎるな。あの場で彼等は一体何を見ていたのやら」

ハーマイオニーの疑問に、薄く笑いながら答える。

「厨房に行き、僕がドビーを呼び寄せたのは事実だ。しかし、僕は彼に対し最初に、お前は僕の命令に従う氣が有るかと聞いたのだ。そして彼は回答した。自分は自由な屋敷しもべ妖精であり、更に邪悪なマルフォイの坊ちやまの友人の命令に従う義務は御座いませんとな」

「震えながらだったが、まあ良い啖呵の切り方だったよ」

ハーマイオニー手製の服を重ね着した妙ちくりんな姿の妖精は、首を縦に振らないように両手で顔を抑えながら、周りの妖精達に白眼視される事すら気にしようともせず、己の意思を明確に表明してくれた。

「だからな、更に僕は細かい事を伝えずに言ってやった。『ハリー・ポッターの窮地を救う為に、ドロレス・アンブリッジの動向を秘密裡に探る事を禁じる』。また、『その後にはハリー・ポッターへ警告をする為、現在八階の部屋に居るであろう彼の許を訪れる事も禁じる』と」

故に、僕は命令などしてはいない。

彼をハリー・ポッターの救出に向かわせたのは、他ならぬ彼自身の意思だった。

ハーマイオニーは息を呑んだ後、暫くの間言葉を発しなかった。その後で、氣力を振り絞るかのように必死な調子で批難を口にした。

「……残酷な真似をするのね」

「僕に従う道理はないというなら何の問題も無いだろう？ 確かに僕は彼の主人でも無い。だから、屋敷しもべ妖精の法は、僕の言葉に違反する事を禁じない」

「…………ドビーはハリーが命令するまで、やたらと自分の事を罰しようとしていたわ」

「本能を理性で抑え込むのが『ヒト』である。そうでは無いか？」

実際、ドビーは僕の期待に応えてくれた。

頭が足りないだけの妖精だと今まで思っていたが、彼も芯の通った信念を持っていたらしい。完全にハリー・ポッターの窮地を救う事には失敗したが、それは僕の方が助けさせる気が無かったのが一番の理由だ。総じて見れば、非常に立派な行いをして見せたと言っても良い。

「…………じゃあ、他の妖精達の様子が変わるのも貴方のせいなんでしょう？」

「……嗚呼、そちらか」

険しい視線に、身動きして座り直し、指を組む。

今日の椅子は意外と座り心地が良い。薬草を摘む仕事は、やはり重労働だからだろうか。何にしても、この場の環境の中で、椅子だけは気に入っていた。

「そちらの方も別に大した事は言っていないとも。彼等は君の革命の真意を理解していないようで、またドビーを種族の恥だと思っている節が有ったからな」

彼等の視線——僕の命令を拒絶した際の一瞬の静寂、そして一部の呻き声、更には同じように扱ってくれるなという感情の乗った視線を見れば良く解った。

「だからそちらにも質問と警告を投げてやった。お前達が考える忠誠とは、主に望まれた事を無批判に受け容れ、思考停止したまま道具として遂行する事なのかと。それを忠誠だと勘違いしているならば、君達は最終的に、自らの手で『ホグワーツ』という大きな家^{house}を潰す事になる」と

流石に具体例は持ち出さなかった。

しかし、途端に一人の妖精が大声を上げて僕に走り寄り、泣き喚きながら殴り始めた——とは言うものの、僕の腰にすら届かない妖精の殴打だ。痛くもなかったから好きにさせた——事からして、それが誰の事を示唆しているかは明らかだっただろう。バツの悪そうな顔をしていた妖精達も居たあたり、彼女が仕えた^{famiy}家の末路も広く知られていたようだ。

「……貴方は本当に残酷な人よね」

「今更だろう」

つくづく僕は、グリフィンドールの精神構造とは程遠い。我ながらそう感じる。

「だがやはり、ウインキーには居場所が無かっただろうと思うのだ」

あの妖精は、苦痛でしかなかっただろう。

アルバス・ダンブルドアの仕打ちは、寧ろ余計に残酷だった。

「彼女の善意は裏目に出て、その結果として主人の家族二人を死なせ

るという最悪の事態を招いた。ついでに、闇の帝王の復活への間接的な助力もした。それにも拘わらず、彼女は誰からも責められない。アルバス・ダンブルドアは人情的情けを掛け、ドビー達他の妖精も腫れ物扱いしかしない。あれでは自死を許してやった方が慈悲だっただろうに」

「……………死を選ぶのは良い事ではないわ」

「僕は国教会信徒では無い。勿論、妖精もな。そして死より辛い事は現実に有る」

生きていれば良い事は——有るかもしれないが、それに会える奇跡などそう多くも無い。ウインキーが望むのならば、僕は助けてやるつもりは有った。彼女が居なければ、僕はバーテミウス・クラウチ・ジュニアと知り合う事は無かったからだ。

「また、妖精達に放った挑発も紛れもない本心だよ。妖精達があのザマでは、千年前に彼等の保護を選んだヘルガ・ハツフルパフも報われん」

彼女は遙か昔の人間であり、その人格を推し量るにも限度が有る。

だが間違いなく言える事は、彼女はホグワーツに便利な奴隷が欲しいなどとは考えておらず、彼等が出て行きたいと言えば鷹揚に許しただろうという事である。

「確かに妖精達の千年の隷属は、歴代の校長が望んで来た結果かもしれない。だが、原初の彼女だけは絶対に違う。給料を貰って休日に遊び惚ける妖精も、悲しみに飲んだくれてる妖精も、奴隷状態を是とする妖精よりは遙かに上等だ。自ら“ヒト”である事を放棄している種族なんぞ、さっさと滅んでくれた方が余程人間族の利益となる」

「……………貴方は一度口を出すと決めたら止まらないわよね。そして、何時もやり過ぎる」

「耐えるには余りに不愉快だった。その程度は理解して欲しいものだ」

まあ頭に血が上ってしまったのは、部屋の片隅にゴミのように積み上げられていた、手製の洋服群を眼にしたからかもしれない。

彼等にとって御節介甚だしいのは解る。忙しい間を縫って大変な

労力を掛けて作られた贈り物だろうと、欲していないモノを与えられるのはゴミを渡されるのと何ら変わらない。それは理解するが、けれども彼等がソレを粗略に扱う権利までは無いだろう。

僕達は同じ「ヒト」であり、言葉が通じる生物ではなかったか。

自分の好む贈り物でないというならば、ハーマイオニーに対して直接拒否の意思を表明し、その代わりに自分達がどうして欲しいのかを伝えれば済んだだけの話である。グリフィン・ドール塔の掃除自体を——労働を放棄するなど、勤労と忠実を謳う妖精の風上にも置けない。

「……ステファン。貴方の気持ちは少しだけ嬉しく思うわ」

言葉の内容に反し、彼女の顔は堅く強張ったままだった。

「けれども、はつきり言わせて貰うわ。迷惑よ」

「貴方の行動は状況を悪くするだけだし、そして貴方の言葉が宿す毒は、妖精達を良い方向に導く事も無い。私の活動にタダ乗りして、貴方の流儀で行動するのも止めて頂戴」

「……成程、今度からはそうしよう」

直接ぶつけられる、解釈の余地も無く明瞭な苦言に苦笑する。

しかし、この明快さがハーマイオニー・グレンジャーの美点でも有り、尊く思える部分でもあり、やはり僕が彼女と立場を異にする根幹に違いなかった。

『ダンブルドア軍団』

一度話を始めれば弾みがついたらしい。

彼女の話はいよいよ核心——少なくとも彼女の方は関心のあった——話題へと触れた。

「その名を聞いた時、貴方は既に今の状況になるのが見えていたんでしょう？」

「そうだな。危険性は予測していたとも」

初めから誤魔化す気などなかった。

その名前がドローレス・アンブリッジに露見した場合、アルバス・ダンブルドアがホグワーツを去る可能性が有る。それは念頭に在った。

そしてハーマイオニーは、僕の返答を聞いて悔しそうに唇を噛んだ。

「……なら何で言ってくれなかったの。言ってくれたら——」

「——何が変わる？ たかが名前の変更で、現状の何が？」

「……………」

僕の疑問に、彼女は口を噤む。睨みつけられもした。

僕が言葉の裏に籠めた意図は、彼女に正確に伝わったのだろう。

言っただとしても、名がダンブルドア軍団で無かろうとも、何も変わったとは思えないと。

「確かに予測は出来ていた。しかしまず、それが直接問題となる可能性は低いと見ていた。仮にも君達の勉強会は秘密の組織であり、その名——『ダンブルドア軍団』という名称が外部に知れる場合など殆ど有り得ないと考えていたからな」

まさか、と。耐え難くも口の端を歪める。

「組織名簿なんてものを押さえられるとは思わなかったし、その軍団名まで御丁寧に書かれているのは想定外だった。アレをドローレス・アンブリッジから見せられた時には、流石の僕も大いに驚いたものだ」

一体誰があんな失態を犯したのか。

その答えは、バツの悪そうに顔を背けた少女の態度が物語っていた。

「……………」から出て行く前に、私は部屋の中にしつかりと名簿を隠した筈よ。だって、途中で親衛隊に捕まって身体検査をされてしまえば言い逃れ出来ない。そう考えたもの」

「君らしくもない。ハーマイオニー、アレは『必要の部屋』だぞ？」

「……………」

「部屋の中に居る人間が望み、そして部屋が叶えられる範囲である限

りは、あの部屋は「必要」な物を用意する筈だ。だから本気で物を隠すのであれば、最初から物を隠す為の部屋として望まれるか、或いは高度な魔法によって特別に隠蔽しなければならなかった」

そして、あの羊皮紙はそうでは無かった。

「羊皮紙の魔法にしても、だ。秘密を喋れば即座に察知出来るような仕掛けを施す事こそが、最も重要だろう？　しかし、君は違った。マリエッタ・エッジコムと直接顔を合わせるか、ドローレス・アンブリッジ達が押し掛けてくるまで気付かない仕組みしか作らなかつた」

「……貴方ならそうする、いえ、実際にそうしていたの？」

「まあな」

その問い方は、明らかに確証を持って問われたもの。

今学期のスリザリンの秘密——僕達が授業内でドローレス・アンブリッジから教わっている事は、少なくとも外には漏れてしまい。しかし、彼女がそれを指摘出来たのは、僕の性格を良く熟知しているからであろう。

「もつとも、やはり喋つた阿呆は出たがな」

「……貴方が警告しても出たの？」

「口の堅いホグワーツ生なんぞ割と矛盾だ。大層面倒な事に成り掛けたが、まあ、上級生の助けも有って收拾はつけられた。喋つた範囲が近い親友のみ、かつ、うっかりという点で情状酌量の余地が有つたのが良かったな。違反は違反だが、別にいきり立つ程の行為じゃない」

初めからその程度の縛りだと認識している。

「そして、秘密裡に終わらせたと。最優先されるべきは秘密の守護。第一に考えるべきは如何に秘密を守るかだが、第二に考えるべきは如何に最小限の被害で済ませるかだ。スリザリンから爪弾きにされて自棄になった彼が、罰を覚悟で喋るといふのも本意では無い。彼は変わらず学生生活を送っている。まあ、彼の友人達も等しく秘密を守る誓約はして貰つたが」

「……………」

一応上級生達には顛末を報告しているし、非常に芳しくない反応が

全体として返って来たものの、何とか納得はして貰った。依然として、他の人間にとり「証拠」としては機能している——少なくとも、彼等が喋っていない事は証明出来ると説明したのも良かったのだから。

勿論、迂闊に喋ってしまった彼は、その抗弁を使う事が出来ない。万一スリザリンの秘密授業が公となってしまう、怒れるドラコ・マルフォイが押し掛け、契約を検めたならば、彼は証拠に則って一人吊るされる危険を負う。

もつとも、その危険性はやはり可能性は低いとは思っている。

秘密授業の秘密が維持されている最大の理由は、スリザリン生の口が総じて堅い訳では無く、ドローレス・アンブリッジから教えを受けたがる他寮の生徒が居ないという事だからだ。各寮の自習体制が構築されている事もあり、関心を持たれていないのだろう。

「ダンブルドア軍団の羊皮紙に話を戻す。兎も角、アレが有った事で、僕にとっては解り易くなった。そして、アルバス・ダンブルドアにとつてもな」

「……貴方はダンブルドアにとつて救いだつたと言うの？」

「君の言っている意味と僕の言っている意味では多少違うがな。今回の一件のみに焦点を合わせれば、それは勿論不都合だつた。しかし、あの老人の心にアレ程激烈に刺さる証拠というのは多くないのだ。君達が意図してやったならば、その悪辣さを見習いたい位だな」

彼女達を追い詰める手段は色々考えていたし、軍団名さえ突き付ければアルバス・ダンブルドアの方から負けてくれると踏んでいたが、あそこまで効果的な物証を用意出来るとは思ってもみなかった。だから、何も介入しなくとも事が想定通りに進んだ。

そして、ドローレス・アンブリッジにも大きな影響を及ぼした。

彼女はアレを見た瞬間、ハリー・ポッター達のように反抗的な生徒の追放より、己が校長の地位に昇る事こそを優先順位の上に置いてくれたのだから。

「嗚呼、そう言えば」

視線を落としたハーマイオニーを前に、話題を意図的に変える。

「ドローレス・アンブリッジは、ハリー・ポッターを退学にしないのは自分にも利益が有ると言っていた。僕には全く解らなかつたし、ドラコ・マルフォイも同じらしかつたが、君の方には何か心当たりは有るか？」

闇の帝王の意向であるというのは、死喰い人でない役人に伝える事は出来ない。

だからドローレス・アンブリッジは多少渋ると思つていたのだが、彼女はハリー・ポッターを学校に留める事をすんなり受け入れた。その理由は僕にとつて不思議と言えるモノだつたのだが、しかしハーマイオニーには違つたようだ。俯いたまま小さく頷いた。

「……多分、シリウスを捕まえる事だと思う」

「十月頃に、アンブリッジは私達とシリウスが繋がつてる事を知つたもの。先日なんかはハリーに真実薬を飲ませて居場所を聞き出すとすらしらしいわ」

「そうか。それならば理解出来る」

答えつつも、内心で少しばかり落胆を覚える。

ハーマイオニーには、先程の僕の表現に何も引つ掛からなかつたようだ。

「確かに、彼女が自身の利益を最大化する気ならば、ハリー・ポッターを今すぐ退学にするのは勿体ない。彼女が魔法大臣付上級次官を後十年続けようと、現状のままでは魔法大臣に成れはしない。しかしシリウス・ブラックの逮捕に成功したのであれば、その道は確かに開けてくる。いやはや、感心してしまう程の権力欲だ」

「……シリウスは無実よ」

「だが無罪では無い。君に言つたのだつたか、最早定かではないが」

アズカバン脱獄、 Hogwーツへの無断侵入、肖像画の損壊。

彼が無実であつた事は、それらの一切の犯罪行為を正当化しない。

そして刑期の事実上の相殺は兎も角として、刑事補償という洒落た制度も期待すべきではないのだ。連合王国で国家無答責の原則が何時放棄されたのかを、彼女は調べるべきである。

「そして今年を見て解つただろうが、魔法省は易々と過ちを認めてくれる組織では無い。ポッター家への殺人幫助に關し、彼の無実を証明出来る証拠がないのは事実だしな。余計な事を言う前に吸魂鬼に引き渡し、口を塞がせても文句は出まい。コーネリウス・ファッジは既に二年前、合法的手続の下に死刑執行の署名をしているのだから」

魔法法執行部が逃がした大量殺人犯を逮捕した人間。さぞかし人気を集められるだろう。

シリウス・ブラックの後輩が十人ばかり出来た今となつては、ドロレス・アンブリッジを直ぐに魔法大臣にせよという声上がるのは間違いない。

「……貴方は、ダンブルドア軍団の味方だと思つていたわ」

小さく呟かれた批難。

自責も含まれていたソレに対しては、流石の僕も自嘲の笑みを浮かべた。

「味方だったとも。最後まで穩便に終われば良いと願つていた」

静かに、けれども確かに認める。

彼女が何も傷付かないままに済めば良かった。

「しかし、こちらに情報を掴まれた時点で君達の負けだ」

更にマリエッタ・エッジコムに掛けられた呪いを見れば、そう結論付けざるを得なかった。

「君は最初からドロレス・アンブリッジは馬鹿で、愚図で、自分達の秘密組織を見付けられもしない無能だと高を括つていたのではないか？ 君達は彼女を優秀で、狡猾な役人だと認識する事は無かった。だから軍団の活動が発覚した場合の行動を何も考えていなかったし、避難訓練を行うなどの対策も怠つていたのである？」

あの部屋であれば、真に望めば逃げ道を用意してくれた筈である。だというのに、ハリー・ポッターはドラコ・マルフォイに捕まつてしまった。

彼の気質上、間違いなく殿を務める——最後まで残る筈で、彼は必ず捕捉出来ると踏んでいたが、あそこまで思惑通りに行くと逆に嘆息すら出てしまう。

「僕の早とちりだったと言うのなら、今直ぐ僕を糾弾して欲しい。あの場面からでも『合法的』に——つまり暴力を振るう以外で——アルバス・ダンブルドアが出て行かず、君達も退学にならないような冴えた方法を君は持っていた、或いは今考えついた。そう言うのなら聞かせて貰いたい。その場合は僕の行動は間違いになるし、過ちを認めるのも吝かではない」

ダンブルドア軍団の名は、決して今回の事件の本質では無い。

暫くの間、時計の秒針の音と、魔法植物が身動きする音だけが温室に響き渡る。

しかし、今日は何時までも待てる訳では無い。だから仕方なく、僕の方から口を開いた。

『学生による組織、団体、チーム、グループ、クラブなどは、ここにすべて解散される。組織、団体、チーム、グループ、クラブとは、定例的に三人以上の生徒が集まるものと、ここに定義する』。この教育令第二十四号の規定からは、学生による組織に所属するのが一回限りや、ほんの三十分程度であれば大丈夫だという解釈は読み取れない。つまり、あの夜にダンブルドア軍団への所属が判明した以上、君は文句無しに退学だ」

はあ、と落胆混じりの吐息を漏らす。

「……嗚呼、そう言えばこの解釈につき、アルバス・ダンブルドアが『定例的』でない云々の言い訳をしていたというような噂を耳にしたが、それに対する言及は必要か？ 仮にその発言が真実だとして、あの賢者が真剣に言っていたとは思えず、思考を纏める為の時間稼ぎに過ぎなかったとしか考えられないのだが、君が反論を必要とするならば言及しよう」

「……不要よ」

「それは有り難い」

その理屈を聞いて煙に巻かれたように感じた生徒は多いだろうし、実際煙に巻く為の説明であり、腰を据えて検討する程に大した価値も無い。

例えばの話。

次のような法解釈と法適用は許されるだろうか。

教育令第二十四号の規定は先の通り。

そしてハリー・ポッター、ロナルド・ウィーズリー、ハーマイオニー。彼等は三人であり、朝の大広間、授業中ないし授業後、そして放課後等々、明らかに定例的に集まっていた。また彼等はドロレス・アンブリッジの許可を受けていない。

だから当然教育令に反し、退学処分処されるのが妥当である。

そんな理屈を持ち出す事は、果たして許されると言つて良いのだろうか。

……まあ、一々世論調査するまでもないだろう。

許されないと考える人間の方が多い。そう断言し切つて構うまい。

一応ドラコ・マルフォイはその発想をする事が出来たが、僕が疑問を呈せば直ぐに諦めた。今年度のドロレス・アンブリッジにしても、その法解釈の下に Hogwarts の友人関係を破壊して回ると言う馬鹿な真似は断じて行わなかった。

その理由は——法的理屈の正しさ云々より、もつと単純に考えるのが一番良いだろう。

つまるところ、先程の文面を読んで、ああ、定義規定から考えるに、これは友人グループも含むのだな。ならば高等尋問官の所に許可を貰いに行こう” という発想をする人間は、常識的に考えて頭がイカレているからだ。

確かに厳密に文面解釈すればそうなるし、悪しき独裁者はその論理でもって市民の弾圧を図ろうとするだろうが、普通の倫理観を持つ社会ではまず許されまい。

翻つて、だ。

先の文面を見て、”『定例的』と書いてあるから、ならば初回の組織の会合等なら何の問題もないのだな” と読み取つた Hogwarts 生がどれだけ居たのだろうか。または、善良な人間により構成される秩序ある社会は、そのような解釈の下での市民の行動を許すべきだろうか。

今日はドロレス・アンブリッジの追い出し会、明日はコーネリウ

ス・ファッジへの悪口大会、明後日はダンブルドア支援パーティー。全て一回目だから問題無い。

或いは、今日はハリー・ポッターが組織のリーダー、明日はロナルド・ウィーズリー、明後日はハーマイオニー。それぞれの日によって集会形態や構成員の人数も微妙に変える。だから全ての集会が定例的に行われたとは言えず、違法ではない。

この手の主張を天才的だ、そんな抜け穴があったかと思える者がどれ程居るだろう？

何より今回の一番の問題は、法解釈の権限を持つのは果たして誰かという点である。

法が変だ、可笑しいと主張する権利は誰もが持つし、勝手である。しかし、その解釈こそが「正当」であると判断し得る権限を持つ存在は、法治の社会において限定される。

古代の非魔法界では立法者——皇帝や教皇、王のみが権限を握っていた。

そして現代では立法・行政・司法が各々権限を持っている。

法が全ての事例への対処を記述し得ない以上、法作成の場面でも法執行の場面でも法適用の場面でも、法の文面解釈は必須であり、不可避だ。それらの三機関のどれかに解釈を許さないとしてしまえば、議会の通す法の一条一条が電化製品の説明書以上に長くなり、内閣が仕事出来る範囲は格段に狭くなり、裁判所は国民に対して救済判決を下し得なくなる。

勿論、その三機関の権限のどれを重んじるかどうかは個人の立場に拠るだろうし、それが国家として最終的に優先されるべき「正当」な解釈であるかどうかもまた国によって変わって来るモノではある。

では、一方魔法界において、法解釈の権限を持つのは誰か。

魔法省が魔法界に対して広く施行した法令ならば、当然コーネリウス・ファッジであり、またウイゼンガモットである。断じて、アルバス・ダンブルドアではない。

あの老人がどんな感動的な解釈をしようが、彼は既にウイゼンガモット主席魔法戦士の地位を降ろされており、そもそも「正当」な解

釈と認められるには、それが合法的手続の下に行われる事を要する。裁判官の判決が酒場で為される事は有りないように、校長室内でのアルバス・ダンブルドアの主張なんぞ、法執行者からは戯言でしかない。確かに僕はドロールレス・アンブリッジに教育令の穴を指摘したものの、それはあくまで彼女が、僕の主張も一理有ると受け容れたからに過ぎないのだ。

対して、アルバス・ダンブルドアの主張——定例的でないから違法ではないという理屈を、彼女やコーネリウス・ファッジが受け容れるたろうか？

定例的に行う事が予定されていた集会が偶々一回目に見つかったに過ぎないならば、これもまた『定例的』に該当する。故に、ハリー・ポッター達の『今夜の会合』『間違いなく行われたとわかっている集会』は教育令第二十四号に反し、彼等を退学にする事は問題無く出来る。

彼等は間違いなくそう反論した筈で——その主張は果たして非論理的で、法執行機関の横暴とまで呼ぶべき解釈なのだろうか？
もつとも。

僕も法の専門家では無いからこの思考過程が正しいのか断言出来ないし、やはり法の解釈権限を持たないので、結局はウイゼンガモットの御偉方がどう判断するか次第である。

そして、最早考えを巡らせる意味も喪われている。アルバス・ダンブルドアが法による問題解決を放棄し、暴力的に出て行った以上、教育令の文面解釈を弄り回す必要は無いのだから。

「兎に角、僕の思考の下では、君達の退学は動かないように見えた」
「……………」

「そしてダンブルドア軍団が何人居たのかを僕の視点では知りえないが——僕に名簿を良く見せてくれる程、ドロールレス・アンブリッジは迂闊でも無かった——それらの人間も残らず退学になり得る。それを踏まえた上で、君達は軍団発覚後、退学処分を通知された後に一体どう行動するつもりだった？」

率直に、あの発覚の瞬間から抱いていた疑問を口にする。

「ダンブルドア軍団に所属した生徒の親達に対し、或いは君の両親に対し、自分達は正しい事をしていたと胸を張って説明出来るのか？」

闇の魔法使いへの対抗という暴力獲得目的で、顧問の監督も無く生徒だけで集まって、実践的な攻撃呪文を御互いへ撃ち合っていたというのに？ まして万一退学処分が課せられたとしたら、親達へと頭を下げて回る覚悟は有ったのか？」

それとも、賢い大人達なら当然助けてくれると甘えていたのだろうか。

糾弾する言葉は余り吐きたくないが、それでもドローレス・アンブルリッジ側——曲がりなりにも秩序を維持する側に立った人間としては、最低限の苦言は呈すべきだろう。

「……貴方は止めようとしなかつたわ」

「僕は私的な決闘訓練を一切問題視しない魔法族で、しかも違法行為だろうと見つからなければ問題無いと、そう考える類の悪党だからな」

反体制組織を立ち上げた彼等の心情も理解出来るし、その行為自体に肯定的である。

「けれども、グレンジャー夫妻のような『マグル』や、或いは『マグル』に親和的思想を持つ半純血の親達は、君達の行動を問題視する魔法大臣と庇うアルバス・ダンブルドア、果たしてどちらの側に味方するだろうか？ その程度の……絶対に表沙汰にしてはならない事項だという位は、君は考えを巡らせていたと信じていた」

ハーマイオニーの両手はローブを強く握り締めている。

魔法界における『マグル』の思想は強まっている。良くも悪くも。そして、それが何時もグリフィンマグルの味方を気取る者ドールに有利に働くとは限らない。

彼等は普段『マグル』と魔法族は同じであると主張している。それにも拘わらず、都合が悪くなると自分達は『マグル』と違い魔法族だから、文化が違うから許されると言い訳し出すのは、余りにしようもなく、みつともない振舞いだらう。

「……まあ、君達が始めた活動だからと、何の口出しもしなかつた僕も

悪いか」

「——っ」

「ドラコ・マルフォイの具体的な命令が無かったとは言え、ダンブルドア軍団の事を黙っていた時点で彼への背信だった。更に背信行為を積み重ねた所で余り大きく変わるまい。せめて僕が関われば隠蔽出来る程度には、最低限打ち合わせでもしておくべきだったか」

僕が関わったとて、マリエッタ・エッジコムの造反は避けられなかっただろう。

どうやって彼女から自白を得たのかは聞いていないが、ドロレス・アンブリッジの事だ。脅迫でも吐かないなら最後は真実薬を使っても聞き出そうとした筈である。

ただ、何れは暴かれたとしても、あの時のような危険——ハリー・ポッターとアルバス・ダンブルドアの両方がホグワーツを去り得る状況が生じるのは避けられたかもしれない。関与しなかった事を怠慢と批難されるのは已むを得ないという思いも有る。

「……そんな事、関わっていれば良かったなんて事、貴方が言わないで頂戴」

「何故？」

「だって、余りにも私が惨めに——」

「——惨めに思う必要など無いだろう？ 使える物は使うべきだ」

求められれば……まあ、関わりはしただろう。

ドラコ・マルフォイへの忠誠につき、僕はハーマイオニーとの関係以上の価値を見出していない。冷血で非道なスリザリンとして、今以上に踏み躪る事も躊躇わない。

「とは言え、こうなってしまう以上、僕の義務として告げておくが。マリエッタ・エッジコムによる告発を知った時点で僕は君達の事態收拾能力に見切りを付け、予めドラコ・マルフォイと約束していた通りに、ハリー・ポッターを退学まで追い込む気だった」

確かに僕はドビーを遣わしはした。

けれどもそれは、僕が追い込み漁をするつもりだったからだ。

アレは『必要の部屋』なのだ。ホグワーツに遺された護りの部屋な

のだ。

ドローレス・アンブリッジや尋問官親衛隊に入れな部屋として望まれれば、彼等はいれない恐れがあった。懸念は杞憂で終わったものの、僕は部屋の存在を知っているからこそ逆に、真正面から部屋に押し掛けるという単純な手段を取り得なかった。

「アルバス・ダンブルドアは消えた。ドローレス・アンブリッジは、前校長が責任を取ったから生徒への追及を止める殊勝な人間でない。そして、ミネルバ・マクゴナガル教授達では、魔法省と政争をやるには役者が足りない……専門ではないから仕方ないが。だからその暴挙を合法的に止められる人間は最早誰も居らず、やはり君達の退学は不可避だった」

ハーマイオニー達に逆転の手が無いのは歴然としていた。

そして、僕にドローレス・アンブリッジとドラコ・マルフォイの望みを覆す力は無く、ならば速やかに校内から退場願うのが慈悲だと僕は信じた。

「……貴方は、わた——ハリーが退学になるのは避けると思っていた」
彼女が言い直した意図は明白で、だからこそ僕も焦点を絞って答えを口にする。

「それは君の早とちりだな」

アルバス・ダンブルドア校長と異なり、僕はハリー・ポッターの在学を優先順位の上には置かない。魔法戦争の遂行に際して、彼がホグワーツに居るか否かは殆ど大きな影響がないからだ。

「確かに、君達の軍団が将来の役に立つかもしれないという期待は僕に有った。しかし、だ。僕は君達がホグワーツに留まる事を必須と見ていなかった」

「同じ場所で同じ時間を過ごす生徒の方が仲間として団結しやすいというだけで、君達の軍団の構成員が子供のみである必要は無かった。結成以降校内で勧誘を続けている様子も見て取れなかったし、大人を軍団に勧誘するならホグワーツ外の方が容易だしな。そもそも反体制組織は、別に校外でも活動し得る。校内に留める必要性自体が無

い」

口にした言葉は本心では有り、しかし一部でしかない。

ダンブルドア軍団内部の結束を深める最も手っ取り早い方法は、平和な自習活動を呑気に丸一年継続させる事では無かった。彼等を残らず退学にして苦境に追いやってこそ、彼等の間に強固な仲間意識を芽生えさせる事が出来たのだ。

僕の心の奥底にはそういう冷酷な判断が存在し……そしてそれを僕が口にしなくとも、僕と五年間関係を持った少女なら見透かしているかもしれないかった。

「また、もう一つ。これもハリー・ポッターから聞いているかもしれないが、僕はホグワーツを割るべき——力を弱めるべきという考えを持っていてという事だ。新校長が君達を退学にしてみましたのならば、彼女の行為に反発し、こんな学校などこつちから願い下げだとしてホグワーツを去る生徒・教授が出現するかもしれない。そのような期待も有ったのだよ」

千年前とは逆の追放劇をする気が僕には有り——けれども、僕以外は違った。

今回のダンブルドア軍団の騒動は、随分と平和な形へと落ち着かされたものだ。

「はつきり言おう。君達が退学になっっていないのは、偶々運が良かったに過ぎない」

何も無ければドラコ・マルフォイは当然ハリー・ポッターの追放に動いていたし、その場合ドロレス・アンブリッジは「マルフォイ」の御曹司の意向に抵抗出来なかった。

それが止められたのは、もつと上からの権力によるに過ぎなかったし、ドロレス・アンブリッジの個人的な打算でしかなかった。

「アルバス・ダンブルドアの逃亡にしても、ハリー・ポッターを退学処分にしやすくしただけ。結果的に退学にならなかったのは、あの老魔法使いの功績では無く、彼女達の事情によるものでしかない。有り得ないとは思うが、僕に救われたと思っっているなら御門違いだし、君達はドロレス・アンブリッジから在学の権利を奪い取った訳でも無

い。反魔法省・反高等尋問官を掲げた組織が彼女によって解散させられた以上、明確に彼女の勝ちだ」

目的を達成したのは彼女の方。

途中で挫折を余儀なくさせられたのは、ダンブルドア軍団の方だ。ドローレス・アンブリッジが今後慣例によりホグワーツを去る事になるとしても、今回の紛争がハリー・ポッター達の勝利に変わる事は有り得ない。

「……ハリーは解散を宣言してないわ」

「現在活動していないなら同じ事だ」

負け惜しみでしかない彼女の発言を一蹴する。

「逃げていったアルバス・ダンブルドアへの忠誠を示す為、軍団として一丸となり、ドローレス・アンブリッジに対する抵抗運動を開始する。簡潔に言えば、ウィーズリーの双子に……否、アルバス・ダンブルドアの行動に倣って大騒動を起こし、ホグワーツから彼女を叩き出してみせる。そんな気はハリー・ポッターには——君達にはもうないのだろうか？」

彼等は既に戦意を喪失した。

軍団と称する事が烏滸がましい、名前負けの組織に成り下がっていた。

「君達にとって、ダンブルドア軍団の活動はO・W・L・試験より優先度が低く、血を流す覚悟で戦う気は……魔法戦争の第二戦線を形成する気は最初から欠片も無かった」

「……………っ。あ、貴方もまた、私達の活動は子供の御遊びだったと言うの……………！」

「そう激昂する事は無い。我がスリザリン、尋問官親衛隊とて全く何も変わらんからな」

多分、「普通」とはそういうものなのだろう。

僕が可笑しいだけだ。

「権力を求めて何をやるかと思えば、魔法戦争に何の貢献もしない滅点行為や生徒虐め。闇の帝王が学生の行動を逐一把握しているとは思わないものの、万一にでもその耳に入ってしまったら、その御気楽さ

を大層不愉快に思う気がするがな。ホグワーツで悪事をする気なら、もっとマシな脳味噌の使い方をして欲しいものだ」

そもそも自分の点数操作で寮杯を取って何が楽しいのか解らんし、ましてスリザリンの狡猾さ、勝利への貪欲さとは、ああした無法を尊んで言ったものでは無いだろうに。

「学生が今の社会を変える。非魔法界で、それが夢物語で無い事が示されたのは約三十年前だ。まあ非魔法界の社会の移り変わりの早さを考えれば、もう大昔かもしれんがね」

1968年。

国によつては、一つの記念碑とされる年。

「その年には世界の何処もかしこも燃えていた。改革要求の波、それに伴う暴動が広がり、学生は間違いなく主役の一人だった。その内、最も「成功」した革命は、まあ対岸の事例だろう。パリで始まった学生の戦いは、カルチエラタンで武力闘争まで引き起こし、その余波は様々な階層・職種の国民を巻き込んで、最終的に政権を引つ繰り返す所まで行つた」

厳密には学生運動が直接政権を崩壊させた訳ではないが、あの革命が無ければ総選挙は起こり得ず、頂点の指導力低下が露わになる事もなく、以降の展開や変化も存在なかったのは間違いない。最後に変えたのが大人達の力だとしても、全てを始めたのは間違いなく学生達だった。

「……貴方がダンブルドア軍団に関わっていた場合、そこまでやる気だったの？」

「コーネリウス・ファッジへ挑戦しようとしたとは思う」
呑気に防衛術の自習を行っていた事はまず無いだろう。

ドローレス・アンブリッジの眼を盗み、秘密裡に呪文を学んでいた。そんな真つ当な学生らしい行為は、胸を張って自慢出来る程に大した偉業でもないからだ。

「ハリー・ポッターのインタビューにしても第二弾・第三弾と続け、ドローレス・アンブリッジの圧政を含めてホグワーツの現状を世間に大きく公表し、シリウス・ブラックの無実すらも白日の下に晒し、今の

校内の暴動を前倒しして引き起こす事を経て、あの不適格者を魔法大臣から引き摺り降ろすよう試みた。まあ、『ザ・クイブラー』の影響力を鑑みるに、社会革命までは至らなかつただろうがな」

しかし成功の可能性が低かろうと、何もしない事は有り得なかつた。

「その逆、尋問官親衛隊を本気でやろうとする場合でも同じ事だ。闇の陣営がハーケンクロイツ宜しく『平和的』に政権を奪取出来るなら、それに越した事は無い。やはりコーネリウス・ファッジの首を飛ばし、死喰い人の傀儡を後任の魔法大臣として送り込もうと画策はしただろう。勿論君も察しているだろうが、ドラコ・マルフォイの方もやる気は無かつた」

学生の枠組みを超えなかつたのは御互い様である。

ホグワーツという狭い世界の外へ干渉する事を、彼等は何も考えていなかった。

「ともあれ、個人的妄想の類に過ぎんよ」

余程真剣に受け止められている反応だったので、薄く笑って付け加える。

「君も、ハリー・ポッターも、この手の過激な手段は忌み嫌うだろう？」

君達の動きを見ていた限り、君は平和かつ穏便に——魔法省が期待する合法性の下に、ドローレス・アンブリッジ達による苦難を乗り越える事を志向していた。だから、僕は口出ししなかつた」

ハリー・ポッター達が生涯クイディッチ禁止になった時にしても、彼等は自らドローレス・アンブリッジの力を認め、下位に降りて行き、権威の下に服従する事を選んだ。

気に入らなかつたというのは僕の感想であり、彼はまた違った意見を持つているかもしれない。そう考えたから自重したのだ。そもそも陣営を異にしている以上、介入する権限はなく、仮に言ったとしても、スリザリン生の言葉に従えるかとハリー・ポッター達は反発しただろう。そして、それが正常だ。

「……貴方は三か月前、スネイプを信じるべきではないと言ったわね」
「そうだな」

俯いたまま発された刺々しい声に、肯定を返す。

「なら、貴方も同一ね。貴方は信じられない、決して信じてはいけない人間だわ」

「否定は出来まい。寧ろ、率先して肯定しよう」

小さく、しかし確かに頷く。

「ダンブルドア軍団の活動を黙っていた事はドラコ・マルフォイへの背信であり、そしてハリー・ポッターの退学に動いた事は君への背信だった。彼にとっても、君にとっても、僕が信用に値しない人間である事は間違いない」

「……………」

「だが、ここで改めて明言しておいた方が良くかもしれない。ハーマイオニー、君が僕を利用するのは一向に構わないし、最大限利用すべきだとも思っているが、しかし絶対に信じるな。君は僕を居ない人間と考^えて思^考から消^すか、盤^面を解^り易^くする為^に実^力で排^除してお^くのが最も適切なのだ」

スネイプ教授を最後まで「駒」として使わずに済むのが一番良いように。

僕を利用する機会のない方が、彼女達にとっては良い事である。

「そして勿論、君が僕と縁を切る選択肢は未だに君の手中に有る。この手の時間が惜しいというのは、あくまで僕の都合だ。最早共に居られないと君が言うのであれば、どうか今ここで言^って欲^しい。そうすれば、僕は今直ぐ君の前から去^らう」

開心術が重い意味を為さない理由の一つ、心は移り変わるモノである。

彼女が去年の十一月に僕を引き留めた事は、今も引き留める理由とはならない。

その問いに対する答えは、葉草学教授に齒向かつてでも待つつもりだった。

けれども彼女は僕を待たせなかった。大きく深呼吸した後で、顔を露わにして静かに言った。視線を合わせて来たその瞳には、迷いは見えなかった。

「私は……間違つたとは思つてない。貴方を引き留めた事に後悔はしていないわ」

「——そうか」

安堵と共に、やはり少しばかり残念だと思ふ。

仮に僕が完全に彼女の敵に回っていたのなら——本気でダンブルドア軍団を叩き潰すような事をしていたのなら、抑圧された彼等は強烈に反動化し、もっと過激な形で、魔法界全体を巻き込む遣り方で動いてくれたのではないか。

僕が中途半端にハーマイオニーへ肩入れする事は、彼女達の鋭さを鈍らせてしまうだけで、誰の為にもなっていないのではないか。

そんな想いが、あの夜の僕には有つた。

「……貴方は私達の負けだと言つたわね」

「——そうだな。確かに言つたな」

僕が考えている事を、見透かしていたのかいなかったのか。

ハーマイオニーは咎めるような視線と共に、強張つた声色で言葉を紡ぐ。

「なら、聞かせて頂戴。私達は勝つ為に何をすれば良かったの？ 貴方の視点と価値観の下からは、一体どうする事が勝利に近かつたの？」

「今更答え合わせをする意味など無いし、そもそも僕が正解とは限らない」

「私が聞いているのは貴方の答えなの」

自分の座る丸椅子を叩きつつ、貴方の、という部分を繰り返して彼女は強調する。

「貴方は私達の誰よりも賢い——いえ、悪知恵が働くでしょう？ だから聞かせて頂戴。貴方がダンブルドア軍団の、騎士団の味方だったなら、一体どうしていたの？」

「……………」

「良いから勿体ぶらないで」

「……はあ。個人的見解を言うなら——」

紡ぎながらも、溜息を自制するだけで一苦労だった。

思う所は有った。それでも口出ししなかった。

立場を異にした以上ハーマイオニー達の行動する権限は何も無く、去年度と同じように一歩間違えば友情関係を破壊しかねないと察していたからで、しかし最終的に答える羽目になっているのだから、僕達の関係は余りにも度し難い。

「——そもそも魔法省の法を守ろうとした時点で負けだったな」

誰も彼も御行儀が良過ぎる。

ドロレス・アンブリッジも——アルバス・ダンブルドアですらも。

今年度が始まった時から、僕はそう思っていた。

「結論を言えば、高等尋問官なんぞさつきと実力で排除しておけば良かった」

最初から彼女の権力も権威も認めてやる必要など無かった。

「始業式の時点では難しかったかもしれん。だが教育令第二十五号が施行され、ハリー・ポッター達がクイディッチを出来なくなると宣告された時は、正に“戦争”に踏み切るのに絶好の機会だった。あの瞬間、ハリー・ポッターはウィーズリーの双子共々ドロレス・アンブリッジに襲い掛かり、ホグワーツの敷地外へと叩き出しておくべきだったのだ」

彼等の精神構造も良く解らない所が有る。

ドラコ・マルフォイには殴り掛かってくれたというのに、どうして同じ事が出来ないのか。

「……!? そ、そんな暴力的な事は許され——」

「つい先日、アルバス・ダンブルドアは何をやった？」

「——」

「結局、彼は出て行った。始業式から維持していた下らない拘り、平和と非暴力の誓いを放棄してな。ならば最初から彼が同じ行為に及んだ所で、五ヶ月ばかり早く魔法大臣と高等尋問官を力で無理矢理屈服させた所で、一体今と何の違いが有っただろう?」

あの老魔法使いが柄にもなく要らぬ譲歩をするから、コーネリウス・ファッジやドロレス・アンブリッジがつけあがり、余計にややくいしい事態となってしまうた。

「魔法省風情が定めた法に『ホグワーツ』は従う義理なんぞ無い。初めからそう言えば良かった。小難しい役人共の理屈を認めず、頭の固いウイゼンガモットの権威を否定し、暴力によってこそ自分達の主張と正義を貫き通す。それこそがグリフィンドールの枠組みを超えた我々魔法族、本質的な『ヒト』らしさというもので、真に模範とすべき振舞いだった」

——九ヶ月掛かって漸く、多くの人間がそれに気付いたようだが。そう言っ、此度の事件の感想を締めくくった。

ウニベルシタス

今年は全くもってグリフィンドルらしくも無かった。

自分が正義であると妄信すれば最後、周りの迷惑や事情など考慮せずに突っ走る。法も秩序も己には関係無いという態度こそが、独善的な彼等の本質だっただろうに。

そしてまた、今もグリフィンドルらしさを忘れている。

送ればせながらウィーズリーの双子は動いたが、それでも拍子抜けな事に、せせこましい「悪戯」以上を行う気は無いようだ。しかも彼等の想像力は非常に乏しく、ドローレス・アンブリッジがスリザリンに——闇の帝王に倣う事を決意してしまった場合、どんな悲劇を招きかねないのかと思いを巡らせる事も無いらしい。

「ウィーズリー」はドローレス・アンブリッジの慈悲と善良さに礼を言うべきだ。

彼女があそこまで御優しい人間でなければ、ロナルド・ウィーズリーが現在O・W・L.の勉強に励んでいる事も、双子達が呑気に卒業計画を進めている事なども有り得なかった。ドローレス・アンブリッジを真なる脅威と看做すならば、グラハム・モンターギューの不幸が起こって直ぐ、彼女を襲撃に行つて聖マンゴへと叩き込むべきだったのだ。

しかしそれをしていない時点で、彼等もまた学生気分から抜けられない。いない。

「……貴方は、ダンブルドアの行動に不満を覚えていると思つていたわ」

「不満だとも。そして不愉快極まりなかった」

チクリと。

そう表現するには刺激的な言葉を、笑いながら受け止める。

彼女の指摘はその通りだが、一面的で、表面的な物でしかない。

「オックスブリッジの総長が自分を逮捕しに来た首相や警察に対して暴力を振るい、現在逃亡を凶っている最中である。こんなニュースが非魔法界で流れれば大騒ぎで、世界的な恥晒しだな。それでオックス

ブリッジの権威の一切が消失する事は有り得ないが、世間の見る目は厳しくなるし、そんな人間を頂点に据えた学校・理事会の「体制」は、どうあっても問われる」

これで「政府」の介入を学校側が拒絶すれば、更に御笑い草となるだろう。

まして、そんな暴力的な人間を、以降も校長のままに据え続けるなんて論外である。オックスブリッジ自身が望んでも、それらの卒業生が、世間がそれを許すまい。

「……なら、何故止めなかつたの？」

「また無茶な事を言う。あの怪物を止める事なんて僕に出来る筈無い」

「嘘よ……！ 貴方ならば、貴方に賢い人間が最初から関わつたのなら、ダンブルドアがそんな行動に及ぶ前に止められた——」

「——アルバス・ダンブルドアは、今回も「正しい」」

「——っ」

非常に遺憾な事に。

あの大魔法使いこそが、この魔法界において絶対の正義なのである。

暴力を行使するのは別に構わないものの、校内に事件の顛末を広めた——後から校長室での出来事に関して惚けたり、「嘘」だと否定する余地の一切を潰した——点は受け容れがたいのだが、それでも僕の抱く感情や批難の方こそが的外れなのである。

「……説明」

一分程沈黙を続けた後、彼女は単語だけを口にした。

「不要だろう。君が今後も魔法界に留まる気なら、君も何れ知る現実だ」

「なら、今教えてくれたって良いでしょう」

「そうでもない。君は君の信じる道を行けば良いし、何より、この論点についての言及は、最終的に無意味になると僕は見ている」

「相変わらず貴方の言っている意味が解らないけど、全ての是非は私が聞いてから判断する事よ。断じて、貴方が一人で決めて良い事じや

ないわ」

「……………はあ」

この貪欲な少女は、やはり疑問に思ってしまった事を放置出来ない。いや、彼女の感情の矛先から見ると、真に放置出来ないのは、多くを理解しながらも傍観し続けた僕の態度か。

「魔法界は、数百年前の世界で生きている。その出発点を忘れてはならない」

今の魔法界は、二つの世界の常識や価値観が混在し、混乱している。二度にわたる魔法族同士の戦争。非魔法界における社会の急激な発展。時代を下るに従って進んだ混血化。それらが現在の歪みや対立構造、そして危うさを生んでいる。

だから今回のような、好ましい曖昧として放置されていた問題が顕在化する。

「ホグワーツと魔法省の関係性。それを特に象徴するような対応が、これまでの五年間で二度ばかり存在した。一つは、バジリスクが校内を這いずり回っていた時。もう一つは、この流れで当然推測が付くだろうが、シリウス・ブラックがグリフィンドール寮に侵入した時だ」

魔法族ならば何も思わなかった。

けれども半純血、或いは「マグル生まれ」ならば、気付いていて然るべきだった。

「この二つは何れも、生徒が危険に晒された事件として括る事が出来る。まあ後者の方は実は危険など存在しなかった訳だが、親達の認識は別だな。そして、これらの事件に対するホグワーツ、魔法省の対応はどうだった？ 非魔法界と比べて何か変だと君は感じなかったか？」

感じた。そう思ってしまった事は、ハーマイオニーの眼から読み取れた。

当事者である彼女は、そして恐らくハリー・ポッターも、同じ事を思ったに違いない。ロナルド・ウィーズリーと違い、彼女達は非魔法界の常識を持ってしまっているのだから。

「一般的な学校の中に、危険な猛獣が迷い込んでしまった。或いは脱

獄した凶悪犯が侵入してしまった。この場合における非魔法界の次の動きは当然目に見えているな。直ぐに警察が来る。仮に来ていない場合、教員達或いは生徒達は近場の電話を探した後、直ぐに緊急番号へとダイアルする事だろう」

「そして駆け付けた警察は事件が進行中、もしくは未解決のままならば、学校の周囲や内部を見回り、生徒の警備に付く。可能ならば学校の運営自体を停止し、休学させようとする。また、仮に事件が円満な解決を見た後も、彼等は暫くの間滞在するだろう。その際、彼等は生徒に言う筈だ。安心して下さい、私達が付いていますと」

非魔法界は、殆ど間違いなくその流れを辿る。

「では、魔法界はどうだった？」

この古臭い世界は、ハリー・ポッター達の眼にはどのように映っていたのか。

「バジリスクが元気に校内を散歩している間、君達は魔法省傘下の組織を何でも良いから校内で見かけたか？ 或いはシリウス・ブラックの事件。学期が始まった頃は兎も角、彼が太った婦人を切り裂いてくれた時点で、脱獄犯がホグワーツ付近に居る事は確定した訳だ。それから後、闇祓い——闇の魔法使い捕獲人とも呼ばれる彼等の姿を、君は校内で見かけたか？」

「……いいえ。少なくとも私は、そしてハリーも多分見ていないわ」

波打つ髪で表情を隠し、額に手を当てながら、彼女は答えてくれた。

声は明らかに沈んでいて、そして気付かなかった自身を責めているようだった。

ハリー・ポッターとロナルド・ウィーズリーが秘密の部屋を見つけた際、彼等は魔法省からの役人に頼れはしなかった。またシリウス・ブラックが脱獄した際も、その警戒の為を行っていたのはパーシー・ウィーズリー、ホグワーツ監督生や教授達であって、省から派遣された公的機関の間では無かった。

「まあ生徒が見ていないからと言って、彼等魔法省の人間が居なかった事にはならんがな」

その二つは単純に等しくならない。

「裏方に回っていたのであれ目眩まし呪文を掛けて潜んでいたのだから、確実にホグワーツ内に誰かが、それも少なくない数が居た筈だ。アルバス・ダンブルドアは吸魂鬼を招き入れるのは断固拒否しても、闇祓い達を校内に入れる事まで難色を示しはしないだろう」

彼は強情だが、生徒の安全を最優先にする人間である。

体面を気にする人間でも無いし、その程度の妥協なんぞ躊躇うまい。

「しかし表向きは来ていない事になった。ホグワーツの独立性を維持する。その原則は維持された。間違いなく意識的にな。そして、この手の対応を異常と非難する事は出来ないのだ。時計の針を二百年程巻き戻せば、こんなのは当然なのだから」

あの状況で警察が校内にいないなんて有り得ない。

そんな批難をする人間こそが有り得ない。

「現在の非魔法界においても、それを正当化する理屈の名残は見付けられる。先の猛獣や凶悪犯が入り込んだ例として、僕は敢えて一般的な学校を挙げた。例えば、オックスブリッジを挙げる事は明確に回避した。要するにそこには明確な意図が存在する訳だが、君は知って――」

「――その二校は、自前で警察を持っているわ」

「正にその通りだ。ついでに言えば裁 university court 判 所もある」

先んじて回答を口にしたハーマイオニーに対して首肯する。

Ancient University ブリテン諸島の七大学には、中世より続く伝統と慣習に基づき、様々な特権が認められている。警察権と司法権は、その数ある特権の内の一つである。

勿論、それらの大部分は時代が下るにつれて地方自治体ないしは中央政府に移譲され、現在では到底治外法権と呼べるものでは無いのだが、さりとて完全に自治を手放した訳でも無い。

「僕は去年、アルバス・ダンブルドア校長に対し、ホグワーツ内は治外法権なのかと問うた。それは僕にとって回答を得る為にした質問では無かったし、その時僕が攻めていた対象は、アルバス・ダンブルド

アではなくコーネリウス・ファツジの方だった」

「……………」

「またあの校長とて、当時はまだ協力的だったコーネリウス・ファツジの手前、この問いに答える事は意識的に避けた筈だ。素直に僕の質問に答えて魔法大臣の敵意を煽った所で得られるモノは無いしな。気付かない振りをしたままでも当然と言える」

誰もが間違いを解っており、その上で看過した。

真正面から答える事は、誰の得にも成りはしないからだ。

「しかし、彼等は内心想っていたに違いない。ホグワーツが治外法権？ そんなのは当たり前では無いかと。魔法省如きが介入する権利も余地も全くないと」

古臭い因習の下ではそれこそが常識であり、自然だ。

魔法界を異常だなんて言う人間は、歴史というモノを全く知らない。この国の非魔法界においても、二百年前は然程変わらなかったからだ。

「僕は解り易く大学を挙げたが、それに拘泥する必要も無い。中央余所者の不当な介入を嫌うのは、民族や時代の区別無く、人間集団としての本能だ。ロンドンの警察の現体制もまた、正に典型例であり象徴だろうか？」

旧い社会とは、二百前の世界の常識とはそういうモノだった。

Metropolitan Police Service「ロンドン 首都警察——スコットランドヤードと言う方が

通りは良いか。その警察機構は現在、グレーター・ロンドンを管轄している。しかし、重大な留保が付いている。彼等の管轄は、その大口約1.6km四方ロンドンの内、この一世紀半程は金融街として著名なスクエアマイルの領域、所謂『シテイ』が除かれると」

ロンドンのど真ん中、長い歴史を持つ都市の心臓部は、ロンドン首都警察の管轄外である。

「何故そんな事になっているか。決まっている。『シテイ』が管轄下に置かれるのを——支配を拒絶したからだ。首都警察の成功によって数年後、やはり警察は置かれるべきだという話になった時も、たったスクエアマイルばかり首都警察の管轄が増やされるような事態には

ならなかった。何故か。やはり決まっている。『シテイ』が善しとしなかつたからだ」

現在シテイを管轄するのはロンドン市警察^{City of London Police}である。

中央政府では無く、地方の統治機構が自ら信認した組織こそが、同地の治安を守っている。

流星に現代では首都警察と市警との間に組織や能力面で大きな差異は無かろうが、十九世紀においては全く別の性質を有する組織であり、両者が混じり合わぬ事は譲れない一線でもあった。

「この根底には、余所者は——特に強大な暴力装置を備える中央から派遣された者は、絶対に権力を濫用し、悪事を働くという信念が有る。スコットランドヤード
首都警察創設時ですら揉めに揉めた。その当時、対岸でのジョゼフ・フーシエの行いは記憶に新しかったからな。要するに、後進的な世界では、警察とは存在を社会に許容されない組織なのだ」

警察組織に対し多大な信頼を寄せる社会が、果たして健全であるかは別の話だが。

先進と呼ばれない国家や社会では、政府指揮下の警察機構なんぞは御伽噺同然の存在である。

勿論、そこにも秩序は確かに在る。

ただ単に、中央政府が統轄していかないというだけで。

各地と各人が独自の慣習の下、思い思いの形で治安維持を行っている。

「もしもし警察ですか、どうか助けて下さい。そんな発想は、ほんの五十年前に生まれたものだ。そして、現代の非魔法界ですらも素直に受け容れられている考えでは無い。特に学校という閉鎖社会への介入は忌み嫌われる傾向が強く、であれば——」

——古い魔法界が、余計にそうでない筈がないのだ。

「実際、魔法族の懸念通りだったではないか。自分達の失政・不甲斐なさを棚に上げて、コーネリウス・ファッジは今回不当な形で校長を逮捕しようとした。明らかかな自治の侵害、腐敗した組織の誤魔化し、典型的な権力機関の暴走であり、それに対してホグワーツ校長が^{ユニベルシタス}共同体の利益の為に杖を上げて抵抗する事を、一体どうして「悪」

と批難出来る？」

「……………」

「『マグル』はどう考えるかは別として、少なくとも魔法族は問題視しない」

魔法族は、それ程『先進的』な種族では無い。

それが今の現実。

「校内の雰囲気もそうだろうか？ まあ、嫌な奴等がやつつけられて良い気味だ、程度の感想を持っている愚か者も多いがね」

グリフィンドールの殆ど。

そしてハッフルパフの大半のレイブンクローの一部はその立場だ。

「しかし、基本的な路線、魔法族の本来の在り方からは、彼等の感想は肯定出来る。余所者の干渉を排除し、hogwartsの独立歩を守ろうと行動を起こしたアルバス・ダンブルドア。あの前校長閣下を英雄視するのは、魔法界の常識の下では絶対的に『正しい』のだ」

民主的な基盤の上に立たない一学校の長が、選挙によって信任を受けた行政機関の頂点——『国家』の顔を虚仮にした。そのような考え方を、決して魔法族はしてくれない。

魔法界は暴力の独占を認めはしない。

不正な公権力に対する反撃を、容易く『正当防衛』として承認してしまう。

「君はhogwartsの自治の根拠を、学問の自由などという近代的な理論に求めていたのだろう。けれども、この箱庭を支えているのは、もつと古くて神聖不可侵の理なのだ。故にアルバス・ダンブルドアは正しい。一切の非の打ち所なく。何の瑕疵すらなく。僕が止めるなど無理な話だ。だって魔法族、否、人間とはそういう生き物なのだから」

そして、当然のように相容れない。

魔法省
組織に所属するコーネリウス・ファッジやドロレス・アンブリッジと。

如何にも古い大魔法使いの振舞いは、彼等にとって許し難きモノとしか映らない。

「……漸く」

「ん？」

「漸く、掴めた気がするわ」

ハーマイオニーは小刻みに震えながら言った。

「貴方がダンブルドアを嫌悪、敵視し続ける理由」

「……………」

何時も何時でも、僕は彼女を傷付ける。

去年度も。今年度も。そして、今回もまた。

性懲りもなく、僕は彼女の心を散り散りに引き裂いてしまったらしい。

ハーマイオニーの顔は完全に血の気が引いて真っ白で、けれども何時の間にか破れている唇から漏れる赤だけが鮮やかであり、その対比が非常に印象的で、美しかった。

「貴方が取る立場は、ホグワーツよりも魔法省が重んじられるべきというものなんでしょう？　今のオックスブリッジやザ・ナインがそうであるように、学校は国家の監督と指揮下に置かれるべきと考えているんでしょう？　でもその一方で、貴方は現実として魔法界ではそうではないと、そうならないのも已むを得ないと、そのように認識してしまっている」

いえ、と。

ハーマイオニー・グレンジャーは栗色の髪を揺らし、舌で血を舐め取りながら続けた。

「貴方の敵意の先はホグワーツだけじゃない。魔法省に対しても平等に向けられている。違つかしら？　だって貴方にとって、この魔法省は『政府』と看做すに足りないから」

「……………まあ、そういう事ではある」

軽く温室の天井を見上げ——そこから透けて見える曇り空を見つめながら思い出すのは、去年の夏に訪れた魔法省、そこに掲げられていた案内図。

「地下一階、魔法大臣室。地下二階、魔法法執行部。地下三階、魔法事故惨事部。地下四階、魔法生物管理部。地下五階、国際魔法協力部。」

地下六階、魔法運輸部。地下七階、魔法ゲームスポーツ部。守衛室等を備える地下八階は飛ばし、地下九階、神秘部。そして地下十階、ウイゼンガモット」

この程度の内容はハーマイオニー・グレンジャーも丸暗記していても疑問に思わないが、改めて記憶喚起する価値は存在するだろう。視点を変えて観察してみれば気付くのだ。

それらの部署が備える共通項と、致命的な欠陥に。

「細かい事を言えば、今の言及は非常に雑で、不十分だ。外来者が知る必要のない部署、たとえば魔法ビル管理部が含まれていないし、オフィスを構えていない各種委員会、実験呪文委員会なども省略されている。またロンドン外の場所に置かれている省——O・W・Lを主宰する魔法試験局を傘下に置き、僕達の学費等に関する業務を行う魔法教育省あたりも入っていないな」

……しかし。

「嗚呼、しかし、一般的な魔法族が思い浮かべる『魔法省』とは、本部としてロンドンに居を構える、この伝統的な八部門と一つなのだ。多くにとってこれらが省の仕事の全てであり、これ以外の仕事を把握する必要性に迫られる人間はそうおらず、だからこそ、僕はこう疑問を提示しよう。」

——あの建物が今日爆破され、跡形もなく消えたとして、魔法族は困るだろうか？」

そう訊ねつつ、しかし直ぐに僕の方から口を開いた。

ハーマイオニーに、『マグル生まれ』に回答は求めていなかった。

彼女にその疑問を考えた経験は一度もないに違いなく、何より既に解答は出ているからだ。

「——困らない。魔法族が明日から生きる事に、何の支障も出ない」
それこそが、魔法省という組織の実情だった。

砂上の家

魔法省はマグルの政府に相当する機関と言われる。

しかしあくまで相当する機関に過ぎず、完全に等しい訳では無い。

現代のマグル社会において、“政府”が無くなる事を望む者はそう居まい。

どんなに反政府的な思想を持っている者で有ったとしても、新たな政府を設立する事を目的とするのが殆どで、原理主義的無政府主義を掲げる者は稀の筈である。

現代の政府は、国民生活と密接に関わっている。

たとえば国民保健に関連する業務を司る保健省、或いは労働省が吹き飛ばせば、各種の金銭給付が停止し、明日から食えなくなる人間が生じるだろう。農漁業食糧省が消えてしまえば水質汚染対策や農耕政策が滞り、即座に漁師や農家が困る事は無くとも、中長期的に生活不可能になる事は眼に見えている。貿易産業省が機能不全に陥れば、雇用関係もそうだが、電力やガス等のエネルギー関連分野の統制が不可能になり、生活自体が困難となるだろう。

まあ、税務を司る財務省あたりは今すぐ滅べと考える人間——そこらの一般市民のみならず、政府内の他省庁も同様だろう——が多いかもしれないが、それでも本気でそう考える人間は多くない筈である。税は国家運営の根幹であり、その業務が停止すれば各所に広く影響が生じるだろうというのは、余程馬鹿でない限り容易に想像出来る。

けれども、この世界における魔法省はそうではない。「魔法省の存在が役に立つ場合も有る。その事まで否定している訳では無い」

全くの無価値と考える原理主義者はやはり“純血”でも少数派であり、今の時代において価値を認める最先鋒は、当然ながらルシウス・マルフォイ氏である。

「しかし、無いなら無いで困りはしない。そう考えるのもまた魔法族なのだ。“マグル”の価値観、特に先進国特有の常識に染まった人間には考えられないかもしれないが、旧い世界に生きている魔法族は」

政府”を必須のモノと見ない」

“マグル”にとって魔法界は異国なのだ。

同じ視点で世界を捉えてしまえば、当然に真実を見誤る。

「魔法省は、国際機密保持法の制定を契機として、1707年に設立された。この前提を胸に深く刻んでいる人間が一体どれだけ居るのだろうか？ 特に“マグル生まれ”。三百年前を知る家系の血を引かない君達は、この意味を全く理解していないように見える」

魔法史の授業で寝ている人間が殆どでは余計期待出来まい。

国際機密保持法。

魔法省を頂点とする現体制は、その法律を原点とする。

ロンドン本部に居を構える部署は、唯一神秘部を除き、その法律維持こそを存在意義とする。

「魔法界を分析した評釈にこんなものがある。魔法省が設立されたのは、機密保持法の制定を受けて、needed a more highly structured, organized and supported, regulate and 隠れ住む事になつた共同体への支援、統制、情報伝達を高度に複雑化された communicate with a community in hiding 複雑な構造が必要となつたからとな」

ハーマイオニーが実際に聞いた事があるかどうかは不明なものの、非魔法族向けの文章には割合引き合いに出される評である。

「しかしこれの意味する所は、魔法省の役人にとって非常に残酷だ」
「……………」

「その理由は、先の文章を反転させてみれば解る。要は、国際機密保持法が無くなつてしまつてしまえば、魔法族は魔法省のような複雑な官僚組織を必要としないし、魔法大臣に対しても支持などしない。魔法省の役人は何時仕事を喪つても可笑しくはなく、魔法大臣が誰からも頭を下げられる日が来る可能性は常に存在する——そういう理屈が成り立ってしまう」

魔法省は魔法界の統治機関であり、魔法大臣はその頂点である。

それは嘘で虚構だと看破してしまうのが、先の評釈の本質なのだ。

「この事は、省の機構を見ても明らかだろう」

どれもが機密保持法を組織の土台としており、仕事の大半が生活に直接関係しない。

「ウィゼンガモット……初代魔法大臣ウリック・ガンプが主席魔法戦士であり、省の安定化には既存権力の権威を借りる必要があったから一体化しただけで、そもそもが省とは別機関だ。機密保持法違反者が消えれば管轄の裁判事件も激減する。神秘部……一般の魔法使いは必要性を感じていない。もつとも、無言者達は省が消えようと勝手に研究を続けるだろうが」

一呼吸置き、更に続ける。

「魔法ゲームスポーツ部……魔法族が唯一存続を望む部であるものの、必ずしも魔法省の組織である必要は無い。分離すれば済む話だし、機密保持法が無ければそこら中でクイディッチを出来るようになる。魔法運輸部……省が煙突飛行や移動鍵を規制しているのを不愉快に思う者は数多い。特に今現在ドローレス・アンブリッジが Hogwarts でやっている暖炉の監視は、伝統的魔法族にとって言語道断だ。部が消える事で移動面が多少不便となるだろうが、絶対に潰す」

「――」

「そして国際魔法協力部……嗚呼、これに関しては多少補足が必要か」
バーテミス・クラウチ氏が君臨し続けて来た部署は、今年スリザリン生の相談に乗っている内、非常に勘違いされやすいという事を学んでいた。

「国際魔法協力部は決して重要部署ではなく、省内の『傍流』だ」

それどころか、省内で最も無くなっても困らない部署と言っても過言では無い。

「その理由は、やはり数百年前の非魔法界を参照するのが手っ取り早い。過去の非魔法界での外交官はどんな身分の人間だった？ 僕から答えよう。貴族だ。そして、魔法界でそれに対応するのは？ 純血だ。スリザリンの純血達に限らず、魔法界で長い歴史を持つ名家の息子子女こそが、他の魔法界との交渉人として最も相応しい。テスト勉強が出来るだけの平民なんて、端から御呼びではない」

入省時点から多くのコネと人脈を持ち、そして相手方の魔法界に本

家や分家と言った親族、嫁いだ娘を通じて繋がりを持つ者達こそが、最も国際交流を円滑に行える。それが古い社会形態での思考である。交渉の本体は部の外に在り、内側には無い。

パーシー・ウィーズリーが国際魔法協力部に配属されたのも必然だった。

彼は能力を見込まれたというより、「ウィーズリー」だからあの場所に行った。そして、似たような人間は多い。血を誇るしかない純血崩れや、継承権の無い三男以下は大概あそこに送られる。魔法省高官という肩書は響きだけは素晴らしく聞こえるし、彼等の自尊心を一定程度満たせはするからだ。

配下の「純血」を利用して交渉に関与出来る魔法省と、家内の穀潰しに職と立場を斡旋出来る「純血」。どちらも全く損しない取引で、この三百年間行われて来た事だった。

「そもそもたった七年、下手すればそれ以下の期間で交代する魔法大臣に、政治の話をする意味が有るのかと考える魔法族は多い。魔法省役人にしても異動するし、権力闘争で敗北すれば左遷されるし、下手すれば省自体を辞めてしまう。これで何の交渉が出来るというのだ？」

そして魔法省自体が最初から信用に値しない組織である。

機密保持法破棄の危険が付き纏う以上、十年後に存在するかすら怪しいのだから。

「一方で、ルシウス・マルフォイ氏のような「純血」は数十年変わら無い。代替わりの際に約束を反故にされる危険は否定しないが、露骨に不義理をしてしまえば、他の「純血」家からも信用されなくなり、最終的に家を傾ける事になる。魔法省と「純血」。どちらと外交出来るか、交渉結果が信頼に値するのかは、普通の魔法族には明らかだった」

結果、外交と言えるような交渉の多くは、「純血」達の邸宅、或いは彼等が開催する華やかなパーティーの中で行われてきた。決して、役人達の小綺麗な机の上ではない。

一応、闇の帝王が墮ちた後は、左遷されて来たバーテミス・クラ

ウチ氏という傑物の働きもあり——言うまでもなく、彼も「クラウチ」だ——相応の存在感を持っていたようではある。しかし彼は去年消え、外交の主導権はルシウス・マルフォイ氏のような古い「純血」の手に取り戻された。結果、十数年前と同じく無能共の集まりに成り下がったと聞いている。

「貿易関連の業務にしても、産業革命以前の世界での貿易高、ひいては役人の仕事量は知れておいる。また金持ちしか飛行機を使えない「マグル」と異なり、魔法族は移動鍵等を使って直接個人で買い付けに行く事が可能だ。物品の欠陥や不揃い品の問題は、法律ではなく自己責任の問題で、そういう訳で——故に国際魔法協力部も必須とは看做されない」

「マグル」界における外務・連邦省とイコールに考えるのが間違っている。

非魔法界での序列が高かろうと、魔法界での序列は圧倒的に下だ。「後、残っているのは……魔法生物規制管理部か。大多数にとって小うるさい事を言ってくる部署だな。ネス湖のケルピーなどの自由な遊泳を認めないのは、魔法生物愛護、動物の権利Animal Rightsという先進的理念に反するという主張も有る。存在しない方が良い。魔法事故惨事部……言わずもがなだ。そもそも魔法を公然と使ったとしても、頭の足りない「マグル」は気付かないのではないか。そう考える魔法族も少なくない」

ハリー・ポッターが空飛ぶ車を飛ばそうが、守護霊の呪文を行使しようが、現場の忘却術士の苦勞と奮闘を見ないのであれば、二つの世界に何も大きな影響を与えなかった。ネッシーや雪男、妖精達を「マグル」が騒ごうとも、魔法界と魔法族の存在が露わになる気配は——今のところ、という限定が必要だが——無い。

これでは、標準的な魔法族が樂觀視してしまうのも已むを得まい。「そして、最後。魔法法執行部」

言及を敢えて後回しにした、現魔法省における最大にして最重要の部署。

「これは機密保持法が原点とはいえ、業務の性質上、その枠組みから逸

脱する事が出来た。逸脱というより、拡大解釈して市民生活の為に利用出来るようにしたと言うのかな。その筆頭は勿論闇祓い局だ。エルドリッチ・デイゴリー魔法大臣は、スコットランドヤード成立の百年前に良くも改革を通じたものだと感じする。そして今や定着した。闇祓いに拒絶反応が示される魔法族は、現在の魔法界では非常に珍しい部類に属するだろう」

その部署は、魔法族が省の統治の正当性を多少なりとも認める端緒となった。

初期の——十八世紀前半の魔法大臣は大概グダグダだ。

初代魔法大臣ウリック・ガンブ以降は混乱が続き、新大陸に倣って闇祓いを作った第四代魔法大臣エルドリッチ・デイゴリー、創成期の闇祓いでもあった第七代魔法大臣ヘスパイスタス・ゴアによって漸く組織としての安定を見て、方向性を意識する事になる。彼等も大臣として問題は有ったが——特に後者は小鬼や狼人間達の叛乱に対して苛烈な態度を取った——その尽力と献身こそが今の魔法省の基礎を作り上げたと言つても過言ではない。

「けれどもそれは、あくまで魔法法執行部が市民にとって信頼出来る存在である事が必須だ。ソレが信頼に値しない、市民にとって不要と評されれば、最低限の警察力だけ行使しろ……つまり、機密保持法を破壊しようとする魔法使いだけ捕まえていろという話になる。そして勿論、機密保持法が消えれば仕事は無くなる。御役御免だ」

どれもこれも、本物の魔法族にとっては要らない。

魔法省が消えようが、マルフォイ一家の家族の生活は一切変わらな
い。他の「純血」一族も同じ。彼等の生計を立てる手段は、魔法省に
拠っている訳ではないからだ。

ただアーサー・ウィーズリーのように魔法省に寄生して生活してい
る者だけが、省が消える事によって明日からの生活に困窮する。そし
て、彼等は少数派だ。ホグワーツ内で魔法省役人を進路として選択す
る人間を数えれば、その事は明らかであろう。

「要するに。魔法省は本質的に、民の人命や財産を護る為の組織では
無いのだ」

悲鳴混じりの小さな呻きを他所に、僕は続けた。

一度口に出してしまつた以上、途中で止まる事は許されなかつた。「ハーマイオニー。君は魔法界で三権分立が存在しない事を疑問に思い、もしかしたら危惧したかもしれない。まあ、非魔法界の連合王国も割と怪しい訳だが、魔法界はその比でない。権力分立という概念以前の話。この世界における魔法省とは、社会契約説——市民が合意に基づく契約の下、市民の権利の保障の為の組織を成立させる——そんな発想自体から程遠いのだから」

権力分立制度は、権力機関同士の牽制により国民の自由を保護する為の制度だ。

もつと言えば、機関運営の効率性に眼を瞑り、専制による最悪を回避しようとする制度だ。

つまるところ、組織に国民保護の理念が不要であるというのならば、権力を分立・分割するのは非効率かつ無意味である。かつての絶対王政期のように、一つの指導者の下に三権が連携して行使されるのが、最も迅速かつ有効に問題へと対処し得るからだ。

そして魔法省。

あの組織は多数の人間に望まれて成立した訳でもない。非魔法界の王の家政組織が母体となり、済し崩し的に成立した訳でも無い。国際社会の多数決によつて半ば押し付けられる形で、この世界に成立した。不自然な玉座が、脈絡も無く突然に、恣意的に据え付けられたのだ。

そして業務上の必然として、彼等は機密保持法を維持する為の三権をロンドン本部に集約し、その法を維持するのに不必要な省——例えば魔法教育省等——は中央から排除された。だから、必要以上に市民に御優しくするという発想も生まれなかつた。市民の方も同じ。自分達の直接の利害に関わらないのだから、魔法省に対して愛着や忠誠心を抱ける訳が無い。

そもそも政府が民に優しくなつたのは、1789年の大革命を大きな転換期とする。

あの革命を端緒とした一連の破壊的戦争により、統治者達は領民の

力を知り、同時に彼等を資源として最大限利用する手段を模索し始めた。その一つの答えが、“国民^{nation}”を構築し、それへ支援する事だった。

強固な官僚制の下での教育改革も、公衆衛生改善も、福利厚生強化も、経済的支援も、“国民”に優しい全ての政策目的は打算であり、最終的に行き着く目標は富国強兵、要は戦争に勝って“国家”や“国体”の維持・発展をする事にこそ在った。

人権意識や人道目的に基づく社会福祉の概念が出来たのはその後であり、極々最近。二度目の世界大戦が終わってからの五十年程。その歩みは遅々として進み始めたに過ぎず、今の時代も尚、発展途上にある。

ならば、魔法界がこの有様であるのは当然だろう。

「近代以前の政府が如何なるモノであったか。それを考えると良い。時の支配者にとって民とは一方的に搾取する存在でしかなく、羽虫のように何時の間にか湧いている存在で、必要以上に愛情を抱く対象では無かった。そして魔法省も然程変わらん。アレは、国民に対する慈愛の精神なんぞ持ち合わせていない。そもそも——魔法界は、“国家

“では無い”

Wizarding World

魔法界。

或いは、Magical community
魔法族の共同体。

素晴らしい呼称だ。カントリーでもステイトでもネイションでも無い。魔法族の生きるのは場であり、人の緩やかな結び付きの間なのだ。

国名というモノを、魔法族はクイティツチのチーム分けの便宜程度にししか思っていない。その旗の下に団結して社会を構築・守護する意識は、魔法族には無い。

「魔法界には、国家——或る一つの領域を全体を強化するという概念自体が無いのだ。王家を持たない世界では“マグル”のような王族間戦争が起きる事も無く、杖一本有れば生きられる魔法族は、土地に対して過度に執着する必要も無かった。家同士の抗争の規模は知れており、別の魔法界同士が戦争する事は稀で、ならば、“政体”を維

持するという発想すら生じない」

近代以前の王家や封建君主には、自家を存続させる為に戦う熱意が有った。

近代以降の国民には、自国の王や政府を存続させる為に戦う熱意が有った。

だが過去と現在を問わず、魔法族には、魔法界の為に戦う熱意は無い。

何故なら魔法界とは誰の所有物でも無いし、姿眩まし等により好きな場所に移動出来る魔法族は、古臭い封建体制に縛られる事も無い。そして政府のような公的機関が無い事は、自分達の生命の危険に直接繋がるモノでもないからだ。

だから——魔法界には国民という概念もまた存在しない。

意識としては今の国際化社会に近いだろう。

杖一本で出来る事は限られるが、少なくとも一人一人を生き延びさせる程度は出来る。僕達は贅沢さえ望まなければ、世界の何処でだって生きていける。

「だから、魔法族は……特に魔法省は、闇の帝王に勝てなかった」

傷付いた少女から視線を逸らし、揺れる魔法植物を眺めつつ、冷淡に告げる。

多くの“マグル”は、一人の魔法使いに“政府”が負けた事を不思議に思う筈だ。テロリスト集団に軍隊が負ける事は全く有り得ないという訳ではないが、それでも平和な先進国では非常に例外的で、だからこの魔法界で何故そうなったのかを強く知りたがる筈だ。

けれども、魔法族の観念から見れば何の不思議もない。

「あの組織は本質的に国際機密保持法——魔法族という種族の為に組織に過ぎず、魔法族を“マグル”から隠すという決まり事さえ護っていれば、誰が上に立っていようと構わない。そんな意識が魔法省の根底に存在していたから、彼等は当然のように敗北した」

闇祓い等は軍隊や警察に近い性質を持つが、等しくは無い。

非魔法界の国民軍とは異質。1689年に創設された法を維持するのが本義の組織であり、治安維持や市民保護等はなくまでつい

だ。彼等が第一に想定する敵は、人間の法を理解しない小鬼等の異種族やゲラート・グリンデルバルトのような革命家だ。魔法省の統治へと組織的に挑戦して来る悪の魔法使いと戦う事は——スカウラーが敵であったMACUSAだけは少し状況を異にするが——最初から視野に入っていないかった。

「国際魔法使い連盟にしてもまた同じ。闇の帝王がゲラート・グリンデルバルトと同じ事を始めない限り、帝王を撃つしようとはすまい。彼等にとって、それは『違法』ではないからな。大多数は内政問題として関わりたがらない」

道義的批難を発する一部の魔法界や、魔法使いは再度出るだろうが、団結した行動を取る事にはならない。そして非魔法界のあちこちで独裁国家が放置されているように、この島で行われる地獄もまた、見ない振りをして放置されたままになる事だろう。

というか、その気が有れば第一次の時点で介入している筈である。そして……そのような良心的魔法使い達は、多分敗北したのだろう。だから語られない。

「——当然ながら。魔法省もな、この状況を、指を咥えて眺めていた訳ではない」

自身の存続の、そして存在意義の問題だ。

三百年間微睡まどろんだままに、見ない振りをする事は出来なかった。

「特に、彼等は直視せざるを得なかった。魔法大臣が舐められている最大の原因は、その地位が国際機密保持法を維持する為の組織の長としか見られていない事なのだ」と

その原点こそが、やはり魔法省を縛っていた。

「魔法大臣に一つの魔法界全ての管轄権が与えられているのは、世界が一丸となつて魔法族を隠す為には、足並みを乱す魔法族を撃つ出来だけの独裁的権力が必要であつたから。逆説的に、国際機密保持法に関係ない仕事は大臣のやる事ではなく、その権限を持たず、自分達が従つてやる義理も更々ない。魔法族が心の何処かでそう考えているから、『マグル』の首相と違つて魔法大臣は敬意を払われない。その現実を受け容れざるを得なかった」

だからホグワーツへの教育内容への介入や今年の高等尋問官の就任は、余り良い受け止められ方をされなかった。秘密の部屋が開けられ、シリウス・ブラックが侵入し、セドリック・ディゴリーが死んでも是とされなかった。本質的に、国際機密保持法に関わりないからだ。

アルバス・ダンブルドアを逮捕しようとした事についても同種の事が言える。ハリー・ポッターへの裁判と違い、前校長は別に機密保持法を侵そうとした訳では無い。故に、彼の逃亡や暴力は然程問題視されないし、魔法大臣を積極的に支持もされない。

一方で同じホグワーツに対する干渉でも、魔法大臣の命令で未成年の杖使用に制限を掛けたり、或いはホグワーツ特急の利用を生徒に強いたりする事は問題無く成功した。そちらの方は、国際機密保持法と密接に関わりが有ったからだ。

「しかし原因が解れば対応策も見えて来る。また、原点は囚われるもので、変化を阻むものだが、絶対という訳ではない。非魔法界の Cabinet 内閣にしても、その語源が小部屋であると言われるように、組織の原点は国王により招集された密室会議に有る。魔法省と魔法大臣が単なる機密保持法維持機関から変わろうとするのは必然だっただろう」

“政府”らしきモノを先に始めたのは魔法界だった。

そして三百年前の王宮と魔法省。どちらが仕事熱心だったかは明らかである。

けれども何時の間にか優劣は逆転し、非魔法界の“政府”が魔法省より遙かに洗練され、強大な物となっていた。魔法省は“マグル”の後追いをする羽目になり——しかしそれは同時に、大衆支持を基盤とした独裁は世間的に許され得るのだと気付かせる事にも繋がった。

「ただ、問題が幾つか有った。その一つが、隣人である連合王国を見習う事は出来なかったという事だ。魔法界に王が存在しない以上、国王大権を掠め取って内閣制度を発展させる事は初めから不可能だ。……しかしまあ、国王を必要としない政治権力、合衆国大統領や対岸の人民皇帝は後世に現れたから、この点は致命的とまでは言えまい」

御逃え向きな事に、魔法大臣は選挙で選出されていた。

魔法大臣を民の代表として祀り上げる事は、必ずしも不可能では無かった。

「けれども、避けては通れない、どうにも解決出来ない問題というものも有る。例えば、だ。魔法族のシングルマザー。生まれたばかりの乳飲み子を抱えているが、仕事も無くて貧困に喘ぎ、家族に絶縁されたせいで頼れる人間も居ない。このような弱者を救うのは、普通の人間なら間違いない。善”だと言うだろう。流石の僕ですら、それを悪と非難する事は出来ない」

ハーマイオニー・グレンジャーは、この例え話の真意を理解出来るのだろうか。

それを一々確認する事はしなかった。意識して視線すら向けなかった。

御互いに確認しない方が良いという事も有る。特に、それが最強最悪の魔法使いの過去に関わるかもしれないのであれば猶更に。

「しかし、その善行には現実問題として金貨ガリオンが要るのだ。そして誰がそれを支出する？ 善行は為されるべきだが、その為に大金を払いたがる者は居ない。故に絶対的権力が無理矢理命令する必要がある訳だが、闇の帝王以前の「純血」は、そこに意義を見出さなかった。魔法族は数百年前を生き延びて、当然のように自力救済が常識だったからな」

古き善き相互扶助機能セーフティネット。

彼等は親族間で助け合い、子や孫、或いは義娘らが困窮する事を許さなかった。

「畢竟、彼等は『魔法省政府』に頼る必要を見出さず、無関係の他人に寄生しようとする者達を嫌悪した。そして持ち出されるのは原点だ。『魔法省は国際機密保持法を護る為に作られた組織の筈だろう？ それなのに何故、魔法省は目的外の余計な仕事を増やす真似をし、あまつさえ純血に金をせびってくるのか？』」

そして魔法省は抗弁を用意出来なかった。

理論的正当性が有ったのは、純血達の方だったが故に。

見知らぬ他人の為に自分達の負担が増えるのは、やはり誰も望まなかったが故に。

「事実、魔法族の問題は杖を使えば大概解決するからな。そのシングルマザーにしても、杖を振って非魔法族から盗みを働けば良い。誇り有る「純血」としてはそんな浅ましい真似をする気にならないが、社会で生きられなかった落伍者が今更何を恥じる？　そして彼等の「善行」——自分と子供の命を救う為の緊急避難的行為を規制し、抑圧する連盟や魔法省こそが「悪」ではないか？　「純血」達がそう主張するのは尤もな話だった」

些細な良心以外に、「マグル」下等種族への犯罪を静止するモノは無かった。

国際機密保持法ですら何の障害にもならない。その法の本意が魔法界の隠蔽にある以上、バレなければ良いのだから。服従の呪文を用いれば如何様にでも非魔法族を操れるし、忘却術を使ってしまえば何も無かった事になるのだから。

「結果、その善良な母親は見捨てられる。そして彼女は最終的に、「マグル」の世界の孤児院や社会保障制度に頼る羽目になるかもしれない。しかしその場合、母親と子供は魔法界から排除される。まあ子供の方はホグワーツ経由で魔法界に戻って来るが、その際に彼が魔法界ないし魔法省に敵意を持ったとしても、何の驚きもしないな」

そのような人間達を救おうと努力している者は魔法省に居るし、その為に立ち上げられた民間団体も確かに在る。彼等彼女等の活動は、一人二人は救っている事だろうし、けれども、全体の数パーセントも救えているかどうかすらも怪しい。

単純に、力が足りないからだ。

彼等は断じて、強権的中央政府ではないからだ。

「こんなのは序の口で、特筆にも値しない不幸の一つに過ぎない。そして、今までは大きな問題にもならなかった。単純に、そんな人間は圧倒的少数派だったからだ。「マグル生まれ」や魔法族と結婚した「マグル」、そして非魔法界で生まれ育った半純血もか。つまり、その手の新参者は稀だったから、社会問題として取り組む必要など無

かった」

「……………」

「しかし、破綻を迎えつつあるのは君も理解出来る筈だろう」

単純に、半純血が増えたから。

正しくは、「マグル」を直接の親に、或いは親戚に持つ子供の数が増えたから。自力救済が神聖化され、弱者淘汰を容易く肯定する旧い社会を疑問視する人間が増えたから。

魔法族ですら、「マグル」の常識や価値観に染まりつつあるから。

「三百年間、魔法省は足掻いて来た。今は国際機密保持法を維持する為の組織としか看做されていなくとも、何時の日か、魔法省は魔法族にとって必要不可欠の組織であると認識して貰えるように。魔法大臣は法が定める通りの頂点となり、そしてブリテンに住まう魔法族の未来の舵取りをし得る玉座となるように。自らの存在意義を確立しようとして来た」

ウリック・ガンブ魔法大臣から始まり、エルドリッチ・デイゴリー魔法大臣や、ヘスパイスタス・ゴア魔法大臣が道筋を作った。市民の為の魔法省”という理想は、途中も幾度と無く失敗を重ねながらも信頼を積み重ね、今では優秀なホグワーツ卒業生が進路として考える程の組織となった。国際魔法使い連盟の走狗として忌み嫌われ、機密保持法に反対する親戚や家族を敵に回したくないとして、多くの生徒が就職を回避した1707年頃からは考えられない事態である。

「特にこの百年間——生活と医療水準が向上し、社会福祉制度が整備され、行政機関が肥大化して権限も増大した「マグル」の世界を見た魔法省は、決意を新たに、そして強くして来ただろう。硬直化した魔法界は腐りつつあり、激痛を伴う改革が必要だ。誰かがやらねばならず、勿論それを為し得るのは魔法省、ひいては魔法大臣だけだ」と

伝統や慣習のみを考慮するなら、ウイゼンガモット主席魔法戦士にも改革の資格が有った。

しかし、魔法界で有利な立場に居たのは、やはり魔法大臣——魔法省という魔法界基準では大きな組織と人員を掌握し、法律上も最高権限を与えられている存在だった。

「そして御誂え向きな事に、五十年前に一人の英雄が現れた」

「——つ」

「元より並外れた杖腕と叡智で知られていた魔法使いは、伝説的決闘によつて全魔法界を救い、歴史上類を見ない程の絶大な名声を獲得した。彼は紛れもなく国際機密保持法の守護者であり、闇の魔法に対しても厳格な立場を取り、しかも“マグル”に対してすら理解有る態度を示した。魔法省が三百年求め続けた、民主主義による“独裁”を成立させるに相応しい英雄だった」

それが誰であるのかは、やはり言う必要も無い。

「だが、期待は裏切られた。彼は魔法省にとつて、最大最悪の敵となった」

過去も。現在も。

アルバス・ダンブルドアこそが真なる敵だった。

世界に革命の火が上がったゲラート・グリンデルバルトの時代。

それに対して最も不安を抱いていたのは魔法省だったと言つて良い。

国際機密保持法在りき。そんな組織は、法の廃止後も存続出来るか不透明だった。

そもその成立時、少なくとも魔法族が国際機密保持法に反対したという時点で組織の基盤は危うかった。第二代魔法大臣ダモクレス・ロウルは“マグル”への強硬路線を取ろうとし、第三代魔法大臣パーセウス・パーキンソンは“マグル”との結婚を一切禁じようとする始末。しかも、その両大臣の改革が何れも失敗した挙句、前者なんぞは国際魔法使い連盟の——非魔法界流に言うなら国連の——反発を受けて魔法大臣を辞任する羽目になっている。こんな有様だというのは、魔法大臣が民主的独裁的を行える地位だと認識する方が可笑しい。

確かに法律上、魔法大臣は魔法界全体の管轄権を有している。

しかし条文にどう書いてあろうと、やはり現実には独裁とは程遠かった。

実態は「純血」達に頭を下げて政治を行うしかない、非魔法界の政府首脳とは程遠い名ばかりの単なる管理職に過ぎなかった。ましてや1707年当時、連合王国首相も合衆国大統領も人民の皇帝も世界に存在しない。設立時に参考に出来る権力機関など精々都市ロンドンの市長くらいしかなく、魔法大臣は手探りで組織の在り方を模索する羽目になった。

その試行錯誤は当然のように、既得権益を守ろうとして反対する「純血」達、或いは政治に無関心な「純血」達の傍観により停滞した。非魔法界で国民国家——強固な官僚機構を備え、市民に広く命令し得る「政府」が形成されて行くのを、魔法省は呆然と眺めるしかなかった。

だが魔法省を滅ぼすかもしれないなかった革命家は、逆に一人の大英雄を生んだ。

アルバス・ダンブルドア。

今世紀における最強にして最高。

反対勢力の一切を無視して改革を進め得うる程の、本物の魔法使い。

そして世の良心的な者達——魔法大臣や魔法省の脆弱さに忸怩たる思いを抱き、非魔法界の首相や政府の権力に憧れていた役人達は、彼の出現を天啓と見ただろう。

無論、アルバス・ダンブルドアに期待した者の中に、疚しい考えを持つ者が居なかったとは言わない。現在の支配者である「純血」に成り代わって魔法省が君臨したいという欲望を抱いていた者はそれなりに居た筈である。しかし、それが全てで無かったのは間違いない。

彼ならば「正しい」独裁を振るい、「政府」を構築する事が出来る。

さながらホグワーツの四寮のように、魔法界は魔法族が帰属意識を抱く大きな家Housesとなり、それを統括する魔法省は統治機関として敬意

を払われ、民の側からも護るべき権力組織として忠誠を向けられる時代が訪れる。

そんな期待が在ったからこそ、アルバス・ダンブルドアを魔法大臣にという声が無くならず、また魔法大臣にならないかと秘密裏に打診される事が繰り返されたのだろう。

しかし、その期待は、希望は見事に裏切られた。

アルバス・ダンブルドアは、明確に魔法大臣の座を拒否した。

そして、それだけならまだ良かった。

権力や支配を穢らわしいとして距離を取る旧い魔法族は一定数居たし、今でも尚少なくない。だから彼が単なる一魔法使いでありたいとして、中央に対して徹底的に干渉を決め込むならば、魔法省も大人しく断念した事だろう。

けれども、彼は違った。

大臣の地位を拒否しながらも、外部から魔法界に口出し、干渉した。

ゲラート・グリンデルバルトを打ち倒した英雄としての権威を用い、 hogwarts 校長やウイゼンガモット主席魔法使いといった公職の権力を用い、最初から闇の帝王に抗い続けたという実績を用いて、本来魔法大臣のみが為すべき筈の魔法界の指導を行った。それが必要性在つての事であり、全体的としてみれば彼の行為が正しかったとしても、彼は魔法省の地位を向上させようとは——“政府”の確立の為に戦おうとはしなかった。

マーリン勲章第一等、ウイゼンガモット主席魔法使い、国際魔法使い連盟議員、そして不死鳥の騎士団長。他にも数多くあるアルバス・ダンブルドアの肩書の中に、彼は魔法大臣といふ非常に些細で無価値な肩書の一つ加えるような真似はせず、彼がやる事の尽くは、魔法省ないし魔法大臣の弱体化で一貫していた。

彼が考えるのは眼前の魔法界の事だけで、将来の魔法界の事など一顧だにしなかった。

アルバス・ダンブルドアは、過去に囚われたままだった。

「……まだ続けるか？」

もう十分だろう。

既に魔法省の本質は指摘してしまった。

ハーマイオニー・グレンジャーの頭脳ならば一人でこの先の思考を進められる筈で、僕が彼女の心を切り刻む必要など無い筈で、けれども、彼女はやはり頑なな態度を崩さなかった。

血が乾きつつあつた唇を再度舌で舐めた後、彼女は押し殺した声で答えた。

「……私はグリフィンドールで、ダンブルドア軍団の一人で、将来は不死鳥の騎士団に入るつもりよ。それで答えは足りるでしょう？」

「——そうか」

本当に強情な事だ。

アルバス・ダンブルドアに代わり、彼女が魔法省側の叫びを聞き遂げる義務もない。

それでもハーマイオニーは、糾弾され続ける事を望むようだった。

「……ともあれ、魔法省は、市民生活にとって必要な組織から逸脱出来なかつた。『政府』とは得てして憎悪されがちなものだが、魔法省が魔法省に対して嫌悪の強さは、『マグル』達の比ではない。口実さえ得れば、魔法族は魔法省を滅ぼしに掛かる」

魔法省は魔法族が忠誠を誓い、守護すべき対象ではなく。

故に、時が来てしまえば、三百年の歴史は当然のように終わる。

「国家は何故、暴力の独占や、税の徴収等の特権を有し、市民の自由を奪う事が正当化されるのか。非魔法界の古代や中世でそれを許した理論は神の代理人という資格であり、近代以降では市民の生命や財産を護る対価であるという社会維持の理念だった。魔法界にそうした理論的支柱の発展は無かつたが、それでも収斂するように、同じ方向へと向かつていた」

「……………」

「しかし、やはり魔法界のそれは非常に危ういものだ。また、非魔法界ですらまま在るように、その前提が崩れてしまえば、政府機関は容易く統治の正当性を喪う」

そして、今や魔法省は崩壊しようとしている。

「第一次魔法戦争は危うい所まで行つた。特に戦争初期は殆ど役立た

ずだったからな」

ユージニア・ジェンキンス魔法大臣は対応し切れず、ハロルド・ミンチャム魔法大臣もまた任期途中で辞任を余儀なくされた。有能と評される事が多いミリセント・バグノールド魔法大臣ですら、その名が知られるのは魔法戦争が停戦を迎えてから、戦後の演説と後始末の手腕故であつて、戦争中の活躍によつて功績を残した訳ではない。

「しかし、バーテミウス・クラウチ氏の台頭以降は多少勢力を盛り返し、またアズカバンの半分を埋めたアラスター・ムーディは闇祓い局——魔法法執行部傘下の役人という立場を捨てていなかった。そして停戦後、死喰い人裁判を主導したのはアルバス・ダンブルドアでは無くバーテミウス・クラウチ氏。また、刑を宣告された犯罪者達にしても恙なくアズカバンへと収監された。最終的な魔法法執行部、ひいては魔法省の戦争への貢献は明らかだ」

それでも批判は大きかったが、省に限らず誰もが闇の帝王への対応に御手に回っていたのは事実であり、最後にバーテミウス・クラウチ氏が失脚した事で全て有耶無耶になった。

「何より、光の陣営で最強の魔法使い、アルバス・ダンブルドアとて勝った訳では無かった。闇の時代を終わらせたのは一人の赤子だったからな。結果、魔法省の権威の低下は最小限に留められた。彼等は何とか踏み止まり、存在価値を維持する事が出来た」

アルバス・ダンブルドアが勝利しなかった事を誰よりも喜んだのは、魔法法執行部——バーテミウス・クラウチ氏に限定しない。勿論、彼は大いに喜んだ筈である——なのかもしれない。少なくとも、自分達が一方的に無能だと罵られる事態は避けられたからだ。

今世紀で最も偉大な魔法使いでも最終的には駄目だったのだから、魔法省が一時的に無様を晒したとしても仕方ない。寧ろ良くやった方だ。そう考えられたからだ。

「しかし、現在はどうだ？ 魔法法執行部傘下の組織——闇祓いや魔法法執行部隊、搜索課や監視課に所属する者を親として、或いは親戚として持つ子供に対して如何なる言葉が投げつけられて来たか、あの傲慢な魔法使いはどれ程知っているんだらうな？」

好きに掻き乱すだけして、後始末をしない。

アルバス・ダンブルドアの悪癖は、ここでも見られる。

「三年間、彼等は皮肉や暴言に耐えて来た。何せ、シリウス・ブラックの無実を世間は知らないし、まあピーター・ペティグリューという凶悪犯が逃げおおせているのも事実ではある。彼等に対する無能や無駄飯喰らいといった誹りに対し、魔法省は反論など出来まい」

今年の大量脱獄者を出す前から、魔法法執行部へ向けられる眼は冷たかった。

市民の安全を守る組織であるという幻想は剥がれ落ち、彼等の権威は低下し続けていた。

「そして止めに今回のアルバス・ダンブルドアの逃亡。客観的な事実としては、二人の闇祓いとオマケの魔法使い三人が居て尚、百歳を超える老魔法使い一人を取り逃がしてしまい、今も捕捉出来ないという事になる。彼は耄碌した、弱くなったと『予言者新聞』で散々喧伝していたのにな。そのような体たらくで、魔法法執行部の能力を――魔法省は闇の帝王に勝てる程強大な組織であると、そのように世間が考えてくれるとでも?」

嗚呼、と付け加える。

「仕方が無かったと言う事は出来ない。相手が強かったから無理でしただなどという言い訳は、『政府』の暴力装置として論外だ。そもそもアルバス・ダンブルドアを捕まえないなら、対等に位置する帝王を捕まえる方も無理と考えるのが筋だ。未だ帝王の復活は噂に留まるものの、魔法法執行部、或いは闇祓い達への信頼低下に歯止めは掛からない」

「……だから魔法法執行部、いえ、魔法省は滅ぼされる事になると言いたいのか? どれも魔法族に不要であるから、廃棄されても已むを得ない」と

「結論としてはその通りだ。しかし、理由としては先の説明では不十分だ」

「不十分?」

「ああ。戦後の話。魔法戦争の後始末の話はまだしていないからな」

第一次と同様、第二次でもアルバス・ダンブルドアが勝って貰っては困る。

僕にそう思わせる決定的な原因は、魔法省側には無い。

「なあ、ハーマイオニー。コーネリウス・ファッジの次の大臣は誰になると思う?」

「——え?」

その瞬間、今まで険しいままだった表情は、意表を突かれたような驚愕に変わった。

実際、不意打ちの質問として機能するのは認める所だが、けれども、将来必ずや持ち上がる問題を提起するには、この問い方こそが最も適切なのだ。

「コーネリウス・ファッジが魔法大臣に就いたのは1990年。魔法大臣の任期は、最長でも一期七年。つまり、原則として1997年……今年度始めより起算すれば二年弱、現時点からは後一年程で選挙を要する。そして、彼が再選される事は無い。三年前のシリウス・ブラック、及び今年の十人の死喰い人の脱獄。更には一方的な検閲と独裁体制。世間でも省内でも、彼を支持する者は最早居ない。声高に叫ばないだけで、内心で誰もが早く辞めろと思っている」

今回のアルバス・ダンブルドアの逃亡騒動にしても、コーネリウス・ファッジの熱意に反し、冷ややかな眼で見ている人間の方が遥かに多いだろう。

「だから問題はコーネリウス・ファッジが辞任した後、その次の魔法大臣だ。一体誰が大臣になると思う? いや、こう聞いた方が遥かに解りやすいか。今の状況で最も魔法大臣として相応しい人物は、果たして誰なのか?」

「そんなの決まってるじゃない。アル——」

その名を口にしようとして、ハーマイオニーは絶句してしまった。

瞳孔は大きく開き、手の甲が白くなる程に両手は強く握られ、全身は強く強張っていた。その間も思考が目まぐるしく回転しているのが見て取れたが、けれども彼女は反論の言葉を用意出来ないらしかった。その名前を考え無しに口に来たであろうハリー・ポッターやロ

ナルド・ウィーズリーと違い、彼女は余りにも聡明過ぎたのだ。

「そういう事だよ」

荒れ狂うハーマイオニーの内心を他所に、僕は至極淡々と回答を口にする。

「あの男は決して、次の魔法大臣に就きなどしない」

杖腕を賭けたとしても良い。

彼が魔法大臣となる未来は、絶対に訪れない。

「……十一月。貴方は二年以内にダンブルドアが魔法界を滅ぼすと
言ったわ」

「そうだな」

「それって——」

「——ああ。コーネリウス・ファッジの任期を念頭に置いた話だ」

1997年以降をどうするか。

これは当然、光の陣営が今の時点から考えておかなければならない
問題だった。

「真つ当な『国家』なら、そこに民主主義が存在するならば、国民は来
る大戦争を前に最も相応しい……違うな、最も戦える人間を頂点に据
えるモノだ」

そうして、国家の全てを衝撃力に変換させる為の、『独裁』が成立
するものだ。

「サー・ウィンストン・チャーチル。元々首相の芽など無かった筈の彼
は、しかし世界大戦の勃発、そして終始一貫していたハーケンクロイ
ツへの敵意によりその椅子へと昇った。また、フランクリン・デラノ・
ルーズベルト。元々三選ですら慣例違反だったが、戦争を戦い抜く中
で、彼は前代未聞、そして恐らく今後も繰り返されないであろう四選
を遂げた」

指導者一人が違った所で、戦争の趨勢や勝敗が変わったという事も
無かろう。

しかし、それでも彼等は頂点として望まれた。何故か。彼等の下でこそ、国家は苦しい大戦争を完遂出来ると信じた——そういう幻想を広く抱かせると思われたからだ。

「そして魔法界、闇の帝王との第二次魔法戦争。これからこの世界が全面戦争を行う際の、象徴アイコンと成り得る存在。その資格を持つ人間は、この戦争が再開される以前に四人居た。バーテミウス・クラウチ氏。アラスター・ムーディ。ハリー・ポッター。そして勿論、アルバス・ダンブルドア」

だからこれも、彼等が実際に、帝王を滅ぼす能力を持っているかという話では無い。

持っているかもしれないと信じさせ、彼の指揮の下でなら命を捨てて戦えると大勢に思わせるだけの力が有るかこそが問題なのだ。

その力を持っているのであれば、これまでどんな失態を犯していようと——例えば、陰謀の下に“生き残った男の子”を散々危険に晒そうと、或いはポリジューズ薬での成り代わりを見抜けず一人の生徒を殺そうと——非常に些細な事である。

一方で、どんなに聖人君子であろうとも、実は魔法大臣としての能力を十分持っていたとしても、市民に勝利の幻想と希望を与えられないのであれば論外である。

平時と戦時。頂点に求められる資質は全く異なる。

「しかし、三人は候補から外される。バーテミウス・クラウチ氏は既に死人で、アラスター・ムーディは去年死喰い人に敗北しており、ハリー・ポッターは未だホグワーツを卒業していない。だから1997年における魔法大臣としての適格者は、誰が見ても一人しか居ない筈なのだ」

まあアルバス・ダンブルドアにも年齢問題は有るが、どう見てもアレの寿命はまだ先だ。

そもそも、あの年齢であの杖捌きを出来るのが可笑しい。彼より十や二十歳程度若い魔法使いだろうと、既に一線から身を引いている人間は数多い。情報提供等で騎士団へと協力する者は居たとしても、杖を取ってまで決闘する者など極少数の筈である。

「そして、彼が魔法大臣になる事を希望すれば当然叶う。闇の帝王の復活が『嘘』であるかは最早関係無い。少なくとも、アズカバンから十人ばかり死喰い人が逃げた事に関しては、コーネリウス・ファッジも認めてくれたからな。故に、あれらの捕縛の為に己を魔法大臣せよと、そうアルバス・ダンブルドアが広く訴えた場合、一体誰がその主張を排する事が出来る？」

ルシウス・マルフォイ氏が反対を示す事は事実上不可能である。

この状況でその主張をするのは、自分は死喰い人達につくと宣言するようなものだ。

そして闇の帝王ですら——裏で妨害工作する事は有っても——アルバス・ダンブルドア以上の魔法大臣など有り得ないと認めざるを得ないであろう。

敵も味方も。誰がどう見ても、アレを魔法大臣とする事こそが最善手。

それ以外の人間を魔法大臣として据えるのは、全て次善以下の手ではない。

「彼自身は否定しているようだが、彼の本質なんぞ明白だ。富や名誉も既に十二分に持っている人間が、何の報酬も無く、ただ虐殺を看過出来ないという理由だけで闇に抗おうとする行為を、一体善以外の何と呼ぶのか。81年の時点で彼が年齢を理由に引退を宣言し、公から身を消していれば、彼は何も喪う事無しに第二次魔法戦争から足抜け出来たのだというのに」

しかし、あの老人は戦うのだ。

たかだかトム・マールヴオロ・リドルが元教え子だったという理由で。

その程度で——自分の教え子が悪の道に染まり、改悛させる事も出来ず、その結果として犯罪を犯した責任を教師が負うべきだと言うのであれば、世界に教職なんぞ消えるだろう。

「そして、今の状況で魔法大臣になったとして、一体誰がそれを権力欲しさだと認識しよう？ 彼が望めば何時でも魔法大臣となれた事なぞ、多くの人間が知っている。まして闇の帝王が復活した以上、大

臣の地位はどう考えても貧乏籤なのだ。今その地位を望んだとしても、後世では逆に無私の気高い行いとして讃えられるだろう。彼の懸念は最早杞憂であり——」

過去その座を目指した理由とは全く違う理由で、魔法大臣に就く事が出来る筈で。

「——けれども、アルバス・ダンブルドアはそうしない」

五年を費やして尚、彼の心は何も変わらなかった。

「……断言するのね」

「ああ。そして、この予測が外れたとして何ら気にもしない」

本心では外れる事を——彼が魔法大臣に昇る事を期待しているとすら言つて良い。

「どう考えても、アレが魔法大臣にならない合理的理由は無い。魔法大臣になれば、彼は魔法法執行部を、闇祓いを自由に使える。秘密同盟たる不死鳥の騎士団にしろ、現状のままでは、戦後に騎士団員が殺人罪で起訴されても何ら文句を言えんだ。正当防衛が認定される事と、裁判……刑事手続自体を免除される事は違うからな。しかし、彼が魔法大臣となれば、騎士団自体を合法化してしまえば、何の問題もなくなる」

確かに抵抗組織レジスタンスとは違法であるのが基本では有る。

しかし、それは当時合法である専制・独裁政府を打ち倒すには、論理必然的に違法にならざるを得ないからである。平和的に政治の頂点に座れるし、合法化も出来るが、何も困っていないから違法のままにしておく——そんなアルバス・ダンブルドアの態度とは絶対的に異なるのだ。

「だが、彼は魔法大臣にならない。……嗚呼、『正しい』とも」

戦争の事だけを考えるのならば、確かに魔法大臣の椅子など必要無い。

「闇の帝王さえ滅ぼせれば戦争は終わる。だからセドリック・デイゴリーが不要なように、不死鳥の騎士団が不要なように、魔法省もまた不要だ。それどころか、どれだけ裏切者と内通者を抱えるか解らん組織の立て直しなんて、時間の無駄とすら言えるだろう」

闇祓い達の指揮権を加味しても、魔法省を内に抱え込んだ所で荷物にしかならない。この戦争だけを考えるのなら、アルバス・ダンブルドアが魔法大臣になる意義は小さい。

「しかし、それは戦後において、魔法省の、ひいては魔法大臣の権威を致命的に低下させる。法律上、魔法大臣は魔法界における最高権力者である筈なのに、平時でも、戦争に際してさえも、アルバス・ダンブルドアは求めなかった。それが世間に与えるメッセージ性など明らかだ。求める意味のない職、就く価値のない職。千年の歴史を有するホグワーツ校長の肩書より遥かに劣る、苦勞しかない中間管理職。世間は、民衆は、魔法大臣をそう見ざるを得ない」

そして実際にそうだから質が悪いのだ。

この魔法界に真の玉座が在るとすれば、それは唯一ホグワーツ校長だけである。

千年の歴史の中で自然と形成され、神秘性を宿し、絶え間ない闘争により確固たる地位を確立してきたその玉座のみが、魔法界の頂点と呼ぶ事が出来る。

「確かに魔法省と不死鳥の騎士団は、今後この戦争で同じ陣営に立つだろう。アズカバンが再度破られ、ハリー・ポッターの告発を受けて多くが闇の帝王の復活を信じ始めた以上、間違いなくそうなる。けれどもだ、不死鳥の騎士団の勝利は、決して魔法省の勝利では無い」

コーネリウス・ファッジとドローレス・アンブリッジが違うように。

闇の帝王とルシウス・マルフォイ氏が違うように。

魔法省と騎士団も同一では無い。

そして、魔法省が敗北する一方で騎士団が勝利する事は有り得るが、騎士団が敗北する一方で魔法省が勝利する事は有り得ない。魔法省は分霊箱の存在を知らないからだ。アルバス・ダンブルドアは、ソレを魔法大臣に明かす程に気の良い人間では無いからだ。

「結果、戦後に魔法省を上位者——『政府』として認める魔法族が現れるのか？」

支配の座は永遠では無い。

玉座や政権のみならず、政府自体もまた。

資格無しと看做されてしまえば、革命によって滅ぼされる。

「今年度、魔法大臣は魔法族の自由を弾圧し、個人的権力欲の下に嘘を振り撒き、魔法界を混乱・麻痺させてくれた。闇祓いや魔法法執行部隊は未だにシリウス・ブラック達を捕えられず、市民の生命や財産を護ってくれもしない。その上、本質的に魔法省は市民生活に不要。この有様で、一体誰が魔法省に敬意を払い、彼等が執行する法に従い、彼等の統治を受け容れる？」

ホグワーツでドロレス・アンブリッジの指示に誰も従わないように。

魔法大臣が民からの敬意と忠誠を喪い、闇祓い等の暴力装置も完全に舐められ切った魔法界においては、同様の無秩序状態が広がる事になる。

世界の大半で王政が消え、一部の国で政府が打ち倒されているように。

被支配者からの敬意を欠き、権威を喪失した組織は、当然に歴史の終焉を迎える。

「……魔法省が勝者となれば、魔法戦争で役に立てば、そうはならないわ」

「それは間違いない。だが、君も良く知る通り、僕は非常に悲観主義だね」

何時も何時でも、悪い展開を念頭に置いてしまう。

「現状魔法省が滅ぼされないのは、単純に滅ぼす為の労力コストが上回るからだ。未だ国際機密保持法が撤廃される気配が無い以上、魔法省を滅ぼしてしまえば代わりの組織が必要になる。それを作らない怠慢を犯せば、ダモクレス・ロウル魔法大臣の時に為されたように、或いはゲラート・グリンデルバルトの時のように、連盟が、そして他の魔法界が介入しに来る。面倒事は眼に見えていて、なら、既に在る物を使う方が早いし楽に済む」

変化を望む者は多くとも、急激な変化を望む者は圧倒的少数だ。

ましてや、革命を志す者などそう居ない。

「しかしながら、魔法省が悪の組織であると、如何なる代償を払ったと

しても滅ぼすべき組織だと看做されれば話は別だ。元々古い常識に囚われた人間——現在の大多数の魔法族は、強権的で高圧的な組織を嫌うのだ。破壊して良いと判断すれば躊躇いはしない」

そうなってしまった場合、アルバス・ダンブルドアが勝ったとしても、戦後には崩壊した魔法界が広がる事になるだろう。

「これを回避する為の手段は、やはり簡単だ。アレが魔法大臣になれば良い」

選挙を経ずに私的に、かつ幾度となく大臣職の打診が来るのも必然なのだ。

あの男が魔法大臣になる事こそが、この魔法界の歪みを解消する単純な手段なのだから。

実質と形式。

支配の座、魔法界の頂点に君臨する人間は一致してくれる。

「別に魔法大臣として仕事をしろとは言っていない。ホグワーツ校長兼不死鳥の騎士団兼魔法大臣なんぞ、どう考えても身体が足りん。しかし、名前だけで良いのだ。今世紀で最も偉大な魔法使いが魔法省を庇護し、支持するのだと——実態はどうあれ騎士団と魔法省は同質であると、役人達も市民の味方として日夜奮闘しているのだと、そう態度で示してくれるだけで良い」

今回闇祓い達がアルバス・ダンブルドアに負けた事や、今も尚魔法法執行部が彼を捕まえられないでいる事にしても、堂々と有耶無耶に出来る。

自分達が戴くべき主である以上、秘密裡に逃亡の手助けをしても可笑しくはないからだ。

「それだけで魔法省は、戦後においても権力と権威を保持し続ける事が出来る」

低下は避けられないかもしれないが、喪失は避けられる。

「見方を変えれば、この魔法戦争は絶好の機会だ。薔薇戦争により絶対王政の道筋が付けられたように、二度の大戦で政府の力が拡大したように、今回の戦争で既得権益者^{純血達}の一掃に成功すれば、この百年間で魔法省が抱いて来た野望——狼人間に、孤独な魔法族の母親、そして

肩身の狭いスクイブ達に補助金を出し、非魔法界の「政府」が如く、多くの人間を救済し得る最大勢力へと変わる事が出来るかもしれない」

アルバス・ダンブルドアは Hogwarts を偉大であると看做す。それ自体は否定しない。

しかし、如何に Hogwarts が偉大であろうと、そこで魔法族が過ごすのはたった七年。五十年、百年、或いはそれ以上の期間、魔法族が生きてるのは Hogwarts の外の世界なのだ。

あの老人は、その事を見ない振りをしている。Hogwarts の卒業を認められた一人前の魔法族ならば、その先の人生に苦難が在ろうと何とかやっつけていけると信じている。

彼は個人として強過ぎるから、それが不可能な弱者が居る事を本質的に理解出来ない。

「非魔法界では最早、政府による国民生活への介入が当然視されている。君のような「マグル生まれ」や半純血は、その常識を引き継いだまま Hogwarts にやって来る。しかし、彼等は卒業後に魔法界の冷酷さに打ちのめされる。自分が憧れていた世界など幻想だったと我に返る。そうして、当然の如く魔法界を去るだろう。今後一部の純血達もまた、それを追おうとするに違いない」

かつての非魔法界は過酷な世界だった。だから人材の流出は起きなかった。

が、今では両世界の格差はそれ程でも無くなっている。非魔法界にも自然と受け込める能力を持つ者から姿を消し、魔法界には古い頭を持つままの人間しか残らない。

もつとも、非魔法界に近付き過ぎた者の末路というのもまた決まっている。

魔法族にとって「マグル」は本質的に敵であり、彼等の「政府」は魔法省と比較にならない本物の怪物^{リヴァイアサン}である。彼等が、奇跡^{魔法}を使える人的資源を放置する筈がない。魔法界に失望し過ぎるが余り非魔法界を神聖視した人間は、非魔法界もまた信頼に値しない世界であると直ぐに気付く事になるだろう。

そうして今後、二つの世界の狭間において、不幸な魔法族が溢れかえる事になる。

「誰がどう見たって、魔法界には変化が求められている。そして、それには強力な指導者と魔法史に前例の無い中央集権化が必須であつて——けれども、あの魔法使いは、誰よりも愚かな道を選択する。独善的な一貫性、誤つた思想信条の下に、魔法省が特にこの百年間目指してきた『マグル』化路線を、徹頭徹尾妨害してくれている」

今世紀で最も偉大な魔法使い。

そう呼ばれる魔法使いは来世紀になつて、絶対に批判に晒される。それだけの力を持ちながら、何故お前は魔法大臣にならなかつたのかと。

まして統治機関の権力や權威を徹底的に貶め、一体何がしたかつたのかと。

「——ホグワーツ王、アルバス・ダンブルドア。あの男こそが、この魔法界を滅ぼすのだ」

そして瓦礫に埋もれた外界を他所に、治外法権の城は悠然と佇み続けるのだ。

覚悟

「——ハーマイオニー。悲しむのは見当違いだ」

彼女は魔法界に強く惹かれている。

ホグワーツ入学前に抱き続けた憧れを、今も持ち続けている。

しかし、それでもやはり「マグル生まれ」だ。

思考の根幹が非魔法界的に被れ過ぎており、精神構造も魔法族とは決定的に異なる。如何に臨んだとしても、決して混じり合えなどしない。

「『政府』は必要である。そんなのは、非常に現代的な発想だ」

数百年前は違った。

女王陛下の政府は、文字通りに陛下の所有物でしかなかった。

誰もが王への忠誠や、家名や家族と言った個人的利益の下に動き、国民の為に広く奉仕するという意識など更々持ち合わせて居なかった。

「そして非魔法界でも政府が機能していない国や領域、国連加盟の許されていない場所は有るが、別に無人の荒野が広がっている訳では無いだろう？ 非魔法族ですら逞しく生きています。更に強い魔法族であれば生きるのに支障は無い。また、魔法省が滅んだとしても、代わりの機密保持法維持機関は必要だ。どういう形であれ、次の統治機関が生まれはするだろう」

ただ、それが今の魔法省より更に脆弱となるだけで。

大きな政府を志向し、社会福祉制度や公衆衛生体制を敷くなんて夢物語となるだけで。

「……っ。貴方は、貴方は本当にそれで良いの？ 貴方の倫理観の下では、ダンブルドアの行為は受け容れられない。だからこそ、共に歩むのを拒絶するんでしょう……？ それなのに、貴方は魔法省の、魔法界の滅びを受け容れるというの……？」

「良くは無いが、まあ仕方が無いだろう？」

その話は、やはり夏休暇中に終わった話なのだ。

「アレクサンドロスやアツティラ、チンギスハン——別に、大英帝国首

相や合衆国大統領あたりでも良いが。それらの暴君に振り回される時代に、何の肩書titleも持たない一市民として生まれた事を、不幸と嘆いて一体何になる？」

普通の一般人にとつて……特に被征服地において、彼等は例外無く災禍だ。

ホグワーツの封建君主であるアルバス・ダンブルドアもまた、ホグワーツ以外のブリテンにとつて災禍だったというだけの話に過ぎない。

「そしてアルバス・ダンブルドアがこの世に居なかつた場合。或いは、彼が自分は魔法界を守護する何の義務も無いとして、戦う事を拒否した場合。ゲラート・グリンデルバルトはさておくとして、この魔法界は間違いなく闇の帝王により滅ぼされていた」

つまり、そもそもこの魔法界は、存在する筈は無かつたのだ。

「本来二十歳で死ぬ人間を五十歳まで生かす医者や名医に違いない。ならば本来1970年に死ぬ筈の世界を二、三十年ばかり延命させてみせた彼は、やはり同じように最大限「善く」やったと言われるべきだろう」

「……魔法界はダンブルドアの所有物では無いわ。ダンブルドアも、そのつもりは無い筈よ」

「しかし、現実として全てが——闇の帝王以外が、彼の意思に沿って動いている」

アレは魔法大臣でないかもしれない。

だが事実上魔法界の王として、或いは「首相」として振る舞っている。

「そして、大多数の魔法族は今まで対策を取らなかつた。結果的に正義であるという理由で、一人の大魔法使いによる非民主的独裁を看過し続けた」

「……………」

「アルバス・ダンブルドアがホグワーツで生徒による私軍を構築し、それを用いて魔法省を乗っ取ろうとしている。君はこれを聞いてどう思う？ 馬鹿々々しいと思うか？ ……嗚呼、そのような顔をしたと

いう事は、この手の発言を何処かで聞いた事が有るらしいな」

アーサー・ウィーズリーか。

それともシリウス・ブラックか、リーマス・ルーピン教授か。

彼等なら——魔法界の本流から外れた、政治に無関心な人間達なら
言いそうな事だ。

「出来るのだ。非魔法界より遥かに楽に」

キングズスクールにしてもオックスブリッジにしてもウインチェスターカレッジにしても、それらは例外無く、聖座ないし玉座よりは新しかった。

更にはそれらの起源ないし発祥は、やはり教会又は王権に拠っており、存在と存続は彼等によって保証・担保されて来た。必然、世界の頂点と自惚れる事は——歴史が下っていくにつれて事実上封建領主化したとしても、そこから先の“国家”に変質する事は構造上不可能だった。

しかし、魔法界は全く違う。

千年の歴史を持つホグワーツは三百年の魔法省より遥かに古く、そして発祥に際しても、四人の魔法使いが何の統治機関にも拠らず作つたのだ。

独立自尊を気取るオックスブリッジですら、カレッジ内を歩いてみれば教会ないし王が建てたという歴史的建造物を見付けられる——建前はどうかあれ、外の支配者達が事実上の影響力の行使をしてきた痕跡にぶち当たる訳だが、ホグワーツではそんな事は無い。

魔法省による教育費用負担にしても、ホグワーツ生は殆ど意識していない。そして仮に魔法省からの金貨の支給が打ち切られようとも、伝統的な中世大学がそうであったように、“ホグワーツ”は卒業生達の慈悲と支援の下で何も変わらず運営出来るだろう。

砂の上に立ったままの、何時倒れても可笑しくない魔法省とは異なるのだ。

「教育令第二十四号の根底に在るのは、魔法省が三百年抱いて来た恐怖だ。そして過日のアルバス・ダンブルドアの行動。それは三百年の恐怖が現実で有った事を示すもので、“正義”でない魔法省の行為に

は個人の勝手な判断の下、暴力でもって反抗しても良いという先例を打ち立てる愚行だ」

彼の行動には秩序が、法治が無い。

「二応アレは基本的に善人だから、或いは君達が平和な自習組織に過ぎなかったから、大事に至らなかった。しかし、今回の先例を最大限悪用したらどうなる？」

「……………」

「闇の帝王は、死喰い人予備軍をそのまま学外へ持つて行った。だから、彼の時は問題が顕在化しなかった。しかし、今後文字通りの『軍団』がホグワーツで結成され、そのまま魔法省に牙を剥いた時、それに魔法省が抵抗出来るのか？ あの脆弱な組織は、生徒に対する武力鎮圧への批判に耐えられるのか？ 或いは、悪しきホグワーツ校長が生徒を利用し、気に入らない政権を打ち倒し得る世界は、『良い』と言えるのか？」

政権に不満を示して行動した生徒の例はダンブルドア軍団がやってくれたし、悪の校長の就任例は現在進行形でドローレス・アンブリッジがやってくれている。

直近では問題にならなくとも、将来には禍根を残し得る先例だった。

「その危険を直視し、懸念し、改善しようとし、故に今世紀で最も偉大な魔法使いに挑む者は居た。バーテミス・クラウチ氏は筆頭で、コーネリウス・ファッジもまた同じ。次の魔法大臣が誰になるかは知らんが、彼ないし彼女も当然のように挑むだろう」

今年も、ホグワーツと魔法省の上下を決める政争だった。

魔法省から見れば、国の中に国が存在するという事態を是正する為の聖戦だった。

「が、勝てなかったし、恐らく今後も勝つ事は無い。少なくともアルバス・ダンブルドアが健在な間はな。対等を取り繕っていた魔法省は、今回以降明確に、序列としてホグワーツの下位に置かれる事となる。魔法省はアルバス・ダンブルドアの顔色を伺いながらの経営を余儀なくさせられ、必然、魔法界やこの地に住まう魔法族への指導力なんぞ

発揮し得ない」

偽の玉座は朽ち果て、真の玉座のみが残る。

誰も彼も、魔法省や魔法大臣の言葉を聞かない。実力も正義も無き者の命令なんぞに従わない。コーネリウス・ファツジの政権前半——
ホグワーツ校長の操り人形と称されていた魔法大臣は、今後の任期でも踏襲される。

魔法省が再度ホグワーツに権力闘争を挑み、その上で勝利しない限りは。

そして当然、アルバス・ダンブルドアが消えれば仕掛けるだろう。何時までも奴隷で居続けたい者など居ない。また、現状回復——三百年間そうであったような曖昧な対等関係——にして手打ちとしようと主張も通らない。自由となった奴隷が主人を殺そうとするように、将来逆襲に出た魔法省は、ホグワーツの自治権を徹底に剥奪し、統制し、牙を抜こうと務めるに決まっている。

その際、果たしてミネルバ・マクゴナガル教授は……或いはそれ以外の後任の校長は、数百人の大人の魔法使いの集団に勝てるのだろうか？

「加えて、既に懸念を示した通り、魔法省が魔法戦争の勝者とならず、あまつさえ魔法族に敵視されるような事態——彼等が死喰い人の先兵となり、市民の生命や権利を蹂躪する事態が万一にでも起こってしまった場合。やはり魔法省は滅ぼされる。アルバス・ダンブルドアが無理矢理存続させた場合でも、彼が死ぬかボケれば同じ末路を辿る事になる」

三人兄弟の物語が綴るように、死人を生かす事は出来ない。

アルバス・ダンブルドアの下で如何に魔法省が盤石に見えようと、彼が消え失せてしまえば、彼の^{His Majesty's Government}為でしかなかった組織は崩壊する。

「そんな組織を、僕は到底 “政府” と呼べんよ」

そして、当事者は責を負うべきだ。

ホグワーツ王の独裁を許した、僕を含めた今生きている全ての魔法族が。

「もつとも、アルバス・ダンブルドアは当然、そうはならないと考えて居る。魔法省も自分が多少小突いた程度で壊れはせず、自分抜きでも問題無くやっていける筈だとな。けれども、僕には余りに楽観的過ぎると思うし、現実逃避しているようにしか映らん」

彼は自分の影響力を御存知ではない。

「……だから、だから貴方はヴォルデモートの支配を肯定するの？」

「間違いなく理由の一つだな」

政府の生まれ損ないを中途半端に残していても害にしかならない。

一切合切を焼き払って、瓦礫の中から生まれる次に期待した方が遥かに良い。

「何より、他の魔法界に少しでも正気な人間が居れば、地獄と化したこの魔法界を反面教師としてくれる。愛国心というものが無かろうと、普通の感性を持つていけば、自分の生まれ育った地に第二の帝王が現れて欲しいとは思うまい。教育改革、社会保障、経済革命等々。非魔法界の見様見真似で考え得る全てに手を出し、“政府”を創ろうとする筈だ」

まあ間違いなく、最初は失敗するだろう。

非魔法界とて無数の失敗の上に今が有り、そして現在も失敗し続けている。魔法族の社会体制も独特であるから、彼等なりの“政府”の構築は更に骨が折れるだろう。

しかし、挑みすらしていない現状からは変わってくれるのは間違いなく、“マグル”被れの魔法使いが増加し、その事に頭を悩ませているのは何処の魔法界も一緒だ。ゲラート・グリンデルバルトの敗北で棚上げになっていたが、魔法族は改めて、“マグル”の存在と関係性、そして自己の存在意義を考える事になるだろう。

だからこそ、一つの魔法界を供物とする事は正当化し得る。

偏に、より For the Greater Good 大きな善の為に。

「……余りに強引で、常軌を逸した理屈だわ」

唾を飲み込んで切り出した彼女に、僕は軽く顎を引いて先を促した。

「貴方は自分の結論を先取りし、自分に都合の良い論理を持ち出し、そ

れによって自分の正当化を図ろうとしている。歴史がどう語っているかと、未来が同じように動く訳がない」

「前半も後半も君の批難を受けいれよう。そして、別に正当化する気は無い。あくまで個人的見解に過ぎず、この理屈を他所で訴える気なんぞ毛頭ないのだから」

「……………つ。貴方は何時も何時も、そういう理由付けで逃げようとする」

「そのつもりは無いが、まあそうなのかもしれん」

そして別に自論を固持する気も無く、ハーマイオニーを論破したい訳でも無い。

「けれども、ハーマイオニー。僕の人生に、魔法省は必須ではない」

「――！」

それだけは間違いない。

魔法が齎した悲劇によって母達が死に、最早僕しか残っていない以上、自己責任と自力救済を至上とする世界こそを肯定する。

「君が今後、魔法大臣を目指すのは結構。しかし、何時か言った言葉を繰り返そう。魔法大臣は、世界を変える椅子では無い。アルバス・ダングルドアがそうであるように、闇の帝王がそうであるように、魔法族はアレに従わない。故に、非魔法族的な幻想を抱いたまま昇れば、君はノビー・リーチ魔法大臣――“マグル生まれ”初と呼ばれ、しかしそれ以外に政治的功績の語られる事のない歴史上の人物と同様の末路を迎える事となる」

イースター休暇が終わった後は、五年生は各寮監との面談を迎える。

彼女がどの道を進むかは彼女の選択次第だが、非魔法界の公務員のように、市民の役に立ちたいとか、国を変えたいという無垢で陳腐な熱意でもって魔法省に就職する気ならば、やはりそれは道を間違えていると言わざるを得ない。

鎮痛な表情をしたままのハーマイオニーに続ける。

「もつとも、君が今から憂う事にも意味は無い」

笑い掛けてはみるものの、彼女の心がどれ程安らいだら。

「第二次魔法戦争が何年続くか解らない以上、遠い未来の話では有る。これからの魔法省が有能である可能性も無くはないし、不死鳥の騎士団が圧勝すれば、魔法省の無様が露呈しないまま終えられる。そもそも、君達が魔法戦争に勝たねば始まらない」

「……………」

「また、闇の帝王が勝てば、良くも悪くも魔法省は存続する。支配に便利な道具であるのには間違いない、だから僕の今の話は、あくまで君達の勝利の後に顕在化し得る話に過ぎん」

眼前の事以外を気にした挙句、戦争に負けるのは本末転倒。

致命的な問題と化する前から思い悩んでいても仕方ないというグリフィンドールの発想は、全く同意は出来ないものの、一理有るとは認めざるを得ない。

また、更に決定的な理由が、もう一つ。

「——そしてまあ、希望的観測をしているのは僕も変わらんかもしれんからな」

「——え？」

腹立たしい事に、今世紀で最も偉大な魔法使いは大抵の場合において正しい。

僕が想定する過程と彼の想定する過程は違うが、それでも結論が同じ事は否定し得まい。

最初から存在しないというのは、逆に好都合とも言える。彼等が——非魔法界で育ったあの男が勝ち得ると言うのならば、僕の懸念なんぞ簡単に吹き飛ばし、世の中を真に良い方向へ導いてくれるかもしれない。なかった。

「さて——」

丸石の上の時計をちらりと見、時間が残っている事を確認した。

想像したより少なくなってしまったが、それでも目的を果たすには十分だろう。

「——僕が開く必要の部屋は、違う開き方をするかもしれない。最初にそう言った筈だな？」

指を組み、椅子から身を乗り出してハーマイオニーと向かい合う。彼女は動揺を表すように少しだけ身を引いたが、直ぐに元の位置に戻した。否、それどころか今までよりも少しだけ、彼女も身を乗り出した。

「……っ。え、ええ。確かに聞いたわよ」

「見たところ君はどうも勘違いしているようだが、今までの話は部屋を“必要”とするかもしれない理由と一切関係ない。まあ、忘れてくなくても構わない。やはり僕の私見に過ぎず、普段の雑談と変わりはないからな」

「——」

「だから、僕が君に問うて置きたいのは、これからの覚悟だ」

「……覚悟？」

「ああ」

本来ならば、五年目の最初にやっておくのが済ませておくのが正しかった。

けれども先延ばしにしたのは、初めから答えが解っている問いであって——けれども、闇の時代が間近に迫った今、僕が心を決める為には必要な儀式だった。

「君がハリー・ポッターの傍、この地で最も危険な場所に居続ける覚悟。そしてこんな下らない世界の為に殉じる覚悟。それを持っているかどうかを、改めて確認しておきたい」

「どうやらハーマイオニーは、直ぐに答えを出そうとするのを避けたようだ。」

口を堅く結び、ただ僕の言葉を受け止めていた。

「進路相談を口実にルシウス・マルフォイ氏に照会したのだが、今年に入って魔法省……特に魔法法執行部からは、大勢の辞職者が出ているらしい」

「——っ」

あくまで噂。

手紙の文面でもそうになっていた。

しかしルシウス・マルフォイ氏より齎されたのだから、結論のようなものだ。

「何処の局は余り問わないようだが、割合としては『現場』の人間が多いらしい。もつと具体的に言うならば、魔法法執行部隊、ないしそれに準ずる組織の人員。要するに、治安維持の為に戦わされる部署の人員が、一気に消えた。流石に闇祓い局の動揺は他より少ないものの、それでもやはり前例に無い程の退職者が出たらしい」

「……………」

「辞めずに残っている人間達にしても、ホグワーツ在學生を逃がす程の露骨さは無いにせよ、親や親戚や配偶者、更に就学以前の子供を海外に逃がしていると聞く。善意で移動鍵を提供出来る小悪党達は、短時間で随分とガリオン金貨を貯め込んだそうだ」

「……貴方の話を踏まえると、当然そうなるわよね」

彼女は暗い表情を浮かべるでもなく、仮面のような表情のまま、小さく頷いてみせた。

それでも内心が大嵐なのは一見して明らかであるものの、ここで無様な反論を口に出さないのは、先程までの話の意味が多少なりとも在ったという事なのかもしれない。

殆どの者にとって唐突に始まった前回とは違う。非常に親切な事に、今から戦争が始まるとアルバス・ダンブルドアが警告してくれているのだ。そして少なくとも現在、闇の帝王は行動を起こしていない。その上でこの魔法界の危うさを理解する知能が有り、また少しでも命が惜しいと考える者は当然逃亡する。

闇祓い達にしても同じ。

彼等は危険を承知でその仕事を選んだにせよ、それでも限度というモノが有る。

第一次魔法戦争で一体どれだけの人間が殉職し、また内通者や共犯者の疑いでアズカバンに叩き込まれたと知っているのか。特に後者の方には、無実の人間——本当に服従の呪文で操られただけの不幸な人間が少なからず含まれていただろう。

ルシウス・マルフォイ氏達を牢獄に送れなかった分、バーテミウス・クラウチ氏は死喰い人の手足となった者達へ容赦する気は余計になかった。そして世間も最小限度の犠牲として黙認したのが現実であり、これから彼等と同じ末路を辿りたいと考える者など居まい。

ましてシリウス・ブラックが脱獄して以降の三年間、彼等は散々世間からバッシングされ続けて来たのだ。社会の守護者としての矜持は深く傷付けられており、極めつけはコーネリウス・ファッジが頂点に居る。指導者が無能では、最初から戦おうとするだけ無駄である。鼠のように逃げ出すのも賢明な判断と言えよう。

「……この魔法界の為に戦おうとする人間は——」

「——居ないとは言わないが、極少数だ。ホグワーツは愛国心、或いは魔法省やウイゼンガモットに対する忠誠を教えないからな。必然、”国家”などという姿のない怪物リヴァイヤサンの為に戦う魔法族など現れない」

原始的な郷土愛Patriotism以上の、国家主義Nationalismは無い。

魔法族は、魔法省やウイゼンガモットを想像の共同体とは捉えていない。

「まあ現在の”マグル”の潮流を見れば、魔法界は”先進的”なのかもしれない。欧州統合の理想——国境等の枠組みが馬鹿らしいという主張にも一理ある。人間は好きな場所、自分が愛せると思うべき土地に住まうべきだ。その権利は、アルバス・ダンブルドアが剥奪出来るものではない。それが嫌ならば、もっとマシな箱庭を作る努力をすべきだった」

住みにくくなつた地は捨て、移動するだけ。

非魔法界では世界の一体化が、魔法界では移動鍵や姿眩まし、煙突飛行がそれを許容する。

「——そして。君が同種の行為に及ぶ気なら、今が最後の機会なのだ」闇の帝王は既に何かを企んでいる。

アズカバン脱獄も有った事だし、既に開戦は秒読みだろう。

「二歳のハリー・ポッターが闇の帝王を破った場所は、知つての通りゴドリックの谷だ。しかし、こう思った事は無いか？ 何故そこであったのかと。当時のこの島が子育て向きで無いのは明らかで、ゲラー

ト・グリーンデルバルトの時とは違って世界全てが燃えていた訳でもない。しかし、ポッター家があそこに留まり続けたのは何故なのか」「……多分、戦争が始まって以降は、島から脱出する自体が危険だったから」

「僕も同じ結論だな」

ポッター家にしても、アルバス・ダンブルドアは国外に逃がす事を当然考慮した筈だ。

だが、あの大魔法使いにとってシビル・トレローニーの予言は信頼に値するものではなく、闇の帝王が本気でポッター家を……それも普通なら脅威にならない赤子を狙いに来るかも不透明。また、親友達を残し一人安全圏に逃げる事にジェームス・ポッターが難色を示した可能性も有るし、灯台下暗しという発想にも一理有る。更に最終的に国外に逃がす事を決断していたとしても、適切な時期が訪れるまで待つという判断は不合理ではない。

他にも様々な事情や原因、理由が有っただろうが、やはり一番の理由は、一歳前後の子供を連れて逃げる事は余りに危険だという思考だった筈である。

「無論、全ての姿眩ましや移動鍵の使用を見張るのは現実として不可能だろう。非魔法界の交通機関も数多く存在する。だから、戦争が始まって以降も、逃げる事は一応可能だとは思う。ただ……領民が逃げ出す事を是とする領主など居ない。その事は心に刻んでおくべきだ」

魔法族の国外逃亡を防ぐ為、闇の大魔法使いが如何なる手段を用いるかは知らない。

しかし、魔法戦争中もホグワーツがほぼ通常運営されていた——移動鍵で全生徒を国外に逃がすような事態にならなかった——あたりからしても、やはり今世紀で最も偉大な魔法使いの実力をもってして尚、危険が付き纏うのだろう。彼がゲラート・グリーンデルバルトと違って世界革命に挑まなかったのは、島を丸ごと牢獄化するのが限界だったという事でもあるのだろうか。

まあ何が理由にせよ、本格的な開戦後に楽に逃げられると考えるべきでないのは間違いなく、捕まって見せしめとして殺される際には、

さぞかし酷い事になるに違いない。

「だから、今しかない。今ならばまだ、君達家族がこの魔法界から殆ど危険も無く逃げ出せる。潜伏を続ける闇の陣営は、未だ罫を張っていない。ドーバーだろうとヒースローだろうとリヴァプールだろうと、
“マグル”の両親を連れて悠々と逃げ出せる」

ハーマイオニーは“生き残った男の子”と違う。

戦わねばならない義務は彼女に無い。単なる“マグル生まれ”を追いかけて殺す必要性も、闇の陣営にはない。だから今直ぐに逃げれば、命を拾う事が出来る。

「戦争中に君が捕まれば、一体どんな事態になるかは解らん。アズカバンに送られるという温情が適用されるとは限らない。“マグル生まれ”が魔法を奪った秘密を解き明かすという口実で、君は生きたまま解体されるかもしれない。或いは、狼人間に喰われながら犯される羽目になるかもしれない。コレは戦争なのだ。尊厳を維持したまま死ぬるとは期待するな」

自殺するのに失敗すれば、死ぬより惨い目に遭う事になる。

ハリー・ポッターの親友であり、尚且つ“マグル生まれ”。そんなハーマイオニー・グレンジャーに、最大限の苦痛と屈辱を与えない理由を探す方が難しい。

「そして戦争を生き延びたとしても、この魔法界の将来には多くの困難が待ち受けている。闇の帝王が勝てば魔法界は全て瓦礫の山になるが、アルバス・ダンブルドアが勝った所で然程変わらん。戦後に万人の万人に対する闘争の世界が広がっていたとしても、僕は何も驚かない」

「……………」

「何より、君は改めて意識しなければならぬ。君がハリー・ポッターの傍に居続ける事は、必然的に戦争へと身を投じるという事だ。故意ではなくとも、相手の命を奪い、血で手を汚すかもしれない立場に身を置くという事だ。これより先の時代、君が入学前に憧れた夢物語の世界は存在していなくて、君が信奉する綺麗な正義なんぞこの世に無い」

魔法の奇跡を暴力的に用いるしか能のない、悪党共が蔓延るのがこの現実で。

「だから君がホグワーツから逃げ出したいというのなら、僕は君に今直ぐ助力するとも。あの特別な部屋の力を最大限使い、責任や後ろめたさを可能な限り感じにくい形で、君の親友二人すらも決して追跡出来ないように——」

途中で言葉を切り、笑う。多分、自嘲が混じっていただろう。

ハーマイオニーは何も語っていない。

けれども、号泣するのを必死でこらえ、流れ落ちた一筋の涙をローブの袖で拭いながらも、こちらに真つすぐと向けられる濁りのない美しい瞳は、一つの答えを告げている。

そして、開心術士である事は非常に残酷だ。心が全くの無防備である相手には、その力は「真実」以外を見せてはくれない。

……嗚呼、最初から決まっていたのだ。

既に一学年の末、この魔法界で最も賢い魔法使いは答えを示していた。

ハーマイオニー・グレンジャーは「グリフィンドール」だと。

「……最近、強く思うわ。貴方は寧ろ、私に好かれたくないと考えてるのではないかって」

「かもしれないな」

「えっ」

涙を一瞬で止めた彼女から視線を外し、改めて地面の上の時計を見下ろす。

感覚は正しく、思った通りに限界だった。

「名残惜しいが、ハーマイオニー。時間だ」

「……………は？」

彼女が如何に呆然としても、時計の針が指す方向は何も変わらない。い。

時刻は九時の十分前。廊下を歩いているだけで見咎められる時間が迫っていた。

「今回はこれで終わりだ。最低限の話は出来たし、今回の場を提供し

てくれたポモーナ・スプラウト教授にも迷惑を掛けたくないからな。後片付けと教授への報告はやっておく……いや、丁度来たようだ。ならば非常に手っ取り早い」

会話の途中で温室の扉が開かれる音。

それにハーマイオニーがビクリと肩を跳ねさせたが、僕は構わず立ち上がった。そして魔法植物の先に視界に入ったのは、本来の温室の主の姿。

そこから再度、座ったままの彼女へと視線を戻す。

「教授に事情を話して送って貰うと良い。自ら質問する程に無料で無くとも、内心では僕達が何を話したか気になってはいるだろう」

ハーマイオニーの眼は赤くなっている。

余り要らない誤解をされるのも、出来れば避けたい事態だった。

「そしてドロレス・アンブリッジに捕まれば困った事になる君と違い、僕の方は何とでもなるからな。如何様にでも言い訳はし得る。正当な理由が有れば……教授の罰則や用事で有れば、九時までに寮室に戻らずとも問題にならない」

「ちよ、ちよつと待って頂戴。まだ私は言いたい事を言えてないし、反論も——」

「——その通りだが、解り切っている事の為に時間を費やす程、僕は悠長でもないよ」

立ち上がるうとしたハーマイオニーに手を掲げ、笑い掛ける事で制止する。

ポモーナ・スプラウト教授の方にチラリと視線を向ければ、少なくとも彼女は、僕達の話が終わるまで待つ事にしたようだ。温室に入った所で佇んでいるが、しかし、そう待つてくれもしないだろう。

「君は如何なる危険に遭つても、たとえ自分が死ぬ羽目になつたとしても、ハリー・ポッターとロナルド・ウィーズリーの傍に居続けるのだろうか？」

「——」

「ならば、君は答えた。そして、終わりだ」

彼女と会える時間は限られている。彼等の軍団が発覚してからは

余計に。

議論にすらならない事項について語り明かすつもりは、少なくとも僕には無い。

「もつとも、君にとって違うというなら——言い足りない事が有るといふなら次回聞く。何時になるかというの今は言えんがね。ドローレス・アンブリッジは、君達を追い詰める為に“必要”の部屋を使えないか試している。他の尋問官親衛隊も似たり寄ったり。だから隙を突いて君が開けるのは難しいのだが、それでも君が求めるならば、僕は努力しよう」

今の所、あの必要の部屋が彼等に扉を開いた形跡は無いようだ。

絶対にマリエッタ・エッジコムから開ける方法は聞き出している筈——ハリー・ポッター達が三人で部屋の秘密を独占するというのは、友人関係上難しいように思える——で、しかし開かないという事は、単に彼等の“必要”とする願いが抽象的過ぎるのか、それとも Hogwartz 城が意思をもって拒絶しているのか。理由が解らないのは座りが悪いが、都合が良くはある。

ハーマイオニーは少しの間、僕と時計の間で何度も視線を往復させ、その表情には規則破りの葛藤が現れていたが、最終的に理性が勝ったようだ。

「……貴方は私の言い分を聞くと云ったわ。その言葉を違えないで頂戴」

忘れずに態度で不満と怒りを表明した後、ただそれだけを言った。

「ああ、約束だ」

「……………夏休暇中とかは無しよ」

「解っている。今学期中——いや、数日中に、何とか隙を見付けて連絡する」

そう頷いてやれば、彼女は何か内心の折り合いを付けたらしい。少しばかり素っ気なさを感じる別れの言葉を口にした後、ハーマイオニーは椅子から立ち上がった。そうして、あてつけのように髪を大きく翻し、殴り掛かってくる魔法植物を避けながら去っていく。

しかし、遠ざかる背を追っている内、ふと気付いた。

話が長引いたせいで失念していた。

「必要」ではないが、それでも忘れてはならない話題が有った事に。

「——少し待ってくれ。ハーマイオニー、君に伝言を頼んでおきたい」
彼女へと呼びかける。

「で、伝言……？」

「ああ」

教授の下へ着く前に硬直したハーマイオニーに、首を縦に振る。

魔法植物を余計に避けさせる事になったのは少々悪い気がした。数秒早く思い出していたのであれば、そんな事をさせずに済んだだろう。

そして、少々過敏な反応をされるのも仕方ないとの自覚もある。

僕が彼女にこの手の頼みをする事は五年間で一度も無かったし、ま
ず間違いなく今回が最後になる筈で、そして大変な面倒事に繋がる可能性は高かった。

更には僕自身、余り望む行いではない。

野蠻な馬鹿共が復讐と報復合戦に勤しむのは勝手にしていると思
うし、ドロレス・アンブリッジにしても中々愉快な見世物になって
くれている。何も無かったのであれば、僕は当然傍観を選んだら
う。

しかし曲がりなりにも僕はスリザリン生であり、今や尋問官親衛隊
に助力する身でもある。またアルバス・ダンブルドアに如何なる感情
を抱いていようと、この無秩序状態が数年に渡って続くのは望まない
し、グリフィンボール下級生達への慈悲も多少は有る。そしてまあ
……ハーマイオニー達が僕に最善を求めた以上、それを試す程度の義
務は有るだろう。

「ロナルド・ウィーズリーに伝えてくれ。」

——去年の借りを返せ。君の双子の兄達と話がしたいと」

応じるかの選択権は向こうにある。

しかし、誰もがドロレス・アンブリッジのように御優しいという
訳では無い。その事をグリフィンボールは知っておくべきかもしれ

ない。

天秤の主張

返答が有ったのは、イースター明け初日の事だった。朝一発目の授業が終わり一人で廊下を歩いていた時、それは起こった。

前触れは無かった。そして殆ど全てが一瞬だった。

何処からともなく現れた、一瞬で視界を覆う程の大量の煙。更に色とりどりの眩い光、続けて複数の爆発音。僅かな火薬臭に、それを遥かに上回る鼻が曲がる程の異臭。そこら中で上がる悲鳴と、僕の傍を駆け抜けて行った小さな笑い声……間抜けにも後から咽る音。そして何よりも、他人によつてローブのポケットが触れられた感覚。

色んな意味で劇的で、しかしその一切に反応せず、僕は成り行きを傍観し続けた。

十秒以上経ち、煙が晴れて見えるようになった光景はまあ、中々壮観だった。

爆発は相当の衝撃を与えたのだろう。流石に廊下自体は傷一つ付いていないにしても、窓硝子には大きな罅が入っている。また天井や壁、床には、ドロドロした何かがそこら中に飛び散り、何処もかしこも極彩色のまだら模様で覆われている。

更に、ここは生徒が往来する廊下である。狙いが僕であり、彼等なりに最大限配慮はしたのだろうが、それでも周りに全く被害無しという訳には行かなかつたらしい。……まあ、そもそも今回は目撃者が必須だ。咳込んでいたり光と音の衝撃でフラフラしていたりする生徒が居るが、彼等には運が悪かったと諦めて貰うしかないだろう。

そこまで認識してから軽く息を吸い直し、漸く杖を抜いた。

自分に清掃呪文を掛け、周りの被害をある程度修復してやり、更に騒霊を先制攻撃で叩き落す所まで終わった後、やっと聞こえて来たのは誰かが急いで駆けて来る音。そちらに視線を向けてやれば……嗚呼、素晴らしい。秩序の教授の御登場で、完璧すぎる仕事だ。ここま

で計算ずくか。

「——どうも、ミネルバ・マクゴナガル教授」

どういう訳か、彼女は僕の軽い挨拶に大きく怯んだ気がした。

しかし、咳払いをした後、凜とした声で教授は言った。叱られている訳では無いと言うのに、被害の余波を受けた生徒や野次馬達が一斉に背筋を伸ばした。

「レッドフィールド。状況の説明を求めます」

「僕が何をやったのかとは問わないのですか？」

少しだけ裾が汚れたらしい下級生達のローブに、順番に片手間で呪文を掛けながら聞く。けれども、教授は呆れたように小さく首を振った。

「貴方の遣り口では無いでしょう。また、犯人の見当も既に付いています」

「そうですか。言い訳を考えなくて良いのは非常に助かりますよ」

「……まさか、本当は貴方の仕業だと言うのですか？」

「その問いに僕は回答出来ない。これで教授には十分だと思いますが」

ミネルバ・マクゴナガル教授は余計に険しい表情を浮かべた。

話が早く済むのは良い事だ。それが個人の頭の良さから来るなら猶更に。

「そして教授、一つ御願いが」

「……ウィーズリー達には私から罰則を科します」

「そう言う事では有りませんよ。今の貴方の危惧も見当違いだ」

懇願の言葉に警戒の視線が返され、笑みを苦笑へと変える。

そのような事を望んでいる訳では無いし、復讐を目論んだ訳でも無い。これは必要経費であり、僕の義務の内で、だから多少不愉快に思う以上の事も無い。

「変身術教授。次の貴方の授業に遅れる事を、どうか御許し頂きたいのです」

可能な限りの誠実さを籠め、頭を軽く下げる。

「確かに魔法を使えば全てを綺麗に出来る。だとしても、流石に糞爆弾と臭い玉と……後は良く解らない何かが色々。兎に角、それらのフ

ルコースを浴びせられたそのままの姿で教室に向かうのは、何処となく嫌な気分を払拭し切れない。僕はそう感じるのですが、貴方もそう思いませんか？」

これだけやって何も無しであれば、逆に感動すらした。
しかし、そういう事は流石に無かつたらしい。

他人に触れられた感覚の有ったポケットの中には、期待通りに羊皮紙が入っていた。

それは本来何かの設計図の一部が描かれていたようで、しかし僕が読めないようにする為の措置だろう。雑でありながらも物理的に削った痕が残っていたが、今回意味と用事があるのはそちらでは無い。その裏面を見てみれば、一つの指示が掛かっていた。

本当に上手い事やってくれたものだ。似たような事を僕も三年前にやったが、比べる事自体が馬鹿らしくなる程良く出来ている。ここまで完璧な仕事をされてしまわれては、後から僕達の繋がりを疑う部外者は現れまい。

指定場所は、五階に置かれた一つの鏡の裏側。

必要の部屋以上にそんな都合の良い場所があるのかと思っただが、一々探し回る必要も無く簡単に見つかった。指定された場所から大きな会話と笑い声が殆ど中断なく聞こえて来たからだ。普通の生徒は授業中である筈なのに、彼等は余程の怖い物知らずらしい。

……いや、違うか。

彼等が最初からN・E・W・T. を受けるつもりが無いと言うのであれば、普通の生徒と異なり大幅に自由時間が増える。元々空き時間かもしれないし、仮に学期最初の時間割としては入れているも、教授に説明して授業を放棄する事は可能だ。所詮ホグワーツは自由教育の場で、非魔法界と違って国家により必要単位が管理されている訳では無いのだから。

足音を少しだけ大きくして近付いた後、僕は踏み込む前、中の人間

達に呼び掛けた。

それまでの間も二人の会話は全く止む事は無かった。侵入者へと不自然さを抱かせるヘマはしないようだ。もつとも、彼等の声色は余りにもわざとらしくあったが。

「——合言葉を言う必要が有るか？」

演技がかつた呼び掛けをしたのは意図的なモノ。

御互いの関係は険悪という表現すら生温いものだから、大袈裟な方が良いだろう。そして僕の思惑通り、部屋内には一瞬だけ静寂が訪れた後、直ぐに笑い声の二重奏が響いた。

「そうだな……野心最高とでも言つて貰おうか？」

「純血主義最高でも良いんじゃないか？」

「そつちも捨てがたいな」

「だろ？」

「思えばスリザリンが馬鹿な合言葉を馬鹿真面目に言うのは聞いた事が無いしな」

「……何なら、グリフィンドル最高でも構わんど。或いは、アルバス・ダンブルドア万歳でも。言うだけならタダだからな。その程度で気を悪くなどしない」

更に笑い声。

「ああ、そうかい。陰険スリザリンにしては少しばかりユーモアを解するらしいな」

「ハーマイオニーは、冗談を解さない人間だと言つてたけどな」

「彼女はかなり石頭な所が有るからな。それで、どうなんだ？」

確認をすれば、返つてきたのは快活な許可。

「良いぜ。だが、中で余計な物に触れたり、床に転がっている物を蹴つたりするなよ？ その場合、君が悲惨な事になる。もつとも、俺達の発明品の実験台として志願してくれる気なら好きにすればいいけどな」

「そうか。ならば立ち入らせて貰おう」

改めて宣告した後、僕は彼等の縄張りに踏み入った。

仮の隠れ家にしては悪くない。踏み入り、中を見渡してみよう。

そこは行き止まりの通路、それも崩壊して通行不能になった通路と表現すべきだろうか。

まあホグワーツには最初から行き止まりの通路というのもままある訳だが、どちらにせよ、ここそこそと何かをするには申し分ない程度の広さはしている。恐らく、ここが健在だった時代には、双子のような人間が悪さの為に利用してきたのだろう。今現在崩壊してしまっているのも、誰かが魔法薬でも爆発させたか、或いは何か危険な魔法生物でも秘密裡に飼っていたのか。

しかし、やはりホグワーツの構造の把握は「本職」に叶わないようだ。少なくとも、僕はこの場所を今日初めて知った。

「で、スリザリンの監督生様が何のつもりだ」

双子の片割れの先制攻撃に、一つ溜息を吐く。

改めて向かい合ってみて思うが、二人とも良く似ている。少しばかり注意深く観察した程度では、どちらがどちらであるか見分けがつかない。区別が出来ずに困る場合はそう無さそうではあるものの、個人を認識し切れないというのはやはり何処か落ち着かない。

ただ、一つだけ、酷く気に入った事が有る。

声を掛けて来た一方は、僕の存在など気にする程では無いというように床に座り、汚らしい襪褌布——恐らくは、何かの悪戯道具を弄っている。つまり、両手が見えている。しかし、もう一方は立ったまま腕組みをしており、必然的に両手が見えていない。彼の顔は笑っているが、その眼は油断なく僕の動向を観察しているのが良く伝わってきた。

スリザリン生に対するモノとしては満足出来る対応で、だから僕は何も握っていないと示す為に両手を広げた後、軽く肩を竦めてやった。

「僕は別に監督生では無いのだがな。形式も実質も、僕はそうでは無い」

ドラコ・マルフォイこそが監督生。

我がスリザリンの第五学年において、頂点に立つ人間である。

「でも、他の連中は君を真の監督生だと言ってたぜ？」

「それは単純に、君達の交わっているのが下流の人間達なだけだ」

ドラコ・マルフォイの取り巻き——つまり間違いなく死喰い人であった者達の子供である連中と、このグリフィンドール達の付き合いは皆無と言って良いだろう。

「そして下流の人間なら、僕も多少は命令に従わせる事は出来る。が、
“純血”は下級生だろうと僕が言ってもどうにもならず、従うのはドラコ・マルフォイの言葉のみ。僕に出来るのは精々伏して懇願する事くらいだ。簡潔に言えば、大した事のない連中の担当が僕で、所詮は下請け労働をしている身に過ぎん。自惚れる気にもなれんよ」

まあ最近は何言おう事を聞いてくれる場合も有るが、それはやはり、僕の言葉に理が有る事が大前提である。そして、僕の価値観の下で理が有るように思えても、実際には彼等の方に理が有り、屈せねばならない事も多く有った。“純血”達の秩序と価値観の多くは、半純血である僕にはやはり理解出来ないからだ。

けれども、それでも左側のウィーズリーは意地悪く笑った。

「そうは言っても、監督生の仕事の大部分をしてれば、そいつはやっぱりもう監督生と呼ぶべきなんじゃないのか？」

「ロニー坊やより余程熱心に仕事をしているのは間違いないよな？」

その上、マルフォイも明らかに君の命令を聞いてるっていうのがスリザリン生や、他の寮生の見立てだし」

「そうそう。来年あたりマルフォイは監督生じゃなくなるんじゃないかってすら言われているよ。非常に例外的な事だとしても、監督生から降ろされる事は有るって聞くし」

「多分グリフィンドール的にはそっちの方が有難くあるよな。君の方がマルフォイより遥かに話は通じやすそうだ」

「——」
ほんの僅かの間、言葉を喪う。

彼等が何処まで主導権を握る気だったのかは解らない。

しかし知ってか知らずか、最初の挨拶は間違いなく彼等の勝ちだった。

嗚呼、当然ながら彼等は僕達の会話を——非魔法界の首相について

の会話を知るまい。

けれども、あの時のドラコ・マルフォイは一体どういう気持ちで聞いていたのだろうか。

まあ、今の彼は僕の眼から見ても少々頼りなく思えるし、寧ろ彼には僕を振り回す位であつて欲しいのだが……それでも、他の寮からすらそう見えてしまうという事は、僕も今まで以上に注意を払うべきだという事なのだろう。

「成程、君達の忠告は感謝しよう」

そう言えば、彼等は何故か爆笑し始めた。

冗談抜きに腹を抱えての、本気の笑いのようだった。

「……今の発言に、何処か愉快な所が有ったか？」

疑問に思つて問えば、更に笑われた。

「はっはっは。そりゃあ愉快な事しかないさ。スリザリンがグリフィンドールに感謝するなんて、少なくとも俺は、ホグワーツの七年間で初めて聞いたな」

「そして、俺達の人生で最初で最後になるかもな」

「なら、俺達もまた逆に感謝してやるか？」

「——君達は、一々何かを茶化さないと会話出来ないのか？」

溜息を吐きながら問えば、更に大袈裟に溜息を吐かれた。それも二人分。

「諦めてくれ。産まれた時から俺達はこんなだつたとオフクロから聞いてるんでね」

「そもそも、俺達に会いたがつたのは君の方だろうか？ 俺達は別に、君に会いたいと思つた訳じゃない。ロニー坊やとハーマイオニーが君に会う事を反対しなければ、最初から君をここに呼ぼうとはしなかつたさ」

深く考えるまでもなく、明らかにペースを握られている。

余り相性が良くないと言うのも有るが、単純に二対一であるというのは分が悪かった。僕が一つ言えば、二つの方向から二倍の言葉が返ってくるからだ。

「けれども、反対されたのにも拘わらず、君達は僕に会うのか」

床に落ちているガラクタを注意深く避けつつ、壁へと寄りかかって腕組みする。

その際、警戒している方の杖腕がピクリと動いたが、それ以上の反応は無かった。

「正直な所、僕は君達が拒絶する可能性も高いと考えていた。君達はグリフィンドールで、僕はスリザリンだ。何より、アルバス・ダンブルドア前校長が出て行ってから、僕と君達は楽しく遊んでいただろう？ もっとも、君達が——グリフィンドールが、本気で仕掛けて来ていない節が有ったのも理解しているが」

前校長の退場を契機としてホグワーツは花火が丸一日以上乱れ飛ぶ状態に陥り、更には少しだけ不思議な事件が起こりはしたが、しかし現状ではそれ止まり。事件を巻き起こしているのはこの双子と取り巻き数人だけらしく、生徒達が全て騒ぎを起こすような、完全な学級秩序の崩壊には至っていない。

拍子抜けだ。期待外れでもある。

大勢の生徒は、この後に及んでもまだ、「悪戯」に踏み切る気がない。

「まあ、今年度のグリフィンドール新監督生殿、そして我が弟が揃って“会う事自体が間違いだ”と言う相手が、一体どんな人間なのか。その事に興味が湧いたというのも有る」

立っている方の片割れが、おどけながら言う。

「そして迷わなかったと言えば嘘になるけどな」

座っている方の片割れが、話を引き取るように続けざまに言った。

「君がウィーズリー謹製の花火を退治しまくっていたのは、全くもって愉快な事じゃない。あのガマガエルババアに嫌がらせする為の出費は覚悟の上とは言え、決して安いものじゃないな。けど、君が相応ヘンなのは、俺達から見ても明らかだったからなあ」

「そうだな。ほら、君の頭に鹿の角を生やしてやった事件が有っただけだろう？」

「……有ったな」

忘れもしないイースター前の一件を思い出し、顔を顰める。

油断したつもりは無かったが、完全に出し抜かれた事件だった。

「しかし、逆に疑問なのだが、アレはあの一度つきりだろうか？　僕が以降警戒を強めていたのも有るのが、それでも同種のモノ——例えば、夕食に不審物が混入され、四六時中嘔吐する事になったり、カナリアの羽が突如として生えたりする事は無かった」

「……あー、それなあ」

「……俺達にも意外な展開になったよな」

僕が苦い顔をする一方、双子は揃って微妙な顔をしていた。

「俺達はな、君を笑い物にするつもりだったんだよ」

「そうそう」

「……十分に笑い物にしてくれたと思うが？」

既に整理を付けてしまった事象とは言え、全く腹が立たなかったという訳では無かったし、蒸し返されてしまえば当時の感情も戻ってくる。

「ドラコ・マルフォイと子分二人は爆笑してくれるし、ハリー・ポッターを虐めている時以外に、スネイプ寮監があそこまで楽しそうなのは初めて見た。スリザリンの女生徒は笑いを止めんし、他の寮生もそうだ。流石に角に触らせてくれという妄言を吐く下級生が現れたのは驚いたが」

休み時間中にハッフルパフとレイブンクローの……二年か三年だろう。クスクス笑っていた集団が僕に纏わり付き、あろう事か、そんな要望をして来やがったのだ。

対応に困った末、大人しく全員に触れさせてやれば揃って満足したような反応を示してくれたが——そして監督生のハンナ・アボットとパドマ・パチルが回収して行った——アレは一体何だったのか。一年生なら兎も角、ホグワーツでそれなりの時間を過ごしているのにスリザリン生にあんな真似をやるのは、こちらが心配になる位に危機感が足りない。

しかも話はそこで終わらない。その後、寮の談話室で同じような頼みをされた上、今度は断ってやれば、何故他の寮生は良くて自分達は駄目なのかと詰め寄られるし、非常に疲れるロクでもない事件だっ

た。

「アー、マルフォイ達は別として、後半は俺達の辞書じや笑い物と言わないな」

「というか、何で平然と授業を受けていたんだ？　普通は医務室に行くべきだろ」

「何故？　優先順位は明らかだろう。二ヶ月後のO.W.L.であり、僕の些細な異変では無い。頭の重りが数ポンド増えた所で、別に授業に差し触りなんぞ出もしない」

何日も続けば流石に困っただろうが、然程大した呪いでも無かった。一日も費やしてやれば、掛けられた魔法を解くには十分だった。けれども、双子は揃って毒気を抜かれたような表情をした。

「……聞いては居たけど、君って大分イカレてんな」

「ロックハートの授業を真面目に受けた唯一無二の生徒だと、伊達に言われない訳だ」

「……懐かしいな」

授業を受けていた当時は割と苛立っていた気がするが、流石に三年も経ってしまうと、そんな感想が先に来てしまうらしい。自分でも意外では有った。

「とは言え、当時でも真面目に受けていた生徒は割と居た筈だが」

「なら、唯一の男子生徒と付け加えておくか？」

「御遊戯の時間を真面目にやってたのは唯一だから、やっぱり良いんじゃないか？　良い機会だから聞けけど、君は一体どんな気持ちで受けていたんだ？」

「そうだな……諦めの気持ちが強かった気もするが——嗚呼、そうだ」
少しだけ懐古し、同時に納得する。

「ギルデロイ・ロックハートは一つの教訓を残したのかもしれない」

少なくとも、単なる一年限りの科目担当以上に印象的ではあったものだ。

「彼は無能と呼ぶのも烏滸がましい程の魔法使いだったが、何時も堂々としていただろう？　あそこまで自信満々で居られれば、寧ろ周りが何も言わなくなるものだ。あの時のスリザリンの授業もそう

だったし、数日前の僕も、知らぬ内に彼を見習ったという事かもしれない」

僕が思うより、あの男は影響を残してくれたらしい。勿論、全く喜ばしい事では無いのだが。

そして、双子達はやはり、呆れの調子を強めていた。

「……手を引いたのは正解だったな。君は絶対、俺達の望む反応をしてくれそうにない」

「寧ろ、途中で恐怖を感じ始めてたかもな。いやまあ、君に角を生やしてやった後で別の恐怖を感じる羽目にはなつたんだが。チャーリーが居れば、間違いなく発情期の雌ドラゴンに喩えてた」

「でも、それは彼女だけだろうか？ 他の人間は立場が逆だし」

「いいや、どうせ求愛中の雌ドラゴンに喩えるから変わらんさ」

「——何が何だかよく解らんのだが」

そして理解する努力に挑む気も無かった。

彼等の話を真面目に受けとるべきでは無い。段々とそう思えて来たからだ。

「その口振りだと比喩の対象はミネルバ・マクゴナガル教授という訳では無いのだろうか？ 恐怖云々にしても、君達が教授に叱られた所で感じると思えん」

そもそも以前の教授達の立場は、ホグワーツ生の無法を見逃すというものだ。

それは僕に対しても例外では無い。彼女達の介入が無い事は確認済みであり、合意済みもある。

だから疑問を呈したのだが、汚らしい布を投げ捨てた片割れはマズいという顔をして、一方で警戒心の強い片割れの方はヒラヒラと片手を振った。

「こつちの話だ。けど、そうだな……本気でやる気が無かったのは君もだろうか？ 先々週アンブリッジやフィルチと楽しい追いかけっこは何度もしたが、君とは一度も無かったし」

「寧ろ、僕が本気でやる義理が有るか？」

所詮、しがない下請けだ。熱心にやる理屈が無かった。

「ドラコ・マルフォイの命令が下されればその限りではなかったし、本腰を入れて取り組みもしただろうが、今の所それが無いからな。僕が真面目に取り組んでいない事なんぞ気付いているだろうに、彼は何も言っただけだ。であれば、必要以上に真剣にはなれんよ」

ドローレス・アンブリッジは煩いが、彼女の命令を素直に聞いてやる筋合いはやはり無い。

尋問官親衛隊の方は何か言ってくるかと思っただが——そして、その場合は彼等の希望を尊重する必要があったが——ドラコ・マルフォイに遠慮しているのか、何も言っただけだ。

結果として、僕が適度に手を抜く事を止める理由は無かった。

「へえ？ マルフォイが君に命令してないのか？ アイツの性格からすれば、君を使って俺達に最大限嫌がらせをしたがる物だと思っただけだ」

「——まあ、僕もそうすべきと思う側ではあるが。彼にとっても堪えたんだらうな」

「堪えた？」

「それは、こちらの話だ」

意趣返しのもつりは無かったが、今度は僕がそう返答する。

グラハム・モンタギューがああなったのは余程衝撃的だったらしい。

また、事件を知ったルシウス・マルフォイ氏から、あの後で手紙が彼の下に届いたとも聞いている。多分、余計な事に首を突っ込むなど改めて釘を刺されたのだろう。あれから非常に大人しくなっているし、かつドローレス・アンブリッジの我儘を撥ね退けても居るようだ。

「ま、俺達としても、本気で君を叩きのめす動機は無いからな」

本気で内容に興味があった訳では無かったのだろう。

あつさりと言質を放棄し、肩を竦めながら双子の片割れが言う。

「君には一応去年のクリスマス時の借りが有るし、他の親衛隊の馬鹿と違って寮の減点なんて事もしない。割とグリフィンボール生を見逃してくれてるところか、スリザリン生を叱ってすら居るとも聞いているぜ？」

「全て誤解だ。クリスマスはフラワーが殆ど勝手にやった事で貸しは無
く、寮の減点については尋問官親衛隊でない僕は権限を有さない。そ
してたとえグリフィンドール生だろうと、非が無ければ拘束する理由
が無い。スリザリン生にしても叱ったつもりはないな。彼等の愚か
さに嫌味は言った程度の事は記憶に残っているが」

そう答えれば、双子はやはり揃って笑った。

「そんな事を言う時点で、余り悪くないスリザリンって事さ」

「口が裂けても良いスリザリンだとは言えないけどな」

「僕もグリフィンドール生からそんな評価を受けたくもないがな」

既に確信しているが、仲良くやれる気はしない。

「とにかく、考えてみたが、何が何でも会いたくないという理由は一つ
も見つからなかった。だから、俺達は君に会ってみても良いかもしれ
ない点に合意した。けど、一つの試しとして、今まで少し自重してい
た悪戯を、今回君に仕掛けてみたという訳だ」

「……成程、あの糞爆弾と花火のフルコースにも意味が有ったのか」
上手く考えられている。

実利と嫌がらせの一石二鳥。怒り狂って押し掛けて来たら、そこで
交渉は終わりか。

「だって、そうだろう？ 話をしたいのは君であって、俺達じゃない」
「そうだな。確かに、とやかく言う気は無い。そして僕達の接触を疑
われない為には非常に良い手だったし、それ位の費用は僕が支払うべ
きだろう」

そう同意を示してやれば、やはり奇妙な物を見る眼で双子から見ら
れたが、僕がどんな人間かというのは彼等にも掴めて来たらしい。

直ぐに納得を示した後、双子は何かを思い出した顔をした。

「そういや、マクゴナガルの行動、アレは君の仕業だろう？」

「ああ、君は当然知らないだろうけど、全グリフィンドール生を強制的
に集めた上で、イースター休暇前に説教してくれたんだ」

「……具体的に？」

「内容自体は大した事無いさ。悪戯は校則により禁止、仮に自分がそ
の場面を目撃したら罰則。俺達にとっては聞き飽きた警告だった」

「彼等に気付かれぬよう、口元に手の甲を当て小さく息を吐く。

……どう切り出すかは悩み所だった。最初から今まで主導権は一貫して彼等の側に在り、だが、彼等は自分から踏み入ってくれるようだ。

そして思う。ハーマイオニーは手を抜くべきでない場所で抜いてしまったのだと。同じ寮の仲間を思うのなら、彼女はもつと親身になって反対しておくべきだった。最低でも用件が解っていたのなら、彼等もこのような形で不用意に話題に出しはしなかつたらどうだろうか。

僕の僅かな失望を他所に、彼等の軽妙な遣り取りは続く。

「ただ、随分とマクゴナガルらしくもない所が目立った一件だった。それが終わってから俺達二人を別個に呼んだ上で改めて釘を刺されるなんて初めての事……でもないが、それでも間違いなく何時も通りじゃなかった」

「そうだな。口煩いのは何時もの事だけど、何度も同じ事を繰り返す人間じゃない。それでも、あそこまで真剣に、強く念押しして来たのは、記憶に有る限り初めてだな」

「しかも、その時に君の名前を出した」

「ほう？」

その部分だけは少し意外だった。

御丁寧にも、僕の存在の意識付けまでしてくれた訳だ。

勿論、ミネルバ・マクゴナガル教授に全くその意図は無かつた筈だが。

「となれば、口煩くなつたのは君達の寮監だけでは無かつたらろう？説明するまでもない事の気もするが、ハーマイオニーについて言及している」

「ああ、そうだな」

双子が全く同時に頷いてみせる。

「あの監督生様には遣り過ぎるなって言われたよ。特に、モンタギューのような事は二度とするなってな。万一にでも君を激怒させたら酷い事になるって言ってた」

「……まあ、アレは俺達としても反省すべき事件だったからな。今度は上手くやるさって返してやったら、余計にプリプリ怒っていたけど」

「そして俺達に愛想を突かしたのか、下級生を脅す方に直ぐ切り替えてたよ。スリザリン生に遣り返されても知らないってな。彼女はロニー坊やの真面目さを見習うべきだな」

「真面目過ぎてハーマイオニーに一番怒られてたしな」

「——成程、君達からそれを聞いただけで、一応は満足としておこうか」

ハーマイオニーと教授は、僕の警告を受けて行動を起こしてくれた。

彼女達が連携しているのは明らかであり、恐らく他の監督生もか。更に言えば、双子が話に出したのはあくまでグリフィンホール内の事だけだが、他の二寮でも同種の事が行われはしたのだろう。そして僕は、それらが行われる事自体は期待していた。

けれども、やはり所詮はその程度止まり。

別に落胆している訳でも軽蔑している訳でも無く、彼女達の立場からはそれが限界なのだ。ミネルバ・マクゴナガル教授にしてもハーマイオニーにしても善良な人間で、そしてアルバス・ダンブルドアの愚行により不本意な形で制限が掛けられている。

だからこそ。

僕のような悪党が世に必要なのだろう。

「……何だ。随分と、おつかない顔をするんだな」

「しかしハーマイオニーが言ってた通り、確かに表情が解りやすいな」「遠目から見ている限りだと、表情を余り変えないように見えたのかな」

「……………本当に、君達は減らず口が過ぎるな」

好き勝手に口々言ってくる双子に、一つ溜息を吐いた。

その後で、僕は既にローブから取り出していた杖を一振りした。振る先は眼の前の地面で、意図通り、肘掛とクッション付きの椅子が一脚出現した。

そして僕の行動に対する双子の反応は迅速で、けれども手遅れだった。

座っていた方は即座に立ち上がり、もう一人の立っていた方は既に杖をこちらに向けていたが、それは僕が杖を振った後だ。僕が彼等に呪文を撃っていたのなら、少なくとも一人は打ち倒す事が出来ただろう。警戒していた割には酷く御粗末な対応だった。

「……一体何時、杖を抜いたんだ？」

「何、単なる奇術だよ」

険しい表情をしている二人を無視し、彼等の目前で、悠々と椅子へと座る。

予想以上に長引いた下らない雑談には流石に疲れを覚えたし、これからの話題で負うであろう更なる疲労を考えれば、余計に立つたままでいたくもなかった。

「僕が対峙してきた相手は、誰も彼も余りに杖を抜くのが早過ぎてな。だから、こういう小細工を覚えてみたのだ。と言っても、君達に通用した所で何の喜びも無いが」

彼等から杖を向けられるまでの時間を観察していたが、これでは普通にローブから杖を抜いても太刀打ち出来そうだった。工夫を凝らした意味など全くない。そしてまず間違いなく、アルバス・ダンブルドアやスネイプ教授には通じはしないのだろう。

「さて、スリザリンとグリフィンボールらしくない話題が続いたが、何時までも楽しく会話している訳にも行かない。ミネルバ・マクゴナガル教授からは、授業の後半には顔を出すようにと言われたのだが、どうも無理そうだからな。とは言え、急ぐに越した事は無い。さつさと本題へと移ろうか」

頭を下げに行く事は確定で、罰則と余計な宿題も課せられる羽目になるだろうが、まあ已むを得まい。まさか、ここまで良いようにされるとは思ってもみなかったのだから。

「この調子では、君達はハーマイオニーから僕の用件を聞かなかったのだろう？　ここに来ている理由はスリザリン生、或いは尋問官親衛隊を手伝っている人間としての仕事だ。嗚呼、流れから想像が付いて

いるだろうが、グラハム・モンタギューの一件だ」

「……………」

「いや、君達の『悪戯』を止めに来た訳では無い」

二つの杖先を向けられたままに、左手に杖を持ち換えながら続ける。

「少し表現が悪かったのかもしれないな。彼と関係無いスリザリンの意向と言った方が良かったかもしれない。校則を愛するハーマイオニーや君達の寮監と違う。つまりとこころ僕は、彼が未だに錯乱状態に有る事自体は問題視していないし、多くのスリザリン生もそうだろう」

結局、他人事だ。

彼が如何に不幸な目に遭おうとも、親身になど成れはしない。

「そもそも、僕が止めると言って君達が止める口かね？ スリザリンとグリフィンドールが互いに抱く憎悪を踏まえて尚、それが出来るとは更々思っちゃいない。実際、今のこの瞬間でさえ、君達に何の文句は言っていないだろう？ やられた事自体を問題視するという、そんな御行儀の良い真似はしない」

「…………じゃあ、何をしに来たんだ」

「一つは伝えに来たのだ」

まずは単純な事実を、と続ける。

警告でも通知でも無い。逆恨みを回避する為の確認に来た。

「スリザリンは君達の『悪戯』の全てを、今君達が計画しているであろう今後の『卒業』も肯定する。グリフィンドールの行為を何も批難しないと。——嗚呼、だが、それは裏表でも有る。僕達は君達にも同じ事を欲する。これからやる、否、やるかもしれないか。兎も角、僕達が為そうとする全てを肯定して貰う。そうして初めて、天秤は釣り合うものだ」

理解させる気が無い言葉であり、実際双子の顔に理解の色は浮かばなかった。

けれども、十分不吉さは感じ取ったらしい。彼等の敵意と警戒心は一段と強くなった。

「——お前も、やっぱりスリザリンなんだな」

「奇妙な事を言う。見て解るだろうに」

ローブの色を認識出来ないの——いや、これはすべきでない、不適切な表現か。

兎も角、彼等は認識が甘かったようだ。良いスリザリンなど一切存在しない……訳ではないが、少なくとも僕はそうではない。

「……ロンの頼みは、お前と会う所までだった」

「その通り。そして、会わない権利すら君達には有った」

この双子達がハーマイオニーやロナルド・ウィーズリーと如何なる会話をしたにせよ、この会合を設定した以上、彼等は僕の思惑に乗ってしまったのだ。

「……なら、俺達は十分義理を果たした。さっさと出て行きやがれ」

「そうしたいのは山々だが、それは僕の目的を果たしてからだ」

「別に、呪文を使って追い出してやっても良いんだぜ」

「好きにすれば良い。敵の本拠地に単身で乗り込む際に、狡猾なスリザリンが何の準備もしていないと本気で思っているのなら、だがな」
彼等が準備していたであろうように、僕もまた準備はしてきている。

「そうだ。僕は君達の花火を随分と退治して来たが、不良品だったり、仕掛けられた物を爆発前に回収したり、使用前に生徒から没収したりした事も有る。その総量を知りたくはないか？　ここで君達が僕を撃てば、多分即座に知れるぞ？」

少しの間双子を眺めていたが、彼等は呪文を使おうとはしなかった。

片方はウズウズしているように手を小さく動かしていたが、もう片方が視線で止めていた。

「そして、別に僕としても、喜んでこの場に居る訳では無い」

二本の杖先から視線を切り、自らの杖へと視線を落とす。

「今僕がこの場に座っているのは、ハーマイオニーやミネルバ・マクゴナガル教授への義理であり……まあ、多少の苦勞で今後の面倒を省けた方が助かるという個人的希望でもある。この場が最初から用意さ

れないと言うなら、それは別段構わなかった。既に、寮監達へと通告はしているからな。その後に報いを受けるのは、最早自業自得と言うべきだろう」

「——お前は一体、何を言ってるやがる？」

「解らないか？ 例えば、今後不幸な事故により、ドラコ・マルフォイがグラハム・モンタギューと同じ目に遭ったとしようか。その場合、御互いにとって、或いは、ホグワーツそのものにとって非常に不愉快な事態になる。そう言っているのだ。まあ、こちらは警告だな」

その瞬間、双子達は低く笑った。

視線を少しだけ上げれば期待通り、楽しげな笑みを浮かべていた。

「へえ。マルフォイの保護者様は流石に言う事が違うな。俺達に何が起こるってんだ？」

「そもそもスリザリン生の脅し文句は聞き飽きてる。君が独創的であれば良いんだが」

「そうだな。七年間で最優秀賞を上げられる位だと俺達も時間を取った甲斐が有る」

「どうぞ、ミスター・レッドフィールド。拜聴させて貰おう」

伺える瞳の色から察するに、彼等も本気で言っている訳では無さそうだ。それでもスリザリンが相手である手前、グリフィンドールとして下手な態度は見せられないと言った所か。

けれども、やはり完全に冗談と言う訳でも無い。ヘラヘラとした二つの表情には、全くもって現状への危機感、人間が齎す悪意への恐怖が全く見て取れない。

……嗚呼、心底羨ましくも有る。妬ましさすら抱く。

そのような反応が出来るという事は、彼等の人生には大きな不幸が存在しなかったという事だからだ。人間の醜悪さに真正面から向かい合わずに済んだという事だからだ。

害意と殺意を向けられた経験など一度もない位には幸福だったという事だからだ。

「期待に沿えず申し訳無いが、やはり僕は、陳腐な脅し文句しか吐けそうにない」

兎も角、と僕は笑った。

「仮に、万一そのような事態になつてしまつた場合だ。僕は……来年か。君達の妹であるジネブラ・ウィーズリーを破壊する。たとえミネルバ・マクゴナガル教授が立ちはだかり、四人の寮監と三寮の全生徒が敵に回る事になろうと、絶対にな」

最も弱い人間こそを、躊躇いなく狙つてみせるとも。

僕の宣言が彼等の脳に染み込むには、相応の時間を要したようだった。

そして、それだけの時間を待つて彼等の口から発されたのは、僕が投げ掛けた挑発と同じ位に陳腐な、何の独創性も無い怒りの言葉だった。

「な、何でそこでジニーの事が出てくるんだ……!」

「ジニーは俺達のやる事とは何も関係無いだろ!」

「寄りにもよつて卑怯な真似をスリザリンは——」

「——死喰い人が筋や道理を重んじる。君達はそんな甘い考えをしているのか?」

「——」

本当に迫力が足りないかと、頬杖を突いたまま嘆息する。

僕に殺意をぶつけてくるにしても、もつと真剣にやつて欲しいものだ。去年の夏のアルバス・ダンブルドアの圧力とは比較にならないし、これを直接伝えに行つたミネルバ・マクゴナガル教授の迫力とも雲泥の差である。

そして簡単に絶句してしまつている時点で、此度の革命家としては論外だ。当初の期待は完全に消え失せ、早くもやる気が喪われつつあつたが、これは仕事でもある。伝える事は伝えねばならない。

「行為者本人に責任を問う。これはな、善人の発想だ」

アルバス・ダンブルドア前校長の、ミネルバ・マクゴナガル教授の、

ハーマイオニーの、そして彼等ウィーズリー達の思考だ。

「一方で、悪人は違う。親の責任は子の責任、兄の責任は妹の責任。更に友人知人にも連帯責任を強要する事に躊躇いは無く、実行犯が解らなければ勿論一番怪しい人間の首を吊るす。僕のような人間はな、ドローレス・アンブリッジやアーガス・フィルチ程に御優しくは無いだ。……まったく、彼等は一体何故、馬鹿正直に主犯の現行犯逮捕に固執するのかね」

つくづく迂遠な真似が御好きな事だ。

ロナルド・ウィーズリーやジネブラ・ウィーズリーを適当に吊し上げれば、彼等の方からノコノコやって来てくれるだろうに。

「そもそも、教育令——何号だ？ 二十九で良かったか？ あんなマグル”被れの教育令を改めて出した事自体、僕にはやはり信じられないな。……嗚呼、君達は知らんのか」

非魔法界被れを見せびらかす親を持つ割に、彼等は余りに無知のようだ。

「非魔法界では現状、教師による生徒への鞭打ちは合法だ。もつとも、公立校では十年程前に廃止されたし、私立校でも既に廃止する方向に動いているようなのだが、何れにしても、魔法魔術学校でやる罰則としては何の面白味も感じられない」

まあ、アーガス・フィルチが試し振りをしていた乗馬用鞭の使用は流石に許されていない気がするが、魔法界なら誤差の範疇であろう。痛みも外傷も、呪文で直ぐに消せるからだ。その辺に気の利く上級生が居合わせれば医務室に行く必要すらない。

「僕達は魔法族なのだから、その通りに杖を使うべきだ。馬鹿をやった生徒をケナガイタチに変身させ、廊下でバスケットボール扱いする程度ではまだ甘い。ホグワーツの秩序を害した生徒に対しては、磔の呪文の使用を許可する位はすべきだな」

「……っ。許されざる呪文をヒトに掛けるのは、法律で禁止されている！」

「校長が魔法大臣を害するのは合法だったとは、僕は今の今まで知らなかった」

「彼等はこの状況で一体どうして常識的思考をしているのだろうか。ホグワーツ校長の椅子は、この閉鎖的な治外法権の城は、世俗と異なる措置を可能にする。その事は、今世紀で最も偉大な魔法使いが露わにしてくれただろうに。」

「君達の大先輩は、魔法界の法律を大っぴらに軽んじてくれた。その時点で法律を護れという主張は空虚を通り越して無意味だ。ドロレス・アンブリッジが同じく現行法を破ろうと、グリフィンドールに批難する権利は一切無い。非常にあの魔法使いらしい愚行だがな。弱者が一体何故法律を守るのが、誰よりも御強い彼には理解出来ないらしい」

魔法族は非魔法族より「社会」を頼りにしないが、それでも不必要ではないだろうに。

「そもそも君達もまた、魔法省の法律や新校長の下での校則を一切守る気が無い。それなのに、都合の良い時だけ法律に——大多数が守るべき世の秩序に守ってくれと欲するのは、酷くみつともないと思わないのか？ 汚い手の者に法の救済は与えられるべきでは無い。野蛮人は勝手にしろというのが、近代法治社会が取る態度だ」

この古臭い世界ではそれすら期待出来ないようだが、と鼻で笑う。

「アルバス・ダンブルドアも、勿論、君達も。君達がやっているのは歴史の巻き戻しであり、原初の自力救済世界の肯定だ。そしてあの魔法使いは単純に強過ぎ、余人が害する事は出来ないが、君達は違う。僕程度でも君達を傷付ける事は出来る。例えば先に挙げたジネブラ・ウィーズリー。後先考えないのであれば、彼女に死の呪文を放つてやる事すら可能だな」

懸念と言えば唯一、この生きた城が生徒に如何なる庇護を掛けているかだけ。

それが死の呪文すら防げる程の強力な代物でなければ、僕は望む通りを行えるだろう。

「……俺達が黙っていると思ってるのか？ 今この場で、呪いを掛け

「でも良いんだぞ」

「構わんよ」

震え始めた杖先と共に紡がれた脅しに、少しだけ愉快さを感じつつ頷いてやる。

「しかし、その場合は僕を確実に殺せ」

「―――！」

「或いは、ギルデロイ・ロックハートのように永遠に正気を喪わせろ。グラハム・モンタギューにしたような半端を、今度ばかりは決してするな」

故意と覚悟をもって、人一人の尊厳を踏み躪りに来るが良い。

「仮に君達が僕を撃ち、しかし僕が回復してしまえば、僕は必ずや報復する。君達の妹に、君達の両親に、もしくは君達の将来の恋人に。君達以外を狙い、君達を徹底的に苦しめる行為を機械的オートマチックに為してしまう。つまるところ、この平和な話合いの場で呪文を放った瞬間に、君達は僕を最後まで滅ぼす義務を負うのだ」

殺すか、壊すか。

それ以外に報復の連鎖を終わらせる道は無い。

「……じ、ジニーに死の呪文を使うなんて、マクゴナガルが、そんな真似は絶対に許さない」

「だろうな。もう止められずらしたよ」

「止められ……?」

「ああ。ミネルバ・マクゴナガル教授に伝え、既に制止されたという意味だ」

もう一方には、肯定の言葉を返す。

僕の返答を受け、何故か表情に恐怖が過ぎつたのを、淡々と観察しつつ。

「けれども、彼女が止められるのは所詮その程度の事だ」

あの卓越した魔女であって尚、それ以上の事を出来やしない。

彼等は所詮教師に過ぎない。親でもなく閨祓いでもなく、そして全能の神では勿論無い。

「ジネブラ・ウィーズリーを破壊するというのは、別に物理的に破壊す

る事に限らない。君達が今まで校内でやった「悪戯」くらいは、僕達も教授の眼を盗んで行える。今回の愉快な花火の返礼品として、同種の代物をグリフィン・ドールの彼女の寮室に毎日打ち込んでやるとかな。彼女は来年O・W・L。だが、睡眠時間も勉強時間も、正気の時間すらも奪える手頃な手だ」

必然、彼女は、そして彼女の周りもO・W・L。どころでは無くなるに違いない。

「お、俺達の妹は、君が思う程に甘っちょろい奴じゃない……。そんな真似をすれば、コウモリ鼻糞の呪いを君に掛けてやる位はするぞ……！」

「ほう？ 試験前の一分一秒も惜しい時に、彼女は僕と楽しく遊んでくれる訳か？ それはまた随分と成績に余裕が有るのだな？」

「っ。ロンやハリーがお前を好きにさせない！」

「随分と彼等の守護を評価しているな？ 仮に君達が僕の立場になれば、あの二人の護りを抜いた上でも容易に「悪戯」が出来ると思うのだが、それは僕の見込み違いか？ そもそも彼等もまた、再来年のN・E・W・T。の為の準備で忙しくなる筈だが」

「……………」

時間の流れは不変だが、相対と絶対を問わず、時間の価値は同一では無い。

そして彼等自身に出来る事を、他人が出来ないとは考えて欲しくないものだ。

「嗚呼、だが。見た所、君達は勘違いしている節が有る」

そろそろ呪文を撃つ誘惑に耐えきれないであろう二人を前に、僕はそう言った。

「僕は必ずそれをやると言っている訳では無い。仮にドラコ・マルフォイがグラハム・モンタギューと同じ目に遭った場合、と言った筈だろうか？ そんな事が起きなければ何も問題は無い。たとえば君達が僕に再度鹿の角を生やそうが、二、三日ばかり医務室に叩き込んだりしようが、その程度の可愛い事件で「スリザリン」は動かない」

御互い様なのは重々承知だ。

どちらがどれだけ悪いという議論は、無意味かつ非生産的である。「けれども、ドラコ・マルフォイに限った話では無い。スリザリン生の誰かが次に『事故』に遭い、それにより受ける被害が悪戯として許容出来る程度を超えた場合。『スリザリン』は報復に動く、動いてしまふ。たとえアルバス・ダンブルドアが帰還した後であろうと、これから数年を待つ事になろうが関係無い。加害者の人生を何としても破壊する」

そもそも勝手な話だ。

ドローレス・アンブリッジが校長になったからホグワーツを無秩序にする、アルバス・ダンブルドア前校長が帰って来れば元のホグワーツに戻すというのは、あくまでグリフィンドール側の一方的理屈に過ぎない。その内容にスリザリンは決して合意して居ない。

それが必要とあれば、来年以降も無秩序を続ける気は当然に有る。

「……グリフィンドール生が、そんな脅迫に怯むと思ってるのか？」

「……ああ、そうとも。逆に振り返りにしてやるさ」

「御好きなように」

更なる失望を自覚しつつ、気の無い言葉を返す。

「君達が反撃をしようとするのは自由だ。或いは、自衛の為の先制攻撃すらも。ドローレス・アンブリッジは勿論の事、尋問官親衛隊である生徒の全てを聖マンガに叩き込む『権利』は、間違いなく君達に在る。グリフィンドールは今までそうして来た通り、己が為したい所を為すが良い」

自力救済を基礎とする末法世界は、それを当然許容する。

「けれども、君達には良心が無いのかね？」

相手がスリザリンならば、こんな事は言わない。

しかし、この場の二人は、組分け帽子にグリフィンドールと宣言された筈だった。

「グラハム・モンタギューは未だに混乱と錯乱から戻って来ない。これが彼相手だったから少々困った事が起きた程度で済んでいるが、仮にO・W・L・受験者の、今のスリザリン五年生の身に起こったらど

うなっていたか、一度でも想像した事が有るのか？」

「——」

「君達にとって、O. W. L. もN. E. W. T. も大した価値が無いのかもしれない。けれども、ロナルド・ウィズリーにとってはどうか？ ハリー・ポッターにとってどうだ？ 僕は後者の方に手を出すべきでないようだが、少なくとも君の弟の方は、或いは妹の方は、グラハム・モンタギューと同様の目に遭わせても構わなかった。偏にドロレス・アンブリッジが御優しかったから、意気地が無かったから、そんな不幸な事故は起こっていない」

彼女の側から持ち掛けてきたのなら、僕は間違いなく協力してやっただろうに。

速やかにキャビネットに叩き込み返す準備を手配してやった筈で、しかし、要請は無かった。だから今の所、報復としてグリフィンドール生の誰かの人生が破壊される事にはなっていない。この双子も、彼の弟も、ヘラヘラ笑ったままで居られている。

「勿論、大部分のスリザリン生にとって、O. W. L. の結果は大きく進路に影響を与えない」

他の寮生と事情を異にする者達、同列に語れない人間が圧倒的多数である。

「しかし、全員がそうでは無いし、純血”にとって重要な試験である事に変わりない。五年間のホグワーツ教育の集大成とも言える試験をパス出来ないのは、自分が阿呆であると宣言するに等しいからな。そして誰であっても、自分達の当主や上司、配偶者が馬鹿である事を歓迎しない」

一度限りの試験が人生を左右し得る。

その事は、このホグワーツに居る殆どの者にとって変わりはない。

「……嗚呼、聖マンガ魔法疾患傷害病院での特別試験、或いは別日での追試——こちらは存在するか把握していないが——を受ければ大丈夫とか、そんな下らない事を宣ってくれるなよ？ それが出来た所で本来費やせる筈だった勉強時間が帰って来る訳ではないし、万一良い成績を収められたとして、”ところで、貴方は何故ホグワーツでO.

W・L・の本試験を受けられなかったのですか？」という質問を、他人に対して許す気か？」

魔法界は狭い。失敗話など容易く広がる位には。

また中世世界の例に漏れなく、杖腕——個人の強さは相応に尊重される。

同じホグワーツ生に叩きのめされて入院してしまいましたというのは、やはり恥なのだ。その後命を賭した決闘を挑んだり、人生を費やして復讐しようとしたりする行為は、稀ではあるが、不思議に思う程の珍事でもない。

「そして個人的な感想になるが、正直言つて、今の状況は非常に憂鬱で仕方ないのだ」

想像するだけで襲い来る気怠さと共に、紛う事無き本音を吐露する。

「君達が勝手にやったり遣り返したりするのは好きにしると思うが、最終的に怒れる“純血”達に振り回されるのは僕達だ。彼等が僕に命令して来た場合、僕達は殆ど断る選択肢が無い。特にドラコ・マルフォイが僕に命令したのであれば、ウィーズリー・ウィザード・ウィーズだったか？ 全く気が進まなくとも、君達のダイアゴン横丁の店を焼き払いに行かねば——」

「——!? 待て待て待て待て！ 何でそんな話になりやがる……!」

「幾ら何でも流石にそれはやり過ぎじゃねえのか!？」

虚勢をかなぐり捨てて捲し立てる双子を眺め、ふと気付く。

「……嗚呼、そうか。僕とした事が、話を飛ばしてしまつたのか」

どういう訳か、その瞬間に双子は大きく震え上がった。

別に特別変な事を言つたつもりはない。脅迫の意図を乗せた訳でも無い。それにも拘わらず、構えていた筈の杖は僕から完全に逸れ、二本ともあらぬ方向へと向けられていた。

「これはな、別に難しい話では無い。君達が他人の人生を奪うというなら、僕達もまた同様に、君達の人生を貰う。そういう天秤の主張だ」
遣り過ぎも何も無い。

遣られた分を、遣り返すだけである。

そしてグリフィンドールの全てを認めた以上、スリザリンの全てを認めて貰う。

「先程、僕はジネブラ・ウィーズリーを破壊すると言ったが、それは単純に、O. W. L. にはO. W. L. をという発想で話に出したに過ぎない。君達は既にO. W. L. を終え、N. E. W. T. を受ける気が無い。そうである以上、君達に同種の報いを受けさせる事は出来ないからな」

どう足掻いても、目には目をという対応を取る事は不可能である。

「しかし同程度の代価を取り立てられるのであれば、ホグワーツ教授の監視を掻い潜るといふ苦勞をしてまで彼女を狙う必要は欠片も無い。君達の夢、悪戯店の経営を不可能としてやれば、それは叶うのだから。君達の人生を徹底的に滅茶苦茶にしてしまえば、被害者が切望する復讐を果たす事は可能なのだから」

護る物が多い人間は傷付けるのが簡単で助かる。

闇の帝王も、かつては同じ事を思っていただろう。もしかしたら、今もこの瞬間もか。

「幾らだって方法は有る。君達の店を物理的に焼き払う事も。君達が雇う店員に危害を加える事も。店で売る品物に毒物を混ぜ込む事も。店から出て来た子供の手中の商品を摩り替え、使えば家族丸ごと爆死する危険物とする事も。たとえ僕が最終的にアズババンに叩き込まれる羽目になろうと、君達が現在全く予想も出来ない方法で、人間の醜悪さを見せつけてはやれる」

「――」

「警察機構闇敵達はな、悲劇が終わった後でしか役に立たない。君達はその事を理解していない」

暫くの間、双子は何も言葉を発さなかった。

「……お前はイカレてる」

ポツリと片割れが呟き、黙っている方も同意と畏怖の瞳で僕を見た。

それに対して、微笑みを返してやった。

「最近、特に良く言われるとも」

「勿論、僕はコレを余り望まない」

沈黙から抜け出す気配のない双子へ、静かに語り掛ける。

彼等の内で渦巻く激情と反比例するかのようには、僕の心は凍り付いていた。

「良く疑われはするのだが、僕はこれでも平和主義のつもりだ。だからこそ、僕は今この場に居る。ハーマイオニー・グレンジャーに伝言を頼み、ロナルド・ウィーズリーに対する些細な借りを行使し、今夜以降に課せられるであろうミネルバ・マクゴナガル教授からの罰則を覚悟してまで、君達へとこの話をしてる」

足を入れ替え、組み直す。

「先程、君達のどちらかが——左右どちらの発言かすら忘れたが、まあ今となつてはどうでも良いか。ともあれ、ミネルバ・マクゴナガル教授やハーマイオニーが君達に警告した話が出たな。そして、君達の想像は正しい。それはな、確かに僕が彼女達に伝えた懸念が原因だ」

「……ジニーに矛先が向くとか、俺達の店を焼き払うとか、そういう事か」

「不正解だ。まさか自分達が世界の中心だと思ってるのか？」

「—————っ」

その皮肉に彼等は強く杖を握り締め、けれども僕の方へと向けはしなかった。

……本当に張り合いの無い事だ。

「君達は魔法上成人しているだろう？ ならば、その行為の結果として君達が、或いは君達の周りの誰かが報いを受けようが、全て大人として覚悟が済んでいる筈だ。既に社会では子供として扱われない年齢なのに、それでも笑えない加害行為に及ぼうというのだから、その程度は覚悟していなければならない。——嗚呼、そうでなくてはならない」

そして被害者にとって、結果のみが全てだ。

如何なる理由や動機、正当性が有ろうとも、ただ他人に奪われたという結果のみが。

「既に終わった事を咎めるにも限度が有り、そもそも贖えもしない回復不能の損害は有ると僕は考えている。……しかしながら、下級生達は君達と事情が異なる。彼等は未熟であり、未だ起こつてもいけない事態に関しても責任を負わない。要するにミネルバ・マクゴナガル教授に伝えに行つた懸念は、現時点なら如何様にも取返しが付く事についてだ」

ドラコ・マルフォイとハリー・ポッターのように、決して相容れないという関係は有る。

しかし、全てのスリザリン生とグリフィンボール生が、彼等のように不仲である訳でも無い。少なくとも去年見たクリスマスパティーには、それを信じるに足る光景を見ていた。

「なあ、僕はグリフィンボールを人でなしだと看做してはいない」
手慰みに、片手だけで杖を一回転させながら続ける。

「僕のように、他人を傷付ける事や殺す事に躊躇いを覚えない人間という方が稀だ。あのドロレス・アンブリッジですら、直接他人を手に掛ける事は忌避している節が有るからな。だから、グリフィンボールの、否、ホグワーツ生の多くは、これからの騒動——君達が『卒業』し、彼等が君達の行いを見習つて次の『悪ガキ大将』を目指す際、邪悪な目的と意思で悪戯行為に及ぼうとはしないだろう」

今はまだ、校内の無秩序状態はマシな方だ。

それは偏に、この双子達の騒動を見守る者が大多数だからだ。自分達が余計な介入をして、彼等の演目を台無しにしたくないという観客気分が先行しているからだ。

けれども、この双子達が消えれば、生徒達は悪戯の当事者となる筈である。

そして、そこに何の悪意も無いだろう。

ただ純粹に、考え無しの稚気のみが在る事だろう。

「だが、グラハム・モンタギューの『事故』のように、偶々うっかり、そんなつもりなど無かつたにしても、スリザリン生を傷付ける事態が

起きたなら？ しかもその傷害の程度が運悪く回復不能にまで至れば？ ……嗚呼、やはり決まっている。我々はその生徒の人生を破壊する。『スリザリン』の教義は、我が寮の鉄の結束は、その報復行為を肯定してしまう」

それが、ミネルバ・マクゴナガル教授を含め、寮監達に伝えた懸念。今後誰かの過失によりスリザリン生が致命的な被害を受ける事が有ったとして、グラハム・モンタギューの事故を止められず、今の騒動に見て見ぬ振りもしている教授達は、以降に我が寮が為すであろう報復行為の責任の一切を負えるのか。

「泣き喚こうが謝罪して来ようが関係無い。たとえ一年生や二年生が相手だろうと慈悲はない。法律や校則も無視した中での非道を肯定したのは君達だ。ならば、必ずや贖わせる。何年経とうが、僕達は無秩序状態を終わらせない。加害者が既に忘却の彼方に追いやつていようとも、被害者は絶対に加害者へと報いを与える」

「……ま、マクゴナガルが、ホグワーツの教授達が許す筈がない……！」

「そ、そうだ。絶対に止めようとする！ そんな事を望みはしない……！」

「そうだな。やはりミネルバ・マクゴナガル教授も同じような事を言った」

確かに一度目は起こってしまった。しかし、二度目は無い。

教授は間違いなくそう宣言してみた。

「けれども、僕は当然ながら彼女に問うた。『では、貴方はこの七年間、双子達の悪戯を止める事が出来たのですか？』と」

「——」

「教授は答えられなかった」

僅かの間ではあったが、それでも彼女は言葉を喪ってしまった。

彼等はグリフィン・ドール寮監以前に、秩序と公平を尊ぶ真つ当な人間だった。だからこそ、僕の問いに対して敗北を認めたのだった。

「勿論、僕は言葉通りの内容を疑った訳では無い。彼女が本気になれば、君達二人を止める事なんぞ非常に容易だろう。これまでも、そし

てこれからも」

そうならなかったのは、全力で止めに入る事が一度もなかったから。

彼等は教師と生徒という立場にあり、彼女は彼女なりに校内で行われる痛快な悪戯を楽しんでおり、何よりウィーズリーの双子の行為の殆どは、あくまで悪戯で片付けられる範疇で済んでいたに違いないからだ。

「けれども、僕が教授の前に呈示したのは、三寮の誰かが過失によりスリザリン生を致命的に傷付けるかもしれないという懸念だ。校内に無法を尊ぶ良くない風潮が蔓延り、ドロレス・アンブリッジや尋問官親衛隊といった、やっつけるに手頃な小悪党が居て、更には復活した闇の帝王や脱獄した死喰い人達への漠然とした不安や恐怖も手伝って、善意と正義感で遣り過ぎる人間が出るのではという危機感だ」

グラハム・モンタギューのような、一切笑えない事が起こるのではという未来予想図だ。

そしてドロレス・アンブリッジや尋問官親衛隊のみならず、今回何もしていないスリザリン生まで被害が行き得るかもしれない。この風潮と雰囲気は彼等の『勇氣』を後押しして、スリザリンに対する最終的解決を図ろうとする人間が出て来るかもしれない。

その予想は、決して杞憂ではない筈だった。

残忍を為すのに、悪意は不要である。

「如何に卓越した魔女だろうと、全ての教授や教職員、首席や監督生が協力し合おうと——数百人の生徒を監視し、統制を行き届かせるのは不可能だ。彼女達をもつてしても、虐めを受ける生徒を零に出来ないようにな。そして一人でも『悪戯』を失敗した大馬鹿野郎が出れば、悲劇の連鎖は止められない。今年度は勿論、来年度以降も」

どう考えても、教授達が防ぐ事が出来ない。

僕一人を見張っていれば済む話では無い。スリザリンの殆ど全員を、学期の全ての時間において監視しておかねば、止める事は出来ない。そして物理的に不可能である。

「君達は熟知している筈だが、『悪戯』は仕掛ける方が圧倒的に有利だ。嗚呼、死の呪文や磔の呪文が行使される程の大事なら一部を見張っていれば済むとも。如何に闇に染まったスリザリン生とは言え、下級生にそれらの呪文を使う魔法力は無い。けれども、他人をノイローゼに追い込む程の嫌がらせなら誰にだって出来る。切断呪文や爆破呪文を他人に撃つよりは心理的抵抗も少ないだろう。君達の下級生時代がそうであったようにな」

「……ダンブルドアなら——」

「——戦争が既に始まっているのに、あの英雄をホグワーツに縛り付けるのか？」

「……………」

確かに、あの反則なら全てを止められる。

けれども、光の陣営が勝つつもりなら、決してそうすべきではないのだ。

「姿眩ましが出来ようと、違法の移動鍵を作れようと、彼が居られる場所は一か所だけ。ホグワーツの生徒数人は救われるかもしれないが、代わりにホグワーツ以外の大勢が死ぬ。君達がそれでも構わないと宣うのは勝手だがな、その罪深さだけは自覚しておくべきだ」

そしてあの大魔法使いは、為すべき最低限を見失いはしない。

来年か再来年か。校長として帰って来る事になろうとも、まず間違はなく、彼はホグワーツを空ける。職は保持し続けたとしても、彼は戦争の為に仕事をする事を選択する。

ホグワーツ内での些細ないざこぎに、彼は胸を痛める以上をしな

い。
「——さて。ここまで語って漸く、僕が今、この場所に座っている事へと繋がる」

全く気が進まずとも、わざわざ先んじて骨を折っている。

「ミネルバ・マクゴナガル教授にしてもハーマイオニーにしても、所詮は生まれながらの優等生だ。もっと身も蓋も無い言い方をすれば、あんな『良い子ちゃん』達に悪戯鬼共を統制するのは不可能だ。彼女達が締め付けようとすればする程に、逆に反発して過激な側に行く事

が眼に見えている。これまでの七年間、君達がそうであったようにな

しかし、と続けた。

「同じ悪餓鬼である君達なら、彼等に言う事を聞かせられるだろうか？」

同種の言葉でも、誰が発言するかはやはり重要なのだ。

「ハーマイオニーや寮監達には不可能であったとしても、叛逆の同志である君達ならば、これからの騒動が学生時代の些細な笑い話の一つで終わるように、一定の歯止めを掛ける事が出来る筈だ。嗚呼、つまり、君達こそが生徒を統制しろと僕は言っている」

これまでの五年間を見る限りは、その程度の能力は期待して良いと思っ

彼等は人気者だ。現在の活動も支持されている。この際にスリザリンを徹底的に迫害しない事が多少の不興を買うとしても、彼等の命令なら生徒は従うだろう。

「手段も問わんよ。最もハツフルパフ的で在った男はグリフィンドールを正義だと認めないと言っていたが、今回は別に正義を騙つても構わんさ。個人的に、僕も見ない振りをしよう。君達はグラハム・モンタギューの件で強く叱責された筈だ——叱責されたと僕は信じている——が、君達を慕う生徒達の前では、それを武勇伝として茶化そうが自由だ」

過程に興味は無い。結果が全て。

このホグワーツが、真に不愉快な場所となる事さえ止められれば良い。

「無論、君達が僕のこの……要請と表現するか。要請に従わないのは構わない。それを強制する権利も、スリザリンの側に立つ僕には全く無い」

そう言いつつ、僕は立ち上がった。

そのまま杖を一振りし、椅子を消失させる。

その間も、二人が目立った反応を示す事は無かった。

「しかしながら、君達がホグワーツに残して行く後輩達——グリフィンドール、レイブンクロー、ハツフルパフ、加えてスリザリンの極々

一部。その彼等を少しでも大事に思い、彼等のO・W・L・やN・E・W・T・試験、更には将来の伴侶や子供の人生そのものを最悪な物にしたくないと考えるのであれば、当然のように、君達は止める方向へと努力出来る筈だ」

彼等に良心が残っているのであれば、そうせねばならない。

「そして、別に君達が全てやらなければならぬという訳ではない。君達が担当するのは裏側であり、表側からはハーマイオニー達が止めてくれるからな。また、彼女達もグリフィンドールだ。建前として規制はしても、本音では君達の悪戯を応援してくれるに違いない。

——そうだろう、ハーマイオニー・グレンジャー？」

言葉を喪ったままの双子から視線を外し、最後だけ、僕は外へと呼び掛けた。

これで間違っていれば大恥だし、目眩まし術や透明マントの存在を考えれば、正解だったとしても呼び掛ける方向が違う可能性は有る。

しかし、僕の希望と思惑通り、彼女は壁の向こう側から姿を現した。

「……貴方は、私が居る事を解っていたのね」

「まあ、居るのが自然だと思っていた」

この空間と同程度に暗い表情をした、正義の少女に対して答える。

「ミネルバ・マクゴナガル教授、或いは君が、彼等と僕とを何の用心もせずに会わせる訳が無いからな。何より、彼等の七年間……僕が見た五年間を思えば、少々自制心が働き過ぎていている気がしていた。そして、その理由として考えられる事は然程多くも無い」

第三者が、それも後輩の女の子が見ていたのであれば、多少は冷静にもなる。

どの時点で双子達が彼女に気付いたかまでは解らなかったが、双子の表情や観察する意義を僕を見出していなかったから、彼等から殆ど視線を外していた。幾らでも機会は有っただろう。

「ともあれ、僕が為せる最善は尽くした」

手を組み、身体の凝りを解す為に軽く背伸びした後、床に転がっている悪戯道具を注意深く避けながら、僕は彼女の方に向かって歩き出す。

「善人である君達には、こう言った形での釘の刺し方は出来まい。仮に似たような事をしていても、スリザリン生の口から発されればまた違うだろう。そして現時点では脅迫に過ぎないが——今後 Hogwarts に稀代の大馬鹿が現れればその限りでも無い。目には目を。遣られたら遣り返す。君達が古代に帰るといふのだから、僕達も帰るだけだ」

もつとも、他に何か有効な手段が有るなら聞かし、多少は働く気も有るが。

そうハーマイオニーに促したが、彼女はその質問に答えなかった。

「……やっぱり貴方は止めないのね」

眼の前で立ち止まった僕を、ハーマイオニーは睨むように見上げて言った。

けれども、僕は小さな薄笑いを返す。

「ならば、グリフィンドールこそ止めるべきでは無いのか？」

「……………」

「ドローレス・アンブリッジと尋問官親衛隊に対する違法・校則違反行為を止め、暴力では無く会話でもって現ホグワーツ体制を打破しようとするなら、僕が示した懸念——今後数年間続くかもしれない報復合戦は杞憂で終わる。スリザリンこそが先に止めろという主張にも説得力が出て来る」

ドローレス・アンブリッジが許可した鞭打ちの体罰は、非魔法界の下でも大きく非常識という訳では無い。また尋問官親衛隊にしても、今まで彼等が為したのは精々寮の減点行為であり、教授達のみが保有する罰則権を与えられた訳では無い。

彼等がやっているのは笑ってしまう位に些細で、学生物語的な悪事だ。

それに対して実力行為に出るグリフィンドール達は、果たして正義と言えるのか。

「けれども、これが権力側の横暴、既に持つ側の傲慢である事も重々承知だ。寧ろ心情的には、僕は君達の側に立っている。さながらジョン・ロックの信奉者であるようにな。だから本気で止める気が無い

し、君達の行動を尊重している。グラハム・モンタギューの事を知つて尚、今の所の僕は何もしないでいる」

まあ、止めない一番の理由は数の論理——数百人と悪戯合戦を本気でやってしまえば絶対に僕が敗北するという、そんな当然の論理にこそ存在する。

しかし最終的に屈するにしても、それまでに何人かに報復する事は可能だ。そして、魔法省が校内自治に介入する為の理由を作ってやる事すらも。廃人と死人を数人出してやれば十分だろう。デイゴリー夫妻は騒がなかったが、それ以外の保護者達はどうかだろうか。

「二応君とは約束した。だから僕が知れる範囲で何かが画策されたなら、予め警告位はしても良い。和解……話し合いで済むなら、それに越した事は無いのだ」

大きな揉め事無く贖えるというのなら、それが一番だ。

「しかし被害者が納得出来ないなら、その時はやはり実力行使による報復しかない。『純血』達は、半純血の多くを支配している。金銭で、仕事で、血縁で、契約で、その他ありとあらゆる場面と手段でもっとも、人間一人を破壊する依頼を強制出来る程の縛りはそう存在しないのだが、全く存在しない訳でも無い。君達が警戒すべきは、『スリザリン』そのものだ」

「……モンタギューは、今後そうしてくると言うの?」

「さあな」

問われても、答えられぬ事は有るものだ。

「僕は彼では無いし、未だに錯乱したままだから、彼が報復を選ぶか泣き寝入りを選ぶかは解らない。皮肉な事に、闇の帝王の存在が逆に歯止めになるかもしれん。下らん悪戯店を焼き払ったり、小娘一人を犯したりする暇が有る位なら己の陣営の為に奉仕しろ。磔の呪文混じりでそのように叱責する可能性も有る」

「……………」

「とは言え、彼等にとって『血を裏切る者』だ。目的が一致し得る可能性は否定しない」

苦しい表情をするハーマイオニーから視線を外し、再度双子へと

視線を戻す。

彼等は僕達の遣り取りを呆然と見ていた。何処か迷い子に思えるような、そんな表情で。

そもそも立ち上がった僕に対して言葉を用意出来なかったのだから、彼等には成り行きを見守るしか出来なかったのだろう。

だから、僕は彼等に向かい、最後となるであろう言葉を投げ掛ける。

「——嗚呼、それとだ。君達は、パーシー・ウィーズリーの離反の真意に気付いたのか？」

そして、反応は想像通りに退屈だった。

フレッド・ウィーズリーとジョージ・ウィーズリー。彼等の顔は一瞬で困惑と驚愕が入り混じった表情へと変わり、またハーマイオニーは悲鳴と共に怒りを示した。

……やはりか。優し過ぎる彼女は、彼等に何も言えなかったらしい。

「っ。ステファン！ 何故、今この場でそんな事を聞くのよ!？」

「何故。今更何故と聞くのか、君は」

怒声を挙げて来た少女は、しかし、僕の視線を受けて途端に狼狽した。

「ハーマイオニー、過ちを放置するのはグリフィンドールの無い。違うだろうか？」

「だ、だからと言って、貴方が口出しして良い事じゃないわ!」

「ならばパーシー・ウィーズリーは、かつての仲間の事はどうでも良いのか？」

その静かな疑問に、ハーマイオニー・グレンジャーはやはり言葉を喪ってしまふ。

彼女の正しさは美点であり、欠点でもある。短絡的に片方を悪と断罪出来ない問題については、彼女は当然のように迷いを抱いてしまふ。そして世の中には、一方的に正義と決め切れない事柄の方が遥かに多いのだ。

「まあ、君が察している通り、腹いせと嫌がらせの意図もあるのは認めるがね」

その面は流石に自覚せざるを得ない。

今回の、そして今後の三寮による抵抗運動について完全な第三者だったなら、僕はまず間違いなく、こういう形で彼等の心を抉ろうとはしなかっただろうからだ。

「けれども、僕の言葉に一つの理が有る事も、既に君は解っている筈だ」

ハーマイオニーは沈黙で耐えようとするが、黙っていられない者達はこの場に居た。

「おい、何故お前の口から大馬鹿野郎の事が出て来やがる——」

「スリザリン生がどうして、オヤジの事を悪く言いやがる——」

「——なあ。君達は、素晴らしく立派な両親を持ったな？」

全く言葉内容が異なる、しかし批難という方向性では同一軸の二重奏。

けれどもそんな下らない言葉は、今度こそ呪文を放ちかねない程の強烈な反抗心は、僕はその投げ掛けによって一瞬で消え失せた。いきなりの褒め言葉に双子達は眼を白黒させ、その裏に籠められた悪意に気付いている少女は、やはり何も言えない。

それを見て心の底から笑う。笑えている筈だ。

「この言葉に——スリザリンであり、尚且つ半純血でもある僕が紡ぐこの皮肉にこそ、パーシー・ウィーズリーが離反した理由の殆どが詰まっている。……しかしながら、嗚呼、君達には全く解らないらしい。ならば、語るべき事は無い。議論も、糾弾する意味すら見出せない」
双子は何かを言おうとし、杖を捨てて掴みかかって来ようとするしただけ、それは叶わなかった。シレンシオ。重ねてプロテゴ。ただそれだけで、彼等は僕に干渉する事が出来なくなった。

「ハーマイオニー・グレンジャー。彼等を想うなら、今直ぐ君が説明すべきだ」

「……そうして貴方は、全てを私に放り投げて逃げるのね」

「逃げる？ 君は勘違いしていないか？」

涙目で睨み付けて来る彼女に、心は一切騒ぎはしない。

「あれから何カ月経つ？ 君に伝えていたのは何の為だと思う？ 僕

が何も言わず大人しくしていた最大の理由は、一体如何なる期待をしていたからだと君は考えている？」

「——っ」

僕は別に認めた訳では無いし、許した訳でも無い。

「アーサー・ウィーズリー達は間違いを犯した。僕はそう信ずる。けっして許容出来ないと憎悪を抱く。……嗚呼、僕の方が間違っているかもしれない。彼等の側にこそ正義があるのかもしれない。なれば、遣る事は一つ。世に広く問うてみる事で、最初から放棄したつもりもない」

そして、近頃都合良く事件が起きそうである。

自分さえ良ければ構わないという、そんな個人主義の極みの事件が。

「彼等が学生生活の中で少しでも向き合っていたならば、この僕の個人的な『卒業』課題にも答えを出させる筈だ。仮にもグリフィンドールであるなら、ゴドリック・グリフィンドールの寮の人間を自負するなら、ただ醜く喚き散らすしかないなど在ってはならない」

強者が弱者を撈るのは明確な虐めである。

そして此度の弱者とは誰か。強者とは果たして何れの方か。

「す、既に貴方は、フレッド達が答えられないと察している筈よ……」
「解らんよ。結果というものは、蓋を開けて見るまで真偽不明のままだ」

尻すぼみに言葉を発したハーマイオニーの肩に手を置き、耳元で囁く。

「僕は僕なりに、ウィーズリー・ウィザード・ウィーズには期待している」

そして愕然とした表情で立ち尽くす彼女の横を、僕は通り過ぎた。

そのまま鏡の裏を抜け出して漸く、我に返った彼女が僕を呼び留める声、一拍遅れて怒鳴り声と制止の声が聞こえて来たが、構わず歩みを進めれば直ぐに聞こえなくなった。そして誰も追って来る者は居なかった。

静寂の中、僕は独りになれた。

一対一

「——で、結局こうなるのか」

「せめて教授の前では、態度と言葉遣いに気を付けるように」

双子との話し合いを終えて、ほんの一時間後。

扉を開けて目に入った部屋内の光景に思わずボヤくと、ミネルバ・マクゴナガル教授は、何時もの厳格な教師の仮面を崩さず、ビシリと僕に対して言った。

が、僕には僕で言い分が有るものだ。

「昼食を終えた後、速やかに自分の下へと来い。それも呼び出される先は、この五年間で一度や二度しか入った事のないような物置同然の場所。まあ、多少可笑しいとは思いましたが、それでも教授。僕は貴方を信頼しているが故に、大人しく此処に来たのですがね」

それとも、僕の学習能力というモノを試しているのですか？

そう問うても、彼女は聊かも揺らがなかった。

「取り敢えず、扉を閉めて中に御入りなさい」

一貫して何時も通りの教授は、そう呼び掛けてくる。

「ドローレスとフィルチへの対処はピーブズが請け負ってくれたと二人から聞いていますし、更に私が呪文を掛けて守ってはいますが、何が契機となって私達に気付くか解りません。何処に座れば良いかは——見れば解るといふものでしょう」

「……それは解りますが。はあ。まあ、良いでしょう」

渋々ながら頷いた後、部屋の中央付近へと進む。

余り広い部屋では無い。精々、大股で十歩も進めば壁から壁まで行けると言った程度。

そして雑多という言葉が似合う部屋でもある。何せ、壁紙は四つの壁全てで別々の色合いと模様。天井には大小不揃いのライトが三つと来ている。余ったモノを適当にくっ付けたという印象しか受けないし、部屋の整頓も為されていない。石畳の床は人が通れる程度には片付けられているものの、壁際には予備の椅子や机が積み上げられ、部屋内は大小様々な箱で溢れている。更には箱に入らなかった植木

鉢や魔法生物用ブラシ等々の道具が転がっていた。

それらのわざとらしい障害物を避け、意図的に空けられていた粗末な回転椅子に僕は着席し、そのまま背を凭れ掛けさせた。その灰色は少々古ぼけているが、魔法で清掃はされているのか、黴臭さは無かつた。大きな不満は低学年向けの椅子のせいかな僕の身長に合って居らず、座面が低すぎると言った事くらいか。後は、身動きすることに甲高い金属音が鳴ってくれる所も気にいらぬ。

「で、秘密裏にグリフィンドール八十パーセントの部屋を作って、一体どういうつもりなのです？　嗚呼、部屋内が片付けられていないあたり教授が“主犯”でない事は解っていますし、させたい事も既に解っています、僕の方も暇だという訳では無いのですが」

グリフィンドール八十パーセント。つまり、四対一。

この狭苦しい物置小屋には、僕を含めて五人の人間が居た。

僕の真正面、硝子製のコーヒーテーブルを挟むように置かれた小さな丸椅子に、しかし堂々と座っているのはミネルバ・マクゴナガル教授。

更に教授の後ろ、僕から見て左側には、粗末なパイプ椅子に肩身の狭そうに座っているハーマイオニー・グレンジャー。同じく教授の後ろ、僕から見て右柄には、やはり肩身の狭そうに二人掛けのソファに座っている双子のウィーズリー兄弟。

言ってしまうえば、教授が三人を僕から護るような構図か。明らかに意図したものだろうし、そして今回の僕の問いに口を開くのも、やはり教授だけだった。

「貴方はそう言いますが、今回もやはり、私が“主犯”と言わざるを得ないでしょう。少なくとも貴方をこの場所に呼び、席に着かせたのは私ですから。レッドフィールド、貴方の事ですから、私が居なければ即座に立ち去っているでしょう？」

「貴方が居ようと何も無ければ立ち去っていますよ」

ホグワーツ教授が相手だろうと、正当性が微塵も無い指示に従う気はない。

ドローレス・アンブリッジやルビウス・ハグリッドに対しては勿論、

それは相手がミネルバ・マクゴナガル教授で有っても例外では無い。「大人しく席に着いたのは、多少興味が湧き、意味も見出せそうだったからだ。この状況を見る限り、彼女が貴方に対し助力を求めたのは明らかですしね」

「グレンジャーを咎めてはなりません」

「そんなつもりは有りませんよ」

少女から再度視線を右へと滑らせ、顔だけを教授へと向ける。

足組みをしつつ更に背凭れに体重を掛ければ、やはり椅子はキイト甲高い悲鳴を上げた。やはり耐久性は怪しいようで、ローブから杖を抜き、レパロと唱える。応急処置にしかないのは解っていたが、会話途中で壊れるような間抜けな事態にはならない筈である。

そして僕の態度に教授は顔を顰めたが、注意の言葉は飛んでこなかった。

「けれども疑問を紡ぐ位は許して頂きたい所です。何せ、今年の彼等の『軍団』にしても、今やっている抵抗運動にしても、彼等は大人の力を——自分達より更に賢く、強い人間達の手を借りる事を良しとしなかった。しかし、今回は貴方を頼った。しかも貴方は受け容れたのでしょうか？ 前校長が消え、高等尋問官殿が君臨している今この状況で」

校内の殆どは監視下に在り、不用意な接触は望ましくないと言うのは共通理解の筈だった。だからこそハーマイオニー、或いは双子達は僕と会話するのにあのような方法を取ってきた訳だが、これは余りにも冒険し過ぎでは無かろうか。

けれども、教授は見せつけるように大きく溜息を吐いた。

「私を頼るのも当然でしょう。貴方が提示したのはどう考えてもグレンジャー達の手には余る問題です。そして、注意はしているつもりです。何せ私は、ポモーナと昼食を取って居ると同時に、今この部屋に居るのですから」

「ええ、大広間を出て来る際、確かに僕も眼にしましたよ」

ポリジューズ薬か。高度な変身術か。流石に逆転時計では無いだろう。

他の手段が使われたのかもしれないが、手段自体を問い詰める意味もなかった。重要なのは、今のミネルバ・マクゴナガル教授は普通の理想的教師の在り方を投げ捨てた上、非常にグリフィンドールの手段を用いてまでこの場に居合わせているという訳だ。

「それでも、危険が無い訳ではないでしょう?」

僕が危惧していたより低そうだが、それでも零ではあるまい。

「しかも、これだけ手の込んだ事をやって、やるのが五人でスリザリンスを囲んでの恫喝となれば多少、いや、かなり呆れもします。何度使える手段でもないでしょうから、もっと有益な事に用いれば良いでしょうに」

たとえば、ホグワーツから逃げたアルバス・ダンブルドア前校長と連絡を付けるとか。

挑発するように笑えば、頬をピクリと動かした以上の反応は無かった。

「恫喝されている認識が有るなら、もっと殊勝な態度を取るべきです。そして貴方ならば、アルバスが私達の助力を必要としない人間だと良く知っている筈でしょう」

「まあ、寧ろ絶対に連絡を試みるべきでない状況だとすら思っていますよ」

「……それに貴方をこの場所に引つ張り出す事は、これだけの骨を折る価値が有る。私はそのように考えていますよ」

良く言ってくれるものだ。

「グリフィンドールの問題をスリザリンに対処させるのですか?」

「貴方が提示した問題です」

「僕が提示する以前、貴方がたが自ら生み出した問題だ」

座ったまま暫く見つめ合い、けれども視線を先に逸らしたのは僕だった。

「しかし、貴方も随分御苦勞な事だ」

よくもまあ、過勞で倒れないものだと思心する。

「貴方に理事会や新校長、魔法省への対応を丸投げし、この無秩序状態の統制すらも押し付けた教職者失格。そして度が過ぎた事故を引き

起こし、モンタギュー夫妻との折衝などの事故から派生する問題を押し付けた生徒失格。彼等は自由というモノを謳歌出来て良いのでしようけど、後始末をする貴方の苦労をどれだけ理解しているか怪しいものですか?」

「そして、貴方にも理解出来るとは思っていません。その共感を私に求められる人間が居るとすれば、それは貴方でなくミスター・マルフォイです」

「——くくく。確かに、仰る通りかもしれない」

冷淡な眼差しと皮肉の切れ味は流石に教授であり、脱帽物だった。けれども教授は、僕が愉快なままでいる事を許さなかった。

「そしてレッドフィールド。貴方はグレンジャーに甘え過ぎではないですか?」

「——甘え過ぎ? それはどういう意味ですか?」

再び教授の後へ視線を向けつつ問う。

ハーマイオニーはやはり俯いたままだったが、自身のローブを強く握り締めている彼女の顔は、真っ赤に染まっているようにも見えた。

「私に迷惑を掛けるのは、まあ、良いでしょう。そして確かにレッドフィールド、貴方が暗に言う通り、総時間で見れば貴方は私に迷惑を掛けていない方です」

「まるで時間比で見れば最悪だと言っているようではないですか」

「そう言ったつもりですが?」

「——」

「ただ、それはやはり教師の、私の仕事の内でも有ります」

口を噤まされた僕を見て、しかし教授は全く面白そうではなかった。

「けれども、グレンジャーは違うでしょう。貴方が引き起こそうとする異例の問題、アルバスやスネイプ教授ですら手を焼く貴方の行動に付いていける人間は、そう多くないのです。それにも拘わらず、彼女が貴方への友情を喪わないと信じ……いえ、違いますね。アルバス達から話を聞く限り、貴方は寧ろ真逆の考えすら抱いているようですか」

深く溜息を吐かれる。

その瞬間だけ、教授は酷く疲れ果たような表情を見せた。

「とにかく、彼女の友情を試すような真似はしない事です。貴方にそのつもりは決してなくとも、第三者である私にそう見えてしまう事は確かです」

「……御説教の為に、貴方は僕を呼んだ訳ですか」

「半分は。これは教師の性というものです。そしてもう半分。こちらは、やはり教師としての仕事です。生徒の手に負えない問題を解決するのは、教授の役目です」

コーヒーテーブルを超え、視線が交錯する。

生徒に手に負えない。

教授が手に負えるかと自惚れている問題。

「——彼女に頼られ、貴方が介入すべきと判断したのは、一体どちらの問題です?」

「勿論、どちらもです」

返ってくるのは明快な回答。

……まあ、そんな気はしていた。

ハーマイオニー・グレンジャーは、ドロレス・アンブリッジより更に御優しい人間である。双子達の悪戯に対するスリザリンの報復として、精々廊下で呪文を撃つ程度の事しか考えて居なかつたのだから。僕が例に挙げた行為なんぞは、彼女には発想自体が出来なかつた。

けれども、彼女は、そしてミネルバ・マクゴナガル教授も意識すべきだ。

冗談としての悪戯、或いは権力への抵抗と言えば聞こえが良いが、法的には単なる器物破損と傷害だ。法秩序を尊ぶ人間は、基本的に許容してはならない行為である。

「私達が一つの失敗をした事は認めましょう」

丸眼鏡を外し、目頭を揉みつつ、教授は言った。

「アルバスの逃走劇が『粋』である、私ですら感じたのは事実です。ウィーズリー達の騒動を、痛快であると感じてしまっていたのも事実

です」

「別に、それを非難などしませんよ」

その事に関して僕は何も思っていない。

「その感性は酷く魔法族らしい。そして僕が仮にグリフィンドール側に立っていたのなら、アルバス・ダンブルドア前校長は勿論の事、この場のウィーズリーの行為ですら全肯定していた事でしょう。スリザリンの一生徒が多少小うるさい事を言って来ようと譲りもしない。何が何でも正当化してみせますよ」

「……その二律背反を平気で飲み込むのが、貴方が貴方である所以なのでしょうね」

はあ、と溜息を吐かれる。

「……以前同種の事を話し合いましたが——」

「——なれば、もう時間の無駄でしょう」

躊躇なき非礼に教授は顔を大きく顰めたが、これは引けない側の事項だった。

「スリザリン代表者という程では有りませんが、一応下級生や女生徒——極々一部の人間達から相談を受け、不安と恐怖の告白を聞かされた身では有る。だから、貴方に伝えるべき事は全て伝えました。今更グリフィンドール寮監と合意する事など何も無い。非道を始めたのはドロレス・アンブリッジですが、無法を始めたのはアルバス・ダンブルドア前校長、貴方の教授であり大先輩だ」

全てが悪戯の範囲に留まるなら問題視しない。

グリフィンドールがスリザリンへ正当防衛を為すのも当然の権利である。

けれども、過剰防衛や単なる傷害行為へと至れば、絶対に報復行為に及んでみせる。

子供でも解る理屈だろう。

悪い事をすれば報いを受ける。何も難しい事など有りはしない。

「グラハム・モンタギューは現在進行形で奪われている。ホグワーツの七年間の一部、代替も代償も不可能な学生生活の一秒一秒を。ただ単に不当な減点行為に及んだというだけで。それにも拘わらず、彼

や、彼に続く被害者は泣き寝入りしろ。或いは、口頭の謝罪や金銭賠償さえすればグリフィンドールは何をやっても構わない。そんな非道徳を、まさか教授とも在ろう者が言わないのでしようね？」

そこまで一息で言い切り、慄然としたままの教授に笑い掛ける。

「個人的な感想を吐露するなら、こんな理屈なんぞどうでも良いのですよ」

頼みを受けた者の義理と義務としてやっているだけで、本心はどちらでも良い。

正論だろうが暴論だろうが、この教授に問い糺す事自体に興味を持っていない。スリザリンの肩を持つのは、単に私情に過ぎない。

「その双子がドラコ・マルフォイに殴り掛かった時や、前校長がどさくさ紛れに『軍団』名簿を回収して行つた時も同種の事を思いましたが、グリフィンドールは少々子供染みた、甘ったれの性根を御持ちではないですか？」

「自分達をまるで物語の正義のように考え、悪に敗北する事など欠片も考えない。相手の憎悪を買い、道連れに不幸に墮とされる恐怖を抱かない。世界は悲劇も理不尽も有り触れているというのに、彼等は知ろうとすらしない」

少なくともアルバス・ダンブルドア前校長は、魔法省が自分を害せるなら害してみる、文句があるなら掛かって来いという覚悟を決めた上で行動を起こしている。

だから双子達にしても、スリザリン——最低でも高等尋問官と尋問官親衛隊の構成員を追放し、我が寮の悪しき理念を根絶させるつもりでやっているならば、その行為に敬意を払えはした。一時間前の接触にしても、もつと互いを尊重する形で話し合う気にはなれただろう。

けれども実際に会ってみれば、彼等は決してそうではなかった。

『ダンブルドア軍団』と同様、学生気分のまま馬鹿騒ぎをやっているに過ぎなかった。

何が何でも、自分達が不幸に墮ちても成し遂げるといふ気概が一切無い。

「……重ねて警告しましょう。私達は、貴方の行為を絶対に許しません」

「ええ、そう在るべきだ」

ホグワーツ教授とは、ミネルバ・マクゴナガル教授とはそうでなければならぬ。

「ですが、僕も繰り返しましょう。貴方はホグワーツ教授に過ぎない。僕達を指導出来るのはこの箱庭内だけ。その外では、貴方は一切の制止する権限も持たない」

「……それは闇祓いや魔法法執行部隊を軽視し過ぎた発言ではないですか？」

「ここ数年を観察していた限り、それをするなという方が無理でしょう？ 魔法省はシリウス・ブラックを未だに捕まえない——」

そこまで言葉にして、部屋内に微妙な空気が漂った事で口を閉じた。

嗚呼、そうか。この場に居るのは、全員が全員、事情を知っている人間なのか。

「——訂正しましょう」

自分の非を認め、口を開き直す。

「シリウス・ブラックは三年前の夏には脱獄していた。それから……暖かくなり始める前ですから、脱獄から約半年後の二月頃ですか。あの脱獄犯がロナルド・ウィーズリーへ馬乗りとなり、ナイフを振り上げるその瞬間まで止められなかった組織の人間達に、寧ろ貴方がたが期待し過ぎなのではないですか？」

そして今度は、期待通りの反応が得られた。

理由がどうあれ、あの時点までは確実に、シリウス・ブラックは完全に自由だった。

まあ、あの騎士団長閣下の頭から動物擬きの可能性が消えていた事は理解出来るのだが——彼は教え子の能力を、そしてかつての騎士団員の能力を良く知っていた筈だ。そして、動物擬きは逃亡中に容易に習得出来るような呪文でもない——大多数の闇祓い共が見落とし、見逃し続けていたのは、無能と呼ばれても己むを得まい。

独裁的な騎士団長と違い、魔法法執行部は「組織」である筈なのだから。

一つの目的の為に協力して、多様な価値観と状況分析に基づき、大勢の人員を割いた上で治安維持活動と犯罪捜査活動を行って然るべきなのだから。

「第一、魔法省や闇祓い達が頼りないから戦っているのが前回の、そして今回の騎士団長閣下でしょうに。法や社会、教授や魔法省といった機関が救済を与えてくれないならば、自らの力をもって損害回復へ動く。人類が有史以前より尊んで来た原初にして不可侵の原則に、スリザリンもまた従う。これは単にそれだけの話ですよ」

「——貴方の主義主張は理解しました」

くすんだ碧色の瞳を閉じ、少し黙り込んだ後、話を打ち切るように教授はそう言った。

しかし、その理解しましたという言葉は、許容するや共感するという意味には全く聞こえず、寧ろ絶対に相容れず、何としても僕を止めてみせるという覚悟の宣言のように聞こえた。……それはそれで少し楽しみですら有る。

少々高揚を覚えて来た僕を他所に、教授は冷めた眼で僕を見た。

「……もう一つ聞きましょう。貴方はウィーズリー達による統制を期待しました。それは私達から求めた事ではなく、貴方自身から出て来た発想です」

「それが何か？」

正しくその通りでは有る。

更なる面倒事を避ける最短だと考えたが故に、彼等を自ら直接刺しに行った。

「つまり、彼等が今後貴方の思惑通りに行動したのであれば……スリザリンの女子生徒や下級生など、貴方が庇護すべきと看做している人間達を護る為、これから最大限努力したのであれば、多少の情状酌量は期待出来るのですよね？」

「教授は勘違いしているのでは？ 最優先されるべきは被害者の意思

——」

「——私はミスター・モンタギューではなく、ミスター・マルフォイですらなく、貴方個人の見解と立場こそを質問しています」

「……………」

暫く睨み合い、しかし今度は白旗を上げた。

被害者と加害者間での落としどころは決められずとも、僕の心一つであれば、今この場で決める事は可能である。

「ハーマイオニーと約束はしました。そして僕自身、更に事故が起こって欲しいと考えている訳では無い。その双子や、ハーマイオニーに限らない。貴方や全ての監督生が協力し、今回の騒動を微笑ましい喧嘩で終わらせてくれる限りにおいては、僕の理性は何の問題も無いと結論を下すでしょう」

「結構。そして、それはスリザリンも同様の努力をする事を前提とする筈です」

「勝手に始めておいて凶々し過ぎると思わないのかと、そう返したい所ですが……まあ、スネイプ寮監の希望に沿うものでは有りますからね。結果まで御約束出来ませんが、最大限注意は払いますよ」

モンタギュー夫妻か、事件を知った他の親から吼えメールでも飛んで来たのだろうか。

僕を呼びだし、何時もの二倍くらいの仏頂面で、寮内を厳しく見張れと命じて来てくれたのがイースター前の事。更にイースター明け、馬鹿をすれば我輩の不興を買うと改めて寮生に脅迫していた姿を目撃してもいる。勿論我等が性悪寮監の事なので自分で止める気は更々無いだろうが、それでも最低限の仕事は期待出来るだろう。手を抜いて最終的に困るのは結局、あの教授自身であるのだから。

「しかし、既に起こったグラハム・モンタギューの一件だけはどうにもなりませんよ。セブルス・スネイプ寮監も所詮は半純血。僕もまた同じ。可能なのは“純血”達に助力せず、諫める所まで。彼等がそれでも本気だというのなら止められない」

我が寮の教義が純血主義である以上、その上下の絶対はどうにもならない。

再三伝えている警告に、だが教授は構わないと頷いた。

「それで十分です。その後始末はやはり私の仕事であり、そもそも私が直接警告する意味を感じている生徒は貴方一人だけです」

「では、もう一方の件に移りましょうか」

そう教授が宣言した瞬間、大きく息を吐いた音が何故か三つ。

その発信源は明らかであり、僕の視界の内に居たハーマイオニーは特に露骨な安堵を浮かべていたが、そんなにもミネルバ・マクゴナガル教授が恐ろしく見えていたのだろうか。その辺りの真つ当な生徒としての感覚は、やはり僕には掴み難い所が有る。僕はこの五年間で、アルバス・ダンブルドア前校長やスネイプ教授と言葉を交わす事に余りに慣れ過ぎたのだろう。

まあ、それは良いとしてだ。

「……レッドフィールド。呼び付けた身ですから何も言わないつもりでしたが、流石にそこまでの態度となると眼に余ります」

「無茶を言わないでくださいよ」

咎められたので、多少は姿勢を正しつつ答える。

「どちらの行動が良いかは僕自身測りかねているので、貴方の思惑に乗るのは吝かでは有りません。しかし、このような状況が面倒だと思ふ事は止められない」

「――」

「そもそも、貴方は既にやる前提で話を進めたいようですが、意思確認は済んでいるんです？ 僕はまだ、それすら聞いていませんが」

双子の方を顎で小さく指し示す。

教授は余計に顔を顰めたが、気に留めるつもりは無かった。

「……この場に彼等が居るだけで答えは明らかだと思えますが」

「教授。貴方は察している筈だ。この介入は自分の指導権を超えるかもしれないと」

「……………」

ホグワーツ教授には広い指導権が認められるが、それでも授業とも

学校生活とも無関係な事項に対しては、その指導権は当然排除されて然るべきだろう。

まして教授がやろうとしているのは仲直りさせるとかではなく、その逆だ。そこまで行くと、教授のやるべき行いでは無い。この普通の教授がこの場に居り、これからの事を承認しようとしているというだけで、僕は十二分に驚いているのだ。

「まあ貴方の仰る通り、問題を突ついてやったのは僕だ。ですから、貴方が僕を留める事は一応良しとしましょう。けれども、そのウイーズリー達は違う」

そこは道理が通らない。

そして、僕も最初に確認しておかねばならない。

「この場を成立させる権利は、僕でも貴方でも無く、『ウイーズリー』にこそ在る」

彼等こそが始まりだ。

「そしてこれは教授によって科される罰則や義務、或いは責任で在ってはならない筈だ。要するに、グリフィンドール寮監が彼等を留める権利など無い。彼等には何時でも、今この瞬間ですらも立ち去るのが認められて然るべきで、彼等が立ち去れば終わりにしなければならぬ」

「……つまり、貴方は私が彼等に無理強いしていると言いたいのですか？」

「生徒は教授よりも、寮監よりも弱い立場に在るものでしょう？ 内心思っていたとしても、力関係上抵抗出来ないという事は多々存在する」

「如何に正論だろうと、貴方が言う途端に嘘臭く聞こえます」

失礼な事だと僕が答える前に、彼女は振り返って背後を見た。

そうして暫く待って、結果は露わになった。双子は立ち去ろうとしなかった。緊張に身を堅め、息を潜めるようにはしていたが、そこに座ったままだった。

「見ての通りです」

視線を戻し、静かにそう伝えた教授に、僕は口の端を歪める。

「僕の眼から見る限り、彼等が完全に、心の底から同意しているようには見えないのですが——まあ良いでしょう。留まる気だというなら同じ事だ」

彼等に僕への敵意や反発心の気配が全く見えなそうだというのが気に掛かるものの、わざわざ視線を合わせて探る程、彼等の内心に余り興味は無い。ウィーズリー達は彼等なりに留まる理由を見付けたのだろうし、そして獅子としての矜持は残っていたという事か。

「それは理解出来ましたが、では、貴方が僕を引っ張り出す理由は何です?」

必須にして最低限の確認は終わったが、全てを納得した訳でも無い。

教授から視線を外し、何となく部屋の隅を観察しながら問う。まさかこの状況で透明マントが使われている事は無いだろう。単純に、ミネルバ・マクゴナガル教授を余り見たくない気分だったからだ。

「貴方がこうして直接的な形で出張ってくるという事は、教授は既に僕の皮肉、彼等の両親を賞賛した真意を理解しているという事ではないですか? 仮にそれが不可能だったとしても、ハーマイオニー・グレンジャーから聞き出せば済む話ですしね。貴方が把握する事は何も難しくくない」

「……………」

視線を合わせず、表情も見ずとも解る事は有る。

彼女の気配は、その事が間違いなく真実だと答えていた。

「血の問題を禁忌とするのは勝手だ」

あの前校長閣下には、ホグワーツの最高権力者にはその権利が有った。

「しかしそのせいで、『穢れた血』が非魔法族の事を指すのだと勘違いしている者すら、今のホグワーツには存在している。それなのに、貴方がたは何もしない。見ない振りをした所で、社会からも問題が無くなる訳ではない。それでも貴方がたは、非魔法族育ちや半純血達に教えない。棒を振る事を教えるだけで、この社会で生きる為の知識を教えてやらない」

そこまで言葉にし、漸くミネルバ・マクゴナガル教授へと戻した。彼女の表情は相変わらず凜然としていて、僕の皮肉は聊かも応えた様子は無かった。それどころか逆に、彼女の覚悟と決意をより強固にしてしまったようだった。

「……てつきり手厳しい反論が返って来るものだと考えていましたが。教授なら幾らでも出来るでしょう？　今貴方を糾弾した僕自身ですら、幾らでも思い付いているのですし」

「この問題についての批難は、私は真正面から受け止めるべきと判断しています」

その潔く眩くもある態度に逆に遣り込められた気分になり、嘆息させられる。

「……ならば、繰り返しましょう。何故僕を担ぎ出そうとするのです？」

その理由がやはり解らないと、改めて双子を見やる。

彼等の計四つの瞳を視界の端で捉え、抱くのは案の定落胆だ。

ミネルバ・マクゴナガル教授は彼等に一体どんな叱責をして、どんな理屈を付けてこの場に引き摺り出して来たのか。その事を不思議に思う位に、彼等からは牙が抜かれている。あの行き止まりの空間で対峙した時と違い、彼等からは僕への対抗心が喪われている。

まったくもって、面白味に欠けている。

「貴方は僕に語らせようとしている。彼等に対して、アーサー・ウィーズリーの背信を語らせようとしている。しかし、貴方が理屈を理解しているならば、それこそ貴方が教えてやれば良いでしょう？　僕は彼等に優しくしてやる義理はなく、それがやれる人間でも無い。手の込んだ仕掛けをしたのは御苦労だと思いますが、貴方がそこまでする意味が見えて来ない」

僕にとつては心底不思議に思える行動であり、けれども、ミネルバ・マクゴナガル教授は静かに、落ち着いた瞳で僕を見返して来た。

「一つだけあるでしょう。貴方を引っ張り出す意味が」

「何が有るといいます？」

「私のかつての、いえ、今でも教え子のつもりであるパーシーの件で

す」

「であれば、やはり無いでしょう」

馬鹿々々しいと切つて捨てる。

「確かに、貴方がたは僕と違つて直接会つた訳では無い。けれども、彼の離反の理由も想像出来てはいる筈だ。僕の皮肉の意味さえ理解すれば、当然そこに行きつく。彼が魔法省で如何なる立場に置かれているか想像出来る。なれば——」

「——上辺だけの理解で、貴方は彼の慟哭を受け止められると考えていますか?」

「……………」

沈黙。

僕はそれを選ばざるを得なかつた。

「私は教師ですから、多くの生徒を見て来ました。だから、解つていないのに解つた振りをしている生徒と言うのは、見れば直ぐに解るので。そして大抵の場合、そのような生徒の下に、良い結果が訪れる事は有りません」

「……………まるで、その双子の物分かりが悪いみたいじゃないですか」

「無論、そう言っているつもりは一切有りません」

気のない僕の揶揄に、返ってくるのは断固とした否定。

「彼等は確かに問題児では有りますが、それでも非常に頭が回る人間達で、何よりグリフィンズ生です。そして、察しているのに惚けるのは賢いとは思えませんよ、レッドフィールド。私はこう言っているのです。解つた振りをしているのは、私も含めてなのかもしれないと」

「——」

「私達はスリザリンの主張を正確に、かつ、可能な限り多く知らねばならないのです。貴方の眼から見れば、パーシーですら無知に当たるでしょう? そして、彼等にとって失敗する訳には行かないのです」

「……………解せませんね」

柄に無く熱を持っている教授とは反対に、今度は僕が酷く冷め切つていた。

「良いじゃないですか、済し崩しの和解で」

全てを受け止める必要など有るのか。それが疑問でならない。

「パーシー・ウィーズリーの忠誠が何処に在るかは、既に僕が直接見えています。直ぐには無理でしょうが、時間が解決してくれる余地は十分あるでしょう。この戦争の何処かでウィーズリー家がグリフィン・ドールのに——上から目線で許し、家族として再度温かく迎えてやれば、彼は容易く屈するのではないか。そんな気がしていますよ」

「まるで貴方らしくない事を言うのですね」

「教授が認識している僕らしさとやらは今は置いておきましょう。けれども、すっぱり解決する問題の方が世の中珍しい筈でしょう？ 継ぎ接ぎの壊れ掛けで満足せねばならない問題というのは確かに存在する」

「しかし、これは明確に違う筈です」

僕の心からの呆れにも、教授は頑な態度を崩さなかった。

「見逃したままで居てしまえば、ウィーズリー家の結束の危機は、それもパーシーだけでない破綻は、今後何処かの場面で訪れるかもしれない。そして賢い貴方に説明する必要があるとは思いますが、和解とは御互いの側が譲歩してこそ成立するのですよ」

「……………」

「また、貴方の方も、この場では譲歩してくれませんか？」

先程引かなかったのは僕だったが、今度は教授の番らしい。

真つすぐ視線を合わせて失された言葉に、大きく息を吐いてみせた。

「……………ミネルバ・マクゴナガル教授。嫌々ながらも確認させて頂くのですが、仮に僕がウィーズリー達に語る事を承諾したとして、貴方もまたその場に同席する。今の言葉からすれば、そう言っているように聞こえたのですが」

「その通りです」

否定の言葉を期待した問いは、しかし当然のように裏切られた。

「レッドフィールド。私は失敗を犯したと考えているのです」

「……………どれを？」

「前回、グレンジャーのみに問題を背負わせた事です」

となれば、あの温室での接触の事か。

「あの時は、私は同席する必要が無いと考えていました。貴方がたを信頼していたというのもありますし……ええ、はつきり言ってしまうと、グレンジャーに貴方を止めて欲しいと伝えたのは、単なる口実に過ぎませんでした。けれども、貴方を甘く見過ぎていたのでしょうか。貴方がその時突き付けた問題は、一生徒が受け止めるには余りに重過ぎるものだったからです」

「ハーマイオニーはあの程度で折れる程に弱くはない。実際そうだった」

「先程も述べた通り、その考えが貴方の甘えだと言うのです」

頬を染めながらも今度は視線を逸らさなかった少女を見つつ言えば、返ってきたのは痛烈な皮肉だった。もともと、それで顔を歪めたのは僕ではなく、あくまで教授の側だった。

「ですが、甘えていたのは私達の方もです。私達はアルバスに依存し過ぎました。そして、問題に取り組む努力を怠っていました」

「けれども、あの場での内容程度、貴方がたには目新しくもないでしょう?」

彼女は、僕よりも遥かに賢い。

そして Hogwartz 教授として、数十年の時を生きている。

「Hogwartz と魔法省、まあ、魔法使い評議会時代も変わりませんが、それらが決定的な対立にまで至らなかつたのは、大人の世界と子供の世界で支配を棲み分けして来た点にある。だがそれはそれとして、裏では様々な事柄で主導権を巡り対立して来た。その程度の事は、この地の魔法族なら、そして勤務者であるなら知っていた筈だ」

激化させたのは彼だが、彼が最初に生んだ訳では決してない。

ただ、僕の言葉に教授は首を振った。

「知っている事と理解している事は違います。そして、その上で行動する事も」

「なら、今回の問題に関して言えば、アズカバンにでも面会に行ったら

どうですか？ 貴方が頭でも下げて請いさえすれば、懇切丁寧に教えてくれる筈ですよ」

「マグルのスカートを捲り上げて弄んだ挙句、闇の印に逃げ出すような輩に聞く気は有りません。……貴方の言いたい事は解りますよ。今アズカバンに囚われている人間は違うというのでしょうか。しかし、私は断じて、死喰い人の話を聞きたい訳では有りません。スリザリンの話を聞きたいのです」

真摯な瞳であり、最大限誠実な言葉だった。

「……スリザリンの、と貴方は仰りますが。しかし、僕の考えは、恐らくスリザリンの考えと完全に一致するものではない」

「ならば、貴方と言い替えても何ら構いません」

「どう考えても、貴方が知っている内容を逸脱出来る気がしませんが」
「既に自分が聞いた事のある内容、知識として有している内容を他から得る事に価値が無いと言うのであれば、教科書も教授も一つで足りるでしょう」

「——成程」

その切り返しは、悪くない挑発ユイモテだった。

そして、僕の負けか。

そもそも、本気で拒絶する気であれば、最初の時点で席を立つておくべきだったのだ。

ミネルバ・マクゴナガル教授が御見通しか解らないが、僕にも留まる意味は存在しているのだ。醜悪で、悪意に満ちた、歪んでいる期待を未だに持っているから、この場をとつと立ち去る事を選ばなかった。

但し、だ。

先に進む為の言葉を、ミネルバ・マクゴナガル教授に向かって口にする。

「しかしながら教授」

「何でしょう？」

「そういう事であれば、貴方には今回黙っていて貰う」

ミネルバ・マクゴナガル教授は大きく眉を寄せた。

「……どういう事です？」

「言葉通り。貴方に口出しは許さない。そう意味ですよ」

その要求には、流石の教授も一切の不愉快を隠さなかった。

けれども、彼女が抵抗するより僕が呼び掛ける方が先だ。僕の怒りの方が、遥かに上なのだ。如何にホグワーツ教授だろうと、否、教授であるからこそ許されない。

「教授」とは、生徒に知識を与え、人生の指針を示す者の事を言うのでは無かったか。

「ねえ、ミネルバ・マクゴナガル教授。いえ、ミズ・マクゴナガル」

指組みした向こう、険しい表情をした魔女をねめつけて告げる。

「僕が貴方にこんな事を言っているのは、そう大した理由が有る訳でもない」

この要求自体に意味は無い。

「思惑や計画も無い。けれども、これだけは明確だ。この話は我々にとって冷静に、理性的に、御行儀の良い態度で出来るようなものではない。これは既に持っている者が持たない者達を踏み躪つて来た話だ。これは魔法や科学の話では無く、何処まで行っても人間の話だ」

「………」

「そして貴方が彼等の側に立つ事は出来ない。その権利は——無い」
マクゴナガルである彼女は寧ろ、僕の側に立たねばならないのだから。

「……傲慢不遜さに関して言えば、貴方はアルバスを遥かに上回っていますね」

「何とでも言うが良いでしょう」

客観的に酷い言い草をしたとは理解しているが、譲る気はない。

「それに、貴方に立ち去れとまで求めている訳では無い。この場に居さえすれば、貴方の目的、つまりスリザリンの思惑を知り、同時にこの双子の心の支えとなるという目的も達成されるでしょう？ まあ、貴方が同席する方が良さそうだというのは頭では解っていますしね」

教授の前で、生徒は完全に自由な振舞いをする事は出来ない。

感情論を度外視すれば、それを最大限利用すべきだというのは理解している。

「そもそも、この要求自体が負け惜しみのようなものです。既にハーマイオニー・グレンジャーの勝ちだ。再度双子達を引つ張り出す事に成功し、僕の話聞かせる為の場を成立させてしまった時点で、僕は引かねばならなくなっている」

そう言った瞬間、教授はどういう訳か怪訝そうに眉を顰め、更にハーマイオニーも驚愕の表情を浮かべてい——嗚呼、彼女はそこまで見通してやった訳では無いのか。完全に僕が早合点した形らしく、まあ、良い。曲がりなりにも口に出した事を撤回するつもりは無い。それ位の矜持は有る。

その代わり、愉快さと共に教授を見つめ直す。

「ミネルバ・マクゴナガル教授。貴方は今回これこそを止めに来たのではないですか？ 少なくともハーマイオニー・グレンジャーはそのつもりだった筈ですが」

「……………」

僕達は揃って一人の少女に視線を向け、しかし彼女は大きく顔を背けていた。

僕へは兎も角として、教授にすらそんな態度を彼女が取るのは、今までの五年間で初めての事態なのかもしれない。

「……貴方が、いえ、グレンジャーが止めようとしたのは何です」「彼女に聞かずに僕へと聞くのは何故です？」

「グレンジャーが私に真意を伝えられなかった事に責任は無い——彼女は意図して隠そうとしていた訳では無く、単純に私に対してどう説明して良いか解らなかったからであつたのだと、そう信ずるからです」

「なら答えますが。その双子の『卒業式』への介入ですよ」

更に厳しくなった気がする視線を受け止め、大した事でないと思える。

「彼等はどうも意気揚々、威風堂々と出て行くつもりだったみたいですからね」

詳細までは伝わって来ないが、随分楽しそうに計画していたとは聞いている。

「ですから、僕はそこに尋問をぶつけてやるつもりだった。主題は勿論、パーシー・ウィーズリーが己を信じられなくなった理由について。被告人はグリフィン・ドールそのもの。証人席に立つのはその二人とドロレス・アンブリッジ。陪審員はホグワーツ生であり、判決を下すのも彼等。今後の無秩序の前哨戦としては良い刺激になりそうでしょうか？」

「……あ、貴方はホグワーツを粉々にするつもりですか」

「粉々？ まさか」

何故だか教授は僕が勝つ事を前提としているらしい。

愕然とした、少しだけ震えているようにも聞こえた言葉を、しかし真正面から否定する。

「公平公正な裁判では無いのですから結論は決まり切っている。ウィーズリーは言わずと知れた人気者で、その上スリザリンは徹底的に不人気。ドロレス・アンブリッジも僕も例外では無い。加えて主題自体が真偽不明と来ている。この状況で勝てるなら地上の神になれますよ。最初から負ける事こそが既定路線だと言って良いでしょう」

「……………」

「——嗚呼、負けるのは構わないが。ただ、せめて知って貰わねば割に合わん」

そこまで口にして、ふと我に返る。

知らず知らずの内に言葉遣いが崩れていたし、僅かの間にしても教授の存在を忘れていた。けれども、ミネルバ・マクゴナガル教授は何も注意を飛ばして来なかった。それどころか、眼を瞑って、僕の言葉を吟味していたようだった。

いや、そもそも眼を瞑っていたのだろうか。

……瞑っていたのだろう。僕が教授の方に視線を戻した瞬間、彼女は僕に対して戦慄と恐怖を抱いたように見えたのだから。生徒にそれを抱く道理など無いのだから、見間違いに違いない。

実際、眼を開いた彼女は、やはり何時も通りの教授だった。

「……私が引き下がれば、貴方も引き下がるのですね」

「引換の条件として出した訳では無いですが、結果的にはそうなりま
すね」

必要が無いのであれば、分の悪い行動に及ぶ気まではない。

確認の言葉にそう領けば、教授は微妙に眉を寄せた。何と無く困惑
しているようで、質問自体も彼女にしては歯切れが悪かった。

「しかし、貴方はそれで構わないのですか？」

「？ 何がでしょう？」

「貴方が引き下がるという事は、貴方が今回の問題を全校生徒に問う
機会を捨てるという事です。貴方の視点でグリフィンドールに好き
にさせるという事です。勿論、それは私達にとって望ましい事になる
筈ですが、それで貴方は十分満足出来るというのですか？」

「嗚呼、そんな事ですか」

教授が疑問に思うのは理解したが、しかし、非常に下らない質問だ。

「教授に言わせれば、和解とは御互いが歩み寄る事なのでしょう？」

個人的には一つ譲るのも二つのも同じですから、もう貴方がたが求め
る部分は全て譲ってやりますよ。僕が何処まで譲れるか。それをこ
れから貴方がたと揉めるといいうのも酷く面倒ですし」

そう答えてやれば、秩序の教授は何処か荒んだ調子になつて言っ
た。

「……グレンジャー。この男の手綱を、可能な限り握っておくように」
暴れ馬のような扱いをされるのは酷く心外だ。

そう思いながらハーマイオニーを見れば、彼女は神妙な顔をして頭
を下げた。

「……鋭意努力します」

「……………」

本当に、彼女達には僕が一体どう映っているのやら。

「まあ、軽い冗談は兎も角として」

「……冗談を吐いている自覚は有ったのですか」

「多少はそうです」

僕は先程讓歩と言った。

要は、敗走や降伏では無い。

つまり、既に得られるモノを見出しており、この流れに従ってやる事に異存はない。

だからこそ、簡単に引いてしまう事が出来るのであり。

「しかしながら、ミネルバ・マクゴナガル教授。どうか御忘れなきよう。コレは、今回僕の口を封じれば終わる問題では無い」

「――」

無理に食い纏る事に価値を見出していないからでもある。

語ろうが語るまいがどちらでも良い、というのは流石に言い過ぎだが。

是が非でも自分の手で為さねばならない、そうでなければ何も変わりはないのだと自惚れている訳では無い。歴史に絶対不可欠の存在など居ない。ゲラート・グリンデルバルトや闇の帝王ですら、仮に彼等が存在しなかったとしても、他の誰かが同種の事を引き起こしただろう。

そして、これもまた変わらない。

「そもそも我がスリザリンは何も困りませんしね。加えて、今年度の魔法界を眺めた上で、僕の方も既に心を決めている。貴方がた三寮こそがサラザール・スリザリンの悲願を叶えるのだというならば、それもまた一つの結末として受け容れると。貴方がたが千年前の勝者はグリフィンドールだと主張するのなら、此度の勝者となるのはスリザリンだと」

アルバス・ダンブルドア前校長も、コーネリウス・ファッジも、ドローレス・アンブリッジも、ミネルバ・マクゴナガル教授ですらも例外ではなく。このホグワーツ内に既に在った些細な問題すら是正しなかった者達は、何の自覚無く、彼等の三創始者を裏切る罪深き道を進んでいる。

その痛烈な皮肉には流石の教授も平静で居られなかったようで、彼女は反発と共に何か反論を紡ごうとしたようだが、僕は人差し指を立てる事で止めてやった。

「この議論は、今は先送りにすべきでしょうか？ 違いますか？」

教授達の人払いを疑っている訳では無いし、何なら直近で最も完璧に近いのかもしれないが、それでも完全無欠では無かろう。そして時間は有限であり、僕と彼女の議論は必要なら来年以降に伸ばす事すらも出来る。

何より、この場の主役はやはり「ウィーズリー」なのだ。

それを籠めた促しに、彼女は不承不承頷く。

けれども、その姿に何処となく見慣れたハーマイオニーが——反論を不本意に止められた少女の姿が重なり、僕は思わず口元が緩んでしまった。

「では、教授。始める前に用意して頂きたいモノがあるのですが」

「席替え」が行われた後、僕はそう切り出した。

部屋内の位置関係は然程大きく変わった訳では無い。

宣言通り、教授は僕の前から消えて部屋の隅に行き、そこから掘り出した執務机と椅子へと着いた。更に羊皮紙、羽ペン、そしてインク瓶を出現させた——つまり仕事を出来る態勢になった辺り、彼女は本気で話を聞くだけにするつもりらしい。そこまでしてくれと要求した訳では無かったが、それは彼女なりの演出、パフォーマンスグリフィンドール三人に対して自分は手助けをしないと主張する為の行動でも有るのかもしれない。

また、教授が居なくなった分それだけ僕の真正面のスペースが空く形になったが、それは生徒三人が僕の方向に距離を詰めるのではなく、コーヒーターブルを彼女達の側に移動させる事で無理矢理誤魔化された。杖を振ってその配置を作ったのは教授で有ったから、要するに、会話する距離の不自然さより僕達を近付けない事の方を優先したのだろう。

まあ、こちらとしても文句は無い。ドラコ・マルフォイに平気で殴

り掛かる野蛮人共には、進んで近付きたくもないからだ。

「……貴方はここまでしてまだ、不服な事が有るのですか」

「こちらは道理に外れた物では有りませんよ」

既に羽ペンを手に取っていた教授は案の定、非常に嫌そうな顔を僕に向けてくる。

この普通でない処遇と配置を受け容れはしても、内心腹立たしく思っているのは一目瞭然で、珍しく言葉にも露骨に棘がある。しかし、僕は構わず要求を紡いだ。

そう何時も何時も、無駄口ばかり叩いている訳では無い。

「出来ればで構いません。『純血一族一覽』の現物がこの場に欲しいのです」

内容自体から真意と真剣味は伝わったのだろう。

今度教授の眉根に拠った皺は、その是非を吟味する為だった。

「その書籍は貴方にとって必須ですか？」

「確かに必須では有りませんが、可能な限り正確は期しておきたい。何より、これは何が何でも最初に確定しておかなければならない大前提です。ここから疑われてしまつては、この場での議論どころか会話自体が成立しなくなつてしまう」

「……だから、証拠が欲しいという事ですか」

「ええ。約六十年前、彼等の父親が生まれる前から存在していた歴史的記述。それが在った方がやはり望ましい。もつとも、駄目元であるのは否めません。あの前校長が独断かつ恣意的に図書室から取り除いていたとしても、僕には何の驚きも無い」

「成程、貴方の主張を認めましょう。少し御待ちなさい」

教授は杖を最初に二度程小さく振った。

何の為かまでは解らないが、求めた成果は得られたのだろう。その後で彼女は大きく円を描くように振り、杖先から現れた銀色の猫を生み出した。そして、その猫は机の上に降り立ち、教授の方に一鳴きした後、床へと飛び降り——擦り抜けて消えて行った。

どうやら多少は期待出来そうらしい。

そう考えつつ、準備が出来るまで黙って待つ羽目になると僕も考

えていたのだが、そうさせなかったのはミネルバ・マクゴナガル教授だった。

「しかし、貴方のその検閲を嫌う態度は、やはりレイブンクロー的ですね」

そう言う教授の口調は酷く軽いもの。

要するに、時間潰しの為の雑談である事が明白だった。

だから、回転椅子の肘掛けに寄り掛かったまま、僕も気楽に答える。相も変わらず、この場に居る他の三人は口出ししてくる気配すら無い。それどころか、ますます身を縮めてしまったような気配すらした。

「そこでスリザリン的という言葉を選ばなかった理由は何故です？

『純血一族一覽』を学校に置けというのは、スリザリンの主張とも重なる部分も有る筈ですが。それにも拘わらず、敢えてレイブンクローを出した理由は気になります」

少し考える素振りを見せた後で、教授は口を開いた。

「そこに貴方の熱意が無いように思えたからです。強いて言うならば、貴方はアルバスが本を取り除く事を嫌悪していても、その一方で権利を認めている。それはスリザリン生としては有り得ない態度でしょう。彼等は絶対に置くべきという立場なのですから」

「……成程。そう言われてみればそうかも知れない」

「レイブンクローは、良くも悪くも知識は無色と扱います。色を決めるのは人間であり、危険性を定めるのも人間次第であると。流石にスリザリン程に闇の魔術を是とほしません」

「しかし、それも偏見だと思えますけどね。陳腐な表現ですが、毒は薬にもなる。前校長も貴方も闇を毛嫌いし過ぎている。闇も使い方次第であり、そもそも闇の濃さを真に知らなければ、光がどれだけ素晴らしいモノであるかを理解出来やしない」

そう述べれば、教授は批難の視線を僕に浴びせて来た。

「しかし、触れるべきでない闇も存在するでしょう。呪文の行使には意思が必要であり、そして意思が人間の物である以上、善悪と言った倫理判断からは自由に居られないのです。殺意や害意を不可欠の前

提とする呪文、それを記述する知識は、やはり不適切以外の何物でもありません」

「それはまあ、確かに。貴方の仰る事には一定の理が在る」

「つまり間違っている部分が有ると？」

「ええ。それも僕が決めるのでは無く、貴方自身が認める間違いが」

「ハーマイオニーも良く嵌る事だが、僕のような人間と余り議論すべきでは無いのだ。」

悪党は禁反言や言行不一致に従わないが、正義の信奉者は容易に縛られてしまう。一方だけ制限が掛かっていれば負けやすくなるのも必然というものだろう。

「教授が省いたのが意図的かどうかは解りませんが、もう一つは違うのではという事です。貴方は過去に魔法省に居たとも聞いています。ならば、現在闇だと分類されるその呪文を、貴方でさえも使った事が有るでしょう？ 或いは、有益な物として今後に使うでしょう？」

薄笑いと共に紡いだ揶揄は流石に効いたらしい。

教授は苦い顔をしたが、逃げはしなかった。渋々であれ、小さく首肯した。

「……そうですね。バーティを全肯定はしませんが、彼が前回闇祓い達から支持された理由はそこに在ります。貴方の指摘はもつともで、私もまた、それ程強くはありません。もつともアルバスは、これすら言い訳だと考えそうですが」

「単にあの怪物が異常なだけでしように」

「アルバスを平然とそう評せるのは、老若男女問わず貴方ぐらいのものです」

最後に軽妙な皮肉を紡いでくれた後、教授はふっと、僕から視線を逸らした。

銀の猫が戻って来たのかと思ったが、そうでは無かった。

ミネルバ・マクゴナガル教授はハーマイオニーを見ていた。そこに座っていた少女の口は大きく開かれていて……嗚呼、成程。そういう事か。そして教授の方も、彼女の反応の理由に気付いているようだっ

た。

「グレンジャー」

「は、はい……！」

背筋を伸ばして勢い良く答えた彼女に、教授は少しだけ頬を緩めた。

『ダンブルドア軍団』の発想は、貴方から出たものでしょう？」

一切の脈絡の無い問いだと感じたのかもしれない。或いは、彼女達の行為を責められていると感じたのかもしれない。更なる緊張に身を堅くした少女に対して、教授の方も僕と同じ事を思ったのだろう。明らかに優しい声色で語り掛け直した。

「決して責めている訳では有りませんよ。私は貴方達の行動に理解を示しています。勿論、貴方がたが行ったであろう活動内容にも。しかし、それがドロレスの手によって停止させられた後、その事について貴方と話す機会は無かったでしょう？」

「え、ええ。一度も有りませんでした」

「ですから、この場で少し質問をしてみたいと思うのです。貴方がた生徒がどれだけ本気で訓練に——魔法戦争の為の実践訓練に励んでいたか。それを確認するテストだと、そう言い替えても良いかもしれませんが。……そう堅くなる必要も有りませんよ。普段の授業でしているのと同様、貴方が学んだ事を、教師である私の前で示すだけです」
恐怖より困惑が勝り始めたハーマイオニーを他所に、既に僕には教授の目的とやりたい事が解理解出来たが——まあ、教授が一瞥を向けて来た辺り、今はお前が引っ込んでいろという事だろう。

「解り易く状況設定をしましょうか、グレンジャー」

意識しているのかいないのか。

そこに居たのは既に変身術教授、授業内で見慣れた教師の振舞いだった。

「貴方が闇祓いになったとした上で、彼等を捕えようとしている場面を想定しなさい。余り有り得る場面では無いですが、一対一で向かい合っていると考えて構いません。そして私達の立場上、死喰い人に可能な限り怪我をさせないという条件も付けましょうか。しかし、相手

は当然、殺すつもりで杖を向けて来ます。この場合、貴方はどう行動しますか?」

「え、ええと……」

この場合は教室ではないが、教授が生徒に対して教えるという形を一応取っている。

それにも拘わらずハーマイオニーが質問に窮するのは割と珍しい、というより Hogwarts 生活で初めてなのではないか。僕は音無く笑いながらそのように思った。

「武装解除呪文を使う、でしようか?」

やはり見た事もない自信無きな回答に、教授は小さく頷いて見せた。

「簡単かつ非常に有効な呪文ですね。その後は?」

「あ、後? い、拘束呪文インカーセラスを使って縛り上げるとかでしょうか? 捕らえなければならぬのですから、動けないようにする事が必要でしょう?」

「成程」

ミネルバ・マクゴナガル教授はもう一度頷き、双子の方へと視線を向けた。

「では、ウィーズリー。貴方達も『軍団』の一員で有ったのでしよう? 今のグレンジヤーの回答について何か付け加える事や、自分達だったらこうするという考えは有りますか?」

双子の方も少々面食らった顔をしていたが、それでもハーマイオニーよりは心の準備は出来たらしい。二人で顔を合わせた後、代わる代わる答えを紡いだ。

「アー、失神呪文を使ってやる——掛けるという事ですか?」

「用心の為に更にも更に石化呪文も掛けとくとか」

「そうですね」

やはり表面上は満足そうに、ミネルバ・マクゴナガル教授は頷いた。「私としても、死喰い人の意識を保ったままにはしておきたくないでしょう。一方で、石化呪文を更に掛ける意味は余り無さそうです。拘束呪文と石化呪文、それらの期待出来る効果は然程変わりませんから

ね。全く無意味とは言いませんが」

「えつと。なら、後は姿眩まし防止呪文とかですか？ ……俺達は使えませんが」

「発想としては十分評価出来ます。前回多くの死喰い人が逃げおおせられた理由の一つは、魔法族個人の機動力の高さに有ります。貴方がたなら……クイディッチ・ワールドカップでの体験を、知識として繋げられるかもしれません」

教授の論評は一貫して称賛では有った。

しかし全くの第三者として眺めていた僕には、彼女が抱いていた本心、及び後に続けるであろう言葉が予想出来ていた。

「しかし、です」

案の定だった。

「確かに今の貴方がたの回答に対し、教師として減点する事は一切出来ません。けれども、戦争経験者個人としては、貴方がたの回答に不満を抱きます。下級生相手には流石にこんな事は言いませんが、貴方達の年なら現実を知っておくべきでしょう」

そして教授は何時も以上に厳しく、険しい表情を作って言った。

「私であれば、何処かで服従の呪文を用います」

「——な」

「——え？」

ハーマイオニーは言葉を喪い、彼女の隣に居る双子もそうだった。

そして、そのグリフィンドールの甘さを、僕は愉快さと共に観察していた。

「で、でも先生！ 許されざる呪文は、同族のヒトに掛ける事が許されていません！ い、いえ、確かに前回の戦争での闇祓いには許可されていますが、それでも——」

「——グレンジャー。私は必ず服従の呪文を使えと言っている訳では有りませんよ」

慌てて正論を捲し立て始めた少女に対し、やはり優しい声色で教授は言った。

「そして倫理的・法的に言えば、貴方が全くもって正しい。けれども、

この問いで私が本当に聞きたかったのは、何の呪文を使うのが正解なのかという事ではないのです。貴方なら答えられるでしょう、レッドフィールド」

「……ここで僕に振るのか。」

一瞬で集まった四人の視線を受けつつ、渋々解答を口にする。

「まあ、これは先程の僕達の議論、その延長戦上に有る話でしょうか？」
教師の発言を殆ど一言一句逃さずに覚えていられるハーマイオニーでも、パニックになってしまえば容易に忘却するらしい。非常に自由度の高いように問われた質問では有ったが、流れを踏まえれば答えは完全に限定されていた。

「危険性の評価は個人や社会の価値観により左右され、しかも現実の形次第では、本来危険とされた代物が危険のままに許容される場合がある。非魔法族の自動車、或いは拳銃が良い例で、あれらは文句無しに危険物であろうと、ある場面における卓越した有用性故に許容される。まあ服従の呪文がそれに当たるかは議論の余地が有るにしても、それが実際の“現場”で重宝されただろうというのは容易に想像出来てしまう」

「……相変わらず、貴方は持つて回った言い回しをするわよね」

「僕の性分だが、答えを言ってしまうえば、君の発想には工程が飛んでいる」

栗色の髪を揺らしながら不満を示した少女に、彼女の論理の欠陥を指摘する。

「君は武装解除呪文を挙げた後、次に拘束呪文の発想に飛びついた。しかし、その発想の流れは明らかに、魔法族の杖を非魔法族の銃と同視している。君は忘れているようだが、例えば、魔法族は杖が無かつても魔法を使えるぞ？ 武装解除して杖を取り上げたとしても、君はまだ、敵の死喰い人より有利に立ってはいない」

何なら未だに不利な状況に在ると言っても良く、当然、相手を制圧したり拘束したりする呪文を用いるのは遙か先だ。

「あ……」

「レッドフィールドの言う通りです」

ハーマイオニーは呆然とし、教授は僕の言葉を引き取って続ける。「貴方は入学前、杖無しでも些細な魔法を使えていた筈です。そして戦闘に使えるような強力な呪文で有っても、熟練の魔法戦士なら行使出来る事は珍しくもありません。また、貴方と同じ年であっても、既に専門の訓練を積んでいる者——例えばワガドゥーに起源を持つ魔法使いなら出来ても不思議では有りませんよ」

そこまで説明した後、今度は双子の方に向き直った。

「ウィーズリー。貴方達には別の観点からの指摘をしましょう」

その前置きは、彼等がハーマイオニーの回答に引き摺られた可能性を考慮してか。

「貴方達は愉快な発明品を作っているのだから、魔法使いの武器は杖に限らないと気付くべきでした。魔法薬に魔法道具、魔法動物に魔法植物。それらを自在に扱って戦う闇の魔法使いが稀であり、更に魔法の力を誇りとする死喰い人達が忌避する傾向を持つのは事実ですが、決して居ない訳では有りません。勿論、貴方がたが敵に使ってはならないという法も有りません」

双子達は酷く素直な顔をして、視線を床へと向けていた。

「相手が何を武器とするか解らないまま戦う。それが魔法使いの決闘、いえ殺し合いです。ですから、服従の呪文を掛けて、お前の武器の一切を差し出せ」と命ずるのも、相手を制圧する為の一つの手段と言えます。勿論、極稀に破られる場合は存在しますから、絶対に頼れる手段でも有りません。しかし魔法使いには逮捕行為に際し、マグルと違って動くなやああしろも不要なのです」

悪くない言い回しをするものだ。

そうは思ったが。

「けれども教授自身が認めたように、正しいのはハーマイオニー・グレンジャーだ」

数十年前のミネルバ・マクゴナガル教授の時代、彼女が魔法省に居た時の逮捕手続マニユアルがそうであったとしても、今後もそうあるべきとは限らない。

「これから先、非魔法界の常識が更に流入し、警察——社会正義の執行

者達は、服従の呪文は一切使うべきでないという、甘つちよろい主張が為されるかもしれない。そもその話、教授がその呪文を使うのは前回の魔法法の上でも違法ですしね」

バーテミウス・クラウチ氏が合法化した対象は、あくまで闇祓のみ。

魔法法執行部隊、或いは魔法省の一般職員には行使が許可されていなかったし、当然ながら Hogwartz 教授も含まれていない。

それを踏まえての揺さぶりだったが、流石に自分で言った通り、僕達より長く生きているだけは有る。ミネルバ・マクゴナガル教授は至極平然としていた。

「何の良心の呵責も無く使用する事は、私にも不可能です。……それが有れば使用して良いのかとは言われるでしょうが。しかし、私の立場は明白です。誰かが死ぬ可能性が有るなら、特にその危険が生徒に有るなら、私は躊躇わず呪文を用いるでしょう」

その清々しい厚顔無恥さに、僕は爽快さすら覚えつつ笑った。

「結局、貴方もまた規則破り常習犯グリップフィンドルという訳ですか」

「貴方に言われる筋合いは有りません。貴方は私と同じ手法は用いないでしょう?」

「ええ、勿論」

当然ながら、最も鮮やかな緑の呪文こそを用いるだろう。

今年初頭の十人の脱獄犯にしても、さっさと殺しておけば問題は出なかったのだ。

僕の解答に教授は頬に手を当て溜息を吐いた後、語り掛けるのはやはり、衝撃を受けたまま停止している少女に対してであった。

「……グレンジャー。レッドフィールドは論外中の論外として、貴方が本気で騎士団に入りたいと——戦争に身を投じたいと考えているならば、まず戦場で自分がどうするかを予め考えておかねばなりません。深く考え、対策を講じた上で尚、服従の呪文は自分に一切不要だと胸を張って言うのなら、私はそれを気高いと思います」

「……………」

「けれども、考えた事すらないのなら不十分です。それではまだ戦う

準備が出来ていないと言わざるを得ません。戦場では考える時間など有りませんよ、勿論、迷う時間も。そして……一秒の猶予が有れば、人間は簡単に死んでしまうのです」

多くの死を見て来た者だけが発せられる忠告を残し、教授は言葉を締めくくった。

その後、つうと彼女は視線を滑らせ、中空を見た。

傍目から見えていた限り、やはり何の合図も無かったように見えた。しかし、僕が見逃したのか、そもそも部外者からは見えない代物なのか。教授には何かが伝達されたらしい。彼女は椅子に座ったまま、ロープから再度杖を取り出した上で軽く縦に振った。

そして意図した通りの現象なのだろう。突如として空中に一冊の本が出現し、重力に引かれて落ちる。その途中で教授は本を受け止め、そのまま僕の方へと差し出して来た。

「貴方が希望した品です」

「ありがとうございます」

椅子を軽く回転させつつ立ち上がって教授の方へ近付き、礼を言つて左手で受け取る。そして弄ぶように左右の手を往復させた後、そのまま無造作に開いた。

目的の記述を一つ探す労力は不要だった。無論、過去に読んだという経験も、その一つの理由では有る。しかし大抵法律の初めを見れば制定目的を知れるように、この『純血一族一覽』も初めから数ページ捲ってみれば足りるのだ。

「——さて」

本を片手に教授から離れ、元々座っていた椅子の下へと向かう。歩きながら話を切り出せば、部屋の緊張が一気に高まった事を感じた。

ミネルバ・マクゴナガル教授の方に最後に視線を向ければ、彼女は山積みになっていた羊皮紙に手を伸ばす所だった。こちらを一瞥すらしない。僕の希望と彼女の宣言通り、教授は本当に空気のような存在として振る舞うつもりらしい。

その一方、双子の左隣のハーマイオニーは、緊張に大きく眼を見開き、僕の動作を固唾をもって見守っている。……彼女もまた部外者で

あり、僕としては彼女にも居なくなつて欲しかったのだが、まあ、良
いか。彼女にも弁護人の権利は明らかに無いのだが、この場も厳密な
手続を要求する場ではない。それ位は許容すべきだろう。

「見ての通り、『純血一族一覽』には著者名が書いてない」

彼等は本を開いた事がないどころか、そもそも現物を初めて見る事
だろう。

ソファに座つたままの双子を見下ろしつつ、手に持った書物の表
紙、裏表紙、そして背と、見せてやる。その外観からは、書名以外の
事は伺い知れない。

「中身を読んでも同じだ。著者を推測出来る情報の殆どは、この書籍
から注意深く省かれている。噂によれば出処はノット家だとも言わ
れるが、彼等が沈黙を守っている以上、確定事項として語る事は出来
ない。匿名の誰かが記述した。それ以上の言及は、幾ら可能性が高か
ろうと推論の域を出ない」

正しいかもしれないし、違ふかもしれない。

著者名という真実は曖昧模糊としており、これを理由にノット家を
批難する事など出来はしない。容疑者は犯人ではないからだ。

「しかし、それでも確かに記述されている事は存在する——書物なの
だから当然だが。流石の君達でも知っているだろうが、『間違ひなく
純血の血筋』と呼ばれる二十八家のリストがコレに載っている。だが
当然、僕がこの本を求めた理由はそれを参照する為ではない。アル
ファベットより二つ多いだけだ、何も見ずとも暗唱くらいは容易い」
スリザリン主流派の『純血』は当然として、非主流派のそれ以外で
も可能だろう。

「この本には多くが書かれているが、この場で話題とするのは一つの
記述だ」

開いた本を左手だけで支え、目線を紙面に落とし、本文を右手でな
ぞる。

「つまるところ、書物とは作成目的が無ければ存在し得ない。自動筆
記羽ペンを使うにしても、そこに人間の意識と意識が無いのならば、
勝手に本文が作成される事は有り得ない。『純血一族一覽』も然り。

そして、この著者は簡潔かつ簡明に書物の作成目的、つまり二十八の家をリストアップした意図を本文中に記載している」

彼等の父親や母親は、この本を読んだ事が有るのだろうか。

仮に読んだ事が無いとすれば馬鹿だし、読んだ事が有るなら大馬鹿だ。

「該当箇所をそのまま読み上げようか。匿名の作者はこう言っている。この書物は、非魔法族の血を含まない例として挙げた二十八のようmaintain the purity of their bloodlinesな家系が、『その血統the aim of helping such familiesの純血性を維持する目的』で記したのだと」

そして、この場に居る者達は、頭が空ではないようだった。

息と唾を呑む音が二つ。嗚呼、しかしだ。非常に「親切」なスリザリン生に突き付けられてからでは余りに遅過ぎるのだ。彼等は入学前から知っていて然るべきであったし、だからこそ、彼等の家族の崩壊を止める事も出来なかったのだ。

「要するに、この『純血一族一覧』の存在を認め、内容を全肯定する場合、計二十八の家には一つの縛りが課せられる。わざわざ言わずとも推測し得るであろうが、結婚相手は同じく二十八の中から選ぶべきという縛りだ」

「……………」

「例えばドラコ・マルフォイ」は「グリーングラス」の姉妹の何れかと——別に「パーキンソン」の令嬢でも良いのだが、兎に角、そのような家の女性と、『立派な、すばらしい純血結婚』をする事が宿命付けられている」

まあ実の所、それから外れる事は必ずしも不可能では無い。

しかしながら、それでも両親や親戚一族全々と対立する覚悟が無ければ不可能なのである。

過去のアンドロメダ・ブラックがそうしたように、何も起こらなかったシリウス・ブラックがそうだったかもしれないように。

「ともあれ、この『純血一族一覧』は、そういう意図の下に記された。著者自身が明確にそう言っているのだから。そして君達も良く知る通りに、この本を馬鹿らしいと一蹴してくれた上で、

Most vocally indignant
声高に怒りを示した者達が居たな？」

その一族を何と呼ぶかは挙げるまでもなかった。

この部屋内に居る全員が、その名を知っているからだ。

「彼等の発言は特にスリザリンの大多数を除いた人間、ぎっくり言つてしまえば半純血や非魔法族生まれから、多いに賞賛を受けた。立派だ。素晴らしい。グリフィンドールの鑑だと。嗚呼、我等がスリザリン——現在も尚時代遅れと看做されている純血主義者と異なり、全く差別思想を持たない一族だったな」

そこまで言つて本を閉じ、クルリと逆さまへ回転させた後、彼等の眼前のテーブルに投げ置いてやる。本と衝突したガラスの天板が鈍い音を立てる。それを気にする事もなく、僕は勢い良く彼等の対面への椅子へと座り直した。

座面の低さがやはり窮屈で不愉快だったが、それ以上に目の前の赤毛が、初めて聞かされた事実にも動揺する二つの顔こそが、僕の気分を盛大に害していた。

「では、問おうか。純血主義の寮とされるスリザリンに組分けされた半純血が、反純血主義の寮とされる筈のグリフィンドールに組分けされた生徒に質問する。

——何故『ウィーズリー』が『プルウエット』と結婚しているんだ？」

魔法族至上主義

議論には共通理解が必要だ。

それが無ければ、御互いの言葉は単なる羅列以上に成り得ない。

そして、この魔法界の血の問題を——1930年代以降の純血主義を語る際は、まずこの『純血一族一覽』から、その書物が記された意図から全てを始めなければならぬ。そして、この双子が今更凍り付いてしまっている光景は、今までスリザリンとグリフィンドールが会話出来なかったのを必然と思わせるに十分だった。

……しかし、彼等は『純血一族一覽』を手に取ろうとしない。

わざわざミネルバ・マクゴナガル教授によって図書室から——もしくは、司書の個人蔵書から——取り寄せて貰ったのは、彼等の眼の前に明確に証拠を示してやる為だった。そして、一度開いた本をわざわざ閉じたのは、彼等が自分達で本を捲り、約六十年前に示された哲学に自ら向き合えと言う意思表示のつもりだった。

それにも拘わらず、双子達は僕の顔を呆然と見つめ返すばかり。質問に対する回答を発するどころか、言葉すら発しはしない。

本当に、何時もの活きの良さは何処に行つたのやら。

「——無限に時間が有るといふ訳では無いのだがな？」

その揶揄に二人は漸く我へと返つたようだったが、それでもやはり、彼等の口から言葉は出て来ない。身動きすらしてくれない。

已む無く、溜息を吐いて僕から先を続けた。

「兎も角、『ウィーズリー』と『ブルウェット』。『純血一族一覽』内において、それらの家系は二十八の中に数えられている」

その程度は彼等も聞いた事が有る筈だ。

その程度しか彼等は聞いた事が無いから、こんな事態になつてい

る。

「しかし、その書籍を『ウィーズリー』は馬鹿にした筈だ。それなのに、どうして彼等は書籍の作成目的に忠実に従う行動を取つた？」

グリフィンドールであるアーサー・ウィーズリーは何故、スリザリンであるルシウス・マルフォイ氏と同じ道を歩んでいる？」

この愚かさを、彼等の周りに居たホグワーツ生は誰も指摘しなかったのだろうか。

……嗚呼、指摘されなかつたのだろう。問題意識すら持たなかつたのだろう。

そうでなければ、ウィーズリー兄妹がスリザリンを軽蔑する事など——自分達はスリザリンの魔法族至上主義者とは違うのだと、そんな厚顔無恥な発言が出来る筈も無かつた。

そして彼等は漸く言語能力を取り戻したらしい。

動揺を隠し切れぬままに、捲し立てるように双子達は言った。

「っ。べ、別に、俺達からすれば、その古臭いクソツタレな本なんぞ、最初から信用に値しない。嘘っぱちだらけで、読む価値すら無い。結果的にそれに従うように見えた所で、一方的に批難される筋合いなどない！」

「そ、そもそもウィーズリーもプルウエットも、最初からマグルの血が混じっているんだ。その二つが結婚したとしても問題無い。俺達の御先祖様だつて間違ひなく言つた筈だぞ！ ウィーズリーの一族は多was proud of its ancestral tiesくの興味深いマグルとの多to many interesting Muggles先祖での繋がりを誇りに思つて——」

本当に、彼等は何処まで恥知らずで居られるのか。

最早嘆息すら見せてやる事もせず、下らない反論の核心こそを一突きする。

「——何故、素晴らしいマグルの親戚が現在居る家系と言わなかつた？」

「っ」

先祖での繋がりに。

その表現を聞いた時から僕は気になっていたのだ。

何故、そんな微妙で解釈の余地が広い言い回しをしているのかと。『純血一族一覽』の主張は明快だ。二十八の家には、「マグル」の血が一滴も混ざっていない。これに対する最も明快な反論は当然ながら、今現在、自分達の家系には非魔法族の血縁者がいるという主張だ。それが出来るのであれば、昔の事、先祖の共通を一々持ち出す必要

なんぞ無い。

「自分の叔父叔母が『マグル』だ。自分の甥姪が『マグル』だ。そして何より、自分の選んだ伴侶は他ならぬ『マグル』なのだから——当代以降の子供は永遠に半純血であり、二度と『間違ひなく純血の血筋』という肩書で呼ばれなくなる。そのような反論は最も強力で、かつ『純血一族一覽』の記述内容を大いに虚仮に出来る」

阿呆な人間が阿呆な文章で阿呆な妄言を垂れ流している。

そのように何々と笑い飛ばす事が出来るのであり。

「で、アーサー・ウィーズリーはどうなんだ？」

「————」

眼前の双子を含め、彼等の血筋は違う。

シリウス・ブラックに会う機会が有れば聞いてみたいものだ。

貴方は、間違ひなく純血の血筋と呼ばれる程の名家の御嬢さんと結婚したいと思うのかと。会った事は無いが、伝え聞く人柄から判断する限り、期待通りの言葉を返してくれるに違ひない。

「そもそもだ。真面目な内容の本を執筆しようとする人間は、それが可能な限り『真実らしい』内容のみで構成されるように心掛けるものだ。明らかに真実らしくない事を記してしまえば、その書物の信憑性自体を喪わせてしまうからな。可能な限りは、過ちが含まれないように努力する」

妄想を基にした空想小説ファンタジーを書くなら流石に別だが、著者が学術的な書物を装う気というならば、そんな事はまず望まない。

「嗚呼、そして。これは別に、書籍に『嘘』が含まれていないという事では無い」

誤解されても困るので、予め釘を刺しておく。

如何なる時代の人間も、本の書き手自身ですらも、そんな主張をする者は居まい。

「権力者の圧力によって、嘘を書く事は有るものだ。自分を偉大に見せたい個人的欲望によって、嘘を書く事は有るものだ。また、時間や資料、当時の科学的知識等の制約により、已むを得ず嘘を書いてしまう事も有るものだ。何より、うっかりミスや些細な勘違いによって意

「図せず嘘を書いてしまう事は、非常にまま有るものだ」

だから過去しか語らない書籍を捲る者は、注意して文章を読まねばならない。

文章の紡ぎ手が示す「真実」と、神により観測される客観的「真実」は違うものである。それを念頭に置いた上で、その正誤を判別すべきである。

「具体的に『純血一族一覽』に即して言おうか。まず、普通の「純血」達は、このリストに自分達の家系が載るよう圧力を掛けただろう。だから二十八の中にも、直近で非魔法族の血を取り入れた家系が有る――つまり、「嘘」を含む可能性が有る。更に、「純血」であるにも拘わらず、あのリストに含まれていない家系も有る。まあ、この著作者はそれ以外が「純血」でないとはまでは言っていないので、これは厳密には「嘘」だとは言いがたいのだが」

テーブルの上の本を指で叩いた後、そしてと容赦無く嘲笑う。

「この著作における最も大きな「嘘」とは、言うまでもなく、自分達に「マグル」の血が一滴も流れていないという主張だ」

どう考えても現実的では無い。

その点に関しては、「ウィーズリー」と合意してやっても良い。

「二人目の魔法族が何処から来たのかという問題を除外しても、この地の魔法族につき、殆ど間断なく追跡出来る文献記録は約千年分。しかしその程度の時間でさえ、二十歳前後で結婚し即座に子供を生むとすれば約五十世代。出産を三十歳前後と考えると約三十三代。その時、或る一人の子供の先祖に当たる人間が、果たして一体何人になると思っっている？ 重複を加味しても膨大だ。その全てが非魔法族と結婚するような気の迷いや気紛れを生じさせなかった。そんな事ならぞ考えられない」

シリウス・ブラックのような変わり者が途中で一人でも生まれてしまえば、「純血」の歴史の鎖は容易く切れてしまう。

そして、千年より遙か以前の時代まで含めれば、或いは最初の魔法族が一体何処から来たのかに想像を巡らせてしまえば、非魔法族の血が一切紛れ込んでいないなど有り得ない。魔法族の真なる純血など

虚構でしかない。

「兎も角、『純血一族一覽』内の記述に『嘘』は有り得るとも。嗚呼、それは認める。——しかし、だ、では『ウィーズリー』が『純血』であるとの『嘘』を書く理由は、『純血一族一覽』の作者には存在したのだろうか？ 政治的圧力や、名誉欲や、うっかりミス。典型的な嘘を書く場合に当て嵌まるだろうか？」

現実として、『ポッター』は二十八に含まれていない。

かの一族の中には『ブラック』と結婚した人間……チャールズ・ポッターとドリア・ブラックの例が存在する。そこから判断するに、少なくとも当時のブラック家当主の認識では、『ポッター』は『純血』だったのだろう。

だがそうであったとしても、『純血一族一覽』の筆者にとってみれば疑わしいと考えられた。だから、リストから外した。外す事が可能だった。

ならば、疑問に思うべきだろう。

逆に『ウィーズリー』は何故、二十八の中に含められたのかと。

「……ステファン。そう言った考えの下で書物の——歴史の真贋を判断する事は、必ずや致命的な歪みを生むわ」

「そうだな。君の言う通りだ」

双子の横、正義の少女から発された指摘を、視線も向けないままに肯定する。

「状況証拠の証明力は限定的だ。世の真実を確定はさせない」

客観的証拠や、別の情報源に基づく複数の証拠等により歴史の真贋判定は行われるべきだ。その文章自体を眺めているだけで『真実』が浮かび上がってくる事は有り得ない。

「けれども、今回の『ウィーズリー』に限っては、こう考えざるを得ないだろう?」

寧ろ、これ以外の考え方が有るなら教えを請いたい位だ。

『純血一族一覽』の作者がどんなに調べても、仮に『ウィーズリー』を外したいと考えていても、直近で——例えば、執筆当時生存している三、四世代の内、非魔法族の家族は見当たらなかった。『純血一族一

覧』の信憑性を明らかに疑わせるような、「嘘」の証拠など一切存在しなかった。だから、筆者は「ウィーズリー」をリストの中に含めたのだと」

確かに彼等は「ブラック」を初めとする純血の大勢と血縁関係を持つているが、しかし、直近数十年の間に非魔法族の身内が居さえすれば、リストから外すのは難しい事ではない。ブラック家と結婚した誰々までは純血だったが、しかしその子供以降は純血でないという論法が使えるからだ。過去は「純血」でも現在は違う。そういう事が出来、二十八から除外出来る。

けれども、かの『一覧』の筆者はそうしていない。

その理由は、家系図よりの血筋は明確に「純血」以外の何物でも無かったからと考える以外にない。実際、同じ聖二十八族達にしても、ウィーズリー家を最悪の『血を裏切る者』と呼びはしても、彼等が実は「純血」でないとか、間違つて記載されたのだとは殆ど言わない。

「まあ実の所、ウィーズリー姓の「マグル」は、当時も少数なら居たのかもしれない。が、例えばシリウス・ブラックのような狂人一人が生まれたせいで、その一族の全てが連帯責任で純血性を喪うというのは酷ではないか？ 一人ぐらい「マグル」の血が混ざっている者を迎えていようと、その一族の圧倒的多数が「魔法族」であるというのなら、その一族はもう「純血」と呼ぶべきだ。そのような考えは、然して不合理というものではあるまい」

一族の恥晒しが後世で生まれる可能性は誰だって危惧する。

余りに厳格過ぎる基準なんぞ、スリザリンすらも望みはしまい。

「反証が有るなら提示しても構わんぞ」

ハーマイオニーでは無く、沈黙に回帰してしまった双子へと問い掛ける。

「例えば、君達の直系の御先祖様に当たる「マグル」が居るなら、その個人名を挙げろ。特に百五十年以内の人間ならば申し分が無い。非魔法界の政府が網羅的に記録を取り始めたのがその頃だからな。照会すれば直ぐに解る。まあそれ以前の個人名を挙げた場合でも、各教会に赴いて讞の生えた資料を当たらねば資料が見つかるかもしれない

が

椅子の肘掛に頬杖を突き、薄汚れた壁紙を何となしに眺めつつ言う。

「しかし、それが出来ないと言うのであれば――非魔法族の名無しジョンヤージェンの誰かが先祖に居る筈だと言うだけなら、アーサー・ウィーズリーの家系は明確に、次の『純血一族一覽』でも“純血”として記述される。口では何と言ってようと、彼等は本能に従って『すばらしい純血結婚』をしました。そう書いてやるのが、誠実な文筆家というモノではないか？」

「――待って。次？ 次ってどういう事？」

「近々『純血一族一覽』を改訂する。そんな話が出ているという意味だ」

流星にその問いには、ハーマイオニーの方を向いて答える。

その際、羽ペンが羊皮紙を引っ掻く音は背後から全く聞こえなかった。

「第二版として出るのか、或いは全く別のタイトルの書籍として出るのかは不明だがな。もつとも、近々と言っても、現状ではまだ与太話の類だ。仮に出るとしても最短で数年後、出版が十年後や二十年後でも何の驚きもない」

この地にルーツを持たない半純血に書いてはどうかという話を持ち掛けて来るのは、どう考えても冗談の域を出ない。

「しかしながら、これは突然に湧き出て来た話でも無いのだ。『純血一族一覽』の改訂は、この六十年間、我がスリザリン寮が抱き続けて来た野望でも有るからな」

「どうしてよ？ マルフォイはあんなに自慢気にしているじゃない？ 彼に繋がれている貴方の立場からすれば、余り賛同出来ない動きなんじゃないの？」

「ハーマイオニー。君にしては想像力が足りない。『純血一族一覽』に対して盛大に文句を言ったのはな、ウィーズリー家だけでは無い。寧ろ、この書物を非常に熱心に批難してくれたのは、このリストの中に名を載せられなかった家系なのだ」

寧ろ、"ウィーズリー"のような変わり者より、
Meanwhile, a larger number of families were protesting
はるかに多くの人間達が『一覽』の
that they were not on the pure-blood list
リストに含まれない事に抗議したのが実情だ。

この書籍の背後に在る思想を考えれば必然である。

多くの家系にとつて、リストに含まれない事は家の名誉以上に、家の存続に関わる事態だと深刻に受け止められたからだ。"ウィーズリー"のような頭が御花畑の一族と、更に科学的真実を追求しようとする極々少数の賢明な魔法族しか、コレには反対する事が出来なかった。

『純血一族一覽』を最も崇めているのは確かにスリザリンだ。しかし、あの悪書を歴史から抹消してやりたいと最も強く思っているのもまた、スリザリンだ。アルバス・ダンブルドア前校長を筆頭に、愚かなグリフィンドール達はその事を忘れている」

だから、あの書籍の改訂版を出すべきだとか、"真に正しい"リストを別個出版するとか、その手の話がスリザリンから出ない筈がなかった。

そして、それが叶わなかったのは、『純血一族一覽』の後追いをした書籍の出来がどれも劣悪だったというのも有るが——この書籍の根底に存在する思想を理解しなければ、他人が読むには苦痛な自画自賛の家史にしなければならないのだ——次を作る上で最も邪魔になったのは、まあ言うまでもなく、一人の桁外れの魔人が原因であろう。

一滴の血の掬を徹底してしまえば彼の怒りを買うのではないかと、そう恐れたのだ。

「そして結局の所、問題はアースー・ウィーズリー達なのだ」

気怠さを拭い切れぬまま、反論を出さない双子へと視線だけ戻し、話を先に進める。

「フランク・ロングボトムが"純血"同士で結婚してようが、或いは将来的にドラコ・マルフォイやアーネスト・マクミランが同じ道を進む事になるうが、正直言って余り関心のある事では無い。純血主義の信奉者がそうするのは、僕達半純血にとって愉快ではないものの、仕方ないと思う部分も有る。非魔法界でも変わらんようだ。王族や侯爵

様など、御偉い人間が俗世と違う生き方をするのは良く有る事のように見える」

生まれ持ったの特権階級共を恨んでも仕方が無い。

人間は何処の場所に生まれるか、誰の子として生まれるかによって世界の立ち位置、上下が決まる。それはどうにもならないと、そんな諦めが心の何処かに有るのだから。

「しかし、『ウィーズリー』だけは違う」

人の感情というのは不思議だ。

最初からの敵よりも、後からの裏切者をより強く憎悪してしまう。

「彼等はスリザリンの純血主義なんぞ愚かしいと宣い、自らに流れる『マグル』の血の誇りを訴えた筈だ。『純血一族一覽』を盛大に馬鹿にしてくれた筈だ。つまりは、『その血統の純血性を維持する目的』なんぞ無意味で、混血には何の問題も無いから安心しろと宣ってみせた筈なのだ」

サラザール・スリザリンをホグワーツから追放した、ゴドリック・グリフィンドールの寮に所属する人間なのだ。

「ならば、その家系の人間達は当然に非魔法族生まれや半純血の味方であり、この古臭い魔法界を改革してくれる希望の星となるべき筈で——しかし、その血を引いて生まれた筈のアーサー・ウィーズリーは、モリー・ブルウエット」と結婚した」

『純血一族一覽』の執筆意図に合致するように、聖二十八族同士が内輪で血を繋ぐ。

時代遅れとされた筈の因習を、それを大々的に否定した筈の血筋が踏襲する。

「——なあ、舐めているのか?」

「……………」

「君達はそんなにも僕達を馬鹿にしたいのか?」

自ら血を裏切らなかつた者達を、どうして僕達に許せと言うのか。

「嗚呼、君達の両親が結婚した時期も酷いものだ」

彼等は、僕達を時系列も理解出来ない馬鹿だと思っているのだろうか。

「僕は今夏マルフォイ家に居たから、君達の両親が結婚した時期を正確に掴めなかった。ナルシツサ・マルフォイ夫人の機嫌は進んで損ねたくないからな。しかし、『そこいらじゅうで駆け落ち』が起こった頃だと言うくらいは把握出来た」

彼等の長男、グリフィン・ドール監督生にして首席でもあったウイリアム・ウイーズリーの年齢を加味すれば、ウイーズリー夫妻が如何なる時期に結婚したかを把握するには十分だった。

「では、その駆け落ちが起こったのは何故か」

天井を仰ぎ見、彼等の愚かさこそを唾棄する。

バーテミウス・クラウチ氏は、あの最も貴族らしい矜持を有していた旧臭い男は、かの二人の結婚を耳にした時、一体何を思ったのだろうか。今となつては絶対に尋ねようがないが、それでも直接本心を聞いてみたかったものだ。

「つまるところ、彼等が自分達の将来を憐んだからだ。今直ぐ結婚しておかないと自分達が死んでしまうという危機感や切迫感が有ったからだ。純血主義を唱えた闇の陣営が力を増し、政情不安が蔓延る中で、十年後や二十年後には生きてられないかもしれないと考えたから、彼等は家の制止を振り切つての駆け落ちに及んだのだ」

スリザリンですらも変わりない。

というより、スリザリンの方が酷い。

派手に血を裏切つた人間は流石に稀ではあるものの、家系図を丹念に見て行くと、力関係上これは有り得ないだろうという婚姻が散見される。何処もかしこも恋愛結婚や拙速な結婚に走つたのは明白で、そしてそれも已むを得ない事ではあつた。

何故なら当時の彼はトム・マールヴォロ・リドル、或いはヴォルデモート卿に過ぎず、『例のあの人』では無かつたからだ。光の陣営の側の人間は、ただ一人の大魔法使いを除き、彼の力を理解して居なかつたからだ。ただスリザリンを中心とする一部だけが彼の脅威を真に理解していたからこそ、『純血』の若者達は駆け落ちに走つたのだ。

「では、ウイーズリー。ここで君達の想像力を試そうか」

視線を戻し。

ただ二人にのみ語り掛ける。

「アーサー・ウィーズリーは闇の時代がいよいよ訪れる頃にプルウェットと結婚し、そして最終的に魔法戦争を乗り越えた。プルウェット兄弟は惨殺されたが、君達の家は違う。君達の両親は五体満足で生き残る事が出来た。また、戦争中に多くの子宝にも恵まれた。ウィリアムもチャールズもパーシーもフレッドもジョージもロナルドも、すすすくと元気に育っていた」

彼等の一家に、致命的な悲しみが降り掛かる事は無かった。

「これを踏まえた上で、君達が非魔法族生まれの人間であつたと仮定しようか。当然、「ハーマイオニー・グレンジャーと同じ立場『穢れた血』として死喰い人達の抹殺対象となる。考えてみる。そのような立場の人間だつた場合、君達はアーサー・ウィーズリーの一家に近付きたいと思うか？ 嗚呼、戦争中や戦争後を問わない。同じ寮を卒業した者として、或いはかつて友人関係に在つた者として、改めて君達の一家と友好を深めたいと思うだろうか？」

視界の端から大きく息を呑む音——何か言葉が発される兆候が聞こえたが、そこから待つたとしても、それ以上は何も聞こえやしなかつた。

しかし、双子の意識を逸らすには十分で、尚且つ、彼等は何かを見てしまつたらしい。彼等の顔は強い衝撃を受けたように大きく歪んでいて、けれども僕は、そちらの方に一切視線を向けなかつた。

単純に、絶対に視線を向けなくなつたからだ。

「……仕方ない。はつきりと言つてみせようか」

注目を再度集める為、溜息の後で改めて口を開く。

本当に、グリフィンボールは何処まで自己中心的で、そして愚か者だということか。

「君達の両親は命惜しさに純血結婚をし、闇の帝王に媚び諂ひ、かつて同じ寮だつたグリフィンボールの人間達の情報を売つていた。だから、幼い子供が死んだり人狼化したり廃人化する世界の地獄の中、アーサー・ウィーズリーの一家は誰一人として欠ける事なく、後遺症も負わず、めでたしめでたしの形で戦争を終えられた。戦争後の半純

血や非魔法族生まれ達はな、君達一家を見てそう考えたから離れて行ったのだ」

故に、アーサー・ウィーズリーは「マグル」に無知のままだった。あの男達がしてしまった背信行為を思えば、彼に対して正しい非魔法界の知識を懇切丁寧に教えてくれる人間など、彼が元グリフィンドールだろうが——寧ろ彼が元グリフィンドールだったからこそ、決して現れる筈が無いのだ。

「……………は？」

彼等が理解に至るのは、今回は酷く遅かった。

しかし、僕の皮肉の意味を理解した後は、二つの顔はみるみるうちに真っ赤に染まった。そして部屋に響き渡る怒声。怒声と表現したのは、そうせざるを得なかったのは、二人の別々の反論が干渉して聞き取れなかったからだ。そして聞き分ける意味も見出せなかった。

彼等が疲れて息と言葉を切らせた後、僕は漸く、そして淡々と問うた。

「何故、君達はそうも自信を持つて違うと断言出来る？」

「っ。何故って……………！ お前に、スリザリンのクソ野郎に、一体親父や御袋の何が解る！」

「そうだ！ 俺達の両親は、そんな人間じゃない！」

「僕に解らないように、君達にも解らないだろうに」

盲目的な怒りから抜け出せない二人には失笑を返すしかない。

「戦争が終わった1981年当時、君達は二歳か三歳だろう？ そんな君達がどうして両親の行動を——彼等が光の陣営で戦ったと弁護出来る？」

彼等は当時を見ておらず、証人の資格はない。

「もつと単刀直入に聞いてやろうか。なあ、『ウィーズリー』？」

感情で容易く理性を喪う相手だと、話を進めるのに苦勞するものだ。

「君達の叔父で有るギデオン・プルウェットとフェアビアン・プルウェットは、不死鳥の騎士団として血を流した。これは僕も認める歴史的事実で、ならばだ。君達は両親がかって不死鳥の騎士団の一員だ

「……聞いた事が有るのか？」

「……」
とうとう、静かになった。

その手の話を、僕はアルバス・ダンブルドア本人から聞いた事が無いし、噂ですらも耳にした事は無い。勿論、僕が聞いた事が無いというのは歴史的事実と違うという事でも無いのだが、しかし残念な事に、僕はアルバス・ダンブルドアという存在を良く知っている。

『純血一族一覽』を堂々と否定した一族の男児。騎士団長閣下の御膝元であるグリフィン・ドール生。また、あのアルバス・ダンブルドア前校長の在学時期にもウィーズリー家の人間は、教授か生徒の中に居た筈だろうか？ つまり、彼と君達一族の親交は有ったに違いない」

「ウィーズリー」は古く、血脈も多い。

彼等と全く没交渉のまま魔法界で生きる事の方が難しい。

「そして君の父親が何時から魔法省に勤務しているか知らんが、当ても魔法省役人だったと言うなら情報源としての価値は有る。ともあれ、普通に考えれば、騎士団長閣下が君の父親を勧誘しない理由が有るだろうか？」

本来であれば、無い筈なのだ。

不死鳥の騎士団と死喰い人の戦力比は、明らかに後者の方が上回っていた。

それはアルバス・ダンブルドアすら認める現実で、ならば可能な限り多く、信頼出来る人間達を集めない道理が何処に在ろう？ スリザリンと相容れない「グリフィン・ドール」であれば、勧誘するのが普通ではないか。

「まあ、君達が父親をグリフィン・ドール失格だと——戦争が始まったのに、ずっと逃げ隠れをしていた臆病者だと見ているなら構わないがね。嗚呼、いや。そちらの方が良いのか。僕が指摘しているのは、君達の両親が死喰い人の協力者だったのではという指摘なのだから」

「……オヤジは、マルフォイと違って裁判になんか掛けられてない」「何の反論にもならんよ」

裁判は決して、真実を映し出す鏡では無い。

「僕は初めから闇の協力者だったと言っている。要は死喰い人ではない、単なる小悪党に過ぎなかったと言う指摘だ。そしてその程度なら、バーテミウス・クラウチ氏にとって多くの“純血”の犯罪者共と同様、政治力学上見逃す方が楽な相手だ。更に裁判を持ち出すなら、ルシウス・マルフォイ氏は正規の手続を経て無罪となっている」

「水掛け論を続ける気は無いから、今僕が求めるモノを言おう。彼が騎士団員だったというアルバス・ダンブルドアの証言。或いは、騎士団員達と映っている写真等の物的証拠。それも、今ここに持つて来いとは言わんさ。君達が聞いた、或いは見たと証言するだけで構わない。それで、どちらなんだ？」

彼等が嘘を吐く可能性も考慮していたし、同時に見破れるだろうという自信も有った。けれども彼等は、この期に及んで偽りを述べる気は無いようだった。

最初から、そうすれば良かっただろうにと思ったが……嗚呼、違うのか。彼等の視線を追ってみれば、黙り込んだ理由が僕の横にこそ在るのは明らかだった。

つまり、この部屋内で唯一魔法戦争時代を生きていた者。アーサー・ウィーズリーを擁護し得るかもしれない現在騎士団員であろう人間に、彼等は問うていた。

「——僕が聞くべき事でないと言うのなら、少しばかり外に出ていきましょうか？」

「それでは貴方が回答を知り得ないでしょう。そもそもウィーズリー達の反応を見れば、貴方は真実を見抜く事が可能な筈ですから、ここに至って無意味な事はしません。貴方ならば悪用する事は無いと信じても居ます」

双子達の方向を見たまま放った問いに、後から返って来たのは堂々とした教授の答え。

「……そして、ウィーズリー……フレッドとジョージ」

しかし、その言葉にだけは、教師らしからぬ弱さが含まれていた。「残念ながら、私はそれに対する回答を持ちません。私は前回、魔法省

の側に立って働いていたのです。当時の『騎士団は魔法省に反乱分子とみなされていました』から。もつとも、今も変わらないと言っても良いでしょうけれど」

「へえ。非常に意外な話ですね」

初めて聞く教授の告白は、僕にそれなりの驚きを齎した。

「あの前校長からは、貴方達の親しさが数十年来のモノであると聞いていましたし、第一次の際も当然騎士団側だと思っていたのですが」「私には魔法省の友人達……更には後の夫も居ましたからね。そして、貴方が良く理解する通り、アルバスは立場の混同をしません。勿論、私も。だから私達が教授と教え子、教授と教授、もしくは校長と教授の関係だったとしても、戦争に関する話は御互い一切口にしませんでした」

ですから、かつての騎士団の内情は良く知りません。

やはり弱い弱いその言葉は、僕では無く双子達に向けられ——けれども、それだけで終わりもしなかったのは、流石ミネルバ・マクゴナル教授だった。

「しかし、レッドフィールド。そもそも貴方は、ウィーズリー夫妻が闇の陣営に居たなどとは信じて居ないのでしょ？ それなのに、相手を傷付ける為だけに都合良く違う立場を取るの、全く褒められたものでは有りません」

「——良く御分かりで。その可能性は殆ど零だと思っっていますよ」

厳格さを取り戻した指摘を、依然として双子に向き合ったままに肯定する。

だが認めてやった割に、二人は余り嬉しそうな表情を見せなかった。

「ルシウス・マルフォイ氏と余り話す機会は無かったが、ナルシッサ・マルフォイ夫人と話す機会は割と有ったからな。彼女の反応を伺う限り、『ウィーズリー』が闇の帝王に与していたという事も無さそう。それでも彼女の知らない所で君達の両親が関わっていた可能性は有るが、個人的な感覚としては無視して良いのではないかと思う」

また、トム・マールヴォロ・リドルの日記帳の件も有る。

スリザリンの仲間であつたのならば、ルシウス・マルフォイ氏はジネブラ・ウィーズリーを嵌めようと——秘密の部屋を開ける鍵だと、そう御主人様から言われた道具を渡しはしまい。単に派閥を異にする人間達を貶める道具にしては、余りに劇物過ぎるからだ。

ただし、と付け加える。

「少なくとも、第一次魔法戦争中、アルバス・ダンブルドアはアーサー・ウィーズリーを相当強い疑いの眼で見っていた。それは断言しても良い」

「——」

「至極当然の理屈だろうか？」

寧ろそうでないなら、あの秘密と猜疑の男らしくもない。

「シリウス・ブラックが——スリザリンの半分以上が意外に思ったらしい男の裏切りすら、現実のモノとして受け止めざるを得なかった時代だぞ？ 騎士団にしる魔法省にしる、内通者と裏切者、そして服従の呪文の対象者で溢れていた。心の底から信用出来ると思う相手すら信じられない時代だつたと聞いている」

今日信じた相手が、明日信じられなくなる事が平気で起こっていた。

「そして純血主義を掲げる帝王の台頭期に純血結婚しやがった夫婦なぞで、グリフィンドールので在ろうと努力している老魔法使いからすれば、一切の信頼に値しない。万一騎士団の協力者としては認めたとしても、騎士団内部に入れて重宝する事は絶対に有り得なかつたと僕は確信している。勿論、彼が素直にそんな理由を吐いたとは思えんが」

しかし、アーサー・ウィーズリー達を擁護する者は騎士団に居なかつたのだろうか。

“ウィーズリー”の男児は、別にアーサー・ウィーズリーだけではない。そして魔法族は長命の傾向にあり、また杖を取って戦うのみが戦争に役立つ道では無い。だから、かつての時代に一人くらいはウィーズリー姓が騎士団に居ても可笑しくないし、騎士団長閣下に夫妻の無実を直訴していそうなものだと思つたのだが——この双子の

様子を見る限りでは、そのような事例は存在しなかったらしい。

もつとも、その辺りをここでは指摘しなかった。

少なくとも、あの騎士団長閣下は、『プルウエット』の方は受け容れていた。駆け落ちしたモリー・ウィーズリーと、彼等の兄弟の關係にしても僕は良く知らない。僕の考えの及ばない、深い理由が有るのかもしれない。

「……でも、今のダンブルドア先生は、おじさん達を全く疑っていない筈よ」

「それはそうだ。でなければ、彼はハリー・ポッターを預けはしない」その点は恐らくハーマイオニーが正しい。

戦後の十数年間の観察期間が有ったし、純血結婚をしたという一点の理由以外には、アーサー・ウィーズリー達が闇の陣営側である事を疑う証拠も無かった筈である。

何よりあの老人は、ハリー・ポッターの他人を見る眼を信じているのだろう。

最早アーサー・ウィーズリーに疑いを掛ける事は一切あるまい。

「オヤジは——」

「……………」

その言葉でハーマイオニーから視線を外し、再度双子の方へと戻す。

「——オヤジは、本気でマグルに愛着を持つてるし、敬意を抱いてる。確かに知識は足りないのかもしれないけれど、少なくともお前達と違う。スリザリンみたいな差別主義者と一緒にするな。マグル保護法を作るのだから努力したし、穢れた……ナントカなんて侮辱的な罵倒は死んでもしない」

掠れた声で、双子の片割れが言った。

入れ替わるように、もう一方の片割れが同じく掠れた言葉を継ぐ。「そうだ。オフクロとの結婚にしてもだ。オヤジが誰と結婚しようとおヤジの勝手だし、他人にゴチャゴチャ言われる筋合いなんぞ無い。純血とマグルが平等って事は、両者を区別しない事なんじゃないのか？　つまり純血同士で結婚したって差別主義者になる訳じゃない」

「第一、お前は『純血一族一覽』が正しいという前提で話を進めてるよ
うに見える。俺達はそれを否定したウィーズリーなんだ。その本を
前提にオヤジ達を批難するのは筋が違う。クソつたれなスリザリン
らしい詭弁だ」

「お前達の唱える純血主義に俺達は賛同したりしない。決して、断じ
て……！」

「……だ、そうだが？」

彼等の言い分を黙って聞いてやった後、その横、非魔法界育ちの賢
い少女に問う。

「……都合良く話を振らないで。貴方の立場からすれば、私は存
在しない筈よ」

「嗚呼、すまないな」

顔を顰めたハーマイオニーに、謝罪の言葉を口にする。

もつとも、それが彼女に誠実なものとして聞こえたかは、自分です
ら怪しいと思った。

「差別主義者は、魔法族至上主義者は果たしてどちらの方が。非魔法
族から学びを得なかったのは、果たして何れの方だったのか。それを
確認する最も手っ取り早い手段だったから、ついやってしまった。今
後は二度としないと約束しよう」

そう宣言するも、ハーマイオニーは返答すらしなかった。

彼女は座ったまま身を縮こまらせており、そして双子も気付いたら
しい。ハーマイオニー・グレンジャーは今回、具体的な反論を一切し
なかつた事に。

そもそも、彼女は今まで多くの事に口出ししなかった。『純血一族
一覽』に関わる話についても、そもそもアーサー・ウィーズリー達に
近付きたいと思うかという問いに関してすらも。

彼等の肩を持つ発言を、しないままで居る。

「まあ、出て来るとは思っていたのだ。予想よりは遥かに遅かったが
な。別に純血主義者だから『純血』同士で結婚した訳では無く、偶々
好意を抱いた相手が『純血』に過ぎなかった。そんな、僕達を——持
たざる人間達を馬鹿にし切った主張が」

一体何故、僕が『純血一族一覽』から始めたのか。その事に対して理解を示さない主張だ。

「確かに、一見その主張には理が有るように見える。非魔法界において、祖父母や親戚に白人しか居ない、或いは黒人しか居ない。これを理由にその家系が差別主義者と看做される事はまず有り得ないからな。しかし、だ。ここは魔法界だ。魔法の、特別の力が現実に存在する世界なのだ。単純に同一視出来ない事など一目瞭然だろうに」

純血・半純血・非魔法族生まれ・スクイブ。

それは明確に、人種とは異なる。

「理解出来なかったようだから説明してやるが、僕はアーサー・ウィーズリー達の両親——つまり、君達の祖父母や曾祖父母達の純血結婚を一切問題視していない。君達の両親の結婚にしても、それが『純血一族一覽』以前、スリザリンが純血性の維持の必要を改めて強調する以前の事件ならば、最初から言及などしなかったとも」

双子の等しく蒼白な顔を眺めつつ、僕は唇を舐める。

「まあ、セプティマス・ウィーズリー、ケンドラ・ブラックと純血結婚してくれた人間あたりは、『純血一族一覽』が世に出る以前だったかは怪しいがな。——女は純血趣味に走ってしまうのはやはり血筋なのか？」

別に良いが、と嘆息する。

「ともあれ知識というモノは、本が出版されて直ぐに受容される訳ではない。その知識への反対派が生まれ、議論や論争が生まれるのも当然だ。ましてこの書物の裏に在る思想が何処由来かを思えば、当時の関係者全てが無知であり、または知っていながら軽んじたとしても、その責を負わせるのは不当と言うものだろう」

他のスリザリンが何と言おうとも、少なくとも僕は問題視しない。彼等まで結婚すべきではなかった、或いは遡及的に子供の血は断たれるべきだった。そんな非人道的な主張など決してしない。

「けれども、君達の両親だけは別だ。アーサー・ウィーズリーの出生。そして、モリー・プルウエットとの結婚。それらは『純血一族一覽』が世に出てから数十年が経過している。その頃にはまず間違いなく、か

の思想が魔法界にも広く知られていた筈なのだ」

知らなかったという事は有り得ない。有ってはならない。

彼等の青年期には既にスクイブ権利運動——1960年代の非魔法界、公民権運動の影響を明らかに受けた事件が起こっている。魔法界への“マグル”の思想の流入と対立が存在していた事は明らかにしている。ましてグリフィンドル、非魔法界育ちの魔法族が珍しくない寮なら、求めれば当然に知識を得られた筈なのだから。

嘲笑すら浮かんで来ないのを自覚しつつ、今度は少女に視線を向けずに言う。

「ハーマイオニー。気分が悪くなったのなら立ち去って構わないぞ」

彼女の行動を、僕は魔法で縛っている訳では無い。

「或いは、君達が出て行っても構わない。その場合はハーマイオニーが留まる意味も無くなるし、この場から僕も解放される。パーシー・ウィーズリーが離反した理由についても、既に十分な材料は提供し終わっている。獅子らしくも無く尻尾を巻いて逃げる気なら好きにすれば良い」

少し本気で促してみるが、全員身動きする気配すら感じとれなかった。

息を潜めたままに、静かに僕の一言一句、一挙手一投足に注目していた。

「……はあ。アーサー・ウィーズリー達がルシウス・マルフォイ氏達より差別主義者だ。そんな事を言うつもりは無い。君達の両親の善性も欠片も否定しない。単に彼等は無知で、魔法界の名家の人間としての責任を果たさなかっただけで——けれども、今回これは致命的だった」

アーサー・ウィーズリー達は白眼視され、見放された。

非魔法族や半純血達は、あの魔法族至上主義者に近づく事は無くなった。グレンジャー夫妻に、第一次魔法戦争の事を知らず、彼等の罪もまた知らない“マグル”が現れるまで、彼等は無知のままである事を余儀なくされた。

「君達のアーサー・ウィーズリーを擁護する主張は、百年前であれば十分だった。しかし、今は違う。普段非魔法族の肩を持っているか、彼等が生み出した科学技術を崇めているかどうかなどは、この問題において然程関係無い。何せ君達の両親を批難するのは、その結婚と出産を咎める理由は、非魔法界の中にこそ有るのだから」

嗚呼、と。

彼等の表情を見て嘲笑う。

「そうだ。今の『純血主義』は、我等が偉大なる始祖、サラザール・スリザリンが唱えた代物とは違う。彼のその系譜に在る事は間違いないが、方向性が同一であるだけで、彼の千年前の思想をそのまま受容している訳では無い」

スリザリンは確かに歩みを進めたのだ。

『純血一族一覽』の著者は、オッターリン・ギャンボル魔法大臣と同様の事をやった。当時の非魔法界において進歩と同義で有った『科学』の叡智を、スリザリンが既に掲げていた純血主義と統合し、魔法界へと改めて導入した」

アーサー・ウィーズリーを初めとする怠慢な一族、魔法界の将来に関心を持たなかった者と違う。非魔法界と同様に魔法界でも社会の退廃が進行しているかのように見えたからこそ、かの著者は熱意と共に『純血一族一覽』を記述した。

「だからこそ、この本は十八世紀でも十九世紀でもなく、二十世紀に生まれたのだ。だからこそ、酷い欺瞞だと感じていて尚、非魔法族の血は一滴も混ぜ込むなという主張を展開したのだ。だからこそ——非魔法界の時代の潮流に適合していたからこそ、以前の個人的な政治宣言や、外部に余り流出しない代々の家系図と違い、『純血一族一覽』は魔法界に広く衝撃を与える悪書にまで至ったのだ」

そして、純血主義とは遠い場所に居た『ウィーズリー』も存在を知った。

純粋な魔法族である彼等では真に脅威を理解出来ずとも、彼等の周りに居た人間が——非魔法界に近い半純血や非魔法族生まれが騒いでくれただろう。時代はまさに1930年代、ハーケンクロイツが

世の「改善」の為に忙しくしていた頃の事である。『純血一族一覽』は最終的に大勢の死を産むだろうと、目端の利く者達であれば容易に気付けたのだ。

……まあ、非常に皮肉な事に、彼等の予測は外れている。

当時の知識人達が予測した地獄は、この魔法界には訪れなかった。それを止めてみせたのは、今世紀で最も偉大と呼ばれた魔法使いでは勿論無い。

一人の闇の魔法使いが『純血一族一覽』の哲学を力で曲げてくれたからこそ、魔法界での殺戮と迫害は非常に限定された範囲に留まっている。

『純血一族一覽』。この書の裏に在る非魔法界の思想を、eugenics 優生学と
言う」

魔法の世界の外から持ち込まれたその思想こそが、サラザール・スリザリンより続く旧き哲学を最も強化し、スリザリンの純血主義への拘りを一層強くした。

「この思想の原始的発露は古くから存在する。何なら、人類の誕生時から存在していたと言っても良いだろう。しかし、この思想が世界を揺るがす程の力を持ち始めたのは、1859年、チャールズ・ダーウィンの『種の起源』が世に出て以降の事だ。嗚呼、そして。何よりも忘れてはならない1900年。その年こそが、大きな転換点だ」

それは、非魔法界の生物学を学べば絶対に突き当たる事実。

「グレゴール・ヨハン・メンデル。一人の敬虔な司祭の研究が再発見され、それを最高に悪用してくれた理論が「科学」の名で語られ始めた時、人類史においても最上級の悪夢——ヒトの進化と適者生存を唱える、新時代の魔女狩りの歴史が産声を上げたのだ」

人間の問題

※ 今話・次話は、生命倫理の論点に多少立ち入る為に御注意下さい。無理だと思つた場合、読み進める事を断念するのは何の問題もありません。

「遺伝の根底に在る法則は如何なるモノか。それは古代よりの難題だつた」

突然話題転換がされたとても思つたのか、双子は面食らつた顔をして、彼等の横、知識の有るハーマイオニー・グレンジャーの方を見た。しかし、双子の反応を見る限り、彼等の期待する反応を彼女は見せなかつたようだつた。

そして、僕は彼等の反応を気に留める事もなく、己が義務としての説明を続けた。

「もつと噛み砕いて言うならば、親の特徴は、どういう形と法則の下で子孫に継承されるかという事だ。そしてこの問題が人々に意識されるようになったのは、恐らくは多分に実利的な要請だ。つまりは家畜や植物の品種改良——家畜の卵や乳がより多く取れるように、或いは植物の実や種がより多く取れるようにするという目的が有つたのだ」
この世界で、鋭い爪も牙も持たぬ種族が生きる為、過去の者達は知恵を振り絞つていた。

「長い歴史の中での経験則で、人間はそれらを代々の交配によって操作し得ると知つていた。詳しい法則までは解らなくとも、優秀な動物や植物同士を交配させれば、子も優秀になる事が多いと理解していた。……嗚呼、なる事が多い。これが非常に重要な点だ」

優秀な雌雄を交配させても、優秀にならない場合も有つた。そういう意味である。

「故に、生物の根底を貫く遺伝法則を解明出来たのならば、もつと楽に品種改良が進むという発想が出たのは必然だつた。……更に噛み砕くか？ 何故、多くの乳を出す家畜同士を掛け合わせても余り乳を出さない家畜が生まれたり、或いは両親と似つかわしくない花の色や葉

の形をした植物が生まれたりするのか。その理屈を知りたいと考えたのだ」

科学の徒は、遙か古代の時代から居た。

彼等は理屈に合わない眼前の現象を、どうにか理屈で説明出来ないかと挑んだのだ。

「その謎の解明の為、多種多様な実験がなされ、また偉大な学者達が大いに頭を悩ませて来た。そして二千年近くを費やしても尚確たる答えが出たという訳では無かったが、割合支持を集められた理論は、今では便宜上融合説と呼ばれている理論——交配の際には水を混ぜた時と同様の事が起こっているという考えだ」

一応、それをメンデル以前の通説と断言してまで良いかは微妙な線だ。

そもそも彼以前の遺伝学を真剣に語るとすれば、前成説や後成説、自然発生説にジャン・バティスト・ラマルクの用不用説等々の歴史を避ける事は出来ない。その上、融合説の中でも学派や派生が色々存在する——その中で一番有名なのはチャールズ・ダーウインの理論だろう——のだが、まあ今は良いだろう。中高生の科学を学んでいない魔法族に理解出来るとは思えないし、ここは過度に学問的正しさを求める場所でも無い。

「この考えは、君達兄弟を観察するのが非常に解り易い」

トロール並の魔法族でも容易く理解出来る理屈だ。

「君達は、母と父のどちらか一方にしか似ていないという事は無く、その両方と似ているだろう？ その一方で、同じ男兄弟でも違いを持ち、言わずもがな父親とも同一ではない。融合説はこれを水の融合、配合比の違いから生じるものと見る」

異物が混ざり合う事を認める。

だから融合説。

「比喩として、君達の父親を青色の水、母親を黄色の水だとしようか。そして彼等から産まれる子供が1000mlの水から出来るとして、一人は580mlの青色と420mlの黄色、また或る一人は530mlの青色と470mlの黄色の配合で出来たとする。この場合同

じ緑色が出来るにしても、一つ目と二つ目の間には濃淡の差異が生まれる。だから同じ夫妻から男兄弟でも差異が生じても——君達双子の違いも可笑しくない。また君達に妹が生まれたのも、母親側の黄色の分量が500m^{過半}より多くなつたから女性として生まれたのだ。そう説明出来る」

非常に単純かつ明快。

そして何より、一番重要な事が有る。

「この説は、人間の観察に一応合致してくれるのだ。親や兄弟、親戚。人為的に交配させたカーネーションやチューリップ、牛や豚やサラブレッド。周りを見る限りにおいて水の喩えは直感的に正しいように見える。この理屈を百年前の人間が、そして魔法族が信じたとしても、それを非科学的で、無知な発想だと笑う事は出来ない」

二つの世界は繋がっている。

そして魔法界にも薬草学……自然現象に挑む体系的学問が有り、遺伝法則も経験的に察していただろう。その仮説が知られて居なかつた、或いは辿り着かなかつた事は有り得まい。

「さて、魔法族における遺伝の関心は、特に“ヒト”の遺伝に限定すれば——言うまでもない。何故、魔法族の子供に“スクイブ”が生まれるのかだ」

魔法力の有無という点で親に似ない子供が何故生まれるのかという問題だ。

「そして先の融合説を用いれば、“スクイブ”の誕生について一応尤もらしい説明が付けられる。例えば、僕は魔法族の父と非魔法族の母の下に誕生した半純血で、尚且つ魔法が使える。これは魔法族の血を赤とし、非魔法族の血を白とすれば、赤が濃く出たと見る。一方で、白の方が濃く出れば魔法が使えず、“スクイブ”と呼ばれる無魔法力者になる。非常に単純明快だな」

長年の歴史の試練を受けただけ合つて、やはり解りやすい理屈だ。

「更に、融合説の説明には、一つの利点がある。先の喩えに従えば、半純血である僕は濃いピンク色の血を持っている。これに魔法族の血を、つまり赤色を加えれば？ 当然、赤に近付く。逆も然り。僕と逆

の薄いピンクの「スクイブ」でも、赤色の水を加えれば、やはり赤に近づく。要するに、混じり者という生まれはどうにもならなくとも、育った後での結婚によつて魔法族の血を濃くする事が出来るのだ」

半純血、或いはスクイブ。

そのような烙印を生まれながらに押された者達への救いとなつた。「そして、僕達のような存在が魔法界に定着すれば、他の魔法族からの認識も変わっていく事になる。三代も続けば——祖父母八人が魔法族ならば、それはもう殆ど赤色であり、純血と呼ぶべきだ。その考えが生まれても可笑しくないな」

過去のスリザリンは、その理屈を一応受け容れたのだろう。そこで言葉を切り、しかし、と改めて見る。

この場に居るのが凡百の hogwarts 生ならば、感情に任せられた阿呆な反論が返つて来ている所と思うのだが、この双子はそうしなかつた。それどころか、瞳の中に恐怖が段々と渦巻いてきた辺り、やはり多少頭は回るらしい。

「……嗚呼、その通り。今のスリザリンは決してこの理屈で動いていないし、君達も気付いている通り、融合説には致命的な欠点がある。「スクイブ」の子が生まれるのは、魔法族と「マグル」の夫婦の下だけでは無い」

結局、魔法族は融合説を真に信じてなど居なかつたのだろう。

それを否定する決定的で、致命的な証拠が、彼等の社会内に散見されたのだから。

「夫婦両方が魔法力を有する魔法族で有つても、「スクイブ」は生まれ得る」

赤と赤を混ぜ合わせても、白が生まれる。

「——水の喩えは、理屈に合わない」

「理屈に合わないと考えたのは、非魔法界でも同じだった」

植物でも動物でも、そして人間でさえも、両親に似ていないモノが

生まれ得る。

全体として似ていると評価出来ても、部分的に見れば——動植物では産卵量や収穫量、寒暖への耐性等、人間で言えば髪や瞳、爪の形や肌の色等々——両親の何れとも違う特徴を持った子供が生まれたりする。世界を観察してみれば、そんな「例外」が有り触れていた。

これが融合説では説明出来なかったから、二千年間以上、遺伝を巡る議論は紛糾した。

「特に、融合説を最も苦しめた痛快な反論は、世界の多様性に関する疑問だった」

明快な理論を叩き潰すのは、やはり明快な理論だった。

「融合説は、水に喩えられると言った。その前提の下では、遺伝とは、混合によって変化し、かつ以降は分離出来ない現象として説明される。しかし、それを何回も繰り返したらどうなる？ 赤、青、黄、緑、紫、橙等々。様々な色の水を幾度と無く混ぜ合わせれば……各々の分量を変え、加える順番を幾ら入れ替えたとしても、行き着く果ては濃淡が違うだけの灰色だ。つまり、終末の世界においては、この世のありとあらゆる存在が灰色に収束していなければ——何処の場所でも似たようなモノが観測されなければならない」

融合説の下では、最終的な世界の均一化は不可避である。

「更に、この世界が紀元前4004年に……魔法族の君達には、約6000年前と言ったら良いのか？ その程度の最近に世界が出来たなら、各地に鮮やかな色は残るかもしれない。赤と青が混ざれば大変化が生じるが、赤と赤、或いは赤と橙が混ざるのなら大きく色が変わる事はないしな。だから世界の——人間の多様性は、三千回程度の混合なら耐えられるかもしれない」

だが。

「チャールズ・ライエル以降に多数生まれた斉一説論者が唱えたように、もしこの世界が数千万年、数億年も続いていたとするならば？

大陸が七に割れている事を踏まえても、数千万回に至る混合の反復が行われてしまえば、その後で鮮やかな色が残るとは考えられない。ましてカール・フォン・リンネの分類体系を踏襲し、人間と猿を同列に

置くならば、他の動植物全てに同じ事が言えなければならぬ。それなのにどうして、この星の生きとし生けるモノ全てが、未だ多様性を保ったままで居られているのか」

この世界は、目の眩む程に色鮮やかなままだ。

その理由は、果たして何故なのか。

「そのような謎を説明しうる科学的理屈を用意した初めての——少なくとも、そう世間的に承認されている——人物。それが、先に挙げたグレゴール・ヨハン・メンデルだ」

ほんの百年足らず前。

一人の敬虔な神学の徒より、現代遺伝子学の歴史は始まる。

「彼にも物語ドラマが有るのだが、その辺りは後からハーマイオニーに聞か、自分で調べるが良い。そして、別に彼が居なければ何も始まらなかった訳でも無い。彼の研究が取り上げられた原因は、あくまで再発見だったからな。同じ研究をやっていた人間達が掘り返したに過ぎず、仮に彼が歴史に存在しなかったとしても、人類の進歩は停滞などしない。とは言え、彼の偉大さは欠片も喪われんが」

メンデル以前にも同種の研究を行った先達は居た。

しかし、彼の名前が科学史に燦然と刻まれているのは、単に最初の時代にやったからでなく、その研究手法と分析考察が非常に科学的であったからである。

「彼の理論の根幹はこういうものだ。生物は二つで一對の因子ファクターを有しており、交配が行われる際、子供は自身の両親からその一對の内の一つをそれぞれ、独立かつ完全に受け継ぐというものだ。その因子とは一定の情報を記述した生物の設計図であり——後世において遺伝子と呼ばれる。……とは言え、生物学の知識が無い魔法族にごちゃごちや説明するのも混乱を招くだけか」

ウィーズリーの双子が段々混乱しつつあると感じた後、非魔法界の教師は生徒にどうやって説明しているのかと思いつきながら、説明を変える。

杖を取り出し、軽く振って、四つの球を宙に浮かべさせた。

赤が二つと白が二つ。そして、両者は別個の組になっている。

「理論の根拠や証拠ではなく、理論に基づく喩えだけをここでは述べよう。メンデルが発見した法則の下では、純系の赤い花と白い花を交配させた場合、ピンク色の花が必ずしも生まれる訳ではないと考える。子供は両親から赤と白の因子を受け継ぐ事になるが、特にその両者に強弱関係が有る場合には一方の性質だけが現れる。つまり、赤色の花が生まれる事は有るのだと説明する」

杖を振って、赤一組から一つ取り出し、白一組からも一つ取り出す。そして二つの球をくっ付けさせると共に、赤色を強調する為、その輝きを強くしてやった。

Law of Dominance
顕性の法則——第三法則の良くある説明だ。

「重要なのは、ここからだ。これによって出来た子供、赤と白の要素を受け継いでいる赤色の花同士を更に交配させたらどうなる？」

更に杖を振り、二つで一組とした球を二組、計四個の球を中空に出現させる。

しかし、今度の組み合わせは、どちらも最初から赤白の組み合わせだ。

「それらの子供——全体で見れば孫——は両親から一對の内どちらか一方を受け継ぐ。したがって、まず母親からは、赤を受け継ぐ場合と、白の場合を受け継ぐ場合の二通りがある。父親の場合も全く同じだ。赤か白のどちらか一方だけを受け継ぐ。だから二通り。そして母と父から受け取った因子を併せ、一對の要素を構築する」

減数分裂も発見されていない時代に良くもまあ考えたものだと思う。

「つまり子の配合パターン、一對の組み合わせは赤赤・赤白・白赤・白の計四通り。そして今回の赤と白には強弱が有るのだから、赤赤・赤白・白赤のパターンは全て赤色の花になる。白白だけが、全四通りの内の一通りだけが白色の花になる。そして、これは赤色の花の両親からも、白色の花が生まれる場合を説明する。同時にまた、赤色の花が数世代に渡って生まれていながら、突然白色の花が生まれる理由も明快に説明出来る」

球の組み合わせの四パターンを宙に用意した上で、更にサービスと

して、その下に三つの赤色と一つの白色のエンドウマメの花を用意してやった。無駄に器用ね、とハーマイオニーが言ったが、僕はそれに対して何も答えなかった。彼女も応答を求めた訳では無かろう。

ともあれ、メンデルの法則の下では、潜性遺伝子を両親の何れもが保有し尚且つ子がそれを二つとも継承したならば、子供が両親とは違う表現型を発現する事も有り得る。そのような理屈が付けられるようになった。

「……いまいち良く解らないが、そんな理屈がマグルの世界で本当に有るのか？」

「この場には、『マグル』知識の間違いを訂正してくれる人間が居るだろう？ 彼女が僕と共謀して嘘を吐くような人間でないというのも、君達は五年間で良く知っている筈だが」

そう促してみたものの、双子達は彼女の方を確認しようともしなかった。

その後、三人の誰も言葉を発する事は無かった。

「そして『ウィーズリー』。解らないか？ これを単純に魔法族へ当て嵌めるとどうなる？」

「……………え？」

その質問に彼等は暫し停止した後、

「……………」

殆ど同時に顔色を変えてくれた。問いの真意に気付いた証だった。

しかし本来、アーサー・ウィーズリー達の結婚を知った時にしておくべき反応だった。

「先程、僕は魔法族を赤色と喩え、非魔法族を白色に喩えた。先のメンデルの理論を非常に安易な形で適用するならば、僕は赤と白の要素を両親から受け継いだ赤色だ。嗚呼、そうだ。見た目は赤色だ——魔法族を使う——が、白色を隠し持っている。つまり、赤赤の魔法族と結婚する場合は確実に赤色が生まれ得る一方、赤白の魔法族と結婚すれば、或いは白白の非魔法族と結婚してしまえば、僕の子供として白白の人間——魔法族を使えない『スクイブ』が確率によつて生まれ得る事になってしまう」

確実に生まれれないというのは、果たして神による救済なのか、それとも罰なのか。

「そして先程、僕は融合説が半純血や「スクイブ」にとつて救いだつたとも言った。しかし、この法則は逆だ。メンデルの遺伝法則は彼等を、僕達を奈落の底に落とす。何故なら半端な血の持ち主達は、選択と行動によって血を濃くする——魔法族を結婚相手とすれば後天的に子供の血を改善出来るという理屈を使えなくなってしまふからだ」

過去の時代では、スクイブと魔法族の結婚に何の躊躇も無かった。多くはないが、それでも良心に溢れた「純血」なら、その程度の幹旋をしてやった。魔法力を持つ側も余り疑問を持たずに受けた。たとえスクイブを通じてだろうと、魔法界の名家と繋がれるなら利益があるからだ。彼等に貸しを与えられる機会というのは、殆ど無いからだ。

しかし魔法族の大多数が気付いたのは、果たして何処の時点からだろう。

やはり1960年代の後半、スクイブ権利運動の頃には気付いていたのではなからうか。

「僕は永遠に赤白で、君達のような赤赤の真の「純血」とは別種である。「スクイブ」なんぞは白白だから、魔法族と結婚しない限り、彼等の子孫からは永遠に魔法族は生まれえない。そして、半純血同士の子供、或いはスクイブと魔法族の子供が奇跡的に赤色で生まれても、その人間は赤白であるから、孫や曾孫の世代で白白が——「スクイブ」が生まれ得る危険性が出てしまう。要するに、赤赤の魔法族は、白を一つでも持った相手との結婚するのは何の利点も無い。昔と違い、非魔法族との混血化は避けるべきという哲学が導かれる」

なあ、と笑い掛ける。

「1930年代に『純血一族一覽』が記され、「純血」結婚が至上とされた理由も解るだろう？ 一族の婚姻に影響を及ぼしかねない白色を家系図から必死に抹消する気持ちも解るだろう？ そして何より、新参者である魔法族の一家が、君達の存在に対して憎悪を向ける事も、理解出来るようになったのではないか？」

現在の「純血」主義の原点はそこに在る。

非魔法族に対して親和性を持ったのは蛇である。断じて、獅子ではない。

だからスリザリンは必然のように純血主義へのめり込んだ。非魔法族が「科学」で人種差別を行うようになったように、魔法族もまた同様の道を進んだのだ。

そうして、暫くの間、部屋内では沈黙が続いた。

僕としては話を終えたつもりも無かったが、彼等が初めて直面する筈の問題であるから、整理する程度の時間は与える気だった。また、この場には第三者、それも非魔法界育ちの優等生、ハーマイオニー・グレンジャーが居る。故に彼女が最初に静寂を破る事になるのだらうと予期していたのだが、意外な事に、それを破ったのはウィーズリーだった。

「……そ、それが魔法族に当て嵌まる理屈は何処に有る？」

「――ほう？」

単に感情的な反発ならば、今まで通り一蹴してやるつもりだった。

しかし、どうやら違うらしい。左側の片割れの瞳には理知的な輝きが有り、何時もとは比べ物にならないものの、その全身には自信と活力が確かに戻っていた。

「お前の理屈は可笑しい……！ その理屈が正しいとしたら、何処かに赤が混じっていないと魔法族は生まれない。つまり、全てが白色のマグル達からはマグル生まれ、魔法を使える人間が生まれるなんて有り得ない……！」

「そ、そうだ。良く良く考えたら、その話じゃハーマイオニーの存在を説明出来ない。水の喩えと同じく理屈に合わない。じゃあ、間違っていると考えるべきなんじゃないのか！」

「当然、スリザリンの純血主義なんて正当化出来やしない！ やっぱりお前は自慢気に知識をひけらかす事で相手を煙に巻く、薄汚い詐欺師じゃないか！」

「真面目に聞いていた俺達が馬鹿だった！ ああ、全く馬鹿馬鹿しい

時間を過ごし——」

「——成程、僕は見縊っていたようだ」

素直な称賛を口にすれば、どういふ訳か双子はピタリと罵倒を止めた。

褒めてやったと言うのに、相変わらず、喜びの代わりに彼等の表情に浮かんだのは恐怖である。割と心外な反応だった。この称賛に限っては、間違いなく本心だというのに。

彼等は今漸く六十年前の魔法族に追い付き、そして僕と議論する出発点へと立った。

「君達は素晴らしく本質を掴んでいる」

杖を振り、今度は白い球の集団を二組、計四つ出現させる。

そこから一つずつ取り出し、新たな組を作っても、最初の白い球の集団から変わらない。杖を何度なく振り、その試行を幾度繰り返すとも同じ。何処かの工程で酷く不思議な事マジカルが起こらない限り、白白の組が赤の球を含む事は有り得ない。

「先の理屈の適用には、”マグル生まれ”の存在が立ちはだかる。そしてまあ、正当化自体は然程難しくもないし、しかもその正当化の為の理屈は幾つも用意出来るのだろう。しかし……それを提示するだけでは何とも芸がない。君達は当然として、僕もまた遺伝学を正確に修めた訳では無い以上、ここで学問的議論を行う事は不可能だからな」

何処まで行っても、建設的な議論にはなりはしない。

「だから、その辺りの面倒の一切を省いて、途中の過程を尽く飛ばし、誰にとっても解りやすく話を進めるとしよう。今君達が提示した質問、この純血主義の理論が間違っているのではないかという指摘に対しては、端的にこう答えてやろう」

頭の出来が悪く、科学的手法を欠片も知らぬ、世に蔓延る凡人らしく行こうではないか。

再度杖を振り、全ての球を消し去った上で宣言する。

「今までの僕の言葉が正しい証拠？ そんなモノは全く存在しない」

結局、明快さこそが世の正義であり、真理なのだから。

双子達が愕然としているのは、僕が全てを引つ繰り返したように思ったからだろう。

けれども、僕は何も引つ繰り返してなどいない。現在を必死に生きるしかない無知な僕達は、ここから、未知と不可解から全てを始めなければならぬ。

「メンデル遺伝学が魔法族に適用されない可能性。それは間違いなく有る」

非魔法族と魔法族を同種としても、受け容れられない理屈では無い。

遺伝学は未だに発展途上、それも、スタートラインから少し進んだだけの学問でしかない。それを魔法の世界に適用するなど、気軽に為せる行いではない。

「何もかも証拠が無い。仮説を立てる事すら覚束ない。魔法力をどう捉えるかという点からまず紛糾する。魔法力の有無を左右する顕性の魔法遺伝子というのが存在するのか。或いは逆に、潜性の魔法遺伝子として存在するのか。はたまた魔法の使用能力を喪わせる顕性のマグル遺伝子が存在するのか。もしくは、複数の魔法関連遺伝子が存在し、それを継承した人間の保有率が一定の閾値を超えれば魔法を使えるようになるのか」

どれも一長一短で、同時に真実らしくも聞こえる。

魔法遺伝子ないしマグル遺伝子を顕性と見れば、魔法族の子供に魔法族が多い理由——言い替えばスクイブが少数である理由——を容易に説明出来る。それに対して魔法遺伝子を潜性と見れば、魔法族が非魔法族と比較して圧倒的少数派である事を容易に説明出来る。

複数の魔法関連遺伝子が存在するという発想だって、遺伝子型と表現型が必ずしも一対一に対応する訳ではないという法理、メンデル的な単一遺伝子疾患よりも多因子疾患の方が遥かに多いという観察か

らは、何の不自然さも抱かせない。

その何れの立場に立とうとも、現代遺伝学は魔法界の遺伝を説明可能とするだろう。

「先に述べた顕性の法則にしても、そこに例外の存在、つまり赤色と白色の花の交配によって、ピンク色の花が生まれる場合はあると認める。まして単純な一つの魔法遺伝子に基づく顕性潜性の法則が成り立たないようだというのは、現在の魔法族の数、マグル生まれとスクイブの数を基とした統計的分析をすれば——もつとも、僕は概算したに過ぎないが——明白なのだ」

何より、と。

双子達に言葉を差し挟ませる隙を許さず続ける。

「魔法の力を科学の俎上に乗せて良いのか解らん。魔法が遺伝子以外の要素によつて子孫に継承されている可能性、それこそ今の非魔法界で間違いだとされているジュエミュール説の方が正しいとも限らない。そしてさながらダークマターのように、現在の科学技術では観測出来ないか、最初から観測不可能な物質であるという可能性もまた有る。非魔法界流の科学的証明をしようとする事自体が無意味なのかもしれない」

「じゃあ——」

「けれども確かな事は、間違いだと証明されてもいないという事だ」

この魔法界の何処にも、他に遺伝を説明する理屈は存在しない。必然だった。

ホグワーツでは、半純血やマグル生まれ、マグルやスクイブの差別が表向き禁じられているからだ。あの大魔法使いが徹底的に禁忌としてしまっているからだ。関心を持つ契機自体がないのならば——特に、非魔法界育ちの生徒に知る機会が与えられないならば、研究が進む道理は無い。

ましてこの主題は、人類の神秘に纏わる事項、この世の最後まで残っているような問題である。非魔法界の数十万人が己の人生数十年間を捧げて研究している難題を、世の魔法族が片手間に解けるなどという事は断じて有り得ない。

「つまり、正しい可能性は十分に残っている。非魔法族の血を一滴も含まない結婚など現実的には不可能だろう。しかし、“スクイブ”の子供を産む確率を見かけの上で低下させられるよう、たとえば三親等以内の親戚全てが魔法族である人間と結婚すべきである。たとえば配偶者が魔法を使えようとも、直近に“マグル”の血縁者を持つ者——特に字句通りの半純血とは、出来る限り結婚を回避すべきである。それが“科学的”な帰結で有るという主張も、否定する事が出来ない」

両親や親戚にヴィーラが居ても小鬼が居ても巨人が居ても水中人が居てもケンタウロスが居ても、たとえドラゴンが居ようとも構わない。それらは等しく魔法界に内包される魔法的存在で在って、しかし唯一“マグル”を——“スクイブ”の誕生に直結する非魔法的存在を一族の血に混ぜ込む事だけは許されない。

そんな“純血主義”が正しい可能性は、未だ残存している。

「僕達は正義でないかもしれない。だが君達もまた、自分達が正義だとは証明していない」

「……っ。詭弁だ！ 誤魔化しだ！ 俺達はそんな——」

「——なあ。」

君達は間違っているかもしれない程度の理論に、己の人生を賭けられるのか？」

鋭く風の抜けるような、息を呑む音が二つした。

二十世紀始めの非魔法族は、当時の人間なりに賢明だった。

けれども、遺伝学が光を当てた負の側面、それが齎す集団恐慌に耐えられなかった。

嗚呼、国家や政治家が支援し、そういう風潮を創ったという側面は間違いなく有るだろう。しかし、僕は思うのだ。あの地獄を創り出したのは、自分の家族に“悲劇的事件”が降り掛かる事を恐れた、真つ当な善の心を持つ、普通の親達によるものではなかったかと。

「メンデルの法則はな、親に似ていない子供が生まれるのは、決して不自然ではないし例外的ですら無い——その事を示したに過ぎない」

そもそも君達は全ての前提を忘れていると嘲笑する。

「親は子供に似る可能性が高い。これこそが、実世界の観測から求められる基本法理だ。両親が赤毛の場合と片親だけが赤毛の場合、子供が赤毛で生まれてくる確率は、前者の方が遥かに高いのだ。両親共に高身長である子供の方が、片親だけが高身長である子供よりも、背が高くなる傾向が確かに存在するのだ」

「幾らでも少数派は見付けられても、あくまでそれは少数派にしかない。観察の上では、親から子への遺伝現象は非常に大きな支配力を持っているのだ。」

「であれば、片親しか魔法使いでない子供は、両親が魔法使いである子供より魔法力を持たないで生まれる可能性は高くなるのではないかしら——スリザリンが抱き続けて来たこの懸念を、非魔法界の科学を知らない君達は、一体如何なる理屈で否定してくれるのだ？」

魔法でも良い。科学でも良い。

何故、自分の家系は百年後も魔法族のままだという考えを持てるのか。

魔法力の遺伝は非魔法力の遺伝に打ち勝つ——非魔法が魔法に勝つ事など絶対に有り得ないという、明らかに選民的で驕り高ぶった思想を、一体どうしてグリフィンドール共は抱いていられるのか。その根拠と理屈が真剣に知りたいものだ。

「魔法族の子は魔法族である事が多いのは、メンデルが示した顕性遺伝性に基づく三対一の確率に加え、今のhogwartsが魔法族の集団外との任意交配を低減させているから。つまり、単純に数値に偏りが出ているに過ぎない。だから非魔法族との結婚は無魔法力者の誕生確率を上げるもので、やはり遺伝上害悪である。この仮説に対し、君達は一体どういう理屈で反論して来る？ ここを打ち砕けない限り、非魔法族と魔法族の婚姻は忌避されるべきという主張は決して消えない」

嗚呼、本当にhogwartsは、かの四人は素晴らしく偉大だ。

思春期の魔法族の少年少女を大々的に集めた上で、限られた範囲での自由恋愛擬きを許可し、種族としての遺伝子プールを維持する為の箱庭。魔法族・非魔法族間の婚姻を明示的に禁止せずとも、異種族間での婚姻を事実上不可能とする悪魔の階級装置。こう考えれば千年

前にスリザリン寮が破壊されなかった、もしくは当時のスリザリン生が離反しなかったのも酷く納得が行くではないか。

やはり魔法族は忘れてはならない。

彼等四人の対立点是非魔法族生まれをホグワーツに入れるかどうかであり、魔法力の無い非魔法族をホグワーツに入学させるかどうかなどは議論自体が存在しなかったのだと。あの博愛主義気取りのアルバス・ダンブルドア前校長でさえ、それを認める気は一切無かった。「更に君達は誤解しているが、理屈が正しいか否かは現状、本質的な問題では無い」

これは魔法の問題でも無い。科学の問題ですらない。

何処まで行っても、あくまで人間の問題でしかないのだ。

「新しい魔法族から古い魔法族へと質問しよう。君達は、自分の子供に“スクイブ”が生まれたとしても、彼等を立派な人間……ヒトとして育て上げられる自信が有るのか？」

その素朴かつ核心的な疑問に、今度こそ双子達は大きく身体を震わせた。

「非魔法界は魔法界と何もかもが違う。学校への選択や通学手段、怪我や病気の場合の対処法。非魔法界の政府への申請手続き、身分証明の方法。通貨の使い方に移動手段、極めつけは、一年に掛かる生活費。それらをどう準備すれば良いか、果たして君達は知っているのか？」

「……………」

「また、国際機密保持法の縛りが有る以上、“スクイブ”の子供には魔法界の口留めをせねばならない。彼等の親として非魔法界に出るなら恥ずかしくない恰好や振舞いを学ぶ必要が有るし、今の君達の家是非魔法族の友人を呼ぶなんぞ論外だ。要するに、“スクイブ”を産んでしまえば最後、君達の人生はこれまでと一変する」

今までのように、魔法族らしい魔法族のままでは居られない。

「それを理解して尚、君達は、魔法力を持たない子が生まれる可能性は然程変わらないかもしれない程度の根拠で、非魔法族と魔法族間での結婚を推進してくれると言うのか？」

答えは無かった。非常に残念極まりなかった。

この非魔法界に無知な者達が答えてくれたなら、僕は素直に怒りを覚える事が出来たからだ。

「君達は生まれながらに魔法界に住んでいる。また、グリフィンドール生でも有る。だから、ネビル・ロングボトムの『美談』を聞いた事が無いという事は有り得ないだろう？」

言葉も無いらしい二人へと、自分ですら実体を掴めぬ感情と共に問い掛ける。

「そして当然それはスリザリン……同じ『純血』達も耳にしていたし、僕はドラコ・マルフォイから知った。その話によると、ネビル・ロングボトムは親戚達から長らく『スクイブ』だと考えられていたらしいな？ 故に橋から突き落とされるなどの危機的状況に置かれ続け、しかし最終的に二階からうっかり落とされた際に運良く魔法力を発現してみせたのだと」

もし彼が本当に魔法力を持っていなければ、下手すれば死んでいた。

だが両親や親戚にとって、子供が泣き喚き、暴れ、大騒ぎして抵抗しようと、愛の名の下に躍起になって存在を否定しようとする者達が『スクイブ』である。だからこそ、子供が魔法力を発現させた際、魔法族は子供の二度目の生誕を大々的に祝うのであって——逆に魔法力を発現させない場合、子供は彼等の誰からも祝福される事は無い。

落胆と嘆息しか、その子供には寄越されない。

「自分達の子供に『スクイブ』が生まれたとして、その生き物を愛せるか。その質問に対し、絶対に不可能だと答えるのが、過去と現在のスリザリンの結論だ」

それこそが問題の根源。僕が『純血主義』を肯定する理由。

それが間違っていると今後証明してくれるならば一向に構わない。しかし現状では答えが出ていなくて、万一純血主義仮説の方が正しかった場合に取返しが付かなくて、だからこそ僕は次善として肯定する。

そしてこれは、アルバス・ダンブルドアには理解し得ず、解決も出来ない理由でもある。

所詮、子供を持たなかった人間が言える綺麗事だ。誰も口にせずとも内心では殆どが思ってしまうから、この問題について、彼は全く影響力を行使し得ない。

「ドラコ・マルフォイは必然として、僕ですらも、他人がそれを是とする事を論破出来るとは考えられん。魔法力の使えない子供など断じて我が子ではない。産まれて欲しくなんぞ無いし、万一産まれたなら眼の届かない所で自ら死を選んで欲しい。その理屈——否、酷く感情的な叫びは、僕ですらも真正面から否定し得ない」

「……お、俺達は、スクイブを殺そうなんて思っちゃいない！ マグル生まれを手当たり次第殺す『あの人』とは違う。お前みたいに死喰い人を有難がつているクソ野郎とは違う……！」

「でも、君達は我が子に無魔法力者が生まれた場合、どう対応すれば良いか知らないのだろうか？ 非魔法族の一般的家庭がどのように暮らしているかを、全く知ろうとしなかったのだろうか？ グリフィンドール共が全く同じだと主張している筈の無魔法力者が、しかし自分の結婚相手の腹から産まれてくる事なんぞ、君達はこれまでの人生で一度も考えた事すら無いのだろうか？」

「——」

「だからグリフィンドールは、百年前の化石なのだよ」

偶々運の悪かった魔法族の両親の下に“スクイブ”が生まれる。

未だにそんな考えで生きているから、平気で非魔法界について無知で居られる。

表現型として魔法を発現している両親が、しかし何らの非魔法的要素を遺伝子型として保因しており、それが子供に継承された上で表現型として発現した結果が“スクイブ”なのかもしれない——魔法族の夫婦の下には確率上誰にでも起こり得る、何の珍しくもない現象だと考えていたのなら、非魔法界に無知のままに居る事は断じて有り得ないのだ。

嗚呼、勿論、魔法界にも“スクイブ”を救う組織は有る。

例えば Society for the Support of Squibs クイブ支援協会がそれだが、しかし、彼等

は、“スクイブ”の子供やその家族達に対し、わざわざ通貨の数え方

や電話の掛け方から懇切丁寧に教えてやらなければならないのだろうか。幾ら彼等が「スクイブの子供達に不幸になって欲しくない」という善意の下に動いていたとしても、その余りに悲惨な一般的魔法族の知識を見て、自分達の活動に対し徒労感と無力感を抱かないと思っているのだろうか。

「——もつとも、君達が『隠れ穴』で「スクイブ」を一生飼殺しにする気なら関係無いが」

ダイアゴン横丁で悪戯店を経営するより余程大変そうだな、と軽い調子で呼び掛ける。

前時代の魔法界では、実際それが行われていた。そして、慈悲深い行いとすら言えた。魔法界においては、十一歳前後の子供の事故死や病死が良くあつたようだから。

「……そ、そんな事になつたら何とかしてみせる……！俺達はそんな薄情な人間と結婚しないし、家族の絆はその程度で壊れる筈が無い……！」

「べ、別にマグルの知識なら、必要になつてからでも遅くないだろう？

子供の為なら頑張ってみせるさ……！ 家族みんなで助け合つてやっけて行ける……！」

「その主張に対する反論材料は無いし——まあ、この問題の根は更に深く、家族関係自体を破壊し得るものなのだが——今は置いておこうか。君達の理解が及ぶとも思えんしな」

この程度の話は所詮序論、魔法界の将来を語る上での触りに過ぎない。

しかし、彼等の思考が割と一杯一杯なのは見て取れている。非魔法界の科学の発展が産もうとしている、更なる地獄の未来は受け止められまい。

「ならば別視点、それ以前の想像しやすい話をしよう。君達の結婚相手の選択肢が狭まり得る事について。この視点こそが、君達にとって最も現実的な問題だ」

そして第三者がアーサー・ウィーズリーへの評価を決する焦点でもある。

「君達は遺憾な事に、二十八の家に数えられる程の『純血』だ。そしてアーサー・ウィーズリーもモリー・プルウエットも、愚かな事に地位を放棄しなかった」

彼等の代で永久に断っておくべきだった——『純血』を配偶者にするとしても、せめて二十八の外から選ぶべきだったのに、自分達が良ければ良かった彼等はそうしなかった。

「仮に君達が『マグル』と結婚した結果、『スクイブ』の息子や娘が生まれてみる。その『スクイブ』の子供は、魔法界の知識が現在の水準のままであった場合、確実に、親である君達に向かって罵倒するだろう。『お前がマグルと結婚したせいで、自分は魔法を使えない出来損ないとして生まれたのだ』と」

「————」

「しかも厄介なのはな、先程示した通り、メンデルの法則は隔世遺伝の原理を理論的に説明した。……これも多分に誤解を招く用語な気がするがな。兎も角、『純血』と『マグル』との子供が無事に——幸運な事に息子や娘が魔法族として産まれても、その孫や曾孫が『スクイブ』として産まれる事、つまり非魔法的要素が継承される事を肯定する。この法則は肯定してしまうのだ」

魔法力の有無が遺伝子によって決されると考える限りは、その理論を何処かで否定する理屈を用意出来なければ、『純血主義』は無くならない。他の混ざり者である半純血達も、過去は変えられずとも、自分達以降は魔法族同士の婚姻を尊ぶ事だろう。

さて、と。

僕から最大限距離を取ろうとし始めた双子に微笑み掛ける。

「これを理解して尚、君達は、せっかく先祖が維持してくれた『純血』の遺伝子を汚染しようとするのか？ 君達は子孫に批難される危険を負担出来るというのか？ 『マグル』の女性達に結婚を申し込まれたとして、彼女達が単に『マグル』であるという理由で、君達はその申し出を拒絶しないで居られるのか？」

——この悪魔の理論が間違っている可能性に、君達は一度きりの人生を賭けられるのか？」

その恐怖に挑む夫婦が産まれたとして、彼等の親や親戚達そして魔法族の社会は、彼等を白い目で見ずに居られるのだろうか。他ならぬ非魔法族達は、魔法族の態度を差別的だと糾弾しないままで居られるのだろうか。

「そして何故、そんなにも恐れる？ 何故、恥じるような心持ちになっている？」

そんな反応をする必要は、論理の上では欠片も無い。

「別にな、この手の問題は魔法界に限った事では無い。非魔法界でも一緒だ。まあ、魔法界のソレとは多少違うがな。それでも根源の感情は変わらない。少なくとも、僕にとつては」

そこまで言い切り、少しだけ息を多く吸った。

この先を口にするには、僕ですら多少の覚悟が必要だった。

「要するに、非常に気の進まない、嫌な言い方をすれば、『生まれ損ない』が増えて欲しくないと考えるのは何処の世界も一緒だという事だ。『マグル』共は人類史が始まって以来『浄化』を続けて来たし、勿論、ニユルンベルクの断罪が終わった後も変わらなかつた。ハーケンクロイツの絶滅作戦は単に遣り過ぎただけだとして、国家政策の多くは殆ど維持された」

異人種間結婚禁止、犯罪者や障害者の断種。大規模隔離政策。同意無き拉致と強制収容・教育による民族浄化。程度の差異は有れど、国の先進後進問わず何処でもやっていた。東西南北を問わない欧州、アフリカ、南北アメリカ、ユーラシア、オーストラリア、中東、アジア、世界の全て。その潮流が変わり始めたのはほんの二、三十年程前で、今は道半ばだ。

非魔法界の一部はラポート法の後進性を笑うかもしれないが、そのような人間は、合衆国で異人種間結婚禁止の違憲判決が西暦何年に出されたのかわからない。

「そして国家政策が放棄された後は、今度は個人がその『浄化』を継承し始めた。国家が自由意思を奪って強制するのは許されないが、ならば家庭内の自由意思の下でなら許されるとな。だから、非魔法族も理解してくれるとも。魔法界と非魔法界、その二つの世界を選べる権

利を子に与えたい——そう親が望むのは仕方ない。アーサー・ウィーズリー達や、将来の君達が「純血」結婚を選択したとしても、理解する事くらいは出来る」と

魔法族は杖と科学を扱えるが、非魔法族は科学しか扱えない。

制御に多少苦勞する事を除けば、魔法力を持つている人間が損する事は殆ど無い。魔法族は電話を使えるし、車や電車にも乗れるし、プレイステーションでだって遊ぶ事が出来る。

ならば、魔法族の両親が魔法族の子供を強く望み、一方でスクイブの子を忌み嫌い、非魔法界の孤児院に捨て、最悪の場合には殺そうとするのも必然ではないか。そんな思考過程は、実際に魔法力を持たない「マグル」や「スクイブ」達にすら理屈として理解出来て——勿論、内容に賛同するかは全く別の話だ——しまう。

故に、遺伝法則の正誤、魔法力の継承過程の謎は、最早核心の問題とならない。

魔法族と非魔法族の結婚は、魔法力を喪わせる可能性を有意に上げたりはしない。そんな理論が生まれ、その証明が確実に為されない限りは、魔法力を持つ者達による自由意思の下での忌避は断じて止まらない。

魔法界から、魔法族至上主義は無くならない。

「大事な事だから繰り返そう。魔法界において非魔法界の遺伝学は適用不能であるかもしれない。それは確かだ。そして、魔法族である君達は、それを逆手に取る事すらも可能だ」

過去のスリザリン——否、過去の魔法族に倣うのも一つの手だ。

「下等種族^{マグル}が唱える学問的理屈なんぞ信ずるに値しない。だから、純血結婚を批難する者こそが——純血・半純血・マグル生まれ・スクイブという無意味な血の区分を振りかざし、それら全てを同じ「ヒト」だと看做して平等に扱おうとせず、人様の結婚に余計な口出しする者達こそが、真なる差別主義者なのだとな」

最初に彼等がそうしたように。

「進歩的」思想の一切を、聞かなかつた振りをすれば良い。

「君達は胸を張っていて構わないのだ。純血主義を——魔法族至上主

義を維持して居れば良い。近くて遠い非魔法界の事なんぞ、これまで通り一切気にも留める必要も無い。そんな物が世に存在しないように振舞い、自分達の子供にはスクイブが生まれない事を当然視して、旧くからの魔法族らしい生活を続けて居れば良いとも」

無意識の選民思想に被れた者達は、勝手に滅んで行けば良い。

それが彼等の選ぶ道だと宣うならば、スリザリンの僕に文句を言う資格も無い。その先に在るのは間違いなく、我等が偉大なる祖、サラザール・スリザリンの悲願の成就なのだから。

「……嗚呼。少しばかり、余計な話をし過ぎたな」

ここに時計が無いのは不便だ。そう思いながら、切り上げの為の言葉をおく。

まあ双子の片割れに腕時計を見せてくれと言えば済む話ではあるが……流石に今のこの状況で、それを選べる感性は僕にも無い。彼等の方から部屋を立ち去る『勇氣』が出る事は期待出来ないようだし、そろそろ僕の方から話を畳んでやるべきだった。

「この話のそもそもの発端はアーサー・ウィーズリーであり、何よりもパーシー・ウィーズリーであった。君達は、その為にこの場を望んだのだろうし、教授にしても僕を持ち出す事を余儀無くさせられた理由の一つだった。だからまあ、これも僕の義務として果たしてやるとも」

彼等と血を分けた兄が、我慢の限界に達した理由を語ろう。

「アーサー・ウィーズリーが『純血』同士で結婚した事は理解出来る。スリザリンは肯定する。僕だってそうだと言うのは既に述べた。しかしながら——理解と感情はやはり別なのだよ。『純血』という特権を手放さなかった人間を妬むな、ズルいと思えるなどというのは無理だ」

純血達が偶々恋愛結婚したに過ぎないという『言い訳』を、僕は許容しない。

『純血』以外との結婚も選べる『純血』と違い、僕達には選択肢が無いからだ。

「君達は非魔法族が先祖に居るといふ主張した事を以って、『純血一族

「一覽」を一方的に論破した気である。また、かつてのウィーズリー家を、ゴドリック・グリフィンドールに倣った誇り高い一族だと自画自賛する。しかしな、それはやはり百年前の反論だ」

頭が中世で止まっているのは、グリフィンドールとスリザリン、果たして何れの方なのか。

「『純血一族一覽』が執筆された問題意識は、自分達の子孫が、スクイブやマグル無魔法力者或いは魔法力弱者へと墮落・退化するのではないかという恐怖と危機感の下に有って、本来君達が反論すべきのはそこなのだ。それなのに君達グリフィンドールは科学的反論を探そうともせず、あろう事か、アーサー・ウィーズリーとモリー・ウィーズリーは進歩的とは真逆の振舞いをしやがった」

そして自分達では気付いてすら居ない。

罪を拭わず、特権階級の責務も果たさず、魔法省の下級役人で満足している。

彼等の両親が純血結婚した点にしても、彼等一家が真剣に非魔法側へと降りていく姿勢を見せていけば——非魔法族の正の面も負の面も等しく学んでいたのなら、離れて行く非魔法族生まれや半純血は減ったのだ。けれども、そうではない。ならば、アーサー・ウィーズリーの非魔法族趣味は、自分達の純血婚を誤魔化す為の隠れ蓑、下品な見せびらかし程度にしか周りに受け止められないのは当然だ。

「アルバス・ダンブルドアの主張——自分が強いから混血化は問題無いというのも、完全に的外れで論外の主張だ。我がスリザリンは、たった一人の怪物の誕生、精々百年程度の時間軸に関心を払っている訳では無い。全く興味が無い訳ではないが、彼等の第一の関心はやはり家の存続、一族の人数十人、今後の数百年や数千年がどうなるかにこそ存在しているのだから」

一滴の血が混じった現在を問題視している訳ではない。

一滴の血が混じれば未来にどう影響が出るかこそを問題視している。

「つまり、アルバス・ダンブルドア個人が魔法族だから、自分は強い魔法力を持つからなんぞは知った事ではない。彼の子供はどうか。彼

の一族が更に混血化を進め、その子孫達の才能がどうなるか。そこま
で言及して来て初めて、スリザリンはあの老人の話聞く気になる。
が、彼は都合良く耳の遠い振りをする。であれば、最初から解り合え
る訳が無い」

そもその話、一代限りであれば、親より強力な個を生む遺伝的理
屈は存在する。

まあ非魔法界でも理論が完全に構築されている訳では無いし、確実
に引き起こすには数十数百の試行と失敗が必須であろうし、逆に親よ
り弱い個体が誕生する場合も当然存在する。そもそも人間が狙って
利用する事など常識的にも現実的にも不可能である筈なのだが――
果たして、アルバス・ダンブルドアは、また彼は何処まで気付いてい
るのやら。

正しいではなく、正しいかもしれないで十分な場合は有るものだ。

「そして君達の兄、パーシー・ウィーズリー。アーサー・ウィーズリー
の負債を負わされた内の一人は、同じ兄妹の誰よりも克明に、その罪
を突き付けられた」

あの男の離反は必然だった。

彼が裏切ったのではない。一家の家長こそが先に裏切っていた。

「パーテミス・クラウチ氏という庇護者が消えて以降、彼は魔法省で
一つの言葉を聞く事になった。『君は善き両親を持ったな』と。最
初は意味に気付かなかったのではないかと思う。しかし、段々と気付
いていった。気付かざるを得なかった。その言葉の裏に秘められた
意味に。特に我がスリザリンの卒業生達が、喜々として彼に対して伝
えたであろう猛毒に」

失望か。呆れか。

やはり自分でも解らない感情と共に口を開き続ける。

「最悪な事に、アーサー・ウィーズリーの子供は優秀だな？ 一人目は
首席兼監督生、二人目はクイディッチキャプテン、三人目も首席兼監
督生で、N. E. W. T. でもトップ。四人目と五人目は学業成績が
悲惨でも、産み出す発明品を見れば能力は明らか。そして出洩らしと
見られた六人目も今年度監督生になった。七人目も成績が悪いとは

聞かないし、僕は直接見た事が無いが才能有る筈の飛び手だとも聞いている。何より忘れてはならない事は、君達の兄妹の中には「スクイブ」が一人たりとも存在しない」

「ここでも思ってしまう。」

アルバス・ダンブルドアは、そしてミネルバ・マクゴナガル教授は、ロナルド・ウィーズリーを監督生に任命すべきでは無かった。あの程度の優秀さで認めてやるべきでなかったと。

「君達兄妹は例外無く、魔法族の標準から見ても優れた側に位置する子供だった。だからパーシー・ウィーズリーはな、魔法省で働いている内、お前の優秀さは両親の純血結婚の賜物だろうと、そのように皮肉を言われたのだ」

「それこそが彼がウィーズリー家から離反した、決定的原因。」

遺伝学が導き得る残酷な論理の一つを、殆ど不意打ちに、最も非道な形で叩きつけられた。

「君達の両親が『純血一族一覽』に従った、或いはルシウス・マルフォイ氏達と同じ行動をし、その挙句、彼等の結婚が全て良い方向に作用してしまっただから、広く嫉妬と憎悪と敵意を集めてしまった。グリフィンドールの大勢から、ハッフルパフやレイブンクローからも、君達の家系は仲間であるとは看做されなくなった。その上、パーシー・ウィーズリーに有力な後ろ盾が無いのならば、陰口や罵倒をするのに躊躇う訳がない」

魔法戦争中においては、その手の事は一切無かっただろう。

誰が聞いているか解らないのに、純血主義否定の世間話をするのは自殺行為。闇の帝王の耳に入れば、或いはアーサー・ウィーズリーが告げ口でもすれば、純血結婚を批難した馬鹿には死あるのみである。だから脳味噌を持っていく者なら自重した。

そして1981年のハロウィン以降にしても、闇の帝王の死は長らく疑問視されていたのだ。故に、軽々しく語る者は簡単に現れなかった。そもそもアーサー・ウィーズリー自体が、彼を含めて二人しか居ない窓際部署に送られていたのだ。一々彼の結婚について掘り返し、糾弾するような人間が近付く余地もなかったのだろう。

けれども、パーシー・ウィーズリーは、闇の帝王の死が確実視されつつあった時代に魔法省へと入った。加えて、国際魔法協力部——良血を持ちながらも労働などという下賤に関わらざるを得ない者達の巢窟へと行つた。更にその上で素直かつ自然に出世を希望し、権力に近付こうとしてしまった。

この皮肉と嫌味を回避する事は不可能だった。

「嗚呼、何度でも言おう。これは現状、難癖で、言い掛かりだと。しかし、君達は一度でも危険性に頭を巡らせた事があるのか？ 君達兄妹の優秀さを例として挙げ、やはり純血同士の結婚は正しい。そのようにルシウス・マルフォイ氏が言い出す危険性に？」

「———」

「世の魔法族はアーサー・ウィーズリーの一家を見習えと。非魔法族生まれや半純血のような混じり者と結婚し、自ら血の純度を下げるのは馬鹿々々しいと。優秀な子を産む可能性を上げる為に、出来るだけ魔法族の血を濃く持つ者と結婚すべきだと、我等が愛すべきスリザリンによって高らかに主張されたのなら？ なあ、あの人間達はそんな悪しき未来を想定もせず、魔法界と獅子寮への忠誠を放棄し、個人的恋愛感情を優先して結婚したのか？」

衝撃に打ちひしがれている様子の双子に、内心だけで嘆息する。

本当にグリフィンボールは、その統領たるアルバス・ダンブルドアは、余りにも罪深い。

「そんな主張をスリザリンに許す真似をした人間共は、アーサー・ウィーズリーという男は、モリー・プルウエットという女は、反純血主義を掲げるグリフィンボールの——そして何よりも『純血一族一覽』を否定した『ウィーズリー』の敵であると言えやしないだろうか？」

『純血一族一覽』の出版後に、彼等は純血婚をしてしまった。

である以上、彼等は決して血を裏切つてなど居ない。スリザリンの多くが彼等を『血を裏切る者』と呼ぼうが、僕にはそう呼べない。

「そして君達の一族は、アーサー・ウィーズリーの一家をどう見ていたのだろうか。特に、『スクイブ』の子供を産んでしまった人間だ」

全く望まずして、持たざる者を家族としてしまった人間だ。

「この『純血一族一覽』がどれだけ見当外れの記述をしよう、現代の遺伝学的知識を基に考える限り、或る子供が両親や先祖の形質を如何に受け継ぐかは確率論だ。突然変異説も今やメンデルイズムの枠組内に在り、そもそも非魔法族の血が一滴も混じっていない純血種の存在自体が虚構だ。『ブラック』にも『スクイブ』が居たようだし、だから君達の親戚の中にも必ずや居る筈——嗚呼、やはり居るのだな」

眼を合わせてしまった片割れから、その答えを読み取る。

「で、その人間は、一体何を思うだろう？ その者が偶々『聖二十八族』以外の存在——つまり、非魔法族の血が混ざっているかもしれないとされた相手と結婚していたのなら？ 『純血性の維持』という目的に逆らう、反純血主義者の『ウィーズリー』の血を引く者としては、正しい。結婚をしていたなら、どうだろうな？」

周りの親戚一族が魔法を使える者ばかりの中、一人だけ無魔法の子供を生んでしまった夫婦は、その非魔法の息子ないし娘は、アーサー・ウィーズリーの一家に対して一体何を思ったのだろうか。

「嗚呼、僕がその立場だったのなら、アーサー・ウィーズリーとモリー・プルウエットを心底憎悪する。偉大な先祖が過去に主張した反純血主義的思想の哲学に背き、のうのうと純血結婚をしゃがった人間達を決して許せなどしない。それに留まらず、彼等が作った幸せな『純血』の家庭を徹底的に破壊してやりたいと思うだろう」

更に自分が『純血主義』を放棄した事に後悔し、今度はスリザリンの側に立つだろう。

『純血一族一覽』を否定した先祖は偉大でも何でも無く、全て間違っていたのだと。そして真に闇の時代が訪れた時、彼等は自分達の安全と引換えに、ウィーズリーの一族の人間を売ってくれるだろう。そうして彼等は身内によって滅ぼされる。

「ハーマイオニー・グレンジャー」

暫く沈黙を保っていた、この場のもう一人へ呼び掛ける。

「君は反証を——この場に存在する最も強力な証拠を挙げて、抗弁し

ようとはしないのだな」

「……………私はそれ程馬鹿じゃない。貴方はその事をもっと知っておくべきだわ」

「——そうか。確かに、僕が間違っていたようだ」

例外は何処にでも存在する。

一人の優秀な「マグル生まれ」で遺伝法則全てを語る事は出来ず、逆もまた然り。

そもそも観察の上では、「聖二十八族」は第五学年に限ってすら優秀である。

ドラコ・マルフォイは素行は兎も角として成績は優秀。パンジー・パークinsonも一枚落ちるが大きく変わりはない。アーネスト・マクミランも監督生。劣等生と扱われる事が多いネビル・ロングボトムにしても、薬草学の分野では類稀な才を持つとポモーナ・スプラウト教授が褒め称えていた。

そしてスリザリンの劣等生代表、ビンセント・クラップとグレゴリー・ゴイルは、「純血」ではあるものの、しかしながら、二十八の家には含まれていない。彼等がトロール程度の知能しか持たないのは、その身に流れる一滴の「マグル」の血が顕在化した結果である——そんな主張を、現在の魔法界の論理では否定出来ない。

……………とは言うものの。

まあ、「聖二十八族」の人間が優秀なのは、教育環境の面が多分に大きいのだろう。

さりとて遺伝要因を完全に排除して良いとは断言出来ないのもやはり事実である。寧ろ、現代遺伝学の知識は、遺伝要因と環境要因の相互作用を殆ど当然の前提としている。そして逆説的に、アーサー・ウィーズリーの罪は、容易く拭い去る事も出来ない。

「僕の立場を一応述べておくと、魔法力の有無の云々は兎も角として、少なくとも君達の優秀さが純血結婚に由来するという理屈などは、更々信じてなどいない」

人間という生物は間違いなく、そう単純な機巧をしてはいまい。

「だが、これは既に科学的正誤の問題ではないのだ。人間の認識と感

情の問題であり、世の不公平と不条理に対する怒りと八つ当たりの問題なのだ。そして、アーサー・ウィーズリー達が恋愛結婚という綺麗事を振りかざして逃げたそれを——逃げられたと思っていた因習の罪を、パーシー・ウィーズリーは真正面から受け止めてしまった」

真面目で、潔癖主義過ぎた。

純血主義者の言い分など知った事かと答えれば良かったのに、己の優秀さは血ではなく自分の不断の努力に由来するのだと突っ撥ねれば良かったのに、真正面から話を聞いてしまった。そうして自分が「純血」であるという矛盾に——両親の血を引く己に、耐え切れなくなった。

「もつとも、積もり積もった疑念も有ったのだろう」

血の問題こそが致命的で、決定的だったとしても、断じて唐突では無かったのだろう。

「パーシー・ウィーズリー。彼はO・W・L。十二科目合格者として、必然のようにマグル学を修めていた。つまり、授業内で教授から非魔法族の知識を授けられ、更には教室の中には同じ学問に励む仲間が居た訳だ。そして彼の寮はグリフィンドールであるから、授業外でも半純血や非魔法族生まれと触れ合う機会が有った。ならば、そんな彼の眼には父親が——「マグル」を面白がるだけで理解を示さない家族達が、どう映って居たのだろうか？」

外の世界の常識が浸食した結果だ。

そのような事は、これについても言える。

アルバス・ダンブルドアと同様、口では広く平等を訴えながらも、自分達にとって都合の良い魔法族的な部分は見ない振りをして、言行不一致を許容する。

偽善であり、背信であり、罪科である。

「飛行可能な自動車を魔法省でなく個人が所有する目的は、『その車を飛ばすつもり』以外に有り得るのか？　それなのに何故、懲戒免職どころか自主退職しない事が許される？　『マグル保護法』にしても、ドローレス・アンブリッジを見てみる。『反人狼法』はアルバス・ダンブルドア前校長の反対を押し切る程には支持された法だったが、

彼女がそれを成立させるまでどれだけの時間と地位が必要だったと思っている?」

アーサー・ウィーズリーが「純血」だったから。

彼が罪を犯したとしても、庇う知り合いが魔法界に大勢居たから。彼が間違った結婚相手を選択したとしても、それでもスリザリンのよ
うな純血主義者ではないと喧伝したい一族達ウィーズリーの思惑の下、『マグル保
護法』の立案者としてアーサー・ウィーズリーを推薦したから。

それが事実かは兎も角として、そんな邪推が外部からは出来てしま
う。ドローレス・アンブリッジや僕には絶対に出来ない事をやっている
のだと、そう妬む事が出来てしまう。

勿論、生粋のスリザリンはそれを問題視しない。

「純血」の立場を用いて好き放題やっているのは、我が寮も同じで
あるからだ。

しかし残念な事に、パーシー・ウィーズリーはグリフィンドール、騎士道精神を尊ぶべき寮の人間である。そしてこの僕もまた、論理を超えた感情の面で何も思わない訳では無い。

「半純血——頼れる親戚や人脈を持たず、誇れるような先祖や歴史も無く、この魔法界で一から立場や地位を築かねばならない孤独な人間から言わせて貰おう。特権階級共が巫山戯やがって、とな。お前達がやっている事は、一方的に忌み嫌っているスリザリン生と何ら変わらない。同列で、同類で、我々の敵だ」

上から目線で手を差し出してくる、選民思想と特権意識のこびり付いた悪。

彼等がどんな考え方をしているようと、御互いに断じて相容れる事無
き存在である。

「ついでだ」

項垂れ切り、最早顔すら上げやしない双子へと、なけなしの親切心を
発揮する。

「最後に、ミスター・ウェーザビーの思惑と、現在の立場に付いて語っ
ておこうか」

これでも相応に肩入れしている気もするが……もう少し位は良い

だろう。僕が然程嫌悪を抱かないグリフィンドールというのは稀少であるし、不器用であるが故に報われれないと言うのは何とも救われな
い話だと思うからだ。

椅子の背もたれに腕と身体を投げ出したまま、僕は可能な限り優しく語り掛ける。

「彼は出世した。この事について、どうせ君達は、彼が単純に小躍りした
ただろうと考える程度の頭しか無いだろう？」 出世こそが逆に彼

にとつての毒杯である。元々白眼視されていた彼が、更に孤立を深め
る理由を提供されたのだ。そんな事は一切考えもしない」

「……………」

その指摘に、双子達は漸く顔を上げた。

「嗚呼、基本的に出世とは利益である。しかし、彼のそれは余りに度が
過ぎるのだ。去年のバーテミウス・クラウチ氏の個人秘書からして大
抜擢。あの傲慢な貴族主義者が他人を、それも hogwarts 卒業一年生
の価値を認めるなど、彼を知る者からすれば驚愕でしかない。更には
今年度、彼は魔法大臣付下級次官へと昇つてしまった。これ程早く出
世した人間なんぞ魔法省の三百年の歴史を見てもそう居ないだろう」
もしかしたら前例自体が存在しないかもしれない。

「そんな彼を、同じように魔法省に就職した彼の先輩や同級生——出
世競争をする者達はどう思うだろうか？ 未だに魔法省の平役人と
して働き、顎で使われているままの元 hogwarts 生達は、ミスター・
ウェーザビーに対して嫉妬せずに居られるだろうか？ 或いは逆に、
彼の方が気不味さを感じ、自ら距離を置くような事が有り得ないと言
えるだろうか？」

そして、僕はその答えを知っている。

彼がスリザリン生と会話する機会を持ったのは、僕が——「純血」
の中に居る半純血が、半純血達の中に居る「純血」に対し、同じ逸れ
者としての理解と共感を示したからだ。

「しかし君達家族は、パーシー・ウィーズリーの痛みに寄り添わない」
彼への対応に、些かも愛を感じない。

「ジネブラ・ウィーズリーは彼を裏切者と見ていて、ロナルド・ウィー

ズリーも変わらんだろう。君達も然り。そしてアーサー・ウィーズリーは罪と向き合わず、彼等の結婚を理由に省内で嫌味を言われていた息子を庇わなかった。挙句、アルバス・ダンブルドアの戦争ごっこに付き合いたがる始末だ。まあ、アーサー王伝説が語る家庭なんぞ大概幸福とは程遠いから、らしいと言えばらしいがね」

大義の為に杖を上げようとはしても、我が子の為に戦おうとはしない。

立派と称えられる騎士様に良く見られる蛮行だ。歴史に名を残そうが、大多数の人間から褒め称えられようが、子供を傷付けたまま放置する人間なんぞ例外なくクソ野郎だ。

「家族とは御互いが殆ど無条件かつ非対価で守り、また守られる集団の事を言う。僕は今までそう思っていたのだが、君達ウィーズリー家にはどうやら当て嵌まらないようだ」

「……っ。俺達はパースを、兄貴を——」

「——僕に対して反論されても困るのだからな？」

再度の沈黙。

それは彼等自身が直接、パーシー・ウィーズリーに掛けるべき言葉だった。そして、肩を落としたまま呆然と僕を見返す双子からは、既に獅子らしい輝きは喪われていた。

「彼が省内で出世を目論んだのも、個人的な欲望は多少有ろうが、究極は君達の為だ」

追い討ちである事を多分に理解しつつ、寧ろその目的で、断罪の言葉を付け加える。

「これからの将来、魔法族が『マグル』に近付いて知識を深めれば、必ず何処かでアーサー・ウィーズリーの矛盾は取り沙汰される」

彼等を正解とする論理が一応世に出されようとも、最終的に許容される事になろうとも、議論すら巻き起こらない事は有り得ない。

非魔法界でも、白人至上主義は消え失せる気配すらないのであるから。

「まして彼の罪の結果として、君達が結婚相手を選べない——今度こそは両親と同じ『純血』を配偶者とする事が許されず、愛した者との結婚を諦めざるを得なくなるかもしれない。家族を捨てての駆け落

ち、君達七人兄妹が永遠に別たれる事を余儀無くさせられるかもしれない。パーシー・ウィーズリーは、その結論に至ってしまった」

アーサー・ウィーズリーの子として例外的に、真つすぐに生まれついてしまった。

「しかしながら、力が有れば大概の事は何とかなるものだ。結局の所、これは正しい正しくないの問題ではない。君達への批難は未証明の仮説に基づくものであり、持たざる者が持つ者達へと抱く一方的かつ身勝手な嫉妬だ。故に権力者ならば——魔法大臣ならば叩き潰す事など容易である。そう考えたから、あの男は、家族と対立してでも更に権力に近付いた」

マルフォイ家とて、将来的に批判を受けようと歯牙にも掛けまい。自分達はリスクを上げたくないから純血結婚を続けるが、他家にまで強いるつもりは無く、止めさせたいなら魔法力の継承が遺伝法則と無関係である確たる証拠を示してみろ。

この戦争で光が闇の帝王を滅ぼそうとも、彼等はそう強弁する事だろう。

「まあ、君達も薄々察している通り、パーシー・ウィーズリーのそれは空回りだがな」

知ってか知らずか、アーサー・ウィーズリーはギリギリ踏み止まろうとしているようだ。

彼が将来純血主義者と強く糾弾されない方法。それは魔法戦争で戦う事だ。不死鳥の騎士団の一員として血を流す事だ。そしてこの魔法戦争での勝利こそが、彼等家族を救う。彼等の結婚を批難する者が完全に消える訳では無いが、戦って勝ちさえすれば体面を取り繕う事は出来る。

一方で、コーネリウス・ファッジを支持したパーシー・ウィーズリーの行動は無意味だ。

後世のウィーズリー家において侮られ、軽蔑され、馬鹿な事をやったのだと笑われる羽目になるのは、間違いなくパーシー・ウィーズリーの側だろう。

「けれども、僕は彼の行動を馬鹿には出来んよ。寧ろ、深く敬意を覚え

る」

あの男こそが、今回ばかりは最も「グリフィンドールの」である。「魔法省から給料を受け取りつつも裏切り、組織を弱体化させようとしている騎士団の恩知らず共よりも。他ならぬ家族達から理解されずとも尚、一つの筋を通してこの魔法界の為に、ただ家族の為に生き抜こうとしている者にこそ尊敬の念を抱く。……僕はどう足掻いても、そう真つすぐ生きられる気がしないからな」

パーシー……パーシヴァル。

聖杯探求を成し遂げた、真なる騎士の名を背負うに相応しい。

「そして去年の夏か。僕はパーシー・ウィーズリーと会話する機会があったのだが、その時の事は未だに強く印象に残っている。……嗚呼、会話内容が印象的だったという訳では無い。彼の表情が、何よりも彼の澄んだ瞳が印象的だった」

静寂が余計に深まったのは、気のせいではあるまい。

恐らくこの双子は、今この瞬間こそ、最も注意深く僕の話へ耳を傾けていた。

「彼はホグワーツに残した兄妹達の事を聞きたがった。まあ、言葉には全く出さなかったがね。そもそも僕の立場上「ウィーズリー」と長々と語る事は許されなかったし、何より僕は、彼に語れる手頃な話を持ち合わせて居なかった。ロナルド・ウィーズリーは凡庸な男であり、ジネブラ・ウィーズリーは学年が違う。嫌われ者のスリザリン生が語れなどしない」

だから、必然的に出した話題は一つだけだった。

そう静かに、大きく顔を歪めている双子へと語り掛けた。

「去年度、君達がフラーと組んで起こした騒動。かつては自身の忙しさを理由に聞く耳を持たなかったであろう、下級生の楽しいクリスマスを勝ち取る為に戦った、かの革命について。掻い摘んどは言え可能な限りそれを語ってやった後、フレッドとジョージは相変わらずだなど。彼が寂し気な眼をしながら笑っていたのが、未だに強く、脳裏に焼き付いている」

逆セーレム魔女裁判

フレッド・ウィーズリーとジョージ・ウィーズリーは去った。

もう十分だと判断したのだろう。ミネルバ・マクゴナガル教授が僕の意見も聞かずに一方的に終了を告げ——もつとも、何の異存も無かったが——双子達を追い出した。彼等も教授の促しに何の反論もせず、立ち去る際にも僕を一瞥する事すらしなかった。

そして彼等が消えた以上僕も御役御免だろうと思ったのだが、しかしハーマイオニーにローブの袖口を掴まれ、引き止められた。その事に対して教授は酷く面白がるような眼で僕達を見ただけで、何も言わずに部屋の片隅へと戻っていった。尚、ハーマイオニーは恥ずかしげに俯いていた。

「——そろそろ昼休憩が終わり、授業が始まると思うのですが？」

「貴方が遅刻する旨を、こちらから連絡しておきましょう」

軋む回転椅子に引き戻された後、身体ごと向けつつ言えば、彼女は平然と杖を取り出した。

「少なくとも貴方がたに関しては、O. W. L. で良い成績を取る事を疑っていません。グレンジャーについては言及する意味すら見出せず、スリザリンの貴方は変身術私の科目しか語れませんが、優。以外を取れば大いに驚く事でしょう。はっきり言えば、期待しています」

「……それはどうも」

再度守護霊の呪文を作り上げ、走らせた教授に力無く答える。「ですが、教授の方はどうなんです？ 貴方も授業が有ったように思いますが？」

「少し遅れる程度であれば私も問題になりません」

きっぱり言ってくれたものの、僕の記憶する限りでは、事前告知による休講は有っても、遅刻した光景は一度も見つた事が無い気がするのだが。まあ、良いか。問題無いと教授が主張している以上、やはり僕が心配する事では無かろう。

「しかし、ハーマイオニー。先程は随分と静かだったな」

双子が去った事で空いた二人掛けソファに座る彼女に声を掛ける。

彼女が元々座っていた椅子も、『純血一族一覽』も、コーヒーテーブル自体も教授の杖により片付けられていた。そのせいか、僕達の距離は先程より遥かに近くなっていた。僕が視線を逸らしていた間、何時の間にかそうになっていた。

「幻惑、省略、簡略化。はぐらかしに加えて恣意的アナロジー。自分に都合の良い話を相手に押し付ける為には、何の手段も選ばないのか。君の正義感溢れる態度からは、その程度の事を批難してくるものだと思っただが」

そう水を向けてみれば、彼女は顔にかかった髪を振り払いつつ、力なく微笑んだ。

「…………でも、貴方は意図的に嘘を混ぜはしなかった。そうでしょう？」
「基本的に時代遅れの、六十年前の理屈で叩きのめしたに過ぎないがな」

「……………そして、貴方は手加減すらしていたわ」
「そうだな」

齒応えが足りなかったと改めて思いつつ、頷いてみせる。

「彼等が脱落しつつあるのが解ったから、非魔法界が将来直面する問題、そして魔法界が非魔法界より早く直面するであろう問題にまで踏み込まなかった。そもそも純血結婚したウィーズリーの夫妻が、あの双子の将来の伴侶が産む子供をどう捉えるのか、それも解らんしな。僕が彼等と会った事が無い以上、推測を立てる事すら出来ん」

それこそが今回の問題の核心部ではあるが、アレらを叩きのめしても多少気が晴れるだけで、何も解決する訳では無い。

「非魔法界が抱える問題と魔法界が抱える問題は、類似であれば同一では無い。人種に基づく差別と、魔法力の有無に基づく区別は明確に違う」

ハーマイオニーも話を聞いていたのだ。

改めて思い知っただろうと考えつつも、明確に言葉にしてやる。

「この魔法界で行われているのは悪名高きジム・クロウや、疾病を理由とする人権無視の隔離政策ではない。最大多数の最大不幸を回避する為の、善意に基づく社会的取り組み。非魔法界でも平気で行われて

いる学力や身体能力による選別めいた分断でしかない」

「……貴方はそう言うけど、それが正しくないと思う人間も大勢居る筈だわ」

「そうかもしれない。その余地を、僕は一切否定しない」

小さな嫌悪感と共に非難を示す少女に、軽く頷いてみせる。

「しかし、まず魔法界の現実を言おう。魔法族と非魔法族、その両者が結婚した例として僕達に最も身近であるのは、ギルデロイ・ロックハートとドロレス・アンブリッジの例だ。彼等は言わずもがな魔法族であるが、前者には二人の姉の「スクイブ」が居て、後者には一人の弟の「スクイブ」が居る——どちらも、居たという表現をすべきだろうか」

「……単純な遺伝学の三対一より、遥かに確率が高いかもしれないて事？」

「さあな」

深刻な表情で発された問いに、余り興味が無いと肩を竦めた。

「ここでわざわざ持ち出したのは、数字を問題視した、或いは強調したいからでは無い。その判別は今後の研究により「科学的」に明らかにされるべき事項だ。そもそも、彼等の親が純血か半純血かで変わる。だから真偽不明。現状はそう取り扱うしかないのであって、故に僕は数値でなく単なる事実のみに言及する」

彼女の知覚範囲外に確かに在り続けた、この魔法界の形を提示しよう。

「彼等の両親は何れも離婚し、一家は離散状態。魔法力を持たぬ者達は非魔法界の中へと姿を消し、それ以降接触が無いようだ。これを幸福な家庭だと評価出来ないのは間違いないだろう。少なくともギルデロイ・ロックハートに関しては、僕が彼の下を訪れた際、癒者から次のような事を直接聞いている。彼が入院して以降、誰も見舞いに来た事は無いとな」

「……………」

「要するに言いたいのは、この魔法界は、「スクイブ」や、ソレを産んでしまった一家が暮らせる構造をしていない。ただ普通の魔法族の

家族だけが、この世界で幸福を掴めるように出来ている」

結局、そこだ。

ギルデロイ・ロックハートやドローレス・アンブリッジの家族が特別悪人だったとか、例外的欠陥が在ったという訳ではない。

単純に、彼等の家族——特に「スキイブ」として産まれた者達には、魔法界に居場所など無かった。最初から存在しなかったし、現在も存在しないままである。アーガス・フィルチの境遇が全く改善されないように、存在自体が魔法族から意識されていないし、自分達が動いて変えるべきモノだと思われていない。

「アルバス・ダンブルドアやアーサー・ウィーズリー、アレらは口では立派な平等思想を唱えながらも、しかしその実、彼等が想定する『社会』には魔法族以外が存在しない。あの典型的な魔法族主義者が造り上げて来たのは、己が特権階級を維持する為の箱庭、非魔法界に^{マグルやスキイブ}無能なゴミを押し付ける世界だ」

「……マルフォイ達も同じでしょう」

「くくく、何故僕がスリザリンを外したのか。それを解らない君ではあるまいに」

僕の揶揄に、彼女は悔しげに上目遣いで睨んで来る。

差別主義者が差別的行動に及ぶのは当然だろう。

彼等は純血も半純血もマグル生まれもスキイブもヒトとして同一であるという、そんな立場を取っていない。それどころか「マグル生まれ」も「スキイブ」も残らず社会から排除されるべきという立場であるからだ。そして、別段スリザリンは現状維持でも困らない。

やるべきはグリフィンドールで、しかしやらなかった。

ただそれだけだ。

「もう僕の所で留めて置くのも意味が無いだろうから、「マグル生まれ」についても言及しておこうか。これも、先程に出た話題の流れの内^内に在るからな」

何度も触れたくないのだから、一挙に終わらせてしまった方が良い。

「特にスリザリンに多い純血主義者による、^{Mud-Blood}「穢れた血」と呼ばれる

君達への認識。良く言われる表現を用いれば、『魔法は、魔法の子孫が生まれることによつてのみ、人から人へと受け継がれる』。だから『いわゆるマグル生まれの者が魔法力を持つ場合は、窃盗または暴力によつて得た可能性がある』という論理だ。この理屈を、君は決して承認しないのだろうか?」

「……ええ、酷くナンセンスだと思うわ」

「そうだな。僕も同意する」

返つて来た言葉に軽く頷く。そう言えば、既に似たような事を彼女は聞いた事が有るのかと思ひながら。ユール・ボール前、彼女は透明マントの下で聞いていた筈だ。

けれども、僕の反応とは逆に、彼女は表情を硬くしていた。

その反応は勘が良いというより、ここ最近の経験に基づくものだろう。

そして、それは非常に正しい。

「他人が持つ魔法力を、何らかの手段を用いて後天的に奪う事は有り得ない。確たる証拠は無いが、殆ど断言してしまつて良いのではないかと思う」

しかし、と。

深く息を吸つた後で、問いを紡ぐ。

尤もらしい理屈をでつち上げるのは簡単だ。そう思ひながら。

「魔法遺伝子が仮に顕性遺伝であるとすれば、親のどちらかが魔法族で無い限り、子として魔法族は生まれる事は有り得ない。であれば、“マグル生まれ”とは、非魔法族が魔法族の少年少女を犯し、彼等から子供を無理矢理に奪い去つて、それを我が子だと偽つて育てているものである。……一切の検討に値しない論理と言えるか?」

「」

「」

「……可能性は低いわ」

「ナンセンスから随分と後退したな」

まさしく『窃盗と暴力』以外の何物でもない。

僕は愉快さと共に低く失笑し、彼女はやはり泣き出しそうになつて

いた。

しかしハーマイオニーの表情で見える事が多いのは笑顔が絶対的多数で、その次に多いのが怒り顔の筈だが、最も印象的であるのが泣き顔なのは何故なのだろうか。

「まあ、君の言う通りではある。可能性が低いのは認めるとも。子供の魔法族は、当然ながら魔法を使えるからな。非魔法族が魔法族を捕獲するというのは、『マグル』が思う程に簡単では無い。たとえそれがホグワーツ入学前の児童で有ったとしてもだ」

それなりの魔法力を宿していれば、杖を持たない子供でも瞬間移動——姿眩ましとまでは呼べない、短距離かつランダム移動——をすす事例は報告されている。ハリー・ポッターあたりなら自分の体験として有しているのでは無かろうか。

「だが同時に幼い子供の場合、暴力による恐怖等によつて逆に魔法力の制御能力を喪う場合も有る。そして物理的には何時でも逃げられる状況に置かれていたとしても——例えば、凶悪犯から食料品等の買い出しの為、外出を許された時が典型だが——心理的に逃げられない場合というのは存在する。それは非魔法界でも魔法界でも同じの筈だ」

特に子供の場合、お前の代わりに親を傷付けると言えば、大概は事足りるだろう。

「また、必ずしも暴力を伴う必要は無い。アーサー王伝説宜しく、魔法族が非魔法族の女性を騙して孕ませるという場合も有り得る。さながら妖精伝説のように、魔法族が悪戯心の下、自分の子と他人の子の摩り替えを行う事も可能だろう。或いは、もつと平和的に考えるならば、子育てに飽きた魔法族が非魔法界へ養子に出したという場合も有り得る」

特に最後のは中々発覚しようがない。

魔法族は子育てという重労働から解放され、非魔法族は自分達の為に魔法を使ってくれる人的資源を獲得する。それらの当事者間に合意が有るなら、誰も不幸になつていない。

「何より決定的問題は数であり、確率論だ。僕はホグワーツ内の『マ

「グル生まれ」の人数を正確に把握している訳では無い。スリザリン生に一々教えてくれはしないのだから。が、君の方は知っている筈だ。そして同時に、ブリテン諸島に居る魔法族の総数も」

物事を考える上で例外は重要だ。

しかし、そればかり見ていては本質を見喪う。

例外というのは、基本的に少数派に属するからこそ、そのように呼ばれるのだから。

「——さて、非魔法族の夫婦の子供に遺伝的突然変異が起こると、先程のような強姦や誘拐といった人災ないし養子縁組のような些細な家庭的事件が起こるのと。その生じる確率を比較してみた場合、果たしてどちらが可能性として有り得るだろうか？」

「……………」

「想像が付きにくいというなら補足しておこうか。純粹非魔法族の両親から「マグル生まれ」が産まれて来る確率が0.0001%も有れば、このホグワーツはパンクする」

まあ物理的に収容する事なら余裕で可能だが。そう一応は付け加える。

けれども、その修正に然したる意味もない。ホグワーツの敷地内に子供達を詰め込む事が出来たととしても、現在の体制のまま教育活動を行うのは不可能になるからだ。

「魔法界において、「マグル生まれ」が尊ばれる事は確かに在った」

歴史書を引つ繰り返してみれば、その旨の記述は見付けられる。

「浮かび上がった者——サラザール・スリザリンの時代に英語がどの程度通用したか知らんが、その手の表現はかなり古くから有る。つまり、過去の一部の魔法族は、新しい魔法族の存在を、神ないし世界の祝福と見て歓迎した。観察に基づき常識を超えた中に神秘を見出すのは、人間として非常に自然な発想だな」

非魔法界の宗教にも良く現れる反応である。

眼の前の事象を否定せず、あるがままを受け容れる。寛容が導く帰結だ。

「けれども、遺伝こそを絶対と見た場合は——分析と思索に基づく」

科学”こそを至上とした場合は、真逆の発想をする。魔法力の有無という点で両親の何れにも似ていないお前は、果たして本当に、彼等の種と胎から産まれたのか。それが“穢れた血”^{MudBlood}に対する嫌悪や偏見の出発点だ”

サラザール・スリザリンはどうかは格別、近代以降の魔法族はそう考えたのだろう。

「やはり君は深く思考を巡らすべきだったのだ。何故、マグル生まれ”は泥の血と呼ばれるのかと。泥というのは、一般的に水と土の混合物を言うだろう？　しかし、君達は何の混合でも無い。両親共に非魔法族で、同質だからな。だから、この場合での泥は意味が違う。単純な汚れであり、穢らわしい。そんな人間的感情を由来とする”

生まれの結果では無く、生まれの過程が穢れている。

そう考えられたからこそ、非魔法族生まれは蔑称を与えられた。

まあ僕の考えはどうかと言えば、その“穢れた血”^{MudBlood}という呼び方は、混合物である半純血が非魔法族生まれへと押し付けたのではないかという疑いを抱いてしまっているのだが——流石にそれは、彼女の前ですら提示する気になれない方の仮説だった。

「そして先の問いに対する“マグル生まれ”の抗弁、自分は間違いなく彼等の子供だと胸を張って言いうる論理は、1984年まで存在しなかった。……科学技術進展の良くある例に漏れず、その年に劇的に変わった訳では無いが”

魔法界がまず一番に見習うべきは、非魔法界の最近二百年の進歩の速さであろう。

「その年に起こったのは、遺伝子型鑑定技術の提唱だ。今関係有る部分と言うなら、遺伝子型を用いての親子関係鑑定。未だ世間一般には知られておらず、鑑定結果の間違いも多い筈だが、ロマノフの末裔だと語った者の遺伝子検査が為されたという記事は見たからな。後十年もすれば、結果を殆ど確実に——原理上100%にはならない筈だが、信用出来るものとなるだろう”

「……じゃあ、もう問題にはならないじゃないの”

「そう思いたいが、一つ残念な知らせだ。ポリジューズ薬によって”

「マグル」に変身した僕は、問題無く魔法を使った」

「……………」

外見を魔法的に真似る事は出来た。

いや、魔法薬は魔法力の有無まで真似なかったという方が正しいか。

「だから、高度な変身術や魔法薬を魔法族が使用中の場合、その人間が産む子供への影響は解らん。理屈は解らないにしても、魔法とは名前に通り不可解なモノである。現状、これ以上は結論を出しようがない。そして検証する方法は非常に簡単だが、どう考えても人権なんぞ完全無視でやる羽目になる。である以上、今世紀で最も偉大な魔法使いが居る限りは無理だな」

ポリジューズ薬使用中の魔法族に交配活動をさせれば済むだけが、アルバス・ダンブルドアが健在の内に行える実験では無かろう。

逆に言えば、アレが消えれば——闇の時代ならば可能だと言う事だ。

そしてこの種の研究は、口では批難の言葉を述べながらも、多くの魔法族が興味を持つだろう。一度知ってしまったえば、その知識を魔法史から払拭する事は不可能になるだろう。また非人道的である事は間違いないが、その研究が「科学」の範疇に在る事も否定出来まい。

「今世紀で最も偉大な魔法使いならば、この手の遺伝の疑問について、一定程度の理屈を持っているかもしれない。魔法族の研究成果は簡単に世間へ公表されるものでもないしな。単に僕が調べ切れ無かった可能性というのも十分有り得る」

「……………言いながらも、貴方は全く信じていないんでしょう？」

「そうだな。そんな都合の良い事が有って堪るか。その想いはある」

アルバス・ダンブルドアは所詮半純血で、魔法界の純血主義から距離を置いていた。つまり、分析の基礎となる情報^{データ}を欠く状況に居る。更に父親はアズカバンで死に、母親は非魔法族生まれ——と聞いているが、それが事実でなかろうと、彼等の家系は魔法界の主流にいた訳では無い。そして何よりも、彼は非人道的な真似を可能な限り回避する。

その条件下では、彼が如何に世紀の大天才であろうと解明出来る筈がない。

人の、生命の神秘は、未だ神の手中に在る筈だ。

「……貴方なら純血と半純血を、ロン達と他のグリフィンドル生の信頼を決定的に破壊する事が可能である。今まで、私はそう思ってた」

ハーマイオニーは、自身の太腿に当てていた両手を、ローブごとギョツと握った。

「けれども、それですら貴方を過少評価していた。その程度に留まらず、貴方はマグル生まれの間に楔を打つ事すら可能だった。ダンブルドアが校内から居なくなつた今、貴方が本気で騒動を引き起こす為に動いてしまえば、最早止められる人間など居なかつた」

「君はそう言ってくれるが、それは有り得んよ」

ハーマイオニーの、恐れを隠さぬ視線に微笑んでみせる。

「僕一人が出来る事なんぞ知れており、全てはホグワーツ生に委ねられている。そもそも、魔法界の遺伝法則は不明のままだという点は絶対に動かせん。魔法界には無いし、非魔法界にすら無い。両親の純血結婚という負い目の有るウィーズリー達だから問題無く押し潰せたが、それ以外を言い包めるには当然限度が有る」

「ホグワーツ生は、貴方より遥かに賢くないわ」

「愚かでも無いだろう。そもそも君一人居れば御釣りが来る」

そして誰も彼も、たかが去年の一度で警戒し過ぎだ。

或いはデラクール姉妹の悪しき置き土産と言うべきか。彼女達は有ること無いこと吹聴し過ぎていた。一年の時間が経つてもまだ残っているのだから、ヴィーラの血の支配は恐ろし過ぎる。二度とホグワーツに来ないで欲しいものだ。

「更に言えば、非魔法族生まれの方は最初からやる気が全く無かつた」

既に察していると思っていたが、と続ける。

「ロナルド・ウィーズリーとジネブラ・ウィーズリーを破壊するのは、彼等の両親や双子達の因果応報として許容出来る。が、何もしていない君達まで攻撃し、勉強どころでは無い状態とってしまうのは、筋違

いであり遣り過ぎだ。O・W・L。もしくはN・E・W・T。試験まで残り一ヶ月強しかないのだしな。そんな事で恨みを買いたくないぞない」

「……なら私は？ 私は良いって訳？」

「僕の観察の上でという限定なら、君は間違いなく彼等の子供だよ」

表面上だけは冷静な、けれど刺々しさを隠せない声へと苦笑する。「他の非魔法族生まれは知らんが、少なくとも僕は君の両親を知っている。僕の眼から見て、君は姿形と性格の何れも両親に似ているし、何より君は気付いていなかったが、彼等は……少なくとも君の父親は気付いていたようだったよ。もしかしたら、君が自分の子では無いかもしれない。その可能性にな」

まあ、自然では有る。

違う人種の特徴を持った子を妻が産んだという程では無いが、それでも魔法力の存在は、血縁関係に疑問を抱くには十分過ぎる異常だ。

そして彼等は歯科医——つまり、この地における大学・医学部を卒業している筈である。遺伝法則の知識なんぞ普通の人間より遙かに持っていた事だろう。魔法界に適用出来るかは解らずとも、人間の問題として、やはり不安を抱くには十分な環境下に在ったのだ。

「気付く程には賢くて、しかし彼等は僕に敵意を向けて来なかった。ただの一度も。自分の娘には兎も角、他の魔法族に良い顔をしない理由には十分な筈だが、それが無かった。それは強さであり、気高さであり、善性への信頼であり、世の正義への忠実さでもある。そして、その特徴は明らかに君も色濃く受け継いでいる。君が遺伝子検査を求めれば受け容れるだろうが、少なくとも今の彼等は、それを試す必要性すら感じていない」

まあ、僕の言葉など信じなくとも構わんし、最先端科学を試すのも一興だろうが。

そう言った僕にハーマイオニーはそっぽを向いた。

もつとも、そんな反応をされるのは薄々解っていた。あからさま過ぎる媚び売りは元々彼女の好む所ではなく、案の定御気に召さなかったようだ。

「……でも、私は未だに信じられないわよ」

話題修正のつもりだろう。

ハーマイオニーは、顎に人差し指を当てながら疑問を紡ぐ。

『純血一族一覽』と優生学の関係は出来過ぎているという思いを捨てきれないし、これからの未来についてもそう。世の中の魔法使い——特に、貴方を除くスリザリンの人間が、非魔法の科学に眼を向けるなんて想像出来ない」

彼女の顔は依然青白さが残っていたが、意外な事に、先程までの混乱や狼狽は殆ど消えていた。……自分が両親の子ではないという可能性は、もっとハーマイオニーの心に影響を与えるものだと思っていたものの、彼女は僕が考える以上に強い精神を持っているようだ。

「貴方にも話した筈だけど、去年のクイディッチ・ワールドカップを思い返す限り、彼等がマグルを理解しようとするなんて全く思えないわ」

「まあ、イカれているのが一般的な魔法族である事は認めるがね」

巨大な金貨で支払いを行おうとしたり、テントに噴水や煙突を付けてみたり、そんな非魔法界の標準……平均値から外れ切っているのが魔法族だ。非魔法族のスーツを着こなして見せるであろうバーテミウス・クラウチ氏が異常である。

もつとも、だからこそ彼の息子生粋の純血主義者により、ぶち殺される羽目になったのだろうか。

「しかし、自分の直接的利害に、生き死にに関わるなら真剣に学び取りもするさ。曲解されたメンデル遺伝学の導入のように、ホグワーツ特急が一部そうであったように、魔法族はそれらをこぞって導入し出す。たとえ、この戦争で闇の帝王が勝利しようとな」

純血主義の本拠地スリザリン寮に居るからこそ、つくづく肌で感じている。

そして、闇の帝王はその潮流を止めきれない。

子供が親や教師の眼を盗んで悪さをするように、市民は独裁者の監

視を乗り越えて「マグル」技術に接近しようとする事だろう。

「……スリザリンがマグルへ眼を向ける理由が有るといふの？」

「有るとも」

恐々と問うて来るハーマイオニーへ微笑む。

「例えば血の呪い——当人でなく、その血を引く子孫達へと掛ける特殊な魔法だ」

特定の呪文の名前でなく、分類や総称に近いものようだが、と続ける。

「ホグワーツで、そして魔法族の家庭内ですら聞く類の話題ではないから、余り有名とは言い難いがな。君の赤毛の親友が知らなくとも不思議では無いし、それを無知と咎められる事でも無い。しかし、その内の一例——最も悪名高きマレディクタスについてならば、君も聞いた事があるかもしれない」

知らないという意味表示か、彼女が少しだけ首を傾げたので補足を続ける。

「この場で簡潔に説明するならば、他人によって強制された動物擬き、しかも不可逆版と表現するのが一番伝わりやすいだろうか？ 嗚呼、そうだ。真実の愛によっても魔法が解けない『美女と野獣』と言えば、君には一番伝わるだろうか」

そう言えば、彼女の顔は少しだけ明るくなった。

あくまで少しだけなのは、理解の喜び以上に内容の恐ろしさが伝わったからか。

「その呪いは対象を獣へと近付ける。発症から暫くは人間と獣の変化を出来るが、最終的には獣の状態で固定される。呪いを受けた子孫だからと言って確実に発症する訳では無いようにも見えるが、発症すれば最後、対処法や治療法は無いとも言われている。少なくとも、今の所はな」

「……そんなスリザリン生を貴方は知っているって事？」

「流石にそうは言っていない」

感情移入してしまったのか、深刻な顔をした少女に苦笑を深める。

「思い返してみてください。リーマス・ルーピン教授は、学生時代にも些細

な秘密を抱えていた。しかし、彼が寮内でそれを言いふらしたか？」
「……仮にそんな人間がスリザリンに本当に居たとして、単なる同級生や先輩後輩程度の関係で明かすとは限らない。そう言う事ね」

「ああ」

普通ならばそうだ。

そして少なくとも、マレディクタスのスリザリン生は知らない。その事は、決して嘘ではない。

「だが、七年生まで——何なら、スリザリン以外の『純血』の人間まで含めれば、血の呪いを背負っている者がホグワーツに居ても可笑しくない。親族関係まで視野を広げれば、絶対に一人以上は見付けられる。もつとも、既に生きていない者も多いかもしれんが」

「……………」

「そして、悲劇を前に形振り構わなくなるのは何処の世界でも一緒だろう？」

感情を持つ我々は、異質な現実直面せざるを得なくなった時、合理を捨てる。

「非魔法界は科学が進んでいる。多くの医者が存在し、多くの薬が流通し、しかし治療どころか緩和すら出来ない病というのは未だ多い。そのような不可避の悲劇に襲われた人間が頼るのは、科学の手を超える領域——宗教や自然信仰、薬効不明の物質の摂取などの、『怪しい』分野だ。そして殆どの場合それらは何の効果も示さないだろうが、極々一部の領域において、治るか、そこまで行かずとも命を永らえる場合というのは、やはり有り得るだろう」

医学は未だ発展途上であり、全ての因果を詳らかにしている訳ではない。

魔法すら及ばぬ奇跡は、この世界に間違いなく存在している。

「そうして、理論不明だろうと再現性皆無だろうと、その者の人生にとって役立てば正義だ。ならば魔法界で手詰まりになった魔法族が、非魔法族の医療に救いを求めようとするのは不可避である。そう考えるのは果たして不自然だろうか？」

「…………ええ、そうね。認めざるを得ないわ。貴方の言う事は十分有り

得る」

「更に言えば、貧乏ウィーズリーと異なり、スリザリンの『純血』の大半は大量のガリオンを持っている。代わりに妻が危篤である程度の報せに取り乱さない場合も多そうだが——まあ、これから先、妻の容態に一喜一憂する変わり者の『純血』当主が現れないとも限らない」
そして残念な事に、その手の行動へ及びそうな人間に一人心当たりがある。

「そうなれば、彼は自分の人脈も金銭もありとあらゆるモノを使い、必ずや非魔法界の領分にも手を出す。結果として、魔法界の『マグル化』は大きく進む事だろう。そして、その未来はそう遠くない。世界の何処かでは既に進行中の筈だ」

非魔法族の医療は、魔法族にとって今まで考慮に値しなかった。

今でも大部分はそうだが、しかし魔法族にとつても使えるものは有るのではないか。少なくとも僕の眼から見ればそう思える。呪いは逆呪いを想定し、対策していても、科学技術や外付けの機械によつて無理矢理生かす事までは視野に入っていないだろう。

魔法でどうにもならないというならば、駄目元で科学に賭けてみる価値は有る。スリザリンに限った事では無く、そう考える魔法族は間違いなく現れる。

「現在での水準でも利用出来そうなのは、臓器や骨髄等の移植手術、人工呼吸器に代表される生命維持装置あたり。実際に役に立つかは微妙な線だが、試さない理由は無」

魔法族も非魔法族も人間である事に変わりないのだから、臓器の流用は出来そうだ。

またホグワーツのような魔法力に溢れた場で電化製品が上手く機能しないのは周知の通りだが、個人の魔法力が精密機器に対してどの程度影響するかは不明である。ただ、魔法族が街中を出歩くだけで各家庭のテレビが消えて行くという事は起こらないので、心配する程に大きな影響をおよぼさないのは間違いないだろう。

「まあ最も魔法族の関心を集め得るのは、今現在進行中の——後十年程で終わる予定であるヒトゲノム計画であり、その発展形の遺伝子検

査技術。既に全面無料化の議論すらある出生前診断、及び三十年前に合法化された中絶技術か。不妊治療や体外受精あたりも重なる領域が有るから、一応言及しておいても良いかもな」

表向き「マグル」を侮蔑しようと、「純血」達が無視する事は有り得ない。

ウィーズリー兄弟へと指摘したように、自分の子供が魔法族として産まれてくれるかどうかは、彼等にとって最大の関心事だ。

「確かに今は、胎児時点で魔法力を持つか否かの判別は出来ない。しかし、将来は必ずやその時代がやってくる」

今回ばかりは曖昧な表現を用いる必要が無い。

確信の下に、断言する。

「非魔法界の科学は、既にその未来を視野に入れている。遺伝子検査によって生まれた瞬間に、或いは母親の胎内で育っている間に、既に病気の発症確率、ましてや知能や身体能力等の閾値が解る時代が訪れるだろうと。ならば、魔法族も同じ道を辿る」

アルバス・ダンブルドア達
グリフィン・ドールが言う通り、非魔法族と魔法族が同じだというならば。

決して、そうならない筈が無い。

「現状、魔法族の関心は闇の帝王を人為的に誕生させられるかどうかではない。杖を振れるか振れないかの二択だ。そしてそれは、魔法力が何処に起源を持つかを特定出来れば判別可能になる。仮に魔法力の有無が遺伝子に由来するとなれば、もう最悪の部類だな。非魔法族の遺伝子と魔法族の遺伝子と比較、対照、分析してやるだけだ。間違いないく、君が生きている内に特定に足りるだろう」

また、と続ける。

「科学で見付けられずとも、魔法の側が見付ける可能性も有る。未成年者の魔法の『痕跡』^{trace}を魔法省が感知出来る事を思えば、また Hogwartsでの入学システムがどうなっているかを考えれば、その応用で早期に発見可能になるかもしれない」

これまでの魔法族の内で、魔法力の継承に関心に向ける研究者は居た。

そして、今後も研究者達は生まれるだろう。

「その果てに来るのは——やはり非魔法界の後追いの未来。優生思想の下に『劣等』な子供を間引かれる事が歓迎される時代だ」

もう、誰が止めようと、誰を殺そうと止まりなどしない。

「この国における1967年の中絶合法化、当時の世界の殆ど最先端を行った『革命』は、民主的需要の下では宗教的禁忌なんぞ些事だという事を示した。そして、特に厳格な宗教国以外は、多くの国が倣うようになった。1970年代までは国家が『不適格者』を殺していたが、それが批判により難しくなった後は、市民が個人の意思で自発的に殺すようになった」

選民的な大量殺人を行って来たのは、決してハーケンクロイツのみではない。

過去は全ての国家であり、今は多くの国民だ。

「……貴方は批判的なのね」

「言った筈だ。どちらでも良いと。在るのは単に、論理的に承認出来るのかという疑問だ」

我が母親——イカれていた育ての母の方だ——の事が少なからず影響しているのは認めるが、それよりも後者の方、理性の方が理由の多くを占めている。

他人に対して与えない権利が存在するというのは理解出来る。

恋人や家族との夕食や旅行を諦めて貧しい人々の為に寄付しろとか、自分の身すら危うい災害の中、水や食料の施しを求められたら何時でも分けてやれとか強制する事は——特にその意思決定に国家が介入し、個人の生き方を決める権利は無かろう。

けれどもその逆、施しを求めて来ただけの相手から先んじて奪う権利は誰にも無いのではなからうか。

正当防衛は加害者以外の第三者への反撃には成立せず、緊急避難は生命の天秤が釣り合う場合しか剥奪は許されない。そして、殆どの中絶はそのどちらでも無い。

「まあ、非魔法界がどうだろうと知った事ではない。そしてどちらかの立場を選べと言われた時、今の僕は、魔法界ではスクイブの赤子な

んぞ殺させてやれ。そう勧めてやる側に立つ。……嗚呼、そうだ。今の魔法界を見る限り、そう、言わざるを得ない」

中絶する夫婦の気持ちは、限界があるにしても、全く想像出来ない訳では無い。

そして法的に胎児は「物」であり、だからこそ中絶が許容されるのだとしても、その通りの心境で中絶を行う人間なんぞ殆ど居ないだろう。そもそも真つ当な人間は、殺人罪が絶対に適用されないと知っている犬猫ですら容易に殺したがる。まして人の形をしたモノなら猶更である。

ならば、無魔法力の子供を諦める魔法界——将来の魔法界であつても、一定程度の慚愧と悔恨の念、そして贖罪の為の善行は期待出来るのではないか。

「現状の魔法界の構造では、「スクイブ」が産まれても幸せにならない。当人も、家族も。マルフォイ家は勿論の事、君が善性を確信するウィーズリー家ですら。彼等程度の覚悟と知識で「スクイブ」を産んでしまえば最後、必然のように一家が崩壊した事だろう」

十八世紀に記された怪しい書籍に則れば、純血ならば三歳で魔法力の発現には十分。バチルダ・バグショット教授の書籍によれば、純血非純血を問わず平均で七歳。世間的に承認されるギリギリの期限となればホグワーツ入学前の十一歳か。

それだけの時間、親から愛を注がれて育てられた後で、しかし自分だけが魔法を使えないという現実の重みに、「スクイブ」の子供は、或いは他の家族達は耐えられない。

また「スクイブ」に忘却術を使うにしても、彼等に魔法族の兄弟が居る場合、その心に傷跡は残る。魔法族まで含めた全ての兄弟姉妹に忘却術を掛け、その存在だけを消すというのはまあ、難しい。特定の記憶だけ、かつ後遺症無しに消すというのは殆ど神業だ。流石のアルバス・ダンブルドアでさえ不可能だろう。

そして半端な忘却術に留まってしまえば、それが魔法族であれば、何れ自力で破ってしまう危険が有る。真実を知った時——兄弟姉妹が本来もう一人居た筈なのに、その事実を両親に臆されたと知ってし

まった時、やはり幸福な家庭は崩壊するのではなからうか。

「„スクイブ”が魔法界に生まれ落ちる事によって、親も、兄弟姉妹も、その„スクイブ”自身も、誰も彼もが不幸になってしまう。ならば、大いなる善の下では、その殺人——と言ってしまふのは片方の立場に寄り過ぎだな。兎に角、その家族の人生を善きモノとする為に、善き法律は率先して„スクイブ”の中絶を是とすべきだろう」

僕は現実を肯定する。

世の母親達の決意を、赤子を産まない勇氣ある選択を尊重する。

「……スクイブは私達と何も変わらないわ」

「ならば、非魔法界にも同じ事を言ってやるべきだな」

食い継るように言うハーマイオニーの言葉は、僕の心に聊かも響かない。

彼女が愚かだと言う訳では無い。彼女が僕より遥かに屋敷しもべ妖精の事に詳しいように、僕が彼女より遥かに詳しいからだ。ホグワーツに居る傍ら、心の何処かには常に問題を置き続け、向き合ってきたからだ。

「非魔法界の議会が制定した1967年の法は、通常許容されるべき中絶期間を定めた。それ以降の中絶が違法であると明確に宣言した。しかし現在、seriously handicapped 重篤な障害を持つ事になる赤子の中絶に関しては、中絶期間要件が意図的に外されている」

「かの法律を厳格かつ文面通りに解釈する限りにおいては、その赤子が産まれる一秒前に彼ないし彼女を中絶したとしても、医師及び母親に対して殺人罪は適用されないのだ」

まあ、実際の運用は流石にそうなっていない筈である。

更には言えば、『重篤な障害』を如何に定義・解釈するかこそ一番揉める点であろう。また、これからも揉め続けて行く事が眼に見えていく。治療技術の絶え間ない向上により『重篤』の範囲は狭まり行くだろうし、その一方で治療費の低下はそう簡単に実現しないだろうから。

「そして君を否定しよう。„スクイブ”は、„マグル”は、僕達と違う

とも。

——彼等は決して魔法を使えないからな」

その一点こそが決定的に、僕達の彼我を分けてしまう。

「確かに非魔法界では、人種差別など時代遅れだというのが支配的だ。しかし、そうなたたのは結局の所、人種が何だろうとマトモに生きるには差異が無いからではないのか？」

人に上下は無い。人類による人類の支配を正当化など出来ない。

二度目の世界大戦以降、その風潮は加速した。

「勿論、オリンピックのような人類の極限点を目指す場合は、環境要因で覆い切れない程の、遺伝要因が露わになるかもしれない。また、知能という大きな枠で括るのは雑過ぎるが——その手の人間は、百米走とマラソンにおいて、有利な遺伝子が同じだと考えているのだろうか？——数学的才能や法的論理思考能力など細かく区分して行けば、その特定の知的分野において有利な遺伝子を持つ人種や民族というのは、何時の日か発見されるのかもしれない」

人間は遺伝子の箱舟である以上、そこを根本から否定仕切るのは中々難しい筈である。

「けれども、普通の生活をする限りは、如何なる人種だろうと同じように生きられる」

そこに大きな差なんぞは存在しない。

「100mを十秒切る速度で走れるか否かは、確かに人種・民族の有利不利が出るかもしれない。だが、一分も与えてやれば、五体満足の全人類が変わらず同じようにこなせるだろう。知的分野にしても、読み書き四則演算は当然の事、現在新しい技術である携帯電話やコンピュータの扱い方だって、適切な教育が為されれば誰もが覚えらるるに違いない」

述べた以上の事にしても、特定の人種だからオックスブリッジやアイビーリーグに入れないう思考なんぞ、最早非魔法界では承認されまい。同じ環境下という条件であれば、世界の澄み数万人程度の中には入れるだろう——そう考える者が殆どの筈だ。

「要は、人種が違おうと、一つの共同体内コミュニティで生きるのに支障はない」

まあ、社会構造のせいでも人種的苦労が付き纏う事は否定出来ない……というか、今の非魔法界もそれを乗り越えられる程に成熟していない筈だが、それはやはり別の話だ。

「しかし、非魔法族と魔法族は違う。杖を振っても火花すら起こせないし、魔法薬学の教科書に忠実に従ったとしても“マグル”はゴミのスイープしか生み出せない。そして、ホグワーツにも入れない。どんなに望もうと、泣きながらアルバス・ダンブルドアに手紙を出して直訴しようとして、この地で学ぶ事は決して許されない」

その絶対の理を、親や子供の後天的努力で崩す事は出来ない。

「……科学の発展で魔法は代用が利くわ」

「利かないものも有るだろう？」

利かないからこそ、僕達は特別なのである。そして問題なのである。

「ホグワーツ卒業生ならば使えるであろう忘却術や、姿現し。変身術や消失呪文、目眩まし呪文にマグル避けの呪文。そして、最も致命である服従の呪文。確かに“マグル”の科学は、この二百年で目まぐるしく発展しているが、彼等がそこに行き着くまで果たして何年掛かる？」

死の呪文は非魔法界で然程価値が高くないが、それ以外は別だ。

非魔法族が三、四十年で辿り着けるとは思えない。百年後か、二百年後か。そしてその頃には、今生きている魔法族は——遠からず子供を産む者達は、尽くが墓の下だ。

であれば、魔法族は倫理的善ではなく、現実的悪を選択する。

マクローの視点など知った事では無い。自分達の人生の幸福こそが最優先だ。

「また、人種ないし民族に対する非魔法界流の議論も、魔法界には適用出来ない。非魔法界での先進的な主張では、それらを真正面から否定したり、文化的・歴史的判別に過ぎないとしたりする。その中で殆ど必ずと言って良い程に取り上げられるのは、ハーケンクロイツの『アーリア人』概念や、特に合衆国で発展した『One Drop Rule一滴の血の掟』の愚かしさだ。……いや、それらを擁護するつもりは無い」

寧ろ、意味は無いと全面的に賛同してすら良い。

「けれども、それらは人為的な——学者や個人次第で平気で定義が動く差別的区分だ。百人居れば百人が違う回答をし得る世界だ。しかし、それらと違い、魔法界で魔法族Wizardkindとそれ以外を判別する為には、難しい手段や喧々諤々の議論なんぞ存在しないだろうか？　ただ単に、魔法の杖を振らせてやれば良い。或いは、組分け帽子を被せてやれば良い。それだけで済む」

名誉アーリア人のように、政治的理由で定義を弄る事は出来ない。民族や国民というように、結婚などの社会的事実や建国などの歴史的事件によつて変動し得る定義でもない。

魔法族は誰の眼からも客観的な形で、己が『魔法族』である事を証明し得る。それもまた『純血主義』の徹底ではないのだが、暫定の現実的な対処としては十分だろう。

「更に君に最大限譲歩し、君やアルバス・ダンブルドアの主張——魔法族と非魔法族の平等をそのまま認めるとしても、だ。ウィーズリー共の前でも少しだけ触れたように、魔法族の夫婦が自分達と同じ魔法族の子供を希望する事を止める論理が有るのか？」

「この親達の望みはやはり、非魔法族であろうと理解出来る筈なのだ」
何処まで行つても、僕達が感情を持つ生き物である事こそが足枷となる。

そして魔法界は止められまい。あの老魔法使いが徹底的に権威を破壊した今後の魔法省が、子供に棒を振る事しか教えられない今のホグワーツが、それを駄目だと言える程の社会を作れる筈が無い。

「子供が健やかで、頭脳明晰で、容姿や能力に優れていて欲しいというのは、親で有る限りは誰もが等しく抱く願いに違いない。重篤な障害を持つ子供が自分達の下に生まれて欲しい——最初からそう思いながら子を設ける夫婦なんぞ、果たして居るだろうか？　いや、居まい。その結晶が、非魔法界の中絶法だ」

我が育ての母は……果たして今の時代、そもそも産まれる事が出来ただろうか。

産みの母は双子では無く、一人っ子だったのではなからうか。

しかも皮肉な事に、その方が遥かに幸福な人生を送れた筈なのだ。

双子の姉が最初から存在しないならば、彼女は魔法の存在を知る事も無く、我が父に研究的興味を抱かれる事も無く、闇の魔術による激痛の中で死ぬ事も無かったのだから。

「嗚呼、僕は肯定する。非魔法界の法を、国民国家が定めた秩序を重んじる」

変わらない現実から目を逸らす気は無い。

「だというのに、『マグル』は魔法族に対し、『スクイブ』の赤子を殺すな。構わず産んで、一家纏めて不幸になれ。『マグル』共は魔法界にそう強制するの？ それは彼等彼女等の大半が忌み嫌う、魔法族の女性の権利の否定ではないか？」

「……何度言っても言い足りないわ。貴方って人は、本当に意地が悪い。そして卑怯よ」

「そうでないのであれば、それは最早僕ではないだろう」

普通の人間のように良識的で在る事は出来ない。

ハーマイオニー・グレンジャーの前ですら、自制出来やしない。

「グレゴール・ヨハン・メンデルは勿論の事、チャールズ・ダーウィンは決して差別主義者で無かった」

彼等の理論を誤解・曲解した大衆こそが真なる悪だった。

「そして現在の賢明な人々も言う。人間に、遺伝子に絶対の良さなど無く、多様性こそが大事だと。なら、僕はこう返したい所だ。神の視点で絶対の良さは無くとも、社会の多数決で称賛される良さは現実として存在するではないかと。弱く愚かで醜い人間よりも、強く賢く美しい人間が広く望まれるものだ」と

チャーリー・ゴードンの苦悩を味わいたい者など、この世にどれだけ居ると言うのだ。

人間の種としての多様性を維持したいというならば、自分達の家族と、その思想に賛同する狂信者と、試験管の中だけでやってくれ。それで十分だろう。他まで巻き込むな。数百年後数千年後になって初めて役立つ遺伝子なんぞに興味は無い。無知で愚昧で近視眼的な

我々は、直近数十年に役立つ遺伝子、この現世での生活を充実させてくれる幸せの種子こそを欲するのだから。

「……貴方は決して、その言葉を本気で言ってはいない。本気だったのならば、今の貴方の中に怒りや悲しみなど存在しない筈だわ」

長い数秒の沈黙の後、ハーマイオニーは震える声で言った。

それを無視して僕は口を開き直した。

「魔法界と非魔法界が異世界で済む時代は終わった」

魔法界が懐古主義に浸ったままにいる事は最早許されない。

「産業革命期を迎えて身分秩序が大きく揺らぎ、今やザ・ナインとオックスブリッジ出身者こそが新たな特権階級とされつつあるように、二度の大戦を経た魔法界もまた、このままで居られないのは明らかだ。国際機密保持法は未だ消えていないが、異なる二つの世界は既に大部分が混合し始めている。そして、この流れは誰も止められない。今世紀で最も偉大な魔法使いも、闇の帝王も。だからこそ、魔法族はその対処の為に真剣に動くべきだったのだ」

そして、この魔法界でそれが出来た人間は一人しか居なかった。

それだけの強権を振るい得る魔法使いなんぞ、歴史を見ても一人しか居なかった。

「『スクイブ』、『マグル』、更に関連して『マグル生まれ』。それらは近い将来必ずや社会問題化し、ゲラート・グリンデルバルトの時以上に全世界を揺るがす大騒動となる。そして、この最終的解決に際し、非魔法族の後追いをして楽をするなんぞ不可能だ。これは端から非魔法界に存在しない問題で、だから魔法族は血反吐を吐きながら未来を模索する必要があるというのに——魔法界は旧態依然とした体制のままで居る」

アルバス・ダンブルドアは政治の世界に身を投じなかった。

外野で騒ぎはしていたが、彼が自ら動いて本気で介入しようとはしなかった。

そして建前とは言え、魔法界における全ての権限を握るのは魔法大臣。マーリン勲章第一等でもウイゼンガモット主席魔法使いでも、世界魔法大戦の英雄でもない——そんな言い訳こそが、都合の悪い言葉

を聞かない振りし、従わない事を許した。

そもそもアルバス・ダンブルドアは校長になつて忘れたのだろうか。

大人による道徳的正論なんぞ、生徒なら反発しようとするのが普通だろうに。

「何処の魔法界であつたとしても、魔法族は何れ『スクイブ』の赤子を殺し始めるとも」

予言する。

闇の帝王が直接殺すのと比較にならない数が、善意の下に摘み取られると。

非魔法界育ちの半純血や非魔法族生まれも例外では無い。ホグワーツから入学許可証が届けられた時の驚愕、組分け帽子に寮を宣言された時の歓喜を覚えている彼等は、魔法という既得権益を、決して自ら手放そうとはしまし。

「中絶禁止法も通らない。非魔法界がそうである以上、ハーマイオニー、万一君が声を上げようと、君の同胞達が強く反対してくれる。その結果、良くも悪くも、魔法界から魔法力を持たない『不適格者』は殆ど一掃される。生きている『スクイブ』を君達が殺さなかつたとしても、肩身の狭くなつた彼等は自ら魔法界を去っていくだろう」
そうして、魔法界の純血主義は達成される。

サラザール・スリザリンの後継者でなく、三創設者の後継者こそが叶えてくれる。

「君も含めたグリフィンドールは闇の帝王を愚かだと断じ、思考停止のままに純血主義を小馬鹿にする。けれども、彼の掲げる純血主義は、あくまで数ある純血主義の内の一つの考え方に過ぎず、また魔法族が抱える血の問題の一面でしかない。新たな『純血主義』、或いは本来の純血主義は、帝王が死んだとしても消えはしない」

グリフィンドールは勝利すれば終わると思つている。

けれども、終わりではない。血の戦争は、まだ始まってすら居ないのだ。

「しかしこれを考えもしない、止めようとしな、止められないまでも

緩和に挑みすらしらない者達。今のグリフィン・ドール、ハツフル・パフ、そしてレイブ・ンクローの愚か者達を、一体どうしてスリザリンと違うのだと言える？ 君達の何処がヴォルデモート卿と違うのだ？」

無垢なる者達が、産声を上げないままに摘み取られる。

この未来を全肯定する魔法族達は、一体どの口で光だと自称出来るのだろうか。

衝撃に大きく震えたハーマイオニーを他所に、独白めいた言葉が口を突いて出る。

「そして、『マグル』達は、そんな魔法界を一体どう見るのだろうか」
結局、僕は魔法族である。

解らないから想像しか出来ない。しかし、余り良い想像も浮かんでこない。

「単に魔法力を持たないという理由で赤子を——自分達と全く変わらない非魔法の存在を、魔法族は中絶する事を止めない。そんな『異種族』を、彼等は共に歩むべき友人として、同じ島に住まう隣人として見てくれるのだろうか？」

この問題を意識する以上、アルバス・ダンブルドアと違って楽観的にはなれない。

「確かに表面上は友好を保つだろう。外交とは感情を排して然るべきだ。けれども内心は、或いは市民達はどうか。国際機密保持法が在る今なら余り問題にならないが、それが破綻を迎えた時、異種族間戦争が起らない可能性は、僕には全く想像出来ないが」

セーレムの非ではない災禍が、世に溢れる気がしてならない。

「……嗚呼、そもその話。現在の魔法族ですらも、酷く独善的な理由で『マグル』の記憶を消している訳だが、その事に対して、彼等は嫌悪感を抱かないのだろうか？ 魔法族が悪意の下に本気で忘却術を用いれば、一つの夫婦に対し、自分達に子供が居た事すら忘れさせられる。だというのに、そんな怪物と仲良く出来るのかね？」

故に、非魔法族は遠くない将来、必ずや魔法を奪いに来るだろう。

遺伝子を人工的に変質させられる事は、既に数十年前のX線の研究により示された。遺伝子組換え技術にしても、それにより産み出され

た食品は既に商業化が始まった。

未だその手の技術のヒトへの適用は不可能であり、また遺伝子を弄るのも自由自在とは行かないが、しかし何れはその時代がやってくる。万が一、魔法力の有無が確かに遺伝子に由来し、かつ非魔法族がそれを知れば、文字通りに『窃盗または暴力』で魔法力が奪われる時代が到来する。

何より、非魔法族は国家という怪物を飼っている。

魔法の力の獲得が社会に正の影響を与えるのは明らかだ。そうである以上、国家は死にもぐるいで——たとえば魔法族の人権を無視し、拉致し、数人を実験動物^{モルモット}として飼う事になるとしても——魔法を奪いに来る。もつと穏やかな方法を採用としても、警戒心の足りない「マグル生まれ」や半純血が宿泊したホテル、もしくは自宅に侵入し、徹底的に清掃し、体毛の一本一本、皮膚の一欠片に至るまで收拾し、遺伝子サンプルとして研究する位は平気でやるだろう。

寧ろ国民国家は、そのような努力を率先して行うべきだ。

それが大勢の国民を養い、彼等の幸福を願う存在として望まれ、だからこそ辛うじて生存を許容されている怪物^{リザアィアサン}の責任というものだ。

「……本当に、貴方は物事を悲観的に見るわよね」

「ああ。そして、魔法界における三度目の大戦も予期するとも」

闇の帝王の次の地獄を想定する。

彼の純血主義が至極半端で矛盾を抱えたままであり、光の陣営も何ら対策を取ろうとしていない以上、絶対に不可避であろうと信仰する。

「これは魔法力が遺伝子により決せられるという前提の話になるが……そんな事が万一判明してしまえば、「スクイブ」を産む可能性を持つ者——たとえば魔法遺伝子をホモ接合^{同型}で持たないか、或いは非魔法遺伝子をヘテロ接合^{異型}で持っている人間は、結婚時点において迫害され、忌避されるようになる事だろう。そして必然のように始まるのは、真の「純血」とそれ以外の魔法族、両者による遺伝子戦争だ」

この魔法界で虐げられ、差別された者達は必ず暴発する。

今現在も非魔法界の何処で起こっているように。

「そうなつてしまえば、銃火器が魔法界に流入して来る気もするがね」
アバダケダブラ
死の呪文に代わる、外の世界での死の象徴。

今は歯牙にも掛けられていないソレらは、近い未来で魔法界をも蝕む気がしている。

何故なら、技術とは絶え間なく発展して行くモノだからだ。時間の進みが遅い魔法界ですら例外ではないからだ。魔法ラジオのように、カメラのように、魔法で同種の機能を持たせた道具は既に存在するからだ。

「確かに魔法族にとって、銃火器は然程の脅威にならない。盾の呪文は外傷自体を防ぎ、治癒呪文は臓器不全や失血に基づく死の危険を低下させる。が、忘れてはならないのは、魔法族は非魔法族と交配出来るという事だ。要は、両者の身体の構造に然程の差異は無い。シヨックを齎すような短時間での大量出血、或いは一瞬で意識障害を招き得る脳幹等への致命的一撃。杖を持った魔法族にも、それらに抵抗する術は無い筈だ」

「マグル」が考えるより魔法族殺しのハードルは高いが、それでも不可能では無い。

そして魔法族だろうと非魔法族だろうと、銃を撃つ為には杖も呪文も不要なのだ。ゴドリック・グリフィンドールが杖に加えて剣を併用したように、将来の魔法族が銃を併用する事に障害があるとも思えない。

「……………私は、貴方程に暗い未来を思い描けないわ」

ハーマイオニーの顔は青白かった。

手を小刻みに震わせ、耐えるように自らの身体を抱いていたけれど、それでも口調だけは確かだった。

「純血も、半純血も、マグル生まれも、貴方が思う程に戦争を愛してなんか居ない。可能な限り平和的に解決するよう努力し続けるし、何時か解決出来ると信じてる」

「そうであれば良いな」

我が母達が死なずに済む世界。

それが訪れてくれると言うのなら、僕は何も文句は無い。

「——嗚呼、本当にそう思う」
思っていて、けれどもそれが叶う未来が、どうしても僕には見えや
しない。

ヘテロシス

「——レッドフィールド」

突然の、予想だにできなかった呼び掛けで我に返る。

恐らくハーマイオニーもそうだっただろう。肩を震わせ、はつとした表情を浮かべて、僕と同じ方向、つまりミネルバ・マクゴナガル教授の方を向いた。この瞬間、僕達は教授を居ないように扱うのではなく、そもそも部屋内に居た事すらも忘却していた。

そして、教授は呆れを隠さない、しかし何処か眩しいモノを見るような目で僕を——いや、僕達を見ていた。それだけでなく彼女は立ち上がり、ハーマイオニーの隣に座った。

「丁度良い機会だから聞くのですが、貴方は将来どうするつもりなのですか」

「……どうするつもり、とは？」

「勿論、進路の話です」

平静を装った問いに、至極当たり前のように教授は答えた。

「進路相談は、自寮の寮監とすると記憶していましたが？」

「別に他の寮監にしてはならないという道理は有りません」

「……まあ、確かに仰る通りでは有りますが」

そして教授は今回もまた、話を聞く気が無いようだった。

それは間違いなく意図的な反応で、恐らくは僕達の会話中に深く検討され、覚悟と共に判断を下した上での行為に違いなかった。

「貴方は非常に賢い人間です。更に言えば、私が見て来た中で最も生徒らしからぬ人間だと表現して良いでしょう」

僕の気のせいだろうか。

それは全く称賛のようには聞こえなかった。

「私も教職生活は長いですから、色々な生徒を見て来ました。決闘の腕で大人に並び立てる生徒。変身術の分野で類稀な才を示す生徒。高度で邪悪な魔法の数々を使える生徒。そして、グレンジャーのように並外れた記憶力を持つ生徒。そのように様々な生徒を見て来て——けれども、レッドフィールド。全く魔法と関係の無い領域で生徒

を、教師を、そしてアルバス程の魔法使いすら手玉に取ろうとする人間は、今まで見た事が有りません」

「それは非常に光栄な話ですが、まあ、何事にも初めてという物はあるでしょう」

数十年前の彼女、新任教授は間違いなくそうだった筈だ。

そもそもハリー・ポッター、『選ばれし者』への対応も、やはり初めての筈だ。

「また、手玉に取っているつもりも、取れたつもりも無い。誰も彼も同じ。アルバス・ダンブルドアも、ハーマイオニー・グレンジャーも、ドラコ・マルフォイも、勿論貴方だって、僕の意図とかけ離れた所で好き勝手に動いている。僕の意図通りに動くモノなど一つも無い」

「ならば、相手になっていない。そう言い直しましょうか」

教授は動揺も無く、僕を真正面から見据えた。

「貴方はグレンジャーが意外と静かだったと、先程そう言いましたね？ その理由は単純ですよ。貴方と論戦をするには力不足だと感じていたからです。ウィーズリー達も同様で、そしてそれは当然なのです。私ですら敵わないと思わせる程の相手を、一体どうして彼女達が相手出来ましようか」

「……解らないでしょう。貴方は被告人でも弁護士でも無かった。実際にやってみれば——」

「——レッドフィールド。貴方はまだ理解していないようですが、大人とは、ホグワーツ一年生の問いにすら容易に答えに窮してしまう程度の生き物ですよ」

「……………」

その指摘に不意を突かれた気がしたが、それ以上に、教授が自ら打ちのめされたように見えた事により大きな驚きを感じた。

「大人が答えを出せない場合は単純な知識不足という場合も有ります。けれども、もつとも答えにくい子供の質問というのは、やはり世の不公平や不条理——大人ですら無力感を抱く類の事柄に関する問いです。思えば去年度のクリスマスもそうでしたね。貴方が我々に叩き付けたのは、三校試合で上級生だけ楽しむのはズルいという、そ

んな素直な感情の論理でした」

「……それが何か？」

「私達は、少なくともアルバスとスネイプ教授以外の人間は、貴方を勘違いしていたという事です。貴方は他の生徒より遥かに大人びて居るように見えますし、実際そうなのでしようが、貴方の根幹を構成している部分は全く違うのでしよう」

「……………」

「ですから、私は問うているのです。貴方は如何なる将来像を思い描いているのです？ ホグワーツを卒業してから、一体何をしたいと考えているのですかと」

その問いは恐らく、今日初めて僕の心を揺らした問いだった。

全てが想定外の範疇とまでは言わずとも、意表を突く言葉というのは今までの場には全く出て来ず、けれども、その問いだけは違った。

「貴方がこの場に私に相談する事へ忌避感を抱いているのは解ります。普通の人間が相手であれば、そもそもこのような話をしなかつたでしょう」

……まあ、通常で無いのは明らかだ。

他の生徒が居合わせる中での進路相談など聞いた事が無いし、一般論としても存在して良いとは思えない。

「けれども、貴方の場合は普通で無い方が良さそうですし、何よりこの場でこれを語るのは、他ならぬ貴方の利にもなると考えています。私は貴方に対し、スネイプ教授——スリザリン寮監よりも多くの道を示せますから」

「……随分とまた、貴女らしからぬ事を言うのですね」

「事実だから仕方ないでしょう。私は彼より遥かに長く生きています」

自賛の響きを一切含ませる事無く、淡々とグリフィンボール寮監は言った。

「貴方の望みにも抛りますが、私ならば、かなりの程度の助力が出来るかと自負しています。貴方が魔法省に就職したいと望むなら、かつての同僚に私が推薦状を書きましよう。貴方がホグワーツ教授になりた

いというなら、私が他の教授達や理事会に、そしてドロレスにも話を通しましょう。貴方が不死鳥の騎士団員になりたいというのなら――確約は出来ませんが、アルバスに話を持ち掛ける事くらいはしてみましよう」

「旨過ぎる話には大概何らかの落とし穴が有るものですが」

「落とし穴など有りませんよ。貴方を欺こうという気も有りません」

ミネルバ・マクゴナガル教授は僅かに微笑んだ。

「しかし、賢い貴方の事です。私がこの提案をする上で、何を前提として言っているかは解っているのでしょうか？」

……嗚呼、勿論だとも。

「光の側に付けという事でしよう？」

「ええ、その通りです」

ハイマイオニーが小さく喉を鳴らした。

けれども、僕は彼女に眼を向けなかった。

僕に余人に意識を向ける余裕は無く、一方で、教授もまた僕から視線を逸さなかった。アルバス・ダンブルドアと違う歳の取り方をし、全く異なる力を持つに至ったであろう魔女は、唯一僕だけを瞳に映していた。

「貴方は、貴方自身が思う以上に力が有る。私はグレンジャーの主張の方が正しいと思いますよ。貴方はアルバスをホグワーツの破壊者と認識していましたが、けれども貴方が今年本気になっていたのであれば、貴方こそが間違いなくそうなれる器でした」

「教授もまた僕を過剰評価してくれる訳ですか」

ウィーズリー共の『卒業』の場を荒らし、ホグワーツの熱気に冷や水を掛けてやる程度が精々で、その後に校内の結束全てを破壊し切るまでは行かない。

それが僕の予測であり、けれども教授はゆっくりと首を横に振った。

「貴方が自分を理解していないだけです。そして、貴方が言うには前哨戦のつもりだったのでしょうか？ ウィーズリーについては純血主義の論理で捻じ伏せましたが、他の生徒に対しても、貴方が一度敵意

を抱いてしまえば幾らでも似たような事をやれるのでしよう？ 後ろ暗い所のない人間など存在せず、貴方にはマルフォイ家の情報網があるのですから」

「貴方は自分の強さを、或いはグレンジヤーの強さを基準としています。……もしかすれば、そこに含まれるのはポッターもでしょうか」

心労を誤魔化すかのように、彼女は溜息を吐く。

「先程のウィーズリー達が良い例です。法律上成人してはいますが、たかが十七や十八の人間の強さには限界があります。貴方が容赦なく振るう感情——憤怒や憎悪、嫉妬や悪意の力に、彼等は耐えられるようには出来て居ない。他の下級生なら尚更です」

そう言うもの……では有るのか。

まあ、教授の言わんとする所は解る。先程のじゃれ合いにも幾らでも付け入る隙は存在していたし、作ったつもりですらあったのだが、彼等は何も言つて来なかった。

「しかし、貴方は自制しています。私達の頼みがあつたとは言え、それでも簡単に引き下がってしまった。サラザール・スリザリンが、いえ、貴方がたの先輩が六十年前に打ち立てた『純血一族一覽』の正義を、全ホグワーツに対して問い直す事はしなかった」

「寧ろ、僕の代わりをやらないスリザリン生の方が理解しかねるのですがね」

どれだけ怠慢な人間が多いのやらと、そう思つてしまう。

「僕は何も独創的な発想をしている訳では無い。アーサー・ウィーズリーの子供は、ホグワーツに十数年居続けている。何時でも叩きのめしてやれば良かった筈で、しかしながら如何なる上級生も、彼等の純血結婚の欺瞞を指摘しなかった。そして今も、誰も及びはしない」

殆ど本心とも言える嘆きに、けれども、教授はゆるゆると首を横に振った。

「他のスリザリン生も貴方とは違うのですよ。前回の戦争後、死喰い人の大半はアズカバン送りから逃れました。だから彼等の子供達が今どのように感じていようと、その時点で彼等は遥かに恵まれていま

す。彼等は親の示す道に何の疑問を持たず——とまで言い切るのは教授として不適切でしょうが、少なくとも貴方よりは考えを巡らせずに済んでいる」

「……………」

「気付いた少数の人間にしても、スリザリンには『例のあの人』の存在が立ちはだかります。彼は支配を正当化する為の論理として純血主義を掲げました。けれども、本当は違うのではないかという噂も、光の陣営側では確かに有りました」

……そして多分、闇の陣営にも在っただろう。

ゲラート・グリンデルバルドは魔法族の未来の為に戦った。

必然的に、彼の配下は魔法族——精々言語が違うだけの、常識や価値観の大半を同じくする者達が殆どだったようだ。噂では亡者の軍隊も居たらしいが、それも所詮は元人間に過ぎない。彼の強さや卓越性は、あくまで人間の枠組みを逸脱するモノでは無い。

だが、闇の帝王は全く違う道を歩んでいる。

確かに、利害の一致を理由とし、巨人や小鬼、狼人間や吸魂鬼、その他多くの闇の存在と一時的協力関係を築けた魔法使いは居る。それこそ魔法史を当たれば簡単に探せる位には。しかしながら、それらのヒト以外を配下として付き従え、命令すら下しているように見える存在は、僕が知る限りでは彼だけだ。

「けれども、貴方は『あの人』の矛盾を平気で指摘してしまう。その理屈を理解しながらも、しかし些細なモノとして呑み込んでみせる。恐らく貴方は彼を肯定する論理すら提示出来るのでしょね。貴方が有するその視点は貴重であり、そしてその視点を言語化出来る存在は更に貴重です」

反論の余地など無い。

そう示すかのように、教授の言葉に迷いは無かった。

「今回の場を準備するにあたっては大きく骨を折りました。貴方が暗に指摘したように、今回の一件で私達がアルバスに連絡を取る一手段を喪ったのかもしれませんが。今後、実際に困る事が出て来るのかもしれない。しかし、私はその価値が十分に有ったと思います」

「……貴方の寮生達を叩きのめしたのを見ておいて良く言えますね」
「まあ、私が考えていたより遙かに手酷くやられたのは否定しません
が」

ミネルバ・マクゴナガル教授は流石に困ったような、疲れたような
表情を浮かべた。

「けれども、私の選択は間違っていないかつたのだろうと、そう思える事
は確かに有りましたよ。貴方がウィーズリー達に対して投げた最後
の言葉。あれは絶対に私の口から、そしてグレンジャーの口からも決
して出なかつた内容ですから」

「彼等がもつとも傷付くであろう言葉を意図的に選択した。そうだと
しても？」

「自分の意図通りに動く物は無い。そう言つたのは貴方でしょう？」

そして、私から見れば至極当然ですよ。貴方は何故グレンジャーやデ
ラクールが手を差し伸べようとするのか、その理由すらも全く理解出
来ていないのですからね」

僕が最も不可解に思える部類の人間達を出すのはやはり反則だと
思う。

「貴方が傷付けようと思つた相手が、傷付いてくれるとは限りません。
それと同様に、貴方が心を折つてやろうと考えた相手が、そのまま屈
したままであるとは限りません」

「彼等はハーマイオニー程に強くない。そう言つたのは貴方ですが
？」

「か弱いと言つた覚えも有りません。彼等は私が誇りに思っている私
の教え子達です」

その返答は堂々と、胸を張つてなされた。恥じる色も一切無かつ
た。

「そして、貴方も同様なのは？ 注意深く観察する事さえ出来るの
ならば、貴方は案外解り易い人間です。この場に居たのが双子達の弟
や妹であれば、いえ、仮に彼等の三人の兄の誰かが相手だったとして
も、貴方は先程の話をしようとしなかつた。私は傍らから見ていてそ
う感じましたが、違いましたか？」

「……良く解りますね」

「伊達に貴方を見て来ていませんからね」

そして視線が険しいままだったので、軽く両手を上げつつ僕から口を開く。

「魔法族——その子供が最も『マグル化』しやすいであろう分野というのは解り切っており、そして革命にはカネが必要なんですよ。特に、外の世界から文物や人間を持って来ようとする場合には。ウィーズリー・ウィザード・ウィーズはその架け橋に成り得る器かもしれない。彼等は好奇心旺盛で、何より新しい世代の発明家だ」

まあ彼等が何処まで本気になるかは解りませんが、と微笑んだ。一族外に金を費やせるか

近代社会で世界を変える原動力となったのは、王でも貴族でも無く、産業資本家だ。そして現代社会で最も金を持つ個人は実業家であり発明家であり、慈善家でもある。

「……貴方は何処まで先を見通しているのです?」

「見通してなど居ませんよ。あの怪物と一緒にされては困る」

芽の有りそうな所に少し嘴を突っ込むのが精々で、結局は彼等次第だ。そして、彼等に対して全てを賭けた訳でも無いし、彼等が失敗したとしても何も思わない。絶対に勝たねばならない騎士団長閣下と違い、僕は百の内の一つでも実れば十分で、そもそも片手間だ。

教授は大袈裟に息を吐いた後、気を取り直して言った。

「確かに今回の貴方の所業や態度は、決して褒められたものではないでしょう」

その表現に微笑する。

褒められたものではないとは、余りに柔和だ。マイルド何時もより少し堅い声色と、その瞳の奥の熱は彼女の本心を語っていて、それでも表情に露わになる事まで無かったのは、既に教授が吐露したように、僕の言葉がああ二人に価値を与えたと認めるが故か。

「貴方は他人に敵しい以上に、他人への悪意を隠さない。貴方なら幾らでも違う方法が思い浮かぶでしょうに、相手の心を最も抉る手段こそを一番に選択する。貴方は世間的には善良と呼べる存在ではなく、けれども、その一方で私は貴方を非常に評価しているのです」

「……………」

「そして、心の底から望んでいるのです。貴方がその力を破壊ではなく創造に、墮落ではなく救済に用いる事を。この魔法界で正しく生きてくれる事を」

だからこそ聞いたのだ、と彼女の瞳は言っていた。

お前は大人になってから、一体何を為し遂げたいのかと。

「正しい云々に絶対など存在しない」

教授の言葉に反発を覚えたのは、やはりその部分だった。

「闇の帝王やルシウス・マルフォイ氏達も自分達が正しいと思ってやっている。貴方達の正義は所詮独善的で在って、社会的が許容する訳ではない——という戯言は止めておきましょうか」

「それが賢明でしょう」

眼を光らせてくる教授に嘆息する。

今度は冗談は求められていないようだ。何時もはもつと甘い筈だが、今日は余程不興を買ったらしい。或いは茶化すべきでない話題だからか。

「ですが、教授。心遣いは有難く思うものの、御断りさせて頂きますよ。貴方の申し出が異例の親切と本心からの善意である事を理解して尚、僕はそれを受ける気が無い」

僕の返答に、ミネルバ・マクゴナガル教授は静かに視線を返してきた。

動揺もなかった。彼女はやはり「教授」だ。期間だけ見るのならば、ほんの僅かとは言えども、前校長やスネイプ教授より付き合いは長い。僕の返答を最初から予期していたのではないかとも思った。

「……………理由を聞いても構いませんか？」

「——単純に、教授が見誤っているからですよ」

ミネルバ・マクゴナガル教授は良い方向に考え過ぎている。

悪い訳ではないのだろうが、彼女もまた、自分中心で物事を捉えて

いる。教授はバーテミウス・クラウチ・ジュニアとは違う。彼女は肉親に憎悪や殺意を抱いた経験を一度も御持ちでは無い——要は僕達と価値観を異にしている。

「僕が散々不満をぶちまけている理由を、貴方は、僕が世の中を変えたという志を抱いているからだと考えている。しかし、それは違うのです。僕は革命に焦がれているが、革命に身を投じたいとも思っていない。僕にそれだけの理由は既に無いし、そもそも今や彼女に求められてすら居ない。まして僕は、自身が速やかに排除されるのが最も望ましいのではないかと疑い始めている」

僕はもう、前など向いていない。

「……話が見えて来ませんが」

「見えるように話す理由が有りますか、ミズ・グリフィンドール？」

「嗚呼。そして、この話の始点は進路相談であり、将来の話でしたね」
もう二年後か。

思った以上に、年月が過ぎるのは早いものだ。

「まあ、結論から言えば、ルシウス・マルフォイ氏の世話になりますよ」
最初から、僕に多くの道など無かった。

去年の夏の最後、現マルフォイ家当主と短い会話をした時点で決まったようなものだ。

「魔法省。あの砂の家に全く興味が無い訳ではないですが、やはり良い顔をされる職場では有りませんし、今後の時世からしてスリザリンス生を受け容れてくれるかは割と怪しい。貴方の推薦はそれを踏まえての事なのでしようが、その必要は有りません」

「私の提案を退けるのは構いませんが、では何の仕事をするつもりなのですか」

「さあ？」

「……さあ、って」

この瞬間だけ、教授は本気で困惑したような表情を見せた。

そして僕もまた、本気で笑う事が出来た。

「言われた所に行き、言われた事をやるだけですよ」

これを手紙でルシウス・マルフォイ氏に伝えた際、文面上でも解る位の困惑は感じ取れた。直接伝えたドラコ・マルフォイに至っては、理解出来ない怪物に向けるような眼で見られすらした。だが、僕としては、それ以上も以下も無い。

貴方がたが決める。僕はそれに従う。

「仕事なんて、将来なんぞに拘りは無い。質素な生活をする限りという条件は付きますが、十年くらいなら母達が遺した遺産で食い繋げもする。そもそも我がスリザリンの中で真つ当な労働をやっているのは極小数でしかなく、参考になる例が存在しない。ルシウス・マルフォイ氏が携わるのは名誉職ばかりですし、そして我等が帝王は疑問の余地無く無職な訳ですから」

割と自信のある冗談だったが、今度の教授は聊かも表情を変えはしなかった。瞬きすら一切しない程に揺らがなかったのだから、寧ろ逆に感嘆すらしてしまった。

「……兎も角、彼等に希望を出したのは、『マルフォイ』の関係者として特別扱いされたい訳では無いという事だけ。煌びやかな職場、誇りを持てる仕事なんぞ求めていない。彼等の監督下に無い、凡庸で地道な仕事で何も問題はない」

とは言うものの、何処かで首輪と紐を付けられはするだろう。

そもそも氏のコネを使おうとしている時点で、その柵からは逃れられない。

「しかし、レッドフィールド。それは貴方が自分で決める事から逃げるという事です。ホグワーツ教授として、私はそれを好ましくは思いません」

「御言葉ですが教授、貴方もまた、半純血に過ぎる」

非魔法界に染まり過ぎている。

「道を選べない者は居るんですよ、まさにドラコ・マルフォイがそうであるように。そして職業選択の自由なんて、スリザリンの価値観からすればふしだら極まりなく、存在しない方が良い。一々将来の夢なんぞに思い悩む必要は無くなるからだ」

「けれども、それは貴方の価値観では無い筈です」

「同じですよ。闇の時代が来るのであれば、そうでなければならぬ」
未だ闇の帝王の考えが完全に掴めた訳では無いが、何となくは察せ
ている。

彼は「スリザリン」足らんとしているのだろう——絶対に、そう成
れはしないのに。

「そもそも教授。貴方の申し出をのうのうと受け取れるようであれ
ば、僕は最初から困っていない。何より、その為の大前提からして成
立していない。僕が光の陣営に付かず、貴方の騎士団長殿にも頭を垂
れない。その核心的理由を、既に察しているのでは？」

言いながら、僕はローブの襟を正しつつ椅子から立ち上がる。

義理は十分果たしたという気がしていたし、教授は見上げるだけで
止めなかった。僕達の会話を見守るしかないらしいハーマイオニー
もまた、僕を止められなかった。

「……貴方は、アルバスが負けるかもしれないと考えているのですね」
「ええ。多少は分が良いかもしれないとも思っています」

一つの特別な駒の分だけ、分があるとは思っている。

けれども、あの魔法使いの敗北を視野に入れているのもまた事実。

スリザリンは勝利の為に手段を選ばない。恩義を踏み躪り、忠誠を
裏切る事も。嫌悪する相手に頭を垂れる事すらも。自身の信義に悖
る道を選択する事すらも。だからあの騎士団長が勝つと信じていた
ならば、最初から闇に堕ちなどしない。

「アルバスは——貴方の見方によれば、この魔法界を壊し続けている。
今回コーネリウスと対立し……そして貴方は、コーネリウスの次の魔
法大臣や闇祓い達とも必ずや対立すると考えている。我々光の陣営
の内輪揉めは終わらず、最終的に共倒れになって負ける。そう考えて
いるのですね？」

「それは一部その通りですし、小さくない理由では有りますが」

決して無視してもならないが。

「けれども、彼が負けると考える一つの理由でしか有りませんよ。光
の陣営が抱える構造的欠陥、あの魔法使いを頂点に据える弱点を、僕
はそれなりに問題視している」

「……どういう事ですか？」

段々と嫌悪の色に染まり始めた表情に、たとえばと笑う。

「ミネルバ・マクゴナガル教授は、アルバス・ダンブルドア騎士団長を心の底から信頼している。この戦争を遂行するにあたり、その忠誠の証として杖を捧げ、騎士団の一員として命を賭して戦うと誓っている。これは事実と捉えても良いのですよね？」

「……それがどうかしましたか？ まさか疑うとでも？」

「それこそまさか」

それを前提に一つ質問です。

人差し指を立てながら、そう問う。

「勝つ為に生徒を見殺しにしろ。彼にそう命じられたとしても服従出来ず？」

「――」

ほら、と笑った。

「貴方は今、彼への叛逆を思考した」

命令違反の道を探し、身を投じる未来こそを見ていた。

「アルバス・ダンブルドアならば、決してそんな命令をしない。そのような反論を受け付ける気は有りませんよ。あの魔法使いの本性は、ハリー・ポッターが入学してからの二年間を見れば明確なのですから。いや、後一年間を余計に足しても良いかもしれませんが。まあいずれにしても、直近二年の方が例外的だというのは間違いない」

アルバス・ダンブルドアは善の側に立つ。

しかれども、必要とあれば少々外れる事を躊躇わない。

我が子のように想い、愛しているたった一人の人間ですらも、大義さえ在れば容赦なく傷付ける事が出来る。ミネルバ・マクゴナガル教授、アーサー・ウィーズリーやモリー・プルウエット、そしてハーマイオニー・グレンジャーには出来ずとも、彼にはそれが可能だ。

大いなる善に繋がる地獄の道を、彼は決して見失いはしない。

「賢者の石を守る為の機巧として、何故かチェス盤を用意させられた事に思う所は無かったですか？ 十三歳の魔女がパイプの中のバジリスクに気付けたのに、あの賢い魔法使いが見落としたとでも？」

何より、アレらの事件時に生徒が故意に殺害される可能性は低かったとして、それでも不幸な事故が起こり得ないとまで言えませんでしたか？」
クイリナス・クイレル教授が生徒の無差別殺戮に踏み切らなかった。

その理由は、彼に憑りついていた闇の帝王の意向以上に、彼に残された最後の善なる心の御蔭だと僕は考えている。

スリザリンのバジリスクは生徒を一人も殺さなかった。

その理由はやはり、トム・マールヴォロ・リドルが望まなかったという以上に、偶々出会い頭にバジリスクの眼を見るような事が起きなかった、単なる幸運の結果に過ぎないと僕は認識している。

まあ、その推測が正しいかどうかは別として。

明らかなのは、一人の魔法使いの智謀が大団円を招いた訳では無い事だ。何処かで歯車の狂いが有れば、容易に悲劇に転ぶ程の物語でしかなかった。

「他にも疑問に思いませんでした？ ハリー・ポッターを守る最善がダーズリー家に預ける事だとして、しかし虐待の発覚時点で何故次善を選択しなかったのか。かつてポッター家にやろうとしたように、あの騎士団長が秘密の守人となり、更に校長職なんぞ放り投げて二十四時間守護すれば良かった。貴方がたに言わせれば、彼は『例のあの人が恐れる唯一の人物』なのですから。どんな複雑な呪文より、母の大いなる愛より、彼の存在こそが最強の盾なのですから」

身体を喪っている帝王への対抗手段として、彼は自分の身を捧げて守る道を選ばなかった。

闇の帝王が一度滅び、彼こそが『予言の子』である事が解つたにも拘わらず。

その理由は既に僕には明らかとなっている。

その道が、過去の己とアリアナ・ダンブルドアを思い出させたからだ。自由を愛する自分本位で利己的な男は、赤の他人の息子に十数年間も縛り付けられたく無かったからだ。虐待を受ける児童の不幸を消すより、己の気楽な人生の方が当時は遥かに大事だったからだ。

けれども、彼女達の視点では未だに不可解のままの筈であり。

「……嗚呼、しかし。貴方はそれでも最終的に、彼の言葉へと従っている」

打ち明けられ、察し、理解している僕と違い、ミネルバ・マクゴナガル教授は一切の理屈抜きで、アルバス・ダンブルドア騎士団長の行動を肯定している。

「まあ、恐らく裏では色々と抗議をし、抵抗はしているのでしよう。それでも貴方は最も重要な部分に関し、あの前校長に決して叛逆しなかった。その忍耐と沈黙こそが、確かにアルバス・ダンブルドアへの無毀の信頼と無比の忠誠を表している。心底敬服する強固な関係性であつて——だが、世の大多数の人間は、間違いなくそうでは無い」
それだけ強い人間は、そう居ない。

「裏切りとは、コーネリウス・ファッジのような、或いはピーター・ペティグリューのような解りやすい行いのみを言うのでは無い。ジェームズ・ポッター達が真の秘密の守り人を秘密にしたのもまた、あの騎士団長閣下への裏切りだ」

グリフィンドールは二元論が御好きだ。

光でなければ闇。闇でなければ光。その二つで物を見ようとする。コーネリウス・ファッジ、或いは魔法省という邪魔者の息の根を完全に止めてやらず、将来に禍根を残してしまうのも同様。あの騎士団長閣下は平然と自分達が同じ陣営であると嘯いた筈で、けれどもこの世界はそんなにも簡単な仕組みをしている訳ではないだろうに。

そして敵の敵が敵という事もあるように。

味方こそが最大の敵という場合もまたある。

『シリウスがポッターの『秘密の守人』だった』。

その旨のアルバス・ダンブルドアの証言は魔法省に存在し、それこそが、シリウス・ブラックを裁判無しで牢獄送りにした最大の証拠である。つまり、彼はポッター家の守り人の素性を全く知らなかったのではなく、明らかに彼等から嘘を教えられていたのであつて——けれども、そうすべき理由は有ったのだろうか。

敵を騙すにはまず味方から。

嗚呼、それも場合によつては非常に有効な策では有ろう。

しかしながら、闇の陣営との密通が絶対に有り得ない大魔法使い、自分が帰属する組織の最上位の長に対してまで秘密にする事は、論理的に擁護する事が可能だろうか。その悪戯っぽい入れ替わりは、人命の懸かる戦時において許されるべきだろうか。あの賢い魔法使いなら何も言わずとも守人の変更に気付くだろうと、そんな期待を寄せるのは余りに身勝手では無かろうか。

「……貴方はジェームズ達を批難しているのですか？」

「とんでもない。寧ろ、彼等の行動は理解出来ると言っているのですよ」

アルバス・ダンブルドアの敵対者として、ジェームズ・ポッター達の弁護側に立っている。

「彼は不可解でしよう？ 秘密主義でしよう？ 彼の行動と理念は余人にとって常軌を逸しているでしよう？ 何より彼は団員達に言うでしょう。お前に対し、自分が何もかも説明するなど期待するな。ひたすら信用しろ。何を説明せずとも、お前より賢い自分は全て納得づくでやっているのだ。たとえ自分がお前を信じていなくとも、お前の方は自分を信用しろと」

耳にした事は一度も無くとも、ありありと光景を想像出来る。

「そして、そんな彼の態度に対し、反発や敵愾心を抱かない方が異常だ。これくらいは大丈夫だろうと言う甘い考えや、彼が間違っていると独断で決めつけて命令違反する人間が出て来るのも良く解る。ジェームズ・ポッター達の憤り、そして選択も真つ当な物だと感じる。しかし——それは理解出来るというだけで、個人的に感心は出来ない」

魔法族が非魔法族に唯一絶対的に劣るのが、その社会性の欠如だ。

産まれた時から個として強いが故に、群れから逸れても一人生きる事が出来たが故に、個人主義の精神が血の中に刻まれている。上意下達の絶対服従が出来ない。非魔法界の古代ローマを筆頭とする強大な帝国が有しており、近代国民軍も当然のように獲得した組織としての頑強さを、魔法族は決して持ち得ない。

「そしてその毒こそが彼を敗北へと導き得る。騎士団を名乗る癖に団

長の意思や言葉を軽んじる者達こそが、真に彼の足を引っ張り得る。僕にはそう思える。騎士団は、というより、彼が作る組織は例外無く、絶対に強固にはならない。組織の長としてはコーネリウス・ファッジの方がまだマシだ。少なくとも、彼は他人へ心から頭を下げる事が出来るのですから」

そしてアルバス・ダンブルドア前校長は出来ない。

あの超越者に、真に人間の心を理解する事は不可能である。

「……随分と解ったような事を言うのですね。ミスター・マルフォイへの貴方の対応を見る限り、貴方もまた、アルバスの傲慢さを責められる口では無いと思いますが」

「それはまた別の話ですし、そして全く違つても？」

既に睨む事を止めない視線を、静かな心持ちで受け止める。

「貴方がたの中に騎士団長に対して反感を抱くのみならず、その不満を公然と表面したり、気軽に命令違反をしたりする人間は全く居ないと？ それを貴方がこの場で保証してくれるなら、僕は簡単に自説を撤回しますし、何なら貴方の提案に耳を傾けても良い」

そして返答の無いのも解り切っていた。

全てがアルバス・ダンブルドアの思惑通りに進んでいたなら、ハリー・ポッターが守護霊騒ぎを引き起こす事なんぞ有り得なかっただろうに。

「上官命令絶対服従は、古今東西問わず、軍団を名乗る組織が貫徹すべき鉄の掟ですよ。反して良いのは命令が明白に無効である場合だけで、それ以外の違反を子供を甘やかすように放置している組織は、勝利を放棄しているに等しいと言つて良い。そんなのは宿題サークルだけで十分だ」

勿論、あの騎士団長は団員にそれを望んでいるのだろうが、端から無理な話だ。

彼が配下においているのは同じ魔法族であつて、そもそも彼自身、スネイプ教授を懐に入れている時点で、真面目に組織経営する気を感じない。幾ら勝利への最短の道だろうが、理屈上は団長に万能の指揮権が存在しようが、組織として選んではならない道、帰属する者に不

信や不安を与えない努力義務は有る筈だ。

まあ闇の帝王も割と気にしていないくらいがあるものの、それでもやはり、騎士団長閣下よりは遥かにマシに思える。彼に対する抗命は基本的に死を意味するからだ。また、騎士団長以外は一切が横並びであろう不死鳥の騎士団とは違い、「純血」の結束をそのまま転用している都合上、組織内での上下の序列は割と明確に見えるからだ。

「そして最早彼も、僕を仲間に取り入れようとは考えていない」

彼は善人足らんとしているから、僕が屈すれば当然受け容れはするだろう。

しかしミネルバ・マクゴナガル教授が何と言おうと、ハーマイオニーが何と懇願しようとも、協力員が精々。騎士団員として迎え入れる事は無く、中枢に近付ける事も絶対にしない。

「彼とは色々話をしましたが、結局、あの偉大なる魔法使いは理解してくれただですよ。僕は彼に絶対に従わない。万一成り行きで頭を垂れようと、必要さえ有れば、闇の帝王が滅ぼうとする瞬間、光の陣営が勝つ一秒前ですら平気で裏切れる人間なのだ」

マルフォイ家には出来ない。他の大勢の死喰い人も例外では無いだろう。

それでも、僕にはそれが出来る。これは彼との共通認識であり、理解だった。

「彼と僕の勝利条件は一致していない。そしてそれ故に、最後の最後に食い違い、致命的な結末を招くかもしれない。それが伝わったからこそ、あの騎士団長は僕に手を差し伸べる事を諦めた。御互いに、その方が良いと信じたのだ」

誰もが本質を見誤っている。

「アルバス・ダンブルドア」の仮面を見て、彼は自分とは違う立派な英雄なのだ。

しかし、違うのだ。彼は怪物だが、それでも全てが人外染みている訳でも無い。

愛する一人と世界を天秤に掛けられれば、愛する一人こそを選んでしまう程度の感性は有している。我が子の為なら大勢を見捨てられ

る、世の親と同じ弱さを持っている。それ故に、僕の真似妖怪は、アルバス・ダンブルドアへと変わってしまったのだろう。

「……けれども、完全に一致しないという事も無いでしょう。貴方は今のところ、ダンブルドアを決定的に邪魔する行為は取っていない。妥協の余地は有る筈です」

「校長を追い出す事を止めなかった僕に、そう言うのですか」

「貴方が本気であったならば、この Hogwarts に闇祓いと死喰い人の両方を引き込んで、彼等が決闘を始める状況を作る位の事はやっていた筈です」

「そこまで褒められると流石にむず痒くなって来ますけどね」

謙遜する言葉すら出て来ない程に呆れ、苦笑する。

ハーマイオニー達が作ったのが軍団である以上、闇祓いの方を招き入れる理屈はどうにでもなりそうだが、恐らく死喰い人の方はどうにもならないだろう。そこまで行くと明確に闇の帝王の意向に反しそうでからだ。

「それでも気に入らない事、共に歩めない場合は存在するという事です。コーネリウス・ファッジが辞めた後、アルバス・ダンブルドア前校長が——まあ、ハリー・ポッターもですか。彼等が魔法省を庇う言動を発信し、役人達を味方に付ける努力を一切しないであろうように」

自分達の気に入らない相手なら、敵に回している方が遥かにマシだというように。

「まして僕達は向いている方向が違うのだから、猶更共に歩めなどしない」

林檎は自然に落ちるのではない。巨大な質量に引かれて落ちるのだ。

今の魔法界にはそれが二つある。一方に引かれられないなら、片方に堕ちるしかない。

「ねえ、ミズ・マクゴナガル」

この世界で数十年の生を紡いだ人間に向けて、僕は問い掛ける。

「貴方がたは、非魔法族——魔法力を持たない者達に対してどれだけ

親切なのです？ 貴方がたは心の何処かで彼等に対する差別意識、あいつらには何も理解出来ず、自分達が護つてやらねば何も出来ないという選民思想を御持ちではないですか？」

魔法族至上主義者は、この魔法界の全てに蔓延っている。

「百歳を優に超えている老人が、若ければ三十そこそこ、それより年を取っていても精々四十や五十程度でしかないダーズリー家の若造相手に、まるで悪戯小僧のような真似をして良い道理はないでしょう。彼等が幾らハリー・ポッターを虐待していようとも、何の法的根拠も無しに魔法を用いた私刑を許容する事は、この現代社会で有つてはならない」

ハリー・ポッターやウィーズリー兄妹が同じ事をやるのとは違う。

彼等は法律上未成年者であり、ハリー・ポッターについては正当な復讐の範疇ですらあり、けれどもアルバス・ダンブルドアは断じて当て嵌まらないからだ。

そもそも、あの騎士団長は自分の都合でダーズリー家に無理強いをして、ハリー・ポッターを護つて貰っている身なのである。彼は決して詐欺や脅迫、偽計を用いてはならない。誠意と共に深々と頭を下げ、ダーズリー家から真の同意を取ろうと努力するのが筋ではなからうか。

「まして、普通の善良で真つ当な価値観を持つている夫婦相手ならば、猶更に丁重に扱い、懇切丁寧に事情を説明すべきでは有りませんか？ 判断材料と成り得る全ての情報を開示し、彼等に自由意思での選択権を与えてこそ、グリフィンドール共が嘯くような魔法族と非魔法族の対等は初めて実現すると言えるのではないですか？」

誰達とは指していない。

けれども、ミネルバ・マクゴナガル教授なら解つた筈だ。実際、表情は依然として変わらずとも、加齢により皺が目立つ皮の下には確かに、大きな動揺が見えた。

「僕が今まで一度も考えなかつたとしても？ 彼等二人が止められないかどうか。貴方達がハリー・ポッターの望みや願いを平気で踏み躪る事が出来るように、彼等もまた同じ大人として、同じ行為に及べない

かどうかを」

「……そ、それは、私の両親の事を言っているの？」

「——嗚呼、流石に気付くのか」

気付かないと踏んでいたが、僕が甘く見過ぎていたらしい。

震える声で口を挟んで来たハーマイオニーを一瞥し、しかし向き直る先は教授だった。

「貴方がたは最低限の事情説明はしているのでしよう。けれども、間違ひなく全てを伝えては居ない。ええ、貴方がたグリフィンドールは事あるごとに“マグル”の味方だと主張しますが、それは身勝手な自惚れに過ぎない。少なくともグレンジャー夫妻はそう看做さない。僕は彼等に直接会った事が有りますから断言して良いでしょう」

今年度の魔法界は見るに堪えないものだ。

一応政府扱いされる組織の頂点が平然と嘘を喧伝し、教育機関の長でしかない筈の前校長が違法に私軍を構築し、生徒が教師の眼を盗んで軍事訓練ごっこをやり始め、そして今は教授ともあろう人間が校内の無秩序状態を黙認している。それに加え、箱庭の外では一つの種の浄化を目論む魔法戦争が既に始まっていると来ている。

去年度までの四年間の秘密の数々を抜きにしても、これらの魔法界の真実を伝えた時にグレンジャー夫妻が為すであろう反応は、やはり容易に想像出来る。性根が真つ当で善良であればある程に、その動きは見えやすいものだ。

「彼等は認めはしない。『アルバス・ダンブルドア』の偉大なる計画を、その中にハーマイオニー・グレンジャーを道具として組み込む事を。それが一人の少年を救い、果てに魔法界を救う結果を齎す事になるろうとも、絶対に。何故なら知らない他人の子供の命よりも、死に行く無辜の大勢の命よりも、一つの世界の救済よりも、愛娘の安全と幸福の方が遥かに大事だからだ。彼等にとって、十六の小娘は親による絶対の庇護対象だからだ」

闇の帝王に牙を剥いたソレが、今世紀で最も偉大な魔法使いにも牙を剥き得る。

両者等しく人でなしなのだから当然の理である。

「そしてミズ・マクゴナガル。貴方もまた、非道を為している」
既に戦争が始まっているのだ。

ならば、この正義と秩序で在るべき教授が全保護者に全てを伝え、非魔法族生まれの全員に対して国外避難を奨励する——そんな善行を僕が期待するのは、果たして筋違いだとまで言えるだろうか。ホグワーツはこの島で最も安全な場所であろうと、しかし世界で最も安全な場所だという訳では無い。

「仮に意識的な行いでなかつても、グレンジャー家への、そして全ての非魔法族生まれへの罪深さを忘れて貰っては困る。貴方がたの今やっている事は、自分達の事情しか考慮しない身勝手な温情主義パターナリズムであり、彼等が本来有すべき庇護と逃亡の選択肢の剥奪であり、善意の誰かが広く真実を知らしめてしまえば簡単に壊れてしまう程度の正義だど。……いや、勿論、そんな都合の良い魔法使いなど何処にも居ない」

焦って口を挟もうとして来た少女を遮って、僕は言い切ってみせる。

「ハーマイオニー・グレンジャーは既に選択した」

彼女の進路は、彼女の自由意思の下に決定された。

「僕は彼女の選択を尊重しますし、またアルバス・ダンブルドアと同様に、部外者である非魔法族なんぞ割とどうでも良いと考えている。それは彼女の両親ですらも例外では無い。彼等の我が子への心配や愛情より、ハーマイオニーの決断と行為の方が絶対的に優先される。……そんな顔をするな、ハーマイオニー。やはり現実には正しく認識しておくべきだ」

あの魔法使いはグレンジャー夫妻の居場所を上手く隠し通している筈であり、故に何も無ければ僕が彼等に会う事は二度と無かろうが、仮に会えた所で真実など伝えはしない。ハーマイオニー・グレンジャーが生きており、尚且つ彼女が本心から逃亡を望まない限りは、そうするつもりはない。

そして、ミネルバ・マクゴナガル教授の瞳が燃えた。

「——しかし、貴方のように明確に悪へ立つのも違う筈です」

本当に見事なものだ。そうつくづく感服する。

そして先程居た双子も、この場に居る少女も見習うべきだ。心から思う。

教授の眼は初めて見る色をしていた。怒り、敵意、正義感。熱い碧の奥に、僕は確かに不死鳥を見た気がした。獅子やグリフィンではないのは、何だかんだ言つて、グリフィンドールの体現者はアルバス・ダンブルドア以外に居ないと、そう僕が見てしまっているからなのか。

身震いする己を自覚し、けれども直ぐにあえなく、儂く消えた。

我に返つた教授が大きな咳払いをし、自分を取り戻してしまつたからだ。今度の瞳には恥じる色、生徒の前で我を忘れた事への反省があり、散々逡巡の様子を見せた後、彼女はポツリと零すように言つた。

「……貴方は、我が道を行くのですね」
「ええ」

その確認に、僕は確かに頷いた。

ハーマイオニー・グレンジャーは、間違いなく事情を掴めて居なかつた。

何故、教授が批難を止め、それ以上を言わなかつたのか。何故、僕が何の疑問も持たず、簡単に肯定してしまつたのか。一瞬でありながらも多弁であつた遣り取りを知らない彼女は、この場から置いてけぼりにされていて、完全な部外者で、けれども介入出来る程の言葉を持たないようだった。

そして僕達は御互いに説明してはやらなかつた。

僕は既に説明する言葉を持ち得なかつたし、一方で教授はグリフィンドール寮監だ。この場で無かろうと、彼女達には幾らでも話し合う時間は有る。

「僕の頭には幾らでも非道が、合理的な方法が思い浮かぶのです」
吐露した言葉を、ミネルバ・マクゴナガル教授は黙って聞いていた。
「例えば、狼人間の差別を無くす方法。その最短経路として為すべきは、脱狼薬の改良では決して無い。この魔法界にも幾らでも不治の病が存在し、更に非魔法界のインスリンの歴史すらも知る僕には、狼人

間の『治療』薬を発明する魔法薬学者が五年や十年で現れるとは思えない。だからこそ、即効性の有る手法を考えてしまう。彼等に対して一定程度の強姦を認め、統計を取り、研究してやれば良いと」

彼等が魔法界から排除されている最大の理由。

それは、彼等の形質が子供に継承されるのではないかという恐怖である。

その答えを魔法族は知らない。

何故なら、魔法族が狼人間に対して大きな関心を抱いて来なかったからだ。狼人化の機序が全く周知されていないからだ。何より単純に、狼人間とその子供という研究対象——実験材料が少ないからだ。けれども、闇の時代ならば。

やはり、「科学」をやれるだろう。

数百の実例を観察した上で人狼化が遺伝に纏わる病でないとは判明すれば、彼等を差別する理由の一つが即座に消える。残念ながら遺伝病だと判明したとしても、狼人間を自由に解体出来る世の中が来れば、魔法界の「医療」を数十年進め、今後苦しむ子供達を減らす事になるかもしれない。

「……貴方の価値観は、それを肯定するのですね」

「ええ。狼人間達は長らく虐げられ続けて来た。何十年と待ち、耐え忍んで来た。それに対する魔法族の回答は三年前の『反狼人法』でしよう。この状況で彼等に更に待てと言うのは魔法族の一方的な我儘で、余りにも道理が通らない」

リーマス・ルーピン教授は思った筈なのだ。

アルバス・ダンブルドア前校長が魔法大臣であれば、あの法は廃案に持ち込めたのではないかと。そして、世の狼人間達が失望を抱き、自暴自棄になるのも当然だろう。また、この魔法界が曲がりなりにも共同体である以上、起草者であるドロレス・アンブリッジならず全ての魔法族が責任を負うべきである。

「魔法界についても同じ。アルバス・ダンブルドア前校長、そしてその教え子達が作って来た結果が現在の魔法界だ。しかもコレを作るのに費やされたのは単なる五十年ではない。今世紀で最も偉大な魔法

使いという最強のカードを有していた上での五十年だ。であれば、貴方がたが勝った後の五十年もまた全く期待出来ない。そう考えるのは非合理的でしょうか？」

内心でドロレス・アンブリッジへの抵抗運動を支持するように。僕の感情はダンブルドア王への抵抗運動、既に持つ者への叛逆を支持してしまう。

「一方で今世紀で最も偉大な魔法使いが斃れ、闇の帝王が魔法界に君臨すれば即座に変わるでしょう。世界は変わらざるを得ない。負けた貴方がたの側も、勝った彼等の側も。ええ、闇の側ですら“外”に無関心で居られない事は既に示している。非魔法界への接近は、スリザリンを主導としても可能だ」

スリザリンが『純血一族一覽』を産んだ数十年後にグリフィンドーブルが産んだのは、ウィーズリー兄妹であり、ネビル・ロングボトムでもある。自分の血の意味を理解せず、非魔法界への近接すら考えない者達である。この有様で彼等が“マグル”の味方を標榜するのは、余りに自惚れが過ぎるというものだろう。

そして、闇の帝王もスリザリンの“マグル化”を止められない。

非魔法界こそが彼の出生の神聖を保証するからこそ、止める事が出来ない。

「闇の時代が善いモノにならない。そんな貴方達の主張は正しいのでしよう。それでも尚、闇の帝王が汚名と悪名を一身に背負い、意図しない結果だとしても種族の時計の針を進めてくれると言うのなら、僕はそれを善で正義だと肯定する。肯定してしまう。貴方がたはコレを悪だと仰るが、僕もまた、貴方がたの作った世界を善だと認めていない。こうして敵対するのは必然なのです」

東方遠征にしても十字軍にしても、或いは大航海時代や植民戦争にしても、それらは世界の広範囲へ多大な災禍と不幸を撒き散らした。彼等の一方的で身勝手な獣欲は多くの人命を奪い、暮らしを永久に破壊し、貴重な建物や文物、文化そのものを灰燼に帰して来た。

けれどもそれが全てでは無い。

殺し合いは往来を、そして交流を産んだのだった。

「……闇に堕ちるといふ事は、貴方が思う程に素晴らしい道では有りません」

念押しのように小さく紡がれた言葉に、僕は微笑みと共に答える。「承知の上だ。僕はグレンジャー夫妻に磔の呪文や死の呪文を放つ事を想定し、覚悟している。そして僕は間違いなく、一切の躊躇いなくやれる人間だ。少数の、しかしスリザリンにも確かに居る死喰い人に向かない者達を知るからこそ、逆にそれを確信出来ている」

「……………その果てにグレンジャーと殺し合う事になるのだとしても？」

「それは有り得ませんよ。ハーマイオニー・グレンジャーが完全な敵に回れば、僕に殺し合いなど出来ない。何も出来ず、ただ一方的に殺されるだけです」

悪の報いは受けねばならないのだ。

「……………」
そうして、僕はとうとうミネルバ・マクゴナガル教授にソレを見た。諦念。そして受容。

彼女は僕の更生不能を認めていた。僕を光の陣営に引き込む事を断念し、僕が死喰い人に堕ちる事を許容してしまっていた。彼女は、僕と杖を向け合い、殺し合う未来を見ていた。

自分で生み出しておきながら目にしたくなかったというのは、流石に身勝手が過ぎるだろうか。意図通り、希望通りだというのに何の勝利感も抱けやしない。寧ろ逆、敗北すら感じていたし、そして、このような一種の感動を僕が覚えられるのは果たして何時までの事だろうか。

更に笑みを深めた後、ローブを翻そうとし、

「——嗚呼、それと。ハーマイオニー・グレンジャー」
しかし、伝え忘れてはならなかったと。

放心状態で、眼の焦点すら合っていない彼女に呼び掛ける。

彼女が気付いているなら一向に構わないのだが、気付かないまま変な迷いを抱かれる方が困る。意味が薄かろうとも、言葉にして伝えておくべきだろう。

「先程はああ言ったが、君がこの魔法界に留まる事は、論理的に正しくない。僕はそんな事まで思っている訳では無い。君が闇の帝王と戦う事は正しく、魔法界から君を引き離そうとするグレンジャー夫妻こそが真に間違っている。そう否定する為の論理は、確かに世界に存在している」

ハーマイオニー・グレンジャーは正義である。

徹頭徹尾、たとえ一つの世界が崩壊しようと、そう在らねばならない。

「——ミネルバ・マクゴナガル教授。貴方なら答えを御持ちでしょう」
今度は眼に見えて混乱を始めた少女でなく、僅かに冷静さを取り戻した教授へ問う。

「第一次魔法戦争時に杖を取りもせず国外に逃げ去り、或いは非魔法界に隠れたりした“マグル生まれ”。彼等の振舞いを、自分に命の危機が迫ったのだから己むを得ないのだ、そう言う人間は確かに居るでしょう」

僕とて、その想いが全く無い訳ではない。

「けれども僕はこうも思ってしまう。彼等は“穢れた血”だと呼ばれるのも当然の愚物だと。サラザール・スリザリンの述べた通り、最初からホグワーツが迎え入れるべきでない不適格者だったのだと。その理由を、真なる魔法族である貴方なら察せる筈だ」

侮蔑を籠めた差別用語に彼女は顔を顰めたが、それでも答えを紡ぐのは躊躇わなかった。

「……魔法使い機密保持法が存在する以上、彼等の子供は何れホグワーツに……若しくは他の魔法魔術学校に通う事になるから。違いますか？」

「正しくその通りです。彼等の逃亡は、彼等に流れる血への裏切りだ」
自分達は悲劇から逃れられても、自分の子達こそが宿業を負う。

魔法力を有する子を産めば、この世界で生きる事を事実上強制させられる。だからこそ、ジェームズ・ポッターとの結婚という理由が有ったにせよ、リリー・エバンスの行いは正しい。

勿論、ホグワーツは家庭教育を認めはする。他の魔法魔術学校も大

概そうである。

けれども、本当に家庭教育が可能なのだろうか？

それは親達が杖の技術を教えられるのかという意味では無い。

非魔法界育ちの魔法族の子供に、自分が孤独のまま研鑽を積み重ねられない——家庭教育を選んでも、血縁や仕事等の理由で子供間の交流が維持される純血達とは違う——環境を、果たして当人に納得させられるのかという疑問である。

魔法魔術学校を頼らずに魔法力を持つ子供を育てるとなれば、親は必然的にその子供を軟禁状態に置く羽目になる。

何せ国際機密保持法の縛りが有る以上、魔法の力は外部に秘密にせねばならない。更に制御不能の魔法は他人を、特に自力で身を護れない非魔法族の子供を容易に傷付け得る。だから、非魔法界で同世代の子供と交わるなんぞ以ての外で、そして非魔法界には魔法族の子供は居ない。彼等の全てはやはりホグワーツに行くのだから。

そのような隔離措置は、この僕ですら割と嫌気が差していたのだ。だから、真つ当な子供ならば余計に耐え切れないように思える。一度は強情を張った親達も、最終的にはやはり、ホグワーツ或いは他の魔法魔術学校に子供を通わせる事になるのではないか。

「故に、彼等は闇の帝王と戦うべきでした。この魔法界の呆れた因習から逃げる事なく、踏み留まって社会改革へと挑むべきでした。文字通りに新しい血である彼等にこそ、それが望まれていた筈で、けれども彼等は選非魔法族側の存在ばれた者としての義務を果たさなかった。既にイルヴァーモーニー等に向かったなら多少なりとも賢明ですが、国内に留まっているなら真正の愚者だ」

彼等は自己の幸福を優先して、この腐った世界を見捨てて去って行った。

それが巡り巡って彼等の不幸へと繋がるという現実に向かい合いもせず。

「そして、僕が『ダンブルドア軍団』に期待した真の理由はそこですよ。ハリー・ポッター達は余り自覚しているようには見えませんが、彼等の心の根底には明らかに非魔法界が在る。魔法界に染まりきってい

ない。まあ、今回は学生のごっこ遊びで終わったようですが——とは言え、まだ結果が出たという訳でも無い」

最終的な結果が出るのは数十年先の話だ。

彼等の中にはスリザリンが居ないようだが、今回は学生の宿題サークルの域を出なかつたし、多様な価値観を有する人間の内包は最低限叶えられている。彼等の友誼と信頼が今後の数十年続き、光の陣営が勝利した後に資すると言うのであれば、確かな価値が有つたと言えるだろう。

『生き残った男の子』の『革命』に役立つてくれる事だろう。

そうして、僕は今度こそローブを翻した。

何も言い残す事も無く、何も言えなくなった二人を後に、僕は狭苦しい部屋を去る。

いや、去ろうとしたが、それは許されなかつた。ミネルバ・マクゴナガル教授は間違いなく敗北した筈だが、それでも「教授」^{Professor}を辞める気はないらしい。

「——貴方が真に選択を決する際、もう一度、私の下を訪れなさい」その言葉の真意を図りかね、思わず立ち止まる。

数秒の時間を費やして、それが何処から来た言葉なのかを漸く思い出した。

「……確か、三年前の事でしたか？」

バジリスク関連のイメージが付着しているから、その辺りの筈だ。

臆気な記憶を何とか掘り返しつつ、立ち止まったまま、振り向く事もなく続ける。

「約束と言う程でも無かつたような気がしますし、こんな流れの話でも無かつた気もしますけれど。そもそも僕の選択云々と貴方の話云々は、直接関連するような話題でも無かつた筈だ」

「貴方にしては、そのような曖昧な表現は珍しいですね」

「全てを記憶している訳では有りませんよ。また、更に印象的な事が有れば忘れもします」

この教授が完全に「教授」で無くなったのは、未だにあの一回だけだ。

「けれども、貴方が一体何の話をしようとも、僕は決して変わらない。貴方が言うような善の道には進まない。それは貴方にも理解して頂いた筈だ。だと言うのに何故、今そのような事を改めて伝えて来たのです?」

教会文学のように、一人の師の言葉に感激し、改心する事など有り得ない。

たった七年しか触れ合わない赤の他人を理由に、悪へ堕ちる道を曲げやしない。だというのに尚も関わりたがる理由は、一体何処に在るというのか。

そう問うてみれば、やはり返ってくるのは凜とした答え。

「生徒の何も変えられないようだからと言って何も伝えないままで居るのなら、その人間はもう教師と呼べません」

その回答に声を出さないまま笑った後、何か気の利いた切り返しが出来ないかと逡巡したが、やっぱり何も浮かびはしなかった。だから僕は深く一礼した後、杖を振って自分の姿を隠した上で、その狭苦しい部屋を立ち去った。

そうしてウィーズリーの双子達は『卒業』して行った。

噂に聞く限りでは、非常に劇的なモノだったらしい。

らしい、と表現するのは、単純に僕が直接見ていないからである。

結局、ミネルバ・マクゴナル教授は危惧を捨てられなかったようだ。その騒ぎの最中、僕は一貫して罰則名目で軟禁され、彼女の監視下に置かれ続けていた。爆発や叫び声が近くで聞こえても僕を外に出さなかったし、扉を開けて確認する事すらしなかった程の徹底振りだった。そんな教授の努力の甲斐有ってか、彼等はホグワーツの伝説として刻まれた。彼等はホグワーツを去って以降も、生徒達に影響を残したままで居る事に成功した。

そしてその後は、“無秩序”が……訪れはしなかった。

人によつては一応そう呼ぶのかもしれないが、僕にとつてはそうではない。予測した程の規模では無かつたからだ。勿論、教授陣の期待通りでは有るのだろうが。

パンジー・パーキンソンやカシウス・ワリントンを筆頭に、尋問官親衛隊にはすぐさま『不思議なこと』が起こりはした。しかしそれは精々一、二日医務室送りにされただけで、直ぐに回復出来る程度の「悪戯」でしかなかつた。後は思い出したように時折誰かが医務室送りにされては居たが、それは何時も通りのホグワーツである。そして六月に入る頃には生徒関連の事件自体が殆ど起こらなくなつた事を思えば——まあ親衛隊連中が馬鹿な嫌がらせどころでは無くなつたのが一番大きいのだろうが——何処かからの統制が利いているのは明白だつた。

もつとも、その煽りを受けてか、ドローレス・アンブリッジとアーガス・フィルチは学年末まで散々な目に遭い続けていた。更に腹いせのように廊下や空き教室が頻繁に爆破されたり、双子が残して行つた悪戯グッズが放し飼いにされる事は一切止まらなかつたものの、それらすらホグワーツは段々と日常として受け容れ始めていた。僕が自主的に時間外労働、二人への助力を申し出てやる位には、この魔法魔術学校はつくづく恐ろしい世界だつた。

一方でハーマイオニー・グレンジャー。

またもや叩きのめしてしまつた少女の方はと言えば——大きく変わりはしなかつた。

それは表面上の事に過ぎないと看破はしていたが、彼女は何も無かつたように振る舞おうとしたし、僕に気を使われる事自体を嫌がつた。その意思は、十一月の時より遥かに強固に見えた。グリフィンドール寮監が諦めて尚、彼女は諦めを持つには至らなかつたらしい。『ステファン。私達の卒業まで、まだ後二年残っているわ』

噛み締めるように言つた彼女に、今度は皮肉を返しはしなかつた。フラーと同様、彼女に僕を見限らせる為には行動以外に無い。そう思つたからだ。

だからハーマイオニーの好きにさせたし、そしてそれ以上に、彼女

の方が直ぐに僕と仲違いを考えるどころの状態ではなくなった。O. W. L. 試験が近付いたからだ。

学年一の優等生の頭は、六月が迫るに比例して試験一色になっていた。

それも、僕が予期していたより遙かに酷い有様で。

進路相談後から割と怪しくは有ったのだが、試験前一ヶ月を切ると段々と勉強以外の会話が余り成立しなくなり、六月に突入して以降は完全に正気を失っていた。その取り乱しようは心配になった屋敷しもべ妖精が相談しに来る位で——非常に意外な事に、妖精達もまた僕から距離を置かなかつた。ウインキーを含め、丁重さすら増していた——彼女達の力を借りて幾度か『必要の部屋』を使用したのだが、まあ、処置無しと言った所だつた。仮にハーマイオニーが試験を落とすなら五年生全員が落第になるだろうに、良くもあそこまで不安になれるものだと思う。

……嗚呼、そして。

僕は彼女の一切を止めなかつた。

その普通のホグワーツ生らしさを。平凡で陳腐な幸福の日々を。今は苦しくても、将来的には良い思い出として語り得るであろう学生生活的一幕を。今回も、また。それが近い将来壊れるのだと既に予測し、今度喪う事になるのは僕に無価値の男では無いかもしれないと想定しても、無垢な少女の選択と行動を尊重し続けた。

結局、これが普通で、真つ当な反応と言うべきなのだろう。

ハーマイオニー・グレンジャーは優秀だ。

そしてどんなに優秀であつたとしても、それは学生の域を出ない。嗚呼、彼女は第一に“ホグワーツ生”なのだ。騎士団員志望者以上ではない。

箱庭の外で大勢を殺す為の計画が進行し、その対象として彼女が狙われているかもしれないとしても、彼女は普通の日常へと没頭する事が出来る。O. W. L. を前にした彼女の頭にはS. P. E. W. も無く、ダンブルドア軍団も無く、魔法省や魔法族の未来も無く、ハリ・ポッターの閉心術の事も無い。何処かの時点でふと過ぎる事が

有ったとしても、やはり眼の前の学生生活が最優先で——本当に重要な事を後回しにしてしまった際に払うツケの事を、一切考えないままに居る事が出来る。

勿論、それは正騎士団員の大多数、善良なだけの大人達の希望なのだろう。

ハーマイオニーは単に彼等の方針に沿って過ごしただけで、彼女に咎など存在する筈が無い。長く生きている事だけを理由に勝手に決め、意思を踏み躪り、型に嵌めようとした結果がこれだ。結局、人間は年齢の積み重ね程度で進化する程上等な生物ではないのだろう。そうである以上、この結末が万一悲劇に終わった時の責任は、全員が等しく罪を問われるべきである。

そして当然、僕の手出しが許される領分でもない。

僕は彼等に反する側に立ち、違う側に賭けてしまっている。だからこそ、後は果たして誰が正しかったのかと、それを示す目が出るのを待つだけだった。

今回も起こる事は解り切っていて、後は何時起こるかと言う問題に過ぎなかった。

故に、O・W・L最後の魔法史の試験中、ハリー・ポッターが絶叫と共に倒れた瞬間に、案の定の事態が起こった可能性が高いと僕は判断した。

まあ、事象としては一人の生徒が倒れただけではある。

これが初めてだというなら見過ごすのも已むを得ず、実際試験官で有ったトフティ教授はハリー・ポッターに単なる心配の感情だけを向けていた。

しかし、彼を良く知る者達にとっては違う。

『生き残った男の子』が学年末に騒ぎを起こすのは恒例行事であり、しかも前日から異変——ミネルバ・マクゴナガル教授の昏睡と、ルビウス・ハグリッドの逃亡という一連の事件が起こっている。更に翌日の夕刻まで待たされたのは少々、いや、かなり意外ではあるにしても、それでもコレで異常無しと判断してしまう人間は真正の大馬鹿野郎に違いない。

今回盤面に唯一残された灰色の駒も、間違いなく僕と同じ結論を下
した筈で。
だから。

僕は彼等の動きの一切につき、何も見なかった振りをしてやった。